

ありふれた職業で世界  
最強if優花

白San

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

一人の少女を守る為に不良というレッテルをはられても尚、大切な者達の為に信念を貫き通す少年、南雲ハジメと彼の幼なじみである園部優花の二人が織り成す物語。

二人は、色々な人達に出会い、どんな苦難も乗り越え自由を手に運命を変えていけるのか……。

※香織アンチのタグがありますが、それは物語の流れ的につけてしまうからでして、決して香織のことが嫌いなわけじゃないです、ご了承ください。

く少しずつですが、本編前からの編集も行っております。

# 目次

本編前	人物設定集1	133
プロローグ	一章 魔獣迷宮オルク	
一話 ある帰り道	スゝ物語の始まり	
二話 影が薄すぎる男との出会	プロローグ	140
い	一話 異世界召喚	
三話 夏休み	二話 晩餐会	172
四話 崩れ掛ける日常	三話 ステータスプレート	
五話 辛い日常	185 四話 訓練とイジメ?	207
六話 守るために	五話 月下の夜に	234
七話 たとえ、変わっても	六話 悪夢の始まり	249
99	七話 ベヒモス	268
エピローグ		118

八話	三つの悪意	290			
九話	奈落の底	303		十五話	真の歴史と旅立ち
十話	兵器作製そして…	320		459	
クラスメイトside	失意と決意	336		クラスメイトside3	帝国と勇者達
十一話	奈落の底の封印部屋			二章	亜人樹海と奇天烈迷宮ライ
351				センくウサ耳少女との出会い	
十二話	奈落の底の吸血姫			十六話	ライセン大峽谷と兎娘
372				507	
十三話	ゆつくり語らい	394		十七話	ハウリア族と帝国兵
クラスメイトside2	悪夢			525	
再びそして…		409		十八話	ハルツイナ樹海
十四話	最奥のガーディアン			十九話	長老会議
					565
					543

二十話 シアの想い — 587

二十一話 大樹とハウリア

605

二十二話 ブルツクの町 — 628

二十三話 ライセン大迷宮

653

二十四話 ミレデイ・ライセン

二十五話 ライセン迷宮・最後の

試練

二十六話 ミレデイの神代魔法 700

二十七話 冒険者らしい仕事

722

三章 再会とウルスの町防衛戦線

黒竜と白ローブ

二十八話 冒険者らしい仕事と

735

二十九話 フューレン

三十話 再会 — 750

三十一話 夜の会談 — 771

三十二話 北の山脈地帯 — 795

三十三話 黒竜との戦い — 811

三十四話 ティオ・クラルス 853

三十五話 冒険者らしい仕事

三十六章 再会とウルスの町防衛戦線

三十七章 冒険者らしい仕事

三十八章 冒険者らしい仕事

三十九章 冒険者らしい仕事

四十章 冒険者らしい仕事

三十五話	殲滅戦前	888	人族 I	1031
三十六話	蹂躪劇	903	クラスメイトside 5	V S 魔
三十七話	白ローブの男	920	人族 II	1048
四章	紅き閃光は愛しの貴女の		クラスメイトside 6	救援要
元へ〜再会〜			請	1067
三十八話	フューレンへ再び		四十一話	懐かしきホルアド、親友
939			との再会	1108
三十九話	海人族の女の子		四十二話	勇者の敗北
958			四十三話	それは紅い雷鳴と共に
四十話	ハジメ〇〇になる	983	1124	
クラスメイトside 4	緊急事態		四十四話	紅雷の無双
1012			四十五話	再会後のあれこれ
クラスメイトside 5			迷	1151
V S 魔			宮内編	1178

			四十六話	再会後のあれこれ――地	
			上編		
			幕間	狂気と嫉妬と大願――	12221195
		四章	二つの迷宮と神代の遣い手		
			遙か昔の追憶		
		四十七話	消えた愛子――		1241
		四十八話	大砂漠でのトラブル		
1256		四十九話	アンカジ公国――		1275
		五十話	オアシスに潜むモノ		
1297		五十一話	グリューエン大火山		
			代魔法		
			五十二話	大火山の深層――	1332
			五十三話	神代魔法の使い手	
		1358	五十四話	灼熱の中の脱出・あ	
			る幻想の追憶		
			五十五話	母娘の再会――	14081388
			五十六話	メルジーネ海底遺跡	
			五十七話	二人だけの迷宮攻略	
		1460	五十八話	メルジーネ海底遺跡の神	
			五十九話	遙か彼方昔の記憶とク	1481

	リオネ討伐	1502
	六十話 娘との約束	1525
	六十一話 異端認定	1542
五章	王都侵攻く天使の目覚めく	
六十二話	意外な再会	1565
六十三話	アレス・バーン	
1585		
幕間	忍び寄る影	1604
六十四話	王都侵攻	1631
六十五話	無双の始まり	1649
六十六話	“元”王国最強の実	1669
力		
六十七話	シアの無双と密談	1669

	1692	
	六十八話 神の使徒	ノイント
	六十九話 “ネームド”使徒ノイ	1713
	ントとの決着	
七十話	神山	
七十一話	裏切り	
七十二話	魔王アルヴ	
七十三話	目覚めの天使様	
七十四話	王都侵攻の後	
七十五話	半端な覚悟	
七十六話	たった一日での出来事	1902



	幕間	加速していく終末	—	1928
	人物設定集2	人物紹介編	—	1955
	人物設定集2	ースタータス編	—	1981
	第六章	墮落獣転ヘルシャー帝国	—	—
	白き祖龍と黒き竜姫	—	—	—
1996	七十七話	遙か遠き竜姫の記憶	—	—
	七十八話	ハウリア再び	—	2036
	七十九話	樹海での戦い	—	2067
	八十話	フェアベルゲンへ	—	—
2086	八十一話	貴女の為ならば	—	—
2103	八十九話	貴方は私の……	—	—
	幕間	王女の受難Ⅰ	—	2236
	幕間	王女の受難Ⅱ・結界の中で	—	2206
	神官は	—	—	—
	八十七話	帝城	—	2267
	八十八話	皇帝会谈	—	2287
	八十九話	—	—	—
	面部隊	—	—	2183
	八十六話	新生ハウリア反撃の	—	—
	始まり	—	—	—
	八十二話	帝都 前編	—	—
	八十三話	帝都 後編	—	—
	八十四話	仮面贈呈式	—	2162
	八十五話	ハウリア救出と動物仮	—	2213
	八十二話	帝都 前編	—	2124

2474	九十七話	黒竜姫VS白祖竜	
	九十六話	原点にして頂点	2446
	九十五話	祖の竜	2425
	九十四話	触発	2409
2388	九十三話	創獣神オルステッド	
	九十二話	反撃のウサギ達	2362
2340	九十一話	パーティー	
		後編	
2326	九十話	パーティー	
		前編	

			九十八話	奈落の化け物VS創獣神	2496
			九十九話	それぞれの決意と新たな	
		旅立ち			
		幕間	神という名の理不尽		
		六・五章	深淵卿と共に往く迷宮攻略		
		く深淵覚醒く			
		深淵一話	突入！ミレディ・ライ		
		セン大迷宮			2568
2584	深淵二話	ライセン大迷宮	上		
2610	深淵三話	ライセン大迷宮	中		

	深淵四話	嘘吐きの仮面	—	2635
2652	深淵五話	ライセン大迷宮 下		
	深淵六話	迷宮のボスゴーレム少女?	その名はミレディちゃん	—
	深淵七話	深淵突破	—	2690
	深淵八話	決意そして……	—	2721
	幕間	黒の獣	—	2737
	第七章	大巨樹迷宮ハルツィナく機神への鍵		
	百話	艦内にて	—	2755
	百一話	英雄の凱旋	—	2774
	百二話	新長老誕生	—	2799
	百三話	母、そして家族	—	2814
	百四話	ハルツィナ大迷宮	—	2835
	百五話	偽者の正体は……	—	2848
	百六話	たとえ姿が変わろうとも		
2867	百七話	トレントモドキ	—	12892
	百八話	理想の世界	—	2911
	百九話	夢から目醒めて	—	2935
	百十話	スライム	—	2960
	百十一話	快樂の試練	—	2979
	百十二話	傍にいるから	—	2994
	百十三話	リ्यूーテイリス・ハルツィナ	—	3014

幕間	3213	百二十四話	P v N	3031
終末の始まり		百二十五話	反転	3048
		百二十六話	それぞれ戦い	3069
		百二十七話	P v N ②   鳴動	3089
		百十八話	神罰の焰	3120
		百十九話	P v N ③   決着	3140
		百二十話	一つの希望	3162
		百二十一話	早朝の二人	3187
		百二十二話	不確かな未来へ	3213
	3258			

		番外編	月刊フェアベルゲン①	3274
		番外編	月刊フェアベルゲン②	3293
		人物ステータス①		3310
		人物ステータス②		3327
		七・五章	鬼人戦線く鬼のたった一つだ	3333
		けの願い		3342
		百二十三話	動き出した古	3333
		百二十四話	新たななる苦難の前触れ	3342



## 本編前

### プロローグ

私の人生が変わった……いや、決まったのはあの時からだと思う。それは物心がついて間もない時、私……園部優花があの人と……彼と出会った時、  
あるべきストーリー  
運命の歯車が変わり出したんだ——。

夏の残暑が残るも、外でも過ごしやすいくらいになった頃。

優花は、親友である宮崎奈々と菅原妙子の二人と一緒にいつも集まる公園で遊んでいた。

しかし、遊ぶのに夢中で門限の五時に迫るのに気付いたのは太陽がもう沈みかけている時だった。門限時間に迫ることに気付いた三人は遊ぶのを止めて各々家に帰ることにした。

優花と二人の家の方向が逆だから公園の入り口で別れることになった。

「またねー、ユウカ〜」

「また明日ね、ユウカっちー！」

妙子と奈々は、入り口で優花の方へ振り返りながら手を振って別れを済ますと手を繋ぎながら家に帰っていった。

「二人共、またねー！」

優花も二人に別れを告げながら手を振ってから帰ろうと思った矢先、あることに気が付いた。

「あれ？……ない。落としちゃった…？」

ふと髪をいじった時に母に買って貰った大事な髪留めが無くなっていることに気が付いたのだ。

「探さないと……」

優花は公園で遊んでいる途中に落としてしまったと、急いで公園に戻り髪留めを探し始めた。

まず滑り台を登って、上から髪留めがないかと見下ろす。

「やっぱり……無いよね……」

流石に髪留めほどの小さい物が滑り台の上から見つかる訳もなく、滑ってから滑り台の周りを確認する。

「此処もない……」

しかし、髪留めがなく、優花は今さつきまで 妙子達と遊んだ遊具の周りを探すことにした。

鉄棒の周り

「ない……」

ブランコの下や周り

「ないよう……」

優花は色々な遊具に回り、髪留めを探していくが一向に見つからない。そして、最後の一か八かの賭けで砂場に向かって走り出した。

そんな優花の遊具の周りをぐるぐると回って探し回っている姿をある黒髪の男の子がジツと見ていたのを優花は気付かなかった。

「……………」

優花は砂場に到着すると、すぐさま砂をどかしたりして髪留めを探す。が、

「なんで……」

幾ら砂をどかしても、髪留めが見つからず不意に言葉を漏らす。

「なんで……見つからないのっ」

ヤケになってしまい、砂を薙ぎ払うように勢いよく払いのけるも……



「ホントに、ど……こなの？ に……っ……」

優花は砂を払うのをやめ、そのまま立ち尽くす。何処を探しても髪留めが見つかず、そして、段々と視界がぼやけだし、泣き出す寸前だった。

その時だった。

「……どうしたの？」

「ぐすっ……え？」

突然、後ろから声が聞こえ、優花は涙目になりながらも、後ろの方向へ振り向いた。

其処には……

「ねえ、君どうしたの？」

背丈は自分と余り変わらないぐらいの黒髪の男の子が立っていた。その子は心配するような眼差しを向けながら優花に声をかけていた。

もしかしたら髪留めを探してるのを見て、気になって話しかけたんだろう。

「……」

優花は普段は知らない子とは話さないタイプだ。簡単に言えば友達以外とは余り喋らない、しつこい時は強く言ってしまうタイプで所謂人見知りに近い。

しかし、そんな性格である優花でも、髪留めのことしか頭になく気付いた頃には自然と口を開き、ポツポツと彼に事情を説明していた。

「あの……グスっ……ね、私ね……んぐ……遊んでた、と、時にね……お母さん……から貰った、髪留めを落としちゃったの……」

涙に耐えながらなので所々、詰まりながら話していく優花。そんな話を彼は真剣に聞いてくれていた。

「……髪留め、それって何か特徴とかある？」

彼は落とした髪留めに何か特徴があるのかと聞く。優花は少し頬に流れた涙を手の甲で拭き取りながら答えた。

「えっ……と、綺麗なお花さんが沢山ついでる」

「他には？」

「白色のお花さん」

そう彼からの質問に答えていくと、彼は優花の話しを聞いて両腕を組みながら「うーん」と声を漏らしながら考えていた。

そして……

「……はっ」

「ふえ?!」

彼が突然、声を上げるので優花は体をビクツと揺らし、変な声をだしながら驚いてしまふ。

「ど、どうしたの?」

「…もしかしてっ」

いきなり声を上げるので、どうしたのか聞くと彼はそんな優花の声に気付かず、自分のポケットに片手をつっ込み、何かを取り出そうとしていた。

「……………あつた」

彼は片手をつっ込んだポケットからある物を取り出し、優花にギュッ握った手を突き出した。

「コレ……………君のだと思うんだ」

彼はそう言いながら、片手で握っていた手を広げて物を見せる。優花はおずおずと近づいて彼の取り出した物を見る。

「え……」

優花は彼が見せた物を見て驚きのあまり目を見開いてしまった。

それは、彼が握っていたものは……

「君から教えて貰った特徴を聞く限り、これかなって思ってた……」

それは、優花が探していた髪留めだった。

「何処にあつたのコレ?」

説明する彼に優花に何処にあつたかと聞くと……

「…………撮…………てたんだ」

彼は今までと違う雰囲気を出しながら恥ずかしそうに顔を逸らしながら話しているが、小さな声音だったので優花の耳には聞こえなかった。

「ん？ ……あの何て？」

「…………」

「あ、あの…………もう、一回言つて欲しいなー」

何を言っているのか分からず、もう一度言つて欲しいと頼むと男の子は少し顔を赤くしながらも再び説明した。

「と、特撮ヒーローの必殺技の練習したら、花壇の近くに落ちてたんだ！…………綺麗な髪留めだったから分かりやすかったんだっ」

「と、特撮ヒーロー？」

恥ずかしいのか顔を赤くして説明する彼に、優花は彼の言葉の特撮ヒーローに反応する。そして、自分の記憶を張り巡らせ、確か日曜日の朝に見てる某魔法少女のアニメの後にやる番組だったと思ひ出す。すると、男の子はそのまま声を上げながら勢いよく座り込んだ顔と顔を両腕で覆い隠した。

「うわああああ！ ……絶対に変な奴つて思われた！」

「えっ、え？」

優花は彼の突然の行動に少し困惑してしまいが、彼の隣にそつと座り込むと微笑みながら伝えた。

「私は、変じゃないと思うよ」

「えっ」

優花の言葉に彼は目を見開きながらジツと見つめていた。

「ホントに変つて思わないの?」

「うん、私はそう思わないよ。それに……君は優しいから」

「……………」

そう伝えると、彼はジツと優花を見つめていた。だが、流石にずっと見つめられるのは恥ずかしくなつてしまつて顔を逸らしてしまう。

「あ、あの。君の名前は?」

優花は髪留めを見つけてくれたお礼がしたくて名前を知りたくて、彼に名前を聞いた。すると、彼は片手でポリポリと頭を掻きながら少し恥ずかしそうに自分の名前を言う。

「僕の名前は南雲ハジメ、君は?」

「私?」 私の名前は園部優花。優花で良いよ」

「じゃ、じゃあ……優花ちゃん、僕もハジメでいいから」

「うん、ハジメ君」

優花は彼の名を聞いた時、素敵な名前だと思った。

「あつ、そうだ。はい、優花ちゃん髪留め」

「あつ……ありがとう」

優花はハジメとの会話が楽しくて、髪留めのことを忘れていたが、ハジメの言葉でハツと思い出す。するとハジメが髪留めを私の手の平に髪留めを置いた。

優花はハジメに見つけて貰った髪留めを頭に着けてから、ハジメの方へ振り向く。

「ハジメ君、ホントにありがとう見つけてくれて」

「うん、どうぞ致しまして」

ハジメに再度お礼を言うと、彼は優しい笑みを浮かべながら言葉を返した。

優花はそんな彼の表情を見て、ギョツと服を握る。何故か胸の奥がドキドキと鳴っていて苦しいのに嬉しく感じているのだ。

こんなことは初めてなのでこの気持ちは何なのかをこの頃の優花は分からなかった。

「そろそろ、暗くなっちゃうね」

「え？」

ハジメに言われて優花もハツと周りを見ると時計はもう六時になりそうので外も暗くなっていることが分かった。

「僕も帰らないと……じゃあ、僕は行くね。じゃあね優花ちゃん！」

ハジメはそう言つて、家に帰ろうと走り出そうとした時だった。

「待つて！」

しかし、優花は何故かハジメを腕を両手で掴んで、家に帰るのを引き止めてしまった。何故、こんな行動をしてしまったのか優花でも分からない。でも、この時はハジメとは離れたくないという気持ちが優花の心を支配していた。

「優花ちゃん？」

ハジメは突然の優花の行動に困惑しながら苦笑いして話しかける。優花はそんな彼に意を決して自分の気持ちを伝えた。

「ね、ねえ……ハジメ君」

「どうしたの？」

「私、ハジメ君にお礼がしたいの！」

優花はハジメにお礼がしたいと伝えると、ハジメは首を傾げた。

「お礼？」

「うん、お礼！」

「でも、家に帰らないと……」

「あ、安心して！ わ：私の家洋食店なの……だ……だから……」

「優花ちゃん？」

「だから……お店の料理を食べさせてあげる！」

優花の言葉にハジメ君は少し考える素振りをしてから、疑問形で聞く。

「良いの？」

「うん！良いのっ！」

そう言つて優花は、ハジメの手を掴むと一緒に私の家へと一直線に駆け出した。  
~~~~~

カラン……

「た、ただいま……」

勢いのまま、ハジメを家に連れてきたは良いものも、門限は過ぎているのを忘れており、家に戻った時に思い出し、私は小声で言いながら慎重に扉を開けたのだが……扉に付いているベルが鳴ってしまう。すると、奥のカウンターから人影が現れた。

「優花！」

「……あつ、お母さん」

大きな声で名前を呼びながら駆けつけたのは母の優里だった。

「何時だと思つているの！」



「ごめんなさい!」

怒っている優里に優花は頭を下げながら大きな声で謝る。すると、優里の怒った声と優花の声が聞こえたのか更に奥から父の博之が優しい表情で優花達の傍まで来た。

「おかえり、優花」

「……お父さん、た、ただいま」

「優里。優花も無事に家に帰ってきて、反省してるんだし良いじゃないか?」

「でも、貴方っ。優花が何故こんなに遅くなったのか聞かない……「あのっ!」と……えっ?」

「ぼ、僕が説明しますっ!」

博之は無事に優花が帰ってきたから良いと言っているが、優里は優花に何で遅くなったのか説明を求めようとした時、扉のせいで姿が隠れていたハジメが声を上げた。

ハジメの登場に優里と博之は驚いていて困惑するも、博之はハジメに傍まで歩き、ハジメの片方の肩に手を乗せながら目を合わせるぐらいにまで腰を下ろす。

「えっと? 君は?」

「あ、僕……南雲ハジメって言います」

「ハジメ君だね。どうしたの此処に? 君のお母さん達は何処かな?」

「えっ……それより優花ちゃんのお父さん! 優花ちゃんがお、遅れちゃったのは、

り、理由があるんです！」

そして、ハジメは博之と優里に初めての人との会話で緊張するも事情を話した。ハジメから大体の事情を聞いた博之はウンウンと頷きながら優花の方を見て確認を取る。

「そうか……ホントかい優花？」

「うん！ハジメ君が見つ付けてくれたの！」

視線を向けられて優花は、微笑んで元氣一杯にそう答える。すると、博之は納得したように頷いてからハジメ君に視線を戻すと、笑みを浮かべて感謝を伝えた。

「ハジメ君、優花の大事な髪留めを見つけてくれてありがとう」

「私からも、ありがとね。ハジメ君、優花の髪留めを見つけてくれて」

「ゆ、優花ちゃん困っていたので……それに、困った人を見過ごせなくて……」

二人はハジメに感謝していると、ハジメは照れ臭そうに顔を赤くしていた。すると、博之はある提案をした。

「そうだ、ハジメ君。優花の言う通りに此処でご飯を食べていくかい？」

「ホントに良いんですか？」

「ああ、構わないよ」

「でも、やっぱ……」

ハジメ君は申し訳ないと思っっているのか、二人に答える声が少しぎこちなかった。そ

れを見た優里は笑みを浮かべながら提案する。

「なら、ハジメ君のお父さん達も呼んでも良いのよ?」

「えっ?! 良いんですかつ」

優里の提案にハジメはパアツと笑みを見せる。

「うん、良いのよ。ねえ、貴方?」

「ああ、構わないさ。私としてもハジメ君のご両親に会ってみたいし、お礼をしないとね」

「ハジメ君、家の電話番号が分かるかしら?」

「はいっ。ヒーローグッズやゲームの通販で購入する際に覚えまして!」

ハジメの覚え方に園部一家は苦笑いしてしまう。そして、彼は自分の親に連絡を入れるために優花の家の電話を借りて連絡を入れた。

数分後……

カラアン、カラアン

「あのー……すみません。ここにハジメがいると聞きましたけどお……」

「お邪魔しまあす……」

扉のベルが鳴り、優花の家に二人の大人の男女が来店した。恐らくハジメの父親と母親だろう。声を聞いて、厨房にいた優里と博之が顔を出した。

「はい、此処に居ますよ」

「良かった……あつ、すみません。私、南雲董と言います。そして隣は旦那の……」

「父の南雲愁です。すみません、ウチのハジメが」

「いえいえ、世話になったのはウチの方ですから」

ハジメの母親の董と父親の愁は博之に頭を下げ謝るが、お世話になったのは此方だと伝えると、董が首を傾げた。

「どう言うことです？」

董がそう聞くと、博之は愁と董に髪留めの件を話した。

「はあ……そう言うことだったんですね」

「ハジメやるじゃないか」

「ちよつ、父さん！」

事情を聞いた南雲夫妻。董はそういうことかと呟きながら納得して頷き、愁の方は嬉しそうにハジメの頭をワシヤワシヤと撫でていた。頭をワシヤワシヤされてるハジメは人前のせいか照れながらやめて欲しそうに頭を振っていた。

「では、私達は料理の準備をするので」

「あつ……本当にありがとうございます」

「いえいえ、感謝するのは此方ですから」

博之達はそう言つて、厨房に向かつていった。

すると、ハジメを見つめていた優花に、董がいつの間にか傍まで近寄つてきており話しかけた。

「えつと……優花ちゃんよね？」

「えつ、あつはい」

名前を呼ばれ、すぐに董の方へ振り向く優花。

「ふう〜む……」

「あ、あの？」

董は優花を見つめる。流石にずっと見られるのは恥ずかしく声をかけるが反応はない。もう一度声をかけようと口を開いた時だった。

「あつ……「可愛いいいい〜」……?!」

董はいきなり声を上げて優花を抱きしめる。優花は突然のことに何が起こつたか分からずに混乱してしまう。

「何してんの?! 母さん!」

ハジメは優花に抱きつく董に声を上げて注意するが董は優花に抱き締めながら口を開いた。

「いや〜、優花ちゃんがウチのハジメのお嫁さんになつてくれれば良いのにな〜つて

思っちゃって」

「っ?!」

「母さん!」

董のトンデモ発言に優花は一瞬でボッと顔全体が真っ赤になってしまい、ハジメも顔を真っ赤にして董に怒鳴る。すると、愁までもが便乗する。

「ハツハツハツ。 良いじゃないか? 優花ちゃん滅茶苦茶良い子だぞハジメ?」

「父さんもか!」

そんなカオスな状況になっていると、声を聞こえた。

「皆さん、出来ましたよお」

「おや? 楽しそうに話していたが何の話をしてたんだい?」

料理が完成したのか博之と優里が厨房から料理を運びながら戻って来てこのカオスは終わりを告げた。

告げた筈だが……

「そうね。 ハジメ君なら優花を任せて良いわね」

「お母さん?!」

何故か優里の追撃にカオスが終わるのは、五分後だった。

そんなことがありながらも、優花達は博之が作った料理と一緒に食べた。

そこで分かったことは董は有名なあの某漫画家でその作品のファンである優里と意気投合したり、愁は有名なゲーム会社の社長だと知り驚いた。そして、ハジメの家は、優花の家の近くにあると知って、優花は、これからもハジメと遊べると思っ嬉しくなつた。

近い内に妙子と奈々にも、ハジメを紹介しようかと、優花は彼との出会いを嬉しく感じたのだった……。

そして、この出来事が園部優花と南雲ハジメとの最初の出会いであり物語の始まりであった……。

一話  
ある帰り道

ハジメと優花の出会いから、七年の時が経っていた。

まだ冬の寒さが残っている三月のある日、小学校からの帰り道、優花とハジメは小学6年生になり、数ヶ月したら、小学校を卒業するのだった。

「それにしても、この七年。色々あったな……」  
「だね」

優花の呟きを聞いていたハジメが隣を歩きながら、笑みを浮かべて相槌を打つ。

「ハジメ君も何故か格闘技を始めちゃったし」

「アハハ」

優花の言葉に、ハジメは苦笑いを浮かべた。それは三年ほど前、ハジメは愁のゲーム作成の為に格闘技の道場へと取材に着いて行った際にハジメが道場の師範の李リさんという初老の男性に声を掛けられ見込みがあると言われ、最初は断ろうとしたが、愁の面白半分もあつてか半ば強制的に道場に入ったというらしい。

最初は面倒くさそうだったが、今は李さんに何か言われて、週に二、三回ほどジムに



行つて鍛錬を励んでいるらしい。

「本当に色々あつたなあ……」

この七年で、色々なことがあつた。それは、ハジとの出会いから更に増えたと思う。ふと、優花が思い出したのは七年前、親友の宮崎奈々と菅原妙子をハジメに紹介したことだった。ハジメは最初二人と会う時はオタクな自分を受け入れて貰えるか分からなくて不安で緊張していた姿が可愛くて、つい笑みを零した。

く七年前く

優花は妙子と奈々と遊ぶ日にハジメをサプライズ的な感じで紹介しようと二人には伝えずにハジメを呼んだ。

当初この時、この話を提案した時、ハジメは電話越しでも分かるぐらいに不安になっているのが分かった。

そして、遊ぶ日の当日、優花とハジメは二人より一足早くいつも集まる公園に来ていた。

『よし、後は二人を待つだけだね』

『う、うん……』

優花はハジメの緊張をほぐそうと話しかけるも少し回答がぎこちなく、いつもとは雰  
囲気が違っていった。

『やっぱり……ねえ、ハジメ君』

『ど、どうしたの？ 優花ちゃん』

『もしかして、妙子達と会うの嫌？』

『……っ！』

優花はそう切なそうにハジメに言うと、彼は目を見開く。そして、下唇を噛みなが  
ら両腕をギュッと握りしめながら顔を俯かせた。

『会うのが嫌なんだ……』

優花はその反応を見て、ハジメは妙子達と会うのは嫌だと思った。

しかし……

『ち、違うー！』

それを反対したのはハジメだった。

『じゃ、じゃあ……何で？』

違うなら何で妙子達に会うのを躊躇うのか優花はハジメに少し語気を強めながら聞  
く。すると彼は若干、唇を震わせながら話しだした。

『優花ちゃん、僕ってオタクでしょ？』

『え?』

ハジメの言葉の意味に分からず、首を傾げた。

『オタクが駄目って、どう言うことなの?』

『だって……オタクって周りから疎まれやすいでしょ? だから、優花ちゃんの友達がおタクが苦手の人だったらどうしようと思って、怖いんだ』

そう言って、ハジメは更に顔を俯かせる。

だから……

『ハジメ君っ!』

優花は、ハジメの手を離さないように強く握った。その表情も真剣だ。

『オタクが何なの?』

『でも……』

どう声をかけてもハジメは顔を俯かせてばかりだった。だから、優花は自分の本音を彼にぶつけた。

『ハジメ君は、ハジメ君でしょ?』

『え?』

唐突に初めて言われた癡に言葉に、ハジメは顔をバツと上げる。その表情は少し困惑の色が見える。

『オタクが何なの？ 私ハハジメ君が話すことは全部面白いよ。それに、二人もそんなことでハジメ君を馬鹿にしないよ』

『優花ちゃん……』

『だから、オタクなんか気にせずに楽しく過ごそう？』

『……うん！分かったよ』

ハジメはそう言つて笑顔を見せた。その笑顔を見て、優花自身も笑顔になった。

そうしている……

『あつ、優花』

『ユウカっちゅー！』

公園の入り口の方から聞き慣れた声が聞こえ、振り向くと妙子と奈々がいた。

『よし、ハジメ君。行く？』

『うんっ！』

そして、優花はハジメの手を繋ぐと妙子達の元へ駆け出した。そして、二人にハジメを紹介して、彼も緊張していたが案外二人共、ハジメ君を受け入れてそれから四人で遊んだりすることが多くなつて、それが自分達の日常となつた。

皆で集まつてゲームをして、お泊まり会をしたりした。そして、私達が三年生になつた辺りからハジメ君彼は時々、私の家の手伝いをするようになった。理由は「将来の為」

としか言わなかった。しかし、ハジメ君が家の手伝いをするようになってから私とハジメ君が一緒にいる姿を見て、常連のお客さんからは優しい眼差しを向けられながら「夫婦」や「カップル」だの揶揄された。私は恥ずかったがそれと同時に嬉しさも感じていた。

因みにハジメ君は常連さんには顔を赤くしながらも、手伝いを頑張っていたが、董さんの煽りには耐えられず、顔を真っ赤に染めながら座り込んでいた姿を優花は可愛く思っていた。

今を思い返すとホントにこの七年、色々あったなど優花は笑みを零す。

「もうすぐ、卒業だね」

すると、隣にいたハジメが声を掛けてきた。

「え？、うんそうだね」

「どうしたの優花ちゃん、何か考え事？」

「う、うん」

「考え過ぎたりしたら周りが見えなくてコケて怪我するかもしれないから、気をつけてね」

いきなり声を掛けられことで少し返答に遅れてしまっし、ハジメに心配されてしまっし少し恥ずかしくなった。

しかし、何故か嬉しくも感じている自分がいた。  
そして……

「ねえ、ハジメ君」

「どうしたの？」

優花は首を傾げるハジメの服の裾を掴みながら私の本音を願望を伝えた。

「これからも、一緒にいようね」

そんな優花の本音を聞いて、ハジメは振り向いて手を取って笑み浮かばせながら……

「うん」

それは短い返答だ。しかし、その返答だけでも優花にとっては嬉しく感じるものだった。

「よしっ！ じゃあ、早く行こっ」

「えっ、ちよっ待っ……」

ハジメの「待った」を聞かずに優花は駆け出していく。

そう、これからも彼とこんな毎日をずっと過ごせるように……。

しかし、それは叶わなかった。中学の時にあんな出来事が起こるなんて誰も想像も出来なかったのだから……。

南雲ハジメは今、小学校から一緒に下校してる隣の女の子、園部優花と出会いで生活は一変した。

彼女との出会いは公園でハジメが特撮ヒーローの必殺技のポーズをとって遊んでる時だった。

『…ライダーキィイツ……ク！……ん？』

自分と同じぐらいの女の子が一人で公園の遊具の周りをウロチョロしていた。それは遊具に遊ぶ気配もなく何かを探してるような感じに見えた。

『何か…探してるのかな？……ん、なんだろこれ？』

ふと、花壇の近くに光るモノが見えたハジメはそれを拾うとそれは髪留めだった。

『あの子のかな？』

ハジメは見つけた髪留めは公園の中をウロチョロしている子の物だと思い一旦、髪留めをポケットに入れ、砂場にいたあの子の元へ向かって手を差し伸べた。

『どうしたの？』

『え？』

それが南雲ハジメと園部優花の出会いだった。その後、彼女の大事にしていた髪留め

を渡し、何故か彼女の両親と自分の両親が一緒にご飯を食べるまでに至り、それからと彼女と遊ぶようになって、一緒に家でゲームや外で色々なことをして遊ぶ仲間となった。

そしてある日の事、優花が自分に友達に紹介したいと言ってきた。それにハジメは難色を示した。理由は簡単だ。自分は所謂オタクだ。これは親の職業からしてそうなる得なかった。そして、オタクとは、周りから疎まれやすく、もし優花がオタクな自分のせいで、その友達に疎まれ、もしその友達に言われ、自分と遊ぶのを避けるとなると嫌だった。

だが、そんな考えをするハジメだったが……

『ハジメ君はハジメ君でしょ?』

彼女の言葉に、救われた気がした。嬉しかった。

そして、彼女が紹介した友達の菅原妙子と宮崎奈々もハジメがオタクであっても仲良くしてくれて嬉しかった。

そして四人はかけがえのない友達となったのだ。

南雲ハジメは優花のおかげで変わることが出来た。友達が出来た。感謝をしきれない。そしてあの時言ってくれた彼女の言葉はハジメの中に募っていた恐怖が消えていくと同時に嬉しかった。



自分が例えオタクであつても友達に変わりはないと。

だからだろうかこの時から決意したのは……

——優花ちゃんに、彼女にどんなことがあつたとしても味方になり、自分はもうなつても良いから守ろう、と。

そして……

「優花ちゃん」

「どうしたの、ハジメ君？」

ハジメは優花を呼び止めると、彼女は顔をコチラを向ける。そして、ハジメを見つめるその瞳は美しく心臓の鼓動が早くなるのを感じた。

しかし、ハジメはそんなのを無視して優花に決意を伝えた。それは、師匠でもある李さんからの言葉を習ったものであつた。

『守る者あれば、人はより強くなれる』

そんな言葉に感銘を受けていたハジメは、つい口走つてしまったのだ。

「どんなことがあつても僕は、優花ちゃんの味方だから！」

口が勝手に動いて『君を守る』ような発言をしてしまったハジメは恥ずかしくなつて顔がみるみる赤くなつて熱くなつているのが理解できた。

その時だつた彼女から……

「ありがとう、ハジメ君」

「……………」

彼女の言葉とその笑顔に見惚れてしまつていつの間にかハジメはその場に立ち止まつてしまつた。

「どうしたの、立ち止まつて?」

「い、いやなんでもないよ」

急に立ち止まつたせいかわ優花に心配されてしまうが、ハツとしたハジメは慌てながらも返事をし、再び歩きだして彼女の隣まで行き彼女から話し掛けてきた。

「中学校楽しみだね」

「うん、そうだね」

「クラス、同じだと良いな」

「うん」

優花とそんな会話をしながらハジメはいつまでも彼女と皆とこんな感じで他愛のない話しながら楽しく日常を送れることを願つた。

しかし、現実はそのなりに甘くなかつた。

中学であるキツカケで僕——いや、俺は優花を守る為になつたのだから……………。

## 二話

## 影が薄すぎる男との出会い

ハジメが彼と初めて出会ったのは、中学の入学式の日であった。

ハジメ達は、同じ中学に進学し、四人で一緒に掲示板上に貼られたクラス表を見ていた。  
「えっ……と……南雲、南雲……あった。僕は二組、か……優花ちゃんは？」

ハジメは自分のクラスを確認すると、左隣にいる小学の私服姿から此処の中学の制服を着ている優花に聞く。優花も、自分の名前を探している最中でクラスを表に視線を向けていた。

「うーん、あつ、あった。私も二組だったよ」

「じゃあ、一緒だねっ」

「うんっ」

なんとか、優花と同じクラスになれたことで安心してハジメは安堵する。すると、右隣から一緒にクラス表を見ていた二人の声が聞こえた。

「ウソー！ 私だけ一組なの?！」

「あー、ドンマイ、奈々……」

それは幼なじみである宮崎奈々と菅原妙子の声であった。

妙子はハジメと優花と同じ二組だったが、奈々だけが一組だったらしく嘆いている。

「あのさ奈々、クラスは違うけど昼ご飯は毎回そっちにいくからさ。ねえ、ハジメ君」

「そうだよ、だから安心して奈々ちゃん」

「二人もこう言ってるんだし」

「うう…南雲っち、ユウカ」

「ほらほら、早く教室に行こ？ 入学式もあるんだし…」

三人でなんとか奈々を励ましていると、妙子がそろそろ入学式の時間が迫っていることを言うので、ハジメ達は各クラスに向かうのだった。

入学式が始まり、校長などの挨拶などがあつて終わると各クラスで自己紹介などをしていった。

『遠藤浩介。遠藤？…遠藤！あれえ、アイツって今日、休みだったかあ？』

しかし、自己紹介の際にハジメ達のクラスの二組で、名前を呼ばれているのに返答が無く、そのままスキップされることもあつたが、担任の挨拶でホームルームが終わり下校時間になった。

「ハジメ君」

「ハジメ」

「南雲つち〜」

「うん？ 優花ちゃん、二人共」

ハジメは後ろから呼ばれて振り返ると優花と妙子、奈々の三人がハジメの所へ駆け寄つて来ていた。

「どうしたの？」

「早く一緒に帰ろう〜」

「そうそう、お母さん達が皆でお祝いしようって」

三人が来たのは、一緒に早く帰つて“ウイステリア”で皆でお祝いパーティーをしようということらしい。ハジメは、企画したのは自分の母の董だろうと予想していると、更に妙子からも呆れる報告があつた。

「既に、父さん方達はもう、お酒飲んじやつて出来上がつてゐるらしいわ……はあ、全く」

「あーアハハ……原因は絶対、ウチの父さんだ」

「ハジメは悪くないでしょ」

妙子の報告を聞いて、原因を察したハジメは苦笑いで校内の窓から見える空を見上げた。何故そうするのか？ 簡単に現実逃避が出来るからだ。

そうてると、優花からも声が掛かった。

「だから、ハジメ君も行こ？」

「あー、僕はちよつと校内を見て回ってから向かうよ」

「ええ〜」

「どうして?」

ハジメはそう返すと、奈々からは「ええ〜」と何故と疑問符を浮かべる。優花も首を傾げている。

「ちよつとした興味だよ。でも安心して僕もすぐに向かうから」

「はあ、ハジメって時々、変よね」

「変って……」

妙子に変人と言われ、少し傷付くが苦笑いしながらハジメは優花ちゃん達と一緒に帰ろうと誘われたがやんわりと断った。

「じゃあ、ハジメ君、また後でー」

「早く来ないと、お料理、全部食べちゃうからね〜」

「いや、アンタそんなに大食いじゃないでしょ? じゃ、ハジメ また後でね」

「うん、わかった〜」

優花はそのまま、手を振りながら後で合流しようと言って、奈々はボケるも妙子に突っ込まれたりしながら先に「ウイストリア」に向かつていくのを手を振りながら見送るハジメだった。

ハジメは、優花達と別れてから適当に校内を回っていると、何処からか微かに人の声  
が聞こえた。

「……………な……………」

「えっ?」

その声を聞こえ、ハジメは立ち止まって周りを見渡すが誰もいない。

「うん…? 空耳かな……………」

やはり誰もいない。空耳だと決めつけ、再び歩きだそうと一歩踏み出そうとした瞬間  
だった。

「…な…で……………も、こん…ばっか…ぐす」

「……………!」

それは空耳じゃなく、噤り泣いてるのか震えた声だった。ハジメは、すぐさま声の発  
生源を探し始めた。

「此処かな……………」

発声を辿りながらハジメが辿り着いた場所は、空き教室だった。普段は余った机や  
椅子が閉まってある所謂、物置教室だった。

ガラガラ……

「誰か、いますか〜?」

少しずつスライドさせ扉を開けながら誰かいないかと声を掛けながら教室誰も居なかった。

「やっぱ、違う場所かな?」

空き教室の何処も見渡しても人影すらも見えず、居ないと思ったハジメは扉を閉めようとした時だった。

ハジメのすぐ近くから……

「ぐすつ……」

再び、啜り泣く声が聞こえ辺りをすぐにまた教室を見渡していく。そして、よく見ると部屋の隅に体育座りをした前髪を伸ばした男の子がいた。

「あの子かな……」

彼は、顔を俯かせているせいかハジメに気付く様子もなく、彼に近付こうとするが……

「クソ……なんでクラス表の名簿に名前がなかったり……自己紹介も順番とばされるし……ホントに俺……この先、友達出来るかな……?　ぐすつ」

彼の虚しい内容の独り言を聞いたハジメは気まずさと少し同情してしまうが、ひとま



ず彼に声を掛けることにした。

「あのー、大丈夫……?」

「……………え?」

声を掛けると、彼はハジメの存在に気が付いたのかハジメの方へと振り向き、固まるだけだった。

「おーい聞こえる?」

「……ッハ！ おっお前、俺に気付いたのか!?!」

彼は驚くように声を上げるが言ってる意味が分からず、ハジメはなんとなく手を差し出し、自分の自己紹介をする。

「あの僕は南雲ハジメって言うんだ。君の名前は?」

「あつ、ゴメン。俺の名前は遠藤浩介って言うんだ」

「遠藤君か……あつ、僕は何でも呼んで良いからっ」

「じゃっ、南雲で」

「うん」

そしてこの日、ハジメは空き教室で出会った彼、遠藤浩介との奇妙な出会いを果たしたのだった。

―数分後―

「……………えっ！遠藤君もあの漫画を読んでのの!？」

「まさか、南雲もアレ読んでのの?」

ハジメは浩介と話してる内にお互い好きな漫画の好みが合いハジメが今お気に入り  
の漫画を持っていたりと好きだと知って話が弾んでいた。それに、ハジメはこれまでの  
人生で同い年の男子とここまで話すことは滅多に無かったので新鮮さも感じていた。

「うん、最新巻も持つてるし、番外編の小説も持つてるよ!」

「マジ!? 俺も読んでえな!」

浩介はそう唇を尖らせながら言つて両手を後ろに回した。そんな浩介を見てハジメ  
は口を開いた。

「じゃあ……………今度、僕のを貸そうか?」

「えっ、良いのか?」

ハジメの言葉に浩介は予想外だったのか驚いた様子でハジメを見つめる。

「うん、良いよ僕もこんなに話しが合う人あまりいなかったから…」

「え?」

そう、ハジメは boyfriend がそんなにいない。いるとしてもネットのゲーム仲間ぐらい  
だ。男の子とはそれなりに遊んではいたが、優花達と遊ぶ方が多く。それに大事と言

える程の男友達が出来ずにいた。

「……………」

ハジメの言葉に浩介が黙ってしまい、ハジメは不安と焦ってしまつて唇を震わせながら話しかけた。

「……………遠藤君？」

「あつあのさ南雲……………俺からも友達になつてくれないか？」

「えつ……………」

遠藤君の言葉にハジメは驚きを隠せず、固まつてしまった。すると、浩介が首を傾げながらハジメの名前を呼ぶ。

「南雲？」

「うん、良いよ！僕も遠藤君とはこれからも仲良くしたい！」

ハジメは、初めての男友達が出来たことに嬉しさを隠せず、声を上げながら感謝を伝える。すると、浩介からも同じように声が上がった。

「よっしやあー！俺も、これからよろしくな南雲」

「うん、こちらこそ」

浩介が差し伸べた手をハジメがしっかりと応えるように手を差し出して二人は握手をする。

そして、ハジメは浩介という初めての男友達と呼べる男の子と出会えることが出来たのだった。ふと、ハジメは浩介は何処のクラスなのか聞くことにした。

「あっそういえば遠藤君って何組？ 僕は二組だけど…」

「えっ…俺も二組なんだが……………」

ハジメは、浩介が同じクラスだったことに驚くも、自己紹介の時のことを思い出した。「遠藤…………ハッ、あの居なかった子は遠藤君なのか?!」

「えっ、今気付いたのか？」

浩介は、ハジメを信じられないといった眼差しを送る。ハジメは浩介の眼差しに耐えず顔を逸らす。

「遠藤君、ゴ、ゴメン。気付いてなかった……………」

「…………ウソだろー?!」

浩介の心の叫びは学校中二響くぐらいの大きさだった。

「アハハ…………ドンマイ」

ハジメはそんな影の薄さを嘆く浩介を見ながら、これから楽しい中学校生活を送れていくと笑みを浮かべながらそう思ったのだった…………。

くオマケく

途中まで、一緒に下校しているハジメと浩介。

「そういえばさく南雲？」

「ん、どうしたの？」

ハジメは話しかけられ、浩介の方へと向いた。

「いや、握手したときさ……お前って思ったより力強いんだな」

「あー……」

そう、浩介はハジメと握手した際に、ハジメの容姿から思えないほどの握力の強さに少し驚いていたのだ。なので何かやってるのかと聞いてみると、ハジメはすんなりと答えた。

「僕、格闘技やってるんだ」

「へえ、格闘ねえ……それは納得……じゃねえわ！」

「ええ?!」

その驚きが、遠藤浩介の今年一の驚きにランクインするのであった……。

## 三話

## 夏休み

空き教室で影が薄い浩介と友達になったハジメは優花達に次の日に彼を紹介した。しかし、返ってきたのは浩介にとって心抉られるものだった。

『ハジメ君、だ、大丈夫?』

『そ、そうだよ。南雲っち今日早退する?』

『ハジメ保健室行く?』

三人ともハジメがおかしくなったか、心配した表情で詰め寄る。このことを隣で聞いていた浩介はたまったものではなく、だがいっまでも黙ってるわけもいかならず心の奥底から叫んだ。

『ずっと、隣にいるわ!!』

浩介の怒りの叫びのおかげで、ようやく三人とも浩介の存在に気が付き驚きの余り目を見開いた。

『ホントにいた……』

『冗談じゃなかったんだ』

『全然、気付かなかった……』

三人共、浩介を人じゃないかのように言い始める。それを聞いた浩介は辛さの余り膝から崩れ落ちた。

『南雲……俺、泣いて良いかな？』

『遠ウウ藤おおくウウン!!』

泣き崩れる浩介を、ハジメは彼の背中を摩りながら励ますのだった。

それが、浩介と三人の最初の出会いだった。

こんな出会いから始まった五人の仲は、

~~~~~

中学に入学して数ヶ月。ハジメ達は中学初の夏休みに突入した。

そして今、ハジメ達は……

「海、綺麗だな」

海にいるのだった。

何故、ハジメが海にいるかは、三日前ほど前だった。その日は、五人で「ウイステリア」で夏休みの宿題をしていた。そして、休憩の時、ご飯を食べながら雑談をしていると何かを考えていた奈々が突然と立ち上がった。

いきなりの立ち上がった奈々に驚く四人。妙子も遂に頭がおかしくなったかと思つて、奈々は店全体に響く声音で、

『海、行こう！』

『奈々、うるさい』

『あ……はい』

しかし、デカイ声で話す奈々は青筋を立てた優花によつて注意されるのであつた。

そして、現在に戻る。波の音、夏の太陽が照りつける中、砂浜でハジメは海パン姿でポケーつと海を眺めながら皆の着替えを待っていた。浩介は、とある用事で更衣室へ居るため此処には居なかつた。

「ハジメく〜ん」

少ししてから優花の声が聞こえたハジメは、勢いよく声がする方向へと顔を向けた。

「ごめんね、ハジメ君。待った？」

そして、ハジメの目には、ピンクと白が混じつた色でフリルの付いた水着、スラリとした白く綺麗な肌。少し頬を赤くなっている優花の姿を見たハジメは、

「――」

美しさの余り、口をポカんと開けたまま時間が止まったかのようにフリーズしていた。



それを見た優花が心配した表情で座ったハジメに四つん這いで近付きながら声を掛けた。

「ハジメ君？」

優花のおかげでハッと我に帰ったハジメだが、すぐ目の前には水着姿の優花。そして、優花が四つん這いをしているせいでチラリと見える胸元に、ハジメは片腕で顔の下半分を隠してハッと顔を横に向けた。

「っ——だ、大丈夫だよ／＼」

「そっか……」

顔を逸らしながら大丈夫だと言うハジメを見て、優花は少し悩む素振りをすると思悟を決めたような表情になるとハジメの肩を叩く。

肩を叩かれたハジメは「どうしたの？」とゆっくりだが優花の方へ視線を戻すと、耳までも真っ赤にしながら水着をまるで見て欲しいかのようなポーズを取った優花が目に入った。

「ねえ……この水着ど、うかな？」

恥ずかしさも我慢して尋ねる優花に、ハジメもちやんと答えないと失礼だと思、ちやんと優花の方へと向き直った。

「淒く、似合ってるよ！」

「ほ、ホントに?!」

「うん!」

そう己の本心に従って優花に水着の感想を言うハジメ。すると彼女は嬉しそうに微笑んだ。

そうしていると後ろから聞き慣れた声が聞こえた。

「おい、二人共——!」

二人は声のする方向を見ると、奈々達も着替えを終えたようだ。そして、奈々達は自分達を呼んでいるようでハジメは優花に手を差し伸べた。

「行こ優花ちゃん」

「うんっ」

差し出された手を彼女は笑みを浮かべながら応えて手を握った。そして、僕達は奈々達の元へと手を繋ぎながら向かった。

少し駆け足で行きながら奈々達の元へ向かうと、ハジメは三人とそして、ある女の子に笑って声を掛けた。

「待ってたよ三人共。それに真実ちゃん」

「園部達もだが、南雲もありがとな妹を連れて来ちゃってすまないな。ほら真実?」

「……」ペコリ

「照れてる真実ちゃんく可愛い」

「こら、やめなさい奈々」

奈々が抱き着こうとして、妙子に止められる。そして、浩介の傍に離れないでいるのは浩介の二つ下の妹の遠藤真実である。

何故、彼女がここにいる理由はハジメ達が“ウイステリア”で海に行く前日の話し合いをしている時だった。

浩介が申し訳無さそうな表情で、皆に話を切り出した。

『なあ、お前等』

『どうしたの遠藤君?』

『明日、海行くけどさあ』

『まさか、浩ちゃん来れない?!』

奈々は残念そうな表情になるが、浩介は「ちやうちやう」と先走り過ぎだと笑って否定すると、用件を話した。

『いや、来れるけどなんか親が海に行くなら真実……まあ妹も連れてけつて言うんだよ』

『えっ遠藤つて妹いたんだ……』

『え、全然お兄ちゃんつて感じしない……』

『……喧嘩売ってる?』

妙子と奈々の言葉に、ピキッと浩介は青筋を立てると優花が止めに入って、話をハジメに振る。

『まあまあ三人共、ストップ! でも、そう言う事なら連れて行っても良いと思うけどハジメ君は?』

『僕も全然構わないし良いよ』

『まあ、私も良いけど』

『私は全然有りだよ』

『おっ助かる!』

そんな感じで真実ちゃんも参加する事になったのだった。そして当日、海に行く途中で浩介の妹の真実と出会った時に四人が一斉に「妹なのに影が薄くない?!」と驚いた時に浩介がキレたのは置いておこう。

そういうことがあって現在に至る。全員が集まったことだしと発案者の奈々が勢いよく海に向かって走り出した。

「じゃあ! 皆、揃ったし泳ごっ!」

「ちよっ奈々!」

「あつ二人共！待って！」

走る奈々に続いて、呆れた表情の妙子と優花も海に向かつていった。その光景を後ろから眺めていたハジメと浩介は苦笑いしていた。

「うわあー、元気だなアイツ等……」

「だね……」

「まあ……俺等も行こうぜ。ほら真実行くぞ」

「うん、そうだね。真実ちゃんも行く？」

「……うん」

そして、真実の手を握ってハジメと浩介も海へと向かうのだった。

それからは六人で海を泳いで、ハジメの見た目と合わない身体能力を見て浩介があんぐりと口を開けたり、ビーチバレーで奈々が顔面に砂浜に突っ込むこともあつて、笑わなかつた真実もクスツと笑いだしたりして楽しんだ。

その後も、恒例行事になりつつある浩介捜しが始まった。

「せつかくの海なのになんであー……!!」

何処からか浩介の叫び声が聞こえた。だが、見つかった際に真実から「浩にい、うっさい！」と怒りながら浩介の頭を引っ叩くのだった。

そして海の家で昼食を取った後、ある事件が起きた。ハジメと浩介が少し離れて近くの店で買い物をしておりハジメが外で待機している時だった。優花の悲鳴が聞こえハジメは急いで駆けつけた。

「ハジメ君、遠藤君！」

「……っ！ どうしたの?!」

「二人共、真実ちゃんがい！」

優花の話だと僕と遠藤君が離れてる時、女子四人で浅瀬で泳いでた時だった。真実ちゃんの足がつつたらしくそのまま四人で砂浜に戻ろうとした時、運悪く大きい波が沖の方へ強く流れたらしく真実ちゃんが波に攫われたらしいのだ。

「どうしよう！ハジメ君……私」

「……っ」

今は浩介も居なく、近くに大人も見つからない。海の家には、妙子と奈々が向かったらしいが時間がない。それを考えたハジメはすぐに行動に出た。それを見た優花が驚いて叫ぶように名前を呼ぶ。

「ハジメ君?!」

「大丈夫！」

ハジメは、海へと飛び込んだ。

バシャバシャ！

真実は、足がつつてるせいか上手く泳げず音を立てながら溺れそうになるのを耐えていた。

「……………ゲボツ、助けっ」

呼吸が上手く出来ず、もう体力の限界も来そうだった。

「(浩にい、ごめんね……………)」

そして、もう限界になってそのまま海の底へと沈んでいくと思った時だった。誰かに体を支えられる感じがした。

「(アレ……………溺れてない?)」

誰かに支えられ真実が溺れてないことに、困惑していると近くで荒い息遣いが聞こえた。その方向を振り返ると

「ハアハア……………間に合った」

間に合って良かったと安堵するハジメの姿があった。真実はハジメがいることに驚くがハジメの名を呼んだ。

「……………ハジメお兄ちゃん」

「ふう……真実ちゃん大丈夫？」

「……大丈夫」

「じゃあ、浅瀬に戻るから、肩に捕まって」

「……うん」

ハジメは息を整えると真実ちゃんの安全を確認して、大丈夫だと分かると彼女を連れて浅瀬まで泳いでいった。その間、真実は嬉しそうに顔を赤くしながらハジメの肩に捕まっていたのをハジメは知らない。

浅瀬に戻ると、店から急いで戻ってきた浩介と奈々と妙子が連れてきたと思われる大人の姿もあった。

「南雲！ 真実！」

「びえええええん！二人共〜！」

「二人共つ無事?!」

「ハジメ君！ 真実ちゃん！」

「大丈夫かい！君たち！」

四人共、心配して声を上げ、奈々は泣いてすらもあった。大人の人達も焦ったように此方に駆け寄った。

そして、ハジメは助けにきた大人の人に「今回は上手く救助を出来たから良かったが



君もまだ子供なんだ！ 次は気をつけなさい！」と叱られてしまった。でも、真実を助ける事が出来たならどうってこともなかった。

そして、ハジメ達は夕方になる前に海を出て帰り支度をしていた。早めに着替えが終わったハジメと浩介、真実は女子三人組を待っていると、浩介が苦笑いしながら話しかけた。

「ふう……散々な目にあつたが楽しめたな」

「だねえー」

そんな話をしていると浩介がハジメの前に立つ。ハジメが困惑するが、浩介は気にせず頭を下げた。

「南雲。真実を助けてくれてありがとう」

「ううん、僕が助けたかっただけだよ」

「それでも——「ハジメさん！」えっ、真実？」

浩介が何か言うのを遮つて真実がハジメに話し掛けた。

「真実ちゃんどうしたの？」

「あつあの今日はありがとうございます」

「良いよ、真実ちゃんの方こそ大丈夫？」

ハジメがそう言うと、真実がハジメが近付いたせいなのか少し顔を赤くなっている。

「はいっ……それでハジメさ……ごめん。ハジメ君、待ったー?」……

真実が何かを言おうとした時だった。丁度、優花達も着替えを終え此方へと駆け寄った。すると、目の前の光景を見て優花は首を傾げた。

「あれ、なんか話してたの?」

「うん。それで真実ちゃん何か……だ、大丈夫です」えっ、うん」

真実はそう言って、浩介の近くへと戻っていった。

「よし、全員揃ったし帰ろう!」

「今さっきまで泣いてたのに、元気ね」

「うっさい!」

そして、全員揃ったのを確認してハジメ達は、電車に乗って駅に付くと解散となった。

ハジメは優花と共に帰路についていた。すると優花が話し掛けてきた。

「海、楽しかったね」

「うん、そうだね」

ハジメも相槌を打って返事をする。すると、優花がハジメのすぐ近くまで顔を寄せる  
と耳元で囁いた。ハジメの心音が早くなる。

「ねえ、ハジメ君?」

「ど、どうしたの?」

「今日カツコ良かったよ」

「えっ！……あ、ありがとう」

「ふふ」

優花にカツコイイと言われ、嬉しくなっていると自分達の家の近くに辿り着いた。そして、優花は家の方向へと駆け出すとハジメの方に振り返って手を振った。

「またね、ハジメ君」

「うん、またね」

ハジメも手を振って、別れを告げると家に戻るのだった。その後も、ハジメ達五人は色々なことをして行った時々、真実ちゃんも遊ぶようになり中学最初の夏休みを満喫したのだった。

そして、ハジメはこの時に思いもしなかっただろうこれから起こってしまうあの悲劇を……。

↳ 遠藤兄妹の帰り道↳

遠藤兄弟は、二人並んで帰路についていた。

「南雲がいて良かったな〜真実？」

浩介がそう言っていると、真実が迫りながら浩介に話し掛けた。その表情は圧があり、浩介は息を飲む。

「ねえ……浩にい。ハジメさんって彼女いるの？」

「いや、聞いた事ねえな……」「分かった！」うおつ、いきなり叫ぶなよ」

以外な質問に、困惑する浩介だが普通に答えるとすぐ近くで真実に叫ばれ耳を抑える。そんな浩介を置いて真実は決心したように口を開いた。

「私、頑張る！」

「おっおう……頑張れ」

後に浩介は驚くことになる。自分の妹が雫のソウルシスターズ並の勢力をハジメのファンクラブを立ち上げたということを……。

## 四話

## 崩れ掛ける日常

今でも思い出す。

あの出来事は俺にとつては忘れられない記憶だろう。彼女のあの笑顔を守りたかった。

彼女を守りたかった。

——だから、俺は弱弱い自分部分自分を捨てた。

~~~~~

夏休みも明け、日常生活に戻ったハジメ達。

風が涼しく秋を感じるようになってきた日、優花は訳あってハジメ達に「先に行く」とだけ告げて一人で登校していた。普段なら、そんな行動派取らない優花なのだが今回は理由があつた。

その理由は昨日のことだった。下校する時に下駄箱から靴を取り出そうとした際に、一通の手紙が下駄箱の中に入っていたからだ。

―昨日―

優花は足早で教室から不満をタラタラと流しながら下駄箱へと向かっていた。

「もうっ、何で今日が日直なの！今日はハジメ君がお手伝いしに来る日なのに！」

優花は急いでいた。それは今日、ハジメが家の「ウイステリア」のお手伝いしてくれる日だった。優花はいつもこの日を楽しみにしており、今日の日直が自分だったことを恨んだ。

下駄箱に辿り着くと、急いで下駄箱から靴を取り出そうとした時だった。

下駄箱の中に白い紙が入っており、優花は首を傾げながら紙を取り出す。

「……何これ手紙？」

よく見ると、それは一通の手紙だった。しかし、優花は手紙を見る気も無く適当に鞆にしまうと、急いで家に帰ったのだった。

―その日の夜―

なんとか、間に合ってハジメと共にお手伝いしていたことを優花は笑みを浮かべなが

ら思い出ししていた。

カラアン、カラアン

勢いよく扉を開けたせい、大きくなる鈴を気にせず優花は中に入った。

『お父さん、お母さん、ハジメ君。ゴメン、遅れた！』

優花が帰ってきた時はまだ、お客さんの出入りは少なく大丈夫そうだったが、優花達は申し訳なく謝罪をするが博之達は既にハジメから事情を聞いていたらしく、優しく笑みを向け優花を宥めた。

『大丈夫だよ、優花は日直だったんだろ？ 心配しなくてもハジメ君が色々準備を

手伝ってくれたから大丈夫さ。ハジメ君はキツくなかったかい？』

『ハハ、大丈夫ですよ博之さん。僕も鍛えてますし、何年もこの手伝いをしているんですよ』

ハジメはそう言って照れているのか苦笑いを浮かべながら片手で頭をポリポリと掻いていると、博之は納得したように「そうだったね」と笑った。

『ハハっ……それもそうか。ほら、もうすぐ人の出入りも激しくなると思うから優花も早く着替えておいで』

『うん、ハジメ君ありがとね』

『どういたしまして』

優花はハジメにお礼を言うときすぐ更衣室に行つて着替えて店内に戻つた。

そして、手伝いしながらハジメと二人で一緒に作業している時には……

『ふふ、熱いわね〜』

『ちよつ、お母さん!』

『なーに〜ふふ』

カウンターを拭いていた母の優里に<sup>かたがわ</sup>押揃れ恥ずかしく顔を真つ赤にしてしまう。ハジメの方もチラリと見ると彼も少し照れていて顔も少し赤くなっていた。その姿が優花には少しドキつとした。

その後も……

『たつのもおー!』

『奈々、騒がしいでしょ』

『よお、来たぞお。真実も一緒だけどな』

『私は浩にいのオマケじゃない…… あつ、優花ねえ!ハジメに!』

奈々や妙子、遠藤と妹の真実が来てくれて、楽しい一日だったと思う。因みに奈々は妙子に制裁を喰らっていた。

優花はそう思い出しながら優花は笑みを浮かべながらベッドで寝転がっていた。

「ふふ、こんな日が続けば良いなあ〜」





|| ||

手紙をも読み終えた優花は、口元を片手で隠しながら少し驚いていた。

「R・T？ てか、これってもしかして……」

それは、簡単に言えば「ラブレター」だった。

「ラブレターよね。これ……でも、R・Tって誰？　イニシャルなのはわかるけどなあ……」

ハジメはこんな回りくどいことをしないし、それにイニシャルN・Hだと優花は思った。

「まあ、誰であつても……」

優花は手紙を見ながら苦笑いを零す。

例え告白の相手が誰だつたとしても優花は断るだろう。だって彼女は彼のことしか……

「でも、行かないのは流石に酷いよね」

しかし明日の朝に教室に来なかつたらラブレターを書いてくれた相手にも悪いと思ひ、何か嫌なことがあつたら嫌と思つて優花は向かうことを決めたのだった。

そんな昨日のことを思い出しながら、生徒が居ない早い時間に学校に着いた優花は、

手紙に書かれていた1-2の教室に向かった。

ガラガラ

教卓の反対側の扉から、そおーっと開けながら優花は誰かいないかを確認める。

「だ、誰かいますか……?」

そうしてると、教卓の方からギリギリ教室全体に聞こえる程度の声が優花の耳に入つた。

「待つてたよ」

「えっ?」

声が聞こえ優花は顔を向けると、そこには一番前の席の机に座るクラスで人気者な男子で文武両道、イケメンで高身長 of 龍堂拓也君の姿があつた。

「え……拓也君?」

優花は彼の姿に驚くも、それ以上に手紙の相手が拓也の可能性があるということに優花は固まってしまう。そうしていると拓也は机から降りると、優花の元へ近付いて来きながら笑顔で優花に話しかける。

「園部さん、来てくれたんだ。俺、嬉しいよ」

「アハハ……もしかしてだけど、手紙の相手って、拓也君だったんだね……」

優花の問いかけに素直に拓也は認めた。

「そうだよ。俺さ……園部さんを一目見た時好きになっちゃったんだよ。所謂一目惚れって奴」

拓也の話を聞きながら優花は、確かに手紙のイニシャルのR、Tと拓也の龍堂拓也であることに気付いた。

「ふっ……園部さん」

優花が呆けていると、拓也君はキザな笑みを浮かべながら急に私の手を掴みだした。

「えっ、ちよっ……あのっ……!」

突然、腕を掴まれたので優花は咄嗟に彼の手を振り払った。そして、すぐに彼から少し距離をとって少し睨みながら彼を見る。

すると、彼も自分に非があると分かったか軽く謝った。

「驚いちゃったかな? ゴメンね。つい君が可愛いくて……でも、これから一緒になるんだし」

「は……一緒?」

唐突な意味不明な発言に、優花は訳が分からなくなる。と同時に背筋がゾツとし、悪寒が走った。

「だってそうだろ? 俺の彼女になるんだし」

「はっ? えっ?」

優花は拓也君の言葉に少し恐怖を覚えながら、更に距離をとろうとするのだが、拓也は私の腕を再び掴む。彼の顔を見ると優花の目が合った嬉しそうに笑って口を開いた。

「園部 優花さん、君のことが好きだ。俺と付き合ってくれないか？ 俺は絶対に君を幸せにできる」

「……………」

拓也に告白されたが優花は決めていた。例え告白してきた人がどんな人でも、自分は彼と一緒にいたい。

だから……

「ごめんなさいー！」

優花は彼と一緒にいたい。だから、頭を下げて断った。そして、顔を上げて彼の顔を見ると、その表情は自分が言ったことに呆気にとられている様子だった。

すると、少し慌てたような口調で話しかける。

「えっ……、断る？俺の告白を……な、何で？」

断られることがない。と思っていたのだろう。少し困惑気味になって噛みまっくっている拓也を見て優花は彼にちゃんと顔を合わせて繰り返しながら自分の気持ちを告げた。

「ごめんなさい。私……心に決めた人がいるので」

「そ…そうか、わかったよ」

そう言うのと拓也は納得したのか、少し覚束無い歩きで教室を出て行った。

「ホッ……」

彼が教室から出ていくのを見て、急に脱力感に襲われへたり込む優花。だが、それと同時に安堵した。

しかし……

「ギリッ……」

優花は気付かなかっただろう。拓也が教室を出る際に優花を睨んでいたことを……。そして、その後はいつも通りにハジメ達と過ごしていた。また、拓也から何かあるかと不安に感じていたが何もなかったので安心した。

だが、次の日、優花はハジメ達と一緒に登校して、教室に入り自分の席に向かった。

そして……

「えっ……」

自分の机の有様を見て、一瞬、何が分からず止まってしまま絶句する。

「な…何これ……」

優花の目に入ったのは、机に『死ね』と大きく書かれていたのだ。急いで文字を消そうと筆箱から消しゴムを取り出す。

「け、消さないと……っ」

幸い文字は消しゴムで擦ることで消える感じだったので消していると優花は嫌な視線を感じた。その方向へと視線を向けた。そして、優花は誰が犯人かを察してしまいが漏れる。

「あ……」

其処には、拓也とつるむことが多いクラスカーストの高い男女が優花の方を見ながら下卑た笑みを浮かべる姿がそこにあった。

そして、優花にとって、忘れ去ることはないだろう出来事。そして、優花達のための幸せだった日常の崩壊の始まりを……。

## 五話

## 辛い日常

あの日から、告白を断った時から私の生活がガラリと一変してしまった。

机の件から優花は拓也達のグループ（だいたい女子）が絡んでくること多くなった。  
最初の頃は……

ドンツ……

「……………」

「あつごめえくん」

「でも、園部さんもちゃんと前見て歩こおうよ」

「クスクス」

「……………ゴメン」

自分にしから聞こえない程度の声で陰口を言われたり、ワザと強く肩にぶつかられたりした。

しかし、この程度なら優花も気楽にいられた。

嫌がらせが始まってから数日後のこと……



ガチャ

「アレ？　上靴……」

上靴を取り出そうと下駄箱を開けるか、上靴が中に無くて困惑していると、どこからか笑い声が聞こえた。

「クスクス」

それは、嘲るような笑い声で声ができる方向を目で追うと、そこには何時も絡んでくる女子生徒達の姿が見えた。

すると、見ているのがバレたのか女子生徒達が優花の方へ歩み寄ってきた。

「園部さあん、どうしたのお？」

「いや、あの私の上靴を知らないかな？　って……」

悪意のある笑みを浮かばせる女子生徒に聞かれて、優花は作り笑いしながら上靴が無いかと伝えると女子生徒は口角を上げ、更にその笑みを深めた。

「ああ……上靴。そういえば、アツチのゴミ箱に汚い誰かの上靴が捨ててあったのは知ってるよ」

「……そう、ありがとう」

わざとらしい言い方に、優花は素直に従ってゴミ箱の方へ向かう。そんな歩き去る優花の姿を女子生徒達は、面白くないといった表情でジッと見詰めていた。

そんな上靴を隠されたりとまだしようもない嫌がらせを優花には耐えていた。しかし、ある日を境に嫌がらせがエスカレートしていった……。

「優花、帰ろう。ハジメはもう遠藤と遊びに行つてるらしいし私達も奈々とどつか遊び行く?」

「うん」

帰り支度をしてると妙子が席にやつて来て楽しそうに笑みを向けて一緒に帰ろうと言っている。そして、優花も一緒に帰ろうとした時だった。

自分達に近づく足音が聞こえた。

「ねえ、園部さん。ちよつといい?」

「……」

視線を辿ると、いつも優花に絡んでくる女子生徒達のリーダー格の女子が腕を組みながら話しかけてきた。

「来なければ、知らないよ?」

「はあ? ちよつと、何言つてんの?」

優花、無視して奈々を呼び行く?」

そう脅しめいた発言に、妙子が突つかかって優花を連れて行くこうとするが、それを優花が止めた。

「……わかった。着いていく」

「え？ 優花？」

リーダー格の女子の言うことを聞いて、着いていくと言う優花に妙子は目を見開いて驚いていた。優花は妙子に向き直って手を合わせながら謝った。

「ゴメン、妙子。遊びに行くのは奈々だけお願い」

「えっでも……優——」「じゃあねっ、妙子っ。また明日ね——花……」

妙子の言葉を遮りながら、優花はリーダー格の女子に従うように着いていつて教室を出ていくのだった。その姿を妙子は見ることしか出来なかった。

放課後、生徒達も帰宅や部活などで校舎には人があまり見掛けない。そんな中、優花を連れてリーダー格の女子生徒はどんどんと人気のない場所へと移動していく。

「コツチよ」

そして、女子生徒に連れてこられた場所は普段から生徒達が寄って来ないトイレだった。そして、中に入ると、いつもの嫌がらせをしてくる四人の女子生徒が玩具を見るかのように笑みを浮かばせながら集まっていた。

優花とリーダー格の女子が来たと分かると逃がさないようにと優花の周り取り囲みだした。

いきなり囲まれたことに優花は困惑してしまう。

「えっ……あの……」

ダンッ

「……………」

リーダー格の女子生徒は優花を壁まで追いやられてそのまま脅かすように勢いよく手を壁に突きつけると、低い声音で話しかけた。

「……………ねえ、園部さんさあ？自分が可愛いからって、なんか調子乗ってない？」

リーダー格の女子生徒はそう言いながら優花を敵として見るかのように睨みつける。

優花は、すぐさま否定した。

「いや……………わ、私そんなこ——っ?!」

パアアン！

「黙りなさいよ」

突然に、頬に痛みを感じたと同時に破裂音のような音が聞こえた。否定しようとした優花に取り囲んでいた一人の女子生徒が近付いて平手打ちしたのだ。優花は突然のこととでバランスを悪くしてしまい、転びはしなかったがよろけてしまった。

「ハッ、調子に乗ってるからよ」

嘲笑するように女子生徒は言い出すと、他の女子生徒達もよろけた優花を見て無様だと笑いだす。そして、他の女子生徒達は優花の肩を押して、また、わざとよろけさせて笑いだす。

「そうよ調子乗りすぎよ」

「ごまあ」

「ホントにそれっ」

三人の女子生徒がそんなふう私を嘲けていると、リーダー格の女子生徒が近付きながら見下すような目で話しかけてきた。

「無様なものね」

リーダー格の女子生徒はそう言っ私を嘲笑して、すぐに真顔になる。顔を見ると、その瞳には自分に対する凄い憎しみを感じ、私は少し顔を青くなる。

「……ッ」

「ホントに無様だわ。ホントになんて、拓也がアンタなんか告白したのかよく分からない。まさか……色仕掛けとかしたの？」

「いや、私はそんな事っ」

そんな見下すように話しかける女子生徒の言葉にすぐに優花は否定しようとするのだが……

「うわっ、淫乱女じゃん」

「女子の敵じゃん、クズめ」

「幻滅」

「拓也君、可哀想」

周りにいた他の女子四人の非難のせいでも、私の否定の言い分が掻き消されてしまう。その後、優花は彼女達に数十分の間、悪口やバレにくいところに暴力を振るって、最終的にはトイレに置いてあるバケツに水を入れ始めた。

「今から、汚れ落としてあげる！」

水が溜まったバケツを優花に勢いよくぶっかける。咄嗟に優花は避けようとしたが、もう既に遅く水が優花へと水が降りかかってしまう。

「…ッ、冷た！」

水をかけられたせいで制服が濡れてしまつて、体が冷たくなるのを感じた。そんなビショビショで濡れている優花を見て、女子生徒達は一斉に笑い出した。

「これで、綺麗になつたんじゃない……ふふ」

「うっわあく、びしょ濡れじゃん。ハハッ」

「良かったじゃん。綺麗になつて」

そう言つて、笑いながら彼女達は「片付けよろ」と優花を馬鹿にしながら、トイレから去つていった。

女子生徒達の足音が完全に聞こえなくなるのが分かると優花はフツと糸が切れたかのように力なくその場にしゃがみこんだ。

「グスっ……」

辛くて泣きそうになった。誰かに相談したかった。でも両親には迷惑をかけたくない。もし話したりすると、もしかしたら自分にとつての大切な友達、そして彼が、あのグループの標的にされそうになると思ってしまう、口には言えずにいた。

その後、優花は両親に心配されないようにとある程度、服を乾かしてから家に帰ったのだった。

それから数日、優花は大切な幼なじみ達がこの件に巻き込まれないようにと、放課後など一人で過ごすことが多くなった。奈々達からは、昼ご飯とか一緒に下校しようとか誘われるも、何かと都合をつけたりして断った。

二人は優花が自分達に何か隠してるんじゃないかと訝しむが優花はなんとか誤魔化した。

そして放課後、いつものように拓也達のグループからは、日課のようにイジメが初めていく。他人からバレにくい場所限定を殴っては痣はバレないように痛みつけていた。

優花はイジメがバレないように徹底としていたが、彼は黙っていなかった。

それは、「ウイステリア」の手伝いをしている時だった。

「優花ちゃん。どうしたのその痣？」

「……………」

ハジメに言われて咄嗟に制服で青痣の部分をすぐに隠す。

腕に出来た青痣が少し見えてしまったのだろう。一緒に手伝いをしていて、優花にとつて一番、バレたくない人。迷惑を掛けたくない彼にはバレたくないとすぐに顔を誤魔化した。

「転んだけだから、大丈夫だよ」

優花はそう言つて、なんとか誤魔化して乗り切ろうとしたが、しかし……

「ホントに転んだの……？」

流石は、約8年来の幼なじみというべきか彼は訝しむが、優花は嘘だとバレたくないのだから、ハジメに何とか色々な言い訳を言つて誤魔化することが出来た。

「優花ちゃんは、そんなに言うなら信じる……」

しかし、ハジメはまだ訝しみながらそう言い終えてから、追求をやめて元の作業に戻つていった。

「うん。心配してくれてありがとうハジメ君」

「うん！……でも、本当に何かあったらいつでも、僕に言つてね、絶対優花ちゃんを守るから！」

「ありがとう」



優花は彼の優しい笑みを見て心が少し救われるような気がした。彼の言葉で私の曇っていた心が晴れたような気分になった。

だから、これからも頑張ってイジメに耐えぬいていこうと優花は決心するのであった。

「はあ~~~~~……」

溜息を吐きながら奈々は廊下を歩いていた。何故、奈々が溜息ばかりかするのは優花のことであつた。

最近の優花がおかしいと感じ始めた。新しいグループにいて、妙子とハジメ達をまるでわざと避けているような気がするのだ。

一度、奈々は優花に声をかけようとしたのだが逃げるように去っていく優花を見て、最近の奈々はスツカリ元気を無くしていた。

そんな奈々は廊下を歩いている時だった。偶然と、放課後に優花と最近一緒につるんでいる女子生徒達を見かけてこっそり尾けていくことにした。

「此処って……」

そのまま付けていって辿りついた場所に奈々は首を傾げる。女子生徒達が向かった場所は普段は人が寄って来ることのないトイレなのだ。

「何でこんなと……「キヤッ」……ユウカっち?!」

奈々は、何故こんな所にと思っていると中から大切な幼なじみの悲痛な声が聞こえ、咄嗟に体が動いて中にいる人にバレないように中を見る。

「……っ!」

奈々はその光景を見て、信じられないか口元を両手で覆う。其処には……

「ほら、何か言いなさいよ!」

「……イタっ」

奈々の視線の先には、優花が中にいる女子達によってイジメられてるところだった。蹴られて、罵倒され、痛いのか表情を歪める優花の姿が奈々の目に入った。

「……ユウカっち」

奈々は怖くて、口がブルブルと震え、泣きそうになっていて、遂にはその場から逃げ出してしまった。

急いで階段を駆け上がる中、奈々は、目元に溜まる涙を袖で拭き取る。

「グスっ、……っ、伝え……ないっ!」

奈々は急いで駆ける。このことを自分の幼なじみの彼——南雲ハジメ。彼に伝えな  
いという思いが頭の中を占領してしまっていた。だからだろう、彼に伝えるよりも他  
に何かあったかもしれない。が、今の奈々はハジメのそこへと向かうことしか考えられ

なかったのだった。

……そして、誰も予想出来なかっただろう。これがキツカケであんなことになるなんて

## 六話 守るために

それは、一人の少年が大事な一人の少女を守ろうとした為に弱い自分を捨て、  
が誕生することになってしまった原因の話である。 〃獣〃

最近の優花の様子がおかしい。

ハジメが最近にそう思うようになったのは、彼女が自分や浩介、奈々達とも、あまり関わらなくなったことだった。

それと前に妙子が優花を帰りに誘った時も龍堂拓也のグループにいる女子生徒に阻まれてしまったらしく一緒に帰れなかつたらしい。

その時、妙子は優花の雰囲気がいつもと違っていると、妙に何かを我慢していると感じたらしい。

それはハジメも感じていたことだった。

ハジメも優花と一緒に帰ろうと思って誘った時も何故かと理由をつけて帰れず、妙に作り笑いをしていた。その表情に少し、不安と感じてしまい、その次の日の昼休みに弁

当を食べながら浩介に相談した。

ハジメはあつたことを全て浩介に話す。それを聞いた浩介はウーンと考え込んだ。

「……つて言うことなんだけど、どう思う遠藤君？」

「ウーン……そうだなー」

「僕、何かしちやつたかな……」

ハジメは少し表情が暗いまま頭を俯かせながら言うと、浩介がそれを否定した。

「いや、それはないだろ。そしたら宮崎や菅原のことも避けてないと思うし……」

そう聞いた話から優花は、ハジメを嫌って避けていることはないと言う浩介。励ましを含められた感じの言葉にハジメは少なからず元気が出る。

「そう、だよね」

「まあ……あれだろ最近さ、園部の奴、龍堂んとこのグループとこと仲良くやってそうだし……」

「龍堂君かあ……あれつて仲良くやってるのかな……？」

浩介がそう言うのは、最近、優花は龍堂拓也を中心とした集まったグループによくいるのだ。端から見れば、ただ仲良くなったと思うのだろう。

でも、ハジメにはそうとは思えなかった。

それは優花は、気が強い部分はあるが人見知りなのだ。だから、そんな優花がすぐに

別のグループと仲良くなるのは考えにくい。

それに、ハジメは見てしまったのだ。彼女が悲痛そうな表情をしているのを。

そのせいでハジメは少なからず不安を抱いていた。

ハジメは、そんなことを考えてると、浩介は何かを思い出したように話しかけた。

「あつ、今日は南雲。園部んとこの手伝いだっただろ？」

「うん」

浩介の言葉に、ハジメは頷きながら返事をする。すると、浩介がある提案を話した。た。

「じゃあ、そんな時に聞いてみればいいじゃねえか？」

「そっか……『ウイステリア』ならっ……うん、わかった聞いてみるよ」

ハジメは浩介の提案を快諾して、実践してみることを決心する。すると浩介は笑ってハジメの肩に腕をまわす。

「そうそう南雲。園部の奴に悩みがあったら聞いてやれよ」

「うん、ありがとう遠藤君。相談に乗ってくれて」

「どうってことよ」

ハジメは浩介という友達を持つことが出来て良かったと思いつつながら、悩みを話した後、浩介と最新のゲーム情報などの話をしながら、昼食を食べ終えた。

午後の授業も難なく終わるとハジメは足早に「ウイステリア」へと向かったのだ。た。

—ウイステリア—

「ハジメ君、次はコレを頼めるかい？」

「あつ、はい！」

ハジメは「ウイステリア」の手伝いをして一時間が経とうとしていた。が、遅れたとしても五分程の優花が帰って来ないのだ。

いつになつても帰って来ない優花に、ハジメも父である博之も不安を抱きながら作業にあたっていた。

そして、博之に頼まれた荷物を運んでいる時だった。

カラン

「……ただいま」

扉のベルの音が聞こえ振り返ると優花が帰ってきた。ハジメは嬉しくなつて優花の元へ行くこうと思つたが、先に荷物を運び終えようと奥へ行き、その代わりに博之が迎えた。

「おかえり、優花。どうしたんだい遅かつたじゃないか？」

「ゴメン、お父さん。ちょっと学校での用事が長引いちゃってさ、ちょっと待ってね。今から支度するからっ！」

博之が心配した表情で言うと、優花は笑みを浮かべて何でもないといいながら支度をしに奥の部屋に向かった。

「……」

そのすれ違い様にハジメは彼女の表情を見て、あの笑顔は作りものだとすぐにわかった。少し暗く、悲しそうだったのが見えた気がした。

「……やっぱり、聞かないと」

ハジメは手伝いが終わったら優花に聞こうと、思いながら自分の仕事を再開したのだった。

暫くして、優花も『ウイステリア』の制服に着替えてから店内の戻ってきた。その時、ハジメは目にしてしまった。

「えっ……」

調理場に向かっていた優花の右腕に隠しているようだったが、痣らしき痕を見てハジメの頭の中が真っ白になった。

ハジメはいつの間にかに自分でも分かっていたぐらいの速さで優花の元へ駆けつけ話しかけていた。



「ねえ優花ちゃん。それって、もしかして痣？」

「…………ツ」

ハジメに指摘されたのが驚いたのか、優花は焦った表情で咄嗟に痣になっていた部分を腕で隠す。

「ホントにどうしたの？昨日はそんなの、なかった気が——」

「安心してっ、今日帰ってる時にコケちゃっただけだから！」

聞いたものの、優花は急いで帰ってる最中にコケて出来てしまったと一点張りだった。しかし、ハジメは怪しいと思いつつながら優花を見る。

「…………そうなの？」

「うん、だから安心してハジメ君」

「…………わ、分かったよ」

疑いはあつたがハジメは優花の言葉を信じることにしてしまったのだ……。

~~~~~

ハジメは腕を組んで「ウーン」と声を漏らしながら学校の廊下を歩いていた。そして、独り言のように呟く。

「やっぱり、怪しいんだよなあ……」

その後もハジメはやっぱり優花ちゃんは龍道君達のグループと何かあったんだろうと疑っていた時だった。

こちららへと物凄い勢いで向かってくる足音が聞こえた。振り返って見れば

「南雲っちー！」

「えっ、奈々ちゃん?!」

抱きつく奈々をハジメは優しく受け止める。

「南雲っちー!!」

奈々はハジメに抱きしめられながらも再度名前を呼ぶ。そして、ハジメは悪寒が走る。ずっと自分を探していたのか見つけた途端、すぐさまハジメの方へと走り出した。奈々の表情は今すぐ泣きそうな顔だったのだ。

「奈々ちゃん、どうしたの? 一旦、そこで……」

ハジメが一旦落ち着かせようとする、奈々ちゃんはそんなのを無視してハジメの制服をギュツと握りしめた。

「な、奈々ちゃん?」

離れようとしないうちにハジメも訳が分からないので苦笑いしながら事情を聞こうとした時だった。奈々は顔を上げた。その顔は泣くのを我慢していたのか涙で濡れて



それ以外のことは今のハジメでは考えられないほど、ぐちゃぐちゃになっていた。ハジメは自分の片手を力強く握って拳を作る。そこからは血が流れている程だ。

そして、ハジメは考える。

——何故、支えられなかったのか。

——彼女を、あの笑顔を、守れなかったのか。

そんな自分への非力さ、何も出来なかったことを怒り、そして思ってしまった……。『支える』だけという言葉は意味守れなかった。

——じゃあ、どうすれば良い？

「……………そっか」

そんなの簡単だった。

すぐに思い付いた。

自分を犠牲にすれば良い。

それで、彼女の笑顔を取り戻せるなら僕は——いや、俺はどんな悪にも、愚者にでもなつてやろう。

覚悟を決めたハジメは、泣いて自分にしがみつく奈々の頭を優しく撫でた。

「奈々……………」

優しく撫でられ安心感を感じ、ハジメの言葉に反応して奈々はまだ泣きながらも顔を

上げる。同時にハジメの自分に対する呼び方の変化に気付く。

「……グスっ……うん？」

「優花は僕……俺が絶対、何とかするから待っててくれ」

そう言い残してハジメは奈々から離れると、下駄箱へと向かう。

「えっ、ちよつ南雲っちー！」

困惑する奈々が名前を呼ぶが、ハジメはそのまま家へと帰っていった。

その夜、今日は真実が三十九度の熱が出てしまい、その看病の為に休んでいた浩介に連絡を入れた。

電話をかけるとすぐに、浩介に繋がった。電話越しから浩介の声が聞こえる。

『もしもし、どうしたんだ南雲く？』

『浩介、頼みがある』

『えっ、ちよつ何いきなり名前呼び……まあ良いけどよ……でどうした頼みって？』

浩介はいきなりハジメの名前呼びに少し驚くがすんなりと受け入れ、頼みとはなんなのか聞く。ハジメは、浩介の柔軟な性格の良さに少し笑みを零すと、用件を話した。『俺は明日の朝でとんでもないことをしでかす。そのせいで俺の立ち位置は変わってしまう。だから、浩介。お前には優花達の傍にいてやってくれ』

『……はあっ?、ちよつと!』

突然のぶつ飛んだ内容に電話越しから浩介の驚愕満ちた声が聞こえる。しかし、ハジメは気にせず用件を言い終えると電話を切ろうとする。

『……つてわけだ。浩介頼む』

『待てっ』

電話を切ろうとした矢先、浩介の制止の言葉が入り、ハジメは一旦、電話を切るのをやめる。

『……なんだ?』

『ならっ、俺もお前につ!』

『駄目だ。それに、まだ真実ちゃんの熱、治ってないだろ? あの子少し病弱だし

な、明日も看病で休むだろ?』

『だ、だがっ!』

ハジメの指摘に浩介は口を噤むがまだ俺の頼みに反対らしい。だが、ハジメは覚悟をもう決めている。

だから、

『頼んだ、浩介。後、真実ちゃんにはお大事につてな』

『おい!、ナグツ』

プツ、ツイッター

浩介が何か言おうとしたが、その前にハジメは電話切り、そして、ある人物に連絡して寝たのだった。

―次の日―

ハジメは、朝早く学校に登校して、教室である奴を教卓の上に座りながら待っていた。そして……

ガラガラ

「あれ、俺が遅れちゃったかな？」

「来たか、龍堂……」

扉が開く音が聞こえ、同時にヘラヘラした態度をしながら拓也が教室の中に入った。拓也はハジメの方を見て、ヘラヘラとした感じ変わらずもハジメの変化に気付き首を傾げた。

「あれ、南雲君なんか雰囲気変わった？」

「……そんなことはどうでも良い。龍堂……てめえ、なぜ優花をイジメる？」

ハジメは龍堂を睨みながら言うと、優花の名前に反応したのか龍堂は何時もヘラヘラ

した態度をやめると、面倒くさそうに頭を掻きながら口を開いた。

「……はあ、なんだそんな事かよ。めんどくせえ」

「……そんな事？」

龍堂の発言にハジメが反応する。それも怒りのせいで目を細めて拓也を睨む鋭さが増しながら。

「だってよお。あの女はなあ、この俺の告白を断つたんだぞ！この俺の告白を！可愛い顔してるから告白してやったのにあの女……だから分からせたまでだ！」

「……………そうか」

拓也  
コイツの魂胆はよく理解した。こんなにも屑だとは思ってなくハジメは小さく呟く。

そして、

「クハツ……………」

小さな笑みを零しながら拓也の方に向き直る。

「なっなんだよ?!」

ハジメが突然と笑ったことに拓也は底知れない恐怖を感じたか一歩ずつ後退っていく。そんな中、ハジメは淡々と語り出した。

「いや、まさか優花をイジメる原因はただのてめえのクズな思考回路だと思おうとな、これからやることに躊躇いなくなつたからよ。つい笑つちまつた」



「は？」

ハジメの言葉に拓也は冷や汗を首筋にタラリと垂らしながら首を傾げるが、その間にハジメはゆつくりと拓也へと近付いていく。

そして、拓也の眼前へと辿り着くと、ハジメは右手を強く握り締め拳をつくる。

「おいー、何をする気……グボツ?!」

そして、拓也が何かを言う前にハジメは顔面を殴り飛ばした。次に追撃と言わんばかりに拓也が倒れ込むと同時に腹に蹴りを入れた。

拓也は声にならない声を上げて、床に強く打たれて倒れ込んだ。

「グフ、ウツウプ……ゲボ」

蹴りを入れられた拓也は嘔吐してしまう。しかし、ハジメはそんなことを気にせず徹底的に叩きのめしていく。

それも、今まで目の前のコイツが女子共に命令して優花に対してやらせたこと以上に

……

「ク、ソつ……舐めん……なっ!!」

「遅いんだよっ」

拓也が反撃でハジメに殴りかかろうとするが、腹を蹴られて痛いのか動きが遅く、格闘技を習っているハジメにとっては、いとも簡単に避けれることが出来た。

「なっ?!」

避けられてしまつて拓也が驚く間にハジメはしゃがみ込むと拓也の足の脛目掛けて右足で回し蹴りをする。

「……ッ?!」

脛を蹴られてしまつて痛いのか苦悶の声を上げながら拓也は蹴られた脛のところを両手で抑えながら座り込む。

しかし、ハジメは容赦なく座り込む拓也の脇腹を蹴り上げた。

「ゴハッ……」

横からの唐突な蹴りで拓也は横に転がっていく。

「ハアハア……「龍堂」……ヒッ!」

そして、もうハジメが拓也を呼ぶと奴はイケメンと言われてきた顔はもうボロボロに歪んでおり、ハジメへの恐怖が支配してしまつて怯えた表情で俺を見ていた。

ハジメはそんな怯えた表情なんか無視して倒れ込んでいる拓也の上に座り込みながら胸倉を掴んだ。

「さてと……次はどうしてやろうか……」

「や、やめて……くれ。あ、謝るよ。ぞ……園部、さんにももういジへませんから……」  
ハジメの言葉に戦慄して、龍堂は更に汚くなった顔を歪めて涙を流しながらハジメに

優花への謝罪ともう勘弁してくれと言うが……

「はっ？　それで許されると思ったのか？」

「ぶへっ！」

ハジメはそんな事はどうでもいいかのようには拓也の顔面を殴りつける。イケメンがどうした？　殴ればただの腫れてパンパンになるだけだ。

ハジメは殴ってから拓也に現実を突き付けた。

「自分の思い通りにいかないからって、女の子に痣をつけさせたんだぞ。てめえは、痣だけだと思ふなよ」

「ヒイツ……やめっ……アガアツ！」

ハジメはそのままひたすら拓也の顔を殴り続ける。苦悶の声を上げているがそんな雑音なんか無視して殴り続けていた。暫くして拓也からの声が聞こえなくなった。しかし、ハジメは殴り続ける。

すると……

ガラガラッ

「へ？……キャアアアア！」

教室の扉が開き、一人の女子生徒が中へと入る。しかし、ハジメ達の方へと視線を向けると一瞬で恐怖に満ちた表情になり、そのまま叫びだして教室から出ていった。

そして、数分後に他の生徒達と女子生徒に呼ばれたであろう教師達がぞろぞろと必死めいた表情で教室に入ってきて、ハジメ達を見ると、すぐさま力づくで二人を引き離れた。

その後、ハジメは先生に連行された後、数時間ほど叱られてから家に強制的に帰された。

拓也の方は救急車が呼ばれ鼻の骨などが折れていたらしく全治二ヶ月の入院になったらしい。

そして、翌日からハジメを見ると避けるようになり、彼を見る周囲の視線から分かるのはハジメを猛獣や恐ろしいものを見ているかのようなものだった……。

~~~~~

あの騒動から二ヶ月ほどが経ってハジメは“不良”としての立ち位置が定着してから学校をサボるようになって、今は、公園のベンチに寝っ転がっていた。

サボった理由は簡単だった校内を歩く度に陰からヒソヒソと“暴力魔”、“化け物”などと言われ、恐怖されるようになってしまい、その視線が鬱陶しく感じていたからだ。だが、どうでもいい。

「クハツ……化け物?……上等だ」

ハジメはそう呟きながら笑みを浮かべた。

ハジメは、周りから疎まれるようになったが、これで良かったと思っている節があった。このおかげで龍堂拓也を中心にしたグループは優花に手を出すのやめたからだ。

なんせ主犯であるリーダーの拓也があんな大怪我を負ってしまつて流石に手を出せないだろう。

しかし、自分も周りからは忌み嫌われしまつたが優花の笑顔が戻るのなら安いものだ。とハジメはそう思いながら空を見上げる。

あの騒動からハジメは優花達に迷惑を掛けないようにと、わざと避けながら学校生活を過ごしていた。

放課後は会わないようにトレーニングの為に何処かへ走りに行ったり、李師範の道場へと通っていた。お店の手伝いも優花の父の博之に店に迷惑をかけるかもしれないと思ひ辞めると伝えた。それなのに博之は自分に気軽に話しかけてくれたり、また手伝いをしたくなつたらまた来て欲しいと言つてれる。ホントに優しい人だとハジメは思つた。

何故ハジメは、こんなことをしている理由は簡単な事だ。

——優花が楽しく学校生活を送るためだ。

「そう思いながら学校をサボって公園のベンチから立ち上がると、両親に十中八九叱られるなあ〜と思ひながら家に帰ろうとした時だった。」

「……足音……こつちに向かつてくる?」

自分の方へと近付く足音にハジメは戸惑いを覚える。一瞬、頭の中にもしかしてと彼女の姿を思い浮かべるがすぐさま否定する。

「まさか……今日は学校の、筈……」

しかし、俺は嫌な予感がしてしまい振り向くと……

「待って……ハジメ君!!」

「優花……」

美しいサラサラとした栗色の茶髪が靡かせながらハジメよ方へと走りながら向かっている優花を見て、ハジメは立ち止まって、自然と口から彼女の名前を呼んでしまっていた。

「ハアハア……やつと見つけた」

ハジメの傍までやって来ると、優花は泣きいてるのか怒っているのか、どちらでも捉えることができそうな表情だった。でもハジメはその表情でも見惚れてしまっていた。

そんな大切な幼なじみの園部優花は、どうやらハジメの些細な願いは嫌らしい……。

## 七話

たとえ、変わっても

ハジメが暴力騒動を起こしてから約2ヶ月が経った。

季節はもう秋が終わり冬を感じさせるような風が吹いている11月になっていた。

そして園部優花は今、

「見つけたよハジメ君」

「……優花」

驚いた表情で公園のベンチに居座る南雲ハジメと向かい合っていた。

~~~~~

あの騒動が起こってから優花に対するイジメは、嘘のようになくなった。

それは、ハジメに脅されているのか、それともあの騒動が原因で頭から抜け落ちて忘れているのか、次は自分が標的になるかもしれないと恐れているのか。理由は分からないまままだ。

あの騒動の後、そこにはハジメおらず奈々と妙子、浩介が優花の元へと焦った表情で駆けつけてくれた。

『ユウカ（つち）！』

『園部！』

『三人共……』

優花は三人の声が聞こえて振り向くが、その表情は誰でも分かるほど元気がなさそうであった。

『……』

三人が私の元へ来ると、妙子が怒りに満ちた顔をしながら更に前に出た。

『このバカツ!!』

パンツ！と、破裂音のような乾いた音がしたと同時に頬に痛みを感じる。それは、妙子が優花に平手打ちをしていたからだった。

『……!』

後ろにいた二人は妙子のいきなりの行動に驚いてしまって、時が止まったように固まった。

『……ッ』

『なんで……?』



私は叩かれた頬を抑えながらも妙子は私を睨みながら怒気を孕んだ声で口を開いた。

『……妙子』

『なんで！私達やハジメに相談しなかったの?!』

『そつ、それは……』

『何?』

優花の返事を待つ中、妙子は睨みを増していく。それは、周りから見てもその怒りは怖気つく程であった。

優花は妙子の怒りに口を噤んでしまうも、こんな事になるとも思っておらず優花自身も今、混乱しており自分の心の奥底の本音を晒け出すように叫んだ。

『それはっ！ 皆に迷惑を掛けたくなかった！ 　もし、相談して私以外に妙子やハジメ君が標的になるかもしれないと思って怖かった!』

『でも！そのせいで、ハジメは優花のために自分を犠牲にするような馬鹿な事をしたんだよ!』

『……ッ』

妙子の言葉に優花は口を噤んでしまった。そうである。妙子の言う通りハジメは優花を助けるために自分にヘイトを向けるような行為をしたのだ。

その事に重く受け止め、深刻そうな表情の優花が俯いてると後ろから浩介の声をかか  
る。

『遠藤くん』

『園部、あいつは……南雲は、お前にそんな顔してほしくねえと思う』  
『……え』

浩介は昨日のハジメとの電話の内容を三人に説明をしだす。

『俺、昨日あいつから連絡があつて、お前らを支えてやってくれつて頼まれんんだよ。  
あゝ、くっそ！俺も手助けしたかつたけどよつ。真実の看病はどうすんだとか言われて  
言い返せなかつたんだよ。あゝホントに南雲の奴』

『ウソ……』

浩介はそう言いながら自分の頭をくしゃくしゃとしている。相当、後悔しているのが  
わかつた。そして、優花は浩介から聞いたことに驚いて両手で口元を覆う。それは、妙  
子も奈々も聞いてなかつたらしく、二人も優花と同じように目を見開いていて驚いてる  
のが分かつた。

だが、そんな私達を無視して彼は更に言葉が続ける。

『後な、あいつ言つてたんだよ。前にな……「優花ちゃんの悲しい顔をしてると胸が苦し  
くなる、だから僕は彼女を心から笑顔にしたいんだ。その為なら僕はなんでもする

よ」ってな』

『……ッ』

その言葉を聞いた途端、優花は後先考えずに彼のいるかもしれない場所へと向かって走り出した。

『おい、園部！』

『ユウカっち?!』

『ちよつ、優花！授業があつ……あー、もうっ！ウチの幼なじみ達はなんで頑固者が多いのよ！』

学校があるのに、走り出した優花に、妙子達は止めに入るもそれを無視してハジメを探しに行ってしまうって妙子は悪態を吐いたのだった。

学校を出た優花は走る。

『ハジメ君っ』

早く彼と話したい。

隠していたことを謝りたい。

そんな想いが優花を突き動かす。

授業など放ったらかして優花は、いるかもしれない彼の家へと直行した。

『ハア……ハア、着いた』

彼の家に着いた優花は家のアラームを鳴らした。

ピンポンとチャイム音が鳴ると、数秒ほどで家の中から足音が聞こえた。

『ハ〜イ』

家から声が聞こえ、出てきたのは彼の母親の菫さんだった。

『あら……優花ちゃん、学校はどうしたの?』

菫は扉を開けると、目の前に優花がいることに少し驚きながらも首を傾げた。すると、優花はハジメに会いたいが故に声を上げる。

『あの、菫さん!ハ、ハジメ君はいますか?!』

そんな必死めいた言葉に菫はやつと謎が解けたような顔になると、片手で頭を痛そうに抑えながら溜息を吐いた。

『ハア……あの子があんな事をしてかした理由、やつとわかったわ。優花ちゃんの為に起こしたんでしょう?あの暴力行為を起こしたのは?』

『……っ、はい。ホントにごめんなさい!!私のせいです』

『優花ちゃん、大丈夫よ。私は全然怒ってないから』

優花は菫に頭を下げながら謝るが、菫さんは怒っていいと笑みを見せるが、優花自身はやるせなく、

『……でもっ!』

『優花ちゃん』

『!』

言葉を続ける優花に董はギュツと自分の子供のように優しく抱きしめた。

『大丈夫よ。でも、私としては頼つて欲しかった。でもね、優花ちゃん私も旦那みただけ  
ど、私達はあなたに対して怒りも恨みも抱いてないわ。ハジメもあなたを守りたかつた  
からとつた行動だと思ふの……まあ、やったことは馬鹿だけどね』  
馬鹿息子

董は優花をそう言つて励ましながら、優しく頭を撫でる。優花はその抱きしめられた  
温かさを感じ緊張が緩む。

『董さん……』

董に優しくされ優花は少し落ち着きを取り戻していると、董さんは抱きしめるのをや  
めて、少し溜息をしてから話しました。

『でも、優花ちゃんごめんなさいね。ここにハジメはいないわ。……あの子ね帰つてき  
てからすぐにどっかに行っちゃつたのよ。先生から今日は家に待機してなさいつて言  
われてるのに…… ホントあの子は……』

董さんは、はあつと溜息を吐きながら呆れたように話す。しかし、大体の事はわかつ  
た優花は董から離れる。

『分かりました董さん。ハジメ君は私なりに探してみるので』

『いいの、いいの』

そう言つて、優花は董さんと別れまた彼の搜索を始めたが、何時間探してもハジメの姿は見つからなかった。

『もうつ、何処にいるの!……もしかして』

優花はハジメの姿が何処を探しても見つからず地団駄を踏むが、もしかしたらと思ひ自分の家へ向かった。

『ただいま!』

『えっ優花!』

『こんなに早くにどうしたんだい? 学校は?』

声を上げながら勢いよく扉を開けると、父の博之と母の優里が奥の部屋から出てくる。

二人は優花が何故ここにいるのかと驚いた表情だ。

『そんなことより、お父さん、お母さん、ハジメ君は此処に来たつ!』

博之に学校のことを聞かれるが、そんなことは今はどうでもいい優花はハジメが来たかと聞くと、両親は少し重たい空気を漂わせながら告げた。

『来たよ……』

『じゃあ、ハジメ君が何処いったか知ってる?!』

『いや、分からない。……彼は、ただ言いに来ただけだ』

——彼はもう此処に来ないと。

その後も、優花は彼に連絡したり、また彼が居そうな場所へと探したりしたが失敗に終わった。

しかし……

『諦めるもんかつ……』

優花は諦めず、瞳に炎を宿して決意した。そして、その日から優花の奮闘期が始まった。

『ハジメ君つ、一緒に……?』

朝、家に行つて 一緒に登校しようとしても、既に学校へ行っていたり……

『ハジメ君!』

『……』

『待つ……つて何処に行つたの?!』

校内で会つても自分を避けるように動き、追いかけても、彼の身体能力の差で追いつけなかったり……

『居ないんですか?』

『そうなの、あの子……最近、あの子何処かに行ってるのよね』

『……そうですか』

彼の家に行っても董曰くハジメ君はお手伝いをやめてから最近ハジメの行きつけの格闘技の道場に入り浸ったり、道場に行っても彼の師範である李からも居ないと言われて

肩をガクリと落とした。

でも、気になることは彼が道場に居ない日に家に帰ると生々しい傷などをして帰って来ていると董から聞いた。そして、学校で最近聞いたことで町にいる不良の人達の数が減っていると聞いたが、優花には関係なかった。

しかし、そんなことが続いて二ヶ月も経っていた。

「うう……」

未だにも成果を出せていない優花は呻き声を上げながら机に突っ伏していた。因みにハジメは学校をサボっていて今日は彼の姿を見していない。

「優花」

「あつ……妙子」

声が聞こえ視線を移すと妙子が私の前にいたので私も名前を呼び返した。すると、妙



子は優花の様子を見ては溜息を吐く。

「まだ、ハジメと話せてない感じ?」

「……うん」

妙子の質問に少し俯きながら答える優花。妙子とはあの騒動では迷惑かけてしまつたが今は何時も通りの関係に戻っていた。

「やっぱ、私も奈々も遠藤も手伝うよ? 二人も話したら乗ると思うし——」それは、

駄目——優花」

「これは私だけで解決しないといけないと思うの。それにハジメ君がああなつたのは私の責任」

優花は手伝うと言う妙子の言葉を遮ると、真つ直ぐ妙子を見て自分の覚悟を伝えた。すると、妙子は納得したのか笑みを見せた。

「……ん、わかつた。優花がそう言うなら手伝わない」

「ありが——」でも——?」

妙子は優花の言葉を遮ると、今の課題点を言う。

「今のままでと、話す以前にハジメを捕まえられそうにないんでしょ?」

「……うん」

「なら、いい方法を教えてあげる」

「いい方法？」

「うん、優花。耳貸しなさい」

妙子はそう言つて優花の元に顔を近付けると悪い顔をしながら耳元で囁いた。優花は妙子の話を聞いて、それはハジメ君の性格を利用するような感じの方法だった。

「えっ……でもこれつて、ハジメ君に悪いよ……」

「今はそんなことを言つてる場合じゃないでしょ？ この方法が一番アイツを捕まえ

やすいわ」

「……」

妙子の言葉の言う通り、この方法が一番手っ取り早くハジメを捕まえられると思う。しかし、良心のせいでか優花は悩みに悩む。

そして……

「わかった……やつてみる」

「うんうん、その意気！」

優花は妙子の案に乗ることにしたのだった。

ハジメには悪いと思う。しかし、この方法ならば確実にハジメを捕まえられると思つたからだ。良心が痛むがけどそれよりもハジメと話せないのが優花にとって一番辛い。

だから………

「私はハジメ君と話したい」  
園部優花は覚悟を決めた。

〜放課後〜

いつもの公園で、やっとハジメを見つけた優花。しかし、ハジメは優花の姿を見た途端、走り出した。

「ハジメ君、待って!!」

ハジメの走り出したのと同時に駆け出した優花だったが、一向に追いつけず、何故か差も開いてしまっている。

「ハアハア……なんか前よりも速くなってる」

優花の推測は当たっていた。それは、ハジメは前より身長も伸びていた。髪も少し伸ばして顔つきも幼さが消えていた。目つきも鋭くなってワイルドになっていた。それに相まってか身体能力も上がっているのだ。

これじゃ、差が開くばかりだと思つた優花は妙子に教えて貰つた案を実行することにした。

「……っ、イタッ！」

優花はわざとコケた。

これは彼の良心を利用した卑怯で最低なやり方だ。でも優花は彼と向き合いたい。話がしたい。

だから、躊躇わず実行した。

そして案の定、ハジメはすぐさま優花のところへ駆けつけてきた。

そして……

「おい、優花っ大じよ……っ?!」

ハジメ君が近付いて、手を差し出した瞬間、優花は、すぐにハジメのしつかりと腕を掴んだ。

「やっつと、捕まえた……」

してやったりと言った感じの笑みを優花はハジメに向けたのだった。

南雲ハジメは誤算していた。

一つは、自分が変わろうとしても、本質は変わらずにいた。だから、人に迷惑を掛ける奴等に、話し合いでは解決出来ない場合は力で沈めていたこと。

そして、最大の誤算は目の前の少女が自分を決して騙さないと過信していたことだっ

た。

優花に掴まれた手を無理矢理に振り払えないハジメは、逃げることを諦めて、ワザとでもコケている優花を支えながら立ち上がらせた。

「騙したな……」

「ゴメン……」

ハジメの眩きに、優花は目を伏せながら謝る。見るからしてこの方法は彼女が考えたものではないと気付いた。そして、思い当たるのは、自分の性格を知ってるツインターの少女を思い出す。

「まあ、大体は察せれる……これ、妙子の入れ知恵なんだろう？」

「うん……怒ってる？」

優花の回答で、やはりと予想通りでこの方法を思いついたのはやっぱり妙子だった。昔から思っていたが妙子はこういう時に頭が回るから凄いとハジメは思う（皮肉）。

しかし、優花はハジメの単なる質問に怒っていると勘違いしてそうだったので怒ってないと伝えることにした。

「いや、怒ってねえよ」

そう言うと、優花はパアッと笑みを浮かべた。

「やっぱ、ハジメ君は優しいね昔から……」

「……いや、俺は優しくねえ。ただの私怨で暴行したんだぞ」

「ウソ。私を守る為にやったんだよね……」

「……………」

痛いところを突かれハジメは口を噤んでしまう。それを見た優花は咄嗟に両手で服をギュツと掴むとハジメの顔を見る。

「ハジメ君してくれた事でイジメはなくなつたよ……でも

、私は全然嬉しくないっ!!」

「……………」

今はまともに優花の顔が見れずにハジメは顔を横に逸らす。しかし優花は、ハジメを見るのをやめずに言葉が続ける。

それも目いっぱい涙を溜めながら……

「だって、ハジメ君がいないんだもん……グスツ、ハジメ君が傍にいないだもん!」

「ゆ、優花……」

優花の言葉の勢いのあまり、ハジメは焦つてしまう。そんな中、優花はギュツとハジメの服を離さない。

「……………だから、また一緒になる? 奈々や妙子、遠藤君も一緒に……また五人で……」

目に涙を浮かべながら優花はハジメの顔を真剣に見つめる。ハジメ自身も同じよう

に真剣に優花の顔を見つめ返した。

「だが、駄目だ。俺みたいな奴といたらお前達の印象が悪くなっちゃう……」

例え、龍堂達のやっていた悪事が明るみになったとしても南雲ハジメには暴力行為という名のレッテルは貼られたままだろう。

そんな奴の近くにいれば優花達の立ち位置も印象も悪くなってしまうだから、とハジメは言おうとした。が、優花はハジメの言葉に怒りが爆発した。

「そんなの、関係ない！」

「……っ！」

「周りが何?! 私達は私達! ハジメ君の——ハジメの良さは私達が知っている!」

「優、花……」

「守ってくれる! 支えてくれる! 家のお手伝いをしてくれる! 勉強を教えてくれる! そして……私の髪留めを見つけてくれた!」

「……………」

ハジメは、ただ優花の話を聞くだけで何も言い返せなかった。いや、思考がショートしてしまっている。

「だ、だがら、一緒にいよう? これからも……ずっと」

優花は耐えきれなくなったのか涙をポロポロと流し始めた。その姿を見た途端、ハジ

メは考えるよりも先に身体を動いていた。

「……優花」

ハジメは、優花の名前を呼びながら、流れる涙を指で拭き取った。

「……ハジメ君？」

優花は首を傾げると、そんな彼女にハジメは自然と笑みを見せ、ゆつくりと彼女を自分の胸元へと抱き寄せると本心を伝えた。

「すまない。お前がそんなに思っていたなんてな予想外だった。でも、もう大丈夫だ。これからは、また俺がお前の傍にいる。何かあっても絶対に守り抜く……だから、泣かないでくれ。俺は優花の泣く姿より笑顔を見る方が好きなんだ」

自分でも大分、恥ずかしいことを言っているのは自覚しているハジメ。しかし、此処で自分の本音を伝えなれないと思ひ、羞恥心を押し殺している。

「……ハジメ君」

「……なんだよ優花」

ハジメは顔を上げて優花の顔を見た。

その表情はあの時、彼女と俺が出会った時のことを連想させるような美しい笑顔だった。

「……」



言葉を失い、その笑顔にハジメは見惚れてしまった。すると、優花はハジメの胸元に顔を埋めながら、伝えた。

「約束だよ」

「ああ」

そう言つて、抱き締め合いながら約束をする二人。そんな二人を見守るかのように空が紅い。それは、秋が最後の踏ん張りを見せてるかのような空が一面紅く綺麗に染まっていた。

紅い夕日が照らす空の下、笑い合っているハジメと優花の二人はこの日、また一緒になつた……………。

## エピローグ

ハジメと優花がまた一緒に過ごすようになってから二年の月日が経った……。

この二年の間に起こったことは色々であった。

まず、優花のイジメの原因であり、主犯である龍堂は優花の告発、ハジメがあの日にかつそりと持ち込んでいたボイスレコーダーによって、素性が明るみになって立場を追いつまわれてしまい学校側からも特例で他の学校に強制的に転校していった。

そのせいでか、龍堂と一緒にいたグループは徐々に数が減っていつの間にか自然消滅していた。

そのグループにいたリーダー格の女子も龍堂という後ろ盾もなくなり、肩身が狭くなくなったのか、二年生に上がるまえには何処かへ転校していた。

そして、暴力行為を働いたハジメは龍堂の悪質さを知ってから学年での評価はマシになっているが、やはりと言うべきか優花を守る為とは言え、あんなに龍堂を叩きのめしているハジメの姿を見た生徒達は恐怖して、近寄り難い存在となっていた。

ハジメは優花達とまた一緒に過ごすようになってから “ウイステリア” に赴き、急

に手伝いを辞めるとか言い出した事を謝罪する為、博之達に謝罪をしていた。

『今回の件は自分の軽率な言動でお二人を不安にしましてすみませんでした!!』

それも優花達もいる中で南雲家直伝という土下座をしながら謝罪をしていた。

『わざわざ土下座までやらなくて良い。ハジメ君』

『そうよつ、優花からちゃんと事情は聞いているから！ほら、立って立って』

二人はハジメの土下座を見て慌てるもハジメを立ち上からさせるよう促し、そして博之はハジメの肩にポンと手を置きながら優しい表情をしながらハジメに話しかけた。

『ハジメ君、そんなに謝らなくても、また手伝いをしたいと言えば良いさ』

『そうよ、ハジメ君』

『で、ですが俺は……』

ハジメはまた、自分を責めた発言をしようとするが博之の発言で遮られた。

『ハジメ君、私いや私達は君に感謝をしているんだ』

『……え？』

博之に感謝してると言われるのはハジメは予想外だったらしく、声を漏らす。

『君は、優花を守る為に動いてくれて、そしてその後も優花の今後の為に関わらないようにしたんだよね』

『……はい』

『その君の頑張りは伝わってるよ。寧ろこんなに君は頑張ったのに突き放すことがおかしい。だからハジメ君、僕は君とまた、もう一度に仕事ができる事を歓迎するよ』

『私もよ、ハジメ君』

そう言ってくれる二人にハジメは嬉しさと申し訳なさでいっぱいになり、涙を流すのを堪えながら感謝を伝えた。

『ありがとうございますっ！』

そう声を上げるハジメ。その姿を二人は微笑ましそうに見つめていた。そして、ハジメはもう一度“ウイステリア”でのお手伝い再開したのだった。

そして、一番の問題だったのは……

『このっ、馬鹿ハジメ!!』

『グホオツ』

それは、妙子達であって、妙子は初っ端からハジメに右ストレートをかましていた。右ストレートをした妙子は、倒れ込むハジメを見下ろす。

『どれだけ、心配したか分かる?』

『……すまん』

『奈々は泣いてたわよ』

『……すまん』

妙子の言葉に、ただ謝ることしか出来ないハジメ。すると、その光景を見守っていた浩介が二人の傍まで歩み寄るとハジメを殴った。

『オラアッ』

『っ……浩介！てめっ——！』

いきなり殴られて、怒りを露わにするハジメに、浩介は億せず、ハジメの胸倉を掴んだ。

『俺達を……俺を頼れ！』

『浩介……』

『俺だって、お前の力になりてえんだよ！だって俺達、親友だろ？』

浩介の叫び、それは、悔しさだった。頼られたかった。力になりたかったという気持ち。ちが浩介を爆発させたのだ。ハジメは浩介の心の奥からの本音を真剣に聞いた。

『すまん、浩介』

『……』

『今度は、親友のお前にも頼むわ』

『っ……分かったぜ。ハジメ！』

『おう』

そう言って、二人は笑みを見せて握手するのだった。そして、五人は更に仲を深める

のだった。

そんなこともありながら、彼等は三年になり、高校受験も無事に終え、この日、優花とハジメは高校の合格発表を見に他の幼なじみ達より、一足早く二人で向かっていった。

「むう……」

しかし、雰囲気は微妙だった。それは、優花がちよっぴりハジメを睨みながら頬をプクッと膨らませているからだ。

何故、優花がこんなになってるのは昨日の夜のことだった。明日はどうするかを前日の夜に五人で通話連絡アプリ話しあっていた時だった。

『優花に話したい事があるから行きは二人で行かせてくれないか?』

とハジメがグループ内で呟いたのだ。

『ふえ?』

それを見た優花は間拔けな声が出て、その直後、みるみる顔が熱くなるのを感じその日は頑張つて寝ようとしても眠れなかったのだ。

『うう……眠……今、何時……はあ?!』

次の日、眠くて仕方なくてまだボーツとする頭とダルい体を動かしながら優花は時計を見る。そして、時計の針が指している時間を見て、悲鳴を上げた。

『ヤバイツ!』

時間がつ

早く準備!』

眠気も完全に覚めた優花は急いでメイクなどの準備に取り掛かった。下に降りた時には、母の優里に「何で起こさなかったの?!」と怒ったら、一回起こしに来たと呆れながら言われた。それを聞いた優花は言い返せなかった。

そんなこともあったが、何とかメイクとセットが終えた優花は家を出て集合場所に向かってハジメと合流した。

それなのに疲れている優花に対してハジメは……

『早く行くぞ』

とだけ素っ気なく言うと、歩き出したのだ。

『なっ……』

キレた優花は、何でよっ！ 励ましか無いの?! 服とかの感想は無いの?! と不満を言いそうになったが心の中に留めることにした。

そして、優花はやっぱりハジメはあの頃と変わったんだなと改めて実感した。

そう、ハジメは変わった。口調が変わった。背も伸びて私と頭一個以上の差が付いた。少し荒々しくなった。

でも、変わらない部分も勿論あった。ハジメの純粋なあの優しさは変わらなかった。困った人達や私達を助けてくれるハジメの姿は昔と全然、変わっていなかった。

『もう……待って!』

だから、優花もそんな彼を支えたい。共にしていきたいと思ひ馳せながら、彼の元へ向かって駆け出したのだった

今、優花と二人で高校の合格発表の掲示板がある場所に辿り着くと、掲示板に載っているかもしれない自分達の番号を探していた。

「……あつた」

落ちると思つてなかつたが、やっぱり自分の受験番号を見つけると妙に安心感がすると思つていると、隣から優花の声が出て振り向くと優花も満面の笑みをハジメに見せる。

「ハジメ〜！見て、私の番号あつたよ！」

嬉しそうな笑顔で掲示板を指で指していた。そこを見ると、ちゃんと優花の受験番号が記載されているのを見て、僅かに口角を少し上げるハジメ。

「良かったな。因みに俺もあつたぞ」

「良かった〜、奈々達も合格してるといいね？」

優花もハジメの受験番号があつたことに優花は安心したように安堵の息を漏らすと、今、此処に居ない幼なじみ達の合格の行方を祈った。

「……ああ」

「……ハジメ？」



ハジメの返答に何かを感じたのか隣にいる優花は首を傾げながら此方を見つめる。ハジメは今がタイムミングだと思いい口を開いた。

「優花、お前に渡したいものがあるんだ」

既にハジメは連絡して浩介達と後で合流すると連絡を入れており、しかし、どのタイミングで渡すか悩んでいたが優花に声をかけられたこの瞬間が今がチャンスだとハジメは動き出した。

「私に……?」

優花はハジメの言葉を聞いて、自分の指で唇を触りながら首を傾げる姿を見て可愛いなと思ったが、すぐさま顔に出てないか確認して気を取り直した。

「ああ、だから此処で渡すのもなんだし、あの公園に行こう。あの公園の方が今は人はいないと思うしな」

「う、うん。でも、浩介とか妙子達には?」

ハジメの提案に乗る優花だが、後から合流することになっている浩介達はどうするかと尋ねる。

「安心しろ、もう伝えてる」

予想していたのかそう返しながら、優花にそう言うハジメは、自分のスマホを見せた。内容は簡単に浩介に合流場所はある場所に変更とだけ連絡した。浩介からは『イキナ

「り過ぎんだろっ」と返信があったがスルーした。

そして、ハジメは優花と二人である場所——二人が初めて出会ったあの公園へと向かった。

公園を辿り着くと、優花は公園の風景を見て、昔を思い出しているのか懐かしそうに眺めながら、隣にいるハジメに話しかけた。

「(ハハ)……懐かしいね」

「ああ……クハッ。あん時の優花、泣いていてびっくりしたからな」

ハジメも公園を眺めながら感傷に浸っていると思つてたら出会った時のことを思い出しながら、笑みを零すと優花はプクウーと頬を膨らました。どうやら怒つたらしい。

「もうっ……このっ！」

「……っ痛てて、ゴメンって」

優花は、紛らわす為と恥ずかしい話を思い出させたハジメの横腹にパンチする。しかし、ハジメは困つたように苦笑いしながら謝る姿にあまり効いてなさそうに見えて、優花は更にムツとなつてハジメの胸元をポカポカとする。

そうしていると、ハジメも本題に切り出そうと決めたのか、軽くあしらうように優花のポカポカ攻撃を止めた。止められた優花もやっと話を聞く体勢になった。

「それでハジメ、渡したい物って？」

「ああ……これだ」

ハジメが渡してきた物は、小さく手の平サイズの綺麗にリボン状にテーピングされた小さな長方形の箱だった。

「開けていい?」

「いいぞ」

箱を受け取った優花は、ハジメに開けていいかと確認を取ると、テーピングを取り外して箱を開けた。

そして、中に入っていたものに優花は一目見た途端、感嘆な声を漏らしていた。

「綺麗……」

それは、白を基調とした綺麗なカランコエの花が裝飾された髪留めだった。

「でも、何で髪留め?」

「優花に似合うと思ってな」

優花はハジメに尋ねると、どうやら、これが似合うと思って買った品物らしい。それを聞いて優花は、嬉しくてニヤケが止まらない。

しかし、優花は分らないことがあった。

「でも、私誕生日じゃないよ」

そう、この日はただの合格発表日であって、優花の誕生日や記念日とかでは無かった。

今年の自分の誕生日は既に終わっており、プレゼントも皆から貰っているから優花は疑問に感じ、首を傾げながらハジメに尋ねた。すると、ハジメは少し恥ずかしそうに頭をポリポリと掻きながら話した。

「……一年の頃、お前から避けてた時に誕生日は過ぎてただろ？それで、渡しそびれちゃったからその分と合格祝いと合わせて渡そうと思っていたんだ」

ハジメはそう言って優花を真っ直ぐ見つめる。

「……………」

優花は、嬉しさの余り顔を紅くして俯いた。するとハジメが心配して声をかける。

「もしかして、気に入らなかったのか？」

ハジメはもしかして、プレゼントが気に入らなかったのかと思ひ尋ねるところもハジメらしく優しいところだ。

心配そうな表情のハジメに優花はそんなことないと伝えて感謝を伝えた。

「全然っ！ すっごく嬉しい……………」

その言葉を耳にして、ハジメは安堵したようでも「ふう……………」と息を吐きながら呟いた。

「それは、良かった……………」

「だからさ、ハジメ……………」

「どうした？」

「髪留め、ハジメが着けて？」

優花は安堵しているハジメに髪留めを着けて欲しいとお願いした。

「えっ、なんで？」

ハジメの疑問は当然だ。そして、鈍感である。なので、優花は本心を伝えた。

「私がハジメに着けて欲しいから」

笑顔でそう言う優花に、ハジメは顔が赤くなると、照れくさそうにしながら私に近付いた。

「……っ、分かったよ。動くなよ優花」

「うん」

そしてハジメは慣れない手つきながらも優花の髪を傷つけないように配慮しながら髪留めを着けてくれた。髪留めつけて貰った優花は、微笑んでハジメにどうかと聞いた。

「どう、似合ってる？」

すると、彼は自分にしか余り見せない優しい笑みを見せながら、

「似合ってるよ」

「……ふふ」

そんな返ってきた彼の言葉に、嬉し過ぎて顔を真っ赤にして優花は笑みを零すと、ハ

ジメは、優花の手を優しく包み込むように握ると優花も真似するようにハジメの手を握った。

「優花……」

「ん……？」

「また、同じ事を言ってるかもしれない……だが言わせてくれ。俺は優花の支えになる！優花の笑顔を守り抜くこれからも、ずっと約束する！」

「ハジメ……」

ハジメの真剣な眼差しと言葉を受け止め、優花は笑みを浮かべながらハジメに抱きついて、今の想いを嘘偽りなく伝えた。

「じゃあ……これからもよろしくね、ハジメっ」

「ああ」

ハジメも相槌を打ちながらギュッと抱き返すと自然と二人の視線が合う。傍から見れば完全に恋人と思えるぐらいの距離ぐらい私達は見つめあっていた。

すると、後ろからある聞き慣れた声が聞こえてきた。

「おーい、ハジメ、園部っ！」

「ハジメっ、ユウカっ、こっちこっち！」

「ねえ、二人共早くっ！」

二人は声のする方向へ振り向くと、公園の入り口に浩介、奈々、妙子の三人が自分達を待っていた。

それを見て、二人は頷き合うと、お互い名残り惜しいが離れると、優花はハジメの服の袖を引つ張つて走り出す。

「ハジメ、行こー！」

「クハッ……そうだな」

優花の呼びかけにハジメは笑みを零して肩を竦めながら応えた。

二人は手を繋ぎあつて駆け出す。

優花は自分が手を繋ぎ合いながら隣で走る少年——ハジメの方を見て笑みを零しながら空を見上げた。空は雲など何処にも見当たらず快晴だった。

優花はふと、思う。また、自分達二人の前に困難が、それも強大な困難が立ち塞がるのかもしれない。でも、なにがあつたとしても皆となら、隣にいるハジメとならば乗り越えられると、そう信じて未来へと駆け出したのだった……。

く  
本編前篇【完】  
く



## 人物設定集1

・南雲 ハジメ

本作主人公

身長175cm（高校入学時）

五歳の頃、優花と出会い友達となる。その後、宮崎奈々と菅原妙子とも友達になる。

中学一年の頃、遠藤浩介と出会い、趣味などが合い友達となる。

優花がイジメられてると知り、支えてるだけじゃ、守れないと理解し変わり、その主犯の龍堂拓也に暴力行為を行って周りから避けられるようになる。

その後は、優花達に迷惑掛けたくなかった為、彼女達から離れたが優花の頑張りによつて、また五人で過ごすようになった。

原作とは違い朝早く起きて、トレーニングをしたり、暇な時は李師範の道場に行っているが、オタクなのは変わりなく、父の愁と母の董の仕事の手伝いをしてる。徹夜をした日は、熟睡してる為、優花が家に来て起こしに来てる。因みにハジメはその目付きと中学の件で学校では「狼」と言われて恐れられている。

“ウイステリア”でも手伝いをしており、常連の奥様方から人気で、時々が優花が嫉妬している。

余談：高校入学時、何故か白崎香織に妙に頻繁に話し掛けられ、彼女の幼なじみである天之川光輝と檜山大介に目をつけられる。

余談Ⅱ：…ハジメは自分に雫のようなファンクラブがあり創始者が深淵妹だと深淵兄と揃って知らない。

・園部 優花

本作ヒロイン

身長156cm（高校入学時）

五歳の頃、友達宮崎奈々と菅原妙子と別れ、自分が無くし探していた髪留めを見つけてくれた南雲ハジメと出会い、友達となる。

中学一年の頃、龍堂拓也に告白され断ったが、そのせいで彼等のグループに目をつけられ、イジメられるがハジメのおかげでなくなった。

その後、自分達からわざと避けたい彼を連れ戻し、五人でまた、過ごすようになった。高校の合格発表日の時にはハジメからカラコンコエの花飾りの着いた髪留めを貰い

ずつと身につけている。

原作と同じように両親が経営している「ウィステリア」のお手伝いをしている。ハジメがお手伝いをした日は母や奈々に押揃われ顔を紅くしてる。

高校に入学してからハジメの弁当を自分ですすんで作っており、幼なじみ達から「通い妻」と呼ばれている。

余談：高校入学時、檜山大輔と白崎香織に目をつけられている。それも、ハジメとは違う意味で……

余談Ⅱ：優花は学校では「裏」女神と呼ばれている。

・宮崎 奈々

ハジメと優花の幼なじみ

身長157cm（高校入学時）

五歳の頃、友達のお花からハジメを紹介され、友達となる。

中学一年の頃は優花とハジメの事を心配し、よく泣いていたが、ハジメがまた自分達のところに戻ってきてくれて喜んで。

余談：どうにかして、優花とハジメを付き合わせようと幼なじみと彼等の両親とも協力してる。

余談Ⅱ：浩介の妹の真実ちゃんに自分だけがちゃん付けなことに心にダメージを

負った。

・菅原 妙子

ハジメと優花の幼なじみ

身長154cm（高校入学時）

五歳の頃、友達のお花からハジメを紹介され、友達となる。

中学一年の頃はハジメとお花のことを心配しながら奈々を励ましたりしていた。

余談：幼なじみの皆とある映画を見ていて、ある人が縛られ拘束されているシーンを  
見て、少し興奮していた。

余談Ⅱ：最近、浩介と一緒にいることが多い？

・遠藤 浩介

ハジメの親友

身長172cm（高校入学時）

中学一年の頃、自分の影の薄さで誰にも気づかれず泣いてたところ、ハジメに声を掛  
けられ友達になった。

優花の件でハジメから優花達三人を支えてくれと頼まれ、支えようと頑張っていた。

余談：自分の事を気付いてくれるのはハジメ達呼び四人に相談してハジメの案で文  
化祭の劇である役に演じて黒歴史となっている。

・遠藤 真実

遠藤の妹

ハジメ達と出会ったのは海で初めて出会った（三話参照）。

その時にハジメを助けられ、初恋を抱くも隣に優花がいることで諦め、今はどうやって自分の兄なれるか思案中であり、ハジメのファンクラブの創設者である。

真実が呼んでいるハジメ達の呼称

ハジメ↓ハジメにい

優花↓優ねえ

妙子↓妙ねえ

奈々↓奈々ちゃん

・南雲 愁

ハジメの父

大手ゲーム会社の社長。時々ハジメに仕事の手伝いをしてもらったりしてる。

余談：自分が息子<sup>ハジメ</sup>から尊敬されてないことに泣いた。

・南雲 董

ハジメの母

有名人気少女漫画家であり、時々ハジメもアシスタントとして、手伝いをしてる。

早く自分の息子と優花が結ばれるように高校からハジメの弁当を作るのをやめた張本人。

・園部 博之

優花の父

“ウイステリア”を経営している。

ハジメが尊敬している人物である。

・園部 優里

優花の母

“ウイステリア”を経営してる。

早くが娘がハジメと結ばれるように董と協力している。

・李<sup>リ</sup>師範（本名：李<sup>リ</sup>・鯉<sup>リ</sup>伴<sup>ハン</sup>）

本名からして中華系の初老の男性。

ハジメの師範として道場の師範。ハジメとの出会いは、父の愁と共に取材に来たハジメを見て、見込みがあると確信し弟子にした。

その強さはハジメ曰く人類最強と言われており、ハジメは李との組手は今でも全敗中である。

・龍堂 拓也

イケメンで文武両道。

性格が性悪であり、優花をイジめるように仕向けた張本人。

ハジメに叩きのめされ、さらに、自分がしてきたことが周りからバレてしまい学校側から強制的に転校させられた。

・リーダー格の女子

・モブ女子A

・モブ女子B

・モブ女子C

本編 一章 魔獣迷宮オルクス物語の始ま

りく

プロローグ

月曜日

それは一週間の内で最も憂鬱な日の始まりである日。そんな日のある一人の栗色髪の少女が準備を終えて、大切な幼なじみの家へ向かう為、家を出ようと玄関で靴を履いているところだった。

すると、おっとりした雰囲気を持つ大人の女性が奥の部屋から、あら？といった様子で出てきた。

「あら、優花もう行くの？」

「うん。ハジメが昨日から愁さんの手伝いで徹夜したらしいから起こしにいかうと思つて」

そう言つて、優花はコチラに歩いてくる母の優里の方へ視線を転じると、優花の言葉



を聞いた優里はイタズラな笑みを浮かばせ嬉しそうに話す。

「あら、お熱いこと〜」

「もうっ、いつてきますっ!」

「ふふ、いつてらっしやい」

優花は優里に揶揄われたことに、恥ずかしさで顔を赤くなつてしまい、少しイラツとしながら幼なじみのハジメの家に向かうために家を出たのであった。

―南雲家―

家に辿り着いた優花はインターホンを鳴らした。

『は〜い』

ピンポンと呼び鈴が鳴ったすぐに、声が聞こえると共にドアから出たのは、ハジメの母の菫だった。菫は家に来た人物が優花だと知ると、嬉しそうに笑みを浮かべながら挨拶をする。

「あら、優花ちゃんおはよ〜」

「おはようございます、菫さん」

挨拶する菫に優花も挨拶をすると、菫は優花が家に来た用件を察して、更に嬉しそうに微笑む。

「今日はハジメを起こしに？」

「はい。まだ、ハジメって寝てます？」

「そうなのよ。起こすのお願い出来る？」

「はい、分かりました」

そして優花は菫に家に入れて貰えると、彼の部屋へと向かうのだった。

~~~~~

「——きて」

自分の部屋以外から他人の声が聞こえたハジメは最初は誰だ？と分からないでいたのだが、声からして自分の大切な幼なじみだと分かるのとゆっくりと閉じた目を開ける。

そして、目覚めると予想通り自分の目の前いたのは、大切な幼なじみの園部優花だった。

「おはよ、ハジメ」

コチラに笑顔を向ける優花を見て、ハジメは彼女の姿が制服姿だと分かると、今日は月曜日で平日。そうなる学校があると分かり、頬から冷や汗が垂れる。

「ああ、おはよ、優花。……………なあ、もしかして時間ヤバいか？」

「うん。後、30分寝てたらヤバかったね」

「……………マジで、助かった。OK、今すぐ準備するから、下で待つててくれ」

「うん」

ハジメはそう言つて、優花が部屋から出ると急いで準備を始めたのだった。下にいた  
董は、上からガタガタと音が聞こえ、やっと起きたのかと溜息を吐いていた。

―数分後―

急いで準備を済ませたハジメは口にギュウギュウと押し詰めたパンを飲み込みなが  
ら外で待つ優花の元へ向かった。

玄関を出ると、すぐ近くで優花が鞆を両手で持ちながら待つていた。

「……………ゴクン。ふう……………待つたか？」

「ううん、全然」

「浩介達は？」

「先に学校に行つてるて」

「じゃあ、自転車で行くか？」

ハジメは優花に他の幼なじみ達はもう学校に向かったと分かるやと自転車を車庫から

取り出す。すると、隣にいる優花がジト目でハジメを見る。

「まさか、二人乗りで行く気？先生とかにバレたら、また叱られるよ？」

「そんなんは、バレなきや良いだろ……なあ？」

「はあく、はいはい」

悪い顔するハジメに、優花は諦めたのか少し笑みを零しながら鞆を自転車の籠に入れるとハジメの自転車の後ろに腰を降ろして、後ろから手を回しハジメにしがみついたで、ハジメの背中に身を預ける。

「じゃあ、行くか」

「うんっ」

そして、ハジメは優花を乗せながら学校の近くまで自転車を漕ぐと、先生にバレない為に自転車を押して歩いて向かった。

校内の駐輪場に着くと自転車を置いてから、ハジメ達は教室まで向かった。そのまま二人で歩いてると段々と隣を歩く優花の足取りが重くなり、難しそうな顔になっていた。

「どうした、優花？」

「いや……今日もあの人突つかかるかなあ……」

「ああ、あいつか……」

ハジメは優花の言葉の人物が誰であるかを察し、ハジメ自身もある女子生徒とその幼なじみが頭に浮かぶと、ゲンナリとした嫌そうな表情になる。

「そうだな。あいつが来たらホントに面倒くさくなる。あのキラキラ野郎も来るからな」

「キラキラ野郎って…」

そんな会話を二人でしながら、ハジメは教室を扉を開けた。その瞬間、クラスの男子の一部が舌打ち、無視、畏怖、様々な反応をしていた。ハジメはそんなのを気にせずは無視して優花と共に自分の席に向かおうとしていると先程、話題に出ていた問題の女子生徒が目の前に現れた。

「南雲くん、おはよう！」

今日もギリギリだね。もつと早く来ようよ」

ニコニコと微笑みながら一人の女子生徒がハジメと優花の二人に歩み寄った。この女子の名は白崎香織という。学校で二大女神と言われ男女問わず絶大な人気を誇っている。

そんな彼女は何故かハジメの事を構ってくる。そのせいで、彼女の幼なじみが変に勘違いを加速してハジメに突っかかりたりするせいで、中学のした事が幼なじみ達以外で、この高校に来た奴が言ってしまう周りから「不良」と言われるようになった（成績はクラスで十位以内に入っている）。

ハジメはこの女子生徒、白崎香織に対して嫌気が指している理由の一つである。残りのもう一つは……

「ああ………おはよ白崎」

「おはよう、香織」

ハジメと優花が挨拶をすると、何故か俺の挨拶には嬉しそうにするのだが、優花の挨拶、そして優花の顔を見ると、ハジメの時と真逆で能面のような表情になってその目は冷めている。

「園部さん、いたんだね……おはよ」

そして、まるでそこに居たんだような冷たい挨拶をする。そう彼女は、何故か優花に對して態度が冷たいのである。この高校に入学した当時からこんな感じでハジメは白崎香織の事は心から嫌っていた。

そんな、ハジメは面倒臭い奴が来る前に白崎から離れる為、話を切り上げようとした時だった。

「南雲君、園部さん おはよう。毎日大変ね」

奴のお世話係が現れたのを見て、ハジメは嫌そうに「ちっ」と舌打ちを漏らす。すると、面倒くさい奴の後ろから二人の人物もやってきた。

「香織、また南雲の世話をしているのか？」

全く、香織は優しいな。園部さんも南雲の

世話で大変だね」

「よお、南雲！　園部！」

最初に挨拶をしたのは、三人の中の一人の女子生徒の名前は八重樫雫。白崎の親友だ。ポニーテールにした長い黒髪がトレードマークである。切れ長の目は鋭く、しかしその奥には柔らかさも感じられるため、冷たいというよりカツコイイという印象を与える。

百七十二センチメートルという女子にしては高い身長と引き締まった体、凛とした雰囲気は侍を彷彿とさせる。

事実、彼女の実家は八重樫流という剣術道場を営んでおり、雫自身、小学生の頃から剣道の大会で負けなしという猛者である。現代に現れた美少女剣士として雑誌の取材を受けることもしばしばあり、熱狂的なファンがいるらしい。後輩の女子生徒から熱を孕んだ瞳で「お姉さま」と慕われて頬を引き攀らせている光景はよく目撃されている。

次に、些いささか臭いセリフで白崎と優花に声を掛けるのが天之河光輝。いかにも勇者っぽいキラキラネームの彼は、容姿端麗、成績優秀、スポーツ万能の完璧超人。

サラサラの茶髪と優しいげな瞳、百八十センチメートル近い高身長に細身ながら引き締まった体。誰にでも優しく、正義感も強い（思い込みが激しい）。

光輝は特に面倒くさく入学当時からハジメの中学のした事をどこで聞いたか知らな

いが妙にハジメに対して突っかかって来るので実に面倒くさい人物である。

最後の男子生徒は坂上龍太郎といい、光輝の親友だ。短く刈り上げた髪に鋭さと陽気さを合わせたような瞳、百九十センチメートルの身長に熊の如き大柄な体格、見た目に反さず細かいことは気にしない脳筋タイプである。

坂上とは、体育の時に話し掛けられ、漫画の話が合っただけか仲良くやっている。

そんな、三人にハジメは二人はちゃんと挨拶をしてくれたので返すことにし、優花も挨拶をした。

「よお。八重樫、坂上」

「おはよう、雫、坂上、後、天之川君……」

そしたら、自分が挨拶に省かれたのが原因なのか光輝は声を上げる。

「おい、南雲！ 何故、俺に挨拶をしない！ 後、いつまでも香織の優しさに甘えるのはどうかと思うっ。香織だって君に構ってばかりはいられないんだから」

光輝のご都合主義の発言に、そして、香織に甘えてるといふ発言にハジメは目を細めると、少し声音を低くて嫌悪感を隠さずに話す。

「うるせえよ天之川。俺はまず挨拶しねえ奴に挨拶をする気がねえよ。それに、誰が白崎に甘えてるって？ 冗談はよしてくれ？」

「なんだと！」



「ああ？ やんのか」

「やめなさい、光輝！」

「ちよつ、ハジメ ストップ！」

今でも、一発触発の状態に雫は声を上げながら、光輝の制服の襟を掴んで止め、優花も雫と同じタイミングでハジメの腕を自分に寄せてギュツと抱きしめる。光輝は雫から後ろで襟を掴まれたことでグエツとなり、ハジメは優花に腕を抱き着かれたことに押し止まり、喧嘩は起きずに済んだ。

「チツ、やってらんねえ。行くぞ、優花」

「う、うん」

ハジメは舌打ちをすると、そのまま優花を抱き寄せる。優花は唐突にハジメに抱き寄せられたせいとか、少し顔を赤くしてるがハジメは気にせず、そのまま自分達の席へと向かいだした。

「おい待て、南雲！話がま……」

「光輝。もうすぐホームルームだし俺達も席に戻ろーぜえ〜」

「そうよ、光輝。龍太郎の言う通り私達も席に戻りましょう？」

「っ、わかった」

「……………チツ」

光輝はハジメとの会話が終わってないため、自分の席に向かうハジメを止めようとするが、幼なじみ二人に止められ、不満に思いながらも二人の言葉に従って席に戻った。そして、香織はハジメに抱き寄せられている優花の姿を見て小さく舌打ちをするのであった。

~~~~~

「ふう……………」

席に着いたハジメは徹夜したせいかわ物凄いい眠気が襲い寝ることにし優花にそのことを伝えた。

「優花」

「…ん、どうしたの?」

「少し寝るわ」

「ん、わかった」

優花にそう言ったハジメは、そのまま夢の世界へと旅立っていくのであった。

「——スーッ」

そんな、ハジメが寝むっている姿を見て優花は微笑ましそうに寝てる彼の髪を優しく撫でる。

「ふふ。(ホントに、いつもこんな感じなら皆からにも怖がられられなくて済むのにな)」  
優花は笑みを浮かべてるながらそう思っていると、幼なじみの三人の声が聞こえ、コ  
チラに向かっていると分力

かると、その方へ視線を向けた。

「はよ。ユウカっち」

「おはよ、優花」

「よお、園部。朝っぱらから災難だったな」

「三人とも、おはよ」

優花は三人に挨拶を返すと、奈々がハジメはどうして寝ているか聞く。

「ハジメっち、もしかして徹夜？」

「うん。愁さんの手伝いしてたみたい」

「わあ……」

「それはハジメはお疲れだな」

優花は三人とそんな話していると、何処からか突き刺すような視線を感じ取った。

「……っ！」

「どうしたの優花？」

「ううん、なんでもないよ」

「じゃあ、先生も来そうだしまた後で」

「うん」

優花は三人との話が終わり、突き刺す視線の方を向けると予想通りの人物がコチラを見ていた。

それは白崎香織だった。彼女は初めて会った時からハジメのことをなにかと気にかけており、幼なじみの自分には、いつも冷たい態度をとられてるのだ。

優花としては別にどうでも良いが、ハジメを心配させたくないから、やめて欲しいと思つてると先生が来てホームルームが始まったのであった。

~~~~~

教室がざわめきだし、隣から優花の声が聞こえるとハジメは薄目を開けながら、目を覚ますと、優花が苦笑い気味で話しかける。

「ハジメ、もう昼」

「……わかった」

優花の声に応えてハジメは上体を起こすと、浩介達が各々弁当箱を持ってやって来た。

「よお、ハジメよく寝れたか？」

「ハジメ、おはよお」

「ハジメつち　くおはよー」

「おう」

ハジメは浩介達と挨拶してから、浩介達が席に座ると同時に優花から貰っている弁当箱を取り出すと、浩介は苦笑い気味で話しかけた。

「ハジメ、弁当は……って、いつものか……」

「ああ、ホントにありがとな優花」

「ううん、大丈夫だよ」

何故、ハジメは優花の手作り弁当なのは理由があった。それは、董は高校生になつてからハジメにとんでもない事を告げたのだ。

『ハジメ、私弁当を作らないわ！』

『……は？　　なんで？』

『疲れたのよ……』

董に理由を聞くと、どうでも良い内容で、ハジメは青筋を立てた。

『おい』

『でも、安心しなさい！　　これからは優花ちゃんが作ってくれるって、本人も優里さん

も了承済みよ!』

『ハアツ?!』

そんな驚くことが連続であつたがハジメは高校に入つてから、優花が作った弁当を食べる事になった。でも、優花の負担になつてないか心配で仕方ない。

「やっぱ、優花…負担じゃねーか? 負担だつたらコンビニや購買にするけど…」

「大丈夫だよハジメ、料理の練習にもなるし…それにハジメに食べて貰えると嬉しいし」

「お、おう」

最後の方は聞こえなかつたが、優花の負担にはなつてないようで少し安心した。だが、何故か奈々と妙子はニヤニヤしており、浩介は「鈍感野郎が」と溜息混じり呟いていた。

すると、女版面倒臭い奴がニコニコと弁当箱を持つて来ながらやつて来た。

「南雲君。私も一緒に食べて良いかな」

「断る」

食事を一緒にしたいと言う香織は、ハジメの拒否の即答に戸惑いを見せる。隣に座る優花は、即答するハジメを注意した。

「ちよ、ハジメっ」

「えつ、あのじゃあ、私の分のお弁当も少し食べる？　その弁当よりもきつと美味しいと思うよ」

ピクツ

「あ、」

場の空気が一変し、ハジメは香織の発言にキレそうになり睨みつける。が、しかしキレることを察した優花が咄嗟に手を握ってハジメの怒りをギリギリ押し留める。でも、あの発言はハジメの他に浩介や奈々達も香織に怒りを覚えて香織を睨む。

折角の昼飯を邪魔されてハジメはイラつきながら、少し強めに白崎を追い払おうとする、

「香織。こつちで一緒に食べよう。南雲は幼なじみ達と食べているしさ。それに、せつかくの香織の美味しい手料理を食べるなんて俺が許さないよ？」

爽やかに笑いながら、気障なセリフを吐く光輝にキョトンとする香織は……

「え？　なんで光輝くんの許しがいるの？」

「「「ブフッ」」」

素で聞き返す香織に思わず雫とハジメ達は吹き出した。

そして、此処では静かに食えないと判断したハジメは優花の弁当を貶した仕返しに、

「し、かし……ホントに白崎の料理は美味しいのかよ？」

「え……」

「ちよつと、ハジメ言い過ぎー！」

その発言に香織は、唾然とし、優花には注意されながら止められたがやつぱり香織に對して怒りが収まらなかつたハジメは仕返しをしたのだ。すると、光輝がハジメの言葉を聞いてキレたのかハジメを睨みつける。

「南雲！香織に謝れ！」

「……何故？」

「つ、貴様ア！」

光輝はハジメの素っ気ない態度に腹が立ってしまい、終いには、立ち上がって光輝はハジメに殴り掛かろうとした瞬間だった。

「……っ」

「何?！」

その瞬間、クラス全体が凍りついた。

ハジメに殴り掛かろうとした光輝の足元に純白に光り輝く円環と幾何学きかがく模様が見れたからだ。

その異常事態には直ぐに周りの生徒達も気がついた。全員が金縛りにでもあつたかのように輝く紋様——俗に言う魔法陣らしきものを注視する。



その魔法陣は徐々に輝きを増していき、一気に教室全体を満たすほどの大きさに拡大していき、遂には、ハジメ達の足元まで異常が迫って来たことで、ようやく硬直が解け悲鳴を上げる生徒達。未だ教室にいた先生の畑山愛子が咄嗟に「皆！ 教室から出て！」と叫んだのと、魔法陣の輝きが爆発したようにカッと光つたのは同時だった。

ハジメは近くにいる優花だけは守ろうと即座に行動を開始して声を上げた。

「優花！俺に捕まれ！」

「……………うん！」

その声を聞いた優花はハジメにギュッとしがみついた。それを確認したハジメは覆いかぶさるように優花を抱き締めるのだった。

そして、その瞬間——この日、教室にいた全ての人が消えたのだった……。

## 一話

## 異世界召喚

光が止み、目を開けたハジメは優花の安全を確認してから周囲を見渡す。そしたら、ある巨大な壁画が見えた。それは、縦横十メートルはありそうなその壁画には、後光を背負い長い金髪を靡かせうっすらと微笑む中性的な顔立ちの人物が描かれていた。

背景には草原や湖、山々が描かれ、それらを包み込むかのように、その人物は両手を広げている。美しい壁画だ。素晴らしい壁画だ。だがしかし、ハジメはなぜか薄ら寒さを感じて無意識に思ってしまった。

「気持ち悪いい……」

小声だったが口にしてしまったハジメはその壁画に対して嫌悪感を顕にした。よくよく周囲を見てみると、どうやら自分達は巨大な広間にいるらしいということが分かった。

素材は大理石だろうか？ 美しい光沢を放つ滑らかな白い石造りの建築物のようで、これまた美しい彫刻が彫られた巨大な柱に支えられ、天井はドーム状になっている。大聖堂という言葉が自然と湧き上がるような荘厳な雰囲気の間である。

ハジメ達はその最奥にある台座のような場所の上にいるようだった。周囲より位置が高い。周りには周囲を見渡すクラスメイト達があった。どうやら、あの時、教室にいた生徒は全員この状況に巻き込まれてしまったようである。

そうしていると、抱きしめられていた優花も目を開けると、今、自分の状況を理解したのか、ボツと顔を瞬時に真っ赤になつてハジメに上目遣いで恥ずかしそうに口を開いた。

「……ハジメ、もう大丈夫だから」

「わかった」

ハジメは優花に従つて抱きしめるのをやめ、彼女を支えながら立ち上がる。そして、おそらくこの状況を説明できるのであろう台座の周囲を取り囲む者達への観察に移す。

そう、この広間にいるのはハジメ達だけではない。少なくとも三十人近い人々が、ハジメ達の乗っている台座の前にいたのだ。まるで祈りを捧げるように跪き、両手を胸の前で組んだ格好で。

彼等は一様に白地に金の刺繍ししゆうがなされた法衣のようなものを纏まとい、傍らに錫杖のような物を置いている。その錫杖は先端が扇状に広がっており、円環の代わりに円盤が数枚吊り下げられていた。

ハジメは彼等の服装を見て、司祭か何かの宗教系に関わる人間と推測する。すると、

その内の一人、法衣集団の中でも特に豪奢で煌びやかな衣装を纏い、高さ三十センチ位ありそうなこれまた細かい意匠の凝らされた烏帽子のような物を被っている七十代くらいの老人が進み出てきた。

もつとも、老人と表現するには纏う覇気が強すぎる。顔に刻まれた皺しわや老熟した目がなければ五十代と言っても通るかもしれない。

そんな彼は手に持った錫杖をシヤラシヤラと鳴らしながら、外見によく合う深みのある落ち着いた声音で俺達に話しかけた。

「ようこそ、トータスへ。勇者様、そしてご同胞の皆様。歓迎致しますぞ。私は、聖教教会にて教皇の地位に就いておりますイシユタル・ランゴバルドと申す者。以後、宜しくお願い致しますぞ」

そう言つて、イシユタルと名乗った老人は、好々爺然とした微笑を見せたのだった。

現在、ハジメ達は場所を移り、十メートル以上ありそうなテーブルが幾つも並んだ大広間に通されていた。

この部屋も例に漏れず煌びやかな作りだ。素人目にも調度品や飾られた絵、壁紙が職人芸の粋を集めたものなのだろうとわかる。ハジメは優花の隣を歩きながら「スゲー造りだな」と感嘆していた。

おそらく、晩餐会などをする場所なのではないだろうか。上座に近い方に愛子と光輝達四人組が座り、後はその取り巻き順に適当に座っている。ハジメと優花、奈々達は後方の席に座る。

その時だった。優花に突き刺さるような視線を感じて、その方向へ目を向ける。それは、白崎香織のものだった。優花は居心地が悪くなり、すぐさま顔を逸らした。

ここに案内されるまで、誰も大して騒がなかったのは未だ現実に認識が追いついていないからだろう。イシユタルが事情を説明すると告げたことや、カリスマレベルMAXの光輝が落ち着かせたことも理由だろうが。

優花も最初は戸惑っていたが、ハジメが傍にいてくれたおかげで安心して落ち着きを取り戻していた。

全員が着席すると、絶妙なタイミングでカートを押しながらメイドさん達が入ってきた。それは見蕩れる程、美しいメイドさん達で、こんな状況でもクラス男子の大半がメイドさん達を凝視している。もつとも、それを見た女子達の視線は、氷河期もかくやという冷たさを宿していたのだが……。

少し心配してハジメの方を見る優花だったが、しかし、ハジメは察したのか「ハニトラか……」と言葉を漏らしながらウンザリしてる様子で優花は少し安心していた。

するとに来て飲み物を給仕してくれたメイドが紅茶のようなものをカップに注いだ。

ハジメはそれを一口飲んだ。

「マジい……やっぱ、ハニトラか」

ハジメは、飲み物の不味さに余り顔が少し強ばり飲むのをやめた。隣の優花も不味かったらしくカップを持ちながら渋い表情をしていた。すると、全員に飲み物が行き渡るのを確認したのかイシユタルが話しを始めた。

「さて、あなた方においてはさぞ混乱していることでしょう。一から説明させて頂きますのでな、まずは私の話を最後までお聞き下され」

そう言って始めたイシユタルの話は実にファンタジーでテンプレで、どうしようもないくらいに勝手なもので、要約するところだった。

まず、この世界はトータスと呼ばれている。そして、トータスには大きく分けて三つの種族がある。人間族、魔人族、亜人族である。

人間族は北一帯、魔人族は南一帯を支配しており、亜人族は東の巨大な樹海の中でひっそりと生きていらしい。

この内、人間族と魔人族が何百年も戦争を続けている。

魔人族は、数は人間に及ばないものの個人の持つ力が大きいらしく、その力の差に人間族は数で対抗していたそうだ。戦力は拮抗し大規模な戦争はここ数十年起きていないらしいが、最近、異常事態が多発しているという。

それが、魔族による魔物の使役だ。

魔物とは、通常の野生動物が魔力を取り入れ変質した異形のことだ、と言われていて。この世界の人々も正確な魔物の生体は分かっていないらしい。それぞれ強力な種族固有の魔法が使えるらしく強力で凶悪な害獣とのことだ。

今まで本能のままに活動する彼等を使役できる者はほとんど居なかった。使役できても、せいぜい一、二匹程度だという。その常識が覆されたのである。

これの意味するところは、人間族側の「数」というアドバンテージが崩れたということ。つまり、人間族は滅びの危機を迎えているらしい。

「あなた方を召喚したのは『エヒト様』です。我々人間族が崇める守護神、聖教教会の唯一神にして、この世界を創られた至上の神。おそらく、エヒト様は悟られたのでしよう。このままでは人間族は滅ぶと。それを回避するためにあなた方を喚ばれた。あなた方の世界はこの世界より上位にあり、例外なく強力な力を持っています。召喚が実行される少し前に、エヒト様から神託があったのですよ。あなた方という『救い』を送ると。あなた方には是非その力を発揮し、『エヒト様』の御意志の下、魔族を打倒し我ら人間族を救って頂きたい」

イシユタルはどこか恍惚とした表情を浮かべている。

おそらく神託を聞いた時のことでも思い出しているのだろう。それを見たハジメは

イシユタルの顔がキモすぎて少し引いていた。隣にいる優花達も同じように引いていた。

イシユタルによれば人間族の九割以上が創世神エヒトを崇める聖教教会の信徒らしく、度々降りる神託を聞いた者は例外なく聖教教会の高位の地位につくらしい。

ハジメ達が、“神の意思”を疑いなく、それどころか嬉々として従うのであろうこの世界の歪さに言い知れぬ危機感を覚えていると、突然立ち上がり猛然と抗議する人が現れた。

愛子先生だ。

「ふざけないで下さい！ 結局、この子達に戦争させようつてことでしょ！ そんなの許しません！ ええ、先生は絶対に許しませんよ！ 私達を早く帰して下さい！ きつと、ご家族も心配しているはずですよ！ あなた達のしていることはただの誘拐ですよ！」

ふりふりと怒る愛子。彼女は今年二十五歳になる社会科の教師で非常に人気がある。百五十センチ程の身長でそのいつでも一生懸命な姿と大抵空回ってしまう残念さのギャップに庇護欲を掻き立てられる生徒は少なくない。

ハジメもこの先生は信頼はしており、愛子は“愛ちゃん”と愛称で呼ばれ親しまれているのだが、本人はそう呼ばれると直ぐに怒る。優花達もそう呼んでいる。



今回も理不尽な召喚理由に怒り、ウガーと立ち上がったのだ。「ああ、また愛ちゃんが頑張ってる……」と、ほんわかした気持ちでイシユタルに食ってかかる愛子を眺めていた生徒達だったが、次のイシユタルの言葉に凍りついた。

「お気持ちはお察しします。しかし……あなた方の帰還は現状では不可能です」

場に静寂が満ちる。重く冷たい空気が全身に押しかかっているようだ。誰もが何を言われたのか分からないという表情でイシユタルを見やる。

「ふ、不可能って……ど、どういうことですか?! 喚べたのなら帰せるでしょう!」

愛子が叫ぶ。

「先ほど言ったように、あなた方を召喚したのはエヒト様です。我々人間に異世界に干渉するような魔法は使えませんのでな、あなた方が帰還できるかどうかもエヒト様の御意思次第ということですね」

「そ、そんな……」

愛子が脱力したようにストンと椅子に腰を落とす。周りの生徒達も口々に騒ぎ始めた。

「うそだろ? 帰れないってなんだよ!」

「いやよ! なんでもいいから帰してよ!」

「戦争なんて冗談じゃねえ! ふざけんなよ!」

「なんで、なんで、なんで……」

パニツクになる生徒達。

ハジメはイシュタルの態度を見てそう予想していた。それ故、他の生徒達よりは平静を保っている。隣から優花が目には涙を浮かばせながら此方を見る。

「ハジメ、私達……もうお母さん達に会えないの？」

不安でいっぱいであろう優花の言葉に、ハジメは応える。

「安心しろ。どんなことがあっても優里さん達の元へ必ずお前を戻すだから泣くな」

「うん……」

この言葉に確証はない。しかし、優花を安心させる為に「会わせる」と言ってしまったが、その言葉で優花は少し安心したのかハジメの手を握った。

誰もが狼狽える中、イシュタルは特に口を挟むでもなく静かにその様子を眺めていた。

なんとなくその目の奥に侮蔑が込められているような気がした。今までの言動から考えると「エヒト様選ばれておいてなぜ喜べないのか」とでも思っているのかもしれない。

未だパニツクが収まらない中、ハジメが状況を変える為に声をだす前に光輝が立ち上がりテーブルをバンツと叩いた。その音にビクツとなり注目する生徒達。光輝は全員

の注目が集まったのを確認するとおもむろに話し始めた。

「皆、ここでイシユタルさんに文句を言っても意味がない。彼にだってどうしようもないんだ。……俺は、俺は戦おうと思う。この世界の人が滅亡の危機にあるのは事実なんだ。それを知って、放っておくなんて俺にはできない。それに、人間を救うために召喚されたのなら、救済さえ終われば帰してくれるかもしれない。……イシユタルさん？

どうですか？」

「そうですね。エヒト様も救世主の願いを無下にはしませんよ！」

「俺達には大きな力があるんですね？　ここに來てから妙に力が漲っている感じがします」

「ええ、そうですね。ざっと、この世界の者と比べると数倍から数十倍の力を持っていると考えていいでしょうな」

「うん、なら大丈夫。俺は戦う。人々を救い、皆が家に帰れるように。俺が世界も皆も救ってみせる!!」

ギョツと握り拳を作りそう宣言する光輝。無駄に歯がキラリと光る。同時に、キラキラのカリスマは遺憾なく効果を發揮した。絶望の表情だった生徒達が活気と冷静さを取り戻し始めたのだ。バカキラを見る目はキラキラと輝いており、まさに希望を見つけたという表情だ。女子生徒の半数以上は熱っぽい視線を送っている。

「言ってることは臭いが全員落ち着いたが）……悪手だな」

ハジメはそう聞こえない程度の声音で呟くと片手で目頭を揉みほぐす。

「へっ、お前ならそう言うと思っただぜ。お前一人じゃ心配だからな。……俺もやるぜ？」

「龍太郎……」

「今のところ、それしかないわね。……気に食わないけど……私もやるわ」

「雫……」

「え、えつと、雫ちゃんがやるなら私も頑張るよ！」

「香織……」

すると、いつものメンバーが光輝に賛同していく。後は当然の流れというようにクラスメイト達が賛同していく。

しかし、ハジメはイシユタルの目を見てこの流れは危険だと判断し、状況を打開しようとして全体に聞こえるように声を上げた。

「俺は反対だ」

ハジメのその言葉で全員の視線がハジメの方に向いた。

「ちよつと、ハジメ！」

優花はハジメを心配して注意したがそれを無視する。すると光輝が怒りの籠った目で話し掛けた。

「どういうことだ南雲……」

「そうだ！」

「何言ってるの！」

光輝に続き、クラスの大半からブーイングが来たがそれを無視しハジメは気にせず言葉が続ける。

「いや、天之川の戦争に参加するという判断は少し無計画過ぎるだろう？」

「なんだと……」

「そう、キレんなよ？　俺はお前の意見に少し手心を加えるだけだ……おいイシユタルさん、少し良いか？」

「なんですすかな……」

ハジメは光輝を煽りながら、話しをイシユタルの爺に振った。イシユタルはハジメを半目で疑うような視線で見つめながら返事をする。

その視線に圧を感じたがハジメは気にせずに口を開く。

「俺も天之川の意見に今の状況的に賛同するしかない」

「……では、どうして光輝殿の意見に反対を？」

「簡単な事だ。俺達のいた国は戦争なんかとつくに終わって、俺達は平和を持って余している身だ。　そんな奴らがいきなり戦争なんて馬鹿げてる。戦っても……ただ、死人が

出るだけだぞ?」

『…………?!』

その言葉で周りは静かになりクラス全体が息を飲んで、ハジメの言葉を理解する。

「南雲! 皆を怖らがすな! 皆は、俺が守る!!」

「てめえに言っつてねえよ。キラキラ野郎」

「なっ!」

光輝が怒りながら何か言うもハジメは適当に受け流した。そうしているとイシユタルが話しかけてきた。

「それで…………どうするのですか?」

「何、今から出す条件をのんで欲しいだけさ」

「条件とは?」

「一つ、俺達は今さっき言ったように戦争なんかやったことないし、この世界のこともよく知らないからな、訓練と学問の指導、二つ、戦争を拒否する奴がいたらそれを認めて身柄の安全と前線に立たせず国の警備などにまわして欲しい」

「…………」

イシユタルはハジメの提案に少し考え込む。ハジメはそれを見て更に追い込ませて早く答えさせる為に急かす。

「で、どうするんだ？」

「おい、やめろ南雲！　イシユタルさんが困っているだろ！」

そう急かせていると、また光輝が突っかかってくるがハジメは光輝を睨みながら口を開く。

「うるせえよ。てめえは黙ってろ」

「……っ」

すると、ハジメの睨みと圧に光輝は言葉を詰まらせる。するとイシユタルが答えをだしたか口を開く。

「そうですね、一つの条件である教育は、準備はしていますのでご安心を。もう一つの条件ですが……呑みましょう」

イシユタルの答えを聞いたハジメはその答えに笑みを零しながら、

「交渉成立だ」

そう言って、ハジメとイシユタルは握手を交わした。だが、ハジメを見るイシユタルの目は敵意を感じた。そんな、視線は気にせずハジメは席に着くと安堵の息を漏らす。

「ふう、これで、少しは防衛ラインは張れたか……ああ、疲れた」

そう愚痴みたいに零すとハジメは少し条件をのんでくれたことに安堵したのだが、嫌々戦争に参加することになったのだった……。

## 一一話

## 晚餐会

戦争に参加することになったハジメ達だが、ハジメの出した条件の一つの訓練や学問などの指導などはその辺の事情は当然予想していたらしく、イシユタル曰く、この聖教会本山がある「神山」の麓の「ハイリヒ王国」にて受け入れ態勢が整っているらしい。王国は聖教教会と密接な関係があり、聖教教会の崇める神——創世神エヒトの眷属であるシャルム・バーンなる人物が建国した最も伝統ある国ということだ。国の背後に教会があるのだからその繋がりの強さが分かるだろう。

ハジメ達は聖教教会の正面門にやって来た。下山しハイリヒ王国に行くためだ。

イシユタルに促されて先へ進むと、柵に囲まれた円形の大きな白い台座が見えてきた。大聖堂で見たのと同じ素材で出来た美しい回廊を進みながら促されるままその台座に乗る。

台座には巨大な魔法陣が刻まれていた。柵の向こう側は雲海なので大多数の生徒が中央に身を寄せる。それでも興味が湧くのは止められないようでキョロキョロと周りを見渡していると、イシユタルが何やら唱えだした。



「彼の者へと至る道、信仰と共に開かれん——『天道』」

その途端、足元の魔法陣が燦然さんぜんと輝き出した。そして、まるでロープウェイのように滑らかに台座が動き出し、地上へ向けて斜めに下っていく。

どうやら、先ほどの『詠唱』で台座に刻まれた魔法陣を起動したようだ。この台座は正しくロープウェイなのだろう。ある意味、初めて見る『魔法』に生徒達がキヤツキヤツと騒ぎ出す。雲海に突入する頃には大騒ぎだ。

やがて、雲海を抜け地上が見えてきた。眼下には大きな町、否、国が見える。山肌からせり出すように建築された巨大な城と放射状に広がる城下町。ハイリヒ王国の王都だ。台座は、王宮と空中回廊で繋がっている高い塔の屋上に続いているようだ。

「演出か……」

大概、神の使徒が舞い降りた感じに見せる演出だろうと考えたハジメ。もしかしたら、今から向かう王国と聖教は密接な関係からだと思いつながら下の景色を眺めていた。すると、優花が腕に抱きつきながら目を輝かせて話しかける。

「ハジメ！　すごいねこれ」

「ああ、そうだな」

優花がこの世界に来て、やっと笑顔になったのを見て、ハジメはとりあえず安心して、イシユタルのことを心の中で感謝した。

王宮に着くと、ハジメ達は真つ直ぐに玉座の間に案内された。教会に負けないくらい煌びやかな内装の廊下を歩く。道中、騎士っぽい装備を身につけた者や文官らしき者、メイド等の使用人とすれ違うのだが、皆一様に期待に満ちた、あるいは畏敬の念に満ちた眼差しを向けて来る。ある程度、事前に知らされていたのだろう。

そして、美しい意匠の凝らされた巨大な両開きの扉の前に到着すると、その扉の両サイドで直立不動の姿勢をとっていた兵士二人がイシユタルと勇者一行が来たことを大声で告げ、中の返事も待たず扉を開け放った。

イシユタルは、それが当然というように悠々ゆうゆうと扉を通る。光輝等一部の者を除いて生徒達は恐る恐るといった感じで扉を潜った。

扉を潜った先には、真つ直ぐ延びたレッドカーペットと、その奥の中央に豪華ごうしやかな椅子——玉座があった。玉座の前で覇気と威厳を纏った初老の男が立ち上がって待っていた。

あの初老が国王だと分かり、ハジメは玉座に座る国王を見てから視線を隣にずらした。

その隣には王妃と思われる女性、その更に隣には十歳前後の金髪碧眼の美少年、十四、五歳の同じく金髪碧眼の美少女が控えていた。更に、レッドカーペットの両サイドには左側に甲冑や軍服らしき衣装を纏った者達が、右側には文官らしき者達がざっと三十人

以上並んで佇んでいる。

その異世界らしい光景に少し関心していると玉座の手前に着いた。

イシユタルはハジメ達をそこに止め置き、自分は国王の隣へと進み、おもむろに手を差し出すと国王は恭しくその手を取り、軽く触れない程度のキスをした。

「はあ……マジかー」

その光景を見たハジメは、王族より聖教の方が立場が上だと分かって内心で溜息を吐く。

そこからはただの自己紹介だった。国王の名をエリヒド・S・B・ハイリヒといい、王妃をルルアリアというらしい。金髪美少年はランデル王子、王女はリリアーナというらしい。

その後は、騎士団長や宰相等、高い地位にある者の紹介がなされた。ちなみに、途中、美少年の目が香織に吸い寄せられるようにチラチラ見ていたことから少しハジメは吹きそうになり笑い堪えていた。

王族の人達の自己紹介が終わった後、晩餐会が行われた。それは、初めて見る料理ばつかで優花は料理心があふれだしてハジメを引っ張って色々な料理を食べていた。

「むぐ……これを見た目に反してなかなかいける！」

「そ、そうか？」

「うん、ハジメも食べて、はい！」

「つむぐ……むぐ、ゴクン」

「どう？……つ、痛っ ゴメンって、ハジメエ」

優花は、ハジメに無理矢理、口に料理を入れてどうかと聞くと、ハジメは笑みを向けて優花の頭をグリグリしながら感想を言う。

「ああ、これは確かに美味しいな」

「痛たたた……でしよ〜」

優花は頭を抑えながらもハジメの感想にウンウンと頷いているとハジメが頬をポリポリと掻きながら話しかける。

「なあ、優花？」

「ん？」

「少し、離れる」

「ん、わかった」

そうやってハジメは私から離れて行った。恐らくトイレだろうと思い、優花は再びは異世界料理を堪能することにしたのだった。

―数分後―

「……遅い」

いくら待つても、ハジメが帰ってくるのが遅いと思つてると妙子達を見掛けた優花はちよつど良いと思ひハジメが何処にいるか聞こうと向かう。すると、妙子達も自分を探していたようで、どうしたかと聞くと奈々がとんでもないことを言いだした。

「ユウカつち！　ハジメつちがリリアーナ姫と楽しそうに話してるよ!!」

「は？」

少し間拔けな声が出る。だが、すぐに気を取り直して奈々達に「ハジメはどこ？」と迫る。何故か怖がつている奈々達を気にしながらも奈々の指をさした方向へと歩き出す。

「そ、園部！少し――」

「ごめん、急いでるから」

「え、あ――」

誰か話しかけたが、今はそれどころじゃないのだ。優花は素つ気なく返事をして止まらずに歩く。そして、話しかけた誰かの檜山君は悲しそうな表情だった。

やつと、ハジメのいるであろう場所に着いた優花の目に入った光景に固まった。

「嘘……」

そこには、リリアーナ姫の頭を撫でてゐるハジメの姿があつた。

―数分前―

「ふう……つたく、あの女……神出鬼没だろ」

ハジメはやつと追わなくなつたことに安堵して苦言を零す。それは、トイレから戻つて、優花の元へ向かおうとした時だつた。会場内に入った瞬間、香織と鉢合わせてしまつて、物凄い勢いで迫つて来るので、ハジメは一目散に逃げたのだ。

そうして、逃げ付いた場所はそれは街を一望出来るテラスだつた。ハジメは、少し休憩がてら夜の王国の風景を眺めていた。

「あの……少し隣良いですか？」

「……アンタは」

景色を眺めていると後ろから声がかけられた。振り向くとそこにはこの国の王女のリリアーナ姫だつた。

「……リリアーナ姫は俺に何の要件で？」

「いえ、大したことじゃありませんよ。あの、貴方のお名前は？」

「いや、これは失礼だつた。俺の名前は南雲ハジメです」

ハジメはそう言つて自己紹介しながら片手で胸を抑えながら軽く礼をした。

「ハジメ様ですな。 あつ、私のことはリリイと呼んでください。 その方が嬉しいです」  
「じゃあ、俺もハジメだけで良いですよ」

王族としては意外にフレンドリーな人物だと、ハジメのリリアーナに対しての最初の評価だった。

「では、ハジメさんで……」

「ああ、それで構わない」

そして、ハジメはリリアーナと軽く探り合いなど無しで話し合った。 そのおかげで、この国の状況、この世界の情報、他国との関係性などを聞けて、有益な情報を手に入れたハジメはその礼といった感じで自分達の世界の事をリリアーナに話した。

その時のリリイの表情は王女と言うよりその年齢に合った少女のように目を輝かせながら聞いているので、つい話が進んでしまった。

そんな話をしている中、リリアーナはあることを聞いてきた。 その表情は不安を感じさせるような感じだった。

「あの……ハジメさんは今回の勇者召喚に思うことはありませんか？」

ハジメはその言葉を聞き、リリアーナを警戒するが今まで話した限り、そう言う人物ではないと分かっていたが、念の為に確認をとる。

「それは探りとか何かか？」

「ち、違います。私の単なる疑問ですから安心して下さい」

ハジメの質問に、リリイは両手をブンブンと左右に振って単なる疑問だと言って、探りとかではないと否定した。

それを確認するとハジメは、リリアーナには申し訳ないと思うが包み隠さず本音を話した。

「……そうだな。勝手に召喚されて、知らん奴等の国の為に戦争に参加してくださいってのは大分迷惑だな」

ハジメの本音を聞いてか、リリアーナは悲しそうな表情で申し訳なさを感じている表情だった。そして、リリアーナは頭を下げながらハジメに謝罪をした。

「……誠に今回の件のことは申し訳ありません。ハジメさんの言うとうりこの戦争は貴方達にとって全く関係のないことです。それなのに私達は……」

リリアーナはそう言いながら頭を下げる。よく見れば身体が震えているのが分かった。

「……」

ハジメはリリアーナの謝罪に、こんな人物が王族にいるんだなと感じた。そして、リリイが頭を下げたのは自分のせいでもあるためハジメは今も頭を下げているリリイに近付いて話しかける。



「リリイ」

「……はっ」

「そつちにだつて責任があると思う。が、コツチだつて、どつかのキラキラバカが考え無しに参加しようと言いだしちまったからな……」

ハジメは、リリアーナに目を合わせながらに少し身体を屈めて言葉を続ける。

「まあ、そのなんだ。そんなに思い詰まるな俺もアンタの為だと思えば力を貸すよ」

ハジメはそう言いながら笑みを向けて、そつとリリアーナの頭を撫でる。

何故、頭を撫でようと思ったのか自分でも分からない。だが、リリアーナの悲しそうな顔は小さい頃の優花の悲しむ顔に似ており、彼女の涙を流す姿を見たくなかった。笑顔にさせたかった。

「ハジメ、さん」

頭を撫でられているリリイは顔が赤くなっており、ハジメは自分が何かしてしまつたと勘違いして、リリアーナに声を掛けようとした時だった。

「おい、リリイどう……「ハジメ？」……」

ビクツ、背筋が凍る。その言葉にびっくりし後ろをたそこには、笑つてるように笑つてない笑顔のした優花とそれに続いて、優花に怖がっている奈々を慰めるように抱きしめながら頭をヨシヨシしてる妙子の姿があった。

「優花、そのつ、これ……」

「問答無用。詳しくはあつちで聞くから」

ハジメの弁明は言わせて貰えず、そのまま、優花に腕を捕まれ連行される。すると、後方からリリアーナが声を上げる。

「ハジメさん！」

「あ……じゃあな。また会おうなり——「ハジメ？」——ウツス、サーセンした優花さん」  
リリアーナにまた会おうと言おうとしたが捕まえられている腕の力が増したのと同じ時に優花の声がかかり手を振るだけにしてハジメはリリアーナと別れた。

そして、優花に連行されたハジメは、何を話していたのか話さないといけなくなり、嘘をついても優花達にはバレることなので真実を話さないといけない羽目になった。

その後、ハジメ達の訓練などの指導する宮廷魔術師や騎士団など紹介されて、晩餐会は幕を閉じた。晩餐が終わり解散になると、各自に一室ずつ与えられた部屋に案内され、ハジメは唾然としながら呟く。

「……VIP待遇かよ」

全てが高級ホテル並の装飾に、ハジメは王国の対応に少し引いてしまう。

「まあ、明日も訓練？があるし、早めに寝るか……」

天蓋付きベッドに愕然としながらも、ハジメは明日のこともあり早く寝る為にベッド

にダイブする。

豪華な部屋にイマイチ落ち着かない気持ちになりながら、それでも怒涛の一日に張り詰めていたものが溶けていくのを感じ、ハジメはベッドにダイブすると共に意識を落としながら眠りに入ったのだった……。

~~~~~

ーリリアーナの部屋ー

ベッドに腰を下ろしながら、リリアーナは今日の晩餐会に出会って会話をした彼……南雲ハジメとの会話を思い出しながら嬉しそう笑みを浮かべた。

「ハジメさん」

リリイはハジメの名を呟くと同時にハジメが自分に対して言ってくれた言葉を思い出す。

『まあ、そのなんだ……そんなに思い詰まるな俺もアンタの為なら力を貸すよ』

「……ツ〜!」

思い出す度にリリアーナは自分の顔が赤くなっているのが分かってベッドの上で身悶える。

「ハジメさん……何かあの人に似てたな……」

リリイは少し落ち着いた後、ハジメの姿を、ある人に重ね合わせる。

そして……リリイはあの人にハジメと同じように頭を撫でて貰った時の記憶を思い出す。

『リリイ』

その優しく自分の名前を呼んでくれていた人を思い出すもリリイは忘れようとブンと首を振る。

「駄目よ、私……あの人はもう居ないんだから……」

リリイはベッドのシーツを握りしめながら呟きながら、自分に言い聞かせる。そうだあの人は私達を裏切ったんだ。王国を裏切ったんだ。ヘリーナをあの人にとって大切な幼なじみである彼女を見捨てたんだ。

リリイはそう自分に言い聞かせながら眠りに入ろうと目を閉じて意識を落としていく。

「……………兄様」

リリイは意識を落とす寸前に自分でも気付かず、自然とその言葉を呟やくのだった……。

## 三話 ステータスプレート

晩餐会があつた翌日、ハジメ達は、集められ、座学と訓練が始まつた。

まず、集まつた生徒達に銀色のプレートが配られた。不思議そうに配られたプレートをみる生徒達に、騎士団長メルド・ロギンスが直々に説明を始めた。

「よし、全員に配り終わったな？ このプレートは、ステータスプレートと呼ばれている。文字通り、自分の客観的なステータスを数値化して示してくれるものだ。最も信頼のある身分証明書でもある。これがあれば迷子になつても平気だからな、失くすなよ？」

ハジメは受け渡されたステータスプレートをまじまじと観察しているとメルドが話を続ける。

「プレートの一面に魔法陣が刻まれているだろう。そこに、一緒に渡した針で指に傷を作つて魔法陣に血を一滴垂らしてくれ。それで所持者が登録される。ステータスオープン」と言えば表に自分のステータスが表示されるはずだ。ああ、原理とか聞くなよ？ そんなもん知らないからな。神代のアーティファクトの類だ」

「アーティファクト?」

アーティファクトという聞き慣れない単語に光輝が質問をする。

「アーティファクトって言うのはな、現代じゃ再現できない強力な力を持った魔法の道具のことだ。まだ神やその眷属達が地上にいた時代に創られたと言われている。そのステータスプレートもその一つでな、複製するアーティファクトと一緒に、昔からこの世界に普及しているものとしては唯一のアーティファクトだ。普通は、アーティファクトと言えば国宝になるもんなんだが、これは一般市民にも流通している。身分証に便利だからな」

メルドの説明を聞いてハジメはステータスプレートの重要さを理解すると早速、指先に針をチヨンと刺し、プクと浮き上がった血を魔法陣に擦りつけた。すると、魔法陣が一瞬淡く輝いた。

すると……

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：1

天職：錬成師

筋力：70

体力：90

耐性：70

敏捷：80

魔力：120

魔耐：120

技能：錬成・雷属性適性・雷属性耐性・脳内設計・■■■■・言語理解

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

と、表示された。

ハジメはステータスプレートを見て、魔法を使えることに心の中でガッツポーズをす  
ると、技能欄の一つの技能がなんて書いてるか分からなかった。

技能欄にある“言語理解”は見る限り様々な言語を理解するということで間違いな  
いだろう。この世界に来た時もイシユタルやリリアーナとの会話に支障もなかったか  
ら、この技能で補正されているのだろう。

そんな技能があつても読み取れない技能に、ハジメは困惑した。

「……なんだこれ。“言語理解”でも、読み取れないってどういうことだ？」

しかし、今考えても意味は無いと思ひハジメは、まあいづれ分かることだろうと、メ  
ルド団長からステータスの説明を聞く。

「全員見れたか？ 説明するぞ？ まず、最初に“レベル”があるだろう？ それは各

ステータスの上昇と共に上がる。上限は100でそれがその人間の限界を示す。つまりレベルは、その人間が到達できる領域の現在値を示していると思ってくれ。レベル100ということは、人間としての潜在能力を全て発揮した極地ということだからな。そんな奴はそうそういない」

ハジメはメルド団長の説明を聞きながらステータスプレートやステータスを見て、案外高いことに安心する。

「ステータスは日々の鍛錬で当然上昇するし、魔法や魔法具で上昇させることもできる。また、魔力の高い者は自然と他のステータスも高くなる。詳しいことはわかっていないが、魔力が身体のスペックを無意識に補助しているのではないかと考えられている。それと、後でお前等用に装備を選んでもらうから楽しみにしておけ。なにせ救国の勇者御一行だからな。国の宝物庫大開放だぞ！」

メルド団長の言葉から推測すると、魔物を倒しただけでステータスが一気に上昇するということはないらしい。地道に腕を磨かなければならないようだ。

「次に『天職』ってのがあるだろう？ それは言うなれば『才能』だ。末尾にある『技能』と連動していて、その天職の領分においては無類の才能を発揮する。天職持ちは少ない。戦闘系天職と非戦系天職に分類されるんだが、戦闘系は千人に一人、ものによっちゃあ万人に一人の割合だ。非戦系も少ないと言え少くないが……百人に一人はいる





天職：勇者

筋力：1000

体力：1000

耐性：1000

敏捷：1000

魔力：1000

魔耐：1000

技能：全属性適性・全属性耐性・物理耐性・複合魔法・剣術・剛力・縮地・先読・高速魔力回復・気配感知・魔力感知・限界突破・言語理解

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

「ほお、流石勇者様だな。レベル1で既に三桁か……技能も普通は二つ三つなんだがな……規格外な奴め！頼もしい限りだ！」

「いや、あはは……」

メルド団長の称賛に照れたように頭を掻く光輝。ちなみにメルド団長のレベルは6。ステータス平均は300前後、この世界でもトップレベルの強さだ。しかし、光輝はレベル1で既に三分の一に迫っている。成長率次第では、あっさり追い抜きそうぐら이다。

周りのクラスメイト達も、光輝に歓声を送っていた。

「……流石は勇者様ってか、チートだろ」

「……………ハジメ」

ハジメは光輝のステータスのチートさに、そんな感想を抱いていると、後ろの方から浩介が近くに寄る。見るからに落ち込んでいると分かったので、ハジメはキョトンとしながら浩介に話しかけた。

「どうした、浩介？」

「これを……見てくれ」

ハジメは浩介に言われるままに、ステータスプレートを見た。

そこには……

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

遠藤浩介 17歳 男 レベル：1

天職：暗殺者

筋力：40

体力：60

耐性：50

敏捷：80

魔力：50

魔耐：50

技能：暗殺術「+深淵卿」・気配操作・影舞・言語理解

と表示されていた。

「おい、浩介スゲーな。派生技能が出てるじゃねーか！ えーと、なになに深淵卿

……ツスー」

「……」

「クハっ……」

「おい、やっぱ笑ったな!!」

「す、すまん。流石に『深淵卿』は……クハっ」

「なんでだー……!」

浩介が嘆く。それは、浩介の黒歴史に関係している。

それは、自分の影の薄さに落ち込む浩介を見兼ねたハジメ達が浩介を何とかして、目立たせて周りに浩介の存在を認知させようという遊び半分の理由で文化祭で劇をやつて、浩介に演じさせた役は『深淵卿』であった。浩介は目立ちたい為か所々臭いオリジナルの台詞を言い印象が強かった。

だが、そんな浩介のおかげか劇は好評だったが、何故か浩介自体を覚えて貰えず、深淵卿だけが周りに覚えられていた。浩介の黒歴史の一つである。これだけはハジメ達も流石に笑えず同情した。

余談だが、あの劇の際の観客席には自分達の親達も集まって見ており、遠藤一家は恥ずかしさの余り顔を両手で隠した。宮崎、菅原、園部一家の皆様は苦笑いをしていた。因みにハジメの親は父の愁は何故か浩介の深淵卿を見て、昔の黒歴史を思い出したのか涙を流して「浩介君っ。君はよくやった！」と歓喜していたらしく、母の董はそんな愁を見て大笑いしていたらしい。

そんな事情があつて、ハジメはそんな技能が出てきて落ち込んでいる浩介に苦笑いを浮かべた。

「まあ、浩介のこのことを知ってるのは、俺と優花達ぐらいだろうしさ……」

「おう……」

「ハジメ……」

そうして浩介を励ましていると、後ろから聞き慣れた声が聞こえ振り向くと、少し穏やかではない表情をした優花と妙子達があった。



ラへと駆け寄る。

「ユウカつちく、見てー私、〃氷術師〃だったよ〜」

「私は、〃操鞭師〃だった優花は？」

「あの、これ見て……」

優花はそう言つて自分のステータスプレートを二人に見せた。二人は、差し出されたステータスプレートに目を向ける。

「うわっ……」

「ず……」

ステータスプレートを見た二人は優花のステータスに驚愕していた。

「ねえ、これハジメに見せた方が良いかな？」

「私は賛成」

「うん、私も、それにハジメつち達のステータスも見たいしっ」

優花の提案に二人は賛成した。

「じゃっ、行こ」

そして、優花達はハジメの元へ向かったのだった。

ー現在ー

ハジメと浩介は優花のステータスを見ていた。奈々達も同じようにハジメと浩介のステータスプレートを見ている。

「……………」

ハジメは、優花のステータスを見て、光輝並にチートステータスだということ、自分と同じ解読出来ない技能があることを理解した。

「はあっ?! なにこれなにこれ!」

ハジメは優花のステータスに絶句してしまい、浩介は驚きのあまり声を上げていると奈々達の方からもハジメと浩介のステータスに驚いていた。

「ハジメっちは凄いいけど……………浩ちゃん、*“深淵卿”*とか…プフっ…………ウケる!」

「ゴメン、浩介これは……………ふふっ」

奈々と妙子は浩介の*“深淵卿”*を見て、あの時を思い出したのだろう笑うのを我慢するも吹き出していた。

「笑うな—————!」

笑う二人にキレた浩介は叫びだすしまいになったので、ハジメは騒がしい三人を睨みながら苦言を呈した。

「お前等、うるせえ……………」

「「うっ……………はい」」



三人はハジメから伝わる圧に萎縮して、シユンとなると優花がハジメに自分のステータスはどうかと聞いた。

「ハジメどう?」

「まあ、天職からして絶対レア職だろうな……」

「だよね……」

ハジメは優花に思ったままのことを伝えたと、優花はハジメの服を掴む。その手は微かに振るえているとことが分かった。

「優花?」

「ハジメ、私なんかされるかな……」

そんな、怯える優花にハジメは安心させる為に優花の頭を優しく撫でる。

「……ん」

優花から嬉しそうな声が漏れたのを確認すると同時にハジメは口を開いた。

「安心しろ。何があっても俺が優花を守る」

「うんっ」

ハジメと優花がそんな会話をしていると傍にいた浩介達がヒソヒソ話し出していた。

「あれで、まだ付き合っていないんだよな……」

「うん、すごいよね」

「どちらとも意気地無しだからでしょ」

なんか後ろからコソコソ言ってるが無視しよう。

すると、メルド団長がハジメと優花を呼んだ。どうやら、自分達二人が最後だったらしい。

~~~~~

メルド団長はまず優花のステータスを見る。すると表情を変えてステータスを二度見すると、声を荒らげた。

「なっ……はあっ?! 魔力と魔耐が300だとお?! それに天職がああ、神天治癒師?!」

「え?」

メルド団長の驚愕に満ちた声に優花もビクツとしたと同時に、声を漏らす。

「この天職は勇者と同等ぐらいのレア天職でな! それは、普通の治癒師などの支援系天職の頂点に君臨してると言える天職で、百年に一人が発現すると言われるほどの珍しい天職なんだ」

「は、はあ……」

「ああ、すまない。まさか、こんな天職を持つ者に生きている間に会おうとは思ってなく

てな……後、この技能はよく読めんな」

「そ、そうですか……」

優花の番が終わり、最後にハジメの番が回って来た。

「じゃあ、お前で最後だな、ではステータスプレートを見せてくれ」

そして、ハジメは頷いて、ステータスプレートをメルド団長に渡した。すると、メルド団長の表情が「うん？」と笑顔のまま固まり、ついで「見間違いか？」というようにプレートをコツコツ叩いたり、光にかざしたりする。そして、ハジメをスゴイ形相で見ている。

「まさか、錬成師でここまでステータス……魔力と魔耐は勇者以上の数値と錬成師では有り得ん程のたくさんの技能。そして前の少女と同じ見えない技能……」

ハジメのステータスと技能に驚きを隠せないメルドにハジメが声をかけた。

「あの、どうしたんすか？」

「いや、お前もある意味、規格外で驚いている」

「はあ……」

「いや、しかし錬成師か……錬成師というのは、まあ、言ってみれば鍛冶職のことだ。鍛冶するときには便利だとか……」

歯切れ悪くハジメの天職を説明するメルド団長。

その様子にハジメを目の敵かたきにしてゐる男子達が食いつかないはずがない。鍛治職ということは明らかに非戦系天職だ。クラスメイト達全員が戦闘系天職を持ち、これから戦いが待っている状況では役立たずの可能性が大きい。

そして、クラスメイトの中から檜山大介が、ニヤニヤとしながら声を張り上げる。

「おいおい、南雲。もしかしてお前、非戦系か？ 鍛治職でどうやって戦うんだよ？ メルドさん、その錬成師って珍しいんっすか？」

「…………いや、鍛治職の十人に一人は持つている。国お抱えの職人は全員持つているな」  
非戦闘職でバカにする奴が出るだろうとハジメは予想していたが本当に馬鹿にする為か一人の男子生徒が近づいて来て少し驚いた。そして、その男子生徒を見る。

「ん？…………確かアイツ」

ハジメは、近付く男子生徒は最初は誰だか覚えてなかったが、檜山っていう名前だと思ひ出した。それは、高校に入学してちよつと経ったぐらいに、自分が少し離れてる間に、優花のことを強引に仲間と一緒に絡んでいるのを目撃して、軽く占めたんだつたか？と一年の頃のことを思ひ出す。

すると、思ひ出してる内にハジメの傍まで歩き寄ると檜山が気持ち悪い表情をしながら話しかける。

「おいおい、南雲。お前、そんなんで戦えるわけ？」

メルド団長の表情から内容を察しているだろうに、わざわざ執拗しつように聞く檜山。本当に嫌な性格をしている。取り巻きの三人もはやし立てる。強い者には媚び、弱い者には強く出る典型的な小物の行動だ。

優花達や八重樫達などは不快げに眉をひそめている。特に優花なんて普段じゃ見せない顔をしている。

そんな状況にハジメは、少しおちよくつてやろうかと思ひ、檜山を見下しながら話す。

「さあな……でも檜山。俺は、お前なんかよりかは上手く戦えると思うぞ？」

「ああん？　じゃあ試してやるよ！」

軽い煽りに想像通りに檜山がキレてハジメに殴りかかった。

「おいおい、単純過ぎだろ」

が、檜山の拳はハジメに届かず、軽くあしらわれ、その際に隙が出来た内にハジメは檜山のみぞおちへと蹴りを入れた。

「そらよっ」

「うっ、がはっ！」

ハジメの蹴りがすんなりと入り、檜山は少し吹き飛ばされ蹲った。すると、クラスの奴等は騒ぎ出す。そんなことを無視してハジメは檜山を見下しながら告げた。

「そんなんで……ケンカなんか売るなよ雑魚が」

「……………」

その言葉を聞いて、檜山は悔しいのか顔を醜いほど歪ませる。そんな時にクラスメイト達の方から声が聞こえ、此方に近づく二人の人物に溜息を吐く。

「南雲っ！お前何をしてるんだ！」

「コラー！　ケンカはいけませんよ！」

振り返ると、ご都合主義愛好家の光輝と愛子が此方にやって怒った表情で来ていた。

「南雲っ！檜山に謝れ！」

「殴りかかってきたのアイツの方からだぞ」

「だが、お前は蹴りをいれたんだ！謝れ！」

またもやご都合アクセル全開の光輝がガヤガヤと言ってくるのをハジメは軽くあしらうが光輝は全く聞く耳を持たないことにゲンナリする。

そして、段々と言い合う後に、面倒臭くなったのかハジメは終わらそうと切り出す。

「うるせえんだよ。キラキラ野郎……………」

「っ……………なんだと！」

その言葉にキレたのか、光輝は前に進み出ようとしたのと同時に愛子がハジメと光輝の間に入り止めにきた。

「ケンカはダメですよ二人共！　後、南雲君もそんな態度を取らずに安心してください。」

私も貴方と同じ非戦闘職なので」

そう言いながら愛子はステータスプレートを見せて来た。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

畑山愛子 25歳 女 レベル：1

天職：作農師

筋力：5

体力：10

耐性：10

敏捷：5

魔力：100

魔耐：10

技能：土壌管理・土壌回復・範囲耕作・成長促進・品種改良・植物系鑑定・肥料生成・

混在育成・自動収穫・発酵操作・範囲温度調整・農場結界・豊穰天雨・言語理解

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

「……………」

「どうですか！」

ハジメは先生が自分の重要さに気付いた様子を見て、屈んで説明することにした。

「……はあく、先生アンタはこの天職の重要さを知った方が良い。作農師なんて食料をばんばん供給できて食料問題とか解決出来るじゃねえか……」

「えっ！」

愛子はハジメの説明に驚きの声を上げた。メルド団長達も天職に作農師が現れたことに「作農師だとお?! 今すぐ上に伝えろ!」などと騒いでいる。愛子もホントに理解していなかったらしくハジメは再度、溜息を吐く。次いでにケンカもする気が失せてしまい、ハジメは頭を掻くと同時に訓練場の出口に向かって歩き出した。

「はあ、ケンカする気も失せたから俺は行く」

「おい待て南雲! 話がまだっ……」

「待たねえよ。てめえといると面倒臭くなる」

「ちよつと待つてハジメ!」

光輝が何か言っているが無視を決め込んで歩いていると優花が声をかけながら追っかけていたことに気付いた。

「おい、優花。大丈夫か俺に着いて来て」

ハジメは優花のことを心配するが、当の本人は首を横に振った。

「うん、大丈夫。それに奈々達以外、皆ハジメのことバカにするし、ムカつく……」

ハジメを馬鹿にされることに怒りを顕にする優花を見て、当のハジメは嬉しさのあ



まり自然と笑みを浮かばせてしまう。

「そつか……ありがとな」

「うんっ」

感謝を伝えると、優花も同じように笑みを浮かばせる。ハジメはその笑顔が眩しく、美しく見えた。

「そういえば、浩介達は？」

「訓練の内容聞いたら戻るって、そういえばハジメは訓練とかどうするの？」

ハジメの疑問に優花はそう答えると、優花は訓練はどうするのかとハジメに聞く。

「ああ、戦闘系の訓練はアイツ等と同じ事をしたり、自主練もすれば済むことだし、天職関係の訓練はアテがあるから大丈夫だ」

「アテ？」

優花はハジメの言葉に首を傾げる。それもそうだろう自分達はこの世界に来て二日程ぐらいしか経っていないから当然の反応だ。

優花が考える中、ハジメは自信満々に応えた。

「ああ、凄く頼りになる奴だ」

ハジメ達はそんな話をしながら訓練場を後にしたのだった……。

「訓練場」

ハジメと優花が居なくなつたが予定通りメルド団長が訓練の内容を説明をして  
いた。そして、クラスの中にいたある独り言を誰かが呟いた。

「……………つち、何あの女……」

この呟きはそこにいたクラスの皆、そして幼なじみの親友の女子生徒にも聞こえ  
ない独り言だつた……………。

## 四話

## 訓練とイジメ？

ハジメと優花は訓練場から離れると王城に向かった。普通は追い返されるが、神の使徒〃という役柄を有効的に使い門番に用件を告げて通してもらいった。

そして、門の傍で少しの間待っていると、向こうから「ハジメさん！」という元気な声が聞こえた、声のする方向に二人は振り返ると、目に入った人物はこの王国の王女リリアーナ姫だった。優花は意外な人物の登場に驚き、ハジメの方を見る。ハジメは〃待っていました〃と言わんばかりの表情だったので優花は聞いてみた。

「ねえ、ハジメ……」

「おう、どうした？」

「もしかして、頼りになるアテって……リリアーナ姫？」

「ああ、そうだが」

「はあ……」

なんで、王女とそんなに仲良くなってんの?!と内心で愚痴をこぼしながらハジメの言っていた〃アテ〃がリリアーナだと分かると頭に手を当て優花は溜息を吐いた。

そんな優花を隣から見ていたハジメは呑気に可愛いな〜と思っっている。

やがて、足音が近くなりリリアーナがハジメの傍まで来ていた。その顔はほんのり赤かった。走ったせいなのかそれか、別の意味で顔が赤くなってるのか……。

「ふうー……ハジメさん、どうしたのですか私に用があるって聞きましたか？」

「いやあー、少しリリイに頼みたいことがあってさ」

そして、ハジメは訓練場でのステータスプレートの件の出来事をリリアーナ姫に説明した。

「そうでしたか……メルドの失言でハジメさんを不快にさせてしまつてすみません。後で私から注意をしておくので……」

リリアーナはハジメから訓練場の出来事を聞いて、メルドの失言でハジメが周りから笑いにされたと聞き、謝罪をするがハジメとしてはあの件はどうでも良いことなのでリリアーナの頭を上げさせる。

「いや、そのことは良いんだ。メルド団長だつてわざとじゃないと思うし、あれはコッチ側のバカが変に騒ぎ立てただけだからな」

「じゃあ……ハジメさんの頼みたいことは？」

「頼みたいことは、鍛冶場や工房があつたなら使わせてもらうのを許可して貰いたい。」

「鍛冶場や工房ですか……」

「ああ、戦闘訓練のことは大丈夫だが俺の天職は錬成師だから錬成の技術を上げておきたくてな。あつ勿論、ただで使わせてくれとは言わん、錬成師が必要な仕事は無償で受け付けるし、錬成技術があがったなら俺達の世界にある物を作って王国の利益にしてもいい。報酬はいらん」

リリアーナはハジメの頼みの内容を聞いて考えている体勢に入った。すると、ハジメは円滑に話を進める為に王国の利益になるような提案をする。

「えっ！　ハジメさんはそれで良いんですか？」

その提案にリリアーナは目を見開きながら俺を見つめながら問いかける。

「ああ、俺としてはただ技術を上げたいだけだからな」

「……分かりました。では至急、工房の許可を手配しておきます」

「助かる」

「いえっ、私もハジメさんの助けになりたいですし……」

ハジメの感謝にリリアーナは顔を赤くさせ、両手をイジイジさせながら嬉しそうに笑みを浮かべてハジメの力になれて嬉しいと言う。しかし、ハジメはそんなリリアーナの気持ちに気付かず再度、礼を言った。

「ありがとな、リライ」

「はい、ではっ！」

リリイはハジメの感謝に嬉しそうに返事をして気分が良さそうに離れていった。

「よし、これで『錬成』の訓練ができ……ん」

「むう……」

ハジメは交渉が上手くいってガッツポーズをしていると視線を感じた。その方へ向くと優花がジト目で頬を膨らませながらハジメを見る。何故、頬を膨らませてるのか分からないハジメは首を傾げた。

「どうしたんだ優花？」

「ハジメ、リリアーナ姫と楽しげに話してた……」

「いや、あれはただの交渉みたいなもんだ」

ハジメはそう言うが優花は聞く耳を持たずか顔をプイツと横に逸らす。

「……ハジメの誑し」

「えっ、ちよつ優花？」

そして、優花はハジメにそう告げ、不機嫌そうに両手を大きく振りながら歩いて行きハジメはそれに追いかけていった。因みに機嫌を直す為に五時間も掛かった。

その後、リリアーナ姫のおかげでハジメは錬成の訓練が出来る王城内にある一つの工房を貸し与えて貰った。

早速、ハジメは王国から手配されている壊れた装備品などの修理で訓練を始める。し

かし、この訓練はたったの一時間ちよつとで終わってしまった。

予想だと二時間はかかると思ったが、初めてのことなのに何故かすんなりとできてしまった。

しかし、ハジメはその原因はなんなのかすぐに気が付いた。それは技能にあつた「脳内設計」だった。それは剣を直す時、触れた瞬間、その剣の構造などが頭の中に浮かび、どこをどう直せば良いかを理解出来たからである。

「これは、スゲー技能だ」

ハジメは「脳内設計」の凄さに驚愕する。

だが、これなら効率良く錬成の技能が上がる！ と確信して作業に戻ろうとした時だった。ある事を思い付いてしまって一旦、手を止めた。

「待てよ……この技能」

ハジメは、集中する。それは、ある事を試すためだ。

ある事とは、「脳内設計」とは、初めて触れた物には、設計図が作成される。作成された説明図は頭の中に保存されるという技能だ。そして、ハジメは思い付いたので。

もし、地球で触れた物が脳内設計によって設計図として残っていたらと……

そして、結果は……

「ゴング」

自分の推測が当たったことに笑みを浮かべるハジメ。そして、戦争をしてるこの世界に、必要な物の設計図を脳内に浮かばした。

「やってみるか……」

そう言つて、ハジメは修理の仕事を全部終わらせ、ある物を作製に取り掛かったのだつた。

―翌日―

「はあはあ……で、出来た……」

集中し過ぎたせいで息が荒くなるもハジメは完成した物を手に取つてから簡単に動きの動作の確認をしていく。

「……よし、ちゃんと動く。が、少し……仮眠を取つてから……リリイを呼びに行くか」

ハジメは、徹夜かけて完成した物を置いて、少し仮眠を取つてからリリイを呼びに行こうと決め、倒れ込むように寝たのだった。

そして、十分に仮眠を取つた後、ハジメはリアーナを呼んで、共に工房へと向かつて一緒に歩いていった。

「ハジメさん、どうしたのですか？」

「いや、ある物を徹夜かけて作つてな、販売つていうか王国の利益になるか聞きたくて



な」

「……分かりました」

二人は工房に着くと、ハジメは工房から取ってきた物をリリイに見せると、リリイは目を見開いて、驚愕の声を上げた。

「こ、これはなんですか！ ハジメさん！」

「いやあー、王都の市民って良い人が多くて良いな。豚の皮とか無償に貰うことが出来た」

ハジメは、異世界人である自分に優しく接してくれた王都の人達を思い出しながら語る。リリアーナもそのことには頷くが、ハジメの作製した物の方が今は気になってしやうがない。

「それは嬉しいですけど、これはなんですか！」

「ああ、それは義手だ」

「義手？」

俺の予想通り、この世界の人であるリリイは義手のことは知らないようである。説明をする。

「ああ、俺達の世界の物よりは質が悪いが使えないことはないし、今は戦時中……ケガで片腕を無くした兵士とか市民がいるだろだから作ってみたんだ」

この時代は戦争の真っ最中、なら負傷して身体の一部が欠損してる兵士などがある筈と思つたハジメは、以前に父である愁のゲーム作製の為のネタ集めに着いていつた際に義手について調べていた。そして、そのことがもしかして「脳内設計」に義手についての設計図があると思ひ、探ると案の定、設計図が脳内に存在していたので作製に取り掛かることにしたのだ。

しかし、初めての試みだったので作製一つに時間を掛けてしまったことに苦笑いを零す。そして、無言で呆然と義手を見るリリアーナどうかと聞いてみる。

「……」

「どう思う？リリイ」

「……………あ、すみません、ハジメさん。少しこの義手の件は、お父様達に聞いてみることにします」

「おう」

その後、リリアーナが国王達に差し出したハジメの作った義手は評価されて早速、在庫が増えたなら販売を開始することになった。

だが、流石にハジメでもたくさんは無理があるので王国の錬成師に手伝つて貰い、自分が描いた設計図を見ながら作り始めた。その時に王国錬成師のウォルペン達と仲良く話し合える仲になった。

そして、販売された義手は好評で次々と売れていき、同盟関係である帝国にも高く評価され帝国でも販売される程になったのだった。

そして、ハジメは義手の設計図は必要ないので王国に引き渡して自分の技能上げに率先した。そして、大分鍊成が上手くなったのでハジメはある得物を作製して、優花達を呼んだ。

呼ばれた四人は、ハジメがいる工房へと駆けつけた。

「ハジメ、来たぞ」

「ハジメ、どうしたの私達を呼んで」

「そうそう、もしかして倒れたの？」

「えっ！、私、回復魔法使おっか？」

奈々の言葉を信用してか優花が心配した表情で此方に駆け寄る。ハジメはそんな変なこと言った奈々の額に軽くデコピンしてから呼んだ理由を説明する。

「ちげーよ。俺はお前等に渡したい物があつたから呼んだんだよ。それに奈々は変なことを言うな」

「あ、イタっ」

「「渡したい物？」」

「ああ、まず浩介にはこれな」

「おつ、これは小太刀?」

「ああ、王国の錬成師の人にな義手の設計図と交換して、硬度が高い鉋石を貰ってな作って見たんだ。だって浩介、前から言ってただろナイフだけだと心もと無いって」

そう言いながらウォールペン達に貰ったこの世界の鉄と言える鉋石で造り上げた小太刀を渡す。

「嘘、まじありがてえ。サンキュ〜ハジメ」

浩介は嬉しそうにハジメの小太刀を受け取る。その姿を見てハジメは笑みを浮かべてから優花達に総数、三十本の投げナイフを渡した。

「後、優花達には、これだ」

「うん?…これって投げナイフ?」

「ああ、流石に杖や鞭は今の俺では良いのが出来ないからな。敵と距離をとる為や護衛用に使えば良いし、優花ならナイフを付与魔法とかで付与とかして使えばいい」

「ありがとつ、ハジメっち!」

「これは、助かる」

「ありがとハジメ」

三人も自分の造った得物に喜んでいたので造った甲斐があつたなと思いつつながらハジメ笑みを浮かべた。

「あつ、ハジメ」

「何だ、浩介？」

少し話してから四人が帰る直前に浩介が振り返るので、ハジメは首を傾げる。

「お前、一回でも良いから、訓練場で訓練しとけよ。周りの奴等が一度も訓練場に来てないハジメをよく思っていないらしい。特に天之川の奴とかな」

「おお。行けたら、行くわ」

浩介の話を聞いて、何だそんな事かと思いつつながら適当に返事をする。そして、優花達が帰った後、ハジメは錬成の訓練を切り上げ、適当に作った像（サンドバック）を造り出した。

「さてと……よし、いっちよやるか……」

そして、像を使って、ハジメは身体を鍛えながらステータスの向上に専念している。

それを続けていく生活が習慣となり、二週間ちよつと経った。

現在、ハジメは訓練の休憩時間を利用して王立図書館にて調べ物をしている。

その手には『北大陸魔物大図鑑』というなんの捻りもないタイトル通りの巨大な図鑑や『技能一覧』というタイトルの本がありハジメの興味が勝つてしまっている。

「へえ。魔物を食らうと、ほぼ高確率で死に至る、ね……」

ハジメはここ二週間近くでこの図書館にある重要そうな本を読み漁りある程度の知識を身に付けていた。

まず、調べたのは周辺国でハジメの作った義手を高く評価してくれていた帝国。

帝国とは、「ヘルシャー帝国」のことだ。この国は、およそ三百年前の大規模な魔人族との戦争中にある傭兵団が興した新興の国で、強力な傭兵や冒険者がわんさかと集まった軍事国家らしい。実力至上主義を掲げており、かなりブラッくな国のようだ。この国には亜人族だろうがなんだろうが使えるものは使うという発想で、亜人族を扱った奴隷商が多く存在している。

ハジメとしては義手を高く評価してくれるのは嬉しいのだが、あまり、帝国の方針は好感は持てなかった。そんな帝国は、王国の東に「中立商業都市フューレン」を挟んで存在する。

「フューレン」は文字通り、どの国にも依らない中立の商業都市だ。経済力という国家運営とは切っても切り離せない力を最大限に使い中立を貫いている。欲しいモノがあればこの都市に行けば手に入ると言われているくらい商業中心の都市である。

そしてハジメはそんな世界情勢がある程度記憶した次に、ある事を調べていたのだが、それについての詳しい文献がなく溜息を吐いた。

その文献とは……

エヒトと七大迷宮。

ハジメは、自分なりに自分達を召喚したエヒトと、この世界にある七大迷宮を調べていたが、詳しい文献が手に入れた際も情報はあまりにも少なく、曖昧なことしか書かれていなかった。

まず、創世神エヒトの事だ。神代において、エヒトを始めとする神々は神代魔法にてこの世界を創ったと言い伝えられている。そして、現在使用されている魔法は、その劣化版のようなものと認識されている。それ故、魔法は神からのギフトであるという価値観が強いのだ。もちろん、聖教教会がそう教えているのだが。

そのような事情から魔力を一切持たず魔法が使えない種族である亜人族は神から見放された悪しき種族と考えられているのである。なお、魔人族は聖教教会の「エヒト様」とは別の神を崇めているらしいが、基本的な亜人族に対する考え方は同じらしい。

この魔人族は、全員人間族は、崇める神の違いから魔人族を仇敵と定め（聖教教会の教え）、神に愛されていないと亜人族を差別する。魔人族も同じだ。亜人族は、もう放っておいてくれといった感じだろうか？ どの種族も実に排他的であると聞くがコレは人間族からの視点での話だ。魔人族からの視点だと違うと思う。

次に七大迷宮。七大迷宮とは、この世界における有数の危険地帯と呼ばれている。

確認されているのはハイリヒ王国の南西、グリューエン大砂漠の「グリューエン大山」と砂漠の間の「オルクス大迷宮」と亜人族の中の獣人族が多く暮らしてゐる「ハルツエナ樹海」。

七大迷宮でありながらなぜ三つかというと、他は古い文献などからその存在は信じられていたのだが詳しい場所が不明で未だ確認はされていないからだ。しかし、文献を読み漁るにつれハジメは、他四つは隠されている内の二つの場所は目星が付けられていた。

それは、大陸を南北に分断する「ライセン大峡谷」や、南大陸の「シユネー雪原」の奥地にある「氷雪洞窟」がそうではないかと言われている。

「はあ……クソツ……」

足りない過ぎる情報に溜息を吐いて悪態をつくハジメはおもむろに自分のステータスプレートを取り出し 眺めた。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：2

天職：錬成師

筋力：90



体力：120

耐性：90

敏捷：100

魔力：150

魔耐：140

技能：錬成「十鉱物系鑑定」「十精密錬成」・雷属性適性・雷属性耐性・脳内設計「十想像設計」・■■■■・言語理解

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

「……………」

ステータスも上がって、特に「錬成」と「脳内設計」には派生技能が発現した。だが、やっぱり、■■■■のことが分からず、図書館の「技能一覧」を調べたが載っていない。ハジメが図書館に入り浸っている理由は、もしかしたら「■■■■」が何だと分かるかもしれないと思っただが何一つも見つからず溜息を吐きながら、ステータスの技能欄にある技能を見て身体がピキッと固まった。

「俺…………魔法使えんの忘れてたわ…………」

トータスにおける魔法とは、体内の魔力を詠唱により魔法陣に注ぎ込み、魔法陣に組

み込まれた式通りの魔法が発動するというプロセスを経る。魔力を直接操作することはできず、どのような効果の魔法を使うかによって正しく魔法陣を構築しなければならぬ。

そして、詠唱の長さに比例して流し込める魔力は多くなり、魔力量に比例して威力や効果も上がっていく。また、効果の複雑さや規模に比例して魔法陣に書き込む式も多くなる。それは必然的に魔法陣自体も大きくなるということに繋がる。

例えば、RPG等で定番の“火球”を直進で放つだけでも、一般に直径十センチほどの魔法陣が必要になる。基本は、属性・威力・射程・範囲・魔力吸収（体内から魔力を吸い取る）の式が必要で、後は誘導性や持続時間等付加要が付く度に式を加えていき魔法陣が大きくなるということだ。

しかし、ハジメは魔法を使えることを忘れほぼ二週間、体術や錬成の訓練しかやって来なかったのだ。

「……使えるようにしておかないとな」

魔法を使えた方が後々、便利になるのでハジメは魔法の訓練ができる訓練場に向かうため図書館を後にした。

~~~~~

ハジメは訓練場に向かう為、近くを歩いてたがその時、後ろから複数の視線と気配を感じてすぐさま、右へと動いて何かを振り下ろされたものを回避した。すると、後ろから喚く声が聞こえた。

「はあっ?!」

「何外してんだよ大介!」

「ちげーよ! 避けられたんだ!」

「はあ?」

後ろを向くと、それは、抜き身の剣を振り落としていた檜山と檜山率いる馬鹿三人組の姿がそこにいた。

「何やってんだ馬鹿四人」

ハジメが馬鹿四人に話しかけると四人一斉に俺を睨む。しかし、それがなんだとハジメは欠伸する。四人の殺気が更に増す。

「んだと……南雲てめえ」

「お前、訓練が怖いから来ないんだろ?!」

「そうだ、臆病者!」

「臆病者ね……」

そんな風に呼ばれていた事を聞いて、浩介達が時々訓練に来いって言ってた理由はこ

れかとハジメは理解する。が、どうでも良いことだ。

「なあ、大介。こいつさあ、俺らで稽古つけてやんね?」

「っそうだな! おい南雲く俺達が訓練付けてやるよ」

どうやら、この四人はたつた二週間で自分達が強くなつてると錯覚しているらしい。なので、ハジメは不敵な笑みを向けながら四人を煽る。

「おつ、そりやありがたい。サンドバックになつてくれるなんて優しいんだなお前等、見直した」

「二「ん、だとしてめえ……」」

一髪触発。ハジメと馬鹿四人の訓練?が始まろうとした時、聞きなれた声が聞こえた。

「何やってんの?!」

「ああ?」

「……優花」

それは、優花だった。檜山は顔を顰め、ハジメは構えを止める。優花は訓練中に檜山達がハジメに悪絡みしているのが見え、止めに行つたのだ。

優花はそのまま、ハジメと檜山達の間に入り、両手を広げながら檜山を睨む。

「檜山アンタ、もしかして四対一でハジメとする訳?」

「なんか文句あんのか?!俺はアイツは臆病者だから稽古付けてやんだよ!」

ハジメが臆病者呼びわりする檜山に、優花の堪忍袋が切れた。

「つ……ハジメは臆病者なんかじゃない!」

「うるせえ黙つてろよ!」

しかし、逆ギレして檜山は優花に抜き身の剣を勢いよく振りかざす。優花は剣が自分に振りかざされるのを見て、恐怖のあまり目を瞑った。

「キャッ!」

優花は誰かに抱き寄せられ、鈍い音がした後、檜山達が「なっ……」と何かに絶句している声が聞こえた。優花自身も痛みがないことに不思議に感じ、恐る恐る目を開いた。そこには、剣を止めたからであろう手から大量の血が出しながらも自分を守る為に剣を受け止めていたハジメの姿が目に入った。

ハジメは抱き寄せている優花にケガがないことを確認してから優しく笑みを向けながら優花に伝える。

「優花、危ねえから少し離れてろ」

「……うん」

そして、優花もハジメに言われた通り少し離れたところで檜山達に告げた。

「ホントは軽くあしらうつもりだったが……優花に手を出そうとしたんだ。徹底的にぶ

ちのめす」

その言葉とハジメの圧に怖気付いた檜山達は顔を青くするも恐怖を紛らわすためか叫びながら攻撃を始めた。

「やっちまえ！」

「ここに焼撃を望む——『火球』！」

「ここに風撃を望む——『風球』！」

中野が『火球』、齋藤が『風球』を詠唱をして魔法を放つがハジメの行動の方が一足早かった。

「……『錬成』」

ハジメは魔法が来る前に錬成で即座に石壁を錬成して防御するが魔法の威力に石壁が壊れて粉塵が舞う。粉塵が消え、壊れた石壁のところには既にハジメがおらず、檜山達は混乱してしまふ。

「何処にいった?！」

「ここだよ……馬鹿二人」

「なっ!」

「遅せえよ」

ハジメは石壁が壊された時の粉塵を利用して、後衛二人の距離を縮めていきながら後

ろにまわっていた。そして、ハジメに気付いて振り向いた齋藤の腹に強めの蹴りをして、着地すると同時に中野には顔を勢いよく殴った。

「グハッ！」

「ブベツ！」

齋藤は蹴りを腕に喰らって、その場で蹲ってしまふ。中野は鈍い音をしながら、後ろに倒れ込んだ。

「……っ、ウオオオオオオ！」

一瞬にして二人が倒れた事に絶望しながらも近藤は意図も分からず叫びながら槍を持つてハジメに突貫する。突貫する近藤にハジメは煽るかのように笑う。

「死ねえ！」

「おいおい、殺す気ならその振るえてる手をやめろよ」

ハジメは、意図も簡単に身体を左にズラして近藤の槍を軽々しく避けるとこの世界に來て初の魔法を使う。

「えーっと、こうだったか……はし進れ—— “雷撃”」

ハジメが出した魔法陣からバリリツと雷の球が放たれる。

「ゴハッ！」

ハジメの魔法の “雷撃” が近藤の腹に目掛けて直撃して近藤が雷で感電して倒れ込

んで気絶した。そして、ハジメは倒れ込む近藤の槍を持つと、遠くに投げ飛ばしてから檜山に冷めきった目を向ける。

「後はてめえだ……檜山」

「ひ、ひいー!」

檜山はほぼ五分も経たない時間で三人を倒したハジメに恐れなして逃げ出そうとするが……

「……逃がすわけねえだろ…… 〃錬成〃」

「……へ、なんだ?! ギャー!」

ハジメは錬成を使って高さ三メートルある落とし穴を檜山が足を地面に着く瞬間に錬成して、檜山を落とし穴に落とした。

「ふう〜」

ハジメは初の戦闘……いや蹂躪を終わらせると服の汚れを出血していない手でパツパツと払うと安堵の息を吐く。

「ハジメー!」

「おっ、優花」

戦いが終わって、優花が必死な表情でハジメの元にすぐさま駆け寄って、檜山の剣を受け止めた方の手を涙を浮かべながら出血した手に触れる。



「ハジメ、手……」

「手？……あー大丈夫、問題ない」

「ちよつと待つて今すぐ治——」

「何をしているんだ!!」

「チツ……面倒なのが来やがった」

優花がハジメの手を治そうとした時だった。光輝達四人組がやって来てたのだ。ハジメは舌打ちと共に愚痴を零す。

光輝はハジメを睨みながら詰め寄る。

「南雲！檜山達に何をしたんだ?!」

「返り討ちをしただけだ」

「でも、これはやり過ぎている!」

「優花に手を出そうとしたんだ。流石に加減はしてやる気はない」

ハジメが光輝の発言を軽くあしらっていると、光輝の隣にいた雫が心配そうに優花に話しかける。

「園部さん、そうなの？」

「うん。ハジメは私を守ってくれただけよ」

「じゃあ、南雲君は自己防衛で良いんじゃない光輝？」

優花の証言を聞くと雫は光輝を見ながら、ハジメは悪くないと言うと、光輝は一瞬、口を噤むが何故か話題を変えていく。

「つ、だが聞けば南雲は、訓練のないときは図書館で読書に耽っていたり工房にいるとかじゃないか。俺なら少しでも強くなるために空いている時間も鍛錬にあてている。南雲も、もう少し真面目になった方がいい。檜山達も、南雲の不真面目さをどうにかしようとしたのかもしれないだろ?!」

光輝の発言に何をどう解釈すればそうなるのか。優花は半ば呆然としながら、光輝に對し静かな怒りが湧く。彼を睨みつけ、手を握りしめながら歯噛みする。

「こいつに何がわかる?! ずっと私達の為に武器を作ったり、夜も寝る間も惜しんでずっと戦闘と技能の技術を鍛えているハジメの努力を見てない癖につ! そんな優花が内心で思っていると、表情を見て察したのかハジメが血の付いてない手で優花を抱き寄せた。」

「こんなところいても面倒くせえだけだ。行くぞ優花」

「え、ハジメ……うん」

ハジメの意図がわかった優花もハジメに寄り添って歩き出そうとした。

しかし、彼女に止められる。

「待って!」

「あ?」

「南雲君、手ケガしてる! 私治すよ!」

それは香織だった。彼女はハジメのケガしてる手を触ろうした。

その時……………

パンツ

ハジメが白崎さんの手を弾いた。

「えっ——」

香織もだが傍にいた優花や光輝達もだがハジメの予想外の行動に啞然とする。

しかし、当のハジメは気にしたようにせず嫌そうに顔を顰める。

「触んな。傷は優花に治して貰うから要らねえよ」

そう言つて、ハジメは優花を抱き寄せながら光輝達と別れ、訓練場を後にしたのだつた。

—ハジメ達が離れた後の訓練場

ハジメ達が訓練場から去つた後、光輝はハジメの香織に対する態度に怒り心頭だった。

「な、南雲の奴つ、香織に対して!」

「おいおい、光輝落ち着けて、あれだって南雲の奴も虫の何だっけ、まあそういうことだと思っぜ」

「虫の居所が悪い」よ龍太郎。香織も大丈夫？」

そんな光輝に龍太郎と雫は宥めていると、香織がブツブツ言いながら俯いてるの姿を見て心配になった雫が声をかける。

「…の…だ…」

「香織？」

雫の呼びかけに反応することなく香織は周りの聞こえない程度の声色で呟いた。

「あの女のせいだ」

ー工房ー

訓練場から離れたハジメと優花は、工房でケガを治して貰っていた。

「もう、ハジメあんな無茶やめてね」

優花は回復魔法をかけた後、必要ないと思うがケガした部分にガーゼで巻きながら、ハジメに無茶をしないで欲しいと言う。

「優花が危ない状況だったら分からんかもなあ」

ハジメはそんな自分を心配してくれる優花に笑みを向けながらその頼みは聞けそう

にないと伝える。

「もうっ……でも、ありがと。カッコよかったよ」

優花は俺の返事に頬を膨らませるも、ハジメに抱き付いた。ハジメもそれに応えるかのように抱き返しながら返事をした。

「おう」

その後は、いつもなら夕食の時間まで自由時間となるのだが、今回はメルド団長から伝えることがあると引き止められた。何事かと注目する生徒達に、メルド団長は野太い声で告げる。

「明日から、実戦訓練の一環として【オルクス大迷宮】へ遠征に行く。必要なものはこちらで用意してあるが、今までの王都外での魔物との実戦訓練とは一線を画すと思ってくれ！ まあ、要するに気合入れろってことだ！ 今日はずっくり休めよ！ では、解散！」

「……」

迷宮と聞いて、もしかしたら何か分かるんじゃないかとハジメは笑みを浮かべたのであった……。

俺はメルド団長の話を聞きながら、夕食を優花達と一緒に夕飯を食べていた…。

## 五話 月下の夜に

### 【オルクス大迷宮】

それは、全百階層からなると言われている大迷宮である。七大迷宮の一つで、階層が深くなるにつれ強力な魔物が出現する。

にもかかわらず、この迷宮は冒険者や傭兵、新兵の訓練に非常に人気がある。それは、階層により魔物の強さを測りやすいからということと、出現する魔物が地上の魔物に比べ遥かに良質の魔石を体内に抱えているからだ。

魔石とは、魔物を魔物たらしめる力の核をいう。強力な魔物ほど良質で大きな核を備えており、この魔石は魔法陣を作成する際の原料となる。魔法陣はただ描くだけでも発動するが、魔石を粉末にし、刻み込むなり染料として使うなりした場合と比較すると、その効果は三分の一度にまで減退する。

要するに魔石を使う方が魔力の通りがよく効率的ということだ。その他にも、日常生活用の魔法具などには魔石が原動力として使われる。魔石は軍関係だけでなく、日常生活にも必要な大変需要の高い品なのである。

ちなみに、良質な魔石を持つ魔物ほど強力な固有魔法を使う。固有魔法とは、詠唱や魔法陣を使えないため魔力はあっても多彩な魔法を使えない魔物が使う唯一の魔法である。一種類しか使えない代わりに詠唱も魔法陣もなしに放つことができる。魔物が油断ならない最大の理由だった。

ハジメ達は、メルド団長率いる騎士団員複数名と共に、「オルクス大迷宮」へ挑戦する冒険者達のための宿場町【ホルアド】に到着した。

宿泊場所は、新兵訓練によく利用する王国直営の宿屋があり、そこに泊まることになった。

「おお……」

ハジメが部屋に入った時の第一印象はやつとこの世界で一般的な部屋の佇まいを見れたことだった。

「なあ、ハジメ。俺、久しぶりに庶民に戻った気がする」

「そうだな」

ハジメと浩介は同じ部屋にして入ると久しぶりの普通の部屋を見た気がして王国の与えられた部屋より落ち着く気がする。しばらくして、ハジメは部屋でくつろぎながら浩介と楽しげに雑談をしていた。

「明日から迷宮だなハジメ」

「ああ」

浩介の言葉に相槌を打つハジメ。すると浩介は俯くと自分の両手をギュツと握りしめながらながら口を開いた。

「俺さ……ワクワクする反面、怖いんだ……」

「……」

ハジメは浩介の言葉の意図に察して頷きながら応えた。

「そうだな。生き物を自分達の手で殺すからな」

「……っ、ハジメは大丈夫なのか？」

浩介はハジメにそう問いかけるが俺は淡々と受け答えた。

「少しは抵抗はある……だが優花、浩介、奈々、妙子。お前達四人を守る為なら、殺ししても何でしてやるさ」

ハジメの真つ直ぐな言葉に、浩介はハジメがいるという安心感に笑みを零す。

「ハハっ、お前はそういう奴だったな少し安心するよ」

笑って答える浩介。それは、逆にハジメが居ないと安心できない自分に対しての被虐だ。部屋が静かになる。そんな静寂をハジメが破る。

「なあ、浩介」

「おっ、どうした？」



「俺になんかあったら、またあん時のように優花達を頼めるか」

ハジメのそんな頼みを聞いた浩介は血相を変えて席から立つとハジメの胸倉を勢よく掴み上げる。

「なっ！ まさかお前っ」

「落ち着け、もしもの場合だ安心しろ」

声を荒あげる浩介に、ハジメは両手を上げながら苦笑いして、浩介を落ち着かせていく。

「そうだよな、あーびっくりした〜」

そう言って、浩介は落ち着きを取り戻したのか席に戻ると安堵の息を漏らすと、ボソッと呟いた。

「……もう、そう言うのやめてくれよ」

「クハッ……分かってるっての」

それは親友の些細な願いなのだろう。浩介の言葉を聞いて、ハジメは大切な人と幼なじみ達にしか見せないだろう優しい笑みを見せるのだった。

コンコン

「あ?」

「ん？」

そんな話をしてると外から自分達の部屋の扉をノックする音が鳴り響いた。

ハジメと浩介は顔を合わせてから警戒心を高める。優花や奈々達ならノックをして声がる筈だ。そしたらハジメ達の部屋へ来るとしたら誰か分からなかった。

「……誰だ？」

ハジメは扉を覗みながら部屋の外にいる人物に話しかける。

「南雲くん、起きてる？ 白崎です。ちよつと、いいかな？」

それは問題児女子（白崎香織）だった。ハジメは眉を顰めると何故、此処に来たのかと扉越しから問う。

「用件はなんだ？」

「少し、南雲君と話がしたくて……」

「断わ——」

「おい、ハジメ」

すぐに断わろうとしたが、浩介によって中断される。ハジメは遮った理由を聞く。

「浩介、なんで止めるんだ？」

「まあ、一方的に追い返すのはちよつとな……」

「……」

浩介の言葉にハジメは沈黙で返す。

「少しぐらい話してやったら良いじゃねえか？」

浩介に言われてハジメは面倒くさそうに片手で頭を掻きながら大きく溜息を吐く。

「……ハア〜つたく……しょうがねえな……」

全く、優しい奴めと内心思う。笑って自分の親友に免じてに白崎と話すことにした

ハジメは、席から立ち上がって扉の前まで歩く。

「おい白崎。今、開ける」

「うんー」

香織の嬉しそうな返事を聞いて、扉を開けるとそこには純白のネグリジエにカーディガンを羽織っただけの香織が立っており、ハジメは間抜けな声がでてしまう。

「は？」

ハジメは呆れてしまい手で目頭を揉む。浩介は突然のネグリジエ姿の来訪に少し顔を赤くしており顔を横に逸らしていた。

もしこれが優花だったのなら鼻血をだしてぶつ倒れたことだろう。とハジメはそんな阿呆なことを考えながら香織に話しかける。

「おい、白崎……」

「うん？」

「その服装はなんだ？」

「えっ、駄目だったかな？」

香織はそう言いながら、ネグリジエ姿を見せつけるもハジメには全く興味が無いので少し見せつけようとする態度に少しイラツとする。

「……いや、お前がそれで良いなら構わないが、この部屋には浩介もいるんだが大丈夫なのか？」

ハジメはそう言うと、白崎は目を見開いて、部屋にいた浩介を見ながら声を上げる。

「えっ?! 遠藤君いたの!」

「……こうなること予想してた」

香織の反応に浩介も予想していたらしくもダメメージは無さそうと思ったが少し悲しい雰囲気を漂わせてるのでしつかりとダメメージを入っていた。

「ご、ごめんね遠藤君。後、私南雲君と二人で話したいから良い?」

「ああ、まあ良いよ……ハジメ頑張れよ」

香織に従うように、いや何かを察したのかハジメに肩をポンと置いてから浩介は部屋を出ていった。

浩介が部屋を出てから仕方無くハジメは香織と自分の分の席を用意して座らせると、用件を聞く。

「……で浩介を追い出してまで話したいことはなんだ？」

「えっと、明日の迷宮だけ……南雲くんには町で待っていて欲しいの。教官達やクラスの皆は私が必ず説得する。だから！ お願い！」

「は？」

ハジメは白崎の発言に驚きのあまり一瞬、頭が痛くなるが、何故そんなことを言うのか少し目を細めながら聞く。

「何故、残らないといけない？」

「あのね、なんだか凄く嫌な予感がするの。さっき少し眠ったんだけど……夢をみて……南雲くんが居ただけ……声を掛けても全然気がついてくれなくて……走っても全然追いつけなくて……それで最後は……消えてしまうの……」

香織はそう言いながら、悲しそうな表情をする。

「……」

しかし、それを聞いたハジメ本人は香織に対して少し恐怖感を抱く。気を取り直して、香織に真剣な眼差しを向けながら告げる。

「それは戯言にしか過ぎない」

「でも！」

「例えそうなくても、俺は優花を守る為ならすすんで大迷宮に向かう」

「……チツ、また園部優花」

ハジメの覚悟を聞いて、香織はハジメには聞こえない声音で何かを呟やいた後、俯いていたので表情は良く見えなかったが少しいつもより声音が低めに話しかける。

「ねえ……南雲君にとつて園部さんはそんなに大事なのかな？」

そんな当たり前のことを聞く香織に、ハジメは難なく答える。

「ああ、俺は優花の身に何か起こるなら絶対に守る。例え、この身を犠牲にしてもな」  
「そう……」

香織は、ハジメの変わることのない覚悟を聞いてから、そう呟くだけで立ち上がると部屋の扉に手をかける。

「……私、もう寝るね」

「ああ、じゃあな」

香織が部屋を出て行った後、ハジメは安堵しながら、ベッドへとダイブする。その数分後に浩介が何処からか部屋へと戻って来た。

「なあ、どうだった？」

「何が？」

「白崎さんと話してどうだったんだ？」

ハジメはそんな浩介の質問に遠い目を向けながら包み隠さずに伝える。

「特に何も……いや、妄想力がスゲー奴だと思った」

「妄想?!」

ハジメと浩介は色々そんな風に雑談した後、ベッドに入り就寝したのだった。

~~~~~

——夢を見ていた。

目の前に何か分からない黒いモヤが立っており、モヤからは紅いスパークみたいなモ  
ノがモヤの周り全体に放たれている。

ハジメは口は開くことが出来ず、それを見ることしか出来ない。すると、黒いモヤが  
何か言っているのか声が聞こえた。

『——まだ——早い』

その瞬間、ハジメの目の前が真っ暗になった……。

「……つて、まだ夜か」

ハジメは謎の夢のせいで寝付けなかったのか薄目を開けながらベッドから身体を起  
こす。

「クソツ……思い出せねえ……少し鍛錬でもして頭ん中スツキリさせるか……」

ハジメは見た夢のことを思い出そうとするも無理で頭がモヤモヤした。そんな感じだと頭の中をスツキリさせようと鍛錬しにいと外に出た。

ハジメは部屋を出て、外に出てみると人影が見えた。

「誰だ？」

こんな時間帯に普通は人は居ないと思うのだが、ハジメは誰だか気になってしまい、人影の方に向かって歩き出す。

人影の方へと辿り着くと、そこにはベンチに座りながら夜空に輝いてる星や月を樂げに眺めていた優花だった。その姿は月の光で照らされおり美しさが増してハジメは、その姿に見蕩れていた。

「……………」

そんな優花の姿に見蕩れてしまっていたせいか、ハジメの視線に気付いた優花はハジメの方に視線を向けながら驚きながら目を見開く。

「誰……って、ハジメか」

逃げようとベンチから立ち上がる優花だったが、その人物がハジメだと気付くと安心したのか安堵してベンチに座り直す。

「よっ、優花」



ハジメは優花にそう軽く挨拶すると優花の隣に座る。そして、同じように夜空を見ながら問いかけた。

「どうしたんだ、こんな時間に起きて？」

「えつと…少し寝付けなくて、そしたら月が見えて綺麗だったから見に来たんだ…ハジメは？」

「ああ、俺も同じで寝付けなくてな、鍛錬しようとして外出たら優花の姿が目に入った」

「そっか……」

そう言いと、優花は少し寒そうに身体を竦めたのでハジメは着ていた上着を優花に肩にそつと羽織らせる。

「えっ」

その行動に優花は驚きながら俺に視線に向ける。しかし、ハジメの方はそんな優花に笑みを浮かべながら答えた。

「これで、冷えることはないだろ」

「でもハジメは？」

「俺は平気だ。これから鍛錬もするし」

「ふふ、ハジメらしいね」

「ん、どういうことだ？」

「いや、やっぱりハジメは昔から優しいってこと」

優花はそう言つて、俺を見つめながら淡々と昔のことを懐かしみながら話し続ける。「なんだよ、いきなり」

そんな昔の話をつづける優花に苦笑いしていると、優花は何かを決心したのかハジメの方へ向くと、顔を真っ赤になりながらもハジメの目をちやんと見ながら伝えた。

「大好き」

その言葉を聞いて、ハジメはベンチから立ち上がつてしまい動きが止まる。どう考えようとしても、思考が纏まらずベンチから立ち上がつて立ち尽くしていると優花が心配して話しかける。

「えっと、ハジメ？」

「な、なあ……優花。いまさっきの『好き』は恋愛としてなのか？」

頭の整理が追いつかないまま、ハジメはそう聞くと、優花は顔を紅潮させながらも首を縦に動かす。

「うん、私は南雲ハジメ、貴方のことがずっと昔から好きです」

「……」

ハジメは優花の言葉を受け止め気付いたら自分は優花を抱き締めていた。

「ハ、ハジメ？」

唐突に抱きしめられた優花は少し動揺する。するとハジメの方も顔を赤くして……

「ああ〜クソツ。こう言うのは俺からしたかったけどな……優花」

「な、何？」

ハジメは優花を抱きしめるのをやめ、立ち上がると優花の前に片膝をつくと両手を優しく自分の手に取ると真剣な表情で思いを伝えた。

「俺もお前の事はずっと昔から好きだ。愛してる……。だから優花……。俺の恋人になって欲しい」

「！」

その言葉を聞いた優花は、嬉し過ぎて両手で顔を口元を隠して泣きそうになるも堪える。すると、ハジメは少し恥ずかしそうに優花に話しかける。

「返事……」

「え……？」

「優花からの返事が欲しいんだ」

ハジメの言葉を聞いて、やっぱりハジメはカッコイイけど可愛いなあと思いつつ、優花はつま先を少し上げながらハジメの顔に近付く。

そして……

チュツ

ハジメの唇にキスという形で返事をした。

それは、たった十秒程のキス。が、二人には長く永遠の時間ぐらいに思えた。

キスが終わると優花はハジメに満面の笑みを向けながら彼からの告白の返事を伝えた。

「はいっ…よろしくお願ひしますハジメ」

ハジメと優花の二人は出会ってから十二年。飛ばされたこの異世界にて晴れて恋人同士になったのだった……。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

深夜、ハジメと優花のキスをしている光景を見ていた人物がいた。

その人物は自分の愛しい彼にキスをして抱き着いている女を殺すような目をしており、表情が醜く酷く歪んでたことを知る者はいない……。

「ギリツ…園部優花っ」

## 六話

## 悪夢の始まり

翌日、「オルクス大迷宮」に向かう前にハジメと優花は浩介達を呼ぶと、昨夜の出来事を伝えた。

「付き合うことになった（なりました）」

「ええー?!」

「……………やっとか……………」

顔を赤くして手を繋ぎながら結果報告する二人に聞いた三人の反応は奈々は純粋に驚いていたが浩介と妙子は「やっとか付き合うのか」と呆れていたが、祝福してくれた。その後、迷宮での訓練が終わったら五人でどっか食べに行こうとか話し合ったのだった。

ハジメ達は今「オルクス大迷宮」の正面入口がある広場に集まっていた。

ハジメとしては薄暗い陰気な入口を想像していたのだが、まるで博物館の入場ゲートのようなしつかりした入口があり、受付窓口まであった。制服を着たお姉さんが笑顔で迷宮への出入りをチェックしている。

なんでも、ここでステータスプレートをチェックし出入りを記録することで死亡者数

を正確に把握するのだとか。戦争を控え、多大な死者を出さない措置だろう。

入口付近の広場には露店なども所狭しと並び建っており、それぞれの店の店主がしのぎを削っている。まるでお祭り騒ぎだ。

浅い階層の迷宮は良い稼ぎ場所として人気があるようで人も自然と集まる。馬鹿騒ぎした者が勢いで迷宮に挑み命を散らしたり、裏路地宜しく迷宮を犯罪の拠点とする人間も多くいたようで、戦争を控えながら国内に問題を抱えたくないと冒険者ギルドと協力して王国が設立したのだとか。入場ゲート脇の窓口でも素材の売買はしてくれるので、迷宮に潜る者は重宝しているらしい。そして、ハジメ達はメルド団長の後を追いながら迷宮へと入った。

迷宮の中は、外の賑やかさとは無縁だった。縦横五メートル以上ある通路は明かりもないのに薄ぼんやり発光しており、松明や明かりの魔法具がなくてもある程度視認が可能だ。緑光石という特殊な鉱物が多数埋まっているらしく、「オルクス大迷宮」は、この巨大な緑光石の鉱脈を掘って出来ているらしい。

「おお……」

後方を歩くハジメは、特殊な鉱石がある迷宮を進んでいく内に、目を輝かせながら明かりに使われてない緑光石を採取していた。

一行は隊列を組みながらゾロゾロと進む。しばらく何事もなく進んでいると広間に

出た。ドーム状の大きな場所で天井の高さは七、八メートル位ありそうだった

「へえ……」

ハジメは、奥から何か来ると感じて、自分のパーティーの優花達を手で制止のサインをすると、それを見た優花達もハジメの後ろで止まる。

「ん？……どうしたのハジメ？」

ハジメのサインにキョトンと首を傾げる優花が声をかける。すると、物珍しげに辺りを見渡している一行の前に、壁の隙間という隙間から灰色の毛玉が湧き出てきた。

「よし、光輝達が前に出ろ。他は下がれ！ 交代で前に出てもらうからな、準備しておけ！ あれはラットマンという魔物だ。すばしっこいが、たいした敵じゃない。冷静に行け！」

その言葉通り、ラットマンと呼ばれた魔物が結構な速度で飛びかかってきた。

灰色の体毛に赤黒い目が不気味に光る。ラットマンという名称に相応しく外見はねずみっぽい……二足歩行で上半身がムキムキだった。八つに割れた腹筋と膨れあがった胸筋の部分だけ毛がない。まるで見せびらかすように。

「気持ち悪い」

ハジメはラットマンを見て気持ち悪く感じた。それは、正面に立つ光輝達——特に前衛である雫やハジメの後ろにいる優花達も頬が引き攣っている。やはり、同じように気

持ち悪いらしい。

間合いに入ったラットマンを光輝、雫、龍太郎の三人で迎撃する。その間に、香織と特に親しい女子二人、メガネっ娘の中村恵理とロリ元気っ子の谷口鈴が詠唱を開始。魔法を発動する準備に入る。訓練通りの堅実なフォーメーションだ。

光輝は純白に輝くバスタードソードを視認も難しい程の速度で振るって数体をまとめて葬っている。

「あれが、聖剣ね……」

その戦闘シーンを見ていたハジメは光輝よりも彼が持っているバスターソードに目がいつていた。光輝の持つその剣はハイリヒ王国が管理するアーティファクトの一つで、お約束に漏れず名称は「聖剣」である。光属性の性質が付与されており、光源に入る敵を弱体化させると同時に自身の身体能力を自動で強化してくれるという「聖なる」というには実に嫌らしい性能を誇っている。

龍太郎は、空手部らしく天職が「拳士」であることから籠手と脛当てを付けている。これもアーティファクトで衝撃波を出すことができ、また決して壊れないのだという。龍太郎はどっしりと構え、見事な拳撃と脚撃で敵を後ろに通さない。無手でありながら、その姿は盾役の重戦士のようだ。

雫は、サムライガールらしく「剣士」の天職持ちで刀とシヤムシールの中間のような



剣を抜刀術の要領で抜き放ち、一瞬で敵を切り裂いていく。その動きは洗練されていて、騎士団員をして感嘆させるほどである。

「……」

流石は高ステータスの集まりというべき無双しているが、見るところどころ連携にあるな、とハジメは光輝達の戦闘を考察していると、詠唱が響き渡った。

「暗き炎渦巻いて、敵の尽く焼き払わん、灰となりて大地へ帰れ——『螺旋』」

三人同時に発動した螺旋状に渦巻く炎がラットマン達を吸い上げるように巻き込み燃やし尽くしていく。「キイイッ」という断末魔の悲鳴を上げながらパラパラと降り注ぐ灰へと変わり果て絶命していった。

「やり過ぎじゃね」

苦笑いでハジメが呟く程で気がつけば、広間のラットマンは全滅していた。他の生徒の出番はなしである。どうやら、光輝達召喚組の戦力では一階層の魔物達は弱すぎるらしい。

「ああ、うん、よくやったぞ！ 次はお前等にもやってもらうからな、気を緩めるなよ

！」

生徒の優秀さに苦笑いしながら気を抜かないよう注意するメルド団長。しかし、初めての迷宮の魔物討伐にテンションが上がるのは止められない。頬が緩む生徒達に「しよ

うがねえな」とメルド団長は肩を竦めた。

そこからは特に問題もなく交代しながら戦闘を繰り返し、順調に階層を下げて行った。そして、一流の冒険者か否かを分けると言われている二十階層にたどり着いた。

「じゃあ、今度は南雲達が前へ出る。今回の魔物は少し強いぞー！」

メルド団長に呼ばれたハジメ達は前に出るとハジメの合図から戦闘を開始した。

「行くぞ」

「「「うん（おう）」」」

戦闘が始まると同時にハジメはそのまま地に手を着けて、錬成をする。

「『錬成』」

「ギヤツ！」

その瞬間、魔物達が立っていたところから数本の石槍が数地面から突き出して魔物達を串刺しにして灰へと変わって散って散っていく。

そしてハジメは石槍を避けて散った魔物達に向かって走り出すと、魔物に向けて魔法の詠唱を発動する。

「<sup>は</sup>進れ——『雷撃』」

ハジメの雷撃を直撃した魔物達は塵になっていく。だが、ハジメの後ろに周り込んだ数体の魔物の気配がしたが頼れる幼なじみ達に頼むことにする。

「任せた」

「「了解」」

ハジメの言葉を聞いて気配を消していた浩介はそのまま魔物の後ろに回り込むと小太刀で首から上と下を切り離す。

妙子は逃げる数体の魔物を鞭で拘束すると「奈々、優花！」と叫ぶ。それを聞いた奈々と優花の二人の詠唱の終わりを告げていた。

「行け、氷の槍を——『氷槍』！」

「『付与』——『威力上昇、速度上昇』！」

そして、奈々の氷の槍と優花が付与で強化された投げナイフによって拘束された魔物達を倒した。

戦闘が終わると優花達が駆け寄って来る。

「ナイス、ハジメ」

「流石、ハジメっち」

「ナイスく指揮、ハジメ」

「ハジメ、ケガとかしてない？」

浩介達三人は駆け寄りながらハジメの指揮を賞賛しており、優花はケガがないかと心配しながらハジメの体を見る。

「ああ、大丈夫だ優花は？」

「うん、大丈夫」

ハジメは優花の髪を優しく触れながら笑みを向けるながら聞くと優花は嬉しそうに笑みを浮かべると、大丈夫と答えた。

「そっか、よかった」

ハジメは、優花の頭を撫でる。

「……ん」

「おいおい、ここでイチヤイチヤすんなよ……」

優花は頭を撫でられてか嬉しそうに目を細めていると、何故かそんな光景を見せられている妙子と奈々は目が死んでおり、浩介は呆れてツツコンでいた。

そんなことをしていると同時に、戦闘を見ていたクラスメイト達とメルドはハジメ達の連携力に目を見開く。

そして、メルド団長は、ハジメの錬成師の能力も活かして、ここまでの戦闘力。戦いを見ていて、非戦闘職でありながらも王国最強の称号を手にしていた彼の姿と重ね合わせていた。そして、全体に聞こえるようにハジメ達を賞賛する。

「まさかここまで連携の良さ、周りへの配慮…流石だ　　よし！光輝達やお前達も

南雲達のパーティーを参考にしろ！」

騎士団員達としては、ハジメが碌に使えもしないと思っていたらしい。ところが実際は、錬成を活かし、非戦闘職とは思えない戦闘技術で魔物を圧倒した。錬成師は弱者とイコールに考えられている。だから、騎士団員達、そしてクラスメイトはハジメの強さに唖然としていた。

「……………」

戦闘が終わってハジメは自分に突き刺さる視線を感じた。それは、ねばつくような、負の感情がたつぷりと乗っている不快な視線だ。今までも教室などで感じていた類の視線だが、それとは比べ物にならないくらい深く重い。

感じる限り、ざつと三人だと推測するハジメは、誰だか知らないが気持ち悪い視線を向けるなと嫌そうに表情を歪める。

「ハジメ?」

「ん?、いや何でもねえよ」

「そっか、少し怖い顔してたから」

優花に声をかけられ、何でもないように取り繕うが今さっきの表情を見られてたらしい。だが、ハジメは悟られないように声をかけた。

「大丈夫だから心配すんな」

「……………わかった」

優花は訝しむも分かってくれたのか、これ以上は何も言わなかった。ハジメは安堵するが内心、優花に心配させてしまったことに舌打ちする。そして、視線の正体が分かったら懲らしめようと思いつながら深々と溜息を吐くと、メルド団長の指示に従い下に向かった。

一行は二十階層を探索する。

迷宮の各階層は数キロ四方に及び、未知の階層では全てを探索しマッピングするのに数十人規模で半月から一ヶ月はかかるというのが普通だ。

現在、四十七階層までは確実なマッピングがなされているので迷うことはない。トラップに引つかかる心配もないはずだった。

二十階層の一番奥の部屋はまるで鍾乳洞のようにツララ状の壁が飛び出していたり、溶けたりしたような複雑な地形をしていた。この先を進むと二十一階層への階段があるらしい。

「ん?」

ハジメは目の前の部屋に何かの気配を感じていると、先頭を行く光輝達やメルド団長が立ち止まった。訝しそうなクラスメイトを尻目に戦闘態勢に入る。どうやら俺が感じていた気配はやはり魔物のようだ。

「擬態しているぞ! 周りをよく注意しておけ!」



体をビリビリと衝撃が走り、ダメーじ自体はないものの硬直してしまう。ロックマウントの固有魔法「威圧の咆哮」だ。魔力を乗せた咆哮で一時的に相手を麻痺させる。

まんまと威圧を喰らってしまった光輝達前衛組が一瞬にして硬直してしまった。

ロックマウントはその隙に突撃するかと思えばサイドステップし、傍らにあった岩を持ち上げ香織達後衛組に向かって見事なフォームで投げつけた。咄嗟に動けない前衛組の頭上を越えて、岩が香織達へと迫る。

香織達が、準備していた魔法で迎撃せんと魔法陣が施された杖を向けた。避けるスペースが心もとないからだ。

しかし、発動しようとした瞬間、香織達は衝撃的光景に思わず硬直してしまう。なんと、投げられた岩もロックマウントだったのだ。空中で見事な一回転を決めると両腕をいっぱい広げて香織達へと迫る。しかも、妙に目が血走り鼻息が荒い。香織も恵理も鈴も「ヒイ！」と思わず悲鳴を上げて魔法の発動を中断してしまった。

「……「錬成」」

俺は面倒に思いながらも「錬成」をする。その瞬間、迷宮の壁から石槍が突き出てきてロックマウントの脳天を串刺しにして灰へと変えていく。

その光景を目の前で見ていた香織達は、ハジメの方へと振り返ると香織だけ何故か頬を赤らめて蕩けた目でハジメを見つめている。



ハジメは香織の反応に困惑して内心引いていると、そんな様子を見てキレル勇者が一人。正義感と思い込みの塊、我らが勇者天之河光輝である。

「貴様……よくも香織達を……許さない！」

どうやら気持ち悪さで青褪めているのを死の恐怖を感じたせいだと勘違いしたらしい。彼女達を怯えさせるなんて！ と、なんとも微妙な点で怒りをあらわにする光輝。それに呼応してか彼の聖剣が輝き出す。

こんな狭い場所に大技を放とうとする光輝の馬鹿な行動にハジメは内心舌打ちすると最悪のケースを予想しながら周りを警戒する。

「万翔羽ばたき、天へと至れ——『天翔閃』！」

「あつ、こら、馬鹿者！」

メルド団長の声を無視して、光輝は大上段に振りかぶった聖剣を一気に振り下ろした。

その瞬間、詠唱により強烈な光を纏っていた聖剣から、その光自体が斬撃となつて放たれた。逃げ場などない。曲線を描く極太の輝く斬撃が僅かな抵抗も許さずロックマウントを縦に両断し、更に奥の壁を破壊し尽くしてようやく止まった。

パラパラと部屋の壁から破片が落ちる。「ふう〜」と息を吐きイケメンスマイルで香織達へ振り返った光輝。香織達を怯えさせた魔物は自分が倒した。もう大丈夫だ！

と声を掛けようとして、笑顔で迫っていたメルド団長の拳骨を食らった。

「へぶう!」

「この馬鹿者が。気持ちにはわかるがな、こんな狭いところで使う技じゃないだろうが!

崩落でもしたらどうすんだ! もう少し、南雲を見習え!」

メルド団長のお叱りに「うっ」と声を詰まらせ、バツが悪そうに謝罪する光輝。そこに、香織達が寄ってきて苦笑いしながら慰める。

その後、恵理と共にハジメに駆け寄った鈴が「南雲君ありがとう!」と感謝を伝えていた。ハジメはやりわりと返しだけにして、一行は再び迷宮の奥へと向かおうとした時だった。

ふと、香織が崩れた壁の方に視線を向けた。

「…………あれ、何かな? キラキラしてる…………」

その言葉に、全員が香織の指差す方へ目を向けた。

そこには青白く発光する鉱物が花咲くように壁から生えていた。まるでインディコライトが内包された水晶のようである。香織を含め女子達は夢見るように、その美しい姿にうっとりした表情になっていた。

ハジメも白崎の指差す方にある水晶を見て、本にあった鉱石を思い出しながら、その鉱石の名を口にする。

「……グランツ鉱石か」

「ほお、あれはグランツ鉱石だな。大きさも中々だ。珍しい」

グランツ鉱石とは、言わば宝石の原石みたいなものだ。特に何か効能があるわけではないが、その涼やかで煌びやかな輝きが貴族のご婦人ご令嬢方に大人気であり、加工して指輪・イヤリング・ペンダントなどにして贈ると大変喜ばれるらしい。求婚の際に選ばれる宝石としてもトップ三に入るとか。

「素敵……」

隣で優花が、メルドの簡単な説明を聞いて頬を染めながらうつとりとしていた。そんな優花を見て、ハジメは笑み見せると、

「……優花」

「ん？」

「今度、お前に似合うアクセサリー作る」

「うん、ありがと」

そんな二人の約束してる光景を誰を見ていた誰かが憎つたらしい視線を向けていたがハジメは優花に夢中になっていたため気付かなかった。

「……………」

そんな約束をしたハジメだったが、壁に生えているグランツ鉱石を見て少し疑問に感

じた。図書館で鉱石に関する書物を調べた限りグランツ鉱石はこんなところがない筈なのだ。

「もしかして……っ」

そして、何故ここにグランツ鉱石があることに気づいたハジメは、急いでメルド団長へ報告しようとするが、その前にある馬鹿が行動してしまった。

「だったら俺らで回収しようぜ！」

そう言つて唐突に動き出したのは檜山だった。グランツ鉱石に向けてヒョイヒョイと崩れた壁を登つていく。それに慌てたのはメルド団長だ。

「こら！ 勝手なことをするな！ 安全確認もまだなんだぞ！」

しかし、檜山は聞こえないふりをして、とうとう鉱石の場所に辿り着いてしまった。

「ばっ……アイツっ」

ハジメとメルド団長は、止めようと檜山を追いかける。同時に騎士団員の一人がフェアスコープで鉱石の辺りを確認する。そして、一気に青褪めた。

「団長！ トラップです！」

「ッ!？」

「……クソっ、やっぱりか！」

ハジメはこの最悪のケースに歯噛みする。そして、メルド団長も、騎士団員の警告も

一步遅かった。

檜山がグランツ鉱石に触れた瞬間、鉱石を中心に魔法陣が広がる。グランツ鉱石の輝きに魅せられて不用意に触れた者へのトラップだ。美味しい話には裏がある。世の常である。

魔法陣は瞬く間に部屋全体に広がり、輝きを増していった。まるで、召喚されたあの日の再現だ。

「クソツ……転移系！」

「くっ、撤退だ！早くこの部屋から出る！」

メルド団長の言葉に生徒達が急いで部屋の外に向かうが……間に合わなかった。

部屋の中に光が満ち始めるその間にハジメは脱出は無理だと判断すると優花の身を守るように彼女を抱きしめる。そして、ハジメ達の視界を白一色に染めると同時に一瞬の浮遊感に包まれる。

「……………」

ハジメ達は空気が変わったのを感じたと同時に、ドスンという音と共に地面に叩きつけられた。

ハジメは抱きしめてる優花の安全を確認して周囲を見渡す。クラスメイトのほとんどは尻餅をついていたが、メルド団長や騎士団員達、光輝達など一部の前衛職の生徒は

既に立ち上がってハジメと同じように周囲の警戒をしている。

ハジメ達が転移した場所は、巨大な石造りの橋の上だった。ざつと百メートルはありそうだ。天井も高く二十メートルはあるだろう。橋の下は川などなく、全く何も見えない深淵の如き闇が広がっていた。まさに落ちれば奈落の底といった様子だ。

橋の横幅は十メートルくらいありそうだが、手すりどころか縁石すらなく、足を滑らせば掴むものもなく真つ逆さまだ。俺達はその巨大な橋の中間にいた。橋の両サイドにはそれぞれ、奥へと続く通路と上階への階段が見えた。

「此処って、もしかしたら……」

俺は此処は何処か察してしまつてクソつと悪態をつく。その時、メルド団長が、険しい表情をしながら指示を飛ばした。

「お前達、直ぐに立ち上がって、あの階段の場所まで行け。急げ！」

雷の如く轟いた号令に、わたわたと動き出す生徒達。

しかし、迷宮のトラップがこの程度で済むわけもなく、撤退は叶わなかった。階段側の橋の入口に現れた魔法陣から大量の魔物が出現したからだ。更に、通路側にも魔法陣は出現し、そちらからは一体の巨大な魔物が……

その時、現れた巨大な魔物を呆然と見つめるメルド団長の呻く様な呟きがやけに明瞭に響いた。

あれは、  
ハジメが読んでいた魔物図鑑にあった化け物の中の化け物——ベヒモスだっ  
た……。

七話  
ベヒモス

橋の両サイドに現れた赤黒い光を放つ魔法陣。通路側の魔法陣は十メートル近くあり、階段側の魔法陣は一メートル位の大きさだが、その数がおびただしい。

小さな無数の魔法陣からは、骨格だけの体に剣を携えた魔物「トラウムソルジャー」が溢れるように出現した。空洞の眼窩からは魔法陣と同じ赤黒い光が煌々と輝き目玉の様にギョロギョロと辺りを見回している。その数は、既に百体近くに上っており、尚、増え続けているようだ。

しかし、数百体のガイコツ戦士より、反対の通路側の方がヤバイとハジメは感じていた。

十メートル級の魔法陣からは体長十メートル級の四足で頭部に兜のような物を取り付けた魔物が出現したからだ。もつとも近い既存の生物に例えるならトリケラトプスだろうか。ただし、瞳は赤黒い光を放ち、鋭い爪と牙を打ち鳴らしながら、頭部の兜から生えた角から炎を放っているという付加要素が付くが……。

ベヒモスは、大きく息を吸うと凄まじい咆哮を上げた。



「グルアアアアアアアア!!」

「ッ!？」

その咆哮で正気に戻ったのか、メルド団長が矢継ぎ早に指示を飛ばす。

「アラン! 生徒達を率いてトラウムソルジャーを突破しろ! カイル、イヴァン、ペイル! 全力で障壁を張れ! ヤツを食い止めるぞ! 光輝、お前達は早く階段へ向かえ!」

「待って下さい、メルドさん! 俺達もやります! あの恐竜みたいなヤツが一番ヤバイでしょう! 俺達も……」

「馬鹿野郎! あれが本当にベヒモスなら、今のお前達では無理だ! ヤツは六十五階層の魔物。かつて、『最強』と言わしめた冒険者をして歯が立たなかった化け物だ! さっさと行け! 私はお前達を死なせるわけにはいかないんだ!」

メルド団長の鬼気迫る表情に一瞬怯むも、「見捨ててなど行けない!」と踏み止まる光輝。

どうにか撤退させようと、再度メルドが光輝に話そうとした瞬間、ベヒモスが咆哮を上げながら突進してきた。このままでは、撤退中の生徒達を全員轢殺してしまうだろう。そうはさせるかと、ハイリヒ王国最高戦力が全力の多重障壁を張る。

「『全ての敵意と悪意を拒絶する、神の子らに絶対の守りを、ここは聖域なりて、神敵を

通さず——『聖絶』!!』」

ハジメはベヒモス、そしてトラウムソルジャーの挟み撃ちの状態でクラスメイト達と共にトラウムソルジャーの相手をしながらこの状況を打破する策を考えていた。しかし、考えていく内に自分の天職が非戦闘系のことを悔やむ。

「……チツ」

ハジメは魔術系の天職ではないから強力な魔法はまだ扱えないし、自分の雷魔法が効くかどうか分からない。錬成も他のクラスメイト達も巻き添えになる可能性があるし、自分の言葉に従うクラスメイトは居ないだろう。だから、ハジメはこの状況を打破するには実質的なクラスメイトの纏め役の光輝が率先してクラスメイトを指揮していくのが一番の妥当案である。

ハジメはトラウムソルジャーを撃退していきながら、背中を合わせて戦っている親友の浩介に頼みをする。

「浩介、そばにいるか?」

「どうした、ハジメ?!」

「少しの間、優花達を守っていてくれ」

「は? ハジメ、お前何をする気だ?」

「この状況を打破するための馬鹿天之川を連れて来る……その間、頼めるか?」

「ああーもうっ、わかったよ！了解！」

「ありがとな　じゃあ行つてくる」

浩介の了承を得たハジメは、トラウムソルジャーを撃退しながら光輝の方へ走り出した。すると、後ろから優花の驚く声が聞こえた。

「ハジメ?!」

「大丈夫だ、すぐ戻つて来る」

ハジメは、優花にそう伝えるだけで走つていった。

ベヒモスは依然、障壁に向かって突進を繰り返していた。

障壁に衝突する度に壮絶な衝撃波が周囲に撒き散らされ、石造りの橋が悲鳴を上げる。障壁も既に全体に亀裂が入っており砕けるのは時間の問題だ。既にメルド団長も障壁の展開に加わっているが焼け石に水だった。

「ええい、くそ！　もうもたんぞ！　光輝、早く撤退しろ！　お前達も早く行け！」

「嫌です！メルドさん達を置いていくわけには行きません！　絶対、皆で生き残るんです！」

「くっ、こんな時にわがままを……」

メルド団長は苦虫を噛み潰したような表情になる。この限定された空間ではベヒモ

スの突進を回避するのは難しい。それ故、逃げ切るためには障壁を張り、押し出されるように撤退するのがベストだ。

しかし、その微妙なさじ加減は戦闘のベテランだからこそ出来るのであって、今の光輝達には難しい注文だ。

その辺の事情を掻い摘んで説明し撤退を促しているのだが、光輝は「置いていく」ということがどうしても納得できないらしく、また、自分ならベヒモスをどうにかできると思っているのか目の輝きが明らかに攻撃色を放っている。

まだ、若いから仕方ないとは言え、少し自分の力を過信してしまっているようである。それは蛮勇だ。メルド団長の戦闘素人の光輝達に自信を持たせようと、まずは褒めて伸ばす方針が裏目に出たようだ。

「光輝！ 団長さんの言う通りにして撤退しましょう！」

雫は状況がわかっていようので光輝を諫めようと腕を掴む。

「へっ、光輝の無茶は今に始まったことじゃねえだろ？ 付き合うぜ、光輝！」

「龍太郎……ありがとな」

しかし、龍太郎の言葉に更にやる気を見せる光輝。それに雫は舌打ちする。

「状況に酔ってんじゃないわよ！ この馬鹿ども！」

「雫ちゃん……」

苛立つ雫に心配そうな香織。その時、一人の男子が光輝の前に飛び込んできた。

「おい、アホキラ野郎！」

「なっ、南雲!?!」

「南雲くん!?!」

驚く一同にハジメは無視してイライラしながら怒鳴りながら今の深刻な事態を告げた。

「早く撤退しろクラスの奴等のところに！ てめえじゃないとクラスの奴等の大半が動かねえんだよ！早く戻れ！」

「いきなりなんだ？それより、なんでこんな所にいるんだ！ここはお前がいていい場所じゃない！ここは俺達に任せて南雲は……」

「うるせえよ！全員守るんじゃないのか馬鹿野郎！」

「……ッ」

ハジメを言外に戦力外だと告げて撤退するように促そうとした光輝の言葉を遮って、ハジメは乱暴な口調で怒鳴り返した。そして、今までハジメと対立していた光輝も流石に胸倉を掴まれながら、ここまでキレられると思つてなく驚きのあまり硬直して、頭が冷静になる。

やっと光輝が冷静になったと理解したハジメは、突き放すように胸倉から手を離し

た。

「理解したのなら早く行け馬鹿キラ野郎」

「……ッああ、お前の意見なのが不本意だがわかった。直ぐに行く！ メルド団長！

すいませ——」

「下がれえ——！」

「すいません、先に撤退します——そう言おうとしてメルド団長を振り返った瞬間、その団長の悲鳴と同時に、遂に障壁が砕け散った。

暴風のように荒れ狂う衝撃波がハジメ達を襲う。

「チイツ…… 錬成——！」

咄嗟に、ハジメが前に出て錬成で巨大な石壁を作り出し衝撃波を石壁で相殺する。しかし、たった一度の衝撃波で石壁にヒビが入るベヒモスの異常な強さに苦虫を噛み潰したような表情になる。

ハジメが前に出て石壁を創り出したおかげで全員が振動で軽く吹き飛ばされただけで済んだ。

「南雲、助かったぞ」

「いえ……そつちは大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ」

ハジメとメルド団長が互いに無事を確認しあつてると、光輝達も身体を起こし始めた。

「ぐっ……龍太郎、雫、時間を稼げるか？」

光輝が問う。それに苦しそうではあるが確かな足取りで前へ出る二人。

「やるしかねえだろ！」

「……なんとかしてみるわ！」

二人がベヒモスに突貫する。

「香織はメルドさん達の治癒を！」

「うん！」

光輝は、今の自分が出せる最大の技を放つための詠唱を開始した。

「神意よ！ 全ての邪悪を滅ぼし光をもたらしたまえ！ 神の息吹よ！ 全ての暗雲を吹き払い、この世を聖浄で満たしたまえ！ 神の慈悲よ！ この一撃を以て全ての罪科を許したまえ！——『神威』！」

詠唱と共にまっすぐ突き出した聖剣から極光が迸る。

先の天翔閃と同系統だが威力が段違いだ。橋を震動させ石畳を抉り飛ばしながらベヒモスへと直進する。

龍太郎と雫は、詠唱の終わりと同時に既に離脱している。ギリギリだったようで二人

共ボロボロだ。この短い時間だけで相当ダメージを受けたようだ。

放たれた光属性の砲撃は、轟音と共にベヒモスに直撃した。光が辺りを満たし白く塗りつぶす。激震する橋に大きく亀裂が入っていく。

「これなら……はあはあ」

「はあはあ、流石にやったよな？」

「だといいいけど……」

「……（いや、駄目だ）」

ハジメは確信していた。光輝の“神威”は強いだろう。だが、奴はまだ生きてると……

光輝は莫大な魔力を使用したようで肩で息をしている。先ほどの攻撃は文字通り、光輝の切り札だ。残存魔力のほとんどが持っていかれたんだろう。背後から、メルド団長が向かってきた。

そんな中、徐々に光が収まり、舞う埃が吹き払われる。

その先には……

無傷のベヒモスがいた。

低い唸り声を上げ、光輝を射殺さんばかりに睨んでいる。と、思ったら、直後、スツと頭を掲げた。頭の角がキィーという甲高い音を立てながら赤熱化していく。そ



して、遂に頭部の兜全体がマグマのように燃えたぎった。

「ボケツとするな！ 逃げろ！」

ハジメの叫びに、ようやく無傷というショックから正気に戻った光輝達が身構えた瞬間、ベヒモスが突進を始める。そして、光輝達はかなり手前で跳躍し、赤熱化した頭部を下に向けて隕石のように落下した。

「クソがつー—— 錬成——！」

ハジメは錬成で即座に半ドーム型の石壁を作り上げベヒモスの落下の軌道を逸らしていく。だが、流星の衝撃波で壁が一瞬で壊れ全員が吹き飛んだ。

「グッ……！」

「クソがつー！」

このままだと光輝達をクラスメイト達の方へと向かわせてもベヒモスを抑えなければ全滅になるだろう。

そんな絶望的な状況をどう覆すか考える。そして、ハジメはある魔法のことを思い出す。だが、その魔法は、まだものにしてなくハジメにとって自爆特攻と同じである。

だが、

「……やるしかねえか」

この状況を覆すために覚悟を決めたハジメは持ち物にある全ての魔力回復薬を飲み

干すと、メルド団長のところへと向かった。

「メルド団長……」

「南雲か、どうしたんだ？」

「俺にベヒモスを任せてください。だから——」

ハジメはメルド団長に自分の考えた作戦を話した。メルド団長は最初は否定した。だが、ハジメの説得とその目を見て決断した。

「……やれるんだな？」

「やってやりますよ」

決然とした眼差しを真つ直ぐ向けるハジメに、メルド団長は「くっ」と笑みを浮かべ、ハジメも同じように笑みでかえした。

「まさか、お前さんに命を預けることになるとはな。……必ず助けてやる。だから……頼んだぞー！」

「ああ、任せろー！」

メルド団長はそう言うのとベヒモスの前に出た。そして、簡易の魔法を放ち挑発する。ベヒモスは、先ほど天之河を狙ったように自分に歯向かう者を標的にする習性があるようだ。しっかりとその視線がメルド団長に向いている。

そして、赤熱化を果たした兜を掲げ、突撃、跳躍する。メルド団長は、ギリギリまで

引き付けるつもりなのか目を見開いて構えている。そして、小さく詠唱をした。

「吹き散らせ——『風壁』！」

詠唱と共にバックステップで離脱する。

その直後、ベヒモスの頭部が一瞬前までメルド団長がいた場所に着弾した。発生した衝撃波や石礫は『風壁』でどうにか逸らす。大雑把な攻撃なので避けるだけならなんとかなる。倒れたままの光輝達を守りながらでは全滅していただろうが。

再び、頭部をめり込ませるベヒモスに、ハジメは詠唱を始める。

「雷の獣よ、この身を纏い更なる力を——『雷装』！」

詠唱が終えた瞬間、ハジメの全身に雷が鎧のように纏いだしていく。

「少し相手をしてもらおうか……なあ！」

そして、雷を纏ったハジメは持っていた鉱石を使って槍を錬成すると、ベヒモスへと突貫したのだった。

~~~~~

ハジメが光輝達を呼びに行つてから、クラスメイト側も少し状況が危なくなつてい

「大丈夫かお前等?!」

「ちよつと、やばいかも……」

「私もっ」

浩介の呼びかけに妙子と奈々も苦悶の声を上げており優花も流石にこの数相手には無理を感じ歯噛みする。

「……ッ」

トラウムソルジャーは依然増加を続けていく。既にその数は二百体はいるだろう。階段側へと続く橋を埋め尽くしている。

だが、ある意味それでよかつたのかもしれない。もし、もつと隙間だらけだったなら、突貫した生徒が包囲され惨殺されていただろう。実際、最初の百体くらいの時に、それで窮地に陥っていた生徒は結構な数いたのだ。

それでも、未だ死人が出ていないのは、ひとえに騎士団員達のおかげだろう。彼等の必死のカバーが生徒達を生かしていたといっても過言ではない。代償に、既に彼等は满身創痕だった。

騎士団員達のサポートがなくなり、続々と増え続ける魔物にパニックを起こし、魔法を使ってもせずに剣やら槍やら武器を振り回す生徒がほとんどである以上、もう数分もすれば完全に瓦解するだろう。

生徒達もそれをなんとなく悟っているのか表情には絶望が張り付いている。優花達の呼びかけで少ないながらも連携をとり奮戦していた者達も限界が近いようで泣きそうな表情だ。

誰もが、もうダメかもしれない。そう思ったとき……

「——『天翔閃』！」

純白の斬撃がトラウムソルジャー達のド真ん中を切り裂き吹き飛ばしながら炸裂した。

橋の両側にいたソルジャー達も押し出されて奈落へと落ちていく。斬撃の後は、直ぐに雪崩れ込むように集まったトラウムソルジャー達で埋まってしまったが、生徒達は確かに、一瞬空いた隙間から上階へと続く階段を見た。今まで渴望し、どれだけ剣を振るっても見えなかった希望が見えたのだ。

「皆！ 諦めるな！ 道は俺が切り開く！」

そんなセリフと共に、再び『天翔閃』が敵を切り裂いていく。光輝が発するカリスマに生徒達が活気づく。

「お前達！ 今まで何をやってきた！ 訓練を思い出せ！ さっさと連携をとらんか！ 馬鹿者共が！」

クラスの皆は安心したが、優花はまだ不安であった。自分の最愛の人がそこにいない

事に気付いたのだから。

「ハジメ?」

皆、メルド団長達が戻って来て体勢を立て直し、階段近くまで戻って来た時、優花はメルド団長の元へと駆けつけてハジメの居場所を聞いた。

「メルドさん! ハ、ハジメは?!」

優花の言葉を聞いて、メルド団長は拳を握りしめながら悔しそうな顔をしながらハジメの居場所を伝える。

「……南雲は一人でベヒモスを抑えている」

「……え」

優花はメルドさんの発言で固まってしまった。そして、感じていた不安感が一気に増加した。嘘だと思いたい。だが、メルドさんがベヒモスの方に指を差す。それに連れられてこの場にいる全員がその方へ視線を向けると驚愕する。

それは、たった一人であるベヒモスと戦っているハジメの姿だった。

「マジかよ……」

「やっぱ南雲つてすげえな……」

「やべえよアイツ……」

ハジメのヤバさは大体は知っていた。だが、一人であの化け物<sup>ベヒモス</sup>を抑えるハジメを見

て、周りのクラスメイト達から驚愕や賞賛の声が湧き上がる。

「ハジメっ」

「へっ、おい！　園部！」

「優花?!」

「何処いくの?!ユウカっちー!」

走り出している優花を見た幼なじみ達が止めようと声を上げるが彼女は聞こえてないのか無視して、いつの間にか最愛の人のところへ、ハジメの方へと向かって駆け出した。

その頃、ベヒモスとタイマンしているハジメは、ベヒモスという化け物の強さを痛感していた。

硬すぎる。それがベヒモスと戦って感じたことだ。ハジメはベヒモスの攻撃を避けながら、何度も槍で攻撃をしていがベヒモスの外皮が硬く、突き刺さらず、かすり傷が出来る程度しか傷付けることしか出来なかった。

更に一つでも、ミスをすると致命傷を喰らってしまうベヒモスの攻撃を避けるのに精一杯であった。

「グルアアア！」

ベヒモスが前足を上げ橋全体を振動させる。その瞬間、ハジメは「雷装」で強制強化された肉体で飛び上がると、振動の余波を避ける。そして、ベヒモスに狙いを定めて残った鉱石で投げナイフを錬成して投擲する。

「ぐっ……！ おらよ！」

そして、追撃するように魔法を放つ。

「迸れ——「雷撃」！」

「グルウツ！」

「硬すぎなんだよっ!!」

「雷装」で強化された「雷撃」を放つてもベヒモスは怯むだけであった。そして、着地した瞬間全体全体にハジメに疲労感が押し寄せ身体が少しよろめく。

「チイツ……（限界がきたかっ）」

それもそうだ。この魔法は体に雷を流して強制的に身体能力を引き上げているのだ。体に負担が掛かるのは当然だ。

ハジメは限界を感じていたのを尻目にメルド団長達が階段近くまで避難していたことを確認すると、「雷装」を解除する。多大な疲労感と体の痺れが襲うが、ハジメは錬成をする。

「ハアハア——「錬成」！」



その瞬間、ベヒモスのいる場所を沈めさせ、下半分を埋まらせて動かないように拘束していく。

「グルアアアアアー！」

抜け出そうとするベヒモスが絶叫する。が、ハジメは更に「錬成」を行使する。

「うるせえよ……追加だ！——「錬成」！」

更にハジメは、ベヒモスが埋まるところから石槍を錬成して、さらに身動きを取れなくすると同時にダメージを与えていく。

これなら戻れる時間までは稼げると判断したハジメはクラスメイト達のところへ逃げようと立ち上がろうとすると、後ろからメルド団長の指示する声が聞こえた。

「後衛組、遠距離魔法準備！　もうすぐ南雲の坊主の魔力が尽きる。アイツが離脱したら一斉攻撃で、あの化け物を足止めしろ！」

ビリビリと腹の底まで響くような声に気を引き締め直す生徒達。そしてメルド団長の「打て！」の号令でたくさん魔法が放たれた。

その隙にハジメは疲労した体を無理やり動かして走る。しかし、その直後、ハジメは目を見開いて表情が凍りついた。

無数に飛び交う魔法の中に、一つの火球がクイツと軌道を僅かに曲げたのだ。

「クソがつ！」

明らかに自分を狙ったのであろう火球をハジメは悪態をつきながら突撃するギリギリのところで体を横にずらして避けるが、そのせいで身体の自由が利かなくなつてコケてしまった。

そして、疲れきつた体で立ち上がろうとするハジメに大事な人の声が聞こえた。

「ハジメ!!」

まさかと思ひ、顔を上げる。そこには優花の姿がハジメの目の前にあつた。

「おい、優花! ここは、危ねえぞ逃げろ!!」

「でも、ハジメのことが心配で……」

ハジメは注意をするが優花は余程俺のことが心配だつたらしく顔を俯かせる。

「……つたく、ほんとに健気だな」

そんな優花を見て、こんな状況なのに笑つてしまうハジメは優花の手を取ろうとした瞬間だった。一つの魔弾が優花に直撃した。

「えっ……」

「はっ?」

優花とハジメは唐突な出来事に変な声が漏れる。

「優花!」

すぐさま気を引き締め直して、体なんかどうでもいいかのように、急いで飛ばされる

優花を抱き締めるようにキャッチしてギリギリで引き止める。

しかし、そんな無駄な時間で、拘束を外すのに奴にとって十分な時間だった。

「グルアアアア！」

「……………っ！」

拘束を抜けたベヒモスは、いつまでも一方的にやられっぱなしではなかった。ハジメが優花を抱き締めた直後、背後で咆哮が鳴り響く。思わず振り返ると三度目の赤熱化をしたベヒモスの眼光がしつかりとハジメだけを捉えていた。

そして、赤熱化した頭部を盾のようにかざしながらハジメ達に向かって突進する。

「……………」

ハジメは、この絶望的な状況で二人共、助かる可能性をゼロに近い。だからその考えは切り捨て、ハジメは優花を守る為、ある決断をした。いや、この決断しかハジメは選ばないだろう。

「……………優花」

「……………ハジメ、どうしたの？」

ハジメが呼ぶと優花は此方に振り向く。その瞬間に、ハジメは自分の顔を彼女の顔に近付けると……………

「……………ん?!」

軽く優花の唇に触れてキスをするハジメ。

「え……ハジメ」

そして、キスをした後、ハジメは、いきなりのキスのせいで言葉を失っている優花に真剣な表情で約束した。

「優花。ぜってえ……お前のところに戻る」

「えっ……ハジメなにを——」

唐突な約束に戸惑いを見せる優花がなにかを言う前にハジメは、自分の親友の名前を大声で叫ぶように呼んだ。

「浩介え——！！」

「！」

ハジメの呼び声に反応した浩介。ハジメは浩介の姿を捉えると階層内に響き渡るほどの声音で用件を伝える。

「今から優花を受け止めてくれ!!」

「えっ、ハジメちよつと！」

優花の制止を無視して、ハジメは残りの全身の力を振り絞って、優花を浩介達の方へ投げ飛ばす。頼まれた浩介は壁を使って高く跳ぶと優花を空中で受け止めた。

「ハジメエエ！」

「つと……おい、ハジメ何をする気……つてお前まさか!!」

「ハジメ（つち）!!」

—— 俺が戻るまで優花を頼む

ハジメは何と言っているのか浩介達は聞こえなかった。しかし、長年の付き合いをしてる彼等は、ハジメの頼みと今からやろうとしていることを察しがついてしまった。優花がハジメに向かって叫び、浩介、そして奈々、妙子もやめるように叫ぶが、それを無視してハジメは残りの全魔力を振り絞って「錬成」を唱えて橋を崩壊させる。

そして、不敵な笑みを浮かべながら自分を睨むベヒモスにハジメは告げた。

「道連れだ。クソベヒモス」

「グルアアアアアア ア ア ア ア ア!」

橋の崩壊に逃げる気力が無いのか、そもそも逃げないのか、そのまま仰向けになってハジメはベヒモスと一緒に奈落へと落ちていったのだった……。

## 八話 三つの悪意

響き渡り奈落に落ちていくにつれ消えゆくベヒモスの断末魔。ガラガラと騒音を立てながら崩れ落ちてゆく石橋。

そして……

ベヒモスと瓦礫と共に奈落へと吸い込まれるように消えてゆく私の愛しい人。

その光景を、まるでスローモーションのように緩やかになった時間の中で、ただ見ていることしかできない優花は自分に絶望する。

幼い頃から一緒にいて、ずっと守ってくれた。支えてくれた大事で最愛の人が……

どこか遠くで聞こえていた悲鳴が、実は自分のものだど気がついた優花は、急速に戻ってきた正常な感覚に顔を顰めた。

「離して三人共！ハジメの所に行かないとっ！ 助けないと！お願い離してよ！」

奈落へと飛び出そうとする優花を奈々と妙子と浩介が必死に羽交い締めにする。細い体のどこにそんな力があるのかと疑問に思うほど尋常ではない力で引き剥がそうとした。

「止まってよ！ユウカっち！」

「そうよ！今は駄目！」

「落ち着け！園部！」

そんな三人の声は優花には届かず浩介達の拘束を解こうしていると、メルド団長ががツカツカと歩み寄り、問答無用で優花の首筋に手刀を落とした。ビクツと一瞬痙攣し、そのまま意識を落とす。

ぐったりする優花を抱きかかえ、浩介はメルド団長に感謝し、メルド団長に頭を下げた。

「……すいませんメルド団長。園部を止めて貰ってありがとうございます」

「礼など……止めてくれ。もう一人も死なせるわけにはいかない。全力迷宮を離脱する。……彼女を頼む」

「わかりました」

離れていく団長を見つめながら、口を挟めず無然とした表情の浩介から優花を受け取った奈々と妙子は、優花を守るように抱えた。

そんな様子でクラスメイト達は、目の前でクラスメイトが一人死んでしまい、クラスメイト達の精神にも多大なダメージが刻まれている。誰もが茫然自失といった表情で石橋のあつた方をポーと眺めていた。中には「もう嫌！」と言って座り込んでしまう子

もいる。

すると、光輝は全体に聞こえる声を張り上げた。

「皆！今は、生き残ることだけ考えるんだ！撤退するぞ！」

その言葉に、クラスメイト達はノロノロと動き出す。トラウムソルジャーの魔法陣は未だ健在だ。続々とその数を増やしている。今の精神状態で戦うことは無謀であるし、戦う必要もない。

光輝は必死に声を張り上げ、クラスメイト達に脱出を促した。メルド団長や騎士団員達も生徒達を鼓舞する。

だが、雫はそんな中、自分の好いていた男子生徒が落ちたのに優花のように慌てもせず、俯いてるだけの親友の香織だけを見つめていた。

そして全員が階段への脱出を果たしたが、そこからの上階への階段は長かった。

先が暗闇で見えない程ずっと上方へ続いており、感覚では既に三十階以上、上つていくはずだ。魔法による身体強化をしても、そろそろ疲労を感じる頃である。先の戦いでダメージもある。薄暗く長い階段はそれだけで気が滅入るものだ。

そろそろ小休止を挟むべきかとメルド団長が考え始めたとき、ついに上方に魔法陣が描かれた大きな壁が現れた。クラスメイト達の顔に生気が戻り始める。メルド団長は扉に駆け寄り詳しく調べ始めた。フェアスコープを使うのも忘れない。



その結果、どうやらトラップの可能性はなさそうであることがわかった。魔法陣に刻まれた式は、目の前の壁を動かすためのものようだ。

メルド団長は魔法陣に刻まれた式通りに一言の詠唱をして魔力を流し込む。すると、まるで忍者屋敷の隠し扉のように扉がクルリと回転し奥の部屋へと道を開いた。

扉を潜ると、そこは元の二十階層の部屋だった。

「帰ってきたの？」

「戻ったのか！」

「帰れた……帰れたよお……」

クラスメイト達が次々と安堵の吐息を漏らす。中には泣き出す子やへたり込む生徒もいた。光輝達ですら壁にもたれかかり今にも座り込んでしまいそうだった。

しかし、ここはまだ迷宮の中。低レベルとはいえ、いっどこから魔物が現れるかわからない。完全に緊張の糸が切れてしまう前に、迷宮からの脱出を果たさなければならぬ。

メルド団長は休ませてやりたいという気持ちを抑え、心を鬼にして生徒達を立ち上げさせた。

「お前達！座り込むな！ここで気が抜けたら帰れなくなるぞ！魔物との戦闘はなるべく避けて最短距離で脱出する！ほら、もう少しだ、踏ん張れ！」

少しくらい休ませてくれよ、という生徒達の無言の訴えをギンツと目を吊り上げて封殺する。渋々、フラフラしながら立ち上がる生徒達。光輝が疲れを隠して率先して先をゆく。道中の敵を、騎士団員達が中心となって最小限だけ倒しながら一気に地上へ向けて突き進んだ。

そして遂に、一階の正面門となんだか懐かしい気さえする受付が見えた。迷宮に入つて一日も経っていないはずなのに、ここを通つたのがもう随分昔のような気がしているのは、きつと少数ではないだろう。

今度こそ本当に安堵の表情で外に出て行く生徒達。正面門の広場で大の字になつて倒れ込む生徒もいる。一様に生き残つたことを喜び合っているようだ。

だが、一部の生徒——幼なじみを失つて未だ目を覚まさない優花を背負つた奈々や妙子、大事な親友を亡くしてしまった浩介、恵里、鈴、雫、坂上などは暗い表情だ。

そんな生徒達を横目に気にしつつ、受付に報告に行くメルド団長。

「……（アイツと同等レベルの人材を亡くしてしまった）」

メルドは思い出す。かつて自分よりも年下で、非戦闘職でありながらも王国最強だった男の姿を。そのまま足取りが重いままメルドは迷宮の受付に行き、二十階層で発見した新たなトラップは危険すぎる。石橋が崩れてしまったので罠として未だ機能するかはわからないが報告は必要だ。

そして、有望だった南雲ハジメの死亡報告もしなければならぬ。

憂鬱な気持ちを顔に出さないように苦勞しながら、それでも溜息を吐かずにはいられないメルドであつた……。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

ホルアドの町に戻った一行は何かする元気もなく宿屋の部屋に入った。幾人かの生徒は生徒同士で話し合つたりしているようだが、ほとんどの生徒は真つ直ぐベッドにダイブし、そのまま深い眠りに落ちていた。

そんな中、檜山大介は一人、宿を出て町の一角にある目立たない場所で膝を抱えて座り込んでいた。顔を膝に埋め微動だにしない。もし、クラスメイトが彼のこの姿を見れば激しく落ち込んでいるように見えただろう。

だが実際は……

「ヒ、ヒヒヒ。ア、アイツが悪いんだ。やったぜ……やったんだよ。俺はあの南雲を殺せた……て、天罰だ。……俺は間違つてない……あんな野郎に……もうかかわらなくていい……俺は間違つてない……ヒ、ヒヒ」

暗い笑みと濁った瞳で自己弁護してただけだった。

そう、あの時、軌道を逸れてまるで誘導されるようにハジメを襲った火球は、この檜山が放ったものだったのだ。

階段への脱出とハジメの救出。それらを天秤にかけた時、自分のタイプの香織と優花から好意を持たれ、遂には昨夜、その一人の優花とキスをしていたハジメが頭の中によぎった瞬間、檜山の中の悪魔が囁いたのだ。今なら殺つても気づかれないぞ？ と。

そして、檜山は悪魔に魂を売り渡した。

バレないように絶妙なタイミングを狙って誘導性を持たせた火球をハジメに放った。流星の如く魔法が乱れ飛ぶあの状況では、誰が放った魔法か特定は難しいだろう。まして、檜山の適性属性は風だ。証拠もないし分かるはずがないし、本当の原因は自分の次に優花を打った魔弾だと。

そう自分に言い聞かせながら暗い笑を浮かべる檜山。

その時、不意に背後から声を掛けられた。

「へえ、やつぱり最初の火球は君だったんだ。異世界最初の殺人の一人はクラスメイトか……中々やるね？」

「ッ!? だ、誰だ!」

慌てて振り返る檜山。そこにいたのは見知ったクラスメイトの一人だった。

「お、お前、なんでここに……」

「そんなことはどうでもいいよ。それより……人殺しさん？　今どんな気持ち？　憎い相手をどさくさに紛れて殺すのってどんな気持ち？」

その人物はクスクスと笑いながら、まるで喜劇でも見たように楽しそうな表情を浮かべる。檜山自身がやったこととは言え、クラスメイトが一人死んだというのに、その人物はまるで堪えていない。ついさつきまで、他のクラスメイト達と同様に、ひどく疲れた表情でシヨックを受けていたはずなのに、そんな影は微塵もなかった。

「……それが、お前の本性なのか？」

呆然と呟く檜山。それを、馬鹿にするような見下した態度で嘲笑う。

「本性？　そんな大層なものじゃないよ。誰だつて猫の一匹や二匹被っているのが普通だよ。そんなことよりさ……このこと、皆に言いふらしたらどうなるかな？　特に……あの子が聞いたら……」

「ツ!?　そ、そんなこと……信じるわけ……証拠も……」

「ないって？　でも、僕が話したら信じるんじゃないかな？　あの窮地を招いた君の言葉には、既に力はないと思うけど？」

檜山は追い詰められる。まるで弱つたネズミを更に翺るかのような言葉。まさか、こんな奴だったとは誰も想像できないだろう。二重人格と言われた方がまだ信じられる。

目の前で嗜虐的な表情で自分を見下す人物に、全身が悪寒を感じ震える。

「ど、どうしろってんだ!？」

「うん? 心外だね。まるで僕が脅しているようじゃない? ふふ、別に直ぐにどうしろってわけじゃないよ。まあ、取り敢えず、僕の手足となつて従つてくれればいいよ」

「そ、そんなの……」

実質的な奴隷宣言みたいなものだ。流石に、躊躇する檜山。当然断りたいが、そうすれば容赦なくハジメを殺したのは檜山だと言いふらすだろ。

葛藤する檜山は、「いつそコイツも」とほの暗い思考に囚われ始める。しかし、その人物はそれも見越していたのか悪魔の誘惑をする。

「白崎香織と園部優花、欲しくない?」

「ツ!? な、何を言つて……」

暗い考えを一瞬で吹き飛ばされ、驚愕に目を見開いてその人物を凝視する檜山。そんな檜山の様子をニヤニヤと見下ろし、その人物は誘惑の言葉を続ける。

「僕に従うなら……いずれ彼女達が手に入るよ。」

「……何が目的なんだ。お前は何がしたいんだ!」

あまりに訳の分からない状況に檜山が声を荒らげる。

「ふふ、君には関係のないことだよ。まあ、欲しいモノがあるとだけ言つておくよ。……」

それで？返答は？」

あくまで小バカにした態度を崩さないその人物に苛立ちを覚えるものの、それ以上に、あまりの変貌ぶりに恐怖を強く感じた檜山は、どちらにしろ自分に選択肢などないと諦めの表情で頷いた。

「……従う」

「アハハハハハ、それはよかった！ 僕もクラスメイトを告発するのは心苦しかったからね！ まあ、仲良くやろうよ、人殺しさん？ アハハハハハ」

楽しそうに笑いながら踵を返し宿の方へ歩き去っていくその人物の後ろ姿を見ながら、檜山は「ちくしょう……」と小さく呟いた……。

檜山が去って、その人物も宿へと戻ろうとした時、後ろから声が聞こえた。

「ふくん……ヤツパリ私の前の火球は檜山君だったんだ」

「……ッ、なんで君がここに?!」

振り返って、目に入った人物は、その彼女にとって予想外の人物であって驚愕するも内心見られたと舌打ちしながら、彼女は警戒する。

「そんなに警戒しなくても大丈夫だよ、——ちゃん、私としては檜山君だけじゃ心もとなから安心してるんだ」

「……まさか、園部さんに魔弾を撃ったのは君かい？」

現れた人物の発言で警戒をしていた彼女はある考えに行き着いて聞いてみると現れた人物は口角を上げてニヤツと笑みを深めて楽しそうに話します。

「うん、私だよ本当はあの女を落とすつもりだったのになく……あつ——ちゃん、あなたのその本性、光輝君とかに知られたくないよね？」

「……ッ」

現れた人物の脅しに彼女は口を噤んでしまう。もし、彼女のせいで自分のこの事を光輝達に知られたら計画が台無しになってしまう。

だから……

「……（いっそ、この女を利用するか殺すか）」

情報が漏れないように彼女は護衛用に使っていたナイフをこっそり手に忍ばせるがその人物はある提案を持ちかけた。

「だから、協力しない私達？」

その人物の提案に彼女は交渉の余地があると分かって、警戒はしながらもナイフをしまう。

「……目的は？」

「えーとね、もし、なぐ……ハジメ君の死体とかあつたらなんかで保存して私のに出来な



い？」

その人物の目的は自分のと同じぐらいの狂気的な内容で、彼女も流石に冷や汗を掻きながら苦笑いをする。

「君はそれで良いのかい？」

「うん、本当はあの女——園部優花を殺すのを手伝って欲しかったけど——ちゃん、——師だから、出来るかな〜と思つてさ」

その人物は彼女の天職を知っていた為、ホントは優花の殺害を目的だったが死んだと思われる愛しの彼の復活、そして自分のにするという目的に変更したらしい。

「……アハハ、狂つてるね」

「——ちゃんもでしょ？」

彼女は狂つてしていると自分でも理解していた。が、そんな自分が「狂つてる」と思つてしまう程、その人物も相当狂つていた。

「光輝君に知られたくないよね」

「……っ、わかつた、協力するよ」

その人物に脅されてしまい協力するしか無いが、彼女はいずれその人物の隙について立場を同等か上の立場に立とうと画作してやろうと。

彼女の答えを聞いた人物は協力してくれることに笑みを浮かべる。

「ふふ、ありがとう——ちゃん（よし、これでハジメ君の死体、あれば良いな♡）」  
こうして、ある悪意ある人物達の夜の会談が終わったのだった……。

## 九話 奈落の底

ピチヨン…ピチヨンと水が落ちる音がする。

冷たい微風が頬を撫で、冷え切った体が身震いした。頬に当たる硬い感触と下半身の刺すような冷たい感触に「うっ」と呻き声を上げてハジメは目を覚ました。

ボーとする頭、ズキズキと痛む失った片腕に眉根を寄せながら、片腕に力を入れて上体を起こす。

「痛っ…、ここは…：俺は確か…：」

ふらつく頭を片手で押さえながら、記憶を辿りつつ辺りを見回す。

周りは薄暗いが採取した緑光石の発光のおかげで何も見えないほどではない。それは地中深く自分で錬成し掘った穴だった。

「上手く、撒けたようだな。それに、腕の痛みが和らいでるのは…：この石のおかげか」

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

神結晶

アクアマリンの青をもっと濃くして発光させた感じの神秘的で美しく、この石は魔力

の塊で出来ており、どんな傷でも回復出来る、しかし失った物は治せない。

|||||

そんなレア鉱石を掘り当てたことに感謝していると、ハジメはポケットに手を突っ込むと何かを取り出す。

それは、優花の髪飾りだった。

「いや、よく生きれたな俺……」

それは落下途中のことだった。ハジメは落ちる中、光り輝く物が見え、それは優花の髪飾りだった。ハジメは彼女を投げ飛ばした際に落ちてしまつて、橋を壊したのと同じに落ちたのだろう。ハジメは急いでその髪飾りを回収しようと落下中に髪飾りを手にした時に偶然、水路であろう横穴を見つけ、そこからのハジメの行動は早かった。

錬成で作っていた槍で横穴近くの壁に深く突き刺しその勢いを利用して横穴に入ることができ一命を取り留めた。しかし、その後のことを楽観視し過ぎていたハジメは、その代償で……

「失ったもんは仕方ねえか……」

自分の左腕があつた部分を苦笑いして見ていた。

それは、意識を取り戻したハジメは、落ちた場所のフロアを探索していたときだった。

ハジメがいる場所は、同じオルクスである筈なのに、整備とかもされておらず人工的の洞窟と言う方が合っていた。

「もしかして、未到達階層か?」

そんな事を考えてると、奥の部屋から相当の圧を感じた。

「……………?!」

ハジメはすぐさま岩陰へと移動して身を隠す。この尋常じゃない圧は、もしかたらべヒモス以上の化け物かもしれないと感じたハジメは、岩陰からこつそりと奥の部屋を見る。しかし、ハジメの予想は外れ、その魔物は白い毛玉がピョンピョンと跳ねているのが見え、長い耳もある。見た目はまんまウサギだった。

「ウサギ? ……いや、普通のウサギじゃないな……アレは」

だが、ウサギと言うには少し大きさが中型犬くらいあり、後ろ足がやたらと大きく発達している。そして何より赤黒い線がまるで血管のように幾本も体を走り、ドクンドクンと心臓のように脈打っていた。物凄く不気味である。

「だが、はつきり分かるのは、明らかにベヒモスと同等かそれ以上だな」

あのウサギから放たれている圧は、ベヒモスに上回っており、今もハジメはウサギに対して少し恐怖を抱いている。

そして、岩陰に隠れたままウサギの様子を伺っていると……

「グルウア!!」

「!」

獣の唸り声と共に、これまた白い毛並みの狼のような魔物がウサギ目掛けて岩陰から飛び出したのだ。二尾の白い狼が現れ、ハジメは目を見開く。

その白い狼は大型犬くらいの大ききで尻尾が二本あり、ウサギと同じように赤黒い線が体に走って脈打っている。

どこから現れたのか一体目が飛びかかった瞬間、別の岩陰から更に二体の二尾狼が飛び出す。

再び岩陰から顔を覗かせその様子を観察するハジメは余りの緊張感により冷や汗が流れる時間にかかるかもしれないが此処の場所の状況と魔物達の強さの程度を知るために必要なことだ。しかし、勝負は一瞬だった。

「キュウー」

可愛らしい鳴き声を洩らしたかと思つた直後、ウサギがその場で飛び上がり、空中でぐるりと一回転して、その太く長いウサギ足で二体の二尾狼に回し蹴りを炸裂させた。

ドパンツ!

およそ蹴りが出せるとは思えない音を発生させてウサギの足が二尾狼の頭部へとクリーンヒットする。

すると、

ゴギヤ!

ベギヤ!

二体の二尾狼が一瞬にして頭が肉塊へとなった。

「……やべえな」

そんな感想を呟きながら此処の場所の魔物の強さを大体把握したハジメは場所を変えようと移動しようとした時にその辺の石を蹴ってしまう致命的ミスを犯した。

カランツ

その音は静寂な洞窟内に響き渡った。

「……っ!」

己の失態に、悪態を吐く。すると、首だけで振り返っていたウサギは体ごとハジメの方を向き、足をたわめグツと力を溜める。

「『錬成』!」

来る。と分かったハジメは、咄嗟に錬成で石壁を作るのだが……

「キュッ!」

バキヤツ

「グツ?! ガアアア!!」

それは、たった一度の蹴りで石壁は破壊されて、そのまま勢いでウサギの蹴りが迫る

が避けきれなかったためにハジメの左腕が変な方向に曲がってしまったって完全に腕が折れてしまう。

「グッ……」

変な方向に曲がる左腕を見て、完全に折れてると分かったハジメは、痛みなんか気にせずに、このチャンスの瞬間を無駄にしない。すぐさまナイフを錬成して、蹴りが終わって隙を見せてるウサギ野郎にぶん投げた。

「うおおおおお！ 死ねウサギ野郎！」

「キュッ?!」

グサッ

見事に投げたナイフはウサギの頭部に突き刺さる。そして、ウサギはその場で倒れ込むと瞳から光が無くなって絶命した。

「よっしやあー！」

ハジメは初の強敵の討伐に喜んだ。が、それはすぐさま終わりを告げてしまった。

「……グルルル」

「……ッ！」

凄い圧を感じ、ハジメは振り返ると巨体の魔物だった。二メートルはあるだろう巨軀に白い毛皮。例に漏れず赤黒い線が幾本も体を走っている。その姿は、たとえるなら熊



だった。ただし、足元まで伸びた太く長い腕に、三十センチはありそうな鋭い爪が三本生えているベヒモス以上の圧だった。

「クツ……」

あんな化け物に勝てるわけがないと判断したハジメは急いで、この場から逃げようと駆け出したのだが、その選択は余りにも遅すぎた。

「グルアアアア！」

グシャツッ！　　ブチュツッ！

「ガハッ！」

一瞬だった。ハジメはいつの間にか壁に埋め込んでおり全身が痛み出し、肺の空気が衝撃により抜け、咳き込みながら壁をズルズルと滑り崩れ落ちて倒れ込むと、ある違和感を感じる。

「ゴホゴホツゲボツ……ハアハア……ん？左腕の感覚が……」

違和感を感じながら、爪熊の方を見ると何かを咀嚼していた。それはハジメの左腕だった。一瞬、ハジメは痛みにも叫びそうになったが耐え、逃げることを選択する。

しかし、爪熊もハジメが逃げることをわかったのが、逃げるハジメを追い掛ける。それも狩人のように……

「グッ……… // 錬成 // !!」

壮絶な左腕の痛みを我慢しながらハジメは、爪熊から逃げ切れないと分かり錬成して穴を掘って逃げた。爪熊は、穴へと入ろうとしたがデカイ図体のせいで入れず、諦めたのかその場を去っていった。

そして大分穴を掘ったハジメは、左腕のことも相まって疲れ尽き寝てしまった。

そして、今に至る。

「くそ……これからどうするか」

何とかどうするか考えようとするが、頭が機能しない。それに奈落到落ちてから時間が経っており、時間の感覚も分からなくなっていた。持っていた鉱石も尽きた。左腕を失くし喰われた。フロア内にいるのは、ベヒモスと同等かそれ以上のバケモンだらけの魔界。

「ああ、もう……疲れたな」

ハジメは諦めを感じていた。普通は絶望して狂って死ぬか狂気の獣のどつちかになるのがオチだろう。でも何故かハジメは心から諦めがついて、このまま死のうと思つた。

——ドクンッ

その時、激しい鼓動と共に聞き慣れない声がハジメの脳内に響く。

『貴様——諦——のか?』

死のうとしてののに俺に知らない声が聞こえ苛立ち、何か言おうと思つていた次の瞬間、聞き慣れた声がハジメに聞こえだした。

『ハジメツ!』

——うるせえよ、浩介。

『ハジメ!』

——うるさい、そつとさせてくれ妙子。

『ハジメっち!』

——死なせてくれ、頼む奈々。

『ハジメ』

——優花。

その声は、ハジメにとって大切な幼なじみだ。死のうとするハジメを止める幻の声だった。

ハジメは薄目で彼女の髪飾りを見つめる。そして、この髪飾りを渡した時の愛しい彼女に告げた約束の言葉をハジメは思い出した。

『俺は優花の支えになる! 優花の笑顔を守り抜くこれからも、ずっと約束する!!』

その言葉が鮮明に頭の中に響き渡る。

「そうだ、俺は……守らないとつ、戻らないと……アイツ等の元へ……花の元へ！そして五人でまた楽しく過ごす為に——」

ハジメは、疲れ切っている自分の体を無理矢理に立ち上がらせる。

「生きねえと、な……約束したからな……こんな所で死ぬるかよつ」

ハジメの瞳に炎が再燃する。体を奮い立たせる。そして、ハジメは生き残るため、大切な人達の元へと戻るために歩み進む

「俺は生き残る!!」

~~~~~

迷宮のとある場所に二尾狼の群れがいた。

二尾狼は四く六頭くらいの群れで移動する習性がある。単体ではこの階層の魔物の中で最弱であるため群れの連携でそれを補っているのだ。この群れも例に漏れず四頭の群れを形成していた。周囲を警戒しながら岩壁に隠れつつ移動し絶好の狩場を探す。二尾狼の基本的な狩りの仕方は待ち伏せであるからだ。

しばらく彷徨っていた二尾狼達だったが、納得のいく狩場が見つかったのか其々四隅の岩陰に潜んだ。後は獲物が来るのを待つだけだ。その内の一頭が岩と壁の間に体を

滑り込ませジツと気配を殺す。これからやって来るだろう獲物に舌舐りしていると、ふと違和感を覚えた。

二尾狼の生存の要が連携であることから、彼らは独自の繋がりを持っている。明確に意思疎通できるようなものではないが、仲間がどこにいて何をしようとしているのかわかるとなくわかるのだ。

その感覚がおかしい。自分達は四頭の群れのはずなのに三頭分の気配しか感じない。反対側の壁際で待機していたはずの一頭が忽然と消えてしまったのだ。

どういふことだと不審を抱き、伏せていた体を起こそうと力を入れた瞬間、今度は仲間間の悲鳴が聞こえた。消えた仲間と同じ壁際に潜んでいた一頭から焦燥感が伝わってくる。何かに捕まり脱出しようともがいているようだが中々抜け出せないようだ。

救援に駆けつけようと反対側の二頭が起き上がる。だが、その時には、もがいていた一頭の気配も消えた。混乱するまま、急いで反対側の壁に行き、辺りを確認するがそこには何もなかった。残った二頭が困惑しながらも消えた二頭が潜んでいた場所に鼻を近づけフンフンと嗅ぎ出す。

その瞬間、地面がいきなりグニャアと凹み、同時に壁が二頭を覆うようにせり出した。咄嗟に飛び退こうとするがその時には沈んだ足元が元に戻っており固定されてしまった。もつとも、これくらいなら、二尾狼であれば簡単に粉碎して脱出できる。今ま

で遭遇したことの無い異常事態に混乱していなければ、そもそも捕まることもなかっただろう。

しかし、ハジメにとってはその混乱も一瞬の硬直も想定したこと。二頭を捕らえるには十分な隙だった。

「グルウア!?!」

悲鳴を上げながら壁に吞まれる二頭。そして後には何も残らなかった。

四頭の二尾狼を捕らえたのはもちろんハジメであつた。生きることを決意をした日から飢餓感も幻肢痛もねじ伏せて、神水を飲みながら生きながらえ、魔力が尽きないのいいことに錬成、魔法の鍛錬をひたすら繰り返した。

より早く、より正確に、より広範囲を。今のまま外に出てもあつさり死ぬのがオチである。神結晶のある部屋を拠点に鍛錬を積み、少しでも武器を磨かなければならない。その武器は当然、錬成だ。

ねじ伏せたとと言っても耐えられるというだけで苦痛は襲ってくる。しかし、飢餓感と幻肢痛は、むしろ追い立てるようにそして、大切な人達の元に戻る為、ハジメに極限の集中力をもたらした。

そしてハジメは雷魔法、錬成の技能が更に上昇させると神結晶から出た水滴を容器を錬成し入れ、槍を更に硬く鋭くすることを可能に出来たハジメは洞穴の周辺に罫を設

置き、二尾狼を罠に引き摺り込んだ。

「さて、すまねえが俺の生きる糧になってもらおうか……」

そして、ハジメは二尾狼に向かい魔法を放った

「轟け怒号の雷いかずち　我が敵を打ち滅ぼせ　我が仇あだなす敵を——『轟雷』！」

ハジメの新魔法『轟雷』はベヒモスレベルで硬い毛皮を持つ二尾狼を一瞬で絶命させた。

「……ふう、焦げてねえよな？」

まだ、威力の調整が出来てないハジメは二尾狼が焦げて食べない状態になってないか少し心配したが、死体を調べて大丈夫だった。

狩りを終えたハジメは一匹の二尾狼の死体を洞穴に持って帰り捌いて肉を剥ぎ取り雷魔法で火を起こしてから肉を焼焼いていく。

これは魔物肉、普通食べたら死ぬ代物である。だがハジメには考えがあった。

魔物の肉は普通食べたら死ぬ。なら、この神結晶の水を使えば何とかなるかもしれな  
いと思つたハジメは一か八かの賭けだが焼けた魔物肉を喰らいついた。

「あが、ぐうう、まじいッ！」

それは、食べなくもないがマズかったが神結晶の水（神水）で流し込んだ。

すると、ハジメの体に変化が起こりだす。

「あ？——ッ!? アガア!!」

突如全身を激しい痛みが襲った。まるで体の内側から何かに侵食されているようなおぞましい感覚。その痛みは、時間が経てば経つほど激しくなる。

「ぐうあああつ。な、何がっ——ぐうううっ!」

耐え難い痛み。自分を侵食していく何か。俺は地面をのたうち回る。幻肢痛など吹き飛ばような遥かに激しい痛みがハジメを襲う。

ハジメは震える手で懐から石製の容器を取り出すと、端を噛み砕き中身を飲み干す。直ちに神水が効果を発揮し痛みが引いていくが、しばらくすると再び激痛が襲う。

「ひいぐがああ!! なんで……なおらなあ、あがああ!」

体が痛みに合わせて脈動を始めた。ドクンツ、ドクンツと体全体が脈打つ。至る所からミシツ、メキツという音さえ聞こえてきた。

しかし次の瞬間には、体内の神水が効果をあらわし体の異常を修復していく。修復が終わると再び激痛。そして修復。神水の効果で気絶もできない。絶大な治癒能力が仇となつた形だ。

「グアツあが!—ゆ、う—かあ!」

ハジメは絶叫を上げ地面をのたうち回り、頭を何度も壁に打ち付けながら終わりの見えない地獄を味わい続けた。だが、優花、そして大切な幼なじみ達の元へ戻る為、ハジ



メは優花の髪飾りを御守りの様に握り締め、壮絶な痛みを耐えぬいていく。すると、再びハジメの体に変化が現れ始めた。

まず髪から色が抜け落ちてゆく。許容量を超えた痛みのせいか、それとも別の原因か、日本人特有の黒髪がどんどん白くなってゆく。次いで、元々あつた身長が更に伸び、体の内側に薄らと赤黒い線が幾本か浮き出始める。

超回復という現象がある。筋トレなどにより断裂した筋肉が修復されるとき僅かに肥大して治るといふ現象だ。骨なども同じく折れたりすると修復時に強度を増すらしい。今、俺の体に起こっている異常事態も同じである。

魔物の肉は人間にとつて猛毒だ。魔石という特殊な体内器官を持ち、魔力を直接体に巡らせ驚異的な身体能力を発揮する魔物。体内を巡り変質した魔力は肉や骨にも浸透して頑丈にしていく。

この変質した魔力が詠唱も魔法陣も必要としない固有魔法を生み出しているとも考えられているが詳しくは分かっていない。とにかく、この変質した魔力が人間にとつて致命的なのだ。人間の体内を侵食し、内側から細胞を破壊していくのである。

しかし、それを許さない秘薬が神水だ。

壊れた端からすぐに修復していく。その結果、肉体が凄まじい速度で強靱になっていく。

壊して、治して、壊して、治す。

脈打ちながら肉体に変化していく。

その様は、人から獣へと変化するようにハジメの絶叫は声をあげた。

「……ハアハア……成功か……流石は神水だな」

そしてハジメは全身の確認をしていく。

飢餓感がなくなり、壮絶な痛みにも幻肢痛も吹き飛んだようで久しぶりになんの苦痛も感じない。それどころか妙に体が軽く、力が全身に漲っている気がする。

途方もない痛みにも精神は疲れているもののベストコンディションといってもいいのではないだろうか。

「一旦、ステータスを見るか……」

魔物肉の凄さに驚きながらもハジメは懐に持っていた持っていたステータスプレートを取り出し現状の自分のステータスを確認する。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：8

天職：錬成師

筋力：200

体力：450



# 十話 兵器作製そして…

魔物肉を喰らって見た目が変貌したハジメは自分のステータスプレートを見て驚愕した。

「ハアッ?!」

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：8

天職：錬成師

筋力：200

体力：450

耐力：300

敏捷：350

魔力：500

魔耐：500

技能：錬成「+鉱物鑑定系」「+精密錬成」「+鉱物系探査」「+鉱物分離」「+鉱物融



へと紅い電気がバチツと弾け、全体に纏うことが出来た。

纏雷を発動してると、雷装とは違ってステータス強化には無いが、身体の痺れ、倦怠感がまるで無い。本当に雷を纏うだけだが、使えこのなせる様になれば電氣量、電圧量を調整出来るかもしれない。

「……なるほど。魔物の固有魔法はイメージが大事ってことか、最後は『胃酸強化』だな。まあ、これは文字通りだろう」

そして、ハジメは試す為に食いかけの魔物肉を眉を顰めながら一気に齧り付き食べる。

十秒……

一分……

十分……

何事も起こらない。

俺は次々と肉を焼いていき再び喰ってみる。しかし、特に痛みは襲って来なかった。胃酸強化のおかげか、それとも耐性ができたのか。

「……しっ」

ハジメは、毎回苦痛なく魔物肉を喰えることにガッツポーズをしながら喜びを顕にした。

~~~~~

ハジメは拠点に戻り、錬成や他の技能の鍛錬をしながら数日が経ち、ある鉱石を探していた。

それは、ハジメの左腕を喰らった爪熊をどうやって倒すのかだ。このフロアボスは確実にアイツだ。しかし今、作れる武器じゃ適わないだろう。それに、左腕も失っている。しかし、ハジメは試行錯誤を重ね唯一あの爪熊に対抗出来る武器を脳内設計で設計図を既に完成させていた。しかし、作れずにいた。理由は簡単。その武器の衝撃に耐えることが出来る鉱石が見つからなかったのだ。

「やっぱねえな……」

そんなことを呟きながら上を見たり、下を見たりと辺りを錬成で穴を作りながら鉱石を探していく。そして、数日が経ってハジメは二つの鉱石を見つけたことが出来た。

|||||

タウル鉱石

黒色で硬い鉱石。硬度8（10段階評価で10が一番硬い）。衝撃や熱に強いが、冷氣には弱い。冷やすことで脆くなる。熱を加えると再び結合する。

燃焼石

可燃性の鉱石。点火すると構成成分を燃料に燃焼する。燃焼を続けると次第に小さくなり、やがて燃え尽きる。密閉した場所で大量の燃焼石を一度に燃やすと爆発する可能性がある、その威力は量と圧縮率次第で上位の火属性魔法に匹敵する。

「これなら……」

この二つの鉱石を採取することが出来たハジメは笑みを浮かべながら急いで拠点に戻り脳内設計で作製していた設計図を元に武器の作製を始めた。しかし、タウル鉱石は鉄鉱石より加工するのが難しく何度もやり直す羽目になったのだが自分の積み上げてきた錬成技術で作製し、燃焼石も火薬の代わりとしてある物を作製する。

作製を始めて四日後、ハジメは一息つくくと、完成した武器——いや兵器を眺める。

「出来た……」



それは、音速を超える速度で最短距離を突き進み、絶大な威力で目標を撃破する現代兵器。全長は約三十五センチ、この辺りでは最高の硬度を持つタウル鉱石を使った六連の回転式弾倉。長方形型のバレル。弾丸もタウル鉱石製で、中には粉末状の燃燒石を圧縮して入れてある。

すなわち、大型のリボルバー式拳銃だ。

しかも、弾丸は燃燒石の爆發力だけでなく、ハジメの固有魔法「纏雷」により電磁加速されるといふ小型のレールガン化している。その威力は最大で対物ライフルの十倍である。

「名前は落雷……「ドンナー」にするか」

ハジメはこのリボルバーを「ドンナー」と名付けた。なんとなく相棒には名が必要と思つたからだ。

「クハツ……これで、あの爪熊と片腕だけでも堂々と殺り合えるな」

ハジメはドンナーの他にも現代兵器を参考に作つた兵器を眼前に並べて薄らと笑つたのだつた。

~~~~~

ハジメは爪熊と戦う前に更にステータスを強化しようと思いついた。魔物を倒しに向かう。

「……………」

ハジメは目的の魔物ウサギを見つけると、岩陰に隠れて気付かれない内にドンナーで狙いを定めてドンナーの引き金を引く。

ドパンツ！

流石にウサギも、電磁加速された秒速三・二キロメートルの弾丸は避けられなかったらしく頭が木端微塵ぱに砕け散って絶命した。わざわざ感電させる必要もなかったかもしれない。それくらい、ドンナーの威力は凄まじかった

「流石の威力だな……………」

ドンナーの凄まじさに唖然としながらもハジメは、ウサギの死体を拠点に持って帰り、焼いて食べた。

「むぐ、むぐ……………ウオエ……………」

ウサギの魔物肉を喰っても最初の時みたいに壮絶な痛みが無いのは安心したが余りにもマズさに優花の料理が恋しくなるが此処を生き抜く為だと思いついて我慢する。

「さて、初めて蹴りウサギの肉を喰ったわけだが……………ステータスは……………」

マズイ食事を終わらせたハジメはどんな風に強化されたのかと早速ステータスプ

レートを眺める。

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：12

天職：錬成師

筋力：400

体力：650

耐性：400

敏捷：600

魔力：800

魔耐：800

技能：錬成「+鉱物系鑑定」「+精密錬成」「+鉱物系探査」「+鉱物分離」「+鉱物融合」・雷属性適性・雷属性耐性・脳内設計「+想像設計」・魔力操作・胃酸強化・纏雷・天歩「+空力」「+縮地」・■■■■・言語理解

「……………やっぱりか」

ハジメは、自分の再び尋常じゃないほど上昇したステータスを見て確信に至った。やはり魔物肉を喰うとステータスが上がるようだ。二尾狼ではもう殆ど上がらなかった

ことを考えると喰ったことのない魔物を喰うと大きく上昇するらしい。

その考えだと、もう二尾狼とウサギの魔物と同等の魔物達を喰らってもステータスの上昇は見込めないだろう。

しかし、ステータスは上がったことだし、ハジメは新しく追加された技能を試すことにした。

早速、ハジメは“天歩”とやらを調べる。まず一番最初にイメージしたのは、ウサギのあの踏み込みだ。焦点速度が間に合わなくて体がブレて見えるほどの速度。“天歩”の横に「十縮地」とあるのはその技能ではないかと当たりを付ける。縮地といえれば地球でも有名な高速移動のことだ。俺は足元が爆発するイメージで一気に踏み込んでみる。

「……ウオツ?!」

体内の魔力が一瞬で足元に集まる。踏み込んだ足元がゴバツと陥没してしまい、ハジメは吹き飛んで顔面から壁にダイブしそうになるが、すぐ受け身の体勢を取って衝撃を弱めることに成功する。

「……危つなかった。だが、これなら加減を調節すれば良いし結果的に成功か……」

今回は踏み込みが強過ぎたが、この技能なら鍛錬を続ければウサギの様な動きが可能になるし、ドンナーと組み合わせれば更に強力となる踏んだ。

そんなハジメは、段々と爪熊を倒せる算段がついていくのを感じ笑みを浮かべてから次の新技能を試しにかかる。

「次は『空力』か……」

早速、ハジメは、再びウサギの動きを思い出しながら踏み出して空中に透明のシールドがあることをイメージする。そして、前方へと跳躍する。

「あっ……加減……痛つてえ!!」

またもや加減をミスしてしまい、顔面ダイブは避けることは出来たが勢いよく背中からゴツゴツとした地面に激突してしまう。直後に背中から激しい痛みを襲い、右手で背中を押さえながらゴロゴロと地面をのたうち回る。しばらく身悶え、痛みが引くと慥然とした表情で立ち上がる。

「……まあ、一応できたし……原因もわかったし」

前方に跳躍して背中を強打した原因は中途半端に足場ができたせいだった。要は躓いて転けたのである。どうやら「十空力」は空中に足場を作る固有魔法で間違いないようだ。

だが、この固有魔法は慣れたら、高機動の動きや戦闘が可能になるだろう。ハジメはそう思いながら、二つの固有魔法を掛け合わせた鍛錬を始めていく。

——目標は爪熊。

おそらく、遠距離からの銃撃で片はつくだろうが、念の為に鍛えておく。あの化け物より強い魔物がふらりと現れる可能性も否定できないのだ。迷宮では楽観視した者から死んでいく。爪熊を倒したら、この階層からの脱出口も探さなければならぬ。ハジメは気合いを入れ直して訓練をしていくのだった。

~~~~~

迷宮の通路を、姿を霞かすませながら高速で移動する影があった。

ハジメである。〃天歩〃を完全にマスターしたハジメは、〃縮地〃で地面や壁、時には〃空力〃で足場を作って高速移動を繰り返し宿敵たる爪熊を探していた。

本来なら脱出口を探すことを優先すべきなのだろうが、ハジメはどうしても爪熊を殺りたかった。しかし、探している最中に爪熊に奇襲されたら元の子も無いので先に見つけて討伐をするのを優先した。

「……………臭え」

探していく内に、周辺から死体の腐肉臭が充満している場所を見つけたハジメ。

その時、何処からか獣の唸り声がハジメの耳に入る。

「グルウア！」

「!」

声が出た方向にハジメは駆け抜けると、奴の姿を捉える見ことが出来た。当の爪熊は新しい獲物が来たと思いきや堂々とハジメを待っている。

その様子にハジメは不敵な笑みを浮かべながら言葉が通じないと思うが話しかける。

「よお、爪熊。久しぶりだな。俺の腕は美味かったか?」

「グルウ」

爪熊はハジメの問いに答えるかのように唸った。

「クハツ……リベンジマツチだ。まずは、俺が獲物ではなく敵だと理解させてやるよ」

そう言つて、ハジメは不敵な笑みを浮かべるとドンナーを抜いて銃口を真っ直ぐに爪熊へ向け告げる。

「俺がお前を殺して喰つてやるよ」

その宣言と同時にハジメはドンナーを発砲する。ドパンツ!と炸裂音を響かせながら毎秒三・二キロメートルの超速でタウル鉱石の弾丸が爪熊に迫る。

「グウウ!!」

爪熊は咄嗟に崩れ落ちるように地面に身を投げ出しながら回避する。弾丸を視認して避けたのではなく、発砲よりほんの僅かに回避行動の方が早かったことから、おそらくハジメの殺気に反応した結果だろう。流星は階層最強の主である。二メートル以上

ある巨軀きよくに似合わない反応速度だ。

だが……

「それぐらい想定内だ」

最初は避けると想定していたハジメは、一発目の弾丸は<sup>ブラフ</sup>、二発目は、避ける場所を狙って発砲したのだ。

最初の発砲は避けるのだが、二発目は直撃してしまつて死ぬには至らなかつたが、爪熊の肩の一部が抉れて白い毛皮を鮮血で汚しているのを見てハジメは口角を上げる。

爪熊の瞳に怒りが宿る。どうやらハジメを殺すべき敵として認識したらしい。

「ガアアア!!」

咆哮を上げながら物凄い速度で突進する。二メートルの巨軀と広げた太く長い豪腕が地響きを立てながら迫る姿は途轍もない迫力だ。

「来いよー爪熊アアア!——『雷閃』!」

ハジメは爪熊に新しく編み出した雷の斬撃魔法を放つが爪熊は突進しながらも側宙して斬撃を回避していく。

「だが、これは避けられねえよな!」

ハジメは『雷閃』が爪熊に届く前に天歩と空力で高速移動すると、爪熊の真上から緑光石で作りに出した『閃光手榴弾』を放ち、カツと強烈な光を放つ。



「グアツ?!」

「……」

爪熊はモロにその閃光を見てしまい一時的に視力を失ったのか両腕をめちゃくちゃに振り回しながら、咆哮を上げもがく。何も見えないという異常事態にパニックになっていた。その隙にハジメはドンナーを発砲する。

「くたばりやがれ!」

ドパアアアンツ!

「グルウアアアアア!!!」

電磁加速された絶大な威力の弾丸が暴れまわる爪熊の左肩に命中し、根元から吹き飛ばされた爪熊はその生涯でただの一度も感じたことのない激烈な痛みに凄まじい悲鳴を上げる。その肩からはおびただしい量の血が噴水のように噴き出している。吹き飛ばされた左腕がくるくると空中を躍り、やがて力尽きたようにドサツと地面に落ちた。

ハジメも勢いのあまり壁に激突してしまう。

「ルグウウウウ」

低い唸り声を上げながら爪熊が自らの血溜りに地響きを立てながら倒れた。その眼光は未だ鋭く殺意に満ちていてハジメを睨んでいる。

「……っ」

ハジメも真つ直ぐその瞳を睨み返し、痛みに耐えながらゆっくり立ち上がった。そして、ホルスターに仕舞っていたドンナーを抜きながら歩み寄り、爪熊の頭部に銃口を押し当てた。

「……俺の勝ちだ」

その言葉を告げると共に引き金を引く。撃ち出された弾丸は主の意志を忠実に実行し、爪熊の頭部を粉碎する。戦闘が終わり、静まり返った迷宮内に一発の銃声が木霊した。

「ふう……」

戦闘を終えたハジメは一息つくくと、爪熊の死体を拠点に持って帰って死体を捌くと焼いて喰らった。

「ウゲエ……マズ……」

勿論、味は不味かった……。

|||||  
南雲ハジメ 17歳 男 レベル：17

天職：錬成師

筋力：600

体力：800

耐性：600

敏捷：750

魔力：10000

魔耐：10000

技能：鍊成「+鈹物系鑑定」「+精密鍊成」「+鈹物系探查」「+鈹物分離」「+鈹物融合」・雷屬性適性・雷屬性耐性・腦內設計「+想像設計」・魔力操作・胃酸強化・纏雷・天步「+空力」「+縮地」・風爪・・言語理解

|||||

## クラスメイトside 失意と決意

時間は少し逝る。

ハイリヒ王国王宮内、召喚者達に与えられた部屋の一室で、奈々と妙子は、暗く沈んだ表情で未だに眠る親友を見つめていた。

あの日、迷宮で死闘と喪失を味わった日から既に五日が過ぎている。あの後、宿場町ホルアドで一泊し、早朝には高速馬車に乗って一行は王国へと戻った。とても、迷宮内で実戦訓練を続行できる雰囲気ではなかったし、クラスメイトの中でも強かったハジメが死んだ以上、国王にも教会にも報告は必要だった。

それに、厳しくはあるが、こんな所で折れてしまつては困るのだ。致命的な障害が発生する前に、勇者一行のケアが必要だという判断もあった。

二人は、王国に帰って来てからのことを思い出し、優花に早く目覚めて欲しいと思いつながら、同時に眠つたままでも良かったと思つていた。

帰還を果たしハジメの死亡が伝えられた時、王国側の人間は誰も彼もが愕然とした。王国にも貢献し、神の使徒の中でも実力者だったハジメの死は相当な損失だった。

しかし国王やイシュタルは、強力な力を持った勇者一行が迷宮で死ぬこと等あつてはならないこと。迷宮から生還できない者が魔族に勝てるのかと不安が広がつては困るのだ。神の使徒たる勇者一行は無敵でなければならぬのだから。

「ハジメを無能だつた扱いにし処理することにしたのだ」

それから、ハジメを無能扱いにしてから悪し様にハジメを罵る者が出てきた。

もちろん、公の場で発言したのではなく、物陰でこそそと貴族同士の世間話という感じではあるが。やれ死んだのが無能でよかつたのだ、神の使徒でありながら役立たずなど死んで当然だの、それはもう好き放題に貶していた。まさに、死人に鞭打つ行為に、奈々達は激怒し、王国側に抗議をした。

その中には、リリアーナ姫、ハジメと共同作業をした王国の錬成師達、騎士団もハジメの扱いに激怒して抗議をした。勇者である光輝も激しく抗議したことで国王や教会も悪い印象を持たれてはマズイと判断したのか、ハジメを罵つた人物達は処分を受け……

光輝は死んだ人の扱いにも心を砕く優しい勇者であると噂が広まり、光輝の株が上がリ、迷宮内でたつた一人でベヒモスと戦い相打ちになり戦死したハジメは神の使徒と騎士団を守つた英雄の扱いになった。

しかし本当は、彼を死に追いやったのはクラスメイトの誰かが放つた二つの流れ弾だ

というのに。

クラスメイト達は図ったように、あの時の誤爆の話をしなさい。自分の魔法は把握してははずだが、あの時は無数の魔法が嵐の如く吹き荒れており、万一分の魔法だったらと思うと、どうしても話題に出せないのだ。それは、自分が人殺しであることを示してしまうから。

結果、現実逃避をするように、あれはハジメが自分で何かしてドジったせいだと思うようにしているようだ。

しかし、ある女子生徒の発言で場は乱れることになった。

『園部さんが南雲君を落としたんじゃない？』

『……』

『……っ！ 香織アンタツ！』

それは白崎香織だった。それを聞いた雫は怒り、香織に物凄い形相で怒鳴った。しかしこの発言は完全に場の空気を持っていつてしまった。

『……そうだよね』

『そうかも……』

『園部が落としたんじゃない』

そんな、香織の発言に賛同していく者が増え、優花のせいにする者が増えていった。

しかし……

Bannon!

『てめえ等、いい加減にしろおお!!』

ある一人の男子生徒が机に拳を突き立てながら立ち上がりキレた。それはハジメの親友である浩介だった。その怒声でクラスメイト達は余りにも浩介の怒りを感じて怒り息を呑む。

しかし、浩介の怒りは治まらない。

『てめえ等は、なんで園部が落としたことにしようとしてんだ?! アイツはただ恋人がヨロけて倒れてしまったのを見て、心配して助けに行っただけだ! ハジメを本当に落とした奴はハジメと園部に魔法を放った奴だろ!!』

『そうよ。優花をせいにするなんて許さないわ!!』

『酷いよ、皆!!』

『そうだ遠藤の言う通りだ!』

『香織、流石にその発言は許せないわ撤回しなさい』

『俺も、園部はそんな奴に見えねえな』

『鈴もユウカちゃんはそんなことしなと思うよ! ねっエリリン!』

『うん、私も鈴と同じかな……』

浩介の言葉に奈々、妙子、清水、雫、龍太郎、鈴、恵理も同意していく。しかし、ご都合主義勇者の登場によって更に場が混乱と化してしまう。

『落ち着け皆！ 香織のいまさつきの発言に悪意は無い！ ただ、香織の目からは園部さんが悪く見えただけだと思うし、もしかしたら本当にそうかもしれない可能性もある！』

『なんだと?!天之河てめえ!』

『つ、何をする遠藤?!』

光輝の発言に完全にキレてしまった浩介は、光輝の胸ぐらを掴みながら彼に対する本音を怒鳴りながら告げる。

『そもそも、てめえが変に経験も積んでねえのにベヒモスとなんかと戦うからハジメが足止めをすることになったんだ! てめえなんか勇者じゃねえ!ただの愚者だ!』

浩介の発言に光輝は困惑から怒りの表情に変え、浩介に掴みかかりながら怒声を上げるが浩介は言葉を続ける。

『なんだとお!』

『何が全員救うだ! 守れてねえじゃねーか! てめえは言ったことを行動に移せない口だけ野郎だ!』

『……つ、遠藤オオオ!』



浩介の言葉に完全にキレた光輝は浩介を殴ろうと手を上げようとするが……

『ちよつ、やめなさい光輝!』

『光輝、落ち着けやがれ!』

雫と龍太郎が殴りかかろうとする光輝を止める。流石のステータスが高い光輝でも、次に高いぐらいの雫と龍太郎の拘束には動けず、浩介にも幼なじみである妙子と奈々が止めに入る。

『浩介、ストップ!』

『浩ちゃん、ケンカはダメツ!』

バンツ!

『お前達! 何をしとるんだ!!』

光輝と浩介の二人のケンカを止めようとしている最中に部屋の扉が大きい音と共に開き、其処には生徒達に事情聴取をしに来たメルド団長がいた。メルド団長は怒声を上げながら二人のケンカを止めに入り、原因である浩介と光輝を叱り、変に発言をして場を乱した、香織には嚴重注意をして、この場は静まり落ち着きを取り戻していた。

~~~~~

メルドは、あの時の経緯を明らかにするため、生徒達に事情聴取をする必要があると考えていた。生徒達のように現実逃避して、単純な誤爆であるとは考え難かったこともあるし、仮に過失だったのだとしても、白黒はつきりさせた上で心理的ケアをした方が生徒達のためになると確信していたからだ。

こういうことは有耶無耶にした方が、後で問題になるものなのである。なにより、メルド自身、はつきりさせたかった。『助ける』と言っておいて、ハジメを救えなかったことに心を痛めているのはメルドも同様だったからだ。

しかし、メルドは行動すること叶わなかった。イシユタルが、生徒達への詮索を禁止にしてみましたからだ。メルドは食い下がったが、国王にまで禁じられては堪えるしかなかった。

「クソツッ！」

ドンツッ！　ピキツ、パラパラ……

メルドは自分の不甲斐なさに苛立ち壁を殴りつけると大きな音が鳴る。殴りつけた壁は、少しヒビが入っているほどだ。

「(クソツッ、聖教め……俺が動くことが分かかっていて、先に手をうっていたか)」

聖教がメルドが行動すると分かかって先手を打っていたことに、内心舌打ちする。そして、メルド団長は五年程前に王国と聖教から追放された、ある神官の青年の言葉を思い

出していた。

『メルドさん、聖教をあまり信用しないで下さい。魔族、亜人族の全員を悪として見ないで下さい。そして王国

を民達を守ってくれませんか』

そんな言い残して、王国を去っていった彼の言葉をメルドはやつと理解したかもしれない。

「なあ、アレス……俺は国を守れているのだろうか……」

メルドは今は此処には居ないある青年の名前を呟いて、空を見上げながら黄昏ていた。

~~~~~

「優花……怒るよね？」

あの日から一度も目を覚ましていない優花の手を取り、そう呟く妙子。

医者 of 診断では、体に異常はなく、おそらく精神的ショックから心を守るため防衛措置として深い眠りについているのだろうということだった。故に、時が経てば自然と目を覚ますと。妙子と奈々は優花の手を握りながら、「どうかこれ以上、私達の幼なじみを

傷つけないで下さい」と、誰ともなしに祈った。

その時、不意に、握り締めた優花の手がピクツと動いた。

「!? 優花! 聞こえる!? 優花!」

「ユウカっち!」

妙子と奈々が必死に呼びかける。すると、閉じられた優花の目蓋がふるふると震え始めた。二人は更に呼びかけた。その声に反応してか優花の手がギユツと二人の手を握り返す。

そして、優花はゆっくりと目を覚ました。

「優花!」

「ユウカっち!」

「……妙子、奈々?」

ベッドに身を乗り出し、目の端に涙を浮かべながら優花を見下ろす二人。優花は、しばらくボーと焦点の合わない瞳で周囲を見渡していたのだが、やがて頭が活動を始めたのか見下ろす二人に焦点を合わせ、名前を呼んだ。

「ええ、そうよ。私よ。優花、体はどう? 違和感はない?」

「そうだよ、大丈夫なのユウカっち?」

「う、うん。平気。ちよつと怠いけど……寝てたからだろうし……」

「そうよね、もう五日も眠っていたのだもの……怠くもなるわ」

そうやって体を起こそうとする優花を補助し苦笑いしながら、どれくらい眠っていたのかを伝える妙子。優花はそれに反応する。

「五日？ そんなに……どうして……私、確か迷宮に行つて……それで……」

徐々に焦点が合わなくなっていく目を見て、マズイと感じた妙子が咄嗟に話を逸らすうとする。しかし、優花が記憶を取り戻す方が早かった。

「それで……あ………ハジメは……落ちたんだよね私を助けた為に……」

「っ……それは」

「わかつてる大丈夫だから二人共」

「ユウカっち……」

優花は悲痛な表情を浮かべながら事の状態を理解していた、その光景を二人共は心配そうに見つめた。

「ねえ……二人共、私が寝てる間にあった出来事を教えて？」

「……っ！ うん、わかった」

そして、妙子は悔しそうに下唇を噛みながら優花が寝てる間に起こった出来事を話した。

「……そうだよね、当然、近くにいたし、魔力弾も当たった私が責められるよね」

優花は自分がハジメを落としてしまった一因だと思っただろうと思われてるだろうと思っていたが話を聞いてホントにそう思われてると知り、俯いてしまいが奈々が優花を励ます為に口を開く。

「いやっ、ユウカっちは悪くない！悪いのはユウカとハジメっちに魔法を放った人だよ！」

「ありがと、奈々」

優花は奈々の優しさに笑みを浮かべながら感謝していると妙子が優花の目を見ながら話しかける。

「ねえ、優花あなたこれからどうする？」

「私は……」

「ねえユウカっち、私達と一緒に愛ちゃん護衛隊を作って一緒に守ろ？」

「えっ、護衛？」

優花が答える前に奈々が話を持ち掛けた。しかし、何故、愛子を護衛する意味が分からない優花は二人に聞いた。

「愛ちゃん先生の護衛って何で？」

「えっと、愛ちゃんね……なんか農地の改革の為に王国を離れるんだ。護衛もいるけど聖教の神殿騎士の人達だから……ほらハジメっちも言っていたじゃん」

そう、以前から聖教のことを信用してなかったハジメは迷宮に向かう前に自分達にやることを伝えていた。

『お前等、余り聖教を信用すんなよ。アイツ等は絶対に何か裏があるし胡散臭せえ、特に上の連中はな』

そんなことをハジメは自分達に伝えていたことを優花は思い出した。

「例えば、言ってたね」

「うん、だからユウカも一緒に……」

「いや、私は迷宮に行く」

「えっ……」

優花は奈々の誘いを断り、「迷宮に行く」と言った。

「でもっ」

「私ね、ハジメは生きてると思ってる。だって、ハジメだよ？何時だって守ってくれた私達の幼なじみよ」

優花は真剣な表情で胸に手を合わせながら話す。

「じゃあ、私達も迷宮に……」

「それはダメッ」

「なんで？」

妙子は優花が迷宮に行くなら自分も行くと言ったが断られ、理由を聞いた。

「二人には、愛ちゃん先生を守っていて欲しい。ほら、ハジメが言ってた様に聖教の人達は信頼出来ないし、ハジメを無能扱いにしようとした奴等なんか信用しない」

「そうだけど……でも優花は一人で平気なの？」

「大丈夫だ。園部の護衛は俺に任せとけ」

「へっ？」

妙子は優花の言葉に納得はしたが、迷宮は一人で大丈夫なのかと聞こうとしたら後ろから声が出て、妙子は変な声を出しながら振り向く。

「誰……って浩介いたの？」

「えっ、浩ちゃんいたんだね」

妙子と奈々は浩介がいたことに驚くが浩介はそんな二人に少し涙を浮かべながら声を上げる。

「いたわっ！　　ずつとこの部屋の扉の前で警備していたらお前等が騒ぐから中に入ってたんだよ……気付けよ！」

「ごっつ、ごめん……」

「浩介は良いの？」

浩介の発言に妙子は苦笑いしながら謝ると優花は浩介にホントに良いかと聞く。



「ああ、大丈夫だ。ハジメと約束したしな自分に何かあったら園部達を頼むってな……」  
「そう……ありがと浩介」

優花は手伝つてくれる浩介に笑みを向けながら感謝を伝えると浩介は親指を立てグッドポーズをする。

「ああ、どういたしまして」

しかし、そんな浩介に妙子と奈々が詰め寄って優花の安全を頼むように伝える。

「浩介、優花に何かあったら全裸にして吊るすね」

「浩ちゃん、ユウカを頼んだよ」

「おっおう、任せろ……菅原、言ってる事怖えよ」

「ん、何か言った？」

「いえっ何も言ってますん菅原様！」

「よろしい」

「浩ちゃん、おもしろーい」

「ふふ」

そんな、妙子はほぼ脅迫めいた感じで浩介の顔は引き攣る。そんな光景を見て優花は、三人の幼なじみのおかげで少し気が楽になった。

そして……

「ハジメ、待っていてね。絶対助けに行くから」

彼女は決意した。彼を最愛の人との再開が出来ることを願って前へと歩み出したのだった……。

## 十一話

## 奈落の底の封印部屋

【オルクス大迷宮】の奈落到ちた男、ハジメは周りをよく見ながら歩き回りながら諦めといった感じでボソツと呟いた。

「やっぱり、上への階層の道はないか……」

ハジメは爪熊を殺し喰らってから望み薄だったが上の階層へと繋がる道を探していたが見つからず苦悩していた。唯一見つかったのは、下へと繋がる道だった。

「錬成も無意味だったしな……」

なおハジメは、更に強くなった錬成でなら直接上階への道を作ればいいじゃないというダンジョンのなんたるかを軽く無視する方法は既に試したが……結果、上だろうと下だろうと、一定の範囲を進むと何故か壁が錬成に反応しなくなるということが分かった。その階層内ならいくらでも錬成できるのだが、上下に関してはなんらかのプロテクトでも掛かっているのかもしれない。

この【オルクス大迷宮】は、神代に作られた謎の多い迷宮なのだ。何があっても不思議ではない。

「まあ、もしかしたら下に行つた方が脱出に繋がるかもな……」

そう言い聞かせながらハジメは下へと向かうと決めると、下に繋がる道を通つていった。下の階層は明かりも一切なくとにかく暗い場所だった。

「暗いな……」

地下迷宮である以上それが当たり前なのだが、今まで潜つたことのある階層は全て緑光石が存在し、薄暗くとも先を視認できないほどではなかった。

だが、どうやらこの階層には緑光石が存在しないらしい。しばらくその場に止まり、目が慣れて多少見えるようにならないかと期待していたが、何時まで経つてもさほど違いはなかった。ハジメは、爪熊の毛皮と錬成した針金で作成したりユツクから緑光石で作つたランプを取り出し灯りとする。

はつきり言つて暗闇で光源を持つなど魔物がいるとすれば自殺行為に等しいが、こうでもしなければ進むことができないとハジメは割り切つた。ただし、右手を塞ぐわけにはいかなないので、肘から先のない左腕に括りつける。

しばらく進んでいると、通路の奥で何かキラリと光つた気がして、警戒を最大限に引き上げながら進んでいく。

「……………」

なるべく、もの陰に隠れながら進んでいると、不意に左側に嫌な気配を感じた。咄嗟

に飛び退きながら緑光石を向けると、そこには体長二メートル程の灰色のトカゲが壁に張り付いており、金色の瞳でハジメを睨んでいた。

「トカゲ型の魔物か……デケエな」

ハジメがトカゲを観察していた。その時、その金眼が一瞬光を帯び出す。

次の瞬間……

「ッ!？」

ハジメの左腕がビキビキと音を立てながら石化を始める。石化は直ぐに括りつけた緑光石にも及びものの数秒で石化させるとバリツと音を立てて砕け散らせた。光源が失われ、辺りを暗闇が覆う。腕の石化は進んでおり既に肩まで侵食していた。

「チッ……!？」

ハジメは、トカゲの石化系の固有魔法に舌打ちして、魔物の皮と針金で作った懐のホルスターから神水を取り出し一気に呷った。すると、期待した通り石化は止まり、見る見ると石化部分を正常に戻していったが本能的にマズイと感じたハジメは腰のポーチから「閃光手榴弾」を取り出すと、金眼トカゲのいた辺りに投げ込む。同時に、暗闇の向こうで再び金眼が輝いた。見えないことも構わず「縮地」を使い、一瞬でその場を離脱する。

すると、ハジメのいた場所の後ろにあった岩の色が少し変わり、次いで風化したよう

にボロボロと崩れ出したのを見て苦笑いをする。

「相当強えな。あのトカゲ……いや、石化させるからバジリスクか」

そろそろ、投げた閃光手榴弾が爆発することに気が付いたハジメはドンナーを抜いて銃身を目の前にかざすことで盾にしなからグツと目をつぶった。

その瞬間、カツ！ と強烈な閃光が周囲を満たし、視界を光で塗りつぶす。

「クウア!？」

おそらく今まで感じたことがないだろう光量に混乱するバジリスクの姿が闇の中に浮かび上がる。

その瞬間に、ハジメはすかさず発砲した。絶大な威力を秘めた弾丸が、狙い変わらずバジリスクの頭部に吸い込まれ頭蓋骨を粉碎し中身を蹂躪する。弾丸は、そのまま貫通し奥の壁に深々と穴を空け、シューと岩肌を焼く音を立てた。電磁加速させているため、当たった場所が高温を発しているのだ。熱に強く、硬いタウル鉱石だからこそその威力だろう。

「撃破つと……他はいねえよな」

ハジメはバジリスク撃破に喜びつつも周囲を警戒をする。そしてバジリスクに近づくと、素早くその肉を切り取りその場を離脱した。ほとんど何も見えない状況では流石にのんびり食事するわけにもいかない。ハジメは一先ず探索を進めることにした。

闇の中を歩き続けるハジメは既に、体感では何十時間と探索を続けていたが、階下への階段は未だ見つかっていない。

「今回はここまでにして……メシにするか」

道中、倒した魔物や採取した鉱石も多く、そろそろ持ち運びに不便なので、ハジメは拠点を作ることにした。

適当な場所で壁に手を当て錬成を開始する。特に問題なく壁に穴が空き、奥へと通路ができた。ハジメは連続で錬成し、六畳程の空間を作った。そして、今日殺した、バジリスクと、羽を散弾銃のように飛ばしてくるフクロウのと、六本足の猫を纏雷で焼いて丸焼きにしたがそのグロテスクな見た目に表情が引き攣るも、これも、生き抜くためだと我慢する。

「……………いただきます」

バジリスクの丸焼きを手にとって、むぐむぐと喰っていると次第に体に痛みが走り始めた。

「……………っ?!」

ハジメはこの痛みは、これは強化だと分かると、この魔物は爪熊と同等以上の強さを持つていると察する。確かに、暗闇という環境と固有魔法のコンビネーションは厄介だったが、もつとも、ドンナーによる射撃と雷魔法が当たれば大体、木っ端微塵や黒焦

げになるのでハジメ的には爪熊以下だと思っていたがどうやら違うらしい。

神水を飲みながら痛みを無視してハジメは喰い続ける。幻肢痛から始まり苦痛続きだった段々、痛みに強くなっていた。

「むぐ、ふうー、ごちそうさま。さて、ステータスは……」

そう言つてステータスプレートを取り出すハジメ。

現状は……

|||||

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：23

天職：錬成師

筋力：800

体力：950

耐性：800

敏捷：900

魔力：1200

魔耐：1200

技能：錬成「+鉱物系鑑定」「+精密錬成」「+鉱物系探査」「+鉱物分離」「+鉱物融合」・雷属性適性・雷属性耐性・脳内設計「+想像設計」・魔力操作・胃酸強化・纏雷・天



歩「十空力」「十縮地」・風爪・夜目・気配感知・石化耐性・■■■■・言語理解

「……上がったな」

予想通り大幅に上昇して技能欄も三つ増えてる。確かによくよく見ると、確かに先程より遥かに周りが見えることに気が付いたハジメは、これが“夜目”の能力だと理解すると同時に、この階層には必須だったので手に入れられたことに笑みを浮かべる。

後は、文字通りの技能だろう。耐性と気配感知が付くのは有難いことだと思いつながら、ステータス確認を終えハジメは消耗品を補充するため錬成を始めていく。

奈落の生活から始まったこの作業に、ハジメはもう慣れてきていた。弾丸は一発作るのにも途轍もなく集中力を使う。何せ、超精密品である。ドンナーに刻まれたライフリングが無意味にならないようにサイズを完璧に合わせる必要がある。炸薬の圧縮量もミスは許されない。一発作るのに三十分近く掛かるのだ。自分でもよく作れたものだと思う。人間、生死がかかると凄まじい力を発揮するものだと思いつながらに感心してしまう。

「よし、行くか……」

ハジメは、消耗品の補充を終え、立ち上がると迷宮の攻略を再開する。“夜目”のおかげで問題なく進むハジメは、遂に階下への階段を見つけると躊躇いなく踏み込んだが

足に違和感を感じる。

「なんだこれ……沼?」

その階層は、地面がどこもかしこもタールのように粘着く泥沼のような場所だった。足を取られるので凄まじく動きにくい。ハジメは顔をしかめながら、せり出た岩を足場にしたたり“空力”を使ったりしつつ探索を開始する。

「……!」

周囲の鉱物を“鉱物系感知”の技能で調べながら進んでいると、途中興味深い鉱石を発見した。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

フラム鉱石

艶のある黒い鉱石。熱を加えると融解しタール状になる。融解温度は摂氏50度ほどで、タール状のときに摂氏100度で発火する。その熱は摂氏3000度に達する。燃焼時間はタール量による。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

「……マジ?」

“鉱物系鑑定”でフラム鉱石の説明を見てハジメは自分のアドバンテージがなくなることに啞然としてしまう。

「くそつ、くそつ火気厳禁かよ……」

発火温度が百度ならそう簡単に発火するとは思わないが、仮に発火した場合、連鎖反応でこの階層全体が摂氏三千度の高熱に包まれることになる。流石に、神水をストツクしていても生き残る自信はないハジメは「ドンナー」と「雷魔法」を封印したまま此処の階層の探索を再開する。

しばらく進んでいると三叉路に出た。近くの壁にチェックを入れセオリー通りに左の通路から探索しようと足を踏み出した。

その瞬間……

ガチンツ！

「!？」

ハジメが踏み出したと同時に鋭い歯が無数に並んだ巨大な顎門を開いて、サメのような魔物がタールの中から飛び出してきた。

「今度はサメかよつ！」

ハジメの頭部を狙った顎門は歯と歯を打ち鳴らしながら閉じられる。咄嗟に身を屈めてかわしたもののハジメは戦慄するがある疑問に至る。

「クソつ、なんで『気配感知』が反応しねえ！」

そうハジメは、ずっと『気配感知』をしていた。しかし、今戦っているサメは、感知

に反応しないのだ。喰い損ねたサメはドボンと音を立てながら再びタールの中に沈み見えなくなつてしまひ再び“気配感知”をするが……

「チツ……やつぱり反応無しっ」

やはりか気配が掴めないことに歯噛みするハジメ。もしかしたら、サメは探知阻害系の固有魔法を持つてるのかもしれないと予想立てる。

そうとなればと、ハジメは策を張り巡らせながら、とにかく止まっただけではやられると“空力”を使い移動を再開する。すると、そのタイミングを見計らつたかのように、再びサメが飛び出してきた、それを予想していた俺は不敵な笑みを浮かべて声を上げる。

「死ねっー！」

ザクツ！

サメが近寄ると、ハジメはその頭部めがけてドンナーを振り下ろした。“風爪”がサメの頭部を両断する。爪熊のように三本も出たりはしないが、その鋭利さはその辺の名刀を遙かに凌ぐ。近接では実に頼りになる固有魔法だ。

「ふう……流石、爪熊の固有魔法だな」

ハジメは喰らつた爪熊の固有魔法の有能さに感嘆しながら殺したサメに視点を移す。

「それじゃ、頂くとするか」

その後、ドロドロとした液体を取るのに苦勞したがサメの肉を切り取り保管するとハジメは探索を続け、遂に階下への階段を発見した。

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：24

天職：錬成師

筋力：1000

体力：1100

耐性：1000

敏捷：1000

魔力：1300

魔耐：1300

技能：錬成「+鉱物系鑑定」「+精密錬成」「+鉱物系探查」「+鉱物分離」「+鉱物融合」・雷属性適性・雷属性耐性・脳内設計「+想像設計」・魔力操作・胃酸強化・纏雷・天歩「+空力」「+縮地」・風爪・夜目・気配感知・気配遮断・石化耐性・■■■■・言語理解

ハジメの迷宮攻略は続いた。

サメの階層から更に五十階層は進んだ。ハジメに時間の感覚は既になかったので、どれくらいの日数が過ぎたのかはわからない。それでも、驚異的な速度で進んできたのは間違いないかった。

その間にも理不尽としか言いようがない強力な魔物と何度も死闘を演じてきた。

例えば、迷宮全体が薄い毒霧で覆われた階層では、毒の痰たんを吐き出す二メートルのカエルや、麻痺の鱗粉を撒き散らす蛾に襲われた。常に神水を服用してその恩恵に預からなければ、ただ探索しているだけで死んでいたはずだ。

カエルの毒をくらったときは直接神経を侵され、一番最初に魔物の肉を喰った時に近い激痛をもたらした。奥歯に仕込んだ神水がなければ死んでいただろう。ちなみに、奥歯に仕込んだのは噛み砕ける程度に薄くした石で出来た小さな容器だ。緊急用に仕込んでおいたのが幸いした。また、地下迷宮なのに密林のような階層に出たこともあった。物凄く蒸し暑く鬱蒼うっそうとしていて今までで一番不快な場所だった。この階層の魔物は巨大なムカデと樹だ。

密林を歩いていると、突然、巨大なムカデが木の上から降ってきたときは、流石のハジメも全身に鳥肌が立った。余りにも気持ち悪かったのである。しかも、このムカデ、体の節ごとに分離して襲ってきたのだ。一匹いれば三十匹はいると思えという黒い台所のGのような魔物だった。

ハジメは、ドンナーを連射して撃退しようとしたが如何せん数が多かった。直ぐにロードに手間取り、"風爪"で切り裂く方法に切り替えた。それでも間に合わず"雷魔法"と慣れない蹴りも使って文字通り必死に戦った。この時、ハジメは更なる"雷魔法"の強化と、素早くロードする技法と、蹴り技を磨くことを決意した。分裂ムカデの紫色の体液を全身に浴び慥然としながら。

そして、樹の魔物はピンチなると頭部をわっさわっさと振り赤い果物を投げつけてくるのだ。これには全く攻撃力はなく、ハジメは試しに食べてみたのだが、直後、数十分以上硬直した。毒の類ではない。めちやくちや美味く、ハジメは樹の魔物を全滅寸前ぐらいまでにしていった。

そんなことが続いていく中、ハジメは五十階層時点でのステータスは上がり上がった。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：49

天職：錬成師

筋力：1300

体力：1400

耐性：1250

敏捷：1400

魔力：1600

魔耐：1600

技能：錬成「＋鉱物系鑑定」「＋精密錬成」「＋鉱物系探査」「＋鉱物分離」「＋鉱物融合」  
 「＋複製錬成」・雷属性適性・雷属性耐性・脳内設計「＋想像設計」・魔力操作・胃酸強化・纏雷・天歩「＋空力」「＋縮地」「＋豪脚」・風爪・夜目・遠見・気配感知・魔力感知・気配遮断・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・■■■■・言語理解

ハジメは、この五十層で作った拠点にて銃技や蹴り技、錬成の鍛錬を積みながら少し足踏みをしていた。というのも、階下への階段は既に発見しているのだが、この五十層には明らかに異質な場所があったのだ。

「やっぱ場違いだよな……あの扉」

ハジメがそう思えたのは脇道の突き当りにある空けた場所には高さ三メートルの装飾された荘厳な両開きの扉が有り、その扉の脇には二対の一つ目巨人の彫刻が半分壁に埋め込まれるように鎮座していたのだ。

何かあると思ったハジメはその空間に足を踏み入れた瞬間全身に悪寒が走るのを感じ、これはヤバイと一旦引いたのである。もちろん装備を整えるためで避けるつもりは



毛頭ない。ようやく現れた“変化”なのだ。調べないわけにはいかない。

ハジメは期待と嫌な予感を両方同時に感じていた。

あの扉を開けば確実になんらかの厄災と相対することになるかもしれないし、もしかしたら、この迷宮を攻略するのに必要な“鍵”になるのかもしれない。

「さながらパンドラの箱だな。……さて、どんな運命<sup>結果</sup>が入っているんだろうな？」

自分の今持てる武技と武器、そして技能。それらを一つ一つ確認し、コンディションを完全に整えていく。全ての準備を整え、ハジメはゆくりドンナーを抜いた。

そして、そつと額に押し当て目を閉じる。覚悟ならとつくに決めている。しかし、重ねることは無駄ではないはずだ。己の内へと潜り願いを口に出して宣誓する。

「俺は、生き延びて優花とアイツ等のところに戻って、日本に、皆で家に……帰る。邪魔するものは敵だ。敵は……殺してやるさ！」

扉の部屋にやってきたハジメは油断なく歩を進める。特に何事もなく扉の前にまでやって来た。近くで見れば益々、見事な装飾が施されているとわかった。そして、中央に二つの窪みのある魔法陣が描かれているのがわかったがハジメはその魔法陣に難色を示す。

「……見たことねえな」

ハジメは自らの能力を更に補うために座学に力を入れていた。もちろん、全ての学習

を終えたわけではないが、それでも、魔法陣の式を全く読み取れないというのは些おかししいと感じてハジメはある推測に至った。

「相当、古い時代の魔法陣か……」

ざっと、数百年ぐらい前のだろう。王国の図書館の本は最も古くて二百年前のモノでそれ以前のモノは見当たらなかった。もしかしたら、教会の本部にもっと前のがあるかもしれないが……

ハジメはそんな推測を立てながら扉を調べるが特に何かがわかるということもなかった。いかにも曰くありげなので、トラップを警戒して調べてみたのだが、どうやら今の持つ知識では解読できるものではなさそうだ。

「危険だが、錬成で確かめるか……」

一応、扉に手をかけて押したり引いたりしたがビクともしない。なので、いつもの如く錬成で強制的に道を作る。ハジメは右手を扉に触れさせ錬成を開始した。

しかし、その途端、

バチィー!

「うおっ!?!」

扉から赤い放電が走りハジメの手を弾き飛ばした。ハジメの手からは煙が吹き上がっている。悪態を吐きながら神水を飲み回復するハジメはトラップかと思いすぐさ

ま構えをとる。

すると、直後にその異変が起きた。

「……………」

何か来ると思った瞬間、

——オオオオオオオオオ!!

突然、野太い雄叫びが部屋全体に響き渡ったのだ。

ハジメはバックステップで扉から距離をとり、再び腰を落として手をホルスターのすぐ横に触れさせいっつも抜き撃ち出来るようにスタンバイする。

雄叫びが響く中、遂に声の正体が動き出した。

「あれは、サイクロプスか?」

苦笑いしながら呟くハジメの前で、扉の両側に彫られていた二体の一つ目巨人が周囲の壁をバラバラと砕きつつ現れた。いつの間にか壁と同化していた灰色の肌は暗緑色に変色している一つ目巨人はゲームで良く出るくるようなサイクロプスだった。手にはどこから出したのか四メートルはありそうな大剣を持っている。未だ埋まっている半身を強引に抜き出し無粋な侵入者を排除しようとハジメの方に視線を向ける。

「面倒だな……………」

単純に素直に戦うのが面倒だと思ったハジメは、ドンナーを構える。その瞬間、

ドパンツ!

凄まじい発砲音と共に電磁加速されたタウル鉱石の弾丸が右のサイクロプスのたった一つの目に突き刺さり、そのまま脳をグチャグチャにかき混ぜた挙句、後頭部を爆ぜさせて貫通し、後ろの壁を粉碎した。

左のサイクロプスがキョトンとした様子で隣のサイクロプスを見る。撃たれたサイクロプスはビクンビクンと痙攣したあと、前のめりに倒れ伏した。巨体が倒れた衝撃が部屋全体を揺るがし、埃がもうもうと舞う。

「スマンがてめえも片付けさせてもらうぜ」

あのサイクロプス達は、おそらくガーディアンのような役目だろう。だつたら早く片付けて、扉の中を拝ませて貰おうとハジメはもう一体のサイクロプスに発砲した。

ドパンツ!

しかし、サイクロプスは発光した後、ドンナーの弾を弾いた。

「へえ、やるじゃねーか」

ドンナーの攻撃に耐えたサイクロプスおそらく、防御力の向上系の固有魔法だろうと推測したハジメは悪い笑みを浮かべながら、あることを確かめることにした。

「てめえの、その防御はいつまで耐えられるのか試させて貰おうか!」

そう言つてハジメはサイクロプスに豪脚、風爪、雷魔法、ドンナーの攻撃をする。

そして……

「『風雷閃』！」

雷魔法と爪熊の『風爪』を複合させた雷と風を合わせた斬撃を飛ばす魔法、『風雷閃』がサイクロプスの目を直撃し、頭部を粉碎した。

「ぎゅっと、二十秒か……」

ハジメは『風雷閃』を放った後、サイクロプスの固有魔法の持続時間と流星に目の強化は出来なくて精々、強化は身体の一部ぐらいだと考察していき使い道があると判断した。

「まあ、いいか。肉は後で取るとして……」

ハジメは、チラリと扉を見て少し思案する。そして、『風爪』でサイクロプスを切り裂き体内から魔石を取り出した。

「鍵だろうな……」

取り出した魔石は、サイクロプス達が守護していた扉の鍵穴と形が同じことが分かる。もう一体の死体も同じように切り裂いた。取り終わると血濡れを気にするでもなく二つの拳大の魔石を扉まで持って行き、それを窪みに合わせてみる。

「嵌ったな……」

そう呟いた直後、魔石から赤黒い魔力光が迸ほとぼしり魔法陣に魔力が注ぎ込まれて

いく。そして、パキヤンという何か割れるような音が響き、光が収まった。同時に部屋全体に魔力が行き渡っているのか周囲の壁が発光し、久しく見なかつた程の明かりに満たされる。

「……………」

ハジメは少し目を瞬かせ、畏じやないかと警戒しながら、そつと扉を開けていく。

扉の奥は光一つなく真つ暗闇で、大きな空間が広がっているようだ。ハジメの「夜目」と手前の部屋の明りに照らされて少しずつ全容がわかつてくる。

「ほお……………」

ハジメは扉の造形もそうだったが中の構造も凝っているデザインに感嘆してしまう。それは、聖教教会の大神殿で見た大理石のように艶やかな石造りで出来ており、幾本もの太い柱が規則正しく奥へ向かって二列に並んでいた。そして部屋の中央付近に巨大な立方体の石が置かれており、部屋に差し込んだ光に反射して、つるりとした光沢を放っている。ハジメはその立方体に目がいく。

その立方体を注視していたハジメは、何か光るものが立方体の前面の中央辺りから生えているのに気がついた。

しかし、ハジメが確認をする前にそれは動いた。

「……………だれ？」

かすれた、弱々しい女の子の声だ。ビクリツとしてハジメは慌てて部屋の中央を凝視する。すると、先程の「生えている何か」がユラユラと動き出した。差し込んだ光がその正体を暴く。

「人……なのか？」

「生えていた何か」は人だった。

上半身から下と両手を立方体の中に埋めたまま顔だけが出ており、長い金髪が某ホラー映画の女幽霊のように垂れ下がっていた。そして、その髪の間隙から低高度の月を思わせる紅眼の瞳が覗いている。年の頃は十二、三歳くらいだろう。随分やつれているし垂れ下がった髪でわかりづらいが、それでも美しい容姿をしていることがよくわかる。

流石に予想外だったハジメは驚きのあまり硬直し、紅の瞳の女の子もハジメをジッと見つめる。そして、ハジメは彼女の悲しい顔を見て気付いた時には、

迷いもなく彼女のところへと駆け出していた……。

## 十二話

## 奈落の底の吸血姫

【オルクス大迷宮】の奈落に囚われているのか分からないが少女の助けを求めような姿を見て、ハジメは少女の元へ歩き出していった。その少女はよく見ると金髪紅眼の女の子だった。

ハジメは、何時の間にか囚われている少女の近くまで足を運んでいた。そして、囚われていた少女はハジメの行動に驚いていた表情をし、掠れながら呟いた。

「た……助け……てくれ……るの？」

「助けはしたいが……アンタ何者だ？」

「わ、私の……こと？」

「ああ、素性が分かんねえ奴を簡単に助ける訳にはいかねえからな」

そう言うのと囚われている少女は掠れながらも話します。

「……私、先祖返りの吸血鬼……すごい力持つてる……だから国の皆のために頑張った。でも……ある日……家臣の皆……お前はもう必要ないって……おじ様……これからは自分が王だって……私……それでもよかった……でも、私、すごい力あるから危険だっ



て……殺せないから……封印するって……それで、ここに……」

「お前、どっかの国の王族だったのか？」

「……（コクコク）」

ハジメの質問に少女は答えるかのように頷き、ハジメは更に質問をする。

「殺せないってなんだ？」

「……勝手に治る。怪我しても直ぐ治る。首落とされてもその内に治る」

「……そいつは凄まじいな……すごい力ってそれか？」

「これもだけど……魔力、直接操れる……陣もいらぬ」

「……」

少女の発言は嘘をついてそうには見えない。それに、再生能力もあつて自分と同じ無詠唱で魔法を撃てるという正にチートの権化である。

ハジメは少女の能力なら封印するのも納得していると、少女はハジメが自分を助けな  
いと思つたのか必死に助けを述べる。

「……お願い……助けて……なんでもする……だから……」

「……おい」

「……？」

そんな事を言う少女にハジメは溜息混じりに真剣な表情になると少し怒気を含めな

がら声を掛けた。

「女の子が何でもするって言うな、少し考え事をしてただけだ」

「!……うん……」

「少し、待ってろ」

そう言つてハジメは少女を捕える立方体に手を置いた。

「あつ……」

少女は本当に自分を助けてくれると分かり大きく目を見開く。ハジメはそれを無視して錬成を始める。

しかし、イメージ通り変形するはずの立方体は、まるでハジメの魔力に抵抗するように錬成を弾いた。迷宮の上下の岩盤のようだ。だが、全く通じないわけではない。少しずつ少しずつ侵食するように魔力が立方体に迫っていく。

「!」

立方体の抵抗力に歯噛みしながらハジメは更に魔力をつぎ込んでいく。詠唱していたのなら六節は唱える必要がある魔力量だ。そこまでやってようやく魔力が立方体に浸透し始める。既に、周りはハジメの魔力光により濃い紅色に煌々と輝き、部屋全体が染められているようだった。

ハジメは更に魔力を上乗せする。七節分、八節分。すると、徐々に少女を封じる周り

の石が徐々に震え出す。

「まだまだあー！」

ハジメは気合を入れながら魔力を九節分つき込む。属性魔法なら既に上位呪文級、いや、それではお釣りが来るかもしれない魔力量だ。どんどん輝きを増す紅い光に、少女は目を見開き、この光景を一瞬も見逃さないとも言うようにジツと見つめ続ける。

「クハッ……」

ハジメは自分のこんな性格はあ優花と出会った日の時から直せてないことに苦笑いしながら魔力を更に乗せしていく。

「……」

「これならあつー！」

ハジメが叫んだ直後、少女の周りの立方体がドロツと融解したように流れ落ちていき、少しずつ彼女の枷を解いていく。

そして、同時に少女が全裸であることに気付いてハジメは、目が点となって頭が真っ白になる。

「まっ！」

それなりに膨らんだ胸部が露わになり、次いで腰、両腕、太ももと彼女を包んでいた立方体流れ出す。一糸纏わぬ彼女の裸体はやせ衰えていたが、それでもどこか神秘性

を感じさせるほど美しかった。

そのまま、体の全てが解き放たれ、少女は地面にペタリと女の子座りで座り込む前にハジメは急いで自分の着ていた外套を少女に羽織らせてから座り込んだ。肩でゼハーゼハーと息をし、大分消費した魔力のせいで激しい倦怠感に襲われている。

「ハアハア……」

魔力が消費が激しい為にすぐに回復しようと荒い息を吐き震える手で神水を出そうとして、その手を少女がギュツと握った。弱々しい、力のない手だ。小さくて、ふるふると震えている。

「どうしたんだ？」

ハジメが横目に少女に問いかけると少女は真っ直ぐにハジメを見つめている。顔は無表情だが、その奥にある紅眼には彼女の気持ち溢れんばかりに宿っていた。

そして、震える声で小さく、しかしはつきりと女の子は告げる。

「……ありがとう」

「ああ、どういたしまして」

感謝する少女にハジメは笑みを向けて返事をする、再び少女はギュギュとハジメの手を握り返す。

「……名前、なに？」

少女が囁くような声で尋ねる。そういえばお互い名乗っていなかったと苦笑いを深めながらハジメは答え、少女にも聞き返した。

「ハジメだ。南雲ハジメ。お前は？」

少女は「ハジメ、ハジメ」と、さも大事なものを内に刻み込むように繰り返して呟いた。そして、問われた名前を答えようとして、思い直したようにハジメにお願いをした。

「……名前、付けて」

「は？ 付けるってなんだ。まさか忘れたとか？」

長い間幽閉されていたせいで記憶喪失になったのかと聞いてみる俺だハジメだったが、少女はふるふると首を振る。どうやら違うらしい。

「もう、前の名前はいらない。……ハジメの付けた名前がいい」

「……はあ、そうは言ってもなあ」

少女喪失言葉でハジメは納得する。おそらく、前の自分を捨てて新しい自分と価値観で生きる。少女は自分の意志で変わりたいらしい。その一步が新しい名前なのだろう。

しかし、難解なお願いに悩むハジメに、少女は期待するような目でハジメを見ている。ハジメはカリカリと頬を掻くと、少し考える素振りを見せて、仕方ないというように彼女の新しい名前を告げた。

「“ユエ”なんてどうだ？ ネーミングセンスないから気に入らないなら別のを考える

が……」

「ユエ? ……ユエ……ユエ……」

「ああ、ユエって言うのはな、俺の故郷で“月”を表すんだよ。最初、この部屋に入ったとき、お前のその金色の髪とか紅い眼が優花と二人で見た夜に浮かぶ月みたいに見えたんでな……どうだ?」

思いのほかきちんとした理由があることに驚いたのか、女の子がパチパチと瞬きする。そして、相変わらず無表情ではあるが、どことなく嬉しそうに瞳を輝かせた。

「……んっ。今日からユエ。ありがとう、でも……」

ユエは嬉しそうにするが段々、声色が変わっていきながらハジメに問いかける。

「ん、なんだ?……」

「……優花って誰?」

「……」

自分の失言に右手で自分の口を覆うがユエはハジメを見つめながら詰め寄ってくる。

「……ねえハジメ……優花って誰?」

「ああくえつとな優花は俺のか……っ!」

ハジメが答えを言い切る前に“気配感知”が反応し……凍りついた。とんでもない魔物の気配が直ぐ傍に存在することに気がついた。

「上か!」

ハジメがその存在に気がついたのと、ソレが天井より降ってきたのはほぼ同時だった。

「ユエツ!」

「!」

咄嗟に、ハジメはユエに呼び片腕で抱き上げると全力で“縮地”をする。一瞬で、移動して振り返ると、直前までいた場所にズドンツと地響きを立てながらソレが姿を現した。

その魔物は体長五メートル程、四本の長い腕に巨大なハサミを持ち、八本の足をわしゃわしゃと動かしている。そして二本の尻尾の先端には鋭い針がついていた。

「……デケエな」

現れたのはサソリ型の魔物だった。しかし、部屋に入った直後は全開だった“気配感知”ではなんの反応も捉えられなかった。だが、今は“気配感知”でしっかり捉えている。ということ、少なくともこのサソリは、ユエの封印を解いた後に出てきたということ。

つまり、ユエを逃がさないための最後の仕掛け……

「最後の門番  
「ガーディアンか……」

そう呟いたハジメはいきなり現れたサソリのことをそう推測しながら腕の中のユエをチラリと見る。彼女は、サソリになど目もくれず一心にハジメを見ていた。風いだ水面のように静かな、覚悟を決めた瞳。その瞳が何よりも雄弁に彼女の意思が伝わる。ユエは自分の運命をハジメに委ねていると感じ取り笑みを向けながらユエに話しかける。

「そんな顔すんな、見捨てはしねえよ」

「……ん」

ハジメはユエを安心させるとサソリ野郎に向き直って告げた。

「上等だ。……殺れるもんならやってみろサソリ野郎」

ハジメはユエを肩に担ぎ一瞬でポーチから神水を取り出すと抱き直したユエの口に突っ込んだ。

「ユエ、これ飲め」

「うむっ!?!」

試験管型の容器から神水がユエの体内に流れ込む。ユエは異物を口に突っ込まれて涙目になっているが、衰え切った体に活力が戻ってくる感覚に驚いたように目を見開いた。ユエの回復が終わるのを確認するとハジメは、そのまま片腕でぐるりとユエを回し背中に背負う。衰弱しきった今の彼女は足でまといだが、置いていけば先に始末されかねない。



「しっかり掴まってるよ！ ユエ！」

「……ん！」

全開には程遠いが、手足に力が戻ってきたユエは応えギユつとハジメの背中にしがみつく。

ギチギチと音を立てながらにじり寄ってくるサソリモドキ。ハジメは背中にユエを感じつつ、不敵な笑みを浮かべながら宣言した。

「邪魔するってんなら……殺すまでだ！」

サソリモドキの初手は尻尾の針から噴射された紫色の液体だった。かなりの速度で飛来したそれを、ハジメはすかさず飛び退いてかわす。着弾した紫の液体はジュワーという音を立てて瞬く間に床を溶かしていった。

「溶解液か……」

ハジメはボソツと呟きながら、それを横目に確認しつつ、ドンナーを抜き様に発砲する。

ドパンツ！

ハジメの背中越しにユエの驚愕が伝わって来た。

「……」

ユエは見たこともない武器で、閃光のような攻撃を放ったち、それは魔法の気配も

なく。若干、右手に電撃を帯びたようだが、それも魔法陣や詠唱を使用していない。つまり、ハジメが自分と同じく、魔力を直接操作する術を持っているということに、ユエは気がついたのである。

自分と「同じ」、そして、何故かこの奈落にいる。ユエはそんな場合ではないとわかっていながらサソリモドキよりもハジメを意識せずにはいられなかった。

背中から伝わる驚愕にハジメは、ユエはこの世界の住人だから銃の存在は知らないから驚いたのだろうと思いつながらサソリモドキの攻撃を避けながら発砲をする。

ハジメは足を止めることなく、「空力」を使い跳躍を繰り返した。その表情は今までになく険しい。ハジメには、「気配感知」と「魔力感知」でサソリモドキが微動だにしていなことがわかっていたからだ。

「……………」

誘っているのかと思った時、ハジメが予想したようにサソリモドキはもう一本の尻尾の針が俺に照準を合わせた。そして、尻尾の先端が一瞬肥大化したかと思うと凄まじい速度で針が撃ち出された。

「チツ…………お返しだ!」

ハジメは苦しげに唸りながら、ドンナーで針を撃ち落とすし、「豪脚」で払い、「風爪

“で叩き切る。どうにか凌ぎ切ると、お返しとばかりにドンナーを発砲。直後、空中にドンナーを投げ、その間にポーチから取り出した手榴弾を投げつける。

サソリモドキはドンナーの一撃を再び耐えきり、更に散弾針と溶解液を放とうとした。しかし、その前にコロコロと転がってきた直径八センチ程の手榴弾がカツと爆ぜる。その手榴弾は爆発と同時に中から燃える黒い泥を撒き散らしサソリモドキへと付着した。

いわゆる“焼夷手榴弾”というやつだ。タールの階層で手に入れたフラム鉱石を利用したもので、摂氏三千度の付着する炎を撒き散らす。

「……どうだ?」

サソリモドキが攻撃を中断して、付着した炎を引き剥がそうと大暴れした。その隙に地面に着地し、既にキャッチしていたドンナーを素早くリロードする。

それが終わる頃には、“焼夷手榴弾”はタールが燃え尽きたのかほとんど鎮火してしまっていた。しかし、あちこちから煙を吹き上げているサソリモドキにもダメージはあったようで強烈な怒りが伝わってくる。

「おつ、キレてんなあ……」

「キシヤアアアア!!」

絶叫を上げながらサソリモドキはその八本の足を猛然と動かし、ハジメ達に向かって

突進し、四本の大バサミがいきなり伸長し大砲のように風を唸らせながら迫って来た。

一本目を「縮地」でかわし、二本目を「空力」で跳躍してかわす。三本目を「豪脚」で蹴り流して体勢を崩しているハジメを、四本目のハサミが襲うが、咄嗟にドンナーを撃ち、その激発の衝撃を利用して自らを吹き飛ばしつつ身を捻ることで辛うじて回避に成功した。背中のユエが激しい動きに「うう」と唸っているが、どうにか堪えられているようだ。

「大丈夫かユエ？」

「……んう、なんとか」

ハジメは横目にユエの安全を確認するとユエは激しい振動に目が回るも返事をしたので、そのまま空中を跳躍し、サソリモドキの背中部分に降り立った。そして、暴れるサソリモドキの上でなんとかバランスを取りながら、ゴツツと外殻に銃口を押し付けるとゼロ距離でドンナーを撃ち放った。

ズガンツ!!

凄まじい炸裂音が響き、サソリモドキの胴体が衝撃で地面に叩きつけられる。

しかし、直撃を受けた外殻は僅かに傷が付いたくらいでダメーヅらしいダメーヅは与えられていない。その事実には歯噛みしながらドンナーを振りかぶり「風爪」を発動するが、ガキツという金属同士がぶつかるような音を響かせただけで、やはり外殻を突破

することは敵わなかった。

「流石に、これで死なねえかつ……」

ハジメは、即行でその場を飛び退き空中で身を捻ると、散弾針の付け根目掛けて発砲する。超速の弾丸が狙い違わず尻尾の先端側の付け根部分に当たり尻尾を大きく弾き飛ばすが、尻尾まで硬い外殻に覆われているようでダメージがない。完全に攻撃力不足だ。

「チイっ！」

空中のハジメを、再度、四本の大バサミが嵐の如く次々と襲う。ハジメは苦し紛れに「焼夷手榴弾」をサソリモドキの背中に投げ込み大きく後方に跳躍した。爆発四散したタールが再びサソリモドキを襲うが時間稼ぎにしなければならないだろう。

「キイイイイイ!!」

「!」

その叫びを聞いて、全身を悪寒が駆け巡り、咄嗟に「縮地」で距離をとろうとするハジメだった……

「ぐうっ!」

直後、強烈な衝撃と共に鋭い針が何十本とハジメの体に深々と突き刺さる。

「……………ッ!」

完全に意表を突かれたハジメは声にならない痛みには耐えながら衝撃で吹き飛ばされ、激痛に襲われながら更に地面に叩きつけられ、そのまま転がる。ユエもその衝撃で背中から放り出されてしまった。

「……………てえなっ!」

体に無数の針を突き刺されながらも歯を食いしばって痛みに耐え、ポーチから“閃光手榴弾”を取り出しサソリモドキに投げつける。放物線を描いて飛ばされた“閃光手榴弾”はサソリモドキの眼前で強烈な閃光を放つ。

「グッ……………」

「キイシヤアアアア!!」

突然の閃光に悲鳴を上げ思わず後ろに下がるサソリ野郎はどうも最初からハジメの動きを視認しているようだったので、いけると踏んで投げたのだが、その推測は間違っていないかったらしい。

ハジメは奥歯に仕込んだ神水を噛み砕き飲み干しながら一気に針を抜いていく。

「ぐううう!」

一つ一つ抜く度にハジメは激痛の余り食いしばった歯の間から呻き声が漏れる。しかし、耐えられないほどではないがある事に気付く。

「……………ユエ?!」

ハジメは、針を抜きながら視線を巡らせユエを探す。しかし、俺が見つけるよりも、ユエが俺のハジメもとに来る方が早かった。

「ハジメー！」

心配そうに駆け寄るユエ。無表情が崩れ今にも泣き出しそうだ。そんな表情をハジメが気にするわけがなく笑って彼女の頭を撫でる。

「大丈夫だ。それよりアイツ硬すぎんだろ？ 攻略法が見つからねえ。目か口を狙おうにも四本のハサミが邪魔で通らねえし……ダメージ覚悟で特攻するか？」

ユエの頭を撫でてから、サソリモドキを攻略すべく思案するハジメにユエがポツリと零す。

「……どうして?」

「あ?」

「どうして逃げないの?」

自分を置いて逃げれば助かるかもしれない、その可能性を理解しているはずだと言外に訴えるユエ。

「クハッ……」

ハジメはユエの言葉に笑いながら返した。

「何を今更。ちつとばつかし強い敵が現れたぐらいで見放さねえし、俺はある時から

困ってる人を助けてしまう性格でな……だから安心しろユエ、俺はお前を助ける」

ハジメはそう言つて、右手で優しくユエの頭をポンポンとする。ユエは少し俯いて顔は見えなかった。

「……／＼」

しかし、俯いたままのユエは、ハジメに言葉以上の何かを見たのか納得したように頷き、いきなり抱きついてきた。

「お、おう？ どうしたんだユエ？」

ハジメはユエに言つたが、そんなことは知らないユエはハジメの首に手を回した。

「ハジメ……信じて」

そう言つてユエは、ハジメの首筋にキスをした。

「ッ!？」

否、これはキスではない。嘔み付いたのだと。ハジメは戸惑いながらも気が付いた。

「あゝ」

ユエが吸血鬼だったのを思い出したハジメは、苦笑いしながら、しがみつくとユエの体を抱き締めて支えてやった。一瞬、ピクンと震えるユエだが、更にギュツと抱きつき首筋に顔を埋める。

「ん？」



顔を埋めるユエは何故か嬉しそうなことにハジメはキョトンと首を傾げる。

「キイシヤアアア!!」

「……ッ?!」

復活したのだろうサソリモドキの咆哮が轟く。どうやら閃光手榴弾のショックから回復したらしい。こちらの位置は把握しているようで、再び地面が波打つ。

「……地面が?!ならコイツはっ」

ハジメは理解する。サソリモドキの固有魔法は地形操作系の固有魔法であると、普通なら驚愕する固有魔法だろうがハジメは不敵な笑みを浮かべながら口を開く。

「だが……それなら俺の十八番だ」

ハジメは地面に右手を置き錬成を行った。周囲三メートル以内が波打つのを止め、代わりに石の壁が俺とユエを囲むように形成される。

周囲から円錐の刺が飛び出しハジメ達を襲うが、その尽くを防壁が防ぐ。一撃当たるごとに崩されるが直ぐさま新しい壁を構築し寄せ付けない。

「……どつちが上なのかを教えてやるよ!」

地形を操る規模や強度、攻撃性はサソリモドキが断然上である。が、錬成速度はハジメの方が上である。ハジメが錬成しながら防御に専念していると、ユエがようやく口を離した。

「…………ちそうさま」

そう言うのと、ユエは、おもむろに立ち上がりサソリモドキに向けて片手を掲げた。同時に、その華奢な身からは想像もできない莫大な魔力が噴き上がり、彼女の魔力光なのだろう——黄金色が暗闇を薙ぎ払った。

そして、神秘に彩られたユエは、魔力色と同じ黄金の髪をゆらりゆらゆらとなびかせながら、一言、呟いた。

「『蒼天』」

その瞬間、サソリモドキの頭上に直径六、七メートルはありそうな青白い炎の球体が  
出来る。

「…………っ！」

初めて見る炎系の最上級魔法にハジメは目を日見開く。直撃したわけでもないのに  
余程熱いのか悲鳴を上げて離脱しようとするが、奈落の底の吸血姫がそれを許さない。

ピンっと伸ばされた綺麗な指がタクトのように優雅に振られる。青白い炎の球体  
は指揮者の指示を忠実に実行し、逃げるサソリモドキを追いかけ……直撃した。

「グウギイヤアアアアア!？」

サソリモドキがかつてない絶叫を上げる。明らかに苦悶の悲鳴だ。着弾と同時に青  
白い閃光が辺りを満たし何も見えなくなる。ハジメは腕で目を庇いながら、その壮絶な

魔法を唯々呆然と眺めた。

やがて、魔法の効果時間が終わったのか青白い炎が消滅する。跡には、背中の外殻を赤熱化させ、表面をドロリと融解させて悶え苦しむサソリモドキの姿があった。

「……正に魔法の天才だな」

ハジメの摂氏三千度の「焼夷手榴弾」でも溶けず、ゼロ距離のドンナーを喰らっても傷が付かなかったサソリモドキの外殻を溶かす程の最上級の炎魔法と完璧な魔法の操作技術を難なく熟すユエは正に天才なのだろう。

トサリと音がして、ハジメは驚異的な光景から視線を引き剥がし、そちらを見やると、ユエが肩で息をしながら座り込んでいる姿があった。どうやら魔力が枯渇したらしい。

「ユエ、無事か？」

「ん……最上級……疲れる」

ハジメはユエの言葉に息を呑むも、最後の仕上げに行く為、ユエに話しかけるだけにした。

「はは、やるじゃないか。助かったよ。後は俺がやるから休んでいてくれ」

「ん、頑張つて……」

ハジメは、手をプラプラと振りながら「縮地」で一気に間合いを詰め告げた。

「よし……再戦といこうかサソリ野郎！」

サソリモドキは未だ健在だ。外殻の表面を融解させながら、怒りを隠しもせず咆哮を上げ、接近してきたハジメに散弾針を撃ち込もうとしたが、その前に手榴弾を投げつけ相殺する。そして空中でハジメは、自分が持つ中で最強の一撃をサソリ野郎に喰らわせていく。

ハジメが手に持つドンナーから紅い雷が溢れ出て、キユウイイイインと何かをチャージする音が聞こえる中、ハジメはその引き金を引いた。

「喰らえー！」

ドツガアアアン!!

「グウギアアアアアー！」

ハジメの一撃でサソリ野郎がゆっくりと傾き、そのままズズンツと地響きを立てながら倒れ込んだ。

「ふう……」

ハジメは一息つきながら地面に着地した。

そして……

ピキッ!と、金属音がヒビ割れるような音が聞こえ、手に持つドンナーを見ると少し銃口が欠けていた。

「……予想はしてたが」

タウル鉱石でも耐えきれないことに落胆するハジメ。最後に放ったレールガンは、いつものレールガンには「纏雷」だけを使用してるが今回はハジメの雷魔法の「轟雷」も合わせて、威力、弾速を更に跳ね上げた砲撃なのだが、ハジメでもドンナーが耐えられるかどうか分ならず、設計図を見るからして壊れることを予想はしていたので余り使いたくなかったがサソリモドキを倒す為には使いざる得なかったのだ。

「やっぱり、新しい武器を作るのと鉱石探しか……」

ハジメがこれからの事に溜息と共に呟き振り返ると、無表情ながら、どこことなく嬉しそうな眼差しで女の子座りしながらハジメを見つめているユエがいた。

でも、まあ……………

「使った成果はあったか……………」

ハジメは笑みを浮かべそう呟きながら、ユエの元へ向かって歩き出したのだった……………。

## 十三話

## ゆっくり語らい

サソリモドキを倒したハジメ達は、サソリモドキとサイクロプスの素材やら肉やらを拠点に持ち帰った。

その巨体と相まって物凄く苦労したのだが、最上級魔法の行使により、へばったユエに再度血を飲ませると瞬く間に復活し見事な身体強化で怪力を発揮してくれたため、二人がかりでなんとか運び込むことができた。

ちなみに、そのまま封印の部屋を使うという手もあったのだが、ユエが断固拒否したためその案は没となった。

無理もない。何年も閉じ込められていた場所など見たくもないのが普通だ。消耗品の補充のためしばらく身動きが取れないことを考えても、精神衛生上、封印の部屋はさつさと出た方がいいだろう。

そんな訳で、現在ハジメ達は、消耗品を補充しながらお互いのことを話し合っていた。ハジメはユエの話を聞いている内に自然と疑問を口に出していた。

「そうすると、ユエって少なくとも三百歳以上なわけか……」

「……マナー違反」

「……スマン」

女性に年齢の話はどの世界でもタブーらしい。

「だが……吸血鬼族、ね」

確かハジメの記憶では、三百年前の大規模な戦争のおり吸血鬼族は滅んだとされていたはずだ。実際、ユエも長年、物音一つしない暗闇に居たため時間の感覚はほとんどないそうだが、それくらい経っていてもおかしくないと思える程には長い間封印されていたのだろう。そう考察していくハジメは、ユエに質問する。

「吸血鬼って、皆そんなに長生きするのか？」

「……私が特別。『再生』で歳もとらない……」

「へえ……」

聞けば十二歳の時、魔力の直接操作や『自動再生』の固有魔法に目覚めてから歳をとっていないらしい。普通の吸血鬼族も血を吸うことで他の種族より長く生きるらしいが、それでも二百年くらいが限度なのだそうだ。

『自動再生』については、一種の固有魔法に分類できるらしく、魔力が残存している間は、一瞬で塵にでもされない限り死なないそうだ。逆に言えば、魔力が枯渇した状態で受けた傷は治らないということ。

ちなみに、人間族の平均寿命は七十歳、魔人族は百二十歳、亜人族は種族によるらしい。エルフの中には何百年も生きている者がいるとか。ユエは先祖返りで力に目覚めてから僅か数年で当時最強の一角に数えられていたそうで、十七歳の時に吸血鬼族の王位に就いたという。

「成程……先祖返りか」

先祖返りは図書館の本で調べて知ったことで、言葉の通り進化する過程で失った先祖の力を得て生まれた子孫の存在であり、どの先祖返りも強力であると。だから、あのサソリモドキの外殻を融解させた魔法を、ほぼノータイムで撃つて、しかも、ほぼ不死身の肉体を持っていると理解したハジメは納得する。

しかし、ある一つの疑問がハジメの中で浮かび上がった。話を聞くと、ユエの叔父は王位に目が眩んでユエを裏切り封印した。でも何故、確実にユエを殺さない？

ハジメはユエの話を聞いていく内にユエの叔父の行動があまりにも不審に思えてしまい、ユエに悪いと思うが質問をする。

「なあユエ？」

「……ん？」

「どうして、お前の叔父はお前を殺さなかった？ 封印より楽だろ？ その方が……」

「……それは私には自動再生があつて殺し切れなかったんだと思う」



「そっか……スマンな最低な質問をして」

「……ん、大丈夫」

「おお……」

聞けば聞くほど謎だ。「自動再生」で確実に殺し切れないからってユエの魔力を切らせば「自動再生」は無効となり確実に殺せるはずだ。

そうなるかとハジメが導き出したのは……

「……ユエの叔父は何らかの理由があつてユエを守るために封印する必要があつた？」

「……ハジメ？」

「あ、いや何でもない」

「……ん」

しかし、ただの推測に過ぎないので、キョトンとしながら聞いてくるユエに何も無いと伝えて、ハジメは一旦、この件は置いておくことにした。

その後、どうやって奈落に連れられたのかとユエの自動再生以外の力についても話を聞いた。奈落のことは分からないらしいがそれによると、ユエは全属性に適性があるらしいが接近戦は苦手らしく、一人だと身体強化で逃げ回りながら魔法を連射するくらいが関の山なのだそうだ。もつとも、その魔法が強力無比なのだから大したハンデになつていないのだが。ちなみに、ハジメと同じように無詠唱で魔法を発動できるそうだが、

癖で魔法名だけは呟いてしまうらしい。魔法を補完するイメージを明確にするためになんらかの言動を加える者は少くないので、この辺はユエも例に漏れないようだ。

「そうか……」

そして、ハジメはユエに今俺の中で一番肝心なことを聞くことにした。

「それで……肝心の話だが、ユエはここがどの辺りか分かるか？ 他に地上への脱出の道とか」

「……わからない。でも……」

ユエにもここが迷宮のどの辺なのかはわからないらしい。申し訳なさそうにしながら、何か知っていることがあるのか話を続ける。

「……この迷宮は反逆者の一人が作ったと言われてる」

「反逆者？」

聞き慣れない上に、なんとも不穏な響きに思わず錬成作業を中断してユエにハジメは視線を転じる。ハジメの作業をジッと見ていたユエも合わせて視線を上げると、コクリと頷き続きを話し出した。

「反逆者……神代に神に挑んだ神の眷属のこと。……世界を滅ぼそうとしたと伝わってる」

ユエの話を聞きながらハジメもドンナーの整備、銃弾などの消耗品の補充、サソリモ

ドキとの戦いで更に戦力の増加の為、新兵器の開発に乗り出しているため、作業しながらじっくり聞きながらユエの話の話を頭の中で整理していく。

「反逆者ねえ……」

ユエの話し曰く、神代に、神に反逆し世界を滅ぼそうと画策した七人の眷属がいたがその目論見は破られ、彼等は世界の果てに逃走し、その果てというのが、現在の七大迷宮でこの「オルクス大迷宮」もその一つで、奈落の底の最深部には反逆者の住まう場所があるとされているか…やっぱり、大迷宮にはこの世界の秘密を知れるかもしれない。

そんなことを考えているとユエは言葉を更に続ける。

「……そこなら、地上への道があるかも……」

「なるほど。奈落の底からえつちらおつちら迷宮を上がってくるとは思えない。神代の魔法使いなら転移系の魔法で地上とのルートを作ってもおかしくないってことか」

そしたら、大迷宮を攻略して脱出の可能性とエヒトについて分かる方が得策かもしれないとハジメはそんなことを考えながら再び、視線を手元に戻し作業に戻る。ユエの視線もハジメの手元に戻る。ジーと見ている。

「……………」

ハジメは最初はユエの視線を無視したが、作業の間ずっと見るので聞いてるみことに

した。

「……そんなに面白いか？」

口には出さずコクコクと頷くユエ。だぶだぶの外装を着て、袖先からちよこんと小さな指を覗かせ膝を抱える姿は昔、両親の仕事の手伝いの作業をしている時に優花が作業をずつと見つめていた姿と似ていて、愛嬌がありハジメは少し笑みを零すしながらハジメはユエを見る。

「……（しかし、三百歳。流石、異世界。ホントにロリババアが実在していたとはな）」  
オタク知識は健在であるハジメは思わずそんなことを思い浮かべてしまい、ユエがすかさず反応してしまう。

「……ハジメ、変なこと考えた？」

「いや、なにも？」

とぼけて返すハジメだが、ユエの、というより女の勘の鋭さに内心冷や汗をかく。黙々と作業することで誤魔化していると、ユエも気が逸れたのか今度は俺にハジメ質問し出した。

「……ハジメ、どうしてここにいる？」

「……まあ……当然の疑問だな」

「ここは迷宮の奈落の底だし真正銘の魔境だ。魔物以外の生き物がいていい場所で

はないしユエからして当然の疑問だろう。

「それはな……」

そして、ハジメはクラスメイトと一緒に異世界に転移させられたこと、優花達と言った恋人、幼なじみ達のこと、どうして奈落に落ちたことを話した。

「……それが俺のここまでの経緯だ」

すると、ユエは目が丸くし驚いていた。

「どうした、ユエ？」

「……ハジメ、恋人いるの？」

「ああ、優花って言う最高の恋人がいる」

驚くところ其処かよと思いながらハジメはユエの驚く部分に呆れてると、ユエが近付きながら何故かと優花のことを聞いてくる。

「……そう、優花可愛い？」

「ああ、可愛いぞ」

ハジメの目を見つめながら質問するユエにハジメ自身もユエの目を見て本心を伝えるとき、ユエは少し残念そうにしながらハジメに聞こえない程度の声で呟いた。

「……一番は無理か」

「ん？ 何か言ったかユエ？」

「……………ん、大丈夫」

その後もユエは、頭を唸らせながら「……………二番目ならばアリなのでは？」とか言っていて、ハジメはユエの言っている言葉の意味がよく分からなかった。

そして、ユエはハジメにまた質問する。

「……………ハジメはこれからどうするの?」

「そうだな……………この大迷宮を攻略して、優花達と再開してから故郷に帰る方法を探すことだな今んとこの目的は」

ユエが、「故郷に帰る」というハジメの言葉にピクリと反応した。

「……………帰るの?」

「うん? ああ、元の世界にか? そりゃあ帰るさ。帰りたいよ。……………色々変わっちゃまったけど……………故郷に優花達と……………家に帰りたいさ……………」

「……………そう」

ハジメの言葉にユエは沈んだ表情で顔を俯かせる。そして、ポツリと呟いた。

「……………私にはもう、帰る場所……………ない……………」

「……………」

そんなユエの様子に失言したと理解したハジメは内心、焦るも、励ますそうとハジメはユエの頭を撫でる。

「……………」

ユエはこんな場所での出会って少しだが信頼してる。それに、変人である自分の両親なら受け入れてくれるだろうと思つたハジメユエを頭を撫でながら口を開いた。

「ユエも来るか？」

「え？」

ハジメの言葉に驚愕をあらわにして目を見開くユエ。涙で潤んだ紅い瞳にマジマジと見つめられるがハジメは、笑みを向けながら告げる。

「だからさ、俺の故郷にな。まあ、普通の人間しかない世界だし、戸籍やらなんやら外には色々窮屈な世界かもしれないけど……今や俺も似たようなもんだしな。どうとでもなると思うし……あくまでユエが望むなら、だが？」

それに、ユエなら優花達とも仲良くなれる気がするから、とハジメは思つた。すると、しばらく呆然としていたユエだが、理解が追いついたのか、おずおずと「いいの？」と遠慮がちに尋ねる。しかし、その瞳には隠しようもない期待の色が宿つていた。

キラキラと輝くユエの瞳に、苦笑いしながらハジメは頷く。すると、今までの無表情が嘘のように、ユエはふわりと花が咲いたように微笑み、ハジメも微笑みかえす。

その後、ハジメは作業に没頭することにした。ユエも興味津々で覗き込んでいる。但し、先程より近い距離で、ほとんど密着しながら……

「……………」

ハジメは苦笑いしながらユエに話しかける。

「ああ〜おい、ユエ」

「？」

「俺…………言つたよな恋人いるって」

ハジメの言葉に、ユエは親指をグツと立てて笑みを浮かべながら元気よく答える。

「…………ん、大丈夫！ 会つたらお願いするから」

「何をだよ!!」

ユエの言葉の意味が分からなつたハジメは再び作業に専念すると、ユエが話題を逸らすように聞いて来る。

「…………これ、なに？」

「ああ、これか…対物ライフル・レールガンバージョンだ。要するに、俺の銃は見せたる？ あれの強力版だよ。弾丸も特製だ」

何故、新しく武器を作つてるのかというと、それはサソリモドキを解体してる時に、サソリモドキの外殻はある鉱石だつたことが判明して、気付いたハジメは色々活用が出来ると思つたからだ。



シユタル鉱石

魔力との親和性が高く、魔力を込めた分だけ硬度を増す特殊な鉱石

「……しかし、これは本当に良い鉱石だ」

シユタル鉱石のおかげで、より頑丈な銃身を作れて、対物ライフル：シユラーゲンの作成、ドンナーの銃身強化が可能になり弾丸もタウル鉱石の弾丸をシユタル鉱石でコーティングし、錬成技能「+複製錬成」により、材料が揃っている限り同じものを作るのは容易なのでサクサクと弾丸を量産出来るようになったのだ。

そんな成果に笑みを浮かばせるハジメは、遂にシユラーゲンを完成させる。

「……っし、完成だな」

シユラーゲンの出来が良いことにウンウンと満足して頷くハジメは、作業を一段落したして腹が減ってきたので、いい具合に焼けたサイクロプスやサソリモドキの肉を食事をすることにした。

「ユエ、メシだぞ……って、ユエが食うのはマズイよな？ あんな痛み味わせる訳にはいかんし……いや、吸血鬼なら大丈夫なのか？」

ハジメは軽くユエを食事に誘ったのだが、果たして喰わせて大丈夫なのかと思ひ直し

自分の食事に対する価値観の低下に落ち込み、ユエに視線を送る。

ユエは、ハジメの発明品をイジっていた手を止めて向き直ると「食事はいらぬ」と首を振るのに疑問を感じる。

ユエ達、吸血鬼族達は飢餓感とかは無いのか？とハジメはその疑問が過ぎりユエに聞いてみることにした。

「三百年も封印されて生きてるんだから食わなくても大丈夫だろうが……飢餓感とか感じたりしないのか？」

「感じる。……でも、もう大丈夫」

「大丈夫？ 何か食ったのか？」

腹は空くがもう満たされているというユエに怪訝そうな眼差しを向けるハジメにユエは真っ直ぐ指差しす。

「えっ……おい、まさか」

「ハジメの血」

「やっぱりか……じゃあ、吸血鬼は血が飲めれば特に食事は不要ってことか？」

「……食事でも栄養はとれる。……でも血の方が効率的」

「へえ……」

吸血鬼は血さえあれば平気らしい。ハジメから吸血したので、今は満たされているよ

うだ。なるほど、と納得しているハジメを見つめながら、何故かユエがペロリと舌舐りしていた。ハジメはそんなユエに話しかけるとユエはハジメを見つめ合いながら話す。

「……何故、舌舐りをするユエ」

「……ハジメ……美味……」

「び、美味ってお前な、俺の体なんて魔物の血肉を取り込みすぎて不味そうな印象だが

……」

「……熟成の味……」

「……」

血って味が異なっているという。そんな事実には驚きながらもユエ曰く、ハジメの血は何種類もの野菜や肉をじっくりコトコト煮込んだスープのような濃厚で深い味わいらしい。

「そういえば……」

ハジメが思い出したのは、最初に吸血されたときも、やけにユエは恍惚としていたことだった。考えると飢餓感に苦しんでいる時に極上の料理を食べたんらしいが、舌舐りしながら妖艶な空気を醸し出すのは辞めて欲しい。

そんなユエにハジメは溜息を吐くと、ユエはニコニコとしながらハジメへと寄って話しかける。

「……美味」

「……勘弁してくれ怖えよ」

いろいろな意味で、この相棒はヤバイかもしれないと、若干冷や汗を流すが確実に迷宮攻略が進めて行けるのを実感したハジメであった……。

## クラスメイト side 2

## 悪夢再びそして：

ハジメがユエと出会い、サソリモドキとの死闘を生き抜いた日。

光輝達勇者一行は、再び「オルクス大迷宮」にやって来ていた。但し、訪れているのは光輝達勇者パーティーと、小悪党組、それに永山重吾という大柄な柔道部の男子生徒が率いる男女四人のパーティーと優花と浩介の二人パーティーだけだった。

理由は簡単だ。話題には出さなくとも、ハジメの死が、多くの生徒達の心に深く重い影を落としてしまったのである。「戦いの果ての死」というものを強く実感させられてしまい、まともに戦闘などできなくなったのだ。一種のトラウマというやつである。当然、聖教会関係者はいい顔をしなかった。しかしシユタルとハジメとの制約によつて城に引き込まれてしまった生徒達は王国の警備として扱われるようになった。

結果、自ら戦闘訓練を望んだ勇者パーティーと小悪党組、永山重吾のパーティー、そしてハジメを見つける為に迷宮に望んだ優花と浩介のみが訓練を継続することになった。そんな彼等は、再び訓練を兼ねて「オルクス大迷宮」に挑むことになったのだ。今回もメルド団長と数人の騎士団員が付き添っている。

今日で迷宮攻略六日目。

現在の階層は六十層だ。確認されている最高到達階数まで後五層である。

しかし、光輝達は現在、立ち往生していた。正確には先へ行けないのではなく、何時かの悪夢を思い出して思わず立ち止まってしまったのだ。

そう、彼等の目の前には何時かのものとは異なるが同じような断崖絶壁が広がっていたのである。次の階層へ行くには崖にかかった吊り橋を進まなければならぬ。それ自体は問題ないが、やはり思い出してしまうのだろう。特に、優花は、奈落へと続いているかのような崖下の闇をジッと見つめたまま動かなかった。

「……ハジメ」

彼の名をボソツと呟く優花は奈落へと続く崖下を見ながら落ちたハジメのことを思っていた。

「園部」

「園部さん」

後ろから浩介と雫が声を掛けたので二人を心配されないように優花は振り返って二人に笑みを浮かべて返事をする。

「大丈夫よ、二人共」

「そう……無理しないでね？ 私に遠慮することなんてないんだから」

「八重樫の言う通りだぞ園部」

「うん、ありがと。でも私は平気」

そうだ。ここで、立ち止まってはいけない。ハジメを見つけるまでは……

そんな想いを抱いて、優花は歩きだそうとした時、彼が笑みを向けながら話しかけてきた。

「園部さん……君の優しいところは良いことだ。でも、クラスメイトの死に、何時までも囚われていちゃいけない！ 前へ進むんだ。きつと、南雲もそれを望んでる！」

「ちよつと、光輝！」

「雫は黙っていてくれ！ 例え厳しくても、勇者である俺が言わないといけないんだ。

……園部さん、大丈夫だ。俺が傍にいる。俺は死んだりしない。もう誰も死なせはしない。園部さんを悲しませたりしないと約束するよ」

「……………」

光輝の問題発言に、優花は無言になって若干、引いていると雫が申し訳ないように謝ってきた。

「はあく、何時もの暴走ね……ごめんなさい園部さん……」

「うん、大丈夫だよ、雫。……えつと、天之河くんも言いたいことは分かったから話しかけないでくれる？ 後、アンタが傍にいても何にもなんないから」

「……つだがー！」

優花は笑顔で容赦無く本心を伝えると、光輝はまだ何か言おうとしたのか私の方へ進み出るが一人の私の幼なじみが間に入ってくれた。

「そこまでだ……天之河」

「何だ、遠藤？」

「園部の言う通りだ。お前が傍にいて何になる？　ただハジメを困らせた奴が次は園部を困らすのか？」

浩介はそう言いながら目を細める声色も低くて圧があるが光輝は浩介の言葉を否定する。

「俺は困らせて何かいない！」

「良いや！　お前はそういう奴だったからハジメはお前のせいだ……」

懐から浩介が武器をコツソリと出してキレ気味なのが分かって、優花はすぐさま止めに入った。

「ストツプ、浩介」

「だがっ、園部……」

「大丈夫。ハジメは絶対生きてるから」

優花のそう言って宥めていると浩介は落ち着いたのか、「ふう……」と気を取り直そう



と軽く深呼吸しながら武器を収める。

「そうだな、スマン」

「うん」

光輝の方も雫が止めに入っていた。

「光輝アンタも困らせないの」

「……っ、だが！」

「だが、じゃないでしょ！」

そして、雫と優花が一発触発だった二人を止めこの場はなんとか収まった。だが、一人の私にとって問題である女子生徒が優花ぐらいにしか聞こえない程度の声量で話しかけてきた。

「へえ……ほぼ落としたような人が何言ってるの？」

「……なに？ 香織」

「いや〜何でもないよハジメ君を落とした犯人さん」

「……」

優花が目を覚ましてから、香織は毎回会った時に突っかかって来るようになっていた。言うこと大体、ハジメを落としたのは優花だとか言う。

「ねえ？ ハジメ君を落としてどんな——ごめん。私、急いでるから」……あつ、

ちよっ！」

でも優花は、香織と言いつ争つても意味が無いと思つてゐるから香織の発言を遮つて、浩介のところへと走つていった。

「……チツ」

そんな中、香織と優花を、後方から暗い瞳で見つめる者がいた。

檜山大介である。あの日、王都に戻つてしばらく経ち、生徒達にも落ち着きが戻つてきた頃、案の定、あの窮地を招いた檜山には厳しい批難が待つていた。

檜山は当然予想していたので、ただひたすら土下座で謝罪するに徹した。こういう時、反論することが下策以外のなものでもないと思つていたからだ。特に、謝罪するタイミングと場所は重要だ。

檜山の狙いは光輝の目の前での土下座である。光輝なら確実に謝罪する自分を許しクラスメイトを執り成してくれると予想していたのである。

その予想は功を奏し、光輝の許しの言葉で檜山に対する批難は収まった。香織も元来の優しさから、涙ながらに謝罪する檜山を特段責めるようなことはしなかつたし、優花とハジメの幼なじみ達は浩介が檜山に突つかかりそうになつてゐるのを必死に止めており、檜山を睨むだけだった檜山の計算通りである。もつとも、雫と浩介は薄々檜山の魂胆に気がついており、クラスのリーダーを利用したことに嫌悪感を抱いたようだが。

また、例の人物からの命令も黙々とこなした。とても恐ろしい命令だった。戦慄すべき命令だった。強烈な忌避感を感じたが、一線を越えてしまった檜山は、もう止まることができなかった。

しかし、クラスにごく自然と溶け込みながら裏では恐ろしい計画を練っているその人物に、檜山は畏怖と同時に歓喜の念も抱いていた。

(あいつは狂ってやがる。……だが、付いて行けば香織と園部は俺の……)

言うことを聞けば香織と優花が手に入る、その言葉に暗い喜びを感じ思わず口元に笑みが浮かぶ檜山だった。

一行は特に問題もなく、遂に歴代最高到達階層である六十五層にたどり着いた。

「気を引き締めろ！……このマップは不完全だ。何が起こるかわからんからな！」

付き添いのメルド団長の声が響く。光輝達は表情を引き締め未知の領域に足を踏み入れた。しばらく進んでいると、大きな広間に出た。何となく嫌な予感がする一同。

その予感は的中した。広間に侵入すると同時に、部屋の中央に魔法陣が浮かび上がったのだ。赤黒い脈動する直径十メートル程の魔法陣。それは、とても見覚えのある魔法陣だった。

「ま、まさか……アイツなのか!？」

光輝が額に冷や汗を浮かべながら叫ぶ。他のメンバーの表情にも緊張の色がはつきりと浮かんでいた。

「マジかよ、アイツは南雲にやられたんじゃなかったのかよ!」

龍太郎も驚愕をあらわにして叫ぶ。それに応えたのは、険しい表情をしながらも冷静な声音のメルド団長だ。

「迷宮の魔物の発生原因は解明されていない。一度倒した魔物と何度も遭遇することも普通にある。気を引き締めろ! 退路の確保を忘れるな!」

いざと言う時、確実に逃げられるように、まず退路の確保を優先する指示を出すメルド団長。それに部下が即座に従う。だが、光輝がそれに不満そうに言葉を返した。

「メルドさん。俺達はもうあの時の俺達じゃありません。何倍も強くなったんだ! もう負けはしない! 必ず勝ってみせます!」

「へっ、その通りだぜ。何時までも負けっぱなしは性に合わねえ。ここらでリベンジマッチだ!」

龍太郎も不敵な笑みを浮かべて呼応する。メルド団長はやれやれと肩を竦め、確かに今の光輝達の実力なら大丈夫だろうと、同じく不敵な笑みを浮かべた。

そして、遂に魔法陣が爆発したように輝き、かつての悪夢が再び光輝達の前に現れた。「グウガアアア!」

咆哮を上げ、地を踏み鳴らす異形。ベヒモスが光輝達を壮絶な殺意を宿らせた眼光で睨む。そして光輝がベヒモスに向かうおうした時、誰かに止められた。

「少し待て、天之河」

「つ、何をする！　遠藤」

光輝を止めたのは浩介だった。そして、その後ろには優花の姿がある。

「俺と園部はあいつに大きな借りがある」

「うん、天之河君。コイツは私と浩介に任せて」

そんな二人に光輝は止めようとするが浩介が怒りを込めた声色で声を掛ける。

「でも、君達二人だけでは……」

「うるせえよ……あのベヒモスは俺が倒す！　だからてめえらは下がれ」

浩介はそう言うのとメルド団長が真剣な表情で駆け寄りながら話しかける。

「浩介、優花……いけるんだな？」

「はい！」

二人の真つ直ぐ芯のある返事を聞くとメルド団長は「ふっ」と笑い全員に伝えた。

「お前達！　ベヒモスは浩介と優花が戦う俺達はトラウムソルジャーをpushさるぞ

！」

「しかし、メルドさん！」

「光輝つ二人を仲間を信用出来ないのかっ！」

「ぐっ…分かりました…」

メルドの指示に光輝は反発するも、メルドの一喝で苦い顔をしながらも渋々、了解する。

そして、騎士団と永山パーティー、小悪党組はメルド団長の指示に従い、天之河の勇者パーティーも渋々従い、トラウムソルジャーの撃退にまわった。

「グルウウウウ！」

浩介は今、親友のハジメを奈落に追いやった魔物が目の前にいる。だが負けない負ける訳にはいかない。

しかし、真正面から見ると怖い。足が震えるのは分かる。だが、親友との約束を果たす為にやってのけた修行の成果を見せるとだと……

「行くぞ園部！」

浩介は園部に声をかけながら胸ポケットから浩介にとっての「キーアイテム鍵」をハジメ特製のサングラスを取り出した。

「わかってる！ 浩介は準備は良いの？心とか？」

「……ああ、大丈夫だ園部もサポートを頼む！」

園部に心の心配をされるがそんなの覚悟の上のことだ。浩介は園部にサポートを頼むとだけ言うとうと園部を笑みを浮かながら答える。

「ええ、サポートは任せなさい！」

「じゃあ……いくか」

例え黒歴史の一つでもコイツを倒せるなら存分にこの力を使ってやろう。そして、浩介は手に持つサングラスを装着して、要らぬターンを決めると華麗に礼をして告げた。

そう……

「フツ、刻は満ちた深淵の夜が始まる……さあ、シヨウタイムだ！」

深淵の再誕を……

「フツ、刻は満ちた……シヨウタイムだ！」

浩介？が告げた瞬間、フツと段々と浩介？の姿が霞んでいくかのように消えていく。

そして……

「ハッ……」

「グルウォー！」

いつの間にか浩介？はベヒモスの頭上に姿を表しており小太刀で角に攻撃を入れる。

ピキッ

そして、浩介の攻撃によりベヒモスの角が一つヒビが入っていた。怒ったベヒモスは浩介？へと突進する。

「温いな……これはどうだ！

〃ヨイヤミスラッシュ  
宵闇の斬撃”！

「グルッオー！」

そんな言葉を吐きながら同時に浩介？が闇の魔力を小太刀に纏わせながらベヒモスの身体を斬りつけていく。すると、ベヒモスの上げた苦痛混じりの驚愕の声に、その場の全員の視線が向けられた。

そこには、いつの間にかベヒモスから離れておりベヒモスを睨む浩介？の姿があった。その立ち姿は片方の手でサングラスを、中指で押さえている浩介？の姿があった。

それを見た光輝達は浩介？の姿に困惑する。

「え、遠藤？」

「遠藤君？」

「遠藤どうしたんだ？」

困惑の音が光輝達の方に湧く中、浩介？は何も意味の無いターンを決めてから告げる。

「今の我は遠藤浩介……否……否！　我が名はコウスケ・E・アビスゲート！」

「……はあ？」



全員困惑した。優花は恥ずかしさとあの時の苦い思い出を思い出して、両手で顔を隠す。しかし浩介……いや、アビスゲートは止まらない。更に、アビスゲートは迷宮中に轟けと、声高らかに叫びだした。

「ご唱和ください我の名を！深淵卿！コウスケ・E・アビイッスゲエツトツ！！」  
「「「イエスツ、アビイッスゲエツトツ！！」」」

何故か永山達や小悪党組、勇者パーティー、騎士団員たちまでもが「アビスゲート」、もとい深淵卿モードになった浩介の名乗りに追従した。

しかし、すぐに追従した者達ははっとなって、何をしているんだという顔をする。

そんなことに気にせずアビスゲートは走り出し、優花に指示を出す。

「行くぞ、我が深淵の友、優花よ、あの怨敵の肅清を共にな！」

優花はアビスゲートに変な呼び方をされてピクッと眉を動かすがサポートは忘れな  
い。すぐさまアビスゲートに付与魔法を発動する。

「……ああ、うん。わかった……いくよ浩介！『付与』——攻撃力上昇、俊敏上昇、防御  
力上昇！」

優花はアビスゲートに普通なら難しい脅威の三つの付与魔法を付与をする。しかし、  
アビスゲートは走りだすと同時に優花に感謝しながら訂正を入れる。

「感謝する！しかし我が深淵の友……我はコウスケ・E・アビスゲートだ！」

「いいから早く、行きなさいっ！この、馬鹿厨二サングラス！」

流星にアビスゲートの発言にイラツときた優花は腰に携えてる投げナイフを取り出して構えながら声を上げ、アビスゲートに早く戦いに行けと指示する。

「承ったぞ！ フツ……」

優花に叱られながらもアビスゲートはベヒモスに接近する。その速度は優花の付与魔法により更に敏捷が上がっており光輝すらギリギリ姿を捉えることの出来ない程の速さであった。

「フツ……」

不敵に笑みを零すアビスゲートは片手に小太刀ともう片手にナイフを構えながらベヒモスへと突貫する。

「……ナイトオブ・レイン悪夢の五月雨！」

「グルウツ?!」

またも意味不明な技名で投げナイフの数本と小太刀での攻撃をしながらアビスゲートは確実にベヒモスの身体に至るところを傷付けていく。ベヒモスはアビスゲートを捉えることを出来ず、そして段々と傷付けられていく自分の身体に驚愕の鳴き声を上げる。



進するベヒモスを頭を利用して高く飛び上がる。その高度はこの空間の天井に届く。そして……何故か要らぬところでターンをしてから魔法でも無いのに詠唱を始めていく。

「我が深淵の分身よ　我が影達よ　我と共に怨敵を打ち滅ぼせ！」  
深淵分身“！”  
アビス・イリュージョン

アビスゲートが詠唱？的なことを言い終えた瞬間……

「フツ……刻がきた」

ターンを決めるアビスゲート……

「我が力を見せつけてやろう」

右手をカッコよく突き出すアビスゲート……

「これこそ我が力の一つ……」  
アビス・イリュージョン  
深淵分身“だ！”

そして、要らぬターンを決めるアビスゲート……

何故かアビスゲートが三人に増えていた。それを見たメルド達は目を見開いて声が出ない程、驚愕するがアビスゲートはそんなこと露知らず、分身達と共に、ベヒモスへ特攻をしかける。

「ではっ……行くぞ！　我が深淵の半身達っ！」

「承知っ！」

本体の号令と共に分身アビスゲート達もベヒモスへと急降下していく。そして、地上に降り立つと同時に三人共、すぐさま行動を開始し、物凄い速さでベヒモスを切りつけていく。

「ハアアアッ！」

「ウオオオ！」

「ハアッ！」

アビスゲート達の攻撃は連携力も凄く高く劣れを全く見せないかのように加速していく。ベヒモスは三人に増えたアビスゲート達の対応が出来ずに明らかに弱らしている。しかし、ベヒモスもやられっぱなしではなくアビスゲート達に反撃をする。

「グルウア！」

「ぐっ……」

ベヒモスはまたも角を赤熱化させアビスに突進する。そのせいで分身達は消えていき、本体のアビスゲートは避けられたもののベヒモスの熱によって少し頬に火傷を負ってしまう。

「ぐっ……やるな！」

だが、我の方が一枚上手だ！行くぞ！

//アビス・ロンド  
深淵演武“！”

アビスゲートは自身をわざと回転しながら空を舞うかのようにベヒモスを切りつけていく。

「ウオオオ！」

ピキンッ

不穏なお度が音が鳴ったと同時にアビスゲートは振り下ろした小太刀でベヒモス一本の角を叩き折る。そして、更に至る所に傷を付けていき弱らせていく。

「グルウウウウ！」

ベヒモスの唸り声が聞こえる。しかし、今のアビスゲートには、ベヒモスの硬皮をも上回る強力な攻撃を持ち合わせていない。

だから、

「今だ！我が友よ！」

「うん！」

アビスゲートに答えるかのように、詠唱を始める。

「火の覇者よ 今宵 我が敵を焼き払え—— 炎天——！」

ゴオオオオオウウッ！

優花が詠唱を終えた瞬間、ベヒモスの足元から真上へ登る巨大な業火の柱がベヒモスに囲い込み、その業火でベヒモスを焼き尽す。

「グウルアガアアアアア!!」

ベヒモスの断末魔が広間に響き渡る。その絶叫は鼓膜が破れそうなほどだったが、その叫びは少しずつ細くなり、やがて、その叫びすら燃やし尽くされたかのように消えていった。そして、柱が消え残ったのは後には黒ずんだ広間の壁と、ベヒモスの物と思しき僅かな残骸だけだっ

「か、勝ったのか?」

「勝ったんだろ……」

「勝っちゃまったよ……あの二人」

「マジかよ?」

「マジで?」

この場にいる者達は、呆然とベヒモスがいた場所を眺め、ポツリポツリと勝利を確認するように呟いていった。

「ふう……」

強大な魔法を放ったので一息吐きながら安堵していると、フラフラとこちらに歩み寄る浩介がニツと笑みを浮かべながら話しかけた。

「……やったな園部」

浩介はそう言いながら親指を立てる。優花も返すかのように同じように親指を立て

る。しかし、優花はニコニコしながら浩介に近付きながら話しかける。

「うん……でも浩介?」

「なんだ?」

浩介はキョトンと首を傾げるが優花は笑顔のまま話す。

「『深淵の友』ってやめてくれない同類って思われるじゃん」

それを聞いた浩介は片足について、苦しいのか胸元をギュツと握りながら叫ぶ。

「やめてえー!　心決まないで!　俺もきてるんだよ身体より心のダメージがっ

!」

そう叫ぶ浩介も大分、心に来ていたようらしい。そんなことを話していると光輝達も

二人のところへ集まってきた。

「二人共、無事か?　園部さん、遠藤凄かったよ。二人がいれば何も怖くないな!」

「お? おう」

「えっ? あ、ありがとう」

二人は光輝の以外な賞賛でびつくりしたが次の発言でいつもの光輝に対する何時も  
の評価になった。

「これで、南雲も浮かばれるな。自分を突き落とした魔物を自分が守った幼なじみ達が  
討伐したんだから」



光輝のそんな満面な笑みで話しだす姿を優花と浩介は唾然として黙っているだけ  
たつた。

「……」

二人は「やっぱり天之河は天之河だと……」と思い知らされたのだった。

~~~~~

一行がベヒモスの討伐に喜んでる時、ある一人の少女が独り言を呟いた。

「ああ、死ななかつたな。あの女、つまんな……」

この呟きは誰も聞こえることはなかったのだつた……。

## 十四話

## 最奥のガーディアン

ハジメとユエは攻略の最中沢山の魔物を倒していき遂に、次の階層でハジメが最初にいた階層から百階目になるところまで来た。その一歩手前の階層でハジメは装備の確認と補充にあたっていた。相変わらずユエは飽きもせずハジメの作業を見つめている。というよりも、どちらかという作業をするハジメを見るのが好きなようだ。今も、ハジメのすぐ隣で手元とハジメを交互に見ながらまったりとしている。その表情は迷宮には似つかわしくない緩んだものだ。

ハジメは百層手前の階層で装備の準備をしているとユエがハジメの作業を見つめていた。

「……」

ユエと出会ってからどれくらい日数が経ったのか時間感覚がイカれてしまってるせいで分からないが、お互いを信頼し合えるぐらいいは過ぎたと思っっている。

だが、ハジメはユエの行動に少し問題を感じていた。

それは……

「……………」

ユエはよくこういうまったり顔というか安らぎ顔を見せながら露骨に甘えてくるようになった。

特に拠点で休んでいる時には必ず密着している。横になれば添い寝の如く腕に抱きつくし、座つていれば背中から抱きつく。吸血させるときは正面から抱き合う形になるのだが、終わった後も中々離れようとしない。俺の胸元に顔をグリグリと擦りつけ満足げな表情でくつろぐのだ。

ハジメは最初は離れるように頑張ったがユエの執念深さに負け、後半辺りから、ユエのスキンシップに慣れるようになった。そして、今現在もユエはハジメの胸元に顔を埋めながら頭をグリグリなどしている。

そんなユエにハジメはある思いを抱いていた。

——俺にとって、ユエは何なのか？

ハジメ自身、ユエのことは信頼しているし大切な仲間だと思つている。しかし、ユエが自分に対して抱いている気持ちが仲間以上の想いだと段々と過ごしている内に分かつてしまった。

しかし、ハジメには優花がいる。何時のハジメなら、優花や幼なじみ達が一番大切だから、容易く切り捨てることが出来た。しかし、ユエ相手になると優花と同じくらいに

大切に思ってしまう自分がいて容易に切り捨てられなかった。そんな思いを張り巡らさせながらハジメは胸元に顔を埋めながらグリグリしてるユエを呼びかける。

「なあ……ユエ」

「……ん？」

ハジメの呼びかけにユエは胸元にグリグリしていた頭を上げて真っ直ぐ見つめてくる。そんなユエにハジメは笑みを向けながら話す。

「次の階層も頑張ろうな……」

「……ハジメ……いつもより慎重……」

ユエはハジメの今までとは違う雰囲気を感じ取ったのか首を傾げながら問いかける。

「うん？ ああ、次で百階だからな。もしかしたら何かあるかもしれないと思ってな。」

一般に認識されている上の迷宮も百階だと言われていたから……まあ念のためだ」

「……んっ」

そんなユエの笑顔にハジメの心が揺らぎそうになるが理性を保たせ耐えていく。

—— そうだ。ユエは俺にとって大切な……仲間だ。

と、自分の心の中に言い聞かせながらハジメは作業を再開した。

ハジメが最初にいた階層から八十階を超えた時点で、ここが地上で認識されている通

常の「オルクス大迷宮」である可能性は消えた。奈落に落ちた時の感覚と、各階層を踏破してきた感覚からいえば、通常の迷宮の遥かに地下であるのは確実だ。

銃技、体術、固有魔法、兵器、雷魔法、そして錬成。いずれも相当磨きをかけたという自負がハジメにはあった。そうそう、簡単にやられはしないだろう。しかし、そのよ  
うな実力とは関係なくあっさり致命傷を与えてくるのが迷宮の怖いところである。

故に、出来る時に出来る限りの準備をしておく。ちなみに今のハジメのステータスは  
こうだ。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：76

天職：錬成師

筋力：2500

体力：3500

耐性：2500

敏捷：3000

魔力：3800

魔耐：3800

技能：錬成「+鉱物系鑑定」「+精密錬成」「+鉱物系探査」「+鉱物分離」「+鉱物融

合]「+複製錬成」・魔力操作「+魔力放射」「+魔力圧縮」「+遠隔操作」・雷属性適性「魔力消費減少」・雷属性耐性・脳内設計「+想像設計」・胃酸強化・纏雷・天歩「+空力」「+縮地」「+豪脚」・風爪・夜目・遠見・気配感知・魔力感知・熱源感知・気配遮断・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・金剛・威圧・念話・■■■■・言語理解

「そろそろか……」

そう口に零しながらハジメはステータスプレートを見て、大体のステータスは上がっているが固有魔法は増えなくなっていることに気付き限界が見えてきたことに理解する。

そして、ステータスの確認を終えてからしばらくして、全ての準備を終えたハジメとユエは、階下へと続く階段へと向かい、その階層の光景にハジメもユエも哑然とした。

「……………何だ此処」

その階層は、無数の強大な柱に支えられた広大な空間だった。柱の一本一本が直径五メートルはあり、一つ一つに螺旋模様と木の蔓が巻きついたような彫刻が彫られている。柱の並びは規則正しく一定間隔で並んでいる。天井までは三十メートルはありそうだ。地面も荒れたところはなく平らで綺麗なものである。どこか荘厳さを感じさせる空間だった。

ハジメは気を取り直し警戒しながら隣にいるユエに油断しないようにと話しかける。  
「ユエ、油断するなよ」

「……………」

ハジメ達が警戒しながら進んだが特に何も起こらないので先へ進むことにした。感知系の技能をフル活用しながら歩みを進める。二百メートルも進んだ頃、前方に行き止まりを見つけた。いや、行き止まりではなく、それは巨大な扉だ。全長十メートルはある巨大な両開きの扉が有り、これまた美しい彫刻が彫られている。特に、七角形の頂点に描かれた何らかの文様が印象的だ。

「七角形の彫刻……………七大迷宮だからか？」

扉にそんな疑問を抱くも美しい彫刻が彫られてる扉を見てハジメは感嘆とする。

「だが、凄いな。もしかして……………」

「……………叛逆者の住処？」

「かもな、だが……………」

嫌な予感がする。実際、感知系技能には反応がなくともハジメの本能が警鐘を鳴らしていた。この先はマズイと。それは、ユエも感じているのか、うつすらと額に汗をかいている。

だが、ハジメはこんなところで恐れてはいけないと思い一旦、両目を瞑り心を整えてか

ら両目を開き、覚悟しながらユエに話しかける。

「行くぞつユエ」

「……………ん！」

そして、二人揃って扉の前に行こうと最後の柱の間を越えていく。

その瞬間、扉と俺達の間三十メートル程の空間に巨大な魔法陣が現れた。赤黒い光を放ち、脈打つようにドクンドクンと音を響かせる。

「……………つ、この魔法陣！」

ハジメは、その魔法陣に見覚えがあった。忘れようもない、あの日、奈落へと落ちた日に見た自分達を窮地に追い込んだトラップと同じものだ。だが、ベヒモスの魔法陣が直径十メートル位だったのに対して、眼前の魔法陣は三倍の大きさがある上に構築された式もより複雑で精密なものとなっている。

魔法陣はより一層輝くと遂に弾けるように光を放った。

咄嗟に腕をかざし目を潰されないようにするハジメとユエ。光が収まった時、そこに現れたのは……………

体長三十メートル、六つの頭と長い首、鋭い牙と赤黒い眼の化け物。

「クハツ……………迷宮のラスボスはヒュドラかよ」

ハジメはそのラスボスの姿を見て冷や汗をかきながら笑みを零しながら呟く。



「「「クルウアアアアン!!」」」」

不思議な音色の絶叫をあげながら六対の眼光がハジメ達を射貫く。身の程知らずな侵入者に裁きを与えようというのか、常人ならそれだけで心臓を止めてしまうかもしれない壮絶な殺気が二人に叩きつけられる。同時に赤い紋様が刻まれた頭がガパツと口を開き火炎放射を放った。それはもう炎の壁というに相応しい規模である。

ハジメとユエは同時にその場を左右に飛び退き反撃を開始する。ドンナーが火を吹き電磁加速された弾丸が超速で赤頭を狙い撃つ。弾丸は狙い変わらず赤頭を吹き飛ばす。

「……っし」

ドンナーが効くことにハジメは内心ガツツポーズを決めた時、白い文様の入った頭が「クルウアーン」と叫び、吹き飛んだ赤頭を白い光が包み込んだ。すると、まるで逆再生でもしているかのように赤頭が元に戻っていることにハジメは舌打ちをする。

「チツ…回復役もいんのか!」

ハジメに少し遅れてユエの氷弾が緑の文様がある頭を吹き飛ばしたが、同じように白頭の叫びと共に回復してしまった。

ハジメは舌打ちをしつつ「念話」でユエに伝える。

「ユエ! あの白頭を狙うぞ! キリがない!」

「んっ!」

青い文様の頭が口から散弾のように氷の礫を吐き出し、それを回避しながらハジメとユエが白頭を狙う。

ドパンツ！

「轟雷球」！

「緋槍」！

閃光と紅の稲妻の玉、燃え盛る槍が白頭に迫る。しかし、直撃かと思われた瞬間、黄色の文様の頭がサツと射線に入りその頭を一瞬で肥大化させた。

「！」

呆気にとられてると、淡く黄色に輝きハジメのレールガンと「轟雷球」もユエの「緋槍」も受け止めてしまった。衝撃と爆炎の後には無傷の黄頭が平然とそこにいて俺達を睥睨している。

「ちっ！ 盾役かつ。攻撃に盾に回復にと実にはバランスのいいことだな！」

苛立ちを覚えるハジメは頭上に向かって「焼夷手榴弾」を投げる。同時にドンナーの最大出力で白頭に連射した。ユエも合わせて「緋槍」を連発する。

「チツ……！」

ユエの「蒼天」なら黄頭を抜いて白頭に届くかもしれないが、最上級を使ってしまう

と一発でユエは行動不能になってしまふ。吸血をすれば直ぐに回復するが、そんな事をする時間は多分無いだろう。なら、せめて半数は減らさないといけない。

黄頭は、ハジメとユエの攻撃を尽く受け止める。だが、流石に今度は無傷とはいかなかったのかあちこち傷ついていた。

「クルウアン！」

すかさず白頭が黄頭を回復させる。全くもって優秀な回復役である。しかし、その後、白頭の頭上で“焼夷手榴弾”が破裂した。摂氏三千度の燃え盛るタールが撒き散らされる。白頭にも降り注ぎ、その苦痛に悲鳴を上げながら悶えている。

「よしっ！」

このチャンスを逃さない為にハジメは“念話”で合図をユエに送り、同時攻撃を仕掛けようとする。が、その前に絶叫が響いた。ユエの声で。

「いやあああああ!!!」

「!? ユエ！」

咄嗟にユエに駆け寄ろうとするが、それを邪魔するように赤頭と緑頭が炎弾と風刃を無数に放ってくる。

「ユエっ！」

ユエを最優先にハジメは“縮地”と“空力”で必死に攻撃をかわしながら黒頭に向

かつてドンナーと雷魔法を発砲、放つ。射撃音と雷音と共に、ユエをジツと見ていた黒頭が吹き飛ぶ。同時に、ユエがくたりと倒れ込んだ。その顔は遠目に青ざめているのがわかる。そのユエを喰らおうというのか青頭が大口を開けながら長い首を伸ばしユエに迫っていく。

「させるかあああ!!」

ハジメはダメージ覚悟で炎弾と風刃の嵐を「縮地」で突っ込んで行く。致命傷になりそうな攻撃だけドンナーの銃身と「風爪」で切り裂き、ギリギリのタイミングでユエと青頭の間に入ることに成功した。しかし、迎撃の暇はなく、俺は咄嗟に「金剛」を発動する。「金剛」は移動しながらは使えない。そのため、どっしりとユエの前に立ち塞がる。魔力がハジメの体表を覆うのと青頭が噛み付くのは同時だった。

「クルルルッ!」

「ぐうう!」  
「雷閃!」

低い唸り声を上げながら、青頭がハジメを丸呑みにせんと、その顎門を閉じようとするが、ハジメは前かがみになりながら背中と足で踏ん張り閉じさせない。そして、雷の斬撃で青頭を口の中から切り裂いた。

青頭の上顎から斬撃で真上に弾け飛ぶ。力を失った青頭をハジメは「豪脚」で蹴り飛ばす。次いで、「閃光手榴弾」と「音響手榴弾」をヒュドラに向かって投げつけ

た。

「ハアツ、ハアツ……」

二つの手榴弾が強烈な閃光と音波でヒュドラを怯ませる。その隙にハジメはユエを抱き上げ柱の陰に隠れるとユエの両肩を掴みながら必死に呼びかける。

「おい！ ユエ！ しっかりしろ！」

「……」

ハジメの呼びかけにも反応せず、青ざめた表情でガタガタと震えるユエ。

「黒頭は精神汚染系か？」

ハジメは黒頭のことよりも一刻も早くユエを起こす為にペシペシと頬を叩く。『念話』でも激しく呼びかけ、神水も飲ませる。しばらくすると虚ろだったユエの瞳に光が宿り始めた。

「ユエ！」

「……ハジメ？」

「おう、ハジメさんだ。大丈夫か？ 一体何された？」

パチパチと瞬きしながらユエはハジメの存在を確認するように、その小さな手を伸ばしハジメの顔に触れる。それでようやくハジメがそこにいると実感したのか安堵の吐息を漏らし目の端に涙を溜め始めた。

「……よかった……見捨てられたと……また暗闇に一人で……」

「ああ？ そりや一体何の話だ？」

ユエの様子に困惑するハジメ。ユエ曰く、突然、強烈な不安感に襲われ気がつけば見捨てられて再び封印される光景が頭いっぱい広がっていたという。そして、何も考えられなくなり恐怖に縛られて動けなくなつたと。

「チイっ、やつぱりバッドステータス系の魔法か黒頭は相手を恐慌状態にでも出来るつてことかっ。ホントにバランスのいい化物だな、くそつたれ！」

「……ハジメ」

敵の厄介さに悪態をつくハジメに、ユエは不安そうな瞳を向ける。よほど恐ろしい光景だつたのだろう。見捨てられるというのは。何せ自分を三百年の封印から命懸けで解き放つてくれた人物であり、吸血鬼と知つても変わらず接してくれるどころか、日々の吸血までさせてくれるのだ。心許すのも仕方ないだろう。

そして、ユエにとってはハジメの隣が唯一の居場所だと思つているのだろう。一緒にハジメの故郷に行くという約束がどれほど嬉しかったか。再び一人になるなんて想像もしたくない。そのため、植えつけられた悪夢はこびりついて離れず、ユエを蝕む。ヒュドラが混乱から回復した気配に立ち上がるが、ユエは、そんなハジメの服の裾を思わず掴んで引き止めてしまった。

「…………私…………」

泣きそうな不安そうな表情で震えるユエ。ハジメは何となくユエの見た悪夢から、今ユエが何を思っているのか感じ取った。そして、普段からの態度でユエの気持ちも察している。どちらにしろ、日本に連れて行くとまで約束してしまったのだ。今更、知らないフリをしても意味がないだろう。

「ユエ…………」

また、ハジメに優花のことが過ぎる。しかし、ユエももうハジメにとつては仲間以上の大切の存在になっていた。彼女と同じぐらいにユエのことも大切にしてる。

だからハジメは決心した。内心優花には申し訳ない。だが、覚悟を決めたならもう止めない。ハジメはユエの前にしやがみ目線を合わせる。

そして…………

「? ……!?!?」

首を傾げるユエにキスをした。

ほんの少し触れさせるだけのものだが、ユエの反応は劇的だった。マジマジとハジメを見つめる。ハジメはユエの手を引いて立ち上がらせ、今の思いを告げた。

「ユエ、俺は今でも優花が一番の大切な存在であり愛しい人だ。だが、お前の事も俺にとつてはもう譲れない大切な存在なんだ。だから行こう一緒にな」

ハジメの言葉を聞いたユエは未だ呆然と見つめていたが、いつかのように無表情を崩しふんわりと綺麗な笑みを浮かべた。

「んっ！」

「じゃあ行くぞ！ユエ、俺はシユラーゲンを使う。連発出来る品物ではないから援護を頼む。」

「……任せて！」

いつもより断然やる気に溢れているユエ。静かな呟くような口調が崩れ覇気に溢れた応答だ。先程までの不安が根こそぎ吹き飛んだようである。

「ああ、頼んだ！」

今のユエなら完全に無敵だ。ハジメはユエの表情を見てそう確信する。

すると、ヒュドラは咆哮を上げ、ハジメ達のいる場所に炎弾やら風刃やら氷弾やらを撃ち込んできた。

二人は一気に柱の陰を飛び出し、今度こそ反撃に出る。

「『緋槍』！ 『砲皇』！ 『凍雨』！」

矢継ぎ早に引かれた魔法のトリガー。有り得ない速度で魔法が構築され、炎の槍と螺旋に渦巻く真空刃を伴った竜巻と鋭い針のような氷の雨が一齐にヒュドラを襲う。攻撃直後の隙を狙われ死に体の赤頭、青頭、緑頭の前に黄頭が出ようとするが、白頭の方



をハジメが狙っている気がついたのかその場を動かさず、代わりに咆哮を上げる。

「クルウアン！」

すると近くの柱が波打ち、変形して即席の盾となった。どうやらこの黄頭はサソリモドキと同様の技が使えるらしい。もつとも規模は幾分小さいようだが。

ユエの魔法はその石壁に当たると先陣が壁を爆砕し、後続の魔法が三つの頭に直撃した。

「「グルウウウウ!!」」

悲鳴を上げのたうつ三つの頭。黒頭が、魔法を使った直後のユエを再びその眼に捉え、恐慌の魔法を行使する。

ユエの中に再び不安が湧き上がってくる。しかし、ユエはその不安に押しつぶされる前に、先ほどのハジメからのキスを思い出す。すると、体に熱が入ったように気持ちが高揚し、不安を押し流していった。

「……もう効かない！」

ユエは、ハジメを援護すべく、更に威力よりも手数を重視した魔法を次々と構築し弾幕のごとく撃ち放つ。回復を受けた赤頭、青頭、緑頭がそれぞれ攻撃を再開するが、ユエはたった一人でそれと渡り合った。尽く相殺し隙あらば魔法を打ち込む。

一方、ハジメは三つの首がユエに掛かり切りになっている間に、一気に接近する。万

一外して対策を取られては困るので文字通り一撃必殺でいかなければならない。黒頭がユエに恐慌の魔法が効かないと悟ったのか、今度はその眼を向ける。ハジメの胸中に不安が湧き上がり、今までにあつた辛い経験、奈落に來たばかりの頃の苦痛と飢餓感きがかんが蘇つてくる。

「くだらねえな……」

こんな過去なんて、優花とユエ大切な人達のためならば、どうでも良いことだ。

「効かねえぞつ黒頭！」

ハジメは怒り任せで黒頭をドンナーでぶつ飛ばした。

白頭がすかさず回復させようとするが、その前にハジメが“空力”と“縮地”で飛び上がり背中に背負っていた対物ライフル：シユラーゲンを取り出し空中で脇に挟んで照準する。黄頭が白頭を守るように立ち塞がるが、そんな事は想定済みだ。

「クハッ……」

予想通りの動きをしてくれたヒュドラにハジメは笑みを零す。

「まとめて砕くー！」

ハジメが“纏雷”と“轟雷”を使いシユラーゲンが紅いスパークを巻き起こす。弾丸はタウル鉱石をサソリモドキの外殻であるシユタル鉱石でコーティングした弾、シユタル鉱石は魔力との親和性が高く“纏雷”と雷魔法にもよく馴染む。通常弾の数倍の

量を圧縮して詰められた燃燒粉が撃鉄の起こす火花に引火して大爆発を起こす。  
ドガンツ!!

大砲でも撃つたかのような凄まじい炸裂音と共に赤い弾丸が、更に約一・五メートルのバレルにより電磁加速を加えられる。その威力はドンナーの最大威力の更に十倍。単純計算で通常の対物ライフルの百倍の破壊力である。異世界の特殊な鉱石と固有魔法がなければ到底実現し得なかつた怪物兵器だ。

発射の光景は正しく極太のレーザー兵器のよう。かつて、勇者の光輝がベヒモスに放つた切り札が、まるで兎戯に思える。射出された弾丸は真つ直ぐ周囲の空気を焼きながら黄頭に直撃した。

黄頭もすっかり「金剛」らしき防御をしていたのだが……まるで何もなかつたように弾丸は背後の白頭に到達し、そのままやはり何もなかつたように貫通して背後の壁を爆砕した。階層全体が地震でも起こしたかのように激しく震動する。

後に残つたのは、頭部が綺麗さっぱり消滅しドロツと融解したように白熱化する断面が見える二つの頭と、周囲を四散させ、どこまで続いているかわからない深い穴の空いた壁だけだった。

一度に半数の頭を消滅させられた残り三つの頭が思わず、ユエの相手を忘れて呆然とハジメの方を見る。ハジメはスタツと地面に着地し、煙を上げているシュラーゲンから

排莢した。チンツと葉莢が地面に落ちる音で我に返る三つの頭。ハジメに憎悪を込めた眼光を向けるが、彼等が相対している敵は眼を離していい相手ではなかった。

「天灼」

かつての吸血姫。その天性の才能に同族までもが恐れをなし奈落に封印した存在。その力が、己と敵対した事への天罰だとしても言うかのように降り注ぐ。

三つの頭の周囲に六つの放電する雷球が取り囲む様に空中を漂ったかと思うと、次の瞬間、それぞれの球体が結びつくように放電を互いに伸ばしてつながり、その中央に巨大な雷球を作り出した。

ズガガガガガガガガッ!!

「へえ………凄まじいな雷魔法の最上級」

ハジメは、もう魔物を喰らったせいかわ化した雷魔法では出来ない最上級に感嘆を漏らす。

中央の雷球は弾けると六つの雷球で囲まれた範囲内に絶大な威力の雷撃を撒き散らした。三つの頭が逃げ出そうとするが、まるで壁でもあるかのように雷球で囲まれた範囲を抜け出せない。天より降り注ぐ神の怒りの如く、轟音と閃光が広大な空間を満たす。そして、十秒以上続いた最上級魔法に為すすべもなく、三つの頭は断末魔の悲鳴を上げながら遂に消し炭となっていた。

「やったか…」

いつもの如くユエがペタリと座り込む。魔力枯渇で荒い息を吐きながら、無表情ではあるが満足気な光を瞳に宿し、ハジメに向けてサムズアップした。ハジメも頬を緩めながらサムズアップで返す。シユラーゲンを担ぎ直しヒユドラの僅かに残った胴体部分の残骸に背を向けユエの下へ行こうと歩みだした。

その直後、

「ハジメー」

ユエの切羽詰まった声が響き渡る。何事かと見開かれたユエの視線を辿ると、音もなく七つ目の頭が胴体部分からせり上がり、ハジメを睥睨していた。

「はっ？」

突然の七つ目の頭の登場に驚きを隠せないハジメ。七つ目の銀色に輝く頭は、ハジメからスッと視線を逸らすとユエをその鋭い眼光で射抜き予備動作もなく極光を放った。

「クっソツッ！」

ハジメは銀頭が視線をユエに逸した瞬間、全身を悪寒に襲われ同時に飛び出した。青頭の時の再現か、極光がユエを丸ごと消し飛ばす前に、再び立ち塞がることに成功した。

「…ッ！　ぐおおおおー！」

だが、その結果は全く違ったものだった。極光がハジメを飲み込む。後ろのユエも直

撃は受けなかったものの余波により体を強かに打ちぬかれ吹き飛ばされた。

極光が収まり、ユエが全身に走る痛みを呻吟き声を上げながら体を起こす。極光に飲まれる前にハジメが割って入った光景に焦りを浮かべながらその姿を探す。

ハジメは最初に立ち塞がった場所から動いていなかった。仁王立ちしたまま全身から煙を吹き上げている。地面には融解したシユラーゲンの残骸が転がっていた。

「ハ、ハジメ？」

「……」

ハジメは答えない。そして、そのままグラリと揺れると前のめりに倒れこんだ。

「ハジメー」

ユエが焦燥に駆られるまま痛む体を見捨てて駆け寄ろうとする。しかし、魔力枯渇で力が入らず転倒してしまった。もどかしい気持ちを押し殺して神水を取り出すと一気に飲み干す。少し活力が戻り、立ち上がってハジメの下へ今度こそ駆け寄った。

うつ伏せに倒れこむハジメの下からジワツと血が流れ出してくる。ハジメの「金剛」を突き抜けダメージを与えたのだろう。もし、ユエの「蒼天」にもある程度は耐えたサソリモドキの外殻で作ったシユラーゲンを咄嗟に盾にしなければ即死していたかもしれない。

仰向けにしたハジメの容態は酷いものだった。指、肩、脇腹が焼け爛ただれ一部骨が

露出している。顔も右半分が焼けており右目から血を流していた。角度的に足への影響が少なかったのは不幸中の幸いだろう。

ユエは急いで神水を飲ませようとするが、そんな時間をヒュドラが待つはずもない。今度は直径十センチ程の光弾を無数に撃ちだしてきた。まるでガトリングの掃射のような激しさだ。

ユエはハジメを抱えると、力を振り絞ってその場を離脱し柱の影に隠れる。柱を削るように光弾が次々と撃ち込まれていく。一分も持たないだろう。光弾の一つ一つに恐ろしい程のエネルギーが込められている。

ユエは急いで神水をハジメの傷口に降り掛け、もう一本も飲ませようとする。しかし、飲み込む力も残っていないのか、ハジメはむせて吐き出してしまう。ユエは自分の口に神水を含むと、そのままハジメに口付けをし、むせるハジメを押さえつけて無理やり飲ませた。

しかし、神水は止血の効果はあったものの、中々傷を修復してくれない。いつもなら直ぐに修復が始まるのに、何かに阻害されているかの様に遅々としている。

「どっしょっしょ」

ユエは半ばパニックになりながら、手持ちの神水をありったけ取り出した。

実は、ヒュドラのあの極光には肉体を溶かしていく一種の毒の効果も含まれていたの

だ。普通は為す術もなく溶かされて終わりである。しかし、神水の回復力が凄まじく、溶解速度を上回って修復しており、速度は遅いものの、ハジメの魔物の血肉を取り込んだ強靱な肉体とも相まって時間をかければ治りそうである。もつとも、右目に関しては極光の光で蒸発してしまい、神水では欠損は再生できない以上治らないのだが。

柱はもうほとんど砕かれ、ハジメが動けるようになるまではとても持ちそうになり。ユエは決然とした表情で、ハジメを見つめるとそつと口付けをする。そして、ハジメのドンナーを手にとると立ち上がった。

「……………今度は私が助ける……………」

ハジメは意識を微かに取り戻し、自分が現状倒れていることに気付いた。

——俺は確か、あのヒュドラの極光を喰らっちゃって……………。

こんな状態になった原因をハジメは段々と思い出していく。

「あぐっ!?!」

その時、悲鳴が聞こえたハジメは、揺らぐ意識を必死に繋ぎ留めその方向へ薄目で向けると、ユエが一人戦っている光景を見た。俺のドンナーを片手に必死に戦い、捌られるように追い詰められているのに諦めずユエが一人でヒュドラに立ち向かっていた。

「ユ……………エっ」



なんとか立ち上がるとしても身体中が痛みだし力が入らずハジメは半ば諦めを感じてしまう。そして、ポケットから優花の髪留めを取り出すと、此処にいない愛しの人に心の中で謝った。

「優花、ごめんな……」

『ハジメ』

諦めかけていたその時だった。心を癒すような優花の声がハジメの頭の中に響く。ハジメは一瞬、死ぬ直前の幻聴かと思う。

『ハジメなら勝てる、ハジメなら倒せる。だって……』

——約束したでしょ？

しかし、その幻聴がハジメの核心を突き動かす。身体にまた、燃え尽きそうだった炎が息を吹き替えしていく。

「……………クハツ、そうだな。こんなんで、倒れたまんまじゃ情けねえよな」

その声は幻聴かもしれない。だが、ハジメは優花の言葉で薄ら笑みを浮かべると重傷ながらも根気で立ち上がる。

「そうだよな、約束したもんな……………絶対に戻るって……………わかつたぜ優花……………俺はもう負けねえ！」

その瞬間、ハジメの周りに紅き雷が纏い出す。

「！」  
心臓が鳴り響く。そして、新たに得た力にハジメは笑みを浮かべる。そして、今も自分を守る為に戦っている少女の元へと駆け出した。

~~~~~

ユエはハジメのドンナーを両手で持ちながら、銀頭と戦っていたが……

「あぐつ!？」

腹部に光弾をまともに喰らってしまいユエは地面に叩きつけられた。

「うう……うう……」

(……ハジメ)

体が動かない。直ぐさま動かなければ光弾に蹂躪じゆうりんされる。わかっている。必死にもがくユエだが、体は言うことを聞いてくれない。『自動再生』が遅いのだ。ユエはいっししか涙を流していた。悔しくて悔しくて仕方ないのだ。自分ではハジメを守れないのかと。

銀頭が、倒れ伏すユエに勝利を確信したように一度「クルウアアン！」と叫ぶと光弾を撃ち放った。

光弾がユエに迫る。ユエは眼を閉じなかった。せめて心は負けるものかとキツと銀

頭を睨みつけた。光弾が迫り視界が閃光に満たされる。直撃する。死ぬ。守れなかったこと、先に逝く事を、ユエはハジメに対し心の中で謝罪しようとした。

刹那……一陣の風が吹いた。

「えっ?」

気がつけば、ユエは、自分が抱き上げられ光弾が脇を通り過ぎていくのを見ていた。そして、自分を支える人物を信じられない思いで見上げる。それは、紛れもなくハジメだった。満身創痍のまま荒い息を吐き、片目をきつく閉じてユエを抱きしめている。

ハジメは今も啞然としているユエに笑いながら話しかける。

「泣くんじゃねえよ、ユエ。お前の勝ちだ。」

「ハジメー!」

ユエは感極まったようにハジメに抱きつく。怪我はほとんど治っていない。実際、気力だけで立っているようなものだった。しかし、ハジメは確信してる。

——自分はどう負けないと。

ハジメはヒュドラを見やる。周囲に光弾を浮かべながら余裕の表情で睥睨し、今更死にぞこないが何だと問答無用で光弾を放った。

「……遅えよ」

ハジメはギリギリまで動かず、光弾が直撃する寸前でふらりと倒れるように動き回避

する。ヒュドラの眼が細められ、無数の光弾が一気に二人に向かって襲ってくる。

「ハジメ、逃げて！」

ユエが必死の表情で言うが、ハジメはどこ吹く風のようにユエを抱いたままダンスでも踊るようにくるりくるりと回り、あるいはフラフラと倒れるように動いて光弾をやり過ぎしてしまう。まるで光弾の方がハジメを避けていると勘違いしそうなくらいだった。

そして、光弾を軽々と避けながらハジメはユエに思いついた作戦を話す。

「ユエ、しっかりと捕まっとけ俺の最大の攻撃をヒュドラにぶつける」

「………んっ！」

「行くぞー！」

ハジメは倒れている間に二つの技能に目覚めた。“天歩”の最終派生技能「十瞬光」。知覚機能を拡大し、合わせて“天歩”の各技能を格段に上昇させる。ハジメはまた一つ、“壁を超えた”のだ。そして、纏雷の派生技能「十紅狼」。体全体に紅き雷が纏い、手足に狼を思わせる紅雷の爪、雷魔法の威力増加、敏捷性の増加という、まさに雷の獣——雷獣のようだ。

この技能で俺は一瞬でユエの元にたどり着き、緩やかに飛んでくる光弾をギリギリでかわしているのである。

「ユエ、ここで待つてろ、終わらせて来る」

「……………んっ！」

ハジメはそう言うのとユエを柱の陰に降ろし、ヒュドラの方へ駆けていった。

「殺り合おうぜ、クソヒュドラア！」

ハジメは叫び迫り来る光弾の弾幕を紙一重でかわしていき、“縮地”で場所を移動しながらドンナーを発砲しながら……

「“雷撃”！」

紅の雷がヒュドラを傷付けていく。ヒュドラは先ほどのユエの銃撃と雷魔法で全くの無傷と行かなかったのが気に食わないのか、頭を振って回避して、ハジメに目掛けてヒュドラは極光を放つが、ハジメはすぐさま体を動かして華麗に回避する。

そして、ハジメは銀頭と応戦しながらこの階層の天井付近に到着する。ハジメはそのまま、銀頭に目掛けて今、持つ雷魔法のオリジナルの最大攻撃をヒュドラの真上から放った。

「喰らえよクソヒュドラ——“天雷牙狼”！」

放たれた魔法は紅き雷で形成された大きな狼が現れた。赤雷の大狼はその大きな口を開き、その顎でヒュドラを噛み砕かんとヒュドラ全体を一瞬にして防御力を突破して飲み込んでいった。

「グウルアアアア!!」

ヒュドラが断末魔の絶叫を上げ、傷だらけの黒焦げになって大地に大きな音を鳴らしながら倒れた。

「ハアハア……」

感知からヒュドラの反応が完全に消え去ったのを感じ取って、ヒュドラの死を確信したハジメは、緊張が解けたのか力が抜けたようにそのまま後ろにぶっ倒れた。

「ハジメー！」

ユエが慌ててハジメのもとへ行こうと力の入らない体に鞭打って這いずってくる。

「流石に……もうムリ……」

何とかハジメのもとへたどり着いたユエが抱きついてくる感触を感じながら、ハジメはゆっくりと視界が霞んでいき、意識を手放していったのだった……。

## 十五話

## 真の歴史と旅立ち

ハジメは、体全体が何か温かで柔らかかな物に包まれているのを感じた。随分と懐かしい感触だ。これは、そうベッドの感触である。頭と背中を優しく受け止めるクッションと、体を包む羽毛の柔らかさを感じ、ハジメのまどろむ意識は混乱する。

(此処は何処だ?)

確か俺は……大迷宮にいた筈……)

体を起こすと、ハジメは自分が本当にベッドで寝ていることに気がついた。純白のシーツに豪華な天蓋付きの高級感溢れるベッドである。場所は、吹き抜けのテラスのよな場所で一段高い石畳の上にいるようだ。爽やかな風が天蓋とハジメの頬を撫でる。周りは太い柱と薄いカーテンに囲まれている。建物が併設されたパルテノン神殿の中央にベッドがあるといえればイメージできるだろうか? 空間全体が久しく見なかつた暖かな光で満たされていた。

ハジメは目が覚めて、目を開けると其処は知らない場所にいることに混乱する。

「……………つ、此処は?!」

ハジメは混乱しながらも警戒を高め辺りを見渡していると傍らにユエがぐつすり

眠っていた。

「ユエ……」

ハジメはユエが無事である事とその寝顔を見て、警戒心を緩めて彼女の頬にそつと右手を添える。

「大丈夫そうだな……」

ユエの安否を確認したハジメはこの状況を知る為に彼女を起こすことにした。

「ユエ、起きてくれ。ユエ」

「んう〜……」

声をかけるが愚図るようにイヤイヤをしながら丸くなるユエ。しかし目をゴシゴシしながら目を開けた。

「……ハジメ？」

「おう。ハジメさんだ。ユエ、おは——」

「ハジメ！」

「!?!」

目を覚ましたユエは茫洋とした目でハジメを見ると、次の瞬間にはカツと目を見開き俺に飛びついた。ユエがハジメの首筋に顔を埋めながら、ぐすつと鼻を鳴らしていることに気が付くと、仕方ないなと苦笑いして頭を撫でる。



「わりの、随分心配かけたみたいだな」

「んっ……心配した……」

しばらくしがみついたまま離れそうになかったし、倒れた後面倒を見てくれたのはユエなので気が済むまでこうしていようと、ハジメは優しくユエの頭を撫で続ける。

それからしばらくして、ようやくユエが落ち着いたので、ハジメは事情を尋ねた。ちなみに、ユエは何故か全裸だったのでしたっけしつかりシーツを纏わせている。

「それで、あれから何があった？ こっちはどこなんだ？」

「……あの後……」

ユエ曰く、あその後、ぶっ倒れたハジメの傍で同じく魔力枯渇でフラフラのユエが寄り添っていると、突然、扉が独りでに開いたのだそうだ。すわっ新手か！ と警戒したもののいつまでたつても特になにもなく、時間経過で少し回復したユエが確認しに扉の奥へ入った。

神水の効果で少しずつ回復しているとは言え、ハジメが重傷であることに変わりはなく、依然危険な状態である。強靱な肉体が一命を取り留めているが、極光の毒素がいつ神水を上回るかわからない。そんな状態で新手でも現れたら一巻の終わりだ。そのため、確かめずにはいられないなかつたのだ。

そして、踏み込んだ扉の奥は、

「……反逆者の住処」

中は広大な空間に住み心地の良さそうな住居があったというのだ。そのあと、危険がないことを確認して、ベッドルームを確認したユエは、ハジメを背負ってベッドに寝かせ看病していたのだという。神結晶から最近めつきり量が少なくなった神水を抽出し、飲ませ続けた。

遂に極光の毒素に神水の効果が勝ったのか、通常通りの回復を見せたところで、ユエも力尽きたという。

「……なるほど、そいつは世話になった。ありがとな」

「んっー」

ハジメが感謝の言葉を伝えると、ユエは心底嬉しそうに瞳を輝かせる。無表情ではあるが、その分瞳は雄弁だった。

それからベッドルームから出たハジメは、周囲の光景に圧倒され呆然としてしまい、此処には存在しないあるモノに目が入った。

「此処に何故……太陽が？」

ハジメがまず、目に入ったのは太陽だった。もちろんここは地下迷宮であり本物ではないと思う。頭上には円錐状の物体が天井高く浮いており、その底面に煌々と輝く球体が浮いていたのである。僅かに温かみを感じる上、蛍光灯のような無機質さを感じない

ため、思わず「太陽」と称してしまった。すると、ユエが更に「太陽」の追加情報を伝えてきた。

「……夜になると月みたいになる」

「マジか……」

次に、注目したのは耳に心地良い水の音。扉の奥のこの部屋はちよつとした球場くらいの大きさがあるのだが、その部屋の奥の壁は一面が滝になっていた。天井近くの壁から大量の水が流れ落ち、川に合流して奥の洞窟へと流れ込んでいく。

川から少し離れたところには大きな畑もあるようである。今は何も植えられていないようだが……その周囲に広がっているのは、もしかしなくても家畜小屋、そして、大理石で出来たような館があった。

「……凄いな」

ハジメは反逆者の住処に驚きを隠せず、目を輝かせながら感嘆しているとある館に目が入り、歩を止める。そしたら隣に追従していたユエが報告をする。

「……少し調べたけど、開かない部屋も多かった……」

ユエの報告を聞いて、ハジメはホルスターにドンナーが入っていることを確認して、目を細めながら口を開く。

「そうか……ユエ、油断せずに行くぞ」

「ん……」

住居は全体的に白く石灰のような手触りだ。全体的に清潔感があり、エントランスには、温かみのある光球が天井から突き出す台座の先端に灯っていた。薄暗いところに長くいたハジメ達には少し眩しいくらいだ。どうやら三階建てらしく、上まで吹き抜けになっていた。

「ほお……」

取り敢えず、二人は一階を探索することにした。一階は暖炉や柔らかな絨毯、ソファのあるリビングらしき場所、台所、トイレを発見した。どれも長年放置されていたような気配はない。ハジメとユエは、より警戒しながら進めていく。更に奥へ行くと再び外に出た。そこには大きな円状の風呂だった。

「おおー」

ハジメは、風呂があることに目を輝かせる。ユエは、足だけを風呂に入れて足湯的なことをしている。

「まんま、風呂だな。こりゃいい。何ヶ月ぶりの風呂だか」

ハジメは風呂に入れる喜びに少し微笑んだ。そんなハジメを見てユエが一言、

「……入る？ 一緒に……」

「……入る訳ないだろ」

「むう……」

素足でパシャパシャと温水を蹴るユエの姿に、断りを入れたハジメにユエは唇が尖らせて不満顔になるが、ハジメはスルーを決め込んだ。

それから二人は、二階で書斎や工房らしき部屋を発見した。しかし、書棚も工房の中の扉も封印がされているらしく開けることはできなかつた。

「重要そうな場所は駄目だな」

二階を調べ終わったハジメ達は三階の奥の部屋に向かった。三階は一部屋しかないようだ。奥の扉を開けると、そこには直径七、八メートルの今まで見たこともないほど精緻で繊細な魔法陣が部屋の中央の床に刻まれていた。

「……これは」

しかし、それよりも注目すべきなのは、その魔法陣の向こう側、豪華な椅子に座った人影である。人影は骸だった。既に白骨化しており黒に金の刺繍が施された見事なローブを羽織っている。

その骸は椅子にもたれかかりながら俯いている。その姿勢のまま朽ちて白骨化したのだらう。魔法陣しかないこの部屋で骸は何を思っていたのか。寝室やリビングではなく、この場所を選んで果てた意図はなんなのか……

「……………怪しい……………どうする?」

ユエもこの骸に疑問を抱いたようだ。おそらく反逆者と言われる者達の一人なのだろうが、苦しんだ様子もなく座ったまま果てたその姿は、まるで誰かを待っているようである。

「まあ、地上への道を調べるには、この部屋がカギなんだろう。俺の錬成も受け付けない書庫と工房の封印……………そしてこの世界について分かるかもしれない。ユエは待つてくれ。何かあつたら頼む」

「ん……………気を付けて」

ハジメはそう言うと、魔法陣へ向けて踏み出した。そして、魔法陣の中央に足を踏み込んだ瞬間、カッと純白の光が爆ぜ部屋を真っ白に染め上げる。

「……………ぐっ?!」

光の眩しさにハジメは片手で目を守るように庇う。やがて光が収まり、目を開けたハジメの目の前には、黒衣の青年が立っていた。

『試練を乗り越えよくだどり着いた。私の名はオスカー・オルクス。この迷宮を創った者だ。反逆者と言えばわかるかな?』

「反逆者……………」

話し始めた彼はオスカー・オルクスというらしい。【オルクス大迷宮】の創造者のよう

だ。ハジメは、驚きながら彼の話を聞く。

『ああ、質問は許して欲しい。これはただの記録映像のようなものでね、生憎君の質問には答えられない。だが、この場所にたどり着いた者に世界の真実を知る者として、我々が何のために戦ったのか……メッセージを残したくてね。このような形を取らせてもらった。どうか聞いて欲しい。……我々は反逆者であつて反逆者ではないということ』

そうして始まったオスカーの話は、ハジメが聖教教会で教わつた歴史やユエに聞かされた反逆者の話とは大きく異なつた驚愕すべきものだった。

それは狂つた神とその子孫達の戦いの物語。

神代の少し後の時代、世界は争いで満たされていた。人間と魔人、様々な亜人達が絶えず戦争を続けていた。争う理由は様々だ。領土拡大、種族的価値観、支配欲、他にも色々あるが、その一番は“神敵”だから。今よりずっと種族も国も細かく分かれていた時代、それぞれの種族、国がそれぞれに神を祭つていた。その神からの神託で人々は争い続けていたのだ。

だが、そんな何百年と続く争いに終止符を討たんとする者達が現れた。それが当時、“解放者”と呼ばれた集団である。彼らには共通する繋がりがあつた。それは全員が神代から続く神々の直系の子孫であつたということだ。そのためか“解放者”のリー

ダーは、ある時偶然にも神々の真意を知ってしまった。何と神々は、人々を駒に遊戯のつもりで戦争を促していたのだ。『解放者』のリーダーは、神々が裏で人々を巧みに操り戦争へと駆り立てていることに耐えられなくなり志を同じくするものを集めたのだ。彼等は、『神域』と呼ばれる神々がいると言われている場所を突き止めた。『解放者』のメンバーでも先祖返りと言われる強力な力を持った七人を中心に、彼等は神々に戦いを挑んだ。

そして、解放者は神エヒトを討伐することができ、解放者達は喜んだがその喜びはすぐに終わりを告げてしまった。

神域の奥に嚴重に封印されていたエヒト以上の力を持った神々がエヒトが敗れたことにより解放されたのだ。解放者達は急遽、その神々と戦わないといけない状況になってしまった。

その神々に解放者達は負けじと挑んだが為す術なく敗れてしまった。そして、その中心と呼べる神が解放者のリーダーと取り引きを行い、その結果……この世界の常識を変えることなく結局、守るべき人々に力を振るう訳にもいかず、神の恩恵も忘れて世界を滅ぼさんと神に仇なした『反逆者』のレットルを貼られ『解放者』達は討たれていった。

最後まで残ったのは中心の七人だけだった。世界を敵に回し、彼等は、もはや自分達



ではあの神共を討つことはできないと判断した。そして、バラバラに大陸の果てに迷宮を創り潜伏することにしたのだ。試練を用意し、それを突破した強者に自分達の力を譲り、いつの日か神の遊戯を終わらせる者が現れることを願って。

長い話が終わり、オスカーは穏やかに微笑む。

『君が何者で何の目的でここにたどり着いたのかはわからない。君に神殺しを強要するつもりもない。ただ、知っておいて欲しかった。我々が何のために立ち上がったのか。……君に私の力を授ける。どのように使うも君の自由だ。だが、願わくば悪しき心を満たすためには振るわないで欲しい。話は以上だ。聞いてくれてありがとう。君のこれからが自由な意志の下にあらんことを』

そう話を締めくくり、オスカーの記録映像はスッと消えた。同時に、ハジメの脳裏に何かが侵入してくる。

「ぐうっ?! がア!」

膨大な情報がハジメの脳内へと強制的にインストールするせいで、痛みの激しさが増していく。

「ハジメツ?!」

痛み頭を抑え苦しんでるハジメを見てユエが心配して声を上げるが脳裏に侵入してくる何かに驚愕してしまい、それ所ではなかった。やがて、痛みも収まり魔法陣の光も

収まる。ハジメはゆっくり息を吐いた。

「ハジメ……大丈夫？」

「ああ、平気だ……にしても、何かどえらいこと聞いちゃったな」

「……ん……どうするの？」

ユエがオスカーの話を聞いてどうするのかと尋ねる。

「そうだな……」

話しを聞く限り教会が信仰しているエヒトはもういない存在。だが現れたエヒト以上の神々は話を聞く限り相当危険な存在だ。それに、ハジメ達を此処に召喚したのはその神々だったら自分達に干渉してくる可能性が高い。

ハジメは目を瞑りながら考えを張り巡らさせ、やがて目を開いて決心するとユエに告げる。

「ユエ……俺はこの世界に召喚されてから帰る方法を探していた。……だが、神は絶対、俺達や優花達にも干渉してきて、もしかしたら元の世界に帰ろうとするところを阻止しようとするかもしれないねえ。だから、俺は守る為に神を殺す。それに話を聞く限り俺は神々が気に食わねえ……だから俺は“解放者”達の意思を継ごうと思う。ユエ、出来ればで良いが力を貸してくれないか？」

そんなハジメの言葉にユエは笑みを向けながら話す。

「私の居場所はここ……ハジメがそうするなら私もそうする」

そう言つてユエは、ハジメに寄り添いその手を取る。ギョツと握られた手が本心であることを如実に語る。

「そうか……ありがとうユエ」

「……んっ」

ユエに感謝しつつハジメはユエに衝撃の事実をさらりと告げる。

「あゝ、あと何か新しい魔法……神代魔法つての覚えたみたいだ」

「……ホント?」

信じられないといった表情のユエ。それも仕方ないだろう。何せ神代魔法とは文字通り神代に使われていた現代では失伝した魔法である。

「何かこの床の魔法陣が、神代魔法を使えるように頭を弄る? みたいな?」

「……大丈夫?」

ユエは心配するが俺は心配ないという態度を取りながら話す。

「おう、問題ない。しかもこの魔法……俺のためにあるような魔法だな」

「……どんな魔法?」

「えゝと、生成魔法つてやつだな。魔法を鉱物に付加して、特殊な性質を持った鉱物を生成出来る魔法だ」

ハジメの言葉にポカンと口を開いて驚愕をあらわにするユエ。

「……アーティファクト作れる?」

「ああ、そういうことだな」

ハジメが手に入れた生成魔法は神代においてアーティファクトを作るための魔法。まさに「錬成師」のハジメのためにある魔法であった。

ハジメは生成魔法の力に感嘆しながら笑みを浮かべて右手の拳を握りしめる。そして、ユエにも生成魔法の獲得をするかと提案する。

「ユエも覚えたらどうだ? 何か、魔法陣に入ると記憶を探られるみたいなんだ。オスカーも試練がどうのって言ってたし、試練を突破したと判断されれば覚えられるんじゃないか?」

「私……錬成使わない……」

「まあ、そうだろうけど……せっかくの神代の魔法だぜ? 覚えておいて損はないんじゃないか?」

「……ん……ハジメが言うなら」

ハジメの勧めに魔法陣の中央に入るユエ。魔法陣が輝きユエの記憶を探る。そして、ユエも試練をクリアしたものと判断された。

「どうだ? 修得したか?」

ハジメの問いかけにユエは頷くもその表情はイマイチな感じで話します。「ん………した。でも………アーティファクトは難しい」

やはり、魔法の天才のユエでも魔法の得意、不得意があるらしい。

「うーん、やっぱり神代魔法も相性とか適性とかあるのかもな」

そんなことを話しながら、ハジメはオスカーの骸に近付いて、骸の肩にポンつと手を置くと優しく笑みを向けて感謝を伝える。

「ありがとなオスカー・オルクス。埋葬ぐらいしてやるよ、ユエ手伝ってくれ」

「ん………わかった………」

畑に埋めてオスカーの埋葬が終わると、ハジメとユエは封印されていた場所へ向かった。次いでにオスカーが嵌めていたと思われる指輪も頂いておいた。その指輪には十字に円が重った文様が刻まれており、それが書斎や工房にあった封印の文様と同じだったのだ。

まずは書斎に入って、一番の目的である地上への道を探らなければならぬ。ハジメとユエは書棚にかけられた封印を解き、めぼしいものを調べていく。すると、この住居の施設設計図らしきものを発見した。通常の青写真ほどこしつかりしたものではないが、どこに何を作るのか、どのような構造にするのかということがメモのように綴つづられたものだ。

「……っしー！」

ハジメは、設計図を見つけたことにガッツポーズをする。

「あつたぞ、ユエー！」

「んっ！」

ハジメから歓喜の声上がる。ユエも嬉しそうだ。設計図によれば、どうやら先ほどの三階にある魔法陣がそのまま地上に施した魔法陣と繋がっているらしい。オルクス  
の指輪を持っていないと起動しないようだ。

「この指輪を頂いて良かったな……！」

指輪に感謝しながら更にハジメは設計図を調べていると、どうやら一定期間ごとに清掃をする自律型ゴーレムが工房の小部屋の一つにあつたり、天上の球体が太陽光と同じ性質を持ち作物の育成が可能などということもわかった。人の気配がないのに清潔感があつたのは清掃ゴーレムのおかげだったようだ。人の気配がないのに清潔感

工房には、生前オスカーが作成したアーティファクトや素材類が保管されているらしい。

「ハジメ……これ……！」

「うん？」

ハジメが設計図をチェックしていると他の資料を探っていたユエが一冊の本を持つ

てきた。

「本にしては薄い……手記？」

ハジメはオスカーのものと思われる手記を読むで分かったことはオスカーの手記の内の一節に、他の六人の迷宮に関することが書かれていた。

「……つまり、あれか？　他の迷宮も攻略すると、創設者の神代魔法が手に入るといふことか？」

「……かも」

手記によれば、オスカーと同様に六人の「解放者」達も迷宮の最深部で攻略者に神代魔法を教授する用意をしているようだ。生憎とどんな魔法かまでは書かれていなかった。

「でも……」

これなら、神を殺せる力をつけれるし、元の世界に帰れる可能性もある。優花達と再会したいが、今、再会しても神々が現れたのに対して何も対応出来ない可能性がある。それなら、神代魔法の獲得を優先にしたい。

「ユエ、予定変更だ。心苦しいが優花達と再会は後にして神殺しと元の世界への帰還の為に神代魔法が欲しい。地上に出たら七大迷宮攻略を目指そう」

「んっ」

明確な指針ができて頬が緩むハジメ。思わずユエの頭を撫でるとユエも嬉しそうに目を細めた。

それからしばらく探索したが、正確な迷宮の場所を示すような資料は発見できなかった。現在、確認されている「グリューエン大砂漠の大火山」「ハルツィナ樹海」、目星をつけられている「ライセン大峽谷」「シユネー雪原の氷雪洞窟」辺りから調べていくしかないだろう。しばらくして書齋あさりに満足した二人は、工房へと移動した。

工房には小部屋が幾つもあり、その全てをオルクスの指輪で開くことができた。中には、様々な鉱石や見たこともない作業道具、理論書などが所狭しと保管されており、錬成師にとつては楽園かと思紛う程で沢山のアーティファクトだらけでハジメは驚愕の余り声を漏らしてしまう。

「おいおい、俺でも見て分かる……どれも、一級品のアーティファクトだぞ?」

其処にあるのは沢山の上等なアーティファクト。ばかりにハジメは満足な笑みを浮かべる。

「これなら……」

ここでなら新しい武器と次の迷宮に向けての準備が出来ると思つたハジメは此処の迷宮で失ってしまった自分の左腕を見ながら思案する。そんなハジメの様子を見て、ユエが首を傾げながら尋ねる。



「……どうしたの？」

ハジメは考えていたことをユエに提案した。

「ユエ。しばらくここに留まらないか？ さっさと地上に出たいのは俺も山々なんだが……せつかく学べるものも多いし、ここは拠点としては最高だ。他の迷宮攻略のことを考えても、ここで可能な限り準備しておきたい。どうだ？」

ユエは三百年も地下深くに封印されていたのだから一秒でも早く外に出たいだろうと思っただのだが、ハジメの提案にキョトンとした後、直ぐに了承した。

「……ハジメと一緒にならどこでもいい」

「そっか、ありがとなユエ」

「んっ」

そして、ハジメ達はここで可能な限りの鍛錬と装備の充実を図ることになった。

く2ヶ月後く

現在、ハジメはユエにマッサージをして貰ってる。何故、マッサージしているかという点、それはハジメの新しい左腕が原因だ。ハジメの左腕に付けられた義手と体が馴染むように定期的にマッサージしているのである。

この義手はアーティファクトであり、魔力の直接操作で本物の腕と同じように動かす



敏捷：18070

魔力：20000

魔耐：20000

技能：錬成「＋鈹物系鑑定」「＋精密錬成」「＋鈹物系探查」「＋鈹物分離」「＋鈹物融合」  
 「＋複製錬成」「＋圧縮錬成」・魔力操作「＋魔力放射」「＋魔力圧縮」「＋遠隔操作」・  
 雷属性適性「魔力消費減少」・雷属性耐性・脳内設計「＋想像設計」・胃酸強化・纏雷「＋  
 紅狼」・天歩「＋空力」「＋縮地」「＋豪脚」「＋瞬光」・風爪・夜目・遠見・気配感知「＋  
 特定感知」・魔力感知「＋特定感知」・熱源感知「＋特定感知」・気配遮断「＋幻踏」・毒  
 耐性・麻痺耐性・石化耐性・恐慌耐性・全属性耐性・先読・金剛・豪腕・威圧・念話・追  
 跡・高速魔力回復・魔力変換「＋体力」「＋治癒力」・限界突破・生成魔法・■■■■・言  
 語理解

ハジメは義手が馴染んでくるのを感じながら自分のステータスの内容に乾いた笑みを零す。

「クハツ……レベルが……」

義手も馴染んで来て、ステータスもレベルは100を成長限度とするその人物の現在の成長度合いを示すのだがハジメの場合、魔物の肉を喰らいすぎてしまつて体質し

過ぎちまったせいがある時期からステータスは上がるがレベルは変動しなくなり、遂には非表示になってしまった。魔物の肉を喰ったハジメの成長は、初期値と成長率から考えれば明らかに異常な上がり方だ。ステータスが上がると同時に肉体の変質に伴って成長限界も上昇していったと推測するならば遂にステータスプレートを以てしてもハジメの限界というものが計測できなくなってきたかもしれない。

そんなハジメは新装備の確認をしていく。

まず、“宝物庫”という便利道具を手に入れた。

これはオスカーが保管していた指輪型アーティファクトで、指輪に取り付けられている一センチ程の紅い宝石の中に創られた空間に物を保管して置けるというものだ。なので、この宝物庫を合わせた空中に転送した弾丸を己の技術によって弾倉に装填出来るように鍛錬することにした。要は、空中リロードを行おうとしたのだ。ドのリボルバーである。これは結論から言うところ一ヶ月間の猛特訓で見事、成功しハジメは空中リロードを会得したということだ。

次に、ハジメは“魔力駆動二輪と四輪”を製造した。

これは文字通り、魔力を動力とする二輪と四輪である。二輪の方はアメリカンタイプ、四輪は軍用車両のハマータイプを意識してデザインした。車輪には弾力性抜群のタールザメの革を用い、各パーツはタウル鉱石を基礎に、工房に保管されていたアザン

チウム鉱石というオスカーの書物曰く、この世界最高硬度の鉱石で表面をコーティングしてある。おそらくドンナーの最大出力でも貫けないだろう耐久性だ。エンジンのような複雑な構造のものは一切なく、ハジメ自身の魔力か神結晶の欠片に蓄えられた魔力を直接操作して駆動する。速度は魔力量に比例する。

更に、この二つの魔力駆動車は車底に仕掛けがしてある。

そして、義眼の代わりに「魔眼石」というものをハジメは開発した。

ヒュドラとの戦いで右目を失ってしまったハジメは、極光の熱で眼球の水分が蒸発してしまい、神水を使う前に「欠損」してしまっていたので治癒しなかったのだ。それを気にしたユエが考案し、創られたのが「魔眼石」だ。

いくら生成魔法でも、流石に通常の「眼球」を創る事はできなかった。しかし、生成魔法を使い、神結晶に、「魔力感知」「先読」を付与することで通常とは異なる特殊な視界を得ることができ、魔眼を創ることに成功した。

これに義手に使われていた擬似神経の仕組みを取り込むことで、魔眼が捉えた映像を脳に送ることができるようになった。一つ一つ新たな装備を確認し終えたハジメはユエにある装備を渡した。それは神結晶で作ったネックレスだった。

ハジメはネックレスをユエにかける。ユエは、プレゼントを貰えて嬉しそうに笑みを見せる。

「……ハジメありがとう大切にする」

「おう」

それから十日後、遂にハジメとユエは地上へ出る。

三階の魔法陣を起動させながら、ハジメはユエに静かな声で告げる。

「ユエ……俺の武器や俺達の力は、地上では異端だ。聖教教会や各国が黙っているというのではないだろう」

「ん……」

「兵器類やアーティファクトを要求されたり、戦争参加を強制される可能性も極めて大

きだ」

「ん……」

「教会や国だけならまだしも、神を自称する狂人共も敵対するかもしれん」

「ん……」

「世界を敵にまわすかもしれないヤバイ旅だ。命がいくつあっても足りないぐらいな」

「神殺しをするのに今更……」

「クハツ……そうえば、そうだったな」

ユエに当たり前なことを言われ、思わずハジメは笑ってしまう。そして、真っ直ぐハジメを見つめてくるユエのふわふわな髪を優しく撫でる。気持ちよさそうに目を細め

るユエに、ハジメは一呼吸を置くと、キラキラと輝く紅眼を見つめ返し、望みと覚悟を言葉にして魂に刻み込む。

「俺がユエを、ユエが俺を守る。そして、神共を殺して、優花達と再開して……世界を越えよう」

ハジメの言葉を、ユエはまるで抱きしめるように、両手を胸の前でギュツと握り締めた。そして、無表情を崩し花が咲くような笑みを浮かべた。

返事はいつもの通り……

「んっー」

ハジメはその返事を聞いて、笑みを浮かべて頷くとユエと共に魔法陣に向かって歩き出しながら胸ポケットにしまってる優花の髪留めを胸ポケット越しに握り締めながら心の中で決意する。

——優花、待ってろ。絶対に俺は必ずお前のところへと戻る。

そして、ハジメの……いや二人の神殺しの旅が始まったのだった……。

## クラスメイトside3

## 帝国と勇者達

——時間は少し戻る。

ハジメがヒュドラとの死闘を制し倒れた頃、勇者一行は、一時迷宮攻略を中断しハイリヒ王国に戻っていた。

今回の「オルクス大迷宮」攻略で、歴史上の最高記録である六十五層が突破されたという事実をもって帝国側も光輝達に興味を持つに至った。帝国側からは非会ってみたという知らせが来たのだ。王国側も聖教教会も、いい時期だと了承したのである。

そんな話を帰りの馬車の中でツラツラと教えられながら、光輝達は王宮に到着した。

馬車が王宮に入り、全員が降車すると王宮の方から一人の少年が駆けて来るのが見えた。十歳位の金髪碧眼の美少年である。光輝と似た雰囲気を持つが、ずっとやんちゃやそうだ。その正体はハイリヒ王国王子ランデル・S・B・ハイリヒである。

「香織！ よく帰った！ 待ちわびたぞ！」

ランデルは香織と話していると、そこへ空気を読まない厄介な善意の塊、勇者天之川光輝がにこやかに参戦する。



「ランデル殿下、香織は俺の大切な幼馴染です。俺がいる限り、絶対に守り抜きますよ」と爽やかなセリフを吐くとランデルは眉を顰め機嫌を悪そうにする。すると、ランデル殿下に何か機嫌を損ねることをしてしまったのかと、光輝が更に煽りそうなセリフを吐く前に、涼やかだが、少し厳しさを含んだ声が響いた。

「ランデル。いい加減にしなさい。香織が困っているでしょう？ 光輝さんにもご迷惑ですよ」

声の正体はランデルの姉であり、ハイリヒ王国王女のリリアーナ・S・B・ハイリヒだった。しかし、その表情はあまり優れてなかった。

「あ、姉上!?!……し、しかし」

「しかしではありません。皆さんお疲れなのに、こんな場所に引き止めて……相手のことを考えていないのは誰ですか？」

「うっ……で、ですが……」

「ランデル？」

「よ、用事を思い出しました！ 失礼します！」

ランデル殿下はどうしても自分の非を認めたくなかったのか、いきなり踵を返し駆け抜けてしまった。その背を見送りながら、王女リリアーナは溜息を吐く。

「香織、光輝さん、弟が失礼しました。代わってお詫び致しますわ」

リリアーナはそう言つて頭を下げた。美しいストレートの金髪がさらりと流れる。

「ううん、気にしてないよ、リリイ。ランデル殿下は気を使つてくれただけだよ」

「そうだな。なぜ、怒つていたのかわからないけど……何か失礼なことをしたんなら俺の方こそ謝らないと」

香織と光輝の言葉に苦笑いするリリアーナ。姉として弟の恋心を察しているため、意中の香織に全く意識されていないランデル殿下に多少同情してしまう。

リリアーナは、現在十四歳の才媛だ。その容姿も非常に優れていて、国民にも大変人気のある金髪碧眼の美少女である。性格は真面目で温和、しかし、硬すぎるということもない。TPOをわきまえつつも使用人達とも気さくに接する人当たりの良さを持っている。

光輝達召喚された者にも、王女としての立場だけでなく一個人としても心を砕いてくれている。彼等を関係ない自分達の世界の問題に巻き込んでしまったと罪悪感もあるようだ。

そんな訳で、率先して生徒達と関わるリリアーナと彼等が親しくなるのに時間はかからなかった。特に同年代の香織や雫達との関係は良好で、今では愛称と呼び捨て、タメ口で言葉を交わす仲であるし、リリアーナもある男の人との会話は常に心を高鳴らせながら楽しみにしていた。

「いえ、光輝さん。ランデルのことは気にする必要ありませんわ。あの子が少々暴走気味なだけです。それよりも……改めて、お帰りなさいませ、皆様。無事のご帰還、心から嬉しく思いますわ」

「ありがとう、リリイ。君の笑顔で疲れも吹っ飛んだよ。俺も、また君に会えて嬉しいよ」

「えっ、そうですか？　ありがとうございます……」

さらりとキザなセリフを爽やかな笑顔で言ってしまう光輝にリリアーナは平然と言葉をかえした。普通の女性ならドギマギするだろうがリリアーナはさらりと返していた。だって彼女はある人のことを……自分を気遣ってくれた彼のことを今でも想っているのだから……。

優花は王国に戻っても、早く迷宮攻略に戻りたくて、城の部屋にあるベッドでも休める気配はなかった。

「……ハジメ」

ベッドのシーツを握りながら寂しげに彼の名を呟く。しかし、いつまでも部屋にいても安らげなかった優花は気晴らしに訓練しようと思ひ、訓練場に向かおうと城内の廊下を歩いていた。

「優花」

すると、後ろから声をかけられ、振り返ると其処にはリリアーナがいた。その表情は、少し切ない様子だ。

「あつ、リリイ……」

「少し、お話しませんか？」

優花とリリアーナの二人は、ハジメの錬成などの特訓をしてる間に何度も会って話してる。そんな二人の関係は非常に良好であった。

優花は、リリアーナに誘われ王宮内の広場へと向かい、ベンチへと腰掛けた。二人の間に沈黙が続く。そして、その沈黙を最初に断ち切ったのはリリアーナだった。

「優花……ハジメさんの件は……」

話しかけるリリイは少し暗い感じで、悲痛そうな表情をしながらハジメの件の事で悲しんでいるだろう優花を心配していた。

「良いの大丈夫よりリリイ。心配してくれてありがとう、私は平気だから」

「でもっ、私は力になれず……ぐすっ……」

リリイは何か思ったことがあったのか、我慢していただろう目からいっぱいの涙を流し始めた。優花は、涙を流すリリアーナを励ますために抱き締めた。

「リリイはハジメのこと “無能” って扱いにしようとした人達に反対してくれたじゃない

い」

「そうはずけどっ！　ワダシはっ」

「リリイっ」

リリアーナを抱き締める優花自身も彼女と同じように目に涙が浮かぶ。

「ゆっ、優花……？」

リリアーナは、優花が涙を流すのを見て、目を見開いて、呼びかけるも優花はリリアーナに、そして自分に言い聞かせるように話す。

「大丈夫だから、リリイ。ハジメは絶対に生きてる……だってハジメは誰よりも強いんだから」

「……っ」

その言葉を聞いたリリアーナは、自分を抱き締めてくれる優花を抱き締め返す。優花はリリアーナの優しさを感じて心が温まる。そして、彼女を見て涙目ながらも笑って話しかけた。

「だから、リリイもハジメのことを信じよ？」

「っ……はいっ！」

リリアーナはその言葉に大きく頷きながら同意して優花の胸元に泣きながら顔を埋めるように抱き着いた。優花はリリアーナを彼が自分にしてきていたように頭を撫

でながら慰めていくも、自分も同じように泣いた。そして、二人は疲れるほど泣いた後、二人は目元が赤くしながらも泣き疲れたようでベンチで仲良く眠りに着いたのだった。そして、

「……風邪引くといけないからな」

そんな二人の会話をずっと聞いていた。通りすがりの暗殺者が眠る二人に今は居ない親友の部屋から持ってきた毛布をかけてると去っていったのだった……。

——それから三日、遂に帝国の使者が訪れた。

現在、光輝達、迷宮攻略に赴いたメンバーと王国の重鎮達、そしてイシユタル率いる司祭数人が謁見の間に勢ぞろいし、レッドカーペットの中央に帝国の使者が五人ほど立ったままエリヒド陛下と向かい合っていた。

「使者殿、よく参られた。勇者方の至上の武勇、存分に確かめられるがよかろう」

「陛下、この度は急な訪問の願い、聞き入れて下さり誠に感謝いたします。して、どなたが勇者様なのでしょう？」

「うむ、まずは紹介させて頂くか。光輝殿、前へ出てくれるか？」

「はい」

そして、光輝を筆頭に、次々と迷宮攻略のメンバーが紹介された。

「ほう、貴方が勇者様ですか。随分とお若いすな。失礼ですが、本当に六十五層を突破したのです？ 確か、あそこにはベヒモスという化物が出ると記憶しておりますが……」

使者は、光輝を観察するように見やると、イシユタルの手前露骨な態度は取らないものの、若干、疑わしそうな眼差しを向けた。使者の護衛の一人は、値踏みするように上から下までジロジロと眺めている。

その視線に居心地悪そうに身じろぎしながら、優花と浩介の勝利は仲間である自分達の勝利だと思っている光輝が答える。

「えっと、ではお話ししましょうか？ どのように倒したかとか、あつ、六十六層のマップを見せるとかどうでしょう？」

光輝は信じてもらおうと色々提案するが使者はあつさり首を振りニヤツと不敵な笑みを浮かべた。

「いえ、お話は結構。それよりも手っ取り早い方法があります。私の護衛一人と模擬戦でもしてもらえませんか？ それで、勇者殿の実力も一目瞭然でしょう」

「えっと、俺は構いませんが……」

光輝は若干戸惑ったようにエリヒド陛下を振り返る。エリヒド陛下は光輝の視線を受けてイシユタルに確認を取る。イシユタルは頷いた。神威をもって帝国に光輝を人間族のリーダーとして認めさせることは簡単だが、完全実力主義の帝国を早々に本心か

ら認めさせるには、実際戦ってもらうのが手っ取り早いと判断したのだ。

「構わんよ。光輝殿、その実力、存分に示されよ」

「決まりですな、では場所の用意をお願いします」

こうして急遽、勇者対帝国使者の護衛という模擬戦の開催が決定したのだった。

光輝の対戦相手は、なんとも平凡そうな男だった。高すぎず低すぎない身長、特徴という特徴がなく、人ごみに紛れたらすぐ見失ってしまいそうな平凡な顔。一見すると全く強そうに見えない。

刃引きした大型の剣をだらんと無造作にぶら下げており。構えらしい構えもとつていなかった。

帝国の護衛と神の使徒の代表である勇者の光輝との模擬戦は同じ神の使徒であるクラスメイト達も模擬戦を見ようと観客席にいた。そして、クラスメイト達は護衛の構えを見て、「舐めてるだろ」、「これは天之川の勝利だな」と護衛を馬鹿にしながら会話していた。

しかし、そんなクラスメイト達の中で違和感を感じている者達が数名いた。

(あの護衛、なんか隠してるだろ)

そんな護衛を観客席から見て、違和感を感じている一人である浩介は護衛に対して疑うような目を向けていた。



「浩介、どうしたの？」

「いやさあ……」

すると隣の席にいた優花がキョトンと首を傾げながら話しかけて来たので浩介は両手を後ろに回しながら、それに答える。

「いや、あの帝国の護衛の人、何か隠してるな〜っと思つてな。それに、あの目は強い奴だよ絶対」

浩介は冗談混じりに話すが、最後の目の部分だけは冗談じゃなく本心だった。何故、そう言い切れるかつて？それは浩介は知っているからだ。

——近くで見えていたからだ、強者という目を。

すると、それを聞いた優花は目を見開いて声を上げた。

「えっ、浩介もそうだったの？」

「！……園部もそうなのか?!」

優花も浩介と同じで、護衛のことを不審に感じていたらしい。

「う、うん……もしかしたら『神天治療師』の技能かもしれないけど私さ、魔力の流れとか見てわかることが出来るんだよね……」

「うわ、流石はチート天職だな……」

優花の話しを聞いて、彼女の天職の凄さに表情が引き攣つてしまいが優花は話しを続

ける。

「だからさ目で見てさ、あの護衛の人と天之河君を見比べると全然、護衛の人の方が上だったからさ。ただの護衛じゃない気がして……」

「へえ……」

浩介はそれを聞いて、ただ相槌を打っていた。

そんな中、光輝は護衛の構えを見て、舐められているのかと些か怒りを抱く。最初の一撃で度肝を抜いてやれば真面目にやるだろうと、最初の1撃は割かし本気で打ち込むことにした。

「いきますー！」

光輝が風となる。〃縮地〃により高速で踏み込むと豪風を伴って唐竹に剣を振り下ろした。並みの戦士なら視認することも難しかったかもしれない。もちろん、光輝としては寸止めするつもりだった。だが、その心配は無用。むしろ舐めていたのは光輝の方だと証明されてしまい、浩介と優花の読みが当たってしまう結果となった。

バキィ!!

「ガフツ!!」

吹き飛んだのは光輝の方だった。護衛の方は剣を掲げるように振り抜いたまま光輝を睥睨している。光輝が寸止めのため一瞬、力を抜いた刹那にだらんと無造作に下げら

れていた剣が跳ね上がり光輝を吹き飛ばしたのだ。

光輝は地滑りしながら何とか体勢を整え、驚愕の面持ちで護衛を見る。寸止めに集中していたとは言え、護衛の攻撃がほとんど認識できなかったのだ。護衛は掲げた剣をまた力を抜いた自然な体勢で構えている。そう、先ほどの攻撃も動きがあまりに自然すぎで危機感が働かず反応できなかったのである。

「はあく、おいおい、勇者つてのはこんなもんか？　まるでなつちやいねえ。やる気あんのか？」

平凡な顔に似合わない乱暴な口調で呆れた視線を送る護衛。その表情には失望が浮かんでいた。

確かに、光輝は護衛を見た目で判断して無造作に正面から突っ込んでいき、あっさり返り討ちにあつたというのが現在の構図だ。光輝は相手を舐めていたのは自分の方であつたと自覚し、怒りを抱いた。今度は自分に向けて。

「すみませんでした。もう一度、お願いします」

今度こそ、本気の目になり、自分の無礼を謝罪する光輝。護衛は、そんな光輝を見て「戦場じゃあ次なんてないんだがな」と不機嫌そうに目元を歪めるが相手はするようだ。先程と同様に自然体で立つ。

光輝は気合を入れ直すと再び踏み込んだ。

唐竹、袈裟斬り、切り上げ、突き、と“縮地”を使いこなしながら超高速の剣撃を振るう。その速度は既に、光輝の体をブレさせて残像を生み出しているほどだ。

しかし、そんな嵐のような剣撃を護衛は難なく最小限の動きでかわし捌き、隙あらば反撃に転じている。時々、光輝の動きを見失っているにもかかわらず、死角からの攻撃にしつかり反応している。

光輝には護衛の動きに覚えがあつた。それはメルド団長だ。彼と光輝のスペック差は既にかんりの開きが出ている。にもかかわらず、未だ光輝はメルド団長との模擬戦で勝ち越せていないのだ。それはひとえに圧倒的な戦闘経験の差が原因である。

おそらく護衛も、メルド団長と同じく数多の戦場に身を置いたのではないだろうか。その戦闘経験が光輝とのスペック差を埋めている。つまり、この護衛はメルド団長並かそれ以上の実力者というわけだった。

「ふん、確かに並の人間じゃ相手にならん程の身体能力だ。しかし、少々動きが素直すぎなな。元々、戦いとは無縁だったか？」

「えっ？ えつと、はい、そうです。俺は元々ただの学生ですから」  
「……それが今や神の使徒か……ケツ……」

チラツとイシユタル達聖教会関係者を見ると護衛は不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「おい、勇者。構えろ。今度はこちらから行くぞ。気を抜くなよ？ うっかり殺してし

まうかもしれんからな」

護衛はそう宣言するやいなや一気に踏み込んだ。光輝程の高速移動ではない。むしろ遅く感じるほどだ。だというのに……

「ッ!?!」

気がつけば目の前に護衛が迫っており剣が下方より跳ね上がってきていた。光輝は慌てて飛び退る。しかし、まるで磁石が引き合うかのようにピッタリと間合いを一定に保ちながら鞭のような剣撃が光輝を襲っていた。

不規則で軌道を読みづらい剣の動きに、“先読”で辛うじて対応しながら一度距離を取ろうとするが、まるで引き離せない。“縮地”で一気に距離を取ろうとしても、それを見越したように先手を打たれて発動に至らない。次第に光輝の顔に焦りが生まれてくる。

そして遂に、光輝がダメージ覚悟で剣を振ろうとした瞬間、その隙を逃さず護衛が魔法のトリガーを引く。

「穿て——“風撃”」

眩くような声で唱えられた詠唱は小さな風の礫を発生させ、光輝の片足を打ち据えた。

「うわっ!?!」

踏み込もうとした足を払われてバランスを崩す光輝。その瞬間、壮絶な殺気が光輝を射貫く。冷徹な眼光で光輝を睨む護衛の剣が途轍もない圧力を持つて振り下ろされた。刹那、光輝は悟る。彼は自分を殺すつもりだと。

実際、護衛はそうなくても仕方ないと考えていた。自分の攻撃に対応できないくらいなら、本当の意味で殺し合いを知らない少年に人間族のリーダーを任せる気など毛頭なかった。例えばそれで聖教教会からどのような咎めが来ようとも、戦場で無能な味方を放置する方がずっと耐え難い。それならいつそと、そう考えたのだ。

しかし、そうはならなかった。

ズドンッ！

「ガア!?!」

先ほどの再現か。今度は護衛が吹き飛んだからだ。護衛が、地面を数度バウンドし両手も使いながら勢いを殺して光輝を見る。光輝は全身から純白のオーラを吹き出しながら、護衛に向かって剣を振り抜いた姿で立っていた。

護衛の剣が振り下ろされる瞬間、光輝は生存本能に突き動かされるように、限界突破“を使ったのだ。これは、一時的に全ステータスを三倍に引き上げてくれるという、ピッチの時に覚醒する主人公らしい技能である。

だが、光輝の顔には一切余裕はなかった。恐怖を必死で押し殺すように険しい表情で

劍を構えている。そんな光輝の様子を見て、護衛はニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

「ハッ、少しはマシな顔するようになったじゃねえか。さっきまでのビビリ顔より、よほどいいぞー！」

「ビビリ顔？　今の方が恐怖を感じてます。……さっき俺を殺す気ではありませんでしたか？　これは模擬戦ですよ？」

護衛は光輝の発言に首を傾げる。

「だからなんだ？　まさか適当に戦って、はい終わりつとでもなると思ったか？　この程度で死ぬならそれまでだったってことだろ。お前は、俺達人間の上に立って率いるんだぞ？　その自覚があんのかよ？」

「自覚って……俺はもちろん人々を救って……」

「傷つけることも、傷つくことも恐れているガキに何ができる？　劍に殺気一つ込められない奴がご大層なこと言ってるじゃねえよ。ああ、そうえば聞いたぜ？　お前達の中に非戦闘職の“錬成師”のくせに凄く強い奴がいたそうじゃねえか。そいつが作成した義手は本当に素晴らしもんだ。帝国で負傷していた民達や兵士達は大層喜んでる。正にハイリヒ王国最強と呼ばれていた神官“アレス・バーン”の再来かと思っちゃまったが……こんな勇者やその仲間達を助ける為に死んじまったと思うと惜しいもんだ……ハア、生きてりゃあ、ウチに勧誘していたのにな……」

護衛は吐き捨てるように言葉を紡ぐと肩をガクリと落としながら落胆を顕にした。その姿にホントにハジメがこの場にいたら勧誘したかつたらしいことが誰でも見てわかった。

「なっ……」

しかし、それを聞いた光輝は護衛に遠回しに自分は奈落で死んだ南雲より劣っていると言われると思ったのか口元を歪め怒りを顕にした。

「俺は……俺はっ、勇者だ！南雲なんかより強いんだ!!……ウオオオオー！」

光輝は怒り任せに突撃するのだが護衛はため息吐き「こいつはダメだ」と吐き捨てるように呟くと、尋常ではない殺気を放ちながら光輝に迫り剣を振るった。光輝は怒りから一変、苦しそうに表情を歪めた。

しかし、護衛が実際に剣は光輝に届かなかった。なぜなら、護衛と光輝の間に光の障壁がそそり立ったからだ。

「それくらいにしましょうか。これ以上は、模擬戦ではなく殺し合いになってしまますのでな。……ガハルド殿もお戯れが過ぎますぞ？後、あの『異端者』の名前はこの国では出さないで貰いたいですな」

「……チツ、バレていたか。相変わらず食えない爺さんだな、まっ、アレスの件はこっちはタブーだったな。スマンスマン」



イシユタルが発動した光り輝く障壁で水を差された。『ガハルド殿』と呼ばれた護衛が、周囲に聞こえないくらいの声量で悪態をつくもタブーを言ったことには平謝りながらも謝罪をする。そして、興が削がれたように肩を竦め剣を納めると、右の耳にしていたイヤリングを取った。

すると、まるで霧がかかったように護衛の周囲の空気が白くボヤけ始め、それが晴れる頃には、全くの別人が現れていた。

四十代位の野性味溢れる男。短く切り上げた銀髪に狼を連想させる鋭い碧眼、スマートでありながらその体は極限まで引き絞られたかのように筋肉がミツシリと詰まっているのが服越しでもわかる。

その姿を見た瞬間、周囲が一斉に喧騒に包まれた。

「ガ、ガハルド殿!？」

「皇帝陛下!？」

そう、この男、何を隠そうヘルシャー帝国現皇帝ガハルド・D・ヘルシャーその人である。まさかの事態にエリヒド陛下が眉間を揉みほぐしながら尋ねた。

「どういうおつもりですか、ガハルド殿」

「これは、これはエリヒド殿。ろくな挨拶もせず済まなかった。ただな、どうせなら自分で確認した方が早いだろうと一芝居打たせてもらったのよ。今後の戦争に関わる重要

なことだ。無礼は許して頂きたい」

謝罪すると言いながら、全く反省の色がないガハルド皇帝。それに溜息を吐きながら「もう良い」とかぶりを振るエリヒド陛下。

光輝達は完全に置いてきぼりだ。なんでも、この皇帝陛下、フットワークが物凄く軽いらしく、このようなサプライズは日常茶飯事なのだとか。しかし、ガハルドは勇者に目を向けず観客席にいた方に指を指し告げる。

「だが、そのの神の使徒の黒い奴と隣にいる女……お前等何モンだ？」

ガハルドが指を差したのは……観客席に座る浩介と優花の二人だった。

「「えつ俺（私）？」」

指を差されて、困惑する二人は念の為に自分達なのかとガハルドに確認を取る。すると、浩介と優花の二人で合っているようでガハルドは頷いた。

「おう、てめえ等だ。名前は？」

ガハルドに名前を聞かれ、浩介は聞かれてもマズイことは無いのですんなりと名前を言う。

「えつと、俺の名前は遠藤浩介です。で、隣は……」

「園部優花です」

浩介が自分の名前を言うと続いて、優花も自分の名前を言った。そして、二人が名前

を言うと、ガハルドは少し考える素振りを見せてから笑みを浮かべながら二人に話しかけた。

「ほう、浩介と優花か……なあ、てめえ等、帝国に来る気はねえか？」

「はあ？」

そこからガハルドの勧誘が始まったが浩介達は、ハジメを探す為に迷宮攻略したい為、勧誘を断り続けること十数分、やっと皇帝も渋々諦めてくれた。その表情は残念そうだ。

「はあ……『錬成師』の奴以外に面白い奴等を見つけたというのにに断られちゃったな。ま、お前達！気が変わったら帝国に来いよ！俺は何時でも待つてるからな！」

本当はまだ諦めてないガハルドはそう二人に告げると、後に予定されていた晚餐で帝国からも勇者を認めるとの言質をとることができ、一応、今回の訪問の目的は達成されたらしい。

余談だが、翌日の早朝訓練をしている八重樫を見て気に入ったガハルドが愛人にどうだと割かし本気で誘ったというハプニングがあった。八重樫は丁寧になり、ガハルドも「まあ、焦らんさ」と不敵に笑いながら引き下がったので特に大事になつたわけではなかったが、その時、光輝を見て鼻で笑ったことで光輝はこの男とは絶対に馬が合わない

と感じてしばらく不機嫌だった。

「八重樫……ドンマイ」

その話を聞いた浩介は同じように（俺と園部とは違う意味で）目をつけられてしまった事に同情しながら呟いたのだった……。

~~~~~

模擬戦を終えて、その日の晩、部屋で部下に本音を聞かれたガハルドは面倒くさそうに答えた。

「ありや、ダメだな。ただの子供だ。理想とか正義とかそういう類のものを何の疑いもなく信じている口だ。なまじ実力とカリスマがあるからタチが悪い。自分の理想で周りを殺すタイプだなアレ。神の使徒である以上は蔑ろにはできねえ。取り敢えず合わせて上手くやるしかねえだろうし……あーあ、何で『錬成師』の奴は死んじまったんだよ……。生きてたらウチに欲しかったし是非、戦ってみたかったんだがな……」

ガハルドはハジメの損失に本当に残念そうに肩を落とし溜息を吐きながら話すと、部下が疑問を口にする。

「しかし、皇帝陛下は、あわよくばあの試合で勇者を殺すつもりだったのですか？」

「ああ？ 違えよ。少しは腑抜けた精神を叩き治せるかと思っただけだ。あのままやつても教皇が邪魔して絶対殺れなかつただろうよ」

どうやら、ガハルドの中で光輝達勇者一行は錬成師のハジメ以外興味の対象とはならなかつたようである。無理もないことだろう。彼等は数ヶ月前までただの学生。それも平和な日本の。歴戦の戦士が認めるような戦場の心構えなど出来ていないはずがないのだが、しかしガハルドは義手を創り出し、錬成師でありながらも強い戦闘力を持つと評されていたハジメとは会いたかつたのだが迷宮で死亡したと知らされ不貞腐れていた。

「まあ、魔人共との戦争が本格化したら変わるかもな。見るとしてもそれからだろうよ。今は、小僧どもに巻き込まれないよう上手く立ち回ることが重要だ。後、教皇には気をつけとけよ？　あの、狂信爺は敵になると色々と面倒臭えからな。後、アレス・バーン」の居場所が判明したら速急に俺に伝える。アイツは帝国にとつて欲しい人材だ。それと、浩介と優花だったか？　アイツ等もこつちに来たいと言つていたら丁重に歓迎しとけよ？　あの二人は少し面白い。俺の本能がそう言っている」

「御意」

そんな評価を下されているとは露にも思わず、光輝達は、翌日に帰国するという皇帝陛下一行を見送ることになった。用事はもう済んだ以上留まる理由もないということ

だ。本当にフットワークの軽い皇帝ガハルドであつた……。

## 二章 亜人樹海と奇天烈迷宮ライセンくウサ耳少

女との出会いく

### 十六話 ライセン大峽谷と兎娘

魔法陣の光に満たされた視界、何も見えなくとも空気が変わったことは実感した。奈落の底の澱んだ空気とは明らかに異なる、どこか新鮮さを感じる空気にハジメの頬が緩む。

やがて光が収まり、目を開けたハジメの視界に写ったものは……洞窟だった。

「洞窟か……」

それもそうだ。自分達がいた場所は隠された反逆者の住処なのだから。ハジメは当たり前前にすることに苦笑いを零しつつ、ユエがいることを確認してから此方を見るユエを呼びかける。

「行くぞ、ユエ」

「……ん」

ハジメとユエは洞窟を進みますかいき、道のりは長かったが待望の地上へ出ることが達成するが出れた場所に立ち止まってしまふ。

「此処は確か……」

「……ハジメ、此処つて」

「ああ、此処はライセン大峽谷だな」

ハジメは図書館でこの世界の地図などを覚えていて良かったと安堵する。そして、二人が辿り着いた場所は、ライセン大峽谷の谷底にある洞窟の入口だった。地の底とはいえ頭上の太陽は燦々と暖かな光を降り注ぎ、大地の匂いが混じった風が鼻腔をくすぐる。

「……戻つて来たんだな……」

「……んっ」

二人は、ようやく実感が湧いたのか、太陽から視線を逸らすとお互い見つめ合い、ハタツチをする。

「よっしやあああー!!」 戻ってきたぞおー!!」

「んっー!!」

二人してケラケラ、クスクスと笑い合う。ようやく二人の笑いが収まった頃には、すっかり……ライセンに棲みつく魔物達に囲まれていた。



ライセンは魔力が分解されて魔法が使えないと記憶していたので、此処は自分の出番だと立ち上がる。

「はあく、全く無粋なヤツらだな……ユエ、此処は俺に任せろ」

「……ん、わかった。でもハジメ、力づくなら此処でも魔法は使える」

ユエの言葉にハジメは耳を傾けながらその効率を聞く。

「効率は？」

「……十倍程」

「了解」

十倍は少しキツイなと思いつつながらハジメは、ユエの返事を聞いた直後、おもむろにドナーを発砲した。相手の方を見もせず、ごくごく自然な動作でスッと銃口を魔物の一体に向けると、これまた自然に引き金を引いたので。

あまりに自然すぎて攻撃をされると気がつかなかったようで、取り囲んでいた魔物の一体が何の抵抗もできずに、その頭部を爆散させ死に至った。

「おつ、ホントに撃てるな」

ユエの言う通りで、魔力をいつもより十倍程で使えばレールガンは打てた。そして、ハジメは次にオルクスの奈落の魔物と此処ライセンの魔物の強さはどれくらいかの差が

あるのかを調べることにした。

「じゃ、試させて貰おうか？」

スつとガンⅡカタの構えをとり、眼に殺意が宿る。常人なら其処に居るだけで意識を失いそうな壮絶なプレッシャーが辺り一帯を覆う中、遂に魔物の一体が緊張感に耐え切れず咆哮を上げながら飛び出した。

「ガアアアアア!!」

ズドンツ!!

しかし、ほぼ同時に響き渡った銃声と共に一条の閃光が走り、その魔物は避けるどころか反応すら許されず頭部を吹き飛ばされた。

そこから先は、もはや戦いではなく蹂躪。魔物達は、ただの一匹すら逃げることも叶わず、まるでそうあることが当然の如く頭部を吹き飛ばされ骸を晒していく。辺り一面が魔物の屍で埋め尽くされるのに五分もかからなかった。

ドンナー・シユラークを太もものホルスターにしまったハジメは、首を僅かに傾げながら周囲の死体の山を見やって一言呟く。

「弱え……」

奈落の魔物とライセンの魔物だと、比べることもない程の強さに格差があることが分かり、地上では、ステータスの上昇は見込めないことにハジメは溜息と吐くと、トコト

コとユエが傍へと寄って来た。

「……どうしたのハジメ？」

「いや、あまりにあっけなかつたんで……ライセン大峡谷の魔物といやあ相当凶悪って話だったから、奈落の魔物はどちらが強いか試してた」

「……どうだった？」

「まあ、奈落の魔物が強すぎたってことと、地上じゃ俺のステータスの上昇は無理ってことが分かったな」

そう言つてハジメは肩を竦め、もう興味がないという様に魔物の死体から目を逸らした。

「さて、この絶壁、登ろうと思えば登れるだろうが……どうする？　ライセン大峡谷と言えば、七大迷宮があると考えられている場所だ。せっかくだし、樹海側に向けて探索でもしながら進むか？」

「……なぜ、樹海側？」

「いや、峡谷抜けて、いきなり砂漠横断とか嫌だろ？　樹海側なら、町にも近そうだしな」

「……確かに」

ハジメの提案に、ユエも頷いた。魔物の弱さから考えても、この峡谷自体が迷宮というわけではなさそう。ならば、別に迷宮への入口が存在する可能性はある。ハジメの

“空力”やユエの風系魔法を使えば、絶壁を超えることは可能だろうが、どちらにしろライセン大峽谷は探索の必要があったので、特に反対する理由もない。

方針が決まったのでハジメは、右手の中指にはまっている“宝物庫”に魔力を注ぎ、魔力駆動二輪を取り出す。颯爽と跨り、後ろにユエが横乗りしてハジメの腰にしがみついたのを確認し、魔力駆動二輪を走らせた。

「よしっ、大丈夫そうだな」

動作確認を終えてハジメは魔力駆動二輪を走らせた。ライセン大峽谷は基本的に東西に真っ直ぐ伸びた断崖だ。そのため脇道などはほとんどなく道なりに進めば迷うことなく樹海に到着する。

しばらく魔力駆動二輪を走らせていると、それほど遠くない場所で魔物の咆哮が聞こえてきた。

「んっ？」

二つの気配を感じながらハジメは魔力駆動二輪を走らせ突き出した崖を回り込むと、その向こう側に大型の魔物が現れた。かつて見たテイラノモドキに似ているが頭が二つある。双頭のテイラノサウルスモドキだ。

「そして、もう一つは……ああ？ 人か？」

だが、真に注目すべきだったのは双頭テイラノではなく、その足元をびよんびよんと

跳ね回りながら半泣きで逃げ惑うウサミミを生やした少女だった。ハジメは魔力駆動二輪を止めて胡乱な眼差しで今にも喰われそうなウサミミ少女を見やる。

「……何だアレ？」

「……兎人族？」

「しかし、なんでこんな場所大鎌谷にいる？ 兎人族って谷底が住処なのか？」

確か、亜人族は海人族とある滅ぼされた一族以外は大体は樹海に住んでる筈だと記憶していたハジメが疑問に思い首を傾げていると、ユエもそうらしく頭に疑問符を浮かべていた。

「……ん、私も聞いたことない」

「じゃあ、あれか？ 犯罪者として落とされたとか？ 処刑の方法としてあつたよな？」

「……悪ウサギ？…助ける？」

「ああ当然。何故、こんな場所に兎人族がいるのかも知りたいしな」

「……ん、わかった」

ハジメはウサミミ少女を助けようとドンナーを取り出そうとした時、それなりの距離があるのだが、ウサミミ少女の必死の叫びが峡谷に木霊しハジメ達に届いた。

「グウルアアアア!!」

「だずげでぐだぎょい！ ひっー、死んじやう！ 死んじやうよお！ だずけてえ、

おねがいしますう〜！」

滂沱の涙を流し顔をぐしゃぐしゃにして必死に駆けてくる。そしてウサミミ少女が次の言葉を言う前に銃声が聞こえた。

ドパントドパント!!

目前に迫っていた双頭ティラノの口内を突き破り後頭部を粉碎しながら貫通した。力を失った両方の頭が地面に激突、慣性の法則に従い地を滑る。双頭ティラノはバランスを崩して地響きを立てながらその場にひっくり返り目から光が失った。

追われていたウサミミ少女が思わず「へっ?」と間抜けな声を出し、おそるおそるハジメの脇の下から顔を出してティラノの末路を確認するウサ耳少女にハジメとユエはケガはないかと心配しながら話しかける。

「し、死んでます…そんなダイヘドアが一撃なんて…」

「おい、お前…大丈夫か?」

「……ん、大丈夫?」

すると、ウサ耳少女はハジメ達が近付いたことに気が付くと少女は礼節を弁えてないのか図々しいお願いをする。

「はっ…先程は助けて頂きありがとうございます! 私は兔人族ハウリアの一人、シアといいますです! 取り敢えず私の仲間も助けてください!」

「……」

二人はウサ耳少女のシアの凶々しさに少し頬が引き曇る。

「シア？ だったか？　　まず何故兎人族が此処にいるか聞かせて貰えねえか？」

「はいっ、実は……」

語り始めたシアの話を要約するところだった。

シア達、ハウリアと名乗る兎人族達は「ハルツィナ樹海」にて数百人規模の集落を作りひっそりと暮らしていた。兎人族は、聴覚や隠密行動に優れているものの、他の亜人族に比べればスペックは低いらしく、突出したものがなないので亜人族の中でも格下と見られる傾向が強いらしい。性格は総じて温厚で争いを嫌い、一つの集落全体を家族として扱う仲間同士の絆が深い種族だ。また、総じて容姿に優れており、エルフのような美しさとは異なった、可愛らしさがあるので、帝国などに捕まり奴隷にされたときは愛玩用として人気の商品となる。

そんな兎人族の一つ、ハウリア族に、ある日異常な女の子が生まれた。兎人族は基本的に濃紺の髪をしているのだが、その子の髪は青みがかった白髪だったのだ。しかも、亜人族には無いはずの魔力まで有しており、直接魔力を操るすべと、とある固有魔法まで使えたのだ。

当然、一族は大いに困惑した。兎人族として、いや、亜人族として有り得ない子が生

まれたのだ。魔物と同様の力を持つているなど、普通なら迫害の対象となるだろう。しかし、彼女が生まれたのは亜人族一、家族の情が深い種族である兎人族だ。百数十人全員を一つの家族と称する種族なのだ。ハウリア族は女の子を見捨てるという選択肢を持たなかった。

しかし、樹海深部に存在する亜人族の国「フェアベルゲン」に女の子の存在がばればば間違いなく処刑される。魔物とはそれだけ忌み嫌われており、不倶戴天の敵なのである。国の規律にも魔物を見つけ次第、できる限り殲滅しなければならぬと有り、過去にわざと魔物を逃がした人物が追放処分を受けたという記録もある。また、被差別種族ということもあり、魔法を振りかざして自分達亜人族を迫害する人間族や魔人族に対してもいい感情など持っていない。樹海に侵入した魔力を持つ他種族は、総じて即殺が暗黙の了解となっているほどだ。

故に、ハウリア族は女の子を隠し、十六年もの間ひっそりと育ててきた。だが、先日とうとう彼女の存在がばれてしまった。その為、ハウリア族はフェアベルゲンに捕まる前に一族ごと樹海を出たのだ。

行く宛もない彼等は、一先ず北の山脈地帯を目指すことにした。山の幸があれば生きていけるかもしれないと考えたからだ。未開地ではあるが、帝国や奴隷商に捕まり奴隷に墮とされてしまうよりはマシだ。



しかし、彼等の試みは、その帝国により潰えた。樹海を出て直ぐに運悪く帝国兵に見つかってしまったのだ。巡回中だったのか訓練だったのかは分からないが、一個中隊規模と出くわしたハウリア族は南に逃げるしかなかった。

女子供を逃がすため男達が追っ手の妨害を試みるが、元々温厚で平和的な兎人族と魔法を使える訓練された帝国兵では比べるまでもない歴然とした戦力差があり、気がつけば半数以上が捕らわれてしまった。

全滅を避けるために必死に逃げ続け、ライセン大峡谷にたどり着いた彼等は、苦肉の策として峡谷へと逃げ込んだ。流石に、魔法の使えない峡谷にまで帝国兵も追って来ないだろうし、ほとぼりが冷めていなくなるのを待とうとしたのである。魔物に襲われるのと帝国兵がいなくなるのとどちらが早いかという賭けだった。

しかし、予測に反して帝国兵は一向に撤退しようとはしなかった。小隊が峡谷の入り口である階段状に加工された崖の入口に陣取り、兎人族が魔物に襲われ出てくるのを待つことにしたのだ。

そうこうしている内に、案の定、魔物が襲来した。もう無理だと帝国に投降しようとしたが、峡谷から逃がすものかと魔物が回り込み、ハウリア族は峡谷の奥へと逃げるしかなかった。そうやって、追い立てられるように峡谷を逃げ惑い……

「……気がつけば、六十人はいた家族も、今は四十人程しかいません。このままでは全滅

です。どうか助けて下さい！」

「……そうか」

ハジメは話を一通り聞いて、シアはユエと同じように先祖返りの可能性であると考え。しかし、何故、樹海側は魔力持ちを迫害しようとすることに疑問を感じるが、それも探りたい為、ハジメはシアの頼みを聞くことにした。

「わかった……助けてやる」

「い、良いんですか?!」

シアはハジメの発言に驚きを示した。

「ああ……だから、お前達の住処まで案内してくれ」

「はいっー!」

ハジメとシアが話していると蚊帳の外で不満だったのかハジメのコートの袖をグイグイと引っ張りながらユエが聞いてきた。

「……どうして助けるの?」

「いや、な……まあ、シアは迫害されたとは言え、樹海に住んでたんだし樹海の大迷宮の案内になると……それに見過ごせないからな……濟まないがユエ、良いか?」

そんなハジメの気持ちが伝わったのかユエは仕方ないなあゝ的な表情をしながら頷いた。

「……ハジメがそうするなら、私もそうする」

「ありがとうよ、ユエ」

「……んっ」

ハジメの頼みを聞いてくれるユエに頭を撫でてるとシアが話しかけてくる。

「あ、あの！」

「ん、何だ？」

「あ、あの、宜しくお願ひします！　そ、それでお二人のことは何と呼べば……」

シアはハジメ達の名前が知りたいらしく、隠す必要もないので答えることにした。

「ん？　そう言えば名乗ってなかったか……俺はハジメ。南雲ハジメだ」

「……ユエ」

「ハジメさんとユエちゃんですね」

「……さんを付けろ。ウサギ」

「シア……ユエはお前より年は上だ」

「ええ?!」

ユエらしからぬ命令口調に戸惑うシアは、ユエの外見から年下と誤っているらしく、ユエが吸血鬼族で遙に年上と知ると土下座する勢いで謝罪した。

「おい、シア取り敢えず後ろに乗れ」

ハジメはシアに指示を出す。シアは少し戸惑っているようだ。それも無理はない。なにせこの世界に魔力駆動二輪等と言う乗り物は存在しないのだ。しかし、取り敢えず何らかの乗り物である事はわかるので、シアは恐る恐るユエの後ろに跨った。

とある魔物の革を使ったタンデムシートだが、ユエが小柄なので十分に乗るスペースはある。シアは、シートの柔らかさに驚きつつ、前方のユエに捕まった。その凶器を押し付けながら。

その感触にビクツとしたユエは、おもむろに立ち上がると器用にハジメの前に潜り込む。ユエの小柄な体格は、問題なく腕の間にすっぽりと収まった。

「……………ああ」

ユエの行動理由を察したハジメは苦笑いしているとシアが後ろから話しかけてくる。

「あ、あの。助けてもらうのに必死で、つい流してしまったのですが……この乗り物？

何なのでしょう？ それに、ハジメさんもユエさん魔法使いましたよね？ ここでは使えないはずなのに……」

「あゝ、それは道中でな」

そう言いながら、ハジメは魔力駆動二輪を一気に加速させ出発した。悪路をものともせず爆走する乗り物に、シアが俺の肩越しに「きゃあああゝ！」と悲鳴を上げた。地面も壁も流れるように後ろへ飛んでいく。

谷底では有り得ない速度に目を瞑ってギョツとハジメにしがみついていたシアも、しばらくして慣れてきたのか、次第に興奮して来たようで、ハジメがカーブを曲がったり、大きめの岩を避けたりする度に、きやつきやつと騒いでいる。

「ほう……」

ハジメは、シアはもしかしたら乗り物好きの可能性を秘めてるのかもしれないと思いつつ魔力駆動二輪を走らすそして、ハジメは、道中、魔力駆動二輪の事やユエが魔法を使える理由、ハジメの武器がアーティファクトみたいなものだと言明した。すると、シアは目を見開いて驚愕を表にした。

「え、それじゃあ、お二人も私みたいに魔力を直接操れたり、固有魔法が使えると……」

「ああ、そうなるな……ん？ シアもなんか固有魔法があんのか？」

「……ん、気になる」

「はい私のは『未来視』といいまして、仮定した未来が見えます。もしこれを選択したら、その先どうなるか？ みたいな……あと、危険が迫っているときは勝手に見えたりします。まあ、見えた未来が絶対というわけではないですけど……そ、そうです。私、役に立ちますよ！ 『未来視』があれば危険とかも分かりやすいですし！ 少し前に見たんです！ 貴方が私達を助けてくれている姿が！ 実際、ちゃんと貴方に会えて助けられました！」

「へえ、それは……スゲエな……ん？」

ハジメはシアの固有魔法の説明を聞いて、その能力の凄さに頷くも、ふと、ある疑問が湧く。

「なあ、そんなすごい固有魔法持つてて、何でバレたんだ？ 危険を察知できるならフェアベルゲンの連中にもバレなかったんじゃないか？」

ハジメの疑問に「うっ」と唸った後、シアは目を泳がせてポツリと零した。

「じ、自分で使った場合はしばらく使えなくて……」

「バレた時、既に使った後だったと……何に使ったんだよ？」

「ちよくとですね、友人の恋路が気になりまして……」

シアの言葉にハジメと前出寛いでるユエも溜息を吐く。

「はあ……お前は、何やってんだよ……」

「……馬鹿ウサギ」

「ううく猛省しておりますうく」

そう言っていたシアだったが、突然、何かを堪える様にハジメの肩に顔を埋めた。そして、何故か泣きべそをかき始めた。

「おい、どうしたんだシア？」

「一人じゃなかったんだなっと思っただけ……何だか嬉しくなっちゃって……」

「……」

魔力操作を持つことは一般的に魔物と同じ性質や能力を有していることになる。この世界で自分あまりに特異な存在である事に孤独を感じて家族だと言つて十六年もの間危険を背負つてくれた一族、シアのために故郷である樹海までも捨てて共にいられる家族、きつと多くの愛情を感じていたはずだし、それでも、いや、だからこそ、他とは異なる自分”に余計孤独を感じていたのかもしれない。

ハジメは前を見ながらもしアに話しかけた。

「シア」

「は、はい」

「安心しろ、お前の気持ちは分かる。だから、泣くな家族を助けんだろ？」

「……ん、私達は同胞、安心して」

「うう…ハジメさん、ユエさん」

しばらく、ハジメとユエの二人でシアを慰めていると、遠くで魔物の咆哮が聞こえた。どうやら相当な数の魔物が騒いでいるようだ。

「……多いな」

ハジメがぎつと魔物は十前後ほどだと分かると後ろのシアが声を上げた。

「！ ハジメさん！ もう直ぐ皆がいる場所です！ あの魔物の声……ち、近いです！

父様達がいる場所に近いです！」

「わかっている。飛ばすからな二人共、しっかり掴まってるよ！」

「……んっ！」

「はいっ！」

ハジメは、魔力を更に注ぎ、二輪を一気に加速させた。壁や地面が物凄い勢いで後ろへ流れていく。そうして走ることに二分。ドリフトしながら最後の大岩を迂回した先には、今まさに襲われようとしている数十人の兔人族達が見えてきたのだった……。



## 十七話

## ハウリア族と帝国兵

ライセン大峽谷に悲鳴と怒号が木霊する。

ウサミミを生やした人影が岩陰に逃げ込み必死に体を縮めている。あちこちの岩陰からウサミミだけがちよこんと見えており、数からすると二十人ちよつと。見えない部分も合わせれば四十人といったところか。

そんな怯える兎人族を上空から睥睨していた魔物がいた。

「ハ、ハイベリア……」

肩越しにシアの震える声が聞こえた。あのワイバーンモドキは「ハイベリア」という。ハイベリアは全部で十二匹はいる。兎人族の上空を旋回しながら獲物の品定めでもしているようだ。

そのハイベリアの一匹が遂に行動を起こした。大きな岩と岩の間に隠れていた兎人族の下へ急降下すると空中で一回転し遠心力のたつぷり乗った尻尾で岩を殴りつけた。轟音と共に岩が粉碎され、兎人族が悲鳴と共に這い出してき絶望しそうになった……。

ドパンツ!! ドパンツ!!



「あつ、すみませんハジメさん」

「わかったなら良い……」

ドパン ツ ドパンツ!!

そして、ハジメは難なく一瞬にして残りのハイベリアを駆逐した。有り得べからざる光景に、硬直する兎人族達。ハジメは駆動した後、兎人族の近くまで移動し、二輪をドリフトさせながら停止した。

すると兎人族がわらわらと集まってきた。

「シアー！ 無事だったのか！」

「父様！」

シアに真つ先に声をかけてきたのは、濃紺の短髪にウサミミを生やした初老の男性だった。

「……」

シアと父様と呼ばれた兎人族は話が終わったようで、互いの無事を喜んだ後、ハジメの方へ向き直る。

「ハジメ殿で宜しいか？ 私は、カム。シアの父にしてハウリアの族長をしております。この度はシアのみならず我が一族の窮地をお助け頂き、何とお礼を言えればいいか。しかも、脱出まで助力くださるとか……父として、族長として深く感謝致します」

そう言つて、カムと名乗つたハウリア族の族長は深々と頭を下げた。後ろには同じように頭を下げるハウリア族一同がいる。

「まあ、礼は受け取つておく。だが、樹海の案内と引き換えなんだ。しかしアンタ等、随分あつさり俺達を信用するんだな。亜人は人間族にはいい感情を持つていないだろうに……」

亜人族は被差別種族だし実際、峽谷に追い詰められたのも人間族のせいだ。にもかかわらず、同じ人間族である俺に頭を下げ、しかも助力を受け入れるという態度に、なにか裏があるのかと思つてしまう程、ハジメはカム達の対応に疑問を抱いて質問したのだが、カムは、それに対して苦笑いで返した。

「シアが信頼する相手です。ならば我らも信頼しなくてどうします。我らは家族なのですから……」

「……」

ハジメはシアから聞いた思慮深い一族ということとカムの言葉で納得はするが、同時に族長としては随分なお人好しなことに大丈夫なのか？という不安が出てきた。

「ハジメ殿？」

「いや、問題ない。それよりこの場所ライセン大峽谷は危ないから早速、移動するぞ」

ハジメはカム達に声をかけ一行は、ライセン大峽谷の出口目指して歩を進めた。

ウサミミ四十二人をぞろぞろ引き連れて峡谷を行く。

当然、数多の魔物が絶好の獲物だところぞつて襲ってくるのだが、ただの一匹もそれが成功したものはいなかった。

例外なく、兎人族に触れることすら叶わず、接近した時点で閃光が飛び頭部を粉碎されるからである。乾いた破裂音と共に閃光が走り、気がつけばライセン大峡谷の凶悪な魔物が為すすべなく絶命していく光景に、兎人族達は啞然として、次いで、それを成し遂げている人物であるハジメに対して畏敬の念を向けられており少しむず痒く感じていた。

「やりずれえ……」

もつとも、小さな子供達は総じて、そのつぶらな瞳をキラキラさせて圧倒的な力を振るうハジメをヒーローだとも言うように見つめているような気がして視線が凄かった。

「ふふふ、ハジメさん。チビツコ達が見つめていますよ手でも振ってあげたらどうですか？」

子供に純粋な眼差しを向けられて若干居心地が悪そうなハジメに、シアが実にウザイ表情で「うりうり」とちよつかいを掛けてくるので、多少、苛立ちを感じるが溜息を吐きながらも子供達に近付く。

「……はあ」

ハジメは優しく子供達の頭を撫でた。すると子供達は喜んで嬉しそうにはしゃぐ。すると、シアが嬉しそうに声をかけた。

「ハジメさんって、ホントに優しい人ですね。私の時ですけど」

「……ん、ハジメは優しい」

「どうか……」

ハジメの行動にシアとユエは俺を「優しい」と言ってくれるがハジメ自身、そうと思えなかった……いや、思いたくなかったの方が良いだろう。だって、ハジメは自分の大切な人達を守る為ならば何でもするからだ。それが、例え非道なことでも……そうこうしている内に、ハジメ達は遂にライセン大峽谷から脱出できる場所にたどり着いた。

「……ゴールは近いな」

人工の階段が見えて、出口が近付いたと思っただけながら念の為にハジメは何となしに“遠見”で遠くを見てみると、シアが不安そうに話しかけてきた。

「帝国兵はまだいるでしょか？」

「ん？ どうだろうな。もう全滅したと諦めて帰ってる可能性も高いが……」

「そ、その、もし、まだ帝国兵がいたら……ハジメさん……どうするのですか？」

「……」

ハジメはシアの質問の意味を察して、平然と応える。

「そうだな、相手は帝国兵……人間族だ。だがそれだけだ家族でも友人でもなえ……なら簡単。敵対するなら殺すだけだ。だがシア、お前は未来が見えていたんじゃないのから？」

「はい、見ました。帝国兵と相対するハジメさんを……」

「だったら分かるだろ？……何が疑問なんだ？」

「疑問というより確認です。帝国兵から私達を守るということは、人間族と敵対することと言っても過言じゃありません。同族と敵対しても本当にいいのかと……」

シアの言葉に周りの兎人族達も神秘的な顔付きでハジメを見ている。小さな子供達はよく分からないとつた顔をしながらも不穏な空気を察してか大人達とハジメを交互に忙しく見ている。

「……甘いな」

ハジメは傍にいるユエ、シアぐらいにしか聞こえない呟きの後に、ため息を吐きながら応えていく。

「はあ……シアお前は、根本的に俺という南雲ハジメの認識を間違っている」

「根本？」

首を捻るシア。周りの兎人族も疑問顔だ。

「いいか？ 俺は、お前等を守る為に此処にいるし、お前達には樹海の案内をして欲しいだけなんだ。それを、忘れたわけじゃないだろう？」

「うっ、はい……覚えてます……」

ハジメの言葉に息を呑みながらも応えていくシアに俺は更に言葉が続ける。

「だからなそれを邪魔するヤツは魔物だろうが人間族だろうが関係ない。道を阻むものは敵は殺す。それだけのことだし、それが南雲ハジメという人間だ」

「な、なるほど……」

「はっはっは、分かりやすくいいですな。ハジメ殿、樹海の案内はお任せください」

カムが快活に笑い、ハジメの意見に賛同し、シア、他の兎人族も納得した。

ハジメ達は、階段に差し掛かった。俺を先頭に順調に登っていく。帝国兵からの逃亡を含めて、ほとんど飲まず食わずだったはずの兎人族だが、その足取りは軽く、俺は兎人の身体能力に感心していた。

「流石は兎人族か……」

やはりと言うべきか、兎人族は魔力を持たない代わりに身体能力が高く、最弱と呼ばれている兎人族でも一般人と下級の兵士並の体力を持つてる程だ。

ハジメはそう思っていると、遂に階段を上りきり、俺達はライセン大峽谷からの脱



出を果たした。しかし、登りきった崖の上、そこには……………

「やつぱり、いたか……」

シアの「未来視」通りにそこには帝国兵が居座っていた。

「おいおい、マジかよ。生き残つてやがったのか。隊長の命令だから仕方なく残つてただけなんだがなあ〜こりやあ、いい土産ができそうだ」

三十人の帝国兵がたむろしていた。周りには大型の馬車数台と、野営跡が残っている。全員がカーキ色の軍服らしき衣服を纏っており、剣や槍、盾を携えており、俺達を見るなり驚いた表情を見せた。

だが、それも一瞬のこと。直ぐに喜色を浮かべ、品定めでもするように兎人族を見渡した。

「小隊長！ 白髪の兎人もいますよ！ 隊長が欲しがってましたよね？」

「おお、ますますツイテルな。年寄りには別にいいが、あれは絶対殺すなよ？」

「小隊長お、女も結構いますし、ちよつとくらい味見してもいいつすよねえ？ こちとら、何もなくて三日も待たされたんだ。役得の一つや二つ大目に見てくださいいよお〜」

「つたく。全部はやめとけ。二、三人なら好きにしろ」

「ひやつほ〜、流石、小隊長！ 話がわかる！」

帝国兵は、兎人族達を完全に獲物としてしか見ていないのか戦闘態勢をとる事もなく、下卑た笑みを浮かべ舐めるような視線を兎人族の女性達に向けている。兎人族は、その視線にただ怯えて震えるばかりだ。

「……………」

クズだな、と内心で呟くと、やはり自分は帝国の連中とは相容れないだろうなどハジメは思った。そして、帝国兵達が好き勝手に騒いでいると、兎人族にニヤついた笑みを浮かべていた小隊長と呼ばれた男が、ようやく嫌悪感を顕にしているハジメの存在に気がついた。

「ああ？ お前誰だ？ 兎人族……じゃあねえよな？」

ハジメは、帝国兵の態度から素通りは無理だろうなと思いつながら、一応会話に応じることにした。

「ああ、人間だ」

「はあく？ なんで人間が兎人族と一緒にいるんだ？ しかも峡谷から。ああ、もしかして奴隷商か？ 情報掴んで追っかけたとか？ そいつあまた商売魂がたくましいねえ。まあ、いいや。そいつら皆、国で引き取るから置いていけ」

勝手に推測し、勝手に結論づけた小隊長は、さも自分の言う事を聞いて当たり前、断られることなど有り得ないと信じきった様子で、そう命令してくるが、ハジメは煽り口

調を交えながら、肩を竦めながら話す。

「断る」

「……今、何て言った？」

「断ると言つてんだ。こいつらは今は俺のもの。あんたらには一人として渡すつもりはない。諦めてさつさと国に帰ることをオススメする」

聞き間違いかと問い返し、返つて来たのは不遜な物言い。小隊長の額に青筋が浮かぶ。

「……小僧、口の利き方には気をつける。俺達が誰かわからないほど頭が悪いのか？」  
「十全に理解している。あんたらに頭が悪いとは誰も言われたくないだろうな」

ハジメの言葉にスッと表情を消す小隊長。周囲の兵士達も剣呑な雰囲気で見睨んでいる。その時、小隊長が、剣呑な雰囲気の中で背中を押されたのか、ハジメの後ろから出てきたユエに気がついた。幼い容姿でありながら纏う雰囲気に艶があり、そのギャップからか、えもいわれぬ魅力を放っている美貌の少女に一瞬呆けるものの、ハジメの服の裾をギュツと握っていることからよほど近い存在なのだろうと当たりをつけ、再び下碑た笑みを浮かべた。

「ああなるほど、よおくわかった。てめえが唯の世間知らず糞ガキだつてことがな。ちよいと世の中の厳しさつてヤツを教えてやる。くつくつく、そっちの嬢ちゃんえらい

別嬪じゃねえか。てめえの四肢を切り落とした後、目の前で犯して、奴隷商に売っばらってやるよ」

「そうか……」

その言葉にハジメは眉をピクリと動かしながら、コイツなら試しの練習になると思っている、ユエは無表情でありながら誰でも分かるほど嫌悪感を丸出しにして、目の前の男が存在すること自体が許せないと言わんばかり、ユエが右手を掲げようとした。

だが、それを制止させ訝しそうなユエを尻目にハジメは最後の言葉をかける。

「じゃ、お前等は俺の敵ってことでいいよな？」

「ああ!? まだ状況が理解できてねえのか! てめえは、震えながら許しをこっ——!？」

「……じゃあな」

ドパンツ!!

想像した通りにハジメが怯えないことに苛立ちを表にして怒鳴る小隊長だったが、その言葉が最後まで言い切られることはなかった。なぜなら、一発の破裂音と共に、その頭部が砕け散ったからだ。眉間に大穴を開けながら後頭部から脳髓を飛び散らせ、そのまま後ろに弾かれる様に倒れる。何が起きたのかも分からず、呆然と倒れた小隊長を見る兵士達に追い打ちが掛けられた。

ドパアアンツ!

一発しか聞こえなかった銃声は、同時に、六人の帝国兵の頭部を吹き飛ばした。実際には六発撃つたのだが、ハジメの射撃速度が早すぎて射撃音が一発分しか聞こえなかったのだ。

「脆いな……」

突然、小隊長を含め仲間の頭部が弾け飛ぶという異常事態に兵士達が半ばパニックになりながらも、武器をハジメ達に向ける。

「流石は隊列は組めるように教わってるか……」

行動は迅速であることに流石は、帝国兵だと思う。が、その対応はハジメ相手には余りにも遅過ぎた。

早速、帝国兵の前衛が飛び出し、後衛が詠唱を開始する。だが、その後衛組の足元に何かコロロンと転がってきた。黒い筒状の物体だ。何だこれ？ と詠唱を中断せずに注視する後衛達だったが、次の瞬間には物言わぬ骸と化した。

ドガアンツ!!

この一撃で、密集していた十人程の帝国兵が即死するか、手足を吹き飛ばされるか、内臓を粉碎されて絶命し、さらに七人程が巻き込まれ苦痛に呻き声を上げた。

背後からの爆風に、思わずたたらを踏む突撃中の前衛七人。何事かと、背後を振り向いてしまった六人は、直後、他の仲間と同様に頭部を撃ち抜かれて崩れ落ちていく。

「……」

血飛沫が舞い、それを頭から被った生き残りの一人の兵士が、力を失ったように、その場にへたり込む。無理もない。ほんの一瞬で、仲間が殲滅されたのである。彼等は決して弱い部隊ではない。むしろ、上位に勘定しても文句が出ないくらいには精鋭だろう。それ故に、その兵士は悪い夢でも見ているのでは？ と呆然としながら視線を彷徨わせていた。

「……」

ハジメはそんな事を気にせず、人間相手だったら「纏雷」すら使わずに通常弾と炸薬だけで十分だという事に分かったことに頷いてるだけだ。そして、確認を終えたハジメは一人だけ生き残った兵士に声をかけた。

「……おい」

「ひい、く、来るなあ！ い、嫌だ。し、死にたくない。だ、誰か！ 助けてくれ！」  
命乞いをしながら這いずるように後退る兵士。その顔は恐怖に歪み、股間からは液体が漏れてしまっている。ハジメは、冷めた目でそれを見下ろし、おもむろに銃口を兵士の背後に向けてと連続して発砲していく。

「ひゅー」

兵士が身を竦めるが、その体に衝撃はない。ハジメが撃つたのは、手榴弾で重傷を

負っていた背後の兵士達だからだ。それに気が付いたのか、生き残りの兵士が恐る恐る背後を振り返り、今度こそ隊が全滅したことを眼前の惨状を持って悟った。

振り返ったまま硬直している兵士の頭にゴリツと銃口が押し当てられる。再び、ビクツと体を震わせた兵士は、醜く歪んだ顔で再び命乞いを始めた。

「た、頼む！ 殺さないでくれ！ な、何でもするから！ 頼む！」

「そうか……なら、他の兎人族がどうなったか教えてもらおうか。結構な数が居たはずなんだが……全部、帝国に移送済みか？」

ハジメはまだ近くにいるなら助けておきたいのだ。しかし、帝国に移送済みなら断念せざるを得ない。

「……は、話せば殺さないか？」

「さあな、てめえの答え次第なら考えるそれとも今すぐ逝くか？」

「ま、待ってくれ！ 話す！ 話すから！ ……多分、全部移送済みだと思う。人数は絞ったから……」

ハジメは「絞った」と言う言葉に少し反応してしまい、自然と聞いてしまう。

「……それは老人とかの兎人族は殺したということか？」

「あ、ああ！ そうだ！」

ハジメは帝国兵の答えを聞き、帝国兵をゴミを見るような視線を向けながら決断し

た。

「……やっぱ俺、お前等帝嫌いだわ」

ハジメは吐き捨てる感じで口にする。「人数を絞った」それは、つまり老人など売れそうにない兎人族は殺したということだろう。兵士の言葉に、悲痛な表情を浮かべる兎人族達。ハジメは、その様子をチラツとだけ見やる。直ぐに視線を兵士に戻すともう用はないと瞳に殺意を宿し、帝国兵が命乞いをする前に……

「待て！ 待ってくれ！ 他にも何でも話すから！ 帝国のでも何でも！ だかつー」

「黙れ、てめえと話すのも疲れた」

ドパンツ！

一発の銃弾を放った。

息を呑む兎人族達。あまりに容赦のないハジメの行動に完全に引いているようである。その瞳には若干の恐怖が宿っていた。それはシアも同じだったのか、おずおずとハジメに尋ねてきた。

「あ、あのさっきの人は見逃してあげても良かったのでは……」

「……シア、言ったろ？ お前と違って俺はそんなに優しい奴じゃないって」

ハジメはシアにそう告げるとシアは「うっ」と唸った。



「……」

シア達の表情を見て、少し苛立ちが湧く。自分達の同胞を殺して、奴隷にしようとした相手にも慈悲を持つことに、とことん温厚というか駄目な例の平和主義者達だとハジメは、シア達に呆れていると、その機先を制するようにユエが反論した。

「……一度、剣を抜いた者が、結果、相手の方が強かったからと言って見逃してもらおうなんて都合が良すぎ」

「そ、それは……」

「……そもそも、あなた達を守ってるハジメにそんな目を向けるのはお門違い」

「……」

ユエは静かに怒っていた。ハジメは別に構わないが守られておきながら、ハジメに向ける視線に負の感情を宿すなど許さないのだろう。ホントに優しいな女性である。ユエの言葉で、兎人族達もバツが悪そうな表情をしている。

「ふむ、ハジメ殿、申し訳ない。別に、貴方に含むところがあるわけではないのだ。ただ、こういう争いに我らは慣れておらんのでな……少々、驚いただけなのだ」

「ハジメさん、すみません」

シアとカムが代表して謝罪するが、ハジメは気にしてないという様に手をヒラヒラと振り言葉を続けた。

「気にすんな、お前達にとつて、こういう光景を見るのは初めてかもしれないし、それならば当然の反応だ」

そう言つてハジメは、無傷の馬車や馬のところへ行き、兎人族達を手招きする。樹海まで徒歩で半日くらいかかりそうなので、せっかくの馬と馬車を有効。魔力駆動二輪を“宝物庫”から取り出し馬車に連結させる。馬に乗る者と分けて一行は樹海へと進路をとつた。

「おっ……」

「ユエ、帝国兵達の死体を頼めるか？」

「……ん、わかつた」

ハジメの頼みに応えたユエは無残な帝国兵の死体を風の魔法で吹き飛ばし谷底に落としていく。

後にはただ、彼等が零した血だまりだけが残されたただけであつたのだつた……。

## 十八話　ハルツイナ樹海

七大迷宮の一つにして、深部に亜人族の国フエアベルゲンを抱える「ハルツイナ樹海」を前方に見据えて、ハジメが魔力駆動二輪で牽引する大型馬車二台と数十頭の馬が、それなりに早いペースで平原を進んでいた頃、ユエがハジメに声をかけた。

平原を進んでいると、ユエがハジメに傍により首を少し掲げながら声をかけてきた。

「……ハジメ、どうして一人で戦ったの？」

「ん？」

ユエが言っているのは帝国兵との戦いのことだ。あの時、魔法を使おうとしたユエを制止して、ハジメは一人で戦うことを選んだ。ユエが参加しようがすまいが結果は「瞬殺」以外には有り得なかっただろうが、どうも帝国兵を倒した後のハジメは物思いに耽っているような気がしたらしく、ユエとしては気になっていたらしい

「ん、まあ、ちよつと確かめたいことがあつてな……」

「……確かめたいこと？」

ユエが疑問顔で聞き返す。シアも肩越しに興味深そうな眼差しを向けている。

「ああ、それはな……俺の武器はどれくらい人間に通用するかの実験と俺にまだ殺しに躊躇いがあるかどうか知りたかったんだ」

「……どうだった？」

「ああ、結果的に人相手には魔力を使わなくても大丈夫だし、人生初の殺しも何も感じなかったな。相手もあれだったからかもしれないが……」

「……そう、大丈夫？」

そう答えるとユエは心配そうに見つめながら話しかけるがハジメは、笑みを向けて伝える。

「ああ、何の問題もない。これが今の俺だし、これからもちゃんと大切な存在を守るには必要なことだし確認出来て良かったさ」

そんなことを二人で話していると、後ろからシアが話しかけた。

「あの、あの！ ハジメさんとユエさんのこと、教えてくれませんか？」

「？ 俺達の話したろ？」

「いえ、能力とかそういうことではなくて、なぜ、奈落？ という場所にいたのかとか、旅の目的って何なのかとか、今まで何をしていたのかとか、お二人自身のことを知りたいです」

「……聞いてどうするの？」

「どうするとうわけではなく、ただ知りたいだけです。……私、この体質のせいで家族には沢山迷惑をかけました。小さい時はそれがすごく嫌で……もちろん、皆はそんな事ないって言ってくれましたし、今は、自分を嫌ってはいませんが……それでも、やっぱり、この世界のはみだし者のような気がして……だから、私、嬉しかったのです。お二人に出会って、私みたいな存在は他にもいるのだと知って、一人じゃない、はみだし者なんかじゃないって思えて……勝手ながら、そ、その、な、仲間みたいに思えて……だから、その、もつとお二人のことを知りたいといいますか……何といいますか……」

シアは話の途中で恥ずかしくなってきたのか、次第に小声になってハジメの背に隠れるように身を縮こまらせた。

「……」

確かに、この世界で、魔物と同じ体質を持った奴など受け入れがたい存在だろうし仲間意識を感じてしまうのも無理はないだろう。

「はあ……わかった暇潰しにはなるしな」

「！、ありがとうございますっ」

そして、ハジメとユエはこれまでの経緯をシアに話すことにした。

結果……

「うえ、ぐすつ……ひどい、ひどすぎますうう、ハジメさんもユエさんもがわいぞうで

すう。そ、それ比べたら、私はなんでめぐまれて……うう、自分がなざけないうすう」

結果、号泣した。滂沱の涙を流しながら「私は、甘ちゃんですう」とか「もう、弱音は吐かないですう」や始末には「ハジメさんの恋人ってユエさんじゃないんですか?！」と驚きの声を上げる。そして、さり気なく、ハジメのコートで顔を拭いている。どうやら、自分は大変な境遇だと思っていたら、ハジメとユエが自分以上に大変な思いをしていたことを知り、不幸顔していた自分が情けなくなったらしいがハジメが優花の事を話すと更に驚いていた。

しばらくして、メソメソしていたシアだが、突如、決然とした表情でガバツと顔を上げると拳を握り元気よく宣言してきた。

「ハジメさん! ユエさん! 私、決めました! お二人の旅に着いていきます! これからは、このシア・ハウリアが陰に日向にお二人を助けて差し上げます! 遠慮なんて必要ありませんよ。私達はたった三人の仲間。共に苦難を乗り越え、望みを果たしましょう!」

「……」

何、言っただコイツ。とハジメとユエは呆れた顔をしていると、ユエが更に追撃するよう、言葉をかける。

「……現在、守られてばっかのウサギが何を言う」

「そ、それは……」

「……（そういうことか）」

シアの発言と表情で何となく察しがついたハジメはシアの目線に合わせながら聞く。

「……シアお前、単純に旅の仲間が欲しいだけだろ？」

「!？」

ハジメの言葉に、シアの体がビクツと跳ねたので、確信がついた。シアの魂胆に 確信したハジメは更に言葉が続けていく。

「一族の安全が 一先ず確保できたら、お前、アイツ等から離れる気なんだろ？ そこにうまい具合に『同類』の俺らが現れたから、これ幸いに一緒に行くってか？ そんな珍しい髪色の兎人族なんて、一人旅出来るとは思えないしな」

「……あの、それは、それだけでは……私は本当にお二人を……」

「別に、責めているわけじゃない。だがな、変な期待はするなよ。俺達の目的は七大迷宮の攻略と神を殺すことなんだ。おそらく、オルクスの奈落と同じで本当の迷宮の奥は化物揃いだ。今のシアだと俺であつても守り切れない場合がある。だから、すまないが同行を許すつもりは毛頭ない」

「……」

ハジメの全く容赦ない言葉にシアはウサ耳をペタンと垂らしながら、落ち込んだように黙り込んでしまった。

「……………」

ハジメはシアに内心申し訳ないと思いつながら、歩を進めていく。その後のシアは、それからの道中、大人しく二輪の座席に座りながら、何かを考え込むように難しい表情をしていた。

それから数時間して、遂に一行は「ハルツィナ樹海」と平原の境界に到着した。ハジメは樹海を目で初めて見るので、期待していたがただの森にしか見えなかった。

「……」が、樹海か……」

本にあった通り、樹海の外から見ると、ただの鬱蒼とした森にしか見えないが、一度中に入ると直ぐさま霧に覆われるだったか？

「それでは、ハジメ殿、ユエ殿。中に入ったら決して我らから離れないで下さい。お二人を中心にして進みますが、万一はぐれると厄介ですから。それと、行き先は森の深部、大樹の下で宜しいのですか？」

「ああ、聞いた限りじゃあ、そこが本当の迷宮と関係してそうだからな」

カムが、ハジメに対して樹海での注意と行き先の確認をする。カムが言った「大樹」とは、「ハルツィナ樹海」の最深部にある巨大な一本樹木で、亜人達には「大樹ウーア・



アルト」と呼ばれており、神聖な場所として滅多に近づくものはいないらしい。峡谷脱出時にカムから聞いた話だ。

ハジメはカムの話を聞いて、樹海に向かいながらある仮説を立てていた。カムの話を聞く限りだと、「ハルツィナ樹海」そのものが大迷宮じゃなくその大樹が大迷宮の入口の可能性が十分に高いと思われる。

そして、カムは、ハジメの言葉に頷くと、周囲の兎人族に合図をしてハジメ達の周りを固めていく。

「ハジメ殿、できる限り気配は消してもらえますかな。大樹は、神聖な場所とされており、ますから、あまり近づくものはおりませんが、特別禁止されているわけでもないのので、フェアベルゲンや、他の集落の者達と遭遇してしまうかもしれない。我々は、お尋ね者なので見つかるかと厄介です」

「ああ、承知している。俺もユエも、ある程度、隠密行動はできるから大丈夫だ」  
ハジメは、そう言うところ「気配遮断」を使う。ユエも、奈落で培った方法で気配を薄くした。

「ツ!? これは、また……ハジメ殿、できればユエ殿くらいにしてもらえますかな?」  
「ん? ……こんなもんか?」

「はい、結構です。さっきのレベルで気配を殺されては、我々でも見失いかねませんから

な。いや、全く、流石ですな！」

そういえば、兎人族は全体的にスペックが低い分、隠密行動には秀ているだったか？ハジメがそんな事を思い出していると、カムは、人間族でありながら自分達の唯一の強みを凌駕され、もはや苦笑いだった。隣では、何故かユエが自慢げに胸を張っている。シアは、どこか複雑そうだった。大概、ハジメの言う実力差を改めて示されたせいだろう。

「それでは、行きましようか」

カムの号令と共に準備を整えた一行は、カムとシアを先頭に樹海へと踏み込んだ。

しばらく、道ならぬ道を突き進む。直ぐに濃い霧が発生し視界を塞いでくる。しかし、カムの足取りに迷いは全くなく、ハジメは言葉を発せずとも感心していた。

「……」

流石は亜人族というべきか、こんな濃い霧が充満してる場所でも現在位置も方角も完全に把握している。これだと、樹海の中でも正確に現在地も方角も把握できるって、可能性も高いと思われる。

順調に進んでいると、突然カム達が立ち止まり、周囲を警戒し始めた。

「……魔物か」

ハジメが感知すると隣のユエも感知した。どうやら、複数匹の魔物に囲まれていることがわかった。樹海に入るに当たって、ハジメが貸し与えたナイフ類を構える兎人族

達。彼等は本来なら、その優秀な隠密能力で逃走を図るのだそうだが、今回はそういうわけには行かない。皆、一様に緊張の表情を浮かべているがハジメはそんな彼等に手で待て、とサインしながら気配が強まる方へ視線を向ける。

「……………そこか」

ハジメは魔物位置をある程度把握し、左手を素早く水平に振った。微かに、パシユという射出音が連続で響く。

直後、

ドサツ、ドサツ、ドサツ

「「キイイイイ!?!」」

三つの何かが倒れる音と、悲鳴が聞こえた。そして、慌てたように霧をかき分けて、腕を四本生やした体長六十センチ程の猿のような魔物が三匹踊りかかってきた。

「ユエ」

「……………ん」

ハジメが呼びかけるとユエは応じて、猿の内、一匹に向けてユエが手をかざし、一言囁くように呟く。

「〴〵風刃〴〵」

魔法名と共に風の刃が高速で飛び出し、空中にある猿を何の抵抗も許さずに上下に分

断する。その猿は悲鳴も上げられずにドシャと音を立てて地に落ちた。

「残りは……チツ、分かれたな」

ある程度の知能はあると分かって、舌打ちするハジメ。分かれた一匹は近くの子供に、もう一匹はシアに向かつて鋭い爪の生えた四本の腕を振るおうとする。シアも子供も、突然のことに思わず硬直し身動きが取れない。咄嗟に、近くの大人が庇う。

「大丈夫だ、安心しろ」

ハジメが左腕を振ると、パシユ！ という音と共にシアと子供へと迫っていた猿の頭部に十センチ程の針が無数に突き刺さって針に付けられた毒に侵され絶命させた。

「あ、ありがとうございます、ハジメさん」

「お兄ちゃん、ありがとう！」

ハジメがニードルガンの確認をしてるとシアと子供（男の子）が窮地を救われ礼を言う。

「気にするな、二人共ケガは無いか？」

「うんっ、大丈夫だよ」

男の子のハジメを見る目はキラキラだ。シアは、突然の危機に硬直するしかなかった自分にガツクリと肩を落とした。その様子に、ハジメもカムも苦笑いする。

「もたもたするな、また出てきたら罫があかん行くぞ」

気を取り直し、ハジメは促して、先導を再開していく。

その後も、ちよくちよく魔物に襲われたが、ハジメとユエが静かに片付けていった。樹海の魔物は、一般的には相当厄介なものとして認識されているのだが、何の問題もなく終わった。

しかし、樹海に入って数時間が過ぎた頃、今までにない無数の気配に囲まれており、ハジメは立ち止まって後ろにいるカム達の歩みを止まらせると、奥の方へと声をかける。

「……誰だ？」

魔物じゃない。この気配に、数も殺気も、連携の練度も、今までの魔物とは比べ物にならない。カム達は忙しなくウサミミを動かし索敵をしている。

そして、何かを掴んだのか苦虫を嘔み潰したような表情を見せた。シアに至っては、その顔を青ざめさせている。

ハジメは既に検討はついていて、面倒そうにしていると、ユエも相手の正体に気がついたのか、ハジメと同じように面倒そうな表情になる。

そして、相手の正体は……

「お前達……何故人間という！ 種族と族名を名乗れ！」

「あ、あの私達は……」

カムが何とか誤魔化そうと額に冷汗を流しながら弁明を試みるが、その前に虎の亜人

の視線がシアを捉え、その眼が大きく見開かれる。

「白い髪の兎人族……だと？ ……貴様ら……報告のあったハウリア族か……亜人族の面汚し共め！ 長年、同胞を騙し続け、忌み子を匿うだけでなく、今度は人間族を招き入れるとは！ 反逆罪だ！ もはや弁明など聞く必要もない！ 全員この場で処刑する！ 総員かつ！」

ドパンツ!!

虎の亜人が問答無用で攻撃命令を下そうとしたその瞬間、ハジメの腕が跳ね上がり、銃声と共に一条の閃光が彼の頬を掠めて背後の樹を抉り飛ばし樹海の奥へと消えていった。理解不能な攻撃に凍りつく虎の亜人の頬に擦過傷が出来る。もし人間のよう  
に耳が横についていれば、確実に弾け飛んでいただろう。聞いたこともない炸裂音と反応を許さない超速の攻撃に誰もが硬直している。

そこに、ハジメは「威圧」を使いながら虎人族の奴等に告げる。

「余り手荒な真似はしたくない。話し合えるなら話をしないか？ まあ……しな

かったら敵と判断して殺すけどな」

「な、なっ……詠唱がっ……」

詠唱もなく、見たこともない強烈な攻撃を連射出来る上、味方の場所も把握していると告げられ思わず吃る虎の亜人。それを証明するように、ハジメは自然な動作でシユ

ラクを抜きピタリと、とある方向へ銃口を向けた。その先には、奇しくも虎の亜人の腹心の部下がいる場所だった。霧の向こう側で動揺している気配がする。

「後、そこにもいるんだろ？」　気配と殺気が駄々漏れだ。てめえ等も殺るといふのなら容赦はしない。こいつらの命は俺が保障しているからな……ただの一人でも生き残れるなどと思うなよ」

あまりに濃厚なそれを真正面から叩きつけられている虎の亜人は冷や汗を大量に流しながら、ヘタをすれば恐慌に陥って意味もなく喚いてしまいそうな自分を必死に押さえ込んでいるそうに見える。

「……」

ハジメはまだ虎人族の反応を見ながらまだいけると思い言葉を続けていく。

「話に応じてくれるなら、殺しはしない。さあ選べ、敵対して全滅するか話合うか」

虎の亜人は確信した。攻撃命令を下した瞬間、先程の閃光が一瞬で自分達を蹂躪することを。その場合、万に一つも生き残れる可能性はないということを確認したのか、虎言葉亜人はハジメに話しかける。

「貴様の要件を飲む前に、一つ聞きたい」

「ああ聞こう」

虎の亜人は掠れそうになる声に必死で力を込めて俺に尋ね、ハジメは了承する。

「……何が目的だ？」

ハジメは虎の亜人の質問に平然と返す。

「俺の目的は樹海の深部、大樹の下へ行きたいだけだ」

「大樹の下へ……だと？ 何のために？」

「そこに、本当の大迷宮への入口があるかもしれないからだ。俺達はある目的の為に大迷宮の攻略を目指して旅をしている。ハウリアは案内のために雇ったんだ。お前達が思うような奴隷にする為に此処に来たわけじゃない」

「そうか……だが本当の迷宮？ 何を言っている？ 七大迷宮とは、この樹海そのものだ。一度踏み込んだが最後、亜人以外には決して進むことも帰る事も叶わない天然の迷宮だ」

「いや、それはおかしい」

「なんだと？」

妙に自信のあるハジメの断言に虎の亜人は訝しそうに問い返した。

「大迷宮というには、ここの魔物は弱すぎる」

「弱い？」

「そうだ。大迷宮の魔物つてのは、どいつもこいつも化物揃いだ。少なくとも【オルクス大迷宮】の奈落はそうだった。それに……」



「なんだ？」

「大迷宮というのは、『解放者』達が残した試練なんだ。亜人族は簡単に深部へ行けるんだろ？ それじゃあ、試練になってない。だから、樹海自体が大迷宮つてのはおかしいんだよ」

「……」

ハジメの話を聞き終わり、虎の亜人は困惑を隠せなかった。流石に、理解するのは難しいかと思い、更に言葉が続けようとした。しかし、虎の亜人は、そこまで瞬時に判断し虎の亜人はハジメに提案する。

「……お前が、国や同胞に危害を加えないというなら、大樹の下へ行くくらいは構わないと、俺は判断する。部下の命を無意味に散らすわけには行かないからな」

その言葉に、周囲の亜人達が動揺する気配が広がった。樹海の中で、侵入して来た人間族を見逃すということが異例だからだろう。

「だが、一警備隊長の私ごときが独断で下していい判断ではない。本国に指示を仰ぐ。お前の話も、長老方なら知っている方もおられるかもしれない。お前に、本当に含むところがないというのなら、伝令を見逃し、私達とこの場で待機しろ」

「……そうか」

ハジメは虎人族の提案に中々理性的な者がいて助かったと安堵しながら素直に提案

を応じることにした。

「……いいだろう。お前の提案に応じるがさっきの言葉、曲解せずにちゃんと伝えろよ？」

「無論だ。ザム！ 聞こえていたな！ 長老方に余さず伝えろ！」

「了解！」

虎の巫人の言葉と共に、気配が一つ遠ざかっていった。

ハジメは、それを確認するともう良いだろうと思い、スつと構えていたドンナー・シユラー太もものホルスターに納めて、「威圧」を解いた。

「威圧は解いたがお前等が攻撃するより、俺の抜き撃ちの方が早い……試してみるか？」

「……いや。だが、下手な動きはするなよ。我らも動かざるを得ない」

「わかっているさ冗談だ、笑えるだろ？」

「……笑えん」

ハジメのジョークは巫人ウケではないらしい。

―数十分後―

ハジメ達が待つてると奥から、気配を感じハジメは声を呆れ顔をしながらも発する。

「来たか……」

霧の奥からは、数人の新たな巫人達が現れた。彼等の中央にいる初老の男が特に目を引く。流れる美しい金髪に深い知性を備える碧眼、その身は細く、吹けば飛んで行きそうな軽さを感じさせる。

「あれはエルフ……いや、この世界では森人族だったか？」

「こちらに近づくエルフ改め、森人族を初めて見たことに、ハジメは内心で素直に喜んだ。すると、森人族の男性がハジメに声をかける。

「ふむ、お前さんが問題の人間族かね？ 名は何という？」

「ハジメだ。南雲ハジメ。あんたは？」

ハジメの言葉遣いに、周囲の巫人が長老に何て態度を！ と憤りを見せる。それを、片手で制すると、森人族の男性も名乗り返した。

「私は、アルフレリック・ハイピスト。フェアベルゲンの長老の座を一つ預からせてもらっている。さて、お前さんの要求は聞いているのだが……その前に聞かせてもらいたい。『解放者』とは何処で知った？」

「オルクス大迷宮の奈落の底、解放者の一人、オスカー・オルクスの隠れ家だ」

「ふむ、奈落の底か……聞いたことがないがな……証明できるか？」

「ああ、オスカー・オルクスの遺品とその奈落の魔物の魔石ならあるぞ」

ハジメはアルフレリックは大迷宮をちゃんと知る者だと判断し、『宝物庫』から地上

の魔物では有り得ないほどの質を誇る魔石をいくつか取り出し、アルフレリックに渡す。

「こ、これは……こんな純度の魔石、見たことがないぞ……」

アルフレリックも内心驚いていてたが、隣の虎の巫人が驚愕の面持ちで思わず声を上げた。

「後は、これ。一応、オスカー・オルクスが付けていた指輪だ……」

そう言つて、ハジメはオスカー・オルクスの指輪を見せた。アルフレリックは、その指輪に刻まれた紋章を見て目を見開いた。そして、気持ちを落ち付かせるようにゆっくり息を吐く。

「なるほど……確かに、お前さんはオスカー・オルクスの隠れ家にたどり着いたようだ。他にも色々気になるところはあるが……よかろう。取り敢えずフェアベルゲンに来るがいい。私の名で滞在を許そう。ああ、もちろんハウリアも一緒にな」

アルフレリックの言葉に、周囲の巫人族達だけでなく、カム達ハウリアも驚愕の表情を浮かべた。虎の巫人を筆頭に、猛烈に抗議の声があがる。それも当然だろう。かつて、フェアベルゲンに人間族が招かれたことなど無かつたのだから。

「彼等は、客人として扱わねばならん。その資格を持つているのでな。それが、長老の座に就いた者のみ伝えられる掟の一つなのだ」

「待て。何勝手に俺の予定を決めてるんだ？ 俺は大樹に用があるのであって、フェアベルゲンに興味はない。問題ないなら、このまま大樹に向かわせてもらう」

「いや、お前さん。それは無理だ」

「はあ、なんでだ？」

ハジメの疑問にむしろ、アルフレリックの方が困惑したように言葉に返した。

「大樹の周囲は特に霧が濃くてな、亜人族でも方角を見失う。一定周期で、霧が弱まるから、大樹の下へ行くにはその時でなければならん。次に行けるようになるのは十日後だ。……亜人族なら誰でも知っているはずだが……」

「はあっ?!」

アルフレリックは、「今すぐ行ってどうする気だ?」とハジメを見たあと、案内役のカムを見る。ハジメも乗じながらアルフレリックと同じようにカムを見る。

「あっ」

カムは、まさに、今思い出したという表情をしていた。ハジメは流石に苛立ちを感じたが、怒っても意味ないと感じ、呆れながらジト目でカムを見る。ユエも同じようにジト目でカムを見ている。

「……カム?」

「あっ、いや、その何といえますか……ほら、色々ありましたから、つい忘れていたとい

いますか……私も小さい時に行ったことがあるだけで、周期のことは意識してなかったといえますか……」

しどろもどろになって必死に言い訳するカムだったが、ハジメとユエのジト目に耐えられなくなったのか逆ギレしだした。

「ええい、シア、それにお前達も！ なぜ、途中で教えてくれなかったのだ！ お前達も周期のことは知っているだろ！」

「なつ、父様、逆ギレですかっ！ 私は、父様が自信たつぷりに請け負うから、てつきりちようど周期だったのかと思つて……つまり、父様が悪いですう！」

「そうですよ、僕たちも、あれ？ おかしいな？ とは思つたけど、族長があまりに自信たつぷりだったから、僕たちの勘違いかなつて……」

「族長、何かやたら張り切つてたから……」

逆ギレするカムに、シアが更に逆ギレし、他の兎人族達も目を逸らしながら、さり気なく責任を擦り付ける。

見てられないとハジメは呆れて片手で頭に当て天を見上げているがカム達はまだ言い争っている。

「お、お前達！ それでも家族か！ これは、あれだ、そう！ 連帯責任だ！ 連帯責任！ ハジメ殿、罰するなら私だけでなく一族皆にお願いします！」

「あつ、汚い！ お父様汚いですよお！ 一人でお仕置きされるのが怖いからって、道連れなんてえ！」

「族長！ 私達まで巻き込まないで下さい！」

「バカモン！ 道中の、ハジメ殿の容赦のなさを見ていただろう！ 一人でバツを受けるなんて絶対に嫌だ！」

「あんた、それでも族長ですか！」

亜人族の中でも情の深さは随一の種族といわれる兎人族。彼等は、ぎやあぎやあと騒ぎながら互いに責任を擦り付け合っていた。情の深さは何処に行つたのか……流石、シアの家族である。総じて、残念なウサギばかりだった。

呆れ顔を浮かべたハジメが、一言、ポツリと呟く。

「……お前等、言い争いはやめろ、みつともねえ」

「ん」

ハジメの言葉を告げるとユエも同意し、ハウリア達も言い争いをやめ、カムは恐る恐るハジメに質問した。

「ハ、ハジメ殿、お、怒ってますか？」

「いや、大丈夫だ怒ってはない。ただ呆れてるだけだ」

「す、すみません」

「まあ、良い……アルフレリックの言う通りならこのままフェアベルゲンに向かうぞ」  
「はい……」

ハジメ達はそのまま、アルフレリックの案内の下、亜人族達の住処のフェアベルゲンへ向かったのだった……。



## 十九話

## 長老会議

濃霧の中を虎の巫人ギルの先導で進む。

行き先はフェアベルゲンだ。ハジメとユエ、ハウリア族、そしてアルフレリツクを中心に周囲を巫人達で固めて既に一時間ほど歩いている。

しばらく歩いていると、突如、霧が晴れた場所に出た。晴れたといっても全ての霧が無くなったのではなく、一本真っ直ぐな道が出来ているだけで、まるで霧のトンネルのような場所だ。よく見れば、道の端に誘導灯のように青い光を放つ拳大の結晶が地面に半分埋められている。そこを境界線に霧の侵入を防いでいるようだ。

「……結晶か？」

ハジメが、見たことない青い結晶に注目していることに気が付いたのかアルフレリツクが解説を買って出てくれた。

「あれは、フェアアドレン水晶というものだ。あれの周囲には、何故か霧や魔物が寄り付かない。フェアベルゲンも近辺の集落も、この水晶で囲んでいる。まあ、魔物の方は比較的」という程度だが」

「なるほど。そりゃあ、四六時中霧の中じゃあ気も滅入るだろうしな。住んでる場所くらい霧は晴らしたいよな」

そうこうしている内に、眼前に巨大な門が見えてきた。太い樹と樹が絡み合ってアーチを作っており、其処に木製の十メートルはある両開きの扉が鎮座していた。

「ほう……」

ハジメが見たのは、天然の樹で作られた防壁だった。最低でも、三十メートルくらいか正に亜人の「国」というに相応しいだろう。

ギルが門番と思しき亜人に合図を送ると、ゴゴゴと重そうな音を立てて門が僅かに開いた。

「ん？」

周囲の樹の上から、視線を感じると、ハジメ達に対しての視線が突き刺さっているのがわかった。

どの視線も動揺か怒りが籠っている。アルフレリックがいなければ一悶着あったかもしれない。ハジメは視線を感じながらアルフレリックに内心で感謝した。

そして、門をくぐると、そこは別世界だった。

「……」

そこは、直径数十メートル級の巨大な樹が乱立しており、その樹の中に住居があるよ

うで、ランプの明かりが樹の幹に空いた窓と思しき場所から溢れている。人が優に数十人規模で渡れるであろう極太の樹の枝が絡み合い空中回廊を形成している。樹の蔓と重なり、滑車を利用したエレベーターのような物や樹と樹の間を縫う様に設置された木製の巨大な空中水路まであるようだ。樹の高さはどれも二十階くらいありそうである。

ハジメとユエがポカンと口を開け、その美しい街並みに見蕩れていると、ゴホンツと咳払いが聞こえた。どうやら、気がつかない内に立ち止まっていたらしくアルフレリツクが正気に戻してくれたようだ。

「ふふ、どうやら我らの故郷、フェアベルゲンを気に入ってくれたようだな」

アルフレリツクの表情が嬉しげに緩んでいる。周囲の亜人達やハウリア族の者達も、どこか得意げな表情だ。ハジメは、そんな彼等の様子を見つつ、素直に称賛する。

「ああ、こんな綺麗な街を見たのは始めてだ。空気も美味しい。自然と調和した見事な街だな」

「ん……綺麗」

掛け値なしのストレートな称賛に、流石に、そこまで褒められるとは思っていないかったのか少し驚いた様子の亜人達。だが、やはり故郷を褒められたのが嬉しいのか、皆、ふんつとそっぽを向きながらもケモミミや尻尾を勢いよくふりふりしているのを見て、ツンデレかよと思いつつ苦笑いする。

そして、ハジメ達は、フェアベルゲンの住人に好奇と忌避、あるいは困惑と憎悪といった様々な視線を向けられながら、アルフレリックが用意した場所に向かった。

~~~~~

「……なるほど。試練に神代魔法、それに神の盤上での遊戯……そして、創世神エヒトはもう敗れており今はそれ以上の存在の神達が君臨しておるのか……」

現在、ハジメとユエは、アルフレリックと向かい合って話をしていた。内容は、ハジメがオスカー・オルクスに聞いた「解放者」のことや神代魔法のこと、自分が異世界の人間であり七大迷宮を攻略すれば故郷へ帰るための神代魔法が手に入るかもしれないこと等だ。

アルフレリックは、この世界の神の話の聞いても顔色を変えたりはしなかった。不思議に思つてハジメが尋ねると、「この世界は亜人族に優しくはない、今更だ」という答えが返つてきた。神が狂つていようが死んでしまいが、亜人族の現状は変わらないということらしい。聖教教会の権威もないこの場所では信仰心もないようだ。あるとすれば自然への感謝の念だという。

ハジメ達の話の聞いたアルフレリックは、フェアベルゲンの長老の座に就いた者に伝

えられる掟を話した。それは、この樹海の地に七大迷宮を示す紋章を持つ者が現れたらそれがどのような者であれ敵対しないこと、そして、その者を気に入つたのなら望む場所に連れて行くことという何とも抽象的な口伝だった。

【ハルツィナ樹海】の大明宮の創始者リユーティリス・ハルツィナが、自分が「解放者」という存在である事と、仲間の名前と共に伝えたものなのだという。フェアベルゲンという国ができる前からこの地に住んでいた一族が延々と伝えてきたのだとか。最初の敵対せずというのは、大明宮の試練を越えた者の実力が途轍もないことを知っているからこそその忠告だ。

そして、オスカー・オルクスの指輪の紋章にアルフレリックが反応したのは、大樹の根元に七つの紋章が刻まれた石碑があり、その内の一つと同じだったからだそうだ。

「それで、俺は資格を持つているというわけか……」

アルフレリックの説明により、人間を亜人族の本拠地に招き入れた理由がわかった。しかし、全ての亜人族がそんな事情を知っているわけではないはずなので、今後の話をする必要がある。

ハジメとアルフレリックが、話を詰めようとしたその時だった。何やら階下が騒がしくなっているのが分かりボソツと呟いた。

「下か？」

ハジメ達のいる場所は、最上階にあたり、階下にはシア達ハウリア族が待機している。どうやら、彼女達が誰かと争っているようだ。ハジメとアルフレリックは顔を見合わせ、同時に立ち上がった。

階下では、大柄な熊の亜人族や虎の亜人族、狐の亜人族、背中から羽を生やした亜人族、小さく毛むくじやらのドワーフらしき亜人族が剣呑な眼差しで、ハウリア族を睨みつけていた。部屋の隅で縮こまり、カムが必死にシアを庇っている。シアもカムも頬が腫れている事から既に殴られた後のようだ。

「おい、何をしてる」

ハジメとユエが階段から降り、少し苛立ちげに声を発すると彼等は一斉に鋭い視線を送った。熊の亜人が剣呑さを声に乗せて発言する。

「アルフレリック……貴様、どういうつもりだ。なぜ人間を招き入れた？ こいつら兎人族もだ。忌み子にこの地を踏ませるなど……返答によつては、長老会議にて貴様に処分を下すことになるぞ」

発言からすると、こいつらはアルフレリックのような各種族の族長達だろう。

必死に激情を抑えているのだろう。拳を握りわなわなと震えている。やはり、亜人族にとつて人間族は不倶戴天の敵なのだ。しかも、忌み子と彼女を匿った罪があるハウリア族まで招き入れた。熊の亜人だけでなく他の亜人達もアルフレリックを睨んでいる。

しかし、アルフレリックはどこ吹く風といった様子だ。

「なに、口伝に従ったままでだ。お前達も各種族の長老の座にあるのだ。事情は理解できるはずだが？」

「何が口伝だ！ そんなもの眉唾物ではないか！ フェアベルゲン建国以来一度も実行されたことなどないではないか！」

「だから、今回が最初になるのだろう。それだけのことだ。お前達も長老なら口伝には従え。それが掟だ。我ら長老の座にあるものが掟を軽視してどうする！」

「なら、こんな人間族の小僧が資格者だとしても言うのか！ 敵対してはならない強者だ」と！

「そうだ」

あくまで淡々と返すアルフレリック。熊の巫人は信じられないという表情でアルフレリックを、そしてハジメを睨む。

「はあ……」

フェアベルゲンには、種族的に能力の高い幾つかの各種族を代表する者が長老となり、長老会議という合議制の集会で国の方針などを決めてると聞いたが、口伝に対する認識には差があるようだ。アルフレリックは、口伝を含む掟を重要視するタイプのようにだが、他の長老達は少し違うらしい。

ハジメはこの事態に面倒くさそうに溜息を吐くと、アルフレリック以外の長老衆は、この場に人間族や罪人がいることに我慢ならないようだ。

「……ならば、今、この場で試してやろう！」

いきり立った熊の亜人が突如、ハジメに向かって突進した。あまりに突然のことで周囲は反応できていない。アルフレリックも、まさかいきなり襲いかかるとは思っていなかったのか、驚愕に目を見開いている。

そして、一瞬で間合いを詰め、身長二メートル半はある脂肪と筋肉の塊の様な男の豪腕が、ハジメに向かって振り下ろされた。

「……」

ズドンッ！

衝撃音と共に振り下ろされた拳を、ハジメはあつさりとは腕を掴み止める。

「……温い拳だな。だが、殺意を持って攻撃したんだ。覚悟は出来てるんだろ？」

そう言つて、ハジメは魔力操作で義手を操り握力を高めていく。熊の亜人の腕からメキツと音が響いた。驚愕の表情を浮かべながらも危機感を覚え、必死に距離を取ろうとする熊の亜人。

「ぐっう！ 離せ！」

必死に腕を引き戻そうとするが、体長が半分程度しかないにもかかわらず、ハジ



メはビクともしない。

「……………」

ハジメは思う。相手の熊人族は強い。見たら分かる。だが、それは普通ならだ。ハジメは無言で魔力を注ぎ込んでいき、義手の握力を一気に高めていく。

バキッ！

「ッ!？」

熊の亜人の腕からなつてはいけない破壊音が響いた。それでも悲鳴を上げなかったのは流石は長老といったところか。だが、痛みと驚愕に硬直した隙をハジメは逃さない。

離れた左腕を空手の正拳突きのように引き絞ると、後退る熊の亜人の懐へ一気に踏み込みながら告げる。

「戦いに慣れてない奴を傷付けたんだ。その痛み分……ぶっ飛べ」

ドパンッ！

絶大な威力を込められた機械式の拳が、遠慮容赦なく熊の亜人族の腹に突き刺さり、その場に衝撃波を発生させながら、文字通り猛烈な勢いで吹っ飛ばす。熊の亜人は、悲鳴一つ上げられず、体をくの字に折り曲げながら背後の壁を突き破り虚空へと消えていった。しばらくすると、地上で悲鳴が聞こえだす。

「あー……」

「豪腕」は使うのはやり過ぎたなと思いつながらハジメは、まあ、生きてることだろうと判断して、誰もが言葉を失い硬直している中、ガシユン！ とギミックの作動音を響かせる。すると、長老達に殺意を宿らせた視線を向ける。

「で？ お前達は俺と敵対するか？」

その言葉に、誰も頷けるものはいなかった。

現在、当代の長老衆である虎人族のゼル、翼人族のマオ、狐人族のルア、土人族（俗に言うドワーフ）のグゼ、そして森人族のアルフレリックが、俺と向かい合って座っていた。ハジメの傍らにはユエとカム、シアが座り、その後ろにハウリア族が固まって座っている。

長老衆の表情は、アルフレリックを除いて緊張感で強ばっていた。戦闘力では一、二を争う程の手練だった熊の亜人（名前はジン）が、文字通り手も足も出ず瞬殺されたのであるから無理もない。

「で？ あんた達は俺等をどうしたいんだ？ 俺は大樹の下へ行きたいだけで、出来れば敵対したくないんだし俺は亜人族を余り傷付けたくない。しかし俺はお人好しじゃないんだ。敵対するなら俺も相応の対応をする。それに、俺はアンタ等、亜人族の掟は嫌気が指す」

ハジメの言葉に、身を強ばらせる長老衆。言外に、巫人族全体との戦争も辞さないという意志が込められていることに気がついたのだろう。

「こちらの仲間を再起不能にしておいて、第一声がそれか……それで友好的になれるとでも?」

土人族の族長グゼが苦虫を噛み潰したような表情で呻くように呟いた。

「まあ、それについてはやり過ぎたと思う。だが、先に殺意を向けてきたのは、あの熊野郎だ。俺はただ、返り討ちにしただけだ」

ハジメがそう告げるとグゼは表情を歪ませ、勢いよく席から立ち上がりかけながら怒鳴る。

「き、貴様! ジンはな! ジンは、いつも国のことを思つて!」

「それが、初対面の相手を問答無用に殺していい理由になるとでも思つてんのか?」

「そ、それは! しかし!」

グゼがハジメの言葉に口を噤むと、ハジメは畳み掛けるように更に言葉を続ける。

「勘違いするなよ? 俺が被害者で、あの熊野郎が加害者。長老つてのは罪科の判断も下すんだろ? なら、そのところ、長老のあんたがはき違えるなよ?」

おそらくグゼはジンと仲が良かった友人なのだろう。その為、頭ではハジメの言う通りだと分かっているも心が納得しないのだ。だが、そんな心情を汲み取ってやるほ

ど、ハジメはお人好しではない。

ハジメは内心でそう思っていると、アルフレリックがグゼに視線を向け、口を開く。「グゼ、気持ちはわかるが、そのくらいにしておけ。彼の言い分は正論だ」

アルフレリックの諫めの言葉に、立ち上がりかけたグゼは表情を歪めてドスンツと音を立てながら座り込んだ。そのまま、むっつりと黙り込む。

「確かに、この少年は、紋章の一つを所持しているし、その実力も大迷宮を突破したと言っただけのことはあるね。僕は、彼を口伝の資格者と認めるよ」

そう言ったのは狐人族の長老ルアだ。糸のように細めた目でハジメを見た後、他の長老はどうするのかと周囲を見渡す。その視線を受けて、翼人族のマオ、虎人族のゼルも相当思うところはあろうだが、同意を示した。代表して、アルフレリックがハジメに伝える。

「南雲ハジメ。我らフェアベルゲンの長老衆は、お前さんを口伝の資格者として認める。故に、お前さんと敵対はしないというのが総意だ……可能な限り、末端の者にも手を出さないように伝える。……しかし……」

「絶対じゃない……だろ？」

「ああ。知つての通り、亜人族は人間族をよく思っていない。正直、憎んでいるとも言える。血気盛んな者達は、長老会議の通達を無視する可能性を否定できない。特に、今回

再起不能にされたジンの種族、熊人族の怒りは抑えきれない可能性が高い。アイツは人望があつたからな……」

「ああ、それはすまないなことをした。だから、慰謝料の代わりに、これをアイツに飲ませてやれ」

「！　それは何かね？」

ハジメはジンの慰謝料代わりの為に「宝物庫」から一瓶の神水を取り出した。アルフレリックは何処からか取り出された水瓶に目を丸くし質問してきた。

「これは、神結晶と呼ばれる鉱石から抽出した神水と言う物だ。飲むと体の欠損など修復不可な部分は再生しないが、大抵の傷は治る代物だ」

「[[[[[！]]]]」

ハジメが神水の説明をしていくと、それを聞いたカムとシア、そして族長達が驚きを示した。そして再度、アルフレリックが尋ねる。

「……南雲ハジメ。ほんとに、こんな代物を貰っても良いのかね？」

「ああ、良いぞ。言つたら？俺にとつて亜人族は差別の対象でもなんでもない寧ろ協力していききたい所存の考えだつて」

「[[[[[！]]]]」

「感謝する……南雲ハジメ」

「ああ……後、そのジンだったか？　起きたら俺が『やり過ぎたすまない』って言って

おいてくれないか？」

「了解した」

そんな話を着々と進めている中、虎人族のゼルが口を挟んできた。

「我々は、大樹の下への案内を拒否させてもらう。口伝にも気に入らない相手を案内する必要はないとあるからな」

「……」

しようがないだろうな、と思いながらハジメはゼルの言葉を聞き流しているとゼルは更に言葉を続ける。

「ハウリア族に案内してもらえろとは思わないことだ。そいつらは罪人。フェアベルゲンの掟に基づいて裁きを与える。何があつて同道していたのか知らんが、ここでお別れだ。忌まわしき魔物の性質を持つ子とそれを匿った罪。フェアベルゲンを危険に晒したも同然なのだ。既に長老会議で処刑処分が下っている」

「……」

ゼルの言葉に、ハジメはそういう事かと察し、シアは泣きそうな表情で震え、カム達は一様に諦めたような表情をしている。この期に及んで、誰もシアを責めないのだから情の深さは折紙付きだ。

「長老様方！　どうか、どうか一族だけのご寛恕を！　どうか！」

「シア！　止めなさい！　皆、覚悟は出来ている。お前には何の落ち度もないのだ。そんな家族を見捨ててまで生きたいとは思わない。ハウリア族の皆で何度も何度も話し合つて決めたことなのだ。お前が気に病む必要はない」

「でも、父様！」

土下座しながら必死に寛恕を請うシアだったが、ゼルの言葉に容赦はなかった。

「既に決定したことだ。ハウリア族は全員処刑する。フェアベルゲンを謀らなければ忌み子の追放だけで済んだかもしれない」

ワツと泣き出すシア。それをカム達は優しく慰めた。長老会議で決定したというのは本当なのだろう。他の長老達も何も言わなかった。

「そういうわけだ。これで、貴様が大樹に行く方法は途絶えたわけだが？　どうする？　運良くたどり着く可能性に賭けてみるか？」

ハジメは特に焦りを浮かべることも苦い表情を見せることもなく、何でもない様に軽く返した。

「お前、アホだろ？」

「な、なんだと！」

ハジメの物言いに、目を釣り上げるゼル。シア達も思わずと言った風にハジメを見

る。ユエはハジメの考えがわかっていいのかすまし顔だった。

「じゃあ……一つ、例え話をしようか。ある日、お前達の族にもし、『忌み子』が産まれたらお前等はどうする？　ハウリアみたいに追放して迫害するのか？」

「「「……っ！」「」」」

ハジメの例え話に長老達は声にならない声を上げるが、ハジメは目を細めながら確認をとる。

「で……どうするんだ？」

「そ、それは……！」

「出来ねえだろ……家族なんだからな」

「ぐっ……しかし掟でっ」

ゼルが苦し紛れで掟だと言おうとするが、ハジメは表情を変えることなく告げる。

「そのお前達が掲げる掟も俺は疑問なんだ。その掟は、本当に建国の時から定められてんのか？」

「なっ?!」

「少し俺の考えを言わせて貰おう。俺の考えだとその魔力持ちの亜人を迫害し追放する掟はクソ神共の手先か何かが関与していると踏んでいる」

その言葉にゼルは目を見開いて、声を上げる。それは此処にいるユエ以外の誰もが目





たところでアルフレリックが話しかける。

「南雲ハジメ、お前さんの考えは一理ある。しかし、掟をそんな簡単に変えれん。変えるには少し時間が掛かる。そうする間にも、もしかしたらハウリア族の者達は危険な目に合うかもしれない」

「……じゃあどうするんだ？」

「掟が変わるまでお前さんの奴隷とし、死んだ者として扱うことにするお前達も良いな？」

アルフレリックがそう告げ長老達も同意するように頷く。それを見たアルフレリックが言葉を続ける。

「しかし、南雲ハジメ。お前さんに聞きたい。何故そこまでハウリアに拘る？」

ハジメはアルフレリックの質問に「なんだ、そんなことか」と呟いたから小さく笑みを向けながら話す。

「約束したからな……」

「……約束か。それならもう果たしたと考えてもいいのではないか？ 峡谷の魔物からも、帝国兵からも守ったのだろう？ なら、あとは報酬として案内を受けるだけだ。報酬を渡す者が変わるだけで問題なからう」

「問題大ありだ。案内するまで身の安全を確保するつてのが約束なんだよ。途中でいい

条件が出てきたからって、ポイ捨てして鞍替えなんざ……」

ハジメは苦笑いしながら頭の中で守ると約束した彼女を想いながらアルフレリックに向き合い真剣な表情で告げる。

「俺のプライドが許せないからな」

ハジメの言葉の中に込まれている信念にアルフレリックもそうだが、長老達も息を呑む。そして、アルフレリックが苦笑いながらも話す。

「……そうかわかった。なら、『現』掟により南雲ハジメの一族はフェアベルゲンや周辺集落への立ち入りを禁ずる。以降、南雲ハジメの一族に手を出した場合は全て自己責任とする……以上だ、何かあるか？」

「いや、何度も言うが俺は大樹に行けばいいんだ。こいつらの案内でな。文句はねえよ」

「……すまない。我々の生き方を変え、ようやく現れた口伝の資格者を歓迎できないのは心苦しいが……」

「気にしないでくれ。掟は変わると言え、むしろ理性的な判断をしてくれて有り難いくらいだよ。もしまた、クソ神共とかの手先や何かあったら手を貸すし、襲って来た奴等は少し傷付くかもしれないが生かして帰しとく」

「……感謝する」

アルフレリックはハジメは握手をし、カムに告げる。

「カムよ、すまなかった。……そして、しばしの間、フェアベルゲンの外で待つていてくれないか。掟が変わったならすぐに迎えに行く」

「は、はいっ!」

これで会議が終わり、解散している時シアが、オロオロしながらハジメに尋ねる。

「あ、あの、私達……死ななくていいんですか?」

「? さっきの話聞いてなかったのか?」

「い、いえ、聞いてはいましたが……その、何だかトントン拍子で窮地を脱してしまったので実感が湧かないといいますか……信じられない状況といいますか……」

周りのハウリア族も同様なのか困惑したような表情だった。それだけ、長老会議の決定というのは巫人にとって絶対的なものなのだろう。どう処理していいのか分からず困惑するシアにユエが呟くように話しかけた。

「……素直に喜べばいい」

「ユエさん?」

「……ハジメに救われた。それが事実。受け入れて喜べばいい」

「……」

ユエの言葉に、シアはそつと隣を歩くハジメに視線をやった。当のハジメは前を向い

たまま肩を竦める。

「まあ、約束だからな」

「……………」

シアは、肩を震わせる。樹海の案内と引き換えにシアと彼女の家族の命を守る。シアとハジメとの約束だ。

元々、「未来視」でハジメが守ってくれる未来は見えていたが心配だった。しかし彼は魔物達から自分、家族までも助けてくれた。自分達に対して差別的な視線もなかった。

でも、内心の不安に負けて、「約束は守る人だ」と口に出してみたり「人間相手でも戦う」などという言葉を引き出してみたりした。実際に、何の躊躇いもなく帝国兵と戦ってくれた時、どれほど安堵したことか。

だが、今回はいくらハジメでも見捨てるのではという思いがシアにはあった。帝国兵の時とはわけが違う。言ってみれば、帝国の皇帝陛下の前で宣戦布告するに等しいのだ。にもかかわらず一步も引かずに約束を守り通しそして、私の為いやそれ以降に産まれる忌み子の為に「掟」さえも変え、シアと大切な家族は確かに守られたのだ。

先程、一度高鳴った心臓が再び跳ねた気がした。顔が熱を持ち、居ても立ってもいられない正体不明の衝動が込み上げてくる。それは家族が生き残った事への喜びか、それ

とも……

シアは、ユエの言う通り素直に喜び、今の気持ちを衝動に任せて全力で表してみることにした。すなわち、ハジメに全力で抱きつく！

「ハジメさ〜ん！　ありがとう〜ございませう〜！」

「どわっ!!?　いきなり何だ!!?»

「むっ……まさか……」

泣きべそを掻きながら絶対に離しません！　とでも言う様にヒシツとしがみつき顔をグリグリとハジメの肩に押し付けるシア。その表情は緩みに緩んでいて、頬はバラ色に染め上げられている。

喜びを爆発させハジメにじやれつくシアの姿に、ハウリア族の皆もようやく命拾いしたことを実感したのか、隣同士で喜びを分かち合っている。

長老達は今まで自分達がやってきたことを反省したのかハウリア達に頭を下げ謝罪していた。

ハジメはその全てを把握しながら、自分のやった事が上手くいったのを感じ少し笑みを零したのだった……。

## 二十話 シアの想い

「さて、お前等には戦闘訓練を受けてもらおうと思う」

フェアベルゲンから出たハジメ達は、一先ず大樹の近くに拠点を作って一息ついた時の、第一声がこれだった。拠点といっても、ハジメがアルフレリックから貰ってきたフェアドレン水晶を使って結界を張っただけのものだ。その中で切り株などに腰掛けながら、ウサミミ達はポカンとした表情を浮かべていた。

「え、えつと……ハジメさん。戦闘訓練というのは……」

困惑する一族を代表してシアが尋ねる。

「そのままの意味だ。どうせ、これから十日間は大樹へはたどり着けないんだろ？ ならその間の時間を有効活用して、魔物ぐらいには戦えるように育て上げようと思ってな」

「な、なぜ、そのようなことを……」

ハジメの目と全身から迸る威圧感にぶるぶると震えるウサミミ達。シアが、あまりに唐突なハジメ宣言に当然の如く疑問を投げかける。





ハジメはそんなハウリア族を鼻で笑う。

「俺も昔はケンカで負けるぐらいに弱かったぞ」

「え？」

ハジメの告白にハウリア族は例外なく驚愕を顔にする。ライセン大峡谷の凶悪な魔物も、戦闘能力に優れた熊人族の長老も、苦もなく一蹴したハジメが「弱い」など誰が信じられるというのか。

「だが、俺はある時から力が必要になった。だから、強くなったそれだけだ……それ  
で、お前等はどうする？」

ハジメは黙り込み顔を見合わせるハウリア族を見る。すると、そんな彼等を尻目に、  
先程からずっと決然とした表情を浮かべていたシアが立ち上がった。

「やりませう。私に戦い方を教えてください！ もう、弱いままは嫌です！」

樹海の全てに響けと言わんばかりの叫び。これ以上ない程思いを込めた宣言。シア  
とて争いは嫌いだ。怖いし痛いし、何より傷つくのも傷つけるのも悲しい。しかし、一  
族を窮地に追い込んだのは紛れもなく自分が原因であり、このまま何も出来ずに滅ぶな  
ど絶対に許容できない。とあるもう一つの目的のためにも、シアは兎人族としての本質  
に逆らつても強くなりたかった。

不退転の決意を瞳に宿し、真っ直ぐハジメを見つめるシア。その様子を唾然として見

ていたカム達ハウリア族は、次第にその表情を決然としたものに変えて、一人、また一人と立ち上がっていく。そして、ハジメだけでなく、女子供も含めて全てのハウリア族が立ち上がったのを確認するとカムが代表して一步前へ進み出た。

「ハジメ殿……宜しく頼みます」

言葉は少ない。だが、その短い言葉には確かに意志が宿っていた。襲い来る理不尽と戦う意志が。

「……クハッ」

ハジメはその覚悟と意思を受け取って笑みを零す。

「わかった。覚悟しろよ?」

その言葉に、ハウリア族は皆、覚悟を宿した表情で頷いたのだった。

ハジメは、ハウリア族を訓練するにあたって、まず、『宝物庫』から取り出した錬成の練習用に作った装備を彼等に渡した。

「まあ、教えるとしたら師範……いや、駄目だ。簡単な体術にしよう」

一瞬、自分の師範である李のある武術が脳裏に過ぎたがあ的高度な技は、時間が掛かるので諦めたハジメは簡単な誰でも分かり易い体術などを教えている。ちなみに、シアに関してはユエが専属で魔法の訓練をしている。亜人でありながら魔力があり、その直接操作も可能なシアは、知識さえあれば魔法陣を構築して無詠唱の魔法が使えるはず

だからだ。

時折、シアの悲鳴が聞こえるがユエが教えるので大丈夫だろうが問題はこっちだった。

訓練開始から二日目。ハジメは片手で頭を抱えながらハウリア族の訓練風景を見ていた。確かに、ハウリア族達は、自分達の性質に逆らいながら、言われた通り真面目に訓練に励んでいる。魔物だって、幾つもの傷を負いながらも何とか倒している。

しかし……

グサツ！

魔物の一体に、ハジメ特製の小太刀が突き刺さり絶命させる。

「ああ、どうか罪深い私を許してくれえ〜」

それをなしたハウリア族の男が魔物に縋り付く。まるで互いに譲れぬ信念の果て親友を殺した男のようだ。

バキツ！

瀕死の魔物が、最後の力で己を殺した相手に一矢報いる。体当たりによつて吹き飛ばされたカムが、倒れながら自嘲気味に呟く。

「ふっ、これが刃を向けた私への罰というわけか……当然の結果だな……」

その言葉に周囲のハウリア族が瞳に涙を浮かべ、悲痛な表情でカムへと叫ぶ。

「族長！ そんなこと言わないで下さい！ 罪深いのは皆一緒です！」

「そうです！ いつか裁かれるときが来るとしても、それは今じゃない！ 立って下さい！ 族長！」

「僕達は、もう戻れぬ道に踏み込んでしまったんだ。族長、行けるところまで一緒に逝きましようよ」

「お、お前達……そうだな。こんな所で立ち止まっている訳にはいかない。死んでしまった彼のためにも、この死を乗り越えて私達は進もう！」

「……………族長！」

「……………」

ハジメの頬が引き攣ってしまい、苛立ちを感じてしまおうが、呆れてしまっている。

「ハジメ殿どうしましたか？」

ハジメは怒りを通り越して呆れながら俯いてると、カム達が心配してきた。

「ハジメ殿？」

「ああ……大丈夫だ。悪かったのは、俺の考えが甘すぎたことだ。お前等……少し

ギアを上げるぞ」

「……………え……………」

そして、ハジメはカム達に笑顔で告げながらホルスターからドンナーを取り出した。

「次は俺との実戦形式で行こうか？」

数分後、ハウリア達の悲鳴が樹海の一角で響き渡るのであった。

~~~~~

ズガンツ！ ドギヤツ！ バキツバキツバキツ！ ドグシャツ！

樹海の中、凄まじい破壊音が響く。野太い樹が幾本も半ばから折られ、地面には隕石でも落下したかのようなクレーターがあちこちに出来上がっており、更には、燃えて炭化した樹や氷漬けになっている樹まであった。

この多大な自然破壊はたった二人の女の子によってもたらされた。そして、その破壊活動は現在進行形で続いている。

「でえやあああ!!」

裂帛の気合とともに撃ち出されたのは直径一メートル程の樹だ。半ばから折られたそれは豪速を以て目標へと飛翔する。確かな質量と速度が、唯の樹に凶悪な破壊力を与え、道中の障害を尽く破壊しながら目標を撃破せんと突き進む。

「……緋槍」

それを正面から迎え撃つのは全てを灰塵に帰す豪炎の槍。巨大な質量を物ともせず触れた端から焼滅させていく。砲弾と化した丸太は相殺され灰となって宙を舞った。

「まだです！」

「緋槍」と投擲された丸太の衝突がもたらした衝撃波で払われた霧の向こう側に影が走ったかと思えば、直後、隕石のごとく天より丸太が落下し、轟音を響かせながら大地に突き刺さった。バックステップで衝撃波の範囲からも脱出していた目標は再度、豪炎の槍を放とうとする。

しかし、そこへ高速で霧から飛び出してきた影が、大地に突き刺さったままの丸太に強烈な飛び蹴りをかました。一体どれほどの威力が込められていたのか、蹴りを受けた丸太は爆発したように砕け散り、その破片を散弾に変えて目標を襲った。

「ツ！ 城炎！」

飛来した即席の散弾は、突如発生した城壁の名を冠した炎の壁に阻まれ、唯の一発とて目標に届く事は叶わなかった。

しかし……

「もらいましたあー！」

「ツ！」

その時には既に影が背後に回り込んでいた。即席の散弾を放った後、見事な気配断ち

により再び霧に紛れ奇襲を仕掛けたのだ。大きく振りかぶられたその手には超重量級の大槌が握られており、刹那、豪風を伴って振り下ろされた。

「疾風壁」

大槌により激烈な衝撃が大地を襲い爆ぜさせる。砕かれた石が衝撃で散弾となり四方八方に飛び散った。だが、目標は、そんな凄まじい攻撃の直撃を躲すと、余波を風の障壁により吹き散らし、同時に風に乗って安全圏まで一気に後退した。更に、技後硬直により死に体となっている相手に対して容赦なく魔法を放つ。

「凍枢」

「ふえー！ ちよつ、まつー！」

相手の魔法に気がついて必死に制止の声をかけるが、聞いてもらえない訳もなく問答無用に発動。襲撃者は、大槌を手放して離脱しようとするも、一瞬で発動した水系魔法が足元から一気に駆け上がり……頭だけ残して全身を氷漬けにされた。

「づ、づめたいいゝ、早く解いてくださいよおゝ、ユエさ〜ん」

「……私の勝ち」

そう、問答無用で自然破壊を繰り返していたこの二人はユエとシアである。二人は、訓練を始めて十日目の今日、最終試験として模擬戦をしていたのだ。内容は、シアがほんの僅かでもユエを傷つけられたら勝利・合格というものだ。

その結果は……

「ううう、そんなら、つて、それ！ ユエさんの頬っぺ！ キズです！ キズ！ 私の攻撃当たってますよ！ あはは、やりましたあ！ 私の勝ちですう！」

ユエの頬には確かに小さな傷が付いていた。おそらく最後の石の礫が一つ、ユエの防御を突破したのだろう。本当に僅かな傷ではあるが、一本は一本だ。シアの勝利である。それを指摘して、顔から上だけの状態で大喜びするシア。体が冷えて若干鼻水が出ているが満面の笑みだ。ウサミミが嬉しさでピコピコしている。無理もないだろう。何せ、この戦いには訓練卒業以上にユエとハジメとした大切な約束事がかかっていたのだ。

そして、その約束事はハジメが了承したから仕方なく、自分も同意した故に、  
「……傷なんてない」

“自動再生”により傷が直ぐに消えたのをいい事にしらばっくれた。拗ねたようにプイっとそつぽを向く。

「んなっ!? 卑怯ですよ！ 確かに傷が……いや、今はないですけどお！ 確かにあったでしょう！ 誤魔化すなんて酷いですよお！ ていうか、いい加減魔法解いて下さいよお。さつきから寒くて寒くて……あれっ、何か眠くなってきたような……」

先ほどより鼻水を垂らしながら、うつらうつらとし始めるシア。寝たら死ぬぞ！の状



態になりつつある。その様子をチラツチラツと見て、深々と溜息を吐くとユエは心底気が進まないと言う様に魔法を解いた。

「ぴくちっ！　ぴくちい！　あうう、寒かったですう。危うく帰らぬウサギになるところでした」

可愛らしいくしゃみをし、近くの葉っぱでチーン！　と鼻をかむと、シアは、その瞳に真剣さを宿してユエを見つめた。ユエは、その視線を受けて物凄く嫌そうな表情をする。無表情が崩れるほど嫌そうな表情だ。

「ユエさん。私、勝ちました」

「……………ん」

「約束、覚えてますよね？」

「……………ん？」

「ちよつとお！　何いきなり誤魔化してるんですかあ！」

ぎやーぎやーと騒ぐシアに、ユエは心底鬱陶しそうな表情を見せる。

シアの言う通り、ユエは、ハジメの了承済みで彼女と一つの約束をした。それは、シアがユエに対して、十日以内に模擬戦にてほんの僅かでも構わないから一撃を加えること。それが出来た場合、シアがハジメとユエの旅に同行することを認めること。

シアは、ハジメのことを想っているしかしハジメへの想いとは別に、ユエに対しても

近い存在になりたいと本気で思っているのだ。それは、この世界でも極僅かな「同類」であることが多分に影響しているのだろう。つまり、簡単に言えば「友達」になりたいのだ。想い人が傍にいて、同じ人を想う友も傍にいる。今のシアにとつて夢見る未来は、そういう未来なのだ。

一方、ユエは何故、シアとそのような約束を交わしたのか。ハジメは了承したがユエ自身には何のメリットもない約束である。その理由の二割は、やはりシンパシーを感じたことだろう。ライセン大峽谷で初めてシアの話を聞いた時、自分とは異なり比較的に恵まれた環境にあることに複雑な感情を覚えつつも、心のどこかで「同類」という感情が湧き上がったことは否定できない。僅かなりとも仲間意識を抱いたことが、シアに對する「甘さ」をもたらした。

そして、八割の理由は……ハジメの恋人の優花の存在だった。自分もハジメの恋人になりたいが、一人だとなんか心もとない。しかし、自分と同じ想いを抱く存在がいれば少し安心するし、戦力にもなる。そして、優花と出会った日に「私もハジメのことが大好きです。二番目でも良いので恋人になるのを許して下さい」と言う為仲間を増やして起きたい気持ちがあった。

そして、約束をかけた勝負の結果がシアの勝利だったのである。

「……はあ。わかった。ハジメも了承してるし約束は守る……」

「ホントですか!？」

「……………ん」

「何だか、その異様に長い間が気になりますが……ホント、お願いしますよ。」

「……………しっしっ」

渋々、ほんとうに渋々といった感じでユエがシアの勝ちを認める。シアは、ユエの返事に多少の不安は残しつつも、ハジメ同様に約束を反故にすることはないだろうと安心と喜びの表情を浮かべた。

そろそろ、ハジメのハウリア族への訓練も終わる頃だ。不機嫌そうなユエと上機嫌なシアは二人並んでハジメ達がいるであろう場所へ向かうのだった。

~~~~~

ユエとシアが俺のもとへ到着したとき、ハジメは腕を組んで近くの樹にもたれたまま瞑目しているところだった。

「……………おっ」

自分へと近づく二人の気配に気が付き呟いてから、ハジメはゆっくり目を開けると二人の姿を視界に収める。全く正反対の雰囲気を感じさせているユエとシアに訝しそうにしつつ、片手を上げて声をかけた。

「よっ、二人共。勝負とやらは終わったのか?」

「ハジメさん! ハジメさん! 聞いて下さい! 私、遂にユエさんに勝ちましたよ!

大勝利ですよ! いや、ハジメさんにもお見せしたかったですよ、私の華麗な戦いぶりを! 負けたと知った時のユエさんたらもへぶっ!」

「シア、おま……あー」

模擬戦に勝てたことに調子に乗っているのか、身振り手振り大はしゃぎという様相で戦いの顛末を語るシア。だが、流石に調子に乗りすぎたので、ユエのジャンピングピンタを食らい錐揉みしながら吹き飛びドシヤと音を立てて地面に倒れ込んだ。よほど強烈だったのかピクピクとして起き上がる気配がない。

フンツと鼻を鳴らし更に不機嫌そうにそっぽを向くユエに、ハジメが苦笑いしながら尋ねる。

「で? どうだった?」

ユエは話したくないという雰囲気を感じしもせず醸し出しながら、澁々といった感じでハジメの質問に答えた。

「……魔法の適性はハジメよりも無い雑魚」

「ありやま、宝の持ち腐れだな……で? それだけじゃないんだろ? あのレベルの大槌をせがまれたとなると……」

「……ん、身体強化に特化してる。正直、化物レベル」

「……へえ。俺達と比べると？」

魔法の天才であるユエの評価に目を細めるハジメ。珍しく無表情を崩し苦虫を噛み潰したようなユエの表情が何より雄弁に、その凄まじさを物語る。ユエは、ハジメの質問に少し考える素振りを見せるとハジメに視線を合わせて答える。

「……強化してないハジメの……三〜四割くらい」

「マジか……最大値だよな？」

「ん……でも、鍛錬次第でまだ上がるかも」

「おおう。そいつは確かに化物レベルだな」

ハジメは、自分のステータスから考えるとシアの最大値のステータスは6000超えるぐらいであり、ユエの説明でシアの“身体強化”は化物レベルのことを聞いて少し啞然とした。

「まあ、これなら……」

認めるしかないか……と静かに呟いたハジメは目を伏せ苦笑いしながら息を吐くとシアはしっかりと視線を合わせて想いを告げた。

「ハジメさん。私をあなたの旅に連れて行って下さい。お願いします！」

「……シア、お前の気持ちはわかっただが一つ聞きたい？」

「はい？」

「どうして、俺にそんなに付いていきたくないんだ？」

そう、ハジメは今のシアなら樹海の魔物や亜人には大丈夫だろうとカム達を安心出来ると考えており、家族が大事なシアなら自分達に着いて行くより、カム達の傍にいた方がいいんじゃないかと考えていた。

「それは、そのお……」

「……」

「ハジメさんの傍に居たいからですよ！ しゅきなのでえー！」

「……はあ？」

シアはハジメの問いかけに体をモジモジしだし、そして、声を上げたトンデモ発言に呆けてしまった。

「……シア、俺には優花がいるお前の気持ちは……」

「わかってます!!」

何とか気を取り直してシアの告白を断ろうとしたらシアに遮られた。

「ハジメさんには優花さんっていう人が一番であって恋人なのは知ってます！でもっ好きなんですっ！ハジメさんが大好きなんですっ！」

「……」

「ここまで言われてしまったハジメは、ガリガリと頭を掻き、シアに告げた。

「分かった、同行は認める。しかし、今はお前の気持ちには答えられない」

「はい。でも、一緒にいたいです」

「危険だらけの旅だ。シア、お前を守り切れない場面があるかもしれない」

「化物でよかったです。お蔭で貴方について行けます」

「最後に確認だ。俺の望みは神を殺し優花達と故郷に帰ることだ。もう家族とは会えないかもしれないぞ？」

「話し合いました。それでもです。父様達もわかってくれました」

今まで、ずっと守ってくれた家族。感謝の念しかない。何処までも一緒に生きてくれた家族に、気持ちを打ち明けて微笑まれたときの感情はきつと一言言葉にできないだろう。

「俺の故郷は、お前には住み難いところだ」

「何度でも言いましょう。それでもです。だからハジメさん……私も連れて行って下

さ

「はあ……まあ、約束だしな。よろしく頼むぞシア」

「……ん、よろしく」

理由がどうあれ、シアの覚悟に魅せられたハジメは苦笑いをするもシアの同行を認め

ると、ユエはハジメが認めたなら仕方ないと賛同するかのように頷きながらシアを歓迎した。

「はいっ!!」

樹海の中に一つの歓声が響く。

その様子に、ハジメは……

「……………」

優花にどう説明しようかと、いろんな意味でこの先も大変そうだと上を見上げ顔を青くしながら苦笑いするのだった……。



## 二十一話

## 大樹とハウリア

「えへへ、うへへへ、くふふふ」

同行を許されて上機嫌のシアは、奇怪な笑い声を発しながら緩みつばなしの頬に両手を当ててクネクネと身を振らせてた。それは、ハジメと問答した時の真剣な表情が嘘のように残念な姿だった。

「……キモイ」

見かねたユエがボソリと呟く。シアの優秀なウサミミは、その呟きをしっかりと捉えた。

「……ちよつ、キモイって何ですか！ キモイって！ 嬉しいんだからしようがないじゃないですかあ！」

ユエとシアが言い争っている、向こうからこちらに向かつて来る気配を感じ取ったハジメは、その方向へと視線を転じる。

「戻ってきたな」

ハジメがその声を上げると言い争いをやめたシアが聞いてきた。

「えつ、誰がですか？」

「カム達だよ」

「父様達ですか。最近、会ってないんで楽しみですよ！」

ハジメ達が待つてると霧をかき分けて数人のハウリア族が、ハジメの課した課題をクリアしたようで魔物の討伐を証明する部位を片手に戻ってきた。よく見れば、その内の一人はカムだ。

シアは久しぶりに再会した家族に頬を綻ばせる。本格的に修行が始まる前、気持ち打ち明けたときを最後として会っていなかったのだ。たった十日間とはいえ、文字通り死に物狂いで行った修行は、日々の密度を途轍もなく濃いものとした。そのため、シアの体感的には、もう何ヶ月も会っていないような気がしたのだ。

早速、父親であるカムに話しかけようとするシア。報告したいことが山ほどあるのだ。しかし、シアは話しかける寸前で、発しようとした言葉を呑み込んだ。カム達が発する雰囲気がおかしいことに気がついたからだ。

歩み寄ってきたカムはシアを一瞥すると僅かに笑みを浮かべただけで、直ぐに視線をハジメに戻した。

そして……

「ボス。お題の魔物、きつちり狩って来ました」

「ボ、ボス？と、父様？ 何だか口調が……というか雰囲気……」

父親の言動に戸惑いの声を発するシアをさりと無視して、カム達は、この樹海に生息する魔物の中でも上位に位置する魔物の牙やら爪やらをバラバラと取り出した。

「これ程の討伐数を……よくやったなお前達」

「有り難き幸せ」

「しゃつ、ボスに褒められた」

「やった〜!!」

ハウリア全員がハジメの事をボスと呼んでいる姿をシアは目を丸くしながら呟いた。

「……誰？」

シアがハジメの方へと向き、困惑した表情で声を上げた。

「ど、どういうことですか!?! ハジメさん! 父様達に一体何が?!」

「落ち着け。どういうことも何も……訓練の賜物だ」

「いやいや、何をどうすればこんな有様になるんですか?!? 完全に別人じゃないですか?! ちよつと、目を逸らさないで下さい! こつち見て!」

「……別に、大して変わってないだろ?」

「貴方の目は節穴ですか?! 見て下さい! 皆顔付きとか変わってますう〜」

樹海にシアの焦燥に満ちた声が響いた。

シアは、そんな変わり果てた家族を指差しながらハジメに凄まじい勢いで事情説明を迫っていた。

「訓練の賜物だ」

「……つうくもうっ！」

埒があかないと判断したのか、シアの矛先がカム達に向かった。

「父様！ みんな！ 一体何があつたのです!? まるで別人ではないですか！……正気に戻って下さい！」

縫り付かんばかりのシアにカムは、表情を緩め前の温厚そうな表情に戻った。それに少し安心するシア。

だが……

「何を言っているんだ、シア？ 私達は正気だ。ボスのおかげで目覚めただけだ」

「め、目覚めた？ 何ですか、それは？」

嫌な予感に頬を引き攣らせながら尋ねるシアに、カムはにっこりと微笑むと胸を張って自信に満ちた様子で宣言した。

「口だけでは大切な者は守れないとな……」

「……」

シアがカムの言葉に啞然としているとハウリアの一人の少年はスタスタとハジメの

前まで歩み寄る。

「ボス、報告があります」

「おう？ パルどうした？」

「はっ、課題の魔物を追跡中に完全武装した熊人族の集団を発見しました。場所は、大樹へのルート。おそらく我々に対する待ち伏せかと」

ハジメはパルの報告を聞いて、予想はしていたが、本当に来るのかと知り、溜息と共に呆れたように頭を搔く。

「あく、やつば来たか。やはり熊人族の奴等は来ると思ったが……なるほど、どうせなら掟が変わる前に叩き潰そうって魂胆だな、いい性格してるじゃねえの。……で？」

「はっ！ 宜しければ、奴らの無力化は我らハウリアにお任せ願えませんか！」

「……カムはどうだ？ パルはこう言ってるけど？」

話を振られたカムは、ハジメの前で膝き領いて応えた。

「我々に、お任せ頂けるのなら是非」

カムの言葉と同時に他のハウリアもハジメの前に跪ついた。

「……任せるぞ」

「「「「「はっ！」」」」」」

そして、ハウリア達はそのまま、熊人族を無力化しに向かった。シアは呆然と立ち尽

くしていた。

レギン・バントンは熊人族最大の一族であるバントン族の次期族長との噂も高い実力者だ。現長老の一人であるジン・バントンの右腕的な存在でもあり、ジンに心酔にも近い感情を抱いていた。

レギンは、変わり果てたジンの姿に呆然とし、次いで煮えたぎるような怒りと憎しみを覚えた。腹の底から湧き上がるそれを堪える事もなく、現場にいた長老達に詰め寄り一切の事情を聞く。しかしジンはその人間族の男から貰った回復薬で復帰出来ると知ったが、全てを知ったレギンは、長老衆の忠告を無視して熊人族の全てに事実を伝え、報復へと乗り出した。

しかし……

「ぐっ……何だこれは……」

レギンは固まってしまった。その光景を見て……亜人族最強と呼ばれた熊人族が底辺とも言われる兎人族に無力化された光景は一瞬だった。

「遅いぞ」

「ぐっ?!」

いつの間にか現れた兎人族に後ろに回り込まれて攻撃を許されてしまったり……

「武器は破壊させて貰うわ」

「なっ!」

相手が女だと舐めて、調子に乗って武器を勢いよく振り上げた隙に、投げナイフに驚いてしまった瞬間に武器を破壊されたり……。

「少し痛い但我慢しろよ」

「ぐあっ?!」

フィジカルでは差が歴然としているのに、男の兎人族の圧倒的な技術の差に負けてしまい片膝を突いてしまったり、と……。

「おい、なんだこれ……っ?!」

「クソ……邪魔——ガッ?!」

飛来する弓や石によって認識が狂わされた熊人族達が気配を消していた兎人族に一瞬で、意識を落とされたりと

奇襲しようとしていた相手に逆に奇襲されたこと、亜人族の中でも格下のはずの兎人族の有り得ない強さ、どこからともなく飛来する正確無比な弓や石、認識を狂わせる巧みな気配の断ち方、そして何より高度な連携能力! その全てが激しい動揺を生み、スベックで上回っているはずの熊人族を圧倒しているのだ。

実際、単純に一对一で戦ったのなら兎人族が熊人族に敵うことはまずないだろう。だ

が、この十日間、ハウリア族は、地獄というのも生ぬるい特訓のおかげでその先天的な差を埋めることに成功していた。

そして、レギンは族長のカムに刃を向けられていた。

「諦めて撤退しろ熊人族達よ」

「くっ……殺さないのか？」

「殺す？……そんな真似はしない。我等はボスに忠実に仕えしハウリアだ！ 決して残酷な帝国兵ではないっ！」

怒りの表情のカムの言葉にレギンは息を呑むが、訝しむようにカムを見る。

「……本当に良いんだな」

「ああ、我等は無益な争いはしないボスの教えだからな」

「わかった。感謝する」

「後、熊人族よボスからの伝言だ」

カムの言葉にレギンはなんだと言った感じで耳を傾ける。

「『お前達の族長にはやり過ぎたと思っっている』とのことだ」

「……了解した 全員撤収だ！」

そして、カムからハジメの表情言伝を聞いたレギンはまだ意識がある部下を呼んで気を失っている仲間達を運びながら霧の向こうへ熊人族達が消えていった。



すると、カム達の後ろから声が聞こえた。

「上出来だ、お前等」

「ボス！」

―数分前―

ハジメはユエ達と共にカム達の戦いを外野から眺めていた。

「どうだスゲーだろ？ アイツ等」

「……………ん、凄過ぎ」

「……………」

ハジメのカム達を感心していることにユエは反応したがシアはまだ呆然としていて無言だった。

「シア？」

「ハジメさん……………」

「ん、どうした？」

シアが話しかけきたので、その方向へと向けると、シアのハジメを見る目がジト目だった。

「後で事情を聞かせて貰いますよ」

「そう、睨むなよ」

「づう〜」

そんな事をしてると戦いが終わったらしく、ハジメは立ち上がると、ユエとシアも同じように立ち上がった。

「行くぞ」

「……ん」

「はっ、はい」

ハジメ達はそのままカム達に下に向かった。カム達も気付いたらしく「ボス」と言いながら集まった。

「ボス、どうでしたか？」

「そうだな、見事な連携だった。よくやった」

「「「「「有り難き幸せ！」「「「「「」」」」」」」

ハジメがそう褒めた瞬間、ハウリア全員が跪き頭を下げ声を上げていく。ウサ耳もピコピコしていて、褒めて貰えて嬉しそうだとわかった。

「おう」

「……流石ハジメ」

「皆ア〜！ 何があつたんですかあ〜！」

跪くハウリア達にシアは涙目になりながら声を上げたのだった。

なんやかんやあつてハジメ達一行は深い霧の中、大樹に向かつて歩みを進めていた。先頭をカムに任せ、護衛にとハウリア達は周囲に散らばって索敵をしている。

「流石は亜人族こんな霧深くても位置がわかるんだな」

「いえ、ボスの訓練もあつて更に能力が上がりましたよ」

「そうか……」

そんな話をしてるとシアが恨みがましい視線を俺に向けている。

「そんな目で見るとなよ、鬱陶しいな」

「ほんとに何があつたか後で聞かせて貰いますよ」

「わかつてるつて」

和気あいあいと雑談しながら進むこと十五分。一行は遂に大樹の下へたどり着いた。

大樹を見たハジメは声が出ってしまった。

「……なんだこりゃ」

という驚き半分、疑問半分といった感じのものだった。ユエも、予想が外れたのか微妙な表情だ。二人は、大樹についてフェアベルゲンで見た木々のスケールが大きいバージョンを想像していたのである。

「……枯れてるだど？」

なんで大樹が枯れていることに疑問に感じる。大きさに関しては想像通り途轍もなく明らかに周囲の木々とは異なる異様だ。だが、周りの木々が青々とした葉を盛大に広げているのにもかかわらず、大樹だけが枯れ木になっている。神代魔法かそれともクソ神共の仕業だろうかと推測が頭に過ぎる。

ハジメは腕を組んで、この大樹の有様を考察していくが、分ならず疑問顔になる。隣にいるユエも同様だった。

「大樹は、フェアベルゲン建国前から枯れているそうです。しかし、朽ちることはない。枯れたまま変化なく、ずっとあるそうです。周囲の霧の性質と大樹の枯れながらも朽ちないという点からいつしか神聖視されるようになりました。まあ、それだけなので、言ってみれば観光名所みたいなものですが……」

ハジメとユエの疑問顔にカムが解説を入れる。

「へえ………」

それを聞きながらハジメは大樹の根元まで歩み寄っていく。

「ん？………これは………」

そこには、アルフレリックが言っていたものと思われる石板が建てられていた。そして、その石板に刻まれた文様にハジメは声を上げた。

「……これは……オルクスの扉の………」

「……ん、同じ文様」

石板には七角形とその頂点の位置に七つの文様が刻まれていた。オスカー・オルクスの部屋の扉に刻まれていたものと全く同じものだ。ハジメは確認のため、オスカー・オルクスの指輪を取り出す。指輪の文様と石板に刻まれた文様の一つはやはり同じものだった。

「ビング、ここが大迷宮の入口みたいだな。だが、こつからどうすりやいいんだ？」

ハジメは石板を隅々調べていると裏側に表の七つの文様に対応する様に小さな窪みが開いていることに気が付いた。

「ユエ、あつたぞ」

「……んっ」

「これは……」

ハジメが、手に持っているオルクスの指輪を表のオルクスの文様に対応している窪みに嵌めてみる。

すると……石板が淡く輝きだしていく。

何事かと、周囲を見張っていたハウリア族も集まってきた。しばらく、輝く石板を見ていると、次第に光が収まり、代わりに何やら文字が浮き出始める。そこにはこう書かれていた。

“四つの証”

“再生の力”

“紡がれた絆の道標”

“全てを有する者に新たな試練の道は開かれるだろう”

「……………んっ、どういう意味？」

「四つの証はたぶん、他の迷宮の証の可能性が高いな」

「……………再生の力と紡がれた絆の道標は？」

ユエの言葉に頭を捻るハジメにシアが答える。

「うーん、紡がれた絆の道標は、あれじゃないですか？ 亜人の案内人を得られるかどうか」

「か。亜人は基本的に樹海から出ませんし、ハジメさん達みたいに、亜人に樹海を案内して貰える事なんて例外中の例外ですし」

「……………なるほど。それっぽいな」

「……………あとは再生……………私？」

「いや……………それは違うと思う」

「……………ん、何で？」

疑問顔のユエにハジメは説明していく。

「それだと、ここの迷宮に入るにはユエみたいな“自動再生”持ちみたいな奴がない

「ここは攻略出来ない事になる」

「……………そっか」

「ああ、俺の推測だと神代魔法には『再生』に関する魔法があるなこれだと……………今すぐ攻略は無理ってことか、仕方ないが他の迷宮から当たるしかないな……………」

「……………ん」

「ここまで来て後回しにしななければならないことに歯噛みする。ユエも残念そうだし、しかし、大迷宮への入り方が見当もつかない以上、ぐだぐだと悩んでいても仕方ない。気持ちを切り替えて先に三つの証を手に入れることにする。」

ハジメはハウリア族に集合をかけた。

「いま聞いた通り、俺達は、先に他の大迷宮の攻略を目指すことにする。お前達なら、もうフェアベルゲンの庇護がなくても、この樹海で十分に生きていけるだろう。そういうわけで、ここでお別れだ」

ハジメの言葉を聞いていたカムが代表でコチラに歩み寄る。

「はっ畏まりました。後、ボス」

「何だ？」

カムはハジメの前に声を高らかに宣言する。

「我等はボスがお戻りになるまで樹海の守備を行っていくと思います」

「ああ、了解した頼むぞ?」

「はっお任せを!」

そんな話をしてカムが片膝を突いて跪く。すると、ユエの隣にいたシアはもう堪忍が切れたか怒ったように表情を変える。

「もうっ! ホントッ、この十日間の間に何があつたんですかっ?!」

「わかつた、わかつた。話す」

ハジメは怒りを顔にしながらか声を上げるシアを尻目にハウリアとの十日間の訓練を簡単に話した。

ハジメはハウリア全員を性根を一から叩き直す為、ゴム弾を使い、発砲しながらハウリアを一人ずつ叩きのめしたり、自分が扱う体術と喧嘩をしていく内に身がついた荒い技を使ってハウリア達を圧倒していた。

『てめえ等の覚悟はそんなもんかあ?!』

俺は追撃と言った感じで倒れ伏すハウリア達に怒号と共に発砲していきながら、近づくハウリアを投げ飛ばす。

『ガハッ!…ハジメ殿オー!』

『ギャー!』



『うわあああつ！』

ハウリアが悲鳴を上げるも、ハジメは止まらない。そんな事を約五日間続けた。そんな事を約五日間続けた。

すると、ボロボロながら、棒があつて、やつと立つてられるくらいのカムが話しかけた。

『ハジメ殿、何でこんな事を……』

カムの言葉にハジメはまだ分かつてないと知り、溜息を吐いて、本心を口にする。

『俺はお前等に呆れてる』

『えっ』

ハジメの唐突の発言にカムはポカンと口を開けた。傍で倒れ伏すハウリア達も同様だった。

『今のお前達ではシアを守れないし家族すら守れない守ると言っても口だけだ』

『……っ、それは！ 我々が弱っ……』

『弱いからって言うなよ。それはただの逃げだ』

ハジメは「弱い」という言葉はただの逃げだと言うとカムは口を噤む。

『……っ！』

そんなハウリアの様子を見て、ハジメは傍にあつた切り株に腰をかける。

『一つ昔話をしよう、俺は昔な……守ると言っておきながら大切な人を守れなかった』  
『えっ』

ハジメの言葉でカムそして、倒れているハウリア達にも言葉を失っていた。

『そんな時に頭の中で理解したよ。口だけじゃ守れない。本当に大事なものや大切な人を守るには力が、強さが必要ってことがよ』

『……守れる強さ』

ハジメの自虐するような笑みをしながら、話していくとカムがボソツと呟く。

『ああ、だから俺は強くなったんだ。大切を守る為にな……で、お前達はどうする？』

口だけか？ それとも行動か？』

ハジメは真剣な眼差しでハウリア達に問い掛ける。

『そ、そんなの一つしかありませんよ行動のみですよ！』

『そうだっ！』

『俺達は家族でシアを守るんだ！』

ハジメの問い掛けにハウリア達は立ち上がりカムが代表で宣言する。

『ハジメ殿……いやボス！ 私達を強くしてください！』

『『『『『お願いますボス！』』』』』』

ハジメは少しカム達の勢いに息を呑んだが、すぐに笑みが零れてしまった。

『クハッ……その意気だ。お前等！俺も……とことん付きやってやるからよ！』  
『はっ！』

『行くぞ、てめえ等ア！』

ハジメはドンナーに“纏雷”を発動させて、レールガンでゴム弾を発砲すると同時にハウリア達へと襲いかかる。

ドパアンツ！

『ぐっ！』

バキッ！

一人は電磁加速されたゴム弾が肩に掠り、倒れ伏すもすぐさま立ち上がる。

『ゲフッ！』

ドゴオツ！

もう、また一人は脆にゴム弾を喰らい勢いで木にぶつかっても尚、立ち上がる。

顔を蹴り飛ばしても、殴り飛ばして木にぶつかっても、ゴム弾の乱れ撃ちを喰らっても……

『まだ、まだあ……』

真剣な目で立ち上がるハウリア達。

そんな様子のハウリアを見て、ハジメは更に笑みを深める。

『クハツ……まだ行くぞお!』

『うおおお!』

そして、ハウリア達は何度も倒れても、ハジメに立ち向かいそしてハジメも一人、一人と返り討ちにしていくのを約五日間続けていったのだった。

「……………という訳だ」

ハジメが話し終わるとシアはウサ耳を垂れたまま、無言だった。

「……………」

「いや〜恥ずかしいですなあ。今思い出すと……………」

カムは何故か恥ずかしながら頭をかいてるとシアがカムに歩み寄る。

「父様……………」

「ん、どうしたんだシア?」

「馬鹿アツ!」

「ぐほおっ!」

シアは唐突にカムを流石に“身体強化”を使つてはないが頬を全力で殴った。

「父様も皆も私なんかの為に、ぐすつ…無茶して…フェグ」

「シア…」

殴られたカムは自分達を心配し泣き始めるシアを抱き締めて伝える。

「安心してくれシア。私達は辛くは無いいし寧ろ家族を、お前を守る強さを手に入れたんだ」

「父様……」

「だから、安心してお前もボスと共に行ってこい」

「っ……は、はい！」

ハジメはそんな二人の様子を見ていて無自覚だが頬が緩み微笑んでいた。

~~~~~

樹海の境界でカム達とアルフレリック達長老衆の見送りを受けたハジメ、ユエ、シアは再び魔力駆動二輪に乗り込んで平原を疾走していた。

すると、肩越しにシアが質問する。

「ハジメさん。そう言えば目的地はライセン大峽谷でしたっけ？」

「ああ、そうだ」

「でも…ライセン大峽谷に迷宮ってありましたっけ？」

ハジメの告げた目的地に疑問の表情を浮かべるシア。

現在、確認されている七大迷宮は、「ハルツィナ樹海」を除けば、「グリュウエン大砂漠の大火山」と「シユネー雪原の氷雪洞窟」で確実を期すなら、次の目的地はそのどちらかにするべきだろうシアの疑問も当たり前なのだろう。

シアの疑問に察したハジメは意図を話した。

「一応、ライセンも七大迷宮があると言われているからな。シユネー雪原は魔人国の領土だから面倒な事になりそうだしな」

「そ、それはそうですね……」

「だから、取り敢えず大火山を目指すのがベターなんだが、どうせ西大陸に行くなら東西に伸びるライセンを通りながら行けば、途中で迷宮が見つかるかもしれないだろ？」

「つ、ついででライセン大峡谷を渡るのですか……」

思わず、頬が引き攣るシアにハジメは苦笑いする。

ライセン大峡谷は地獄にして処刑場というのが一般的な認識だ。その反応は理解は出来る。

「で、では、ライセン大峡谷に行くとして、今日は野宮ですか？ それともこのまま、近場の村か町に行きますか？」

「……ん、どうするハジメ？」

「そうだな出来れば、食料とか調味料関係を揃えたいし、今後のためにも素材を換金して

おきたいから町がいいな。前に見た地図通りなら、この方角に町があったと思うんだよ」

「そうですか〜」

「……ん、わかった」

ハジメはシア達に町に行くと言った後、ハツとあることを思い出した。

そして、運転しながらハジメはシアに確認取ろうと声をかける。

「シア」

「はい？ どうしたんですかハジメさん？」

「少しな、町に着く前に渡したいものがあるから近くまで着いたら渡したい物があるんだが……良いか？」

「分かりましたですう〜」

「おう……了承は取ったからな」

重要なところは話さずに許可を得たハジメ。そのまま、近くの町に向かって魔力駆動二輪を走らせていったのだった……。

二十二話  
ブルツクの町

遠くに町が見える。周囲を堀と柵で囲まれた小規模な町だ。街道に面した場所に木製の門があり、その傍には小屋もある。おそらく門番の詰所だろう。小規模といっても、門番を配置する程度の規模はあるようだ。

「おお……」

ここならば、充実な備蓄を揃えることが出来そうだとハジメは町を見ながら頬を緩めた。

そんな道中、シアがあることでブチブチと文句を垂れていたが、スルーして遂に町の門までたどり着いた。案の定、門の脇の小屋は門番の詰所だったらしく、武装した男が出てきた。格好は、革鎧に長剣を腰に身につけているだけで、兵士というより冒険者に見える。その冒険者風の男がハジメ達を呼び止めた。

「止まってくれ。ステータスプレートを。あと、町に来た目的は？」

「あー、分かった」

ハジメは「隠蔽」を使って偽装したステータスプレートを門番に渡しながら目的を



伝える。

「食料の補給がメインだ。旅の途中でな」

「……」

「……」

門番は、ハジメの目的を聞きながら偽装ステータスプレートとハジメを交互に見て、問題は無いと判断する。

「よし、良いだろう……しかし、そっちの二人は？」

門番がユエとシアにもステータスプレートの提出を求めようとして、二人に視線を向ける。

「あく、少し前に魔物の襲撃があっちまっつてな、こっちの子のは失くしちゃったんだ。こっちの兎人族は……わかるだろ？」

その言葉だけで門番は納得したのか、なるほどと頷いてステータスプレートをハジメに返す。

「それにしても随分な綺麗どころを手に入れたな。白髪の兎人族なんて相当レアなんじゃないか？……まあよし行け」

「ああ、どうも。おっと、そうだ。素材の換金場所って何処にある？」

「それなら、中央の道を真っ直ぐ行けば冒険者ギルドがある。店に直接持ち込むなら、ギ

ルドで場所を聞け。簡単な町の地図をくれるから」

「おお、そいつは親切だな。ありがとよ」

門番から情報を得て、ハジメ達は門をくぐり町へと入っていく。門のところで確認したがこの町の名前はブルックというらしい。

一見、ホルアドみたいな活気で平和そうな町で少しばかり気が楽になる。それは、ハジメだけでなく、ユエも楽しげに目元を和らげている。しかし、シアだけは先程からぶるぶると震えて、涙目でハジメを睨んでいた。怒鳴ることもなく、ただジツと涙目で見てくるので、流石にハジメもシアに視線を合わせる。

「シア、そろそろ機嫌を直してくれないか？」

「うう、でもこの首輪！ これのせいで奴隷と勘違いされたじゃないですか！ ハジメさん、わかっついていて付けたんですね！ うう、酷いですよ、私達、仲間じゃなかったんですかあ？」

シアが怒っているのは、旅の仲間だと思っていたのに、意図して奴隷扱いを受けさせられたことが相当ショックだったようだ。もちろん、ハジメが付けた首輪は本来の奴隷用の首輪ではなく、シアを拘束するような力はない。それは、シアもわかっている。だが、だとしても、やはりショックなものはショックらしい。

「それについてはすまない。だが、奴隷でもない亜人族、それも愛玩用として人気の高い

兎人族が普通に町を歩けるわけないだろう？」

「ううう、そうですけど」

「嫌なのは分かっているが我慢してくれ」

「……ん、シア我慢」

「ううう、分かりましたあ」

ハジメとユエが宥めることでなんとかシアは首輪の事は渋々、頷いて納得した。そして、ハジメはシアに首輪に備えつけの機能の説明をする。

「あとな、その首輪だが、念話石と特定石が組み込んであるから、必要なら使え。直接魔力を注いでやれば使えるから」

「念話石と特定石ですか？」

「ちなみに、その首輪、きっちり特定量の魔力を流すことで、ちゃんと外せるからな？」

「なるほどおく。なんとも無駄な高性能ですねえ」

「……ん、流石ハジメ」

「はあ、無駄とはなんだ、無駄とは……まあ、ギルドに向かうとするか」

ハジメ達はメインストリートを歩いていき、一本の大剣が描かれた看板を発見する。かつてホルアドの町でも見た冒険者ギルドの看板だ。

「あった……」

規模は、ホルアドの冒険者ギルド比べて二回りほど小さかった。もしかしたら、普通の町ならばこの規模かもしれない。ハジメは看板を確認すると重厚そうな扉を開き中に踏み込んだ。

ハジメ達がギルドに入ると、冒険者達が当然のように注目してくるがスルーし、カウンターへと向かった。

「……」

カウンターへ向かう中、ハジメ達は周りの冒険者達に注目はされているが、足止めとかされていないので気にしないことにした。カウンターに向かうとそこには笑顔で浮かべたオバチャンがいた。

「少し良いか?」

「おや、珍しい。受付がこんなオバチャンなのに残念と思わないだねえ」

「あんまり見た目で人を判断しない性格でな。それに、アンタは相当な熟練に見える」

ハジメがそう話すと、オバチャンは笑みを浮かべ俺の後ろにいたユエとシアに視線を向ける。

「そりや嬉しいねえ。そこのお嬢ちゃん達も良い男を捕まえて良かったねえ」

「……んっ」

「はいですう」

二人も何故か嬉しそうに頷く。

「さて、じゃあ改めて、冒険者ギルド、ブルック支部によるこそ。ご用件は何かしら？」

「ああ、素材の買取をお願いしたい」

「素材の買取だね。じゃあ、まずステータスプレートを出してくれるかい？」

「ん？買取にステータスプレートの提示が必要なのか？」

ハジメの疑問に「おや？」という表情をするオバチャン。

「あんた冒険者じゃなかったのかい？ 確かに、買取にステータスプレートは不要だけどね、冒険者と確認できれば一割増で売れるんだよ」

そして、オバチャンはハジメに冒険者について色々、説明してくれた。

「そうだったのか……」

オバチャンの言うことだと、冒険者になれば様々な特典も付いてくるし生活に必要な魔石や回復薬を始めとした薬関係の素材は冒険者が取ってくるものがほとんどで町の外はいつ魔物に襲われるかわからない以上、素人が自分で採取しに行くことはほとんどない。危険に見合った特典がついてくるのは当然らしい。

ハジメが納得していると、オバチャンは更に言葉が続ける。

「他にも、ギルドと提携している宿や店は一〜二割程度は割り引いてくれるし、移動馬車を利用するときも高ランクなら無料で使えたりするね。どうする？ 登録しておくか

い？ 登録には千ルタ必要だよ」

「そうか。ならせつかくだし登録しておくかな。買取金額から差引くつてことにしてくれないか？ もちろん、最初の買取額はそのままがいい」

ハジメは、そう言いながらオバチャンにステータスプレートを差し出す。

「はいよ」

戻ってきたステータスプレートには、新たな情報が表記されていた。天職欄の横に職業欄が出来ており、そこに「冒険者」と表記された。

「男なら頑張つて黒を目指しなよ？ お嬢さん達にカッコ悪いところ見せないようにね」

「ああ、そうするよ。それで、買取はここでもいいのか？」

「構わないよ。あたしは査定資格も持つてるから見せてちょうだい」

オバチャンは受付だけでなく買取品の査定もできるらしい。やはり、ハジメの思った通りオバチャンはかなり優秀な人ようだ。

ハジメは、あらかじめ「宝物庫」から出してバックに入れ替えておいた素材を取り出す。品目は、魔物の毛皮や爪、牙、そして魔石だ。カウンターの受け取り用の入れ物に入れられていく素材を見て、オバチャンが驚愕の表情をする。

「ハ、ハこれは！」

恐る恐る手に取り、隅から隅まで丹念に確かめる。息を詰めるような緊張感の中、ようやく顔を上げたオバチャンは、溜息を吐きハジメに視線を転じた。

「とんでもないものを持ってきたね。これは……………樹海の魔物だね？」

「ああ、そうだが？」

ハジメは樹海の魔物は相当なレア物の可能性が出て少し冷や汗が流れ出る。すると、オバチャンから樹海の魔物についての説明がはいった。

「樹海の素材は良質なものが多いからね、売ってもらえるのは助かるよ」

「そうか…やつぱり珍しいか？」

「そりゃあねえ。樹海の中じゃあ、人間族は感覚を狂わされるし、一度迷えば二度と出てこれないからハイリスク。好き好んで入る人はいないねえ。巫人の奴隷持ちが金稼ぎに入るけど、売るならもつと中央で売るさ。幾分か高く売れるし、名も上がりやすいからね」

「……………」

今度は素材の提出にも気を付けようとハジメがそう思っているとオバチャンはチャリとシアを見る。

「……………」

オバチャンはおそらく、シアの協力を得て樹海を探索したのだと推測して、ハジメは

樹海の素材を出しても、シアのおかげで不審にまでは思われなかったようで安堵する。

ハジメはシアに心の中で感謝した。

それからオバチャンは、全ての素材を査定し金額を提示した。買取額は四十八万七千ルタ。結構な額だった。

「これでいいかい？ 中央ならもう少し高くなるだろうけどね。」

「いや、この額で構わない」

ハジメは五十一枚のルタ通貨を受け取る。この貨幣、鉱石の特性なのか異様に軽い上、薄いので五十枚を超えていても然程苦にならなかった。そして、ハジメは、この町に入る際に門番に教えて貰ったことをオバチャンに聞く。

「ところで、門番の彼に、この町の簡易な地図を貰えると聞いたんだが……」

「ああ、ちよつと待つといで……ほら、これだよ。おすすめの宿や店も書いてあるから参考にしなさいな」

「おう、ありが……っ！」

ハジメはオバチャンに貰った地図の出来映えに驚愕する。

「おいおい、いいのか？ こんな立派な地図を無料で。十分金が取れるレベルだと思うんだが……」

「構わないよ、あたしが趣味で書いてるだけだからね。書士の天職を持つてるから、それ



くらい落書きみたいなものだよ」

「……」

ハジメはオバチャンの落書き感覚だと聞いて苦笑いする。

「そうか。まあ、助かるよ」

「いいってことさ。それより、金はあるんだから、少しはいいところに泊りなよ。治安が悪いわけじゃあないけど、その二人ならそんなの関係なく暴走する男連中が出そうだからね」

オバチャンは最後までいい人で心配り上手だった。ハジメは苦笑いしながら「そうするよ」と返事をし、入口に向かって踵を返した。ユエとシアも頭を下げて追従した。

「ふむ、いろんな意味で面白そうな連中だね……」

後には、そんなオバチャンの楽しげな呟きが残された。

~~~~~

ハジメ達が、もはや地図というよりガイドブックと称すべきそれを見て決めたのは「マサカの宿」という宿屋だ

宿の中は一階が食堂になっているようで複数の人間が食事をとっていた。俺達が入

ると、また注目されたがそれらを無視して、カウンタ―らしき場所に行くと、十五歳くらい女の子が元氣よく挨拶しながら現れた。

「いらつしやいませー、ようこそ『マサカの宿』へ！ 本日はお泊りですか？ それともお食事だけですか？」

「宿泊だ。このガイドブック見て来たんだが、記載されている通りでいいか？」

ハジメが見せたオバチャン特製地図を見て合点がいったように頷く女の子。

「ああ、キャサリンさんの紹介ですね。はい、書いてある通りですよ。何泊のご予定ですか？」

「一泊でいい。食事付きで、あと風呂も頼む」

ハジメは女の子の口からギルドのオバチャンの名前を聞き、そのインパクトさに苦笑いする。

「はい。お風呂は十五分百ルタです。今のところ、この時間帯が空いてますが」

女の子が時間帯表を見せる。なるべくゆっくり入りたいたいので、男女で分けるとして二時間は確保したい。その旨を伝えると「えっ、二時間も!？」と驚かれた。

「ん？」

「え、えくと、それでお部屋はどうされますか？ 二人部屋と三人部屋が空いてますが

……」

ちよつと好奇心が含まれた目でハジメ達を見る女の子。年頃なのか？　と思いがからハジメは、周りも聞き耳を立ててい少女と宿にいる人達を尻目にハジメは部屋のことを伝える。

「ああ、三人部屋で頼む。お前等も良いよな」

「……ん」

「はいですう〜」

ハジメは二人の確認を取り女の子に視線を戻すと顔を赤くしながらとんでもない事を言い出した。

「さつ三人部屋……つ、つまり三人で？　す、すごい……はつ、まさかお風呂を二時間も使うのはそういうこと!?　お互いの体で洗い合ったりするんだわ！　それから……ああ、あんなことやこんなことを……なんてアブノーマルなっ！」

「……」

ムツツリな女の子はトリップしていた。見かねた女将さんらしき人がズルズルと女の子を奥に引きずっていく。代わりに父親らしき男性が手早く宿泊手続きを行った。

「すみません、家の娘が……」

「問題ない、そういう年頃なんだろう？」

父親の人は、苦笑いして頷いていた。なんやかんやあつたがハジメはそのまま、受付

をし終えるとユエ達と一緒に部屋に入り、一晚過ごしたのだった。

翌朝、朝食を食べた後、ハジメは、ユエとシアに金を渡して、旅に必要なものの買い出しを頼んだ。チエックアウトは昼なのでまだ数時間は部屋を使える。なので、ユエ達に買い出しに行ってもらっている間に、部屋で済ませておきたい用事があったのだ。

「用事ってなんですか?」

「ちよつと作っておきたいものがあるんだよ。その設計図は頭の中で完成してるし、数時間もあれば出来る」

「分かりました、あつユエさん。私、服も見っておきたいんですけどいいですか?」

「……ん、問題ない。私は、露店も見みたい」

「あつ、いいですね! 昨日は見ていただけでしたし、買い物しながら何か食べましよう」

「……ん、じゃあハジメ行ってくる」

「行つてきますですよ」

「おう」

~~~~~

現在、シアとユエは町に出ている。昼ごろまで数時間と行ったところなので計画的に動かなければならぬ。目標は、食料品関係とシアの衣服、それと薬関係だ。武器・防具類はハジメがいるので不要である。

町の中は、既に喧騒に包まれていた。露店の店主が元気に呼び込みをし、主婦や冒険者らしき人々と激しく交渉をしている。飲食関係の露店も始まっているようで、朝から濃すぎないか？ と言いたくなるような肉の焼ける香ばしい匂いや、タレの焦げる濃厚な香りが漂っている。

道具類の店や食料品は時間帯的に混雑しているようなので、二人はまず、シアの衣服から揃えることにした。

オバチャン改めキャサリンさんの地図には、きちんと普段着用の店、高級な礼服等の専門店、冒険者や旅人用の店と分けてオススメの店が記載されている。やはりオバ……キャサリンさんは出来る人だ。痒いところに手が届いている。

二人は、早速、とある冒険者向きの店に足を運んだ。ある程度の普段着もまとめて買えるという点が決め手だ。

その店は、流石はキャサリンさんがオススメするだけあって、品揃え豊富、品質良質、機能的で実用的、されど見た目も忘れずという期待を裏切らない良店だった。

ただ、そこには……

「あらくん、いらつしやい♥可愛い子達ねえん。来てくれて、おねえさん嬉しいわあ、たくぷりサービスしちゃうわよくん♥」

化け物がいた。身長二メートル強、全身に筋肉という天然の鎧を纏い、劇画かと思うほど濃い顔、禿頭の天辺にはチヨコンと一房の長い髪が生えており三つ編みに結われて先端をピンクのリボンで纏めている。動く度に全身の筋肉がピクピクと動きギシミシと音を立て、両手を頬の隣で組み、くねくねと動いている。

ユエとシアは硬直する。シアは既に意識が飛びかけていて、ユエは奈落の魔物以上に思える化物の出現に覚悟を決めた目をしている。

「あらあらくん? どうしちゃったの二人共? 可愛い子がそんな顔してちゃだめよおくん。ほら、笑って笑って?」

「……人間?」

その瞬間、化物が怒りの咆哮を上げた。

「だあくれが、伝説級の魔物すら裸足で逃げ出す、見ただけで正気度がゼロを通り越してマイナスに突入するような化物だゴラアアア!!」

そんなに言っていない!とユエは心の中で叫びながらも頭を下げ謝罪する。

「(ゴ)めんなさい……」

「いいのよくん。それでえ? 今日は、どんな商品をお求めかしらあくん?」

結論から言うと、化物改め店長のクリスタベルさんの見立ては見事の一言だった。店の奥へ連れて行つたのも、シアが粗相をしたことに気がつき、着替える場所を提供するためという何とも有り難い気遣いだった。

ユエとシアは、クリスタベル店長にお礼を言い店を出た。その頃には、店長の笑顔も愛嬌があると思えるようになっていたのは、彼女？ の人徳ゆえだろう。

「いや、最初はどうなることかと思いましたが、意外にいい人でしたね。店長さん。」  
「ん……ハジメが言ってみたいに人は見た目によらない」

「ですね」

そんな風に雑談しながら、次は道具屋に回ることにした二人。しかし、唯でさえ目立つ二人だ。すんなりとは行かず、気がつけば数十人の男達に囲まれていた。冒険者風の男が大半だが、中にはどこかの店のエプロンをしている男もいる。

その内の一人が前に進み出た。ユエは覚えていないが、この男、実はハジメ達がキャサリンと話しているとき冒険者ギルドにいた男だ。

「ユエちゃんとシアちゃんて名前あつてるよな？」

「? ……合つてる」

ユエの返答を聞くとその男は、後ろを振り返り他の男連中に頷くと覚悟を決めた目でユエを見つめた。他の男連中も前に進み出て、ユエかシアの前に出る。

そして……

「「「ユエちゃん、俺と付き合ってください!!」」」」

「「「シアちゃん! 俺の奴隷になってくれ!!」」」」

盛大な告白を受けたユエとシアは……

「……シア、道具屋はこつち」

「あ、はい。一軒で全部揃うといいですね」

何事もなかったように歩みを再開した。

「ちよつ、ちよつと待つてくれ! 返事は!? 返事を聞かせてく「断る(ります)」……  
ぐう……」

まさに眼中にないという態度に、男は呻き、何人かは膝を折って四つん這い状態に崩れ落ちた。しかし、諦めが悪い奴はどこにでもいる。まして、ユエとシアの美貌は他から隔絶したレベルだ。多少、暴走するのも仕方ないといえれば仕方ないかもしれない。

「なら、なら力づくでも俺のものにしてやるう!」

暴走男の雄叫びに、他の連中の目もギンツと光を宿す。二人を逃さないように取り囲み、ジリジリと迫っていく。

その時だった。ユエとシアにとつての好きで大切な人が自分達の前に横から割つて入るとユエとシアを守るように立つのだった。



その人物とは……

「おい……てめえ等、人の仲間は何しようしてる？」

勿論、ハジメだった。

―数分前―

「アイツ等、マジ何処にいった……」

俺は作りたかった物は出来たので帰りが遅いユエ達を迎えに行く為、外に出いた。

すると……

「ユエちゃん、俺と付き合ってください!!」

「シアちゃん! 俺の奴隷になってくれ!!」

ハジメがいる所から少し離れたところから二人に告白する大勢の男の声が聞こえる。

「なんだあ? なんか盛大な告は……って、ユエとシアの名前が聞いたような……」

もしかしてと思ったハジメは、溜息を吐いて呆れながらそこへと向かった。

辿り着くと、フラれた野郎共が問題無いと思うがユエ達に手を出そうとしたので割つて入った。

「おい……てめえ等、人の仲間は何しようしてる?」

俺の割り込みに驚いていたが男はハツと我を取り戻し声を上げた。

「てめえは！ユエちゃんとシアちゃんのっ！」

「ああ、仲間だ」

ハジメがそう言うのと、男共は怒りのせいかわかぬ表情を歪ませていく。

「てめえ、可愛い二人が傍にいるからって調子に乗りやがって……」

「調子に乗ってねえよ」

「はっ、嘘つけっ！」

「それより……」

ハジメは男共が何か言ってるがそんなの無視して、ただ睨みつけるだけだ。しかし、ハジメから伝わる圧に男達はたじろぐ。

「……っ、なんだよっ！」

「てめえ等な……女の子に、ましてや俺の大切な仲間に手を出そうとしたんだわかってるよなっ！」

「「「「「「「……っ！」」」」」」」」」

ハジメはそう告げながら「威圧」を発動してユエ達に手を出そうとした男に挑発する。

「「……っ、来いよっ！」

「…っ、くっっそうおお!!」

「……」

ドスッ!

「ぐあっ!」

男は挑発されたことに激高し、無我夢中に突撃してきたがハジメの手刀で首に当てて一瞬で気絶させた。周りはユエ達以外にはハジメの手の動きが早過ぎて見えなかったらしく後退りし始める。

「で……次は誰が来るんだ?」

「「「「うわあああ!」」」」

ハジメが再度、「威圧」しながら告げると男共は逃げ帰って行った。ハジメはそれを確認した後、溜息と共に「威圧」を解き、ユエ達に視点を転じる。

「お前等、大丈夫だったか?」

「……ん」

「ハジメさん、ありがとうございますう」

「今度からは絡まれないように気をつけとけよ」

「分かりましたあゝ」

ハジメは安心しているとユエが質問した。

「……でもハジメの助けが無くても大丈夫だった」

「まあ、そうだがな……」

「……？」

「いや、この町に入ってからなお前達に対する視線が凄いだよ。だからこういう時に脅しでもしとけば収まると思っただけだ」

ハジメの答えを聞くとユエ「……ん、わかった」と言つて納得して貰えた。

「そろそろ、部屋に戻ろうぜ」

「……んっ」

「はいですう〜」

ハジメ達はそのまま宿に帰つていくのだった。

だが、この日、ハジメに気絶させられた一人の男がクリスタベルに捕まり、後のマリABELちゃんが生まれた。彼は、クリスタベル店長の下で修行を積み、二号店の店長を任され、その確かな見立てで名を上げるのだが……それはまた別のお話。

そのせいでかハジメに、“白髪の悪魔”という二つ名が付き、後に冒険者ギルドを通して王都にまで名が轟き、冒険者を震え上がらせるのだが、それもまた別の話。

そして、畏怖の視線を向けてくる男達の視線をさらつと無視して宿へと向かった。道中、女の子達が「お兄様……」と呟いきながら熱い視線を向けているのだった。

「へえ……」

ハジメは、ユエとシアから今日あった町で起きたことを聞いて、笑みを零すと、ユエに必要な備蓄は買ったのかを聞く。

「そういえばユエ、必要なものは全部揃ったか？」

「……ん、大丈夫」

ハジメ達は宿に戻るとまだ買いたい物は買えたか確認してなかった為、ユエに聞くと、買いたい物は買えたらしい。

「ですね。食料も沢山揃えましたから大丈夫です。にしても『宝物庫』ってホント便利ですよね」

「まあな、俺も『宝物庫』は便利過ぎるが、今の俺でも作れない代物だからなあ」

「えっ、そうなんですか?! ハジメさんでも作れない物があるなんて驚きですう」

「ああ……」

シアが驚くのも無理はない。ハジメはこの世界でもトップクラスの錬成師だ。しかし、そんなハジメでも『宝物庫』の作成に至れない。理由は簡単、他の神代魔法も組み合わせないといけないからだ。ハジメは既に『脳内設計』で『宝物庫』の設計図を作成して、削り上げるがそれはただの指輪だったのだ。

「まあ、それはさておき、シア。こいつはお前にだ」

話題を変えてハジメはシアに直径四十センチ長さ五十センチ程の円柱状の物体を渡した。銀色をした円柱には側面に取っ手のようなものが取り付けられている。

ハジメが差し出すそれを反射的に受け取ったシアは、あまりの重さに思わずたたらを踏みそうになり慌てて“身体強化”の出力を上げた。

「な、なんですか、これ？ 物凄く重いんですけど……」

「そりゃあな、お前用の新しい大槌だからな。重いほうがいいだろう」

「へっ、これが……ですか？」

シアの疑問はもつともだ。円柱部分は、槌に見えなくもないが、それにしても取っ手が短すぎるし何ともアンバランスな形だ。

だが……

「シア、その状態はただの待機状態だ。取り敢えず魔力流してみろ」

「えつと、こうですか？ ツ!？」

ハジメの言われた通り、シアは槌モドキに魔力を流すと、カシュン！ カシュン！ という機械音を響かせながら取っ手が伸長し、槌として振るうのに丁度いい長さになった。

この大槌型アーティファクト：ドリユツケン（ハジメ命名）は、幾つかのギミックを

搭載したシア用の武器だ。魔力を特定の場所に流すことで変形したり内蔵の武器が作動したりする。

「今の俺にはこれくらいが限界だが、腕が上がれば随時改良していくつもりだ。これから何があるか分からないからな。ユエとの訓練でもたつたの十日。俺達が底い切れな場合もあるし、まだまだシアは危なっかしい。その武器はシアの力を最大限生かせるように考えて作ったんだ」

「ハジメさん……ふふ、大丈夫です。まだまだ、強くなって、どこまでも付いて行きますからね！」

シアは嬉しそうにドリユツケンを胸に抱く。

「期待してるぞ」

「はいですう！」

はしやくシアを連れながら、宿のチェックアウトを済ませる。未だ、宿の女の子が俺達を見ると頬を染めるが無視だ。外に出ると太陽は天頂近くに登り燦々と暖かな光を降らせている。それに手をかざしながら俺は大きく息を吸った。

良い旅日和だな……。

振り返ると、ユエとシアが頬を緩めて俺を見つめている。

「じゃあ、行くぞ迷宮攻略」

「んっ（はいですう）！」

ハジメは二人の反応を見ると、スっと前に歩みを進めた。ユエとシアも追従していく。

「さあ、迷宮攻略の再開だ……。」



## 二十三話

## ライセン大迷宮

ハジメ達はライセン大峡谷に到着して二日経っていた。

「はあく、ライセンの何処かにあるってだけじゃあ、やっぱ大雑把過ぎるよなあ」

しかし、迷宮の入り口が何処にも見当たらず、洞窟すらもない。注意深く観察はしているのだが、それらしき場所は一向に見つからなかった。

「まあ、大火山に行くついでなんですし、見つければ儲けものくらいでいいじゃないですか。大火山の迷宮を攻略すれば手がかりも見つかるかもしれないまし」

「まあ、そうなんだけども……」

「ん……でも魔物が鬱陶しい」

「あく、ユエさんには好ましくない場所ですものね」

そんな風に愚痴をこぼし、魔物の多さに辟易しつつも、更に走り続けること三日。ハジメ達はキャンプをしてそろそろ就寝時間のため寝る準備に入るユエとシアを尻目にハジメは見張りをしながら行き先は変えるべきかと考え込んでいた。

「……………そろそろ、別の迷宮に向かった方がいいか」

こんな場所で気長に待つてられない。自分達を召喚した神達は、何らかの理由があるためだ。そろそろ、火山へと向かうべきかとハジメは悩んでいるとテントの中からシアがテントの外へと出ていこうとした。

訝しそうなハジメに、シアがすまし顔で言う。

「ちよつと、お花摘みに」

「……………気をつけろよ？」

「はいですう」

なんだ、トイレかと思ったハジメは、特に口することなく夜は危ないから注意しとけとしか言わずに見張りを続けた。シアがテントの外に出て行き、しばらくすると……

「ハ、ハジメさくん！ ユエさくん！ 大変ですう！ こつちに来てくださあ〜い！」

「あ〜？」

シアが、魔物を呼び寄せる可能性も忘れたかのように大声を上げた。何事かと、ハジメとユエは顔を見合わせ同時にテントを飛び出す。

シアの声がした方へ行くと、そこには、巨大な一枚岩が谷の壁面にもたれ掛かるように倒れおり、壁面と一枚岩との間に隙間が空いている場所があった。シアは、その隙間の前で、ブンブンと腕を振っている。その表情は、信じられないものを見た！ というように興奮に彩られていた。

「こつち、こつちですう！ 見つけたんですよ！」

「わかったから、取り敢えず引つ張るな、興奮しすぎだ」

「……うるさい、シア」

はしやぎながらハジメとユエの手を引つ張るシアに、ハジメは少し引き気味に、ユエは鬱陶しそうに顔をしかめる。シアに導かれて岩の隙間に入ると、壁面側が奥へと窪んでおり、意外なほど広い空間が存在した。そして、その空間の中程まで来ると、シアが無言で、しかし得意気な表情でピシッと壁の一部に向けて指をさした。

その指先をたどって視線を転じるハジメとユエは、そこにあるものを見て「は？」と思わず呆けた声を出し目を瞬かせた。

二人の視線の先、其処には、壁を直接削つて作ったのであろう見事な装飾の長方形型の看板があり、それに反して妙に女の子らしい丸っこい字でこう掘られていた。

「おいでませ！ ミレディ・ライセンのドキワク大迷宮へ♪」

「……なんじゃこりゃ」

「……なにこれ」

「何って、入口ですよ！ 大迷宮の！ おトイ……ゴホッン、お花を摘みに来たたら偶然見つけちゃいました。いや、ホントにあつたんですね、ライセン大峡谷に大迷宮って」  
能天気なシアの声が響く中、ハジメとユエはようやく硬直が解け、何とも言えない表

情になり、困惑しながらお互いを見合わす。

「……………ハジメ、マジだと思おう？」

「合つてると思おうぞ……………」

「……………根拠は？」

「……………ミレデイって名前だな」

「……………やつぱり」

「ミレデイ」その名は、オスカーの手記に出て来たライセンのファーストネームだ。ライセンの名は世間にも伝わっており有名ではあるがファーストネームの方は知られていない。故に、その名が記されているこの場所がライセンの大迷宮である可能性は非常に高かった。

「あつてんかな。ここで……………」

「……………」

「でも、入口らしい場所は見当たりませんか？ 奥も行き止まりですし……………」

そんなハジメとユエの微妙な心理に気づくこともなく、シアは、入口はどこでしょう？ と辺りをキョロキョロ見渡したり、壁の窪みの奥の壁をペシペシと叩いたりしている。

「おい、シア。あんまり……………」

ガコンツッ！

「ふきや!？」

「あんまり不用意に動き回るな」そう言おうとしたハジメの眼前で、シアの触っていた窪みの奥の壁が突如グルンツと回転し、巻き込まれたシアはそのまま壁の向こう側へ姿を消した。さながら忍者屋敷の仕掛け扉だった。

「……」

少し以外な仕掛けに固まってしまいうハジメとユエ。しかし、向こうに行つたシアが心配だ。

「……行くぞユエ」

「………ん」

無言でシアが消えた回転扉を見つめていたハジメとユエは、一度、顔を見合せて溜息を吐くと、シアと同じように回転扉に手をかけた。

扉の仕掛けが作用して、ハジメとユエを同時に扉の向こう側へと送る。中は真っ暗だった。扉がグルリと回転し元の位置にピタリと止まる。と、その瞬間、

ヒュヒュヒュ!

無数の風切り音が響いたかと思うと暗闇の中をハジメ達目掛けて何かが飛来した。

「……………畏か」

「ご丁寧に黒く染めてある矢にしており、*「夜目」*がなかつたら危なかつたとハジメはドンナーを右手に、左手はそのままに、飛来する漆黒の矢の尽くを叩き落としていく。最後の矢が地面に叩き落とされる音を最後に再び静寂が戻っていく。

「……………」

と、同時に周囲の壁がぼんやりと光りだし辺りを照らし出す。ハジメ達のいる場所は、十メートル四方の部屋で、奥へと真っ直ぐに整備された通路が伸びていた。そして部屋の中央には石版があり、看板と同じ丸っこい女の子文字とある言葉が掘られていた。

「ビビった？　ねえ、ビビっちゃった？　チビってたりして、ニヤニヤ」

「それとも怪我した？　もしかして誰か死んじゃった？　…………ぶふっ」

「……………」

ハジメはその文字を見て額に青筋を立てていると、ユエも同じように額に青筋を浮かべてイラツとした表情をしている。そして、ふと、思い出したように呟いた。

「そういえばシアはどこにいった？」

「…………あつ確かに」

ハジメの呟きでユエも思い出したようで、慌てて背後の回転扉を振り返る。扉は、一度作動する事に半回転するので、この部屋にいないということは、自分達が入ったのと

同時に再び外に出た可能性が高い。結構な時間が経っているのに未だ入ってこない事に嫌な予感がして、俺は直ぐに回転扉を作動させに行った。

果たしてシアは……いた。それも、回転扉に縫い付けられた姿で……。

ハジメはその姿を見てすぐに、シアの尊厳を守るためにすぐに後ろへと振り返った。

「うう、ぐすつ、ハジメさん……見ないで下さいいゝ、でも、これは取って欲しいですう。

ひつく、見ないで降ろじて下さいいゝ」

「……ユエ、頼めるか……」

「……………ん」

女として絶対に見られたくない姿を、よりにもよって惚れた男の前で晒してしまったことに滂沱の涙を流すシア。ウサミミもペタリと垂れ下がってしまっている。

「……シア、動かないで」

ユエが無表情の中に同情を含ませてシアを磔から解放していく。

「……シア、大丈夫？」

「ユエさんゝ。ぐすつ」

「……ハジメ、着替え出して」

「おう」

ハジメは『宝物庫』からシアの着替えを出してやり、シアは顔を真っ赤にしながら手

早く着替えた。

シアの着替えが終え、迷宮攻略を始めようとした時、シアは石板を見つけ、よほど腹に据えかねたのか、親の仇と言わんばかりの勢いでドリユツケンを何度も何度も振り下ろした。すると、砕けた石板の跡、地面の部分に何やら文字が彫つてあり、そこには……

「ざんね〜ん♪ この石板は一定時間経つと自動修復するよお〜プ〜クスクス!!」  
「ムキィー!!」

シアが遂にマジギレして更に激しくドリユツケンを振り始めた。部屋全体が小規模な地震が発生したかのように揺れ、途轍もない衝撃音が何度も響き渡る。

発狂するシアを尻目にハジメはポツリと呟いた。

「ミレディ・ライセンだけは『解放者』云々関係なく、人類の敵だな……」  
「……激しく同意」

そして、ミレディ・ライセンはハジメ達の中で『敵』と認定されたのだった。

~~~~~

「ちっ、めんどくせえな」

迷宮を進む中、ハジメはライセンの大迷宮は想像以上に厄介な場所で苦い表情をす



る。

まず、魔法がまともに使えない。谷底より遙かに強力な分解作用が働いているためだ。魔法特化のユエにとっては相当負担のかかる場所である。何せ、上級以上の魔法は使用できず、中級以下でも射程が極端に短い。五メートルも効果を出せれば御の字という状況だ。何とか、瞬間的に魔力を高めれば実戦でも使えるレベルではあるが、今までのように強力な魔法で一撃とは行かなくなった。

また、魔晶石シリーズに蓄えた魔力の減りも馬鹿にできないので、考えて使わなければならぬ。それだけ消費が激しいのだ。魔法に関しては天才的なユエだからこそ中級魔法が放てるのであって、大抵の者は役立たずになってしまうだろう。

シアが、最初のウザイ石板を破壊し尽くしたあと、ハジメ達は道なりに通路を進み、とある広大な空間に出る。

そこは、階段や通路、奥へと続く入口が何の規則性もなくごちゃごちゃにつながり合っており、まるでレゴブロックを無造作に組み合わせてできたような場所で一階から伸びる階段が三階の通路に繋がっているかと思えば、その三階の通路は緩やかなスロープとなって一階の通路に繋がっていたり、二階から伸びる階段の先が、何もない唯の壁だったたり、本当にめっちゃくちゃだった。

「こりゃまた、ある意味迷宮らしいと言えばらしい場所だな」

「……………ん、迷いそう」

「ふん、流石は腹の奥底まで腐ったヤツの迷宮ですう。このめちやくちや具合がヤツの心を表しているんですよお！」

「……………気持ちには分かるから、そろそろ落ち着け」

ハジメがシアを諫めながらどう攻略していくか思案しているとユエが話しかけた。

「……………ハジメ。考えても仕方ない」

「ん、まあ、そうだな。取り敢えずマーキングとマッピングしながら進むしかないか」

「ん……………」

ハジメは早速、入口に一番近い場所にある右脇の通路に“マーキング”して進んでみることにした。

長い通路を進んでいると、突然、

ガコンツ

「ん??」

聞き慣れない音を響かせてハジメの足が床のブロックの一つを踏み抜いていた。そして、そのブロックだけハジメの体重により沈んでいる。三人が思わず「えっ?」と一斉にその足元を見た。

その瞬間、

シヤアアア!!

そんな刃が滑るような音を響かせながら、左右の壁のブロックとブロックの隙間から高速回転・振動する円形でノコギリ状の巨大な刃が飛び出してきた。右の壁からは首の高さで、左の壁からは腰の高さで前方から薙ぐように迫ってくる。

「はあ?! チツ、回避!」

二枚の殺意と悪意がたつぷりと乗った刃はハジメ達を通り過ぎると何事もなかったように再び壁の中に消えていく。

「ふう……………もう、来ねえよな」

ハジメは第二陣を警戒して、しばらく注意深く辺りを見回すのだがどうやら今ので終わりだったらしくホツと息を吐き後ろを振り返ろうとしたその時……………

「……………ッ!」

またもや、悪寒を感じ本能の命ずるまま飛び出すハジメ。ユエとシアを回収して勢いそのままに前方に身を投げ出す。直後、今の今までの場所、頭上からギロチンの如く無数の刃が射出され、まるでバターの如く床にスッと食い込んでいた。やはり、先程の刃と同じく高速振動している。冷や汗を流しながら足先数センチに落とされた刃を見つめるハジメ。ユエとシアも余程のことで硬直している。

「此処の迷宮は……………完全な物理トラップってわけか。なら、俺の魔眼石じゃあ、感知でき

ないわけか……」

ハジメは再度、迷宮攻略に身を引き締めてると、シアが安堵しているとハジメのことを心配した。

「はう、し、死ぬかと思いましたあ。ていうか、ハジメさん！ 大丈夫ですか！ ケガとかは！」

「いや、安心しろ無傷だ。しかし、此処はライセンだからな『金剛』が余り使えねえからな更に警戒をしとかなないといけないな……」

「……ん」

ハジメ達はお互い向き合って頷き合ってから、更に警戒を強めて攻略を再開した。

~~~~~

ハジメ達はライセン迷宮のいかにもウザイトラップ攻略していった道中、落とし穴だったり、毒性の生き物の巣に入ったり、石製の大玉が一本道に転がってきたりして、今、三人は、鉄製の腐食液が撒き散らしながら転がる大玉から逃げていた。シアはヒイヒイ言っつて走っており、ユエも無表情ながらも息を荒く疲れが出ている。そうしている内に通路の終わりが見えていた。

「あれは……何だ？」

ハジメは「遠見」で確認していると、少し先に相当大きな空間が広がっているのが見えたが、少し違和感を感じた。

見えるには見える。だが、範囲が少しおかしいのだ。部屋の床がずっと遠くの部分しか見えない。それとも、部屋の天井付近に通路の出口があるのかもしれない。やつとカギになるかもしれない部屋を見つけたのでハジメは二人に声をかけた。

「真下に降りるぞー！」

「んっ」

「はいっー！」

ハジメ達は、スライディングするように通路の先の部屋に飛び込み、出口の真下へと落下していく。

そして………

「げっ!？」

「んっ!？」

「ひんっ!？」

三者三様の呻き声を上げた。その理由は出口の真下が明らかにヤバそうな液体で満たされてプールになっていたからだ。

「んのやろうおー！」

ハジメは、咄嗟に義手からアンカーを射出し壁に撃ち込み右手でユエとシアを捕まえて落下を防いだ。

直後、頭上を溶解液を撒き散らしながら金属球が飛び出していき、眼下のプールへと落下した。そのままズブズブと煙を吹き上げながら沈んでいく。

「『風壁』！」

ユエの魔法で飛び散った溶解液が吹き散らされる。しばらく、周囲を警戒したが特に何も起こらないので、俺はようやく肩から力を抜き、安堵の息を漏らしながら、二人の安全の確認をとる。

「ふう……お前等、無事か？」

「……ん、大丈夫」

「ハジメさん、助かりました」

「じゃあ、移動するから少し揺れるぞ、しっかり掴まっとけよ」

「……ん（はいですう〜）」

ハジメ達は、アンカーを利用して振り子の要領で移動し、溶解液のプールを飛び越えて今度こそ部屋の地面に着地した。しかし、  
“遠見”でも見たがやっぱり、あそこ奥に何かあるよな……。

その部屋は長方形型の奥行きがある大きな部屋だった。壁の両サイドには無数の窪みがあり騎士甲冑を纏い大剣と盾を装備した身長二メートルほどの像が並び立っている。部屋の一番奥には大きな階段があり、その先には祭壇のような場所と奥の壁に荘厳な扉があった。祭壇の上には菱形の黄色い水晶のようなものが設置されている。

ハジメは周囲を見渡しながら微妙に顔をしかめていく。

「いかにもな扉だな。ミレディの住処に到着か？ それなら万々歳なんだが……この周りの騎士甲冑に嫌な予感をするのは俺だけか？」

「……大丈夫、お約束は守られる」

「それって襲われるってことですよ？ 全然大丈夫じゃないですよ！」

そんなことを話しながらハジメ達が部屋の中央まで進んだとき、確かにお約束は守られることになった。

ガコン！

ピタリと立ち止まるハジメ達。内心「やつぱりなあ」と思いつつ周囲を見ると、騎士達の兜の隙間から見えている眼の部分がギンツツと光り輝いた。そして、ガシャガシャと金属の擦れ合う音を立てながら窪みから騎士達が抜け出てきた。その数、総勢五十体。

騎士達は、スッと腰を落とすと盾を前面に掲げつつ大剣を突き型の型で構えた。窪みの

位置的に現れた時点で既に包囲が完成している。

「ははっ、ホントにお約束だな。動く前に壊しておけばよかったか。まあ、今更の話か……二人共、やるぞ?」

「んっ」

「か、数多くないですか? いや、やりますけども……」

ホントは数には機関砲のメツエライが有効だと思うが、この部屋にどれだけのトラップが仕掛けられているかわからないし無差別にバラまいた弾丸がそれらを尽く作動させてしまつては目も当てられないし今回は控えるか……。

ハジメはそう思い、ドンナーとシユラクをホルスターから抜く。ユエもやる気はあるみたいだったがシアは少し引き気味だったので励ます為に声をかけた。

「シア」

「は、はいいい! な、何でしょう、ハジメさん」

「お前は強い。俺達が保証してやる。こんなゴレム如きに負けはしないさ。だから、下手なこと考えず好きに暴れな。ヤバイ時は必ず守るから安心しろ」

「……ん、安心して」

シアは、ハジメとユエの言葉に思わず涙目になった。単純に嬉しかったのだ。シアは、全身に身体強化を施し、力強く地面を踏みしめた。



「はいっハジメさん、ユエさんありがとうございます！ 私も大丈夫ですう！」

「……ん、その意気」

「じゃあ、行くぞー！」

ゴーレム騎士達は一斉に侵入者達を切り裂かんと襲いかかった。ゴーレム騎士達の動きは、その巨体に似合わず俊敏だった。ガシャンガシャンと騒音を立てながら急速に迫るその姿は、装備している武器や眼光と相まって凄まじい迫力である。まるで四方八方から壁が迫って来たと錯覚すらしそうだった。

「チッー」

何故か隊列はちゃんとしていて、オート性なのか？ と思いつながらハジメは、ゴー

レム達の無駄に洗練されてる動きに訝しみながらも、ゴーレム騎士達に向けて左右の手握り締めた二丁のレールガンが、普段の半分以下の威力しか出せないとは言え、対物ライフルの数倍の威力を以てゴーレム騎士達に撃ち放つていく。

ドパン！ ドパン！

二条の閃光が狙い変わらず二体のゴーレム騎士の頭部、正確には目の部分を撃ち抜く。衝撃で頭部が仰け反り後方へ倒れる騎士達。それを軽やかに飛び越えて後続の騎士達が俺達へと迫る。ハジメは、再度連続して発砲し、致命的な包囲をされまいと隊列を乱していく。

「これぐらいの威力でも、通用する、か」

銃の威力確認を取りながらハジメの嵐のような銃撃を盾と大剣と仲間の体で凌ぎながら、遂に俺達の目前へと迫った数体の騎士達。

だがそこは、青みがかった白髪をなびかせ、超重量の大槌を大上段に構えたまま飛び上がったいたシア・ハウリアのキルゾーンだ。限界まで強化したその身体能力を以て遠慮容赦の一切を排した問答無用の一撃を繰り出していた。

「でえやあああ!!」

ドオガアア!!

気合一発。打ち下ろされた大槌ドリユツケンのは、凄まじい衝撃音を響かせながら一体のゴーレム騎士をペシヤンコに押しつぶしていく。一応、騎士も頭上に盾を構えていたのだが、その防衛ごと押しつぶされたのだった。

地面にまで亀裂を生じさせめり込んでいるドリユツケン。渾身の一撃を放ち、死に体となつていると判断したのか、盾を構えて衝撃に耐えていた傍らの騎士が大きく大剣を振りかぶりシアを両断せんと踏み込む。

シアはそれをつっかり横目で確認しており、柄を捻り、ドリユツケンの頭の角度を調整すると、柄に付いているトリガーを引いた。

ドガンツ!!

そんな破裂音を響かせながら地面にめり込んでいたドリユツケンが跳ね上がった。シアの脇を排莖されたショットシエルが舞う。跳ね上がったドリユツケンの勢いを殺さず、シアはその場で一回転すると遠心力をたっぷり乗せた一撃を、今まさに大剣を振り下ろそうとしている騎士の脇腹部分に叩きつけていく。

「りゃああ!!」

そのまま気迫を込めて一気に振り抜く。直撃を受けた騎士は、体をくの字に折り曲げて、まるで高速で突っ込んできたトラックに轢かれたかのようにぶっ飛んでいき、後ろから迫って来ていた騎士達を盛大に巻き込んで地面に叩きつけられた。騎士の胴体は、原型を止めないほどひしゃげており身動きが取れなくなっているようだ。

ヒュンヒュン

そんな風切り音がシアのウサミミに入る。チラリと上空を見ると、先程のゴーレム騎士が振り上げていた大剣が、シアに吹き飛ばされた際に手放なされたようで上空から回転しながら落下してくるところだった。

シアは、落ちてきた大剣を跳躍しながら掴み取ると、そのまま全力で、迫り来るゴーレム騎士に投げつけた。

大剣は豪速で飛翔し、ゴーレム騎士が構えた盾に衝突して大きく弾く。シアは、その隙を逃さず踏み込み、下段からカチ上げるようにドリユツケンを振るった。腹部に衝撃

を受けた騎士の巨体が宙に浮く。苦し紛れに大剣を振るうが、シアはカチ上げたドリユッケンの勢いを利用してくるりと回転し、大剣をかわしながら再度、今度は浅い角度で未だ宙に浮く騎士にドリユッケンを叩きつける。

先のゴーレム騎士と同様、砲弾と化してぶっ飛んだゴーレム騎士は後続の騎士達を巻き込みひしゃげた巨体を地面に横たわらせた。

シアの口元に笑みが浮かぶ。戦いに快楽を覚えたからではない。自分がきちんと戦えていることに喜びを覚えているのだ。自分はちゃんとハジメ達の旅に付いて行けるのだと実感しているのだ。その瞬間、ほんの少しだけ気が抜ける。

戦場で、その緩みは致命的だった。気がつけば視界いっぱいには騎士の盾が迫っていた。何と、ゴーレム騎士の一体が自分の盾をシアに向かって投げつけたのである。流石ゴーレムというべきか。途轍もない勢いで飛ばされたそれは、身体強化中のシアにとつて致命傷になるようなものではないが、脳震盪くらいは確実に起こす威力だ。そうなれば、一気に畳み込まれるだろうことは容易に想像できる。

しまった！　と思う余裕もない。せめて襲い来るであろう衝撃に耐えるべく覚悟を決める。と、盾がシアに衝突する寸前でレーザーの如き水流が飛来し盾に衝突。その軌道を捻じ曲げた。盾はシアの頭部のすぐ脇を通過し、背後のゴーレム騎士に激突して転倒させる。

「……油断大敵」

「ふえ!? 今のユエさんが? す、すみません、ありがとうございます!」

「ん……気を抜いちゃダメ」

「うっ、はい! 頑張りますう!」

ユエに「メッ!」という感じで叱られてしまい、自分が少し浮かれて油断してしまったことを自覚するシア。反省しながら気を引き締めなおす。改めて、迫って来たゴーレム騎士を倒そうとして、後方から飛んできた細いレーザーのような水流が、密かにシアの背後を取ろうとしていたゴーレム騎士をスッパリと両断したのを確認した。

その後も、暴れるシアの死角に回ろうとする騎士がいれば同じように水流が飛び、その辺の刃物よりよほど鋭利に切断していく。ユエが行使しているのは水系の中級魔法「破断」である。空気中の水分を超圧縮して撃ち放つウォーターカッターだ。

ユエは両手に金属で出来た大型の水筒を持っていた。肩紐で更に二つ同じ水筒を下げている。これらは、俺の「宝物庫」から取り出してもらった物だ。ユエが、その水筒をかざして魔法名を呟く度にウォーターカッターが水筒より飛び出し敵を切り裂いていく。

ユエは、魔法で空気中の水分を集めるよりも、最初からある水分を圧縮してやる方が魔力消費が少なくて済むと考えたのだ、また、照準は水筒の出口を向けることで付けて

おり、飛び出たウオーターカッター自体は魔力を含まないものなので分解作用により消されることもない。二人は物凄い、息の合った連携でゴーレム騎士達を屠つていった。

「ほう……………」

シアの爆発的な近接攻撃力と、その死角を補うように放たれるユエの水刃。騎士達は、二人のコンビネーションは最高だ。そんな素晴らしい連携を披露するユエとシアを横目にハジメが苦笑いを浮かべる。

「クハっ……………」

これは、自分も負けてられないとニイツと口角を上げる。

「いいところを見せないとな？」

そんな冗談を独りごちながらハジメは、ドンナー・シユラークを縦横無尽に振り近接戦闘を繰り広げていく。

「……………遅えよ」

騎士の振り下ろした大剣をシユラークの銃身で受け流し、右手のドンナーを兜に突き付けてゼロ距離射撃する。弾け飛ぶ騎士には目もくれず、受け流した後のシユラークで、そのまま振り向かず、背後の騎士を撃ち抜き、横風に振るわれた大剣を一回転しながらしやがみつっ躲し、腕を交差させて両サイドの騎士達を撃ち抜く。

“纏雷”と雷魔法を使わず放たれた弾丸が、騎士の盾に跳弾して隣の騎士の膝関節を撃ち抜きバランスを崩させ、その上を側宙しながら飛び越えつつ反転した視界の中で頭上の騎士と隣の騎士を同時に破壊する。着地を狙って振るわれた大剣を銃撃で逸らしつつバク転でかわし、再度空中で四方に発砲して同時に四体の騎士の頭部を撃ち砕く。着地と同時に、“宝物庫”から虚空に取り出した弾丸を、ガンスピンをさせながら一瞬でリロードし、再び回転しながら発砲。周囲の騎士達が放射状に吹き飛ぶ。

そうやって、不用意に部屋そのものに傷を与えないようにしながら次々とゴーレム騎士達を屠り倒していく。

だが……

「……」

やっぱりと思ってゴーレム騎士達の襲撃をかわし反撃しながら、ハジメは戦いながら考えていたことが当たりそう、訝しように眉を寄せる。

その疑問は、ユエとシアも感じていたらしい。

「……ハジメ」

「ああ……やっぱり、再生してやがるな」

「そんな!? キリがないですよお!」

シアが、迫り来るゴーレム騎士達を薙ぎ払いながら狼狽えた声を出した。どれだけ倒

しても意味がないと来れば、そんな声も出したくなるだろうと思う。

だが、それに反してハジメもだがユエも冷静なまま、特に焦った様子もなく思考を巡らしながらゴーレム騎士達を蹴散らしていく。この辺りは経験の差というやつだろうと思う。この程度の逆境、奈落の底では何度も味わったものだ。むしろ、あの頃より遥かに強くなった今は余裕すらあると自分自身、感じれた。

「……ハジメ、ゴーレムなら核があるはず」

「ああ、だが魔眼石でも確認したが核が見当たらねえんだ」

「……確か？」

「ああ、だがアイツ等から微量に魔力を感知できる」

「け、結局どうするんですかあ！ このままじゃジリ貧ですよー！」

シアがいよいよ焦った声を上げる。ハジメは、シアの叫びをスルーして、  
“定”を使う。核という動力なくして作動するゴーレムは、もしかしたら特殊な鉱石を使っている可能性があるかと踏んだからだ。

結果は……

「っし……ピンゴッ！」

|||||

感応石



魔力を定着させる性質を持つ鉱石。同質の魔力が定着した二つ以上の感応石は、一方の鉱石に触れていることで、もう一方の鉱石及び定着魔力を遠隔操作することができる。

|||||

「……っ、だが」

わかったが、現状は変わらない。

「ユエ、シア。こいつらを操っている奴がいる。マジでキリがないから、強行突破するぞ！」

「んっ」

「と、突破ですか？ 了解ですっ！」

ハジメの合図と共に、ユエとシアが一気に踵を返し祭壇へ向かって突進する。

「邪魔だ」

ハジメはドンナー・シユラークを連射して進行方向の騎士達を蹴散らし隊列に隙間をあけつつ、後方から迫ってきているゴーレム騎士達に向かって手榴弾を二個投げ込んだ。背後で大爆発が起こり、衝撃波と爆風でゴーレム騎士達が次々と転倒していく。

シアが、ハジメの空けた前方の隙間に飛び込みドリユッケンを体ごと大回転させて周囲のゴーレム騎士達を薙ぎ払った。技後硬直するシアに盾や大剣を投げつけようとす

るゴーレム騎士達にユエの“破断”が飛来し切り裂いていく。

ハジメは殿を務めながら後方から迫るゴーレム騎士達にレールガンを連射した。その隙に一気に包囲網を突破したシアが祭壇の前に陣取る。続いてユエが、祭壇を飛び越えて扉の前に到着した。

「ユエさん！ 扉は!?!」

「ん……やっぱり封印されてる」

「あう、やっぱりですかっ!」

「封印の解除はユエに任せる。錬成で突破するのは時間がかかりそうだ」

「……ん、任せて」

シアとハジメはユエが扉の封印の解除が終わるまで自分達に迫り来るゴーレム騎士達をユエに近付けさせないように退けていく。

「うう〜キリがないですう」

「もう少しの辛抱だ。我慢しろ」

若干、疲れた表情でシアが横目でハジメを見るも、流石にキツくはないが未だにも攻め続けるゴーレム騎士達に対して溜息を吐く。すると、ユエから少し得意気な声で任務達成を伝えられた。

「……開いた」

「早かったな、流石ユエ。シア、下がれ！」

「はいっ！」

ハジメが、チラリと後ろを振り返ると、ユエの言った通り封印が解かれて扉が開いているのが確認できた。奥は特になにもない部屋になっているようだ。ハジメはシアに撤退を呼びかけ、自らも奥の部屋に向かって後退する。封印の扉を閉めればゴーレム騎士達の襲撃も阻めるだろう。最初にユエが、続いてシアが扉の向こうへ飛び込み、両開きの扉の両サイドを持っていつでも閉められるようにスタンバイする。

「置き土産だ」

ハジメは、置き土産にと手榴弾を数個放り投げると、自らも奥の部屋へと飛び込んだ。ゴーレム騎士達が逃がすものかと殺到するが、手榴弾が爆発し強烈な衝撃を撒き散らす。バランスを崩したたらを踏むゴーレム騎士達。その隙に、ユエとシアが扉を閉める。

部屋の中は、遠目に確認した通り何も無い四角い部屋だった。てつきり、ミレディ・ライセンの部屋とまではいかなくとも、何かしらの手掛かりがあるのでは？ と考えていたので少し拍子抜けしてしまう。

「これは、あれか？ これみよがしに封印しておいて、実は何もありませんでしたっけ？ うオチか？」

「……ありえる」

「うう、ミレディめえ。何処までもバカにしてえ！」

三人が、一番あり得る可能性にガツクリしていると、突如、もううんざりする程聞いているあの音が響き渡った。

ガコン！

「「!?」」

音と共に部屋全体が揺れ、三人共バランスが崩れそうになった。

「っ!? 何だ!? この部屋自体が移動してるのか!？」

「……そうみたっ!？」

「うきや!？」

「二人共、掴まってるっ」

ハジメは咄嗟に二人が怪我をしないように抱きしめる。その後、部屋は移動していき、やがて止まった。

「ふう〜、ようやく止まったか……ユエ、シア、大丈夫か?」

「……ん、平気」

「だ、大丈夫ですう〜」

ハジメは二人の安全を確認して、部屋の向こうにある扉に向かった。扉の先は、ミレ

デイの住処か、ゴーレム操者か、あるいは別の罠か……ハジメは「何でも来い」と不敵な笑みを浮かべて扉を開いた。

そこには……

「ん……何か見覚えはないか？ この部屋。」

「……物凄くある。特にあの石板」

扉を開けた先は、別の部屋に繋がっていた。その部屋は中央に石板が立っており左側に通路がある。見覚えがあるはずだ。

なぜなら、その部屋は……

「最初の部屋……みたいですね？」

シアが、思っけていても口に出したくなかった事を言ってしまう。だが、確かに、シアの言う通り最初に入ったウザイ文が彫り込まれた石板のある部屋だった。よく似た部屋ではない。それは、扉を開いて数秒後に元の部屋の床に浮き出た文字が証明していた。

“ねえ、今、どんな気持ち？”

“苦勞して進んだのに、行き着いた先がスタート地点と知った時って、どんな気持ち

？”

“ねえ、ねえ、どんな気持ち？ どんな気持ちなの？ ねえ、ねえ”

「……」

ハジメ達の顔から表情がストーンと抜け落ちる。能面という言葉がピッタリと当てはまる表情だ。三人とも、微動だにせず無言で文字を見つめている。すると、更に文字が浮き出始めた。

“あつ、言い忘れてたけど、この迷宮は一定時間ごとに変化します”

“いつでも、新鮮な気持ちで迷宮を楽しんでもらおうというミレディちゃんの心遣い  
です”

“嬉しい？ 嬉しいよね？ お礼なんていいよお！ 好きでやってるだけだからあ  
！”

“ちなみに、常に変化するのでマツピングは無駄です”

“ひよつとして作っちゃった？ 苦労しちやっただ？ 残念！ プギヤア”

「クハッ、ハハハ」

「フフフフ」

「フヒ、フヒヒヒ」

三者三様の壊れた笑い声が辺りに響いたのだった……。

## 二十四話

## ミレデイ・ライセン

とある部屋の中、壁から放たれる青白い仄かな光が、壁にもたれ掛かりながら寄り添う三人の人影を映す。ハジメ、ユエ、シアの三人だ。

ハジメを中心に右側にユエ、左側にシアが座り込んで肩にもたれ掛かっている。部屋には静寂が満ちているが、耳を澄ませばほんの僅かにスウースウーと呼吸音が聞こえる。ユエとシアの寝息だ。二人は、ハジメの両腕を抱いたまま、その肩を枕替わりに睡眠をとっているのだった

もうそろそろ進展があるかもしれない。そんなことを思いながら、ハジメは両隣で睡る少女達に視線を向けた。

「クハッ、気持ちよさそうに寝やがって……ここは大迷宮なんだがな？」

ハジメの苦笑い混じりの囁きが響く。見張り役なのでずっと起きていたのだ。ハジメは、何となしに抱きしめられている腕をそつと解いて、二人の髪を優しく撫でる。僅かに頬が綻んだように見えた。ハジメの目元も僅かに緩んだ。

すると、シアがムニヤムニヤと寝言を言い始めた。

「むにゃ……あう……ハジメしゃん、大胆ですう、お外でなんてえ、……皆見てますよお」

「……」

ハジメは優しい手付きのまま、そつと移動させた手で、シアの鼻を摘み口を塞いだ。すると、穏やかだったシアの表情が徐々に苦しげなものに変わっていくが気にせず塞ぎ続けていると……

「ん、ん？ んう？！ んんー！！ んんー！！ ぷはっ！ はあ、はあ、な、何するんですか！ 寝込みを襲うにしても意味が違いますでしよう！」

ぜはぜはと荒い呼吸をしながら目を覚まし猛然と抗議するシアに、ハジメは冷ややかな目を向ける。

「こんな時に変な夢を見るな」

「うっ……すみませんですう……」

「わかったなら良い」

「はいですう」

シアが起きた（強制的に）ので、ハジメはユエを優しく揺さぶり起こす。ユエは「……んう……あう？」と可愛らしい声を出しながらゆつくりと目を開いた。そして、ポーとした瞳で上目遣いにハジメを確認すると目元をほころばせ、一度、肩口にすりすりする



と、そつと離れて身だしなみを整え始めていく。

「うう、ユエさんが可愛い……これぞ女の子の寝起きですう、それに比べて私は……」  
今度は落ち込み始めたシアに、ユエは不思議そうな目を向けるが、「シアだから」という理由で放置し、ハジメは二人の頭を撫でてから

「ほれ、シアも落ち込んでないで探索開始だ」

「……うう、はいですう」

今度は、スタート地点に戻されなことを祈って、ハジメ達、三人は迷宮攻略を再開した。

再び嫌らしい数々のトラップとウザイ文に青筋も立てるも、菩薩の心境でどんどん迷宮の中を進んで行く。

そして、ある部屋に辿り着いた。辺りを見渡すと、その場所はハジメ達は、一週間前に訪れてから一度も遭遇することのなかった部屋に行くわした。最初にスタート地点に戻して天元突破な怒りを覚えさせてくれたゴーレム騎士の部屋だ。ただし、今度は封印の扉は最初から開いており、向こう側は部屋ではなく大きな通路になっていた。

「……かつ……また包囲されても面倒だ。扉は開いてるんだし一気に行くぞー！」

「んっー！」

「はいですー！」

ハジメ達は、ゴーレム騎士の部屋に一気に踏み込んだ。部屋の中央に差し掛かると、案の定、ガシャンガシャンと音を立ててゴーレム騎士達が両サイドの窪みから飛び出してくる。出鼻を挟いて前方のゴーレム騎士達を銃撃し蹴散らしておく。

そうやって稼いだ時間で、ハジメ達は更に加速し包囲される前に祭壇の傍まで到達した。ゴーレム騎士達が猛然と追いかけるが、自分達が扉をくぐるまでには追いつけそうにない。逃げ切り勝ちだと、ハジメはほくそ笑んだ。

「よし、行け……?!」

だが、そんなハジメの笑みは次の瞬間には剥がれ落ちた。何と、ゴーレム騎士達も扉をくぐって追いかけてきたからだ。

しかも……

「なっ!? 天井を走ってるだど!」

「……びつくり」

「重力さん仕事してくださいあ〜い!」

そう、追いかけてきたゴーレム騎士達は、まるで重力など知らんとばかり壁やら天井やらをガシャンガシャンと重そうな全身甲冑の音を響かせながら走っているのである。これには、流石のハジメ達も度肝を抜かれた。咄嗟に通路に対して“鉱物系鑑定”を使うが、材質は既知のものばかり。重力を中和したり、吸着の性質を持った鉱物等は一切

検知できなかった。

「どうなつてやがるんだ?」

磁石や特殊な鉱石でもない。そして、魔法か?と、そんな呟きが思わず口から漏らしながらハジメはゴーレム騎士達の動きの原理を推測する。そして、再度、背後の騎士をチラリと振り返つて更に度肝を抜かれることになった。

「はあっ?!」

天井を走っていたゴーレム騎士の一体が、走りながらピョンとジャンプすると、まるで砲弾のように凄まじい勢いで頭を進行方向に向けたまま宙を飛んできたのである。

「くそつたれ!」

ハジメは驚愕の声を漏らしながらドンナーを連続して発砲する。放たれた弾丸は閃光となつて飛んできたゴーレム騎士の兜と肩を破壊した。ゴーレム騎士は頭部と胴体が別れ、更に大剣と盾を手放す。しかし、それらは地面に落ちることなく、そのまま向かつて突っ込んできた。

破壊されても突撃するゴーレム騎士にハジメは口元を歪めながらも、急いで二人に指示する。

「回避だ!」

「んっ」

「わきゃー！」

猛烈な勢いで迫ってきたゴーレム騎士の頭部、胴体、大剣、盾を屈んだり跳躍したりして躲していく。ハジメ達を通り過ぎたゴーレム騎士の残骸は、そのまま勢いを減じることなく壁や天井、床に激突しながら前方へと転がっていった。

「なんだ？　重力が働いたり、しなかったり……あれじゃあ、まるで……」

「ん……『落ちた』みたい」

「重力さんが適当な仕事してるのですね、わかります」

まさしくユエやシアの言葉が一番しっくりくる表現だった。どうやらゴーレム騎士達は重力を操作できるらしい。なぜ、前回は使わなかったのかはわからないが、もしかすると部屋から先の、この通路以降でなければならなかったのかもしれない。

そんな推測も、ゴーレム騎士達がこぞってハジメ達に『落下』してきたことで中断された。中には大剣を風車のように回転させながら迫ってくる猛者もいる。ハジメ達は、銃撃や『破断』で遠距離攻撃しつつ、接近してきたものはシアが打ち払い、足を止めることなく先へ進んでいった。

しばらくすると、先の方に何かの嫌な気配を感じ取ってハジメは目を細めた。

「……」

「むう……ハジメ」

「ああ、わかつてる。まあ、再構築できるんなら、そうなるわな」  
「は、挟まれちゃいましたね」

先へと落ちていったゴーレム騎士達が、落下先で再構築したようだ。隊列を組んで待ち構えていた。盾を前面に押し出ししりと据えて壁を作っている。ご丁寧に二列目のゴーレム騎士達は盾役の騎士達を後ろから支えていた。おそらく、一列だけではパワーで粉碎されると学習したのだろう。

「ちっ、面倒な二人共下がれ『オルカン』を使う」

舌打ちをするとハジメは、ドンナー・シユラークを太もものホルスターにしまう。そして『宝物庫』から一つの兵器を取り出す。

手元に十二連式の回転弾倉が取り付けられた長方形型のロケット&ミサイルランチャー：オルカンである。ロケット弾は長さ三十センチ近くあり、その破壊力は通常の手榴弾より高くなっている。弾頭には生成魔法で『纏雷』と雷魔法を付与した鉱石が設置されており、この石は常に静電気を帯びているので、着弾時弾頭が破壊されることで燃焼粉に着火する仕組みだ。ハジメは、オルカンを脇に挟んで固定すると口元を歪めて笑みを作った。

「ユエ、シアー！ 耳塞げ！ ぶっぱなすぞ！」

「ん」

「ええ、何ですかそれ!？」

初めて見るオルカンの異様にシアが目を見張る。ユエは、走りながら人差し指を耳に突っ込んだ。シアのウサミミはピンツと立ったままだが、ウサ耳は大丈夫なのかと思いつつもハジメはオルカンの引き金を引いた。

バシユウウ!

そんな音と共に、後方に火花の尾を引きながらロケット弾が発射され、狙い違わず隊列を組んで待ち構えるゴーレム騎士に直撃した。

次の瞬間、轟音、そして大爆発が発生する。通路全体を激震させながら大量に圧縮された燃烧粉が凄絶な衝撃を撒き散らした。ゴーレム騎士達は、直撃を受けた場所を中心に両サイドの壁や天井に激しく叩きつけられ、原型をとどめないほどに破壊されていた。

「……………」

あれほどまでに破壊したのだ。再構築にも時間がかかるだろう。そして、ハジメ達はその隙に、一気にゴーレム騎士達の残骸を飛び越えていく。

「ウサミミがあゝ、私のウサミミがあゝ!!」

ハジメ達と併走しながら、ウサミミをペタンと折りたたみ両手で押さえながら涙目になって悶えているシア。兎人族……それは亜人族で一番聴覚に優れた種族である。

「だから、耳を塞げって言っただろぅが」

「ううゝすみません…」

「……駄目ウサギ」

ハジメとユエが呆れた表情でシアを見て、その本人は落ち込みながら謝っていた。再び落ちて来たゴーレム騎士達に対処しながら、駆け抜けること五分。遂に、通路の終わりが見えた。通路の先は巨大な空間が広がっているようだ。道自体は途切れており、十メートルほど先に正方形の足場が見えた。

「ユエ、シアー！ 飛ぶぞー！」

ハジメの掛け声に頷くユエとシア。背後からは依然、ゴーレム騎士達が落下してくる。それらを迎撃し、躲しながらハジメ達は通路端から勢いよく飛び出した。

ハジメ達は眼下の正方形に飛び移ろうとした。が、思った通りにいかないのがこの大迷路の特徴。何と、放物線を描いて跳んだ目の前で正方形のブロックがスィーと移動し始めたのだ。

「?!チイツ、ユエっ!」

ハジメはすぐさまユエに呼びかけた。目測が狂いこのままでは落下する。チラリと見た下は相当深い。するとユエの声が響いた。

「ん、来翔!」

発動した風系統の魔法により上昇気流が発生しハジメ達の跳躍距離を延ばす。一瞬の効果しかなかったが十分だった。未だに離れていこうとするブロックに追いつき何とか端に手を掛けてしがみつくことに成功する。義手のスパイクで固定し、ぶら下がったハジメにユエとシアもしがみついた。

「ナ、ナイスだ、ユエ」

「ユエさん、流石ですう！」

「……もつと褒めて」

墜落せずに済んだことに思わず笑みを浮かべ、ハジメとシアはユエを賞賛する。ユエも魔力の消費が激しく少々疲れ気味だが得意げな雰囲気だ。

しかし……

「…………?!」

反応がして、見ればハジメが予想した通りゴーレム騎士達は宙を飛んでいるのである。おそらく重力を制御して落下方向を決めているのだろう。凄まじい勢いで未だぶら下がったままの状態で急速接近する。

「やっぱりか！ ユエ、シア登れ！」

ハジメは二人に指示をして同時にドンナーを抜き、騎士達に向かって銃撃をし、撃ち落としていく。



「くそつ、こいつら、重力操作なんか知らんが動きがどどん巧みになってきてるぞ」  
「……たぶん、原因はここ？」

「あはは、常識って何でしょうね。全部浮いてますよ？」

シアの言う通り、ハジメ達の周囲の全ては浮遊していた。

入ったこの場所は超巨大な球状の空間だった。直径二キロメートル以上ありそうである。そんな空間には、様々な形、大きさの鉱石で出来たブロックが浮遊してスイーと不規則に移動をしているのだ。完全に重力を無視した空間である。だが、不思議なことにハジメ達はしっかりと重力を感じている。おそらく、この部屋の特定の物質だけが重力制限を受けないのだろう。

この空間をゴーレム騎士達が縦横無尽に飛び回ったり、やはり、落下方向を調節しているのか。方向転換が急激になり、この空間に近づくとつれて細やかな動きが可能になっていった事を考えると、おそらく……

「ここに、ゴーレムを操っているヤツがいるな？」

ハジメの推測にユエとシアも賛同するように表情を引き締めた。ゴーレム騎士達は何か、周囲を旋回するだけで襲っては来ない。取り敢えず、何処かに横道でもないかと周囲を見渡す。ここが終着点なのか、まだ続きがあるのか分からない。だが、間違いなく深奥に近い場所ではあるはずだ。ゴーレム騎士達の上昇と、この特異な空間が

その推測に説得力を持たせる。

ハジメは「遠見」で、この巨大な球状空間を調べようと目を凝らした。と、次の瞬間、シアの焦燥に満ちた声が響く。

「逃げてえ！」

「!?!」

シアの警告に瞬時に反応し弾かれた様に飛び退いた。運良く、ちょうど数メートル先に他のブロックが通りかかったので、それを目指して現在立っているブロックを離脱する。

直後、

ズウガガガン!!

隕石が落下してきたのかと錯覚するような衝撃が今の今までハジメ達がいたブロックを直撃し木っ端微塵に爆砕した。隕石というのはあながち間違った表現ではないだろう。赤熱化する巨大な何かが落下してきて、ブロックを破壊すると勢いそのままに通り過ぎていったのだ。

「なっ……」

ハジメは、ブロックが落下するとは感知が遅れていて、シアの「未来視」が無ければ無事じゃすまなかつただろう。

「シア、助かったぜ。ありがとうよ」

「……ん、お手柄」

「えへへ、『未来視』が発動して良かったです。代わりに魔力をごっそり持つて行かれましたけど……」

ハジメは『未来視』の凄さを実感しながら、通過していった隕石モドキの方を見やっ  
た。ブロックの淵から下を覗くと気になる物が目に入った。下の方を見ると何かが動  
いたかと思うと猛烈な勢いで上昇してきた。それは瞬く間にハジメ達の頭上に出ると、  
その場に留まりギンツと光る眼光をもってハジメ達を睥睨していた。

「おいおい、マジかよ」

「……すごく……大きい」

「お、親玉って感じですね」

ハジメ達の目の前に現れたのは、宙に浮く超巨大なゴーレム騎士だった。全身甲冑は  
そのままだが、全長が二十メートル弱はある。右手はヒートナツクルとでも言うのか赤  
熱化しており、先ほどブロックを爆砕したのはこれが原因かもしれない。左手には鎖が  
ジャラジャラと巻きついていて、フレイル型のモーニングスターを装備している。

ハジメ達が、巨体ゴーレムに身構えていると、周囲のゴーレム騎士達がヒュンヒュン

と音を立てながら飛来し、周囲を囲むように並びだした。整列したゴーレム騎士達は胸の前で大剣を立てて構える。まるで王を前にして敬礼しているようだ。

すっかり包囲され緊張感が高まる。辺りに静寂が満ち、まさに一触即発の状況。動いた瞬間、張り詰めた空気を破ったのは……

巨体ゴーレムのふざけた挨拶だった。

「やほ、はじめまして、みんな大好きミレディ・ライセンだよ」

「……は？」

硬直する三人に、巨体ゴーレムは不機嫌そうな声を出した。声質は女性のものだ。

「あのねえ、挨拶したんだから何か返そうよ。最低限の礼儀だよ？ 全く、これだから

最近の若者は……もつと常識的になりたまえよ」

ハジメは取り敢えず、その辺りのことを探ってみる事にした。

「そいつは、悪かったな。だが、俺が知る限りミレディ・ライセンは人間で故人のはずだ。まして、自我を持つゴーレム何て聞いたことないんでな……すまないがお前が何者か説明してくれ」

「ほう、礼儀はちゃんとしてるねえ。まっ、良いよ」

ゴーレムはハジメの礼儀に感心しながら説明し出した。それも巫山戯ながら、

「ミレディさんは初めからゴーレムさんですよ、何を持って人間だなんて……」

「オスカーの手記にお前のことも少し書いてあった。きちんと人間の女として出てきてたぞ?」

「ほう……今さつきオスカーって言った? もしかして、オーちゃんの迷宮の攻略者?」

「ああ、オスカー・オルクスの迷宮なら攻略した。そして俺達の目的は神代魔法だ」

「……神代魔法ねえ。それってやっぱり、神殺しのためかな? あのクソ野郎共を滅殺

してくれるのかな? オーちゃんの迷宮攻略者なら事情は理解してるよね?」

「ああ、俺達は神殺しと帰還を目的としてる」

「……」

ハジメの回答でミレディは黙った。そして、一言も発さずハジメ達を見つめると、今さつきとは違う口調で質問してきた。

「一つ良いかな?」

「なんだ?」

「君達は神殺しの為に何を望む?」

「……第一は故郷への帰還。第二にお前達『解放者』が掲げていた人間、亜人、魔人が自由の意思で生きられるような世界にしたいと思ってる」

「……………ふふ」

ハジメがそう答えた後、ミレディは少し沈黙した後、笑みを零してるのかは分からない

いが嬉しそうなのが感じ取れた。

「そつかく、それは嬉しいな。でも、確かめさせて？君達がそれぐらいの価値があるのかをミレディさんに証明させてみて？」

ミレディの発言で、ハジメは不敵な笑みを浮かべながらミレディに告げた。

「ああ、良いぜつ。ミレディ・ライセン、俺達の力を証明してやるよっ！」

ハジメは問答無用にオルカンからロケット弾をぶっぱなした。火花の尾を引く破壊の嵐が真つ直ぐにミレディ・ゴーレムへと突き進み直撃する。

ズガアアアアン!!

凄絶な爆音が空間全体を振動させながら響き渡る。もうもうとたつ爆煙。

「やりましたか!？」

「……シア、それはフラグ」

「ああ、アイツはまだピンピンしてるぞ」

煙の中から赤熱化した右手がボバツと音を立てながら現れると横薙ぎに振るわれ煙が吹き散らされる。煙の晴れた奥からは、両腕の前腕部の一部を砕かれながらも大して堪えた様子のないミレディ・ゴーレムが現れた。ミレディ・ゴーレムは、近くを通ったブロックを引き寄せると、それを砕きそのまま欠けた両腕の材料にして再構成されていた。

「再構築……」

「ふふ、先制攻撃とはやってくれるねえ。さあ、君達に資格があるかミレデイさんに証明してみろ。ミレデイさんは滅茶苦茶強いけど、死なないように頑張つてねえ」

「ああ、やってやるさっ！」

そして、ハジメ達三人と解放者ミレデイ・ライセンの戦いが幕を上げたのだ……。

## 二十五話

## ライセン迷宮・最後の試練

ミレディ・ゴーレムは左腕のフレイル型モーニングスターをハジメ達に向かって射出した。投げつけたのではない。予備動作なくいきなりモーニングスターが猛烈な勢いで飛び出したのだ。

ハジメ達は、近くの浮遊ブロックに跳躍してモーニングスターを躲す。モーニングスターは、ハジメ達がいたブロックを木っ端微塵に破壊しそのまま宙を泳ぐように旋回しつつ、ミレディ・ゴーレムの手元に戻っていく。

「やるぞ！ ユエ、シア。ミレディを破壊する！」

「んっ！」

「了解ですう！」

ハジメの掛け声と共に、七大迷宮の一つ、ライセン大迷宮最後の戦いが始まった。

大剣を掲げたまま待機状態だったゴーレム騎士達が、ハジメの掛け声を合図にしたかのように一斉に動き出した。通路でそうしたのと同じように、頭をハジメ達に向けて一気に突っ込んでくる。



ユエが、くるり身を翻しながらじやらじやらぶら下げた水筒の一つを前に突き出し横薙ぎにする。極限まで圧縮された水がウォーターカッターとなつてレーザーの如く飛び出しゴーレム騎士達を横断していく。

「あはは、やるねえ、でも総数五十体の無限に再生する騎士達と私、果たして同時に捌けるかなあ〜」

嫌味つたらしい口調で、ミレディ・ゴーレムが再度、モーニングスターを射出した。シアが大きく跳躍し、上方を移動していた三角錐のブロックに飛び乗る。ハジメは、その場を動かずにドンナーをモーニングスターに向けて連射した。

ドパアアンツ！

銃声は一発。されど放たれた弾丸は六発。早打ちにより解き放たれた閃光は狙い違わず豪速で迫るモーニングスターに直撃する。

「チツ（流石に壊れねえか……）」

流石に大質量の金属球とは言え、レールガンの衝撃を同時に六回も受けて無影響とはいかなかった。その軌道がハジメから大きく逸れる。同時に、上方のブロックに跳躍していたシアがミレディの頭上を取り、飛び降りながらドリユッケンを打ち下ろした。

「見え透いてるよお〜」

そんな言葉と共に、ミレディ・ゴーレムは急激な勢いで横へ移動する。横へ // 落ちた

“ のだろう。”

「くう、このっ！」

目測を狂わされたシアは、齒噛みしながら手元の引き金を引きドリユツケンの打撃面を爆発させる。葉莖が排出されるのを横目に、その反動で軌道を修正。三回転しながら、遠心力もたつぷり乗せた一撃をミレディ・ゴーレムに叩き込んだ。

ズウガガン!!

咄嗟に左腕でガードするミレディ・ゴーレム。凄まじい衝突音と共に左腕が大きくひしゃげる。しかし、ミレディ・ゴーレムはそれがどうしたと言わんばかりに、そのまま左腕を横薙ぎにした。

「きゃあああ!!」

「シアー！」

悲鳴を上げながらぶっ飛ぶシア。何とか空中でドリユツケンの引き金を引き爆発力で体勢を整えると、更に反動を利用して近くのブロックに不時着する。

「はっ、やるじゃねえの。おい、ユエ。お前、シアに一体どんな特訓したんだ？」

「……ひたすら追い込んだだけ」

「……なるほど、しぶとく生き残る術が一番磨いたって感じか」

遠目にシアがピョンピョンと浮遊ブロックを飛び移りながら戻ってくるのを確認し

つつ内心シアの成長に感心する。そんな、ハジメとユエのブロックに、遂にユエ一人では捌ききれない程のゴーレム騎士達が殺到する。

「……メツエライを使うか」

一体、一体相手取るのを面倒に感じたハジメは、“宝物庫”からガトリング砲“メツエライ”を取り出す。そして、ユエと背中合わせになり、毎分一万二千発の死を撒き散らす化物を解き放った。

ドウルルルル!!

六砲身のバレルが回転しながら掃射を開始する。独特な射撃音を響かせながら、真っ直ぐに伸びる数多の閃光は、縦横無尽に空間を舐め尽くし、宙にある敵の尽くをスクラップに変えて底面へと叩き落としていった。回避または死角からの攻撃のため反対側に回り込んだものは、水のレーザーにより、やはり尽く両断されていく。

瞬く間に四十体以上のゴーレム騎士達が無残な姿を晒しながら空間の底面へと墜落した。時間が経てば、また再構築を終えて戦線に復帰するだろうが、しばらく邪魔が入らなければそれでいい。そう、親玉であるミレディ・ゴーレムを破壊するまで。

「ちよつ、なにそれえ！ そんなの見たことも聞いたこともないんですけどおー」

ミレディ・ゴーレムの驚愕の叫びを聞き流し、ハジメは、メツエライを“宝物庫”にしまうと、再びドンナーを抜きながら、少し離れたところにいるシアにも聞こえるよう

に声を張り上げた。

「ミレディの核は、心臓と同じ位置だ！ あれを破壊するぞ！」

「んなつ！ 何で、わかったのお！」

再度、驚愕の声をあげるミレディ。ゴーレムを倒すセオリーである核の位置が判明し、ユエとシアの眼光も鋭くなる。周囲を飛び交うゴーレム騎士も今は十体程度。三人で波状攻撃をかけて、ミレディの心臓に一撃を入れるのだ。ハジメが、一気に跳躍し周囲の浮遊ブロックを足場にしながらミレディ・ゴーレムに接近を試みる。

「クっソ……」

今のレールガンの出力だと、ミレディ・ゴーレムの巨体を粉碎して核に攻撃を届かせるのは難しい。ゼロ距離射撃で装甲を破壊しつつ、手榴弾でも突っ込もうとハジメはそう考えて行動しようとしたが、そう現実には甘くはない。

ミレディ・ゴーレムの目が一瞬光ったかと思うと、彼女の頭上の浮遊ブロックが猛烈な勢いで宙を移動するハジメへと迫った。

「!?」

「操れるのが騎士だけとは一言も言っていないよお〜」

「チツ！ ブロックもかつ！」

ミレディのニヤつく声音を無視して、ハジメは、ガシユンという音と共に義手のギ

ミックを作動させた。

ドゴンツ!!

腹の底に響くような爆発音を響かせながら義手の甲から正面に向けて衝撃が発生する。正確には、強力な散弾が発射されたのだ。電磁加速は出来ないが、燃燒粉の圧縮率はドンナーの弾丸よりもずっと高い。それに伴って反動も強烈だ。宙にあるハジメの体は弾かれた様に軌道を変えて、飛来した浮遊ブロックをすんでの所で躲す。そして、何とか目標の浮遊ブロックに足を掛けた。

「危っ……（オルクスのヒュドラよりめんどくせえぞ）」

当然、ミレディ・ゴーレムは、ハジメの足場を「落とそう」とするが、いつの間にか背後から迫っていたシアが、強烈な一撃をミレディ・ゴーレムの頭部に叩き込もうと跳躍する。そんなミレディ・ゴーレムは、シアの接近に気がついていたのか跳躍中のシアを狙ってゴーレム騎士達を突撃させた。宙にあって無防備なシア。あわや大剣に両断されるかと思われた瞬間……

「……させない」

これまたいつの間にか移動していたユエが、「破断」によりシアを襲おうとしているゴーレム騎士達を細切れにしていく。

「流石、ユエさんです！」

そんなことを叫びながら、障害がいなくなった宙を進み、シアは極限まで強化した身体能力を以て大上段の一撃を繰り出した。

「パワーでゴーレムが負けるわけないよお〜」

ミレディ・ゴーレムは自身の言葉を証明してやるとでも言う様に、振り返りながら燃え盛る右手をシアに目掛けて真っ直ぐに振るった。

ドオガガガン!!

シアのドリユッケンとミレディ・ゴーレムのヒートナツクルが凄まじい轟音を響かせながら衝突する。発生した衝撃波が周囲を浮遊していたブロックのいくつかを放射状に吹き飛ばした。

「おのののー」

突破できないミレディ・ゴーレムの拳に、シアは雄叫びを上げて力を込める。しかし、ゴーレムの臂力にはやはり敵わず、振り切られた拳に吹き飛ばされた。

「きやああ!!」

悲鳴を上げるシア。飛ばされた方向に浮遊ブロックはない。あわや、このまま墜落するかと思われたが、予想していたようにユエが横合いから飛び出しシアを抱きとめ、一瞬の「来翔」で軌道を修正しながら、眼下の浮遊ブロックに着地した。

「中々のコンビネーションだねえ〜」

「だろ？」

「!?」

驚愕し慌てて声のした方向に視線を転じるミレディ・ゴレム。ハジメは懐に潜り込み、アンカーと甲冑の隙間に足を入れることで体を固定しながら、巨大な兵器・シユラーゲンを心臓部に突き付けた。シユラーゲンから紅いスパークが迸る。

「い、いつの間ツ!?」

ドオガン!!!

胸部から煙を吹き上げながら弾き飛ばされるミレディ・ゴレム。ハジメも反動で後方に飛ばされてしまう。しかし、咄嗟にアンカーを飛ばして、近くの浮遊ブロックに取り付けると巻き上げる勢いそのままに空中で反転して飛び乗る。そして、ミレディ・ゴレムの様子を観察した。

そこへ、ユエとシアもハジメの近くの浮遊ブロックに飛び乗ってくる。

「……………いけた？」

「いや、まだだ……………」

ハジメはであるが、ミレディを仕留めれた感じはなくミレディのいる方向に目を細めている……………

「いやあく大したもんだねえ、ちよつとヒヤつとしたよお。分解作用がなくて、そのアー

ティファクトが本来の力を発揮していたら危なかったかもねえ、うん、この場所に苦  
労して迷宮作ったミレディちゃん天才!!」

ハジメの勘が当たり、胸部の装甲を破壊されたままのミレディ・ゴレムが、何事も  
なかったように近くの浮遊ブロックを手元に移動させながら、感心したような声音で三  
人に話しかけてきたのだ。

「やはり、アザンチウム製の装甲だな？」

アザンチウム鉱石は、ハジメの装備の幾つかにも使われている世界最高硬度を誇る鉱  
石だ。薄くコーティングする程度でもドンナーの最大威力を耐え凌ぐ。道理で、シユ  
ラーゲンの一撃に傷一つつかないわけである。

「面倒な……」

流石にアザンチウムを硬度も相まってミレディの装甲を破るには時間が掛かると分  
かるとハジメは眉間にシワを寄せながら悪態をついた。

「おや？ 知っていたんだねえ、つてそりやそうか。オーくんの迷宮の攻略者だもの  
ねえ、生成魔法の使い手が知らないわけないよねえ、さあさあ、程よく絶望したとこ  
ろで、第二ラウンド行ってみようかあ！」

ミレディは、砕いた浮遊ブロックから素材を奪い、表面装甲を再構成するとモーニン  
グスターを射出しながら自らも猛然と突撃を開始した。



「ど、どうするんですか!？」 ハジメさん!

「大丈夫、まだ手はある。何とかしてヤツの動きを封じるぞ!」

「……ん、了解」

「させないよお」

ミレデイ・ゴーレムの気の抜けた声と共に足場にしていた浮遊ブロックが高速で回転する。いきなり、足場を回転させられバランスを崩すハジメ達。そこへモーニングスターが絶大な威力を以て激突した。

ハジメ達は、木っ端微塵に碎かれた足場から放り出される。ハジメは、ジャラジャラと音を立てながら通り過ぎる鎖にしがみついた。ユエは碎かれた浮遊ブロックの破片を足場に「来翔」を使って、シアはドリユッケンの爆発の反動を利用して何とか眼下の浮遊ブロックに不時着する。

そこへ狙いすました様にミレデイ・ゴーレムがフレィムナツクルを突き出して突っ込んだ。

「くうう!!」

「んっ!!」

直撃は避けたものの強烈な衝撃に、ユエとシアの口から苦悶の呻き声が漏れる。それでも、すれ違い様にユエは「破断」をミレデイ・ゴーレムの腕を狙って発動し、シアは

ドリリュッケンのギミックの一つである杭を打撃面から突出させて、それを鎧に突き立て取り付いた。

一方、ミレディ・ゴーレムの肩口に取り付いたシアは、そのまま左の肩から頭部目掛けてドリリュッケンをフルスイングした。が、ミレディ・ゴーレムが急激に“落ちた”ことによりバランスを崩され宙に放り出された。

「きゃあー！」

「シアっ」

悲鳴を上げるシア。そこへ、モーニングスターの鎖にしがみついていたハジメが、振られる鎖の遠心力を利用してシアのもとへ飛び出し空中でキャッチする。

「ハジメさん！」

「大丈夫かっ?」

「はいっ。大丈夫ですう」

ミレディは迎撃で、ヒートナックルを放とうと拳をグツと後ろに引き絞る。と、その瞬間、手元に戻したモーニングスターに繋がっている鎖がいきなり大爆発を起こした。

「わわわっ、なにつ!?!」

「っし! かかった!」

驚きの声を上げるミレディ。爆発の原因は、ハジメが鎖に捕まっている間に仕掛けた

大量の手榴弾である。凄まじい爆発力により鎖が半ばから弾け飛び、巻きつけていた左腕が大きく損傷する。衝撃により、ミレディ・ゴーレムの体勢も崩れてしまう。

そこへ、ハジメを踏み台にしてミレディに急接近したドリユツケンを振りかぶったシアが到達する。

「りやああああ!!」

気合のこもった雄叫びと共に、手元の引き金が引かれ内蔵されたシヨットシエルが激発する。衝撃により一気に加速したドリユツケンが空気をすら叩き潰す勢いでミレディ・ゴーレムに迫った。ミレディ・ゴーレムは反射的に損傷の激しい左腕を掲げる。直後、ドリユツケンの一撃が左腕に直撃した。ドリユツケンは、脆くなつた左腕を打ち砕き肩口から先を容赦なく粉碎した。

ドリユツケンを振り切り勢いそのままに宙を泳ぐシア。ミレディ・ゴーレムは、せめて、奪われた左腕の仕返しに一撃を入れてやると、死に体のシアにヒートナックルを放とうとする。しかし、ミレディがシアに意識を集中した瞬間、下方から水のレーザーが迸り、先ほど入れられた切れ込みに寸分違わず命中した。そして、その傷口を更に抉り切り裂いて、遂にミレディ・ゴーレムの右腕を切断した。

「……してやったリ」

そう言ってほくそ笑んだのは、もちろんユエである。

「っ、このお！ 調子に乗ってえ！」

ミレデイが、イラついた様子で声を張り上げた。その間に、上方の浮遊ブロックにアンカーを打ち込んだハジメが振り子の要領で宙を移動し、落下中のシアをキャッチする。

「よくやったシア」

「ありがとうございませう」

近場の浮遊ブロックに着地した瞬間、両腕を失ったミレデイが何故か、周囲の浮遊ブロックを呼び寄せて両腕を再構成することもなく、天井を見つめたまま目を強く光らせていた。

「ん？……っ！」

猛烈に嫌な予感がした瞬間、それを裏付けるようにシアの表情が青ざめている。

「ハジメさん、ユエさん！ 避けてえ！ 降ってきます！」

「…っ?! そうか上かつ」

ミレデイがやろうとする事を察しがついたハジメは急いでシアを抱き寄せ移動する。

その直後、それは起こった。

空間全体が鳴動する。低い地鳴りのような音が響き、天井からパラパラと破片が落ちくる。いや、破片だけではない。天井そのものが落下しようとしているのだ。

「っ!? こいつぁー!」

「ふふふ、お返しだよ。騎士以外は同時に複数进行操作することは出来ないけど、ただ一斉に『落とす』だけなら数百単位でいけるからねえ、見事凌いで見せてねえ」

のんきなミレデイの言葉に苛立つが、そんな事に気を取られている余裕はない。この空間の壁には幾つものブロックが敷き詰められているのだが、天井に敷き詰められた数多のブロックが全て落下しようとしているのだ。一つ一つのブロックが、軽く十トン以上ありそうな巨石である。

「……ホントになんでもアリだなっ!」

一つでも、当たったら致命傷になり兼ねない巨石が豪雨の如く降ってくるのだ。ハジメの額に冷たい汗が流れる。

「ハ、ハジメさん!」

「シア、捕まってる! ユエと合流する!」

シアを抱えて、アンカーによる振り子を利用しつつ、ユエのいる方向へ飛び降りる。ユエもこちらに合流しようとする浮遊ブロックを足場に跳躍して来た。ミレデイ・ゴーレムは、その間もずっと天井を見つめたままだった。

おそらく、彼女の言葉通り、ゴーレム騎士以外の操作は一つ二つが限度なのだろう。落とすだけとは言え、数百単位の巨石を天井から外すのには集中がいるようだ。

何とか、ハジメ達が合流するのと天から巨石群が降り注ぐのは同時だった。

ゴゴゴゴゴゴゴッ!! ゴバツ!!

天井からブロックが外れ、地響きがなり止む代わりに轟音を立てながら自由落下する巨石群。

「えげつねえ……」

しかもゴ丁寧にと、ある程度軌道を調整することが出来るのかハジメ達のいる場所に特に密集して落ちてくる。ミレデイ・ゴレムも心中するつもりはないだろうから、彼女のもとへ行けば安全かと視線を巡らせるが、ちやうど猛スピードで壁際に退避して行くところだった。今から追ったのでは間に合わない。

「ユエー！ シアー！ 掴まってる！ 絶対に離すなよ！」

「んっ」

「はいですうー！」

ハジメは、ユエとシアにそう言うやいなや、『宝物庫』から再びオルカンを取り出す。そして落ちてくる巨石に対して十二発のロケット弾を全弾連射した。火花の尾を引きながら頭上の死を吹き飛ばさんと突撃したロケット弾は次々と大爆発を起こすと巨石を粉碎していく。

しかし、ハジメの迎撃もそこまでだった。遂に、豪速を以て落下してきた巨石群がハ

ジメ達に到達する。ハジメは、左右のユエとシアがきつちり自分に掴まっているのを確認すると固有魔法を発動した。『瞬光』だ。世界が一気に色あせ、落ちくる死の欠片の一つ一つを明確に認識できるようになる。

「チイツ、『限界突破ア』！」

更に、ハジメは固有魔法を発動する。『限界突破』だ。ハジメの体を一瞬、紅い光が包み込んでいく。ユエとシアをしがみつかせながらフラフラと揺れるような動きで、降り注ぐ死を紙一重で回避して碎かれ激しく揺れる足場の上で神業的なバランスを取りながら、時には落下してくる破片自体も足場にしていく。

「……………」

流星に無理をしてるせいかハジメの眼球には毛細血管が浮かび上がり、僅かに鼻血が流れ出してきている。

「でもっ、やらないと、いけないよなあ！」

しかし、そんな無理も分かっているながら、ハジメは更にある固有魔法を発動させる。そんなハジメ達の様子を壁際で観察していたミレデイの目には、一瞬で巨石群に飲み込まれたように見えた。

「うゝん、やっぱり、無理だったかなあゝ、でもこれくらいは何とかできないと、あのクソ野郎共には勝てないしねえゝ」

ミレディは、そう眩きながら、巨石郡からハジメ達の死体を探す。と、その時……  
「ああ……そうだよな。こんなところで死んじまったらそのクソ野郎共に勝てねえよな」  
「えっ?」

そこには、荒い息を吐き、目や鼻から血を流してはいるもの紅の雷を纏った五体満足  
のハジメが浮遊ブロックの上に立ってミレディを睥睨していた。

「ど、どうやって……」

ハジメが、目の前にいることに思わず疑問の声を上げるミレディ。そんな彼女に、ハ  
ジメは、ニイと口の端を吊り上げて笑う。

「答えてやってもいいが……俺ばかりを見ていいのか?」

「えっ?」

先程と同じ口調で疑問の声を上げるミレディ。だが、その疑問は、直後、魔法の直撃  
という形で解消された。

「『破断』!」

ユエの凜とした詠唱が響き渡り、幾筋もの水のレーザーがミレディ・ゴレムの背後  
から背中や足、頭部、肩口に殺到する。着弾したウォーターカッターは各部位の表面装  
甲を切り裂いていく。

「こんなの何度やっても一緒だよお、両腕再構成するついでに直しちゃうし〜」



「いや、そんな暇は与えなえよ」

振り向きもせず余裕の雰囲気ですエの魔法を受けきったミレディ・ゴーレムに、ハジメがアンカーを打ち込みながら一気に接近する。片手にはシユラーゲンを持っている。

「あはは、またそれ？ それじゃあ、私のアザンチウム製の装甲は砕けないよお」

「普通わな……だが、これは一味違うぜ？」

ハジメは「限界突破」をした後、更に「紅狼」を発動させ、更に身体能力、敏捷を向上させ、巨石郡を回避させ、更に「紅狼」は雷の威力を更に上げる能力を持つ。

だからハジメが放ったシユラーゲンの威力は……

ズガアアアアン!!

「なあっ?!」

一瞬にして、轟音と共にミレディ・ゴーレムを吹き飛ばして、そのまま両腕を破壊した。

「ここ、こんなこととしても結局は……」

「ユエー！」

ミレディの言葉を無視して、ハジメがユエの名を呼ぶ。すると、跳躍してきたユエが更に魔法を発動した。

「凍って！ 凍結！」

「なっ!? 何で上級魔法が!？」

驚愕の声を上げるミレディ。ユエが上級魔法である氷系統の魔法を使えたのは単純な話だ。『破断』と同じく、元となる水を用意して消費魔力量を減らしただけである。あらかじめ、ミレディ・ゴーレムを叩きつけるブロックを決めておき水を撒いておく。そして、隙をについてミレディ・ゴーレム自身の背面にも水を撒いておく。最初の『破断』はそれが目的だった。

それでも、莫大な魔力が消費され、ユエが所持している魔晶石の全てから魔力のストックを取り出す羽目になってしまい、ユエは肩で息をしながら近場の浮遊ブロックに退避していく。

「よくやったぞ、ユエー!」

体を固定されたミレディ・ゴーレムの胸部に立ち、ハジメは『宝物庫』から切り札を取り出す。虚空に現れたそれは全長二メートル半程の縦長の大筒だった。外部には幾つものゴツゴツした機械が取り付けられており、中には直径二十センチはある漆黒の杭が装填されている。下方は四本の頑丈そうなアームがつけられており、中程に空いている機構にハジメが義手をはめ込むと連動して動き出した。

ハジメはそのまま、直下の身動きが取れないミレディ・ゴーレムをアームで挟み込み、更に筒の外部に取り付けられたアンカーを射出した。合計六本のアームは周囲の地面

に深々と突き刺さると大筒をしつかりと固定する。同時に残りの魔力を注ぎ込んでいく。すると、大筒が紅いスパークを放ち、中に装填されている漆黒の杭が猛烈と回転を始める。

キイイイイイ!!!

「存分に喰らいやがれ」

そんな言葉と共に、吸血鬼に白木の杭を打ち込むがごとく、ミレディ・ゴーレムの核に漆黒の杭が打ち放たれた。

ゴオガガガン!!!

凄まじい衝撃音と共にパイルバンカーが作動し、漆黒の杭がミレディ・ゴーレムの絶対防壁に突き立つ。胸部のアザンチウム装甲は、一瞬でヒビが入り、杭はその先端を容赦なく埋めていく。あまりの衝撃に、ミレディ・ゴーレムの巨体が浮遊ブロックを放射状にヒビ割りながら沈み込んだ。浮遊ブロック自体も一気に高度を下げる。ミレディ・ゴーレムは、高速回転による摩擦により胸部から白煙を吹き上げていた。

……しかし、ミレディ・ゴーレムの目から光は消えておらず、まだ健在だ。

「ハ、ハハ。どうやら未だ威力が足りなかつたようだねえ。だけど、まあ大したものだよお？ 四分の三くらいは貫けたんじゃないかなあ？」

「そんなん知ってるからな……シアッ!」

ハジメは、「宝物庫」に杭以外のパイルバンカーをしまおうと、ミレデイ・ゴーレムの胸部から勢いよく飛び退いた。そして、代わりに現れたのは、ウサミミをなびかせ、ドリユッケンを大上段に構えたまま、遙か上空から自由落下に任せて舞い降りるシアだった。

「ッ!?!」

シアが何をしようとしているのか察したのだろう。今度こそ、焦ったようにその場から回避しようとするミレデイ・ゴーレム。自分が固定されている浮遊ブロックを移動させようとするが猛スピードで落下してくるシアに間に合わないと悟り……諦めたように動きを止めた。

シアは、そのままショットシエルを激発させ、その衝撃も利用して渾身の一撃を杭に打ち下ろした。

「ドリヤアアアですうっ!」

ドゴオオオ!!

そして、その衝撃で遂に漆黒の杭がアザンチウム製の絶対防御を貫き、ミレデイ・ゴーレムの核に到達する。先端が僅かにめり込み、ビシツという音を響かせながら核に亀裂が入った。

地面への激突の瞬間、シアはドリユッケンを起点に倒立すると、くるりと宙返りをす

る。そして、身体強化の全てを脚力に注ぎ込み、遠心力をたつぷりと乗せた蹴りをダメ押しとばかりに杭に叩き込んだ。

シアの蹴りを受けて更にめり込んだ杭は、核の亀裂を押し広げ……遂に完全に粉碎した。

この瞬間、七大迷宮が一つ、ライセン大迷宮の最後の試練が確かに攻略された瞬間だった……。

## 二十六話 ミレディの神代魔法

辺りにもうもうと粉塵が舞い、地面には放射状のヒビが幾筋も刻まれている。激突した浮遊ブロックが大きなクレータを作っており、その上に胸部から漆黒の杭を生やした巨大なゴーレムが横たわっていた。

そのミレディ・ゴーレムの上で、ドリユツケンを支えにしてゼハアゼハアと息を荒げるシアのもとに、ハジメとユエがやって来た。ハジメは感心したように目を細め、ユエは優しい眼差しを向けている。

「やったじゃねえかシア。最後のは凄い気迫だった。見直したぞ?」

「……ん、頑張った」

「えへへ、有難うございますう」

疲れた表情を見せながらも、ハジメとユエの称賛にはにかむシア。実際、つい最近まで、争いとは無縁だったとは思えない活躍だった。それはひとえに、ハジメやユエと同じステージに立ちたい、ずっと一緒にいたいというシアの願いあつてのことだろう。深く強いその願いが、シアの潜在能力と相まって七大迷宮最大の試練と正面から渡り合わ

せ、止めを刺すというこれ以上ない成果を生み出したのだろう。

ハジメは優しい眼差しをシアに向けながら彼女の頭を撫で称賛した。

「ホントによく頑張った、シア」

「ふえ……／＼／＼。あつ、はい。ありがとうございます……」

「……ハジメ、私にも撫でて」

「はいよ……」

可愛いなと思いつつながらハジメは要望通りにユエの頭も撫でていると後ろから声が聞こえた。

「あのおく、いい雰囲気悪いんだけどおく、そろそろヤバイんで、ちよつといいかなあ  
く？」

物凄く聞き覚えのある声。ハジメがハツとしてミレデイ・ゴーレムを見ると、消えたはずの眼の光がいつの間にか戻っていることに気がつき安堵した。

「やつと、起きたか、ミレデイ」

「あつれえく私がまだ生きてると気づいてたのく？」

「まあな、魔力の核から反応があるからな」

ハジメはミレデイの疑問に対して答えると、ある事を教えて貰おうと聞く。

「ミレデイ、お前は他の大迷宮の場所を覚えてるか？ 今じゃ把握されてる大迷宮は少

ないからさ……覚えてるなら教えて欲しいんだ」

「ああ、そうなんだね。……そっか、迷宮の場所がわからなくなるほど……長い時が経ったんだね……うん、場所……場所はね……」

ミレデイ・ゴーレムは声が力を失い始める。どこか感傷的な響きすら含まれた声に、ユエやシアが神妙な表情をする。長い時を、使命、あるいは願いのために意志が宿る器を入れ替えてまで生きた者への敬意を瞳に宿した。

ミレデイは、ポツリポツリと残りの七大迷宮の所在を語っていく。中には驚くような場所にあるようだ。

「以上だよ……頑張ってね」

「……感謝する。しかし、あのウザったい口調やはどうしたんだ？」

ハジメの言った通り、今のミレデイは、迷宮内のウザイ文を用意したり、あの人の神経を逆なでする口調とは無縁の誠実さや真面目さを感じさせた。戦闘前の目的を聞いたときに垣間見せた、おそらく彼女の素顔が出ているのだろう。消滅を前にして取り繕う必要がなくなったということなのかもしれないと思うが……

「あはは、ごめんね。でもさ……あのクソ野郎共って……ホントに嫌なヤツらでさ……嫌らしいことばっかりしてくるんだよね……だから、少しでも……慣れておいて欲しくてね……」



「……そうか。ん？」

ハジメはミレデイの発言におかしな部分があると感じていると、ミレデイ・ゴーレムの体は燐光のような青白い光に包まれていた。その光が螢火の如く、淡い小さな光となって天へと登っていく。死した魂が天へと召されていくようだ。とても、とても神秘的な光景である。

その時、おもむろにユエがミレデイ・ゴーレムの傍へと寄って行った。既に、ほとんど光を失っている眼をジツと見つめる。

「何かな？」

囁くようなミレデイの声。それに同じく、囁くようにユエが一言、消えゆく偉大な解放者〃の一人に言葉を贈っていた。

「……お疲れ様。よく頑張りました」

「……」

それは労いの言葉。たった一人、深い闇の底で希望を待ち続けた偉大な存在への、今を生きる者からのささやかな贈り物。本来なら、遥かに年下の者からの言葉としては不適切かもしれない。だが、やはり、これ以外の言葉を、ユエは思いつかなかった。

ミレデイにとつても意外な言葉だったのだろう。言葉もなく呆然とした雰囲気漂わせている。やがて、穏やかな声でミレデイがポツリと呟く。

「……ありがとね」

「……ん」

「……さて、時間の……ようだね……君達のこれからが……自由な意志の下に……あらんことを……」

オスカーと同じ言葉をハジメ達に贈り、*“解放者”*の一人、ミレディは淡い光となつて天へと消えていった。辺りを静寂が包み、余韻に浸るようにユエとシアが光の軌跡を追つて天を見上げる。

「……最初は、性根が捻じ曲がつた最悪の人だと思つていたんですけどね。ただ、一生懸命なだけだったんですね」

「……ん」

どこかしんみりとした雰囲気で言葉を交わすユエとシア。しかし、ハジメはある仮説を立てていたの、しんみりとせず、二人に先を行こうと促すように言った。

「ユエ、シア、そのゴーレムは無視して、そろそろ向こうに行くぞ」

「ちよつと、ハジメさん。そんな死人にムチ打つようなことを。ヒドイですよ。まったく空気読めないのはハジメさんの方ですよ」

「……ハジメ、KY?」

「違う。俺はある仮説を立てているだけだ」

そんな雑談をしていると、いつの間にか壁の一角が光を放っていることに気がつき、気を取り直して、その場所に向かう。上方の壁にあるので浮遊ブロックを足場に跳んでいこうと、ブロックの一つに三人で跳び乗った。と、その途端、足場の浮遊ブロックがスィーと動き出し、光る壁まで運んでいった。

「……はあ」

「わわっ、勝手に動いてますよ、これ。便利ですなあ」

「……サービス？」

勝手にハジメ達を運んでくれる浮遊ブロックにシアは驚き、ユエは首をかしげる。ハジメは推測していた事がかなり当たっていることに大きく溜息を吐いた。

十秒もかからず光る壁の前まで進むと、その手前五メートル程の場所でピタリと動きを止めた。すると、光る壁は、まるで見計らったようなタイミングで発光を薄れさせていき、スつと音も立てずに発光部分の壁だけが手前に抜き取られた。奥には光沢のある白い壁で出来た通路が続いている。

ハジメ達の乗る浮遊ブロックは、そのまま通路を滑るように移動していく。どうやら、ミレディ・ライセンの住処まで乗せて行ってくれるようだ。

「ハア………」

変に上手い演出してることに溜息を吐き、そうして進んだ先には、オルクス大迷宮に

あったオスカーの住処へと続く扉に刻まれていた七つの文様と同じものが描かれた壁があった。近づく、やはりタイミングよく壁が横にスライドし奥へと誘う。浮遊ブルックは止まることなく壁の向こう側へと進んでいった。

くぐり抜けた壁の向こうにいたのは……

「やつほー、さつきぶり！ ミレディちゃんだよ！」

ちっこいミレディ・ゴーレムがいた。

「……」

「ほら、やつぱりな……」

言葉もないユエとシア。ハジメは立てていた仮説が綺麗に当たってウンザリした表情をしていた。

「あれっれえ、白髪の子は分かってたの〜？」

「まあな、冷静になつて考えると分かるだろ？ だって、ミレディお前は、意思を残して自ら挑戦者を選定する方法をとっている。だとしたら、一度の挑戦者が現れ撃破されたらそれつきり等という事は有り得ない。それでは、一度のクリアで最終試練がなくなってしまうだろ」

「おお、分かつてるじゃあ〜ん」

ハジメの応えにミレディは「正解！ピンポンピンポンッ〜」感じで感嘆していた。す

ると黙り込んで顔を俯かせるユエとシアの二人に、ミレデイが非常に軽い感じで話しかける。

「あれえ？ あれえ？ そつちテンション低いよお？ もつと驚いてもいいんだよお？ あつ、それとも驚きすぎても言葉が出ないとか？ だったら、ドツキリ大成功おくだね☆」

ちつこいミレデイ・ゴーレムは、巨体版と異なり人間らしいデザインだ。華奢なボディに乳白色の長いローブを身に纏い、白い仮面を付けている。ニコちゃんマークなところが微妙に腹立たしい。そんなミニ・ミレデイは、語尾にキラツ！ と星が瞬かせながら、眼前までやってくる。未だ、ユエとシアの表情は俯き、垂れ下がった髪に隠れてわからない。

「おいおい、ちょっと……」

ハジメは先の展開を読めるので一步距離をとって、数秒後に起きることの被害から回避する。ユエがシアがぼそりと呟くように質問する。

「……さつきのほ？」

「ん？ さつき？ ああ、もしかして消えちゃったと思った？ ないない！ そんなことあるわけないよお！」

「でも、光が昇って消えていききましたよね？」

「ふふふ、中々よかったでしょう？ あの『演出』！ やだ、ミレディちゃん役者の才能まであるなんて！ 恐ろしい子！」

テンション上がりまくりのミニ・ミレディ。比例してウザさまでうなぎ上りだ。そんなミニ・ミレディを前にして、ユエは手を前に突き出し、シアはドリユツケンを構えた。流石に、あれ？ やりすぎた？ と動きを止めるミニ・ミレディ。

「え、えくと……」

ゆらゆら揺れながら迫ってくるユエとシアに、ミニ・ミレディは頭をカクカクと動かし言葉に迷う素振りを見せると意を決したように言った。

「テへ、ペロ☆」

「……死ね」

「死んで下さい」

「ま、待つて！ ちょっと待つて！ このボディは貧弱なお！ これ壊れたら本気でマズイからあ！ 落ち着いてえ！ 謝るからあ！」

しばらくの間、ドタバタ、ドカンバキツ、いやあーなど悲鳴やら破壊音が聞こえていたが、ミレディが「助けてえ〜！」と口走りながら手を合わせていたハジメの背後に回り、二人の悪鬼に対する盾にしよんとする。

「……ハジメどいて、そいつ殺せない」

「退いて下さい。ハジメさん。そいつは殺ります。今、ここで」

「お前等、もう落ち着け。ミレデイも二人を余り煽るな」

「……………ん」

「はいですう…」

ハジメは二人とミレデイに注意してミレデイの方へ視点を転じた。

「それとミレデイ、そろそろ神代魔法を渡してくれねえか？　　後、お前が騎士やゴーレ

ムに使っていた『感応石』辺りの鉱石が欲しいんだが、良いか？」

「お、分かった。良いよ、少し待っててね」

ハジメの要件にミレデイは承諾し、魔法陣を起動させ、ハジメ達は魔法陣の中に入る。今回は、試練をクリアしたことをミレデイ本人が知っているので、オルクス大迷宮の時のような記憶を探るプロセスは無く、直接脳に神代魔法の知識や使用方法が刻まれている。ハジメとユエは経験済みなので無反応だったが、シアは初めての経験にビクンツと体を跳ねさせた。

ものの数秒で刻み込みは終了し、あっさりと俺達はミレイ・ライセンの神代魔法を手に入れる。

得たのは、重力魔法。ハジメは、ミレデイとの戦闘から彼女が空間操作系か重力操作系の二つのどっちかだと踏んでいたが、当たりだったらしい。

「……やつぱり重力操作の魔法か」

「そうだよくん。ミレディちゃんの魔法は重力魔法。上手く使つてね……つて言いたいところだけど、君はそれなりに使えるけどウサギちゃんは適性ないねえくもうびつくりするレベルでないね！」

「そうか……」

ミレディの言う通り、ハジメと特にシアは重力魔法の知識等を刻まれてもまともに使える気がしなかった。ユエが、生成魔法をきちんと使えないのと同じく、ハジメにも重力魔法の適性がないのだろう。

「まあ、ウサギちゃんとは体重の増減くらいなら使えるんじゃないかな。君は……生成魔法使えるんだから、それで何とかしなよ。金髪ちゃんは適性ばっちりだね。修練すれば十全に使いこなせるようになるよ。それに後、君になら……」

ミレディの幾分真面目な解説にハジメは肩を竦め、ユエは頷き、シアは打ちひしがれた。せつかくの神代魔法を適性なしと断じられ、使えたとしても体重を増減出来るだけ。ガツカリ感が凄まじい。

「後、君——ハジメンで良いや……はいっ、これ攻略の証と『感応石』だよ」

「なんだよ。ハジメンって、まあ良いが……後、感謝する。有難く頂くよ」

「良いってことだよ。だって私の迷宮の初めての攻略者がクソ野郎共を殺すつてこと



だから嬉しいし、私達の目的を受け継いで貰えるだけでミレデイさんは嬉しいよお」  
「ミレデイ……」

嬉しそうに話すミレデイに、ハジメは少し頬が緩む。すると、ミレデイが三人を呼びかける。

「ハジメン……後、ユエちゃんとシアちゃん」

「なんだ、ミレデイ？」

ミレデイが真剣なのだろう真つ直ぐハジメ達を視線を向けて告げた。

「必ず、私達『解放者』全員の神代魔法を手に入れること。ハジメンの望みのために必要だから……頑張つてねっ。神殺し！ 私達の分までやつちやつて！」

ハジメ達はそんなミレデイの声援を受け……

「ああ、任せろ」

「……ん、任せて」

「はいですう」

その声援を笑みを浮かべ応えた。

その返事を聞いたミレデイはゴーレムだから分からないが嬉しそうに見えた気がした。  
た。

「ふふ……あつそうだ。そろそろ、地上に行きたいよね三人共」

「あっそうだな神代魔法も手に入れたしな」

ハジメが応えるとミレディはある魔法陣を出現させた。

「三人共、外に出るなら此処に立つてね」。場所は近くの水辺に転移されるから」

「おう、わかった」

ハジメはミレディの指示に従い魔法陣の上に立つと、別れ際にミレディがユエを呼び止めた。

「後、ユエちゃん」

「……………ん？」

「もし、全部の神代魔法を揃えてから更に力が欲しいのならもう一度、ミレディさんの迷宮に来てね。…………ユエちゃんにならもしかしてだけど、ミレディさんでも扱えなかった

“あの力”を使えると思うから…………」

「……………ん、わかった」

「うん、じゃあ三人共！ 頑張つてね！ バイツバイ〜！」

「ああ……………またな、ミレディ」

そう別れを告げると、次第に魔法陣から発する光がハジメ達の周りを覆つていく。そして、目の前が光に包まれた。そして、ハジメ達三人は七大迷宮の一つライセン大迷宮を攻略したのだった…………。

## 三章 再会とウルの町防衛戦線く黒竜と白ローブ

## 二十七話 冒険者らしい仕事

ライセンの大迷宮を攻略したハジメ達はブルツクの町に戻り、「マサカの宿」で体を休ませていた。

この間に、そのの宿娘が色々行動をしようと奮闘していたがハジメによつて不発に終わり、女将さんに叱られていた。

そんな事があつた翌日、ハジメ達は冒険者ギルドに向かつていた。

カラン、カラン

そんな音を立てて冒険者ギルド：ブルツク支部の扉は開いた。入ってきたのは三人の人影、ここ数日ですつかり有名人となつたハジメ、ユエ、シアである。ギルド内のカフェには、何時もの如く何組かの冒険者達が思い思いの時を過ごしており、ハジメ達の姿に気がつくくと片手を上げて挨拶してくる者もいる。しかし、そうでもない者もいる。

ハジメは尻目に席に座る男共を見る。男共は相変わらずユエとシアに見蕩れ、ついでハジメに羨望と嫉妬の視線を向けるが、そこに陰湿なものはない。

後、何故か女性陣がハジメにユエ達と同じような視線を向けてられており、そのせいで二人にジト目で見られやすくなっていた。

「……（俺……何かしたっけ？）」

そんなわけで、この町では、「美しい金髪のビスクドール」たるユエと、そんな彼女が心底惚れており、決闘が始まる前に相手が逃げ帰ってしまう「白髪の悪魔」たるハジメのコンビは有名であり一目置かれる存在なのである。ギルドでパーティー名の申請等していいのに「デビル・ビスクドールズ」というパーティー名が浸透しており、自分の二つ名と共にそれを知ったハジメがしばらく遠い目をしていたのは記憶に新しくユエとシアが励ましていた。ちなみに、自分の存在感が薄いと知ったシアが涙したのは余談である。

ハジメはそんなことを思い出し苦笑いして、ギルドのカウンターにいるキャサリンの下へ向かった。

「おや、今日は三人一緒かい？」

ハジメ達がカウンターに近づくと、いつも通り、キャサリンがおり、先に声をかけた。キャサリンの声音に意外さが含まれているのは、この一週間でギルドにやって来たのは

大抵、ハジメ一人かシアとユエの二人組だからだ。

「ああ。明日にでも町を出るんで、あんたには色々世話になったし、一応挨拶をとな。ついでに、目的地関連で依頼があれば受けておこうと思つてな」

世話になったというのは、ハジメがギルドの一室を無償で借りていたことだ。せつかくの重力魔法なので生成魔法と組み合わせを試行錯誤するのに、それなりに広い部屋が欲しかったのである。キャサリンに心当たりを聞いたところ、それならギルドの部屋を使つていいと無償で提供してくれたのだ。

なお、ユエとシアは郊外で重力魔法の鍛錬である。

「そうかい。行つちまうのかい。そりゃあ、寂しくなるねえ。あんた達が戻ってから賑やかで良かったんだけどねえ」

「勘弁してくれよ。俺も賑やかなのは良いがアレは度が過ぎてゐる」

苦々しい表情のハジメが愚痴をこぼすように語つた内容は全て事実だ。宿娘のソーナは言わずもがな、クリスタベルは良い奴だが会う度に俺に肉食獣の如き視線を向け舌なめずりをしてくるので、何度寒気を感じたかわからない。

また、ブルツクの町には三大派閥が出来ており、日々しのぎを削つている。一つは「ユエちゃんに踏まれ隊」、もう一つは「シアちゃんの奴隷になり隊」最後が「お兄様と傍にい隊」である。それぞれ、文字通りの願望を抱え、実現を果たした隊員数で優劣を競つ

ているらしい。

あまりにぶつ飛んだネーミングと思考の集団にドン引きのハジメ達。町中でいきなり土下座するとユエに向かって「踏んで下さい！」とか絶叫するのだ。もはや恐怖であった。

シアに至ってはこういう思考過程を経てそんな結論に至ったのか理解不能だ。亜人族は被差別種族じゃなかったのかとか、お前らが奴隷になつてどうするとかツツコミどころは満載だが、深く考えるのが嫌だったので出会えば即刻排除している。

最後は女性のみで結成された集団で、ハジメに付き纏つたり、ハジメと共にいるユエとシアの排除行動が主だ。一度は、「お兄様アー！ 何処までも付いて行きませー！！」とか叫びながらハジメに突っ込んで来た少女もいる。その時は、流石に町中で少女をケガをさせたくなかったのハジメは少女を抱きつこうとする寸前に両肩を掴み突撃を止め、「俺なんかよりも良い奴が見つかるから諦めろ」と言ったら、少女は何故か鼻血を吹き出してぶつ倒れてしまった。

その後、ハジメは急いで少女を治療院に運び貧血で事は済んだが、何故か突撃してくる少女の数が増えていくのを尻目にハジメは遠い目をしながら空を仰ぎ見て呟いた。

『何故だ……』

そんな出来事を思い出し大きい溜息を吐くハジメに、キャサリンは苦笑いだ。

「まあまあ、何だかで活気があったのは事実さね」

「嫌な、活気だな」

「で、何処に行くんだい？」

「フューレンだ」

そんな風に雑談しながらも、仕事はきつちりこなすキャサリン。早速、フューレン関連の依頼がないかを探し始める。

フューレンとは、中立商業都市のことだ。ハジメ達の次の目的地は「グリューエン大砂漠」にある七大迷宮の一つ「グリューエン大火山」である。その為、大陸の西に向かわなければならぬのだが、その途中に「中立商業都市フューレン」があるので、大陸一の商業都市に一度は寄ってみようという話になったのである。なお、「グリューエン大火山」の次は、大砂漠を超えた更に西にある海底に沈む大迷宮「メルジーネ海底遺跡」が目的地だ。

それと、フューレンなら王国やクラスメイト達の状況の情報も知れるかもしれないからだ。

「なあ、キャサリン。フューレンに行く途中で出来そうな依頼とかあるか？」

「うーん、おや。ちようどいいのがあるよ。商隊の護衛依頼だね。ちようど空気が後一人分あるよ……どうだい？ 受けるかい？」

「見せてくれ」

「はいよ」

ハジメはキャサリンにより差し出された依頼書を受け取り内容を確認する。

「ふむ……」

依頼内容は、商隊の護衛依頼。中規模な商隊で十五人程の護衛を求めている。人数的に、ユエとシアは冒険者登録をしていないからハジメの分でちようどだ。

「キャサリン、連れを同伴するのはOKなのか？」

「ああ、問題ないよ。あんまり大人数だと苦情も出るだろうけど、荷物持ちを個人で雇ったり、奴隷を連れている冒険者もいるからね。まして、ユエちゃん、シアちゃんも結構な実力者だ。一人分の料金でもう二人優秀な冒険者を雇えるようなもんだ。断る理由もないさね」

「そうか、二人はどうする？」

ハジメは二人に聞いてみることにした。

「……急ぐ旅じゃない」

「そうですねえ、たまには他の冒険者方と一緒にするのもいいかもしれません。ベテラン冒険者のノウハウというのものもあるかもしれませんよ？」

「……そうだな、急いでも仕方ないしな、たまにはそういう事も良いか……」



ユエの言う通り、七大迷宮の攻略にはまだまだまだ時間がかかるだろう。急いで事を仕損じては元も子もないというし、シアの言うように冒険者独自のノウハウがあれば今後の旅でも何か役に立つことがあるかもしれない。

ハジメは二人の意見に「ふむ」と頷くとキャサリンに依頼を受けることを伝える。

「キャサリン、この依頼を受けるよ」

「あいよ。先方には伝えとくから、明日の朝一で正面門に行つとくれ」

「了解した」

ハジメが依頼書を受け取るのを確認すると、キャサリンが俺の後ろのユエとシアに目を向けた。

「あんた達も体に気をつけて元気でやりよ？　この子に逃げられないように頑張つてね」

「……ん、お世話になった。ありがとう」

「はい、キャサリンさん。良くしてくれて有難うございました！」

キャサリンの人情味あふれる言葉にユエとシアの頬も緩む。特にシアは嬉しそうだ。

シアの気持ちは分かる。この町に来てからというもの自分が亜人族であるということとを忘れそうになっているほどだ。もちろん全員が全員、シアに対して友好的というわけではないが、それでもキャサリンを筆頭にソーナやクリスタベル、ちよつと引いてし

まうがファンだという人達はシアを亜人族という点で差別的扱いをしていない。土地柄かそれともそう言う人達が自然と流れ着く町なのか、それはわからないが、いずれにしろシアにとっては故郷の樹海に近いくらい温かい場所だった。

「あんたも、こんないい子達泣かせんじゃないよ？ 精一杯大事にしないと罰が当たるからね？」

「……つたく、アンタも世話焼きな人だな。言われなくても承知してるよ」

キャサリンの言葉に苦笑いで返すハジメに、キャサリンが一通の手紙を差し出す。疑問顔で、それを受け取る。

「これは？」

「あんた達、色々厄介なもの抱えてそうだからね。町の連中が迷惑かけた詫びのようなものだよ。他の町でギルドと揉めた時は、その手紙をお偉いさんに見せな。少しは役に立つかもしれないからねそれにアンタはあの人に似てるしね」

「あの人？」

「……確か四、五年前だったかしらね？ この町に来た聖教の神官の服を着た青年の人がアンタと雰囲気似ていてね。この町もね、その青年に一回、救われたからね町の人は皆、彼に感謝してるんだよ」

「へえー。神官ねえ……ソイツは何て言うんだ？」

ハジメは、王国にいた時はそんな話題やそんな奴の話なんか聞いた事なかったのでキャサリンに聞く。

「……いや、名前は教えて貰えなくてね。この町では彼を『ホーリー・ナイト』と呼んでるさ」

「ホーリーナイト……まあ良いか、それよりそんな手紙を書けるぐらい、キャサリン……アンタは何だ？」

「おや、詮索はなしだよ？ いい女に秘密はつきものさね」

「……はあ、わーたよ。これは有り難く貰っとく長話して悪かったな」

「素直でよろしい！ 色々あるだろうけど、死なないようにね」

謎多き、片田舎の町のギルド職員キャサリン。ハジメ達は、そんな彼女の愛嬌のある魅力的な笑みと共に送り出された。

その後、ハジメ達は、クリスタベルの場所にも寄った。町を出ると聞いた瞬間、クリスタベルは最後のチャンスとばかりにハジメに襲いかかる巨漢の化物と化した。「また来る」とハジメが言うと、収まり握手をしてクリスタベルと別れたのだった。

そして、最後の晩と聞き、遂には堂々と風呂場に乱入、そして部屋に突撃を敢行したソーナちゃんが、ブチギレた女将に本物の亀甲縛りをされて一晩中、宿の正面に吊るされるという事件の話も割愛だ。なぜ、母親が亀甲縛りを知っていたのかという話も割愛

である。

そして翌日早朝。

そんな愉快？ なブルツクの町民達を思い出しながら、正面門にやって来たハジメ達を迎えたのは商隊のまとめ役と他の護衛依頼を受けた冒険者達だった。どうやらハジメ達が最後のようで、まとめ役らしき人物と十四人の冒険者が、やって来たハジメ達を見て一齐にぎわつた。

「お、おい、まさか残りの三人って『デビル・ビスクドールズ』なのか!？」

「マジかよ！ 嬉しさと恐怖が一緒くたに襲ってくるんですけど!」

「見ろよ、俺の手。さっきから震えが止まらないんだぜ?」

「いや、それはお前がアル中だからだろ?」

「はあ……」

大きく溜息を吐くハジメ。そこにはユエとシアの登場に喜びを顕にする者、股間を両手で隠し涙目になる者、手の震えを俺達のせいにして仲間につっこみを入れられる者、ハジメを見て顔を赤くする女冒険者など様々な反応だ。ハジメが、嫌そうな表情をしなから近寄ると、商隊のまとめ役らしき人物が声をかけた。

「君達が最後の護衛かね?」

「ああ、これが依頼書だ」

ハジメは、懐から取り出した依頼書を見せる。それを確認して、まとめ役の男は納得したように頷き、自己紹介を始めた。

「私の名はモットー・ユンケル。この商隊のリーダーをしている。君達のランクは未だ青だそうだが、キャサリンさんからは大変優秀な冒険者と聞いている。道中の護衛は期待させてもらおうよ」

「そうか、俺は南雲ハジメ。こちらにも任務はちゃんとするつもりだから宜しく頼む、後こっちは仲間のユエとシアだ」

「それは頼もしいな……ところで、この兎人族……売るつもりはないかね？ それなりの値段を付けさせてもらおうが」

「……」

モットーの視線が値踏みするようにシアを見た。兎人族で青みがかった白髪の超がつく美少女だ。商人の性として、珍しい商品に口を出さずにはいられないというところか。首輪から奴隷と判断し、即行で所有者たるハジメに売買交渉を持ちかけるあたり、きつと優秀な商人なのだろう。

その視線を受けて、シアが「うっ」と嫌そうに唸りハジメの背後にそそつと隠れる。ユエのモットーを見る視線が厳しい。

「その目をやめてくれ、シアが嫌がる」

「ほお、随分と懐かれていますな……中々、大事にされているようだ。ならば、私の方もそれなりに勉強させてもらいますが、いかがですか？」

「ま、あんたはそこそこ優秀な商人のようだし……答えはわかるだろう？」

シアの様子を興味深そうに見ていたモットーが更に俺に交渉を持ちかけるが、ハジメの対応はあつさりしたものである。モットーも、実はハジメが手放さないだろうとは感じていたが、それでもシアが生み出すであろう利益は魅力的だったので、何か交渉材料はないかと会話を引き伸ばそうとする。

「はあ……」

そんな魂胆もハジメには丸見えなので、あつさりしているが、揺るぎない意志を込めた言葉をモットーに告げる。

「例え、どこぞの神がシアを欲しても手放す気はないし力づくで奪うんなら殺してでも奪い返すさ……理解してもらえたか？」

「……………ええ、それはもう。仕方ありませんな。ここは引き下がりましたよ。ですが、その気になったときは是非、我がユンケル商会をご最真に願いますよ。それと、もう間も無く出発です。護衛の詳細は、そちらのリーダーとお願います」

「こちらも脅し紛いのことを言ってすまないな。宜しく頼むよ」

自分でも理解できるくらい、ハジメの今さっきの発言は相当危険なものだった。下手

をすれば聖教教会から異端の烙印を押されかねない発言だ。一応、魔人族は違う神を信仰しているし、もう死んでいるが、歴史的に最高神たる「エヒト」以外にも崇められた神は存在するので、直接、聖教教会にケンカを売る言葉ではない。だが、それでもギリの発言であることに変わりはなく、それ故に、モットーはハジメがシアを手放すこととはないと心底理解させられた。

「(まっ、神を殺すことが目的の一つだけだな)」

ハジメがそんなことを思いながら笑みを零しながら、すごすごと商隊の方へ戻るモットーを見ていると、周囲が再びざわついている事に気がついた。

「ん？」

「すげえ……女一人のために、あそこまで言うか……痺れるぜ！」

「流石、白髪の悪魔と言ったところか。自分の女に手を出すやつには容赦しない……ふっ、漢だぜ」

「いいわねえ、私も一度くらい言われてみたいわ」

「いや、お前、男だろ？ 誰が、そんなことッあ、すまん、謝るからつやめつアッー!!」

「……」

ハジメは、愉快？ な護衛仲間の愉快的な発言に頭痛を感じたように手で頭を抑えた。

やっぱりブルツクの町の奴らは阿呆ばかりだと。そんな事を思っていると、背中に向

やら「むにゆう」と柔らかい感触を感じ、更に腕が背後から回されハジメを抱きしめてくる。

ハジメが肩越しに振り返ると、肩に顎を乗せたシアの顔が至近距離に見えた。その顔は真つ赤に染まっており、実に嬉しそうに緩んでいる。ハジメもシアを安心させる為に彼女の頭を撫でながら優しく声をかけた。

「シア、落ち着くまで良いぞ」

「ありがとうございます……ハジメさん／＼」

ユエは、トコトコと傍に寄って行くと、そんなハジメの袖をクイクイと引っぱった。

「？ 何だユエ？」

「ん……カツコよかった。後、私にも撫でて」

「つたく……しようがねえな」

そして、ハジメはもう片方の空いている手でユエの頭を撫でる。

「……ん／＼」

早朝の正門前、多数の人間がいる中で、背中に幸せそうなウサミミ美少女をはりつけ、右手には金髪紅眼のこれまた美少女を纏わりつかせる男、南雲ハジメ。

商隊の女性陣は生暖かい眼差しで、男性陣は死んだ魚のような眼差しでその光景を見つめる。ハジメに突き刺さる煩わしい視線や言葉は、きつと自業自得であるのであった



⋮  
⋮  
⋮  
⋮  
○

## 二十八話

## 冒険者らしい仕事とフューレン

ブルツクの町から中立商業都市フューレンまでは馬車で約六日の距離である。

日の出前に出発し、日が沈む前に野営の準備に入る。それを繰り返すこと三回目。ハジメ達は、フューレンまで三日の位置まで来ていた。道程はあと半分である。ここまでに何事もなく順調に進んで来た。ハジメ達は、隊の後方を預かっているのだが実際にどかなものである。

この日も、特に何もないうまま野営の準備となった。冒険者達の食事関係は自腹である。周囲を警戒しながらの食事なので、商隊の人々としては一緒に食べても落ち着かないのだろう。別々に食べるのは暗黙のルールになっているようだ。そして、冒険者達も任務中は酷く簡易な食事で済ませてしまう。ある程度凝った食事を準備すると、それだけで荷物が増えて、いざという時邪魔になるからなのだという。代わりに、町に着いて報酬をもらったなら即行で美味しいものを腹一杯食うのがセオリーなのだから。

そんな話を、この二日の食事の時間にハジメ達は他の冒険者達から聞いていた。ハジメ達が用意した豪華なシチューモドキをふかふかのパンを浸して食べながら。

「カッター、うめえ！ ホント、美味いわあ、流石シアちゃん！ もう、巫人とか関係ないから俺の嫁にならない？」

「ガツツガツツ、ゴクンツ、ぷはっ、てめえ、何抜け駆けしてやがる！ シアちゃんは俺の嫁！」

「はっ、お前みたいな小汚いブ男が何言ってるんだ？ 身の程を弁えろ。ところでシアちゃん、町にいたら一緒に食事でもどう？ もちろん、俺のおごりで」

「な、なら、俺はユエちゃんだ！ ユエちゃん、俺と食事！」

「ユエちゃんのスプーン……ハアハア」

「……（こいつ等……うるせえ……）」

うまうまとシアが調理したシチューモードキを次々と胃に収めていく冒険者達。初日に、彼等が干し肉やカンパンのような携帯食をもそもそ食べている横で、ハジメが普通に“宝物庫”から取り出した食器と材料を使い料理を始め、いい匂いを漂わせる料理に自然と視線が吸い寄せられ、熱々の食事をハフハフしながら食べる頃には、全冒険者が涎を滝のように流しながら血走った目で凝視するという事態になり、物凄く居心地が悪くなったシアが、お裾分けを提案した結果、今の状態になってしまった。

それからというもの、冒険者達がこぞって食事の時間にはハイエナの如く群がってくるのだが、最初は恐縮していた彼等も次第に調子に乗り始め、ことある毎にシアとユエ

を軽く口説くようになったのである。

「……」

ぎやーぎやー騒ぐ冒険者達に、そろそろ黙らせようかとハジメは無言で「威圧」を発動。熱々のシチューモドキで体の芯まで温まったはずなのに、一瞬で芯まで冷えた冒険者達は、青ざめた表情でガクブルし始める。口の中の肉をゴクリと飲み込むと、シチューモドキに向けていた視線をゆっくり上げ囁くように、されどやたら響く声でポツリとこぼした。

「お前等……静かに食事が出来ないのか？」

「……調子に乗ってすみませんっしたー……」

見事なハモリとシンク口した土下座で即座に謝罪する冒険者達。彼等のほとんどは、ハジメよりも年上でベテランの冒険者なのだが、そのような威厳は皆無だった。俺から受ける威圧が半端ないというのもあるが、ブルツクの町での所業を知ってるからか逆らおうという者はいない。

「シア、食事中に「威圧」をしちまってすまないな」

「大丈夫ですよ。それより、ハジメさん」

「ん、何だ？」

シアが頬を染めながら上手に焼けた串焼き肉を、ハジメの口元に差し出す。

「ハジメさん、あつ、あ〜ん」

冒険者達の視線を感じながら、ハジメは溜息を吐くとシアに向き直り口を開けた。シアの表情が喜色に染まる。

「あ〜ん」

「……」

差し出された肉をパクツと加えると無言で咀嚼するハジメにシアは、ほわあ〜んとした表情で見つめている。と、今度は反対側から串焼き肉が差し出された。

「……あ〜ん」

「……お前もか」

苦笑い気味で呟いてハジメは、再びハジメはパクツと無言で咀嚼した。

そんな光景を冒険者達は悔しそうに見ていた。

それから二日。残す道程があと一日に迫った頃、遂にのどかな旅路を壊す無粋な襲撃者が現れた。最初にそれに気がついたのはシアだ。街道沿いの森の方へウサミミを向けピコピコと動かすと、のほほんとした表情を一気に引き締めて警告を発した。

「敵襲です！ 数は百以上！ 森の中から来ます！」

その警告を聞いて、冒険者達の間一気に緊張が走る。現在通っている街道は、森に隣接してはいるが其処まで危険な場所ではない。何せ、大陸一の商業都市へのルートな

のだ。道中の安全は、それなりに確保されている。なので、魔物に遭遇する話によく聞くが、せいぜい二十体前後、多くても四十体くらいが限度のはずなのだ。

「くそつ、百以上だと？ 最近、襲われた話を聞かなかつたのは勢力を溜め込んでいたからなのか？ つたく、街道の異変くらい調査しとけよ！」

護衛隊のリーダーであるガリティマは、そう悪態をつきながら苦い表情をする。商隊の護衛は、全部で十五人。ユエとシアを入れても十七人だ。この人数で、商隊を無傷で守りきるのとはかなり難しい。単純に物量で押し切られるからだ。ガリティマが、いつそ隊の大部分を足止めにして商隊だけでも逃がそうかと考え始めた時、その考えを遮るよ  
うにハジメが声を上げた。

「迷ってんなら、俺達が殺ろうか？」

「えっ?」

ガリティマは、ハジメの提案の意味を掴みあぐねて、つい間拔けな声で聞き返した。  
「だから、なんなら俺達が殲滅しちまうけど? って言っただよ」

「い、いや、それは確かに、このままでは商隊を無傷で守るのは難しいのだが……えつと、出来るのか? このあたりに出現する魔物はそれほど強いわけではないが、数が……」  
「数なんて問題ない。すぐ終わらせる。ユエ、俺がやっても良いがどうする?」

ハジメはそう言って、すぐ横に佇むユエの肩にポンツと手を置いた。ユエも、特に気

負った様子も見せずに、そんな仕事ベリイージーですと言わんばかりに、「ん……私に任せて」と返事をした。

ガリテイマは少し逡巡する。一応、彼も噂でユエが類希な魔法の使い手であるという事は聞いている。仮に、言葉通り殲滅できなくても、ハジメ達の態度から相当な数を削ることができよう。ならば、戦力を分散する危険を冒して商隊を先に逃がすよりは、堅実な作戦と考えられる。

「わかった。初撃はユエちゃんに任せよう。仮に殲滅できなくても数を相当数減らしてくれるなら問題ない。我々の魔法で更に減らし、最後は直接叩けばいい。みな、わかったな！」

「「了解！」」

「……」

心配は無用であるが、ハジメ達の実力を知らない冒険者達が、商隊の前に陣取り隊列を組む。緊張感を漂わせながらも、覚悟を決めた良い顔つきだ。食事中などのふざけた雰囲気は微塵もない。道中、ベテラン冒険者としての様々な話を聞いたのだが、こういう姿を見ると、なるほど、ベテランというに相応しいと頷かされる。商隊の人々は、かなりの規模の魔物の群れと聞いて怯えた様子で、馬車の影から顔を覗かせている。

ハジメ達は、商隊の馬車の屋根の上に佇んでいた。

「ユエ、一応、詠唱しとけ。後々、面倒になる」

「……詠唱……詠唱……？」

「……もしかして知らないとか？」

「……大丈夫、問題ない」

「……頼むぞ」

「接敵、十秒前ですよ」

そうこうしている内に、シアから報告が入る。ユエは、右手をスつと森に向けて掲げると、透き通るような声で詠唱を始めた。

「彼の者 常闇に紅き光をもたらさん 古の牢獄を打ち砕き 障碍の尽くを退け

ん 最強の力へとたるこの力、彼の者の為に 天すら呑み込む光となれ——」

雷龍」

ユエの詠唱が終わり、魔法のトリガーが引かれた。その瞬間、詠唱の途中から立ち込めた暗雲より雷で出来た龍が現れて、彼女と違い紅雷の大狼を扱うハジメは自然と口を零しながら呟いた。

「東洋の龍か……俺の話を参考にしたのか」

「な、なんだあれ……」

それは誰が呟いた言葉だったのか。目の前に魔物の群れがいるにもかかわらず、誰も



が暗示でも掛けられたように天を仰ぎ激しく放電する雷龍の異様を凝視している。護衛隊にいた魔法に精通しているはずの後衛組すら、見たことも聞いたこともない魔法に口をパクパクさせて呆けていた。

そして、それは何も味方だけのことではない。森の中から獲物を喰らいつくそうと殺意にまみれてやって来た魔物達も、商隊と森の間あたりの場所で立ち止まり、うねりながら天より自分達を睥睨する巨大な雷龍に、まるで蛇に睨まれたカエルの如く射竦められて硬直していた。

そして、天よりもたらされる裁きの如く、ユエの細く綺麗な指に合わせて、天すら呑み込むと詠われた雷龍は魔物達へとその顎門を開き襲いかかった。

ゴオガアアアア!!!

「うわっ!?!」

「どわああ?!」

「きやああああ!!」

雷龍が、凄まじい轟音を迸らせながら大口を開くと、何とその場にいた魔物の尽くが自らその顎門へと飛び込んでいく。そして、一瞬の抵抗も許されずに雷の顎門に滅却され消えていった。更には、ユエの指揮に従い、雷龍は魔物達の周囲をとぐるを巻いて包囲する。逃走中の魔物が突然眼前に現れた雷撃の壁に突っ込み塵となった。逃げ場を

失くした魔物達の頭上で再び、落雷の轟音を響かせながら雷龍が顎門を開くと、魔物達は、やはり自ら死を選ぶように飛び込んでいき、苦痛を感じる暇もなく、荘厳さすら感じさせる龍の偉容を最後の光景に意識も肉体も一緒くたに塵へと還された。雷龍は、全ての魔物を呑み込むと最後にもう一度、落雷の如き雄叫びを上げて霧散した。

隊列を組んでいた冒険者達や商隊の人々が、轟音と閃光、そして激震に思わず悲鳴を上げながら身を竦める。ようやく、その身を襲う畏怖にも似た感情と衝撃が過ぎ去り、薄ら目を開けて前方の様子を見ると……そこにはもう何もなかった。あえて言うならとぐろ状に焼け爛れて炭化した大地だけが、先の非現実的な光景が確かに起きた事実であると証明していた。

「これは……」

「……ん、やりすぎた」

「ユエ……その『雷龍』って魔法。重力魔法と雷魔法の『雷槌』の複合魔法のオリジナルか?」

「そうらしいですよ? ハジメさんから聞いた龍の話と例の魔法を組み合わせたものらしいです」

「俺がギルドに籠っている間、そんなことしてたのか……ていうかユエ、さっきの詠唱って……」

「ん……出会いと、未来を詠ってみた」

「……そうか」

詠唱のことは置いて、重力魔法を扱えるようになってくるユエにハジメは少しばかり驚いていた。

そして、そんな話をしていると焼け爛れた大地を呆然と見ていた冒険者達が我に振り返り始めた。そして、猛烈な勢いで振り向き俺達を凝視すると一斉に騒ぎ始めた。

「おいおいおいおい、何なのあれ？ 何なんですか、あれっ！」

「へ、変な生き物が……空に、空に……あつ、夢か」

「へへ、俺、町についたら結婚するんだ」

「動揺してるのは分かったから落ち着け。お前には恋人どころか女友達すらいないだろうが」

「魔法だつて生きてるんだ！ 変な生き物になつてもおかしくない！ だから俺もおかしくない！」

「いや、魔法に生死は関係ないからな？ 明らかに異常事態だからな？」

「なにい!? てめえ、ユエちゃんが異常だともいうのか!? アアン!」

「落ち着けお前等！ いいか、ユエちゃんは女神、これで全ての説明がつく！」

「……なるほど……」

「うるせえ……」

確かにユエの魔法が衝撃的過ぎて、冒険者達は少し壊れ気味なのは分かる。何せ、既存の魔法に何らかの生き物を形取ったものなど存在しないし、それを自在に操るなど国お抱えの魔法使いでも不可能だろう。が、壊れて「ユエさま万歳！」とか言い出して騒いでいるのは、流石に騒々しくハジメは少し苛立ちを感じていた。すると、騒ぐ冒険者達の中で唯一まともなリーダーガリティマは、そんな仲間達を見て盛大に溜息を吐くとハジメ達のもとへやって来た。

「はあ、まずは礼を言う。ユエちゃんのおかげで被害ゼロで切り抜けることが出来た」

「今は、仕事仲間だろう。礼なんて不要だ。な？」

「……ん、仕事しただけ」

「はは、そうか……で、だ。さっきのは何だ？」

ガリティマが困惑を隠せずに尋ねる。

「……オリジナル」

「オ、オリジナル？ 自分で創った魔法ってことか？ 上級魔法、いや、もしかしたら最

上級を？」

「……創ってない。複合魔法」

「複合魔法？ だが、一体、何と何を組み合わせればあんな……」

「他人にタネを明かす訳が無いだろ？」

「つ……それは、まあ、そうだろうな。切り札のタネを簡単に明かす冒険者などいないしな……」

深い溜息と共に、追及を諦めたガリテイマ。ベテラン冒険者なだけに暗黙のルールには敏感らしい。

「……」

ハジメもガリテイマはちゃんと弁えているらしく、他の冒険者よりもベテランなのが理解出来る。商隊の人々からも畏怖と尊敬の混じった視線をチラチラと受けながら、一行は歩みを再開したのだった。

ユエが、全ての商隊の人々と冒険者達の度肝を抜いた日以降、特に何事もなく、一行は遂に中立商業都市フューレンに到着した。フューレンの東門には六つの入場受付があり、そこで持ち込み品のチェックをするそうだ。ハジメ達も、その内の一つの列に並んでいた。順番が来るまでしばらくかかりそうである。

馬車の屋根で、ユエとシアを侍らせながら寝転んでいたハジメのもとにモットーがやって来た。何やら話があるようだ。若干、呆れ気味にハジメ達を見上げるモットーに、ハジメは軽く頷いて屋根から飛び降りた。

「まったく豪胆ですな。周囲の目が気になりませんか？」

「嫉妬の視線か？ そんなのとづくに慣れてる。そんな事よりモットー、俺に何か用か？」  
モットーの言う周囲の目とは、毎度お馴染みの俺に対する嫉妬と羨望の目、そしてユエとシアに対する感嘆と嫌らしさを含んだ目だ。それに加えて、今は、シアに対する値踏みするような視線も増えている。流石大都市の玄関口。様々な人間が集まる場所では、ユエもシアも単純な好色の目だけでなく利益も絡んだ注目を受けているようだ。

そう言つて肩を竦めるハジメにモットーは苦笑いだ。

「フューレンに入れば更に問題が増えそうですな。やはり、彼女を売る気は……」

さりげなくシアの売買交渉を申し出るモットーだったが、その話は既に終わっただろ？ というハジメの無言の主張に、両手を上げて降参のポーズをとる。

「そんな話をしに来たわけじゃないだろ？ 本当の用件は何だ？」

「いえ、似たようなものですよ。売買交渉です。貴方のもつアーティファクト。やはり譲つてはもらえませんか？ 商会に来ていただければ、公証人立会の下、一生遊んで暮らせるだけの金額をお支払いますよ。貴方のアーティファクト、特に『宝物庫』は、商人にとっては喉から手が出るほど手に入れたいものですからな」

「……………」

やはり、『宝物庫』が狙いだと溜息を吐く。野営中からあまりにしつこい交渉に、ハジメが軽く殺気をぶつけるとようやく商人の勘がマズイ相手と警鐘を鳴らしたのか、す

「ごすこと引き下がっていた。しかし、やはり諦めきれないのだろう。ドンナー・シュラク共々、何とか引き取ろうと再度、交渉を持ちかけてきたようだ。」

「何度言われようと、何一つ譲る気はない。諦めろ」

「しかし、そのアーティファクトは一人人が持つにはあまりに有用過ぎる。その価値を知った者は理性を効かせられないかもしれないかもしれませんぞ？　そうなれば、かなり面倒なことになるでしょなあ……例えば、彼女達の身にッ!？」

モットーが、少々、狂的な眼差しでチラリと脅すように屋根の上にいるユエとシアに視線を向けた瞬間、ゴチツと額に冷たく固い何かを押し付けられた。壮絶な殺気と共に。周囲は誰も気がついていない。馬車の影ということもあるし、ハジメの殺気がピンポイントで叩きつけられているからだ。

「それは、俺に対しての宣戦布告と受け取っていいのかモットー?」

ハジメの静かな声音。されど氷の如き冷たい声音で硬直するモットーの眼を覗き込む隻眼は、まるで深い闇のようだ。モットーは全身から冷や汗を流し必死に声を捻り出す。

「ち、違います。どうか……私は、ぐっ……あなたが……あまり隠そうとしておられない……ので、そういうこともある……と。ただ、それだけで……うっ」

「そうか、ならそういうことにおこう」

そうやって、ハジメはドンナーをしまい殺気を解くと、モットーはその場に崩れ落ちた。大量の汗を流し、肩で息をしている。

「別に、お前が何をしようとお前の勝手だ。あるいは誰かに言いふらして、そいつらがどんな行動を取っても構わない。ただ、敵意をもって俺の前に立ちはだかったなら……生き残れると思うな？ 国だろうが世界だろうが神だろうが関係ない。全て潰してやる」

「……はあはあ、なるほど。割に合わない取引でしたな……」

未だ青ざめた表情ではあるが、氣丈に返すモットーは優秀な商人なのだろう。それに道中の商隊員とのやりとりから見ても、かなり慕われているようであった。本来は、ここまで強硬な姿勢を取ることはないのかもしれない。彼を狂わせるほどの魅力が、ハジメのアーティファクトにあったということだろう。

「ま、今回は見逃すし、忠告も受け取っておこう」

「……全く、私も耄碌したものだ。欲に目がくらんで竜の尻を蹴り飛ばすとは……」

「そう言えば、ユエ殿のあの魔法も竜を模したものでしたな。詫びと言ってはなんです。あれが竜であるとは、あまり知られぬがいいでしょう。竜人族は、教会からはよく思われていませんからな。まあ、竜というより蛇という方が近いので大丈夫でしょうが」

「そうか、覚えておくよ……」



モットーが言うのは、龍人族のことだろう。ハジメが図書館で調べ物をしていると、竜人族に関する書物を見つけた時だ。その書物には、竜人族は五百年以上に滅びたとされている。理由は定かではないが、彼等が「竜化」という固有魔法を使えたことが魔物と人の境界線を曖昧にし、差別的排除を受けたとか、半端者として神により淘汰されたとかだつと言われている。

「ええ、人にも魔物にも成れる半端者。なのに恐ろしく強い。そして、どの神も信仰していなかった不信心者。これだけあれば、教会の権威主義者には面白くない存在というのも領けるでしょう」

「なるほどな。つーか、随分ない様だな。不信心者と思われるぞ?」

「私が信仰しているのは神であつて、権威をかさに着る“人”ではありません。人は“客”ですな」

「……クハツ、何となく、あんたの事がわかってきたわ。根っからの商人だな、あんた。そりゃ、これ見て暴走するのも領けるわ」

「とんだ失態を晒しましたが、ご入り用の際は、我が商会を是非ご鼻屑に。あなたは普通の冒険者とは違う。特異な人間とは繋がりを持つておきたいので、それなりに勉強させてもらいますよ」

「……ホント、商売魂が逞しいな……まあ、また会ったら鼻屑にさせて貰うよ」

「ありがとうございます」

ハジメから呆れた視線を向けられながら、「では、失礼しました」とモットーは踵を返して前列へ戻って行つた。

### 中立商業都市フューレン

高さ二十メートル、長さ二百キロメートルの外壁で囲まれた大陸一の商業都市だ。あらゆる業種が、この都市で日々しのぎを削り合っており、夢を叶え成功を収める者もいれば、あつさり無一文となつて悄然と出て行く者も多くいる。観光で訪れる者や取引に訪れる者など出入りの激しさでも大陸一と言えるだろう。

その巨大さからフューレンは四つのエリアに分かれている。この都市における様々な手続関係の施設が集まっている中央区、娯楽施設が集まった観光区、武器防具はもちろんな家具類などを生産、直販している職人区、あらゆる業種の店が並ぶ商業区がそれだ。東西南北にそれぞれ中央区に続くメインストリートがあり、中心部に近いほど信用のある店が多いというのが常識らしい。メインストリートからも中央区からも遠い場所は、かなりアコギでブラックな商売、言い換えれば闇市的な店が多い。その分、時々とんでもない掘り出し物が出たりするので、冒険者や傭兵のような荒事に慣れている者達がよく出入りしているようだ。

そんな話を、中央区の一角にある冒険者ギルド：フューレン支部内にあるカフェで軽食を食べながら聞いたハジメ達はモットー率いる商隊と別れると証印を受けた依頼書を持って冒険者ギルドにやって来た。そして、宿を取ろうにも何処にどんな店があるのかさっぱりなので、冒険者ギルドでガイドブックを貰おうとしたところ、案内人の存在を教えられたのだ。

そして、現在ハジメは、案内人の女性、リシーと名乗った女性に料金を支払い、軽食を共にしながら都市の基本事項を聞いていたのである。

「そういうわけなので、一先ず宿をお取りになりたいのでしたら観光区へ行くことをオススメしますわ。中央区にも宿はありますが、やはり中央区で働く方々の仮眠場所という傾向が強いので、サービスは観光区のそれとは比べ物になりませんから」

「なるほどな、なら素直に観光区の宿にしとくか。どこがオススメなんだ？」

「お客様のご要望次第ですわ。様々な種類の宿が数多くございますから」

「そうか。じゃあ、飯が美味くて、あと風呂があれば文句はない。立地とかは考慮しないでいい。あと責任の所在が明確な場所がいい」

リシーは、にこやかにハジメの要望を聞く。最初の二つはよく出される要望なのだろう「うんうん」と頷き、早速、脳内でオススメの宿をリストアップしたようだ。しかし、続く言葉で「ん？」と首を傾げた。

「あのく、責任の所在ですか？」

「ああ、例えば、何らかの争いごとに巻き込まれたとして、こちらが完全に被害者だった時に、宿内での損害について誰が責任を持つのかということだな。どうせならいい宿に泊りたいが、そうすると備品なんか高そうだし、あとで賠償額をふっかけられても面倒だろ」

「えくと、そうそう巻き込まれることはないと思いますが……」

困惑するリシーにハジメは苦笑いする。

「まあ、普通はそうなんだろうが、連れが目立つんでな。観光区なんてハメ外すヤツも多そうだし、商人根性逞しいヤツなんか強行に出ないとも限らないしな。まあ、あくまで“出来れば”だ。難しければ最後の条件は無視して良い」

ハジメの言葉に、リシーは、俺の両脇に座りうまうまと軽食を食べるユエとシアに視線をやる。そして、納得したように頷いた。確かに、この美少女二人は目立つ。現に今も、周囲の視線をかなり集めている。

「しかし、それなら警備が厳重な宿でいいのでは？　そういうことに気を使う方も多いですし、いい宿をご紹介しますが……」

「ああ、それでもいい。ただ、欲望に目が眩んだヤツってのは、時々とんでもないことをするからな。警備も絶対でない以上は最初から物理的説得を考慮した方が早い」

「ぶ、物理的説得ですか……なるほど、それで責任の所在なわけですか」

「済まないな、変に難しい条件を言つて」

「いえ、問題無いですよ。仕事ですから」

それから、他の区について話を聞いていると、ハジメは不意に強い視線を感じた。

「あ？」

あまりにも、粘着質で気持ち悪い視線にハジメは僅かに眉を顰める。ハジメがチラリとその視線の先を辿ると……ブタがいた。体重が軽く百キロは超えていそうな肥えた体に、脂ぎった顔、豚鼻と頭部にちよこんと乗っているベツトリした金髪。身なりだけは良いようで、遠目にもわかるいい服を着ている。そのブタ男がユエとシアを欲望に濁った瞳で凝視していた。

「……金髪の豚」

ボソツと呟くハジメはリシーがあつた豚に対して「げっ」と声を上げたので聞いてみることにした。

「あの豚は何だ？」

「はいっ、えつとあの方は貴族の方でして……」

リシーから豚が貴族と聞いてハジメが、「面倒な」と思うと同時に、そのブタ男は重そうな体をゆっさゆっさと揺すりながら真つ直ぐハジメ達の方へ近寄ってくる。どうや

ら逃げる暇もないようだ。

ブタ男は、ハジメ達のテーブルのすぐ傍までやって来ると、ニヤついた目でユエとシアをジロジロと見やり、シアの首輪を見て不快そうに目を細めた。そして、今まで一度も目を向けなかったハジメに、さも今気がついたような素振りを見せると、これまた随分と傲慢な態度で一方的な要求をした。

「お、おい、ガキ。ひゃ、百万ルタやる。この兎を、わ、渡せ。それとそっちの金髪はわ、私の妾にしてやる。い、一緒に来い」

ハジメはその豚が言い放った言葉を宣戦布告として受け取ることにしたのだった……。

## 二十九話　フューレン支部長の依頼

「お、おい、ガキ。ひゃ、百万ルタやる。この兎を、わ、渡せ。それとそっちの金髪はわ、私の妾にしてやる。い、一緒に来い」

ドモリ気味のきいきい声でそう告げて、豚男はユエに触れようとす。彼の中では既にユエは自分のものになっているようだ。その瞬間、その場に凄絶な殺意威圧が降り注いだ。周囲のテーブルにいた者達ですら顔を青ざめさせて椅子からひっくり返り、後退りしながら必死にハジメから距離をとり始めた。

ならば、直接その殺気を受けた豚男はというと……「ひい!？」と情けない悲鳴を上げると尻餅をつき、後退ることも出来ずにその場で股間を濡らし始めた。

ハジメが本気の殺気をぶつけられ、おそらく瞬時に意識を刈り取っただろうが、それでは意味がないので十分に手加減している。

「ユエ、シア、行くぞ。場所を変えよう」

こんな程度の殺気で失禁するなんて思いながら豚男を汚物を見るような視線を向けながら、ハジメはユエとシアに移動すると伝えた。

「ユエ、シア、行くぞ。場所を変えよう」

ハジメは「威圧」を解きギルドを出ようとした直後、大男が三人の進路を塞ぐような位置取りに移動し仁王立ちした。豚男とは違う意味で百キロはありそうな巨体である。全身筋肉の塊で腰に長剣を差しており、歴戦の戦士といった風貌だ。

「誰だ？」

見る限り豚の護衛だろうと思っていると、その巨体が目に入ったのか、豚男が再びキィキィ声で喚きだした。

「そ、そうだ、レガニド！ そのクソガキを殺せ！ わ、私を殺そうとしたのだ！ 黠り殺せえ！」

「坊ちゃん、流石に殺すのはヤバイですぜ。半殺し位にしときましようや」

「やれえ！ い、いいからやれえ！ お、女は、傷つけるな！ 私のだあ！」

「了解ですぜ。報酬は弾んで下さいよ」

「い、いくらでもやる！ さっさとやれえ！」

「雇われの護衛か……」

ハジメから目を逸らさずにブタ男と話、報酬の約束をするとニンマリと笑った。

「おう、坊主。わりいな。俺の金のためにちよつと半殺しになってくれや。なに、殺しはしねえよ。まあ、嬢ちゃん達の方は……諦めてくれ」



レガニドはそう言うと、拳を構えた。長剣の方は、流石に場所が場所だけに使わな  
いようだ。周囲がレガニドの名を聞いてざわめく。

「お、おい、レガニドって『黒』のレガニドか?」

「『暴風』のレガニド!? 何で、あんなヤツの護衛なんて……」

「金払じゃないか? 『金好き』のレガニドだろ?」

周囲のヒソヒソ声で大体目の前の男の素性を察した俺。

天職持ちなのかどうかは分からないが冒険者ランクが『黒』ということは、上から三  
番目のランクだ。相当な実力者なのかもしれない。一般的からしてだが。

「まあ、半殺しぐらいが丁度いいか」

レガニドから闘気が噴き上がる。ハジメが、これなら正当防衛を理由に半殺しにして  
も問題ないだろうと、拳を振るおうとした瞬間、意外な場所から制止の声がかかった。

「……ハジメ、待って」

「? どうしたユエ?」

ユエは、隣のシアを引っ張ると、ハジメの疑問に答える前に、ハジメとレガニドの間  
に割って入った。訝しそうなハジメとレガニドに、ユエは背を向けたまま答える。

「……私達が相手をする」

「えっ? ユエさん、私もですか?」

シアの質問はさらり無視するユエ。ユエの言葉に、ハジメが返答するよりも、レガニドが爆笑する方が早かった。

「ガツハハハハ、嬢ちゃん達が相手をするだつて？ 中々笑わせてくれるじゃねえの。何だ？ 夜の相手でもして許してもらおうって——「……黙れ、ゴミクス」——!？」

下品な言葉を口走ろうとしたレガニドに、辛辣な言葉と共に、神速の風刃が襲い掛かりその頬を切り裂いた。プシュと小さな音を立てて、血がだらだらと滴り落ちる。かなり深く切れたようだ。レガニドは、ユエの言葉通り黙り込む。ユエの魔法が速すぎて、全く反応できなかつたのだ。心中では「いつ詠唱した？ 陣はどこだ？」と冷や汗を掻きながら必死に分析している。

ハジメはというとユエの言葉の意味を察したのか、肩を竦めて此処はユエ達に頼む事にした。

「……じゃ、頼めるか?」

「……ん、問題ない」

ユエは何事もなかつたように、ハジメと、未だ、ユエの意図が分かつていないシアに向けて話を続ける。

「……私達が守られるだけのお姫様じゃないことを周知させる」

「ああ、なるほど。私達自身が手痛いしっぺ返し出来ることを示すんですね」

「……そう。せっかくだから、これを利用する」

ハジメは二人なら問題ないだろうと思い一歩後ろに下がった。ユエは、ハジメが下がったのを確認すると、隣のシアに先にいけと目で合図を送る。それを読み取ったシアは、背中に取り付けていたドリユッケンに手を伸ばすと、まるで重さを感じさせずに一回転させて、その手に収めた。

「おいおい、兎人族の嬢ちゃんに何が出来るってんだ？ 雇い主の意向もあるんでね。大人しくしていて欲しいんだが？」

ユエから目を離さずにレガニドは、そうシアに告げる。しかし、シアはレガニドの言葉を見無視するように、逆に忠告をした。

「腰の長剣。抜かなくていいんですか？ 手加減はしますが、素手だと危ないですよ？」

「ハッ、兎ちゃんが大きく出たな。坊ちゃん！ わりいけど、傷の一つや二つは勘弁ですぜ！」

レガニドは、シアは大して気にせずユエに気を配りながら、未だ近くでへたり込んでいる豚男に一言断りを入れる。流石に、ユエ相手に無傷で無力化は難しいと判断したのだろう。

「だが、シアの実力が分かってない時点で駄目だな。レバニラ……いや、レガニドか」

そんな事を呟いていると、シアはドリユッケンを腰だめに構え……一気に踏み込んだ。そして、次の瞬間にはレガニドの眼前に出現する。

「!？」

「やあ!!」

可愛らしい声音に反して豪風と共に振るわれた超重量の大槌が、表情を驚愕に染めるレガニドの胸部に迫る。直撃の寸前、レガニドは、辛うじて両腕を十字にクロスさせて防御を試みる。咄嗟の防御態勢を取るのは流星は「黒」と言ったところだろう。

「ありゃあ、片腕が潰れちまったな」

しかし、ハジメの予想通り、踏ん張ることなど微塵もかなわず、咄嗟に後ろに飛んで衝撃を逃がそうとするも、スイングが速すぎてほとんど意味はなさない。結果、

グシャ!

そんな生々しい音を響かせながら、レガニドは勢いよく吹き飛びギルドの壁に背中から激突した。轟音を響かせながら、肺の中の空気を余さず吐き出したレガニドは、揺れる視界の中に、拍子抜けしたようなシアの姿を見る。どうやら、もう少し抵抗があると思っていたらしい。

冒険者ランク「黒」にまで上り詰めた自分が、まさか兎人族の少女に手加減までされて、なお、拍子抜けされたという事実、レガニドはもはや笑うしかない。痛みのせい

でしかめたようにしか見えない笑みを浮かべ、立ち上がろうと手をつき、激痛と共にそのまま倒れこむ。激痛の原因に視線を向ければ、ひしゃげたように潰れた自分の腕が見えた。

幸い、潰されたのは片腕だけだったようで、痛みを堪えながらも片方の腕で何とか立ち上がる。視界がグラグラ揺れるが、何とか床を踏みしめることが出来た。ほとんど意味は無かったと言えど、咄嗟に、後ろに飛ばなければ、立ち上がることは出来なかったかもしれない。

しかし、立ち上がった事は果たしていい事だったのか。半ば意地で立ち上がったレガニドだったが、ユエが氷の如き冷めた目で右手を突き出している姿を見て、小声で愚痴る。

「坊ちゃん、こりや、割に合わなさすぎだ……」

直後、レガニドは生涯で初めて、〃空中で踊る〃という貴重で最悪の体験をすることになった。

「舞い散る花よ 風を抱かれて碎け散れ 〃風花〃」

空中での一方的なリードによるダンスを終えると、レガニドは、そのままグシャと嫌な音を立てて床に落ち、ピクリとも動かなくなつた。

「終わったな」

ハジメは二人の戦いになってもない戦闘を見た後、豚男の下へツカツカと歩き出した。ギルド内にいる全員の視線がハジメに集中する。

「ひい！ く、来るなあ！ わ、私を誰だと思ってる！ プーム・ミンだぞ！ ミン男爵家に逆らう気かあ！」

「そうか、豚。じゃあ、二度と俺の視界に入るな。直接・間接問わず関わるな……次はないと思え」

ハジメは、盛大に顔をしかめると、尻餅を付いたままの豚男の顔面に靴底に錬成したスパイクで勢いよく踏みつけた。

「プギャー!!？」

スパイクが、プームの顔面に突き刺さり無数の穴を開ける。更に、片目にも突き刺ささったようで大量の血を流し始めた。プーム本人は、痛みで直ぐに気を失った。ハジメはそれを確認すると踏みつけるのを止め、ユエ達のところに戻ろうとした時だった。

「あの、申し訳ありませんが、あちらで事情聴取にご協力願います」

そうハジメに告げた男性職員の他、三人の職員が俺達を囲むように近寄った。もつとも、全員腰が引けていたが。もう数人は、プームとレガニドの容態を見に行っている。

「そうは言ってもな、これは単なる正当防衛だ。その辺の男連中も証人になるぞ。特に、近くのテーブルにいた奴等は随分と聞き耳を立てていたようだしな？」

ハジメがそう言いながら、周囲の男連中を睥睨すると、目があった彼等はこぞつて首がもげるのでは？　と言いたくなるほど激しく何度も頷いた。

「それは分かっていますですが、ギルド内で起こされた問題は、当事者双方の言い分を聞いて公正に判断することになっていきますので……規則ですから冒険者なら従って頂かないと……」

「当事者双方……ね」

しかし、あの二人は二、三日は目を覚まさないだろうとハジメは、チラリとプームとレガニドの二人を見る。当分目を覚ましそうになかった。ハジメは溜息を吐くと突如、凜とした声が掛けられた。

「何をしているのです？　これは一体、何事ですか？」

そちらを見てみれば、メガネを掛けた理論的な雰囲気漂わせる細身の男性が厳しい目で俺達を見ていた。

「ドット秘書長！　いいところに！　これはですね……」

ハジメは秘書長の出現に逃げれないと判断し、肩を落としながら遠い空を見上げた。

ドット秘書長と呼ばれた男は、片手の中指でクイツとメガネを押し上げると落ち着いた声でハジメに話しかけた。

「話は大体聞かせてもらいました。証人も大勢いる事ですし嘘はないのでしようね。や

り過ぎな気もしますが……まあ、死んでいませんし許容範囲としましょう。取り敢えず、彼らが目を覚まし一応の話を聞くまでは、フューレンに滞在はしてもらおうとして、身元証明と連絡先を伺っておきたいのですが……それまで拒否されたりはしないでしょうか？」

「ああ、構わない。そっちの豚がまだ文句を言うようなら、むしろ連絡して欲しいくらいだしな。今度はもつと丁寧な説得を心掛けるよ」

ハジメはそんな事をいい、ドットに呆れ顔をさせながらステータスプレートを差し出す。

「連絡先は、まだ滞在先が決まってないから……そっちの案内人にでも聞いてくれ。彼女の薦める宿に泊まるだろうか」

ハジメに視線を向けられたリシーは、ビクツとした後、やっぱり私が案内するんですねと諦めの表情で肩を落としていた。

「ふむ、いいでしょう……青ですか。向こうで伸びている彼は黒なんですかね……そちらの方達のステータスプレートはどうしました？」

ハジメのステータスプレートに表示されている冒険者ランクが最低の「青」であることに僅かな驚きの表情を見せるドット。しかし、二人の女性の方がレガニドを倒したと聞いていたので、彼女達の方が強いのかとユエとシアのステータスプレートの提出を



求める。

「いや、ユエもシアも……こっちの彼女達もステータスプレートは紛失してな、再発行はまだしていない。ほら、高いだろ？」

「しかし、身元は明確にしてもらわないと。記録をとっておき、君達が頻繁にギルド内で問題を起こすようなら、加害者・被害者のどちらかに関係なくブラックリストに載せることになりますからね。よければギルドで立て替えますが？」

ドットの口ぶりから、どうしても身元証明は必要らしい。しかし、ステータスプレートを作成されれば、隠蔽前の技能欄に確実に二人の固有魔法が表示されるだろう。それどころか今や、神代魔法も表示されるはずだ。大騒ぎになることは間違いない。騒ぎになると面倒だし、もうまともに滞在はできないだろう。何だか色々面倒になってきたハジメ。その思考を読んだようにユエがハジメに話しかけた。

「……ハジメ、手紙」

「？ ああ。あの手紙か……」

ユエの言葉で、ハジメ達がブルツクの町を出るときに、ブルツク支部のキャサリンから手紙を貰ったことを思い出す。ギルド関連で揉めたときにお偉いさんに見せれば役立つかもしれないと言って渡された得体の知れない手紙だ。

ダメ元であるが、渡すか？と悩むハジメ。こうなる前に渡中身の内容見れば良かった

とハジメは少し後悔するも、仕方ないので手紙を取り出す。

「身分証明の代わりになるかわからないが、知り合いのギルド職員に、困ったらギルドのお偉いさんに渡せと言われてたものがある」

「？ 知り合いのギルド職員ですか？ ……拝見します」

ハジメ達の服装の質から、それほど金に困っているように思えなかつたので、ステータスプレート再発行を拒むような態度に疑問を覚えるドットだったが、代わりにと渡された手紙を開いて内容を流し読みする内にギョツとした表情を浮かべた。

そして、三人の顔と手紙の間で視線を何度も彷徨わせながら手紙の内容をくり返し読み込む。目を皿のようにして手紙を読む姿から、どうも手紙の真贋を見極めているようだ。やがて、ドットは手紙を折りたたむと丁寧に便箋に入れ直し、視線を戻した。

「この手紙が本当なら確かな身分証明になりますが……この手紙が差出人本人のものか私一人では少々判断が付きかねます。支部長に確認を取りますから少し別室で待っていてもらえますか？ そうお時間は取らせません。十分、十五分くらいで済みます」

「えっ、マジ？」

「まあ、それくらいなら構わない。待たせてもらうとするよ」

「職員に案内させます。では、後ほど」

ドットは傍の職員を呼ぶと別室への案内を言付けて、手紙を持ったまま颯爽とギルド

の奥へと消えていった。指名された職員が、ハジメ達を促す。それに従い移動しようとして歩き出した。

応接室に案内されてから、きっかり十分後、遂に、扉がノックされた。ハジメの返事から一拍置いて扉が開かれる。そこから現れたのは、金髪をオールバックにした鋭い目付きの三十代後半くらいの男性と先ほどのドットだった。

「初めまして、冒険者ギルド、フューレン支部支部長イルワ・チャングだ。ハジメ君、ユエ君、シア君……でいいかな？」

簡潔な自己紹介の後、ハジメ達の名を確認がてらに呼び握手を求める支部長イルワ。ハジメも握手を返しながら返事をする。

「ああ、構わない。名前は、手紙にか？」

「その通りだ。先生からの手紙に書いてあったよ。随分と目をかけられている……というより注目されているようだね。将来有望、ただしトラブル体質なので、出来れば目をかけてやって欲しいという旨の内容だったよ」

「トラブル体質……ね。確かにブルックじやあトラブル続きだったな。まあ、それはいい。肝心の身分証明の方はどうなんだ？ それで問題ないのか？」

「ああ、先生が問題のある人物ではないと書いているからね。あの人の人を見る目は確かだ。わざわざ手紙を持たせるほどだし、この手紙を以て君達の身分証明とさせてもら

うよ」

「先生?」

ハジメはイルワの発言に少し気になってると隣に座っているシアは、キャサリンに特に懐いていたことから、その辺りの話が気になるようでおずおずとイルワに訪ねた。

「あの、キャサリンさんって何者なのでしょう?」

「ん? 本人から聞いてないのかい? 彼女は、王都のギルド本部でギルドマスターの秘書長をしていたんだよ。その後、ギルド運営に関する教育係になってね。今、各町に派遣されている支部長の五、六割は先生の教え子なんだ。私もその一人で、彼女には頭が上がらなくてね。その美しさと人柄の良さから、当時は、僕らのマドンナ的存在、あるいは憧れのお姉さんのような存在だった。その後、結婚してブルツクの町のギルド支部に転勤したんだよ。子供を育てるにも田舎の方がいいって言ってね。彼女の結婚発表は青天の霹靂でね。荒れたよ。ギルドどころか、王都が」

「はあくそんなにすごい人だったんですね」

「……キャサリンすごい」

「只者じゃないとは思っていたが……思いつきり中枢の人間だったとはな」

ハジメが思っていた以上にキャサリンは、大ベテランだったことに苦笑いする。しかし、こう話していてもキリがないのでハジメは本題に移そうとする。

「まあ、それはそれとして……本題は何だ？　このまま帰してくれる訳じゃ無いんだろ」

「……分かってるじゃないか」

ハジメは元々、身分証明のためだけに来たが、手紙一つで身分が証明されると思えなかつた、証明されたとは言え何か見返りが必要だとギルド側が要求してくると予測していたが的中した。

「……で、要件は何だ？」

ハジメが聞くとイルワは、隣に立っていたドットを促して一枚の依頼書をハジメ達の前に差し出した。

「実は、君達の腕を見込んで、一つ依頼を受けて欲しいと思っている」

「……流石、大都市のギルド支部長。いい性格してるよ……で、内容は？」

「君も大概だと思うが……まあ依頼の内容だが、そこに書いてある通り、行方不明者の捜索だ。北の山脈地帯の調査依頼を受けた冒険者一行が予定を過ぎても戻ってこなかったため、冒険者の一人の実家が捜索願を出した、というものだ」

イルワの話を要約すると、つまりこういうことだ。

最近、北の山脈地帯で魔物の群れを見たという目撃例が何件か寄せられ、ギルドに調査依頼がなされた。北の山脈地帯は、一つ山を超えるとほとんど未開の地域となつてお

り、大迷宮の魔物程ではないがそれなりに強力な魔物が出没するので高ランクの冒険者がこれを引き受けた。ただ、この冒険者パーティーに本来のメンバー以外の人物がいささか強引に同行を申し込み、紆余曲折あつて最終的に臨時パーティーを組むことになった。

この飛び入りが、クデタ伯爵家の三男ウィル・クデタという人物らしい。クデタ伯爵は、家出同然に冒険者になると飛び出していった息子の動向を密かに追っていたそうなのだが、今回の調査依頼に出た後、息子に付けていた連絡員も消息が不明となり、これはただ事ではないと慌てて捜索願を出したそう。

「伯爵は、家の力で独自の捜索隊も出しているようだけど手数は多い方がいいと、ギルドにも捜索願を出した。つい、昨日のことだ。最初に調査依頼を引き受けたパーティーはかなりの手練でね、彼等に対処できない何かがあつたとすれば、並みの冒険者じゃあ二次災害だ。相応以上の実力者に引き受けてもらわないといけない。だが、生憎とこの依頼を任せられる冒険者は出払っていてね。そこへ、君達がタイミングよく来たものだから、こうして依頼しているというわけだ」

「前提として、俺達にその相応以上の実力つてやつがないとダメだろう？ 生憎俺は青ランクだぞ？」

「さつき黒のレガニドを瞬殺したばかりだろう？ それに……ライセン大峽谷を余

裕で探索出来る者を相応以上と言わずして何と云うのかな？」

「！ 何故知って……手紙か？ だが、俺はキャサリンにそんな話は……」

ハジメ達がライセン大峽谷を探索していた話は誰にもしていない。しかし、イルワがそれを知っているのは手紙に書かれていたという事以外には有り得ない。だが、何故キャサリンは、それを知っている。

「……まさか」

ハジメが答えに行き着く前に、おずおずと犯人の一人が手を上げた。ハジメが胡乱な眼差しを向ける。

「やっぱり、お前が犯人だなシア？」

「えくと、つい話が弾みまして……てへ？」

「……後でお仕置きな」

「!? ユ、ユエさんもいました！」

「……シア、裏切り者」

「二人共お仕置きな」

ハジメのお仕置き宣言に、二人共、平静を装いつつ冷や汗を掻いている。そんな様子を見て苦笑いしながら、イルワは話を続けた。

「生存は絶望的だが、可能性はゼロではない。伯爵は個人的にも友人でね、できる限り早

く捜索したいと考えている。どうか。今は君達しかいないんだ。引き受けてはもらえないだろうか？報酬も色々を用意しよう」

「何故、そんなに焦ってるんだ？」

ハジメの言葉に、イルワが初めて表情を崩す。後悔を多分に含んだ表情だ。

「彼に……ウイルにあの依頼を薦めたのは私なんだ。調査依頼を引き受けたパーティーにも私が話を通した。異変の調査といっても、確かな実力のあるパーティーが一緒なら問題ないと思った。実害もまだ出ていなかったしね。ウイルは、貴族は肌合わない」と、昔から冒険者に憧れていてね……だが、その資質はなかった。だから、強力な冒険者の傍で、そこそこ危険な場所へ行つて、悟つて欲しかった。冒険者は無理だと。昔から私には懐いてくれていて……だからこそ、今回の依頼で諦めさせたかったのに……」

「条件？」

「ああ、そんなに難しいことじゃない。ユエとシアにステータスプレートを作つて欲しい。そして、そこに表記された内容について他言無用を確約すること、更に、ギルド関連に関わらず、アンタの持つコネクションの全てを使って、俺達の要望に応え便宜を図ること。この二つだな」

「それはあまりに……」



「出来ないなら、この話はなしだ。もう行かせてもらう」

席を立とうとするハジメに、イルワもドットも焦りと苦悩に表情を歪めた。一つ目の条件は特に問題ないが、二つ目に關しては、実質、フューレンのギルド支部長が一人の冒険者の手足になるようなものだ。責任ある立場として、おいそれと許容することはできない。

「何を要求する気かな？」

「そんなに気負わないでくれ、無茶な要求はしない。ただ俺達は少々特異な存在でな、教会あたりに目をつけられると……。いや、これから先、ほぼ確実に目をつけられると思うが、その時に伝手があった方が便利だなとそう思ったただけだ。面倒事が起きた時に味方になってくれればいい。ほら、指名手配とかされても施設の利用を拒まないとか……」

「指名手配されるのが確実なのかい？ ふむ、個人的にも君達の秘密が気になって来たな。キャサリン先生が気に入っているくらいだから悪い人間ではないと思うが……。そう言えば、そちらのシア君は怪力、ユエ君は見たこともない魔法を使ったと報告があったな……。その辺りが君達の秘密か？そして、それがいずれ教会に目を付けられる代物だと……大して隠していないことからすれば、最初から事を構えるのは覚悟の上ということか……。そうなれば確かにどの町でも動きにくい……。故に便宜をと……」

「……」

イルワは、しばらく考え込んだあと、意を決したようにハジメに視線を合わせた。

「犯罪に加担するような倫理にもとる行為・要望には絶対に応えられない。君達が要望を伝える度に詳細を聞かせてもらい、私自身が判断する。だが、できる限り君達の味方になることは約束しよう……これ以上は譲歩できない。どうかな」

「……それでいい。あと報酬は依頼が達成されてからでいい。お坊ちゃん自身か遺品あたりでも持つて帰ればいいだろう？」

ハジメとしては、ユエとシアのステータスプレートを手に入れるのが一番の目的だ。この世界では何かと提示を求められるステータスプレートは持つていない方が不自然であり、この先、町による度に言い訳するのは面倒なことこの上ない。

問題は、最初にステータスプレートを作成した者に騒がれないようにするにはどうすればいいかという事だったのだが、イルワの存在がその問題を解決した。ただ、条件として口約束にしても、やはり密告の疑いはある。いずれ、ハジメ達の特異性はばれるだろうが、積極的に手を回されるのは好ましくない。なので、ハジメは、ステータスプレートの作成を依頼完了後にした。どんな形であれ、心を苛む出来事に答えをもたらしたハジメを、イルワも悪いようにはしないだろうという打算だ。

イルワもハジメの意図は察しているのだろう。苦笑いしながら、それでも搜索依頼の

引き受け手が見つかったことに安堵しているようだ。

「本当に、君達の秘密が気になつてきたが……それは、依頼達成後の楽しみにしておこう。ハジメ君の言う通り、どんな形であれ、ウイル達の痕跡を見つけてもらいたい……ハジメ君、ユエ君、シア君……宜しく頼む」

イルワは最後に真剣な眼差しでハジメ達を見つめた後、ゆっくり頭を下げた。大都市のギルド支部長が一冒険者に頭を下げる。そうそう出来ることではない。

そんなイルワの様子を見て、ハジメ達は立ち上がると気負いなく実に軽い調子で答えた。

「……ん」

「はいっ」

「あいよ、後イルワ一つ聞きたいが良いか？」

「何かね？」

ハジメはこの大都市のギルド長なら知っているかもしれないと聞いてみた。

「『ホーリー・ナイト』って言う神官の服を着た人間の情報を知らないか？」

「……『ホーリー・ナイト』？ 知らないな」

「そうか……済まないな、変なことを聞いて依頼の事は任せろ」

「ああ、頼む」

その後、支度金や北の山脈地帯の麓にある湖畔の町への紹介状、件の冒険者達が引き受けた調査依頼の資料を受け取り、ハジメ達は部屋を出たのだった。

バタンと扉が締まる。その扉をしばらく見つめていたイルワは、「ふう〜」と大きく息を吐いた。部屋にいる間、一言も話さなかつたドットが気づかわしげにイルワに声をかける。

「支部長……よかつたのですか？あのような報酬を……」

「……ウイルの命がかかつている。彼ら以外に頼めるものはいなかつた。仕方ないよ。それに、彼等に力を貸すか否かは私の判断でいいと彼等も承諾しただろう。問題ないさ。それより、彼らの秘密……」

「ステータスプレートに表示される『不都合』ですか……」

「ふむ、ドット君。知っているかい？ ハイリヒ王国の勇者一行は皆、とんでもないステータスらしいよ？」

ドットは、イルワの突然の話に細めの目を見開いた。

「！ 支部長は、彼が召喚された者……『神の使徒』の一人である？ しかし、彼はまるで教会と敵対するような口ぶりでしたし、勇者一行は聖教教会が管理しているでしょう？」

「ああ、その通りだよ。でもね……およそ四ヶ月前、その内の一人がオルクスで亡くなつたらしいんだよ。奈落の底に魔物と一緒に落ちたつてねそれも、非戦闘職でありながら勇者一行の中でも相当な実力者だったらしい」

「……まさか、その者が生きていたと？ 四ヶ月前と言えば、勇者一行もまだまだ未熟だったはずでしょう？ オルクスの底がどうなっているのかは知りませんが、とても生き残るなんて……」

ドットは信じられないと首を振りながら、イルワの推測を否定する。しかし、イルワはどこか面白そうな表情で少し懐かしく感じながら再びハジメ達が出て行つた扉を見つめた。

「そうだね。でも、もし、そうなら……なぜ、彼は仲間と合流せず、旅なんてしているのだろうね？ 彼は一体、闇の底で何を見て、何を得たのだろうね？」

「何を……ですか……」

「ああ、何であれ、きつとそれは、教会と敵対することも辞さないという決意をさせるに足るものだ。それは取りも直さず、世界と敵対する覚悟があるということだよ本当に彼

に似ているしね」

「世界と……」

「私としては、そんな特異な人間とは是非とも繋がりを持っておきたいね。例えば、彼が教会や王国から追われる身となつても、ね。もしかすると、先生もその辺りを察して、わざわざ手紙なんて持たせたのかもしれないよ」

「支部長……どうか引き際は見誤らないで下さいよ？ 貴方は前に一度、異端者。教会からは指名手配である。彼も擁護しているのですから……」

「……もちろんだとも」

しかし、彼は何でアレス君の話題を……まあ、先生辺りが妥当か……」

「……アレス君、君は今何処にいるんだい？」

スケールの大きな話に、目眩を起こしそうになりながら、それでもイルワの秘書長として忠告は忘れないドット。しかし、イルワは、何かを深く考え込みドットの忠告にも、半ば上の空で返し五年前に出会った神官の服を着た青年を思い出していたのだつた……。

## 三十話 再会

広大な平原のど真ん中に、北へ向けて真っ直ぐに伸びる街道がある。街道と言っても、何度も踏みしめられることで自然と雑草が禿げて道となっただけのものだ。この世界の馬車にはサスペンションなどというものはないので、きつとこの道を通る馬車の乗員は、目的地に着いた途端、自らの尻を慰めることになるのだろう。

そんな、整備されていない道を有り得ない速度で爆走する影がある。黒塗りの車体に二つの車輪だけで凸凹の道を苦もせず突き進むその上には、三人の人影があった。

ハジメ、ユエ、シアだ。かつてライセン大峽谷の谷底で走らせた時とは比べものにならないほどの速度で街道を疾走している。時速八十キロは出ているだろう。魔力を阻害するものがないので、魔力駆動二輪も本来のスペックを十全に発揮している。座席順は、いつもの通り、ハジメの腕の中にユエ、背中にシアという形だ。風にさらわれてシアのウサミミがパタパタとなびいていた。

「今日は快晴だな……」

天気は快晴で暖かな日差しが降り注ぎ、ユエの魔法で風圧も調整されているので絶好

のツーリング日和と言える。実際、ユエもシアも、ポカポカの日差しと心地よい風を全身に感じて、実に気持ちよさそうに目を細めていた。

「はう、気持ちいいですう、ユエさあ、帰りは場所交換しませんかあ」

「……ダメ。ここは私の場所」

「え、そんなこと言わずに交換しましょうよ、後ろも気持ちいいですよ？」

「……シアの身長的に前は無理」

「うっ、それを言われると、ハジメさん」

「諦めとけ、シア」

「うう」

そのままシアはハジメの肩に頭を乗せ全体重を掛けてもたれうずくまった。

「まあ、このペースなら後一日つてところだ。ノンストップで行くし、休める内に休ませておこう」

ハジメの言葉通り、三人は、ウィル一行が引き受けた調査依頼の範囲である北の山脈地帯に一番近い町まで後一日ほどの場所まで来ていた。このまま休憩を挟まず一気に進み、おそらく日が沈む頃に到着するだろうから、町で一泊して明朝から搜索を始めるつもりだ。急ぐ理由はもちろん、時間が経てば経つほど、ウィル一行の生存率が下がっていくからだ。



「……積極的？」

ハジメは、腕の中から可愛らしく首を傾げて自分を見上げるユエに苦笑いをして返す。

「生きてる方が感じる恩がでかいだろうし……俺的にもな、生きて帰してやりたいんだ」

「……ん、なるほど」

「それに聞いたんだがな、これから行く町は湖畔の町で水源が豊かなんだと。そのせいか町の近郊は大陸一の稲作地帯なんだそうだ」

「……稲作？」

「おう、つまり米だ米。俺の故郷、日本の主食だ。こつち来てから一度も食べてないからな。同じものかどうかは分からないが、早く行つて食べてみたい」

「……ん、私も食べたい……町の名前は？」

遠い目をして米料理や優花の作った料理に思いを馳せるハジメに、微笑ましそうな眼差しを向けていたユエは、そう言えば町の名前を聞いてなかったとハジメに尋ねる。

「………」

「……ハジメ？」

「おつ、すまない。その町の名前だったな。確か……」

我に返ったハジメはユエの眼差しに気がつき答えた。

「湖畔の町ウルだ」

~~~~~

「はあ、今日も手掛かりはなしですか……清水君、一体どこに行つてしまつたんですか……」

悄然と肩を落とし、ウルの町の表通りをトボトボと歩くのは召喚組の一人にして教師、畑山愛子だ。普段の快活な様子がなりを潜め、今は、不安と心配に苛まれて陰鬱な雰囲気を漂わせている。心なしか、表通りを彩る街灯の灯りすら、いつもより薄暗い気がする。

「愛子、あまり気を落とすな。まだ、何も分かつていないんだ。無事という可能性は十分にある。お前が信じなくてどうするんだ」

「そうですね、愛ちゃん先生。清水君の部屋だつて荒らされた様子はなかつたんです。自分で何処かに行つた可能性だつて高いんですよ？ 悪い方にはかり考えないでください」

元気のない愛子に、そう声をかけたのは愛子専属護衛隊長のデビッドと生徒の菅原妙子だ。周りには他にも、毎度お馴染みに騎士達と生徒達がいる。彼等も口々に愛子を

氣遣うような言葉をかけた。

クラスメイトの一人、清水幸利が失踪してから既に二週間と少し。愛子達は、八方手を尽くして清水を探したが、その行方はようとして知れなかった。町中に目撃情報はなく、近隣の町や村にも使いを出して目撃情報を求めたが、全て空振りだった。

当初は事件に巻き込まれたのではと騒然となったのだが、清水の部屋が荒らされていなかったこと、清水自身が「闇術師」という闇系魔法に特別才能を持つ天職を所持しており、他の系統魔法についても高い適性を持つていたことから、そうそう、その辺のゴロツキにやられるとは思えず、今では自発的な失踪と考える者が多かった。

元々、清水は、大人しいインドアタイプの人間で社交性もあまり高くなかった。クラスメイトとも、特別親しい友人はいなかったが、大迷宮で死んでしまったハジメにはある時から心を開いていたらしい、愛ちゃん護衛隊に参加も自分から参加の意思表示を驚かれ、生徒達も清水の事を心配していたが護衛隊の騎士達に至っては言わずもがな日に日に元気が無くなってる愛子の心配だけをしていた。

ちなみに、王国と教会には報告済みであり、捜索隊を編成して応援に来るようだ。清水は、魔法の才能に関して召喚された者らしく極めて優秀なので、ハジメの時のような失敗をさせない為、上層部は楽観視していない。捜索隊が到着するまで、あと二、三日といったところだ。

次々とかけられる気遣いの言葉に、愛子は内心で自分を殴りつけた。事件に巻き込まれようが、自発的な失踪であろうが心配であることに変わりはない。しかし、それを表に出して、今、傍にいる生徒達を不安にさせるどころか、気遣わせてどうするのだと。それでも、自分はこの子達の教師なのか！ と。愛子は、一度深呼吸するとペシツと両手で頬を叩き気持ちを立て直した。

「皆さん、心配かけてごめんなさい。そうですよね。悩んでばかりいても解決しません。清水君は優秀な魔法使いです。きっと大丈夫。今は、無事を信じて出来ることをしましょう。取り敢えずは、本日の晩御飯です！ お腹いっぱい食べて、明日に備えましょう！」

無理しているのは丸分かりだが、気合の入った掛け声に生徒達も「はーい」と素直に返事をする。騎士達は、その様子を微笑ましげに眺めた。

カラントツカラントツ

そんな音を立てて、愛子達は、自分達が宿泊している宿の扉を開いた。ウルスの町で一番の高級宿だ。名を「水妖精の宿」という。昔、ウルディア湖から現れた妖精を一組の夫婦が泊めたことが由来だそうだ。ウルディア湖は、ウルスの町の近郊にある大陸一の大きを誇る湖だ。

「水妖精の宿」は、一階部分がレストランになっており、ウルスの町の名物である米料

理が数多く揃えられている。内装は、落ち着きがあつて、目立ちはないが細部までこだわりが見て取れる装飾の施された重厚なテーブルやバーカウンターがある。また、天井には派手すぎないシャンデリアがあり、落ち着いた空気に花を添えていた。『老舗』そんな言葉が自然と湧き上がる、歴史を感じさせる宿だった。

当初、愛子達は、高級すぎでは落ち着かないと他の宿を希望したのだが、『神の使徒』あるいは、『豊穡の女神』とまで呼ばれ始めている愛子や生徒達を普通の宿に泊めるのは外間的に有り得ないので、騎士達の説得の末、ウルの町における滞在場所として目出度く確定した。

元々、王宮の一室で過ごしていたこともあり、愛子も生徒達も次第に慣れ、今では、すっかりリラックス出来る場所になっていた。農地改善や清水の搜索に東奔西走し疲れた体で帰つて来る愛子達にとって、この宿でとる米料理は毎日の楽しみになっていた。

全員が一番奥の専用となりつつあるVIP席に座り、その日の夕食に舌鼓を打つ。

「ああ、相変わらず美味しいいゝ異世界に来てカレーが食べれるとは思わなかつたよ」

「まあ、見た目はシチューなんだけども……いや、ホワイトカレーってあつたけ？」

「いや、それよりも天井だろ？ このタレとか絶品だぞ？ 日本負けてんじやない？」

「それは、玉井君がちゃんとした天井食べたことないからでしょ？ ホカ弁の天井と比

べちゃだめだよ」

「いや、チャーハンモドキ一択で。これやめられないよ」

極めて地球の料理に近い米料理に毎晩生徒達のテンションは上がりつばなしだ。見た目や微妙な味の違いはあるのだが、料理の発想自体はとも似通っている。素材が豊富というのも、ウルスの町の料理の質を押し上げている理由の一つだろう。米は言うに及ばず、ウルディア湖で取れる魚、山脈地帯の山菜や香辛料などもある。

美味しい料理で一時の幸せを噛み締めている愛子達のもとへ、六十代くらいの口ひげが見事な男性がにこやかに近寄ってきた。

「皆様、本日のお食事はいかがですか？ 何かございましたら、どうぞ、遠慮なくお申し付けください」

「あ、オーナーさん」

愛子達に話しかけたのは、この「水妖精の宿」のオーナーであるフォス・セルオである。スッと伸びた背筋に、穏やかに細められた瞳、白髪交じりの髪をオールバックにしている。宿の落ち着いた雰囲気がよく似合う男性だ。

「いえ、今日もとてもおいしいですよ。毎日、癒されています」

愛子が代表してニッコリ笑いながら答えると、フォスも嬉しそうに「それはようございまして」と微笑んだ。しかし、次の瞬間には、その表情を申し訳なさそうに曇らせた。

何時も穏やかに微笑んでいるフォスには似つかわしくない表情だ。何事かと、食事の手を止めて皆がフォスに注目した。

「実は、大変申し訳ないのですが……香料を使った料理は今日限りとなります」

「えっく!? それって、もうこのニルシツシル食べれないの?」

カレーが大好物の宮崎奈々がショックを受けたように問い返した。

「はい、申し訳ございません。何分、材料が切れまして……いつもならこのような事がないように在庫を確保しているのですが……ここ一ヶ月ほど北山脈が不穏ということで採取に行くものが激減しております。つい先日、調査に来た高ランク冒険者の一行が行方不明となりまして、ますます採取に行く者がいなくなりました。当店にも次にいつ入荷するかわかりかねる状況なのです」

「あの……不穏ってというのは具体的には?」

「何でも魔物の群れを見たとか……北山脈は山を越えなければ比較的安全な場所です。山を一つ越えるごとに強力な魔物がいるようですが、わざわざ山を越えてまでこちらには来ません。ですが、何人かの者がいるはずのない山向こうの魔物の群れを見たのだとか」

「それは、心配ですね……」

愛子が眉をしかめる。他の皆も若干沈んだ様子で互いに顔を見合わせた。フォスは、

「食事中にする話ではありませんでしたね」と申し訳なさそうな表情をすると、場の雰囲気盛り返すように明るくい口調で話を続けた。

「しかし、その異変ももしかするともう直ぐ収まるかもしれませんよ」

「どういうことですか？」

「実は、今日のちょうど日の入り位に新規のお客様が宿泊にいらしたのですが、何でも先の冒険者方の搜索のため北山脈へ行かれるらしいのです。フューレンのギルド支部長の指名依頼らしく、相当な実力者のようですね。もしかしたら、異変の原因も突き止めてくれるかもしれません」

愛子達はピンと来ないようだが、食事を共にしていたデビッド達護衛の騎士は一樣に「ほう」と感心半分興味半分の声を上げた。フューレンの支部長と言えばギルド全体でも最上級クラスの幹部職員である。その支部長に指名依頼されるというのは、相当どころではない実力者のはずだ。同じ戦闘に通じる者としては好奇心をそえられるのである。騎士達の頭には、有名な「金」クラスの冒険者がリストアップされていた。

愛子達が、デビッド達騎士のざわめきに不思議そうな顔をしていると、二階へ通じる階段の方から声が聞こえ始めた。男の声と少女二人の声だ。何やら少女の一人が男に文句を言っているらしい。それに反応したのはフォスだ。

「おや、噂をすれば。彼等ですよ。騎士様、彼等は明朝にはここを出るそうなので、もし



お話になるのですしたら、今のうちがよろしいかと」

「そうか、わかった。しかし、随分と若い声だ。『金』に、こんな若い者がいたか？」

デビッド達騎士は、脳内でリストアップした有名な『金』クラスに、今聞こえているような若い声の持ち主がないので、若干、困惑したように顔を見合わせた。そういう内、三人の男女は話ながら近づいてくる。

愛子達のいる席は、三方を壁に囲まれた一番奥の席であり、店全体を見渡せる場所でもある。一応、カーテンを引くことで個室にすることもできる席だ。唯でさえ目立つ愛子達一行は、愛子が『豊穰の女神』と呼ばれるようになって更に目立つようになったため、食事の時はカーテンを閉めることが多い。今日も、例に漏れずカーテンは閉めてある。そのカーテン越しに若い男女の騒がしめの会話の内容が聞こえてきた。

「楽しみですね。『ハジメさん』の故郷の料理」

「シア、故郷の料理じゃねえよ。ただ此処は米を使ってるってだけだぞ？」

「へえ。でも確か『ハジメさん』の恋人の優花さんは料理上手でしたっけ？」

「ねえ、ユエさん」

「……ん、そう聞いた。そうでしょ『ハジメ』？」

「ああ、優花の作る料理はどれも絶品だ」

その会話の内容に、そして少女の声が呼ぶ名前に、愛子と彼の幼なじみだった二人の

少女の心臓が一瞬にして飛び跳ねる。彼女達は今何と叫んだ？ 少年を何と呼んだ？

少年の声は、「あの少年」の声に似てはいないか？ 愛子と二人の脳内を一瞬で疑問が埋め尽くし、金縛りにあつたように硬直しながら、カーテンを視線だけで貫こうとでも言うように凝視する。

それは、傍らの他の生徒達も同じだった。彼らの脳裏に、およそ四ヶ月前に奈落の底へと消えていった、とある少年が浮かび上がる。クラスメイト達を化け物から守り、「異世界での死」というものを強く認識させた少年を。

尋常でない様子の愛子と生徒達に、フォスや騎士達が訝しげな視線と共に声をかけるが、誰一人として反応しない。騎士達が、一体何事だと顔を見合わせていると、愛子がポツリとその名を零した。

「……南雲君？」

無意識に出した自分の声で、有り得ない事態に硬直していた体が自由を取り戻す。愛子は、椅子を蹴倒しながら立ち上がり、転びそうになりながらカーテンを引きちぎる勢いで開け放った。

愛子に続いて妙子、奈々も椅子を蹴倒して続いた。

シャアアア!!

存外に大きく響いたカーテンの引かれる音に、ギョツとして思わず立ち止まる三人の

少年少女。

愛子は、相手を確認する余裕もなく叫んだ。大切な教え子の名前を。二人の少女は昔から一緒にいて、自分達にとって大切な幼なじみの名前を。

「ハジメ！」

「ハジメっち！」

「南雲君！」

「ああ？ ……………先生、奈々、妙子？ ってうおっ?!」

ハジメが二人に声をかける前に既に妙子と奈々が逃がすものかと言わんばかりに強く抱き着き泣き出し始めた。

「ハジメ、ハジメ！」

「よがったよお〜ハジメっち、生きでで、よがったあ〜」

「妙子、奈々……」

泣く幼なじみ二人に、随分と心配かけたとハジメは申し訳ない気持ちになる。

「すまん、二人共」

ハジメは今も、抱き着きながら泣き止まない二人に声をかけると二人は泣きながらも顔を上げた。

「大分、心配をかけちゃったな……安心しろ。俺はこの通り生きてるよ」

「ぐすつ……うん良かったっ」

「ハジメっち〜!」

ハジメは二人を泣き止ませてると、二人を知らないユエとシアがハジメに話しかけた。

「……ハジメ、その二人は?」

「あゝ、会うのが初めてだからな。ほら、前に話したろ?俺の大切な幼なじみだ」

「ああ、そこのお二人さんがハジメさんの幼なじみですかあゝ」

二人に説明していると、次に駆け寄って来てた愛子が目にいっぱい涙を溜めながら話しかけてきた。

「南雲君ですよね?」

「ああ。久しぶりだな、先生」

「やつぱり、やつぱり南雲君なんですね……生きていたんですね……」

涙目の愛子に、ハジメは特に感慨を抱いた様子もなく肩を竦めた。

「まあな。色々あったが、何とか生き残ってるよ。俺としても先生達が無事で良かった」

「よかった。本当によかったです……あつ、そうだ話が聞きたいですし、一緒にご飯はどうですか?」

「ああ、構わないユエとシアも良いか?」

「……ん」

「良いですよ〜」

二人の返事を聞き、先生達の席に向かおうとしたがハジメに抱き着いていた幼なじみの二人がハジメの肩を掴んで歩みを止めさせる。

「ハジメ、少し良い？」

「ん、なんだ妙子？」

「その可愛い二人は誰？」

「っスー……えっと、コイツ等は」

ハジメが視線をユエとシアに向けると、二人は、ハジメが説明する前に、自信満々に妙子達にとって衝撃的な自己紹介しだした。

「……ユエ」

「シアです」

「ハジメ（さん）に惚れた女（ですう）」

「「……………」」

マズイっ、と思ったハジメは気配を消してそそくさと席に向かおうとするも両肩をガツと掴まれた。

後ろを振り向くと……

「……ハジメ（つち）、少しお話をしよっか？」

それは、怖いぐらい満面な笑みの妙子と奈々だった。

「ふ、二人共、落ち着け！　少し俺の話を聞っ……」

「問答無用」

「ですよー……」

そしてハジメは先生達と話をする前に二人の幼なじみに事情の説明とお説教を一時間近く喰らってしまい、ユエとシアからの擁護もあって二人に納得して貰いハジメは解放されたのであった……。

## 三十一話

## 夜の会談

何とか幼なじみを説得する事が出来たハジメは若干、疲れを感じながらも生徒達の間に向かい、席に腰を下ろして、安堵した溜息を吐いた。

「ふう……やつと、納得して貰った」

何処まで先生達に話そうかとハジメは考えながらユエとシアに視線を転じたが二人はまだ奈々と妙子と会話をしていた。

「……それでハジメがねっ、見捨てずに私を救ってくれたんだっ」

「私もハジメさんは家族や私みたいな亜人族を差別せずに救って嬉しかったです」

「こんなの聞かされるとユエさん達が惚れてしまうのは分かるかもねっ。ねっ、タエ？」  
「うん、まあ分かるけど……うん、ハジメなら絶対しそうだしね。ハジメはそういう性格だし……」

「……ん、やっぱ二人はハジメの事がわかってる？」

「それは……ねっ？」

「十二年近く幼なじみやつてるからね。ハジメのやりそうな事ぐらい理解出来るわ」

「おお、流石幼なじみですねえ」

「えっへん、敬え！」

「奈々、調子乗らない」

ポカッ

「アダッ」

四人はそんなガールズトークを続けていると妙子は自分達にとって知りたい事を聞いた。

少し目を細めながら……

「ねえ、ユエさん、シアさん……二人は、えっと、優花と会ったらどうするの？　もし、

優花からハジメを奪おうとするなら……」

妙子の言葉の意図を察したユエは、嘘でもない本当のことを伝える。

「……そこは、安心して。私も優花に会ってみたいし、認めて貰う様に頑張る」

「私もユエさんと同じです。それに、優花さんと話してみたいです」

「うんうん。ユウカたちは私達よりもハジメたちの事を知ってるし話すから凄いいよお

」

「……ん、楽しみにしてる」



妙子の質問をユエは親指を立てながら、シアもただただ話してみたいと二人共、妙子の言った事はししないとかえした。それを見た妙子は笑みを零した。

「……………」

ハジメも自分についての変な話をされてないことに安心していると、四人のガールズトークも終わり全員が席に着い段階でお話するという尋問をハジメは、目の前の今日限りというニルシツシルに夢中で端折りに端折った答えをおざなりに返していく。

Q、橋から落ちた後、どうしたのか？

A、オルクスの「奈落」という場所に行き着いた。

Q、なぜ白髪なのか

A、生きる為に魔物の肉を食ったら、色素が落ちた。

Q、その目はどうしたのか

A、強い魔物と戦ったら溶けて失った。

Q、なぜ、直ぐに戻らなかったのか

A、戻るよりもやるべき事を見つけた。それに王国に戻ったところで何も得れないと判断したから。

そこまで聞いて愛子が、「もつと詳しく答えなさい！」と頬を膨らませて怒る。全く、迫力がないのが物悲しく、ハジメは特に感じることなく、ニルシツシルを食べるのを専

念した。

その様子にキレたのは、愛子専属護衛隊隊長のデビッドだった。見た感じ、先生に好意があるのが丸わかりだったので、愛する女性が蔑ろにされていることに耐えられなかったのだろう。拳をテーブルに叩きつけながら大声を上げた。

「おい、お前！ 愛子が質問しているのだぞ！ 真面目に答えろ！」

ハジメは、チラリとデビッドを見ると、はあと溜息を吐いた。

「食事中だぞ？ 行儀よくしろよ」

全く相手にされていないことが丸分かりの物言いに元々、神殿騎士にして重要人物の護衛隊長を任されているということから自然とプライドも高くなっているデビッドは、我慢ならないと顔を真っ赤にした。そして、何を言ってもものらしくらりとして明確な答えを返さないハジメから矛先を変え、その視線がシアに向く。

「ふん、行儀だと？ その言葉、そっくりそのまま返してやる。薄汚い獣風情を人間と同じテーブルに着かせるなど、お前の方が礼儀がなっていないな。せめてその醜い耳を切り落としたらどうだ？ 少しは人間らしくなるだろう」

侮蔑をたっぷりと含んだ眼で睨まれたシアはビクツと体を震わせた。ブルツクの町では、宿屋での第一印象や、キャサリンと親しくしていたこと、ハジメの存在もあって、むしろ友好的な人達が多かったし、フューレンでも蔑む目は多かったが、奴隷と認識さ

れていたからか直接的な言葉を浴びせかけられる事はなかった。

つまり、ハジメと旅に出てから初めて、亜人族に対する直接的な差別的言葉の暴力を受けたのである。有象無象の事など気にしないと割り切ったはずだったが、少し、外の世界に慣れてきていたところへの不意打ちだったので、思いの他ダメージがあつた。シユンと顔を俯かせてしまったシア。

よく見れば、デビッドだけでなく、チェイス達他の騎士達も同じような目でシアを見ていた。彼等がいくら愛子達と親しくなろうと、神殿騎士と近衛騎士である。聖教教会や国の中枢に近い人間であり、それは取りも直さず、亜人族に対する差別意識が強いということでもある。何せ、差別的価値観の発信源は、その聖教教会と国なのだから。デビッド達が愛子と関わるようになって、それなりに柔軟な思考が出来るようになったといつても、ほんの数ヶ月程度で変わる程、根の浅い価値観ではないのである。

あんまりと言えばあんまりな物言いに、思わず愛子が注意をしようとするが、その前に俯くシアの手を握ったユエが、絶対零度の視線をデビッドに向けた。最高級ビスクドールのような美貌の少女に体の芯まで凍りつきそうな冷ややかな眼を向けられて、デビッドは一瞬たじろぐも、見た目幼さを残す少女に気圧されたことに逆上する。普段ならここまでキレイやすい人間ではないのだが、思わず言ってしまった言葉に、愛しい愛子からも非難がましい視線を向けられて軽く我を失っているようだった。

「何だ、その眼は？ 無礼だぞ！ 神の使徒でもないのに、神殿騎士に逆らうのか！」

思わず立ち上がるデビッドを、副隊長のチェイスは諫めようとするが、それよりも早く、ユエの言葉が騒然とする場にやけに明瞭に響き渡った。

「……小さい男」

それは嘲りの言葉。たかが種族の違い如きで喚き立て、少女の視線一つに逆上する器の小ささを嗤う言葉だ。唯でさえ、怒りで冷静さを失っていたデビッドは、よりよつて愛子の前で男としての器の小ささを嗤われ完全にキレてしまった。

「……異教徒め。その獣風情と一緒に地獄へ送つてやる」

無表情で静かに呟き、傍らの剣に手をかけるデビッド。突如現れた修羅場に、生徒達はオロオロし、愛子やチェイス達は止めようとする。だが、デビッドは周りの声も聞かない様子で、遂に鞘から剣を僅かに引き抜いた。

その瞬間、

ドパンツ！

「一々、聞いてりやあ、うるせえよ」

「ガッ！」

ハジメはデビッドにゴム弾で額を撃ち、即座に移動すると、デビッドの首を掴まえ締めた。誰もが、今起こった出来事を正しく認識できず硬直していた。視線は、白日

を向いてハジメに掴まれているデビッドに向けられたままだ。と、そこへ、大きな破裂音がし何事かと、フォスがカーテンを開けて飛び込んできた。そして、目の前の惨状に目を丸くして硬直する。

代わりに、フォスが入ってきた事で愛子達が我を取り戻した。ハジメは白目を向いたままのデビッドをゴミのように投げ捨て、ドンナーをホルスターに閉まつてから全体に聞こえるようにそして、教会の騎士達だけに「威圧」を発動して愛子に冷えきった声音で告げた。

「先生、俺が戻らなかつた理由はこれだ。こいつ等、教会はゴミだ。信用も出来ないし、ただ魔力が使えないだけで亜人を差別する奴等に俺は力を貸さない。寧ろ敵側について方がマシだと思っている」

わかつたか？ そう眼で問いかけるハジメに、誰も何も言えなかつた。直接、視線を向けられたチェイス達騎士は、かかるプレッシャーに必死に耐えながら、僅かに頷くので精一杯だった。

ハジメは、続いて愛子と幼なじみ達にも視線を転じる。愛子は、何も言わない。いや、言えないのだろう。迸る威圧感のせいだけでなく、ハジメの言葉を了承してしまつたら何も分からぬまま変わってしまった教え子を放置してしまうことになる。それは、愛子の教師としての矜持が許さなかつた。

「はあ……」

少しやり過ぎたと感じたハジメは、溜息を吐き肩を竦めると、「威圧」を解いた。愛子から返事はなかったが、なんとなくその心情を察したハジメは、無理に返事を求めなかった。幼なじみ達以外の生徒達は、明らかに怯えた様子だったので、敢えて関わっては来ないだろうと推測した。

凄まじい圧迫感が消え去り、騎士達がドウツと崩れ落ちて大きく息を吐いた。愛子達も疲れたように椅子に深く座り込む。ハジメは、何事もなかったように食事を再開しながら、シユンとしているシアの頭を撫でながら話しかけた。

「シア。これが『外』での普通なんだ。気にしていたらキリがないぞ？」

「はい、そうですね……わかっただけですけれど……やっぱり、人間の方には、この耳は気持ち悪いのでしょうかね」

「そんな事ない」

「ふえ？」

「俺はシアの耳は好きだぞ」

「……私も」

「……ハジメさん、ユエさんっ！」

シアが涙目になりながら赤く染まった頬を両手で押さえイヤンイヤンし、頭上のウサ

ミミは「わーい！」と喜びを表現する様にわっさわっさわと動く。

それで、シリアスな雰囲気は一気に吹っ飛んでしまった。

すると神殿騎士の一人のチエイイスが、場の雰囲気が落ち着いたのを悟り、デビッドの治療に当たらせる。同時に、警戒心と敵意を押し殺して、微笑と共に問い掛けた。ハジメの事情はともかく、どうしても聞かなければならない事があったのだ。

「南雲君でいいでしょうか？ 先程は、隊長が失礼しました。何分、我々は愛子さんの護衛を務めておりますから、愛子さんに関することになるかと少々神経が過敏になってしまふのです。どうか、お許し願いたい」

「……なんだ？」

「はい。そのアーティファクト……でしょうか。寡聞にして存じないのですが、相当強力な物とお見受けします。弓より早く強力にもかかわらず、魔法のように詠唱も陣も必要ない。一体、何処で手に入れたのでしょうか？」

「……やつぱりね」

予想通りドンナーに興味を示すチエイイス微笑んでいるが、目は笑っていない見え見えのポーカーフェイスでハジメは、少し吹きそうになるが我慢する。

それにチエイイスは、先ほどのやり取りで、魔力が使われたような心配がないことから、弓のように純粋な物理な機構が用いられているなら量産が可能かもしれないと考える。

そして、そうなれば、戦争の行く末すら左右しかねないため、自分達が束になつてもハジメには敵わないかもしれないとは思いつつも、聞かずにはいられなかつたのだ。

吹きそうになるのを我慢するハジメが、チラリとチェイスを見る。そして、何かを言おうとして、興奮した声に遮られた。クラス男子の玉井淳史だ。

「そ、そうだよ、南雲。それ銃だろ!? 何で、そんなもん持つてんだよ!」

「(おい、玉井イイ!)」

玉井の叫びにチェイスが反応して、ハジメは内心、玉井にツツコミを入れて、睨みつける。一瞬、玉井がブルつと体が震えた。

「銃? 玉井は、あれが何か知ってるのですか?」

「え? ああ、そりゃあ、知ってるよ。俺達の世界の武器だからな」

玉井の言葉にチェイスの眼が光る。そして、ハジメをゆつくりと見据えた。

「ほう、つまり、この世界に元々あったアーティファクトではないと……とすると、異世界人によって作成されたもの……作成者は当然……」

「……俺だな」

玉井のせいで隠すのは無理と判断して、ハジメは、あっさりと自分が創り出したと答えた。チェイスは、ハジメに秘密主義者という印象を抱いていたため、あっさり認めただけで、ことに意外感を表にする。



「あつさり認めるのですね。南雲君、その武器が持つ意味を理解していますか？　それは……」

「この世界の戦争事情を一変させる……だろ？　量産できればな。大方、言いたいことはやはり戻ってこいとか、せめて作成方法を教えろとか、そんな感じだろ？　当然、全部却下だ。諦めろ」

取り付く島もないハジメの言葉。だが、チエイスも食い下がる。ハジメという戦力と銃はそれだけ魅力的だったのだ。

「ですが、それを量産できればレベルの低い兵達も高い攻撃力を得ることができません。そうすれば、来る戦争でも多くの者を生かし、勝率も大幅に上がることでしょう。あなたが協力する事で、お友達や先生の助けにもなるのですよ？　ならば……」

「なんと言われようと、協力するつもりはない。奪おうというなら敵とみなすし、後、言つたら？　俺は教会を信用してない。そんな奴等に協力する事は断じて無い」

ハジメの静かな言葉に全身を悪寒に襲われ口をつぐむチエイス。そこへ愛子が執り成すように口を挟む。

「チエイスさん。南雲君には南雲君の考えがあります。私の生徒に無理強いはいしないで下さい。南雲君も、あまり過激な事は言わないで下さい。もつと穏便に……南雲君は、本当に戻ってこないつもり何ですか？」

「ああ、まだ戻るつもりはない。明朝、仕事に出て依頼を果たしたら、そのままここを出る。だが、いざれ目的を成したら皆の下へ戻るから安心しろ」

「どうして……」

「ハジメ（つち）」

「あつ二人共これを渡しておく見たならその紙に書いてある通りにしてくれ」

愛子が悲しそうにハジメを見やり、理由を聞こうとするが、それより早くハジメが席を立ち二人の幼なじみにあるメモ用紙を渡して、ユエやシアの食事を終えたのを確認して愛子の引きとめを無視してユエとシアを連れ二階への階段を上っていつてしまった。

愛子自身も、怒涛の展開と教え子の変貌に内心激しく動揺しており、離れていくハジメを引き止めることができなかった。

チエイスは、傍らで治癒をかけられているデビッドの姿を見ながら、何かを深く考え込んでいる。

奈々と妙子はハジメが席を立った瞬間、自分達に渡されたメモのような紙を見ていた。

食事はすっかり冷めてしまい、食欲も失せた。目の前の料理を何となしに眺めながら、幼なじみ達以外の誰も、ハジメが退席した事で改めて“ハジメの生存”について深く考え始めた。

皆一様に沈んだ表情で、その日は解散となった。

~~~~~

夜中。深夜を周り、一日の活動とその後の予想外の展開に精神的にも肉体的にも疲れ果て、誰もが眠りついた頃、しかし、愛子は未だ寝付けずにいた。愛子の部屋は一人部屋で、それほど大きくはない。木製の猫脚ベッドとテーブルセット、それに小さな暖炉があり、その前には革張りのソファが置かれている。冬場には、きつと揺らめく炎が部屋を照らし、視覚的にも体感的にも宿泊客を暖めてくれるのだろう。

愛子は、今日の出来事に思いを馳せ、ソファに深く身を預けながら火の入っていない暖炉を何となしに見つめる。

するとドアからノックの音が聞こえ愛子は向かってドア越しから声をかけた。

「誰ですか、こんな時間に？」

「愛ちゃん私達だよ少し開けてくれない？」

「開けて。愛ちゃん先生」

「菅原さんと宮崎さん？」

愛子は何故、二人はこんな時間の此処に？　と思つたが何か理由があると思ひドアを開けた瞬間、奈々が愛子に抱き着いた。

「あつ、開いた」

「愛ちゃんー」

「わつ、宮崎さん、いきなり抱きつかないで下さい！」

「ゴメンつてえゝ愛ちゃん抱き心地がいいもん」

「抱き心地つてなんですか?! 私は先生ですよ! つて、それで、二人はどうして私の部屋に？」

「えつと〜」

「ハジメに貰つた紙に夜中に愛ちゃん先生の部屋に来て欲しいとあつたので」

「えつ! 南雲君が?」

「はい、話したい事があるからつて……」

「そうなんですか……」

愛子はハジメが話したい事はなんなのかと考えると、窓の方から声が聞こえた。

「おつ三人共、集まつたようだな」

「!」

ギョツとして声が出た方へ振り向く三人。そこには、窓の近くの壁にもたれながら腕

を組んで立つハジメの姿があった。驚愕のあまり舌がもつれながらも何とか言葉を発する愛子。

「な、南雲君？　な、なんでここに、どうやって……」

「ハジメ、デリカシーないよ」

「ハジメっち……」

三人のジト目にハジメは平謝りしながら声をかけた。

「いや、そんな顔すんなよスマン。後、先生、忘れたか俺の天職は錬成師だぞ」

ハジメの突然の登場に驚いていた愛子だが、落ち着きを取り戻し問い掛けた。

「こんな時間に、しかも女性の部屋にノックもなくいきなり侵入とは感心しませんよ。わざわざ菅原さん達も呼んで……一体、どうしたんですか？」

ハジメは、そんな愛子のお叱りを柳に風と受け流し、非常識な来訪の目的を告げた。

「まあ、そこは悪かったよ。他の連中に見られたくなかったんだ、この訪問を。先生と妙子達には話しておきたい事があったんだが、さつきは、教会やら王国の奴等がいたから話せなかったんだよ。内容的に、アイツ等発狂でもして暴れそうだし」

「話ですか？」

もしや、本当は戻ってくるつもりなのではと、期待に目を輝かせる愛子。生徒からの相談とあれば、まさに教師の役どころであると思っただろう。しかし、ハジメは、そ

の期待を即行で否定していく。

「いや、すまないが、まだ戻るつもりはない。だから、そんな期待した目で見るのは止めてくれ……今から話すことは、先生と妙子と奈々が一番冷静に受け止められるだろうと思つたから話す。聞いた後、どうするかは三人の判断に任せるよ」

そう言つてハジメは、オスカーから聞いた「解放者」と狂つた神の遊戯の物語を話し始めた。

ハジメが、愛子にこの話をしようと思つたのは、もちろん理由がある。神の意思に従つて、勇者であるキラキラ野郎達が盤上で踊つたとしても、彼等の意図した通り神々が元の世界に帰してくれるとは思えなかつた。魔人族から人間族を救う、すなわち起こるであろう戦争に勝利したとしても、それはそもそも神々が裏で糸を引いている結果だ。勇者などと言う面白い駒をそうそう手放す訳が無い。むしろ、勇者達を利用して新たなゲームを始めると考えた方が妥当である。

ただ、ハジメとしては、その事を、わざわざキラキラ野郎達を捜し出して伝えるつもりはなかつた。ハジメにとって大切な幼なじみ達を連れて行けば良いことだ。それに、仮に伝えたとしても、あの正義感と思ひ込みの塊のような男が、敵対心を抱いているハジメの言葉を信じるとは思えなかつた。

たつた一人の、しかも変貌した少年の言葉と、大多数の救いを求める声、どちらを信

じるかなど考えるまでもない。むしろ、大勢の人たちが信じ、崇める“エヒト様”を愚弄したとして非難されるのがオチだろう。そう言う意味からも、ハジメはキラキラ野郎に関わるつもりは毛頭なかったのである。

だが、偶然に偶然が重なって、何の因果か愛子と幼なじみの二人と再会することになった。ハジメは、知っている。愛子の行動原理が常に生徒を中心に行っていることをつまみ、異世界の事情に関わらず、生徒のために冷静な判断ができるということだ。そして、日本での慕われ具合と、今日のクラスメイト達の態度から、愛子が話したのなら、きつと彼女の言葉は光輝達にも影響を与えるだろう、とハジメは考えた。

妙子と奈々には知って欲しいから呼ぶことにした。

その結果、彼等の行動にどのような影響が出るのかはわからない。だが、この情報により、光輝達が神々の意図するところとは異なる動きをすれば、それだけ神の光輝達への注意が増すはずだ。ハジメは、大迷宮を攻略する旅中で自分が酷く目立つ存在になると推測しており、最終的には神々から何らかの干渉を受ける可能性を考えている。なので、間接的に信頼のある人物から情報を伝えてもらうことで、光輝達の行動を乱し、神から受ける注目を遅らせる、ないし分散させることを意図したのである。

また、神に縋る以外で、更に一つの目的であるハジメとも異なる帰還方法を探っていくれるのではという意図も僅かにある。更に言えば、かつて“解放者”がされたように、

本来味方であるはずの人々を操り敵対させるといふ方法を光輝達で再現されないように、神への不信感を植えつけることで楔を打っておくという意図もある。

もつとも、この考えは偶然愛子と幼なじみ達に再会したことからの単なる思いつきであり、ハジメ自身大して期待していない。ハジメとしては、クラスメイト達に対して恨みも憎しみもない。ただ、自分にとつての大切な人達を守りたいだけである。利用できればそうするし、役に立ちそうになれば放置である。今回は、たまたま利用できそうなので情報を開示したに過ぎない。

ハジメから、この世界の真実を聞かされ呆然とする三人。どう受け止めていいかわからないようだ。情報を咀嚼し、自らの考えを持つに至るには、まだ時間が掛かりそうである。

「まあ、そういうわけだ。俺が奈落の底で知った事はな。これを知ってどうするかは先生と二人に任せるよ。戯言と切って捨てるもよし、真実として行動を起こすもよし。好きにしてくれ」

「な、南雲君は、もしかして、その“神々”をどうにかしようかと……旅を？」

「ああ、俺は神殺しをするつもりだ」

「アテがあるのハジメ？」

「うん、そうだよっ、絶対危ないてっ！」



「危ないのは承知だし、アテなら大迷宮が鍵だ。興味があるなら探索したらいい。オルクスの百階を超えれば、めでたく本当の大迷宮だ。もつとも、今日の様子を見る限り、行っても直ぐに死ぬと思うけどな。あの程度の「威圧」に耐えられないようじゃ論外だがな」

三人は、夕食時のハジメから放たれたプレッシャーを思い出す。そして、どれだけ過酷な状況を生き抜いたのかと改めてハジメに同情やら称賛やら色々なものが詰まった複雑な目差しを向けた。

「奈々、同情なんかしなくていい」

「うっ、でも……」

「俺はお前達と浩介、そして優花と再会する為にも生きて来たんだ。まだ再会は先だと思いがな……そういえば優花は王国いるのか？」

「いや、大迷宮よハジメ」

「はあっ?! 何で、優花が大迷宮に一人でか？」

「そこは安心して、浩ちゃんがついてるから」

「浩介がついてるなら……まあ、うん安心は出来る」

「どうしたのハジメ? そんなに焦って?」

「いや、無事なら良い。しかし手紙のやり取りをしてるなら伝えてくれないか？」

「本当に注意するのは魔物じゃなく仲間の方だ」

「[「!」]」

「どつどついう事ですか?!!」

「玉井達の反応を見て俺はベヒモスと一緒に落ちた事になってんだろ?」

「はい、そう聞きましたけど……」

「それは違う、本当は俺と優花を明確に狙って魔法をぶつけられた」

「え? 誘導? 狙って?」

「やっぱり!」

わけがわからないといった表情の愛子と自分達の考えた事が当たったことに驚く二人だが、ハジメは、容赦なく愛子を更なる悩みに突き落とす言葉を残す。

「俺は、クラスメイトの誰かに殺されかけたって事だ」

「ツ!?!」

顔を蒼白して硬直する愛子に「もし、優花と浩介が大迷宮にいるなら連れ戻して欲しい。後、妙子と奈々も元気にやっていてくれ」と言い残し、ハジメは部屋を出ていったのだった。

シンとする部屋に冷気が吹き込んだように錯覚し、愛子は両腕で自らの体を抱きしめ

蹲り、妙子と奈々が駆け寄って励ましていた。

しかし、愛子は動揺せずいられた。大切な生徒が仲間を殺そうとしたかもしれない。それも、死の瀬戸際で背中を狙うという卑劣な手段で。生徒が何より大切な子には、受け入れ難い話だ。だが、否定すればハジメの言葉も理由もなく否定することになる。生徒を信じたい心がせめぎ合う。

そんな愛子に奈々と妙子はある提案をした。

「愛ちゃん先生、私達に考えがあります」

「考えですか……」

「はい、私達もまだハジメと話したい事があります。ですので——」

妙子は愛子にある提案を話した。

「！ それは良い考えですねっ、分かりました！ 皆さん明日は頑張りますよっ！」

「はいっ！」

そうして、ある宿の下、一人の教師と二人の生徒は団結したのだった……。

## 三十二話

## 北の山脈地帯

夜明け。

月が輝きを薄れさせ、東の空がしらみ始めた頃、ハジメ、ユエ、シアの三人はすっかり旅支度を終えて、「水妖精の宿」の直ぐ外にいた。手には、移動しながら食べられるようにと握り飯が入った包みを持っている。極めて早い時間でありながら、嫌な顔一つせず、朝食にとフォスが用意してくれたものだ。流石は高級宿、粋な計らいだと感心しながらハジメ達は遠慮なく感謝と共に受け取った。

朝靄が立ち込める中、ハジメ達はウルの町の北門に向かう。そこから北の山脈地帯に続く街道が伸びているのだ。馬で丸一日くらいだというから、魔力駆動二輪で飛ばせば三、四時間くらいで着くだろう。

ウイル・クデタ達が、北の山脈地帯に調査に入り消息を絶つてから既に五日。生存は絶望的だ。ハジメも、ウイル達が生きている可能性は低いと考えているが、万一ということもある。生きて帰せば、イルワのハジメ達に対する心象は限りなく良くなるだろうから、出来るだけ急いで搜索するつもりだ。幸いなことに天気は快晴。搜索にはもって

こいの日だ。

幾つかの建物から人が活動し始める音が響く中、表通りを北に進み、やがて北門が見えてきた。と、ハジメはその北門の傍に複数の人の気配を感じ目を細める。特に動くわけでもなくたむろしているようだ。

朝靄をかきわけ見えたその姿は……愛子と生徒五人の姿だった。

「……何となく想像つくけど一応聞こうか……何してんの？」

ハジメが半眼になって愛子に視線を向ける。

「私達も行きます。行方不明者の捜索ですよ？ 人数は多いほうがいいです」

「却下だ。行きたきや勝手に行けばいい。が、一緒に断る」

「な、なぜですか？」

「単純に足の速さが違う。先生達に合わせてチンタラ進んでなんてられないんだ」

見れば、愛子達の背後には馬が人数分用意されていた。しかし、ハジメは乗馬できるのか？と視線を送る。特に奈々に対して、

「アレ……なんか私、ハジメつちに馬鹿にされている気がする」

奈々が何か言ってるがスルーし、ハジメはそんな疑問を抱いていると、妙子が脅し紛いの発言を吹っかけてきた。

「あら、そんな事言っただい？」

「あ？」

「優花にハジメが女の子を二人侍らせてるって言うよ、色々脚色を入れてね」

「おいっ、それは卑怯だぞ！」

「で、どうするの、ハ・ジ・メ？」

声を荒あげるが、妙子は我関せず「へい、言っちゃうよ」と煽り口調でどんだんハジメを追い込んでいく。

「グツ……はあく、わかつた。わかつた同行を許すから優花に変な事を伝えないでくれ頼む」

「交渉成立ね」

「はいはい」

ハジメは脅され肩を竦めながら腹を括って、愛子達の同行を許すと愛子が寄って来た。

「南雲君、先生は先生として、どうしても南雲君からもっと詳しい話を聞かなければなりません。だから、きちんと話す時間を貰えるまでは離れませんし、逃げれば追いかけます。南雲君にとって、それは面倒なことではないですか？ 移動時間とか搜索の合間の時間で構いませんから、時間を貰えませんか？ そうすれば、南雲君の言う通り、この町でお別れできますよ」

「分かったよ、先生だがいつても話せることなんて殆どないけどな……」

「構いません。ちゃんと南雲君の口から聞いておきたいだけですから」

「はあ、全く、先生はブレないな少し安心するよ」

「当然です!」

ハジメが折れたことに喜色を浮かべ、むんつ! と胸を張る愛子。どうやら交渉が上手くいったようだ、生徒達もホツとした様子だ。

「……ハジメ、連れて行くの?」

「ああ、この人は、どこまでも『教師』なんだな。生徒の事に関しては妥協しねえだろ。放置しておく方が、後で絶対面倒になるし……妙子のあの脅しには敵わない」

「ほえ、ハジメさん妙子さんには弱いんですね」

「いや、脅しが怖いだけだ」

「ハジメ、何か言った?」

「なにも言っていないぞ」

妙子のニコニコと問い詰めて来たが棒読みで返事をしてハジメはそのまま宝物庫から魔力駆動四輪を取り出した。ポンポンと大型の物体を消したり出現させたりするハジメに、愛子達は、おそらくアーティファクトを使っているのだらうとは察しつつも、やはり驚かずにはいらなかった。

前方に山脈地帯を見据えて真っ直ぐに伸びた道を、ハマーに似た魔力駆動四輪が爆走する。サスペンションがあるので、街道とは比べるべくもない酷い道ではあるが、大抵の衝撃は殺してくれる上、二輪と同じく錬成による整地機能が付いているので、車内は当然、車体後部についている硬い金属製の荷台に乗り込むことになった男子生徒も特に不自由さは感じていないようだった。

ハジメは愛子と色々な話をして今は失踪している清水の事を聞いていた。

「へえー、清水の奴がいなくなったのか……」

「はい。突然、清水君がいなくなりました……あんな積極的に貢献していたのに……」  
「……そうか」

しかし、清水は勝手に居なくなる奴じゃないと知っているハジメは首を傾げながら、昔のこと、自分と清水と初めて会った時のことを思い出していた。

~~~~~

『おい、お前、大丈夫か?』

『えつ、あ、あの! ありがとう! 助けてくれて。でも君も怪我がつ』

『あー、怪我のことは心配すんな、平気だからな。俺は南雲ハジメだ。お前は?』



『し、清水幸利です』

『そうか、清水とりあえず、お前もケガしてるから一緒に保健室行くか?』

『う、うん』

~~~~~

やはり、ハジメとしての清水のことが気になる。

「もし、山脈に清水の痕跡が見つかったなら捜すのを手伝おう」

「! 南雲君、ありがとうございます!」

ハジメはウィルの件が優先だが清水にはそれなりに友好関係があったので捜索の手伝いを了承した。

### 北の山脈地帯

標高千メートルから八千メートル級の山々が連なるそこは、どういうわけか生えている木々や植物、環境がバラバラという不思議な場所だ。日本の秋の山のような色彩が見られたかと思ったら、次のエリアでは真夏の木のように青々とした葉を広げたり、逆に枯れ木ばかりという場所もある。

また、普段見えている山脈を越えても、その向こう側には更に山脈が広がっており、北へ北へと幾重にも重なっている。現在確認されているのは四つ目の山脈までで、その向こうは完全に未知の領域である。何処まで続いているのかと、とある冒険者が五つ目の山脈越えを狙ったことがあるそうだが、山を一つ越えるたびに生息する魔物が強力になつていくので、結局、成功はしなかった。

ちなみに、第一の山脈で最も標高が高いのは、かの【神山】である。今回、ハジメ達を訪れた場所は、神山から東に千六百キロメートルほど離れた場所だ。紅や黄といった色鮮やかな葉をつけた木々が目を楽しませ、知識あるものが目を凝らせば、そこかしこに香辛料の素材や山菜を発見することができる。ウルが潤うはずで、実に実りの多い山である。

麓に四輪を止めると、しばらく見事な色彩を見せる自然の芸術に見蕩れた。女性陣の誰かが「ほう」と溜息を吐く。先程まで、生徒の膝枕で爆睡するという失態を犯し、真っ赤になつて謝罪していた愛子も、鮮やかな景色を前に、彼女の黒歴史を頭の奥へ追いやることに成功したようである。

「広いなあ……アレを使うか」

ハジメは、もつとゆつくり鑑賞したい気持ちを押さえて、四輪を「宝物庫」に戻すと、代わりに実用試験と兼ねて、とある物を取り出した。それは、全長三十センチ程の鳥型

の模型と小さな石が嵌め込まれた指輪だった。模型の方は灰色で頭部にあたる部分には水晶が埋め込まれている。

ハジメは、指輪を自らの指に嵌めると、同型の模型を四機取り出し、おもむろに空中へ放り投げた。そのまま、重力に引かれ地に落ちるかと思われた偽物の鳥達は、しかし、その場でふわりと浮く。愛子達が「あつ」と声を上げた。

四機の鳥は、その場で少し旋回すると山の方へ滑るように飛んでいった。

「あの、あれは……」

「アレは俺が作った無人偵察機の『オルニス』だ」

「む、無人偵察機……」

今回は、搜索範囲が広いので上空から確認出来る範囲だけでも無人偵察機で確認しておくのは有用だろうと取り出したのである。既に彼方へと飛んでいった無人偵察機を遠くに見つめながら、愛子達は、もういちいちハジメのすることに驚くのは止めようと、おそらく叶うことのない誓いを立てるのだった。

ハジメ達は、冒険者達も通ったであろう山道を進む。魔物の目撃情報があつたのは、山道の中腹より少し上、六合目から七号目の辺りだ。ならば、ウィル達冒険者パーティーも、その辺りを調査したはずである。そう考えて、俺は無人偵察機をその辺りに先行させながら、ハイペースで山道を進んだ。

「おおよそ一時間と少しくらいで六合目に到着したハジメ達は、一度そこで立ち止まった。理由は、そろそろ辺りに痕跡がないか調べる必要があつたのと……」

「はあはあ、きゆ、休憩ですか……けほつ、はあはあ」

「ぜえー、ぜえー、大丈夫ですか……愛ちゃん先生、ぜえーぜえー」

「うえつぷ、もう休んでいいのか？ はあはあ、いいよな？ 休むぞ？」

「……ひゆうー、ひゆうーハジメつち、ヤバイ」

「ゲホゲホ、南雲達は化け物か……」

「どんだけ、体力がねえんだ？……いや、俺が化け物なだけか？」

予想以上に愛子達の体力がなく、休む必要があつたからである。もちろん、本来、愛子達のステータスは、この世界の一般人の数倍を誇るの、六合目までの登山ごときでここまで疲弊することはない。ただ、ハジメ達の移動速度が速すぎて、殆ど全力疾走しながらの登山となり、気がつけば体力を消耗しきってフラフラになっていたのである。

四つん這いになり必死に息を整える愛子達に、ハジメは若干困った視線を向けつつも、どちらにしろ、詳しく周囲を探る必要があるので休憩がてら近くの川に行くことにした。ここに来るまでに、無人偵察機からの情報で位置は把握している。

「……しようがねえな」

未だ荒い呼吸を繰り返す愛子達を見兼ねてハジメは妙子と奈々、愛子を軽々しく持ち

上げた。

「ハジメ?!」

「おお〜」

「なっ南雲君?!」

「しようがねえから運んでやる」

「ありがと、ハジメ」

「ありがと〜、ハジメっち〜」

「あ、ありがとうございます」

「じゃあ、行くぞ」

ハジメが出発を促すと男子生徒三人が待ったを掛けた。

「南雲! 俺たちは?!」

「そうだつ!」

「は? お前等は男だろ? 自力で頑張れよ。後、俺は流石に六人を持つのは流石に面倒くさ〜」

「クソオー!」

嘆いている男子生徒達を無視してハジメ達は先に川へと向かった。ウィル達も、休憩がてらに寄った可能性は高い。そして、ハジメ達は川に着くと、ユエ達は男子共を待つ

時間に休憩を俺は川の上流にオルニスを飛ばし痕跡を探していた。

「……まだ、改良の余地はまだあるな」

七機の操作が限界なことに更なる改良が必要と感じながら痕跡を探すハジメ。しばらくするとフラフラしながら男子生徒達も合流した。そしてハジメの方にも進展があつた。

「……………これは」

「ん……………何か見つけた？」

ハジメがどこか遠くを見るように茫洋とした目をして呟くのを聞き、ユエが確認する。その様子に、愛子達も何事かと目を瞬かせた。

「川の上流に……………これは盾か？ それに、鞆も……………まだ新しいみたいだ。当たりかもしれない。ユエ、シア、妙子達も行くぞ」

「ん……………」

「はいですー！」

ハジメ達が、阿吽の呼吸で立ち上がり出発の準備を始めた。愛子達は本音で言えばまだまだ休んでいなかったが、無理を言つて付いて来た上、何か手がかりを見つけた様子となれば動かないわけには行かない。疲労が抜けきらない重い腰を上げて、再び猛スピードで上流へと登っていく俺達に必死になつて追隨した。

ハジメ達が到着した場所には、ハジメが無人偵察機で確認した通り、小ぶりの金属製のラウンドシールドと鞆が散乱していた。ただし、ラウンドシールドは、ひしゃげて曲がっており、鞆の紐は半ばで引きちぎられた状態で、だ。

「これは……」

ハジメ達は、注意深く周囲を見渡す。すると、近くの木の皮が禿げているのを発見した。高さは大体二メートル位の位置だ。何か擦れた拍子に皮が剥がれた、そんな風に見える。高さからして人間の作業ではないだろう。ハジメは、シアに全力の探知を指示しながら、自らも感知系の能力を全開にして、傷のある木の向こう側へと踏み込んでいった。

先へ進むと、次々と争いの形跡が発見できた。半ばで立ち折れた木や枝。踏みしめられた草木、更には、折れた剣や血が飛び散った痕もあった。それらを発見する度に、特に愛子達の表情が強ばっていく。しばらく、争いの形跡を追っていくと、シアが前方に何か光るものを発見した。

「ハジメさん、これ、ペンダントでしょうか？」

「ん？ ああ……遺留品かもな。確かめよう」

シアからペンダントを受け取り汚れを落とすと、どうやら唯のペンダントではなく口ケツトのようだと思がつく。留め金を外して中を見ると、女性の写真が入っていた。お

そらく、誰かの恋人か妻と言ったところか。大した手がかりではないが、古びた様子はないので最近のもの……冒険者一行の誰かのものかもしれない。なので、一応回収しておく。

その後も、遺品と呼ぶべきものが散見され、身元特定に繋がりそうなものだけは回収していく。どれくらい探索したのか、既に日はだいぶ傾き、そろそろ野営の準備に入らねばならない時間に差し掛かっていた。

しかし、未だに野生の動物以外で生命反応はないことに訝しむハジメ。ウィル達を襲った魔物との遭遇も警戒していたが、それ以外の魔物すら感知していない。位置的には八合目と九合目の間と言ったところだが、山は越えていないとは言え、宿の主人のフォスから聞いた情報だと普通なら、弱い魔物の一匹や二匹出てもおかしくないはずだ。

「……逆に不気味だな……っ！　これは?!」

不気味に感じていた、その時だった。再び、無人偵察機が異常のあった場所を探し当たった。東に三百メートル程いったところに大規模な破壊の後があったのだ。ハジメは全員を促してその場所に急行した。

「おいおい、何があつてこうなつたんだよコレ……」

そこは大きな川だった。上流に小さい滝が見え、水量が多く流れもそれなりに激し



い。本来は真っ直ぐ麓に向かって流れていたものであろうが、現在、その川は途中で大きく抉れており、小さな支流が出来ていた。まるで、横合いからレーザーか何かに抉り飛ばされたようだ。

そのような印象を持ったのは、抉れた部分が直線的であったのと、周囲の木々や地面が焦げていたからである。更に、何か大きな衝撃を受けたように、何本もの木が半ばからへし折られて、何十メートルも遠くに横倒しになっていた。川辺のぬかるんだ場所には、三十センチ以上ある大きな足跡も残されている。

「ここで本格的な戦闘があつたようだな……この足跡、大型で二足歩行する魔物……確か、山二つ向こうにはブルータルって魔物がいたな。だが、この抉れた地面は……」

ハジメは、間違い無くこの地面とこの場に残る魔力の残留を感じて、このクレーターは、ブルタールの仕様じゃないと推測できる。それは、同じく感じ取っていたユエも同じらしい。そして、この山脈地帯には、それ以上の存在がいるということ。

ハジメは、無人偵察機を上流に飛ばしながら自分達は下流へ向かうことにした。ブルタールの足跡が川縁にあるということは、川の中にウイル達が逃げ込んだ可能性が高いということだ。ならば、きつと体力的に厳しい状況にあつた彼等は流された可能性が高いと考えたのだ。

ハジメの推測に他の者も賛同し、今度は下流へ向かって川辺を下っていった。する

と、今度は、先ほどのものとは比べ物にならないくらい立派な滝に出くわした。ハジメ達は、軽快に滝横の崖をひよいひよいと降りていき滝壺付近に着地する。滝の傍特有の清涼な風が一日中行っていた探索に疲れた心身を優しく癒してくれる。と、そこでハジメの「気配感知」に反応が出た。

「ユエっ!」

「…………ハジメ?」

ユエが直ぐ様反応し問いかける。ハジメはしばらく、目を閉じて集中した。そして、おもむろに目を開けると、驚いたような声を上げた。

「気配感知に掛かった。感じから言って人間だと思う。場所は……あの滝壺の奥だ」

「生きてる人がいるってことですか!」

シアの驚きを含んだ確認の言葉にハジメは頷いた。人数を問うユエに「一人だ」と答える。愛子達も一様に驚いているようだ。それも当然だろう。生存の可能性はゼロではないとは言え、実際には期待などしていなかった。ウィル達が消息を絶ってから五日は経っているのである。もし生きているのが彼等のうちの一人なら奇跡だ。

「ユエ、頼む」

「…………ん」

ハジメは滝壺を見ながら、ユエに声をかける。ユエは、それだけで意図を察し、魔法

のトリガーと共に右手を振り払った。

「――『波城』　『風壁』」

すると、滝と滝壺の水が、紅海におけるモーセの伝説のように真つ二つに割れ始め、更に、飛び散る水滴は風の壁によって完璧に払われた。

詠唱をせず陣もなしに、二つの属性の魔法を同時に、応用して行使したことに愛子達は、もう何度目かわからない驚愕に口をポカンと開けた。きつと、かつてのヘブライ人達も同じような顔をしていたに違いない。

魔力も無限ではないので、ハジメは、愛子達を促して滝壺から奥へ続く洞窟らしき場所へ踏み込んだ。洞窟は入って直ぐに上方へ曲がっており、そこを抜けるとそれなりの広さがある空洞が出来ていた。天井からは水と光が降り注いでおり、落ちた水は下方の水溜りに流れ込んでいる。溢れないことから、きつと奥へと続いているのだろう。

その空間の一番奥に横倒しになっている男を発見した。傍に寄って確認すると、二十歳くらいの青年とわかった。端正で育ちが良さそうな顔立ちだが、今は青ざめて死人のような顔色をしている。

「微かに息をしているが、こりゃ、起きるのに時間が掛かるな……」

気づかわしげに愛子が容態を見ているが、ハジメは手っ取り早く青年の正体を確認したいのでギリギリと力を込めた義手デコピンを眠る青年の額にぶち当てた。

バチコンツ!!

「ぐわっ!!」

悲鳴を上げて目を覚まし、額を両手で抑えながらのたうつ青年。愛子達が、あまりに強力なデコピンと容赦のなさに戦慄の表情を浮かべた。ハジメは、そんな愛子達をスルーして、涙目になっている青年に近づくと端的に名前を確認する。

「お前が、ウイル・クデタか? クデタ伯爵家三男の」

「いつつ、えつ、君達は一体、どうしてここに……」

状況を把握出来ていないようで目を白黒させる青年に、ハジメは落ち着かせるように声をかける。

「一旦、落ち着け。デコピンはすまないが、質問に答えてくれないか」

「えつ、えつ!!」

「お前は、ウイル・クデタか?」

「えつと、うわつ、はい! そうです! 私がウイル・クデタです! はい!」

「そうか……俺はハジメだ。南雲ハジメ。フューレンのギルド支部長イルワ・チャングからの依頼で捜索に来た。君が生きていてよかった」

「イルワさんが!? そうですか。あの人が……また借りができてしまったようだ……あの、あなたも有難うございます。イルワさんから依頼を受けるなんてよほどの凄腕なの

ですね」

「ハジメはウイルの生存を確認ができて少し頬が緩んだが、すぐに平常に戻り問い掛けた。」

「すまないが、ウイル、君に何があつたか教えて欲しい」

「あつはいっ 実は……………」

要約するところだ。

ウイル達は五日前、ハジメ達と同じ山道に入り五合目の少し上辺りで、突然、十体のブルータルと遭遇したらしい。流石に、その数のブルータルと遭遇戦は勘弁だと、ウイル達は撤退に移つたらしいのだが、襲い来るブルータルを捌いているうちに数がどんどん増えていき、気がつけば六合目の例の川にいた。そこで、ブルタールの群れに囲まれ、包囲網を脱出するために、盾役と軽戦士の二人が犠牲になつたのだという。それから、追い立てられながら大きな川に出たところで、前方に絶望が現れた。

漆黒の竜だつたらしい。その黒竜は、ウイル達が川沿いに出てくるや否や、特大のブレスを吐き、その攻撃でウイルは吹き飛ばされ川に転落。流されながら見た限りでは、そのブレスで一人が跡形もなく消え去り、残り二人も後門のブルータル、前門の竜に挟撃されていたという。

ウイルは、流されるまま滝壺に落ち、偶然見つけた洞窟に進み空洞に身を隠していた

らしい。何となく、誰かさんの境遇に少し似ていると思わなくもない。

ウイルは、話している内に、感情が高ぶったようです。泣きを始めた。無理を言っ  
て同行したのに、冒険者のノウハウを嫌な顔一つせず教えてくれた面倒見のいい先輩冒  
険者達、そんな彼等の安否を確認することもせず、恐怖に震えてただ助けが来るのを待  
つことしか出来なかった情けない自分、救助が来たことで仲間が死んだのに安堵してい  
る最低な自分、様々な思いが駆け巡り涙となつて溢れ出す。

「わ、わだじはさいでい。うう、みんなじんでしまったのに、何のやぐにもただない、  
ひつく、わたじだけ生き残つて……それを、ぐす……よろこんでる……わたじはっ！」  
洞窟の中にウイルの慟哭が木霊する。誰も何も言えなかつた。顔をぐしやぐしやに  
して、自分を責めるウイルに、どう声をかければいいのか見当がつかなかつた。生徒達  
は悲痛そうな表情でウイルを見つめ、愛子はウイルの背中を優しくさする。ユエは何時  
もの無表情、シアは困つたような表情だ。

「……」

が、ウイルが言葉に詰まつた瞬間、彼の傍にいたハジメがウイルの胸倉を掴み上げ人  
外の膂力で持ち上げ宙吊り状態にした。そして、息がつまり苦しそうなウイルに、意外  
なほど透き通つた声で語りかけた。

「生きたいと願うことの何が悪い？　生き残つたことを喜んで何が悪い？　その願ひも

感情も当然にして自然にして必然だ。ウイル、お前は人間として、極めて正しい」  
「だ、だが……私は……」

「それでも、死んだ奴らのことが気になるなら……それを背負って、生き続け守りたい者を見つけたりして、生きたい目的を探せ。そして、これから先も足掻いて、足掻いて死ぬ気で生き続けろ。そうすれば、いつかは……今日、生き残った意味があつたつて、そう思える日が来るだろう」

「……生き続ける」

涙を流しながらも、ハジメの言葉を呆然と繰り返すウイル。ハジメは、ウイルを乱暴に放り出し、自分に向けて「何やってんだ」と苦笑いしてツツコミを入れる。

「すまん、ウイル……少し熱が入った」

「いえつ、大丈夫です……」

ハジメは軽く自己嫌悪に陥っていると、ハジメのもとにトコトコと傍に寄つて来たユエ、そして、シアも励ましに来た。

「……大丈夫、ハジメは間違つてない」

「……ユエ、ありがとな心配してくれて」

「……ん」

「私もハジメさんの意見に賛同ですっ」

「シアもありがとさん」

「えへへへ」

二人の励ましで何とか切り替えるハジメ。そうだ、自分には大切な人達がいる。そして、戻らないといけないのだ。最愛優花の人の下へと……

ハジメは今もずっと胸ポケットにしまっている最愛の人の髪飾りをポケットに入れたままギュツと握り締めた。

「……よし、ウイルの生存の確認が出来たし、清水の痕跡を探しながら下山する……ッ！」  
ハジメは全員を促して清水の搜索及び下山をしようとした瞬間、突如、強大な魔物の様な存在が接近していることを感知した。それは、再度、ユエの魔法で滝壺から出てきた一行を熱烈に歓迎するものがいたからだ。

「グウルルル」

「もしかして、あれか？ 漆黒の竜って奴は……」

低い唸り声を上げ、漆黒の鱗で全身を覆い、翼をはためかせながら空中より金の眼で睥睨する……それはまさしく「竜」だった……。



## 三十三話 黒竜との戦い

その竜の体長は七メートル程。漆黒の鱗に全身を覆われ、長い前足には五本の鋭い爪がある。背中からは大きな翼が生えており、薄らと輝いて見えることから魔力で纏われているようだ。空中で翼をはためかせる度に、翼の大きさからは考えられない程の風が渦巻く。だが、何より印象的なのは、夜闇に浮かぶ月の如き黄金の瞳だろう。爬虫類らしく縦に割れた瞳孔は、剣呑に細められていながら、なお美しさを感じさせる光を放っている。

その黄金の瞳が、空中よりハジメ達を睥睨していた。低い唸り声が、黒竜の喉から漏れ出している。

その圧倒的な迫力は、かつてライセン大峡谷の谷底で見たハイベリアの比ではない。ハイベリアも、一般的な認識では、厄介なことこの上ない高レベルの魔物であるが、目の前の黒竜に比べれば、まるで小鳥だ。その偉容は、まさに空の王者というに相応しかった。

「……ちっ、あれがウィルの言っていた黒竜か」

その圧からして、奈落の主のヒュドラより弱いと思われるが九十層レベルなのは間違いない。黒竜は、ウィルの姿を確認するとギロリとその鋭い視線を向けた。そして、硬直する人間達を前に、おもむろに頭部を持ち上げ仰け反ると、鋭い牙の並ぶ顎門をガパツと開けてそこに魔力を集束しだした。

キュウワアアア!!

不思議な音色が夕焼けに染まり始めた山間に響き渡る。ハジメはあのプレスはマズイと察知する。

「ッ！ 退避しろ！」

ハジメは警告を発し、自らもその場から一足飛びで退避した。ユエやシアも付いて来ている。だが、そんな警告に反応できない者が多数、いや、この場合ほぼ全員と言っていいだろう。愛子や生徒達、そしてウィルもその場に硬直したまま動いていない。愛子達は、あまりに突然の事態に体がついてこず、ウィルは恐怖に縛られて視線すら逸らせていなかった。

「チツイ!!」

「ハジメ！」

「ハジメさん！」

ハジメは、*“念話”*でユエとシアに指示を出しつつ、*“縮地”*で一気に元いた場所に

戻り、愛子達と黒竜の間に割り込み、“宝物庫”から二メートル程の枢型の大盾を虚空に取り出し、左腕を突き出して接続、魔力を流して大盾の下部からガシユン！と杭を出現させる。そして、それを勢いよく地面に突き刺した。

直後、竜からレーザーの如き黒色のブレスが一直線に放たれた。音すら置き去りにして一瞬で大盾に到達したブレスは、轟音と共に衝撃と熱波を撒き散らし大盾の周囲の地面を融解させていく。

「ぐうー！ おおおおお！！」

ハジメは、氣迫を込めた雄叫びを上げてブレスの圧力に抗う。体と一緒に、大盾はいつの間にか紅く光り輝いていた。だが、ブレスは余程の威力を持つているらしく、しばらく拮抗した後、その守りを突破して大盾に直撃した。大盾は、それでもブレスに耐えた。ハジメの“金剛”すら突破する威力と熱に徐々にその表面を融解させていくが、壊れそうになるたびに“錬成”で即座に修復し、その突破を許さない。

固定のために地面に差し込んだ杭が圧力に負けて地面を抉りながら徐々に後退していく。靴からスパイクを錬成し、再度、金剛を張り直してひたすら耐えた。大盾と連結した左腕を突き出し、更に右腕も添える。

取り出した大盾は、タウル鉱石を主材にシユタル鉱石を挟んでアザンチウムで外側をコーティングしたものだ。錬成師であるハジメならば、仮にアザンチウムの耐久力を超

える攻撃をされても、数秒でも耐えられるなら直ちに修復することができる。仮に突破されても、二層目のシユタル鉱石は魔力を注いだ分だけ強度を増す性質を持つので、ハジメの魔力ならまず突破はされない。この拮抗状態にハジメは笑みを零しながら呟いた。

「グウツ……我慢比べかよ、上等だ」

ブレスは未だに続いている。周囲にあつた川の水は熱波で蒸発し、川原の土や石は衝撃で吹き飛びひどい有様だ。ブレスの直撃を受けて、どれほどの時間が経つたのか。ハジメは、永遠に等しいほど長い時間だと感じているが、実際には十秒経つたか否かといったところだろう。歯を食いしばりながら、そんな事を考えていると、遂に、待望の声が聞こえた。

「『禍天』」

その魔法名が宣言された瞬間、黒竜の頭上に直径四メートル程の黒く渦巻く球体が現れる。見ているだけで吸い込まれそうな深い闇色のそれは、直後、落下すると押し潰すように黒竜を地面に叩きつけた。

「グウルアアアア!?!」

豪音と共に地べたに這い蹲らされた黒竜は、衝撃に悲鳴を上げながらブレスを中断する。しかし、渦巻く球体は、それだけでは足りないとも言おうように、なお消えること

なく、黒竜に凄絶な圧力をかけ地面に陥没させていく。

地面に礫にされた空の王者は、苦しげに四肢を踏ん張り何とか襲いかかる圧力から逃れようとしている。が、直後、天からウサ耳なびかせて「止めですう〜！」と雄叫び上げるシアがドリユッケンと共に降ってきた。激発を利用し更に加速しながら大槌を振りかぶり、黒竜の頭部を狙って大上段に振り下ろす。

ドオガアアアア!!

その衝撃は、今までの比ではない。インパクトの瞬間、轟音と共に地面が放射状に弾け飛び、爆撃でも受けたようにクレーターが出来上がる。故に、その超重量の一撃をまともに受けた者は深刻なダメージは免れないはずだ。そう、まともに受けていれば……  
「グルアアア!!」

黒竜の咆哮と共に、ドリユッケンにより舞い上げられた粉塵の中から火炎弾が豪速でユエに迫った。ユエは、咄嗟に右に“落ちる”事で緊急回避する。だが、代わりに重力球の魔法が解けてしまった。

火炎弾の余波で晴れた粉塵の先には、地面にめり込むドリユッケンを紙一重のところまで躲している黒竜の姿があった。黒竜は、拘束のなくなつた体を鬱憤を晴らすように高速で一回転させドリユッケンを引き抜いたばかりのシアに大質量の尾を叩きつけた。

「あつぐう!!」

間一髪、シアはドリユツケンを盾にしつつ自ら跳ぶことで衝撃を殺すことに成功するが、同時に大きく吹き飛ばされてしまい、木々の向こう側へと消えていつてしまった。

黒竜は、一回転の勢いそのまま体勢を戻すと、黄金の瞳でギリリとハジメを……素通りして背後にいるウィルを睨みつけた。

「クソツ……やっぱ狙いはウィルかつ！」

ハジメは、直ぐさま大盾を“宝物庫”に戻すと、ドンナー・シユラークを抜きざまに発砲する。轟音と共に幾条もの閃光が空を切り裂いて黒竜を襲った。回避など出来ようはずもない破壊の嵐の直撃を受けた黒竜はその場から吹き飛ばされ、地響きを立てながら後方の川へと叩きつけられ、盛大に水しぶきが上がった。

ハジメは、射線上にウィルがいるのはマズイと、自ら黒竜に突貫する。手元でドンナー・シユラークをガンスピンさせ空中リロードをしながら、再度連射し追い討ちをかける。しかし、黒竜は、川の水を吹き散らしながら咆哮と共に起き上がると、何と、ハジメを無視してウィルに向けて火炎弾を撃ち放った。

「ツッ！」

ウィルが狙われないように、敢えて接近し怒涛の攻撃をして注意を引こうとしたのに、黒竜は、そんなハジメの思惑など知ったことではないと言わんばかりにウィルを狙い撃ちにする。

「ユエー！」

「んっ、波城」

「ひっ！」と情けない悲鳴を上げながら身を竦めるウィルの前に、高密度の水の壁が出来上がる。飛来した火炎弾はユエの構築した城壁の如き水の壁に阻まれて霧散した。と、その時、生徒達が怒涛の展開にようやく我を取り戻したのか魔法の詠唱を始めた。加勢しようというのだろう。早々に発動した炎弾や風刃は弧を描いて黒竜に殺到する。

しかし……

「ゴオアアア!!」

竜の咆哮による衝撃だけであっさり吹き散らされてしまった。

「……チイツ、お前等、隠れとけ!!」

申し訳ないが奈々達を戦力外だと判断したハジメは、愛子にこの場所から離れるよう声を張り上げた。逡巡する愛子。ハジメとて愛子の教え子である以上、強力な魔物を前に置いていつていいものかと、教師であろうとするが故の迷いを生じさせる

その間に、周囲の川の水を吹き飛ばしながら黒竜は翼をはためかせて上空に上がろうとした。しかも、ご丁寧なウィルに向けて火炎弾を連射しながら。

「硬いな……」

先程からレールガンを連射してるが、一向に注意を引けない。黒竜の竜鱗は、あのサ

ソリモドキを彷彿とさせる硬度。レールガンの直撃を受けても表面を薄く砕く程度の効果しかない。ハジメは黒竜の竜鱗をどう突破するか策を張り巡らせながら、何故ウイルを執拗に狙っているのかを考えていた。

しかし、ハジメは黒竜に対して不自然さがあつた。ウイルを狙う動きが邪魔されても任務を遂行するような機械のように従順だ。それも誰かに操られているかのように……

「操られて……まさかつ！」

ハジメは、そこまで執拗にウイルを狙う理由はわからなかつたが、ある推測を仮定すると、目標が定まっているなら好都合だと、ユエとシアに指示を飛ばした。

「ユエー！ シアー！ ウイルの守りに専念しろ！ こいつは俺がやる！」

「んっ、任せて！」

「了解ですう！」

ユエは、ハジメの指示を聞くとウイルの方へ「落ちる」ことで急速に移動し、その前に立ちはだかつた。チラリと後ろを振り返り、愛子と妙子と奈々以外の生徒達を見ると、こういう状況で碌に動いていない事に苛立ちをあらわにしつつ不機嫌そうな声で呟き、シアはユエみたいに不機嫌ではないが、後ろに行くように促した。

「……死にたくないなら、私の後ろに」



「皆さん、ちゃんとユエさんの後ろにいて下さい！」

生徒達に関してはどうでもよかったが、一応ハジメが気にかけてる愛子とハジメの幼なじみである妙子と奈々に関しては、絶対に守ろうと決心する。生徒達は、ユエの冷たい言葉にも特に反応することなくほうほうの体で傍に寄つて来た。周囲の水分を利用し、無詠唱で氷の城壁を築いていくユエの傍が一番安全と悟つたのだろう。

本来なら、彼等ともう少し戦えるだけの実力は持つている。しかし、いくらハジメが生きていたと分かつてても、あの日、ベヒモスやトラウムソルジャーに殺されかけ、ハジメの奈落落ちにより「死」というものを強く実感した彼等の心には未だトラウマが蔓延つていた。愛子について来たのも、勇者組のように迷宮の最前線に行くようなことは出来ないが、じつともしてられないという中途半端さの現れでもあったのだ。なので、黒竜に自分達の魔法が効かず、殺意がたつぷり含まれた咆哮を浴びせられ、すつかり心が萎縮してしまつていた。とても、戦える心理状態ではなかった。特に妙子と奈々は、またあの時みたいにハジメの力になれない事に悔しそうに涙を流していた。

ハジメは、黒竜の攻撃を受け流しながら、ウイルや奈々達にはユエとシアが守つていることを確認して、存分に攻撃に集中できるようになつたと理解する。

「じゃあ……やろうぜ黒竜」

ハジメは不敵な笑みを浮かべながらドンナーをホルスターにしまうと、宝物庫から //

シユラーゲン”を取り出すと、即座に“纏雷”と“轟雷”を発動してチャージして、黒竜に狙いを定めた。

「クハッ、ここまで無視されたのは初めてだ……なら、どうあつても無視できないようにしてやるよ！」

黒竜は、流石に、ハジメの次手がマズイものだど悟つたのか、その顎門の矛先をハジメに向けた。思惑通り、無視出来なかつたようだ。

死を撒き散らす黒竜のブレスが放たれたのと、シユラーゲンが充填を終え撃ち放たれたのは同時だった。

共に極大の閃光。必滅の嵐。黒と紅の極光が両者の中間地点で激突する。衝突の間、凄まじい衝撃波が発生し、周囲の木々を根元から薙ぎ倒した。威力だけなら、おそらく互角。しかし、二つの極光は、その性質故に拮抗することなく勝敗を明確に分ける。ブレスは継続性に優れた極光ではあるが、シユラーゲンのそれは、一点突破の貫通特化仕様で更に“轟雷”により敏捷性と威力も上がってるのにしたがって、必然的にブレスの閃光を突破して、その力を黒竜に届かせた。

ブレスを放っていた黒竜の頭部が突然弾かれた様に仰け反る。ブレスを突き破つたシユタル鉱石製フルメタルジャケットの弾丸が黒竜の顎門を襲つたのだ。しかし、致命傷には程遠かつた。ブレスの威力に軌道が捻じ曲げられたようで、鋭い牙を数本蒸発さ

せながら、頭部の側面ギリギリを通過し、背後ではためく片翼を吹き飛ばすに止まった。  
「グルアアアア!!」

「クハツ……まだまだ行くぜ黒竜よおつ——『紅狼』!」

ハジメは『紅狼』を発動しながら黒竜に突貫する。紅雷の爪を纏った拳で黒竜を殴り飛ばし『空力』『縮地』を発動。超速を以て急降下し、仰向けになっている黒竜の腹に紅雷を纏った『豪脚』を叩き込んでいく。

「……しっ」

効いてることに笑みを零しながら、ズドンッ! と腹の底に響く衝撃音が轟く。更に追撃と言わんばかりの雷撃に黒竜の体がくの字に折れる。地面は、衝撃により放射状にひび割れた。黒竜が、悲鳴じみた咆哮を上げるがダメージは大きいとは言えないだろう。レールガンに耐える装甲なのだ。しかし、そんなこと想定済みの俺は、更に追撃をかけるため大きく左の義手を振りかぶった。義手からはキイイイイイ!! という機械音が鳴り、紅い雷もバチバチと集中的に義手に纏わり付いた落下する前から発動しておいた『振動粉碎』と全体に纏っていた紅雷を義手に集中させていく。

「喰らえっ!」

ハジメは、大質量・高速で突っ込んで来た岩石をも一撃で粉碎した破壊の拳を、容赦なく黒竜の腹にぶち込んだ。

ドオグウウウ!!

くぐもった音が響き、腹の鱗に亀裂が入る。衝撃を伝えることを目的とした攻撃なので内臓にも相当ダメージが入ったようだ、黒竜は再び苦悶の声を上げると口から盛大に吐血した。このままではまずいと思ったのか、黒竜は、片翼に爆発的な魔力を込めて暴風を巻き起こし、その場で仰向け状態から強引に元の体勢に戻った。ハジメは、再び、  
“空力” を使ってその場を退避する。置き土産を残して。

黒竜が、空中に逃れたハジメに黄金の瞳を向けた瞬間、その腹の下で大爆発が起きる。竜の巨体が、その衝撃で二メートルほど浮き上がったほどだ。置き土産は紅雷で強化された“手榴弾”である。

「クウワアアア!!」

同じ場所への更なる衝撃と雷による痺れに、今度は悲鳴も上げられずくぐもった唸り声を上げることしか出来ない。耐えるように頭を垂れて蹲る黒竜の口元からはダラダラと血が流れ出している。心なしか、唸り声も弱ってきているようだ。

「流石に効いてるよな……」

黒竜はウイルから目を離しハジメに向けて痺れる体を無視して、顎門を開いて火炎弾を連射した。さながら対空砲火のように空中へ乱れ飛ぶ火炎弾。しかし、その炎はただの一撃も当たることにはなかった。“空力” と “縮地” を併用し、縦横無尽に空を駆ける

ハジメは、いつしか残像すら背後に引き連れながら、ヒット&アウエイの要領で黒竜をフルボッコにしていくな。

「遅え、よー！」

ドンナー・シユラークで爪、齒茎、眼、尻尾の付け根、尻という実に嫌らしい場所を中距離から銃撃したかと思えば、次の瞬間には雷のような速度で接近して“振動粉碎”またはシヨットシエルの激発+“豪腕”のコンボで頭部や脇腹をメツタ打ちにしていき、雷魔法で黒竜の動きを鈍らせていく。

「クルウ、グワツン！」

若干、いや、確実に黒竜の声に泣きが入り始めている。鱗のあちこちがひび割れ、口元からは大量の血が滴り落ちていた。

「すげえ……やっぱ南雲はすげえな……」

ハジメの戦闘をユエの後ろという安全圏から眺めていた玉井淳史が思わずと言った感じで呟く。言葉はなくても、他の生徒達や愛子も同意見のようで無言でコクコクと頷き、その圧倒的な戦闘から目を逸らせずにいた。ウィルに至っては、先程まで黒竜の偉容にガクブルしていたとは思えないほど目を輝かせて食い入るようにハジメを見つめていた。

「グッグルウ……」

「……」

そろそろだと判断したハジメが、シユラーゲンやオルカン等で一気に片をつけないのはある推測をしたからだ。ハジメは、黒竜の一通りの動きを見て不信感を感じていた。簡単に言えば黒竜の魔力じゃない魔力が黒竜に纏わり付いてる事に接近戦をしている最中に気付いたのだ。

あの黒竜は、操られている、と。

もし、操られてるだけなら気絶させれば正気に戻る筈だ。例え戻らなくても拘束は出来る。

ハジメは黒竜の状態を見てそろそろ一気に決めれると思ひ、黒竜に優しい声音で告げた。

「安心しろ……今すぐ救ってやる」

「グウガアアアア!!」

黒竜の咆哮と共に、全方位に向けて凄絶な爆風が発生した。純粋な魔力のみの爆発だ。ハジメはそれを好機に“紅狼”で上昇した敏捷性、“空力”、“縮地”を發動して一瞬で黒竜の真上に移動した。

「グルッ?!」

黒竜はすぐさまハジメが上にいることに気が付き、即座にプレスを放とうとしたがハ

ジメの魔法のトリガーを引く方が早かった。

「喰らえ——『天雷牙狼』！」

黒竜の真上に大きな紅き雷でできた大狼が現れた。大狼は大きな口を開いて一瞬にして黒竜を飲み込んだ。その光景を見て魔法を放ったハジメはポツリと眩いた。

「……生きてるよな」

やり過ぎてないよか、大丈夫だよな、硬い竜鱗が貫通され黒竜が死んでいないかと不安になり内心、焦り冷や汗をかいていた。

「……ん、流石ハジメ」

ユエはハジメの魔法を見て勝利は確信としていた。だってあの魔法は以前、自分とハジメを死の寸前で追い詰めたヒュドラを滅した魔法なのだから。

そして、紅き大狼が黒竜を飲み込んだ光景をユエ以外の初めてハジメの最上級の魔法を見るシアと愛子、生徒達、ウィルはあまりの壮絶な光景に口をポカンと開けて唾然としていた。

雷はやがて消えていき、ハジメ以外の誰しもが倒せたと思っていたがそれは直ぐに瓦解した……

そこには、黒竜はまだ空に残っていたのだ。

ユエはハジメも全力を使って魔法を放ち、動けない状態にあると思えばサポートをする為、急いで魔法を放とうとしたが、ある事に気付いて魔法を発動を止めた。

「禍……ッ！」

「ユエさん、どうしたんですか?!」

「そうだよ！ ハジメがやられちゃう！」

「……あれ、見て」

シアは何故ユエと妙子が魔法を止めたのが気になり声を上げる。それは、後ろにいる全員も同じ気持ちで視線がユエに向かう。しかし、ユエは視線なんか気にせず、黒竜の方に指をさして、シア達も黒竜の方へ視点を転じた。

すると、そこには……

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

黒竜に変化が訪れたのを見てユエは手を止めていたのだと理解した。黒竜から何か黒い何かが放出しており、ユエはアレが魔力だと察した。そして、黒竜は一気に黒い魔力が霧散すると、黒髪金眼の美女が現れ、そのまま落ちていった。地面に激突するかと思われたが紅い閃光が横切り、彼女が地面と激突することはなかった。

「うおっ！ あっぶねえ……問一髪」

あの紅い閃光の正体はハジメで、“紅狼”の雷を脚部に集中的に纏わせて加速して、



落ちていく彼女を急いで抱きとめたのだ。所謂お姫様抱っこの状態で……しかしハジメはそんな事は気にせず、彼女の生存確認をする。

「ふう……息はしてる。ただの魔力枯渇で気絶してるだけだな」

ハジメは大丈夫だと確認すると、そのまま「紅狼」を解除して彼女を運びながらユエ達の下へ向かった。すると、降りている最中に下から声が聞こえ、ハジメは少し笑みを浮かべながら返事をした。

「……ハジメ！」

「ハジメさん！」

「ハジメっち！」

「ハジメ！」

「南雲君！」

「おうー」

ハジメは全員が無事なことを確認して安心してると、ユエが声をかけた。

「……ハジメ、もしかしてこの黒竜の正体って」

ユエは吸血鬼だから直ぐに理解したのだろう。ハジメはユエの言葉に頷いて口を開いた。

「ああ、俺も信じられんと思ったんだが、ユエの思っている通り、コイツは「竜人族」だ」

それは、約五百年前に絶滅……人の手によつて滅ぼされたという竜人族だった……。

## 三十四話

## テイオ・クラルス

暗い。苦しい。

いつの間にか自分の体が勝手に動いて一人の人間を狙い、邪魔する人間達を襲っていた。止めようと思っても体の自由が効かない。

そして……

『や、やめてくれえ!! 死にたくな——』

『お、おい! 逃げ——』

キュウイイイイン!

何の罪もない逃げ惑う人間を死の咆哮でその地形ごと跡形もなく焼き払ってしまった。

——やめてつ、やめてたもうつ! 妾は人を人間を殺しとうないっ!!

そんな願いも呆気なく、竜の息吹で何人かの冒険者は死に一人の青年だけ残ってしまった。その表情は、恐怖に満ちて涙を流しぐちゃぐちゃに歪んでいた。

——あつあつ、あ——

その瞬間、自分に纏わりつく何かが黒い黒い何かに為す術なく呑み込まれ、目の前が真つ暗になった。

何日、何時間経つたのかは分からないまだ自分の言う事を効かない体は、まだ目標の人間を殺しに向かっていると思っていた。

——誰か…誰でも良い妾を…殺して

竜人族として誇りを汚し続けている自分が、ふと、そんな事を思ったが有り得ないと自覚していた。自分は竜人族の中でも、一、二を争うぐらいの実力者。そんな自分を倒せる人間なんか居ないと思っていたが願っていた。

……だが、その願いは叶ってしまった。

自分に有り得ない程のダメージを受けた。自慢の竜鱗がどんどん剥がされていく。竜人の中で一、二の実力者の自分がたった一人の人間に押されていく。

そして……

『——天雷牙狼！』

真上を見て、こちらへと襲いかかる魔法であろう綺麗な巨大な紅雷の狼が飲み込ん

だ。

——ああ、やっと……死ねる。解放されるのじゃ。

少し人間に負けたことが悔しいが、嬉しかった。

もう人間を殺さなくて済む思つて、竜人族の誇りが汚れずに済むと安堵した。

しかし、こんなにも自分を凌駕する相手を一目だけ見ておきたく薄目を開けながらその人物を見たそれは……

それは、綺麗な紅い雷を纏う白髪の青年だった。

——……………あ。

そして、視界が暗くなるまで、その青年の姿に何故か目が離せなかったのだ……。

~~~~~

ハジメは、一旦、気絶している黒髪の竜人族の介抱をシアに任せた。

「つたく……何故、滅ぼされた筈の竜人族が生存して、しかもこんな場所にいるか不明なんだよな」

「………ん、五百年前に滅びた筈」

「だよなー。やっぱ本人に聞くしかないか……」

「あつ、ハジメさん！」

そんな事をユエと話していると、竜人族の女性を介抱してるシアが突然声を上げた。

「どうした、シア！」

「ハジメさん、この人、目が覚めそうですよっ！」

「！ わかった、今向かう」

ハジメとユエがシアの下へ向かって竜人族の女性を見ると、僅かながらも声を出して薄目を開けながら目を覚ました。その瞳は金色だ。

「くん、う、ーん。……此処は？」

「よう、目を覚ましたようだな」

「……はっ！」

「っ、うおっ?!」

竜人族の女性は完全に目を覚ました瞬間、すぐさま上体を起こしたのでハジメは少し驚き、体を後にずらしながら避けた。

「うむ、介抱してくださいださり感謝する……。って、そっ其方は?!」

竜人族の女性は感謝の言葉を言っていたがハジメを見た瞬間、驚くように目を見開き声を上げながら少しハジメから離れた。

竜の姿でハジメと戦った時のことを覚えているのか、少し警戒をしているとハジメは思い、謝罪を入れながら声をかけた。

「……ああ、ボコボコにした件はすまない、俺は南雲ハジメだそっちは？」

「あついや、別に謝らなくてよい。アレは妾の失態じゃしいう。そうじゃった妾も申し遅れた。妾の名はティオ・クラルス。最後の竜人族クラルス族の一人じゃ」

「……なあ、ティオ、すまないがどうしてあんな事になった経緯を教えてくださいか？」  
「う、うむ実は……」

ティオの話を要約するところだ。

ティオは、ある目的のために竜人族の隠れ里を飛び出して来たらしい。その目的とは、異世界からの来訪者について調べるといふものだ。詳細は省かれたが、竜人族の中には魔力感知に優れた者がおり、数ヶ月前に大魔力の放出と何かがこの世界にやって来たことを感知したらしい。

竜人族は表舞台には関わらないという種族の掟があるらしいのだが、流石に、この未知の来訪者の件を何も知らないまま放置するのは、自分達にとつても不味いのではないかと、議論の末、遂に調査の決定がなされたそうだ。

ティオは、その調査の目的で集落から出てきたらしい。本来なら、山脈を越えた後は人型で市井に紛れ込み、竜人族であることを秘匿して情報収集に励むつもりだったのだが、その前に一度しっかり休息をと思い、この一つ目の山脈と二つ目の山脈の中間辺りで休んでいたらしい。当然、周囲には魔物もいるので竜人族の代名詞たる固有魔法「竜化」により黒竜状態になって。

と、睡眠状態に入ったティオの前に一人の黒いローブを頭からすっぽりと被った男が現れた。その男は、眠る黒竜の姿で眠るティオに洗脳や暗示などの闇系魔法を多用して徐々にその思考と精神を蝕んでいった。

当然、そんな事をされれば起きて反撃するのが普通だ。だが、ここで竜人族の悪癖が出る。そう、例の諺の元にもなったように、竜化して睡眠状態に入った竜人族は、まず起きないのだ。それこそ尻を蹴り飛ばされでもしない限り。それでも、竜人族は精神力においても強靱なタフネスを誇るので、そう簡単に操られたりはしない。

では、なぜ、ああも完璧に操られたのか。

それは……

「恐ろしい男じゃった。闇系統の魔法に関しては天才と言っていいレベルじゃろうな。そんな男に丸一日かけて間断なく魔法を行使されたのじゃ。いくら妾と言えど、流石に耐えられなかった……」

一生の不覚！ と言った感じで悲痛そうな声を上げるティオ。しかし、ハジメはツツコミを入れる。

「それはつまり、調査に来ておいて丸一日、魔法が掛けられているのにも気づかないくらい爆睡していたって事じゃないのか？」

全員の目が、何となくバカを見る目になる。ティオは視線を明後日の方向に向け、何



事もなかったように話を続けた。ちなみに、なぜ丸一日かけたと知っているのかというと、洗脳が完了した後も意識自体はあるし記憶も残るところ、本人が「丸一日もかかるなんて……」と愚痴を零していたのを聞いていたからだ。

その後、ローブの男の傍にいるもう一人のローブを被った者に従い、二つ目の山脈以降で魔物の洗脳を手伝わされていたのだという。そして、ある日、一つ目の山脈に移動させていたブルタールの群れが、山に調査依頼で訪れていたウイル達と遭遇し、目撃者は消せという命令を受けていたため、これを追いかけた。うち一匹がローブの男に報告に向かい、万一、自分が魔物を洗脳して数を集めていると知られるのは不味いと万全を期してテイオを差し向けたらしいテイオも番号しようとしたが無理だったらしい。

で、気がつけばハジメにフルボッコにされており、「天雷牙狼」を喰らって、目を覚ましたらしい。

「……ふざけるな」

事情説明を終えたテイオに、そんな激情を必死に押し殺したような震える声が発せられた。皆が、その人物に目を向ける。拳を握り締め、怒りを宿した瞳でテイオを睨んでいるのはウイルだった。

「……操られていたから……ゲイルさんを、ナバルさんを、レントさんを、ワスリーさんをクルトさんを！ 殺したのは仕方ないとも言うつもりかっ！」

「どうやら、状況的に余裕が出来たせいかな冒険者達を殺されたことへの怒りが湧き上がったらしい。激昂してティオへ怒声を上げる。」

「……」

対するティオは、反論の一切をしなかった。ただ、静かな瞳でウィルの言葉の全てを受け止めるよう真つ直ぐ見つめている。その態度がまた気に食わないのか

「大体、今の話だつて、本当かどうかなんてわからないだろう！ 大方、死にたくなくて適当にでつち上げたに決まつてる！」

「……今話したのは真実じゃ。竜人族の誇りにかけて嘘偽りではない」

なお、言い募ろうとするウィル。それに口を挟んだのはユエだ。

「……きつと、嘘じゃない」

「つ、一体何の根拠があつてそんな事を……」

食つてかかるウィルを一瞥すると、ユエはティオを見つめながらぼつぼつと語る。

「……竜人族は高潔で清廉。私は皆よりずつと昔を生きた。竜人族の伝説も、より身近なもの。彼女は『己の誇りにかけて』と言つた。なら、きつと嘘じゃない。それに……嘘つきの目がどういふものか私はよく知っている」

ユエが話しているのは、きつと、三百年前の出来事を思い出し出しているんだろう。孤高の王女として祭り上げられ周りは、結果の出た今から思えば、嘘が溢れていたのだろう。

もつとも身近な者達ですら彼女の言う「嘘つき」で、その事実から目を逸らし続けた結果が「裏切り」だった。それ故に、「人生の勉強」というには些か痛すぎる経験を経た今では、ユエの目は「嘘つき」に敏感だ。

初対面でハジメに身を預けられたのも、それしか方法がないというのも確かにあったが、ハジメ自身が一切の誤魔化しをしなかったというのが、今にして思えば大きな理由だったのだろう。

ユエはそう呟くと遠くを見ており、傍にいるハジメは、ユエの気持ちを察してか頭を撫でた。

「ふむ、この時代にも竜人族のあり方を知るものが未だいたとは……いや、昔と言ったかの？」

竜人族という存在のあり方を未だ語り継ぐものでもいるのかと、若干嬉しそうな声音のテイオ。

「……ん。私は、吸血鬼族の生き残り。三百年前は、よく王族のあり方の見本に竜人族の話が聞かされた」

「何と、吸血鬼族の……しかも三百年とは……なるほど死んだと聞いていたが、主がかつての吸血姫か。確か名は……」

テイオもどうやら、テイオはユエと同等以上に生きていて、しかも、口振りからして

世界情勢にも全く疎いというわけではないようだ。今回の様に、時々正体を隠して世情の調査をしているのかもしれないがそのティオにしてユエの生存は驚いたようだ。それほど、ユエはそれほどの有名な人物だったのだろう。なんせ、大迷宮の奈落で封印されるほどだ。

ティオは、ユエの前の名前を呟こうとする前にユエが首を振って口を開いた。

「ユエ……それが私の名前。大切な人に貰った大切な名前。そう呼んで欲しい」

ユエが、薄らと頬を染めながら両手で何かを抱きしめるような仕草をする。ユエにとつて竜人族とは、正しく見本のような存在だったのだろうと分かる。話す言葉の端々に敬意が含まれている気がする。ウィルの罵倒を止めたのも、その辺りの心情が絡んでいるのかもしれないと理解できた。

ユエの周囲に、何となく幸せオーラがほわほわと漂っている気がする。ウィルも、何やら氣勢を削がれてしまったようだ。だが、それでも親切にしてくれた先輩冒険者達の無念を思い言葉を零してしまう。

「……それでも、殺した事に変わりないじゃないですか……どうしようもなかったってわかっていますけど……それでもっ！ ゲイルさんは、この仕事が終わったらプロポーズするんだって……彼らの無念はどうすれば……」

頭では黒竜の言葉が嘘でないと分かっている。しかし、だからと言って責めずにはい

られない。心が納得しない。ハジメは内心、「また、見事なフラグを立てたもんだな」と変に感心しながら、ふとここに来るまでに拾ったロケットペンダントを思い出す。

「ウイル、ゲイルってやつを持ち物か？」

そう言つて、取り出したロケットペンダントをウイルに放り投げた。ウイルはそれを受け取ると、マジマジと見つめ嬉しそうに相好を崩す。

「これ、僕のロケットじゃないですか！ 失くしたと思つてたのに、拾つてくれてたんですね。ありがとうございます！」

「あれ？ お前のだったか、へえ……」

ハジメは、ウイルは歳上好きかと予想する。ハジメ自身、人それぞれ好みがあるしなと頷く。

しかし……

「はい、ママの写真が入っているので間違いありません！」

「マ、ママ？」

予想が見事に外れた挙句、斜め上に行く答えが返ってきて思わず頬が引き攣つてしまった。

写真の女性は二十代前半と言つたところなので、疑問に思いその旨を聞くと、「せつかくのママの写真なのですから若い頃の一番写りのいいものがないじゃないですか」と、

まるで自然の摂理を説くが如く素で答えられた。その場のハジメ以外の全員も「ああ、マザコンか」と物凄く微妙な表情をした。

女性陣はドン引きしていたが……

ちなみに、ゲイルとやらの相手は「男」らしい……

母親の写真を取り戻したせいも、随分と落ち着いた様子の子のウィル。何が功を奏すのか本当にわからない。だが、落ち着いたとは言っても、恨み辛みが消えたわけではない。ウィルは、今度は冷静に、ティオを殺すべきだと主張した。また、洗脳されたら脅威だというのが理由だが、建前なのは見え透いている。主な理由は復讐だろう。

「駄目だ」

「なんでですかっ！　ハジメ殿だつて命懸けで戦つてたじゃないですかー！」

命懸けではないんだけどなー、と思ひながらハジメは、ウィルの質問に応えていく。

「ああ、戦いはした。しかし、それはティオが俺達に対しての敵意持つての行動じゃない、操られていただけだ。だから俺は、どんな事を言われおうとも決してティオを殺さない。それにウィル、お前のそれは建前であつて、ただの復讐したいだけだろ？」

「……っ！」

「復讐なら他人の手じゃなく自分の手でやれば良いし、復讐なんてしたつて何も生まないし……」

「……ハジメ殿は誰かに復讐をした事があるんですか？」

ウイルはハジメの発言で復讐をした事あるのを知ったのだろう、ハジメは平然と言葉をかえした。

「ああ、したさ。殺すまではしなかったが、やっても残ったのは、虚無感しか無かったけどな」

「……………」

ハジメの言葉を聞いたウイルは呆然と立ち尽くし、事情を知っていた妙子と奈々は少しだけ顔を俯かせていた。しかし、ハジメは無視してテイオへ視線を転じた。

「テイオ」

「なんじゃ ごしゆ……ハジメ殿？」

「(ごしゆ?) いや、お前が話していた二人の黒ローブの奴について話してくれ」

テイオは、次いで、黒ローブの男が、一人は魔物を洗脳して大群を作り出して、もう一人が町を襲う気であると語っていた。その数は、既に三千から四千に届く程の数で、何でも、二つ目の山脈の向こう側から、魔物の群れの主にのみ洗脳を施すことで、効率よく群れを配下に置いているのだとか。

魔物を操ると言えば、そもそもハジメ達がこの世界に呼ばれる建前となった魔人族の新たな力が思い浮かぶ。それは先生達も一緒だったのか、二人の黒ローブの男の正体は

魔人族なのではと推測した。

しかし、その推測は、ティオによってあっさり否定される。何でも魔物を操っていた方の黒ローブの男は、黒髪黒目の人間族で、まだ少年くらいの年齢だったというのだ。それに、黒竜たるティオを配下にしたが喜びもせず、仕切りに「ごめんなさい」等と口にし、悲痛そうな表情だったことを覚えており、彼をよく見ると首には首輪みたいなのが着けられていた。

黒髪黒目の人間族の少年で、闇系統魔法に天賦の才がある者。ここまでヒントが出れば、流石に脳裏にとある人物が浮かび上がる。愛子達は一様に「そんな、まさか……」と呟きながら困惑と疑惑が混ざった複雑な表情をした。限りなく黒に近いが、信じたくなかったところだろう。

ハジメは、ティオの話しを聞いて、黒ローブは清水の可能性が高いと判断する。だが、同時に不思議に思う。ハジメが知る限り清水はそんな事をする奴ではない。それに、ティオが言っていた首輪……

「……………つ、これは」

ハジメはティオの話を書いて無人偵察機を飛ばしながら考え事していると、遂に無人探査機の一機がとある場所に集合する魔物の大群を発見して、その数に思考が一旦、止まってしまう。



「こりゃあ、三、四千つてレベルじゃないぞ？ 桁が一つ追加されるレベルだ」

ハジメの報告に全員が目を見開く。しかも、どうやら既に進軍を開始しているようだ。方角は間違いなくウルスの町がある方向。

「このままだと、一日あれば町に到着するレベルだな」

「は、早く町に知らせないと！ 避難させて、王都から救援を呼んで……それから、それから……」

事態の深刻さに、愛子が混乱しながらも必死にすべきことを言葉に出して整理しようとする。いくら何でも数万の魔物の群れが相手では、チートスペックとは言えトラウマ抱えた生徒達と戦闘経験がほとんどない愛子、駆け出し冒険者のウィルに、魔力が枯渇したテイオでは相手どころか障害物にもならない。なので、愛子の言う通り、一刻も早く町に危急を知らせて、王都から救援が来るまで逃げ延びるのが最善だ。

と、皆が動揺している中、ふとウィルが呟くように尋ねた。

「あの、ハジメ殿なら何とか出来るのでは……」

その言葉で、全員が一斉にハジメの方を見る。その瞳は、もしかしたらという期待の色に染まっていた。

「そんな目で見えるな、端から、そうするつもりだし、それに宿の人には飯で、お世話になったしな」

ハジメの答えを聞くとウィルに愛子、妙子と奈々、他の生徒達全員が喜びを顕にしていた。

「おい、喜んでないで、急いで町に戻るぞ」

そんな中、思いつめたような表情の愛子がハジメに問い掛けた。

「南雲君、二人の黒いローブの男というのは見つかりませんか？」

「ん？ いや、さつきから群れをチェックしているんだが、それらしき人影はない。

まあ、何処かに隠れてるかもな……」

「そ、そうですか……」

「先生、まずは町に向かう事を優先しろ二人の黒ローブはその後だ」

「まあ、ご主じ……コホンツ、ハジメ殿の言う通りじやな。妾も魔力が枯渇している以上、何とかしたくても何もできん。まずは町に危急を知らせるのが最優先じやろ。妾も一日あれば、だいぶ回復するはずじやしの」

「……………」

一同へ、後押しするようにティオが言葉を投げかける。若干、ハジメに対して変な呼び方をしそうになっていた気がするが……気のせいだろう。

「じゃあ、お前等行くぞ。ティオ」

「ん、なん……………——っ／／」

テイオが、魔力枯渇で動けないのであろうと思い、ハジメがあの時と同じようにお姫様抱っこ状態でテイオを持ち上げ移動する。

その時のテイオの表情は顔を隠しており余り見えなかったがユエとシア、そして妙子と奈々がハジメをジト目で見ていた。

「……………」

「俺、何かしたか？」

「……………」

ハジメはそのままテイオを運びながら下山した。そして、一行は、背後に大群という暗雲を背負い、急ぎウルの町に戻っていったのだった……。

## 三十五話

## 殲滅戦前

ウルの町。北に山脈地帯、西にウルディア湖を持つ資源豊富なこの町は、現在、つい昨夜までは存在しなかった。『外壁』に囲まれて、異様な雰囲気にも包まれていた。

この『外壁』はハジメが即行で作ったものだ。魔力駆動二輪で、整地ではなく、『外壁』を錬成しながら町の外周を走行して作成したのである。

もつとも、壁の高さは、ハジメの錬成範囲が半径四メートル位で限界なので、それほど高くはない。大型の魔物なら、よじ登ることは容易だろう。一応、万一に備えてないよりはマシだろう程度の気持ちで作成したので問題はない。そもそも、壁に取り付かせらるつもりなどハジメにはないのだから。

町の住人達には、既に数万単位の魔物の大群が迫っている事が伝えられている。魔物の移動速度を考えると、夕方になる前くらいには先陣が到着するだろうと。

当然、住人はパニックになった。町長を始めとする町の顔役たちに罵詈雑言を浴びせる者、泣いて崩れ落ちる者、隣にいる者と抱きしめ合う者、我先にと逃げ出そうとした者同士でぶつかり、罵り合って喧嘩を始める者。明日には、故郷が滅び、留まれば自分

達の命も奪われると知って冷静でいられるものなどそうはいない。彼等の行動も仕方のないことだ。

だが、そんな彼等に心を取り戻させた者がいた。愛子だ。ようやく町に戻り、事情説明を受けた護衛騎士達を従えて、高台から声を張り上げる「豊穡の女神」。恐れるものなどないと言わんばかりの凛とした姿と、元から高かった知名度により、人々は一先ずの冷静さを取り戻していた。

「先生……勇者より勇者してんじゃん」

ハジメはそう呟いて壁の上で先生の行動を見ながら感心していた。魔物達が侵攻度確かめるべく山脈の方を見やる。するとそこへ愛子と生徒達、ティオ、ウィル、デビッド達数人の護衛騎士がやって来た。愛子達の接近に気がついているだろうに、振り返らないハジメにデビッド達が眉を釣り上げるが、それより早く愛子が声をかける。

「南雲君、準備はどうですか？ 何か、必要なものはありますか？」

「いや、問題ねえよ、先生」

振り返らず簡潔に答えるハジメの態度に我慢しきれなかったようでデビッドが食ってかかる。

「おい、貴様。愛子が……自分の恩師が声をかけているというのに何だその態度は。本

来なら、貴様の持つアーティファクト類の事や、大群を撃退する方法についても詳細を聞かねばならんところを見逃してやっているのは、愛子が頼み込んできたからだぞ？  
少しは……」

「デビッドさん。少し静かにしてもらえますか？」

「うっ……承知した……」

しかし、愛子に「黙れ」と言われるとシユンとした様子で口を閉じる。

「南雲君。人間族の方の黒ローブの男のことですが……」

「どうやら、それが本題のようだ。愛子の言葉に苦悩がにじみ出ている。

「正体を確かめたいんだろ？ 安心しろ殺しはしない、俺だつて確かめたいんだ」

「その……南雲君には、無茶なことばかりを……」

「安心しろ、こんなの苦じゃねえよ」

「南雲君……ありがとうございます」

愛子は、ハジメの予想外に協力的な態度に少し驚いたようだが、未だ振り向かない様子から、ハジメ自身にも思うところが多々あるのだろうと、その厚意を有り難く受け取ることにしたんだろう。

そして、愛子の話が終わったのを見計らつて、今度は、テイオが前に進み出てハジメに声をかけた。

「ふむ、よいかな。妾もご主……ゴホンツ！ お主に話が……というより頼みがあるのじゃが、聞いてもらえるかの？」

「……テイオか」

聞き覚えのない声に、思わず肩越しに振り返ったハジメは、黒地にさりげなく金の刺繍が入っている着物に酷似した衣服を大きく着崩して、白く滑らかな肩と魅惑的な双丘の谷間、そして膝上まで捲れた裾から覗く脚線美を惜しげもなく晒した黒髪金眼の美女に向けて名前を呼んだ。

テイオは、頬を染めながらハジメに頼みをした。

「んっ、んっ！ えっとじゃな、お主は、この戦いが終わったらウィル坊を送り届けて、また旅に出るのじゃろ？」

「ああ、そうだが」

「うむ、頼みというのはそれでな……妾も同行させてほしいのじゃ」

「……理由は？」

「……う、うばわれたんじゃ」

「？ すまん、聞こえなかったから、もう一度言ってくれないか？」

ハジメはテイオが何言っているのか聞こえずもう一度欲しいと頼むと予想外の返答がきた。

「其方に、ご主人様に身も心も奪われたんじゃ！」

責任を取って欲しいのじゃっ！／

「……はあ？」

全員の視線が「えっ!？」というようにハジメを見る。ユエとシアも目を光らせる。

「里でも、妾は一、二を争うくらいでな、特に耐久力は群を抜いておった。じゃから、他者に組み伏せられることも、痛みらしい痛みを感じることも、今の今までなかつたのじゃ」

近くにテイオが竜人族と知らない護衛騎士達がいるので、その辺りを省略してポツポツと語るテイオ。

「それがじゃ、ご主人様と戦って、初めてポッコポッコにされた挙句、組み伏せられ、痛みと敗北を一度に味わったのじゃ」

一人盛り上がるテイオだったが、彼女を竜人族と知らない騎士達は、一様に犯罪者でも見るかのような視線をハジメに向けている。騎士達の視線を感じて、絶対に婦女暴行だと誤解されている。客観的に聞けば、そうなるが、ハジメは、誤解が続く前にテイオを止めようと声をかける。

「……お、おい、テイオ。ストップ」

「こんな可憐なご婦人に暴行を働いたのか！」とざわつく騎士達。あからさまに糾弾し



ないのは、被害者たるティオの様子に悲痛がないからだろう。むしろ、嬉しそうなので正義感の強い騎士達もどうしたものかと困惑している。

「そ、それに妾、自分より強い男しか伴侶として認めないと決めておったのじゃ……じゃが、里にはそんな相手おらんしの……敗北して、組み伏せられて……初めてじゃったのに……じゃからご主人様よ。共に居させて欲しいのじゃ……」

潤んだ瞳をハジメに向けるティオ。両隣のユエとシアですら、ジト目で見ている。迫り来る大群の前に、ハジメは四面楚歌の状況に追い込まれてしまう。

「で、でも、ティオは色々やる事あるんだろ？ その為に、里を出てきたって言ったじゃねえか」

ハジメは苦し紛れに“竜人族の調査”とやらはどうしたと返す。

「うむ。問題ない。ご主人様の傍にいる方が絶対効率いいからの、後、ご主人様の方が何か知ってそうじゃからの」

「……そうかい」

随分のご慧眼なことにハジメは、苦笑いする。が、これからも迷宮に攻略していくには竜人族であるティオも加わった方が戦力になる。だが、その代償に優花に問い詰められることが確定した。

どう考えを張り巡らせても無駄で、ハジメは、最終的にティオの同行を許す事にした。

「はあく、わかった。テイオ、同行を許す。しかし……」

「ん、なんじゃ?」

「今は、お前の想いにはまだ応えられないのは許してくれ。何時か絶対に答えはだす」

「……わかったのじゃ」

ハジメの応えに最初は喜んだテイオだがハジメの想いを聞いて少し残念そうにしていた。

そんな事があつて時間が経つと遂にそれは来た。

「! ……来たか(予想してたより少し早いご到着だな)」

ハジメが突然、北の山脈地帯の方角へ視線を向ける。眼を細めて遠くを見る素振りを見せた。肉眼で捉えられる位置にはまだ来ていないが、*「魔眼石」*には無人偵察機からの映像がはつきりと見えていた。

それは、大地を埋め尽くす魔物の群れだ。ブルタールのような人型の魔物の他に、体長三、四メートルはありそうな黒い狼型の魔物、足が六本生えているトカゲ型の魔物、背中に剣山を生やしたパイソン型の魔物、四本の鎌をもったカマキリ型の魔物、体のいたるところから無数の触手を生やした巨大な蜘蛛型の魔物、二本角を生やした真つ白な大蛇など実にバリエーション豊かな魔物が、大地を鳴動させ土埃を巻き上げながら猛烈な勢いで進軍している。その数は、山で確認した時よりも更に増えているようだ。五万あ

るいは六方に届こうかという大群だった。

更に、大群の上空には飛行型の魔物もいる。敢えて例えるならプテラノドンだろうか。何十体というプテラノドンモドキの中に一際大きな個体がいる、その個体の上には薄らと人影のようなものも見えた。

「……清水」

おそらく、黒ローブの男。愛子は信じたくないという風だったが、十中八九、清水幸利だった。

「……ハジメ」

「ハジメさん」

ハジメの雰囲気の変化から来るべき時が来たと悟るユエとシアが呼びかける。ハジメは視線を二人に戻すと一つ頷き、そして後ろで緊張に顔を強ばらせている愛子達に視線を向けた。

「来たぞ。予定よりかなり早いが、到達まで三十分つてところだ。数は五万強。複数の魔物の混成だ」

魔物の数を聞き、更に増加していることに顔を青ざめさせる愛子達。不安そうに顔を見合わせる彼女達に、ハジメは壁の上に飛び上がりながら肩越しに不敵な笑みを見せた。

「そんな顔するなよ、お前等。たかだか数万増えたくらい何の問題もない。予定通り、万に備えて戦える者は『壁際』で待機させてくれ。まあ、出番はないと思うけどな」  
何の気負いもなく、任せてくれというハジメに、三人は少し眩しいものを見るように目を細めた。

「わかりました……君をここに立たせた先生が言う事ではないかもしれませんが……どうか無事で……」

「ハジメ、頼んだよ」

「ハジメっち、頑張つて！」

三人はそう言うと、護衛騎士達が「ハジメに任せていいのか」「今からでもやはり避難すべきだ」という言葉に應對しながら、町中に知らせを運ぶべく駆け戻つていった。生徒達も、一度、複雑そうな目で見ると愛子を追いかけて走つていく。残つたのは、ハジメ達以外には、ウイルとティオだけだ。

ウイルは、ティオに何かを語りかけると、ハジメに頭を下げて愛子達を追いかけていった。疑問顔を向けるハジメにティオが苦笑いしながら答える。

「今回の出来事を妾が力を尽くして見事乗り切つたのなら、冒険者達の事、少なくともウイル坊は許すという話じゃ……そういうわけで助太刀させてもらうからの。何、魔力なら大分回復しておるし童化せんでも妾の炎と風は中々のものじゃぞ？」

確かに竜人族は、教会などから半端者と呼ばれるように、亜人族に分類されながらも、魔物と同様に魔力を直接操ることができる。その為、天才であるユエのように全属性無詠唱無魔法陣というわけにはいかないが、適性のある属性に関しては、ユエと同様に無詠唱で行使できるらしい。

「じゃあ、それなら……ほらよ」

それを聞いたハジメは、自分と同じようなもんかと思い、ティオにある物を渡そうと“宝物庫”から取りだし投げ渡した。

「ご主人様、これは？」

「ユエが持つてる奴と同じで魔力のストックが入っているネックレスだ。やるよ」

「……ありがとうなのじゃ／＼」

ティオはハジメの初めてであるプレゼントに少し頬を染めながら感謝する。

ネックレスを嬉しそうに眺めるティオを「戦い前なのに嬉しそうにしゃがって」と思いつながら苦笑いしていると、遂に、肉眼でも魔物の大群を捉えることができるようになった。“壁際”に続々と弓や魔法陣を携えた者達が集まってくる。大地が地響きを伝え始め、遠くに砂埃と魔物の咆哮が聞こえ始めると、そこかしこで神に祈りを捧げる者や、今にも死にそうな顔で生唾を飲み込む者が増え始めた。それを見て、ハジメは前に出る。鍊成で、地面を盛り上げながら即席の演説台を作成する。

突然、壁の外で土台の上に登り、迫り来る魔物に背を向けて自分達を睥睨するハジメに困惑したような視線が集まる。ハジメは、全員の視線が自分に集まったことを確認すると、すうと息を吸い天まで届けと言わんばかりに声を張り上げた。

「聞け！ ウルの町の勇敢なる者達よ！ 私達の勝利は既に確定している！」

いきなり何を言い出すのだと、隣り合う者同士で顔を見合わせる住人達。ハジメは、彼等の混乱を尻目に言葉を続ける。

「なぜなら、私達には女神が付いているからだ！ そう、皆も知っている。『豊穰の女神』愛子様だ！」

その言葉に、皆が口々に愛子様？ 豊穰の女神様？ とざわつき始めた。護衛騎士達を従えて後方で人々の誘導を手伝っていた愛子がギョツとしたようにハジメを見た。

そう、ハジメはフレンドリーファイアを喰らわないようにするために、愛子の立場を利用することにしたのだ。

「我らの傍に愛子様がいる限り、敗北はありえない！ 愛子様こそ！ 我ら人類の味方にして『豊穰』と『勝利』をもたらす、天が遣わした現人神である！ 私は、愛子様の剣にして盾、彼女の皆を守りたいという思いに応えやって来た！ 見よ！ これが、愛子様により教え導かれた私の力である！」

ハジメはそう言うと、片手を上げて紅の狼を出す。町の人々が注目する中、些か先行

しているプテラノドンモドキの魔物に狙い定めトリガーを引いた。

「――なぐれほし流星狼」

紅いスパークを纏った狼がもの凄いスピードで空を駆け抜け、数キロ離れたプテラノドンモドキの一体を木つ端微塵に噛み砕き、爆散していき、その余波だけで周囲の数体の翼を粉碎して地へと墮としていく。

慌てたように後方に下がろうとしている比較的巨大なプテラノドンモドキを、その上に乗っている黒ローブごと余波で吹き飛ばした。黒ローブは宙に吹き飛ばされて、ジタバタしながら落ちていった。

「あっ」

黒ローブが落っこちたことに冷や汗を掻くが愛子に黒ローブが落ちた事がバレずに、空の魔物を駆逐し終わった俺は、悠然と振り返った。そこには、唾然として口を開きっぱなしにしている人々の姿があった。

「愛子様、万歳！」

ハジメが、最後の締めめに先生を讃える言葉を張り上げた。すると、次の瞬間……

「「「「愛子様、万歳！ 愛子様、万歳！ 愛子様、万歳！ 愛子様、万歳！」」」」

「「「「女神様、万歳！ 女神様、万歳！ 女神様、万歳！ 女神様、万歳！」」」」

ウルの町に、今までの様な二つ名としてではない、本当の女神が誕生した。どうやら、

不安や恐怖も吹き飛んだようで、町の人々は皆一樣に、希望に目を輝かせ先生を女神として讃える雄叫びを上げた。遠くで、愛子が顔を真っ赤にしてふるふる震えている。その瞳は真っ直ぐに俺に向けられており、小さな口が「ど・う・い・う・こ・と・で・す・か！」と動いている。

ハジメは、しれつとして再び魔物の大群に向き直った。ここまで愛子を前面に押し出したのは、もちろん理由がある。

一つは、この先、ハジメの活躍により教会や国が動いたとき、彼等が俺に害をなそうとすれば、先生は確実に彼等とぶつかるだろうが、その時、“豊穰の女神”の発言権は強い方がいいというものだ。

町の危急を愛子様で乗り切ったとなれば、市井の人々は勝手に噂を広め、“豊穰の女神”の名はますます人々の心を掴むはずだ。その時は、単に国にとつて有用な人材というだけでなく、人々自身が支持する女神として、国や教会も下手な手出しはしにくくなり、より強い発言権を得ることになるだろう。

二つ目は単純に、大きな力を見せても人々に恐怖や敵意を持たれにくくするためだ。一個人が振るう力であっても、それが自分達の支持する女神様のもたらしたものと思えば、不思議と恐怖は安心に、敵意は好意に変わるものである。教会などから追われるようになって、協力的な人がいる……といいなというものだ。



ハジメは「宝物庫」からメツエライを二門取り出し両肩に担いで、前に進み出る。

右にはユエが、左にはハジメが貸与えたオルカンを担ぐシアが、更にその隣には、魔晶石のネックレスをうつとり見つめるテイオが並び立った。地平線には、プテラノドンモドキが落とされたことなどまるで関係ないと言う様に、一心不乱に突っ込んでくる魔物達が視界を埋め尽くしている。

ハジメは、ユエを見た。ユエも俺を見つめ返しコクリと静かに頷く。ハジメは、シアを見た。シアは、ウサミミをピンツと伸ばし自信満々に頷く。その隣のテイオもやつと我に振り返いた。

ハジメは、視線を大群に戻すと不敵な笑みを浮かべながら、何の気負いもなく呟いた。「じゃあ、殲滅戦の開始といこうか」

~~~~~

―ウルの町が見える山の麓―

ハジメが空の魔物を殲滅した光景を彼は麓で眺めていた。

「ほう、私も見た事のない美しい紅い雷魔法。……やつぱり彼は私と同じ迷宮の攻略者

が妥当ですかね。でも、そしたらこれで……奴等を」

彼はハジメの存在を知り、調べに回っていた。

南雲ハジメ

教会によって召喚された神の使徒の一人であるとその中でも相当の実力を持つていること、七大迷宮の一つのオルクス大迷宮でベヒモスと戦い、奈落に落ちて死んだと言われていること。だが、彼は生きていて、出会った仲間と一緒に目的は分からないが迷宮を攻略していると推測した。

「南雲ハジメ、貴方を今ここで実力を見せて貰いましょうか。そして、判断させて貰う。貴方々は神を殺せる程の実力者なのかを」

そう、彼は判断するハジメはどれ程の実力なのかを、そして彼が掲げている先祖の願いであり、成すべき「神殺し」必要な人材かと見定める。

もし、魔物共に負けたとしても自分が「転移」で助太刀でもすれば良い。

彼はそう思いながら見定める。

彼の名は「アレス・バーン」。

解放者の意思を願いを受け継ぐ者だ……。

## 三十六話

## 蹂躪劇

少年は、自分の目に入る光景に目を見開いて声を上げた。

「……………、これなら……町が壊されずに済む」

ウルスの町を襲う数万規模の魔物の大群の遙か後方で、即席の塹壕を掘り、出来る限りの結界を張って必死に身を縮めている少年、清水幸利は、目の前の光景に体を震わせながら歓喜して言葉を失っていた。願っていた光景、自分の手で人が死なない現実に、内心で言葉にもなつて喜びと安堵を感じていた。

魔物の大群をけし掛けたのは紛れもなく、行方不明になっていた愛子の生徒、清水幸利だった。とある男に偶然に相対した末に、操られ、ウルスの町を愛子達ごと壊滅させられる事になった。

何処かの熟練の冒険者なのだろう。だから、魔物を殲滅してくれた後は……………

「——殺して貰おう」

清水は今も自分の過ちで呼びつけてしまった魔物の殲滅をしてる冒険者達にそう願ったのだった。



メツエライの弾が後、少して切れると判断したハジメはユエとテイオに広域範囲がデカイ魔法を頼み、二人はそれを了承した。

テイオはハジメから受け取った魔晶石のネックレスにストックされた魔力を取り出し、ブレスの一撃によりテイオが担当する範囲の魔物の先陣はあらかた消滅し、多少の余裕が出来たテイオは、魔力消費の比較的少ない魔法を行使する。

「吹き荒べ頂きの風 燃え盛れ紅蓮の奔流 嵐焰風塵」

少しでも魔力消費を抑えるため、敢えて詠唱し集中力を高める。そうして解き放たれた魔法は火炎の竜巻だった。渦巻く炎が魔物の群へと爆進し、周囲の魔物達をまとめて巻き上げた。宙へと放り出され足掻くすべを持たない魔物達は、そのまま火炎に自ら飛び込むように巻き込まれていく。そして、紅蓮の竜巻から放り出された時にはただの灰燼に変わり果て灰色の雪のように舞い散るのだった。そのまま全てを灰燼と帰す竜巻は、存分に戦場を蹂躪していく。

ハジメの右に陣取るユエの殲滅力は更に飛び抜けていた。俺達が攻撃を開始しても、瞑目したまま静かに佇むユエ。右側の攻撃が薄いと悟った魔物達が、破壊の嵐から逃れるように集まり、右翼から攻め込もうと流れ出す。既に進軍にすら影響が出そうなほど密集して突進して来る魔物達。そして、遂に彼我の距離が五百メートルを切ったその瞬間、ユエは、スッと目を開きおもむろに右手を掲げた。

そして、一言、囁くように、されど世界へ宣言するように力強く魔法名を唱えた。

「――『壊劫』」

それは神代魔法を発動させるトリガーだ。ミレディ・ライセンにより授けられた世界の法則の一つに干渉する魔法『重力操作』。魔法に関しては天性の才能を持つ吸血姫を以てして、魔力の練り上げとイメーজの固定に長い『タメ』を必要とし即時発動は未だ困難な魔法。

ユエの詠唱と同時に迫る魔物の頭上に、対黒竜戦で見たのと同じ渦巻く闇色の球体が出現する。しかし、以前と違うのは、その球体が形を変化させたことだ。薄く薄く引き伸ばされていく球体は魔物達の頭上で四方五百メートルの正四角形を形作る。そして、太陽の光を遮る闇色の天井は、一瞬の間のと眼下の魔物達目掛けて一気に落下した。

密集して突進していた魔物達は、何が起きたのか理解する暇もなく体の全てを均等に押し潰され、地の底で大地のシミとなった。その様相は、まるで魔物の死体集積場のようである。ユエの放った一撃で、一度に二千体近い魔物が一瞬で圧殺され、運悪く、術の境界線上にいた魔物達は体を寸断され臓物を撒き散らすことになった。

やがて、魔物の数が目に見えて減り、密集した大群のせいで隠れていた北の地平が見え始めた頃、遂にティオが倒れた。渡された魔晶石の魔力も使い切り、魔力枯渇で動けなくなったのだ。

「むう、妾はここまでのようじゃ……もう、火球一つ出せん……すまぬ」

うつ伏せに倒れながら、顔だけを俺の方に向けて申し訳なさそうに謝罪するティオの顔色は、青を通り越して白くなっていた。文字通り、死力を尽くす意気込みで魔力を消費したのだろう。

「……十分だ。後は、任せてそのまま寝てろ」

ハジメはそのままティオの頭を撫でる。

「ご主人様のあ、愛が……深い」

「深くねえし、愛じゃねえよ。早く寝て休め」

ハジメは、そう言つてティオの発言を適当に返しながら、魔物の群れに視線を戻す。「既に、一万を割り八千から九千と言ったところか……見る限り、一部の魔物が命令を出しているようだな」

大抵の魔物は完全に及び腰になっており、命令を出している各種族のリーダー格の魔物に従つて、戸惑つたように突進して来ている。数が少なくなつたことにより、ハジメはそのことに気がついた。

「……後は近接で片ずけていくか」

ハジメは攻撃方法を切り替えるのが、清水捜索にもなる近接戦が妥当だと思い、ユエにどれくらい魔力が残つてるか聞く。

「ユエ、魔力残量は？」

「……ん、残り魔晶石二個分くらい……重力魔法の消費が予想以上。要練習」

「いや、十分だ。残りはピンポイントで殺る。援護を頼む」

「んっ」

ハジメの少ない言葉でも、委細承知と即行で頷く。そのままハジメはシアに話しかける。

「シア、魔物の違いわかるか？」

「はい。操られていた時のテイオさんみたいな魔物とへっぴり腰の魔物ですよね？」

「へっぴり……うん、まあ、そうだ。おそらく、テイオモドキの魔物が洗脳されている奴等だ今からそいつ等を直接叩くぞ」

「なるほど、私の方も残弾が心許ないですし、直接殺るんですね！」

「行くぞっ」

「はいですう！」

にぱっと笑みを見せるシアに、優しげな笑みを返すハジメ。だが、次の瞬間にはグツと表情を引き締めてメツエライを“宝物庫”にししまうと、ドンナー・シユラークを抜いた。同時に、シアもオルカンを置き、背中のドリユッケンに手をかける。

見たところ、リーダー格と思われる魔物はおよそ百体。おそらく、突撃させて即行で



殺されては、配下の魔物の統率を失うと思ひ、大半を後方に下げておいたのだらうとハジメは推測する。

「だが、問題ねえな……………」

メツエライとオルカン、そしてテイオの魔法による攻撃が無くなつてチャンスと思つたのか、魔物達が息を吹き返すように突進を始める。ハジメとシアの突撃を援護するため、ユエが魔法を發動した。

「——『雷龍』」

即座に立ち込めた天の暗雲から激しくスパークする雷の龍が落雷の咆哮を上げながら出現し、前線を右から左へと蹂躪する。大口を開けた黄金色の龍に、自ら飛び込むように滅却されていく魔物の群れを見て、後続の魔物が再び二の足を踏んだ。その隙に、ハジメとシアが一気に群れへと突撃する。

ドパンツッ！ ドパンツッ！ ドパンツッ！ ドパンツッ！ ドパンツッ！

ハジメは、『縮地』で大地を疾走しながらドンナー・シユラークを連射した。その眼には、群れの隙間から僅かに見えるリーダー格の魔物の姿が捉えられており、撃ち放たれた死の閃光は、その僅かな隙間を縫うようにして目標に到達、急所を容赦なく爆散させる。

前線の魔物には目もくれず、何故か背後のリーダー格ばかりが次々と爆ぜる奇怪さ

に、周囲の魔物が浮き足立った。と、不意に一体の魔物の頭上に影が差す。咄嗟に、天を仰ぎ見た魔物の眼には、ウサミミをなびかせ巨大な戦鎚を肩に担いだ少女が文字通り空から降ってくる光景が飛び込んできた。

その少女、シアは、魔物の頭を踏み台に、ウサギらしくぴよんぴよんと群れの頭上を飛び越えていき、最後に踏み台にした魔物の頭を圧殺させる勢いで踏み込むと、自身の体重を重力魔法により軽くして一気に天高く舞い上がった。

そして、天頂まで上がると空中でくると反転し、今度は体重を一気に数倍まで引き上げ猛烈な勢いで落下する。目標地点は、もちろんリーダー格が数体で固まっている場所だ。自由落下の速度をドリユッケンの引き金を引き激発の反動を利用して更に加速させ、最大限の身体強化をも加えて一撃の威力を最高にまで引き上げる。そして、全く勢いを減じることなく破壊の権化ともいうべき鉄槌を振り下ろした。

「りやあああああ!!!」

ドオガアアアアア!!!

可愛らしい雄叫びと共に繰り出されたその一撃は、さながら隕石の如く。直撃を受けたブルータル型の魔物のリーダー格は、頭から真っ直ぐ地面へと圧殺され、凄絶な衝撃に肉と血を爆ぜさせた。

シアは、回転運動から流れるように体勢を戻し、吹き飛んだブルータル達の隙間から

見えた目標のリーダー格を潰そうと踏み込みの体勢に入った。と、その瞬間、右後方より新手が高速で接近する音をウサミミが捉える。シアは、慌てずドリユツケンを最適のタイミングで体ごと回転させ迎撃しようとした。が、その新手、黒い体毛に四つの紅玉のような眼を持った狼型の魔物は、それを予期していたように寸前で急激に減速すると、見事にシアの一撃を躲けてみせた。

「えっ?!」

シアが攻撃をしようとした瞬間、黒い四目の狼は、シアではなくドリユツケンに飛びかかり、その強靱な顎と全体重で地に押し付けるようにして封じたのである。もちろん、たかだか魔物の一体くらい、シアの身体強化を施された膂力ならどうということはない。しかし、それでも意表を突かれた事と、一瞬であれ動きを封じられたことに変わりはない。

「……………っ——ふえっ？」

鋭い牙がシアを血濡れにさせるかというその瞬間、何かがシアと四目狼の間に割り込んだ。それは、縦六十センチ横四十センチ、中心部分にラウンドシールドの様なものが取り付けられている金属製の十字架だった。その十字架が魔物の顎門に挟まりシアに喰いつくの阻止した。ギリギリと音を立て、魔物が必死に突如飛び込んできた異物を噛み砕こうと力を入れるが、薄く紅色に発光する十字架はビクともしない。そして次の

瞬間、轟音と共に魔物の下顎が爆ぜて吹き飛んだ。

「グウルアアア!!」

悲鳴を上げてのたうち回る魔物の頭上にスつと音もなく移動した十字架は、再度轟音と共に弾丸を吐き出し魔物の頭部を粉碎する。

更に……

ズドンツ!!

発砲音が聞こえたと思うと、シアのドリユッケンを握る手が軽くなった。シアが、相棒を一時的に封じていた四目狼を振り返ると、そちらも腹部と頭部を空中に浮遊する二つの十字架に撃ち抜かれ崩れ落ちていた。

「シア、油断するな。魔物の中に、明らかに動きの違うやつがいる。洗脳支配されているわけでも、どこかの魔物の配下というわけでもなさそうだ。クロスビットを三機付けておく。右の二十七体を殺れ。前線は、ユエが後五分は持たせてくれる」

シアが、やや自らのピンチとそれを脱した事に意識を囚われていると、念話が届いた。それにハツと我を取り戻したシアは気を引き締め直し、首元のチョーカーの念話石を通して返事をする。

「了解です! それと、助かりました。有難うございます!」

「おう、気をつけてな」

「……ふふ、やっぱりハジメさんは優しくてカッコイイですう！」

シアは、通信が切れた事を確認すると、まるで自分を守るように周囲を浮遊する「クロスビット」に頬を綻ばせて、そんな独り言を呟いた。そして、気合を入れ直してドリユッケンを構え、先程の毛色の違う魔物に注意しながらリーダー格の殲滅に乗り出した。

「ふう、これなら安心だな。だが、流石にカッコイイは照れるな……」

クロスビットの動作が良好なことを確認したハジメはそんな事を呟きながら、猛烈な勢いで魔物を駆逐していく。そのハジメの周囲にも四機の十字架が浮遊している。

——「クロスビット」

ハジメがそう呼んだ浮遊する十字架は、無人偵察機と同じ原理で動く攻撃特化タイプだ。内部にライフル弾や散弾が装填されており、感応石が七つ取り付けられた腕輪で操作する。また、表面を覆う鉱石には生成魔法により「金剛」を付与しており、感応石の魔力に反応して強固なシールドにもなる。

ハジメは、ガン⇨カタでドンナー・シユラークを縦横無尽に操りながら、雷魔法、クロスビットを併用して、隙のない嵐のような攻撃を繰り広げる。既に、リーダー格の魔物を四十体近く屠り、全開の「威圧」により逃亡する魔物も出始めている。

「粗方、片付いたか……あれって、まさか!」

と、ハジメの視界の端に遠くの方で逃げ出す魔物に向かって何やら襲われている人影を捉え、駆け出した。

近付くにつれハジメはある光景を目撃する。黒いローブ——清水に向かって黒い四目の狼型魔物が一斉に襲いかかっている光景だった。

「……清水!」

なぜ、そんな魔物がここに?!という疑問はあるが、清水が攻撃を受けそうになっている以上、今は、余計な思考だ。ハジメは、一時的にリーダー格の魔物駆逐から意識を逸らし、十二体の黒い四目狼の撃破に集中した。

「——<sup>へんらいぎよ</sup>紅雷玉<sup>ぎよ</sup>——」

ハジメの魔法で周りに沢山の紅雷の玉が出現し、紅雷の宝玉が数体の四目狼に狙いを定めて放たれた。そして、一瞬にして、清水に襲いかかろうとした四体を宝玉に内包された雷が消し去った。

すると残った四目狼達が標的をハジメに変え、襲い掛かる。ハジメは、難なく襲い来る四目狼達をドンナーシユラクで撃ち抜いていく。しかし、内の一体が、最初から捨て身を狙ったのか、撃ち抜かれた魔物に体当たりしてハジメに向かって吹き飛ばした。ハジメは、横つ飛びに回避しながら、飛んでくる魔物の下方より発砲し、その後ろを疾

駆してくる四目狼の頭部を吹き飛ばす。受身を取りながら、即座に立ち上がる。しかし、この瞬間を待っていたと言わんばかりの四目狼が大口を開けて、その牙でハジメを噛み殺そうとする。

「俺も待っていたぜ、このタイミングをよお」

傍から見れば、間違いなく四目狼の顎門がハジメの体に喰いついたように見えただろう。しかし、それがハジメの狙いであり、その瞬間、姿がゆらりと揺れると四目狼の顎門は何もない空でガチンツッ！と音を立てて閉じられた。ハジメの体はいつの間にか一歩進んだ場所におり、すれ違い様にシユラークでその四目狼の腹部を撃ち抜いた。

「初めて、『幻踏』を使ってみたが、使えるなこれは」

クハツと笑うハジメは、気配遮断の派生技能『幻踏』を発動して、四目狼を撃退したのだ。そして、ハジメは更に『紅狼』を発動して一気に清水に下へ駆けつけると、今にも清水に噛み付こうとする黒い四目狼からの攻撃を防ぎ、ドンナーシユラーク、クロスビットで殲滅する。

「清水っ！ちっ……やっぱりかつ……」

ハジメが清水の容態を確認していると、首に首輪みたいな物が着いていた。急いで取り外そうとすると清水の声が聞こえた。

「……誰？」

「！　清水、安心しろ今外す！」

「この声……まさか、南雲なのか？」

清水は今にも泣き出しそうな声音でハジメに話しかけるとハジメは笑みを浮かべて返事をする。

「ああ、真正正銘、南雲ハジメ本人だ」

「……よ、良かった、生きててっ」

清水はそう言つて嬉しそうに涙を流していた。ハジメはそんな清水を見て、笑みを浮かべる。

「ああ、俺もお前と再会出来て嬉しいよ。後、安心しろこの首輪は外してやる。大概洗脳系の首輪だろ」

「で、出来るのか？でも、これ無闇に外そうとしたら爆発するんだぞ」

「クハツ、清水。俺を誰だと思つてる俺は『錬成師』だぜ？こんなの簡単だつ！」

ハジメは清水に着けられている首輪に触れると、脳内設計で新たな派生技能「＋構造把握」で首輪の原理を構造を瞬時に理解したハジメは首輪を外す。

「よし、成功」

「嘘だろ……外れた」

清水は首輪が本当に外れた事に啞然としていた。ハジメも首輪以外の外傷はあまり



無いことに安堵すると、後ろへと振り返る。

「……後、お掃除だな」

ハジメはそう言つて立ち上がると、清水が聞いてきくるので、返事をした。

「おい南雲、何処に行くんだよ?」

「清水、少し待つとけ。残りを片付けてくる」

ハジメはそう言い残して殲滅を再開していく。クロスビットを飛ばして怒涛の勢いでリーダー格を仕留めにかかる。離れた場所にいるシアに付けたクロスビットからの情報では、向こうもあと数体で終わるようだ。町に向かって突進していた前線の魔物も、ユエの雷龍が全く寄せ付けていないようだ。

「……そろそろだな」

確認していた限りの洗脳を受けた魔物の駆逐したハジメは、それを確認すると、スウーと大きく息を吸い「魔力放射」を併用して天地に轟けとばかりに咆哮を上げる。

「カアアアアアアアアアアア!!」

戦場を特大の咆哮と魔力が波動となつて駆け巡る。その圧倒的な威圧は、何より魔物達の精神に衝撃となつて襲いかかり多大な本能的恐怖を感じさせた。そして、自分達の群れのリーダーが既に存在していないことに気がつくのと、しばらくの硬直の後、一体、また一体と後退りし、遂には踵を返してハジメを迂回しながら北を目指して必死の逃亡を

凶り始めた。

そんな光景を清水は苦笑いしながら呟いた。

「チート過ぎんだろ」

「清水」

「あつ南雲お疲れ。それにしても凄いな」

「まあな、しかしよく俺に気づいたな、髪色とか変わってんのに、驚いたぞ」

少しハジメは驚いていた。奈落に落ちる前より風貌は変わってると自分でも理解しているからか、気付くとしても、幼なじみ程度しかいないと思っていたのだが清水は自分が南雲ハジメであるとは分かったのだ。

「俺も最初は誰だと思ったださ……でもな魔物に始末されそうな時にお前が守ってくれた姿がああのに似ていて、もしかしてと思っただ」

「クハツ……まだ、覚えてんのかよ」

「そりや覚えてるよ。だって、あの時に自分の目的と憧れを見つけたからな」

笑って答える清水に、ハジメも同じように笑みを見せる。

「クハツ……そうかい」

「そう言つてハジメは『宝物庫』から『魔力駆動二輪』を出して、清水に乗るように促した。

「取り敢えず、後ろに乗れ。事情は先生達もいた方が良いだろう？」  
 「ああ、そうだよな……愛子先生にも謝らないと」

清水はそう言いながらハジメの後ろに乗る。乗ったのを確認したハジメは魔力駆動二輪を走らせたてユエ達の元へと戻っていったのだった……。

~~~~~

アレスはハジメとその仲間達の戦いを見て満足そうに笑みを零していた。

「……私も出る幕もなかったですか。心配は無用でしたね……それにしても、予想以上の実力でした。神代魔法もアレは“生成”と“重力”が妥当ですかね」

アレスはそう言つて片手で持っていた白を基調とし、刃や柄の部分が金色で裝飾されている槍を仕舞う。そして、ハジメ達の使っていた魔法、アーティファクトを見て、ただ自分が持つていない神代魔法と推測していた。

「やっぱり、南雲ハジメは必要な存在ですね。人間族側は神の使徒の召喚、魔人族もこの年に限つて動きが更に増してきている。もしかしたら“五神”がこの時代に諦めた可能性がありますね。……そろそろ私も動くべきですね」

アレスはそう呟きながら空を睨みつけるように眺めていたのだった……。

## 三十七話

## 白ローブの男

清水幸利にとつて、南雲ハジメとは、まさに憧れであつた。二人が最初に出会つたのは高校一年時だつた。

清水はただのオタクなだけでイジメられていた。毎朝、クラスメイトに悪口を言われ、先生の見えない場所では多少なりの暴力を受けていた。

清水は元々、性格的に控えめで大人しく、それが原因なのか中学時代もイジメに遭つていた。当然の流れか登校拒否となり自室に引きこもる毎日で、時間を潰すために本やゲームなど創作物の類に手を出すのは必然の流れだつた。親はずつと心配していたが、日々、オタクグッズで埋め尽くされていく部屋に、兄や弟は煩わしかつたようで、それを態度や言葉で表すようになる。清水自身、家の居心地が悪くなり居場所というものを失いつつあつた。

しかし、清水は高校では変わらうと決め、学校には行くと決めだが結果は変わらなかつた。

陰キヤな理由のせいでイジメられてる清水は今日も空き教室で、クラスメイトにイジ

められていた。

『……………』

最初は言い返そうとしても、味方もおらず何も出来ずに殴られ、蹴られる毎日、もう自殺でもしようかと思っていた時に彼は現れた。

『何やってんの?』

それは、この一年生、いや学校の生徒はだいたい知っている不良だの悪人などの噂が立つ生徒の南雲ハジメだった。清水はイジメられると思い蹲り、イジメていたクラスメイト達は最初は驚いたが、すぐに気を取り直して清水に殴ろうとした。清水は恐怖で、目を瞑ってしまったが痛みがない事に気付き目を開けると……

『えっ…………』

殴りかかろうとした奴は、いつの間にか清水の前に移動していたハジメに殴られていた。

『つまんねえこと、すんな』

殴られた奴は、一発KOで白目を向いて倒れ伏した。イジメてた奴等から『檜山ア?!』と叫んでいる。そして、殴ったハジメを睨みつける。が、ハジメはどこ吹く風だ。

そして、ハジメは片手を出して、クイックイツと曲げる。

『なら、てめえ等も来いよ』



う理由だ。町の残った重鎮達が、現在、事後処理に東奔西走しているだろう。

連れて来た清水に、愛子が歩み寄った。デビッド達が、危険だと止めようとするが愛子は首を振って拒否する。拘束も同様だ。それでは、きちんと清水と対話できないからと。愛子はあくまで先生と生徒として話をするつもりなのだろう。

「清水君……」

「愛子先生っ……すみませんっでしたっ！」

「理由があるのですね、やっぱり……」

「はい……実は——」

清水の話を要約するところだった。

ハジメが奈落に落ちてからは、天之河達とは行動出来ない、信用出来ないと判断した清水は、奈々と妙子が提案した先生の護衛隊の話聞いて、先生達のサポートの為、そしてある訓練の幅を広げられると思ひ参加を決意したらしい。

その、ある訓練とは魔物の使役化らしい。元々、清水は天職で扱う闇系統の魔法は、相手の精神や意識に作用する系統の魔法で、実戦などでは基本的に対象にバッドステータスを与える魔法と認識されている。清水の適性もそういったところがあり、相手の認識をズラしたり、幻覚を見せたり、魔法へのイメージ補完に干渉して行使しにくくしたり、更に極めれば、思い込みだけで身体に障害を発生させたりということが出来る。

そして、清水は、ふとあることを思いついた。閨系統魔法は、極めれば対象を洗脳支配できるのではないか？

召喚の原因である魔人族による魔物の使役を思い出し、人とは比べるべくもなく本能的で自我の薄い魔物ならば洗脳支配できるのではないか。

清水は、それを確かめるために夜な夜な王都外に出て雑魚魔物相手に実験を繰り返した。その結果、人に比べて遥かに容易に洗脳支配できることが実証できた。

結果、清水は強い魔物を配下にして、守護に使えると判断し、愛子達とウルの町に来て北の山脈地帯というちよいどいい魔物達を探していたらしい。

その時に黒のフードを被った魔人族と相対したらしい、魔人族の方は清水を勧誘しに来たらしいが清水は断った。だってその行為は自分の憧れを、憧<sup>ハジメ</sup>憬を裏切る事になるから……。

しかし勧誘を出来ないと判断した魔人族は腰から剣を抜き、清水に向かって襲い強行手段に出たらしく、清水もそれなりに抗ったが、流石に後衛職の清水では近接には太刀打ち出来ず負けてしまった。

その後、ハジメが壊した奴隷の首輪を着けられ、魔人族からは無理矢理外そうとする<sup>と</sup>と爆発すると言われ、従うしかなかった。そして清水は従われた通りにどんどん魔物を使役して行って、町に差し向けたのが今回の事の顛末らしい。



「本当にすみませんっでしたっ！」

話を終えた清水は全員に謝り土下座をしていた。すると、愛子は清水に話しかけた。

「清水君……今回の件は許される事ではありません。貴方の独断で沢山の人達に迷惑をかけてるのを分かっていますか？」

「……はい、十分に理解しています、すみまつ——」

愛子に問いに清水は顔を上げ答えようとしたが、遮られた。愛子が抱きついたからだ。

「でもっ、私はそんな事よりも貴方が生きてて良かったっ！　大事な生徒が無事に生きてて良かったっ！」

愛子は涙を流しながら、清水の無事を歓喜していた。

「せ、先生……」

すると、奈々と妙子、他の生徒達も清水に声をかけた。

「清水つちく、良かったよお！」

「はあ、ホントに迷惑掛け過ぎなのよ」

「そうだぞ。清水」

「そうだ。そうだ。終わったら何か奢れよお？」

「そーだぞお」

「み、皆、ごめん。でも、ありがとう」

操られたとしても皆に酷い事をしたのにも関わらずに軽口だけ言ってくれるに皆に清水は感謝した。

だが、こんな良い雰囲気をぶち壊すの者が現れた。

「——ッ、それは罪を逃れる妄言に過ぎないっ！ 即刻、連行して処刑にするべきだっ！」

それは、デイビッドだった。全員がデイビッドに視線を向け、愛子は怒った形相で睨みながらデイビッドに問い詰めた。

「何で、そんな事を言うんですかっ！ 清水君は操られてだけなんですよっ！」

「ち、違うんだっ愛子。彼は罪から逃げる為に虚言の可能性があると……」

「ああ、それは違うぞ」

デイビッドは愛子に問い詰められ、少しビクツとしながらまだ言葉を続けようとしたが、ハジメが遮った。デイビッドはハジメに視線を向けて不機嫌な感情を隠さずに口を開いた。

「ふん、貴様は何か証拠があるのか？」

「ああ、あるさ」

そんな、デイビッドの問いかけにハジメは平然と返しながら「宝物庫」から適当に鉄

鉱石を出した。それを見てデイビッドは驚くが、スルーして、ハジメは錬成で清水に着けられていた首輪を錬成した。ちなみに洗脳能力はない……。

「俺が持っている技能でな。触れた物の構造をすぐに解析して、その物の設計図を作製する技能を持つてんだよ。で、この首輪は清水に着けられていた物だ。なんだったかな、隷属の首輪だっけこれ？」

「なっ！」

ハジメがすぐさま錬成したのを見たデイビッドは隷属の首輪に見覚えがあるらしく驚きを示していた。

「その、反応を見る限り、合ってそうだな。なら、これで清水の疑いは晴れるだろ？ なら設計図も書いて提出してやろうか？」

「……っ！ 故意にやったではない事は理解した」

ハジメの怒涛の返しに言い返せなくなったデイビッドは苦虫を噛み潰したような顔をしながらかた、了承した。それを見てハジメは「ざまあ〜」と言った感じの表情でデイビッドを見た。

「よし、そろそろ町に戻るか……って、テイオの奴がいねえな……ユエ？」

ハジメは一件落着したことだし町に戻ろうとした時、この場にテイオがいない事に気付く、殲滅戦の時に傍に居たユエに聞いた。

「……………ん、どうしたの？」

「ユエ、テイオは何処にいったか知ってるか？」

テイオのことを聞かれたユエは、遠い目をしながら話し出した。

「……………実は」

~~~~~

『カアアアアアアアアアアアアアアアア!!!』

ビリビリッ!!!

ビクッ

「……………ん、流石ハジメ。こんなに凄い威圧」

ユエは壁の上からハジメの「威圧」に圧倒されてしまう。

魔物軍団の方もリーダー格が失い更にハジメの「威圧」を喰らい山脈に向かって逃げた。

「……………どうやら、終わったみたい」

ブルブルッ

流石ハジメと思いながらユエは隣にいるテイオに視線を向けると彼女もハジメの「

威圧”を受けてか、少し身震いをしていた。

流石に竜人族のテイオでも、初めてのハジメの「威圧」はキツかったのだろう。

「……大丈夫、テイオ？ 竜人族のあなたでもハジメの「威圧」に圧倒されちゃった？」

「……ッ！」

ユエは笑みを見せながら問いかけるとテイオは顔を紅くしながら悶えながら声を上げた。

「……ッツッ！　　凄いのじゃあ〜！　　更に惚れてしまうのじゃあ〜！」

テイオはハジメの「威圧」で惚れ直してしまったらしく、目までもハートになっていた。

「……（拝啓……ハジメ。また貴方に完全に堕ちた人が現れました）」

そして、ユエは、息を荒くしながら、まだ悶えているテイオを無視してハジメ達の下へ向かった。

~~~~~

「——つて言うこと」

「……そ、そうか」

ハジメはユエの話の聞き、テイオの気持ちは冗談じゃないと分かり、空を見上げながら、彼女持ちの癖に離れてる間に三人の女の子を墮とした自分に自己嫌悪した。

※ちなみにハジメは日本でも陰ながら男女に人気があり、ある彼の親友の妹が立ち上げているファンクラブがある。本人とその兄は知らないが……。

「まあ、テイオの事は置いといて、町に向かうか」

「そうです…ッ!? ダメです! 避けて!」

ハジメが皆に促そうとしたが、その瞬間、事態は急変する。叫びながら、シアは、一瞬で完了した全力の身体強化で縮地並の高速移動をして愛子に飛びかかったが一足遅かった。

「…っ! 先生エー!」

ドンッ!

「キャッ! 清水君!」

しかし、シアより行動が早かった清水が咄嗟に愛子に押し突き離れたと後、蒼色の水流が、清水の胸を貫通して、ついさつきまで愛子の頭があつた場所をレーザーの如く通過したのはほぼ同時だった。

「チイッ!」

射線上にいたハジメが、ドンナーで水のレーザー、おそらく水系攻撃魔法“破断”を

打ち払う。

「清水君?!」

突然の事態に誰もが硬直する中、清水に押され、立ち上がった愛子が清水の名を呼びながら全力で駆け寄る。そして、追撃に備えてユエやデイビッド達が守るように陣取った。

「クソがつ!」

ハジメは、怒りをすぐさま抑えてからドンナーを両手で構え、「遠見」で「破断」の射線を迎える。すると、遠くで黒い服を来た耳の尖ったオールバックの男が、大型の鳥のような魔物に乗り込む姿が見えた。

ドパンツ! ドパンツ! ドパンツ! ドパンツ! ドパンツ! ドパンツ!

ハジメは、一瞬のタメの後、飛び立った魔物と人影にレールガンを連射する。オールバックの男は、攻撃されることを予期していたように、ハジメの方を確認しつつ鳥型の魔物をバレルロールさせながら必死に回避行動を行った。中々の機動力をもってかわっていた魔物だが、全ては回避しきれなかったようで、鳥型の魔物の片足が吹き飛び、オールバックの男の片腕も吹き飛んだようだ。それでも、落ちるところか速度すら緩めず一目散に遁走を図る。攻撃してからの一連の引き際はいつそ見事という他ない。

「……アレかつ」

おそらく、あれが清水の言っていた魔人族なのだろうとハジメは推測した。既に低空で町を迂回し、町そのものを盾にするようにして視界から消えている。

「あの野郎、殲滅戦を見てやがったな」

恐らく、何処かに隠れてハジメ達の殲滅戦を見ていたのだろう。ハジメの攻撃手段を知っていたような逃走方法だった。そして、魔人族側にハジメ達の情報が渡るだろうと苦い表情をする。逃走方向がウルディア湖の方だった事から、その手前にある林に逃げ込んだなら無人偵察機などによる追跡も難しいだろう。何より、今は優先しなければならぬことがある。

「南雲君！」

「——つ今、行く！」

敵の逃走を察したのだろう、愛子は焦りを含んだ声でハジメを呼び、ハジメもそれに応えてすぐさま向かった。

ハジメは、ドンナーをホルスターにしまうと、近くで倒れている清水のもとへ駆け寄る。

「清水！」

「ヒュー……ヒュー、な……南雲、先生はぶ、無事か？」



「……っ、今は自分の心配をしろ！　今から回復させる！」

怪我のせいで息を乱しながら話す　清水の容態は胸に穴がポツカリと空いていた。出血が激しく、大きな血溜まりが出来ており、ハジメは急いで宝物庫から神水を取り出し飲ませようとする。

「清水、これを飲めっ」

「ゲホツゲホツ！」

しかし、自分では上手く飲み込めないようだ。しまいには、気管に入ったようで激しくむせて吐き出してしまう。

ハジメは自分の不甲斐なさに苛立ちを隠せなく、地面にヒビが入るくらいの威力で殴ってしまう。

「クソツが！」

バキッ！

「……ハジメ」

「ハジメさん……」

「クソツ……（俺は…俺は守れないのか、強くなったのに……）」

ハジメは眉を顰めながら苦虫を噛み潰したような表情で片膝をついて自分に対して怒りが込み上げる中、

「私がその少年を助けてあげましょう」

この場にいる人の声では無い声が聞こえ全員が視線を転じた。そして、全員が驚愕して、身動きが取れなかった。

その人物は空間を転移して来たように現れたのだ。

「なっ——何処から?!」

その人物は白いローブを着て顔がよく見えないが、身長は180は超えてるぐらいの青年に見えた。

白ローブは喋りながら、ハジメ達に近付いて来る。

「……君の持っている物は神結晶の魔力を抽出した神水ですね。そうだったら凄い品物だ」

「……」

近づく白ローブにハジメは咄嗟にドンナーをホルスターから抜き出し構えた。ユエとシアも戦闘の構えを取るが白ローブは両手を上げながら、敵意はないと示して再度、話し掛けた。

「おっと、そのアーティファクトを下ろしてくれませんか？ 君達から見ると私は不審

者ですけど私としても、そこに倒れてる少年を救いたいんです」

「……てめえなら、清水を救う事が出来るのか？」

「……良い『威圧』ですね。はい、そうだと。私なら其処の彼を救える」

ハジメは『威圧』を発動させながらも問いかけるが白ローブは平然としながら返すことに顔には見せてないが、内心、驚いていた。

ハジメは、自分の『威圧』にも動じず淡々と話す白ローブは相当な実力者だと分かる。もしかしたら本当に清水を救えるかもしれない。

「……分かった。俺はお前を信じる」

ハジメは清水を救えるならと思いい信じる事にして、ドンナーを下ろしてホルスターに閉まった。

「ありがとう。信じて貰えて、しかし……デイ……んんっ、そこにいる騎士は教会の関連者かい？」

白ローブはハジメが信じた事を喜んだがデイビッド達を見て、少し嫌そうに聞いてきた。

「ああ、そうだが」

「なら、そうですね。教会の側の人には悪いですけど、眠って貰おうか——『安眠魂』」

「『！』」

「——ッ?!」

白ローブは一言、ある魔法を発動した瞬間、自分達に魔力干渉して驚くも、何も影響

がなく、首を傾げるが、

その瞬間……

ドサツドサツ

「えっ、デイビッドさん?!」

「……なっ」

ハジメ達に何も無かったがデイビッドなどの教会の騎士達だけが倒れていき、愛子が叫んだ。

「大丈夫ですよ。彼等は眠ってるだけです」

そう言いながら、白ローブはもう虫の息の清水に近付き容態を確認していた。

「……ふむ、胸にポツカリ穴が空いてる。でも、これなら私の力でも間に合いますね」

そう言いながら白ローブは清水に手をかざすと魔法を発動させる。

「——『聖天』」

白ローブがそう呟いた直後、清水に光が纏い出し、傷が逆再生していくように無くなっていく光景に目を見開いてしまった。

「なっ?!」

ハジメだけじゃなくユエ達も驚愕を示していた。普通の回復魔法でもあんな回復の仕方は見た事ない。しかし、ハジメやユエ、シアはその魔法は何であるか可能性を持つ

た。

「……ハジメ、アレってもしかして」

「ああ、神代魔法の可能性が高い」

そんな事を話していると白ローブは立ち上がり、愛子は清水の容態を聞いた。

「あつ、あの！ 清水君は?!」

「安心して下さいお嬢さん。彼は少し眠っているだけです、後少ししたら目が覚めます」

「よつ、良かったあ〜」

白ローブから清水は大丈夫と言われ安堵した愛子は力を抜けた様にその場にしゃがみこんだ。生徒達は愛子の方へ向かったがハジメとユエ、シアの三人は白ローブに視線を転じて質問した。

「おい、お前が使っていた魔法は神代魔法だよな?」

「……ええ、そうですよ。私は彼に神代魔法を使いました」

「なら……」

神代魔法の遣い手で、更に樹海の迷宮に必要な“再生の力”を持つ白ローブがいれば心強いと思つてハジメは、声をかけようとするが、白ローブは首を横に振った。

「おっと、でも私は迷宮の事は言いませんし、まだ、貴方々に力添えはしません、まだね」

「……何故？」

ユエが鋭い眼差しで白ローブを睨むが平然と白ローブは平然と言葉を返していく。

「簡単なことです。大迷宮は試練、そのもの……言わば、大迷宮は己への試練です。だから神代魔法が欲しいなら自分達の力で獲得して頂きたい」

白ローブは更に言葉を続ける。

「……南雲ハジメ殿。私は、また会える事を楽しみにしています。その時は貴方の仲間になると約束します」

そう言つて白ローブは現れた時の様に転移をしようとしたがハジメが咄嗟に声を上げた。

「お前は誰なんだっ?! 神代魔法を集める目的は何だ？」

ハジメの質問に白ローブは苦笑気味に応えた。

「まだ、名は言えませんが、目的は『神殺し』ただそれだけです。では、皆さんに自由の意思の下にあらんことを」

そして、再び白ローブは転移をしたかのように俺達の前からいなくなったのだつた……。

## 第四章 紅き閃光は愛しの貴女の元へ〜再会〜

## 三十八話 フューレンへ再び

白ローブが去り、神殿騎士達も清水もまだ寝っているのだがハジメ達はウィルを連れていかないといけない為に、ウルの中から出発しようとしていた。

ハジメが魔力駆動四輪を宝物庫から出していると、愛子と奈々と妙子達が来ていた。

「南雲君、もう行くんですか?」

「ああ、スマンな先生こつちもそろそろウィルを連れて帰らないいけないしな。清水が起きたら、また会おうと伝えといてくれ」

「本当に、戻るつもりは無いんですね……」

「ああ、まだ戻るつもりはない」

「ハジメ……」

「ハジメつち……」

やっぱりハジメが皆の所に戻らないと口になると、全員が少し寂しそうに俯いた。

幼なじみの二人は特に暗い表情だったので、ハジメは頭を片手でポリポリ掻く二人に

話しかけた。

「奈々、妙子、お前達に渡す物がある」

「ん、私達に？」

「えっ何？」

ハジメはそう言つて“宝物庫”からある二つのアーティファクトを取り出し、二人に投げ渡した。

「これって」

「妙子の奴は魔法陣に魔力を流すと硬質化と風の斬撃を飛ばせる鞭だ。名前は“トルネーグ”。操鞭師のお前なら扱えるだろ」

「すつ、凄い……。ありがとつ、ハジメ」

「そして、奈々のは魔力のストックが出来る腕輪だ。名前は“アーベン”。氷術師の奈々は魔力は多くあった方が良いだろ？」

「わあく綺麗……。ありがとつハジメっち！」

「二人が喜んでくれたなら何よりだ」

三人でそんな会話をしていると、男子生徒達が物欲しそうな目でこちらを見ている。ハジメも視線を感じて男子生徒達の方へ視線を転じた。

「……何だよ、お前等？」



「南雲っ！」

「俺達にも何か渡して欲しいな」

「……」

ハジメは視線から男子生徒達のことを見当がついていたので、適当に試作品や鍛錬の時に制作していた武器をポイポイツと投げ渡した。

「おい、南雲。絶対これ適当だろ！」

ハジメはそんな男子生徒達の抗議を無視して、きつさと魔力駆動四輪に乗り込み、それに合わせてユエ達も乗り込んだ。それを確認したハジメは最後に愛子に真剣な表情で告げた。

「……先生、世界が変わっても俺達の先生であろうとしてくれる事は嬉しく思う……。出来れば、これからも何があっても生徒の死があつたとしても折れないでくれ」

ハジメはそう告げてから魔力駆動二輪を走らせ、ウルの本を出ていったのだった。

北の山脈地帯を背に魔力駆動四輪が砂埃を上げながら南へと街道を疾走する。何年もの間、何千何万という人々が踏み固めただけの道であるが、ウルの本から北の山脈地帯へと続く道に比べれば遥かにマシだ。サスペンション付きの四輪は、振動を最小限に抑えながら快調にフューレンへと向かって進んでいた。

車内で運転しながらハジメは清水の件での事でシアに感謝していた。

「シア、清水の件は助かった、お前の『未来視』がなかったら先生までも危なかった」  
「いえいえ、それ程でも」

ハジメの感謝の気持ちが伝わったシアは嬉しそうにウサ耳をピコピコしていた。

「だから、お礼がしたいしな、シア何か要望があったら言ってくれ。でも、出来る範囲の奴で言えよ」

いきなりの言葉に、少し困惑するシア。仲間として当然の事をしたと考えていたので、少々大げさではないかと思う。「う、うくん」と唸りながらシアは、少し考えた後にへらくと笑い、ハジメに視線を転じた。

「では、私の初めてをもらっ『却下だ』……冗談ですよ。私、そんなことしたら優花さんに出会ったらボコボコにされるかもしれません」

「はあ……冗談も程々にしとけよ。それに、お前は優花を何だと思ってるんだ？」

「アハハ……。では、ハジメさんデートしてください。フューレンに着いたら、観光区に連れて行って下さいね？」

「ああ、わかったよ」

そんな事を話していると隣の席のユエと後ろの席にいたティオが羨ましそうな視線でシアを見ていた。

「……良いな。シア、私もハジメとデートしたい」

「そうじゃの〜」

「や、やめてください、そんな視線を私に向けないでください恐いですう……」

「……ユエ、ティオ。時間があつたならお前達ともデートくらいするよ」

「……ホント?」

「ホントかの?」

「ホントだ、だから今回の件は勘弁してくれ」

「ん、分かった(のじゃ)」

そんな会話を車内でしながら一行は中立商業都市フューレンへと向かった。ちなみに同乗していたウイルは会話に着いて来れず窓から景色を眺めているのであった。

中立商業都市フューレンの活気は相変わらずだった。

高く巨大な壁の向こうから、まだ相当距離があるというのに町中の喧騒が外野まで伝わってくる。これまた門前に出来た相変わらずの長蛇の列、唯の観光客から商人など仕事関係で訪れた者達まであらゆる人々が気怠そうに、あるいは苛ついたように順番が来るのを待っていた。

しかし、人々の耳に聞き慣れない音が聞こえ始めた。

キイイイイイイ!!!

振り返ると見たこともない黒い箱型の物体が猛烈な勢いで砂埃を巻き上げながら街道を爆走してくる光景を目撃してギョツと目を剥いた。にわかには騒がしくなる人々。すわつ魔物か！ と逃げ出そうとするが、箱型の物体の速度は想像以上のものであり、気がついたときには直ぐそこまで迫っていた。

そして箱型の物体はギヤリギヤリギヤリと尻を振りながら半回転し砂埃を盛大に巻き上げながら急停止した。

停止した物体、魔力駆動四輪を凝視する人々。一体何なんだと混乱が広がる中、四輪のドアが開いた。ピクツとする人々の事など知ったことじゃないと気にした風もなく降りてきたのは当然、ハジメ達だ。ユエとシア、テイオも人々の視線など気にした様子はない。ウイルだけは、お騒がせしてすみません！ と頻りに頭を下げている。

ハジメは、四輪のボンネットに腰掛けながら、門までの距離を見て後一時間くらいかかりそうだなあと目を細めた。ずっと車中において体が凝りそうだったので門に着くまで外で伸び伸びするつもりだ。魔力駆動四輪は、ハジメが魔力を直接操作して動かししているので、実は運転席に座らなくても操作難度が上がるだけで動かそうと思えば動かせるのだ。

ハジメはボンネットに腰掛けながらそう思っているとシアが疑問を呈した。

「ハジメさん。四輪で乗り付けて良かったんですか？ できる限り隠すつもりだったの

では……」

「ん？ もう、今更だろ？ あんだけ派手に暴れたんだ。一週間もすれば、よほど辺境でもない限り伝播しているさ。いつかこういう日は来るだろうとは思っていたし……予想よりちよつと早まっただけのことだ」

「……ん、ホントの意味で自重なし」

シアの疑問に、ハジメは肩を竦めて答えた。今までは、僅かな労力で避けられる面倒なら避けるべきという方針だったが、ウルスの町での戦いは瞬く間に伝播するはずなので、そのような考えはもう無駄だろう。なので、ユエの言う通り、アーティファクト類をできる限り見せないというやり方は止めて、自重なしで行くことにしたのだ。

「うくん、そうですか。まあ、教会とかお国からは確実にアクションがありそうですし、確かに今更ですね。愛子さんとか、イルワさんとかが上手く味方してくれればいいですけど……」

「まあ、あくまで保険だ。上手く効果を發揮すればいいなあという程度のな。最初から、何とだって戦う覚悟はあるんだ。何かあれば雑ぎ払って進むさ。そういうわけで、シア。お前も、もう奴隷のフリとかしなくていいぞ？ その首輪を外したらどうだ？」

その話は早々に切り上げ、ハジメはシアにも奴隷のフリは止めていいと、首輪をチョンチョンとつつきながら言う。手を出されたらその場で返り討ちにしてやれ、もう面倒

事を避けるために遠慮する必要はないと暗に伝える。

しかし、シアは、そつと自分の首輪に手を触れて撫でると、若干頬を染めてイヤイヤと首を振った。

「いえ、これはこのままです。ハジメさんから初めて頂いたものですし……それにハジメさんのものという証でもありません……最近結構気に入っていて……だから、このままで」

そんな事を言うシアにハジメは笑みを零した。

「じゃあ、もう少しオシヤレじゃないとな」

「え？」

ハジメは、首を傾げるシアの顎に手を当てるとそつと上を向かせた。その行為に、ますますシアの頬が紅く染まる。ハジメはそんなのを気にせず、*“宝物庫”*からいくつか色合いの綺麗な水晶を取り出しつつ、シアの着けている首輪、正確には取り付けられている水晶に手を触れて、*“錬成”*をしていった。

結果、黒の生地には白と青の装飾が幾何学的に入っており、かつ、正面には神結晶の欠片を加工した僅かに淡青色に発光する小さなクロスが取り付けられた神秘的な首輪……というより地球でも売っていいそうなファッション的なチョーカーが出来上がった。

「……上出来かな」

ハジメは、そう呟いてから、出来栄えに満足の表情を浮かべ、首を時折撫でる俺の指の感触にうっとりしていたシアは、ハジメから鏡を渡されてハツと我に返った。そして、いそいそと鏡で首元のチヨーカーを確かめる。そこには、神秘的で美しい装飾が施されたチヨーカーが確かにあった。神結晶のクロスが、シアの蒼穹の瞳と合っていて実に美しい。

シアは、指先でクロスをツンツンと弄りながら、ニマニマと口元を緩ませた。

そして、ハジメの腕に抱きつくとき、にへらくと実に幸せそうな笑みを浮かべながら額をぐりぐりと擦りつけつつ礼を言った。ついでに、ウサミミもスリスリと擦り寄る。

「……ん？」

そんな事していると簡易の鎧を着て馬に乗った男が三人、近くの商人達に事情聴取しながらハジメ達の方へやって来た。

「おい、お前！ その黒い箱？は何なのか説明しろ！」

ハジメに高圧的に話しかけるが、ハジメはこのことも予想していた展開なので門番の男に視線を向けると淀みなく答える。

「これは俺のアーティファクトだ」

そんな尋問を受けていると、その時、門番の一人がハジメ達を見て首をかしげると、「あつ」と思い出したように隣の門番に小声で確認する。何かを言われた門番が同じよ

うに「そう言えば」と言いながらハジメ達をマジマジと見つめた。

「……君達はもしかしてハジメ、ユエ、シアという名前だったりするか?」

「ん? ああ、確かにそうだが……」

「そうか。それじゃあ、ギルド支部長殿の依頼からの帰りということか?」

「ああ、そうだが……もしかして支部長から通達でも来てるのか?」

ハジメの予想通りだったようで門番の男が頷く。門番は、直ぐに通せと言われているようで順番待ちを飛ばして入場させてくれるようだ。四輪を走らせ門番の後を着いて行く。列に並ぶ人々の何事かという好奇の視線を尻目に悠々と進み、再びフェーレンの町へと足を踏み入れた。

~~~~~

現在、ハジメ達は冒険者ギルドにある応接室に通されていた。出された如何にも高級そうなお茶と茶菓子をバリバリ、ゴクゴクと遠慮なく貪りながら待つこと五分。部屋の扉を蹴破らん勢いで開け放ち飛び込んだのは、ハジメ達にウイル救出の依頼をしたイルワ・チャングだ。

「ウイル! 無事かい!? 怪我はないかい!」



以前の落ち着いた雰囲気などがなくなり捨てて、視界にウィルを収めると挨拶もなく安否を確認するイルワ。それだけ心配だったのだろう。

「イルワさん……すみません。私が無理を言ったせいで、色々迷惑を……」

「……何を言うんだ……私の方こそ、危険な依頼を紹介してしまった……本当によく無事で……ウィルに何かあったらグレイルやサリアに合わせる顔がなくなるところだよ……二人も随分心配していた。早く顔を見せて安心させてあげるといい。君の無事は既に連絡してある。数日前からフューレンに来ているんだ」

「父上とママが……わかりました。直ぐに会いに行きます」

イルワは、ウィルに両親が滞在している場所を伝えると会いに行くよう促す。ウィルは、イルワに改めて搜索に骨を折ってもらったことを感謝し、ついで、ハジメ達に改めて挨拶に行くこと約束して部屋を出て行った。ハジメとしては、これっきりで良かったのだが、きちんと礼をしないと気が済まないらしい。

ウィルが出て行った後、改めてイルワとハジメが向き合う。イルワは、穏やかな表情で微笑むと、深々と頭を下げた。

「ハジメ君、今回は本当にありがとう。まさか、本当にウィルを生きて連れ戻してくれるとは思わなかった。感謝してもしきれないよ」

「まあ、生き残っていたのはウィルの運が良かったからだろ」

「ふふ、そうかな？ 確かに、それもあるだろうが……何万もの魔物の群れから守りきつてくれたのは事実だろう？ 女神の狼様？」

にこやかに笑いながら、ハジメが大群との戦闘前にした演説の内容と俺が放った魔法から文字つた二つ名を呼ぶイルワにハジメの頬が引き攣った。

「その二つ名は初めて聞くが……随分情報が早いな。何か通信用のアーティファクトでもあるのか？」

「察しがいいね。ハジメ君の言う通りギルドの幹部専用だけどね。長距離連絡用のアーティファクトがあるんだ。私の部下が君達に付いていたんだよ。といっても、あのもとんでもない移動型アーティファクトのせいで常に後手に回っていたんだけど……彼の泣き言なんて初めて聞いたよ。諜報では随一の腕を持っているのだけどね」

そう言つて苦笑いするイルワ。最初から監視員がついていたらしい。ギルド支部長としては当然の措置なので、特に怒りを抱くこともない。むしろ、支部長の直属でありながら、常に置いていかれたその部下の焦りを思うと、中々同情してしまう。

「それにしても、大変だったね。まさか、北の山脈地帯の異変が大惨事の予兆だったとは……二重の意味で君に依頼して本当によかった。数万の大群を殲滅した力にも興味はあるのだけど……聞かせてくれるかい？ 一体、何があったのか」

「ああ、構わねえよ。だが、その前にユエとシアのステータスプレートを頼むよ……ティ

才は『うむ、二人が貰うなら妾の分も頼めるかの』……ということだ」

「ふむ、確かに、プレートを見たほうが信憑性も高まるか……わかったよ」

「助かる」

そう言つて、イルワは、職員を呼んで真新しいステータスプレートを三枚持つてこさせる。

結果、ユエ達のステータスは以下の通りだった。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

ユエ 323歳 女 レベル：75

天職：神子

筋力：120

体力：300

耐性：80

敏捷：120

魔力：7500

魔耐：7120

技能：自動再生「＋痛覚操作」・全属性適性・複合魔法・魔力操作「＋魔力放射」「＋魔力圧縮」「＋遠隔操作」「＋効率上昇」「＋魔素吸収」・想像構成「＋イメージ補強力上

昇「＋複数同時構成」 「＋遅延発動」 ・血力変換 「＋身体強化」 「＋魔力変換」 「＋体力変換」 「＋魔力強化」 「＋血盟契約」 ・高速魔力回復 ・生成魔法 ・重力魔法

シア・ハウリア 16歳 女 レベル：40

天職：占術師

筋力：60 「＋最大6100」

体力：80 「＋最大6120」

耐性：60 「＋最大6100」

敏捷：85 「＋最大6125」

魔力：3020

魔耐：3180

技能・未来視 「＋自動発動」 「＋仮定未来」 ・魔力操作 「＋身体強化」 「＋部分強化」 「＋変換効率上昇Ⅱ」 「＋集中強化」 ・重力魔法

ティオ・クラルス 563歳 女 レベル：89

天職：守護者

筋力：770 [＋竜化状態4620]

体力：1100 [＋竜化状態6600]

耐力：1100 [＋竜化状態6600]

敏捷：580 [＋竜化状態3480]

魔力：4590

魔耐：4220

技能・竜化「＋竜鱗硬化」「＋魔力効率上昇」「＋身体能力上昇」「＋咆哮」「＋風纏」「＋痛覚変換」・魔力操作「＋魔力放射」「＋魔力圧縮」・火属性適性「＋魔力消費減少」「＋効果上昇」「＋持続時間上昇」・風属性適性「＋魔力消費減少」「＋効果上昇」「＋持続時間上昇」・複合魔法

三人のステータスは、ハジメには及ばないものの、召喚されたチート集団ですら少数では相手にならないレベルのステータスだ。例えば、光輝が「限界突破」を使用したとしても及ばないレベルだ。

「ほう……」

流石に、ハジメもユエ達のステータスを初めて見て、その異常さに内心驚いたが、イルワも口をあぐりと開けて言葉も出ない様子だった。無理もない。ユエとティオは既に滅んだとされる種族固有のスキルである「血力変換」と「竜化」を持つている上に、ステータスが特異に過ぎる。シアは種族の常識を完全に無視している。驚くなどいう方がどうかしている。

「いやはや……なにかあるとは思っていましたが、これほどとは……」

冷や汗を流しながら、何時もの微笑みが引き攣っているイルワに、ハジメはお構いなしに事の顛末を語って聞かせた。普通に聞いただけなら、そんな馬鹿なと一笑に付しそうな内容でも、先にステータスプレートで裏付けるような数値や技能を見てしまっているの信じざるを得ない。イルワは、すべての話を聞き終えると、一気に十歳くらい年をとったような疲れた表情でソファアに深く座り直した。

「……道理でキャサリン先生の目に留まるわけだ。ハジメ君が異世界人の一人だということとは予想していたが……実際は、遙か斜め上をいったね……」

「……それで、支部長さんよ。あんたはどうするんだ？ 危険分子だと教会にでも突き出すか？」

イルワは、ハジメの質問に非難するような眼差しを向けると居住まいを正した。

「冗談がキツイよ。出来るわけないだろう？ 君達を敵に回すようなこと、個人的にもギルド幹部としても有り得ない選択肢だよ……大体、見くびらないで欲しい。君達は私の恩人なんだ。そのことを私が忘れることは生涯ないよ」

「……そうか。そいつは良かった」

ハジメは、肩を竦めて、試して悪かったと視線で謝意を示した。

「私としては、約束通り可能な限り君達の後ろ盾になろうと思う。ギルド幹部としても、個人としてもね。まあ、あれだけの力を見せたんだ。当分は、上の方も議論が紛糾して君達に下手なことはしないとと思うよ。一応、後ろ盾になりやすいように、君達の冒険者ランクを全員『金』にしておく」

「おいおい、そんな大盤振る舞いで大丈夫か？ こちらとしては、随分有難いが……」

「まあ、普通は、『金』を付けるには色々面倒な手続きがあるのだけど……事後承諾でも何とかなるよ。キャサリン先生と僕の推薦、それに『女神の狼』という名声があるからね」

「そうか……感謝するよ」

その後、イルワと別れ、ハジメ達はフューレンの中央区にあるギルド直営の宿のVI Pルームでくつろいだ。途中、ウィルの両親であるグレイル・グレッタ伯爵とサリア・グレッタ夫人がウィルを伴って挨拶に来た。かつて、王宮で見た貴族とは異なり随分と筋の

通った人のようだ。ウィルの人の良さというものが納得できる両親だった。

グレイル伯爵は、しきりに礼をしたいと家への招待や金品の支払いを提案したが、ハジメが固辞するので、困ったことがあればどんなことでも力になると言い残し去っていった。

広いリビングの他に個室が四部屋付いた部屋は、その全てに天蓋付きのベッドが備え付けられており、テラスからは観光区の方を一望できる。ハジメは、リビングの超大型ソファアーにゴロンと寝転びながら、リラックスした様子で深く息を吐いた。

ユエが、寝転んだハジメの頭を持ち上げて膝枕をする。シアは、足元に腰掛けた。テイオは、キョロキョロと物珍しげに部屋を見渡している。

「取り敢えず今日はもう休もう。明日は消費した食料とかの買い出しとかしなきゃならいがユエ、テイオ頼めるか？」

「……ん、任せて」  
「のじゃ」

頑張ったシアのご褒美に、一日付き合おうという約束をしたハジメはユエとテイオに買い出しを頼み、二人は了承した。

「じゃあ、シア明日は楽しむとするか」

「はいですう」



ハジメの言葉にシアはウサ耳をピコピコさせて返答した。その後、四人はあれこれ雑談しつつ、その日の夜は更けていったのであった……。

## 三十九話 海人族の女の子

「ふんふんふふくん、ふんふふくん！ いい天気ですねぇ、絶好のデート日和ですよ  
」

フューレンの街の表通りを、上機嫌のウサミミ少女シアがスキップしそうな勢いで歩いてる。

そんなシアの後ろを、ハジメは苦笑いしながら歩いてた。よほど心が浮きだつていいのか、少し前に進んではくるとターンしてハジメに笑顔を向け追いつくのを待つという行為を繰り返すシアに、周囲の人々同様、ハジメも思わず頬が緩んでしまうのだ。

「はしやぎすぎだろう、シア。前見てないと転ぶぞ？」

「ふふふ、そんなハマしませんよお、ユエさんに鍛えられているんですからッ!」

注意するハジメに、再びターンしながら大丈夫だと言いつつ足を引つ掛けて転びそうになるシア。すかさず、腰を抱いて支える。

「危なかつしいなあ。大丈夫かシア？」

「しゅ、しゅみません」

「ほれ、浮かれているのはわかったから隣りを歩け」

腰を抱かれて恥ずかしげに身を縮めるシアは、ハジメの服の袖をちよこんと摘んだまま、今度は小さな歩幅でチマチマと隣りを歩き始めた。

そんなハジメとシアの二人は周囲の視線を集めつつ、遂に観光区に入った。観光区には、劇場や大道芸通り、サーカス、音楽ホール、水族館、闘技場、ゲームスタジオ、展望台、色とりどりの花畑や巨大な花壇迷路、美しい建築物や広場があつて、正に観光の為に造られた地区である。

「ハジメさん、ハジメさん！　まずはメアシユタットに行きましよう！　私、一度も生きている海の生き物って見たことないんです！」

ガイドブックを片手に、ウサミミを「早く！　早く！」と言う様にびよこびよこ動かすシア。「ハルツィナ樹海」出身なので海の生物というのを見たことがないらしく、メアシユタットというフューレン観光区でも有名な水族館に見に行きたいらしい。

「じゃあ、其処に行くか（しかし、内陸なのに海の生き物とか、気合はいつてんなあ。この世界だと、管理、維持、輸送と大変だろうに……）」

少し興味を持つ点がズレているが断る理由もないので了承する。それにシアが嬉しそうにニコニコしながら俺の手を握って先導した。

途中の大道芸通りで、人間の限界に挑戦するようなアクロバティックな妙技に目を奪

われつつ、たどり着いたメアシユタツトは相当大きな施設だった。海をイメージしているのか全体的に青みがかった建物となっており多くの人で賑わっている。

「ほう……」

中の様子は極めて地球の水族館に似ていた。が、地球ほど、大質量の水の圧力に耐える透明の水槽を作る技術がないのか、格子状の金属製の柵に分厚いガラスがタイルの様に埋め込まれて若干の見にくい。

ハジメはそう思っていたが、シアはそんな事気にならないようで、初めて見る海の生き物の泳いでいる姿に瞳をキラキラさせて、頻りに指を差しながら話かけた。すぐ隣で同じく瞳をキラキラさせている家族連れの幼女と仕草が同じだ。不意に、幼女の父親と思しき人と視線が合い、その目に生暖かさが含まれている気がして、ハジメは何となく気まづくなりシアの手を取ってその場を離れた。シアが、ハジメの行動に驚きつつも、手を握られたのが嬉しくて、頬を染めながら手をにぎにぎし返したのは言うまでもない。

そんなこんなで一時間ほど水族館を楽しんでいると、突然、シアがギョツとしたようにとある水槽を二度見し、更に凝視し始めた。

「ん、んー……うおっ」

そこにいたのは……ハジメが、知っている某ゲームの人面魚そっくりだった。

「き、気持ち悪いですう……」

戦慄の表情でシアが一步後退りする。人面魚は、シアに気がついたのか水槽の中から同じように、彼女を気だるそうな表情で見つめ返した。訳のわからない緊迫感が生まれる。そんな二人？を放置して、ハジメは水槽の傍に貼り付けられている解説に目をやった。

「えー、つと……名称がリーマン、ね」

このシーマンは水棲系の魔物であるらしく、固有魔法「念話」が使えるが滅多に話すことはないらしいがきちんと会話が成立するらしく、確認されている中では唯一意思疎通の出来る魔物として有名ならしい。

ハジメはリーマンの「念話」が気になったのか同じく「念話」を発動した。

「お前さん、念話ができるんだって？本当に話せるのか？言葉の意味を理解できる？」

突然の念話に、リーマンの目元が一瞬ピクリと反応する。そして、ゆっくりハジメを見返した。

「……チツ、初対面だろ。まず名乗れよ。それが礼儀つてもんだろ。全く、これだから最近の若者は……」

おっさん顔の魚に礼儀を説かれてしまった。痛恨のミスである。ハジメは頬を引き

變らせながら再度会話を試みる。

“……それは、悪かったな。俺はハジメだ。本当に会話が出来るんだな。リーマンつてのは一体何なんだ？”

“……お前さん。人間つてのは何なんだ？と聞かれてどう答える気だ？そんなもんわかるわけないだろうが。まあ、敢えて言うなら俺は俺だ。それ以上でもそれ以下でもねえ。あと名はねえから好きに呼んでくれ”

“お、おう……”

リーマンの言う内容が常識的過ぎて、それに一々セリフが少しカツコつけてることにハジメは、ちよつと現実逃避気味に遠くを見る目をしてしていると、今度はリーマンの方から質問が来た。

“こつちも一つ聞きてえ。お前さん、なぜ念話が出来る？人間の魔法を使っている気配もねえのに……まるで俺と同じみてえだ”

リーマンの言うことは正しく、当然といえば当然の疑問だろう。何せ、人間が固有魔法として“念話”を使っているのだから、

“まあ、多少いろいろあつてな”

そしてハジメはリーマンに簡潔に魔物を喰らつて奪い取ったとかなり端折った説明をした。

“……若えのに苦労してんだな。よし、聞いてえことがあるなら言ってみな。おっちゃんが分かることなら教えてやるよ”

「……（なんか、可哀想な奴だと思われて同情された）」

どうやら、ハジメは魔物を喰うしかないほど貧乏だとも思われたようだ。今のそれなりにいい服を着ている姿を見て、「頑張ったんだなあ、てやんでえ！ 泣かせるじゃねえか」とヒレで鼻をすする仕草をしている。

実際、苦労したことは間違いないので特に訂正はしなかったハジメだが、人面魚に同情される人生って……と若干へこんだ。何とか気を取り直しつつ、リーマンに色々聞いてみる。例えば、魔物には明確な意思があるのか、魔物はどうやって生まれるのか、他にも意思疎通できる魔物はあるのか……リーマン曰く、ほとんどの魔物は本能的で明確な意思はないらしい。言語を理解して意思疎通できる魔物など自分の種族しか知らないようだ。また、魔物が生まれる方法も知らないらしい。

他にも色々話しているとそれなりの時間が経ち、傍目には若い男とおっさん顔の人面魚が見つめ合っているという果てしなくシユールな光景なので、人目につき始める。シアアが、それにそわそわし始めハジメの服の裾をちよいちよい引つ張るので、ハジメは会話を切り上げた。

リーマンとの会話は中々に面白かったが、今日はシアに付き合うと決めていたのだ。

蔑ろにしては約束を反故にすることになる。リーマンの方も「おっと、デートの邪魔だったな」と空気を呼んで会話の終わりを示した。ちなみに、その頃には「リーさん」「ハー坊」と呼び合う仲になっていた。

ハジメは、最後にリーマンが何故こんなところにいるのか聞いてみた。そして、返ってきた答えは……

“ん？いやな、さつきも話した通り、自由気ままな旅をしていたんだが……少し前に地下水脈を泳いでいたらいきなり地上に噴き飛ばされてな……気がついたら地上の泉の傍の草むらにいたんだよ。別に、水中じゃなくても死にはしないが、流星に身動きは取れなくてな。念話で助けを求めたら……まあ、ここに連れてこられたってわけだ”

“そうか、リーさん。その、何だ。ここから出たいか？”

“？そりゃあ、出てえよ。俺にやあ、宛もない気ままな旅が性に合ってる。生き物つてのは自然に生まれて自然に還るのが一番なんだ。こんな檻の中じゃなく、大海の中で死にえてもんだよ”

いちいち言葉に含蓄のあるリーマン。既に、リーマンを気に入っていたハジメは、彼を助けることにした。

“リーさん。なら、俺が近くの川にでも送り届けてやるよ。どうやら、この状況は俺達の事情に巻き込まれたせいで済ませたいだしな。数分後に迎えを寄越すから、信じて大



人しく運ばれてくれ”

“ハー坊……へつ、若造が、氣い遣いやがって……何をやる気かは知らねえが、てめえの力になるうって奴を信用できないほど落ちぶれちやいねえよ。ハー坊を信じて待つてるぜ”

ハジメとリーマンは共に男臭い笑みを交わしあつた。するとシアが頬を引き攣らせ、ハジメがシアの手を引いてその場を離れようと踵を返した。訳がわからないが、取り敢えず俺に付いて行くシアにリーマンの“念話”が届く。

“嬢ちゃん、睨んで悪かつたな……ハー坊と繋いだその手、離すんじやねえぞ”

「へ？　へ？　えつと、いえ、気にしてません！」

しつかり返事するシアに満足気な笑みを見せるリーマン。「お節介め」と苦笑いするハジメは、新たな友人のこれからに幸運を祈りつつメアシュタツト水族館を後にした。

そして、その数分後、下部にカゴをつけた空飛ぶ十字架が水族館内を爆走し、リーマンの水槽を粉碎、流れ出てきたリーマンを見事カゴにキャッチすると追いかける職員達を蹴散らし（怪我はさせていない）、更に壁を破壊して外に出ると遙か上空へと消えていくという珍事が発生した。新種の魔物か、あるいはリーマンの隠された能力かと大騒ぎになるのだが……それはどうでもいい話だ。

~~~~~

一方その頃……

ユエとテイオは、商業区にて買い出し中だった。といつても、ハジメの“宝物庫”には必要なものが大量に入っている。旅中で消費した分を少し補充する程度のことだ。したがって、それほど食料品関係を買い漁る必要はなく、二人は、商業区をぶらぶらと散策しながら各種のショップを冷やかしていた。

「……ん、この紅茶おいしい」

「そうじゃの〜」

そして、買い物も無事に終え、二人は近くのカフェで寛いでいると……

ドガシャン!!

「ぐへっ!!」

「ぶぎやあ!!」

すぐ近くの建物の壁が破壊され、そこから二人の男が顔面で地面を削りながら悲鳴を上げて転がり出てきた。更に、同じ建物の窓を割りながら数人の男が同じように悲鳴を上げながらピンボールのように吹き飛ばされてくる。その建物の中からは壮絶な破壊音が響き渡っており、その度に建物が激震し外壁がひび割れ砕け落ちていく。

そして十数人の男が手足を奇怪な方向に曲げたままビクンビクンと痙攣して表通りに並ぶ頃、遂に、建物自体が度重なるダメージに耐えられなくなったようで、轟音と共に崩壊した。

野次馬が悲鳴を上げながら蜘蛛の子を散らすように距離を取る中、ユエとティオは聞きなれた声と気配に、その場に留まり呆れた表情を粉塵の中へと向けた。

「ああ、やっぱり二人の気配だったか……」

「あれ？ ユエさんとティオさん？ どうしてこんな所に？」

「……それはこっちのセリフ……デートにしては過激すぎ」

「全くじゃのおく、で？ ご主人様よ。今度は、どんなトラブルに巻き込まれたのじゃ？」

ユエとティオが感知していた通り、粉塵をかき分けて現れたのはハジメとシアだった。二人はデートに出かけた時の格好そのままに、それぞれお馴染みの武器を携えてユエ達のもとへ寄って来た。可愛らしい服を着ていながら、肩に凶悪な戦鎚を担ぐシアの姿はとてもシユールだ。

「あはは、私もこんなデートは想定していなかったんですが……成り行きで……ちよつと人身売買している組織の関連施設を潰し回っていました……」

「……成り行きで裏の組織と喧嘩？」

呆れた表情のユエにシアが乾いた笑いをする。テイオが、どういふ事かとハジメに事情説明を求めて視線を向けた。

「まあ、ちようど人手が足りなかつたところだ。説明すつから手伝つてくれないか？」

ドンナーをホルスターに仕舞いながら、地面に転がる男達を通行の邪魔だとも言うように瓦礫の上に放り投げていくハジメ。積み重なつていく男達を尻目に、ハジメは、ユエとテイオに何があつたのか事情を説明し始めた。

~~~~~

メアシユタツト水族館を出て昼食も食べ終えた後、ハジメとシアの二人は、迷路花壇や大道芸通りを散策していた。シアの腕には、露店で買った食べ物が入った包みが幾つも抱えられている。今は、バニラっぽいアイスクリームを攻略中だ。

「よく食べるな……そんなに美味いか？」

「あむっ……はい！ とつても美味しいですよ。流石、フューレンです。唯の露店でもレベルが高いです」

「そうか……シア、口元にアイスがついてるぞ」

「……えっ、ちよっ?! ハジメさん／＼」

ハジメはシアのアイスの感想を聞いてると彼女の口元にアイスが付いていたので指

で拭き取った。

そんなハジメの行動に一瞬、食べる手が止まり、顔を真っ赤にするシア。そんなシアに苦笑いしながら横を歩くハジメは、突如、その表情を訝しげなものに変え足元を見下ろした。

「ん？」

それに気がついたシアが、「ん？」と首を傾げてハジメに尋ねる。

「どうかしましたか、ハジメさん？」

「んー？ いやな、〃気配感知〃で人の気配を感知したんだが……」

「気配感知なんて使っていたんですか？」

「どんな事態にも対応できるよう基本は常時展開してるからな」

「うーん？ でも、何が気になるんです？ 人の気配って言っても……」

シアは周囲を見渡して「人だらけですよ？」と首を傾げるがハジメは首を振る。

「いや、そうじゃなくてな……俺が感知したのは下だ」

「下？ ……って下水道ですか？ えっと、なら管理施設の職員とか？」

「それが大人じゃなくてな……っ！ シア急ぐぞ反応が弱くなってきているっ」

「えっ、ちよつと ハジメさん?!」

ハジメはシアに説明しようとしたが反応が弱くなってるのを確認し、説明する暇もな

いと考え駆け出した。シアと二人で地下をそれなりの速度で流れていく気配を追う。  
「下水の流れ的に、ここだなっ」

そう予想したハジメは一気に気配を追い抜くと地面に手を付いて錬成を行った。紅いスパークが発生すると、直ちに、真下への穴が空く。

ハジメとシアは、躊躇うことなくそのまま穴へと飛び降りた。そして、下方に流れる酷い匂いを放つ下水に落ちる前にシアを抱き寄せながら「空力」で跳躍し、水路の両サイドにある通路に着地する。

「ハジメさん、私にも気配が掴めました。私が飛び込んで引つ張り上げますね！」  
「いや、大丈夫だから」

服が汚れるなど気にした風もなく下水に飛び込もうとするシアの首根っこを掴んで止め、再び地面に手を付いて錬成を行った。紅いスパークと共に水路から格子がせり上がってくる。格子は斜めに設置されているので、流されてきた子供は格子に受け止められるとそのまま俺達の方へと移動して来た。ハジメは、左腕のギミックを作動させ、その腕を伸ばさせると子供を掴み、そのまま通路へと引き上げた。

「この子は……」

「まあ、息はある……取り敢えずここから離れよう。臭いが酷い。それに……」  
引き上げられたその子供を見て、シアが驚きに目を見開く。ハジメも、その容姿を見

て知識だけはあったので、内心では結構驚いていた。しかし、場所が場所だけに、肉体的にも精神的にも衛生上良くないと場所を移動する事にする。

何となく、子供の素性的に唯の事故で流されたとは思えないので、そのまま開けた穴からストリートに出ることを止め、穴を錬成で塞ぎ、代わりに地上の建物の配置を思い出しながら下水道路に錬成で横穴を開けた。そして、「宝物庫」から毛布を取り出すと小さな子供をくるみ、抱きかかえて移動を開始して裏路地の突き当たり突如紅いスパークが奔り地面にポツカリと穴を作り、そこからピョンと飛び出し、錬成で穴を塞ぐと、改めて自らが抱きかかえる子供に視線を向けた。

その子供は、見た目三、四歳といったところだ。エメラルドグリーンの長い髪と幼い上に汚れているにも関わらずわかるくらい整った可愛らしい顔立ちをしている。女の子だろう。だが何より特徴的なのは、その耳だ。通常の人間の耳の代わりに扇状のヒレが付いているのである。しかも、毛布からちよこんと覗く紅葉のような小さな手には、指の股に折りたたまれるようにして薄い膜がついている。

「この子、海人族の子ですね……どうして、こんな所に……」

「まあ、まともな理由じゃないのは確かだな……」

迷子の可能性は低だろう。なんせ海人族は、亜人族としてはかなり特殊な地位にある種族だ。彼等は、その種族の特性を生かして大陸に出回る海産物の八割を採って送り

出しているから、亜人族でありながらハイリヒ王国から公に保護されている種族だ。差別しておきながら使えるから保護するという何とも現金な話だが、大概、教会のせいだろう。

「二番有力なのは、誘拐だろう」

ハジメは一番有り得る可能性を呟いていると、海人族の幼女の鼻がピクピクと動いたかと思うと、パチクリと目を開いた。そして、その大きく真ん丸な瞳でジーとハジメを見つめ始める。ハジメも何となく目が合ったまま逸らさずジーと見つめ返した。

意味不明な緊迫感が漂う中、シアが何をしているんだと呆れた表情で近づくと、海人族の幼女のお腹がクゥーと可愛らしい音を立てる。再び鼻をピクピクと動かし、俺から視線を逸らすと、その目が未だに持っていたシアの露店の包みをロツクオンした。

「……腹減ってんだな」

シアも海人族の少女がお腹が空いていることに気付き、これ？ と首を傾げながら、串焼きの入った包み右に左にと動かすと、まるで磁石のように幼女の視線も左右に揺れる。どうやら、相当空腹のようだ。シアが、包から串焼きを取り出そうとするのを制止して、ハジメは幼女に話しかけながら錬成を始めた。

「で？ お前の名前は？」

女の子は、シアの持つ串焼きに目を奪われていたところ、突如、地面から紅いスパ―



クが走り始め、四角い箱状のものがせり上がってくる光景に驚いたように身を竦めた。そして、再度、名前を聞かれて、視線を彷徨させた後、ポツリと囁くような声で自身の名前を告げた。

「……ミュウ」

「そうか。俺はハジメで、そっちはシアだ。それでミュウ。あの串焼きが食べたいなら、まず、体の汚れを落とせ衛生的に悪いし、変に病気になつたら心配だ」

下水で汚れた体のまま食事をとるのは非常に危険だ。幾分か飲んでしまっているだろうから、市販の解毒作用や殺菌作用のある薬も飲ませておく必要がある。

ハジメは、完成した簡易の浴槽に「宝物庫」から綺麗な水を取り出し浴槽に貯め、更にフラム鉱石を利用した温石で水温を調整し即席のお風呂を作った。

返事をする間もなく、毛布と下水をたつぷり含んだ汚れた衣服を脱がされ浴槽に落とされたミュウは、「ひうー!」と怯えたように身を縮めたものの、体を包む暖かさに次第に目を細めだした。

「後、服も必要だな……シア、俺は少し出るから、その子の世話を頼む」

「はい、分かりましたあ」

ハジメは、シアに薬やタオル、石鹸等を渡しミュウの世話を任せて、自らはミュウの衣服を買いに袋小路を出て行った。しばらくして、ハジメが、ミュウの服を揃えて袋小

路に戻ってくると、ミュウは既に湯船から上がっており、新しい毛布にくるまれてシアに抱っこされているところだった。抱っこされながら、シアが「あくん」する串焼きをはぐはぐと小さな口を一生懸命動かして食べている。薄汚れていた髪は、本来のエメラルドグリーンの輝きを取り戻していた。

「あつ、ハジメさん。お帰りなさい。素人判断ですけど、ミュウちゃんは問題ないみたいですよ」

ハジメが帰ってきた事に気がついたシアが、ミュウのまだ湿り気のある髪を撫でながら報告をする。ミュウもそれでハジメの存在に気がついたのか、はぐはぐと口を動かしながら、再びジーと見つめ始めた。良い人か悪い人かの判断中なのだろう。

ハジメは、シアの言葉に頷くと、買ってきた服を取り出した。シアの今着ている服に良く似た乳白色のフェミニンなワンピースだ。それに、グラディエーターサンダルっぽい履物、それと下着だ。子供用とは言え、店で買う時は店員の目が非常に気になったが「妻に買って来て言われてしまって……」と笑って誤魔化した。

ハジメは、ミュウの下へ歩み寄ると、毛布を剥ぎ取りポスツと上からワンピースを着せた。次いでに下着もさっさと履かせる。そして、ミュウの前に跪いて片方ずつ靴を履かせていった。更に、温風を出すアーティファクト、つまりドライヤーを「宝物庫」から取り出し、湿り気のあるミュウの髪を乾かしていく。ミュウはされるがままで、未だ

にジーとを見ているが、温風の気持ちよさに次第に目を細めていった。

「……何気に、ハジメさんって面倒見いいですよね」

「まあな、『ウイステリア』に来る常連さんの子供のお守りとかを優花としてたしな……」

「へえ、それなら納得ですう」

ミュウの髪を乾かしながらシアの言葉に返答しているとシアは頬を緩めてニコニコと笑う。しかし今後の事も考えたハジメは話を切り替えた。

「で、今後の事だが……」

「ミュウちゃんをどうするかですね……」

二人が自分の事を話していると分かつているようで、上目遣いでシアとハジメを交互に見るミュウ。ハジメとシアは取り敢えず、ミュウの事情を聞いてみることにした。

結果、たどたどしいながらも話された内容は、ハジメが予想していた物だった。

すなわち、ある日、海岸線の近くを母親と泳いでいたらはぐれてしまい、彷徨つているところを人間族の男に捕らえられたらしいということだ。

そして、幾日もの辛い道程を経てフューレンに連れて来られたミュウは、薄暗い牢屋のような場所に入れられたのだという。そこには、他にも人間族の幼子たちが多くいたのだとか。そこで幾日か過ごす内、一緒にいた子供達は、毎日数人ずつ連れ出され、戻つ

てくることはなかったという。少し年齢が上の少年が見世物になって客に値段をつけられて売られるのだと言っていたらしい。

いよいよ、ミュウの番になったところで、その日たまたま下水道施設の整備でもしていたのか、地下水路へと続く穴が開いており、懐かしき水音を聞いたミュウは咄嗟にそこへ飛び込んだ。三、四歳の幼女に何か出来るはずがないとタカをくくっていたのか、柵を付けられていなかったのは幸いだった。汚水への不快感を我慢して懸命に泳いだミュウ。幼いとは言え、海人族の子だ。通路をドタドタと走るしかない人間では流れに乗って逃げたミュウに追いつくことは出来なかった。

だが、慣れない長旅に、誘拐されるという過度のストレス、慣れていない不味い食料しか与えられず、下水に長く浸かるといふ悪環境に、遂にミュウは肉体的にも精神的にも限界を迎え意識を喪失した。そして、身を包む暖かさに意識を薄ら取り戻し、気がつけば俺の腕の中だった。

「客が値段をつける、ね。オークションか。それも人間族の子や海人族の子を出すってんなら裏のオークションだろうな」

やはり、フューレンにはあると思っていたがやっぱりかとハジメは思った。大都市あるあるだ。しかし、この事をイルワは、把握してるのか？ いや、もしかしたら手を出せないのか？ と、疑問に感じた。

「……ハジメさん、どうしますか？」

シアが辛そうに、ミュウを抱きしめる。その瞳は何とかしたいという光が宿っていた。亜人族は、捕らえて奴隷に落とされるのが常だ。その恐怖や辛さは、シアも家族を奪われていることから分かるのだろう。

だが、ハジメは首を振った。

「保安署に預けるのが最善だ」

「そんなつ……この子や他の子供達を見捨てるんですか……」

ハジメの言葉にシアが噛み付く。ミュウをギョツと抱きしめてショックを受けたような目で見た。

ハジメは、そんなシアに嘸んで含めるように説明する。

「あのな、シア。迷子を見つけたら保安署に送り届けるのは当然のことだし、まして、ミュウは海人族の子だ。必ず手厚く保護してくれる。それどころか、海人族をオークションに掛けようなんて大問題だ。正式に捜査が始まるだろうし、そうすれば他の子供も保護されるだろう。いいか？ おそらくだが、これは大都市にはつきものの闇だ。ミュウが捕まっていたところだけでなく、公的機関の手が及ばない場所では普通にある事なんだろう。つまり、これはフューレンの問題。どっちにしろ、通報は必要だろう？」

……お前の境遇を考えると、自分の手で何とかしたいという気持ちはわからんでもない

が……」

「そ、それは……そうですが……でも、せめてこの子だけでも私達が連れて行きませんか？ どうせ、西の海には行くんですし……」

「……それは一番駄目だ。西の海に行く前に俺達は大火山の迷宮攻略するし、連れて行く気か？ それとも、砂漠地帯に一人で留守番させるか？ その方が一番危険だ。大体、誘拐された海人族の子を勝手に連れて行ったら、俺達も誘拐犯の仲間入りだぞ？ 心苦しいが連れてくのは駄目だ」

「……うう、はいです……」

この短時間でかなりの情が湧いてしまったのだろう。しかし、ハジメの言ったことは当然の事なので、シアは肩を落としながらも頷いた。ハジメは、屈んでミュウに視線を合わせると、ミュウが理解出来るようにゆっくりと話し始めた。

「いいか、ミュウ。これから、お前を守ってくれる人達の所へ連れて行く。時間は掛かるだろうが、いつか西の海にも帰れるだろう」

「……お兄ちゃんとお姉ちゃんは？」

ミュウが、ハジメの言葉に不安そうな声音で二人はどうするのかと尋ねる。

「悪いが、そこでお別れだ」

「やっ！」

「いや、やつ！ じゃなくてな……」

「お兄ちゃんとお姉ちゃんがいいの！ 二人といえるの！」

「マジか……（以外に駄々っ子だな）」

ハジメとしても信頼してくれるのは悪い気はしないのだが、どつちにしろ公的機関への通報は必要であるし、途中で「大火山」という大迷宮の攻略にも行かなければならぬのでミュウを連れて行くつもりはなかった。なので、「やつー!!」と全力で不満を表にして、一向に納得しないミュウへの説得を諦めて、抱きかかえると強制的に保安署に連れて行くことにした。

ミュウとしても、窮地を脱して奇跡的に見つけた信頼出来る相手から離れるのはどうしても嫌だったので、保安署への道中、ハジメの髪やら眼帯やら頬やらを盛大に引っ張り引っかけ必死の抵抗を試みる。隣におめかしして愛想笑いを浮かべるシアがいなければ、ハジメこそ誘拐犯として通報されていたかもしれない。髪はボサボサ、眼帯は奪われて片目を閉じたまま、頬に引っかけ傷を作つて保安署に到着して、目を丸くする保安員に事情を説明した。

事情を聞いた保安員は、表情を険しくすると、今後の捜査やミュウの送還手続きに本人が必要との事で、ミュウを手厚く保護する事を約束しつつ署で預かる旨を申し出た。ハジメの予想通り、やはり大きな問題らしく、直ぐに本部からも応援が来るそうで、自

分達はお役目御免だろうと引き下がろうとした。が……

「お兄ちゃんは、ミュウが嫌いなのか？」

「うっ」

流石に幼女にウルウルと潤んだ瞳は心に刺さって、心苦しかったがハジメは眼前の保安員のおっちゃんに任せておけば家に帰れる事を根気よく説明するが、ミュウの悲しそうな表情は一向に晴れなかった。

見かねた保安員達が、ミュウを宥めつつ少し強引にハジメ達と引き離し、ミュウの悲しげな声に後ろ髪を引かれつつも、ようやくハジメとシアは保安署を出たのだった。当然、そのままデートという気分ではなくなり、シアは心配そうに眉を八の字にして、何度も保安署を振り返っていた。

やがて保安署も見えなくなり、かなり離れた場所に来たころ、未だに沈んだ表情のシアにハジメが何か声をかけようとした。と、その瞬間、

ドオガアアアン!!!!

背後で爆発が起き、黒煙が上がっているのが見えた。その場所は、

「なっ?!」

「ハ、ハジメさん。あそこって……」

「ああ、保安署だっ急ぐぞ! (クソツツ粗方、誘拐組織が情報漏えいを防ぐ為に保安署ご



と爆破したかつ」

二人は、互いに頷くと保安署へと駆け戻る。焦る気持ちを抑えつけて保安署にたどり着くと、表通りに署の窓ガラスや扉が吹き飛んで散らばっている光景が目に入った。しかし、建物自体はさほどダメージを受けていないようで、倒壊の心配はなさそうだった。ハジメ達が、中に踏み込むと、対応してくれたおっちゃんの保安員がうつ伏せに倒れているのを発見して、容態を確認した。

「……生きてる。気を失ってるだけだな」

両腕が折れて気を失ってるだけだろう。周りを見ても他の職員も爆風に当てられただけで生きてはいる。

ハジメが、職員達を見ている間、ほかの場所を調べに行ったシアが、焦った表情で戻ってきた。

「ハジメさん！ ミユウちゃんがいません！ それにこんなものが！」

シアが手渡してきたのは、一枚の紙。そこにはこう書かれていた。

“海人族の子を死なせたくなければ、白髪の兎人族を連れて〇〇に來い”

「ハジメさん、これって……」

「どうやら、あちらさんは欲をかいいたらしいな……」

ハジメは、メモ用紙をグシャと握り潰すと目を細めた。

おそらく、連中は保安署でのミュウとハジメ達のやり取りを何らかの方法で聞いていたのだろう。そして、ミュウが人質として役に立つと判断し、口封じに殺すよりも、どうせならレアな海人族のシアを手に入れてしまおうとでも考えたのだろう。

「そういう魂胆ならば……」

そんなハジメの横で、シアは、決然とした表情をする。

「ハジメさん！ 私！」

「シア、こいつ等はもう俺の敵だ……全部ぶちのめして、ミュウを奪い返すぞ」

「はいです！」

正直、危険な旅に同行させる気がない以上、さつきと別れるのがベターだとは考えた。精神的に追い詰められた幼子に、下手に情を抱かせると逆に辛い思いをさせることになるしと思ったが、再度拐われたとなれば放っておくわけにはいかない。それに、今回、相手はシアをも奪おうとしている。つまり「大切」に手を出そうというのだ。

「つまり俺の敵だ……遠慮容赦一切無用だ」

ハジメとシアは武器を携え、化け物を呼び起こした愚か者達の指定場所へと一気に駆け出したのだ……。

## 四十話

## ハジメ〇〇になる

商業区の中でも外壁に近く、観光区からも職人区からも離れた場所。公的機関の目が届かない完全な裏世界。大都市の闇。昼間だというのに何故か薄暗く、道行く人々もどこか陰気な雰囲気を放っている。

そんな場所の一角にある七階建ての大きな建物、表向きは人材派遣を商いとしているが、裏では人身売買の総元締をしている裏組織「フリートホーフ」の本拠地である。いつもは、静かで不気味な雰囲気を放っているフリートホーフの本拠地だが、今は、騒然とした雰囲気で激しく人が出入りしていた。おそらく伝令などに使われている下っ端であろうチンピラ風の男達の表情は、訳のわからない事態に困惑と焦燥、そして恐怖に歪んでいた。

そんな普段の数十倍の激しい出入りの中、どさくさに紛れるように頭までスツポリとローブを纏った者が二人、フリートホーフの本拠地に難なく侵入した。バタバタと慌ただしく走り回る人ごみをスイスイと避けながら進み、遂には最上階のとある部屋の前に立つ。その扉からは男の野太い怒鳴り声が廊下まで漏れ出していた。それを聞いて、

ローブを纏った者のフードが僅かに盛り上がりピコピコと動いている。

「ふざんけてんじゃねえぞ！ アア!? てめえ、もう一度言ってみやがれ！」

「ひい！ で、ですから、潰されたアジトは既に五十軒を超えました。襲ってきてるのは

二人組が二組です！」

「じゃあ、何か？ たった四人のクソ共にフリートホーフがいいように殺られてるって  
のか？ ああ？」

「そ、そうなりまッへぶ?!」

室内で、怒鳴り声が止んだかと思うと、ドガッ！ と何かがぶつかる音がして一瞬静かになる。どうやら報告していた男が、怒鳴っていた男に殴り倒されでもしたようだ。

「てめえら、何としてでも、そのクソ共を生きて俺の前に連れて来い。生きてさえいれば状態は問わねえ。このままじゃあ、フリートホーフのメンツは丸潰れだ。そいつらに生きたまま地獄を見せて、見せしめにする必要がある。連れてきたヤツには、報酬に五百万ルタを即金で出してやる！ 一人につき、だ！ 全ての構成員に伝えろ！」

男の号令と共に、室内が慌ただしくなる。男の指示通り、組織の構成員全員に伝令するため部屋から出ていこうというのだろう。耳をそばだてていた二人のフードを着た者達は顔を見合わせ一つ頷くと、一人が背中から戦鎧を取り出し大きく振りかぶった。

そして、室内の人間がドアノブに手をかけた瞬間を見計らって、超重量の戦鎧を遠心

力と重力をたつぷり乗せて振り抜いた。

ドオガアア!!

爆音を響かせて、扉が木つ端微塵に粉碎される。ドアノブに手を掛けていた男は、その衝撃で右半身をひしゃげさせ、更に、その後ろの者達も散弾とかした木片に全身を貫かれるか殴打されて一瞬で満身創痍の有様となり反対側の壁に叩きつけられた。

「構成員に伝える必要はありませんよ。本人がここに居ますからね」

「ふむ、外の連中は引き受けよう。手っ取り早く、済ますのじゃぞ? シア」

「ありがとうございます、テイオさん」

今しがた起こした惨劇などどこ吹く風という様子で室内に侵入して来たのはシアとテイオだ。いきなり、扉が爆砕したかと思うと、部下が目の前で冗談みたいに吹き飛び反対側の壁でひしゃげている姿に、フリートホーフの頭、ハンセンは目を見開いたまま硬直していた。しかし、シアとテイオの声に我に返ると、素早く武器を取り出し構えながらドスの利いた声で話した。

「……てめえら、例の襲撃者の一味か……その容姿……チッ、リストに上がっていた奴らじゃねえか。シアにテイオだったか? あと、ユエとかいうちびっこいのもいたな……なるほど見た目は極上だ。おい、今すぐ投降するなら、命だけは助けてやるぞ? まさか、フリートホーフの本拠地に手を出して生きて帰れるとは思ってッ!? 『ズドンッ!』グ

ギヤアアア!!」

好色そうな眼でシアとテイオを見ながらペチャクチャと話し始めたハンセンに、シアは冷め切った眼差しを向けて問答無用にシヨットガンを撃ち放った。飛び出した無数の鉄球によりハンセンは右腕を吹き飛ばされた状態で錐揉みしながら背後の壁に激突し、絶叫を上げながら蹲った。

騒ぎを聞きつけて本拠地にいた構成員達が一斉に駆けつけてくるが、テイオが炎系魔法で階段を灰に変え上階へと至る道を無くしたため立ち往生する。更に「プレス」縮小版を横風に打ち払い、七階をハンセンの部屋を除いて全て消し炭にした。風通しどころか、見通しも良くなつたフリートホーフの本拠地、茫然と上階を見上げる構成員達に、テイオは、風刃や炎弾をマシンガンの如く撃ち放っていく。容赦の欠片もない攻撃に、構成員達は蜘蛛の子を散らすように逃走を図るが……それが叶うものは少ないだろう。

テイオが、外の構成員を一手に引き受けている間に、シアは、ドリユツケンを肩に担いだまま、悲鳴を上げてのたうつハンセンにツカツカと歩み寄ると、ドリユツケンを腹に突き落とした。「ぐええ」と苦悶の声を上げて何とか大槌を退かせようとするが、超重量のドリユツケンを片腕でどうこうできる訳もなく、ハンセンに出来たことは、無様に命乞いをする事だけだった。

「た、たのむ。助けてくれえ！ 金なら好きに持っていい！ もう、お前らに関

わったりもしない！ だからッゲフ!?」

「勝手に話さないで下さい。あなたは私の質問に答えればいいのです。わかりましたか？ 分からなければ、その都度、重さが増していきますので……内臓が出ないうちに答える事をオススメします」

「……シアよ。お主、やっぱりご主人様の仲間じやの……言動がよう似とるの〜」

後ろを振り返りながら、ツツコミを入れるテイオの言葉はさらつと無視して、シアはハンセンにミュウの事を聞く。ミュウと言われて一瞬、訝しそうな表情を見せたハンセンだが、海人族の子と言われ思い至ったのか少しづつ重さを増していくドリユツケンに苦悶の表情を浮かべながら必死に答えた。どうやら、今日の夕方頃に行われる裏オークシヨンの会場の地下に移送されたようだ。

ちなみに、ハンセンはシアとミュウの関係を知らなかったようで、なぜ、海人族の子にこだわるのか疑問に思ったようだ。おそらく、シア達とミュウのやり取りを見ていたハンセンの部下が咄嗟に思いつきでシアの誘拐計画を練って実行したのだろう。元々、シアはフリートホーフの誘拐リストの上位に載っていたわけであるから、自分で誘拐して組織内での株を上げようともしたに違いない。

シアは、首のチョーカに手を触れて念話石を起動すると、ハジメに連絡をとった。

「ハジメさん、ハジメさん。聞こえますか？ シアです」

“……………シア。ああ、聞こえる。どうした？”

“ミユウちゃん居場所が分かりました。ハジメさんは今、観光区ですよ？ そちらの方が近いので先に向かつて下さい”

“了解した”

シアは、ハジメに詳しい場所を伝えたと念話を切った。既にドリユツケンの重さで呼吸もままならないのか、青紫っぽい顔色になっているハンセン。シアは、ドリユツケンにかけて重力魔法を解いて、通常の重さに戻すとハンセンの上から退かせて肩に担いだ。ドリユツケンの重さからは解放されたものの、既に出血多量で意識が朦朧とし始めているハンセンは、それでも必死にシアに手を伸ばし助けを求めた。

「た、助け……………医者を……………」

「子供の人生を食い物にしておいて、それは都合が良すぎるといふものですよ……………それにあなたのような人間を逃したりしたら、ハジメさんとユエさんに怒られてしまいます。というわけで、さよならです」

「や、やめー！」

グシャー！

シアは、振り下ろしたドリユツケンを勢いよく振り回して付着した血を吹き飛ばすと再び背中に背負い、テイオに向き直った。



「テイオさん。ここは手っ取り早く潰して、早くハジメさん達と合流しましょう！」

「う、うむ……シアも大概容赦ないのじゃ……」

「？ ……何か言いました？」

「な、何でもないのでっ」

ボソツと呟かれた言葉に反応して笑みを返すシアにテイオは冷や汗を垂らしながらシラを切り、フリートホーフ本拠地の破壊活動に勤しむ。

シアとテイオが立ち去った後には、無数の屍と瓦礫の山だけが残った。 フリートホーフ フューレンにおいて、裏世界では三本の指に入る巨大な組織は、この日、実にあっさりとは壊滅したのだった。

~~~~~

「……シア達の所は心配無用だな」

「……………」

シアから念話をもらったハジメとユエは、情報の場所に急行していた。ミュウがオークションに出される以上、命の心配はないだろうが精神的な負担は相当なものはず

だ。奪還は早いに越したことはない。

目的の場所に到着すると、その入口には二人の黒服に身を包んだ巨漢が待ち構えていた。ハジメは、騒ぎを起こしてまたミュウが移送されては堪らないと思い、裏路地に移動すると錬成を使って地下へと侵入して、ユエと共に、気配遮断を使いながら素早く移動していく。

「(此処だな……)」

やがて、ハジメは地下深くに無数の牢獄を見つけた。入口に監視が一人が居眠りしており、その監視の前を素通りして行くと、中には、人間の子供達が十人ほどいて、冷たい石畳の上で身を寄せ合って蹲っていた。十中八九、今日のオークションで売りに出される子供達だろう。

「……完全にクロだな」

この世界は、基本的に、人間族のほとんどは聖教教会の信者であることから、そのような人間を奴隷や売り物にすることは禁じられている。人間族でもそのような売買の対象となるのは犯罪者だけで、神を裏切った者として、奴隷扱いや売り物とすることが許されるらしいが、眼前で震えている子供達が、そろってそのような境遇に落とされべき犯罪者とは到底思えない。正規の手続きで奴隷にされる人間は表のオークションに出されるが、ここにいる時点で、違法に捕らえられ、売り物にされていることは確定な

証拠だった。

ハジメは、突然入ってきたことに怯える子供達と鉄格子越しに屈んで視線を合わせる  
と、静かな声音で尋ねた。

「ここに、海人族の女の子はこなかったか？」

てつきり、自分達の順番だと怯えていた子供達は、予想外の質問に戸惑ったように顔  
を見合わせる。牢屋の中にはミュウの姿はなかった。そのため、ハジメは、他にも牢屋  
があるのか、それとも既に連れ出された後なのか、子供達に尋ねてみたのだ。

しばらく沈黙していた子供達だが、ハジメの隣りにユエがしゃがみ込み優しげな瞳で  
「……大丈夫」と呟くと、少し安心したのか、一人の七、八歳くらいの少年がおずおずと  
質問に答えた。

「えつと、海人族の子なら少し前に連れて行かれたよ……お兄さん達は誰なの？」

やはり、既に連れて行かれたあとかと内心舌打ちしたハジメは、不安そうな少年に向  
かって簡潔に優しく笑みを浮かべながら返した。

「君達を助けに来たんだ」

「えっ!?! 助けてくれるの!」

ハジメの言葉に、驚愕と喜色を浮かべて、つい大声を出してしまう少年。その声は薄  
暗い地下牢によく響き渡った。慌てて口を両手で抑える少年だったが、監視にはばっち

り聞こえていたようで「何騒いでんだ！」と目を覚ましてドタドタと地下牢に入ってきた。

そして、ハジメ達を見つけて、一瞬硬直するものの「てめえら何者だ！」と叫びながら短剣を抜いて襲いかかる。それを見て、子供達は、刺されて倒れるハジメとユエの姿を幻視し悲鳴を上げた。

だが、そんな事はありません。ハジメは、突き出された刃物を左手で無造作に掴み取り、そのまま力を込めて短剣の刃を粉々に砕いてしまった。

ハジメが、手を広げるとバラバラとこぼれ落ちる刃の欠片。監視の男は、それが何なのか一瞬理解出来なかつたようでキョトンとした表情をすると、手元の短剣に目を落としました。そして、柄だけになつてゐる姿を見て、ようやく何が起こつたのか理解し、「なつ、なつ」と言葉を詰まらせながら顔を青ざめさせて一歩後退つた。

ハジメは、問答無用で一歩詰めると男の頭を鷲掴みにし、そのまま地面に叩きつけた。  
グシヤ！

そんな生々しい音共に、一瞬で男は絶命する。

「監視なら、まず警笛鳴らせよ。雑魚が」

呆れた表情でそんな事を言いながら、文字通り監視を瞬殺したハジメに、子供達は目を丸くして驚いている。そんな視線にもお構いなしにハジメは、錬成で鉄格子を分解し

てしまう。子供達の目には、一瞬で鉄格子を消し去ってしまったように見えたため更に驚いてポカンと口を開いたまま硬直してしまった。

「ユエ、悪いが、この子供達を頼めるか？ 俺は、どうやらもうひと暴れしなきゃならないみたいだ」

「ん……任せて」

「おそらく、もうすぐ保安署の連中も駆けつけるだろうしな。そいつらに預ければいい。イルワ支部長が色々手を回してくれるだろうし……細かい事は、あの人に丸投げしよう」

ユエが、若干、同情するような眼差しで遠くを見た。それはギルド支部がある方角だった。実は、ここに来る前に、適当に捕まえた冒険者にイルワ宛の念話石を届けてもらい、事の次第をイルワに説明しておいたのだ。

「やはり、ランク金は役に立つな」

ハジメはそう薄ら笑みを浮かべながら呟いた。

ちなみに、イルワの方から念話石を起動することは出来ないのです、彼は一方的にハジメから、巨大裏組織と喧嘩しているという報告と事後処理もろもろ宜しくという話を聞かされ、執務室で真っ白になっていたりする。

ハジメは、再び、地下牢から鍊成で上階への通路を作ると子供達をユエに任せてオー



会場の客はおよそ百人ほど。その誰もが奇妙な仮面をつけており、物音一つ立てずに、ただ目当ての商品が出てくるたびに番号札を静かに上げるのだ。素性をバラしたくないがために、声を出すことも躊躇われるのだろう。

そんな細心の注意を払っているはずの彼等ですら、その商品が出てきた瞬間、思わず驚愕の声を漏らした。

出てきたのは二メートル四方の水槽に入れられた海人族の幼女ミュウだ。衣服は剥ぎ取られ裸で入れられており、水槽の隅で膝を抱えて縮こまっている。海人族は水中でも呼吸出来るので、本物の海人族であると証明するために入れられているのだろう。一度逃げ出したせいか、今度は手足に金属製の枷をはめられている。小さな手足には酷く痛々しい光景だ。

多くの視線に晒され怯えるミュウを尻目に競りは進んでいく。ものすごい勢いで値段が上がっていくようだ。一度は人目に付いたというのに、彼等は海人族を買って隠し通せると思っているのだろうか。もしかすると、昼間の騒ぎをまだ知らないのかもしれない。

ざわつく会場に、ますます縮こまるミュウは、その手に持っていた黒い布をギュツと握り締めた。それは、ハジメの眼帯だ。ミュウと別れる際、ミュウを宥めることに忙しくてすっかりその存在を忘れていたハジメは、後になって思い出し、現在は予備の眼帯

を着けている。

ミュウは、身を縮こまらせながら考えた。やっぱり、痛いことしたから置いていかれたのだろうか？ 黒い布を取ったから怒らせてしまったのだろうか？ 自分は、お兄ちゃんとお姉ちゃんに嫌われてしまったのだろうか？ そう思うと、悲しくて悲しくて、ホロリと涙が出てくる。もう一度会えたら、痛くしたことをゴメンなさいするから、黒い布も返すから、そうしたら今度こそ……どうか一緒にいて欲しい。

「お兄ちゃん……お姉ちゃん……」

ミュウがそう呟いたとき、不意に大きな音と共に水槽に衝撃が走った。「ひう！」と怯えたように眉を八の字にして周囲を見渡すミュウ。すると、すぐ近くにタキシードを着て仮面をつけた男が、しきりに何か怒鳴りつけながら水槽を蹴っているようだ。気が付く。どうやら更に値段を釣り上げるために泳ぐ姿でも客に見せたかったらしく、一向に動かないミュウに痺れを切らして水槽を蹴り飛ばしているらしい。

しかし、ますます怯えるミュウは、むしろ更に縮こまり動かなくなる。ハジメの眼帯を握り締めたままギュウと体を縮めて、襲い来る衝撃音と水槽の揺れにひたすら耐える。

フリートホーフの構成員の一人で裏オークションの司会をしているこの男は、余りに動かないミュウに、もしや病気なのではと疑われて値段を下げられるのを恐れて、係り



の人間に棒を持ってこさせた。それで直接突いて動かそうというのだろう。ざわつく客に焦りを浮かべて思わず悪態をつく。

「全く、辛気臭いガキですね。人間様の手を煩わせているんじゃないよ。半端者の能無しのごときが！」

そう言つて、司会の男が脚立に登り上から棒をミュウ目掛けて突き降ろそうとした。その光景にミュウはギユウと目を瞑り、衝撃に備える。が、やってくるはずの衝撃の代わりに届いたのは……聞きたかった人の声だった。

「そのセリフ、そっくりそのまま返そうか？　クソ野郎」

それはハジメだった。

ハジメは天井から舞い降り男の頭を踏みつけると、そのまま脚立ごと猛烈な勢いで床に押しつぶした。ビシャアア！　と司会の男から破裂したように血が飛び散る。まさに圧殺という有様だった。

「そのセリフ、そっくりそのまま返すそうか？　クソ野郎」

ハジメは、潰れて一瞬で絶命した男の事など目もくれず義手で水槽を殴りつけた。パリンツッ！　という破碎音と共に水槽が壊され中の水が流れ出す。

「ひゃうー！」

流れの勢いで、思わず悲鳴を上げるミュウを抱き締めるとミュウは目をパチクリと

し、初めて会った時のようにジッターとハジメを見つめる。

「よお、ミュウ。お前、会うたびにびしょ濡れだな?」

冗談めかしてそんな事を言うハジメに、ミュウは、やはりジーと見つめたまま、ポツリと囁くように尋ねる。

「……お兄ちゃん?」

「お兄ちゃんかどうかは別として、お前に髪を引つ張られ、頬を引つ搔かれた挙句、眼帯を取られたハジメさんなら、確かに俺だ」

ハジメが苦笑いしながらそう返すと、ミュウはまん丸の瞳をジワツと潤ませる。

そして……

「お兄ちゃん!!」

ハジメの首元にギュッウ〜と抱きついてひっくひっく〜と嗚咽を漏らし始めた。

「よく、耐えたな。今度はしっかりと守ってやる」

ハジメはそう言つて、ミュウの背中をポンポンと叩きながら手早く毛布でくるんでやった。と、再会した二人に水を差すように、ドタドタと黒服を着た男達がハジメとミュウを取り囲んだ。客席は、どうせ逃げられるはずがないとでも思っているのか、ざわついてはいるものの、未だ逃げ出す様子はない。

「クソガキ、フリートホーフに手を出すとは相当頭が悪いようだな。その商品を置いて

いくなら、苦しまずに殺してやるぞ？」

二十人近くの屈強そうな男に囲まれて、ミュウは、首元から顔を離し不安そうにハジメを見上げた。

「ミュウ、目を閉じてろ」

ハジメは、ミュウの耳元に顔を近づけると、煩くなるから耳を塞いで、囁き、小さなぷくぷくしたミュウの手を取って自分の耳に当てさせる。ミュウは不思議そうにしながらも、焦燥感も不安感もまるで感じさせない余裕の態度をとるハジメに安心したように頷くと、素直に両手で耳を塞いで目を瞑り、ハジメの胸元にギュツと顔を埋めた。

完全に無視された形の黒服は額に青筋を浮かべて、商品に傷をつけるな！ ガキは殺せ！ と大声で命じた。その瞬間、

「——轟雷閃」

ハジメがそう呟くと共に紅い閃光が黒服達を襲った。そして、リーダー格と思われる黒服の頭部と他の黒服の男十人程の首から上が無くなった。誰もが「えっ？」と事態を理解できないように目を丸くして首から上が無く崩れ落ちる黒服達を見つめる。

ようやく、ハジメを尋常ならざる相手だと悟ったのか、黒服たちは後退り、客達は悲鳴を上げて我先にと出口に殺到し始めた。

「む、無詠唱オ?! お、お前、何者なんだ！ 何が、何で……こんなっ！」

混乱し、恐怖に戦きながらも、必死に虚勢を張って声を荒げる黒服の一人。奥から更に十人ほどやってきたがホールの惨状をみて尻込みしている。

そんな彼等をハジメは鼻で笑う。

「何で？ 見りゃわかるだろ？ 奪われたもんを奪い返しに來ただけだ。あとは……唯の見せしめだな。俺の連れに手を出すところなるっていう。だから、終わりは派手にいかせてもらうぞ？」

ハジメはそう言うのと、*“空力”* を使ってホールの天井まで上がって行き、いつの間にか空いていた穴に飛び込んでそのまま建物の外まで空いた穴を通って地上へと出た。

“ユエ。ミュウは無事確保した。そっちはどうだ？”

“……ん、避難完了。後は、客がワラワラ出てくるところ”

“そうか、じゃあファイナーレは派手に行こうか”

“んっ！”

ハジメは、*“空力”* で更に上空に駆け上がりながら、ミュウに話しかけた。律儀に言いつけを守り耳を塞いで胸元に顔を埋めていたミュウは、ハジメの「もういいぞ、ミュウ」という言葉に目をパチクリさせながら周囲を見渡し……「ふわっ!？」という驚きの声を上げた。

「お兄ちゃん凄いの！ お空飛んでるの！」

「飛んでるんじやなくて跳んでるだけなんだが……まあいいか。それより、ミュウ、ちよつと派手な花火が見れるぞ?」

「花火?」

「花火つてのは……綺麗な紅い閃光だ」

「閃光?」

碌な説明が出来ていないが、これからやることに変わりはないのでハジメは気にせずミュウを片腕で抱っこしたまま、「空力」で上空に留まりつつ、ハジメはミュウに「た〜ま〜や〜つて言えば良い」と伝え、ある複合の新魔法を放った。

「んじや、行こうか——『紅雷華』」

「た〜ま〜や〜?」

ハジメの一言と間延びしたミュウの声が夕暮れの空に響いた瞬間、フューレン全体に轟くほどの轟音と共に周囲のフリートホーフの関連建物をも巻き込んで凄絶な紅い閃光の衝撃が走り、裏オークションの会場は言わんばかりに木っ端微塵に粉碎されていき、紅き雷の華が咲き誇った。

「おお〜（初めて放ったが、威力は凄まじいな……）」

「ふええええ!?!」

「どうだ、ミュウ? 驚いたか?」

「花火スゴイ……」

ミュウが紅雷華を見て目を輝かせてると追い打ちをかけるように、少し離れた空に突然暗雲が立ち込め始めた。そして、雷鳴の咆吼と共に、四体の「雷龍」が出現した。

「おつ、アツチも始まったな」

ユエが生み出した「雷龍」四体は、それぞれ別方向に雷を迸らせながら赤く燃える空を悠然と突き進む。おそらく、フューレンにいるほとんどの人が、その偉容を目撃していることだろう。そして、四体の雷龍は、取り残していたフリートホーフの重要拠点四ヶ所に、雷鳴を轟かせながら同時に「落ちた」。稲光で更に周囲と空を染め上げて、轟音と共に建物が崩壊する音がフューレンに響き渡った。

ちなみに、関係のない一般人には危害が及ばないように注意はしている。関連施設やその周辺にも、無人偵察機を飛ばして、しっかりフリートホーフと関係のない人がいなか確認済みだ。なので吹き飛んだり消し炭になっっているのはフリートホーフの間だけである。個人の人格までは知ったことではない。

「ハジメさん！ ミュウちゃんは無事ですか!？」

「ちよ、待つのはじゃシアよ。つて早いのはじゃ!」

ミュウと二人で収まりつつある炎や噴煙を眺めていると、シアからの念話が入った。そういえば、二人には何をするのか詳細は伝えていなかったことを思い出すハジメ。

“ああ。無事だよ。奴等の拠点も大体潰したし……そうだな。多分、悲鳴を上げてい  
るだろうイルワ支部長のもとにでも集合しようか”

“うう、良かったあ。支部長さんのところですね？ 了解です。直ぐに向かいま

すから早くミュウちゃんに会わせて下さいね？”

“ああ。わかつてるよ。じゃあ、向こうでな”

“はいですう”

突然、遠くを見つめて沈黙したハジメに、不思議そうな眼差しを向けるミュウ。ハジ  
メが「お姉ちゃん、もう直ぐ会えるぞ？」と伝えると、「お姉ちゃん！」と嬉しそうに  
頬を綻ばせたと、地上に降りたハジメの下へ捕まっていた子供達を保安員に引き渡した  
ユエがやって来た。抱っこされるミュウをジーと見つめている。ミュウの方は、そわそ  
わと視線を彷徨わせて、ハジメを見上げた。その目が、「この人誰なの？」と言っている。

「ミュウ、彼女の名前はユエ。俺の大切な仲間だ」

「……シアお姉ちゃんも？」

「ああ、仲間だな」

「恋人じゃないの？」

「違うな、俺の恋人はここから、ちよつと離れた所にいるんだ」

「……ミュウも会える？」

「さあな……どうだろうか？」

ハジメとミュウがそんな話をしてるとユエがおもむろに進み出てきたのだ。「むっ」と警戒するミュウ。だが、ユエはそんなミュウの警戒心などお構いなしにミュウを奪い取る、むぎゆくと音がしそうなほどキツく抱きしめた。「むう〜」と唸り声を上げながらジタバタもがくミュウだが、ユエは一向に離さない。そして一言、

「……可愛すぎる」

「……クハッ」

どうやらウチの吸血姫様はミュウの事が相当お気に召したらしい。ようやくプハッと顔を上げて呼吸を確保したミュウは、至近距離でユエと見つめあった。

「……ミュウ。私はユエ。一人でよく頑張った。とっても偉い」

ユエは、優しく目に元を和らげると、抱きしめたままミュウの頭をいい子いい子する。その優しい手つきと温かい雰囲気はミュウは自然と気が緩みホロホロと涙を流し始めた。そのまま、盛大にワツ〜と泣き始める。

ハジメは苦笑いしながらミュウの頭を撫で、泣き止むのを待って冒険者ギルドの支部長のもとへ向かうのだった。

~~~~~



くく

「倒壊した建物二十二棟、半壊した建物四十四棟、消滅した建物五棟、死亡が確認されたフリートホーフの構成員九十八名、再起不能四十四名、重傷二十八名、行方不明者百十九名……で？ 何か言い訳はあるかい？」

「計画的にやっただけだ。反省も後悔もない」

「はあ~~~~~」

冒険者ギルドの応接室で、報告書片手にジト目で俺を睨むイルワだったが、出された茶菓子を膝に載せた海人族の幼女と分け合いながらモリモリ食べている姿と反省の欠片もない言葉に激しく脱力する。

「まさかと思うけど……メアシユタツトの水槽やら壁やらを破壊してリーマンが空を飛んで逃げたという話……関係ないよね？」

「……ミユウ、これも美味いぞ？ 食ってみろ」

「あ〜ん」

ハジメは平然とミユウにお菓子を食べさせているが、隣に座るシアの目が一瞬泳いだのをイルワは見逃さなかった。再び、深い、それはもうとても深い溜息を吐く。片手が自然と胃の辺りを撫でさすり、傍らの秘書長ドットが、さり気なく胃薬を渡した。

「まあ、やりすぎ感はあるけど、私達も裏組織に関しては何も焼いていたからね……今回の件は正直助かったといえれば助かったとも言える。彼等は明確な証拠を残さず、表向きはまっとうな商売をしているし、仮に違法な現場を検挙してもトカゲの尻尾切りでね……はつきりいつて彼等の根絶なんて夢物語というのが現状だった……ただ、これで裏世界の均衡が大きく崩れたからね……はあ、保安局と連携して冒険者も色々大変になりそうだよ」

「まあ、元々、其の辺はフューレンの行政が何とかするところだろ。今回は、たまたま身内にまで手を出されそうだったから、反撃したまでだし……」

「唯の反撃で、フューレンにおける裏世界三大組織の一つを半日で殲滅かい？ ホント、洒落にならないね」

苦笑いするイルワは、何だか十年くらい一氣に年をとったようだ。

「まあな……」

流石に、ちよつと可哀想に感じたハジメは少しイルワに同情してしまったのである提案をした。

「二応、そういう犯罪者集団が二度と俺達に手を出さないように、見せしめを兼ねて盛大にやったんだ。支部長も、俺らの名前使ってくれていいんだぞ？ 何なら、支部長お抱えの『金』だつてことにすれば……相当抑止力になるんじゃないか？」

「おや、いいのかい？ それは凄く助かるのだけど……そういう利用されるようなのは嫌うタイプだろう？」

「良いさ、アンタには色々やって貰ったしな……これぐらいはするさ」

「感謝するよハジメ君」

イルワはハジメからの提案を有り難く受け取った。

ちなみに、その後、フリートホーフの崩壊に乗じて勢力を伸ばそうと画策した他二つの組織だったが、イルワの「なまはげが来るぞ」と言わんばかりの効果的なハジメ達の名の使い方のおかげで大きな混乱が起こることはなかった。この件で、ハジメは「フューレン支部長の懐刀」とか「白髪眼帯の雷使い」とか「紅い化け物」とか色々二つ名が付くことになったが……ハジメの知ったことではない。ないっただけだ。

大暴れしたハジメ達の処遇については、イルワが関係各所を奔走してくれたおかげと、意外にも治安を守るはずの保安局が、正当防衛的な理由で不問としてくれたので特に問題はなかった。どうやら、保安局としても、一度預かった子供を、保安署を爆破されて奪われたというのが相当頭に來ていたようだ。

また、日頃自分達を馬鹿にするように違法行為を続ける裏組織は腹に据えかねていたようで、挨拶に來た還暦を超えているであろう局長は実に男臭い笑みを浮かべて俺達にサムズアップして帰っていった。心なし、足取りが「ランラン、ルンルン」といった感

じに軽かったのがその心情を表している。

「それで、そのミュウ君についてだけど……」

イルワがはむはむとクツキーを両手で持つてリスのように食べているミュウに視線を向ける。ミュウは、その視線にビクツとなる、また引き離されるのではないかと不安そうにハジメやユエ、シア、ティオを見た。

「こちらで預かつて、正規の手続きでエリセンに送還するか、君達に預けて依頼という形で送還してもらうか……二つの方法がある。君達はどっちがいいかな？」

誘拐された海人族の子を、公的機関に預けなくていいのかと首を傾げるハジメに、イルワが説明するところによると、「金」と今回の暴れっぷりの原因がミュウの保護だったという点から、任せてもいいということになったらしい。

「ハジメさん……私、絶対、この子を守つてみせます。だから、一緒に……お願いします」  
シアが、ハジメに頭を下げる。どうしても、ミュウが家に帰るまで一緒にいたいようだ。ユエとティオは、ハジメの判断に任せるようで沈黙したまま見つめている。

「お兄ちゃん……一緒に……め？」

「まあ、最初からそうするつもりで助けたからな……ここまで情を抱かせておいて、はいさよならなんて真似は流石にしねえよ」

「ハジメさん！」

「パパ！」

ミュウとシアは歓喜したがハジメはミュウの発言に脳が一瞬フリーズして身体が硬直した。

「……ミュウ。今なんて言ったんだ？　なんか、聞いてはいけないような単語が聞こえたんだが……」

ハジメの疑問に、ミュウは平然と返した。

「……パパ！」

「……………な、何だって？　悪い、ミュウ。よく聞こえなかったんだ。もう一度頼む」

「パパ」

「……そ、それはあれか？　海人族の言葉で『お兄ちゃん』とか『ハジメ』という意味か？」

「ううん。パパはパパなの」

「うん、ちよつと待とうか」

ハジメが、目元を手で押さえ揉みほぐしている内に、シアがおずおずとミュウに何故『パパ』なのか聞いてみる。すると……

「ミュウね、パパいないの……ミュウが生まれる前に神様のところにいつちやったの

……キーちゃんにもルーちゃんにもミーちゃんにもいるのにミュウにはいないの……だからお兄ちゃんがパパなの」

「何となくわかったが、何が『だから』何だとツツコミたい。ミュウ。頼むからパパは勘弁してくれ。俺は、まだ十七なんだぞ?」

「やつ、パパなの!」

「出会った時のお兄ちゃん呼びにしてくれ!」

「やつー!! パパはミュウのパパなのー!」

その後、あの手この手でミュウの「パパ」を撤回させようと試みるが、ミュウ的にお兄ちゃんよりしつくり来たようで意外なほどの強情を見せて、結局、撤回には至らなかった。

「ハア……こうなったら、もう、エリセンに送り届けた時に母親に説得してもらうしかないか」

ハジメはミュウの説得に出来ないかと判断し、奈落を出てから一番ダメージを受けたような表情で引き下がった。

イルワとの話し合いを終え宿に戻ってからは、アホ三人は誰がミュウに「ママ」と呼ばせるかで紛争が勃発し、取り敢えず、ハジメは恋人でもないのにそんな論争をする三人の頭に軽めの拳骨（ハジメ基準）をして黙らせた。

結局、ママは本物のママしかダメらしく、三人とも「お姉ちゃん」で落ち着いた。そして夜、ミユウたつての希望で全員で川の字になって眠る事になり、ミユウがハジメと誰の間で寝るかで再び揉めて、精神的に疲れきつたハジメが強引にミユウを間にして三人を縛って寝た出来事があつたが、なんとか眠りに付き激動の一日を終えることが出来た。

この日、ハジメは十七歳でパパになった……これより子連れの旅が始まったのであつた……………。

~~~~~

おまけ

ハジメ「なあユエ……」

ユエ「……ん？」

ハジメ「もし、優花と再会したら吊るされそうな気がするんだが？」

ユエ「……再会したら三人の女を侍らしながら子連れで帰って来る恋人……ん、頑

張つてハジメっ！」

ハジメ「うん、吊るされるなこれは……」

ハジメは遠い目をしながら空を見上げるのだった。

## クラスメイトside4

## 緊急事態

淡い緑色の光だけが頼りの薄暗い地下迷宮に、激しい剣戟と爆音が響く。

その激しさは、苛烈と表現すべき程のもので、時折、姿が見えない遠方においても迷宮の壁が振動する程だ。銀色の剣線が、虚空に美しい曲線を無数に描き、炎弾や炎槍、風刃や水のレーザーが弾幕のごとく飛び交う。強靱な肉体どうしがぶつかる生々しい衝撃音や仲間への怒号、気合の声が本来静寂で満たされているはずの空間を戦場へと変えていた。

「万象切り裂く光 吹きすさぶ断絶の風 舞い散る百花の如く渦巻き 光嵐となりて敵を刻め! 〃天翔裂破!」

聖剣を腕の振りと手首の返しで加速させながら、自分を中心に光の刃を無数に放つ光輝。今まさに襲いかかろうとしていた体長五十センチ程のコウモリ型の魔物は、十匹以上の数を一瞬で細切れにされて、碌な攻撃も出来ずに血肉を撒き散らしながら地に落ちた。

「前衛! カウント、十!」



「了解！」

ギチギチと硬質な顎を動かす蟻型の魔物、空を飛び交うコウモリ型の魔物、そして無数の触手をうねらせるイソギンチャク型の魔物。それらが、直径三十メートル程の円形の部屋で無数に蠢いていた。部屋の周囲には八つの横穴があり、そこから魔物達が溢れ出しているのだ。

場所は、「オルクス大迷宮」の八十九層。前衛を務める光輝、龍太郎、雫、永山、檜山、近藤に、後衛からタイミングを合わせた魔法による総攻撃の発動カウントが告げられる。何とか後衛に襲いかかろうとする魔物達を、光輝達は鍛え上げた武技をもって打倒し、弾き返していく。

厄介な飛行型の魔物であるコウモリ型の魔物が、前衛組の隙を突いて後衛に突進するが、頼りになる「結界師」が城壁となつてそれを阻む。

「刹那の嵐よ 見えざる盾よ 荒れ狂え 吹き抜ける 渦巻いて 全てを止め 爆風壁！」

谷口鈴の攻勢防御魔法が発動する。呪文を詠唱する後衛達の一步前に出て、突き出した両手の先にそよ風が生じた。見た目の変化はない。コウモリ型の魔物達も鈴の存在などに気にせず、警鐘を鳴らす本能のままに大規模な攻撃魔法を仕掛けようとしている後衛組に向かって襲いかかった。

しかし、一人の少女がそれを阻んだ。

「全ての敵意と悪意を拒絶する——『聖絶』、『防御力上昇』！」

園部優花が防御の付与で上昇させた防御魔法で何十匹というコウモリモドキが次々と衝突していくが、空気の壁はたわむばかりでただの一匹も彼等を通しはしない。そして、突進してきたコウモリモドキ達が全て空気の壁に衝突した瞬間、優花が投げた投げナイフで一気にコウモリモドキ達を絶命させた。

「ふう……上手くいっただ」

優花は防御が上手くいって安心してると激しい戦闘音の狭間に響く。と、同時に、前衛組が一斉に大技を繰り出した。敵を倒すことよりも、衝撃を与えて足止めし、自分達が距離を取ることを重視した攻撃だ。

「後退——」

光輝の号令と共に、前衛組が一気に魔物達から距離を取っていく。そして、次の瞬間、完璧なタイミングで後衛六人の攻撃魔法が発動した。

巨大な火球が着弾と同時に大爆発を起こし、真空刃を伴った竜巻が周囲の魔物を巻き上げ切り刻みながら戦場を蹂躪する。足元から猛烈な勢いで射出された石の槍が魔物達を下方から串刺しにし、同時に氷柱の豪雨が上方より魔物の肉体に穴を穿っていく。

自然の猛威がそのまま牙を向いたかのような壮絶な空間では生物が生き残れる道理

などありはしない。ほんの数秒の攻撃。されど、その短い時間で魔物達の九割以上が絶命するか瀕死の重傷を負うことになった。

「よし！ いいぞ！ 残りを一気に片付ける！」

「いや、大丈夫だ、もう全滅させたぞ」

「なっ遠藤?! まあ、良い……皆つ、よく頑張った！」

光輝が掛け声をする前に遠藤浩介が光輝の前に立っていた。浩介の後ろには、瀕死だった魔物達を全て殲滅したのだらう魔物達の死体が散らばっていた。そのことに光輝は勝手に行動したのを咎めようとしたが、今は、全員に健闘を称えた。

戦闘の終了と共に、光輝達は油断なく周囲を索敵しつつ互いの健闘をたたえ合った。

「ふう、次で九十層か……この階層の魔物も難なく倒せるようになったし……迷宮での実戦訓練も、もう直ぐ終わりだな」

「だからって、気を抜いちやダメよ。この先にどんな魔物やトラップがあるかわかったものじゃないんだから」

「雫は心配しすぎってえもんだろ？ 俺等あ、今まで誰も到達したことのない階層で余

裕持つて戦えてんだぜ？ 何が来たって蹴散らしてやんよ！ それこそ魔人族が来てもな！」

感慨深そうに呟く光輝に雫が注意をすると、脳筋の龍太郎が豪快に笑いながらそんな

事を言う。そして、光輝と拳を付き合わせて不敵な笑みを浮かべ合った。その様子に溜息を吐きながら、雫は眉間の皺を揉みほぐした。これまでも、何かと二人の行き過ぎをフォローして来たので苦勞人姿が板に付いてしまっている。まさか、皺が出来たりしてないわよね？ と最近鏡を見る機会が微妙に増えてしまった雫。それでも、結局、光輝達に限らず周囲のフォローに動いてしまう辺り、真性のお人好しである。

「……檜山、近藤、これで治ったと思うけど……どう？」

周囲が先程の戦闘について話し合っている傍らで、優花は己のもう一つの本分を全うしていた。すなわち、「神天治療師」として、先程の戦闘で怪我をした人達を治療しているのである。一応、迷宮での実戦訓練兼攻略に参加している十六名の中には、香織ともう一人「治療師」を天職に持つ女の子がいるので、今は、三人で手分けして治療中だ。

「……ああ、もう何ともない。サンキュ、園部」

「お、おう、平気だぜ。あんがとな」

優花に治療された檜山が、ボーと間近にいる優花とあちらで光輝の治療をしている香織の顔を見ながら上の空な感じで返答する。見蕩れているのが丸分かりだ。近藤の方も、耳を赤くしどもりながら礼を言った。前衛職であることから、度々、香織と優花のヒーリングの世話になっている檜山達だが、未だに、優花と香織と接するときは平常心ではいられないらしい。近藤の態度は、ある意味、思春期の子供といった風情だが……檜山

の優花と香織を見る目の奥には暗い澱みが溜まっていた。それは日々、色濃くなっているのだが……気がついてる者はそう多くはない。

二人にお礼を言われた優花は「……どういたしまして」と溜息を吐きながら、スッと立ち上がり踵を返した。そして、周囲に治療が必要な人がいないことを確認すると、目立たないようにまた溜息を吐き、奥へと続く薄暗い通路を憂いを帯びた瞳で見つめ始めた。

「……（ハジメ……）」

その様子に気がついた浩介には、幼なじみの心情が手に取るように分かった。優花の心の内は今、不安でいっぱいなのだ。あと十層で迷宮の最下層（一般的な見解）にたどり着くというのに、未だ、ハジメの痕跡は僅かにも見つかっていない。

それは希望でもあるが、遥かに強い絶望でもある。自分の目で確認するまでハジメの死を信じないと心に決めても、階層が一つ下がり、何一つ見つからない度に押し寄せてくるネガティブな思考は、そう簡単に割り切れるものではない。まして、ハジメが奈落に落ちた日から既に四ヶ月も経っている。強い決意であっても、暗い思考に侵食され始めるには十分な時間だ。

「でも、生きてるよな……俺は信じてるぞ」

浩介は小声で呟いていると、ハジメから貰った投ナイフを、まるで縋り、願うように

ギユツと抱きしめる優花の姿を見て、浩介、そして雫はたまらず声をかけようとした。と、二人が行動をおこす前に一人のムードメーカーがピョンとジャンプし優花の背後からムギユツと抱きついた。

「ユウカつちやくん！そんな野郎共じゃなくて、鈴を癒して〜！ぬつとりねつとりと癒して〜」

「ちよつとつ、何つ、谷口さん！　えっ待つ！　谷口さん、そんなにケガしてないでしょ…つて、ひゃん?!何処触ってんのよアンタっ！」

「してるよお！　鈴のガラスのハートが傷ついてるよお！　だから甘やかして！　具体的には、そのユウカちゃんのおっぱおで！」

「お、おっぱ…ちよつダメだつて！　あつ、こら！　やんつ！　誰か、助けてえー！」  
「ハアハア、ええのんか？　ここがええのんか？　お嬢ちゃん、中々にびんかッへぶ!」  
「…はあ、いい加減にしなさい、鈴。男子共が立てなくなってるでしょが…たつてるせいで……」

ただのおっさんと化した鈴が、人様にはお見せできない表情でデヘデしながら優花の胸をまさぐり、雫から脳天チョップを食らって撃沈した。ついでに、鈴と優花の百合百合しい光景を見て一部男子達も撃チンした。頭にタンコブを作ってピクピクと痙攣している鈴を、何時ものように中村恵里が苦笑いしながら介抱する。

「……ありがとう。助かったわ、雫」

「もう大丈夫よ。また変態が何かしたら退治するから安心してね？」

「うん、ありがとう」

優花は鈴のセクハラを止めた雫にお礼を言った。そんな雫は、優花の顔色を覗いた。しかし、優花は、困った表情で、されど何処か楽しげな表情で恵里に介抱される鈴を見つめており、そこには先程の憂いに満ちた表情はなかった。どうやら、一時的にでも気分が紛れたようだ。ある意味、流石クラスのムードメイカー鈴おっさんバージョンと、雫は内心で感心する。

「あと十層よ。……頑張りましょう、園部さん」

雫が、優花の肩に置いた手に少々力を込めながら、真っ直ぐな眼差しを向ける。それは、心が折れないように活を入れる意味合いを含んでいた。優花も、そんな雫の様子に、自分が少し弱気になっていたことを自覚し、両手で頬をパンツと叩くと、強い眼差しで雫を見つめ返した。

「うん。ありがとう、雫」

「おーい、園部さつきは災難だったな」

「あつ浩介」

流石に鈴のセクハラ行為を男として止める事が出来なかった浩介はセクハラが終

わった後、優花に話しかけた。

「八重樫が言っただけで、十層だな」

「うん」

「今なら……俺、ハジメに勝てるかな？」

「そうね……まあ、無理じゃない？ だってハジメよ。私の大切な人が深淵卿に負ける訳ないでしょ」

「うぐつ、それを言わないでくれ……心にくるんだよ」

「はいはい……ありがとね、浩介」

「……別に、幼なじみを励ましたただけだ」

「ふふっ」

二人はハジメの生存を信じている。あんなので死ぬような人ではないと……しかし、後に色んな意味で度肝を抜かれるのだが、そのことを知るのももう少し先の話だ。

ちなみに、この場にいるのは光輝、龍太郎、雫、香織、鈴、恵里、優花、浩介の他、永山重吾を含める四人及び檜山達四人の十六人であり、メルド団長達は七十層で待機している。実は、七十層からのみ起動できる、三十層と七十層をつなぐ転移魔法陣が発見され、深層への行き来が楽になったのであるが、流石にメルド団長達でも七十層より下の階層は能力的に限界だった。もともと、六十層を越えたあたりで、光輝達に付き合える



団員はメルドを含めて僅か数人だった。七十層に到達する頃には、彼等は既に光輝達の足を引つ張るようになっていたのである。

メルド団長も、そのことを自覚しており、迷宮でのノウハウは既に教えきっていたこともあつて、自分達は転移陣の周囲で安全地帯の確保に努め、それ以降は光輝達だけで行くことにさせたのだ。

たった四ヶ月ほどで超えられたことにメルドは苦笑い気味だったが、それでも光輝達に付き合う過程で、たとえ七十層でも安全を確保できるほどの実力を自分達もつけられたことに喜んでいた。彼らもまた実力を伸ばしていたのである。

なお、光輝達のステータスは現在、こんな感じである。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

天之河光輝 17歳 男 レベル：72

天職：勇者

筋力：880

体力：880

耐性：880



技能：格闘術「＋身体強化」 「＋部分強化」 「＋集中強化」 「＋浸透破壊」・縮地・物理  
 耐性「＋金剛」・全属性耐性・言語理解

八重樫雫 17歳 女 レベル：72

天職：劍士

筋力：450

体力：560

耐性：320

敏捷：1110

魔力：380

魔耐：380

技能：劍術「＋斬撃速度上昇」 「＋抜刀速度上昇」・縮地「＋重縮地」 「＋震脚」 「＋無  
 拍子」・先読・気配感知・隠業「＋幻撃」・言語理解

白崎香織 17歳 女 レベル：72

天職：治癒師

筋力：230

体力：470

耐性：350

敏捷：290

魔力：1200

魔耐：1150

技能：回復魔法「＋効果上昇」「＋回復速度上昇」「＋イメージ補強力上昇」「＋浸透看破」「＋範囲効果上昇」「＋遠隔回復効果上昇」「＋状態異常回復効果上昇」「＋消費魔力減少」「＋魔力効率上昇」「＋連続発動」「＋複数同時発動」・光属性適性「＋発動速度上昇」「＋効果上昇」「＋持続時間上昇」「＋連続発動」「＋複数同時発動」「＋遅延発動」・高速魔力回復・言語理解



遠藤浩介 17歳 男 レベル：72

天職：暗殺者

筋力：500

体力：700

耐性：400

敏捷：900

魔力：800

魔耐：700

技能：暗殺術「＋深淵卿」「＋短剣術」「＋隠蔽」「＋追跡」「＋投擲術」「＋暗器術」・気配操作「＋気配遮断」「＋幻踏」「＋夢幻II」・影舞・言語理解

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

「そろそろ、皆、出発だ！」

光輝はメンバーに号令をかける。既に、八十九層のフロアは九割方探索を終えており、後は現在通っているルートが最後の探索場所だった。今までのフロアの広さから考えて、そろそろ階下への階段が見えてくるはずである。

その予想は当たっており、出発してから十分程で一行は階段を発見した。トラップの有無を確かめながら慎重に薄暗い螺旋階段を降りていく。体感で十メートルほど降り

た頃、遂に光輝達は九十層に到着した。

一応、節目ではあるので何か起こるのではと警戒していた光輝達。しかし、見た目、今まで探索してきた八十層台と何ら変わらない作りのようだった。さつそく、マツピングしながら探索を開始する。迷宮の構造自体は変わらなくても、出現する魔物は強力になつていようから油断はしない。警戒しながら、変わらない構造の通路や部屋を探索していく光輝達。探索は順調だった。だったのだが、やがて、一人また一人と怪訝そうな表情になつていった。

「……………どうなつてる？」

一行がかなり奥まで探索し大きな広間に出た頃、遂に不可解さが頂点に達し、表情を困惑に歪めて光輝が疑問の声を漏らした。他のメンバーも同じように困惑していたので、光輝の疑問に同調しつつ足を止める。

「……………何で、これだけ探索しているのに唯の一体も魔物に遭遇しないんだ？」

既に探索は、細かい分かれ道を除けば半分近く済んでしまつている。今までなら散々強力な魔物に襲われてそう簡単には前に進めなかつた。ワンフロアを半分ほど探索するのに平均二日はかかるのが常であつたのだ。にもかかわらず、光輝達がこの九十層に降りて探索を開始してから、まだ三時間ほどしか経っていないのに、この進み具合。それは単純な理由だ。未だ一度もこのフロアの魔物と遭遇していないからである。

最初は、魔物達が光輝達の様子を物陰から観察でもしているのかと疑ったが、彼等の感知系スキルや魔法を用いても一切索敵にかからないのだ。魔物の気配すらないというのは、いくら何でもおかしい。明らかに異常事態である。

「……………なんつうか、不気味だな。最初からいなかっただのか？」

龍太郎と同じように、メンバーが口々に可能性を話し合うが答えが見つかるはずもない。困惑は深まるばかりだ。

「……………光輝。一度、戻らない？ 何だか嫌な予感がするわ。メルド団長達なら、こういう事態も何か知っているかもしれないし」

「俺も八重樫の意見に賛成だな」

雫と浩介が警戒心を強めながら、光輝にそう提案した。光輝も、何となく嫌な予感を感じていたので二人の提案に乗るべきかと考えたが、何らかの障碍があったとしてもいずれにしろ打ち破って進まなければならぬし、八十九層でも割りかし余裕のあった自分達なら何が来ても大丈夫ではないかと考えて、答えを逡巡する。

光輝が迷っていると、不意に、辺りを観察していたメンバーの何人かが何かを見つけたように声を上げた。

「これ……………血……………だよな？」

「薄暗いし壁の色と同化してるから分かりづらいけど……………あちこち付いているよ」



「おいおい……これ……結構な量なんじゃ……」

表情を青ざめさせるメンバーの中から永山が進み出て、血と思しき液体に指を這わせる。そして、指に付着した血をすり合わせたり、臭いを嗅いだりして詳しく確認した。

「天之河……遠藤と八重樫の提案に従った方がいい。これは魔物の血だ。それも真新しい」

「そりゃあ、魔物の血があるってことは、この辺りの魔物は全て殺されたって事だろうし、それだけ強力な魔物がいるって事だろうけど……いずれにしろ倒さなきゃ前に進めないだろ？」

光輝の反論に、永山は首を振る。永山は、龍太郎と並ぶクラスの二大巨漢ではあるが、龍太郎と違って非常に思慮深い性格をしている。その永山が、臨戦態勢になりながら立ち上がると周囲を最大限に警戒しながら、光輝に自分の考えを告げた。

「天之河……魔物は、何もこの部屋だけに出るわけではないだろう。今まで通って来た通路や部屋にも出現したはずだ。にもかかわらず、俺達が発見した痕跡はこの部屋が初めて。それはつまり……」

「……何者かが魔物を襲った痕跡を隠蔽したってことね？」

あとを継いだ雫の言葉に永山が頷く。光輝もその言葉にハツとした表情になると、永山と同じように険しい表情で警戒レベルを最大に引き上げた。

「それだけ知恵の回る魔物がいるという可能性もあるけど……人であると考えたほうが自然ってことか……そして、この部屋だけ痕跡があつたのは、隠蔽が間に合わなかつたか、あるいは……」

「……が君達の終着点という事さ」

光輝の言葉を引き継ぎ、突如、聞いたことのない男の声が響き渡つた。透き通るほどの綺麗な声音だ。光輝達は、ギョツとなつて、咄嗟に戦闘態勢に入りながら声のする方に視線を向けた。

コツコツと足音を響かせながら、広い空間の奥の闇からゆらりと現れたのは軍帽を被つてゐるが少し明るい灰色の髪をした黒を基調とした軍服姿の男。その耳は僅かに尖つており、肌は浅黒かつた。

光輝達が驚愕したように目を見開く。男のその特徴は、光輝達のよく知るものだったからだ。実際には見たことはないが、イシユタル達から叩き込まれた座学において、何度も出てきた種族の特徴。聖教教会の掲げる神敵にして、人間族の宿敵。

そう……

「……魔人族」

誰かの発した呟きに、魔人族の男は少し軍帽をクイツと上げて鋭い目を向けながら薄らと冷たい笑みを浮かべたのだつた……。

## クラスメイトside5

## VS魔人族 I

光輝達の目の前に現れた灰色の髪の毛の男魔人族は、冷やかな笑みを口元に浮かべながら、驚きに目を見開く光輝達を観察するように見返した。

瞳の色は燃える火のような赤色で、髪の毛の長さは首元ぐらいに伸ばしている。服装は黒を基調とした軍服姿で軍帽も被っており、身長は光輝と同じぐらいだ。腰には軍剣のような剣を携えているので戦士系の戦闘職だと思われる。

「勇者は君で間違いないかな？　　そのアホみたいにキラキラした鎧着ている君で」

「あ、アホ……う、嫌い！　　魔人族なんかアホ呼ばわりされるいわれはないぞ！　　それより、なぜ魔人族がこんな所にいる！」

あまりと言えばあまりな物言いに軽くキレた光輝が、その勢いで驚愕から立ち直って魔人族の男に目的を問いただした。しかし、魔人族の男は、煩そうに光輝の質問を無視すると言葉を続ける。

「何、私は提案をしに来ただけさ……、勇者君……私達側に来ないかい？」

「な、なに？　　来ないかって……どう言う意味だ！」

「呑み込みが悪いね。そのまんまの意味だ。勇者君を勧誘してるんだよ。私達、魔人族側に来ないかって。来てくれるなら色々、優遇しよう」

光輝達としては完全に予想外の言葉だったために、その意味を理解するのに少し時間がかかった。そして、その意味を呑み込むと、クラスメイト達は自然と光輝に注目し、光輝は、呆けた表情をキツと引き締め直すと魔人族の男を睨みつけた。

「断る！ 人魔族を……仲間達を……王国の人達を……裏切れなんて、よくもそんなことが言えたな！ やはり、お前達魔人族は聞いていた通り邪悪な存在だ！ わざわざ俺を勧誘しに来たようだが、一人でやって来るなんて愚かだったな！ 多勢に無勢だ。投降しろ！」

光輝の言葉に、安心した表情をするクラスメイト達。光輝なら即行で断るだろうとは思っていたが、ほんの僅かに不安があったのは否定できない。もつとも、龍太郎や隼など幼馴染達は、欠片も心配していなかったようだが。

一方の、魔人族の男は、即行で断られたにもかかわらず「そうか」と呟くのみで大して気にしていないようだ。むしろ、怒鳴り返す光輝の声を煩わしそうにしている。

「二応、君の仲間も一緒でいいって上からは言われているが？ それでも？」

「答えは同じだ！ 何度言われても、裏切るつもりなんて一切ない！」

お仲間には相談せず代表して、やはり即行で光輝が答える。そんな勧誘を受けること

自体が不愉快だとしても言うように、光輝は聖剣を起動させ光を纏わせた。これ以上の問答は無用。投降しないなら力づくでも！ という意志を示す。後ろで、永山や雫、浩介が内心で舌打ちしつつ、魔人族の男より周囲に最大限の警戒を行う。三人は、場合によつては一度、嘘をついて魔人族の男に迎合してでも場所を変えるべきだと考えていたのだが、その考えを光輝に伝える前に彼が怒り任せに答えを示してしまったので、仕方なく不測の事態に備えているのだ。

普通に考えて、いくら魔法に優れた魔人族とはいえ、こんな場所に一人で来るなんて考えられない。この階層の魔物を無傷で殲滅し、あまつさえその痕跡すら残さないなどもつと有り得ない。そんなことが出来るくらい魔人族が強いなら、はなから人間族は為すすべなく魔人族に蹂躪されていたはずだ。

それに、この階層に到達できるほどの人間族十六人を前にしても魔人族の男は全く焦っていない。戦闘の痕跡を隠蔽したことも考えれば最初に危惧した通り、ここで待ち伏せしていたのだと推測すべきで、だとしたら地の利は彼の側にあると考えるのが妥当だ。何が起きても不思議ではない。そんな三人の危機感は、直ぐに正しかったと証明されてしまった。

「そうか…なら、もう用はない。一応、言っておこう…：君の勧誘は最優先事項ってわけじゃないからね。殺されないなんて甘いことは考えないことだ。ガルラ、ルトス、ハベ

ル、エンキ。行きなさい」

魔人族の男が四つの名を呼ぶのと、バリントツ！ という破砕音と共に、浩介と雫と永山が苦悶の声を上げて吹き飛ぶのは同時だった。

「…グツ?!」

「ぐつ!?!」

「がつ!?!」

三人を吹き飛ばしたものの正体は不明。魔人族の男の号令と共に、突如、光輝達の左右の空間が揺らいだかと思うと、*“縮地”*もかくやという速度で、*“何か”*が接近し、何の備えもせず光輝と魔人族の男のやり取りを見ていたクラスメイト達に襲いかかったのだ。

最初から、最大限の警戒網を敷いていた三人はその奇襲に辛うじて気がつき、咄嗟に、狙われている生徒をかばって見えない敵に防御態勢を取ったのである。

雫は、スピードファイターであるため防御力は低い。そのため、揺らぐ空間に対して抜刀した剣と鞘を十字にクロスさせて衝撃の瞬間を見計らい自ら後方に飛ぶことで威力を殺そうとした。しかし、相手の攻撃力が想像の遥か上であったため、防御を崩され腹部を浅く裂かれた上に肺の空気を強制的に排出させられる程強く地面に叩きつけられた。

永山は、“重格闘家”という天職を持っており、格闘系天職の中でも特に防御に適性がある。“身体強化”の派生技能で“身体硬化”という技能とお馴染みの“金剛”を習得しており、両技能を重掛けした場合の耐久力は鋼鉄の盾よりも遥かに上だ。自らの巨体も合わせれば、その人間要塞とも言うべき防御を突破するのは至難と言っている。

だが、その永山でさえ、“何か”の攻撃により防御を突破されて深々と両腕を切り裂かれ血飛沫を撒き散らしながら吹き飛び、たまたま後方にいた檜山達にぶつかって辛うじて地面への激突という追加ダメージを免れるという有様だった。

浩介は優花から予め付与して貰っていた防御力上昇のおかげで、それなりに耐える事は出来たが吹っ飛んでいった勢いで強く壁に激突し、背中にダメージを負ってしまった。

ガラスが割れるような破砕音は、鈴が雫の臨戦態勢に合わせて予め唱えておいた障壁魔法を、本能的な危機感に従って咄嗟に張ったものだ。場所は、パーティーの後方。そこに“何か”あると感じたわけではなく、何となく、雫と永山の位置からして自分は後方に障壁を展開するべきだと、これまた本能的、あるいは経験的に悟ったからだ。その行動は極めて正しかった。鈴の障壁がなければ、四つ目の空間の揺らめきは、容赦なく永山のパーティーメンバーを切り裂いていただろう。

だが、味方を見事に守った代償に、障壁破砕の衝撃をモロに浴びて鈴もまた後方へ吹

き飛ばされた。運良く、すぐ後ろに恵里がいたため、受け止められて事なきを得たが、ほかの浩介と雫と永山を切り裂いた三つの揺らめきと同じく、四つ目の揺らめきも直ぐさま追撃に動き出したため、危機は未だ終わってはいない。

突然の襲撃に、反応しきれていないクラスメイ ト達を四つの揺らめきが切り裂かんと迫った、その瞬間、

「光の恩寵と加護をここに！」　「回天」　「周天」　「天絶」！　（――）　「効果上昇付与！」　「――」

優花と香織がほとんど無詠唱かと思うほどの詠唱省略で同時に三つの光系魔法を優花は更に効果上昇の付与を発動した。一つは、切り裂かれて吹き飛び、地面に叩きつけられた三人を即座に癒す光系中級回復魔法「回天」。複数の離れた場所にいる対象を同時に治癒する魔法だ。痛みに呻きながら何とか起き上がろうともがく二人に淡い白光が降り注ぎ、尋常でない速度で傷が塞がっていく。

次いで、少しでも気を逸らせば直ぐに見失いそうな姿なき揺らめく三つの存在に、雫達に降り注いだのと同じ淡い白光が降り注ぎ纏わりつく。すると、その光はふわりと広がって空間に光の輪郭が出現した。

光系の中級回復魔法「周天」。これは、いわゆるオートリジエネだ。回復量は小さいが一定時間ごとに回復魔法が自動で掛かる。この魔法は掛かっている間、魔力光が纏わ



りつくという特徴がある。二人は、その特性を利用し、回復効果を最小限にして正体不明の敵に使用することで間接的に姿を顕にしたのだ。

白光により現れた姿は、ライオンの頭部に竜のような手足と鋭い爪、蛇の尻尾と、鷲の翼を背中から生やす奇怪な魔物だった。命名するならばやはりキメラだ。おそらく、迷彩の固有魔法を持っているのだろう。姿だけでなく気配も消せるのは相当厄介な能力ではあるが、行動中は完全には力を発揮出来ないように、空間が揺らめいてしまうという欠点があるのは不幸中の幸いだ。

なにせ、クラスメイトの中でもトップクラスの近接戦闘能力を持つ雫と永山、ベヒモスを圧倒していた浩介を一撃で行動不能と重症に陥れたのだ。恐るべき敵である。この上、完全に姿を消せるとあっては、とても太刀打ち出来ない。今までの階層の魔物と比較すると明らかにこの階層の魔物のレベルを逸脱している。

そのキメラ四体は、纏わりつく光など知ったことかと追撃の爪牙を繰り出した。目標は、雫、永山、鈴、浩介の四人だ。だが、その爪牙が四人に届くことはなかった。なぜなら、四人の眼前にそれぞれ三枚ずつ光の盾が出現し、キメラの一撃で粉碎されながらも、微妙に角度をずらして設置していたために攻撃を間一髪のところまで逸らしたからである。

光系の中級防御魔法 “天絶”。 “光絶” という光のシールドを発動する光系の初級

防御魔法の上位版で、複数枚を一度に出す魔法だ。『結界師』である鈴などは、この魔法を応用して、壊される端から高速でシールドを補充し続け、弱く直ぐに破壊されるが突破に時間がかかる多重障壁という使い方をしたりする。この点、優花は全属性適性を持つ物の結界専門の鈴には及ばないため、そのような使い方は出来ない。精々、設置するシールドの微調整が出来る程度だが優花は更に付与で防御力を上げた。

しかし、今回はそれが役に立った。鈴の強力な障壁が一撃で破壊された瞬間に、優花は、自分の障壁では役に立たないと悟り、攻撃をいなす方法を選択したのだ。もつとも、全く同じ攻撃が、予想通り来るとは限らないので、イチかバチかという賭けの要素が強かった。上手くいったのは幸運である。

攻撃をいなされた四体のキメラは、やや苛立ったように再度攻撃に移ろうとした。稼げた時間は一瞬。問題などないと。しかし、一瞬とはいえ、貴重な時間を稼げた事に変わりはない。その時間を光輝達が逃すはずはなかった。

「雫から離れろおおお!!」

浩介と永山はいいのか？ とツツコミを入れてはいけない。光輝は、怒りを多分に含ませた雄叫び上げながら『縮地』で一気に雫の近くにいたキメラに踏み込んだ。光輝の移動速度が焦点速度を超えて背後に残像を生み出す。振りかぶった聖剣が一刀のもとにキメラの首を跳ねんと輝きを増す。

同時に、龍太郎も永山を襲おうとしていたカメラへと空手の正拳突きを構えを取った。直接踏み込んで攻撃するより、籠手型アーティファクトの能力である衝撃波を飛ばしたほうが早いと判断したからだ。龍太郎から裂帛の気合が迸り、籠手に魔力が収束していく。

さらに、吹き飛ばされ鈴を受け止めていた恵里が片手を突き出し、鈴と同様、危機感から続けていた詠唱を完成させ、強力な炎系魔法を発動させた。『海炎』という名の炎系中級魔法は、文字通り、炎の津波を操る魔法で分類するなら範囲魔法だ。素早い敵でも、そう簡単には避けられない。

光輝の聖剣が壮絶な威力と早さをもって大上段から振り下ろされる。龍太郎の正拳突きが、これ以上ないほど美しいフォームから繰り出され、それにより凄絶な衝撃波が砲弾のごとく突き進む。恵里の死を運ぶ紅蓮の津波が目標を呑み込み灰塵にせんと迸った。

だが……

「ルウガアアア!!」

「グウルウオオオ!!」

一体どこに潜んでいたのか。光輝達の攻撃がまさに直撃しようかというその瞬間、三つの影が咆哮を上げながら光輝達へと襲いかかった。

「ッ!?」

突然の事態に光輝と龍太郎の背筋を悪寒が襲う。二体の影は、それぞれ光輝と龍太郎に猛烈な勢いで突進すると、手に持った金属のメイスを豪速をもって振り抜いた。

しかし、

「ふっ……させる訳無かろう!」

二体の影の後ろに更に影が現れ、二体の攻撃を阻止した。その影は攻撃を阻止した後、何故かくるつとターンをしながら着地した。

「まさか、遠藤かつ!」

「違う……今の我はコウスケ・E・アビスゲートだつ!」

光輝達は攻撃の阻止をしたのが浩介だと分かり、声を掛けたが浩介……いや、アビスゲートはサングラスをくいつとしながら呼び名を訂正した。

光輝と龍太郎に不意を打とうとしたのは、体長二メートル半程の見た目はブルタールに近い魔物だった。しかし、いわゆるオークやオーガと言われるRPGの魔物と同様に、ブルタールが豚のような体型であるのに対して、その魔物は随分とスマートな体型だ。まさに、ブルタールの体を極限まで鍛え直し引き絞ったような体型である。実際、先程の不意打ちからしても、膂力・移動速度共に、ブルタールの比ではなかった。

一方、恵里の方は直接攻撃を受けたわけではなかったが、受けた心理的衝撃の度合

いはむしろ光輝達よりも強かった。なぜなら、押し寄せる炎の津波を、突如割り込んだ影が大口を開けたかと思うと一気に吸い込み始めたからだ。ヒュオオオ！ という音と共に、みるみると広範囲に展開していた炎が一点へと収束し消えていく。その影が全ての炎を吸い込むのに十秒程度しか掛からなかった。

炎と熱気が消えた空間からは、体から六本の足を生やした亀のような魔物が姿を現した。背負う甲羅は、先程まで敵を灰に変えようと荒れ狂っていた炎と同じように真っ赤に染まっている。と、次の瞬間、多足亀が炎を吸収しきって一度は閉じていた口を再びガパツと大きく開いた。同時に背中の甲羅が激しく輝き、開いた口の奥に赤い輝きが生まれる。まるで、エネルギーを集めて発射寸前のレーザー砲のようだ。

その様子を見た恵里が、表情に焦りを浮かべた。魔法を放ったばかりで対応する余裕がないからだ。だが、その焦りは、腕の中の親友がいつも通りの元気な声で吹き飛ばした。

「にやめんな！ 守護の光は重なりて 意志ある限り蘇る “天絶”！」

刹那、鈴達の前に十枚の光のシールドが重なるように出現した。そのシールドは全て、斜め四十五度に設置されており、シールドの出現と同時に、多足亀から放たれた超高熱の砲撃はシールドを粉碎しながらも上方へと逸らされていった。

それでも、継続して放たれる砲撃の威力は、先程のキメラの攻撃の上を行く壮絶なも

ので、一瞬にしてシールドを食い破っていく。鈴は、歯を食いしばりながら詠唱の通り次々と新たなシールドを構築していき、「結界師」の面目躍如といべきか、シールドの構築速度と多足亀の砲撃による破壊速度は拮抗し辛うじて逸らし続けることに成功した。逸らされた砲撃は、激震と共に迷宮の天井に直撃し周囲を粉碎しながら赤熱化した鉋物を雨の如く撒き散らした。

「ちくしょう！ 何だつてんだ！」

「なんなんだよ、この魔物は！」

「くそ、とにかくやるぞ！」

そこまでの事態になつてようやく檜山達や永山のパーティーが悪態を付きながらも混乱から抜け出し完全な戦闘態勢を整える。傷を負っていた雫や永山も完全に治癒されて、それぞれ眼前の見えるようになったキメラに攻撃を仕掛け始めた。

雫が、残像すら見えない超高速の世界に入る。風が破裂するようなヴォツ！ という音を一瞬響かせて姿が消えたかと思えば、次の瞬間にはキメラの真後ろに現れて、これまたいつの間にか納刀していた剣を抜刀術の要領で抜き放った。「無拍子」による予備動作のない移動と斬撃。姿すら見えないのは単純な移動速度というより、急激な緩急のついた動きに認識が追いつかないからだ。さらに、剣術の派生技能により斬撃速度と抜刀速度が重ねて上昇する。鞘走りを利用した素の剣速と合わせれば、普通の生物には

認識すら叶わない神速の一閃となる。

先程受けた一撃のお返しとばかりに放たれたそれは八重樫流奥義が一〃断空〃。空間すら断つという名に相応しく、銀色の剣線のみが虚空に走ったかと思えば、次の瞬間には、キメラの蛇尾が半ばから断ち切られた。

「グウルアアア!!」

怒りの咆哮を上げて振り向きざまに鋭い爪を振るうキメラ。しかし、その攻撃は虚しく空を切る。既に、雫は、反対側へと回り込んでいたからだ。そして、二の太刀を振るい今度はキメラの両翼を切り裂いた。

「くっー!」

速度で翻弄し着実にダメージを与えていく雫。しかし、雫の表情は晴れず、それほどろか苦虫を噛み潰したような表情で思わず声を漏らした。それは、思惑が外れたことが原因だった。雫は、本当なら、最初の一撃でキメラの胴体を両断するつもりだったのだが、寸でのところで蛇尾が割って入り斬撃が届かなかったのだ。二太刀目も胴体を切り裂くつもりが、斬撃が届くより一瞬早く身を屈められて両翼を切り裂くに留まってしまう。

キメラは、雫の速さに付いてこられていない。しかし、全く対応できないというわけでもなかったのだ。姿が消せる上、かろうじてとは言え雫の本気の速さに対応してくる

反応速度。本当に難敵である。さっさと倒して他の救援に向かいたい雫としては、厄介なことこの上なかった。

その後も、三太刀目、四太刀目と剣を振るい、キメラの体に無数の傷をつけていくが、どれも浅く致命傷には遠く及ばない。それどころか、キメラは徐々に雫の速度を捉え始めているようだった。雫の表情に焦りが生まれ始める。

さらに、雫にとつて、いや、雫達にとつて悪いことは続く。

「キュワアアア!!」

突然、部屋にそんな叫びが響いたかと思うと、雫の眼前で両翼と蛇尾を切断されていたキメラが赤黒い光に包まれて、みるみる内に傷を癒していったのだ。香織の「周天」は、ほとんど意味がないほどに効果を落としてあるので、いくら浅い傷といえどそう簡単に治ったりはしない。雫は目を見開き、癒されていくキメラに注意しながら叫び声の方をチラリと見やった。

すると、いつの間にか、高みの見物と洒落こんでいた魔人族の男の肩に双頭の白い鴉が止まっており、一方の頭が雫の方を、正確には、雫の眼前にいるキメラに向いていたのだ。

「回復役までいるって言うの!?!」

難敵にやつとの思いで傷を与えてきたというのに、それを即座に癒される。唯でさえ



時間が経てば経つほど順応されて勝機が遠のくというのに、後方には優秀な回復役が待機している。あまりの事態に、思わず雫が悲鳴を上げた。

見れば、雫だけでなく、他の場所でも同じように悲痛な叫びを上げる仲間達がいた。

光輝の方も、支援を受けつつブルータルモドキと戦っていたようで、ブルータルの胴体には肩から腰にかけて深々と切り裂かれた痕がついていたのだが、その傷も白鴉の一方の頭が見つめながら叫び声を上げること、まるで逆再生でもしているかのように癒されていく。

龍太郎や永山の方も同じだ。龍太郎が相手取っていた二体目のブルータルモドキは腹部が破裂したように抉れていたり片腕が折れていたりしたようだが、雫が相手取っていたキメラを癒していた白鴉の頭が同じように鳴くとみるみる癒されていき、永山の相手だったキメラも陥没した肉体の一部が直ぐさま癒されていた。

「だいぶ厳しいみたいだな。やはり、こちら側につくのが賢明なのではない……っ！」  
キイインツ！

光輝達の苦戦を、腕を組んで余裕の態度で見物していた魔人族の男が再び勧誘の言葉を光輝達にかけようとした瞬間、後ろから気配を感じ咄嗟に腰に携えた軍剣を抜いて攻撃を受け止めた。

「ほう……勇者の仲間にこれ程の気配を消す者がいるとはな何者かな？」

「我も、この攻撃に気付かれたのは驚いた。流石、魔人族と言うべきか」

それはアビスゲートだった。アビスゲートは魔人族の男が油断してる時に後ろから狙ったがギリギリ気付かれてしまったのを内心、悔しがっていた。

「君とはちゃんとした一戦、交えてみたいね。久しぶりに人間族相手に心が高鳴りそう  
だ」

「それはどうか……魔人族よ、貴様は後ろの敵も確認した方が良い」

「それは、どういう……」

魔人族の男はアビスゲートの実力に感心し、一戦交えようとするがアビスゲートの言葉を受け、後ろの方へ視点を向けた。

そこには……

「俺達は脅しには屈しない！ 俺達は絶対に負けはしない！ それを証明してやる魔人族！ 行くぞ “限界突破ア”！」

メイスを振り下ろしてきたブルータルモドキの一撃を聖剣で弾き返し一瞬の間をついて “限界突破” を使用して神々しい光を纏った光輝は、これで終わらせると気合を入れ直しながら魔人族の男に向かって突進していた姿だった。

「限界突破ですか……面白いっ」

魔人族の男はアビスゲートとの戦闘も良いと考えたが “限界突破” を使用した光輝

の実力を測るべきだと考え、アビスゲートから一旦離れて、その対処を魔物達に任せる  
と、剣先を光輝に向けながら笑みを浮かべるのだった……。

## クラスメイトside5

## VS魔人族 II

“限界突破”は、一時的に魔力を消費しながら基礎ステータスの三倍の力を得る技能である。ただし、文字通り限界を突破しているので、長時間の使用も常時使用もできないし、使用したあとは、使用時間に比例して弱体化してしまう。酷い倦怠感と本来の力の半分程度しか発揮できなくなるのだ。なので、ここぞという時の切り札として使用する時と場合を考えなければならない。

光輝は、魔物の強力さと回復が可能という事実には、このままでは仲間の士気が下がりは押し切られると判断し、“限界突破”を使用して一気に白鴉と魔人族の男を倒そうと考えた。光輝の“限界突破”の宣言と共に、その体を純白の光が包み込む。同時に、メイスの一撃を弾かれたブルータルモドキが光輝の変化など知ったことではないと、再び襲いかかった。

「刃の如き意志よ　光に宿りて敵を切り裂け——　“光刃”——」

光輝は、ブルータルモドキにより振るわれたメイスを屈んで躲すと、聖剣に光の刃を付加させて下段より一気に切り上げた。先程も、“光刃”を使って袈裟斬りにしたのだ

が、その時は、深手を与えるにとどまり戦闘不能にすることはできなかった。しかし、今度は「限界突破」により三倍に引き上げられたステータスと、光の刃の相乗効果もあつてか、まるでバタを切り取るようにブルータルモドキの胴体を斜めに両断した。

一拍遅れて、ブルータルモドキの胴体が斜めにずれ、ドシャ！ という生々しい音と共に崩れ落ちる。光輝は、踏み込んだ足をそのままに、一気に加速すると猛然と魔人族の男のもとへ突進した。

光輝と魔人族の男を隔てるものは何もない。いくら魔人族が魔法に優れた種族とはいえど、今更何をしようとも遅い。このまま、白鴉ともども切り裂いて終わりだ。誰もがそう思った。

その瞬間、

カキイイインツ！

「流石は限界突破ですね。本気で受け止めないと力負けしそうですが……貴方のは軽いつつ」

「なっ?!」

魔人族の男は「限界突破」をした光輝の斬撃を自分の剣で受け止められた挙句、純粋に力負けして弾かれたことに光輝は驚愕の声を上げて目を見開いた。

「じゃあ、まだ、楽しませて貰いましょうかっ！」

「……っ?!」

魔人族の男は聖剣が弾かれた際によるめいている光輝の腹に蹴りを入れ、距離を取った瞬間、一瞬で光輝に近付いて素早い剣撃で光輝の肩口を抉った。

「——っ」

光輝は肩の痛みを我慢して、体勢を整えようとするも魔人族の男が「縮地」で一瞬で距離を詰めると、光輝の鎧のグリーヴの上からの鎧の守りが薄い部分に傷を付けていく。

「ぐうう!!」

「……はっ、勇者の実力はこんなもんですか……正直、期待ハズレですねっ!」

魔人族は光輝を押し倒し、残念な表情をしながら追撃しようとして軍剣を振り下ろす。

「光の恩寵よ、癒しと戒めをここに「焦天」!「封縛」!」

光輝のピンチを見た香織が、すかさず、光系の回復魔法を行使した。「焦天」一人用の中級回復魔法だ。先ほど使った複数人用の回復魔法「回天」より高い効果を発揮する。しかし、光輝の肩には剣が刺さっており、このままでは癒すことができない。なので、同時発動により、光系の中級捕縛魔法「封縛」を行使する。「封縛」は、対象を中心に光の檻を作り出して閉じ込める魔法だ。香織は、その魔法を光輝にかけた。光輝を

中心に光の檻が瞬時に展開し、のしかかっていた魔人族を弾き飛ばす。

同時に、鈴達を襲っていたキメラと多足亀の相手をしていた後衛組の何人かが、光輝を襲おうとしているキメラ達に向かって攻撃魔法を放った。ただ、それなりに距離があることと、香織の「周天」が施されていないために動いていても見えにくい事から狙いは甘く大したダメージは与えられなかった。

「天乃河君つ　——　「攻撃力上昇、速度上昇、防御力上昇付与」！」

それでも、光輝が体勢を立て直す時間は稼げたようで、聖剣を構え直すと、優花の付与と治癒されながら唱えていた詠唱を完成させ反撃に出た。

「——「天翔剣四翼」！」

振るわれた聖剣から曲線を描く光の斬撃が揺らめく空間四つに飛翔する。狙われたキメラ達とは、「限界突破」により強化された光輝の十八番に危機感を抱き回避しようとするのだが、魔人族の男は動こうとしなかった。

「（捕らえよ）「縛印」！」

香織のほとんど無詠唱と言っている程の短い詠唱と優花のほぼ無詠唱により、光系中級捕縛魔法「縛印」が発動する。回避しようとしたキメラ達と魔人族の男の足元から光の鎖が無数に飛び出し、首、足、胴体に絡みついた。キメラの力なら引きちぎることも難しくはないが、一瞬、動きを止められることは避けられない。

結果、四体のキメラは、光輝の“天翔剣”の直撃を受けて血飛沫を撒き散らしながら絶命したが、魔族の男は“天翔剣”の直撃を跳ね返した。光輝は、魔族の男に向き直ると聖剣を突きつけながら睨みつける。

「残念だったな。お前の切り札は俺達には通用しなかった。もう、お前を守るものはないぞ！」

光輝の言葉を受けた魔族の男はまだ平然としていた。寧ろ余裕そうな表情で笑みを浮かべてる。

「……別に、アレは切り札ってわけじゃないですけどね」

「強がりをつー！」

「まあ、強がりかどうかは私とこれらをを撃退してからにしてみても？ こっちは、“異教の使徒”とやらの力もある程度確認出来ましたし、もう貴方の実力は把握しましたから用はないですし」

「なにをいつ『きやあああ！』ツ!？」

魔族の男が面倒そうに髪をかき上げながらそんな事をいい、それに対して光輝が聞いただそうとしたその時、後方から悲鳴が響き渡った。

思わず振り返った光輝の目に映ったのは、更に五体のブルータルモドキとキメラ、そして見たことのない黒い四つ目の狼、背中から四本の触手を生やした体長六十センチ程



の黒猫が、一斉に仲間に襲いかかり、永山のパーティーの一人で彼の親友でもある野村健太郎が黒猫の触手に脇腹を貫かれている光景だった。悲鳴を上げたのは同じく永山のパーティーの一人である吉野真央だ。

「健太郎っ!」

「真央、しつかりして! 私が回復するから!」

同じパーティーメンバーである永山が、野村を貫く触手を抜き取り、怒りの炎を宿した眼で黒猫を殴りかかる。

野村が苦悶の声を上げながら崩れ落ちたことに茫然としている吉野に、やはり同じパーティーの辻綾子が叱咤の声を張り上げながら、直ぐさま治癒魔法を発動した。ちょうど、永山が受けた切り傷を癒そうと詠唱を完了していたのは幸いだった。

「なっ、まだあんなに!」

後方を振り返って、いつの間にか現れた新手に光輝が驚愕の声を漏らす。

「キメラの固有魔法『迷彩』は、触れているものにも効果を発揮します。その可能性を考えませんでしたか? ほら、追加いきますよ」

「ッ!?!」

いきなり現れた大量の魔物に、劣勢を強いられる仲間。それを見て、光輝が急いで引き返そうとする。そんな光輝に、キメラの『迷彩』効果で隠れていただけだとタネ明か

しをしなから、更に魔物をけしかける魔人族の男。彼の背後から、四つ目狼と黒猫が十頭ずつ光輝目掛けて殺到する。

「くっ、おおお！」

黒猫の触手が途轍もない速度で伸長し、四方八方から光輝を襲った。光輝は、聖剣を風車のように回転させ襲い来る触手の尽くを切り裂き、接近してきた黒猫の一体目掛けて横薙ぎの一撃を放った。光輝の顔面を狙ったせいも、空中に飛び上がっていた黒猫には避けるすべはないはずだった。光輝も「まず一体！」と魔物の絶命を確信していた。

しかし、次の瞬間、その確信はあっさり覆される。何と、黒猫が空中を足場に宙返りし、光輝の一撃を避けたのだ。そして、その体格に似合わない鋭い爪で光輝の首を狙った一撃を放とうとしたが、その前に何者かに切り付けられた。

「余所見をするな馬鹿タレがっ」

「なっ遠藤っ！」

「アビスゲートだ！ こちらも反撃をさせて貰おう！ 行くぞ我達！」

「「おうっ！」」

アビスゲートの掛け声に合わせて、分身達が光輝達を包囲していく魔物達を撃退していく。しかし、一撃で絶命させなければ、即座に白鴉が回復させてしまう。なので光輝達もアビスゲートと共に応戦していく。

優花と香織と、同じく“治癒師”の天職をもつ辻綾子が三人がかりで味方を治癒し続けているからこそ何とか致命的な戦線の崩壊は避けられているが、状況を打開する決定打を打つことができない。

光輝が“限界突破”の力をもつて敵を蹴散らそうとするが、魔物達も光輝に対しては常に五体以上が連携してヒット&アウェイを繰り返し返し決して無理をしようとしなくて攻めきることができない。

雫の“無拍子”による高速移動も、速度に優れた黒猫と“先読”の固有能力をもつ四つ目狼の連携により対応され、手傷は負わせても致命傷を与えるには至らない。

アビスゲートとその分身も連携能力で、この応戦体勢を維持させている要なので絶命するまでの攻撃は前回のキメラでの傷が癒えておらず、無理に動こうとすると分身が消えてしまうので無理に行動が出来ない状態。

必死に応戦しながらも、次第に、クラスメイト達の表情に絶望の影がちらつき始めた。そして、その感情は、魔人族の男の参戦により更に大きくなる。

「ククッ、アビスゲートでしたか……もしかしたら勇者より危険因子ですね。我が偉大なる魔王様の邪魔になるかもしれない、ここで排除しときましようか……地の底に眠りし金眼の蜥蜴 大地が産みし魔眼の主——落牢——」

アビスゲートを危険と判断し、短縮された詠唱を完了した直後、魔人族の掲げた手に

灰色の渦巻く球体が出来上がり、放物線を描いて光輝達の方へ飛来した。速度は決して早くはない。今の光輝達の中に回避できないものなどいない。一見、何の驚異も感じない攻撃魔法だったが、それを見た先ほど腹を触手で貫かれた野村健太郎が、血を失ったために青ざめている顔に更に焦りの表情を浮かべて叫んだ。

「ッ!? ヤバイッ! 谷ロイ!! あれを止めろお! バリア系を使え!」

「ふえ!?」 りよ、了解! ここは聖域なりて 神敵を通さず!——「聖絶!」

切羽詰った野村の指示に鈴が詠唱省略した光系の上級防御魔法を発動する。輝く障壁がドーム状となつて光輝達全員を包み込んだ。もつとも、「聖絶」に敵味方の選別機能などないので、ドーム状の障壁の中には多くの魔物も取り込んでしまっている。「聖絶」は強力な魔法なだけあつて消費魔力が大きい。なので、普段ならこんな無意味な使い方はない。しかし、野村の叫びが、魔人族の女から放たれた魔法の危険性をこれでもかと伝えていたので、できる限り強力なバリア系の防御魔法として、咄嗟に「聖絶」を選んだのだ。

鈴が「聖絶」を展開した直後、灰色の渦巻く球体が障壁に衝突した。灰色の球体は、障壁を突破しようと思かけによらない凄まじい威力で圧力をかける。鈴は、突破させるなるものかと、自身の魔力がガリガリと削られていく感覚に歯を食いしばりながら必死に耐えた。

「あの『結界師』邪魔ですな。——殺れ」

と、魔族の男から命令でも受けたのか、魔物の動きが変化する。複数体が一齐に鈴を狙い始めたのだ。

「……っ、谷口さんっ——『防御力上昇付与』！」

「鈴！」

「谷口を守れ！」

優花が鈴に付与をして、恵里が鈴の名を呼びながら魔法を放って接近するブルータルモドキを妨害する。鈴を中心に恵里とは反対側でキメラや四つ目狼と戦っていた斎藤良樹と近藤礼一が、野村の呼びかけに応じて鈴の傍に駆けつけようとする。が、『聖絶』の維持で動けない鈴に、隙間を縫うようにして黒猫が一気に接近した。野村が、咄嗟に地面から石の槍を発動させて串刺しにしようとするが、黒猫は空中でジグザグに跳躍すると、身をひねりながら石の槍を躲し、触手を全本射出した。

「谷口いー！」

「あぐう!?!」

野村が鈴の名を呼んで警告するが、時すでに遅し。触手は、咄嗟に身をひねった鈴の腹と太もも、右腕を優花の付与で防御力が上がってるにも関わらず意図も簡単に貫通した。更に捉えたまま横薙ぎに振るって鈴の小柄な体を猛烈な勢いで投げ捨てた。

鈴は、血飛沫を撒き散らしながら、背中から地面に叩きつけられて息を詰まらせる。そして、呼吸を取り戻すと同時に激痛に耐え兼ねて悲鳴を上げた。

「ああああああ!!」

「谷口さん!」

「鈴!」

その苦悶の声を聞いて優花と恵里が、思わず悲鳴じみた声で鈴の名を呼ぶ。直ぐさま、優花が回復魔法を行使しようと精神を集中するが、それより鈴の施した光り輝く結界が消滅する方が早かった。

「皆の者つ、あの球体から離れろお!」

アビスゲートが焦燥感に満ちた声で警告を発する。だが、鈴の鉄壁を誇った「聖絶」と今の今まで拮抗していた魔法だ。今更、その警告は遅すぎた。

結界が消滅し、勢いよく飛び込んできた灰色の煙を周囲に撒き散らした。すると音もなく破裂し猛烈な勢いで灰色の煙を周囲に撒き散らした。

傍には、倒れて痛みにもがく鈴と駆けつけようとしていた斎藤と近藤、それに野村。灰色の煙は、一瞬で彼等を包み込む。魔物の影はない。着弾と同時に、一斉に距離をとったからだ。

灰色の煙はなおも広がり、光輝達をも包み込もうとする。

「風よっ！ 風爆！」

優花が、咄嗟に、突風を放つ風系統の魔法で灰色の煙を部屋の外に押し出す。魔法で作り出された煙だからか、通常のものとは違って簡単に吹き飛びはしなかったが、“限界突破”中の光輝の魔法は威力も上がっているの、僅かな拮抗の末、迷宮の通路へと排出することに成功した。

だが、煙が晴れたその先には……

「そんな、鈴！」

「野村くん！」

「斎藤！ 近藤！」

完全に石化し物言わぬ彫像となった斎藤と近藤、下半身を石化された鈴、その鈴に覆いかぶさった状態で左半身を石化された野村の姿があった。

斎藤と近藤は、何が起こったのかわからないという様なポカンとした表情のまま固まっている。鈴は、下半身を石化された事で更なる激痛に襲われたようで苦悶の表情を浮かべたまま意識を失っていた。

一方、鈴を庇いながら、それでもなお一番被害が軽微だった野村だが、やはり激痛に襲われているらしく食いしばった歯の奥から痛みに耐えるうめき声が漏れていた。野村の被害が軽かったのは、彼が“土術師”の天職持ちだからだ。土属性に天賦の才を

持っており、当然、土系魔法に対する高い耐性も持っている。

「貴様ア！ よくも！」

光輝が、仲間の惨状に憤怒の表情を浮かべる。光輝を包む“限界突破”の輝きがより一層眩い光を放ち始めた。今にも、魔人族の男に突貫しそうだ。

だが、そんな光輝をストッパーのアビスゲートと雫が声を張り上げて諫める。そして、撤退に全力を注げと指示を出した。

「やめろ馬鹿っ！」

「待ちなさい！ 光輝！ 撤退するわよ！ 退路を切り開いて！」

「なっ!? あんなことされて、逃げろっていうのか！」

しかし、仲間を傷つけられた事に激しい怒りを抱く光輝は、キツと二人を睨みつけて反論した。光輝から放たれるプレッシャーが二人にも降り注ぐが、険しい表情のまま光輝を説得する。

「聞きなさい！ 園部さんと香織なら、きつと治せる。でも、それには時間がかかるわ。治療が遅くなれば、手遅れになる可能性もある。一度引いて態勢を立て直す必要があるのよ！ それに、三人欠けた上に、今、あんたが飛び出したら、次の攻勢に皆はもう耐えられない！ 本当に全滅するわよ！」

「ぐっ、だが……」



「天乃河、貴様の『限界突破』も、そろそろヤバイのだろう?! この状況で、貴様が弱体化してしまつたら、確実にこのパーティーは終わるっ。少しは冷静になれっ! また、我が親友の時と同じような愚行をするのか!」

理路整然とした幼馴染の言葉とアビスゲートは親友のハジメの時と同じような行動をするのかと怒鳴つた。二人の言葉に、光輝は、唇を噛んで逡巡するが、二人が唇の端から血を流していることに気がついて、茹だつた頭がスツと冷えるのを感じた。二人も悔しいのだ。思わず、唇を噛み切つてしまう程に。大事な仲間をやられて、出来ることなら今すぐ敵をぶっ飛ばしてやりたいのだ。

「わかつた! 全員、撤退するぞ! 遠藤、雫、龍太郎! 少しでも耐えてくれ!」

「承つた、しかし我はアビスゲートだつ」

「任せなさい!」

「おうよ!」

光輝は、聖剣を天に突き出すように構えると長い詠唱を始めた。今までは、詠唱時間が長い上に状況の打開にならないので使わなかったが、撤退のための道を切り開くにはちょうどいい魔法だ。

ただし、詠唱中は完全に無防備になるので身の守りをアビスゲートと雫と龍太郎に託さねばならない。それは、光輝が引き受けていた魔物も彼等が相手取らなければならな

いということだ。当然、三人に対応しきれるはずもなく、必死に応戦しながらもかなりの勢いで傷ついていく。

「撤退なんてさせると思っかい？」

そんなことを呟きながら、魔人族の男が光輝達の背後にある通路にも魔物を回し退路を塞いでいく。そして、何やら詠唱を始めた光輝を標的に軍剣を抜き、突貫した。

だが、そこで、始めて魔人族の男にとって不測の事態が起こる。

「「「ガアアア!!」」」

「……!」

何と、味方のはずのキメラが五体、魔人族の男を襲ったのである。驚愕に目を見開きながら、咄嗟に、素早い斬撃で五体を一瞬で肉塊にしながら切り刻み回避する。

魔人族の男は、「……ふむ」と動揺せず考察しながら襲いかかってきたキメラを思い出す。すると、あることに気がついた。それは、どのキメラも体が損壊しているということだ。あるキメラは頭がなかったし、またあるキメラは胴体に深い傷がついていた。

「……降霊術ですか」

「あなたに光輝君の邪魔はさせない!」

そんなことを叫びながら、手をタクトのように振るって死体のキメラに魔人族の男を包囲させたのは恵里だった。

「……降霊術の使い手の情報なかったのですが、これは嬉しい情報だ」

魔族は笑みを浮かべまた光輝達に向かって駆け出していく。しかし既に光輝の詠唱の終わっており遂にその時が訪れた。

「行くぞー！ “天落流雨”！」

光輝の掲げた聖剣から、一条の閃光が打ち上げられたかと思うと、その光は天井付近で破裂するように飛び散り、周囲の魔物達に流星の如く降り注いだ。

この“天落流雨”は、敵の直上からピンポイントで複数同時に攻撃するという光系の攻撃魔法だ。威力は分散しているためそこまで高くはなく、本来は多数の雑魚敵掃討に用いるものだが、それでも“限界突破”中に使えば、五十層クラスの魔物くらいなら十分効果を発揮する爆撃のような魔法である。

ただ、やはり、異常な強さをもつ魔族の魔物達には、さほどダメージにならなかったようで、精々吹き飛ばして仲間達から引き離すくらいの効果しか発揮しなかったし、魔族の男も軍剣で魔法を弾いているのだが、光輝にとつては、それで十分だった。隙を作り、仲間が撤退出来る状況を作ることができれば。

光輝はそれを確認すると、馬鹿みたいに詠唱の長いこの魔法の本領を発揮させた。

「“収束”！」

「！」

天より降り注ぎ、魔物達を一時的に後退させた光の雨は、光輝の詠唱によって再び聖劍に収束していく。流星が尾を引いて一点に集まる光景は中々に幻想的だった。光輝は、収束させた光を纏って輝く聖劍を、真っ直ぐ退路となる通路とその前に陣取る魔物達に向けて突き出し、裂帛の気合とともに一連の魔法の最後のトリガーを引いた。

「天爪流雨！」

直後、突き出された聖劍から無数の流星が砲撃のごとく撃ち放たれる。同じ砲撃でも光輝の切り札である「神威」には遠く及ばない威力であり、当然、退路を塞ぐ魔物達を一掃することなど叶わない。

本来なら、「神威」を使いたいところだが、詠唱が長すぎてとても盾となってくれている三人がもつとは思えなかつたので仕方ない。しかし、それでも、「天爪流雨」は今の状況では最適の手だった。流星となつて退路上の魔物達に直進した光の奔流は、着弾と同時に無数の爆発を引き起こした。砲撃を構成する無数の光弾がクラスター爆弾のように破裂したのだ。それによって衝撃が連続して発生し、魔物達は体勢を崩され大きく吹き飛ばされた。

「ルアアア!!」

魔物達があきつく目を閉じたまま悲鳴を上げる。「天爪流雨」の副次効果、閃光による視覚へのダメージだ。間近で発生した強烈な光によって眼を灼かれたのである。混乱

したように目元を手でこすりながら、闇雲に暴れる魔物達。

彼等は既に、退路上にはいない。通路に向かって一直線に道が開かれた。

「今だ！ 撤退するぞ！」

光輝の号令で、全員が一斉に動き出す。石化している近藤と斎藤は、永山が一人で肩に担ぎ、気絶している鈴は優花が背負った。野村は、まだ左腕が石化したままだったが、激痛を堪えながらも自力で立ち上がり、通路に向かって走り始める。

「逃がしはしませんよ」

魔族の男は光輝の行動に驚きはしたが、そのまま走り光輝達が引き離れた距離は瞬く間に詰められていく。と、そこで野村が身を翻し、痛みに顔をしかめながらも不敵な笑みを浮かべて右手を突き出し、鈴を背負っていた優花も魔法を発動した。

「土系統で負けるわけにやあ行かねえんだよ！ お返しだ！ 落牢！」

「効果上昇付与——縛光鎖！」

先程の魔族の男と同じく灰色の渦巻く球体が野村の手より放たれ、優花の傍から光の鎖が出現し、魔族の男に放たれた。魔族の男は咄嗟に歩みを止め素早く後退して二つの魔法を回避した。

「……ちっ、逃しましたか」

回避した後、魔族の男は光輝達の方を見たが一行は撤退をしており、魔族の男は

舌打ちをしながら光輝達が逃げていったであろう道を見つめるのだった……。

## クラスメイト side 6

## 救援要請

場所は八十九層の最奥付近の部屋。

その正八角形の大きな部屋には四つの入口があるのだが、実は今、そのうちの二つの入口の間にはもう一つ通路があり、奥には隠し部屋が存在している。入口は、上手くカモフラージュされて閉じられており、隠し部屋は十畳ほどの大きさだ。

そこでは、光輝達が思い思いに身を投げ出し休息をとっていた。だが、その表情は一樣に暗い。深く沈んだ表情で顔を俯かせる者ばかりだ。皆、満身創痍であるが故に苦痛に表情を歪めている者も多い。

いつもなら、そのカリスマを以て皆を鼓舞する光輝も、“限界突破”の副作用により全身をひどい倦怠感に襲われており壁に背を預けたまま口を真一文字に結んで黙り込んでいます。

そして、こういう時、いい意味で空気を読まず場を盛り上げてくれるクラス一のムードメイカーは、血の気の引いた青白い顔で、やはり苦痛に眉根を寄せながら荒い息を吐いて眠ったままだった。その事実も、皆が顔を俯かせる理由の一つだろう。

鈴の下半身は、膝から下がまだ石化しており、優花が継続して治療にあたっていた。太ももの貫通した痕は既に完治している。後は石化を解除するだけだ。しかし、運悪く、鈴が受けた触手の攻撃は彼女の体から大量の血を失わせた。おそらく、重要な血管を損傷したのだろう。優花だからこそ、治療が間に合ったと言える。

優花が、鈴にかかりきりになっているため、他の者はまだ治療は香織が受け持っているがその香織はオブジェの如く置かれている斎藤と近藤の石化した彫像を治療している。鈴や彼等の治療が終わっても、自分達が治療を受けられるのは、まだ先であると感じているメンバーはごく一部を除いて特に文句を言う素振りはない。単に、その気力もないだけかもしれないが。

薄暗い即席の空間に漂う重苦しい空気に、雫が眉間に皺を寄せながら何とか皆を鼓舞しなればと頭を捻る。元来、雫は寡黙な方なので鈴のように場を和ませるのは苦手だ。しかし、光輝が「限界突破」と敗戦の影響で弱体化して使い物にならない以上、自分が何とかしなければならぬだろうと、生来の面倒見の良さから考えているのだ。本当に苦勞人である。

雫自身、肉体的にも精神的にも限界に近い事も有り、だんだん頭を捻るのも面倒になつてきて、もういつそのこと空気を読まずに玉碎覚悟の一発ギャグでもかましてやろうかと、ちよつと壊れ気味なことを考えていると、即席通路の奥から野村と辻綾子が話



をしながら現れた。

「ふう、何とか上手くカモフラージュ出来たと思う。流石に、あんな繊細な魔法行使なんてしたことないから疲れたよ……やっぱ、こう思うとホントに南雲って凄かったんだなって実感するよ」

「壁を違和感なく変形させるなんて領分違いよね……一から魔法陣を構築してやったんだから無理もないよ。お疲れ様」

「そつちこそ、石化を完全に解くのは骨が折れたろ？ お疲れ」

二人の会話からわかるように、この空間を作成し、入口を周囲の壁と比べて違和感がないようにカモフラージュしたのは「土術師」の野村健太郎だ。なお、辻綾子が野村について行ったのは、野村の石化を治療するためだ。

「お疲れ様、野村君。これで少しは時間が稼げそうね」

「そつちの方もお疲れ。……それに園部の言う通り、もう、ここまで来たら回復するまで見つからない事を祈るしかないな。遠藤の方は……あつちも祈るしかないか」

「……浩介なら大丈夫よ。影の薄さでは誰にも負けないからアイツは」

「いや、園部さん。それ、聞いているだけで悲しくなるから口にしてやるなよ……」

「アビスゲートって言ってる奴が、こんなことで悲しくなるんじや駄目ね」

「うわー、辛辣ウ……」

隠れ家の安全性が増したという話に、僅かに沈んだ空気が和らいだ気がして、とんだ黒歴史を作りそうになった雫は頬を綻ばせて野村を労った。それに対して、野村は苦笑いしながら、優花は鈴の治療をしながら今はここにいない一人の暗殺者に健闘を祈った。

〈数時間前〉

全員の避難が終わり、光輝、雫、優花、香織、恵理、永山はこれからどうするか話し合っていた。因みに、脳筋の龍太郎と深淵卿の影響で、シクシク鬱モードに陥ってる浩介は話しに不参加である。

「やっぱり、負けたままじゃ駄目だ、俺は戦う！」

「状況を考えなさい光輝、アンタも“限界突破”の副作用であまり動けないでしょう？」

「…………ぐつ、だがっ！」

「雫ちゃんの言う通りだよ、鈴ちゃんや野村君達はまだ動ける状況じゃない…………今、戦っても負けるだけだよ。それに、あの魔族は光輝君が“限界突破”を使ってもまともに渡り合ってるんだよ？」

「うっ…………でもどうすれば、全員で上に避難するのか？」

「それは無理よ、重症者がいるのに全員で避難なんかしたら魔物達の的になるし、もし魔

人族達が追つて来ていたらそこで終わりよ」

光輝達はあれやこれや提案したりして話し合ったが良い案は出なく、場の空気が沈みかけていたその時、一人の新しく黒歴史に刻ませた悲しみから立ち直った男が声を上げた。

「……俺が上に言つて救援を呼ぶ」

「……遠藤（君）?!」

「……浩介、大丈夫なの?」

「ああ、お陰様でな……」

浩介の突然の言葉に光輝達は驚き、優花はもう動けるのかと心配した。

「しかし……遠藤、君はなんて言つた?」

「聞こえなかつたのか? 俺が上の階層に上がつて、救援を呼ぶんだよ」

「流石に君でも無茶だつ」

「そうよ、遠藤君。考え直したら?」

光輝と雫は浩介の危険な提案を飲めずにいたが、浩介は譲らなかつた。

「何を言つてるんだ? 俺の影の薄さは一級品だ、安心しろ。それに、俺の親友なら、こんなところでイジイジしてられるか?」

「……っだが?!」

親指をグッと立てながら言う浩介に光輝は止めようと声をかけようとするが、その前に、優花が立ち上がった浩介の前に来ると、真剣な眼差しで声をかけた。

「浩介、大丈夫そ？」

「ああ、任せろよ。俺はハジメの隣で、親友として戦うために努力してきたんだからな」  
「……わかった。皆つ、浩介を信じよ。私も浩介の影の薄さなら保証するわ」

「えっ、ちよつ園部。何その支持の仕方……」

優花が浩介の意見に賛同した。優花の賛同に、この場にいる全員は考える。浩介自体、実力は光輝と並ぶぐらいは持つと、今までの浩介の戦闘を見て考えられる。それを考慮した結果、永山達、雫も渋々賛同した。そして、浩介一人で救援を呼ぶことになった。

「見つからないですよ。そして、帰ってきて。私はもう、大切な人が居なくなるのは……」  
「大丈夫だって、安心しろよ。救援を呼んで絶対に生きて帰ってくるからよ」  
そして、浩介そう言うって優花の言葉に頷くとは救援を呼びに向かったのだった。

〈現在〉

本当なら、浩介だけじゃなく、光輝達も直ぐにもっと浅い階層まで撤退したかったのだが、如何せん、それをなすだけの余力がなかった。満身創痍のメンバーに、戦闘不能

が三人、弱体化中の光輝、とても八十層台を突破できるとは思えなかったのだ。

もちろん、メルド団長達が救援に来られるとは思っていない。メルド団長を含め七十層で拠点を築ける實力を持つのは六人。彼等を中心にして、次ぐ實力をもつ騎士団員やギルドの高ランク冒険者達の助力を得て、安全マージンを考えなければ七十層台の後半くらいまでは行けるだろうが、それ以上は無理だ。

仮にそこまで来てくれたとしても、八十層台は光輝達が自力で突破しなければならぬ。つまり、遠藤を一人行かせたのは救援を呼ぶためではなく、自分達の現状と魔族が率いる魔物の情報を伝えるためなのだ。それは、浩介自体も理解しており、この情報をメルド団長に伝えて、コチラに戻って来るといふ算段だ。

光輝達は、確かに、聖教教会のイシユタル達から魔族が魔物を多数、それも洗脳など既存の方法ではなく明確な意志を持たせて使役するという話を聞いていたが、あれほど強力な魔物とは聞いていなかった。驚異なのは個体の強さではなく、**“数”** だったはずなのだ。

にもかかわらず、実際、魔族が率いていたのは前人未到の【オルクス大迷宮】九十層レベルの魔物を苦もなく一掃し、光輝達チート持ちを圧倒出来る魔物達だった。そして、あの軍服を着た魔族の男だ。流石にあれ程の人物が魔族に多くは居ないと思われるが、たった一人で勇者である光輝すら圧倒した**“實力”**。そんな事が、そもそも可

能ならもつと早く、人間族は滅ぼされていてもおかしくない。

つまり、イシユタルの情報は、あの時点では間違っていないのであり、結論としては、魔族の率いる魔物は「強力になっている」ということだ。「数」に加えて個体の「強さ」も脅威となり、この情報は、何が何でも確実に伝えなければならぬと光輝達は判断したのである。

「白崎さんと優花ちゃん。近藤君と斉藤君の石化解除は任せるね。私じゃ時間がかかりすぎるから。代わりに他の皆の治癒は私がするからさ」

「うん、わかった。無理しないでね、辻さん」

「そつちもね、綾子」

「平気平気。というかそれはこっちのセリフだって……ごめんね。私がつと出来れば、二人の負担も減らせるのに……」

野村達が話している傍らで、魔力回復薬をゴクゴクと喉を鳴らしながら服用する綾子が鈴の治療を続ける優花と近藤の治癒をしてる香織にそんな事をいった。同じ「治療師」でありながら、二人に比べると大きく技量の劣る綾子は、表面上は何でもないように装っているが、内心では自分への情けなさや二人にばかり負担をかけることへの申し訳なさでいっぱいだし、特に優花は「付与魔法」も行使して、前衛のサポートもしてるので更に申し訳なかった。

「そんな事はない」と言う二人に苦笑いを返しながら、仲間の治療に向かう綾子。彼女の治療により癒されていく仲間達の顔からは少しだけ暗さが消えた。そんな綾子を、何とも言えない表情で見つめている野村だったが、治療の邪魔になるかと思いい声はかけなかった。

「……こんな状況だ。伝えたい事があるなら伝えておけ」

「……うつせえよ」

永山が、どこか面白がるような表情で野村にそんな事をいうが、本人は不貞腐れたように顔を背けるだけだった。それから、数十時間。光輝達は、交代で仮眠を取りながら少しずつ体と心を癒していった。

~~~~~

一方、一人、撤退と魔族の情報伝達を託された遠藤浩介は、ただの一度も戦闘をせず全ての魔物をやり過ごししながらメルド団長達のいる七十層を目指して着実に歩みを進めていた。

「急がねえとな……」

浩介は『隠形』を駆使して着実に七十層を目指しながら優花達の心配をしながら駆

け出していった。そして未だにも迷宮の魔物には自分の存在は気付かれずにいた。浩介としては、ほんとは「深淵卿」を使って一気に登り詰めて行きたいところだったが、浩介の心が持たないだろうし、光輝達のところへ戻るための体力を残しておく為だ。

と、ちゃんと考えていた浩介なのだが……

「やっぱ魔物でも俺の存在に気付いてくれないのかよ……」

音を立てなければ、目の前を歩いても自分に気がつかない魔物に若干虚しさを覚えて、泣いた。だが今は、それが最大の武器になっているのだと自分に言い聞かせつつ頭に叩き込んである帰還ルートをたどって、遂に七十層にたどり着いた。

逸る気持ちを抑えながら、メルド団長達が拠点を構える転移陣のある部屋に向かう。しばらくすると、浩介の気配感知に六人分の気配が感知された。間違いなくメルド団長達だ。距離的に、「隠形」を解いたので向こうも気づいたはずである。

浩介は、最後の角を曲がり、メルド団長達のいる転移部屋に出た。しかし、既に完全に姿を見せているのに、メルド団長達は特に気がつく気配がない……。

浩介は、死んだ魚みたいな目をしながらメルドに近づき、声を張り上げた。

「団長！俺です！ 気づいてください！ 大変なんです！」

「うおっ!? 何だ!? 敵襲かつ!?」

「何でだああああ!!」



声を張り上げた瞬間、メルド団長がそんな事を言いながら剣を抜いて飛び退り、警戒心たつぷりに周囲を見渡した。他の騎士達も、一様にビクツと体を震わせて、戦闘態勢に入っている。

「だから、俺ですって！マジそういうの勘弁して下さい！」

「えっ？　　って、浩介じゃないか。驚かせるなよ。ていうか他の連中はどうした？」

それに、何かお前ポロポロじゃないか？」

「ですから、大変なんです！」

メルド団長達は相手が浩介だとわかると、影の薄さは知っていたのでフツと肩の力を抜いた。しかし、戻ってくるには少々予定より早いことと、一人であること、そして、その浩介が、満身創痍といってもいくらいポロポロであることから、直ぐさま何かがあったと察して険しい表情になった。浩介は、王国最精鋭の騎士達にすら、声をかけないと言つぱり気づかれないという事実には地味に傷つきながら、そんな場合ではないと思ひ直し、事の次第を早口で語り始めた。

浩介の説明で、メルド団長達の表情は険しくなる。そして、浩介の肩に手を置いて、浩介の頑張りを称賛した。

「浩介。短時間で一度も戦わずに二十層も走破して来てよく伝えてくれた」

「団長、俺はこのまま戻ります。あいつらは自力で戻るっていったけど今度は負けな

いつていつてたけど、天之河が「限界突破」を使っても倒しきれなかった魔人族がいま  
す。そいつは、俺の「深淵卿」の相手でも引けを取らなかつた、真正正銘の化け物です。  
皆、逃げるので精一杯だったんだ。全員、かなり消耗してるし、傷が治つても今度、襲  
われたらヤバイんです。だから、先に地上に戻つて、このことを伝えて下さい」

浩介は決然とした表情でメルドに告げた。

メルド団長は、悔しそうに唇を噛むと、自分のもつ最高級の回復薬全てを、その入つ  
た道具袋ごと浩介に手渡した。他の団員達もメルドと同じく、悔しそうに表情を歪めて  
自らの道具袋を託した。

「すまないな、浩介。一緒に、助けに行きたいのは山々だが……私達じゃあ、足でまとい  
にしかならない……」

「あ、いや、気にしないで下さい。大分、薬系も少なくなつてるだろうし、これだけでも  
助かりますよ」

「ふっ……そうか」

浩介は、コクリと頷くだけで優花達の元へ戻ろうと踵を返そうとした。が、その瞬間  
……

「浩介ッ!?!」

「なっ、嘘だろ?! ま、まさかっ……!」

メルド団長が、突然、浩介を弾き飛ばすとギャリイイ!! という金属同士が擦れ合うような音を響かせて、円を描くようにその手に持つ剣を振るった。そして、そのままくるりと一回転すると遠心力をたつぷりのせた見事な回し蹴りを揺らめく空間に放った。

ドガッ!

そんな音を響かせて、揺らめく空間は後方へと吹き飛ばされる。そして、五メートルほど先で地面に無数の爪痕が刻み込まれた。爪を立てて減速したのだろう。それを見て、地面に尻餅を付いていた浩介は、内心舌打ちしながら呟いた。

「ちっ、気付かれてたのかよっ……」

その言葉がまるで合図となったかのように、そろそろと浩介達を追い詰めた魔物達が現れた。浩介は、すぐさまハジメから貰った小太刀を握り締め臨戦態勢をとった。

浩介は、ここに来るまでの間、“穩形”を使って気配や臭い、魔力残滓などの痕跡を消しながら移動したというのに魔人族が天之河達を探しながら移動する以上、一直線に駆け抜けた浩介にこんな早く追いつくはずがないと思っていたのだが……

「俺の予想が随分と外れちゃったか?」

そんな浩介の疑問は、続いて現れた悪夢のような男によって解消されることになった。

「一人だけでしたか。私の予想と食い違いましたね。逃げるなら転移陣のあるこの部屋まで来るかと思いましたが……様子から見て、どこかの階層に隠れているようですね」

「クソツ……転移陣つ、そういうことかよ！」

軍帽を深々と被りながら、四つ目狼の背に乗って現れた魔族の男に、メルド団長達も臨戦態勢になる。彼の言葉からすると、どうやら、光輝達が目散に転移陣へと逃げ込むと考えて、搜索せずに一直線にやって来たらしい。予想が外れて、天之河達を探さねばならないことに溜息を吐いている。それは同時に、天之河達がまだ無事であるということでもある。浩介もメルド団長達も僅かではあるがホツとしたように頬を緩めた。それに目ざとく気がついた魔族の男が、浩介達をいや、浩介を見つめて嬉しそうに冷酷な笑みを浮かべた。

「おや、君は『アビスゲート』だったかな？……勇者を探すのも良いが後にしよう。私は君と戦ってみたい。お相手願おうか？」

直後、魔族の男は腰に携えた軍剣を抜くと、浩介に向かって駆けていく。同時にそれに続いて一斉に魔物が襲いかかったてきた。キメラが空間を揺らめかせながら突進し、黒猫が疾風となって距離を詰める。ブルータルモドキが、メイスを振りかぶりながら迫り、四つ目狼が後方より隙を覗う。

「円陣を組め！ 転移陣を死守する！ 浩介ッ、お前は……逃げろ！ 地上へ！」  
「えっ!？」

流石、王国の最精鋭と思わず称賛したくなるほど迅速な陣組みと連携で襲い来る魔物の攻撃を凌ぐメルド団長達。事前に浩介から魔物の話を聞いていた事から、自分達では攻撃力不足だと割り切り、徹底的に防御と受け流しを行っている。

メルド団長達と共に戦おうとした浩介は、メルド団長の「地上へ逃げろ」という言葉に思わず疑問の声を上げた。その疑問は当然だ。魔物との対抗が出来たとしても、あの軍服の魔人族の男にはメルド団長達では到底、相手にならないと思っっているからだ。

「団長っ！ 魔物も強いですが、その魔人族は本当にヤバいんですっ！ 幾ら団長達でも死んでしまいますっ！」

「我らは……ここを死地とする！ 浩介！ 向こう側で転移陣を壊せ！ なるべく時間は稼いでやる！ だから地上から助けを呼べ！」

「そ、そんな……」

「クソッ……」

メルド団長の考えは明確だ。地上へ逃げるにしても、誰かが僅かでも時間を稼がねば直ぐに魔物達も転移してしまう。そうなれば、追っ手を撒く方法がなくなってしまう、追いつかれて殺される可能性が高い。なので、一人を逃がして、残り全員で時間稼ぎを

するのがベストなのだ。時間を稼げれば、対となる三十層の転移陣を一部破壊することで、完全に追っ手を撒ける。転移陣は、直接地面に掘り込んであるタイプなので、成で簡単に修復できる。逃げ切つて、地上の駐屯部隊に事の顛末を伝えた後、再び、光輝達が見えるように修復すればいい。

「……………でもっ」

しかし、そのやり方がベストだと分かっているとしても、命を犠牲にする方法を拒否しようとする浩介に、激しい戦闘を繰り広げるメルド団長の心根と願いが、雄叫びとなつて届けられる。

「無力ですまない！ 助けてやれなくてすまない！ 選ぶことしか出来なくてすまない！ 浩介！ 不甲斐ない私だが最後の願いだ！ 聞いてくれ！」

戸惑う浩介に、ハジメ親友と同じくらいに信頼を寄せていた男から最後だという願いが届く。

「生きろお！」

「……………ッ！ 団長……………はい!!」

浩介は、グツと唇を噛むと全力で踵を返し転移陣へと向かった。ここで、メルド団長の思いと覚悟に応えられなければ男ではないと思つたからだ。

「逃がしませんよっ！」

魔族の男が、浩介を逃がせまいと、加速しながら軍剣を握りしめ追いかける。浩介との距離が二、三メートル程に近付くと軍剣を浩介に目掛けて振り下ろすが

しかし……

ガキインツ！

騎士団員の一人が円陣から飛び出し、浩介を庇い、剣と剣とのぶつかり合いによつて大きな金属音が鳴り響いた。

「ア、アランさん！」

「ぐっ……いいから気にせず行けえ！」

魔族の男の攻撃を受け止めているアランと呼ばれた騎士は、ニツと実に男臭い笑みを浮かべて浩介にそう言った。浩介は、噛み切るほど唇を強く噛み締めて、転移陣へと再び駆ける。

「……雑魚の人間の分際で、お前達！　アビスゲートを集中的に狙えつ。決して逃がすなあつ！」

魔族の男が声を荒あげて、改めてそう命じるが……その命令はするのには既に遅かった。

「ハッ、私達の勝ちだ！　ハイリヒ王国の騎士を舐めるなあ！」

メルド団長が不敵な笑みを浮かべながら、そう叫ぶと同時に浩介が転移陣を起動し終

え、その姿を消した。魔族の男は、メルド団長の言葉を無視して魔物をつつませる。魔物は直接魔力を操れるので、面倒な起動詠唱をすることもなく転移陣を起動出来、それ故、今なら、まだ間に合うと考えたからだ。

しかし、

「舐めるなと言っている！」

メルド団長達が光輝達にはない巧みな技と連携、そして経験からくる動きで魔物達を妨害する。多勢に無勢でありながら、その防御能力と粘り強さは賞賛に値するものだった。

もつとも、メルド団長達がいくら死力を尽くしたところで相対する魔物の数と強さは異常。腹を石の槍で貫かれていたアランが、遂に力尽きて、魔物の攻撃に踏ん張りきれずバランスを崩し膝を突いた。その綻びから、カメラの一体が防衛線を突破し転移陣に到達する。

二体のカメラが消えるのと、魔法陣が輝きを失うのは同時だった……。

「くっ、二体、送られてしまったか……浩介……死ぬなよ『グルウウアアアアアア！』  
……っっ！」

「……よくやりましたよ貴方達は、流石に私も驚いた。『劍聖』の私が褒めてやります」  
メルド団長の呟きは魔物の咆哮にかき消された。浩介を逃したことの腹いせに魔人



族の男がメルド団長達に魔物達を一斉に差し向けたからだ。

「『劍聖』だと……」

メルド団長の方も魔人族の男が言った言葉に覚えがあった。それは、見たわけではない。しかし、耳にしていた。

魔人族に、若くして最強の域に辿り着いた劍士がいます、その者は黒の軍服を着ており、周りから畏怖と畏敬の念が込められて与えられた二つ名。

それが……『劍聖』である。

メルド団長は、目の前に魔人族の最強格の一人がいることに、冷や汗が止まらない。が、その反面、一人の騎士として笑みが止まらない。

「フツ、まさか、あの魔人族の中でも此方にも名が伝わってる程のあの『劍聖』がお見えになるとはな……魔人族側も勇者の存在には焦っていることだな。なればこそ、お前達の戦力の低下の為に俺達はここを死地と定めて最後まで暴れるだけだ。お前達、ハイリヒ王国騎士団の意地を見せてやれ！」

「『おうー！』」

「……やってみろ雑魚共」

メルド団長の号令に、部下の騎士達が威勢のいい雄叫びを以て応える。その雄叫びに込められた気迫は、一瞬とはいえ、周囲の魔物達を怯ませる程のものだった。

……その十分後

転移陣のある七十層の部屋に再び静寂が戻った。

~~~~~

「うおおおー!!」

そんな雄叫びを上げながら、【オルクス大迷宮】三十層の転移陣から飛び出した浩介は、直ぐさま、腰に携えたショートソードを振りかぶり、眼下の魔法陣の破壊を試みた。

「な、何だ!?……っってお前! 何をやる気だ!」

「やめろ!」

「取り押さえろ!」

転移陣から現れた黒装束の少年が、いきなり雄叫びを上げながら手に持つ剣で魔法陣を傷付け始めたことに、一瞬、呆然とするも、周囲の騎士団の正装をした者達が怒号を上げながら浩介に飛びかかりその破壊活動を妨害する。

彼等は、メルド団長の部下で三十層側の転移陣を保護する役目をおった者達だ。実力不足で、三十層での警備が限界な者達でもある。一撃で魔法陣を破壊できなかった浩介が、二撃、三撃と加えあと一步で陣の一部を破壊できるところで、辛くも魔法陣

破壊を阻止する事ができた。

「は、放せ！ 早く、壊さないと！ 奴等が！ 放せ！」

「なっ、君は勇者一行の!? なぜ、君が……」

狂乱とも言える行為を行った人物が、よく見知った勇者の仲間の一人とわかると、驚愕の声を漏らしながら思わず手を緩める団員達。その隙に、再度、ショートソードを振りかぶって魔法陣の一部を破壊しようと浩介だったが、一步、遅かった。

魔法陣が、再び輝き起動する。そして、次の瞬間には、浩介達に揺らめく空間が襲いかかった。

「くっそおー！」

浩介は小太刀で一瞬で襲いかかってきたキメラの首を刈り取り、転移陣に向かって、投げナイフを投げた。

パァン！ そんな澄んだ音が響き渡る。それは、魔法陣が破壊された証拠だ。魔法陣の転移の際に使われた魔力残滓が霧散したのだ。

「これでっ……っ……があ、あああああ!!クソッ……もう一体いたのかよ!!」

転移陣の破壊に成功し、これ以上の追っ手はないと思わず安堵の吐息を漏らす浩介だったが、次の瞬間には右腕に襲いかかったキメラの牙が喰い込み、その激痛に絶叫を上げた。キメラの強靱な顎が、そのまま浩介の右腕を噛みちぎろうとする。

「……………っおおおおおー！」

浩介は声にならない声をあげながら左手で小太刀を抜き取りカメラの首を切り裂き、右腕を引き抜いた。

「…っ！ 行かねえと……………早くっ……………救援をっ！」

浩介はメルドから貰った回復薬の一つを一気に飲み込み、幼なじみを仲間達を助ける為にひたすら地上を目指すのだった……………。

## 四十一話 懐かしきホルアド、親友との再会

ハジメ達は、現在、宿場町ホルアドにいた。

本来なら素通りしてもよかったのだが、フューレンのギルド支部長イルワから頼まれごとをされたので、それを果たすために寄り道したのだ。といつても、もともと「グリューエン大砂漠」へ行く途中で通ることになるので大した手間ではない。

ハジメは、懐かしげに目を細めて町のメインストリートをホルアドのギルドを目指して歩いた。ハジメに肩車してもらっているミュウが、そんなハジメの様子に気がついたようで、不思議そうな表情をしながらハジメのおでこを紅葉のような小さな掌でペシペシと叩く。

「パパ？ どうしたの？」

「ん？ あゝ、いや、前に来たことがあつてな……まだ四ヶ月程度しか経ってないのに、もう何年も前のような気がしてな……」

「……ハジメ、大丈夫？」

複雑な表情をするハジメの腕にそつと自らの手を添えて心配そうな眼差しを向ける

ユエ。ハジメは、肩を竦めると、次の瞬間にはいつも通りの雰囲気に戻っていた。

「ああ、問題ない。ちよつとな、えらく濃密な時間を過ごしたもんだと思つて感慨に耽つちまつた。思えば、ここから始まつたんだよな……優花との想いを交わした次の日に迷宮に潜つて……そして、大切を守る為に奈落に落ちた」

「……」

ある意味運命の日とも言うべきあの日のことを思い出し独白をするハジメの言葉を、神妙な雰囲気で聞くユエ達。ユエは、ジツと見つめている。テイオが、興味深げにハジメに尋ねた。

「ふむ。ご主人様は、やり直したいとは思わんのか？ 元々の仲間……そして、恋人がおるのじゃろ？」

テイオは、まだハジメ達と付き合いが浅いため、時折、今のうちにハジメ達の心の内を知ろうと、客観的に見ればかなりストレートな、普通なら気を遣つてしないような質問をする。それは、単なる旅の同行者ではなく、テイオ自身がきちんと仲間になりたいと思つているが故の彼女なりの努力だ。其の在り方はハジメの好みだった。

なので、特に気を悪くすることもなく、ハジメはテイオの質問を受け止める。そして、ふと、月明かりに照らされた真夜中で想いを伝え合つて抱き締め合い、キスマでした彼女の姿を思い浮かべる……。

不意に、自分の腕に触れる手に力が込められるのを感じてハッと我を取り戻す。見れば、ユエが揺らがぬ強い眼差しで真っ直ぐにハジメを見つめており、触れている手はギョツとハジメの袖を握りしめていた。

ハジメは、そんなユエと目を合わせると、ふっと目元を和らげて優しい眼差しで同じくジツと見つめ返した。

「確かに、戻りたいと思う。幼なじみ達と優花と一緒にいたい……でも、もし仮にあの日に戻ったとしても、俺は何度でも同じ道を辿ってしまうかもな……」

「ほう、なぜじゃ?」

ハジメの答えが以外だったらしく、テイオは、少し目を丸くした表情で聞いた。ハジメは、ユエ達から目を離さないまま、自分を掴むユエ、そして傍にいるシア、テイオをユエが掴んでいない方の手で頭を撫でていった。ユエ達の表情が僅かに綻ぶ。頬も少し赤く染まっている。

「もちろん……お前達に会いたいからだ」

「……ハジメ」

「ハジメさん」

「ご主人様……」

ホルアドの町は、直ぐ傍にレベル上げにも魔石回収による金稼ぎにも安全マージンを

取りながら行える「オルクス大迷宮」があるため、冒険者や傭兵、国の兵士がこぞって集まり、そして彼等を相手に商売するため多くの商人も集まっていることから、常時、大変な賑わいを見せている。当然、町のメインストリートと叫べたら、その賑わいもひとしおだ。

そんな多くの人々で賑わうメインストリートのだ真ん中で、突如立ち止まり見つめ合  
い出すハジメ達。周囲のことなど知ったことかと自分達の世界を作っていた。好奇心  
や嫉妬の眼差しがこれでもかど注がれ、若干、人垣まで出来そうになっているのを気付  
いたハジメは咳払いをした。

「んんっ、それに、この世界は……いや、ここの神共は性根が腐ってる。あの時の強さの  
ままじゃ、優花達を守れない。だから俺の選択は変わらないと思う」

「……」

——これは自分の欲だ。自覚している。でも、だからこそ、大事な人を守る為  
には必要だと思ひ続けるんだ。

ハジメは自分の拳を握り締め、前をみながら口を開いた。

「まあ、そういう訳だ、じゃギルドに向かうぞ」

「……ん」

「はいですう」



「のじゃ」

「パパ、ミュウにもナデナデしてなの」

「はいはい」

そしてハジメはミュウの頭を撫でながらギルドに向かった。道中、美女、美少女に囲まれていたハジメに羨望と嫉妬の目が突き刺さるのだが……ハジメは睨みを利かして視線を黙らせたのだった。

ハジメ達は、周囲の人々の視線を無視しながら、ようやく冒険者ギルドのホルアド支部に到着した。相変わらずミュウを肩車したまま、ハジメはギルドの扉を開ける。他の町のギルドと違って、ホルアド支部の扉は金属製だった。重苦しい音が響き、それが人が入ってきた合図になっているようだ。

前回、ホルアドに来たときは、冒険者ギルドに行く必要も暇もなかったので中に入るのは今回が初めてだ。ホルアド支部の内装や雰囲気は、最初、抱いていた冒険者ギルドそのままだった。

壁や床は、ところどころ壊れていたり大雑把に修復した跡があり、泥や何かのシミがあちこちに付いていて不衛生な印象を持つ。内部の作り自体は他の支部と同じで入って正面がカウンター、左手側に食事処がある。しかし、他の支部と異なり、普通に酒も出しているようで、昼間から飲んだくれたおっさん達がたむろしていた。二階部分にも

座席があるようで、手すり越しに階下を見下ろしている冒険者らしき者達もいる。二階に居る者は総じて強者の雰囲気を出しており、そういう制度なのか暗黙の了解かはわからないが、高ランク冒険者は基本的に二階に行くのかもしれない。

冒険者自体の雰囲気も他の町とは違うようだ。誰も彼も目がギラついていて、ブルツクのようなほのぼのした雰囲気は皆無である。冒険者や傭兵など、魔物との戦闘を専門とする戦闘者達が自ら望んで迷宮に潜りに来ているのだから気概に満ちているのは当然といえば当然なのだろう。

しかし、それを差し引いてもギルドの雰囲気はピリピリしており、尋常ではない様子だった。明らかに、歴戦の冒険者をして深刻な表情をさせる何かが起きているようだ。

ハジメ達がギルドに足を踏み入れた瞬間、冒険者達の視線が一齐に捉えた。その眼光のあまりの鋭さに、俺に肩車されるミュウが「ひう！」と悲鳴を上げ、ヒシ！ とハジメの頭にしがみついた。冒険者達は、美女・美少女に囲まれた挙句、幼女を肩車して現れたハジメに、色んな意味を込めて殺気を叩きつけ始める。ますます、震えるミュウを肩から降ろしハジメは、片腕抱っこに切り替えた。ミュウは、胸元に顔をうずめ外界のあれこれを完全シャットアウトした。

「……」

ドンツ！

そんな音が聞こえてきそうなほど濃密にして巨大かつ凶悪なプレッシャーが、睨みつけていた冒険者達に情け容赦一切なく叩きつけられた。先程、冒険者達から送られた殺気が、まるで子供の癩癩に思えるほど絶大な圧力。既に物理的な力すらもついでいようなそれは、未熟な冒険者達の意識を瞬時に刈り取り、立ち上がっていた冒険者達の全てを触れることなく再び座席につかせる。

ハジメの尋常ではないプレッシャー “威圧” と “魔力放射” を受けながら意識を辛うじて失っていない者も、大半がガクガクと震えながら必死に意識と体を支え、滝のような汗を流して顔を青ざめさせている。

そんな彼等にハジメはニッコリ笑いながら話しかけた。

「おい、今、こつちを睨んだやつ」

「「「「「「「「」」」」」」」」」

ハジメの声にビクツと体を震わせる冒険者達。おそろおそろといった感じでハジメの方を見るその眼には、化け物を見たような恐怖が張り付いていた。

「何、そんなに怯えんなよ。いきなり “威圧” をしたのは謝る。が、こつちには小さい子がいるんだ。だから、変に睨むのをやめてくれないか？」

「おつ、おう……こつちこそすまねえ」

冒険者達はハジメハジメに何かせれると怯えたが、以外の言葉に肩の力が抜いて、す

んなりとハジメの指示に従い、睨むのをやめた。ハジメは満足そうに頷くと胸元に顔を埋めるミュウの耳元にそつと話しかけた。

「ミュウ、もう大丈夫だぞ」

ミュウはおおずと顔を上げると、ハジメを潤んだ瞳で見上げる。そして、ハジメの視線に誘われてゆっくり振り向き冒険者達をジッと見つめ、何かに納得したのかニヘラ〜と笑うと小さく手を振り返した。その笑顔と仕草が余りに可愛かったので、状況も忘れてこわもて軍団も思わず和む。ハジメは再びミュウを肩車すると、もう冒険者達に興味はないとカウンターへと歩いて行った。

ハジメ達が、カウンターに向かった瞬間、ドサドサと崩れ落ちる音があちこちから響いたがサクツと無視して、たどり着いたカウンターの受付嬢に要件を伝える。

「支部長はいるか？ フューレンのギルド支部長から手紙を預かっているんだが……本人に直接渡せと言われてるんだ」

ハジメは、そう言いながら自分のステータスプレートを受付嬢に差し出す。受付嬢は、緊張しながらもプロらしく居住まいを正してステータスプレートを受け取った。

「は、はい。お預かりします。え、えつと、フューレン支部のギルド支部長様からの依頼……ですか？」

普通、一介の冒険者がギルド支部長から依頼を受けるなどということはありえないの

で、少し訝しそうな表情になる受付嬢。しかし、渡されたステータスプレートに表示されている情報を見て目を見開いた。

「き〃金〃ランク!?!」

冒険者において〃金〃のランクを持つ者は全体の一角に満たない。そして、〃金〃のランク認定を受けた者についてはギルド職員に対して伝えられるので、当然、この受付嬢も全ての〃金〃ランク冒険者を把握しており、ハジメのこと等知らなかったの思わず驚愕の声を漏らしてしまった。その声に、ギルド内の冒険者も職員も含めた全ての人々が、受付嬢と同じように驚愕に目を見開いて凝視する。建物内がにわかに騒がしくなった。

受付嬢は、自分が個人情報を大声で晒してしまったことに気がついてサツと表情を青ざめさせる。そして、ものすごい勢いで頭を下げ始めた。

「も、申し訳ありません! 本当に、申し訳ありません!」

「あく、いや。別にいい。取り敢えず、支部長に取り次ぎしてくれないか?」

「は、はい! 少々お待ちください!」

放っておけばいつまでも謝り続けそうな受付嬢に、ハジメとしては、ウルで軽く戦争し、フューレンで一つの巨大裏組織を壊滅させてきた以上、身分の秘匿など今更だと思っただけなので、あそこまで謝らなくて良いと困ったように苦笑いをして、支部長を呼

んでくれと頼むと、すぐさま受付嬢は、支部長を呼びに向かった。

やがて、と言つても五分も経たないうち、ギルドの奥からズダダダツ！ と何者かが猛ダツシュしてくる音が聞こえた。何事だと、ハジメ達が音の方を注目しているのと、カウンターの横の通路から全身黒装束の少年がズザザザザと床を滑りながら猛烈な勢いで飛び出てきて、誰かを探すようにキョロキョロと辺りを見渡し始めた。

ハジメは、その人物に見覚えがあり、こんなところで再会するとは思わなかったので思わず目を丸くして呟いた。

「……浩介？」

ハジメの呟きに反応した浩介は、ハジメを見て身体が石化したかのように固まった。

「おつ、お前ハジメな、のか？」

浩介はハジメを見て、今にも泣きそうな声で話しかけてくる。ハジメもあまりの唐突な再会に涙が出ないが、親友と再会できたことに嬉しそうに返事をした。

「久しぶりだな、浩介……うお！」

「ハジメええええ！」

ハジメが言いかける前に浩介が抱きついた。男に抱きつかれても、ただシユールな光景なのだか、相当、心配させたらしく申し訳なさを感じるハジメ。

「浩介、抱きつくのは良いが、絵面的に気持ち悪いから、そろそろ離せ」

「あつ……スマン、でも嬉しくて……って気持ち悪いはないだろうっ！ 親友だぞっ！」

「はいはい。んで、お前との再会は嬉しい、が……浩介、此処に来る前にウルで妙子達と会ってな、話を聞く限り、お前がにいるなら優花がいるはずなんだ。何処だ？」

妙子達から聞いた限り優花は浩介の傍にいますかと思いい、浩介は浩介に聞くが、浩介は何も言わずに俯いてしまい、ハジメは首を傾げる。

「……」

「ん？ どうした浩介？」

「ハジメ……お前ってランク『金』だよな」

ハジメは浩介が何故、冒険者ランクのことか疑問に思い、訝しむが素直に答えた。

「ああ、そうだが……」

「頼むっ！ 俺と一緒に迷宮に来てくれ！」

浩介はそう言つて土下座をしてきて、ハジメは少し戸惑いながら話しかける。

「おいおい、浩介……突然そんなことを言われてもな上手く状況が掴めねえ。詳しく教えてろ」

「実は……」

浩介が話そうとした時、そこでしわがれた声による制止がかかった。

「話の続きは、奥でしてもらおうか。そっちは、俺の客らしいしな」





アド支部の支部長ロア・バワビスと浩介が座っており、浩介の正面にハジメが、その両サイドにユエとシアがシアの隣にテイオが座っている。ミュウは、シアの膝の上だ。

浩介から事の次第を聞き終わった魔人族の襲撃に遭い、勇者パーティーが窮地にあるというその話に浩介もロアも深刻な表情をしており、室内は重苦しい雰囲気であつた。しかし、ハジメは勇者の光輝のことなんかどうかどうでもよく、優花のことの方が断然、心配だつた。

「さて、ハジメ。イルワからの手紙でお前の事は大体分かつている。随分と大暴れしたようだな？」

「まあ、全部成り行きだけだな、後悔はないぞ」

成り行き程度の心構えで成し遂げられる事態では断じてなかつたのだが、事も無げな様子で肩をすくめるハジメに、ロアは面白そうに唇の端を釣り上げた。

「手紙には、お前の『金』ランクへの昇格に対する賛同要請と、できる限り便宜を図つてやつて欲しいという内容が書かれていた。一応、事の概要くらいは俺も掴んではいるんだがな………たつた数人で六万近い魔物の殲滅、半日でフューレンに巢食う裏組織の壊滅………にわかには信じられんことばかりだが、イルワの奴が適当なことをわざわざ手紙まで寄越して伝えるとは思えん………もう、お前が実は魔王だと言われても俺は不思議に思わんぞ」

ロアの言葉に、浩介が大きく目を見開いて驚愕をあらわにするが「まあ……ハジメだし」と呟きながら納得している様子を見て、ハジメは少し頬を引き曇らせる。

元々、浩介が冒険者ギルドにいたのは、高ランク冒険者に光輝達の救援を手伝ってもらうためだったらしい。もちろん、深層まで連れて行くことは出来ないが、せめて転移陣の守護くらいは任せられたのである。駐屯している騎士団員もいるにはいるが、彼等は王国への報告などやらなければならないことがあるし、何より、レベルが低すぎて精々三十層の転移陣を守護するのが精一杯で七十層の転移陣を守護するには、せめて「銀」ランク以上の冒険者の力が必要だったてことらしい。

そう考えて冒険者ギルドに飛び込んだ挙句、二階のフロアで自分達の現状を大暴露し、冒険者達に協力を要請したのだが、人間族の希望たる勇者が窮地である上に騎士団の精銳は全滅、おまけに依頼内容は七十層で転移陣の警備というとんでもないもので、誰もが目を逸らして、救助要請に応答しなかったらしい。だから、ギルドがあんな重い空気だったんだと納得しながら、ハジメとロアは話しをすすめていく。

「バカ言わないでくれ……魔王だなんて、俺はそこまで弱くないつもりだぞ？」

「ふっ、魔王を雑魚扱いか？ 随分な大言を吐くやだ……だが、それが本当なら俺からの、冒険者ギルドホルアド支部長からの指名依頼を受けて欲しい」

「……勇者達の救出だろ？」

「ハジメ……」

「あたり前だ、行くに決まっている。優花がいるんだ俺が絶対助ける……」

——そうだ俺は優花を守る為に……。

「なっ、なあハジメ。園部以外も助けるよな?」

浩介はハジメの返事に嬉しく感じていたが、内容がほぼほぼ優花を第一優先事項にしてる為、光輝などを助けてくれるのか心配になっていた。

「あー……助けるよ、助ける」

「マジで助けるよっ!おいつ」

ハジメの棒読みの返事に浩介は叫んだ。しかし、ハジメは嫌そうな表情を隠さない。最悪、雫はいいとして香織などを助けるとなると気が進まないらしい。

「……なんか、ヤル気が失せるつつうかあ〜」

「おいつ、ゴラアツ!」

ハジメの言葉に浩介はツツコミを入れるが、当のハジメは、頭をカリカリと掻きながら、傍らで自分を見つめている大切な仲間達を見やって話しかけた。

「三人共、これは俺の勝手の行動だ。だから着いてこなくても良いがどうする?」

「……ん、ハジメのしたいように。私は、どこでも付いて行く」

「わ、私も! どこまでも付いて行きますよ! ハジメさん!」

「ふむ、妾ももちろんついて行くぞ。ご主人様」

「ふえ、えつと、えつと、ミュウもなの！」

対面で、浩介は愕然とした表情をしながら「え？ ハジメ、えつ、もうお前浮気か？

……園部に殺されるぞ」と呟いている。ハジメも十分理解している。

「(やめてくれ浩介、それが一番の俺の悩みなんだよっ！)」

そんな叫びを内心で納めながら、ハジメは大切な仲間己の意志を伝えた。

「ありがとな、お前等。神に選ばれた勇者になんて、わざわざ自分から関わりたくはないし、お前達を関わらせるのも全くもって嫌なんだが……優花がいるんだ。だから、助けに行こうかと思う。まあ、優花とか八重樫がいるし、案外、自分達で何とかしそうな気もするが俺は優花を助けに行きたい」

本心としては、光輝達がどうなろうと知ったことではなかったし、勇者の傍は同時に狂った神にも近そうな気がして、わざわざ近寄りたい相手ではなかった。だが、優花のことになればどうでもいい。絶対に助けに行く。もし、優花にケガでもしていれば其処にいた敵を皆殺し、前衛の奴らは締め上げる所存である。

危険度に関しては特に気にしていない。浩介の話からすれば既に戦った四つ目狼が出たようだが、キメラ等にしても奈落の迷宮でいうなら十層以下の強さだろう。何の問題もない。問題は魔族の男だろう聞く限り、光輝の“限界突破”さえも容易く返り討

ちにするなど相当強いと判断出来るし、もしかしたら其奴が大迷宮の攻略者の可能性があるなどハジメは判断した。

「南雲ハジメ話しを聞く限り、迷宮に行ってくれらるんだよな？」

「ああ、ロア支部長。一応、対外的には依頼という事にしておきたいんだが……」

「上の連中に無条件で助けてくれると思われたくないからだな？」

「そうだ。それともう一つ。帰ってくるまでミュウのために部屋貸しといってくれ」

「ああ、それくらい構わねえよ」

結局、ハジメが一緒に行ってくれるということに安堵していたがユエ達を見て「大丈夫か？」と複雑そうな視線を送る浩介を無視して、ハジメはロアとさくさく話を進めていった。流星に、迷宮の深層まで子連れで行くわけにも行かないので、ミュウをギルドに預けていく事にした。

その際、ミュウが置いていかれることに激しい抵抗を見せたが、何とか全員で宥めすかし、ついでに子守役兼護衛役にテイオも置いていく事にしたが、テイオはハジメに話しかけた。

「ご主人様、何故妾を？  
護衛なら此処のギルドの者に任せれば良いと思うのじゃが？」

「いや……ギルドに向かつてる最中な、ミュウやお前達に嫌な視線を送ってる奴等がい

てな……」

「……わかったのじゃ、コチラは任せておれ」

「頼む」

「うむ」

ハジメとテイオの話が終わりようやくハジメ達は浩介の案内で出発することが出来た。しかし、出ていく間際にテイオと一緒に迷宮に向かうユエとシアに「優花への紹介の時は妾のアピールもしておいてくれるか?」「………任せて」「ユエよ。なんじゃ、その間は?」などと話していたが、ハジメはスルーを決め込んだ。

「浩介、おぶつてやろうか?」

「いらんわ!それなりに敏捷は高いぞ俺は?! ハジメが規格外なだけだ!」

「そんな、化け物扱いすんなよ。それより早く優花を助けないとな……」

「……お前、園部を助けるのは良いが……一緒にいる美少女達をどう説明すんだ?……俺は何があつても知らないぞ?」

「………」

「ちよつとハジメ、凄いい冷や汗かいてるぞ……」

「………ん、任せてハジメ、大丈夫。私が上手くやって纏まるせるから」  
「ですう」

「余計に心配だわっ！」

迷宮深層に向かって疾走しながら、ハジメ達はそんな会話をしていた……。

そして、ハジメは視線を迷宮に転じて呟いた。

「優花、待つててくれ……絶対助ける」

~~~~~

オマケ

優花「！」

雫「どうしたの？ 園部さん？」

優花「いや、何か良いことが起きそうかなって」

雫「へえ、それは楽しみね」

優花「うん、でも……」

雫「でも？」

優花「なんか、私にとって最大の一大事が起きそうな気がする……」

雫「そ、それは大変ね……」

オルクス迷宮の八十九層の隠れ部屋で二人はそんな会話をしていたのだった。

その後、二人は会話していた事が本当に起こるとは思いもしなかった。

## 四十二話 勇者の敗北

「うっ……」

「谷口さん！」

「鈴！」

うめき声を上げて身じろぎしながらゆっくり目を開けた鈴に、ずっと傍に付いていた優花と恵里が声に嬉しさを滲ませながら鈴の名を呼んだ。鈴は、しばらくボーとした様子で目だけをキョロキョロと動かしていたが、やがてゆっくりと口を開いた。

「し、知らない天井だあ〜」

「鈴、あなたの芸人根性は分かったから、こんな時までネタに走って盛り上げなくていいのよ？」

喉が乾いているのだろう。しわがれ声で、それでも必死にネタに走る鈴に、彼女の声を聞いて駆け付けてきた雫が、呆れと称賛を半分ずつ含ませた表情でツツコミを入れた。そして、傍らの革製の水筒を口元に持っていき水分を取らせる。

ぐきゅぐきゅと可愛らしく喉を鳴らして水分を補給した鈴は、「生き返ったぜ！ 文



字通り！」と、あまり洒落にならない事を言いながら、頑張つて身を起こす。優花と恵里がそれを支える。瀕死から意識を取り戻して即行明るい雰囲気撒き散らすクラス一のムードメイカーに、今の今まで沈んだ表情だったクラスメイト達も口元に笑みを浮かべた。

「鈴、目を覚ましてよかった。心配したんだぞ?」

「よお、大丈夫かよ。顔、真つ青だぜ?」

起きていきなり騒がしい鈴に、光輝と龍太郎が近寄ってくる。一時期、*「限界突破」*の影響で弱体化し、かつ、手痛い敗戦に落ち込んでいた光輝だったが、この即席の隠れ家に逃げ込んでからそれなりの時間が経っているため、どうにか持ち直したようだ。

「おはよー、光輝君、龍太郎君! 何とか逃げ切ったみたいだね? えつと、みんな無事……あれつ、一人少ないような……」

「ああ、それは遠藤だろ。あいつだけ、上に行つて貰つて救助要請を頼んだんだ。あいつの*「隠形」*なら一人でも階層を突破出来ると思つて……」

光輝と龍太郎に、笑顔で挨拶すると、鈴は周囲のクラスメイトを見渡し人数が足りないことに気がついた。鈴は戦闘中に意識を喪失していたので、光輝達は彼女の疑問に答えると共に現状の説明も行った。ちなみに、近藤と斎藤も既に石化は解除されていて鈴より早く目を覚ましており、事情説明は受けている。

「そっか、鈴が気絶してから結構時間が経っているんだね……あ、そうだ。ユウカちゃん、ありがとね！ ユウカちゃんは鈴の命の恩人だね！」

「谷口さん、治療は私の役目よ。当然のことをしたただけだから、恩人なんて大げさよ」

「くうく、ストイックなユウカちゃんも素敵！ 結婚しよう？」

「鈴……青白い顔で言っても怖いだけだよ。取り敢えずもう少し横になる？」

優花に絡み、恵里に諫められる。行き過ぎれば雫によつて物理的に止められる。全くもつていつも通りだった。もう二度と、生きて地上に戻れないんじゃないかとそんなことまで考え出していたクラスメイト達も、敗戦なんて気にしないで言うような鈴達のもの取りに、次第に心の余裕を取り戻し始めた。が、そんな明るさを取り戻し始めた空気に、水を差す輩はいつでもどこにもいるものだ。

「……なに、ヘラヘラ笑つてんの？ 俺等死にかけたんだぜ？ しかも、状況はなんも変わつてねえ！ ふざけてる暇があつたら、どうしたらいいか考えろよ！」

鈴を睨みながら怒鳴り声を上げたのは近藤礼一だ。声は出していないが、隣の斎藤良樹も非難するような眼を向けている。

「おい、近藤。そんな言い方ないだろ？ 鈴は、雰囲気明るくしようと……」

「うっせえよ！ お前が俺に何か言えんのかよ！ お前が、お前が負けるから！ 俺は死にかけたんだぞ！ クソが！ 何が勇者だ！」

近藤の発言を諫めようと光輝が口を出す、火に油を注いだように近藤は突然激高し、今度は光輝を責め立て始めた。

「てめえ……誰のおかげで逃げられたと思ってるんだ？　光輝が道を切り開いたからだろうが！」

「そもそも勝つていれば、逃げる必要もなかっただろうが！　大体、明らかにヤバそうだったんだ。魔族の提案呑むフリして、後で倒せば良かったんだ！　勝手に戦い始めやがって！　全部、お前のせいだろうが！　責任取れよ！」

今度は、そんな近藤に龍太郎が切れ始める。近藤が立ち上がり、龍太郎が相對してにらみ合う。近藤に共感しているのか斎藤と中野も立ち上がり、龍太郎と對峙した。

「龍太郎、俺はいいから……近藤、責任は取る。今度こそ負けはしない！　もう、魔物の特性は把握しているし、不意打ちは通用しない。今度は絶対に勝てる！」

握りこぶしを握ってそう力説する光輝だったが、斎藤が暗い眼差しでポツリとこぼした。

「……でも、天之川が“限界突破”を使っても勝てなかったじゃないか」

「そ、それは……こ、今度は大丈夫だ！」

「なんでそう言えるの？」

「今度は最初から“神威”を魔族に撃ち込む。みんなは、それを援護してくれれば

……」

「でも、長い詠唱をすれば厄介な攻撃が来るなんてわかりきったことだろ？ 向こうだって対策してんじゃねえの？ それに、魔物だってあれで全部とは限らないし、それに今は天之河と同じくらい強い遠藤も救援を呼びに行っているから戦力がガタ落ちしてるじゃん」

光輝が大丈夫だと言つても、近藤達には、あの魔人族の男と善戦していた浩介もいない、光輝の実力に対する不自信が芽生えているらしく疑わしい眼差しを向けたまま口々に文句を言う。ここで、光輝に責任やら絶対勝てる保証などを求めても仕方ないのだが、どうやら、死にかけてたという事実と相手の有り得ない強さと数に平静さを失っているようだ。

沸点の低い龍太郎が喧嘩腰で近藤達に反論するのも彼等をヒートアップさせている要因だろう。次第に、彼等の言い争いを止めようと口を出した綾子や吉野、野村も含めて険悪なムードが漂い始める。

しまいには、龍太郎が拳を構え、近藤が槍を構え始めた。場に一気に緊張が走る。光輝が、龍太郎！と叫びながら彼の肩を掴んで制止するが、龍太郎は、よほど頭にきているのか額に青筋を浮かべたまま近藤を睨むことを止めない。近藤達の方も半ば意地になつているようだ。

「みんな、落ち着きなさい！ 何を言ったところで、生き残るには光輝に賭けるしかないのよ！ 光輝の『限界突破』の制限時間内に何としてでも魔人族の男を倒す。彼に私達を見逃すつもりがないなら、それしかない。わかつているでしょ？」

「そうよっ！ 今ここで変にケンカしても何も状況は変わらないし、生き残れる確率を減らすかもしれないでしょっ！」

雫と優花が、両者の間に入つて必死に落ち着くように説得するが、やはり効果が薄い。鈴が、フラフラと立ち上がりながら、近藤に謝罪までするが聞く耳を持たないようだ。香織が、いい加減、一度全員を拘束する必要があるかもしれないと、密かに拘束系魔法の準備をし始めたとき……それは聞こえた。

「グウルルルル……」

「！！！！」

唸り声だ。とても聞き覚えのある低く腹の底に響く唸り声。全員の脳裏にキメラや赤い四つ目狼の姿が過ぎり、今までの険悪なムードは一瞬で吹き飛んで全員が硬直した。僅かな息遣いすらも、やたらと響く気がして自然と息が細くなる。視線が、通路の先のカモフラージュした壁に集中する。

ザリッ！ ザリッ！ フシュー！ フシュー！

壁越しに、何かをひつかく音と荒い鼻息が聞こえる。誰かがゴクリと喉を鳴らした。

臭いなどの痕跡は遠藤が消してくれたはずで、例え強力な魔物でも壁の奥の光輝達を感知出来るはずはない。そうは思っているも、緊張に体は強張り嫌な汗が吹き出る。

完全回復には、今しばらく時間がかかる。鈴などは、とても戦闘が出来る状態ではないし、回復役の三人も治癒に魔力を使いすぎて、まだほとんど回復していない。前衛組は、ほぼ完治しているが、魔法主体の後衛組も半分程度しか魔力を回復できていない。回復系の薬もほとんど尽きており、最低でも後数時間は回復を待ちたかった。

特に、回復役の香織と綾子と優花、それに結界師の鈴が抜けるのは看過できる穴ではなかった。なので、光輝達は、どうかまだ見つからないでくれと懇願じみた気持ちで外の部屋と隠れ部屋を隔てる壁を見つめた。

しばらく、外を彷徨っていた魔物だが、やがて徐々に気配が遠ざかっていった。そして、再び静寂が戻った。それでも、しばらくの間、誰も微動だにしなかったが、完全に立ち去ったとわかると盛大に息を吐き、何人かはその場に崩れ落ちた。極度の緊張に、滝のような汗が流れる。

「……あのまま騒いでいたら見つかったわよ。お願いだから、今は、大人しく回復に努めてちょうだい」

「あ、ああ……」

「そ、そうだな……」

雫が頬を伝う汗をワイルドにピツ！ と弾き飛ばしながら拭う。近藤達も、どもりながら返事をして矛を取めた。まさに、冷や水を浴びせかけられたという感じだろう。

取り敢えず、危機を脱したと全員が肩から力を抜いた……その瞬間、優花は嫌な魔力を感じ取った。

「皆っ！退避してっ！」

咄嗟に、全員に向かって叫んだが遅かった。

「ルウガアアアアアア!!」

ドオガアアアン!!

凄まじい咆哮と共に隠し部屋と外を隔てる壁が粉微塵に粉碎された。

「うわっ!?!」

「きやあああ!!」

衝撃によって吹き飛んできた壁の残骸が弾丸となって隠し部屋へと飛来し、直線上にいた近藤と吉野に直撃した。悲鳴を上げて思わず尻餅をつく二人。

次の瞬間、啞然とする光輝達の眼前に、まだ相対したくはなかった空間の揺らめきが飛び込んできた。

「戦闘態勢！」

「ちくしょう！　なんで見つかったんだ！」

光輝が、号令をかけながら直ぐさま聖剣を抜いてキメラに斬りかかる。動きを止められては姿を見失ってしまうので距離を取られるわけには行かないからだ。龍太郎が、悪態を吐きながら、外につながる通路の前に陣取って、これ以上の魔物の侵入を防ごうとする。

しかし、

「オオオオ!!」

「ぐう!!」

直後にブルータルモドキがその鋼の如き体を砲弾のように投げ出して体当たりをかました。そして、龍太郎に猛烈な勢いをもって組み付き、そのまま押し倒した。

その際に、黒猫が何十匹と一気に侵入を果たし、即座に何十本もの触手を射出する。弾幕のような密度で放たれたそれは、容赦なく口論の時のまま固まった場所にいた近藤達に襲いかかった。咄嗟に、手持ちの武器で迎撃しようとする近藤達だったが、いかにせん触手の数が多い。あわや、そのまま串刺しかと思われたが、

「——天絶!!」

「——天絶!!」

「——天絶!!」

二十五枚の光り輝くシールドが近藤達の眼前の空間に角度をつけて出現し何とか軌



道を逸らしていった。極々短い詠唱で、それでも何とかシールドを発動した技量には、誰もが舌を巻く程のものだ。十枚のシールドを出した方が鈴であり、五枚出した方が香織、もう十枚は優花である。

ただ、やはり咄嗟に出したものである上に、鈴は体調が絶不調で、香織と優花は魔力が尽きかけている状態だ。その事實は、シールドの強度となつて如実に現れた。

バリントッ！　バリントッ！　バリントッ！　バリントッ！　バリントッ！　バリントッ！

角度をつけて衝撃を逸らしているはずなのだが、それでも触手の猛攻に耐え切れず次々と碎かれていく。そして、その内の数本が、ついに角度のついたシールドに逸らされることなく打ち碎き、その向こう側にいた標的、中野と斎藤に襲いかかった。咄嗟に、身をひねる二人だったが、どちらも後衛組であるためにそれほど身体能力は高くなくない。そのため、致命傷は避けられたものの、中野は肩口を、斎藤は太ももを挟られて悲鳴を上げながら地面に叩きつけられた。

「信治！　良樹！　くそっ！　大介、手伝ってくれ！」

「……ああ、もちろんだ」

隠し部屋に逃げ込んでからずっと何かを考え込んでいた檜山に、近藤は気を遣つてあまり話しかけないようにしていたのだが、流石にそうも言つていられない状況なので負傷した中野と斎藤と一緒に鈴の傍に引きずって行く。体調が絶不調とはいえ、魔力残量

はそれなりに残っている鈴の傍が一番の安全地帯だからだ。それに傍にいる方が、香織と優花の治療を受けやすい。

「くっ、光輝！ “限界突破” を使って外に出て！ 部屋の奴らは私達で何とかするわ！」

「だが、鈴達が動けないんじゃない……」

「このままじゃ押し切られるわ！ お願ひ！ 一点突破で魔族を討つて！」

「光輝！ こっちは任せろ！ 絶対、死なせやしねえ！」

「……わかった！ こっちは任せろ！ “限界突破” ！」

雫と龍太郎の言葉に一瞬考えるものの、確かに、状況を打開するにはそれしかない。光輝は決然とした表情をして、今日、二度目の「限界突破」を発動する。「限界突破」の一日も置かない上での連続使用は、かなり体に負担がかかる行為だ。なので、通常、「限界突破」の効力は八分程度であるが、もしかするともっと短くなっているかもしれない。そう予想して、光輝は他の一切を気にせず魔族の男を倒すことだけに集中し、隠し部屋を飛び出していった。

隠し部屋から、大きな正八角形の部屋に出た光輝の眼に、大量の魔物とその奥で白鴉を肩に止め周囲を魔物で固め、剣を持った魔族の男が冷めた眼で佇んでいる姿が映った。光輝は、心の内を、このような窮地に追いやった怒りと仲間を救う使命感で滾らせ、

魔人族の男を真つ直ぐに睨みつける。

「随分と手間取らせてくれましたね。こっちは他にも重要な任務があるというのに……」

「黙れ！ お前は俺が必ず倒す！ 覚悟しろ！」

光輝が、そう宣言し短い詠唱と共に聖剣に魔力を一気に送り込む。本来の「神威」には遠く及ばず魔人族の男には届かないだろうが、それでも道を切り開くくらいは出来るはずだと信じて詠唱省略版「神威」を放とうとした。が、輝きを増す聖剣を前に魔人族の男は薄らと笑みを浮かべると、自身の周囲に待機させていたブルータルモドキに命じて何かを背後から引きずり出してきた。

訝しげな表情をする光輝だったが、その「何か」の正体を見て愕然とする。思わず、構えた聖剣を降ろし目を大きく見開いて、震える声で彼の名を呼んだ。

「……メ、メルドさん？」

「へえ……この方はメルドっていう名前でしたか？ 騎士達の中では骨があつたので人質には良いと思ひましてね」

そう、そこには、四肢を碎かれ全身を血で染めた瀕死のメルドがブルータルモドキに首根っこを掴まれた状態でいたのである。一見すれば、全身を弛緩させていることから既に死んでいるようにも見えるが、時折、小さく上がるうめき声が彼等の生存を示して

いた。

「おま、お前え！ メルドさんを放せえツ!?」

光輝が、メルドの有様に激昂し、我を忘れたように魔人族の男へ突進しようとしたその瞬間、見計らっていたかのような絶妙のタイミングで、突然巨大な影が光輝を覆いつくした。ハツとなって振り返った光輝の目に、壁のごとき巨大な拳が空気を破裂させるような凄まじい勢いで迫ってくる光景が映る。

バギヤア!!

光輝は、本能的に左腕を掲げてガードするが、その絶大な威力を以て振るわれた拳はガードした左腕をあつさり押し潰し、光輝の体そのものに強烈な衝撃を伝えた。ダンブカーにでも轢かれたように途轍もない速度でぶつ飛び壁に叩きつけられた光輝。背後の壁が、あまりの衝撃に放射状に破碎する。

「ガハッー!」

衝撃で肺から空気が強制的に吐き出され、壁からズルリと滑り落ち、四つん這い状態で無事な右腕を頼りに必死に体を支える光輝。その口から大量の血が吐き出された。どうやら、先の一撃で内臓も傷つけたらしい。物理耐性の派生技能「+衝撃緩和」がなければ即死していたかもしれない。

脳震盪も起こしているようで、焦点の定まらない視線が必死に事態を把握しようとは

りを彷徨い、そして、見つけた。先程まで光輝がいた場所で拳を突き出したまま残心する体長三メートルはあるのかという巨大な魔物を。

その魔物は、頭部が牙の生えた馬で、筋骨隆々の上半身からは極太の腕が四本生えており、下半身はゴリラの化物だった。血走った眼で光輝を睨んでおり、長い馬面の口からは呼吸の度に蒸気が噴出している。明らかに、今までの魔物とは一線を画す雰囲気を感じていた。

その馬頭は、突き出した拳を戻すとともに、未だ立ち上がれずにいる光輝に向かって情け容赦なく濃密な殺気を叩きつけながら突進した。光輝がうずくまる場所の少し手前で跳躍した馬頭は、振りかぶった拳を光輝の頭上から猛烈な勢いで突き落とす。光輝は、本能がけたたましく鳴らす警鐘に従ってゴロゴロと地面を転がりながら、必死にその場を離脱した。

ドオガガアア!!

直後、馬頭の拳が地面に突き刺さり、それと同時に赤黒い波紋が広がったかと思うと轟音と共に地面が爆ぜた。まさに爆砕という表現がぴったりの破壊がもたらされる。これが、この馬頭の固有能力「魔衝波」である。内容は単純で、魔力を衝撃波に変換する能力だ。だが、単純故に凄まじく強力な固有魔法である。

「物理耐性」の派生技能「+治癒力上昇」により、何とか脳震盪からだけは回復しつ

つある光輝は、必死に立ち上がり聖剣を構えた。その時には、もう、馬頭が眼前まで迫っており再び拳を突き出していた。

光輝は、聖剣を盾にするが左腕が完全に粉碎されており、右腕一本では衝撃を流しきれず再び吹き飛ばされる。その後も、何とか致命傷だけは避けていく光輝だったが、四本の腕から繰り出される“魔衝波”を捌くことで精一杯となり、また最初の一撃によるダメージが思いのほか深刻で動きが鈍く、反撃の糸口がまるで掴めなかった。

「ぐうう！ 何だ、こいつの強さは！ 俺は“限界突破”を使っているのに！」  
「ルウアアアア!!」

苦しそうに表情を歪めながら、“限界突破”発動中の自分を圧倒する馬頭の魔物に焦燥感が募っていく光輝は、このままではジリ貧だと思いきやダメージ覚悟で反撃に出ようとした。

だが……

ガクン

「ツッ!」

その決意を実行する前に、遂に、光輝の“限界突破”の時間切れがやって来た。一気に力が抜けていく。短時間に二回も使った弊害か、今までより重い倦怠感に襲われ、踏み込もうとした足に力が入らず、ガクンと膝を折ってしまった。その隙を馬頭が逃すは

ずもない。突然、力が抜けてバランスを崩し、死に体となった光輝の腹部に馬頭の拳がズドン！ と衝撃音を響かせながらめり込んだ。

「ガハッ！」

血反吐を撒き散らしながら体をくの字に折り曲げて吹き飛び、光輝は再び壁に叩きつけられた。『限界突破』の副作用により弱体化していたこともあり、光輝の意識はたやすく刈り取られ、肉体的にも瀕死の重傷を負い、倒れ込んだままピクリとも動かなくなつた。むしろ、即死しなかつたことが不思議である。おそらく、死なないように手加減したのでらう。

「呆気ないですね……」

馬頭が、光輝に近づき首根つこを掴んで持ち上げる。完全に意識を失い脱力している光輝を、馬頭は魔族の男に掲げるようにして見せた。魔族の男は、それに失望しながら眩いた。指示をして隠し部屋に突入させた魔物達を引き上げさせる。

しばらくすると、警戒心たつぷりに雲達が現れた。そして、見たこともない巨大な馬頭の魔物が、その手に脱力した光輝を持ち上げている姿を見て、表情を絶望に染めたのだつた……。

## 四十三話 それは紅い雷鳴と共に

「うそ……だろ？ 光輝が……負けた？」

「そ、そんな……」

「や、やだ……な、なんで……」

隠し部屋から出てきた仲間達が、吊るされる光輝を見て呆然としながら、意味のない言葉をこぼす。流石の雫や香織、鈴も言葉が出ないようで立ち尽くしている。そんな、戦意を喪失している彼等に、魔族の男が冷ややかな態度を崩さずに話しかけた。

「はあ、こんな単純な手に引つかかるとは。色々……舐めてるガキだと思ったが、その通りでしたか」

雫が、青ざめた表情で、それでも気丈に声に力を乗せながら魔族の男に問いかける。

「……何をしたの？」

「ん？ これですよ、これ」

そう言つて、魔族の男は、未だにブルータルモドキに掴まれているメルド団長へ視線を向ける。その視線をたどり、瀕死のメルド団長を見た瞬間、雫は理解した。メルド



団長は、光輝の気を逸らすために使われたのだと。知り合いが、瀕死で捕まっていれば、光輝は必ず反応するだろう。それも、かなり冷静さを失って。

おそらく、前回の戦いで光輝の直情的な性格を魔族の男は把握したのだ。そして、キメラの固有能力でも使って、温存していた強力な魔物を潜ませて、光輝が激昂して飛びかかる瞬間を狙ったのだろう。

「……それで？ 私達に何を望んでいるの？ わざわざ生かして、こんな会話にまで応じている以上、何かあるんでしょう？」

「やはり、貴女が一番状況判断出来るようだ。なに、特別な話じゃない。前回の君達を見て、もう一度だけ勧誘しておこうかと思つてね。ほら、前回は、勇者君が勝手に全部決めていただろう？ 中々、アビスゲートのような優秀な者はいらうだし、だから改めてもう一度しようかと。で？ どうでしょうか？」

魔族の男の言葉に何人かが反応する。それを尻目に、雫は、臆すことなく再度疑問をぶつめた。

「……光輝はどうするつもり？」

「クク、聡いですね……悪いですが、勇者君は生かしておけない。こちら側に来るとは思えないし、説得も無理だろう？ 彼は、見た感じ自己完結するタイプだろうからね。なら、こんな危険人物、生かしておく理由はない」

「……それは、私達も一緒でしょう?」

「もちろん。後顧の憂いになるってわかっているのに生かしておくわけないですよ?」

「今だけ迎合して、後で裏切るとは思わないのかしら?」

「それも、もちろん思っています。だから、首輪くらいは付けさせてもらいます。ああ、安心して下さい。反逆できないようにするだけで、自律性まで奪うものじゃない首輪ですのねで」

「自由度の高い、奴隷って感じかしら。自由意思は認められるけど、主人を害することは出来ないっていう」

「そうです。理解が早くて助かります。そして、勇者君と違って会話が成立するのがいい」

雫と魔族の男の会話を黙って聞いていたクラスメイト達が、不安と恐怖に揺れる瞳で互いに顔を見合わせる。魔族の提案に乗らなければ、光輝すら歯が立たなかった魔物達に襲われ十中八九殺されることになるだろうし、だからといって、魔族側につけば首輪をつけられ二度と魔族とは戦えなくなる。

それは、つまり、実質的に“神の使徒”ではなくなるということだ。そうなった時、果たして聖教教会は、何とかして帰ってきたものの役に立たなくなつた自分達を保護してくるのか……

そして、元の世界に帰ることは出来るのか……。  
どちらに転んでも碌な未来が見えない。

しかし……

「わ、私、あの人の誘いに乗るべきだと思う！」

誰もが言葉を発せない中、意外なことに恵里が震えながら必死に言葉を紡いだ。それに、クラスメイト達は驚いたように目を見開き、彼女をマジマジと注目する。そんな恵里に、龍太郎が、顔を怒りに染めて怒鳴り返した。

「恵里、てめえ！ 光輝を見捨てる気か！」

「ひっ!?!」

「龍太郎、落ち着きなさい！ 恵里、どうしてそう思うの?」

龍太郎の剣幕に、怯えたように後退る恵里だったが、雫が龍太郎を諫めたことで何とか踏みとどまった。そして、深呼吸するとグツと手を握りしめて心の内を語る。

「わ、私は、ただ……みんなに死んで欲しくなくて……光輝君のことは、私には……どうしたらいいか……うう、ぐすっ……」

ポロポロと涙を零しながらも一生懸命言葉を紡ぐ恵里。そんな彼女を見て他のメンバーが心を揺らす。すると、一人、恵里に賛同する者が現れた。

「俺も、中村と同意見だ。もう、俺達の負けは決まったんだ。全滅するか、生き残るか。

「迷うこともないだろう?」

「私も恵理ちゃんに賛成かな」

「檜山、香織……それは、光輝はどうでもいいってことかあ? ああ?」

「じゃあ、龍太郎君は、もう戦えない光輝君と心中しろっていうの? 私達全員を?」

「そうじゃねえ! そうじゃねえが!」

「代案がないなら黙ってろよ。今は、どうすれば一人でも多く生き残れるかだろ」

香織と檜山の発言で、更に誘いに乗るべきだという雰囲気になる。二人の言う通り、死にたくなければ提案を呑むしかないのだ。しかし、それでも素直にそれを選べないのは、光輝を見殺しにて、自分達だけ生き残っていいのか? という罪悪感が原因だ。まるで、自分達が光輝を差し出して生き残るようで踏み切れないのである。

そんなクラスメイト達に、絶妙なタイミングで魔族の男から再度、提案がなされた。「ふむ、勇者君のことだけが気がかりというなら……生かしてあげましょうか? もちろん、君達にするものとは比べ物にならないほど強力な首輪を付けさせてもらいます。その代わり、全員魔族側についてもらいますけどね」

雫は、その提案を聞いて内心舌打ちする。今、笑みを浮かべている魔族の男は、最初からそう提案するつもりだったのだろうと察したからだ。光輝を殺すことが決定事

項なら現時点で生きていることが既におかしい。問答無用に殺しておけばよかったのだ。

それをせずに今も生かしているのは、まさにこの瞬間のためだ、おそらく、魔族の男は前回の戦いを見て、光輝達が有用な人材であることを認めたのだろう。だが、会話すら成立しなかったことから光輝がなびくことはないと確信した。しかし、他の者はわからない。なので、光輝以外の者を魔族側に引き込むため策を弄したのだ。

一つが、魔族は魔物がいなくても、光輝や雫達まとめて殺せる実力があるのに現時点では殺さないことで反感を買わないこと、二つ目が、生きるか死ぬかの瀬戸際まで追い詰めて選択肢を狭めること、そして三つ目が、"それさえなければ"という思考になるように誘導し、ここぞという時にその問題点を取り除いてやることだ。

現に、光輝を生かすといわれて、それなら生き残れるしと、魔族側に寝返ることをよしとする雰囲気になり始めている。本当に、光輝が生かされるかについては何の保証もないのに。殺された後に後悔しても、もう魔族側には逆らえないというのに。

雫は、そのことに気がついていたが、今、この時を生き残るには魔族側に付くしかないのだと自分に言い聞かせて黙っていることにした。生き残りさえすれば、光輝を救う手立てもあるかもしれない。

魔族の男としても、ここで雫達を手に入れることは大きなメリットがあった。一つ

は、言うまでもなく、人間族側にもたらすであろう衝撃だ。なにせ人間族の希望たる「神の使徒」が、そのまま魔人族側につくのだ。その衝撃……いや、絶望は余りに深いだろう。これは、魔人族側にとって極めて大きなアドバンテージだ。

二つ目が、戦力の補充である。魔人族の男が「オルクス大迷宮」に來た本当の目的、それは迷宮攻略によってもたらされる大きな力だ。ここまでは、手持ちの魔物達で簡単に一掃できるレベルだったが、この先もそうとは限らない。幾分か、魔物の数も光輝達に殺られて減らしてしまったので戦力の補充という意味でも雫達を手に入れるのは都合がよかつたということだ。

このままいけば、雫達が手に入る。雰囲気ですれを悟つた魔人族の男が微かな笑みを口元に浮かべた。

しかし、それは突然響いた苦しそうな声によつて直ぐに消されることになった。

「み、みんな……ダメだ……従うな……」

「光輝！」

「光輝くん！」

「天之河！」

声の主は、宙吊りにされている光輝だった。仲間達の目が一齐に、光輝の方を向く。

「……騙されてる……アランさん達を……殺したんだぞ……信用……するな……人間と

戦わされる……奴隷にされるぞ……逃げろんだ……俺はいい……から……一人でも多く……逃げ……」

息も絶え絶えに、取引の危険性を訴え、そんな取引をするくらいなら自分を置いてイチかバチか死に物狂いで逃げろと主張する光輝に、クラスメイト達の心が再び揺れる。「……こんな状況で、一体何人が生き残れると思ってるんだ？ いい加減、現実をみろよ！

俺達は、もう負けたんだ！ 騎士達のこととは……殺し合いなんだ！ 仕方ないだろ！ 一人でも多く生き残りたいなら、従うしかないだろうが！」

檜山の怒声が響く。この期に及んでまだ引こうとしない光輝に怒りを含んだ眼差しを向ける。檜山は、とにかく確実に生き残りたいのだ。最悪、ほかの全員が死んでも優花と香織と自分だけは生き残りたい。イチかバチかの逃走劇では、その可能性は低いのだ。

魔人族側についても、本気で自分の有用性を示せば重用してもらえる可能性は十分にあるし、そうなれば、二人を手に入れることだって出来るかもしれない。もちろん、首輪をつけて自由意思を制限した状態で。檜山としては、別に彼女達に自由意思がなくても一向に構わなかった。とにかく、二人を自分の所有物に出来れば満足なのだ。

檜山の怒声により、より近く確実な未来に心惹かれていく仲間達。と、その時、また一つ苦しげな、しかし力強い声が部屋に響き渡る。小さな声なのに、何故かよく響く低

めの声音。戦場にあつて、一体何度その声に励まされて支えられてきたか。どんな状況でも的確に判断し、力強く迷いなく発せられる言葉、大きな背中を見せて手本となる姿のなんと頼りになることか。みな、兄のように、あるいは父のように慕った男。メルドの声が響き渡る。

「ぐっ……お前達……お前達は生き残る事だけ考えろ！……信じた通りに進め！……私達の戦争に……巻き込んで済まなかつた……お前達と過ごす時間が長くなるほど……後悔が深くなつた……だから、生きて故郷に帰れ……人間のことは気にするな……最初から……これは私達の戦争だつたのだ！」

メルドの言葉は、ハイリヒ王国騎士団団長としての言葉ではなかつた。唯の一人の男、メルド・ロギンスの言葉、立場を捨てたメルドの本心。それを晒したのは、これが最後と悟つたからだ。

光輝達が、メルドの名を呟きながらその言葉に目を見開くのと、メルドが全身から光を放ちながらブルータルモドキを振り払い、一気に踏み込んで魔族の男に組み付いたのは同時だつた。

「『剣聖』……一緒に逝つてもらおうぞ！」

「……それは『最後の忠誠』。……自爆ですか？ 滑稽ですね」

「抜かせ！」



メルドを包む光、一見、光輝の“限界突破”のように体から魔力が噴き出し、うにも見えるが、正確には体からではなく、首から下げた宝石のようなものから噴き出しているようだった。それを見た魔族の男が、知識にあつたのか一瞬で正体を看破し、メルドの行動を呆れを通り越して面倒くさそうに溜息を吐く。

その宝石は、名を“最後の忠誠”といい、魔族の男が言った通り自爆用の魔道具だ。国や聖教会の上層の地位にいるものは、当然、それだけ重要な情報も持っている。闇系魔法の中には、ある程度の記憶を読み取るものがあるので、特に、そのような高い地位にあるものが前線に出る場合は、強制的に持たされるのだ。いざという時は、記憶を読み取られないように、敵を巻き込んで自爆しろという意図で。

メルドの、まさに生命を賭した最後の攻撃に、光輝達は悲鳴じみた声音でメルドの名を呼ぶ。しかし、光輝達に反して、自爆に巻き込まれて死ぬかもしれないというのに、魔族の男は一切余裕を失っていないかった。

そして、メルドの持つ“最後の忠誠”が一層輝きを増し、まさに発動するという直前に、一言呟いた。

「喰らい尽くせ、アブソド」

と、魔族の男の声が響いた直後、臨界状態だった“最後の忠誠”から溢れ出していた光が猛烈な勢いでその輝きを失っていく。

「なっ!? 何が!」

よく見れば、溢れ出す光はとある方向に次々と流れ込んでいくようだった。メルドが、必死に魔人族の男に組み付きながら視線だけをその方向にやると、そこには六本足の亀型の魔物がいて、大口を開けながらメルドを包む光を片っ端から吸い込んでいた。

六足亀の魔物、名をアブソド。その固有魔法は「魔力貯蔵」。任意の魔力を取り込み、体内でストックする能力だ。同時に複数属性の魔力を取り込んだり、違う魔法に再利用することは出来ない。精々、圧縮して再び口から吐き出すだけの能力だ。だが、その貯蔵量は、上級魔法ですら余さず呑み込めるほど。魔法を主戦力とする者には天敵である。

メルドを包む「最後の忠誠」の輝きが急速に失われ、遂に、ただの宝石となり果てた。最後のあがきを予想外の方法で阻止され呆然とするメルドに、突如、衝撃が襲う。それほど強くない衝撃だ。何だ? とメルドは衝撃が走った場所、自分の腹部を見下ろす。そこには、美しく刃こぼれのない刃が生えていた。正確には、メルドの腹部から背中にかけて軍剣が貫いているのだ。背から飛び出している刃にはべつとりと血が付いていて先端からはその雫も滴り落ちていく。

「……メルドさん!」

光輝が、血反吐を吐きながらも気にした素振りも見せず大声でメルドの名を呼ぶ。メ

ルドが、その声に反応して、自分の腹部から光輝に目を転じ、眉を八の字にすると「すまない」と口だけを動かして悔しげな笑みを浮かべた。

「やはり、滑稽ですね……つまらない」

直後、剣が横薙ぎに振るわれ、メルドが吹き飛ぶ。人形のように力を失ってドシャ！と地面に叩きつけられた。少しずつ血溜りが広がっていく。誰が見ても、致命傷だった。満身創痍の状態で、あれだけ動けただけでも驚異的であったのだが、今度こそ完全に終わりだと誰にでも理解できた。

咄嗟に、間に合わないとは分かっているけど、優花が遠隔で回復魔法をメルドにかける。僅かに出血量が減ったように見えるが、優花自身、もうほとんど魔力が残っていないので傷口が一向に塞がらない。

「お願い！ 治って！」

魔力が枯渇しかかっているために、ひどい倦怠感に襲われ膝を突きながらも、必死に優花は回復魔法をかける。

「滑稽でしたが、あの傷で立ち上がって組み付かれるとは思いませんでした。流石は、王国の騎士団長。称賛に値します。ですが、今度こそ終幕……これが一つの末路です。君達はどうします？」

魔族族の男が、赤く染まった剣を軽く振って血を落としながら光輝達を睥睨する。再

び、目の前で近しい人が死ぬ光景を見て、一部の者を除いて、皆が身を震わせた。魔人族の男の提案に乗らなければ、次は自分がああなるのだと嫌でも理解させられる。

檜山が、代表して提案を呑もうと魔人族の男に声を発しかけた。が、その時、

「……………るな」

未だ、馬頭に宙吊りにされながら力なく脱力する光輝が、小さな声で何かを呟く。満身創痍で何の驚異にもならないはずなのに、何故か無視できない圧力を感じ、檜山は言葉呑み込んだ。

「はて？　死にぞこないの勇者が何を言っている？」

魔人族の男も、光輝の呟きに気がついたようで、どうせまた喚くだけだろうとつまんなそうに問い返した。光輝は、俯かせていた顔を上げ、真っ直ぐに魔人族の男をその眼光で射抜く。

魔人族の男は、光輝の眼光を見て思わず息を呑み微かに笑みを浮かべた。なぜなら、その瞳が白銀色に変わって輝いていたからだ。得体の知れないプレッシャーに思わず戦士として感情が湧き上がりながら、本能が鳴らす警鐘に従って、馬頭に命令を下す。雫達の取り込みに対する有利不利など、気にしている場合ではないと本能で悟ったのだ。

「はあ…………アハトド殺りなさい」

「ルウオオオ!!」

馬頭、改めアハトドは、魔族の男の命令を忠実に実行し、*“魔衝波”*を発動させた拳二本で宙吊りにしている光輝を両サイドから押しつぶそうとした。

が、その瞬間、

カッ!!

光輝から凄まじい光が溢れ出し、それが奔流となつて天井へと竜巻のごとく巻き上がった。そして、光輝が自分を掴むアハトドの腕に右手の拳を振るうと、ベギャ! という音を響かせて、いとも簡単に粉碎してしまった。

「ルウオオオ!!」

先程とは異なる絶叫を上げ、思わず光輝を取り落とすアハトドに、光輝は負傷を感じさせない動きで回し蹴りを叩き込む。

ズドオン!!

そんな大砲のような衝撃音を響かせて直撃した蹴りは、アハトドの巨体をくの字に折り曲げて、後方の壁へと途轍もない勢いで吹き飛ばした。轟音と共に壁を粉碎しながらめり込んだアハトドは、衝撃で体が上手く動かないのか、必死に壁から抜け出ようとするが僅かに身動きすることしか出来ない。

光輝は、ゆらりと体を揺らして、取り落としていた聖剣を拾い上げると、射殺さんば

かりの眼光で魔人族の男を睨みつけた。同時に、竜巻のごとく巻き上がった光の奔流が光輝の体へと収束し始めたのを見て魔人族の男は確信しながら呟いた。

「クク…やはり、限界突破の派生っ “覇潰” ですか！」

“限界突破” 終の派生技能「+覇潰」。通常の “限界突破” が基本ステータスの三倍の力を制限時間内だけ発揮するものとすれば、“覇潰” はその上位の技能で、基本ステータスの五倍の力を得ることが出来る。ただし、唯でさえ限界突破しているのに、更に無理やり力を引きずり出すのだ。今の光輝では発動は三十秒が限界。効果が切れたあとの副作用も甚大。

だが、そんな事を意識することもなく、光輝は怒りのままに魔人族の男に向かって突進する。今、光輝の頭にあるのはメルドの仇を討つことだけ。復讐の念だけだ。

光輝は、魔人族の男の傍にいる魔物達には目もくれない。聖剣のひと振りでなぎ払い、怒声を上げながら一瞬も立ち止まらず、魔人族の男のもとへ踏み込んだ。

「お前えー！ よくもメルドさんをおー!!」

「面白いー！」

大上段に振りかぶった聖剣を光輝は躊躇いなく振り下ろす。魔人族の男は笑みを浮かべながら、咄嗟に、剣を振る盾にするが……光の奔流を纏った聖剣はたやすく軍剣ごとを切り裂いていき、魔人族の男と共に袈裟斬りにした。

軍剣を盾替わりにして、後ろに下がっていたのが幸いして、両断されることこそなかったが、魔族の男の体は深々と斜めに切り裂かれて、血飛沫を撒き散らしながら後方へと吹き飛んだ。

背後の壁に背中から激突し、砕けた壁を背にズルズルと崩れ落ちた魔族の男の下へ、光輝が聖剣を振り払いながら歩み寄る。

「流星は勇者の『限界突破』……少し、悔ってましたよ」

ピンチになれば隠された力が覚醒して逆転するというテンプレな展開に、魔族の男が諦観を漂わせた瞳で迫り来る光輝を見つめながら、皮肉気に口元を歪めた。

傍にいる白鴉が固有魔法を発動するが、傷は深く直ぐには治らないし、光輝もそんな暇は与えないだろう。完全にチェックメイトだと、魔族の男は激痛を堪えながら、右手を伸ばし、懐からロケットペンダントを取り出した。

それを見た光輝が、まさかメルドと同じく自爆でもする気かと表情を険しくして、一気に踏み込んだ。魔族の男だけが死ぬならともかく、その自爆が仲間をも巻き込まないとは限らない。なので、発動する前に倒す！ と止めの一撃を振りかぶった。

だが……

「すまない先に逝く……我が親友、フリード、カトレア……」

和らいだ表情で、手に持つロケットペンダントを見つめながら、そんな呟きを漏らす

魔人族の男に、光輝は思わず聖剣を止めてしまった。覚悟した衝撃が訪れないことに訝しそうに顔を上げて、自分の頭上数ミリの場所で停止している聖剣に気がつく魔人族の男。

光輝の表情は愕然としており、目をこれでもかと思開いて魔人族の男を見下ろしている。その瞳には、何かに気がつき、それに対する恐怖と躊躇いが生まれていた。その光輝の瞳を見た魔人族の男は、何が光輝の剣を止めたのかを正確に悟り、侮蔑の眼差しを返した。その眼差しに光輝は更に動揺する。

「ククツ……まさかと思いましたがこれは呆れますね。まさか、貴方は今になってようやく気がつきましたか？」  
“人”を殺そうとしていることに「

ッ!？」

そう、光輝にとって、魔人族とはイシユタルに教えられた通り、残忍で卑劣な知恵の回る魔物の上位版、あるいは魔物が進化した存在くらいの認識だったのだ。実際、魔物と共にあり、魔物を使役していることが、その認識に拍車をかけた。自分達と同じように、誰かを愛し、誰かに愛され、何かの為に必死に生きている、そんな戦っている“人”だとは思っていないなかったのである。あるいは、無意識にそう思わないようにしていたのか……

その認識が、魔人族の男の和らいだ表情で親友の名を呼ぶ声により覆された。否応な



く、自分が今、手にかけようとした相手が魔物などでなく、紛れもなく自分達と同じ人だど気がついてしまった。自分のしようとしていることが、人殺しであること認識してしまったのだ。

「まさか、私達を『人』とすら認めていなかったとは随分と傲慢なことですね。まあ大概、聖教教会の教えでしょうが……彼等も酷い教えをしますね。こちらも言えたことでは無いですけどね」

「ち、ちが……俺は、知らなくて……」

「ククツ、貴方は『知ろうとしなかった』の間違いでしょう？」

「お、俺は……」

「ほら？ どうしました？ 所詮は戦いですらく唯の『狩り』でしょう？ 目の前に死に体の一匹がますよ？ さっさと狩ったらどうでしょうか？ 貴方が今までそうしてきたように……」

「……は、話し合おう……は、話せばきつと……」

光輝が、聖剣を下げてそんな事をいう。そんな光輝に、魔人族の男は心底軽蔑したような目を向けて、返事の代わりに大声で命令を下した。

「アハトド！ 剣士の女と投げナイフを持った治癒師の女を狙いなさい！ 全隊、攻撃せよ！」

衝撃から回復していたアハトドが魔人族の男の命令に従って、猛烈な勢いで雫と優花に迫る。光輝達の中で、人を惹きつけるカリスマという点では光輝に及ばないものの、冷静な状況判断力という点では最も優れており、ある意味一番厄介な相手だと感じている雫と回復魔法と付与魔法の二つを行使してるところを目にして、支援系天職の頂点とも言える「神天治癒師」だと推測した魔人族は優花を真っ先に狙わせたのだ。

他の魔物達も、一斉に雫と優花以外のメンバーを襲い始めた。優秀な人材に首輪をつけて寝返らせるメリットより、光輝を殺す事に利用すべきだと判断したのだ。それだけ、魔人族の男にとって光輝の最後の攻撃は脅威だった。

「な、どうして!」

「自覚のない子供ですわ……私達は『戦争』をしてるんですよ! 未熟な精神に巨大な力、貴方は危険過ぎる! 何が何でもここで死んでもらう! ほら、お仲間を助けに行かないと、全滅しますよ!」

自分の提案を無視した魔人族の男に光輝が叫ぶが当の魔人族の男はウンザリしながら取り合わない。そして、魔人族の男の言葉に光輝が振り返ると、ちょうど雫が優花を庇いながら一緒に吹き飛ばされ地面に叩きつけられているところだった。アハトドは、唯でさえ強力な魔物達ですら及ばない一線を画した化け物だ。不意打ちを受けて負傷していたとは言え「限界突破」発動中の光輝が圧倒された相手なのである。雫が一人

で対抗できるはずがなかった。

光輝は青ざめて、「霸潰」の力そのままに一瞬で雫とアハトドの間に入ると、寸でのところで「魔衝波」の一撃を受け止める。そして、お返しとばかりに聖剣を切り返し、腕を一本切り飛ばした。

しかし、そのまま止めを刺そうと懐に踏み込んだ瞬間、いつかの再現か、ガクンと膝から力が抜けそのまま前のめりに倒れ込んでしまった。

「霸潰」のタイムリミットだ。そして、最悪なことに、無理に無理を重ねた代償は弱体化などという生温いものではなく、体が麻痺したように一切動かないというものだった。

「こ、こんなときにも！」

「光輝！」

「天之河君！」

倒れた光輝を庇って、雫がアハトドの切り飛ばされた腕の傷口を狙って斬撃を繰り出し、優花は投げナイフをアハトドの傷口に向かって投げた。流石に傷口を抉らたり刺されたりして平然としてはいられなかったようで、アハトドが絶叫を上げながら後退した。その間に、雫は、光輝を掴んで仲間のもとへ放り投げる。

光輝が動けなくなり、仲間は魔物の群れに包囲されて防戦するので精一杯。ならば

……自分がやるしかない！ と、雫は魔族の男を睨む。その瞳には間違はなく殺意が宿っていた。

「……ふむ。あなた方は、殺し合いの自覚があるようですね。むしろ、あなた方が勇者と呼ばれるにふさわしいと思いますか？」

「……そんな事どうでもいいわ。光輝に自覚がなかったのは私達の落ち度でもある。そのツケは私が払わせてもらおうわ！」

「雫、援護するわ！」

魔族の男は、白鴉の固有魔法で完全に復活したようでフラつく事もなく、しっかりと立ち上がり、雫と優花をそう評した。雫は、光輝の直情的で思い込みの激しい性格は知っていたはずなのに、本物の対人戦がなかったとはいえ認識の統一、すなわち自分達是人殺しをするのだと自覚する事を今の今まで放置してきた事に責任を感じ齒噛みする。

雫とて、人殺しの経験などない。経験したいなどとは間違っても思わない。だが、戦争をするならいつかこういう日が来ると覚悟はしていた。剣術を習う上で、人を傷つけることの「重さ」も叩き込まれている。

しかし、いざ、その時が来てみれば、覚悟など簡単に揺らぎ、自分のしようとしていることのアマリの重さに恐怖して恥も外聞もなくそのまま泣き出してしまいたくなっ

た。それでも、雫は、唇の端を噛み切りながら歯を食いしばって、その恐怖を必死に押しさえつけた。

そして、神速の抜刀術で魔族の男を斬ろうと“無拍子”を発動しようとする構えを取った。しかし、魔族の男の方が早かった。

「遅いですよ」

「くっっ!」

魔族の男は一瞬に雫の間合いに入り、吹き飛ばした。同時に雫は感じる。あの魔族は光輝の攻撃はわざと受けたのだと、自分よりも剣の技量が格上の存在だと。

「雫!」

「貴女も逃がしませんよ、魔物共いきなさい!」

「……キヤツ!」

優花が雫のもとへいこうとした時、魔族の男は分かってたように魔物共に優花を狙うように襲わせ、アハトドが優花をその巨腕で吹き飛ばした。

「園部さんっ!」

「……人の心配をするより自分の心配もした方が良いでしょうっ!」

「……ッ!」

バギヤア!!

「あぐうう!!」

雫は自分と同じように吹き飛ばされ優花のもとへ向かおうとしたら、いつの間にかに魔人族の男が近付き、雫を蹴り飛ばそうとしていた。

雫は咄嗟に剣と鞘を盾にしたが、魔人族の男は“身体強化”を使っており、雫の相棒を半ばから粉碎しそのまま雫の肩を捉えた。地面に対して水平に吹き飛び体を強かに打ち付けて地を滑つたあと、力なく横たわる雫。右肩が大きく下がって腕がありえない角度で曲がっている。完全に粉碎されてしまったようだ。体自体にも衝撃が通ったように、ゲホツゲホツと咳き込むたびに血を吐いている。

「雫……」

口元に血が付いても、近くにいた優花は、衝動のままに駆け出す。魔力がほとんど残っておらず、先程アハトドに吹き飛ばされたせいで体がフラつき足元がおぼつかない。クラスメイトがいる所から制止する声上がるが、優花の耳には届いていなかった。ただ一心不乱に雫を目指して無謀な突貫を試みる。当然、無防備な優花を魔物達が見逃すはずもなく、情け容赦ない攻撃が殺到する。

「つ……邪魔……」

だが、優花は悪態をつきながらそれらの攻撃は全て光り輝くシールドが受け止めたり、投げナイフで応戦したりして走り抜けていく。

「雫！」

優花は、多少の手傷を負いつつも雫の下へたどり着いた。そして、うずくまる雫の体をそつと抱きしめ支える。

「そ、園部さん……何を……早く、戻つて。ここにいちやダメよ」

「ううん。雫には色々お世話になったから力になりたいの」

「……いいえ、世話になったのは私の方だわ園部さん……いいえ優花」

「ふふ、雫やつと私の名前言ってくれたね。こんな状況なのになんか笑つちゃうわ」

雫を支えながら眉を八の字にして微笑む優花は、痛みを和らげる魔法を使う。雫も、無事な左手で自分を支える優花の手を握り締めると困つたような微笑みを返した。

そんな二人の前に影が差す。アハトドだ。血走つた眼で、寄り添う二人を見下ろし、「ルウオオオ!!」と独特の咆哮を上げながら、その極太の腕を振りかぶっていた。

今、まさに放たれようとしている死の鉄槌を目の前にして、優花の脳裏に様々な光景が過ぎっていく。「ああ、これが走馬灯なのね?」と妙に落ち着いた気持ちで、思い出に浸っていた優花だが、最後に浮かんだ光景に心がざわついた。

それは、彼と初めて出会った公園。彼がああの公園で今は失くしてしまつた髪飾りを着けてくれた思い出。

——嬉しかった。大事なお母さんのプレゼントを彼は見つけてくれた

一緒にウイステリアの手伝いをした思い出。

——ハジメと一緒に作業するのが幸せだった。

イジメから守ってくれた思い出。

——ハジメが変わったのは私が原因であって、今でも自分の人生の汚点だと思っ  
ている。

忘れてはならない自分の戒め。

そして、あの月下の夜にやつと、お互いの想いが通じあい初めてのキスをしたあの日。

——嬉しかった。いつまでもハジメと隣にいたいと思う程だった。

いなくなつたとしても、幼なじみ達と共に生存を信じて追いかけた。だが、それも

ここで終わる。そんな思いが、気がつけば優花の頬に涙となつて現れた。

再会したら、彼の名前を呼びたい。キスしたい。抱きつきたいと思つていた。その想

いのままに、せめて、最後に彼の名を……自然と口に出していた。

「……ハジメ」

彼の名を紡いだ瞬間、優花の中に彼の言葉、約束した言葉が頭の中に再生された。

『俺は優花の支えになる！優花の笑顔を守り抜くこれからも、ずっと約束する！』

そんな約束した彼の言葉が再生された瞬間だった。

ドオゴオオン!!



轟音と共にアハトドの頭上にある天井が崩落し、同時に紅い雷を纏った巨大な漆黒の杭が凄絶な威力を以て飛び出したのは。スパークする漆黒の杭。杭は、そのまま眼下のアハトドを、まるで豆腐のように貫きひしゃげさせ、そのまま地面に突き刺さった。

全長百二十センチのほとんどを地中に埋め紅いスパークを放っている巨杭と、それを中心に血肉を撒き散らして原型を留めていないほど破壊され尽くしたアハトドの残骸に、眼前にいた優花と雫はもちろんのこと、光輝達や彼等を襲っていた魔物達、そして魔人族の男までもが硬直する。

戦場には似つかわしくない静寂が辺りを支配し、誰もが訳も分からず呆然と立ち尽くしている、崩落した天井から人影が飛び降りてきた。その人物は、優花達に背を向ける形でスタッと軽やかにアハトドの残骸を踏みつけながら降り立つと、周囲を睥睨する。

そして、肩越しに振り返り背後で寄り添い合う優花と雫を見やった。

振り返るその人物と目が合った瞬間、優花の体に電撃が走る。悲しみと共に冷え切っていた心が、いや、もしかしたら大切な人が消えたあの日から凍てついていた心が、突如、火を入れられたように熱を放ち、ドクンツドクンツと激しく脈打ち始めていく。

「……………言つたら？絶対守るって」

優しい笑みを浮かべながら、そんな事を言う彼に、考えるよりも早く優花の心が歓喜

で満たされていく。

髪の色が違う、纏う雰囲気が違うのだが、わかる。彼だ。見間違える筈がない。何年も一緒にいて、生存を信じて探し続けた彼だ。

そう、

「ハジメツ！」

——私の大切な愛<sup>ハジメ</sup>しい人だ……………。

## 四十四話 紅雷の無双

「へ？ ハジメ？ って南雲くん？ えっ？ なに？ どういうこと？」

優花の歓喜に満ちた叫びに、隣の八重樫が混乱しながら優花とハジメを交互に見やる。どうやら、優花は一発でハジメだと看破したようだが、八重樫にはまだ認識が及ばないらしい。しかし、それでも肩越しに振り返って自分達を苦笑い気味に見ている少年の顔立ちが、記憶にある南雲ハジメと重なりだすと、八重樫は大きく目を見開いて驚愕の声を上げた。

「えっ？ えっ？ ホントに？ ホントに南雲くんなの？ えっ？ なに？ ホントどういうこと？」

「いや、落ち着けよ八重樫。お前の売りは冷静沈着さだろ？」

優花と同じく死を覚悟した直後の一連の出来事に、流石の八重樫も混乱が収まらないように痛みも忘れて言葉をごぼす。そんな彼女の名を呼びながら諫めるハジメは、ふと気配を感じて頭上を見上げた。そして、落下してきた金髪の女の子ユエをお姫様抱っこで受け止めると恭しく脇に降ろし、ついで飛び降りてきたウサミ少女シアも同じよう

に抱きとめて脇に降ろす。

最後に浩介も降り立った。

「おいつハジメっ！ おまつ！ 余波でぶっ飛ばされただろ！ ていうか今の何だよ！

いきなり迷宮の地面ぶち抜くとか……」

「パイルバンカーだが？」

「パイルバンカー?! 何そんなヤバイの作ってんだよっ……ったく」

文句を言いながら周囲を見渡した浩介は、そこに優花と仲間達と魔物の群れがいて、硬直しながら自分達を見ていることに気がつき「ぬおっ！」などと奇怪な悲鳴を上げた。そんな浩介に、再会の喜びの声がかかる。

「遠藤！」

「おっ、お前等！ 凄く頼れる助けを呼んできたからな！」

「助けを呼んできた」その言葉に反応して、光輝達も魔人族の男もようやく我を取り戻した。そして、改めてハジメとユエ達を凝視する。だが、そんな周囲の者達の視線などはお構いなしといった様子で、ハジメはユエとシアに手早く指示を出した。

「ユエ、悪いがあそこで固まっている奴等の守りを頼む。シア、向こうで倒れている騎士甲冑の男、容態を見てやってくれ」

「ん……任せて」

「了解ですう！」

ユエは周囲の魔物をまるで気にした様子もなく悠然と歩みを進め、シアは驚異的な跳躍力で魔物の群れの頭上を一気に飛び越えて倒れ伏すメルドの傍に着地した。

「ハ、ハジメ……」

優花が、再度、ハジメの名を声を震わせながら呼んだ。その声音には、再会できた喜びを多分に含んではいたが、同じくらい悲痛さが含まれていた。それは、この死地にハジメが来てしまったが故だろう。

ハジメは、チラリと優花を見返すと肩を竦めながら笑みを浮かべ「安心しろ、絶対守る」と短く伝えた。そして、即座に「瞬光」を発動し知覚能力を爆発的に引き上げると、「宝物庫」からクロスビットを三機取り出し、それを優花と八重樫の周りに盾のように配置した。

突然、虚空に現れた十字架型の浮遊する物体に、目を白黒させる優花と八重樫。そんな二人に背を向けると、元凶たる魔族の男がハジメに話しかけてきた。

「その君は、何者かな？」

「……何、通りすがりの錬成師だ」

「……（……この肌から感じる重圧、彼は相当な実力者なのは間違いない）ククツ、何が通りすがりの錬成師ですか……」

ハジメから伝わる尋常のない圧に魔族の男は暫し黙りハジメを見て不意に苦笑い浮かべて呟い直後、腰の軍剣を引き抜きハジメに話し掛ける。

「私は『強者』には敬意を払いたい性格でね。君には名乗っておこう。私は魔族軍・軍曹。そして『劍聖』の称号の保持者ウイリス・アルクと申します」

「……『劍聖』？」

「はい、人族の中で一番強い剣士ということですよ」

「魔族で一番強い剣士ねえ。クハツ……良いぜ、殺ろし合おうか？」

「是非、こちらこそ宜しく頼みます……では、まず小手調べから……『殺れ』」

笑みを浮かべながらハジメと話した後、魔族の男、改めウイリスは軍剣をハジメに向け『殺れ』と魔物に命令を下した、が……。

ハジメは左側から襲いかかってきたキメラを意にも介さず左手の義手で驚掴みにすると苦もなく宙に持ち上げた。

キメラが、驚愕しながらも拘束を逃れようと暴れているようで空間が激しく揺らめく。それを見て、ハジメはキメラはどんな固有魔法かを察した。

「おいおい、何だ？ この半端な固有魔法は。大道芸か何かか？」

コイツは気配や姿を消す固有魔法だろうに動いたら空間が揺らめいてしまうなど意

味がないにも程があり、思わずツツコミを入れた。奈落の魔物にも、気配や姿を消せる魔物はいたが、どいつもこいつも厄介極まりない隠蔽能力だったしそれらに比べれば、動くだけで崩れる隠蔽はただの大道芸だと思えてしまった。

数百キロはある巨体を片手で持ち上げ、キメラ自身も空中で身を捻り大暴れしているというのに微動だにしないハジメに、ウイリスは笑みを浮かべ、優花達が啞然とした表情をする。ハジメは、そんな彼等を尻目に、観察する価値もないと言わんばかりに「豪腕」を以てキメラを地面に叩きつけた。

ズバンツ!!

ドグシャ!

そんな生々しい音を立てて、地面にクレーターを作りながらキメラの頭部が粉碎される。そして、ついでにとばかりにドンナーを抜き、一見、何もない空間に向かってレールガンを続けざまに撃ち放った。

ドパンツッ! ドパンツッ!

乾いた破裂音を響かせながら、二条の閃光が空を切り裂き目標を変わらず問答無用に貫く。すると、空間が一瞬揺ぎ、そこから頭部を爆散させたキメラと心臓を撃ち抜かれたブルータルモドキが現れ、僅かな停滞のあとぐらりと揺れて地面に崩れ落ちていく。

ハジメからすれば、例え動いていなくても、風の流れ、空気や地面の震動、視線、殺

意、魔力の流れ、体温などがまるで隠蔽できていない彼等は、ただそこに佇むだけの的でしかなかったのである。瞬殺した魔物には目もくれず、戦場へと、いや、処刑場へと一步を踏み出す。これより始まるのは、殺し合いですらない。敵に回してはいけないうけ物による、一方的な処刑だ。

あまりにあつさり殺られた魔物を見て唾然とするウイリスや、この世界にあるはずのない兵器に度肝を抜かれて立ち尽くしているクラスメイト達。そんな硬直する者達を、おいて、魔物達は、ウイリスの命令を忠実に実行するべく次々にハジメへと襲いかかった。

黒猫が背後より忍び寄り触手を伸ばそうとするが、ハジメは、振り向きもせずダランと下げた手に持つドンナーを手首の返しだけで後ろに向けて発砲。音速を優に超えた弾丸は、あつさり黒猫の頭蓋を食い破った。弾けとんだ仲間の魔物には目もくれず、左右から同時に四つ目狼が飛びかかる。が、いつの間にか抜かれていたシユラークが左の敵を、ドンナーが右の敵をほぼゼロ距離から吹き飛ばす。

その一瞬で、絶命した四つ目狼の真後ろに潜んでいた黒猫が、背後から迫るキメラと連携して触手を射出するが、その場で数メートルも跳躍して空中で反転し上下逆さとなった世界で、標的を見失い宙を泳ぐ黒猫二体とキメラ一体をレールガンの餌食とした。



血肉が花吹雪のように舞い散る中で、着地の瞬間を狙おうとでも言うのか、踏み込んで来たブルータルモドキ二体がメイスを振りかぶる。しかし、そんな在り来りな未来予想が俺に通じるはずもなく、ハジメは「空力」を使って空中で更に跳躍すると、独楽のように回りながら左足に纏わせた雷魔法を虚空を蹴ると共にトリガーを引いた。

「――轟雷閃」

解き放たれた紅い雷の一閃が、待ち構えていたブルータルモドキ二体だけでなく、その後ろから迫っていたキメラと四つ目狼を殲滅した。それぞれ血肉を撒き散らす魔物達が、慣性の法則に従いハジメの眼下で交差し、少し先で力を失って倒れこんだ。ハジメは、四方に死骸が横たわり血肉で彩られた交差点の真ん中に音もなく着地し、虚空に取り出した弾丸をガンスピンスさせながらリロードする。

と、その時、「キュウアアア！」という奇怪な音が突如発生した。ハジメがそちらを向くと、アブソドが口を大きく開いてハジメの方を向いており、その口の中には純白の光が輝きながら猛烈な勢いで圧縮されているところだった。

「あの魔力量……」

ハジメは、アブソドから周囲数メートルという限定範囲ではあるが、人一人消滅させるには十分以上の威力がある魔力量を感じ取った。そんな強大な魔力が限界まで圧縮され、次の瞬間、ハジメを標的に砲撃となって発射された。射線上の地面を抉り飛ばし

ながら迫る死の光に、しかし、ハジメは冷静に枢型の大盾を虚空に取り出すと左腕に装着、同時に「金剛」を発動しながらどっしりとかざした。

「このまま耐える……いや」

魔力の砲撃が直撃した瞬間、凄まじい轟音が響き渡り、空気がビリビリと震え、その威力の絶大さを物語る。しかし、直撃を受けたハジメは、いたずらっぽい笑みを口元に浮かべると盾に角度をつけて砲撃を受け流し逸らされた砲撃を感知した場所に向かわせた、そこには……

「ッ!? そうきますかっ!」

ウイリスだ。ハジメがあっさり魔物を殺し始めた瞬間から、軍剣を握り攻撃の瞬間を伺っており、アブソドの砲撃がチャンスだと思いついて俺に突撃しようしていたが、それと気がついてきたハジメが、アブソドの砲撃を指示したのであろうウイリスに砲撃を流したのだ。

予想外の事態に、慌てて回避行動を取るウイリスに、ハジメは盾の角度を調整して追いかけるように砲撃を逸らしていく。壁を破壊しながら迫る光の奔流に、壁際を必死に走るウイリス。その表情に余裕は一切ないのに笑みを浮かべていた。

「(……アイツ、戦いを楽しんでやがるな)」

しかし、いよいよ逸らされた砲撃が直ぐ背後まで迫り、ウイリスが、自分の指示した

攻撃に薙ぎ払われるのかと思われた直後、アブソドが蓄えた魔力が底を尽き砲撃が終つてしまった。

「チツ……」

ハジメの舌打ちに反応する余裕もなく、冷や汗を流しながら更に笑みを浮かべるウリスだったが、次の瞬間には凍りついた。

ドパアンツ！

「なっ！」

炸裂音が轟くと同時に右頬を衝撃と熱波が通り過ぎ、パツと白い何か飛び散つたからだ。その何かは、先程までウリスの肩に止まっていた白鴉の魔物の残骸だった。思惑通りにいかなかったハジメが、腹いせにドンナーをアブソドに、シユラークを白鴉に向けて発砲したのである。

アブソドは、音すら軽く置き去りにする超速の弾丸を避けることも耐えることも、それどころか認識することもできずに、開けっ放しだった口内から蹂躪され、意識を永遠の闇に落とした。

白鴉の方も、胴体を破裂させて一瞬で絶命し、その白い羽を血肉と共に撒き散らした。レールガンの余波を受けたウリスは、衝撃にバランスを崩し尻餅を付きながらもすぐに体勢を戻し、そつと自分の頬を撫でる。そこには、白鴉の血肉がべつとりと付着して

おり、同時に、熱波によって酷い火傷が出来ていた。

「今でも私を殺せる範囲内と言うことですか」

ウイリスは、長年戦ってきたのだが、戦いで久しぶりの高揚感に、それに手を震えも止まらないことに嬉しくて堪らなくて口角を吊り上げた。

「ククツ……ホントに、面白いっ！」

~~~~~

その光景を見ていた、光輝達は恐怖していた。彼等は、白髪眼帯の少年の正体を直ぐさまハジメとは見抜けず、正体不明の何者かが突然、自分達を散々苦しめた魔物を歯牙にもかけず駆逐しているとしかわからなかったのだ。

「何なんだ……彼は一体、何者なんだ!？」

光輝が動かない体を横たわらせながら、そんな事を呟く。今、周りにいる全員が思っていることだった。その答えをもたらしたのは、先に逃がし、けれど自らの意志で戻ってきた仲間、浩介だった。

「はは、お前等は信じられないだろうけど……あいつはハジメだっ！」

「「「「は？」」」」」

浩介の嬉しそうな言葉に、光輝達が一斉に間の抜けた声を出す。浩介を見て「頭大丈夫か、こいつ？」と思っているのが手に取るようにわかる。浩介は、何、信じてないだとお?!と思いいながら、語気を強めて話しだす。

「だーかーらっ、ハジメだよ。あの日、俺達を守る為にベヒモスと戦って橋から落ちたハジメだ。迷宮の底で生き延びて、自力で這い上がってきたらしいぜ。ここに来るまでも、迷宮の魔物が完全に雑魚扱いだった。まあ、俺と園部達は生きてるのを信じてたけど……ああ、また泣きそう」

「南雲って、え? 南雲が生きていたのか!?!」

光輝が驚愕の声を漏らす。そして、他の皆も一斉に、現在進行形で殲滅戦を行っている化け物じみた強さの少年を見つめ直し……一部の者は「まあ、あの時にベヒモスと渡り合っていたしな……」と信じる者、そして「どこをどう見たら南雲なんだ?」と。そんな心情もやはり、手に取るようにわかる浩介は、「いや、本当だ。めっちゃ変わってるけど、ステータスプレートも見たし」と乾いた笑みを浮かべながら、彼が南雲ハジメであることを再度伝える。

皆が、信じられない思いで、ハジメの無双ぶりを茫然と眺めていると、ひどく狼狽した声で浩介に喰ってかかる二人の人物が現れた。

「う、うそだ。南雲は死んだんだ。そうだろ？ みんな見てたじゃんか。生きてるわけがない！ 適当なこと言ってるんじゃないよ！」

「そうだよっ！ 本当にハジメ君なのかな、かな?!」

「うわっ、なんだよ！ ステータスプレートも見たし、この俺が親友を断じて見間違える筈ない！」

「うそだ！ 何か細工でもしたんだろ！ それか、なりすまして何か企んでるんだ！」

「いや、何言ってるんだよ？ そんなことする意味、何にもないじゃないし……榎山でめえ、それに白崎さんも何か思うことがあんのか？」

「……ッ！」

浩介の胸ぐらを掴んで無茶苦茶なことを言うのは榎山と顔が少し青ざめてる香織だ。

榎山は顔を青ざめさせ尋常ではない様子でハジメの生存を否定する。周りにいる近藤達も榎山と香織の様子に何事かと若干引いてしまっているようだ。そんな錯乱気味の榎山と香織に、比喻ではなくそのままの意味で冷水が浴びせかけられた。二人の頭上に突如発生した大量の水が小規模な滝となって降り注いだのだ。呼吸のタイミングが悪かったようで若干濡れかける二人。水浸しになりながらゲホツゲホツと咳き込む。一体何が!? と混乱する榎山と香織に、冷水以上に冷ややかな声がかけられる。

「……ハジメの邪魔になるから大人しくして。鬱陶しいから」

その物言いに再び激高しそうになった二人だったが、声のする方へ視線を向けた途端、思わず言葉を呑み込んだ。なぜなら、その声の主、ユエの二人を見る眼差しが、まるで虫けらでも見るかのような余りに冷たいものだったからだ。同時に、その理想の少女を模した最高級のビスクドールの如き美貌に状況も忘れて見蕩れてしまったというのも少なからずある。

と、その時、ウイリスが指示を出したのか、魔物が数体、光輝達へ襲いかかった。メルドの時と同じく、人質にでもしようと考えたのだろう。普通に挑んでも、ハジメを攻略できる未来がまるで見えない以上、常套手段だ。

鈴が、咄嗟にシールドを発動させようとする。度重なる魔法の行使に、唯でさえ絶不調の体が悲鳴を上げる。ブラックアウトしそうな意識を唇を噛んで堪えようとするが……そんな鈴をユエの優しい手つきが制止した。頭をそつと撫でたユエに、鈴が「ほえ？」と思わず緩んだ声を漏らして詠唱を止めてしまう。

「……大丈夫」

ただ一言そう呟いたユエに、鈴は、何の根拠もないというのに「ああ、もう大丈夫なんだ」と体から力を抜いた。自分でも、なぜそうも簡単にユエの言葉を受け入れたのかは分からなかったが、まるで頼りになる姉にでも守られているような気がしたのだ。

ユエが、視線を鈴から外し、今まさにその爪牙を、触手を、メイスを振るわんとして

いる魔物達を睥睨する。そして、ただ一言、魔法のトリガーを引いた。

「蒼龍」

その瞬間、ユエ達の頭上に直径一メートル程の青白い球体が発生した。それは、炎系の魔法を扱うものなら知っている最上級魔法の一つ、あらゆる物を焼滅させる蒼炎の魔法「蒼天」だ。それを詠唱もせず、ノータイムで発動など尋常ではない。特に、後衛組は、何が起こったのか分からず呆然と頭上の蒼く燃え盛る太陽を仰ぎ見た。

しかし、彼等が本当に驚くべきはここからだ。なぜなら、燦然と燃え盛る蒼炎が突如うねりながら形を蛇のように変えて、今まさにメイスを振り降ろそうとしていたブルタールモドキ達に襲いかかるとそのまま呑み込み、一瞬で灰も残さず滅殺したからだ。

宙を泳ぐように形を変えていく蒼炎は、やがてその姿を明確にしていく。それは蒼く燃え盛る龍だ。全長三十メートル程の蒼龍はユエを中心に光輝達を守るようにとぐるを巻くと鎌首をもたげた。そして、全てを滅する蒼き灼滅の業火に阻まれて接近すら出来ずに立ち往生していた魔物達に向かって、その顎門をガバツつと開く。

ゴアアアアア!!

爆ぜる咆哮が轟く。と、その直後、たじろぐ魔物達の体が突如重力を感じさせず宙に浮いたかと思うと、次々に蒼龍の顎門へと向けて飛び込んでいった。突然の事態にパ



ニツクになりながらも必死に空中でもがき逃げようとする様子から自殺ではないとわかるが、一直線に飛び込んで灰すら残さず焼滅していく姿は身投げのようで、夕子の悪い冗談にしか見えない。

「なに、この魔法……」

それは誰の吹きか。周囲の魔物を余さず引き寄せ勝手に焼滅させていく知識にない魔法に、もう光輝達は空いた口が塞がらない。それも仕方のないことだ。なにせ、この魔法は、「雷龍」と同じく、炎系最上級魔法「蒼天」と神代魔法の一つ重力魔法の複合魔法でユエのオリジナルなのだから。

ちなみに、なぜ「雷龍」ではなく「蒼龍」なのかというと、単にユエの鍛錬を兼ねているからという理由だったりする。雷龍は、風系の上級である雷系と重力魔法の複合なので、難易度や単純な威力では「蒼龍」の方が上なのだ。最近、ようやく最上級の複合も出来るようになってきたのでお披露目してみたのである。

当然、そんな事情を知らない光輝達は、術者であるユエに説明を求めようと「蒼龍」から視線を戻した。しかし、背筋を伸ばして悠然と佇み蒼き龍の炎に照らされる、いつそ神々しくすら見えるユエの姿に息を呑み、説明を求める言葉が発することが出来なかった。そんなユエに早くも心奪われている者が数人……特に鈴の中の小さなおっさんが歓喜の声を上げているようだ。

一方、ウイリスは、遠くから「蒼龍」の異様を目にして、内心「まさか彼女も化け物とは……」と冷や汗を殴流すも笑みを浮かべていた。しかし、次々と駆逐されていく魔物達に焦燥感をあらわにして、先程致命傷を負わせたメルドの傍らにいる兎人族の少女と離れたところで寄り添っている二人の少女に狙いを変更することにした。

しかし、ウイリスは、これより更なる理不尽に晒されることになる。

シアに襲いかかったブルータルモドキは、振り向きざまのドリユツケンの一撃で頭部をピンボールのように吹き飛ばされ、逆方向から襲いかかった四つ目狼も最初の一撃を放った勢いそのまま体を独楽のように回転させた、遠心力のたつぷり乗った一撃を頭部に受けて頭蓋を粉碎されあっさり絶命した。

また、優花と雫を狙ってキメラや黒猫が襲いかかった。殺意を撒き散らしながら迫り来る魔物に歯噛みしながら半ばから折れた剣を構えようとする雫だったが、それを制止するように、周囲で浮遊していたクロスビットがスッと雫とキメラの間に入る。

自分を守るように動いた謎の十字架に雫が若干動揺していると、突然、十字架が長い方の先端をキメラに向けて轟音を響かせた。雫が「ホントに何なの!？」と内心絶叫している、その頬を掠めるように何かがくるくと飛び、カランカランという金属音を響かせて地面に落ちた。優花の側でも同じく轟音が響き、やはり同じように金属音が響く。

二人が、混乱しつつも、とにかく迫り来る魔物に注意を戻すと、そこには頭部を爆砕させた魔物達の姿が……啞然としつつ、先程の金属音の元に視線を転じてその正体を確かめる。

「これって……薬莢？」

「薬莢って……銃の？」

二人が、馴染みのない知識を引つ張り出し顔を見合わせる。そして、俺が両手に銃をもって大暴れしている姿を見やって確信する。自分達を守るように浮遊する十字架は、オールレンジ兵器なのだ。

「ふふ、やっぱりハジメはいつでも守ってくれるわね」

「彼、凄いわね……」

周囲の魔物が一瞬で駆逐されたことで多少の余裕を取り戻し、優花はクロスビットを見ながら「やっぱ守ってくれてるんだ」と呟きながら嬉しそうに笑みを浮かべ、雫は、驚きを隠せずにいられなかった、実はそれがクロスビットを通して俺に伝わっており、優花の安心を確認して安堵していた。

「ククッ、まさかここまでの実力とは。君はもしかしたら（魂魄はあの時、勇者に致命傷を負わされたおかげで戻りましたが、まだ体は自由に効きませんね……ですが）これで、彼との野望<sup>約束</sup>の為ならば、この身命を落とせる」

ウイリスは少し光輝に感謝しながら、ハジメとの最後の一騎討ちに臨むためにハジメを拍手で笑みを浮かべた表情で称賛しながら話し掛ける。

「素晴らしいですね貴方方の実力は……これは私の敗北でしょう。確実に……」

「……なんだ、投降か？」

「いいえ。負けはしましたが、私は強き貴方に一矢報いてみたい。ですから、私との一騎討ちを臨みたい。これは魔族と人間族関係なく一人の武人としての願いだ。頼みます」

ハジメは投降するののかと思い、ドンナーをホルスターに入れようとしたがウイリスが言葉を続けたので入れるのをやめ、ハジメは戦闘体勢に入り、不敵な笑みを浮かべてウイリスの頼みを了承した。

「良いぜ、やってみろよ？」

「ありがとうございます。では………」

ピキッ！

「……『限界突破』！——地の底に眠りし金眼の蜥蜴 大地が産みし魔眼の主 宿るは暗闇見通し射抜く呪い——『落牢・武玄』！」

ウイリスはハジメの言葉を聞き感謝を述べると、ズボンから宝玉を取り出し破壊して擬似的な『限界突破』を発動した。そして詠唱を始め、そしてウイリスの周りに灰色の

霧が現れ、そして霧は纏まっていき剣が幾つか作り出されていく。

「あの宝玉は誰もが『限界突破』が出来るようにするアーティファクトの可能性が高い。だが、あの魔法の剣はなんだ？」

ハジメはウイリスの行動に推測していたがあのウイリスの周りに現れた剣はどんな能力か分からずにいると後方から優花の声がした。

「ハジメ！　あの剣はもしかしたら切られたりすると石化するかもしれない！ 気をつけてっ！」

「(……石化の類の魔法ね) ……了解」

ハジメは優花の言葉でウイリスの使う魔法の能力を知り、スピード勝負で決める事にした。そして、ハジメ自身も本気を出す。

「――『紅狼』」

ハジメがそう呟いた瞬間、ハジメに紅い雷が纏いだしていき、段々と紅い雷がハジメの手足に纏うと狼のような爪になっていく。その光景を見ていた優花達は息を呑む。

「おや、貴方も準備は終わりましたか？」

「そつちも大丈夫か？」

「はい、大丈夫です」

ハジメとウイリスはお互いの確認を取り合い、笑みを浮かべた瞬間……

「じゃあ（では）…殺ろうか！」

ドガン！

迷宮の大地を揺らすかのような轟音が鳴り響く。その瞬間、紅い閃光と灰色の霧が激突した。

ウイリスは忽ち、ハジメを石化させようと剣を向かわせるがハジメは紅狼で敏捷は上がつており軽々しく避け、魔法を放った。

「雷閃」

「クッ！」

紅い閃光がウイリスに向かっていったが頬を掠めたがギリギリのところで避け、一瞬で体勢を持ち直し、攻撃を再開した。

「行けっ、剣達をつー！」

ビュンビュン

「遅えよ」

「なっ?!」

ウイリスが剣に指示をしてハジメに向け、剣を放ったが、ハジメは軽々しく剣を避けていき、ウイリスは驚愕に包まれるがハジメは追撃にレールガンを次々と発砲するが

……

「ハアアアアッ！」

ウイリスはレールガンで発砲した速度の弾丸を見えているのか勘なのか分からないが、全て軍剣で弾丸の軌道を逸らしたり、切り裂いたりして全てを回避した。それを見たハジメは苦笑いしながら距離を詰める。

「マジかよつ。でも、これならどうだ？——アスタリスク・スパーク」

俺がそう言つて、魔法をトリガーを引いた瞬間……

バリバリッ！ ピシヤッ！

階層内全体をアスタリスク状の紅いスパークが迸った。

「ぐっ……『守れ』！」

ウイリスは唐突なスパークに驚いたがギリギリ対応で落牢の剣を盾にしてその場を凌いでいくが、ハジメはそこが狙い目だと判断してレールガンを発砲した。

ドドパン！

「……………ぐっ！」

ウイリスは一発に見えたのだろう回避行動をしたがハジメが撃つたのは六発の銃撃、流石にも今さつきみたいにて全ての弾丸を避けきれず、三、四発の銃弾が被弾し、地面に転がっていく。

ハジメは「これで決める」と内心思いながらウイリスに一直線に向かったがウイリス

はそれを予想していたようにすぐさまハジメに合わせて目眩しをした。

「『感わせ』！」

「……ッ！（ちっ目眩しかつ！だが感知を使えば）」

ハジメは目眩しを感知で凌ごうとした、その瞬間……

「行けっ！」 収束——落牢大剣——！

ウイリスはハジメに隙を付き、この時を待つてましたと言わんばかりの魔法の大剣を叩き込んでいく。

「……………ならっ、ぶっ壊すだけだ！」

ハジメはこれは避けきれないと確信し、ドンナー取り出し、魔力の五割をドンナーに収束させていくと、ウイリスが放った魔法の大剣に目掛けて撃ち放った。同時に激しいぶつかり合いの音とウイリスの苦悶の声上がる。

ドパアアアン！

「ぐっ………おとおおおお！」

ピキッピキッ……

「私はまだアアアアア！」

バリッ！

「グウアアアアアアアッ！」



その放たれた一発の銃弾はウイリスの魔法の大剣を破壊し、ウイリスごと蹴散らした。その光景を見たハジメはドンナーの銃口に軽く息を吹き掛け、*“紅狼”*を解除してから呟いた。

「……俺の勝ちだな」

ハジメはそう呟いてから、優花の方を見た。彼女は笑みを浮かべながらハジメを見ていて、内心、嬉しい感情が湧き上がったが抑え、ハジメは優花に微笑み返し、吹っ飛ばされたウイリスのもとへ向かった。

ハジメがウイリスのもとへ向かい、ドンナーの銃口をスッとウイリスに照準する。眼前に突きつけられた死に対して、ウイリスは死期を悟ったような澄んだ眼差しを向けながら質問した。

「……………貴方の名前は？」

「……………そうえば、言つてなかったな俺は南雲ハジメだ」

「南雲ハジメですか……………良い名前だ」

名前を言った後、ハジメはウイリスに確認する為にあることを質問していく。

「ウイリス、お前がこんな場所で何をしていたのか……………それと、あの魔物を何処で手に入れたのか……………吐いてもらおうか？」

「ククツ……………知らないような口ぶりですね南雲ハジメ。攻略者の貴方なら察しがつくで

しよう?」

ウイリスのその言葉に、ハジメは予想していたことが当たり、そして納得したように話す。

「やはり、あの魔物達は、神代魔法の産物だな。魔人族側の変化は大迷宮攻略によって魔物の使役に関する神代魔法を手に入れ、そして魔人族側は勇者達の調査・勧誘と並行して大迷宮攻略に動いているわけか……」

「はい、大体は合ってますよ」

「だが、何故俺が攻略者だと分かった?」

「……似ていたからでしょうか……私の大切な親友に」

「親友か……まあ、良いウイリス最後に言い遺す事は無いか?」

ハジメとしては神代魔法と攻略者が別にいるという情報を聞いただけで十分だったので、その瞳に殺意を宿すことで雑念を消し、早く終わらせてやろうと、殺す者としての責任を背負いながらドンナーを構えた。

「そう、ですね。南雲ハジメ、君なら神共を殺してくれますか?」

ハジメはウイリスの質問に息を呑むと共に、ある事を確信した。そして、ギリツと悔しそうに口元を歪めた。しかし、それはウイリスを不安にさせるだろうと感じ、笑みを浮かべて安心させようと返事をした。

「……ああ、殺すさ絶対に。だから、安心してくれ」

「……ククツ、そうですねか……君のその表情と覚悟のある言葉で安心しました。では、さようなら」

「ああ、じゃあな……ウイリス・アルク」

互いにもう話すことはないと言口を閉じウイリスは笑みを浮かべていたもう思い残すことはないのだろう。

ハジメは、ドンナーの銃口をウイリスの頭部に向けた。

しかし、いざ引き金を引くという瞬間、大声で制止がかかる。

「待て！ 待つんだ、南雲！ 彼はもう戦えないんだぞ！ 殺す必要はないだろ！」

「……（何言ってるんだ、アイツ）？」

光輝は、フラフラしながらも少し回復したようで何とか立ち上がると、更に声を張り上げた。

「捕虜に、そうだ、捕虜にすればいい。無抵抗の人を殺すなんて、絶対ダメだ。俺は勇者だ。南雲も仲間なんだから、ここは俺に免じて引いてくれ」

余りにツツコミどころ満載の言い分に、俺は聞く価値すらないと即行で切って捨てた。ウイリスも「大丈夫なんですか？ 今代の勇者は？」と眩やく程だった。

でも、気を取り直したハジメは無言のまま……引き金を引いた。

「……」

—— 楽に逝けよ……ウイリス。

ドパンツ！

「フリード。私は先に逝ってしまいましたが、君なら私達の大願を成し遂げられる。私達の……魔人族のこれからが神の意思じゃなく自由の意思の下にあらんことを……そして、南雲ハジメ）——」

—— ありがとう。

乾いた破裂音が室内に木霊する。解き放たれた殺意は、狙い変わらずウイリスの額を撃ち抜き、ウイリスを一瞬で絶命させた。

静寂が辺りを包む。クラスメイト達は、今更だと頭では分かっているけど同じクラスメイトが目の前で躊躇いなく人を殺した光景に息を呑み戸惑ったようにただ佇む。

だが、当然、正義感の塊たる勇者の方は黙っているはずがなく、静寂の満ちる空間に押し殺したような光輝の音が響いた。

「なぜ、なぜ殺したんだ。殺す必要があったのか……」

ハジメは、絶命させたウイリスの死体の見開いた目をそっと優しく閉ざした。

「ウイリス、安らかに眠れよ」

そう言った後、ハジメはメルド団長の容態を確認するべく介抱してるシアの方へ歩みを進めながら、自分を鋭い眼光で睨みつける光輝を視界の端に捉えた。光輝がハジメを見る視線から、またも面倒事が起こりそうな気がするが、

「まあ、いつか……」

一瞬考えたがハジメはさりと無視することにした。もつとも、そんなハジメの態度を相手が許容するかは別問題であるのだった……。

## 四十五話 再会後のあれこれ——迷宮内編

必死に感情を押し殺した光輝の声が響く中、その言葉を向けられている当人はというと、まるでその言葉が聞こえていないかのようになり、スタスタと倒れ伏すメルドの傍に寄り添うシアのもとへ歩みを進めた。

ユエの方も、光輝達の護衛はもういいだろうと、ハジメ達の方へ向かう。背後で「ああ、お姉さまあ！」と心の中に鈴が叫んでいたがスルーだ。

「シア、メルドの容態はどうだ？」

「危なかったです。あと少し遅ければ助かりませんでした。……指示通り“神水”を使っておきましたけど……良かったのですか？」

「ああ、この人には、それなりに世話になったしな。それに、メルドが抜ける穴は、色んな意味で大きすぎる。特に、勇者パーティーの教育係に変なのがついても困るしな。まあ、あの様子を見る限り、メルドもきちんと教育しきれていないようだが……人格者であることに違いはない。死なせるにはいろんな意味で惜しい人だ」

ハジメは、龍太郎に支えられつつクラスメイト達と共に歩み寄ってくる光輝が、未だ

ハジメを睨みつけているのをチラリと見ながら、シアに、メルドへの神水の使用許可を出した理由を話した。ちなみに、「変なの」とは、例えば、聖教教会のイシユタルのような人物のことである。

「……ハジメ」

「ユエ。ありがとな、頼み聞いてくれて」

「んっ」

シアと話しているうちにユエが到着する。ハジメは、感謝の意を伝えた。それに、視線で「気にしないで」と伝えながらも、嬉しそうに目元を綻ばせるユエ。自然、ハジメの眼差しも和らぎユエの頭を撫でた。

「……お二人共、そろそろ集まって来ましたよ!」

ハジメは、天之河達とは別方向から来る視線に、嫌な感じがするが、スルー決め込む。

「おい、南雲。なぜ、彼を——」

「ハジメっ!」

「優花っ」

ハジメを問い詰めようとした光輝の言葉を遮って、優花が、ハジメのもとへすぐさま駆け寄って抱きついた。ハジメも抱きついた優花を抱きしめ返す。優花は本当にハジメが生きてくれたことに嬉しさを涙ぐんでしまう。

「……遅いよ」

「すまない」

「……私、ハジメにずっと会いたかったんだよ？」

「俺もさ」

「……ハジメ」

「優花」

ハジメは優花と抱きしめ合いながら話してる内に徐々にお互いの顔が近付き、そして

……

「……………ん」

互いの唇同士を合わせてキスをした。すると周りが騒ぎだし、ユエ達からも何か視線を送っているが今は優花との時間を大事だと思ひ優花とのキスを優先する。

「ふはっ……優花」

「ハジメ……」

「お前に渡しておきたい物があるんだ」

「渡したい物？」

キスが終わり、ハジメは胸ポケットからある物を取り出し、優花はそれを見て目を見開いた。



「ハジメ、それってまさか……」

「ああ、これはあの時、奈落に落ちた際に拾っておいた」

それは、ハジメが優花へプレゼントし、以降、大事に身に付けていたカラコンエの花を模した髪飾りだった。ハジメは手に持つ髪飾りを眺めながら話す。

「俺は、この髪飾りがなかったら奈落で生きることが諦めて死を選んだ……だが、これがあったこそ、生きていかないと思った。優花を守らないと、戻らないといけないと思っただ」

「……ハジメ」

「優花……着けてやる」

「……うんっ」

ハジメの言葉に従い、嬉しきで頬を赤らめてる優花に、ハジメは、あの時、あの公園でしたように彼女の髪を優しく触れながら髪飾りを着けた。すると、優花は嬉しそうに髪飾りに触れながらハジメにどうかと聞く。

「……どう？ 似合ってる？」

「ああ、似合ってるさ」

そんな事を言い合いながら桃色空間を作り上げるハジメと優花が見つめあっている、どこかの勇者さんの横槍が入った。

「…………ふう、園部さんは本当に優しいな。幼なじみが生きていた事を泣いて喜ぶなんて……でも、南雲は無抵抗の人を殺したんだ。話し合う必要がある。もうそれくらいにして、南雲から離れた方がいい」

クラスメイトの一部から「お前、空気読めよ!」という非難の眼差し、浩介からは「コイツ、何言ってるんだ?」という呆れと怒気を孕んだ視線が天之河に飛ばす。この期に及んで、光輝は、まだハジメと優花との関係に気がつかないらしい。そして、何処かハジメを責めるように睨みながら、ハジメに抱きついてる優花を引き離そうとしている。単に、気に食わないのか、それとも人殺しの傍にすることに危機感を抱いてなのか……あるいはその両方かもしれない。

「ちよつと、光輝!南雲君は、私達を助けてくれたのよ? そんな言い方はないでしょう?」

「だが、雫。彼は既に戦意を喪失していたんだ。殺す必要はなかった。南雲がしたことには許されることじゃない」

「あのね、光輝、いい加減にしなさいよ?大体……」

「八重樫の言う通りだ天之河。ハジメが来なきや、このままだと全員が死んでいったんだぞ?」

光輝の物言いに、雫と浩介が目を吊り上げて反論する。クラスメイト達は、どうした

ものかとオロオロするばかりであったが、檜山達は、元々ハジメが気に食わなかったこともあり、天之河に加勢し始める。

次第に、ハジメの行動に対する議論が白熱し始めた。優花は、今もハジメの胸元から離れてないので、そのまま浩介を連れて地上に向かおうと思っていると、そんな彼等に、今度は比喩的な意味で冷水を浴びせる声が一つ。

「……くだらない連中。ハジメ、優花と遠藤を連れてもう行こう?」

「あー、うん、そうだな。行くぞ、優花」

「ちよつ、ハジメ!」

「おーい、浩介も早く来いよ。行くぞ」

「おいおい、めつちやつマイペース過ぎるだろ?……って、歩き始めてるし。ユエさんもだけど……」

絶対零度と表現したくなるほどの冷たい声音で、光輝達を「くだらない」と切つて捨てたのはユエだ。その声は、小さな眩き程度のもだったが、光輝達の喧騒も関係なくやけに明瞭に響いた。一瞬で、静寂が辺りを包み、光輝達がユエに視線を向ける。

ハジメは、元々、浩介から話を聞いて、優花を救出を本命にしており、それも終わったことなので、ハジメは優花をお姫様抱っこしながら浩介を呼んでユエに従うように、部屋を出ていこうとした。シアも、周囲を気にしながらもハジメ達に追従する。

そんなハジメ達に、やっぱり光輝が待ったをかけた。

「待つてくれ。こつちの話は終わつていない。南雲の本音を聞かないと仲間として認められない。それに、君は誰なんだ？ 助けてくれた事には感謝するけど、初対面の相手にくだらないなんて……失礼だろ？ 一体、何がくだらないって言うんだい？」

「……………」

光輝が、またズレた発言をする。言っている事自体はいつも通り正しいのだが、状況と照らし合わせると、「自分の胸に手を置いて考えろ」と言いたくなる有様だ。ここまでくれば、何かに呪われていると言われても不思議ではない。

ユエは、既に光輝に見切りをつけたのか、会話する価値すらないと思つているように視線すら合わせない。光輝は、そんなユエの態度に少し苛立ったように眉をしかめろが、直ぐに、いつも女の子にしているように優しげな微笑みを携えて再度、ユエに話しかけようとした。

「はあ……………」

埒があかないと思つたハジメは、面倒そうな表情で溜息を吐きながらも優花を慎重に下ろしてから代わりに少しだけ答えることにした。

「天之河。存在自体が色んな意味で冗談みたいなお前を、いちいち構つてやる義理も義務もないが、それだとお前はしつこく絡んできそうだから、少しだけ指摘させてもらう」

「指摘だって？俺が、間違っているとしても言う気か？俺は、人として当たり前的事を言っているだけだ」

「……はあ（マジでコイツ苦手だ）」

不機嫌そうにハジメに反論する光輝に取り合わず、ハジメも嫌々な態度で話す。

「誤魔化すなよ」

「いきなり何を……」

「お前は、俺がウイリスを殺したから怒っているんじゃない。人の死を見るのが嫌だっただけだ。だが、自分達を殺しかけ、騎士団員を殺害したウイリスを殺した事自体を責めるのは、流石に、お門違いだと分かっている。だから、無抵抗の相手を殺したと論点をズラしたんだろ？ 見たくないものを見させられた、自分が出来なかつた事をあつさりやつてのけられた……その八つ当たりをしているだけだ。さも、正しいことを言っている風を装ってな。タチが悪いのは、お前自身にその自覚がないこと。相変わらずだな。その息をするように自然なご都合解釈」

「ち、違う！勝手なこと言うな！お前が、無抵抗の人を殺したのは事実だろうが！」

「敵を殺す、そのの何が悪いんだ？」

「なっ!?何がって、人殺しだぞ！悪いに決まってるだろ！」

「はあ、お前と議論するつもりはないから、もうこれで終いな？——俺は、敵対した者

には一切容赦するつもりはない。敵対した時点で、明確な理由でもない限り、必ず殺す。そこに善悪だの抵抗の有無だのは関係ない。甘さを見せた瞬間、死ぬということは嫌ってくらい理解したからな。これは、俺が奈落の底で培った価値観であり、他人に強制するつもりはない。が、それを気に食わないと言って俺の前に立ちはだかるなら……」

(そして、アイツを……ウイリスの覚悟を、生き様を否定するようならば……)

ハジメが一瞬で距離を詰めて天之河の額に銃口を押し付ける。同時に、「威圧」が発動し周囲に濃密な殺気が大瀑布のごとく降りかかった。息を呑む光輝達。仲間内でもっとも速い雫の動きだつて目で追える光輝だったが、今のハジメの動きはまるで察知出来ず、戦慄の表情をする。

「例え、元クラスメイトでも躊躇いなく殺す」

「お、おまえ……」

「勘違いするなよ？俺は、戻つて来たわけじゃないし、まして、お前等の仲間でもない反吐が出る。俺は単に優花と浩介を助けにきただけだ。てめえ等はそのオマケに過ぎない」

それだけ言うと、何も答えず生唾を飲む光輝をひと睨みして、ハジメはドンナーをホルスターにしまった。「威圧」も解けて、盛大に息を吐き複雑そうな眼差しで見るクラスメイト達だったが、光輝は、やはり納得出来ないのか、なお何かを言い募ろうとした。

しかし、それは、うんざりした雰囲気のエエのキツイ一言によって阻まれる。

「……戦ったのはハジメ。恐怖に負けて逃げ出した負け犬にとやかくいう資格はない」  
「なっ、俺は逃げてなんて……」

実は、ハジメ達が、ピンポイントであの場所に落ちてこられたのは偶然ではない。ちようど上階を移動している時に莫大な魔力の奔流を感じて光輝達だと察したハジメが、感知系能力をフル活用して階下の気配を探り、錬成とパイルバンカーで撃ち抜いたというのが真相である。

そして、その時感じた魔力の奔流とは、光輝の「霸潰」だった。感じた力の大きさを知らずれば、あの状態の光輝ならウイリスを討てたはずだと、ハジメ達は思っていた。しかし、その後の現場の状況と合わせて光輝が人殺しを躊躇い、そのためにあの窮地を招いたのだと看破していたのだ。それが、エエの言う「恐怖に負けて逃げ出した」という言葉である。

光輝が、エエに反論しようとする、そこへ、深みのある声が割って入った。

「よせ、光輝」

「メルドさん！」

メルドは、少し前に意識を取り戻して、光輝達の会話を聞いていたようだ。まだ少しボーとするのか、意識をはつきりさせようと頭を振りながら起き上がる。そして、自分

の腹など怪我していたはずの箇所を見て、不思議そうな顔で首を傾げた。

雫が、メルドに簡潔に何があったのかを説明する。メルドは、自分が何やら貴重な薬で奇跡的に助けられたことを知り、そして、その相手がハジメであると聞いて、ハジメの生存を心底喜んだ。また、救われたことに礼を述べながら、あの時、助けられなかった事を土下座する勢いで謝罪するメルドに、ハジメは居心地悪そうにして謝罪を受け取った。

ハジメとしては、全く気にしていなかったというか、メルドが言った「絶対助けてやる」という言葉自体忘却の彼方だったのだが……深々と頭を下げて謝罪するメルドを前に空気を讀んだ。ハジメとのやり取りが終わると、メルドは、光輝に向き直り、ハジメにしたのと同じように謝罪した。

「メ、メルドさん？ どうして、メルドさんが謝るんだ？」

「当然だろ。俺はお前等の教育係なんだ……なのに、戦う者として大事な事を教えなかった。人を殺す覚悟のことだ。時期がくれば、偶然を装って、賊をけしかけるなりして人殺しを経験させようと思っていた……魔族との戦争に参加するなら絶対に必要なことだから……だが、お前達と多くの時間を過ごし、多くの話しをしていく内に、本当にお前達にそんな経験をさせていいのか……迷うようになった。騎士団団長としての立場を考えれば、早めに教えるべきだったのだろうか……もう少し、あと少し、こ



れをクリアしたら、そんな風に先延ばしにしている間に、今回の出来事だ……私が半端だった。教育者として誤ったのだ。そのせいで、お前達を死なせるところだった……アイツとの約束も破りそうになった……ホントに申し訳ない」

そう言つて、再び深く頭を下げるメルドに、クラスメイト達はあたふたと慰めに入る。どうやら、メルドはメルドで光輝達についてかなり悩んでいたようだ。団長としての使命と私人としての思いの狭間で揺れていたのだろう。

メルドも、王国の人間である以上、聖教教会の信者だ。それ故に、「神の使徒」として呼ばれた光輝達が魔族と戦うことは、当然だとか名誉なことだとか思つてもおかしくはない。

メルドの心の内を聞き、押し黙る光輝。そう遠くないうちに人を殺さなければならなかったと言われ、魔族の男を殺しかけた時の恐怖を思い出したようだ。それと同時に、たとえば賊であつても人である者を訓練のために殺させようとしていたメルドの言葉にシヨックも受けていた。賊くらいなら、圧倒出来るだけの力はあるので、わざわざ殺すなんて……と。

一方、優花の方はハジメと光輝が話してる時にずっとユエとシアに見られており、その視線が気になっていた。

「……………」

「……………」

さつきから、ジツと優花を見つめるユエとシアに優花も同じようにジツと二人を見つめている。

優花としても恋人と一緒<sup>ハジメ</sup>にいた少女達には興味を感じていた。話したい気持ちもある。すると、見つめ合っていた二人の中の一人の金髪の少女——ユエが近付いてきた。

近付いてなおしばらく、また見つめ合う二人。

「……………貴女が優花？」

「えっ……………うん、そうだけど」

「……………そう、私の名前はユエ、貴女の事をハジメから聞いている。それで貴女に少し聞きたい」

「えっ何？」

見つめあっていたら唐突にユエが質問してきた。

「貴女は今のハジメをどう思っているの？」

「……………（あつ、そういう事）」

優花はユエの言葉の意味を理解して自分を試しているのだと察する簡単に言えば「お前は今のハジメでも愛しているのか？」と。同時に、自分に対する挑発と。

「……………（面白いじゃない）」

優花は自分を試しているかのように思えるユエの質問にフツと微笑みながら答えた。

「そうね。私としては、ハジメは余り変わってないように見えるわ」

「……どうしてそう思うの？」

「だって、知っているもの。ハジメは、いつだって誰かを守っていた性格だし、特に私達とかね。それに、ここに来るまでもハジメは人を殺したんだと思う。でも、それは確かな理由……誰かを守る為にした事なんですよ？」

「……」

質問を、迷いなく答える優花にユエは驚きの余り目を見開いて固まっていた。そして、思う。「ただけ器がデカイ人だ」と。逆に、それを見た優花は失言したかと思いきや葉を変えようとしたがユエが口を開く方が早かった。

「……やっぱり、ハジメが言ってた通りの人」

「え？」

ユエはそう言って優花に近付くとニツコリとそれは誰でも「可愛い」と言ってしまうような笑顔で手を差し出しながら話しかけた。

「……優花、これからも仲良くしよ」

「えっ、う、うん」

優花は一瞬戸惑うも、ユエと握手を交わした。

「……………ん、それで優花…貴女に伝え——」

「ユエさくん、優花さくん。ハジメさんがそろそろ地上に向かいますって」

「……………ん、分かった。行こ優花？」

「えっ？ う、うん。それでユエ、私に言いたい事があつたんじゃ…?」

「……………それは、地上に出たらする」

そんな会話を優花とユエとしていて、ユエが何かを言おうとした際に、後方からシアの声で遮られた。どうやらハジメ達の話がついたようでそろそろ地上に上がるといふことで二人を呼んだらしい。

そして、シアの話を聞くと全員、消耗しているので地上に出るまでの間、ハジメ達に便乗しようと浩介が提案し、メルドさんがハジメに頼み込んで了承を取つたらしい。

そして地上へ向かう道中、邪魔くさそうに魔物の尽くを軽く瞬殺していくハジメに、改めて、ベヒモスの頃より強さを実感されていた。檜山は、青ざめた表情のままハジメを睨み、近藤達は妬みの視線を送り、永山達は感嘆の視線を向けながらも仲間ではないとはつきり言われた事に複雑な表情をしていた。

近藤達は、ハジメの実力を間近で見ると萎縮はしているものの、以前の恨みが抜けきつていないのだろう。永山達は、ベヒモスの件と死んだ決めつけていたことでの後ろめたさがあるようで、仲間と思われなくても仕方ないかもしれない。背後からぞろぞろ

と様々な視線を向けてくる光輝達を、サクツと無視しながら優花を守るように迷宮を進んでいくハジメ。

途中、鈴が騒ぎ出しユエにあれこれ話しかけたり、ハジメに何があつたのか質問攻めにしたり、二人が余り相手にしてくれないと悟るとシアの巨乳とウサミミを狙いだしたりして、雫に物理的に止められたり、近藤達がユエやシアに下心満載で話しかけるも、完全に無視されたり、それでもしつこく付き纏つた挙句、無断でシアのウサミミに触ろうとしてハジメからゴム弾をしこたま撃ち込まれたり、ヤクザキックを受けて嘔吐したり、マジな殺気を受けて少し漏らしながら今度こそ恐怖を叩き込まれたり、香織は異様にハジメに話しかけていた。頬を紅く染めながら「会いたかつた」や「生きてるって信じてた」など言いながら詰め寄ってくるも、当のハジメは優花を自分の胸元に抱き寄せながら無視を決め込んでいた。

そんなことが、道中色々あつたがハジメ達はオルクス大迷宮の入場ゲートまでやってきた。

そして入場ゲートを出た瞬間……

「あつー！。パパあー!!」

「むっ！。ミユウか」

ハジメをパパと呼ぶ少女が現れたたのだった。

「は？ パパ？」

感動の再会を果たした優花とハジメの問題は、まだ残ってるようであった……。

## 四十六話 再会後のあれこれ——地上編

「パパあー!! おかえりなのー!!」

【オルクス大迷宮】の入場ゲートがある広場に、そんな幼女の元気な声が響き渡る。

各種の屋台が所狭しと並び立ち、迷宮に潜る冒険者や傭兵相手に商魂を唸らせて呼び込みをする商人達の喧騒。そんな彼等にも負けない声を張り上げるミュウに、周囲にいる戦闘のプロ達も微笑ましいものを見るように目を和らげていた。ステテテテー!と可愛らしい足音を立てながら、ハジメへと一直線に駆け寄ってきたミュウは、そのままの勢いでハジメへと飛びつく。ハジメが受け損なうなど夢にも思っていないようだ。

普通はロケットのように突っ込んで来た幼女の頭突きを腹部に受けて身悶えするところだが、生憎、ハジメの肉体はそこまで弱くない。むしろ、ミュウが怪我をしないように衝撃を完全に受け流しつつ、しっかりと受け止めた。

「ミュウ、迎えに来たのか? テイオはどうした?」

「うん。テイオお姉ちゃんが、そろそろパパが帰ってくるかもって。だから迎えに来たの。テイオお姉ちゃんは……」

「妾は、ハジメじゃよ」

人混みをかき分けて、妙齡の黒髪金眼の美女が現れる。言うまでもなくテイオだ。ハジメは、いつはぐれてもおかしくない人混みの中で、何故、ミュウから離れたか聞く。

「テイオ。何かあったのか？」

「少しな、ご主人様が言つてた通り不埒な輩がいての。凄惨な光景はミュウには見せられんじやろ」

「なるほど。それなら、しゃあないか……ありがとよテイオ」

「フフ、褒めて貰えるだけで嬉しいのじゃ」

「そうかい」

そんな、ハジメとテイオの会話を呆然と聞いていた光輝達。ハジメが、この四ヶ月の間に色々な経験を経て自分達では及びもつかないほど強くなつたことは理解したが、「まさか父親になつてゐるなんて！」と誰もが唖然とする。特に男子などは、「一体、どんな経験積んできたんだ！」と、視線が自然とユエやシア、そして突然現れた黒髪巨乳美女に向き、明らかに邪推をしていた。ハジメが、迷宮で無双した時より驚きの度合いは強いかもしれない。

誰もが驚愕してる中、一人が歩みでてハジメに話しかけた。

「……ハジメ」



ハジメはテイオと話していると後方から声をかけられた。

その人物とは……

「説明してくれるよね?」

そこには、ニッコリと笑顔な優花だった。普段は可愛いだけだが、今回は違う。その笑顔からの圧が凄まじいのだ。

「……(やべえ……完全に頭から抜けてた。いや、それより事情を説明しないと)」

優花の笑みにハジメは滝のように大量の冷や汗を流すもすぐさま事情説明をしようと口を開く。

「いや、その優花。ミュウはな、少しいろいろと事情があつてな」

あたふたと説明するハジメ。しかし、優花は予想してたのか、スッと目を細め、次には溜息を吐いた。

「まあ……その女の子のパパ呼びは気になるけど何らかの理由があるのは分かるわ。まあ、察するにハジメの事だから助けたりしたんでしょ?……はあ」

「そ、そうか……」

優花の的確な推測にハジメは一安心して、もしかしたら、このまま大丈夫ではないかと期待するが、その考えは甘かったとハジメは後悔した。

「私が言いたいの……ユエさんやシアさんと後、着物を着てる人の事……三人共、ハジ

メのこと好きよね親愛とかじゃなくて恋愛として、ね？」

「……………いや、それは——そのう……………」

「ねえ……………ハジメ、説明を……………」

語彙力が無くなりつつあるハジメに優花が詰め寄ろうとするが、それを邪魔するかのようミユウとテイオが来た方向から声が掛かる。

「おいおい、どこ行こうってんだ？ 俺らの仲間、ボロ雑巾みたいにしておいて、詫びの一つもないってのか？ ア、ア、ア、!?」

邪魔をしたのは、薄汚い格好の武装した男達が、いやらしく頬を歪めながらテイオを見て、そんな事を言いながらハジメ達に詰め寄ってくる。

「……………あれか」

詰め寄られていたハジメは、ミユウを誘拐しようとした連中のお仲間だろうと察し、テイオに振り返りにあったこともあつて報復に來たと推測した。もつとも、その下卑た視線からは、ただの報復ではなく別のものを求めているのが丸分かりだったので、ハジメはスッと目を細める。

「……………優花、話は少し待ってくれないか？ 終わったら、ちゃんと説明する」

「ちよつ、ハジメ?!」

しかし、これは一旦話を止めれるチャンスだと思えたハジメは、優花との話を切り上

げ傭兵共の所に近付いていく。

傭兵共は自分達に近付くハジメを少しだけ視線を向けた。その後の視線がユエやシアにも向く。舐めるような視線に晒され、心底気持ち悪そうにハジメの影に体を隠れていたユエとシアに、やはり怯えていると勘違いしているらしく、ユエ達に囲まれていたハジメを恫喝し始めた。

「ガキイ！ わかつてんだろ？ 死にたくなかつたら、女置いてさっさと消えろ！ なあゝに、きつちりわび入れてもらつたら返してやるよ！」

「まあ、そんな時には、既に壊れてるだらうけどなゝ」

何が面白いのか、ギャハハと笑い出す男達。そのうちの一人がミュウまで性欲の対象と見て怯えさせ、また他の一人が兎人族を人間の性欲処理道具扱いし、優花でさえもその対象に入れた時点で、彼等の運命は決まった。

いつもの通り、空間すら軋んでいると錯覚しそうな大瀑布の如きプレッシャーが傭兵達に襲いかかる。彼等の聞くに耐えない発言に憤り、進み出た光輝がプレッシャーに巻き込まれフラついているのが視界の片隅に映っていたが、俺は気にすることもなく傭兵達に向かって歩み寄った。

今更になつて、自分達が絶対に手を出してはいけない相手に喧嘩を売ってしまったことに気がつき慌てて謝罪しようとするが、プレッシャーのせいで四つん這い状態にさ

れ、口を開くこともできないので、それも叶わない。

ハジメは四つん這いになる傭兵共に視線を合わせるかのように腰を下ろして問い掛けた。

「なあ……一生歩けなくなるか、ここで死を迎えるのか……どちらにする？」

その告げられた事とハジメの重圧で傭兵共は大人なのにも関わらず涙目になっており、首を横にブンブン振ったりしたりして謝罪を示すように土下座をする。

「どちらも嫌なら、さっさと俺達の前から失せろ……もし、またこういう事をするならば容赦はしない。分かったか？」

ハジメの脅しに傭兵共は恐怖で喋れないのか壊れた人形のようにコクコクツ！と頷く。

「じゃあ、さっさと行け」

「「「「ひ、ひいっ！」「」」」」

ハジメは少しプレッシャーを緩めながらシツシツと手を動かしながら、再度脅し紛いな発言をすると傭兵共は一目散に逃げていった。その余りに容赦ないプレッシャーに、ユエ達と優花以外の者達は後退っていた。

~~~~~

くく

優花は傭兵たちから自分達を守るハジメの姿をジツと見つめていた。すると、こちらへ三人ほど近づいて来るのが分かり、視線を転じた。

「……優花」

「ゆ、優花さん」

「其方が優花かの？」

「えっと貴女は……」

「申し遅れたのう。妾はティオ・クラルスじゃ」

近づて来たのは、迷宮で出会ったユエとシア、そして、着物女性——ティオだった。

「……優花、迷宮の時は言えなかつたけど私達……」

優花は今からユエが言うことをある程度察することができたので、ユエが言い切る前に優花が口を開いた。

「ユエ達が言いたい事がわかるよ。……三人共ハジメの事が好きなんだよね？ 仲間

とかの親愛じゃなくて恋愛として」

「「ー」」

「やっぱりかあ〜」

優花はユエ達の反応を見て、当たっているのが分かった。そして、困ったような笑み  
を浮かべて「しようがないかあー」と頷いていると、ユエが話し掛けてきた。

「……なんでわかったの?」

「……だって、大体ハジメのしそうな事は予想がつくからね。三人共、ハジメに助けら  
れたりして惚れた口でしょ?」

「……やっぱり、優花は嫌? 人の恋人を好きになる私達のこと……」

ユエは少し俯きながら優花に聞いてきた。優花はそんなユエ達の表情を見てから真  
剣な表情で話す。

「うん、少し嫌な気持ちもある。だって、私とハジメが離れている間、私の知らないハジ  
メを貴女達が知っているとと思うと思わず嫉妬する」

その言葉にユエ達は息を呑む。それもそうだろう自分達も大好きな恋人の知らない  
部分が自分じゃなくて他の女が知っていると誰でも嫉妬したくなる。しかし、優花  
は違った。

「……でも、それは、逆にすると貴女達は以前のハジメをよく知らないってことになる  
……だから、聞かせて? 三人はハジメの事を本当に愛してる?」

「……うん、好き。だってハジメがいてくれたから今の私がある!」

「わ、私もハジメさんのおかげで家族も救われたんです。大好きなんですう!」

「うむ、妾もご主人様の事は愛してゐる。あれ程の殿方は何処を探そうとも見つからん。それに、妾もご主人様のおかげで救われた身じゃ」

ユエ達の返事を聞いて、その言葉は嘘じやないと分かり優花は少し笑みをこぼして頷いた。

「(本当に愛してゐるんだハジメのこと) ……ふふ」

優花は、ユエ達三人のハジメへの気持ちを理解した。ハジメに対するその愛の重さにも……

「……優花？」

「うん、三人の気持ちは分かった……なら、私は構わないわ」

「「えっ」」

優花の答えに三人は目を見開いて驚いた表情をすると、シアとユエが戸惑った表情で聞いてくる。

「えっ？良いんですかっ？」

「……優花、ホントに良いの？」

「うん、だって三人共ハジメが好きなんしょ？ハジメもハジメで貴女達の事は大切にしているように見えるしね」

それに、優花自身でも感じたことだった。ユエ達となら仲良くなれそうだと。仲間と

して、家族としても……。

優花はそう言った直後、自分の願望をユエ達に話す。

「でも、私もハジメと一緒にいたい……だから私もついて行く、ハジメの旅に」

「……ん、分かった。これからヨロシクね、優花」

「私も歓迎ですう」

「うむ、妾もじゃ」

「うん、こつちも宜しく頼むわ。ユエ、シア、ティオ」

「二ん（ですう）（うむ）！」「」

危険な旅だからハジメは難色を示そうなのだろうが三人の歓迎に嬉しそうに優花は微笑むが、思い出したようにハツとした表情になってから、優花はユエ達にある話を切り出す。

「あつ！でも、三人に話があるんだけど良い？」

「「？」」

~~~~~

ハジメは傭兵共を追っ払い、振り向くと優花がニコツとしながら立っていた。



「ハジメ」

「……優花、あのユエ達のことだけだな」

ハジメはそう言つて、話を切り出そうとするが、次にくる優花の言葉にあっけらかんとなる。

「うん、ユエ達のこととは許す」

「へっ?」

唐突な優花の言葉にハジメは間抜けな声が出てしまふも、すぐに気を取り直して聞き間違いかもしれないと再度聞く。

「ホントに良いのか?」

「うん、でも私も連れて行つてね。旅に」

優花のその言葉にハジメを一瞬、戸惑いながらも、少し難色な表情になふ。そして、少し庄のある声音で問い掛けた。

「……危険な旅だぞ」

「その事は十分に理解してる。それに、私もそれなりに強くなつたわ。それに……」

優花はそう言いながらハジメに抱きつくつと、顔を見上げる。そして、ハジメの顔を見つめながら満面の笑みを浮かべて答えた。

「どんな事があつても、絶対にハジメが守つてくれるんでしょ?」

「クハッ……それを言われたら何も言い返せねえよ」

ハジメは、抱き着く優花の言葉と笑顔と、その可愛さに根負けてしまった。でも、元々ハジメとしては優花を連れていくつもりだったので、あの質問は優花の覚悟を試す為にしたものである。

「これから、よろしくな優花」

「うんっ」

そんな話をしながらハジメと優花は互いを抱き締め合いながら見つめ合っていた。

そして、優花も旅に同行することになったが、それについて光輝が抗議したが雫や浩介や永山達などが光輝の意見に反対し、優花自身も「私はハジメと一緒にいたい」と発言して流石に光輝も本人も意思なら、と苦い顔しながらも優花の攻略組から抜けるのを認めたが、その光景もある少女が憎たらしい視線で見ていることを、その場にいた人達は知らない。

そんな事があってハジメ達は現在、入場ゲートを離れて、町の出入り口付近の広場に来ていた。ハジメはロア支部長の下へ依頼達成報告をし、二、三話してから、いろいろ騒がしてしまったので早々に町を出ることにしたのだ。元々、ロアにイルワからの手紙を届ける為だけに寄った様なものなので、旅用品で補充すべきものもなく、直ぐに出ても問題はなかった。

そこである問題が起こった。

ハジメ達のところにある少女が歩み寄って来た。傍にいた優花はその少女を見た瞬間「えー……」と声を零しながらハジメの後ろにそつと隠れた。

その少女とは……

「ハジメくん、私もハジメくんについて行かせてくれないかな？ ……ううん、絶対、付いて行くから、よろしくね？」

「……………は？」

白崎香織だった。

第一声から、前振りなく挨拶でも願望でもなく、ただ決定事項を伝えるという展開にハジメの目が点になる。思わず、間拔けな声で問い返してしまった。

直ぐに理解が及ばずポカんとするハジメに代わって、隣にいたユエが進み出て、睨みながら冷えると感じさせるような声音で香織に話し掛ける。

「…………お前にそんな資格はない」

「資格って何かな？ ハジメくんをどれだけ想っているかってこと？ だったら、誰にも負けないよ？」

ユエの言葉に、そう平然と返した香織。ユエが、どんどん冷めた目になってきている。ユエはハジメと奈落で過ごしていた時、休憩の合間にハジメの話を聞いてる中、ハジ

メが香織の話題を出した時があった。その時のハジメの表情は嫌悪感が丸出しであり、ユエも聞いていて鳥肌が立った。

その時の事と、この現状を見る限り、ユエ自身も香織とは合わないし嫌だと感じたの  
だろう。

香織は、ユエを見下しながら目を合わせたあと、スツと視線を逸らして、揺るぎない  
眼差しをハジメに向ける。

そして、両手を胸の前で組み頬を真っ赤に染めて、深呼吸を一回すると、震えそうに  
なる声を必死に抑えながらはつきりと……告げた。

「貴方が好きです」

「……白崎」

白崎の表情には、羞恥とハジメの答えを予想しているからこそ瞳が濁って見えた。そ  
れに……白崎は優花を視線を捉えるとそれは殺意が宿つてるように見えた。

しかし、その目でハジメは確信した。

「(……やっぱり、もう一人はコイツだったか)」

香織の瞳を見て確信したハジメ。予想はしてたが、やはり怒りが湧くが、内心で抑え  
て平静を保ちながら冷めきつた眼差しで答えた。

「俺には、優花とユエ達がいる。白崎の想いにはえられない。だから、連れては行かな

い」

はつきり返答したハジメに、香織は唇を噛んで俯くものの、しかし、一拍後には、目に力を宿して顔を上げた。

「……でも、その中に私がいても良いよね？」

「……いや、白崎。俺は、この際はつきりとお前に言いたかったことがある」

「えっ！ な、何かな、かな!？」

「俺はこの世界に来る前からお前の事は嫌いだ」

「えっ……」

ハジメの言葉を聞いた瞬間、香織は絶望したような表情になった。ハジメはそんな香織に近付くと、香織にししか聞こえないような声音で囁いた。

「それに、ベヒモスの時に優花に撃った魔弾はてめえだろ白崎？」

「……ッ！」

ハジメがそう言った瞬間、香織は顔を青ざめたのでハジメはやっぱりと思った。あの時、優花に撃った魔弾の犯人は白崎香織だと。

「……（まあ、となると俺に撃った奴は檜山の奴が妥当だろうな）」

そしてハジメは、同時に自分に対して魔法を放った犯人に見当つけた後、香織に再度、厳しい眼差しで囁きながら告げた。

「俺はそんな奴に旅の同行にして欲しくないし、優花達に手を出すというなら殺す。ベヒモスの件のことはアイツ等には言わないでやるからとつと俺の前から消えろ」

「……………」

そう言った直後、香織は俯きながら歯を食いしばると走り去っていった。すると、更にダルい奴が絡んできた。それも怒りに満ちた表情で。

「おいっ！南雲っ、香織に何をした！」

それは勇者（笑）の光輝だった。ハジメは頭を痛めたように頭を抱える。

「なんだよ、俺はただ白崎の告白を断っただけだぞ？」

「嘘だっ！お前が何かして泣かせたんだろっ！」

そして光輝の視線が、スツとハジメへと向く。ハジメは、我関せずと言った感じで遠くを見ていた。その周りには美女、美少女が侍っている。その光景を見て、光輝の目が次第に吊り上がり始めた。何故ハジメにあんなに美少女達が集まってると思うと、今まで感じたことのない黒い感情が湧き上がってきたのだ。そして、衝動のままに、ご都合解釈もフル稼働する。

「やっぱり園部さん。行つてはダメだ。これは、園部さんのために言っているんだ。見てくれ、あの南雲を。女の子を何人も侍らして、あんな小さな子まで……しかも兎人族の女の子は奴隷の首輪まで付けさせられている。黒髪の女性もさつき南雲の事を『ご主

人様』って呼んでいた。きつと、そう呼ぶように強制されたんだ。南雲は、女性をコレクションか何かと勘違いしている。最低だ。人だつて簡単に殺せるし、強力な武器を持つているのに、仲間である俺達に協力しようとしてもしない。園部さん、あいつに付いて行つても不幸になるだけだ。だから、ここに残つた方がいい。いや、残るんだ。例えば恨まれても、君のために俺は君を止めるぞ。絶対に行かせはしない！」

光輝の余りに突飛な物言いに、雫達が啞然とする。しかし、ヒートアップしている光輝はもう止まらない。説得のために向けられていた優花への視線は、何を思ったのかハジメの傍らのユエ達に転じられる。

「君達もだ。これ以上、その男の元にいるべきじゃない。俺と一緒にいこう！ 君達ほどの実力なら歓迎するよ。共に、人々を救うんだ。シア、だつたかな？ 安心してくれ。俺と共に来てくれるなら直ぐに奴隷から解放する。テイオも、もうご主人様なんて呼ばなくていいんだ」

そんな事を言つて爽やかな笑顔で浮かべながら、ユエ達に手を差し伸べる光輝。雫は顔を手で覆いながら天を仰ぎ、優花はなんか腕をさすりながら「見て、ハジメ。鳥肌が凄いよ」とハジメに見せていた。するとハジメの方も「あつ、俺もだ」と呟いており、光輝のことなんて眼中にないらしい。

そして、光輝に笑顔と共に誘いを受けたユエ達はどうと……

「……………」

もう、言葉もなかった。光輝から視線を逸らし、両手で腕を摩っている。よく見ればユエ達もハジメと優花と同じように素肌に鳥肌が立っていた。ある意味、結構なダメーシだったらしい。テイオが、「アレが勇者なのかの……？」と、眉を八の字にしてハジメの後ろに隠れる。

そんなユエ達の様子に、手を差し出したまま笑顔が引き攣る光輝。視線を合わせてもらえないどころか、気持ち悪そうにハジメの影にそそくさと退避する姿に、若干のシヨックを受ける。

そして、そのシヨックは怒りへと転化され行動で示された。無謀にもハジメを睨みながら聖剣を引き抜いたのだ。光輝は、もう止まらないと言わんばかりに聖剣を地面に突き立てると俺に向けてピシツと指を差し宣言した。

「南雲ハジメ！ 俺と決闘しろ！ 武器を捨てて素手で勝負だ！ 俺が勝ったら、二度と園部さんには近寄らないでもらう！ そして、その彼女達も全員解放してもらおう！」

「……イタタタ、やべえよ。勇者が予想以上にイタイ。何かもう見てられないんだけど」「何をごちゃごちゃ言っている！ 怖気づいたか！」

聖剣を地面に突き立てて素手の勝負にしたのは、きつと剣を抜いた後で、同じように



ハジメが武器を使ったら敵わないと考え直したからに違いない。意識的にか無意識的にかはわからないが……ユエ達も優花達も、流石に光輝の言動にドン引きしていた。

しかし、光輝は完全に自分の正義を信じ込んでおり、ハジメに不幸にされている女の子達を救ってみせると息巻き、周囲の空気に気がついていない。元々の思い込みの強さと猪突猛進さ、それに初めて感じた「嫉妬」が合わさり、完全に暴走しているようだ。

ハジメの返事も聞かず、猛然と駆け出す光輝。ハジメは、溜息を吐きながら二歩、三歩と後退りした。それを見て、武器を使わない戦いに怖気づいたと考えた光輝は、より一層、力強く踏み込んだ。あと数歩で拳が届くという段階でも、ハジメは両手をだらんと下げたまま特に反応もしない。光輝は、ハジメが反応しきれていないのだと思い、勝利を確信した。

その瞬間……

ズボッ！

「ッ!？」

光輝の姿が消えた。

正確には、拳に力を乗せるため最後の一步に最大限の力を込めて踏み込んだ瞬間、落ちたのだ。落とし穴に。ハジメは、最初に二、三步下がった時に、靴から錬成を行い、地面の下に深さ四メートル程の穴を作って置いたのだ。

その落とし穴は、光輝を呑み込むと瞬時に元の石畳に戻った。そして、地面の下からくぐもった爆発音が響く。落とし穴を錬成した時、ついだとばかりに閃光手榴弾と衝撃手榴弾、麻痺手榴弾と催涙手榴弾を“宝物庫”から地面の下に転送しておいたのである。

おそらく地面の下では、脱出しようとした天之河に爆発の衝撃が襲いかかり、閃光が視覚を潰し、催涙成分が目と鼻を虐め抜き、麻痺成分が悶えることも許さずに体を硬直させ始めていることだろう。

「……………重傷様」

ハジメはそう言ったてから再び錬成を行い、いつか二尾狼にした様に光輝の周囲を石で固めていった。一応、空気がなければ死ぬかもしれないので顔の周りは塞がずに、小さな空気穴だけ開けといてあげた。

この間、傍目には、ハジメは何もせず突っ立っているだけに見えるので、一人で憤り、一人で突っ込み、一人で落ちて姿を消した光輝は物凄く……………滑稽だった。

「あゝ、八重樫。一応、生きてるから後で掘り出してやつてくれ」

「……………言いたいことは山ほどあるのだけど……………了解したわ」

光輝に関する面倒事は八重樫雲に！という日本にいた時からの暗黙の了解のまま、雲に面倒事を押し付けるハジメに、手で目元を覆いながら溜息をつく雲。ようやく、邪魔

者はいなくなつた。……と思つたら、今度は檜山達が騒ぎ出す。曰く、優花の抜ける穴が大きすぎる。今回の事もあるし、優花が抜けたら今度こそ死人が出るかもしれない。だから、どうか残つてくれと説得を繰り返す。特に、檜山の異議訴えが激しい。まるで、長年望んでいたものももう直ぐ手に入るといふ段階で手の中からこぼれ落ちることに焦つているような、そんな様子だ。

檜山達四人は、優花の決意が固く説得が困難だと知ると、今度は、ハジメを残留させようと説得をし始めた。過去のバカにした事は謝るので、これからは仲良くしよう等とふざけたことを平気でぬかす。

そんなこと微塵も思っていないだろうに、馴れ馴れしく笑みを浮かべながらハジメの機嫌を覗う彼等に、ハジメだけでなく、雫達も不愉快そうな表情をしている。そんな中、ハジメは、再会してから初めて檜山の眼を至近距離から見た。その眼は、優花が出て行くことも影響してか、狂的な光を放ち始めているようにハジメには思えた。

雫達が、檜山達を諫めようと再び争論になりそうな段階で、ハジメは、せつかくなので、あの日の真実の確認と現状の解決のために檜山に話しかけてみることにした。口元に皮肉気な笑みを浮かべながら。

「なあ、檜山。火属性魔法の腕は上がったか？」

「……………え？」

突然、投げかけられた質問に檜山がポカンとする。しかし、質問の意図に気がついたのか徐々に顔を青ざめさせていった。

「な、なに言ってるんだ。俺は前衛だし……一番適性あるのは風属性だ」

「へえ、てつきり火属性だと思ってたよ」

「か、勘違いだろ？ いきなり、何言い出して……」

「じゃあ、好きななんだな。特に火球とか。思わず使っちゃうくらいになあ？」

「……」

今や、檜山の顔色は青を通り越して白へと変化していた。その反応を見て、ハジメは確信する。そして、出ていこうとする優花への焦った態度から見て、その動機も察する。よく、今まで襲われなかったものだ、と、ハジメは優花と香織の走り去った方角をチラリと見やった。

そして、色々あり、豹変ともいえる檜山の態度に訝しそうな表情をする近藤達だったが、檜山が、感情を押し殺した尋常でない様子だったので、渋々、ハジメへの説得を諦めた。

ようやく、本当のようにやく、ハジメ達は出発を妨げる邪魔者がいなくなった。優花が、宿に預けてある自身の荷物を取りに行っている僅かな間、坂上達が天之河を掘り起こしているのを尻目に、雫と浩介が俺に話しかけた。

「何というか……いろいろなごめんなさい。それと、改めて礼をいうわ。ありがとう。助けてくれたことも……後、香織の事は本当に、ごめんなさい」

「今日も災難だったなく、ハジメ」

「クハツ……お前等も相変わらずだな、それに八重樫。白崎の件はお前が謝ることじゃねえよ。あれはアイツ自身の問題だ」

「そ、そう。でも……」

「はあ……」

ハジメは雫の性格の悪いところのためにため息を吐きながらも彼女に近付くと雫の頭をポンと手を置く。

「……っ／＼！」

「はあ、八重樫お前な、そんなに気苦労してるとマジで体が壊れるぞ。俺はお前の事は信頼してるからな」

「なっ、な……」

ハジメの唐突な行動に雫は顔を真っ赤に染まっていた。そして、雫の反応にハジメが首を傾げていると、後ろから「ハジメ」と聞こえ、そして浩介が「後ろを向け」とジェスチャーしながら言ってるので後ろを向くと、ニコニコしている優花達があった。

「ゆ、優花……」

「ハジメ、雫に何してるの？」

「いや、八重樫は凄く苦労してんだなって思ってた……」

「ふくん。まあ良いわ。私の準備終わったよ」

「おっ、そうか……なら」

名状しがたい表情の優花達を気にしつつ、いよいよ出発するハジメ達。浩介と雫や谷口など女性陣と永山のパーティー、それに報告を済ませて駆けつけたメルド団長が見送りのためホルアドの入口に集まった。そして、ハジメが取り出した魔力駆動四輪に、もはや驚きを通り越して呆れた視線を向ける。浩介は「ハジメ、これはやり過ぎだろ」と呟いていた。

雫と優花が、お互いに手を取り合いしばしのお別れを惜しんでいると、ハジメが、  
“宝物庫” から黒塗りの鞘に入った剣とあるボックスを取り出し雫と浩介に手渡した。

「これは？」

「八重樫、得物失ってたろ？ やるよ。まあ、日本にいたとき色々世話になった礼だ」

雫が、ハジメに手渡された剣を受け取り鞘からゆっくり抜刀すると、まるで光を吸収するような漆黒の刀身が現れた。刃紋はなく、僅かな反りが入っており、先端から少しの間は両刃になっている。いわゆる小烏丸造りと呼ばれる刀に酷似していた。ハジメは日本刀自体には詳しくないが、  
“脳内設計” と練成の鍛錬の過程で造り出したもので

良作の一つだ。

「世界一硬い鉾石を圧縮して作ったから頑丈さは折り紙付きだし、切れ味は素人が適当に振っても鋼鉄を切り裂けるレベルだ。扱いは……八重樫にいうことじゃないだろうが、気を付けてくれ」

「……こんなすごいもの……流石、錬成師というわけね。ありがとう。遠慮なく受け取っておくわ」

一振り二振りし、全体のバランスと風すら切り裂きそうな手応えに感嘆して、笑みを浮かべながら素直に礼をいう雫。正直、雫の扱う八重樫流の剣術は当然日本刀を前提とするものなので、前の剣ではどうしても技を放つときに違和感があった。なので、刀が手に入ったのは素直に嬉しく、自然笑みも可憐なものになる。

「ハジメ、この箱は？」

「それはな、開けて見ろ」

「おっおう………つてこれはっ！」

浩介が箱を開けて驚愕しながら叫んだ。しかし、その表情は嬉しそうだ。そんな浩介が喜ぶほどの物とは……

「お前が転移した時に欲しがっていた小太刀やクナイのセットだ。全部、世界一硬い鉾石を圧縮して作ったから頑丈さは一流だ」

「嘘つ、こんなにか。マジで助かる、ハジメ。……後、少し良いか？」  
「ん？」

浩介に手招きされながら呼ばれたハジメ。近付くと浩介はハジメにしか聞こえないような声で話しかける。

「ハジメ、俺は此処に残るわ」

「……どうしてだ？俺としては浩介も着いて来て貰った方が心強いが……」

「それは有難いんだけどよ……少しな、お前が言ってたように教会のことが気になつてな。少し調べようと思う」

「……危険じゃねえか？」

浩介の考えは一理あると思う。が、教会の力はまだ完全に把握は出来ていない。それに教会は神共（クソ野郎共）との繋がりがあろうし、もしかしたらヤバい奴がいる可能性がある。とハジメは思い、浩介を心配する。

「それでもだ。俺もお前の力になりたいしな、それにヤバくなつたしても俺は影が薄いからな、逃げてやるぜ」

そう言いながら浩介はニヤツと笑みを向けながら親指をグツと立てた。

「はあ、妙子の奴にちゃんと告白を出来てないアビスゲートが何言つてんだ」

「ちよつ、何言つてんのお前！」



ハジメはそう言って浩介を煽ると、浩介は声を張り上げ誤魔化していた。耳は真つ赤だったが、そんな他愛ない話をしてからハジメは真剣な表情をしてから言った。

「……気をつけろよ」

「お前もな、ハジメ」

「クハッ……誰に言ってるんだ」

二人そう言い合って笑い合いながらグータッチをした。そして、別れを済ませ、浩介と隼達が見送る中、ハジメ達はホルアドの町を後にした。

天気は快晴。目指すは「グリュューエン大砂漠」にある七大迷宮の一つ「グリュューエン大火山」。新たな仲間を加え賑やかさを増しながら、ハジメの旅は続くのだった……。

## 幕間 狂氣と嫉妬と大願

「くそつ！ くそつ！ 何なんだよ！ふぎけやがつて！」

時間は深夜。宿場町ホルアドの町外れにある公園、その一面に植えられている無数の木々の一本に拳を叩きつけながら、押し殺した声で悪態をつく男が一人。檜山大介である。檜山の瞳は、憎しみと動揺と焦燥で激しく揺れていた。それは、もう狂氣的と言っても過言ではない醜く濁った瞳だった。

「案の定、随分と荒れているね……まあ、無理もないけど。愛しい愛しい姫様の一人が目の前で他の男に搔つ攫われたのだものね？」

そんな檜山の背後からたつぷりの嘲りと僅かな同情を含んだ声が掛けられた。バツと音がなりそうな勢いで檜山が振り返る。そして、そこにいた人物が密会の相手であるとわかると一瞬ホツとした表情を浮かべ、次いで、拳を握り締めながら、まるで獣が唸り声を上げるような声音で言葉を返した。

「黙れ！ くそつ！ こんな……こんなはずじゃなかつたんだ！ 何で、あの野郎生きてんだよ！ 何のためにあんなことしたと思つて……」

「一人で錯乱してないで、会話して欲しいのだけど？ 密会中のところを見られたら言い訳が大変だからね」

「……ちつ、わあつたよ、で次は何をすればいい？」

月明かりが木々の合間に陰影を作り、その影に、まるでシルエツトのように潜む人物に向かつて、檜山は、傍らの木に拳を打ち付けながら苦々しく次は何をすれば良いか聞く。そんな協力的な檜山に対して、暗闇で口元を三日月のように裂いて笑う人物は、再び悪魔の如き誘惑をする。

「随分と協力的だね、それじゃ、君の愛しい優花ちゃんを奪われたのなら奪い返せばいい。違う？ 幸い、こっちにはいい餌もあるしね」

「……餌？」

言っている意味が分からず、首を訝しそうな表情をする檜山に、その人物は口元を二やつかせながらコクリと頷く。

「そう、餌だよ。例えば、自分の気持ちを優先して仲間から離れたとしても……果たして彼と彼女は大切な幼馴染達を……放って置けるかな？ その窮地を知っても」

「お前……」

「彼女を呼び出すのは簡単なことだよ。何も悲観することはない。特に、今回の事は、まあ流石に肝が冷えたけれど……結果だけをみれば都合も良かった。うん、僥倖といっ

てもいいね。王都に帰ったら、仕上げに入ろうか？　そうすれば……きつと君の望みは叶うよ？」

「……」

檜山は、無駄と知りながら影に潜む共犯者を睨みつける。その視線を受けながらも、目の前の人物は変わらず口元を裂いて笑う。

檜山は、その計画の全てを知っているわけではなかったが、今の言葉で、計画の中には確実にクラスメイト達を害するものが含まれていると察することができた。自分の目的のために、苦楽を共にした仲間をいともあっさり裏切ろうというのだ。そして、その事に何の痛痒も感じていないらしいと知り、改めて背筋に悪寒が走る。

（相変わらず気持ち悪い奴だ……だが、俺ももう後戻りは出来ない……俺の優花を取り戻すためには、やるしかないんだ……そうだ。迷う必要はない。これは優花のためなんだ。俺は間違っていない、そして、香織と優花を二人を俺の手に……）

檜山は自分の思考が、既にめちやくちやであることに気がついていない。共犯者として、指示されるままにやってきた事から目を逸らし、常に自分の行いを正当化し、その根拠を全て優花に求める。

影の人物には黙り込む檜山のそんな心情が手に取るようにわかった。なので、口元に笑みを浮かべながら、わかりきった返答を待つ。

「……わかった。だが……そんな作戦は成功出来るのか？ 天之河とか八重樫にバレたらどうすんだ？」

「ああ、それは大丈夫だよ。君以外にも僕には強力な協力者がいるからね。だから心配しなくていいよ。だから僕は僕の、君は君の欲しいものを手に入れる。ギブアンドテイク、いい言葉だよ？ これからが正念場なんだ。王都でも、宜しく頼むよ？」

「………わかった」

表情を歪める檜山を特に気にする風でもなく、その人物はくるりと踵を返すと、木々の合間へと溶け込むように消えていった。後には、汚泥のように濁った暗い瞳を爛々と輝かせる堕ちた少年が一人残された。

~~~~~  
一方、町外れの広場で怪しげな会談が行われていた頃、別の場所で一人の少女が月明かりに照らされて佇んでいた。

密談場所とは異なり、その場所は、小さなアーチを描く橋の上だった。町の裏路地や商店の合間を縫うように設けられた水路に掛けられたものだ。水路は料理店や宿泊施設が多いことから必要に迫られて多く作られており、そのゆると流れる水面には、下弦の月が写り込んでいて、反射した月明かりが橋の上から水面を覗き込む少女の顔を照

らしていた。

「なんで、なんで、なんで、なんで……」

その少女とは白崎香織だった。

「なんで私は断られた……なんでなの、こんなにもハジメ君を愛してるのに……なんで、なんで、なんでっ！」

怒りの余り香織は橋の手摺りをダアンツと鳴り響くほど強く殴りつけた。

「園部優花……そうだ、あの女のせいだっ。あの女がいたからハジメ君が私の告白を断ったんだ……うんきつとそうだっ！そうに違いない！」

香織はそんなことを言いながら、どんどん優花への恨み、妬みなどといった負の感情を募らせていく。

「それに……なんなのあの女共……」

香織は優花から次にユエ達にも恨み、怒りを募らさせていき始める。

「なんか知らないけど……ただ、ハジメ君に助けられたからって、仲間？、大切な人？ふざけんなっ！特にあの金髪チビ……私よりスタイルダメダメな癖にあんな態度……なんなの？なんでハジメ君はあんな女共の同行を認めてるの？」

香織は特に迷宮の時は溺れそうぐらいの水を上からかけられた挙句「邪魔」と言われ、しかも、告白の際には自分の邪魔をしていたユエを因縁付けていた。そして、香織

は何故、あんな女共はハジメと同行できているのかを考え始めて数秒後、これだつと言わんばかりの表情になる。

「そつかく、ハジメ君はあの女共にストーカーされてるんだ。そうに違いないよ！私の告白もあの女共と園部優花のせいだったんだ！」

香織は導き出した考えはどつかの勇者（笑）のようなご都合主義全開の結論に至ったのだった。

「ああ……ハジメ君が可哀想、昔から幼なじみに拘束されながらの生活を強いられて、異世界でも、あの女共に縛られてるんだ……なんて可哀想なのハジメ君っ！……だから私が救つてあげないとね♡」

彼女はどんどん壊れていく……。醜い嫉妬のあまり視界が狭くなっているにも関わらず、本人は気付いていない。

「あく、そうえば、——ちゃんの聞いた策……聞いた限り凄く良いけど問題点が多いから心配だなあ。光輝君は別に大丈夫だけど……雫ちゃんが危ないよね〜案外、雫ちゃん感が良いからね〜でもこれが成功すれば……フフ」

「あつ、香織」

香織がそんな事を呟いていると、後ろから香織を探していた雫が橋の上で佇んでいた香織を見つけ声をかけた。

「あつ…雫ちゃんどうかしたの？」

「ちよつとね…香織が心配になって探してたの」

「あつそうなんだ。全然、大丈夫だよ私は…光輝君は大丈夫だったの？」

そう言う雫はちよつと疲れたのか少し眉を八の字にしたような表情になりながら話した。

「あー、光輝はちよつと前に話はしたけどあれはまだ…理解出来てなさそうだったわ」「アハハ…まあ、光輝君だしね」

「そうなのよ。南雲君は人殺しやら女の子を物扱いしながら侍らしてるとか、優花のこどもでも彼の幼なじみだから仕方なく着いて行っただけで、もしかしたら脅されてるかもしれないって言うのよ…ホントに今回のご都合解釈は呆れてしまったわ、まあ、今回は南雲君への嫉妬で拍車がかかったかもしれないけどね」

「アハハ…（はあ…光輝君はわかってないなあ、脅されてるのはハジメ君の方なのに…まあ光輝君だし、仕方がないか…なんでホントに——ちゃんは光輝君のこと好きなんだろ？）」

雫の話を聞いた香織は光輝がハジメのことを悪く言っているのを腹が立ったが内心堪えながら苦笑いをしていた。

「話は変わるけど…香織、ホントに貴女はもうアナタは大丈夫なの？」



「えっ？」

「だって、ホルアドのアレで香織……走っていちやっただから心配だったの」

「あくうん、大丈夫だよ安心して雫ちゃん。私は元氣だよ安心して」

「そう、安心したわ……でも辛くなったら私に相談してねだって親友だもん」

「うん、ありがとね雫ちゃん………ハジメ君は必ず手に入れるからね」

「うん？　香織なんか言っただ？」

「ううん、何も言っていないよ、うん雫ちゃんその刀つて新しいの？」

香織は誤魔化した後、雫の持っていた黒刀が気になり聞いてみた。

「あつ、これねこの刀は南雲君に貰ったのよ、八重樫はこの世界の剣よりこっちの方が使いやすいだろうって、ホントに優しいよね彼……優花が自慢しながら話すのは納得出来るわ」

雫は目を細めながら頬を少し赤く染めながら、優しく刀を擦りながら説明すると、

香織は呆然と雫を見る。

「……………雫ちゃん？」

「あつ、ごめんなさいね香織、少し熱中しちゃったわ」

「ううん、大丈夫だよ」

「じゃあそろそろ寝ましよう香織」

「……うん（雫ちゃんも……あの女共みたいになじめ君を奪わないよね……）」

「雫ちゃん」

「？ どうしたの香織……！」

香織に声をかけられ、振り返った瞬間、香織に抱きつかれ雫は勢いの余り、転びそうになったがギリギリ転ぶのを耐えれてホッとした。

「ふう、危なかった……って香織どうしたの？」

「ねえ……雫ちゃんは、ずっと私の親友だよね？」

「……もう、何言ってるのよ香織。私達はずっと親友よ」

「うん」

「じゃっ行きましょ」

「……（ああ……楽しみだな……作戦……これが成功すればハジメ君、待っててね♡）」

月明かりが照らす中、二人は宿に戻るため歩いて言った一人は幼なじみやクラスメイ  
ト、そして旅立った友の心配を抱きながら、そして、もう一人は自分の目的の為ならば  
なんでもしてやると思いを抱きながら……。

~~~~~

【魔国ガーランド】

ガーランドの中心に堂々とそびえ立つ魔王城のある一室で一人の魔人族の男が執務室の窓からガーランドの景色を眺めながら佇んでいると、扉の向こうからコンコン、と扉をノックする音が聞こえた。

「……入れ」

「失礼します」

「要件は？」

「將軍殿、以前、会議の議題にあった人間族のことで相談したい事があるのですが……」  
部屋に入室した魔人族は蕩けから「將軍」と呼ばれた魔人族に問い掛けようとするが片手で制止の合図を取られ、話を遮られる。

そして、將軍と呼ばれた魔人族が口を開いた。

「……すまないが、その件の報告のことについては後にしてくれないか？」

「……しかし」

「もう少ししたら私の直属の部下が来るんだ。だから、後にしてくれないか？ 終わったなら話を聞こう」

「……で、ですがっ」

「何度も言わせないでくれ。……後にしろ」

ゾワツ

「ひっ……わ、わかりました」

魔族の将軍であると思われる男に断れて尚、部下と思われる魔族が再度申し出ようとしたが将軍に睨まれ、その重圧に耐えれず萎縮してしまった。

「申し訳ありません。では、の、後程お伺います」

「ああ、そうしてくれ」

「し、失礼しましたっ」

そうして、部下の魔族の男は逃げるようにダアンツと音を鳴らしながら扉を閉めて出ていった。そして、部下が去ってから数分した後に、再び将軍の部屋の扉からコンコン、とノック音がし出した。

「……誰だ？」

「フリード様、カトレアです」

魔族の将軍、改めフリードは扉の前にいるのは直属の部下のカトレアだとすると入るように促す。

「戻ったか、入れ」

「はい、失礼します」

フリードの部屋に入ったカトレアと呼ばれている人物は赤髪の魔族の女性だった。

フリードはカトレアの姿を見て、安堵するように厳格な表情をやめ、優しい表情で話し掛ける。

「カトレア、お前が無事で安心した」

「ご心配なく私は大丈夫ですよ」

「それで……どうだったウルの件は？」

「はい……ウルの件ですが、エスプリの報告だと、やはりアルヴ派の者の犯行だと確認が取れました。『神の使徒』を強制的に操らせて魔物を六万の大軍を作り、ウルに進軍させたいです」

「六万……そうか。それで、ウルは滅びてしまったか？」

「いえ、失敗に終わったようです」

フリードは六万の魔物の大軍にはウルも流石に滅びてしまったのだろうと思っていたが、カトレアの言葉に驚きを示した。

「ほう……それは何故だ？ウルに対大軍殲滅用のアーティファクトでもあったのか？」

「いえ、『イレギュラー』が現れたようです」

「………そうか、イレギュラーか、やっと現れたくれたのか」

フリードは、現れたイレギュラーに笑みをこぼした。

「ククツ……そしたら、アルヴの奴の苦難に歪む顔が思い浮かぶ。……それでそのイレ

ギユラーは何人だ？一人か？」

「いえ、イレギユラーはたったの四人だったそうです」

「四人か……なら絶対に、その者達は私と違う神代魔法の使い手で間違いないだろうな……。で、その者達はウルから何処に向かった」

「……ウイリスがアルヴに命じられ向かっていったオルクス大迷宮に向かったらしいです」

その名前を聞いて、フリードは反応を示し、少し瞠目すると、暗い声音でカトレアに話しかけた。

「……じゃあ、そう考えるとウイリスは死んだか？」

「……はい、報告だとウイリスは敗れたと報告されています。後に、オルクスに死体回収に向かった者からの情報によると嬉しそうに笑みを浮かべていた、そう……です」

カトレアは涙を流すのを我慢しながら、フリードに報告をし続けていく。

「……そうか（ウイリス……やっとなんか解放されたんだな）」

「フリード様……」

カトレアは、ウイリスの死亡報告でフリードが俯いて深刻そうな顔をしているのを見て心配になってしまい彼に近付くと、そっと手を取って自分の寄り添った。そんなカトレアの行動にフリードは笑みを浮かばせ、もう片方の手でカトレアの頭をそっと優しく

撫でながら笑みを見せた。

「大丈夫だ、カトレア。私は問題ない」

「本当にですか？」

「ああ、安心してくれ。カトレア、お願いだ。ウイリスの死体は回収されて、此処の慰安の場に置かれてるなら、こちらで回収して、私達三人の故郷……産まれ育ったあの里で埋葬をしよう。此処ではアイツが嫌がる。神共によつて汚されてる今のガーランドの大地ではな」

「はっ……かしこまりました」

フリードはそう言った直後、決意を決めた表情でカトレアに話しかけた。

「カトレア……そろそろ作戦に取り掛かることにするぞ」

「…………やる時が来たのですね」

「ああ、ウイリスを親友の思いを私は無駄にしたくない。それに今こそ神共を……奴等を倒せる時代かもしれないんだ。異世界から召喚でされた『イレギュラー』に五年程前から情報が上がっている『ホーリー・ナイト』彼等は確実にこの作戦に必要な勝利の欠片は揃ってきている。やつと、神共を神域から引き摺り下ろせるかもしれない」

「…………はいっ」

「それに、私もそろそろ新たな神代魔法を手に入れる必要がある。彼等の足でまといになるのは嫌だからな」

「お待ち下さい。フリード様」

早速、行動を始めようとするフリードにカトレアは待ったをかけた。

「フリード様は今、外に出たらアルヴの監視の目が……」

「ああ、そうだな。もし、大迷宮でイレギュラーと出会ったら戦う羽目になるかもしれない。しかし大願の為だ。ならば心を鬼にして、立ち向かうのみだ」

そう言った後、フリードは扉の前に立ち、ドアノブに手を掛ける前に振り返りカトレアの方へと視線を転じる。

「カトレア。これより私はアルヴのもとに行つて許可を貰ったら【グリューエン大火山】に向かう。お前は作戦の準備をそして、あの魔剣の在り処を部下達と共に見つけ出せ」

フリードからの任務を告げられたカトレアを笑みを見せて、フリードの前に片膝を突いて頭を下げながら跪いた。

「はっ、かしこまりました。フリード様もどうかご無事で」

「ふっ、お前もなカトレア」

フリードはカトレアに笑みを浮かべながら頷くと部屋から退室したのだった。



「……………」

フリードは今、アルヴいや、魔王のいる玉座の間に向かう為に王城の廊下を歩いていた。

「ウイリス……」

フリードはそう呟いた後、オルクスでイレギュラーと正々堂々と戦い散った親友との最後の会話を思い出していた。

あの日の出来事は突然のことだったからフリードは今でも、鮮明に覚えていた。

ー二年前ー

『……フリード』

『ウイリスどうしたんだ?』

ウイリスは少し引き攣ったような笑みを浮かべながらフリードに話しかけ、フリードは親友の様子になり何があったのか伺った。

そして、ウイリスは重い口を開いた。

『……アルヴに呼ばれてしまったよ』

『なっ?!』

唐突な言葉にフリードは勢いよく席から立ち上がり椅子がガタツ!と大きな音を立てて倒れた。その表情は絶望に近いものだった。

『そういう事だからフリード。もう私にあの作戦の話は持ちかけな。あの子達とも極力会わせないようにしてくれ。アルヴに情報の部分が読み取られたら何もかも終わってしまうからね。安心してくれ記憶の抹消は、エスプリに頼んで貰うようにしておくよ』

『……ツ、だがっ！』

『フリード。君は私達、魔人族の希望なんだ。君がいなくなってしまうたら魔人族はずっと神共の支配下のままなんだ』

『……ツ……でも、私は』

フリードは苦虫を噛み潰したような表情になり、普段は見せない顔をしてるとウイリスが優しい笑みを浮かべながらフリードを元氣付けるために口を開いた。

『ククツ……我が親友フリード。そんな顔をしないでくれ、君にそんな顔は似合わない。カトレアも心配してしまうよ』

『ウイリス……』

それは、お前も同じだろう、とフリードは思った。これをカトレアが知ったら泣いてしまうだろうと……。

『安心したまえ、私も私なりに神の洗脳に抗ってみせるさ……』

『……』

ウイリスはそう言いながら自分の拳を握りしめた。それを見たフリードは苦い表情を止め、笑みをこぼした。

『フツ……お前はそういう奴だったな昔から』

『そうさ私はそういう奴さ、だからフリード頼んだよ。カトレアを、あの子達を……そしてあの時、三人で誓った、私達の大願を……』

『……魔族、人間族、亜人族が手を取り合い』

『神共に支配されず』

『自由の意思に下にあらん世界を創りだす』

フリードとウイリスは昔、カトレアを連れて、里で見つけた「解放者」の手記を読んで、そこに記されていた内容で、この世界の真実を知った三人は誓い合った願いを大願を言い合い互いに笑みを浮かべた。

『フリード、後は頼みましたよ』

『ああ、任せてくれ親友』  
ウイリス

『ククツ……じゃあ、お別れですね』

『ああ……ではなウイリス。お前と過ごせた十八年は楽しかった』

『それは、私もですよ』

そして、二人は固い握手をした後、ウイリスは部屋を出て行った。その後のウイリス

は人が変わったようにアルヴ派に寝返ったのだった。

「……………ふう」

そんな事を思い出していたフリードは玉座の間の扉の前で一旦立ち止まってから深呼吸をして、真剣な表情になって、誓いを立てるように呟いた。

「……………見ていてくれウィリス。私は絶対に魔族の自由を取り戻す」

そう呟くと顔を上げ、フリードはまた一歩前に踏み出し歩を進め、目の前にある巨大な扉を開けるのだった。

——親友との誓いを胸に抱きながら……………。

彼の名は魔族将軍フリード・バグアー。彼もまた解放者の意思を引き継ぎ、魔族、人間族、亜人族が手を取り合える事を大願にしてる者である……………。

## 第四章 二つの迷宮と神代の遣い手々遙か昔の追憶

## 四十七話 消えた愛子

時間は少し進む。

光輝達が、「宿場町ホルアド」にて、再会によって受けた衝撃と別れによる複雑な心情を持って余していた夜から三週間ほど経った。

現在、光輝達の早急に対処しなければならぬ欠点、「人を殺す」ことについて浅慮が過ぎるという点をどうにかしなければ、これ以上戦えないという事で、彼等は王都に戻って来ていた。魔人族との戦争にこのまま参加するならば、「人殺し」の経験は必ず必要となる。克服できなければ、戦争に参加しても返り討ちに遭うだけだ。

もつとも、考える時間は、もうあまり残されていないと考えるのが妥当だ。ウルでの出来事は、既に光輝達の耳にも入っており、自分達が襲撃を受けたことから、魔人族の動きが活発になっていることは明らかで、開戦に近い事は誰もが暗黙の内に察し

ている事だった。従つて、光輝達は出来るだけ早く、この問題を何かしらの形で乗り越えねばならなかった。

そんな光輝達かというと、現在、ひたすらメルド団長率いる騎士達と対人戦の訓練を行つていた。龍太郎や近藤達、永山達も、ある程度の覚悟はあつたものの、実際、ハジメが魔族の頭を撃ち抜く瞬間を見て、自分にも出来るのかと自問自答を繰り返していた。時間はないものの、無理に人殺しをさせて壊れてしまつては大事なので、メルド達騎士団も頭を悩ませている。

そんな、ある意味鬱屈した彼等に、その日、ちよつとした朗報が飛び込んできた。

愛子達の帰還だ。普段なら、光輝のカリスマにぐいぐい引つ張られていくクラスメイ卜達だったが、当の勇者に覇気がないので皆どこか沈みがちだった。手痛い敗戦と直面した問題に折れてしまわないのは、雫や永山といった思慮深い者達のフオローと鈴のムードメイクのおかげだろうが、それでも心に巢食つたモヤモヤを解決するのに、身近な信頼出来る大人の存在は有難かった。みな、いつだつて自分達の事に一生懸命になつてくれる先生に、とても会いたかつたのだ。

愛子の帰還を聞いて、真つ先に行動したのは雫だ。雫は、愛子の帰還を聞いて色々相談したい事があると、先に訓練を切り上げた。ハジメに対して何かと思うところのありそうなクラスメイ卜達より先に会つて、愛子が予断と偏見を持たないように客観的な情

報の交換をしたかったのだ。

ハジメから譲り受けた漆黒の鞘に収まる、これまた漆黒の刀身に鋒両刃造りの刀を腰のベルトに差して、王宮の廊下を颯爽と歩く雫。そんな彼女の姿に、何故か男よりも令嬢やメイドが頬を赤らめている。世界を超えても雫が抱える頭の痛い問題だ。自分より年上の女性に「お姉様あ」と呼ばれるのは本当に勘弁して欲しいのだ。

雫は、ウルでハジメが色々した事を聞いていたので、愛子からハジメについてどう思ったかも直接聞いてみたかった。愛子の印象次第では、今も考え込んでいる光輝の心の天秤が、あまり望ましくない方向に傾くかもしれないと思ったからだ。どこまでも苦勞を背負い込む性分である。

「きつと、ウルでも色々したのしたのでしょうね。それに、この貰った刀……国宝級のアーティファクトじゃない」

そんなことを独り言ちながら、そつと腰の刀に手を這わせる雫。愛子の部屋を目指しながら、この刀のメンテナンスについて、国直営の鍛冶師達のもとへ訪れた時のことを思い出す。

この刀、雫は単純に黒刀と呼んでいるが、黒刀をこの国の筆頭鍛冶師に見せたときのことだ。最初は、「神の使徒」の一人である雫を前に畏まっていた彼だったが、鑑定系の技能を使って黒刀を調べた途端、態度を豹変させて、雫の肩を掴みかからんばかりの

勢いで迫って来たのだ。そして、どこで手に入れたのか、誰の作品なのかと、今までの態度が嘘のように怒涛の質問、いや、尋問をして来たのである。

目を白黒させる雫が、何とか筆頭を落ち着かせ、何事かと尋ね返した。すると、彼曰く、これほどの素晴らしい剣は王宮の宝物庫でも、聖剣くらいしか見たことがない。出力や魔力を受けるキャパシティという点では聖剣に及ばないが、武器としての機能性・作りの精密性では上をいつているという。

そして、詳しく調べた結果、黒刀に付けらるる魔法陣に魔力を流し込むことで、最大六十センチほど風の刃で刃先を伸長したり、刀身の両サイドに更に二本の風の刃を形成したり、雷の刃を形成したり、刀に雷を纏わしたり更には雷の斬撃を飛ばすことも出来るということが分かった。

また、鞘の方にも仕掛けがあり、同じく魔力を流し込むことで雷を纏わせることが出来たり、その状態で鯉口付近にある押し込み式のスイツチを押すことで鎧（鞘の先端部分）から高威力の針を射出できたりすることもわかった。

刃の部分はアザンチウム製なのでまず欠けることもなく、メンテナンスも殆どいらないうという。強いて言うなら、消費した針を補充するくらいだ。

そして、錬成師の筆頭は雫に誰が作ったか聞き、雫はハジメのことを話すと筆頭は「あの坊主……生きてたんだな」と涙を流しながら喜んでいた。他の錬成師達も喜びを顔に



していた。ハジメは凄く慕われたんだと思うと雫自身も嬉しく思えた。

そんな事を思い出していると、目的地である愛子の部屋に到着した。ノックをする  
が、反応はない。国王達への報告をしに行っていると聞いていたので、まだ、戻つてき  
ていないのだろうと、雫は、壁にもたれて愛子の帰りを待つことにした。

愛子が帰つてきたのは、それから三十分ほどしてからだ。廊下の奥から、トボトボと  
何だかしよげかえつた様子で、それでも必死に頭を巡らせているとわかる深刻な表情を  
しながら前も見ずに歩いてくる。

そして、そのまま自分の部屋の扉とその横に立つている雫にも気づかず通り過ぎよう  
とした。雫は、一体何があつたのだと、訝しそうにしながら、愛子を呼び止めた。

「先生……先生！」

「ほえっ!？」

奇怪な声を上げてビクリと体を震わせた愛子は、キョロキョロと辺りを見回し、よう  
やく雫の存在に気がつく。そして、雫の元氣そうな姿にホッと安堵の吐息を漏らすと共  
に、嬉しそうに表情を綻ばせた。

「八重樫さん！ お久しぶりですね。元氣でしたか？ 怪我はしていませんか？ 他の  
皆も無事ですか？」

今の今まで沈んでいたというのに、口から飛び出るのは生徒への心配事ばかり。相変

わらずの愛ちゃん先生の姿に、自然と雫の頬も綻び、同時に安心感が胸中を満たす。しばし、二人は再会と互いの無事を喜び、その後、情報交換と相談事のため愛子の部屋へと入っていった。

~~~~~

「そう、ですか……清水君がそんな大怪我を……」

雫と愛子、二人っきりの部屋で、可愛らしい猫脚テーブルを挟んで紅茶を飲みながら互いに何があったのか情報を交換する。そして、愛子からウルの町であった事の次第を聞き、雫が最初に発した言葉がそれだった。

室内には、やり切れなさが漂っている。愛子は、悄然と肩を落としており、自分を守る為に大怪我をした清水のことを気に病んでいるのは一目瞭然だった。雫は、愛子の性格や価値観を思えば、どんな事情が絡んでいても気にするのは仕方ないと思い、掛けるべき言葉が見つからない。

しかし、このまま落ち込んでいても仕方ないので、努めて明るく、愛子と清水の無事を喜んだ。

「でも、清水君も一命を取り留めて今は歩けるぐらいになったじゃないですか、本当よかったです。南雲君とその白いローブの人には本当に感謝ですね」

愛子は、微笑みかけてくる雫に、また、生徒に気を使わせてしまったと反省し、同じく微笑みを返した。

「そうですね。再会した当初は、姿は変わってましたが、沢山の人を守って色々救ってくれて頼もしい限りです」

愛子はそう言つて遠い目をしていた。

「そういえば、南雲君も南雲君ですけど清水君を助けた白いローブの人って誰ですかね？話を聞く限り教会から避けてるような感じですけど」

雫はハジメも万の魔物を殲滅したのは凄いと思つたが、死んでも可笑しくなかつた清水の命を助けた白いローブの人が気になり愛子に聞いてみた。

「そうですよね……。私も気になつてデイビッドさん達や教会の方々の報告の際に神官の人達に聞いてはみましたが、全然でした。また出会えたらお礼がしたいんですけど……」

そんな事は話している愛子は段々、表情が曇り出しており、雫は気になり聞いてみた。「それで、先生。陛下への報告の場で何があつたのですか？随分と深刻そうでしたけど」

雫の質問に、愛子はハツとすると共に、苦虫を噛み潰したような表情で憤りと不信感をあらわにした。

「……正式に、南雲君が異端者認定を受けました」

「!? それは! ……どういうことですか? いえ、何となく予想は出来ませんが……それは余りに浅慮な決定では?」

ハジメの力は強大だ。僅か数人で六万以上の魔物の大群を、未知のアーティファクトで撃退した。ハジメの仲間も、通常では有り得ない程の力を有している。にもかかわらず、聖教教会に非協力的で、場合によっては敵対することも厭わないというスタンス。王国や聖教教会が危険視するのも頷ける。

しかし、だからといって、直ちに異端者認定するなど浅慮が過ぎるといふものだ。異端者認定とは、聖教教会の教えに背く異端者を神敵と定めるもので、この認定を受けるということは何時でも誰にでもハジメの討伐が法の下に許されるという事だ。場合によつては、神殿騎士や王国軍が動くこともある。

そして、異端者認定を理由にハジメに襲いかかれば、それは同時に、ハジメからも敵対者認定を受けるといふことであり、あの容赦のない苛烈な攻撃が振るわれることとだ。その危険性が上層部に理解出来ないはずがない。にもかかわらず、愛子の報告を聞いて、その場で認定を下したというのだ。雫が驚くのも無理はない。

雫が、そこまで察していることに、相変わらず頭の回転が早い子だと感心しながら愛子は頷く。

「全くその通りです。しかも、いくら教会に従わない大きな力とはいえ、ウルを助けている上、私がいくら抗議をしてもまるで取り合ってもらえませんでした。南雲君は、こういう事態も予想して、ウルを助けてくれたので、唯でさえ高い『豊穡の女神』の名を更に格上げしたのには、です。護衛隊の人に聞きましたが、『豊穡の女神』の名と、『女神の狼』の名は、既に、相当な広がりを見せているそうです。今、彼を異端者認定することは、自分達を救った『豊穡の女神』そのものを否定するに等しい行為です。私の抗議をそう簡単に無視することなど出来ないはずなのです。でも、彼等は、強硬に決定を下しました。明らかにおかしいです……今、思えば、イシユタルさん達はともかく、陛下達王国側の人達の様子も少しおかしかったような……」

「……それは、気になりますね。彼等が何を考えているのか……でも、取り敢えず考えないといけないのは、唯でさえ強い南雲君に『誰を』差し向けるつもりなのか？ という点ではないでしょうか」

「……そうですね。おそらくは……」

「ええ。私達でしょう……まっぴらゴメンですよ？ 私には、まだ死にたくありませんし、

彼の親友の遠藤君や幼なじみの菅原さん達は南雲君側につくでしょうし、南雲君と敵対

するとか……想像するのも嫌です」

雫がぶるりと体を震わせ、愛子は、その気持ちにはわかると苦笑いする。

そして、国と教会側からいいように言いくるめられて、ハジメと敵対する前に、愛子は、光輝達にハジメから聞いた狂った神々の話とハジメの旅の目的を話す決意をした。証拠は何もないので、光輝達が信じるかは分からない。なにせ、今まで、魔人族との戦争に勝利すれば、神が元の世界に戻してくれると信じて頑張ってきたのだ。

実は、その神は死んでいて、自分達を喚んだのは邪悪な神々なので、帰してくれる可能性は極めて低く、だから、昔、神に反逆した者達の住処を探して自力で帰る方法を探そう！ などといきなり言われても信じられるものではないだろう。光輝達が話を聞いたあと、戯言だと切つて捨てて今まで通り戦うか、それとも信じて別の方針をとるか……それは愛子にも分からないが、とにかく教会を信じすぎないように釘を刺す必要がある。愛子は、今回のことでそれを確信した。

「八重樫さん。南雲君は、自分が話しても信じないどころか、天之河君辺りから反感を買うだろうと予想して、私と宮崎さん、菅原さんにだけ話してくれたことがあります」

「話……ですか？」

「はい。教会が祀る神様の事と、南雲君達の旅の目的です。証拠は何もない話ですが……とても大事な話なので、今晚……いえ、夕方、全員が揃ったら先生からお話したい

と思います」

「それは……いえ、分かりました。なんなら今から全員招集しますか？」

「いえ、あまり教会側には知られたくない話なので、自然に皆が集まるとき、夕食の席で話したいと思います。久しぶりに生徒達と水入らずで、といえば私達だけで話せるでしょう」

「なるほど……分かりました。では、夕食の時に」

その後、雫と愛子は雑談を交わし、程よい時間で分かれた。夕食の約束は守られないと知る由もなく……

~~~~~

時刻は、夕方。

鮮やかな橙色をその日一日の置き土産に、太陽が地平の彼方へと沈む頃、愛子は一人誰もいない廊下を歩いていた。廊下に面した窓から差し込む夕日が、反対側の壁と床に見事なコントラストを描いている。

夕日の美しさに目を奪われながら夕食に向かう愛子だったが、ふと何者かの気配を感じて足を止めた。前方を見れば、ちょうど影になっている部分に女性らしき姿が見え

る。廊下のご真ん中で、背筋をスつと伸ばし足を揃えて優雅に佇んでいる。服装は、聖  
教教会の修道服のようだ。

その女性が、美しい、しかしどこか機械的な冷たさのある声音で愛子に話しかけた。

「はじめまして、畑山愛子。あなたを迎えに来ました」

愛子は、その声に何故だか背筋を悪寒で震わせながらも、初対面の相手に失礼は出来  
ないと平静を装う。

「えつと、はじめまして。迎えに来たというのは……これから生徒達と夕食なのですが」

「いいえ、あなたの行き先は本山です」

「えっ?」

有無を言わせぬ物言いに、思わず愛子が問い返す。と、そこで、女性が影から夕日の  
当たる場所へ進み出てきた。その人物を見て、愛子は息を呑む。同性の愛子から見  
ても、思わず見蕩れてしまうくらい美しい女性だったからだ。

夕日に反射してキラキラと輝く銀髪に、大きく切れ長の碧眼、少女にも大人の女にも  
見える不思議で神秘的な顔立ち、全てのパーツが完璧な位置で整っている。身長は、女  
性にしては高い方で百七十センチくらいあり、愛子では、軽く見上げなければならぬ。  
白磁のようになめらかで白い肌に、スラリと伸びた手足。胸は大きすぎず小さすぎず、  
全体のバランスを考えれば、まさに絶妙な大きさ。



ただ、残念なのは表情が全くないことだ。無表情というより、能面という表現がしつくりくる。著名な美術作家による最高傑作の彫像だと言われても、誰も疑わないだろう。それくらい、人間味のない美術品めいた美しさをもった女だった。

その女は、息を呑む愛子に、にこりともせず淡々と言葉を続けた。

「あなたが今からしようとしていることを、我が母は不都合だと感じております。そして、あなたの生徒がしようとしていることの方が我が母と主は「楽しそうだ」と。なので、時が来るまで、あなたには一時的に、退場していただきます」

「な、なにを言って……（母？、主？）」

ゆっくり足音も立てずに近寄ってくる美貌の修道女に、愛子は無意識に後退る。その時、修道女の碧眼が一瞬、輝いたように見えた。途端、愛子は頭に霞がかかったように感じた。思わず、魔法を使うときのように集中すると、弾かれた様にモヤが霧散した。

「……なるほど。流石は、我が母と主を差し置いて「神」を名乗るだけがあります。私の「魅了」を弾くとは。仕方ありません。物理的に連れて行くことにしましょう」

「こ、来ないで！ も、求めるはっ……うっ！？」

得体の知れない威圧感に、愛子は咄嗟に魔法を使おうとする。しかし、詠唱を唱え終わるより早く、一瞬で距離を詰めてきた修道女によつて鳩尾に強烈な拳を叩き込まれてしまった。崩れ落ちる愛子は、意識が闇に飲まれていくのを感じながら、修道女のおつ

やきを聞いた。

「ご安心を。殺しはしません。あなたも優秀な駒です。それに我が母が危険視しているイレギュラーの一人の餌に役立つかもしれません」

愛子の脳裏に、白髪眼帯の少年が思い浮かぶ。そして、届かないと知りながら、完全に意識が落ちる一瞬前に心の中で彼の名を叫んだ。

——南雲君！

~~~~~

「？」

愛子を、まるで重さを感じさせないように担いだ修道女は、ふと廊下の先に意識を向けて探るように視線を這わせた。しばらく、じっと観察していた修道女は、おもむろに廊下の先にある客室の扉を開く。

そして、中に入り部屋全体を見回すと、やはり足音を感じさせずにクローゼットに近寄り、勢いよく扉を開けた。しかし、中には何もなく、修道女は首を傾げると再び周囲を見渡し、あちこち見て回った。やがて、何もないと結論つけたのか愛子を担ぎなおす

と、踵を返して部屋を出て行った。

静寂の戻った部屋の中で、震える声がポツリと呟く。

「……………知らせないと……………誰かに」

部屋の中には誰もいない。しかし、何処かに遠ざかる足音がほんの僅かに響き、やがて、完全に静寂を取り戻した。そして、もう一人、教会の事を調べていた者があの光景を見ていた者がいた。

「やべえなアレ……………俺が戦ったとしても絶対に負けるだろうし、ハジメを呼ぶ……………いや、アイツがすぐに帰ってくれるとは限らねえ……………なら天之河達を、いやアイツ等は信じてくれないだろうし……………なら、一か八かメルドさんのところに向かうか」

そう言いながら彼……………遠藤浩介は“隠形”を全開にしながら信頼出来る騎士団長のもとへ駆けていくのだった……………。

## 四十八話 大砂漠でのトラブル

赤銅色の世界。

「グリュウエン大砂漠」は、まさにそう表現する以外にない場所だった。砂の色が赤銅色なのはもちろんだが、砂自体が微細なのだろう。常に一定方向から吹く風により易々と舞い上げられた砂が大気の色をも赤銅色に染め上げ、三百六十度、見渡す限り一色となっているのだ。

また、大小様々な砂丘が無数に存在しており、その表面は風に煽られて常に波立っている。刻一刻と表面の模様や砂丘の形を変えていく様は、砂丘全体が「生きている」と表現したくなる程だ。照りつける太陽と、その太陽からの熱を余さず溜め込む砂の大地が強烈な熱気を放っており、四十度は軽く超えているだろう。舞う砂と合わせて、旅の道としては最悪の環境だ。

もつとも、それは「普通の」旅人の場合である。

現在、そんな過酷な環境を、知ったことではないと突き進む黒い箱型の乗り物、魔力駆動四輪が砂埃を後方に巻き上げながら爆走していた。道なき道だが、それは車内に設

置した方位磁石が解決してくれている。

「……外、すごいですね……普通の馬車とかじゃなくて本当に良かったです」

「全くじゃ。この環境でどうこうなるわけではないが……流石に、積極的に進みたい場所ではないのお」

車内の後部座席で窓にビシバシ当たる砂と赤銅色の外世界を眺めながらシアとテイオがしみじみした様子でそんなことを呟いた。いくら竜人族のテイオでも、流石にこの環境は鬱陶しいだけらしい。

「前に来たときとぜんぜん違うの！ とつても涼しいし、目も痛くないの！ パパはすごいー！」

「そうね、ハジメはすごいね。ミュウちゃん、冷たいお水飲む？」

「飲むう。優花お姉ちゃん、ありがとうなの」

前部の窓際の席で優花の膝の上に抱えられるようにして座るミュウが、以前、誘拐されて通った時との違いに興奮したように万歳して、快適空間を生み出したハジメにキラキラした眼差しを送っていた。

無理もないだろう。海人族であるミュウにとって砂漠の横断は、どれほど過酷なものだったか。四歳という幼さを考えれば、むしろ衰弱死しなかつたことが不思議なくらいだ。そんな環境を耐えてきたミュウからすれば、ギャップも相まって驚きもひとしおだ。

ろう。なにせ、この四輪、きちんと冷暖房完備付きである。

そして、ハジメを称えるミュウに賛同しながら、砂漠では望めるはずもない冷たい水を普通に差し出したのは、ホルアドの町で、再会した恋人の優花だ。ちなみに、この水は、やはり車内備え付けの冷蔵庫から取り出したものだ。

「……ん、やっぱり優花も子供の扱いに慣れてる」

その時、その光景を見ていたユエが優花の幼子との接し方に慣れてる事が気になり、優花はそれに答えた。

「まあね、店の手伝いをしてる時に常連さんの子供をお守りをハジメとしてたしね。ミュウちゃんぐらいの子なら慣れてるわ。ねっ、ハジメ」

「ああ」

優花の言葉に運転しながらハジメも一言で返事をすると、後部座席にいるシアがハツと思い出したかのように話す。

「あつそうえば、以前ハジメさんとデートした時にそんな事を言ってたですう」

「ほう、優花の家は店でも開いておるかの？」

「ええ、家はね、ウイステリア”っていうレストランを開いているの」

「……私、優花のお店行ってみたい」

ユエがそう言うのと優花は嬉しそうに微笑んでからユエ達にご馳走様すると約束した。「ふふ、ありがと。……じゃあ、戻ったならユエ達にご馳走様してあげるわ。ねっ、ハジメ?」

「まあ、そうだな。それにユエ達が店の手伝いをしてくれるなら更に客も来るかもなー」  
「まあ……そうだけど、流石にユエ達がウエイトレスやったら客は来ると思うけど絶対手が回らなくなるわよ」

「……それも、そうだな」

優花がいる時も男の客が多かったのに、ユエ達が加わるとなると更に混雑してしまうだろうとハジメは軽く想像することが出来た。

「あっ……そうえば、優花さん私、気になる事があつて〜」

「どうしたのシア?」

「その〜ウイステリア?でお手伝いしていたハジメさんってどんな感じでした?」

「いや、前言ったろ特に何もただ手伝いをしてただけだぞ?」

シアがそんな事を聞くのでハジメは面倒そうに話を切り上げようとしたが……

「……ん! 私も知りたい」

「妾もじゃ!」

「ミュウもの〜」

シアに続いてユエ、テイオ、ミユウも気になると次々と言い出し、止めれず優花も優花で笑みを浮かべながら口を開いた。

「そうね、女性客に人気だったわ。常連さんには指名で呼び出されるぐらいの人気だね。一緒に手伝いをしていた浩介が誰にも呼ばれてなくて、いじけていた時があったわね」

「「……………」」

シアの質問を優花が答えた瞬間、ユエ、シア、テイオの三人がジツと視線をハジメに転じた。運転してるハジメは後ろから突き刺さるような視線を感じながら咳払いをする。

「んんっ。さ、三人共……運転中にそんな目で見ないでくれ、気が散る」

「…………ハジメの誑し」

「誑しですう」

「誑しなのじゃ」

「違えよ！お前等が思ってることはねえから！」

ハジメはそう言つて、ユエ達の思っていることは一切無いと否定するが……

「…………絶対嘘」

「そうですよっ、ブルツクの町の時だつて『お兄様の傍にい隊』とかの人達だつていた



じゃないですか！」

「えっ、何それ、知らない」

「いやっ、ユエとシアだつてあつたらそう言うファンクラブは！　　後、日本にいた時は

あんなババイファンクラブみたいのはなかったから俺！後、優花は知らなくていいあの力オスは！」

　戦鬪や色々なことは一切疑うことなくハジメを信用してるユエ達が女性関係だけ信用してないことにハジメの頬がピクピクと引き攣つていた。そして、そんな四人の会話の様子を優花はミユウをあやししながら楽しげにみていた。

「まあ、でも本人は気付いてないけど、非公式のファンクラブがあるし、創始者が真実ちゃんだし……」

　優花は、そう口にせず、遠い目をしながら窓に映る景色を眺めていた。何故か空の彼方に笑顔でサムズアップする真実の姿が浮かんだ。

「ん？　なんじゃ、あれは？　　主人様よ。三時方向で何やら騒ぎじゃ」

　ハジメ達はそんな雑談をしながら目的地向かっていると、不意に、そんな様子を面白げに見ていたテイオがハジメに注意を促した。窓の外に何かを発見したらしい。

　ハジメが、言われるままにそちらを見ると、どうやら右手にある大きな砂丘の向こう側に、いわゆるサンドワームと呼ばれるミミズ型の魔物が相当数集まっているようだっ

た。砂丘の頂上から無数の頭が見えている。

このサンドワームは、平均二十メートル、大きいものでは百メートルにもなる大型の魔物だ。この「グリューエン大砂漠」にのみ生息し、普段は地中を潜行していて、獲物が近くを通ると真下から三重構造のずらりと牙が並んだ大口を開けて襲いかかる。察知が難しく奇襲に優れているので、大砂漠を横断する者には死神のごとく恐れられているらしい。

幸い、サンドワーム自身も察知能力は低いので、偶然近くを通るなど不運に見舞われない限り、遠くから発見され狙われるということはない。なので、砂丘の向こう側には運のなかった者がいるという事なのだが……

「？　なんで、アイツ等あんなところでグルグル回ってんだ？」

サンドワームが出現しているだけならティオも疑問顔をしてハジメに注視させる事はなかった。ハジメの感知系スキルなら、サンドワームの奇襲にも気がつけるし、四輪の速度なら直前でも十分攻撃範囲から抜け出せるからだ。異常だったのは、サンドワームに襲われている者がいるとして、何故かサンドワームがそれに襲いかからずに、様子を伺うようにして周囲を旋回しているからなのである。

「まるで、食うべきか食わざるべきか迷っているようじゃのう？」

「まあ、そう見えるな。そんな事あんのか？」

「妾の知識にはないのじや。奴等は悪食じやからの、獲物を前にして躊躇うということはないはずじゃが……」

テイオは、ユエ以上に長生きな上、ユエと異なり幽閉されていたわけでもないの知識は結構深い。なので、魔物に関する情報などでは頼りになる。その彼女が首をかしげるといふことは、何か異常事態が起きているのは間違いないだろう。

「テイオでも知識がないことなら尚更、巻き込まれないようにもう少し離れていくか」  
ハジメはそう言つて、確認せず巻き込まれる前にさつきと距離を取ることにした。

と、そのとき、

「っ!? 掴まれ!」

ハジメは、そう叫ぶと一気に四輪を加速させた。直後、四輪の後部にかすりつつ、僅かに車体を浮き上がらせながら砂色の巨体が後方より飛び出してきた。大口を開けたそれはサンドワームだ。

「クソツ……アツチに気を取り過ぎてたか!」

ハジメは、旋回していたサンドワーム達に気を取られ過ぎたことに悪態をつきながら、さらに右に左にとハンドルをきり、砂地を高速で駆け抜けていく。そのSの字を描くように走る四輪の真下より、二体目、三体目とサンドワームが飛び出してきた。

「きやああ!」

「ひうー！」

「わわわー！」

優花、ミュウ、シアの順に悲鳴が上がる。強烈な遠心力に振り回され、膝の上にいるミュウを守るように優花はミュウを抱きしめた。そして、小柄なユエは何故かシートベルトが取れてしまい遠心力で浮遊してしまった同時にゴンツと鈍い音がした後、ハジメの膝上へと着地をしたのだが……

「……………痛い、グスツ」

上手く着地したユエだが、四輪の天井に頭をぶつけたらしく頭にコブが出来ており、涙目になりながらコブの部分摩擦っていた。

「ちっ……………お前等まだ来るからどっかにしがみつけ！　ユエはシートベルトを着ける時間ねえから俺にしがみつけいとき！」

「「わかった（のじゃ）（ですう）！」「」」

「……………グス、ん」

サンドワームの奇襲を受けながら、俺は全員に指示をして、ユエは、涙目になりながら「サンドワーム……………絶対に許さん」とサンドワームに物凄い殺意を込めて呟きながらハジメの胸元に顔を押し付けながら抱きついた。

「クソツ……………面倒だな。アレを使っつか……………」

そうこうしているうち、現れた三体のサンドワームが、地中より上体を出した状態で全ての奇襲をかわした四輪を睥睨し、今度はその巨体に物を言わせて頭上から襲いかかろうとした。

これが唯の馬車であったなら、その攻撃で終わっていたかもしれない。しかし、これは、ハジメが身に付けた知識の片鱗が作り出したアーティファクトだ。ただ食らいつかれたくらいでは、ビクともしない。

それに……

「てめえ等、コレの餌食になって貰おうか！」

そんな事を言いながら、ハジメは、四輪をドリフトさせて車体の向きを変え、バック走行すると同時に四輪の特定部位に魔力を流し込み、内蔵された機能を稼働させる。

ガコンツ！ カシャ！ カシャ！

機械音が響き渡ると同時に、四輪のボンネットの一部がスライドして開き、中から四発のロケット弾がセットされたアームがせり出してきた。そのアームは、獲物を探すようにカクカクと動き、迫り来るサンドワームの方へ砲身を向けると、バシユ！ という音をさせて、火花散らす死の弾頭を吐き出した。

オレンジの輝く尾を引きながら、大口を開けるサンドワームの、まさにその口内に飛び込んだロケット弾は、一瞬の間の後、盛大に爆発し内部からサンドワームを盛大に破

壊した。サンドワームの真つ赤な血肉がシャワーのように降り注ぎ、バックで走る四輪のフロントガラスにもベチャベチャとへばりついた。

「うへえ……優花、ミュウが見ないようにしてやっててくれないか」

「もう、してるから大丈夫……。んっ！ ミユウちゃん、苦しかったの？ でも、先つぽを摘むのは勘弁して」

「(……聞かなかったことにしよう)」

更に、迫り来るサンドワームにロケット弾を放つハジメは、ミュウには刺激が強いだろうと優花に配慮を頼むが、俺のする事を察していたのか既にミュウを対面方向で胸元に抱きしめて見えないようにしていた。ただ、優花に強く抱きしめられ顔を包まれて苦しかったのか、ミュウが抜け出そうとしたようで、その際、優花の何処かに触ってしまったようだ。思わず、優花が喘ぐような場所を。ハジメは、聞こえなかつたことにした。ハジメは、そのまま砂丘の上へと四輪を走らせる。下方に地中の浅い部分を移動してくるサンドワームの群れが見えた。微妙に砂が盛り上がっており隠密性がない。

向こうも、ハジメ達が気がついておることを察して、奇襲よりも速度を重視しているのだろうと推測したハジメは、ロケットランチャーをしまうと、代わりの兵器を起動した。ボンネットの中央が縦に割れて、そこから長方形型の機械がせり出てくる。そして、長方形型の箱は、カシュン！ と音を立てながら銃身を伸ばしていき、最終的にシユ

ラーゲンに酷似したライフル銃となった。

直後、四輪内蔵型シユラーゲンから紅いスパークが迸り、アームが角度を調整すると同時にドウウ!! と射撃音を轟かせながら一条の閃光が赤銅色の世界を切り裂いた。

解き放たれた超速の弾丸は、もこもこと盛り上がって進んで来る砂地に着弾し、衝撃と共に砂埃を盛大に巻き上げた。その噴火の如き砂柱には当然、砂色の肉片と真つ赤な血が多分に含まれている。

四輪内蔵型シユラーゲンは、その後も次々と紅の閃光を吐き出し続け、獲物を狩らんと迫っていたサンドワームの尽くを地中にいながら爆ぜさせ、不毛の大地へのささやかな栄養として還していった。

「ハジメー! あれ!」

「……白い人?」

白煙を上げる四輪内蔵型シユラーゲンを収納するのと、優花が驚いたように声を上げ前方に指を差すのは同時だった。優花が指を差した先には、ユエが呟いたように白い衣服に身を包んだ人が倒れ伏していた。

おそらく、先程のサンドワーム達は、あの人物を狙っていたのだろう。しかし、なぜ食わなかったんだと疑問に思うがこの距離からでは分からない。

「お願い、ハジメ。あの場所に……」

「わかってる……俺も気になるしな」

懇願するような眼差しをハジメに向ける優花。ハジメとしても、なぜ、あの状態で砂漠の魔物に襲われないのか興味があったので優花の頼みを了承する。

もしかしたら、魔物を遠ざける方法やアイテムでもあるのかもしれない。実際、樹海にはフェアドレン水晶という魔除けの効果を持つ石がある。魔物が寄り付きにくくなるという程度の効果しかないが、もしかしたらより強力なアイテムがある可能性は否定できないしな。

そんなわけで、四輪を走らせ倒れている人の近くまでやって来て、ハジメは窓からその人物を観察した。

「あの衣服、確か………」

ハジメは衣服を見て、ガラベヤー（エジプト民族衣装）に酷似してると思った。それに顔に大きなフードの付いた外套のせいで顔はわからないし、うつ伏せに倒れている上に、フードが隠れているが体格的に男だろう。

四輪から降りた優花が、小走りです倒れる人物に駆け寄り仰向けにした。

「……………これって……………」

フードを取りあらわになった男の顔は、まだ若い二十歳半ばくらいの青年だった。だが、優花が驚いたのは、そこではなく、その青年の状態だった。苦しそうに歪められた



顔には大量の汗が浮かび、呼吸は荒く、脈も早い。服越してもわかるほど全身から高熱を発している。しかも、まるで内部から強烈な圧力でもかかっているかのように血管が浮き出ており、目や鼻といった粘膜から出血もしている。明らかに尋常な様子ではない。

「……見る限り、ただの日射病や風邪というわけではなさそうだな」

ハジメはそう呟きながら、まるでウイルス感染者のような青年の傍にいる事に危機感を覚えたが、この人物を放っておけないし、治癒の専門家が診察しているので大人しく様子を見ることにした。優花は「浸透看破」を行使する。これは、魔力を相手に浸透させることで対象の状態を診察し、その結果を自らのステータスプレートに表示する技能である。

優花は、片手を青年の胸に置き、もう片手に自分のステータスプレートを持って診察用の魔法を行使した。その結果……

「……魔力暴走？ 摂取した毒物で体内の魔力が暴走しているの？」

「優花？ 何がわかったんだ？」

「う、うん。これなんだけど……」

そう言つて優花が見せたステータスプレートにはこう表示されていた

|||||

状態：魔力の過剰活性 体外への排出不可

症状：発熱 意識混濁 全身の疼痛 毛細血管の破裂とそれに伴う出血

原因：体内の水分に異常あり

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

「魔力暴走……俺みたいに魔物の肉でも食ったのか？」

「おそらくだけど、ちよつと違うと思うわ。何かよくない飲み物を摂取したりして、それが原因で魔力暴走状態になっているみたい……しかも、外に排出できないから、内側から強制的に活性化・圧迫させられて、肉体が付いてこれてない……このままじゃ、内蔵や血管が破裂しちゃう。出血多量や衰弱死の可能性も……。ここに回帰を求めろ」  
 万天

ハジメがそう言うと、優花は少し違うと結論を下し、回復魔法を唱えた。使ったのは「万天」。中級回復魔法の一つで、効果は状態異常の解除だ。以前の魔族の襲撃の時に谷口達にかけられた石化を解いた術であるらしい。

しかし……

「……ほとんど効果がない……もしかして、それほど溶け込んでいる？」

「どうやら、万天では、進行を遅らせることは出来ても、完全に治すことは出来なかったようだ。体内から圧迫されているせいかな、青年は、苦しそうに呻き声を上げてい

る。粘膜から出血も止まらない。優花は、今の段階では、明確な治療法が思いつかなかったので、歯噛みしながら応急措置を採ることにした。

「ここは聖域にして我が領域 全ての魔は我が意に降れ 廻聖」——効果上昇・回復速度上昇・回復力増加付与」

「……凄い技量」

「ほう……」

光系の上級回復魔法「廻聖」。これは、一定範囲内における人々の魔力を他者に譲渡する魔法だ。基本的には、自分の魔力を仲間に譲渡することで、対象の魔力枯渇を一時的に免れさせたり、強力な魔法を放つのに魔力が足りない場合に援護する事を目的とした魔法だ。

もつとも、優花は、本来十小節は必要な詠唱を僅か二小節まで省略し、更に付与術士でも、普通じゃ出来る事が難しいとされる複数付与までして、実戦でもある程度使えるレベルに仕上げていたりしていた。その技量に魔法天才であるユエと年長組のテイオは感嘆の声を漏らしていた。

純白の光が、青年を中心に広がり螢火のような淡い光が湧き上がる。神秘的な光景だ。目を瞑り、青年の胸に手を起きながら意識を集中する優花の姿は、淡い光に包まれていることもあって、どこか神々しさすら感じてしまいそんな姿に見蕩れている

た。

ハジメ以外でもミュウは、シアに抱っこされながら、「きれい……」とうつとりした表情で優花を見つめている。

周囲で、ハジメ達が感嘆の声を上げていることに気がついた様子もなく、優花は、青年から取り出した魔力を、ハジメ自身が優花の手を取って着けた神結晶の指輪に収めていった。

「どうやら、上級魔法による強制ドレインは有効か……」

徐々に、青年の呼吸が安定し、体の赤みも薄まり、出血も収まつてきたようだ。優花は、「廻聖」の行使をやめると初級回復魔法「天恵」を発動し、青年の傷ついた血管を癒していった。

「取り敢えず……今すぐ、どうこうなることはないと思うけど、根本的な解決は何も出来てないわ。魔力を抜きすぎると、今度は衰弱死してしまうかもしれないし、圧迫を減らす程度にしか抜き取れてないの。このままだと、また魔力暴走の影響で内から圧迫されるか、肉体的疲労でもそのまま衰弱死する……可能性が高いと思う。勉強した中では、こんな症状に覚えはないの……ユエとテイオは何か知らない？」

「……ん……ごめん、私もこんな症状知らない」

「すまぬ、優花……妾もこんな症状は知らぬ」

青年が危機を脱したことに、一応の安堵を見せるも完全な治療は出来なかったことに憂いを見せる優花が、知識の深いユエとテイオに助けを求めた。二人も記憶を探るように視線を彷徨わせるが、該当知識はないようだった。結局、原因不明の病としか言い様がないという状況だ。

「優花、念のため俺達も診察しておいてくれ。未知の病だというなら空気感染の可能性もあるだろ。まあ、魔力暴走ならミュウの心配は無用だが」

「うん、わかった」

ハジメの言葉に頷いて、優花が全員を調べたが特に異常は見当たらなかった。そうになると、呼吸での周囲の感染の危機はないらしい。

そうこうしていると、青年が呻き声を上げ、そのまぶたがふるふると震えだした。お目覚めのようなだ。ゆっくりと目を開けて周囲を見わたす青年は、心配そうに自分を間近で見つめる優花を見て「女神？　そうか、ここはあの世か……」などとほざきだした。

そして、今度は違う理由で体を熱くし始めたので、嫉妬半分といい加減、暑さと砂のウザさにうんざりしていたハジメは、嫌な表情を隠しもせず、優花に手を伸ばそうとしている青年を腕を掴み、強制的に上体を起こさせた。

「うおっ!?!」

「ハ、ハジメ!?!」

「スマン、スマンちよつとイラツとしてな……まあそんな事より……なあ、お前その衣服は確かアンカジ公国の衣服だろ話せる状態なら何があつたか？此処で何してたか話して貰えないか？」

ハジメの記憶が確かなら、青年の着ているガラベヤ風の衣服や外套は、図書館の本に書かれていた「グリュューエン大砂漠」最大のオアシスである「アンカジ公国」の特徴的な服装だつたと記憶している。青年が、アンカジで何かに感染でもしたのだというなら、これから向かうはずだつた場所が危険地帯に変わってしまうし、是非とも、その辺のことを聞いておきたいのだ。

いきなり上体を起こされ驚いたように声を上げる青年といきなりのハジメの行動に驚きの声を上げた優花を尻目に、ハジメは、青年に何があつたのか事情を聞く。

ハジメのいきなりの行動で正気を取り戻した青年は、自分を取り囲むハジメ達と背後の見たこともない黒い物体に目を白黒させて混乱していたが、ハジメから大雑把な事情を聞くと、命の恩人であると理解し、頭を下げて礼を言うと共に事情を話し始めた。

その話を聞きながら、ハジメは、どこに行つてもトラブルが付き纏うことに、よもやクソ神共のいたずらじゃあないだろうな？と若干疑わしそうに赤銅色の空を仰ぎ見るのだった……。

## 四十九話 アンカジ公国

未だ体内に異常事態を抱える青年は、意識は取り戻したもののまともにも立つことも出来ない状態だった。砂漠の気温も相まって相当な量の発汗をしており、脱水症状の危険もあったので車内に招き入れ水を飲ませてやる。

青年は、四輪を馬車のようなものだと無理やり納得したものの、車内の快適さに違意味で目眩を覚えていた。しかし、自分が使命を果たせず道半ばで倒れたことを思い出し、こんなところでのんびりしている場合ではないと気を取り直す。そして、自分を助けてくれたハジメ達と互いに自己紹介をした。

「まず、助けてくれた事に礼を言う。本当にありがとう。あのまま死んでいたらと思うと……アンカジまで終わってしまうところだった。私の名は、ビイズ・フォウワード・ゼンゲン。アンカジ公国の領主ランズィ・フォウワード・ゼンゲン公の息子だ」

「……ゼンゲンって確か」

ゼンゲンと言えば、北大陸における一分野の食料供給に置いて、ほぼ独占的な権限を持っているに等しいとぐらいの単なる名目だけの貴族ではなく、ハイリヒ王国の中でも

信頼の厚い屈指の大貴族である。

その事を思い出したハジメは砂漠に倒れていた青年が領主の息子だと知り、顔には出なかつたが内心驚いていた。

「でも何故こんなところに領主の息子が倒れてんだ？　もしかしてアンカジに何かあったのか？」

「……じ、実は」

ビイズ曰く、こういうことらしい。

四日前、アンカジにおいて原因不明の高熱を発し倒れる人が続出した。それは本当に突然のことで、初日だけで人口二十七万人のうち三千人近くが意識不明に陥り、症状を訴える人が二万人に上ったという。直ぐに医療院は飽和状態となり、公共施設を全開放して医療関係者も総出で治療と原因究明に当たったが、優花と同じく進行を遅らせることは何とか出来ても完治させる事は出来なかつた。

そうこうしているうちに、次々と患者は増えていく。にもかかわらず、医療関係者の中にも倒れるものが現れ始めた。進行を遅らせるための魔法の使い手も圧倒的に数が足りず、なんの手立ても打てずに混乱する中で、遂に、処置を受けられなかつた人々の中から死者が出始めた。発症してから僅か二日で死亡するという事実には絶望が立ち込める。



そんな中、一人の薬師が、ひよんなことから飲み水に「液体鑑定」をかけた。その結果、その水には魔力の暴走を促す毒素が含まれていることがわかったのだ。直ちに調査チームが生まれ、最悪の事態を想定しながらアンカジのオアシスが調べられたのだが、案の定、オアシスそのものが汚染されていた。

当然、アンカジのような砂漠のど真ん中にある国において、オアシスは生命線であるから、その警備、維持、管理は厳重に厳重を重ねてある。普通に考えれば、アンカジの警備を抜いて、オアシスに毒素を流し込むなど不可能に近いと言っても過言ではないほどに、あらゆる対策が施されているのだ。

一体どこから、どうやって、誰が……首を捻る調査チームだったが、それより重要なのは、二日以上前からストックしてある分以外、使える水がなくなってしまったということだ。そして、結局、既に汚染された水を飲んで感染してしまった患者を救う手立てがないということである。

ただ、全く方法がないというわけではない。一つ、患者達を救える方法が存在している。それは、「静因石」と呼ばれる鉱石を必要とする方法だ。この「静因石」は、魔力の活性を鎮める効果を持っている特殊な鉱石で、砂漠のずっと北方にある岩石地帯か「グリーンエン大火山」で少量採取できる貴重な鉱石だ。魔法の研究に従事する者が、魔力調整や暴走の予防に求めることが多い。この「静因石」を粉末状にしたものを服用

すれば体内の魔力を鎮めることが出来るだろうというわけだ。

しかし、北方の岩石地帯は遠すぎて往復に少なくとも一ヶ月以上はかかってしまう。また、アンカジの冒険者、特に「グリューエン大火山」の迷宮に入つて「静因石」を採取し戻つてこられる程の者は既に病に倒れてしまつてゐる。生半可な冒険者では、「グリューエン大火山」を包み込む砂嵐すら突破できないのだ。それに、仮にそれだけの実力者がいても、どちらにしる安全な水のストックが圧倒的に足りない以上、王国への救援要請は必要だつた。

その救援要請にしても、総人口二十七万人を抱えるアンカジ公国を一時的にでも潤すだけの水の運搬や「グリューエン大火山」という大迷宮に行つて、戻つてこられる実力者の手配など容易く出来る内容ではない。公国から要請と言われれば無視することは出来ずとも、内容が内容だけに一度アンカジの現状を調査しようとするのが普通だ。しかし、そんな悠長な手続きを経てからでは遅いのだ。

なので、強権を発動出来るゼンゲン公か、その代理たるビイズが直接救援要請をする必要があつた。

「父上や母上、妹も既に感染してゐて、アンカジにストックしてあつた静因石を服用すること何とか持ち直したが、衰弱も激しく、とても王国や近隣の町まで赴くことなど出来そうもなかつた。だから、私が救援を呼ぶため、一日前に護衛隊と共にアンカジを出

発したのだ。その時、症状は出ていなかったが……感染していたのだろうか。おそれなく、発症までには個人差があるのだろう。家族が倒れ、国が混乱し、救援は一刻を争うという状況に……動揺していたようだ。万全を期して静因石を服用しておくべきだった。今、こうしている間にも、アンカジの民は命を落としていつているというのに……情けない！」

力の入らない体に、それでもあらん限りの力を込めて拳を己の膝に叩きつけるビイズ。アンカジ公国の次期領主は、責任感の強い民思いな人物らしい。護衛をしていた者達も、サンドワームに襲われ全滅したというから、そのことも相まって悔しくてならぬのだろう。

「……………そうか、だからサンドワーム共が喰らわなかったのか……それなら納得だ」

ハジメは、サンドワーム達が、ビイズを喰らわなかった理由がわかったが、ビイズの話を推測するにおそらくワーム達はこの病を察知して捕食を躊躇ったことだと分かった。それにビイズ自身、病にかかったがゆえに力尽きたが、それゆえにサンドワームに襲われずに済んだということに納得している……

「……………君達に、いや、貴殿達にアンカジ公国領主代理として正式に依頼したい。どうか、私に力を貸して欲しい」

そう言って、ビイズは深く頭を下げた。車内にしばし静寂が降りる。窓に当たる風に

煽られた砂の当たる音がやけに大きく響いた。領主代理が、そう簡単に頭を下げるべきでないことはビイズ自身が一番分かっているのだろうが、降って湧いたような僥倖を逃してなるものかと必死なのだろう。

全員の視線がハジメを向く。

「……しようがねえな、次期領主に頭を下げられちまったならやるしかねえな」

ハジメは肩を竦め苦笑いしながらビイズに向かつて了承の意を伝えた。

もともと、「グリニューエン大火山」には行く予定であり、その際、ミュウはアンカジに預けていこうと考えていた。いくら何でも、四歳の幼子で大迷宮に連れて行くのは妥当ではないし、迷宮攻略ついでに「静因石」を確保することは全くもって問題なく、ミュウは亜人族の子であるから魔力暴走という今回の病因は関わりがないので危険もない。どっちにしろ、道程の中で処理できる問題だとハジメは思っていた。

「ハジメ殿が『金』クラスなら、このまま大火山から『静因石』を採取してきてもらいたいのだが、水の確保のために王都へ行く必要もある。この移動型のアーティファクトは、ハジメ殿以外にも扱えるのだろうか？」

「まあ、優花とミュウ以外は扱えるが……わざわざ王都まで行く必要はない。水の確保はどうか出来るだろうから、一先ずアンカジに向かいたいんだが？」

「どうにか出来る？ それはどういうことだ？」

数十万人分の水を確保できるという言葉に、訝しむビイズ。ハジメは笑みを零しながら話す。

「それは、水系の魔法で貯水池を作る」

「はっ。」

ハジメの言葉にビイズは口をポカンと開けて啞然としていた。その反応は当たり前だろう。

もちろん、普通の術師ではおよそ不可能だろうが、ここには魔法に関して稀代の天才がいる。そう、ユエだ。しかも、彼女ならば、魔力をすぐさま回復する手段も多数持ち合わせている。ビイズなりランジイなりがアンカジに残っている静因石をしっかりと服用し体調を万全に整えて、改めて王国に救援要請をしに行くくらいの時間は十分に稼げるはずである。

その辺りのことを掻い摘んで説明すると、最初は信じられないといった風のビイズだったが、どちらにしる今の自分の状態ではまともに王国までたどり着けるか微妙だったので、「神の使徒」たる優花の説得も相まってアンカジに引き返すことを了承した。

砂漠地帯を滑るように高速で走り出す四輪に再び驚きながら、ビイズは、なぜ「神の使徒」たる優花が単独で冒険者達と一緒にいるのか、なぜ海人族の幼子が人間族のハジメをパパと呼ぶのか、兔人族と和気あいあいとしているのか、疑問に思いつつも、見え

てきた希望に胸の内を熱くするのだった。

~~~~~

「……フューレンとはまた違う感じの綺麗だな」

赤銅色の砂が舞う中、たどり着いたアンカジは、中立商業都市フューレンを超える外壁に囲まれた乳白色の都だった。外壁も建築物も軒並みミルク色で、外界の赤銅色とのコントラストが美しくハジメは言葉をこぼした。

そして、ふとハジメはフューレンにはなかった不規則な形で都を囲む外壁の各所から光の柱が天へと登り、上空で他の柱と合流してアンカジ全体を覆う強大なドームを形成していて時折、何かがぶつかったのか波紋のようなものが広がって、まるで水中から揺れる水面を眺めているような、不思議で美しい光景が広がっている建築物的な何かが気になりハジメはビイズにアレはなんなのかと聞いた。

「……ビイズ、あの町を覆っているアレは何だ？」

「ああ、アレは『真意の裁断』というアーティファクトです」

「『真意の裁断』？」

ビイズに聞くと、どうやら砂の侵入を阻み、空気や水分など必要なものは通す作用が

ある便利な障壁なのだが、何を通すかは設定者の側で決めることが出来る。そして、単純な障壁機能だけでなく探知機能もあり、何を探知するかの設定も出来る。その探知の設定は汎用性があり、閤系魔法が組み込まれているのか精神作用も探知可能らしい。

「へえ……そこまでの機能を搭載しているのか。しかし、このアーティファクト、見るだけで分かる程の凄い技術だな……」

「わかるのですか、ハジメ殿は」

「ああ、一度調べてみたいほどだ」

ハジメがそう言うほど、*“真意の裁断”*というアーティファクトは魅力的だった。

そしてハジメ達は、これまた光り輝く巨大な門からアンカジへと入都した。砂の侵入を防ぐ目的から門まで魔法によるバリア式になっているようだ。門番は、魔力駆動四輪を見ても、驚きはしたがアンカジの現状が影響しているのか暗い雰囲気でもなく、どこか投げやり気味であった。もともと、四輪の後部座席に次期領主が座っていることに気がついた途端、直立不動となり、兵士らしい覇気を取り戻したが。

アンカジの入場門は高台にあった。ここに訪れた者が、アンカジの美しさを最初に一望出来るようにという心遣いらしい。

確かに、美しい都だとハジメ達は感嘆した。太陽の光を反射してキラキラときらめくオアシスが東側にあり、その周辺には多くの木々が生えていて非常に緑豊かだった。

オアシスの水は、幾筋もの川となつて町中に流れ込み、砂漠のど真ん中だというのに小船があちこちに停泊している。町のいたるところに緑豊かな広場が設置されていて、広大な土地を広々と利用していることがよくわかる。

北側は農業地帯のようだ。アンカジは果物の産出量が豊富という話を証明するようには、ハジメが「遠見」で見る限り多種多様な果物が育てられているのがわかった。西側には、一際大きな宮殿らしき建造物があり、他の乳白色の建物と異なつて純白と言つていい白さだった。他とは一線を画す荘厳さと規模なので、あれが領主の住む場所なのだろう。その宮殿の周辺に無骨な建物が区画に沿つて規則正しく並んでいるので、行政区にでもなつているのかもしれない。

砂漠の国つて言うよりも水の都と表現したくなるのがアンカジ公国だった。

だが、普段は、エリセンとの中継地であることや果物の取引で交易が盛んであり、また、観光地としても人気のあることから活気と喧騒に満ちた都であるはずが、今は、暗く陰気な雰囲気覆われていた。通りに出ている者は極めて少なく、ほとんどの店も営業していないようだ。誰もが戸口をしつかり締め切つて、まるで嵐が過ぎ去るのをジツと蹲つて待っているかのような、そんな静けさが支配していた。

「……使徒様やハジメ殿にも、活気に満ちた我が国をお見せしたかった。すまないが、今は、時間がない。都の案内は全てが解決した後にも私自らさせていただく。一先ず



は、父上のもとへ。あの宮殿だ」

一行は、ビイズの言葉に頷き、原因のオアシスを背にして進みだしたのだった。

~~~~~

「父上！」

「ビイズ！ お前、どうしつ……いや、待て、それは何だ!？」

ビイズの顔パスで宮殿内に入ったハジメ達は、そのまま領主ランズイの執務室へと通された。衰弱が激しいと聞いていたのだが、どうやら治癒魔法と回復薬を多用して根性で執務に乗り出していたらしい。

そんなランズイは、一日前に救援要請を出しに王都へ向かったはずの息子が帰ってきたことに驚きをあらわにしつつ、その息子の有様を見て、ここに来るまでの間に宮殿内で働く者達が見せたのと全く同じ様に目を剥いた。

無理もない。なにせ、現在ビイズは、宙に浮いているのだから。正確には、宙に浮くクロスビットの上にならうつつ伏せに倒れる感じで乗っかりつつ運ばれているのである。ビイズも衰弱が激しく、優花の魔法で何とか持ち直し意識ははっきりしているものの、

自力で歩行するには少々心許ない有様だった。見かねた優花が肩を貸そうとしたところ、ビイズが顔を赤くして「ああ、使徒様自ら私を……」等と喋って潤んだ瞳で優花を見つめ始めたので、ハジメが、クロスビットを突貫させて無理やり乗せると、そのまま運んで来たのである。

ちなみに、その行為はハジメがただ単に嫉妬でした事なので優花に「病人には優しくなさい！」と正座させられ叱られてしまった。

クロスビットにしがみつきながらという微妙に情けない姿でありながらも、事情説明を手早く済ませるビイズ。話はトントン拍子に進み、執事らしき人が持ってきた静因石の粉末を服用して完治させたビイズに優花が回復魔法を掛けると、全快とまでは行かずとも行動を起こすに支障がない程度には治ったようだ。

なお、完治といっても、体内の水分に溶け込んだ毒素がなくなっただけではなく、単に、静因石により効果を發揮できなくなったというだけである。体内の水分に溶け込んでいる以上、時間と共に排出される可能性はあるので、今のところ様子見をするしかない。

「じゃあ、そろそろ動くか。優花はシアを連れて医療院と患者が収容されている施設へ。魔晶石も持っていけ。俺達は、水の確保だ。領主、最低でも二百メートル四方の開けた場所はあるか？」

「む？ うむ、農業地帯に行けばいくらでもあるが……」

「なら、優花とシア以外は、そつちだな。シアは、魔晶石がたまったらユエに持って来てやってくれ」

ハジメがメンバーに指示を出す。ハジメ達のやることは簡単だ。優花が、ビイズにやつたのと同じように、「廻聖」を使つて、患者たちから魔力を少しずつ抜きつつ、「万天」で病の進行を遅らせて応急処置をする。取り出した魔力は魔晶石にストックし、貯まったらそれをユエに渡して水を作る魔力の足しにする。

ハジメは、貯水池を作るユエに協力したあと、そのままオアシスに向かい、一応、原因の調査をする。まあ、分かれば解決してもいいし、分からなければそのまま「グリューエン大火山」に向かう。そういうプランだ。

ハジメの号令に、全員が元氣よく頷いた。

現在、領主のランズイと護衛や付き人多数、そしてハジメ、ユエ、ティオ、ミュウはアンカジ北部にある農業地帯の一角に来ていた。二百メートル四方どころかその三倍はありそうな平地が広がっている。普段は、とある作物を育てている場所らしいのだが、时期的なものから今は休耕地になっているそうだ。

未だ、半信半疑のランズイは、この非常時に謀つたと分かれば即座に死刑にしてやる

と言わんばかりの眼光でハジメ達を睨んでいた。藁をも掴む思いで水という生命線の確保を任せたが、常識的に考えて不可能な話なので、ランズイの眼差しも仕方のないものだ。

もつとも、その疑いを孕んだ眼差しは、ユエが魔法を行使した瞬間驚愕一色に染まった。

「『壊劫』」

前方の農地に頭上に向けて真つ直ぐにつき出された右手の先に、黒く渦巻く球体が出現する。その球体は、農地の上で形を変え、薄く四角く引き伸ばされていき、遂に二百メートル四方の薄い膜となった。そして、一瞬の停滞のあと、音も立てずに地面へと落下し、そのまま何事もなかったかのように大地を押しつぶした。

凄まじい圧力により盛大に陥没する大地。地響きが鳴り響く。それは、さながら大地が上げた悲鳴のようだ。一瞬にして、超重力を掛けられた農地は二百メートル四方、深さ五メートルの巨大な貯水所となった。

ハジメがチラリとランズイ達を見ると、お付の人々も含めて全員が、顎が外れないか心配になるほどカクンと口を開けて、目も飛び出さんばかりに見開いていた。衝撃が強すぎて声が出ていないようだ。

神代魔法を半分程の出力で放ったユエは、「ふう」と息を吐く。魔力枯渇というほどで

はないが、一気に大量に消費したことに変わりはなく僅かだが倦怠感を感じたのだ。ウルでの戦争時のように魔晶石からストックしてある魔力を取り出してもいいのだが、この後、「グリューエン大火山」に挑むことを考えれば、出来るだけ魔晶石の魔力は温存しておきたい。また、戦争時と違い時間があるので、ハジメはもう一つの魔力補給方法を実行する。

フラリと背後に体を倒れさせるユエだったが、体を支えようともがく仕草は見せない。自分からしたことであるし、そんな事をしなくても倒れないことはわかりきっているからだ。案の定、ポスンと音を立てて、ユエの体はハジメの腕の中に収まった。

ユエは、嬉しそうに頬を緩め、ハジメの首に腕を回すと抱きついた。

そして、

「……………いただきます」

そのままハジメの首筋に噛み付いた。

カプツ！ チュク、

ハジメの体から血が流れ出していく。ユエは、うつとりと瞳を潤ませながら、何度も何度もハジメの首筋に舌を這わせた。普段から、その見た目に反してどこか色気を漂わせているユエであったが、吸血するとそれが顕著になる。体全体からフェロモンでも放出しているのではないかと思うほど、妖艶な雰囲気になるのだ。

んっ あむっ ぴちやぴちや あふう

「ミュウにはこれを見るのはちと早すぎるのう……」

ランズイは顔を紅くしながらもこちらを真剣にみていた。テイオは流石にミュウに見せるのはまだ早いという分別はあつたのか、頬を紅くしながら後ろから目隠しをしていた。ミュウは「見えないの〜」としきりに文句を言っていたが背後から抱きしめられ、シアを超える巨乳に後頭部からすっぽり収まってしまっているため抵抗は出来ないようだ。

ハジメから血をもらい“血力変換”により魔力に変換したユエは、そつと、俺の首筋から体を離すと、一度舌舐りして「……ご馳走様」と言つて俺から抱きつくのをやめて地面に降り立った。

「ユエ、もう十分か?」

「……ん、大丈夫問題ない」

そんな会話をしているとランズイが話しかけて来た。

「ハ、ハジメ殿。もしかしてだが、そちらのお嬢さんは……」

ハジメはランズイの目を見て、これは誤魔化せないと判断して、苦笑いしながら返事をする。

「あゝ、まあ察してくれないか?」

「……………うむ、今はコチラとしても緊急事態だから見なかつた事にしよう」  
「……………感謝する」

ランズイの言葉に安堵の息を吐いたハジメはユエと仕上げの仕事に取り掛かった。

ハジメは、貯水池に降りると、四輪を“宝物庫”から取り出し走り出す。四輪についている整地機能で土中の鉱物を“鉱物分離”で取り出し、水が吸収されないように貯水池の表面を金属コーティングしているのだ。そして、コーティングを終えて戻ってくるのと、今度はユエが腕を突き出し、即席の貯水池に水系魔法を行使した。

「“虚波”」

水系上級魔法の一つで、大波を作り出して相手にぶつける魔法だ。普通の術師では、大波と言っても、せいぜい十から二十メートル四方の津波が発生する程度だが、ユエが行使すると桁が変わる。横幅百五十メートル高さ百メートルの津波が虚空に発生し、一気に貯水池へと流れ込んだ。この貯水池に貯められる水の総量は約二十万トン。途中、何度かハジメから吸血をし、魔力を補給して半分ほど溜め込んだ。だが、ハジメの血量にも限界はある。

流石にこれ以上、血を吸われては貧血になるという辺りで、現場にシアが飛び込んできた。手には、優花から預かった魔晶石がある。少量ずつとは言え、数千人規模の患者からドレインした魔力だ。相当な量が蓄えられている。優花が、医療院や施設に趣いて

からまだ、二時間も経っていない。その短時間で、それだけの人間に処置を施したという点では、確かに、優花も十分にチートである。

シアが、再び、優花の手伝いに戻ったと同時に、ユエは「虚波」の連発を再開する。ほどなくして、二百メートル四方の貯水池は、汚染されていない新鮮な水でなみなみと満たされた。

「こんなことが……」

ランズイは、あり得べからざる事態に呆然としながら眼前で太陽の光を反射してオアシスと同じように光り輝く池を見つめた。言葉もないようだ。

「取り敢えず、これで当分は保つだろう。あとは、オアシスを調べてみて……何も分からなければ、稼いだ時間で水については救援要請すればいい」

「あ、ああ。いや、聞きたい事は色々あるが……ありがとう。心から感謝する。これで、我が国民を干上からせずに済む。オアシスの方も私が案内しよう」

ランズイはまだ衝撃から立ち直りきれずにいるようだが、それでもすべきことは弁えている様で、ハジメ達への態度をガラリと変えると誠意を込めて礼をした。

ハジメ達は、そのままオアシスへと移動する。

オアシスは、相変わらずキラキラと光を反射して美しく輝いており、とても毒素を含んで見るようには見えなかった。



しかし……

「……ん？（魔力反応だど？）」

「……ハジメ？」

ハジメが、眉をしかめてオアシスの一点を凝視する。様子の変化に気がついたユエがハジメに首を傾げて疑問顔を見せた。

「いや、何か、今、魔眼石に反応があつてな……領主。調査チームつてのはどの程度調べたんだ？」

「……確か、資料ではオアシスとそこから流れる川、各所井戸の水質調査と地下水脈の調査を行ったようだ。水質は息子から聞いての通り、地下水脈は特に異常は見つからなかった。もつとも、調べられたのは、このオアシスから数十メートルが限度だが。オアシスの底まではまだ手が回っていない」

「オアシスの底には、何かアーティファクトでも沈めてあるのか？」

「？ いや。オアシスの警備と管理に、『真意の裁断』が使われているが、それは地上に設置してある……結界系のアーティファクトでな、オアシス全体を汚染されるなどありえん事だ。事実、今までオアシスが汚染されたことなど一度もなかったのだ」

それを聞いてハジメはニヤツと不敵な笑みを見せた。

「……へえ。じゃあ、あれだな原因は」

あるはずのないものがあると言われランズイ達が動揺する。ハジメは、オアシスのすぐ近くまで来るとオアシスに手を入れ魔法を放った。

「――アスタリスク・スパーク」

ハジメが魔法のトリガーを引いた瞬間……

ドゴオオオ!!!

凄まじい雷音と共にオアシスの中央で巨大な水柱が噴き上がった。再び顎がカクンと落ちて目を剥くランズイ達。

「ちっ、これも使ってみるか……試験がてらになるし」

ハジメはそんなことを言いながら、今度は十個くらいのペットボトルのような形の金属塊を取り出しポイポイとオアシスに投げ込んでいく。そして、やっぱり数秒ほどすると、オアシスのあちこちで大爆発と巨大な水柱が噴き上がった。ハジメが投げ込んだのは、いわゆる魚雷である。この先、エリセン経由で向かう事になる七大迷宮の一つ「メルジーネ海底遺跡」は海の底にあるらしいので（ミレディ情報）、海用の兵器と言えば魚雷だろうと試作品をいくつか作っておいたのである。せっかくだし試してみようと実験がてら放り込んでみたのだ。

「（威力は良いが、スピードが足りない）……要改良だな」

ちなみに、この魚雷、「特定感知」や「追跡」を生成魔法により付加された鉱石を組

み込んで作成されており、一度、敵をロックオンすると後は自泳して追いかけ、接触により爆発する。つまり、水中の何かは、現在、絶賛未知の兵器に追い掛け回されているということだ。

「おいおいおい！ ハジメ殿！ 一体何をやったんだ！ ああ！ 棧橋が吹き飛んだぞ！ 魚達の肉片があ！ オアシスが赤く染まっていくう！」

「……それは、スマンがおい見ろそろそろ元凶のお出ました」

オアシスの景観が徐々に悲惨な感じで変わっていく様にランズイが悲鳴を上げ部下と共に俺にしがみついて、必死に阻止しようとしたがハジメの言葉で足を止めた。

その直後、

シユバ！

風を切り裂く勢いで無数の水が触手となってハジメ達に襲いかかった。咄嗟に、ドンナー・シユラークで迎撃し水の触手を弾き飛ばす。ユエは氷結させて、テイオは炎で即座に蒸発させて防ぐ。

何事かと、オアシスの方を見たランズイ達の目に、今日何度目かわからない驚愕の光景が飛び込んできた。ハジメの度重なる爆撃に怒りをあらわにするように水面が突如盛り上がったかと思うと、重力に逆らってそのまませり上がり、十メートル近い高さの小山になったのである。

「なんだ……これは……」

ランズイの呆然としたつぶやきが、やけに明瞭に響き渡ったのだった……。

## 五十話

## オアシスに潜むモノ

オアシスより現れたそれは、体長十メートル、無数の触手をウネウネとくねらせ、赤く輝く魔石を持っていた。スライム……そう表現するのが一番わかりやすいと思えるぐらい酷似していた。

「……バチエラムか？」

ハジメはそう思つて魔物の名前を口にするが、すぐにそれを否定せざる得なかつた。それはサイズがおかしいからだ。通常、バチエラムはせいぜい体長一メートルくらいの筈……それに、周囲の水を操るような力もなかつたはずだ。少なくとも触手のように操ることは、自身の肉体以外では出来なかつたはずだと記憶していた。

「なんだ……この魔物は一体何なんだ？ バチエラム……なのか？」

呆然とランズイがそんな事を呟く。

「俺もそう思ったが違ふと思うぞバチエラムに毒素を出す固有魔法を持った個体がいると思うか？」

「……確かに、そう考えるのが妥当か。だが、倒せるのか？」

ハジメとランズイが会話している間も、まるで怒り心頭といった感じで触手攻撃をしてくるオアシスバチュラム。ユエは氷結系の魔法で、ティオは火系の魔法で対処している。ハジメも、会話しながらドンナー・シユラークで迎撃しつつ、核と思しき赤い魔石を狙い撃つが、魔石はまるで意思を持っているかのように縦横無尽に体内を動き回り、中々狙いをつけさせない。

その様子を見て、ランズイが、ハジメの持つアーティファクトやユエ達の魔法に、もう驚いていられるかと投げやり気味にスルーすることを決めて、冷静な態度でハジメに勝算を尋ねた。

「ん〜……ああ、大丈夫だ。もう捉えたしな」

ランズイの質問に対してお座なりな返事をしながら、目を細めジツと動き回る魔石の軌跡を追っていたハジメは、おもむろにシユラークをホルスターにしまうと、ドンナーだけを持って両手で構えた。持ち手の右腕を真っ直ぐ突き出し左肘を曲げて、足も前後に開いている。いわゆるウィーパー・スタンスと言われる射撃姿勢だ。ドンナーによる精密射撃体勢である。

ハジメの眼はまるで鷹のように鋭く細められ、魔石の動きを完全に捉えているようだ。そして……

ドパンツ!!

乾いた破裂音と共に空を切り裂き駆け抜けた一条の閃光は、カクつと慣性を無視して進路を変えた魔石を、まるで磁石が引き合うように、あるいは魔石そのものが自ら当たりといったかのように寸分変わらず撃ち抜いた。

レールガンの衝撃と熱量によって魔石は一瞬で消滅し、同時にオアシスバチュラムを構成していた水も力を失ってただの水へと戻った。ドザアー！ と大量の水が降り注ぐ音を響かせながら、激しく波立つオアシスを見つめるランズィ達。

「……終わつたのかね？」

「ああ、もう、オアシスに魔力反応はねえよ。原因を排除した事がイコール浄化と言えるのかは分からないが」

ハジメの言葉に、自分達アンカジを存亡の危機に陥れた元凶が、あっさり撃退されたことに、まるで狐につままれたような気分になるランズィ達。それでも、元凶が目の前で消滅したことは確かなので、慌ててランズィの部下の一人が水質の鑑定を行った。

「……どうだ？」

「……いえ、汚染されたままです」

ランズィの期待するような声音に、しかし部下は落胆した様子で首を振った。オアシスから汲んだ水からも人々が感染していたことから予想していたことではあるが、オアシスバチュラムがいなくても一度汚染された水は残るといふ事実には、やはり皆落胆が隠

せないようだ。

「まあ、そう気を落とすでない。ご主人様が元凶を倒した以上、これ以上汚染が進むことはない。新鮮な水は地下水脈からいくらでも湧き出るのじゃから、上手く汚染水を排出してやれば、そう遠くないうちに元のオアシスを取り戻せよう」

テイオが慰めるようにランズィ達に言うのと、彼等も、気を取り直し復興に向けて意欲を見せ始めた。ランズィを中心に一丸となつてゐる姿から、アンカジの住民は、みながこの国を愛しているのだということがよくわかる。過酷な環境にある国だからこそ、愛国心も強いんだろう。

「……しかし、あのバチュラムらしき魔物は一体なんだつたのか……新種の魔物が地下水脈から流れ込みでもしたのだろうか？」

気を取り直したランズィが首を傾げてオアシスを眺める。それにハジメは可能性だと思われる話だが答えることにした。

「おそらく……いや、大方、魔族の仕業じゃないか？」

「!? 魔族だと？ ハジメ殿、貴殿がそう言うからには思い当たる事があるのだな？」

ハジメの言葉に驚いた表情を見せたランズィは、しかし、すぐさま冷静さを取り戻し、ハジメに続きを促した。水の確保と元凶の排除を成し遂げたハジメに、ランズィは敬意と信頼を寄せているようで、最初の、胡乱な眼差しはもはや微塵もない。



ハジメは、オアシスバチユラムが、魔族の神代魔法による新たな魔物だと推測していた。それはオアシスバチユラムの特異性もそうだが、ウルの町で先生を狙い、オルクスで勇者一行を狙ったという事実があるからだ。

おそらく、魔族の魔物の軍備は整いつつあるのだろう。そして、いざ戦争となる前に、危険や不確定要素、北大陸の要所に対する調査と打撃を行っているのだ。愛子という食料供給を一変させかねない存在と、聖教教会が魔族の魔物に対抗するため異世界から喚んだ勇者を狙ったのがいい証拠だ。そして、アンカジは、エリセンから海産系食料供給の中継点であり、果物やその他食料の供給も多大であることから食料関係において間違いなく要所であると言える。しかも、襲撃した場合、大砂漠のど真ん中という地理から、救援も呼びにくい。魔族が狙うのもおかしな話ではないのだ。

それに魔族側が持つてる神代魔法は唯、魔物を操る魔法ではなく、もしかしたら魔物を今さっきのバチユラムやオルクスにいたアハトドみたいに魔物に新たな固有魔法を注ぎ強化や改造が出来る魔法……ハジメの生成魔法に似たような類いの魔法だろうとハジメは推測する。

ハジメは最後に考えていた事以外のことを、ランズイに話すと、彼は低く唸り声を上げ苦い表情を見せた。

「魔物のことは聞き及んでいる。ここちらでも独自に調査はしていたが……よもや、あん

なもので使役できるようになっているとは……見通しが甘かったか」

「まあ、仕方ないんじゃないか？ 王都でも、おそらく新種の魔物なんて情報は掴んでいないだろうし。なにせ、勇者一行が襲われたのも、つい最近だ。今頃、あちこちで大騒ぎだろうよ」

「いよいよ、本格的に動き出したということか……ハジメ殿……貴殿は冒険者と名乗っていたが……そのアーティファクトといい、強さといい、やはり優花殿と同じ……」

ハジメが、何も答えず肩を竦めると、ランズイは何か事情があるのだろうかとそれ以上の詮索を止めた。どんな事情であろうとアンカジがハジメ達に救われたことに変わりはない。恩人に対しては、無用な詮索をするよりやるべき事がある。

「……ハジメ殿、ユエ殿、ティオ殿。アンカジ公国領主ランズイ・フォウワード・ゼンゲンは、国を代表して礼を言う。この国は貴殿等に救われた」

そう言うのと、ランズイを含め彼等の部下達も深々と頭を下げた。領主たる者が、そう簡単に頭を下げるべきではないのだが、ハジメが「神の使徒」の一人であるか否かに関わらず、きつと、ランズイは頭を下げただろう。ほんの少しの付き合いしかないが、それでも彼の愛国心が並々ならぬものであると理解できる。だからこそ、周囲の部下達もランズイが一介の冒険者を名乗るハジメに頭を下げて止めようとせず、一緒に頭を下げているのだ。この辺りは、息子にもすっかり受け継がれているだろう。仕草も言動

もそっくりである。

そんな彼等に、ハジメは少し笑みを浮かべながら……

「……気にすんな、ただ単に成り行きで助けたまでだ。感謝するならアンタの息子にしとけ」

ハジメとしては、優花の頼みでもあつたし、ミュウを預けなければならぬ以上、アンカジの安全確保は必要なことだったので、それほど感謝される程の事でもないし、アンカジのこの状況を見れば、ハジメは動いていたのだろう。

「……」

ハジメの言葉にランズイは、てつきり「いや、気にしないでくれ。人として当然のことをしたまでだ」等と謙遜しつつ、さり気なく下心でも出してくるかと思つていたので、思わずキョトンとした表情をしてしまう。別にランズイとしては、救国に対する礼は元からするつもりだったので、それでも構わなかつたのだが、まさか、まったく下心のない言葉に予想外だった。

「しかし、領主としてもハジメ殿にはそれなりに恩を返したい……だが、アンカジには未だ苦しんでいる患者達が大勢いる……それも、頼めるかね？」

政治家として、あるいは貴族として、腹の探り合いが日常とかしているランズイは、下心のないハジメの言葉に少し戸惑つた様子だったが、やがて何かに納得したのか苦笑い

をして頷いた。そして、感染者たちを救うため「静因石」の採取を改めて依頼した。「まあ……もともと、「グリューエン大火山」に用があつて来たんだ。そつちも問題ない。ただ、どれくらい採取する必要があるんだ？」

あつさり引き受けたハジメにホツと胸を撫で下ろし、ランズイは、現在の患者数と必要な採取量を伝えた。相当な量であつたが、ハジメには「宝物庫」があるので問題ない。こういうところでも、普通の冒険者では全ての患者を救うことは出来なかつただろうと、ランズイはハジメ達との出会いを神に感謝するのだった。

~~~~~

医療院では、優花がシアを伴つて獅子奮迅の活躍を見せていた。緊急性の高い患者から魔力を一齐に抜き取つては魔晶石にストックし、半径十メートル以内に集めた患者の病の進行を一齐に遅らせ、同時に衰弱を回復させるよう回復魔法も行使したり、付与術も行使する。

シアは、動けない患者達を、その剛力をもつて一気に運んでいた。馬車を走らせるのではなく、馬車に詰めた患者達を馬車ごと持ち上げて、建物の上をピョンピョン飛び跳

ねながら他の施設を行ったり来たりしている。緊急性の高い患者は、優花が各施設を移動するより、集めて一気に処置した方が効率的だからだ。

もつとも、この方法、非力なはずのウサミミ少女の有り得ない光景に、それを見た者は自分も病気にかかって幻覚を見始めたのだと絶望して医療院に駆け込むという姿が多々見られたので、余計に医療院が混乱するという弊害もあったのだが。

医療院の職員達は、上級魔法を連発したり、複数の回復魔法を当たり前のように同時行使したり、有り得ない程の付与術を行う優花の姿に、驚愕を通り越すと深い尊敬の念を抱いたようで、今や、全員が優花の指示のもと患者達の治療に当たっていた。

そんな優花を中心とした彼等の元に、ハジメ達がやって来る。そして、共にいたらズイより水の確保と元凶の排除がなされた事が大声で伝えられると、一斉に歓声が上がった。多くの人が亡くなり、砂漠の真ん中で安全な水も確保できず、絶望に包まれていた人達が笑顔を取り戻し始める。その知らせは、すぐさま各所に伝えられていき、病に倒れ伏す人々も、もう少し耐えれば助かるはずだと氣力を奮い立たせた。

「優花、これから『グリューエン大火山』に挑む。どれくらい持ちそうだ?」  
「ハジメ……」

歓声に包まれる医療院において、なお、治療の手を休めない優花にハジメが歩み寄り尋ねた。

優花は、ハジメの姿を見て嬉しそうに頬を綻ばせるが、直ぐに真剣な表情となつて虚空を見つめた。そして、計算を終えたのか、ハジメを見つめ返して「一日」と答えた。それが、魔力的にも患者の体力的にも、持たせられる限界だと判断したのでろう。

「ハジメ。私は、ここに残つて患者さん達の治療をするわ。だから静因石をお願い。貴重な鉱物らしいけど……大量に必要だからハジメしか頼める人がいないの……攻略の邪魔になるかもしれないけど」

「……優花」

「ハジメ？つちよ、皆のまつ……ん」

優花は、アンカジに出来るまでの道中で、ハジメから狂った神の話や旅の目的は聞いており、ハジメがこの世界の神共を殺すことも聞いている上、ハジメの迷宮攻略の邪魔をしたくなく少し俯いていた。

それを見たハジメは優花の手を取つて自分の元に抱き寄せてから唇を合わせる。優花もいきなりの行動で戸惑うが、ハジメからのキスも顔を紅くしながらも快く受け入れた。

「……安心しろ、こんな事ぐらい攻略に支障はねえよ。……それに、ミュウを人がバツタバツタと倒れて逝く場所に置いて行くわけにも行かないだろ？」

「ふふ……ハジメはそうだったわね、頼りにしてる。ごめんなさい。安心して、ミュウ

ちゃんは私がしつかり見てるから」

「おう、頼む」

優花は、そんなハジメの態度に、「ハジメはそうだもんね」と呟きながら頬を緩め、ハジメの胸元に顔を埋めながら顔を見上げ、信頼と愛情をたっぷり含めた眼差しをハジメに向けた。

「私も頑張るから……無事に帰ってきてね。待つてるから……」

「ああ」

優花の、愛しげに細められた眼差しと、まるで戦地に夫を送り出す妻のような雰囲気、思わず、見蕩れて再びキスをしようと、お互い顔を近付けていくが……

「んっ？」

しかし、コートをグツ、と誰かに引つ張られてると感じたハジメは後ろに目を向けた先には……ユエがいた。いつか見た、無機質な眼差しでジーとハジメを見ている。すぐく見ている。よく見るとシアもテイオもジーと見ている。

「……んんっ。さっ、行くか」

そんな重圧の視線にハジメは、優花とのキスを諦めてさっさと【グリユーエン大火山】へと向かうことにした。事前に話は通してあったが、医療院で忙しい優花だけでなく、ランズイにもミュウの世話を改めて頼んでおく。ハジメ達の関係に苦笑い気味のラン

ズイは、快くミュウの世話を引き受けてくれた。

あらかじめ言い聞かせてあったものの、ハジメが出発すると雰囲気で察した途端、寂しそうに顔をうつむかせるミュウに、ハジメは膝をついて目線を合わせ、ゆつくり頭を撫でた。

「ミュウ、行つてくる。いい子で留守番してるんだぞ?」

「うう、いい子してるの。だから、早く帰ってきて欲しいの、パパ」

「ああ、出来るだけ早く帰る」

服の裾をギュッと両手で握り締め、泣くのを我慢するミュウと、それを優しく宥めるハジメの姿は、種族など関係なく、誰が見ても親子だった。修羅場により冷えた空気がほんわかと暖かくなる。ハジメはミュウの背中を押し、優花の方へ行かせる。そして、未だにもジーと見てるユエ、シア、テイオに出発の号令をかけた。

踵を返そうとするハジメに、ミュウが爆弾を落とした。

「ミュウも、さっきの優花お姉ちゃんみたいに。パパとチュウするの」

「はあっ?!」

「……ハジメっ私にも私にも!」

「ハジメさん私にもお願いしますう!」

「妾も欲しいのお」



爆弾  
ミュウを初めに、便乗したユエ、シア、ティオが順にキスをハジメせがんできた。

「いや、待てお前等、此処は人前だし——」……優花とはした」……うつ、でもな……なつ、優花？」

流石に人前だとかでやり過ぎそうとしたがユエに論破され言葉に詰まったハジメは最後の砦である優花に頼みの眼差しを向けた。

「ん、それぐらい、良いわよ？　ほら、言ったじゃない？　私はユエ達なら全然構わな  
いって」

その優花の言葉にハジメは優花はユエ達側だと確信し、味方にならないと判断し、諦める。

「……優花の許可も得れた」

「ま、待て……一旦落ち着こうか……なつ？」

無邪気に手を伸ばして来るミュウに、便乗する三人。ハジメが、色々言つて躲そうとするが（ミュウには強くは言えない）、遂には、

「パパは、ミュウが嫌いなのか？」

と、涙目でそんな事を言われてはグウの音も出ない。

結局、ミュウの頬にキスをすることになり、今度は、多くの患者が倒れている中で、生暖かな視線を受けるといふ意味のわからない状況になって、ハジメは逃げるように「グ

リユーエン大火山」へと出発するのだった。

ちなみに、ハジメとのキスを望んでいた三人も「駆動四輪」を出す前に人が居ないところでユエから順に唇を合わせたキスをした。ユエとは前に一度したが、シアとテイオは初めてだったので顔を真っ赤にしていてその反応が初々しくて可愛らしかったとハジメは口にはしなかったがそう思ったのだった……。

## 五十一話　グリユーエン大火山

〔グリユーエン大火山〕

それは、アンカジ公国より北方に進んだ先、約百キロメートルの位置に存在している。見た目は、直径約五キロメートル、標高三千メートル程の巨石だ。普通の成層火山のよ  
うな円錐状の山ではなく、いわゆる溶岩円頂丘のように平べったい形をしており、山と  
いうより巨大な丘と表現するほうが相応しい。ただ、その標高と規模が並外れているだ  
けで。

この「グリユーエン大火山」は、七大迷宮の一つとして周知されているが、「オルクス  
大迷宮」のように、冒険者が頻繁に訪れるということはない。それは、内部の危険性と  
厄介さ、そして「オルクス大迷宮」の魔物のように魔石回収のうまみが少ないからとい  
うのもあるが、一番の理由は、まず入口にたどり着ける者が少ないからである。

その原因が、

「……まるでジ〇リの天空の城じゃねえか」

「……ジ〇リ?」

思わず、日本を代表する名作アニメを思い出し呟いたハジメに、ユエ達の疑問顔が向けられる。それに肩を竦めるハジメは、魔力駆動四輪の車内から前方の巨大な渦巻く砂嵐を見つめた。

そう、「グリュエーン大火山」は、かの天空の城を包み込む巨大積乱雲のように、巨大な渦巻く砂嵐に包まれているのだ。その規模は、「グリュエーン大火山」をすっぽりと覆って完全に姿を隠すほどで、砂嵐の竜巻というより流動する壁と行ったほうがしつくりくる。しかも、この砂嵐の中にはサンドワームや他の魔物も多数潜んでおり、視界すら確保が難しい中で容赦なく奇襲を仕掛けてくるというのだ。並みの実力では、「グリュエーン大火山」を包む砂嵐すら突破できないというのも領ける話である。

「つくづく、徒歩でなくて良かったですう」

「流石の妾も、生身でここは入りたくないのお」

ハジメと同じく窓から巨大砂嵐を眺めるシアとテイオも、四輪に感謝感謝と拜んでいる。ハジメは、苦笑いしながら、四輪を一気に加速させた。

今回は、悠長な攻略をしていられない。表層部分では、静因石はそれ程とれないため、手付かずの深部まで行き大量に手に入れなければならない。だが、深部まで行ってしまえば、おそらく今までと同じように外へのショートカットがあるはずだとハジメは推測しており、それで一気に脱出してアンカジに戻る算段を立てていた。

ハジメは、そんな事を考えながら気合を入れ直し、巨大砂嵐に突撃していくと砂嵐の内부는、まさしく赤銅一色に塗りつぶされた閉じた世界だった。「ハルツィナ樹海」の霧のように、ほとんど先が見えない。物理的影響力がある分、霧より厄介かもしれない。ここを魔法なり、体を覆う布なりで魔物を警戒しながら突破するのは、確かに至難の業だろう。

太陽の光もほとんど届かない薄暗い中を、緑光石のヘッドライトが切り裂いていく。時速は三十キロメートルくらいだ。事前の情報からすれば五分もあれば突破できるはずである。と、その時、シアのウサミミがピンツ！と立ち、それと同時にぐらいにハジメも反応しており、「掴まれー」と声を張り上げながら、ハンドルを勢いよく切る。

直後、三体のサンドワームが直下より大口を開けて飛び出してきた。俺は、四輪にS字を描かせながらその奇襲を回避し、構っていられるかとそのまま遁走に入る。四輪の速度なら、いちいち砂嵐の中で戦うよりも、さっさと範囲を抜けてしまった方が良いと踏んだ。

サンドワーム達を無視して爆走する四輪を、更に左右から二体のサンドワームが襲いかかった。タイミング的に真横からの体当たりを受けそうだ。たかだか体当たりで車体が傷つくことはないが、横転の可能性はある。なので、“気配感知”で奇襲を掴んだハジメは、咄嗟に車体をドリフトさせて回避しようとした。が、それをユエとテイオが

制止する。

「……ん、ハジメここは任せて、サンドワームは絶対に撲滅する」

「ご主人様。ここは妾達に、任せるのじゃ」

「おう、頼む」

若干一名私怨を含めた発言をしたていたがハジメは、二人の言葉を聞いて、切りそうになったハンドドルをそのままに迷うことなく直進していく。直後、大質量のミミズが、赤銅色の世界から飛び出してくる。

しかし、左右からの挟撃を狙ったサンドワームの襲撃は、四輪に触れることすら叶わなかった。

二〃風刃〃二

左のサンドワームを一瞥したユエがそう呟くと、車外に作り出された風の刃が瞬時に射出され、宙を舞う砂がその軌跡を描く。そして、眼前まで飛びかかっていたサンドワームを横一文字に切断した。上下に分かれて血肉を撒き散らすサンドワーム。

その光景は、右側を担当したティオの側でも同じだった。

「ふむ、流石ユエじゃ。よい風を放つ」

「……砂嵐の風を利用しない手はない。ティオも流石」

お互いが一瞬で選択した〃風刃〃は風系の攻撃魔法では初級に分類されるものだが、

先程放たれた「風刃」は中級レベルの威力はあった。

「流石、二人だな」

おそらく、外で激しく吹き荒れている風を利用したからである。単に、魔力に物を言わせて強力な魔法を放つだけでなく、その場の状況や環境も利用して最適な魔法を選択する。言っていることは簡単だが、実践するのは難しい。ユエもテイオも、流石といふべき技量だろう。

「?!……ちっ鬱陶しいな!」

ハジメが二人の技量に関心していると背後から、先程の三体が中々の速度で地中に潜って追隨してくるの気付き鬱陶しくなったハジメは、四輪のギミックを起動させることにした。車体後部からガコン! と音が響いたかと思うと、パカリと一部が開き、そこから黒く丸い物体が複数転がり出る。

「そんなに、腹減ってんなら、食わせてやるよ!」

それらは、真後ろから四輪を追跡していたサンドワーム達と交差した瞬間、大爆発を起こした。衝撃で地面が吹き飛び、地中をモコモコと進んでいたサンドワーム達が肉片を撒き散らしながら飛び出す。そこへ追加の黒い物体——手榴弾が更に転がり込み、再び大爆発を起こして、サンドワーム達を半ばから吹き飛ばした。上半身がちぎれ飛び、宙をくるくると舞ったあと、砂嵐の中へと消えていく。

「うひゃあー、すごいですう。ハジメさん、この四輪つて一体いくつの機能が搭載されているんですか？」

派手に飛び散ったサンドワームを後部の窓から眺めながら、シアがハジメに尋ねた。ハジメは、ニヤツと悪戯つぽい笑みを浮かべた。

「最終的に変形して——巨大レールキャノンになる」

「……」

そんな馬鹿など言いたいところだが、ハジメならやりかねないと、尋ねたシアだけでなくユエとテイオも無言になってキョロキョロと車内を見回し始めるのでハジメは、「冗談だつて。流石に、まだそんな機能はついてねえよ……まだな」と苦笑いするもハジメなら、いつかやらかすに違いないと、ユエ達はそう確信した目でハジメを見ていた。

そんな余裕のハジメ達の前には、その後も、赤銅色の巨大蜘蛛やアリのような魔物が襲いかかってきた。しかし、四輪の武装やユエとテイオの攻撃魔法の前に為すすべなく粉碎され、その進撃を止めることは叶わなかった。

そうして、後部座席で、「私は、役立たずですう」と落ち込むシアを励ましつつ、ハジメ達は、数多の冒険者達を阻んできた巨大砂嵐を易々と突破したのだった。

「ボバツ！」と、そんな音を立てて砂嵐を抜け出たハジメ達の目に、まるでエアーズロツクを何倍にも巨大化させたような岩山が飛び込んできた。砂嵐を抜けた先は静か



なもので、周囲は砂嵐の壁で囲まれており、直上には青空が見える。竜巻の目にいるようだ。

【グリューエン大火山】の入口は、頂上にあるとの事だったので、進める所まで四輪で坂道が上がっていく。露出した岩肌は赤黒い色をしており、あちこちから蒸気が噴出していた。活火山であるにも関わらず、一度も噴火したことがないという点も、大迷宮らしい不思議さだ。

やがて傾斜角的に四輪では厳しくなってきたところで、ハジメ達は四輪を降りて徒歩で山頂を目指すことになった。

「うわう……あ、あついですう」

「ん……」

「確かにな。……砂漠の日照りによる暑さとはまた違う暑さだ。……こりやあ、タイムリミットに関係なく、さっさと攻略しちまうに限るな」

「ふむ、妾は、むしろ適温なのじゃ……」

「……流石は竜人族の耐熱能力だな」

外に出た途端、襲い来る熱気に、テイオ以外の全員がうんざりした表情になる。時間がないので、暑い暑いと文句を言いながらも素早く山頂を目指し、岩場をひよいひよいと重さを感じさせず、どんどん登っていく。結局、ハジメ達は、一時間もかからずに山

頂にたどり着けた。

たどり着いた頂上は、無造作に乱立した大小様々な岩石で埋め尽くされた煩雑な場所だった。尖った岩肌や逆につるりとした光沢のある表面の岩もあり、奇怪なオブジェの展示場のような有様だ。砂嵐の頂上がとても近くに感じさせる。

「ん……入口って、これか？」

ハジメが、十中八九、これが大迷宮の入り口だと目がつけたのはそんな奇怪な形の岩石群の中でも群を抜いて大きな岩石があった。歪にアーチを形作る全長十メートルほどの岩石があった。

ハジメ達は、その場所にたどり着くと、アーチ状の岩石の下に「グリュエーン大火山」内部へと続く大きな階段を発見した。ハジメは、階段の手前で立ち止まると肩越しに背後に控えるユエ、シア、テイオの顔を順番に見やり、自信に満ちた表情で一言、大迷宮挑戦の号令をかけた。

「ん、じゃ……やるぞー！」

「んっ！」

「はいですー！」

「うむっ！」

「これはまた奇怪な……」

ハジメの迷宮に入つてでの第一声は不思議な物を見るような感じだった。「グリユーエン大火山」の内部は、「オルクス大迷宮」や「ライセン大迷宮」以上に、とんでもない場所だった。

難易度の話ではなく、内部の構造が、だ。

まず、マグマが宙を流れており、亜人族の国フェアベルゲンのように空中に水路を作つて水を流しているのではなく、マグマが宙に浮いて、そのまま川のような流れを作っているのだ。空中をうねりながら真っ赤に赤熱化したマグマが流れていく様は、まるで巨大な龍が飛び交っているようだ。

また、当然、通路や広間のいたるところにマグマが流れており、迷宮に挑む者は地面のマグマと、頭上のマグマの両方に注意する必要があつた。

しかも、

「うきやー！」

「おっと、大丈夫かシア？」

「はう、有難うございます、ハジメさん。いきなりマグマが噴き出してくるなんて……：察

「知できませんでした」

「まあ、このマグマは『熱源感知』を持つてないと何処に出るか分かんねえしな……察知が難しいのも分かる」

ハジメはシアが言うように、壁のいたるところから唐突にマグマが噴き出してくるのである。本当に突然な上に、事前の兆候もないので察知が難しい。ハジメが『熱源感知』を持つていたのは幸いだった。それが無ければ、警戒のため慎重に進まざるを得ず攻略スピードが相当落ちていたところだった。

そして、なにより厳しいのが、茹だるような暑さ——もとい熱さだ。通路や広間のいたるところにマグマが流れているのだから当たり前ではあるのだが、まるでサウナの中にでもいるような、あるいは熱したフライパンの上にもいるような気分である。「グリユーエン大火山」の最大限に厄介な要素だった。

ハジメ達が、ダラダラと汗をかきながら、天井付近を流れるマグマから滴り落ちてくる雫や噴き出すマグマをかわしつつ進んでいると、とある広間で、あちこち人為的に削られている場所を発見した。ツルハシか何かで砕きでもしたのかボロボロと削れているのだが、その壁の一部から薄い桃色の小さな鉱石が覗いていた。

「お？ 静因石……だよな？ あれ」

「うむ、間違いないぞ、ご主人様よ」

ハジメの確認するような言葉に、知識深いテイオが同意する。どうやら、砂嵐を突破して「グリューエン大火山」に入れる冒険者の発掘場所のようだ。

「あるにはあるんだが……」

「……小さい」

「ほかの場所も小石サイズばかりですね……」

ユエの言う通り、残されている静因石は、ほとんどが小指の先以下のものばかりだった。ほとんど採られ尽くしたというのもあるのだろうが、サイズそのものも小さい。やはり表層部分では、静因石回収の効率が悪すぎるようで、一気に、大量に手に入るには深部に行く必要があるようだ。

ハジメは、一応、「鉱物系探査」で静因石の有無を調べ、簡単に採取できるものだけ、「宝物庫」に収納すると、ユエ達を促して先を急いだ。

暑さに辟易しながら、七階層ほど下に降りる。記録に残っている冒険者達が降りた最高階層だ。そこから先に進んだ者で生きて戻った者はいない。気を引き締めつつ、八階層へ続く階段を降りきった。

その瞬間、

ゴオオオオオ!!!

強烈な熱風に煽られたかと思うと、突如、ハジメ達の眼前に巨大な火炎が襲いかかっ

た。オレンジ色の壁が螺旋を描きながら突き進んでくる。

「『絶禍』」

そんな火炎に対し、発動されたのはユエの魔法。俺達の眼前に黒く渦巻く球体が出現する。重力魔法だ。ただし、それは対象を地面に押しつぶす為のものではなかった。

人など簡単に消し炭に出来そうな死の炎は、直径六十センチほどの黒く渦巻く球体に引き寄せられて余すことなく消えていく。余波すら呑み込むそれは、正確には消滅しているのではない。黒く渦巻く球体——重力魔法『絶禍』は、それ自体が重力を発生させるもので、あらゆるものを引き寄せ、内部に呑み込む盾なのだ。

火炎の砲撃が全てユエの超重力の渦に呑み込まれると、その射線上に襲撃者の正体が見えた。

「雄牛かアレは?」

それは、雄牛だった。全身にマグマを纏わせ、立っている場所もマグマの中。鋭い二本の曲線を描く角を生やしており、口から呼吸の度に炎を吐き出している。耐熱性があるにも程がある魔物だった。

マグマ牛は、自身の固有魔法であろう火炎砲撃をあつさり無効化されたことに腹を立てたのか、足元のマグマをドバツ! ドバツ! と足踏みで飛び散らせながら、突進の構えを取っている。

そんなマグマ牛に向かって、ユエの展開していた超重力の渦が、突如、マグマ牛に向かって弾けとんだ。その瞬間、圧縮されていた火炎は砲撃となつて一直線にマグマ牛へと疾走する。レーザーのごとき砲撃はそれを放ったマグマ牛のものより圧縮された分威力があつた。

今まさに、突進しようとしていたマグマ牛は出鼻をくじかれ、ユエにより、文字通りお返しとばかりに放たれた砲撃の直撃を受けた。

ドオゴオオ!!

爆音と共に空間が激しく振動し、マグマ牛の立つていたマグマが爆撃されたように吹き飛んだ。マグマ牛は、衝撃により後方へ吹き飛ばされ、もんどり打って壁に叩きつけられる。しかし、「ギユオオオ!!」と悲鳴とも怒りの咆哮ともつかない叫びを上げると、すぐさま起き上がり、今度こそ、侵入者を排除せんと猛烈な勢いで突進を開始した。

「むう……やっぱり、炎系は効かないみたい」

「まあ、マグマを纏っている時点であ……仕方ないだろ」

火炎の砲撃を返したユエが不満そうな声を上げる。それに苦笑いしながらドンナーを抜こうとしたハジメにシアが待ったをかけた。

「ハジメさん、私にやらせて下さい!」

「いつになく積極的だな……あー、まさかシア、アレを試したいのか?」

「おつ、流石ハジメさん！ 分かってますねえ〜」

既にドリユツケンを手に気合充分な感じで鼻息を荒くしているシアに、ハジメは疑問を抱いたがシアがドリユツケンに仕込んである魔力を魔眼石で見ても、新機能を試したいのだと察し手をヒラヒラさせて了承の意を伝える。

シアは、「よっしゃーですう！ 殺つたるですう！」と気合の声を上げると、トツトツと軽くステップを踏み、既に数メートルの位置まで接近していたマグマ牛に向かって飛びかかった。

体を空中で一回転させ遠心力をたつぷり乗せると、正面から突っ込んできたマグマ牛に絶妙なタイミングでドリユツケンを振り下ろす。狙い変わらず、振り下ろされたドリユツケンは、吸い込まれるようにマグマ牛の頭部に直撃した。と、その瞬間、直撃した部分を中心にして淡青色の魔力の波紋が広がり、次いで、凄まじい衝撃が発生。マグマ牛の頭部がまるで爆破でもされたかのように弾けとんだ。

シアは、打ち付けたドリユツケンを支点にして空中で再び一回転すると、そのまま慣性にしたがって崩れ落ちながら地を滑るマグマ牛を飛び越えて華麗に着地を決めた。

「お、おう。ハジメさん、やった本人である私が引くくらいすごい威力ですよ、この新機能」

「ああ、みたいだな……『衝撃変換』。どんなもんかと思ったが、なかなか……」



ハジメだけでなく、ユエやテイオも思わず感心の声を上げてしまうくらい、なかなかの威力を発揮したシアの一撃。それは、ハジメが口にしたように、「衝撃変換」という固有魔法のおかげだ。この「衝撃変換」は、ハジメが手に入れた新たな固有魔法で、魔力変換の派生に位置づけられている。効果は文字通りで魔力を衝撃に変換することが出来るというものだ。

先日、「オルクス大迷宮」においてハジメが問答無用でミンチにした、あの馬頭の能力を、実は、杭を回収する時にこつそりと一緒に回収していた肉を喰らうことで手に入れたのだ。

並みの魔物では、もう能力どころかステータスも変動しないハジメであったが、ハジメが光輝達の位置を掴む原因となった光輝の「限界突破」の波動は相当なもので、それでも倒せなかった馬頭なら、あるいは効果があるのではと思いついてみたのだが……案の定、ステータスは目立つほど上昇しなかったものの、ハジメは馬頭の固有魔法を手に入れることが出来たのである。

そして、その「衝撃変換」を、生成魔法で鉱石に付加し、それを新たにドリユッケンに組み込んだというわけだ。

「……（まあ、アイツからの些細なプレゼントだと思っとくか）んじゃ、新機能は試したことだし進むぞ」

ハジメは、そう思いながら灰色髪の軍服を着た魔人族を思い出し微笑を浮かべた後、マグマ牛の爆ぜた頭部を見てから先に進んだ。

その後、階層を下げる毎に魔物のバリエーションは増えていった。マグマを翼から撒き散らすコウモリ型の魔物や壁を溶かして飛び出てくる赤熱化したウツボモドキ、炎の針を無数に飛ばしてくるハリネズミ型の魔物、マグマの中から顔だけ出し、マグマを纏った舌をムチのように振るうカメレオン型の魔物、頭上の重力を無視したマグマの川を泳ぐ、やはり赤熱化した蛇など……。

生半可な魔法では纏うマグマか赤熱化した肉体で無効化してしまう上に、そこかしこに流れるマグマを隠れ蓑に奇襲を仕掛けてくる魔物は厄介なこと極まりなかった。なにせ、魔物の方は、体当たりするだけでも人相手なら致命傷を負わせることが出来る上に、周囲のマグマを利用した攻撃も多く、武器は無限大と言つていい状況。更に、いざとなればマグマに逃げ込んでしまえば、それだけで安全を確保出来てしまうのだ。

例えば、砂嵐を突破できるだけの力をもった冒険者でも、魔物が出る八階層以降に降りて戻れなかったというのも頷ける。しかも、それらの魔物は、倒しても魔石の大きさや質自体は「オルクス大迷宮」の四十層レベルの魔物のそれと対して変わりがなく、貴重な鉱物である静因石も表層のものとはほとんど変わらないとあっては、挑戦しようという者がいないのも頷ける話らしい。

そして、なにより厄介なのは、刻一刻と増していく暑さだった。

「はあはあ……暑いですう」

「……シア、暑いと思うから暑い。流れているのは唯の水……ほら、涼しい、ふふ」

「むっ、ご主人様よ！ ユエが壊れかけておるのじゃ！ 目が虚ろになっておる！」

「ああ、そうだな……少し休むとするか」

暑さに強いティオ以外、ハジメ達ですらダウン状態だった。一応、冷房型アーティファクトで冷気を生み出しているのだが……焼け石に水状態。止めどなく滝のように汗が流れ、意識も朦朧とし始めているユエとシアを見て、ハジメもあご先に滴る汗を拭くと、少し休憩が必要だと考えた。

ハジメは、広間に出ると、マグマから比較的に離れている壁に“錬成”を行い横穴を開けた。そこへユエ達を招き入れると、マグマの熱気が直接届かないよう入口を最小限まで閉じた。更に、部屋の壁を“鉱物分離”と“圧縮錬成”を使って表面だけ硬い金属でコーティングし、ウツボモドキやマグマの噴射に襲われないよう安全を確保する。

「ふう……ユエ、氷塊を出してくれ。しばらく、休憩しよう。でないと、その内致命的なミスを犯しそうだ」

「ん……了解」

ユエは、虚ろな目をしながらも、しつかり水系の魔法を発動させ部屋の中央に巨大な

氷塊を出現させた。気をきかせたティオが、氷塊を中心にして放射するように風を吹かせる。氷塊が発する冷気がティオの風に乗って部屋の空気を一気に冷やしていった。

「はうあくく、涼しいですうく、生き返りますうく」

「…………ふみゆく」

女の子座りで崩れ落ちたユエとシアが、目を細めてふにやりとする。正に、タレユエとタレシアの誕生だ。

ハジメは、内心そんな二人に萌えながら“宝物庫”からタオルを取り出すと全員に配った。

「ユエ、シア、だれるのはいいけど、汗くらいは拭いておけよ。冷えすぎると動きが鈍るからな」

「…………んく」

「了解ですうく」

間延びした声で、のろのろとタオルを広げるユエとシアを横目に、ティオがハジメに話かける。

「ご主人様は、まだ余裕そうじゃの？」

「いや、ティオほどじゃない。流石に、この暑さは俺でもヤバイ。もつといい冷房系のアーティファクトを揃えておくんだつたと後悔してる……」

「ふむ、ご主人様でも参る程ということは……おそらく、それがこの大迷宮のコンセプトなのじゃろうな」

「コンセプト？」

参るほどではないとは言え、暑いものは暑いので同じく汗をかいているテイオがタオで汗を拭いながら言った言葉に、ハジメが首をかしげる。

「うむ。ご主人様から色々話を聞いて思ったのじゃが、大迷宮は試練なんじゃろ？」

神々に挑むための……なら、それぞれに何らかのコンセプトでもあるのかと思つたのじゃよ。例えば、ご主人様が話してくれた「オルクス大迷宮」は、数多の魔物とのバリエーション豊かな戦闘を経て経験を積むこと。「ライセン大迷宮」は、魔法という強力な力を抜きに、あらゆる攻撃への対応力を磨くこと。この「グリュエン大火山」は、暑さによる集中力の阻害と、その状況下での奇襲への対応といったところではないかのぉ？」

「……なるほどな、攻略することに変わりはないから特に考えたことなかったが……試練そのものが解放者達の“教え”になつてゐるってことか」

それなら道理がつくとハジメはテイオの考察に頷く。知識深く、思慮深くもあるテイオに、普段から肉感的で匂い立つような色気がある上に理知的でもある黒髪美女の彼女に尊敬の眼差しを向ける。

しかし、テイオの首筋から流れた汗がツツと滴り落ちて、その豊満な胸の谷間に消えていくのを目にすると、何となく顔を逸らした。そして、その視線の先に、同じように汗で服が張り付いて、濡れた素肌が見え隠れしているユエとシアがいることに気がつき、今度は、更に視線を上にはずらした。

すると、ハジメのすぐ眼前まで四つん這いでやって来たユエは、胡座をかいて座るハジメを下から上目遣いで見つめると、甘えるような、誘うような甘い声音で……。

「……ハジメが綺麗にして？」

「……はあ、しようがねえな」

「……ありがと」

そしてハジメはユエの身体を拭こうとすると、シアもハジメに拭いて貰いたいよううで声を上げる。

「ハジメさんっ。私も体をユエさんみたいにタオルで拭いて欲しいですっ！テイオさんもそうでしょ？」

「まあ、ご主人様は、妾の胸に少し反応しておったしのお。今回は、それで満足してくのじゃ。くふふ」

そんな発言をするテイオ。最初に、テイオの胸元を流れる汗に、ハジメがセクシーさを感じたことがバツチリばれていたらしい。それを聞いたシアが、「ズルいですっ！」と

怒り出し、先程のTPOを弁えろと言ったことも忘れて、ハジメの前で脱ぎだした。しかし、「それは駄目じゃ」とティオが拳骨をしてシアを気絶させる。

「ティオ、助かった」

「構わんよ、それに……妾もご主人様に拭いて貰いたいのじゃが、良いかの？」

「はいよ」

そんな事を言うティオにハジメは苦笑いをしながら了承する。ティオは恥ずかしさと嬉しさが混ざったような何とも言えない表情（良い意味）をしていた。

「……しかしなく」

なんでこんなに自分の事が好きな連中がおるのかとハジメは溜息を一つ吐いてからハジメは胸をモロ出したシアをタオルで隠してからハジメはユエから順に汗を拭いていくのであった。

因みに起きたシアも一人だけ拭いて貰えないのは悪いと思いい汗を拭くことにした。その時のシアはウサ耳をピコピコさせながら喜んでいたのであった……。

## 五十二話 大火山の深層

「グリユーエン大火山」たぶん、きつと五十層くらい。

それが、現在、ハジメ達がいる階層だ。なぜ「たぶん」なのか。それは、ハジメ達に置かれた状況が少々特異なので、はつきりと現在の階層がわからないからである。

具体的には、ハジメ達は宙を流れる大河の如きマグマの上を赤銅色の岩石で出来た小舟のようなものに乗ってどんぶらここと流されているのだった。

「しくじったな……」

自分の判断ミスで溜息を吐きながらそんな事を呟いた。

なぜ、ハジメ達がこんな事態になったのは少し前の階層に遡る。その階層で攻略しながらも静因石を探していたハジメ達は、相変わらず自分達を炙り続けるマグマが時々不自然な動きを見せていることに気がついた。

具体的には、岩などで流れを邪魔されているわけでもないのに大きく流れが変わっていたり、何も無いのに流れが急激に遅くなっていたり、宙を流れるマグマでは一部だけ大量にマグマが滴り落ちていたり、というものである。



大抵、それは通路から離れたマグマの対岸だったり、攻略の障害にはならなかったのだ。気にも止めていなかったのだが、たまたま“鉱物系探査”の効果範囲にその場所が入り、その不自然な動きが“静因石”を原因としていることが判明したのである。マグマそのものに宿っているらしい魔力が“静因石”により鎮静されて、流れが阻害された結果だったのだ。

ハジメ達は、ならば、マグマの動きが強く阻害されている場所に“静因石”は大量にあるはずと推測し探した結果、確かに大量の“静因石”が埋まっている場所を多数発見したのである。マグマの動きに注意しながら、相当な量の“静因石”を集めたハジメ達は、予備用にもう少しだけ集めておこうと、とある場所に向かった。

そこは、宙に流れるマグマが大きく壁を迂回するように流れている場所だった。ハジメが錬成を使って即席の階段を作成して近寄り、“鉱物系探査”を使うと充分な量の“静因石”が埋まっていることがわかった。

早速、錬成の“鉱物分離”を使い静因石だけを回収するハジメだったが、暑さによる集中力の低下と何度も繰り返した“静因石”の回収に油断があったのか、壁の向こう側の様子というものに注意が向いていなかった。

自分のミスに気が付いたのは、“静因石”を“宝物庫”に収納し、その効力が失われた瞬間、“静因石”が取り除かれた壁の奥からマグマが勢いよく噴き出した後である。

咄嗟に飛び退いたが、噴き出すマグマの勢いは激しく、まるで亀裂の入ったダムから水が噴出し決壊するように、穴を押し広げて一気になだれ込んできた。

あまりの勢いに一瞬で周囲をマグマで取り囲まれたハジメ達は、ユエが、障壁を張って凌いでいる間に、ハジメが錬成で小舟を作り出しそれに乗って事なきを得たのである。小舟は、直ぐに灼熱のマグマに熱せられたが、ハジメが「金剛」の派生「付与強化」により小舟に金剛をかけたので問題はなかった。

そして、流されるままにマグマの上を漂っていると、いつの間にか宙を流れるマグマに乗って、階段とは異なるルートで「グリーンエン大火山」の深部へと、時に灼熱の急流滑りを味わいながら流されていき、現在に至るといわわけだ。

ちなみに、マグマの空中ロードに乗ったとき、普通に川底を抜けそうになったのだが、シアが咄嗟に重力魔法「付与効果」で小舟の重さを軽減したのでマグマに乗ることができた。「付与効果」は、シアが触れているものの重量を、自身の体重と同じように調整出来るというものだ。

「あつ、ハジメさん。またトンネルですよ」

「そろそろ、標高的には麓辺りじゃ。何かあるかもしれないぞ?」

シアが指差した方向を見れば、確かに、ハジメ達が流されているマグマが壁に空いた大穴の中に続いていた。マグマ自体に照らされて下方へと続いていることが分かる。

今までも、洞窟に入る度に階層を下げてきたので、普通に階段を使って降りるよりショートカットになっているはずだ。

テイオの忠告に領きながら、いぎ、洞窟内に突入していく。マグマの空中ロードは、広々とした洞窟の中央を蛇のようにくねりながら続いている。と、しばらく順調に高度を下げていたマグマの空中ロードだが、カーブを曲がった先でいきなり途切れていた。いや、正確には滝といっても過言ではないくらい急激に下っていたのだ。

「またかつ、全員振り落とされるなよー」

内心舌打ちしながらハジメの言葉にユエ達も領き、小舟の縁やハジメの腰にしがみつ。ジェットコースターが最初の落下ポイントに登るまでの、あのジワジワとした緊張感が漂う中、遂に、ハジメ達の小舟が落下を開始した。

ゴウオゴウオ

耳元で、そんな風の吹き荒れる音がする。途轍もない速度で激流と化したマグマを、シアの重力魔法を使った体重移動とテイオの風によって制御しながら下っていく。マグマの粘性など存在しないとばかりに速度は刻一刻と増していった。

ハジメは、靴裏にスパイクを錬成し体を固定しながら、油断なく周囲を警戒する。

しかし、こういう時に限って……

「ちっ、やっぱり出たか」

ハジメは舌打ちすると同時にドンナーを抜き、躊躇いなく引き金を引いた。周囲に轟く炸裂音。それが三度響くと共に三条の閃光が空を切り裂いて目標を違わず撃破する。襲いかかってきたのは翼からマグマを撒き散らすコウモリだった。

このマグマコウモリは、一体一体の脅威度はそれほど高くない。かなりの速度で飛べることとマグマ混じりの炎弾を飛ばすくらいしか出来ない。雑魚同然の敵である。

だが、マグマコウモリの厄介なところは、群れで襲って来るところだ。一匹見つけたら三十匹はいると思え、という黒いGのような魔物で、岩壁の隙間などからわらわらと現れるのである。

今も、三羽のマグマコウモリを瞬殺したが、案の定、激流を下る際の猛スピードがもたらす風音に紛れて、おびただしい数の翼がはためく音が聞こえ始めた。

「……ハジメ、左と後ろ、任せて」

「ああ、任せた。シア、ティオ、船の制御は頼んだ」

「はいですー！」

「うむ、任された」

ティオの冗談とも本気ともつかない変態発言はスルーして、ハジメとユエが小舟の上で対角線上に背中合わせになった直後、マグマコウモリの群れがその姿を見せた。

それはもう、一つの生き物といっても過言ではない。おびただしい数のマグマコウモ

りは、まるで鳥類の一糸乱れぬ集団行動のように一塊となつて波打つように動き回る。その姿は傍から見れば一匹の龍のようだ。翼がマグマを纏い赤く赤熱化しているので、さながら炎龍といったところだろう。

一塊となつて迫つてきたマグマコウモリは、途中で二手に分かれると、前方と後方から挟撃を仕掛けてきた。いくら一体一体が弱くとも、一つの巨大な生き物を形取れる程の数では、普通は物量で押し切られるだろうがハジメには通じない。

「殲滅してやるよ」

ハジメはそう呟き、「宝物庫」から「メツエライ」を取り出すと、腰だめに構えて、そのトリガーを引いた。

ドウルルルルル!!

独特の射撃音を響かせながら、恐るべき威力と連射を遺憾無く發揮した殺意の嵐は、その弾丸の一発一発を以て遙か後方まで有無を言わせず貫き通す。洞窟の壁を破砕するまでの道程で射線上にいたマグマコウモリは、一切の抵抗も許されず粉碎され地へと落ちていった。

「ほらよ。追加だ」

更に、ハジメはオルカンを取り出すと「メツエライ」を持つ手とは反対の手で肩に担ぎ、容赦なくその暴威を解放した。火花の尾を引いて飛び出したロケット弾は、メツエ

ライの弾幕により中央に固められた群れのだと真ん中に突き刺さり、轟音と共に凄絶な衝撃を撒き散らした。

結果は明白。木っ端微塵に砕かれたマグマコウモリの群れは、その体の破片を以て一時のスコールとなった。そして、後方から迫っていたマグマコウモリも同じようなものだ。

「『嵐龍』」

ユエが右手を真つ直ぐ伸ばし、そう呟いた瞬間、緑色の豪風が集まり球体を作った。そして瞬く間に、まるで羽化でもするかのように球形を解いて一匹の龍へと変貌する。緑色の風で編まれた『嵐龍』と呼ばれた風の龍は、マグマコウモリの群れを一睨みすると、その顎門を開いて哀れな獲物を喰らい尽くさんと飛びかかった。

当然、マグマコウモリ達は、炎弾を放ちつつも、『嵐龍』を避けるように更に二手に分かれて迂回しようとした。しかし、ユエの『龍』は、その全てが重力魔法との複合魔法だ。当然、『嵐龍』も唯の風で編まれただけの龍ではなく、風刃で構成され、自らに引き寄せる重力を纏った龍であり、一度、発動すれば逃れることは至難だ。

マグマコウモリ達は、いつか見た『雷龍』や『蒼龍』の餌食となつた魔物達のように、抗うことも許されず『嵐龍』へと引き寄せられ、風刃の嵐に肉体を切り刻まれて血肉を撒き散らし四散した。なお、ユエが『雷龍』や『蒼龍』を使わなかつたのは、マグ

マコウモリが熱に強そうだった事と、翼を切り裂けば事足りると判断したためである。

最後に、「嵐龍」は群れのと真ん中で弾け飛ぶと、その体を構成していた幾百幾千の風刃を全方向に撒き散らし、マグマコウモリの殲滅を完了した。

「うゝむ、ご主人様とユエの殲滅力は、いつ見ても恐ろしいものがあるのお」

「流石ですう！」

「お前達もよくやったよ」

小舟を制御して激流に上手く乗りながら、ティオとシアが苦笑い気味に称賛を送る。それに肩を竦めつつメツエライとオルカンを「宝物庫」にしまったハジメは、得意気に胸をはるユエの頭を撫で、シアのウサミミを軽く撫で、ティオには頭をポンと手を置き、前方に視線を戻した。ユエ達も、頭を撫でられたりしたこと目元を緩めて嬉しそうにしながら視線を周囲の警戒に戻す。

マグマの激流空中ロードを、魔物に襲われながら下っているというのに結構余裕のあるハジメ達。だが、その余裕に釘を刺したかったのか、今まで下り続けていたマグマが突然上方へと向かい始めた。

勢いよく数十メートルを登ると、その先に光が見えた。洞窟の出口だ。だが、問題なのは、今度こそ本当にマグマが途切れていることであつた。

「……掴まれ！」

ハジメの号令に、再び、小舟にしがみつくユエ達。小舟は、激流を下つてきた勢いそのままに猛烈な勢いで洞窟の外へと放り出された。

襲い来る浮遊感に、ハジメは素早く周囲の状況を把握する。飛び出した空間は、かつて見た【ライセン大迷宮】の最終試験の部屋よりも尚、広大な空間だった。

【ライセン大迷宮】の部屋と異なり球体ではなく、自然そのままに歪な形をしているため正確な広さは把握しきれないが、少なくとも直径三キロメートル以上はある。地面はほとんどマグマで満たされており、所々に岩石が飛び出していて僅かな足場を提供していた。周囲の壁も大きくせり出している場所もあれば、逆に削れているところもある。空中には、やはり無数のマグマの川が交差していて、そのほとんどは下方のマグマの海へと消えていつている。

ぐつぐつと煮え立つ灼熱の海とフレアのごとく噴き上がる火柱。地獄の釜というものがあつたのなら、きっとこんな光景に違いない。ハジメ達は、ごく自然にそんな感想を抱いた。だが、なにより目に付いたのは、マグマの海の中央にある小さな島だ。海面から十メートル程の高さにせり出ている岩石の島。それだけなら、ほかの足場より大きいというだけなのだが、その上をマグマのドームが覆っているのである。まるで小型の太陽のような球体のマグマが、島の中央に存在している異様さは視線を奪うには十分だった。



「風よ」

飛び出した勢いでひっくり返った小舟を、テイオが空中で立て直し、それぞれ己の姿勢を制御して再び乗り込んだ。ユエが、小舟の落下速度を「来翔」で調整する。柔らかなマグマの海に着地した小舟の上で、明らかに今までと雰囲気異なる場所に、警戒を最大にする。

「……あそこが住処？」

ユエが、チラリとマグマドームのある中央の島に視線をやりながら呟く。

「階層の深さ的にも、そう考えるのが妥当だが、そうなるか……」

「最後のガーディアンがいるはず……じゃな？　ご主人様よ」

「シヨートカットして来たっばいですし、とつくに通り過ぎたと考えてはダメですか？」  
ハジメの考えをテイオが確認し、僅かな異変も見逃さないと鋭い視線を周囲に配る。そんなハジメ達の様子に気を引き締めながらも、シアがとある方向を見ながら樂觀論を呟いてみた。

ハジメが、シアの視線をたどると、大きな足場とその先に階段があるのが見えた。おそらく、正規のルートをとれば、その階段から出てくることになるんだと推測する。

しかし、いくらマグマの空中ロードに乗って流れてくるのが普通は有り得ないことだとしても、大迷宮の最終試練までシヨートカット出来たと考えるのは樂觀が過ぎると

いうものだ。シアも、そうだったらいいなあ〜と口にしつつも、その鋭い表情はまるで信じていない事を示している。

その警戒が正しかった事は、直後、宙を流れるマグマから、マグマそのものが弾丸のごとく飛び出してくるという形で証明された。

「むっ、任せよー！」

ティオの掛け声と共に魔法が発動し、マグマの海から炎塊が飛び出して頭上より迫るマグマの塊が相殺された。

しかし、その攻撃は唯の始まりの合図に過ぎなかったようだ。ティオの放った炎塊がマグマと相殺され飛び散った直後、マグマの海や頭上のマグマの川からマシンガンのごとく炎塊が撃ち放たれたのだ。

「ちっ、散開だー！」

このままでは、小舟ごと今いる場所に釘付けにされると判断したハジメは、小舟を放棄して近くの足場に散開するように指示を出した。凄まじい物量の炎塊が一瞬前までいた小舟を粉碎し、マグマの海へと沈めていく。

ハジメ達は、それぞれ別の足場に着地し、なお、追ってくるマグマの塊を迎撃していった。迎撃そのものは切羽詰るといふほどのものではなかったのだが、いつ終わるともされない波状攻撃に苛立たしげな表情を俺は見せる。それは、マグマの海により、景色が

歪むほど熱せられた空気も原因だろう。

そんな状況を打開すべく、ハジメは、ガンスピンしてドンナー・シユラークのリロードを終えると同時に、振り返らず肩越しにシユラークの銃口を真後ろに向けた。そして、前方に向けた義手の肘から散弾を発射してマグマの塊を迎撃しつつ、背後でユエに迫っていたマグマの塊を、シユラークの連射で撃ち落としていく。

その意図を、言葉はなくとも正確に読み取ったユエは、一瞬出来た隙について重力魔法を発動させる。

「『絶禍』」

響き渡る魔法名と共に四人の中間地点に黒く渦巻く球体が出現し、飛び交うマグマの塊を次々と引き寄せていった。黒き小さな星は、呑み込んだ全てを超重力のもと押し潰し圧縮していく。

「いっそ、乗り込むか」

ユエの魔法により炎塊の弾幕に隙ができ、ハジメは、『空力』で宙を跳ぶと一気にマグマドームのある中央の島へと接近した。

ハジメ達を襲う弾幕で一番厄介なのは、止める手段が目に見えないことだ。場所的に、明らかに「グリューエン大火山」の最終試験なのだが、今までの大迷宮と異なり目に見える敵が存在しないので、何をすればクリアと判断されるのかが分からない。その

ため、もつとも怪しい中央の島に乗り込んでやろうと思いつたのだ。

ハジメは、中央の島へと宙を駆けながら「念話」を使ってユエに連絡を取る。

「中央の島を調べる。援護を頼む」

「了解」

ユエの「絶禍」の効果範囲からマグマの塊がハジメを襲うが、そうはさせじとテイオがマグマの海より無数に炎弾を飛ばして迎撃し、シアもドリユツケンを戦鎚に展開せずシヨットガンモードで迎撃していく。ユエは、「絶禍」を展開維持しながら、更にテイオと同じく炎弾をマグマの海より作り出して迎撃に当たった。

ユエ達の援護をもらって、一直線に中央の島へと迫ったハジメは、「空力」による最後の跳躍を行い飛び移ろうとした。

だが、その瞬間、

「ゴオアアアアア!!!」

「っ?!——下かっ!」

そんな腹の底まで響くような重厚な咆哮が響いたかと思うと、宙を飛ぶ俺の直下から大口を開けた巨大な蛇が襲いかかってきた。その巨大な蛇は全身にマグマを纏わせているせい、周囲をマグマで満たされたこの場所では熱源感知にも気配感知にも引つかからず、そして、マグマの海全体に魔力が満ちているようなので魔力感知にも引つか

らなかつたことから、完全な不意打ちと形になってしまった。

「チィッ……！」

ハジメは不意打ちの形を取られながらも、超人的な反応速度で体を捻ると、辛うじてその顎門による攻撃を回避していく。

一瞬前までハジメがいた場所を、マグマ蛇がバクンツ！ と口を閉じながら通り過ぎる。ハジメは、空中で猫のように体を反転させながら、銃口を通り過ぎるマグマ蛇の頭に照準し発砲した。必殺の破壊力を秘めた閃光が狙い違わずマグマ蛇の頭を捉え、弾き飛ばすが……

「なにっ!？」

マグマ蛇は健在であり、ハジメは驚愕の声をあげる。マグマ蛇の頭部は確かに弾け飛んだのだが、それはマグマの飛沫が飛び散っただけであり、中身が全くなかつたのだ。今までの「グリューエン大火山」の魔物達は、基本的にマグマを身に纏ってはいたが、それはあくまで纏っているものであって肉体がきちんとあつた。断じて、マグマだけで構成されていたわけではない。

ハジメは直ぐに立ち直ると、物は試しにと頭部以外の部分を滅多撃ちにした。幾条もの閃光が情け容赦なくマグマ蛇の体を貫いていくが、やはり、どこにも肉体がないことを確認する。

「どうやら、ホントにこの蛇はマグマだけで構成されてるらしいな」

ハジメは眉を顰めながらも、取り敢えず、体のあちこちを四散させたことでマグマ蛇を行動不能に出来たので、その脇を通り抜け “空力” で中央の島へ再度跳ぼうとした。

だが、マグマ蛇の攻撃は、まだ終わってなく、ハジメが、脇を抜けようとした瞬間、頭部を失い体中を四散させておきながらも突如身をくねらせ体当たりをした。

「チツ……面倒なっ！」

ハジメは、義手のシヨットシエルを激発させ、その反動で体を流しギリギリ回避に成功した。

「ふう……っ！」

一息吐いた瞬間、ハジメの背筋を悪寒が駆け抜けた。ハジメは、本能に従って、間髪入れず義手のシヨットシエルを連続して激発させながら、“空力” も併用してその場を高速で離脱する。

すると、ハジメの軌跡を追うようにしてマグマの海からマグマ蛇が次々と飛び出し、その巨大な顎門をバクンツ！ バクンツ！ と閉じていった。

「あつ、ぶねえ……」

ハジメは、宙をくるくると回りながら後退すると近くの足場に着地する。その傍にユ

工達もやって来た。ハジメが襲われている間に、炎塊の掃射は一時止んだようだ。

「……ハジメ、無事？」

「ああ、問題ない。それより、ようやく本命が現れたようだ」

ハジメの腕にそつと触れながら安否を気遣うユエに、ハジメは前方から目を逸らさず、そつと触れ返すことで応える。その目には、ザバア！ と音を立てながら次々と出現するマグマ蛇の姿が映っていた。

「やはり、中央の島が終着点のようじゃの。通りたければ我らを倒していけと言わんばかりじゃ」

「でも、さつきハジメさんが撃った相手、普通に再生してますよ？ 倒せるんでしょっか？」

遂に二十体以上のマグマ蛇がその鎌首をもたげ、ハジメ達を睥睨するに至った。最初に、ハジメから銃撃を受けたマグマ蛇も、既に再生を終え何事もなかったかのように元通りの姿を晒している。

シアが、眉をしかめてその点を指摘した。ライセン大迷宮のときは、再生する騎士に動揺していたというのに、今は、冷静に攻略方法を考えているようだ。それを示すようにウサミミがピコピコと忙しく動き回っている。ハジメは、随分と遅しくなったものだど苦笑いしつつ、自分の推測を伝えた。

「おそらく、バチユラム系の魔物と同じで、マグマを形成するための核、魔石があるんだろう。マグマが邪魔で俺の魔眼でも位置を特定出来ないが……それをぶち壊すしか攻略法はないな」

ハジメの言葉に全員が頷くのと、総数二十体のマグマ蛇が一斉に襲いかかるのは同時だった。

マグマ蛇達は、まるで、太陽フレアのように噴き上がると頭上より口から炎塊を飛ばしながら急迫する。二十体による全方位攻撃だ。普通なら逃げ場もなく大質量のマグマに呑み込まれて終わりだろう。

「ティオー」

「わかったのじゃー！久しぶりの一撃存分に味わうが良い！」

ハジメの掛け声に反応したティオはそう言っただけで揃って前に突き出された両手の先には、膨大な量の黒色魔力。それが瞬く間に集束・圧縮されていき、次の瞬間には、一気に解き放たれた。

それは竜人族のブレスだ。

かつて、ハジメをして全力の防御を強いた恐るべき威力を誇る黒色の閃光は、ティオの正面から迫っていたマグマ蛇を跡形もなく消滅させ、更に横薙ぎに振るわれたことにより、あたかも巨大な黒色閃光のブレードのようにマグマ蛇達を消滅させていった。



一気に八体ものマグマ蛇が消滅し、それにより出来た包囲の穴から、ハジメ達は一気に飛び出した。

「クハッ……流石は大迷宮っ」

矢張りと言うべきか跡形もなく消し飛ばされれば、魔石がどこにあるとも一緒に消滅しただろうと思われたが、そう簡単には行かなく、ハジメは苦笑いしながら悪態を吐きながら、マグマ蛇を見る。

ハジメ達が数瞬前までいた場所に着弾した十二体のマグマ蛇は、足場を粉碎しながらマグマの海へと消えていったものの、再び出現する時には、きっちり二十体に戻っていらてハジメはマグマ蛇を見ながらハジメは疑問を呈す。

「しかし、魔石が吹き飛んだ瞬間は確認したぞ？ 倒すことがクリア条件じゃないのか？」

確かにハジメはテイオのプレスがマグマ蛇に到達した瞬間から“瞬光”を発動し、跳ね上がった動体視力で確かにマグマ蛇の中に魔石がありプレスによって消滅した瞬間を確認した筈だ。

そんな事を思いながらハジメが迷宮攻略の方法に考えていると、シアが中央の島の方を指差し声を張り上げた。

「ハジメさん！ 見て下さい！ 岩壁が光ってますう！」

「なに？」

言われた通り中央の島に視線をやると、確かに、岩壁の一部が拳大の光を放っていた。オレンジ色の光は、先程までは気がつかなかったが、岩壁に埋め込まれている何らかの鉱石から放たれているようだった。

ハジメが「遠見」で確認すると、保護色になっていてわかりづらいが、どうやら、かなりの数の鉱石が規則正しく中央の島の岩壁に埋め込まれているようだとわかった。中央の島は円柱形なので、鉱石が並ぶ間隔と島の外周から考えると、ざっと百個の鉱石が埋め込まれている事になる。そして、現在、光を放っている鉱石は八個……先程、テイオが消滅させたマグマ蛇と同数だった。

「なるほどな……このマグマ蛇を百体倒すつてのがクリア条件つてところか」

「……この暑さで、あれを百体相手にする……迷宮のコンセプトにも合ってる」

ただでさえ暑さと奇襲により疲弊しているであろう挑戦者を、最後の最後で一番長く深く集中しなければならぬ状況に追い込む。

確かに、ハジメ達も相当精神を疲労させている。しかし、その表情には疲労の色はなく、攻略方法を見つけさえすればどうとでもしてやるという不敵な笑みしか浮かんでいなかった。

そうして全員が、やるべき事を理解して気合を入れ直した直後、再び、マグマ蛇達が

襲いかかった。マグマの塊が豪雨のごとく降り注ぎ、大質量のマグマ蛇が不規則な動きを以て獲物を捉え焼き尽くさんと迫る。

ハジメ達は再び散開し、それぞれ反撃に出た。

ティオが竜の翼を背から生やし、そこから発生させた風でその身を浮かせながら、真空刃を伴った竜巻を砲撃の如くぶつ放す。風系統の中級攻撃魔法「砲皇」だ。

「これで九体目じゃ！ 今のところ妾が一步リードじゃな。ご主人様よ！ 妾が一番多く倒したらご褒美を所望するぞ！ もちろん、二人つきりで一晩じゃ！ もちろん優花からの許可は貰っておるぞ！」

九体目のマグマ蛇を吹き飛ばし切り刻みながら、そんな事をのたまうティオ。呆れた表情で「いつの間に許可を貰ってんだよ」と呟くハジメだったが、シアがそれを遮る。

「なっ！ ティオさんだけじゃないです！ 私も参戦しますよ！ ハジメさん、私も勝つたら一晩ですよ！」

「えっ？ あっ、おっ——」

そんな事を叫びながら、シアは、跳躍した先にいるマグマ蛇の頭部にドリユッケンを上段から振り下ろした。インパクトの瞬間、淡青色の魔力の波紋が広がり、次いで凄絶な衝撃が発生。頭部から下にあるマグマの海まで一気に爆砕した。弾けとんだマグマ蛇の跡にキラキラした鉱物が舞っている。『魔衝波』の衝撃により砕かれた魔石だ。

一体のマグマ蛇を屠った空中のシアに、背後からマグマの塊が迫る。シアは、ドリユッケンを激発させ、その反動で回避した。しかし、それを狙っていたかのように、シアが落ちる場所にマグマ蛇が顎門を開いて襲いかかる。

しかし、シアは特に焦ることもなく、背中のホルスターから取り出した一枚の円盤を宙に放り投げた。その直径三十センチ程の大きさの円盤は、落下することなくシアの少し下方で宙に浮き、シアは、その上を足場にして重さを感じさせずに再度宙を舞った。

この円盤は、クロスビット等と同じ原理の空飛ぶ足場で、シアの意思に従って感応石により操作される。これに、シア自身の体重操作が加われば、まさに「宙を舞う」という戦闘が可能になる。目測を外されシアの下方を虚しく通り過ぎるマグマ蛇に、シアは変形させたドリユッケンの銃口を向けてトリガーを引いた。撃ち放たれたのはいつもの散弾ではなくスラッグ弾だ。

ただし、普通のスラッグ弾ではない。ハジメ特製の「魔衝波」が付与された特殊鉱石を使った弾丸で、着弾と同時に込められた魔力が衝撃波に変換される。威力だけなら、グレネード弾を遥かに凌ぐレベルだ。

ドリユッケンの咆哮と共に飛び出した炸裂スラッグ弾は、狙い違わず背後からマグマ蛇に直撃し、頭部から胴体まで全てを巻き込んで大爆発を起こした。その衝撃で、再び、砕け散った魔石がキラキラと宙を舞う。

「おい、コラお前等。俺の……」

「……なら、私も二人つきりで一晚か優花も入れて三人で一晚」

「おい、ユエっ！ お前は何言ってるんだ！」

ハジメは、ティオとシアの勝手な競争にツツコミを入れようと口を開いたが、それを遮ってユエも討伐競争に参戦の意を示し、内容が内容でツツコンでしまった。

ユエは、楽しみという雰囲気醸し出しながら、しかし、魔法についてはどこまでも凶悪なものを繰り出した。最近十八番の「雷龍」である。

ただし、熟練度がどんどん上がっているのか、出現した「雷龍」の数は七体。それをほぼ同時に、それぞれ別の標的に向けて解き放った。雷鳴の咆哮が響き渡る。ユエに喰らいつこうとしていたマグマ蛇達は、逆にマグマの塊などものともしない雷龍の群れに次々と呑み込まれ、体内の魔石ごと砕かれていった。

その光景を見て、「やっぱり、ユエさんが一番の強敵ですうー」とシアが、「ユエはバグつとるよ！ 絶対、おかしいのじゃ！」とティオが、それぞれ焦りの表情を浮かべて悪態をつきつつ、より一層苛烈な攻撃を繰り出し、討伐数を伸ばしていった。

「はあ……まあ別に、いいけどな。楽しんでるようだし……しかし戻ったら優花を問いつめねえとな」

ハジメは、そんな自分が景品になっている競争に闘志を燃やす女子三人に肩を竦め愛

しの彼女の元に戻ったら問い詰めようと考えながら若干、諦めた感を醸し出したすも、背後から襲いかかってきたマグマ蛇に、振り向くことなく肩越しにシユラークを連射する。

放たれた弾丸は、マグマ蛇の各箇所均等に着弾し衝撃を以てそのマグマの肉体を吹き飛ばした。同時に、衝撃で魔石が宙を舞う。ハジメは、すつと半身になって前方から飛んできたマグマの塊をかわしながら、右のドンナーでマグマの海に落ちる寸前の魔石をピンポイントで撃ち抜いていく。

ハジメがシユラークで放った弾丸も、シアに渡したのと同じ炸裂弾だ。ただ、弾丸の大きさの問題で、炸裂スラッグ弾程の威力はでない。もちろん、シユラーゲンなどを使えば、それ以上の破壊力をもたらす事もできるが、今回は、初使用なので実験も兼ねて二丁の拳銃でも使用している。

拳銃サイズの弾丸では、一撃でマグマ蛇を魔石ごと吹き飛ばす威力はないため、ハジメは、大体二発ほど撃ってマグマの鎧を衝撃で吹き飛ばし、露出した魔石をドンナーでピンポイント狙撃する方法を取った。当然、レールガンならマグマの鎧など無視して魔石を貫通できるが、貫通力が高すぎて、位置を特定しづらい魔石を狙うには不適當だったのだ。

「……遅えよ」

更に、二体のマグマ蛇が左右から挟撃するが、「空力」と「縮地」で高速離脱すると、空中で上下逆さになり、シユラークを発砲する。

ドオパアアン!!

響く炸裂音は一発。しかし、解き放たれた殺意の塊は四発。猛烈な勢いで以て左右から襲いかかったマグマ蛇達は、突如、見失った獲物に混乱する暇もなく直上から襲いた衝撃にマグマの体を四散させ、核となっていた魔石を露出させる。

同時に、ドンナーから放たれた二条の閃光が、一ミリの狂いもなく二つの魔石を撃ち抜き粉砕した。

気が付けば、中央の島の岩壁、その外周に規則正しく埋め込まれた鉱石は、そのほとんどを発光させており、残り八個というところまで来ていた。本格的な戦闘が始まってから、まだ十分も経っていない。

【グリューエン大火山】のコンセプトが、悪環境による集中力低下状態での長時間戦闘だという推測が当たっていたのだとしたら、ハジメ達に対しては、完全に創設者の思惑は外れてしまったと言えるだろうな。

テイオのプレスが、マグマ蛇をまとめてなぎ払う。

——残り六体

シアの、ドリユツケンによる一撃と、ほぼ同時に放たれた炸裂スラッグ弾がマグマ蛇

をまとめて爆砕する。

——残り四体

ユエに対し、直下のマグマの海から奇襲をかけて喰らいつこうとしたマグマ蛇と直上から挟撃をしかけたマグマ蛇が、とぐろを巻いてユエを包み込んだ「雷龍」に阻まれ、立ち往生する。そして次の瞬間、その二体のマグマ蛇を四体の「雷龍」が逆に挟撃し、喰らい尽くす。

——残り二体

ハジメに、急速突進してきたマグマ蛇がマグマの塊を散弾のごとく撒き散らす。しかし、ゆらりゆらりと木の葉が舞うようにマグマの塊をかわしていき、マグマ蛇が喰らいつこうとした瞬間、交差しながらシユラークを発砲し弾け飛びながら慣性に従って吹き飛んだ魔石を見もせずにドンナーで狙撃し粉砕した。

遂に最後の一体となったマグマ蛇が、直下のマグマの海から奇襲をかけ、そのまま直上に「空力」で飛び上がると、真下からガバツと顎門を開いて迫るマグマ蛇の口内に向けてシユラークを発砲した。

着弾と同時に紅い衝撃波が撒き散らされ飛び散るマグマの隙間から僅かに魔石が姿を現す。ハジメは、右のドンナーを構えた。ユエ達が満足気な眼差しでハジメが最後の一撃を放つところを見つめている。



「これで、終わりだ」

それを視界の端に捉えながら、俺は「グリューエン大火山」攻略のための最後の一発を放った。

——その瞬間

「——ッ?!」

ズドオオオオオオオオオオ!!!

頭上より、極光が降り注いだ。

まるで天より放たれた神罰の如きそれは、ハジメがかつて瀕死の重傷を負った光。いや、それより遥かに強いかも知れない。大気すら悲鳴を上げるその一撃は、攻撃の瞬間という戦闘においてもっとも無防備な一瞬を狙って放たれ——ハジメを、最後のマグマ蛇もろとも呑み込んでいったのだった……。

## 五十三話 神代魔法の使い手

何の前触れもなく、突如、天より放たれた白き極光。

その光は、今まさに最後のマグマ蛇に止めを刺そうとしていたハジメに絶妙なタイミングで襲い掛かり、凄絶な熱量と衝撃を以てハジメを破壊の嵐の中へと呑み込んだ。

「ハ、ハジメえ!!!」

ユエの絶叫が響き渡る。ハジメが極光に飲み込まれる光景を、少し離れた場所から呆然と見ていることしか出来なかったシアとテイオだったが、出会ってこの方一度も聞いたことのないユエの悲痛な叫び声に、ハツと我を取り戻した。

轟音と共にハジメの真上から降り注いだ極光は、そのまま最後のマグマ蛇をも呑み込んで灼熱の海に着弾し、盛大に周囲を吹き飛ばしながら一時的に海の底をさらけ出す。極光は、しばらくマグマの海を穿ち続けたが、次第に細くなっていき、遂にはスつと虚空の中へと溶け込むように消えていった。

必死にハジメのもとへ飛んでいくユエの目に、消えた光の中から、ハジメの姿は無かった。

「えっ……ハ、ハジメ？」

ユエは極光が消えた後にハジメの姿は無く呆然と立ち尽くしていた。

と、その時、

「馬鹿者！ 上じや!!」

テイオの警告と同時に無数の閃光が豪雨の如く降り注いだ。それは、縮小版の極光だ。先程の一撃に比べれば十分の程度の威力と規模、されど一発一発が確実にその身を滅ぼす死の光だ。

ユエは、ハジメを探す事に気を取られすぎて上空から降り注ぐ数多の閃光に気が付いておらず、警告によって天を仰いだ時には魔法の発動がユエを以てして間に合わない状況だった。あと三秒、いや、一秒あれば……引き伸ばされた時間の中で、ユエは必死に防御魔法を頭の中で構築する。

「さっせんのじや！—— // 嵐空 // !」

その数秒を、駆けつけたテイオが稼ぐ。発動させたのは風系統の中級防御魔法 // 嵐空 // 。圧縮された空気の壁が死の雨を受け止める。直撃を受けた瞬間、大きくたわむ風の境界は、本来ならそのまま攻撃を跳ね返すことも出来るはずだったが、そのような余裕など微塵もなく、次々と着弾する小極光に早くも悲鳴を上げている。防げた時間は、やはりほんの数秒だった。

しかし、それで十分。

「――『聖絶』!」

ユエの防御魔法が発動する。本来なら『絶禍』を展開したかったが、いくら熟練度が上がり発動時間を短く出来るようになってきたとは言え、重力魔法の構築・発動は、他の属性魔法の比ではない。咄嗟に発動出来る上級レベルの防御魔法としては『聖絶』が適当だった。

ユエが、掲げた手の先に燦然と輝く光の障壁が出現し、半球状にユエを覆う。直後、テイオの展開していた『嵐空』が、遂に小極光の嵐に耐え切れず空気が破裂するような音と共に消滅し、同時に、その衰えぬ破壊の奔流が、その下に展開されていた光の障壁に殺到した。

ドドドドドドドドドツ!!!

大瀑布の如き圧力がユエを消滅させんと間断なく襲い掛かり、ユエの『聖絶』を軋ませる。ユエは、想像以上の威力にこのままでは押し切られると判断し、展開中の『聖絶』を、全体を覆うバリア状から頭上のみを守るシールド状に変形させた。守護する範囲が狭くなった分、頑丈さが増す。周囲は、小極光の余波で荒れ狂い破壊し尽くされ、既にユエのいる場所以外の足場は粉微塵にされてマグマの海へと沈んでいった。

この小極光は、どうやら集中的にユエを狙っているらしく、少し離れたところの足場

にいるシアとテイオには足止め程度にしか降り注いでいないようだ。それでも、シアとテイオの二人が足止めされる程度には、威力も密度もある弾幕であり、尋常な攻撃でないことは確かである。

「ユエさん！ ユエさん！」

「落ち着くのじゃ、シア！ 今、妻の守りから出てはお主でも死ぬぞー！」

「でもお！ ユエさんが！それにハジメさんも……き、消えて……」

泣きそうな表情で小極光の豪雨の中に飛び出そうとするシアを、渦巻く風のシールドでその軌道を逸らしながら、テイオが必死に諫める。

テイオとて、ユエと消えたハジメが心配でならない。シアの気持ちは痛いほどわかる。しかし、縮小版とはいえ、ハジメが消えた拳句、あの破壊力の極光の雨の中へ無防備で飛び出させるわけには行かない。片手でシアの首根っこを掴みながら、必死に光の暴威を逸らし続ける。

十秒か、それとも一分か……永遠に続くかと思われた極光の嵐は最後に一際激しく降り注いだあと、ようやく終わりを見せた。周囲は、見るも無残な状態になっており、あちこちから白煙が上がっている。

ユエもテイオも魔力を使いきり、肩で息をしながら魔晶石にストックしてあった魔力を取り出して充填したと、同時に、上空から男の感嘆の声が降ってきた。

「……素晴らしい実力だ。やはり、ここで待ち伏せていて正解だった。お前達は強過ぎる。男の方は残念だったが……」

「……へえ……誰が残念だった？」

ドパアン！

「……！」

ユエ達は、その声があった天井付近に視線を向ける。そして驚愕に目を見開いた。なぜなら、いつの間にか、そこにはおびただしい数の竜とそれらの竜とは比べ物にならないくらいに巨体を誇る純白の竜が飛んでおり、その白竜の背に赤髪で浅黒い肌、僅かに尖った耳を持つ魔人族の男が……そして、魔人族の男の言葉を言い切る前にドンナーを撃ち遮ったのは自分達にとって愛しい人であるハジメがいたのだった

「ハアハア……」

「空力」を使い上空に佇むハジメは身体中が傷だらけで息を切らしていると下から声が聞こえた。

「ハジメエー！」

「ご主人様！」

「ハジメさん！」

三人はハジメの生存を知り、感嘆の声をあげたており、ハジメは三人に不敵な笑みを

浮かべ「俺は大丈夫だ」という顔をした。魔族の男は目を見開いて驚愕してたが誰にも気付かれぬような笑みを浮かべていたがハジメはその表情に気が付き目を細めて訝しんだ。

「……私のウラノスのブレスを直撃させても殺しきれんとはな。おまけに報告にあつた強力にして未知の武器、女達もだ。まさか総数五十体の灰竜の掃射を耐えきるなど有り得んことだ。流星は『イレギュラー』か。だが男の方は極光の毒素は喰らっているな」

そう、あの時……ハジメは極光が降り注ぐ瞬間、咄嗟に『紅狼』・『限界突破』を発動し、巨大な極光の直撃をともに受けずに避けたのだが完璧とはいかず、少なからずダメージを受けていたのだった。その後も縮小版の極光を回避していったのだが、回避は出来ず、コートも服もボロボロで義手も半ば融解しており眼帯は取れ、額から血を流しており魔族の男が言っていたように極光による毒素が体に回っていると思ひ身体が重く感じている状態だ。

「はあ……はあ、それが何だつてんだ？　それより魔族は礼儀がある種族かと思つたが違うようだな」

ハジメは不敵な笑みを浮かべ魔族の男を煽ると、魔族の男は、それに眉を一瞬ピクリと動かし、「そうか、やはりウィリスは……」と呟いた後、後方をチラ見した後、ハジメ達に聞こえる声音で答えた。

「私の名はフリード・バグアー。異教徒共に神罰を下す忠実なる………」  
「神の使徒」である」

「……神の使徒……ね。大仰だな。神代魔法を手に入れて、そう名乗ることが許されたところか？ 魔物を使役する魔法じゃねえよな？ これ程の極光を放てるような魔物が、うじゃうじゃいて堪るかかってんだ。おそらく、魔物を作る類の魔法じゃないか？ 強力無比な軍隊を作れるなら、そりゃあ神の使徒くらい名乗れるだろうよ」

「……その通りだ。神代の力を手に入れた私に、『アルヴ様』は直接語りかけて下さった。『我が使徒』と。故に、私は、己の全てを賭けて主の望みを叶える。その障碍と成りうる貴様等の存在を、私は全力で否定する」

「……？」

ハジメは魔人族の男——改めフリードの言葉が途切れ途切れな話し方とその自分の立場を忌避するような表情に目を細め訝しむが……

今は関係ない。

——俺の目的の邪魔、敵対をするのなら……

ハジメは自分の信念を脳裏を過ぎらせると、不敵に笑い。回復は遅いが、『魔力変換』の派生『治癒力』で魔力を治癒力に変えているので、止血だけは出来ている。左腕は義手が融解しているも使えないことはない。右手も骨が見えていても折れてはいない



から使える。「俺は、まだ戦える！」とハジメは、そう気合を入れ直した。

「それは、俺のセリフだ。俺の前に立ちはだかったお前は敵だ。敵は……殺すだけだ！」  
ハジメは、そう雄叫びを上げながら、激痛を堪えてドンナーをフリードに向け引き金を引いた。激発の反動に右腕と体が悲鳴を上げるが全て敵への殺意で振り伏せる。更に、「瞬光」を発動してクロスビットも取り出し突撃させ、雷魔法「雷槍」を二本放つた。それと同時に、ユエが「雷龍」を、テイオがブレスを、シアが炸裂スラッグ弾を放つ。しかし、「灰竜」と呼ばれた体長三、四メートル程の竜が数頭ひらりと射線上に入ると、直後、正三角形が無数に組み合わさった赤黒い障壁が出現し、攻撃を全て受け止めてしまった。

その障壁は、攻撃力が絶大であるために数秒程で直ぐに亀裂が入って砕けそうになるのだが、後から更に他の灰竜が射線上に入ると同じように障壁が何重にも展開されていき、思ったように突破が出来ない。よく見れば、竜の背中には亀型の魔物が張り付いているようだ。甲羅が赤黒く発光しているので、おそらく、障壁は亀型の魔物の固有魔法なのだろう。

「私の連れている魔物が竜だけだと思ったか？ この守りはそう簡単には抜けんよ。さあ、見せてやろう。私が手にしたもう一つの力を。神代の力を！」

そう言うと、フリードは極度の集中状態に入り、微動だにせずにブツブツと詠唱を唱

え始めた。手には、何やら大きな布が持たれており、複雑怪奇な魔法陣が描かれているようだ。

新たに手に入れた神代の力と言っていた事から、おそらく、この「グリユーエン大火山」で手に入れた神代魔法なのだとハジメ達は察し、それ故、神代魔法の絶大な効果を知っているハジメ達は、詠唱などさせるものかと、更に苛烈に攻撃を加え始めた。

しかし、灰竜達は障壁を突破されて消し飛んでも、直ぐに後続が詰めて新たな障壁を展開し、ハジメ達の攻撃をフリードに届かせない。本来なら、ユエ達に援護を任せて、「空力」で直接叩きに行くのだが、今はまだ回復しきっておらず、灰竜の群れに叩き落とされるのが関の山だと思ひハジメは齒噛みした。

ドンナーをしまい、反動の少ないオルカンを取り出し全弾ぶつ放すが、数頭の灰竜を障壁ごと吹き飛ばして終わりだった。フリードには届いていない。クロスビツトも、威力が足りず障壁を破壊しきるには至らない。

と、その時点でタイムアップだったようだ。フリードの詠唱が完成してしまった。

「――「界穿」！」

「ッ！ 後ろです！ ハジメさん！」

最後の魔法名が唱えられると同時に――フリードと白竜――改めウラノスの姿が消えた。正確には、光り輝く膜のようなものが出現し、それに飛び込んだのだ。ハジメ達

は、フリードが魔法名を唱えると同時に叫んだシアの警告に従い、驚愕に目を見開く暇もなく背後へ振り返った。

そこには……眼前で大口を開けたウラノスとその背に乗ってハジメを睨むフリードがいた。ウラノスの口内には、既に膨大な熱量と魔力が臨界状態まで集束・圧縮されている。

「……………」

ハジメは咄嗟にオルカンを盾にするが、ゼロ距離で放たれるの極光も同時だった。

ドオゴオオオオ!!!

「ぐうう!! ああああ!!」

轟音と共に、かざしたオルカンに極光が直撃し俺を水平に吹き飛ばした。凄絶な衝撃に、ただでさえダメージを受けていた肉体が悲鳴を上げ、食いしばった口から苦悶の呻き声上がる。

「ハジメ!」

極光に押しされ吹き飛ぶハジメを助けようと、ユエ達が咄嗟に、ウラノスに向かって攻撃を放とうとするが、それを読んでいたように灰竜からの掃射が彼女達に襲いかかり、その場に釘付けにされてしまった。

吹き飛ぶハジメは、直撃こそ受けていないものの極光の衝撃に傷口が開いてしまい盛

大に血飛沫を撒き散らすが、必死に傷ついた右腕のみでオルカンを支え、「空力」で踏ん張りつつも、このままでは煮え滾る海に叩き落とされると悟ったハジメは、二度目の「限界突破」・「紅狼」を発動した。

「——「限界、突破ア」！「紅狼」！」

傷ついた体そして更に二度目の「限界突破」を使うのは非常に危険な賭けだ。普段なら、「限界突破」を使っても、ひどい倦怠感に襲われるだけで済むが、今の状態で言えば、おそらく使用後に身動きがとれなくなるだろう。それでも、状況の打開に必要だと判断した。そして、ハジメの体を紅い光の奔流が包み込み、紅き雷が纏っていき、力が爆発的に膨れ上がる。

「らああああ!!——「天雷牙狼」！」

「なっ！」

雄叫びを上げながらハジメはオルカンを跳ね上げてから自分の最大威力の魔法を放ち、紅い巨大な狼がウラノスの極光とぶつかり合い消し去った。

「まさか……人間の魔法でウラノスの極光を消すとは……ではこれならどうだっイレギュラー！」

フリードはハジメの魔法に驚愕と同時に少し笑みを見せた表情をするがすぐに真顔に戻り、ウラノスに指示して光弾を無数に放ってくる。

ハジメはフリードが乗るウラノスの放つ極光はオルクスの最下層にいるヒュドララスボスよりも極光の威力が上であると、今も自分に向かって放たれている光弾の威力も侮ることは全く出来ないと判断し、避けていくもフリードとのコンビネーションも相まって厄介さは格段に上と感じ歯噛みしながらも……

「クロスビットおー！」

ハジメは、襲い来る光弾を極限の集中によりスローになった世界で、紅い閃光のように動きながらかわしていく。そして、極光により融解して使い物にならなくなったオルカンをしまうと、ドンナーを連射しながら、同時にクロスビットを飛ばしてフリードを強襲していく。

「フツ……何というしぶとさだっ！ 紙一重で決定打を打てないとはなっ！」

フリード不敵な笑みを浮かべながら、再び、亀型の魔物が張る障壁の中に包まれながら、重傷を負っているはずのハジメのしぶとさに感嘆すると、ウラノスを高速で飛ばしながら、再び、詠唱を唱え始めようとした。

しかし……

“そうはさせせんよ！”

クロスビットの猛攻に耐え、光弾を搔い潜りながら距離を詰めてくるハジメから後退して時間を稼ごうとするフリードとウラノスに、突如、空間全体に響くような不可思議



——あの男ハジメを使って妾の■■を遂げるため……。

その前提として、テイオが竜人族であることは、極力隠したいと思っていた。それは掟なのだから当然のことだ。いくら強力な種族であっても、数の暴力には敵わない。その事は、五百年前の迫害で身に染みていた。

——それが、あの時に身に付いた生きる為の術だから……。

しかし、無敵だと、傷つくはずがないと思いついていたハジメが重傷を負った。天よ降り降り注ぐ極光に焼かれ、直撃は避そして、けていたがボロボロのハジメを見たとき、テイオの胸中は激しい動揺に襲われた。

——何百年振りだった。あんなに激しい動揺に襲われることなんて……。

そして、気が付く。自分は何を勘違いしていたのか。ハジメとて人。傷つくこともあれば、一瞬の油断であつさり死ぬことも有り得る。そんな当たり前のことをようやく思い出したテイオは、長く生きておきながら常識を忘れるほどハジメに傾倒していた事を、今この時にこそ明確に自覚した。単なる興味の対象でも、自分を救ってくれた恩人でも、■■■■の為の道具でも。ご主人様でもない。

——ご主人様……いや、ハジメは、一人の女として失いたくない“男”なのだ  
と自覚したのじゃ！

それ故に、人前での“竜化”の決断をした。仲間の危機に出し惜しみをするのであれ

ば、もう胸を張って仲間を名乗れない。なにより、竜人族ティオ・クラルスの誇りにかけて、掟と大切な者の命を天秤にかけるような真似は出来なかったし、するつもりもなかった。

~~~~~

「若いのお！ 覚えておくのじゃな！ これが「竜」のブレスよお！」  
ゴオガアアアアア!!

轟音と共に黒色の閃光がウラノスもろともフリードを呑み込もうと急迫する。ウラノスは身をひねり迫るブレスに向けて同じように極光のブレスを放った。黒と白の閃光が両者の間で激突し、凄絶な衝撃波を撒き散らす。直下にあるマグマの海は衝突地点を中心に盛大に荒れ狂いマグマの津波を発生させた。

最初は拮抗していたティオとウラノスのブレスだが、次第に、ティオのブレスが押し始める。

「くっ、まさか、このような場所で竜人族の生き残りに会うとは……仕方あるまい。未だ危険を伴うが、この魔法で空間ごと……（これは、作戦の成功度が上がる。クツ、ホン



トに監視がなければっ！）」

「させねえよ」

「ッ!?!」

竜人族については報告がされていなかったのか、フリードは本気で驚いているようで、まさかの事態に笑みを零し、そして、自分の背後に控えるデカイ一つ目の翼が生えた魔物を睨みつけてから懐から新たな布を取り出し、再び正体不明の神代魔法を詠唱しようとしたが……

傷口から血を噴き出しながら、いつの間にかフリードの背後に回っていたハジメはドーナートを連射し、一発の銃声と共に放たれた弾丸は六発。その全てが、ほぼ同時に、ミリのズレもなく同じ場所へピンポイントに着弾した。

フリードの傍にいた亀型の魔物が、フリードが反応するより早く障壁を展開していたのだが、赤黒く輝く障壁はほぼゼロ距離から放たれた閃光と衝撃により、あっさり喰い破られた。焦燥感をあらわにしたフリードの懐へ潜り込む。

そして、〃紅狼〃で頭になっている〃紅雷〃の爪を纏わせた右腕に〃風爪〃を発動させながら、一気に振り抜いた。

「——〃天雷風爪〃!」  
てんらいふうせん

「ぐああ!?!」

ハジメの放つ紅い旋風を纏った爪をフリードに目掛けて横に切り刻もうとするも、フリードは間一髪、避け両断されることは免れたが胸に横一文字の切創が刻まれる。

「逃がさねえぞー！」

ハジメは声を上げながら攻撃の手を緩めず、フリードを切り裂いた勢いそのままに、くるりと回転すると、「魔力変換」による「魔衝波」を発動させながら「紅雷」を纏った足で後ろ回し蹴りを放った。

ドオガ!!

「があああ!!」

フリード辛うじて左腕でガードしたのだろうが、勢いを殺すことなど出来るはずもなく、左腕を粉碎されて内臓にもダメージを受けながら、フリードはウラノスの上から水平に吹き飛んでいった。

主がいなくなったことに気がついたのか、気を逸らしたウラノスに黒きブレスが一気に迫ってくる。

「任せた」

ハジメがそう呟いでウラノスの上から飛び退いた直後、テイオのブレスがウラノスを極光ごと盛大に吹き飛ばした。

「ルアアアアアン!!」

悲鳴を上げて吹き飛んだウラノスは、テイオのブレスの直撃を受けた腹を大きく損傷しながらも空中で何とか体勢を立て直し、天井付近へと一気に飛翔する。そこには、いつの間にか灰竜に乗ったフリードがいた。上空で合流すると、フリードは再びウラノスに乗り込んだ。

「逃がすかつ！」

ハジメはフリードを逃がさない為に、“空力”で追撃を仕掛けようとするが……

「ぐっ!? ガハッ!!」

ハジメを包んでいた紅色の光と紅雷が急速に消えて行き、傷口からだけでなく、口からも盛大に血を吐き出してしまった。“限界突破”と“紅狼”のタイムリミットだ。傷を負った状態で、更に限界越えと身体と魔力の強化などしたものだからダメージは深まり、リミットも早かったらしい。“空力”が解除されて、マグマの海に落ちる。

“ご主人様よ! しつかりするのじゃ!”  
「ぐっ、テイ、テイオ……」

落下していたハジメを、飛翔してきたテイオが自分の背に乗せる。ハジメは、“限界突破”と“紅狼”の二つの副作用と深刻になったダメージに倒れそうになるが、何とか片膝立ちで堪え、ギラギラと光る眼光で上空のフリードを睨みつけた。

見れば、フリードの周囲に、ユエ達を襲っていた灰竜達も集まっている。

「ハジメー！」

「ハジメさんー！」

ユエとシアが、ハジメの名を叫びながら駆けつけてきた。テイオは、近くにあった足場に着地する。今のハジメでは、攻撃を受けたときのテイオの戦闘機動に耐えられず落下するおそれが高いからだ。同じ足場に飛び移ってきたユエとシアは、直ぐにハジメの傍に寄り添いその体を支えた。

「……恐るべき戦闘力だ。侍らしている女共も尋常ではないな。絶滅したと思われるいた竜人族に、無詠唱無陣の魔法の使い手、未来予知らしき力と人外の膂力をもつ兎人族……よもや、神代の力を使って、なお、ここまで追い詰められるとは……最初の一撃を当てられていなければ、蹴散らされていたのは私の方だな」

何かの感情を押し殺したような声で語りながら、ハジメと火花散る視線を交わすフリード。肩で息をしながら、無事な右手で刻まれた胸の傷口を押さえている。

「なに既に勝ったこと前提で話してんだ？ 俺は、まだまだ戦えるぞ」

ハジメは、フリードの言葉に不快げに表情を歪めると、身体はボロボロだがそれでも殺意で眼をギラギラと光らせながら戦闘続行を宣言する。

「……だろうな。貴様から溢れ出る殺意の奔流は、どれだけ体が傷つこうと些かの衰えもない。真に恐るべきはその戦闘力ではなく、敵に喰らいつく殺意……いや、大切なも

のを守ろうとする執念か……（この者達は絶対に生かしておきたい。どうすれば……いやこれならつ、ナイズ・グリュューエンには悪いことをするが）

フリードは、何かを決断するように、一度目を伏せると決然とした表情で再びハジメ達を見る。

「この手は使いたくはなかつたのだがな……貴様等ほどの強敵を殺せるなら必要な対価だったと割り切ろう（生き残るかは分からない……だが、これが今の私に出来る一番の最善の手だ）」

「なにを言ってる?」

フリードは、ハジメの質問には応えず、いつの間にか肩に止まっていた小鳥の魔物に何かを伝えた。

その後、

ゴゴゴゴゴゴゴゴツ!!! ゴバツ!!! ズドオン!!

空間全体、いや、「グリュューエン大火山」全体に激震が走り、凄まじい轟音と共にマグマの海が荒れ狂い始めた。

「うおっ!?!」

「んあ!?!」

「きやあ!?!」

「ぬおっ!？」

突如、下から突き上げるような衝撃に見舞われ、四者四様の悲鳴を上げて必死にバランスをとる。激震は刻一刻と激しさを増し、既に震度で言えば確実に七はあるだろう。マグマの海からは無数の火柱、いや、マグマ柱が噴き上がり始めている。

「ハジメさん! 水位が!」

シアの言葉に、ハジメ達が足場の淵を見れば、確かにマグマの海がせり上がってきていた。

「何をした?」

ハジメが、明らかにこの異常事態を引き起こした犯人であるフリードに押し殺したような声音で聞いた。フリードは、中央の島の直上にある天井に移動しながら、その質問に答える。

「『要石』を破壊したただけだ」

「『要石』だと?」

「そうだ。このマグマを見て、おかしいとは思わなかったのか? 『グリューエン火山』は明らかに活火山だ。にもかかわらず、今まで一度も噴火したという記録がない。それはつまり、地下のマグマ溜まりからの噴出をコントロールしている要因があるという(こと)」

「それが『要石』か……まさかつ!」

ハジメはフリードが大迷宮自体を破壊することを察すると、フリードは淡々と説明をする。

「そうだ。マグマ溜まりを鎮めている巨大な要石を破壊させてもらった。間も無く、この大迷宮は破壊される。神代魔法を同胞にも授けられないのは痛恨だが……貴様等をここで仕留められるなら惜しくない対価だ。大迷宮の住処で籠ったりして餓死でもすればいい（これならば監視の目を欺けて同胞の神代魔法をアルヴ派の者に渡らなくて済む。後は、お前達が此処の住処に入り、空間魔法を手に入れ、此処から脱出出来ることを願う）」

フリードは、ハジメ達を見下ろしながら、首に下げたペンダントを天井に掲げた。すると、天井に亀裂が走り、左右に開き始める。円形に開かれた天井の穴は、そのまま頂上までいくつかの扉を開いて直通した。

どうやら、【グリューエン大火山】の攻略の証で地上までのショートカットを開いたようだ。フリードは最後にもう一度、ハジメ達を見て何かを口パクで呟いた後、踵を返してウラノスと共に天井の通路へと消えていった。

「……アイツ（今さつき口パクで「生きろ」って言ったよな）じゃあ、やっぱりアイツは、もしかして……」

「ちよつハジメさんこんな時に考え込まないで下さい！」

「……………スマン」

周囲のマグマの海は、既に、まるでハリケーンの勢力圏に入った海のように荒れ狂い、噴き上がるマグマ柱はその数を次々と増やしている、ハジメ達の足場も端からマグマが流れ込みだした。まるで終末世界のような光景であるのにハジメがフリードの口パクでの言葉が気になり考え込んでるとシアに叱られ、一旦フリードの件は置いといてこの状況をどう打開するか考える。

「此処の神代魔法はなんとかして手に入れないといけない。なら、まだテストの段階だが『アレ』を使うか」

ハジメは、僅かな時間でアレを使うことを決断すると、怪我を押し立て立ち上がる。直後、フリードとウラノスが出て行っても残っていた灰竜達が一斉に小極光を放ち始めた。そこには、大きな一つ目に翼が生えていた魔物が指揮を取つてるように見えた。どうやらハジメ達をここで殺すつもりらしい。

ユエが、『絶禍』を発動して小極光を呑み込みながら攻撃を凌いでいる間に、ハジメは、『宝物庫』を手に握ると、頭上の灰竜達にブレスを放とうとしているティオの堅い竜鱗に覆われた頬に手を這わせ自分の方に顔を向けさせた。

「ティオ、よく聞け。これを持って、お前は一人であの天井から地上へ脱出しろ」



一瞬、何を言われているのか分からないという表情で目を瞬かせるティオだったが、次の瞬間には傷ついたような表情をして悲しみと怒りの混じった声を響かせた。ハジメの言葉が、まるでティオだけ生き残らせて、自分達を切り捨てると言っているように聞こえたのだ。

「ご主人様よ、妾は、妾だけは最後を共に過ごすに値しないというのか？ 妾に切り捨てると、そういうのか？ 妾は……」

「ティオ、そうじゃない。時間がないから一度しか言わないぞ。俺は、何も諦めていない。神代魔法は手に入れるし、そして「静因石」を届けるという約束も守る。だが、一人じゃ無理なんだ。だからお前の力を貸して欲しい。お前でなければ、全てを突破して期限内にアンカジに戻ることは不可能なんだ……頼む、ティオ」

ハジメは真剣な眼差しで、竜化状態のティオの瞳を見つめる。ティオの心が悲しみや怒りから一転して歓喜に震える。気に入った男から、いや、今や本気で伴侶になりたいと思っている相手から、生死のかかった瀬戸際で大切なものを「託された」のだ。これに応えられなければ、女ではない。

それ故に、ティオはただ一言、応えた。

「任せよ！」

ハジメは、ティオのウロコの内側へ「宝物庫」を入れる。こうすることで、竜の肉体



いかない。しかし、拮抗するかと思われた瞬間、下方より極光が迸り、ティオに攻撃を加えていた灰竜が数体、そして指揮をしたと思われる大きな一つ目の魔物が消し飛んだ。

ユエが“絶禍”で圧縮した小極光を解放したのだ。さらに、炸裂スラッグ弾が乱発され灰竜達を衝撃波で吹き飛ばしていく。と、その時、フリードとウラノスが外に出たのか、天井の扉が閉まり始めた。時間がないと悟り、ティオは、被弾覚悟で加速することのみに集中する。そのおかげで飛行速度は更に増加したが、灰竜からの小極光がティオの竜鱗を砕き始めた。

“ふん、この程度の痛みい！ ご主人様からの頼みとあらば屁でもないわ！”  
言葉通り、灰竜の攻撃がティオの体にダメージを入れることに調子が上がり飛行速度が増していく。“竜化”の派生“痛覚変換”の効果だ。痛みが酷ければ酷いほど任意の能力が一時的に強化されるという派生能力だ。ちなみに、ハジメと出会ってから数百年ぶりに手に入れたものである。

灰竜達ですら被弾しても怯まないティオの姿に若干恐れる中、ティオは遂に小極光の嵐を突破して閉まり切る寸前の扉をくぐり抜けた。頭上を見れば、遙か先に小さな光が見える。地上の光だ。それまでに幾つか扉があるようで、順次閉まり始めている。

ティオは、もう後先考えず、残りの魔力を“竜化”が維持できるギリギリを残して、全

て使い切るつもりで風を操ることに注ぎ込んだ。自分の長い生を思い出しても、ここまでの速度は出したことが無いと思えるほどの速度で、文字通り、疾風と化して飛翔する。一つ目、二つ目、三つ目と、扉をくぐり抜け、遂に最後の扉、地上へと繋がる分厚い扉のみを残すところまで上がってきた。黒い風を纏って一発の砲弾のごとく突き進むティオ。そんな彼女に、頭上から光弾が襲いかかる。

どうやら、ティオの存在に気がついて足止めの攻撃を放ってきたと思ったがその極光は既に半分以上閉まつてる扉に向けて打っており、扉の速度を弱めようとしていた。

“なっ……どういう事じゃ?!”

ティオは動揺した。今さっきまで殺し合いしていた者に助けられる事を……しかし扉は頑丈でウラノスの極光であっても少ししか遅らせる事が出来ない。間に合わないと思つた時、ティオの脇を幾つかの影が走り抜け、ティオと迫り来る極光の間に割つて入った。

それは、ティオにとって見覚えのあるもの。浮遊する十字架、オールレンジ兵器、そう、ハジメのクロスビットだ。ティオの直ぐ後ろに付けていたのである。

飛び出した三機のクロスビットは、紅色の輝きを放つと扉を両側を抑え閉まる速度を抑えていた更に、ティオを守るように四機のクロスビットがティオのすぐ傍を飛ぶ。

“フフ、ご主人様よお、愛しておるのじゃー!”

マグマの奔流に襲われているであろうに、テイオにクロスビットを全機付けて地下から操っているハジメに、天地に轟けと愛を叫ぶテイオ。竜人族の中でも特に強者であったテイオを守る男など、未だかつていなかった。いつだって、彼女は守る側だったのだ。だからこそ、極めて困難な状況において守られているという事実には、今まで感じたことのない喜びが爆発する

「グウルウアアア!!」

そして、クロスビットは役目を果たしたのか一つ一つ充電が切れたように落下していき、テイオは竜の咆哮をも響かせながら、遂に最後の扉をくぐり抜けた。黒い風の塊と化したテイオが垂直に飛び出し、巨大な砂嵐に囲まれながらも太陽の光が降り注ぐ天空を舞う。

「……………」

頭上を飛び越えたテイオに、ウラノスに乗ったフリードはそのまま無言で立ち尽くしていた。テイオは自分を見つめるフリードを疑惑の眼差しを向けながら質問した。

「お主に一つ質問したい何故、妾を助けたのじゃ？」

「…………それは、何時か説明しよう。それより竜人族の生き残りよ貴女に伝言を頼みたい」  
「なんじゃ？」

テイオはフリードの頼み内容次第ではブレスで焼き付くそうと考えているがフリー

ドの頼みは以外なものだった。

「あの男……ハジメだったか？ その者に『また何時か会おう』と伝えてくれ。その時に私の事も全て話すとな」

「ちよつと待つつのじや！ お主はもはやっ！」

「竜人族の生き残りよ、今はここで与太話をしてる状況ではないだろう？ すぐさま

アンカジに戻つて公国の人達を救わないといけないはずだ」

フリードはそう言つて立ち去ろうとする姿にティオは「フリードはもしかして」と思いつつたをかけるがアンカジの事を言われ、うつと顔を曇らせた。

「後、アンカジの件と男の件は悪かった……それだけだ。ではな。——『界穿』」

そう言つてフリードはフリードに乗りながら瞬間移動したように消えた。

「（なつ、ユエとご主人様と同じ無詠唱でつ、彼奴……実力を隠しておつたのか！ 侮れんのう）……つて、妾も急がなければっ！」

ティオはフリードがまだ己の実力を隠していた事に驚きしばらくフリード達が消えていった場所を見つめていたが、変化がないことを確かめると視線を転じ、眼下の「グリューエン大火山」を静かな眼差しで見つめた。そして、『信じている』というように一つ頷くと、踵を返してアンカジの方角へと飛翔していった。

数十分後、『グリューエン大火山』を中心に激震が走った。轟音というのも生温い、大

気すら軋ませる大爆発が発生し、一時的に砂嵐さえ吹き飛した。あらわになった「グリュウエン大火山」はもうもう黒煙を噴き上げ、赤熱化した岩石を弾き飛ばし、火山雷のスパークを撒き散らしていた。

現存する歴史書の中で、ただの一度も記録されていない「グリュウエン大火山」の大噴火。ある意味、貴重な歴史的瞬間は、どういう原理か数分後には復活した巨大な砂嵐のベールに包まれ、その偉容を隠してしまった。

それでも、まるで世界が上げた悲鳴の如き轟音も、噴き上がる黒煙も、アンカジの人々は確かに観測したのだ。不安が募る。それは、大切な人の帰りを待つ少女と幼子も同じだった……。

## 五十四話

## 灼熱の中の脱出・ある幻想の追憶

「何とか守れたな……」

「? ……ハジメ?」

「ハジメさん?」

小極光の豪雨に晒されながら、突然、眩いたハジメに、ユエとシアが訝しそうな表情を向ける。ハジメは、何でもないと言頭を振って、二人に支えられながら何とか跳躍し、中央の島の端に足をかけた。

テイオが飛び立ってから、周囲のマグマは益々荒々しさを増し、既に中央の島以外の足場はマグマの海に沈んでしまった。五分もしない内に中央の島も呑み込まれるだろう。

降り注ぐ小極光をユエの「絶禍」が呑み込み、焦れた灰竜が直接攻撃を仕掛けてきてはシアのドリユッケンによりマグマの中に叩き落とされるということを繰り返す。灰竜の数も十体を切っていた。

中央の島には、最初に見たマグマのドームはなくなっていて、代わりに漆黒の建造物



がその姿を見せていた。その傍らには、地面から数センチほど浮遊している円盤がある。真上がさつきまで開いていた天井のショートカット用出口だったので、本来は、これに乗って地上に出るのだろう。

ハジメ達は、灰竜達がハジメ達への攻撃よりも噴出するマグマ柱の回避に必死になり始めたのを尻目に、漆黒の建造物へと近づいた。

一見、扉などない唯の長方体に見えるが、壁の一部に毎度お馴染みの七大迷宮を示す文様が刻まれている場所があった。ハジメ達が、その前に立つと、スつと音もなく壁がスライドし、中に入ることが出来た。ハジメ達が入ると、遂にマグマが中央の島をも呑み込もうと流れ込んできたのは同時だった。再び、スつと音もなく閉まる扉が、流れ込んできたマグマを間一髪でせき止める。

しばらく、扉を見つめていたハジメ達だったが、扉が溶かされてマグマが流れ込むということもないようなので、ホツと安堵の吐息を漏らした。

「一先ず、安心だな……それにしても、この部屋は振動も遮断するのか……凄いな」  
「ん……ハジメ、あれ」

「魔法陣ですね」

ハジメは部屋に入った途端、大地震クラスの振動を感じなくなったことに驚き、その眩きに応じながら、傍らのユエが指を差す。その先には、複雑にして精緻な魔法陣が

あった。神代魔法の魔法陣だ。俺達は互いに頷き合い、その中へ踏み込んだ。

「オルクス大迷宮」の時と同じように、記録が勝手に溢れ出し迷宮攻略の軌跡が脳内を駆け巡る。そして、マグマ蛇を全て討伐したところで攻略を認められたようで、脳内に直接、神代魔法が刻み込まれていった。

「……やっぱり此処の神代魔法は空間操作の魔法か」

「……瞬間移動のタネ」

「ああ、あのいきなり背後に現れたやつですね」

そんな事を思っているとユエが、フリードの奇襲について言及する。最初の奇襲も、おそらく、空間魔法を使ってあの場に現れ攻撃したのだろうとハジメと同じ予想に至った。

空間転移か空間を歪めて隠れていたのかは分からないが、厄介なことに変わりはない、二度目の奇襲も、咄嗟にシアが「未来視」の派生「仮定未来」を行使しなければ、ハジメは直撃を受けていたかもしれない。

ハジメ達が空間魔法を修得し、魔法陣の輝きが収まっていくと同時に、カコンと音を立てて壁の一部が開き、更に正面の壁に輝く文字が浮き出始めた。

「人の未来が 自由な意思のもとにあらんことを 切に願う—— ナイズ・グリューエン」

「……シンプルだな」

そのメツセージを見て、ハジメは素直にそう抱くと同時に、周りも見ると殺風景だと感じる。オルクスとは違って生活感がまるでないなく、本当に此処は魔法陣があるだけの部屋だと思われる。

「……身辺整理でもしたみたい」

「ナイズさんは魔法以外、何も残さなかったみたいですね」

「らしいな。オスカーの手記にもナイズってやつも出てたな。すごく寡黙なやつだったみたいだってアレ……攻略の証じゃないか？ユエ頼めるか？」

「……ん」

ハジメはユエに頼むとユエはハジメを支える役をシア一人に任せて、拳サイズの開いた壁のところに行き、中に入っていたペンダントを取り出した。それを、そつとハジメの首にかける。

「ありがとう、ユエ」

「……んー」

「ふうん……しかし、グリユーエンの証はペンダントか」

ハジメはペンダントを見て、以外に造りが凝っているのがわかる。ナイズ・グリユーエンはこういうのが趣味なのか、もしくは何かのヒントなのかもしれないとハジメはそ

う感じた。

そんな感想を抱きつつハジメは二人に呼びかけた。

「……さて、魔法も証も手に入れた。次は、脱出なわけだが」

「……どうするの？」

「何か、考えがあるんですよね？ たぶん、外は完全にマグマで満たされてしまってますよ？」

懸念を伝えつつも、不安は微塵も感じさせないユエとシアにハジメは、二人の寄せてくれる信頼を嬉しく思いながら脱出計画を話す。

「実は、この建物のすぐ外に潜水艇を用意してある。次のメルジーネ海底遺跡で必要になるだろうと思って作っておいたものだ。果たして、マグマの中でも耐えられるか少々不安ではあったんだが、金剛で覆った小舟が大丈夫だったから、いけると踏んだんだ。やはり大丈夫だったみたいだな」

ハジメは、フリードの奴が要石を破壊したと告げたときに「宝物庫」から直接マグマの中に潜水艇を転送しておいて溶け出すようなら、直ぐに強行突破してテイオと一緒に天井から脱出するつもりだったが、しばらく様子を見ても溶け出す様子がなかったの  
で、マグマに満たされても後から脱出できると踏んだが、明らかにヤバイレベルで「グ  
リューエン大火山」自体が激震し、あちこち崩壊していたことから、スムーズに脱出で

きない可能性が大いにあった。アンカジへ戻るタイムリミットが迫る中、悠長に脱出ルートを探っている時間はない。なので、その場合に備えてテイオを先に脱出させたのである。確実に、タイムリミット内に「静因石」を持ち帰るために。

「二体、いつの間にそんなこと……」

「……流石ハジメ」

シアが呆れたような声を出す、ユエは瞳に呆れを宿していたが感嘆を漏らしてた。

「脱出ルートは、当然、天井のショートカットだ。ユエ、潜水艇の搭乗口まで結界を頼む」  
「んっ………任せて」

ハジメの言葉に頷いて、ユエが念を入れて「聖絶」を三重に重ね掛けする。光り輝く障壁が三人を包み込んだ。三人は、互いに頷きあつて扉の前に立つ。そして、煮えたぎるマグマで満たされた外界への扉を開いた。

直後、ゴバツ！ と音を立てて、灼熱の奔流が部屋の中に流れ込んでくる。「聖絶」はしっかりとマグマからハジメ達を守ったが、一瞬にして視界の全てが紅蓮に染まってしまう。マグマの中からマグマを見るという有り得ない体験に、覚悟していたとは言え、流石のハジメ達も言葉に詰まった。

世界広しと言えど、このような体験をした事があるのはハジメ達くらいだろう。しかし、本人達は二度とこんな体験はしたくはないが。

「すぐ外だ。行くぞ！」

「んっ」

「は、はいです！」

ハジメは二人に号令を出し、ゆっくりと部屋の外に出てすぐに傍に待機させていた潜水艇を見つけた事ができた。

「よかった……。流されては無いようだな」

一度、確認はしたが流されてたらかでハジメは不安を抱いていたが、少し懸念していた事が無事で安堵の息を漏らし、ユエは、「聖絶」の障壁を調整しながらハツチまで行き、ようやく三人は潜水艇に乗り込むことができた。思わず、体に入っていた力が抜けてしまう。

と、その瞬間、

ドオゴオオオオ!!!

今までの比ではない激震が空間全体を襲った。そして、突如、マグマが一定方向へと猛烈な勢いで流れ始める。潜水艇は、その激流に翻弄される中、ハジメ達はミキサーにかけられたように上に下に、右に左にと転げまわる事になった。

「ぐわっ!!」

「んにゃ!!」

「ほう!? 痛いですう!」

それぞれ、船内の壁に体のあちこちをぶつけて、悲鳴を上げる。ユエが、咄嗟に「絶禍」の応用版を発動し、自分達を黒く渦く小さな球体に引き寄せることで、何とかシエイクされる状況を脱した。

「た、たすかった。ありがとうな、ユエ」

「有難うございますう、ユエさん」

「ん……それより」

ハジメはユエに、「絶禍」を移動させて操縦席にまで運んで貰ってから、魔力を流し込んで、潜水艇のコントロールを試みた。しかし、やっぱり激しい流れとマグマの粘性により、思うように舵が取れずに、火口とどんどん遠ざかっていくことにハジメは歯噛みする。

「ちっ、これが噴火だつてなら、外に放り出されて、むしろラッキーなんだがな」

「……違うの?」

苦虫を噛み潰したような表情をするハジメに、ユエが首をかしげる。

「ああ。マグマの中でも方向を見失わないよう、クロスビットに特定石を仕込んでおいたんだが、墜落する前に、脱出口付近に射出して置いたから、少なくとも天井のショートカットの場所はわかるんだが……この流れ、出口から遠ざかってやがる」

「えっ？ それって地下に潜ってるってことですか？」

「ああ、真下ってわけじゃなくて、斜め下って感じだが……さて、どこに繋がっているのやら……ユエ、シア。やっぱり直ぐには戻れそうにない。このまま行くとこまで行くしかないようだ」

覚悟の決まった表情でそう語るハジメに、ユエとシアはただ優しげに目元を緩めて、そつと寄り添った。

「……最後まで傍にいる。それが叶うなら何も問題ない」

「ふふ……文字通り、例え火の中水の中ですね。私も、お二人と一緒にいられるなら、どこまででも、ですよ！」

「……クハツ……そうか。そうだな」

ハジメも、そんな二人に頬を緩め笑いながら返した。そして、同時に思う自分は彼女達に“約束”をしたんだ“必ず戻る”と……

「……どんな事があっても生き残ってやるさ！」

そしてハジメ達三人は、潜水艇の中で寄り添いながら、灼熱の奔流に流されていったのだ……

~~~~~



くく

「グリューエン大火山」からの脱出が叶わず、ハジメ達が何処とも知れないマグマが流れる地下道を流されている頃、赤銅色の砂が吹きすさぶ「グリューエン大砂漠」の上空をフラフラと飛ぶ影があつた。

言わずもがな、*“竜化”* 状態のテイオである。

*“むう……これはちとマズイのじゃ……全く、厄介なブレスを吐きおつて……致し方ない。ご主人様よ、許してたもれ”*

強行突破のせいで、少なくとも灰竜の極光を浴びていたテイオは、極光の毒素に蝕まれて傷を悪化させていた。このままでは、アンカジに到着する前に倒れてしまうと判断したテイオは、勝手に秘薬を使う事をハジメに謝罪して、*“宝物庫”* から神水を取り出し容器ごと嘔み碎いて服用した。

ブレスの連発と限界以上に身体能力や飛行能力に注ぎ込んだため大量に消費した魔力が、かなりの勢いで回復していく。また、傷も瞬時に治るわけではなかったが少なくとも毒素の影響は抑えられたようだった。

それから飛ぶこと数時間、ようやく前方にアンカジの姿が見えてきた。これ以上、飛行を続ければ、アンカジの監視塔からもテイオの姿が見えるだろう。テイオは、一瞬、竜

化を解いて行くべきかと考えたが、おそらく生きているであろう魔人族のフリードに知られた事と、きつと、今後、ハジメの旅について行くなら「竜化」が必要な場面はいくらでもあるだろうと考えて、すっぱり割り切ることにした。

隠れ里はそう簡単に見つかることはないし、万が一見つかったとしても、魔人族はそう簡単にやられはしない。それに、五百年前の悪夢（迫害）が襲いかかったとしても、ティオが助けを求めれば、ハジメは力を貸してくれる。だって自分はハジメの「大切」だから。

そんな考え事をしていっているうちに、遂にアンカジまで数キロの位置までやって来た。見れば、監視塔の上が何やら非常に慌ただしい。勘違いで攻撃を受けても面倒なので、ティオは入場門の方へ迂回し、少し離れた場所に着地した。

ズドオオン!!

と、半ば墜落する形で砂塵を巻き上げながら着地したティオのもとへ、アンカジの兵士達が隊列を組んでやってきた。見れば、壁の上にも大勢の兵士が弓や魔法陣の刻まれた杖などをもって待機している。

もうもうと巻き上がる砂埃が風にさらわれて晴れていく。兵士達が、緊張にゴクリと喉を鳴らす音が響く。しかし、砂埃が晴れた先にいるのが黒髪金眼の美女で、しかも何やら随分と疲弊しているようだとかわくと、一様に困惑したような表情となって仲間同

士顔を見合わせた。

そんな、混乱する兵士達の隙間を通り抜けて、一人の少女が飛び出す。少し赤みがかった栗色髪の少女、優花だ。後ろから危険だと兵士達や領主の息子ビイズが制止の声をかけるが、まるつと無視して猛然と、片膝をついて荒い息を吐くティオのもとへ駆け寄った。

監視塔からの報告があつた時点で、優花は、ティオが竜人族であると知っていたため、ハジメ達が帰ってきたと察し、急いで駆けつけたのだ。

「ティオ！ 大丈夫なの!？」

「むっ、優花か……うむ、割かし平気じゃ。ちと疲れたがの」

体中、あちこちに怪我を負って疲弊した様子のティオに、優花が血相を変える。すぐ傍に膝をつくと、急いでティオの容態を診察し出した。そして、見たことのない毒素が体に入っているとわかると、すぐさま浄化と回復魔法を付与を重ねがけしてから同時にかけ始めた。

「！ そんな……こんなに付与をした回復魔法なのに浄化が遅いなんて……」

しかし、極光の毒素は、神水ですら解毒に時間がかかる代物だ。優花の回復魔法だけではすぐさま浄化することは出来なかつた。それに、顔を歪める優花だったが、先程服用した神水の効果と優花のズバ抜けた回復魔法のおかげでかなり回復できたティオは、

優花に「心配するでない、もうすぐ浄化できるのじゃ」と微笑みながら頭を撫でた。

本当に、テイオの表情から心配ないことを察すると、優花は肩の力を抜いて安堵の笑みを浮かべる。そして、キヨロキヨロと辺りを見回し、次第に不安そうな表情になった。

「テイオ……ハジメは？ 一人なの？ どうして……あの噴火は……」

「落ち着くのじゃ、優花。全部説明する。まずは、後ろの兵達を落ち着かせて、話せる場所に案内しておくれ」

「あつ、うん、そうね」

背後で困惑にざわつく兵達に今更ながらに気がつき、優花は不安そうな表情をしながらも力強く頷いた。テイオが悲愴な表情をしていないことも、落ち着きを取り戻した要因だ。

優花は、ビーズや駆けつけたランズイ達のもとへ戻り、事情説明をしながらテイオを落ち着いて話のできる場所に案内したのだった。

「それじゃあ、ハジメ達は……」

「うむ、あとから追いかけてくるはずじゃ。ご主人様は、微塵も諦めておらんかった。時間がないで詳しくは聞けんかったが、何か打開策があったのは確かじゃよ」

「グリユーエン大火山」で何があったのかを聞いた優花は、顔を青ざめさせて手をギュッ

と握り締めた。アンカジの人々を震撼させた大噴火を見たときから感じていた不安が急速に膨れ上がっていく。

しかし、優花が不安で必死に握り締めた手に、ティオが、そつと自分の手を重ね合わせる。そして、力強い眼差しで私を見つめた。

「優花よ。ご主人様からの伝言じゃ」

「ハジメからの？」

「うむ。正確には優花とミュウにじゃが……」あとで会おう絶対に戻ると約束する「じゃ」

優花は、「必ず帰る」とか「心配するな」など、そんな私達を安心させるための言葉かと思っていたのだが、「約束する」とその言葉で優花は確信して笑みを浮かべた。

「ふふ……そっか、ならハジメは大丈夫よ」

「うむ、優花。しかし何故お主はもう安心しておるのじゃ？ まだご主人様の現状が分かっておらぬのに？」

「だって……ハジメが約束って言ったんでしょ？ なら大丈夫よ。だってハジメは

約束を必ず守る人だから」

「……フフ、そうじゃったな」

ティオは優花のその言葉に目を丸くしたが、次には納得したように微笑みながら頷い

た。

「なら私もやるべき事をやらないとね」

「そうじゃな。もちろん、妾も手伝うからの」

ハジメは、大迷宮でハジメが行方不明になったという事実を目眩を覚えていたものの、ハジメなら大丈夫だと、約束をしたんだと、テイオと同じくギュツと拳を握りながら信じた。そして、先に、ランズイ達に渡しておいた大量の「静因石」が、現在、粉末状にされ患者さん達に配られている頃だと判断し、衰弱した人々を癒すためにグツと瞳に力を入れて立ち上がった。

「ハジメ……（私も頑張るからっ、そっちも頑張りなさいよー）」

その後、宮殿で、領主の娘であるアイリー（十四歳）に構われているミュウとも合流し、事情説明が行われた。ハジメパパがいけないことに泣きべそをかくミュウちゃんだったが、ハジメパパの娘は、そう簡単に泣いたりしないといとテイオとハジメに言われて、ほつぺをプクツと膨らませながら懸命に泣くのを堪えるということがあった。

ミュウは海人族ではあるが、「神の使徒」たる優花の連れであることと、少し関わればわかってしまうその愛らしさに、アンカジの宮殿にいる者達はこぞつてノックアウトされていたらしく、特に、アイリーに至っては病み上がりで外出禁止となっていることもあり、ミュウを構い倒しているようだ。

テイオが竜人族であるという事についても、ランスイ達は思うところがあるようだったが、命懸けで“静因石”を取ってきてくれた事から、公国の恩人であることに変わりはなく、そう大きな騒ぎにはならなかったらしい。

優花達は患者達を次々と癒していったが、二日経つてもハジメ達が戻ってこないことに、次第に表情を暗くしたが、諦めずに私は患者さん達を癒し続けた。テイオは何度か「グリュウエン大火山」までのルートを探索してみたが、ハジメ達の痕跡はなく途方に暮れた。

そしてテイオが戻ってから三日目の晩、優花は、ミュウちゃんとテイオに提案をした。「今日で、私の処置が必要な患者さんはいなくなっただと思う。あとは、時間をかけて安静にするか、医療院のスタッフに任せれば問題ないわ。だから……ハジメ達を探しに行くかと思うの」

「パパ？ お迎えに行くの？」

「ふむ、そうじゃな。妾も、そろそろ動くべきかと思っておった」

優花の言葉に、ミュウちゃんは嬉しそうに身を乗り出し、テイオは真剣な表情で賛同した。

「でも、流石に、『グリュウエン大火山』にミュウちゃんを連れて行く訳にはいかないよね」

「そうじゃな。それでは、ご主人様が、ここにミュウを預けていった意味がない。それに、今は噴火の影響で、どちらにしろまともな探索は出来んじやろ」

「うん。私もそう思う。だから、先にエリセンに行つてミュウちゃんをママさんに会わせようと思うの」

「ふむ、それが妥当じやろうな……よかろう。ならば、妾の背に乗つていくがよい。エリセンまでなら、急げば一日もかからず行けるじやろう。早朝に出れば夕方までには到着できよう」

スイスイと進んでいく話に、ミュウが頭の上で「？」の花を大量に咲かせていた。そんなミュウの姿に優花は「まだ、子供だもんね」と微笑みながら見ていた。

そして優花は、ミュウちゃんに、丁寧にわかりやすく説明すると、直接ハジメを迎えに行けないことに悲しげな表情をしたが、母親にも会いたかつたようで、二人でハジメパパが会いに来るのを待つていて欲しいと伝えると、渋々ではあるが納得をしてくれた。実母と天秤にかけられるとか、どこまでパパなんだと優花とティオは二人揃つて苦笑いを浮かべずにはいられなかつた。

「……私も欲しいな、子供」

優花はそんなミュウちゃんを見ながらお腹に手をあてながらひっそりと誰にも聞かえないような声で呟いた。



翌日、引き止めたような領主やビイズに見送られながら、竜化したテイオの背に乗って私達は西の空へと飛び立った。背後で、盛大な感謝や私を称える人々の声が砂塵をものともせず響き渡る。

「ハジメ……待つてるから」

優花はそう呟きながら、再びはぐれてしまった愛しい人を想い、必ず見つけると決意を胸に秘めて、真つ直ぐ前を向いた。

「……ッ?!」

その瞬間、優花の頭に自分の知らない記憶か夢か分からない映像がよぎった。

そこには何処か分からない場所で二つの黒いモヤがあった。モヤの正体は、目を拗らせながら見ると男女だとわかった。そして男の方は分からなかったが女の方のモヤには翼があるように見えた。

そして、会話が聞こえてくる。

『……、私待——るから』

『……ろ、——スタ、俺——る』

——なんだろう？ 会話をしてると思うけど、所どころが聞こえなくて、何を言ってるのか分からないわね……。

『……ナ』

『——ず、俺はラ——倒す』

『え——自由——為に』

途切れ途切れしか聞こえない会話が終わると二つのモヤは抱き締めあつてるように見えた。それは、まさに恋人のように……

そして、段々と景色が黒く見えなくなつてきていた。

(……ツ！なにこれ?! 視界がつ!)

そしてその黒は優花の視界も覆つていき、そして私の周りは真つ黒になつた……。

「う……アレ?! 此処はティオの上……」

いきなりの事に優花は最初は戸惑つたが次第に落ち着きを取り戻していく。すると、竜化しているティオと私の上に座つてるミュウが話しかけた。

「優花どうかしたかの?」

「優花お姉ちゃん、どうしたの?」

「いや、ティオ、ミュウちゃん。今さっき私に何か変な事とかなかつた?」

優花がそんな質問をすると二人は首を傾げた。

「はて? 優花、其方はずっと妾の上で呆けておつただけじゃぞ?」

「ミュウもく優花お姉ちゃん、ぼうつとしてただけにしか見えなかつたの?」

「そつか……」

じゃあ今さっきのは夢？ 思ってしまったが、心の奥底で違うと否定してしまう。

「優花、其方……少し無理をしているのではないか？　ご主人様の事もあるだろうしこ

の移動の時ぐらいに寝ても大丈夫じゃぞ？」

「ミュウもそう思うの〜」

「うん、ありがと二人共、私は大丈夫だから」

優花は平気だと言つて二人に無駄な心配をさせたくないと思うと、また、夢？　記憶？のような映像をのことを考えてしまう。

「(本当になんだったろ？アレ……ただの夢じゃない気がする……誰かの記憶のような……)」

いや、しかし今はそんな事よりハジメ達の方が重要だと優花はその考えを切り捨てる。そして……

「ハジメ……」

優花はそう呟いて愛しの彼との再会を願つた。

しかし……その先で、拍子抜けするほどあっさり再会するとは夢にも思わなかった。

そして、優花は知る由もなかった。あの記憶のような夢はどれだけ重要なものだったといふことを……。

## 五十五話

## 母娘の再会

見渡す限りの青。

空は地平の彼方まで晴れ渡り、太陽の光は燦々と降り注ぐ。しかし、決して暑すぎるということとはなく、気候は穏やかで過ごしやすい。時折、優しく吹くそよ風は何とも心地いい。

この光景を見なければ……

「お前達は何者だ？ なぜ、ここにいます？ その乗っているものは何だ？」

現在、ハジメ達は海の下真ん中で海人族の集団に囲まれていた。

「……………ムグ、ムグ（この状況、どう打開しようか…………）」

ハジメは焼き魚を口にしたまま、海人族の集団に囲まれながらここからどう打開しようか考えながら、自分やユエ達の体調ぐらいいいか考えが至ってなく、自警団などの懸念を蔑ろにしてたのを後悔していた。

—— 火山から数時間前までの出来事

火山から海に放流され二日目の事だった。ハジメ達は放流されてから海の魔物との戦闘があつた後、ハジメはウラノスや灰竜から喰らつてしまつた極光の毒素を抜かせる事を専念し、一日が経ち、ユエに血を飲んで貰い毒素が抜けたと確認して貰つたらマガマや魔物との戦闘で傷付いてしまつた潜水艇の簡単な修理を行った。

ユエもユエで潜水艇の防御や魔物の戦闘により大量の魔力を消費してしまい、大量の血が必要になった。普通ならユエの技能の“血力変換”の派生の“血盟契約”では契約相手であるハジメの血が最適だがハジメは身体に毒素がまわっており、もしユエに害があつたら危険なのでシアの血を飲んで貰う事にした。

その事に飲む側のユエは「……それなら仕方ない」と残念そうに顔をムスーつと唇を尖らせながら言い、飲まれる側シアは「まあ、私特に何もしてないので……ユエさん！ どんどん飲んで下さい！」と余り仕事がなくイジケていたシアがドンツと胸を張りながら言っていたが数分後、貧血で倒れ、半日は寝たきり状態になった。

そんな事があつて、潜水艇をエリセンの港があると思われる方向の東に向かいながら二日目の太陽が中天を越えた頃、ハジメ達は、お昼休憩のため潜水艇を停めて、その上で波に揺られながら昼食をとっていた。

メニューは、当然、海で採つた魚だ。“紅雷”で焼いて食べるという行為が、奈落にいたときのことを思い出してまい、優花の料理が恋しくなる。焼くだけなのは“宝物庫

“をテイオに預けてあるので、調理器具も調味料も何もないのだ。

それでも、三人仲良く並んでポーと水平線を眺めながら食べる魚は、中々、美味しかった。

と、その時、見たこともない魚の丸焼きに舌鼓を打っていたシアのウサミミが、突如、ピコンツ！と跳ねたかと思うと、忙しく動き始めた。次いで、ハジメも「ん？」と何かの気配を感じ、全長六十センチ近くある魚を頬張りながら、視線を動かした。

直後、潜水艇を囲むようにして、先が三股になつている槍を突き出した複数の人々が、ザバツ！と音を立てて海の中から一斉に現れた。数は、二十人ほど。その誰もが、エメラルドグリーン髪の毛と扇状のヒレのような耳を付けていた。どう見ても、海人族の集団だ。彼らの目はいずれも、警戒心に溢れ剣呑に細められている。

そのうちの一人、ハジメの正面に位置する海人族の男が槍を突き出しながら、問い掛けた。

「お前達は何者だ？ なぜ、ここにいます？ その乗っているものは何だ？」

——そして、現在に至る。

「……ムグ、ムグ」

ハジメは尋問に答える為に急いで食っている魚を飲み込もうと頑張つてると尋問した男の額に青筋が浮かべている。

「ムグ……（しかし、なんでコイツ等、こんなに殺気立ってるんだ？）」

どうにも、ただ海にいる人間を見つけたにしては殺気立ち過ぎているようで、ハジメは疑問を抱きつつも、一触即発の状況を打開しようと、ハジメの代わりにシアが答えようとした。

「あ、あの、落ち着いて下さい。私達はですね……」

「黙れ！ 兎人族如きが勝手に口を開くな！」

やはり兎人族の地位は、樹海の外の亜人族の中でも低いようで妙に殺気立っていることもあり、槍の矛先がシアの方を向き、勢いよく突き出された。

その瞬間、ハジメから巨大な殺気と大瀑布の如きプレッシャーを放たれた。すると、海面が波紋を広げたように波打ちそして……

ガシッ

シアに突き出された槍を義手で掴み握りしめバキッと音がした共に槍が破壊され砕け散った。

「なっ?!」

槍を突き出していた海人族の男から槍を片手で破壊されたことに驚愕の声があがる。

「……ゴクンッ。ふう、尋問に答えられなかったのは謝る。だが、人の女を傷付けるようにするのは流石にやめようか。なあ？」

焼き魚を食べ終えたハジメは「威圧」を放ちながらそう言うのと、海人族の集団はハジメの強烈な「威圧」に怯み少し後ろに後ずさっていく。

まあ、身体強化したシアに、海人族の攻撃が通るわけがないのだが、突き出された槍はシアが躲さなければ、浅く頬に当たっている位置だ。おそらく、少し傷を付けて警告しようしたんだろうが、少々やりすぎ感があるし、それに海人族はこれほど苛烈な種族ではないはずだとハジメはそのことに疑問を感じ少し目を細めながら話す。

「さて、俺としては海人族と極力争いたくないんだ。だから、ここは落ち着いて話し合いと聞かないか？ 流石に、本気で人の女に手を出されたら黙っている訳にはいかないし……そつちも何かと気が立ってるようだしな」

紅色の輝きを失い「威圧」を解くとハジメは、そう提案した。ハジメとしても、ミユウと同じ海人族とは、あまり争いたくはないからだ。

しかし、海人族の方は、提案を呑むつもりがないらしい。海の上という人間にとつて圧倒的に不利な状況で「お前達など相手にならない」という態度に腹を立てたと思っただのだろう。ハジメはもう少しオブラートに話せば良かったと後悔する。

また、何故人間族に対する警戒が異常に高いようで、ハジメの言葉を全く信用していないようだ。油断させようとしてもそうはいかない！ と、ハジメ達から距離を取りながら背中に括りつけた短いモリを、投擲するように構えだした。



「そうやって、あの子も攫ったのか？ また、我らの子を攫いに来たのか！」

「もう魔法を使う隙など与えんぞ！ 海は我らの領域。無事に帰れると思うな！」

「手足を切り落としてでも、あの子の居場所を吐かせてやる！」

「安心しろ。王国に引き渡すまで生かしてやる。状態は保障しないがな」

「……あ（コイツ等もしかして）」

ハジメは何故海人族がこんなに殺気立ってるか理解してある質問をした。

「なあ、その攫われた子ってミュウって名前か？」

「……ッ?! 何故知っている！」

そして、海人族の反応を見てハジメは両手をあげ闘う意思ないことを示しながら伝えた。

「今はステータスプレートは持つて無いが俺達は冒険者だ。フューレンの支部長からその子の保護とエリセンに護送する事を依頼されている」

「……」

海人族はハジメの言葉に目を見開いたがすぐさま疑いの目を向けた。

「……では、今その子は何処にいる？ 此処には見えないか？」

「少し事情があつて、此処にはいないんだよ。でも安心しろ俺の仲間と一緒に今はア  
ンカジにいる」



ミュウを知っている者達だったらしい。ミュウ誘拐の折、母親が負傷したこともあつて余計感情的になつていたようらしい。

そうして海の上を走ること数時間、

「あつ、ハジメさん！ 見えてきましたよ！ 町ですう！ やつと人のいる場所ですよお！」

「ん？ おお、ほんとに海の下真ん中にあるんだな」

シアが瞳を輝かせながら指を指し「エリセン」の存在を伝える。視線を向けたハジメの眼にも、確かに海上に浮かぶ大きな町が見え始めた。

ハジメは、栈橋が数多く突き出た場所へ向かう。そして、見たこともない乗り物に乗つてやつて来たハジメ達に目を丸くしている海人族達や観光やら商売でやつて来たであろう人間達を尻目に、空いている場所に停泊した。

すると、そうこうしているうちに、完全武装した海人族と人間の兵士が詰めかけてきた。青年が、事情を説明するため前に進み出て、何やらお偉いさんらしき人と話し始める。ハジメは、早く、アンカジに戻つて優花達と合流したかったので、心の中で「さつさと同行者を決めろよ」と多少ウンザリしながら、その様子を見守っていた。

しかし、穏便にいつてくれというハジメの思いは、やはりそう簡単に叶いはしないらしい。何やら慌てている青年を押しつけ、兵士達が押し寄せ狭い栈橋の上なので逃げ場

などなく、あつという間に包囲されてしまった。

「大人しくしろ。事の真偽がはっきりするまで、お前達を拘束させてもらう」

「おいおい、話はちゃんと聞いてんのか？」

「もちろんだ。確認には我々の人員を行かせればいい。お前達が行く必要はない」

にべもない態度と言葉にハジメはイラっとしつつも、ミュウの故郷だと自分に言い聞かせて自制する。

「……あのな。俺達だつて仲間が待っているんだ。直ぐにでもアンカジに向かいたいところを、エリセンに来てやったんだぞ？」

「果たして……攫われた子がアンカジにいなければ、エリセンの管轄内で正体不明の船に乗ってうろついていた不審者ということになる。道中で逃げ出さないと制限らないだろう？」

「どんなタイミングだよ。逃げ出すなら、こいつらを全滅させて逃げ出しているつつうの」

「その件もだ。お前達が無断で管轄内に入ったことに変わりはない。そう簡単に自由にさせるわけには行かないな」

「……いい加減にしとけよ」

ハジメは剣呑に目を細めた。目の前の兵士達のリーダーらしき人間族の男は、ハジメ

から溢れ出る重い空気に冷や汗をかきながら眉をしかめる。そして、ハジメは人間族の男の胸元にあるワツペンを見ると、ハイリヒ王国の紋章だだと理解する。すると国が保護の名目で送り込んでいる駐在部隊の隊長格だろうと察した。そして、海人族側のおそらく自警団と呼ばれた奴等も引く気はないらしい。

ハジメとしては、ミュウの故郷であるし、大迷宮の一つ「メルジーネ海底遺跡」の正確な場所を知らないのです、しばらく探索に時間がかかる可能性を考えると拠点となるエリセンで問題を起こしたくはなかったがアンカジにミュウがいるのは確実であるし、そうすれば疑惑も解けると頭ではわかっているが……

まさに、一触即発。

緊張感が高まる中、ハジメが、やはりミュウの故郷で暴れまわるわけにはいかないかと、譲歩しようとした。と、その時……

「ん？　今なにか……」

シアが、ウサミミをピコピコと動かしながらキヨロキヨロと空を見渡し始めた。ハジメは、隊長格の男から目を逸らさずに、「どうした？」と尋ねる。だが、それにシアが答える前に、ハジメにも薄らと声と気配が感じられた。

「——ッ！」

「あ？　なんだ？」

「——パッ！」

「おい、まさか!?」

「——パパあー!!」

ハジメが慌てて空を見上げると、何と、遙か上空から、小さな人影が落ちてきているところだった！両手を広げて、自由落下しているというのに満面の笑みを浮かべるその人影はハジメもよく知る人物だった。

「ミュウツ?!」

そう、ミュウだ。ミュウがスカイダイビングしている。パラシュートなしで。よく見れば、その背後から、慌てたように落下してくる黒竜姿のテイオとその背に乗った、やはり焦り顔の優花の姿が見えた。

「チイツー！」

ハジメは、落ちてくる人影がミュウだと認識するや否や、“空力”と“縮地”を発動。その場から一気に跳躍した。その衝撃で棧橋が吹き飛び、兵士達が悲鳴を上げながら海に落ちたが知ったことではないミュウが優先だ。

一気に百メートル以上跳んだ俺は、更に“空力”を使ってミュウが落下して来る場所へ跳躍し“瞬光”を発動。スローになった世界で、確実にミュウを腕の中に収めると、神業とも言うべき速度調整で落下し、衝撃の一切を完璧に殺した。



少年が空を跳びはねキャッチした事、更にその上空から少女を背に乗せた黒竜が降りてきた事も原因ではあるのだが、一番の理由は、その少年が盛大に海人族の少女を叱り付けたことだろう。いや、正確には、叱りつけた少年に対する先程から何度か聞こえる少女の呼び名が原因かもしれない。

「ぐすつ、パパ、ごめんしやい……」

「もう、あんな危ない事しないって約束できるか？」

「うん、しゆる」

「よし、ならいい。ほら、来な」

「パパあー!」

片膝立ちで幼子にしっかりと言い聞かせるハジメの姿と、叱られて泣きながらも素直に反省し、許されてハジメの胸元に飛び込むミュウの姿は……普通に親子だった。ミュウが連呼する「パパ」の呼び名の通りに。

攫われたはずの海人族の幼子が、単なる「慕う」を通り越して人間の少年を父親扱いしている事態に、そしてそれを受け入れてミュウを娘扱いしているハジメに、皆、意味が分からず唖然としていた。

ハジメは苦笑いしながらミュウを抱き上げて、よしよしと背中をポンポンしているのと、ようやく、周囲の人々も我を取り戻したよう盛大に騒ぎ始めた。



そんな周囲の困惑に満ちた喧騒を尻目に、ハジメがミュウをあやしていると背後からギョツと抱きついてくる感触が……

ハジメが肩越しに振り返ると、そこには肩口に額を当てて小刻みに震える優花の姿があった。

「ハジメ、よかったよ……ぐすっ」

「優花」

今度は、優花が泣き出してしまった。気丈に振舞っていても、内心、死ぬほど不安だったのだろうと察した。生存を信じていたが、それでも心配な気持ちを感じなくなるわけではない。しかも、ようやく再会できたというのに、すぐさま二度目の行方不明だ。相堪えたに違いないだろう。

「心配掛けて悪かった。この通り、俺はピンピンしてるよ。だから、泣くなって……」

「うっ、ひっく、じゃ、じゃあ、もう少しこのまま……」

ハジメは困ったように、肩越しに手を回して優花を抱き締めるが、優花は涙が止まらないのか、顔を見せないように益々俺の胸に顔をうずめた。

「おい、お前、一体どういふことか、せつッぶげらっ!?!」

「むっ? すまぬ」

そんな中、先程、ハジメの跳躍の余波で詰め寄ろうとした。が、その後ろから小走り

でハジメに駆け寄った竜化を解いたティオとぶつかってしまい、再び海に叩き落とされた。

大して気にもせず、ティオはハジメの傍に寄ると、その頭を抱き抱え自らの胸の谷間に押し付けてきた。

「ぬおっ!!? おい、ティオ」

「信じておつたよ? 信じておつたが……やはり、こうして再会すると……しばし、時間をおくれ、ご主人様よ」

ハジメが僅かに胸の谷間から顔を覗かせティオの顔を見れば、大切なものが腕の中にあることを噛み締めるような表情をして、目の端に涙を溜めていた。

「お前にも心配かけたな」

そう言いながらハジメはティオの頭を撫でていく。

そうこうしているうちに、ミュウが「ミュウもギョクする」と言いながら首筋に抱きつき、いつの間にか傍に来ていたユエが側面から、シアが優花とは反対側の肩口に抱き付き始めた。

衆人環視の中、美少女・美少女・美女を体が見えなくなるくらい全身に纏わりつかせた俺に周囲の視線が、困惑から次第に生暖かなものへと変わっていく気がした。

「貴様等……一度ならず、二度までも……王国兵士に対する公務妨害で捕縛してやろう

か！」

すると再び棧橋から這い上がってきた隊長らしき人物が、怒りの形相でハジメ達を睨み武器を手に、今にも襲いかかってきそうな勢いだった。

一応、攫われた本人であるミュウが尋常でなくらい懐いていることから誘拐犯の可能性は余り考えていないよう見えるがそれにしても理解不能な点が多すぎるからしよつ引いて事情聴取をしたいんだろう。

ミュウに関しては、元より、中立商業都市フューレンのギルド支部長であるイルワからの正式な護送依頼であるので、事情説明はするつもりだったが、それを証明するものがなかったたので困っていたわけだが今はある。

「テイオ、宝物庫を」

「うむ」

ハジメは、テイオから「宝物庫」を返してもらおうと、中からステータスプレートとイルワからの依頼書を取り出し、隊長に提示した。

「……なにになに……」金「ランクだどっ?!」しかも、フューレン支部長の指名依頼!」

ハジメは続けて、イルワの依頼書の他、事の経緯が書かれた手紙も提出した。これはエリセンの町長と目の前の駐在兵士のトップに宛てられたものだ。それを食い入るように読み進めた隊長は盛大に溜息を吐くと、少し逡巡したようだが、やがて諦めたよう

に肩を落として敬礼をした。

「先程はすまない……依頼の完了を承認する。南雲殿」

「疑いが晴れたようで何よりだ。こつちも焦っていたんだ無礼は詫びる。他にも色々聞きたいことはあるんだろうが、こつちはこつちで忙しい。というわけで何も聞かないでくれ……一先ず、この子と母親を会わせたい。いいよな？」

「もちろんだ。しかし、先程の竜の事や貴方の先程の跳躍、それにあの船らしきもの……すまないが王国兵士としては看過できない」

先程の高圧的な態度とは一転し、ハジメに対して一定の敬意を払った態度となった隊長は、それでも聞くべきことは見逃せないと強い眼差しで訴える感じがした。

「それなら、時間が出来たら話すつてことでもいいか？ どつちにしろしばらくエリセンに滞在する予定だし。もつとも、本国に報告しても無駄だと思うぞ。もう、ほとんど知ってるだろうし……」

「むっ、そうか。とにかく、話す機会があるならいい。その子を母親の元へ……その子は母親の状態を？」

「いや、まだ知らないが、問題ない。こつちには最高の薬もあるし、最高の治療師もいるからな」

「そうか、わかった。では、落ち着いたらまた、尋ねるとしよう」

隊長の男——セルゼはハジメとの会話を終わると野次馬を散らして騒ぎの收拾に入った。中々、職務に忠実な人物だと感じ悪い事をしちまったとハジメは苦笑いする。

そうしているとミュウを知っている者達だろうと思うが、声を掛けたそうにしていたが、そうすれば何時までたつても母親のところへたどり着けそうになかったので、ハジメは視線で制止した。

「パパ、パパ。お家に帰るの。ママが待つてるの！　ママに会いたいのに」

「そうだな……早く、会いに行こう」

ハジメの手を懸命に引っ張り、早く早く！　と急かすミュウ。まあ、ミュウにとつては、約二ヶ月ぶりの我が家と母親だから、無理もない。道中も、ハジメ達が構うので普段は笑っていたが、夜、寝る時などに、やはり母親が恋しくなるようで、そういう時は特に甘えん坊になっていて優花とかユエ達と一緒に寝ていたのだ。

そのミュウの案内に従って彼女の家に向かう道中、顔を寄せて来た優花が不安そうな小声で尋ねる。

「ハジメ。さっきの兵士さんとの話って……」

「いや、命に関わるようなものじゃないらしい。ただ、怪我が酷いのと、後は、精神的なものだそうだ……精神の方はミュウがいれば問題ない。怪我の方は詳しく見てやってくれ」

「うん。任せて」

そんな会話をしていると、通りの先で騒ぎが聞こえた。声質的に、若い女性が数人と大勢の男性の声だろう。

「レミア、落ち着くんだ！ その足じゃ無理だ！」

「そうだよ、レミアちゃん。ミュウちゃんならちゃんと連れてくるから！」

「いやよ！ ミュウが帰ってきたのでしよう!? なら、私が行かないと！ 迎えに行つてあげないと！」

どうやら、家を飛び出そうとしている女性を、数人の男女が抑えているようだ。おそらく、知り合いがミュウの帰還を母親に伝えただろう。

「うおっ！とミュウ！」

レミアと呼ばれる女性の声を聞いたミュウは顔をパアア！ と輝かせ、そして、ハジメの手から離れて精一杯大きな声で呼びかけながら駆け出した。

「ママーー!!」

「ツ!? ミュウ!? ミュウ！」

ミュウは、ステテテテ！ と勢いよく走り、玄関先で両足を揃えて投げ出し崩れ落ちている女性——母親であるレミアの胸元へ満面の笑顔で飛び込んでいった。

もう二度と離れないというように固く抱きしめ合う母娘の姿に、周囲の人々が温かな

眼差しを向けていた。

レミアは、何度も何度もミュウに「ごめんなさい」と繰り返していた。それは、目を離してしまったことか、それとも迎えに行つてあげられなかったことか、あるいはその両方か。

娘が無事だった事に対する安堵と守れなかつた事に対する不甲斐なさにポロポロと涙をこぼしているレミアに、ミュウは心配そうな眼差しを向けながら、その頭を優しく撫でていた。

「大丈夫なの。ママ、ミュウはここに居るの。だから、大丈夫なの」

「ミュウ……」

まさか、まだ四歳の娘に慰められるとは思わず、レミアは涙で滲む瞳をまん丸に見開いて、ミュウを見つめていた。再び抱きしめ合つたミュウとレミアだったが、突如、ミュウが悲鳴じみた声を上げた。

「ママー！ あしー！ どうしたの！ けがしたの!? いたいの!？」

どうやら、肩越しにレミアの足の状態に気がついたらしい。彼女のロングスカートから覗いている両足は、包帯でぐるぐる巻きにされており、痛々しい有様だった。

これが、サルゼが言っていたことか、エリセンに来る道中でハジメも青年から聞いていたがミュウを攫つたこともだが、母親であるレミアに歩けなくなる程の重傷を負わせ

たことも、海人族達があれば程殺気立っていた理由の一つだったらしい。

レミアは、これ以上、娘に心配ばかりかけられないと笑顔を見せて、ミュウと同じように「大丈夫」と伝えようとした。しかし、それより早く、ミュウは、この世でもっとも頼りにしている「パパ（ハジメ）」に助けを求めた。

「パパあー！ ママを助けて！ ママの足が痛いのに！」

「えっ!? ミ、ミュウ？ いま、なんて……」

「パパ！ はやくうー！」

「あら？ あらら？ やつぱり、パパって言ったの？ ミユウ、パパって？」

混乱し頭上に大量の「？」を浮かべるレミア。周囲の人々もザワザワと騒ぎ出した。あちこちから「レミアが……再婚？ そんな……バカナ」「レミアちゃんにも、ようやく次の春が来たのね！ おめでたいわ！」「ウソだろ？ 誰か、嘘だと言ってくれ……俺のレミアさんが……」「パパ……だど!? 俺のことか!?」「おい、緊急集会だ！ レミアさんとミュウちゃんを温かく見守る会のメンバー全員に通達しろ！ こりゃあ、荒れるぞ！」など、色々危ない発言が飛び交っている。

「……………」

どうやら、レミアとミュウは、かなり人気のある母娘のようだ。レミアは、まだ、二十代半ばと若く、今は、かなりやつれてしまっているが、ミュウによく似た整った顔立



ちをしている。復調すれば、おっとり系の美人として人目を惹くだろうことは容易く想像できるので、人気があるのも頷ける。

刻一刻と大きくなる喧騒に、「行きたくねえなあ」と表情を引き攣らせるハジメ。ミュウがハジメをパパと呼ぶようになった経緯を説明すれば、あくまでパパ（代わり（内心は別としても））であって、決してレミアとの再婚を狙っているわけではないと分かってももらえるだろうと簡単に考えていたのだが、どうやら、誤解が物凄い勢いで加速しているようだ。

だが、ある意味僥倖かもしれないとハジメは考えた。ミュウは母親の元に残して、ハジメ達は旅を続けなければならない。「メルジーネ海底遺跡」を攻略すれば、ミュウとはお別れなのだ。故郷から遠く離れた地で、母親から無理やり引き離されたミュウの寄り辺がハジメ達だったわけだが、母親の元に戻れば、最初は悲しむかもしれないが時間がハジメ達への思いを薄れさせるだろうと考えていた。周囲の人々の、レミア達母娘への関心の強さは、きつと、その助けとなるはずだ。

「パパあー！ はやくうー！ ママをたすけてー！」

するとミュウの視線が、がっちりハジメを捉えているので、その視線をたどりレミアも周囲の人々も俺の存在に気がついたようだった。

「はあ………しようがねえ」

ハジメは観念して、レミア達母娘へと歩み寄った。

「パパ、ママが……」

「大丈夫だ、ミュウ……ちゃんと治る。だから、泣きそうな顔するな」

「はいなの……」

ハジメが、泣きそうな表情で振り返るミュウの頭をくしゃくしゃと撫でながら、視線をレミアに向けた。レミアは、ポカンとした表情でハジメを見つめていた。

無理もないだろうと思いつつも、ハジメは取り敢えずここでは騒ぎが拡大するだろうし一旦、治療の為に家に入らせて貰うと判断する。

「悪いが、ちよつと失礼するぞ？」

「え？ ツ!? あらら？」

ハジメは、ヒヨイと全く重さを感じさせずにレミアをお姫様抱っこすると、ミュウに先導してもらってレミアを家の中に運び入れた。当のレミアは、突然、抱き上げられたことに目を白黒させている。

レミアを抱き上げたことに、背後で悲鳴と怒号などの喧騒が上がっているがハジメはスルーを決め込んだ。

家の中に入ると、リビングのソファァーが目に入ったので、ハジメはそこへレミアをそつと下ろし、ソファァーに座りハジメのことを目をぱちくりさせながら見つめるレミア

の前にかしずき、優花を呼んだ。

「優花、どうだ？」

「ちよつと見てみるわ……レミアさん、足に触れますね。痛かったら言つて下さい」

「は、はい？ えつと、どういう状況なのかしら？」

レミアは、困つたように眉を八の字にしている。

突然、攫われた娘が帰つてきたと思つたら、その娘がパパと慕う男が現れて、更に、見知らぬ美女・美少女が家の中に集まつているという状況に、レミアは、困つたように眉を八の字にしている。

そうこうしているうちに、優花の診察も終わり、レミアの足は神経を傷つけてはいるものの優花の回復魔法できちんと治癒できることが伝えられた。

「ただ、少し時間がかかります。デリケートな場所なので、後遺症なく治療するには、三日ほど掛けてゆつくり、少しずつ癒していくのがいいと思います。それまで、不便だと思いませんけど、必ず治しますから安心して下さいね」

「あらあら、まあまあ。もう、歩けないと思つていましたのに……何とお礼を言えばいいか……」

「ふふ、いいんですよ。ミュウちゃんのお母さんなんですから」

「えつと、そういえば、皆さんは、ミュウとはどのような……それに、その……どうして、

ミュウは、貴方のことを「パパ」と……」

優花が早速レミアの足を治療している間に、ハジメ達は事の経緯を説明することにした。フューレンでのミュウとの出会いと騒動、そしてパパと呼ぶようになった経緯など。優花に治療されながら、全てを聞いたレミアは、その場で深々と頭を下げ、涙ながらに何度も何度もお礼を繰り返した。

「本当に、何とお礼を言えればいいか……娘とこうして再会できたのは、全て皆さんのおかげです。このご恩は一生かけてもお返しします。私に出来ることでしたら、どんなことでも……」

氣にするなどハジメ達は伝えたが、レミアとしても娘の命の恩人に礼の一つもしないでは納得できないらしい。そうこうしているうちに、優花の治療もひと段落着いたので、今日の宿を探すからと暇を伝えると、レミアはこれ幸いと、自分の家を使つて欲しいと訴えた。

「どうかせめて、これくらいはさせて下さい。幸い、家はゆとりがありますから、皆さんの分の部屋も空いています。エリセンに滞在中は、どうか遠慮なく。それに、その方がミュウも喜びます。ね？ ミュウ？ ハジメさん達が家にいてくれた方が嬉しいわよね？」

「？ パパ、どこかに行くの？」

レミアの言葉に、レミアの膝枕でうとうととしていたミュウは目をぱちくりさせて目を覚まし、次いでキョトンとした。どうやら、ミュウの中でハジメが自分の家に滞在することは当たり前のことになってるらしい。なぜ、レミアがそんな事を聞くのかわからな  
いと言った表情だった。

「しかしな、母親の元に送り届けたら少しずつ距離を取ろうかと思っていたんだが……」  
「あらあら、うふふ。パパが、娘から距離を取るなんていけませんよ?」

「いや、それは説明しただろ? 俺達は……」

「いずれ、旅立たれることは承知しています。ですが、だからこそ、お別れの日まで『パパ』でいてあげて下さい。距離を取られた拳句、さようならでは……ね?」

「……まあ、それもそうだが……」

「うふふ、別に、お別れの日までと言わず、ずっと『パパ』でもいいのですよ? 先程、

『一生かけて』と言ってしまいましたし……」

そんな事を言つて、少し赤く染まった頬に片手を当てながら「うふふ♡」と笑みをこぼすレミア。おっとりした微笑みは、普通なら和むものなのだろうかハジメの周囲にはブリザードが発生していた。

「そういう冗談はよしてくれ……空気が冷たくなるだろうが……」

「あらあら、おモチになるのですね。ですが、私も夫を亡くしてそろそろ五年ですし……」

ミュウもパパ欲しいわよね？」

「ふえ？　パパはパパだよ？」

「うふふ、だそうですよ、パパ？」

ブリザードが激しさを増してる。冷たい空気に気が付いているのかいないのか分からないが、おっとりした雰囲気で、冗談とも本気とも付かない事をいうレミアに「いい度胸だ、ゴラア！」という視線を送るユエ達や笑ってない笑顔の優花にも「……フツ」と微笑むだけで、柳に風と受け流している。意外に大物なかもしれない。

結局、レミア宅に世話になることになった。部屋割りで「夫婦なら一緒にしますか？」とのたまうレミアとユエ達が無言の応酬を繰り返したり、「パパとママと一緒に寝る」というミュウの言葉に場がカオスと化したりしたが、一応の落ち着きを見せた。

しかし、明日からは、大迷宮攻略に向けて、しばらくの間、損壊、喪失した装備品の修繕・作成や、新たな神代魔法に対する試行錯誤とハジメが「脳内設計」で作成し、色々と試行錯誤を重ねているアーティファクトの製作があるのだが……

「zzz…:。パパ」

「クハツ……」

しかし、残り少ないミュウとの時間も、蔑ろにはできないしな。ベッドに入ったハジメの意識は微睡んでいった。

それから三日。

妙にハジメとの距離が近いレミアに、海人族の男連中が嫉妬で目を血走らせたり、ハジメに突つかかかってきたり、ご近所のおぼちゃん達がハジメとレミアの仲を盛り上げたり、それに優花達が不機嫌になってアプローチが激しくなったり、夜の優花達が殊更可愛くなったりしながらも、アーティファクトの完成に至らずとも大迷宮攻略の準備を万全にしたハジメは、遂に、「メルジーネ海底遺跡」の探索に乗り出す事ができた。

しばしの別れに、物凄く寂しそうな表情をするミュウにハジメは盛大に後ろ髪惹かれる思いだったが、何とか振り切り棧橋から修繕した潜水艇に乗り込む。

ミュウが手を振りながら「パパ、いつてらっしやい！」と気丈に叫ぶ。そして、やはり冗談なのか本気なのか分からない雰囲気です「いつてらっしやい、あ・な・た♡」と手を振るレミア。

傍から見れば仕事に行く夫を見送る妻と娘そのままだ。背後のユエ達からも周囲の海人族からも何故か鋭い視線が飛んでくる。迷宮から戻って来ることに少々ためらい

を覚えるハジメであつた……。



## 五十六話

## メルジーネ海底遺跡

【海上の町エリセン】から西北西に約三百キロメートル。

ハジメ達は「メルジーネ海底遺跡」を探していたが見つからず難航していた。

「……マジで何処にあんだ？」

ハジメはミレディから聞いた七大迷宮の一つ「メルジーネ海底遺跡」の存在する場所とヒントを貰っているも「月」と「グリューエンの証」に従えとしか教えられず、場所も座標ぐらいで詳しい場所はわからなかった。

取り敢えずハジメは、方角と距離だけを頼りに大海原を進んできたが、昼間のうちにポイントまで到着し海底を探索したものの特に何も見つけることは出来なく、海底遺跡というくらいだから、それらしき痕跡が何かしらあるのではないかと考えたが甘かったと後悔する。

ただ、周囲百キロメートルの水深に比べると、ポイント周辺の水深が幾分浅いように感じたから、場所自体は間違えていないことは判明していた。

「座標は間違っていない。……でも、「月」ってのが分かんねえんだよなあ……」

そう眩きながら、ハジメはミレデイの教えに従い月が出る夜を待つ為、潜水艇を停泊させ甲板の上で黄昏ていた。

今は、ちょうど日没の頃で、空も海も赤とオレンジに染まり、太陽が海に反射して水平線の彼方へと輝く一本道を作り出していて美しかった。やはり、どこの世界でも自然が作り出す光景は美しいとハジメは沈む太陽を何となしに見つめながら、ふと、このまま太陽へと続く光の道を進んだならば、神共を殺せる武器を手に入れ日本に帰れはしないだろうか、そんな有り得ない事を思った。そして、何を考えているんだかと苦笑いをこぼした。

「どうしたのハジメ？」

そんなハジメの様子に気がついて声を掛けてきたのは優花だった。

先程まで船内でシャワーを浴びていたはずで、その証拠に髪が湿っている。いや、優花だけではない。いつの間にかユエやシア、テイオも甲板に出てきており、皆、船内シャワーを浴びてきたようで、頬は上気し、湿った髪が頬や首筋に張り付いていて実に艶かしい姿だ。備え付けのシャワールームは天井から直接温水が降ってくる仕様なので、四人全員が入っても問題ない。ちなみにハジメが甲板で黄昏れているのは、下手をすればシャワールームに連れ込まれていた可能性があったからだ。

彼女達がシャワーを浴びようとした時、テイオがハジメを誘ったのだが、それに優花

もシアも、もちろんユエも賛同し、断ったハジメに全員でにじり寄ってきたのである。ハジメは四人が大切に愛しているが流石に四人一気には、迷宮攻略前だからする訳にはいかないと伝えた。

しかし、そんなハジメの言葉を嬉しそうにしながらも笑顔でスルーする優花達は、三人でハジメを抑えに掛かり、シアが背後からドリユッケンで意識を飛ばそうとしたのだ。ハジメは流石に身の危険を感じ、割かし本気で逃げ出し、甲板に出て来たわけだが……

ハジメは、そんな出来事を頭を振って追い出しつつ、優花の質問に答えた。

「ちよつと、日本を思い出していたんだよ。こういう自然の光景は、変わらねえなって」  
「……そっか。うん、そうね。向こうの海で見た夕日とそっくり……なんだかすごく懐かしい気がするわ。まだ半年も経っていないのにね」

「こつちでの日々が濃すぎるんだよ」  
ハジメの隣に座り肩に頭を乗せた優花が、どこか遠い目をしながらハジメの言葉に同意する。

「……」

きつと、優花も日本で過ごしてきた日々を懐かしんでいるんだろうとハジメはそんな遠い目をしてる優花の頭が乗ってる方の腕を動かし更に抱き寄せた。

「…………絶対に戻るうな」

「ハジメ…………うんっ」

優花はハジメの言ったことに目を細め嬉しそうに俺の胸に顔を埋めた。すると、二人にしか通じない話題に寂しさを感じたのか、ユエは火照った体でトコトコと歩み寄りつて、ハジメの片膝の上に腰をおろし、暑いだろうに背中を俺のほう片方の胸元にもたれかけさせ、真下から上目遣いで見つめ始めた。

その瞳は明らかに、自分も話に入れて欲しいと物語っていた。寂しさと同時に、ハジメ達の故郷のことを聞きたいという気持ちがあるようだ。

すると今度はユエの隣からシアが寄り添い、その目をキラキラさせる。明らかに構って欲しいという合図だ。空いている手でウサミミをモフる。「えへへ」と頬を緩めるシア。背中には、テイオがもたれかかり特に何を要求するでもなく、静かに背中合わせになっているだけだが、体重のかけ具合から心底リラックスしていることが分かった。

広大な海の上で、小さく寄り添い合いながら夜天に月が輝き出すまでは今しばらく時間がかかるので暇つぶしに、ハジメは少し故郷のことを話すことにした。

ハジメの語りにユエ達が興味津々に相槌を打ち、優花がにこやかに補足を入れたりハジメの黒歴史も入れてきて止めに入った。そんな和やかな雰囲気を楽しんでいると、あつという間に時間は過ぎ去り、日は完全に水平線の向こう側へと消え、代わりに月が

輝きを放ち始めていた。

「ふう……そろそろ頃合だな」

ハジメは懐から「グリューエン大火山」攻略の証であるペンダントを取り出した。ペンダントはサークル内に女性がランタンを掲げている姿がデザインされており、ランタンの部分だけがくり抜かれていて、穴あきになっている。

しかし、ハジメはエリセンに滞在している時にも、このペンダントを取り出して月にかざしてみたり、魔力を流してみたりしたのだが、特に何の変化もなく、本当に迷宮の「カギ」なのかと疑問に感じていた。

ハジメは内心首を捻りながら、取り敢えずペンダントを月にかざしてみた。ちょうどランタンの部分から月が顔を覗かせている。

しばらく眺めていたがやはり変化はなく、ハジメは溜息を吐きながら他の方法を試そうとした。

と、その時、ペンダントに変化が現れた。

「！」

「わあ、ランタンに光が溜まっていきますう。綺麗ですねえ」

「ホント……不思議。穴が空いているのに……」

ハジメは目を見開き、シアが感嘆の声を上げ、優花が同調するように瞳を輝かせる。

彼女達の言葉通り、ペンダントのランタンは、少しずつ月の光を吸収するように底の方から光を溜め始めていた。それに伴って、穴あき部分が光で塞がっていく。ユエとテイオも、興味深げにペンダントを見つめた。

「昨夜も試してみたんだがな……」

「ふむ、ご主人様よ。おそろく、この場所であればならなかったのではないかの？」

「……そうか。それなら一番納得できるな」

ハジメはテイオの推測に納得していると、やがて、ランタンに光を溜めきつたペンダントは全体に光を帯びると、その直後、ランタンから一直線に光を放ち、海面のとある場所を指し示した。

「岩壁地帯？」

その場所は海底の岩壁地帯だった。無数の歪な岩壁が山脈のように連なっている。昼間にも探索した場所で、その時には何もなかった場所だった。

ハジメは潜水艇で近寄りペンダントの光が海底の岩石の一点に当てると、ゴゴゴゴツ！ と音を響かせて地震のような震動が発生し始めた。その音と震動は岩壁が動き出したことが原因で岩壁の一部が真つ二つに裂け、扉のように左右に開き出したのである。その奥には冥界に誘うかのような暗い道が続いていた。

「粹な演出しやがって……道理でいくら探しても見つからないわけだ……時間を無駄に

しちまったな」

「……でも、楽しかった」

「そうよ。異世界で海底遊覧なんて、貴重な体験だと思うわよ?」

ハジメは昼間の探索が徒労だったとわかり、ガツクリと肩を落とすが、ユエと優花は結構楽しんでたようだ。

ハジメは潜水艇を操作して海底の割れ目へと侵入していきペンダントのランタンは、まだ半分ほど光を溜めた状態だが、既に光の放出を止めており、暗い海底を照らすのは潜水艇のライトだけだ。

「う〜む、海底遺跡と聞いた時から思っておったのだが、この『せんすいてい』? がなければ、まず、平凡な輩では、迷宮に入ることも出来なさそうじゃな」

「……強力な結界が使えないとダメ」

「他にも、空気と光、あと水流操作も最低限同時に使えないとダメだな」

「でも、ここにくるのに『グリユーエン大火山』攻略が必須ですから、大迷宮を攻略している時点で普通じゃないですよね」

「もしかしたら、空間魔法を利用するのがセオリーなのかも」

「まあ、それが一番考えられるな……じゃあ進むぞ」

道なりに深く潜行しながら、ハジメ達は潜水艇がない場合の攻略方法について考察し

てみた。確かに、ファンタジックな入口に感動はしたのだが、普通に考えれば、超一流レベルの魔法の使い手が幾人もいなければ、侵入すら出来ないという時点で、他の大迷宮と同じく厄介なことこの上ないとわかる。

ハジメ達は、気を引き締め直し、フロント水晶越しに見える海底の様子に更に注意を払っていた。

と、その時、

ゴウン!!

「うおっ!？」

「んっ!」

「わわっ!」

「きゃっ!」

「何じゃっ!？」

突如、横殴りの衝撃が船体を襲い、一気に一定方向へ流され始めた。マグマの激流に流された時のように、船体がぐるぐるんと回るが、そこは既に対策済みだ。組み込んだ船底の重力石が一気に重みを増し、船体を安定させる。

「うっ、このぐるぐる感は、もう味わいたくなかったですう」

シアが「グリューエン大火山」の地下で流されたときの事を思い出し、顔を青くして



イヤイヤと頭を振っていた。

「直ぐに立て直しただろ？　もう、大丈夫だって。それより、この激流がどこに続いているかだな……」

そんなシアに苦笑いを浮かべつつ、ハジメはフロント水晶から外の様子を観察する。緑光石の明かりが洞窟内の暗闇を払拭し、その全体像をあらわにしている。見た感じだと、どうやら巨大な円形状の洞窟内を流れる奔流に捕まっているようで、ハジメは船体を制御しながら、取り敢えず流されるまま進む。しばらくそうしていると、船尾に組み込まれている「遠透石」が赤黒く光る無数の物体を捉えた。

「なんか近づいてきてるな……まあ、赤黒い魔力を纏っている時点で魔物だろうが」  
「……殺る？」

ハジメがそう呟くと、隣の座席に座るユエが手に魔力に集めながら可愛い顔でギャングのような事をさらりと口にする。

「いや、武装を使う。有効打になるか確認しておきたい」

ハジメが潜水艇の後部にあるギミックを作動させる。すると、真つ赤に染めたペットボトルくらいの大きさの魚雷が無数に発射していった。

潜水艇が先に進み、やがて、赤黒い魔力を纏って追いかけてくる魔物——トビウオのような姿をした無数の魚型の魔物達が、魚雷群に突っ込んでいった。

ドオゴオオオオ!!

背後で盛大な爆発が連続して発生し、大量の気泡がトビウオモドキの群れを包み込む。そして、衝撃で体を引きちぎられバラバラにされたトビウオモドキの残骸が、赤い血肉と共に泡の中から飛び出し、文字通り海の藻屑となつて激流に流されていった。

「うん、前より威力が上がっているな。改良は成功だ」

「うわあ、ハジメさん。今、窓の外を死んだ魚のような目をした物が流れて行きましたよ」

「シアよ、それは紛う事無き死んだ魚じゃ」

「改めて思うけど、ハジメの作るアーティファクトって反則よね」

それから度々、トビウオモドキに遭遇するが容易く蹴散らし先へ進めた。

どれくらいそうやって進んだのか。

代わり映えのない景色に違和感を覚え始めた頃、周囲の壁がやたら破壊された場所に出くわした。よく見れば、岩壁の隙間にトビウオモドキのちぎれた頭部が挟まっており、虚ろな目を海中に向けている。

「……………」、さつき通つた場所だな」

「……………」そうみたい。ぐるぐる回ってる?」

どうやら、円環状の洞窟を一周してきたらしい。大迷宮の先へと進んでいるつもり

だったが、ここはただの海底洞窟で道を誤ったか？と思ってしまう。

ハジメは疑問顔になりながら、今度は道なりに進むのではなく、周囲に何かないか更に注意深く探索しながらの航行となった。

その結果、

「あつ、ハジメ。あそこにもあつたわ！」

「これで、五ヶ所目か……」

洞窟の数ヶ所に五十センチくらいのおおきさのメルジーネの紋章が刻まれている場所を発見した。メルジーネの紋章は五芒星の頂点のひとつから中央に向かって線が伸びており、その中央に三日月のような文様があるというものだ。それが円環状の洞窟の五ヶ所にあるのである。

ハジメ達は、じっくり調べるため、最初に発見した紋章に近付いた。激流にさらされているので、船体の制御に気を遣いながら動かす。

「まあ、五芒星の紋章に五ヶ所の目印、それと光を残したペンダントとくれば……」

ハジメは呟きながら、首から下げたペンダントを取り出し、フロント水晶越しにかざしてみた。すると、案の定ペンダントが反応し、ランタンから光が一直線に伸びる。そして、その光が紋章に当たると、紋章が一気に輝きだした。

「これ、魔法でこの場に来る人達は大変ね……直ぐに気が付けないと魔力が持たないわ

よ

優花の言う通り、このような仕掛けを魔法で何とか生命維持している者達にさせるのは相当酷だろうな「グリュエーン大火山」とは別の意味で限界ギリギリを狙っているのかもしれない、ホントに意地が悪い。

その後、更に三ヶ所の紋章にランタンの光を注ぎ、最後の紋章の場所にやって来た。ランタンに溜まっていた光も、放出することに少なくなっていく、ちょうど後一回分くらい量となっている。

ハジメが、ペンダントをかざし最後の紋章に光を注ぐと、遂に、円環の洞窟から先に進む道が開かれた。ゴゴゴゴッ！ と轟音を響かせて、洞窟の壁が縦真つ二つに別れた。

特に何事もなく奥へ進むと、真下へと通じる水路があった。潜水艇を進める。すると、突然、船体が浮遊感に包まれ一気に落下した。

「おお？」

「んっ」

「ひゃっ!？」

「ぬおっ」

「はうう！」

それぞれ、五者五様の悲鳴を上げる。直後、ズシンツ！と轟音を響かせながら潜水艇が硬い地面に叩きつけられた。激しい衝撃が船内に伝わり、特に体が丈夫なわけではない優花が呻き声を上げる。

「つ……優花、無事か？」

「うう、だ、大丈夫。それより、ここは？」

優花が顔をしかめながらもフロント水晶から外を見ると、先程までと異なり、外は海中ではなく空洞になっているようだった。ハジメは取り敢えず周りを警戒しながら優花達と船外に出た。外は大きな半球状の空間だったか、頭上を見上げれば大きな穴があつてどういう原理なのか水面がたゆたつていてハジメ達はそこから落ちてきたようだ。

「どうやら、ここからが本番みたいだな。海底遺跡っていうより洞窟だが」

「……全部水中でなくて良かった」

ハジメは潜水艇を“宝物庫”に戻しながら、洞窟の奥に見える通路に進もうとユエ達を促す……寸前でユエに呼びかけようとする前に優花が声をあげた。

「ねえ、ハジメ。上から魔力を感じるけど……」

「おつ、優花も気付いたのか、ユエ」

「ん」

それだけで、ユエは即座に障壁を展開した。

刹那、頭上からレーザーの如き水流が流星さながらに襲いかかる。圧縮された水のレーザー、*“破断”*と同じようなもので、直撃すれば、容易く人体に穴を穿つぐらいの威力だろう。

しかしユエの障壁は、例え即行で張られたものであっても強固極まりないものだ。それを証明するように、天より降り注ぐ暴威をあつさり防ぎ切った。*“魔力感知”*を持つてる優花とハジメが魔力の高まりと殺意をいち早く察知し、阿吽の呼吸でユエが応えたために、奇襲は奇襲となり得なかつた。当然、ハジメが呼びかけた瞬間に、攻撃を察していたシアやテイオにも動揺はない。

「でも、流石ね。ユエはこれ程の障壁が出せるなんて」

「……優花もハジメ程の感知能力があつて凄い」

「それ程でもないわよつて、原因はアレよね……灰となりて 大地に還れ—— *“螺炎”*」

優花はユエと褒め合いながら*“破断”*を放っている原因に向けて魔法を放ち、天井を焼き払つた。それに伴つて、ボロボロと攻撃を放つていた原因が落ちてきた。

「やはり、水中生物系の魔物は火に弱えな」

ハジメはそう呟きながら、魔物が焼き尽くされるのを眺めていた。魔物の排除を終え

ると、ハジメ達は奥の通路へと歩みを進める。通路は先程の部屋よりも低くなってお  
り、足元には膝くらいまで海水で満たされていた。

「あゝ、歩きにくいな……」

「……降りる？」

「そうよハジメ。ユエは良いとして、私は降りしても良いわよ？」

ハジメはザバアサバアと海水をかき分けながら、鬱陶しそうに愚痴をこぼすとそれに  
対して、ハジメの肩に座っているユエとお姫様抱っこされている優花が、氣遣うように  
そう言った。ユエの身長的に、他の者より浸かる部分が多くなってしまうのでハジメが  
担ぎ上げ、優花も服が濡れるといけないので抱っこしているのだ。

「問題ねえよ、これぐらい」

そんなハジメは少し羨ましそうに見つめてくるシアの視線をスルーして、問題ないと  
返しながら進んでいく。

「つ……何だ？」

ハジメ達は魔物を倒しながら進んでると大きな空間に入ったその途端、半透明でゼ  
リー状の何かが通路へ続く入口を一瞬で塞いだのだ。

「私がやります！ うりゃあ!!」

咄嗟に、最後尾にいたシアは、その壁を壊そうとドリユツケンを振るった、が、表面

が飛び散っただけで、ゼリー状の壁自体は壊れなかった。そして、その飛沫がシアの胸元に付着する。

「ひゃわ！ 何ですか、これ！」

シアが、困惑と驚愕の混じった声を張り上げた。視線を向ければ、何と、シアの胸元の衣服が溶け出している。衣服と下着に包まれた、シアの豊満な双丘がドンドンさらけ出されていく。

「シア、動くでない！」

咄嗟に、テイオが、絶妙な火加減でゼリー状の飛沫だけを焼き尽くした。少し、皮膚にもついてしまったようでシアの胸元が赤く腫れている。どうやら、出入り口を塞いだゼリーは強力な溶解作用があるようだなどハジメは思っていると、何かを感知した。

「っ！ また来るぞ！」

ゼリーの奴は何だと考えながら警戒して、ゼリーの壁から離れた直後、今度は頭上から、無数の触手が襲いかかった。

「ユエツ」

「……ん！」

先端が槍のように鋭く尖っているが、見た目は出入り口を塞いだゼリーと同じだとすれば、同じように強力な溶解作用があるかもしれないと、再び、ユエに呼びかけ障壁を



張って貰う。更に、ティオと優花が炎を繰り出して、触手を焼き払いにかかった。

「正直、ユエの防御とティオと優花の攻撃のコンビって、割と反則臭いよな」

ハジメがそう呟くとそれを余裕と見たのか、シアが傍にそろりそろりと近寄り、露になった胸の谷間を殊更強調して、実にあざとい感じで頬を染めながら上目遣いでおねだりを始めた。

「あのお、ハジメさん。火傷しちゃったので、お薬塗ってもらえませんかあ」

「……お前、状況わかってんの？」

「いや、ユエさんとティオさんと優花さんが無双してるので大丈夫かと……」

シアが胸のちょうど谷間あたりに出来た火傷の幾つかをハジメに見せつけながら、そんなことをのたまった。

だから……

「はあ……優花」

「あつ、うん……ティオ少し任せるわ」

「うむ」

「はい、じゃあシア……癒しをここに——天恵」

ハジメが優花に頼みすかさずシアの負傷を治してしまった。「ああ、お胸を触ってもらおうチャンスがあ！」と嘆くシアに、全員が冷たい視線を送る。

「むむ……ハジメ、このゼリー、魔法も溶かすみたい」

嘆くシアに冷たい視線を送っていると、ユエから声がかかる。見れば、ユエの張った障壁がジワジワと溶かされているのがわかった。

「ふむ、やはりか。先程から妙に炎が勢いを失うと思っておったのじゃ。どうやら、炎に込められた魔力すらも溶かしているらしいの」

「そうか」

テイオの言葉が正しければ、このゼリーは魔力そのものを溶かすことも出来る可能性がある。中々に強力で厄介な能力だとハジメは眉を顰める。そんなハジメの内心が聞こえたわけではないだろうが、遂に、ゼリーを操っているであろう魔物が姿を現した。

天井の僅かな亀裂から染み出すように現れたそれは、空中に留まり形を形成している。半透明で人型、ただし手足はヒレのようで、全身に極小の赤いキラキラした斑点を持ち、頭部には触覚のようなものが二本生えている。まるで、宙を泳ぐようにヒレの手足をゆらりゆらりと動かすその姿は、クリオネのようだった。

その巨大クリオネは、何の予備動作もなく全身から触手を飛び出させ、同時に頭部からシャワーのようにゼリーの飛沫を飛び散らせた。

「ユエも攻撃に転じて！ 防御は私が！ —— “聖絶”！ —— “防御力上昇二重付与

”！」

優花は、派生技能“遅延発動”で、あらかじめ唱えておいた“聖絶”と防御力上昇の付与を重ね掛けして強力な障壁を発動する。それにコクリと領いたユエはテイオと一緒に巨大クリオネに向けて火炎を繰り出した。シアもドリユツケンを砲撃モードに切り替えて焼夷弾を撃ち放つ。

全ての攻撃は巨大クリオネに直撃し、その体を爆発四散させ、満足気にしてたがハジメが警告の声を上げる。

「まだだ！ 反応が消えてない。優花は障壁を維持してくれ……なんだこれ、魔物の反応が部屋全体に……」

どういうことだ？ とハジメは目を見開く。感知系能力は部屋全体に魔物の反応を捉えていてしかも、魔眼石で見える視界は赤黒い色一色で染まっており、まるで、部屋そのものが魔物みいだ。

ハジメは未だかつて遭遇したことのない事態に鋭さを帯びる。すると、その懸念は当たっていたようで、四散したはずのクリオネが瞬く間に再生してしまった。

「ふむ、ご主人様よ。無限に再生されてはかなわん。魔石はどこじゃ？」

「そういえば、透明の癖に魔石が見当たりませんか？」

テイオの推測に頷きつつ、シアがハジメを見る。

「……ない」

「……ハジメ?」

ハジメの困惑してる表情が気になったユエが呼びかけると、ハジメは、頭をガリガリと掻きながら見たままを報告した。

「……ない。あいつには、魔石がない」

その言葉に全員が目を丸くする。

「ハ、ハジメ? 魔石がないって……じゃあ、あれは魔物じゃないってこと?」

「わからん。だが、強いて言うなら、あのゼリー状の体、その全てが魔石だ。俺の魔眼石には、あいつの体全てが赤黒い色一色に染まって見える。あと、部屋全体も同じ色だから注意しろ。あるいは、ここは既に奴の腹の中だ!」

ハジメが驚愕の事実を話すと同時に、再び、巨大クリオネが攻撃を開始した。今度は、触手とゼリーの豪雨だけでなく、足元の海水を伝って魚雷のように体の一部を飛ばしてきてもいる。

「チツ……」

ハジメは、“宝物庫”から黒い大型ライフルのようなものを取り出した。その大型ライフルには、本来マガジンが装填されるべき場所にポンベのようなものが取り付けられており、口径も弾丸を発射するとは思えないほど大きい。

それもそのはずだ。それはライフルではなく……

ゴオオオオオオー!!

火炎放射器なのだから。タール状のフラム鉱石が、摂氏三千度の消えない炎を撒き散らす。

ハジメは狙うのは巨大クリオネでも、触手や飛沫でもない。周囲の赤黒い反応を示す“壁”を狙い本体への対応はユエ達に任せる。

すると何の変哲もないと思っていた壁が、ハジメの火炎放射によつて壁紙が剥がれるようにポロポロと燃え尽きていく。どうやら、壁そのものが巨大クリオネというわけではないらしい。

ユエ達による本体への攻撃も激しさを増し、巨大クリオネもいよいよ本気になってきたのか、壁全体から凄まじい勢いで湧き出してきた。しかも、いつの間にか水位まで上がってきており、最初は膝辺りまでだったのが、今や腰辺りまで増水してきている。ユエに至つては、既に胸元付近まで水に浸かっていた。

ユエ達は何度も巨大クリオネを倒しているのだが、直ぐにゼリーが集まり、終わりが見えない。

「……………」

ハジメは考える。今は殲滅の方法が見つからない上に、戦闘力を削がれる水中に没するのは非常にまず。なにせ、巨大クリオネには籠城が通用しない魔法で障壁を張ろうと

も、潜水艇を出して中に入ろうとも、殲滅方法がなくてはいずれ溶かされるだろう。

「……此処は一度離脱するか」

そう呟いたハジメは決断して、必死に周囲を見渡す。そして、地面にある亀裂から渦巻きが発生しているのを発見した。

「二度、態勢を立て直すぞ。地面の下に空間がある。どこに繋がってるかわからない。覚悟を決めろ！」

「んっ」

「はいですう」

「承知じゃ」

「わかったー！」

全員の返事を受け取り、ハジメは火炎放射器を振り回して襲い来るゼリーを焼き払いながら、渦巻く亀裂に向かって“錬成”を行った。亀裂を押し広げ、ドンドン深く穴を開けていく。

ハジメは、水中に潜り、ポーチから長さ十五センチ直径三センチ程の円筒を取り出した。中程にシユノーケルのマウスピース部分のような突起がついている。これは、小型の酸素ボンベだ。生成魔法で空間魔法を付与した鉱石で出来ており、中には“宝物庫”と同じく空間が広がっていて、空気が入れてあるが三十分程度しか持たない。

タイムリミットを頭の片隅に、ハジメは水中で「錬成」を繰り返していき、やがて地面が反応しなくなると、「宝物庫」からパイルバンカーを取り出した。そして、アンカーで水中に固定すると、一気にチャージする。

キイイイイイ!!

そして、階層破りの一撃を放つ引き金を引いた。

ドオゴオオオン!!!

水中にくぐもった轟音が振動と共に伝播する。

次の瞬間、貫通した縦穴へ途轍もない勢いで水が流れ込んでいった。腰元まで上がってきていた海水が、いきなり勢いよく流れ始めたので、ユエ達も足をさらわれて穴へと流されて来る。ハジメは、激流の中、水中で必死に踏ん張りながら「宝物庫」から巨大な岩石と無数の焼夷手榴弾を転送しつつ、ユエ達と共に地下の空間へと流されていった。

背後で、くぐもった爆音が響く。巨大クリオネの追撃に対し、少しでも時間が稼げたのか確かめることは出来なかったのだった……。

## 五十七話 二人だけの迷宮攻略

「けほっ、けほっ、うっ」

「はあはあ、無事か、優花？」

「う、うん。何とか……皆は……」

結構な量の海水を飲んでしまい、むせながら周囲を見渡す優花の目には、自分の腰に手を回して抱きしめるハジメの姿と、真っ白な砂浜が映っていた。周囲にはそれ以外何もなく、ずっと遠くに木々が鬱蒼と茂った雑木林のような場所が見えていて、頭上一面には水面がたゆたっていた。結界のようなもので海水の侵入を防いでいるようで広大な空間である。

「はぐれたな……まあ、全員に小さな倉庫レベルとはいえ『宝物庫』を渡してあるし、あいつ等なら自分でどうにでもするさ」

「うん」

周りを見渡すもユエ達の姿が見えないのでハグれたと理解したハジメは自分と優花の服を見て大分濡れており、着替えた方が良くと判断して優花を呼び掛けた。



「よし、優花。服が濡れてるし、まずは着替えるか？」

「そうね。服がびしょ濡れだから着替えたいわ」

ハジメの呼びかけに優花は急いで立ち上がり、エリセンを出る前に俺から全員に贈られた小型版「宝物庫」から替えの衣服を取り出して服を脱ぎ始めた。ハジメはさりげなく背を向け、着替え終わるのを待っていたが、優花が時折「うわゝ、下着も濡れてる」と言ったり、服の擦れる音が聞こえ、ハジメは耳栓をして、自分の欲望を理性で抑えつけようかと考えていた。

「着替えたわよ……ってハジメ何してんの？」

「えっ、いやっ、何もっ」

着替えを終えた優花はハジメの方へ視線を転じると座禅を組んでいるハジメの姿が目に入り、優花が怪訝な表情で質問すると、ハジメはビクツと体を震わせた後、何故か焦ったように返事をするので、優花は何故、焦るのか分からず首を傾げた。

「まあ、良いけど……これから、どうするの？」

「んんっ。そうだな……このまま海底に戻っても、あいつらが何処に行ったのかわかんて分らないし……深部目指して探索するしかないだろうな。アイツ等もそうするだろうしな」

咳払いしながら答えるハジメは遠くに見える密林を眺めながら、振り返る。優花は笑みを浮かべ頷いた。そんな優花の笑顔に、ハジメも笑みを浮かべながら頷き歩き出した。

真つ白な砂浜をシャクシャクと踏み鳴らしながらしばらく進み、二人は密林に入る。鬱蒼と茂った木々や草を、ハジメがバツバツサと切り裂いていく。優花は、その後ろをついていくだけだ。

その時……

「わっ！ちよっ何?! ハジメ取ってっ」

「ん?……ああ、コイツか。ちよっと待ってろ」

後ろの優花が突然、声をあげたので振り向くと、優花の後頭部に何かいたので、そつと抱きしめるように片手を優花の後頭部に伸ばした。

「取れたぞ。これは、魔物……いや、魔石の反応がねえからただの蜘蛛だな」

「ありがと、ハジメ」

ハジメは優花から摘んだ蜘蛛が魔物じゃない事を確認すると、優花はホツと息を吐いた。

「しかし、魔物だけじゃないと分かればもう少し警戒しながら進むとするか。毒持ちだったらダルいし」

「うん、そうするわ」

ハジメと優花は今まで以上に集中した様子で辺りを警戒するが、楽しげ会話をしているので、迷宮攻略とは違う雰囲気です。密林を抜けていった。

その先は……

「これは……船の墓場ってやつか？」

「すごい……帆船なのに、なんて大きき……」

密林を抜けた先は岩石地帯となっており、そこにはおびただしい数の帆船が半ば朽ちた状態で横たわっていた。そのどれもが最低でも百メートルはありそうな帆船ばかりで、遠目に見える一際大きな船は三百メートルくらいありそうだ。

ハジメも優花も思わず足を止めてその一種異様な光景に見入ってしまった。しかし、いつまでもそうしているわけにも行かず、ハジメと優花は気を取り直すと、船の墓場へと足を踏み入れた。

岩場の隙間を通り抜け、あるいは乗り越えて、時折、船の上も歩いて先へと進む。しかし、目に入るどの船も朽ちてはいるが、触っただけで崩壊するほどではない、一体いつからあるのか判断が難しいが、どの船もある共通点があった。

「それにしても……戦艦ばっかだな」

「うん。でも、あの一番大きな船だけは客船っぽいよ。装飾とか見ても豪華だし……」



「な、なんだこりや……」

「ハ、ハ、ハジメ？ 私、夢でも見てるの？ ハジメ、ちゃんとここに居るわよね？ ね？」

ハジメも優花も度肝を抜かれてしまい、何とか混乱しそうな精神を落ち着かせながら周囲の様子を見ることができない。そうこうしている内に、大きな火花が上空に上がり、火花のように大きな音と共に弾けると、何百隻という船が一斉に進み出した。俺達が乗る船と相對している側の船団も火花を打ち上げると一斉に進み出す。

そして、一定の距離まで近づくと、そのまま当たりでもする勢いで突貫しながら、両者とも魔法を撃ち合いました。

ゴオオオオオオオオオオ!!

ドオガアアアン!!

ドバアアアアア!!

「おお!」

「きゃっ!」

轟音と共に火炎弾が飛び交い船体に穴を穿ち、巨大な竜巻がマストを狙って突き進み、海面が凍りついて航行を止め、着弾した灰色の球が即座に帆を石化させていく。

ハジメ達の乗る船の甲板にも炎弾が着弾し、盛大に燃え上がり始めた。船員が直ち

に、魔法を使って海水を汲み上げ消火にかかっていく。

これは戦場だとハジメは察するも、このおびただしい船団と人々は戦争、放たれる魔法に込められた殺意の風が、ぬるりと肌を撫でてきて気持ち悪く感じる。が何故、ハジメ達が戦場に紛れ込んでいる？、と……

「これが、此処の試練なのか？」

ハジメ達はその様子を呆然と見ていた背後から再び炎弾が飛来した。放っておけば直撃コースだった。

ハジメは、なぜいきなり戦場に紛れ込んだのか？ 試練なのか？ などと疑問で

頭の中を埋め尽くしながらも、とにかくドンナーを抜き、炎弾を迎撃すべくレールガン  
を撃ち放った。

炸裂音と共に一条の閃光となって飛翔した弾丸は、しかし、全く予想外なことに炎弾  
を迎撃するどころか直撃したにも関わらず、そのまますり抜けて空の彼方へと消えて  
いつてしまった。

「なに？！」

ハジメはもう何度目かわからない驚愕の声を上げながら、傍の優花を抱いて回避行動  
に出ようとする。

「待って、防ぐ！ —— 光絶！」

優花の詠唱と共に、光系初級防御魔法の障壁が出現した。ハジメとしては、確かに魔法の核を撃ち抜いたのにすり抜けた正体不明の攻撃など避けるに越したことはなかったのだが、優花が魔法を発動してその場に留まろうとしたので、仕方なく“金剛”を発動し炎弾に備える。

しかし、ハジメの心配は杞憂に終わり、優花の障壁はすっかり炎弾を防いだ。

「射撃のミス？」

ハジメはそう言っつて、訝しげな表情をしながらと首を捻つて、再度、飛来した炎弾に向かつて発砲してみた。今度も、魔眼石には、確かに魔法の核を撃ち抜いたように見えただのだが、やはり、弾丸は炎弾をすり抜けて明後日の方向へ飛んでいく。

「クハッ……そういう事か」

ハジメはそれを見て、攻撃の有効性についてある程度の推測を立て、別の攻撃方法を試してみることにした。飛来する炎弾を防ぐため、優花が、もう一度障壁を張ろうとしたのを制止して、ドンナーに“風爪”を発動した。そして、回避と同時に“風爪”で炎弾を斬り付けると、今度は、炎弾をすり抜けることもなく真つ二つにすることが出来て、笑みを零す。

「ハジメ、分かったの？」

「ああ、どうやらこれはただの幻覚つてわけでもないが、現実というわけでもないよう

だ。実体のある攻撃は効かないが、魔力を伴った攻撃は有効らしい。全く、本当にどうなっただんだか」

ハジメが、厄介な状況に溜息を吐いていると、すぐ後ろで「ぐあああ」と苦悶の声が上がった。何事かと振り返ると、年若い男がカッタラスを片手に腹部を抑えて蹲っていた。足元に血だまりが出来て、傍らには血濡れの氷柱が転がっている。おそらく、被弾したのだらうな

咄嗟に、優花は、「大丈夫ですか!」と声を掛けながら近寄り、回復魔法を行使した。彼女の放つ純白の光が青年を包み込む。優花の「神天治癒師」としての腕なら瞬く間に治るはずだ……と思われたが、結果は予想外。青年は回復魔法をかけられた瞬間、淡い光となって霧散してしまった。

「えっ? えっ? ど、どうして……」

混乱している優花に、回復魔法を掛けるところを見ていたハジメはある推測を優花に話しをした。

「魔力さえ伴っていれば、魔法の属性や効果は関係ないってことじゃないか?」

「嘘お……えー、何それ幻覚でもこれは少しキツイわよ。……ハジメ、大迷宮ってこんなにヤラシイの?」

「まあ……そうだなそれに今回の大迷宮は特にそういう精神をゴツソリ削るタイプのヤ



ラシイ迷宮だな……」

「はあ、分かったわ。でも、そうと分かれれば、問題ないわ。さつきは取り乱しちやっただけ  
ど今度は大丈夫、安心して」

「クハツ……流石は優花だな」

ハジメの淡々とした説明に優花は眉を顰めてウンザリした表情になるのだが今度は大丈夫と言つて真剣な表情になつていたこれ程の精神力を持つてる優花は流石だとハジメは思う。すると、不穏な気配を感じ、優花から視線を外した。

「ハジメ？」

「……来るぞ」

「えっ、何が……っ！」

ハジメが視線を外したのを気になつた優花が声をかけたが、ハジメは呼びかけただけで優花は最初は疑問顔だったが何かを感じ取り周囲を見渡した。

見渡せば、雄叫びを上げながら、かなり近くまで迫つてきた相手の船団に攻撃する兵士達に紛れて、いつの間にか、かなりの数の男達が暗く澱んだ目でハジメと優花の方を見ていた。

優花が、ハジメの視線に気がつき同じように視線を巡らせた直後、彼等はハジメ達に向かつて一斉に襲いかかってくるのを見てハジメは齒噛みする。

「幻覚の癖に、俺達のごときは認識すんのかよ」

ハジメがそう言っていると、ハジメ達に向かってくる者達が何かを言っており、ハジメと優花の二人は回避行動を取りながら、耳を傾ける。

そして、聞こえてきたのは……………

「全ては神々の御為にい！」

「エヒト様あ！最高神 ラーゼン様あ！ 万歳い！」

「異教徒めえ！ 我が神々の為に死ねえ！」

そこにあつたのは狂気だった。血走った眼に、唾液を撒き散らしながら絶叫を上げる口元。まともに見れたものではない。相対する船団は、明らかに何処かの国同士の戦争なのだろうと察することが出来るが、その理由もわかつてしまった。これは宗教戦争なのだ。よく耳を澄ませば、相対する船団の兵士達からも同じような怒号と雄叫びが聞こえてくる。ただ、呼ぶ神の名が異なるだけだ。

しかしハジメはある神の名が気になり眉を顰めた。

「…………ラーゼン？」

ハジメはそんな神の名を聞いた事はなく、王国の図書館にもそんな名は載ってなかったのを記憶している。しかし、今はそんな事を考えるより、襲ってくる狂人共の対処が優先だった。

ハジメは優花を後ろから抱きしめつつ、その肩越しにドンナーを突き出し発砲した。ただし、飛び出したのは弾丸ではなく、純粹な魔力の塊だ。『魔力操作』の派生『魔力放射』と『魔力圧縮』によつて放たれたそれは、通常であれば、対象への物理的作用は余りなく魔力そのものを吹き飛ばすという効果をもつが魔力が枯渇すれば人も魔物も動けなくなるので、ある意味、無傷での無力化という意味では使える技術でハジメが面倒臭い相手（寄つた町で店や宿で絡んできた奴）に使う時に使つていた。

そして、ドンナーによつて撃ち放たれた紅色の弾丸は、一瞬で空を駆け抜けると、狂気を瞳に宿しカッタラスを振り上げる兵士の眉間をぶち抜いた。それだけに留まらず、貫通して更に背後の兵士にも着弾し、その体を一瞬で霧散させた。

「優花！ 飛ぶぞ！ 舌を噛むなよ！」

「えっ此処から?! ちよつとハジメ待つ…きやああ!!」

狭い甲板の上で四方から囲まれるのも面倒なので、ハジメは優花をお姫様抱つこで抱き上げると、『空力』を使い一気に飛び上がった。余りの勢いに待つたをかけた優花から悲鳴が上がる。

ハジメは先に物見台にいた兵士を蹴り落として、四本あるマストの内の一本にある物見台に着地した。

下方で、狂気に彩られた兵士達が血走つた眼でハジメ達を見上げている。今の今まで

敵国同士で殺意を向け合っていたというのに、どういう訳か一部の人間達がハジメ達を標的にしている。しかも、狙う場合に限って敵味方の区別なく襲ってきてその数も、まるで質の悪い病原菌に感染でもしているかのように、次々と増加していつて気持ち悪いと感じてしまう。

それに、一瞬前まで目の前の敵と相対していたというのに、突然、動きを止めるとグリンツッ！と首を捻ってハジメ達を凝視して直後に群がって来る光景は軽くホラーだった。狂気に当てられた優花など、既に真つ青になってハジメの胸元にギュツと離れないように顔を埋めていた。その理由は簡単、優花は大のホラー苦手である。ホラー映画をハジメ達五人で見た時は、優花はずっとハジメの後ろに隠れながら、しがみついていた程だ。

「さて、どうすれば、この気持ち悪い空間から抜け出せるんだ？」

「…………どこかに脱出口がある…………とか？」

「海のご真ん中だぞ？」

「じゃあ、戦争を終わらせる…………とか？」

「終わらせる…………なるほど、一理あるな」

「えっあれ？ えっと、冗談で言っただけ…………」

「うん、きつとそうだな。それ以外思いつかないし、何より俺好みだし」

「ちよつとハジメ?!」

ハジメは、マストのロープを使って振り子の要領で迫ってきた兵士数人を見もせず魔力弾で撃ち抜き霧散させ、撃ち放った紅色の弾丸を“魔力操作”の派生“遠隔操作”で誘導し、更に飛来した炎弾を迎撃していく。ハジメはこの時、“魔力砲”でも作れば良かったと思っていた。

「優花、脱出方法はよく分からないが、襲われたのは事実なんだから、取り敢えず全員ぶちのめすぞ」

「はあ、それしか方法がないと思うしね……分かったわー!」

ハジメの言葉に優花は溜息を吐きながら決然とした表情で詠唱を始める。ハジメは狂気が吹き荒れる戦場は、優花の精神を掘削機のように削り取っていると思ったが大丈夫そうだと分かり、その姿に見蕩れてしまっていた。

ハジメはそんな彼女を守るように周囲を睥睨した。眼下を見れば、そこかしこで相手の船に乗り込み敵味方混じり合って殺し合いが行われていた。

ハジメ達が攻撃した場合と異なり、幻想同士の殺し合いでは、きつちり流血する。甲板の上には、誰の物とも知れない臓物や欠損した手足、あるいは頭部が撒き散らされ、かなりスプラッタな状態になっていた。どいつもこいつも、“神々のため”“異教徒”“神罰”を連呼し、眼に狂気を宿して殺意を撒き散らしている正に狂っている。

兵士達の鮮血が海風に乗って桜吹雪のように舞い散る中、マストの上の物見台にいる俺達にも、いや、むしろハジメ達を狙って双方の兵士が執拗に襲いかかってきた。

その度に、紅色の弾丸と雷魔法が縦横無尽に飛び回り、敵の尽くを撃ち抜き、黒焦げにしていく。更には、ハジメと優花の周囲を衛星のようにヒュンヒュンと飛び回って、攻性防御の役割を果たす魔力弾と雷魔法の「紅雷玉」もあつた。

それでも、狂気の兵士達は怯むどころか気にする様子もなく、特攻を繰り返して来た。飛翔の魔法で何十人という兵士達が頭上から、そして、隣のマストやマストにかかる網を伝って兵士達が迫って来る。見れば、俺達の乗る船にやたらと攻撃が集中しており、魔眼石には、俺達に向かって手を掲げる術師達から最上級クラスの魔力の高まりが見えていた。

「チツ……多すぎるだろっ！」

ハジメは苦言を呈しながら、何とか狙撃してやろうかと考えたその時、優花の詠唱が終わり、彼女の最上級魔法が発動する。

「……ここに聖母は微笑む『聖典』——『範囲向上付与』！」

直後、優花を中心に光の波紋が一気に戦場を駆け抜け脈動を打つように何度も何度も広がり、その範囲は半径一キロメートルに及んだ。そして、その波紋に触れた敵の一人一人を光で包み込んでいった。

## ——光系最上級回復魔法“聖典”

超広範囲型の回復魔法で、領域内にいる者を全員まとめて回復させる効果を持ち、範囲は、術者の魔力量や技量にもよるが、最低でも半径五百メートル以内の者に効果がある魔法で、あらかじめ“目印”を持たせておけば、領域内で対象を指定して回復させることも出来る魔法である。

だが当然、普通は数十人掛りで行使する魔法で、長時間の詠唱と馬鹿デカイ魔法陣も必要だと本にあったがたった一、二分で、しかも一人で行使してそれに付与術も行使したりする。なので、回復魔法や支援系のバフの魔法なら優花はユエを超えるチートヒーラーである。

優花の放った“聖典”の光が戦場を包み込むと同時に、領域内の兵士達は敵味方の区別なく全てが体を霧散させて消え去った。魔法の効果が終わり、優花の体が魔力枯渇で傾ぐ。ハジメは苦笑いしながらすかさず支えに入った。

「流石だな優花」

「ふふ、そんなことないわよ。ハジメ達の方がずっと凄いよ」

「そんな謙遜すんな。後、魔力も回復しておけ」

「そうね、ありがとハジメ」

優花は、ハジメの素直な称賛に嬉しくてはにかむも、ハジメ達の方が凄いと言葉にし

ながら笑みをこぼした。

そして、「『補充』」と呟いてハジメから貰った魔晶石の指輪により失った魔力を充填していく。優花は魔力の直接操作が出来ないので、ハジメが魔法陣を刻んで詠唱で取り出せるように改良している。ハジメは、優花の魔力の回復を待つてから、再び戦闘に入った。

「早急に終わらせて先に進むぞ」

「了解」

そして二国の大艦隊は、その後、一時間ほどでたった二人の人間に殲滅されたのだった。

~~~~~

「うっ、魔法使い過ぎて魔力が……」

「優花、大丈夫か？ヤバイなら抱っこするが……」

「いや、そこまでしなくて良いから、ハジメ過保護過ぎ」

「づっ」

最後の兵士達を消滅させた直後、再び、周囲の景色がぐにやりと歪み、気が付けば、ハ



ジメ達は元の場所に戻っていた。やはり、殲滅で正解だったかと、安堵の吐息を漏らした直後、優花は魔力の使い過ぎでその場で両膝を着きながら倒れて「疲れた」と呟いているので、ハジメは心配になりお姫様抱っこしようと言ったが優花に「過保護過ぎ」と言われ少しへこんでしまった。

「ねえ、ハジメ。あの幻覚みたいなの何だったの？ やっぱこの廃船と関係あるわよね？」

魔力がそれなりに回復したのだろう優花は立ち上がり、近くの岩場に腰掛けながら問いかける。ハジメは戦闘中に少し考えてあった推測を話した。

「おそらくだが、昔あった戦争を幻術か何かで再現したんだろうな。……まあ、迷宮の挑戦者を襲うという改良は加えられているみたいだが……あるいは、これがこの迷宮のコンセプトなのかもしれない」

「コンセプト？」

「ああ。【グリューエン大火山】でテイオが言ってたんだよ。大迷宮にはそれぞれ解放者達が用意したコンセプトがあるんじゃないか？ ってな。それが本当だとすれば、

ハハハは……」

「……狂った神々がもたらすものの悲惨さを知れ……とか？」

「ああ、大体そんな気がするよ」

ハジメの言葉を引き継ぎ、答えを呟いた優花は先程までの光景を思い出して再び、寒気に襲われたように体をぶるりと震わせながら顔を青ざめさせた。

優花の精神を苛んだのは、兵士達の狂気だろう。〃狂信者〃という言葉がびったり当てはまる彼等の言動が、思想が、そしてその果ての殺し合いが気持ち悪くて仕方なかったし、狂気の宿った瞳で体中から血を噴き出しながらも哄笑し続ける者や、死期を悟ったからか自らの心臓を抉り出し神々に捧げようと天にかかげる者、俺達を殺すために弟ごと刺し貫こうとした兄と、それを誇らしげに笑う弟。戦争は狂気が満ちる場所なのだろうが、それにしても余りに凄惨だった。その全て〃神々の御為〃というのだから、尚更だ。

顔を青ざめている優花を見かねて、ハジメはすぐ隣に腰掛けて優花を抱きしめた。狂気に吞まれそうになっている優花を放っておくことは出来ない。優花は、少し驚いたようにハジメを見ると、嬉しそうに頬を緩めてギョツとハジメの背中に手をやって抱きしめ返す。

「ハジメ、ありがと……」

「気にするな。狂気に吞まれそうになる辛さは……わかる。俺も奈落の底で墮ちそうになつたしな……」

「……そうならなかったのはどうして？」

「お前のおかげだよ、優花」

「私？」

優花はハジメの答えに驚いて目を見開いていると、ハジメはそんな優花を優しく見つめながら、彼女の髪に身に着けてある髪飾りにそっと触れた。

「正確にはこの髪飾りだけだな。……この髪飾りがあつたからこそ思ったんだ。 優花のもとへ戻らないと、守らないと、約束したんだと」な

「ハジメ……」

懐かしそうに、それでいて愛しそうに優花を見るハジメの表情を見て、優花は嬉しそうにハジメを見つめ返す。

「ふふ、ありがとハジメ」

「どういたし——！」

ハジメは返事をしようとした。その瞬間、優花が逃がさないようにか両手でハジメの頬を触れると、そのまま顔を近付けさせ、キスをした。それもディープの方だ。

「ちゅっ、くちゅ、ぷちゅ、ちゅるっ……」

口の中でハジメの唾液と優花の唾液が混ざり合い、舌が絡み合っていく。

「(ヤバイ、はまりそう)」

ハジメは優花とのディープキスで脳内が蕩けてしまい意識が飛びそうになる。しか

し、此処は大迷宮、ハジメはどうか意識を飛ぶのを回避して、優花の唇と自分の唇を離れさせた。

「……………ぷはっ！…おい、優花。いきなりディープは驚いたぞ」

「ゴメン……………話を聞いたら、つい嬉しくなっちゃって……………私……………」

ハジメは優花の唐突のディープに驚いてると、優花は嬉しそうに顔を真っ赤にして手イジイジしながら話す姿にハジメはゴクリと音を立てて、口の中にある唾液を飲み込む。

「(可愛い顔しやがって……………) まあ……………良いか。優花、もう魔力も精神も回復したろ？」

「うん、バツチリ」

「そうか……………じゃあ行こうか。愛しのお姫様」

「ふふ、ありがと。私の王子様」

ハジメは優花の回復を聞いて、回復したと知ると優花の前で片膝を突いてから片手を指し出し、優花はそれを見て嬉しそうにハジメの手を取って互いに笑みを浮かべ合うと、ハジメ達は手を繋ぎ合いながら一番遠くに鎮座する最大級の帆船へと歩みを進めたのだった……………。

## 五十八話

## メルジーネ海底遺跡の神代魔法

ハジメと優花が見上げる帆船は、地球でもそうそうお目にかかれない規模の本当に巨大な船だった。

全長三百メートル以上、地上に見える部分だけでも十階建て構造になっている。そこかしこに荘厳な装飾が施してあり、朽ちて尚、見るものに感動を与えるほどだ。木造の船で、よくもまあ、これほどの船を仕上げたものだ、同じく物造りを得意とするハジメは、当時の職人達には尊敬の念を抱かずにはいらなかった。

ハジメは、優花を抱えると“空力”を使って飛び上がり、豪華客船の最上部にあるテラスへと降り立った。すると、案の定、周囲の空間が歪み始めた。

「またか……優花、気をしっかりもてよ。どうせ碌な光景じゃない」  
「うん。大丈夫」

ハジメの呼びかけに優花は「大丈夫」と返事したが微かに手が震えるてるのを感じ、手をギュツと優しく握って安心させると、優花はハジメの行動の意思に気付いたのか、嬉しそうに笑みを浮かべていた。

そうこうしている内に周囲の景色は完全に変わり、今度は海上に浮かぶ豪華客船の上  
にいた。

時刻は夜で、満月が夜天に輝いている。豪華客船は光に溢れキラキラと輝き、甲板に  
は様々な飾り付けと立食式の料理が所狭しと並んでいて、多くの人々が豪華な料理を片  
手に楽しげに談笑をしている光景だった。

「パーティー……よね？」

「ああ。随分と煌びやかだが……メルジーネのコンセプトは勘違いだったか？」

ハジメは予想していた凄惨な光景とは程遠い光景で、なんか肩透かしを喰ったような  
顔をする。その煌びやかな光景を、優花とおそらく船員用の一際高い場所にあるテラス  
から、巨大な甲板を見下ろす形で眺めていた。

すると、ハジメ達の背後の扉が開いて船員が数名現れ、少し離れたところで一服しな  
がら談笑を始めた。休憩にでも来たのだろう。

その彼等の話に聞き耳を立ててみたところ、どうやら、この海上パーティーは、終戦  
を祝う為のものらしい。長年続いていた戦争が、敵国の殲滅や侵略という形ではなく、  
和平条約を結ぶという形で終わらせることが出来たのだという。船員達も嬉しそうだ。  
よく見れば、甲板にいるのは人間族だけでなく、魔人族や亜人族も多くいる。その誰も  
が、種族の区別なく談笑をしていた。

「こんな時代があったのね……」

「終戦のために奔走した人達の、まさに偉業だな。終戦からどれくらい経っているのか分からないが……全てのわだかまりが消えたわけでもないだろうに……あれだけ笑い合えるなんてな……」

「きつと、あそこに居るのは、その頑張った人達なんじゃない？ 皆が皆、直ぐに笑い合えるわけじゃないだろうしね……」

「そうだな……」

楽しいで晴れやかな人々の表情を見ると、ハジメと優花も自然と頬が緩んだがハジメは少なからず疑問を抱いていた。それは、おかしい？という疑問だ。こんな時代の記録は王国の図書館にはなかったとハジメは記憶していた。だから、疑問を感じたハジメは、腕を組んで目の前の光景を眺めていく内にある結論に至った。

「記録……いや、歴史からの抹消か」

ハジメの推測はこうだった。昔に、人間族は魔人族と亜人族と手を取り合ったことがあると歴史に残ると、人間至上主義である聖教教会などにとっては不都合であろう。だから、歴史から抹消したとなると納得がいく。

ハジメが優花に聞こえない程度の声音で呟いてから、しばらく眺めていると、甲板に用意されていた壇上に初老の男が登り、周囲に手を振り始めた。それに気がついた人々

が、即座におしやべりを止めて男に注目する。彼等の目には一様に敬意のようなものが含まれていた。

初老の男の傍には側近らしき男と何故かフードをかぶった人物が控えている。時と場合を考えれば失礼に当たると思うられるが誰もフードについては注意しないことにハジメは目を細めながらフードの人物を見る。

やがて、全ての人々が静まり注目が集まると、初老の男の演説が始まった。

「諸君、平和を願ひ、そのために生命を賭して戦乱を駆け抜けた勇猛なる諸君、平和の使者達よ。今日、この場所で、一同に会す事が出来たことを誠に嬉しく思う。この長きに渡る戦争を、私の代で、しかも平和を結ぶという形で終わらせる事が出来たこと、そして、この夢のような光景を目に出来たこと……私の心は震えるばかりだ」

どうやら初老の男は、人間族のとある国の王らしいな人間族の中でも、相当初期から平和のために裏で動いていたようで人々が敬意を示すのも頷ける。演説も遂に終盤のようで、どこか熱に浮かされたように盛り上がる国王。場の雰囲気も盛り上がる。

しかし、あの表情何処かで……

ハジメは、そんな国王の表情を何処かで見たことがあるような気がして、途端に嫌な予感に襲われた。

「——こうして和平条約を結び終え、一年経って思うのだ………実に、



愚かだったと」

国王の言葉に、一瞬、その場にいた人々が頭上に「*グ*」を浮かべる。聞き間違いかと、隣にいる者同士で顔を見合わせる。その間も、国王の熱に浮かされた演説は続く。

「そう、実に愚かだった。獣風情と杯を交わすことも、異教徒共と未来を語ることも……愚かの極みだった。わかるかね、諸君。そう、君達のことだ」

「い、一体、何を言っているのだ！ アレイストよ！ 一体、どうしたと言うツがはっ!?」  
国王アレイストの豹変に、一人の魔人族が動揺したような声音で前に進み出た。そして、アレイスト王に問い詰めようとして……結果、胸から剣を生やすことになった。

刺された魔人族の男は、肩越しに振り返り、そこにいた人間族を見て驚愕に表情を歪めた。その表情を見れば、彼等が浅はかならぬ関係であることが分かる。本当に、信じられないと言った表情で魔人族の男は崩れ落ち、場が騒然とし「陛下あ！」と悲鳴が上がり、倒れた魔人族の男に数人の男女が駆け寄った。

「さて、諸君、最初に言った通り、私は、諸君が一同に会してくれ本当に嬉しい。我が神々から見放された悪しき種族ごときが国を作り、我ら人間と対等のつもりでいるという耐え難い状況も、創世神にして最高神たる「ラーゼン様」に背を向け、下らぬ異教の神を崇める愚か者共を放置せねばならん苦痛も、今日この日に終わる！ 全てを滅ぼす以外に平和などありえんのだ！ それ故に、各国の重鎮を一度に片付けられる今日この日

が、私は、堪らなく嬉しいのだよ！ さあ、神々の忠実な下僕達よ！ 聖母神「エクス  
トラ様」の力を持って獣共と異教徒共に裁きの鉄槌を下せえ！ ああ、ラーゼン様、エ  
クストラ様！ 見ておられますかあ!!!」

膝を付き天を仰いで哄笑を上げるアレリスト王。彼が合図すると同時に、パーティー  
会場である甲板を完全に包囲する形で船員に扮した兵士達が現れた。

甲板は、前後を十階建ての建物と巨大なマストに挟まれる形で船の中央に備え付けら  
れている。なので、テラスやマストの足場に陣取る兵士達から見れば、眼下に標的を見  
据えることとなる。海の上で逃げ場もない以上、地の利は完全に兵士達側にあるのだ。そ  
れに気がついたのだろう。各国の重鎮達の表情は絶望一色に染まった。

次の瞬間、遂に甲板目掛けて一斉に魔法が撃ち込まれた。下という不利な位置にいる  
乗客達は必死に応戦するものの……一方的な暴威に晒され抵抗虚しく次々と倒れて  
いった。

何とか、船内に逃げ込んだ者達もいるようだが、ほとんどの者達が息絶え、甲板は一  
瞬で血の海に様変わりした。ほんの数分前までの煌びやかさが嘘のようだ。海に飛び  
込んだ者もいるようだが、そこにも小舟に乗った船員が無数に控えており、やはり直ぐ  
に殺されて海が鮮血に染まっていく。

「うっ」

「優花」

ハジメは咄嗟に吐き気を堪えるように、手すりに身を預け片手で口元を抑えた優花を支える。

ハジメは優花を支えているとアレイスト王は、部下を伴って船内へと戻っていった。幾人かは咄嗟に船内へ逃げ込んだようなので、あるいは、狩りでも行う気なのかもしれない。

彼に追従する男とフードの人物も船内に消える。と、その時、ふと、フードの人物が甲板を振り返った。

「銀髪？」

その拍子に、フードの裾から月の光を反射してキラキラと光る銀髪が一房、ハジメには見えた気がした。周囲の景色がぐにやりと歪む。どうやら、先程の映像を見せたかっただけらしく、ハジメと優花は元の朽ちた豪華客船の上に戻っていた。

「優花、少し休め」

「ううん、大丈夫。ちよつと、キツかったけど……それより、あれで終わり？ 私達、何もしてないけど……」

「この船の墓場は、ここが終着点だ。結界を超えて海中を探索して行くことは出来るが……普通に考えれば、深部に進みたければ船内に進めという意味なんじゃないか？ あ

の光景は、見せることそのものが目的だったのかもな。神々の凄惨さを記憶に焼き付けて、その上でこの船を探索させる……中々、嫌らしい趣向だよ。特に、この世界の連中にとってはない」

「そうね……私達よりこの世界の人達の方が酷ね」

「ああ……」

この世界の連中は、そのほとんどが信仰心を持っているはずだし、その信仰心の行き着く果ての惨たらしさを見せつけられては、相当精神を苛むだろう。この迷宮は精神状態に作用されやすい魔法の力が攻略の要である意味、「ライセン大迷宮」の逆で異世界人であるハジメ達だからこそ、精神的圧迫もこの程度に済んでいる。

ハジメと優花は甲板を見下ろし、意を決して甲板に飛び降り、アレイスト王達が入って言った扉から船内へと足を踏み入れた。船内は完全に闇に閉ざされていた。外は明るいので、朽ちた木の隙間から光が差し込んでいてもおかしくないのだが、何故か全く光が届いていない。ハジメは「宝物庫」から緑光石を使ったライトを取り出し闇を払う。

「さっきの光景……終戦したのに、あの王様が裏切ったってこと？」

「そうみたいだな……ただ、不自然過ぎる。壇上に登った時は、随分と敬意と親愛の籠った眼差しを向けられていたのに……内心で亜人族や魔人族を嫌悪していたのだとした

ら、本当に、あんなに慕われるとは俺は思えない」

「……そうよね。あの人の口ぶりからすると、まるで終戦して一年の間に何かがあつて豹変した……と考えるのが妥当ね……問題は何かがあつたのかということだけど」

「まあ、神々絡みなのは間違いないな。めっちゃ叫んでたし。危ない感じで」

「うん、イシユタルさんみたい……トリップ中の。痛々しいよね」

どうやらイシユタルは女子高生からイタイ人と思われていたらしい。ハジメは少しだけ同情してしまうが、ハジメから見てもアレはキモかった。

それから二人で先程の光景を考察しながら進んでいると、前方に向けられたハジメのライトが何かを照らし出した。白くヒラヒラしたものだ。ハジメと優花は足を止めて、ライトの光を少しづつ上に上げていく。その正体は女の子だった。白いドレスを着た女の子が俯いてゆらゆらと揺れながら廊下の先に立っていたのだ。

猛烈に嫌な予感がするハジメと優花。特に優花は大のホラー嫌いなので表情は引き攣りまくっている。ハジメは、こんなところに女の子がいるはずないので取り敢えず撃ち殺そうとドンナーの銃口を向けた。

その瞬間、女の子がペシヤと廊下に倒れ込み、手足の関節を有り得ない角度で曲げると、まるで蜘蛛のように手足を動かし、真っ直ぐハジメ達に突っ込んで来た！

ケタケタケタケタケタケタケタツ！

奇怪な笑い声が廊下に響き渡る。前髪の隙間から炯々と光る眼でハジメ達を射抜きながら迫ってきた。

「いやああああああああ!!ハジメエエエエ!!」

「うおっ!? 落ち着け優花! 今は腕を掴むな!」

「無理イイイイイ!」

「(クソツ……照準が定まらねえっ)」

優花が盛大に悲鳴を上げてハジメにしがみついた。ケタケタ笑って迫る化け物をドンナーで撃とうとしていたハジメは、優花がしがみついたせいで照準をずらしてしまった。

「ケギヤ!!」

瞬間に足元まで這い寄った化け物は、奇怪な雄叫びと共に俺の顔面に向かって飛びかかってきた。

「チツ……気持ち悪りいんだよ『雷脚』!」

ハジメは仕方なく銃撃を諦めて、ケタケタ笑う化け物の腹部にヤクザキックをぶち当てた。念のため『紅雷』を纏わせた上で『豪脚』も発動させている。

ハジメの紅雷付きのヤクザキックが腹にヒットした瞬間、少女は盛大に吹き飛び壁や廊下に数回バウンドしたあと、廊下の奥で手足を更におかしな方向に曲げて停止し、そ

のまま溶けるように消えていった。

「ふう……」

ハジメは溜息を吐くと、未だにふるふると震えながらしがみつくと優花の頭を軽く小突く。ビクツとしたあと、優花は恐る恐るという感じでハジメを見上げた。既に目尻には涙が溜まつており、口元はキュツと一文字に結ばれている。

「あつ……ヤバイ、可愛い」

ハジメは優花の可愛いさにノックアウトしそうになりそうだったので、理性を保つ為に深呼吸してから優花に話しかけた。

「優花……お前のビビリ具合、前より上がってねえか？」

「……ウルサイ」

「まあ、良いか……って優花、お前、腰抜けてね？」

「……ハジメ、おんぶ」

「クハツ……ハイハイ、分かったよ」

優花は今さっきの腰が抜けたらしく、ハジメはおんぶする事になる。ハジメは何年振りに優花をおんぶした。優花は腕を首に回して、これでもかというくらいギュツと背中にしがみつく。何がとは言わないが、ハジメは背中に感じる凄く柔らかい感触を極力無視して精神統一しながら歩き出した。

「……でも、やっぱ昔からビビりは変わらないなあ〜っギブギブツ！」

「……なんかムカつく」

「……サーセンした」

ハジメの言葉にイラツとした優花は、おんぶされながらハジメの首まわりに力を入れられ、首がしまりそうになり、取り敢えず謝った。

そのままハジメは優花をおんぶしながら霧の中を戦い続けて進んでいくと、やがて霧が晴れていき、奥にある倉庫の一番奥で輝き始めた魔法陣を見つけた。

「優花……魔法陣見つけたから降りて良いぞ？」

「……」

「優花サーン？」

ハジメがそう呼び掛けると、優花の甘い声音がハジメの耳元に響く。ほとんど触れるような近さで、優花の唇が震え、熱い吐息と共に言葉が囁やかれた。

「……まだ、ハジメに甘えたい」

「……それは、反則だろ……」

ハジメは顔を上げて天を仰いだ。そして、優花の要望通りおんぶをしたまま魔法陣に入ることにした。

「……魔法陣を通った後は降りろよ」





場にも魔法陣が描かれていた。そして、その四つある魔法陣の内の一つがハジメ達である。

しかし、ハジメは中心の魔法陣の場所を見つめながら疑問を抱いた。

「……あの複雑な魔法陣は神代魔法の魔法陣だな……なら、俺達は攻略したのか？」

「ハジメ、何か問題あるの？」

「いや、まさかもうクリアとは思わなくて……他の迷宮に比べると少し簡単だった気が……最後にあのクリオネモドキくらい出てくると思ったんだが……」

ちよつと他の迷宮と比べて拍子抜けだったとハジメ思った。すると、ハジメの思いを察したのか優花は、肩越しに顔を覗かせて、苦笑いしながら答えた。

「あのね、ハジメ。十分大変な場所よ此処。最初の海底洞窟だつて普通は潜水艇なんて持つてないんだから、クリアするまでずつと沢山の魔力を消費し続けるし、下手をすれば、そのまま溺死よ。クリオネみたいなのは有り得ないくらい強敵だし、亡霊みたいなのは物理攻撃が効かないから、また魔力頼りになる。それで大軍と戦つて突破しなきゃならないのよ？ 十分、おかしな難易度よ」

「むつ、そう言われればそうなんだろうが……」

「まして、この世界の人なら信仰心が強いし……あんな狂気を見せられたら……」

「余計、精神的にキツいか……」

優花の指摘で要するにハジメが強すぎたという結論になった。そこまで言われると、確かに、「グリユーエン大火山」も最後のフリードの襲撃さえなければ無傷で攻略出来ていたと納得する。

「そういえばユエ達はまだみたいね」

「ん、ああそうだなアイツ等大丈夫か？」

そして、そう言えば、ユエ達と合流する前に到着してしまつたが彼女達はどうしているだろうかと二人で考えたその時、右側にある通路の先の魔法陣が輝き出した。

「来たみたいだぞ」

爆ぜる光が収まると、そこにはユエ、シア、テイオの三人の姿があつた。

「いいタイムイングだな。そっちは大丈夫だったか？」

「ん……そっちは……大丈夫じゃなかった？」

「あ、優花さん大丈夫ですかっ！」

「む？ 怪我でもしておるのか？ 回復魔法はせんかつたかの？」

「ううん安心して三人共。ただ、甘えてるだけだから」

ハジメの呼びかけに、それぞれ元気な様子を見せつつ、ハジメに背負われている優花に心配そうな視線を送つたが、それに対する優花の返事で……

「……ん、優花ズルい。私も、ハジメ」

「羨ましいですう。代わって下さいよ。」

「うむ、妾もして欲しいのじゃが……」

三人共、言つてゐる事は違ふが目的は一緒に優花とハジメに迫つてきた。

「いやいや、お前等……住処に着いたんだし魔法陣に行くぞ。なつ、優花？」

「じゃつ、交代制で」

「わゝい」

「いや、やんねえから」

「ブ〜！」

「ブ〜、じゃねえわつ。ほら行くぞ。後、優花も降りろ約束だろ？」

「ブ〜！」

「お前もかいつ〜！」

そんな事がありながらハジメは優花を降ろしてから祭壇に到着した。ハジメ達は全員で魔法陣へと足を踏み入れる。いつもの通り、脳内を精査され、記憶が読み取られた。しかし、今回はそれだけでなく、他の者が経験したことも一緒に見させられるようだった。つまり、ユエ達が見聞きしたものをハジメと優花にも共有された。

どうやら、ユエ達は、巨大な地下空間で海底都市とも言うべき廃都にたどり着いたようだ。そこで、俺達と同じく空間が歪み、二国の軍隊と都内で戦争して来たようで、そ

の都は人間族の都で魔人族の軍隊に侵略されているところだったらしく、結局、俺達と同じように両者から襲われたようで、都の奥には王城と思しき巨大な建築物があり、軍隊を蹴散らしながら突き進んだユエ達は、侵入した王城で重鎮達の話聞くことになった。

何でも、魔人族が人間族の村を滅ぼした事がきっかけで、この都を首都とする人間族の国が魔人族側と戦争を始めたのだが、実は、それは和平を望まず魔人族の根絶やしを願った人間側の陰謀だったようなのだ。気がついた時には、既に収まりがつかないほど戦火は拡大し、遂に、返り討ちに合った人間側が王都まで攻め入られるという事態になってしまった……という状況だったらしい。

そして、その陰謀を図った人間とは、国と繋がり深い光教教会の高位司祭だったらしく、この光教教会は聖教教会の前身だったようだ。更に彼等は進退窮まり暴挙に出た。困った時の神頼みと言わんばかりに、生贄を捧げて神の助力を得ようとしたのだ。その結果、都内から集められた数百人の女子供が、教会の大聖堂で虐殺されるという凄惨な事態となった。

「そつちもそつちでゴミみたいな幻覚だったんだな」

「……ん、ハジメ達の方も最悪」

「だろ？　　って、シア大丈夫か？」

「あつ、はい、大丈夫ですう……少し嫌なモノがフラッシュバックしただけですから」

ユエ達も、その光景を見たときは流石にかなりキツかったようで、魔法陣による記憶の確認により強制的に思い出し、顔を青ざめさせている。特にシアは今にも吐きそう。ようやく記憶の確認が終わり、無事に全員攻略者と認められたようである。ハジメ達の脳内に新たな神代魔法が刻み込まれていった。

「クハツ……ここ、この魔法かよ。大陸の端と端じゃねえか。解放者めやつてくれる……まあミレデイが考えたと思うのが妥当だな」

「……ん、同意。それに見つけた『再生の力』」

ハジメが苦笑いしながら悪態をつく。それは、手に入れた「メルジーネ海底遺跡」の神代魔法が『再生魔法』だったからだ。

ハジメが解放者の嫌らしさに眉をしかめていると、魔法陣の輝きが薄くなつていくと同時に、床から直方体がせり出てきた。小さめの祭壇のようだ。その祭壇は淡く輝いたかと思うと、次の瞬間には光が形をとり、人型となった。

メール・メルジーネはどうやら、オスカー・オルクスと同じくメッセージを残してんだな。

人型は次第に輪郭をはっきりとさせ、一人の女性となった。祭壇に腰掛ける彼女は白いつつたりとしたワンピースのようなものを着ており、エメラルドグリーンの長い髪と

扇状の耳を持つていた。どうやら解放者の一人メール・メルジーネは海人族と関係のある女性だったようだ。

彼女はオスカーと同じく、自己紹介したのち解放者の真実を語った。おっとりした女性のように、憂いを帯びつつも柔らかな雰囲気を纏っている。やがて、オスカーの告げたと同じ語りを終えると、最後に言葉を紡いだ。

「……どうか、神々に縋らないで。頼らないで。与えられる事に慣れないで。掴み取る為に足掻いて。己の意志で決めて、己の足で前へ進んで。どんな難題でも、答えは常に貴方の中にある。貴方の中にしかない。神々が魅せる甘い答えに惑わされしないで。始祖の力に負けないで。自由な意志のもとにこそ、幸福はある。貴方に、幸福の雨が降り注ぐことを祈っています」

そう締め括り、メール・メルジーネは再び淡い光となって霧散した。直後、彼女が座っていた場所に小さな魔法陣が浮き出て輝き、その光が収まると、そこにはメルジーネの紋章が掘られたコインが置かれていた。

「証の数も四つですね、ハジメさん。これで、きつと樹海の迷宮にも挑戦できます。父様達どうしてるでしょう」

シアが、懐かしそうに故郷と家族に思いを馳せた。しかし、脳裏に浮かんだの正に軍隊のような父親達だったので、「今の父様達なら元気そうですね……」と乾いた笑みを浮

かべながら呟いた。

ハジメは、シアと同じようにハウリア族を思い出しながら「そうだな」と苦笑いしながら証のコインを取ろうとした時だった。

ドサツ！

「はっ？」

ハジメの後ろから大きな音がしたので振り向くと、やけに静かだと思っていた優花が倒れており、ハジメから間抜けな声が出た。

「……ッ！優花?!」

「大丈夫かの?!優花っ！」

「……優花っ！」

「優花さん?!」

ハジメの叫びに三人も優花の方へ視線を向けると、優花が倒れてるのを見て目を見開き、すぐさま駆け寄った。

「……どういう事だ？　神代魔法の負荷か……いや、絶対にそれはありえねえ……何だ？何が原因だ?!」

今の優花の状態は息はしてるのだが、目が虚ろの状態になっていた。

「おいつ、優花！優花！」





## 五十九話

## 遙か彼方昔の記憶とクリオネ討伐

優花は、何も無い。全てが黒だけの世界に閉じ込められていた。痛み、苦しさもなく、浮遊感だけあった。

その時、何かが聞こえた。

『――！』

“誰か……呼んでる？”

『花！』

“誰だろう？……でも落ち着く声”

『優――！』

“もしかして、この声は……”

『優花！』

“ハジメ。そうだった。ハジメの声だ！ハジメっ、ハジメっ！”

優花は、思い出す。そして、目を見開いて手を伸ばした。

“ハジメっ！”



其処には……

『……グツウ』

“……っ！ 人？”

其処には全身機械のようなものを纏い、紅い電流が流れている人の様な何かだった。しかし、体のあちこちから血のようなモノを流しており、機械の部分も少し融解されてあつたりと破損部分が多く見られた。

“大丈夫ですか?!——っ！”

声は出せないが行動ならと思ひ、優花は回復魔法の詠唱をしながら近付き容態を確認しようとして機械を纏う人に触れようとしたが……

“えっ……”

優花が触ろうとしたら手がすり抜けた。そのことに啞然としながら驚きのあまり自然と言葉が漏らした。

“嘘。もしかして、これってあの夢と関係……っ?!”

優花はもしかしてこれはテイオの背に乗ってる時に見たあの夢のようなものと関係あるのかと考えた時だった。

それは空から凄まじい圧が優花を襲った。

そして……

『流石は機械仕掛けの神だな——よ、我等を相手にしてこれ程とはな』

『誰?!……それに、何この庄……うっ』

それは凜とした男の人の声だった。しかし、その男の庄は凄まじい重圧だった。それは、ハジメと同等もしくはそれ以上の庄だった。優花に向けられてもないのに寒気がする程だった。

優花はその重圧と声の正体を知るべく上を見上げ、いたのは……

『だが、我等四柱を相手をするには少々無理があつたな……』

それは白いモヤ達であつた。ちゃんとした姿形は分からない。しかし優花は断言できた。モヤがあつても、あの重圧、そして何故か神々しく見えるアレは自分達の敵である。『神々』だと……

優花が空を見上げながら唾然としてると真ん中のモヤが喋りだした。

『しかしな——貴様は何故、我等に齒向かう?我等に叛逆する?』

『黙レ……ラーゼン、お前達はマ、間違ッてル、人間、巫人、魔人は自由の意思で在るべきだ』

『!ラーゼンつて』

優花は機械を纏った人の話の中に『ラーゼン』という神の名に覚えがあつた。それは、メルジーネ海底遺跡の大迷宮で過去の幻影で見た狂信者達が口にしていたことだつ

たからだ。真ん中にいるモヤが「ラーゼン」……ハジメが言っていたこの神の遊戯の元凶だと確信した。

「なら、あの真ん中の白いモヤが最高神ラーゼン……姿を見たいけど……やっぱり姿はつきり見えないわね」

ラーゼンは機械を纏った人の電子音のような声音の言葉に首を傾げながら少し考えながら見えて、少しした後、呆れたような感情が含まれた話をしだした。

『ふむ、自由の意思、ね。……くだらんないな——。それじゃ我が退屈してしまうだろう？ 我が求めているモノは知ってるだろう？ 我が求めるのは強者。強き者との

戦い、その成り立ち、成り行きを見てみたいのだ。その為には、宗教同士の争い、戦

争が必要だ。そして、そこから生まれる「復讐心」、  
「対抗心」、  
「嫉妬」、  
「憤怒」、  
「崇拜」、  
「狂信」、  
これがあつてこそ生ける者達の中に強者は産まれると我は思っているし、ゲームみたいで楽しいではないか？』

それは、暴論だった。簡単言えば自分が強い奴と戦いたいから宗教同士の戦争をやつてるといふ事だった。

「じゃあ、もしかして……私達が召喚された理由って……」

優花は何故、神は私達のを呼んだ理由を理解したしまい唾然としてしまった。

『それはッ！ 貴様の欲ダー！ ソンな理由で人々を彼等の意思を利用スルナー！』

機械を纏った人は電子音を流しているような声音だが、言っている事は理解出来た。

『しかし、巫人と魔人は我とエヒトルジュエが創った存在なんだぞ？ 創作者側が遊

んでも良いじゃないか？』

『ダガッ！』

『それに、貴様はもう負けだ。諦めろ』

『いや、負けテナイ……俺はマダ、貴様ラと戦エルツ！』

機械を纏った人は諦めていなかった。そのギラついた目は優花にとつての大切な人と似ており、その瞳に心を震わせ、彼と重ねながら見えてしまいがついたら彼の名前を自然と呟いていた。

“……ハジメ？”

それと、同時にその言葉を聞いたラーゼンは心の奥底から笑い出した。

『クハハハハッ！ 凄まじい執念だ。その目だけでも圧が凄まじい。だが、これを見ても貴様は戦えるか？……エクストラ、あれを』

『はい、我が主』

そう言つてラーゼンはエクストラと呼ばれる神を呼んだ。そのエクストラは何故か白いモヤではなく、ちゃんとこの目で姿を見ることが出来た。

“あの銀髪の人がエクストラ……エクストラって確か……あの王様が言つた聖母

神？　でも、凄く綺麗な人形みたい……”

優花はエクストラは海底遺跡の幻覚で人間族の王様が口にしていた聖母神と予想するが優花は寒気を覚えた。それはエクストラは白い天使の様な翼が生えており、銀髪のロングで美しい顔立ちなのだが、その表情は生きているのか怪しいと思える程の人形のような無表情だった。

エクストラはラーゼンに指示された通りにある者を引っ張り出した楔で十字で磔ながら……

『——機械仕掛けの神よ。貴方はこれを見ても戦いを続けるのですか？』

『う、アツ……グ——逃げて』

そう言つてエクストラが突き出したのは磔にされたエクストラと同じような容姿の人物だった。でも、エクストラと違って翼は生えてるが戦っていたせいかわろわろわ綺麗な銀髪は所々、焦げているようだった。

『クリスタツ?!　っ……ラーゼン！　エクストラア！　貴様等ア!!』

『なんだい？　貴様みたいな奴を手っ取り早く処理するには恋人である彼女を使った方が効率的だろ?』

”クス……コイツ……本当に最高神?”

優花はラーゼンの考えてる事に心底、嫌悪感を抱いた。そして、本当に最高神かと疑



問を抱く程だった。そんな事を思っていると機械を纏った人は黙っていた。

『……………』

『さあ、——どうする？　愛しの人を殺すか？　君の死を選ぶか？』

『駄目よっ！　——貴方は生きて！　貴方なら……いつ』

『黙りなさい、愚妹』<sup>クリスタ</sup>

ラーゼンは煽りをかけていく、クリスタは機械の人を守ろうと生きて欲しいと必死だがエクストラに何らかの魔法か何かの長方形の物で苦しめられる。

それを見た機械を纏った人は戦闘する意思が無くなったのか、武装を解除していき、機械でゴツゴツしていたが普通ね人みたいな姿になったその容姿は白髪でその目は……

≪嘘っ……≫

優花は彼の容姿を見て、口元を両手で抑えながら唾然としてしまった。

『…………武装は解除したラーゼン。裁きも受ける。だから、早く彼女をクリスタを解放しろ』

『その答えが欲しかったよ——。エヒト、オル——、スカ——、お前達は神域に戻りたまえ。——の裁きは我自身がしよう』

『『はっ』』

ラーゼンの言葉に三つのモヤが返事をした後に次第に消えていった。そして、ラーゼンは白髪の男に向かい直る。

『ではサヨナラだ。機械仕掛けの神よ。此度の戦いは面白かった。実に見事だった。だから、我も相応の返しをしよう。』

ジャッジメント  
神罰の槍——起動』

キュウイイイイイイーン！

ラーゼンが手を掲げているように見えた。そして激しい音と共に巨大な光の槍が空から出ていた。その大きさは山さえも一瞬で消し去る程の大きさだった。

『駄目やめてっ！——、——！』

クリスタは磔にされながらも彼の名を呼び泣き叫ぶ。そんなクリスタを見て彼は優しげに笑みを浮かべていた。その姿がその笑みが優花には「彼」の姿に見えてしまい、気がついたら彼の元へ駆け出していた。

「駄目っ、ヤメテッ！」

優花が手を伸ばした瞬間……

『サヨナラだ』

キュウイイイイイーン！！

その瞬間、優花の一步目の前でこちら一帯を消し去るような絶望の光の柱がたった。それと共に、優花の視界も次第に暗くなっていたのだ……。

~~~~~

「優花！ おい、優花！」

「優花さん！」

「……………優花！」

「優花！」

優花が倒れてから十分が経過するが未だにも彼女は一向に目を覚まそうとしない。ハジメは動揺が隠し切れずに手も若干震えている。

すると……………

「……………んう、ハジメ？」

「！」

ハジメが色々と考えてると倒れていた優花が薄ら目を開けながらゆつくりと目を覚ました。

「優花！」

「……………ん！」

「優花よ、大丈夫かの?!」

「優花さん良かったですう〜」

「ちよつハジメ？皆？どうしたの?!」

ハジメとユエは優花に抱きつき、ティオは心配し、シアは泣いている。

「どうした、じゃねえよ。優花、お前な、此処の神代魔法を手に入れた瞬間に倒れたから焦ったんだよ」

「えつ、そうなの？……ゴメンんう……」

「ちよつ、優花!」

目を覚ました優花はそのまま、また力尽きたようにハジメにもたれ掛かりまた、眠りに入ってしまった。

「ハジメ、優花は?」

「……大丈夫だ、今さつきと違って、ちゃんと今度は寝てるだけだと思う」

「それは安心じゃな」

「ああ、シア。優花をおぶっていてくれないか? 俺は証を取りに行く」

「はい、分かりましたあ〜」

「すつかり休めよ」

ハジメは寝ている優花の額にキスをしてからゆつくりとシアに渡し、証を取りに行つた。そして証を「宝物庫」にしまった途端、神殿が鳴動を始めた。

「はっ?」

そして、周囲の海水がいきなり水位を上げ始めた。

「うおっ!?! チツ、強制排出ってかつ。全員、掴み合え! シアは絶対に優花を離すな!」

「……んっ」

「はっ、はいですう!」

「水責めとは……やりおるのお」

凄まじい勢いで増加する海水にハジメ達は潜水艇を出して乗り込む暇もなく、あつという間に水没していく。

「ハッ、次は別々に流されねえよ!」

ハジメは咄嗟に、また別々に流されては敵わないと、全員がしつかり優花を守りながらお互いの服を掴み合ったのを確認して「宝物庫」から酸素ボンベ取り出して口に装着し、寝ている優花にも装着させた。

そして、その直後、天井部分が【グリューエン大火山】のショートカットのように開き、猛烈な勢いで海水が流れ込み、その竖穴に流れ込んで、下から噴水に押し出されるように、猛烈な勢いで上方へと吹き飛ばされた。

これは、おそらく、【メルジーネ海底遺跡】のショートカットなのだろうが、滅茶苦茶乱暴なショートカットだ。しかも、強制的……メール・メルジーネはおっとり系じゃな

く過激系の奴なのかもしれない。

ハジメはこのショートカットでメイル・メルジーネの評価が変わってしまったのだった。

そして、押し上げられていくハジメ達は、やがて頭上が行き止まりになっていることに気が付く。しかし、ハジメ達がぶつかるといつた瞬間、天井部分が再びスライドし、ハジメ達は勢いよく遺跡の外、広大な海中へと放り出された。

それでハジメは確信した。

「(メイル・メルジーネは絶対、見た目に反して過激で大雑把な性格だろっ!)」

ハジメ達は海中に放り出されたが急いで潜水艇を「宝物庫」から取り出した。そして、ハツチから乗り込もうとするが、その目論見は阻止される。一番、会いたくなかった相手によって。

ズバアアアアアアアツ!!!

ハジメ達の眼前を凄まじい勢いで半透明の触手が通り過ぎ、潜水艇が勢いよく弾き飛ばされた。

「ユエ」

「凍極!」

ハジメが向けた視線の先には、一見妖精のような造形でありながら、全てを溶かし、無

限に再生し続ける凶悪で最悪の生物——巨大クリオネがいた。わざわざ攻略が終わった後で現れたことに歯噛みしながら、ハジメはユエに「念話」を発動して呼びかける。

巨大クリオネは、再び無数の触手を水の抵抗などないかのように猛烈な勢いで射出した。それに対して、ユエがハジメの呼びかけに応え、阿吽の呼吸で周囲の海水を球形状に凍らせて、氷の障壁を張る。

直撃した触手の勢いで海中を勢いよく吹き飛ばされていき、氷の障壁と中で激しい衝撃に全員が障壁内でシェイクされる。

「どうするんじや！ ご主人様よ！」

「全員海上を目指せ。水中じゃあ馴り殺しだ。時間は俺が稼ぐ！」

念話石を使って通信してきたティオに答えてからハジメは指輪型の感應石を操って潜水艇を遠隔操作した。ハジメ達の背後から、吹き飛ばされ沈んだはずの潜水艇が猛スピードで突き進み、船体を捻りながら襲い来る無数の触手をかわしていく。そして、船底から無数の魚雷を射出した。

一度に射出された魚雷の数は十二。普通に考えれば十分な破壊力だがここで確実に隙を作らなければハジメはギリ貧だからな容赦しい。

それから合計六十の魚雷を発射した。

泡の線を引きながら殺到したそれらは、狙い違わず巨大クリオネに直撃し凄絶な破壊

をもたらした。

ドオウ！ ドオウ！ ドオウ！ ドオウ！

そんなくぐもった衝撃音が鳴り響き、海水が膨張したように膨れ上がる。海上から、巨大クリオネの直上を見ているものがいれば、海面が一瞬盛り上がり、次いで噴き上がる巨大な水柱ができる程の威力だが……

あの威力の魚雷を受けて尚、巨大クリオネは健在で、潜水艇を攻撃して船体が溶かされ始めるのを確認してハジメは歯噛みした。溶かされていく自慢の潜水艇に内心悪態を吐きながら、ハジメはユエに念話で呼びかけた。

“ユエ、”界穿”を頼めるか？”

“……四十秒はかかる”

“邪魔はさせない。優花を出来るだけ安全な状況で休ませたい。それには海中から脱するしかない”

“んっ……任せて”

ユエが集中のため目を瞑り、動かなくなつた。優花が海流に流されないようにシアがしっかりと離さないでくれている。ユエが行使しようとしている“界穿”とは、【グリューエン大火山】で修得した神代魔法である空間魔法の一つで、空間の二つの地点に穴を開け、二点の空間を繋げる。要するにワープゲートを作る魔法で、まだ修得して日



が浅いので、ユエをもつてして、それだけの時間がかかる程の魔法だ。

襲い来る触手をテイオが縮小版ブレスの連射で何とか薙ぎ払っていた。

テイオのブレスで何とかユエを守れてるがブレスは魔力消費が激しい上に、水中では威力も射程も相当落ちる上、直線的な攻撃なので触手には当てづらく殲滅力が弱く、もう数秒も持たずに突破されちまうと感じたハジメは「宝物庫」から鉦石を次々と取り出しては、連続して「錬成」していき、先程ユエが形成した氷の障壁のような、球形状の物理障壁を形成していった。

「ご主人様よ！ もう、突破されるのじゃ！」

「出来たぞ、全員入れ！」

五人が十分に入れるくらいの金属製障壁が出来上がり、テイオが最後に入り込むと同時に穴が塞がって完全な金属球となった。さらに、その金属球を紅色の魔力が覆う。「金剛」による強化だ。一応、重力石も組み込んでいたので、沈み続けるということもない。

その直後、金属球に触手が殺到し、一気に包み込み始めた。即行で魔力そのものすら溶かす半透明ゼリーが「金剛」を食い破ってくる。そして、金属球の表面もみるみると溶かされていった。しかし、金属球に紅色のスパークが走ったかと思うと溶かされる端から金属が盛り上がり、その防壁を辛うじて維持する。

「クハッ……おもしろえー！こっちも腐る程鉱石があるからなっ！」

ハジメは不敵な笑みを浮かべながら中から常に溶解速度に対抗して本気の「錬成」を繰り返した。

そして、遂に待ちわびた瞬間が来た。

「界穿！」

ユエの空間転移魔法が発動する。金属球の中、ハジメ達の直ぐ傍に楕円形の光り輝く膜が出来上がった。空間を繋げるゲートだ。

「全員飛び込め！」

金属球に手を当てて「錬成」し続けるハジメの号令に従って、全員が一齐にゲートへと飛び込んでいく。ハジメも最後に飛び込み潜ったあと、直ぐにゲートは消滅した。

あれくらいの溶解速度なら数秒で金属球を溶かしていつてるだろうと。ゲートを潜ったハジメ達は、凄まじい浮遊感に襲われた。

おそらく少しでも海から離れようと、ユエが上空百メートルに出口を設定したんだろう。でも、これならあのクリオネも追っては来ないとハジメは推測する。

ハジメがそう推測してるとすぐさまテイオが「竜化」をし、その背にハジメ達を乗せて浮遊した。テイオの背でユエが崩れ落ちかけ、傍らのハジメが支える。

完全に魔力枯渇の状態だと分かると急いでハジメは「宝物庫」から魔晶石を取り出

し、魔力を補充させる。

「ユエ、助かった。流石だよ。空間転移は相当難しいだろうに」

「……はあはあ、ん。頑張った。でも、まだまだ実戦レベルじゃない…シア、優花は大丈夫？」

「はいっ、優花さんは無事ですすよ！」

「……ん、よかった」

ユエの言う通り、空間魔法は重力魔法の比ではないくらい扱いが難しく、ユエを以てして未だ実戦で使えるレベルではなかった。「想像構成」によるイメージでの魔法陣構築には多大な時間がかかるし、魔力効率もまだまだ悪く、百メートルの空間転移をするのに最上級魔法二回分の魔力を消費してしまう程らしい。尚、ハジメだったら数ヶ月はかかるだろう。

それでもユエが短い期間で発動に到れるまで習熟していてくれたおかげで、脱出することが出来たので、ハジメ達から称賛が送られ、若干頬を染めてユエは照れていたが、すぐさまシアに優花の様態を確認して安心していたが……

次の瞬間、全員その表情は凍りつくことになった。

ドオゴオオオオオオオ!!!

ザバアアアアアア!!!

「なっ?!」

そんな轟音と共に、突然、ハジメ達の背後から巨大な津波が襲いかかったのだ。いや、巨大というのもおこがましいだろう。もはや、壁、そして空だ。上空百メートルほどの高さを飛ぶティオの遙か天に白波を立てながら襲い来る津波は、優に高さ五百メートルを超えているだろう。そして直径は一キロメートルくらいありそうだ。

「ッ、ティオ!」

「承知っ!」

ハジメの叫びにティオが我を取り戻し、翼をはためかせて一気に加速する。左右に逃げ場はない。空間転移は間に合わない。ならば、何も考えず「前へ!」  
「グリユーエ  
ン大火山」から脱出した時に匹敵するような高速で飛行する。

するとシアは、何やら集中すると次の瞬間には目を見開いて警告を発した。

「ティオさん、気をつけて! 津波の中にアレがいます! 触手、来ます!」

固有魔法「未来視」の派生「仮定未来」で見た光景を伝えたのだろう。ティオは、シアの言葉を確認することもなく、咄嗟に身をひねった。直後、津波から無数の触手が伸び、今の今までティオの居た空間を貫いていく。

上手く避けることは出来たが、そのせいで津波との差が詰まってしまった。

「これでも喰らいやがれ!」

ボオオオオー！

なお襲い来る触手を、ハジメが火炎放射器で焼き払い迎撃していくが……

「ちくしょう！ 狙った獲物は逃がさないってか？」

津波は勢いを衰えることなく向かってくる。

「チツ……しぶとすぎだろっ」

ハジメは遅い来る津波を睨みつきながら歯噛みする。

「……ハジメさん」

“……ご主人様”

ギユツ！

「……お前等」

するとシアと竜化したティオは暗そうな表情をし、ユエはハジメのコートをギユツと

掴んだ。

「(クソツ、でも俺は優花をつ、そうだ俺は皆で戻るんだ。神共を殺すんだろ俺！ こ

んなどころで諦めねえぞ！)」

ハジメは両手で自分の頬をパンツと強く叩くそれに気付いたか、ハジメに視線を向けた彼女はビクツと体を震わせた。なぜなら、ハジメの眼が爛々と輝き眼光は鋭く、濃密で狂的なほどの殺意を宿し、歯を剥いて巨大化するクリオネモドキを睨んでいるから

だった。

それを理解し、共に奈落の底で死線をくぐり抜けて来たからこそ、ユエもまた、諦めなど一切持たずに、必死に考えを巡らす。

「(此処なら何も弊害もねえし、気をつける事はないな)」

そしてハジメは、あの魔法を使うことを決断した。

「テイオ……少し、どでけえ魔法を使うから止まってくれ」

“……ご主人様、承知なのじゃ!”

ハジメはある魔法を放つ為にテイオに止まってくれと呼びかけるとテイオはハジメを信頼してるのだらう。すぐさま従い移動するのを止めた。

だんだんと津波がハジメ達に迫ってくるに對してハジメは“限界突破”、“紅狼”を發動する。その瞬間、ハジメの周りに紅いスパークが纏いだしていく。

あのクリオネは高音熱で再生はしていたが再生速度は遅くなっていた。なら、あれ以上熱をぶつけばいい。とハジメは考えた。

ハジメは片手を天に掲げ、巨大な津波を睨みつける。

「喰らいやがれ!——ケラウノス雷霆!”

ハジメは天に掲げていた片腕を勢い良く雷を落とすかのように腕を振り落とした。

次の瞬間……

ドガアアアアアアアアン!!!

凄まじい轟音と共に大きな紅い落雷が津波と巨大クリオネを飲み込んだ。ハジメは魔法私放った瞬間、魔力を大分消費したので片膝を着いてしまい荒く息をする。咄嗟にユエがハジメを支えた。

「流石に魔力の半分以上の消費はハアハア……疲れるな」

「……ハジメ、大丈夫？」

「ああ……少しフラつくが平気だ」

ハジメはユエに支えられながら津波とクリオネがどうなったか確認しに向かった……。

実践は初だが、この魔法の威力はどんなもんかとハジメは気になり、立ち上がった。

「……凄い。私でもこの威力の雷は無理」

「はわわ……凄いですう……海が蒸発してますう……つとと、ふう……危なかつたですう」

「ご主人様は流石じやのう」

それは、魔法を放ったハジメも嘔然としていたが、魔法の天才のユエとユエの次に魔法に長けているティオまでも息を飲み、シアは驚き過ぎておんぶしていた優花を落とすようになっていた。

そこまで驚く程のハジメ達の見た光景とは……

そこには、津波と巨大クリオネがいた場所の水が全て蒸発しており、海中で見えなかった岩石地帯などが丸見えになっていたので。

「あのクリオネ……倒せましたよね？」

「あれ喰らって生きて再生されてたら神共よりもやべえよ……」

「……ん」

“そうじゃなく”

もし、この雷を喰らっても生きてたのなら神とは別で厄介過ぎる。

「よし、魔眼石にも反応ねえから消滅はしたな」

しかし、ハジメはシアの発言で少し不安になり、こっそり“魔眼石”で反応を見たのだが、しっかりとハジメの魔法で消滅しており安堵の息を漏らした。

「よし、ティオ。優花を早く休ましてえからエリセンに直行してくれ」

“うむ、承知”

そして、ハジメ達は未だに寝ている状態にいる優花を安静に休ませたい為エリセンへと直行したのだ……。



## 六十話 娘との約束

ハジメ達が、「メルジーネ海底遺跡」を攻略し、「竜化」したテイオの背に乗ってエリセンまで帰り、再び、町に話題を提供してから六日が経っていた。帰還した日から、ハジメ達は、ずっとレミアとミュウの家に世話になっていた。

エリセンという町は、木で編まれた巨大な人工の浮島であり広大な海そのものが無限の土地となっているので、町中は、通りにしろ建築物にしろ基本的にゆとりのある作りになっている。レミアとミュウの家も、二人暮らしの家にしては十分以上の大きさがあり、ハジメ達五人が寝泊りしても何の不自由も感じない程度には快適な生活空間だった。

そこでハジメ達は、手に入れた神代魔法の習熟と装備品の充実に時間をあてていた。エリセンは海鮮系料理が充実しており、波風も心地よく、中々に居心地のいい場所だったので半分はバカンス気分ではあったが……。

「そろそろ、次の迷宮に向かう準備をしないと……」

ハジメはそう言いながら、六日も滞在しているのは少々骨休めが過ぎると感じていた

が行動に出る事が出来ずにいた。

その理由は言わずもがな、ミュウである。ミュウを、この先の旅に連れて行くことは出来ない。四歳の何の力もない女の子を、東の果ての大迷宮に連れて行くなどもつてのほかだ。まして、「ハルツィナ樹海」を除く残り二つの大迷宮は更に厄介な場所にあるし、一つは魔人族の領土にある「シユネー雪原」の「氷結洞窟」。そしてもう一つは、何とあの【神山】なのである。どちらも、大勢力の懐に入り込まねばならないのだ。そんな場所にミュウを連れて行くなど絶対に出来ない。

なので、この町でお別れをしなければならぬのだが、何となくそれを察しているのか、ハジメ達はその話を出そうとすると、ミュウは決まって超甘えん坊モードになるので中々言い出せず、結局、ズルズルと神代魔法の鍛錬やら新装備の充実化やら、言い訳をしつつ六日も滞在してしまっているのである。

「それでも、いい加減出発しないと……はあ、ミュウに何て言うべきか……泣かれるかな。泣かれるよな……はあ、憂鬱だ。だが、優花の件もあるしな……」

そう、ハジメが早く旅に出ないといけないと思っっている理由の一つは優花の件だった。

それは優花が目を覚ましてからレミアとミュウの家で一晩たつて全員が揃っている頃、優花がハジメ達に声をかけた。

『皆……少し話があるから良い?』

そして、優花から聞いた話はお伽話よりは遙かに現実味のある話だった。


確かに、優花の夢の話には幾つかオスカーの手記やメルジーネ海底遺跡の幻覚と辻褃が合うモノがあった。しかし、優花の話が本当だと、神共はハジメの予想より相当ヤバイと確信する。もし、神代魔法を全て獲得したとしても勝てるどうか曖昧になっている。

それにラーゼンの目的が“強者の誕生の見届けと戦闘”ならこの世界でも、強者の一人であろうハジメを返す気は無いだろう。グリューエンの時にフリードと出会った際には“イレギュラー”と呼ばれていることは分かっている為、あっち側はハジメの事を目に留めている可能性が高い。

そして……

「機械仕掛けの神、ね……」

ハジメは優花の話の中にあつた“機械仕掛けの神”の事が頭から離れずにいた。それは、ハジメとその機械仕掛けの神とは、妙に親近感のような近い何かを感じたのだ。

ハジメはそんな事を考えていると無意識に“宝物庫”から自分のステータスプレートを取り出し、自分の技能欄に載っている“”を見た。

「……まさか、な」

ハジメはそんな考えに至った事を「ないない」と引き攣った笑みを浮かべながら自分で否定した。そして、視線の先に優花とユエ、シア、ティオ、そして彼女達と水中鬼ごっこをして戯れるミュウの溢れる笑顔を見ていた。

海人族の特性を十全に發揮して、チートの権化達から華麗に逃げ回る変則的な鬼ごっこを全力で楽しんでいるミュウを見ながら、再び、溜息を吐く。

「やつぱり、言いつれえなあ」

ハジメはそんな事を呟いてると、棧橋から投げ出した両足の間から突然、人影がザバツと音を立てて海中から水を滴らせて現れたのは、ミュウの母親であるレミアだった。

レミアは、エメラルドグリーンの長い髪を背中一本の緩い三つ編みにしており、ライトグリーンとの結構際どいビキニを身に付けている。ミュウと再会した当初は、相当やつれていたのであるが、現在は、再生魔法という反則級の回復効果により以前の健康体を完全に取り戻していた。

「有難うございませす。ハジメさん」

「いきなり何だ？ 礼を言われるようなことは……」

いきなりお礼を述べたレミアにハジメが訝しそうな表情をする。

「うふふ、娘のためにこんなにも悩んで下さるのですもの……母親としてはお礼の一つ

も言いたくなります」

「それは……バレバレか。一応、隠していたつもりなんだがな」

流石はミュウの母親だと、ハジメはレミアに本心がバレてしまった事に苦笑いをした。

「あらあら、知らない人はいませんよ？　優花さん達もそれぞれ考えて下さっているよ  
うですし……ミュウは本当に素敵な人達と出会えましたね」

レミアは肩越しに振り返って、ミュウのいたずらで水着を剥ぎ取られたシアが、手づ  
らをしながら必死にミュウを追いかけている姿をみつ、笑みをこぼす。そして、再度、  
ハジメに視線を転じると、今度は少し真面目な表情で口を開いた。

「ハジメさん。もう十分です。皆さんは、十分過ぎるほどして下さいました。ですから、  
どうか悩まずに、すべき事のためにお進み下さい」

「レミア……」

「皆さんと出会って、あの子は大きく成長しました。甘えてばかりだったのに、自分より  
他の誰かを気遣えるようになった……あの子も分かっています。ハジメさん達が行か  
なければならぬことを……まだまだ幼いですからついつい甘えてしまえますけれど  
……それでも、一度も『行かないで』とは口にしていないでしょう？　あの子も、これ  
以上ハジメさん達を引き止めてはいけないと分かっているのです。だから……」

「クハツ……そうかい。……幼子に氣遣われてちやあ、世話ないな……わかった。今晚はつきり告げるよ。明日、出発するって」

ミュウの無言の訴えが、行って欲しくないけれど、それを言つてハジメ達を困らせたくないという氣遣いの表れだったと氣付かされ、片手で目を覆つて天を仰ぎながら笑いなからハジメは、お別れを告げる決意をする。そんなハジメに、レミアは再び優しい眼差しを向けた。

「では、今晚はご馳走にしましょう。ハジメさん達のお別れ会ですからね」

「そうだな……期待してるよ」

「うふふ、はい、期待していて下さいね、あ・な・た♡」

「いや、レミア……その呼び方は……」

どこかイタズラっぽい笑みを浮かべるレミアに、ハジメはツツコミを入れようとしたが、それはブリザードのような冷たさを含んだ声音により、いつものように遮られた。

「レミアさん、油断も隙も無いわね……」

「……レミア……いい度胸」

「ふむ、やはりレミアもかの？」

「あの、ミュウちゃん？ お姉ちゃんの水着、そろそろ返してくれませんか？ さつきから人目が……」

いつの間にかハジメのもとに戻ってきていた優花達が、半眼でレミアを睨んでいた。まさか本当にハジメを再婚相手として狙っているんじゃないか？ と警戒しているらしい。

ハジメも最初は背筋が凍るかと思っていたがここ数日、よく見られる光景であるからスルー出来る程になった。

一方、睨まれている方のレミアはというと、「あらあら、うふふ」と微笑むばかりで特に引いた様子は見られない。そのゆるふわな笑みが、レミアの本心を隠してしまうので、ハジメとしては時折見せるアプローチが本気なのか冗談なのか区別が付きにくくて困る。

そして、俺ハジメというと、棧橋に上がって笑顔でレミアを睨んでいる優花の水着姿に目を奪われている。連日見ているのだが、もはや無意識レベルで視線が吸い寄せられている。そして、ハジメ自身も「これが、自然の摂理」だと考え仕方ないと思っている。

そんな、優花の水着は白のフリルタイプだ。紐で結ぶタイプでフリルが付いて可愛く、優花の肌と相まってコントラストがとても美しい。珍しく髪を後ろに纏め、少し短めのポニーテールにしており、それが普段より更に可愛さが極まっておりますハジメとしては堪らなかった。

レミアに凍った笑みを送っていた優花だがハジメの視線に気が付くと、どうやら自分

に心奪われているということを察したようで、顔を赤くしたが機嫌良さそうに笑みをこぼし、そのままハジメの腕に抱きつく。何時もより柔らかいモノの感触がおり、ハジメは理性を保とうと奮闘する。

だが、それを許さないかの様にユエが四つん這いで移動しながらからハジメの反対側の腕に抱きついた。黒ビキニで「ふふ」と上目遣いで見る目が「私も見て？」と無言で訴えている。

更に背後からはシアが、その自慢の双丘をハジメの背中に押し付けながらもたれかかった。未だ、ミュウに水着を取られたままなので、体を隠す意図もあるようだ。ただ、ハジメとしては、極上の柔らかさの他に、当たっている二つの特徴的な感触が非常に困る。

ちなみに、テイオも中々魅力的な水着姿でハジメの背中に身体を預けながら頭を俺の肩にコテと乗せており、随分幸せそうな笑みを浮かべていた。

そんな、美女・美少女に囲まれたハジメのもとへ、ミュウが海中から浮かび上がってきた。レミアとハジメの間に割り込むように現れたミュウは、そのまま正面からハジメに飛びつく。

「おう、ミュウどうした？」

「パパ、これあげるの〜」



咄嗟に抱きとめた時に、ミユウは「戦利品とったどー!」とばかりにシアの水着を掲げ、それをパサツとハジメの頭に乘せた。どうやら、娘からの贈り物らしいが当のハジメは「要らない」と言おうとした時だった。

「ミ、ミユウちゃん!? なぜ、こんな事を……はっ!? まさか……ハジメさんに頼まれて? も、もうっ! ハジメさんたら、私の水着が気になるなら、そう言ってくれば……いくらでも……」

「……ハジメ、私のもあげる」

「なら、妾も」

「あらあら、じゃあ、私も……上と下どちらがいいですか? それとも両方?」

「はあ……ハジメがそんな事を頼む訳ないでしょ? シアも早くハジメの頭に乘つて

る水着を着なさい」

「それは……確かに、そうですねえ」

シアの勘違いが加速した事により、頭に女物の水着を乗せ、四方から女に水着を献上される男になりそうだったが優花の言葉でそうなる事にならなくて済んだハジメは安堵の息を吐いた。

そして、やっぱユエ達でも優花には敵わない。とハジメは思っていると優花がこっそりハジメの耳に甘い声音で囁く。

「…………部屋でなら脱がして良いよ♡」

訂正、ハジメも優花には敵わないのだった……。

~~~~~

その日の晩、夕食前にハジメ達はミュウにお別れを告げた。それを聞いたミュウは、着ているワンピースの裾を両手でギュツと握り締め、懸命に泣くのを堪えていた。しばらく沈黙が続く中、それを破つたのはミュウだった。

「…………もう、会えないの?」

「…………」

それは答えに窮する質問だった。

ハジメの最終的な目的は故郷たる日本に帰ること。しかし、その具体的な方法はまだ分からない、前回ユエに空間魔法で出来ないかと聞いたが、流石に無理に近いと聞いて断念したし、どのような形でどのタイミングで帰ることになるのか定かではない。

かつて、ミレディは、望みを叶えたければ全ての神代魔法を集めろといった。もしかしたら、神共に負けるかもしれない。勝ったとしても強制的に帰らされるかもしれない。旅の終わりまでエリセンに来ることは出来ないかもしれない、だから、これが今生

の別れとなる可能性は否定しきれねえから安易なことは言えない。

「……パパは、ずっとミュウのパパでいてくれる？」

どう答えるべきかと悩むハジメに、ミュウは、その答えを聞く前に言葉を重ねた。ハジメはミュウの両肩をしっかりと掴むと真っ直ぐ視線を合わせた。

「……ミュウが、それを望むなら」

そう答えると、ミュウは涙を堪えて食いしばっていた口元を緩めてニツと笑みを作る。

「[[[[[」

その表情にハツとしたのは優花達だった。ミュウのニツとした笑みが、どこか困難に戦いを挑む時のハジメの表情に似ていて、一瞬、本当の親子のように見えたらしい。

「なら、いつてらっしゃいするの。それで、今度はミュウがパパを迎えに行くの」

「迎えに……ミュウ。俺は、ある目的が完了したら凄く遠いところに行くつもりなんだ。だから……」

「でも、パパが行けるなら、ミュウも行けるの。だって……ミュウはパパの娘だから」

「……………」

ハジメの娘たる自分が、出来ないことなどない。自信有りげに胸を張り、会いに来られないなら、自分から会いに行くと言明するミュウ。もちろん、ミュウは、ハジメ達が

神共を殺してから世界を越えて自分の故郷に帰ろうとしていることを正確に理解しているわけではない。まして、ミュウが迷宮を攻略して全ての神代魔法を手に入れ、世界を超えてくるなど有り得ない。

それ故に、それは幼子の拙い発想から出た実現不可能な目標だ。だが、一体誰が、その力強い宣言を笑えるというのだろうか？ 一体誰が、彼女の意志を馬鹿馬鹿しいと切り捨てられるのだろうか？ 出来はしない。してはならない。

ハジメはレミアの言ったミュウが成長したという言葉の意味がよくわかった。ミュウは短い時間ではあったが、それでもしつかりハジメ達の背を見て成長してきたのだ。そんな愛しい娘を今更手放せるのか。手放していいのか。いや、そんな事できるわけではない。していいわけではない。

だからこそ、ハジメは決断した。今、ここでもう一つ誓いを「約束」を立てようと。

「ミュウ、待っていてくれ」

「パパ？」

ハジメの雰囲気を変化したのを感じ取ったのかミュウが不思議そうな顔をして首を傾げる。先程までの、どこか悩んだ表情は一切なく、いつもの力強い真っ直ぐな眼差しがミュウの瞳を射貫く。

「全部終わらせたなら。必ず、ミュウのところに戻ってくる。みんな連れて、ミュウに会い

に来る約束だ」

「……ホント？」

「ああ、本当だ。俺がミュウに嘘吐いたことあったか？」

ハジメの言葉に、ふるふると首を振るミュウ。ハジメは、そんなミュウの髪を優しく撫でる。

「戻ってきたら、今度はミュウも連れて行ってやる。それで、俺と優花の故郷、生まれたところを見せてやるよ。きつと、びつくりするぞ。俺達の故郷はびつくり箱みたいな場所だからな」

「！。パパと優花お姉ちゃんの生まれたところ？　みたいの！」

「楽しみか？」

「すつごく！」

ピョンピョンと飛び跳ねながら喜びを表現するミュウ。そんなミュウに、ハジメは優しく目を細める。ハジメとまた会えるという事に不安を吹き飛ばされ満面の笑みを浮かべるミュウは、飛び跳ねる勢いそのままに、飛びついた。ハジメはしっかり抱きとめ、そのままミュウを抱っこする。

「なら、いい子でママと待っていていろよ？　危ないことはするな。ママの言うことをよく聞いて、お手伝いを頑張るんだぞ？」

「はいなの!」

ハジメは、そんな二人のやり取りを微笑みながら見つめていたレミアに視線で謝罪する。「勝手に決めて済まない」と。それに対し、レミアはゆっくり首を振ると、しつかりハジメと視線を合わせて頷いた。「気にしないで下さい」と。その暖かな眼差しには、責めるような色は微塵もなく、むしろ感謝の念が含まれているに思えた。

そんなパパとママのアイコンタクトに気がついたのか、ミュウがハジメとレミアを交互に見つつ、ハジメの服をクイクイと引つ張る。

「パパ、ママも? ママも一緒?」

「あ、それは……レミア?」

「はい、何ですか、あなた? もちろん、私だけ仲間はずれなんて言いませんよね?」

「いや、それはそうだが……マジ、こことは『別世界』だぞ?」

「あらあら。娘と旦那様が行く場所に、付いていかないわけじゃないですか。うふふ」

娘を抱っこするハジメと、それに寄り添うレミアの図。普通に夫婦だった。ユエ達だが、「させるかあー!」と言わんばかりに割り込み喧騒が広がった。

「良い雰囲気をぶち壊すなよ……」

最初のしんみりした空気は何処に行つたのか。ユエ達とレミアが笑顔の戦争を

繰り広げているのを苦笑いしながら見てみるといつの間にか蚊帳の外に置かれたハジメに、優花がトコトコと歩み寄った。

「ハジメ、連れて行くの?」

「優花は反対か?」

優花の質問に、ハジメがそう返すと、優花は笑みを浮かべながら首を振り、どこか優しげな眼差しでハジメを見つめ返した。

「まあ、ハジメの決めた事だから従うし、ハジメならそう言うと思つたしね」

「クハツ……そうか、やっぱり優花には何でも分かつてしまわれるな」

「だって、十二年も一緒にいたのよ?　それぐらい分かるわ。でもハジメ、もしタイムングを選ばなかったら?」

それはハジメの懸念と同じ質問だ。神代魔法を手に入れて、仮に何とか故郷に帰る手段を手に入れたとして、いつでも好きな時に世界を越えられるとは限らないし、神共の件がある。それでミュウとの約束が違えられる事態になる可能性も十分にある。そんな事になれば、ミュウの心は深い傷を負うことになるだろう。

優花の質問を理解しながらハジメは肩を竦めると、口元に笑みを浮かべながら決意を宿した強い眼差しを優花に向けた。優花も、一応聞いてみただけで、答えはわかっているとでも言うように口元が緩んでいた。

「どうとでもするさ。クソ神共を殺して、ミュウのところに戻るし、日本だつて見せてやる。ミュウを置いて世界を越えちまったのなら、何が何でも、またこの世界に来ればいい。何度でも世界を越えればいい。それだけのことだろ？」

「ふふ……知つてたわ」

互いに分かりあつた笑みを浮かべ、間近で見つめ合うハジメと優花。優花は、ハジメが約束をするほどだから自分も最大限に手伝うと思つてる。ハジメもまた、そんな自分を理解して、微笑んでくれる優花に愛しさがこみ上げていく。

自分達の喧騒を放置して、二人っきりの世界を作っているハジメと優花に、突撃して「自分達も」と言つてるような眼差しを向けながらハジメに抱き着き俺も仕方なく抱き返した。

そして、娘たるミュウも、堂々とユエ達との間に割つて入ると、ハジメに再度抱っこを要求した。

ハジメは可愛い奴め、と思ひながらも、再会の約束をしたとはいえ、しばらくのお別れであることに変わりはないから最後の夜は精一杯甘えたいんだろう。

ハジメは笑みを浮かべながらミュウを抱き抱えた。ミュウは嬉しそうにハジメの胸の中に顔を埋めた。

その翌日、ハジメ達はミュウとレミアに見送られ、海上の町エリセンを旅立つたの





## 六十一話 異端認定

赤銅色の世界に再び足を踏み入れて一日半。

ハジメ達は、砂埃を盛大に巻き上げつつ魔力駆動四輪を駆りながら一路【アンカジ公国】を目指していた。本来の目的地は、【ハルツィナ樹海】ではあるのだが、優花が、再生魔法を使えば【アンカジ公国】のオアシスを元に戻せるのかもしれない、是非試してみたいと提案したためだ。

再生魔法は、文字通り、あらゆるものを「元に戻す」という効果がある。なので、回復魔法による浄化の効かない汚染されたオアシスでも、元に戻せるはずと踏み、ちょうど通り道であるし、前回は名物のフルーツを食する暇もなかったことから、ハジメ達も特に反対する理由はなく、優花の提案に乗ることにした。

そして、現在、アンカジの入場門が見え始めたところなのだが、何やら前回来た時と違って随分と行列が出来ていた。大きな荷馬車が数多いし、雰囲気からして、どうも商人の行列だろう。

しかし………

「でも随分と大規模な隊商だな……」

「……ん、時間かかりそう」

「多分、物資を運び込んでいるんじゃない?」

優花の推測通り、長蛇の列を作っているのは、「アンカジ公国」が「ハイリヒ王国」に救援依頼をし、要請に応えてやって来た救援物資運搬部隊に便乗した商人達であった。王国側の救援部隊は、当然の如く先に通されており、今見えている隊商も、よほどアコギな商売でもない限り、アンカジ側は全て受け入れているようだった。

何せ、水源がやられてしまっていて、既に収穫して備蓄していたもの以外、作物類も安全のため廃棄処分にする必要がある、水以外に食料も大量に必要としているだろうし相手を選んでいる余裕はないだろう。

ハジメはそんな事を思いながら、吹き荒ぶ砂と砂漠の暑さに辟易した様子で順番待ちをする隊商を尻目に、四輪を操作して直接入場門まで突入した。

ハジメ達は、門前まで来ると周囲の注目を無視して四輪から降車した。周囲の人々は、いつも通り、優花達の美貌に目を奪われ、次いで、「宝物庫」に収納されて消えたように見える四輪に瞠目している。

「ああ、やはり使徒様方でしたか。戻って来られたのですね」

兵士は、優花の姿を見るとホッと胸をなで下ろした。おそらく、ビイズを連れてきた

時か、ハジメ達が「グリュューエン大火山」に「静因石」を取りに行く時に四輪を見たことがあったのだろうか。

そして、それが、「神の使徒」の一人としてアンカジで知れ渡っている優花の乗り物であると認識していたようだ。概ね間違つてはいないので特に訂正はせず知名度は優花が一番なので、代表して前に出る。

「はい。実は、オアシスを浄化できるかもしれない術を手に入れたので試しに来ました。領主様に話を通しておきたいのですが……」

「オアシスを!? それは本当ですか?!」

「は、はい。あくまで可能性が高いというだけです……」

「いえ、流石は使徒様です。と、こんなところで失礼しました。既に、領主様には伝令を送りました。入れ違いになつてもいけませんから、待合室にご案内します。使徒様の来訪が伝われば、領主様も直ぐにやつて来られるでしょう」

ハジメは凄いいVIP対応だな、と思つた。やはり、国を救つてもらつたという認識なのかハジメが考えてると兵士のハジメ達を見る目には多大な敬意の色が見て取れた。そしてハジメ達は、好奇の視線を向けてくる商人達を尻目に、門番の案内を受けて再び「アンカジ公国」に足を踏み入れた。

領主であるランズイが息せき切つてやつて来たのは、ハジメ達が待合室にやつて来て十五分くらいだった。

それは、随分と早い到着だ。それだけ、ランズイ達にとつてハジメ達は重要なんだろう。ハジメは少し照れてしまいそうになる。

ハジメがそう思いながら頬をカリカリとかいてるとランズイが話しかけた。

「久しい……というほどでもないか。無事なようでは何よりだ、ハジメ殿。ティオ殿に『静因石』を託して戻つて来なかった時は本当に心配したぞ。貴殿は、既に我が公国の救世主なのだからな。礼の一つもしておらんに勝手に死なれては困る」

「二介の冒険者に何言つてるんだよ。でもまあ、この通りピンピンしてる。ありがとよ。それより領主、どうやら救援も無事に受けられているようだな」

「ああ。備蓄した食料と、ユエ殿が作つてくれた貯水池のおかげで十分に時間を稼げた。王国から援助の他、商人達のおかげで何とか民を飢えさせずに済んでいる」

そう言つて、少し頬がこけたランズイは穏やかに笑つた。アンカジを救うため連日東奔西走していたのだろう。疲労がにじみ出ているが、その分成果は出ているようで、表情を見る限りアンカジは十分に回せていけているようだ。

「領主様。オアシスの浄化は……」

「使徒殿……いや、優花殿。オアシスは相変わらずだ。新鮮な地下水のおかげで、少しずつ自然浄化は出来ているようだが……中々進まん。このペースだと完全に浄化されるまで少なくとも半年、土壤に染み込んだ分の浄化も考えると一年は掛かると計算されるおる」

少し、憂鬱そうにそう語るランズイに、優花が今すぐ浄化できる可能性があるかと伝える。それを聞いたランズイの反応は劇的だった。掴みかからんばかりの勢いで「マジで!？」と唾を飛ばして確認する。

優花は完全にドン引きしながらコクコクと頷くが、ハジメの影にすぐさま隠れた。そんな優花を見て、取り乱したと咳払いしつつ居住まいを正したランズイは、早速、浄化を頼んできた。

「安心しろ、元よりその為に来たんだ」

ハジメはそう言いながら頷き、俺達一行はランズイに先導されオアシスへと向かった。

「やっぱ人気がねえな……」

ハジメはそう呟きながら周りを見る。オアシスには、全くと言っていいほど人気がなく、普段は憩いの場所として大勢の人々で賑わっていると聞いているが見る影もなかつ

た。

そんなオアシスをランズイが無表情ながらも何処か寂しそうな雰囲気を漂わせながらオアシスを眺めていた。ランズイは賑わっていた頃のオアシスを思い出しているのであろうとハジメはランズイの気持ちを察し話しかけた。

「安心しろよ領主、優花の手に掛ければオアシスは元通りだからよ」

「……ハジメ殿、ありがとうございます」

ランズイはハジメに自分の気持ちに察せられたのを理解し、少し照れ臭そうにお礼をした。

優花は「なんか、期待を膨らまさせられてる気がする」と呟きながらオアシスの畔に立つて再生魔法を行使する。

再生魔法を入手したものの、ハジメは魔法は使えるがユエ達よりかは発動に時間が掛かる為、アーティファクト作成に使うが、相変わらずシアは適性が皆無だった。しかしシアはまともに発動できなくてもオートトリジェネのような自動回復効果があるらしく、また、意識すれば傷や魔力、体力や精神力の回復も段違いに早くなるらしい。

一番適性が高かったのは優花で、次がテイオ、その次がユエだった。ユエの場合、相変わらず、自前の固有魔法“自動再生”があるせいか、任意で行使する回復作用のある魔法は苦手なようで、反対に、“神天治癒師”である優花は、回復と“再生”に通じる

ものがあるようで一際高い適性を持っており、より広範囲に効率的に行使出来るようだが、やはり魔法陣は必要でユエの方が実戦的だ。

優花が詠唱を始める。長い詠唱だ。エリセン滞在中に修練して最初は七分もかかっていた魔法を今では二分に縮め付与との複合まで出来ている。たつた一週間でそれなのだから、十二分にチートで、魔法の天才であるユエでさえも「優花……やべえ」と口をこぼしながら、その類まれない回復魔法と付与術の技術に驚愕していた。

静謐さと、どこか荘厳さを感じさせる詠唱に、ランズイと彼の部下達が息を呑む。決して邪魔をしてはならない神聖な儀式のように感じたのだ。緊張感が場を支配する中、いよいよ優花の再生魔法が発動した。

「——『絶象』」

瞑目したままアーティファクトの両手を突き出し眩かれた魔法名。

次の瞬間、前方に螢火のような淡い光が発生し、スつと流れるようにオアシスの中央へと落ちた。すると、オアシス全体が輝きだし、淡い光の粒子が湧き上がって天へと登っていく。それは、まるでこの世の悪いものが浄化され天へと召されていくような神秘的で心に迫る光景だった。

誰もがその光景に息をするのも忘れて見蕩れる。術の効果が終わり、オアシスを覆った神秘の輝きが空に溶けるように消えた後も、ランズイ達は、しばらく余韻に浸るよう



に言葉もなく佇んでいた。

「おっ……と、お疲れ優花」

「ありがと、ハジメ」

「どういたしまして……おい、領主。見蕩れてないで水質を調べろ」

少し疲れた様子で肩を揺らす優花を支えつつ、ハジメはランズィを促す。ハツと我を取り戻したランズィは、部下に命じて水質の調査をさせた。部下の男性が慌てて検知の魔法を使いオアシスを調べる。固唾を吞んで見守るランズィ達に、検知を終えた男は信じられないといった表情でゆつくりと振り返り、ポロリとこぼすように結果を報告した。

「……戻っています」

「……もう一度言ってくれ」

ランズィの再確認の言葉に部下の男は、息を吸って、今度ははっきりと告げた。

「オアシスに異常なし！ 元のオアシスです！ 完全に浄化されています！」

その瞬間、ランズィの部下達が一齐に歓声を上げた。手に持った書類やら荷物やらを宙に放り出して互いに抱き合ったり肩を叩きあつて喜びをあらわにしている。ランズィも深く息を吐きながら感じ入ったように目を瞑り天を仰いでいた。

「あとは、土壌の再生だな……領主、作物は全て廃棄したのか？」

「…………いや、一箇所にまとめてあるだけだ。廃棄処理にまわす人手も時間も惜しかったのでな…………まさか…………それも？」

「ユエとテイオも加われれば、いけるんじゃないか？ どうだ？」

「…………ん、問題ない」

「うむ。せつかく丹精込めて作ったのじゃ。全て捨てるのは不憫じゃしの。任せるが良  
い」

ハジメ達の言葉に、本当に土壌も作物も復活するのだと実感し、ランズイは、胸に手を当てると、人目もはばからず深々と頭を下げた。領主がすることではないが、そうせずにはいられないほどランズイの感謝の念は深かったのだ。公国への深い愛情が、そのまま感謝の念に転化したようなものだ。

ランズイからの礼を受けながら、早速、ハジメ達は農地地帯の方へ移動しようとした。

「…………」

「ハジメ？」

ハジメは不意に感じた不穏な気配を感じその歩を止め、それに気付いた優花が尋ねるが手で制して視線を巡らす。そして遠目に何やら殺気立った集団が肩で風を切りながら迫ってくる様子が見えた。

「チツ…………誰かと思えば、やっぱり、教会の連中か」

アンカジ公国の兵士とは異なる装いの兵士が隊列を組んで一直線に向かってくるのでハジメは「遠見」で確認するとこの町の聖教教会関係者と神殿騎士の集団のようである悪態をついた。

ハジメ達の傍までやって来た彼等は、すぐさま、半円状に包囲した。そして、神殿騎士達の合間から白い豪華な法衣を来た初老の男が進み出てきた。物騒な雰囲気、ランズイが咄嗟に男と俺達の間割りに割って入る。

「ゼンゲン公……こちらへ。彼等は危険だ。特にその黒の服装をした白髪の男の皮を被った獣にはな」

「フォルビン司教、これは一体何事か。彼等が危険？ 二度に渡り、我が公国を救った英雄ですぞ？ 彼等への無礼は、アンカジの領主として見逃せませんな」

フォルビン司教と呼ばれた初老の男は、馬鹿にするようにランズイの言葉を鼻で笑った。

「ふん、英雄？ 言葉を慎みたまえ。彼等は、既に「異端者認定」を受けている。不用意な言葉は、貴公自身の首を絞めることになりますぞ」

「……」

ハジメは、フォルビンの発言で、豊穡の女神効果は駄目だったと知る。しかし、これといって別に期待はしてなかったので、異端認定はそろそろ来るだろうと思つてたから

焦る程ではないが、先生には恥ずかし二つ名を作っちまったと心の中で謝罪をした。

「異端者認定……だと？ 馬鹿な、私は何も聞いていない」

ハジメに対する「異端者認定」という言葉に、ランズイが息を呑んだ。ランズイとて、聖教教会の信者だ。その意味の重さは重々承知している。それ故に、何かの間違ひでは？ と信じられない思いでフォルビン司教に返した。

「当然でしょうな。今朝方、届いたばかりの知らせだ。このタイミングで異端者の方からやって来るとは……クク、何とも絶妙なタイミングだと思わんかね？ きつと、神が私に告げておられるのだ。神敵を滅ぼせとな……これで私も中央に……」

最後のセリフは声が小さく聞こえなかつたが、どうやらハジメが異端者認定を受けたことは本当らしいと理解し、思わず、背後にいるハジメに振り返るランズイ。

だが、下手にハジメが行動するとランズイやアンカジ公国に迷惑が掛かると思い、ハジメは肩を竦めるのみで視線で「どうするんだ？」と問いかけるだけにした。

ハジメの視線を受けて眉間に皺を寄せるランズイに、如何にも調子に乗った様子のフォルビン司教がニヤニヤと嗤いながら口を開いた。

「さあ、私は、これから神敵を討伐せねばならん。相当凶悪な男だという話だが、果たして神殿騎士百人を相手に、どこまで抗えるものか見ものですな。……さあさあ、ゼンゲン公よ、そこを退くのだ。よもや我ら教会と事を構える気ではないだろう？」

ランズイは瞑目する。そして、ハジメの力、その他あらゆる情報を考察して何となく異端者認定を受けた理由を察した。自らが管理できない巨大な力を教会は許さなかったのだろうか。

しかし、ハジメ達の力の大きさを思えば、自殺行為に等しいその決定に、魔人族と相対する前に、ハジメ一行と戦争でもする気なのかと中央上層部の者達の正気を疑った。そして、どうにもキナ臭いと思いつつ、一番重要なことに思いを巡らせた。

それは、ハジメ達がアンカジを救ってくれたということ。毒に侵され倒れた民を癒し、生命線というべき水を用意し、オアシスに潜む怪物を討伐し、今再び戻って公国の象徴たるオアシスすら浄化してくれた。

この莫大な恩義に、どう報いるべきか頭を悩ましていたのはついさっきのことだ。ランズイは目を見開くと、ちょうどいい機会ではないかと口元に笑みを浮かべた。そして、黙り込んだランズイにイライラした様子のフォルビン司祭に領主たる威厳をもって、その鋭い眼光を真っ向からぶつけ、アンカジ公国領主の答えを叩きつけた。

「断る」

「……今、何といった？」

「……へえ」

全く予想外の言葉に、ハジメは以外な言葉に笑みを漏らし、フォルビン司教の表情が

面白いほど間抜け顔になっていた。あの顔からして内心、聖教教会の決定に逆らうなど有り得ないことなのだから当然だろうと慢心していたのだろう、良い様だった。そう思っているとランズイも苦笑いしながらも、揺るがぬ決意で言葉を繰り返した。

「断ると言つた。彼等は救国の英雄。例え、聖教教会であろうと彼等に仇なすことは私が許さん」

「なつ、なつ、き、貴様！ 正気か！ 教会に逆らう事がどういふことかわからんわけではないだろう！ 異端者の烙印を押されたいのか！」

ランズイの言葉に、驚愕の余り言葉を詰まらせながら怒声をあげるフォルビン司教。周囲の神殿騎士達も困惑したように顔を見合わせている。

「フォルビン司教。中央は、彼等の偉業を知らないのではないか？ 彼は、この猛毒に襲われ滅亡の危機に瀕した公国を救つたのだぞ？ 報告によれば、勇者一行も、ウルの町も彼に救われているというではないか……そんな相手に異端者認定？ その決定の方が正気とは思えんよ。故に、ランズイ・フォウワード・ゼンゲンは、この異端者認定に異議とアンカジを救つたという新たな事実を加味しての再考を申し立てる」

「だ、黙れ！ 決定事項だ！これは神のご意志だ！ 逆らうことは許されん！ 公よ、これ以上、その異端者を庇うのであれば、貴様も、いやアンカジそのものを異端認定することになるぞ！ それでもよいのかっ！」

どこか狂的な光を瞳に宿しながら、フォルビン司教は、とても聖職者とは思えない雰  
囲気で喚きたてた。それを冷めた目で見つめるランズイ。

ハジメはランズイの傍に向かってから問いかける。

「……おい、いいのか？ 王国と教会の両方と事を構えることになるぞ。領主として、そ  
の判断はどうなんだ？」

ランズイは、ハジメの言葉には答えず事の成り行きを見守っていた部下達に視線を向  
けた。

「オイオイ、マジかよコイツ等……」

ハジメも、誘われるように視線を向けると、二人の視線に気がついた部下達は一瞬瞑  
目した後、覚悟を決めたように決然とした表情を見せた。瞳はギラリと輝いている。明  
らかに、「殺つたるでえ！」という表情で苦笑いしてしまった。その意志をフォルビン司  
教も読み取つたようで、更に激高し顔を真っ赤にして最後の警告を突きつけた。

「いいのだな？ 公よ、貴様はここで終わることになるぞ。いや、貴様だけではない。貴  
様の部下も、それに与する者も全員終わる。神罰を受け尽く滅びるのだ」

「このアンカジに、自らを救ってくれた英雄を売るような恥知らずはいない。神罰？  
私が信仰する神は、そんな恥知らずをこそ裁くお方だと思つていたのだが？ 司教殿の  
信仰する神とは異なるのかね？」

ランズイの言葉に、怒りを通り越してしまったのか無表情になったフォルビン司教は、片手を上げて神殿騎士達に攻撃の合図を送ろうとした。と、その時、ヒュ！と音を立てて何かが飛来し、一人の神殿騎士のヘルメットにカン！と音を立ててぶつかつた。足元を見れば、そこにあるのは小石だった。神殿騎士達は何のダメージもないが、なぜこんなものが？と首を捻る。しかし、そんな疑問も束の間、石は次々と飛来し、神殿騎士達の甲冑に音を立ててぶつかつていった。

何事かと石が飛来して来る方を見てみれば、いつの間にかアンカジの住民達が大勢集まり、神殿騎士達を包圍していた。

彼等は、オアシスから発生した神秘的な光と、慌ただしく駆けていく神殿騎士達を見て、何事かと野次馬根性で追いかけて来た人々だった。

彼等は、神殿騎士が、自分達を献身的に治療してくれた「神の使徒」たる優花や、特效薬である「静因石」を大迷宮に挑んでまで採ってきてくれたハジメ達を取り囲み、それを敬愛する領主が庇っている姿を見て、「教会のやつら乱心でもしたのか！」と憤慨し、敵意もあらわに少しでも力になると投石を始めたのである。

「やめよ！ アンカジの民よ！ 奴らは異端者認定を受けた神敵である！ やつらの討伐は神の意志である！」

フォルビンが、殺気立つ住民達の誤解を解こうと大声で叫ぶ。彼等はまだ、ハジメ達



が異端者認定を受けていることを知らないだけで、司教たる自分が教えてやれば直ぐに静まるだろうと思っいるらしい。

実際、聖教教会司教の言葉に、住民達は困惑をあらわにして顔を見合わせ、投石の手を止めた。

しかし、そこへ今度はランズイの言葉が、威厳と共に放たれる。

「我が愛すべき公国民達よ。聞け！ 彼等は、たった今、我らのオアシスを浄化してくれた！ 我らのオアシスが彼等の尽力で戻ってきたのだ！ そして、汚染された土地も！ 作物も！ 全て浄化してくれるという！ 彼等は、我らのアンカジを取り戻してくれたのだ！ この場で多くは語れん。故に、己の心で判断せよ！ 救国の英雄を、このまま殺させるか、守るか。……私は、守ることにした！」

フォルビン司教は、「そんな言葉で、教会の威光に逆らうわけがない」と嘲笑混じりの笑みをランズイに向けようとして、次の瞬間、その表情を凍てつかせた。

カンッ！ カンッ！ カンッ！ カンッ！ カンッ！ カンッ！ カンッ！ カンッ！ カンッ！ カンッ！

住民達の意思が投石という形をもって示されたからだった。

「なっ、なっ……」

「クハッ……」

再び言葉を詰まらせたフォルビン司教に住民達の言葉が叩きつけられたのを見てハジメは笑みをこぼした。

「ふざけるな！ 俺達の恩人を殺らせるかよ！」

「教会は何もしてくれなかつたじゃない！ なのに、助けてくれた使徒様を害そうなんて正気じゃないわ！」

「何が異端者だ！ お前の方がよほど異端者だろうが！」

「きつと、異端者認定なんて何かの間違いよ！」

「優花様を守れ！」

「領主様に続け！」

「優花様、貴女にこの身を捧げますう！」

「おい、誰かビイズ会長を呼べ！ 『優花様にご奉仕し隊』を出してもらうんだ！」

「おい、何だその隊？ 聞いてねえぞ……おい領主、今すぐ息子を呼べ！」

どうやら、住民達はランズイと優花に深い敬愛の念を持っているらしい。信仰心を押しつけて、目の前のランズイと一行を守ろうと氣勢をあげた。いや、きつと信仰心自体は変わらないのだろう。ただ、自分達の信仰する神が、自分達を救ってくれた『神の使徒』である優花を害すはずがないと信じているようだ。だが、変にブルツクのような集団をいつの間にか創っているビイズとは『オハナシ』をしないとイケないとハジメは

笑みを浮かべながら指を鳴らす。

そうこうしていると、事態を知った住民達が、続々と集まってくる。彼等一人一人の力は当然のごとく神殿騎士には全く及ばないが、際限なく湧き上がる怒りと敵意にフォルビン司教や助祭、神殿騎士達はたじろいだ様に後退っていた。

「司教殿、これがアンカジの意思だ。先程の申し立て……聞いてはもらえませんか？」  
「ぬっ、ぐう……ただで済むとは思わないことだっ」

歯軋りしながら最後にハジメ達を煮え滾った眼で睨みつけると、フォルビン司教は踵を返しその後を、神殿騎士達が慌てて付いていく。フォルビン司教は激情を少しでも発散しようとしているかのように、大きな足音を立てながら教会の方へと消えていった。

「……本当によかったのか？ 今更だが、俺達のこととは放っておいても良かったんだぞ？」

ハジメは自分達の件に変に関わらなくても良いのに申し訳ないと思いつながらランズイに困ったような表情でそう告げる。優花達も、自分達のせいでアンカジが、今度は王国や教会からの危機にさらされるのでは心配顔だった。

だが、そんなハジメ達に、ランズイは何でもないように涼しい表情で答えた。

「そうだろうな。つまり君達は、教会よりも怖い存在ということだ。救国の英雄だからというのもあるがね、半分は、君達を敵に回さないためだ。信じられないような魔法を

いくつも使い、未知の化け物をいとも簡単に屠り、大迷宮すらたった数日で攻略して戻ってくる。教会の威光をそよ風のように受け流し、百人の神殿騎士を歯牙にもかけない。万群を正面から叩き潰し、勇者すら追い詰めた魔物を瞬殺したという報告も入っている……いや、実に恐ろしい。父から領主を継いで結構な年月が経つが、その中でも一、二を争う英断だったと自負しているよ」

「クハッ……そうかよ」

ハジメとしては、ランズイが自分達を教会に引き渡したとしても敵対認定するつもりはなかったのだが、ランズイは万一の可能性も考えて、教会と俺達を天秤にかけ後者とつたのだろう。確かに、国のためとは言え、教会の威光に逆らう行為だ。英断と言っても過言ではない。

ハジメは、覚悟していた教会の異端認定とその結果の衝突が、いきなり自分達以外の人々によって回避されたことに何とも言えない曖昧な笑みを浮かべた。そして、わらわらと自分達の安否を気遣って集まってくるアンカジの人々と、それにオロオロしつつも嬉しそうに笑う優花達を見て笑みをこぼすのだが、ハツとしてハジメはランズイに話し掛ける。

「おい、領主。早く息子を呼べ」

「いや、しかし……ハジメ殿」

「良いから、呼べ」

「りよ、了解した」

謎の隊を創った領主の息子のビイズとのオハナシをしないと、とハジメはそう思いながら不敵な笑みを浮かべた。

~~~~~

教会との騒動から三日。

「二日も過ぎしちまった……」

「だね」

「……ん、楽しいから仕方ない」

「ですう」

「うむ」

農作地帯と作物の汚染を浄化したハジメ達は、輝きを取り戻したオアシスを少し高台にある場所から眺めていた。

視線の先には、キラキラと輝く湖面の周りには、笑顔と活気を取り戻した多くの人々

が集っていた。湖畔の草地に寝そべり、水際にはしゃぐ子供を見守る夫婦、棧橋から釣り糸を垂らす少年達、湖面に浮かべたボートで愛を語り合う恋人達。訪れている人達は様々だが、皆一様に、笑顔で満ち満ちていた。

救った価値はあつたな。と、ハジメは高台から笑みを浮かべながらそう思った。そして今日ハジメ達は、アンカジを発売と決めた。

当初は、汚染場所の再生さえすれば、特産のフルーツでも買ってさつさと出発するつもりだったのだが、ビイズとのオハナシ、領主一家や領主館の人々、そしてアンカジの住民達に何かと引き止められて、結局、余分に二日も過ぎってしまった。

アンカジにおけるハジメ達への歓迎ぶりは凄まじく、放っておけば出発時に見送りパレードまでしそうな勢いだったので、ランズイに頼んで何とか抑えてもらったほどだ。見送りは領主館で終わらせてもらい、ハジメ達は、自分達だけで門近くまで来て、最後にオアシスを眺めているのである。

「なあ、そろそろ目立つからさ、着替えるか、せめて上から何か羽織ってくれよ」

ハジメは、そろそろ門に向かおうと踵を返しつつ、傍にいる優花達にそんなことを言った。

「あれ、飽きちゃった？」

「……………ん？ そうなの？」

「いや、ユエ、優花よ。ご主人様の目はそう言っておらん。単に目立たぬようにという事じゃろう」

「まあ、門を通るのにこの格好はないですからね」

シアがその場でぐるりと華麗にターンを決めながら「この格好」と言ったのは、いわゆるベリーダンスで着るような衣装だった。チョリ・トップスを着てへそ出し、下はハーレムパンツやヤードスカートだ。非常に扇情的で、ちっちゃなおへそが眩しい。この衣装を着て踊られたりしたら目が釘付けになること請け合いにしてるらしい。

アンカジにおけるドレス衣装らしい。領主の奥方からプレゼントされた優花達をこれを着てハジメに披露したとき性癖に刺さってしまった、その勢いでハジメの理性クンが欲望クンに負けてしまい目が一瞬、野獣になってしまった。

ハジメはこの一瞬を後悔した。そのせいで優花達は味をしめてしまい普段から着るようになってしまい、夜でも四人が一斉に誘惑してくる為、ハジメの堅牢な理性の壁が崩されてしまい、昨日もそうだったが今日も余り元気が出なくてヤツれてしまっている。

そして、どうにかして優花達に普段着を着させないとハジメは決意したのだった。

そんな事があつて結局、出発間際の今になつても、全員、エロティックな衣装のままなのである。ハジメの性癖が明らかになつて、その点をガンガンと積極的に突かれなが

ら、どこか嬉しくも疲れた表情をしながらは、どうやって、普通の服を着させようか悩  
みながら門に向かうのだった。

~~~~~

アンカジを出発して二日。

そろそろホルアドに通じる街道に差し掛かる頃、四輪を走らせるハジメ達は、賊らし  
き連中に襲われている隊商と遭遇した。

そこで、ハジメと優花は、意外すぎる人物と一人の白ローブと再会を果たすことにな  
ったのだった……………。



## 五章 王都侵攻く天使の目覚めく

## 六十二話 意外な再会

最初に、その騒動に気がついたのはシアだった。

「あれ？ ハジメさん、あれって……何か襲われてませんか？」

ハジメはシアに言われた通り前方に前を向けると……

「……マジじゃん」

「なっ……私の言う事が嘘だと思ったんですかっ！」

「いや、ちよつとした冗談かと……」

「もうっ！」

シアの言う通り、どうやら何処かの隊商が襲われているようで、相対する二組の集団が激しい攻防を繰り返していた。近づくにつれ、シアのウサミミには人々の怒号と悲鳴が聞こえ、ハジメの「遠見」にもはつきりと事態の詳細が見て取れた。

「相手は賊みたいだな。……小汚ない格好した男が約四十人……対して隊商の護衛は十五人つてところか。あの戦力差で拮抗しているのがすげえな」

「……ん、あの結界は中々」

「ふむ、さながら城壁の役割じやな。あれを崩さんと本丸の隊商に接近できん。結界越しに魔法を撃たれては、賊もたまらんじやろう」

「でも、一向に引く気配がありませんよ?」

「そりゃあ、あんな隊商全体を覆うような結界、異世界組でもなけりやあ、そう長くは持たないだろう。多少時間は掛かるが、待つていれば勝手に勝手に解ける」

見るからして、最初に奇襲でもされたらしく、重傷を負って蹲る者が数人、既に賊に殺られたようで血の海に沈んでいる者も数人いる。あの結界により何とか持ち堪えているようだが、ただでさえ人数差があるのに、護衛側は更に数を減らしているから結界が解ければ鬨り殺しにされるだろう。冒険者らしき女性などは、既に裸に剥かれて結界内にいる仲間の冒険者に見せつけるようにして晒し者にされていた。

「あつ、結界がっ」

シアが叫んだのは、ハジメの推測した通り、会話が途切れた直後、結界は効力を失い溶けるように虚空へと消えていったからだだった。待つてましたと言わんばかりに、雄叫びを上げた賊達が隊商へとなだれ込んだ。賊達の頭の中は既に戦利品で一杯なのか一様に下卑た笑みを浮かべている。護衛隊が必死に応戦するが、多勢に無勢だ。一人また一人と傷つき倒れていくのが見えた。と、その時、何か酷く驚いたような表情で固まっ

ていた優花が、焦燥を滲ませた声音でに救援を求めた。

「ハジメ、お願い！ 彼等を助けて！ もしかしたら、あそこに……」

「わかってる！」

ハジメは、優花の言葉を最後まで聞くこともなく、返答して四輪を加速させた。話を聞いて助ける助けがないの判断をしているうちに隊商が全滅することは明白だったので、優花が何を言いたいのかは後回しにした。

四輪の車輪がギヤリギヤリギヤリと地面を噛み、ロケット噴射でもしたかのように凄まじい勢いで加速する。

「ハジメ……ありがとう」

「ああ……俺も、あの光景は見たくな……ッ?!」

「「「「！」」」」

ハジメが言葉を言い切る時だった。賊達の集団の所から強大な魔力を感じ取ったのだ。ハジメは息を呑み、優花達もハジメと同じように強大な魔力を感じ一斉に視線を向けていた。

そこには……

「……………」

ウルルの町で会った白ローブの男がいた。

~~~~~

それは突然だった。結界が崩れていき、賊が一斉に攻めかける時だった。

「——『聖絶』」

崩れかけてる結界の上から更に結界が貼り直され賊達の侵入を妨げたのだ。

「……まさか、リ——君が、こんな場所いるなんて」

白ローブは一人の護衛隊の一人を見て呟いたがその声に、護衛隊や冒険者、賊達も視線を白ローブへと向けて驚愕した。

「「「「「「「……っ！」「」「」「」」」」」」

それもそうだ。いつの間にか得体の知れない白ローブが賊達の前に、護衛隊を守るかのように現れたのだから。その場にいた全員が驚愕して言葉を失ってしまう。

「おい、てめえ！　いきなり現れて何者だ?！」

賊の一人……格好からしてボスと思われる男は白ローブに向けて剣を突き出し問いかけた。

「名なんてどうでもいい……賊共、チャンスをあげましょう。今から逃げ帰るか？　私に殲滅されるか？」



「なっ!」

「もう、遅いですよ」

賊が反応する前に白ローブはもう次の行動に移しており、白色のアーティファクト級と思える槍を手にしていた。

「はっ?! てめえ、そんな槍を何処から!」

「さあ?」

賊の問いに白ローブは軽く煽りを入れながら返し、槍を大きく振り回し、周りにいた賊の頭と胴体を軽々しく離れさせていきながら吹き飛ばした。

「天翔閃・円弧」

白ローブは槍を円を描くように振り回した後、ほぼ無詠唱で光属性の魔法の「天翔閃」を発動した。だがそれは、普通の「天翔閃」ではなく、その形は円形であり、その光の円は次第に形が大きくなっていく度に賊の数十人の身体の上と下を半分に切り離していく。

「ヒッ、ヒイヒイ!」

たった、十秒も経たないぐらいの時間で賊の数は半数をきっていた。戦慄、絶望、困惑——そんな表情を浮かべた賊達が、顔に似合わない声を出しながら後ずさっていく。

そして……

やっと、自分達と戦う相手が化け物であると理解し、自分達の選択が間違っていたことに後悔した。

「逃げろおおお！」

賊のボスが逃げながら叫びだし、それに反応した賊達も逃げようと踵を返そうとした。賊達の判断は良かった無闇に戦っても自分達はあの白ローブには到底敵わないと。

しかし……………

「—————『選定・震天』」

その判断は余りにも遅すぎた。

ドンツ！と、大地を鳴らすほどの大きな炸裂音がした直後、周りには賊達だけが体が爆散している光景だけが残されていたのだった。

「……………これを使う事はなかったですね。でも……………まあ、実力は見せる事は出来たかな？」

白ローブは、そう呟きながらこちらに向かっている四輪に乗っているハジメ達に視線を向けた。そして、視線を転じて近くにいる怪我人に目を向ける。

「づつ……………」

「あつ、その人達も軽傷の人からコチラに私は微力ながら回復系の魔法も扱えるので」  
そして、白ローブの男はハジメ達が到着するまで商隊のケガ人の治療を始めたのだった。

「……なんだよアイツ」

ハジメは驚愕した。あの白ローブの使っていた魔法は神代魔法の一つ「空間魔法」だと、そして、理解させられる。その扱いも、遥かにユエなどよりも超えていることを。「やはり、あの白ローブは攻略者。それにあの槍……相当な得物だ」

ハジメは白ローブの戦闘姿を見て唾然としていた。それは隣と後ろの席にいた優花達も同じで目を見開いていた。

「ハジメ……もしかしてあの白ローブの人が清水を救ったって人？」

「ああ……あの時はどうやって清水を救えたか理解は出来なかったが、今ならアイツがメルジーネとグリューエンの攻略者だったからと理解出来る」

優花はあの白ローブを初めて見るので俺達の話で出ていた白ローブの奴と推測して問いかけ、ハジメはそれに答えていく。すると、ユエが口を開く。

「……でも、あの「震天」私達や護衛隊の所にはダメージがなかった」

「……確か「震天」って広域範囲系の魔法ですよね？」

「ああ、「震天」は広域範囲系の魔法だ。だから多少俺達にも影響があった筈だ。だが……」

ユエは白ローブが最後に逃げる賊達に放った「震天」が自分達が知るものと違うことに疑問を呈していた。それもハジメ達も同じ事を抱いていた。



——空間魔法 “震天”  
“しんてん”

空間を無理やり圧縮して、それを解放することで凄まじい衝撃を発生させ空間爆発を可能にする魔法。

すると、ユエの次に魔法を理解しているティオがある推測を述べる。

「もしかしてじゃが……あの者が使った“震天”は何かを複合した別の“震天”かもしれない」

ティオの推測にハジメも賛同する。それは、ハジメも以前にも感じていたことだった。

「ああ……俺もティオと同じ考えだ。あの白ローブはもう一つ神代魔法を持つてる可能性があるな」

あの時もそうだったとハジメは思い出す。神殿騎士達を眠らせた魔法に、自分達の体……いや、心に干渉された気がすると。

ハジメはそんな推測を立てながら優花達と白ローブについて話合っていると、白ローブは空間と再生の他に神代魔法を有してる可能性が十分であると予測して四輪を急行させたのだった。

衛隊の場所に着くと軽傷だった冒険者の治療は済んでおり、白ローブは重症者の手当てに回っていた。それを見た優花も急いで加勢しようと四輪から飛び出していく。

「あの！ 手伝いますっ」

「それは、ありがたい申し出だが、私は回復魔法は適性はないが普通の治癒師とは同列のレベル以上の回復魔法を扱えるがそれでも彼はもう……」

「普通の治癒師だったらですよ！ ならっ……」

そう言つて優花は白ローブが諦めていた重症者に手をかざし詠唱を始めた。

そして……

「——『絶象』・『回復力上昇、回復速度上昇付与』！」

優花の詠唱を終えるとアンカジの時と同じように淡い光が現れ、重症者を包み込んでいき、治せないであろうケガが再生していくように治されていく。すると、荒い微かな息から次第に落ち着いていった。

「これは、再生魔法。それに付与魔法も扱える……もしかや『神天治癒師』……そして、再生は私より適性は上か……ハハ」

「助けましたよ。この人」

「ああ、私が侮つてました。実に素晴らしいです」

優花のニヤツとした笑みに対して、白ローブは優花を称賛しながら拍手をした。

「おい、てめえ本当にな——『優花！』——この声つて」

四輪をしまつて、ハジメは白ローブを問い詰める為に進もうとした瞬間、小柄なフー

ドの人物の声にハジメには覚えあった。

フードの人物はそのままの勢いで優花に飛び付き、可憐な声で優花の名を呼びながらギョツと抱きついた。優花は、まさかの推測が当たっていたと知り驚愕を隠せない様子で、その人物の名を呟く。

「リリイ！ やつぱり、あの結界、見覚えが有ると思ったの。まさか、こんなところにいるとは思わなかったから、半信半疑だったのだけど……」

優花がリリイと呼んだフードの相手、それは、

——ハイリヒ王国女王リリアーナ・S・B・ハイリヒ

その人だった。

リリアーナは、心底ホツとした様子で、ずれたフードの奥から煌く金髪碧眼とその美貌を覗かせた。そして、感じ入るように細めた目で優花を見つめながら呟く。

「私も、こんなところで優花に会えるとは思いませんでした。……僥倖です。私の運もまだまだ尽きてはいないようですし、それに……」

「リリイ？」

リリアーナは優花と抱き合った後、そのままハジメに向かって走りだす。

そして、

「ハジメさんっ！ 貴方が生きてて……グスツ、嬉しくて……良かったですー！」

涙を流しながらそのままギュッとハジメに抱きついた。ハジメも抱き着くりリアーナを支えるように手を背中にまわす。

「あー、リリイ……久しぶりだな元気だったか？心配かけちゃまったなお前にも」

「グスツ……ハジメさん、よかった」

リリアーナは泣き止まずハジメに抱きついてるので、ただハジメは泣き止むまでリリアーナの頭を撫でるのだった。

―数分後―

「あつあの……今さつきまではすみません……王女として恥ずかしいばかりです……」

「良いよ、久しぶりの再会だしな。優花もそれぐらい泣かれちゃったし……」

「ちよつ！ ハジメ！」

リリアーナは泣き止むと顔を真っ赤にして、いそいそとハジメから離れていき、泣き止むまで抱きついてた事を顔を赤くしながら謝ったが、ハジメは冗談交じりに気にしないと言ったが今度は優花が顔が真っ赤になっていた。

そんな、和やかな雰囲気ハジメ達のもとへ、ユエ達と、見覚えのある人物が寄ってくる。

「お久しぶりですな、息災……どころか随分とご活躍のようで」

「ああ、久しいな……モットー」

「ええ、覚えていて下さって嬉しい限りです。ユンケル商会のモットーです。危ないところを助けて頂くのは、これで二度目ですな。貴方とは何かと縁がある」

「クハツ……そうだな」

握手を求めながらにこやかに笑う男は、かつて、ブルツクの町からフューレンまでの護衛を務めた隊商のリーダー、ユンケル商会のモットー・ユンケルだった。

彼の商魂が暴走した事件は、ハジメもよく覚えている。この世界の商人の性というものを、ハジメはモットーで学ばせて貰ったようなモノだ。実際、商魂はいささかの衰えもないようで、握手しながらさりげなく、俺の指にはまった『宝物庫』の指輪を触っている。その全く笑っていない眼が、「そろそろ売りませんか?」と言っていると感じるのは、きっと気のせいではないだろう。

背後で、シアがモットーとの関係を説明し、「へえ、そんな出会いが……」とリリアーナと優花がハジメを見ていたそんな二人を尻目に、ハジメはモットーの話を聞いた。

それによると、彼等は、ホルアド経由でアンカジ公国に向かうつもりだったようで、アンカジの窮状は既に商人間にも知れ渡っており、今が稼ぎ時だと、こぞって商人が集まっているらしい。モットーも既に一度商売を終えており、王都で仕入れをして今回が二度目らしい。ホクホク顔を見れば、かなりの儲けを出せたようだ。

ハジメ達は、ホルアドを経由してフューレンに行き、ミュウ送還の報告をイルワにし

てから、「ハルツィナ樹海」に向かう予定だったので、その事をモットーに話すと、彼はホルアドまでの護衛を頼み込んできた。

しかし、それに待ったを掛けた者がいた。リリアーナだ。

「申し訳ありません。商人様。彼等の時間は、私が頂きたいのです。ホルアドまでの同乗を許して頂いたにもかかわらず身勝手とは分かっているのですが……」

「おや、もうホルアドまで行かなくても宜しいので？」

「はい、ここままで結構です。もちろん、ホルアドまでの料金を支払わせて頂きます」

どうやらリリアーナは、モットーの隊商に便乗してホルアドまで行く予定だったがハジメ達会えたことでその必要は無くなったようだ。その時点で、リリアーナの目的は自分達だと……ハジメはキナ臭さを感じた。

ハジメは王都で何かあったのかと考えていると、モットーが話しだした。

「そうですねか……いえ、お役に立てたなら何より。お金は結構ですよ」

「えっ？ いえ、そういうわけには……」

お金を受け取ることを固辞するモットーに、リリアーナは困惑する。隊商では、寝床や料理まで全面的に世話になっていたので。後払いでいくら請求されるのだろうと、少し不安に思っていたくらいなので、モットーの言葉は完全に予想外だった。

そんなリリアーナに対し、モットーは困ったような笑みを向けた。

「二度と、こういう事をなさるとは思いませんが……一応、忠告を。普通、乗合馬車にしろ、同乗にしろ料金は先払いです。それを出発前に請求されないといいのは、相手は何か良からぬ事を企んでいるか、または、お金を受け取れない相手という事です。今回は、後者ですな」

「それは、まさか……」

「どのような事情かは存じませんが、貴女様ともあろうお方が、お一人で忍ばなければならぬ程の重大事なのでしょう。そんな危急の時に、役の一つにも立てないなら、今後は商人どころか、胸を張ってこの国の人間を名乗れますまい」

モットーの口振りからしてリリアーナの素性は分かっていたらしい。流石は商人かとハジメは内心で称賛した。

「ならば尚更、感謝の印にお受け取り下さい。貴方方のおかげで、私は、王都を出ることが出来たのです」

「ふむ。……突然ですが、商人にとって、もつとも仕入れ難く、同時に喉から手が出るほど欲しいものが何かご存知ですか？」

「え？……いいえ、わかりません」

「それはですな、“信頼”です」

「信頼？」

「ええ、商売は信頼が無くては始まりませんし、続きません。そして、儲かりません。逆にそれさえあれば、大抵の状況は何とかなるものです。さてさて、果たして貴女様にとって、我がユンケル商会は信頼に値するものでしたかな？ もしそうだというのなら、既に、これ以上ない報酬を受け取っていることになりませんが……」

ハジメは上手い言い方だと内心で苦笑いした。これでは無理に金銭を渡せば、貴方を信頼していないというのと同義だ。お礼をしたい気持ちと反してしまうってことか

リリアーナも言葉の意味を察したようで、諦めたように、その場でフードを取ると、真つ直ぐモットーに向き合った。

「貴方は真に信頼に値する商会です。ハイリヒ王国王女リリアーナは、貴方方の厚意と献身を決して忘れません。ありがとうございます……」

「勿体無いお言葉です」

リリアーナに王女としての言葉を賜ったモットーは、部下共々、その場に傅き深々と頭を垂れた

その後、リリアーナとハジメ達をその場に残し、モットー達は予定通りホルアドへと続く街道を進んでいった。去り際に、ハジメが異端者認定を受けている事を知っている口振りで、何やら王都の雰囲気が悪いと忠告までしてくれたモットーに、ハジメもアンカジ公国が完全に回復したという情報を提供しておいた。



それだけで、ハジメが異端者認定を受けた理由やら何やらを色々推測したようで、その上で「今後も縁があれば是非ご最眞に」と言つてのけるモットーは本当に生粋の商人だった。

そして、モットー達が去つたあと……

「あん時は、まだ会う時じゃないと言つて去りやがつたが……今回は違うんだな？」

そう言ながらハジメはホルスターからドンナーを抜き取り、銃口を白ローブに向けながら目を細める。

「はい。南雲ハジメ……いや、ハジメ殿、私は今回は貴方達と会う為にこちらから来ました」

白ローブの目的もハジメ達らしく、ハジメに銃口を向けられているのに、淡々と話す白ローブにハジメは一つ質問をする。

「一つ良いか？」

「はい、何でもどうぞ」

「てめえは何者だ？」

「ああ、そうですね。自己紹介がまだでした。私の名は——「ちよつと待つてください！……」

白ローブが自己紹介をする前にリリアーナが遮つた。その表情は焦りそのものだった。

た。

「おい、リリイどうした？」

「そうよ？どうしたのリリイ？」

ドンナーをホルスターに仕舞うとハジメは優花と共にリリアーナに問いかけるも、彼女は気にせず、いやそれよりも重要なことなのか白ローブの方へと視線を向ける。その雰囲気は白ローブの正体を知っているかのようだ。

「いえ、あの間違つてたらずみません。貴方は……アレス兄様ですよね？」

「は？」

「リリイ……兄様つて？」

「えっと……」

「ただの仲の良かった親戚ですよ」

ハジメ達はいきなりのリリアーナの言った情報に整理が追いつかずリリイに話しかけるとリリアーナは少し言うのを躊躇っていると、白ローブが口を開いた。

そして……

「ハハ……やっぱリリイにはわかってしまいましたか」

白ローブは笑いながらフードを取り外した。白ローブを取るとそこには、サラサラとした金髪、優しい目付きで瞳の色はリリイに似ており、ホントに血縁関係を持っている

と思える程だった。

「リリイが言つてしまいましたでしたが改めまして、私の名は『アレス・バーン』自分から言うのも何ですが……自分は元ハイリヒ王国最強の神官と呼ばれてました。まあ、今は解放者の掲げていた事の実現を目的とする者です。どうかお見知り置きを」

そう言つて白ローブ改め、アレス・バーンは笑みを浮かべながら自己紹介をし終えた。そんなアレスにハジメはまだ疑惑の視線を向けながら一番聞きたい事を聞いた。

「アレス、お前が俺達の前に現れた理由を話せ」

「それは、会う時が来た……『ド・パアン!』……」

「ちゃんとした理由を話せ。そうして貰わないと俺はお前を信用出来ない」

ハジメはアレスが詳しく話さない為、ドンナーで威嚇射撃をした。すると、アレスは「しょうがない」と呟きながらハジメを真剣な眼差しで見る。

「ハジメ殿の意見は分かりました、話しましょう。ホントは、リリイには聞いて欲しくはないのですが、いずれ知る事になるでしょうし……私が動いた目的は簡単です。神共がとうとう行動を始めました」

「[[[[[・]]]]」

「?」

アレスの発言でハジメ達は目を見開いて息を呑み、リリイは意味が分かってないよう

で首をコテン、と傾げていたのだった……。

## 六十三話

## アレス・バーン

ハジメ達は樹海に向かってる最中にハイリヒ王国の王女のリリイとウルで会った謎の白ローブの男、改めアレス・バーンと再会した。そして、アレスが話す事はハジメ達にとって驚愕するモノだった。

「……私が動いた目的は簡単です。神共がどうとう行動を始めました」

「「「「！」」」」

ハジメはアレスの発言に目を見開き驚愕したが、詳しく知る必要があるため、すぐさま落ち着きを取り戻してからアレスに問いかけた。

「神共が動き出したってどういう事だ？」

「言った通りのことです。神共の目的……いや神共にとつては戯れですね。それが佳境に入ったんです。……そろそろ人間族と魔族との大きな戦争が起きます」

「あの、どうしてそう言い切れるんですか？」

アレスはハジメの問いかけに詳しく説明したがハジメはどうしてそう言いきれるのが不明で聞き出そうとしたらハジメと同じ事を思っていた優花がアレスに質問した。

優花の質問でこの場の全員の視線がアレスに向く。アレスは真剣な表情をしながら話した。

「使徒が動きだしました」

「……使徒？」

アレスの発言にユエが首を傾げながらアレスの言っていた単語を言いながら、視線をハジメと優花に向く。

「いえ、ハジメ殿達も使徒と言われてますが彼等は本物の使徒ではありません。正確には『ネームド』……本物の神の使徒と言うべきでしょう」

「ネームド？」

「はい、ハジメ殿と皆さん方は、メルジーネ海底遺跡の幻覚の試練の時、見た筈です帆船にいたロープの被った銀髪の女を」

ハジメは狂乱した人間族の王の傍にいたロープを被った奴の姿を思いだし、声をあげた。

「……ッ！ アレスっ。まさかあの銀髪が神の使徒って奴なのか？」

「はい、ハジメ殿。奴等」

ハジメの推測が当たったようで、アレスはハジメの回答に頷きながら答えた。

「ハジメ殿が答えたように神の使徒は調整や特にネームドはイレギュラーの排除に駆り

出されます」

「調整ですか？」

「はい、彼女達は固有魔法で『魅了』<sup>チャーム</sup>を持っていきます、その力で戦争・意識改革を促して  
いました」

ハジメはアレスの話で使徒の役割である意識改革である事を思い出した。

「なあ……もしかしてだが、樹海の掟で魔力持ちの亜人が迫害されるようになっていた。  
そんな掟をつくったのは神の使徒の仕業か？」

「――」

ハジメの言葉にユエとシアをハツと目を見開いた。そうハジメは、以前から樹海の掟  
は神が関わっているだろうと踏んでいたがアレスの発言で確信したのだ。

「そうですね……私は、まだ樹海には入った事はないですが、確か、樹海の初代女王で解  
放者の一人だったリユータイリス・ハルツィナは魔力持ちの亜人ですからね……そんな  
掟があったなら使徒の仕業と言えますね。まあ、理由は簡単でしょう。亜人は元々人間  
と魔人より身体能力が高いですし、其処に魔力すらも持っていたら能力の差が凄いです  
からね調整の為に رفتたんでしよう……」

「チツ……やっぱりか」

「じゃあ……私達はそんな理由でっ」

「「シアっ」」

アレスの推測にハジメは悪態をつき、シアはその場で両膝をつきながら倒れ込むように座り込んだ。優花達がシアの元に駆け出した。余程シヨックだったのだろう。ただの「調整」で魔力持ちの巫人達は迫害されるようになったから。ハジメは怒りで自分の右の拳を握りしめた強くし過ぎたせいか血が流れたている。しかし、ハジメはある疑問を抱いた。アレスは攻略者でこの世界の真実を知ってるのは分かる。だが、ハジメ達より遥かに神共の情報を持っていた「グリユーエン」や「メルジーネ」にはそんな情報はなかった筈だ。

ハジメはアレスに問い掛けた。

「アレス、お前は何でそんなに情報を持つてる？ お前は幾つの神代魔法を持つてるんだ？」

「……………」

ハジメの問いにアレスは黙る。優花達もハジメと同じような事を思ったんだろう。シアに寄り添いながら視線はアレスに向いていた。

「……………で、どうなんだ？」

「そうですね……………私は三つの神代魔法を持っています」

「三つ？」



「はい、私が持つ二つはハジメ殿達が所有している空間と再生魔法です」

「もう一つは？」

「……神山」

「は？」

「神山にある大迷宮で得た魔法。私の祖先であるラウス・バーンの魔法……魂魄魔法です」

「[[[「！」]]」

「？」

「なっ?!」

アレスの言葉にハジメ達は驚愕し、リリイは話の内容についていけないのか首を傾げている。

「なっ、祖先つてアレスお前……解放者の子孫かよ。それに魂魄魔法つて……」

「はい。私達、バーン家は王家とは血縁関係で王国をつくった初代王はシャムル・バーン……ラウス・バーンの息子らしいです。魂魄魔法は簡単に言えば生きてるモノ魂……通常は干渉が出来ないモノに干渉する事が出来る魔法です」

「……じゃあ今さっきの『震天』とウルの時に醜男達にやった魔法つて」

シアに寄り添っていた魔法の天才のユエがアレスの話を聞き自分の見た二つの魔法

の原理を知る為、アレスに質問した。ハジメはユエの辛辣な物言いに呆れた表情をしながら彼女を見つめ、それから俺も原理は知りたかった為、アレスに視点をずらした。

「はい、ユエ殿の考えてる事です。今さっきの『震天』も私が選んだ人達の魂魄に干渉して『震天』の影響を受けなくしていました。それに、デイビッド達にしたのは

強制的に魂魄を落ち着かせる『鎮魂』と言う魔法です」

「……しかし、魂魄を干渉出来るとな。もしかしてじゃが、死んだ者にも干渉して復活させる事は出来るかの？」

「……！」

アレスの説明に、驚くハジメ達だったがユエの次に魔法に詳しいテイオがとんでもない事を言い出し、ハジメも優花達も気になったようであレスに視線を向けた。

「……そうですね、出来はしますね」

「ならっ！護衛隊だった人達をっ！」

アレスの答えに優花は反応し、護衛隊の中で死んだ人達を生き返らせる事をしなかつたと怒りの眼差しを向けながら声をあげた。

「……すみません、優花殿。魂魄魔法は人を生き返らせる事は出来ません。ですが、時間が経っている魂や既に壊れ切ってる魂だと復活させる事は出来ません……」

「そ、そんな……」

「本当に申し訳ありません。私がもう少し早く駆けつけていれば……」

「いえっ……私も勝手に怒鳴っちゃって……」

「そうですよっ！ 兄様は悪くないです」

「……二人共、ありがとうございます」

アレスは顔を俯きながら自分が少しでも早く駆けつけていればと後悔しながら頭を下げたが優花も申し訳なくなり、自分の非を謝り、リリイもアレスを心配して励ましていた。それからは、ハジメとアレスはそれぞれの神代魔法の情報交換をしていた。

そして……

「……………頭がついていかねえんだけど」

ハジメはアレスから出る情報量に頭を痛め頭がパンクしそうだった。

「ハハッ……最初はそうなりますよ。私もこの手記を見つけた時はそうでしたから……」

アレスは、ハジメの様子に懐かしげに苦笑いをしていた。

「手記って……」

「ああ、言ってなかったですね……私が十五の時に家の隠し部屋にこの手記と……この槍がありました」

そう言いながらアレスは片手に手記を持ち、もう片方から槍を取り出した。

「なあ、アレスその槍は何だ？」

運転してる時も見だが、それって、オスカー・オルク

スが創ったアーティファクトだろ？」

「やはり、オルクス大迷宮を攻略した錬成師であるハジメ殿は分かりますか……はい、これはオスカー・オルクスの創ったアーティファクトで最高傑作と言われている一つです」

「……！」

ハジメはアレスの最高傑作という言葉聞いて驚きのあまり目を見開いた。

「名は聖槍 “ロンギヌス” です」

「聖槍 “ロンギヌス” ……どういう能力だ」

「まあ、気になりますよね。そうですね、この槍は魔力を喰らいますが、それも勝手に。だから変に使うと魔力がなくなってしまういぶつ倒れてしまうほどのじゃや馬です。しかし、性能は素晴らしいですよ。名前だつて “ロンギヌス” は私の祖先がつけたらしいですがホントの名は “必殺槍・暴食魔力ランス君” らしいです……手記に書いてました」

「……！」

ハジメはアレスの説明でやはりオスカー・オルクスの技術は素晴らしいと感嘆したがネーミングセンスだけはやっぱり酷いと思いつつ苦笑いをした。

「……大体の事は分かった。でも、アレス一つ良いか？」

「はい、何でしょう？」

「何で『元』王国最強なんだ？　後、お前の名前なんて王国にいた時は聞かなかったぞ？」

「私も確か……帝国のガハルド皇帝が口にしたのといシユタルさんが知ってそうだったけど、アレスって名は、町では余り聞いたことないわ」

「……………それは「私が説明します」……………リリイ」

アレスが説明しようとした時、リリアーナが割り込んだ。そして、アレスへと向き直る。

「兄様、私も五年前の件の真相を知りたいんです。あの事件でランデルとメルド。そして、ヘリーナも悲しんでいたんですよ」

「リリイ……………」

リリアーナの言葉から、アレスの件はリリアーナも知ってるようで彼女が説明すると言った。暗い雰囲気だったが埒があかない為、ハジメはリリアーナに声をかけた。

「それで、リリイ。アレスは何をしたんだ？」

「あつ、すみませんハジメさん。では、話します。」

五年前、アレス兄様……………いえ、アレス・バーンは南の魔人族領から少し離れた場所にあった魔人族の村の殲滅作戦の際、教会側に反抗、その後、教会側の軍を全滅させて魔人族の村を守った事で教会から異端者とされ、人問族の敵として王国から追放されました」

「そうか……そんな時から知ってたんだな」

「はい、ハジメ殿の考えてる通りです」

ハジメがアレスに確認を取って、頷いていると、リリアーナは目元に涙を溜めながら声をあげた。

「なんで兄様は私やメルドと幼い頃から一緒にいたヘリーナさえも説明しなかったんですかっ！ あの時のヘリーナの姿は見てもいられませんでしたっ！」

「……説明しても、理解出来ないと思いました」

「でもっ……」リリイ、落ち着け「ハジメさん……」

ハジメは泣き叫ぶリリイを落ち着かせる為、頭に手を置いた。

「リリイ……アレスにも事情があんだよ」

「ハジメさん……あのっ、すみません。兄様……私も取り乱し過ぎました」

「いや、大丈夫だよ。リリイ、君の意見はご最もだからね」

リリイは落ち着きを取り戻し、アレスに謝った。アレスも五年前の件は自分に非があると分かっている為、リリアーナの怒りも理解している。その後、アレスの話は一旦終わりにし、ハジメはもう一人この場に居るのは珍しい人物の話聞く事にした。

「しかし、アレスの話は分かったが……リリイ何で王女のお前が此処に？」

「そうよ。リリイ何でこんな場所に」

「それは……」

「まあ、王国を出た理由は大概、俺達を探す為だろ」

「えっ、何でわかつたんですか?！」

「まあ……リリイが向かってた場所はアンカジと聞いたし、俺達を見つけた時点でアンカジに向かうのをやめるなんて俺達に用があるのは明確だろ?」

「うっ……おっしやる通りですね」

ハジメはそんな目が泳いでるリリアーナに苦笑いしながら真剣な表情になり問いかけた。

「リリイ、もしかして王国に何かあったか?」

「………！ 実は………」

焦燥感と緊張感が入り混じったリリアーナの表情が、ハジメの感じている嫌な予感に拍車をかける。そして、遂に語りだしたリリアーナの第一声は……

「愛子さんが……攫われました」

ハジメの予感を上回る最低のものだった。

リリアーナの話を要約するところだった。

最近、王宮内の空気が何処かおかしく、リリアーナはずっと違和感を覚えていたらしい。

父親であるエリヒド国王は、今まで以上に聖教教会に傾倒し、時折、熱に浮かされたように「エヒト様」を崇め、それに感化されたのか宰相や他の重鎮達も巻き込まれるように信仰心を強めていった。

それだけなら、各地で暗躍している魔族のことが相次いで報告されている事から、聖教教会との連携を強化する上での副作用のようなものだと、リリアーナは、半ば自分に言い聞かせていたらしいが……

違和感はそれだけにとどまらなかつたらしい。妙に覇気がない、もつと言えば生氣のない騎士や兵士達が増えていったらしく、顔なじみの騎士に具合でも悪いのかと尋ねても、受け答えはきちんとするものの、どこか機械的というか、以前のような快活さが感じられず、まるで病気でも患っているかのようだったらしい。

そのことを、騎士の中でもっとも信頼を寄せるメルドに相談しようにも、少し前から姿が見えず、時折、光輝達の訓練に顔を見せては忙しそうにして直ぐに何処かへ行ってしまう。結局、リリアーナは一度もメルドを捕まえることが出来なかつた。

そうこうしている内に、愛子が王都に帰還し、ウルの中の町の詳細が報告された。その席にはリリイも同席したらしい。そして、普段からは考えられない強行採決がなされた。それが、俺の異端者認定だ。ウルの中の町や勇者一行を救った功績も、「豊穡の女神」として大変な知名度と人気を誇る愛子の異議・意見も、全てを無視して決定されてし



まったらしく有り得ない決議に、当然、リリアーナは父であるエリヒドに猛抗議をしたが、何を言つても俺を神敵とする考えを変えざる気はないようだった。まるで、強迫観念に囚われているかのように頑なでむしろ、抗議するリリイに対して、信仰心が足りない等と言ひ始め、次第に、娘ではなく敵を見るような目で見始めたらしい。

恐ろしくなつたリリアーナは、咄嗟に理解した振りをして逃げ出し、そして、王宮の異変について相談するべく、悄然と出て行つた愛子を追いかけ自らの懸念を伝えた。すると愛子から、俺が奈落の底で知つたクソ神共の事や旅の目的を夕食時に生徒達に話すので、リリアーナも同席して欲しいと頼まれたのだそうだ。

愛子の部屋を辞したりリアーナは、夕刻になり愛子達が食事をとる部屋に向かい、その途中、廊下の曲がり角の向こうから愛子と何者かが言い争うのを耳にした。何事かと壁から覗き見れば、愛子が銀髪の教会修道服を着た女に気絶させられ担がれているところだった。

リリアーナは、その銀髪の女に底知れぬ恐怖を感じ、咄嗟にすぐ近くの客室に入り込むと、王族のみが知る隠し通路に入り込み息を潜めた。銀髪の女が探しに来たが、結局、隠し通路自体に気配隠蔽のアーティファクトが使用されていたこともあり気がつかなかったようで、リリアーナを見つけることなく去っていった。リリアーナは、銀髪の女が異変の黒幕か、少なくとも黒幕と繋がっていると考え、そのことを誰かに伝えなければ

ばと立ち上がった。

ただ、愛子を待ち伏せていた事からすれば、生徒達は見張られていると考えるのが妥当であるし、頼りのメルドは行方知れずだ。悩んだ末、リリアーナは、今、唯一王都にいない頼りになる友人を思い出した。そう、優花だ。そして、優花の傍にはリリアーナ自身、特別な信頼をしてる俺がいる。もはや、頼るべきは二人しかいないと、リリアーナは隠し通路から王都に出て、一路、アンカジ公国を目指したのである。

アンカジであれば、王都の異変が届かないゼンゲン公の助力を得られるかもしれないし、タイミング的に、俺達と会うことが出来る可能性が高いと踏んだからだ。

「あととは知つての通り、ユンケル商会の隊商をお願いして便乗させてもらいました。まさか、最初から気づかれていたとは思いませんでしたし、その途中で賊の襲撃に遭い、それをアレス兄様に助けられるとは思いませんでした。……少し前までなら

「神のご加護だ」と思うところです。……しかし……私は……今は……教会が怖い……一体、何が起きているのでしょうか。……あの銀髪の修道女は……お父様達は……」

自分の体を抱きしめて恐怖に震えるリリイは、才媛と言われる王女というより、ただの女の子にしか見えなかった。だが、無理もないことだ。自分の親しい人達が、知らぬうちに変貌し、奪われていくのだからな。優花は、リリアーナの心に巣食った恐怖を少しでも和らげようと彼女をギュッと抱きしめた。

「チツ……アレス、もしかしてだが……」

「はい。ハジメ殿がご想像している通りです……使徒の仕業です」

「……………クス神共め」

ハジメはリリアーナの様子を見ながら、アレスの確認を取り内心で舌打ちしながら悪態をつく。リリイの語った状況は、まるで【メルジーネ海底遺跡】で散々見せられた“末期状態”によく似ていたからだ。神に魅入られた者の続出。非常に危うい状況……いや、手遅れかもしれない。

それに先生が攫われた理由は十中八九、先生が神の真実とハジメの旅の目的を話そうとした事が原因だ。おそらく、駒としての天乃河達に、不審の楔を打ち込まれる事を不都合だと判断したんだろう。

ならば、先生が攫われたのは、ハジメの責任だ。攫ったという事は殺す気はないと思うが、裏で人々をマリオネットのごとく操り享楽に耽る者達の手中にある時点で、何をされるかわかったものではない。

だからこそ……

「取り敢えず、先生を助けに行かねえとな」

ハジメは救う事を選ぶ。

ハジメの言葉に、リリアーナがパッと顔を上げる。その表情には、共に王都へ来てく

れるという事への安堵の気持ちがあられていた。

「宜しいのですか?」

リリアーナの確認に、ハジメは肩を竦めた。

「先生のためだ。あの人が攫われたのは俺が原因でもあるし、放つて置くわけにはいかないそれに、リリイのそんな顔も見たくねえし……王国にいる浩介達が心配だ」

「ハジメさん……」

リリアーナは、ハジメの言葉に頬を染め、俯いた。

「リリイ?」

「あついえっ……何でもありませんよ。ハジメさん!」

「そうか……」

ハジメは俯いてるリリアーナが気になり顔を見ようとしたりリリイは慌てだした。すると、優花達の方から視線を感じたがスルーしてハジメは状況の整理をしていく。

先生を攫つたのは教会の修道服を着た女。そして、異常な程教会に傾倒する国王達のことを聞けば、十中八九、今回の異変には教会と神共が絡んでいると分かる。つまり、先生を助けるということは、神の何かと相対しなければならぬ。優花と笑みを交わし合うリリアーナを横目に、ハジメは口元を僅かに歪める。

ハジメには、先生救出以外にも、もう一つ目的があった。それはアレスが習得してる

「神山」にある神代魔法、魂魄魔法だ。ミレディの情報であるとは知ってたが、聖教教会の総本山でもある「神山」の何処に大迷宮の入口があるのか、さっぱり見当もつかず探索するにしても、教会関係者の存在が酷く邪魔で厄介だったので後にまわしていたが今がチャンスかもしれないとハジメは踏んだ。

後、此処には「神山」の迷宮の攻略者のアレスから情報など貰えば習得出来る確率は上がる。それに、リリアーナの言った銀髪の女……アレスが言っていた神の使徒で間違いない。メルジーネの時だと僅かに時代が違いすぎるが神の使徒であることは納得だ。そして、ハジメは必ず使徒と殺り合う事になる。

ハジメはそう考えながら闘志を燃やす。神の使徒はどれくらい強いのか？ 自分との差はどれくらいなのか？ そして自分より強くても抗って勝ってやると獰猛な笑みを口元に浮かべる。

「……ハジメ、素敵」

「はう、ハジメさんが、またあの顔をしてますう、何だかキュンキュンしますう」  
「むう、ご主人様よ。その笑みを刺さるのじゃ」

「……三人共、雰囲気ぶち壊し過ぎよ。まあ、気持ちは分かるけど」

しかし、頬を赤らめて、ハアハアする女性陣のせいで雰囲気は何とも微妙で優花が突っ込んだ。優花も最後に何か言っていたがそこはスルーする。

そして……

「アレス、手伝つてくれるか？」

「何を言いますか。私の目的はハジメ殿の助力そして仲間として迎えられたく馳せ参じましたから」

「やっぱり……接触した理由はそれか」

「ええ、神共が動き出したなら私も動くべきだと思ひましてね」

「でも、王国の件は個人的にも何かしたいだろ？」

「はい、王国は私の故郷です。決して神共の遊びの盤上じゃない。私としても苛立つてますからね」

「クハツ……そうかよ」

「それで、ハジメ殿……この件は……」

「大丈夫だって、お前等も良いだろ？」

ハジメはわかつてる事だが冗談交じりに優花達に聞いた。

「私は構わないわよ」

「……私も優花とハジメが良いなら賛成」

「アレスさんがいれば心強いですう」

「うむ、アレスがいれば、これからの迷宮攻略も捗るしの」

四人共、言つてゐる事は違ふがアレスの件に賛成の意見を述べた。

「だつてよ、アレス」

「ハハッ、嬉しい限りです」

アレスは喜びを隠せず笑つた。

これで戦力は十分だとハジメは不敵な笑みを浮かべる。化け物の自分、魔法の天才吸血姫のユエ、身体強化チートのシア、竜人族で一、二番の実力のテイオ、支援チート治癒師の優花、そして新しく加わつた元王国最強の神官のアレス、この六人ならどんな奴等が来ても、クソ神共が来ても戦える気がしてしまう。

「クハッ……じゃあ行くかうかつ」

——どんな奴が来ても絶対に負けねえ。足搔いて足搔いて勝つてやるよ！

新たな仲間を得たハジメはそう心の中で誓い、笑みを浮かべて瞳に炎を宿らせたのだつた……。

## 幕間 忍び寄る影

時間は少し遡る。

愛子が誘拐され、リリアーナが王都より脱出した日の深夜。王都の外れにある開けた場所に、人の姿があつた。静かな場所ゆゑりと吹く夜風の囁きと、冴え冴えとした月明かりだけが許されたような、静謐で、何処か物悲しい雰囲気漂う場所。

それもそのはずだつた。此処はある意味、墓地であるからだ。

もちろん、王宮の敷地内であるから、不特定多数の死者を埋葬するような場所ではない。あるのは、「神山」の岩壁を直接加工して作られた石碑だ。そびえ立つ石碑は、忠霊塔（国の為に忠義を尽くして戦死した者の霊に対して称え続けることを象徴と見え表す塔）のようなもので、王国に忠義を尽くしていった戦死者・殉職者は例外なく、此処に名前が刻まれている。

その忠霊塔の前に無言で佇んでいた人影の正体は、ハイリヒ王国騎士団団長メルド・ロギンスだつた。

無表情であつたが、その瞳には言葉では表せないほど強く重い感情が込められてい



た。

深夜を少し回ったこの時間に巡回中の騎士を除けば此処に

来る者はいなく、死者に安息を与えるこの場所はもう一つ有用な使い方できる場所であつた。

「——団長」

風に紛れて消えそうならい小さな男の声が聞こえ、メルドはチラリと視線を向ければ、足音を立てずに待ち人が姿を現した。その男の名はホセ・ランカイド。王国騎士団副団長にして、メルドの腹心の部下だ。

「問題はなかつたか？」

「はい、誰にも見られてはいません。とは言え、余り長居はできないでしょうが」

「そうだな、こんな真夜中に騎士のトップの二人が、こんな場所で密会だからな。今のお偉い方特に教会側からすれば、『一体何を企んでいる？』と目を血走らせるだろうしな」  
僅かに口元を歪めて笑うメルドに、ホセは苦笑いをした。

「ホントに団長は教会を嫌つてますね。昔は少なからず“エヒト様”へのお祈りはしていたのに」

「……アイツが…アレスが追放されてからな…なんだか教会の事や“エヒト様”……神を余り信用出来なくなつたんだ」

「彼……ですか……あの時の王国は荒れにも荒れましたからね。今では彼の名を神官とかの前で口にしてたら即異端審問ですから……」

「ああ……それで兵士の様子は？」

表情を再び厳しいものに戻して、メルドは問う。ホセの表情は冴えず、それどころか顔は青ざめているように見えた。

「……兵団長を含め、約六割に『虚ろ』の症状が見られた事を確認しました」

ホセの言う『虚ろ』とはここ最近、王宮内に広がっている奇妙な症状で、簡単に言えば無気力症候群と言うべきか、仕事はちゃんと果たし、受け答えもするのだが、以前に比べると明らかに覇気が欠け笑うことはなく、人付き合いも最低限となり部屋に引き籠もることが多くなる。

その症状は徐々に広がりを見せ、遂には発言力が強い貴族や、騎士団でも分隊長クラスにまで症状が見られるようになった。流石にこれは何かがおかしいと、蔓延し出した不気味な現象に危機感を抱いたメルドは本格的な調査を乗り出していた。

「そこまで来たか。騎士団の一割強というのが幸いと思えてしまうな。いや、大隊長クラスに症状が見られないだけ、確かに幸いか」

「……しかし、団長。その、何と言いますか……本当に、これは何者かの攻撃でしょうか？ 単に気が抜けているだけなのは？」

ホセの報告を聞いて、ますます厳しい表情になったメルドに、ホセは遠慮がちにそう尋ねた。

「勇者が敗北し、使徒の一人の南雲が生存してたが我等の元から決別し、騎士団の英気を失い、数の有利という人間側の生命線を魔族がひっくり返しつつあるこの状況でか？ 気持ちは分からんでもないがな、ホセ。樂觀視はやめておけ、お前までやられてしまうぞ」

「失礼しました」

ホセとて樂觀視してゐるわけではない。副団長として、団長の発言に対し別の角度での否定的意見を出すのは職務でもあるのだ。ホセは一つ咳払いをしてから改めて口を開いた。

「それで、団長の方は？ 陛下に何か影響は？」

「陛下は今のところは大丈夫だ。『虚ろ』の症状がない。寧ろ、覇気が増しているくらいだ。主の御名において、魔族の蛮行は許しはしない、とな。……ただ……」

「？ どうされました？」

普段にない歯切れの悪さを見せたメルドにホセは首を傾げる。

メルドはどう言うべきか迷ったが、結局、言葉が見つからず「なんでもない」と頭を振った。——まさか、些か神に傾倒し過ぎる気がする、例えるなら祈りを捧げている時

のイシユタルのような感じだと言えるわけがない。己の信仰心はもうどうでも良いが、部下に対しては。

「宰相殿も問題があるように見えなかった。だが、中央の有力者方が無事かと問われれば、到底、そうは言えん」

そう言つて、挙げられた症状の見られる貴族達の名を聞いて、ホセは思わずクラリと意識がぶれるのを感じた。本当の中枢を担う大貴族は無事であるが、各派閥に属する有力貴族の内、かなりの者達が発症していたのだった。

「陛下に具申し、騎士団から護衛を付けさせてもらっている。近衛も、神殿騎士も怪しい所だ。異変があれば即座に報告するように命じてある」

「陛下は『虚ろ』について何と?」

当然、エリヒド国王には、現在王国の中枢が正体不明の敵から精神攻撃を受けている可能性がある旨について報告がなされている。いくら、ただ無気力が目立つだけの症状とはいえ、数が数だ。早急な対応が必要なのは確か。だが、報告をしたメルドの表情は優れていなかった。

「……今、こうしてこそこそとお前と報告会なんてしている時点で、明白だろ?」

「もしかして、調査具申を却下されたのですか?」

そう、王宮の片隅で、深夜に人目につかないよう現状報告しあっているのは、エリヒ

ド国王が本格的な調査を却下した上、メルドに余計なことにかまけないで軍備増強に専念しろと命じたからであった。表だって調査が出来なくなつたメルドは、それでも己の危機感を信じて、こうして腹心の部下とできる限りのことをしているのである。

「魔族の脅威が高まつているこの状況だ。陛下も不明確な情報のみでは、判断に困っているのかもしれない」

「しかし、それでも普段の陛下であれば団長の言葉なら……」

ホセの言葉をメルドは視線を止めた。確かに、今のエリヒド国王は些か強引な姿勢が目立つが、だからと言ってそう簡単に不服を口にするのは憚られる。

「だからこそ、俺達で陛下が判断するに足る情報を集めたのだろうか？ ホセ、閥属性の魔法に精通している者を集めろ。『虚ろ』の正体を探らせ、対抗策を用意させろ。あと、どうにか王宮の宝物庫の解錠を管理部に、後、神の使徒の幸利の協力が欲しいと愛子殿とイシユタル殿に申し出をしてくれ」

「了解です。ですが団長……光輝君達には？」

「俺が対応する。……今アイツ等は不安定な時期だ。余計な不安を与えたくないが……ままならんものだな。俺はとことん教育者に向いてないらしい」

自嘲するような溜息に吐くメルドに、ホセは笑みを浮かべて言う。

「大丈夫ですよ。団長の心遣いなら、きちんと伝わってますよ」

「ハッ……俺の心を知つてどうする。俺がアイツ等の心を知らねばならない。そして、其処に一番悩んでいるんだよ、俺は。剣の振り方、戦い方なら、悩むことなんてないことなのになあ……こう言うのはアレスの方がよっぽど上手だから見本にはしてるがな……俺には難しいな」

「そうですね。彼の魔法や教え方は歳も二十もしないであれ程でしたが……でも、団長から話された方が、一番彼等は安心されますよ」

騎士団の入団なら、もとより覚悟の上での入団だ。故に、メンタルケアの主たる方法は、取り敢えず走る、剣を振る、一緒に酒を飲むだけである。そして大体はそれで解決する。が、意図せず故郷から連れ出され、戦わねば故郷に帰れない状況のただの学生達にそれをするのは、いろんな意味でアウトである。

だからこそメルドは不得意である非体育会系の子供達のケアに四苦八苦し、自分より遥かに教育者として上だと思えるアレスを見本にしているわけだが……

そんな子育てに悩む団長の姿に、ホセは苦笑いをせずにはいられなかった。

その後、二、三の情報共有と今後の方針を打ち合わせたメルドとホセは、互いに闇に紛れるようにして王宮内へと戻った。誰にもバレずに部屋に戻ったメルドは大きく息を吸う吐くと腰に下げた騎士剣を外して壁に立てかけた。そして、ドガツと身を投げ出すようにソファアヘ腰を落とし、指先を眉間に押し当て揉みほぐすようにグリグリ

し、少し休息をした。

「……土気のみを落とす魔法、か。魔人族の仕業だと考えるのが順当だが、王宮に直接？  
有り得ん。仮にそれができるなら、何故もつと強力な魔法を行使しない？ 何故、下級兵士と騎士からなんだ？ 悟られずに魔法を行使出来るのなら何故俺を狙ってこない？ 騎士団団長の首を取ればそれこそ土気なんか簡単に落ちるだろう？ 一体何か起こっているんだ？」

思考が口から流れ出る。危機を察知してからというものの、正体不明の敵の手段にメルドの気は張り詰め続けていた。限界には遠いが、それでも考えるべきことは多く、何より国のトップに自分の危機意識を共有できないことが彼の精神力を削り取る。

「……………アイツは今頃、何をしてるだろうな」

ふと脳裏を過ぎったのは「オルクス大迷宮」で奇跡のような再会と圧倒的な力を見せつけた一人の少年の姿。死に瀕した自分を伝説級の秘薬を使ってまで救ってくれた恩人だ。

しばらく当時のことを思い出して何とも言えない表情を浮かべていたメルドは、おもむろに立ち上がるとデスクへと向かい、デスクの引き出しから取り出したのは便箋と封筒の二セット。ペンを手に取り、メルドは難しい表情をしながら書き始めた。

それは万が一に考えた布石だった。一つは「アンカジ公国」のゼンゲン公宛。そして、

もう一通は彼の少年宛。もしかしたら、ゼンゲン公を通して渡して貰えるかもしれない。そうすれば、自分に何かあったとしても、あるいは起死回生の一手になるかもしれない。月明かりが差し込む静かな室内にカリカリとペンを走る音が響く。

ある程度書き終えたメルドが内容の見直しをしてみると、不意に部屋の扉がコンコンツとノックされた。

ハツとして思わず壁に立てかけていた騎士剣を手を取ったメルドは警戒心を押し込めて平然とした音声で誰何する。

「誰だ？」

「……あの、メルド団長。俺です。檜山です」

「大介？ どうした、こんな時間に」

「その、俺……どうしてもメルド団長に相談したいことがあって」

何処か切羽詰まったような、あるいは弱り切ったような音声でそう言う訪問者に、メルドは訝しみつつも部屋のドアを開けた。

部屋の前で檜山大介が一人ぼつんと突っ立っていた。

「相談と言ったが……こんな時間にか？」

「……すみません。迷惑かと思っただんすけど……クラスの連中には余り聞かれなく  
て」



「そうか……いや、迷惑とかじゃないぞ？ さあ、入れ」

メルドは檜山の沈んだ様子から何となく察した様子で、彼を部屋に招き入れた。

檜山のクラスの立ち位置は微妙なところだった。不用意な行動で仲間を窮地に追いやり、結果、クラスメイトの中でも実力を持った一人が奈落へと落ちてしまった。平身低頭で謝罪した結果、他の生徒達も余り触れたくないといった思いがあつて、落ちた彼の幼なじみ以外は抗議はしたが、光輝が割つて入るなどして弾効はない。だが、まった溝がないというわけではないのだ。

ハジメの生存を知つてからは変わったように感じる。

メルド自身気にしていたことであり、自ら仲間との関係について相談しに来てくれたなら、応えないわけには行かない。メルドはそう思った。

ソファーに座るよう勧めたメルドの言葉に、素直に従う檜山。だが、中々、話しだそうとしない。背を丸め、両手を揉みほぐすように絡めながら、貧乏揺すりをしている。

「……大介。お前の話したいことは何となく察している。だから、上手く話そうとしないで良い。思ったことを言ってくれればいいんだ。何が問題なのか、どうすべきなのか。それは一緒に考えていこう」

慰めるようにそう言うメルドだったが、檜山の貧乏揺すりは一向に収まらない。顔を上げることもなく、随分と落ち着かない様子だ。知らぬ間に、余程追い詰められている

のかと、メルドはメルドはもう一度声をかけようとした。

その寸前、再び、コンコンツとノック音が響いた。今晚は客が多いなど苦笑いしつつ、メルドが再び誰何する。

すると、返ってきたのは先程別れたばかりのホセの声だった。なにやら緊急で報告したいことがあると言う。

なんともタイムミングが悪い。ここには檜山がいる。報告内容によっては聞かせるわけにいかないものかもしれない。

そんなメルドの気持ちを察したのか。

「……メルド団長。良いっすよ。俺、話が終わるまで、廊下で待つてるんで」

「そうか……。すまん、大介」

申し訳なさそうにするメルドに、檜山は「いえ」と言葉少なく返事をして立ち上がった。

メルドは扉に手をかけ、檜山を送り出すと同時に、ホセを迎え入れようとドアノブに手を回した。ガチャと音が鳴り扉を開くと扉の前にはホセがいた。

“虚ろ”の状態のホセが……。

ぞわりつとメルドが総毛立つ。本能がけたたましく警鐘を鳴らす。刹那、

「ツ?!」

メルドが声にならない叫びを上げて身を逸らす。その眼前を騎士剣による凄まじい突きが通り過ぎた。

「ホセツ！貴様どういうつもりだっ?!」

メルドは怒声を上げるが、それに対する返事は、袈裟斬りの一撃だった。それを咄嗟に転がって回避するメルドはそのまま壁に立てかけてあつた自分の騎士剣に手に取り、無言で追撃するホセの攻撃を受け止める。ギンツという金属同士がぶつかる音が響く。

「クソツ……やはり洗脳の類いかっ!？」

間近に見るホセの瞳には生気が感じられず「虚ろ」の症状であつた。自分と別れた後に発症したとして、その後、すぐに自分を襲撃してくるなど、何者かの指示がなければ今までの発症者との行動が違い過ぎる。やはり「虚ろ」は精神攻撃系の類いの魔法と断定し、戦慄と焦燥の表情を浮かべるメルド。

とにかく、今はホセをどうにかしないといけない為、メルドは気合いと共にホセの騎士剣を弾く。

「多少の怪我は許せよ!」

メルドはホセへと突進する。騎士剣を弾かれて僅かに姿勢の崩れた今なら、体当たりで組み伏せられるだろうと判断した。しかし、ホセが予想外の行動を取る。一貫してメルドを狙っていた為に、標的は騎士団団長の身かと思つていたが、突進するメルドから目

を逸らしたホセは、なんと呆然と突っ立っていた檜山へと急迫した。

不意の動きに、一瞬、メルドの動きが遅れる。それがこの土壇場で、まさか戦意を喪失するなんて予想外。否、これこそ檜山の相談したかったことだろうと、メルドは内心舌打ちをしつつ、急速転身した。

無理な姿勢からの減速なしの方向転換に軸足が悲鳴が上がるのを意識しつつ、なお強く踏み込む。バキヤツと床板が踏み割れた音がするも無視し、メルドは檜山とホセの間に割り込んだ。

「ぐっ……この、力はっ」

ギリギリのタイミングで間に合い、再び騎士剣同士がぶつかり合い金属音が響く。だが、ホセの一撃は普段より断然破壊力があつた。いつものホセは力より技術で戦うタイプの為、メルドにとって予想外であつた。

今の状況では回避は出来ない。後ろには守るべき者がいる。押し返すには体勢が悪い。十分な臂力が発揮できないと判断したメルドは魔法でホセを吹き飛ばそうと決断する。

「耐えてみせろ！ 副団長！」

多少のケガでは済まないかもしれないが、王国騎士団副団長のタフさを信じ、メルドは至近距離で風の砲弾を喰らわそうとする。

「鳴け、遍く風よつ——〃風——ツ〃!？」

魔法を放とうした瞬間、自分の脇腹に短剣を突き刺さそうとする檜山の姿が見え、詠唱が止まる。メルドは傷を喰らうのを覚悟したが……

ギインツ!

金属音が鳴り響いた。

「やっぱ檜山でめえ……」

いつの間にかメルドと檜山の間に行った、その者の正体は……

「浩介?!」

浩介だった。

「チイツ……なんで、てめえが此処にいやがるんだ!遠藤っ!」

檜山は自分の行動が上手くいくと思っていたのに防がれてしまい、怒りが爆発し、血走った目で自分の邪魔をした浩介に叫ぶ。

「いや、緊急でメルド団長に伝えたい事があったから部屋に来ただけ……戦闘音が聞こえたから急行したってわけ」

そう、浩介は夕方愛子が攫われた事をメルドに報告する為、探していたが見つからず夜には部屋にいるだろうと判断し、部屋に向かっていたところ、この状況だった為、メルドの助けに入ったわけだった。

「浩介、助かった!」

「いえつ、団長! 此処はヤバいですって離れましょう!」

メルドと浩介は背中を合わせながら、ホセと檜山の攻撃を受け流しながら話し合っていた、

「どういう事だ?」

「ホントはこの下にまだホセさんのような騎士や兵士の人っていて、俺を見た瞬間、襲ってきたんですよ。でも全員、返り討ちにしましたが、まだ来る可能性があるんです」

「……ッ! そうか、クソツ」

メルドは浩介の報告で自分の部下達はもう駄目だと知り、悪態をつく。

「わかった浩介! お前の言う通り、此処から離脱する時間を稼いでくれ!」

「うっす!……ではっ——フツ、シヨウタイムだっ!」

「逃がすかっ!」

メルドは浩介の報告と今の状況的に離脱を決心して、浩介に魔法を放つ為に時間を稼いでもらうと頼み、浩介はそれを了承して服からサングラスを取り、カチャツと装着して深淵卿を発動したと同時に分身を作る。檜山は二人を逃がさんと目を血走らせながら「虚ろ」のホセと共にメルドに目掛けて剣を振るう。

「クソツ……ホントに遠藤てめえは!」

「フツ……貴様なぞに我は負けんよ檜山。それに貴様、悪の傀儡と墮ちてしまった貴殿達も止まって貰おうか。後、我はコウスケ・E・アビスゲートだっ」

アビスゲートは小太刀で檜山の斬撃を受け止めると、分身でホセや部屋に入ろうとしている騎士や兵士達の動きを止める。しかし、その時だった。扉からぞろぞろと浩介……アビスゲートが道中で倒した筈の騎士や兵士達が現れた。

「なっ?!」

アビスゲートから驚愕の声が漏れる。すると檜山から下卑た笑い声が聞こえた。

「ヒヒツ……無駄だっつうの。そいつ等死んでも止まらねえからなー」

「なぬっ！ 檜山、貴様っ、この者達に何をした?!」

檜山の発言に浩介が驚愕して問い詰めようとするが、檜山は黙秘をした。どうやら話したくないらしい。そうなればとアビスゲートは更に分身を増やした。

「なっ、遠藤?! お前更に増えんのかよっ、クソがっ!」

「フツ……我を過小評価して貰っては困る。我は親友の隣に立つ為ならば努力も辞さないからなー」

そう、アビスゲートはハジメ達と別れてからも教会を調べながら努力を怠らず、ずっと鍛錬をし続け、アビスゲートならする分身を十人程度増やせるようになったのだ。

「チイッ！ 天之河よりめんどくせえじゃねえか!」

「フツ……我はあんな勇者より弱いと思つた事はないぞ」

檜山はアビス・ゲートのチートさに齒噛みする。アビスゲートは天之河と比べられるのは心外だと口にする。

そして、アビスゲートと檜山と「虚ろ」の騎士達の小競り合いは、いよいよ終わりを告げる。

「よくやった！ 浩介、準備は整つた。行くぞつ！——「風槌」！」

「うむつ」

「ちよつ?! 待ちやがれつ！」

メルドは部屋にあつた大事な物を回収し終えるとアビスゲートに逃げると伝え、魔法で壁を破壊してアビスゲートと共に飛び降りる。メルドとアビスゲートの二人は飛び降りるがメルドの私室は王宮の四階である。普通なら大怪我で済まないが……

「——「風撃」！」

メルドは咄嗟の魔法を放ち、風圧で落下速度を減速させ、二人は見事に着地を決めた。おそらく、すぐに檜山達も飛び降りて追ってくるだろうと二人は推測し、すぐに行動を再開した。

メルドは上級魔法を放つ為、詠唱を始める。

「天地を染める紅蓮の——」



「ムッ？ 団長どう……ッ!!」

メルドの詠唱が止まった事に疑問を抱いたアビスゲートは声をかけようとした瞬間、オルクスで会った魔族以上……もしかしたら親友のハジメと同等レベルと思えるほどの圧を感じ、息を呑む。

「——」

二人はまるで、心臓を鷲掴みにされたかのよう。冷や汗が吹き出る。体もまともに動かず硬直し、己の息遣いや心音ですらうるさく感じてしまう。

その時だった……

「国王の事と言い、詰めが甘いと言わざるを得ません。やはり、所詮は人間のすること。手を貸さないといけませんか……」

怖気を振るうほど綺麗な声だった。だがその声には何も感情が伝わってこない。声が聞こえてようやく二人の体は動き出した。だがその動きはぎこちなく、二人は声がした方向——空を見上げた。

月光を背負うシルエットが見えた。驚くべきはその人影から伸びる一対の翼。銀に輝くそれは、余りにも非現実的であり、幻想的だった。

だが、その感動する心の余裕などない。肌で、頭で、魂で理解する……圧倒的な格の違いを。

しかし、それでも、二人は……

「……浩介、まだ動けるか？」

「フツ、メルド団長。誰にモノを言っている我はコウスケ・E・アビスゲートだつ。何処までも抗ってみせよう！」

「お、おう……良い意気込みだ！」

諦めていなかった。

メルドはアレスの件から教会を疑い初め、神への信仰心は薄れていた。そのせいか今、圧倒的に格が違う相手が目の前にしても王国騎士団団長として、そして一人の騎士として立ち向かうと決めていた。

アビスゲート——浩介はこの目の前の存在は確実に自分の大切な幼なじみ、そして親友が大変な目に合うと瞬時に理解した。なら、一撃でも良い。殺せなくても良い。大切な親友（ハジメ）と幼なじみの手助けとなれば本望だと。

「主と我が母の望まれた事です」

銀の月が降ってきた。子供が遊びに使うようなボール程の大きさのお月様。命を滅する死の光。

だが、二人は諦めない。地を蹴りあの存在へと立ち向かうために駆け出した。

もしかしたら、ここで自分達は死んでしまうかもしれない……でも

(俺達が死んだら、後は頼んだ……なんて言わんさ。あれはお前の敵だ。だから——)  
 (ハジメ。俺はここで終わりかもしれないでもっ、お前ならあの化け物を、神を殺せると信じてる。俺も諦めねえからよ。だから——)

(——存分にぶちのめせ!)

現王国最強の騎士と深淵卿は遺言なのか分からないが……奈落から這い上がってきた化け物(親友)に勝利の祈りを捧げながら神の手先に立ち向かっていったのだった。

~~~~~

主のいなくなった部屋の中で、*「虚ろ」*な目をした兵士達が、壊れた床板と窓を修復を行っている傍らで、デスクの前に三人の人影と一人の使徒がいた。

「あれあれ？ 神の使徒様がまだいるとはどういう事だい？ 仕事はもう終わっただろ？」

「いえ……まだ一つ残ってるので」

「へえ……何の——」

ザシュツ！

「……………へ？」

「わおっ」

「ゲハツ……な、んで？」

使徒は話していた最後の仕事で三人の人影の一人——檜山のお腹を一ノ大剣で貫き、そしてすぐさま引き抜いた。檜山は突然の事で状況を理解出来ないまま倒れ伏せ、息絶える。

「主のお言葉です。『其方みたいな弱者は我的世界に要らない』との事です。安心してください。遺体は主のご意向で神域で眠らせてあげます。感謝しなさい。そして最後に貴女方は少し爪が甘いですよ。では」

神の使徒はそう言い残して檜山の遺体を銀翼で運びながら空へ飛び立っていった。

「アハハ……檜山乙々」

「——ちゃん、檜山君死んだら計画に支障が出ない？」

「あー、大丈夫、大丈夫。檜山は今回の件で切り捨てるつもりだったし……余り支障がないんだよね〜」

「うわー、可哀想」

「香織こそ、どうなんだい？ 檜山の奴、君の事が好きだったんだよ？」

「へえー……で？ 私はハジメ君しか要らないからな〜」

「うわー、ひつどっ」

クスクスと二人の影は笑い合った。

「でも、今回は使徒様に感謝だよ。団長のついでに少し目障りだった遠藤も殺してくれ  
たしさ」

「だねえ、私も光輝君と雫ちゃんは抑えられるけど、遠藤君はどうしようか迷ってたし  
……良かったよ」

そして、湧き上がった心を抑える為に香織が話題を変えるように口を開く。

「なんにしても、最大の障害はクリアしたんだよ。後は、雫ちゃん達に感づかれなければ  
どうって事ないし」

「その通り。彼女のおかげで国王様も宰相さんも頭がぶっ飛び中だし、教会は最初から  
障害ですらない。団長さんと遠藤が死んだ今、もう僕達を止められる者はいないっ！」

人影の声音に狂気が溢れ出す。同じく堕ちた香織も狂ったように笑みを深める。

人影の手元でグシャと何かを握り潰した音がした。見れば、そこには手紙らしきもの  
があった。メルドが彼の少年に届けたかった懸念の想いを綴られた手紙だ。

「さあ、加速していこう。坂道を転がる石のようにつ！終わりに向かって。僕の望ん  
だ未来に向かって！」

「これで私も……ハジメ君を……フフフフ」

二人の口元が三日月のように裂け、瞳孔が収縮する。しばらくの間、主のいなくなっ

た部屋の中に、悪意と敵意でべつとりとコーティングされた二つの笑い声が響いていた。

同時刻。

大陸の果て

大陸の南の果ての王国にて、凄まじい光景が広がっていた。圧倒的な数の魔物が、整然と並んでいるのだ。十万は越えているだろう。どれもこれも、「オルクス大迷宮」の深層レベルを有していることは、その身に纏う禍々しい気配が示している。「蹂躪」という言葉が、形を持って顕現したかのような光景だ。

驚いたことに、その内の何体かには、人が騎乗しているようだった。この集まりが、単にスタンピードではないことは明白だった。

そんな魔物と、騎乗者達の前方の空に、天空より一体の魔物が舞い降りた。それは、普通の灰竜よりも数倍の大きさの巨大な灰竜に騎乗している一人の男が声を上げた。

「聞け！ 我等の偉大なる魔王様の眷属達よ！ 私はウイリス・アルク元軍曹の後任となった。新軍曹の『ゲルマン・マクベリー』である！宜しく頼む！」

ゲルマンの発言が終わると同時に、地上からは歓声上がる。ゲルマンは地上の歓声に笑みを浮かべると言葉を続ける。

「そして、示す時が来たのだ！我等の力を今！フリード様！」

ゲルマンがそう言うのと、またもや前方の空に、一体の強大で壮麗な魔物が舞い降りた。煌めく純白の鱗が神威すら感じさせる。

天空を統べるのは己である、無言で訴えるような威容を纏う白竜の背には、やはり、人が騎乗していた。赤い髪を風に靡かせ、白竜の背で凜と立つ姿に、ゲルマンの時よりも大きな歓声上がる。

「ゲルマンの言う通り、神託が降りた。神の代弁者たる魔王陛下から、勅命が下った。——異教徒共を滅ぼせと」

厳格な重圧を感じさせる声音が地上に降り注ぐ。再び、爆発的で熱狂的な歓声が上がった。フリードは発言を終えた後、「後は任せる」といった感じにゲルマンに視線を送ると、フリードは後方に下がる。ゲルマンはフリードに頼まれたことに嬉しさを隠し切れず笑みを浮かべて話す。

「皆の者、知らしめてやろう！ 神意を！我等の強さを！ 我が物顔で北大陸を支配する愚か者共に、身の程というものを！」

狂的な使命感を帯びた声音に、踏み鳴らされた大地が揺れ、狂気の絶叫が大気を震わせる。

フリードはその光景を眺めながら、隠すように口元を悔しそうに歪め、拳に力が入っ

てしまう。『今は我慢だ』と、無駄に削られていく命をただ見ることしか出来ない自分を悔みながら……………」

奇しくも、薄暗い部屋の人影が宣言したのと、南の果てで大軍を統べる男の補佐が宣言したのは同時だった。

—— さあ、始めよう！僕達が幸せになるための、僕達のための物語を！

—— さあ、雄叫びを上げろ！我等が主に勝利を！開戦の時だ！

~~~~~

—ある王宮のはずれの古びた小屋—

この小屋は靈忠塔と同じレベルで人気がない場所。そんな場所に二人の影があった。

「団長……………無事すつか？」

「ああ……………少し所々に火傷を負ったが問題ないな」

影の正体はメルドと浩介だった二人の服は神の使徒と戦闘の後のせいかわろわろで、



よく見れば火傷跡や傷が所々あった。しかし、運良く退避できて、生き残れることが出来たのなら僥倖だ。

「……これからどうします？　俺達もう死人扱いだと思いますけど……」

「安心しろ浩介。この小屋は見廻りも余り来ない場所だ。部屋から取っておいた食料もあるし、此処なら数日は身を隠せる」

「おおつ、流石、団長。でも、いつまで身を隠します？」

「そうだな……今の王国はもう駄目だ。傷を癒したら時がくるまで正体を隠しておこう」

「ウツス、了解です」

「だが浩介、助かったぞ。お前のおかげで」

「いやあく、ホントっすね。俺も成功するのは一か八かでしたが成功して安心しましたよ」

メルドは浩介に尊敬の眼差しを向け、浩介を称えた。

「まさか、影の中に潜れるなんてな……」

「いやまだまだっすよ。俺もこの『影移動』の技能を上達させないと……あの化け物に勝ち目ないですし……」

「……そうだな。だが次は勝とう」

「……………ウツス」

メルドと浩介の二人はそんな会話をした後、古びた小屋で戦闘の傷を癒す為に休息を取るのだった……………。

## 六十四話 王都侵攻

薄暗く明かり一つ無い部屋の中に、格子の嵌った小さな窓から月明かりだけが差し込んで黒と白のコントラストを作り出していた。

部屋の中は酷く簡素な作りになっている。鋼鉄造りの六畳一間、木製のベッドにイス、小さな机、そしてむき出しのトイレ。地球の刑務所の方がまだましな空間を提供してくれそうだ。

そんなどう見ても牢獄にしか思えない部屋のベッドの上で壁際に寄りながら三角座りをし、自らの膝に顔を埋めているのは畑山愛子その人だ。

愛子が、この部屋に連れて来られて三日が経とうとしている。愛子の手首にはプレスレット型のアーティファクトが付けられており、その効果として愛子は現在、全く魔法が使えない状況に陥っていた。それでも当初は何とか脱出しようと試みたのだが、物理的な力では鋼鉄の扉を開けることなど出来るはずもなく、また唯一の窓にも格子が嵌っていて、せいぜい腕を出すくらいが限界であった。

もつとも、仮に格子がなくなるとも部屋のある場所が高い塔の天辺なうえに、ここが「神

山】である以上、聖教教会関係者達の目を掻い潜って地上に降りるなど不可能に近く、生徒達の身を案じることしか出来ない愛子は悄然と項垂れ、ベッドの上で唯でさえ小さい体を更に小さくしているのである。

「……私の生徒がしようとしてしていること……一体何が……」

僅かに顔を上げた愛子が呟いたのは、攫われる前に銀髪の修道女が口にしたことだ。愛子が、ハジメから聞いた話を光輝達に話すことで与えてしまう影響は不都合だと、彼女の言う「主」と「母」とやらは思っているらしい。そして、生徒の誰かがしようとしていることの方が面白そうだと。

愛子の胸中に言い知れぬ不安が渦巻く。こうして何も無い部屋で監禁されて、出来る事と言えば考えることだけ。そうして落ち着いて振り返ってみれば、帰還後の王宮は余りに不自然で違和感だらけの場所だったと感じる。愛子の脳裏に、強硬な姿勢を崩さない、どこか危うげな雰囲気のエリヒド国王や重鎮達のことか思い出される。

きつと、あの銀髪の修道女が何かをしたのだと愛子は推測した。彼女が言っていた、「魅了」という言葉がそのままの意味なら、きつと、洗脳かそれに類する何かをされているのだ。

しかし同時に、会議の後で話した雫やりリアーナについては、そのような違和感を覚えなかった。その事に安堵すると共に、自分が監禁されている間に何かされるのではな

いかと強烈な不安が込み上げる。

どうか無事でいて欲しいと祈りながら思い出す、もう一つの懸念。それは、グイレギユラーの排除”という言葉。意識を失う寸前に聞いたその言葉で、愛子は何故か一人の生徒を思い出した。

命の恩人にして、圧倒的な強さと強い意志を秘めながら、愛子の言葉に耳を傾け真剣に考えてくれた男の子。そして……色々と思うところがあるが信念が真つ直ぐな人。

ハジメの安否を憂慮する気持ちでポロリと零すように彼の名を呟いた。

「……………南雲君」

「おう？ 何だ、先生？」

「ふえ!？」

愛子はハジメの返事で思わず素つ頓狂な声を上げ、部屋の中をキョロキョロと見回している。気付いてないのか？ と思ひハジメはまた声をかけた。

「こつちだ、先生」

「えっ?？」

愛子は、体をビクツと震わせながら、ハジメのいる方、格子の嵌った小さな窓にやつと視線を向けた。

「えっ? えっ? 南雲君ですか? えっ? ここ最上階で…本山で…えっ?！」

「あく、うん。取り敢えず、落ち着け先生。もうちよつとでトラップがないか確認し終わるから……」

混乱する愛子を尻目に、ハジメは魔眼石で部屋にトラップの類がないか確かめると、紅いスパークを迸らせながら「錬成」を行い、一人通れるだけの穴を壁に開けて中に侵入を果たした。外壁に穴を開けて登場したハジメに、先生は目を白黒させているがハジメは愛子が無事だと分かり小さく笑みを浮かべながら歩み寄った。

「なに、そんなに驚いているんだよ。俺が来ていることに気がついてたんだろ？ 気配は完全に遮断してたはずなんだが……ちよつと、自信無くすぞ」

「へっ？ 気づいて？ えっ？」

「いや、だって、俺の名前呼んだじゃないか。俺が窓の外にいるのを察知したんだろ？」

「そ、それよりも、なぜここに……」

「もちろん、先生を助けにきただけだ」

「わざわざ助けに来てくれたんですか？でも南雲君はまだ旅の途中ですよね？」

愛子はハジメのきた事に驚き、旅はどうしたのかと聞いてきた。

「ああ……旅の途中にリリイに出会ってな、先生が攫われたと聞いたんだ」

「リリイ？ あっ、リリアーナ姫ですか？」

「ああ。先生が攫われるところを目撃してたんだよ。それで、王宮内は監視されている

だろうから掻い潜って天之河達に知らせることは出来ないかと踏んで、一人王都を抜け出したんだ。俺達に助けを求めるためにな」

「リリアーナ姫が……南雲君はそれに応えてくれたんですね」

「まあな……それに先生が攫われたのは俺が話した件が関係してると思ってた……つて先生？ その手に着いてるブレスレットは何だ？」

ハジメはこれまでの経緯を先生に話していると先生が前に会った時に着けていなかったブレスレットが目に入り聞く事にした。

「あつ……これは魔力封じのアーティファクトで魔法を出せないんです」

「魔力封じ型ね……わかった。先生、今外すから手を出してくれ」

「は、はいっ」

ハジメはベッドに腰掛ける愛子の元に歩み寄り、手を取った。そして、錬成をして先生に着いてる魔力封じのアーティファクトを取り除く。

「あ、ありがとうございます南雲君」

「良いってことよ」

愛子が無傷で救出できたのは良いが、ハジメは嫌な予感がしてならない。だから、ハジメは喜ぶ愛子に笑って返し、ここから早く離脱することにし、愛子を促す。

「それより先生、そろそろ行こう。天之河達のところにはリリイ達に向かってるはずだ。」

合流してから、これからどうするか話し合えばいい」

「わかりました。……南雲君、気を付けて下さい。教会は、頑なに君を異端者認定しました。それに、私を攫った相手は、もしかしたら君を……」

「わかっている。どつちにしろ、先生を送り届けたら、俺は俺の用事を済ませる必要があるし、多分、その時、教会連中とやり合う事になる。……もとより覚悟の上だ」

ハジメは強靱な意志を秘めた眼差しで愛子に頷く。その眼差しに愛子は再び憂慮の言葉をかけようとした。と、その時、遠くから何かが砕けるような轟音が微かに響き、僅かではあるが大気が震えた。

「……っ！ まさかっ」

「ふえっ?!」

何事かと緊張に身を強ばらせた愛子がハジメに視線を向けるがハジメは無視して遠くを見る目をして何かに集中し現在、地上にいるユエ達から念話で情報を貰った。

「ちっ、なんてタイミングだよ。……まあ、ある意味都合かもしれないが……」

ハジメは舌打ちしながら視線を愛子に戻す。愛子は、ハジメが念話を使えることを知らないが、何か情報を掴んだのだろうと察し、視線で説明を求めてきた。

「先生、魔人族の襲撃だ。さっきのは王都を覆う大結界が破られた音らしい」

「魔人族の襲撃!! それって……」



「ああ、今、ハイリヒ王国は侵略を受けている。仲間から『念話』で知らせが来た。魔人族と魔物の大軍だそうだ。完全な不意打ちだな」

ハジメの状況説明に愛子は顔を蒼白にして「有り得ないです」と呟き、ふるふると頭を振った。

それもそうだろう。王都を侵略できるほどの戦力を気づかれずに侵攻させるなど、まず不可能だし、王都を覆う大結界として並大抵の攻撃ではこゆるぎもしないほど頑強だ。その二つの至難をあつさりクリアしたなど、そう簡単に信じられないのは当然だ。

ハジメはそんな愛子を落ち着かせながら口を開く。

「先生、取り敢えず天之河達と合流しな。話はそれからだ」

「は、はい」

緊張と焦燥に顔を強ばらせた愛子を、ハジメは片腕に座らせるような形で抱っこする。「うひゃー」と再び奇怪な声を上げながらも、愛子は咄嗟に、ハジメの首元に掴まった。

と、その瞬間……

カッ!!

外から強烈な光が降り注いだ。

「ッ!?!」

部屋に差し込んでいた月の光をそのまま強くしたような銀色の光に、ハジメの本能がけたたましく警鐘を鳴らす。

「先生っ、落ちんなよっ!」

「えっ……っ?!」

ハジメは愛子に言う事だけ言って脇目も振らず咄嗟に外壁の穴から飛び出した。急激な動きに愛子が耳元で悲鳴を上げギョツと抱きついてくるが、今は気にしている場合ではない。ハジメが、隔離塔の天辺から飛び出したのと銀光がついさつきまで愛子を抱えていた部屋を丸ごと吹き飛ばすのは同時だった。

ポバツ!!

物が粉碎される轟音などなく、莫大な熱量により消失したわけでもなく、ただ砕けて粒子を撒き散らす破壊。人を捕えるための鋼鉄の塔の天辺は、砂より細かい粒子となり、夜風に吹かれて空へと舞い上がりながら消えていった。

余りに特異な現象に、ハジメは「空力」で空中に留まりながら、目を見開き思わずといたった感じで眩く。

「あれはただの破壊じゃねえ……「分解」か?」

「ご名答です、イレギュラー」

返答を期待したわけではない独り言に、鈴の鳴るような、しかし、冷たく感情を感じ

させない声音が返ってくる。

ハジメは声のした方へ鋭い視線を向けると、そこには、隣の尖塔の屋根から睥睨する銀髪碧眼の女がいた。ハジメはあれがアレスの言っていた使徒と確信する。

もつとも、リリアーナが言っていたのと異なり修道服は着ておらず、代わりに白を基調としたドレス甲冑のようなものを纏っていた。ノースリーブの膝下まであるワンピースのドレスに、腕と足、そして頭に金属製の防具を身に付け、腰から両サイドに金属プレートを吊るしている。どう見ても戦闘服でまるで戦乙女ワルキューレのようであった。

銀髪の女は、その場で重さを感じさせずに跳び上がった。そして、天頂に輝く月を背後にくるりと一回転すると、その背中から銀色に光り輝く一對の翼を広げた。

バサアと音を立てて広がったそれは、銀光だけで出来た魔法の翼のようだ。背後に月を背負い、煌く銀髪を風に流すその姿は神秘的で神々しく、この世のものとは思えない美しさと魅力を放つ。だが、惜しむらくはその瞳だ。彼女の纏う全てが美しく輝いているにも関わらず、その瞳だけが氷の如き冷たさを放っていた。その冷たさは相手を嫌悪するが故のものではない。ただただ、ひたすらに無感情で機械的。人形のような瞳だった。

銀色の女は、先生を背負いながら鋭い眼光を飛ばす俺を見返しながら、おもむろに両手を左右へ水平に伸ばした。すると、ガントレットが一瞬輝き、次の瞬間には、その女

の周りには銀の柱の様な物が出現していた。それは銀色の魔力光を纏った二メートル近い柱のような物を周りに浮かせている銀色の女は、やはり感情を感じさせない声音でハジメに告げる。

「ノイントと申します。『神の使徒』として、我が母の願いにより貴方を排除します」  
「チツ……:よりによって『ネームド』か」

それは宣戦布告だった。ノイントと名乗った女は、神共が送り出した本当の意味での『神の使徒』なのだろう。いよいよ、ハジメが邪魔と判断し、直接、『神の遊戯』から排除する気のようにアレスが言っていた使徒の中でも実力のある使徒『ネームド』を送らせたのだろう。

ハジメは自分の相手が『ネームド』と知ると眉を顰めながら悪態をつく。すると、ノイントから噴き出した銀色の魔力が周囲の空間を軋ませる。大瀑布の水圧を受けたかのような絶大なプレッシャーがハジメと愛子に襲いかかった。

「クハツ……:面白れえ」

愛子は必死に歯を食いしばって耐えようとするものの、表情は青を通り越して白くなり、体の震えは大きくなる。「もうダメだ」と意識を喪失する寸前だと確認してすぐさま先生をハジメの紅い魔力で包み込み、守るようにノイントの放つ銀のプレッシャーの一切を寄せ付けないようにした。

すると愛子は目を見開いて、原因であろう間近い場所にあるハジメの顔に視線を向けたが、直後ビクツと身体を震わせた。

それもその筈だ。途方もないプレッシャーを受けておきながら微塵も揺らぐことなく、ハジメは瞳をギラつかせて獰猛に歯を剥いてるからであった。ハジメは愛子の視線を尻目に、ノイントに向けて挑発的に嗤いながら同じく宣戦布告した。

「殺れるものなら殺ってみろ。クソ神共の木偶<sup>人形</sup>が」

その言葉を合図に、標高八千メートルの「神山」上空で、  
“神の使徒”と奈落から這い上がって来た“化け物”が衝突したのだった。

~~~~~

ハジメがノイントの襲撃を受ける少し前、優花、ユエ、シア、リリアーナの四人は夜陰に紛れて王宮の隠し通路を進んでいた。リリアーナを光輝達のもとへ送り届けるためだ。

優花達の目的は王国の異変解決とリリアーナと光輝達——異世界組との合流である

合流の目的は取り敢えず愛子の安全を確保するためには、救出後の預け先である光輝達が洗脳の類を受けていないか、彼等が安全と言えるかの確認が必要だったからだ。そ

れに、「神山」は文字通り聖教教会の総本山であり、愛子の救出までは出来るだけ騒動を起こさないことが望ましいところ、彼等に気付かれず愛子の監禁場所の搜索と救出を行うためにもハジメ一人の方が都合がよかった為である。

そのため、王都に残ることになった優花達は、リリアーナと一緒に行動しているのである。

なお、テイオと追放されてる身であるアレスは万一に備えて王都の何処かで待機している。全体の状況を俯瞰できる者が二人くらいいた方がいいという判断だ。

そんな優花達が、隠し通路を通って出た場所は、何処かの客室だった。振り返ればアーンテイクの物置が静かに元の位置に戻り何事もなかったかのように鎮座し直す。

「この時間なら、皆さん自室で就寝中でしょう。……取り敢えず、雫と香織の部屋に向かおうと思います」

闇の中でリリアーナが声を潜める。向かう先は、雫と香織の部屋のような。勇者なのに光輝に頼らない辺りが、彼女の評価を如実に示している。

リリアーナの言葉に頷き、索敵能力が一番高いシアを先頭に一行は部屋を出た。雫と、異世界組が寝泊まりしている場所は、現在いる場所とは別棟にあるので、月明かりが差し込む廊下を小走りで進んでいく。

そうして、しばらく進んだ時、それは起こった。

ズドオオオン!!

パキヤアアアン!!

砲撃でも受けたかのような轟音が響き渡り、直後、ガラスが砕け散るような破砕音が王都を駆け抜けたのだ。衝撃で大気が震え、優花達のいる廊下の窓をガタガタと揺らした。

「わわっ、何ですか一体!?!」

「これはっ……まさか!?!」

索敵のためにウサミミを最大限に澄ましていたシアが、思わずペタンと伏せさせたウサミミを両手で押さえて声を漏らす。すぐ後ろに追従していたリリアーナは、思い当たることがあったのか顔を蒼白にして窓に駆け寄った。優花達も様子を見ようと窓に近寄る。

そうして彼女達の眼に映った光景は……

「そんな……大結界が……砕かれた?」

信じられないといった表情で口元に手を当て震える声で呟くりリアーナ。彼女の言う通り、王都の夜空には、大結界の残滓たる魔力の粒子がキラキラと輝き舞い散りながら霧散していく光景が広がっていた。

リリアーナが呆然とその光景を眺めていると、一瞬の閃光が奔り、再び轟音が鳴り響

く。そして、王都を覆う光の膜のようなものが明滅を繰り返しながら軋みを上げて姿を現した。

「第二結界も……どうして……こんなに脆くなっているのです？ これでは、直ぐに……」

リリアーナの言う大結界とは、外敵から王都を守る三枚の巨大な魔法障壁のことだ。三つのポイントに障壁を生成するアーティファクトがあり、定期的に宮廷魔法師が魔力を注ぐことで間断なく展開維持している王都の守りの要だ。その強固さは折り紙つきで、数百年に渡り魔族の侵攻から王都を守ってきた。戦争が拮抗状態にある理由の一つでもある。

その絶対守護の障壁が、一瞬の内に破られたのだ。そして、今まさに、二枚目の障壁も破られようとしている。内側に行けば行くほど展開規模は小さくなる分強度も増していくのだが、数度の攻撃で既に悲鳴を上げている二枚の障壁を見れば、全て破られるのも時間の問題だろう。結界が破られたことに気が付き、王宮内も騒がしくなり始めた。あちこちで明かりが灯され始めている。

「まさか、内通者が？ ……でも、僅かな手勢ではむしろ……なら敵軍が？ 一体どうやって……」

呆然としながら思考に没頭しているリリアーナに答えをもたらししたのはユエ達だっ



た。

“聞こえるかの？ 妾じゃ、状況説明は必要かの？”

優花達の持つそれぞれの念話石が輝き、そこから声が響いている。王都に残してきたテイオの声だ。口振りから、何が起きているのか大体のところを把握しているらしい。

“お願いテイオ”

“心得た。王都の南方一キロメートル程の位置に魔人族と魔物の大軍じゃ。あの時の白竜もおるぞ。結界を破壊したのはもう一つの竜のプレスじゃ。しかし、白竜の主の姿が見えんの”

「まさか本当に敵軍が？ そんな、一体どうやってこんなところまで……」

テイオの報告に、リリアーナが表情を険しくしながらも疑問に眉をしかめる。

その疑問に対して、優花達には想像がついていた。白竜使いの魔人族、フリード・バグアーは「グリュエーン大火山」で空間魔法を手に入れている。軍そのものを移動させる程の「ゲート」を開くなどユエでも至難の業ではあるが、何らかの補助を受ければ可能かも知れないが……。

するとアレスからも連絡がきた。

“皆さん聞こえますか？ こちらからもテイオ殿と同じ南方に魔物の大軍を確認

したのでこちらで食い止めます”

「一人で大丈夫ですか？」

「ハハッ……ご心配ありがとうございます。でも安心してください。一人での殲滅戦は慣れてますから」

アレスは優花の心配に感謝したが、彼はこういう戦闘に慣れていると言つて報告を終わった。

ティオとアレスの報告を受けた優花はある事を思いつく。

だが、そうこうしているうちに、再びガラスが砕けるような音が響き渡った。第二章壁も破られたのだ。焦燥感を滲ませた表情でリリアーナが光輝達との合流を促す。しかし、それに対して優花が首を振った。

「優花？ どうしたんですか？」

「ユエ、シアはここで別れるわよ。二人は外の魔物達をお願い。それに、ハジメのあの推測が正しいか確かめてきて欲しいの」

「……ん、わかった」

「えっ、アレですか。まあ……はい、了解ですう」

「なっ、ここで？ 一体何を……」

一刻も早く光輝達と合流し態勢を整える必要があるのに、何を言い出すのかとリリアーナは訝しそうに眉をしかめた。ユエは窓を開けると瞳を剣呑に細めて端的に理由

を述べる。

「……ハジメの頼みで白竜使いの魔人族に少し用がある」

「では優花さん、リリイさん。私とユエさんは、ちよつとここで失礼します」

「うん、行つてらつしやい」

「……ん、優花でも……大丈夫なの？」

「私は大丈夫だから」

ユエは戦力が大分削る事を心配するが優花は「大丈夫」と笑みを浮かべユエの頭を撫でた。

「……ん、もう優花」

「お願いね、ユエ」

「……ん、任された」

そして、ユエとシアの二人は、優花の指示で窓から王都へ向かつて飛び出して行つてしまった。開けつぱなしの窓から夜風と喧騒が入り込んでくる。優花は二人が行くのを確認した後、リリイと二人して進み始めた。

「……仲が良いんですね」

「うん……それに皆、ハジメの事を愛してるからね」

「えっ?! 優花、それ大丈夫なんですか?!」

「ふふつ、大丈夫。ハジメは私達四人共を愛してくれてるから」

そんな会話しているとリリイが「私もハジメさんに……」と顔を真っ赤にしながら呟く。優花はそれを見て「やっぱハジメは誑しだなく」と苦笑いしながら溜息を吐く。そして二人は光輝達のもとへ急ぐのだった……。

## 六十五話

## 無双の始まり

突然の結界の消失と早くも伝わった魔人族の襲撃に、王都は大混乱に陥っていた。

人々は家から飛び出しは碎け散った大結界の残滓を呆然と眺め、そんな彼等に警邏隊の者達が「家から出るな!」と怒声を上げながら駆け回っている。決断の早い人間は既に最小限の荷物だけ持って王都からの脱出を試みており、また王宮内に避難しようとなりの数の住人達が門前に集まって「中に入れる!」と叫んでいた。

夜も遅い時間であることから、まだこの程度の騒ぎで済んでいるが、もうしばらくすれば暴徒と化す人々が出てもおかしくないだろう。王宮側もしばらくは都内の混乱には対処できないはずなので尚更だ。なにせ、今、一番混乱しているのは王宮なのだ。全くもって青天の霹靂とはこの事で、目が覚めたら喉元に剣を突きつけられたような状態だ。無理もないだろう。

彼等も急いで軍備を整えているようだが……

パキヤアアアン!!

間に合わなかったようだ。

遂に最後の結界が破られ、大地を鳴動させながら魔人族の戦士達と神代魔法により生み出された魔物達が大挙して押し寄せた。残る守りは王都を囲む石の外壁だけ。それだけでも相当な強度を誇る防壁ではあるが……長く持つと考えるのは楽観が過ぎるだろう。

外壁を粉碎すべく、魔人族が複数人で上級魔法を組み上げる。魔物も固有魔法で炎や雷、氷や土の礫を放ち、体長四メートルはありそうなサイクロプスモドキがメイスを振りかぶって外壁を削りにかかった時だった。

「——千断——」

その一言で魔法が発動し、サイクロプスモドキの身体、後ろにいた魔物達。そして複数名の魔人族の空間がズレた。そして、ブシヤアアツと血が吹き出す音を鳴りながら魔物達と複数の魔人族の身体が細切れとなった。

その光景を後方から眺めていた魔人族が顔を青ざめ声を荒らげながら叫んだ。

「き、貴様は何者だ?!　よくも、同胞を我が魔王様の忠実な部下達を——」

叫ぶ魔人族に対し、外壁に堂々と立ち塞がる神官服を身に纏った青年——アレスはそんな叫ぶ魔人族を相手を見て口を開いた。

「そうですね……何者です、か。まあ、簡単に言えば貴方方の敵ですね」

笑顔でそう言い返すアレス。魔人族達は、その笑顔とまるで自分達を相手として見て

ない目を見て、段々と、魔族の顔が怒りで歪みだしていく。

「舐めやがって……行けつ魔物共！ 外壁なんかよりあの人間を優先的に殺せつ  
！」

魔族は魔物と他の魔族にそう指示してアレスに狙いを定めた。普通なら百を超える魔物に一齐に襲われたら手も足も出ずに死ぬだろう……しかし、アレスは違った。

アレスはハジメから貰い受けた「宝物庫」から聖槍「ロンギヌス」を取り出す。ロンギヌスに魔力を流し、刃の部分が光り輝く。そして、迫りくる魔物達をたったの横に一振。

「——『天翔閃・極』」

「つう?!」

横に振るわれたロンギヌスから普通の「天翔閃」より遥かに大きく光り輝く斬撃が飛ぶ。その斬撃はアレスに迫ってきていた魔物達を一瞬にして灰燼と化し、魔族達もその斬撃からの生まれた風圧に吹き飛ばされそうになる。

アレスは、一振りした「ロンギヌス」を魔族達の方へ突きつけながら告げた。

「で? 次はどうきます?」

その言葉と態度は、次が来ても余裕で対処できるという表れ。魔族達はアレスから伝わる強大な圧に萎縮してしまって少し後退る者、侮辱され表情が怒りに染める者がい

る。しかし、アレスは動じない。

「舐めるああ!!」

怒りが頂点に達した魔人族の一人が魔物達を連れ、アレスに突撃する。しかし、アレスはただ笑みを見せるだけ、

「さあ、来い」

そして、アレスの無双が始まったのだった。

そんな様子を、城下町にある大きな時計塔の天辺からどうしたものかと眺めていたテイオの傍に、王宮から飛び出してきたユエとシアが降り立った。

「……テイオ、あの魔人族、見つけた？」

「テイオさん、あの人は何処ですか？」

「……お主等か、いやまだ見つかっておらんよ」

「……ん、そう。アレスは？」

「アツチの外壁で戦っておるよ」

そう言つてテイオが指を指した方向に二人は目を向ける。そして、アレスの無双振りに舌を巻く。

「うひゃ、アレスさん、凄いですね」



「……ん、ホントに一人で抑えてる」

「うむ。王都の南方はアレスのおかげで余り被害はないのじやが、やはり空や別のルートから魔物達が侵入はしてしまつて王都は大混乱。……それに、此処の兵士達は頼りないのう」

ユエとシアはアレスの実力を褒めていたがティオは冷静に今の状況を確認しており、王国の戦力に呆れ溜息を吐いた。そう、アレスが抑えて場所以外でも、魔物達が猛烈な勢いで外壁に突進して外壁を崩しており、更に上空には灰竜や黒鷲のような飛行型の魔物が飛び交い、外壁を無視して王都内へと侵入を果たしていた。

外壁上部や中程に詰めていた王国の兵士達が必死に応戦しているが、全く想定していなかった大軍相手では、その迎撃は突進してくる鋼鉄列車にエアガンで反撃しているようなものでティオが言うように頼りないモノだった。

三人が目を皿のようにしてフリードを探していると、念話石が反応する。ハジメからの通信だ。

「おい！ ティオ！ 今すぐこっちに来てくれ！」

「ぬおっ！ ご主人様？ どうしたのじや？」

念話石から思いのほか強い声音が響き、名を呼ばれたティオが思わず驚きの声を上げた。

「アレスの予想通り使徒が出てきた。しかも、『ネームド』だ！ だから先生を預かって欲しい。抱えたままじゃ全力が出せねえ！」

「!? 相分かった！ 直ぐに向かうのじゃ！」

ハジメが全力を出さねばならない相手と相対しているという事を直ぐに悟ったティオは、一瞬で「竜化」すると咆哮一発、標高八千メートルの本山目指して一気にその場を飛び立った。

「……ハジメ、気を付けて」

「ハジメさん！あの魔物使いは私とユエさんで確認しときますからっ！」

「は？ お前らリリイ達といるんじゃないや……っうお、あぶね！ 悪い、ちよつと話して暇はなさそうだ！ 状況はそれなりに把握した。二人共気をつけてな」

ハジメは、シアの言葉に何を言っているんだと最初は疑問を抱いたが、フリードの件だと把握してから、よほど戦闘が激しいのか直ぐに通信を切ってしまった。ユエとシアは、愛子を庇いながらとはいえ、ハジメを苦戦させる相手が居るといふ事に、一瞬、自分達も救援に駆けつけるべきかと考えた。

「ユエさん、どうします？」

「……ハジメなら大丈夫。ティオもいる。それより、魔物使いの確認。また、神代魔法の魔法陣を壊そうとするなら止める」

そう、ユエが戦場に出てきたのは、同じ神代魔法の使い手であり、まだ目的が分からないフリードを野放しにしたくなかったからという理由もあったのだ。

フリードが【神山】の大迷宮の詳しい場所を知っていた場合、先を越されると【グリュエン大火山】の時のように、また魔法陣を破壊される可能性がある。大迷宮は気が付けば魔物も構造も元通りになっている場合が多いので【グリュエン大火山】も時間経過で元に戻る可能性はあるが、どれくらい掛かるかは分からない。その為、それだけは何としても避けたいユエは、フリードが味方か敵のどっちであっても抑えようと考えた。

と、その時、時計塔の天辺にいるユエとシアに気がついたのか、体長三、四メートル程の黒い鷲のような魔物が二体、左右から挟撃するようにユエとシアを狙って急降下してきた。

クエエエエエ!!

そんな雄叫びを上げて迫ってきた黒鷲に、シアは見もせず射撃モードのドリユツケンを「宝物庫」から取り出し、躊躇いなく炸裂スラッグ弾を撃ち放った。ユエもまた、見もせず右手をフィンガースナップするだけで無数の風刃を上方から豪雨のごとく降らせる。

今まさに二人の少女を喰らおうとしていた二体の黒鷲は、頭部を衝撃波によって爆砕

され、また、ギロチン処刑でもされたかのように体の各所を切り落とされてバラバラになり、無残な姿となって民家の屋根に落ちていった。今頃、家の中のいる人達は屋根に何かが落ちてきた音にビクツとなって戦々恐々としていることだろう。

黒鷲が無残に絶命させられたことでユエとシアの存在に気がついた飛行型の魔物達が二人の周囲を旋回し始めた。よく見れば、その三分の一には魔族が乗っているようだ。彼等は、黒鷲を落とされたことで警戒して上空を旋回しながら様子を見ていたようだが、その相手が兎人族と小柄な少女であるとわかると、馬鹿にするように鼻を鳴らしユエ達向かって、魔法の詠唱を始めた。

ユエ達としては、王都を守るために身命を賭して大軍とやり合うつもりなど毛頭なく、ただフリードだけが目的だったので、行きたければ勝手に行きという気持ちだったのだが、襲われたとあっては反撃しないわけにはいかない。

一応、シアが「私達は敵じゃないですよお、さっきのは襲われて仕方なくですよお」と呼びかけているが、彼等はますます馬鹿にしたように笑うだけで攻撃を止める気配はなかった取るに足らない相手だと侮って幾人かの仲間だけを残し先行した魔族達は、次の瞬間、背後から響いた断末魔の悲鳴と轟音、そしてその原因を見て驚愕に目を見開くことになった。

ゴオガアアアア!!

全身から雷を迸らせながら雷鳴の咆哮を上げる龍が、彼等の仲間と魔物達を次々と喰い散らかしていた。

その光景に、あり得べからざる事態に呆然とする魔人族達。何とか命からがら雷龍から逃げ出し、先行していた仲間のもとへ必死に飛んできた魔人族の一人が、助けを求めように手を伸ばす……が、次の瞬間には背後から殺意の風に乗って飛来した炸裂スラッグ弾に撃ち抜かれ、騎乗していた灰竜ごと木っ端微塵となった。

魔人族のものか灰竜のものか分からない血肉が先行していた魔人族達にビチャビチャと降りかかる。

硬直していた魔人族達が、ハッと我に返り、追撃に備えて最大限の警戒をする。そして、仲間を一瞬で粉碎した原因たる少女達を探した。全く予想外のところから振るわれた死神の鎌に己の死を幻視しながら、緊張に流れる汗を拭うことも忘れて視線を巡らせる。そして、向けた視線の先にユエ達はいた。

しかし、その姿は彼等にとつて、全くの予想外。なぜなら、自分達への追撃態勢に入っているどころか、ユエ達は彼等を見てすらいなかったのだ。最初と同じく、ただ外壁の外を何かを探すように眺めているだけ。その背中は、何よりも雄弁に物語っていた。

すなわち、眼中にない、と。

それを察した瞬間、緊張に強ばっていた魔人族達の表情が憤怒に歪んだ。戦友を粉微

塵にしておいて、路傍の石を蹴り飛ばした程度の認識しかしていないユエ達に、戦士として、または一人の魔族としての矜持を踏みにじられたと感じたのだ。彼等の全身が血液が沸騰したかのような灼熱が駆け巡る。

「貴様等あーあーあー!!」

「うおおおお!!」

「死ねえー!!」

怒りに駆られながらも、戦士としての有能さが自然と陣形を整えさせ、絶妙な連携を取らせる。四方と上方から逃げ場をなくすように包囲し、一斉に魔法を放った。魔法に長けた魔族達の魔法だ。普通なら、絶望に表情を歪める場面である。

しかし、当のユエが浮かべるのは呆れた表情。ついで、細くしなやかな指をタクトのように振るわれる。

「……彼我の実力差くらい、本能で悟れ」

そんな言葉と同時に、全ての魔法は雷龍がとぐろを巻いてユエ達を繭のように包むことで完全に防がれてしまった。そして、雷龍が一度その大食らいの顎門を開けば、彼等はまだで特攻しか知らぬと言わんばかりに自らその身を投げ出していく。

ならば反対側からと複数人で貫通性に優れた上級魔法を唱えようとすると、雷龍の一部が開いて、そこからウサミミをなびかせたシアが砲弾もかくやという速度で飛び出し

た。咄嗟に近くにいた魔族が、詠唱の邪魔をさせてなるものかと、ほとんど無詠唱かと思う速度で完成させた初級魔法の炎弾を無数に放った。

しかし、シアは、まるで気にした様子もなく、ドリユツケンの激発の反動で軌道を変えると全弾あつさり躲し、ギョツとしている詠唱中の魔族三人に向けてドリユツケンを横殴りにフルスイングした。

「りゃあああああー！」

気合一発。振るわれたドリユツケンは、重力魔法の力でインパクトの瞬間だけ四トンの重量を得る。それを、最近更に上昇した身体強化で振るった。結果は言わずもがな。魔族の三人は為すすべもなくまとめて上半身を爆砕され、騎乗していた魔物も衝撃で背骨を砕かれて断末魔の悲鳴を上げながら吹き飛んでいった。

空中にあるシアは、その場で自身の重さをドリユツケンも含めて五キロ以下まで落とし、再度、激発を利用して羽のように軽やかに宙を舞う。そして、ドリユツケンを変形させて射撃モードに切り替え、先程炎弾を放ってきた魔族に向けて炸裂スラッグ弾を轟音と共に解き放った。狙い通り、王都の夜空にまた一つ、真つ赤な花が咲いた。

シアは、“宝物庫”から取り出した二枚の鈍色の円盤を宙に放ち、重力を無視して空中に浮くそれを足場にした。そして、その場に留まりドリユツケンで肩をトントンしながら周囲を見渡す。ちようど、少し離れたところで、ユエ達に襲いかかってきた魔族

の最後の一人が死に物狂いでユエに特攻しているところだった。

「小娘があああ!! 殺してやるう!!」

血走った目が、刺し違えてでも! という決死の意志を感じさせる。しかし、そんな彼に対するユエの態度は実に冷めていた。

「……三百年早い、坊や」

雷龍が、彼の仲間を襲っている隙を突いたつもりだったのだろう。ユエが雷龍を戻すより先に仕留められると口元を歪めた魔人族は、直後、真下から飛んできた風刃に首をすっぱりと切り落とされて、錐揉みしながら眼下の路地へと落ちていった。

ユエは、無意味な時間を取ったと直ぐにフリード探しを再開する。隣に、ドリユツケンを担いだままのシアが降り立った。

「これ完全に私達……目をつけられたんじゃないですか?」

「……関係ない。くるなら返り討ちにするだけ」

「まあ、確かにそうなんですけど……」

軽口を叩き合いながらも、フリードを探す二人だったが、中々見つからないので、よもや、既に大迷宮の場所を把握していて空間転移したんじゃないかと内心不安になり始めた、その時、

「ッ!? ユエさん!」



「んっ」

シアが警告を発すると同時に、ユエは躊躇うことなく時計塔から飛び退いた。直後、何も無い空間に楕円形の膜が出来たかと思うと、そこから二つ特大の極光が迸った。極光は、一瞬でユエ達が直前までいた時計塔の上部を消し飛ばし、それだけにとどまらず射線上にあつた建物を根こそぎ吹き飛ばしていく。

「やはり、予知の類か」

「フリード様。アレが報告にあつた魔王様に害を成す者達ですね」

「ああ……そうだ。ゲルマン」

二人の男の声が響くと同時に、楕円形の膜から白竜に乗った赤髪の魔人族フリードと前回見たものより巨大な灰竜に乗ったゲルマンと呼ばれた魔人族の男が現れた。その二人の表情は、フリードは無表情であり、ゲルマンは渾身の不意打ちが簡単に回避されたことに対する苛立ちが表れていた。

二頭の竜が完全に「ゲート」から現れると、タイミングを合わせたように黒鷲や灰竜に乗った魔人族が数百単位で集まり、ユエとシアを包囲した。

「どうやら、ここでユエとシアを完全に仕留めるつもりらしい。」

「まさか、フリード様の御力をもってしても生還していたとは……やはり、報告にあつた男はアルヴ様に害を成す……危険過ぎる。まずは、確実に奴の仲間である貴様等から仕

留めさせてもらう」

ゲルマンの憎しみすら宿っていきそうな言葉を向けられて、しかし、ユエとシアは二人して不敵に口元を歪めた。そして、同時に同じ言葉を返す。それは奇しくも、八千メートル上空で彼女達の愛する少年が敵に放った言葉と同じだった。

「殺れるものなら殺ってみて（下さい）」

その言葉が合図になったかのように、周囲の魔物と魔族が一斉に魔法を放った。

大気すら焦がしかねない熱量の炎槍が乱れ飛び、水のレーザーが空間を縦横無尽に切り裂き、殺意の風が刃となって襲い掛かり、氷雪の砲撃が咆哮を上げ、石化の礫が永久牢獄という名の死を撒き散らし、蛇の如き雷の鞭が奇怪な動きで夜天を奔る。そして、駄目押しとばかりに極光が空を切り裂いた。

魔族四十人以上、魔物の数は百体以上。四方上下全てが敵。視界は攻撃の嵐で埋め尽くされている。

しかし、ユエもシアも、逃げ場のない死に囲まれながら焦りは一切なく、まして回避する素振りも見せずに佇んでいた。何人かの魔族が「諦めたか……」と若干拍子抜けするような表情になったが、フリードだけはユエのやろうとしていることを察して「まさか、もう其処まで扱えるようになったのか」と誰にも聞こえない程度で声を呟きながら笑みをこぼすと、少しゲルマン達から距離を取る。

「『界穿』」

ユエが神代魔法のトリガーを引く。

直後、二つの光り輝くゲートが飛来する極光の前に重なるようにして出現した。ゲルマンは訝しそうに眉を潜める。あんな座標にゲートをつなげては、極光を空間転移させても、直ぐにもう一つのゲートから出てきて直撃するだけだろうと。しかし、そのゲルマンの予想は、ゲートを一対しか展開していないという事を前提とした考えと使い手であるフリードが自身の限界を基準にしていると教えられた考えでもある。

だから、ユエとシアが眼前のゲートに飛び込んだ意味が咄嗟に理解出来なかったし、いつの間にか自分達の背後にゲートが開いている事にも直ぐに気がつくことが出来なかった。

「しまっ、回避せよっ!!」

ユエ達がゲートの向こう側に消え、極光がゲートを通る瞬間、自分の思い違いに気が付いたゲルマンが部下達に警告を発するが、時すでに遅し、だった。

ゲルマン自身と既に移動してたフリードは回避が間に合ったものの、部下の多くは背後から……極光の直撃を受けて死を意識する間もない消滅を余儀なくされた。

「おのれ、私に部下を殺させたな……まさか同時発動出来るとは……まだ見くびっていたということかっ」

ゲルマンは瞳に憤怒を浮かべ、フリードさえ出来ていないと言っていたゲートの二対同時発動という至難の業を実戦で成功させたユエに畏怖にも似た念を抱く。詠唱した形跡も魔法陣を用いた様子もなく、その正体が気なるところだったが、今は、消えた二人を探さなければならない。

「フリード様！ ゲルマン様！ あそこにつ！」

二人の部下の一人が外壁の外を指差す。そこには、確かにユエとシアがいた。

真下に民家があつては戦いづらかった。ゲルマン自身ユエ達との対決を望むなら、そのまま王都侵攻に踵を返すとも思えなかつたので、外壁の外へ空間転移したのである。もちろん、万一、自分達がユエ達を無視して王都侵攻を続行すれば、その背中に向けて死神の鎌を振り下ろすだけだ。

ゲルマン達もそれがわかつているので、ユエ達に背を向けることはない。そして、遠目にユエが右手を自分達に伸ばし手の甲を向けると指をクイクイと曲げる仕草をした時点で、魔人族達の怒りは軽く沸点を超えた。

明らかな挑発だが、見た目幼さの残る少女と、蔑む対象である兎人族の少女にしてやられて多くの戦友を失い、その上で「相手をしてあげる」という上から目線……自分達を少数ながら優れた種族と誇ってはばからない魔人族の戦士達にとっては看過できない挑発だった。

「小娘ごときがあー！」

「薄汚い獣風情が粹がるなあー！」

「魔王アルヴ様の加護を受けしの我等を愚弄しおつてええー！」

そんな罵詈雑言を叫びながら、魔族達が一斉に襲いかかった。タイムラグのない致死性の魔法を連発するユエを警戒して魔物を先行させる。地上からも、大軍の一部がユエ達を標的に定め猛然と襲いかかってきた。

シアは、『宝物庫』のおかげで、実質無制限と言つてもいいくらい大量に保管している炸裂スラッグ弾を惜しむことなく連発する。空で、あるいは地上で、シアの魔力が青白いムーンストーン色の波紋となつて広がり、次の瞬間には衝撃波に変換されて破壊を撒き散らした。後に残るのは、轢死あるいは圧死でもしたかのようなひしゃげ、砕けた遺体のみ。

と、そこへ、白竜と強化灰竜、灰竜から一斉に吐かれたブレスが殺到する。直撃すれば身体強化中のシアといえどもただでは済まない破壊の嵐。しかし、シアが慌てることはない。

「『絶禍』」

シアの眼下にユエの放った黒く渦巻く球体が出現する。超重力を内包する漆黒の球体は、さながらブラックホールのようにシアに迫っていた極光群の軌道を下方に捻じ曲

げてその内へと呑み込んでいった。

「あの時も使っていたな。……私の知らぬ神代魔法か。総員聞け！ 私は金髪の術師を相手をする！ お前達は全員で兎人族を狙え！ 引き離して、連携を取らせるな！」

「「「了解！」「」」」

「フリード様！ 私も手伝いますっ！」

ゲルマンは自分の放った極光で部下達を消した事にユエに相当な憎しみを抱いてるらしく瞳には怒りの炎が宿っているように見えた。

「……………」

「フリード様？」

「ゲルマン。お前は南方にいる魔物達と部下達の侵攻を抑えてる者のところに向かえ。奴もかなり危険な人物と思える」

「し、しかし…………フリー——私の命令を聞かないという事が偉くなったのだなゲルマン軍曹…………っ！ 分かりました」

ゲルマンはフリードの命令を逆らおうとしたのだがフリードの言葉と肌からひしひしと感じる壮絶な圧に萎縮してしまった。

「ゲルマン。もう一度言おう。此処にいる灰竜達と部下達も連れて南に向かえ」

「ぐっ…………り、了解しました」

ゲルマンは苦虫を噛み潰したような表情で不満があったが、上司であり、魔人族の英雄であるフリードの言葉に逆らえず、指示通りに灰竜と黒鷲に乗った部下を連れて南方を抑えてるアレスの元へ急行していったのだった。

その離れ際にフリードは「やつと監視が外れた」と呟いていた。その光景を魔物達の攻撃から避けながら眺めていたユエはフリードの行動や言動である魂胆に気付きシアに念話で話しかけた。

“……シア、フリードの案に乗ろうと思う”

“えっ、でも……まだ信用できませんよ。あれだってハジメさんがテイオさんの報告などで推測した事ですし”

“でも、やってみる可能性はゼロじゃない”

“もうっ、しようがないですね。じゃあ私は部下の人達を相手をしときますので”

“……ん、助かる”

ユエの案に乗ったシアは、空中で咄嗟にドリユツケンを振るって弾き飛ばす。すると絶妙なタイミングで数人の魔人族が決死の覚悟による特攻を図ったため、そちらの対応に追われることになった。ドリユツケンの激発の反動を使用してその場で一回転し、襲い来た全ての魔人族を放射状に吹き飛ばす。

急いで正面から突撃してきた竜巻を纏う黒鷲と魔人族と相対し直すものの、流石に力

ウンターを放つ暇はなく、また回避も間に合いそうになかったので、ドリユツケンを盾代わりにかざして防御体勢をとった。ドリユツケンのギミックが作動し、カシユンカシユンと音を立てて打撃面からラウンドシールドが展開される。

「貴様等だけはあ！ 必ず殺すっ！」

そんな雄叫びを上げながら金髪を短く切り揃えた魔族の男が、ただ仲間を殺された怒りだけとは思えない壮絶な憎悪を宿した眼でシアを射貫きながら、彼女の構えたドリユツケンに衝突した。誘導が上手くいったシアは、ユエにサインを送りそれを確認したユエはシアの背後に空間転移のゲートを展開した。

「じゃっユエさん、お願いしますう〜」

「ん……シアもそっちは頼んだ」

「はいですう」

ゲートに押し込まれる寸前、ユエが「グッドラック！」とでも言うようにサムズアップしている姿を見て、シアは小さく笑みを浮かべ、シアもサムズアップした。その笑みと行動を見て眼前の大黒鷲に乗った魔族が再び憤怒に顔を歪めるが、シアは特に気にすることもなく、そのまま魔族の男と共にゲートに呑み込まれて作戦通りにユエから引き離されていったのだった……。



## 六十六話

## “元” 王国最強の實力

王都南方、其処には地上を埋め尽くす魔物の群れが、空に天頂に輝く月を覆い隠す程の灰竜と黒鷲の群れが王都へ向けて侵攻していた。

優にその数は地上と空を合わせ二百体は越えるだろう。普通ならこの大群を目の当たりにし勝てる訳ないと逃げ帰る者、自決をする者などがいるだろう。しかし、この男は違った。今は異端者とされ王国から追放されている身の男。彼は“元” 王国最強の神官 アレス・バーン。

アレスは魔物と魔人族の侵攻から王都を守るかのように堂々と前に立ち塞がっていた。

其処へ外壁を壊そうと固有魔法なのか風を纏ったイノシシ型の魔物の群れ数十体が突進する。それに続いて、黒鷲が外壁の上から王都に侵入しようと空を駆ける。

だが……

「一体たりとも侵入させませんよ—— “千断”」

アレスは一体たりとも此処からの侵入をさせる筈もなく空間魔法—— “千断” を発

動させ、またもや世界が一斉にズレた。地上にいたイノシシ型の魔物達はズルツと何か  
がずり落ちるような音がした後、所々の部位が細切れになり肉塊となった。

「天翔閃・飛連撃」

アレスはそのまま流れるような動きで地面に突き刺していたロンギヌスを引き抜く  
と、魔力を流して巨大な光の刃を形成させると、上空を飛び回る黒鷲達に向けてロンギ  
ヌスを振るい、一つの光の斬撃を飛ばした。そしてその斬撃は上に上昇するに連れて分  
裂していき黒鷲達に届くまでの距離となると、おびただしい数の光の斬撃となってい  
た。

「ー」

ザシユザシユザシユザシユツ!

無数の斬撃が黒鷲達を襲い、羽や胴体など色々切り裂かれていく。羽が切り刻まれ飛  
行能力を無くし、致命傷を負わされ、そのまま地面に激突して絶命したりと戦闘不能に  
させていく。

「さて、次は誰が来ます?」

アレスは上空にいた八割ほどの黒鷲達を戦闘不能にした後、魔人族達に振り返りなが  
ら手をクイツと曲げた「さあ、かかってこい」と思わせる表情をしながら笑みを見せる。

「クソツ……化け物めっ!」

灰竜に騎乗している魔人族の兵士が悪態をつきながらアレスに向かって叫ぶ。

「……………?!」

しかし、悪態をついた後、魔人族の兵士は目を見開いた。今さっきまで外壁の近くにいたアレスが、いつの間にか自分達の真下に、魔物達の群れの中心にいるのだから。

「貴様っ！何をっ……………」

そんな叫びは虚しく、アレスは軽く聞き流しながら魔物中心で広範囲の魔法のトリガーを引いた。

「——『震天』」

空間を揺るがす大魔法を放った瞬間、アレスの周り全体の空間が爆散したかのようにズドンツと轟音が響いた。直後、魔人族の兵士達の真下にいた百をも超える数の魔物達を爆散させ一掃させた。

「残り、五十ぐらいですか……………（魔力のストックもありませんし、異常事態がない限り余裕ですね）」

アレスはそう呟きながら、ハジメから貰い受けた魔力ストックと念話席の役割も出来る腕輪を着けており自分の魔力残量の確認しながら、ロンギヌスで振るって魔物達を袈裟斬りにしたり、その素早い突きで串刺しにして魔物達を片付けていく。しかし、それをただ黙って眺めているだけしか出来ない魔人族の兵士達ではない。

「総員！　あの男に魔法をつ！　灰竜達も極光で集中狙いだ！」

魔族の兵士がアレスを睨みながらそう指示した。彼がこの部隊の隊長格なのだろう。彼の指示で一斉に他の魔族は詠唱を始めた。

「…（あの詠唱は上級…：喰らったとしても致命傷にはなりません）…：チャンスですね」

アレスは上級魔法を喰らったとしても空間魔法があるので安心なので、ここで詠唱をしている最中に魔族達を一網打尽にできると思いロンギヌスを魔族達に向け大きく振りかざした。

「『天翔閃・六蓮』」

ロンギヌスから放たれた六つの斬撃が魔族達を狙う。

しかし…：

ザシュツ！

「クウエエエ!!」

魔族達を守るかのように黒鷲達が身を挺してアレスが放った斬撃を受け地上に激突した。

「おや、少し予想外でした」

（魔族達を仕留めらなかったですが…：まっ、支障はないですね）

黒鷲達の意外な行動に少し驚いたが、余り支障はないと判断した。すると魔法の詠唱が終わったのか、隊長格の魔人族が怒りが混じり叫んだ。

「クソツ、これで死ねえっ——」

「風槌——！」

「——」

「雷槌——！」

「——」

「螺旋——！」

「——」

「凍雨——！」

「キユワアアアア！」

魔人族が魔法を、遠距離攻撃が出来る灰竜達が極光を一斉にアレスに放った。

「そんな魔法で私を倒せると思ってるんですかねー。少し心外です——」

「界穿——」

アレスは魔人族達の自分に対する評価に心底呆れ、軽口を言いながら「界穿」を発動した。自分の前に巨大なゲートを出現させ魔人族と灰竜が放った全ての魔法と極光をゲートに吸収させていく。

「なっ?!」

「お返しです」

「はっ。」

魔人族達は自分達の一斉攻撃が、たったの一つのゲートに吸い込まれていったことに目を見開き啞然としてる中、アレスは平然と指をパチンツと鳴らすと、次は魔人族達と



殲滅しようとロンギヌスを持ち駆け出したのだった。

~~~~~

「ふう……粗方、片付きましたね」

アレスは最後の魔物の首を刎ね飛ばした後、そう呟やいた時だった。

「……………（殺気っ）！」

「上かつ——『聖絶』！」

アレスは王都から自分に向けられた物凄い圧の殺気を感じてすぐさま『聖絶』を展開した。

その瞬間……

ズドオオオン！

アレスの真上から極光が降り注ぐ。アレスは間一髪で『聖絶』を展開していたのでダメージを受けることはなかったが、流石に唐突な殺す気満々の極光だったのでアレスは冷や汗を流した。

「まさか……此処に配備した兵士と魔物を殲滅してもなお、其処までの魔法を発動。そして無詠唱とは……」

アレスは声がした方向に視線を向ける。其処には強化された巨大な灰竜に乗った魔族と男と十数体ほどの灰竜の群れを連れていた。

「貴方は……」

「今から死にゆく者に名乗る名はないっ」

「……」

魔族の男はの言い分に少し苛立ちはするも、すぐに平常を取り戻してアレス自身、魔族の男に対して煽りをいれる。

「あつ……そうですね。今から貴方が死ぬんですし、名乗らなくても大丈夫ですね」

アレスの言葉に魔族の男は眉を顰め自分の拳を強く握りしめており、相当怒りに心頭してるとわかった。

「……気が変わった。貴様には我の名を心に刻みながら死んで貰おうつ。我の名はゲルマン・マクベリー、魔人軍軍曹であり、偉大なる魔王アルヴ様の忠実なる兵士だ」

「偉大なる……ですか」

（この人はもう……手遅れです、か）

アレスはゲルマンの名乗りを聞いて「アルヴ様」を崇拜するような目を見てゲルマンは手遅れの状態だと理解し、残念だと思いながら目を瞑った。

「よし、名は名乗った。悔やみながら死ね人間の皮を被った化け物よ」



ゲルマンは名を名乗った直後、罵声をすると同時に片手を掲げ一斉にアレスに向けて灰竜達が極光を放った。

キュワアアアーン！

「——『界穿』」

アレスは魔族達の兵士の時のように『界穿』を発動してカウンターに入ろうとゲルマン達の真上にゲートを展開しようとしたが、ゲルマンは行動がわかってたのように回避行動をとった。

「貴様もやはり神代魔法の遣い手か！だがっ、二度も同じ手を喰らうほど我は馬鹿ではない！」

「同じ手……ああ（大概、王都でユエ殿にこの技を喰らったんですね……ご重傷様です）」  
ゲルマンの発言にアレスは首を傾げたが、次第にユエがした事だと気付き内心同情する。

「これを、知っていたのは予想外でしたが……これはどうでしょう？」  
「何？……なあっ?!」

アレスは王都でのユエの戦いを見ていたのでであろうと予想しゲルマンには大概の間魔法はわかってしまっていると判断し、もう一つの神代魔法を行使した。長年の間、鍛え抜いた技術の空間移動で一瞬でゲルマンの目の前に現れたアレス。ゲルマンは一

瞬のこと過ぎて唖然とし声を漏らす。だがアレスはロンギヌスで貫くことなく灰竜とゲルマンだけを狙ってある魔法をトリガーを引く。

「——『衝魂っ』」

「ツ！……グハアツ！」

「クルウアアアア！」

ズドオオオン

アレスの『衝魂』が直撃してゲルマンと強化灰竜は今さっきの今さっきのアレスの攻撃では喰らうことのない凄まじい衝撃を防具や身体を抜け魂だけが喰らったかのようで一人と一体は地上に落ちていった。

「ぐっう……貴様何を？」

「ほう……『衝魂』を喰らっても、立ち上がるとは少し驚きです」

——魂魄魔法『衝魂』  
しょうこん

魂魄に直接衝撃を与える事の出来る魔法。防具を無視したり、相手の魔法をも強制解除にも使える。

アレスは自分の『衝魂』を喰らってもなお立ち上がったゲルマンに内心、驚き賞賛した。

「でも、終わりですね」

「なっ?! 我等はまだ終わっ……」「〃千断〃」はえっ?」

ズシヤッ!

ゲルマンの言葉を遮って、アレスは〃千断〃を発動して空間がズレていくと同時に連れていた灰竜の群れも自分の隣に落ちた強化灰竜も細切れになっていった。そして、ゲルマン自身も身体のいたるところがズレているのが理解してしまった。

「そうか……我は負けてしまったんだな」

「はい」

ゲルマンは自分の死期が分かり天を見上げるそして、両手をガクガクと震わせながら掲げて

「魔王……様に栄光あ……れ」

ズシヤ

ゲルマンはそう言葉にした後、身体がズレ、その生涯を終えた。

「……………貴方は、もし洗脳されてなかったら素晴らしい軍人だったのかもしれませんがね」  
アレスはそう呟いた後、ロンギヌスを強く握りしめながら「クソ神共めっ……………」と神共への怒りで目を細めた。

「そろそろ……私も王都に入……………ッ!」

ダッ!

アレスは少し頭を冷やして自分も王都に向かうとしたその矢先……悪寒を感じその場を跳び避けた。そして、アレスがいた場所に……

ビュンビュン!

銀色の羽のような物が突き刺さった。

「……ッ?!これはっ 銀翼!」

(やはり、私の所にも差し向けられたかつ!)

ビュンビュンビュンビュンビュン!

銀色の何か——銀翼はまだアレスを狙い追撃していく。アレスは避けたり、弾いていく事でこの元凶が何かを察した。

「……(何処にいるっ)」

アレスは銀翼の元凶は何処にいるか視線と感知系の技能で探し出す。

すると……

「やはり、貴方は避けますよね、慣れてるんですから」

真上から寒気を感じる程の綺麗で冷徹な声が入った。アレスはその声に反応し、咄嗟に真上を見上げた。

そこには……

「もう一人のイレギュラー、アレス・バーン。我が母が望まれたことです。死になさい」  
それは神の使徒だった。

「……やはり使徒ですか」

アレスは自分の予想が当たったことに舌打ちしながら歯噛みする。

「もう一人のイレギュラー……いや貴方はこちらの名の方が良いでしょうか “使徒殺し”」

「……………」

使徒の発言でアレスは無言だがその目は使徒を殺さんとする凄まじい目で睨みつけているとアレスはある事に気付いた。

「……おや、貴女の持つているもの……普通の双大剣ですね?」

「……どう言う意味です?」

「いえ、 “ネームド” なら持つてますからね。聖母神エクストラから授かった万能武器 “聖杭” がある筈ですが貴女にはない。なら、貴女はただの…… “量産型” ですね。私も舐められたものです」

溜息をするアレスの発言に使徒がピクつと反応した。そして、アレスが “聖杭”、 “量産型” という発言をした時の使徒の表情は……

「……早急に抹殺してあげましょう」

「やってみなさい……量産型」

更に冷めた冷酷な眼差しをアレスに向けながら使徒は物凄い速さで急降下する。アレスも使徒に向けてロングヌスを持って、駆けだした。

そして……

ガキイイインツ！

王都南方で凄まじい金属音が発生した。それは二つの大剣と聖槍がぶつかり合い発生した金属音だった。

「死になさいっ！」

最初に仕掛けたのは使徒だった。二つの武器がぶつかり合った後、双方、逆方向に飛ばされ使徒はその瞬間を無駄にせず銀翼をアレスへと飛ばしていく。

ビュンビュンビュンビュン！

死の銀翼が風を切ってアレス目掛けて飛んでゆくがアレスは分かったのようにロングヌスで飛んでくる銀翼を次々と破壊していく。

「貴女達の攻撃など当に知っている！次はコチラからいかせて貰う！——天翔閃・千撃ッ！」

アレスはそう叫びながら前回の飛連撃より更に多くの光の斬撃を飛ばしながら使徒

のもとへ駆け出した。

「くっ……多数の魔物と魔人族を相手をしたというのに、まだこんな力をつー！」

使徒はアレスは今までの戦闘により大分疲弊していると考えていたが、アレスが放った無数の斬撃に驚きのあまり目を見開いた。銀翼で分解をしていくが、少しばかり斬撃を喰らってしまい歯噛みする。

だが、使徒の驚きは続いた。

「此処ですよ」

「……！」

すぐ真横からアレスの声が聞こえた使徒は早急に方向転換し、視線を向けた其処にはいつの間にかアレスがいた。咄嗟に使徒は大剣でアレスを切り裂いた。

だが……

「なっ……まさか、幻覚?！」

「余所見はイケないなあつ——『衝魂』！」

ズドンッ!

「があっ!」

使徒は切り裂いたアレスは幻覚だった。幻覚が消える中、本物のアレスは使徒が方向転換した隙に背後に回り込んで防御無視の魔法『衝魂』を打ち込み、使徒にダメージを

与える。使徒は唐突の衝撃により受け身を取れず地面に落下した。

「……………（どういう事だ？　確か使徒達は記憶の共有をしてる筈）」

アレスは少し違和感を感じていた。使徒に見せたあの魔法は前に戦ったある使徒に見せ、その隙を見て致命傷を与えた過去がある。

魂魄魔法——“幻霊”……疑似魂魄を作り出して気配を飛ばし、敵を攪乱させる魔法だが、アレスは更に修練し、その疑似魂魄を少しだが喋らせるように出来ていた。「もしかして……………ああ、そういうことか“ネームド”じゃない使徒は……………“ネームド”の使徒の記憶は共有出来ない仕組みか）実力が違うだけで……………残酷ですね」

アレスは腕輪で魔力の回復をしながら考えている内にある結論に至った。そして納得して、量産型の使徒に少し同情してしまった。

ビュン！

「……………！」

ガキン！

アレスが魔力回復してる瞬間、一瞬で目の前に白い影が現れ双大剣を振りかざした。アレスも咄嗟の事だったがギリギリ防ぐ。

だが……………



ガキッ！

「グッ……！」

アレスは使徒の双大剣をロンギヌスで受け止めながら使徒の力が上昇してる事に気付く、使徒は無表情ながらも瞳には壮大な殺意を感じた。更に力が増しているのがわかる。

「…… “限界突破” ですか」

「ご名答です。流石は “ネームド” も撃退しただけがありますね」

アレスの疑問に使徒は声色は冷たいながらも答えた。

「…… “限界突破” か…… 使徒側はほぼ魔力は無限状態…… コチラも本気にならないといけない」

アレスと使徒の今の状況はまだ力が抗培しているがいずれ押し負けるとアレスは理解している。

ギチギチギチツ

「……グッ」

「ほら、押されてますよ？ 貴方もすれば良いのでは “限界突破” を特に貴方のは彼と同じで特別ですから勝てると思いますよ」

「……！ …… そういうことですか。私に使徒を差し向けた魂胆はっ」

アレスは使徒を差し向けたのは疲弊してる内に「ネームド」を殺し、他の相対した使徒を殺していった自分を殺せるチャンスの為に差し向けたと思っていたが本当の理由は……

「私の足止めですか……」

「ふふ、ご名答です。やはり貴方は強いだけじゃなく聡明でもありますね」

アレスは使徒の反応に歯噛みする。

「……………貴女達の上の神共は何を考えている？　王国に何をしようとする？」

「……………単なる余興だと」

「単なる余興、ですか……」

アレスは使徒の発言でこの魔族の王都侵攻もある余興の為だと言う。そんな事の為に王都の民、騎士達、王族が利用される。アレスにとって大事な妹分、尊敬する騎士団長、そして別れは酷かったが今にも大切に思う彼女。

そんな人達がたかが余興の為に血を流すことになると思うとプツンとアレスの頭の何かが切れた。

「そうですか……やっぱりお前達神共はゴミだ」

「……………その発言を撤回しなさい」

アレスの眩きに反応した使徒は眉を顰めた。しかし、アレスは撤回することなく使徒

を見つめる。

ゾワツ

「！」

使徒は普通は感じない感じることではない。しかし、何故か今は感じてしまった寒気を悪寒を恐怖を……そのせいかわれが震えている。そんな使徒を無視してアレスは使徒を睨んだと同時に口を開いた。

「余興でもぶつ壊してやりますよ。私達は貴様等、神の駒じゃないことをつ——」  
三限界・突破——」

アレスはそう叫んだ瞬間、アレスの周りに明るい橙の魔力が爆発しているように纏いだした。

第・限界突破——この限界突破は初代魂魄魔法の遣い手ラウス・バーンが使っていた限界突破。普通との違いは自身の魂魄を強制的に能力を引き上げ、例え限界突破を持っていなくても発動可能にし、更に段階を上げることで限界突破の派生「覇潰」を超える程まで引き上げられる。

「やつと、本気を出しましたかつ」

使徒は腕の震えは止まらないが、無視してアレスが限界突破を発動を確認したと同時に駆け出す、目の前にいた筈のアレスの姿が消えた……いや、捉える事が出来なかつ

た。

「なっ……何処……「此処ですよ、衝魂」……ガハッ！」

アレスはいつの間にか使徒の背後に回っており、「衝魂」を発動した。更に限界突破した分更に威力が跳ね上がっているため使徒は一瞬意識を飛びかけてしまう。しかし、流石は使徒と言うべきか

「くっ、このまま負けてたまるものですかっ！」

ビュンビュンビュンビュンビュンビュン！

使徒は負けじと無数の銀翼を飛ばす。しかしアレスは銀翼が全て見えているかのようになんげと避けていく。

「貴女達は単純なんですよっ！「ネームド」と違って！」

「姉様達の事を口に出すなあ！」

アレスは銀翼を避けながら使徒と「ネームド」を比較する。それがいけなかったのかタブーなのか使徒の顔は何時ももの無表情とは違い怒りに染まっていた。

「死ねえっ！」

ガキイイイイイーン！

使徒は怒りの余り双大剣をクロスにしながらアレスへと突貫する。アレスもロングノスを手持って同じように突貫した。銀の閃光と橙の閃光が激しい金属音を立てな

がらぶつかり合い交差していく。そのぶつかり合いは段々激しさを増していくつ。

「アレス・バアアアアン！」

使徒が一之大剣をアレスに振りかざす。

「神共の木偶があああああ！」

アレスがロンギヌスを横に振るう。

ガキイイイイイイイイイイイイイイイイ！

この戦いで一番大きい金属同士のぶつかり合いの音が猛々しく響き渡る。

そして……

パキッ、ピキンッ

「なっ?!」

先に限界を迎えたのは……

パリンッ！

使徒の方だった。それは使徒の双大剣はアレスのロンギヌスのぶつかり合いの結果、耐久が限界を迎え、半ばから折れ破壊されてしまった。

そして……

「聖槍—— 抜錨——！」

そんな使徒にとつて不味い状況を見逃すアレスではなかった。アレスは使徒の武器



「早く……ハジメ殿達と合流を」

その男の名は、アレス・バーン。

元 王国最強の神官である……。

## 六十七話

## シアの無双と密談

王都内、外ではアレスが魔物達の侵攻を抑えてる中、シアはユエの案でワザとユエから離れ、フリードの傍にいた魔人族達もフリードと引き離す為にゲートに入った。

「そのヘラヘラと笑った顔、虫酸が走る。四肢を引きちぎって、貴様の男の前に引きずって行つてやろう」

ゲートを抜けた先で、相対する魔人族の第一声がそれだった。どうも他の魔人族と違って、個人的な恨みあるようだと察したシアは、訝しそうに眉をしかめて尋ねてみる。

「……どこかで会いました？ そんな眼を向けられる覚えがないんですが？」  
「ウルのことを覚えてるだろ？」

シアは、なぜそこでウルの話が出てくるのか分からず首を捻る。しかし、魔人族の男は、それを覚えていないという意味でとつたのか、ギリツと歯を食いしばり、怨嗟の籠った声で追加の情報を告げながらマントで分からなかったが片方の腕が肘から無くなっていった。

「こんな腕にしたのにかっ！俺が『神の使徒』の一人を操り、最後に貴様等に向かつて



攻撃した魔人族だあ！」

「……………ああ！ あの時の人ですか」

「きぎまあ〜」

明らかに今の今まで忘れてましたという様子のシアに、既に怒りのせいで呂律すら怪しくなっている男は、僅かな詠唱だけで風の刃を無数に放った。それを、何でもないうにひよいひよいと避けるシア。

「ちよつと、それだけで恨むのは意味が分からないです」

「なあっ?! 貴様等のせいであつ片腕を失い、ウル作戦を失敗したせいで私の階位キャリアも下がったんだぞっ！」

「! ああ、なるほど……………」

シアは得心したように頷いた。

どうやら目の前の男は、ウルで自分達に愛子の殺害とウル破壊を邪魔された挙句、ハジメに片腕を吹っ飛ばされた魔人族の男らしい。どうやらあの一件で片腕も失い、随分良い身分だったのだろう。その身分が下がったらしく、こんな事をした元凶のハジメに対して復讐に燃えているようだ。

「よくも、俺の築き上げて来た階位キャリアを…………この俺、ミハイル・カイザーの出世の道を…………もう少しで軍曹に就くことが確定だったのに……………」

血走った目で恨みを吐く男、改めミハイルに、シアは普段の明るさが嘘のような冷たい表情となつて、実にあっさりした言葉で返した。

「知りませんよ、そんな事」

「な、なんだと!」

「いや、ただ単に自業自得でしょ?」

それにその腕だつて変にハジメさんを怒らせた

からですし……」

「う、うるさい、うるさい、うるさい! 苦痛に狂うまでいたぶつてから殺してやる!」

ミハイルは痲癩を起こしたように喚きたてると、大黒鷲を高速で飛行させながら再び竜巻を発生させてシアに突っ込んで来た。どうやら、竜巻はミハイルの魔法で大黒鷲の固有能力ではないらしい。騎乗のミハイルが更に詠唱すると、竜巻から風刃が無数に飛び出して、シアの退路を塞ごうとする。

シアはドリユッケンを振るつて風の刃を蹴散らすと、そのまま体重を軽くして円盤を足場に大跳躍し、竜巻を纏う大黒鷲を避けた。しかし、避けた先には、ミハイルとシアが話している間に集まってきた魔族と黒鷲の部隊がいた。ミハイルの騎乗しているのが大黒鷲であることから、彼の部下なのかもしれないと判断した。

すると、シアより上空にいた黒鷲部隊は、石の針を一齐に射出した。それはまさに篠突く雨のよう。シアは、炸裂スラッグ弾を撃ち放ち衝撃波で針の雨を蹴散らす。

そして、空いた弾幕の隙間に飛び込んで上空の黒鷲の一体に肉薄した。ギョツとする魔人族を尻目に、ドリユツケンを遠慮容赦一切なく振り抜く。直撃を受けた魔人族は、骨もろとも内臓を粉碎させながら吹き飛び夜闇の中へと消えていった。

シアは更に、勢いそのままに柄を伸長させて、離れた場所にいた黒鷲と魔人族も粉碎する。

「くっ、接近戦をするな！ 空は我々の領域だ！ 遠距離から魔法と石針で波状攻撃しろ！」

まるでピンボールのように吹き飛んでいく仲間には、接近戦は無理だと判断したミハイは、遠方からの攻撃を指示する。再び、四方八方から飛んできた魔法と石の針を激発による反動と円盤を足場にした連続跳躍で華麗に避け続けるシア。しかし、中距離以下には決して近づかず、シアが接近しようものなら全力で距離をとる戦い方に、シアは次第に苛つき始める。

「ちよつと面倒くさくなつたので、新武装を使いわせて貰いますよぉ〜」

そして、炸裂スラッグ弾だけでは手が足りないかと判断し、シアはこの場に似合わない喋り方で新ギミックを“宝物庫”から取り出した。

それは赤い金属球だ。大きさは直径二メートルほどで金属球の一部から鎖が伸びており、シアはその鎖の先をドリユツケンの天辺についた金具に取り付けた。そして、重

力に引かれて落ちかけた金属球を足で蹴り上げると、大きく水平に振りかぶったドリユッケンをシアラ「そくれ」と眩きながらその金属球に叩きつけた。

ガギンツ!!

金属同士がぶつかる轟音と共に、信じられない速度で金属球が打ち出される。

標的にされた魔族は慌てて回避しようとするが、突然、金属球の側面が激発し軌道が捻じ曲がった。その動きに対応できなかった魔族と黒鷲は、総重量十トンまで加重された金属球に衝突され、全身の骨を砕かれながら一瞬でその命を夜空に散らすことになった。

敵を屠った金属球は、シアがドリユッケンを振るう事で鎖が引かれ一気に手元に戻ってくる。シアは、その間にも炸裂スラッグ弾を連発し、敵を牽制、あるいは撃ち滅ぼしていく。そして、戻ってきた金属球を再びぶつ叩き、別の標的に向けて弾き飛ばした。

そう、ドリユッケンの新ギミックとは、重量変化と軌道変更用ショットシエルが内蔵された「剣玉」であった

「うりやりやりりやりりや!」

シアが、そんな雄叫びをあげながら王都の夜空に赤い剣玉を奔らせ続ける。ぶつ飛ばしては引き戻し、またぶつ飛ばしては引き戻す。赤い流星となつて夜天を不規則に駆け巡る「剣玉」は、自身の赤だけでなく敵の血肉で赤く染まり始めた。

「おのれつ、奇怪な技を！ 上だ！ 範囲外の天頂から攻撃しろ！」

ミハイルが次々と殺られていく部下達の姿に唇を噛み締めながら指示を出し、自身は足止めのために旋回しながら牽制の魔法を連発する。シアは、それらの攻撃を重さを感じさせない跳躍で宙を舞うように軽く避けていく。

そうして、最後の一撃を避けた直後、頭上より範囲攻撃魔法が壁のごとく降り注いだ。シアは、ドリユツケンを頭上に掲げると柄の中央を握ってグルグルと回し始める。すると、回転の遠心力によって鎖で繋がった金属球も一緒に大回転を始めた。猛烈な勢いで超高速回転するドリユツケンと剣玉は、赤い色で縁取った即席のラウンドシールドとなり、頭上から降り注いだ強力無比な複合魔法を吹き散らしていった。

「もらったぞー！」

頭上からの攻撃を防ぐことに手一杯と判断したミハイルが、シアに突撃する。大黒鷲の桁外れな量の石針を風系攻撃魔法「砲皇」に乗せて接近しながら放った。局所的な嵐が唸りを上げてシアに急迫する。

「むうっ」

シアは、自由落下に任せて一気に高度を落とし、風の砲撃を避けた。ミハイルは予想通りだと口元を歪め、回避直後の落下してきた瞬間を狙って再度、風の刃を放とうとした。しかし、標的を見据えるミハイルの目には、絶望に歪むシアの表情ではなく、虚空

から現れた拳大の鉄球がシアの足元に落ちる光景が映っていた。

シアは、「宝物庫」から取り出した鉄球を最大強化した脚力を以て蹴り飛ばす。豪速で弾き出された鉄球は、狙い違わずミハイルの乗る大黒鷲に直撃しベギョ！ と生々しい音を立ててめり込んだ。

クウエエエエエエ!!!

激痛と衝撃に大黒鷲が悲鳴を上げ錐揉みしながら落下する。ミハイルもまた、悪態を吐きなが苦し紛れに石針を内包させた風の砲弾を放ち、大黒鷲と一緒に落ちていった。

ようやく頭上からの魔法攻撃を凌ぎ切ったシアは、迫る風の砲弾をギリギリ、ドリユッケンで弾き飛ばす。しかし、内包された石の針までは完全には防げず、いくつかの針が肩や腕に突き刺ってしまった。

「やったぞー！ コートリスの石針が刺さっているー！」

「これで終わりだー！」

石の針自体はそれほど大きなダメージではないのに、シアが石針を喰らった事で魔族達が一様に喜色を浮かべている。

「ん？ どういうことですか……！」

シアはその事に怪訝そうな表情をするがその疑問の答えは直ぐに出た。針の刺さった部分から徐々に石化が始まったのだ。どうやら、黒鷲はコートリスという名の魔物ら

しく、その固有魔法は石化の石針を無数に飛ばすことが出来るらしい。

普通は、状態異常を解くために特定の薬を使うか、光系の回復魔法で浄化をしなければならぬ。今、この戦場にはシア一人なので、これで終わりだと魔族達は思ったのだろう。仮に薬の類を持っていても服用させる隙など与えず攻撃し続ければ、そうかからずに石化出来るからだ。

しかし、彼等の勝利を確信した表情は次の瞬間、啞然としたものに変わり、そして最終的に絶望へと変わった。

なぜなら……

「むむっ、不覚です。しかし、これくらいなら！」

そう言つて、シアは刺さった針を抜き捨てると、少し集中するように目を細めた。すると、一拍おいて、じわじわと広がっていた石化がピタリと止まり、次いで、潮が引くように石化した部分が元の肌色を取り戻していった。そして、最終的には、針が刺さった傷口も塞がり、何事もなかったかのような無傷の状態に戻ってしまった。

「な、なんで！」

「どうなってるんだ！」

回復魔法が使われた気配も、薬を使った素振りも見せず、ただ少しの集中により体の傷どころか石化すら治癒してしまったシアに、魔族達は、その表情に恐怖を浮かべ始

めた。それは理解できない未知への恐怖だ。声も狼狽して震えている。

シアの傷が治ったのは、どうということもない。ただ再生魔法を使っただけである。相変わらず、適性は悲しい程になく、自分の体の傷や状態異常を癒すくらいしか出来ない。

ユエの「自動再生」のように欠損した部分が再生したり、瞬時に重症でも治せたり、自動で発動したりもしない。外部の何かを再生することも出来ない。だが、多少の傷や単純な骨折、進行の遅い状態異常なら少し集中するだけで数秒あれば癒すことが出来る。時間をかければある程度の重症でも大丈夫だ。

魔人族達が絶望するのも仕方ないことだろう。圧倒的な破壊力に回復機能まであるのだから、攻略方法が思いつかない。シアを見る目が、かつてハジメと対した者達が彼を見る目と同じになっている。すなわち、この化け物めっ！と。

「さあ、行きますよ？」

狼狽えて硬直する魔人族達の眼前にシアがドリユツケンを振りかぶった状態で飛び上がってくる。そして、一撃必殺！と振るわれた一撃で、また一人、魔人族が絶命した。その瞬間、残りの魔人族が恐慌を来たように意味不明な叫び声を上げて、連携も何もなくがむしやりに特攻を仕掛けていった。

シアは冷静に剣玉を振り回しながら、あるいは炸裂スラッグ弾を撃ちながら確実に仕



留めて数を減らしていく。

いよいよミハイル部隊の最後の一人がドリユツケンの餌食となったその時、急に月明かりが遮られ影が一带を覆った。

シアが上を仰ぎ見れば、暗雲を背後に、上空からミハイルが降って来るところだった。大黒鷲も限界のようで、上空からの急降下しかまともな攻撃が出来なかつたのだろう。

「天より降り注ぐ無数の雷、避けられるものなら避けてみる！」

おそらく、確実に仕留めるために、雷に打たれた瞬間に刺し違える覚悟で特攻する気なのだろう。いくら細分化して威力が弱まっている上に、シアが超人的とは言え、落雷に打たれば少なくとも硬直は免れない。

そして雷の落ちる速度は秒速百五十キロメートル。認識して避けるなど不可能だ。ミハイルの眼にも、部下が殺られていく中ひたすら耐えて詠唱し放った渾身の魔法故に、今度こそ仕留める！ という強靱な意志が見て取れる。

しかし、直後、ミハイルは信じられない光景を見ることになった。なんと、シアが降り注ぐ落雷を避けているのだ。いや、正確には最初から当たらない場所がわかっているかのように、落雷が落ちる前に移動しているのである。

ミハイルの誤算。それは、シアには認識できなくても避ける術があつたこと。

シアの固有魔法 “未来視” “未来視” “その新たな派生 “天啓視””。最大二秒先の未来を任意で

見ることが出来る。『仮定未来』の劣化版のような能力だが、それより魔力を消費しないので、何度か連発できる使い勝手のいい能力だ。日々、鍛錬を続けてきたシアの努力の賜物である。

「ハジメさんの雷の方が速いですう〜」

「何なんだ、何なんだ貴様は！」

「……ただのウサミミ少女です」

自分でも余り信じていない返しをしながら、全ての落雷を避けたシアは、当然、突撃してきたミハイルもあっさりかわし、すれ違い様に剣玉を振るった。

そして、大きく円を描いてミハイルの周囲を旋回した剣玉は、その鎖をミハイルに巻き付かせて一瞬で拘束してしまった。

「ぬぐおお！ 離せえー！」

「放しますよお、お望み通りいー！」

シアは、鎖に囚われたミハイルをドリユツケンを振るうことで更に振り回し、遠心力がたつぷり乗ったところで地面に向かって解放した。重量級の鉄塊が振り回されることで生み出された遠心力は凄まじく、ミハイルは、隕石の落下もかくやという勢いで地面に叩きつけられた。

咄嗟に、風の障壁を張って即死だけは免れたようだが、全身の骨が砕けているのか微

動だにせず仰向けに横たわり、口からはゴボツゴボツと血を吐いている。

シアは、その傍らに降り立った。

ドリユツケンを肩に担いで、ツカツカとミハイルに歩み寄る。ミハイルは、朦朧とする意識を何とかつなぎ止めながら、虚ろな瞳をシアに向けた。その口元には、仇を討てなかつた自分の不甲斐なさにか、あるいは、百人近い部下と共に全滅させられたという有り得ない事態にか、ミハイル自身にも分からない自嘲気味の笑みが浮かんでいた。ここまで完膚なきまでに叩きのめされれば、もう、笑うしかないという心境なのかもしれない。

自分を見下ろすシアに、ミハイルは己の最後を悟り、自分をこんな目にした元凶を恨みつつ、掠れる声で最後に悪態をついた。

「……………ほっ、このっ……………げほっ……………化け物めっ！」

「ふふ、有難うございます！」

ミハイル最後の口撃は、むしろシアを喜ばせただけらしい。

最後に、己の頭に振り下ろされた大槌の打撃面を見ながら、ミハイルは衝撃と共に意識を闇に落とした。

止めを刺したドリユツケンを担ぎ上げながら、シアは、ミハイルの最後の言葉に頬を緩める。

「どうやら、ようやく私も、化け物と呼ばれる程度には強くなれたようですね……ふふ、ハジメさん達に少しは近づけたみたいです。さて、アレスさんとユエさんの方は……」

「シア！」

「うひゃっ！」

シアはユエとアレスはどうなったのかと考えながらどつちかの方に向かおうとした時、ユエからの唐突な念話で驚きで変な声を上げる

「ユエさん、どうしましたか？ フリードとはどうでした？」

「そんな事より早く王宮の方に向かって！ 私も今向かってる最中だからっ」

「え？ どういう事です？」

「優花が危ないっ！」

「……っ?! 分かりました私も今から向かいますっ！」

「ん……急いでっ！」

「一体何が……って考えるよりも行動ですう！」

シアは、ユエの念話に焦燥感を感じ疑問に思ったが「優花が危ない」の一言でシアは血相を変え、ユエと合流すべく一気に駆け出したのだった。

~~~~~

シアを離れさせたユエは目の前にいる白竜に乗った魔人族将軍フリード・ハグアーと視線を交わしていた。

「君達とは、ちゃんと話がしたかった」

パチンツ

「！」

先に口を開いたのはフリードの方だった。そしてフリードは口を開くと同時に指を鳴らす。その瞬間、ユエとフリードの周りに深い霧が二人を隠すかのように覆い込んだ。

「……何をしたの？」

ユエはフリードの行動に、訝しみながら目を細めるがフリードは両手を上げており戦う意思は無いと分かる。

「安心してくれ。コレは私の作ったある特殊な魔物でね。幻覚作用の霧をだす固有魔法を持つ魔物だ。今、周りからは私と君が戦っている幻覚を見せている。後、少し君に頼みがある」

「……頼み？」

ユエはフリードの頼みに少し警戒しつつ耳を傾ける。

「ああ、今下にいる。魔物達に向けて強大な魔法を放つてくれないか？ 安心してくれ、魔力回復薬も渡しておこう」

フリードはそう言つて、懐から魔力回復薬の瓶を取り出しユエに投げ渡した。ユエはフリードから貰つた。魔力回復薬を上手くキャッチしてから首を傾げる。

「……何故？」

「今さつきも言つたが、この霧は幻覚作用ある。でも、それだけだ。魔法の幻覚を見せても外部には影響はなくてな。もしかしたら救援に来た部下が来てしまつたら訝しむかもしれない」

「……そういうことなら」

ユエはフリードの言い分に理解し、今自分が出せる全力の魔法を放つた。

「——『五天龍』」

直後、二人の下から暗雲が立ち込め雷鳴が轟き、渦巻く風が竜巻となつて吹き荒れ、集う水流が冷気を帯びて凍りつき、灰色の砂煙が大蛇雲の如く棚引いて形を成し、蒼き殲滅の炎が大气すら焦がしながら圧縮される。

その結果、王都の夜天に出現したのは五体の魔龍。それぞれ、別の属性を持ち、重力魔法と複合された龍である。

ゴオアアアアアア!!!

凄まじい咆哮が五体の龍から発せられ、大気をビリビリと震わせる。巨体を誇り神々しくすらある魔龍の群れに、灰竜達は本能が己の上位者であるとも悟ったのか、怯えたように小さく情けない鳴き声を上げた。

雷龍が最初にアブソドに突撃し、アブソドも喰らい尽くしてやろうと大口を開ける。僅かばかり取り込まれる雷龍だったが、雷龍の後ろから飛び出した蒼龍が、その業火を以て相対するアブソドを融解させていった。

「クアアアアアアアアン!!」

生きたまま甲羅から溶かされていく苦痛に、堪らず苦痛の声を上げて固有魔法を解いてしまったアブソドを放置して、雷龍は次の標的を狙う。それは嵐龍を呑み込もうとしている別のアブソドだ。神鳴る音を響かせながら雷龍の顎門がアブソドに喰らいつき、その灼熱によって身の端から灰に変えていった。

また、少し離れたところでは、氷龍がアブソドを凍てつかせ、石龍が周囲一帯を根こそぎ巻き込んで石化させていく。雷龍により解放された嵐龍は、身の内に蓄えた風の刃でアブソド以外の黒豹などの魔物共も一緒くたに切り刻んでいった。

「——凄まじいな。でも、これで救援に来る者は居ないだろう……って、大丈夫なのか？ 顔色が悪いぞ？」

「……ん、平気」

フリードはユエの魔法に目を見開き感嘆した。そして視線を向けると、流星に、五天龍の行使はキツかったのか、額に大量の汗を浮かべて肩で息をするユエを見て、声をかけるがユエは「……平気」と言いながらフリードに貫った魔力回復薬を飲み、しばらくすると顔色は徐々に戻っていった。

「それにしても、素晴らしい魔法だえっと」「ユエ」……ユエ」

「……でも、良いの？ 貴方の魔物でしょ、アレ」

ユエは首を傾げながら自分が倒していった魔物達の残骸を指さす。しかしフリードは肩を竦めながら口を開いた。

「安心してくれたまえ。あの魔物達はアルヴに献上する為に創り出した魔物に過ぎない。簡単に言えば実験、お遊び程度で創ったような魔物だ。私が本気で創り出した魔物は、この私の相棒であるウラノスと私の信頼できる部下達と隠し部屋にいる魔物達だけだ」

そう言いながら、フリードは笑みを浮かべて、今も乗っている相棒のウラノスを撫でる。すると、ウラノスも方も「クルアアン」と嬉しそうに鳴いていた。

「……（嘘……アレをお遊びで……）」

しかし、ユエの方はフリードの言葉に驚いていた。あの魔物達はハジメの言い分によるとオルクスの奈落の下層魔物達と実力は変わりないという。そうになると、フリードが



本気で創り出した魔物達はどれくらいの強さを持つてるのかと息を呑む。

ユエは驚愕の余り言葉が出ないでいると、フリードが話しかける。

「そうだ。今、南雲ハジメと他の貴女の仲間達が此処に居ないのが惜しいが、ここで改めて名乗らせてくれ。私の名はフリード・バグアー。解放者の意思を引き継ぎ、人間、亜人、魔族が平等に手を取り合える未来を創る事を目的にしている者だ」

フリードはこの場にハジメ達が居ないのを惜しみながらも淡々と「グリューエン大火山」とは違った自己紹介をする。これがフリードの素らしい。

「……やっぱり（やっぱり、フリードはハジメが言ってたように味方だったんだ……でも）」

フリードの二度目の自己紹介でユエはフリードは自分達の味方であると確信した。だがユエにはある心残りがあり口にする。

「……なんで、ハジメをあんなに傷付けたの？」

ユエはフリードが味方だとわかったが、グリューエンの件で大切な人が死にそうになつた事で何故そこまでしたのかを目を細めながら理由を聞く。

「グリューエンの件は済まない。私は外に出向く度にアルヴの指示で監視型の神獣を着けられているんだ。その為、下手な行動が出来なかつたのが最大の理由だ」

「最大の理由……他に理由があるの？ねえ？」

フリードは頭を下げ謝罪をしたが、彼の言葉の中に最大の理由という事にユエは引っかけ、更に問い詰める。

「……怒らないか？」

フリードは少し冷や汗を流しながらユエに問いかけるとユエはうんうんと頷くだけだ。

「……ん、怒らないから」

フリードはユエの視点を入れないように顔を逸らしながらボソツ話しだす。

「……実力を確かめたかった。戦ってみたかった。そして戦って、久しぶりに強者との戦いが楽しくて……つい」

「……怒るよ？」

フリードのもう一つの理由は、ただ単に戦いたかったということにユエは冷酷な眼差しでフリードを睨み付ける。よく見れば片方の手の平から雷魔法を発動しようする。

「す、すまない。魔法だけはやめてくれっ」

「……ん、冗談だから」

フリードは慌てて謝るとユエは冗談と言って雷魔法を解除する。フリードはそれを見て安堵する。

「冗談か……心臓に悪い。まあ、君達と話せる機会が出来て良かったよ」

「……ん、私も……あつ、そうだ。ハジメがフリードが味方だと判断したらコレを渡せつて」

ユエはそう言いながら懐からある小切手をフリードの傍まで寄つて渡した。

「ふむ。これは……座標か？」

フリードはユエから受け取つた小切手の内容を見て、何処かの座標と判断する。すると、ユエはフリードの言葉に頷きながら答える。

「……ん、そこにはミレディ・ライセンの大迷宮の場所の座標が書かれてる」

ユエの言葉にフリードは目を見開いて驚愕する。

「！　良いのかっ?!　　こんな代物を？」

「……ん、ハジメからの伝言『親友の件はすまない』つてそれはそのお詫びみたいなモノらしい」

「——感謝する」

フリードはそう言いながら貰つた小切手を大事そうに握りしめた。

「そろそろ……霧が晴れるな……ユエ殿。そろそろ……ん？……少し待つてくれ、部下からの連絡だ」

フリードはそろそろ霧が晴れる時間が来る為、ユエをそのまま戻そうとした時だった。『念話』の固有魔法を持つた連絡用魔物から連絡がかかる

「——は？ 何だどっ?!」

「……………! どうしたの?」

フリードは部下と連絡していると、何か重要なことを報告されたのか大声を上げる。ユエはその声に驚いたものもすぐさま何があったかフリードに問い掛けた。

「ユエっ、貴女は早く王宮の方へ!」

「……………どう言う事?」

フリードの突然の焦り具合にユエは真剣な表情になりながら耳を傾ける。

「部下からの連絡でアル魔族を支配する者ヴがコチラに向かっていると連絡が入った!」

「!」

「目的は協力者の保護の為らしい……………そろそろ私にも連絡が来るだろう。ユエは急いで

王宮へっ!」

「……………ん! (王宮……………優花がつ)」

フリードの報告でユエは王宮にいる大事な仲間がいるのを思い出し、すぐさま駆け出したのだった……………。

## 六十八話

## 神の使徒

## ノイント

月下に銀翼がはためいた。

だが、それは飛翔のためではない。その銀翼から殺意をたつぷり乗せた銀羽の魔弾を射出するためだ。恐るべき連射性と威力を秘めた銀の魔弾は、標高八千メートルの夜闇を切り裂き、数多の閃光となって標的に殺到する。

それに対するは、紅色のスパークを迸らせる鋼鉄の兵器。あらゆる敵を粉碎してきた怪物が咆哮を上げる度に、飛来する銀羽は無残に飛び散り四散する。計算され尽くした弾道が、たった一発で幾枚も羽を蹴散らし、壁と見紛うほどの弾幕に穴を開ける。必要なのは踏み込む勇氣。それこそが、完璧な回避を実現する。

「ひゃああー！」

お互いの命をベツトした死合に似つかわしくない可愛らしい悲鳴が響いた。場違いな声を我慢しきれず出してしまったのは畑山愛子先生だ。ハジメのメツエライもかくやという銀羽の弾幕を撃ち放つ。神の使徒。ノイントの攻撃を、紙一重で回避し続けるハジメの片腕に抱かれながら、人生初のドッグファイトを経験中なのである。

「先生！口は閉じてろ！噛みまくって血だらけになるぞ！」

「そんなこと言ってみよッ!? か、かんじやった……」

「チツ……」

ハジメは今この状況の自分の不利に対して舌打ちしながら打開策を張り巡らさせていた。流石に愛子を抱えている状態で激しく動くことは出来ないハジメは、今は「瞬光」で何とかなってるがずっと持つかは分からず、コチラに向かうテイオを待つしかなかった。

ハジメは頼もしい仲間が救援に来ることを願い、再び全方位から包み込むように強襲してきた銀羽をシユラークで撃ち抜き回避しながら、ギユツと目を瞑ってしがみついている愛子に話しかける。

「先生、もう少し頑張れ。今、俺の仲間がこつちに向かっている。そいつが来れば地上に降りられるぞ」

「は、はい！ で、でも南雲君は?」

「もちろん、あの木偶をぶつ殺す」

「うう、足手纏いですみません……」

「……」

愛子は自分がお荷物になっていることを自覚しているためハジメに抱きつきながら

も自分の弱さに齒噛みする愛子をハジメはジツと見ていた。

「……っ！ 先生っ！ つかまっつけよ！」

「ふえ？」

悪寒が背筋に走り咄嗟にハジメは愛子を見ながらギュッと抱きしめて宙返りをする。すると頭上を銀色の砲撃が通り過ぎた。最初に、愛子が幽閉されていた隔離塔の上部を消し飛ばした閃光だ。

「それより気にすんな。元より、多少の無茶をするのは想定内だ。しかし『ネームド』が仕掛けてくんのは予想外だったが……」

「… あ、ありがとうございます……」

ハジメは悔しがってる愛子を励ましと安心させる為に話しかける。

ハジメも救出と神代魔法を修得するために教会側と衝突するのは想定内はしていたが神の使徒自体それも『ネームド』が出張るなんて想定外過ぎていた。アレスの話だと『ネームド』はアイツ等にとつての『母』エクストラの指示に従って動き、個々での実力も高いらしく、余程の事態しか動かないと聞いていた。

即ち、ハジメ達は、ネームドが出張るほどの危険な存在ということ。

「……雑談とは余裕ですね、イレギュラー」

「ぬぐおおっ！」

銀色の砲撃と銀羽の弾幕をかわした直後、ハジメのすぐ傍で機械的で冷たい声音が響く。咄嗟に義手の肘から散弾を背後に向かって放ちつつ、その激発の反動を利用して反転する。その目に飛び込んできたのは、ガントレットから出した双大剣の片方を盾にして散弾を防ぎつつ、もう一方の大剣を横殴りに振るうノイントの姿だった。

銀光を纏う長さ二メートル幅三十センチの大剣は、そこにあるだけで凄まじい威圧感を放ち、その宿した能力も凶悪だ。なにせノイントが操る銀の魔力は全て固有魔法“分解”が付与されているのだから。触れるだけで攻撃になるなど反則とも言っている。しかし、そうは分かっているにもかかわらず、愛子がいる以上無茶な動きは出来ず、ハジメは咄嗟にシユラークを迫り来る大剣の腹に当てて軌道を逸らしつつ、自らは背中から倒れ込むように落下して、ギリギリ回避した。前髪をチリツと掠めながら大剣が通り過ぎ、冷や汗が吹き出る。

数瞬くらいならシユラークや義手でも“金剛”とアザンチウムの結合力が“分解”に抗って攻撃を防いでくれるが、受ける度に傷を負ってしまうのは避けられないだろう。今回も、わずかにシユラークの表面が削れてしまった。何度も同じことをしていれば、そう遠くない内に破壊されてしまう。

「……………なっ！」

仰向けになりながら思考を張り巡らせてるハジメにノイントは、振るった大剣の遠心



力に逆らわず、月光を反射してキラキラと煌く美しい銀髪を広げながら回転し、散弾を防いだ方の大剣を振り下ろした。途轍もない臂力から生み出された剣速は、もはやただの銀閃であり視認することも叶わない。

ハジメは再び義手のショットシエルを激発させ、反動で横回転しながら大剣をかわしつつ、シユラークの銃口をノイントに向けて、三度、引き金を引いた。轟音と共に三条の閃光がノイントの頭部、心臓、腹部に向かって正確に撃ち込む。

しかし、ノイントの反応速度も尋常ではない。ハジメが銃口を向けた瞬間には大剣を縦にかざしてその剣の腹で全て受け止めてしまう。ハジメは距離を取ることに思考を切り替えた。

「クロス・ビットオー！」

ハジメはレールガンの威力に押されて距離を離れたノイントにクロスビットによる追撃をかける。装填された炸裂スラッグ弾が、紅色の波紋を夜空に波打たせながら、凄まじい衝撃をばら撒くが、ノイントは、その衝撃も、あっさり背中の銀翼で打ち消してしまうが、ハジメの目論見通り、距離を取ることは成功した。

「はわ、はわわ……何が、どうなって……」

「……先生。頼むから殺し合いの最中に、変に声出さないでくれ。何か気が抜けちまう」

「変って……南雲君！せ、先生相手に何を言って……」

やっていることはコンマ数秒で勝敗が決してしまふような息つまる超高等戦闘だというのに、合間に入る愛子の悲鳴にハジメの氣勢がガリガリ削られていた。「この人案外余裕なんじゃなからうな？」と胡乱な眼差しを向けた。

「……足でまといを抱えて尚、これだけ凌ぐなど……やはり、あなたは強すぎる。主にとってでは喜ばしいと思いますが……我が母にとっては貴方は危険過ぎる存在です」

「そりや嬉しい。クソ神共に褒められたって何も嬉しくないが……礼は言つてやるよ。どうも、ありがとう」

「……私を怒らせる策なら無駄です。私に感情はありません」

「は？ 何言つてんだ？ 紛う事なき本心に決まつてるだろ？」

「……」

ハジメの侮辱にノイントは、スツと目を細めると大きく銀翼を広げ、今まで使わず、周りに浮かばせてるだけだった銀の魔力を纏う二つの「柱」を構えだした。

果たして本当に感情がなく、ただ無駄な会話をしたと仕切り直しただけなのかハジメの目には、どこか怒りを抱いているように見えたが、そんな事は考えるだけ無駄な事だとすぐさま切り捨てた。どうせ殺すのだ。ノイントが何を考えていようと、何を感じていようと、どうでもいい。ハジメは神共を殺すだけだ。とハジメは構えをとってノイントを睨む。

すると、ノイントが再び銀翼をはためかせながら片手を天に掲げる。それと同時に浮かぶだけだった柱がノイントの手の動きに合わせてかのように動き出した。

そして……

「聖杭起動——『聖槍顕現』」

ノイントの冷たく凍てつくような声に反応して柱が変化していき、二つの柱が槍の形に変形していく。その神秘的な光景にハジメは、足が止まってしまう。

「なっ……」

ハジメが唾然とした束の間、ノイントは顕現させた聖槍を二つをハジメに目掛けて飛ばしてきた。その速さはハジメでもギリギリで捉える程の速さだった。

「?!、ぐうっ……」

「南雲君?!」

飛んで来た聖槍がいつの間にかハジメの目の前に迫っており、ハジメは咄嗟に愛子を庇うように避けたが背中に多少の傷を負い、苦悶の声を上げる。

「大丈夫だ。先……『劫火浪』……っ!」

ノイントは銀羽を宙にばら撒くいており、ノイントの前方に一瞬で集まると、何枚もの銀羽が重なって魔法陣を形成しており、ハジメが心配の声を上げる先生に何か言おうとした矢先、魔法を発動させた。

発動された魔法は、天空を焦がす津波の如き大火。

「チツ……！」

魔弾だけでなく属性魔法も使えんのかよつ、とハジメは内心悪態をつく。ノイントは今まで魔法も今さっきの柱を使ってこなかったのは、単純に銀の魔弾だけで十分だと判断していたためだろう。つまり、本気になったということだ。ハジメは今までノイントは本気じゃなかった事を知り、苛立ち舌打ちする。

「見つかるかどうか分かんねえが……」

うねりを上げて頭上より覆い尽くすように迫る熱量、展開規模共に桁外れの大火に、先生は戸惑いだが無視し、俺は頬に汗を流しながら必死に魔法の核を探す。

しかし、ノイントの発動した魔法は超広範囲魔法であり、「神山」全体を昼と見紛うほどに照らす大規模なもの。大海に落ちた針を一本探すが如く、核の位置は判然できない。

そして、容赦なく訪れるタイムリミット。

「まだ試作段階だが……」

数百メートルに及んだ炎の津波は、ハジメと愛子を逃がすことなく完全に呑み込む前にハジメはクロス・ビットのある新ギミックを発動させた。

「……これも凌ぐのですか」

ノイントがそう眩いた直後、術の効果が終わり、大火が霧散していくその中心で、四機のクロスビットに囲まれたハジメと愛子が無傷で姿を現れる。

四機のクロスビットはそれぞれ、ハジメを中心として三角錐の頂点の位置に浮遊しており、それぞれを起点にワイヤーで繋がっている。そしてそのワイヤー同士で繋がった面には紅色の光の膜が張られている。

「試作段階だったが……上手くいったようだな」

「う、これは……」

ハジメは上手くいったことにどこかホツとしたような表情をする。これは、生成魔法により空間魔法を付与したワイヤーと鉱石をクロスビットに組み込み、四点で結合させてボックス型の結界を張るギミックだ。単なる障壁ではなく、空間そのものを遮断するタイプなので、理論上の防御力は折り紙付きだ。ただ、まだ実験段階で、実際にどの程度まで耐えられるのか確証がなかったので、ハジメとしてはちよつと不安があった。

驚いてキョロキョロと結界を見る愛子を抱き締め直しノイントを見れば、彼女は、聖槍をハジメに目掛けて飛ばしながらまたもや魔法陣を形成させていた。

ただし、今度は二十以上の魔法陣を、聖槍を、銀羽をハジメに撃ち込みながら同時展開するという形で。

「面倒くせえっ！」

まさに怒涛の攻撃。おそらく、四点結界は相当な強固さを発揮してくれるだろうが、内側に籠っていてはジリ貧だ。おまけに、ノイントの分解能力とあの聖槍にどこまで耐えられるか全く分からない。

それに、この結界の難点は空間が遮断されているので、展開中は俺も攻撃できないという点にある。なので、俺は急いで結界を解除すると、ノイントから大きく距離をとり、再びテイオが来るまで回避に徹しようとした。と、その時、突如、「神山」全体に響くような歌が聞こえ始めた。

「何だ………聖歌？」

ハジメが、銀羽の弾丸と二つの聖槍をかわしながら何事かと歌声のする方へ視線を向ければ、そこには、イシユタル率いる聖教教会の司祭達が集まり、手を組んで祈りのポーズを取りながら歌を歌っている光景が目に入った。どこか荘厳さを感じさせる司祭百人からなる合唱は、地球でも見たことのある聖歌というやつだろう。

一体、何をしているんだとハジメが訝しんだ直後、

——ズンツ

「……ツ!? なんだ? 体がっ……」

「南雲君!! あうっ、な、何ですか、これ……」

ハジメと愛子の体に異変が訪れた。

体から力が抜け、魔力が霧散していくのだ。まるで、体の中からあらゆるエネルギーが抜き出されているような感覚。しかも、光の粒子のようなものがまとわりつき、やたらと動きを阻害する。

「くっ、状態異常の魔法か？……流石総本山。外敵対策はバッチリっつてか？」

ハジメの推測は当たっていた。

イシユタル達は、「本当の神の使徒」たるノイントが戦っている事に気が付き、援護すべく「覇墮の聖歌」という魔法を行使しているのだ。これは、相対する敵を拘束しつつ衰弱させていくという凶悪な魔法で、司祭複数人による合唱という形で歌い続ける間だけ発動するという変則的な魔法だった。

「イシユタルですか。……あれは自分の役割というものをよく理解している。よい駒です」

「チツ……気持ち悪りいんだよ！狂信者共！」

恍惚とした表情で、地上からノイントを見つめているイシユタルに、感情を感じさせない眼差しを返しながらノイントがそんな感想を述べる。イシユタルの表情を見れば、ノイントの戦いに協力しているという事実自体が、人生の絶頂といった様子で気持ち悪過ぎて悪態をつく。

そんなイシユタル達司祭の中身はともかく、現在、展開している魔法は正直なところ

厄介なこと極まりないものだった。

「ぐっ……」

ハジメは、徐々に抜けていく力を、その身に内包する膨大な魔力で補いながら、ノイントの攻撃を回避する。しかし、明らかに先ほどまでに比べれば動きに精細を欠いていた。そして、そんな状態で凌ぎ続けられるほど、ノイントの攻撃は甘くなかった。

ノイントの周囲に形成された魔法陣から、雷撃が飛び出し、空に不規則な軌跡を描きながら殺到する。しかし、ハジメは雷に耐性がある。雷撃を直撃しても大してダメージはない。しかし、雷撃はハジメの直撃する寸前に爆発し、眩い閃光を放った。そんな突然な回避不可能な目眩しにハジメは一瞬、目を守ろうとして動きを止めてしまう。

刹那の硬直。しかし、ノイントからすれば致命的な隙だ。

「ッ!？」

超速で踏み込んできたノイントが、二つの聖槍と共に双大剣を十字に振るう。感電による硬直のため、僅かに反応が遅れたが、どうにかシユラクで一撃を逸らすものの、唐竹の一撃をかわしきれず肩を切り裂かれ、一本の聖槍が太腿の肉を僅かに抉りだした。

「ぐううー———『紅雷玉』!」

苦しげな声を上げながら、ハジメはすぐさま義手の激発で体を弾き、片足が抉られたが無視して『空力』を使って必死にノイントの剣界から離脱を図る。当然、そんな暇は



与えないと苛烈な剣戟と聖槍が襲い来るが、自爆も辞さないクロスビットの砲撃と雷魔法により、どうにか距離を取ることができた。

「南雲君っ!？」

「大丈夫だから、黙ってろっ!」

肩から飛び散ったハジメの血が、ピツと愛子の頬に付く。クロスビットがもたらした衝撃により、「金剛」で守られていたとはいえ、少なくとも衝撃を受けた先生だったが、揺らぐ意識を必死に繋ぎ留め、ハジメに悲鳴じみた心配の声を上げた。

だが、ハジメとしても愛子を気遣う暇がない。素っ気ない返事をしている間にも、ノイントは銀羽を射出して二つの聖槍を浮かばせながら急迫しているのだ。ハジメは、シユラークで撃ち落としつつ「金剛」と「風雷閃」も使って捌く。体にまとわりつく光の粒子と倦怠感のせいで、遂に回避しきれなくなっていた。

そんなハジメに、ノイントは正面から突っ込むと見せかけて銀翼をカツ! と発光させた。爆ぜる光が目を灼く。

「……………ッ!」

しかし、ハジメの持つ感知系能力ですぐさま見失ったノイントの気配を背後に感じて、振り向きざまにシユラークを連射した。

「(当たった感覚がしねえ…。まさか囨かつ)……………っ!？」

ハジメの予想が当たり背筋が粟立った。本能がけたたましく警鐘を鳴らす。ハジメは振り向く暇も惜しんで、腕だけ後方に向けると狙いも付けずに引き金を引いた。

撃ち放たれた弾丸は、運良くノイントの頭部に飛翔したが、彼女は首を捻るだけであっさり回避され、双大剣の片割れが俺の背中目掛けて袈裟斬りに振るわれる。咄嗟にハジメは、“金剛”の派生“集中強化”を全力で行使し、覚悟を決めて斬撃に備えた。

ノイントの大剣は、ハジメの“金剛”と一瞬の間拮抗するも、直ぐに分解能力によってその防壁を切り裂いていき、肉体に切っ先を届かせ振り抜かれ、更に追撃で二つの聖槍がハジメの肉体を貫きはしなかったが突き刺さる。

「がああ!!」

「南雲君!」

ハジメは背中に焼き付くような痛みを感じ、思わず口から苦悶の声を漏らす。愛子が焦ったような表情で声を上げる。しかし、ハジメは斬られた際の衝撃も利用して自ら前方に飛ぶと宙返りしながらノイントと相対する。

ノイントは、すぐさま追撃に入り、既に大剣を振りかぶしながら聖槍をハジメに目掛けて飛ばす。

「ハアハア……」

ハジメは、出血も酷い状態であるが、動きづらい体での対応を諦めクロスビットに”

金剛”を纏わせて盾にしつつ、他のクロスビットをノイントの左右に展開し内蔵された弾丸を炸裂させる。

ノイントは、クロスビットの弾丸を回転しながら広げた銀翼で打ち払うとそのまま突進し、ハジメが盾にしたクロスビットを一之大剣で斬り付け、更に、クロスビットに食い込んだ一之大剣に弍之大剣を叩きつけることで、あっさり切断してしまい、雷魔法を発動しようとしたが聖槍に魔法自体を破壊され、不発となってしまう。

「クソがつー！」

ハジメは目を見開いてその瞳を、間近に踏み込んだノイントが覗き込んだ。その無機質な眼差しが雄弁に物語っていた。すなわち、”これで終わりです”と。しかし、ハジメは大切な仲間達、そして大切な彼女達が脳裏に過りハジメは瞳にまた炎を宿したように目を吊り上げる。

「まだ諦める訳にはいかねえ！」

ハジメはこの状況で愛子を死なせないためには、対価が必要で、代わりにハジメが傷つくという対価だった。こんな事なら、後の弱体化を覚悟してでも、テイオを待たずに”限界突破”を使っておくべきだったかと後悔するが。今となつては少しでも良いと切り捨て左腕を犠牲にする覚悟を決める。

そして、ノイントの大剣と聖槍が、かざしたハジメの義手を切り裂いて、その奥の肉

体に致命傷を負わせようと振るわれたまさにその瞬間……

グウガアアアアア!!

「クハッ………遅えよ」

竜の咆哮と共に、黒色の閃光が下方から凄まじい勢いで迫って来た。それは、あらゆるものを消滅させる灼熱のプレス。黒き暴虐の嵐は、狙い違わずノイントへと襲いかかるを見てハジメは苦笑しながら「ナイスタイミング」と呟く。咄嗟に、ノイントは銀翼で身を包み防御態勢をとっていた。

直後、黒色のプレスはノイントの銀翼に直撃し、分解されながらも凄まじい勢いで吹き飛ばす。黒と銀の魔力が衝突し、空中に黒銀の魔力を撒き散らしながら、ノイントは教会の塔の一つに背中から突っ込んだ。その衝撃により塔がガラガラと音を立てながら崩れ落ちていく。

下方からイシユタル率いる司祭達が上がっている悲鳴が聞こえる。信望する神の使徒が吹き飛ばされ動揺しているようだ。

「……ぎゃあ」

ハジメは呟いた後、“宝物庫”からオルカンを取り出すと、イシユタル達の方を見もせず十二発全弾を無造作に撃ち込んだ。今度は、違う種類の悲鳴が聞こえてきたが無視だ。なぜなら、そんな雑音などかき消すような聞きたかったハジメにとって愛しい彼

女達の一人の声が響き渡ったからだ。

「ご主人様よ。無事かの？」

その声に、ノイントを警戒しながらもハジメの頬が緩む。待ち人ならぬ待ち竜のご到着だ。

「テイオ、助かった。ちよつとヤバかったんだ」

ハジメの言葉に嬉しそうにしながらも、ハジメの姿と言葉でそれほどまでの強敵かと直ぐに険しさを取り戻す黒竜姿のテイオが、翼をはためかせながら傍らにやって来た。

「間に合ったようで何よりじゃが、ご主人様、足や背中が……」

「大丈夫だ安心しろ……テイオは先生を頼む」

心配するテイオにハジメは嬉しさを感じるが今は戦闘中、すぐに険しさを取り戻しながら竜化したテイオの頬を擦りながら愛子の保護を頼む。

「了解した、が……後で妾を可愛がっておくれ」

竜化していても甘えるような視線を向けながらそんなことを言うテイオにハジメは苦笑いしながら口を開く。

「……わかったよ」

「本当か！ その言葉忘れるでないぞ！ さあ、先生殿よ、妾の背に乗るがいい」

ハジメは、こんな状況でも自らの欲望に忠実なテイオ（思い返せばユエ、シア、優花

もだが)に呆れた表情をしながらも、抱きしめていた愛子とその背に乗せる。

愛子は、なんだかハジメとテイオの会話に「不純異性交友？」と呟きながら、ようやくハジメの足でまといから解放されるとあつて素直にテイオの背にしがみついた。

「えつと、テイオさん。よろしくお願ひします」

“うむ。任せよ。先生殿はご主人様の恩師というじやからの、敵の手には渡さんよ”

愛子は、テイオの“恩師”という言葉に嬉しそうにしたが、心配そうにハジメの方を見ていた。その表情はどう見ても教師が生徒を憂う類のものだった。と、その時、ノイントの突っ込んだ塔が轟音と共に根元から吹き飛んだ。もうもうと舞う砂埃を、銀翼をはためかせて起こした風圧で吹き飛ばしながら無傷のノイントが姿を現す。

「生きてはいると思つていたが……無傷かよ」

テイオのプレスでも、銀翼の防御は貫けないことにハジメはノイントの無傷に対して内心舌打ちするが、テイオ達のが優先なのでテイオに指で「行け」とジェスチャーする。

“承知。しかし、先生殿の安全を確保したら助太刀するぞ？ 少なくとも教会の連中

は妾が何とかしよう”

「……助かる」

ハジメは既に猛烈な殺気を噴き出しながらノイントをギラつく眼で睨んでいると、

テイオは、先程俺に掛けられていた弱体化の魔法の原因を察して、イシユタル達を睨みながら頼もしいこと言う。ハジメは、ノイントに集中しろということだ。

ハジメは、その言葉に口元を吊り上げると一つ頷いて簡潔ながらも感謝して、今度は自らノイントへと向かつて猛然と宙を駆けていった。

「さあ、神の木偶。第二ラウンドといこうかつー！」

~~~~~

「南雲君！ 気をつけて！」

両手を胸の前で組み祈るようなポーズの愛子に、テイオは愛子を地上に下ろすことを説明する。

「先生殿よ。ご主人様が心配なのは分かるが、少し急ぐのじゃ。貴女を地上に送り届けて、妾はあそこの老害共を叩かねばならん。ご主人様の邪魔をされては敵わんからな

”

そう言つて踵を返そうとしたテイオに愛子は待ったをかけた。何事かと、首だけ振り返つて背に乗る愛子に視線を向けたテイオに、愛子は、決然とした眼差しを返した。

「テイオさん。今から私を地上に降ろして、また戻つて来るとすればかなりの時間がかるのではありませんか？ ここは標高八千メートルです。往復するのも大変なはず

……」

「むっ？ 確かに、その通りじゃが……まさか先生殿よ」

「はい。テイオさんが南雲君のために戦うというのなら、私にも手伝わせて下さい。早急にイシユタルさん達をどうかしておかないと、南雲君はどんどん衰弱してしまします。私を下に送り届ける時間が勿体ないです」

愛子の言うことは最もではあるのだが、テイオとしては正直気が進まない。

オルカンの攻撃で負傷者が多数出たようだが、直ぐに立て直し結界を張りながら再び聖歌の準備をしているイシユタル達を見れば、テイオとしても、今すぐにもぶっ飛ばしに行きたいところだ。だが、それで万一、愛子が傷つけば、ハジメとの約束を反故にする事になってしまう。

「じゃが、言つては悪いが先生殿に何ができる？ 魔法陣も戦闘経験もなからう？」

司祭達と神殿騎士達を相手に戦えるのかの？

愛子は、テイオの厳しい意見にぐっと歯を食いしばると、おもむろに自分の指を口に含んだ。そして、ギュツと目を瞑ると一気に指の腹を噛み切り、指先から滴る血を反対の手の甲に塗り付け即席の魔法陣を描き出す。

「私、こう見えて魔力だけなら勇者である天之河君並なんです。戦闘経験はないけれど……テイオさんの援護くらいはしてみせます！ 人と戦うのは……正直怖いですが、や



るしかないんです。これから先、皆で生き残つて日本に帰るためには、誰よりも私が逃げちやダメなんです！」

王国は侵攻を受け、国王も司祭達も狂信者と成り果てた。当初予定していた神を頼つての帰還はもう有り得ないだろう。この異世界で寄る辺なく愛子達は前に進まねばならないのだ。

ならば、先生である自分こそが、たとえ忌避するべきことでも、それがすべき事ならやらねばならない。そんな決意を愛子の眼差しから読み取ったティオは、逡巡したものの、仕方あるまいと愛子の同行を許すことにした。

「既に決めたというなら是非もない。ご主人様も、それが先生殿の意志だというなら文句は言うまい。よかろう。共に愚か者共を蹴散らすとしようか！」

「はー」

愛子の緊張と恐怖、そしてそれらを必死に制しようとする決意が表れた返事を合図に、ティオは聖教教会を象徴する大神殿に向かって一気に飛翔した。相手取るのは、数百人規模の司祭達と神殿騎士団。

今、ティオと愛子という異色のタッグチームがこの世界最大の宗教総本山に挑むのだった……。



弾丸と雷撃を防いだ後、ノイントは盾から槌に形状変化させ、恐るべき速度でハジメに突進する。

しかし、それを読んでいたのか、そこには既にクロスビットが配置されており、炸裂スラッグ弾が回避不能の近さで轟音と共にぶつ放された。

「ッ!？」

ノイントは紅い波紋を広げる炸裂スラッグ弾を見て、銀翼での防御も間に合わないと思ったのか、その手に持つ一之大剣で迎撃に打って出た。

神速で振り抜かれた大剣は、まるでバターを切り取るようにスツと弾丸に入り込みそのまま縦に両断する。内包する魔力を分解された炸裂スラッグ弾だったが、大剣の一撃もその全てを散らすことは出来ず、ノイントの左右に分かれた弾丸が両側から衝撃波を放つが追従する聖槌がノイントを守る。

衝撃を防ぐが、炸裂スラッグ弾の煙により一瞬動きが止まるノイント。

そんな彼女の懐に、意識の間隙を突くようにいつの間にか踏み込んできたのはハジメだ。"空力"を使つた空中での震脚によって、踏み込みの力を余すことなく左腕に集束し、ギミックの"振動破碎"と"炸裂ショットガン"、そして"豪腕"と膨大な魔力を注ぎ込んだ"衝撃変換"による絶大な威力の拳撃を放つた。

ノイントは咄嗟に大剣を盾にした。体と着弾寸前の拳との間に大剣を割り込ませる。

その試みはギリギリのところまで間に合い、ハジメの鋼鉄の拳をせき止めたが、ノイントは二つの聖槌でハジメを狙うように突撃させる。

しかし、ハジメそれも読んでいたかのようにすぐさま離脱した後、雷魔法を発動させる。

「——轟雷爆——」

ハジメが魔法を発動した瞬間、ノイントの目の前に紅のスパークを放った雷の球体が現れ、勢いよく爆発した。その威力ま衝突する凄まじい音を轟かせながら、ノイントは猛烈な爆風で吹き飛ばされた。

ドパアアアンツ！ ドパアアアンツ！

ハジメは追撃の手を緩めない。即座にドンナー・シユラークを抜くと最大威力で連射する。轟く炸裂音は二発分。夜闇を切り裂く紅い閃光も二条。されど、吹き飛びながらも聖槌を聖盾に形状変化させ、防御姿勢をとるノイントを襲ったのは十二回分の衝撃だった。

「くうううっ!!」

ドンナー・シユラークそれぞれにつき、一発分しか聞こえない程の早撃ちと、全く同じ軌道を通り着弾地点も同じという超精密射撃。ノイントの呻き声と同時に、彼女の周りに浮かぶ聖盾が衝撃に震え、僅かにピキッと嫌な音を立てる。

更に吹き飛び、再び、背後にあつた教会の荘嚴な裝飾が施された何らかの施設を破壊しながら埋もれるノイント。ハジメは、オルカンを「宝物庫」から取り出し、ダメ押しとばかりにと雷魔法と共に全弾発射した。

「――「紅雷玉」」

バシユウウウウツ!!

火花の尾を引いて殺到した絶大な暴力の群れと紅の宝玉達は崩れかけた建物に致命傷をプレゼントする。大爆発と紅い雷と共に完全に崩壊した建物は、そのままオルカンから放たれたロケット弾と内部に搭載されていた大量のタールによつて摂氏三千度の業火に包まれた。

夜空を赤く染め上げる大火を眺めながら、ハジメは追撃の手をまだ緩めない。「宝物庫」から取り出したミサイルをオルカンに装填すると、再度、燃え盛る瓦礫の山に向かつて狙いを定めた。

と、その瞬間、

「っ！ 下かつ」

ハジメが眼下に視線を向け直すと同時に直下の地面が爆発したように弾け飛び、その中から銀翼をはためかせたノイントが飛び出てきた。どうやら、魔法を使つて地中に退避し、そのまま強襲を掛けてきたらしい。

おびただしい数の銀羽が掃射され、銀の砲撃と二つの聖槍が撃ち放たれる。ハジメは、それらを風に吹かれる木の葉のようにゆらりゆらりと揺れながらかわし、交差する一瞬で振り抜かれた双大剣と聖槍をレールガンによって受け流しつつ僅かな剣撃の間を側宙するように通りぬけ、突き刺すように向かう聖槍を「豪脚」を使って振り払う。そして、通り過ぎるノイントに向かってミサイルと紅い雷撃を発射する。

オルカンとハジメの雷魔法の威力をその身で理解したノイントは、銀の光を弾きながら高速飛行し、追尾してくるミサイルと雷撃から距離をとる。そして背後に向けて聖槍を飛ばして迎撃しつつ、作り出した魔法陣から怒涛の魔法攻撃をハジメに向けて放った。

夜天に撃墜されたミサイル群の爆炎が無数に咲き誇っているのを尻目に、ハジメはオルカンをしまうと、再びドンナー・シユラークを抜いた。そして、急迫する魔法の核を撃ち抜き、ノイント同様に全て迎撃する。

壮絶な空中戦の合間に訪れた僅かな静寂。空中でノイントとハジメが対峙する。

「なあ、ちよつと聞きたいんだが俺に構っていいのいか?」

「……何のことです?」

教会関係者が地上で起きている魔族による王都侵攻を知らないわけがない。問答無用に襲われていたので聞く暇もなかったのだが、一時の間が出来た上に、ノイントが

会話に乗ってきたので、ハジメは、ちようどいいと話を続ける。

「下で起きていることだ。このままじや王国は滅びるぞ？ 次は当然、この【神山】だ。俺なんか構ってないで、魔人族達と戦った方がいいんじゃないのか？」

言い直されたハジメのもつともな質問に、しかし、ノイントはくだらない事を聞かれたとしても言うような素振りでは鼻を鳴らす。

「そうなったのなら、それがこの時代の結末という事になるのでしょうか」

「結末ねえ。……やっぱり、クソ神共にとつて“人”は所詮“人”でしかなく、暇つぶしの駒でしかないということか。……この時代は、たまたま人間族側についてみただけでわけだ？ 性根が腐ってるよホントに……」

「……だったら何だというのです？」

「いや、クソ神共はクソ野郎達の集まりだったって再確認出来ただけだ」

主達と敬愛する母をクソ共呼ばわりされたせいか眉がピクリと反応するノイント。しかし、ハジメは気にした風もなくにこやかに告げる。

「なあ、ラーゼンは強い奴と戦いたい戦闘狂なんだろ？ なら、何故俺を排除しようとするんだ？」

それに、戦闘狂なら勇者共は大したことねえから世界に戻したらどうだ？」

「……却下です、イレギュラー」

「理由を聞いても?」

「イレギュラー、我が母と三柱の神々はあなたを危険視しています。あらゆる困難を撥ね退け、巨大な力と心強い仲間を手に入れて、この勢いだとホントに我等と戦うことになつてしまいます。主は、あなたの戦いをお望みなのですが、我が母は貴方のことはお嫌いそうなのでこの世界から消しておきたいと……。ああ、それと勇者達は……。中々面白い趣向を凝らしているとのこと、主は大変興味を持たれております。故に、まだまだ主を楽しませる駒として踊つて頂きます」

ハジメは、概ね予想通りの回答だったので特に気にした風もなく肩を竦めると、かつて聞いたミレデイの言葉に、内心で深く同意した。しかし、自分の事はともかく、最後の言葉はハジメとしても気になるところだ。

「……面白い趣向?」

「これから死ぬあなたにとつて知る必要のないことです」

話は終わりだと、ノイントは無数の魔法と銀羽と聖槍を放ち、戦闘再開を行動で示した。

「……聖杭、形状変化——『聖剣』」

ノイントの言葉で聖槍の形から光輝の持つている聖剣と酷似した剣へと変化した。そして、先程までとは威力も桁も別次元と思える程の銀羽の一枚一枚がレールガンに迫



ろうかという威力を持ち、放たれる魔法は全て限りなく最上級に近いレベルである。よく見れば、ノイントの体全体が銀色の魔力で覆われており、感じる威圧感が跳ね上がった。まるで、ハジメや光輝が使う「限界突破」のような姿だ。

「——ッ（限界突破かつ）！」

その圧倒的な物量からなる怒涛の攻撃に息を呑みながら、ハジメは右手にメツエライを、左手にシュラーゲンを持って応戦する。メツエライが咆哮を上げ、毎分一万二千発の破壊を撒き散らして銀羽と魔法を相殺し、シュラーゲンが射線上の全てを打ち砕いて直進しノイントを狙うが……

「聖剣——『神威』の発動を執行」

「なっ?！」

ノイントの指示で二つの聖剣が輝き出すと光輝が発動するより高い威力と思われる二つの極大の大きさの『神威』がハジメへと迫る。

「……っ！——『雷壁』！」

ハジメは咄嗟に雷の壁を展開して紅の雷の壁を形成させて、二つの神威から紙一重で回避すると、すぐにシュラーゲンで紅い砲撃を放つ。しかし、銀光を纏うノイントの動きもまた、先程までとは比べ物にならなかつた。シュラーゲンの紅い砲撃が確かにノイントを撃ち抜いたと思われた瞬間、彼女の姿は霞のように消え去り、数メートルも離れ

た場所に現れたのだ。

自らが放つ弾幕を追い越す勢いで進撃するノイントの姿は、余りの速度に残像が発生し、常にその姿を二重三重にブレさせる。

ハジメが「先読」で配置したクロスビットから炸裂スラッグ弾を放つが、やはり撃ち抜くのは残像のみ。フツと姿を消したノイントは、次の瞬間にはズザザザーと残像を引き連れてハジメの背後に回り込んでいた。そして、独楽のようにクルクルと物凄い勢いで回転しながら遠心力をたっぷり乗せた双大剣を振るった。

「ツ!？」

ノイントの最後の動きは、ハジメの「瞬光」状態での知覚能力をも上回り、完全な不意打ちとなった。辛うじて身を仰げ反らせ直撃を避けたものの、咄嗟に盾にしたシユラーゲンを真つ二つに両断されてしまう。内蔵されたエネルギーが暴発し、ハジメとノイントの間で大爆発が起こった。

「ぐっ………」  
「紅狼オ！」

それが、ほんの一瞬ではあるがノイントの追撃を遅らせる。ハジメが反撃に出るための時間としてはそれで十分だった。ハジメの全身から紅色の魔力が噴き上がり、紅いスパークが体を覆っていく。「限界突破」と「紅狼」だ。

踏み込んできたノイントに対して、ハジメもまた一步を踏み込む。その手には既にメ

ツエライはなく、代わりにドンナー・シユラークが握られていた。そこからは超接近戦だ。

「つあああッ!!」

「はあああッ!!」

一之大剣による唐竹の斬撃を半身になってかわしたハジメに、絶妙なタイミングで弐之大剣が胴を狙って横薙ぎに振るわれ、ノイントに追従する二つの聖剣がハジメの肩を狙って飛び回る。

「チマチマ狙って、うぜえんだよっ!」

バリバリバリッ!

「なっ、聖剣をつ?!」

ハジメは、その一撃をシユラークの銃身でカチ上げながらレールガンの一撃を剣の腹に当てて上方に弾き飛ばし、右のドンナーでノイントの心臓を狙った。撃ち放たれた紅の閃光を、残像を残しながら回転することでかわしたノイントは、その勢いのまま一之大剣を下方より跳ね上げ、自分の魔力を一時的に上げ、体に纏う紅いスパークで二つの聖剣を弾いて軌道を逸らすとノイントから驚愕の声を上げる。

ハジメはその隙にシユラークに“金剛”の“集中強化”を大剣の刃が当たるほんの僅かな場所に通常時の数倍の密度でかけて分解に対抗し、大剣の勢いに逆らわずシユ

ラークを跳ね上げて、その軌道だけを逸らすもノイントは一つの聖剣を聖槍に形状変化させておりハジメの胴を狙って撃ち放つ。

「つらあー！」

しかし、ハジメは咄嗟に全身を動かして身体を逸らし、スパークが纏った足に「金剛」の「集中強化」を纏わせて蹴り上げる。そして、水平に切り込んできた式之大剣も、同じく「金剛」の超「集中強化」をかけて銃口で刃を受けて、そのまま発砲する。炸裂音と共に放たれた閃光が式之大剣を弾き飛ばし、また、飛び回る聖剣から「神威」が飛ばされるも「雷華」で「神威」を相殺する。

互いに至近距離で、相手の武器、魔法をかわし、逸らし、弾きながら致命の一撃を与えんと呼吸も忘れて攻撃を繰り返す。

「おおおおおおおっ!!!」

「はあああああああっ!!!」

ハジメとノイントは何時しか互いに雄叫びを上げていた。

筋一本、神経一筋、扱いを間違えただけで、次の瞬間には死が確定する。互いの攻撃を判断する時間などあるわけもなく、ただ本能と経験だけを頼りに神速の剣撃と銃撃が互いの命を僅かでも削り取ろうと飛び交った。

銀色の剣線と聖武器が夜の闇に幾条もの軌跡を残し、紅の閃光が血飛沫のように四方

八方へと飛び散る。銀と紅に輝く二人を太陽に例えるなら、二人が放つ攻撃の嵐はさながらフレアだろう。一秒、一手を掻い潜り互いが生き残る度に、際限なく速度は上がっていく。

比例して、僅かにヒットする攻撃が互いを血染めに變えていった。ハジメはいたるところを浅く切り裂かれ、ノイントは決るように穿たれた箇所から血を滴らせる。

ハジメとノイントの技量は互角。このまま、永遠に続くかと思われた攻防だが、実際に追い詰められているのはハジメの方だった。

「ハアハア……クハツ（アレスからは聞いてはいたが、本当に無限なんだな魔力……）」  
ハジメはアレスから神の使徒の話聞いており、言うまでもなく、「限界突破」は制限時間付きだ。それを過ぎれば強制的に解除され、しばらくの間弱体化を余儀なくされる。魔力が膨大であるハジメとは言え、いつまでも発動し続けられる訳ではなく、それに対してノイント達神の使徒達の場合、どうやら何処からか魔力の供給を常に受けているようで実質無制限に強化状態を維持できるらしい。ハジメの魔眼石には、やたらと強く輝き、全く衰える様子のない魔石に似た何かがノイントの心臓部分にあるのを捉えていた。

「勝負にかけるか……吹き飛ばやがれっ!!」

ドドドドドドドドド  
!!!!



いい女になつてから言え」

無茶な攻撃に、思わず自棄でも起こしたのかと疑いの眼差しを送るノイントに、ハジメは荒い息を吐きながら軽口で返す。お前ごときが誰かと最後を共に出来ると思うなという嘲笑混じりで。

ハジメは、“宝物庫”から新たな武器を手元に取り出した。そして、トランプでも飛ばすようにスナツプを効かせて高速でそれを投擲する。音もなく、そこに有るはずなのに意識しないと直ぐに見失つてしまいそうなそれを、しかし、ノイントは何でもないように聖盾から形状変化した聖剣で弾き飛ばした。

カキンツッ！ カキンツッ！と硬質な音を立てて弾かれ、空中をくるくると回るそれは、直径十五センチ程のドーナツ型の円盤——俗に言う円月輪、あるいはチャクラムと呼ばれる投擲武器だった。

「今さら、このような。万策尽きましッ!？」

「いや……全然」

ドパンツッ！ ドパンツッ！ ドパンツッ！ ドパンツッ！ ドパンツッ！

原始的な武器に、ノイントが唯の悪足掻きかとより冷めた眼差しをハジメに向けた瞬間、ハジメが喋りながら自分の左右に向かつてレールガンを連射した。

その直後、その紅き閃光はハジメと向かい合うノイントの左右から出現し、彼女の頭

部を粉碎せんと強襲した。

「…………?!——『聖盾』!」

ノイントが、有り得ない事態に思わず言葉詰まらせ、咄嗟に形状変化させた聖盾を両サイドに掲げる。ドンナー・シユラークから吐き出された合計十二発の弾丸は全て炸裂弾。そして最初と同じくピンポイント射撃だ。

なぜ、全く明後日の方向に撃った弾丸が、ノイントを挟撃したのか。

それは、先程、ハジメが投擲した円月輪が原因である。この円月輪、『気配遮断』と『風爪』『轟雷』を生成魔法で付与した鉱石で作成されており、極めて隠密性と殺傷性の高い投擲武器なのだが、それ以上に、特殊な効果をもったアーティファクトなのだ。

それは、ゲート機能である。つまり、円月輪の真ん中に空いた穴は、他の円月輪と空間的に繋がっており、そこに弾丸を撃ち込めば、空間を跳び超えて別の円月輪の穴から弾丸が飛び出すのである。もちろん、クロスビットと同様に感応石で自在に動かす事も出来る。

頭部の位置、聖杭の位置、ノイントの反応速度など全てが計算されて空間を飛び越えた炸裂弾は、全弾、寸分のずれもなく狙った場所に着弾し、凄まじい衝撃を迸らせた。

次の瞬間、

バキンッ!!



バキンツ!!

そんな音を響かせて、ノイントの「ネームド」の専用武器である聖杭が破壊されたのだ。

「なあっ！ 我が母の聖杭がつーこの程度で、なぜっ……」

感情がないと言っていたにも関わらず、随分と驚きをあらわにするノイント。

「流石に不壊性じゃなくて安心したぜ」

彼女は気が付いていなかったのだろう。ハジメは、最初のピンポイント射撃のあと、ずっと、あの近接戦闘の最中でさえ、アレスから聞いていた双大剣より厄介である「聖杭」を狙い、ノイント本人よりも聖杭に入った亀裂を狙って衝撃を与え続けていたということを。実力が拮抗しているからこそ、武器破壊によって出来るであろう一瞬の隙を狙っていたということ。

ハジメは、確かにできたノイントの隙を逃さず、新たなアーティファクトを「宝物庫」から取り出し、それを連続して投擲した。高速で投擲された十の影をノイントは隙を突かれたがために回避する事も出来ず、咄嗟に、双大剣で振り払おうとする。

しかし、このアーティファクトにそれは悪手だった。投擲されたそれは、両サイドに丸い鉾石の重りが付いたワイヤーだった。

俗に言うボーラと呼ばれる捕獲道具ないし投擲武器だ。通常は、回転させて遠心力を

たっぷり乗せてから放つものだが、感応石内蔵なので、即投擲しても十分な速度を出せる。そして、当然、ハジメの作り出したものが唯のボーラなわけがなく……

「ッ！　これはっ、動けない!？」

ノイントの双大剣の柄、両腕、腰、両足に絡みついたボーラは、その両サイドに付いた球状の鉱石から波紋を出しながら空中に留まった。それは、生成魔法により空間魔法が付与された効果だ。二つの錘が空間そのものに固定され、捕縛対象も合わせて固定してしまおうのである。

もつとも、ノイントには分解能力があるので、如何に空間そのものに固定するという反則じみた効果を持っていたとしても十秒も持たないだろう。しかも、銀翼自体は、拘束されても魔法の構成を解いて再展開すればいいだけなので実質拘束は不可能だ。今まで通りの接近しても銀翼が拘束を解くまでの時間をあっさり稼いでしまうだろう。

だが、その数十秒を稼ぐことがハジメの狙いだ。一撃必殺——この僅かな時間に最強の一発を放つのだ!

ハジメは紅いスパークを更に激しくバリバリバツとスパークを纏わせながら「宝物庫」から一本の漆黒の大槍を取り出す。そして、一気に神速と言えるくらいの速さでノイントへと突っ込んでいく。

「くっ」

苦さを含んだ声を漏らしたノイントは、銀翼を大きく広げ自らを繭のように包み込む。分解能力を秘めた銀色の魔力が燦然と輝き、まるでもう一つの月のようだ。

ハジメは、そんな美しきすら感じる障壁に凄まじい程の衝撃共に大槍を突き刺そうとする。大槍はハジメの紅いスパークを取り込み、紅い雷が纏い出していく。

「耐えられるものなら耐えてみなっ！」

ハジメの口元が不敵に吊り上り、瞳が殺意にギラつく。『限界突破』と『紅狼』によつて紅き魔力は益々輝きを増す。銀月を紅月に染め上げていく。

「『神喰<sup>カミグレイ</sup>雷槍——起動——！』」

直後、大槍から不可視の衝撃が迸った。それは、槍の先端に空間振動を起こす機能だ。空間魔法『震天』の簡易版であるそれは、対象に激烈な振動を与え、その結合を——耐久力を著しく弱らせる。

そして、重力魔法によりインパクトの瞬間、その重さを二十トンにまで増加させる漆黒の大槍が、雷霆の如き轟音と共に解き放たれた。

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!!

ハジメの傑作であるアザンチウム製の大槍は、ゼロ距離で獲物を穿ち破壊する。

紅いスパークを放つ漆黒の大槍は、重ねられた銀翼二枚と双大剣をあつさり貫き、その奥にあるノイントの心臓部分を貫通して尚止まらず、背中から抜けて片翼を根元から

吹き飛ばした。そして、流星の如く紅色の尾を引きながら漆黒の大槍が夜空の彼方へと飛んでいつてしまった……。

「――」

「ふう……」

ハジメとノイントの戦いの後に残ったのは、魔力供給源であった場所に文字通り風穴を空けられたノイントの姿。「轟雷」により傷口を焼かれたためか血が噴き出すことはなく、ただポツカリと胸に穴を空けている姿は人間味を感じさせない。空気に溶け込むように霧散していく銀翼の中から覗く瞳は相変わらず機械的な冷たさをたたえたままだった。

ただ、それでも、どことなく恨めしそうな雰囲気混じっているように思えたのはハジメの気のせいか……

そんなノイントの眼差しも、直ぐに光を失い虚ろとなり、グラリと体を傾けるとそのまま教会の建築物が密集する場所から少し離れた山腹に落下していった。黒ずんだ山肌に、ノイントの銀がやけに映えていた。

ビュウウウウン！

「おっ、返ってきたな」

ハジメはノイントの死体を空から確認していると彼方へと飛んだ大槍が戻ってきたの

で、ホツとした表情で大槍を手にしながら眺めた。

「実戦使用は初めてだったが、流石の威力だな」

ハジメは手に持つ大槍の自己評価してから「宝物庫」に戻すと、ノイントの死体の確認に戻った。

「魔眼石と感知能力で死んだと示してるか……」

ハジメは、その傍らに降り立つと、開きついているノイントの目を手を使って閉ざした。敵だったが、埋葬ぐらいはさせてくれ……」

ハジメが、一人入る程の穴を錬成で作っていき、ノイントの死体を持ち上げて埋葬しようとした、その瞬間……

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオン  
!!!!!!

「なんだっ?!

聞こえた感じだと大地を激震させる程の爆発音は「神山」から聞こえ、驚きの声を上げながら何事かと振り返ったハジメの目に映った光景は……巨大なキノコ雲と轟音を立てながら崩壊していく大聖堂を含む聖教教会そのものだった。

「……………うそん」

思わず漏れたハジメの呟きが、やけに明瞭に木霊していたのだった……。

## 七十話 神山

「うそん」

ハジメは驚きのあまりポカンと口を開けながら夜天を焦がす巨大なキノコ雲を見つめながら、昔のテレビの戦争系ドキュメンタリーでこんな光景を見たことを思い出していた。

そう呆然としてみると、突然、念話が届いた。

“ご、ご主人様よ……そっちはどうじゃ？”

“お？ おお、テイオか。いや、こっちはちようど終わったところなんだが……”

“ふむ、それは重畳。流石、ご主人様じゃ。ちようど、こちらも終わったところなんじゃが、合流できるかの？”

“いや、それが何かすごいことに……”

“……その原因はわかかっておる。というより、妾達のせいじゃし……”

“やっぱりか……”

大方、ハジメはテイオのプレスだろうと思っていたが、あんなに威力が強かったかと

疑問に感じていた。

“……と、取り敢えず、合流出来るかの？”

“はあ、わかった”

どうやら聖教教会総本山が根こそぎ崩壊した原因を知っているようなので、一体、何があつたと頬を引き攣らせながら、ハジメはテイオとの合流を急ぐ事にした。

「おつ、発見……ん？」

上空に上がると直ぐに、黒竜姿のテイオがキノコ雲から距離を置いた場所で滞空しているのを発見した。

そして、ハジメの目には、その背に乗って「あわわわ」といった感じで狼狽えまくっている愛子の姿も映った。なぜ、ここに愛子が？ という疑問は湧いたものの、先生の性格ならきつと、逃げずにテイオに協力でもしたのだろうが、それよりも、明らかに、愛子の「やってしまった」といった様子の方が気になった。

「……先生、テイオ。二人共無事みたいだな」

「な、南雲君！よかった、無事だったんですね。……本当によかった」

“ご主人様。うむ、一瞬、死ぬかと思つたが何とか生きておるよ。全く、流石はご主人様の先生殿じゃ。まさか、妾のブレスを聖教教会そのものを崩壊させる程に昇華させるとは。天晴れ見事じゃよ”

テイオの言葉に、俺の目を瞬かせながら愛子に「まさか」という引き攣った表情を向ける。

「……先生、一体何やったんだ」

「あわわわわ、ち、ちなうんです！　こんなつもりでは。ちよつと教会の結界が強くて……テイオさんのブレスの威力を高められればと……結界を破るだけのつもりが……」  
ハジメの登場に、安堵の吐息を漏らす愛子だったが、続く質問で再びあたふたし始めた。狼狽える愛子に事情を聞くと、どうやらこういう事らしい。

愛子は、テイオに騎乗しながら、イシユタル達がハジメに状態異常の魔法をかけられないように戦うことを決意した。しかし、魔法に関して高い適性は持つていても、碌な魔法陣を持つていない愛子に強力な攻撃魔法を行使することは出来なかった。また、大聖堂そのものが強力な結界を発動させるアーティファクトだったらしく、その結界に守られたイシユタル達には、テイオのブレスさえも届かなかった。

このままでは、イシユタル達は安全地帯から悠々と魔法を行使できてしまう。何とか結界を突破できるだけの火力を得ることは出来ないだろうかと、神殿騎士達からの攻撃を凌ぎながら考えて、愛子が思いついたのは……自分の特技を生かす事だった。ちなみに、愛子の特技とは以下にある通り、



畑山愛子 25歳 女 レベル：56

天職：作農師

筋力：190

体力：380

耐性：190

敏捷：310

魔力：820

魔耐：280

技能：土壤管理・土壤回復「＋自動回復」・範囲耕作「＋範囲拡大」「＋異物転換」・成長促進・品種改良・植物系鑑定・肥料生成・混在育成・自動収穫・発酵操作「＋急速発酵」「＋範囲発酵」「＋遠隔発酵」・範囲温度調整「＋最適化」「＋結界付与」・農場結界・豊穰天雨・言語理解

この内、使ったのは発酵操作らしい。【神山】と云えど、人が暮らす場所であるから発酵できるものは大量にある。それから、地球で言うところのメタン発酵というものを

行ったようだ。勿論、正確には別の異世界物質だが、可燃性ガスであることに変わりはない。

それをとにかくひたすら教会周辺で行いまくったようだ。攻撃魔法ではなく、ただの発酵なので教会の結界も反応せず空気と同じように結界の内外に溜まり続けた。風に吹かれて霧散しないようにテイオが風を操って一定範囲に留めることまでした。

そして、これくらい可燃性ガスが溜まっていれば、テイオのブレスと相まって教会の結界を破壊できるだろうと、いざ、ブレスを放ってみれば……

「……こうなったと」

流石は可燃性ガスとテイオのブレスを合わせた爆発だな。とハジメはそう思いながら頷いているとテイオが話しかけた。

「うむ。妾達も盛大に吹き飛ばされてなあ、久しぶりに死を感じたのじゃ。結界を破壊するどころか、教会そのものを崩壊させる程とは……このような方法、妾の長い生のうちでも思いつかんかった。流石、ご主人様の先生殿じゃ。感服じゃよ」

「ちなうんです！ そうじゃないんです！ こんなに爆発するなんて思ってたなくて！ ただ、半端はいけないと思つて！ ホントなんです！ はっ!? 教会の皆さんはっ!? どうなりました!?!」

愛子が涙目でオロオロしながら弁解し、廃墟と化した教会に視線を彷徨わせる。ハジ

メと二人も一緒に瓦礫の山々に視線を向けるが……

「……まあ、まとめて吹き飛んだらどうなあ」

“教会の結界を過信している感じじゃったしのお。完全な不意打ちでもあったのじゃし、無防備なところにあの爆発では、助からんじやる”

「あ、ああ……そんな……いえ、覚悟はしていたのですが……」

愛子は幫助が、教会関係者達をまとめて爆殺してしまった原因である事に顔を青ざめさせる。

「……………」

覚悟を決めて戦いに挑んだつもりなんだろうが、いざ、その結果を突きつけられると平常心ではいられないだろう。

思わず、その場で嘔吐してしまふ。涙を流しながら吐く愛子に、ハジメは頭をカリカリと搔くと、そつと愛子に寄り添った。そして、吐瀉物で汚れているのも気にせず愛子の手を握る。ハジメは今の愛子には、とにかく暖かさが必要だと思つたのだ。

「先生……辛いだろうが先生のお陰で使徒を倒せたんだ。ありがとう」

ハジメは愛子に感謝の言葉を送ると、先生が紐が解けたように泣き出した。ハジメは“宝物庫”からタオルを取り出し、愛子に渡す。

“……………妾の背中……………”

「テイオ。少しの間、我慢してくれ」

“……うむ”

テイオが自分の背中の惨状に少し悲しげな声を出すも、ハジメの言葉で直ぐに気を取り直して再生魔法を行使する。テイオとしても、愛子には時間を掛けて立ち直ってもらいたいという思いはあるし、そもそもブレスを放ったのは自分であつて愛子が必要以上に責任を感じる必要はないのだが、今は、その説明が許されるほど時間に余裕のある状況ではない。なので、再生魔法によつて、磨り減つた精神を僅かばかりに癒していた。

気力が戻つてきた愛子は、顔を上げると涙と鼻水と吐瀉物で大変なことになつていたが、ハジメは特に気にせず風もなく、宝物庫からまた、タオルや水を取り出すと、汚れた愛子を綺麗にしてやった。愛子は、とんだ醜態を見せた事に動揺して、されるがままである。

「落ち着いたか？ 先生」

「は、はい。も、もう大丈夫です。南雲君……」

ハジメの呼びかけにハッと我に返つた先生は、羞恥で顔を真っ赤に染め上げていた。

「そうか……良かった」

ハジメは愛子が落ち着いたのを安心してると、テイオから警戒心の含まれた声が届く。

「ご主人様よ。人がおる。明らかに、普通ではないようじゃが……」  
「何だつて？」

ハジメは驚きながらもドンナーを構えテイオの視線を追うと、そこには確かに、白い法衣のようなものを着た禿頭の男がおり、ハジメ達を真つ直ぐに見つめていた。しかし、テイオの言う通り、普通の人間では有り得ない。なぜなら、その体が透けてゆらゆらと揺らいでいたからだ。

「まさか、アレは……」

ミレデイと同じように生き残っている解放者なのか？とハジメは男に対しての推測を立てていると、禿頭の男は、ハジメ達が自分を認識したことに察したのか、そのまま無言で踵を返すと、歩いている素振りも重力を感じている様子もなくスーと滑るよう動いて瓦礫の山の向こう側へと移動した。そして、姿が見えなくなる直前で振り返り、ハジメ達に視線を向けた。

「……ついて来いってことか？」

「じゃろうな。どうするのじゃ、ご主人様よ」

「……そうだな、さつさとユエ達と合流はしたいところだが……此処にはアレスが持っている魂魄魔法がある。もしかしたら、あの男は何か関係があるのかもしれない。手ごかりを逃すわけにはいかないな」

「ふむ。そうじゃの。では、追うとしよう」

ハジメの言葉に、テイオは一つ頷くと、翼をはためかせ瓦礫の山の上に降り立ち、俺と愛子を降ろしてから竜化を解いた。そして、背中の汚れに気がついて、少し眉を下げると、「宝物庫」から代わりの服を取り出した。ハジメも、至る所にケガや火傷と背中がボロボロなのと先生を励ましてる時に着いたのだろう少しばかり吐瀉物がついているのを気付き、「宝物庫」から服を取り出し、素早く着替えを済ませる。

「あう、す、すみません……汚してしまつて……」

その原因である、愛子が、羞恥と申し訳なさで小さな体を更に小さくして謝罪する。女として、自分の吐瀉物で他人の服を汚すなど恥ずかしくて堪らないのだろう。

「先生、気にすんな。俺はノイントとの戦いでも服が血で汚れてるからな」

「うむ、先生殿よ。気にするでない」

「うっ……でも」

ハジメもテイオも、仕方ない事だと分かっていたので、気にするなと声を掛けたが、愛子はそう簡単に割り切れるものでもないらしい。

「……………」

しかし、いつまでも縮こまっていられても困るので、ハジメはさつさと話題を転換することにした。

「先生、悪いが付いてきてくれ。何が起こるか分からないが……あの男が何者か、確かめないわけにもいかないんだ」

「は、はい。わかりました。……南雲君に付いていきます……」

愛子の答えを聞いてハジメは禿頭の男が消えていった場所に歩を進めていった。

禿頭の男は、その後も、時折姿を見せてはハジメ達を誘導するように瓦礫の間を進んでいく。そして、五分ほど歩いた先で、遂に目的地についたようで、真つ直ぐハジメ達を見つめながら静かに佇んでいた。

「あんた、何者なんだ？俺達をどうしたい？」

「……」

禿頭の男は、ハジメの質問には答えず、ただ黙つて指を差す。その場所は何の変哲も無い唯の瓦礫の山だったが、男の眼差しは進めと言っているようだ。

「これは、ミレディみたいな感じじゃなくて、オスカーやメルジーネと同じような感じか……」

「そうかもしれないのう……」

「……行くか」

ハジメは問答をしても埒があかないと判断し、テイオ達と頷き合うとその瓦礫の場所へ踏み込んだ。すると、その瞬間、瓦礫がふわりと浮き上がり、その下の地面が淡く輝

きだした。見れば、そこには大迷宮の紋章の一つが描かれていた。

「やっぱりか……」

ハジメはこの紋章を見た瞬間……推測していたことがあたり、答えることは無いだろうが、質問してみた。

「……あんたは、解放者の一人のラウス・バーンか？」

ハジメが質問したのと、地面が発する淡い輝きがハジメ達を包み込んだのは同時だった。

そして、次の瞬間には、ハジメ達は全く見知らぬ空間に立っていた。それほど大きくはない。光沢のある黒塗りの部屋で、中央に魔法陣が描かれており、その傍には台座があつて古びた本が置かれていた。

「どうやら、いきなり大迷宮の深部に到達してしまつたらしいな」

「そうらしいの。じゃがご主人様、試練は……」

「もしかしたら、教会の爆発と共に無くなつたのかそもそもなかったの二つだが、十中八九、前者だろうな」

ハジメはアレスから、神山の試練は二つの神代魔法を持つてしてもキツかつたと聞いていた。なので、【神山】の大迷宮はテイオのプレスで崩れた可能性が高い。そう思いながら、ハジメはテイオ達と共に、魔法陣の傍に歩み寄つた。ハジメは、何が何やらと頭



上に大量の“?”を浮かべている愛子の手を引いて、テイオと領き合うと精緻にして芸術的な魔法陣へと踏み込んだ。

と、いつも通り記憶を精査されるのかと思つたら、もつと深い部分に何かが入り込んでくる感覚がして、思わず三人とも呻き声を上げる。あまりに不快な感覚に、一瞬、畏かと思つても、次の瞬間にはあつさり霧散してしまった。そして、攻略者と認められたのか、頭の中に直接、魔法の知識が刻み込まれる。

「……やはり『魂魄魔法』か」

「うむ。アレスが言つてたように、魂に干渉できる魔法のようじゃな……」

「先生は……大丈夫そうだな」

ハジメは愛子の方へと振り返ると、いきなり頭に知識を刻み込まれるという経験に、頭を抱えて蹲る愛子を尻目に、納得顔で領いてから、脇の台座に歩み寄り、安置された本を手にとろうとした時だった……

「さて、此処に何て——ッ！ ガアアッ！」

「ゴ主人様?!」

「南雲君?!」

ハジメは唐突な頭痛に倒れ込み、テイオと先生が声上がるが俺は頭を両手で抑えながら二人の声より頭に流れ込んでくる音声に強制的に耳を傾けられていた。

『鍵——後、二——の魔法』

——グッ……だ、誰の声だ？ 鍵？ 魔法？

『解き——れる——機械の力——我が——』

—— 機械の力？

『この——で、必——ラー——を………』

—— 頭痛がつ

「………治まった？」

その言葉を最後にハジメの頭痛が止み、冷や汗を流したが、身体に異常がないかと確かめて問題無くてホッとす。

「ふう………身体もおかしくないな——」

「ご主人様っ！」

「南雲君！」

「うおつ、先生、ティ——?!」

ティオは涙を浮かばせながらハジメに抱きついた。愛子は涙目になりながら傍に駆け寄る。ハジメは大丈夫だと言うが、ティオは我を忘れたかのように抱き締める力を緩めないで、苦笑いする。

「ティオ、安心しろよ。俺は大丈夫だ」

「でもつご主——「テイオ」?!」

「ハワワワワワツ」

ハジメはテイオを涙を見たくなかった。だからなのか身体が勝手に動いてしまい、愛子がいるのに関わらず、テイオに口付けをした。

「ご、ご、ご主人様?!」

唇同士を離すと、いきなりのキスで、テイオの顔が真つ赤に染まらせながらあたふたしていた。そんなテイオをハジメは愛おしく思いながら頬を擦る。

「テイオ、お前に涙は似合わねえよ。俺はテイオがずっと笑ってる方が良い」

「ご主人様……」

「テイオ「ゴホンツ」! …あつ、先生」

「南雲君! …私も心配したんですよつ! …全く貴方は……」

ハジメは顔を真つ赤にさせた愛子に少しでもだけ説教を喰らってから改めて、安置された本を手にとった。

「これは……アレスが持つてるのと違う手記だな」

どうやら、中身は大迷宮【神山】の創設者であるラウス・バーンが書いた手記のようで、アレスが持つてるのと別の手記だった。内容はオスカー・オルクスが持つていたものと同じで、解放者達との交流や、この【神山】で果てるまでのことが色々書かれてい

た。

しかし、ハジメは王都の事も気になってからさくつと読み飛ばしていく。内容的にラウス・バーンの人生などや彼が、なぜ映像体としてだけ自分を残し、魂魄魔法でミレデイのように生きながらえなかったのかも、懺悔混じりの言葉で理由が説明されていた。

そして、最後の辺りで、迷宮の攻略条件が記載されていたのだが、それによれば、先程の禿頭の男ラウス・バーンの映像体が案内に現れた時点で、ほぼ攻略は認められていたらしい。

というのも、あの映像体は、最低、二つ以上の大迷宮攻略の証を所持している事と、神に対して信仰心を持っていない事、そして、あるいは神の力が作用している何らかの影響に打ち勝った事、という条件を満たす者の前にしか現れないからだ。つまり、「神山」のコンセプトは、神に靡かない確固たる意志を有すること、のようだ。

おそらくだが、本来、アレスのように正規のルートで攻略に挑んだのなら、その意志を確かめるようなあれこれがあったのではないだろうか。愛子も攻略を認められたのは、長く教会関係者から教えを受けておきながら、そんな信仰心より生徒を想う気持ちを揺るがせなかったから、あるいは教会の打倒に十分手を貸したと判断されたからだろう。

「俺達には楽だが、この世界の人じゃキツイ条件だろうな」

ハジメは手記を読み終えて呟いた後、ようやく、神代魔法を手に入れた衝撃から立ち直った愛子を促して、台座に本と共に置かれていた証の指輪を取ると、ハジメ達は、さつさとその場を後にした。再び、ラウス・バーンの紋章が輝いて元の場所に戻る。

「先生、大丈夫か？」

「うう、はい。何とか……それにしても、すごい魔法ですね……確かに、こんなすごい魔法があるなら、神様と戦えたり、日本に帰ることの出来る魔法だってあるかもしれませぬ」

愛子が、こめかみをグリグリしながら納得したように頷く。その表情は、ここ数日の展開の激しさに疲弊しきったように疲れたものだったが、帰還の可能性を実感できたのか少し緩んでいた。

「それじゃ、魔法陣の場所もわかったことだし、早く優花達と合流しよう」

「あつ、そうです！ 王都が襲われているんですよね？ みんな、無事でいてくれれば……」

「ああ、急ごう……少し俺も嫌な予感がする」

「ご主人様、嫌な予感とは？」

「何か、胸騒ぎがするんだ。急ぐぞ」

——そう、あの声を聞いてから胸騒ぎがする……大切なものが失うような……。

心配そうな表情で祈るように胸元をギュと握り締める愛子を促して、ハジメ達は、下山を開始した。といつても、【神山】から王都へ降りるためのリフトがある場所から飛び降りるだけだが。

強制フリーフォールを体験することになった愛子の悲鳴が木霊するものの、ハジメはそんな事より胸騒ぎが収まらないことを気にしており、テイオはそんなハジメを心配そうに見つめている為、愛子の事はスルーだった。ぐったりした先生を肩に担いで地面に降り立った俺達は、あちこちから火の手が上がり悲鳴や怒号が響き渡っていた。

「テイオ、急いで優花の所に向かうぞっ！」

「うむっ」

王都の光景を見てハジメは急いで優花達がいる場所に向かった。

そして、合流した先で見たものは……

「は？」

仮面を着けた黒ずくめの男に胸を貫かれ、既に息絶えていた優花の姿だった……。

## 七十一話 裏切り

時間は少し戻る。ちょうど、リリアーナ達が王宮内に到着した頃。

パキヤアアアアン!!

「ッ!? 一体なにっ!?!」

ガラスが砕かれるような不快な騒音に、自室で就寝中だった八重樫雫は、シーツを跳ね除けて枕元の黒刀を手にとると一瞬で臨戦態勢を取った。明らかに普段から気を休めず警戒し続けている者の動きだ。

「……………」

しばらくの間、抜刀態勢で険しい表情をしながら息を潜めていた雫だったが、室内に異常がないと分かると僅かに安堵の吐息を漏らした。

雫がここまで警戒心を強めているのは、ここ数日、顔を合わせることも出来ないリリアーナと愛子、そしてメルド団長と遠藤、檜山の事が引つかかっているからだ。

少し前から王宮内に漂う違和感には気がついていて、あの日、愛子が帰還した日に、夕食時に重要な話があるという別れたきり姿が見えない事で、愛子の身に何か良くな

い事が起きているのではとも疑っていた。

そして、愛子が姿が見えなくなつてから翌日、メルド団長がいなくなつており、そして妙子と奈々の二人が遠藤を、そして我儘小悪党組の三人も檜山を見てないと言う。

当然、五人の行方を探し、イシユタルから愛子達は総本山で異端審問について協議しているというもつともらしい話を聞き出したのだが、直接会わせてもらうことは出来なかつた。そして、遠藤と檜山とメルド団長の三人は国王の勅命で何処かへと出向いてるとしか言われず、騎士団も副団長のホセがいるから大丈夫と言われたが、なお食い下がった雫だったが数日後には戻つてくると言われ、またリリーアーナの父で国王でもあるエリヒドにも心配するなど言われれば、渋々ではあるが一先ず引き下がるしかなかつた。

しかし、雫はそれでも漠然とした不安感は消えず、今のように、どこぞのスパイのよきな警戒心溢れる就寝をしていたのである。

「香織つ……アレ？」

香織？」

雫は音もなくベッドから降りると、ある事に気付く。同じ部屋に寝ていた筈の香織が居ないのだ。雫は急いで装備を整えて慎重さを忘れて部屋の外へ出た。

「香織、何処に行ったの？」

（香織がい……後、あの大きな音は？……いや、まず光輝の所へ向かつて香織の事と



かを伝えないとっ！)

部屋に居ない親友探しながら、雫は直ぐに向かいの光輝達の部屋をノックした。扉はすぐに開き、光輝が姿を見せた。部屋の奥には龍太郎もいて既に起きているようだ。どうやら先程の大音響で雫と同じく目が覚めたらしい。

「光輝、あなた、もうちよつと警戒しなさいよ。いきなり扉開けるとか……誰何するくらい手間じゃないでしょ？」

何の警戒心もなく普通に扉を開けた光輝に眉を潜めて注意する雫。それに対して光輝はキョトンとした表情だ。破碎音は聞こえていたが、王宮内の、それも直ぐ外の廊下に危機があるかもしれないとは考えつかなかったらしい。まだ、完全に覚醒していないというのもありそうだ。

ここ数日、雫が王宮内の違和感や愛子達のこと、何かがおかしい、警戒するべきだと忠告をし続けているのだが、光輝も龍太郎もそして、香織さえ考えすぎだろうと余り真剣に受け取っていないかった。

「そんな事より、雫。さっきのは何だ？ 何か割れたような音だったけど……」

「……わからないわ。とにかく、皆を起こして情報を貰いに行きましょう。後、光輝……香織が居ないのよっ！」

「なっ?! 香織がっ！ わかった龍太郎っ！ すぐ準備だ」

「お、おうー」

雫の香織が居なくなったの言葉で光輝は表情を変え、すぐさま龍太郎に指示して自分も装備を整えにいった。雫はそれだけ言うと、踵を返して他のクラスメイト達の部屋を片っ端から叩いていった。ほとんどの生徒が先程の破碎音で起きていたらしく、集合は速やかに行われた。不安そうに、あるいは突然の睡眠妨害に迷惑そうにしながら廊下に出てきた全生徒に光輝が声を張り上げてまとめる。

と、その時、雫と懇意にしている侍女の一人が駆け込んで来た。彼女は家が騎士の家系で剣術を嗜んでおり、その繋がりですと親しくなったのだ。

「雫様……」

「ニアー！　ねえつ、香織は知らない？　見なかった?！」

ニアと呼ばれた侍女は、どこか覇気に欠ける表情で雫の傍に歩み寄る。いつもの凜とした雰囲気影が差しているような、そんな違和感を覚えて眉を寄せる雫だったが、香織の事を知らないかと話すと、ニアからもたらされた情報に度肝を抜かれ、その違和感も吹き飛んでしまった。

「大結界が一つ破られました」

「……なんですつて?！」

思わず聞き返した雫に、ニアは淡々と事実を告げる。

「魔族の侵攻です。大軍が王都近郊に展開されており、彼等の攻撃により大結界が破られました。後、香織様は騎士団の方達と一緒にいると聞いてます」

「嘘、香織……そんな、一体魔族もどうやって……」

もたらされた情報が余りに現実離れしており、流石の雫も冷静さを僅かばかり失って呆然としてしまう。

それは、他のクラスメイト達も同じだったようで、ざわざわと喧騒が広がった。香織の居場所がわかったのは良いが、魔族の大軍が誰にも見咎められずに王都まで侵攻するなど有り得ない上に、大結界が破られるというのも信じ難い話だ。彼等が冷静でいられないのも仕方ない。

「……大結界は第一障壁だけかい？」

そんな中、険しい表情をした光輝がニアに尋ねる。王都を守護する大結界は三枚で構成されており、外から第一、第二、第三障壁と呼び、内側の第三障壁が展開規模も小さい分もつとも堅牢な障壁となっている。

「はい。今のところは……ですが、第一障壁は一撃で破られました。全て突破されるのも時間の問題かと……」

ニアの回答に光輝は頷くと、自分達の方から討って出ようと提案した。

「俺達で少しでも時間を稼ぐんだ。その間に王都の人達を避難させて、兵团や騎士団が

態勢を整えてくれれば……」

光輝の言葉に決然とした表情を見せたのはほんの僅か。雫や龍太郎、鈴、永山のパーティーなど前線組だけだった。

他のクラスメイトは目を逸らすだけで暗い表情をしている。彼等は前線に立つ意欲を失った者達だ。とても大軍相手に時間稼ぎとはいえ挑むことなど出来はしない。

ならば俺達だけでも、より一層心を滾らせる光輝に意外な人物、中村恵里が待ったをかけた。

「待って、光輝くん。勝手に戦うより、早くホセさん達と合流するべきだと思う」

「恵里……. . . . .だけど」

「ニアさん、大軍って……. . . . .どれくらいかわかりますか？」

「……. . . . .ざっとですが十万ほどかと」

その数に生徒達は息を呑む。

「光輝くん、とても私達だけじゃ抑えきれないよ。……. . . . .数には数で対抗しないと。私達は普通の人より強いから、一番必要な時に必要な場所にいるべきだと思う。それには、ホセさん達ときちんと連携をとって動くべきじゃないかな……. . . . .それにニアさんの話だと香織ちゃんもホセさん達というようだし……. . . . .」

大人しい眼鏡っ子の恵里らしく控えめな言い方ではあるが、瞳に宿る光の強さは光輝

達にも決して引けを取らない。そして、その意見ももつともなものだった。

「うん、鈴もエリリンに賛成かな。さつすが鈴のエリリンだよ！ 眼鏡は伊達じゃないね！ それにカオリンも其処にいるなら絶対にそうしよっ！」

「眼鏡は関係ないよお……鈴う」

「ふふ、私も恵里に賛成するわ。少し、冷静さを欠いていたみたい。私も香織の無事を確認したいしね。光輝は？」

女子三人の意見に、光輝は逡巡する。

「そうだな！ 良しつ、皆、俺達はホセさん達と合流する！」

しかし、光輝は普段は大人しく一步引いて物事を見ている恵里の判断を結構信頼している事もあり、結局、恵里の言う通りホセ達騎士団や兵団と合流することにした。

光輝達は出勤時における兵や騎士達の集合場所に向けて走り出した。すぐ傍の三日月のように裂けた笑みには気づかず……

~~~~~

「おいしい、雫ちゃん、光輝くうん、皆あ！」

「香織っ」

光輝達が、緊急時に指定されている屋外の集合場所に訪れたとき、既にそこには多くの兵士と騎士が整然と並び、前の壇上にはハイリヒ王国騎士団副団長のホセ・ランカイドが声高に状況説明を行っているところだった。そして、ホセの隣で大声を上げながら自分達を呼びながら手を振る香織の姿があった。月光を浴びながら、兵士達は、みな青ざめた表情で呆然と立ち尽くし、覇気のない様子でホセを見つめていた。

と、香織の呼び声で気付いたのか、広場に入ってきた光輝達に気がついたホセが言葉を止めて光輝達を手招きする。

「……よく来てくれた。状況は理解しているか？」

「はい、ニアから聞きました。えっと、ホセさん何故、香織はどうして此処に？」

ホセの歓迎の言葉と質問に光輝は頷き、そして尋ねた。

「香織殿は少し前に団員達の治癒を頼んでたんだ。それより、さあ、我らの中心へ。勇者が我らのリーダーなのだから……」

ホセはそう言つて光輝達を整理する兵士達の中央へ案内した。居残り組のクラスメイトが「えっ？俺達も？」といった風に戸惑った様子を見せたが、無言の兵達がひしめく場所でもか言い出せるはずもなく流されるままに光輝達について行った。

無言を通し、表情もほとんど変わらない周囲の兵士、騎士達の様子に、雫の中の違和感が膨れ上がっていく。それは起きた時からずっと感じている嫌な予感と相まって、雫

の心を騒がせた。無意識の内に、黒刀を握る手に力が入る。

そして、光輝達が、ちょうど周囲の全てを兵士と騎士に囲まれたとき、ホセが演説を再開した。

「みな、状況は切迫している。しかし、恐れることは何もない。我々に敵はない。我々に敗北はない。死が我々を襲うことなど有りはしないのだ。さあ、みな、我々が勇者を歓迎しよう。今日、この日のために我々は存在するのだ。さあ、剣をとれ」

兵士が、騎士が、一斉に剣を抜刀し掲げる。

「始まりの狼煙だ。注視せよ」

ホセが懐から取り出した何かを頭上に掲げた。彼の言葉に従い、兵士達だけでなく光輝達も思わず注目する。

そして……

カツ!!

光が爆ぜた。

ホセの持つ何かがハジメの閃光弾もかくやという光量の光を放つたのだ。無防備に注目していた光輝達は、それぞれ短い悲鳴を上げながら咄嗟に目を逸らしたり覆ったりするものの、直視してしまったことで一時的に視覚を光に塗りつぶされてしまった。

そして、次の瞬間……

ズブリッ

そんな生々しい音が無数に鳴り、

「あぐっ?」

「があ!」

「ぐふっ!?!」

次いで、あちこちからくぐもった悲鳴が上がった。

先程の光に驚いたような悲鳴ではない。苦痛を感じて、意図せず漏れ出た苦悶の声だ。そしてその直後に、ドサドサと人が倒れる音が無数に聞こえ始める。

そんな中、雫だけは、その原因を理解していた。広場に入ってからずっと最大限に警戒していたのだ。ホセの演説もどこか違和感を覚えるものだった。なので、光が爆発し目を灼かれた直後も、比較的動揺せずに身構え、直後、自分を襲った凶刃を何とか黒刀で防いだのである。目が見えない状況で気配だけを頼りに防げたのは鍛錬の賜物だろう。

そして、閃光が収まり、回復しただした視力で周囲を見渡した雫が見たのは、クラスメイト達が全員、背後から兵士や騎士達の剣に貫かれた挙句、地面に組み伏せられている



姿だった。

「な、こんな……」

呻き声を上げながら上から押し倒されるように押さえつけられ、更に、背中から剣を突き刺されたクラスメイト達を見て、雫が声を詰まらせる。まさか、全員殺されたのかと最悪の想像がよぎるが、みな、苦悶の声を上げながらも辛うじて生きているようだ。

そのことに僅かに安心しながらも、予断を許さない状況に険しい視線を周囲の兵士達に向ける雫だったが、その目に奇妙な光景が映り込み思わず硬直する。

「あらら、流石といふべきかな？……ねえ、雫？」

「え？… えっ……何をっ!？」

そう、瀕死状態のクラスメイト達が倒れ伏す中、たった一人だけ平然と立っている生徒がいたのだ。その生徒は普段とはまるで異なる、どこか粘着質な声音で雫に話しかける。余りに雰囲気が変わっているため、雫は言葉を詰まらせつつ反射的に疑問を投げ掛けようとした。

その瞬間、再び、雫の背後から一人の騎士が剣を突き出してきた。

「くっ!？」

よく知る相手の豹変に動揺しつつも、やはり辛うじてかわす雫に、その生徒は呆れたような視線を向ける。

「これも避けるとか……ホント、雫って面倒だよね？」

「何を言ってるッ！」

更に激しく、そして他の兵士や騎士も加わり突き出される剣の嵐。雫は、それらも全て凌ぐが、突然、自分の名が叫ばれてそちらに視線を向ける。

「雫ちゃん！」

「香織！」

そこには、騎士に押し倒され馬乗りの状態から、今まさに剣を突き立てられようとしている香織の姿があった。雫は咄嗟に“無拍子”からの高速移動で振り下ろされる剣撃をかいくぐり一瞬で香織のもとへ到達すると、親友に馬乗りになっている騎士に鞘を叩きつけて香織の上から吹き飛ばした。

「香織、無事？」

「雫ちゃん……」

倒れ込んでいた香織を支え起こしながら、周囲に警戒の眼差しを向ける雫。

そんな雫の名を香織はポツリと呟き、両手を回して継りつく。

そして、

……雫の背中に懐剣を突き立てた。

「あぐっ!?! か、香織? ど、どうして……」

「……ホントに雫ちゃんって、こう言うのにダメだよね」

背中に奔る激痛に顔を歪めながら信じられないといった表情で、雫は自分に抱きつく香織を見下ろした。

香織は、笑顔でただ雫を見返すだけだった。

雫はそこでようやく気がついた。あの時……ホルアドの頃から香織の様子がおかしいと感じていた。しかし、自分で「香織は、私の親友は大丈夫だ」と心の中で言い聞かせてきた。

しかし、現実違った。

香織はそのまま雫の腕を取って捻りあげると地面に組み伏せて拘束し、他の生徒達にしているのと同じように魔力封じの枷を付けてしまった。

「いや、雫ちゃんが単純で助かったよ」

「アハハハ、流石の雫でも、まさか『親友』に刺されるとは思ってた？ うんうん、そうだろうね？ いや、やっぱ、香織が味方でホントに助かったよ」

背中に感じる灼熱の痛みと頬に感じる地面の冷たさに歯を食いしばりながら、雫は他の正気でない兵士達は何かをされたのだと悟る。そして認めたくはないが、この惨状を作り出したであろう、今も笑顔の香織とニヤニヤと普段では考えられない嫌らしい笑みを浮かべるもうウンウンと頷く一人の親友の名を呼んだ。

「どういふこと……なの……香織、恵理」

そう、その人物は控えめで大人しく気配り上手で心優しい、雫達と苦楽を共にしてきた親友の一人、中村恵里その人だった。

重傷を負いながらも、直ぐには死なないうような場所を狙われたらしく、苦悶の表情を浮かべて生きながらえている生徒達も、コツコツと足音を立てながら幽鬼のような兵士達の間を悠然と歩く恵里を呆然とした表情で見つめている。

恵里は雫の途切れがちな質問には答えずに、何がおかしいのかニヤニヤと笑いながら光輝の方へ歩み寄った。そして、眼鏡を外し、光輝の首に嵌められた魔力封じの一つである首輪をグイッと引つ張ると艶然と微笑む。

「え、恵里……っ……か、香織もっ……一体……ぐっ……どうしたんだ……」

雫達幼馴染ほどではないが、極々親しい友人で仲間の一人である恵里の余りの雰囲気の違いに、体を貫く剣の痛みに堪えながら必死に疑問をぶつける光輝。だが、恵里はどこか熱に浮かされたような表情で光輝の質問を無視する。

そして、

「アハ、光輝くん、つくかまくえたく」

「うわあ、恵理ちゃん。良いなあ。私も……いずれ、ハジメ君と……フフ」

恵理はそんな事を言いながら、光輝の唇に自分のそれを重ねた。妙な静寂が辺りを包

む中、ぴちゃぴちゃと生々しい音がやけに明瞭に響く。恵里は、まるで長年溜め込んでいたものを全て吐き出すかのように夢中で光輝を貪つていて、香織はその光景を羨ましそうに見ている。

光輝は、わけがわからず必死に振りほどこうとするが、数人がかりで押さえつけられている上に、魔力封じの枷を首輪以外にも、他の生徒達同様に手足にも付けられており、また体を貫く剣のせいで力が入らずがままだった。

やがて満足したのか、恵里が銀色の糸を弾きながら唇を離す。そして、目を細め恍惚とした表情で舌舐りすると、おもむろに立ち上がり、倒れ伏して血を流す生徒達を睥睨した。苦悶の表情や呆然とした表情が並んでいる。そんな光景に満足気に頷くと、最後に視線を定めて笑みを浮かべた。

「とまあ、こういう事だよ。雫」

「つ……どういふ事よ……こふつ……」

「だから、言つたじやん恵理ちゃん。雫ちゃんも光輝君をそんな目で見てないつて」わけがわからないといった表情で、恵里を睨みながら吐血する雫に、恵里は物分りが悪いなあと言いたげな表情で、香織は「説明したのにな」と唇を尖らせる。恵理は頭を振ると、まるで幼子にももの道理を教えるように語りだした。

「うーん、わからないかなあ？ 僕はね、ずっと光輝くんが欲しかったんだ。だから、そ

のために必要な事をした。それだけの事だよ？」

「……光輝が好きなら……告白でもすれば……こんな事……」

雫の反論に恵里は一瞬無表情になる。しかし、直ぐにニヤついた笑みに戻ると再び語りだした。

「ダメだよ、ダメ、ダメ。告白なんてダメ。光輝くんは優しいから特別を作れないんだ。周りに何の価値もないゴミしかいなくても、優しすぎて放っておけないんだ。だから、僕だけの光輝くんにするためには、僕が頑張つてゴミ掃除をしないとイケないんだよ」

「そんな事もわからないの？ と小馬鹿にするようにやれやれと肩を竦める恵里。〃  
「ゴミ呼ばわり」されても、余りの豹変ぶりに驚きすぎて怒りも湧いてこない。一人称まで変わつており、正直、雫には目の前にいる少女が初対面にしか見えなかった。

「ふふ、異世界に来てよかったよ。日本じゃゴミ掃除するのは本当に大変だし、住みにくいっいたらなかったよ。もちろん、このまま戦争に勝つて日本に帰るなんて認めない。光輝くんは、ここで僕と二人ずーっと、ずうーと暮らすんだから」

「まさか……香織も」

「うん、私も恵理ちゃんに協力してるんだ」

雫は信じたくないと表情しながら自分にとって一番大切な親友に視線を向ける。

しかし、その親友……香織は雫を裏切るような言葉を返した。

「な、なんで……………」

「ハジメ君を救う為だよ♡」

「南雲君を……………救う?」

「うん!……………だって、ハジメ君が私の告白を断る訳ないよっ! 私のことを嫌う訳ないっ! あの時からずっと思ってた!そして、わかったんだよっ雫ちゃん! ハジメ君は縛られてるって!苦しめられてるって! あの園部優花につ!」

「香織……………アンタ、何……………いい、言つて……………」

香織は話していく内に内容が狂氣的だった。雫、そしてクラスメイトさえ、顔を青ざめていく。

「園部優花さえ殺せば、ハジメ君は私のモノになる。後、ハジメ君にくっ付いているあの女共も同じように殺して、ハジメ君と二人で愛を誓うんだあ」

クラスメイトを淡々と言う香織に二人の女子生徒が声を上げた。

「白崎さん!優花を殺すつて……………」

「それにユエさん達も……………」

それは、ハジメと優花の幼なじみである。妙子と奈々の二人であった。

「妙子ちゃん、奈々ちゃん……………」

「白崎さん！貴女は間違っ二人つてさく、遠藤君探してたよね？」……え」

「どう言う事、香織ちゃん？」

「遠藤君つてさあく、少し実力もあつて、光輝君と違つて面倒臭かつたんだよく。だから

……メルド団長と一緒に殺しちやつた♡」

「「「「「！」「」」」」」

「「え……」」

「香織……嘘、よね？」

香織の言葉にクラスメイト達が反応し、幼なじみの二人は大切な幼なじみの死に啞然として顔を青ざめさせていく。雫は香織の言葉を嘘だと願う。

「あれく、香織もう言うのく？もう少しサプライズ感覚で言おうと思つたのになく」

しかし、恵理の言葉でその願いが潰えた。

「浩介が……死んだ？」

「浩ちゃんが……ふえ、グズツ」

妙子は絶望とした表情となり、奈々は泣き出す。そんな二人をクスクスと笑いながらそう語る香織と恵理に、雫は、まさかと思ひながら、ふと頭をよぎつた推測を口からこぼす。

「……まさか……つ……大結界が簡単に……破られたのは……」



「アハハ、気がついた？ そう、僕だよ。彼等を使って大結界のアーティファクトを壊してもらったんだ」

「流石っ、雫ちゃん」

雫の最悪の推測は当たっていたらしい。魔族が王都近郊まで侵攻できた理由までは思い至らなかつたが、大結界が簡単に破られたのは恵里と香織の仕業だったようだ。二人の視線が、彼女の傍らに幽鬼のように佇む騎士や兵士達を面白げに見ている事から、彼等にやらせたのだろう。

「君達を殺しちゃつたら、もう王国にいられないし……だからね、魔族とコンタクトをとって、王都への手引きと異世界人の殺害、お人形にした騎士団の献上を材料に魔人領に入れてもらつて、僕と光輝くん。香織と南雲だけを放つておいてもらうことにしたんだあ」

「馬鹿な……魔族と連絡なんて……」

「それが……出来たんだよね。恵理ちゃん」

二人の発言の衝撃からどうにか持ち直し、信じられないと言つた表情で呟く。二人は自分達とずっと一緒に王宮で鍛錬していたのだ。大結界の中に魔族が入れない以上、コンタクトを取るなんて不可能だと、恵里を信じたい気持ちから拙い反論をする。

しかし恵里は、そんな希望をあつさり打ち砕く。

「香織が言ったように、「オルクス大迷宮」で襲つてきた魔人族の男の人。帰り際にちよちよいと、降霊術でね？ 予想通り、魔人族が回収に来て、そこで使わせてもらつたんだ。あの事件は、流石に肝が冷えたね。何とか殺されないように迎合しようとしたら却下されちゃうし……思わず、降霊術も使っちゃったし……怪しまれたくないから降霊術は使えないっていう印象を持たせておきたかつたんだけどねえ……まあ、結果オーライって感じだったけど……」

恵里の言葉通り、彼女は魔人族の男に降霊術を施して、帰還しない事で彼を探しに来るであろう魔人族にメッセージを残したのである。フリード達がウイリスの死の真相を知っていたのはそういうわけだ。なお、魔人族からの連絡は適当な「人間」の死体を利用してゐる。

恵里の話を聞き、彼女の降霊術を思い出して雫が唯でさえ血の気を失つて青白い顔を更に青ざめさせた。

降霊術は死亡対象の残留思念に作用する魔法である。それを十全に使えることを秘匿したかつたということは、実際は完璧に使えるということ。であるならば、雫達を包围する幽鬼のような兵士や騎士、そして、自分を抑えるニアの様子から考えれば最悪の答えが出る。

「彼等の……様子が……おかしいのは……」

「もつちろん降霊術だよ。既に、みんな死んでます。アハハハハハ！」

「ホントにこの数を殺すのは大変だったよね〜」

雫は、もたらされた二人の非情な解答にギリツと歯を食いしばり、必死の反論をした。

「……嘘よ……降霊術じゃあ……受け答えなんて……できるはず……ない！」

「そこはホラ、僕の実力？ 降霊術に、生前の記憶と思考パターンを付加して、ある程度だけど受け答えが出来るようにしたんだよ。僕流オリジナル降霊術『縛魂』ってところかな？ ああ、それでも違和感はあるけどね。一日でやりきれない事じゃなかったし、そこは僕も香織もどうしたものかと悩んでいたんだけどお……ある日、協力を申し出てくれた人がいてね。銀髪の綺麗な人。計画がバレているのは驚いたし、一瞬、色々覚悟も決めたんだけど……その時点で告発してないのは確かだったし、信用はできないけど取り敢えず利用はできるかなあ〜って、まあ……その代償に協力者の檜山が死んだだけ〜」

「残念だったよね〜」

ホント、焦ったよおくと、かいてもいない汗を拭うふりをする恵里に賛同する香織。おそらく、その過程にも色々あったのだろうが、そんなことはおくびにも出さない。

「一、じゃ、じゃあ……檜山君は……もう」

「はいっ、檜山は、もう死んでますっ！ アハハッ！」

「大介が……」

二人の話で檜山も死んだと知るとクラスメイト達は更に顔を青ざめていくが、恵理はスルーして言葉を続ける。

「実際、国王まで側近の異変をスルーしてくれただから凄いやね？ 代わりに危ない薬でもキメてる人みたいになってたけど。まあ、そのおかげで一気に計画を早める事ができたんだ。くふふ、大丈夫！ 皆の死は無駄にしないから。ちやくんと、再利用して魔人族の人達に使つてもらえるようにするからね！」

本来、降霊術とは残留思念に作用して、そこから死者の生前の意思を汲み取ったり、残留思念を魔力でコーティングして実体を持たせた上で術者の意のままに動かしたり、あるいは遺体に憑依させて動かしたり出来る術である。

その性能は当然、生前に比べれば劣化するし、思考能力など持たないので術者が指示しないと動かない。もちろん、「攻撃し続ける」などと継続性のある命令をすれば、細かな指示がなくとも動き続ける事は可能だ。

つまり、ホセが普通に雫達と会話していたような事は、思考能力がない以上、降霊術では不可能なはずなのだ。それを違和感を覚える程度で実現できたのは、恵里のいう「縛魂」という術が、魂魄から対象の記憶や思考パターンを抜き取り、遺体に付加できる術だからである。

これは言ってみれば魂への干渉だ。すなわち恵里は末端も末端ではあるが、自力で神代魔法の領域に手をかけたのである。まさにチート、降霊術が苦手などとよく言つたもので、その研鑽と天才級の才能は驚愕に値するものだ。あるいは凄まじいまでの妄執が原動力なのかもしれない。

ちなみに恵里が即座にクラスメイト達を殺さないのは、この「縛魂」が、死亡直後に一人ずつにしか使用できないからである。

「ぐう……止めるんだ……恵里！香織！……そんな事をすれば……俺は……」

「僕等を許さない？　アハハ、そう言うと思つたよ。光輝くんは優しいからね。それに、ゴミは掃除してもいくらでも出てくるし……だから、光輝くんもちゃんと「縛魂」して、僕だけの光輝くんにしてあげるからね？　他の誰も見ない、僕だけを見つめて、僕の望んだ通りの言葉をくれる！　僕だけの光輝くん！　ああ、ああ！　想像するだけだよ！　」

「光輝君に言われてもな」

恍惚とした表情で自分を抱きしめながら身悶える恵里と何も感じてない表情をする香織。そこに、穏やかで心配り上手な図書委員の女の子と二大女神の一人の面影は皆無だった。クラスメイト達は思う。彼女達は狂っていると。「縛魂」は、降霊術よりも死者の使い勝手を良くしただけで術者の傀儡、人形であることに変わりはない。それが分

かっついて、なお、そんな光輝を望むなど正気とは思えなかつた。

「嘘だ……嘘だよ！ う……エリリンとカオリンが、二人が……つ……こんなことするわけない！ ……きつと……何か……そう……操られているだけなんだよ！ つ……目を覚まして二人共！」

「そうよっ！ 鈴の言う通りよっ！ 恵理、香織っ！ 今なら戻つてこれるわっ！」

二人の親友である鈴と雫が痛みに表情を歪め、苦痛に喘ぎながらも声を張り上げた。その手は二人のもとへ行こうとでもしているかのように地面をガリガリと引つ掻いている。恵理と香織は、顔を見合わせ二人の自分達を信じる言葉とその真つ直ぐな眼差しにニツコリと笑みを向けた。そして、おもむろに一番近くに倒れていた近藤礼一のもとへ歩み寄りながら喋る。

「ねえ、鈴？ ありがとね？ 日本でもこっちでも、光輝くんの傍にいるのに君はとつても便利だったよ？」

「……え？」

「参るよね？ 光輝くんの傍にいるのは雫と香織つて空気が蔓延しちやつてさ。不用意に近づくと、他の女共に目付けられちゃうし……向こうじや何の力もなかつたから、嵌めたり自滅させたりするのは時間かかるんだよ。その点、鈴の存在はありがたかつたよ。馬鹿丸出しで何しても微笑ましく思つてもらえるもんね？ 光輝くん達の輪に入つて

も誰も咎めないもの。だから、〃谷村鈴の親友〃っていうポジションは、ホントに便利だったよ。おかげで、向こうでも自然と光輝くんの傍に居られたし、異世界に来ても同じパーティーにも入れたし……うん、ほくんと鈴って便利だった！ だから、ありがと！

「……あ、う、あ……」

衝撃的な恵里の告白に、鈴の中で何かがガラガラと崩れる音が響いた。親友と築いてきたあらゆるものが、ずっと信じて来たものが幻想だったと思いい知らされた鈴。その瞳から現実逃避でもするように光が消える。

「恵里っ！ あなたはっ！」

「まあ、感謝は良いとして……じゃあね近藤」

「バイバイ、近藤君」

近藤の傍に歩み寄った二人は、何をされるのか察して恐怖に震える近藤に向かって再び、ニツコリと笑みを向けた。光輝達が、「よせえ！」「やめろお！」と制止の声を上げる。そして、恵里が剣を心臓に向けて突き刺そうとした時だった。

「目眩しだつ、〃シャイン〃！」

「クルルッ！」

その大声に反応して一体の黄色の鳥型の魔物が鳴き声した直後、恵里と香織の前で、

体を発光させた。

「キャッ!」

「……………?! チツ……………そういうえば居たねえ、面倒臭いのがもう一人。……………ねえ、清水?」  
発光中に近藤は自分で転がりながら二人から離れ、発光が終わると恵理はある人物を睨む。

それは……………

「へっ……………従魔を仕込んで良かったぜ」

闇術師の清水幸利だった。

「……………恵理ちゃん」

「分かってる。清水を先に殺す。殺れ」

香織と恵理は目を細めながら、清水の近くにいる騎士に指示をする。指示された騎士は清水を殺す為、動き出す。

「はっ!俺は南雲やあの人達に恩があるっ、先生にも。だから俺はまだ死ねない約束したからなっ!だからこの状況を覆すプレゼントをお前達に用意したっ!」

「何、御託言ってるの? さっさと死ねよ」

清水の言葉に恵理は無視して、さっさと殺せと指示する。騎士は剣を清水に突き立てようとした時だった。



「俺が何時、従魔が一体だけだと思つたか？ インビジブル！ 不可視を解除しろっ！ そして、頼みましたっ、二人共！ ガルル！」

「ゲロロオン」

ザッ！

「おうっ！」

「ガルウツ！」

ガキイイイイン！

「なっ?!」

「何で生きて……」

清水の叫びと同時に清水の懐から出たカメレオンのような魔物が鳴く。その瞬間、清水の周りの空間が歪み二人の声と獣の鳴き声が聞こえる。そして、清水を殺そうとした騎士の剣が弾かれ、少し大きい魔物に襲われてしまい倒れてしまう。そして、香織と恵理はその騎士の一振を弾いた二人の人物に驚愕した。

妙子と奈々は、その人物達の一人を見て、絶望から喜びに変わる。

「浩介……アンタねえ！生きてんなら声をかけなさいよっ、馬鹿！」

「浩ちゃん！よがっだっよ〜」

「メルド団長！」

「メルドさん！」

「確かに死んだ筈……」

「何で、何で、何で 生きてんだよっ！ 遠藤！ 団長！」

妙子と奈々、雫と光輝は喜びの表情を見せ、香織は戸惑い、恵理は叫ぶ。そう、目の前にいるのは二人は使徒との戦いで、恵理と香織の話で死んだとされた……

「白崎さん……いや白崎、そして中村……もう、てめえ等の好きにさせねえぞ……」

「カオリ、エリ……お前達はやり過ぎた。これは俺の指導者としての責任がある。……が、お前達も相応の罰を受けて貰うぞ」

小太刀とサングラスを構える“深淵卿”遠藤浩介と、騎士剣とはまた違う翡翠の輝きを持つ剣を手に持った王国騎士団団長メルド・ロギンスの二人だった……。

## 七十二話 魔王アルヴ

恵理と香織の裏切りにより、絶望の状況だったクラスメイト達。そんな状況に現れたのは恵理と香織の二人が死んだと言われていた二人……

「てめえ等の好きにはさせねえぞ」

「お前達には相応の罰を受けて貰う」

「ガルルッ！」

遠藤浩介とメルドの二人と清水の従魔であるサーベルタイガー型の魔物。ガルルッ  
“ だった。

「何でっ！アンタ達が生きてんだよっ！」

恵理は自分の計画にまたもや邪魔が入り、怒りを顕にする。そんな恵理に浩介はサングラスを装着してから一旦ターンを決めてから恵理に告げた。

「フツ……中村よ。我を少し侮り過ぎたようだな」

「……殺すっ」

アビスゲートの一々キレのあるポーズにキレた恵理は傀儡の騎士達を一斉にアビ

スゲートとメルドに攻撃を指示をする。それに続いて、清水もガルルに指示を出した。

「浩介っ！ お前は光輝達を解放しろっ！俺はこの馬鹿者達を抑える！」

「ガルル！ お前もメルド団長のサポートを頼む！」

「承知！ 行くぞっ我達！」

「「おうっ」」

「ガルウツ！」

メルドの指示でアビスゲートは光輝達の解放する為、分身を作り行動に出る。ガルルも主人である清水の指示でメルドのサポートにまわる。

「……ッ！ させないっ！」

恵理は拘束を解除させない為に、アビスゲートに狙いを定めて騎士達を動かすが……  
「お前達の相手はこの俺だ。風魔の太刀を 我が身に纏いて 今此処に！—— 烈

風豪斬！！」

ゴオオオオオオオウ

アビスゲートを狙う騎士達にメルドが周り込み激しい風の斬撃を飛ばし、騎士達を吹き飛ばす。

「どうした！ お前達っ！ 浩介の所に向かうなら俺を倒してみろっ！」

メルドは風の斬撃を飛ばした後、正に王国騎士団団長と言える圧を飛ばしながら剣

を構える。

「クソツ……」

「恵理ちゃん！　メルドさん何か強くなってるじゃない？」

あの魔法とか？」

「確かに……」

（メルドは確か……自分で魔法系は苦手と言っていた。迷宮の時も大体は初歩の風系

の魔法しか使っていないのに……）

恵理と香織はメルドが上級魔法を使っているのを驚く。それは拘束されてる光輝達クラスメイト達も驚いていた。

「俺が上級魔法を行使してる事に驚いているようだな」

「ー」

「この剣はな、アーティファクトで、俺の信頼できる。ある男から貰ったモノでな。重要な時にしか使わんようにしてたのさ……甘いぞっ！　ウオオッ！」

メルドは襲いかかる騎士達を相手にしながら恵理達の疑問を解くように自分の剣の説明をした。そう、メルドが今、使っている剣はいつも使う騎士剣では無く、翡翠に輝く綺麗な大剣だった。

「ガルルッー」

それに続いて、ガルルもメルドと同じように物凄いスピードで駆け出しながら、騎士

達を吹き飛ばしたり、その厳つい牙で騎士達に喰らいつく。

ガルルは清水の持つ従魔で攻撃型の魔物であり、その強さはオルクスの奈落の中層に匹敵するレベルである。

「もう滅茶苦茶だよっ……—光じ……キャッ!」

「香織、どうしたの?! って……これは投げナイフ? それにこれって……」

「これってアンタの仕業よね。中村さん?」

メルドとアビスゲート、清水の従魔の登場で、恵理の計画が滅茶苦茶二なり、内心舌打ちする香織は自分もサポートしようと思つたが何者かによって、邪魔をされる。駆け寄った恵理は香織を邪魔した投げナイフを拾う。その投げナイフに恵理は見覚えがあった。そして、後方から此処にいる筈のない人物の声が出た。

恵理と香織、他のクラスメイト達も声の方向に視線を向けた。

そこには……

「状況は分かんないけど……見た感じ、中村さんと香織が何かしたんだよね?」

「みなさん! 一体、どうしたのですか! 恵理! 香織! これは一体どういうこと

です!」

投げナイフを構えた少女、園部優花と最近、王都で見なかつたりリアーナ姫だった。

「ユウカ（ツチ）！」

「優花?!」

「ムツ……園部！　ならハジメがつ」

「園部さん?!」

「リリアーナ姫?!」

「姫様！」

クラスメイト達とメルドからは優花とリリイの登場で驚愕、そして……

「っ!?　なんで、君がここに居るのかなあ！　君達はほんとに僕の邪魔ばかりするね！」

「園部エエエエ！」

恵理と香織が怒りに顔を歪める。恵理は優花達に騎士達を差し向けようとした時だった。

ガチャン

「まさか………」

「まさか……拘束が……」

何かが外れる音がした。恵理と香織はまさかかと思いい顔を青ざめながら、拘束されているクラスメイト達の方へ目を向ける。

そこには……

「フツ……全員の解放完了したぞ」

「流石ね、浩介」

「浩ちんくありがと〜」

「サンキューな遠藤！」

「はあく、上手くいっただ。よくやったガルル！」

「恵理、香織……貴女達のしたことは許せないわ」

「恵理、香織！ もうやめてくれ！ こんな事をしても意味ないっ！ 投降するんだっ！」

アビスゲートの手によって拘束が全て外され、自分達の装備を手にしたクラスメイト達だった。近くにいた騎士達もアビスゲートとメルドの手によって倒れている。

「クソ、クソ、クソ、クソッ！ あくもうっ滅茶苦茶だ！」

「アイツを殺してないのに、ハジメ君を……」

騎士達を倒され、クラスメイト達も全員解放された。恵理は悪態をつきながら髪を巻るように荒く掻く。香織は計画が失敗した事に絶望する。

クラスメイト達とメルド、優花達はどんどん恵理達に迫る。恵理達はそれに合わせるかのように後退る。もう……勝負は決まったと誰もがそう思った。

しかし……



『少し、君達に期待していたのだが……惜しかったな。でも安心してくれたまえ私が助太刀をしよう』

何処か透き通った声が響き渡る……

ヒュン！

「なっ?!」

「えっ何?! 瞬間移動?!」

「あれって、アレス兄様が使ってた……」

「アレは何者だ?」

「……ヤバイぞ、彼奴は」

「空間魔法? いや、ゲートが見えてない」

クラスメイト達は突然、自分達と恵理達の間は何者かが現れ、驚愕し、雫、メルド、浩介、優花はその相手のヤバさに気付き、すぐさま得物を構える。

その者は全身が黒色の軍服で少し豪華さを感じる長めのケープを身に纏い、顔は見せないようにか頭全体を覆う仮面を被っている。

「……人間族共には自己紹介がまだだったな……私の名はアルヴ。〃魔人族の王アルヴヘイト〃だ」

仮面の男は自己紹介をして、その名を聞いた瞬間、この場にいる全員に衝撃が走

る。それもそうだろう。目の前に現れた仮面の存在は魔人族の王だから。

「嘘でしょ。まさか魔王様が直々にボク達を助けに来たのかい？」

「ああ、私の大事な部下がイレギュラー達の介入で大ケガを負ったらしくてね。救助に向かえないと連絡が入ったから、私が直に助けに来たんだ」

「でも、何で魔王様が私達をそこまで……」

「君達はまだあの方達を楽しませれる面白い駒だからね、生かしておきたいんだよ」

「……………」

「……………ああ、そういうこと」

恵理と香織は魔王の登場に驚きと歓喜に感じたが、どうして自分達を助けるのか気になったが、アルヴの言葉で恵理は納得した。そして、恵理は傀儡の騎士達を立ち上がらせ、またもやクラスメイト達に向けて襲いかかるように指示する。

「お前が、魔王アルヴか！ お前が恵理と香織を唆したんだろ！俺がお前を倒す！ウオオオオツ——『限界突破ア』！」

「光輝！止まれっ！」

「光輝っ、無茶よっ！」

「おいっ、馬鹿勇者！」

傀儡の騎士達の対処をしている中、光輝はアルヴの登場で恵理と香織はアルヴに

よつて裏切つたと解釈して限界突破を發動する。メルド、雫、アビスゲートは光輝に止まるように叫ぶが、光輝は無我夢中にアルヴに突つ込む。

「ウオオオオツッ！ 天へと羽ばたけ—— “天翔閃”！」

光輝がアルヴに迫りながら“限界突破”で威力が上がつた光の斬撃を飛ばす。

「これが勇者か……聞いていた通り面白い駒ではあるが……弱いな」

アルヴは光輝の“天翔閃”を片手で驚掴みそのまま破壊した。その光景に光輝、そしてクラスメイト達もが驚愕する。

「クツ……俺は弱くないっ！ウオオオオオツッ！—— “神威”！」

光輝はアルヴに“弱い”と言われ怒りが更に加速する。好機は“縮地”でアルヴとの距離を詰め、既に詠唱をしてストツクにしていた“神威”を發動する。光輝は神々しく輝きを増す聖剣空へ掲げてからを振り落とそうするが……。

「そんな君みたいなの攻撃に“神言”を使う意味もないな……」

アルヴは呆れたように言つた直後、どういふ理屈でかは分からないが一瞬で光輝の後ろに周り込み、横腹に蹴りを入れ、同時に鈍い音が聞こえる。更にアルヴは追撃で攻撃しようとして光輝に手を出そうとするが、光輝はギリギリの瞬間にアルヴがまた攻撃をするのを気付き、横腹が痛むのを我慢して全身を使って回避をする。

しかし……

「……読めてるよ」

アルヴは光輝の行動を分かっていたようにすぐさま、詰め寄り顔面を掴んで地に向かって投げ飛ばす。

「グハアッ！」

投げ飛ばされた光輝は受け身を取れる暇もなく、地面に叩きつけられながら激突し、吐血すると共に全身の幾つかの骨が折れ、仰向けに倒れ伏す。

「光輝ッ！」

「今代の勇者の実力はこんなモノか……」

雫は地面に激突した光輝に心配して声を上げ、アルヴは勇者の実力に対し落胆するが……。「まあ、人としては面白い駒だし」と呟く。

「オオオオオオオ！」

光輝と入れ替わるように龍太郎、永山がクラスメイト達を守る為にアルヴに突っ込む。

「次は脳の無い雑魚共か……」

ガシッ

「なっ?!」

「くっ！」

アルヴは二人の強烈な突きを軽々しく受け止め、二人からは驚愕の声が漏れる。するとアルヴは受け止めた同時に永山の腹に蹴りを入れ吹っ飛ばす。その瞬間永山から骨が折れる音が聞こえた。何本か骨が折れたのだろう。そして、アルヴは片方の手で抑えてる龍太郎の手をバキツと音を立てながら握り潰した。

「グウウウツッ！」

龍太郎は片手を握り潰され、その場で倒れ込み苦悶の声を上げる。

「フツ……他愛のないな……ツッ！」

ガキイン！

「やはり、この太刀を受け止めるかっ！」

アルヴは龍太郎にトドメを刺そうとした時、龍太郎の影からアビスゲートが現れて驚愕するが、すぐさまアビスゲートの小太刀を受け止める。

「まさか、私の感知を欺ける者がいるとはな驚いたよ」

「ご褒めに預かり光栄だ。しかし、魔王よ我ばかりを気にして良いのかな？」

「どういう……ツッ！」

「ハアアアアアッ！」

「よくやった！浩介！」

「行くぞっ！ガルル！」

「ルガアッー」

いつの間にかアルヴに詰め寄っていた雫とメルドは雄叫びとアビスゲートの称賛をしながらアルヴに斬り掛かっており、清水もガルルに騎乗してアルヴに詠唱をしながら、ガルル共に突貫する。

「それが……どうしたっ！」

アルヴはアビスゲートに気にし過ぎており、感知を怠ってしまい、雫とメルドの接近に気付くのを遅れてしまうが、全身を回転させながら片方の足で雫を蹴り飛ばし、その勢いでアビスゲートを殴り飛ばすと、流れるようにメルドを踵蹴りで横腹に蹴りを入れる。その威力は鎧に強く伝わり、メルドを吹き飛ばしていく。清水とガルルには頭上へと一瞬に移動すると清水の蹴りで吹き飛ばし、闘技場の壁に激突する。ガルルも同じように蹴り飛ばされた。

「少しは連携が取れてるが……私には通用しない」

スつと華麗に着地したアルヴはアビスゲート達の連携に褒めはしたが、それだけだった。

「なんて、実力なの……」

「クツ……流石は魔王と呼ばれる者だな……強い」

「グツ……姫様、お前達……光輝達を連れて此処から離れろ！俺が出来るだけ時間を稼

ぐー」

「……ッ！駄目です！メルド団長も傷がっ！」

「……そうだぞ。メルド団長……あの時に助かった命を無駄にするのか？」

清水とガルルは壁に激突した勢いで意識を失うが吹き飛ばされただけの三人は身体をボロボロにしながらも立ち上がる。そしてメルドは自分が身代わりになるから逃げろと言うが、雫とアビスゲートがそれを止める。

「話は良いが……私の事を忘れてないな」

「「……ッ！」」

「雫！」

「雑魚が何言おうか知らんが……一人ぐらい構わないか、死ぬ———『聖絶』！———』  
「防御力上昇———『光属性魔法強化付与』！」……ほう」

そんな三人の会話にアルヴは気にせず三人の中で一番近くに転がっていた雫を殺そうとするが、ガキンと音が鳴り、見れば雫を覆うように光の障壁が出来ていた。

「そんな汚い手で雫を触らないで貰える？」

それは、優花が張った障壁だった。

「ほう……貴様は確かイレギュラーの……ッ?!」

な……クリ……スタ様?」

「え?」

「まさか、貴女の魂魄はそこにあつたとは……これはつ、早急に始末せねばっ！」

アルヴは優花を見て仮面越しからでも分かる程、動揺していた。そして、アルヴは血相を変え、その勢いのまま標的を雫から優花に変えて、一気に加速する。

「……つお前等アア！園部を守れっ！」

それに気付いたアビスゲートは大声で叫ぶ。しかし、清水は意識を取り戻したが身動きが取れない。他のクラスメイト達も立ち上がった騎士達の対処に追われ、身動きの取れない状態。そして、優花の傍にいたりイイはアビスゲートが叫ぶと同時に、聖絶“を発動しようとした。

しかし……

グチャッ！

「えっ……」

それは、何かが潰れた音だった。リリイはその音の聞こえる方へ目を向けるとそこには……

「カハッ……」

「……ッ?! ユウカアアアア！」

アルヴに心臓辺りを貫かれた優花の姿が目映った。

「貴様は早急にこの盤上から消えて貰わないと困るんだ。貴様はもしかしたら奴を呼



び起こす可能性があるんだ厄災を」

アルヴは手で優花の身体を貫きながらそう若干、唇を震えながら話す。

「ユウカアアアア！」

「嘘……ユウカっち」

「ゆ、優花……？」

優花の幼なじみの妙子と奈々の絶叫が響き渡り、雫は自分の友達が名前を呼び合えるようになった人が貫かれるのを見て放心する。

「アハハ……園部さん死んだね。香織」

「うん！私の手でしたかったけど、結果オーライ！アルヴさんに感謝だよっ！」

恵理はアルヴの急変した動きに驚き、香織は自分の殺したい相手が殺されたのは納得いかなかったが、嬉しさを顕にする。

直後、絶叫が響き渡る。

「……ツ貴様アアアアアアア！」

アビスゲート……いや浩介だ。怒髪天を衝くと言った様子で無我夢中にアルヴに突貫していく。

「駄目だっ、浩介！」

「遠藤っ、駄目だ！」

「遠藤君っ!」

メルド、そしてクラスメイト達は遠藤の突貫をやめようと叫ぶが、浩介は無視して怒りに任せてアルヴへと突貫していく。

「死ねええ!」

「……五月蠅い蠅が、アルヴの名に命ずる——『止まれ』」

「がっ……身体が……?」

(動けねえ……何でだっ?)

アルヴは浩介に何か言った直後、浩介は一瞬で勢いが無くなったように、止まったように動かなくなった。

「てめえ……何を……」

「貴様に使うことはないと思つたが、私は今、忙しい。早急にこの女を確実に殺さないといけないんだ」

「……や……めろ」

「断る。次は頭を砕こうか……」

浩介を無視してアルヴは優花を貫いたまま、頭を砕くために優花の頭に触れようとする。

傀儡の騎士達の肉壁越しにメルド、龍太郎や永山、雫や光輝、健太郎や綾子、更に

は居残り組の生徒達まで怒声を上げて制止する。

「やめてよ……優花が」

「やめてよ……ユウカつちに……そんなことしないで……」

「グオオー……園部に触るなっ!」

そして、優花のずっと大切な幼なじみの三人も涙を流しながら制止の声を上げる。そんな声を無視するように動きは止まらない。

香織はそんな光景にニヤニヤが止まらず、まだかまだかと笑みを浮かべる。

そして――

その声は絶望渦巻く裏切りの戦場にやけに明瞭に響いた。

「……一体、どうなつてやがる?」

それは白髪眼帯の少年、南雲ハジメの声だった。

ハジメの登場に、まるで時間が停止したように全員が動きを止めた。それはハジメが凄絶なプレッシャーを放つていたからだ。

本来なら傀儡兵達に感情はないため、ハジメのプレッシャーで動きを止めることなどないのだが、術者である恵里が、生物特有の強者の傍では身を潜めてやり過ごすという本能的な行動を思わずとつたため、傀儡兵達もつられてしまったのである。

ハジメは自分を注視する何百人という人間の視線をまるで意に介さず、周囲の状況を

睥睨する。クラスメイト達を襲う大量の兵士と騎士達、一塊になつて円陣を組んでいるクラスメイト達、血を垂らしながら立ち上がるメルドとボロボロで片膝を着く光輝、黒刀を片手に膝をつけている雫、壁に埋め込まれている清水、涙を流す自分の大切な幼なじみ達、身体を動かせないのか止まっている親友、硬直する恵里と香織、そして……黒ずくめの仮面の男に胸を貫かれ、命の鼓動を止めている優花……

「ほう……アレがイレギュラー……ッ?!」

アルヴはハジメを見て何か言おうとしたが途端にやめた……いや止まってしまった。その姿を見た瞬間、この世のものとは思えないおぞましい気配が広場を一瞬で侵食した。体中を虫が這い回るような、体の中を直接かき混ぜられ心臓を鷲掴みにされていくような、怖気を震う気配。圧倒的な死の気配だ。血が凍りつくとはまさにこのこと。一瞬で体は温度を失い、濃密な殺意があらゆる死を幻視させる。

刹那、ハジメの姿が消えた。

そして、誰もが認識できない速度で移動したハジメは、轟音と共に優花の傍に姿を見せる。轟音は、アルヴが吹き飛び広場の奥の壁を崩壊させながら叩きつけられた音だった。ハジメは一瞬でアルヴの懐に踏み込むと、優花に影響が出ないように手加減しながら殴り飛ばしたのである。

「流石はイレギュラーッ！」

私でも今の貴様を捉えることが出来なかつた！」

アルヴはハジメの動きを捉える事が出来ず驚愕しながら、ハジメに加減されたとしても殴り飛ばせられても平然と上手く着地した。

ハジメは片腕で優花を抱き止めると、そつと顔にかかった髪を払った。そして、大声で仲間を呼ぶ。

「テイオ！ 頼む！」

「優花つ……うむ、任せよ！」

「そ、園部さんっ！」

ハジメの呼びかけに応じて、一緒にやつて来たテイオが我を取り戻したように急いで駆けつけた。傍らの愛子も血相を変えて優花の傍にやつて来る。ハジメから優花を受け取ったテイオは急いで詠唱を始めた。

「無駄だイレギュラー、もうその女は死んだ。何しようが無理だ。しかし、良い条件があるぞイレギュラー。私の軍門に降れ。そしたら貴様の命と此処にいる人間共の命を落とすことはないと保証する。どうだろうか？」

アルヴはハジメに交渉を持ち込む。内心、ハジメが軍門に降れば主には褒められはしないだろうが他の三柱には褒められると思っっているからだ。クラスメイト達はアルヴの交渉に驚愕するのを尻目に、ハジメはスツと立ち上がる。

「うるせえ………死ねよ」

ハジメは優花を強く抱きしめていると頭の中から、また、あの声が聞こえ出した。しかし、今度は、あの激しい頭痛はしない。

『我を——俺——使え』

『今——なら、——少し——扱え——る』

—— 良いのか？

『ああ……我が力を——』

ハジメはその言葉に息を呑む。しかし、それなりにこの力は代償があるだろう。禁忌と呼べる力だろう。普通は手出しをしない。

だが……

＼ハジメっ＼

脳裏に過ぎるのは優花愛しの彼女の笑顔。しかし、もう一生その姿を見れない可能性がある。だからハジメは……

—— わかった。使わせてくれ。

禁忌に触れることにした。

『なら、使え我の……俺の——』



量を発射させているのだ。

「なあっ?!」

アルヴは驚愕の声を上げながらミサイルを回避に専念する。おびただしい数のミサイルをギリギリの所を避けていく。しかし、アルヴは唾然とした……

アルヴが避けたミサイル達は方向転換を始め、またアルヴを狙う。その衝撃にアルヴに隙が出来る。

そう、発射されたミサイルは全て追走型へと作り替えられているのだ。

「ぐああああー!」

隙が出来たアルヴに百を超えるミサイルが直撃し、直後……轟音と共に大爆発が起ころる。

しかし、アルヴは服をボロボロしながらも生きており、空中に浮きながら悪態をつく。

「クソツ……この私が『五神』の一人であるこの私がつ!」

「やっぱ……てめえは神の一人か」

「なっ?!」

ハジメはアルヴがミサイルの餌食になってる中、すぐさまアルヴに元へ駆け出し、アルヴが出てきた瞬間に後ろに周り込み紅雷を纏った足で全力の蹴りを入れる。

「グッ!」



ドガアアン！

アルヴは蹴りの勢いで壁に激突するがすぐさま立て直して、恵理と香織を呼ぶ。

「エリよっ！ 傀儡の騎士をイレギュラーに差し向ける！ カオリは私に回復をつ！」

「……………ッ！ 了解！」

「……………えっ？、えっ？、うん！」

ハジメの化け物ぶりに啞然とした二人だがアルヴの指示に反応してすぐさま、指示された事を取り掛かる。恵理はアルヴの指示通りに傀儡騎士達を全てハジメを狙うように指示する。

「邪魔……………」

冷めきった目でハジメは、そう呟きながらオルカンをしまい『宝物庫』から仕舞うと代わりにメツエライを取り出した。そして、メツエライも同じようにハジメが触れた瞬間、形が変わっていく……………

メツエライ—D・M

いきなり虚空から現れた見るからに凶悪なフォルムの重兵器に、その場の全員が息を呑む。

咄嗟に、雫と動けるようになった浩介が叫んだ。

「みんな！ 伏せなさい！」

「お前等！ 伏せろっ！」

龍太郎や永山が立ち尽くしているクラスメイト達を覆いかぶさる様に引きずり倒した。

直後、独特の回転音と射撃音を響かせながら、破壊の権化が咆哮をあげる。かつて、解放者の操るゴーレム騎士を尽く粉砕し、数万からなる魔物の大群を血の海に沈め、ネームドの神の使徒が放つ死の銀羽すら相殺した怪物の牙。そして、オルカンと同様メツエライも禍々しい形となり砲門の数が倍となっており、容量が耐えきれないのか紅いスパークが漏れだしていた。そんなものを解き放たれて、たかだか傀儡兵如きが一瞬でも耐えられるわけがなかった。

電磁加速された弾丸は、一人一発など生温いと言わんばかりに全ての障碍を撃ち碎き、広場の壁を紙屑のように吹き飛ばしながら、ハジメを中心に薙ぎ払われる。傀儡兵達は、その貴賤に区別なく体を砕け散らせて原型を留めない唯の肉塊へと成り下がっていった。

「嘘でしょ」

恵理はそんな光景を眺めながら苦笑いして座り込む。

やがて、メツエライの咆哮が止み、静寂が戻った広場にハジメに攻撃を仕掛

けたのは……

「はっ！ 油断したな！イレギユラーよ！」

香織の回復が済んだアルヴだった。アルヴはそのまま、ハジメの後ろに回り込み、奇襲しようとするがハジメはもう、メツエライを閉まっており立ち尽くすだけ、アルヴはハジメの態度に少し苛立ちを感じながらハジメに攻撃を仕掛ける。

しかし……

「お前って神なのに単純だな……」

「はっ?」

アルヴはハジメの言葉に少し疑問と怒りを感じる。しかし、その疑問はすぐに解決したのだった。

「……死ぬゴミ—— //五天龍」!

ゴガアアアア!

そう、アルヴの後ろの上空、ユエは冷めた眼差しでアルヴを睨み、自身の最強の魔法 //五天龍// を発動する。

「なっ……ッ！ アルヴの名に命ずる！—— //消えろ」!

「……む！ その声、何処かで……」

アルヴの後ろから五つの龍がアルヴに向かって喰らいつこうと顎を開く。アルヴは浩介にしたように何かを言った事で //五天龍// は消えるが、まだアルヴに対する攻撃

が続いていく。

「うりやあああああー！」

ユエの「五天龍」にしか目をつけてなかったアルヴの隙をつきシアがドリユツケンでアルヴ目掛けて全力で振り下ろす姿にアルヴは歯噛みする。

「っ?!　クソツ……イレギュラー共め……まさかとは思いませんが、シア殿で終わりと思っただんですか?　クソ神……なっ?!」

「『衝魂』!」

「グハアツ!」

ドガアアン!

シアの一撃をギリギリ回避をするアルヴにゲートから現れたアレスが奇襲を仕掛け「衝魂」を放ち、アルヴに防御無視の衝撃を与える。アルヴはそのまま苦悶の声を上げながら地面に直撃する。

「この私がつ………「もう終わりだよ」……ッ!」

地面の直撃により砂埃が舞う中、アルヴは立ち上がった時、ガチャツと音が鳴り、そこに視線を向けるとハジメがアルヴの頭に銃口が押し当てられていた。そこへユエ、シア、アレスが降り立つ。

「てめえは俺を完全に怒らせた。地獄を見せてやるよ」

「ッ、ッ！ この私を愚弄してえ……アルヴの名に命ずる——『動くなあ』！」

「「「……ッ！」」」

アルヴは何かを言ったと同時にハジメ達の動きが止まる。その隙にアルヴはすぐさま、離れて恵理と香織を回収して、上空へと駆ける。

「……余興は済んだ。イレギュラー、今回の勝利は貴様に譲ろう……しかし、次は私が勝負！ まあ、これに生き残れたならの場合だが……どうするイレギュラー？」

アルヴが言うのは王都内に侵入しようとした十万を超える魔物達の生き残り。そして、ハジメは周囲の気配を辿ればいつの間にか魔物立ちが取り囲んでいる状態だった。

ハジメは自分達が本気で戦えば、甚大な被害が出ることを理解しているため人質作戦に出たのだらうと推測する。

と、その時、優花に何かをしていたティオがハジメに向かって声を張り上げた。

「ご主人様よ！ どうにか固定は出来たのじゃ！ しかし、これ以上は……時間がかかる……出来ればユエとアレスの協力が欲しいところじゃ。固定も半端な状態ではないつまでも保たんとぞ！」

ハジメは肩越しにティオを振り返ると力強く頷いた。何のことかわからないクラスメイト達は訝しそうな表情だ。そして、後ろにユエとアレスに視線を向けると二人は力

強く頷きティオの元へ駆けるがユエは一度、ハジメの所に向かつてハジメの耳元に囁く。「フリードは味方。後、周りにいる魔物は殲滅しても問題ない」と。

ハジメはユエの言葉に「了解」と言いながら頷く。ユエはハジメの返答に頷きそのままティオの元へ急行した。

ハジメはアルヴに向けていた冷ややかな視線を王都の外——生き残りの魔物の大軍がいる方へ向けた。そして、無言で「宝物庫」から拳大の感応石を取り出した。訝しむフリードを尻目に感応石は発動し、クロスビットを操る指輪型のそれとは比べ物にならない光を放つ。

猛烈に嫌な予感がしたアルヴは、咄嗟にハジメに向けて魔法を放とうとする。しかし、ハジメのドンナーによる牽制で射線を取れず、結果、その発動を許してしまった。——天より降り注ぐ断罪の光。

そう表現する他ない天と地を繋ぐ光の柱。触れたものを、種族も性別も貴賤も区別せず、一切合切消し去る無慈悲なる破壊。大気を灼き焦がし、闇を切り裂いて、まるで昼間のように太陽の光で目標を薙ぎ払う。

キュワアアアアア!!

独特な調べを咆哮の如く世界に響き渡らせ大地に突き立った光の柱は、直径五十メートルくらいだろうか。光の真下にいた生物は魔物も魔人族も関係なく一瞬で蒸発し、凄

絶な衝撃と熱波が周囲に破壊と焼滅を撒き散らした。

ハジメが手元の感応石に魔力を注ぎ込むと、光の柱は滑るように移動し地上で逃げ惑う魔物の尽くを焼き滅ぼしていった。

防御不能。回避不能。それこそ、ハジメ達のように空間転移でもない限り、生物の足ではとても逃げ切れない。外壁の崩れた部分から王都内に侵入しようとしていた魔物と魔族が後方から近づいて来る光の柱を見て恐慌に駆られた様に死に物狂いで前に進み出す。

光の柱はジグザグに移動しながら大軍を蹂躪し尽くし、外壁の手前まで来るとフツと霧散するように虚空へ消えていった。

そして、思考が停止し、呆然と佇むことしか出来ないのは、ハジメの目の前にいるアルヴや恵里と香織、雫達も同じだった。

「さっさと消えろクソ共……今回は優花を助けることが優先だからな見逃してやる。だが、次はためえ等、他のクソ神共まとめてぶっ殺してやる。覚悟しとけ」

ハジメとしてもクソ神の一人を逃がすのは業腹ではあったが、今は一刻も早く優花に対して処置しなければならない。時間が経てば、手の施しようがなくなってしまうのだ。まして初めての試みであり、ぶつつけ本番の作業である。しかも、実は先の光の一撃は試作品段階の兵器であり、今の一発で壊れてしまった。大軍への指揮権があるであ

ろうと思われるアルヴを殺すのは得策ではなかった。

アルヴは唇を噛み切り、握った拳から血を垂れ流すほど内心荒れ狂っていたが、自分達神への宣戦布告を受け取り、称賛と怨嗟の籠った捨て台詞を吐く。

「……私達、神々への宣戦布告はしっかりと受け取っておこう……しかし、貴様だけは、我が主に申し訳ないが貴様は私の獲物だっ！私に恥を晒したのだっ！プライドを傷付けたのだ！だから、私は必ず貴様を殺すっ！」

アルヴは恵里と香織を浮かせたまま一緒に霧のように消えていく。恵里は、その強靱なステータスで未だ生きながらえている光輝を見て、妄執と狂気の宿った笑みを向け、香織も未だに自分達を睨むハジメに頬を染めながら深く笑みを浮かべる。二人のそれは言葉に出さなくても分かる。必ず光輝を、ハジメを手に入れるという意志の籠った眼差しだった。

ハジメはアルヴ達が姿を消した後、急ぎでテイオ達の元へ駆け付ける。そして、優花をお姫様抱っこで抱え上げ、そのまま広場を出ていこうとする。

そこへ、雫、妙子と奈々、二人を支えながらこちらに向かう浩介の四人が追いかけて、必死な表情でハジメに呼びかけた。

「ハジメ……ごめん、私……何も……出来なくて……グスッ」

「ハジメたち……ユウガつちがあ、うわあアアン」



「ハジメすまねえっ！　園部をつ、アイツを守れなかった！　今度こそは助けられると大切な皆をつ、守れるって……ホントにすまねえっ！」

幼なじみ三人は自分の力不足で優花を大切な幼なじみを守れなかったことに後悔し、涙を流しながら謝る。

そして……

「南雲君！　香織が裏切……って……優花を……私……どうすれば……」

雫は今まで見たことがないほど憔悴しきった様子で、放っておけばそのまま精神を病むのではないかと思えるほど悲愴な表情をしていた。戦闘中は、まだ張り詰めた心が雫を支えていたが、脅威が去った途端、親友の裏切りとそれが友達の死への原因という耐え難い痛みに苛まれているのだろう。

「……シア、優花を頼む」

「は、はいですう！」

ハジメはシアに優花を預けると、テイオに先に行くように伝える。四人の様子を視察したユエ達は、テイオの案内に従って広場を足早に出て行った。

クラスメイト達が怒涛の展開に未だ動けずにいる中、ハジメは女の子座りで項垂れる雫、泣いて謝る三人の幼なじみの眼前に膝を付く。そして、両手で四人を一気に抱きしめた。

「妙子、奈々、安心しろ。優花は俺が絶対に助けるから信じてくれ。約束する。」

「浩介……お前はよくやってるよ。お前が力不足な訳ない。だつて俺の親友であつて右腕だろ？ なら自信を持って、『深淵卿』はそんなタマじゃねえだろ」

「八重樫、折れるな。親友が裏切つたことは辛いだろうが優花の件は俺達を信じて待つていてくれ。必ず、もう一度会わせてやる」

「ハジメ……」

「ハジメつち」

「ハジメ」

「南雲君……」

光を失い虚ろになつていた四人の瞳に、僅かだが力が戻る。ハジメは、そこでフツと笑うと言葉をかけた。

「俺はお前達四人のことを信頼してる。だから待つててくれないか？」

「そうよね……。ハジメが『約束』つて言つたもん。なら私はハジメを信じる」

「うん！ 私もハジメつちなら救えるつて信じてる！」

「そうだな……お前の言う通りだなハジメ。でも俺は今『深淵卿』じゃねえ」

「……………信じて……………いいのよね？」

ハジメは笑みを収めて真剣な表情でしつかりと頷く。

間近でハジメの輝く瞳と見つめ合い、四人はハジメが本気だと理解する。本気で既に死んだはずの優花をどうにかしようとしているのだ。その強靱な意志の宿った瞳に四人は凍てついた心が僅かに溶かされたのを感じた。

そしてハジメは雫が精神的に壊れてしまう危険性が格段に減った事を確認すると、  
「宝物庫」から試験管型容器二つを取り出し、雫の手に握らせた。

「これって……」

「二人の幼馴染に飲ませてやれ。片方は全身骨折、もう片方は右手が潰れてんだろ？」

ハジメの言葉にハツとした様子で倒れ伏す光輝と右手を痛そうにしてる龍太郎に視線を移す雫。龍太郎は大丈夫そうだが、光輝は既に気を失っており、見るからに危険な様子だ。ハジメが手渡した神水が、以前死にかけのメルドを一瞬で治癒したのを思い出し、秘薬中の秘薬だと察する。ハジメとしては、せつかく声をかけても親友の裏切りの後に光輝の死で雫が折れてしまつては困るくらいの認識だったのだが……雫の表情を見れば予想以上に感謝されてしまつていようだった。

雫はギュツと神水の容器を握り締めると、少し潤んだ瞳でハジメを見つめ「……ありがとう、南雲君」とお礼の言葉を述べた。ハジメは、お礼の言葉を受け取ると直ぐに立ち上がり踵を返す。

「優花……待つてろ。俺が……俺達が絶対に助けるからな」

そう、  
言いながらユエ達を追って、  
風のように去って行ったのだった……。

## 七十三話 目覚めの天使様

雫達四人を励ました後、ハジメはテイ才達がいる【神山】へと風のように駆けていた。その駆け抜ける速さ、先の戦いで「ネームド」の神の使徒ノイント、魔王アルヴヘイトの強敵達と連戦した後のような感じを見せない程の爽快な速さで「空力」をしい空を駆けていた。

「……グッ、流石の連戦のせいかな、身体に響いたか……」

しかし、向かっている最中に胸辺りに何かが暴れて尖った物を内側から刺されているような痛みがしだしてハジメの表情が歪む。

だが、ハジメはこんな痛みを感じるのは初めてだった。ノイントとの戦いの時も「限界突破」や「紅狼」など使っていたが、こんな痛みはなかった。

すると、ハジメはこの痛みの正体はアルヴとの戦いの時の際に「あの声」に言われるままに……使ってしまった……いや、使った……

『我が機械——力——存分——え』

禁忌。触れては駄目。そんな事が頭に過ぎるも、あの時のハジメにはどうでも良かった

た。目の前の敵を倒すことが出来ればと。そして、その力は絶大だった。

一回のミサイルの発射数が百を優に超え、ミサイル全てが追尾性能を持つ機能が搭載するミサイル兵器へと変貌した……オルカン―D・M

砲門の数が倍となり、電磁加速の為に魔力を溜め込むタンクが何故か漏れ出てしまうほどの紅いスパークに威力も驚異的なほどに増し、悪魔の兵器と化した……メツエライ―D・M

この二つの武器は使い終わったと同時に元の形に戻った。見ると、二つともメンテナンスが必要なほど壊れてしまっており、メツエライに至っては壊れることも溶けだすことも余り無いアザンチウム鉱石でコーティングした部分などが溶けだしている程だった。

「まあ……この痛みはあの力のせいだよな……」

あの時は死んだ優花の姿を見てしまつて我を忘れてしまい、無我夢中であの力を使つた。悔いはない。

しかし、ハジメは、あの力を今ここで使うことは出来なかった……いや、正確には禍々しく変形したメツエライを使い終わった後から発動が出来なくなっていた。それと同時にこの身体中の違和感を感じるようになった。多分この痛みもアレが原因だろうとハジメは推測する。

「……………まっ、いずれ治るだろう……それに」

痛みには慣れていて、この痛みも時間もすれば痛みも無くなるだろうし、あの力も大迷宮を攻略していく内に分かっていくだろうと思ひ、そして、決心するようにハジメは呟いた。

「今度こそ……優花を、ユエ達を、友を、もう誰も失わせない。絶対に……」

ハジメは自分の拳を握りしめながら決意する。

例え自分がどうなつたとしても大切な恋人達、大事な友を守れるようにと……。それが、またあの力を使うことになつたとしても……。

ハジメはそう決意して、胸の痛みを無視して更に速度を上げ、「神山」にいるティオ達の元へ駆けていった。

~~~~~

痛みを耐えながら【神山】に到着してハジメはユエ達を探していると……

「ユエ達は……いた」

周りを見渡していると、ユエ達の存在を感知し、すぐさま其処へ向かう。着くと、ユエとティオ、アレスはまだ優花に魔法を行使しており、シアは自分に出来ることはない

ので自分の魔力をストックしてユエ達に渡しており、愛子は神代魔法の行使に疲れたのか少し休んでいた。

「ユエっ！ お前等！ 優花は大丈夫そうかつ?!」

「あつ、ハジメさん」

「南雲君！」

「……ハジメ」

「ご主人様」

「ハジメ殿」

先にストックを作っていたシアと愛子がハジメの存在に気付き、シアと愛子の声で他の三人もハジメが到着したことが分かり、顔だけハジメの方に向き声をだす。

「三人共、優花の容態はっ?!」

「「「……」」」

ハジメはいつも三人に優花の容態を聞く。すると、三人は少し苦い顔をする。

「……ハジメ、優花は」

「おい、魂魄は固定が出来てんだろ？ ならっ……」

「ハジメ殿……」

ハジメはユエの言葉を遮り、自分でも分かるぐらい焦ってきてるのを分かる。三人



の表情の意味も理解してしまう。それなのに心が……否定したい。嘘だ。ありえない。と思いが膨らんでいき、徐々に声が荒だつていくハジメにアレスが口を開く。

「アレス……優花は死……「ハジメ殿っ」……っ！」

「ハジメ殿っ！ そんな顔をやめて頂きたい。優花殿が悲しみますよ？」

「でも……優花は……「ちゃんと話を聞いてください」……はっ？」

「ハジメ殿、安心してください。優花殿は生きています。魂魄も安定している状態ですし、傷も私とユエ殿とテイオ殿の再生魔法で完全に塞いでいます」

「……ホントなのか？」

「はい」

「そうか……」

「……助かったんだな」

ハジメはアレスの言葉を聞いて、力が抜けるようにその場にヘナヘナと座り込む。しかし、ある疑問が残る。

「じゃあ……治ってんなら、何で優花は起きねえんだ？」

そう、傷も魂魄も治っているなら優花は目を覚ます筈だ。でも何で優花は起きないのか。とハジメは思っていた。

「ハジメ殿の言うことは」最もです。しかし、魂魄魔法をこの中では長く扱う私でも、原

因は未だに分かりません」

「そうか……」

ハジメは段々不安が募っていく。もしかしたら、もう目を覚まさないかと……。そう思っていると、アレス、ユエ、ティオがハジメの心情を察したのか声をかける。

「ハジメ殿、優花殿は必ず目を覚まします。私の推測だと魂魄の状態で何かと対話……

私では考えられない“未知”なことが優花殿に起こってるかもしれない」

「考えられないこと……」

「……ん、ハジメ。もしかしたら優花の話してた」

「あつ、記憶の話かつ！」

「妾もアレスの推測から考えるとそれしか考えられんのか」

ハジメはアレスの推測とユエの助言で優花がメルジーネの攻略の際、話していた余りにも具体的な話を思い出す。ティオもハジメと同じ考えに至ってそうだった。

「じゃあ……その考えを優花が目覚まさない理由の前提とするなら……」

「優花殿、次第ですね……」

ハジメは立ち上がり、優花の元へ歩きながら向かい、傍までくると優しくそつと優花を抱きしめる。

貫かれた胸の傷はすっかり綺麗となり服は少し破けて少し胸が見えそうになってい

たので俺は自分のコートを着させる。彼女に触れると確かに死後硬直はなく、体温も冷たくなっていない。しかし息をしておらず心臓の鼓動も鳴っていない。

「……優花」

ハジメは自分の身体の状態を無視して、優花の身体を更に強く抱きしめながら呟く。

「早く戻って来てくれ」

これはハジメの願いでもあるが、此処にいるユエ達、そして王都にいる大切な幼なじみ達の願いでもあるから……。

~~~~~

「此処は……」

優花は薄目を開けながらゆっくりと上体を起こしていく。

「あれ……此処何処？ 私……確か王都の広場……っ！」

優花は王都の広場でアルヴに胸を貫かれたことを思い出し、すぐさま自分の胸を確認する。

「あれ？ 傷が塞がっ……てる？」

しかし、貫かれている筈の胸は綺麗に塞がっており頭の整理が追いつかなくなる。「どういふことなの?」

優花は胸を貫かれて死んだと思ったけど生きている? でも此処は? 優花は沢山疑問に思うことはあるが、まず此処は何処なのか知る為に立ち上がる。

「うん、動ける…でも投げナイフがないし…魔法は……んっ!…出来な、か」

優花は立ち上がって、ジャンプや色々身体を動かしてみる。しかし、痛みや倦怠感もない。寧ろ身体が軽い。しかし、ハジメから貫い身につけてる筈の投げナイフがなく、魔法を発動しようとしたが出来なく、魔法陣を手書きで描いても無理だった。

優花は色々確認をしていくが、この場所は何処でなんなのかも一切分からない。

「身体は動けるけど…魔法は使えないって…ホント此処って何処……なの…」  
優花は溜息を吐きながら、ゆっくり空を見上げていくとその景色に啞然とした。

空には……………

「凄い……………」

それは、あの日……ホルアドでハジメと恋人関係になった時と同じくらいの綺麗な夜空で月はその夜空を照らすかのように星と共に輝いていた。

「綺麗……………」

『でしよ? ……私も好きなんだ。この夜空』

「——っ！ 誰っ?!」

『あら、驚かしちゃった？ ゴメンね』

「……貴女は」

優花が夜空に見蕩れていると後ろから女性の声が聞こえた。優花はすぐに距離をとって武器はないが戦闘の構えをとるが優花は彼女の姿を見てスッと構えをとるのをやめてしまった。

優花の目の前にいるのは……

『優花……貴女と話すのは今回が初めてね』

あの夢に出た銀髪の女性……クリスタだったのだ。彼女は優花の名前を呼びながら嬉しそうに微笑む。

「なんで……私の名前を？」

『あつ、ごめんね。優花は知らなくて当然よね……』

そう言つて銀髪の女性……クリスタは優花に謝罪する。

「あつ、謝らないで。それに、聞きたいの。あの時の夢のことや私達がいる此処は何処なのか、そして何で私と貴女が此処にいるか。貴女は知ってるんですよね？」

『ええ、優花。あの夢の件などは私が関係してるわ。そして、原因は貴女の技能にある』

■■■■ “ 私はずっと貴女の中から今までのことを見ていたの ”



『優花……私は貴女に“運命”を感じたんだ。そして……貴女の恋人……ハジメが……あの人に似ていたから……』

「あの人……もしかしてあの夢に出た……」

優花の答えにクリスタはゆっくり首を縦に動かす。

「………やっぱり。でもそれだけで？」

優花はクリスタの意見に共感できた。優花自身も夢に出た彼はハジメ恋によく似ていたから……。

しかし、似ているとだけで優花の中に入るとは到底思えない何かしら理由があると思い更にクリスタに尋ねる。すると、クリスタはポツポツと語る。

『優花……貴女には私みたいに大切な人を失わせたくないと思ったの……見たでしょ？』

あの夢を……私の記憶を』

「………っ！」

やっぱりアレはただの夢じゃなく、クリスタの記憶であったと優花は確信する。でも、あれが記憶だと現実にあつたことと分かると……

「辛すぎるよ……」

優花はクリスタの最愛の人が自分のせいで身代わりとなった夢。いや記憶が脳裏に過ぎり自然と涙が溢れ出る。

『ふふ、ありがと優花。泣いてくれるなんて』

クリスタはそう言いながら笑みを零し、泣いてる優花をそつと抱きしめてくれた。そして、クリスタは私を抱きしめながら真剣な表情で話す。

『優花、貴女の恋人は神殺しを目的にしている。トータスの全種族が自由の意思を持って平等に生きていく世界にする為……あの人と同じように』

「……」

『でも、私はヘマをしてしまった。姉にバレてしまつて戦つて負けて……人質にされて彼を追いつめてしまった』

「……姉つてもしかして」

『ええ、私の姉はエクストラ……神の使徒達の完全な指揮権を持ち、彼女達の母である彼女は血の繋がった私の姉よ。でも、私は姉とは違う。私は人は魔人は亜人は自分たちの意思を持って自由に生きて欲しいの。だから、私は彼と一緒に戦つた……負けちゃったけどね』

「……あれつていつ頃の記憶なの？」

『あれは……確か……十萬年前……ホントに宗教ができた頃ぐらいかな……』

「そんなに前から……」

優花はそんなに前から神々が支配していたと聞いて、驚きの余り言葉を漏らす。



『まあ……びつくりするわよね。だから優花、お願い。貴女達のいるこの時代で終わらせて欲しいの。神共の支配を……ラーゼンの支配を』

「私達の時代で……」

『ええ、今の時代は解放者達のおかげで数は少ないけど相当な強者が現れている。貴女の恋人のハジメも』

「……強者」

優花が今、思いつくのはハジメ、ユエ、シア、テイオ、アレス、そしてハジメの話。を聞く限り魔人族のフリードって言う人が強者に該当していると思う。

『だからね優花……貴女はそんな人達を貴女の大切な人を支えて欲しい』

「……支える？ でも……私はそんな力は」

『だから……私の力“をあげる』

「え？」

優花は自分を抱きしめながら物凄いことを言うクリスタの発言に驚愕するがクリスタは気にせず言葉を続ける。

『貴女なら私の力を扱えると判断できたの。神代魔法を手に入れ、支援職ながらも彼処まで戦える貴女なら、私の力……天使族の力“を……』

「天使族？」

優花はクリスタの「天使族」という言葉に疑問を覚える。そんな種族はこの世界に存在しない。優花もハジメよりかは調べてないが多少なりと王都の図書館の本は読み漁ったがクリスタの言う「天使族」は覚えがなかった。

『それは、当然よ。天使族は、このトータスには存在しない。別世界に絶滅した種族よ。この世界の神の使徒達は私達、天使族をベースにして出来ているの。そして……優花、貴女に渡すのは使徒達とは違う本物の天使族の力……本物の「聖杭」、そして「天性魔法」を』

「天性魔法？」

『ええ、天使族しか、そしてごく稀の者にしか上手に扱えない最強の光魔法……それが「天性魔法」よ。まだ慣れない時は扱いは難しいけど慣れることが出来れば、この魔法は最強の「矛」にもなるし最硬の「盾」にもなる。「聖杭」も姉のように最大十二まで出せるようになったら優花……貴女は「最強」になる』

クリスタは真剣な表情で優花に話す。優花自身もクリスタの真剣さに緊張が走る。そして、「最強」という言葉に心が引き寄せられていた。

「……………」  
「最強」

優花は思う。皆を、ハジメを、更に上手くサポートが出来る。皆に心配させる事も無くなる。なら、優花の答えは決まったようなものだ。

『…で、どうする優……「下さい、クリスタ…貴女の力を」……人間を捨てるとしても?』  
「……っ!」  
でも、それでも大切な人をつ、ハジメをつ。愛している彼をずっと支えれるならっ!」

以前、ハジメは言っていた「自分は魔物を食べたから普通の人間とは違うかもしれない」と、それを聞いた時は悲しかった。だって、そういうことなら、もうハジメは普通の人としての寿命じゃないかもしれない。でも、自分はハジメとずっと一緒にいたい。ハジメの他にも、ユエ、シア、テイオとも……

だから優花はクリスタの案に乗る。

クリスタは優花の言葉を聞いて、笑みを浮かべる。そして、何かを懐かしんでいた。もしかしたら、昔の自分と優花を重ね合わせているかもしれない。

『ふふ、それだけの覚悟あるなら問題ないわ。なら、あげるわ。私の力を……』

そう言っただけクリスタは優花を抱きしめるのをやめて両手からバスケットボールぐらいの光の球体を作り出す。そして、その球体を優花の両手にそっ乗せる。

その瞬間……

「光が中?!」

光の球体はゆっくりと優花の中に入り込んでいく。

そして……

バサッ!

「えっ? ……っ、翼が?!」

背中に何かを感じ、視点を向けると優花の背に翼が、クリスタと同じような綺麗な純白の翼が生えていた。

「凄い……私に翼が……って髪の色が変わってる?! それに、何この柱?!」

『あら、まだ四つしか出せないのね。それが“聖杭”よ』

「これが……“聖杭”」

優花は翼の他に髪色がクリスタのように銀髪になつており、よく見れば周りに四つの柱のような物が私の周りに浮かんでいた。クリスタ曰くこれが“聖杭”らしい。

「凄い……なんかステータスも上がってる気がする」

『ふふ、起きたら確認して見れば良いじゃない?』

「起きる?……あつ、そうか、此処は私の中だから」

『ほら、行きなさい優花。待つてるわよ? 貴女の大切な人達が、恋人が……』

「うん! あつ、クリスタ一つ良い?」

『何かしら?』

優花はクリスタにある疑問が残つたので聞いてみることにした。

「どうして、この空間はこんな綺麗な月夜の光景なの?」

そうこれは単純な疑問。しかし、クリスタは少し頬を赤くしながら、モジモジとしたし、恥ずかしそうに話す。

『あ、あの人と……初めて恋人になれた時、綺麗な……つ、月夜だったから……』

「フフツ……アハハツ！」

『なっ！ わ、笑うなあ〜！』

理由が優花の思っていた通りの答えに耐えきれず笑ってしまう。クリスタは頬をプクウーツと膨らまし、怒ったような視線を優花に向ける。

優花は怒るクリスタにゴメンと軽く謝ると、笑いも収まった。そして、口に出す。

「ホントに似てるのね。私達」

『……ふふ、そう言うことね』

クリスタは優花の言葉に察したのか笑みを浮かべてそう答えた。

「ありがとう、クリスタ。そして、見ていてね。私達が貴女の……貴女達の願いを必ず叶えるからっ！」

優花の言葉にクリスタは笑みを浮かべる。そして、視界が段々と暗くなっていた。

~~~~~

『行っちゃったわね……………』

クリスタは消えていった……………いや、戻っていった。優花がいた場所を見つめながら  
呟く。

『デウス……………今、貴方は何処にいるかも見当もつかない。でも貴方は生きてるんですよ？  
でも、安心して、貴方の願いは、解放者から、ある竜人族の王……………ある吸血鬼族の  
王族……………そして今は優花達が貴方の意思を引き継いでるわ』

クリスタは月を見ながら彼の名を呟く。

『優花……………貴女なら出来るわ。神殺しを……………そして、この世界を自由の意思の下にあら  
んことを……………』

クリスタの発言と同時に空間が消えていったのだった。

~~~~~

「花」

——ユエ……………？

「優——さん！」

——シア……………？

「優——っ」

——テイオ……………?

「園——さん！」

——愛ちゃん先生……………?

「優——殿！」

——アレスさん……………?

「優花っ！」

——ハジメ？……………この声はハジメだ！

「ハジメっ！」

優花は愛しい人の名を上げながら上体を起こし、目を開けると、そこにはハジメが嬉しそうに自分を抱きしめていたのだった。

~~~~~

それは唐突だった。ハジメは優花を抱きしめながら優花を呼び、ユエ達もハジメのように呼びかけていると……

「ハジメっ！」

彼女は、優花はハジメの名を呼びながら起き上がった。

「やつぱり生き……」「優花っ！」……ちよつ、ハジメっ?!」

だ。ハジメは優花を抱きしめるもう離さないと思う程、優花から声が聞こえるが無視だ。

ドガッ！

「痛ってー！」

優花を抱きしめると、ユエに後ろから頭を叩かれた。

「……ハジメ、嬉しいのは分かるけど、優花が苦しんでる」

「あつ……スマン」

恥は優花を抱きしめるのをやめ、優花を支えながら一緒に立ち上がる。

そして……

「皆、ただいま」

そんな笑顔で言う彼女に、ハジメ達も嬉しそうに笑みを浮かべて……

「」「」「おかえり」「」「」

と。

優花は起きてから少しして、ハジメ達に自分に起きていた事を話した。優花は皆が信じてくれるかは分からなかったけどクリスタとの会話は皆の耳に入れといった方が良いと思えた。

「……って言うことなんだけど」





けると、ユエも、シアも、ティオも、アレスさんも、愛子も自分の話を信じ、優しい笑みを浮かべながら頷いていた。その光景に優花は涙ぐみながら嬉しそうに笑う。

「皆……ありがとう」

そして、優花はハジメ達と一緒にラウス・バーンの魂魄魔法を習得してから優花とクリスタの話になった。

「……じゃあ優花はその『天使化』ってなれるの?」

「ん〜出来るんじゃない?」

「えっ、私見たいですう〜」

「シア殿、優花殿もお疲れだろうですし、後日にした方が……」あつ大丈夫よ。なんか体力も魔力もあるし」……そうなんですか」

そう言つて優花は立ち上がる……

「うん、やってみる——『天使化』」

「「「「「!」」」」」」

その瞬間……ハジメ達の前に一人の天使が現れた。

「あつ………できたよ。どう?」

優花は『天使化』が出来たことに嬉しそうにするがハジメ達は啞然としていた。特

に神の使徒と相対した。ハジメ、愛子、ティオ、アレスは特に……

「はわわわっ、本当にあの女性に似てます!」

「ふむ……それに優花の魔力も大分強くなってる気がするのう」

「本当に神の使徒のベースなんだなそれに……」

「聖杭の数が“ネームド”より多いですね」

四人共、感想はそれぞれだが、共に驚いていた。

「でも、この“聖杭”……エクストラはこれの十二本を扱ってるらしいわ。私もこの力に慣れてきたらそうなるってクリスタも言っていたし」

優花はアレスとハジメに指摘された聖杭をクルクルと回しながら、クリスタが言っていたことを伝える。

「……十二ですか」

「マジかよ……二本でも、かなり面倒だったぞ」

アレスとハジメは聖杭の能力を知ってる為か、眉を顰めていく。

「……しかし、優花殿のおかげで一柱の神の能力が大体判明しましたね」

「だな。それにこっちは優花が完全に“天使化”を使いこなせれば、こっちの戦力に神一柱分ゲットだしな」

「……ん、これなら神達と更に渡り合える」

ハジメ達は頷き合う。神殺しの道が更に近づいたと……。

「それに……クリスタか……何か知ってるような知ら……グッ！」

(クソツ……またこの痛みかつ！)

「ハジメ?!」

「ハジメさん！」

「ご主人様?!」

「南雲君?!」

「ハジメ殿?!」

「どうしたのハジメ?!」

ハジメが突然叫びだし、優花達はすぐさまハジメの方へと視線を転じる。そして、優花達はその光景に驚愕する。

優花達が見たのは……

「グッ!……ガアッ……」

ハジメの体に何か黒いモノが侵食していたのだ。

「ハジメっ」

「……ハジメっ!」

「ハジメ殿」

ハジメの様態を見た。優花、ユエ、アレスは咄嗟に回復魔法、再生魔法をかけるのだが……………

「なんで再生魔法がつ?!」

「……………なんで効かないの!」

「再生魔法が効かないとは……………どういう事だ?」

再生魔法が全く効いてなかった。そして、ハジメが治る様子はなく、黒い何かの侵食がすすんでいく。その度にハジメから物凄く痛みに苦しむ声を上げる。

「グツウ……………」

「ハジメ……………」

(なんで……………私はハジメの為にこの力を……………あつ、これなら!)

優花は自分の不甲斐なさに自己嫌悪するが、*“天性魔法”*のことを思い出し、一か八かやってみることにした。

「ハジメ。絶対に助けるから——*“浄化”*」

*“天使化”*した優花は、悶え苦しむハジメに両手を翳すと回復系の天性魔法を放つ。その瞬間、神々しい光と共にハジメが包まれていく。

「……………凄い」

「凄い綺麗です」

「ほう……これが天性魔法……」

「……凄いですね」

ユエ達は優花の天性魔法の幻想さに見蕩れていた。

そして、光が消え、包み込まれていたハジメが現れる。

「ハジメっ！」

「……優花……あれ、痛みが……消えたただと？後……身体が妙に軽くなったような……」

優花の天性魔法でハジメは黒い何かの侵食が消え、痛みも収まりゆつくりと起き上がる。

そして、ハジメは優花に感謝をすべく彼女の方へと視線を転じる。

「助かった優花、いやホントに凄いな天性……」「ハジメ？」……「はい」

ハジメは『天性魔法』の凄さに感嘆したが優花に肩を掴まれるそれも満面の笑み。

だが、妙に寒気を感じる。

「あの、優花？」

「ちよつと、話をしようか？ ユエ達と一緒にね」

優花はそう言いながら後ろを向く。そこには優花と同じようにニコニコのユエ、シ

ア、テイオの三人がいた。

「いや、少し待つ……」「[「問答無用」]……「はい」

この後、ハジメは四人の恋人達に無理をし過ぎるなど色々と説教されたのだった  
 ……。

|||||

園部優花 17歳 女 レベル：???

天職：神天治癒師

筋力：10000 (天使化 +200000)

体力：50000 (天使化 +200000)

耐力：35000 (天使化 +200000)

敏捷：20000 (天使化 +200000)

魔力：80000 (天使化 +200000)

魔耐：80000 (天使化 +200000)

技能：回復魔法「+効果上昇」「+回復速度上昇」「+イメージ補強力上昇」「+浸透看  
 破」「+範囲効果上昇」「+遠隔回復効果上昇」「+状態異常回復効果上昇」「+消費魔力  
 減少」「+魔力効率上昇」「+連続発動」「+複数同時発動」「+遅延発動」「+付加発動」・  
 付与術「+効果上昇」「+連続付与」「+高速付与」「+複数付与」・全属性適性「+発動

速度上昇」「＋効果上昇」「＋持続時間上昇」「＋連続発動」「＋複数同時発動」「＋遅延発動」・全属性耐性・高速魔力回復「＋瞑想」・魔力感知・魔力操作・再生魔法・魂魄魔法・天使化（クリスタ）「＋聖杭」「＋天性魔法」「＋限界突破」・言語理解

天性魔法・浄化《パージ》：どんな毒も呪いも全ての精神汚染系魔法も無効化、浄化し、かけた対象の悪いところも全て浄化する。



## 七十四話

## 王都侵攻の後

魔人族の侵攻の後、ハイリヒ王国は大変な後処理が行われていた。

恵里に傀儡兵化されていた兵士は五百人規模に上り、広場においてハジメにミンチにされてしまった約三百人を除けば姿を消したようだ。おそらく、アルヴの命令でフリードが作っていた対軍用ゲートと一緒に魔人族の領土に行ったのだろう。

後の調査でわかったことだが、王都の近郊に幾つかの巨大な魔石を起点とした魔法陣が地中の浅いところに作られていたようで、それがフリードの対軍用空間転移の秘密だったようだ。

また、国王を含む重鎮達は、恵里の傀儡兵により殺害されており、現在はハイリヒ王国国王の座は空席になっている。混乱が収まるまではリリアーナと、無事だった王妃ルリアアが王都復興の陣頭指揮を取るようだ。おそらく一段落ついて落ち着いたら、同じく無事だったランデル殿下が即位することになるだろう。

一番、混乱に拍車を掛けているのは聖教教会からの音沙汰がないことだ。

王都が大変なことになっているというのに、戦時中も戦後も一切姿を見せない聖教教

会に不安や不信感が広がり、「神山」から教会関係が降りて来ないことを不審に思つて、当然、確かめに行こうとする者は多かつた。しかし、王都の復興やその他もろもろのやらねばならない事が多すぎて、とても標高八千メートルを登山できる者などいなかった。ちなみに直通のリフトはハジメ達が停止させているので、地道な登山しか総本山に辿り着く方法がない。

そうして色々なことが判明しつつ、魔族の襲撃と手痛い仲間の裏切りや死から五日が経つた。

香織と恵里の二人と仲が良かった鈴は言わずもがな、その妄執と狂気がクラスメイトにもたらした傷は深かつた。そして、檜山の死に、いつも一緒だった近藤と中野や斎藤は引きこもりがちになっている。

そんな心身共に深い傷を負つた光輝達は、リリアーナ達の王都復興に力を貸しながらも、立ち直るために療養しつつ、あの日から姿を見せないハジメ達の事をチラチラと考へていた。

前線組や愛ちゃん護衛隊のメンバーはハジメの実力を知っていたつもりだが、光輝達が一斉に立ち向かつてても歯が立たなかつた魔王アルヴを圧倒し、そして光の柱で大軍を殲滅したような圧倒的な力までは知らず、改めて隔絶した力の差を感じて思うところが多々あつた。

光輝達ですらそうなのだから、居残り組にとっては衝撃的な出来事だった。帰還したメンバーからハジメの生存や実力のことは聞いていたが、実際のハジメの凄まじさは、自分達の理解が万分の一にも達していなかったことを思い知ったのだ。誰も彼もハジメの事や優花の事、ハジメの仲間の事が気になって仕方ないのである。

そして、それが顕著なのが雫だった。やるべき事はしっかりやっているのだが、ふとした時に遠い目をして心ここにあらずといった様子になるのだ。雫は心から信頼していた親友の裏切り、そして仲の良かった友が親友の裏切りで死ぬ羽目になってしまい、憔悴しているのがわかる。優花の事を想っているのだろうという事は誰の目にも明らかで、優花が死んだところを目撃していたクラスメイト達はどう接すればいいのか分からずにいた。

しかし、そんなクラスメイト達と違って、ハジメと優花の幼なじみ三人はずっと訓練や復興の手伝いをしている。幼なじみが胸を貫かれたのに雫みたいに憔悴しておらず、三人共、ハジメならなんとかなると心からの信頼を置いているのだ。

ハジメと雫達の会話から、何やら優花が戻ってくるようなことを言っていたが、死者蘇生など本当に出来るのか半信半疑どころか無理だと思えなかったのだ、安易な慰めも出来なかったのだ。

よもや恵里のように生きた人形にでもするのではないかと邪推し、その場合、雫を更

に傷つけることになるのは容易に想像が付くため、特に光輝などは露骨にハジメ達を警戒していた。

光輝自身も二度に渡って何も出来ずハジメに救われたという事実と、大切な幼なじみの香織の裏切りに相当落ち込んでおり、自分とハジメの差や、操られて魔族に連れいかれた香織（光輝の中ではそういう認識）も相まって、魔族もそうだが、ハジメに對していい感情も持てていなかった。

それが、いわゆる「嫉妬」であるとは、光輝自身自覚がない。仮に気が付いたとしても認めることは容易ではないだろう。認めて、その上で前に進めるか、やはりご都合解釈で目を逸らすか……光輝次第だろう。

光輝も雫も、そんな様子で明るいとは言えず、龍太郎は脳筋なので頼りにならず、クラスメイト達は全体的に沈んでいたが、クラス全体が沈みきらず、王都復興に向けて動いているのは、ひとえにメルドの存在あってだろう。

メルドは流石は王国騎士団団長と言うべきか生き残った兵士、騎士達をまとめあげ、早急に王都の復興にあたりながら、裏切りで落ち込むクラスメイト達も励まし一人鼓舞していった。

メルド自身、自分がもう少し「虚ろ」を警戒していたらこんな事はなかっただろうと内心自分を責めていた。

そんな風に生徒達はそれぞれ心に重りをこびり付けたまま、今日も今日とて王都復興のためにメルドとリリアーナの手伝いをしていた。

本日は王国騎士団の再編成を行うため、練兵場にて各隊の隊長職選抜を行っていた。ちなみに新たな騎士団副団長の名はクゼリー・レイル。女性の騎士でリリアーナの付きの元近衛騎士である。

「お疲れ様でした。光輝さん」

選抜試験における模擬戦で、騎士達の相手を務めていた光輝が練兵場の端で汗を拭いていると、そんな労いの言葉が響いた。光輝がそちらに視線を向けると、リリアーナが微笑みながらやって来るところだった。

「いや、これくらいどうってことないよ。……リリイの方こそ、ここ最近ほとんど寝てないんじゃないか？　ほんとにお疲れ様だよ」

光輝が苦笑いで返すとリリアーナもまた苦笑いを浮かべた。お互いここ数日、碌に眠る時間が取れていないのだ。もつとも睡眠時間が削れている理由は、二人では全く違うのだが。

「今は寝ている暇なんてありませんからね。……死傷者、遺族への対応、倒壊した建物の処理、行方不明者の確認、外壁と大結界の補修、各方面への連絡と対応、周辺の調査と兵の配備、再編成……大変ですが、やらねばならないことばかりです。泣き言を言って

も仕方ありません。お母様も分担して下さってますし、まだまだ大丈夫ですよ。……本  
当に辛いのは大切な人や財産を失った民なのですから……」

「それを言ったら、リリイだって……」

光輝はリリアーナの言葉に、彼女もまた父親であるエリヒド国王を失っていることを指摘しようとしたが、言っても仕方のないことだと口をつぐんだ。リリイは光輝の気持ち察してもう一度「大丈夫ですよ」と儂げに微笑むと、話題を転換した。

「雫の様子はどうですか？」

「……変わらないな。普段はいつも通りの雫だけど、気が付けばずっと上を見上げてるよ」

そう言つて光輝は、練兵場の中央でクゼリーと話をしている雫に視線を転じた。

二人はリリアーナを通して友人関係にあることもあり、かなり親しげな様子で何やら編成のことで議論しているようだ。しかし、ふと会話が途切れた時など、自然と視線が上、つまり「神山」の頂上付近に向いているのがよくわかる。

「ハジメさん達を……待っているのですね」

「そうだね。……正直、南雲のことは余り……信用できない……雫には会つて欲しくないと思つてるんだけどね……」

リリアーナは少し驚いたような表情で雫から光輝に視線を戻した。光輝の表情は何

とも複雑な色を宿しており、内心が言葉通りだけでないことは明らかだった。嫉妬、猜疑、恐怖、自負、感謝、反感、焦燥その他にも様々な感情が入り混じって飽和しているような、表現しがたい表情だった。

リリアーナは光輝にかけるべき言葉を見つけられず、ハジメ達がいるであろう【神山】の頂上を仰ぎ見た。

空は快晴で、ほんの数日前には滅亡の危機に晒されていたとは思えないほど晴れ晴れとしている。そんな空模様は何となく能天気さを感じて、少し恨めしい気持ちを抱いたリリアーナはジト目を空に向けた。

と、その時、何やら空に黒い点が複数見え始めた。訝しそうに目を細めたリリアーナだったが、その黒い点が徐々に大きくなっていくことに気がつき、何か落ちて来ているのだとわかると慌てて傍らの光輝を呼んだ。

「こ、光輝さん！ あれっ！ 何か落ちて来ていませんかあ！」

「へ？ いきなり何を……っ、皆あ！ 気をつけろ！ 上から何か来るぞお！」

リリアーナの剣幕に驚いた光輝だったが、促されて向けた視線の先に確かに空から何かが落ちて来ているのを確認して「すわっ、敵襲かつ！」と焦燥を表情に浮かべて大声で警告を発した。

雫達が慌てて練兵場の中央から光輝達の傍に退避したのと、それらが練兵場に降り

立ったのは同時だった。

ズドオオン!!

そんな地響きを立てながら墜落じみた着地を決めて、もうもうと舞う砂埃の中から姿を現したのは……ユエ、シア、ティオ、アレス、そしてアレスにお姫様抱っこをされながら、抱えられていた愛子の五人だった。

「愛子先生!」

「愛ちゃん先生!」

真つ先に雫と妙子、奈々が飛び出す。ハジメの言葉通り、信じて待っていたのだ。勢い余るのも仕方ないだろう。しかし、愛子達の中にハジメと優花の姿がないことから徐々にその表情に不安の影が差し始める。

「うう………神山から飛び降りるのはもう………嫌。………つて八重樫さん、皆さん!」

「先生?二人は? なぜ、南雲君と優花がいないの?」

「そうですよっ先生! ハジメと優花は?!」

「ユウカたちは無事なんですか?!」

愛子は神山から初ダイビングで目を回すが直に治り、クラスメイト達が元気にしてるのを見て嬉しそうに表情が緩むが、三人の怒涛の質問がくる。

愛子はいきなりの質問で慌てるが、代わりに愛子を支えていたアレスが三人を落ち



着かせるように答える。

「そんな慌てなくても、安心してください。お嬢様方」

「えっ……貴方は？」

「まあ、そこは置いといて……ほら、上を見てください」

雫は初めて見るアレスに戸惑うも、アレスの言葉に従って上を見上げる。それに釣られて妙子や奈々、クラスメイト達も騎士団も見上げる。

すると、そこには、優花をお姫様抱っこしながら、優雅に地上を降りているハジメの姿だった。そして、よく見ればハジメに抱えられている優花は地上の皆に向かって手を降っているのを確認できた。

そして、ハジメが地上へと着地して、優花を優しく地上へと下ろした。

そして……

「皆、五日ぶりかな？」

優花は笑みを浮かべながら話しかけた。

「優花っ！」

「ユウカっちゅー！」

「ちよっ、二人共?!」

妙子と奈々の幼なじみ二人は優花の無事を見て涙を流した同時に優花に抱きつ

いた。

「ひつぐ、ぐすつ、よかったあ！ よかったあ！」

「びええええん！、ユウガアア〜」

「二人共……ゴメンね心配させちゃって」

優花は二人を抱きしめる。二人も優花を抱き返す。すると、浩介が走って来ていた。全速力だったらしく、息遣いも荒い。

浩介は優花達の傍まで、行くと両手を膝の上に置いて「ふうー」と一息つく。優花に話し掛ける。

「流石ハジメだな……でも、園部……良かった。俺……」

「浩介、大丈夫だから。ほらっ」

浩介は自分がアルヴに何も出来ずに優花を殺され、自分の実力不足に悔やんでいたが、長年幼なじみをやっている優花は浩介の心情を察したのか「私、生きてるぜっ」と親指をグツと立てる。

「ハハッ、何だよそれ……ありがとな」

浩介は優花は自分を励まそうとしてるんだと分かり、嬉しさに泣きそうになるが、笑って誤魔化すのに専念する。

そんな、久しぶりの再会で誰もが微笑んでいる中、一人の人物が優花の方へ歩み

寄った。

「……優花」

「……雫」

雫は抱きついてきた二人と浩介とは雰囲気少し違っていた。それは申し訳なきと後悔みたいな感情が優花は雫から感じ取った。

「優花……その香織のせいで、私があの子を……ちゃんと見てれば……ほ、ホントに……」  
雫のせい……「八重樫のせいじゃねえだろ？」……ハジメ」

雫は香織のことをちゃんと見ていなかった自分に非があると優花に謝ろうとするのを優花は止めようとしたがハジメが前に出て雫の頭に片手を置く。

「な、南雲君……」

「だが、確かにお前の親友は裏切って、優花を殺した原因の一人なのは変わらねえ」

「……ッ！」

「おいつ、南雲っ！　香織は操られてるだけだ！　それに雫なんて事を言うんだ

謝っ……「黙れよ、アホ勇者てめえとは話すことはねえよ」……なっ?!　アホだどっ……

南雲！」

ハジメは八重樫に皆が言わないでいた香織の裏切りが優花が殺される（今は復活した）原因になった一端だと淡々と告げる。その言葉に雫の表情は今にも泣きそうで、

ギユツと自分の服を握り締めていた。そこに光輝が激昂するが、ハジメは一言だけ言い、光輝を無視した。

雫は現実を受け止めている。しかしもう心が壊れそうになっていた。だって、今まで自分の心を支えていた親友が裏切ったのだから……

「南雲君……そうよね。恵理に協力をした香織も王都を滅茶苦茶にした一人よね……でも、私どうしたら……「止めてやれば良い」……え？」

雫はそれでも平静を保とうと口元を震わせながら話すも、自分でもどうすれば良いか分からなくなってきた。その時、雫の言葉をハジメが遮った。

「私が……香織を……？」

「ああ……白崎は今後も何かをやらかす。クソ神共と一緒にいるしな。でも、それでお前の心が痛むなんなら止めれば良いさ。戦って、勝って、説教して……そして白崎の親友としていれば良いじゃねえか？」

「……南雲君」

「俺は今でも中村と白崎のした事は絶対に許さねえ……でも、お前が白崎を止めたいと言うなら力を貸すよ。約束だ」

そう言いながら、ハジメは優しく雫の頭を撫でる。

「だから今は何も背負わなくて良い。八重樫も女の子だ。泣きたい時は泣け。そして

ら、何時かお前に寄り添ってくれる奴が現れるだろうしな」

雫はその言葉を聞いた瞬間、ハジメを見る。それは自分を心配して、優しい表情で自分を励ましてくれる彼の姿が……

(ああ……香織も優花もユエさん達も彼のことを好きになるのが少し分かった気がする……)

「な、なぐ……も、君……私……ひつぐ、ぐすつ、うわあああん！」

ギョッ！

「おっ………つたく、こんなに溜め込んだのかよ苦労人め……まあ、今回は俺が受け止めといてやるよ」

雫はハジメの言葉で何か肩から落ちた気がして、それと同時に耐えていた涙が溢れ出てしまい、自分の頭を撫でていたハジメに抱きつき、大声をだしながら涙を流す。そんな雫の姿にハジメは苦笑いしながら、優しく雫の頭を撫でながら宥めていた。

そんな光景を見ていた優花達は……

「……優花、良いのアレ？」

「そうですね。私もハジメさんにあんなふうを抱きついて撫でて貰いたいですわ」

「いや、シア……今はそんなことを言う状況じゃないじやろ？羨ましいのは分かるの」

「じゃが……」

「そうだよ。ホントに良いの優花？」

「ハジメっちが取られるかもよ？」

「取られるって……まあちよびり羨ましいけど、今は雫が元気にならないとね」（なんで……私達の恋人はあんなに無自覚天然誑し野郎なんだろう？）

抱きついて泣く雫を頭を撫でながら宥めるハジメを見て羨ましがる恋人達と、優花を心配する幼なじみの二人に優花は少しあの光景を「嫉妬」しながらも、しようがないなあ困ったように笑みを浮かべながら見つめる。

「良いなあ……シズク」

「リリイもハジメ殿に構って貰えば良いのでは？」

「ムツ……兄様は乙女心がわかってません！」

「乙女心って……」

羨ましいそうに見てる可愛い妹分に「自分も行ってみたらどうだ？」と言うと、何故か乙女心がわかってないと怒られ頭を傾げるアレス。

「南雲っ！雫を「いや、今は構うなよ」……遠藤！」

「そうだぜ、天乃河あ」

「清水……君もかっ！」

光輝があの空間に入ろうとするのを止める浩介と清水。

こんなやり取りがあり、誰もが唾然呆然としているなか、しばらくの間、晴れ渡った練兵場に温かさ優しさに満ちた泣き声が響き渡っていた。

~~~~~

「ありがとう……南雲君。でも……それで、一体、どうやって優花を生き返らせたの?」

盛大に泣きはらしたせいで目元を真っ赤に染めて、恋人でもない（しかも相手は恋人持ち）男に抱きつきながら泣いてしまったせいで、頬も同じくらい羞恥で真っ赤に染めた雫が、照れを隠すようにそっぽを向いたまま事情説明を求めた。

場所は練兵場から移動して現在は光輝達が普段食事処として使用している大部屋だ。雫に対して、優花の状態の説明をするのに、取り敢えず落ち着いた場所でもリリアーナに促されたのだ。なお、この場には雫だけでなく、クラスメイト全員と愛子、リリアーナとメルドが同席している。

「そうだな……簡潔にいうと、魔法で優花の魂魄を保護して、傷は再生魔法で塞いだんだ」

「なるほど……全然わからないわ」

ハジメの簡潔すぎる説明に雫がジト目を送る。その眼差しには明らかに「説明する気あんのか？ ああ？」という剣呑さが潜むが、しかしハジメと目が合うと顔を赤く染まっけてしまい俯いてしまう雫。だが、ハジメのやる気ゼロな説明に呆れた表情をしながら優花がハジメの頭を軽く小突いて代わりに説明する。

「ハジメの代わりに私が説明するわ……雫。今、私達が使ってる魔法が神代と呼ばれる時代の魔法の劣化版だっことは知ってるわね？」

「……ええ。この世界の歴史なら少し勉強したものだ。この世界の創世神話に出てくる魔法でしょ？ 今の属性魔法と異なってもっと根本的な理に作用でき……待って。もしかして、そういうこと？ 南雲君達は神代魔法を持っていて、それは魂魄……人の魂というものに干渉できる力ってこと？ それで、死んだ優花の魂魄を保護して、穴が開いた体も再生させたのね？」

「正解よ。流石、雫」

雫の頭の回転の早さに笑みを浮かべる優花。ハジメも前から分かっていたことだが、内心、改めて感心していた。

「でも、どうして五日も掛かったの？ ユエさんとかもいるなら、もう少し早く終わると思うのだけど……」

「まあ……八重樫の言う通り、優花の治療は三日で終わることができた」



魂魄魔法は魂魄の固定と定着を行うことで擬似的に不老不死を実現できるといふつ飛んだ神代魔法だ。

“固定”とは、死ぬことで霧散してしまう魂魄に干渉して霧散・劣化しないよう保存する魔法で、最初、テイオと愛子が優花に施したのはこれである。死亡から数分以内でないと効果がないので、二人が間に合ったのは幸運だった。

「じゃあ、どうして……残りの二日は？」

「そうよ……三日で優花は治ったんでしょ？」

「……優花の手に入れた新たな力を慣らす為に模擬戦とかを少々な」

「模擬戦？」

「えっ、どゆこと？」

「二人共、落ち着いて。ちゃんと説明するから」

身を乗り出す雫と妙子を落ち着かせながら優花が続きを話す。

「まあ……見た方が早いよね。見せても良い、ハジメ？」

「まあ……直に知ることになるしな。良いぞ」

「えっ？ ちょっとどう言うこ……」「天使化」……えっ？」

雫と妙子、そして優花の能力を知らないこの場にいる誰もが目を見開いて言葉を詰まらせた。

そこには……

「えつとおー、私が少し魂魄状態の時にある方から貰った力の『天使化』です……」

両方の人差し指同士をツンツンと苦笑いしながら喋る。優花の姿は髪は赤みがかった栗色の髪から美しい銀髪に変わり、背中には天使といえるぐらい美しい純白の白い翼が生えていたのだった。

「これが優花が手に入れた能力だな。まあ、療養も兼ねて能力の確認をしながら俺たちは模擬戦してたんだよ」

ハジメは話すが突然の出来事に誰もが啞然として声が出せない状況だった。しかし、ある二人の人物が口を開く。

「なあ……ハジメ、今の園部の姿が滅茶苦茶、あの時の『神の使徒』だっけ？ 似てんだけど」

「ああ、本当に似ている。その神々しさ、あの時の感じを思い出す。ハジメ、説明を頼む。しかし、俺としてはそれと同時に其処にいる男も気になるがな……」

「……………」

それは以前は負けたものの、神の使徒と戦った浩介とメルドの二人だった。それもうさだろう。今の優花の姿はあまりにも使徒の姿と似ているからだろう。

しかし、メルドの方は優花のことも気になっているだろうが、それより彼はハジ

メ達側の席に座るアレスに視線を向ける。そして視線を向けられてる当のアレスはだんまりとして黙秘を貫いていた。

沈黙が続く中、雫は、スツと表情を真剣なものに変えてハジメ達の方を向き姿勢を正し、深々と頭を下げた。

「南雲君、ユエさん、シアさん、テイオさん。優花。今回は私の親友がごめんなさい。貴方達にはまた大きな借りが出来てしまつて……返せるアテはないけど……今度こそ私が絶対、香織を止めるわ」

「……相変わらず律儀な奴だな。まあ、あんまり気にすんな。俺は大切な恋人を助けただけだ。それに、また変に溜め込むと心が壊れるぞ？」

ハジメの非常に軽い対応に、雫は苦笑いを見せる。優花だけでなく自分達も救われているのだ。それも命を二度も。自分達の窮地を救ったことさえ、きつとハジメにとつては大切な存在を守る為だけだと言うその余りの差にもはや笑うしかなく、ハジメを見ると鼓動が止まない心境だった。

そして、何となく平然とした態度をする彼に憎らしくもあつたので雫は唇を尖らせて指摘する。

「……その割には、私のことも気遣つてくれたし、光輝と龍太郎のために秘薬もくれたわね？」

「それは、八重樫が壊れちまったたら、このクラスは崩壊するだろ？  
それは御免だから  
な」

「ほ、崩壊つて、アンタ…ねえ……」

微妙な空気が漂い始め、敏感に察した雫が、雰囲気に戻す意味も込めて話を続ける。  
聞きたいことは山ほどあるのだ。

「あの日、先生が攫われた日に、先生が話そうとしていたことを聞いてもいいかしら？  
それはきつと、南雲君達が神代の魔法なんでものを取得している事とそして、優花のその姿にも関係があるのよね？」

ハジメは雫の言葉を受けて愛子に視線を向ける。説明しろと無言の圧力が愛子にかかった。愛子はコホンツと咳払いを一つすると、ハジメから聞いたクソ神共の話とハジメ達の旅の目的を話し、そして、自分が攫われた事や王都侵攻時の総本山での出来事を話し出した。

全てを聞き終わり、真つ先に声を張り上げたのは光輝だった。

「なんだよ、それ。じゃあ、俺達は、神様達の掌の上で踊っていただけだつていうのか？  
なら、なんでもつと早く教えてくれなかつたんだ！ オルクスで再会したときに伝えることは出来ただろう！」

非難するような眼差しと声音に、しかし、ハジメは面倒そうにチラリと光輝を見ただ

けで何も答えない。無視だった。その態度に、光輝がガタツ！と音を立てて席を立ち、ハジメに敵意を漲らせる。

「何とか言ったらどうなんだ！ お前が、もっと早く教えてくれていれば！」

「ちよつと、光輝！」

諫める雫の言葉も聞かず、いきり立つ光輝にハジメは五月蠅そうに眉をしかめると、盛大に溜息をついて面倒くさそうな視線を光輝に向けた。

「俺がそれを言つて、お前、信じたのかよ？」

「なんだと？」

「どうせ、思い込みとご都合解釈大好きなお前のことだ。大多数の人間が信じているクソ神は死んでいて、そのクソ神より強力なクソ神共が俺達を駒として此処に呼んだと言われた挙句、お前のしていることは無意味だつて俺から言われれば、信じないどころか、むしろ、俺を非難したんじゃないか？ その光景が目には浮かぶよ」

「だ、だけど、何度もきちんと説明してくれば……」

「アホか。なんで俺が、わざわざお前等のために骨を折らなけりやならないんだよ？

まさか、俺がクラスメイトだから、自分達に力を貸すのは当然とか思つてないよな？

俺は自分の力は大切なモノの為にしか使わない……あんなまふざけたことばつか言つて……殺すぞ」

永久凍土の如き冷めた眼差しで睥睨するハジメに、クラスメイト達はさつと目を逸らした。

だが、光輝だけは納得できないよう未だ厳しい眼差しをハジメに向けている。ハジメの隣で優花が、そしてユエ達は二度も救われておいて何だその態度はと言いたげな目を向けているが光輝は気が付いていない。

「でも、これから一緒に神と戦うなら……」

「待て待て、勇者（笑）。俺がいつお前達と協力してクソ神共と戦うんだよ。神は俺の獲物だし、今のお前達はただの足手纏い、要するに邪魔だ」

その言葉に、光輝は目を大きく見開く。

「なっ?! 邪魔って、俺は勇者だぞっ! この世界でも相当な実力を持っているんだぞ! それを南雲っ! お前は足手纏いと言うのかっ!」

「ああ……特にご都合解釈を加速させてる勇者なんかいたら寧ろ邪魔にしかならねえよ……」

「南雲、貴様アツ!」

「ちよつと! 聖剣はダメよっ 光輝!」

光輝が吠えるが、ハジメには届かない。ハジメは、まるで路傍の石を見るような眼差を光輝に向ける。それにキレたのか光輝は腰に携えた聖剣を抜こうとするのを見て雫

は光輝を止めようとするが、光輝の動きの方が一拍早く、聖剣を抜きる直前だった。  
「……………?!」

光輝は抜くのをやめた……………いや、やめさせられた。何故なら一瞬で、自分のすぐ目の前に、ほんの数ミリの距離に槍の矛先が突きつけられているからだ。

「これが、今代の勇者ですか……………手記に書いている人物像と違い過ぎて、失望ですよ。全く」

突きつけている人物はずっと沈黙を貫いていた人物……………それは、*“元”*王国最強の神官アレスだった。そして、言葉が続ける。

「この世界を甘く見るなよ……………ガキ風情が」

それも、アレスの光輝を見る目はハジメ達と接する時のような優しい眼差しじゃない、ゴミを見るような冷たい視線だった……………。

## 七十五話 半端な覚悟

最初は耐えていた。相手はまだ学生身分の子供だ。この世界の真実を知って、少し戸惑っているだけかもしれない。落ち着いたら、分かって貰える。ハジメの言い分を理解して貰えると思っていた。

しかし……………

「なっ?! 邪魔って、俺は勇者だぞっ! この世界でも相当な实力を持つているんだぞ! それを南雲っ! お前は足手纏いと言うのかっ!」

「ああ…………特にご都合解釈を加速させてる勇者なんかいたら寧ろ邪魔にしかならねえよ…………」

「南雲、貴様アツ!」

「ちよつと! 聖剣はダメよつ、光輝!」

「……………」

この瞬間、理解した。この目の前にいる勇者は自分を特別だと思っている。この世界の人は自分を称えて当然だと。ただの自分中心の物語の登場人物でしかない。



……

そして、この勇者の……この男の考え方と似ていて、見れば勇者はあのクス共に重なつて見えてしまった。

「……っ、おい、アレスっ」

「！」

その動きは最初にハジメがすぐに気が付き、次にシアもギリギリのところでき付く。それぐらいにアレスの行動は早かった。光輝が聖剣を手にかける前に「宝物庫」から「ロンギヌス」を取り出す。

そして、光輝が聖剣を抜く時にはもう……

「……なっ」

ロンギヌスを光輝の顔面ギリギリにまで詰めながら矛先を突きつけていた。

「この世界を甘く見るなよ……ガキ風情が」

その言葉は、この部屋全体に浸透するように響いた。だが、その言葉は響くと同時にアレスの「威圧」も伝わり、ハジメ達以外のクラスメイト達は息を呑む。それは雫も同じだった。

「……………」

（嘘……あの人の槍を何処で出したか分からないし、槍を光輝に向ける動きも早過ぎて

て、ブレているようにしか見えなかった)

そう、今さっきのアレスの行動をハジメ達はちゃんと見えていたのだが、雫、浩介、戦いに慣れているメルドですら動いてるのはわかったが、ブレていることしか確認出来なかった。

「……………つ、この槍を下ろして下さい」

光輝は目の前にいきなり槍が突きつけられているのを驚いたものもすぐさま、気を取り直してアレスに話しかける。

「じゃあ……………今さっきの発言を撤回しろ。勇者」

「撤回って……………俺が間違ったことを言ったんですか？」

光輝はアレスの言葉の意味が分からずにキョトンとしている。それを更にアレスをイラつかせることを知らずに……………

「それが分からないなら、君は神共と戦わない方が良い。君みたいな半端な覚悟で神殺しを宣言するなど言語道断だ。ハジメ殿の言う通り邪魔でしかない」

アレスは冷めた眼差しを光輝に向ける。それはこの場全体に伝わりクラスメイト達の大半は顔を青ざめていく。

「……………っ！ そしたら南雲はどうなんですっ?! コイツはクラスメイトである俺達に力も貸さない！ 其処にいる女性達もコレクションにしか見てないんですよっ！」

「ちよつと光輝っ！ 南雲君に謝りなさいっ！」

「「「……………」」」

光輝のものの言いにハジメは俄然と無反応だったが、優花達は違つた。ハジメの恋人達四人は光輝を冷酷な眼差しを向ける。それは、もう途轍もないくらいのこと……

しかし光輝は四人の視線に気付いておらず、雫に叱られて、少し口を噤む。

「……………勇者。君にはハジメ殿のことをそう見ているのですね？」

「はいっ！ 貴方もわかるでしょう！ 絶対嫌がつてます！」

アレスはハジメ達の方へ振り向いてから光輝の方へ向き直ると口を開く。

「私には、四人共ハジメ殿と一緒にいるだけで幸せそうに見えますが？」

「そ、それはっ……………」

その言葉に光輝は口を噤むがアレスはそんなのを気にせず言葉が続ける。

「それに、ハジメ殿はちゃんと信念を。覚悟を持っています。だから私は彼等の旅に同行を申し出ました。彼の覚悟は凄いものですよ。半端な覚悟の貴方と違つて」

「なっ……………俺は半端な覚悟じゃない！」

「半端な覚悟だと認めないか……………ふむ」

アレスの物言いに光輝は自分はハジメより、信念も覚悟もなく半端ものと言われ更に苛立ちさしさ反発を続ける。アレスは反発する光輝を尻目にある事を思いつく。

「なら、聞こう勇者。君はこの世界の人達を救えるのかい？」

「はいっ！救うっ、救えますっ！ 皆や俺の力があれば絶対につっ！」

「…はあ………なんかもう良いです。話だけでストレスが溜まる」

(ここまでとは、思いませんでした)

アレスの問いかけに光輝は大きく宣言した。その宣言を聞いたアレスはこの答えを予想していたのか、怒りを通り越して呆れたのか、ため息を吐きながらロンギヌスを「宝物庫」に戻す。

「やっぱり、勇者。君とは一生分かり合えないな……」

「ま、待つてくれませんか！」

アレスはそう言いながら光輝に冷酷な眼差しを向けながら席に戻ろうとするが、光輝に待てがかった。アレスは仕方なく立ち止まり光輝の方へと振り向く。

それも嫌な表情で……

「何か？」

「つかぬことを聞きますが…貴方は誰なんです？ 初対面にしかも勇者の俺に槍なんか突きつけて……まあ、南雲達といるから仲間だと思えますが…貴方は強……」  
「てめえよりは遥かに断然に強えよ」……南雲」

「アレスはためえより、数倍、何十倍強い。俺達が保証する」

光輝は初めて会うアレスに、いきなり槍を突きつけられハジメとの一件もあり、少々苛立っていた。もし、アレスが自分より弱いと分かったら「何故、俺は連れて行かないのに、この人は連れていくのか？」とハジメに言おうと思ってたが、ハジメにバツサリと言いい切られ、その言葉にハジメと優花達、そして愛子も頷いていた。

「でもっ、それを言い切れるのは南雲達だけだ！何処にも確認が……」「あるぞ（あります）」……えっ……リリイ、メルドさん？」

しかし、光輝は諦めずに喋るが今度は王女のリリアーナと尊敬する人物のメルドに遮られ、困惑してしまう。先に口を開いたのはリリアーナだった。

「光輝さん達は兄様の實力は知らなくて当然だと思います……あっ……」

「えっ?! 兄様?!」

「嘘、兄妹?!」

「えっ?! この人ってリリイのお兄さん?!」

「よく見れば、似てそう……」

「あのっ、み、皆さんアレス兄様はホントの兄妹じゃなくて、親戚でして……」

リリイが話しますがいつもの癖で「兄様」と失言してしまい片手で口を素早く覆うが遅く、クラスメイト達にはちゃんと耳に入ってしまった事実を知る者以外の全員が驚愕



そして、メルドはハジメ達がリリイと再会した時にアレスの説明をした時と同じ話とアレスの実績についての話をした。

アレスは十五の歳で非戦闘職の神官でありながら王国最強にまで上り詰めたていたこと。

その時には、騎士の中でも実力者だったメルドとの模擬戦形式だが、魔法有りの戦いに勝利していること。

五年前、辺境にある魔人族の村を殲滅戦に参加するも、裏切り、王国と教会の連合軍を全員殺しはしなかったものの戦闘不能にまで追いやり、圧倒的な差を見せて勝利する。

その後、教会に呼ばれ、普通なら異端者として処刑するが、その沢山の功績と実力から王国にも教会にもアレスを倒せる戦力も手段もなく、追放という形になってしまったのだった。

「……………と言うことだ。俺はあの時この報告を聞いた時は驚いたよ。俺にとっては、アレスは尊敬出来る奴であり、弟みたいに接していたからな……………お前が生きることが分かって安心した。アレス」

メルドの説明を終えるとクラスメイト達はメルドの顔を見る。それは、家族との再会に喜びを感じているような表情だった。

「……メルドさん、あの時は十分に説明を出来ずにすみませんでした。あの時はこの世界の真実を話すと、メルドさん、リリイ、私の大切な人達に神共が何らかの形で干渉してくると思ひ話すことを躊躇つてました」

アレスはメルドの表情を見て、頭を下げて謝罪をする。

あの時はまだ、神々とまともに戦える戦力もなく自分の大切な信頼できる人達を巻き込まみたくないと思つて誰にも語らず去つていったことを……。

「何を言つてる、昔のことだ。それに今はお前が話をしなかつた理由も分かつたしな……それより言わせてくれアレス、よく戻つてきてくれた……」

「私もですよ兄様。再会したときは色々あつたから怒つちやいましたけど、兄様が生きていたことに心から嬉しかつたんですよ。だから、言わせてください……」

「おかえり（なさい）」

二人は何も裏もなく、ただ純粹に、尊敬していた弟みたいに接していた。実の兄のように慕つていた男の帰還を喜び、そして家族であるかのように伝える「おかえり」と。

「……はい、アレス・バーン。今此処にただいま戻りました」

アレスは二人の言葉に涙を流しそうになつたが堪え、二人の前に跪きながら口を開く「ただいま」と……。



その後、話は進むがやはり光輝がご都合主義を加速させながら文句を言つて、場を乱していく。最初にキレていたアレスも呆れている為、無視か沈黙を貫いていた。

そして、ある人物がハジメ達に願い出た。

「……やはり、残つてはもらえないのでしょうか？　せめて、王都の防衛体制が整うまで滞在して欲しいのですが……」

そう願い出たのはリリアーナだ。

未だ混乱の中にある王都において、大規模転移用魔法陣は撤去したものの、いつ魔族の軍が攻めてくるかわからない状況ではハジメ達の存在はどうしても手放したくなかつたのだ。相手の総大将らしきアルヴは、ハジメがいるから撤退した。ハジメ達は、そこにいるだけで既に抑止力になつていたのである。

「『ネームド』の神の使徒と本格的に事を構えた以上、クソ神共も動く。先を急ぎたいんだ。優花の蘇生に五日もかかつたしな。明日には出発する予定だ」

リリアーナは肩を落とすが、ハジメ達が出て行つたあと、魔族達が取つて返さない

保証はないので王女として食い下がる。

「そこを何とか……せめて、あの光の柱……あれもハジメさんのアーティファクトですよね？ あれを目に見える形で王都の守護に回せませんか？ ……お礼はできる限りのことをしますので」

「……ああ『ヒュベリオン』な。無理だ。あれ、最初の一撃でぶつ壊れたし……試作品だったからなあ。改良しねえと」

ハジメが魔物の大軍を消し飛ばした対大軍用殲滅兵器『ヒュベリオン』は、簡単に言えば太陽光収束レーザーである。「神山」を降りる前に上空へ飛ばしておいたものだ。

『ヒュベリオン』は、巨大な機体の中で太陽光をレンズで収束し、その熱量を設置された『宝物庫』にチャージすることが出来る。そして、臨界状態の『宝物庫』から溢れ出た莫大な熱量を重力魔法が付加された発射口を通して再び収束し地上に向けて発射するのだ。

そして、この『ヒュベリオン』最大の特徴は、夜でも太陽光を収束できる点にある。その秘密は、オスカー・オルクスの部屋を照らしていたあの擬似太陽だ。あれは、太陽光を空間魔法と再生魔法、それにハジメの把握しきれない神代魔法の力が加わって作り出された『解放者』達の合作だったのだ。

今のハジメでは、擬似的とはいえ太陽の創造など到底できない。そして『ヒュベリオ

ン」は試作段階だったせいもあり、その自身の熱量に耐えられずに壊れてしまったので、もうあの一撃は撃てないのである。もつとも、ハジメが作り出した大軍用殲滅兵器は「ヒュベリオン」だけではないのだが……

「そう……ですか……「だが……」……え？」

「出発前までには此処の大結界は直すよ」

「ホントですかっ！　　ありがとうございます！……キャツ！」

「うおっ……と、リリイ、ケガはねえか？」

「う……あつ……え／＼……はい、だ、大丈夫です」

ハジメの言葉にガクリと肩を落とすが、次のハジメの言葉にパア！　と表情を輝かせたリリイは嬉しさの余りかハジメの元へ走りながら駆け寄るが何かに躓いて転びそうになってしまふ。しかし、ハジメがリリイがコケる直前に抱きつかせる形でリリイを怪我をさせずに済む。リリイは唐突にハジメに抱きついたせいか段々、顔がみるみると赤く染まっていく。

「……まさか、リリイ」

雫はリリイの顔を見て、何かを察した。

そして……

「……優花。やっぱり再会した時もそうだったけど……」

「やつぱり、ハジメさんって、凄い誑しですよ。特に女性に対する」

「そうじゃのう、ホントに妾達の旦那様は……」

「まあ、ハジメはハジメだからねえ……はあ」

ハジメの恋人達はコソコソと話合っていた。その内容は当のハジメにも微かに聞こえており「俺ってそんなに誑しか？」と疑問顔になる。すると、「んん」と咳払いする雫が予定を聞く。

「それで、南雲君達はどこへ向かうの？ 神代魔法を求めているなら大迷宮を目指

すのよね？ 西から帰って来たなら……樹海かしら？」

「ああ、そのつもりだ。フューレン経由で向かうつもりだったが、一端南下するのも面倒いからこのまま東に向かおうと思ってる」

ハジメの予定を聞いて、リリイが何か思いついたような表情をする。

「では、帝国領を通るのですか？」

「まあ、経路的にそうなるな……」

「でしたら、私もついて行って宜しいでしょうか？」

「ん？ なんでだ？」

「今回の王都侵攻で帝国とも話し合わねばならない事が山ほどあります。既に使者と大使の方が帝国に向かわれましたが、会談は早ければ早いほうがいい。南雲さんの移動用

アーティファクトがあれば帝国まですぐでしょう？ それなら、直接私が乗り込んで向こうで話し合っつてしまおうと思ひまして」

「凄く大胆だな……まあ、でもそうか」

何とも大胆というかフットワークの軽いリリアーナの提案にハジメは驚くもの、よく考えれば助けを求めるために単身王城から飛び出し隊商に紛れて王都を脱出するようなお姫様なのだ。当然の発想と言えれば当然かと、妙に納得する。

そして、通り道に降ろしていくだけなら手間にもならないので、それくらいいいかと了承の意を伝えた。

「送るのはいいが、すまないが帝都には入らない。そして言つとくが皇帝との会談なんて絶対付き添えないぞ？」

「ふふ、そこまで凶々しいこと言いませんよ。送つて下さるだけで十分ですよ」

用心深い発言に、思わず苦笑いを浮かべるリリアーナだったが、そこへハジメとアレスに黙らされた光輝が再び発言する。

「だったら、俺達もついて行くぞ。こんな奴にリリイは任せられない。道中の護衛は俺達ができる。それに、南雲達より早く俺がこの世界を救う！ そのためには力が必要だ！

神代魔法の力が！ お前に付いていけば神代魔法が手に入るんだろ！」

「いや、場所くらい教えてやるから勝手に行けよ。ついて来るとか迷惑極まりないつ

うの。それにこれはお遊びじゃねえよ？ 何が早くだ？ そんな事だからためえは半端なんだよ」

勝手に盛りがって何言ってるんだと呆れ顔をするハジメ。アレスもまた表情を険しくする。非難しながら頼るとか意味がわからなかった。そこに、愛子がおずおずと以前のハジメの言葉を指摘する。

「でも、南雲君、今の私達では大迷宮に挑んでも返り討ちだつて言つてませんでした？」  
「……………」

そんな愛子の指摘にハジメは頷くと、自分のコートに手をかけながら話します。

「……………そうだな。お前等が思うより大迷宮はそんな生半可なモノじゃない」

「えっ、ちよつと、南雲君?!」

ガチャツ

雫が声を上げるたのは、ハジメが話しながらコートを脱ぎ始めたからだ。そしてガチャと音が鳴った。それはハジメが義手を取り外した音だった。そして、更にハジメは眼帯を取り外した。

「見れば分かる通り、俺は大迷宮で左腕と右目を失った」

「……………ツ……………」

「それでも、俺は帰るべき場所がある。守るべきモノがある。俺はずつと奈落でそれを

信念として生きる糧として足掻いて攻略してきた」

ハジメの話にクラスメイト達は息を呑みながら聞く。

「それで、俺のこの話を聞いても、覚悟をもつて神代魔法を獲得したいなら連れてってやらんことも無い」

ハジメの言葉に沈黙が続く。だが、一人の人物が出て、沈黙を破った。

「南雲君、お願いできないかしら。一度でいいの。一つでも神代魔法を持っているかないかで、他の大迷宮の攻略に決定的な差ができるわ。一度だけついて行かせてくれな  
い？」

「八重樫……寄生したところで、魔法は手に入らないぞ？ 迷宮に攻略したと認められるだけの行動と結果が必要だ」

「もちろんよ。神々を倒したいと思う気持ちは私達も一緒よ。それに、私は香織を止めたい。あの子は絶対に私の手で止めないといけない。だから迷宮も死に物狂い、不退転の意志で挑むわ。だから、お願いします。何度も救われておいて、恩を返すといったばかりの口で何を言うのかと思うだろうけど、今は、貴方に頼るしかないの。もう一度だけ力を貸して」

「鈴からもお願い、南雲君。もつと強くなって、もう一度恵里と話をしたい。だからお願い！ このお礼は必ずするから鈴達も連れて行って！」

今のハジメの話の聞いて、怖いと感じる雫は決心する。その顔は、恩も返せないうちにまた頼らなければならぬ事を心苦しく思っているのか酷く強ばっているが、覚悟がみられた。自分の手で親友を止めたいと。

そして、雫に感化されたのか、ずっと黙っていた鈴まで頭を下げだした。どうやら、里の事で色々考えているようだ。その声音や表情には必死さが窺えた。

「頼めねえか、南雲。せめて、自分と仲間を守るようになりてえんだ。それに、俺としても幼なじみが裏切つてんのをただ見てるだけなのは……耐えられねえ」

必死さで言えば、龍太郎も同じぐらいで、土下座と同じくらいに頭を下げている。

「……………」

「ハジメ、どうするの?」

優花は考え込んでるハジメに話しかける。

「……………分かった。八重樫、谷口、坂上の三人は連れて行く」

「あ、ありがとう!南雲君」

「ありがとう!南雲君」

「助かるっ!南雲!」

ハジメの言葉に三人はよろこびを見せる。だがある人物は声を上げる。

「なっ……なんで!雫達は了承して、俺は駄目なんだっ!」



それは光輝だった。どうやら、ハジメの答えに不満を感じたのだろう。声を張り上げる。

しかし当のハジメは……………

「それが分かかってねえから連れて行かないんだよ。アホ勇者」

「なっ！　南雲っ、お前何処に行くんだっ！」

そう言つてハジメは席に立つと、それに続いて優花達も立ち上がる。それに光輝は反応するが、ハジメは軽く受け流す。

「てめえと何時までも話すことはねえよ。俺はやるべき事が山程あるからな」

そう言つてハジメは部屋を出ていき、それに続いて優花達も出て行つた。最後にアレスは部屋を出る前に光輝に一つ忠告する。

「勇者。自分の価値観を人に押しつけるのはやめた方が良く、それにハジメ殿に向けるその醜い感情は辞めた方が良く」

「……………ッ！」

アレスは最後の方は光輝ぐらいにしか聞こえない程度の声で伝えると、部屋を出ていった。

そして、光輝はアレスに言われた後からずっと立ち尽くすだけだったのだつた……………。

## 七十六話

## たった一日での出来事

ガヤガヤ、ザワザワと王都は普段に増して喧騒に満ちていた。

いつもなら「活気に満ちた」と表現すべきところだが、現在の王都における人々の表情を見れば、そう表現するには些か悲しみに暮れる者が多すぎるだろう。王都への侵攻は、本当に突然のことだったのだ。

あの日から五日経った今も、人々の胸に去来する喪失感や悲しみは僅かな衰えもなく心に痛みを与えていた。しかし、それでも復興へと向けて歩みを止めないのは、きつと、それこそが「人の強さ」なのだ。

そんな悲しみと強さに満ちた王都のメインストリートを、ギルド本部からの帰りに大人買いしたホットドッグモドキをモグモグと食べながら結界のアーティファクトの場所を目指して歩くのは白髪眼帯の少年ハジメだ。傍らには、優花とユエと雫だけがいる。ギルド本部に行った後に大結界の修復に行くので、そのアーティファクトの場所への案内を雫が買って出たのである。

シア達は王宮でお留守番だ。今の王都で他種族が堂々と歩くのは無意味に人々を刺

激する行為だと判断し自発的に居残ったのだ。たとえ、王都の人々が、自分達を襲ったのは魔族だと分かっているとしても、今は「人間族ではない」というだけで八つ当たりの対象になりかねないというわけだ。

聖教教会のお膝元である王都においては、奴隷の亜人族すら忌避されるくらいで、元々、人間族以外はほとんどいない。なので、妥当な判断と言えるだろう。愛子達は忙しいリリアーナのお手伝い、テイオはここ数日ぶつ通しで消費していた魔力の充填のため睡眠中、アレスはリリアーの専属のメイドの人に見つかり、連れていかれていった。アレスは最初は逃げようとしたが、その時のメイドの人の笑みが優花の笑ってない笑顔ぐらゐの寒気を感じ、アレスは為す術なく連行されていったのを見てハジメはアレスに両手を合わせて健闘を祈ったのだった。

「それにしても……報告に行っただけなのに疲れたわ」

ハジメはホットドッグモドキを食べていると俺と同じくチーズ風味を食べている八重樫が口を開く。

「俺も彼処までガヤガヤなると思ってなかった」

「……………」

「私はそんな事より聞きたいのはハジメとユエは何をしたのよ、あの人に……」

「俺はやってない、ユエがやった」

「……………ん、後悔も何もない」

それは、ハジメ達がギルドの本部でフューレンからのミュウのエリセンまでの保護、護衛の依頼を完了を報告していたら、何か同じ“金”ランクの冒険者の“閃刃”のアベルに絡まれていたが、その時にブルックにいたクリスタルベルに似た人物に助けて貰った。それに聞けば、彼女？は以前ブルックでユエに告白したが振られ、強硬手段に出たところハジメの威圧と手刀にやられた後、ユエにスマッシュされた元冒険者の男だと言う。今はクリスタルベルの元で漢女とは何たるか学んでいるそうだ。ちなみに名前はクリスタルベル命名のマリアベルらしい。

しかし、たった数ヶ月で彼処までの戦闘技術の急成長にハジメは少なからず驚いていた。

「まあ……………ハジメ達は暴れ過ぎることね」

ハジメがギルドの出来事を思い出していると優花の言葉にハジメは反論する。

「いや、其処まで暴れてないって、なあ、ユエ？」

「……………ん」

「いやいや、暴れてるわよ。二人の二つ名何よ“デビル・ビスクドールズ”って…………」

其処に雫も賛同する。

「いや、俺も知りてえよ……」

いつか、この二つ名を作った奴は見つけ次第、絶対に吊るそう。ハジメはそう決心しながら優花達と結界のアーティファクトの場所へ向かった。

~~~~~

雫の案内の元、結界のアーティファクトの場所へ向かうと其処にはかなりの数の兵士によつて嚴重に警備をされていた。

「……おい、八重樫。ホントに入れんのか？」

そう場所に近付くにつれ、ハジメに対する剣呑な眼差しが強くなっており、入れるのか心配するが……

「大丈夫よ、ほら」

雫が言つたように、兵士達は八重樫に目を向けると、剣呑さが消え、目元を和らげ、通してくれた。

「嘘。マジ、顔パスかよ……」

「フフン、褒めても構わないわよ」

「流石だな、八重樫は」

「いや、素直に褒めるのね……」

「いや、お前が褒めろって」

ハジメは雫が何故、称賛だけで顔を赤くするのが分からずにいると隣にいた優花とユエにジト目で「誑し」と言われ更にハジメの頭に疑問符を浮かべることになった。

雫のおかげでほとんど顔パスで通った先には大理石のような白い石で作られた空間があり、中央に紋様と魔法陣の描かれた円筒形のアーティファクトが安置されていた。

「これが、結界のアーティファクトか……」

しかし、そのアーティファクトは本来なら全長二メートルくらいあったのだから、今は、半ばからへし折られて残骸が散乱していた。

「ん、アレは……」

その周りには頭を抱えてうんうんと唸る複数の男女の姿があった。おそらく、大結界修復にやって来た職人連中だろう。

「おや？ 雫殿ではありませんか。……どうしてこちらに？ 後、優花殿もいるではないですか。お久しぶりです」

その内の一人、それはハジメも顔見知りである人物だった。それは職人氣質の六十代ぐらいの男のウォルペンだった。ウォルペンは、ハイリヒ王国直属の筆頭錬成師だっ

た。

「お久しぶりです、ウォルペンさん」

「こんにちは、ウォルペンさん。私は、ただの案内です。大結界が修復できるかもしれない錬成師を連れてきたんです」

「なんですと？　もしや、そちらの少年が？」

優花と八重樫に挨拶してからウォルペンは、ハジメに視線を転じると、雫の手前口には出さなかつたものの明らかに胡乱な眼差しを向けた。

「久しいな、ウォルペンさん。五ヶ月振りぐらいか？」

ウォルペンはハジメの言葉に最初は訝しむが……

「まさかっ！お前っハジメかっ?!」

しかし、ハジメの声が誰かと分かり目を見開き、大声だが、ウォルペンは確認をとる。

「ええ」

ハジメはウォルペン達と一緒に共同作業などをしたのは一週間程だが、自分を覚えてくれた事に嬉しく感じた。

「おいつ、お前等！　ハジメが来てくれたぞっ!!」

ウォルペンはハジメだと分かる態度を一変し、すぐさま他の錬成師達を呼ぶ。す

ると、鍊成師達が俺のことを知ると、すぐさま此方に駆け寄ってきた。

「ハジメ、生きてて俺は嬉しいぞ！」

「生きているとは聞いたが、ここまで姿が変わつてるとな流石に分からなかったわい！」

「いやつ、良かったハジメ！ お前ハジメ俺達、鍊成師にとつての金の卵だからなっ！」

「いや、しかし……ハジメ。お前とまた話し合えて俺達は嬉しいぞっ！」

「クハツ……俺もウォルペンさん方が元気で何よりですよ」

鍊成師達はハジメとの再会に喜んでいるようで、ハジメも流石に照れ臭くなり、頬をポリポリと搔いていた。

そんな、ハジメとウォルペン達の会話を優花達は嬉しそうに眺めていた。

「彼、凄い人気ね」

「まあね、私もハジメの鍊成の鍛鍊中とかに会いに行つてたけどウォルペンさん達、ハジメのこと凄い認めていたからね」

「……そうなの？」

「うん。それにハジメが奈落に落ちて、私がまだ眠っている時に教会はハジメを無能扱いして処理するつもりだったらしいけど、それをウォルペンさん達も反対してたらしいわ」

「ええ、南雲君の無能扱いしてた教会にウォルペンさん達……激怒して教会を突貫して



壊そうとまでしようとしたらしいわ」

そう、ウォルペン達、王国直属の錬成師達はハジメの無能の扱いに激怒して、一期、王宮で錬成師達のボイコットが起きたらしい。

「……それは、凄い」

ユエは優花と雫から話を聞いてそう言葉を漏らした。

久しぶりの再会というわけで少しばかり話をした後に、ハジメは結界の復旧作業に取り掛かった。

「まず……確認しないとな」

ハジメはそう呟きながらアーティファクトの残骸に手を当てる。発動するのは「鉱物系鑑定」と「脳内設計」の派生技能「構造把握」だ。

「へえ、なるほど……そりゃあ、強力なはずだ」

「ハジメ、直せるのか？」

「ああ、任せろ」

大結界が何百年もの間、王都を外敵から守り抜いてきた理由に納得して頷くハジメに、ウォルペンが直せるか聞くのに対して、ハジメは軽口で返す。

そしてハジメは、「錬成」を始める。紅いスパークがハジメを中心に広がり、その手元にあるアーティファクトの残骸が次々と元の位置に融合されていく。

その錬成速度と精度に、ウォルペンのみならず彼の部下達が一斉に目を剥いた。ハジメの本格的な「錬成」を初めて見た雫も、白い空間に舞い散る鮮やかな紅いスパークに目を奪われているようで、「綺麗……」と呟いている。

「よし……これで魔力を流して……と」

僅か数十秒で神代のアーティファクトを修繕し終えたハジメは、ついでに魔力を注ぎ込み大結界を発動させてみた。

すると、円筒形のアーティファクトは、その天辺から光の粒子を天へと登らせていく。直後、外で警備をしていた兵の一人が部屋に駆け込んできて、第三障壁が復活したことを告げた。

「……なんとということだ……神代のアーティファクトをこうもあっさり……ハジメお前どうやったんだ？」

ウォルペンは最初は哑然としていたがすぐさま気を取り直して俺にどうやったかと聞く。ハジメはウォルペンの問いかけに平然と返す。

「俺が使ったのは「錬成魔法」だけじゃなくて「生成魔法」っていう魔法でなウォルペンさん達には使えない魔法を使っただよ。このアーティファクトを調べたところかな、錬成だけじゃ完全には修復までに至れないからな」

「そうか……だから、俺達じゃ修復出来ねえ訳か」

ハジメの言葉にウォルペンは自分達だけでは結界のアーティファクトを直せなかったのか納得する。

実際、ハジメが「構造把握」で調べたところ大結界のアーティファクトには生成魔法により空間魔法が付与されており、王都の結界は特殊な空間遮断型の障壁だった。

そうなれば、普通の錬成師には修復できないはずである。もちろん、空間魔法は鉱石に付与されているので、地道に復元していけば、完全とは言えないまでもある程度の修理はできるかもしれないが、今までのより質が落ちるだろうな。

ハジメはそう思いながら、直ったアーティファクトを眺めていると、ウォルペンさん達が寄ってきた。

「ハジメ、ホントに助かった。お前が来なけりや、結界の修復は大分先だったからな」

「いや、良いんだよ。俺としてもウォルペンさんやアンタ達には恩があるからな」

「ガハハツ、そうか……」

ハジメがそう言うとうォルペンは笑い出し握手を求め手を差し出す。俺もそれに応じて手を差し出し握手をした。

「ハジメ、次は俺達がお前の助けになる。……まっ、お前なら自分で何とかしそうだな」

「クハツ……頼りにしてますよ」

ハジメはウォルペンの言葉に笑みを浮かべながらウォルペンと握手と交わしたのだった。

~~~~~

夕方。

茜色の空が広がり、人影が大きく薄く伸びる頃、王宮の西北側にある山脈の岸壁を利用して作られた巨大な石碑の前に人影が佇んでいた。

「ごめんなさい……」

そう、眩く人影の正体は愛子だ。

彼女の前にそびえ立つ石碑は、いわゆる忠霊塔の石碑版である。王国に忠義を尽くした戦死者・殉職者は例外なく、ここに名を刻まれるのだ。現在も、石碑前には、今回の騒動で亡くなった多くの人々の遺品や献花が置かれている。

未だ、戦死者の確認中で石碑に名は刻まれていないが、ホセ達もここに名を連ねることになる。

そんな遺品の中には、愛子にとって見覚えのある武器がそつと置かれていた。損壊した西洋剣だ。それは、逝ってしまった愛子の生徒達——檜山大介のアーティファクトで

ある。檜山の死体自体は見つからなかったが裏切った恵理と香織の証言、そして現場となるメルドの部屋に大量の血が流れており、すぐ側には破損した西洋剣が落ちており、確定ではないが、現場証拠により檜山大介は死亡したことになった。

愛子がポツリとこぼした懺悔の言葉は、一体、何に対するものなのか分からない。檜山を日本に連れて帰ることが出来なかったことか、それとも、自分の生徒達が起こしたことで多くの人々が亡くなったことに対してか、あるいは、自分のしたことも含めた全てか……。

愛子が悄然とした雰囲気では俯きながら、何かを堪えるように立ち尽くしていると、足音が聞こえ、愛子が、ハツとしたように俯いていた顔を上げ視線をそちらへ向けるとそこには……

「アレスさん……」

「奇遇ですね。愛子殿」

愛子の視線の先にいたのはアレスだ。夕日に照らされても青き輝き透き通る瞳を真っ直ぐ愛子に向けている。その手には花の束が、見るからに献花しに来た事柄に愛子は理解した。

アレスは、愛子の表情から何を考えているのか察し、苦笑いしながら献花台にパサリと花束を置いた。

「愛子殿、そんな気になさらないで下さい。貴女の生徒の裏切りは貴女の責任じゃありません」

「え？ あつ、いや、そんな、でも……」

愛子に話しかけたアレスに、愛子は動揺したように手をワタワタと動かして誤魔化する。アレスは、冗談だとも言うように肩を竦めると、無言で愛子の傍らに佇んだ。

愛子は、チラリチラリとアレスを見るが、巨大な石碑を見上げるアレスは愛子のことを特に気にした様子もなく、話をする気配もない。無言の空間に何となく焦りを覚えて、愛子は仕方なく自分から話しかけた。

「えくと、アレスさんは何故此処に？」

「そうですね……。私は王国から追放された身ですが、私とて王国の民なのは変わりありません。死んだ王国の騎士や兵士には私の知人もいますからね」

アレスの言葉に愛子は更に心が痛む。愛子は、両腕を組むようにして二の腕をさす。それはまるで、冷え切った体を温めようとしているかのようだった。

「愛子殿。まさか、総本山でやったことをまだ気にしてるのですか？」

「……」

（無言の肯定……ですか……）

無言の肯定。一時は、均衡を崩しそうな精神をハジメ達のフォローとテイオの再生魔法によってどうにか立て直した愛子だったが、再び、罪悪感やら倫理観により精神が磨り減ってきているようだ。よく見れば目の下には化粧で隠しているが隈が出来ており、ここ数日眠れていないことが明らかだった。もしかすると、悪夢でも見ているのかもしれない。

再び降りる静寂。アレスは何を言うでもなく無言のままだ。場の空気に居た堪れなくなつたのか、愛子が覇気のない声音でアレスに尋ねる。

「……アレスさんは……辛くないですか？」

「……人を殺すことですか？　まず最初に私達と愛子殿達の住む世界は違いますからね。まず其処で価値観は違うと思います。しかし、愛子殿の気持ちは分かります。ですがもう、この手を沢山の血に染めてる私は共感はできませんね」

「……」

アレスの言葉に、愛子が辛そうに顔を歪める。アレスにはつきり切られたことも、愛子の精神を更に締め上げる要因となつた。

「……誰も……責めないんです」

「はい？」

愛子が、堪りかねたように言葉を漏らした。

「誰も、私を責めないんです。クラスの子達の私を見る目は変わらないし、王国の人々からは、称賛してみた眼差しさえ向けられます」

それは事実だった。クラスメイト達は、ハジメの凄惨な戦闘の印象が強すぎて、愛子が殺人に加担したということに余り実感が持てず、むしろ愛子が自分達のために矢面に立って戦ってくれたという印象を抱いているし、王国の貴族や役人達は洗脳を解いてくれたと感謝しているくらいだ。

「デビッドさん達にも全て話しましたが、彼等でさえ、少し考えさせて欲しいとその場を離れるだけで直ぐに責めるようなことはしませんでした。私は、彼等の大切なものを根こそぎ奪ったというのにつ」

噛み締めた唇から血が滴り落ちた。愛子は、責めて欲しかったのだろう。人を殺すという行為は……重い。狂人や性根の腐った者でもない限り、普通は罪悪感や倫理観という名の刃によって己の精神をも傷つけるものだ。そういう者にとって、責められる、罰を与えられるというのは、ある意味救いでもある。

愛子自身も、無意識にそれを求めたのだろう。しかし、それは与えられなかった。しばしの沈黙の後、アレスは静かに尋ねた。

「……愛子殿は後悔していますか？」

「つ……いえ、あの時、覚悟をしてテイオさんと……教会の行いを見過ごすことは出来ま



せんでしたから……貴方の助けに……それに、きつと、放っておけば生徒達が酷い目に遭うと……だから……」

苦しげに声を詰まらせながら「後悔はない」と話す愛子。

アレスはそんな愛子の話を聞き、愛子を見ながら優しく微笑む。

「ハジメ殿の言つた通り貴女は度を超える善人だ」

「……」

「愛子殿、貴女には罪悪感を抱いていて欲しい。その重さを背負っていくべきです」

「罪悪感を……抱く？」

「はい、そしたら……ハジメ殿達も貴女のその「人間らしさ」を見てたらきつと彼等も世界に戻つても人間らしく過ごせませす。私も貴女を見terると、まだ殺しに躊躇ちゅうちゆいがあつた自分を思い出す」

「アレスさん……」

アレスの言葉に、愛子が目を大きく見開く。まさか、責めるでも慰めるでもなく、これからも苦しんでくれと言われるとは夢にも思わなかつたのだろう。だが、愛子の心は、その我が儘で、ある意味、追討ちを掛けるような言葉にまるで暗雲を払われるような衝撃を覚えた。

自分のした決意と行動の結果を受け止めることは大変なことだ。ましてそれが痛み

を伴うものなら尚更。逃げてしまいたくなるし、折れてしまいたいようになる。生来の性格が、あるいは決意と覚悟がそれを許さないから余計に苦しい。

だが、そんな自分を見て、助けになるといふ人がいる。失った大切なものを、感じずとも忘れないでいることが出来るという人がいる。

愛子は思った。

——ああ、本当に何でこの人は何で、優しい人だろう

愛子の頬を透明な雫がするりと零れ落ちた。今まで、自分がやったことなのに泣くなんておこがましいと耐えてきたものがあつさり決壊してしまった。

ホロリホロリと涙を流す愛子に、アレスが視線を逸らし、後ろを向きながら困ったように最後の言葉を伝える。

「まあ、どうしても、苦しくて苦しくて折れてしまいたいような時は……他に誰もいなくて……ほんとに誰もいなくて困り果てていたなら……背中くらいは貸しましょう」

「アレスさん……は……ホントに優しい人です」

愛子が泣いていることに気がついてなんていませんよ？　と言わんばかりに背を見せるアレスに、愛子は、泣き笑いをしながら近寄ると、ポスつとその背中に顔を埋めた。

「では、少しだけ貸して貰いますね。……アレスさん」

「はい。どうぞ、自由」

気軽に応えるアレスに愛子は頬を緩めつつ、その身を預ける。そして、溜め込んだものを吐き出すように涙を流しながら、改めて誓いを立てた。すなわち、教師で在り続けると。そして、罪を背負い続けると……頑張れそうな気がしたのだ。

二人の影が大きく東に伸びる。暫らくの間、日暮れの中ですすり泣く声が響いていた……。

~~~~~

「まさか、アレスが先生を慰めていたとはな」

「ハハツ、偶然ですよ偶然」

王宮内の食堂にて、俺達は話をしながら如何にも他人事といった様子で目の前の夕食である王宮料理に舌鼓を打っていた。

「……で、アレス。先生は耐えれそうだったか?」

アレスから話の内容を聞いていたため、ハジメは少し心配そうにそんな質問をした。それに対し、アレスは食事の手を止めて少し考える素振りを見せる。

「彼女なら大丈夫だと思えますよ? 最悪、私の魂魄魔法で安定させたりしますが、愛子殿なら時間が経つにつれ消化できると思いますよ」

「……そうか、助かるよ」

ホントにこの男は違う世界の住人なのに……こんなに献身的だろう。いや、アレスはリリーの兄みたいなもんだしホントに似ているな、と。ハジメはそう思いながら笑みを零す。

ハジメ達が仲間内で、ある意味仲良く盛り上がっていると、不意に食堂へ集団がやってきた。愛子達を含むクラスメイトだ。どうやら、愛子も含めて全員いるらしい。

ハジメはチラリと彼等を見やると、僅かに眉をしかめる。あらかじめ、彼等が食事をする時間は聞いていたから、仲間内でゆったり食事できるように時間をずらしたのだがその目論見は外れてしまった。

「でも、まあ……気にする程ではないか」

ハジメはそう思い直し、そのまま食事を再開する。優花達も特に気にしてはいないようだ。

だが、クラスメイト達はそうもいかないようで、ある者は興味津々な様子で、ある者はどこか気まずそうに、またある者はどういう態度をとればいいのか分からないと戸惑ったようにそわそわして、声を掛けることが躊躇われるようだ。ちなみに、愛子は別の意味でアレスをチラ見している。

「あつ、優花、隣良い？」

「あつ、私はつその隣りいゝ」

「ふふ、良いわよ二人共」

妙子と奈々の二人のお願いに優花は笑みを浮かべて了承し、二人は優花の隣の座席に座る。

光輝達が席に着くと、王宮の優秀な侍女達が一斉に動き出し配膳を行つていった。ハジメ達と同様のメニューだ。

と、その時、向かいの座席にいるアレスに目を向けると、愛子がアレスの傍にいた。徐々に愛子の頬が薄く染まり、恥ずかしげに目が逸らしている。それでも、チラチラとアレスを見たあと、内緒話でもするように声を潜めて声をかけた。

「あ、あの、アレスさん……その、さっきのは……その、出来れば……」

愛子は顔を赤くしながら話しているとアレスはそつと自分の口に手をやり「シート」とポーズをしていた。おそらく秘密にしておきたいのだろう。

「……はつ、はい。ふふ、ありがとうございます」

愛子もアレスの意図に察したか笑みを浮かべながら自分の席に戻つていった。

「……アレは堕ちた」

優花とは逆側に座るユエはそう呟いて、リリアーナはずつとアレスを見つめていて、その視線に気付いたアレスは気まずそうだったがハジメはスルーした。

「……ハジメ、少し良いか？」

ハジメは何事もなく夕食を食べていると、唐突に浩介が話しかけてきた。

「どうした浩介？」

「俺に大迷宮の場所を教えてください」

「あつ？」

ガタツ

ハジメは浩介の発言内容に持っていたスプーンを落としてしまった。

「じゃあ、浩介も俺達と同：「違う。俺はハジメ達と違う大迷宮を攻略するつもりだ」  
……本気なのか？」

ハジメは元々、浩介が大迷宮に向かうという意味があるならハジメは連れていく気はあったが浩介の言葉にハジメは眉を顰める。

「ああ、本気だ。俺はお前の隣で並べるようになりたいんだ。だから、神代魔法もお前の手を借りずに自分の手で手に入れたい」

「だが、浩介。大迷宮はそんな：「じゃあ、私達が浩介に同行するわ」……妙子」

「ちよつ、妙子。何言ってるん：「二人が行くなら私も行くつ！」……ちよつ、奈々までつ?!」

妙子の着いていく発言に優花はガタツと音を立てながら席を立てながら止めようとすると、その隣も奈々も参加すると宣言したことに優花は目を見開いて驚く。

「優花。私だつて、アンタが胸を貫かれた時からずつと思つてた。私だつて、優花やハジメの力になりたいのっ！だつて、二人は私達にとつて大事な幼なじみじゃないっ！」

「うん！私だつて、二人だけが傷付くのもうイヤなの！ 私も二人の力になりたいっ！」

「お前等……」

「三人共……」

二人の言葉にハジメは暫し考える。隣にいる優花も自分と同じ気持ちなんだろう。

「……浩介もだが、お前達は大迷宮に挑む覚悟はあるんだな？ 天之河みたいな半端

な覚悟で挑んでも死ぬだけだぞ？」

ハジメは席から立ち上がり、余り幼なじみ達にはしたくなかつたが「威圧」を発動しながら三人に問いかける。

三人はハジメの「威圧」に怯みそうになるが、すぐさま気を取り直して……

「ああ、あるに決まつてる！」

「やつてやるわよっ」

「私もっ！」

三人はそう答えた。三人共その瞳には揺るぎない覚悟がハジメには見えた。

「……そうかよ。わかった三人にはある大迷宮の場所を教えるよ」

「……っ、助かるっ」

「でも、ホントに良いんだな」

「ああ」

ハジメは再度、浩介に聞く。しかし、浩介の揺るぎない回答を聞いて、つい笑みが零れる。

「クハッ……なら、頑張れよ親友」

「任せろよ。親友」

ハジメと浩介はそう軽口を言い合いながら拳を合わせる。

「浩介。もし妙子達になんかあつたら吊るすわよ」

「いや、何もする訳……「イヤーン！ 浩チンに襲われるう！」……ンだと、宮崎。ゴラア！」

「「アハハハハ」」

優花の言葉に浩介が大丈夫と言う時に奈々が変に発言することに浩介がキレた。その光景にハジメ達やこの場にいるクラスメイト達も笑っている……

「南雲っ！ やはり、俺も連れて行ってはくれないか？」

それは天之和河だった。



「……言つたらう？半端な覚悟の奴は無理だつて」

ハジメは先の話で天之河に告げたことを再度告げる。

「ああ、俺にはまだ何が半端な覚悟なのか分からない！　だが、俺としても香織と恵理を取り戻したい！　それには神代魔法が必要だつ！　だから頼むツ！」

「……………」

ハジメは天之河の言葉に何かを感じたが自分手では判断しかねるので俺に視線を向ける。すると、アレスはハジメの意図を察したらしく、席に立ち上がって天之河に視線を向ける。

「勇者。貴方がいまさっき言ったことに揺らぎはありませんか？」

「……………はいっ！　ありませんっ！」

「……………まあ、良いでしょう」

「じゃ、じゃあ…しかし、その言葉が嘘なら強制的に王都に返します。ホントに邪魔されたら洒落にならないので」…分か、りました……」

天之河はアレスの条件を飲んだ。そして、アレスは話が終わったと俺に視線を向ける。ハジメは面倒臭いがアレスが認めたとし、ハジメも了承することにした。

しかし、ハジメはアレスの判断の理由が気になり、こつそり「念話」で話す。

「なあ？　なんで試験やなんかで試さないんだ？」

「時間の無駄ですし、試験をしたって不合格だった場合、ああだこうだ言いそうですし」

「ああ……そういうこと」

「ハジメはアレスの意見にこもっともと思った。自分でも思う。光輝ならそうしそうですと。」

「だから、連れて行くだけ連れてって、神代魔法を集めめていくのが得だと思った訳です」

「了解だ。アレスもすまないな、お荷物を連れていくかもしれないが」

「ハハッ。構いませんよ」

そして、ハジメとアレスの「念話」が終わった。

その後、ハジメは優花達四人から何度も「あーん」されていきクラスメイト達からの視線が凄く、その中の二つぐらいの視線は他と違う感じの視線だった。

ハジメは「あーん」をされながら今日一日を回想する。

【神山】から天使となった（昔から天使だが）優花をお姫様抱っこしながらフリーフォールで登場し、冒険者ギルドで「金」ランクの冒険者を一人漢女にして、ウォルペンさん達と再会を果たした。

「なんか、長い一日だったな……」

「ハジメ、どうしたの？」

「いや、なんでもない」

「じゃっ、はい、アーン」

ハジメの呟きに優花が反応したが誤魔化し優花の髪を優しく撫でる。すると優花は嬉しそうに笑みを浮かべ、またハジメにアーンを再開する。

ハジメ達は、明日にはリリイ達を連れて王都を出発する。ハジメは、帝都に入るつもりなど毛頭ないが……きつと、〃何事もなし〃などということはないだろう。

果たして、東の地には何が待ち受けているのか……ハジメは、新たな騒動を予感しつつも、大切な恋人達と大切な仲間達を見る。

「まあ、どうにでもするさ」

と言葉にする。何が来たって、振り返ちにしてやるとハジメは思いながら肩を竦めるのだった……。

## 幕間 加速していく終末

―魔人族の地ガーランド―

南大陸の上空に白い閃光が横切る。その閃光はある場所に向かっている。それは並の魔物でも追えない程のスピードで地上からでも風切り音が聞こえる程であった。

その音を聞いてか、ガーランドに生きる魔人族達は空を見上げ、その白い閃光を目に捉えた。

「アレは……何だ？」

その閃光を見て、戸惑いを見せる者。

「魔法じゃないよな……」

人間族からの攻撃ではないかと、警戒する者。

「わあ。見て、お母さん。まだ明るいのに、お空に星が流れてるよ」

「そうねえ。もしかしたら、『アルヴヘイト様』の祝福かしら。ほら、お祈りしましよ  
う。魔人族の平和の為に」

「うん！」

閃光が、自分達の崇拜する神の祝福だと言って、祈りを捧げる親子。

誰もが、この上空を横切る白い閃光を見たが、それぞれ異なることを述べていた。

しかし、王城を守る兵士達は危機感を顕にしていた。

「おい、何だアレは?!」

「分からん！　すぐさま城内に行つて、応援を呼ぶんだ！」

「クツソー！　北への侵攻が失敗して今は、兵長達も居ない状況、兵力が足りないつて

いうのにつ！」

白い閃光が段々とこちらに近付いていると分かり、兵士達はアワアワと慌てだしてい

く。しかし、閃光のスピードは落ちはしない。

そして……

ズドオオオンツ！

閃光は、王城の門の前に落ち、大地を震わせる。地面が砕かれ砂煙が立ち込める。門番をしていた兵士達はすぐさま、応援と呼びにいく兵士と白い閃光の正体を探る兵士達の二手に別れてすぐさま行動を取った。

「おいっ、何者だっ！」

此処は魔王城、魔王様の城だ！　それを知つての愚行か?!」

魔人族の兵士達は槍や剣を持って、白い閃光が降り立った場所を取り囲む。その兵士達の後ろには門番をしていた魔法師団が詠唱を開始しようとしている。

しかし……

砂塵が舞う中、閃光が落ちた場所から覚えのある声が聞こえた。

「……お前達こそ、この私に剣や槍を向け、魔法を撃とうとはそれこそ愚行だと思わないのか？」

威厳のある声だ。その声音は魔人族なら誰でも知っている魔人族の英雄と呼ばれる人物の声に似ている。

「……この声は……まさか……」

魔人族の兵士の一人が声の正体が分かったのか、顔を青くなっていく。やがて、煙が晴れていき、白い閃光の正体が姿を現す。純白の鱗が輝き、その威厳のある姿で佇む竜。その名は「ウラノス」。そして、ウラノスに騎乗していたのは、燃える業火のような赤色の髪が彼の強さを表し、ウラノスの主であり、自分達魔人族將軍であるフリード・バグアーその人だった。

「フ、フリードオ様ア?!」

「お、お戻りになりましたかっ」

「よ、良くご帰還なされましたっ!」

門番の魔人族の兵士達はフリードを見たと同時に、すぐさま対応を切り変えると、自分達の英雄であるフリードの帰還を喜んだ。フリードも城を守る兵達に称賛を述べた。

「ああ、お前達も門番の任をよくこなしている。このまま頑張りましたまえ」

「ご褒めの言葉、ありがとうございますっ！」

「ああ。では、私は少し疲れている。部屋に戻りたいから門を開けてくれないか？」

「いや、あのそれは………できません」

フリードはすぐさま、自分の部屋に戻ると門番の兵士に伝えるが、門番の兵士が苦い顔をして拒否する。それを聞いたフリードはスつと目を細め、少し圧を感じさせながら問いかけた。

「私が今、入っては不都合なことがあるのか？」

「いえっ………そう言うことではないんですが………」

「言え」

「………っ」

門番の兵士が中々言わないので、フリードは少々“威圧”をしながら兵士達に詰め寄る。

「魔王陛下の命令で………」

「陛下からだど？」







「い、いえっ！ 私達は魔王陛下の使いの方に、それをフリード様がご帰還なされたら渡せと、としか……」

「そうか」

「で、では、フリード様。私達も仕事なので、居なくなつた五日間は何をしておられたのですか？」

門番の兵士の一人がアルヴの命令されている仕事をこなす為、フリードにいなかった五日間は何処で何をしてたのかと聞く。

「……この五日の間、私はウラノスと共に王都侵攻の際に負つた傷を癒す為に療養をしていた」

「療養ですか……フリード様、疑つてはいませんが、発言の許可をお許し下さい」

フリードの意見に納得がいかなかったのか、聞いた兵士がフリードに発言の許可を願う。フリードは、頷き発言の許可を許した。

「良いだろう」

「フリード様なら、神代魔法の一つ『空間魔法』でガーランドに帰還できて、すぐに我等の回復魔法に長けた者達に任せれば、もう少し早く療養できたと思うのですが……」

「ほう……じゃあ、私は嘘の発言をしている、と？」

門番の兵士の言うことは一理ある。が、内心悟られないためにフリードは、門番の兵

士の一人に鋭い視線を向けながら問いかける。

「い、いえっ！ 決してそう言う事ではありせんっ！ フリード様ならそうするか

と思つて疑問に思つただけですっ！ 不快に思われたならすみせんっ！」

「……いや、構わない。私も説明不足だったようだ。君の言う通り、私なら『空間魔法』でガーランドまでゲートを繋げられる。しかし、王都侵攻の際に負つた傷が余りにも深くてな、ウラノスも飛べるのが不可能と思えるほどの深手を負つてしまつて、何処かで早急に傷を癒さないといけなかつたんだ。それで、療養していたら五日も掛かつてしまった。自分も流石に驚いてしまつたよ」

兵士の言葉に肯定しながらフリードは、自分の経緯を話した。経緯を聞いた兵士やこの場にいる兵士達も納得したように頷いていく。

「そ、そう言う事だったのですか……」

「ああ、魔王陛下やお前達に心配になるのはごもつともだろう。迷惑かけてすまなかつた」

フリードはそう言いながら、兵士達に頭を下げた。

「フリード様?! 頭を下げないでください！ 貴方は我等、魔族の英雄であり、我等の将軍なんです！」

「そうですよっ！」

フリードが頭を下げるのを見て、兵士達は驚愕した表情になる。そして、半狂乱となりながらフリードの頭を下げるのをやめさせようとする。

「そうか……では、私の意を魔王陛下にも伝えてくれ」

「はっ！　では、フリード様どうぞ」

「感謝する。行くぞウラノス」

「クルアアア」

フリードは門を通してくれた兵士達に感謝の意を伝えながらウラノスと共に魔王城に入っていったのだった。

コツコツ……

王城へと入れたフリードはウラノスを専用の部屋に預け、自分の部屋に向かうため城の廊下を歩いていった。その廊下には人気がなくフリードの足音だけが響いていた。

「魔族の未来の為に……か」

フリードはそうボソツと呟きながら懐から門番の兵士から受け取ったアルヴからの書状を取り出す。

「……何が未来だ……私達を駒としか見ない奴が……魔族の未来などと語るなっ」

ギリツと齒軋りするフリードはこの書状を見て、内心怒りに満ちていた。自分達を遊

戯の為の駒としてしか見ていない。奴等……神々にとつて不都合な存在は洗脳や暗殺、神の罰だとかの名目での弾圧……やってきたことを数知れない程の所業。フリードは書状をギュツと握りしめる。

「……私は許さない。貴様みたいなクズが魔人族の未来を語るなど言語道断だつ」

フリードは怒りの余り更に書状を握りしめる力を強める。そしてシユボツと音と共に書状が燃えだした。やがて、書状は灰になつてチリチリと廊下に流れる入る風に飛ばされていく。

「待っている。必ずしろ私は、いや私達が貴様等神を……神域から這いずり出して、地の底にまで沈めてやる。そして……三人で誓つたあの理想を実現する」

フリードはそう呟きながら瞳に炎を宿す。そして、再び、歩みを進めようとした時だった。

「フリード様！」

後ろからフリードにとつて一番信頼出来る部下であり、大切な人の声が聞こえてフリードの心を落ち着かせていく。フリードは、立ち止まると声のする方向へ振り返り名を呼んだ。

「カトレアか……」

「はい、フリード様。門番の兵士から貴方様が帰還なされたと聞き早急に伺つてまいり

ました」

「そうか、私はこの通り無事だ。ウラノスもな。しかし、お前とは『フォン』で連絡をとっているから心配は要らないだろ」

「ですが……私の目で見えておきたかったです。フリード様は私達の英雄である前に、私と……そして、ウィリスにとって大事な人ですから」

フリードは、カトレアや大事な部下達に連絡用の魔物を渡しており、連絡をとっているのだが、カトレアは自分の姿をちゃんと目で見ておきたかつたらしく、フリードの姿を見てカトレアは嬉しそうで、安堵したような表情になっている。

「フツ……そうか」

「！フリード様?!……」今は誰も居ない。三人の時の呼び名で構わないがカトレア」  
「……フリー君……」

フリードはそんな嬉しそうな表情をするカトレアに寄り添い頭を撫でる。するとカトレアは顔を真っ赤に染め、更にプライベートでの呼び名を要求すると更に赤く染め、恥ずかしがりながら呼び名を呼ぶ。

「可愛いな……」

「ツ……!! もうっ言いませんからっ!」

「フツ、そんなに怒るな。カトレア悪かった」

「ふう……、それでフリード様……「フー君って呼ばないのか」……つ、言いません！　それでフリード様、どうでしたか。その魔剣は……」

カトレアはフリードのからかいに反応しながらも、フリードの腰に携えてる剣の感想を聞く。フリードも腰に携えた剣を視線を向けて応えた。

「ああ……この魔剣は役に立った。これのおかげで彼の仲間のユエから貰った座標で見つけたミレディ・ライセンの大迷宮を攻略することが出来た」

そう言つてフリードは嬉しそうに腰に携える剣をそつと優しく撫でる。

「そうですか……なら、皆で見つけた甲斐がありました。魔剣「イグニス」を……」

「ああ……ホントによくやったカトレア。本当に。里の伝承とされていた、この魔剣「イグニス」を見つけてくれたことを……」

「いえ、私の力だけじゃありません。あの子達もフリード様の為に尽力してくれましたから」

「フツ……そうか」

フリードはそう笑みを浮かべると、魔剣を腰から取らずに手元に「出いでてよ。イグニス」と口にする。魔剣がフリードの手に収まる。その光景に目にしたカトレアが驚きの声を上げる。

「フリード様。まさか、「イグニス」に認められたんですか?!後、攻略したって……」

「ああ、この『イグニス』とウラノスの助けもあって、攻略することが出来た」

「ではっ、攻略したなら」

「ああ、手に入れたぞ。ミレディ・ライセンの神代魔法『重力魔法』を」

カトレアの言葉にフリードは笑みを浮かべながら頷くと、重力魔法の一つ、小さい一つ黒い球体の『禍天』を手の平に出現させた。それを見たカトレアは驚きながらも嬉しそうに表情になる。

「流石ですっ！フリード様。それで、ミレディ・ライセン様はどんな方でしたか？ や

はり、ヴァンドゥル・シユネーの手記に記されてた通り、彼女はゴーレムとして生きていましたか？」

「ああ、彼女は、手記通りゴーレムだったよ……」

「フリード様？」

フリードはカトレアに質問にミレディはどんな人物だったかと聞かれ、遠い目をする。それに気付いたカトレアは何があつたかと聞く。

「……ウザかった」

「えっ？」

「ウザかった。ミレディ・ライセンはホントにウザかった」

「あつ、ああー。本当に手記通りの方だったんですね……ミレディ・ライセン様は……」



「ああ、だから流石に私もイラツとした。だが……」

フリードは思い出す。

ライセンス大迷宮を攻略し、重力魔法を獲得した時だった。

『フーちゃん。君とハジメン達ならあのクソ共を倒せると信じてるよ』

『ああ、任せてくれ』

『うんっ、アハハハ。ゴメンね、少しフーちゃんとウラノスちゃんを見てるとヴァンちゃんを思い出すよ』

フリードはその時のミレディはゴーレムの姿でありながらも笑っているように昔の解放者達との記憶を懐かしんでいるように見えた。

『ヴァンドウル・シユネーを？』

『うんっ！だってヴァンちゃんはね、フーちゃんと同じように魔物も大切にして友情を育んでいたよ。ホントに相棒……いや家族のようにね☆』

『フツ……そうか。それは、嬉しいな』

フリードは尊敬する人物と似てると言われ、嬉しそうに笑うと、傍らに頭を自分に擦り付けるウラノスの目元を優しく撫でる。そんな姿をミレディは楽しそうに、懐かしそうに眺めていた。

フリードは、そんなミレディとの会話を思い出し、自然と笑みを零す。

「フツ……」

「フリード様？」

「いや、ミレディ・ライセンはウザかったが、しかし解放者のリーダーとして、手記に記されていた通り、素晴らしい人格者だった」

「フフ……そうなんですね」

そう語るフリードの表情を見てカトレアは嬉しそうに笑みを浮かべる。

「カトレア。私は今から隠し部屋に籠り、アレの完成を早めていこうと思う」

フリードの言葉にカトレアは真剣な表情になると、フリードに確認をとる。

「アレをですか……」

「ああ、アレを完成させて、まだ見つからないが見つかるであろう『適正者』に渡しておきたい。私の最高傑作になるであろう『グランド・ビースト』を。だからカトレア、私が部屋に籠っている間にアルヴが帰還したら報告してくれ。もし奴にバレたら台無しだからな。それに、此処にいるのだから分からないが、彼等を裏切った者達は？」

「はい。今は、アルヴ様のお部屋に滞在されています」

フリードはカトレアから使徒を裏切った二人の情報を聞くと、眉をひそめながら言う。

「その者達も、私の元へ来ようとしたら報告を頼む」

「はっ、かしこまりました。このカトレア。フリード様の為ならどんな命令も従います」  
カトレアはそう言いながら、フリードに跪く。しかし、彼女の発言はただ上司と部下の関係だけじゃない。お互いを信頼し合っているからこそその発言だ。

「頼む」

「はい」

カトレアの回答にフリードは笑みを浮かべる。そして、カトレアも笑みを浮かべる。

「……………」

(しかし、アルヴめ……神域で何を話してるんだ?)

フリードは部屋に向かう途中そう思いながら、アルヴがいる神域があるであろう空に視線を向けるのだった……。

~~~~~

其処は幻想的で神々しく感じる場所だった。

その場所は、空の上。中心にそびえ立つ建物は、いかにも、神の住む場所とも言つても過言ではないだろう。そこには、白一色の巨大な宮殿が建っていた。

そう、此処は『神域』

——神達の住む世界である。

く宮殿内のある大きな一室く

この一室に、三柱の神が揃っていた。

「ガハハツ、聞いたぞアルヴよ！　我が主の異世界召喚から召喚された者達の中に現れた『イレギュラー』にボコボコにされたとな。愉快、愉快！ガハハハハツ！」

「なっ！　ち、違います！　私はまだ負けてはおりません！　油断してた……いやっ、

私は、イレギュラーの力を測っていただけですよ！　だから、私は本気を出してはいません！」

一柱の黒を基調とした着物を着た男神がアルヴの失態を声を出しながら笑う。それを、アルヴは否定していくのだが、そこにいた一柱の女神が横槍を入れる。

「でもく、アルヴ。アンタさあ、イレギュラーとただの駒に『神言』を使つたって聞いてるんだけどく。マジウケるんだけどく」

「それは、真かつ！ガハハツ。滑稽だなアルヴ！」

「いやっ、それはイレギュラーが予想以上に強力で……」

「いや、イレギュラーにならまだ分かるよく。でも雑魚の駒に『神言』を使うのはナイナア」

「い、いえっ！アレは！少し理由が………」

アルヴに一柱の女神がどんどん煽つていき、アルヴは内心悔しく齒噛みする。だが、アルヴは二柱の神には逆らえない。実力差があり過ぎるのだ。アルヴが本気を出したとしても勝てないであろう。そんな二柱の言葉に耐えることしか出来ないアルヴだったが……

「静かにしなさい。貴方達、我が主が来られましたよ」

二柱の神がアルヴの失態をネタにして笑い合っていると、扉が開き、透き通った女性の声がある。それと同時に五月蠅かった部屋がシンツと静まりかえった。

それも、そうだ。彼女の声するのなら、あの御方が傍にいるからだ。

ザツ！

アルヴを含めた三柱の神が席から立ち上がり、扉の前に綺麗に並んで跪く。それを見た銀髪の女性が部屋に入ると扉の横に移動する。そして、扉の奥からは尋常ではない程の重圧が響き渡る。アルヴは、その圧に吐きそうになってしまう。

そして、扉の方から声が聞こえた。

「お前達、よく私の招集に集まってくれた感謝する」

「二、いえ、ラーゼン様の呼びかけなら我等一同はすぐさま駆けつけます」

そう。部屋に入ったのは、白を基調とした服に、外套を身に纏った最高神。ラーゼン

だ。ラーゼンは、自分の前に跪く三柱に命ずる。

「そうか。じゃあ、まず座って話そうじゃないか？ エクストラも」

「「はっ！」」

「かしこまりました」

ラーゼンの言葉に従い四柱は自分達の席に戻り、着席する。そして、一番豪華な玉座ともいえるような椅子にラーゼンは腰がける。

「では、我が今回、お前達に招集をかけた理由を話そう」

「「……」」

「無論、イレギュラーの件だ。エクストラ報告を」

「はい」

ラーゼンの言葉に銀髪の女神エクストラはスッと席から立ち上がり、感情が籠ってなような声音で報告内容を淡々と報告する。

「イレギュラー、南雲ハジメは、怒濤な勢いで神代魔法を獲得。そしてつい最近では、私の「ノイント」さえもイレギュラーに敗れてしまいました」

「そうか、そうか……もう「ネームド」さえも倒されたのか……凄いのおく。今回のイレギュラーは「使徒殺し」と同等……いや、それ以上か？」

エクストラの報告を聞いて、黒く少し荒々しい着物を着た男神がニヤニヤしながら口

を開く。

「それならあく、イレギュラーと実際に戦ったアルヴクンに聞いた方が早いんじゃない？ ねえ、アルヴクン？」

男神の話しを聞いた紅いドレスを着た女神がハジメの事を知るとしたら、この中で一度ハジメと対したアルヴに聞いた方が早いとクスクスと笑いながらアルヴに視線を向ける。

「そうだな一理ある……アルヴよ。イレギュラー、南雲ハジメはどうだった？ お前から見て」

女神の意見にラーゼンは賛同するとアルヴに視線を向けて問いかける。アルヴは、自分に向けられた視線から伝わる圧に緊張しながら、ラーゼン達に報告を始める。

「はっ……かしこまりました。これは、私の主観からしてです。イレギュラー、南雲ハジメは……化け物です。アレはもう人間ではない。まず、天職が生産職の“錬成師”である筈なのに、勇者を超える程の戦闘センス。そして……奴は、機械と思わしきアーティファクトの使用が確認されました」

アルヴが、そう報告したと同時に、バツと部屋全体が静まり返った。

そして……

ズンツ！

「ひ、ひいー！」

アルヴの報告に「機械」と聞いた瞬間、ラーゼンを含めた全員から殺気を放たれた。その殺気にあてられたアルヴは腰が抜けるように床に崩れ落ちた。その殺気は、死ぬんじゃないかと思わせるほどの尋常じゃない殺気だった。

「そうか……機械か……まさかな……」

「安心してください、我が主。あのゴミの集合体は愚妹の代わりになって貴方様の神罰の光槍で朽ち果てた筈です」

「我が主。エクストラの言う通り奴は十万年前に主に敗北したのですぞ」

「エクスちゃんとおホ龍の言う通りですよ。奴の魂魄の破壊は確認した筈だし」

ラーゼンの言葉に三柱の神は大丈夫。奴は死んだと、魂魄も破壊されたと言う。その言葉を聞いたラーゼンは頷く。

「そうだな……奴は死んだ。我がこの手で確実に滅した。しかし、アルヴよ」

「はっ、はい。何でしょう?」

ラーゼンはアルヴをずっと見つめる。それは、まるでアルヴの心の中を全て見透かしているように。

「其方、まだ我等に報告していない事があるだろう? エクストラの報告は使徒の目で見ただものしかないからな」



「……ッ！」

アルヴはラーゼンの心を見透かされたような言葉に驚愕を隠せずにいられなかった。  
「話せ」

ラーゼンの庄に耐えられずアルヴは口を震わせながら報告をする。

「……ッ、はい。では報告します。その…… “クリスタ様” の魔力の気配を感じさせる人間の少女を見つけました」

「——」

「やはり、あの愚妹は生きていたのですね。あの時に、死ねば良かったのに……」

「そうか。魂魄を破壊できてないと思っていたが……まさか、魂魄の状態で生き延びていたか。その執念には称賛できると言えるな」

アルヴの報告で二柱は驚きを示し、エクストラは溜息を吐きながら「まだ、生きていたのか」と眉をひそめながら言うだがその目はいつもより感情があるように見える。一方、ラーゼンはその生きる永らえる執念さに賞賛をした。

「しかし……人間の少女と言ったか？」

「はい。見た目は完全に人間の少女でした。ですが、中から感じる魔力には、クリスタ様の魔力でした」

「そういう事ですか……」

アルヴの報告を聞いてエクストラは、クリスタがどうやって生き永らえてきたか分かったのか、頭に手を当てながら応えた。

「あの愚妹は魂魄の状態のまま、私達に存在を悟られないよう人間の少女の中に入っていたのですね。今まで分からなかったのは、眠っていたのか、適当に人間の中に住み着いたりして隠れて生き永らえていたってことでしょう。私達の種族ならそれぐらい可能ですから」

エクストラの言葉に「なるほど」と頷く。ラーゼンは、エクストラの話を聞いた分、アルヴに視線を向ける。

「それで、アルヴ、貴様はその少女を殺したか？」

「はいっ！ それはもう早急に胸を貫き殺し……生きてますよ。あの愚妹は絶対に……えっ？」

「どう言う事だエクストラ？」

アルヴの発言を遮り、エクストラはアルヴが殺しであろう少女、優花は生きていると断言する。そして、アルヴが問う前に理由も話す。

「あの愚妹の事です。完全に人間の少女の魂魄が破壊される前に自分の力でも渡して、生き返らせた事でしょう。我が主どうしますか？ 今、イレギュラーの戦力は今も上がり続けています。それに、愚妹は愚妹ですが、あの子が復活となれば戦力が一変する可

能性があります。早急な対応を」

エクストラはそう断言してからラーゼンに早急な対応を呼びかける。

「そうだな……我としては『イレギュラー』との戦いを楽しみたい。が……なら、『ルシフェウス』を解放させるのはどうかな？」

「『なつ?!』」

ラーゼンの言葉に四柱が驚愕の反応を示した。

「ラ、ラーゼン様。ま、真ですか?! あの『ルシフェウス様』を？」

「儂は賛成ですな。あの破壊神は凶悪ですが、味方につけば儂等の戦力が完全なものとなる」

「私はあく、アイツはないかな」

「そうですよ。我が主、あの破壊神はただの邪魔でしかありません。それに、本当の破壊神である貴方の名にも傷が付きまます」

四柱共、言ってる事は違うが、『ルシフェウス』と言う神を解放させるのは男神以外の三柱は反対を示していた。

「つれないな。特にエクストラ。ルシフェウスは我とお前の間に出来た初の息子だぞ？」

ラーゼンはそう言いながらエクストラに視線を向ける。

「はい。そうではありませんが、アレは自分の強大な力を制御出来ずにただ、破壊を繰り返すだけの獣。それに今は魂魄だけの状態で器なんて今はありませんよ」

エクストラはラーゼンの問いかけに平然と返し、ルシフェウスの「器」はないと言うが、ラーゼンはその言葉を待つてましたと言わんばかりの表情で口を開く。

「器はあるだろう？　弱者で私のトータスには要らない存在ではあったが、アレはアレで召喚された神の使徒の一人だ。器ぐらいには使えるだろう？」

ラーゼンの言葉にエクストラは片方の眉をピクツと上げる。

「……あの弱者ですか……そうですね。あの者自体は雑魚ですが、器としてなら……使えるかもしれませんね」

「……じゃあ、使おうではないか。もしかしたら、あの器でルシフェウスを扱える可能性がある。それならば、お前達も賛成であろう？」

ラーゼンは、以前手に入れた死体を、ルシフェウスの器にしてコントロールしようとして提案する。

「ゴ、コントロール出来るなら、私は賛成します」

「僕は主の願いがそうであれば構わないですぞ」

「私も……それなら」

エクストラ以外の三柱はルシフェウスの解放を了承する。

「エクストラ……其方は？」

「……分かりました。今は馬鹿息子の事よりイレギュラーと愚妹の対処が最優先事項です」

エクストラは不満だったのだが、突如多く現れたイレギュラー、そして愚妹の対処が優先と思ひ渋々了承する。

「よしつ、なら満場一致で器の処理が終わり次第、ルシフェウスを解放するでしょうか」

「……はっ」

ラーゼンの言葉に四柱はそのままラーゼンの前で跪つくのだった。

「よし、話すことは話した。そろそろ解散といこ……つとその前に「オルステッド」

「はっ！ どうか如何しましたか、主よ？」

他の神々が解散してる中、黒を基調とした荒々しきを感じさせる着物を着た男神、オルステッドは、ラーゼンに呼ばれると同時に御身の前に跪く。

「其方、今、帝国で面白い遊びを計画してるではないか？」

「ガハハツ、流石は主、気付くのがお早いすな」

オルステッドは主の慧眼さに驚愕と尊敬を念を抱きながら快活に笑って応えた。

「順調か？」

「はい、全く以つて順調でございます。あの帝国の皇太子は面白いくらいに扱いやすく、

着々と計画が進んでいますぞ」

オルステッドはラーゼンに計画は順調と答えるとラーゼンは笑みを浮かべながら頷き、オルステッドの肩に手をかけて口を開いた。

「そうか、楽しみにしてるぞ。帝国皇の民落全賦ての墮計獣画化」

「! …… ガハハハハッ! まさか、計画内容自体までもがお見通しとは、愉快!

痛快!」

オルステッドはラーゼンに自分の計画を教えないのに当てられて、驚愕を通り越して頭に手を当てて大笑いをしながら声を荒あげる。

「では、楽しみにしておるよ。創獣神オルステッドいや、竜人始まりの竜人の祖 オルステッドとでも

言った方が良いか?」

その言葉に、ピクツと尖った耳が動くオルステッドだが、首を横に振る。

「いえいえ、そんな昔の名はやめて頂きたい。儂は竜人の祖ではなく、今は、創獣神オルステッドでございまする」

「そうか、そうか。では、創獣神オルステッドよ。健闘を祈る」

「はっ、有り難きお言葉っ! このオルステッド。必ずや成功させてみせましょう!」

ラーゼンがそう言い残しながら消えていくまで、オルステッドは両手を合わせながら跪くのだった……………。

## 人物設定集2―人物紹介編

《ハジメ side》

・南雲 ハジメ

天職：錬成師

所持してゐる神代魔法：生成魔法、重力魔法、空間魔法、再生魔法、魂魄魔法

＜説……異世界召喚されてから「オルクス大迷宮」で二つの悪意によつて、奈落に落ち、左腕、右目を失うも魔物の肉を喰らい肉体に変質し、奈落の底で出会つた吸血姫のユエと共に「オルクス大迷宮」を攻略。世界の真実を知り、大切な人達を守るために神殺しを決意する。

大迷宮攻略の旅の途中にライセン渓谷で兎人族の少女のシア、ウルでは、愛子達と再会した後、竜人族のティオ、フューレンでは、奴隷オークシヨンに出典されそうだった海人族のミュウと出会い旅をして行き、ホアルドで親友である浩介と再会した後、勇者一行を救出（ハジメの中では優花の救出）の際、優花と再会、旅の仲間に加わる。

アンカジでは、オアシスの水質悪化の原因の対処、そして、「静因石」の採取と神代魔法を取得の為、「グリューエン大火山」の大迷宮に挑む。そこで、魔人軍将軍フリード・バグアーと迎合し、一戦交える。そして、色々あったが神代魔法を取得し、ミユウの故郷エリセンに到着、そして「メルジーネ海底遺跡」の大迷宮を難なく攻略し、ミユウと少しばかりかのお別れをする。

樹海へ向かっている最中、ハイリヒ王国の王女リリアーナ・S. B. ハイリヒ略してリリイと再会、その時にウルの際、清水を救った謎の白ローブ、アレス・バーンとも再会を果たし、仲間となる。その時にアレスからは神々が動き出したと聞き、リリイからは愛子が攫われたと聞き、王都に向かい愛子救出の際、アレスに教えられていた「ネームド」の神の使徒ノイントと戦い、勝利する。その際、テイオと愛子が教会を破壊した際、神代魔法の一つ「魂魄魔法」を手に入れる。そして、王都の広場に向かった際、優花の胸を貫いていた魔人族の王アルヴと戦う。その際、ハジメの中の何かが力を貸し、ハジメの武装が変貌するもそれはより強力なモノになり、アルヴを圧倒する。そして、なんかんやあつて優花は復活（十チート能力獲得）を成し、次の目的地である帝国に新たに加わったりリリイ、勇者一行（光輝はしようがなく）と共に向かう。

＜戦闘スタイル……普段はガンカタと雷魔法を扱い、強敵の場合は「限界突破」、  
「紅狼」など扱う。他に殲滅用にオルカン、メツエライを使用し、強力な一撃を放つ時はハ



ジメオリジナル雷魔法の『天雷牙狼』、『雷霆』や自信作である『神喰雷槍』を使う。簡単に言えばオールラウンダー系。得意とする神代魔法は『生成魔法』。

・園部 優花

天職：神天治癒師

所持してる神代魔法：再生魔法、魂魄魔法

＜説……ハジメを探す為に幼なじみ二人と別れ、『オルクス大迷宮』で勇者一行と過ごす。その後、魔人族の襲撃の際、ハジメと再会して一緒に旅をする（その日の夜の宿でハジメと眠れない夜を過ごす）。その後、アンカジで公国の民達の治療を行い、その後、ハジメ達と合流する為にティオとミユウと共にエリセンに向かう。その際に何かの夢を見る。

エリセンの到着後、ハジメ達と合流そして、『メルジーネ海底遺跡』の大迷宮に挑み、再生魔法を獲得するも、その際、謎の記憶のような夢を見る。そして、旅の道中にリリイと再会、アレスと出会う。王都侵攻の際にアルヴに胸を貫かれたのを見て内心怒り狂い、謎の声を聞き、そしてその力を使い、アルヴを圧倒した。優花は死んでしまうが、その際、優花の中にいた魂魄だけの存在、天使族のクリスタと出会い、彼女から彼女の力を受け継ぎ、復活を為す。

＜戦闘スタイル……回復や付与などのサポート、投げナイフでの対応が主だったが、クリスタの力を受け継いでからは「聖杖」やクリスタの種族だけの固有魔法「天性魔法」を使って戦うスタイルになっている。得意とする神代魔法は「再生魔法」。

・ユエ

天職：神子

＜所持してる神代魔法……生成魔法、重力魔法、空間魔法、再生魔法、魂魄魔法  
 ＜説……【オルクス大迷宮】の奈落に封印されていたがハジメに解放され惚れ、旅を共にする。そして、ハジメと優花との再会の際にユエはハジメと恋人関係になる。

＜戦闘スタイル……後衛だが、大体一人で何とかなる。魔法は全属性適性があり、全て無詠唱（しかし、ハジメの雷魔法と優花の回復魔法と付与魔法には劣る）で扱える。神代魔法では「重力魔法」を得意として、複合魔法「五天龍」は辺り一帯の魔物達を殲滅する程の強力な魔法。

・シア      ハウリア

天職      : 占術師

所持してる神代魔法……重力魔法、空間魔法、再生魔法、魂魄魔法

＜説……シアは魔力持ちの“忌み子”とされ一族者共、樹海から追放されてしまい、帝国兵や魔物達に襲われたりしていたが、“未来視”でハジメ達に助けられて、樹海の間でも掟を変えてまで自分達の一族を……いや、これから産まれてくるかもしれない魔力持ちの亜人達を救ってくれたハジメに惚れ、旅の同行にする為、ユエの訓練を受ける。自分が訓練してる間に一族の皆がハジメの訓練で人が変わっており（悪い方向では無い）混乱している。

ハジメと優花との再会の際、ユエと共にハジメの恋人入りを果たす。

＜戦闘スタイル……ハジメ作のドリユツケンでの近接戦を主にしており、状況に応じてドリユツケンを変形させ、スラッグ弾や鉄球での遠距離戦法。後、シアには固有魔法“未来視”で数秒先の仮定未来を視る事ができて、敵の攻撃を避ける事ができ、“重力魔法”でのシア自身やドリユツケンの重さの変換、“再生魔法”で簡単な状態異常の解除ができる。

・ テイオ      クラルス

天職：守護者

所持してる神代魔法……再生魔法、魂魄魔法

＜説……テイオは五百年前に滅亡したと言われる竜人族の生き残りであり、竜人族の中でも一、二番ぐらいの実力を持つ。元々、竜人族の隠れ里にいたが、異世界召喚された

使徒を調査しに里から離れ、ウル近くの山で休んでいたところ強制的に操られていた清水の洗脳にかかってしまい、ウィル一行の冒険者達を襲ってしまい、冒険者を殺してしまう。その後、自分を殺して欲しいと思つてところにハジメに負けて、自分に救つてくれたハジメに興味を持つ。そして、【グリューエン大火山】の件でティオ自身、どれだけ南雲ハジメという男が自分にとって大事な人なのか自覚する。その後、恋人入りを果たす。

＜戦闘スタイル……大体はユエと同じように魔法を使つて戦うが、強敵やハジメ達が危険となつたと思つた時は“竜化”して戦う。

・ アレス                      バーン

天職：神官

所持してゐる神代魔法……空間魔法、再生魔法、魂魄魔法

＜説……アレスは解放者の一人、ラウス・バーンの子孫であり、十歳の頃に誰も見つけることの無かつた屋敷の隠し部屋を見つけ、ラウスの手記と聖槍“ロンギヌス”と天剣“エアリアル”を見つける。そして、世界の真実を知る。それからは鍛錬をし続け、十五の頃には、騎士団団長であるメルド・ロギンスに正々堂々と戦い勝利し、王国最強の称号を手に入れる。

その後、各地の教会を見てまわりたいと虚偽の頼みをして、大迷宮の攻略に向かい、  
“空間魔法”と“再生魔法”を手に入れる。そして、王都に戻った後、神山に向かい死  
闘の後、“魂魄魔法”を手に入れる。その数年後、魔人族の村の殲滅戦の際、王国、教  
会の連合軍を裏切り、軍を無力化する。その後、異端者として追放された。その際にメ  
ルドに天剣“エアリアル”を渡す。

追放されても尚、アレスは神々に対抗する為の準備をしてたところ“ネームド”の  
神の使徒“アテネ”と戦闘してギリギリ勝利を掴む。そして、ハジメ達が現れる五年の  
間に二十を超える神の使徒を撃破する。神達からは“使徒殺し”と呼ばれるようになる。

二十五の時、王都近辺の町で異世界召喚された使徒とハジメの情報聞き、調査  
をする。ウルでハジメの実力を見て、喜びを示す。そして、死にそうだった清水を“再  
生魔法”で救う。ハジメ達からはこの時にアレスのことは“白ローブ”と呼ばれるよ  
うになる。そして、リリイ達の商隊を助けた際、ハジメと再会して仲間となる。王国侵  
攻の際は大元と言える王都南方に進軍してくる魔物達と魔人族を殲滅した後、魔人軍軍  
曹　ゲルマンを討伐。そして、そのまま神の使徒も撃破した。

＜戦闘スタイル……近接、遠距離戦どちらもいけるハジメと同じオールラウンダー系  
で、“ロンギヌス”での槍術を得意とし、光魔法を扱う。特にアレスは鍛錬の結果、手

だけで光魔法の“天翔閃”を放つことができる。神代魔法に関しても“空間魔法”と“魂魄魔法”の扱いはズバ抜けており（再生魔法は少し苦手としている）ユエには“空間魔法”を教えられる程の実力者で“魂魄魔法”に関してはラウス・バーンとほぼ同等レベルで扱える。

・遠藤 浩介

天職：暗殺者

＜説……ハジメの親友であり、深淵卿になれば光輝と同等レベルの実力を出せる。しかし、光輝と違って、状況の判断、対応が出来る為、もしかしたら勇者を超えてるかもしれないと噂される程の暗殺者。今は親友であるハジメの隣に立って戦えるように力を得る為、ハジメ達が帝国に行ってる間にライセン大迷宮を幼なじみの妙子と奈々の二人と共に攻略に向かう。

＜戦闘スタイル……ハジメ作の小太刀（闇夜）やクナイ（黒羽）で隠れながら戦う暗殺者スタイルだが、深淵卿になると大胆になり、分身を作れたり、発言が厨二臭くなる。だが、強い。

・菅原 妙子

天職：操鞭師

＜説……ハジメ、優花の十五年付き合いのある幼なじみ。ハジメと優花の足枷にならない為、今度は自分達で二人を支えたい為、今は浩介と奈々共にライセン大迷宮の攻略に向かう。

＜戦闘スタイル……ハジメ作の鞭（トルネーグ）を使って戦う。何故か鞭を使うのは初めての癖に一日程で鞭を使いこなしており、その時の妙子の表情を見たハジメと浩介は寒気を感じた。

・宮崎 奈々

天職：氷術師

＜説……妙子と同じようにハジメ、優花の十五年付き合いのある幼なじみ。妙子と同じように二人の力になりたい為、浩介と妙子共にライセン大迷宮の攻略に向かう。

＜戦闘スタイル……ハジメから貰った魔力ストックと杖替わりになる腕輪（アーベン）を使って「氷魔法」を扱う。

・ミユウ

＜説……裏組織に捕まり、裏オークション出される前にハジメに助けられ、それ以降、ハジメのことをパパと呼ぶようになった海人族の幼女。

・レミア

<説……ミユウの母親でおっとり系の美人。「あらあら、うふふ」が口癖。

《勇者一行》

・天之河 光輝

天職：勇者

<説……勇者（笑） 善意と正義感の塊。但し、自分の正しさに疑いをしないので、不都合なことになるとご都合解釈する悪癖があるせいで、ハジメをイラつかせ、アレスをキレさせるレベル。ハジメのことを異世界召喚前から目をつけていた。香織と雫、龍太郎と幼なじみ。香織と恵理の裏切りは魔族の手で操られていると思っっているが、力が欲しい為、ハジメ達と共に大迷宮攻略の旅を共にする。

<戦闘スタイル……元々、剣道部なので聖剣を使って戦う。

・八重樫 雫

天職：剣士

<説……香織の親友。光輝と龍太郎の幼なじみ。実家が剣道場であり。人の機微や人間関係の把握に優れているが、香織の裏切りには心が折れそうになったがハジメの励ま



しにより心を保てた。そして、香織を自分の手で止める為、ハジメ達と大迷宮攻略の旅を共にする。時々、ハジメの事を目に追っている。しかし、本人は自覚無し。

＜戦闘スタイル……ハジメ作の黒刀（八咫鳥）を使って戦う。

・坂上 龍太郎

天職：拳士

＜説……光輝と雫、香織と幼なじみ。脳筋であるが、幼なじみや皆を守る為にハジメ達と大迷宮攻略の旅を共にする。

＜戦闘スタイル……殴る、蹴る。所謂、脳筋プレイ

・谷口 鈴

天職：結界師

＜説……ムードメーカー的存在だが、恵理の裏切りに大分心をやられてしまった。今は恵理ともう一度話したい為にハジメ達と大迷宮攻略の旅を共にする。

＜戦闘スタイル……結界を張って皆のサポートをする。

《地球組》

・畑山 愛子

天職：作農師

＜説……生徒思いの身長約百二十五センチのチビツ子先生。清水の命を救ったり、自分を励ましてくれたアレスのことが気になって、アレスが通るとつい目を追ってしまう。

・永山 重吾

天職：重格闘家

＜説……勇者と並ぶ前線組のリーダー。龍太郎と違ってちゃんとした判断ができる筋肉。

・野村 健太郎

天職：土術師

＜説……永山。パーティーのメンバー。辻 綾子に恋心を抱いている。

・辻 綾子

天職：治療師

＜説……香織と優花と同じ系の天職。治療の腕を香織と優花と比べて、少しコンプレックスがある。

・吉野 真央

天職：付与術士

＜説……永山パーテイーの縁の下の力持ちだが、付与の腕は優花に劣っている（優花はある意味チート）。

・檜山 大介——死亡

天職：軽戦士

＜説……小悪党組のリーダー的存在。ハジメを奈落に落とす張本人の一人。恵理に脅され従っていたが、理不尽な神達の命令によって殺される。

・中野 信治

天職：炎術士

＜説……小悪党組の一人。

・斎藤 良樹

天職：風術士

＜説……小悪党組の一人。

・近藤 礼一

天職：槍術師

<説……小悪党組の一人。

・相川昇 愛ちゃん護衛隊

・仁村明人 愛ちゃん護衛隊

・玉井淳史 愛ちゃん護衛隊

・清水 幸利

天職：闇術師

従魔……シャイン（鳥型の魔物）、インビジブル（カメレオン型の魔物）、ガルル（サーベルタイガー型の魔物）

<説……ハジメには昔、イジメから助けられ尊敬の念を抱いており、自分の命を助けてくれたアレスにも感謝している（侵攻が終わった後にアレスに元いき御礼を行っていた）。

今は従魔達との連携を強めて、ハジメ達が居ない分、メルドと共に王国を守っている。

## 《ハイリヒ王国》

・エリヒドⅡSⅡBⅡハイリヒ——死亡

＜説……ハイリヒ王国国王。王都侵攻編で恵里達に殺される。

・ルルアリアⅡSⅡBⅡハイリヒ

＜説……同王妃。表舞台には出ず、補佐に務める。影の薄さは、奴とタメを張るかもしれない。

・ランデルⅡSⅡBⅡハイリヒ

＜説……同王子。10歳。金髪碧眼の美少年。香織に気があったが、魔族側に裏切つたと聞き、部屋に引き籠もりガチになっている。

・リリアーナⅡSⅡBⅡハイリヒ

＜説……同王女。14歳。王国の才女として絶大な人気がある。アレスの事を「兄様」と呼び、ハジメのことが気になっている。

・メルドⅡロギンス

＜説……ハイリヒ王国騎士団団長。死にそうだったのを浩介に命を救われ、今は清水達と王国の守備にまわっている。

・ホセⅡランカイド——死亡

＜説……同騎士団副団長。同じく恵里達により死亡。

・アランⅡソミス——死亡

＜説……モブ騎士だが地味に活躍している。奈落にてウイリスに袈裟斬りにされて死亡。

・クゼリーⅡレイル

＜説……新騎士団副団長。女性騎士でリリアーナの付きの元近衛騎士。

《冒険者ギルド》

・イルワⅡチャング

＜説……フューレン支部支部長。ハジメに金ランクを与え、後ろ盾にもなった。ハジメに沢山のお仕事（苦勞）を貰えた人。

・ドットⅡクローウ

＜説……イルワの秘書長。雫に負けない苦勞人。

・キャサリン

＜説……ギルドマスターの元秘書長。ベテランさが滲み出ている。

・ロアールバワビス

＜説……ホルアド支部支部長。

### 《アンカジ公国》

・ランズイーフオワードゼンゲン

＜説……アンカジ公国の領主。教会相手に啖呵をきるなど、漢氣溢れるナイスミドル。

・ビイズルフオワードゼンゲン

＜説……ランズイの息子。優花に憧れを持っている。ファンクラブを創設（ハジメも協力）するが、優花にバレ、ハジメと共に正座されながら叱られた。

・アイリーⅡフオウワードⅡゼンゲン

＜説……ビイズの妹。亜人差別の価値観を超えてミュウの可愛さが分かる出来る14歳。

《ハルツィナ樹海フェアベルゲン》

・アルフレリックⅡハイピスト

＜説……フェアベルゲン長老衆の一人。森人族の長。一番長く生きている話の分かる人。掟を変えてくれたハジメには感謝している。

・虎人族のゼル、翼人族のマオ、狐人族のルア、土人族のグゼ、熊人族のジン

＜説……モブ長老。ジンはハジメに腹パンを喰らって再起不能になったが、今はハジメの神水により、元気になった。長老達も掟を変えてくれたハジメには感謝している。

・レギンⅡバントン

＜説……熊人族のおっさん。かつてジンの敵討ちにハウリアを襲撃し返り討ちに合うが、今はハウリア達とは協力してフェアベルゲンの守りに徹している。

《ハウリア族》

・カムⅡハウリア



＜説……シアの父親で兎人族ハウリアの族長。族の皆を守る為にハジメの指導の元、強靱な戦士となった。ハジメのことはボスと呼び、尊敬している。

・パル

＜説……ハジメに助けられた男の子。ハジメの訓練の元、カム同様、戦士となっている。射撃が得意らしい。

### 《魔人族》

・フリードⅡバグアー

天職：魔導剣士

所持してる神代魔法……変成魔法、空間魔法、重力魔法

＜説……軍の将軍。純白の竜 ウラノスを相棒としている。魔人族側のハジメ達の味方であり、アルヴ達にバレないように神々を倒す計画を立てている。カトレア、そして死んだウイリスとは同郷からの仲であり、三人で昔いた里で見つけたある人物が書いた本を見つけ其処から世界の真実を知って、三人で誓いを立てる。

実力はアルヴ達にバレないように表向きは隠しており、本当にの強さは魔法は無詠唱可能で近接戦闘も得意としている。そして秘密裏に“グランド・ピースト”という最強の魔物達を作製にあたっている。

＜戦闘スタイル……主にウラノスに騎乗しながら戦っている。ミレデイの最後の試練

の時には魔剣「イグニス」を使用する。

・カトレアースミナル

天職：土魔導士

＜説……フリードの直属の部隊の隊長であり、フリードからの秘密裏の仕事をこなしている。フリードからはたくさんの魔物を貰っており、亡き、ウイリスと同じようにある特殊な自分専用の魔物を貰っている（ウイリスが死んだ後は、ウイリスの専用の魔物もフリードがカトレアを守る為にと渡している）。

・ウイリスⅡアルク——死亡

天職：剣士

＜説……軍の軍曹。オルクスで勇者一行の襲撃の際、ハジメと戦い死亡する。ウイリスは元々フリードと共に解放者の意思を受け継ぐ者だったがアルヴの手によって洗脳される。しかし、死に際に元に戻り、ハジメに神殺しを頼んで、ハジメの答えに笑みを浮かべて死を受け入れた。ウイリスは魔人族の中では「剣聖」と呼ばれる程の実力者。

＜戦闘スタイル……軍剣を使って戦う。その戦闘技術は雫やメルドを優に超える剣の技量であり、正に「剣聖」と呼べる実力。

土魔法では上級魔法である「落牢」を短略詠唱が可能にしてオリジナル魔法、「落牢・武玄」をさせる。

・ゲルマンⅡマクベリー——死亡

＜説……アルヴ派の魔人族。ウィリスの後釜で軍曹に就任したがアレスの空間魔法“千断”により細切れにされ死亡した。

・ミハイルⅡカイザー——死亡

＜説……アルヴ派の魔人族。ウルの場合の主犯で計画を失敗になったことにより自分の出世回廊が閉ざされた。そして自分の出世を邪魔したハジメ達を恨んでおり、王都侵攻でもシアを狙っていたが、呆気なくドリユツケンの餌食になって死亡した。

### 《神側》

・“ネームド”神の使徒ノイント——死亡

＜説……驚異的なスペックを誇る神の兵。限界突破状態のハジメと互角以上に戦うことが出来る。時代の節目に現れては、神の意志を実行すべく地上の人々を惑わし、あるいは抹殺している。他にも“ネームド”と量産型がおり、“ネームド”には“聖杭”という武器を扱う許可を貰っている。

・イシユタル・ランゴバルド——死亡

＜説……聖教教会の教皇。いっっちゃってる老人。既に手遅れ。

・白崎 香織

## 天職：治癒師

＜説……異世界召喚前からハジメの恋心を抱いており、何時もハジメの隣にいた優花のことを嫌っていた。ハジメが奈落に落ちた原因の一人。恵理と交渉して仲間となる。

ホルアドの際は、ハジメに告白したものの散々に振られるが認めずに、優花やユエ達のせいにしている。裏切ったのはハジメを死体でも良いから手に入れる為。

・中村 恵理

## 天職：降霊術士

＜説……仲間を裏切つて、香織共に神側に寝返つた。王都の傀儡兵の原因は恵理の魔法“縛魂”で操っていた。これは全て光輝と結ばれる為。

・魔王 アルヴヘイト

＜説……五神の一人（その中では最弱）。魔人族の王をやっている。王都侵攻の際、自分をコケにしたハジメを憎み、この手で殺そうと思っている。

・■■■■■■■■■■

＜説……喋りがギヤル口調の紅いドレスを着た金髪サイドテールの女神。時折、見せる笑顔は妖艶さを含んでおり、よく見ると肌はやけに白く、紅い目、犬歯が鋭いこと。

・創獣神 オルステッド

＜説……爺口調の黒髪の男神。黒い荒々しい着物を着ており、ラーゼンの口からオルステッドは竜人族の祖であると言う。今は帝国である計画を目論んでいる。

・ルシフェウス

＜説……破壊神。ラーゼンとエクストラの子供らしいが、凶悪な為、魂魄の状態だけにして強固な封印がされている。

・聖母神 エクストラ

＜説……銀髪、無表情の女神。全使徒の母であり、指揮権を持っている。ラーゼンの右腕的な存在。

・最高神 ラーゼン

＜説……最強の神。戦いを好む戦闘狂。その力は絶大だと言う。そして、強者の成り行きを見るのを好みとしている。本当は破壊神らしい。

・エヒトルジェ——死亡

＜説……遙か昔、隙をつけてラーゼン達を封印したがその後、解放者達に敗れた際に、封印が解けてしまい解放されたラーゼン達に殺される。

《その他》

・モットーII ユンケル

〈説……本物の商人。ハジメは信頼してる。

・ソーナ

〈説……ブルツクの町、マサカの宿の看板娘。ハジメ達の情事を覗く為なら手段を選ばない。その技術は既に町娘の領域を超えており、ハジメはドン引きした。

・クリスタベル

〈説……服屋の化け物（漢女）。二元金ランクの冒険者。理解不能の強さと育成術を持っている。

・マリアベル

〈説……服屋の化け物2号。ユエに股間スマッシュユされて第二の人生を送り始めた。

・フォス・セルオ

〈説……湖畔の町ウルにある「水妖精の宿」のオーナー。日本人好みの料理を出してくれる。

・ウイル・クデタ

〈説……クデタ伯爵家の三男。マザコン。

・リーマン

〈説……人面魚の魔物。固有魔法により意思疎通できる。漢気溢れるおっさん。実は妻子持ち。

・ウオルペンⅡスターク

〈説……ハイリヒ王国直属筆頭錬成師。本物の職人。ハジメが尊敬してる人の一人。

《解放者》

・オスカーⅡオルクス

〈説……オルクス大迷宮（奈落）の主。生成魔法の担い手。骸はハジメとユエがきつちりと埋葬した。

・ミレディⅡライセン

〈説……ライセン大迷宮（大峡谷）の主。重力魔法の担い手。ウザさは宇宙一。解放者の中で現存が確認されている人。

・ナイズⅡグリユーエン

〈説……グリユーエン大迷宮（大火山）の主。空間魔法の担い手。

・メルⅡメルジーネ

〈説……メルジーネ大迷宮（海底遺跡）の主。再生魔法の担い手。海人族。見た目に反して雑っぽい。

・ラウスⅡバーン

〈説……バーン大迷宮（神山）の主。魂魄魔法の担い手。アレスの祖先。そしてアレスは祖先の姿を見て、頭を気にしているらしい何かと言わないが……。

《十万年前に自由を願った者達》

・クリスタ——魂魄で優花の中に生きている。

〈説……トータスには存在しない種族の天使族であり、聖母神 エクストラの妹であり、銀髪で綺麗な女性。自分のせいで恋人が負けてしまったと後悔している。だから、自分が今中に入っている優花には、そんなことを起こさせない為に、優花に自分の天使族の力を受け継がせた。

・デウス ■■■——死亡？

〈説……クリスタの恋人。機械を纏えることが可能。白髪で優花の証言だと目つきがハジメに似ている。クリスタを守る為に自ら犠牲になった。



## 人物設定集2ーステータス編

## 《ハジメ side》

|||||

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：???

天職：錬成師 職業：冒険者 ランク：金

筋力：16500

体力：19400

耐性：16200

敏捷：19000

魔力：21000

魔耐：21000

技能：錬成「+鉱物系鑑定」「+精密錬成」「+鉱物系探查」「+鉱物分離」「+鉱物融合」  
 「+複製錬成」「+圧縮錬成」「+高速錬成」「+自動錬成」「+イメージ補強力上昇」  
 「+消費魔力減少」「+鉱物分解」・雷属性適性「+魔力消費減少」「+効果上昇」・雷属性

耐性・複合魔法・脳内設計「+想像設計」「+構造把握」・魔力操作「+魔力放射」「+魔力圧縮」「+遠隔操作」・胃酸強化・纏雷「+紅狼」「+雷耐性」「+出力増大」・天歩「+空力」「+縮地」「+豪脚」「+瞬光」・風爪「+三爪」「+飛爪」・夜目・遠見・気配感知「+特定感知」・魔力感知「+特定感知」・熱源感知「+特定感知」・気配遮断「+幻踏」・毒耐性・麻痺耐性・石化耐性・恐慌耐性・全属性耐性・先読・金剛「+部分強化」「+集中強化」「+付与強化」・豪腕・威圧・念話・追跡・高速魔力回復「+魔素集束」・魔力変換「+体力変換」「+治療力変換」「+衝撃変換」・限界突破・生成魔法・重力魔法・空間魔法・再生魔法・魂魄魔法・■■■■・言語理解

\*自動錬成……魔法陣と材料を置いておけば、魔法陣に込められた魔力が尽きるまで自動で錬成する。

\*鉱物分解……魔力をじっくりと浸透させて、物質の結合を解く。最小単位まで分解可能だが、時間はかかる。なので戦闘などでは使えない。鉱物を砂状に加工する為の技能。

\*三爪……かつての爪熊と同様に風刃が三本出る。

\*飛爪……風刃を飛ばせる。

\*構造把握……触れた物の構造を把握できる。しかし、大き過ぎる物は把握が出来な

い。

園部優花 17歳 女 レベル：???

天職：神天治癒師

筋力：10000 (天使化 +200000)

体力：50000 (天使化 +200000)

耐性：35000 (天使化 +200000)

敏捷：20000 (天使化 +200000)

魔力：80000 (天使化 +200000)

魔耐：80000 (天使化 +200000)

技能：回復魔法「+効果上昇」「+回復速度上昇」「+イメージ補強力上昇」「+浸透看破」「+範囲効果上昇」「+遠隔回復効果上昇」「+状態異常回復効果上昇」「+消費魔力減少」「+魔力効率上昇」「+連続発動」「+複数同時発動」「+遅延発動」「+付加発動」・付与魔法「+効果上昇」「+連続付与」「+高速付与」「+複数付与」・全属性適性「+発動速度上昇」「+効果上昇」「+持続時間上昇」「+連続発動」「+複数同時発動」「+遅延発動」・全属性耐性・高速魔力回復「+瞑想」・魔力感知・魔力操作・再生魔法・魂魄魔法・天使化<sup>クリスタ</sup>「+聖杭」「+天性魔法」「+限界突破」・言語理解







果上昇」「＋持続時間上昇」「＋雷属性」・複合魔法・再生魔法・魂魄魔法

※竜鱗硬化……魔力を注ぐことで竜鱗の硬度が増していく。竜化基本ステから耐性のみ更に上昇が可能。

※痛覚変換Ⅱ……痛みを任意のエネルギーに変換できる能力が、全スペックの上昇になった上位版。更に、変換したエネルギーを溜めることも出来る。但し、溜めていられるのは痛みの余韻を感じている間だけ。

※雷属性……風属性の上位である雷属性の魔法を、風属性と変わらないレベルで扱える。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

アレス・バーン 25歳 男 レベル：99

天職：神官

筋力：4500

体力：7800

耐性：4000

敏捷：3500

魔力：7500





遠藤 浩介 17歳 男 レベル：83

天職：暗殺者

筋力：640

体力：800

耐性：500

敏捷：1250

魔力：920

魔耐：780

技能：暗殺術「＋深淵卿」「＋短剣術」「＋隠蔽」「＋追跡」「＋投擲術」「＋暗器術」「＋伝振」「＋遁術」・気配操作「＋気配遮断」「＋幻踏」「＋夢幻Ⅲ」「＋顕幻」「＋滅心」・影舞・影潜り「＋影移動」・言語理解

※影潜り：影の中に入れる。

※影移動：影の中を移動できる。

菅原 妙子 17歳 女 レベル：75

天職：操鞭師

筋力：480

体力：500

耐性：300

敏捷：405

魔力：420

魔耐：380

技能：操鞭術「十早打ち」「十蛇動」「十自念鞭」・風属性適性・言語理解

※早打ち……鞭を早く打てる。

※蛇動……鞭を蛇のように硬質化し、鞭の動きが滑らかになる。遠隔操作も可能。

※自念鞭……自分の思い通りに鞭を動かせる。

宮崎 奈々 17歳 女 レベル：75

天職：氷術士

筋力：180

体力：460

耐性：250

敏捷：300

魔力：840

魔耐：600

技能：氷属性適性「＋魔力消費減少」 「＋効果上昇」・氷属性耐性・造形「＋氷造形」・

言語理解

※造形……魔法で物を造形できる。例……剣や槍などを魔法で造れる。

《勇者一行》

天之河光輝 17歳 男 レベル：83

天職：勇者

筋力：1020

体力：1020

耐性：1020

敏捷：1020



重縮地」〔＋震脚〕〔＋無拍子〕・先読〔＋投影〕・気配感知・隠業〔＋幻撃〕・言語理解

坂上龍太郎 17歳 男 レベル：83

天職：拳士

筋力：980

体力：980

耐性：790

敏捷：650

魔力：350

魔耐：350

技能：格闘術〔＋身体強化〕〔＋部分強化〕〔＋集中強化〕〔＋浸透破壊〕・縮地〔＋爆縮地〕・物理耐性〔＋金剛〕・全属性耐性・言語理解

谷口鈴 17歳 女 レベル：83

天職：結界師

筋力：350

体力：450

耐性：450

敏捷：380

魔力：820

魔耐：580

技能：結界術適性「＋魔力効率上昇」「＋発動速度上昇」「＋遠隔操作」「＋連続発動」・  
 光属性適性「＋障壁適性連動」・言語理解

《魔人族》

フリード・バグアー 25歳 男 レベル：99

天職：魔導剣士

筋力：4100

体力：7500

耐性：3500

敏捷：3200

魔力：8000

魔耐：7500

技能：剣術「＋斬撃速度上昇」「＋抜刀速度上昇」「＋魔纏」・炎属性適性「＋魔力消費減少」「＋効果上昇」「＋黒炎」・炎属性耐性「＋炎属性効果上昇」・複合魔法・縮地「＋爆縮地」「＋無拍子」・先読・高速魔力回復「＋瞑想」・気配感知・魔力感知「＋特定感知」・魔力操作「＋魔力放射」「＋魔力圧縮」「＋遠隔操作」・共鳴「＋以心伝心」「＋魔力接続」・限界突破「＋霸潰」・変成魔法・空間魔法・重力魔法

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

\*魔纏……………：剣に属性魔法を付与ができる。

\*黒炎……………：炎の温度を極限に高めた炎であり蒼炎より威力が高く、炎属性の魔法を扱う術士でもここまでの領域にたつのは難しい。

\*共鳴……………：共鳴する者（ウラノス）を決め、その者との連携力を高める。

\*以心伝心……………：共鳴相手と言葉などで伝えなくてもお互いの考えていることがわかる。

\*魔力接続……………：共鳴相手とお互いの魔力の受け渡しができるようになる。

## 第六章 墮落獣転へルシヤー帝国く白き祖龍と黒き

竜姫く

## 七十七話 遙か遠き竜姫の記憶

——夢を見ていた。

それは妾が一番の幸せを感じていた記憶……。

あの時……約五百年前は世界でも最も美しいと称されていた木と水の王国である竜人国は安泰であった。他種族との共存を行い、民達は家族と仲睦まじく暮らしていたり、都は店や出店で賑やかであり、己の力を鍛える者がいたり、種族など関係なく互いを尊重し合っている平和な日常を送っていた……。

そして……

ダツダツダツダツ



「ハアハアっ」

そんな竜人国の城内の廊下を笑顔で走り抜けている美しい黒髪と黄金の瞳を持つ、見た目十歳程の少女もまた、同じであった。美麗な和装を身に包みながらも髪を揺らし息を切らしながら走っていた。

そんな少女を見て、城の者達にはこやかな表情をしながら少女に声をかけていく。

「おや、姫、今日も元気なことぞ」

「おつ、姫様ア、今日もお元気ですなっ！」

「あら、姫様」

「あらあら益々、オルナ様似てきて美しいこと」

その少女の姿を見て挨拶をしていく者達……

「ありやく、絶対に『ヴェンリ』の奴から逃げてるな姫様は……」

「だなあく、『ヴェンリ』にしごかれたんだらうなあ……」

少女が走っている理由を大体分かって苦笑いしながら眺めている者達……

そして……

「コラア、待ちなさああい！　姫様ア！」

走り回っている少女を追うように瑠璃色の髪的女性が走っていた。

「まだ、稽古が終わってませんよお！」

そうこの女性こそ、城の者達が話していた竜人族の女性で少女の乳母の「ヴェンリ」である。ヴェンリは少女を追いかけながら声を上げる。それに少女は答えるかのよう  
うに声を上げる。

「嫌じゃあ！ 妾は稽古じゃなくて遊びたいんじゃない！」

「なっ?! 我慢しなさい！」

少女の返事にヴェンリは目を見開きながら声を上げる。

「そもそも、貴女様は将来の我等、竜人族を統べる女王になるんですよっ！」

「……ッ！」

ヴェンリの言葉に少女は口を噤んでしまい立ち止まり、ヴェンリは「やっとお  
止まりになってくれましたか」と安堵しながら言葉を続ける。

「ほら、もうこんな事はもう止めにして、稽古に戻りましょう？ 姫様いえ……ティオ様？」

そう言って、ヴェンリは走り回っていた少女……いや、竜人族の王の娘、ティオ  
に笑顔を向けながら呼びかける。

しかし……

「むうううっ！」

しかし、ティオはムツとした表情をして唸り声みたいな声を上げながらまた走り出した。

「なっ?!」

ヴェンリはティオがいきなり走り出したことで反応が遅れてしまってまたもやティオを逃がすことになった。

「……フフ」

ヴェンリは逃がしてしまった自分にも非があると思うが笑いを込み上げると同時に片腕に力が入っていく。

そして………

「………ティオ様ああああー!」

そんな、ヴェンリの叫びが城全体に木霊した。そんな叫び声を聞いた竜人達は揃って「また、逃げられたなく」と思っていた。

そんなヴェンリが叫ぶ中、逃げていたティオは振り返りヴェンリが追ってきていないのを確認すると、立ち止まって、息を整える。

「ハアハア……もう、ヴェンリは追ってきてないのう」

逃げ切ったティオはそう呟きながらニツと笑みを浮かべるも、ティオは少し頭を唸らせる。

「しかし、これからどうしようかの……」

そう、ティオはヴェンリからの稽古から逃げ出すことしか考えておらず、その後のことは考えていなかった。

「外に出ようとしても門兵達に止められてヴェンリに知らされるのう……」

ティオは「ウーン」と何処で身を隠そうかと思案していき、ある場所を思いつく。「あつ、彼処ならっ！」

ティオは閃いたて笑みを零しながら、ある場所へとまた、走り出していった。

~~~~~

ティオは走り出して、目的の場所に着き障子をそおーと開けながら口を開く。

「母上？」

「誰じゃ？」

ティオがそう答えるとその部屋にいた白に近い翠の長い髪に美しい黄金の瞳を持つ竜人の女性が反応して笑みを浮かべながらティオの方に振り返った。この女性はティオの母であり、今代の竜人族の王の妻であり、女王のオルナ・クラルスであった。オルナは部屋に來たのは誰かと振り向くが相手がティオだと分かると口調を変え、

家族と過ごす時のように砕けた口調で首を傾げながらテイオの名を呼ぶ。

「あら、テイオ？」

「母上！」

「ふふ、おいで」

テイオは部屋に入るなり、すぐさま満面な笑顔でオルナに抱きついた。オルナは駆け寄って抱きついてきたテイオを愛おしそうに見つめながら優しく頭を撫でながら抱き返した。

「あら、でも、テイオ。　ヴェンリとの稽古の時間が終わったの？　この時間は稽古の時間なのだと思うのだけど？」

「……」

「あらあら……」

オルナの指摘にテイオはサツと顔を逸らした。その様子を見てオルナは困ったように笑みを浮かべながら頭を撫でながら話しかける。

「テイオ、お稽古は逃げ出しちゃ駄目よ」

「だって……ヴェンリが厳しいんじや……」

オルナの言葉にテイオは口を尖らせながら話す。その様子にオルナは優しくヴェンリの気持ちに話を話す。

「それは、ヴェンリはテイオに立派な竜人に育って貰いたいのよ。私達、竜人族の王家たるクラルス家の名に恥じないようにね」

「じゃが……」

テイオはオルナの話聞いて、顔を俯かせる。そんな様子を見てオルナはある事を思いつく。

「なら、テイオ？」

「なんじゃ、母上？」

「少し、昔話をしましょうか……聞く？」

オルナはテイオに微笑みながら昔話をしようと言う。

「聞く！ 妾、母上のお話好きじゃっ」

テイオはオルナの話す話が好きだったので、話を聞けると聞き、嬉しそうにはしゃぎながらオルナに再度抱きついた。

「じゃあ、しましょうか」

オルナはテイオの様子を笑みを浮かべながらテイオを両足の上に乗せながら座り込まずと話しだす。

「テイオ？ 今から、話すことは私達が心から掲げている『竜人族の聖句』の生み出されたキツカケの話です」

「聖句?」

ティオはオルナの方を見ながら首を傾げる。

「ええ……この話は竜人族にとつて心に刻んでおくほど大切な話です。だから、しっかりと耳に入れないといけませんよ。分かりましたかティオ?」

「はいのじゃ!」

オルナはそう言いながらティオを今までおっとりしていた表情から真剣な表情に変えて問いかける。流石にティオも息を呑みながら覚悟して勢いよく頷きながら声を上げる。

「では……」

そして、ティオの答えに深く頷いた淡々とオルナは語り出していく。

この話はある意味、戒めとしてのお話である。

何故、戒めになっているのは、初代クラルスと我等、竜人族が祀っている竜人族の祖……始まりの竜人である。『祖龍様』が関係している為だと言う。

それは、まだ竜人族が獣かと問われていた時代の話であった。竜人への迫害が頻発する中、強大な力を持ちながらも共存を呼び掛け続け、高潔を以て他種族に献身を捧げ

ていた初代クラルスは、手酷い裏切りによって最愛の妻を失ってしまった。

そして、初代は辛くなり、やがて憎しみの余り、遂には理性を手放して獣に堕ちたという。

そして、獣となった彼は今まで共存の為に守ってきた他種族の町などの破壊活動を始めたという。

暴れ続ける彼はあまりにも強力であつてどの種族が止めようとしてもただ蹴散らされるのみだった。それで初代はその凶悪さに「厄災」と称されるようになった。

そんな中、竜人族の未来の為に初代を討とうと立ち上がった者達がいた。

それは、初代の息子であり——テイオの祖父にあたるアドウルの祖父率いる竜人族だった。

しかし、初代クラルスの力は強力だった。多数の数を挑んだとしても歯がたたず、ブレスのぶつけ合いでも「衆」と「個」の差であるのに押されてしまう。

この戦いは空に大地に大きな影響を及ぼす程、続いていき、やがて敗れてしまったのはアドウルの祖父が率いる竜人族だった。

竜人族も他種族達の誰もがこの世の終わりだと嘆き始め、絶望していた。このままこの世は初代によって滅ぼされるだろうと思つた。

しかし……



『地上の者達よ……我が子等よ……よく耐え抜いた。其処の我が種の恥晒しは儂が片付けようぞ』

天から厳格で重圧な低い声が地上全体に響き渡ったという。

そして、天から光がボールのように降りかけていく。その光景は美しく幻想的で地上の者達、初代に敗れて死にかけだった竜人達、そして初代までもが目を向けたという。

そして……

ピキッ

天が割れ、それと同時に顕現……いや、舞い降りたという。普通の竜より一回りも二回りも大きい純白で神々しいオーラを纏った「龍」が……

地上に舞い降りた、龍は一人の竜人にトドメを刺そうとしていた初代を守り跳ね除け、アドウルの祖父達にこう言ったという。

『儂は竜人の祖……「祖龍」である』と……。

そして、龍……いや……祖龍様は初代クラルスと激烈な戦いを始めた。

ブレスのぶつかり合い、龍鱗が崩れ落ちる程、お互いの身体を激しくぶつけ合っていく。

その戦いの余波のせいか地上に大きな影響が現れた。山が崩れ、地が割れ、気候が

変動していく。

戦いが羅列を増していく中、竜人達、他種族の者達は傍観することしか出来なかったという。

しかし、その戦いは終わりを告げる。それは、祖龍様しか使えない……いや、持っていない魔法を放った。初代クラルスは祖龍様の魔法に為す術なく敗れ、討ち取られ戦いの終わりを告げたという。

そして、祖龍様は去る際にアドウルの祖父率いる竜人達に告げたという。

『我が子……竜人達よ理性を持ち続けろ。持ち続けてこそ儂等は “人” でありそして “竜人” である』

祖龍様はそう告げて、天へと舞い上がっていったという。

その後の竜人族達は長く苦労したという。

それは、竜人族の強力さに畏怖を抱いてしまった為、各国の迫害は鳴りを潜めたが、そこから、長く苦しい共存の可能性を探る竜人達の時代が始まったという……。

「そして、先代の王……アドウルが平和の礎を作り、今代の王で私の夫のハルガの代で他種族共存が成り立った。そして、この話は竜人の子供が成長した際に必ず話すことになったのよ?」

「……………」

オルナはそう言い終えて話を終わらせ、一息ついてからテイオを見る。テイオは話を聞いてたのかと疑うぐらい無言で呆けていた。

「テイオ？」

「！、はいっ、母上！」

オルナが呼び掛けるとテイオはビクツとしながら視線をオルナに移す。

「テイオ、分かりましたか？　これが聖句が生み出されたキツカケの話よ」

「のじゃ……でも……」

テイオはオルナの話を聞いて、頷くが少し悲しそうな感じであり、オルナは気になり問う。

「どうしたのテイオ？」

「……………」

「ん？」

テイオがボゾボソツと呟き、オルナはよく聞こえず、首を傾げるがテイオは次は聞こえる声量で話します。

「初代様は確かに悪いことをした。でも、可哀想なのじゃ……愛していた人がずつと守ってきた者の裏切りで殺されたんじゃぞ……」

「ティオ……」

オルナはそんなことを言うティオを愛おしそうにギュツと抱きしめる。

「ホントにティオは優しい子。自慢の娘」

「母上……」

オルナは顔を上げながら此方を見つめるティオに微笑みを向けながら話す。

「いつか……そんな貴女にも良い出逢いがあると思うわ」

「出逢い？」

ティオはオルナの言葉の意味はまだ分かっておらず、首を傾げるとオルナは言葉  
を続ける。

「将来の旦那様ってことよ？ ティオはどんな殿方が好きなの？ 私、知りたいわ」

ニコニコと質問するオルナにティオは頭を唸らせながら考えてからパツと考  
えつくど少しばかりか顔を赤くしながら答える。

「父上みたいに強い殿方……」

「……フフ」

ティオは自分の尊敬する父のような強い殿方が好きだと言う。そんな回答にオ  
ルナから笑みが零れ出す。

「そう、あの人のような強い殿方ね……なら、ティオもそれに担うような女性へとならな

いとね」

「ウツ……」

オルナの言葉にティオは少し身体を竦める。そんなティオにオルナは優しく背中を擦りながら話す。

「ティオ、これから何年後か分からない。でも、絶対に貴女が想いを寄せてしまう殿方が現れるわ。ハルガのような強い殿方をね……」

「……」

オルナの話すをティオは抱きつきながら、じつ、とオルナを見つめながら聞いていく。そんなティオの様子をオルナも優しい眼差しで見つめながら話を続ける。

「なら、ティオもそんな殿方から好かれるような美しい女性にならなくちゃね。そうしないと誰かに奪られちゃうわよ?」

「な、なら……妾……稽古……頑張るのじゃ」

オルナはそう言うのと、ティオは立ち上がりこれからは稽古を頑張ると宣言する。

「なら、ヴェンリのところに戻って謝って、稽古を真面目に受けなさい」

「うむっ! じゃっ、母上、いつてくる!」

「いつてらっしやい」

オルナの言葉にティオは頷き、部屋の障子に手をかけてからオルナに一言だけ伝え

て部屋を出た。

部屋を出たティオはヴェンリの声ができる方へ歩を進める。頭の中ではどう、謝ろうか。どれぐらい怒られるだろうか。と考えていた。

「出逢い……」

そんな事を考えながらティオは母オルナの言葉を口にする。それは、何時か会えるかもしれない自分の伴侶となる殿方……。

しかし、そんな殿方を前にして、自分が駄目な女だったら嫌だ。だって、自分の理想の夫婦は父上と母上のような仲睦まじい夫婦が理想なのだから……。

「妾……頑張る！」

ティオは気合いを入れる。それは未来のために……何時か会えるかもしれない未来の旦那様の為に……空を見上げながらティオは決心して目を閉じる。

そして、次にティオが目を開けて見た光景は数年後の自分が見る光景……。

「え？」

——世界が赤く染まっている光景だった。

都を焼き尽くす燃え盛る業火と、撒き散らされた命の飛沫と、天空に尋常でない大きさの魔法陣、そしてこの狂気に埋め尽くされた悲劇の舞台を彩るような夕焼けの

色。

「このような、このようなことが……」

未だに幼さを残すティオから、絞り出されたような声が出る。熱を運ぶ風に髪を揺らして、物見台の天辺から崩壊していく王国を瞳に映している。

メキメキツ

ティオは崩壊していく王国を見ていく内に木製で頑丈に出来ている欄干に力を入れすぎてしまい悲鳴を上げるような音がなり、今にも粉碎されそうな状態になっていた。

ティオは自分の愛してる国を、圧倒的な戦力による侵略を受け、灰燼と帰そうとしている国を眺める。少し前まではありとあらゆる種族が区別なく平和に暮らしていたというのに、何故こんなことになってしまったのか……。

ティオの認識は現実が追いつかず、ただただ呆然と、燃え行く王国を見つめていた。  
「姫様……此処は危険です。避難を……」

ティオの背後に控えていたヴェンリは避難を促す。しかし、ティオはヴェンリの方へ振り返ることなく、ただ小さく首を振る。

「姫様……」

「ヴェンリよ。妾はクラルスの姫ぞ。父上達が、同胞達が、今この時も戦っているという

のに、何処に逃げろというのじゃ？ 行くならば……あそこじゃろう」

ティオはそう言つて、真つ直ぐ戦場の方へ指を指す。それにヴェンリが慌てたようにティオの傍に寄る。

「なりません、姫様！」

「……………分かつておる。妾が行つても、足手まといにしかならん。今ほどつ、この身の未熟を口惜しいと思つたことはないっ！」

ティオは唇を噛み締め、可愛らしい唇からツーツと血が滴り落ちた。そうでもしなければ、己の中の理性を殴り飛ばし衝動のまま駆け出してしまひそうになるからだつた。

国を焼かれ、同胞達が散つていき、家族すら危機にあるこのときに、なにも出来な自分の無力が、恨めしくて、憎くて仕方がなかつた。それこそ、敵に対する憤怒よりもなお、激しい怒りを自分に対して抱くほどに。

と、其処へティオが心より安否を憂慮し、同時に心から信頼している人の声が響いた。

「ティオ、結界の中にいなさいと言つただろう！」

「父上っ」

ティオのいる物見台に、竜の翼を背負う黒髪の偉丈夫が滑り込んでくる。ティオの父親にして、今代の竜人族の王ハルガ・クラルスだ。



ハルガの姿は酷いものだった。魔物の素材を使った戦装束は下手な金属鎧よりも頑丈だが、今はあちこちが焼き焦げ、破れ、あるいは千切れて、見るも無惨な有様になっていた。その下にある肉体も、大小様々な傷が走っており、特に腹部の傷からは大量の血が滴り落ちていて、止血もままならない様子だった。

ハルガは、竜人族の中でも最高の防御力を誇る黒竜だ。熟練しなければ行使できない人間の姿での「部分竜化」もできる強者で、たとえ戦装束の防御を貫かれても、肉体の竜鱗を纏ってあらゆる攻撃を弾いてしまう。

その身を以て盾となり、悪意と敵意の尽くを受け止めながら、敵陣に突進し蹴散らしてしまふその戦い振りから「移動城塞」などという二つ名がついたほど。

故に父の強靭さを知るティオは、凄絶な父の姿に言葉を失う。ティオの表情で、その内心を察したハルガは、苦笑いを浮かべながら片膝をついてティオと視線を合わせた。

「ティオ。どうやら我等は、ここまでのようだ。方々手を尽くしたが、やはり、作られた世界の流れを変えることは出来なかった。お前に、この王国の地を残してやれないこと、すまなく思う」

「そ、そのような、そのようなことをつ。何を言うのじゃ、父上！ 竜人がこれしきのことで終わるなど……そんなことがあるわけないのじゃ！ そうじゃろう?!」

「今や、我等は世界の敵……ティオ、いついかなるときも目を背けてはいけない。そう、教えた筈だ」

「父上っ」

悲痛な声音と表情で、美しい着物が汚れるのも構わず、ハルガに抱きつくティオは、父の言葉を必死に否定する。

そんなことがあるわけないのだ。竜人族は世界の「守護者」。あらゆる国、あらゆる種族を受け入れ、共に手を携え合い、手を差し伸べ、平和をもたらしてきた。どの国も、どんな種族も、多かれ、少なかれ、竜人族には恩義と敬意を抱いてきたのだ。

それが、たった数年。季節が幾つか巡る程度の間、全てが変わってしまった。竜人族は魔物である。竜人族は多種族を支配している。竜人族はいつ暴走してもおかしくない。竜人族は神に牙を剥く。竜人族は……

——神敵である

——なんだそれは、とティオは思う。

「完全竜化」——地上のどんな種族も持ちえない固有魔法は、確かに、人々に大きな恐れを抱かせるだろう。だが、だからこそ、竜人族は誰よりも、どんな存在よりも、高潔であらんとしてきた。「恐れ」を「畏れ」に、そして「畏敬」へと昇華させるために。

愚直と言っても過言でないほど、竜人族は己を律し、他者を思いやり、勇気を示し、その身を剣に、あるいは盾にして、全ての人々と共存してきた。

結果、数百年の時を経て、過去の、そして今を生きる竜人達は、世界中から一種の楽園とも称される王国を築き、世界中が手を携え合える世界同盟の盟主になって世界を守り続けてきた。

——世界の守護者

——平和の紡ぎ手

——真の王族

人々の竜人族を称える言葉だ。

そう声高に称賛していた人々の口からは、今や狂気と共に罵詈雑言が吐き出されている。

まるで悪夢だった。手の平を返したように人々の悪意、恐怖、敵意……。

テイオは実際に世界規模の多民族混合連合軍と謎の「竜」が指揮する異様な魔物の軍勢の侵略を受けてもまだ現実を受け入れられないでいた。

赤に染まり、狂気が満ち、同胞達が散っていく……そんな夢の世界から、深緑の樹々と陽の光が反射してキラキラときらめく小川と、種族に關係なく笑い合い寄り添い合う人々の喧騒に満たされた世界に帰りたい。と。

「テイオっ！ しつかりしなさい！ お前は、もっとも若き、次代を担うクラルス娘であらう！」

「っ……………父上」

父親の力強い叱咤の声に、夢幻に囚われていたテイオはハッと我を取り戻した。

そして、いつまでも無様を晒している訳にはいかないと、あまりに不条理に零れ落ちそうになっていた涙をゴシゴシと払って、キツと睨みつけるような力強い眼差しをハルガに向ける。

そんなテイオに対し、心底愛しそうに目を細めるハルガは直後、強く、強くテイオを抱き締めた。それはまるで、二度と感ずることはできない愛しく大切な温もりを、名残り惜しむかのように……。

余りの力強さに、テイオは「ふぐう」と苦しそうな声を漏らし、父に小さな抗議をしようとする。

が、開かれた口は噤まれることになった。父の肩越しに、ヴェンリの表情を見てしまったから。そして、父の抱擁から伝わる尋常でない気配に気がついてしまったから。そうすれば、当然、沸き上がる疑問。何故、父は戦場を抜けて自分の元へ戻ってきたのか。

——— どうやら、我等はここまでのようだ。

蘇る父の言葉。未だ幼くして、母に宣言したあの時から、努力した結果、その聡明さにおいては大人顔負けとの称されるようになったティオは、それらの情報を統合して——総毛が立った。父親の意図を察し、愕然とした表情で自分を抱く父の横顔を見つめた。

「父上……嘘じゃろう？　嘘だと言ったもう」

「……まったく。お前は本当に聡い。顔つきといい、言動といい、日に日にオルナに——母親に似ていく」

父の苦笑いを浮かべた表情を見て、ティオは確信する。今、この時が父との今生の別れの瞬間なのだ。

ティオは言葉にならぬ想いを、それでも何か言わぬと口を開こうとする。が、その寸前、都の中心から凄まじい轟音と「竜」の咆哮と衝撃が伝播した。物見台を倒壊させかねないほどの爆風に、ティオは顔を庇って身を縮めてしまう。

そうして、静寂が戻って一拍。ティオやハルガが共に厳しい表情で視線を転じれば……

「な、なんとということをつ」

「……………あ」

ティオは悲鳴のような声を上げた。

爆心地は、最初からなかったように更地となっていた。しかし、テイオが悲鳴を上げた原因は別。今、この瞬間も、一本、また一本と立てられていく木柱に磔にされた——同胞達の姿だった。

そうして気が付く。たとえ距離があっても、気が付かないわけがない。

同胞達を磔にさせたと思われる敵の大将と思われる白い巨大な“竜”の近くに磔にされてる女性は——母だ。

白に近い翠の長い髪に自分が受け継いだ黄金の瞳を持つ美しい女性。普段は穏やかで、優しい微笑んでいる姿なのに、一度、戦場に出れば、壮麗な風と、誰よりも速い飛翔で先陣を切り、敵を薙ぎ倒す勇猛果敢な、テイオが心から敬愛する人。

その母——オルナが、見るも無惨な姿で磔にされていた。その傷だらけの姿を見れば、いかに勇猛に、最後の瞬間まであの“竜”に向かって死力を尽くしたのは一目瞭然。そんな母が、晒し者にされていたのだ。

脳裏に大好きな母の言葉が過ぎっていく。

——テイオ。

——ホントにテイオは優しい子。私の自慢の娘。

——流石ね、テイオ。ハルガや歴代の竜人族の王のように貴女なら未来の竜人族をまとめられるわ。

——愛してゐるわティオ。

母の言葉が、母が自分に向ける優しい微笑みが、母との記憶が、頭の中に溢れてくると同時にティオの瞳に、暗い炎が燃え上がった。普段は鮮やかと言える黒の魔力が、まるで負の感情という素材を煮詰めたかのように深く暗い色になっていく。己の制御など軽く吹き飛ばしてしまいそうな憤怒と憎悪が、幼き竜人の姫を、本物の化生へと転化させようとする。

「ティオッ！」

「っ、ちち、うえ？」

全身を包む魔力の奔流の中、巨大過ぎる怒りが、ティオの言葉を怪しくさせる。そんな、今にも衝動のまま、母を同族を殺し、磔にした「竜」に喰らいつきそうな娘を、ハルガは片膝を突いて再び、強く、強く、抱き締めた。

ティオはそんな父に憤怒と憎悪で輝く黄金の瞳を向ける。その眼は言葉よりも雄弁に、なぜ仇を討ちにいかないのか、なぜ、悪逆非道な輩共を、母を殺したあの白い「竜」を駆逐しないのか、なぜ、母を殺されてそんなに落ち着いていられるのか……そんな疑問を物語っていた。

そんなティオに、ハルガは、抱き締めたまま、小さく、されど透き通った声音で語りかける。

「——我等、己の存する意味を知らず」

ハルガは、無言でティオに続きを促す。ティオはふうーふうーと怒りの余り乱れる呼吸のまま、されど物心ついたときから聞かされ、教えを受けてきた古き言葉を口にする。

「この身は獣か、あるいは人か。世界の意味をあるものとするならば、その答えは何処に……」

応えた娘をより一層強く抱き締めながら、ハルガは言葉を重ねる。

「答えなく幾星霜。なればこそ、人か獣か、我等は決意もて魂を掲げる」

それは、敬愛する母から教えを受けた聖句の原典から、竜人族に伝わる誓約と決意の言葉。

「竜の眼は一路の真実を見抜き、欺瞞と猜疑を打ち破る」

ティオとハルガの言葉が重なる。ティオの身体から力が抜け、次第に落ち着きを取り戻していく。

「竜の爪は天の楔を切り裂き、巢食う悪意を打ち砕く」

ハルガが体を離し、愛娘の瞳を真面目から見つめる。大切なことを語るように。最後の教えを授けるように。言霊に乗せて、竜人族に相応しい心を取り戻していく。

「竜の牙は己の弱さを噛み砕き、憎悪と憤怒を押し流す」



テイオの唇から、再び血が滴り落ちた。理性を飛ばしそうな己に牙を突き立て、先にそうしたように己の心を律していく。

「仁、失いし時、我等はただの獣なり。されど、理性の剣を振るい続ける限り——」  
そつと、テイオの唇にハルガの指が触れる。愛娘が嘔み締めた血は、心が流した血と同義。それを拭い、それでいいと微笑む。

テイオの瞳に雫が溢れる。しかし、決して流しはしない。憤怒と憎悪が心を侵し、敵をあつ「竜」を殺せと絶叫を上げ、それに身を委ねてしまいたいと思う「弱さ」を、幼き心は光の雫に変え、しかし、流してしまうのは竜人族の矜持に反する。

——強く、優しく、高潔であれ。

古き言霊に込められた竜人族の在り方——それを、父の前で、最後まで民と同族のために戦った母の亡骸の前で、曲げる訳にはいかない。

テイオはスツと息を吸うと、それでいいと優しい眼差しを己に向ける父に頷き、最後の、父と母、そして家族に授けられた誇りを口にす。

「我等は「竜人」である！」

小さな身体をむんつと張り、声高に叫ぶテイオ。ハルガは、もう一度、今度こそ最後であると、そして、己の誇りを具現化したような愛娘を、もう心配はいらないと万

感の想いと亡き愛しの妻の想いを込めて抱き締めた。

「テイオ、よく聞きなさい」

「……はい。父上」

父と言葉を交わす最後の機会だ。流れ出しそうな涙を必死に堪えながら、テイオは、少女とは思えないほど決然とした声音で応える。

「我等の、いや、世界の本当の敵は、今、この国を侵攻している人々ではない」

「……世界を歪ませた存在——教会が崇める“神”」

テイオの答えにハルガは首を振り、テイオを見つめ直した後、少し訂正を入れて話す。

「テイオ、“神”は“神”でも教会が崇める“神”では無い。そんな輩よりも力を越えた者達——“五神”。それこそがこの世界の本当の敵だ」

「……“五神”」

「そうだ。あらゆる手を尽くし、その存在達を討たんとしてきたが……間に合わなかった。故に竜人族はここで終わる。終わらねばならん。何故か分かるな？」

「はい。我等が滅びねば、世界中の人々が歪んだままになってしまう。だから、我等はここで終わることで、この戦いを終わらせねばならんのじゃ」

ぐつと重い感情を堪えながら、聡明さを示すテイオに、ハルガは力強く頷く。

「真の敵である『五神』は強大で、狡知に長ける。だが、決して万能ではない。そして、いつの時代も、邪悪が栄え続けることはないのだ。故に、いつか、いつの日か、かの存在達を討つことが出来る者が、必ず現れるだろう。テイオ」

「はい、父上」

予言者の如く語るハルガは、テイオに、最後の、父としての願いと、竜人族の王としての命令を口にした。

「生き延びよ」

「ッ、父上。しかし、我等は——」

たった今、竜人族が滅びなければ世界は戦火に包まれたままだと語った父に、テイオは困惑する。ハルガは、そんなテイオに、テイオ自身余り見たことの無い、らしからぬ不敵な笑みを浮かべた。

「敵の強大さを知りながら、手を拱いているほど我等は甘くない。竜人族は今日、滅びるが……それは歴史的に、だ。既に大陸の外に隠れ里を用意してる。そこへ行くための、神共にも知覚されぬ道もだ。父上と、そして、選ばれた同胞達と共に、其処で時が来るまで生き延びるのだ」

「なっ、爺様?! 父上、爺様は亡くなった筈……いや、そういうことなのじゃな」

世界の流れが変わり始めた頃、目に見えない敵の影にハルガと先代の王にしてハル

ガの父——アドウル・クラルスは、様々な手を打ってきた。そのほとんどは、一見すれば偶然と思える出来事——確実に、神々の手であろう策謀により潰されてしまい、その中で、先代の王として、最強の「緋竜」として名を馳せたティオの祖父のアドウルは、銀翼の何かとの戦闘の末、亡骸の残らない戦死を遂げた筈なのだ。

だが、きっとそれは、敵を欺き、今のような滅びの時を迎えても竜人族を歴史の陰に隠せるよう手を打たれた、ハルガとアドウルの一手だったのだと、ティオは察した。同時に、自分の死を偽装する手立ても、もう、打ってあるのだろう、と。

大好きだった祖父が、実は生きていたことに喜びを感じつつ、同時に悲しみがティオの心を襲う。

「……父上は、行けないのじやな？」

「うむ、我は今代の竜人の『王』。この首なくして戦は終わらん。それに………」  
「それに？」

「オルナだけを戦場に残していくことは出来ん」

少しだけ冗談めかしてそんなことを言う父に、ティオは淡く微笑んだ。ハルガはティオの髪をゆつくりと撫でながら最後の言葉を贈る。

「ティオ。私の黒鱗と、オルナの風と、アドウルの火を受け継ぎし、我等クラルスの誇りよ。今日、お前の中に生まれた黒い炎と、生まれたときから持つクラルスの猛き炎を胸

に、よく生きよ」

「はいっ……」

「それに、すまぬな……お前が心から決めた相手を見届けることが出来なくてな……ふっ、これは、オルナも悔いてるだろうな我もだが……」

「はい。はいっ、父上っ」

きつと、母オルナにも託された言葉と想いを伝え終えたハルガは、ヴェンリにテイオを任せ、再び、終焉の戦場へと飛び出していった。そうして、最初から了解をしていたらしいヴェンリと共に、大陸の外へと繋がる秘密の場所へ向かうテイオは、最後に見た。

この戦において、竜人達は、侵略者たる混成軍はほとんどを無力化だけにしただけで命までは奪わず、ある、*“*竜*”*の魔物の軍団を集中的に狙い戦った。最後まで、竜人族を信じて王国に残った者達は、この身を盾にして逃した。

神々の邪心に従って、人間同士で殺し合いなどやらない。たとえ、我等の身が朽ちようとも民を傷つけさせはしない。絶望に浸かってもやらなければ、怒りや憎しみがこの身を侵させもしない。

*“*グルウウアアアアアア！*”*

『……………』

ハルガは自身の攻撃を堂々と待ち受ける白き「竜」に強力なブレスを放つ。そのブレスと共に響き渡った竜の咆哮は、まるで、遙か高みから世界を嘲笑う神々への、竜人の誇りを汚せるものならやってみるといふ、ハルガの、そして散つていった竜人達の、挑戦状のようだった……。

「父上エエエエエ！」

~~~~~

）

「……………んう」

ティオは薄目を開けながらゆっくりと身体を起こす。部屋の窓を見るとまだ朝日が昇っていない時間帯だと知る。

「……………妾…ん？ ……っ」

周り見渡していると、ティオのすぐ傍に何かいた。よく見ると、其処には生まれのままの姿のハジメがおり、よく見れば自分も一糸纏わぬ姿だと気付き、驚きの余り、大声を出しそうになったが、ティオは昨夜のことを思い出し、顔を赤くしながらも大声を出さずに済んだ。

「そうじゃったな……………（そうじゃった……………妾、昨夜、ご主人様と……………）」

そう、帝国に向かう前夜、テイオとハジメはノイントの戦いの際にテイオが約束していたハジメに可愛がって欲しいということで、一夜を共にしていた（優花達からは了承を貰っている）。

テイオは昨夜のことを思い出し、みるみる、顔の温度が上がっていることに気が付き、両手で顔を覆うおうとしするがあることに自分のあることに気付いき、口にしてしま

う。

「……………でも何故、妾は涙を流してるんじや?」

それは一筋の涙だった。そして、無性に自然と自分のいつまでも敬愛している人達の名をギュツと毛布を両手で握り締めながら口にしていた。

「……………母上……………父上」

「……………ん? ティオ?」

「!」

そう呟くと、同じベッドで寝ているため、ベッドが異様に揺れるのを感じたのかハジメが頭を掻きながら身体を起こして、薄目ながらもテイオに話しかけた。

「なんだ、テイオ。まだ夜じゃねえ……………」

「ご、ご主人様?」

ハジメは話していたがテイオを見て、言葉を失い、体を微動だにしないかのよう  
に止まり、テイオは疑問に思いハジメの手を触れながら話ししかける。

「(主……?!)」

テイオがハジメが手を触れようとした瞬間、ハジメは触れようとしたテイオの手  
を掴み、自分の方へ抱き寄せる。テイオは唐突のことで顔をみるみる赤くなつていく。

すると、ハジメは心配してそのような表情をしながら口を開き話しだす。

「テイオ……泣いてたのか？」

「……っ（そうじゃったっ、涙を拭うの忘れててもうたっ）」

「原因が俺なら悪い。もし、お前を不快にさせてしまったのならホントにスマねえ……」

「(主)主人様っ、これは、違うのじゃっ!」

ハジメはテイオの目元に流れていた涙を自分の指で拭き取りながら謝るように  
話していく。その表情は少し悲しそうに見えたテイオは必死に否定して、ハジメの胸に  
寄り添いながら話す。

「……夢を見たんじや、妾の昔の幸せだった記憶と、悲しい記憶じゃったと思う」

「はあ………そういうことか。安心した……クハっ……でも、珍しいなお前が夢で涙を流す  
なんて……」

「ムッ……」



涙を流した理由を話すティオにハジメは苦笑混じりに安心し、安堵の息を吐きながら寄り添っているティオの頭を撫でる。すると、ティオは顔を上げながらハジメの顔を見て、頬を膨らましムツとした表情をした。

「なんだよ?」

「ご主人様は妾が怖い夢で泣かない冷血な女だと思っておるのか?」

「違えよ。沢山のことを抱えているお前が俺に甘えてくれることに嬉しいんだよ俺は………」

「! (ご主人様……まさか)」

ティオはハジメが自分のことを冷血な女だと思っているのかと思いい眉を顰めると、ハジメはそれを否定しながら自分の核心をつく発言をする。

ティオは内心、ドキリとするも、当のハジメはそんなのを気にしないのか話を続けていく。

「ティオ、お前が俺達に着いてきた目的は惚れた以外に何かあるのは分かっていたさ最初からな………」

「どうしてじゃ?」

「そうだな……まず、ウルの件が終わった後に、大迷宮の話をした際にお前の魔力の乱れを感じたからな。まあ……俺以外にユエも感じていたらしいし、ユエもあん時から知っ

てるかもな……」

「……………」

ティオはハジメの話を聞いて言葉を失ってしまう。しかし、ハジメは話を続ける。

「まあ、確信したのはノイントの野郎との戦いの際だった。お前の目付きはガラリと変わったからな口調や他は取り繕っていて、普通じや分かりにくいが俺にはバレバレだったぞ？　それで思ったんだ。ティオ、お前は俺達を自分の復讐に利用しているんじゃないかとな……………」

「……………」ご主人様の思ってることで合っているのじや。幻滅したかの？」

ハジメの考察に圧倒されたティオは諦めたように目を伏せながらハジメの考察は正解だと話す。しかし、ティオは真剣な表情でハジメを真っ直ぐ見つめながら声を上げる。

「……………」でもつ、妾のご主人様への想いは嘘じゃないっ！　洗脳された妾を救ってくれたっ。竜人である妾を気にせず仲間だと大切な人だと傍にいさせてくれたっ。ご主人様を愛してるこの気持ちは変わらないのじやっ！」

「……………」ティオ」

ティオは初めて自分の本音を口に出していく。

「幻滅したならもう妾を仲間だと、大切な人だと思わなくて良いっ。でもっ、この想いは、ご主人様……貴方様を愛してるこの気持ちだけは本物だって本心だって信じ……」  
「テイオ」……ご主人様？」

どんどん本音を言つてエスカレートしていくテイオをハジメは亡き父——ハルガのように強く、強く抱き締めた。

そして、ハジメはテイオを抱き締めながら優しく話しかけていく。

「俺がいつお前を、幻滅したと言った？」

「でも……」

「俺は、テイオ、お前のことも大切だし一人の女性として愛している。後、言つたら？」

俺は大切な人のためなら俺の全力を幾らでも使うのも惜しまないって……」

「……復讐のためじゃとしても？」

「ああ、それでもさ……」

「……………（ホントに、この殿方は…………）」

ハジメの言葉にテイオは夢で流した涙とは違う。心が温まるような涙を流してしまう。けれど、それに気付いたハジメはそっと、笑みを浮かべながら指で拭いとる。

「……テイオ」

「……………ご主人様」

そして、二人は互いを見つめ合いながらそつと唇を合わせた。キスをして、十数秒経った後、二人は互いに唇を離すと、ティオはハジメに寄り添いながら頭を胸元に埋める、ハジメはそれに応えるように抱き締めた。

そして、ティオはいつの日か大好きな母にしたみたいに甘えた表情でハジメにお願いをする。

「妾、まだ、ご主人様の温もりを感じたいのじゃが……良いかの？」

「クハツ……構わねえよ。俺の竜姫」

そんなティオのお願いをハジメは笑いながらも優しい眼差しを向けながら了承した。ティオはその言葉を聞いて、嬉しそうにハジメの胸元に顔を埋め、ハジメの温もりを感じて自分の心が温まっていくのを感じる。

「……愛してるのじゃ」

（父上……母上……見つけたのじゃ、妾の出逢い……心から決めた殿方を……）

まだ、朝日が昇らず、月が王国を照らす中、王城のとある客室で一人の奈落の化け物と一人の竜姫が互いに愛を確かめあつた……。

~~~~~

)

― 帝国 ―

「……………」

帝城のとある月が見える部屋にある和装を着た男が無言で景色を眺めていた。そして、一万年ほど前にある「黒い竜」に傷をつけられた胸元に触れていた。

「我が神よ……………神?」

すると、部屋の扉が開き、一人の豪華な装束を着た男が入り、和装の男に跪き、話しかけるが、反応がなく、男は首を傾げながらも話しかける。

「……………ああ、お主か」

「はっ、我が神よ……………」

「……………計画はどうじゃ?」

「はい。順調であります。そろそろ、俺との婚約の為にハイリヒ王国から王女が来訪するので、婚約パーティーの際に計画を実行しようかと思えます」

「そうか……………貴様の手腕を楽しみにしてぞ。これは、儂もだが、我が主も期待しておられるからな」

「しよ、承知しましたあ!」

男の存在に気付いた和装の「男神」は計画の進み具合を聞いて、男の手腕を期待していると答え、男は跪ずきながら声を上げ感謝していた。

「……よし、計画の進み具合を知れたから貴様は戻って良いぞ？」

「……あ、あのつ、我が神よ！」

「何じゃ？」

男神に戻れと言われた男は戻らず男神に話しかける。しかし、男神は面倒くさそうに男を睨むが、男は怯まずに震えながらも口を開き話します。

「あの一つ、聞いても宜しいでしょうか？」

「一つだけじゃぞ？」

「はっ……あの、その胸の「傷」は………？」

「これか………」

男の願いに男神は自分が睨みを効かせたのに怯まず聞いてくる度量に仕方なく、聞くことにした。そして、質問されたのは、この胸の「傷」のことだったので、溜息を吐きながらも短く話す。

「二万年程前だったか……儂等に挑もうとした「黒竜」にやられた傷だ。ホントに忌々しい」

「さ、際ですか………」

「よし、話したぞ。貴様はもう、戻れ。鬱陶しい」  
「は、はいイイっ」

男神は質問に答えたので男を睨みながら部屋を出ると促す。男はそれに従い、すぐさま、部屋を出た。そして、男神は月を見て、両方の拳を血が流れるほどの勢いで握り締め一言ポツリと呟いた。

「ああ、ホントに……忌々しいクラルスの一族め」

その男神の憎しみを込めた言葉は誰に聞こえはしなかったが、月が照らす中、木霊していた……………。

## 七十八話

## ハウリア再び

眼下の八雲が流れるように後方へと消えていく。重なる雲の更には下には草原や雑木林、時折小さな村が見えるが、やはりあつと言う間に遙か後方へと置き去りにされてしまふ。相当なスピードのはずなのに、何らかの結界が張つてあるのか風は驚く程心地良いそよ風だ。

「まるで……夢みたいね」

そんな気持ちの良い微風にトレードマークのポニーテールを泳がせながら、眼下の景色を眺めていた雫は、視線を転じて頭上に燦々と輝く太陽を仰ぎ見た。

雲上から見る恵みの光は、手を伸ばせば届くのでは？ と錯覚させるほど近くに感じる。雫は、手で日差しを遮りながら手すりに背中を預け、どこか達観したような、あるいは考えるのに疲れたような微妙な表情でポツリと呟いた。

「……まさか、飛空艇なんてものまで建造しているなんてね。……もう、何でもありなのね」

そう、雫が現在いる場所は、ハジメが作り出した飛空艇「フェルニル」の後部甲板の



上なのである。

このフェルニルは、重力石と感応石を主材料に、その他諸々の機能を搭載して建造された新たな移動手段だ。今まで使わなかったのは、ひとえにハジメの未熟故である。

重力石で物体を動かすことは難しくなかったが、質量が大きくなればなるほど熟練した生成魔法の行使が必要だった。クロスビットなどでは精々、一人一人を持ち上げるくらいが限界だったのだ。しかし、ちまちまと時間の合間に修練を積んできた結果、ついに大質量を自在に浮かせて操作できるまでに熟練し、その集大成として飛空艇「フェルニル」を開発したのである。王都から出発する際、馬車も魔力駆動車も用意せず王都近郊の草原に集合させたハジメを訝しむ皆の前で、フェルニルをお披露目したハジメは、ニヤツと笑みを浮かべながら

『やつと、飛行系の移動手段が完成した』

と、自信満々に語ったものだ。

このフェルニルは、全長百二十メートルのマンタのような形をしており、中には前面高所にあるブリッジと中央にあるリビングのような広間の他、更にキッチン・バス・トイレ付きの居住区まである。と言っても、帝国まで馬車で二ヶ月の道のりを僅か一日半。歩いて三ヶ月の樹海までを二日半で走破してしまうので、どこまで活用されるかわからない。空に浮かせているだけでも、結構な魔力を消費するのだ。魔力が一番高い

ハジメでなければ長時間の使用など不可能である。

「あら、雫ここに居たの?」

「あつ、優花」

ハジメのセリフを思い出して、作れたってなんで飛空艇の設計を知ってるのかと内心ツツコミを入れていた雫に声がかけられた。

雫がそちらに視線を向ければ、ちょうどハッチを開いて優花が顔をのぞかせているところだった。優花はそのまま、雫に隣に並んだ。

「優花、南雲君達は?」

「確か……鈴はリリイと話してる。ハジメはフェルニルの操作に大分魔力を使ってるからブリッジでテイオといえるわ。ユエとシアは何してるか分からないわ」

「優花は南雲君のどこに行かないの?」

そんな説明をする優花に雫は首を傾げながら何故ここに来たのかと言うと優花は頬をカリカリと困ったように笑みをしながら搔く。

「えつと……なんかね。今朝からテイオがやけにハジメの傍にいたがるのよ」

「テイオさんが?」

雫は優花からの話を聞いて、雫から見てもユエとはまた違う意味で大人な色気と雰囲気を感じさせるテイオは、雫にとつても女として憧れてしまう。そんな彼女がやけにハ

ジメに甘えてることを聞いて少し驚いてしまう。しかし、優花はティオはハジメに対しては甘えてしまう事を知ってるので何とも言えないが今朝のティオは何時もと違うと気付いていたらしい。

「うん。何か思い詰める事があつた感じだし。少し心配でハジメと二人きりにさせて気を楽にさせよかなつて。ユエ達と話したんだ。まあ、私もユエ達も今さつきまで、ハジメに甘えてたけどねえ〜」

「へえ……………」

最後の所が何故か惚気ていたので、雫の顔が少し強ばるも、気を取り直して笑みを向けながらサラツと話題を変えることにする雫。

「でも、南雲君つて…………ホントに凄いわよね。こんな飛空艇も作つたりして…………。」

「まあ、ね。この飛空艇も、車の機構や機械の知識を覚えて自分の技能で作り上げたらしいし……………」

「嘘……………」

優花の話の聞いて、雫がハジメの凄さに賞賛していると、優花は少しぎこちなく笑みを浮かべていた。

「どうしたの？」

優花そんなぎこちない表情をして?」

「いや…………まあ、日本に戻ったらハジメには自重して貰わないといけなあー、と思つて

ね。だって、あのバカはなんでも作ろうとするから……………」

「アハハ……………そういう事ね」

ぎこちない表情をしてる優花の理由を知った雫は乾いた笑みを浮かべ、優花の気持ちに同情してしまう。

「ホントに、ハジメったら私達の為だからって、昔から自分の体の心配はせずに徹夜するから危なかつしいのよ。だからね、ユエ達にもハジメを監視するようにお願いしてるの。でもねっ、ハジメったら作業にしている時の顔がね……………カッコイイのホントにずっと見ていたいぐらいっ！……………それにねっ、ハジメがねっ……………」

「何、惚気なの？ 惚気なのね」

しかし、段々と優花の話が心配から惚気に変わって両手で頬を抑え顔を紅く笑みを浮かべながらイヤンイヤンする優花に雫は内心、イラツとして眉を八の字になってしまふ。雫は何とかして怒り？を抑えて話題を変えようと数時間前に別れた三人の話をすることにした。

「まあ、南雲君のことは一旦置いてね……………本当に大丈夫かしら……………」

「何の…………？」

「遠藤君達の……………」

ハジメに付いて来たのは、帝国に送ってもらう約束をしたりリアーナ姫とその護衛の

近衛騎士達数名、光輝達勇者パーティー、それに迷宮攻略別働隊の浩介達だけだ。愛子は戦えない生徒達を放置することは出来ないで残り、永山達前線組も、光輝達がいらない間王都の守護をメルド団長の指揮の元に居残りを決意した。

もつとも、王都にはフリードがわざとらしく残してくれた超長距離転移の仕掛けをヒントに、いつでも直ぐに戻れるアーティファクトを置いてきてあるので、光輝達もハジメに頼めば一瞬で戻ることが出来る。

そして、雫が心配してたのは数時間前に「ライセン大峡谷」で降ろし別れた浩介、妙子、奈々の三人のことだ。雫は心配していたが、優花の方は問題無さそうに心配などしてなさそうな表情だった。

「私は浩介達なら大丈夫だと思ってる」

「なんでそう言い切れるの?」

「幼なじみだから?」

「フフ、何それ」

優花の発言に自然に雫は笑みを零してしまふ。すると、優花から雫に話しかける。

「あれ?　　そういえば、天之河君達は?」

優花は、何時も雫の傍に居そうな光輝は何処にいるかと尋ねる（優花自身も大体ハジメの傍にいる）。

「あー……光輝達はあっちにいるわよ」

「あっち？」

雫は優花に言われて、甲板の向こうを指さす。優花もそれに連れられてその方向に目看向けると、そこには、光輝と龍太郎の2人がアレスと模擬戦をしてる光景だった。

「あー、アレスさんと模擬戦してるんだ……」

「ええ……やっぱり衝突はしたけど、光輝自身、〃元〃王国最強の人と戦いたかつたらしいの」

「へえ、アレスさんもよく引き受けたわね」

「まあ、アレスさんは模擬戦なら構わないと言ってたけど、アレは惨いわよ。心が折れそうになったわ」

雫も今さっきまでアレスと魔法無しの模擬戦をしてたらしく、その表情は自信を失いかけてる表情だった。

「何があつたの？」

「えっと、ね……」

そして、雫は空を見上げながらアレスとの模擬戦での出来事を話した。

「では三人共、何処からでも掛かってきてもいいですよ」

甲板の上で模擬戦を引き受けたアレスは、そう三人に告げる。しかし、三人は少し文句を言いたそうな表情をしている。それもそうだ。自分達はちゃんとした武器なのに、アレスはいつと、いつも持つ「ロンギヌス」ではなく、ただの木の棒だったのだ。龍太郎は舐めているのかとアレスを睨み、光輝は不満そうだ。

「ん、どうしました？」

かかつてこない三人に、アレスは首を傾げると、光輝が苦言を呈した。

「あの、アレスさん。俺達を馬鹿にしてます？」

「いえ、全く」

「じゃあ、なんでっ、貴方は木の棒なんですか?! 貴方にあの槍があるでしょう!」

苦言を呈する光輝の意見は雫も同意できた。自分達相手なら木の棒で十分と言われているようなものだ。しかし、アレスはどこ吹く風だ。

「私が貴方達には、「ロンギヌス」を使わなくても良いと判断したまで。使わせたいのなら、証明して下さい。貴方達の強さを」

「なら、証明させますよ!!」

光輝はそう言い切ると、聖剣を構えながら「縮地」を駆使して、アレスの眼前へと移動する。それに続いて、雫、龍太郎も駆け出した。

「うおおおおお!!」

「ハアアアアア！」

「オラアアアアア！」

アレスは、眼前へと現れた光輝が振るう聖剣を木の棒で受け止めた。

「なっ?!」

光輝から驚愕の声が上がる。が、右から龍太郎、左から雫の攻撃が襲いかかる。しかし、アレスは二人の攻撃を予測してたのか甲板から落とさない程度の力で光輝を蹴り上げる。光輝は、咄嗟に受け身を取るが、蹴られたみぞおちの部分が痛みで苦痛の声を漏らした。

「ぶうっ」

光輝を蹴り上げた後、アレスは龍太郎の拳を体を後ろに傾けることで最小限の動きで回避をすると、傾けている間の一瞬で、雫の腕を掴み取り、雫のバランスを崩して刀の斬撃の軌道を逸らした。そして、そのまま掴んでる腕を引っ張って雫を甲板に壊れない程度で叩きつけた。

「カハッ……」

雫は急な衝撃と共に激しい痛みが襲い肺から空気が出ていき、力が上手く入らず体が動かない。

「雫っ!!……」「戦闘中で、余所見はいけませんよ」……っ?!」



龍太郎は、自分の拳を避けられた隙に、甲板に叩きつけられて戦闘不能させられた拳を見て、相手そつちのけで視線を向けたことで、隙ができる。その隙を、アレスが駄目だしされた直後、腕を掴まれたと同時に、木の棒でみぞおちを突かれる。

「グホオツ?!」

龍太郎はみぞおちの激しい痛みに、その場で蹲ってしまい戦闘不能となった。模擬戦が終わり、アレスは自分と勇者達の差がここまでとは知らず落胆の溜息を漏らす。

「ハア……ここまで差があるとは……少し残念です」

「くっ、俺はああああー!」

アレスに駄目だしされて、激昂した光輝は聖剣を手にとって突貫する。振り上げた聖剣を光輝は勢いよく振り下ろした。しかし、アレスは光輝の剣筋を見通してるかのよう  
に木の棒で、光輝の剣戟を受け流していく。アレスと光輝の打ち合いが続く中、段々と光輝が押されていき、苦い表情となっていく。

「くうっ」

そして……

「ここです」

「クツ?!」

アレスに隙を突かれて、木の棒で横腹を突かれた光輝は横腹を抑えるも、その間に、詰

め寄ったアレスに、そのまま木の棒で胴体を突かれ、そのまま、後ろへ倒れて尻餅をついてしまう。

「甘いですね」

「……………」

光輝は見上げると、其処にはアレスが目の前に立つており眼前には、木の棒を突き出されていた。無理に身の動きが取れない状況。

簡単に言えばアレスの勝ちだった。

「まだ、続けますか？」

「……………はいっ！　お願いしますっ」

「俺もだっ！」

アレスは、首を傾げて光輝を見下ろしながら模擬戦を再開するかと問うと、光輝は三対一で負けた悔しさに歯噛みするも、立ち上がり再度、アレスに模擬戦をお願いする。それに連られて龍太郎も再戦をお願いする。

「ハハッ、元気でなによりです。……………分かりました、受けて立ちましょう。で、　零殿はどうします？」

「あつ、私は少し風に当たってきます……………」

「了解しました」

アレスは光輝と龍太郎の意見を聞き、再度の模擬戦を了承するが、雫はアレスの確認に休むと申し出て甲板のハッチの近くに歩き出して休憩を取るのだった。

「……………つて言うことなのよ」

「うわぁ……………」

（アレスさん……………容赦無いなあ〜）

優花は雫からアレスとの模擬戦の話聞いて、同情してしまった。何故なら、優花自身もまだアレスに模擬戦では負けてしまうからだ。ハジメとシア、ティオ、そして、何故か浩介ならアレスとは良い模擬戦は出来る。しかしユエと優花は勝てない。優花はステータスならアレスに勝ってはいるが、戦闘経験と戦闘技術の差でステータスの差を埋められてしまい、まだ勝てないでいた。

優花はアレスとの模擬戦を思い出し苦笑いしていると、自信を失いかけてる雫に背中を擦って励ます。

「大丈夫よ雫。私もまだ、アレスさんに勝てないから」

「でも……………優花は、あの『天使化』が上手く扱えるようになったらアレスさんに勝てるのよね？」

「えっ、まあ……………そう、かな……………」

“天使化”をしても、果たしてアレスに勝てるか苦笑いする優花に雫は久しぶりにこんな楽しく友達と話せることに笑みを零す。と、その時、今まで一定速度で飛行していたフェルニルが急に進路を逸らし始めた。帝国までは真つ直ぐ飛べばいいだけのはずなので何事かと顔を見合わせる優花と雫。

「……何かあった……ん？　ハジメ？」

直後、優花の“念話石”でできたアクセサリーからハジメからの“念話”が入る。

「うん。……わかった」

少し、優花はハジメと話した後、雫の方に振り返る。

「雫。取り敢えず、中に戻ろう」

「わかったわ。でも、光輝達がまだ……」

「あつ、それは大丈夫よ。ほら」

雫の心配に優花は問題ないと言って、アレス達がいた場所に指をさす。雫もそれに連れられてその方向を見ると、アレスも耳につけていた“念話石”のイヤリングでハジメと連絡を取っているようだった。

「天之河君達はアレスさんと一緒に行くと思うから行く？」

「わかったわ」

二人は、一拍おいて頷き合うと急いで艦内へと戻っていった。

そして、雫と優花の二人がブリッジに入った時には、既に全員が集まって中央に置かれていた水晶のようなものを囲んでいた。アレス達は空間魔法で転移したらしい。

「何があつたの？」

「……………ん、優花に雫。なんか帝国兵に追われている人がいるみたい」

尋ねた優花にユエが答える。そのユエが指差した立方体型の水晶には、峡谷の合間を走る数人の兎人族と、その後ろから迫る帝国兵のリアル鬼ごっこが映っていた。

この水晶は、「遠見石」と「遠透石」を生成魔法で付加した水晶で出来ており、外部遠方の映像をブリッジに設置されている水晶に映すことができる、簡単に言えばデイスプレイに画像を映せる望遠鏡である。

二人が、その水晶デイスプレイを覗き込めば、確かに、水の流れていない狭い谷間を兎人族の女性が二人、後ろから迫る帝国兵を気にしながら逃げているようだった。追っている帝国兵のずっと後ろには大型の輸送馬車も数台有って、最初から追つて来たというより、逃がしたのか、あるいは偶然見つけた兎人族を捕まえようとしているように見える。

「どうやら、ハジメ達は、この状況を見てフェルニルの速度を落とすようだ。」

「不味いじゃないか！ 直ぐに助けに行かないと！」

光輝が、案の定、喚き立てた。ここは空の上だというのに今にも飛び出していきそう

だ。しかし、ハジメは急かす光輝には答えず、その眉を寄せて訝しげに水晶ディスプレイを眺めている。

「おい、南雲！ まさか、彼女達を見捨てるつもりじゃないだろうな!? お前が助けられない俺が行く！ 早く降ろしてくれ！」

「シア、こいつらって……」

「へ？……あれっ？ この二人って……」

いきり立つ光輝を無視してシアに声をかけるハジメ。シアも、よりズームされた映像を見て気がついたようだ。

「二人共、何をそんなにのんびりしているんだ！ シアさんは同じ種族だろ！ 何とも思わないのか！」

「すいません、ちよつとうるさいんで黙っててもらえますか？ ……ハジメさん、間違いないです。ラナさんとミナさんです」

「やはりか。……連携の具合が凄かったから俺も覚えちまったんだよな。……こいつらの動き、表情……ふむ」

光輝は、自分の主張をシアにばっさりと切り捨てられて思わず口をつぐむ。ちなみに、光輝がシアを「さん」付けで呼んでいるのは、爽やかな笑顔で自己紹介と共に呼び捨てにしたところ、シアに、呼び捨ては止めると、にこやかにドリユツケンを構えられ

ながら言われてしまったからである。因みにユエもティオも「さん」付けである。

そういうしている内に、逃げていた傭人族の女性二人が倒れ込むようにして足を止めてしまった。谷間の中でも少し開けている場所だ。

それを見て、ハツと正気に戻った光輝がブリッジを出て前部の甲板に出て行こうとする。距離はまだあるが、取り敢えず魔法でも撃つて帝国兵の注意を引くつもりなのでハジメが止めるために呼びかける。

「まあ、待てよ。キラ之河。コイツ等は大丈夫だし、此処から魔法を放ったって意味ねえぞ」

「なつ、何を言っているんだ！　弱い女性が今にも襲われそうなんだぞー！」

キツ！と苛立たしげにハジメを睨む光輝に、しかし、ハジメはニヤリと笑うと、水晶ディスプレイを見ながらどこか面白げな様子で呟いた。

「か弱い？　まさか。あいつらは……「ハウリア」だぞ？」

何を言っているんだ？と、光輝が訝しげな表情をした直後、「あっ！」と誰かが驚愕の声を上げた。光輝が、何事かと水晶ディスプレイに視線を向けると、そこには……首を落とされ、あるいは頭部を矢で正確に射貫かれて絶命する帝国兵の死体の山が映っていた。

「……………え？」

光輝だけでなく、ハウリア族を知らないその場の全員が目点を点にする。その間にも、輸送馬車から離れて兎人族を追っていた部隊が戻ってこない事を訝しんだ後続が、数人を斥候に出した。そして、その斥候部隊が味方の死体の山を見つけ、その中央で肩を寄せ合つて震えている兎人族の女二人に、半ば恫喝するように何かを喚きながら詰め寄つた。

彼等も、普段ならもつと慎重な行動を心がけたのかもしれないが、いきなり味方の惨殺死体の山を目撃した挙句、目の前にいるのは戦闘力皆無の愛玩奴隷。動揺する精神そのままに無警戒に詰め寄つた。詰め寄つてしまった。

斥候の一人が兎人族の女のウサミミを掴もうとした瞬間、どこからか飛来した矢がその男の背後にいた別の斥候の頭部に突き刺さつた。一瞬の痙攣のあと横倒しになつた男の倒れる音に気がついて振り返る斥候。

その前で、恐怖に震えていたはずの兎人族の女が音もなく飛び上がり、いつの間にか手に持っていた小太刀を振るつて、眼前の斥候の首をあつさり落としてしまった。

そして、もう一人の兎人族の女も、地を這うような低姿勢で一気に首を飛ばされ倒れる男の脇を駆け抜け、突然の事態に呆然としていた最後の斥候の首を、これまたあつさり刈り取つてしまった。

まるで玩具のようにポンポンと飛ぶ首に、光輝達が「うつ」と顔を青褪めさせて口元



を押さえる。リリアーナ姫や近衛騎士達は、兎人族が帝国兵を瞬殺するという有り得ない光景に、思わずシアを凝視する。特殊なのはお前だけじゃなかったのか!? と、その目は驚愕に見開かれていた。

「いや、紛れもなく特殊なのは私だけですからね? 私みたいなのがそう何人もいるわけじゃないじゃないですか。彼等のあれは訓練の賜物ですよ。……ハジメさんが施した地獄というのも生温い、訓練によって、あんな感じになったんです」

「……………」

全員の視線が一斉にハジメに向けられる。その目は何より雄弁に物語っていた。すなわち「また、お前か?!」と。ハジメは、「俺は大事なことを教えただけだ」と言うのだが、優花からのチョップが入る。

その間にも事態は最終局面を迎える。後続の輸送馬車と残りの帝国兵達が殺戮現場に辿り着いたのだ。道を塞ぐようにして散らばる味方の変わり果てた姿に足が止まる帝国兵達。

まさか、何事もなかったように死体を踏みつけて先へ進むわけにはいかないし、何より動揺が激しいようでざわめいている。

そして、ハウリア族はその隙を逃さなかった。いや、全ては、その隙を作るための作戦だったのだろう。相手の帝国兵は残り十二名。対して両サイドの崖から飛び出した

ハウリア族は、いつの間にか姿を消していた先程の女性二人を入れてもたったの五名。しかし、帝国兵が、飛び出してきたハウリア族に対して明確な戦闘態勢をとったのは、三人の首が飛び、一人の肩間が矢で撃ち抜かれた後だった。

ハウリア族の猛攻は止まらない。流れる水のように、あるいは群体のように帝国兵に襲いかかる。

一人が正面から小太刀を振るい帝国兵が剣で受け止めた瞬間には、脇から飛び出した別のハウリア族があつと言う間に首を刈る。

帝国兵に正面から飛来する矢。初撃とは比べ物にならないほど遅く山なりに飛んできたそれを、見え透いているとばかりに切り払った瞬間、その帝国兵の矢を追う視線を讀んでいたように、別の兎人族が死角から滑り込んで首を刈る。

雄叫びを上げて迫る帝国兵にも恐れずに影に潜むように背後から突如現れたハウリアに首を刈られる。

右と思えば左から、後ろと思えば正面から、縦横無尽、変幻自在の攻撃に終始翻弄される帝国兵達。彼等の首が余さず飛ぶまで……そう時間はかからなかった。

「こ、これが兎人族だというのか……」

「マジかよ……」

「うさぎコワイ……」

フェルニルのブリッジでそんな戦慄を感じさせる眩きが響く。

「見る限り、大分練度が上がっているじゃねえか。サボってはいなかったようだな。しかし、殺しの許可は確か樹海とかが危ない時にしか許可をしてない筈……」フェアベルゲン「や樹海に何かあったか？……だが、ちとやっぱり詰めが甘いな」

啞然呆然とする光輝達を放ってハジメはシユラーゲンを取り出すと開閉可能な風防の一部を開けて銃口を外に出し立射の姿勢をとった。現場まではまだ五キロメートル程ある。ユエ達以外が目を丸くする中、ハジメは微動だにせずにスツと目を細めた。そして、静かに引き金を引く。

ドパアン!!

炸裂音と共に紅いスパークを纏うシユラーゲンから一条の紅い閃光が空を切り裂いた。そして、ちょうど馬車から飛び出てハウリア達を狙い魔法を発動しようと手を向けた帝国兵の頭蓋を寸分変わらず消滅させた。

小さく息を吐いて、シユラーゲンを肩に担いだハジメに原理を知っていたユエ達とアレス以外の視線が集まる。

「な、なんで分かったんだ」

「南雲君って、エスパー的な力があつたの？」

「驚愕で口が開けないでいる近衛兵の代わりに、龍太郎と鈴が疑問を口にする。」

「物理攻撃なら気付くのは少し遅れたけどな……魔法を使おうとするならば、俺にはわかるんだよ」

そう言つて眼帯を指でちよんちよんと差し示すハジメ。つまり、魔眼石と「遠見」で魔力のうねりを感じしたのだ。そして、龍太郎と鈴の二人が何か言う前にハジメが睨みを入れながら口を開く。

「分かつたろ。特にこの眼帯を俺のファッションだと思つている奴等？」

ビクツ

ハジメの睨みをきいた声に龍太郎と鈴を含めた数人がビクツと体を震わせるも、ハジメは睨んだ後、肩を竦めながら水晶デイスプレイに視線を戻した。

水晶デイスプレイに、驚いたような表情で頭部を消失した伏兵を見ているハウリア族が映つていた。彼等は、すぐさま射線を辿つて空高くを飛ぶフェルニルに気が付く。

普通なら、正体不明の飛行物体と、そこからの攻撃に警戒心をあらわにするものだろうが……次の瞬間には彼等の表情は喜色に彩られていた。

岩陰から飛び出てきたクロスボウを担ぐ少年などはビシッ！と綺麗な敬礼を決めてから片膝を突いている。彼等は紅い閃光を放つた者が誰なのか気がついたようだ。それも、当然といえば当然である。「紅き閃光」は、彼等が敬愛するボスの代名詞のようなものだから……

少年にならって敬礼を決めてから平伏するハウリア族達。水晶ディスプレイにデカデカと映ったその姿に、再びその場の全員がハジメに視線を向けた。今度は、多分に呆れを含んだジト目で。何をしたら温厚の代名詞のような兎人族があんなことになるのだと、光輝達の目が無言の疑問を投げかけていた。

「ハジメさん、ハジメさん。早く、降りましょうよ。樹海の外で、こんな事をしているなんて……もしかしたら樹海に何かあつたんじや……」

「……………ああ、そうだな。アイツ等が殺しをする程だ。何かあつたんだろう」

光輝達のジト目をスルーしてシアがハジメを急かす。ハウリア族は明らかに作戦を練って帝国兵の輸送部隊を狙っていたため、どうやら、樹海の外まで出張って帝国兵を殺すほど、樹海に何かあつたのかと心配なようだ。

ハジメも自分が定めた必要なら殺して守れと言っていたが、それを行っている何か樹海で異変があつたと察してシフェルニルを操って谷間に着陸させた。

ハジメ達が谷間に降りると、そこにはハウリア族以外の亜人族も数多くいた。百人近くいそう。どうやら、輸送馬車の中身は亜人達だったらしい。兎人族以外にも狐人族や犬人族、猫人族、森人族の女子供が大勢いる。みな一樣にハジメ達に対して警戒の目を向けると共に、見たことも聞いたこともない空飛ぶ乗り物に驚愕を隠せないようだ。まさに未知との遭遇である。と、そんな驚愕八割、警戒二割で絶賛混乱中の亜人族達の

中からクロスボウを担いだ少年が颯爽と駆け寄り、ハジメの手前でビシッ！ と背筋を伸ばすと見事な敬礼をしてみせた。

「お久しぶりです、ボス！ 再びお会いできる日を心待ちにしておりました！ まさか、このようなものに乗って登場するとは改めて感服致しますっ！ それと先程のご助力、感謝致しますっ！」

「よお、久しぶりだな。まあ、さつきのは気にするな。お前等なら、多少のダメージを食らう程度でどうにでもできただろうしな。……中々、腕を上げたじゃないか」

ハジメがニヤリと口元に笑みを浮かべてそう言うのと、啞然とする亜人族達の合間からウサミミ少年と同じく駆け寄ってきたウサミミ女性二人と男三人が敬礼を決めつつ、感無量といった感じで瞳をうるうると滲ませ始める。そして、一斉に踵を鳴らして足を揃え直すと見事にハモリながら声を張り上げ平伏する。

「……あ、有り難きっ、幸せっ！……」

谷間に木霊する感動で打ち震えた平伏するハウリア達の声。敬愛するボスに、成長を褒められて涙ぐんでいるが、決して涙は流さず平伏をする。ハジメ、ユエ、シアの三人は平然としているが、背後のティオや優花、光輝達とリリアーナ達はドン引きである。普段冷静なアレスでさえも兎人族の変わり様に片手で両目の目頭を抑えている。

原因のハジメはハウリア達の成長に嬉しくウンウンと頷いていると隣にティオと共

に駆け寄った優花に「聖杭」で今さっきより強烈なチョップが入る。そして、ハジメが頭を抑えて痛みで蹲っている間にシアが話しかける。

「えっと、みんな、久しぶりです！ 元気そうでなによりですう。ところで、父様達はどこですか？ パル君達だけですか？ あと、なんでこんなところで、帝国兵なんて相手に……」

「落ち着いてくれよ。シアねえ。一度に聞かれても答えられないよ？ 取り敢えず、今、ここにいるのは俺達六人だけで色々、事情があるんだ。詳しい話は落ち着ける場所に行つてからにしましょう」

「……分かりました。ですってハジメさん」

「……お、おう。パルも報告ありがとな」

「は、はいっ！」

パルから話を聞いたシアは優花からのお仕置に頭を抑えて蹲るハジメに寄り添う。ハジメもシアから話を聞きながらゆっくりと立ち上がるり、報告をしたパルに頭を撫でる。パルは嬉しそうにウサ耳をピコピコさせる。

「あの……宜しいでしょうか？」

ハジメがパルの頭を撫でているとそう声をかけてきたのは足元まである長く美しい金髪を波打たせたスレンダーな碧眼の美少女だった。耳がスツと長く尖っているので

森人族ということが分かる。

「……」

しかし、どこか、長老のアルフレリックの面影があると、ハジメがそう感じていると。「あなたは、『フェアベルゲンの英雄』南雲ハジメ様で間違いありませんか?」

「ん? 確かに、そうだが……はあ?!」

「「「「「「へ?」」」」」」」

ハジメが頷いていると「英雄」という聞き慣れない言葉に声を上げる。後ろにいた優花達も声が出ない程、驚いている。多少、笑っている者もいるのをハジメは見逃さず、後で仕返しすると誓った。

しかし、そんな状況を気にしてないのか金髪碧眼の森人族の美少女はホツとした様子で胸を撫で下ろした。もつとも、細い両手に金属の手枷がはめられており、非常に痛々しい様子だった。足首にも鎖付きの枷がはめられており、歩く度に擦れて白く滑らかな肌が赤くなつてしまっている。

「では、わたくし達を捕らえて奴隷にするということはないと思つて宜しいですか?」

祖父から、あなたの種族に対する価値観は平等だとそして、心優しい方だと聞いています。決して亜人族を弄ぶような方ではないと……」

「祖父? やっぱりアンタ、アルフレリックの孫か?」



「はい、その通りです。申し遅れましたが、わたくしは、フェアベルゲン長老衆の一人アルフレリックの孫娘アルテナ・ハイピストと申します」

「長老の孫娘が捕まるって……どうやら本当に色々あったみたいだな」

長老の孫娘となればやっぱり長老の孫娘と言えば紛れもなく森人族のお姫様ということであり、当然、その警護やいざという時の逃走経路・方法もしっかり確立してあるはずだ。それらを使用することもなく、あるいは使用しても捕まってしまったと言うなら、それだけ逼迫した事態に晒されたということだろう。ハジメは一瞬、クソ神共の仕業かと考えたが、状況的に無いと判断した。

ハジメは考えながら顔をしかめて、益々、パル達から詳しい話を聞く必要があるなど判断して視線を鋭くする。

「ん?」

その様子を、なぜかジツと見ていたアルテナの視線を感じるのだが今はそれどころじゃないと無視して、パル達に声をかける。

「おい、お前等。亜人達をまとめて付いてこさせろ。ついでだ。樹海まで送る」

「はっ! あっ、申し訳ないんですが、ボス。帝都近郊に潜んでいるネア達や仲間に連絡をするので、途中で離脱させて頂いてもよろしいですか?」

「ああ、それならちょうど、こっちも帝都に送る予定だった奴等がいるから、帝都から少

し離れた場所で一緒に降ろしてやるよ」

「有難うございますっ！」

ハジメはパルの連絡という言葉聞いてある正解に近いと思われる推測がたった。

「あー……そう言うことか、お前等がいる此処に訳は」

現在、ハジメ達がいるのは帝都のかなり手前の位置だ。そんな場所で亜人族達の輸送馬車があったということは、この輸送は樹海から帝都へ行くものではなく、帝都から他の場所へ向かう途中だったということだ。つまり、パル達は帝都に何らかの情報収集をしに行つて、輸送の話を知り、追いかけてきたということだろう。

亜人族達が、パル達に言われ不安そうにおずおずと歩き始めた。それを見て、ハジメ達もフェルニルに戻る。と、その時、ハジメの近くで「きゃー！」と可愛らしい悲鳴が上がりその瞬間、背中に何かを感じた。

「んっ！」

後ろを見るとアルテナが、足枷の鎖のせいで躓いたようだ。わたわたと両手が宙をかき、咄嗟に、近くにあつたもの——すなわちハジメの背中にしがみついたと理解する。

そして、更に後ろにいた亜人族達が一瞬で青褪めて硬直していた。ハジメには何故、顔を青くするのか分かり、帝国に対する怒りが増す。

「……………」

これが、帝国兵相手だったなら、支え代わりにした瞬間、平手でも飛んでくるところだ。「なに許可なく触ってんだ、薄汚い獣風情がつ！」とか何とか怒鳴りながら。なので、アルテナもそうされるのではないかと、亜人達は殴られる姿を幻視したのだろう。「……………たくつ」

ハジメは肩越しに振り返り、自分の視線にビクツと身を竦ませたアルテナの手と足の枷を見る。

「あー、そりや歩きにくいわな。気付かんくてスマン」

ハジメはアルテナに着けられている枷の状態を“構造把握”で理解した後に納得し、スツとアルテナの前に跪く。その事に、亜人族達がざわつと動揺したように騒めくがハジメはスルーする。

「あ、あの…………」

「いいから、ジツとしてろ」

いきなり跪かれて動揺するアルテナだったが、次ぐ、ハジメの行為に更に動揺が激しくなった。というのも、ハジメがアルテナの足に触れたからだ。まあ、正確には足枷だが、ビクンツと震えるアルテナ。未だかつて、男に跪かれた挙句足に触れられたことなどないのだろう、動揺のあまり硬直しつつも目が泳ぎまくっている。ハジメは内心申し訳ないと思いつつも、足枷に魔力を込める。すると次の瞬間には、アルテナは驚きで目

が丸くなった。それは、紅い魔力光が迸ったと思つたら、音もなく足枷が外れたからだ。「よし……後これもな」

ハジメは立ち上がって、今度はアルテナの両手を持つ。その時点で、ハジメが何をしているのか理解したのかアルテナは少し落ち着きを取り戻していた。そして、ハジメは魔力を込める。すると、目を奪われていたのかハジメの魔力を見ていたアルテナが音になるかならないかというほど小さな声で「綺麗……」と呟いていた。

その声に当のハジメも同意する。それは最近、魔力が更に研ぎ澄まされてきているのか、以前より鮮やかになってきているからだ。

「そして……これが、最後だな」

ハジメは直ぐに外された手枷を放り捨てて、最後にアルテナの首筋に触れる。奴隷用の首輪が着けられているからだ。真剣な眼差しで、自分の首筋に手を這わせる。

「ん？」

なぜかアルテナの頬が熱を持った視線を感じるがハジメは無視してあっさり首輪を外す。

「これで歩ける筈だ。後、それと……パル」

「はいっ。なんででしょうかボス？」

ハジメはアルテナを枷を全て外した後、片手で傍らにあった石を錬成して作った「鍵

“を投げ渡す。

「パル。それは、俺が『構造把握』で調べて作った。その枷や首輪の鍵だ。アルテナみたいに躓いてしまつて怪我をする奴が出るかもしれないねえからな全員解いてやつてくれでも、外す時は慎重にやれよ」

こんだけの数の枷に首輪だ。大体同じものでいける筈だろう。とハジメは考えた。もし、違ったのなら新しく作れば良いことだと。

「はっ。了解です！」

ハジメの命令に従い、パルは枷と首輪が着いている亜人達を一人一人と慎重に解放させていく。それを見た俺は納得すると、何事もなかったようにくるりと踵を返す。

「？」

すると、妙にまた違った視線が幾つか自分に集まっていることに気がつき、其処へ視線を移す。

其処には、亜人族達は、不思議な者を見るような救世主を見るようなキラキラした目で、パル達ハウリアは誇らしげに、光輝はどこか複雑そうに。

そして……

優花達女性陣は、呆れと鋭さの両方を含んだ眼差しで、ハジメは、若干たじろぎながら「何だよ？」と尋ねる。

しかし、それに対して、俺の傍にいる若干頬を染めるアルテナの姿をチラリと見た女性陣の反応は……

「……別に（じゃ）（ですう）」

何とも冷たいものであった……。

## 七十九話

## 樹海での戦い

ハジメが錬成した鍵によつて全ての枷を外された亜人達が、飛空艇フェルニルに度肝を抜かれながらも物珍しげにあちこちを探検しているころ、ハジメ達はブリッジにてパール達ハウリアの話聞いていた。

ハジメは腕を組ながらパールに問いかける。

「それで？、何故こんなところまで出張つたんだ？ それに、アルフレリックの孫娘が奪われたとしたら、フェアベルゲンまで帝国の手が伸びたんだろう？」

「肯定です、ボス」

ハジメの質問にパールは背筋を伸ばして答えていく。

何故、ハジメはパールに話を聞いているかと言うと、自分達が樹海から離れる際に数人の小隊を作っていた方が良いと考え、その時に抜擢されたハウリアの一人が俺の目の前にいるパールだ。歳は十歳の子供だが、十歳と思えない程の指揮能力や気概を見せ、訓練の際に確認した。後方支援の要領の良さ、分析が出来ることから抜擢したのだ。

「それは、本当なのですか？ 帝国はどうやって樹海の霧を攻略をしたのですか？」

思わず、といった感じで疑問を口にしたのはリリアーナだった。まあ、聞くからに帝国が王国に隠れて力を得ているなら由々しき事態だろう。

「……………」

「あ、あの……………」

パルはリリアーナのことを案じて無視をするが、後ろの近衛兵達が殺気を放ってきた。どうやら、何故亜人風情がリリアーナの言葉を無視するなっで感じらしい。ハジメは溜息と共に片手でパルに喋っても良いと合図す。

「……………ボス良いのですか？」

ハジメの指示に、パルは頷きながら確認を取る。ハジメはそれを了承すると、近衛兵達限定に「威圧」を発動しながらリリアーナに視点を転じる。

「ああ、構わない。後、リリイ？」

「は、はい。どうしましたか？　ハジメさん？」

ハジメの呼びかけにリリアーナは反応し、ハジメの方へと視線を転じる。

「あんま、キツイことは言いたくないが、まだ世界の常識が変わってない今、一国の王女が不用意に亜人に話しかけると周りが騒がしくなる。パルもそれを考慮して無視をしたんだ。わかってくれ」

「うっ……………そう、ですね。要らぬ口を挟みました」



リリイはそう言ってシヨボンとしながら頭を下げる。そんな様子にハジメは苦笑いしながらも、そのまま近衛兵達の方へと睨みつける。

「そういうことだ。アンタ等もリリイを守る為とはいえ、そんな殺気をぶつけんな」

「……ッ、了解した」

ハジメがそう言うのと、近衛達の指揮と呼べる男が応答するも、その表情は嫌悪感を顕にしているのがよくわかり、ハジメは呆れて溜息をした。

「はあ……」

リリアーナもそうだったが王国は帝国とは違うも亜人に対しては差別意識があるのはわかる。が、変に亜人のすることに対して敏感になるのをやめて欲しいとハジメは思う。

「よし、パル話してくれ」

「了解です……事の始まりは魔人族の襲撃からでした」

パルはハジメの呼びかけに反応して、少し思索しながらポツポツと事の出来事を話していく。

「なるほどな……やっぱ魔人族は帝国と樹海にも手を出していたか」

「肯定です。帝国の詳細は分かりませんが、樹海の方は強力な魔物の群れや魔人族の兵隊が来ましたがあらかじめ作っておいたトラップ地帯に誘導できなければ、俺達もヤバ

かったです」

パル達曰く、樹海にも魔人族が魔物を引き連れてやって来たらしい。「ハルツィナ樹海」は大迷宮の一つとして名が通っているからフリードのように神代魔法の獲得を狙っている以上当たり前と言えば当たり前だ。

当然、樹海に侵入した魔人族達を、フェアベルゲンの戦士達が許すはずもなく、最大戦力をもって駆逐しに向かった。しかし、亜人族と樹海の魔物以外は感覚を狂わされ、視界を閉ざされる濃霧の中でなら楽に勝てると思われる当初の予想は、あっさり裏切られることになる。魔人族はともかく、引き連れた魔物達は、樹海の中でも十全の戦闘力を発揮したのだ。ほとんどの魔物が昆虫型の見たこともない魔物だったらしく、その固有魔法も多彩かつ厄介でフェアベルゲンの戦士達は次々と返り討ちにあつてその命を散らしていった。

その魔人族は、瀕死状態の亜人族に、かつてのハジメと同じく「大迷宮の入口はどこだ？」と聞いて回つたらしい。しかし、彼等が敵に情報を教えるわけもなく、また、そもそも知らないこともあり、魔人族は、ならば長老衆に聞けばいいとフェアベルゲンに向かつて進撃を始めたのだそうだ。

余りに強力な魔物の軍勢に、同胞を守るためにもフェアベルゲンの長老会議は、大樹の情報を教えることにした。紛争を避ける為に。自分達にとつて大樹も本当の大迷宮

も大して価値のあるものではないのだから、と。

しかし、同じ大迷宮を求める者でも、ハジメとその魔人族では決定的に違う点があった。それは亜人族に対する価値観だ。その魔人族も例に漏れず、いや、むしろ一般的な差別意識を通り越して、亜人族に対して憎悪すら抱いている程だったのだ。

曰く、この世界は魔人族によつて繁栄していくべきであり、神から見放された半端者の獣風情が国を築いているという時点で耐え難い屈辱だということらしい。その表情は自らの神を信望する狂信者のそれだったという。

そして、その魔人族は、その思いのままフェアベルゲンに牙を剥いた。大迷宮に行く前に亜人共を狩り尽くしてやる、と。

亜人族は死を覚悟した。しかし、その時だった。俺の為に大樹の周りを守備に回っていたハウリアが参戦した。

——アルフレリックッ！ 我等も手を貸そうッ！

そして、一気に状況を魔人族の勢いを覆したという。参戦したハウリア達は、まずフェアベルゲンの外側から各個撃破で魔物達を仕留めていったらしい。魔物達の動きと固有魔法を実地で確かめて戦略に組み込むためだ。ハウリア族が強くなったといつても、それは自らの種族の特性を上手く扱えるようになったというのと、精神が戦闘を忌避しなくなったというだけで、劇的にスペックが上がったわけではない。なので、未

知の敵と正面から戦うような愚は決して犯さなかったのだ。

相手を決死の覚悟が必要な難敵と定めて、闇討ち、不意打ち、騙し討ち、ハツタリと使えるものは何でも使つて確実に情報を集めた。

そして、配置が終わつたチエスのように、一齐に攻勢に出たのである。濃霧の効果がなくとも、兎人族本来の巧みな気配操作によつて確実に魔物を仕留めていった。

そのうち配下の魔物がいつの間にか相当減つていることに気がついた魔人族が、魔物を集め始めた。各個撃破が出来なくなつたハウリア達は自分達を囮にして、今度は新たな集落の周囲に設置しまくつたトラップ地帯に誘導を開始した。

そして、何とかハウリア族が戦っている間に戦線に復帰したフェアベルゲンの戦士達と協力して、魔人族の殲滅に成功したという。しかし、事態はそれだけでは終わらなかつた。ハウリアの参戦により窮地を救われたフェアベルゲンだったが、その被害は甚大だった。とても樹海の警備に人を回せるような余裕はなく、復興と死者の弔い、負傷者の看病で手一杯だった。

そして、その隙を突くように、今度は帝国兵が樹海へと侵入してきたのである。

ハウリアも警備に当たつてたが突然のことに驚くも侵入してくる帝国兵と相對したらしい。

「……帝国の目的は人攫いか？」



ていた。

「クソツ……魔人族の後に攻めるなど。帝国めっ」

そう苦言を吐き捨てるのは一度ハウリア達とハジメに仕掛けた熊人族のレギンだった。

レギンはあの件から神水で回復した族長のジンと共にハウリア達に謝り他の族長達のように良好な関係を築いていた。レギンは帝国兵達を抑える為にフェアベルゲンの戦士達に鼓舞するように声を上げる。

「樹海の戦士達よっ！ 帝国兵を族長やハウリア達が抑えていている。 なら、俺達も絶対に帝国兵をフェアベルゲンに通すな！」

「『『『『『おほおほ!!』』』』』」

レギンの掛け声に戦士達は雄叫びを上げる。

しかし、そんな時だった。

「?」

ドゴオオオン!

大きい何かがレギン達の横をもの凄い速さで横切り、そのまま、樹木に大きな音をたて激突する。

「……………ッ、何が起こつ……………なっ?!」

レギンは自分達に横切った何かを確認する為に樹木の方へ駆け寄り、その何かを見て驚愕する。

「ぐっ……………」

「族長?!」

それは、熊人族の族長のジンだった。

「……………ッ! 族長! 一体何が?!」

「……………お、前達……………逃げろ」

ジンを支えながら叫ぶレギンにジンは薄目で片目を上げながら逃げろと言う。しかし、レギンはジンの言ってる意味が分からず、再度問いかけようとした時だった。

「族長! 一体何……………「がはっ」…が」

レギンが言い切る前に自分の傍まで吹っ飛ばされていたのはハウリアの一人だった。レギンはそのハウリアの姿を見て、一瞬で脳全体からヤバイと判断する。

そして、二人を吹っ飛ばされた地点に目を向けると、其処には……………。

「……………ッ、なんなのよ! この帝国兵」

「ネアッ! 余り其奴に近寄るな!

シアンが吹っ飛ばされたんだ!

普通の帝

国兵じゃない!」

「G a a a a a a a a a a!」

ハウリアが二人がかりでも苦い顔をしてしまう程に奇声を発せながら圧倒していた。帝国兵がいた。服装も普通の帝国兵よりも軽装である筈なのに、動きが人間離れしていた。そして、よく見ると、後方からも同じような帝国兵達が二十人程いて、全てハウリア達が対処に回っていた。

「何だ?! コイツ?!」

「余所見をしないで、殺られるわよっ!」

「クソツ、何で俺の気配に気付いたんだ!」

「族長! コイツ等、私達の気配遮断が効いてません!」

ハウリア達は自分達より力が強く、動きが尋常に速く、切り裂こうとしても刃が余り通らない硬い肉体を持ち、ハウリアにとってアドバンテージである「気配遮断」が効かない。脅威の力を持つ帝国兵達に苦言を呈す。

一人のハウリアが族長であるカムに声を上げるがカムそれぞれどころではなかった。

「ムツ、流石に二対一だとキツイな……」

「G a a a a a!」

カムは他のハウリアより前線に立ち、ヤバイ帝国兵二人と相對していた。帝国兵は連携などはせずに野生の獣のようにその脅威なパワーでカムに突貫する。

「……………」



突貫する帝国兵達にカムは冷静に攻撃を的確に避けて行きながら小太刀を使って帝国兵達を切り裂いていく。だが、皮膚に刃が通らずに薄く切れただけでありノーダメージに近いものでカムは舌打ちしながら後退をする。

「……………」

（何だ、あの帝国兵は動きや耐久力を見る限り、人間ではない。簡単に言えば “我等に近い何か” か？）

カムはそのまま、帝国兵達と戦いながら、この異様な帝国兵達の考察をしていく。これはハジメの教えの一つであり戦いながらも相手の動きや技を考察しろという教え守っているからだ。

「なっ、数がっ?!」

しかし、考察に頭を使い過ぎていたのか、自分を狙う帝国兵達の数が増えていることに動揺するも、すぐさま、気を取り直し冷静さを取り戻す。

「ッ、囲まれた?!」

冷静さを取り戻したカムだが、帝国兵達はカムを狙って四方から囲むように襲ってくる。カムは咄嗟に地面の土を握り締め、帝国兵達の目を狙って周りに飛ばす。

「[[[[Guggya?!]]]]」

帝国兵達の目に土が入り、目を抑えてる内にカムは “気配遮断” を駆使して、この場

を脱する。そして、すぐさま帝国兵達の方へと振り返り構えを取りつつも安堵の息を漏らす。

「ふう……………」

しかし、状況は変わらない。異様な強さを持つ帝国兵達のせいで自分達の置かれている状況はま危ない。それに、もしかしたらと別働隊の帝国兵がフェアベルゲンに侵入したかもしれない。

「クソツ……………」

カムは悪態をつくも、フェアベルゲンの心配は後に回し、今はあの帝国兵達をどうにかしないかと策を巡らす。

「……………」

(奴等は連携が出来ずにただ、目の前の敵をなりふり構わず狙うだけだな……………ならっ)

カムはある策を思いつくと、帝国兵達と相對してるハウリア達、後方支援に回っているハウリア達を呼びかける。

「前線組は帝国兵達をB―2のポイントに誘導！ 後方支援組は畏の 準備と強化を

！ 安心しろっ その帝国兵は知能がないから誘導がしやすいっ」

「……………了解！……………」

カムの掛け声に帝国兵と相對していたハウリア達は応答と共に行動を開始をする

……。

そして、案の定。カムの予想通り帝国兵達はまんまと誘導されて、其処のポイントにあつた罠と後方支援組が更に用意した罠に引つ掛かり、ダメージを与えていく。

「今だ！ 皆よつ狩るぞつ！」

「……了解！」

今がチャンスと踏んだカムは近接が得意なハウリア達と共にどんどん罠に掛かり動けずにいる帝国兵達の首から上を跳ね飛ばして借り尽くした。

~~~~~

「……………と云うことです」

「……そうか」

ハジメはパルの話を聞き、帝国の悪辣さに怒りを覚えて目を細める。

「だが、何で亜人達が攫われた？ いや、待てつ。話を聞く限り、その帝国兵達が囮としたら……」

「肯定です。アイツ等、あの帝国兵はただの囮で別働隊がいました。そして、奴等、樹海の特徴をクリア出来ないからって、とんでもない力押しで攻めて来ました」

「力押し？」

怪訝なハジメに合わせて、先程質問したりリアーナが身を乗り出して、耳を傾ける。

「はい、ボス。奴等、樹海が感覚を狂わせるなら、フェアベルゲンが確認出来る場所まで、樹海を燃やしてなくせばいいって、発送に至ったんですよ」

「なっ、樹海に火を放ったのですか?!」

「……外道が」

思わず声を上げるリアーナ。それにハジメの後ろに立っていたアレスも流石に帝国の所業に嫌悪感を顕にしながら悪態をつく。

「パルはチラリとリアーナとアレスを見やって頷く。」

「俺達も急いでと戻りましたが、駆け付けた時には、戦士達も魔族とあの帝国兵達のせいで戦う事ができませんでしたから碌に抵抗が出来なかったようです」

「ハジメはパルの言葉を聞いて、ポツリと言葉を漏らす。」

「……………それなら回避が出来ねえよな」

まさか、魔族が侵攻直後のタイミングで、前代未聞の方法でやって来るのは誰も流石に予想は出来るわけない。しかし、ふと思う。ハジメは何故、帝国がここまで大胆に行動を出たのか気になってしまう。

「……………まで大胆なやり方……………なあアレス？」

「帝国は此処までするような国が?」

ハジメは五年も身を隠していて情報を集めていたらしいアレスに聞いてるみことに

した。

「……そうですね。これは私なりの見解ですが、帝国は此処まで行動するとしたら……  
「帝国にも何があつた訳か？」……はい。私の見解ですが」

アレスの見解により、帝国に何かあつたと予想し、パルに問いかける。

「どうなんだパル？」

「ボスと其処のお兄さんの言う通りです。偵察部隊から幾人か普通の帝国兵をさらつて、尋問した結果、どうやら帝国でも強力がつ未知の魔物が大暴れしたようです。帝都でも相応の被害が出たようです。アイツ等『消費した労働力を補填する必要がある』なんて言つてやがりました」

吐き捨てるような言葉に誰もが息を呑み、ハジメと後ろにいるアレスは目を細めていく。

「そ、そんな」

そんな言葉を口にしたのはリリアーナだった。かなり動揺していた。それもそうだろう。これから支援を含めて協議しようとか向かっていた先が同様に襲撃にあい、無茶をしてまで、労働力に努めている状況だから。

しかし、パルの話を聞くと、帝国が攫つたのは労働力としては使えないと思うハウリア以外の兎人族達も攫われた聞き、内心舌打ちしながら一つ溜息を吐く。

「なるほどな……労働力の確保とか言ってる割にゲスの欲望が透けて見える」

「ええ……胸糞の悪い話です」

愛玩奴隷として認識される兎人族が帝国でどんな末路を辿るかは自明の理だ。

「……カムはどうした？」

「族長なら仲間を数人率いて、亜人達の救出に……」

「えっ？」

パルの答えにシアが声を上げる。

パルの話だと、カムはパル達やほとんどのハウリアを警備に残しアルフレリックなどの族長達に亜人達を救出に向かうと言伝を入れて、自分が選出した少数の精鋭部隊を率いて帝都へと向かったらしい。しかし、帝都に到着して、都内に入った頃から、連絡が途絶えたと言う。伝令役との待ち合わせ場所に誰一人も現れなかったからだ。

——カム達に何か起きた。

そう考えたハウリアと族長達は、もはやじつとしてはいられないと、更に選抜した部隊を——パル達を送り出したという。

パルの話を聞いて、一同が沈黙する。

ハジメは頭をガリガリと掻きながら、席から立ち上がる。

「まあ、大体の事情は分かった。取り敢えずお前達は引き続きカム達の情報を集めんだ

ろ?」

「肯定です。ですから…「わかつてる。俺達が亜人族達を樹海に戻す」……!」

「ボス、ありがとうございますっ!」

パル達が一斉に頭を下げる。

「……………」

そんなパル達の様子をシアは何かモゴモゴと言いたそうなことに気付き、何が言いたいかハジメは察するが今は亜人達のことなど色々しないといけないので自分の口から言うまで待つことにした。

~~~~~

「パル」

ハジメはパル達に樹海に残るハウリアから伝言を預かった後、個人的に聞きたいことをパルに聞く。

「お前達が戦った異様な帝国兵のことを知りたい。何か情報を掴んでるか?」

ハジメの質問にパルは聞いた情報を思い出しているのかウーンと腕を組ながらウサ耳をパタパタさせ、思い出したのかウサ耳をピンツと立つと口を開く。

「そうですね……………あの帝国兵は俺は後方支援でしたがアレは人間とは思えませんでした。なんだろう……………理性が外れた獣人みたいな……………」

「獣人ね……………その他は？」

「他に……………あつ、尋問した。帝国兵にあの帝国兵のことを聞いたんですがアイツ等もあんなのが居るのは知らなかったらしいです」

「知らない……………か」

尋問されてる辺り、嘘だと思えない。ハジメはその帝国兵は本当に知らないだろうと判断する。

「はい。後、こう言っていましたね自分達はただ『バイアス様』の指揮の元で動いた。と」  
「……………そうか、パル情報ありがとな。引き止めて悪かったな」

バイアス様。ハジメはその名を聞いたことないが、帝国でも上層部分の位置に居る奴だろう。アレス辺りに後で聞いてみるとハジメは良いと考えた。情報を聞いたハジメはパルに引き止めてしまったことに謝る。

「いえっ、ボスの役に立てたのなら光栄ですっ！」

「そ、そうか……………」

パルは引き止めたことに嫌がらず逆に嬉しそうにしていたことにハジメは乾いたような苦笑いする。



そして、ハジメは、ハル達を別れた後、帝都から少し離れた位置にリリイ達と近衛兵達を降ろしてから、ハジメ達一行は「ハルツイナ樹海」へと向かったのだ……。

八十話  
フェアベルゲンへ

遠目に「ハルツイナ樹海」が見えてきた時、其処に残されていた爪痕を見て、誰もが思わずといった様子で息を呑んだ。

帝国から再短距離で飛んできた為か帝国軍が樹海に進軍したルートと被ったらしく、彼等の強引極まりない進軍経路がまざまざと残されていた。

「こりやあ……」

「……酷いわね」

「自然軽視の考えは、少々考えるものがあるのう」

「同感ですね」

ハジメは「フェルニル」から見た樹海の姿に口元を歪めた。帝国が進軍したであろう経路は炭化し、黒く染まった道筋。幅非百メートル超のブラックロードが樹海の負った傷のように奥へと続いていた。

一応、延焼はしないように配慮したようだが、其処にあつた動植物が根こそぎ灰燼に帰している様子で、優花やテイオ、アレスが表情を歪めていた。

そして、良い思い出があったか分からないが生まれ故郷の光景を見たシアはウサ耳をしょんぼりとへたれさせた。その様子を見て傍らにいたユエが心配そうに、そつとシアの手を握っていた。

ハジメは水晶ディスプレイで更に奥の方を見て、ある事に気付き口を開く。

「フェアベルゲン自体が露出しちまつている訳じゃないみてえだな。奥地の方は、木々が燃やされても、霧は充満してるみたいだ」

ハジメはそう言いながら見ていた水晶ディスプレイを全員に見えるように拡大して流す。

すると、ハジメの言葉に、そろそろ樹海に到着と言われてブリッジにやって来ていたアルテナが答えた。

「はい。疲弊していたとはいえ、流石にフェアベルゲンに直接手がかかるまで気付かなかった訳ではありません。少数の戦士達が迎撃に出た時点で彼等は火を放つのをやめたのです。おそらく、攫うつもり私達が炎に巻かれて死んでしまうのを避けるためでしょう」

「なるほどな。でも、パルの話だと、フェアベルゲンまで進軍されただろ？距離的にどれくらいあるか分からねえが、連中、よく“狂化”帝国兵達も連れていきながら辿り着けたな」

因みに、「狂化」帝国兵はパルが話していた。言語能力や知能面が失つてゐる代わりに強大なステータスの可能性がある帝国兵のことだ。

「数日前の魔人族との戦いの跡がフェアベルゲンまで続いてましたから。それを迎れば迷いようがありません。彼等も途中で気付いたのでしよう。フェアベルゲンの現状に」  
「泣きつ面に蜂だなあ……」

アルテナの話だと、どうやら、「フェアベルゲン」周辺まで燃やし尽くされた訳では無いらしいな……。

アルテナと話をした後、ハジメは、生い茂った樹海の木々で上からでは都の場所が特定出来ないことと、勘で下降したりして、下手に亜人族達を警戒させて騒動になるのを避ける為に横着せずに炭化した場所の霧がかつてる手前辺りに着陸させた。

タラップが下り、ハジメ達に引き続いて捕らわれていた亜人達も恐る恐る降りていき、表情は喜びながらも樹海に刻まれた足下の傷跡を見て悲しそうな眼差しを向けるのを見て、ハジメは言葉にはしなかつたが同情してしまふ。

「……………」

そんな彼等を見てか、光輝の奴が帝国への憤りを見せていた。龍太郎や雫、鈴も同じだった。

「はあ……………」

憤りを見せてたって、出来なければ意味ねえだろ。とハジメは思いつつ、そんな光輝達を尻目に溜息を吐いてから、この場所をどうにか出来る人物を呼ぶ。

「優花、頼めるか？」

「ん？ ああ、そういうことね」

優花はハジメの意思が伝わったのか説明せずとも、すぐに分かり了承する。流石は優花は俺の恋人、と感嘆する。

ハジメの意思がわかった優花は“天使化”を発動する。すると、髪色が銀髪になり、純白の美しい天使の翼が勢い良く広がる。

ハジメのメンバー達はその姿に慣れたので平然としているのだが、光輝達は初めて見る訳じゃないがその姿に息を呑み、亜人族達は目を丸くして驚いていた。

まあ、それもそうだろう。いきなり、少女の髪色が変わって、翼が生えるのだから。そして、ハジメは“天使化”した優花に話しかける。

「じゃあ、優花。この範囲を再生魔法でババ〜ンとやってやれ」

「ちよつと待って、ハジメ」

「ん？」

ハジメは優花に再生魔法で炭化した場所を再生して貰おうしたが優花に待ったが入り、首を傾げる。

「えっと、再生魔法も良いけど、使ってみたい天性魔法があるからそっち使ってみても良いわ。」

「でも、何でだ？」

「えっと、それに『絶象』だと、すぐに再生しちやって戦闘の痕跡まで消しちやって都までの道のりが分からないでしょ？」

「……流石、優花」

「でしよう〜」

「ああ……すっかり頭から抜けてたわ」

ハジメは『絶象』だとすぐに再生させちまって痕跡を辿ることが出来ねいことを頭が抜けていたことに、優花の指摘で思い出す。

「じゃあ、優花？ 天性魔法には丁度良い魔法があったのか？」

「うん、任せて」

ハジメは此方を振り向いて頷く優花に笑みを向けながら返すように頷く。

そして優花は目を閉じながら両手を天へと掲げる。

「——『天使の涙』遅延！」

それは、神代魔法と同レベルと思えるほどの聖属性の魔法が展開された。

優花の白の魔力に銀の煌めきが混じり美しさを増した魔力が、無数の波紋と

なって駆け巡る。傷付いた大地に染み渡っていく魔力の光。ゆらりゆらりと燐光が立ち昇っていき大きな翼を広げていく様は神秘的で息を呑む程美しい。

「ふう……終わったわ」

魔法を唱え、〃天使化〃を解いた優花は息を整えながら終わったことを伝える。

「えっ、でもまだ木が……」

この場に居る全員が息を呑んで沈黙する中、それを破るように口を開いたのは光輝だった。ハジメ達は優花が何をしたか分かったが、光輝達や亜人達には何をしたのか分かっていないらしい。

「炭化した場所とかよく見ろよ。天-之-河」

「は？ なん……?!」

ハジメは優花の魔法の効果にわかってない天-之-河に指でクイツと炭化した場所を指す。光輝も疑問顔でハジメの指した方へ視線を移すと目を見開く。それに続いて、雫達もその場所を見る。

其処には……

「……………」

「嘘……………」

「マジかよ」

「うわあ、草や花が生えてきて、木とかも勝手にくつついてきてる」

光輝達が見たのは、ゆっくりした速度だが炭化した大地から新しい命が芽生え、折れた木などはどんどん元に戻ろうと勝手に繋がっていき、大地の緑が遅くあるが元通りになっていく光景だった。

その光景を見た亜人達は目を見開いて硬直し、光輝は絶句し、雫などは驚きの余り声を漏らす。

「初めて使ったけど、うん。成功してるわ」

優花も初めて使う魔法だったが成功していると分かれると安堵の息を漏らした。

すると自分達の故郷が元に戻してくれるようにしてくれたおかげで警戒心が消えたのか亜人族の子供が数人、

「お姉さん、凄いい！」

「お姉さんって、天使様？」

「ねえねえっ！ もっかいアレ見せてっ！ パアッて！」

「私も！ 私も！」

と声をかけながら、優花に駆け寄ってくる。そんな子供達の様子に優花は嬉しそうに頬を緩め子供達と目を合わせる為にしゃがみ込む。

「フフ、ありがとう」



そして、優花は子供達が元気になったのが嬉しくかったのか笑みを浮かべながら子供達の頭を撫でていた。

「……可愛え……んんっ」

そんな優花の笑顔にハジメは心音が高鳴ってしまいが此処で長く過ぐすと痕跡も自然が再生されて無くなってしまふから気を取り直してこの場に居る全員に聞こえるように声を上げる。

「お前等々、そろそろ行かないと痕跡が消えちまふから早く行くぞおー。後、念の為にシア、先導を頼む」

「お任せあれですう」

ハジメはシアが優花の魔法で樹海が少し戻ったおかげか少し元気になっていたのを安心してから、ティオに視線を向ける。

「ティオ。すまねえがお前も樹海の影響が受けねえと思うし、天之河達の先導にあたってくれないか？」

「ムツ……：しょうがないのう。妾の愛しのご主人様の頼みじゃ」

「ありがとな。ティオ」

頼みを引き受けてくれたティオにハジメは彼女の頬をそつと撫でるとティオは嬉しそうに目を細める。

「フフ、もう少し撫でてたもう〜」

そう言つて、テイオはハジメに甘えてくるが時間が無いので、少しだけにしてハジメはシアの方へ向かった。

テイオは離れていったハジメをしようがなさそうに表情で見つめながらも困つたような笑みを浮かばせていた。

「フフ、ホントにご主人様は心配性じやのう〜。いや、優花達のところでは“ツンデレ”と言うのじゃったかの？」

テイオは、ハジメが何故、光輝達の先導役を自分を選んだのか分かつているため苦笑いしていた。

「あの、テイオさん……」

すると、後ろから声が聞こえテイオが振り返ると少し思うところがあるのか眉を顰め少し俯いた様子の光輝がいた。

「光輝よ。そんな顔してどうしたのじゃ？」

「あの、何で……」

「そんな事より、妾達もご主人様達に着いていくぞ。安心するのじゃ。樹海の魔物ぐらいは妾達でも余裕じやろう」

「いえ、そうじゃなくて……」

「うむ、違ったのか……ではどうしたのじゃ？」

テイオは光輝が話しかけた理由が戦力的な問題じゃないと分かると話しかける理由はなんなのかと扇子で口元を仰ぎながら首を傾げる。

すると、光輝が元気なさげな感じで疑問を呈した。

「俺には分からないんです。どうして貴女みたいな人が南雲なんかの奴と旅の同行なんかを……それに、恋人って……」

光輝は疑問だった。ユエやシアもそうだが、何故、奴を……召喚される前までは「不良」だって言われていた南雲なんかを信頼しているのか、何であんな美女、美少女達はあんな「人殺し」も躊躇わないような奴の傍にいるのか？と。

そして、自分の目の前にいるテイオもそうだ。強く、美しい容姿でありながら、聞けば、太古の昔に滅んだと言われる「竜人族」生き残りらしい。だから、光輝が分からなかった。何故、そんな人も南雲の奴なんかを信頼して、好意を抱いているのか。そんな凄い人なら「勇者」である自分の傍にいるべきではないかと……。

そんなハジメに対して毒を吐く光輝に、テイオは……

「……全くお主という者は、主人様のことを全く分かっていないのじゃな？」

目の前にいる相手を怖気付かせる程の冷酷な視線を光輝に向けていた。

「え？ 分かってないってどう……」「それを見つけないのは妾じゃなくてお主じゃろ

「?」……………」

ティオは光輝の言葉を遮りながら光輝に背を向けて、雫達がいる方へと歩を進める。

「ちよつ、ティオさん! まだ、話がっ!」

「話はもう終わりじゃ。ほら、雫達も待たせておるし、先に向かったご主人様達を待たせとしないのじゃ」

光輝は話がまだ終わってないとティオの肩を掴もうとするがティオはさらりと横に避ける。そしてティオはそんな光輝を尻目に言いたい事だけ言っただけ何事もなかったように歩き出して行っただ。

「クソツ…なんでなんだよ…なんでだ…」

分からない…:…:…:そんな表情をしながら光輝はドス黒い感情を抱きながら拳を握りしめ誰にも聞こえない程度の声量で呟いた。

そして、一行は濃霧の奥地へと進み出したのだった。

ハジメとユエが前に訪れたのは二ヶ月程前のことだ。その時よりも強くなった自信はあるし、修得した神代魔法の数も大樹の下にある石版に示唆された以上にある。

だが、それでもやはり、戦闘の痕跡が無いと感覚を狂わされてしまうようだった。

「はあ……ホントに痕跡を残せていて良かったな」

「ん……………」

「……………ですがホントに凄いですね。この濃霧は……………」

以前体験した濃霧の世界のことを思い出したハジメは一緒に体験したユエとお互い顔を見合わせて苦笑いをし、初めて樹海の中を訪れたというアレスは初めて体験する濃霧に感心を抱いていた。

ぞろぞろと歩く亜人達は、ハジメ達は自分達への悪意やへんけんが欠片もないことを理解したのか、かなり気を許しているようで、痕跡を辿ってはいるがハジメ達がそれぞれ見失って離れ離れにならないように念の為に周囲を囲むように先導をしていていた。

特に、優花にはかなり好意的なようで、先程から子供達がちよろちよろと優花の周りを彷徨っては、ニコツと微笑まえて顔が真っ赤になっている。幾人かの女の子は既に優花の手や服の裾をギュツと握っていた。そんな子達に優花は懐いてくれたのは嬉しいが囲まれ過ぎて逆に困ったように笑みを浮かべている。

そして、ハジメはというと、何故か自分の隣で先導をしていたシアに対抗するような感じで、アルテナが前に出たり、チラチラとハジメを気にしてるのか振り返るのだが、優花が子供達に囲まれてるのでハジメの傍らに控えていたユエと先導してるシアに無

機質な眼差しを向けられてはビクツと視線を戻していた。

(「なんで、視線を向けたり、睨んだりしてんだ?」)

そんな様子を見ていたハジメは言葉にはせずともそんなことを思いながら樹海の道を歩いていった。

そうして進むこと一時間ほど経ったときだった。

表情がいつも通りでも、どこかしおれた感じのシアのウサ耳がピコピコと反応した。ハツとしてウサ耳を澄ませたシアは、霧の向こうを見通すように見つめ始める。

「シア、何かいるのか?」

「はい。ハジメさん、武装した集団が正面から来ますよ」

「そうか……」

シアの言葉に俺達はお互い顔を見合わせ頷くが、周囲の亜人族達は驚いたようにシアに視線を向けていた。

その中には攫われていた兎人族も含まれており、どうやら自分達じゃ察知できない気配をしっかりと捉えているシアに驚いてるようだ。

そのシアの言葉を正しく証明するように、霧をかき分けて、いつか見た虎人族の武装集団が現れた。

全員、険しい表情で、まさに臨戦態勢といった様子で武器を手にかけている。

とはいえ、彼等も亜人族が多数いる気配を掴んでいるようで、いきなり襲いかかるということはなさそうだった。

彼等の内、リーダーらしき虎人族の視線がハジメ達に留まった。直後、驚愕に目を見開く。

「お前た……いや、貴方は……」

「ん……あつ、お前つて確か……」

その虎人族の様子にハジメも彼を思い出した。

そう、かつてハジメ達が樹海に踏み込んだ際に相對した警備隊の隊長と名乗った男。虎人族のギルだ。どうやら、襲撃を生き延びていたことに出会いは最悪に近いがハジメは安堵していた。

「貴方が何故ここに……つてアルテナ様あ?!　ご無事だったのですか?!」

「あ、はい。ハジメ様達とハウリア族の方々に助けて頂きました」

ギルはハジメがいることに驚いたが傍らにいたアルテナに気が付き更に素っ頓狂な声を上げた。

そして、ギルは落ち着きを取り戻し、アルテナの助けて貰ったという言葉に、安堵とハジメに対して感謝を含んだ眼差しを向ける。

「それは良かったです。アルフレリック様も大変辛そうでした。早く元気なお姿を見せ

て差し上げてください。……………そして、ハジメ殿、お久しぶりです。あの時は大変悪いことをしたのが貴方のおかげ樹海の被害はここまでには済まなかったでしょう。礼を言わせて頂きたい」

「そんな畏まんなよ。あの時もお前はただ仕事を果たしたただけだし、ハウリアはアイツ等の努力の賜物だ」

ギルが感謝しながら頭を下げることに対してハジメが苦笑いしてる様子で、何やら知り合いらしい雰囲気に、後続から着いて来た光輝達が疑問顔になるが、シアが、こっそり何があったのかを簡潔に説明すると、シアがハジメに惚れている理由も分かるというもので、成程とたつた一名覗いて納得して頷いた。

「それより、フェアベルゲンに向かいたいが良いか？」

「了解した。おいお前達も武器を下ろせこの方々達は味方だ。それに『掟』を変えてく  
ださった『英雄様』だ」

「ちよつ待つ……………」

ハジメの言葉にギルは頷き、部下達に武器を収めさせるが要らぬことを言つてハジメは止めようとしたがもう遅く部下達は一気にハジメに視線が向いて騒ぎ出す。

「隊長！もしかしてこの人があの『英雄様』ですかっ?！」

「アンタが『掟』を変えたおかげで差別なく暮らせるようになったんだ！ありがとう



!

部下達はハジメを囲み感謝していた。やはり亜人族達も自分の家族がただの“魔力持ち”の理由で迫害されるのが嫌だったのだろう。だから、“掟”を変えてくれたキツカケであるハジメに感謝したかったらしい。

気持ちは嬉しいのだが、今はそういうことをしてる暇はないのでハジメは困ったように笑みを向けながら口を開く。

「おーい……ジン。そろそろ、辞めさせてくれないか？」

「ムツ、スマンな。お前達！　ハジメ殿が困っている。そろそろ解放させてやれ」

ギルの言葉に反応して部下達はハジメに礼をしてから離れていったのを見てハジメは一息ついてからギルに話しかける。

「ふう……なあ、もしかしてだがフェアベルゲンでも、俺はこんな扱いなるのか？」

「まあ、そうだな。　族長達もそうだが、ハウリア達もハジメ殿に感謝している。もしかしたら、これより凄いことになるかもしれない」

「いや、辞めてくれよ。俺も急いんでんだよ……はあ」

人間からの襲撃があったばかりなのに、見知らぬ人間が交じるハジメ達に対して以前のような敵意を感じないのは、ハジメによって鍛えられ、樹海の防衛の際には優秀さを見せたハウリア達と族長達のせいでハジメの評判がフェアベルゲンで凄いことに

なってるのを知ってハジメは肩を使いながら大きく溜息を吐く。

「では、アルテナ様とハジメ殿達も此方へ」

ギルはそう言つて先導を務め始めた。ハジメ達は大人しく案内を受けるのだつた。

「……………」

ハジメ達のが辿り着いた「フェアベルゲン」は、ハジメが予想していた通りに大きく様変わりしており、流星のハジメでも息を呑んだ。

まず、威容を示していた巨大な門。話には聞いていたが見事に粉碎されており、その残骸は未だに処理されずに放置されたままだった。門の内側には大きなクレターと、その中心には岩石が埋もれている。

そして、ハジメさえも魅了されてしまった幻想的で自然の美しさに満ちた木と水の都は、あちこち破壊された跡が残っていて、木の幹でできた空中回廊や水路もボロボロに途切れてしまつていて用をなしていなかった。

「……………ひどい」

誰もが沈黙をする中、この悲惨な有様に誰かがそう言つて呟いた声が木霊したのだつた……………。

## 八十一話

## 貴女の為ならば

ハジメ達は警備隊の隊長の虎人族のギルの先導でフェアベルゲンに着くがその惨状に息を呑んだ。

「……ひどい」

誰かがそう呟いた。口には出していないがその言葉にハジメ達も同感だった。「フェアベルゲン」そのものも、どこか暗く冷たい風が吹いているようで、どんよりとした雰囲気漂わせていた。

と、その時、通りがかった「フェアベルゲン」の人々がアルテナ達を見つけて信じられないといった表情で硬直する。

と思えば次の瞬間、喜びを爆発させるように駆け寄ってきた。

傍らに人間族達がいることに気付いて、一瞬、表情を強ばらせるものの、アルテナ達が口々に助けられたことを伝えると、警戒心を残しつつも抱き合って喜びをあらわにしていた。

連れ去られた亜人達の中には、ハジメ達に礼を言うと言った家に向かって一目散に駆け

ていく者もいるが、ハジメはこの状況ではしようがないと思ひスルーしていた。

次第にハジメ達を囲む輪が大きくなっており、気が付けば周囲は「フェアベルゲン」の人々で完全に埋め尽くされていた。

「凄い人集りね……………」

「これじゃあ……………前に進めねえな」

（強引に集団を掻き分ける訳にもいかねえし…………）

優花とハジメは苦笑いしながら言葉を漏らすややはり、囲まれたままだった。

しばらくその状態が続いた後、不意に人垣が割れ始める。その先には、「フェアベルゲン」の長老衆の一人——アルフレリック・ハイピストがいた。

「お祖父様！」

「おお、おお、アルテナ！　よくぞ無事で…………」

アルテナは目に涙を溜めながら一目散に駆け出し、祖父であるアルフレリックの胸に飛び込んだ。

以前、アルフレリックが言っていた。樹海の外に連れられた者は死んだものだとみなすものだ。後を追って、被害が拡大するのを防ぐために。

故にもう二度と会えないと思っていたに違いない。祖父と孫娘の感動の再会にハジメ達は笑みを浮かべ、周囲の人々は涙ぐんで二人を見つめていた。

しばらくして、アルフレリックは孫娘から身を離して優しげに頭を撫でると、視線をハジメに転じた。その目、表情から感謝の念が伝わるほどだった。

「しかし……とんだ再会となったな、南雲ハジメ。まさか、孫娘を救われるとは思ひもしなかった。縁というものは分らないものだ。」

「俺はただ送り届けただけだ。感謝するならパール達ハウリア族にしてくれ。それに俺は、フェアベルゲンの様子を見に来ただけだしな……」

「そのハウリア族を変えたのはお前さんであろう。『掟』の時もそうであつたが、お前さんのおかげで孫娘のみならず我等も救つて貰つた。それが事実だ。この莫大な恩、『掟』もそうだが、変えてくれたことでフェアベルゲンは更に手を取り合えるようになったんだ。せめて礼ぐらいを言わせてくれ」

「クハツ……そうかい」

ハジメはアルフレリックの言葉に、若干、困つたように頬を掻きつつも仕方なそうに肩を竦め苦笑いして返す。

そんなハジメを、優花やユエ、シア、テイオは、微笑ましげに、そして誇らしそうに見つめている。アレスもハジメを尊敬の眼差しで見つめ、首を縦に振っていた。

一方で、人間を救うために大迷宮に潜つて訓練を積んできた自分よりも、世界を巡り意図せず人々を救つてきたハジメに、光輝は一層、心の中のドス黒い何かが渦巻き

増幅していき、複雑そうな表情を見せていた。

アルフレリックはチラリと、面識の無いアレスや光輝達に視線を向けつつハジメに言う。

「ハウリア族だが、タイミングが悪かったようだ。ちょうど儂等の頼みで都の外に出ていてな、直ぐに戻ると思うんだが……」

「なら、少し待たせて貰っても良いか？色々大変な最中だろうが頼めるか？　まあ、待

たせて貰える間にウチの癒しの天使様が怪我をした住人達や町を癒しておけるが……」

「一、そんなつ良いのか？」

アルフレリックがハジメの言葉に反応を示して目を見開く。それ程までにまだ怪我をしてる巫人がいるのだろう。ハジメは頷いてから傍にいる優花に視線を転じると優花は頷きながら了承のサインをハジメに送る。

「ウチの天使様もオーケーだってさ」

「……感謝する。では、我が家に招待しよう。ハウリア族が戻り次第、知らせを門の者に言っておく」

そう言って、アルフレリックは快く、ハジメ達を自宅へと促す。しかし……

「ではっ、わたくしが自宅へと案内をしますのでハジメ様、お手を……」

「お、おう」

そう言つて、アルテナが案内するつもりでか、何故かハジメの手を取ろうとするのだが、邪魔が入る。

「あのー、アルテナさあ〜ん？　なんでハジメさんの手を触ろうしたんですかあ〜？」

シアだ。シアはアルテナがハジメの手を触れる瞬間に、ハジメの手を自分の方へと抱き寄せたのだ。そして、シアの言葉にアルテナは……

「い〜えつ。わたくしは皆様方を纏めておられるのはハジメ様だと思ひましたのでえ……」

ニコニコ笑顔？のウサ耳少女と笑み？を浮かべた森人族のお姫様がパチツと視線を交わす。

「アハハハハ……………」

「フフフフ……………」

二人は視線を固定しながら笑い合うがその光景に男性陣は恐怖を覚える。

「……………」

（ヤバそう……）

そして、そんな二人の近くにいたハジメはこの雰囲気にはヤバイと感じ、アルフレリックへと視線を向ける。

「……………」

すると、アルフレリックも此方の視線に気がついたかハジメの方へと視線を転じた。

数秒、見つめあった二人は目を閉じて頷き合った後、ハジメは歩き出すアルフレリックの後に付いていったのだった。

そんな、ハジメの後ろでユエ、ティオ、優花の三人はガールズトークを始める。

「……優花、ハジメの天然誑し性質を何とかできない？」

「そうじゃぞ優花。このままでは妾達のご主人様の魅力が広まってしまうのじゃっ」

「いやあ、アレは直せないんじゃない？」

（日本では隠れファンクラブもあるし……）

そんなガールズトークを広める優花達は傍にいたある人物にも声をかける。  
いや、巻き込んでいく。

「アレスさんはどう思います？　ハジメの天然誑しは？」

そんな、ガールズトークに巻き込まれた犠牲者アレスさんは目を瞑り、ハジメの尊厳を守る故に……

「……………ノーコメントで」

アレスはそう言つて、逃げるようにハジメの後を追つた。流石に王国最強の神官でも、身の危険を感じることはあるのだった……………。



アルフレリックの家に招かれたハジメ達は、ハウリア達が戻ってくるのを待つている間、優花は怪我をしている亜人達の治療へと、そして残ったハジメ達はアルテナ手ずから入れたお茶をご馳走になっていた。

「どうぞ、ハジメ様」

「あ、おう。ありがとな」

「はいっ」

妙に頬を染めるアルテナにハジメはお茶を受け取って視線を感じながらもお茶を飲む。

ハジメが飲んでいる間にも、アルテナはハジメの周囲をウロチョロと動き回り世話を焼こうとしているのが分かる。

「……………ウマ」

お茶は普通に美味しい。だが、四方から凄い視線を浴びているのが分かり、ハジメはお茶が楽に飲めない状況だった。

チラリとアルフレリックを見るがその様子は何とも難しそうな顔をしている。つ

い、顔を隣へ逸らすとユエとテイオがチラリと俺をジト目で見ていた。また逆の方向へ視線を転じるとシアはアルテナとまだニコニコし合っており、何かと恐怖を感じ取ってしまう。なので、視線を正面へと戻したハジメは再度、お茶を飲むことにした。

そして……

「俺なんかしたっけなあ〜」、と思いながら、隣でニコニコし合ってるシアのウサ耳を愛でておいた。機嫌を直して欲しいという意味表示と、今のシアに対する気遣いから……。

そんな事があるもハジメはお茶を飲み干した後、ある程度の近況をアルフレリツクと共有していた時だった。

「ふう……ハジメ、ただいまあ〜」

バサツと天使の翼を羽ばたかせながら「天使化」した優花が窓の外からやってきてた。

ハジメは優花が帰ってきたと同時に席と机の距離を少し離すようにして人一人入るぐらいのスペースを作ると意図を察した優花がハジメの膝上とやってきて「天使化」を解除したと同時にハジメの膝上に座り、ハジメに体を預けるように抱きついた。

優花が「天使化」して、やって来たのはアルフレリツクの招いた部屋は地上から十メートル程の高さにあり、優花も面倒臭いと感じて翔んできたんだろう。

「休憩か？」

ハジメは膝上に座る優花の頭を撫でながら問うと、優花は首を振り……

「ううん、外傷のある人はみんな癒したし、門も含めて都の中心周辺は復元したわ。再生魔法と天性魔法の練習になったし、いつそ“聖杭”を飛ばしながら他の場所も全て復元しようと思ったけど……」

「どうしたんだ優……ん？」

困った表情で言葉を濁す優花にハジメが首を傾げながら問うとした時だった。耳をよく澄ますと下から「優花様アー」という住民達の熱烈な優花コールが聞こえてきた。

ハジメは優花を椅子に座らせてからアルフレリックと一緒に窓から身を乗り出して下を見る。

「なあ、アルフレリック……」

「南雲ハジメ、何も言うな」

其処には多数の亜人族が顔を紅潮させて興奮気味に優花を称えている姿だった。ハジメは顔を難しくしてるアルフレリックに同情した。

「ん？……アイツ等」

集団の中に、何処で見たような顔があると感じたハジメは興奮気味の亜人族達を見ると知っている顔が見えた。そして、頭を抑えるアルフレリックに苦笑い気味に話し

かける。

「なあ、前に見たことあるんだが、アイツ等……長老衆のメンバーじゃなかったか？」

「……………ゼルにグゼ。アイツ等は何をしとるんだ」

「……………優花が戻ってきた理由が何となくわかったわ」

優花が戻ってきた理由は、亜人族の間の狂信的な熱気に、ちよつぴり怖くなつて逃げたんだろう。とハジメ察する。

そして、アルフレリックは頭痛が激しくなつたのか片手で頭を抑えもう片方で堪えるように眉間を揉んでいた。相当、参つたのだろう。

ハジメはそんなアルフレリックに同情しながら、席に戻つて優花を膝上に座らせてから頭を撫でていると、ドドドドドツツという音が聞こえ始めた。

「……………来たか」

ハジメ以外の全員は扉の方を見るが、ハジメはこの音の正体を察しながら笑みを浮かべて扉を見ると同時にズバンツと扉が勢いよく開く。その衝撃でか扉に亀裂が入り、頭を痛めているアルフレリックが悲しそうな顔になる。

後で、お詫びで材質は壊れにくいように「タウル鉱石」の扉をプレゼントしよう。とハジメは悲壮感が溢れ出るアルフレリックに申し訳ないと思いつながら、後で扉を直して、更に頑丈にしておこうと考えてると、扉を亀裂に入れた原因達が声を上げる。

「ボスウ!!　お久しぶりですっ!!」

「お待ちしておりましたっ!　ボス!」

「お、お会い出来て光栄ですっ!」

「新入り!　ボスのご帰還だっ!!　他の者達に早急に伝達しろっ!」

「りよ、了解ですっ!!」

原因はやはり、男女のハウリア達だった。余りの剣幕に、パル達でハジメへの信頼が限界突破してる反応を予想していた筈の光輝達はブフウー!とお茶を吹き出し、アレスとユエ、テイオは表情が引き攣り、シアは顔を真っ赤にして恥ずかしそうに両手で顔を隠す。その様子に今度がハジメが頭痛がしだして頭を抑える。ハジメの膝の上に座る優花は同情したのか頭を撫でてくれている。

ハジメが優花の頭ナデナデに癒されるも構わず敬礼をした後に、片膝を突いて平伏するハウリア達。しかし、ハジメは首を傾げる。

「……ん?」

(あんな奴、いたか?)

ハジメはハウリア達をよく見ると見ない顔がいて首を傾げるが直ぐに理由が判明した。先程の言動を踏まえると、どうやらカム達は他の兎人族の部族にも自分達のように守る力を教えるために、取り込んで訓練をしていきながら勢力を拡大している予想し

た。

「あく、うん。久しぶりだな。取り敢えず、他の連中がドン引きしてるから平伏はするな」

「「「「「はっ！」「」」」」」

その応答は樹海の全体に響く程の声だった。

そして、久しぶりのハジメの掛け声でか、とても嬉しそうにウサ耳をピコピコとするハウリア族と、初めて経験した本物のハピバの掛け声に「俺達も遂に……」と感動しているハウリアではない兎人族達。

きっと、ハジメが出ていった後も、カム達を中心に「家族を守る為だと」言ってるあの訓練を行っていったのだらうと想像ができた。感動してる兎人族達にハジメは若干ながら同情と申し訳なさを感じるも、言葉を続ける。

「ここに来るまでにパル達と出会って大体の事情を聞いている。中々、活躍したそうだな？ 帝国の連中や謎が多い『狂化』帝国兵を退けるなんて大したもんだ」

「「「「あ、有り難き幸せ！」「」」」」

ハジメの激励にハウリア達が感動に震えてるのを見て、苦笑いするもハウリア達も揃ったので部屋にいるまだマトモな長老であるアルフレリックにもパルから預かっていた情報を伝える。

すなわち、自分達も帝都に侵入するつもりであることと、応援の要請だ。

「なるほど。……パル達からの伝言は確かに受け取りました。わざわざ有難うございます。ボス」

「しかし、あのカムが簡単に捕まるとは思えねえな……」

ハジメが受け取った情報を聞いてハウリア族のイオは感謝をし、アルフレリックは顔を難しくしていた。ハジメも因みにアルフレリックの意見には同意だった。

カムはハジメが訓練した中で一番、努力し、強く成長した兎人族であるからだ。指揮能力も族長故に正確であり、隠密もトップレベルだ。そんなカムが簡単に帝国に捕まるとは到底思えない。

ハジメはカムのことを心配しながらも、どうか、気を取り直してイオに尋ねていく。

「ハウリア族以外の奴等も訓練させていたみたいだが、今、どれくらいいるんだ？」

「……確か……ハウリア族と懇意にしていた一族と、バントン族を無力化した噂が広まったことと長老衆の方々の呼びかけで訓練志願しに来た者達が加わりましたので……実践可能なのは総勢百二十二名になります」

「……そうか。随分と増えたな」

イオの答えにハジメのみならずユエやシアも驚きを顔にしていた。

そしてハジメは、質問の意図が分かっておらず疑問顔を浮かべているイオを尻目に頷く。

「よし。それくらいなら全員一度に運べるな。……イオ。帝都に行く奴等さつきと集めろ。俺がまとめて全員帝都に送り届けてやる」

「は？　はっ！　了解です！　直ちに！」

イオはハジメの言葉が一瞬、何を言ってるのか分からなかったようで間抜け顔で聞き返すイオだったが、直ぐにハジメが帝都に同行してくれる意味だと察して、敬礼をすると仲間達を引き連れて他のハウリア族達を呼びに急いで出ていった。

「……………」

イオの疑問はわかる。ハジメが大迷宮の攻略のために戻ってきたと思い、自分達を手伝ってくれるだろうと思っていなかったらしく、意外すぎる言葉に動揺しまったそうだ。

だが、驚いていたのは、イオだけでなく、寧ろ一番驚いているのは傍らにいるシアだった。その大きな可愛いらしい瞳をまん丸に見開き、ウサ耳をピンツ！と、立ててハジメを凝視していた。

「ハ、ハジメさん？　大迷宮に行くんじや？」

「予定を変更する。カムのご心配なんだろう？」



「つ……それは……その……でも……」

ハジメに凶星を突かれて口籠るシア。

シアはハジメの目的が神殺しと大迷宮の攻略であり、カム達の事情に関係ない以上、わざわざ面倒事を持つていそうな帝都に入つてまでカム達の行方を捜して欲しいと言えなかつたんだろう。まして、カム達は連れ去られた訳もなく、自分達で向かつたのだ。何かあつても自己責任であるし、アレスの情報や王都侵攻の際に神達も動き出そうとしてこの時期なら尚更だ。

シア自身も、ハジメに付いて行くと決めたのだ。ならば、父親達は父親達の道を、シアはシアの道を進めべきだと思つてゐるんだらう。このウサ耳娘は。

しかし、心優しいシアのことだ。家族の行方が分からないと知れば、心配する気持ちは自然と湧き上がるものだ。そう簡単に割り切れる筈がない。シアなど特にだ。

本人は隠しているつもりでも、憂いはしっかりと顔とウサ耳に出ていた。他の者達は気が付かなくとも、ハジメとユエ、優花やテイオ、魂魄魔法に長けてゐるアレスはシアの心情など筒抜けだったのだ。

「はあ……（このウサ耳娘が）」

ハジメは溜息をすると同時に余計に手間を取らせていると思つて口籠る愛しいウサ耳娘の傍に寄り添つて、優しい手つきでほっぺをふにふにと摘んだ、

「ふえ？」

ハジメの突然の行動にかシアはどっかの可愛い天使様みたいに声を出してポカンと口を開けて間抜け顔を晒す。

そんなシアの表情を見て、ハジメは可笑しそうに笑みを浮かべそうになるが、真つ直ぐ視線をシアの目と合わせて言い聞かせるように言葉を紡いだ。

「そんなウサ耳をしおれさせて、無理して笑って……なんて顔をしてんだ？カム達が心配なら、『心配』って言えば良いだろう？」

「で、でも……」

「でも〴〵じゃねえよ。何、今更遠慮をしてるんだ？何時もみてえに思ったことを思った通り言えば良い。それがシア・ハウリアだろ？それに、俺は愛する人をそんな顔をさせたくない」

「ハジメさん……」

ぶつきらばうであるがハジメはシアのことを想つての言葉だ。場所が何処であろが関係ない。愛する人の悲しい顔なんて見たくない。

それを理解したのかシアは自分の頬に添えられたハジメの手を自分のそれを重ねる。瞳は嬉しさと愛しさなのか分らないが潤み始めていた。

「シア。俺は愛する人達の憂いが、悲しみが晴れるのなら……俺は、俺の“全力”を使

うことを躊躇わない。それが俺の信念だからだ」

「ハジメさん、私……」

「ほら、言ってみろ。俺の愛しのウサ耳娘。」

ハジメはそう言いながら真つ直ぐに笑みを浮かべながらシアを見つめる。シアは頬に伝わる優しく暖かい感触に気持ちよさそにうに目を細め、湧き上がる気持ちのままに思いをそのまま口にしたように言葉にした。

「……私、父様が心配ですう。……一日でも良いから、無事な姿を見たいですう」

「クハツ……全く、最初からそう言えばいいんだ。俺はシアのこともちゃんと愛してんだがな」

「し、知ってますよっ！ 私もそれぐらい！ ハジメさんがちゃんと優花さん達と

同じくらい愛してくれていることなんてっ！ だって夜……「おっとお……シア。これ以

上はストツプだ」……あっ」

拗ねたように頬を膨らませているが、その瞳は何時も通りにキラキラと星のように輝いており、頬を薔薇色に染まっけて、ハジメでも分かるくらいその表情は愛しい男を見る女の顔であった。

贈った言葉に、幸せで堪らないという気持ちが全身から溢れ出ており、幸せの余りかウサ耳娘は余計なことを言いそうだったのでストツプさせる。

「ふふ……良かったわね。シア」

と、優花はシアに近寄りながら頭を撫でる。その姿は正にザ・正妻を体現してるよ  
うな感じがした。

「……………ん。元気になって良かった」

と、ユエは微笑ましげにシアを見守る。完全にお姉さん思考だった。

「フフ、全くシアは可愛いらしいのお」

と、昨夜に自分に抱きつきながら涙を流していた竜姫さんことテイオは扇子で  
口元を仰ぎながら笑みを浮かべていた。

「まあ……あんな事を言われれば嬉しいでしょうね」

「な、南雲くん……ストレートだよ。鈴はビックリだよ」

「シアさん……羨ましい、妬ましい」

順に雫、鈴、そして何故かアルテナである。

そこで、ようやく周囲に大勢いることを認識したシアが真っ赤になって両手で顔を  
隠してしまった。

「クハツ……おいおい、そんな恥ずかしかったのかよ」

「ごう」

ハジメは恥ずかしくて顔を隠してるシアが更に可愛く見えて胸元に抱き寄せ

る。すると、羞恥以上に嬉しさが抑えきれなくなったのか、ウサ耳がわっさわっさ、ウサしつぽがパタパタと動きまくり気持ち悪くてもかど代弁しているのを見て不意に笑みを零してしまふ。

そして、ハジメは恥ずかしがつているシアを抱き寄せながらアレスに視線を向けながら特定でアレスにだけ「念話」で謝罪を入れる。

「アレス、すまねえ。樹海の迷宮攻略の前なのに」

「ハハ、構いませんよ。私は……それに、私としても、帝国には気になる事があるの  
で……」

ハジメはアレスが気になることは何なのか察し、周りにバレないために表情を変えずに声色を低くして話す。

「狂化」帝国兵のことか？」

「ええ……」

「なら、帝国に行く前にイオに聞いた限りその帝国兵の死体がフェアベルゲンの外に埋められてるらしいから調べてみるか？」

「ええ、そうしましょう。では後程」

「ああ……」

ハジメはアレスとの「念話」を終わらせ、胸元にいるシアの頭を撫でてから、



備が整ったようだ。滅茶苦茶、迅速な対応である。

そして、アレスとの個人的な調査をした後、ハジメ達は、アルフレリツクとアルテナ達の見送りを受けながら樹海を抜け、ハウリア族と共に帝都に向けて再びフェルニルを飛ばしたのだった………。

## 八十二話 帝都 前編

雑多。

〔ヘルシャー帝国〕の首都はどんな所なのか？と聞かれたらその一言だろう。

徹底的に実用性を突き詰めたような飾り気のない建物が並ぶ一方、後から継ぎ足したような奇怪な建物と並ぶ場所もある。

ストリートは、区画整理？何それ？と言わんばかりに大小入り乱れ、あちこちに裏路地へと繋がる入口がある。

雰囲気も、何処か張り詰めたような緊張感があり、露店を出している店主ですら“お客様”という考えからは程遠い荒々しい接客振りだ。

だが、決して淀んでいるわけでも、荒んでいるわけでもない。誰もが、それぞれやりたいことをやりたいようにやっているのだという自由さが溢れているような、そんな賑やかさがあつた。何があつても自己責任、その限り自由にやれ！という意気が帝都民の信条なのかもしれない。

〔ヘルシャー帝国〕は数百年前の大戦で活躍した傭兵団が設立した新興の国で、実力



至上主義を掲げる軍事国家だ。

「後、帝都民の多くも戦いを生業としており、良く言えば豪気、悪く言えば粗野な気質だ。帝都内には大陸最大規模の闘技場などもあって、年に何度も種類の違う催しが大いに盛り上がっているらしいわ」

と、優花が帝都内を歩きながら王国の図書館の本に記されていた帝国の情報を封印されていたユエとか脳筋の龍太郎など帝国のことを余り知らないメンバーに説明していたがその中の聞いていた一人、雫が顔を引き攣りながら優花に話しかける。

「あのね、優花……説明は嬉しいけどそろそろ南雲君をどうにかしてくれない？」

と、言つて雫はある方向に指を指して其処にいるメンバーが一斉に同じ方向に視線を転じる。

其処には……

「おいっ、おまえ……ぐべっ?!」

相手が話しかけた途端、問答無用に沈めていたハジメの姿だった。

「雫……ハジメの事は気にしなくて良いわよ」

「いや、でも……」

優花の言葉に雫は口を噤むが優花は続ける。

「安心して、ハジメも半殺しぐらいだろうから」

「良いのそれは?!」

「だって……ハジメが私達の為だって……」

「はあ……そういうことね……」

雫のツツコミを入れるが優花はハジメに対してお互い押しに弱く、雫は優花の様子をハジメに押し負けたのだろうと溜息を吐く。

それは帝都内に入ることが出来たハジメ達だったが、当然、美女、美少女を引き連れていたハジメが目立たないわけがなく、仕切りにちよつかいを掛けられては問答無用に沈めるということは何度も繰り返していた。

優花も最初はやり過ぎと怒ろうとしたが、ハジメ曰く「新しい町に入る度に、こういうのに出会うから『威圧』じゃ足りない」と判断して徹底的にブチのめすことにした。そしたら人が寄って来ない」と優花に話しており、優花はしょうがないと思いを承っていた。

今も、ニヤつきながら寄って来た男をハジメは強制的にトリプリアクセル&地面に濃厚キスをさせていた。

しかし、周囲はそんな暴力沙汰をどうとも思っていないらしく、普通にスルーしている。この程度の「ケンカ」ならごく普通の日常茶飯事なのだろう。

「うう、話には聞いてきましたが……帝国はやっぱり嫌なところですよ」

「シア、気分が悪くなったらちゃんとして頼りなさい」

「帝国は王国とは違って、根っからの実力至上主義の軍事国家ですからね」

「そうじゃのう。アレスの言う通り、軍備が充実してるところか、住民でさえ、その多くが戦闘者なんじゃ。この程度の粗野な雰囲気は当たり前と言えれば当たり前じゃ。妾も住みたいとは全く思わんがの」

予想した通り、シアもテイオも帝都はお気に召してないようで、優花はシアを心配しており、アレスも「……この、雰囲気はやっぱ変わってませんね」と嫌そうに眉を顰めるも変わらないことは重々承知の為か肩を竦めている。無言ではあるがユエも同意するように頷いている。

光輝や龍太郎などはそんなに嫌いな雰囲気では無いらしいが、ツツコミをかまっていた雫は警戒心跳ね上がっているし、鈴は少し怯えているようで頑なに雫から離れない。

やはり帝国は女性には余り好かれない国らしい。

とはいえ、光輝達も好んでいるわけではなく、日本人においては刺激が強過ぎる特異な有様には、しきりに顔を歪めていた。

それは、王国では見られなかった光景。特にシアの心を抉るだろう……：：：：奴隷達だ。

「シア、余り見るな」

「そうよ。見ても仕方ないわ」

「ハジメさん、優花さん……はい、そうですね」

どうしても目に入ってしまう同族達の有様。値札付きの檻に入れられた亜人族の子供の姿には見るに堪えない。

使えるものは何でも使う主義である帝国は奴隷売買は非常に盛んである。見ないようになしようとしても、そこかしこにも奴隷商があり、奴隷を鎖に繋がった首輪をつけて引きつけている者も多々いる。

「……………シア。大丈夫？」

ユエは心配そうにシアを握り、優花はシアに余り奴隷商などを見せないように抱き寄せ、テイオもアレスもシアを気遣うように隣に立ち、シアを守るように並び歩く。ハジメはシアの頭を撫でてからシアを卑しく見ている者達に「威圧」を放つ。

二人の温かさが手と頭から、三人は触れては無いが自分のことを守ってくれる事が伝わり、シアのウサ耳が嬉しそうにパタパタと動いた。

「……………許せないな。同じ人なのに……奴隷なんて」

ハジメ達の後ろを歩いていた光輝がギリツと歯噛みした。

【ハイリヒ王国】は、聖教教会の威光が強く、亜人族への差別意識は高い。その分、亜人

族を奴隷として置くという考え自体が忌避されがちな風習なので、光輝達も王都で奴隷を見る機会は無かった。だから余計に心に来るものがあるのだろう。

だからと言つて、本当に行動を起こされては困る。

ハジメは雫に視線を向ける。直ぐに視線に気付いた雫は此方を見る。一瞬、少し頬を赤くしたのはスルーしてハジメは周囲にバレないようにこつそり光輝を指差した。

察しの良い雫は、それだけでハジメの言わんとすることを理解したのだろう。僅かに口元を引き攣らせつつ、少し溜息を吐いて小さく頷き、自然と光輝の隣に並ぶと何やら話しかける。光輝は難しそうな表情をしながらも渋々といった様子で頷いた。

ホツと胸を撫で下ろす雫に、ハジメは申し訳ないと思いつつながらその様子に苦笑いする。

すると、鈴が王国であつた珍事を思い出し口を開いた。

「そう言えば、シズシズって皇帝さんにプロポーズされたたよね。後、ユウカちゃんも帝国に誘われてたし」

「……………そう言えば、そんなこともあつたわね」

「……………谷口さん！ 私だけじゃなくて浩介もでしょっ！ ほらっ、ハジメが……………」

帝、コロシテクル……………ちよっ！ユエ！ シア！ テイオ！手伝つて！」

「……………ん (のじゃ) (ですう)！」

思い出したくないことを思い出して顔を顰める雫。そして、優花は鈴の足らず言葉に反応して、皇帝に対して殺人宣言をしながら、帝城に向かうハジメを止めるのに必死になっている。

雫のジト目と優花の少し怒りを感じさせる眼差しが鈴に向かう。何故、そんな話題を出したのかと言いたげだ。鈴は視線で謝る。

ユエ達は優花と一緒に暴走気味のハジメを抑えており、雫の話には「ほお〜」と なったが今はそれどころではない。

アレスはガハルドのことを知っているが故に雫を憐れむような同情した視線を送ってから自分もハジメを止めるのを手伝いに向かう。光輝は渋い表情になった。同じくらい雫も渋い表情になっていた。普通に考えればシンデレラストーリーと言えなくもないのだが、女性として嬉しい気持ちは皆無らしい。

どうやら、国だけではなく、ガハルド皇帝陛下自身も嫌われてしまっているようだ。

「そんなことより、南雲君。具体的に何処に向かっているの？」

こんな話を直ぐさま断ち切るために雫は暴走しているハジメに話を振る。

それは、雫達はシアの父親の安否を確認するということは聞いているが、そのための具体的な方針は聞いてないのだ。

話を振られたハジメは何とか四人の恋人の抱擁とアレスの「鎮魂」によって落ち着いて雫の意見に答える。

「ふう……ん？ あゝ取り敢えず、冒険者ギルドだな。『金』ランクの立場を利用すれば大抵の情報は聞き出せるからな」

「……………南雲君は、彼等が捕まっていると考えてるの？」

「それは、分からない。捕まって牢屋にぶち込まれているのか、最悪、奴隷に墮とされているのか……未だ何処かに潜伏している可能性もある。帝都の警備は見る限り厳戒態勢までとははいってないが異常なレベルだろ？ 入ったのは良いが出られなくなっただけということもあるだろうしな……………」

ハジメの言う通り、警備は過剰と言っても過言ではないレベルであった。入場門では、一人一人身体検査をされた上、外壁の上には帝国兵が巡回ではなく常駐しており目を光らせていた。

都内でも、最低スリーマンセルの帝国兵が厳しい視線であちこちを巡回しており、大通りだけではなく裏路地までしつかりと目を通して様子だった。

恐らく、魔族の襲撃が原因で、未だ高レベルの警戒態勢を敷いているのだろう。それとも、他に別の理由があるのかもしれないが……。

そんな帝都の状況からパル達も侵入には苦勞して未だ隙を窺っている状

態だ。

それもそうだろう。奴隷でもない兎人族が入れるわけもなく、ハジメ達の奴隷にするとしても限度がある。その為、ハジメが運んできたハウリアの増援部隊も、今は目立たないように帝都から少し離れた岩石地帯に潜伏させている。

寧ろ、この状況の中で、侵入に成功したカム達にハジメはどうやって侵入して来たかと教えて欲しいぐらいだった。

ただ、ハジメは口では「分からない」と言ったが、十中八九、カム達は捕まっているのだろうかと考えていた。

ハウリア達兎人族は気配操作に関しては亜人族随一な上に、カム達はそれを磨き続けてきたのだ。人の出入りが難しくても、カム達ならばなんらかの方法で外で伝言を送るくらいは出来るだろう。にも関わらず、それすら出来なくなつたれなくなつたと考えると、捕まっていて身動きが取れない状況であると考えるのが自然だった。

勿論、冒険者ギルドにカム達の情報がそのままあるとは思っていない。だが、それに関係している事件や噂ぐらいあるのではないかと考えている。

「ん……………つたく」

傍らで、不安そうな表情をするシアにそつと頭に手を乗せる。そして、彼女のウサ耳を優しく撫でていくハジメ。気持ち良さそうに目をトロンとしていながらも少しの



不安を残すシアに冗談めかして言う。

「捕まっけていても、あんな特異なレアウサギ達だって、帝国側はそう簡単に処断したりしない。いろいろ時間を掛けて調べるだろうさ。そして、捕まっけているのなら返せば良いことさ。安心しろよシア。いざとなれば、俺達がヘルシャー帝国という国自体なかつたことにしてやる」

「……………ん。任せてシア。塵も残さない」

「ハジメさん、ユエさん」

奈落から出て直ぐ共にあつたシアとハジメ・ユエの絆は、旅を通してとても強固なモノとなつている。ハジメとは十年以上一緒に過ごした優花、三人よりも後、仲間になつたテイオ、アレスが少し羨ましそうに、三人を見る。しかし、その姿を見てるだけでも、段々と温かい気持ちに……………

「いやいやいや、国自体を無くしちやダメでしょう？ 目が笑つてないけど冗談よね？

ねえ、お願いだから冗談と言つてえ〜！」

そんな苦労性の雫さんの顔を青ざめながらのツツコミはよく響いたのだつ

た……………。

~~~~~

此処は帝城でもある人物が公には出来ないような話をするために設けられた一室である。

部屋の中は帝城の中でも信頼された人物で、しか鍵は持つておらず、定期的に選ばれた従事者が掃除を行っており、清潔さを保っていた。

そして、この部屋にある人物と信頼出来る部下一人が対面になるようにして椅子に腰をかける。

「よし、王国の姫さんが来る前に話をしとこうぜ」

「はい、陛下」

その人物とはヘルシャー帝国皇帝である。ガハルド・D・ヘルシャーであった。

「しかし、陛下……話すことは、先日には捕らえた特異な兎人族のことですか？」

「いや、それもあるちゃつあるがな……アイツ等は『使える』。俺専属の奴隷兼兵士達にしてえぐらいだ」

ガハルドは部下に投げられた話題である先日、帝城で捕まえた数人の兎人族に好感を示していた。

「普通の兎人族とは桁違いな戦闘能力、自分達の長所の『気配遮断』も上手く使いやがる。あれ程の亜人はそうにいねえし……どうして、今まで見つからなかったも謎だ」

と、疑問を呈しているガハルドだった。

それもそうだろう。その兎人族はある人物が地獄と呼ぶにも生温いとも思える訓練の賜物であるからだ。

「そういや、アイツ等は何らかの情報は吐いたのか？」

「……いえ、拷問を行った兵士達からの伝言だと、ずっと黙っているようで、喋るにしてもただ煽るような発言しかないようです」

「そうか……」

（忠誠心か愛国心なのか……いやその両方かもしれない……オモシロイ）

ガハルドは部下から、今の兎人族の近況を聞いて、深く考えをする素振りを見せながら、口を深く三日月のように歪める。

「それで、陛下。もしや、今回はその兎人族達の処遇の件ですか？　そしたら他の者達も呼ばなくてはいけないのですが……」

「いやいや、言つたら？　俺が今、話したい事じゃねえよ」

部下の言葉にガハルドは手を振りながら否定を示してから言葉を続けていく。  
「俺が話してえことは………『バイアス』のことだ」

「バイアス様ですか……その件は私も驚いています。今回の魔人族の襲撃にも陛下より早かった対応。樹海襲撃での功績。帝都の民達も貴族達も高く評価しております。次期『皇帝』が今のバイアス様ならガハルド陛下のちゃんとした後釜になると、城内を歩く

度に耳に入ってきました。しかし、どうしたのでしょうか……バイアス様」

部下が今回のバイアスの功績に対して疑問を感じてか嬉しうで、何かと素直に喜べないような感情が混じった表情をする。

「全く、それには俺も驚いてる。昔から俺の部下だったお前もバイアスに付きつきりだった家臣達も驚いてるだろうよ。だってよ、暴力、女漁りや俺は何も咎めなかったが色々やらかしていた馬鹿息子がここ最近で人が変わった様に見えて気持ち悪い」

ガハルドも息子の変わり様に嫌そうに顔を歪める。

「しかし、本当にバイアス様が変わったのなら、嬉しいことですがね……」

「そりゃあそうだろうがよ……アレは違い。確証は無いが、アイツには後ろに何かいるかもしれないねえ……」

「バックですが……しかし、確……最近の帝都民と兵士達の行方不明とバイアスの変わった時期が同じだったろ？」……っ！」

部下の言葉を遮ってガハルドの話したことは部下の口を噤ませるぐらい強烈なこと、それは、最近帝都では民間には余り知られてないが、兵士達や貴族の間では問題になっている民達の行方不明の件だった。

「俺の推測だが、バイアスの奴……人が変わった前の日に奴隷で遊んでくるかと言いやがって、数人の護衛を連れて帝都を出たろ？ 其処でアイツは“何か”と出会ってし

まったかもな」

「何か……とは？」

「さあな？　　“竜”とか“神”だったりしてな……つてオイオイつ、こんな冗談で真

剣になんなよっ！」

「それは……そうですね」

ガハルドはちよつとした冗談に部下の顔が真剣になつてのを見て可笑しくなつたのか笑つてしまう。部下も畏まりながらガハルドの意見に肯定する。

ガハルドは笑つた後チラリと帝都が一望出来る窓にチラリと目を向ける。

「あく、そろそろ、王国からやって来た姫さん達を出迎えねえとな……行くぞ」

「………御意」

そう言つて、ガハルドは部下との話を切り上げ、王国から訪れたりリアーナ姫を迎えに行く為に部屋を出たのであつた。

そして、ガハルドも部下も思つてもいなかつたのだろう。ちよつとした冗談で言つていたことが、あながち間違ひではなかつたことが……。

## 八十三話 帝都 後編

ハジメとユエの帝都破壊発言に雫はツツコンではいられなかった。

「いやいやいや、国自体無くしちゃダメでしょう？ 目が笑っていないのだけど冗談よね？」 お願いだから冗談と言ってっ！」

顔を青ざめさせながら雫はツツコミを入れる。絆は素晴らしいと思うが、目の前で方を超える住民をぶち殺すと宣言されてはスルー出来ない。

「優花もテイオさんも何か言ってくださいっ！」

雫はあの二人には自分の言葉を通じないと判断して、常識ある二人に頼もうとそちらに目を向けるが……

「「え？」」

二人も帝都を壊す気満々のようで、雫は更に心のダメージが入るも二人にもツツコミを入れる。

「ちよつ、テイオさんはともかく、優花は神天治癒師でしょ?! って聞いてるの?!

あつ、顔を逸らさない！」

雫の言葉に優花はプイっと顔を逸らしていく。そんなにも帝都を救いたくないのか……。

アレスはハジメ達四人はちゃんと冗談だと分かっているので翻弄されてる雫を見て笑いを堪えていたが、流石に雫が可哀想だと思いつめに入る。

「ハジメ殿。雫殿が可哀想ですし、そろそろ冗談は止めにしときましよう？ 時間も時間ですし」

「ん、そうだな。じゃっ行くか」

ハジメがそう言うとうエ達も頷いて何事も無かったように歩き始める。それを見ていた雫はプルプルと体を震わす。

「もうっ！ なんなのよっ!!」

そんな、余り冗談に聞こえな冗談を交わしながら、冒険者ギルドに向かってメインストリートを歩くことしばし不意に足が止まってしまう。

「これは……」

それは、ハジメが声に出るほど、前方の街の様子が変わり始めてるせいだった。

あちこちの建物が崩壊していたり、その瓦礫が散乱しているのだ。

道中、耳に入ってきた話によれば、コロシアムで決闘用に管理されていた魔物が、突然変異し見たことない強力かつ巨大な“竜”の形のした魔物となって暴れ出したら

しい。

都心の中心部に突如出現した体長が三十をメートルを超えた魔物に対して、帝国はいいように蹂躪されたようだ。

挙句、魔族がその機に乗じて一気にガハルドに迫ったらしい。帝国における皇帝陛下とは、それ即ち、「帝国最強」を意味している。故に、だろう。魔族達は結局、ガハルドを討つこと叶わず、逆に返り討ちにあつたようだ。

そして、魔物方は、皇帝陛下の息子であり皇太子であるバイアスが陣頭指揮を取り、討伐に成功したらしい。

しかし、襲撃の防衛には成功したものの、コロシウムを起点に、数百メートル単位で放射状に崩壊している街並みを見る限り、被害は酷く大きかった。

そんな瓦礫の山となっている場所では、復興作業のため大勢よ巫人奴隷が駆り出されていた。

冒険者ギルドは、その崩壊が激しい場所の更に向こう側にあるので否応なく通らなければならぬ。自然、ハジメ達は彼等の姿を視界に入れることになる。

武装した帝国兵の厳しい監視と罵倒の中、暗く沈みきつた表情で瓦礫を運ぶ様は悲惨の一言だった。

「……………ゲスが」



その光景は、アレスが眉を蹙め小さく悪態を吐くほどであった。

帝都にもたされた人的・物的被害のしわ寄せは、誰よりも亜人族達にきていた。こうして復興の為に、酷使していれば、いくら肉体的ポテンシャルの高い亜人族といえど倒れる者は続出してしまふだろう。

樹海への襲撃は、もし、彼等が倒れたとしてもたととしても、新調すれば良いという、まさに亜人族を人として見ない価値観のあらわれだろう。或いは単に「弱い者」を認めない実力至上主義の価値観も含まれているかもしれない。

と、その時、ハジメ達から少し離れたところで犬耳、犬尻尾の十歳くらいの少年が瓦礫に躓いて派手に転び、手押し車に載せていた瓦礫を盛大にぶちまけてしまった。

足を打ってしまったのか蹲って痛みを耐えている犬耳少年に、監視役の帝国兵が剣呑な眼差しを向け、棍棒を片手に近寄り始めた。何をする気なのか明白であった。

そして、それを見て黙っているわけのない正義の味方が此処に一人。

「おいっ！ やめ——」

光輝が、帝国兵を止めようと大声を上げながら駆け出そうとする。

しかし、その言動は次の瞬間に起きた出来事によって中断されることになった。

ピリッ！——つと、そんな電流が走ったような音が微かに響くと同時に、帝国兵が勢いよくつんのめり顔面から瓦礫にダイブしたのである。

なんとも、痛々しい音が響き、帝国兵はピクリと動かなくなつた。どうやら気絶してしまつたようである。

同僚の帝国兵達が慌てて駆けつけて容態を見るが、顔を見合わせると、呆れた表情で頭を振る。そして、面倒くさそうに、かつダラダラと流れる鼻血を見て嫌そうにしながらも、担いで何処かへと運び去つていった。犬耳少年のことは放置であつた。

犬耳少年は何が起きたか分からずといった様子で呆然としていたが、ハツとした表情で立ち上がると、自分手散らかした瓦礫を急いでかき集めて、何事もなかつたように運搬を再開する。

そして、犬耳少年のように呆然としているのは駆け出そうとしとして出鼻をくじかれた光輝も同じだつた。

そこへ、ハジメからの声が掛かる。

「面倒事に首を突つ込むのは構わないが、バレないようにやるなり、俺達に迷惑を掛からないようにするなり、物事を考えてやってくれよ?」

「つ……今のは南雲が?」

光輝の確認に溜息を吐いてから無言で頷くハジメ。

実際、ハジメは指で銃の形を作つてからスタンガンよりも威力の高い紅い電撃を飛ばして、帝国兵を電気ショックで気絶させたのだ。

自分よりも先に助けたことはともかく、光輝は、ハジメの「迷惑」という言葉に眉を顰めた。どうやら光輝の正義スイッチがONになってしまったようだ。

「迷惑ってなんだよ。……助けるのが悪いって言うのか？ お前だつて助けたんじゃないか」

「ハア………」

（スイッチが入っちゃったか………）

ハジメは光輝のスイッチが入ったことに面倒くさそうな表情をして溜息を吐くも光輝の質問に答えた。

「助けない気持ちがあるが、どちらかというところ、お前が起こす面倒事を止めたいって言う方が正しいけどな。考えてみる、こんなところで帝国兵に突つかかかっていったら、今さっきみたる？ わらわらとお仲間が現れて騒動になっちゃうだろ？ コツチは人捜しに来てんだ。頼むから、余計な騒ぎを起こすんじゃないよ」

そうしてハジメは、もう一度、助けるなら隠れてやるか、ハジメ達との関係を疑われないようにやってくれと念を押した。

そして、手をヒラヒラさせて、この話は終わりだと示し先を進めるハジメに、光輝は本来の目的であるシアの家族を捜すことを頭の隅に追いやってヒートアップ。倫理やら正義の価値観を持って訴え出す。

「じゃあ、南雲お前は、あの亜人族の人達を見てなんとも思わないのか?! 見る!

今、こうしている時だって、彼等は苦しんでいるんだぞ!」

「……………お、おい、八重樫。申し訳ないがこの目的を見失っているキラキラの阿呆を早くなんとかしてくれ。コイツに俺の話は通らないらしい」

ハジメとて、かつてミュウを助けているし、異世界に転移される前からも「ウィステリア」で手伝いをしてた時も常連さんの子供達のお守りを優花と一緒にしていからそれなりに子供が好きであるのだ。

子供が目の前で苦しんでいれば何も感じないわけがない。寧ろ、内心怒りがふつふつと湧き上がって今すぐに大人の亜人達と共に助けたいと思っている。

しかし、だからと言って本来の目的を放り出して、今ここで奴隷解放運動などするわけもなく、光輝の相手をするのも面倒だし、自分だと火に油を注ぐだけだと判断して、対天之河鎮静剤・Y A E G S H I こと八重樫さんに申し訳ないが丸投げする。

雫がこめかみをグリグリしつつも諫める言葉を掛ける……………その前に、光輝が怒声を上げる。どうやら今度は、ハジメが雫に頼ったことが気に食わないらしい。

「雫は関係ないだろ! 俺は今、お前と話してゐるんだ! シアさんのことは大切にすることに、あんなに苦しんでいる亜人達は見捨てるのか?!」

光輝の声が大きくなるにつれ、周囲も何事かと注目しだした。よく見ると離れたと

ところで監視役を担っている帝国兵が幾人かもチラチラとハジメ達の方を見始めている。

ハジメ達の捜し人であるカム達が帝国側の手に落ちている可能性が高い現状、自ら騒動を起こして官憲と揉めるなど言語道断だ。

——それに、かかっているのはシアの家族の安否なのだ。

故に、やけに突つかかってくる光輝に、ハジメはスつと目を細める。

僅かな怒気と、有無を言わせぬピンポイントのプレッシャーが光輝に降りかかる。

「……………なあ、天之河。俺は、お前の高説は聞く気はねえし、倫理観やら正義感について議論する気もない。それに俺はお前と仲間になった覚えもなければ、連れ合っているつもりもなく、価値観も共有する気もなければ、歩調を合わせるつもりもない。お前が駄々言つて『付いて来る』のを仕方なく『許可』しただけだ。だから、いちいち突つかかってくるな。時と場合すら弁えられないのら……………手足を砕いて王国に送り返すぞ？」

「——っ」

「ハジメ殿……………」

「……………ああ、分かっている」

アレスが言いたいこと……………帝国兵がコチラを見る目の数が増えてきていることを指していた。

しかし、ハジメもそのことも視野には入れていたので、アレスの呼びかけと同時にプレッシャーを収めると、溜息を一つ吐き続きを口にする。

「逆に、俺もお前の価値観には干渉はしない。だから、俺達に迷惑にならない範囲でなら好きにしる。まあ、当然、カム達の危険度を上げるような言動は見逃せないけどな。……それと、当たり前のことを聞くな。シアが他の亜人と同列なわけないし、俺はそこまで冷酷じゃねえよ」

ハジメは、歯噛みする光輝を尻目に頭を振って踵を返した。

奴隷制度は、この世界では当たり前のこと。確かに酷い扱いではあるが、ここで奴隷にされている亜人達を助ける方が一般的に「悪い」ことなのだ。他人の「所有物」を盗むのと変わらないのだから。

「それでも」と、思うなら、相応の覚悟が必要だ。それこそ、帝国そのものを敵に回して戦う覚悟と、二度と亜人を奴隷にさせない方法を確立させる程度のことだ。

でなければ、今、奴隷達を力尽で助けても、後に帝国からの報復や亜人族捕獲活動が悪化する可能性が高く、そうなれば待つているのは更なる地獄だろう。

その辺りのことを光輝は分かっているのか、いないのか……。ハジメはそんなことを考えながら溜息を吐くのだった。

光輝はハジメの背中を睨みつけながらその場を動かない。

「…………胸糞悪い話だけだよ。今は行こうぜ、光輝」

「今は、シアさんの家族のことを優先しよ？」

龍太郎と鈴にそう言われて、光輝は仲間に気を遣われていると大きな溜息を吐いた。

すると、アレスが呼びかける。

「勇者」

「…………アレスさん、貴方も南雲と同じ考えですか？」

アレスに呼びかけられた光輝は眉を顰めながらアレスを見る。アレスはそんな光輝を見て呆れたのか首を横に振ってから溜息を吐いた。

「ハア…………貴方はハジメ殿が冷酷な人間だと思ってるんですか？」

「…………だって、南雲は奴隷の人達を…「優先順位というものがあります」…っ」

アレスは光輝の言葉を遮って言葉を続ける。

「今、騒動を起こしたって私達の立場が悪くなるだけです…………それに、貴方はハジメ殿を感謝した方がいい。最悪の未来を回避したかもしれないですから。では」

「……………」

アレスはそう言いながらハジメ達の元へと歩き出して行ってしまった。

光輝はアレスの最後の言葉の意味が分からずに無言で突っ立っていると、今度は雫

が呼びかける。

「光輝」

「……分かつてる」

ようやく淡々といった様子で頷く光輝。

光輝はアレスの言葉をこう解釈した……自分はまだ、力が足りていないとだと。

光輝は分かっている。ハジメが本気になれば、自分達を送り返すことは間違いない。可能だ。しかし、今は、力が必要なのだ。思いを押し通すためには、ハジメ達以上の。

そのためにはどうしても、神代魔法を修得しなければならぬ。

そう、例え、どれだけ気に食わなくても、ハジメ達に付いていかなければならぬ。それが、力を得る一番確実な方法なのだから。

光輝は自分にそう言い聞かせると、胸の内の黒いモヤモヤをグツと抑え込み、黙って後を付いて行くのだった。

「いろいろと、難儀じゃのう」

いつの間にか、雫の隣に来ていたティオが少し苦笑いを浮かべながらそう言った。

「……単純な人間なんて、あまりいませんよ」

「道理じゃな。人より多くを気付いてしまうお主も、確かに難儀じゃ。放っておけないその性格も含めての」



テイオに深い眼差しを向けられて、雫は言葉に詰まった。

「年長者の戯れ言と流してくれても良いが……お主は、少し甘えた方がよい。世話を焼いてばかりでは、お主の方が道を見失うぞ？」  
取り敢えず、ほれ。甘えさせてくれそうなのがおるじやる？」

「え？」

雫の視線がスッと前に流れ――

「雫、ハジメが無理を言つてホントにゴメンね。大丈夫そう？」

自分の元へ駆け寄つて来てくれた優花に、心配そうな声を掛けられた。

慌てて視線を転じる雫。優花の手が、そつと雫の手を優しく触れるように握つた。

「……ふふ、ありがと、優花。大丈夫よ。まあ、なんと言うか、光輝のことがね？　でも、

今は強い味方もいるし、いざつて時は南雲君に頼らせて貰うわね？」

「ええ、全然、頼つて構わないわ」

頼れる友達の心遣いと、テイオの善意による助言に感謝しながら、雫は少し肩の力を抜いて前に行くハジメ達の後を追うのだった。

微妙な雰囲気の中（光輝達だけ）辿り着いた帝国のギルドは、まんま酒場という様子だった。

広いスペースに雑多な感じでテーブルが置かれており、カウンターは二つある。一つは手続きに関するカウンターで、受付は女性だが粗野な感じが滲み出ており、もう一方のカウンターは完全にバーカウンターだ。昼間にかかわらず飲んだくれたおっさんがあちこちにおり、暇なら復興作業に手伝えよとツツコミを入れたくなってしまう有様だった。

ハジメ達の中に踏み入れると、もう何度目か分からず、もう毎度お馴染みになっている反応が返ってくる。

即ち、優花達に対する不躰で下卑た視線である。流石の呆れてしまいハジメは舌打ちをした。

「チツ……」

（毎回、毎回何処も……この世界の奴等はそんなに出会いがないのか？）

そんな事を思いつつハジメは面倒くさげに「威圧」を初っ端なから発動しつつカウンターへと向かう。

だが、流石と言うべきか、飲んだくれていても軍事国家の冒険者と言うべきか【宿場町ホルアド】の冒険者達のように気絶する者はおらず、一斉に警戒心を顕に出す。

「へえ……」

（流石、軍事国家にいる冒険者だな）

ハジメは帝国の冒険者に関心しながら、カウンターに向かうと、其処には他の町では余り見ることのない受付嬢がいた。受付嬢はハジメ達を見ても、気怠そうで、やる気の無さそうな表情で見返すだけだった。用があるならさっさと見えと見えといった感じだ。

「情報を貰いたい。ここ最近、帝都内で騒動を起こしたりした亜人がいたりしなかったか？」

ハジメの質問二受付嬢は胡乱な眼差しを向ける。質問の内容が奇妙だったからだろう。

アレスから聞いた話だと、普通に亜人族の情報が欲しいのなら商人ギルドや何処かの商会にでも行けばいいし、帝都内で騒動を起こせる奴隷などそうはおらず、大抵、奴隷の首輪が反抗を封じるからだ。

そして、帝都内に奴隷でない亜人族などいないことから、ハジメの質問は有り得ない可能性を尋ねているのと変わらないからである。

結果、受付嬢は面倒になったのか、それともそれが正規のシステムなのか、カウンターの方を指差した。

「ゴメンけど……そういう情報はあつちで聞いて」

ハジメがそちらを見れば、ロマングレーの初老の男がグラスを磨いている姿があり、どうやら情報収集は酒場らしい。

「ああ、それはスマナ……イ」

ハジメがそう言おうとしたが詰まってしまった。受付嬢が自分の仕事をやり遂げというように明後日の方向へと向けてしまっていたからであった。

ハジメは苦笑いを浮かべると、バーカウンターの方へと向かう。

冒険者達達の値踏みをするような剣呑な眼差しが突き刺さり、喧嘩っ早い龍太郎がいちいち反応して睨み返す。鈴はこういう場所が苦手なのか小さい体を雲に寄せて上手く隠れている。

ハジメがバーカウンターの前を陣取り、ロマンガレーの男に先程の受付嬢にしたのと同じ質問をする。

しかし、マスターは無視してグラスを磨き続けているだけだった。

ハジメの目がスッと細められる。

すると、

「此処は酒場だ。ガキが遠足に来る場所じゃない。酒も飲まない奴を相手にする気もない。さっさと出ていけ」

という返答が返ってきた。

「へえ……」

ハジメは内心ニヤニヤ笑みを浮かべながら、それを表情に出さずに納得顔に金を置

いた。

隣の優花が、少し呆れたような、或いは困った夫を見るような目を向けながら「もう、ハジメったら全くこういう事にホントに目がないから……」と呟くもハジメは氣付かない。

そう、ハジメは王道テンプレを愛してる男である！

その事を昔から知っている優花は呆れ、それを見ていたユエ達も意図を察しハジメに対して呆れた視線を送るもハジメは氣付かない。

「その意見はもつともだな。マスター、この店で一番キツくて質の悪い酒をボトルで頼む」

「……吐いたら叩き出すぞ」

マスターは、ハジメの注文に一瞬、眉をピクリと動かしたものの特に断るでもなく、背後の棚から一升瓶を取り出しカウンターに置いた。

マスターがハジメのことをガキと言いながらも素直に出したのは、ハジメの放つ威圧感と周囲の冒険者達の警戒した雰囲気から只者ではないと分かったからであろう。

ハジメは、ボトルわ手に取ると指先でスつと撫でるように先端を切断する。その行為自体と切断面の滑らかさに周囲は息を呑んだ。マスターですら少し目を見開いている。

封の開いたボトルからは強烈なアルコール臭が漂い、傍にいたシアや優花が思わず鼻を覆ってむせてしまった。光輝達も「うっ」と呻きながら後退る。

「な、南雲君？ それを飲む気なの？ 絶対にやめた方が良くと思うわよ？」

「そ、そうだよ。絶対に吐いちやうって。鈴なんか既に吐きそうだよ」

「ご主人様、その酒はやめた方が良くと思うのじゃが……」

「テイオさんの言う通りですよ、ハジメさん。どうしてわざわざ質の悪いのを……」

雫、鈴、テイオ、シアが口々に制止の声を掛けてくる。

傍らのユエも酒の匂いに眉を顰めつつハジメ服の裾を引っ張るし、優花も呆れて溜息を吐きながらも心配そうに見つめる。

「いや、味わう気もないのに良い酒をがぶ飲みなんて……酒に対する冒瀆だろう？」

心配する彼女達を余所に、ハジメはそんな事を言う。そして、チラリとマスターの表情を伺う。

マスターの口元が僅かに楽しげな笑みを浮かべていた。

「クハツ……」

（やっば、このマスター。分かってらっしやっる）

ハジメは笑みを零しながら「え〜」と批判的な声を出す女性陣を無視して、ほとんど異臭と言っても過言ではない匂いを発する酒を、飲むというより流し込むようにあ

おり始めた。

シーンとする店内にゴキユゴキユと喉を鳴らす音だけが響き渡る。そして、一度も止まることなく、ものの数秒でボトルを飲み干してしまった。

ハジメは、手に持ったボトルをガンツ！とカウンターに叩きつけるようにして置くと、口元に笑みを浮かべながらマスターを見やる。その目が「文句はあるか？」と物語っていた。

「……………分かった分かった。お前は客だ」

マスターは苦笑いを浮かべながら両手を上げて降参の意を示していた。

「……………ハジメ、後で説教ね」

「Oh……………」

優花の生暖かい視線と共に言われた。説教宣言にハジメの顔が少し引き攣りながらも逆らえないので頷く。

因みにハジメはいくら飲んでも酔わない体質だ。その原因は「毒耐性」である。元々、日本にいた時も父と博之さんから酒の美味しい飲み方を教え込まれたので、それなりに好きな方であったが、「毒耐性」のせいで酔わなくなっていて少し残念がついていた。

「……………で、さっきの質問に対する情報はあるのか？　もちろん、相応の対価は払う」

「いや、対価ならさっきの酒代で構わん。……お前が聞きたいのは兎人族のことか？」  
「……………情報があろうだな。詳しく頼む」

曰く、数日前に大捕物があったそうで、その時、兎人族でありながら帝国兵を蹴散らし逃亡を図ったとんでもない集団がいたのだとか。

しかし、流石に十数人で百人以上の帝国兵に帝都内で完全包囲されてしまつては逃げ切れることはやはり出来ず、全員捕まり城に連行されたようだ。

それでも、兎人族の常識を覆す実力に結構な話題になつていたので、町中で適当に聞いても情報は集められたようである。

「城か……………」

ハジメが呟きながら傍らのシアを見ると、やはりシアの顔色は曇っている。

果たして、帝都に不法侵入した亜人がどういった扱いを受けるのか……………少なくとも明るい未来は期待できない。

ただ、連行したという点が気になるどころだ。男の兎人族も需要がないわけではないが、カム達のような初老の男まで需要が高いわけではない。しかも、帝国兵に牙を剥くような存在だ。その場で即座に処刑されていてもおかしくはないし、むしろその方が自然である。

つまり、帝国側としてはカム達に何らかの価値を見出して、生かしておくことにした



ということなのだろう。だとすれば、カム達は未だ生きている可能性が非常に高い。望みを捨てるには早すぎる。

そんな意思を込めてカウンターの下でシアの頭を撫でるハジメ。見れば、手はユエが握っている。もう片方の手には優花が握っている。シアも、三人の気持ちが伝わったように、瞳に力を宿しコクリと頷いた。

マスターが、珍しい髪色の兎人族であるシアを意味深な眼差しで見やる。捕まった兎人族達との関係をあれこれ推測でもしているのだろう。

そんなマスターに、ハジメは、さりとんでもないことを尋ねる。

「マスター、言い値を払うといったら、帝城の情報、どこまで出せる？」

「……冗談でしている質問じゃないが……その様子を見る限り冗談というわけじゃなさそうだな……」

ハジメが笑みを浮かべつつも、その全く笑っていない眼で真っ直ぐマスターを射抜く。

得体の知れない圧力に、流石のマスターも少し表情が強ばった。質問の内容も、下手をすれば国家反逆の意思を疑われかねないものだ。

もつとも、ここは冒険者ギルドであり独立した機関であるから、帝国に対する“反逆”という観念自体がない。ハジメも、その辺りを踏まえて、ワンクツション挟んだ上で

尋ねたのだ。

ただ、いくらマスターが冒険者ギルドの人間であっても、自国の、それも本拠地内部の情報売り渡したと知られば、帝国の人間がただで済ますわけがないので安易に情報を渡すわけにはいかない。

かといって、目の前の刻一刻と纏わり付くような威圧を増していくハジメ相手に返答を渋つても碌な未来は見えそうにないのが悩ましいところだ。

なので、マスターは苦渋の選択として、代わりにハジメの知りたい情報を知っている人間を教えることにした。

「……警邏隊の第四隊にネデイルという男がいる。元牢番だ」

「ネデイルね。わかった、訪ねてみよう。世話になったな、マスター」

ハジメも、マスターがあっさり帝城内部、特に捕虜がいる場所を教えてくれるとは思わなかったし、知らない可能性も考えていたので、知っている人間を教えてもらっただけでも十分だとあっさり引き下がるとマスターからある情報を貰う。

「後、アンタの実力なら大丈夫だと思いが気をつけとけよ。最近、帝都民が行方不明の事件が増えてるからな」

「……忠告どうも」

ハジメはそんな事を言うマスターに尻目にギルドを後にした。再びメインスト

リートを歩く中、シアが先程のやりとりについてハジメに尋ねた。

「あの、ハジメさん、さっきの元牢番の人を教えて貰ったのは、もしかして……」

「ああ、詳しい場所を聞いて、今晚には侵入するつもりだ。今から、俺とユエで情報を仕入れてくるから適当な場所で飯でも食っててくれ。二、三時間で戻る」

ハジメの指示に優花とアレス以外が疑問顔のシア達。

「?、どうしてお二人だけなんですか? みんなで行けば……ハッ、まさか、ユエさん

とシツポ……」「女の子が変な事を言わないの」……アイタツ……優花さん」

シアが変な事を言い出す前に優花がシアの頭を軽くチョップする。

「ハジメがユエを選んだのは、そのネディルさんが素直じゃなかったら、より丁寧な『お話』が必要になるから、慣れているユエを選んだんでしょ? 再生魔法も使えるし」

優花の説明に意図が分かっていたアレスとテイオが苦笑い気味に頷き、顔を赤

くしながら狼狽えていた雫達もその意図を察した。

「そしたら、優花も使えるんじゃないの? それに、話を聞くと、優花の方が回復系は

長けているんじゃない?」

「私はそういうのに慣れてないしね。ハジメが私の事を気遣ってくれてるからよ。言いは方的にはアウトだけど」

「……………」

雫の質問に軽く答える優花はジト目でハジメを見る。ハジメは凶星だったらしく、無言で明後日の方向を見る。

「……………ん、私は大丈夫」と言ってくれて心が軽くなる。

ユエとしても、優花やシアを汚い部分を担わせたくないらしい。

アレスは俺の頼みで優花達の護衛として、この場に残って貰っている。アレスもこの頼みには快く了承した。

そして、全員が納得したところでハジメとユエが雑踏の中へと歩き始めた時、シアが二人に声を掛ける。

「ハジメさん！ ユエさん！ えっと、その……………」

言いたい事があるのだが上手く言葉に出来ない。

そんな様子のシアに、可愛いと思いつながら、ハジメは困ったように笑みを浮かべる。きつと、遠慮するなどは言っても、シアとしては大迷宮を前にして面倒事を巻き込んでいるという気持ちが少ないからあるのだろう、と。

シアは結局、上手い言葉が見つからなかったのか、ハジメと同じく困った笑みを浮かべながら一言だけ言葉を届けた。

「……………エッチは程々にっ！」

「台無しだよっ!! もう一回、優花の話聞いてこい! 阿呆ウサギ!」

ハジメは怒鳴り返すと、何故か隣でキリツとした表情でサムズアツプしてるユエの手を引いて、今度こそ、雑踏の中に消えていった。

その数時間後。

帝都のある一角の食事処に、何処か冷たい空気が流れていた。

## 八十四話

## 仮面贈呈式

ある帝都の一角の食事処で冷たい空気が流れていた。冷気の発生地点であるテーブルに座っているのは、当然ながらハジメ達である。

ハジメとユエが情報収集に戻ってきてから、優花とテイオ以外の女性陣のハジメに向ける視線が冷たいのだ。

特にシアと何故か雫の瞳はハイライトが消えたような無機質さがあり、正直、ハジメをして恐怖を感じながら「何故、八重樫もあんな目をするのか」と疑問に感じている。

「随分とお楽しみだったみたいですね？」

「へえ……南雲君ってそういう人だったんだ。それに、ユエさんとイチャコラした後は今度は優花とですか。良いご身分ですね。」

二人の抑場のない声音に、遂に耐えれなくなったのか隣のテーブルの客がそそくさと出て行ってしまった。龍太郎と光輝がさりげなく一緒に出て行くとしたが、鈴が「逃がさないよ」と簡易の結界を神速レベルで発動したため、二人は「イエス、スズ」

と呟いてしまうほど鈴の気迫に圧倒されながら大人しく席に腰を落とした。

アレスはこの光景を静観して表では表情を変えずにいるが、内心笑いを堪えるのに必死になっており、笑いを堪えてるためか微妙に体が小刻みに揺れていた。

ティオは「仕方ないご主人様じゃのう」と困ったように笑みを浮かべながら、こんな冷たい空気に男二人などが逃げ出したくなる気持ちが分わかり光輝達に可哀想な子供を見るような眼差しで見ている。

尚、こうなった原因は、戻って来たユエがやけにツヤツヤしていて、ハジメが微妙にやつれた様子で、そのまま優花に膝枕してもらっているからだった。

膝枕をしている優花はハジメがやつれてる原因がなんなのか知ってるが、面白いからという理由で黙っており、「ふふ」と笑みを零しながら自分の膝に頭を乗せるハジメを髪を撫でていた。

しかし、冷たい視線を送る二人はハジメがやつれてる理由を知らず勘違いしている。

つまり、『情報収集に出かけておきながら、二人つきりをいいことに何してやがんだ！ それに、帰ってきた途端に別の女に膝枕して貰って良いご身分だな！』と怒気を撒き散らしているのである。

「……何を勘違いしているんだ。ユエがツヤツヤしてんのは俺の血を吸ったからだぞ

「？」

「へへ？」

シア達の勘違いを察したハジメは優花の膝枕で癒されながら呆れた様子で事実を伝える。それを聞いたシアと雫が揃って間拔けな顔になった。

「まさか、本当にユエを抱いたと思ってるのか？ 俺は盛りついた犬か？ 随分な評価

じゃないか？ ええ？ それに、優花を差し置いてそんな事を俺もユエもすると思うか？」

「あは、あははははは、まさかあゝ。私は分かっていましたよ。そうだろうなあゝって。

ね、ねえ、雫さん」

「え、ええ、そうよね。南雲君には優花がいるしね……っでもしかして、優花はわかってたの？」

「勿論よ。再生魔法は魔力消費が激しいからね。最初からそう思ってたわ」

ハジメのジト目付きの嫌味に二人は明後日の方向へ目を泳がせながら弁明するシアと雫。

そして、ハジメは事実を分かって起きながら黙っていた優花に不満げな眼差しを向けながら質問を投げける。

「なあ、優花……事実がわかってたのに、何故、勘違い共に説明しなかった？」



「……面白そうだったから?」

「そんな理由でかよっ!……でも、可愛いから許すっ」

質問の回答をテヘツとした表情で舌をチロツと出す優花を見たハジメは可愛すぎるが故に許してしまった。流星はバカツプルだ。

因みに、優花以外にテイオもアレスも分かっていたが優花と同じで面白いことになりそうだからという理由で黙っていたのである。

「はあ、まあいい。欲しい情報は手に入れた。今晚、カム達がいる可能性の高い場所に侵入する。警備は嚴重そうだが、まあ問題無いだろう。潜入するのは俺とユエとシア、アレスの四人だけだ。万が一に備えて、気配遮断や転移が使える方が良いし。優花達は帝都の外にいる。パル達のところにいてくれ。直接転移するから」

「それは、分かったけど……そもそも、その情報は正しいの? ネデイルっていう人が嘘を言っている可能性は……」

雫はもつともな懸念を口にするがハジメが頭を振って否定した。

「そりあないだろ。自分の股間が目の前ですり潰された拳句、痛みで気を失う前に再生させて、また潰されて……というのを何度も繰り返し返したからな。男に耐えられるもんじゃねえ。……洗いざらい吐かせれた後、股間を押さえながら、ホロホロと涙を流すネデイルを見て、流星の俺でも同情しちゃった」

お前がやったんだろ！と光輝達は盛大にツツコミを入れたかったが、目の前でわざとらしく沈痛そうな表情を見せているハジメには、何を言っても流されるだけであると溜息を吐くだけに止まった。

優花は女として駄目なことを手伝わされたユエに心配するが、ユエは「大丈夫」と、手でVサインをしている姿とユエの意図を察し、微笑みながらユエの頭を撫でる。

同時に、男の股間を何度もすり潰しておいて特になんとも思っていないようなユエを見て、光輝と龍太郎は戦慄しながらユエにだけは逆らわないでおこうと固く誓うのだった。若干、テーブルの下で内股になりながら。

「ハジメ殿、少し宜しいですか？」

「ん、どうしたアレス？」

ネディルの話をした後、静観していたアレスが唐突に話し掛けてきて、ハジメはどうしたんだと思ひながら首を傾げる。

「いえ、ハジメ殿。今晚、少し調べ事をしたので単独行動させて貰えませんか？」

「なっ、それは駄目に決まっ——「ん、良いぞ？」——南雲！」

アレスの申し出を簡単に許可するハジメに光輝は自分は勝手な行動は許されてないのにアレスは良いのかと内心、苛立ちが増していく。

「どうして、俺は駄目でアレスさんは良いんだ?!」

「は？ 簡単なことだろ？ アレスはお前よりも強いし、帝国の事も俺達より理解している。それに、単独行動の理由には俺も察しがついているからな」

ハジメに嫌味も含めた質問を平然と返され、光輝はぐうの音も出さず黙ってしまった。それを見たハジメは溜息を一つ吐きながらアレスを見やる。

「しかし、アレス。一人でも大丈夫か？」

「はい、大丈夫ですよ。では、集合場所で落ち合いしましょう。シア殿もお父様の無事を願ってます」

「はいっ、ありがとうございますー！」

アレスはハジメに心配無いと言ってからシアに一声掛けた後に空間魔法を使って、転移していった。

「……なあ、南雲。今更だと思うが、シアさんの家族が帝城に捕まっているんなら、普通に返してくれて頼めばいいんじゃないか？ 今ならリイもいる筈だし、俺は勇者だし……話せばなんとかなると思うんだが……」

黙っていた光輝が本当に今更なことを言う。確かに、光輝の言通り、勇者である光輝の言葉であればそうそう無下にはできないし、頼めばリリアーナも口添えをしてくれるだろう。ハジメ自身が力を示して強引な交渉をすることも可能だ。

だが……

「対価に何が払うんだ？」

「え？」

「はあ……（分かってないのかよ……）」

ハジメは光輝の理解の無さに溜息を吐いてしまうが仕方なく説明していく。

「考えてみるよ。カム達は不法侵入の上に、帝国兵を殺したんだぞ？しかも、兎人族でありながら帝国兵とまともにやり合えるという異質な存在だ。加えて“神の使徒”って立場でも、もう無理は通せねえ。皇帝の野郎はリリイから真実を聞いてるだろうからな。この状況で、まさか頼んだからって無償で引き渡して貰えると思ってたのか？」

「それは……」

「対価を要求するに決まってるさ。それも思いつきり足下を見た、ドでかい対価をな。帝国にだって面子がある。ただで済ますことなんてないだろう。それに、リリイの交渉にも影響が出るかも知れんだろ。ちと、頭で考えれば分かることだろう？」

ハジメの説明の通り、考えてみればそうなる可能性は確かにあると、口を噤んでしまう光輝。

勿論、ハジメはリリイの交渉の影響を気にしており、もし対価を要求されたら、喜んで弾丸とミサイルを万単位で相手の頭に支払うぶっ殺すつもりだ。

つまり、最初から物理で話をする可能性が高いなら、リリイには申し訳ないが、顔

を突き合わせるよりさっさと奪い返した方が断然面倒ではないと判断している。

「対価はともかく、リリイに迷惑を掛けたくない」

「だろ？　それが、分かったんなら集合場所で大人しくしている」

「……でも」

光輝としては、せっかく着いてきたのだから自分も何かしたいのだろう。先程の巫人奴隷のこともあったせいで、じつとしていられないようでも何かを考え込み始めている。

それを見たハジメはひじょくに嫌な予感がし、チラリと雫を見る。雫もハジメに視線を向けると小さく頭を降振った。どうやら、やはり暴走の兆候が出ているらしい。

（まさか、俺達が帝城に侵入した際に「余計なお世話」をするんじゃないよな……）

ハジメは作戦に支障が出ると考え先手を打つことにした。

「なあ、天の河。一つお前に頼みがあるんだが……」

「ツ?!　なん……だつて？　南雲が俺に頼み？　有り得ない」

ハジメからの突然の頼みという言葉に光輝は愕然とした表情で硬直する。それは、隣にいる龍太郎や鈴と同じだった。まるで「UMA」と街中でバツタリと遭遇してしまつたような顔だ。

それくらいハジメからの「頼み」というものは、今までの言動からして有り得なかつ

たのだろう。

しかし、その反応もハジメは予想はしていたので、少しだけイラツとするものの、表情には出さずに続ける。

「しかし、これはただの『頼み』だ。嫌なら、引き受けなくてもいい。それを決めるのは天之河自身だしな」

「ま、待てつ、待てつてくれ！　まず、何をしたいのか教えてくれつ」

さも悪いことを言ったようなハジメに、寧ろ光輝の方が食いついた。

よしつ、食いついた！とハジメは此処にいる全員にバレないようにコツソリと悪い笑みを浮かべるも、すぐに表情を直して光輝に説明する。

「いやな、帝城に侵入するといつても警備はとても嚴重だ。だから少しでも成功率を上げるために陽動役をやつて欲しいんだよ。……例えば、さっきの巫人を助けるといふ建前でひと暴れして帝国兵共を引き付ける……とかな。しかし、これは単なる『頼み』だしな。忘れてくれ」

勿論、警備は嚴重だと思われるがハジメ達が侵入できない訳が無い。陽動役も、あれば全く役に立たないわけではないだろうが、特に必要でもない。単に光輝という男をを上手く誘導するには、これぐらいの理由が必要と判断したまじだつた。

そう光輝が「俺達も手伝うぞ！」とか言つて帝城に潜入してこない為の楔を打ち付け

るため…………

「陽動…………やる。やるぞ！ 南雲！ 陽動は任せてくれ！」

「お、おう…………それは助かる。ありがとな天之河」

（しかし、ここまで引つかかってくるとは思ってもなかったが上々だな）

「……………」

しかし、察しの良い雫さんとハジメのことなら色々と分かる優花さんにはお見通しらしく、雫はジト目で優花はしようがない人を見るような目をハジメに向けていた。

雫に関しては、幼なじみが軽く誘導されたことか、それとも、必然的に自分も巻き込まれたことに対してか。

ハジメは二人の視線に気付きながらも、気付かない振りをして、《宝物庫》を光らせる。

「よし、そうとなれば、協力の対価を渡さないとな。正義感溢れる素敵な勇者チームには、これを贈呈しておこう」

そう言つてハジメは《宝物庫》から鉱石をいくつか取り出すとパパッと錬成して四つの仮面を作り出す。

その仮面はホントに鉱石で作られているのかと思うぐらいの出来で、それぞれライオン、ゴリラ、猿、狐に分かれており、お祭りの屋台で見るような動物型のフェイスタイ

プだった。その仮面は細かな意匠が施され、視界や呼吸を遮らないように工夫もなされている。まさに無駄に洗練された業である。

「……南雲……これは？」

「見ての通り、動物の仮面だ」

「……………なぜ？」

「なぜってお前、〃神の使徒〃であつて代表格の勇者が脈絡もなく帝都で暴れると不味いだろ？ 正体は隠さないと。そして、正体を隠すといえは仮面だ。それに動物の仮面なら亜人達を守る象徴的なモンになれるだろ。安心しろ。ちゃんと区別をしてるから」

「え？ いや、いきなりそんな力説を言われても……まあ、確かに正体を隠していた方がいいというのは分かる。リリーの迷惑にもなるだろうし……でも、これは……」

光輝が頬を引き攣らせながら目の前の無駄に精巧な動物マスクを見る。

「……………心配するな勇者（笑）。お前には、ちゃんとしたリーダーで正義感の溢れる動物の〃ライオン〃をくれてやる」

「……………なあ、今、勇者の後に何か付けなかつたか？」

「坂上、お前は〃ゴリラ〃だ。ホントは〃クマ〃でも良かったがパワフルで脳筋のお前ならゴリラだと判断した。我ながら良い英断だと思う」

「お、おう。バカにされたような気がするが、くれるんなら貰つとくぜ」



「そして、谷口。お前は……………」

「ま、まさか……………南雲くん。嘘だよね」

「猿だ。元氣ハツラツでお調子者の『猿』だ。」

「……………ねえ、南雲くんって、もしかして鈴のこと嫌いなのか?」

「そして最後、八重樫は……………」

「待ちなさい、南雲君。もう一つしか残っていないのだけど……………まさかよね?」

「八重樫、もちろん、残っている『キツネ』それがお前の仮面だ」

「嫌よっ! 何でキツネなのかしら卑屈って理由かしら? 何、それともずる賢いと私に対して思っているから? それに、南雲君。絶対にあなた、確実にふざけてるでしょ!」

雫の抗議に、ハジメはやれやれと肩を竦める。まるで聞き分けのない子供に対するような態度に雫の頬がピクピクと引き攣る。

「いいか? 正体を確実に! だ。その仮面はちゃんと留め金が付いていて、ちよつとやそつとで外れない上に、衝撃緩和もしてくれる。更に重さを感じさせないほど軽く、並の剣撃じゃ傷一つ付かない耐久性も併せ持つてるんだ」

「あ、あの一瞬でそこまでのモノを……………なんて無駄に高い技術力……………」

「そして、八重樫。何故キツネした理由はな、お前はクールビューティで、キツネと言えば騙すとかズル賢いイメージだが、逆に言えば頭の回転が早く機転が効く性格とも言え

る。合ってるだろお前に。それに八重樫、お前可愛いモノが好きだろ?」

「な?! 何を言ってるの!……私はべ、別に可愛いモノなんて……」

「え? だってお前。王都にいた際にネコと戯れ……それ以上お、言うなあ!!」

「……うおつ、危ねっ?!」

ハジメの言葉にビクリ、と反応した雫は言葉が動揺で口が良く回らなくなる。だが、ハジメの追撃は終わらず、まさか自分の恥ずかしい所を見られたのを知り、更にその話しをするハジメに黒刀を持って斬りかかって強制的に中断させた。

「おい、八重樫……危ねえじゃねえか」

「……っ、南雲君が悪いのよ!」

余りの恥ずかしさで顔を赤くする雫は黒刀をハジメに構えながらキツと睨む。が、勇者な幼なじみ達からも不意の追撃が入る。

「……そういえば、昔から動物が好きだったよな。特にウサギやネコとか……小さくて可愛い感じの」

「?!」

「ああ、シズシズの携帯の待ち受けもウサちゃんだったよねえ」

「?!」

「ゲーセンも寄ったりすると、必ずUFOキャッチャーやるよな。しかも、やたらうめえ

し

「?!」

「なるほど。それで雫さん、私のウサ耳をいつもチラ見してたんですね?」

「!!」

「あら、雫にそんな可愛い趣味持ってたんだあ〜」

「……ッ!!」

「………八重樫。さあ、受け取れ。『キツネ』は……お前のモノだ」

いつになく優しい眼差しで『キツネ』の仮面をそつと差し出すハジメ。

何故か、ハジメ以外の全員も、妙に優しい眼差しで贈呈式を見守っている。

いつの間にか、『仮面を受け取らない』という選択肢がなくなっていることに誰も気付かない。

「………なんなのよ、この空気……。言っておくけど、私、ホントに可愛い動物に目がな  
 いてことはないからね?仕方なく受け取っておくけど、喜んでないから勘違いしない  
 ですよ? あと、小動物が嫌いな人なんてそうはいないでしょ? だから、私が特別、そ  
 ういうのが好きじゃいから……。だから、その優しい眼差しを向けるのをやめて  
 ちょうだい!」

耳までも赤くしながら、雫は律儀に仮面を受け取った。羞恥心から必死に否定するも

の、シアと優花がコッソリ、

「雫さんなら少しくらいウサ耳を触ってもいいですよ？ほら、今、絶賛にウサ耳を触る優花さんみたいに」

「ほら、雫もどう？シアのウサ耳モフモフよ」

と言うと、デレつと相好が崩れてしまったので、雫の頑張りの意地は虚しい努力で終わった。

因みに、ハジメがここまで動物の仮面を推したのは、単なるお巫山戯半分と八つ当たり半分である。

帝都に動物仮面組が現れてひと暴れすれば、亜人族が付けた『樹海の英雄』みたいに同レベルの二つ名が雫達に付けられないかと目論んでいた。

実は、パール達やアルテナとの会話の際に、コッソリ後ろで雫達が失笑していたのをハジメは気付いていたらしい。

もつとも、正体が隠されているので直接呼びかけられるわけではなく、人知れず耳にして悶えるのが関の山だが……

光輝達のコントロールするついでに、セコい仕返しを目論んでいるハジメの意図を察して、ユエとシアのウサ耳を雫と共にモフモフしてる優花が若干呆れたような眼差しを向けていた……。

ある帝都の路地裏に白ローブを着た男が地面に手をつけるなどをして何かを調べたりしていた。

「この魔力の流れ……やはり」

そう白ローブと言えば、そう我らのアレスである。

アレスは、ハジメとユエがネデイルの所へ向かつてる際に街中から行方不明者が多く出る場所を割り出し、ハジメに無理言つて、単独行動を許して貰つてその場所の路地裏へと転移してから、色々な場所へと赴きその場に残留する魔力を調べ続けていた。

「やはり、コロシウムにあつた魔力と他の大型の魔物が出没した場所の魔力が違う。それに、此処で感じる魔力はコロシウムと似ている……それに」

アレスはコロシウムとこの路地裏で感じていた魔力には覚えがあつた。

それは……

「樹海に侵略していた『狂化』帝国兵とも似ている」

（ならば、ここ最近の行方不明と樹海の襲撃の際に指揮をしたバイアスには確実に繋がりがあ……）

アレスは帝都にくる前にハジメと共に樹海で埋葬されてる「狂化」帝国兵の死体を調べていた。

「すると、バイアスは黒ですね。しかし、あのバイアスがここまでの事をするのか……」アレスは昔、バイアスと会っている。彼と出会った時に感じた第一印象は嫉妬の視線を向けられていたのを思い出す。その瞳からは自分に対する、力の差、同年代での自分との評価の違い、それがバイアスにとつて許せなかつたのだろう。そんな目をアレスは向けられていた。そして、その件からは会った際はいつも睨んでくるバイアスは少し苦手としていた。

しかし、アレスはそれなりにもバイアスのことは知っている。だからこそ、アレスは疑問に感じていた。

「……だが、バイアスに、ここまでの力は無かつた筈だ」

（情報収集の旅をしてる際にも、帝国の情報は耳にしていた。しかし、バイアスが此処までの力を持つていたことは聞いてない……だとすると、ここ最近に何かがあつた？……まさかつ！）

アレスはある考えに辿り着いた。目を見開き自然と零れるように呟く。

「まさか……バイアスは、既に神の傀儡に……『ほお、其処までの考えに至つたか面白い。流星は『使徒殺し』……ツ?!』」

その考えに辿り着いた瞬間、アレスでも体の芯から振るえる程の寒気を感じ、すぐさま“宝物庫”から聖槍ロングヌスを取り出す。

嫌な汗を流しながらも、気を保とうと真剣な表情で聖槍を構える。

「……誰だ！」

『そんなに、殺気を出すな……しかし、今はバレては面白くないのう。貴様には儂の余興を邪魔されたくないからの、少しの間、大人しくして貰おうか』

「……っ、何を……」

相手の魔力を辿っていき、アレスは空を見上げる。そして、正体を見て固まってしま

う。そして、感じ取る。己の本能が告げている。体が……頭が既に答えを出している。

あれは、、

目の前にいる存在は…… “神”だと。

「……まさか、使徒ではなく神自らこの件の黒幕でしたか……ならっ、貴様を今っ、ここで屠るまで！」

アレスは空間魔法を駆使して空へとゲートを開き、神の目前へと最短で転移する。そして、初っ端から聖槍の力を最大限で発揮させる。

「聖槍——抜錨！」

アレスの言葉と共に「ロンギヌス」に魔力が集約していき太陽の如き光が大きな光の槍と成す。

「ロンギヌス・ゼツ……おつと、此処でそんな魔力の塊を撃たれては帝都が騒ぎになつてしまつたら？」……なつ！」

神はアレスが自分に聖槍を突きつけるより先に、アレスに接近していた。

そして……

『「魔喰竜」』

「っ?! 魔力がっ」

魔法と思わしきその一言で神の傍に黒い中規模ぐらいの「竜」が眼前に現れ「ロンギヌス」の魔力を喰らつた。その瞬間、「ロンギヌス」から魔力が失いアレスから驚愕の声が漏れる。?!

「っ……貴様はまさかっ！」

（そうか、神の石柱は……クソっ此処はハジメ殿に、ティオ殿に知らせないとっ！）

アレスは敵対する神の姿を見て、その正体に目を見開くも、すぐに撤退するべきだと脳内が告げている。即座に逃げようと空間魔法を使うしたが、遅かった。

「……逃がさんと言つたらう。『獄竜門縛』」

再び、聞いたこともない魔法が発動すると共に、巨大な竜の頭部が現れると、アレス



を飲み込んでしまう。アレスは飲み込まれても空間魔法を使うが遮断されてしまう。「クッソ……」

アレスは悪態をつくも意味もなく、そして目の前が真つ暗になっていった。

『かの「使徒殺し」は儂の竜達を殺し切れるかどうか楽しみだな……ガハハッ!』

神はそう言いながらアレスが飲み込まれたのだろう。立方体の箱を路地裏へと投げ捨て、飛び去っていった。

~~~~~

ずっと真つ暗なままだと思っていたがすぐに視界が明るくなるのが分かり、アレスは閉じた目を開く。

「此処は……」

目を覚ましたアレスはすぐに辺りを見回して察した。

「空間系魔法の遮断……いえ、条件付きの結果での隔離ですか。……そして、見る限り此処へ出るには、この竜達を全て倒せということですかね……」

アレスが振り向くと目の前には、数は千は優に越えているだろう。多種多様な竜達があり、竜達は全てアレスを一点と見つめていた。その目から感じるのはアレスは捕

食対象でしか見られてないと分かる。

「……ハジメ殿、皆さん……少し待っててください。必ず戻りますから……」

アレスはそう言い終わると、ロンギヌスを片手で構えながら、自分を睥睨する竜の群れへと突貫する。

「うおおおおおおお！」

そう早くハジメ達との合流を果たすために、この情報を早く伝えるために……。

## 八十五話

## ハウリア救出と動物仮面部隊

深夜。

光一つ存在しない闇の中に、格子のはめ込まれた無数の小部屋があつた。特殊な金属で作られた特別製の格子は、地面に刻まれた魔法陣と相まつて堅牢な城壁となつており、小部屋にいる者を絶対に逃がさないという無言の意思表示をしている。

汚物や血から発生する異臭で、何も見えなくとも極めて不潔な空間であることが分かる。そんな最低な場所とは、もちろん囚人を拘束し精神的に追い詰めることを目的とした牢獄、それは「ヘルシャー帝国」帝城にある地下牢であつた。

流石、帝城の牢というべきか、地下牢を構成する金属の質もさることながら、至る所に刻まれた囚人を逃がさない魔法陣が実に秀逸である。

脱獄を企てた者、または地下牢に忍び込んだ者、それぞれに致死に至らない程度の、しかし極めて悪質な苦痛を与えるトラップが、見えるところだけではなく壁の中にまで仕込まれている。トラップを解除する詠唱を正確に唱えない限り、勝手な行動は封じられていると見るべきだろう。

脱獄できる可能性など微塵もなく、光一つない世界で凶悪な異臭に苛まれつつ小さな部屋に一人押し込まれたりいれば、常人なら一日も保たずして発狂してもおかしくないだろう。

看守とて、通常は唯一の入口である扉のすぐ外にある詰所で待機しており、決められた時間に巡回するだけで地下牢の暗闇の中に長時間いたりしないのだ。

だが、そんな最低の空間であるにもかかわらず、現在は、何故か余裕有りげ声音の話し声に聞こえていた。

「おい、今日は何本逝った？」

「指全部と、アバラが二本程ぐらいだな……お前は？」

「俺は、アバラ七本ぐらいだな……そっちは？」

「右手の指全部と頬骨、ウサ耳を片方を持つてかれたな……」

「なっ?! マジかよっ! お前何言ったんだ? アイツ等、俺達が使えるかもってウサ耳は手を出さなかったのに……」

「なに。いつもいつも『背後にいるものは誰だ?』と見当違いの質問を延々と繰り返すからな。言つてやったんだよ。『貴様等の膿が詰まった頭では到底理解することの出来ない御方』つてな」

「……………それはキレるな」

「でも、アイツ等、ウサ耳は落とすなって、多分そういう命令を受けてた筈だし、それに背いったてことは……」

「ああ、確実に処分が下るだろうな。馬鹿な奴だ」

聞こえてくるのは、お互いの怪我の確認の話。最低限の回復魔法は掛けられるので死にはしないが、こんな余裕そうな会話をしているも、声の主達はまさに満身創痍という有様だ。

それでも、やせ我慢をしつつ軽口を叩き合う彼等の正体は、帝国に捕まったハウリア達である。彼等が何故、痛々しい拷問を受けていても、軽口を叩き合うのは、別に狂ってしまったわけではない。既に覚悟が決まっているからであつた。

帝城の地下牢に囚われている以上、自分達はもう助からない。処刑されるか奴隷に落とされるかの二択である。

後者の場合は、それこそ全力全開で自害をするので、やはり命はない。奴隷の首輪で強制的に同族と戦わされるなど家族を守る為に力を身に付けたハウリアにとって、それは悪夢なので、事前にそう決めていたのだ。

そして、助からない以上は、家族達に手を出させない為に一矢報いるつもりで生き長らえている。

帝国側は、ハウリア族の実力があまりにも常識からかけ離れていることか

ら、彼等の背後に何か陰謀でもあるのではないかと疑っている。

また、そうではなくとも、報告を受けたガハルド陛下がハウリア族を気に入り、帝国軍の手駒として使えない画作しているようだった。

戦闘方法、持っていた武器、その精神性、温厚な筈の変えた兎人族を変えた育成方法……。

強者を好むガハルド陛下にとって、ハウリア族はまさに宝箱のような存在だったのだ。

そんな帝国側の思惑を察しているハウリア達は、命尽きるその瞬間まで、帝側に楯突いているのである。

ちなみに、この地下牢に満身創痍で入れられて、それでも尋問という名の拷問のために牢から出された時、余裕そうにしているハウリア達は、既に関わる帝国兵のほとんどの恐怖を宿した目で見られている。

「今頃、族長も拷問されてんだらうな……」

「そうだな。……大丈夫かな族長」

「何言ってるんだ。あの族長があんな拷問如きで屈するとも思ってるのか？」

「ああ、それもそうだよな」

「しかし、最近の族長、ますますボスに似てきたからなあ。……特に新人の訓練のして

いる時とか」

「ああ、まるでボスが乗り移ったみたいだよな。あんな容赦ない攻撃で何度も心がへし折れそうになるが、一言一言、言われる度に強くなつて家族を守りたいって思いたくなるしな」

「まあ、ボスならそもそも捕まるわけがねえし、それに捕まっても今度は内部から何もかも破壊して普通に出てきそうだしな」

「そうだな……。いや、寧ろ帝都涙目って感じだろ？　きつとボスのことだからシア

とかユエの姉御の為とかならば帝国は地図から消えるぜ」

「シアとボスカあ……」

「……………死ぬ前にはもう一回、一目見たかったな」

「ああ、そうだな……。でも、俺はシアがボスとして幸せそうな姿をまだ見たかったな」

「そうだな……。それに、シアのことだから『ハジメさあああん♡』とか言いながら抱きついてそうだな」

「わかる。アイツは昔から好きなモンに目がねえしな！」

「そうだな。シアは言うところの“一直線兔”だしな」

「おいおい、それじゃあ、シアの怪力オバケさが伝わってないだろ？　もうちよつとパワフルな感じで、アイツ確かムツツリだったし、その要素も入れてさっ」

「なら……………猪突猛進ムツツリ兔娘」っていう感じですかあ？」

「……………それだ！」

「へえ……………よく、分かりました。皆、私のことをそう思ってたんですかあ。ええ？」

「……………」

暗闇の中で盛り上がっていたハウリア達のウサ耳に、怒気の孕んだ声が響いた。

随分と聞き分けのある声に、ハウリア達が凍りついたように黙り込む。暗闇の中、まるで肉食獣をやり過ぎそうとしている小動物のように息を潜める。

「黙ってどうしたんですかあ？もう一度言ってみてくださいよ？ 誰が単純で怪力オ

バケでムツツリの兔ですかあ？ うん？」

「ハハハ、わりいな、皆。俺、ここまでのようだ。……………遂に幻聴が聞こえ始めやがった……………」

「大丈夫だ。安心しろよ、逝くのはお前だけじゃねえ。……………俺もダメみたいだ」

「そうか……………お前等もか……………でも、最後に聞く声シアの怒り声とか……………」

「せめて最後まで妹分の声じゃなくて、エロ可愛い女の子の声が良かったよ……………」

いる筈のない相手の声が聞こえて、いろんな意味で幻聴扱いをするハウリア

達。現実逃避とも言える。



「はあ……ユエ、*“光球”*を頼む」  
「……………ん」

そんな彼等に黙っていたが呆れてしまったハジメが現実を突き付ける。傍らにいるユエに頼むと、ユエは頷きながらパツと光球を出し、地下牢の闇を払拭した。途端、地下牢に浮かび上がる溜息を吐くハジメの姿と額に青筋を浮かべながら満面の笑みのシアの姿。

「……………げえっ?! ボスウウウウウ?! それに、シア?!……………」

「……………お前等、もう少しは静かにしろよ」

「……………以外に元気?」

「ハジメさん、ユエさん、此処に父様が居ないらしいですし、こんな人達は無視して行きましょ?」

ハウリア族の面々は、見るも無惨な酷い怪我を負ってるにもかかわらずに素っ頓狂な声を上げる。

ハジメとユエは呆れ顔だったが、シアはそんな彼等を無視して、此処に居ないカムを探そうとしていた。相当、今さっきの話しにキレているようだ。

「まあ、シア。落ち着けよ。心配だったんだろ?」

「づっ……………ですが」

「アイツ等も何だ？　愛故に妹分みたいなお前をイジってたんじやないか？　そう  
だろお前等？」

「「「「「イ、イエス！　ボス！」「」「」」」」」

ハジメはシアを宥めながら、ハウリア達を睨みつける。ハウリア達も流石にハジメの庄とシアに嫌われたくない故に声を上げた。

「ほら、シア。コイツ等もそう言ってるし」

「シア！　スマないっあれは、失言だった」

「俺もスマネエ！　シア！」

「……わかつたですう」

そして、何とかハウリア達の謝罪のおかげでシアの機嫌が治りハジメは安堵してるとハウリアの一人がハジメ達に話しかける。

「しかし、シアもユエの姉御もそうだが、何故こんなところにボスが？」

「詳しい話は後だ。取り敢えず、助けに来たんだよ。……つたく、ボロボロなくせに騒ぎやがってどんだけタフなんだよ」

「は、ははっ。そりゃ、ボスに鍛えられましたから」

「そうですよ。ボスのおかげで帝国の拷問なんてただのお遊戯程度しか思いませんよ」  
「俺達はボスのおかげで強くなれたんだ」

ゲフツゲフツと血を吐きながら、なお軽口を叩くハウリア達とその言葉に、ユエとシアがなんとも言えない表情でハジメを見る。

「んんー！」

（そんなに、やり過ぎたか？　ハート○ン式よりは軽くしたつもりなんだがな）

ハジメは二人の視線をスルーして誤魔化すように咳払いを一つすると、魔眼石と“構造把握”で地下牢内のトラップを確認した後に、さつさと解除を始めていく。

ハジメはトラップを解除していく内に、トラップの仕組みについて分かり、この地下牢の鉄壁さに納得したように呟いた。

「へえ……魔法陣のトラップってこういう構造か。そりや堅牢な訳だ。……まあ、俺にとつては無力だけどな」

魔法陣によるトラップは、通常、正しい詠唱によってしか解除されない。それは魔法陣に込められた魔力を、操作し散らすというプロセスを経て無力化する必要があるとわかったからだだった。

魔法陣を壊すという方法もあるが、“構造把握”で確認した限り、このトラップの魔法陣を壊した瞬間、魔法が発動したり、壊したことが他者にへと伝わる機能が備えつけられてるとわかった。

故に隠密性を維持したいなら詠唱による解除が望ましい。本来は鍵となる

詠唱を知る者しか解除できないわけだが、しかし、それは「詠唱による魔力の操作」しか出来ない場合の話である。逆に言えば、「魔力の直接操作」ができる者なら問題なく解除できるということだ。

なので、「魔力操作」を持つハジメには赤子の手をひねるぐらいのことだ（ハジメの場合は「構造把握」を使えば、その魔法陣の詠唱を把握可能である）。

あつさり、と、帝国が誇る絶対監獄でたる帝城地下牢を無力化したハジメは、更に錬成で次々と格子を開けていき、ユエの再生魔法でハウリア達全員を即座に完全回復させた。

「はあ、相変わらずとんでもないですね。しかし、まあ取り敢えず、ボス」

「「「「「「助けていただき、ありがとう」さいましたあ!!」「「「「「「」

「おう。まあ、シアのためだ。気にすんな。それよりカムは此処に居ないようだが、違う場所に囚われてんのか?」

「それなら……」

ハウリア族の一人が、今の時間はカムが尋問されていること、詳しい尋問部屋的位置をハジメに教える。

彼等は、「是非、自分達も族長救出に!」と訴えてきたが、手伝ってもらおうほどのことでもない。ここまで普通に侵入してきたハジメ達に任せるのが一番だと分かっ

ていたので、ハジメの言葉で大人しく引き下がった。

ハジメは「宝物庫」から掌サイズの金属プレートを取り出した。それは、光沢のある灰色をしており、手元部分に魔法陣が刻まれていて先端に幾つもの凹凸があった。簡単に言えば「鍵」のような形をしていた。

なんだなんだと目を丸くする。ハウリア達の前で、ハジメは鍵型のプレートに魔力を注ぎ込み、おもむろに目の前の空間へと突き出した。

すると、鍵型のプレートの先端部分がズブリと空間そのものに突き刺さり、波打つように波紋を広げていく。波紋が次第に大きくなって大人の人間サイズになったところで、ハジメは鍵型のプレートを、文字通り鍵のようにグリツと捻った。

その直後、鍵型のプレートを中心に「穴」が広がっていき、目を丸くするハウリア達の眼前で人間大の大きさに広がると、その向こう側にどこかの岩石地帯が広がった。

——空間転移用アーティファクト「ゲートキー」

設置型の鍵穴型アーティファクト「ゲートボール」と二つで一つのアーティファクトで、ゲートボールを設置した場所に空間を繋げる穴——ゲートを作ることができる。

「よし、お前等ここを通れ。向こう側は帝都から少し離れた岩石地帯だ。パル達も其処

で待機してるからな」

「はっ！　ボス、族長のことをを頼みます」

目の前で起きた非常識に唾然とするハウリア達だったが、ハジメの言葉ではハツと我を取れ返すと、「まあ、ボスですし」とすぐに納得し、美しい敬礼をした。そして、躊躇いなくゲートをくぐっていった。

ハウリア達がゲートの向こうへと渡ったと確認したハジメは空間の穴を閉じ、カムの居場所へと向かった。

新しい警備を持ち前のスキルで魔法で突破して易々と目的の場所に辿り着く。外の見張りもさくつと倒して扉の前につくと、何やら怒声が聞こえてきた。

シアの表情が強ばる。もしかして、中にいるだろうかカムが酷い目に合わされているのではないかと、軽口を叩きながらもボロボロだった先程の家族を思い出して心配する気持ちが湧き上がってきたのだろう。

それを見て、さっそく踏み込もうとドアノブに手をかけたハジメの動きが、向こうから微かに漏れてくる聞き覚えのある怒声により思わず止まる。

「なんだその腑抜けた拳は！　それでも貴様は帝国兵かつ。　そんなんで帝国兵を名乗れるなら帝国の底が知れる！　それぐらいなら子猫でも帝国兵に入隊できそうだな！　どうしたっ。悔しければ、せめてこの私の骨を一本でも砕いてみる！　できなけれ

ば、所詮貴様は「弱虫」だ！」

「う、うるせえ！　なんでてめえにそんなことを言われなきやいけねえんだ！」

「口を動かす暇があるのなら貴様についてる手を使え！　貴様の両方についてるそれはお飾りなのか？　だから、所詮貴様は「弱虫」なのだ。恋人もいるなら其奴も「弱虫

「だろう？　それなら、良かったじゃないか「弱虫カップル」でお似合いじゃないか  
！」

「て、てめえ！　ナターシャはそんな女じゃねえ！」

「よ、よせヨハン！　それはダメだ！　コイツ死んじまうぞ！」

「ふん、そつちのお前もやはり「弱虫」か。帝国兵はどいつもこいつも腑抜けてるな……いつそのこと「弱虫軍団」と改名でもしたらどうだ！　この腑抜け共！　御託を並べないで、殺意の一つでも見せてみる！　私なら、家族を守るためならば、こんな拷問生ぬるいわっ！」

「なんだよお！　コイツ、ホントになんだよお！　こんなの兎人族じゃねえだろ！　誰か尋問を変わつてくれよお！」

「もう、嫌だあ！　他の奴等もそうだけどコイツは特に話していると頭がおかしくなっちゃまうよお！」

そんな叫び声と怒声が部屋から盛れ聞こえてくる。

ハジメ達は無言だった。ドアノブに手を掛けたまま、捕まって尋問している帝国兵の方が追い詰められてるといふ非常識に頭が着いていけず思わず顔を見合わせる。「カム……話に聞いてはいたが、ここまで随分と遅しくなるとはな……コレ、助けが必要か？」

「……………帰る？」

「……………いえ、すみませんが、一応、助けてあげて下さい。流石に自力では出て来れないと思うので……………」

シアが在りしの日父の姿を思い、遠い目をしながらもハジメに頼む。

実際、シアの言う通りである。威勢はよくてもカムが自力で脱出する可能性はないので助ける必要はあるのだが……………。

「ふん、口ほどでもないっ。やはり数だけで私達を捕らえただけで、一人一人は弱者の集まりなんだろうな。そんな奴等が我等ハウリアを黙らせることは出来ないと思え！」  
扉の向こうからカムはまだ、叫ぶ。これも流石に尋問官達もまいったのか……………

「だから、わけわかんねえよ！ くそっ、もう嫌だ！ こんな狂人がいる場所にこれ以上いられるかっ！ 俺は帰るぞ！」

「待て、ヨハン！」

と、尋問官が言った後、ドタドタと扉に近付いてくる音が聞こえてくる。



ハジメはカムの変わり様に少し表情が引き攣るが、扉の前で拳を振りかぶった。そして、バンツと音を立てて扉が開いた瞬間、拳を突き出す。

ヨハンと呼ばれていた尋問官の一人が、一瞬「えっ？」という驚愕と困惑に満ちた表情をしたが、次の瞬間には顔面に鋼鉄の拳を埋め込まれて部屋の奥へと吹き飛ばされていった。

ハジメはそのまま部屋に踏み込み、一瞬でもう一人の尋問官に接近すると、驚愕で硬直してるのを幸いに同じく殴りつけて気絶させた。

そして、気絶した尋問官二人を適当部屋の隅に放り投げておく。

「まさか……ボス……ですか？」

「ああ。なんといか、よくそんなボロボロであれだけの罵詈雑言を放てたな。ホントに遅くなったなカム」

「は、ははは。どうやら夢でもないようですね……。おお、ユエ殿にシアまで」

一瞬、夢でも見ているのかと自分を疑った様子のカムだったが、先程のハウリア達以上にボロボロでありながら、力のある声音でハジメ達に返答する。

思考力も鈍ってないようで、どうやらハジメ達が自分を助けに来てくれたのだと直ぐに察したようだ。

「せっかくの再会に無様を晒しました。しかも帝国の腑抜け共を罵るのに忙しくて、気

配にも気付かないとは……いや、お恥ずかしい」

「……父様、既にそういう問題じゃないと思います。直ぐにでも治療院にも行くべきです。ていうか、その怪我で何故ピンピンしているんですか？」

「何、シア簡単なことだ。……気合いだ」

「ハジメさああん！」

「ああ……ほら、シア泣くなつて、流石に俺にも心にダメージがくる」

「………ハジメ」

「いや、ユエもそんな目で見ないでくれ……」

拘束を解かれたカムは本当に恥ずかしそうに、折れてあらぬ方向を向いてる指で頭をカリカリと掻く。シアのツツコミにも平然と非常識な返答をした。

返答を聞いて泣きそうになるシアはハジメに抱き着き、ユエは再生魔法を掛けながら、カムをこんな風にした原因のハジメを少し恐ろしげな眼差しで見ると、ハジメは少し頬が引き攣っていた。ハジメもカムがこんな事になるのは予想外だったのだろう。

完全に回復して自分の体の調子を確かめるようにピョンピョン跳ねているカムを横目に、ハジメは再びゲートキーを取り出した。

「他の連中は一足先に逃がした。さっさと行くぞ」

「しかし、ボス、装備が取られたままなのですが……」

「問題ない。アレは唯の遊びで作ったような武器だからな。もつと性能がいいもんが、宝物庫」にあるから、それやるよ」

「ほう、新装備を頂けるので？ それは、嬉しいですね……あと、ボス少しお耳に入れておきたいことが……」

「……わかった」

カムをゲートに押し込んで、未だに抱き着いてるシアを抱っこしながら、ハジメもユエもゲートを潜るのだった。

~~~~~

一方、少し時間が戻って、ハジメ達が帝城に侵入した頃。

警鐘が鳴り響く帝都の夜に、突如、光が迸った。光の奔流は闇夜を切り裂いて直進し、巫人奴隸達が寝泊まりしている掘っ立て小屋の密集地区——そこにある帝国兵の詰所に直撃した。

明らかに魔法攻撃と分かるそれは最小限まで手加減されたものらしく、詰所の外壁が吹き飛んだだけで中の帝国兵は無事なようだった。もつとも大半は衝撃で気絶しているが。

それをなしたのは、建物の屋根上にて悠然と佇む四人の人影……………。

「何者だ、貴様等！ 帝国に盾ついてただで済むと思っているのか！」

その人影に向かって、駆けつけた帝国兵の一人が怒声を上げる。

「しかも、しかも……………そんなふざけた仮面なんかつけやがって！ 馬鹿にしてんのかっ！」

「え？ いや、馬鹿にしてるわけじゃ……………」

「どう見ても馬鹿にしてるだろうが！ 特に、そのキツネの仮面の奴！」

「?!」

「可愛さアピールでもしてる気か?! 仮面を付けてる時点で激しくキモイんだよっ！

この変質者めっ！」

「?!……………可愛さなんてアピールしてないわ。……………特にそういうのが好きなわけでもないし……………無理矢理だもの……………私のせいじゃないもの……………」

「ちよつと、不細工面なおっさんの癖にシズ……………フォックスになんてことを言うの!!

すず……………モンキーは本気で怒っちゃうよ！」

「そうだ！ シズ……………フォックスが可愛いモノ好きで何が悪い！ それ以上フォックスを傷つけたら、俺……………ライオン仮面が許さないぞ！」

「あく、取り敢えず、ゴリラも許さねえぞ！」

どこか疲れ切った様子で悄然と肩を落とす仮面フォックス。彼女を庇うように他の仮面達が帝国兵に言い返す。

彼等の目的は帝都で騒ぎを起こし、ハジメ達の帝城侵入を手助けすることなのだが……………。

フォックスこと雫はハジメの意図を読み取っていた。故に光輝の暴走を抑えるために仕方ないとはいえ、あんまりな扱いに、帰ったら絶対ハジメに復讐しよう心に誓いを立てた。

フォックスが項垂れている間にもヒートアップした帝国兵達が、遂に「ふぎけたアニマル仮面野郎共をとっ捕まえろ！」と襲いかかり始めた。

しかし、相手は表層とはいえ「オルクス大迷宮」の前人未到領域を踏破してきた異世界チート達だ。並の兵士如きが敵うはずもなく次々と蹴散らされていく。

「ちくしょう！　ふぎけた動物の仮面の癖に強すぎる！」  
「おのれえ、フォックスめっ！」

「つつか、ライオンが持つている剣、どつかで見たことあるような……………」

帝国兵が地面に這いつくばりながら悪態と共に呻き声を上げる。既に三個人小隊ほどが戦闘不能に追い込まれていた。堪りかねた指揮官が思わず叫ぶ。

「くそつ、貴様等、一体なにが目的なんだ！」

その質問にライオン仮面が一瞬ピタリと止まった。そして、溜まりに溜まった鬱憤を吐き出かのように要求を叫んだ。

「亜人奴隷達の解放を、せめて待遇改善を要求する！」

「……………はあ？」

「お前達の亜人族に対する言動は目に余る！むやみに傷つけるのは止めるんだ！」

帝国兵達は、まさかの要求に「なに、言ってるんだコイツ？」といった表情で顔を見合わせた。

無理もない。ライオン仮面達が昼間見た亜人奴隷への対応はあれで常識なのだ。それを目に余ると言われても、何が言いたいのか、ピンと来ないのだ。

「くっ。なんだ、その態度は……………あんな仕打ちをしておいてっ」

「こう……………ライオン。残念だけど非常識なのは私達の方よ。私達の目的は陽動であることは忘れないで」

「分かってる！でも、せめて子供達だけでも……………」

「数が多すぎるわ。子供達の目の前で助ける子を選ぶの？それに、そろそろ時間よ……………私だって悔しくは思っけれど、今は、きっちり目的を果たしましょう？」

「……………そうだな」

ライオン仮面は、仮面越しでも分かるほどの渋々といった感じで引き下がっ

た。

フォックスはそれを確認すると、仮面の突き出す鼻の先をトンと指で触れる。仮面の作成者に帝国から目的を聞かれたり、或いは勇者パーティーだと疑われたり場合は、そうしてみると言われていたのだ。

仮面の内側、目元の部分に魔力で光る文字が出てきた。ピクツとしつつも、直ぐに最初の一文が浮かび上がってきたので、フォックスは思わず読み上げていく。

「帝国兵、聞きなさい。私達の目的は帝都の現状を確認することよ。皇帝を討つには足りなかったようだけれど、随分と痛手を負ったようね！」

帝国兵達がギョツとした表情になった。仲間の仮面達もギョツとしてい

る。「まさか、まさか貴様等は魔人族?! そうか、帝国の状況を確かめに来たのか!」

「精鋭中の精鋭部隊。魔獣仮面部隊ANIMALよ!」

フォックス、若干ヤケクソになっており、視線で仲間にはポーズを取れと促している。ライオン仮面達が、フォックスの剣幕に押されておおずとポーズを取っている。

これで、魔人族には動物の仮面を被った精鋭部隊がいるという噂が立つことになるだろう。フォックスは心の中で魔人族に謝った。困った時は大体魔人族のせ

いにしとけばいい。アッチにはお前と同レベルの味方の苦勞人がいるから何とかしてくれるという、何処その白髪少年の悪辣な発想に軽く目眩を覚える。

ついでにライオン仮面が亜人奴隷解放を口にしてしまったので、念の為、彼等にしわ寄せが行かないようにフォローしていく。

魔人族がなんで？という疑問が出そうだが、そこまでフォックスの知ったことではない！

「今回の件で、亜人奴隷に八つ当たりするのは止めておきなさい。もし、そんなことをしたら……」

「な、なんだっていうんだ……」

異様な雰囲気恐れおののく帝国兵達へ、フォックスは告げる。

「夜、シャワーを浴びてる時その背後に、誰もいない筈の廊下の奥に、鏡の端に、夢の中から……神隠しに合って、何処か……誰も知らない場所へと連れ去っていくわよ？」

抑情のない淡々とした語りは不気味の一言。帝国兵達は一斉に息を飲み込み、そして思った「怖え……」と。

仮面達は目的は果たしたとでもいうように「とう！」という感じで建物から裏路地に飛び降りた。そして、慌てて帝国兵達が駆けつけた時には、まるで夢幻だったように忽然と姿を消していたのだった……。



後に、帝国兵の間で「キツネの死への誘い、奴は何時も見ている」という都市伝説が広まるのだが、それはまた別の話。

某魔族の將軍は、自分の知らない名の部隊が勝手に他国でやらかしているのを聞きいた後、その処理を任せられ、胃に穴が空きそうになったのも別の話。

そして何故、自分だけ……と、フォックスの中の人が崩れ落ち、未来の想いに慰められていたのは別の話である。

この後、帝城内から忽然と消えたハウリア族や、魔族の隠し玉らしい動物仮面集団の起こした騒ぎ、その日の夜に帝都のある場所からの大きな魔力余波が渡った件により、帝都が朝まで上を下への大騒ぎになったことは言うまでもなかった……。

## 八十六話

## 新生ハウリア反撃の始まり

カムを伴って、ゲートを通って岩石地帯に空間転移して来たハジメ、ユエ、シアの三人は、ハウリア達の熱狂的な歓迎に出迎えられた。

ハウリア達自身も、お互いに肩を叩き合ったりして、無事を喜び合っていた。

「ぐすつ、良かったですう。みんな無事で良かったですう。ハジメさん、ユエさん、ありがとうございます」

涙声で感謝するシア。

一目。家族の無事な姿を見たいと言った彼女の願いは確かに叶ったのだ。

「……ん、間に合って良かった」

ユエが背伸びして、シアの頭を良い子良い子すると、シアの涙腺は決壊。そのままお姉さんに縋り付く妹のように抱きついた。

「ま、いろいろ予想外だったが良かったな。しかし、見た感じアレスの奴が帰ってきてないな……まだ、何か調べてんのか？」

まだ、帰ってきてないアレスのことを心配しつつも、ハジメは優しい手つきでシアのウサ耳を撫でた。と、その時、ハジメの耳に風切り音が聞こえた。

ごく自然な動作で掲げられたハジメの手。其処には黒い鞘に納められた見覚えのある刀が片手白羽取りの要領で掴み取られていた。

「……………なんのつもりだ、八重樫？」

鞘の納めた状態の黒刀でハジメに殴りかかった襲撃者の正体は八重樫 雫、その人だった。

片手の指先で掴んでいるにもかかわらず、どれだけ力を込めようともビクともしないハジメに舌打ちをしつつ、雫はなお、ギリギリと力を込める。

「……………ストレス発散のために南雲君に甘えてみただけよ。大丈夫、私は南雲君を信じているわ。優花達に対してみたいには、そのリアアナ海溝より深い度量で受け止めてくれるって……………だから大人しく！ 私に！ タコ殴りに！ なりなさい！」

「……………キツネがそんなに嫌だったか？ それなら獣耳カチューシャが良かったのか？ 良かれと思つたのに」

「嘘おっしやい！ あなたの意図は分かつてるのよ！絶対、悪ふざけでしょ！ 何となく雰囲気の流れされたけど！ ある意味、自業自得ではあるけれど！ 一発、殴られずはいられないこの気持ち！ 男なら受け止めなさい！」

「んな、理不尽な……」

どうらや、キツネ仮面のダメージは思っていたより相当、深かったらしい。

確かに、拒めばよかったただけなので、場の雰囲気や仮面自体の優秀な機能に流された雫の自業自得である。

しかし、そうとは頭の中で理解していても、明らかに悪ふざけが入っていたハジメの言動と帝国兵の罵りが地味に効いて、雫は八つ当たりせずにはいられなかった。

もつとも、ハジメと雫の実力差は明らかであり、実際、黒刀の鞘がギチギチと音を立てるだけで押し切れる気配が全くない。

なので仕方なく、雫はハジメが備えつけてくれた黒刀の能力を一つ解放することにした。文字通り、ハジメなら多少痛みは感じてでも受け止めるだろうと、ある意味、信頼を込めて。

「こんのお！——はしれ奔れ——〃雷華〃！」

「お？ おお〜」

バチバチと放電する黒刀を掴みながら、しかし、痛がるどころか、感心した様子を見せるハジメ。雫は思わずツツコミを入れる。

「ちよつと、南雲君。電流流しているのに、なんで平気なのよ」

「いや、なんでも何も、お前、俺が雷を纏ったりしたり、レールガンを放っているところを何度も見てるだろうに。生身で雷の上位の“紅雷”を扱うのに、この程度の電撃が効くわけ無いだろ？ それと八重樫達はアレスが戻ってきたところを見たか？」

「くっ、仕方ないわね……今回は引くわ。でも、いつかその澄まし顔を殴ってやる。いえ、私達も南雲君達よりも早く戻ったけど、アレスが戻ったところを見てないわ」

「……………そうか」

もつともな返答に、雫は渋々といった様子で引き下がった。彼女の背後には目を丸くしている光輝達がいる。どうやら、思いがけない雫の行動に驚いてるようだった。

優花は面白そうに、ユエはジト目で、それぞれ雫を見つめている。小声で、

「雫の八つ当たりが見れて面白いわ……まあ、私達から見れば唯の甘えにしか見えな  
けど」

「……………ん、優花に同意。アレは甘え」

などと話し合っている。その話しを聞いていたテイオもうんうんと頷いていた。

「ボス、少し宜しいですか？」

ようやく、喜び合いが終えたららしいカム達が、“宝物庫”から何かを取り出し

てから、それを空へ飛ばしていたハジメの方へと歩み寄ってきた。

真剣な表情であることから、ハジメも目を細め、ただの再会の挨拶ではないことを察する。錬成で手っ取り早く椅子を車座状に設置すると、その内の一つに腰掛け、視線で了承の意を伝えた。

「まず、何かあったのかといことですが、簡単に言えば、我々は少々やり過ぎたようです……」

そう言つて始まったカムの話を要約すると、こういうことだった。

カム達は、“狂化”帝国兵の他に殿を務めた帝国の部隊員達も相当の数を撃破している。

本隊に合流できなかった兵士の数と生き残りの証言から、帝国側は「フェアベルゲン」に通常の戦士達とは毛色を異なる未知の集団がいると警戒を強めたらしかった。

既に魔族族によって大きな被害を出した後だからだろう。彼等の警戒心齒極めて高く。バイアスの指揮の下“亜人族は樹海から出ない”という常識を捨てて、奪還に来る可能性を意識してたようだ。

というのも、カム達が帝都に到着したとき、さらわれた大勢の亜人族は即労働に駆り出されるでもなく、一箇所にとめられていたのだ。

しまったと思つた時には既に遅かつた。嚴重に嚴重を重ねて構築された監視網に発見され、カム達は一時撤退を余儀なくされた。

帝国兵側も相当驚いたことだろう。何せ、網にかかつた正体不明の原因は、温厚で争い事とは無縁の愛玩奴隸である兎人族だったのだから。しかも、樹海でもないのに、包囲する帝国兵に対して匠な連携を駆使して対等以上に渡り合つたのだ。当然、その非常識は帝国上層の興味を引いてしまう。

その結果……………

「我等は生け捕りにされ、連日、取り調べを受けていたわけです。あちらさんの興味は主に、ハウリア族の変わり様の原因と所持していた装備の出所。そして、フェアベルゲンの意図つてところです。どうやら、我等をフェアベルゲンの隠し玉か何かと勘違いしてゐるようで……実は一族郎党処刑されかけた関係だとは思ひもしいでしょうなあ。ま、今は仲良くやつてますけどね、ハハッ」

尋問官にも、「フェアベルゲン」の情報など吐けとか言われたが、無視を貫く姿は国のためならば自分達はどうなつてもいいと覚悟を持つ奴等だと関心を強められてしまつたらしい。

特に、何度か尋問を見に来たガハルドなど、不敵な笑みを浮かべながら新しい玩具を見つけた子供のよう瞳を輝かせていたという。

「で？捕虜になった言い訳がしたいわけじゃねえんだろ？さっさと本題を言え」

「失礼しました、ボス。では、本題ですが、我々ハウリア族と新たに家族として迎え入れた者を合わせた新生ハウリア族は——帝国に戦争を仕掛けます」

カムの鋭い眼差しでなされた宣言に、その場の時が止まる。そう錯覚するほど、ハジメと、カムを含めたハウリア族以外は、一切の動きを止めて硬直していた。理解が追いついていないのか、或いは驚愕のあまり思考停止に陥ったのか。

周囲に静寂が満ちて、僅かに虫の奏でる鳴き声が夜の岩石地帯に響く。

その静寂を、最初に破ったのはシアだった。

「何を、何を言っているんですか、父様？ 私の聞き間違いでしょうか？今、私の家族が帝国と戦争をすると聞いたように聞こえたのですが……………」

「シア、聞き間違いではない。我々ハウリア族は、帝国に戦争を仕掛ける。確かにそう言った」

僅かに震えながら、努めて冷静であろうとしたシアだったが、カムの揺るぎない言葉を聞いて血相を変えた。

「ばつ、馬鹿のことを言わないで下さいっ！何を考えているのですかっ！確かに父様達は強くなりましたけれど、たった百人とちよつとなんですよ？ それで帝国と戦争？血迷いましたか！ 同族を奪われた恨みで、まともな判断もできなくなっただんですね?!」



それに、戦争するならフェアベルゲンの戦士達も加えることはしないんですかっ」  
「シア、そうではないのだ。我々は正気だし、フェアベルゲンの戦士達は、まだ怪我を負っている者が多いから無理に戦わせたくない。それに、これは私の独断である。後、ちゃんと話を——」

「聞くウサ耳を持ちません！ 復讐でないなら調子に乗ってるんですね？ だつたら今すぐ武器を取って下さい！ 帝国の前に私が相手になります。その伸びきった鼻っ柱を叩き折ってやります！」

興奮状態で「宝物庫」からドリユッケンを取り出し、豪風と共に一回転させビシツとカムの眼前に突きつけるシア。その表情は、無謀を通り越して、ただの自殺としか思えない決断を下したカム達への純粹な怒りで満ちていた。

淡青白色の魔力が荒れ狂い、物理的圧力すら伴ったプレツシャーが放たれる。その迫力は凄まじく、それこそ光輝達異世界チート組が霞むほどだ。

事実、いつも元気に笑っていて、怒ると言ってもどこかコミカルさがあるシアからは想像もできない怒気と迫力に、光輝達は息を呑んで硬直している。

だが、そんな勇者達さえ怯む迫力で戦鎧を突きつけられた当のカムは、臆することもなく、ただ静かな眼差しで娘を見つめ返していた。

睨み合う、或いは見つめ合う二人に誰もが固唾を呑んで見守る中、やはり

動いたのは、ハジメだった。

「シア」

「……ハジメさん、今は家族で話してるんです。邪魔を——んう」

「「「「「「?!」」」」」」」」

いつの間にか、シアの後ろに迫っていたハジメは、シアを呼び掛ける。シアは、たとえ大好きな恋人であるハジメであつても今は邪魔されたくないなのでハジメの方へ振り返り、邪魔しないでと言おうと瞬間、ハジメはシアの言葉を遮るようかのよう唇を奪う。

光輝達とハウリア達はハジメのいきなりの行動で目を見開いてある意味、硬直してしまふ。カムもいきなりのことでポカンと口を開けている。

「?!んう……ハジ……しゃ……んん!」

シアが唐突のキスに驚きながらも、更に舌どうしが絡み合うキスとして顔が真っ赤になる。そして、離れようと暴れるが、それと逆にハジメは離れないようにとシアの片手で後ろ頭を抑えガツチリと拘束する。

「んん——ぶはあつ……ハアハア」

ざっと、十数秒。唐突のペロチューと仲間や家族の前で恋人とのキスのところを見られたりで、ふにやりと力が抜けてしまったシア。四つん這い状態になってハアハアと熱い吐息を漏らしつつ、恨めしげにハジメを睨んだ。キスは嬉しいけれど、時と場合を考えて欲しいと、その目が言葉より雄弁に物語っている。

ハジメは優しい笑みを浮かべると、今度はシアのウサ耳を撫でる。それは、優しげで労るような手つきでハジメを恨めしげに睨んでいたシアも表情が和らぎ、あえなく気持ちよさそうに目を細めてしまう。

「どうだ、少しは落ち着いたか？カムの話はまだ終わってないんだ。ぶっ飛ばすのは話を聞いた後からでも遅くはないだろ？」

「うっ……そうですね……すみません。ちよつと頭に血が上がりました。もう大丈夫です。父様もごめんなさい」

ウサ耳をへによんとさせて、シアは反省を示すと、カムは優しげに目を細めると頭を振った。

「家族を心配することの何が悪い？謝る必要などないよ。こつちこそ、もう少し言葉に配慮すべきだったな。……私もいろいろと焦っていたようだな。それにしても、くつくつく」

「な、なんですか、父様。その笑いは……」

「いや、お前が幸せそうで何よりだと思っただけだ。……しばらく見ない間に、ボスと恋人の一人になったと見える。愛されてるようで何よりだ。そろそろ孫の顔が見れたりするか？」

「なっ、ま、まごって、何を言ってるんですか、父様！ ハジメさんともう、シマしたけど……子供はまだ……あつ」

カムにからかわれて、自分でも地雷を口にしたシアは顔を真っ赤になり、その顔を隠したためかハジメの胸元に抱きつく。見ればハウリア達全員、ニヤニヤとした笑みを浮かべている。

「クハっ……」

（どいつもこいつも、いい性格になったな……）

ハジメはそんなことを思いながら苦笑いをして、シアの視線をスルーしてカムに尋ねた。

「カム、まさかと思うが、その話をしたのは俺に参加を促すためじゃないだろうな？」  
「ははっ、それこそまさかですよ。ただ、こんな決断ができたのも、全てはボスに鍛えられたおかげです。なので、せめて決意表明だけでもと、そう思っただけですよ」

カムは笑いながら、ハジメの推測を否定した。どうやら、本当に自分達だけでやるつもりのようなのだ。彼等の瞳に宿る決意は本物で、復讐心に狂っているわけ

でも、力を得て調子に乗っているわけでもないことがよく分かる。

しかしそうになると、本当に無謀としか言いようがない決断であり、その決断に至った理由が気になるところだ。

「理由は？」

「意外ですな、聞いて下さるのですか？興味が無いと思いましたが……」

「俺に鍛えられて決断ができたことは、お前等が無謀をやらかそうって原因は俺にもあるだろ？　それだけなら知ったことじゃないが……」

そう言つて、ハジメはチラリと横にいる。家族の未来を想いウサ耳をへたらさせているシアの姿を見て、言葉を続けた。

「俺もこれから、家族になる奴等が心配でね」

その言葉を聞いたカムは嬉しそうに目元を緩め、「なるほど」と頷き理由を話し出した。

「先程も言った通り、我々兎人族は皇帝の興味を引いてしまいました。それも極めて強い興味を。帝国は実力至上主義を掲げる強欲が強い者が集う国で、皇帝も例には漏れません。そして、弱い者は強い者に従うのは当然であるという価値観が性根に染み付いている」

「つまり、皇帝が兎人族狩りでも始めるって言いたいのか？殺すんじゃないかって、自分のも

のにするために？」

「肯定です。尋問を受けているとき、皇帝自らやって来て『飼ってやる』と言われまして。もちろん、その場で齒の裏側に仕込んでいた隠し刃を投げつけましたが……」

皇帝に向かって隠し刃を投げつけたというカムの言葉に、ハウリア達は「流石、族長！」と盛り上がり、光輝達は「あの、ガハルド陛下に?!」と驚愕を顕にした。

無理もないだろう。捕まっていながらも、皇帝陛下に隠し刃を投げつける者など、亜人族以外の種族も含めてカムが史上初なものではないだろうか。

「しかし、そのせいで逆に気に入られてしまいました。全ての兎人族を捕らえて調教してみるのも面白そうなどと、それは強欲そうなると顔で笑っていましたよ。断言しますが、あの顔は本気です。再び樹海に進撃して、今度は多くの兎人族を襲うでしょう」

当然、今度は愛玩用ではなく、戦闘用として、だ。

カムは難しい表情をして、溜息を一つ。

「まだ、未だ立て直しきれていないフェアベルゲンでは次の襲撃には耐えられない。ここでもし帝国から見逃す代わりに兎人族の引渡しを要求されれば……」

「なるほどな。受け身に回らず、文字通り同族の全てが奪われる、か」

「肯定です。フェアベルゲン側もこの要求されても、引渡しは行わないと思います。しかし、それだとフェアベルゲンはまた、戦地となってしまう。そして、我々のせいで沢

山の亜人の未来が奪われるのは……耐え難い」

「どうやら、思っていた以上二カム達は状況的に追い詰められていたようだ。」

カムの言う通り、フェアベルゲン側はこの要求を呑む気はないだろう。しかし、そうなる結果的にフェアベルゲン側は防衛戦が必須になるだろうが負けるのは確実。

そして、捕まってしまったハウリア以外の兎人族は地獄を見ることになる。彼等が「強い兎人族」という強い望みに応えられなければ、女、子供は愛玩奴隷に、それ以外は殺処分になるのがオチだろう。

「だが、まさか本気で百人ちよいなんて数で帝国軍と殺り合えるとは思ってないだろう？ それに、アッチには数も不明な「狂化」帝国兵だっているんだ。戦力差は圧倒的だ」

「もちろんです。平原で相対して雄叫びを上げながら正面衝突など有り得ません。それに、ボスの言う通り奴等がああ帝国兵を出すなら我々の勝利は無くなるのは確実。しかし、我々は兎人族。気配の扱いだけは、どんな種族にも負けやしません」

「そう言つて、ニヤリと笑うカム。ハジメもカムの意図を察する。」

「つまり、暗殺か？」

「肯定です。我等に牙を剥けば、気を抜いた瞬間、闇から刃が翻り首が飛ぶ……それを実践し奴等に恐怖と危機感を植え付けます。いつ、どこからか襲われるか分からない、兎人族はそれができる種族なのだと力を示します。弱者でも格下でもなく、敵に回すには死を覚悟する必要がある脅威だと認識させるわけです」

「皇族が暗殺者に対する対策をしてないと思うか？」

「勿論していません。しかし、我等が狙うのは皇帝の一族ではなく、彼等の周囲の人間です。流石に、周囲の人間全てまで厳重な守りなどないでしょう。昨日、今日、親しくしていた人間、或いは部下が、一人、また一人と消えていく……。我々に出来るのは、今のところこれくらいですが、十分効果的だと思います。最終的に、亜人族達に不干渉の方針を取らせることができれば十全ですな」

なんとも、えげつない策であるが、皇族一味を暗殺するなどと言うよりは、よほど現実味がある。ただ、それだと、帝国側に脅威を感じさせるには必然的に時間が掛かってしまうので、大規模な報復行為に出られる可能性が高いだろう。

帝国側が兎人族の本格的な捕縛戦又は殲滅戦に出るか、それとも、実力至上主義のもと、その力を認めて交渉のテーブルに着くか、どちらが早いとかいう紛れもない賭けだ。それも極めて分の悪い賭け。

それでもやらなければ、どちらにしろ兎人族の未来はないだろう。既にハ



ウリア族は全員、覚悟を決めた表情だ。

「……父様……みんな……」

シアは悄然と肩を落とした。帝国兵相手に立ち回り、絶対監獄というべき帝城の地下牢からも逃走を果たした兎人族を、皇帝は指摘興味と公的責務として見逃しはしないのだろうか。察したのだ。

カム達が残された道は、同族や亜人達を見捨てて生き残るか、全員仲良く帝国の玩具になるか、身命を賭して戦うか、そのどれしかなかった。

「シア、そんな顔をするな。以前のようにただ怯えて逃げて蔑まされて、結局蹂躪されて、それを仕方ないと甘受けすることのなんと無様なことか。今、こうして戦える、その意志を持てること、我等の故郷や同族達を守れるのが、私達はこの上なく嬉しいのだ」  
「でも……」

「シア、私達は生存の権利を勝ち取るために戦う。ただ生きるためではない。ハウリアとしての矜持をもって生きるためだ。どんな力を持つとも、ここで引けば、結局、私達は以前と同じ口だけが達者な敗者となる。それだけは断じて許容できない」

「父様……」

「前を見るのだ、シア。これ以上、私達を振り返るな。お前は決意したはずだ。ボスと共に外を出て、前へ進むのだと。その決意のまま、真つ直ぐ進め」

カムが、族長としてでも、戦闘集団のボスとしてでもなく、一人の父親として娘の背中を押す。自分達のことこれ以上、立ち止まるなど、共にいたいと望んだ相手と前へ進めと。

泣きそうな表情で顔を俯けてしまうシアに愛しげな眼差しを向けたあと、カムはハジメに視線を転じて目礼をした。「娘を頼みます」とでも言うかのように。

無言無表情のハジメの代わりに、光輝が、いかにも「俺がなんとかする！」とでも言いそうな雰囲気腰を上げるが、雫の黒刀に後頭部をぶん殴られて撃沈した。雫はストレスが溜まっているようで、光輝の止め方がいつもより雑であった。

ハジメが反応を示さないと、シアがハジメへと振り返った。だが、シアが口を開く前に、何を言うか察したカムが叱責するようにシアの名前を強い口調で呼び止めた。

「シアー！」

それにビクツ！と体を震わせるシア。

カム達は、ハジメに助けを求めるつもりはなかった。自分達のミスでまんまと敵の罠にはまり、皇帝の目に留まってしまったことは自業自得と言える事態なのだ。ここでハジメの力を当てにして解決を委ねるようでは、以前と何も変わらない。

カムが言ったように、この戦いは、兎人族が掲げることができるようになっ

た矜恃を貫くための戦いなのである。

そして、シアもまたそれは理解していた。ただ逃げるだけしか出来なかった自分も同じであり、今は、ハジメの仲間としての矜恃がある。

だが、余りにも分が悪い賭けを行おうとしている家族に、心は否応なく痛む。結局、シアは何も言えずに口をつぐんだ時だった。シュバツと風を切るような音と共にハジメの下へ鳥の形がした物がハジメの肩に着地する。

ハジメ以外の全員が目丸くするが、ハジメは無表情を崩し、笑みを見せる。

「……………来たか」

ハジメはそう呟いた後、立ち上がりつてから俯くシアに話し掛ける。

「シア」

「ハジメさん……………」

シアの瞳に、僅かばかりの期待の色が宿る。

「今回の件で、俺が戦うことはない」

「つ……………そう、ですよね」

しかし、続くハジメの言葉に泣き笑いの表情をして再び俯いてしまった。背後で光輝が何かを喚くこととして、脇腹に当てられた黒刀から電流を流され気絶したのを尻目に、ハジメは、早とちりをして沈むシアのほっぺを苦笑いしながらムニムニし

た。

「おいこら、早とちりをするな。戦わないが手伝わないとは言っていないだろ？」

「へ？」

ハジメの言葉に、シアはほっぺをみよくとされながら間抜けな声を出す。カム達も、ハジメの言葉の意味を図りかねたのように困惑した表情で顔を見合わせている。

「今回の件はハウリア族が強さを示さなきゃならない。容易ならざる相手はハウリア族だと思わせなきゃならない。この世界においてクソみたいな亜人差別が常識である以上、俺が戦って守ったんじゃない。俺がいなくなつた後に同じことが起きるからな。何より、カム達の意志がある。俺はそれを尊重したい。だから、俺は一切、戦うつもりはない」

ハジメはそこで視線をカムへと転じた。

「しかし、状況が変わつたし、それに俺の大事な恋人がこんな顔をしてんだ、黙って引き下がると思つたら大間違いだぞ？」

「し、しかし、ボス……なら、一体……」

困惑を深めるカム達に、ハジメは牙を剥くような不敵な笑みを浮かべて宣言する。

「カム、そしてハウリア族。シアを泣かせるようなチンケな作戦なんぞ全て却下だ。お前等は直接、皇帝の首にその刃を突きつける。髪を掴んで引き摺り倒し、親族、友人、部下の全てを奴の前で組み伏せろ。帝城を制圧し、助けが来ないと、一夜で帝国は終わったのだと知らしめてやれ！ハウリア族にはそれができるのだと骨の髄まで刻み込んでやれ！この世のどこにも安全がないのだと、帝国の歴史にその証を立ててやれ！」

辺りに静寂が満ちる。誰もが、ハジメの氣勢に吞まれて硬直している。ゴクリツと生唾を飲む込む音がやけに明瞭に響いた。

ハジメは、周囲を睥睨しながらカム達を方へと見つめ声を出す。

「……………まさか、できないのか？」

「「「「「ツ?! いえっ!」」」」」」

ハジメの視線がカム達を貫く。そして、カム達はすぐさま跪いて平伏する。ハジメはそれを見て言葉が続けながら声を上げる。

「……………俺が膳立てしてやるんだ。だから、お前等は雑魚ではなく皇帝を攻めろ。そして、研ぎ澄まさせた意地と己の信念の刃で、邪魔する者を尽く斬り伏せろ！」

「「「「「はっ!!」」」」」」

「主役はお前等だ！気合いを入れろ！ 新生ハウリア族、百二十二名で…………」

「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

「帝城を落とすぞっ」

「「「「「はっ！ ボスのご命令とならばっ!!」「」「」」」」

膳立てするとは何をやる気なのか、帝城を落とすなどそれこそ不可能ではないのか、そんな疑問は、ハウリア達の頭にはこれっぽっちもない。自分達が信頼してる、自分達を口だけじゃなく自分達の手で守りたい者を守るようにしてくれたボスが、扉の鍵を開けてくれるというのだ。

ならば、その先で待っている障害くらい切り裂けなくては、新生ハウリア族の名折れである。ボスに顔向けができない。

故に、ハウリア達は心は一つとなつて、*“帝城落とし”*への闘志が燃え上った。

帝都から離れた岩石地帯に、闘志と己の信念の貫くためにハウリア達は尊敬するボスに跪いた。

「ううう、シズシズ、あの人達怖いけどなんかカツコイイよ」

「そ、そうね。……南雲君の発想も凄いけど……シアさんが羨ましく感じてしまうわ……」

「南雲の奴……凄えな。な、光輝！」

「あ、ああ……」

様子を眺めていた。

雫達が、それぞれ違った表情で異様な熱気に包まれるハウリア達の様子を眺めていた。「うゝむ、凄いのう。兎人族がここまで変わるとは。流星はご主人様じゃ。しかも、あつさり帝国潰しを目的にしよるし……」

「……………それでこそ、ハジメ。惚れ直してしまう」

「ふふ、シアの表情を見てよ、二人共。とろけちゃってるよ。同性の私でも、ちよつとドキドキしちゃうくらい可愛いわ。抱きしめたい」

「……………ん、確かに。ハジメが決断したのは、他に理由があつたと思うけど、一番はシアを泣かせないためだから……………。当たり前」

「ふふ、そうじゃのうゝ」

ユエ達の方は、蕩けた表情でハジメを見つめるシアについて語り合っていた。

三人共、最初からこうなると分かつていたのか、シアから暗さが払拭されたのを見て嬉しそうに目を和らげて笑みを浮かべていた。

その後、帝城落としての詳細を詰めたハジメ達は、その時に備えて各々休むことになった。

シアはしばらくの間、ハジメの傍を離れたがらなかった。いつもの元気の良さ

は鳴り潜め、しかし、決して暗く沈んでいるわけではなく、頬を蔷薇色に染めてハジメの胸元にピトリと引っ付いたまま寄り添うのだ。

ウサ耳が時折、ちよちよことハジメに触れては離れてを繰り返す。それは、ただただ、傍でハジメを感じていたいという気持ちを顕にしているようだった……。

~~~~~

一夜を開けて、東の空が白み始める少し前、岩場に腰掛けた二つの人影があつた。少し早く目が覚めたハジメと優花である。

ちなみに、岩場に座っているのはハジメだけで、優花はハジメの膝の上に横抱きに座っている。

見張り役以外の全員がまた寝静まつていて、場所も死角となつていたので、ハジメと優花は久しぶりに二人っきりの静かな時間を満喫していた。

心地良さすら感じる沈黙の中、夜明けを待つている二人。おもむろに、ハジメの肩口に頭を預けていた優花が顔を上げ、前触れも無くハジメの頬にキスをした。チュツという可愛らしい音が、朝の静寂を僅かに揺らす。

「……………どうした、いきなり？」



「うん？　なんか昨夜のことを思い出してなんとなくなね」

優花が言う昨夜のことと言えば、「帝城落とし」のことだろう。だが、それがキスに繋がるのか分からず、自分を優しくに見つめる優花を見つめ返ししながら、ハジメは首を傾げた。

「そんなに深く考えなくても、ただ単にハジメは私達を愛してくれてるなあ。つて思うと嬉しくって」

ということらしい。優花はそう言いながら、再びキスを落とした。

「そういえばさ、ハジメ？」

「ん、なんだ？」

「どうして、ハジメはあんな事を言い出したの？　手伝う気はいたと思うけど、最初は静観を貫いてたからさ」

「ああ、それは……理由はこれさ」

優花の疑問を答えるためにハジメは「宝物庫」からある物を取り出した。優花はハジメの取り出した物に見覚えがあった。

「それって、昨夜の鳥型のアーティファクト？」

それは、昨夜ハジメの肩へと降り、「帝国落とし」の説明をカム達にす

る際にハジメが今、取り出したアーティファクトを使って話していたのを優花は思い出した。

「これはな、半自律型起動無人偵察機 “オルニスA” だ」

——半自律型起動無人偵察機 “オルニスA”

ハジメが以前作成していた重力制御式無人偵察機 “オルニス” に改良を加えたアーティファクトであり、以前のオルニスはハジメの制御が必要であったがこれは魔力を流すだけで後は、操作をしなくても勝手にハジメがプログラムしていた事を実行するように出来ている。

因みにこの “オルニスA” には、“構造把握” を有しており、外からでも大体の建物などの構造が把握できるようになっている。しかし、この “オルニスA” は作製期間が長引くため、一機しか作られていない。

「それで、その、“オルニスA” で何かしてたの？」

「コイツには、二つの調べごとを頼んでいた。一つは帝城について、もう一つはアレスの居場所だ」

優花のを質問をハジメは返答すると、その内容に優花は目を見開き、質問を口にする。

「帝城のことは、昨夜、ハジメが説明していたから分かったけど……アレスさんのことはどうだったの？あの場で、説明していなかったじゃない？」

「……アレスが最後にいた場所までは把握したが、其処からの魔力が途切れていたのを確認した。俺の推測だが、もしかしたら、帝国に“クソ神共”が干渉している可能性があるかと踏んでいる。アレスもそれに気付いて昨日は俺達と別れて、単独で調べ物をしていた。もしかしたら、そんな時に、“クソ神共”のなんかと戦い、行方知らずとなった感じだろうな……」

「嘘……」

ハジメは話しを聞いて優花は信じられないのか両手で口を抑えていた。しかし、ハジメは真剣な表情で自分の拳を握りしめながら話し続けた。

「でも、俺はアレスは絶対に生きている。アイツは簡単に殺られる性格じゃねえ。何があつて生きて帰ってくる俺はそう信じてるさ」

「……ハジメがそう言うんだつたら私も信じるわ。それに、アレスさんは大切な仲間だしねっ」

そんな優花の言葉に、ハジメは少しムツとする。アレスは大切な仲間なのは分かるが、愛してる女が自分と違う男の話をして、笑みを浮かべられると、なんとなく気に食わなかったのだ。なので取り敢えず、今は自分のことしか考えられないように

する為に問答無用で優花の唇を奪うことにした。

「ん……んっ、あむっ……ハジっ……んっ」

東の空がいよいよ白み始め、二人の後ろに影ができ始める。ピツタリと重なった影は、時折離れるものの直ぐにまた重なり、その度に生々しい音が響く。

優花の瞳は熱に浮かされたように潤み、頬は蔷薇色、唇は艶やかに輝いている。

そのまま、二人は自然な動きで続きを……

と、しようとしたところで、ハジメ達のいる岩陰の向こう側から人の声が聞こえた。

「おっ、南雲。いるのか？」

どうやら、光輝のようだ。寝床にいないハジメを探しに来たらしい。陽も昇ってきたので、他の者達も起き出しているのだろう。

「チツ。いいところであのクソキラキラ野郎。邪魔……ムツ、優花だけズルい。私もハジメっ……?!」

悪態を吐きながら、しょうがないと優花を抱えたまま立ち上がろうとするハジメだったが上から聞き覚えのある声と共に立ち上がるのを阻まれた。上からの邪魔した正体はユエだった。ユエも優花を探しに来ており、この現場を目撃し、自分も混

ざりたくなり、仰向けになっていた優花とアイコンタクトで結託したのであろう。凄  
い連携でハジメは二人に押し倒されたのだった。

そして……

「……ハジメ。私ともしよ？」

「ゴメン、ハジメ。ハアハア、私もあんなことされて我慢出来ると思っ  
ているわけ？」

「ちよつ、おま……んむつ」

ハジメを押し倒した二人は、顔を薔薇色に染めながらハジメに襲いかか  
た。

「光輝、南雲君いた？」

「ああ、こつちから気配がするからいるとおもつ——?!」

光輝の後ろから雫や鈴、龍太郎も現れた。雫の質問に答えながら岩場  
を迂回した光輝だったが、其処で目撃した光景に思わず硬直する。固まった光輝を訝し  
げに見ながら、雫達も岩場を覗き込み……

ビシッ！と硬直した。

更に後ろからシアとテイオの二人がやってくる。そして、硬直する光輝  
達を訝しげに岩場へと迂回して……

「ちよつとおおおお！ 三人共朝っぱらから何をしているんですかあ?!」

「優花とユエ、朝から羨ましいのお〜」

「二人も混ざる?」

「混ざる(ですう)(のじゃ)！」

ハジメは流石に二人の追加はヤバイと思い、咄嗟に立ち上がろうとするが、優花とユエの二人にガツチリと腕を拘束されてしまい、立ち上がれずにいると、駆け付けたシアとテイオもハジメを拘束するように抱きつき始める。

「ちよつと、待てつ! お前……あ、ああああ!!」

そして、ハジメの頑張りは無謀に終わったのだった。

少し、離れたところで、硬直していた光輝達が慌てたように戻っていく。

鈴は「大人だあ……、三……いや、今は五ツ?!」と顔を染めながら硬直したままだったので、雫が脇を抱えて運んでいった。もつとも、その雫もハジメ達のところをチラツチラツと見つつ、耳まで真っ赤に染まっていたが。

東の空に昇る朝日は、新生ハウリア族の戦いの狼煙と同じなのだが……

なんとも締まらない始まりだった……。

ちなみに、ハジメが解放されたのは、それから一時間ちよつとしてからで、顔が少

しやつれており、フラフラ状態であった。そして、その逆に女性陣はやけにツヤツヤだったのであった……。

幕間  
王女の受難 I

時間は少し遡る。

リリアーナが侍女や近衛達と共に帝都近郊に降ろされた後、一行はフェルニルに積み込まれていた馬車と馬に乗って帝都へと入った。

先に送り出した王国の王女が来訪することを知らないはずだ。帝国は王国の王女が来訪することを知らないはずだ。

一応、近衛騎士を先行させているので、それでご勘弁願いたいところだ。「警戒態勢でございませぬ」

馬車に同乗しているリリアーナ付き専属侍女ヘリーナが、小窓から外を覗きつつ言った。

「魔族の襲撃のせいでしょう。ハウリア族の話を聞いてましたが、かなりの被害を受けたようですね」

「本当に、ハジメ様とあの『馬鹿』がいて下さって幸いでした。本命ではない帝国での被害です。王国が助かる道はなかったでしょう」



「そうですね……つて、ヘリーナ。……兄様のことを馬鹿呼ばわりつて……まだ、怒っているのですか？」

「……アレスが悪いんです。あの時だつて、私に何も本当のことを告げずに王国を出て行って……私がどれだけ想っていたのか……」

リリアーナはヘリーナがアレスのことを馬鹿呼ばわりしていることをツツコミを入れると、ヘリーナはそっぽを向いて唇を尖らせ、溜まりに溜まったいたのだらうアレスへの不満をダラダラと口にし始めた。

「ア、ハハ……（何か地雷を踏んじやった気がします。なんとか止めなくてはっ）」

リリアーナは苦笑いを零していたが、口々とアレスへの不満を垂らすヘリーナを止めるため優しく語りかけることにした。

「……ですが、ヘリーナ。兄様が本当のことを言わなかったのは、私や貴女のことを守るためにと思つたからじゃないかしら？」

「……」

「ヘリーナだつて知つたでしょ？ 神々の真実を……もし、五年前に兄様が私達にそ

のことを話していたら、もしかしたら私達に被害が出ると考えていたんじゃないんですか？ 兄様ならそう考えそうですし……」

「……」

「だからね、ヘリーナ。余り兄様を責めないであげましょ？」

リリアーナの言葉にヘリーナは黙っていたが、リリアーナが話終わると視線をリリアーナの方へと転じて口を開いた。しかし、その口から言われるのはリリアーナの予想外のことだった。

「……恋心がまだ、分かっていない。お子……  
「なっ！」

そんな、ヘリーナの辛辣な一言にリリアーナは顔を真っ赤にしながら声を上げた。

「なんでっ?! 私、凄いいいことを言ったのに！」

「余計なお世話ですよ。私もその件は王国の時に再会した際に逃げようとしたアレスを捕まえて、キツチリを話をつけました」

「じゃ、じゃあ……なんでヘリーナはまだ、そんなに不機嫌なんですか？」

リリアーナは話をしたんなら、そんな態度を取らなくても良いんじゃないかと言うが、ヘリーナは溜息を吐く。

「ハア……だから、お子ちゃまは……」

「あつ、またヘリーナ。私のことを、お子ちゃまって言いましたね！」

「なら、リリアーナ様もハジメ様を王国の未来のために繋ぎ止めてみては貴女様の

愛しのハジメ様に」

「なっ、なっ?! わ、私はっ、ハジメさんはただ、兄様と同じように頼れるお兄さんの存在ってわけです！決して、ヘリーナの思うようなっことは……なくてですね。それにハジメさんには、優花やユエさん達のような美人揃いの恋人がいますし……私なんて……」

「何言ってるんですか。リリアーナ様だって大変可愛らしい……」

そう言いながら、リリアーナが話しているとヘリーナは話しながら、リリアーナの体を這わせるように視線を滑らせ……

「………そうですね、リリアーナ様。失言を言ってしまったって申し訳ありません」

と言いながら、頭を下げたのだった。その謝罪の意味は何のかは分からない。

「その、謝罪の意味は私が思っていることと違うような………というか、私の体を見て、『これじゃあ、ダメだな』と言いたげな視線を私にした理由を言いなさい!」

リリアーナ付き専属侍女ヘリーナ。アレスとは昔からの幼なじみのような関係であり、幼少の頃よりリリアーナを陰から支えてきた侍女だ。リリアーナにとっては心許せる友人のような大切な存在であり、彼女の約十七年にも渡る恋路の応援もしている。

とはいえ、時々、看過できない言動を取るのが玉に瑕である。そうして、リリアーナがヘリーナを問い詰めている間に帝都に辿り着いた。

突然の来訪に一悶着あったものの、リリアーナ達は無事に部屋へ通され、その日の夕刻にはガハルド皇帝陛下への謁見が叶うことになった。

リリアーナが、やって来た案内に従って謁見の部屋に行くと、そこに既にガハルドが実には楽しげな笑みを浮かべて待っていた。

ガハルド・D・ヘルシャー。もうそろそろ五十代が見えてきそうな年齢にもかかわらず、見た目は四十代前半。場合によつては三十代後半に見える若々しさと猛々しい覇気を纏った男。

灰色に近い銀の髪と、狼を思わせる鋭い目、服越しでも分かる極限にまで引き絞られた肉体は些かの衰えも感じさせない。

光輝達の実力を確かめるべく、ガハルドがお忍びで王国に来たとき以来だが、数ヶ月程度で変わらないらしい。

魔族に襲撃されたと聞いていたので、或いは怪我の一つでもしているのかと思えば、そんな様子も皆無である。

「よく来てくれたな、リリアーナ姫。随分と急な来訪だが、それだけの土産話があるのだ

と楽しみにしているぞ」

リリアーナは「ご期待に添えないと思いますが……」と前置きをし、まず王国で起きた事件のあらましを語った。

王宮内に蔓延った恐ろしい侵食から始まった一連の出来事。魔人族の大軍による侵攻、「真の神の使徒」による暗躍と神々神々の真意、聖教会総本山の崩壊。中村 恵理と白崎 香織の裏切りと、エリヒド国王の崩御。

口を挟まず黙っていたガハルドは、リリアーナが口を閉ざすと同時に大きく息を吐いた。そして、腰を深く腰を預けると片手で顔を覆って天を仰いでしまった。

豪放磊落な皇帝陛下をして、伝えられた事実の有様と真実の大きさに動揺を隠せなかったらしい。気持ちは分かるとリリアーナがお茶に口をつけつつ待つことしばし。

「そうか……エリヒド国王も、あの殺しても死ななそうな教皇の爺さんまで……みんな逝ったか」

特に感情は込められてない。けれど、どことなく寂寥を感じさせる声音。ガハルドは姿勢を戻すと、リリアーナに視線を合わせた。

「凄まじい状況だったようだな。偉大な国王と戦士達の死に、心からお悔やみ申し上げ

る。よく伝えに来てくれた、リリアーナ姫」

「いえ、コチラも大変だったそうですから」

ガハルドの見せた意外な態度に、リリアーナは少し驚きつつもそう言つて返礼した。

「しかし、そうか……教会は、神……いや、神々か……こりやあ、公表なんぞしようともんなら、世界がひっくり返すな」

「その割には、陛下はそれほどショックを覚えてないようですが」

「いや、結構な衝撃だったぞ。生まれてより信仰していたらな。だが、まあ、帝国はそもそも実力至上主義。敵あらば殺す、欲しいもんは奪う。弱者は強者に従えつてのが信条だ。神の勢力がぶつ飛ばされたつてなら、そりやあ、ぶつ飛ばされた方が悪い。そんな奴等の相手を、いつもでも崇めちやいられんさ」

「そ、そういうものですか……」

帝国の実力至上主義は筋金入りだ。何せ、王位継承問題すら決闘という対外的に分かりやすい方法で解決するくらいなのだ。とはいえ、今まで信仰していた形だけの神に対してまで、その理念を適用するとは……

「……（本当にこの国の人間はっ……）」

リリアーナは口にはせずにそう思いながら頬を引き攣らせてい

た。ガハルドは気にした様子もなく、早くも気持ち切り替えたようだ。

「しかし、あれだな。そう考えると、王国の民に伝えた話は中々秀逸だ。見事に『真実の衝撃』ってやつを受け流し……いや、利用してやがる。考えたのは姫か？」

「ええ、まあ。最終的には」

曖昧な返答に、ガハルドの目を細まった。

「最終的には……。つまり姫にそんな入れ知恵を出来る程のブレインがいるってことだな？」

「私のブレインではありませんよ？」

「誤魔化しはいらん。話が進まねえだろ？ 皇帝として絶対に聞く必要がある事柄に、どうせ関係しているんだろうからな。でなきや、リリアーナ姫。そんな質の悪いストーリーを考えられる時点で、俺は是が非でも姫を手に入れるために動くぞ」

「……ご想像の通り、とある人物の草案です」

リリアーナは申し訳なきを感じながらハジメを売ることにした。と言つても、帝国に教会や神々の話、魔族の力の秘密を共有する上でハジメの話は不可欠なので、ハジメから自分のことを話して良いと許可は貰っていた。

しかし、リリアーナはハジメのことは隠したかった。実力者大好きな帝国は死んだとされているハジメの存在が生きてると知った時点でガハルドはハジメ

を是が非でも手に入れようとするだろう。

ハジメに大きな恩があるため、リリアーナはそんな彼を困らせたくなかったのである。

リリアーナから、ハジメの生存と詳細を聞いたガハルドは……

「……まさか、生きてたんだな。【オルクス大迷宮】で死んだとされた南雲　ハジメは……」

「はい。ハジメさんは奈落到ちてもなお、生き続けてそのまま、大迷宮を攻略したようですよ」

ガハルドはハジメの生存を知り、深く笑みを浮かべている。しかし、リリアーナの話す内容のスケールがデカすぎて頭の処理が追いつかないらしく眉間を指でグリグリしている。

「義手という活気的な物を作製して、戦闘に関しての実力も申し分なく、俺の中では、召喚された使徒達でトップレベルだと思っていたが……俺の予想以上の実力だったとはな。信じられねえ……」

「事実です。ハジメさんは、十万の大軍を消し飛ばし、王国・帝国を一日半で走破するアーティファクトを作り出す——『稀代の錬成師』です」

困ったような表情なのに、ハジメの事を話すのを嬉しそうに微笑みなが



ら断言するリリアーナ。

ガハルドは眉間に深い皺を刻む。

「戦術級、なんてレベルじゃない。個人で戦略級たあ本当に何の冗談だ。南雲 ハジメがその気になれば、個人で戦争が出来るほどの絶大な力を持っていて、その実力は勇者の比じゃねえ。俺としては是が非でも南雲ハジメが欲しいがな……なあ、リリアーナ姫。俺はちゃんと会ったことねえから分からないが、南雲ハジメという人間の人格はどんなモンだ？もし、あの勇者みたいな人格だと放置出来ないレベルだぞ？」

ハジメの実力を分析していくガハルド。しかし、分析していく内にガハルドはハジメの精神状態や人格が気になり、リリアーナに尋ねた。

リリアーナは笑みを浮かべて頭を振る。

「いいえ。ハジメさんは覚悟あつて、ちゃんとした信念を持つた方です。彼はちゃんと現実を見ていて、懐の内にいる者のためならば何も躊躇わない。そして、我が道を突き進む人。要するに我が覇道を持ち、邪魔するなら敵として叩き潰していく……」  
「覇王」  
「みたいな人です」

ついでに、女性を知らずに誑しこむのが上手、と伝えておく。

ガハルドは失笑しつつも顎を撫でて思案した。

「『覇王』ねえ……要するに俺にちよっかいを出すなということか？帝国の頭たる俺

に、また無茶なことを言う」

喉から手が出てでも欲しい。手元で管理したい。欲を言うなら、その絶大な力、利用したい。帝国の皇帝として当然の考えだ。

「とはいえ、当の本人を捕えようとしても、今の帝国の軍事力じゃ、到底敵わない。挑んだって、全滅に終わるだろうな……せめて、アレス・バーン並の強さを持つ者を見つけろ。後は、独自に、南雲 ハジメと魔族の力の根源 “神代魔法” の獲得に動くくらいかな……つて、ふと思つたが、アレス・バーンも “神代魔法” を持つてる可能性があるな……どうなんだリリアーナ姫？」

「に……アレス様の件はお答えしかねますが、これからの動きはそれでよろしいかと。そもそも我が国の恩人ですので、同盟国とはいえ、あまり無茶は見過ぎせません」

「ふん、なかなか言うな」

ガハルドは鼻を鳴らした。

大迷宮攻略のご褒美が何か、それが分かったのは僥倖だが、だからといって自分達が獲得できる可能性は著しく低いことは分かっている。やはり、既に持っている者の勧誘が一番現実的だ。だが、その可能性も低そうだ。他の可能性としては持っている可能性が高い行方知らずの “最強の神官” を勧誘すべきかとガハルドは考えるのだった。

そして、ガハルドは思わないだろう。彼が是が非でも欲しがっている人物の二人は既に出会い、利害が一致して仲間であることを……その可能性も低いということ。

「それで、事情を伝えに來ただけではないだろうか？協議の内容を聞こう」

「はい。端的に言えば、支援のお願いと、今後の連携について方針を固めたく参りました」

そう言つて、リリアーナはあらかじめ支援内容をまとめた書類をガハルドに渡した。

内容としては、主に戦力貸与とお願いだ。メルド・ロギンスという王国最強の騎士は生き残っているが、それでも、多数の優秀な騎士・兵士達を大量に失つてしまったのだ。軍事国家たる帝国には是非とも、万が一に備えて戦力を貸して欲しかった。

「なるほど。一個師団程度なら構わん。こちらも、王国を潰されては西に戦力を分散する必要が出てしまうからな」

「ありがとうございます」

一番欲しかった支援があつさり決まつて、リリアーナは少しホツと胸を撫で下ろした。

それから細かな支援内容を決めた後、魔人族に対する方針を話し合っ  
た。

一気に二人だけで決められることでもないので、今のところは概要と、  
各方面との具体的な協議内容の確認だけしておく。

「まあ、こんなところだろう。あと、重要なのは、対外的に関係強化をどう示すかだが、  
それに関してはリリアーナ姫、一役買ってもらうことになるぞ」

「つ……わかっていきます。婚約の話であれば、こちらも考えていたこと。お話は受けさ  
せていただきます。ただ……」

「ああ、そちらの事情は分かる。今、リリアーナ姫が王国から抜けるのは不可能だ。ラン  
デル王子の即位すらまだなのだろう？優秀な文官すらも多数失ったようだしな。王妃  
殿が過労で死ぬぞ」

ガハルドの言葉に、リリアーナは苦笑いしながら頷く。とガハルドは  
言葉を続けた。

「何、安心しろ。最近のバイアスは昔と違って、性格が軟化している。リリアーナ  
姫。アンタが心配することはないぞ」

「は、はい……それは、嬉しいです、ね」

結局、皇太子との婚約話をまとめ、一両日中には帝都にて発表。

その後、一個師団の派遣準備ができ次第、リリアーナ姫は一時帰国するということになった。

王国が落ち着いたら、改めて輿入れに来るということだ。王国と帝国の強固な同盟関係を見せつけ、足踏みを揃えて活性化する魔人族に対抗すると示すのだ。

おおよそ、予定していた通りに話が進んでリリアーナは満足そうに笑った。

内心の、ズキズキとくる。小さな痛みには気付かない振りをして……。

## 幕間 王女の受難Ⅱ・結界の中で神官は

協議を始めてから二日後の夜。協議を重ねるガハルドとリリアーナのもとに、一報が飛び込んできた。

「以上で報告を終わります！」

「ご苦労、下がれ」

「はっ」

ツカツカと規則正しい足音を響かせて部下が出て行った扉を暫く見つめた後、ガハルドは、目の前で澄ました顔をしているリリアーナに視線を転じた。

リリアーナは、ガハルドの視線に気が付くと「大変そうですね？」と心配するような、或いは困ったような微笑みを向けた。隣国の王女として、先程報告された内容に憂いているような、されど口出しは余計だと弁えているようなそんな表情だ。

ある意味、見事な表情だと、ガハルドは思えた。

「全く、困ったものだ。ふざけた強さの魔物や魔族の次は、ふざけた動物の仮面を付け

た、ふざけた強きの四人組の襲撃か……この件、どう思う？ リリアーナ姫」

「……私には分かりかねます。報告では魔人族の切り札的な部隊とのことでしたが……」

「そうだな。その可能性もあるだろう。連中がそんなふざけた仮面なんぞつけるわけがないと分かっているが、まあ、可能性がゼロではない。たとえば、その内の一人が光属性の魔法を自在に操り、眩い光のアーティファクトの剣を振るっていたとしても、な？」

「……………そうですね。恐ろしいことです」

「ああ、全くだ。それで何が目的かと尋ねたら、亜人奴隷達の待遇改善だと抜かすのだから、意味不明すぎて、俺も恐ろしいと、俺も思う。まるで、この世界の人間じゃないみたいだ。未知との遭遇だな？」

「そう、ですね」

リリアーナの表情は崩れない。

ガハルドは面白そうにリリアーナを観察しているが、笑顔という仮面は鉄壁だ。何せ貼り付けたような笑顔ではなく、王族必須スキルであるその場の状況に応じて変幻自在に変わる笑顔なのだから。

しかし、そんな鉄壁な仮面であっても、僅かに呼吸が乱れていたことをガハルドは見逃さなかった。

「リリアーナ姫」

「はい?」

「確か勇者殿は、あの、南雲ハジメと一緒に向かったのだったな?」

「……その通りです」

「そうか。そうえばな昼頃に部下からの報告でな、アレス・バーンらしき人物が帝都にいたと報告にあつたんだ」

「……………それは、真ですか?」

「ああ、報告だと、そのアレス・バーンらしき人物は白いローブを着ていたから、顔までがわからなかつたらしいが……その部下はな、アレス信者でな。ほら、覚えてるだろ?」

アレス信者騒動。あれは頭が痛くなつたぜ」

「……………はい。あれは凄かつたですな」

ガハルドの言葉にリリアーナは頬が引き攣りながら苦笑いした。

——アレス信者騒動

アレスが異端者として追放される数年前に起こつた騒動であり、事の発端はアレスの人気さ故であつた。元々、アレスは王国でも人気があつて信者みたいな人達がいたが、更に各地の教会巡り（本当は大迷宮攻略の旅）で各地を巡つたことで、アレスの「王国最強の神官」の名が各地に広まり、そして、サラツとした金髪、透き通つ



た碧眼で整った顔であるアレスの外見に魅了され、女性を中心としたファンクラブが増えたり熱狂的な信者も増えたせいで、教会側はもしかしたら「神エヒト」の教えがアレスのせいで教えに傷がつくと考えてしまい全力で抑えにかかるまでに発展しまった騒動のことである。

この騒動で王国、帝国、教会の上層部は頭を痛め、この騒動の中心となつてしまった。ある意味被害者の立場のアレスはこの件は自分にとっての黒歴史になり、両手で頭をかかえるほど苦悩していた。

しかし、アレスが異端者として追放されてからは、めつきり信者やファンクラブがなくなつてしまった。しかし、隠れ信者は所々存在しており、それは王国ではなく帝国に

多く存在したのだった。

「それで、その信者の部下の報告だと、その白ローブの人物はある集団と一緒にいたらしくてな、その集団は余り帝都には見かけない集団だったらしい」

「へ、へえ……それは、どんな集団でしょう？」

リリアーナの鉄壁の笑顔が少し引き攣つてしまう。

「ああ、なんかな。その集団にな余り見ない黒コートを着た白髪で眼帯を着けた男や美女、美少女の集まりだったらしい。リリアーナ姫は何か知ってるか？」

「さ、さあ……私は知りませんね。そんな方々……」

「そうかそうか。実は最近、面白い巫人を捕まえてな」  
「？」

内心、仮面達の正体を察したり、アレスのことで冷や汗を掻いていたリリアーナは、突然の話題変更に目を瞬かせた。ガハルドはお構いなしに語る。

「特殊な、そうあまりに特殊な——兎人族だ」

「……………」

ぶわつと毛穴が開くような感覚。笑顔仮面を強化！猫を被るように、リリアーナは五人目の動物仮面……猫仮面となった。

「樹海の外れだというのに帝国の兵士とまともにやり合いやがった。とても、兎人族とは思えん殺意と覇気を持っていてな」

「まあ！温厚の代名詞のような兎人族に、そのような部族もいるのですね。恐ろしい……………」

「それだけじゃない。そいつらの装備がな、これまた凄かった。オルクス大迷宮でしか取れないような貴重な鉱石で作られたものばかりだな」

「フェアベルゲンの技術力も侮れませんね」

「そうだな。本当に、フェアベルゲンの職人が作ったんだからな。俺には、あんな業物の

装備を量産できる奴は見当がつかなかったが今なら見当がつくんだよ。あんな装備を作れるのは「稀代の錬成師」の南雲ハジメぐらいだと思えんが」

「……………」

胃がしくしくする。今日の協議を終えたら、ヘリーナ特製のお腹に優しい紅茶を入れて貰おう、そうしよう。リリアーナは心のヘリーナにお願いした。

と、そのとき、再び扉がノックされた。

「入れ」

「ハッ。失礼します。緊急故、報告をお許し願いたく！」

「構わん、どうした？ また仮面でも出たか？」

「い、いえ。それが、その——地下牢のハウリア族が全員、脱獄した模様です！」

「……………は？」

有り得ないことを聞いて、声をだしながらガハルドの視線がリリアーナに向けられた。珍しく無表情だ。無機質な目がジツとリリアーナに注がれている。

リリアーナは「あらまあ、大変！」と言いたげな表情を見事に作りだすと同時に、内心で絶叫する！

（来てる！ あの人…………ハジメさんが絶対に来てるう！

帝城の地下牢から気付かれ

ずに脱獄させるなんて、ハジメさんにしか無理い！というか光輝さん達も何をやってるのですかあ?! 仮面、意味無いし! 顔面隠して聖剣隠さずくって馬鹿ですかっ! それに兄様も兄様ですっ!なんでハジメさん達を止めずに帝都に来てるんですかっ、あの人!ヘリーナに言いつけようかしらっ! )

無表情なまま、ガハルドが感情のない音声で尋ねた。

「そういえば、リリアーナ姫」

「はい、陛下。なんででしょうか?」

「南雲ハジメには、異常な程に強い仲間がいるのだったな?その内の一人は、兎人族だとか」

「ええ、可愛いらしい兎人族の少女の方がいましたね」

それが何か?と可愛いらしく、首をコテンと傾げるリリアーナ。笑顔仮面からキョトン仮面にシフトチェンジして誰が見ても不思議そうな顔だ。

“王国最強の神官”と呼ばれているアレスと同じように“王国の才女”と呼ばれる王女は、仮面を幾つか持っている。それは王族必須スキルであり、王族の誇りを誇示するためである。たとえ、どんな状況下におかれても、それに見合った表情の仮面を付け、相手に自分の弱さを見せず堂々とした態度を見せる。それが王女

リリアーナが鍛え上げた技術なのである。

だが、同時に内心では絶叫していた！

(ばれてるう！ 絶対にばれてるう！ もしかして私も関与を疑われています？ いやあつ、どうして私がおんな目に！ 皇帝陛下が未だかつて見たことない目で見えてますよお！ もうつ、これもハジメさんのせいですつ！ 兄様も兄様ですつ！ そうです！ 光輝さん達が動物の仮面なんてふざけた格好で大暴れしたのも、もしかして悪ふざけですかつ！ 私に対する悪ふざけですなつ！ あの二人なら、私にしわ寄せがくることぐらいお見通しでしょうに、なんて質の悪い！ ぐすつ、許しません。今日の協議が終わったら、優花とヘリーナに言いつけてやるつ！)

無表情のガハルドに、「ん？」と何も分かっていなそうな可愛いらしい疑問顔を見せながら、リリアーナは内心で、つらつらと愚痴やらツツコミを入れ、ハジメとアレスが強く出れない優花とヘリーナの二人に言いつけやると心の中で誓った。

その翌日。

この日はリリアーナ姫とバイアス皇太子の婚約発表を兼ねた歓迎パーティーが催されることになっており、リリアーナは朝から大忙しだった。

そんな、彼女の耳に、ある一報が届く。

「リリアーナ様。その、門のところですね、リリアーナ様を訪ねて来ている方々がいる

そうなのですが……」

門番の兵士から伝言を預かった使用人が困惑したように伝えてくる。予定にない来客にリリアーナも少々困惑しつつ、小首を傾げて尋ねた。

「どなたですか？」

「はあ。なんでも、勇者を名乗っていらつしやるとか」

「なんで正面から来てるのですかあ！」

リリアーナは絶叫した。使用人はビクツと体を跳ねさせた。だが、リリアーナに取り繕うほどの余裕はない。何せ、正体バレバレのお尋ね者が正面から自分を訪ねてきているのだ。勇者の傍には首謀者と傍観者の二人もいるに違いない。

「直ぐ迎えを！ 必ず、私の部屋の応接室に通して下さい！ 一直線で！ 有無を言わさず！ お願いしますね！」

「は、はいい！」

王女に両肩を掴まれ、若干血走った目で「お願い」された使用人は、涙目で部屋を出て行った。

「ヘリイ〜〜ナア！ 光輝さん達がガハルド陛下と謁見する前に、何がなんでも割り込みますよお！ 準備を！」

「お任せあれ！」

ヘリーナを筆頭に、連れてきた侍女達が一齐に動き出す。リアーナもまた、「今度は何をやらかす気ですか?!」と、鼻息荒く準備を進めるのであった……。

~~~~~

「——『千断』！」

その瞬間、空間がズレていき、襲いかかる竜達の体がズリユツとした生々しい音共に体がズレていき絶命していく。

「グリユアアアアアア!!」

しかし、数を減らしたとしても、たったの数体。この空間にいる竜はまだだおり、標的を狙って一齐に息吹ブレスを吐く。

「……っ！——『空絶』！」

咄嗟に展開した防御魔法で全方向から来る息吹を完全に遮断していく。

—— 複合魔法・空絶

光魔法の聖絶と空間魔法を組み合わせ、完全なる外からくるあらゆる物を遮断する魔法。これは空気も含まれるので長く発動できない。

大勢の竜達の息吹を止めて一息を吐く。

「ふう……（ぎつと、四百五十体ぐらい倒しましたが、残りは見たところまだ、五百）……多いな」

神の魔法によって、この結界に囚われしまった青年——アレスは竜達と休む暇無く、ずっと戦いを続けていた。

そして、アレスはこの結界内の竜達と戦いを続けながらこの結界の分析を続けていた。

「……（体幹的に一日が経った気がするが現実世界との時間軸の差はどれぐらいなのだろうか）」

「グラアアアアア！」

「——天翔閃・極」

アレスに向かって数十体のワイバーン型の竜が突撃してくるがアレスはロングリヌスを構えて、横に一直線に大きく振るう。その瞬間、極大の光の斬撃が大きな音と共にワイバーン達のもとへ行き、消し炭にしていたが、そのアレスの行動を狙ったかのように、上から、下から、後ろからワイバーン達が突っ込んでいく。



しかし、

「——『綺羅』」

アレスは全てを見透かしているかのようにロンギヌスを持っていない手を上に掲げて魔法を発動して、幾多の数の光の斬撃がアレスの周りから飛ばされ、ワイバーン達を細切れにしていく。

——複合魔法・綺羅

光魔法の天翔閃と空間魔法の千断、魂魄魔法の選定を組み合わせた自動追尾型の光の斬撃である。当たれば絶対にその部分を綺麗な断面になって切れていく斬撃魔法。

アレスはワイバーン達を殲滅していくが、何かが見えない速度で高速移動してアレスの横腹を抉っていた。

「……ぐっ?!」

アレスは抉られた場所を片手で抑えながら再生魔法を発動して、横腹を抉りとった相手を確認する為にその相手の魔力を辿っていった。

「まさか、そういう個体もいるんですね。それもそうだ人間すら強化していますからね……不覚でした」

(あれは、スピードを重点的に強化された個体ですか……)

アレスが見たのは、鋭利な刃で出来ているような翼にスピードを重視したと見えるワイバーンより少し体躯の小さいワイバーンだった。見れば、そのスピード型はこの空間の中に十体程だと認識した。

「……（あの、スピードは使徒の銀翼よりも速い。だが、数は少ない）ならっ」

アレスは横腹の痛みを無視して、スピード型以外の竜達をロンギヌスと魔法で殲滅していく。ロンギヌスに魔法を乗せ、投擲してから、アレスは近くにいる巨体の竜に詰め寄った。

「——『衝魂』！」

「グルッ?!」

魂魄魔法『衝魂』で目の前の巨大な竜に防御無視の衝撃を与える。それと、同時に投擲していたロンギヌスが、ワイバーン達に風穴を開けながら進んでいきアレスのもとへ戻っていく。

「——『天翔閃・羅円』」

アレスは戻ってきたロンギヌスを手で受け取り、その戻ってきた時の力を利用して流れるように円を描くように回りながら光の円の斬撃を飛ばして、周りにいる竜達の首、胴体を切り離していった。

アレスは『天翔閃・羅円』を放った同時に、腕輪で貯めていた魔力を

使つて魔力補充する。

(これで、魔力を回復できる回数は三回ほどですか。厳しいですね……)

そうアレスの言う通り、竜の数はまだ、多くて四百はいる。もし、魔力の底が尽きたら確実にここで命を落とす。アレスから冷や汗が流れる。

だが……アレスは自分の頬を両手でパンツと叩く。それは自分の弱音を払拭していくように、頬にやり過ぎたのかジンジンとする痛みを感じながらアレスは顔を上げて、口を開く。

「ふっ、マイナス思考は駄目でした。これでは、神殺しを目的としている癖に恥ずかしいばかりですね。此処にハジメ殿達がホントに居なくて良かった」

そうだ。こんなんで弱音を吐くなど言語道断。彼等の仲間の一人なのに恥ずかしいことだ。

アレスはロンギヌスを強く握る。その表情は目は真剣でながらも笑みを浮かべていた。

「かかつてこい。偽りの竜……いや、雑種共っ」

その瞬間、全てのワイバーン型の竜達がアレスの発言にキレたのか、血走ったような目でアレスを見る。そして、アレス目掛けて突貫していった。

そして、その中にはスピード型がいるのをアレスは今度は目で捉え

ていた。

「見えたっ！」

アレスは最初のスピード型にダメージを喰らった際にある技能を得ていた。それは、アレスの技能の一つである「適応」から新たな適応した誕生した技能「真眼」を獲得していた。アレスはその「真眼」でスピード型の動きを捉えたのであった。そして、アレスはこの時からスピード型（敏捷35000）のスピードまで目で捉えることが可能になった。

「スピード型は面倒くさいですからね。ここで全滅させましょうか——『大震天』——」  
その瞬間、アレスを中心に大きな音と共に広範囲の空間爆発が起こり、大きな煙が舞う。

そして、煙が晴れると一人の男が立っていた。

「ふう……これで、スピード型共々、ワイバーン型は殲滅しましたか」

立っていたのはアレスだった。アレスは口元を袖で拭ってからワイバーン型、総勢二百の数を殲滅したことを確認する。

「これで、残りは……」

アレスは上を見るそこには、ワイバーン型とは違い、ちゃんとした竜の姿をした竜達が総勢二百程の数がいた。呼称は、造られし竜……デミ、ドラゴン偽りの竜と呼べば

良いだろう。

デミ・ドラゴン達は突貫かブレスしか脳がないワイバーン型とは違い、知能があるのだろう。アレスの動きを観察していたのか余り、アレスに攻撃をせざるにワイバーン型との戦い眺めているだけだった。アレスも今まで、この結界内でデミ・ドラゴンを倒した数は十体ほどであった。

「少し、面倒ですが、まあ何とかなるでしょう(それに、私が一番警戒はあれですし……)」  
アレスはそんな事を口にしながら、ある十体のデミ・ドラゴンを見る。  
「……やはり、あの中であの竜達が一番巨大ですね」

アレスは一番の警戒はデミ・ドラゴン達の奥にいる十のそれぞれ異なる色の巨大な躯体の竜達に対して苦笑いを浮かべる。

「(やっぱり、そうですね。あの竜達の魔力量が他と全く違いますね)……ですが、それがどうしたってことです」

アレスはロンギヌスをデミ・ドラゴン達に突きつけながら口を開いて、睨みつけた。

「私は、さっさと外に出させて貰いますよ」

そして、アレスはロンギヌスをギュッと強く握りしめる。デミ・ドラゴン達もワイバーン型が全滅したのを確認すると、本格的に動き出したのか、アレスのも

とへ近付いて来ているのが分かった。

アレスは笑み浮かべる。それは、どっかの白髪眼帯の黒コートのように不敵な笑みを浮かべていた。そして、アレスはデミ・ドラゴン達に宣戦布告するように声を上げる。そして、偶然か分からないが、デミ・ドラゴン達もアレスの宣戦布告に応えるかのように各々、大きな咆哮を上げた。

「さあ、第二ラウンドです。行くぞっ、デミ・ドラゴン共っ！」

「二二」グルウアアアアアアッ、アッ、アッ、アッ！「二二」

アレスの声とデミ・ドラゴン達の咆哮と共に第二ラウンドが始まったのであった……。

## 八十七話

## 帝城

【ヘルシャー帝国】を象徴する帝城は、帝都の中にながら周囲を幅二十メートル近くある水路と、魔法的な防衛装置が施された堅固な城壁で囲まれている。

水路の中には水生の魔物が放たれていて、城壁の上にも常に見張りが巡回しており、入り口は巨大な跳ね橋で通じている正門ただ一つだ。

帝城にも入れる人は限られており、原則として魔法を併用した入場許可証を提示しなければならない。

跳ね橋の前にはフランスの凱旋門に酷似した巨大な詰所があり、ここで入場検査をクリアしないと、そもそも跳ね橋を渡ることさえ出来ないのだ。

不埒な事を考えて侵入を試みようものなら、魔物の蔓延る水路に投げ入れられるとか……：

詰所での検査も全く容赦がない。たとえ入場許可証を持っている出入りの業者などであっても、商品の一つ一つに至るまできっちり検査される。なので、

荷物に紛れ込んでの侵入なども、もちろん不可能であつて、何が言いたいかというと、帝城に不法侵入することは至難中の至難であるということだ。

そんな、今更な事実を、凱旋門の前で入場検査の順番待ちをしながら考えていた光輝は、チラリと肩越しに背後を振り返った。

そこにいるのは、いつものパーティメンバーにして幼馴染である雫と龍太郎、そして鈴、それに加えてハジメ達である。

ハジメ達は、堂々と正面から帝城に入るために再び帝都にやつて来たのだ。帝城の威容と厳しい検査を見て光輝は思う。

自分達が陽動していたとはいえ、よくなんの騒ぎも出さずにハウリア族の人達を脱獄させることができたな、と。

もちろん、ハジメ達には空間転移の魔法があるので侵入、脱出はそれほど難しくはないだろうが、入るだけでこれだけ厳重な警備がなされているなら、帝城内の警備は言わずもがなだ。

予め、地下牢の位置を聞き出していたとはいえ、正確な位置が分からなければピンポイントでの空間転移は使えない。なので、侵入後は徒歩で搜索したはずである。それでも全く見つからずに事を成し遂げられたのだから脱帽する他ない。そして、今も行方不明のアレスや帝国と“神”の繋がりを調べるために、“宝物庫”から



取り出した「オルニスA」を遠隔操作していた。

そんなハジメの姿と自分との「差」を再び感じて、光輝は思わず「はあ」と溜息を吐いた。

因みにだが、光輝達の陽動は外の部隊が担当し、わざわざ帝城内の部隊が出張ることなど有り得ないので、ほとんど役に立っていない。多少、「何があつたんだ？」と、動揺くらいさせたかも、という程度であつた。

「次い……見慣れない顔だな。許可証を出してくれ」

門番の兵士が光輝達を訝しげな表情になる。帝城内に入れる者が限られている以上、門番からすれば大抵は知っている顔だ。そして、たとえ初めての相手であっても、帝城に招かれるような人物は大抵身なりが極めて整っているのが普通である。なので、光輝達のように、どこぞの冒険者のような装いの者は珍しいのだ。それこそ、胡乱な目を向けてしまいうくらいに。

「いや、許可証はないんですけど、代わりにこれを……」  
「なに？……ステータスプレート？ 一体なんだというんだ？」

当然、ハジメ達は誰一人として帝城に入るための許可証などを持つてはいない。だが、ここで光輝の立場が役に立つ。何せ、彼は「勇者」。世間の立場では対魔族戦において神が遣わせた人間族の切り札であり「神の使徒」のリーダーなのだ。

許可証を持ってない時点で、剣呑な目付きになっていた門番だったが、渡されたステータスプレートに表示された天職「勇者」の文字に目を瞬かせ、何度も光輝の顔とステータスプレートを交互に見る。

その門番の様子に、周囲の同僚達が何事かと注目し始めていく。

「えつと……勇者……様ですか？王国に召喚された神の使徒の？」

「あ、はい、そうです。その勇者です。こちらにいるリリアーナ姫と途中まで一緒に来たのですが……ちよつと事情があつて」

「は、はあ……」

光輝の正体を知つて、門番達にわかにながめ始めた。その表情は当然のことながら「なぜ、リリアーナ姫と別に来たのか？」「なぜ、事前連絡がないのか？」など疑問に溢れていた。

とはいえ、相手は自分達が信仰する神の「使徒様筆頭」だ。根掘り葉掘り詮索するのは失礼にあたるのではと躊躇してしまう。そのため、きつと秘密の使命でも帯びていたに違いないと勝手に納得して、取り敢えず、上に取り次ぐという判断になつたようだ。

確認のため待たせる失礼に戦々恐々しながら、数人の門番が猛ダツシユで帝城の方へと消えていった。

その後、ハジメ達は詰所にある待合室のような場所に通されてから待つこと十五分が経っていた。そして、最早誰もツツコミを入れないくらい自然な光景と化している。ハジメとその膝の上に座る優花ともう片方に座るユエとハジメに寄り添いながら隣に座るシアとテイオの光景に光輝達は頬を引き曇らせていると、跳ね橋の方からドタバタと足音が聞こえ始めた。

「こちらに勇者様一行が来ていると聞いたが……貴方達が？」

「あ、はい、そうです。俺達です」

そう言つて、姿を見せたのは、一際大柄な帝国兵で、周囲の兵士の態度からそれなりの地位にいることが窺える。

彼は、対応する光輝を無遠慮にジロジロと見ると、光輝のステータスプレートを確認しながら、他のメンバーにも探るように視線を向け始めた。

その過程でハジメに寄り添っていたシアに気が付くと驚いたように大きく目を見開き、その直後には、何が面白いのかニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべ始めた。いきなり向けられた嫌な視線に、シアは僅かに身じろぎハジメの腕を強く抱き締める。

「確認しました。自分は第三連隊隊長のグリッド・ハーフと申します。どうぞお見知り置きを。勇者様のご来訪は、既にリリアーナ女王殿下の耳にも入っております。お部屋

でお待ちですので部下に案内させましょう。……ところで勇者様、その傭人族は？それは奴隷の首輪ではないでしょうか？」

「え？いや、彼女は……」

ステータスプレートを返しながら、グリッド・ハーフと名乗った男は何故かシアについて尋ねた。

しかし、尋ねられても光輝としては返答に困るところだ。奴隷ではないことは、シアが大事そうに身に付けているチョーカーが既にどう見ても奴隷の首輪では見えないことから一目瞭然であるし、ハジメの恋人であるシアのことを自分が説明していいのかと迷う。「そんなこと俺に聞かれても……」というのが正直なところだ。

口籠る光輝から答えは期待できないと判断したのか、グリッドはシアへと視線を転じる。そして、彼がなぜシアに注目するのか、その理由を察せられる質問をした。

「よお、ウサギの嬢ちゃん。少し聞きてえんだけだよ。……俺の部下はどうした？」  
「部下？一体のなんの話を——っ、まさか……」

グリッドから発せられた唐突な質問に一瞬、何を聞かれているのかわからない様子のシアだったが、直ぐに察したようで驚愕に目を見開いた。

シアにとって直接関わりのある帝国兵など限られている。そ

れは、当然、樹海から出たばかりの頃、自分達ハウリア族を散々追い詰めた連中だ。大勢の家族を殺し、拉致し、奴隷に落とし、そして、シア達を「ライセン大溪谷」へと追いやった敵。

「おかしいよなあ？俺の部下が一人戻ってこなかったつてえのに、なんでお前は生きていて、こんな場所にいるんだ？ ああ？」

「うあ……」

シアを追い詰めるようにジリジリと迫るグリッド。そう、彼は、樹海から出たばかりのシア達を襲った部隊の隊長だったのだ。連隊長であるグリッドは全体の指揮を執っていただけで、直接にはシア達の捕獲を行ってなかった。そのため、シアにはグリッドの記憶はなかった。

グリッドの方は、珍しい青色がかった白髪の兎人族という珍しさから、しっかりと覚えていたようである。

シアの脳裏に、甦るように襲い掛かってくる帝国兵達の表情と、家族が一人、また一人と欠けていくというあの時の絶望感がフラッシュバックする。

無意識に呻き声を上げ、表情を強ばらせながら、目を瞑ろうとした時……温かな感触を感じハツとする。

見れば、隣にいたハジメが立ち上がっていて座っている自分の頭を優

しく撫でていた。間を置かず片手と頬、肩にも温かさを感じる。それは、片手はシアの隣に座り直したユエ、頬をツンツンするのは優花、肩に優しく安心感を与えていたのはいつの間にかシアの後ろに回っていたティオであった。

三人のシアを見る瞳はシアを安心させるように守るかのような優しい眼差しだった。ユエに聞しては、どちらかと言えば呆れるような、叱責するような眼差しで、言外に「あんな、雑魚に気圧されるな未熟者」と言われたかのようで、シアは苦笑いを浮かべる。

いくらトラウマとも言うべき出来事だろうと、今のシアは大迷宮の怪物共すら打ち砕く力と気概を持った紛れもない「強者」なのだ。たかだか帝国の将校一人に気圧される理由など何処にもない。

シアは視線で大好きな四人に「もう大丈夫です！」と伝えると、ピントとウサ耳と背筋を伸ばして、ジリジリと迫るグリッドに向かって艶然と微笑んだ。そして、思わず足を止めてしまうグリッドに向かって言い放つ。

「あなたの部下のことなんて知ったことじゃありませんよ。頭の悪そうな方達でしたし、魔物にも喰われたんじゃないんですか？あと、私のことで答えることなんて何一つありません」

「……随分と調子に乗ったことを言うじゃねえか。ああ？勇者様一行と一緒にいるから

大丈夫だとも思ってるのか？ 奴隷ですらないなら、どうせその体で媚で売ってんだろ？ 売女如きが、舐めた口を聞いてんじやねえぞ」

グリッドが、剣呑な目を細めながらそんなことを言うが、シアは既にグリッドから視線を外して見てすらおらず、如何にも眼中にありませんといった様子だ。

寧ろ、グリッドの酷い罵倒に、他の女性陣が怒りを顕にしている。シアの態度に表情を歪めつつも、場の雰囲気を感じたのだろう。グリッドは誤魔化し笑いをしながら光輝に向けて提案する。

「申し訳ありませんがね、勇者様。この兎人族は二ヶ月程前に行方不明になった部下達について何か知っているようでした、引渡し願えませんかね？ 兎人族の女が必要ななら他を用意させますので、ここは一つ……「おい、雑魚下っ端」……」

しかし、グリッドが全てを言い終わる前に声が割り込んだ。そのタイミングと言いつきにグリッドが怒りで頬を引き攣らせながら視線を転じて声音を低くして話しかけようとしたが……

「なにか——ムグッ?!」

「てめえの了見なんて知らねえが俺の女が売女だつて？ ああ?」

また、グリッドの言葉を遮ったのは、グリッドの顔面の口元の方

をギユムツと骨が砕けそうならいので掴んでグリッドを持ち上げるハジメの姿があった。

ハジメもグリッドの物言いにはスルーをしてきたが、シアに対しての売女発言は流石にキレてしまったのだ。そして、今、グリッドをゴミを見るような目で見ながら、掴み上げていた。

「ムグツ?! んんん!」

「シアにその汚え頭を地面に擦り付けて謝れ。そしたら、離してやるよ」

グリッドは足をバタバタさせながら抵抗しようとするが、ハジメは平然とグリッドを持ち上げ、更に力を込めていき、グリッドの方からパキパキと何かがヒビ割れたような音がしだして、グリッドが変な奇声を上げながら、足を更にジタバタさせる。

「んん!!」

ハジメはそのまま、グリッドの顔を破壊しようとしたが、後ろから愛しい兎娘の声が上がるのが聞こえ、動きを止める。

「ハジメさん、私は大丈夫です。ありがとうございます。怒ってくれて」

「……気にすんな。俺の勝手だ」

ハジメはそうシアにそう返答してから、ポイツとグリッドを投



げ捨てる。グリッドは投げ捨てられて尻餅を着くがそれよりも掴まれていた口元を痛そうにしながら、ハジメを睨み付ける。

「貴さ——」黙れよ、顔を破壊せずにやったんだ。シアに感謝しとけよ。それと、お前の話はどうでも良いし、シアが言うように知ったことない。どつかで野垂れ死んだだけだろ？ 次にシアに対して、侮辱やら手を出すならてめえの未来はないと思え——ッ！」

グリッドはハジメの「威圧」で言葉を噤んでしまうがハジメは言葉を続けていく。

「ほら、てめえのせいで時間が勿体ないだろ？ さっさと案内させろ」

ハジメの自分に対する態度、物言いにグリッドの顔が真っ赤に染まる。怒りと痛みの余り、涙目を溜めながら、血走っていた。

それでも、連隊長として自制を効かせる言葉できるようで、まさか「神の使徒」一行に斬り掛かるわけにいかないし、グリッドは兵士としての勤でハジメが放つ「威圧」から自分では到底、敵わないと判断して、背後で控えさせていた部下に視線で案内を促す。

苦虫を噛み潰したような表情でハジメを睨みグリッドを尻目に、何事もなかったように詰所を出ていくハジメ達。

若干、ハジメの行動と物言いに光輝や龍太郎が頬を引き攣らせていた



友の雰囲気、雫や優花は視線を泳がせている。

「帝都での茶番といい、一体全体どうして皆さんが此処にいるのですか？ 納得のできる説明を求めます。ええ、それはもう強く強く求めます。誤魔化しは許しませんからね！ 特にハジメさんと……つてアレ？ 兄様は……つまあ、とにかく！」 絶対、裏で手を引

いてるのは、ハジメさんでしょう！ 他人事みたいにシアさんのウサ耳をモフらないで下さい！ 優花達も、どうしてシア三人のほっぺをムニムニしたりしているんですか！

後。兄様は何処なんですか?!」

リリアーナがキッ！とハジメを睨む。リリアーナの脳内には大体の非常識なことが出来る人間はハジメかアレスぐらいという揺るぎない理論である。

一方、矛先を向けられたハジメと言うと、シアを膝の上に座らせてウサ耳を優しくモフモフしていた。シアとは反対側に座るユエとハジメの隣に寄り添って座る優花は正面からシアのほっぺをムニムニしている。

「ん？ すまん、何か言ったかりリイ？」

帝城に入ってからというもの、シア達を愛でたり、アレスの居場所、帝国とクソ神共の関連性をこつそりと空から「オルニスA」を操縦モードに設定して念入りで調べていたハジメ。その関係でリリアーの言っていることを聞き逃してしま

い首を傾げる。

リリアーナは涙目になった「王女なのに、まともに話を聞いて貰えてない!」と。頬を膨らみしながら、気持ち、音量を多めに繰り返して説明を求め。

「声がかいって、リリイ。聞いてなかったのは謝る。ちよつと俺も忙しくてな」

「忙しい、つてシアさんとイチヤイチャしているだけじゃないですかっ! 羨ま………じゃなくって、ハジメさんの嘘つきい!」

「お、落ち着いてリリイ! どうしようシズシズ。こんな怒髪天を衝く! つて感じのリリイなんて初めて見るよ!」

「いや、アレは嫉つ……いや、違うわよね。でも、南雲君のことだから……。ほら、リリイ、落ち着いて。今説明するから、ね?」

ふうーふうーと息を荒あげるリリアーナを鈴と雫が二人がかりで宥めていくが、ハジメは悪びれた様子もなく「オルニスA」を自動操縦モードに切り替えてから言う。

「まあ、大目に見てくれないかりリイ。ちよつと事情があつてな。今のシアは、少しばかり不安定なんだ」

「不安定、ですか?」

「どこか具合でも……」

途端に心配そうな表情になる辺り、リリアーナは人が好いこと

が分かる。視線を受けたシアは、何かを堪えるようにグツと唇を噛み締めていたが、先程からされていたモフモフとムニムニに表情を緩め始めた。俯かせていたよ

顔を上げると「大丈夫です」といつもの笑顔を見せる。

シアの情緒が少し不安定なっていたのは、言うまでもなくグリッドが原因だ。だが、別に彼に対する恐怖などで、不安定になつていたわけではない。逆だ。シアは内から溢れ出す「殺意」を抑えていたのである。何と言つても、グリッドはシアの家族の大勢奪つた憎き相手だ。トラウマさえ乗り越えてしまえば、あとに来るのは強烈な殺意だけ。

しかし、此処に来た目的を考えると、ハジメがしたことはギリギリだろうが殺しはライン越えだ。だから、必死に我慢していたのだ。そして、それを察したハジメ、優花、ユエの三人が、シアを甘やかすことで宥めていたのである。

事情を知らない者のために、掻い摘んでグリッドとシアの関わりを話すと、皆一様に悲痛そうな表情になり、次いで、光輝達は当然の如く憤り、リリアーナは暗い表情で俯いてしまった。

リリアーナとしては、亜人族の奴隷化はこの世界の常識であり確認して来たことなので、自分が憤るのは余りにも筋違いだと思つたのだ。

教会と神々の真実を知つた今、彼等に対する偏見は急速に薄れてい

る「亜人とは神に見放された種族」——その神こそ人類の敵であるのに、亜人族を差別することのなんと滑稽ことか。リリアーナに限らず、真実を知った者は同じ想いを抱いていた。

とはいえ、差別してきた過去が精算されるわけではない。昔、一度、アレスにも『リリイ、亜人族に対して、そう偏見を持つてはダメだ』と言われた時は、何を言ってるの? と思っていたが、今、アレスの言葉に意味を理解した自分に何かを言う資格はないと、リリアーナは、いつもの笑顔を振りまくシアを眩しげに見つめながらハジメに話の続きを促した。

「それで、何故こちらに來たのですか? 樹海の大迷宮の攻略は? それと昨夜の動物の仮面集団はなんなのですか? もうそろそろガハルド陛下から謁見の呼び出しがかかるはずです。口裏を合わせる為にも無理を言つて先に合う時間を作つて貰つたのですから、最低限のことは教えて貰いたいのですが。それにハジメさん。兄様の姿が見えないのですが……何処におられますか?」

「まあ、そんな慌てるなるなよ、リリイ。夜になれば全部わかる。アレスのこともさ。だから、俺達のことは……用事が早く片ずいたから、遠出する前に立ち寄つたくらいに言つておけばいいさ」

「そ、そんな適当な……夜になれば分かるつて、また仮面でも付けて暴れる気ですか?」

分かっていられるのですよ！ 雫達に恥ずかしい格好をさせたのはハジメさんだって！」

「そうカリカリすんなよ、リリイ。無理言ってるの分かっているが、頼む」

「うっ……ハジメさん。私はどうしたら……」

「……………チョロ姫」

「ユエさん?!」

どうやら、ハジメ達が話す気はないと悟り、そしてハジメの押しに負けそうになったことでユエに言われた言葉で「王女なのに……」と落ち込む。その隣では、雫が「恥ずかしい格好……」と呟きながら自らの黒歴史にどんよりしている。

「……………昨夜、仮面騒動とは別に、帝城の地下牢から脱走騒ぎと帝都のコロシウム近くの上空に巨大な魔力余波が発生した騒ぎがありました。まあ、脱走騒ぎの犯人は十中八九ハジメさんとして、魔力余波の件はまだ原因は判明していません」

「当然の如く犯人呼ばわりか……まあ、そうだが（コロシウム辺りだと、アレスが消えた場所と近い。なら、その魔力余波の原因はアレスのロンギヌス辺り……そして、アレスをそこまで本気にさせた存在か……）リリイはなんで俺だと思った？」

「簡単でしょう？ 詳しい話は聞いてませんが、捕らわれていた兎人族はハウリア族の方と聞きました。シアさんのために助けたというのは分かります。それに王国でも、有

名な帝城の地下牢を難なく破れる人はハジメさんくらいでしょうか？　でも、分からないのは、今更ここへ乗り込んできたことです。何を考えているのですか？」

必要なら口裏も合わせるし協力もする。リリアーナの瞳にはそういう物語っていた。まだ十四歳という若さで、国の舵取りの先達に立つ重圧は相当なモノだろう。

なのに、躊躇わずハジメ達のために動くこうとするリリアーナに、光輝達だけでなく、優花達も「本当にこの王女は人が好い」としたほっこりしたような表情を見せる。

思えば、彼女は最初からそうだった。周囲が召喚された生徒達を「神の使徒」とただ称える中、この世界の事情に巻き込んでいるからと、自分にできる最大限で心を砕いてくれていた。

そんな真剣な眼差しで向き合ってくれるリリアーナに、ハジメは苦笑いして立ち上がりリリアーナの傍に近付くと頭を優しく撫でた。

「リリー、俺達の為にありがとうよ」

「ならっ…：「だが、この件は詳しく話さない」…：な、何故分からないのですか?!」

しかし、リリアーナに待っていたのは自分と違った答えで声を上げてしまう。



「俺は今は『忙しい現状』なんだ。それにリリーの負担が増える」

「でも、忙しいなら、私が手伝った方が……」

「いや、俺が行っていることは、リリーがするには難しいんだ。理解してくれ」

「うっ……でも……」

ハジメの言葉に口を噤んでしまうリリーアナ。この光景を他のメンバーがわざわざ口を挟まなかったのは、ハジメの『忙しい現状』を理解しているからだだった。

「ありがとな、リリー。その気持ちだけ有難く受け取っておく」

「うう……」

ハジメはそう言いながら謁見の時間が来るまでリリーアナに優しい笑みを向けながら、頭を撫でていた。その時のリリーアナの顔は真っ赤に染まっており、なんとも言えない表情だった。

そんなことをしていると、遂に謁見の時間が来たと同時に、やって来た案内役に付いて、ハジメ達はガハルドのもとへ向かった。

通された部屋は、三十人は座れる縦長のテーブルを置かれた、ほとんど装飾のない簡素な部屋だった。

その、テーブルの上座の位置に、頬杖をついて不敵な笑みを浮かべ

るガハルドがいた。彼の背後には二人、見るからにして手練れと分かる、研ぎ澄まされた空気を纏った男達が控えている。

「……………はあ（見えないが、壁の裏に二人、天井裏に四人、そして扉の外に二人ね……相当、俺達を警戒してのるか、試してるのか……だな）」

ハジメは部屋に周りに隠れている者の気配を感じ取っていた。どうやら、謁見は完全包囲された状態で始まることに溜息を吐く。

そして、ハジメ達に相当強いプレッシャーを向けた同時に言葉が放たれた。

「お前が南雲ハジメか？」

## 八十八話 皇帝會談

「お前が南雲ハジメか？」

ハジメ達が部屋に入るなり、リリアーナによる紹介も、勇者である光輝への挨拶もすつ飛ばして、ガハルドはそう問いかけた。視線は鋭く細められ、真つ直ぐにハジメを射抜いている。放たれるプレッシャーは、今も戦闘が始まりそうな強さだ。

流石は数十万ものの荒くれ者共を力の理で支配する男の威圧は半端なものではない。光輝達は思わず後退りして身構え、戦闘者ではないリリアーナなどは息苦しうに小さな呻き声を上げた。

しかし、そんな強烈なプレッシャーの中でも、ハジメ、優花、ユエ、シア、ティオの五人は平然としていた。一番経験の少ない優花ですら、【メルジーネ海底遺跡】では頗る付きの狂気を耐え、自分の中にあるクリスタの記憶ではあるが、「神々」の圧を体験しておるのだ。皇帝の威圧とはいえ、大迷宮攻略者——神殺しを行う者達にとってはそよ風に等しい。特にハジメは苦しうにしているリリアーナを優しく支えながら、スつと目を細めながらガハルドを睨んでいた。

そんなハジメ達を、そしてプレツシャーを放った自分を睨んでいるハジメを見て、ますます面白そうに口元を吊り上げるガハルドに、ハジメは返事をした。

「ええ、俺が南雲ハジメですよ。しかし……随分としたご挨拶だな皇帝陛下さんよ？」

「「「「「——っ?!」」」」」

支えてリリアーナを優花に託してから、*“威圧”*をしながら、そんなことを言うハジメに対して、光輝達はハジメの威圧と皇帝陛下に対する物言いに驚愕していた。

「ちよつ、南雲君!? 皇帝陛下の前よ? もう少し礼節を持つて挨拶をしないと!」

「はあ? 会つて初っ端なプレツシャーをしてくる奴に礼節とか関係ねえだろ? それ

より優花、リリイは大丈夫そうか?」

「うん、念の為に回復魔法もしといたから大丈夫」

「はい、私はもう大丈夫です。ハジメさんも優花もありがとうございます」

ハジメは雫の言葉に肩を竦めながら、優花に託していたリリアーナを心配した。リリアーナは優花に支えられながらも大丈夫と返していた。

「でも、最低限の礼ぐらい示さないと……」

「いや、八重樫。この皇帝さんはそんなのを求めてないだろ? 帝国は実力至上主義だから、示すなら礼節じゃなくて実力だろ?」

ハジメはそう言いながら、ガハルドに視線を転じた。味方の動揺が激しく、優花達は平然としている中、ハジメから視線を向けられたガハルドは笑い声を漏らしながら口を開く。

「ククツ……流石は国民を欺くストーリーを平然と作り出す奴だ。そうだ、南雲ハジメ。お前の言う通り、畏まった礼節なんかより実力を示してくれる方が俺にとっては嬉しいことさ」

「ほら、言ったろ？　　こういう奴は畏まるよりこういう態度で対応をした方が良かったって」

「そ、そうなの……？」

ハジメの言葉に雫は首を傾げるが、ガハルドに促されて、ハジメ達は順に席に着いていく。それを見て、ようやくハジメから視線を外したガハルドは、ハジメの傍に陣取るユエ達を興味深げに観察し始めた。特にシアに対しては意味深な視線を向けてから、優花に視線を向けて笑みを浮かべる。

「久しいな、園部優花」

「はい、お久しぶりです。ガハルド陛下」

「あの時、お前が言っていた探している人つてのは南雲ハジメのことだったんだな」

「ええ、そうです。後、勧誘の件は……」

そう言つて、優花は隣に座るハジメの腕に抱きつきながらガハルドを見る。

「分かつてる。お前の目を見る限り、望み薄みたいなもんだつたからな………んで」

そう言つて、ガハルドは優花と会話した後、光輝達の方に視線を向けると………光輝をスルーして、隣の雫に目を向けニヤリと楽しげな笑みを浮かべた。

「雫も久しいな。俺の妻になる決心はついたか？」

「陛下！雫は既に断つたでしょう！」

ガハルドの言葉に雫が何かを言い返すより早く、光輝が反応する。チラリと光輝を見たガハルドは、ハツと鼻で笑うと雫を真つ直ぐに見つめ出した。あからさまな「眼中にない」という態度をとられて額に青筋を浮かべる光輝。

そんな二人に嘆息しながら、雫は澄まし顔で答える。

「前言を撤回する気は全くありません。陛下の申し出はお断りさせて頂きます」

「つれないな。だが、そうでなくては面白くない。元の世界より、俺がいいと言わせてやろう。その澄まし顔が俺への恋慕で赤く染まる日が楽しみだ」

「そんな日は来ませんよ。………というか、皇后様がいらつしやるでしょう？」

「それがどうした？ 側室では不満か？ ふむ、正妻にするとなるといろいろ面倒なところ………」

「そういう意味ではありません！ 皇后様がいるのに他の女に手を出すとか………」

「何を言っている？ 俺は皇帝だぞ？ 側室の十や二十、いて当たり前だろう」

「ぐつ……そうだったわ。と、とにかく、私は陛下のものにはなりません。諦めて下さい」

「まあ、神々による帰還が叶わない以上、まだまだこの世界にいるのだろうし、時間を掛けて口説かせて貰おうとしようか。クク、覚悟しろよ、雫」

どうやら本当に、ガハルドは雫を気に入ってるらしい。優花の時とは違って、強欲な皇帝らしく、断られたくらいでは諦めないようだ。その鋭い眼光が雫をロツクオンしていた。雫は心底嫌そうな表情でそっぽを向いているのだが、全く気にした様子もない。

と、その時、向いた先で雫の視線が、偶然、皇帝陛下の前なのに優花の頭を撫でたりとイチヤイチヤしていたハジメと合う。やはり、普段の鋭さと異なり、大事な人達の前では目を和らげ優しい様子の子のハジメであったが話は聞いていたのだろう。その時のハジメの眼差しには、「ドンマイ、八重樫（笑）」という明らかに面白がるような色が含まれていた。

イラツときた雫は、つい、用意された紅茶付属の角砂糖を指で弾いてしまった。ハジメには遠く及ばないが、結構な勢いで飛ばされた角砂糖の弾丸は、狙い違わずハジメの顔面に飛来するも、直撃はすること無く、パクツとハジメの口の中でキャッチされてしまった。

ハジメは口をモゴモゴと口を動かし、角砂糖の甘みを堪能していると両隣の優花とユエから机に出されてる菓子をアーンされ、それもちゃんと頂いて堪能してから、胃に収めた。

それを見て悔しそうな雫に対して、ハジメは既に優花とユエ達とイチヤイチャしている。そんな様子を見ていたガハルドは、改めて鋭い視線をハジメに向ける。それは、色々な意味で値踏みするような眼差しだ。

「ふん、面白くない状況だな。………南雲ハジメ。お前には聞きたいことが山ほどあるんだが、まず、これだけ聞かせろ」

「ああ？ なんだ？」

「お前、俺の雫はもう抱いたのか？」

「「「ぶふうー！」「」」」

唐突にとんでもないことを真剣な表情で尋ねるガハルドに、雫を含め、光輝達が噴き出した。ガハルドの背後に控える護衛の男達ですら「陛下………最初に聞くのがそれですか………」と頭の痛そうな表情をしている。

顔を真っ赤にした雫が泡を食って声を張り上げる。

「ちよつ、陛下！ いきなり何をっ」

「雫、お前は黙っている。俺は南雲ハジメに聞いてんだよ」



ガハルドは雫を制して、ハジメに視線を向け続けている。対するハジメは呆れ顔だ。「何をどうしたらその発想に辿り着くんのだ？」

「どうやら、雫はお前に心を許しているようだから……態度から見ても、ないと思いたいが、念の為だ」

「はあ、あるわけないだろう？」

「……………ふむ、嘘はついてないな。では、雫のことはどう思っている？」

その質問に、部屋中の視線がハジメに集まった。光輝の視線は厳しく、龍太郎や鈴は、どこかハラハラしている。優花達からも様々な意味が込められた視線が突き刺さる。ハジメは、何故、皇帝陛下と謁見して最初に聞かれる質問が恋人でもない雫との関係なのかと溜息を吐きながら、なんとなしに雫へ視線を向けた。

見ると、雫の表情は面白いことになっていた。ハジメはその様子に　首を傾げて雫を見つめる。

「……………（なんで、八重樫の奴。あんなに耳を真つ赤にしているんだ？）」

そう思いながら、ハジメは本音を取り敢えず告げた。

「……………苦勞人で、勇者のオカン」

「OK、その喧嘩買ったわ。表に出なさい、南雲君」

十七歳のうら若き乙女を捕まえて、よりによって「勇者のオカン」とは何事か、と雫

が据わった目でハジメに向けながら揺らりと席を立とうとする。

「案の定かい！」と、隣の龍太郎と鈴が慌てて雫を止めに入り、ハジメは優花に「女の子にそれは言つてはいけないでしょ」と、頬を引つ張られながら叱られていた。片方の頬も隣にいるユエが引つ張つてゐる。

「……まさかの回答だが……まあいい。雫、うっかり惚れたりするなよ？ お前は俺のものだからな」

「だから、陛下のものではありませんし、南雲君にほ、惚れるにやんてありませんからっ！いい、いい加減、この話題から離れて下さい！」

「分かつた分かつた。そうムキになるな。過剰な否定は肯定と受け取られるぞ？」

「ぬっぐう……」

ガハルドの物言いに思わず呻き声を上げてドカツと座り直す雫を鈴が苦笑いしながら宥めて、何故か光輝はハジメを睨む。

「南雲ハジメ。お前も、雫に手を出すなよ？」

「興味の欠片もねえから安心しろ。つか、ホントに無駄話しかないなら、もう退出したいんだが？」

「無駄話とは心外だな。新たな側室、或いは皇后が誕生するかもしれない話だぞ？ 帝国の未来が関わっているというのに……。まあ、話したかったのは確かに雫のことでは

ない。分かっているだろう？ アレス・バーン以来の規格外なお前の異常性についてだ」

雫を絡めてハジメを観察する時間を稼いでいたガハルドだが、そろそろ潮時と判断してガラリと雰囲気を変える。今までの覇気を纏いつつもどこかふざけた雰囲気とは異なり、抜き身の刃のような鋭さを放ち始める。

「まず、聞きたい。アレス・バーンは何処にいる？ 誤魔化したって無駄だ。情報は割れてるからな」

「……今は、別行動中だ。そして、今現在は絶対にアンタは会えないと思う」

「……そうか。隠れさせてるわけでもないか」

「それが、アンタの聞きたいことか？」

「そう急かすな。この場にアレス・バーンがいなかったから聞いたまでだ」

ガハルドはずっと気になっていたアレスのことを聞くと、頷くだけだった。そして、ハジメ達との謁見の時間を取った最大の理由に切り込んだ。

「リリアーナ姫からある程度は聞いている。お前が大迷宮攻略者であり、そこで得た力でアーティファクトを創り出せると……魔族の軍を一蹴し、二ヶ月かかる道程を僅か二日足らずで走破する、そんなアーティファクトを。真か？」

「ああ」

「そして、そのアーティファクトを王国や帝国に供与する意思がないというの？」

「ああ」

「ふん。一個人が、それだけの力を独占か……そんなことが許されると思っているのか？」

「誰の許しがいる？」

許さなかったとして、お前に何が出来るんだ皇帝さんよ？」

ハジメの簡潔な煽りを含めた返しに、ガハルドが目を細め、覇気が更に増した。ガハルドの背後にいる護衛達がガハルドに合わせて殺気を放ち始める。対して、部屋の周囲に隠れている者達の気配が更に薄まっていった。まさに一発触発の状態である。

「ガ、ガハルド陛下！何を考えてっ」

こうならないように事前に警告混じりの話をしたというのに、何故、竜の尻を蹴り飛ばす？ ような真似をと、顔を蒼白になりがちながら苦言を呈す。

しかし、ガハルドの視線はハジメに固定されたまま。返事もない。緊迫する空気に光輝達が顔を強ばらせ腰を浮かせた。そんな中、当のハジメは、重く粘りつくような殺意を何も感じてないように受け流し、平然と紅茶に手を伸ばしていた。その際、チラリと数ヶ所に視線を向けた。「丸見えだぞ？」とでも言うかのように。

それが伝わったのか、微かにガハルドから周囲から動揺するような気配が伝わってくる。

「はっはっはっ、止めだ止め。ばっちりバレてやがる。確かにコイツはアレス・バーン同様、真正銘の化け物だ。今、殺り合えば皆殺しにされちまうな！」

ガハルドは豪快に笑いながら覇気を収めた。それに合わせて周囲の者達も剣呑な空気を収めていく。百聞は一見にしかず。皇帝として実行せずにはいられなかったらしい。ハジメも呆れてしまった表情でガハルドに言う。

「なんで、そんなに楽しそうなんだよ」

「おいおい、俺は『帝国』の頭だぞ？ 強い奴を見て、心が踊らなきゃ嘘つてもんだろ？」

ガハルドの返事は実に実力至上主義の国の人間らししかった。光輝達が大きく息を吐いて椅子に座り直す。リリアーナは胃がしくしくと痛みを訴えてるようでお腹を摩っている。

「それにしても、お前が侍らしている女達もとんでもないな。おい、何処で見つけてきた？ 園部優花もそうだが、こんな女共がいると分かってりゃあ、俺が直接口説きに行つたつてえのに……一人ぐらい寄越せよ。南雲ハジメ」

「もし、優花達に指一本でも触れてみる。てめえの頭部と帝国は明日にはなくなつ……「はい。ハジメ、ストップ。テイオー」のじゃ。ほら、ご主人様、落ち着いてたもう」……ムグツ?!」

ハジメのブチギレスイッチが入ったのを察した優花はハジメがしやっべつている最中、割って入って指示し、ティオの胸でハジメの頭を押し付けた。ティオもハジメが抜け出さないように頭をガツチリと拘束して自分の胸でハジメを抑えながら頭を撫でていく。すると、最初は反抗してたハジメも最終的に腕がダランと垂れた。どうやら落ちていたらしい。

「ごめんなさい、ガハルド陛下。ハジメは私達のことになると、こんなになるので、そう言った発言は控えて欲しいんですが……」

「お、おう……それはスマン」

覇気を感じる優花の笑顔？に皇帝陛下さえも少し怖気てしまい頬が引き攣ってしまいが、一旦、咳払いして気を取り直すガハルド。ハジメも咳払いして乱れた髪は優花に直して貰いながら気を取り直して会話を再開する。

「まあ、俺としては、そちらの兎人族の方が気になるがね？そんな髪色の兎人族など見たことがない上に、俺の気当たりにもまるで動じない。その気構え、最近捕まえた玩具を思い起こさせるんだが、そのところどうよ？」

ガハルドの「玩具」発言に、シアの目元がピクリと反応する。隣のユエが、テーブルの下でそつとシアの手を握った。

「玩具なんて言われてもなあ〜」

「心当たりがないってか？ なんなら後で見るか？ 実は、まだ何匹かいてな、女と子供なんだが、これが中々——」

ガハルドの言葉はハツタリだ。カムを通じて、捕まった者全員を連れ出したことは確認済みである。

それに対して、ハツタリだと分かっているハジメの返事はガハルドを心の中で駄目出ししながらの一言だった。

「興味ないなあ……（ハツタリなら、もう少し良いのを考えとけよガハルド皇帝さんよ）」  
「ほう。そいつ等は、凄まじい業物のショートソードや装備を持っていたんだが、それでも興味ないか、稀代の錬成師？」

「俺、剣とかそんなに使わないからなあ……」

「……そうかい。ところで、昨日、地下牢から脱獄した奴等がいるんだが、この帝城へ易々と侵入し脱出する、そんな真似が出来るアーティファクトや特殊な魔法は知らないか？」

「知らないなあ……あつたらいいよなあ」

「……聞きたいことはこれで最後だ。何を得られれば帝国につく？」

「そうだな……でも、まず一つ聞いて良いか？」

「普通なら断っているが、お前になら、一つぐらい答えてやろう」

「そうか。じゃ、アンタは、普通よりステータスがイかれてて、思考能力が欠損している帝国兵達は知ってるか？」

ハジメの雰囲気が一変し、少し空気を重くするような圧を発しながら、ガハルドに問い掛ける。

そんな中、ガハルドは、ハジメの雰囲気の変わり様とその圧に獯猛な笑みを浮かべながら返事をした。

「圧まで変えてまでの質問がそれか。だが、俺は知らんな全く。それがどうしたんだ？」

「……………知らないなら、いい（アレは本当に知らないだろうな）」

「なら、もう一度聞くぞ。どうしたらお前は帝国につく？」

「そうだな……………亜人奴隷の解放宣言。それをしてくれたら考えてやるよ」

「おいおい、それは豪胆だろ？ チツ、ホントに話題の奴だな。ったく、扱いづらいガキめ」

ガハルドはハジメの言葉に目を見開くも、ガリガリと頭を掻きながら悪態を吐く。しかし、その表情にはやはり何処か楽しげな笑みを浮かんでいる。自分に抗う相手というのが実に好みらしい。

同時に、今のやり取りで事前にリリアーナから聞いていたハジメの情報について、あの程度は確信が持てたらしい。人物評価も確定したようだ。

はつきり言って、ハジメの態度は皇帝陛下を舐めきったものであり、神々の真実を



知った今となつては、ガハルド自身が許可したとはいへ普通なら問題となる。無礼講と言われて、本当に無礼千万を働いたらアウトなのと同じだ。

しかし、ガハルドはそれを許容した。それは、ハジメと相対するデメリットを確信したからだ。ついでに言えば、實力至上主義の理念に沿つたからだ。

結論として、ハジメを囲い込む、或いは危険過ぎると排除するような行動は取らないようだ。と、其処で時間が来たようで、背後に控えていた男の一人がそつとガハルドに耳打ちすると、ガハルドは一つ頷き席を立つた。

「まあ、最低限、確認すべきことはできた。……今のところは、これくらいで良しとしておこう。帝国も王国も、今は大忙しだしな。ああ、そうだ。今夜、リリアーナ姫の歓迎パーティーを開く。お前達も是非、出席してくれ。姫と息子の婚約パーティーを兼ねているからな。真実は異なつていてもそれを知らないのなら、『勇者』や『神の使徒』の祝福は外聞がいい。頼んだぞ?」

ガハルドは、突然落とされた爆弾発言に啞然とする光輝達を尻目に、意味深な視線をハジメに向けると、そのまま颯爽と部屋から出ていった。

ボタンと扉の閉まる音が響き、それによつてハツと正気を取り戻した光輝達がリリアーナを詰問する。

「リリイ、婚約つてどういうことだ! 一体、何があつたんだ!」

「それは……例え、狂った神々の遊戯でも、魔人族が攻めてくれば戦わざる得ません。我が国の王が亡くなり、その後継が未だ十歳と若く、国の舵取りが十全でない以上、同盟国との関係強化は必要なことです」

なんでもないように語るリリアーナに光輝は絶句してしまふ。代わりに雫が厳しい表情で尋ねた。

「それが、リリイと皇太子の結婚ということなのね？」

「はい。お相手は皇太子様ですね。ずっと以前から皇太子様との婚約の話はありました。事実上の婚約者でしたが、今回のパーティーで正式なものとするのです。魔人族の侵攻で揺らいでいる今だからこそ、というわけです」

「王国には？ 協議が必要ではないの？」

「事後承諾ではありませんが、反対ではないでしょう。元々そういう話だったわけですし。それに、今の王国の実質的なトップは私です。ランデルは未だ形だけで、お母様も前には出ない人ですし、兄様も親戚ですけど、そもそも、追放されているのですから。なので、問題はありません。今は何事も迅速さが必要な時です」

リリアーナは極めて冷静だ。悲劇のヒロインのような雰囲気は微塵もない。ただ、自分の役目を全うすべく全力を注いでいる、という様子だ。

光輝は苦虫を噛み潰したような表情をしながら口を開いた。

「……リリイはその人のことが好きなのか？」

その質問には、流石にリリアーナも困った顔になる。

「……好き嫌いの話ではないのです。国同士の繋がりのための結婚ですから。ただ次期皇帝陛下筆頭候補ともなれば側室も多く娶る必要があつて、現在の愛人の方々の中からも選ばれる方もいると思いますが……ふふふつ、私の立場上、彼女達を差し置いて正室になるのですよ。凄いでしよう。まあ、後宮内の調整に関しては、私が最年少ですし、胃がシクシクしちゃうのですが……」

リリアーナは、冗談めかしてドヤ顔をしたり、わざとらしくお腹をさすったりして雰囲気明るくしようとするが、その気遣いの態度に、光輝は逆に声を荒あげた。

「な、なんで、そんな平然としているんだよ！好きでもない上に、そんな奴と結婚なんておかしいだろ！」

「光輝さん達から見ればそうなのかもしれませんが、私は王族で王女ですから。生まれ時から、これが普通のことです」

「普通って……リリイだって女の子なんだ。ちゃんと好きになった人と結婚したいんじゃないのか？」

納得出来ず言葉を重ねる光輝に、リリアーナはただ、困った笑みを浮かべる。

リリアーナとて、ロマンチックな恋愛に憧れたりも当然する。特に、親友となった異

世界の女の子達、優花や雫、此処には居ない香織などとガールズトークもすれば尚更。そして、今も脳裏に焼き付いているあの夜で彼と初めて出会い話し合った思い出。だが、憧れは憧れだ。王族として果たさねければならない責務がある。

だから、どうか、あまり自分で自分の憧れを否定する言葉を言わないで欲しいなあと、リリアーナは目で訴えてみるのだが……。

光輝は納得できない感情のまま、なお言い募ろうとするが、その寸前、ハジメが席を立った。

思わず言葉を止める光輝。ハジメに注目が集まるも、当のハジメは何事もなく部屋を出ていこうとするが、その行動に、光輝が行き場のない感情を吐き出すかのように突っかかった。

「おい！南雲！お前は、なんとも思わないのか！」

「……………うるせえんだよ、天之河。それにな、思うか思わないか以前にこれは婚姻という形をとっただけの政治の話だろ？俺達みたいなド素人が違う口を挟むことじゃない」

「ぐつ、で、でも…………」

光輝の様子を見て、ハジメはカム達を救出する前の光輝を思い出す。雫達がいる以上、まさか目的を見失って暴走したりしなれないと思うが、念の為にと釘を刺した。

「……………今の俺達にはやる必要がある。下手なことをするな。それでも邪魔するなら、

口の利けないレベルでぶちのめす。それに、婚姻の話はリリーの問題だ。それに……」  
ハジメはそう言いながら、リリーに近くに近づく。そして、リリーの視線が合わさるぐらいにまで屈むとそつと、リリーの頭を撫でながら優しい笑みを向けて口にした。

「俺はいつまでも、リリーの味方さ」

「ハジメ……さん」

ハジメはそれだけ言うと、さつさと出て行ってしまった。王族ということもあつてか、ユエやティオなどは同情しつつも、リリーアーナの決意を応援するような眼差しを向けて追隨する。優花はハジメに「素直じゃないなあ」と、いった感じの眼差しを向けつつハジメに追隨する。シアは複雑な表情ではあつたが、心配そうにしながらもユエや優花に促されて退出した。

リリーアーナはそんなハジメを出ていく様子を頭を撫でられた部分をまた、自分で撫でながら見つめていた。頬を赤く染めながら……。

「クソつ。アイツは、いつもいつも簡単にっ」

「（ああ、そういうと……南雲君も素直じゃないのね……）光輝、落ち着きなさい。それと、そこまで深刻にならなくても良いかもしれないわよ？」

光輝は雫に愕然とした表情を向ける。心配じゃないかと、責めるような目を向ける。だが、続くハツとする鈴と龍太郎の言葉でハツとした。

「う、うん。そうだよ。歓迎パーティーどころじゃなくなるかもだしね」

「ある意味、パーティー、だな。南雲も凄いことを考えたもんだなあ」

光輝は無言になった。ハジメが出ていく際にリリイに向けて言った言葉も意味も察しがついたようで、微妙で悔しそうな表情になる。

そんな、彼等の様子を対してリリイは……

「ハジメさん……助けてくれるんですか……」

彼等の様子を見ることなく、両手を胸に抑えながら、ポーツと扉を見つめているのであった。

~~~~~

く

「やつとだ……」

帝城の傍に建てられている。皇太子の別荘にある男が笑みを浮かべながら嬉しそうに口にする。

「あの、無能もここまで来れば、儂の使徒にするのも良いに思えてきたな……まだ、成功していないがな」

そして、男はそう口にすると同時に、手で持っているグラスの中に入っているワインを一口、口を付けてから、両手を広げながら声を上げた。

「ああ、我が主、天上天下唯我独尊たる最強の神、ラーゼン様。見ていて下さい。この、創獣神・オルステッドの活躍をつ！ 儂の采配をつ！」

手で持っていたワイングラスが床に落ちてパリンつと音をたてるも、オルステッドは気にしない。

「一万と五百年前の儂の失態を挽回する為につ」

オルステッドは、自分の失態を屈辱を思い出す。一つは自分の胸に大きな傷をつけ、竜人族に神々が敵であると、伝えた初代クラルス。二つ目は、五百年前に自分達を倒そうと画作していたクラルスの一族。

「しかし、今度は邪魔になるであろう『使徒殺し』は封印済み、イレギュラーも今は樹海の大迷宮にいとバイアスからの報告で聞いておる。ああ、楽しみだな。今宵は楽しみだなあ……ガハハハハッ！」

オルステッドは笑う。その姿に映る影には巨大な『竜の姿』が映っているのであった……………。

## 八十九話

## 貴方は私の……

光輝達と別れた後、リリアーナもパーティーの準備の続きをするために部屋に戻っていた。ヘリーナを筆頭に、帝国側の侍女達を交えてドレスの選別などに精を出す。

「まあ、素敵ですわ、リリアーナ様！」

「本当に……まるで、花の妖精のようです」

「きつと、殿下もお喜びにやりますわ！」

帝国側の侍女達がこぞって称賛の言葉を並べた。それは、決してお世辞だけではない、純粋な称賛であることは、彼女達のうつとりした表情が証明している。

十四歳という、少女と女の狭間にある絶妙な魅力が、淡い桃色のドレスと相まって最大限に引き立てられていた。まさに花の精と表現すべき可憐さだ。

「ふつ、当然でしょう」

「ヘリーナ、どうして貴女が胸を張っているのですか」



何故かドヤ顔のヘリーナに小さく笑ってから、リリアーナ自身も自分のドレス姿に納得したようで一つ頷くと、帝国側の侍女が嬉しそうに声を上げた。

「やはり、リリアーナ様、お美しいですわっ。流石、アレス様の血縁関係ですね！」

「えっ……あ。はい」

「ちよっ！それはっ」

「え？ あっ！ も、申し訳ありませんっ」

「私からも申し訳ございません。この子、アレス信者で、アレス様に関係することは妙に反応するんです。王国では禁句なのに……」

「アハハ、大丈夫ですよ。気にしないでください」

リリアーナは、謝る帝国側の侍女達を宥めながら、アレスの人気さが劣っていないことに苦笑いだった。

「(でも、この婚約を兄様はどう思うのかしら……)」

「(シスコン<sup>アレス</sup>のことですし、こんな婚約パーティーなんなぶち壊しそうですね。確実に……)」

リリアーナはアレスはこの政略結婚はどう反応するのか口にはしてないが、考えていた。そして、侍女達とリリアーナの会話を聞いていたヘリーナはアレ

スはこんなパーティーには反対するだろうなあ。リリアーナの髪を整えながら考えていた。

「でも、綺麗……」

リリアーナは改めて、自分のドレスを見て思った。

いくらこれが政略結婚であり、皇太子が父親に似た極度の女好きで、自分を見る目が恐ろしく、王国に来た下級騎士を「稽古」と称して悪戯に黜るなどで、自分が兄と呼べるアレスのことを毛嫌いし、自分の強さをひけらかす嫌な人間であつてとしても、夫になることに変わりない。ガハルドの話だと、性格は軟化したと聞いているが、信用していない。

でも、パートナーとして恥をかかせるわけにはいかないし、自分の婚約パーティーである以上、リリアーナも最大限に着飾ろうと思つていた。

光輝に指摘された「好きな人と結婚したくないのか」という言葉がやけに頭にチラつくのを振り切るように。それでも、チラリチラリと「憧れ」が、そして、彼の「俺はいつまでも、リリーの味方さ」という言葉が脳裏に過ぎるのは、どれだけ表面上には出さずとも、この結婚に対する消しきれない不安のせいか。

「そんな、御伽噺なこと——」

そして、不安が相まつてか、脳裏に幼い頃、ヘリーナが話してくれ

た自分の好きな物語が過ぎった。それは、絶対絶命の姫を、颯爽と現れて救う英雄のお伽噺。偶然の出会いに惹かれあつて、身分違いでありながらも多くの障害を乗り越えて結ばれるというラブストーリー。

——馬鹿馬鹿しい。有り得ない話だ。ミライ

頭を振つて頭から追い出す。

リリアーナは「王国の才女」と呼ばれる程の聡明であつたが故に、幼い頃から自分に課せられた使命とも言うべき在り方を受け入れていた。

だから、心の底では嫌悪感を抱く相手であつても、立派な妻となろうという気持ちは本当であり、今夜のパーティーも立派に皇太子妃として務め上げようと決意していた。

「王女なのに、私は王女なのに……なんでっ」

なのに、こんなお伽噺で気持ち左右されるなど、王女としてあつてはならない。叱咤するように、自分を言い聞かせていく。

と、その時、突然、部屋の外が騒がしくなつた。かと思つた次の瞬間には、ノックもなしに扉が開け放たれ、大柄な男が遠慮の欠片もなくズカズカと部屋の中に入つてきた。リリアーナに付いてきた近衛騎士達が焦つた表情で制止するが、そ

の男は意に介した様子もない。

「ほう、今夜のドレスか……まあまあだな」

「……バイアス様。いきなり淑女の部屋に押し入るといのは感心致しませんわ。貴方様のそういうところは変わったとガハルド陛下から聞いてましたが……」

「あん？ あ、あー……そうだな。スマナイな俺としてもお前と婚約が嬉しくてな。でもな、未来の皇帝——夫になる男に、何を口答えしてんだ？」

注意をして、やつぱりガハルドの話は信用ならないと思っ  
ている。年齢は二十五歳。  
ていりリアーナに、最初は穏やかな口調だったが、段々と粗野かつ横暴な言葉で返した者こそ、この国の皇太子バイアス・D・ヘルシャーだった。外見は父親であるガハルドに似ている。年齢は二十五歳。

王族同士の付き合いで一年程前にも顔を合わせているが、アレスが追放されてからは、相も変わらず、度の過ぎた横暴振りだ。改善されてると思っていた、他者を見下した態度も、嗜虐的な雰囲気も、リアーナをまるで玩具を見るような目で見てくるところも、まるで変わっていなかった。

アレスがリアーナを守っていたからであろう。昔はこんな事はなかったが、追放されてからは上から下までを舐めるように見てくるようになった目に、リアーナは悪寒を感じてぶるりと震えた。

「おい、お前ら全員出ていけ」

バイアスは、突然、口を少し手で覆ってから二チャアと口元を歪めると、侍女や近衛騎士達にそう命令した。帝国側の侍女達は慌てて部屋を出ていったが、当然、近衛騎士達は渋る。ヘリーナなど露骨に不審と憤りを瞳に浮かべている。

それを見てバイアスの目が剣呑に細められたことに気が付いたりリアーナは、何をするか分からないと慌ててヘリーナ達を下がらせた。

「何かありましたら、必ず大声をお上げ下さい」

去り際にヘリーナが小さい声で耳打ちする。リリアーナも小さく頷く。最後まで心配そうにしながら全員が部屋を出て扉が閉まる。そして、扉が閉まる直前にヘリーナは祈るように自分の両手を握りしめ「アレス……リリアーナ様を助けて」と小さく呟きながら願った。

「ふん。飼いだの躰ぐらい、しつかりやっておけ」

「……………飼いだではありません。大切な臣下ですわ」

「相変わらず反抗的だな？ククツ、あの野郎が居なくなつた時も、まだ十にも届かないガキの分際で、いっちょ前に俺を睨んだだけのことはある。いつか俺のものにして、あの野郎に見せつけてやろうと思つていたんだ。そして、俺は言うんだアレスに、俺が上だ  
“つてな！”

そういうと、バイアスは顔を強ばらせつつも真っ直ぐに自分を見るリリーアナに心底楽しげで嫌らしい笑みを向けた。すると、リリーアナも睨み返しながら口を開いた。

「だから、貴方は、兄様に勝てないんです」

「あ？」

「そんな、兄様の實力は貴方より遙かに上です。だけど、兄様は努力を惜しまなかった。私は、その時は何でそんなに努力をしているか分かりませんでした。……でも、今なら分かります。兄様の努力は全て私達をつ、この世界を守るための努力だつて。そして、そんな兄様を妬んだり、努力もせずに姑息な手しか使えない貴方なんかには、兄様は……アレス兄様は絶対に負けないっ！ 勝つことなんて一生ありません！」

静かな怒りから、フツフツと不満と怒りが込み上げてきたのかリリーアナを最終的に声を上げてバイアスを否定した。すると、無表情だったバイアスがいきなり彼女の胸を驚掴みにした。

「っ?! いやあ！ 痛っ！」

「……随分と言ってくれるじゃねえか？ ああ？ 久しぶりだぜ、こんなに言われたのはなあつ。……しかし、度胸も育っているが此処もそこそこ育っているじゃねえか。まだ、足りねえが、それなりに美味そうだ」

「は、離しっ」

乱暴にされてリリアーナの表情が苦痛に歪む。その表情を見て、ますます興奮したように笑うバイアスは、そのままリリアーナを床に押し倒した。

リリアーナが悲鳴を上げるが、外の騎士達は何故か反応しない。

「いくらでも泣き叫んで良いぞ? この部屋は特殊な仕掛けがしてあるから、外には一切、音が漏れない。まあ、仮に飼い犬共が入ってきてても、皇太子で次期皇帝である俺に何ができるわけもないからな。なんなら、お前の処女を散らすところを奴等に見てもらうか? くはははっ」

「やっぱり……貴方っていう人はっ」

リリアーナが、これからされることに顔を青ざめさせながら気丈にバイアスを睨む。

「その青く透き通った眼だ。その美しい金の髪だ。アレスに似て、美しいお前を滅茶苦茶にしたい。そして、その反抗的な眼を、苦痛に、絶望に、快樂に染め上げてやりたいのさっ」

長年へのアレスへの妬み、羨望、恨みによってかバイアスは、  
醜い」と表現すべき表情を浮かべて語る。

「俺はな、自分に楯突く奴をつ、自分より出来る奴を黽つて屈服させるのが何より好きなんだ。必死に足掻いていた奴等が、結局何もできなかったと頭を垂れて跪く姿を見ること以上に気持ち良いことなどない。この快感が俺のアレスに対する怒りを妬みを忘れさせてくれる。そして、一度でも味わえば、もう病みつきになっちまう。リリアーナ。初めて会ったとき、アレスの奴が大切にしていた、品定めする俺を気丈に睨み返してきた時から、いつか滅茶苦茶にしてやりたいと思っていたんだ」

「あなたという人はっ……」

「なあ、リリアーナ。今夜で俺は最強の力を手に入る。この世界を支配できる力が俺の手元に来るんだ。そしたら、俺はアレスなんて雑魚しか見えなくなるだろうな……クッククック」

「それは、どういっ……痛ッ！」

バイアスの言葉の意味が分からず、リリアーナが話しかけようとしますが、再び、胸を鷲掴んだ。

「リリアーナ。俺はもう一つ楽しみにしてることがあるんだ。それはな結婚どころか、婚約パーティーの前に純潔を散らしたお前は、どんな顔でパーティーに出るんだ？

ああ、楽しみで仕方がねえ」

たとえ、

嫌悪感さえ抱く相手だとしても、妻として支え



諫めていけば、いつかきつと立派な皇帝になってくれる、いや、自分がそうしてみせると決意してたりリアーナの心に早くも亀裂が入る。

リアーナは悟つたのだ。目の前の、今も零れ落ちそうな涙を必死に堪える自分を見て嗤っている男は、ある意味、正しく、「帝国皇太子」なのだ。

アレスに対して、強い嫉妬は抱いているが、それ以外は欲しいものは奪う。弱者は強者に従え！ その理念の申し子なのだ。

バイアスの恥をかかすまいと選んだドレスが彼の手により引きちぎられる。シミ一つない玉の肌が晒され、リアーナは羞恥で顔を真っ赤にした。

唇を奪うつもりなのか、バイアスの顔がゆっくり近づいてくる。まるで、リアーナの恐怖心でも煽るかのように目は見開かれたままだ。片手で顎を掴まれ、顔を逸らすこともできないリアーナは、恐怖と羞恥で遂に流れ落ちた涙にすら気づかずに、ふと思つた。

望んだ通りの結婚なんて有り得ないと覚悟していたけれど、こんなのはあんまりだと。

—— 本当は、好きな人に身も心も捧げて幸せになりたかつたと。

それは、王女という鎧で覆った心から僅かに漏れ出たただの女の子の  
気待ち。

そうして、雫から聞いた話を思い出す。

ピンチの時に颯爽と現れて、襲い来る理不尽を更なる理不尽で押し潰し、危険な沼から救い上げて貰ったという、まるでお伽噺のような物語。

もし願ったなら、自分にも救いも訪れるのだろうか。そして、何故か思い出すあの人との……彼との会話が——今なら分かってしまう。

あれは、自分の「初恋」だと——。

そして、思い浮かべてしまう。彼が自分をこんな窮地から颯爽と助けてくれる姿を——。

リリアーナは、王女としての自分が「何を馬鹿な」と嗤う声が聞こえながら、それでも止められず心の中で叫んだ。

——ハジメさん、助けてっ

その時だった。

リリアーナは、迫るバイアスの肩の上に、天井から落ちてきた小さな蜘蛛らしきものがピトツ！と着地するのを目撃した。「えっ？」と目を見開いたリリアーナの眼前で、蜘蛛は脚の一本を振りかぶると、そのままバイアスの首にプスツ！と突き刺した。

「いつっ！——なんだ？　今、くびにい……」

突然生じた痛み。バイアスは首を押しえながら、もう僅かでリリアーナの唇に接触するところで身を引いた。

その時には、既に天井に吊るした糸を辿ってスルスルと退避している蜘蛛。リリアーナが、呆然とその光景を見ていると、

「なんら、世界が、まわあつてえ——」

バイアスは呂律が回らない様子になり、直後、そのままガクツと意識を失ってリリアーナの上に倒れ込んでしまった。

「えっ? えっ?」

混乱するリリアーナの前に、再度、蜘蛛が糸を伝ってバイアスの上に降りてくる。バイアスは現在、リリアーナの上に覆いかぶさっている状況なので、彼の肩口に乗る蜘蛛がちょうどリリアーナの眼前に来ている。

そこまで間近で凝視して、リリアーナは初めてその蜘蛛の異様さに気が付いた。

「……金属の……蜘蛛」

そう、バイアスの上に乗っているの蜘蛛は金属でできていたのだ。目を丸くしているリリアーナの前で金属の蜘蛛は「止めだあ」とでもいうかのように、先程とは違う脚の針を、再度、プスツ!とバイアスの首に突き刺した。

意識を失っているにもかかわらずビクンツ！と震えるバイアス。呼吸はしているの、本当の意味で止めを刺したわけではないようだ。

リリアーナはハッと我を取り戻すとズリズリと体を動かしてバイアスの下から這い出た。そして、女の子座りをしたままジツと眼前の蜘蛛を見つめた。

金属の蜘蛛は、少しの間、リリアーナに水晶のような光沢のある目を向けると、そのまま糸を巻き上げてスルスルと天井へと上がっていく。

「あ、待って、待って下さい！ もしかして、貴方は……」

リリアーナが慌てて制止の声をかけるが、金属の蜘蛛はお構いなしに上がっていき、八本の脚で天井にしがみつくと、そのままカサカサと外壁の方へ移動していった。

そして、僅かに紅い光を放つと、いつの間にか空いていた外に通じる穴を塞ぎながら部屋から出て行ってしまった。

破れたドレスの前に寄せて肌を隠しながら座り込むリリアーナは、ようやく事態を把握して、心臓の鼓動が早くなるのを感じる、息が荒くなるのを感じる、顔が赤くなっているのが分かる。そして、頭の中に鮮明と彼の姿と自分に言ってくれた言葉が浮かんでくる。

——俺はいつまでも、リリイの味方さ



ハジメが本格的に集中していることが分かってきているからだ。どれくらいそうしていたのか。日が傾き、太陽が燃えるような色に変わり始めた頃。

ハジメの目がスッと開いた。

それに気が付いた優花が、ちよこんとユエを膝に乗せて隣に座りながら尋ねる。

「どうだったの？ ハジメ」

「ん〜上々だな。途中、ちよつとした面倒事があつたが、まあ、予定の七割が完了したし、それに、見つけたしな」

長く集中していたせいか、少し疲れの滲んだ声音が返ってくる。すかさず、優花がハジメの頭を自分の上に座るユエの太腿に乗せてから魔法で癒しにかかると。

「やつぱり、トラップが多かった？」

「そうだな。流石は帝城といったところか。だが、全てを解除する必要はない」

「ふむ、今夜がパーティーというのは幸いじゃの。人が集まればその分、いろいろと動きやすいじゃろう。しかし、ご主人様。何を見つけたんじゃ？」

「帝国の皇太子のバイアスがクソ神供が繋がっている証拠が見つかった。今、カム達の中の別働隊にあるアーティファクトの破壊及び回収を行って貰ってる」

「!……ホントなのハジメ」

「ああ、バイアスの奴の部屋を調べたら案の定クロだった。てか、コイツ相当の馬鹿だ」  
ハジメがそう答えると雫が反応して焦るように声を上げた。

「馬鹿って……南雲君。後、バイアスってリリイの婚約者じゃないっ!! どうするのっ!」

「どうするのにも、カム達に頑張つて貰つてパーティーをぶち壊してもらうだけだ」  
「ぶち壊すって……」

「……でも、上手くいくでしょうか。アレスさんもまだ、帰ってきてませんし、父様達の方だって……」

ハジメを労るように肩を揉みつつも、シアが不安そうな表情になる。何せ、これから自分の家族の未来が決まる一世一代の大勝負が始まるのに、そこに神々の干渉があるのかもしれないのだ。緊張しない方がおかしいだろう。

そんなシアのウサ耳をハジメがモフリ、ユエが頬をムニリ、ティオが髪をナデナデして、優花がシアを軽く抱きしめる。

微笑む仲間に、シアは込み上げるものを感じる。しかし、涙は流さない。たとえ、それが嬉し涙でも、まだ流すのは早いからだ。代わりに、いつものようにニッコリと輝く笑みを浮かべた。自分は一人ではない。家族もいる。恵まれすぎなく





そして…………

バキイイイイイン!!と何かが壊れた音と同時に、人が飛び出した。白を基調とした神官服、アレスだった。

「ハアハア……………やつと抜け出しました」

結界を破ったのは良いが、服はボロボロ、肩からは大量出血したように血の痕がついており、至るところには擦り傷、挫傷、火傷、裂傷などが沢山出来ていた。しかし、アレスは難なく「再生魔法」で傷を癒していくが、回復速度が遅い。

「……………流石に魔力を消費を過ぎましたか(ぎゅと、全回復は二時間かかりますね)」  
アレスは立ち上がろうとするも、疲労のせいかわらわらしてしまいヨロけてしまつて上手く立ち上がれずに、壁にのたれかかった。

「ハジメ殿達は……………えっ」

アレスは壁にのたれながら、ハジメ達の居場所を確認すると、その居場所の間抜けな声が出てしまった。

「なんで、帝城?」

アレスは脳が一瞬停止した……。

## 九十話

## パーティー 前編

日がすっかり落ち、辺りが暗闇で覆われた帝城の一角。二人の帝国兵が、警備のため決められたルートを巡回していた。

その手には魔法的な火が燃え盛る松明のようなものが持たれており、不埒な侵入者を味方をする夜闇を懸命に払っている。

「はあ。今頃、お偉方はパーティーか……美味いもん食ってんだろうなあ」

「おい。無駄口を叩くなよ。バレたら連帯責任なんだぞ」

一人の兵士が遠くに見える明かりを眺めながら溜息混じりに愚痴を零した。相手の兵士が顔を顰めながら注意するが、その表情の原因は言葉通りのものではないようだ。どちらかと言えば、暑い時に暑いと言うと余計に暑い気がするから言うな」という、ウンザリ気味の雰囲気が漂っている。内心では、同じように愚痴を零していたらしい。

「だけどさ、お前も早く出世して、ああうのに出たいと思うだろ？」

「……そりゃあな。あそこに出れるくらいなら。金も女にも困らねえしな……」

「だよなあ。パーティーで散々飲み食いした後は、お嬢様方と朝まで、だろ？ 天国じゃん。あゝ、こんなところで意味のねえ巡回なんかしないで女抱きてえ。兎人族の女がいいなあ」

「お前、兎人族の女、好きだなあ。亜人族の女は大体いい体してつけど、お前、娼館行っても兎人族ばつかだもんな」

「そりゃあ、あいつらが一番いたぶりがいがあるからな。いい声で泣くんだよ」

「趣味わりいな……」

「なに言ってるんだよ。兎人族って、ほら、イジメて下さいってオーラ出てるだろ？ 俺はそれを叶えてやってんの。お前だって何人か使い潰してんだろ？」

「しょうがねえだろ？ いい声で泣くんだから」

二人の巡回兵は、顔を見合わせると何が面白いのか下品な笑い声を上げる。帝国において、亜人は所詮道具と変わらない。ストレスや性欲を発散するための、いくらでも替えの利く道具なのだ。故に、この二人が特別、嗜虐的な性格なのではなく、亜人を辱め弄ぶのは帝国兵全体に蔓延してる常識と言ってよかつた。

と、その時、片割れの兵士が不意に視線を転じた。

建物の陰に何かを見た気がしたのだ。

「おい、今、何か……」

「あ？ どうした？」

警戒しながら建物へと近づき、暗がりを探らしだそうとする兵士。疑問の声を上げながらも一人も追従する。先行していた兵士は「誰かいるのか？」と誰何しながら、ちょうど一人がギリギリ通れる程度の建物と建物の間に、バツ！と松明の火を向けた。

しかし、その先に人影はなく「見間違いだったか……」と眩きながら安堵の吐息を漏らす。そうして、苦笑いしながら、相棒の方へと振り返った兵士だった……

「悪い。見間違い——。？　おい、マウル？　どこだ？　マウル？」

そこに相棒の姿はなく、足元に彼が持っていた筈の松明だけが残されていた。何処に行ったんだと、キョロキョロと辺りを見回す兵士だったが、周囲に人影がない。

彼の背筋に冷たいものが流れる。湧き上がる恐怖心を誤魔化すかのように、兵士は声に苛立ちを滲ませて、再度、相棒へ、呼びかけた。

「おい、マウル。さっさと出てこい！　悪ふざけなら——んぐつ?!」

その瞬間、誰もいなかった筈の建物の隙間からスつと二本の腕

が音もなく伸びた。闇の中から直接生えてきたかのような腕の一本には、光を吸収する艶消しの黒色ナイフが握られており、片手が兵士の口元を塞ぐと同時に延髄へと深く突き立てられる。

一瞬、ピクンと痙攣したあとグツタリと力を抜いた兵士は、そのまま二本の腕に引きずられて闇の中へと消えていった。

いつの間にか彼等の松明も消え去り、ただ生温い夜風だけがゆるりと吹き抜ける。そして闇の中、風に紛れそうなほど小さな囁き声がする。

「司令部、こちらアルファ。Cポイント制圧完了」

「アルファ、こちらHQ。了解。E2ポイントに向かえ。歩哨四人。東より回りこめ」  
「HQ、こちらアルファ。了解」

そんな囁きの後、黒ずくめの衣装に全身を包んだ複数の人影が、足跡一つ立てず移動を開始した。

顔面まで黒い布できっちり隠しているが、目の部分だけは視界保護のために空いており、そこから鋭い眼光が覗いている。背中には小太刀が二本括りつけられていた。

ハウリア族である彼等は、闇に紛れて建物の陰に身を潜める。そこからそっと顔を覗かせれば、報告通り歩哨が二人組に分かれて互いに目視できる位置に

佇んでいた。

ハウリア族の一人が背後に控える三人にハンドシグナルを送る。それに頷いた三人はスッと後ろに下がると、まるで溶け込むように夜の闇へと姿を消した。

待つこと数秒。指示した場所から、歩哨の視線が逸れた隙にチカツ！と光が輝く。

同じく、歩哨の視界に入らないように考慮して、ハウリア族の一人がライターサイズの容器の蓋を一瞬だけ開けた。これは、中に緑光石が仕込まれた簡易の懐中電灯のようなものだ。

合図を送ったハウリア族は、背後の二人を振り返るとハンドシグナルで指示を出しながら動き出した。

二組の歩哨が互いの姿を視界の外に置いた瞬間、気配を極限にまで薄くして一気に接近し、一人が兵士の口と鼻を片手で覆いながら延髄を一突き。

「——ッ?!」

もう一人も同じく、片手で拘束しながら別の兵士の腎臓を突き刺す組み倒す。最後の一人は、歩哨が手放した松明を落ちる前にキャッチして火を消し、その他の痕跡が残っていないか確認する。そして、一気に建物の陰に引きずっていった。

しかし、流石に無音とはいかず、もう一組の歩哨が「ん？」と視線を向け、その視線の先には先程までいた仲間の姿がないことに気付く。松明の光もなく暗闇が存在するだけだ。

「あいつら、何処に行つたんだ？」

と、訝しみながら目を凝らす歩哨は、闇の中で微かに動く人影を捉えた。何か大きなものを引きずる姿だ。

ぞわりつと危機感を背筋を駆け抜ける。歩哨は、咄嗟に首元に下げた警笛を吹き鳴らそうと手を伸ばすが……

次の瞬間、その歩哨の首にナイフが突き立てられた。歩哨は悲鳴を上げることができず、その意識を永遠の闇に沈めることになった。

警笛を握つた歩哨の隣では、やはり相手の歩哨も同じようにナイフを突き立てられて絶命している。同時に松明の火が消されて建物の陰に引きずられていった。

現在、帝城の至るところで同じような殺戮が行われていた。既に、複数の詰所に控えていた多くの兵士達の首が胴体と永遠のお別れを済ませた後であり、帝国を囲むように四方に設置されていたアーティファクトを守護していた半獣人化してた帝国兵を殺し、そのアーティファクトを破壊及び回収を済まし、兵舎で就寝中





帝城内のパーティー会場は、流石と言うべき絢爛豪華さだった。立食形式のパーティーで、純白のテーブルクロスが敷かれたテーブルの上には何百種類もの趣向を凝らした料理やスイーツが並べられている。

装飾や調度品も素晴らしく、つい目を奪われるほどの華やかさだ。

—— H Q、こちら、アルファ。H4ポイント制圧完了

—— H Q、こちら、ブラボ。全Jポイント制圧完了

—— H Q、こちら、チャーリー。全兵舎への睡眠及び、防御用アーティファクトの

設置を完了

—— H Q、こちら、エコー。皇子二名、皇孫並びに皇女各二名確保

—— H Q、こちら、ゲッター。四方のアーティファクト破壊及び回収を完了。至急、

帝城に向かう

—— H Q、こちら、ザップ。帝城内にいる“狂化”帝国兵の殲滅完了

そんな煌びやかなパーティー会場で、普段では有り得ないほど満面の笑みを浮かべながら、話しかけてくる帝国貴族の相手をしていた。

その間、耳につけたイヤリング型の通信型のアーティファクトから次々と不穏な情報が入ってくるのだが、そんなことは気にしない。

ハジメ以外も“勇者一行”は注目の的で、少しでも面識を得よう

と帝国貴族がしきりに話しかけていた。

何せ、「神の使徒」にして、「勇者一行」だ。世間一般では「オルクス大迷宮」の攻略階層を破竹の勢いで更新した強者と思われており、「強さ」が基準の彼等からすればなんとも興味のそそる存在なのだろう。勿論、あわよくば個人的な繋がりを持ちたいという下心もたつぷりある。

もつとも、ハジメに話しかけている者達だけは、別の意味で下心が満載のようだ。

彼等の目的は言わずもがな。パーティーが始まってから片時もハジメの傍を離れない美貌の女性陣達だ。ハジメに話しかけながらも、チラチラと背後に控える優花達に視線が向いているのでバレバレである。

だが、無理のないことだろう。リリアーナの来訪歓迎と婚約祝いを兼ねたこのパーティーにおいて、優花達の存在は花を添えるどころの話ではない。寧ろ自分達こそ主役だと言わんばかりの強烈な存在感を放っていた。

「ほえ〜。世の中には、こんな場所があるんですね〜、ハジメさん。樹海では考えられません」

会場の豪華さにぼか〜んとしつぱなしのシアは、ムーンライト色のミニスカートドレス姿だ。スラリと長く、引き締まった美脚を惜しげもなく晒してい

る。

しかし、決して下品さはなく、ふんわりとしたスカートと、珍しく楚々としたシアの雰囲気彼女の可愛らしさをこれでもかと引き立てていた。

普段は真つ直ぐ下ろしている美しい髪を纏めて前に垂らしている姿も、彼女の上品さと可愛らしさを与えている要因なのだろう。

「料理も酒も一流じゃのう。今の内に堪能しておかねばもつたない」

その隣で、上品でワインを傾けるティオは、普段の黒い和服と同じような黒いシャドウドレスだ。

しかし、体のラインが出るようなドレスなので、凹凸の激しいボディラインが丸分かりであり、更に、背中と胸元が大きく開けているので、彼女の見事な双丘が今にも零れ落ちそうになっている。

会場の男性陣の視線が、動く度にいちいちプルンツ！と震える凶器に吸い寄せて来るので、その度に立ち塞がるようにハジメが目笑っていない笑みを浮かばせながら、「何を見てんだ吾え？ あ？」といった感じでティオの前に立っていた。

「……………視線多すぎ」

自分達に向ける視線を嫌そうに目を細めているユエは光沢のある生地  
で、肩口が露出しており、裾はフリルが何段も重ねられ大きく広がっている。髪はポ

ニールにしていて上品な白い花を模した髪飾りで纏められていた。

そして、いつもの外見の幼さと纏う妖艶な雰囲気ギャップからくるユエの魅力が何十倍にも引き立てられている。

「ねえ……やっぱ、私の派手じゃない？」

自分のドレスの色に困ったような笑みを浮かべている優花は、肩口が完全に露出したタイプのスレンダーラインの真紅のドレスを着ている。

テイオほどのボディラインはないが、そのバランスは美しく、チャイナドレスのように深いスリットが入った裾から、ふとした拍子にチラリと覗く美脚、髪にはハジメからのプレゼントでドレスの色に合わせたルビーのように赤く輝くカラシコエの花を模した髪飾りが更に、優花の魅力を引き立たせていた。

因みに、帝国の花嫁カラーは闘争と帝国を象徴する鮮烈な赤色だと帝国の侍女さんに聞いたユエ達が進めたから仕方ないという理由で優花のドレスは真紅らしい。

部屋で、優花達の着替えが終わるまで待つていたハジメ、光輝、龍太郎の三人が、彼女達が入った瞬間、その溢れ出る魅力にやられて完全に硬直したのも仕方ないことだった。

特にハジメの目は優花に釘付けになっていて、誰の目から見ても

心奪われているのが丸分かりだった。優花の方も、それを察したのだろう。嬉しそうに微笑むが、恥ずかしいのか少し頬を赤く染めながら熱が籠った瞳でハジメを見つめる。

ハジメの視線が一点から離れないことにムツとしたユエ達が文句を言おうとしたのだが、それより先に動いたハジメが有無を言わさず優花達四人を抱きしめて、そのまま四人の額に軽くキスをし、優しく笑みを浮かべて話しかけた。

「四人共、凄く綺麗だ」

その言葉に四人も嬉しそうに笑みを浮かべるが、その後も、一向に離れようとしないうハジメを引き剥がす為、優花がチョップで撃沈させるまで、離れなかつたという。『ハジメ理性ぶつ飛び事件』が発生した。

とにもかくにも、「これ、誰の婚約パーティーか理解してる？」とツツコミを入れられそうくらい優花達は魅力的なのだが、ハジメもハジメで人気で魅力的であることを本人は知らない。

今のハジメの服装は黒のタキシード姿で眼帯部分を前髪を浮かべ隠し、もう片方は髪を掻き上げたヘアスタイルでワイルドさが伝わり、十分魅力的である。

元々、ワイルド味があつたハジメだが、人気がないわけがない。これまででのハジメの実績は帝国の貴族の娘達にとつても魅力的であり、お近づきになろう

とするぐらいである。

しかし、帝国の貴族の令嬢達はそんな簡単にハジメに話しかけられなかった。理由は簡単、優花達である。令嬢達がハジメに近づこうとするとニコツと「私達のハジメに何か用？」といった感じの圧をぶつけているのである。なので、令嬢達はハジメに話すら掛けられなかった。

そんなわけで、帝国貴族が群がるも、男性陣の対処はハジメの鉄壁、女性陣の対処は優花達のニコツとした圧を前に歯噛みするのであった。

因みに、雫と鈴も十分に着飾っていて、帝国の令嬢方に負けないくらいに華やかだったのだが……。

流石に、優花達の原動力がハジメを見蕩れさせたいということである以上、そういう強い動機がない二人では数歩及ばず、どうしてもユエ達と比べると大人しい印象だったので、あまり目立っていなかった。

雫の対応も如才なものなので、帝国の貴族令嬢に群がられて姿すら見えない光輝と違い安心して放置が出来る。

なお、龍太郎は「うんめえ」と連呼しながら料理を貪っており、鈴がしきりに、「ちよつと龍太郎くん！ 恥ずかしいってばー！」と諷めている。もつとも、止めながら「あ、このケーキおいし」と、鈴も貪っているので似た者同士であった。

「それにしても、南雲殿のお連れは本当にお美しい方ばかりですな」

「全くだ。この後のダンスでは是非一曲お相手願いたいものだ」

「機会がありましたら」

——H Q、こちらデルタ。全ポイントの拘束を完了

——H Q、こちらインディア。Mポイントの制圧完了

帝国貴族達がハジメの意味深な笑みに「ん？」と首を傾げる。

しかし、その意味を問う前に、会場の入り口がにわか騒がしくなった。どうやら、主役であるリリアーナ姫とバイアス殿下のご登場らしい。文官風の男が大声で風情たっぷりに二人の登場を伝えた。

大迎に開けられた扉から現れたリリアーナの姿に、会場の人達が困惑と驚きの混じった声を上げる。

リリアーナは、全ての光を吸い込んでしまいそうな漆黒のドレスを着ていたのだった……。

## 九十一話

## パーティー 後編

パーティー会場にいる誰もがリリアーナのドレス姿を見て、困惑していた。本来なら、リリアーナの容姿や歓迎、婚約祝いという趣旨を考えれば、もつと明るい色のドレスが相応しいのだが、如何にも「義務としてここにいます」と言わんばかりの澄まし顔と合わせて、漆黒野ドレスはリリアーナが張った防壁かのように見えた。

パートナーのバイアスの方も、どこか苦虫を噛み潰したような表情であり、どう見てもこれから夫婦になる二人には見えない。

そのせいでか、リリアーナが入場次第、睨みの一つでもくれてやろうと意気込んでいたバイアスの愛人達も、出端をへし折られたように、呆然として  
いる。

会場は取り敢えず拍手で二人を迎え入れたものの、なんとも微妙な雰囲気になるが、二人は、そのまま壇上へと上がった。

司会の男は、困惑を残しながらもパーティーを進行させていく。



そして、リリアーナとバイアスの様子を見て、今にも笑い出しそうなガハルドの挨拶が終わると、会場に音楽が流れ始めた。リリアーナ達の挨拶回りとダンスタイムだ。

微妙な雰囲気を払拭しようとする流麗な音楽が会場に響き渡る。会場の中央では、それぞれ会場の花を連れた男達が思い思いに踊り始めた。リリアーナとバイアスも踊るが、主にリリアーナの表情や雰囲気が原因で、どうにも機械的でバイアスが強引に抱き寄せても、旋律似合わせて気が付けば微妙な距離が開いている。

そうこうしている内に一曲終わってしまった、リリアーナはさつさと挨拶回りに進んでしまい、イラついた表情でなかりながらも挨拶回りは必要なので随するバイアス。

——HQ、こちらロメオ。Pポイント制圧完了

——HQ、こちらタンゴ。Rポイント制圧完了

——HQ、こちらゲッター。帝城に侵入完了

「なんて言うか、リリイらしくないわね。いつもなら内心を悟らせるような態度は取らないのだけど……」

優花が、特に笑顔もなく淡々と挨拶を交わすリリアーナを見てポツリと呟く。

「まあ、あんなことがありやあなあ。リリイもいろいろおもうだろう」

「……あんなこと?」

ハジメの言葉にユエが首を掲げてハジメを見る。

「南雲君。貴方は何か知ってそうだけど、リリイが公の場であんな態度を取るぐらいのことがあつたの?」

ワインレッドのロングドレスを着た雫がリリアーナを心配そうに見つめた後に、ハジメみを見る。

「こんな場所で、あまり口にしたくないが……まあ、あの馬鹿皇太子に暴行、まあレイプされそうになってリリイを通りすがりに助けただけだ」

「そう、リリイがレイ……ナンデスッテ?」

「ちよつ、ハジメ。どういふこと?!」

雫と優花を筆頭に、驚愕の眼差しを向ける一同。ダンスが始まってから散々優花達を誘おうと男連中がやって来たのだが、ハジメの「威圧」により追い払われており、ハジメを誘おうとした令嬢達も優花達がハジメに寄り添うように抱き着き、「ハジメは私達のです」とアピールをしたりして追い払っているおかげか周囲には優花達と雫しかない。

光輝は、ハジメと違ってストッパーが居ないため半ば強引に淑女達に連れ出されて慣れないダンスを必死に踊り、未だ龍太郎はひたすら食つ

ている。鈴はどこぞのダンディーなおっさんに連れ出されて「ほえ〜」とひたすら流されるままに踊っていた。

なので、リリアーナがバイアスにレイプされかけたという発言はユエ達以外には伝わっていなかったが、雫が掴みかからんばかりの勢いでハジメに説明を求めるので、何事かと注目が集まり出している。

「あ〜、うん、だから……………優花、俺と一曲踊らないか俺のお姫様?」

「聞きたいことはあるけど……………喜んで、私の王子様」

「あつ、ちよつと、南雲君! 面倒になったからつて逃げないで! きちんと説明してちょうだい!」

「……………ムッ、優花だけズルい。次は私」

雫の言葉通り、説明が面倒だし、悪目立ちしそうだったからハジメは優花の手を取ってダンスホールへと逃亡を図った。主役のリリアーナと同じくらいに目立っている真紅のドレスを着て更に美しさが研ぎ澄まされた少女とそのパートナーたる白髪眼帯の少年に注目が集まる。

優花は元王族でダンスの嗜みがあるユエとテイオからシアと一緒にレクチャーして貰って人前に出ても恥ずかしくない程度では踊れるようになっていて、それを合わせるかのようにな、*“瞬光”* を利用したり、体に *“紅雷”* を纏い

始めて踊るハジメ。踊りを観察していたこともあり、それなりに様になっている。

「楽しいか？ 優花」

「うん。ハジメとこうして楽しく踊れるから。次はユエ達と踊ってよ？」

「それは、わかっているけどさ、今は俺とのダンスのことだけを考えてくれよ？」

「何、嫉妬？ 可愛い。でも、そんなハジメのことが私は大好き」

「クハツ……そうかい」

楽しげで、幸せそうな優花の表情と、それに目元を和らげるハジメの姿は、互いの衣装も相まって傍から見れば完全に二人の婚約パーティーである。

どこかギスギスしていた空気に、楽士達も場を盛り上げることで必死になつていたのだが、ハジメと優花の雰囲気気分が乗ってきたようで楽しげに演奏し始める。

今や、会場の主役はハジメと優花であり、誰もが幸せそうにそして、くるくると踊る度に二人を囲むように紅雷が舞っていて、更に二人を注目させていた。

そんな二人の様子を、リリアーナは微笑みながら見つめている。そこには、羨望の色が含まれていた。

一方、ハジメの恋人達は、これから起こることも、リリアーナの事件も一時的に頭の隅に押し込めて「次は誰だ」と躍起になっていた。

やがて、演奏も終わり、微笑みながら軽くキスを交わす二人に帝国貴族達から盛大な拍手が贈られる。彼等の瞳には、ただ純粹に称賛の気持ちがあらわれていた。帝国貴族の令嬢達も「ほう」と熱い溜息をつきながら、熱の籠った視線を主にハジメへと向けながらうつとりしている。

贈られる拍手に優雅に礼を返したハジメと優花が仲睦まじく手を繋ぎながら仲間の下へ戻つて来た。

そこへ競り勝つたらしいティオが進み出て来る。瞳に期待を輝かせながら、そつと手を差し出したが……

「南雲ハジメ様。一曲、踊つて頂けませんか？」

絶妙なタイミングでインターセプトが入り、そして、ハジメに声をかけた人物はリリアーナだった。

「リリア……主役がパートナーと離れて、いきなりどうした？」

「あら、その主役の座を奪つておいて、その言い方は酷くありませんか？」

「クハツ、言うぜ。あんな仕事顔してるからだろ？つていうかあの馬鹿皇太子は放つていいのか？」

「挨拶回りなら大体終わりましたし、今はパーティーを楽しむ時間ですよ。もともと、何曲かは他の人と踊るものです。ほら、バイアス様も愛人の一人と踊っていらっしやいま

すし」

「愛人って……あつけらかんだなあ」

「ふふ。それより、そろそろ手を取って頂きたいのですが……。踊っては頂けないのですか？」

ハジメは、単に踊りたいだけじゃなく何か言いたげな様子のリリアーナを見て大体その内容に察しがつき、優花達に「行つてくる」といった視線を送る。

優花達もハジメの視線に気が付き、頷き返すが、次のハジメとのダンスを楽しみにしてたティオは少し俯いてしまったので、ハジメはリリアーナの手を取る前にティオの傍まで行き、そつと頭を撫でてから耳元に囁いた。

「……後で二人で踊ろう」

「んん……主人様がそう言うなら分かったのじゃ」

耳元で囁かれたせいも少し、ビクツとしながらも、頭を撫でられて嬉しそうに目を細めたティオはハジメとの約束を交わすと笑みを浮かべながら引き下がった。

引き下がったティオを見送つてからハジメは、振り返り自分の視線の先にいるリリアーナを見つめてから笑みを浮かべた。

「では、喜んでお相手します。リリイ……リリアーナ姫」

「……はい」

注目を集めていることをハジメは知っていてもそんなのを無視をするように、リリアーナを手をそつと優しく取り、ダンスホールの中央に導いた。

「(今さつきより、視線が多くなってる気がする……)」

ハジメが思っていることは正解で先程の、優花とのダンスが脳裏に過ぎているのだろう。リリアーナの恥じらうような態度、それでも目の前にいる彼と踊れることが嬉しいのか笑みを浮かべている姿のこともあつて注目度は高い。

ゆったりとした曲調の旋律が流れ始める。ゆらりゆらりと優雅に体を揺らしながら密着するリリアーナとハジメ。ハジメの肩口に顔を寄せながら、リリアーナがそつと囁くように話しかけた。

「……先程はありがとうございます」

「やつぱりそれか……でも、無事そうで安心したが、よく俺だと分かったな」

「あんな美しい蜘蛛みたいなアーティファクトを作れる人なんて、ハジメさん以外有り得ないでしょう？それに、ハジメさんの『紅』はとても綺麗で、私の好きな色ですから……見間違いがありません」

「そうか。でも、あれじゃその場凌ぎだけしかならないけどな」

「……でも、嬉しかったですよ。私、ヘリーナから聞いた窮地に陥った姫が英雄が助け

るお伽噺に少し憧れていたのです……それに、やっとヘリーナの言葉の意味も理解しましたから」

そう言って、リリアーナはハジメの肩口から少し顔を離すと、言葉通りに嬉しそうな微笑みを浮かべた。その笑顔は、先程までバイアスの傍らにいたときとは比べるまでもないリリアーナの本来の魅力に満ちたもので、注目していた周囲の帝國貴族達は僅かに騒めいた。

「クハツ……それで、いろいろと吹っ切れてあの態度とそのドレスか?」

「似合ってませんか?」

「いや、似合っている……でも、俺はやっぱり、あの桃色のドレスがリリイに合う。真逆の黒も似合うが、それは当てつけが目的だろ?」

「ええ、婚約者を暴行するような夫にはこの程度で十分ですから。それより……やっぱ、見てたんですね。ハジメさんのエッチ」

そう言いながら、再びハジメの肩口に顔を埋めるリリアーナに「何言っただか……」と苦笑いするハジメ。

「小声とはいえ、こんな場所で滅多なことを言うんじゃないよ。というか、さつきから密着し過ぎだろ? 馬鹿皇太子がすごい形相になってんぞ?」

「いいんじゃないですか。今夜が終われば私は実質的に皇太妃です。今くらい、女の子



で居させて下さい。それとも、近い内に暴行されて、愛人達に苛められる哀れな姫の些細なわがままも聞いてくれないのですか？」

——それに、今夜で初恋の人と一緒にいられるのが最後なのでもしれないのですから……。

「暴行されて、苛められるのは確定か……」

「確定ですよ」

——でも、もう一度、もう一度だけでいい……。

そこで、リリアーナは、一度ギユツとハジメに抱きつくとき表情は隠しながらポツリと、つい零れ落ちたかのような声で呟いた。

「……もし……もし、〃助けて〃と言ったらどうしますか？」

——あれ、なんで私……こんなことを口に……。

リリアーナ自身、こんなことを聞くつもりはなかった。帝国の息子との婚姻関係の締結は今後の為にやらねばならないこと。

両国が魔物と魔人族の襲撃によりダメージを負い、聖教教会が消滅して不安定になっている北大陸の人々を安心させる為に、見て分かる形で人間族の結束の強さを示さなければならぬ。

——そう、私は王族だから。

王族の一員として、果たさねばならない役目なのだ。たとえ、尊厳すら奪われかねない辛い結婚生活が待っているとしても……。

——私は王族だから、民のためだから……。

それでもハジメにこんなことを聞いてしまったのは、彼が初恋の相手だったのだからかもしれない。

——彼の名を聞く度に、心臓の鼓動が早くなるのを感じた。彼を見る度に顔が赤くなるのを感じた。

声も届かず誰の助けも期待できない状況で、それでも心底恐怖で震える自分を助けてくれたこと。

——まるで、私だけの王子様かと思えた。彼の「紅」が綺麗で美しかった。

ハジメに包み込まれて幸せそうな表情をする優花達を見たこと。少し羨ましく思えた。

——羨ましかった。優花達が、彼といつでも傍にいて、デートをしたりして、彼と添い遂げると感じると胸が締め付けられそうになった。

でも、これで……きつと、ハジメなら「断つてくれる」と思ったからだ。そして、これで覚悟を決めれる。自分の初恋を終わらせれると。

——これは、甘えだ。自分じゃ、覚悟できない、終わらせれないことを他人で委ね

るといふ甘え。

だから……

「ハジメさん、助終わらせて」

そんなリリアーナの言葉に対するハジメの返答はリリアーナの予想を超えるものだった。

「安心しろよ、リリイ。お前にそんな地獄は来ないし、あの皇太子はもう、俺の獲物になった」

「……………はい？」

—— H Q、こちらヴィクター。Sポイント制圧完了

—— H Q、こちらイクスレイ。Yポイント制圧完了

目を点にして顔を上げるリリアーナに、ハジメはニヤリと口元を吊り上げる。その表情を見て、リリアーナの胸中に嫌な予感が押し寄せると同時にハジメの悪そうな不敵な笑みにドキリと高揚感を感じてしまった。もしかしたら、もう自分の好みのタイプは変わったかもしれない。

そんなリリアーナの耳元にハジメがそつと口を寄せる。

「それに言ったら？ 俺はいつでもリリイの『味方』だ」

「——っ」

リリアーナの体がビクツと震える。それは耳元にかかる息と声音のせいもあつたが、ハジメが言外に何を言っているのか察したからだ。

すなわち、「助ける」と。

——ダメ、ダメ、ダメ……ダメツ!

リリアーナの心が激しく動揺する。それはダメだと王女のリリアーナが叫ぶ。

結婚は果たさねばならない責務だ。

——そうなのに……責務なのに……貴方はどうして私をここまで心臓を高鳴すの？ 希望を持たせてくれるの？ 少女の私リリアーナを呼び起こすの？ どうして切り捨ててくれないのっ!

叫びたい。心の奥底から目の前に彼に伝えたい。貴方の言葉で、夢を抱く女の子の自分をバツサリ切り捨てて欲しかったのに、と。

「なぜ？」と、ある意味残酷な仕打ちにか、それとも嬉しさのせいか潤む瞳をハジメに向けるリリアーナに、ハジメは優しい笑みを向けながらそつと片手で潤んだ瞳から零れ落ちそうな滴をそつと、拭い取ると言葉を返す。

「リライは、俺にとつての『大切』だからさ」

「——」

ハジメの言葉にリリアーナは時間が止まったののような感覚した。そして、同時に何かが入み上げてくる。しかし、それを抑え込んで、瞳が潤み、視界がぼやけるが我慢して、笑みを向けながら視線をハジメに向ける。

「ホントに貴方は女性の扱い方がお上手ですね」

「……なんだよ。その含みのある言い方」

「……………天然女誑し」

「なんだ、その不名誉な呼称」

「自分の心に聞いてみたらどうですか？」

リリアーナはジト目をしながらハジメを見つめる。そんな目を向けられたハジメは頬が引き攣っていた。

曲はいよいよ終盤。ハジメの言葉を脳内に繰り返しながら笑みを浮かべるリリアーナは、ハジメに体を預けて、ただ今この瞬間のダンスを楽しむことにした。

そうして、余興をたつぷりと残して曲が終わり、どこか名残惜しげに体を離れたリリアーナは、繋いだ手を離さず少しの間ジツとハジメを見つめて……「ありがとう」と呟いた。咲き誇る満開の花の如き可憐な微笑みと共に。

それはただの十四歳の微笑み。あまりに純粹で濁りのない笑み

は、それを見た者全ての心を軽く撃ち抜いた。そこかしこから熱の籠った溜息が漏れ聞こえる。

そして、僅かな間の後、先程の優花とのダンスに負けなくらい盛大な拍手が贈られた。リリアーナは、他のお偉いさんと踊る必要があるようだったので、途中で別れて一人戻ってきたハジメを、女性陣のジト目が迎えた。

「…………ハジメの女つたらし」

「流石、ハジメさん。『天然女誑し』の名は伊達じゃないですう」

「ふふ、ご主人様よ。リリアーナ姫とのダンスは楽しかったかの？」

「さっきの暴行発言と関係あるのね。…………リリイが危ないところを助けたと言っていたし、今のダンスで止めを…………いや、それ以前の可能性も…………。ねえ、一体、何を囁いてたの？ リリイは人妻になるのよ？ 分かってる？ ねえ、分かってるの、南雲君？」

「はわわ、南雲君、遂にNETORI属性まで…………。アブノーマルだよ！ 遠い世界に行き過ぎだよ！ 鈴のキャパを超えてるよお」

事情が分かっている癖に煽るユエ達三人と一様にリリアーナに手を出したみたいな言い方をする雫達にハジメは「何言ってるんだ」と呆れ表情を向ける。

一応、念の為、誤解がないように優花に視線を向けるが、

「ハジメ。女誑しは良いけど、程々にね」

そうやって優花は、ハジメを自分の胸を抱き寄せた。ハジメは優花の言葉に少し語弊があると感じながらも、それすらどうでも良く感じ、優花に身を任せるように顔を埋めた。若干、抱く力がいつもより強めだと感じるのは気のせいかと思うようにした。

——HQ、こちらゼファー。Zポイント制圧完了

——全隊へ通達。こちらHQ。全ての配置が完了、及びにバイアス・D・ヘルシャーが神の傀儡と判明。プランαからβへ移行。カウントダウン開始します。

光輝達だけではなく、流石に、ユエ達も緊張が走った。そんな中、シアは瞑目しながら一度呼吸すると、一拍、スッと目を開けた。

瞳に宿る戦意に、思わず誰もが息を飲み、ハジメはその瞳に頷く。

「ハジメさん」

視線が巡る。優花達にも余さず。ハジメは再度、頷くと、不敵に笑ってウサ耳をそつと撫でる。

「今から、お前は“ハウリア族、族長の娘”だ。行ってこい」

その言葉に、シアもまた不敵に笑うと、

「はい、行ってきますー！」

そうやって、すうと気配を薄めていき、誰にも気付かれずに会場から出て

行つた。その背を見送っていると、司会進行役の男が声を張り上げた。

ガハルドがスピーチと乾杯をするらしく、壇上に上がったガハルドがよく通る声で話し始めた。

「改めて、リリアーナ姫と我が国訪問と、息子との正式な婚約を祝うパーティーに集まつて貰つたことに感謝する。いろいろとサプライズがあつて面白い催しになつた」

そこで、ガハルドは意味ありげな視線をハジメに向けるも、当の本人は明後日の方向を向いてる。その態度にガハルドは益々、面白そうな表情になる。

同時にハジメのイヤリングから決然とした声が響いてきた。

——全隊へ。こちらアルファ。これより我等は、数百年に及ぶ迫害に終止符を打ち、この世界の歴史に名を刻む。恐怖の代名詞となる名だ。この場所は運命の交差点。地獄へ落ちるか未来へ進むか、全てはこの一戦にかかつている。神の件はボスがやつてくださる。だから、我等も遠慮容赦は一切無用。さあ、最弱と謳われた爪牙がどれ程のものか見せてやろう！

「パーティーはまだ、始まつたばかりだ。今宵は、大いに食べ、大いに飲み、大いに踊つて心ゆくまで楽しんでくれ。それが、息子と義理の娘の門出に対する何よりの祝福になる。さあ、杯を掲げろ！」

鬼人族と人間族。二つの種族の長が重なるように演説をする。



——十、九、八……

ハジメ達と、蔓延るウサギ達にだけ響く運命のカウントダウン。  
——ボス。この戦場へ導いて下さったこと感謝します。ボスと皆様方は神殺しの  
件だけを考えていて下さい。後のことは我等にお任せ下さい

何も知らない帝国の貴族達が杯を掲げていく。ガハルドは、会場  
の全員の杯を掲げるのを確認すると、自らもワインがなみなみと注がれた杯を掲げて一  
呼吸を置く。

そして、息をスウィーツと吸うと覇気に満ちた声で音頭を取った。  
念話の向こうも、また、同じく。

——気合いを入れろ！ ゆくぞ!!

——「「「「「おうっ!!」「「「「」」

——四、三、二、一……

そして、カウントダウンは遂に——

「この婚姻により人間族の結末はより強固となった！ 恐れるものなど何もない！我  
等、人間族に栄光あれ！」

「「「「「栄光あれ!!」「「「「」」

——ゼロ。ご武運を

その瞬間。全ての光が消え失せ、会場は闇に呑まれたのであった。……。

今宵に起こる出来事の一つの喜劇が開始される少し前、創獣神オ  
ルステッドは誰かと念話で会話しながら、周りの空気が重く感じる程の圧を放つてい  
た。

「やはり、人間なんかに期待した儂が馬鹿じゃった……」

「ええ、馬鹿ですな」

「そう、すんなりと言ってくれるな。我が主に顔向けが出来んדר？ エクストラ。」

オルステッドと会話してるのは、全神の使徒の指揮権を持ち、母  
である聖母神エクストラであった。エクストラの言葉はオルステッドへの呆れが含ま  
れていた。

「まあ、貴方の余興好きは昔から知ってますが……今回ののは過去以上の失敗作ですな

”  
「全くだ。もの創りが上手くもない儂が頑張つて創り出したアーティファクトがいつの  
間にか壊されていて、挙句の果てには持っていかれておるし、あのゴミは勝手に行動を

起こす。はあ、いつの間に人間族は無能が多くなってしまつてホントに悲しい種族だと感じるわい。ああ、*「解放者」*の奴等が恋しい。エヒトの馬鹿が独占したから、儂等は碌に奴等との余興を楽しめなかつた……」

「貴方の心情は知りませんが、私の前で、ラーゼン様に仇なしたカスの俗物の名を今後一切、口にしないで下さい」

オルステッドが解放者の話をする中、エヒトの名を呟くとエクストラが冷えきつた声音で話すので、苦笑いなつてしまふ。

「それは、すまなかつたのう。しかし……ホントにお主は我が主に仇なした者を徹底的に嫌うのう。まあ、儂も*「スカーレット」*もそうじゃが……」

「当然です。ラーゼン様の矛、そして盾となる役目こそが我等の絶対的使命。そんな誉れ高き使命を放棄するような者は全てゴミ同然です」

「……そうじゃな（ああ、いつものスイッチが入つたかの……面倒じゃなあく）」  
エクストラのラーゼン様話にオルステッドは呆れたように溜

息を一つする。

「まあ、ラーゼン様の素晴らしさを話すのは一旦、置きましょう」

「（ホッ……）」

「しかし、珍しいですね。自分のミスは自分の手で片付ける貴方が私に、使徒を手配

して欲しいと申し出るとは”

「……そうじゃな。儂としてもお主等の手を煩わせたくなかつのじゃが、帝国を一夜で滅ぼすには、この体スベアじやと本来の力を出せなくて無理じゃし……、この体スベアが死すまで、本体に戻れんしのう……」

オルステッドの言葉にエクストラは念話越しに“はあ”と溜息してから話す。

“帝国のことはまあ、いいとして、その体の移行したのは貴方でしょう？ あの“叛逆の黒竜”を殺してから『地上はつまなくなつた』と言つて、ステータス以外の全てを制限付きにしたその体にしたのは……まあ、幾らここでグダグダ話しても埒も開きませし、良いでしょう。帝国程度なら五体程で良いですか？ それとも、“ネームド”も入ります？”

「いや、“ネームド”は要らん。そこまで本気じゃなくて良い。今さつきお主が言った五体で十分」

“では、手配しときますね。オルステッド……今度はラーゼン様を楽しませて下さいよ？ 期待してますから”

エクストラはオルステッドにそう言つて、念話を切つた。“ラーゼン”という、自分達にとって命より重要な言葉爆弾を残して……。

「……………わかっておる。もう、失敗はせん。絶対に」

オルステッドは吐き捨てるように言つて、立ち上がると帝城へと

向かう。

「……………待つておれよ。この儂に恥をかかせ、失望させたことを後悔するがいい」

そう言い放つた時のオルステッドの瞳はまさに“竜”そのもので

あつた……………。

## 九十二話 反撃のウサギ達

——ゼロ。

ガハルドの乾杯と共に会場の光が消え失せ、会場は闇に呑み込まれた。

「なんだ?! 何が起こった?!」

「いやあ! なに! なんなのお?!」

一瞬で五感の一つを奪われた帝国貴族達が、混乱と動揺の声を震わせながら怒声を上げる。

「狼狽えるな! 魔法で光をつくつ——があ?!」

「どうしたつ——ギヤア?!」

「何が起こつてい——あぐうつ!」

比較的優秀だった者達が、指示を出しながら魔法で光球を作りだし灯りを確保しようとする。が、直後には悲鳴と共に倒れ込む音が響いた。更に、混乱する貴族達が次々と悲鳴を上げていく。

その異様な状況に、会場は再び混乱に陥った。特に、令嬢方は完全にパニック状態で、

闇雲に走り出しては、そこかしこから転倒者や衝撃音が聞こえ始める。

「落ち着けえ！ 貴様等それでも帝国人か！」

暗闇の中、ガハルドの声が響き渡る。

闇夜も払拭しそうな程の喝は、暗闇と悲鳴の連鎖で恐怖に陥りかけた帝国貴族達の精神を強制的に立て直させた。

そこで、更に指示を出そうとしたガハルドだったが……

ヒュ！ ヒュ！ ヒュ！ と、連続した風切り音がガハルドを強襲する。

「ッ?! チイツー！ こそこそと鬱陶しい！」

通常では考えられないほど短い癖に、驚く程の速度と威力を秘めた矢が四方八方へと飛来していく。

その上、絶妙にタイミングをズラし、実に嫌らしい位置を狙って正確無比に間断なく矢を撃ち込まれるので、さしものガハルドは防戦一方に追い込まれてしまった。しかし、それでも真つ暗闇の中、風切り音だけで矢の位置を把握して、儀礼剣だけで捌いているのは流石と言うべきだろう。

怒声を上げるガハルドの中心にギン！ ギン！ ギン！と金属音が衝突する音が連続で鳴り響く。

次々と立ち上がる悲鳴と、物や人が倒れる音が響く中、ようやく冷静さを取り戻した

幾人の者達が灯りとして火球を作り出すことに成功した。

険しい表情で周囲を見回しつつ衛兵を大声で呼ぶ彼等の視界の端に何か黒い影のうなものがヒュツ！と風切りながら横切る。

「ツ?! 何者っ——げふっ?!」

咄嗟に火球を飛ばそうとした帝国貴族の男。しかし、その寸前、彼の背後の闇から影が飛び出した。真後ろにいるのに、男はまるで反応しない。そして、その無防備な項に、黒塗りの小太刀が一閃された。

結果は単純。まるで、冗談のように、男の首が宙に舞った。クルクルと回って、生々しい音と共に地面に落ちたそれは、何処かキョトンとした表情をしており、未だ死を自覚していないかのようだった。

光に誘われる蛾のように、光を作り出した者のところへ向かっていた帝国貴族や令嬢達は、火球が消滅する寸前に垣間見えた影と、一瞬で人の首が飛ぶ光景を目の当たりにし、無様にも腰を抜かしていく。

気が付けば、照明を照らしていた火球は全て消えて、再び闇一色となっていた。

「ひっ、ば、化け物っ! 化け物だっ」

「し、死にたくないっ、誰かあ! 誰かあっ」

腰を抜かした者の多くは令嬢や文官だったが、少なからず軍の将校もいる。前線から



退いて贅沢の極みを尽くしていた彼等には、死神の鎌に等しい暗闇と襲撃者の存在に精神が耐えられなかったのだろう。

彼等は一人の例外もなく、何もできないまま、そしてしないまま、音もなく肉薄した黒装束達に手足の健を切られ、痛みへのたうちながら倒れ伏すことになった。

そんな情けない者達もいるが、ここが実力至上主義を掲げる軍事国家である以上、いつまでも混乱に甘んじているわけがない。

ガハルドのように礼儀剣は持つていなくても、護身用の懐剣を頼りに何度か襲撃を凌いだ猛者達が、仲間の気配を頼りに集まり陣形を組み出した。

「くそっ！ 相当の手練れだぞ！ 気配がまるで掴めない！」

「愚痴ってる場合か！ ローグ、テッド！ 視界確保を優先！ 他は防御に徹しろ！」

背中を合わせるなり、中央に術者を据えて詠唱を任せる。という見事な連携だ。比較的ガハルドに近くにいた者達、おそらく近衛だろう彼等もすぐに陣形を組んでガハルドの背後を守りだした。

「これ以上好きにさせるな！ 反撃開始だっ！」

“炎弾”で明かりをつくり、そう息巻いたガハルドだったが、直後、目の前に金属塊がコロコロと転がってくる。

「なんだ？ ーこれは……！」

訝しみながらも正体を確かめようと接近するガハルドの側近を務める男。それは、彼だけではなく離れた場所でも明かりを確保した者達も同じだった。

猛烈に嫌な予感がしたガハルドは、咄嗟に制止の声を掛ける。

「よせ！ 無闇に近付くな！」

「ッ?!」

ガハルドの言葉に反射的に従って後ろに飛び退ろうとする側近だが、その金属塊のもたらす効果からすれば無意味な行動だった。それは次の瞬間に証明された。

カッ！と光が爆ぜキイイイイン！と耳を裂く暴音が周囲を無差別に蹂躪する。

「ぐああ?!」

「何がア?!」

咄嗟に目を瞑り、腕で顔を庇うガハルド達だが、あまりの不意打ちに完全に防ぎきれず、一時的に視力と聴力が失ってしまふ。

そして、その瞬間を襲撃者たるハウリア族が見逃す筈がなく、絶妙なタイミングで急迫しながら、極限の“気配遮断”で標的の懐に踏み込む。そして、漆黒の小太刀を一閃。二閃。

五感の二つを奪われ、抵抗する余裕のない近衛達は、手足の健はあっさりと切り裂かれ、激痛な痛みに悲鳴を上げて倒れ伏してしまふ。

直後、口にナイフを突き込まれて、詠唱封じの為に舌を切り裂かれてしまう。

離れた場所でも同じように、反撃をしようとしていた者達が、手足の健を切られて舌を裂かれていく。大きな魔術を行使しようとした者は容赦なく首を飛ばされた。

そんな中、ギンギン！と金属音同士の激突音が響く。その音の正体はガハルドだった。なんと、ガハルドだけは目も耳も潰された状態で、極限まで気配を殺したハウリア族二人の斬撃を防いだのである。

これには襲撃をしているハウリア族の二人も、覆面の隙間から覗く瞳を大きく見開いて驚きを露わにした。

その一瞬の動揺を感じ取ったのか、隙を突いて気合いを一発。ガハルドは震脚の如き踏み込みで衝撃を発生させる。

「っー」

「くっー」

体勢を崩された二人のハウリアが思わず呻き声を上げた。そこへガハルドは目の使えない状態なのに、ゾツとするほどの正確な斬撃を繰り出す。

ハウリアの二人は咄嗟に小太刀を交差させて全力防御。二連撃とは思えない破壊力を持った斬撃を、最高レベルの耐久力を持つ小太刀は見事耐えきるものの、その使い手の二人は吹き飛ばされてしまう。

そこへ、吹き飛ばされた二人と入れ違いに、間髪を容れず矢が殺到する。篠突く雨の如きクロスボウによる一斉射撃。しかし……………

「散らせ。——『風壁』！」

たった二言で発動した強烈な風の障壁に、全矢あつさりと軌道が逸らされてしまう。

「撃ち抜け。——『炎弾』！」

そして、再び二言で魔法を発動。十も作り出した『炎弾』を『風壁』で感じ取った矢の射線に沿って一斉掃射する。

ハウリア達は既に移動していたが、全ての『炎弾』の着弾位置が全て自分達が潜んでいた場所。ガハルドに戦慄する気配が無数に湧き上がる。気配を殺していたハウリア達が僅かに漏らしてしまう。

ガハルドの閉じたままの目蓋が僅かに開き、見えてないのもかわらず、その瞳がギリと野獣じみた危険な光を宿している。

「そこかあ」

グリーン！と首が回った。その視線が闇の奥にいるハウリア達を捉える。あの一瞬の動揺だけで、居場所を掴み取られたのだ。

「爆ぜろっ。——『炎弾』！」

再び放たれる『炎弾』の群れに、背を向けながら、闇の奥のハウリア達に向かって一

直線に突進するガハルド。

直後、パーティー会場の天井付近に向かって飛んでいった背後の炎弾が一瞬の収縮のあと轟音と共に大爆発を起こした。

しかし、ハウリア達は苦悶の声を上げながらも、物陰に隠れたりなどして、爆発を回避し、今度は気配に緩急をつけ、ガハルドの感覚を狂わせていくことで攻撃を凌ぐことにするが、それも「辛うじて」という状況だ。

視界を奪われながらも、躊躇うことなく戦いに踏み込める胆力。高まる殺気は凄絶の一言。見えずとも斬撃の正確性は刻一刻と増していく。

——これが皇帝。

——これが軍事国家の頭。

力こそ全てと豪語する戦闘者達の王。それを身を似つて実感したハウリア達は……

「上等」

「なます斬りにしてやる」

萎縮するどころか誰もがその口に凄惨な笑みを浮かべた。覆面の隙間から覗く瞳はギラギラと獐猛と輝き、一人一人から濃密な殺気が噴き出す。

気配操作の効果が薄くとも、仕留めて殺る。と言わんばかりに、ハウリア達はまるで一つの生き物のように動き出した。

四方八方からヒット&アウエイを基本とした絶技と言っても過言ではないレベルの連携攻撃が殺到する。

「ククク、心地いい殺気を放つじゃねえか！　なあ、ハウリアあ！」

襲いくる斬撃を独特ほど剣術で弾き返しながら、ガハルドは楽しげに叫ぶ。どうやら、とつくに襲撃者はハウリア族だとバレていたようだ。

ハウリア達はガハルドの雄叫びを聞いても、もはや何も言わない。ただ、殺気を滾らせていく。

「ああ？　ビビって声も出せねえのか?！」

言葉からしてやはり聴力が少しづつだが回復しているらしい。そのガハルドの叫びに、一際強烈な殺気を振りまくハウリア——カムが小太刀の二刀を振るいながら、その溢れ出る殺気とは裏腹に無機質な声をポツリと返した。

「戦場に言葉は無粋。切り抜けてみよ」

「ハッ、上等だ」

暗闇に火花が舞い散り、更に激しさを増す剣戟は嵐の如く舞う。単体戦力はガハルドの圧勝。しかし、ハウリアはカムを起点にした群体戦力。

両者の力は拮抗し、互いに決定打を打てない千日手状態。

数十秒。いや、数分か……………

会場で、意識はあるものの口も手足も切り裂かれて苦悶に表情を浮かべる者達は、なぜ外から誰も駆けつけけないのかと苛立ちながらも自分達の王の勝利を願う。

だが同時に、襲撃者が兎人族であるという有り得ない事態に、その未知に、恐怖に慄く体を止められずにいた。と、その時、彼等の予想を裏切るような事態が動いた。

「ツ！ なんだった？ 体がっ」

ガハルドは突如ふらつき始め、急速に動きを鈍らせたのである。それを「待つてました」と言わんばかりに四方八方からハウリア達は飛びかかる。

辛うじてそれを弾き返すガハルドだったが、最初からガハルドの異変は想定済みだったように、絶妙なタイミングではなた矢が遂にガハルドに直撃した。

「ぐあっ！」

ふくらはぎを深々と貫かれ、ガクンと膝を折るガハルドは遂に剣を取り落とした。

ガハルドは、瞬時に魔法を発動しようとするも、刹那のタイミングで交差するようにすれ違った二人のハウリア族が、戦闘中に確かめていた位置に小太刀を振るい、隠し持っていた魔法陣やアーティファクトを破壊または弾き飛ばす。同時に残りの腕と足にも矢が突き立った。

「——ツ！」

迸る激痛。悲鳴こそは上げなかったが、その体は意思に反してゆっくりと傾いて

………

ドガツと音が響く。遂にガハルドが倒れ伏したのだ。

静まり返るパーティー会場。誰も言葉を発せない。物理的に口を閉ざされているからというものもあるが、きつと、たとえ口が利けたとしても言葉を発する者はいなかったらう。

視界が暗闇に閉ざされていようとも理解してしまう。その事實は、帝国人から言葉を、或いは思考自体を奪うには十分過ぎる衝撃だった。

そう、ヘルシャー帝国皇帝陛下の——敗北。

それ即ち、帝国という一つの強国が、最弱種族に落とされた瞬間だった。

~~~~~

時間は少し戻る。

「急げっ。パーティーに何かが起きている！一刻も早く陛下のもとへ行くぞ！」

しんしんとした帝城内に焦燥の滲む怒声が響いた。声を張り上げたのは帝国軍第三連隊隊長のグリッド・ハーフだ。駆ける後ろには、部下の兵士が二十人程が連なっている。

パーティー会場が暗闇に包まれた同時刻、地下の宝物庫の警備に当たっていた彼等



は、警備の途中、突如、異変を知らせる魔法具が反応し、慌てて駆けつけしているのである。この魔法具はガハルドが身につけている備えの一つであり、起動した瞬間に、連動する他の魔法具の色が変わるといふもので、具体的に何が起きているのかまでは分からない。とはいえ、皇帝陛下自ら発する警告と緊急招集命令であるのだ。

何か異常で急迫した事態が起きているのは間違いなく、その片鱗は、帝城内の異様な雰囲気が出していた。

「連隊長殿！どうなっているのですか?! 他の部隊は?! 何故、誰もいないのですか?!」  
そう、あちこちいるはずの巡回も、同じく緊急招集を受けてる筈の詰所の兵士達も、誰も合流しない。そんな不安を隠し切れない部下の叫びに、グリッドも嫌な予感を覚えながら答える。

「とにかく、今は陛下のもとへ急げ! 勅命だぞ!」

やけに静かな帝城の敷地内。途中でグリッドの小隊と合流した兵士達も加わり、最終的に三十人程となったグリッド達は、帝城内部からの連絡路を通るルートで、パーティー会場のある建物へと飛び込んだ。

その直後……

「こんばんはです、帝国兵の皆さん。今夜はいい夜だと思いませんか?」  
急迫した状況に似合わない可憐な声が響いた。

「お前は……」

グリッドが目を見開く。他の兵士達は息を呑んだ。

本来なら使用人が忙しく行き交っている筈のエントランスは異様に静まり返っており、そして、荘厳なシャンデリアと中央の階段の下にはただ一人、着飾った美少女がいたからだ。

モフモフなウサ耳がピコピコと動き、一步踏み出せばふんわり広がるムーンライト色のミニスカートドレス。脚線美はもはや芸術的とすら言える。ニッコリド微笑む美貌もさることながら、そのドレスと同じ淡青白色の髪が流れる様は神秘的であり、愛している彼もこの髪を『綺麗だ』と言ってくれる自慢の髪色だ。

そして、やって来たのがグリッドだと気が付いた直後から、顔を伏せて震えている姿も嗜虐心を唆る。

「チツ、構っている暇はない。行くぞっ」

だが、そこは連隊長。千を越える部隊を率いる権限を与えられた者だ。優先すべきことを弁え、兎人族の少女——シアを無視して会場へと向かおうとする。

だが、その足は止まった。いや、止められたのだ。

「くふっ、ふふふっ、あはははっ」

震えていた理由が、恐怖ではなく、笑いを堪えるためだとわかったからである。

「つ、何がおかし——」

「なんとという、なんとという僥倖ですか！ まさか、やって来るのが貴方だなんて！」

「どういう意味だ？」

「嬉しい、という意味ですよ」

シアに会えて嬉しいと言われて悪い気はしないだろう。だが、この時ばかりは、グリッドはそうと思えなかつた。寧ろ肌が粟立つた。

「今、私の家族が皇帝さんを襲撃しています。助けに行きたければ、私を倒すしかありません」

「連隊長殿！ いつまで足を止められておるのですか！ こんな兎人族如き、無視して行きましょう！」

じれた兵士の一人が、シアの言葉を戯れ言と切つて捨てた。そして、さつさと進もうと駆け出す。忠誠心の厚い彼は、一刻も早くガハルドのもとへ向かいたかつたのだろう。だが、シアの脇を抜けようとした彼は……

「私を倒すしかない。そう言いましたよね？」

次の瞬間、姿を消した。直後、轟音が響いた。

グリッド達が油を差し忘れた機械のようなぎこちなさで、音の発生源へと顔を向ける。彼は

……飛び散っていた。あたかも泥団子を思いつきり壁にぶつけたように。

視線を戻せば、拳を真横に突き出したシアがいる。腰が入ってるいように見えない。まして相手は非力な兎人族の、しかも少女だ。なのに、ただ、無造作に突き出しただけの拳で、装備を身に付けた大の男を、認識が追いつかないような速度で殴り飛ばしたのだ。

ゴクリつと、息を呑む音が静まり返ったエントランスで響く。気を、吞まれたのだ。あり得べからず状況に。

シアは微笑んだまま淡々と続ける。

「何故、私一人がここにいますか？ 会場に入るためには、絶対に通らなければならぬこのエントランスで」

それは言わずとも、先の部下を見れば分かる。駆け付けるだろう帝国兵を潰すためだ。どれだけ事前に制圧戦を上手くやろうとも、必ず取りこぼしが必ず出る。ガハルドとの戦闘中に乱入されるのは、たとえ小隊規模でも避けたいところ。

だからハウリア族は、単体最強戦力を一人、この場所に配置したのだ。

そう、族長の娘で、最強のハウリアたるシアを。

にわかには、シアの指輪が輝きを放つ。グリッド達がハッと我を取り戻す中、シアの頭上に出現する巨大な戦鎧ドリユツケン。見もせず、パシツと小気味よい音を響かせて握

り込み、手首の返しだけで回転させる。

それだけで、轟々と風が吹き荒れる。衝撃が迸る！

「貴方と貴方の部隊が相手なら、改めて名乗っておきます。私はシア。シア・ハウリア。かつて貴方達を取り逃してしまった——ウサ耳少女化け物です」

ニツコリ笑い、誇らしげに名乗りを上げ、大好きな彼から貰った凶悪な戦鎧をそつと撫でてから肩に担ぐ。そして、誘うようにスつと片手を出して、たおやかな指先をクイックイッと曲げる。

誤解などしようもない。誰にだって分かる。即ち……

——相手してやるからかかってこい。

言葉を失っていたグリッドの額に青筋がくつきりと浮かび上がった。

「化け物、だど？ 兎人族如きが舐めた口をつ」

確かに、普通の兎人族とは違う。だが、それでも所詮は兎人族。魔法一つも使えない憐れな種族の、その中でも最弱だ。そんな「兎人族如き」に気圧されていたという事実に、プライドを痛く傷つけられたらしいグリッドは砲えた。

「お前達つ、勅命の前だ！ あの兎人族は殺してから先に進む！ 多少力が強かろうと所詮は亜人！ 魔法で仕留めろ！」

即応したグリッドの部下達が詠唱を開始。部下数人が、今度は油断なくシアへ強襲を

かける。

そんな彼等に、招き手を握って逆さにすると親指を下に突き下ろし、

「ウツサウサにしてやんよ、ですう！」

踏み込んだ。爆ぜる鉱石の床。刹那、吹き飛ぶ前衛。そして、シアの姿が後衛の目前に。

「ッ?！」

驚愕に目を見開く後衛の二人。次の瞬間、横殴りの暴風により彼等の上半身だけが吹き飛んだ。戦鎧の常軌を逸したスイング速度と威力により、上半身だけが千切り飛んだのだ。更に、振り抜かれたドリユツケンから衝撃が迸り、その余波だけで三人の内蔵に致命傷を食らう。

一拍遅れて血のシャワーが降ってくるが、その時には、シアは既に先程強襲をかけて来た前衛二人の前にいた。

「しまっ——」

「なんだ、今の——」

ようやく起き上がった二人の頭部は、ドリユツケンの一撃でピンボールと化す。血の雨が降り注ぐ中、それを頭から被ったグリッドがようやく指示を出す。

「さ、散開！散開だ！」

密集しては、まとめて薙ぎ払われる。シアの異常な膂力からそう判断したのだらう。そして、シアを中心にして周囲に散らばる兵士達。

「うりゃー！」

可愛いらしい掛け声とは裏腹に、凄まじい速度で投げられたドリユツケンは、そのまま帝国兵の一人を壁の染みにした。武器を手放したと喜色を浮かべるグリッド達だったがそれは………  
不正解間違いだつた。

シアが大きく腕を振ると、帝国兵の体にのめり込んでいたドリユツケンが引き寄せられるように飛び出した。よく見れば、彼女の手元には柄の先端が握られており、その柄からはドリユツケン側の柄へ鎖が伸びている。手元の柄とパージして、特殊なフレイルのように変形する機構だ。

「今だっ！」

「死ねえ！」

完全に引き戻す前にと帝国兵二人が襲いかかる。その時、シアは手元の柄にあるトリガーを引く。その瞬間、空中にあるドリユツケンから連続した炸裂音。打撃面から放れた弾丸が、迫っていた二人を背後から見事に撃ち抜く。

ドシャツと崩れ落ちる二人を飛び越えて、反動で宙を舞ったドリユツケンを空中で

キヤッチするシアは即座に射撃モードに変えて連続発砲。更に五人が血の海に沈む。

「このっ、喰らえ！ 化け物め！」

仲間の死を見せつけられながらも完成した魔法“緋槍”を十連。散開した帝国兵達の絶妙な連携による包囲攻撃。

そんな迫る十本の炎の槍を前にシアは、

「しやらくせえですう！」

こんな炎の槍なんて自分の姉貴分の方が上だと思いつつながら膂力と遠心力を最大限に生かした回転打撃の大回転を一発。衝撃と暴風が竜巻のように吹き荒れ、急迫した“緋槍”の全てを吹き飛ばす。

「馬鹿なっ」

「有り得ない！」

亜人に対する絶対的なアドバンテージ。その魔法が、まさに鎧袖一触。思わず絶叫した兵士達だったが、次の瞬間、シアが“宝物庫”から取り出した鉄球を、ドリユツケンで弾き飛ばし顔面に、拳大の鉄球がめり込んだために物言わぬ屍となった。

そして、あつと思つた時には、更に二人、接近したシアの殴打を受けて体をひしゃげさせていた。開戦してまだ一分も経ってないだろう。

なの……



「い、こんなこと……」

既に、グリッドの隊の戦力は半分以下となっていた……。

「こんなこと、あつてたまるかあつ」

己を奮い立たせるように雄叫びを上げて、グリッドが斬り掛かる。流星は連隊長というべきか。身体強化した踏み込み、斬撃は見事の一言。シアが兵士の一人に攻撃を加えた直後を狙うというタイミングも素晴らしい。

もつとも、このウサギ少女には届きはしないのだが……

「なっ」

ガツとグリッドの斬撃を、シアはドリユッケンを振り下ろした反動で跳ね上がった片足のヒール部分と靴底の間で挟むようにして受け止め、斬撃を阻んだのだ。

そして、シアは剣を挟んだまま、体を一回転。グリッドは剣ごと巻き込まれるようにして体勢を崩され……

「ですうー！」

刹那、シアの拳がグリッドの腹部にズドンツと衝撃が入るほどのボディブローを決めていた。

「かはっ」

体をくの字に折り曲げ、よたよたと後退りするグリッド。その腹に、今度は大好きな

彼直伝のヤクザキツクが炸裂し、グリッドは血反吐を吐きながら壁際まで吹き飛んだ。

しかし、手加減をされたのか、即死はしなかった。グリッドは意識を辛うじて繋ぎ止めながら、激痛の中、部下が一人また一人と吹き飛んでいく光景を目の当たりにする。

……誰も動かなくなるのは三十秒も掛からず、そして、カツカツカツとヒールが床を打つ足音だけが響く。

グリッドが目線を向けると目の前に、返り血を浴びていない麗しい皮を被った化け物ウサギがいた。

「ま、まで……まつでぐれえ……」

グリッドは血を吐きながらの命乞いをする。

——目の前の存在が分からない。

——恐怖で体が震えていく。

——自分は、あの時、一体何を逃してしまったのか。無防備にも樹海の外を彷徨っていた兎人族の群れを、これを幸いと追い回した。

——絶望を与えるように、男や老人は目の前で殺してやった。それで、最弱種族のウサギ共は心が折れて屈服する筈だった。

——【ライセン大溪谷】に逃げ込んでも生き残れる可能性はなく、逃げて疲れて、そうして最後には部下が捕らえてくれる筈だった。

——珍しい髪色の、とびっきりの上玉。蹂躪してやれば、どんな声で泣くか。仲間に見せびらかしてやろうと思つていたのに……………。

——自分はこんな化け物に手を出そうしたのか？

胸元を掴まれた。軽鎧とはいえ金属のそれが、まるで粘土のようにぐしゃりとひしゃげる。即座に掴みやすい形状が作られた。

「た、だのむつ。だずけでくれ！　そ、そうだつ。あ、あのどき、捕らえだ連中の居場所をお、教えてやるつ。お、俺を殺しだら、取り戻せなく——」

「……ホントにハジメさん以外の男性方の多くつて、ダメな人にしか見えませんね。それに貴方にもう、語るべき言葉は持ちません」

グリッドの命乞いを自分の恋人と比べて落胆しながらバツサリ切るシアは片手で持ち上げ宙吊りにする。思うところが、ないわけではないのだ。恨み辛みが沢山ある。

だから、楽に死なせてやるものかと無意識の内に手加減してしまつて、彼を最後に残すことになつてしまつた。

だが、復讐に身を焦がして我を失うようなことは、ハウリアとして、何よりハジメの仲間として、恋人の一人として、シア自身が許せない。

——だから、この一撃。この一撃で、全てをうち払うですう！　シア・ハウリアが、樹海に生まれた化け物が、また一歩、仲間と、ハジメさんと前に進むために！

シアはグリッドを上投げると同時に、大きくドリユッケンを振りかぶる。そして、ニツと、まるで大好きな彼のよう恋人に不敵に笑う。

「月までぶつ飛びな！ ですう！」

「やめっ——」

轟音。ピンボールのように吹き飛んだグリッドは、そのままエントランスの天窓を突き破つて外へと消えた。

窓から見える今夜の月——纖月。

シアの言葉の通り、グリッドは薄笑いする月に向かって消えていったのだった。

~~~~~

轟ツと風を唸らせドリユッケンを一振り。

「……みんな……少しは報いることはできましたか？」

——今はもういない失った家族自分。シアのために、故郷すら捨てた大切な人達。

彼等を思いシアは少しの間、瞑目した。

「よし。次も頑張らないとっ」

瞑目した後、シアはまだ来るであろう増援の帝国兵を待ち構えようとした、だが……

「……………来ない」

そう、来ないのだ。自分の予想だと、すぐさま此処へとドタバタと駆けてくる足音がある筈なのに、それすらもないのだ。シアに一筋の悪寒が走る。

そして……

「はあつはあつ」

「！」

シアのウサ耳から足音が聞こえる。しかし妙だ。その数は一人。そして、シアは音の方へと視線を転じる。そこには……

「ハアハアツー」

シアの目に映ったのは一人の帝国兵。しかし彼は自分のことなど見向きせず、後ろばかりを警戒していて、今にも泣きそうな表情で必死に逃げているのだ。この血の海と化しているエントランスにも気付いていないように見える。まるで、そんなことより後ろにいる何かの方が一番の恐怖の対象のように……。

「ツ?!」

それと同時にシアに数秒先の最悪の未来の光景ビジョンが見えた。その光景を見たシアの額に冷や汗が噴き出す。息も荒くなり、悪寒が酷い。早くこの場から逃げ出したいと思ってしまう。

そして……

「助けっ——」

やっとシアがいる事に気付いた兵士が声を掛けようとした時、グシャツと帝国兵の声を掻き消すように生々しい咀嚼音がこの場に響き渡る。

咀嚼音が響き渡る中、男の声がシアの耳に聞こえた。

「ほう……この惨状は貴様がやったものか『イレギュラー』の仲間よ」

目を向ければ、エントランスに入る男が一人、シアに話しかけながらコチラへと歩いてきた。シアは冷や汗を流しながらも、スつとドリユツケンを構える。

しかし……

「えっ——」

シアはその男の姿に声を漏らす。だって、その姿は自分が知る大好きな仲間の一人と同じような着物のような服装なのだから……。

「……帝国兵共は脆すぎたのう。さて兎人族の娘よ貴様はどうする？ 其処をどくのか？ 儂を楽しませてくれるのか？ どっちじゃ？」

男は帝国兵達に落胆の言葉を口にすると、目の前にいるシアに笑みを浮かべながらそう提案する。一つは戦わずパーティー会場の道を通すこと。もう一つはパーティー会場の道を阻み、あの存在と戦うこと。この二択である。

しかし、シアの答えは決まっている。シアは戦鎚を大きく振り回しながら、

「答えは決まっています。——私は貴方を止めます。それが私の答えです」

シアはそう言つて真剣な表情で戦鎚を男に向ける。その答えを聞いた、真剣なシアの瞳を見た男はニイツと口元を歪ませる。

「ガハハハッ。良いだろう、その覚悟、気に入ったぞ！ 兎人族なのが勿体ない！」

そう言いながら、男は快活に笑い声をあげる。そして、両手をバツと広げて何処からでも掛かつてこいというような態度をみせ……………

「儂に素晴らしい余興をさせてくれよつ。小娘！」

「……………舐めるな、ですう！」

一柱の神に立ち向かう一人のウサ耳少女は、大事な人達の為に、巨大な戦鎚を男に振りかざしながら激突するのであった……………

## 九十三話 創獣神オルステッド

ガハルドは何故、自分がこんな風に倒れ伏しているのか原因は何かと察する。

「っ、毒かつ」

パーティー会場に、ガハルドの苦悶の伴う声が響いた。誰もが、不敗の象徴たる皇帝陛下の敗北に呆然とする中、ハウリア族の一人が倒れ伏すガハルドにスッと近寄る。そして、視力と聴力を回復させる薬をガハルドに施した。

『ふん。魔物用の麻痺毒を散布してここまで保つとはな』

「クソがつ、最初からそれが狙いだっただか……」

衣服に仕込まれた魔法陣やアーティファクトも全て取り除かれ死に体となったガハルドは視力と聴力が回復されたところで推測を肯定されて悪態を吐く。

そんなガハルドに、突如、頭上から光が降り注いだ。ハウリア族の装備の一つでフラッシュユライトモドキだ。それが、フラッシュユライトのようにガハルドを照らす。

あらわになった光景を見て、会場の端で激しく動揺する声が一つ。



「どどどどどどど、どういふことですか?! ここここ、これは?! ハハハハ、ハジメさん!」  
「いいから、落ち着けよリリイ。今、クライマックスなんだから」

襲撃の際、リリアーナは皇太子バイアスの傍らにいたのだが、邪魔にならないようにとリリアーナの被害を避けるために、既に会場の隅で避難していたハジメ達の下へ、ユエが空間魔法を使って回収していた。

いきなりゲートに引き摺り込まれたかと思つたら真つ暗となり、騒乱となり、皇帝陛下がぶつ倒れているのである。王女といえど動揺せずにはられない。

そして、光輝達が違う意味で動揺していた。光輝は幾人もの帝国貴族達が死んだことに顔を顰めているし、鈴や雫、龍太郎も、青ざめた表情で黙り込んでいた。

これが、亜人の境遇を改善する最大のチャンスであり、文字通りハウリア達の運命を左右する一戦であることを理解しているためじつとしているが、やはり目の前で繰り広げられる惨劇をあつさり割り切ることはできないだろう。

もつとも、たとえ割り切れなくとも静観する以外に道はない。もし感情に任せ、  
「これ以上はやり過ぎだ!」等と言いながらカム達の邪魔をしようともなら……

「……………」

きつちりと光輝を視界に意識を収めているハジメを見れば、結果は言わずもがなだ。それに、変に光輝が介入したりすると、カム達の後に行うハジメの要件に支障

が出る可能性あるからだ。

『さて、ガハルド・D・ペルシャーよ。今、生かされている理由が分かるな?』

「ふん、要求があるんだろ? 言ってみろ、聞いてやる」

『……減点だ。ガハルド。立場を弁えてもらおうか』

姿は見え、パーティー会場全体に木霊するように響き渡るカムの声は、ガハルドの横柄な態度に、僅かな間の後、無機質な声音で忠告した。

そして、その忠告を、ガハルドは部下の命という形で叩き込まれることになった。

突如、ガハルドから少し離れた場所にスポットライトが当たる。そこには、ガハルドと同じく手足の腱を切られ、詠唱封じのために口元を裂かれた男の姿があった。その男にスポットライトの外から腕だけ伸びてきて、髪を掴んで膝立ちさせたかと思うと、次の瞬間には、男の首が嘘のようにあっさりとはり飛ばされた。

「てめえ!」

『減点』

思わず怒声を上げるガハルド。生き残りが悲鳴を上げ、息を呑む。しかし、返されたのは機械じみた淡々とした声のみ。再び別の場所にスポットライトが降り注ぎ、同じように男の首が刈り取られた。

「ベスタあ！　このつ、調子にのつ——」

『減点』

側近だったのだろうか。ガハルドは男の名を叫び、カムに悪態を吐く。それに対する返答は、やはり淡々とした声音と、首刈りという罰だけだった。

「……………」

ギリギリと歯ぎしりしながらも押し黙り、ガハルドは、それだけで人を殺せそうな眼光で前方の闇を睨む。

そんなガハルドにカムは淡々と話しかけた。

『そうだ、地を舐めている意味を理解しろ。判断は素早く、言葉は慎重に選べ。今、この会場で生き残っている命は、お前の言動一つにかかっている』

その言葉と同時に、いつの間にかスポットライトの外から伸びてきた手が素早くガハルドのネックレスをかけた。細めの鎖と先端に紅い宝石がついたものだ。

『それは、『誓約の首輪』。ガハルド、貴様が口にした誓約を、命を以て遵守させるアーティファクトだ。一度発動すれば貴様だけでなく貴様に連なる魂を持つ者は生涯身に付けていなければ死ぬ。誓いを違えても、当然、死ぬ』

そして、皇帝一族の人間は既に確保しており、ある一人以外は同じアーティファクトが掛けられていると伝えるカム。ガハルドは苦虫を噛み潰したような表情に

なる。

——アーティファクト “誓約の首輪”

魂魄魔法により、口にした誓約を魂レベルで遵守させる効果を持つ。具体的には、発動状態で口にした誓約が直接魂魄に刻まれ、誓約を反故にしたり、“誓約の首輪”を外したりすれば魂魄自体が強制霧散させられる。

また、“連なる魂を持つ者”——ガハルドの一族に対しても効果をあり、同じく“誓約の首輪”を付けなければ死ぬことになる。要するに皇帝一族に末代まで誓約を守らせるというアーティファクト。(婚姻に対しては別途誓約の首輪が必要になる)

「誓約……だと?」

『誓約の内容は四つだ。一つ、現亜人奴隷の解放。二つ、樹海への不可侵・不干渉の確約。三つ、亜人族の奴隷化・迫害の禁止。四つ、その法定化と法の遵守。理解したか?できたら“ヘルシャー”を代表してここに誓う”と言え。それで発動する』

「呑まなければ?」

『今日を以て皇室は終わり、帝国が体勢を整えるまで将校の首が飛び続け、その後においても泥沼の暗殺劇が延々と繰り返される。我等ハウリア族が全滅するまで、帝国の夜に

安全の二文字はなくなる。帝国の将校達は、帰宅したとき妻子の首に出迎えられることになるだろう』

「帝国を舐めるなよ。俺達が死んでも、そう簡単に瓦解などするものか。確実に万軍を率いて樹海へ侵攻し、今度こそフェアベルゲンを滅ぼすだろう。分かっている筈だ。帝国が本気になれば、それが可能だと。今までフェアベルゲンを落とさなかつたのは……」

『畑を潰しては収穫ができなくなるから、か？』

「分かっているじゃねえか。今ならまだ間に合う。たとえ『奴』の力を借りたのだとしても、この短期間で帝城を落とした手際、そしてさっきの戦闘……やはり貴様等を失うのは惜しい。今なら、俺直属の一部隊として優遇してやるぞ？」

『論外。貴様等が今まで巫人にしてきた所業を思えば信じるに値しない。それこそ『誓約』をしてもらわねばな』

「だったら戦争だな。俺は絶対に誓約などしない」

口元を歪めるガハルドに、カムはどこまでも機械的に接する。

『そうか……減点だ。——『デルター、こちらアルファ1。やれ』』

突然、ガハルドにとつて意味の分からないことを言い出したカム。訝しそうな表情になるガハルドだったが、次の瞬間、腹の底に響くような大爆発の轟音が響き渡り、

顔色を変える。

「っ、なんだ今のは！」

『なに、大したことではない。奴隷の監視用兵舎を爆破しただけだ』

「爆破だと？ まさか……」

『ふむ、中には何人か眠らされたいたか。……少なくとも、数百人単位の兵士が死ん

だ。ガハルド、お前のせいだな』

「貴様のやったことだろうが！」

『いいや、お前が殺したのだ、ガハルド。お前の決断が兵士の命を奪ったのだ。そして、

ズデルター、こちらアルファー、やれ』

その言葉にガハルドは咄嗟に制止の声をかける。

「おい！ハウリアっ」

しかし、返答は二度目の轟音。帝城ではない。帝都の何処かで大爆発が起きた。感情を押し殺した声音でガハルドが尋ねる。

「……どこを爆破した？」

『治療院だ』

「なっ、てめえ！」

『そこは安心しろ。爆破したのは軍の治療院だ。死んだのは兵士と軍医だけ。もつと

も、一般人の治療院、宿、娼館、住宅街、魔族襲撃で家を失った者達の仮説住宅区にも仕掛けてはあるが、リクエストはあるか？」

「一般人に手を出してんじゃねえぞ！ 墮ちるとこまで墮ちたかハウリア！」

『……貴様は、貴様等は！ 亜人というだけで女子供をも迫害しただろつ。それで、立場が変わっただけでその言い様か！…… “デルタ、やれ”』

「まてっ！」

亜人族を帝国全体で迫害をしておいて、今更関係のない一般人ないだろう？ と若干キレ気味の声を出すカム。そして、容赦なく命令を下す。

三度起きた爆音に、ガハルドは今度こそ、帝国の民が建物ごと爆破されたと思ひ込んで歯ぎしりをした。

しかし実のところ、爆破されたのは帝城に続く跳ね橋だったりする。帝都で爆破事件が起きれば帝城に報告に来るのは必然なので、唯一の入場ルートを破壊しておいたのである。更に言えば、カムの言葉はバツタリで、軍と関係のない場所に爆弾を仕掛けたりしていない。それは、帝国人とは同じならないという一つの矜持であり、敬愛するボスであるハジメとの約束決まりであるからだ。

目的のためだとは言え、関係のない人を殺すなど外道と変わりない。だから、嘘でも、ハツタリでも、詐術でも使つて相手を打倒する。それが今のハウリアなの

である。

『貴様が誓約しないというのなら、仕方あるまい。帝都を吹き飛ばし、貴様等への手向けとしてやろう。数千、あるいは数万人規模の民が死出の旅に付き合うのだ。悪くない最期だろう？』

ガハルドは容赦のない要求に、即断できず沈黙している。その頭の中は目まぐるしく状況の打開方法を探っているのだろうが、妙案は一向に出てこない。苦みしばった表情と流れる冷や汗が、追い詰められていることを如実に物語っていた。

そして、そんな状態でもカムは全く容赦しない。返答が遅い、と命令を下す。

『『アルター、こちらアルファー や——』』

「まてっ」

ガハルドが慌てて制止の声をかける。そして、苛立ちと悔しさを発散するよう頭を数度地面に打ちつけると、吹っ切ったように顔を上げた。

「かぁーっ、ちくしょうが！ わーったよっ！ 俺の負けだ！ 要求を呑む！ だから、これ以上、無差別に爆破すんのを止めろ！」

『それは重畳。では誓約の言葉を』

要求が通ったというのに、やはり淡々と返すカム。ガハルドは苦い表情のまま、しかし、ふっと肩の力を抜くと、会場にいる生き残り達に向かって語りかけた。



「お前等、すまん。今回ばかりはしてやられた。帝国は強きこそが至上。こいつら傭人族は、それを『帝城を落とす』ことで示した。民の命も握られている。故に——」

生き残り達が、王の言葉を聞いて悔しそうに震えている中、一人の男が怒声を上げる。

「おい、親父い！ 何言つてんだつ。奴隷達が居なくなつたら楽しみが減るじゃねえか！」

その声の人物はガハルドの息子の皇太子バイアスだった。バイアスは憎たらしい視線をガハルドに送りながら言葉が続ける。しかし、ガハルドは平然としながら返答する。

「おい、聞いてん——」

「……黙れ、バイアス。てめえも、次の皇帝になるんなら奴隷のことなんかより民のことを考えろ。民あってこそこの国だ。民がいなければ成り立たない。そんなことを忘れんじゃねえ」

「なっ」

ガハルドがそう語りながらバイアスを睨む。バイアスは言い返せなくなつたのか歯ぎしりして押し黙る。そして、ガハルドは悔しそうにするバイアスや彼等を目に焼き付けるように見て声を張り上げた。

「——ヘルシャーを代表してここに誓う！ 全ての亜人奴隷を解放する！ ハルツィナ樹海には一切干渉しない！ 今、この時より亜人に対する奴隷化と迫害を禁止する！ これを破った者には帝国が厳罰に処す！ その旨を帝国の新たな法として制定する！」

誓約が成されたと同時に首輪に施された宝石が輝きを放つ。そして、ガハルドは最後に、皇帝として宣言をした。

「この決断に文句ある奴は、俺の所に来い！ 俺に勝てば帝国をくれてやる！ 後は好きにしろ！」

——亜人族を今まで通りに奴隷にしたければヘルシャーの血を絶やせ！受けて立つ！

それは、そういう宣言だった。本当に実力至上主義を体現した男である。

『ふむ、正しく発動したようだな』

その言葉と共に、会場の一角にスポットライトが降り注いだ。そこにはバイアス以外の皇帝一族が並んでいた。全員が既に「誓約の首輪」が身につけられている。

『ヘルシャーの血を絶やしたくなければ、誓約は違えないことだ』

「分かっている」

『明日には誓約の内容を公表し、少なくとも帝都にいる奴隷は明日に全て解放しろ』

「明日中だと？ 一体、帝都にどれだけの奴隷がいますか……」

『やれ』

「クソつたれ！ やりやあいんだろ、やりやあ！」

『解放した奴隷は樹海へと向かわせる。ガハルド。貴様はフェアベルゲンまで同行しろ。そして、長老衆の眼前にて誓約を復唱しろ』

「二人でか？ 普通に殺されるんじゃないかねえのか？」

『安心しろ。長老達もそこまで馬鹿ではない。それに我々が無事に送り返す。貴様が死んだら色々と面倒だからな』

「はあ、分かったよ。お前等が脱獄したときから、嫌な予感はしてたんだ。それが、ここまでいいようにやられるとはな、笑っちゃまう。——なあ、一つ聞いていいか？」

『なんだ？』

「何故、バイアスの奴は俺の家族達の所に並べられてないんだ？」

その疑問は当然だろう。バイアスはガハルドの息子であつて皇太子、しかし、彼には首輪も一族の所にも並べられてないのだ。ガハルドはそう言いながらカムに問う。

『それは、貴様の息子は、ある疑惑がある。そのため隔離した。そして、この件はある御方の仕事だ』

「ある御方ね……で、その息子の疑惑なんなのかね。なあ、南雲ハジメ」

カムの答えにガハルドは溜息を吐き、カムが言ったある御方……ハジメの方を睨む。その言葉にハジメは会場の隅からバイアスの方へ歩き出した。

~~~~~

ハジメは歩きながら会場を全てを照らすようにアーティファクトを発動する。ガハルドや貴族達の怒りと憎しみが含まれた圧のある視線が来るも平然とスルーしている。

そして……

「……よう。ちゃんと話すのは初めてだな？」

「あ？」

バイアスの元へと着くと、ハジメは「宝物庫」からボーラーを取り出し、バイアスを拘束する。すると、バイアスは来い声を上げる。

「てめえ！ 何——「うるせえよ」……グフツ?!」

バイアスの怒声をハジメは踏みつけることで黙らせる。そして、ドンナーを取り出すと銃口をバイアスへと向ける。

「何、簡単な質問だ。バイアス。てめえクソ野郎共神共の眷属……いや協力者だろ？」

「?!」

ハジメの言葉にバイアスは急激に顔を青ざめる。ハジメはその表情を見て、当たり前だと確信する。

「知ってるなら、さっさと神共の情報を吐け」

「……し、知らん!」

「……へえ、しらばつくれんだな」

「ツ?! き、貴様! 不敬だぞ! 俺は皇太子で次の皇帝だ! そんな俺をこんな目に合わせてどうなる——」  
フォールンピースト「墮落獣転計画」……は?」

「いやあ、お前が、相当馬鹿で助かったよ。こんな重要な計画書やアーティファクトの説  
 明書も全部鍵付きの引き出しに入れてるからな」

「——」

ハジメの言葉と共に手でピラピラと振りながら持っている書類を見て、バイアスは顔色が青から真っ白へとなりながらド肝を抜かれたような表情でハジメを見る。ハジメはニコニコ笑顔だ。そして、ハジメの肩には金属の蜘蛛が乗っている。

——多目的蜘蛛型ゴーレム<sup>〃</sup>アラクネ<sup>〃</sup>

あのリリアーナを助けた金属の蜘蛛は、クロスビットと同じ原理で複数同時に遠隔操作ができる。備えた機能は、錬成、鋼糸の操作と設置、魔眼石や<sup>〃</sup>水晶<sup>〃</sup>ディ

スプレイ”への映像転写、各脚に付いた注射針による麻痺、睡眠、小型スタンガンによる電気ショック等々、多岐に渡る。

ハジメが帝城に入ってからというもの、どこかぼうつとして優花達に膝枕をして貰っていたのは、無数のアラクネを帝城内のあらゆるところに侵入させ、片っ端からトラップの無効化、帝城の操作に意識の大半を向けていたからなのだ。そして、トラップの無効化を終えたアラクネ達は疑惑のあるバイアスの部屋へと赴くと明らかに何か入ってそうな引き出しを見つけ、鍵穴を錬成で壊すと、案の定、神達との繋がり証拠がバンバンと出てきたのである。

その後、作業を終えたアラクネ達は、そのまま帝城に潜んで監視カメラの役割を担い、ハウリア達の司令部（帝都の外にある）に映像を送り、改良版念話石で通信することで最大効率の制圧戦、神の思惑を阻止をするのを可能にしたのである。

そして、ハジメの言葉に反応する人物が声を上げる。

「おい、南雲ハジメ。フオーレンビースト墮落獸転とはどういう計画だ？」

それは、ガハルドである。ガハルド自身、息子が神の手先になっていたことに驚いたが、ハジメの言葉に納得がいく節が幾つかあった。だから、ハジメの言葉を真実と仮定してバイアスと神が行おうとした計画を知りたいのだ。

そして、ハジメ自身、ガハルドの言葉に少し驚いていた。

「……へえ、ガハルド。お前は俺の言葉は信用しないと思ったが、これは驚いた」

「ふん。てめえがハウリア達に手を貸したことに苛立っているが、それとこれは関係ねえ。それに、俺もバイアスの最近の行動には、気になる節が幾つかあった。だから、お前の言葉を信用するだけだ」

「クハツ……そうかよ。なら、コレを見てくれ」

そう言ったハジメは、ハウリアから回収してもらったアーティファクトを取り出す。それは体長1・5メートル程の獣の形をしたチエスの駒のような物だった。

「……それは、アーティファクトか？」

「ああ、もう壊しているが、報告によると、このチエスの駒みたいなアーティファクトが帝国の四方を囲むように置かれていたらしい。駄獣兵ダスト・ビーストに守らせながらな？」

「ツ?!」

「駄獣兵ダスト・ビースト?」

ハジメの言葉にバイアスは声にならない声を漏らし、ガハルドは言葉の意味が分からず首を傾げながら口にする。

「駄獣兵ダスト・ビースト。この書類によると、人間に獣の能力を付与させたが、器である人間自体がその能力を耐えきれずに理性を無くしてただの無知性の獣になるってことだ。それに、コイツ等全員、帝国兵だったらしい」

「なっ!」

ガハルド、いや、この話を聞いていた貴族達、光輝達までもがその言葉に絶句する。

「そして、このアーティファクトも フォールンピースト・ワールド “墮落獣結界” と言ってな。書類によると、このアーティファクトを四方で囲み、スイッチ……ああ、これか」  
「なっ、おい返せ!」

ハジメはアーティファクトの説明しながら、魔眼石でバイアスを調べると案の定、服のポケットから魔力反応したので確認をすると、一瞬でバイアスから奪い取った。そして、バキツと音を立てながら握り潰す。

それを見たバイアスは更に絶望した表情になる。しかし、ハジメはスルーして、握り潰した手を両手を合わせながらパツパツと払うと説明を続ける。

「んで、俺が壊したスイッチを押して魔力を流したら、アーティファクトが発動して結界が展開される。そして……その結界内にいる者は全て理性の無くなったただの獣だ。簡単に言えば帝国の終末だな」

『……………』

ガハルド達は沈黙だった。なんせ、自分達の皇太子は帝国を、自分の祖国を終わらせようしたのだから。



「それに、俺は『構造把握』でこのアーティファクトを調べたんだが……驚いた。これの原材料は『大量の人間の血』だった。それも数十人単位だな」

『！』

「血……南雲ハジメ。まさか！」

ハジメの言葉に会場の全員が驚いた。そして、ガハルドはその言葉にある真相に辿り着き、ハジメの方を見る。ハジメもガハルドの視線に気が付き首を縦に振った。

「ああ、そうだ。ガハルド、コイツだよ。コイツが帝国民達を誘拐していた犯人だ。誘拐した人間をアーティファクトの材料として提供してたんだろう。ホントに外道の所業だ」

ハジメはそう吐き捨てて、バイアスを睨みつける。それはガハルドも、この場にいる帝国の者達全員も同じようにバイアスを睨んでいる。

しかし、バイアスから返ってきたのは沈黙だ。そんなバイアスにハジメは更に問い詰める。

「なあ、バイアス。もうお前の負けだ。さっさとお前と組んでいる神の情報を吐けよ」  
「……………おい、バイアス、てめえ。随分とやっていたんだなあ。兵や民達の命をなんだと  
思っついていやがる！」

ガハルドも怒り心頭でハウリア達に拘束をされながらも、バイアスに飛びかかりそうな勢いで怒鳴る。しかし、バイアスは黙ったままだ。

「……………が」

「？」

「クソがアアアア！」

バイアスは何かを呟いたと思ったら、次には声を張り上げながら悪態を吐く。

「クソがつ。後、少して俺はてめえ等なんかより上位の存在になれたんだ！ あの方の眷属になれたのにつ。 てめえ等のせいで台無しだ！」

バイアスは叫ぶ。今までやってきたことが台無しにされたから、あの方という者の期待に答えられなかったから。

「てめえのせいで……………よく——ガアツ?!」

「うるせえ」

叫ぶバイアスは片足で背中を強く踏みつけて黙らせる。そして、ドンナーの銃口を向ける。

「……………そろそろ、吐いてもらおうか。お前の協——「いや、その必要はない」——ツ?!」

ハジメはそう言って問い詰めようとした時だった、会場の入り口から声が聞こえた。物凄い重圧と共に。ハジメは言葉を強制的に終了され、会場にいる者達はその

重圧に大量の冷や汗を流して息を呑んだ。

ハジメは咄嗟にドンナーをバイアスから入り口の方へと向け「威圧」を発動しながら問い掛ける

「誰だ？」

「貴様と話すのは初めてだったな。『イレギュラー』」

ハジメは男の『イレギュラー』という言葉に目を細めながら問い掛ける。

「……てめえ、神か？」

「ああ、そうだともし」

そう言って、入り口から現れたのは伸びた黒髪を纏め、黒い着物を着た男が現れた。そして、ハジメと優花達は一目でわかった。あの男は神共の一人だと。それもアルヴより強い存在だと。

そして、ハジメは男に既視感を覚えてしまった。その服装、その圧に覚えがあるからだ。そう自分にとって大切な恋人達の一人と同じような……………

ハジメがそう思っていると男の口が開く。

「ここで、自己紹介をしておこうか……聞けっ、下賤な人間族共、亜人族共、イレギュラー達よ！ 儂は五柱の神の石柱であり、獣の創成を担う者。『創獣神オルステッド』である！」

そう叫んで名を語る男——オルステッドはハジメ達を嘲笑うかのように見下した表情で口元を大きく歪めているのであった……。

## 九十四話

## 触発

「儂は五柱の神の一柱であり、獣の創成を担う者。『創獸神オルステッド』である！」

オルステッドの声が会場内に響き渡る。その言葉にガハルド達は息を呑み、光輝達も冷や汗を流している。しかし、ハジメ達は至つて冷静だった。ハジメはオルステッドにドンナーを構えながら話し掛ける。

「……五柱の神、ね。アルヴのカスが言っていた『五神』つてやつか？」

「左様、イレギュラー。先日のアルヴの件は世話になったのう」

「何、軽く捻つてやつただけだ。なあ、神つて奴等はある拍子抜けの奴等の集まりか？」

ハジメはそう言つて、嘲笑うかのように話す。それを聞いたオルステッドは暫しの沈黙の後、

「……ハハッ……ガハハハハッ！」

快活に大声で笑い出した。周囲が困惑する中、オルステッドは話す。

「イレギュラー、南雲ハジメ。貴様は思つていた通りの男だ。益々、気に入つた！儂の姿

を見ても臆せず、更に儂等を愚弄するとは肝が据わっておる！」

オルステッドはハジメの態度が気に入らなく、笑っていたらしい。調子が狂いそうになったハジメは気を取り直してオルステッドに話し掛ける。

「なあ、てめえに一つ聞きたい。どうやって此処に入ってこれた？」

「はて？ 儂は普通にエントランスから入っただけだが……」

「それが有り得ねえんだよ。エントランスには、シアが、俺の恋人が守っていたはずだ」  
そう。エントランスには帝国兵達の介入を防ぐためにハウリア達の中でも、最高戦力であり、ハジメの大切な恋人であるシアが守っていたはずだ。それなのに、オルステッドはエントランスから会場に入ったのだ。

ハジメは嫌な予感してならなかった。すると、オルステッドは思い出したかのように語り出した。

「あー、確かにいたのう。異常な戦闘力のある兎人族の小娘が一人。彼奴は『使徒殺し』と同じくらい面倒だった」

「……………そうか、アレスがいなくなった件も犯人はやっぱりてめえだな？」

「左様。奴と貴様の二人相手だと実に計画を進めるのに邪魔じゃった。だから、『使徒殺し』は儂の魔法結界に閉じ込めておる」

「魔法結界だと？」

「ああ、そうじゃったな。この時代だと知らないのは当然か。まあ、儂でも『使徒殺し』は死んでるのか、生きてるのか知らん。……まあ、あの結界で生き残る者はそうはおらん。死んでる可能性が高いだろう」

『……………ツ?!』

『魔法結界』と言葉にハジメが訝しむが、オルステッドの次の言葉に、ハジメ達は息を呑んだ。アレスは屈指の実力者である。しかし、もしもの可能性でオルステッドの言う魔法結界に敗れたりしたら……と不安が募ってしまふ。

その時だった。一人の少女が声を張り上げた。

「嘘です！　兄様が、アレス兄様がそんな簡単に死ぬわけありません!!」

リリアーナだ。彼女は、この状況に戸惑っていたのだが、自分が慕う強くて、優しい兄のような存在であるアレスが死んだということは、すぐに有り得ないという考えに至っており、それで真っ先に否定したのだ。

「リライ……そうだな。アレスはそんな簡単に死ぬ男じゃねえ。それもお前達、クソ神共が意気揚々としてるのにアイツが黙ってるわけねえ」

リリアーナの言葉に優花達も、その言葉を賛同し、強く頷く。ハジメもリリアーナの言葉に頷き、オルステッドに不敵な笑みを浮かべながら語る。

しかし、ハジメ自身、思いもしなかつただろう。次にオルステッドに見

せられた物に自分の理性を失いかけることを……

「ほう、面白い。まさか、そこまで言い切るとはな。しかし、コレを見てもそう言えるか  
イレギュラー？」

「あ？ 何を——」

言つてんだ？と言おうとしたハジメだったが、オルステッドがエントランスの奥から引つ張りだした物に言葉に失つてしまった。それは、優花達、光輝達、ガハルド達、そして、ハウリアまでもが言葉を失い、啞然としてしまった。オルステッドが見せたのは、何かの竜のような魔物によつて礫にされたポロポロのシアのだった。

彼女の着ていた華やかだったドレスは至る所が引き裂かれ、焼き焦げており、美しさという言葉がシアの美しい体には全体に裂傷や火傷、切り傷、打撲痕、腕は折れているのだらう有り得ない方向へと曲がっていた。そして、極めつけは横腹が抉られており、なんとも痛ましい姿だった。

「——」

『シアっ。貴様アアアアア！』

カムが叫ぶ。それは、今さつきまでのガハルドと要求の話をしてたときみたいな機械のような淡々とした声音ではなく、焦りと怒りが含めたような声音であった。

「……………シア?!このっ——『雷龍』!」



ユエは怒りに満ちた表情で会場のことは無視してオルステッドに雷龍を放つ。雷の龍が喰らおうと巨大な口を開きながらオルステッドに迫る。

しかし……

「龍とは、なんとも精密な魔力操作じゃな。しかし、温い——」  
「魔喰竜」

オルステッドがそう言つて片手をかざす瞬間、彼の足元から黒い竜の頭部が出現し、その口を開くとユエの雷龍を喰らつた。

「なっ——」

「では、送り返そうか『雷竜』」

ユエは自分の『雷龍』が消された。いや、正確に喰われたのだろう。そのことに驚愕しているのも束の間、オルステッドが返すように魔法をユエへと放つ。それも、雷の竜の形を模した魔法で。

「ッ?!」

ユエは咄嗟に重力魔法の『禍天』を展開して、迫りくるオルステッドの『雷竜』を黒の球体で吸い込んでいく。オルステッドはその光景を見て感心するように頷きながら話す。

「ふむ、重力魔法か。流石の実力じゃなあ。イレギュラーの仲間達は……しかし、温い、温すぎる。この兎人族の小娘もそうじゃった。いい線にはいつておつたが、儂には届か

ん。もう少し儂をた——グオツ?!」

楽しませろ。と言う直前に、オルステッドが宙に飛んだ。いや、殴り飛ばされたのである。そして、それが、できるのは……………

「…………ちやちや、うるせえんだよ。てめえは俺が絶対に殺す」

当然、ハジメである。ハジメはオルステッドがユエの「雷龍」を送り返したと同時に、「紅狼」を発動して、紅い雷を纏わせたながら、オルステッドの懐へと一瞬に移動すると、雷で爪の形状へと変化して纏わせた左手でオルステッドの頬を殴り飛ばしたのだ。そして、オルステッドはそのまま、会場の壁にドガンツと音をたてながら激突した。

ハジメは言葉からは冷静さを感じさせるが、それは全くであり、内心怒り狂っていた。それは優花が、アルヴに殺されたとき程だ。そして、それは会場のいる者達にも伝わっており、ハジメから伝わる重圧にガハルドや優花達以外は気を失うほどの圧である。

オルステッドを殴り飛ばした後、ハジメはシアを磔にしてる竜を雷魔法「雷閃」で瞬殺すると、拘束が外れ、前へと倒れる傷だらけのシアをそつと、優しく掬い上げるようにお姫様抱っこをする。

「(微かだが息はある)…………シア」

ハジメはシアの抱きかかえながら、傷だらけの重症だが、息があると分かるとすぐさま声を上げる。

「ユエ！ ゲートを使ってシアを頼む！」

「……………ん！」

ユエはハジメの応えるようにゲートを発動して、抱き上げているシアを運びだした。  
「ぐっ……………イレギュラーか！ ガハハッ。油断もしてたが、全く貴様を捉えられないとは流——！」

「そのよく喋る口をズタズタにしてやろうか」

ハジメはシアがゲートでユエ達の元へと運ばれた後、すぐにオルステッドへと急迫すると、顔面に狙いを定めると、「紅雷」と「衝撃変換」、「豪脚」を集中的にかけた右足で蹴りを入れて、オルステッドを喋らす暇なくしながら追撃を開始する。

「温いつ——」  
ニードル  
 「棘竜」

反撃と言わんばかり、棘だらけの竜を出現させると無数の棘を迫るハジメへと飛ばす。しかし、ハジメは追いかけるスピードを緩めずに「魔力放射」と「紅雷」で全ての棘を弾き飛ばしていく。そして、「宝物庫」から何かを取り出すとオルステッドへと投げ飛ばす。

ハジメが投げた物はオルステッドへと近付いたその瞬間、キイインと音を立てて物凄い光が放射させた。

「ッ?!」

オルステッドは突然の光に咄嗟に目を隠すもやられ視界が短い間、奪われる。そうハジメが投げたのは「閃光弾」であった。ハジメはその間に、「宝物庫」から取り出した「神喰らい」を取り出すとオルステッドへと投げつける。

「———」  
「壁竜」

オルステッドは強烈な殺意か何かを感じとったのか地面から体長三メートルほどの竜を出現させ、漆黒の大槍を受け止めるが、巨大な竜はあっさりと滅つされた。しかし、その間にオルステッドは移動しており、視界も回復していた。

「目眩しは驚いた。それに、その漆黒の槍もな、「壁竜」がああもあっさり倒されるとは………ホントに貴様は面白い！———」  
「竜々舞」

オルステッドは多数の竜を出現させる。現れた竜達は獰猛な目をギラつかせながら口を開くと、ハジメを喰らうかのように襲いかかってくる。

「轟雷閃」

しかし、ハジメは竜達など傍らの石を振り払うかのように、紅いスパークの一閃が竜達の首を一齐に両断していく。

「即席の竜はやはり脆いか———ッ?!」

オルステッドは竜達が簡単に一齐に両断されることに驚きながらも、そう言っているのと突如、右頬から痛みがしたと同時に吹きた飛ばされる。

オルステッドは吹き飛ばしたのは、紅いスパークを足に纏わせて高速移動をしたハジメであり、高速移動した力を利用してオルステッドの顔面に蹴りを入れたのであった。蹴りを入れたハジメはそのまま、ホルスターからドンナーシユラークを抜き出すと、

ドパアアアン！ ドパアアアン！

ハジメはドンナーシユラークを最大威力で連射していく。発砲音は二発、しかし、ハジメの早撃ちで、本当は十二発の紅いスパークの弾丸がオルステッドへと炸裂する。

「——ふんっ、洒落臭い！——」

「硬竜こうりゆう」！

しかし、オルステッドもハジメに全力で蹴り飛ばされながらも至つてのダメージなきように笑っており、ふっ飛ばされながらも、どこからかユエのときとは別の竜の頭部を出現させる。そして、盾にするかのように自分の前へと突き出し、十二の紅の弾丸を防いだ。オルステッドは弾丸を防いだ後、ハジメに煽りを入れながら体勢を整えようとするが……

「そんなものかつ。イレギュ——「遅せえよ」——ガッ?!」

しかし、ハジメの追撃は終わつてなかつた。オルステッドが「硬竜」を出した間に「紅雷」を足に纏わせ、オルステッドの真上へと高速移動しており、左の義手に「衝撃変換」と「豪腕」をかけると、オルステッドを床へ叩きつけるように殴りつけたのだ。

「チエックメイトだ」

手を緩めないハジメは冷酷な表情でそう言うと、「宝物庫」から「オルカン」、四機の「クロスビット」を取り出すとオルステッドを叩きつけた場所へと狙いを定めてロケット弾と炸裂スラッグ弾を全弾発射する。

次の瞬間、

バシユウウウウウウウウウ!

会場内に凄まじい爆風と轟音が響き渡った。ハジメはオルカンを担ぎながら着地する。そして、爆風によつて煙が舞うオルステッドのいる場所をハジメは無言のままジツと見詰める。そして、確信する。この追撃ラッシュツをしても尚、オルステッドは、

——まだ、致命傷すら負つてないと。

「……………」

ハジメが無言で見詰める中、瓦礫の音や何か立ち上がる音がします。

そして……

「これは、流石に少し効いたぞ。イレギュラー」

「……………推測はしていたんだが、やつぱり、てめえ竜人族か」

爆煙が晴れていくにつれ、オルステッドの姿が見えていく。そして、現れたオルステッドの姿にハジメは懸念していたことが確信する。

「左様。これは貴様も知っているであろう『部分竜化』。これを使うのは何百年振りだ

ろうか」

そう言いながら、現れたオルステッドの姿は竜人族の固有魔法である「竜化」の派生技能「部分竜化」を発動している状態の姿だった……。

~~~~~

ハジメの頼みにすぐさま応えるかのようにゲートを使って、ハジメの元にいるシアを自分の元へと移動させたユエは、シアの姿を見る。いつも元気を振りまく笑顔はなく、傷だらけの眠っている彼女の姿をユエは悔しそうに口元を歪めながら「シア」と名前を口にしながらギュツと抱きしめる。

「優花っ、シアの治療をお願い！ 私はハジメが戦いやすいように此処にいる人達を守る！」

「わかった！ シアの治療は任せてっ」  
「ん！」

隣にいる優花にシアを任せて、自分はハジメの邪魔をさせない為に怪我を負っている帝国貴族達を避難させに向かっていく。

「ッ?! 嘘。ここまでの重症……でもっ」

治療を任された優花は傷だらけのシアを見て、容態の深刻さに絶句して、大切な仲間の悲惨な姿に涙を流しそうになるのだが……

「シア、大丈夫だから……私が絶対に治すから!——」  
「絶象」——回復速度上昇、回復力上昇!

そう言つて、優花はシアの頬をスつと優しく撫でると、一刻もはやく治療するためすぐに再生魔法「絶象」と回復増加の付与魔法を発動する。そして、優花は隣にいるティオへと視線を転じる。それは、ティオは何故かオルステッドが現れた時から一言も喋っていないからであつた。

いつもなら、既に適確な対応をとるティオなのだが、今は全く動く気配が感じられない。優花はそのことが不安になり、隣にいるティオを見て不意に声が漏れでた。

「——ティオ?」

優花が見たティオは能面かのように無表情で、呆然とただ一点とオルステッドがいる場所を見つめていた。そんな姿を見て、優花は恐怖とはまた違う何かを感じてしまつて、シアの治療の手が止まりそうになる。

その時、

バシユウウウウウウ!

ハジメが放つたであろう。オルカンなどの爆撃音などが会場内に響き渡り、爆煙が広



がる。優花は咄嗟にシアが爆風で飛ばされないようにギュツと抱きしめる。

「——ツう」

自分達は会場の隅にいるというのに、その爆風は何もかも吹き飛ばすような勢いであり、リリアーナも雫と鈴がかり三人でギリギリというところで爆風を耐え凌いで、光輝と龍太郎は腕を交差させ、足に集中的に力をいれることで耐え凌いだのだった。そして、煙はまだ舞うも、爆風が収まると、光輝達は安堵の息を漏らして、お互いの確認をしあつた。

「なんて、威力なの……って、リリイ大丈夫？」

「は、はい。支えてくれてありがとうございませ雫、鈴」

「へへん。大丈夫だよ」

「スゲエな……あの威力。流石、南雲だけ。なつ、光輝」

「あ、ああ……」

雫、リリアーナ、鈴は三人で無事だったことを確認しあつて安堵し、龍太郎はハジメの実力の凄さを称賛し、光輝はまた自分とハジメとの差を痛感していた。そんな事をしていると、近くから優花の声が聞こえた。

「雫！そつちは皆、無事?!」

「優花っ。ええ、こつちはリリイも皆無事よ！」

「よかった。コッチもシアもユエもテイオも無事だわ。後、皆こっちに来て、ユエが障壁を張ってるからっ」

そう、優花はシアを抱きしめて守ろうするもケガに影響がでるかもしれないと障壁を張ろうとしたが駆けつけたユエが代わりに障壁を張って、爆風を防いだのだ。

雫達は優花の言葉に従い、優花達の近くへと移動すると、そこにはシアの治療に専念している優花と優花達を守るかのように前にいるユエ、そして、何故か呆然と立ち尽くしているテイオの姿だった。そして、爆煙が段々と晴れていき、目に映った光景に光輝達、そしては驚愕した。

そこには……

「これは、流石に少し効いたぞ。イレギュラー」

ハジメの怒涛の攻撃を喰らっても尚、擦り傷程度しか負っておらず、何ともなさそうに話すオルステッドの姿だった。そして、優花とユエはそんなことよりオルステッドのある部分に注目して驚愕していた。

「左様。これは『部分竜化』。これを使うのは何百年振りだろうか」

それは、自分達の大切な仲間テイオと同じ竜人族の固有魔法の『竜化』の派生技能『部分竜化』で白い竜鱗を纏った腕をしているオルステッドの姿だった。そんなオルステッドに驚愕する優花達とは違ってオルステッドへと駆け出す者がいた。

「お主は、やはりお主はっ」

「ちよつ、テイオ！」

テイオであつた。優花が制止の言葉を投げかけても聞こてないのか、止まらずオルステッドへと駆け出す彼女はなんとも絶対に殺してやると言わんばかりの憤怒と憎悪で輝く金の瞳が鋭い眼光を放ち、自分が着ているのはドレスなのを忘れたかのように全力で走っている姿でいつもの聡明で自分達の大切な仲間のテイオとは、確然に雰囲気が変わっていた。

そして、テイオは走りながら、「竜化」をしていく。帝国の者達は、テイオの正体を知らない為、走るテイオの体が突然と黒い竜鱗を纏いながら翼を生やし、肥大化するごとに驚愕する。しかし、テイオは気にしない。大切な恋人でさえも見向きもせずに彼女の見詰めるのはただ一点、あの忌々しい白い竜鱗をもつオルステッドのみ。

テイオの魔力がいつも黒くて鮮やかな魔力の奔流がまるで、強大な負の感情が溢れ出るかのように黒く黒く深く深くなっていく暗い色になっていき、膨れ上がっていく。

—— やつと見つけた……そう見つけたんだ。

テイオは自分の記憶の脳裏に深く焼き付けられた光景を思い出す。大好きだった国を滅ぼした。優しかった自分を愛してくれていた民達を無惨に磔にしながらか殺した。大切だった、大好きだった、心から尊敬し愛していた母と父を殺した。

——あの白い竜憎き怪物を見つけたのだ！

テイオから溢れ出てくるドス黒くなってしまった魔力が段々とテイオの全身を包み込んでいくと漆黒の鱗で全身を覆い、濁った金の眼をもった黒竜が現れる。

“死ねえええええ!!”

そして、憎しみや負の感情が詰まった言葉を叫びながら、怨恨と恩讐に満ちた黒竜が創獣神へと牙を剥いたのだ……。

## 九十五話 祖の竜

激しい戦闘のせいで中は荒れている会場内に、更に黒竜が現れ、帝国の者達が驚きの声を上げる中。

「死ねええええ!!」

テイ

黒竜が叫びと共に最大威力の息吹プレスをオルステッドへと放つ。

キュウイイイイン!!

その息吹は強大な熱量と轟音と共にオルステッドがいた辺りのところを灰燼へとさせていく。

『……………』

テイオの息吹が放ち終わると、放たれた所の惨状にこの会場にいる全ての者が息を呑む。壁と天井が息吹の勢いで破壊され、下を嘲笑うかのように空に浮かぶ織月が見えていた。黒竜になったテイオは無言でオルステッドがいた場所を見詰めている。

——これで、やれたのかと……。

『流石に同族……そして、クラルスの一族の者がいるとは驚いた』

『！——グレアツ?!』

しかし、テイオの期待を裏切るようにか、オルステッドの声がした途端、テイオの腹部に激しい痛みが伴い苦悶の声を上げながら、横へと倒れる。竜の体ともあつて、会場内が揺れる。

すると、どこからかオルステッドの声が響く。

『だが、温い。故に、この儂には勝てん』

声の発声場所が会場の外だと分かり、ハジメ達、テイオも起き上がりながらその方向へと視線を転じる。

『——』

思わず、この場にいる者の全てが息を呑んだ。そこには竜がいた。黒い和服を着ていた人間の姿とは違い、白く、月に照らされ神々しく光輝く竜鱗に巨大な白い翼、同じ白竜のフリードの相棒であるウラノスとは遙かに上回っている圧や雰囲気、存在感にハジメすらも目を見開いて冷や汗を流す。

『改めて、挨拶をしよう。下等な人間族共にイレギュラー達よ。儂の名はオルステッド。創獣神であり、始まりの竜人である。此処にいる目的はヘルシャー帝国の消滅それだけ

だ

『!』

“なつ——”

オルステッドの挨拶と目的をハジメ達は驚愕し、ティオはオルステッドが始まりの竜人という言葉に間拔けな声を出してしまう。

「なつ、ま、待ってくれよ！　我が神つ。話が違うじゃねえか！　俺との約束はっ?!  
俺をこの世界の王として君臨させ、貴方様の眷属として強大な力を渡すって!」

そう叫ぶのは皇太子のバイアスだった。ティオの息吹の熱でポーラー拘束が緩んだのだろう。拘束を外して、そのままオルステッドの方へと駆け付けたらしい。

そして、今、バイアスはオルステッドと交わした契約と違うことに異議を申し立てるが、オルステッドの返答は何とも冷酷なものだった。

「なあつ、なんか言え……『あんな、沢山のヘマをしておいてか』……ほえ?」

『小童。儂にどれだけの迷惑を掛けたと思っておる？　貴様が樹海の侵攻の際にダストレネスト駄獣兵達を使ったせいで、怪しまれイレギュラー達に帝国に来られるわ、貴様の腐った性欲の暴走のせいで、計画を知られるわ、こんなに儂の余興が上手くいかなかったのは初めてじゃ!』

「ひ、ひいひい！」

オルステッドの怒号にバイアスは間抜けな叫びと共にズボンを濡らしながら、腰が抜けたように、後ろに崩れ落ちる。その表情は怯えていて、今にも泣きそうなる表情である。

『我が主が楽しみされていた。墮落獣フォーレンビースト転計画は貴様のせいであらう。だが、儂は考えた。なら、この帝国を消滅させて、今代のトータスの状況をぐちゃぐちゃにしてやろうとな』

「……………」

『しかし、貴様を傀儡にするのを選んだのは、紛れもないこの儂。ならば、選んだ傀儡は最後まで使い尽くそうと儂は考えた。だから……………』

そう言いながらオルステッドは竜の姿でありながら、指をパチンツと綺麗に鳴らす。するとバイアスに変化が訪れる。

「グブオ……………ナ、なにこれえブえ?!」

バイアスの体が徐々に肥大化していく。ガハルドに似た鋭い目付きも顔も原型をなくしていく。腹部は大きく膨れていき、魔物のような角や翼が生えていく。口もギザギザとした牙へと変化していく。

「あぎゃッ。プギヤッ、ナ、なに力が……………」



爪が伸びて、顔は段々と変形をしていく。竜鱗がバイアスを覆っている。バイアスは苦痛や侵食により血をたくさんと吐き出す。

「た、たひゆ……けて……」

その言葉を最後にバイアスだったものは肥大化を停止すると、突然、宙に浮き出す。そして、空へと浮かび上がっていき、地上から五十メートル離れた地点で留まると

『G d p m j m d p d p d p m / m g d @ , , @ , W , @ w , j ! ! !』

理解不能の言葉を並びたてながら叫びだしたのだった。

』

”

「——おい、オルステッド。あれは何だ？」

沈黙。この場にいる誰もが、その光景を見て沈黙する中、ハジメがその沈黙を破るようにオルステッドを睨みながら空に浮かぶバイアスだったものを指差すと、オルステッドは淡々とハジメの言葉に返答する。

『アレは自動的に魔力が溜まっていく造りであり、上限値まで達すると強大な魔力爆発を起こす生きた要塞兵器。名は爆滅要塞竜ばくめつようさいりゆう。アルマゲドン”。今の儂おれが創りだせる竜の中で、一番の殲滅力をもつ竜である』

要塞兵器、魔力爆発という言葉に、ハジメ達は驚愕する。そして、ハジメよりも早く声を上げたのは皇帝のガハルドだった。

「爆弾だ?! まさか、帝都に落とす気なのかてめえ!」

『左様、ガハルド・D・ヘルシャー。言っただろう? 儂の目的は帝国の消滅。この『アルマゲドン』を使えば、ここら一帯は更地と化すだろうよ』  
「ん、だとう!」

怒りと焦りを含めた叫びに、淡々と返答するオルステッドにガハルドは自分の無力さに血が大量に出そうなほど強く唇を噛み締める。

「なら、あの要塞を破壊すれば済むだろう?」

バシユウウウウ!!

そう言つて、ハジメは「宝物庫」から弾倉を取り出して全弾を再装填を完了したオルカンで、アルマゲドンへと狙いを定めミサイル弾を全弾発射する。

ミサイル弾はアルマゲドンへと飛んでいき、直撃するかと思われたのだが……刹那、ミサイル弾は破壊……いや、分解されてしまった。

ミサイル弾が分解されていく光景を見て察してしまったハジメはその分解に見覚えがあり、眉を蹙めながら悪態を吐く。

「ちつ、使徒までも配置してるのかよ」

『ふつ、イレギュラー。貴様なら、すぐさま“アルマゲドン”を破壊するだろうと思つてな。配置させて正解じゃつた』

オルステッドがそう口にする、奴の後方から月の光を反射するかのよう輝きを放つ銀翼をもつた五体の神の使徒が現れる。

「御機嫌よう。イレギュラー、南雲ハジメ」

「ノイント姉様に代わって私達が」

「我が母の願いの為」

「貴方を」

「排除します」

人形のように感情がないような声音で淡々と冷酷な視線をハジメに向けて話す使徒達。そして、“銀翼”をハジメ達へと射出しようとするがオルステッドが腕を横に突き出し制止させる。

「……………何の真似ですか。オルステッド様」

『まあ待て、彼奴等は儂の獲物じゃ。それに、神である儂に口答えとは木偶の存在が言うのう』

「……………畏まりました。皆、私達は“アルマゲドン”の守護にまわりましょう」

攻撃の邪魔をされた使徒の一体がオルステッドを睨みながら苦言を呈すが、流石のオルステッドの言葉に逆らえず従うように他の使徒の指示にまわり、他の使徒達もそれに応えて「アルマゲドン」の守護にまわる。

『では、儂も……クラルスの小娘、イレギュラー、下等の人間共よ！ 我が息吹を受けてみよ！——』  
ボロボレス 『熱息吹』！』

その息吹はティオの放っていた息吹よりも熱量が、威力が、遙かに格が違っていた。会場の壁など熱で一瞬で溶けていき、一気に会場の全てを飲み込んだ。そして、帝城の三割程も灰燼に帰した。

『終わっ……いや、そうか、そうじゃったなあ！ 貴様がいたのを忘れておったわ！』  
 オルステッドは息吹を放った後、ジツと煙で見えない会場を見詰める。最初は全員死んだと思っていたが、オルステッドはある魔力を感じ取り全員が生きてると確信した。

そして、自分の息吹を防ぎ、全員を守る者なんてオルステッドには一人しか思いつかなかった。

『クリスタ嬢！』

オルステッドがその名を叫ぶ。同時に煙が晴れて、見えたのは会場を全てを包み込む光のドーム。そして、そのドームを展開する者は……

「ふう………ギリギリセーフ」

天使化に姿になった優花である。髪色が銀色となり、その背中には美しい純白の翼。そして優花の周りに浮かぶ四つの聖杖とドームの四隅に聖杖へと形態変化した聖杖が顕現されていた。

「初めてのことだったけど、上手く行って良かったわ」

そう、優花は今もシアの治療を行っている。にも関わらず、会場の全体を覆う程の防御魔法を展開できたのは、四つの聖杖を聖杖へと形態変化させ、魔法の展開の速度を高めたからである。

そして、オルステッドの熱息吹は普通は「聖絶」や普通の防御魔法などは到底、耐えられはしない。そんな息吹を耐えられるのはユエやアレスレベル相当の実力者、そして魔法ではたった一つ。

その名は………

——天性魔法 // サンクテユアリ 聖域 //

ドーム型で全方位からの守護、自分に対して害ある如何なるもの完全に防ぐことができる完全防御魔法。しかし、デメリットも当然ありますこの魔法自体の魔力消費が激しく、展開する大きさによっても魔力消費量が違う。

『やはり、生きておったかクリスタ嬢。いや、違うな………そうか、エクストラの言う通り

力の継承か。まあ、そんな事はどうでも良い。それに、その魔法は魔力消費が激しいことを知っておる。だから、お前さんの魔法が何処まで耐えられるか我慢比べといこ——グオウ?!」

再度、息吹を放とうとするオルステッドだったが、黒い何かが自分に体当たりをして、息吹の邪魔をされてしまう。そして、邪魔をしたのは当然、

「グルウアアアアア！」

ティオである。オルステッドに与えられたダメージがやつと治まり、優花の天性魔法「聖域」で防いだ後には、オルステッドへと迫っていたのだ。

「死ねえええ！ オルステッドオオ!!」

『クラルスの小娘の分際でこの儂を倒せると思っておるとは片腹痛い！だが、気が変わった！その眼を見込んで、特別に帝国が消滅するまで儂が相手をしてやろう！』

「黙れええ!!」

そう、ティオを挑発するように叫ぶオルステッドはティオと空中戦を広げながら帝城からどンドンと離れていく。

「ちっ、ティオ！」

(ティオの実力じゃ、到底あの野郎に敵わねえ)

離れていく二体の竜の姿を見たハジメは、ティオ達を追いかけるために、

“空力”を使おうとするのだが……

「っ?!」

刹那、ハジメを狙うかのように銀翼が炸裂する。ハジメは咄嗟に体を大きく逸らし、ドンナーで避けきれないと判断した銀翼を狙い撃つて軌道をずらしていき、銀翼を全て回避していくと、眉を顰める。

「……チツ、クソ木偶の坊共」

「イレギュラー。貴方の相手は私達です」

使徒がそう言いながら、二つの大剣を取り出す。

「（今すぐでもテイオのところへ向かいてえのにつ）……クソがつー!」

ハジメは悪態を吐く。今、自分が使徒達の相手をしたら、テイオは間違いなく敗けて、最悪の場合死ぬ可能性だってある。

「（ユエに任せる? いや、ユエでも使徒五体の相手はキツイ。優花はシアの治療に他の奴等の守りに専念している）……ユエと共同で早く倒すしかないか」

ハジメは策を捻りだしていくが、焦っているせいか未だに良い策が見当たらず、ユエと二人で早急に使徒達を倒すしかないと考えにしか思いつかない。そうこうしている内に使徒達がハジメに向けて攻撃をしようとした時だった。

「“綺羅”」

何処からか声が聞こえた。と、同時に幾千の光の斬撃が使徒達を襲い、使徒達は口元を歪めながら攻撃をするのをやめ、回避に専念していく。

ハジメにはその声に覚えがあった。そして、無意識に笑みを零してしまふ。それは、この状況を打開するジヨ<sup>切</sup>ーカ<sup>札</sup>ーだった。

「クハツ……遅せえんだよ。アレス！」

上を見上げて笑うハジメ。その視線の先にはゲートが展開され、そこから神官服を着た青年が現れた。

「すみません。駆け付けるのに遅れてしまいました」

ハジメに謝罪しながら笑みを浮かべる青年。その名はアレス・バーン。史上最強の神官であった。

「兄様！」

「アレスさん！」

「……アレス！」

「ホントに生きてたんだな。アレス・バーン！」

アレスの登場に、リリアーナ、優花、ユエが嬉しそうに声を上げ、ガハルドはホントにアレスがいることに驚きの声を上げていた。

「リリイ、優花殿、ユエ殿。三人には心配をかけました。ガハルド陛下もお久しぶりで



す」

アレスはそう言いながら申し訳ないという表情をする。すると、上の方からも淡々としている使徒達だが、明らかにアレスが生き延びることに驚愕していることがわかった。

「……アレス・バーン。オルステッド様の結界魔法 “獄竜門縛”じごくりゅうもんばく から生還するとは……やはり貴方も我が母にとつての危険人物です。即刻にイレギュラーと共に排除します」

使徒はそう言つて、銀翼を大きく広げながらアレスとハジメを見下すすうに二人を見る。しかし、アレスはどこ吹く風のように使徒を無視してハジメに話し掛ける。

「ハジメ殿。貴方はティオ殿のところへ」

「は？ 何を……」

「ティオ殿のことが心配でしょう？ 此処は私とユエ殿で相手をします」

「でも、アレス。そんな怪我をしてるのにか？」

そうハジメが言うように、アレスの今の姿は、怪我は再生魔法で回復したのだろう。しかし、服はボロボロで血など、至るところに付着しており、特に横腹を怪我したのだろう。出血の痕が酷かった。

「ハハハッ。心配ありませんよ。再生魔法で治しましたし、それに私は貴方の仲間です

から」

笑いながらそう言うアレス。すると、優花達のところにいたユエも二人に元に来ると、ハジメにギュツと抱きつく。

「……ん、アレスの言う通り此処は私とアレス、優花の三人で守るから、ハジメはティオのところに向かつて」

ユエはそう言うのとハジメの頬に軽くキスをする。ハジメはアレスを、ユエを、そして奥にいる優花を見る。三人の表情は「任せろ」と言つたような感じで自分みたいに不敵な笑みを浮かべていた。

「お前等………クハツ、そうかい分かつたよ。此処はお前等に任せる。だから三人も待つてくれ。俺達の大事な黒龍テイオは俺が絶対に連れて帰る！」

その言葉に三人は頷く。ハジメもそれを見たと同時に、再度「空力」を使つて空を駆けていく。

「いかせませんよ。イレギュラー！」

使徒達は声を上げると同時にハジメへと一斉に「銀翼」を飛ばしていく。

「させる訳ないでしょう？——「界穿」」

呆れたように話すアレスがゲートを展開してハジメに狙っている銀翼を全てをゲートの中に飲み込んでいく。

「ツ。アレス・バーン！」

「しかし、こちらだけ狙っていても大丈夫ですかね？」

「何を——」「蒼龍」——ツ?!」

言っている?と問いかける寸前に自分達を喰らおうとするかのように顎門をガバツと開く蒼い炎の龍が使徒達を襲う。が、使徒達も高速移動で回避する。

「……ん、流石は神の木偶。渋とい」

「大丈夫ですよ。彼女達は『ネームド』でもないですし、私達の相手になりませんよ」  
「ん」

そんな会話をしながら、ハジメが使徒達から離れたのを確認するユエとアレスは隣に並び立つ。

「ふざけたことをつ……………」

一人の使徒が魔法を放とうと銀翼で魔法陣を形成していく。しかし、それは

……………

「ワンス トゥワイス I、 II //行つて」

「つ?!」

使徒へと急迫する二つの聖剣が使徒の魔法陣を破壊する。使徒はその二つの聖剣に驚きの声を上げる。

「まさか、相手が二人だけだと思っただけ？」

その言葉と共に、隣立つ二人に一人の銀髪の天使が傍に駆け寄り、アレスとユエはその天使の姿に笑みを零して頷く。

「残念。三人よ」

優花である。優花はシアの治療が終わったと同時に、聖杭二つを聖剣へと形状変化させて使徒の魔法陣を破壊したのだ。

「……優花はシアは？」

「大丈夫よ。安心して、治療は完璧よ。今は眠っているだけだから」

「……良かった」

ユエは優花からシアの容態を聞いて安堵する。すると、次はアレスが優花へと話し掛けた。

「お疲れ様です。優花殿」

「いや、大丈夫ですよ。それより私よりも大変だったのはアレスさんでしょ？」

「ハハハツ、大丈夫ですよ。これぐらい、それよりもハジメ殿とティオ殿が帰ってくる前に終わらせましょうか」

「ええ」

「ん」

三人はジツと上にいる五体の使徒と“アルマゲドン”を見詰める。そんな三人を使徒達は冷めた目で見下ろす。

「何を言うかと思えば」

「後ろにいるお荷物を抱えながら」

「私達に勝とうなど」

「失笑」

「無様を晒しながら」

「「「死に絶えなさい」」」」

淡々と喋る冷酷な使徒達の言葉。そして、静かなる怒りを感じさせていた。そんな使徒達の言葉に対する三人の返答は……

「「「やってみろ」」」

~~~~~

帝国の夜空を“紅”が駆け抜けていく。それは、大切な人を助けるため黒竜に紅いスパークを纏わせながら空を駆け抜けているハジメだった。

「テイオツ」

——速く

——速く

——速く！

その想いが増す度にハジメの速度が増していき、閃光へと成していく。しかし、それを阻む者は当然いる。

ハジメに迫ってくるのは竜だった。竜はハジメを喰らうかのように口を大きく開けながら、咆哮を上げる。

「グルウウアツ!!」

「邪魔だ!」

ハジメは悪態を吐きながら、“宝物庫”からパイルバンカーの杭を取り出す。そして、竜の口へと杭を全力に投げつける。竜は物凄いスピードでコチラへと向ってくる杭に避けきれずに貫通する。

しかし、それが……

「っ?!」

オルステッドの罠だった。

竜を殺してそのまま駆け抜けようとしたハジメだったが、突如、竜か

ら鎖が現れハジメに足に絡みついでいく。

「鎖?!」

ハジメは外そうとするが、外れない。そうこうしている内に竜に埋め込まれてあつた魔法が発動する。

『“獄竜門縛”——展開』

「なっ——」

その機械的な声音と共に光がハジメを飲み込んだ。

~~~~~

「——っ!」

光が収まっていき、ハジメはゆっくりと目を開ける。そして、目を見

開く。

「ここが、オルステッドの言っていた魔法結界か……」

ハジメは瞬時に理解する。此処はアレスを封じていた魔法結界だと。

そして、自分を取り囲む無数の竜達。

「“構造把握”でも、理解できない、か」

ハジメはこの間にも、“構造把握”などでこの結界を調べるも、理解不

能と判断される。今の自分では到底、理解できない魔法構築つてことだろう。

——魔法結界は直接、破壊できない。

なら、自分がするべき事はたった一つ……

「……殲滅しかないか」

ハジメは“宝物庫”からオルカン、メツエライを取り出し、装備すると、自分を餌としか見てない竜達を睨みつける。その眼には物凄い重圧を感じさせる。

「クハッ……そんなに俺を喰いてえのか？」

ハジメはそう言いながら、体から無意識に紅いスパークが放ちだす。その瞬間、竜達も感じたのだろうハジメが自分達に対する強大な殺気を。

『……………』

「……………」

戦闘態勢をとっていく竜達。ハジメも紅いスパークを放ちながらも両者沈黙する。

そして……………

バシユウウウ!!

「グルア?——」

開戦の合図かのようにオルカンから放たれたミサイル弾が轟音



と共に一体の竜の首から上を吹き飛ばした。吹き飛ばされた竜は首から上が無くなつたままドサツと横に倒れて絶命する。

「てめえ等が俺を喰らうんなら………」

ハジメは淡々と語りながらメツエライの銃口を竜達に向けると、それは獣。奈落に生き抜いた獯猛な獣のように目をギラつかせ、不敵な笑みを竜達に見せつける。

「俺がてめえ等を喰らってやるよ」

その瞬間、約千の竜達と一人の奈落の化け物の戦いの火蓋がきられたのだった……。

## 九十六話 原点にして頂点

織月が浮かぶこの日の帝国の夜は静寂の二文字は無いに等しかった。上空で激しくぶつかり合う白と黒の二つの影。その余波が、咆哮が下の帝都にも響き渡り、帝都の民達は「兵士達はどうした?」、「また、魔人族の襲撃なのか?!」などの叫びに近い言葉が行き交い。その表情は不安と恐怖などに満ちていた。

そして帝城からは、金属同士のぶつかり合う音、魔法の余波が伝わっており、上空に浮かぶ巨大な物体を見て帝国は混乱に満ちていた。

~~~~~

帝都が混乱に満ちている頃と同時刻。帝城では五体の使徒とアレス達三人の戦いは羅列と化していた。

「“双龍”」

迫りくるおびただしい数の銀翼をユエは二つの龍を以って相殺する。そ

して、反撃をするかのようにユエは魔法を繰り出す。

「『氷槍・百連』」

その瞬間、使徒達に百の数の氷の槍が炸裂する。使徒達は神速で回避をしていくが、氷の槍の軌道がおかしいことを訝しむ。あの氷の槍は自分達を集めるように誘導してるかのように……

そして、一体の使徒はハツと視線をユエに転じて、そのニヤリとする笑みに察してしまう。これはユエの罠であると

「っ?! まさかっ」

「ええ、そのまさかですよ」

そして、気付くのに数秒遅かったことを。いつの間にか使徒達にすぐ近くに移動していたアレスの魔法が発動する。

「『震天』!」

「『『ツ?!』』』』』」

直後、使徒達に物凄い衝撃波を喰らい一時的に動きが止まってしまふ。

「形状変化——聖槍。」

ワンス、  
トウワイス、サド、  
II、III、IV、V  
フオー、ラゴラス  
『行つて』!」

そこへ、優花が動きが止まった使徒達へと聖杭を形状変化させた聖槍を射出する。神速の速さの聖槍達は使徒達の心臓を狙う。しかし、使徒達もそんなに

やわではない。

「くうー！」

使徒達は、各々、双大剣を聖槍を軌道を逸らしたり、銀翼を大きく広げると自分を繭のように包み込んだりして、聖槍の攻撃を回避する。

だが、三人の攻撃は終わらない。

「天翔閃・極」！

「五天龍」！

「<sup>アーク</sup>聖櫃」！

そこへ、極大の光の斬撃が、五つの異なる属性の魔龍達が、そして、使徒達を包み込む巨大な光の球体の形をしたドームが炸裂し、光の球体が破裂すると同時に膨大な熱量が、五つの龍の顎門が、極大の光の斬撃が使徒達を襲う。

その瞬間、轟音と共に巨大な爆発が起こった。爆音が帝城すらも響き渡り、物凄い爆風が優花達を襲うも、優花はユエを抱き締めてから翼を広げると繭みたいに自分達を包み込んでから前に三つの聖杭を形状変化させた聖盾を前に出す。アレスは片手で顔を隠しながら爆風に耐える。会場にいる者達も体を寄せあつたり、腕を交差させたりして爆風に耐え凌ぐのだった。

「ふう、流星にこんな魔力を使うのはキツイわ」

「……優花、あの魔法何？」

「あゝ、あの魔法ね」

爆風が吹いた後に、ユエは優花にあの魔法はなんだと聞くと優花は軽くその魔法の説明をする。

——天性魔法 「アーケ 聖櫃」

相手を球体の形をした光のドームに包み込んで身動きを取れなくし、破裂させると同時に膨大な熱量のダメージを与える魔法。しかし、この魔法は魔力消費が高く光のドームを大きくするほど更に消費量が増える。

「……って感じかな」

「……強」

「天性魔法は凄いですね。回復も攻撃も防御もできる万能型の魔法なんて」

「うん。凄いけど全部魔力消費量が激しいからなあ」

優花の説明にユエはその魔法の使い勝手に驚き、アレスは天性魔法の力を称賛するが、優花は魔力消費の激しさに悩んでいた。

「……あんなに凄い魔法なら魔力消費が激しいのは当たり前」

「そつかあ。でも、使徒達は倒せたよねアレスさん」

「……いえ。まだですね」

ユエに言われて、納得する優花はアレスに使徒を倒せたか聞くと、アレスは首を振って否定する。すると同時に爆発の発生地……使徒達の方から巨大な魔力反応が起こり、三人は上に視線を転じる。

「流石は『使徒殺し』と叛逆者達ですか」

「イレギュラーも危険ですが、貴方達も相当危険です」

「我が母の危険因子」

「もう、貴方達の勝ち目はありません」

「諦めて死になさい」

そこに、ポロポロで、一体は片方の銀翼が失っているも、彼女達から溢れ出る魔力にアレス達は目を細める。

「……アレス、あれって」

「ええ、限界突破をしましたね……」

「確か、使徒の限界突破って……「優花殿が思うように無限です」……だよね」

「……どうする？ 私は限界突破はないけど」

「しかし、五体の限界突破を相手をするには私達もするしかありません」

「ですよ、ね」

そんな言葉を交わしながら、アレス達も覚悟を決める。

「〃限界突破〃！」

直後、アレスから橙の魔力の奔流が溢れ出し、優花からは白と銀が混じり合う魔力も同じように溢れ出している。そして、一拍。

ガキイイン！

ゲートを使つて一人の使徒の前に転移をしたアレスがロングヌスが振るい、それに使徒が片方の大剣で防いだ際の金属音で戦いの第二ラウンドの火蓋をきつた。

「全部オールつ。〃行つて〃！」

「〃轟嵐帝〃」

優花の計八つの聖杭から形状変化した聖剣達が神速の速さで、ユエからは極大の竜巻が使徒達を襲う。

「〃凍雨〃」

「〃劫火浪〃」

「〃嵐帝〃」

しかし、使徒達も三つの最上級の魔法と銀翼を飛ばすことで、ユエの竜巻を分解し、優花の聖剣達の軌道を逸らしていく。

「聖杭は危険ですが、我が母やエアースト姉様に比べれば、まだ操作に慣れてはなさそうですね」

「吸血鬼の方も分解すれば無力でしょう」

「では、『使徒殺し』はあの二人に任せて、私達はあの危険因子達の相手をしましょう」  
三体の使徒は話し合うとユエと優花へと銀翼を放ちながら双大剣を構えて突貫をしたのだった。

「っ……」

ロンギヌスで振り下ろされた四本の大剣を受け止めると共に金属音が鳴り響く。しかし、振り下ろされたのは限界突破された二人分の腕力が乗せられた威力。限界突破をしているアレスでも、流石に顔を歪める。

「流石にその状態で、二人相手は荷が重いのですね『使徒殺し』」

「オルステッド様の結界魔法を破ったのは称賛をしましょう。しかし、その体では私達に勝てるなど到底、不可能」

二体の使徒はそう言いながら、大剣を振りながら銀翼もの飛ばしていく。アレスも一切、集中を切らさずにロンギヌスで四の迫りくる大剣を受け止め、銀翼も空間魔法を駆使して回避していく。

「終わりです」

「！」

しかし、それを予測して狙ったかのように使徒が大剣を振り下ろすアレスは回避不可



能であつたが……

「『衝魂』！」

「ツ?!」

「カハツ」

アレスは咄嗟に両手を突き出すと使徒二体に魂魄魔法の『衝魂』で防御不回避の魂に衝撃のダメージを与えて使徒の魂魄を乱す。

「『綺羅』！」

「くうつ」

「つうー！」

そして、追撃と言わんばかりに空間さえも切り裂く光の斬撃を使徒達に与えていく。使徒達は銀翼と双大剣で盾にしたりして光の斬撃を耐え凌いでいく。

光の斬撃が終わる隙に使徒達から離れると、アレスも使徒達も睨み合う。正に攻防一体、アレスは秘策はあるのだが今の魔力では保つどうか分からない。それに違和感を感じていた。目の前の使徒達は今までの使徒達とは何かが違うのだ。

「何が違う。目の前のそして優花殿達と相手してる使徒達も言葉だけで、殺すという気配を感じられない。時間稼ぎをしているかのよう……ん？ 時間……） つ、まさか！」

アレスは睨み合いながら使徒達の行動の不可解な理由を考えてると、ある一つの思惑に気が付く。そして、バツと使徒達の方を見ると、フツとアレスの考えていることを肯定するかのようにに笑みを浮かべる。

「流石、使徒殺しです」

「よく、気付きましたね。私達はただの時間稼ぎだと」

「くっ」

アレスは苦虫を噛み潰したように口元を歪める。そして、優花とユエ達の元へゲートを使つて移動する。

「行くよっ。ユエ！」

「んー」

「お二人共ー」

「ふえー」

「！」

魔法を繰り出そうとしたユエと優花の元に突如、ゲートで現れたアレスに優花は間抜けな声を漏らし、ユエは驚いてしまう。

「ど、どうしたんですかアレスさん？」

「……ん、二体の使徒はどうしたの？」

「そんなことより、お二人共、私達は嵌められていたらしいです」  
「えっ」

慌ただしい様子のアレスに首を傾げる二人だったが、次のアレスの言葉に二人は哑然とする。

「……どういこと？」

「あの使徒達はただの時間稼ぎ。本当の目的は……」

「まさか、アルマゲドンですか？」

優花の言葉にアレスは頷くと二人も口元を歪めて上に視線を転じる。

「やっと思いきましたか」

「私達では貴方達を倒せません」

「なら、確実に消し去るには」

「アルマゲドンを使おうと考えたままでです」

「爆発まで以って残り十分ほど終わりです」

淡々と告げる使徒達。しかし、三人は未然にも諦めている様子はなかった。

「なら、十分以内に壊せばいいんですね」

「何を——」「界穿」！「っ！」

アレスはゲートを展開すると、一気にアルマゲドンへと近付いていく。使徒達は急い

でアレスの元へと向かうが、アレスの方が早かった。

「『天翔閃・極』!」

アレスはロンギヌスを大きく振るい巨大な光の斬撃をアルマゲドンへと繰り出す。しかし……

「なっ?!」

弾かれてしまった。アレスの斬撃をアルマゲドンには、傷一つも付かなかったのだ。そこに、追い付いた使徒達はアレスに向かつて銀翼を放っていく。しかし、その前にユエが展開したゲートによってアレスが入り込んで銀翼の攻撃には免れた。

「……助かりましたユエ殿」

「……ん、大丈夫?」

「アレスさん。やっぱり疲れが……」

「いえ、まだ動けますよ。もう一度、今さっきみた——「無駄です」——なに?」  
そこへ使徒達が呆れたように話す。

「今の貴方ではアルマゲドンを破壊できませんよ」

「あれは要塞兵器ですよ」

「今の貴方達の魔力量では到底無理です」

「それに、貴方達はもう限界でしょう?」

「っ！」

その言葉にアレスと優花は口を歪める。その通り二人はもうすぐ“限界突破”が切れそうなのだ。そしたらもう勝ち目はなくなる。正に、絶体絶命の状態である。

「…………やるしかありませんか」

「え？」

「…………アレスまだ策があるの？」

ユエの言葉にアレスは頷く。

「ええ、しかしこれは今の疲労状態の私では発動するのに少々時間が掛かってしまいます。なので時間稼ぎをお願い出来ますか？」

「…………何分？」

「ざつと、五分程ですね」

「…………了解。優花は？」

「ええ、大丈夫よ。もう、私達はアレスさんに賭けるしかないからね」

「お二人共、ありがとうございます」

三人はそう頷き合うとアレスはロンギヌスを床に突き刺すと両目を閉じる。すると、ロンギヌスから巨大な魔法陣が浮かび上がる。

「無駄な足掻きを…………」

「しかし、『使徒殺し』のすることです。止めた方が良いのでは？」

「……そうですね」

使徒達は銀翼を広げるとアレスを集中的に狙うように動き出すと同士に千を超える銀翼がアレスを襲う。

「『雷龍』！」

「VII、VIII。聖盾に形状変化！『守って』！」

しかし、ユエの雷龍がその顎門を以って、優花の二つの聖杭から形状変化された聖盾がアレスを銀翼から守っていく。

「III、V！ 聖槌に形状変化！『衝撃波』！」

「くうっ！」

そして、双大剣を持ちながら近づく二体の使徒を優花が聖槌で繰り出す衝撃波で吹き飛ばす。そこにユエが吹き飛ばされた二体と他の使徒達を狙って創り出した二つの強力なオリジナル魔法の一つを撃ち込む。

「『月詠』」

その瞬間、巨大な闇の渦が現れると、そこから沢山の禍々しい手が出てくると使徒達を渦の中へと取り込もうと使徒達に襲い掛かる。使徒達はおびただしい数の手から避けて、銀翼で分解していく。

——複合魔法ツクヨミ「月詠」

重力魔法と魂魄魔法の複合魔法。対象の魂魄を指定すると巨大な闇の渦のブラックホールと禍々しい手が現れ、指定された魂魄の者を狙う。そして、その手に捕まると渦の中に引き摺り込まれて魂魄を抜かれるという凶悪の魔法（簡単に言えば魔力と魂魄の吸収魔法）。

この魔法を防いだり終わらせるのには、魔法の核の破壊、対象、上限値までの魔力を撃ち込むしか方法はない。

「くっ、この魔法はっ」

「複合魔法っ」

「これでは、私達が時間を稼がれていますっ」

「ならっ」

「ええ！」

頷き合った二体の使徒が渦の中へと突っ込んでいくと、闇の渦がなくなっていくのを見て、ユエが驚愕しながら口を開いた。

「……っ、身代わりになって『月詠』を解除したっ」

そう。ユエの言う通りで使徒の二体は自分達が身代わりになることで魔力の上限値

を超えさせて『月詠』を解除したのだ。

「……………うっ」

「ユエっ」

そして、ユエでもあんな魔法を行使するには莫大な魔力を消費する。なので、少しヨロけてしまう。優花が咄嗟にユエを支えにいくが、それが悪手だった。

「そこですー！」

「しまっ——」

優花は自分の油断したせいで、使徒一体をアレスの元へと向かわせてしまい、咄嗟に聖槌を向かわせるが、『限界突破』した使徒の神速には追いつけない。当の狙われているアレスは動けないのかそこから一步も動かない。

「待っ——「終わりです」」

優花の叫びは虚しくアレスへと使徒の二つの大剣が振り下ろされ、アレスの命が狩られると誰もがそう思った時だった。

ドゴオオン!!

刹那、何かがぶつかった音と共に大剣を振り下ろそうとした使徒が吹き飛ばされた。使徒に直撃したのは巨大な会場の壁の破片だった。

「……………ふう、何がどうなってるか分かりませんが、アレスさんを守れば良いですよね



「？」

その声にユエと優花がすぐに反応した。そして、二人の目に映ったのは、ボロボロのドレスだが、その綺麗な淡白青色の髪にモフモフなウサ耳大切な仲間の少女がそこにいた。

「皆さん！ 迷惑掛けてごめんないさい！ シア・ハウリア復活ですう！」

シアはニコツと笑みを浮かべると高らかに声を上げた。

「シア！」

「優花さん！ ユエさん！」

優花はユエを抱えながら、シアの元へ駆け寄るとギユツとシアも抱き締める。ユエも優花とシアに挟まれながらもシアに抱き着く。

「シア、よかった！」

「……ん、シア。無事に治ってよかった」

「アハハ、すみません。神相手にハマりましたですう。でも、この状況はどういうことですか？」

二人の言葉にシアは困ったように笑みを浮かべるとこの状況について説明を求めると、優花が簡潔にこの場にはいないティオはオルステッドと戦っていることとハジメもティオの元に行つてること、自分達は上空に浮かぶアルマゲドンの破壊などのことを説明した。

「ふむふむ、なるほど。つまり私達はアレスさんを使徒達から守ればいいと」

「……………ん」

「ええ、そうよ」

「了解ですう！」

シアはそう言っていると上空にいる三体の使徒が優花達を見下ろしながら告げる。

「手負いの兎人族が増えたところで」

「アルマゲドンを止めることは出来ません」

「諦めなさい」

そんな言葉は三人に通じることなく、三人はアレスを守るように前に立つ。

「「お断り（ですう）」」

その言葉共に、使徒達は加速して、アレスを殺そうと動く。優花達も武器ドリュウケンが壊れているのシアに優花は聖槌を渡し、優花とユエは残りの魔力ストックを使うと駆け出す。

アルマゲドン起動まで残り六分、アレスの奥の手解放まで残り一分。

この一分は優花達にとって物凄い長い時間を感じていた。迫りくる銀翼を優花とユエが撃ち落とし、アレスに近づく使徒をシアが聖槌を振りかざし対処していく。反撃と言わんばかりのユエと優花の魔法を使徒を分解して対処していく。

そんなことを何度も同じように攻防を繰り返していく優花達と使徒達。

「死になさいっ」

「させるかあ（ですう）！」

正に、それは拮抗状態。しかし、それは突然と終わりを告げてしまう。

「……っあ」

それは、シアだった。優花は感嘆のあまり咄嗟に声を上げた。

「シア！（やっぱり傷は治したけど残ってるダメージがつ）」

シアはオルステッドに受けていたダメージの残りのせいか片膝を突いてしまったのだ。そこへ一体の使徒がシアを抜いてアレスへと迫る。

そして、

「死になさい！」

アレスへと大剣が振り下ろされていく。

「アレス（さん）！」

「うっ……アレスさ、ん」

優花とユエが声を上げて、シアは横腹を抑えながら弱々しくアレスの名を呼ぶ。誰もが、この後の結末に口元を歪めるなか、声が響く。

「すみません。遅くなりました」

その声と共に金属音が響く。使徒の大剣が受け止められたのだ彼のロンギヌスに

よって。その声に会場内にいる者、優花達は歓喜した。

「後は、私にお任せを」

最強の神官——アレス・バーンの戦線復帰を。

~~~~~

アレスは自分を襲ってきた使徒をロンギヌスで吹き飛ばすと、優花達の元へと向かう。

「遅くなりました。シア殿もご無事で何より」

「えへへ。今は、体は動きませんけどお」

「アレスさん。間に合ったですね！」

「……アレス大丈夫そう？」

アレスは三人に感謝を述べると、三人の無事を見て安心するとユエの言葉に頷いた。

「ええ、安心してください。速攻で終わらせますので」

アレスはそう言うと、歩き出すと前に三体の使徒が立ち塞がる。

「アレス・バーン」

「このまま行かせると思いませんか？」

「ここで、貴方を足止めします」

その言葉にアレスは笑って返した。

「ハハッ……なら、やってみろよ？ 私の追い付けたらね」

「何を……」

その言葉に使徒は寒気をしたが、アレスはそんなを気にせずにロンギヌスを天に掲げると声を上げた。

「〃<sup>オリジン</sup>原点・起動〃！」

その言葉と共に、ロンギヌスが魔力の塊に変化するとアレスに纏っていく。そして、現れたのは黄金の軽<sup>ライトアーマー</sup> 鎧を装着した姿のアレスだった。

「っ、なんですか。その姿は！」

人形のような喋りとは違って感情を曝け出したように声を上げる使徒にアレスは話  
す。

「これは、原点にして頂点の力。名は〃ロンギヌス・オリジン〃。これがロンギヌスの本来の形です。私はあの魔法結界でロンギヌスの本当の所有者に認められ、この力である結界を打ち破りました」

~~~~~

『……までですか……』

結果内でアレスはロンギヌスを使ってギリギリ立っていられる状態で周りには巨大な偽デミトロン竜達を取り囲んでいた。竜達は舐めているのかアレスが動くまで待っていて、動いたら存分に自分を叩きのめすのだろうとアレスは察した。

アレスは諦めたようにフツと笑みを浮かべる。

『神を殺せずに死ぬなんて解放者達に申し訳ないな……』

そんなことを呟いた時だった。

《君はそれで良いのかい?》

『!』

脳内に声の流れ混み、アレスは目を見開く。

『だっ——《質問しているのは余だ。もう一度聞く。君はそれで良いのか?》……良くない』

——そうだ。私は神を殺すと決めたんだ。だから、ここまで戦って来たんだっ。

そう思っているとまた、声が流れる。

《違う。それは君の本心じゃない。余が聞きたいのは本心。本心を曝け出した君を見た  
いんだ》

——私の本心を……。

《そうだ。君は何故、神を殺したい？》

その言葉にアレスの口を噤んでしまう。

《なら、余が答えよう。守りたいんだらう？君にとって大切な人達を——彼女を》

『！』

その言葉にアレスの心に火が灯し始める。そして、頭に流れ込むのは自分の大切な人達の姿だった。尊敬する王国の騎士団長、心優しき異世界から召喚された女教師、大事な妹分、旅の際に出会った魔人族の女性、大事な仲間達——そして、自分が離れるまで傍にいてくれた大切で特別な彼女<sup>幼なじみ</sup>。

『そうか……ハハッ。そういうこと、か……簡単なことだったんだ。私はっ、僕はっ。守りたいんだっ。大切な人達を！　ヘリーナを！』

その言葉に謎の声を高らかに嬉しそうに喋り出す。

《そうだ！　それでこそ余が求めたアレス・バーンだ！遅くなつたが認めよう君を！  
余の新たな主<sup>あおし</sup>として！》

アレスはその言葉で確信して、自分の手に持つ聖槍に目を向けて笑みを零す。

『……そうか、君だったかロンギヌス。なら、君の力を私に見せてくれよ』

その言葉と共に聖槍は意思を持つているかのようにとペかーつと光出したのだった。

~~~~~

アレスの説明にこの場にいる者が沈黙する。そして、息を呑む。アレスから感じられる膨大な魔力量に……

「長話はこれで、私はアルマゲドンの破壊に向かうとしますか」

「なっ、待ちな——」「光速<sup>ミューテア</sup>」——は？」

使徒の制止を遮るように、アレスは光の速さ並に駆け出しそのまま、アルマゲドンへと向かうが……

「させません！」

「通しません！」

使徒達が前に阻むが、今のアレスにとっては全てがスローのように見えてしまう。

「遅い」

「くっ！」

「なっ?!」

アレスは光の反射のようにジグザグしながら高速移動して使徒達を抜いていき、そのままアルマゲドンの元へと辿り着く。



「……バイアス。終わらせて上げます」

アレスはそう言った後、アレスは構えを取っていく。

「っ、やらせますか!」

使徒達はアルマゲドンを破壊しようとするアレスを必死に追いかけるのだが……

「〃天網スカイネット〃

使徒達を囲むように天の網が出現し、アレスの元へ行くのを阻害する。使徒達はすぐにこの天の網に察しがつき、

「っ?!……これは天性魔法!」

キツと天性魔法の遣い手である優花を睨む。

「ふふっ。させる訳ないでしょ?」

——天性魔法スカイネット〃天網〃

名前の通り、聖属性の網を展開する魔法であり、その耐久性は遣い手が注ぐ魔力によって変わる。

使徒達は網を破壊しようと銀翼や大剣で攻撃を加えるが、優花が不敵な笑みを浮かべて口を開いた。

「私の魔力を全部を耐久にまわしてるから、そんなじゃ壊れる訳ないわ。ユエ、お願い!」

「んー」

ユエは今、自分に残る魔力を全てを解き放つ。それは、アレスもアルマゲドンに終符を撃つのと同じ刻であった。上空でアレスは残った魔力を全て右手の籠手に注ぎ込んでいき、声を張り上げる。

「原点抜錨！—— // ロンギヌウス・オーバーゼロオ!!」

右手の籠手から繰り出されるのは、巨大な聖なる槍。強大な光がアルマゲドンを飲み込んでいく。

「D p d j m t m a t?!」

アルマゲドンは絶叫と共に塵となつていった。その様子をアレスは無言で見詰めていた。そして、謝罪をする。

「……バイアス。君をこの手の方法でしか救えなくて済まない。君は私のことを敵意していたが、私は君のことは友達だと思っていたよ」

アレスはそう言うのと、瞠目して頭を俯かせる。

その時だった……

—— ありがとう。

「……フツ、そうですか……バイアス。君のことは忘れないよ」

そう言つてアレスは上空に目を向けながら笑みを浮かべていたのだった……。

下では、ユエが目を閉じながら魔法陣を構成させていくと両手を翳す。

「アマテラス天照！」

ユエが繰り出した魔法は誰が見ても同じことを言うだろう。それは、太陽だった。莫大な光と熱が使徒達へと襲い掛かる。

「——」

使徒達は受け入れるかのように無言で太陽の熱を喰らって魂魄まで溶かされていった。

——アマテラス複合魔法 // 天照 //

炎系の魔法、光系の魔法を重力魔法で創り出した魔法を貯蓄する球体に上限にまで詰め込んだのを発動者《ユエ》の好きな時に解放させ、太陽を想起させるような膨大な熱のダメージを与える魔法（簡単に言うと溜め込んだ魔法を発散させる魔法）。

「……………流石に無理」

「ユエっ」

ユエは久しぶりの多くの最上級とオリジナル魔法の行使によりフラフラと床へとダイブしそうになったが、天使化を解除した優花がつかさずキャッチしてユエを抱きとめる。

「ふう……危なあ」

「……んう、優花？」

「ユエ、お疲れ様」

「……優花こそ疲れたでしょ？」

「まあ……『限界突破』や天性魔法を使ったか……つてやば、足が、おぼつかない——」

優花も優花で無理していた為か魔力の底が尽きそうな状態である。そして、ユエを抱えたまま倒れそうになったが後ろから誰かに支えられて、その心配は無くなり後ろから声が掛かる。

「お二人共、無理し過ぎですよ。まあ私もですけど」

「シアー！」

それはシアだった。しかし、シアもよく見ると今の優花とユエを支えるだけでも限界らしく足がプルプルと震えていた。それを見た二人は顔を見合わしてからプツと笑みを零してしまう。

「なっ、お二人共！ 笑わないで下さいよお。私だって疲れたんですから」

「ゴ、ゴメン。小鹿みたいだったからつい。フフツ」

「……プルプル兔」

「なっ、ユエさああん？」

ユエの言葉でシアがユエの頬をミニミニといじくりまわす。ユエは「ちよっ、やめっ。謝るから」と言うが、シアは「うーりやりやりやつ」と言いながら手は止まらせずいたが、優花の制止でようやく止まった。そして、立っているのも疲れるだけということと三人は床へと寝っ転がった。

「流石に疲れたね今日は……」

「……ん」

「ですう」

「後は、ハジメとティオの帰りを待つことだけね」

「ん！」

「ですう！」

三人は笑い合つて寝そべりながら大切な仲間と恋人の帰りを待っているのであつた。その日、帝国の夜に横に一条と流れる巨大な閃光が、一つの太陽が現れたのだった……。

## 九十七話 黒竜姫VS白祖竜

『ティオ』

——まただ……聞こえる。

『ティオ』

——あの声が聞こえる度に、あの頃の景色を鮮明に思い出してしまう。

『ティオ』

——その度に涙を流してしまう。もう泣かないと決めたのに……誓ったのに。心が、妾の本心が求めてしまう。願ってしまう。

——あの頃に戻りたいと。

『ティオ』

次に見えるのは二つの人影。一人は白に近い翠の長い髪に自分と同じ黄金の瞳を持つ女性。もう一人は自分と同じ黒髪に威厳ある佇まいの男性。その姿はティオにとつて忘れられない。忘れる筈のないのだ。

——自分の両親の姿を。

——愛していた。大好きだった。父上ハルガの声が、母上オルナの声が、その姿が声と共に目に入ってしまったと無意識に走り出してしまふ。遠くに行つてしまふ。二人を焦燥に駆られたように追い掛けてしまふ。

「父上！　母上！」

だが……

「あ——」

テイオが近付くと、その手を触れると、その瞬間、二人は幻、霞のように消えてしまふ。そして、毎度のように理解させられる。

——二人はもう居ないのだと。

「母上……」

——優しく強き美しい竜人であつた母は、もう居ない。妾を抱き締めてくれたあの手の温もりは感じることは出来ない……。

「父上……」

——民を愛し、国を愛し、妾を愛してくれた強き黒竜である父の姿を……あの愛情に溢れた笑顔を見ることが出来ないのだと……。

そして、声が聞こえる。聞いたことのあるようで、ないような声がテイオに語りかけるのだ。

“そんな二人を殺したのは誰だ？”と。

——っ！

その瞬間、テイオの心が大きく揺れる。心臓の鼓動が早くなつていくのを感じる。しかし、声はまだ語りかける。

“恨むのは人か？”

——違う。人間達は操られていただけじゃ……。

“じゃあ、誰を恨めばいい？”

——父上と母上を殺した。民達の死体を辱めるように磔にしたあの白い竜……。

“その竜は何処にいる？”

——……目の前にいる。神の一人じゃった……。妾達の祖先である始まりの竜人じゃった……。

“じゃあ、尚更だ。殺せ”

——しかし、妾だけでは……

“何故、弱気になる？ 目の前にいるんだぞ？ 国を、民を、父を、母を殺したあの白い竜がお前の目の前にいるのだぞ？”

——……………

“殺せ！お前に心の中にある復讐の炎を燃やせ！燃やすのだ！そして、その手であ



の竜を殺すのだ！”

——妾の手で……

“そうだ！ お前はなんの為になんの目的の為に生きてきた？ 強くなった？”

——国を……父上と母上の仇を取るため……

“そうじゃ！ お前はその為に生きてきたんだ！ 全ては復讐の為！ 憎きあの竜

を殺すため！”

——そうじゃ……妾はつ、彼奴……創獣神オルステッドが憎い！

“そうじゃ。それでこそ妾！ ティオ・クラルス！ その恩讐の炎で！ その牙を以って目の前にいる者を殺すのじゃ！”

——妾は……彼奴を殺す！

その瞬間、ティオから溢れ出た負の感情によつて黒く黒く深く深くなつた暗い色の魔力がティオを覆い尽くすように纏わりついていく。それは、闇がティオの心を喰らうかのよう……。

~~~~~

“グルウウウウア！！”

帝都の上空。咆哮と共に黒竜テイオの爪が白竜オルステッドへと振りかざす。

『温かい！』

しかし、オルステッドは襲ってくるテイオの爪を巨体でありながらも軽々しく避ける。

『グルウツ?!』

そして、流れるように尻尾を鞭のように振りかざしてテイオに語りダメージを与える。テイオは余りにも不意な攻撃に避け切れずに苦悶の声を上げながら吹き飛ばされる。

『決着は早そうじゃな——死ね』

オルステッドは追撃するようにブレスを吹き飛ばされているテイオへと放つ。襲ってくる息吹にテイオは吹き飛ばされながらも体勢を直す。

『舐めるなああ!!』

キュワアアアアン!!

叫び共にテイオは負けじとブレスを放つ。轟音が鳴り響きながら帝都の空に黒の閃光と白の閃光が両者の間で激突し、激しい衝撃波を発生させる。

最初は拮抗していた両者のブレスだったが……

『若いのう。いや、その年にしてこれ程のブレスは褒めるべきかのう。だがっ』

オルステッドがそう言い放つと、次第にオルステッドのブレスがティオのブレスを押し始めていく。

『温いわ!!』

オルステッドのブレス完全にティオのブレスごと押し込んでいき、ティオの居場所にブレスの衝撃で発生した爆発が起こる。

『所詮、こんな者——ッ!』

“死ねえええ!!”

オルステッドがティオの実力に落胆としてるいるように口を開いた時だった。オルステッドの虚を突くかのように上から現れたティオから怒号と共にブレスが放たれた。

ティオは自分のブレスに押し負けることを見越して、押し負けた際に爆発を隠れ蓑にして上へと移動していたのだ。

不意に放たれた黒の閃光をもろに喰らったオルステッドはというと……

“!　ぐうつ?!”

ティオの眼では捉えることの出来ない速さでティオの横腹を軽く挟むと、いうことで健在を意味した。

『久しぶりじゃなあ。ここまでのダメージを喰らうのは……少し舐めすぎていた』

痛みに耐えながらティオは見上げると多少のダメージで口元が血で滲んでいるも白く輝く竜の姿がそこにあった。しかし、違うとすればその胸には爪痕で出来たと思われる傷痕があった。

『流石はクラルスの一族の者か……魔法で貼った外装が破壊されてしまったわい』

“ぐう……その傷痕は？”

『抉られて頭が冷えたのか。傷痕？ああ、この傷痕か……魔法外装で隠してたが……貴様には聞く権利はあるな』

“……………権利？”

ティオは頭に血が昇ってオルステッドを殺すことにしか頭に無かったが、横腹を抉られたことにより少しだが話せるぐらいには頭を冷やすことが出来ただ。だ。

『そうだ。貴様はこの傷をつけた初代クラルスの王 ガルダ・クラルスの一族の者じゃからな』

“……………初代クラルスじゃと?!”

オルステッドのから言い放たれた言葉にティオは驚愕する。しかし、オルステッドは気にせず話を続ける。

『奴はそもそも誇り高き我が子である竜人の癖に他種族と共存で献身などという愚かな

ことをする。そして奴は更に儂ら神に齒向かうなどという愚行。正に失敗作。だから、儂自ら鉄槌を下した』

『鉄槌じゃ、と?』

『ああ、奴の献身してきた国を儂が創り出した竜で暴れさせ、意識誘導で奴が信頼してきた者達に奴の最愛の妻を殺させた』

『!……ッ、下衆があ!』

テイオは憤った。オルステッドの語ったことは全て母のオルナが話してくれた。『聖句の起源の話』と内容がほぼ同じだからであり、そして、それは真実を捻じ曲げられた話であると理解したからであつた。

『貴様は、そんな理由で竜人族を!初代様を貶めたというのか!』

『左様。しかし、奴は絶望しなかつた。妻を殺した他種族の者達を、国を壊さずに儂等に齒向かつてきたのだ。だから儂が本来の姿で相手をした』

オルステッドは胸の傷痕を怒りに満ちた表情でギユツと肉をもぎ取るうとしてるかのように強く驚掴みながら語る。

『しかし、奴は所持していた五つの神代魔法で抗つた。そして、この儂に魂魄に及ぶほどの傷をつけた!これがこの傷だ。再生を使つても治らないほど魂魄に深く刻まれていてなこれ程の屈辱は初めてじゃつた!』

“……………それで、殺したのか初代様を”

『ああ、殺したさ。傍にいた奴の息子達には使徒達の魅了チャームを使つて操り人形にしたのがな……まさか、聖句で奴の意思は受け継がれていたとはな。そのせいで、儂の面倒事が増えてしまった』

“っ！……………それで、妾の故郷を！竜人国を滅ぼしたのか！”

『左様だ。貴様達は、また人の為、自由を得るとかで儂等を殺そうという無謀な計画していたからな。それで滅ぼしてやった』

“ッ……………貴様アアア!!”

オルステッドの話聞いたティオは冷えていた頭が嘘のように一変する。

——そんな理由で国を滅ぼし、父上を、母上を殺したというのか……………許せない。許せない。許せない。許せない。許せない。許せない。許せない。許せない。

怒りが爆発したように叫ぶティオはオルステッドへと無策にも言えるほどの突貫する。

『怒りで状況が分からないのかっ。小娘！』

オルステッドは自分に突貫するティオに再度、会場の際に放ったプレス  
を放つ。

『熱息吹ボロボレス！』

膨大な熱量を有し全て破壊せんとする威力を持ったプレスがティオへと迫る。しかし、ティオはスピードを緩めずに更に加速をする。

『血迷ったかつ。小娘！』

その以外な行動にプレスを放ちながらオルステッドは驚きの声を上げる。

そして、トドメを刺そうとプレスの威力を上げる。

『狂ったならしやうがないつ。此処で貴様の墓場としよう！』

『舐めるなあ!!』——『風炎鎧鱗』！』

その瞬間、ティオの炎と風が纏わりつき、竜鱗を更に強化させていく。

そして、オルステッドのプレスを突っ込むと、風で身体を全て守っていきながらプレスの中を突っ切って行き、炎で更に加速していく。

——『複合魔法』『風炎外鱗』

ティオが編み出した複合魔法。自分の適正属性である風と炎を利用して、

竜鱗の硬度を底上げさせる魔法。

しかし、この魔法は自分の魔法をただ纏うだけなので、当然ダメージを受けるが、耐性の技能、ティオの持つ『痛覚変換』、再生魔法を駆使して魔法に耐えている。

そして、オルステッドのプレスを真っ正面から受けたティオは『風炎外鱗』

によって膨大な熱が振りかぶるプレスの中を突き破った。

『なっ?!』

『アアアア!——』  
『壊刻』!』

『っ?!それっ——ギヤアアア!!』

テイオがブレスを突き破ってきたことに驚くオルステッドに、テイオは痛みに叫びながらも、オルステッドに急迫して胸の傷へと触れると再生魔法『壊刻』をオルステッドに放つ。傷が再び発現させられたオルステッドからは絶叫が響き渡る。

——再生魔法『壊刻』

対象の過去の傷を再び発現させてしまう魔法。発動させるには半径三メートル以内で直接触れてないといけない。再現させられる傷は術者の魔力の量に比例される。

『これで、終わりじやあ!!』

テイオは追撃と言わんばかりにブレスを傷だらけのオルステッドへと放つ。黒い閃光がオルステッドを飲み込んでいくと巨大な爆発を起こる。

テイオは響き渡る爆発音と共にくる爆風を腕を交差させて耐え凌ぐとオルステッドの方を見る。

『やったか………ッ?!』

『呷。』



テイオに押し掛けるのは重圧。同時に背筋に悪寒が走り冷や汗が溢れ出る。恐怖のせい何か分らないが声が出ない。翼が重く感じてしまう。

『壊刻……再生魔法か。驚いたそこまで扱えるとは……ここまでのダメージは何千年振りだ。まさか替<sup>スベア</sup>えでもデウスの奴に傷付けられた傷まで発現するとは思わなかった……褒めてやろうクラルスの小娘』

そこには傷だらけのオルステッドの姿があつた。目に入るのは胸の傷に、体の至るところに切り傷、腹、腕には丸い穴が幾つか空いておりそこからはドクドクと血が流れている。誰も見れば分かつてしまう。感じてしまう。創獣神オルステッドはあんな傷を受けるほどの戦いにおいても生き残つた最強の竜だと。

『“天竜”……ふう、爺口調はやめだ。クラルスの小娘。貴様の名は？』

オルステッドはテイオに名をなんだと聞きながら小さな白い竜を創り出すと徐々に傷を回復させていく。テイオは重圧に耐えながら重い口をゆつくり開く。

“……テイオ・クラルス”

『テイオ・クラルス……その名を覚えておこう。そして、誇れ。貴様はこの体<sup>スベア</sup>での儂の本気を見れることを！—— 竜<sup>リゅうじんか</sup>神化』

その瞬間、オルステッドに白い魔力が纏わりついて球体を作っていく。

そして、魔力の余波が放たれると同時に球体が割れ現れたのは……

「この姿になるのは、何百年振りだろうな」

人の姿だった。嫌、人であるが何もかにも違う。体中には竜鱗が覆っており、両腕、両足普通より大きく爪が鋭く、尻尾が生え、背中には白い竜の翼が生えていた。

“(疾いつ)?!”

テイオの眼からオルステッドの姿がフツと一瞬で消えるとゾツと悪寒が走り咄嗟に左を構えて防御をとる。その瞬間、左に衝撃と腕に痛みが走る。しかし、驚くべきはそこじゃない。

“………ぐうつ！（見えんかった）”

そう見えなかった。テイオの目では捉え切れないほどの速さで攻撃をしたのだ。テイオは左腕を抑えながらオルステッドの次の攻撃を警戒する。

「ほう、この攻撃を防いだか………しかし、儂の姿は捉えられないようだな」  
“!!”

テイオは声ができる方へ目を向けるとオルステッドは腕を組みながらテイオを見ていた。

「テイオ・クラルス。貴様の實力では儂には勝てん諦めろ」

“黙れ！ 妾はつ、貴様を殺す！ あの時からずっと誓ってたんじゃ！”

——そうだと。目の前の存在を、父上と母上を殺した彼奴は殺すと決めたんじゃない！

テイオの眼には、復讐の炎がまだ宿っている。魔力も黒く黒く染まっっていく。目の前の存在をこの牙で、爪で、炎で殺し尽くすまで……………

「グルウウウウアア!!」

怒りに身を沈めたテイオがその顎門を以つてオルステッドを噛みちぎらんと駆けるも、オルステッドは落胆しながら溜息を一つ。

「はあ、つまらん——『硬竜』」

オルステッドは迫りくるテイオに硬度が特段に高い硬竜を創り出し盾のようにして顎門を防ぐ。そして、硬竜を手放すとテイオの胸部へと強力な蹴りを入れる。

「カハツ?!」

テイオの激痛と共に肺から空気が抜けながら吹き飛ばされる。しかし、オルステッドの攻撃は終わらない。

「あの吸血鬼の小娘の魔法を真似て見たんだがどうだろう?——『十天竜』」

オルステッドから創り出したのは、異なる十の属性を持つ竜達。竜達はテイオを喰おうと迫っていく。

『グルアアア!!』

竜達はティオに目掛けて、炎のブレス、風のブレス、水のブレス、岩のブレス、氷のブレスなどの十の異なる属性のブレスを放つ。

“ぐううっ”

ティオは吹き飛ばされながらも体勢を持ち直し、迫りくるブレスを避けたり自分のブレスで相殺するも、十のブレスだ。流石に全てを対応できるわけがなく、耐性のあるかせと炎のブレスだけを喰らうようにするも、流石のブレスに苦悶の聲が上がる。

“ぐうっ……偽の竜如きが舐めるなあ!!”

ティオは痛みに耐えながらも、迫る十の竜達に向けてブレスを放って塵にさせたり、そして顎門で喉を喰いちぎり絶命させ、爪で胴を袈裟斬りのように切り裂く。だが、残った竜達もティオを喰らおうと至るところを噛み付く。しかし、ティオの耐久はオルステッドを除いては竜人族の中では一番の耐久性を誇る。それは竜鱗も同じく噛みちぎろうとしても硬い竜鱗によって阻まれる。

“グルウウア!”

キュワアアアアン!!

ティオは喰らったダメージを“痛覚変換”で魔力に変換すると自分に噛み付いている竜達をブレスで一掃する。その光景を見ていたオルステッドは……

「ふむ。耐久性が下がるところ改良が必要か……」

自分の創り出した竜の分析を行っていた。そして、終わるとオルステッドは笑みを浮かべテイオに話しかける。

「まあ、〝十天竜〟の改良は後にして、そろそろ限界だろうか？ テイオ・クラルス」

〝ハアハア……なんじゃ、と？〟

「貴様はよくやった。儂をここまで傷付けた。これは誇ってもいい。だから、楽に殺してやろう」

〝断る!!〟

「………そうか。折角、提案してやったが苦しんでからの死をご所望だな。……了解した」

そう言うと、またオルステッドの姿が消える。次の瞬間、テイオに激痛が走る。

〝ぐっ?!〟

防御が間に合わず、そのまま体中の至る所が激痛が走る。反撃しようとも、姿を捉え切れず不可能であった。竜鱗は耐えきれずに破壊やら剥がされたり、腹部、肩を抉られ、至るところには切り傷、腕は左は完全に折れてしまっているだろう。再生魔法も間に合わず、オルステッドが再生よりも早く傷付けていく。

「……………つまん」

“……………ガツ!!”

オルステッドの姿が見えた思えば、ティオに腹部に激痛と衝撃が走る。よく見れば蹴られていた。竜鱗がひび割れ口からは大量の血が吐き出していた。ティオは蹴られたことにより帝都へと急降下し、コロシアムの方へと落ちていき、そのまま地面と激突し、轟音がコロシアムを中心に響き渡り、砂埃が舞い上がる。

砂埃が晴れると、ひび割れたコロシアムにいたのは人に戻ったティオの姿だった。ドレスはポロポロ、横腹や至るところに出血しており体も碌に動かせないいた。

「っあ……………」

ティオは出血と魔力の底が尽きそうな状態であるため意識が朦朧であつたが、重たい瞼を開け薄目で上を見る。そこには朧気であるがオルステッドの姿があつた。

「渋とい。そろそろ見苦しいぞティオ・クラルス。だが、これで終わらせよう」

オルステッドから白の魔力が収束していく。魔力から熱を感じる。それは“竜化”したオルステッドのプレスよりも熱よりも膨大な熱であつた。

ティオは体が動けずに、その光景を見ることしか出来ない。例え、動け

たとしても傷のせいで碌に動けず間に合わないだろう。

ティオはスツと目を閉じる。そして、自分はなんとも上手くいかない人生だったと……

——国が滅びた亡国の王女。

——愛していた母と父が殺された哀れな竜人の少女。

——憎き宿敵に為す術なく敗れた情けない竜人。

「フフっ……」

ティオは自分の人生の不幸さについて笑ってしまった。だが同時に、こんな自分を大切な仲間だと傍にいてくれた人達を思い出してし申し訳ないと思ってしまう。

『……ティオ』

——ユエ、すまぬな。お主との時間は楽しかった。

『ティオさんっ』

——シア。お主の元気な笑顔は妾も元気づけられた。

「ティオ」

——優花、妾達のことを認めて、それで仲間以上の家族のように接してくれて妾は嬉しかった。

大切な三人に申し訳なくてテイオは口元を歪めてしまう。そして、一番はあの人……彼に謝りたい。強くて、妾を一人の女として愛してくれた彼に……

『テイオ』

—— 操られていた妾を救ってくれた。

—— 復讐の為に利用しようと考えていたのに、それすらも受け入れてくれた。

—— 妾を大切だと言ってくれた。

—— こんな妾を愛してくれた。

テイオは彼のことを想うとあの時、あの夜に彼が言ってくれた言葉を思い出してしまった。

『言つたる？ 俺は大切な人のためなら俺の全力を幾らでも使うのも惜しまないって

……』

—— 嬉しかった。この人と出逢えたことが哀れな人生の中で一番の幸運だと思うほどだった。

「？」

不意に頬に何かが流れるのを感じた。テイオはそれを涙だとすぐに理解した。しかし、今はテイオの流す涙を拭き取ってくれる者は居ない。だからだろうテイオは自然と彼の名を呟いた。



「ご主……ハ、ジメ」

「死ね——  
デリートブレス  
 “滅竜息吹”」

オルステッドが「熱息吹」を超える息吹をティオへと放つ。そのブレスは白い死神のようにティオの命を刈り取ろうと近付いていく。ティオは自分の死を覚悟して受けようとした時だった。

突如に浮遊感を感じる。誰かに持ち上げられている気がする。そして、心が落ち着くような温もりを感じる。一瞬、自分は死んだのだとティオは思ったのだが、それは違うのだと分からされた。

「こんな涙を流しちまって……ティオ。お前に涙は似合わねえよ」

そんな事を言われながら流れていた涙を指で拭ってくれたような気がする。そして、この自分の心臓の鼓動を高鳴らせる声の正体は……

「ご、主人様？」

「ああ、お前の大事な恋人のバジメさんだ」

ティオが目を開けるとそこには、自分と同じようにボロボロだが優しい笑みを向けてくれるハジメの姿があった。

「な、んで此処に来たんじゃっ」

——そうじゃ。ボロボロのご主人様がこんな所にいたらオルステッドに殺されて

しまう。この人はこんな所で死なせていけない人なのじゃ。

テイオは何故、こんな死地に来たんだと声を荒あげる。するとハジメはテイオの頬を優しく触れると真剣な眼差しで告げる。

「……言ったじゃねえか。俺は大切な人の為ならなんだってする。それが俺の信念であり覚悟だ。だから、俺はテイオの為ならばなんだってする」

その言葉にテイオは母オルナとの会話この記憶を思い出した。

『テイオ。いつか……そんな貴女にも良い出逢いがあると思うわ』

『出逢い？』

『将来の旦那様ってことよ？ ティオはどんな殿方が好きなの？ 私、知りたいわ』

『父上みたいに強い殿方……』

『フフ。そう、あの人のような強い殿方ね……なら、テイオもそれに担うような女性へならないとね』

『テイオ、これから何年後か分からない。でも、絶対に貴女が想いを寄せてしまう殿方が現れるわ。 ハルガのような強い殿方をね……』

——母上の言う通りじゃった。本当にいたんじやな……妾を想ってくれて父上のように強い殿方が。

テイオはハジメに抱き着きながら涙を流す。そして確信するこの人は

自分の運命の殿方だと。

「ご主……ハジメ。助けてっ」

「クハッ……ああ、任せろ」

ハジメは笑みを零しながらテイオの頼みを快く了承するとギユツとテイオを抱きしめた。すると、テイオは安心したのかフツと意識を落とした。ハジメは、安全な場所に眠ったテイオをそつと下ろすとオルステッドの場所へと移動した。

「イレギュラー?!まさか………儂の『獄竜門縛』を破つてここまで来たと言うのかっ」

オルステッドは驚いていた。殺したと思つたテイオが生きており、自分の目の前には結界に閉じ込めた筈のハジメの姿があるからだ。

「ハッ、あんな結界、破つてやったよ。舐めんなよ俺を?」

「——っう?!」

その言葉の圧にオルステッドは息を呑む。そして、次の瞬間には物凄い重圧が押し掛つた。オルステッドは少し体がよろけてしまう。

「………後、随分と俺の大切な恋人を甚振つてくれたなあ………覚悟しろよ?」

「やれるものならやってみよっ。小童如きがあ!」

オルステッドも負けじと圧を放つ。二つの重圧がぶつかり合う。そして、創獣神と奈落の化け物の戦いの火蓋が切られたのであった……。

## 九十八話 奈落の化け物VS創獣神

撃だった。

初撃は動くのがオルステッドより速かったハジメの「シユラーゲン」の一  
紅いスパークが迸り、悽絶の破壊力を持った弾丸が一直線に目標へと迫る。

「『硬竜』」

オルステッドはティオの爪やハジメのドンナーシユラークの弾丸を防いだ  
硬い竜鱗を持つ竜を創り出し、ハジメの放ったシユラーゲンの弾丸を受け止めようとす  
るが……

「——っ！」

グツシヤアアアアア!!

弾丸の破壊力に竜鱗が耐えきれず硬竜の竜鱗が破壊される音がしたオルス  
テッドは咄嗟に硬竜を手放し、その場から離れる。

「まさか、『硬竜』がたったの一撃で使い物にならなくなるとは……」

「余所見していいのか？」

「っ——『岩竜』！」

しかし、離れて移動した先には既にハジメの姿があり、右肩には『オルカン』を担いでいた。そして、オルステッドが回避をとる前にハジメはミサイル弾を全弾発射する。

十二のミサイル弾がオルステッドへと炸裂するも、オルステッドもすぐさま岩の竜を創り出して盾にするも、たったの二発のミサイル弾で岩竜が破壊され、十のミサイル弾がオルステッドに直撃する。

「舐めるなあー！」

しかし、オルステッドもそこまで弱くない。迫まりくる残りのミサイル弾をプレスで一掃する。ミサイル弾がプレスで爆発し、爆煙が舞う。

「『轟雷』」

ハジメはその爆煙を利用して、魔眼石から反応した場所に強力な雷撃を放つ。雷撃が魔力の反応した場所に直撃するが、向こうが全く動かないことに違和感を感じるハジメは爆煙が晴れると目を見開く。

「<sup>デコイ</sup>匣かー！」

向こうにあるのは、人の形を模しただけの生きた匣であった。その時、ハジメの後ろ

から悪寒が迸った同時に後ろに振り向く。

「っうー！」

そこにはオルステッドの姿があり、ハジメに向かつて凶悪な爪を振りかざしている瞬間だった。ハジメは咄嗟に体全体を後ろを向かせて手に持つシユラーゲンを盾にするもその強靱な爪により真つ二つにされてしまい、内蔵されているエネルギーが爆発を起こす。その隙にハジメは後方へと動き、一気にオルステッドの距離を離す。

「まさか、気付かれるとはな……侮れんな」

「クハッ……！ てめえも凝った囧デコイなんか作りやがってー！」

軽口を叩き合いながら、睨み合う二人。次に早く動いたのはオルステッドだった。テイオの目すら捉えることの出来なかつた速さでハジメへと急迫する。

「ぐっー！」

ハジメは腕を交差させて、オルステッドの蹴りを受け止める。しかし、その蹴りの威力は半端なく後方へと吹き飛ばされる。

「ほう、この速さでも防ぐとはな—— 蒼炎竜そうえんりゆう“住け”ゆ」

オルステッドは蒼い炎の竜を創り出すと、吹き飛ばされているハジメへと仕向ける。

「“紅狼”！」

ハジメは吹き飛ばされながらも“紅狼”を発動して、迫りくる蒼炎竜の顎門を紅いス

パークを纏った足で雷のような速さで軽々しく回避すると、ホルスターからドンナーを取り出して頭を吹き飛ばす。

「お返しだ」

そして、反撃するかのように「宝物庫」から「クロスビット」を六機をオルステッドへと出撃させて計百を超えるゼロ距離炸裂スラッグ弾を撃ち込ませた。

ズドオオオオオオン!!

直後、帝都の夜天に巨大な光華が満開に咲き乱れる。絶大な威力の衝撃波が離れたハジメからも伝わり、スラッグ弾の破片がハジメの頬を掠めた。

「これは……流石に響いたぞ。イレギュラー」

「……化け物が」

しかし、対するオルステッドはゼロ距離で百発を超えるスラッグ弾を受けても尚、擦り傷程度で平然としている様子にハジメは苦笑いするしかなかった。

「ふむ……ならば、これはどうだ!——「十天竜」」

そう言つてオルステッドは十の異なる属性の竜を創り、ハジメへと突撃する。ハジメは「宝物庫」から「メツエライ」を取り出し、魔物と使徒も圧倒した破壊の権化を以つて此方へと迫る竜達にニヤツとする。

「沈めてやるよ」

ドウルルルルル!!

直後、独特の回転音と射撃音を響かせ、破壊の始まり合図が鳴り響き、六の砲門から電磁加速された無数の弾丸の雨が竜達に向かって容赦無く降り注いでいく。竜達の竜鱗が一瞬で破壊し、次々と肉塊にしていき絶命させる。

「……ガトリングだ、と」

オルステッドはハジメの用いた兵器を見て眩く。その表情は、顔を青くし、額からは冷や汗が流れ出ていた。

そして思い出すのは、自分の体に無数の傷を負わせたあの男の姿……

「ッー」

オルステッドは頭を横に振って自分の拳を握りしめて口元を歪ませた。やがて、竜達を殺し終わると同時に破壊の音も止み、帝都の空に静寂が訪れるとオルステッドは口を開く。

「『十天竜』を数秒、か……」

「お、なんだ？ 大人しく俺に殺されるをご所望か？」

「ハッ、違うわ。ただ……」

「……ただ？」

「貴様を早急に殺さないといけないと判断したまで」



空気が変わる。一瞬でこの場が重く感じてしまうハジメは息を呑み、集中力が乱れ隙が生じてしまう。そんな隙をオルステッドは見逃す筈がなかった。

「——ガッ?!」

ハジメの腹部に衝撃が奔る。『金剛』を発動も間に合わずオルステッドの拳がハジメの腹部に喰らってしまったからだ。ハジメの口からは血が流れ出ていた。

「むっ」

「グッ、捕まえた——『雷——ッ?!』」

ハジメはオルステッドが離れる寸前に腕を掴み離れないようにして魔法を放とうとするも、オルステッドの尻尾が竜へと変化しハジメへと襲い掛かってハジメの魔法を放つのを阻害する。

「まだ、儂のターンだ」

「——っ」

オルステッドはハジメの拘束から離れると、フツと音もなく姿を消す。その瞬間にハジメの体中の至るところから激痛が走り、ハジメから苦悶の声上がる。

「ガッ!」

反撃をしようとも、相手の姿を捉えなければなんも意味もない。全体に雷を放とうとも考えたが、今の魔力量的にそんな無駄な消費はしたくない。しかし、ハジメはオルス

テッドの高速攻撃を止めれる方法を持っているが、使うべきか悩んでいた。

「グッ……（クソッ。コイツの攻撃の原理が分かるまではアレは使いたくねえ）……ならっ」

ハジメは「瞬光」を使って脳の処理能力などで視覚を研ぎ澄ませる。頭痛が激しくタイムリミットも短いのだが、ハジメは此方に攻撃を仕掛けるオルステッドの姿を捉えた。

「（見えた）！」

ハジメはオルステッドを捉え、そして確信する。オルステッドの高速移動攻撃の原理を……

「クハッ……そういうことか」

不敵な笑みを浮かべたハジメは新たに手に入れた固有魔法を使用し、オルステッドの次の攻撃を待つのだった。

「……………」

オルステッドはハジメの不敵な笑みを見て訝しむが、自分の動きなど読める者はいない筈がないと自負している。

「（次で殺すか……）」

オルステッドはそう思い、ハジメのすぐ傍までと高速移動すると、ずっと打撃だけ

だったがハジメの腹部を貫くために腕を真っ直ぐにして、剣のようにハジメの腹部へと爪を突き刺した。

ピキッ

「グッ……ん?」

突き刺した腕に痛みがしてオルステッドは困惑する。ハジメの腹部へと突き刺したのなら聞こえるのは肉の抉られる生々しい音の筈なのだ。しかし、聞こえたのは何かが割れる音。それに腕の痛み。オルステッドは自分の突き刺した腕を見る。

「なっ?!」

オルステッドは驚愕の余り声が漏れ出た。オルステッドの見たのは、ハジメの腹部は服の突き刺した部分が破けただけで、貫通などしてなく出血すらしてない無傷であり、それに反して自分の方は中指が折れており、爪には亀裂が入っていた。

そして、オルステッドは驚きの余り硬直していたのが不覚だった。ガツと腕を掴まれ声を掛けられる。

「……よお」

「——ガっ?!」

オルステッドは距離を取ろうと動くが腕が義手によって掴まれており、不可能。尻尾でまた、攻撃しようとした時だった。ハジメのストレートが腹部に決まり、腹に覆って

いた竜鱗すら破壊されながら吹き飛ばされる。

「グウ……イレギュラー。貴様はどうや——」

オルステッドは腹を片手で抑えどうやって自分の攻撃を防いだのかと口にしながらハジメの姿を見る。そして、その姿に啞然とし、言葉を失っていた。そして、今度は恐怖と焦りが合わさったような表情をする。

「き、貴様……その姿は……なんだ！ なんだんだその姿はああ!!」

「おいおい、神なんだろう？ こんな姿でそんな驚くなよ」

声を荒あげるオルステッドに軽口を叩くハジメの姿は腕や顔の口元まで彼の恋人と  
同じような黒色の竜鱗に覆われている姿だった。

そして、ハジメは言葉が続ける。

「これは、『金剛』の特殊派生技能『竜鱗化』。竜人族の固有魔法『竜化』の変質化したものだ」

——特殊派生技能『竜鱗化』

リゅうりんか

ハジメの持つ『金剛』から特殊な条件によって派生された技能であり、竜族のように竜の姿にはなれないが、体全体に竜鱗を覆うことができる。

竜鱗の硬さは消費する魔力量によって変化する。

「特殊派生……竜鱗……まさかつ。イレギュラー貴様！」

「おつ、気付いたか？」

「まさか、結界内で儂の竜達を喰らったな？」

「正解」

オルステッドの言葉に、ニヤツと笑みを向けながら答えるハジメ。そうオルステッドの言うようにハジメは結界内にいる時に竜達を喰らいながら戦っていたのである。

しかし、ハジメはオルクスの奈落の魔物を喰らっても地上の魔物を喰らってもこれ以上の強化はされないとされていたのだが、オルステッドの創り出した竜達はどれもオルクスの奈落の魔物達と同等のレベルであり、デミ・ドラゴン偽りの竜などはヒュドラと同じくらいであり、ハジメにとっては強化するのに最高の餌場だった。

「……んな訳でサンキューな。オルステッド。てめえのおかげでまた強くなれた」  
笑みを浮かべて説明するハジメに対してオルステッドは放心したかのような沈黙で返した。そして、少しした後には口を開いた。

「……………そうか。儂が貴様を強くさせてしまったか……………そうか、そう、か……………ハハッ、ガハハハハハッ！ アツハハハハハハ!!」

オルステッドは声高らかに笑い声を上げる。

「ハハハッ。じゃあ反撃をしたのも、儂の高速移動の原理も理解したからであろう？」

「ああ、アレ空間魔法の応用だろ？俺がてめえを目で捉えた時、てめえは速い動きをしてるんじゃないかその場で消えていた。そして、このことが可能なのは『空間魔法』のゲートだ」

ハジメの言葉にオルステッドはまた沈黙で返したが、ハジメはそのまま言葉を続ける。

「だから、てめえはゲートを即展開しながら攻撃をしていたんだろ？魔力感知もしてみたら、攻撃にくる際に異様に魔力の乱れを感じた。それを感じ取ればてめえの移動先は分かるってことだ」

「正解だ。よく分かったなイレギュラー。褒めてやろう」

オルステッドは拍手をして、ハジメの推測を肯定した。そして、段々と声音を落としていき、圧を感じさせる。

「だが、それだけだ。それに貴様はこの世界には居ては危険過ぎる。……だから、これで

——サヨナラだ。『限界突破ア』!!」

オルステッドに白い魔力が覆っていき、一気にオルステッドの魔力の急激な上昇をハジメは感じ取り、目を細めた。

すると、オルステッドは重圧を放ちながらハジメに話し掛ける。

「イレギュラーよ。堂々と死合おうぞ」

「ハッ……殺れるもんなら殺ってみろ？」

ハジメも笑って返しながら、「限界突破」をする。紅い魔力がハジメを覆っていく。そして、魔力がハジメの背中に紅い竜の翼を生成していた。

——特殊派生技能「紅翼」（せきよく）

ハジメの待つ「纏雷」から特殊な条件によって派生された技能であり、魔力によって翼を生成する。翼の色は本人の魔力の色によって変化する。

「……………それも、儂の竜を喰らって得た力か？」

「ご名答。これで俺もちゃんとした飛行能力を手に入れたってわけだ」

ハジメの言葉にオルステッドは嘲笑うかのように返答する。

「ハッ、翼を得て半日も経ってない小僧が創獣神である儂に追い付けるとでも？」

「追い付くさ。奈落の化け物を舐めんな」

「……………小童が」

「……………クソ駄竜が」

オルステッドは更に腕を巨大化させる。ハジメはホルスターからドンナージュラークを取り出し、ガンスピンをして腕を交差しながら構える。互いが顔を見合わせた瞬間、紅と白が同時に物凄い速さで閃光かのように動き出した。

夜天の空を二条の閃光が空を駆け抜け抜けぶつかり合う。離れてぶつかる。離

れてぶつかる。という動きを何度も繰り返している二色の閃光。

二つの閃光の正体であるハジメとオルステッドはぶつかり合うと、ハジメは“竜鱗化”と“集中強化”を纏わせた足でオルステッドに蹴りを入れ、オルステッドはその強固なる腕を交差させてハジメの蹴りを受け止める。そして、オルステッドは即席に創り上げた竜達がハジメを襲わせるも、ハジメが神速のような速さで放った十二の紅い閃光の弾丸が竜達の頭などを吹き飛ばす。

互いに至近距離で、ハジメの武器や魔法を、オルステッドの竜達や強靱な爪を躲し、逸らし、弾きながら呼吸をするのを忘れるほど攻撃を繰り返し、その攻撃で生まれる衝撃によって二人は互いに吹き飛ばされ離れていた。

「おおおおおおおおお!!」

「うおおおおおおお!!」

いつの間にか、ハジメとオルステッドの二人は戦いに集中してか雄叫びを上げていた。

たったの一ミリ体を傾けなかったら、一秒遅く動いていたら次の瞬間にはハジメの敗北が確定する。互いの己の本能と経験だけを頼りに見事な攻防を繰り返していた。

オルステッドが腕を大きく肥大かし、そのままハジメへと振りかざすもハジメはドンナーシユラークの二丁に“金剛”と“集中強化”を掛けてると交差させ、オルステッド



の攻撃を防ぐが、その力の大きさに右腕の骨が軋むのを感じ、その痛みにハジメは苦い顔をする。

「グッ——『紅雷玉』!!」

すぐさま、距離を取ろうとハジメはオルステッドに蹴りを入れると、そのまま紅いスパークで形成された十の紅の宝玉を撃ち込んでいく。そして宝玉達は目標へと接近した瞬間、周りに紅いスパークの爆発が起こる。

「……チツ、どんだけ硬いんだよ」

爆風が止み、ハジメはオルステッドの方向へ目を向けると、オルステッドは翼で自分を繭のように包み込んで爆発を防いでいた。そして、爆発が終わったのをわかったのか翼を広げ、オルステッドの姿が現る。多少のダメージを受けているのが分かるがどれも致命傷には至っておらず、その頑丈さにハジメは舌打ちする。

「……流石だイレギュラー。貴様のその強さは人の部類として狂っている。……いや、もう人ではないかもな。しかし、もう限界だろう?」

「……何が言いてえ?」

称賛を送るオルステッドにハジメは殺気を飛ばしながら睨みつけるも、オルステッドはそんな殺気を気にすることなく話を続ける。

「つまり諦めろ。貴様はこの儂に『限界突破』まで使用させた。そんな人間は貴様が初

めてだ。だが、もう十分。だから死ぬ」

「ハッ、俺に怖気付いただけだろ？ クソ駄竜」

「口はよう回るようだが……体はどうだろうだろうか？」

「何を——ッ?!」

突然の痛みと衝撃にハジメは驚愕の余り言葉を詰まらせる。そして、目の前には離れていた筈のオルステッドが自分の腹を殴っている姿だった。

「反応速度が鈍っているぞ？」

「——カハッ（空間魔法は使っていないはず?!）」

オルステッドが空間魔法を使った痕跡がなくハジメは驚愕しているとオルステッドはハジメの心を読んだかのように笑みを浮かべて説明した。

「空間魔法を使ってなくて驚いたのだろう？ アレは疲れるから使ってたまで……儂ぐらいこれぐらいの速さは普通だ」

「なっ?!——ガアアッ!!」

ズドオオオオオオン!!

ハジメがドンナーを発砲するも、レールガンの速度よりオルステッドの方が速く、ハジメは上空から大地へと叩き落とされた。大地がひび割れ、轟音が響き渡った。

その光景をオルステッドは見詰めながら溜息を一つ。

「はあ……やはり人は人であったな」

オルステッドは落胆の言葉を発したのであった。

~~~~~

ハジメは流石の“竜鱗化”でも、上空から地面に激突する衝撃波耐えきれずハジメは激痛と共に意識を落としたのだが、誰かがハジメの名を呼ぶ声がした。

「——メ!!」

——誰だ？

「——ジメ!!」

——この安心する声。そして、この温もりは……

「ハジメ!!」

「テイ、オ」

ハジメが重い目を開けて視界に捉えたのは大切な人が涙テイオを流して自分の顔を見ながら抱き締めている姿だった。テイオが涙を流す姿にハジメは重い右腕を動かしてそつと涙を拭い取って、優しく笑みを浮かべる。

「泣くなテイオ。俺、は大丈……グウツ」

「ハジメ！そんな怪我で無闇に動くでない！」

ティオの言う通り、今のハジメは“限界突破”も切れ、副作用である倦怠感もあり、魔力も体も境界内の多くの童達とオルステッドとの戦闘でボロボロであった。

「だ、が……オルステッドが此処に……」

「駄目じゃ。そんな体で無理したらハジメが死んでしまう。だから妾が時間を稼ぐ。だからハジメはその隙に逃げるのじゃ」

「なつ、ティ、オ。おま、何を——」

ティオの発言にハジメはその意図を察し、口を開いた時だった。上から此方にくる圧に言葉を詰まらせてしまう。

「ほお、小娘。生きておったか」

その声の主はオルステッド。ハジメを支えるティオの姿を見て言葉を漏らすのであった。

「しかし、何故、貴様が此処に？ 生きておれば逃げればいいものを……邪魔だ。儂が用があるのはイレギュラーだけだ」

「……………」

「なつ、ティオツ」

その言葉に、ティオは無言で立ち上がるとハジメの言葉を無視してオルステッドから

守るようにハジメの前に立った。その光景にオルステッドは目を細める。

「なんの冗談だ小娘？」

「冗談もなにもお主の相手は妾じゃ」

テイオは笑みを浮かながら告げると、オルステッドは溜息を一つする。

「何を言うかと思えば……失せよ。僕は弱者に興味は無い消えろ」

「フツ、ハジメが神々の脅威だからってそんなに殺したいとは……お主の主のラーゼンは相当の怖がりらしいようじゃの？」

そんな煽りの言葉に、オルステッドから今まで以上の重圧が押し掛ける。テイオはその重圧に体が震えるもその足は一步たりとも微動だにしない。すると、テイオへ殺意を込められた声音で口を開く。

「そうか。そうか……小娘。貴様はそんなに死にたいのだな？ 良いだろう。貴様を先に殺してやる」

オルステッドはそう言いながら、標的をテイオへと変える。自分の偉大なる主を馬鹿にされ、その目は怒りに満ちていた。

ハジメは体を無理に動かして片膝を突く状態になるとテイオに話し掛ける。

「テイオ！ 止めろっ。俺はお前の命を犠牲にして、生きたくねえ!!」

「……………ハジメ。お主には妾以外にも、シア、ユエ、そして優花がおる。三人が妾の分ま

で愛して支えてくれる」

「……止めろ」

——そんなことは聞きたくない。

「もう少し、ハジメと優花達と一緒に居たかったが」

「なら、俺も一緒に……」

——そんな顔をしなくてくれ。

「駄目じゃ。ハジメも妾ももうボロボロ。こんな妾達で倒せる相手ではない。なら、神共に対抗できるハジメをこの身を犠牲にして生かすまでじゃ」

「……俺はそんなのを望んでねえ！」

——止めろ止めろ止めろ！

「妾は、ハジメに会えて幸せじゃ……」

その言葉にハジメは言葉を失う。そして、自分の魔力を収束させるとオルステッドが口を開く。

「もう、最後の会話は終わりか？ならイレギュラーと共に死ぬ——  
滅息吹デリートブレス」

オルステッドがそう告げながら白い滅びの息吹を放つ。膨大な熱がそこら一帯を滅しながらテイオとハジメに迫る。そんなブレスを物怖じとせずテイオは愛おしく透き通る声でハジメの名を呼ぶ。

「ハジメ」

ハジメはその声に反応して顔を上げる。そこには、優しく微笑んだティオの姿だった。

そして……………

「こんな妾を愛してくれてありがとう」

そう告げて微笑むティオの姿にハジメは悔しそうに顔を歪めながらも片手を伸ばす。

——止めろ。

——止めてくれ。

——そんな顔をしないでくれっ。

——俺は大切な人の為に力をつ。優花を、ユエを、シアを……そしてティオを守る

為に俺はっ……………

その時だった。あの声がハジメの頭に響いた。

『俺の力を使え。大切な者を——神——殺す為に』

——てめえの力を使えば、アルヴの時のようにアイツに勝てるのか？

『ああ——絶対——だ』

——なら、その言葉を信じる。てめえの力は禁忌とか関係ねえ……………。

“ご主人様”

ハジメはティオの姿を、彼女の笑顔を思い出す。

——俺はティオを守るなら……禁忌でもなんでも使ってやるさ！ だからっ

『許可する——お前は——俺が選んだ——だから、神など——せ』

——俺は勝つ!!

その瞬間、オルステッドのプレスが相殺された。紅色の光によって……

「えっ——」

「は？」

その様子を見たティオは声を漏らし、オルステッドは信じられない光景を見て、開いてる口が塞がらない。

「ティオ。見ていてくれ」

ハジメの声が聞こえ、ティオはその方向へと振り向くとハジメの姿はなく、同じタイミングで、

「ガハッ?!」

オルステッドが殴り飛ばされ空高くに吹き飛ばされ、その後ろに紅い閃光が追い掛けている。その様子を見ていたティオは彼の名を呟く。

「ハジメ」

頭には嬉しさとちよつとした怒りがある。だが、今のティオはそんなことはどうでも



良くただ願うのみ……

「勝つて」

~~~~~

吹き飛ばされたオルステッドは殴られた頬を抑えながら此方に向かう男に怒りを感じながら話す。

「イレギュラー。まさか俺のブレスを相殺するぐらいのそ力が残っていたのは驚きだ。だが、それで俺に勝てると思うか？」

「……………うるせえよオルステッド。てめえは俺に負けるそれだけだ」

「何を——」

ハジメの言葉にキレたオルステッドはハジメの方を見て、その姿に言葉を失い、呼吸が荒くなる。ハジメはオルステッドの表情を見て話し掛けた。

「なんだ？悪夢を見たような顔をして？」

「……………か」

「あ？」

「やはり、イレギュラーの中に存在していたのか！ デウス!!」

オルステッドは叫ぶ。ハジメの姿を見て、今のハジメの姿は義手が変形して悪魔の腕のような禍々しいフォルムへと変化し、義手からハジメを侵食するかのようハジメの耳元ぐらいいまで機械を纏っていた。

ハジメはオルステッドの叫びを気にせず、フォルムが変化し銃剣の形となったドンナード・MとシユラークD・Mを構える。

「デウスがなにがなんとか知らねえが俺はてめえを殺す。それだけだ」

「黙れええええええ!!」

オルステッドは加速してハジメへと急迫する。しかし、ハジメはオルステッドの動きを読んだかのように飛んで宙りしながら回避すると、上から背中へと十二の紅い牙がオルステッドを襲う。

「ガッ?!」

オルステッドは背中を抑えながらハジメを見る。ハジメは煽るかのように片手を出しすと指先をクイッククイックと曲げる。

——相手してやるよ?

言葉を失ったオルステッドの額に青筋がくつきりと浮かび上がった。

「……………」まで儂を愚弄するとはな……………イレギュラー。絶対に貴様は殺す!」

「やってみろよ?」

オルステッドの言葉に軽々と返すハジメ。刹那、閃光がぶつかり合う。再び、帝都の夜天を二つの閃光が駆け抜け抜けぶつかり合う。それも、前よりも獰猛で激しく。

「デウスウウア!!」

オルステッドが叫びながら更に巨大化させた剛腕でハジメへと振りかざす。しかしハジメは平然と義手で軽く受け止めると、「竜鱗化」と「集中強化」、紅いスパークを纏わせた足で蹴りを入れ水平方向に吹き飛ばす。

「ツ……………舐めるなああああ!!」

オルステッドは十を軽く超える竜達を創り出すと、一斉にハジメに向かってプレスを放つ。ハジメは迫りくるプレスを避ける気配はなく、「宝物庫」から「メツエライ」を取り出す。オルステッドはその様子に声を上げる。それに対するハジメはメツエライを構えると口を開いた。

「血迷ったかあ! デウス!!」

「『電子錬成』」

その言葉と共に、メツエライが変化をしだす。前回の王国で見せた禍々しいフォルムと違って六つの砲門は一つの砲門へとなるために繋がっていた。

———対殲滅用兵器メツエライ・ブラスターD・M

ハジメが引き金を引くと、六つの砲門が回転して紅いスパークが吸収していき蓄積し

ていく。そして、蓄積がされたスパークが一つの砲門へと集中していく。

「——ファイア」

その瞬間、巨大な一筋の閃光が空を駆け迫りくるブレスの群れをいとも容易く飲み込み、そのままオルステッドの方へと駆けていく。

「クッー！」

オルステッドは竜達を犠牲にして、なんとか巨大な閃光に吞まれずに回避する。ハジメの方はたつたの一発で耐えきれなくなつたのかメツエライが壊れ使い物にならなくなつていた。ハジメはメツエライを“宝物庫”に戻すとドンナーD・MとシユラークD・Mを持ち直す。

睨み合う両者。そしてお互いに一瞬で距離を詰めると再び接近戦が始まつた。ハジメは二丁の銃剣に“風爪”、“轟雷”を纏つてオルステッドに斬り掛かる。オルステッドも二つの刃を片腕に魔力を集中させ耐久性を高めるも、相手の武器は銃剣。片腕を封じられた状態で紅い閃光が撃ち込まれるも、体全体を捻るようにして回避する。

バジメはその隙にドンナーD・MとシユラークD・Mに“衝撃変換”をかけオルステッドを吹き飛ばすと、今度は足に“轟雷”と“風爪”を纏わせると、虚空を蹴り上げ、雷と風の刃をオルステッドへと飛ばす。オルステッドは即席に創り出した竜を盾にして刃を防ぐ。

お互いに致命打を与えきれず、拮抗する状態。斬り掛かるも防がれ、ブレスを放つても避けられる。魔法を放つても相殺される。そんな攻防を永遠に続きそうな勢いで行っていた。しかし、お互いに切り傷や挟られた箇所から血を滴らせていた。

「はあ、はあ」

「ふう、ふう」

呼吸だけでも、息が荒れキツく感じてしまう。

「クハッ……」

「ガハハッ……」

しかし、笑ってしまう。自然と笑みを零してしまう。楽しいのだ。この戦いを……殺し合いを、命の削り合いをお互い楽しんでしまっているのだ。

「イレギュラー。そろそろ終わりにしよう」

「同感だ。俺もそう思っていた」

笑みを浮かべ合う二人は、最後に自分の全力をぶつける。オルステッドは残りの魔力を全て収束させていく。ハジメは“宝物庫”から漆黒の大槍“神喰らい”を取り出す。そして、義手の方で持つと槍の形が凶悪なフォルムへと変化していく。

「白に染まり朽ちよ——」

「ごく、カミグライ 獄神喰雷槍——」

静寂となった空に響く二つの声。刹那……………

「『終末の咆哮』!!」

「——起動』!!」

オルステッドは白き滅びの終末の咆哮を放ち、ハジメは紅いスパークが放つ漆黒の大槍を雷霆の如き轟音を鳴らしながら解き放った。その反動により元々、限界がきていた義手がバキンツと軋む音が鳴った後に義手の二の腕部分から崩れ落ちた。

ゴオオオオオオオオオオ!!

白の終末が、紅いスパークを放つ漆黒の大槍が帝都の空を切り裂くような轟音を鳴らしながらぶつかり合う。終末が槍を溶かさんと言わんばかりに膨大な熱を放つ。大槍も貫かんとするが、押され気味になっていた。しかし……………

「貫けええ!!」

その言葉が、ハジメが無意識に……………いや、何かしらの力が働いて強制的に『神喰雷槍』に付与されていた魔法が発動する。

——『擬似概念魔法【神を喰らう天へと貫く雷霆の大槍】強制発動。

「なあ?!」

オルステッドが声を上げる。ハジメが放った大槍が言葉の通りに、自分の放った白の終末を真つ二つに切り裂くように貫いていつているのだ。スピードが下がらず魂が吹

き込まれたように意思すら感じさせる大槍に、オルステッドは察して口元を歪める。

「そうか擬似的な概念魔法の作成……貴様が中にいるなら当然かデウス——」

その言葉を言う前に、いや言わせない為か白き終末を破った大槍がオルステッドを襲う。その瞬間、オルステッドは確信する。

——自分の敗北を……。

大槍が「神喰雷槍」が名の通りに神を喰らった。オルステッドの左の上半身を吹き飛ばしたのだった。

「つと……ふう」

その光景を見詰めていたハジメは体からフツと力が一気に抜けフラつく体を気合で踏みとどませ大きく息を吐いた。すると、致命傷を受けたオルステッドがハジメに近付いてきた。

「っ！」

「そう構えるな。もう儂の魔力も残っておらんし、この傷ではもう戦えん」

オルステッドが近付いたことに壊れかけのドンナーを構えたハジメだが、オルステッドの言葉に武器を下ろした。

「……なんの用だ？」

「なに、ただ儂は貴様を認めに来ただけだ。イレギュラー南雲ハジメ貴様の名は覚えて

おこう。今回は貴様の勝ちだ。だが、覚えておけ……次は儂が勝つ」

「クハツ……やってみろ？ 次も俺が勝つ」

オルステッドの言葉にハジメは目をギラつかせ不敵な笑みをしながら返答した。

「クツ、クハツ……ガハハツ!! そうか楽しみ貴様との再戦を楽しみに待っておるぞ。南雲ハジメ!!——」

オルステッドは笑ってそう告げると、使徒のように目が虚ろになつて人形のように動かなくなり、グラリと体を傾けると帝都へと落ちていった。

ハジメはオルステッドが落ちる姿を眺めていると自分にも限界を迎えたようだった。

「つやべ、体が……」

体が動かず、魔力も底に尽いたハジメはフツと空から崩れ落ちる。このまま地面に激突すれば死ぬだろう。しかし、体が動かない。なんとか死なないように対策を考えている時だった。

「ハジメツ！」

声がる方へと目を向けると部分竜化で竜の翼を広げたテイオがハジメの名を呼びながら両手を伸ばしていた。ハジメも骨が折れている右腕を踏ん張りながら伸ばしてテイオの愛しの人の名を呼ぶ。



「テイオ！」

二人の手が合わさったと同時にテイオがハジメを抱き締めると、そのまま地面へと着地する。

「テイオ助かつ——「馬鹿！」——グオオツ」

無事に降りれたハジメはお礼を言う前にテイオに強く抱き締められたせいで折れた骨に響き痛みに悶えてしまう。

「何故？一人で戦ったのじゃつ馬鹿！ハジメは馬鹿じゃ！」

「……テイオ」

ハジメに抱きつくテイオは胸元に顔を埋めながら涙を流しながらも言葉を続ける。

「……でも、嬉しかった。妾の為にあんなに命を削り合いをしてまでも妾を守ってくれた姿に見蕩れてしまうた。……だから——」

——自分を守る為に戦う彼の姿。彼が放つ紅い魔力がとても魅力的で心が高鳴り目が離せなかった。そして、実感させられた。自分が如何に彼に惚れ込んでいることを。

テイオは顔を上げ、両手の位置を首の後ろに移す。そして、顔を赤くさせながら彼の唇に自分の唇を合わす。そして、唇を離すと笑みを向けて

「ありがとう。愛してるのじゃ」

「俺もテイオを愛してる」

ハジメも笑みを浮かべてそう言うと、二人はそのまま見つめ合って抱き締め合う。そして、フツと糸が切れたように地面に倒れると意識を失ったように眠りについた。だが、二人共も離れないと言わんばかりに抱き締め合っていた……。

## 九十九話

## それぞれの決意と新たな旅立ち

帝国の激戦の夜はアルマゲドンの消滅とオルステッドがハジメに敗れたことにより  
終わりを告げた。

帝国はハジメ達のおかげで消滅せずには済んだのだが被害は大きくコロシウムとその周辺はオルステッドとの戦いの中心だった為、住宅などが瓦礫の山となり、帝城はパーティー会場や城の一部が瓦礫の山と化しその周辺の兵舎などはあるウサギ集団によつて爆破され被害は損大だった。

しかし、そんな被害を被つた帝国だが、驚くことに死者はほぼ帝国兵で帝民達はゼロに等しかった。その理由はオルステッドの襲撃の前にハウリア達の爆破劇のおかげだった。帝民達はハウリア達の仕掛けた爆破を見て、魔族などの襲撃だと間違えたらしく帝都の外れへと避難をしていたのだ。だから、帝民達は被害が免れ、その事を聞いた皇帝さんはニヤニヤと笑みを浮かべるハウリア達に悔しそうに頭を下げながら感謝の言葉を述べていたらしい。

そして、ハジメ達のことだが、ハジメとテイオの二人は救助に向かった光輝達によつ

て抱き合いながら眠りにについている二人を見つけ、色々であったが医療院へ運び込んだ。

医療院には、既に帝国の貴族達、生き残った帝国兵達や優花、ユエ、シア、アレスの四人が眠りに就いていた。優花とユエ、アレスの三人は魔力枯渇で眠っているだけで少し時間が経てば目を覚まし倦怠感はあるものの動けるようになっていた。

問題だったのはシアと後に運び込まれたハジメとテイオの三人であった。シアは勿論、オルステッドから受けた傷、テイオは一人で無闇にオルステッドに戦いに挑んだせいで骨折、裂傷、火傷、魔力枯渇の重症だった。そして、一番の問題はハジメだった。義手は壊れ、横腹は抉られ、全身は傷だらけであった。

そしてハジメは更に危険な状態だった。それは、光輝達がハジメ達を見つけて運ぶ時だった。ハジメを抱えた龍太郎が顔面を蒼白させながら口を開く。

『おい、やべえぞ……皆』

『どうしたんだ龍太郎?』

『そうよ? 早く南雲君とテイオさんを運ばな——』  
『な、南雲の奴、息してねえんだよ——  
——え?』

雫は言葉を失う。今さつき自分の幼なじみの言った内容が頭で理解できなくなった。いや、理解したくないのだ。しかし、龍太郎は今度は叫ぶかのように声を出す。

『だからっ、南雲が息してねえんだよ！』

『『ッ！』』

そこからは大変だった。雫はティオを抱えてるので鈴と先に医療院に向かい、龍太郎と光輝はハジメに心臓マッサージを繰り返して、微かに心臓の鼓動が聞こえたのを確認すると医療院へと駆け出したのだった。

そして、ハジメ達が運び込まれる前に魔力が回復し目を覚ました優花、ユエ、アレスの三人は重症者の手当にあたっていたが、雫と龍太郎によつて運び込まれた二人の容態を見て、血相を変えながら二人のもとへ駆け寄つて治療にあたった。その時の優花とユエは今にも泣きそうな表情だった。

そんな深刻な事態があつたのだが、ユエと優花の頑張りによつて一日の間でティオもシアも動けるようになるまで回復し、ハジメも動ける状態ではない（優花達が監視するため動けない）が目を覚まし容態は良くなつていた。

そして、全員が目を覚ましてアレスと光輝達以外の四人がハジメの元に集まっているのだが……

「ティオの馬鹿！」

「うっ」

「……ティオの阿呆オ！」

「うう」

「テイオさんは真面目馬鹿ですう！」

「うぐつ。す、すまぬ三人共……」

暴走して勝手にオルステッドに突っ込んで戦いに行つたテイオは優花達三人に正座させられ叱られていた。

「本っ当に心配したんだから！」

「……んー！」

「わ、私は同じことは言えませんが……命を無駄にしようとするのはいけないですう！」  
「うつ……本当に申し訳ないのじゃ」

テイオはそう言つて三人に謝っていると、優花はギュツとテイオを抱き締め話す。その声は涙声だった。

「もう簡単に命を捨てようとしな……テイオは私達の大切な仲間家族なんだから」  
「優花……」

抱き締める優花にテイオは自分もそつと両手を優花の背中に添える。すると、ユエもシアも互いに笑みを浮かべながら顔を見合わせ頷くと勢いよくテイオへと抱き着く。そして、脇腹をくすぐり始める。

「つ……ユエ！ シア?! お、主等！ く、くすぐりたいじゃろ！ ん、あつ……や」

「……お仕置」

「ですう！」

「ほん、！ とに、や……ハ、ハジメ！ た、助けてたもう！」

小悪魔的な笑みを浮かべるユエとそれに便乗したシアを見て、言っても聞かないと判断したティオは病床の上で上半身だけ起き上がって此方に顔を向けていたハジメに助けを求めた。

「クハッ……」

ハジメは笑みを零す。それは目の前の光景のこともあるが、ティオの自分の呼び方が変わったからであった。今までは「ご主人様」と少し距離を置いていた感じだったのだが、今は「ハジメ」ってちゃんと名を呼んでくれる。本当のティオの姿を知れた感じで、そのことがハジメは嬉しくて堪らなかつた。そんなことを思いながらハジメは涙目で助けを求めるティオに返事をする。

「ティオ……スマン。今の俺では何も出来ない」

「つう……ハジメの薄情者オ！」

そんなティオの叫びとハジメ達の笑い声が医療院に響き渡つたのだった……。

~~~~~

その日の夜。帝都を一望できる高台に白い神官服を纏ったアレスが吹く夜風に金髪をたなびかせながら帝都の光景を自分の澄み切った青色の瞳に写し込んでいた。

「はあ……こんなところにいましたか」

「やつ」

コツコツと自分の方へと近づく足音とその声にアレスは優しい笑みを向け軽く返事をしながら後ろに振り向く。そこには、自分の幼なじみであり、リリアーナの専属の侍女であるヘリーナがいた。ヘリーナはそんな返事をするアレスに溜息を一つ。

「怪我は大丈夫なんですか？ 相当無茶をしたんでしょ？」

「ハハツ、君にそんなに心配されるとは嬉しいね。しかし、ヘリーナこそ大丈夫だったかい？」

心配してくれる彼女に嬉しさを感じながら彼女こそあの激戦の間は大丈夫だったと心配する声を掛けるアレスにヘリーナはボソツと言葉を漏らす。

「……ホント自分のことより人の心配ばっか」

「ん？ 何か言ったかい？」

「いえ。何も？ 私は近衛騎士達に守られていたので大丈夫でした。それより私が来る前にガハルド皇帝陛下と話してたそうですけどどうしたんですか？」



ヘリーナは首を傾げるアレスに悟られないように話題を変える。

「ああ……見られてた、か」

「何かいけませんでしたか?」

「いや、何も? ただ勧誘と感謝されただけだよ」

「勧誘ですか……感謝?」

アレスの勧誘という言葉に納得するヘリーナだったがもう一つの感謝はハジメ達にまとめて言えればいい。なのに何故、ガハルドはアレス個人に感謝をしたのだろうかと疑問に感じた。

「ええ、勧誘も丁重に断って……感謝はただ『馬鹿息子を楽に殺してくれて感謝する』と」  
「……」

アレスの言葉にヘリーナは沈黙でしか返せなかった。アレスはフツと笑みを零すと自嘲気味に言葉を続ける。

「何も返す言葉が浮かばなかったよ。私はただ彼を殺しただけで何もしてない。救えなかった。助ける手段が思い付かなかった。普通なら恨まれてもいいのにガハルド陛下が言ったのは感謝の言葉だった」

「アレス……」

「ホントに私は……僕は弱い。殺すことしか救えなかったただの弱い——」  
「そんなこと

ない！」——えっ

自分の弱い部分を曝け出し、自己嫌悪に陥るアレスにヘリーナは声を上げる。ヘリーナはそのままアレスに抱き着くと顔を上げアレスの目を見る。

「貴方は救ったの！ 帝国をつ、帝国に住む人達をつ、リリアーナ様をつ、そして私も！…… それにバイアス様も！」

「僕が……バイアスを？」

「ええ。彼は姿形を変えられ、そして自分の手で国を破壊するところだった。でも貴方が止めてくれた。だから、貴方は決して弱くなんかない。貴方はいつだって私の “英雄” なんだから」

「英雄……」

アレスの脳裏に過ぎるのは、昔、目の前にいる彼女と交わした会話……。

『僕は王国の……ヘリーナの英雄になるよ』

『うん。待つてるから』

そして、アルマゲドンバイアスにトドメを刺した時に聞こえた—— “ありがとう” と。

それに、ロンギヌスと交わしたことを思い出す。この力は大切な者達を守る為に振るう為だと……。

「そうだ。僕は……私は守る為にでしたね」

アレスは納得したように笑みを浮かべて呟くとヘリーナも微笑む。

「分かつて貰つて良かったです」

「ええ、やはりヘリーナ。私はいつも君には弱い」

「それは、貴方が甘いだけです」

「ハハッ、そうですねか……ヘリーナ」

「はい」

「もう少し貴女を抱き締めていても良いですか？」

「それで、貴方が安らぐなら良いですよ」

帝国の夜に二つの影が重なる。そして、お互いに思つてしまう……。

—— やつぱり、僕（私）はこの人には弱いと。

しかし、安心してしまふ。だって、この人には本当の自分部分を見せれるから……。

~~~~~

アレスとヘリーナが話している時と同時刻。ハジメの部屋で優花は看病を続けていた。ユエ達には明日は樹海に戻る為に先に眠るように言つていた。

優花は眠りにつくハジメの頬に片手で優しく撫でながらうつと目と目を細めて微笑む。そして、ハジメが起きない程度の声で呟いた。

「……良かった。心配したんだからね」

優花はテイオからの話だと、ハジメはまたあの力を使ったと聞いた。そして案の定、あの時のようにハジメの体を侵食するかのようにはく黒い何かがあったが、前と違い直ぐに天性魔法を発動したことによりハジメは苦しまずに済んだ。しかし、優花は、またハジメが無理をしたんだと思うと胸がギュツと締めつけられるのを感じた。

そして、嫌な、受け入れたくない思いが頭を過ぎる。

——いつしかハジメがハジメで無くなりそうな気がする。別の何かになってしまふと感じてしまう。

そう思った瞬間、優花の頭の中に見せるかのように映像が流れ込んだ。

『ガアアアアア!!』

黒い機械のようなモノを全身に武装し、全身から放たれる紅いスパーク。色々なモノを取って付けたような歪で禍々しい姿をした何かが叫ぶ姿。

そして、紅く光る獣のような眼光は、ただ見ているだけの優花でもオルステッドを超える物凄い重圧を感じてしまう程だった。

「つ……もしかて、これはクリスタの?」

嫌な光景……いや、これは記憶なのだろう。クリスタが自分に見せた記憶だと理解出来た。そして、クリスタが何故こんな記憶を自分に見せるのは、もしかしたらそう遠く

ない未来でハジメがそうなるかもしれないという警告なのかもしれない……。

「嫌っ」

そんな残酷な未来が待ち受けているかもしれないと思ってしまう。優花はそんな思いを掻き消すように首を横に振ってハジメに寄り添うように彼の温もりを感じるように抱き着くと決意するように呟く。

「絶対にハジメを一人にさせないから……」

—— そうだ。私はずっと彼を支えていくんだ。傍にいるんだ。

—— それが自分の愛私罪なんだから。

「何があっても私はハジメを愛してるから……」

そう微笑みながら優花は呟くと起こさないようにハジメの頬に軽くキスをする。そして、隣にいるハジメは聞こえないと思うが「おやすみ」と言う息をするように眠りに就いたのだった……。

~~~~~

医療院のすぐ近くの人気の無い場所に刀を振るう少女が一人いた。

「セイツ、ハアツ！ フツ！」

空気を裂く音にそれに同調するかのような短い呼吸音。その使い手の動きも極めて洗練されていて、翻る特徴的な黒髪と合わさると、まるで神に捧げる神楽舞の如き神秘性すら感じられた。

踊る黒刀と黒髪。彼女の作り出した剣界に入った物が四散し、玉の汗が飛び散る。

一体、何時間そうやって踊り続けていたのか。彼女——雫の足元には、すり足が地面に刻んだ幾条もの円が出来ていた。

しかし、その有様に反して、雫の体幹は疲れ知らずとも言うように僅かなブレも生じていない。一本芯を通したような美しい姿勢で、ただひたすら無心となつて刀を振るう。

「——うん?」

その時だった。自分の元へ近付く足音がする。そして、雫は刀を振るうのをやめ黒刀を鞘に収め、流れる汗を持参していたタオルで拭き取るとその方向へと振り向いた。

「……雫」

「光輝」

そこには幼なじみがいた。彼も自分と同じように鍛錬しに来たのかと思つた。

「どうしたの? 光輝も鍛錬しに来たの?」

「いや、眠れなくて散歩をしてたんだ。雫は?」

「光輝と同じよ。私も眠れなくて鍛錬していたのよ」

光輝の言葉に、雫は納得したように頷きながら返事をした。

「そうか、そうだよな……だって、俺達は南雲達が戦っているというのに何も出来なかった」

「………光輝」

光輝の言葉に雫は何も言い返せず彼の名を呼ぶことしか出来なかった。それもそうだろう。自分達は勇者パーティーなのに神や神の使徒達の戦場に一步も踏みだすことが出来なかったのだから。ただの圧だけで圧倒され理解してしまったのだ神という存在はどれだけの存在かと。

「ホントに凄いよな南雲達は、あんな存在と張り合えるぐらいに強くて、それで………勝つてしまうなんて………」

「ええ、ホントに彼は凄いわ」

そして、実感させられた。自分達とハジメ達の實力の差を、覚悟の差を。光輝は苦い顔をして彼等を羨望の対象かのように話す。雫は彼等を憧憬の存在かのように話す。

雫は光輝の表情を見る。その表情は誰が見ても落ち込んでいると分かった。だからだろう、そんな幼なじみをほっとけずいられなかった雫は光輝を元氣付ける感じで話し掛ける。

「光輝。私達も頑張つて迷宮を攻略して、南雲君達と並び立てるように……そして、香織と恵理の二人を止められる頑張つていきましょ？」

「ああ……ああ！俺も絶対に神代魔法を手に入れてこの世界を……南雲を越える程の強さをつ」

雫のの言葉に顔を上げて返事をする光輝。表では同じような目的で話し合っているように感じる二人の言葉だが……

一人の女剣士は親友を止める為、先を往く彼等に並び立つために……。

一人の勇者は絶大な力を手に入れ、自分より強い彼より強くなつて自分が正しいことを証明する為に……自分の正義を貫き通すために……。

そんな内に秘める思いが違うも、二人は決意しあうのであった……。

~~~~~

激戦の夜から二日経つたその日、帝都に激震が走つた。

——全亜人族の解放と今後の奴隷化の禁止

簡潔に言えば、そんな皇帝陛下の勅命が、全帝国民に布告されたのである。本当はあの夜の次の日にする予定だったが、重役（ハジメ）が重症だった為、その日は宣告されずに帝城で所有していた亜人奴隷の回収だけを行っていた。



だが、この布告で帝国は個人所有も、奴隷商も関係ない。一切の例外を許されない強権を發動されたのである。しかし当然、困惑と同時に反発が起こった。

帝城の前には既に突然の事態にどういうことかと問い詰める民で溢れ返っていた。すると、帝城のテラスから民達の前に姿をさらしたガハルドは、微妙に引き攣った表情で叫んだ。

「全ては創世神エヒト様からの『神託』である！ エヒト様は帝国に、使徒様と勇者様を遣わされた！」

途端、空から無数の光が降り注ぎ、そこから純白の翼を広げた美しい銀髪の天使（天使化した優花さん）が降臨した。眩く輝き、純白の羽がふわりと天上より落ちてくる。

世界が煌めき、光の波紋（天性魔法『天使の音色』<sup>エンジェルトーン</sup>）と回復魔法（回復魔法）が帝都を駆け巡る。人々はそのあまりの心地良さにうっとりとして目を細めた。

——天性魔法『天使の音色』<sup>エンジェルトーン</sup>

光の波紋が放つ範囲内の者達の精神を安定させ、心を安らがせる魔法。使う用途は精神が安定しない者などに適用。魔力消費も以外に少ない。

そこへ、ガハルド陛下の隣に勇者光輝が姿を見せ、いつもより強めに輝かせた聖剣を掲げる。

「亜人の解放は、これからの帝国が更に繁栄するために必要なことだと仰った！ 困惑

もあるだろうが案ずるな！ 奴隷を失った者には帝国より補償がある！ 私は、愛する我が帝国の皇帝として、帝国民の愛国心と信仰心を信じる！」

舞い落ちる天使の羽を手にした帝都民は、一拍、歓声を上げて天使と勇者と皇帝陛下を称えた。しかし、やはりという言うべきか補償のほどに不安を隠せない者達もいたが、そこは今後のガハルド次第だろう。

「まあ、頑張れよ皇帝陛下」

部屋の中から、引き攣った笑みを浮かべるガハルドに声が掛かった。ハジメだ。動くようになったが、まだ体調も全快ではなく義手も予備のを付けており、右目と額を覆うように包帯が巻かれていた。そして、傍らにはユエやテイオもいる。優花を神々しく見せる演出要員だ。そして、この一幕を考えたのはハジメだった。ガハルドのセリフもハジメの作った台本による物だった。

昨日の内に迅速な対応で帝城の所有する巫人の奴隷達を集め切ったガハルド達だったが、やはり問題はあり、帝国民達にどう伝えるかだ。いきなり、奴隷という財産を没収と言われれば、個人所有はともかく奴隷商などは路頭に迷うことになる。暴動が起きないとも限らないし、その過程で奴隷達が傷付けられる可能性もある。

頭を抱えるガハルド達に救いもたらしたのは、アレスに支えられながら爽やかな笑顔でやって来たハジメだった。

「困ったときはクソ神を利用すれば良い」

そんな恐ろしい発言をさらりかまして、その内容を書き記したシナリオだけポイツとガハルドに投げ渡してハジメは病室に帰って行つた。そんな様子をシナリオだけ渡されたガハルドは胃が痛くなつたらしい。

なお、先程の優花の光の波紋は、彼等を心地良くする以外に、心身共に傷付つてゐるだろう亜人奴隷達をまとめて癒すためである。

帝国兵達の手によつて次々回収され、ど奴隷の首輪が外されていく亜人奴隷達が、今もこの瞬間もコロシウム跡地の方に見える。それを横目に、ガハルドはハジメの方へと振り返つた。そして、

「南雲ハジメ。帝国を救つてくれたことは感謝する。……だが、これはやりすぎだろ?!」

テラスで聖剣を掲げたままの光輝を含め、龍太郎達は強く頷き、部屋にいたアレスは苦笑いするのであつた。

それから後、帝国兵総出で奴隷解放に当たつたため、全ての亜人達から枷が外されるまでさほど時間も掛からずに終わった。数千人規模の亜人達は、未だ何が起きているのか理解できておらず、理解できても信じられない様子だ。ただ、呆然としたまま帝都の外に先導する光輝に従っている。帝都の外に出ても、何度も帝都の方へと振り返り、こ

れは帝国側の新たな遊びの何かでは、逃げ出した途端、酷い目に遭うのではないかと、戦々恐々としていた。

そんな亜人族達に度肝を抜く事態が発生した。空から、巨大な船が降りてきたのだ。巨大なゴンドラを増設されたフェルニルだ。ポカントと口を開けて硬直する彼等は、直後、甲板の上で元気に手を振る一人の兎人族の少女を見た。

手を振る少女——シアは、凜と響く声で、亜人達が心の奥底に期待していた言葉を叫んだ。

「みなさあ~~~~ん！助けに来ましたよお！ みんなでつ、お家につ、フェアベルゲンにつ、帰りましょう~~~~!!」

癒された傷、背後の帝都、先導する勇者、未知の乗り物、そしてそんな乗り物の上で、迎えに来たという同族の少女。

現実が、有り得ないと諦めていたはずの未来が、彼等の心を押し寄せた。

一拍。

——ワアアアアアアアアッ!!

大地を揺るがす程の大歓声が上がる。誰も彼もが涙を流し、隣の者同士抱き合つて喜びを顕にしている。

「家に帰る、ね……」

ブリッジで、デイスプレイ越しにその光景を眺めていたハジメが小さく呟いた。その表情は一言では表現が出来ないがとても人間味のある表情だった。

そんなハジメを後ろから抱き締める形で、優花がハジメを抱き締めるとその思いが同じだからこそ言葉にする。

「大丈夫。私達もいずれ帰れるから……」

すると、隣にいたユエもハジメの手をそつと握り、ジツと優しくな眼差しを向ける。ティオは逆の腕を抱き締めながら、ハジメを見詰める。

「お前等……クハッ」

そんな優花達の行動に、ハジメは笑みを零す。

神は強い。オルステッドの戦いの時にそう実感した。だが、奴はあれで全力ではないだろう。そして、そんな存在がオルステッドを含め五柱もいる。

だが、

「それがどうした？ 俺は神共を殺して優花達と故郷に帰る——それだけだ」

ハジメはそう呟いくと不敵な笑みを浮かべ目をギラつかせる。例え、どんなに困難だとしても、それをぶつ壊して前へと進む。それだけでだと。

ハジメはそう信念を燃やしながら亜人達を迎えるためにフェルニルの操縦に集中する。

……  
そんなハジメの背を、アレスや零達は、何処か温かい眼差しで見詰めるのだった。

## 幕間 神という名の理不尽

【神域】にそびえ立つ全体が白一色の宮殿。名を白神殿はくしんでんの内部のある一室。その部屋は少し薄暗く、置かれている物はたったの一人が余裕に入る程のカプセル横に置かれているだけであった。

カプセルには、色々なケーブルみたいなモノが繋がっており、何かを眠らしている？封印しているかのようであった。

そしてその時、カプセルに変化が生じた。

シューウウウウウ

蒸気が噴き出すのような音が鳴ると同時に、スモークを放出しながら閉まっていたカプセルが開き始める。そして、スモークが晴れるとカプセルは完全に開き、中に入っていた人の姿が顔になった。性別は男、服は何も来ておらず、その髪色は濁りのない白色、見た目は三十代前半に見えるだろう。そして、胸には大きな三本の引っ掻き傷がある。

「……………ふう」

男は何も喋らず、ゆっくりと目を見開くと溜息を一つすると自分の体を確認する。肩

を回したりして、久しぶりの本体の感覚を取り戻していきながら呟いた。

「……………ふむ、本体に戻ったのは良いが、流石に何千年も使つてなかつたから多少のズレがあるな。……………後、服もだな」

そう口にする男は、パチンツと指を鳴らす。すると、白い魔力が男を包み込む。そして、次に姿が見えた時は男は白い着物を着た姿になっていた。

「目覚めたようだなオルステッド？」

「?!」

すると、後ろから名を呼ばれた男——オルステッドは、すぐに振り向くと、片膝を突いて跪く。そして跪く先にいるのは白い装束を着た男。そして、オルステッドと他の四柱の神もが忠誠を誓う偉大なる神——ラーゼンの姿がそこにあつた。オルステッドは跪きながら口を開く。

「まさか、我が主。貴方様が儂を出迎えて下さるとは誠に感謝の極み」

「ふつ、そう畏まるなオルステッド。だが、その姿を見るのは何年振りだろうな」

「ガハハツ、ざつと千年は軽く超えていると思えますな」

「千年、か……………どうだ体の調子は？」

「多少のズレは感じますが、直ぐに取り戻します故、ご安心を」

「そうか……………」



二人は軽く雑談をしていく。そして、ラーゼンは本題に切り出すため、話題を切り替えた。

「よし、本題に入ろうか。オルステッド」

「はっ」

「単刀直入に言おう。イレギュラー南雲ハジメはどうだった？」

「……はっ、イレギュラー南雲ハジメは、アルヴの言う通りアレは人の域というモノを越えています」

「そうか人の域を越えている、か……フツ、面白そうだ」

オルステッドの報告に、ラーゼンは笑みを浮かべる。それは、新しい獲物を捉えた獣のように目を輝かせる。その表情を見ながらオルステッドは更に言葉が続ける。だが、今さつきとは違い少し暗い感じの声音だ。

「そして、我が主。誠に申し上げにくいですが……」

「なんだ？ 言ってみよ」

重い雰囲気でも口を開くオルステッドにラーゼンは首を傾げるも、次のオルステッドの放つ雰囲気の意味を理解する。

「……はっ、イレギュラー南雲ハジメの中に奴が——デウスが、デウス・エクス・マキナの存在を確認しました。南雲ハジメ本人は自覚は無さそうでしたが、あの機械を纏う姿

と概念魔法を創造する力は奴で——ッ?!」

オルステッドは言葉を詰まらす。否、詰まらせられたのだ。ラーゼンから放たれる重圧に、息が出来ない。体が恐怖で動かず、震えるしか出来ない。そんな中、ラーゼンが口を開く。

「デウス……奴は、まだ存在していたか。あの失敗作ガラクタが生きていたとは……」

ラーゼンの一言、一言が圧を感じさせる。空気が軋むのを感じる。それも構わずラーゼンは言葉を続ける。

「デウス、クリスタ……いずれも我の元配下の二柱が、あの時に叛逆を起こしたあの二柱が、また我に挑もうとしているとは——面白」

ラーゼンは笑みを浮かべる。それは、狂氣的で獰猛さも感じさせる笑み。それと同時に、足に力が入り過ぎたのか床にヒビが入ると、連鎖していくように壁、天井へと伝わっていく。その光景をオルステッドは見ることにしか出来ない。

「オルステッド、面を上げよ」

「ッ——ハアハアッ?!」

ラーゼンからの重圧がなくなると、オルステッドは両手を地面に付きながら荒い息を整えていく。そして、呼吸を安定するとラーゼンに言われた通りに面を上げると、謝罪する。

「ゲホツ、申し訳ありません我が主。お見苦しいところをお見せしてしまつて」

「よい、気にするな。我も感情が昂り過ぎたようだ。まあ、そのことはどうでもいい。往くぞオルステッド」

「はっ」

ラーゼンに言われた通りにオルステッドは立ち上がる。それを尻目に、ラーゼンは後ろに振り返り歩きだす。オルステッドもそれに付いて行くように歩きだす。

そして、オルステッドは気付く。いつもなら、主の傍には、エクストラがいる筈だが、今は此処に居ないことを。オルステッドは疑問に思い聞くことにした。

「我が主。一つ不躰ながらお聞きします」

「なんだ？」

「エクストラとスカーレットは何処に？」

そう疑問を呈するオルステッドの言葉に、ラーゼンはあつ、と思ひ出したように手をポンとする。

「そうか言つてなかつたな。エクストラは少し野暮用でガーランドに向かつた。スカーレットは奴に負けて拗ねておる」

「……奴とは……」

「——ルシフェウスだ」

「ッ?!——復活が完了したのですな?」

ラーゼンから言い放たれたルシフェウスの復活に、オルステッドは冷や汗を流す。それもそうだろう……ルシフェウスは自分達の主であるラーゼンと同じに破壊を司ることを認められた者であるからだ。

「ああ、お前が帝国にいる間に魂魄と器の同化が終わり、解放させた。そして、試しということでスカレットと戦わせ——「スカレットの奴が負けたのですな」——そうだ」「そうでありますか……しかし、あのスカレットが負けてしまうとは」

オルステッドは少し驚いていた。スカレットとは、それなりに同じ時期にラーゼンの配下となった仲だ。そして、実力も負けず嫌いなことも知っているのに、負けたことに驚いていた。それはラーゼンも同じらしく、

「我も、少し驚いた。スカレットは貴様の制限スベアされた体であるが、それよりかは遥かに強い。まあ今は、元の体に戻った貴様の方が強いか……」

そう。オルステッドのスペアの体は幾つもの制限が課せられており、身体的なステータスは変わらぬものの、魔力や魔耐、使用できる魔法。そして、真の姿すら封印されていたのだ。

「左様であります。が、僕も驚きです。スカレットはルシフェウスの戦い方を知っていたはず、それに奴は器と同調したばかり調整を終えてない筈です。それなのにスカ-

レットが負けるということは——まさか、ルシフェウス自体に何か起きたということですか？」

オルステッドの的を得た発言に、ラーゼンは首を縦に振る。

「ああ、そのまさかだ。器とルシフェウスの魂魄が綺麗な程に完全に波長が合ったのだ」「まさか……そんな奇跡があるとは」

「フツ、世界に奇跡は付き物だ。そして世界は未知に巡り合っている。そんな未知が、南雲ハジメを殺したいほど憎み、園部優花を狂愛した。そんな同じ意思を持った二つの器と魂魄が巡り合わすという奇跡を起こし、化け物を産み落としてしまった」

「……化け物ですか」

「そう化け物だ。アレは最早、神という存在じゃない。憎悪と狂愛だけを持った人型の化け物だ」

ラーゼンの言葉にオルステッドは返す言葉も浮かばない。しかし、ある事に気付く。

「それで、我が主。その化け物は何処に？ 儂の魔力感知には反応しませんか……」「奴はエクストラと共に、ガーランドへと向かわせた」

「……ガーランド。まさか、時代の終幕を始めるのですな」

「そうだ。今回は南雲ハジメ、園部優花、使徒殺し、その仲間の小娘共、そしてあの勇者道化という面白い駒が揃っているのだぞ！ それに、何時もの終幕じゃないかもしれんから

な。我は楽しみだ！貴様もそうだろう？」

「……はて？」

「表面を取り繕つても我にバレバレだぞ？創獣……いや、創龍神オルステッド」

ニヤケながら言うラーゼンの言葉に、頭を傾け作つたような笑みを見せるオルステッドは確信を突かれ、この御方には隠し事は無理だと、そして肩を竦め諦めたように笑う。

「ハハッ、ガハハハハハハッ。やはり儂は主には隠し事はできませんなあ」

「貴様は昔から分かり易いからな。それに、我は嘔吐きには慣れてるしな」

昔を懐かしむような笑みを見せるラーゼンは白神殿のテラスまでに着くと立ち止まり片手を上に掲げる。そして、ギョツと何かを握り潰すように拳を作ると声高らかに笑みを浮かばせながら告げた。

「加速しようか終幕を！時代の破壊を！さあつ、我が愛しき駒達よ！見せてくれつ、命を掛けた戦いを！その生きたいという執着を！そして挑んでくれつ、我等に！神々に！人という名の駒達よ！我を楽しませよ！」

笑う。それは豪快に快活と笑う。人という未知が、どんな奇跡を起こすのかをこの目に納めたい。人という存在が何処まで自分達に抗えるのかを試したい。そんなラーゼンの想いが笑い声に含まれており、その姿は言葉に出来ないほど神々しかった。

「何という……」

オルステッドは跪く。それは自分の主の偉大さに、その神々しい姿に感嘆し、一生の服従を行動で示すかのように跪いた。

「……今回はどんな結末が見れるだろうか」

笑い疲れたラーゼンは、下へ目を向けてボソツと呟くと、オルステッドを連れ、白神殿の中へと戻っていった。

そして、物語の終わりという時計の針が加速していく……。

~~~~~

【魔国ガーランド】は現在、まるで通夜の如き悲壮な静けさで満ちていた。王城が存在する魔国では、老若男女がひそひそと自国の行く末を語り合っており、その内容は決して明るいものではなかった。

誰もが不安と絶望を表情に浮かべ、チラチラッと王城へ救いを求めるような眼差しを向けている。

原因は一つだ。

人間族と魔人族の趨勢を喫するだろう最重要にして最大作戦——【ハイリヒ王国】及び【聖教会総本山】への侵攻作戦。それが、失敗したことだった。

否、失敗などという言葉ではまだオブラートに包んだ表現であろう。

敗北だ。紛うことなき大敗北だ。差し向けた十万を超える魔物の軍勢。精鋭たる魔族の兵達と階位を与えられた者達。その実に九割近い兵力が壊滅したというのだから。

出陣前、魔都の前に広がる平原に整然と並んだ軍勢を見て、人々は確信していた。これほどの力を前に、人間族は何するものぞ、と。

しかし、蓋を開けてみればこの通り。魔物の軍勢はほとんどが全滅し、兵士達や階位を与えられた者の中には軍曹などの精鋭達の命が散り、魔族の英雄であるフリードも重症（嘘）、そして我等の魔王陛下が出陣しても尚、敗北に終わってしまった。

それを聞いて、平然といられる人々ではなかった。人間族はそれほどに強力だったのか？ 反攻作戦が始まるのではないか？ そうなれば、祖国は勝利できるのか？

未だにフリード將軍と魔王陛下からも、なんの発表もないために、誰もが己の内的那种な不安を少しでも和らげようと、身近な者達と意味の無い言葉を交わし合うしかなかった。

一方、その王城内は、城下以上の沈痛な雰囲気で満たされていた。多くの同胞を失ったのだ。それも、あまりに予想外の方法で。単純に正面から戦争をして敗北したわけではない。それなら、彼等はまだ責任の所在を指揮官に求めることができた。罵詈雑言を



並べ立て、八つ当たりだろうが正当な弾効だろうが、なんでもできたが、そんな考えは一兵卒に至るまで、浮かばなかった。

一体誰が、天から降り注ぐ光の柱の、ただ一撃を以て壊滅するなど想像できようか。たつた一人の神官服の男に一万規模の兵団が殲滅されるなどと想像できようか。何故、予想できなかったなどと責めることができようか。

そもそも、受けた痛手のあまりにの大きさに、誰も彼も茫然自失という有様で、責任の所存を議論する気力にならなかった。

そんな、城内の雰囲気を感じている男が、自分の執務室で小さな声で謝罪した。「……すまない。神の遊戯を止められなかったことを」

服の胸元を引き千切らんとばかり握り締め、目を伏せ辛そうな表情は悲壮感に溢れていた。それは、軍部の最高司令官であり解放者の意志を引き継ぐ者の一人である。将軍フリード・バグアーだった。

「私が無能なばかりにっ」

心から己の不甲斐なさに責任を感じていた。神の遊戯というただの神達の遊びで仕掛けられた戦争に無駄に散っていった沢山の部下の命が、例えばアルヴに洗脳されていた者達であったとしても大事な部下なのだ。そんな命が散るのは心苦しかった。

もし自分がアルヴを倒せていたら、戦争をなんらかの形で止めることは出来なかった

のか、とフリードは悔しくて堪らなかつた。

不意に、執務室の扉がノックされた。入室の許可と同時に勢いよく部下が入ってくる。この部下はフリードの直属の部下の一人である。

「ほ、報告します！ たった今、帝都及び樹海の監視に向かっていた者から報告が届けられました！」

「確か樹海がダヴァロス部隊、帝国がデイヴォフ部隊だったが……帝国と樹海は無事か?!」

帝都侵攻作戦が失敗に終わって結果的に良かったが、残りの両作戦も失敗に終わって、生還して来て欲しいと願っているながら尋ねるフリードは、報告に来た部下の表情を見て、安心とまた部下の死を察した。

「はっ。樹海の攻略は完全に失敗した模様であり、痛手は負ったそうですがフェアベルゲンは健在。帝国も大きな被害を与えられましたが、皇帝は無事です。そして、ダヴァロス、デイヴォフの両部隊は全滅です」

「っ、そうか。でも、二つとも失敗に終わったなら僥倖か」

部下の生還がないことに、心痛むフリードだったが、両作戦が失敗に終わったことに安堵した。そして、次の部下の報告でフリードは歓喜することになる。

「そして、フリード様！ 帝国に神の一人がいた模様」



復活などの連絡で、焦りと苛立ちが合わさってその表情は怒りに染まり荒れていた。

「——以上によるとダヴァロス、デイヴオフの両部隊は全滅したという報告が届きました」

「そうか………ちつ、魔人族は使えないな」

「陛下?」

「ん?……いや、何でもなし。しかし、帝国は理解したが、樹海の攻略はなぜ失敗した?」

アルヴは頭を振ると続きを促す。

「……報告によれば、調査のため樹海に侵入した伝令部も相当やられたそうです。幾人かの生き残りによりますと……あの樹海には兎人族の皮を被った化け物共がいる、と」  
背筋に、氷塊が滑り落ちた気がした。化け物? 常識外の兎人族? そのワードに、ふと浮かび上がるのは神である自分を、偉大なる神の眷属である自分を恥をかかせた白髪眼帯の少年と、彼の傍らにいた兎人族の少女。アルヴは確信した。脳裏に浮かぶ少年に叫ぶ。

「イレギュラアアアアつ!!」

「へ、陛下?!」

部下が戸惑っているのが分かるが、フリードの内心は荒れ狂いそれどころではない。その場にいらなくても、己の恥をかかせ、顔に泥を塗った彼の少年への怒りに腸が煮えく

り返ってしまい、怒りのあまり力が入ったのか玉座の手摺にヒビが入る。

そこへ、扉の前にいた兵士が中に入り、部下に用件を伝える。用件を聞いた部下はアルヴの元へ駆け寄るよってくる。

「陛下。フリード様がご到着したようです」

それを聞いたアルヴは深呼吸をして、沸騰した頭を落ち着かせると入室の許可をす  
る。

「……入れ、と伝えろ」

「はっ」

部下はそう返事をする、扉の兵士に話し掛けるのだった。

扉が開く。玉座の間へと入室したフリードは、アルヴの姿が見えた。フリードに背を向ける形で、玉座の背後に飾られた大きな神の絵を眺めている。

「陛下。フリード・バグアー、参上致しました」

その絵の不快さに眉を顰めるも、すぐに表情を戻し跪き、頭を垂れる。しばらくの間、アルヴからの返事はなかった。

フリードにとっては、今度は何をやらかす気だ？民達を傷付けるのか？と内心ふつつと怒りを募らす中、やがて、アルヴは神の絵から視線を逸らさずに口を開いた。

「帝国と樹海の件を聞いたか？」

「はっ。先程、報告を受けました。大事な部下達の命が散ってしまったのはこれも全て、私の見込みの甘さが招いたこと。申し訳のしようもございません」

アルヴから「ふっ」と小さく笑ったような音が響いた。

「お前の計画に誤りはなかった。全ては、あの憎きイレギュラーの存在によるものだ」  
「……………」

沈黙するフリードに、アルヴは続ける。

「フリードよ。先の報告の内容をもう一度聞かせて欲しい」

「は？……………つ、報告の内容、でございますか？」

「うむ。お前が交戦したという金髪紅眼の少女。どれだけ傷を負っても——『再生』したのだな？」

何故、アルヴがユエを気に掛けているかは分からない。だが、今は怪しまれる訳に行かないとフリードはユエから貰った幾つかの情報の一つのユエの特性のことを交えながら本当に戦いをしたかのように話す。

「……………『再生』……………はい。確かに、陛下のおっしゃる通り、あれは治癒というより『再生』と表現すべき現象でした」

「そして、詠唱も、魔法陣も必要としなかった。見た目はまだ幼さすら残す。そうだな？」

「……………その通りでございます」

「……………そうか、やはり生きていたのかスカレット様の——」

ブツブツと独り言を言うアルヴから「ふっ」と笑ったような声が響いた。だが、先程とは微妙に意味合いが違うように感じられフリードは今の報告にハジメ達が不利になつてしまう情報を与えたのかと内心焦り出す。

「……………陛下?」

焦りを表情に出さずに呼びかけるフリードに、アルヴは気を取り直すように咳払いを一つ。

「フリード。大方の作戦は失敗し、王都侵攻で侵攻軍に壊滅的打撃を受けた。このガールランドにはお前の魔物を含め十分な戦力があるとはいえ、兵達も、民達も、随分と不安に思っていることだろう」

「……………忸怩たる想いでございます。全ての責任は私に」

「責任を所在など問うてはいない。呼び出した理由は別だ」

呼び出した理由は別にあると聞いて、悪寒が走り頬に冷や汗が流れるフリードに、アルヴは言った。

「———神託が下った」

「それはっ（クソっ、何時もより早いだと?!）」

何時もより早いペ神託にフリードは内心焦り、悪態を吐き、不意に表情が崩れそうになるが、すぐに元の表情に戻す。アルヴは厳かに口を開いた。

「——使徒を遣わす。存分に使え。そして——イレギュラーと彼の者に与する者達を我が前に」とのことだ」

「なつ。こ、ここに、奴等を?!（やはり、神達は時代の終幕を加速させる気か!）」

神達を意図を察したフリードは、怒りのあまりに立ち上がって腰に掛けた軍剣に手を掛けようとしたが、計画を台無しにさせないために下唇を噛んで自制する。口の中には血の味が広がっていくのを感じる。

「——っ!」

突如、視線の先に降り注いだ光の柱とその柱から伝わる重圧にフリードは目を見開く。

「こ、この圧は!（間違いない!これは——）」

この光の柱の正体を察したフリードは、重圧に耐えながら目を細める。アルヴは、光の柱へ向き直ると跪くように片膝を突いた。

眩く、神々しいまでの光を放つそれは、玉座の間の天井を貫くように降り注ぎ、一拍して弾けた。思わず手で目を庇ったフリードの視線の先に、人影が一つ。

美しい銀の髪に、戦女神の如き壮麗な装束。心奪われずにいられない完璧な容姿。そ



して、この世を全てを見下すような碧眼の瞳。余りに美しく、純白の翼をもつ女は片膝を突くアルヴを見る。

「私の名は聖母神 “エクストラ”。この雑魚の願いを聞いた偉大なる主の命により、私の子供達を遣わすことを許可します」

「エクストラ様。この度は誠に感謝を申し上げます」

呆然とするフリードの前で、神の使徒を統べる女神と魔神アルヴが挨拶を交わした。アルヴは姿勢を低くしたまま、フリードの動揺を他所に話を進める。

「エクストラ様。今回はどれ程の使徒を？」

「そうですね。 “ナンバーズ”、そして、 “ネームド” も遣わせました」

「おおつ、なんと！」

なんだと？思わず口に出しそうになったフリードは口を抑える。しかし、次の光景を見て言葉を失う。

五、六百人入つてもなお余裕のある広々とした玉座の間の空中に、次々と渦巻く光が生まれる。数は百を優に超え、その全ての渦巻く空中の光から、人が出て来た。ズズと、にじみ出るように現れたのは、全て——

「へ、陛下つ、フリード將軍！外に、王城の外に凄まじい数の女が！同じ顔の女が出現しております！」

駆け込んできた兵士の声にハッと我に返ったフリード。咄嗟に空間魔法でゲートを開き、外の様子を上空から俯瞰すして言葉を失った。

「なっ——」

見えたのは、王城の前に愕然と並ぶ神の使徒。数は目測でも、四百体はいる。そして、今、この玉座の間に現れた神の使徒が、およそ百体。全てがハジメが討ち倒したノイントと同じ顔、同じ姿。エクストラとは違い無機質な、まったく感情を感じさせない声音が響いた。

「——神の使徒 “エアースト” と申します。我が母と主の命により、これより “ネームド” 十二人、 “ナンバーズ” 五百人はこれより魔王の配下となりて、万難を排しましう」

全ての兵士が、全ての国民が震えた。

——ああ、やはり、魔人族こそ神に選ばれし種族なのだ。

「っ——」

フリードは違う意味で震えた。

——これが、神という名の理不尽だと。

「フリードよ。新たな命を与える。使徒共に遂行せよ」

「……………御意っ」

自信と威厳も揺るがせない風に装うアルヴに、フリードはその姿を改めて見てふと思った。

そういえば、アルヴも——彼女と同じで金の髪に、紅色の瞳だな、と。

「……………」

そして、その光景を見ていたエクストラは本人に気付かれない程度でフリードを無言で見詰めていたのだった……。



三人の呆れたような声を出す。順にハジメと優花の幼なじみである浩介、妙子、奈々だ。三人は途中までハジメ達と共に飛空艇フェルニルの乗り、ライセン大渓谷の近辺に降りして貰うと、ハジメから貰った地図でライセン大迷宮の入り口を歩き探して五、六時間。太陽が、一番高い位置に指す頃にようやく見付け出したのだった。

日差しが照りつける中、呆れた三人の視線の先にある看板に書かれていたのは……

〃おいでませ！ ミレデイ・ライセンのドキワク大迷宮へ♪〃

と、妙に女の子らしい丸っこい字でこう彫られており、〃！〃や〃♪〃のマークが妙に凝つてるところがなんとも腹立たしい。

「なんだろ……五人でスマ○ラしてた時の愁おじさんのしゃがみ煽り並にイラツとした」

「……………浩ちんの言いたいこと分かる」

「はあ、二人共……言いたいことが分かったけど、大迷宮の前よ？ 気持ちを切り替えな」と

看板を見て、ハジメの父である愁にゲームで煽られた並にイラツとしてる浩介と賛同する奈々に妙子が片手を頭に当てながら二人を宥めた。

「……………まあ、そうだな。俺達は、ハジメ達のように強くならねえと」

「うんっ」

「ええー!」

気を取り直した浩介の言葉に二人も続くように頷きながら答える。その二人を尻目に浩介は拳を合わせると親友のように不敵な笑みを浮かべた。

「ん、じゃ迷宮攻略、始めっか!」

そう言つて妙子達も頷くと、三人は回転扉へと歩を進める。先頭の浩介が回転扉に手をかけると、扉の仕掛けが作用して三人を扉の向こうへと送る。中は真つ暗で、扉がグルリと回転して元の位置にピタリと止まる。

と、その瞬間、ヒュヒュヒュ!と、ハジメ達の時と同じように無数の全く光に反射しない漆黒の金属の矢が風切り音を響かせながら浩介達を出迎える。しかし、浩介達はハジメと違つて『夜目』がないので対処が難しいのだが……

「ふっ、はっ、とっ!」

黒の装飾がされたゴーグルを装備した浩介が小太刀でカンツカンツカンツと金属同士をぶつかるような音を響かせながら迫りくる矢を叩き落としていく。

「はっ、ふっ………ふう」

最後の矢をカンツと金属音と共に叩き落としたと同時に周囲の壁がぼんやりと光りだし辺りを照らし出す。俺達のいる場所は、十メートル四方の部屋で、奥へと真つ直ぐに整備された通路が伸びていた。そして部屋の中央には石版があり、看板と同じ丸っこ

い女の子文字でとある言葉が掘られていた。

“ビビったあ〜？ ねえ、ビビっちゃったあ〜？ チビってたりしてえ、ニヤニヤw w”

“それとも怪我しちやったあ？ もしかして誰か死んじやった？ ……ぶふつ”

「……………」

浩介達三人の内心はかつてないほど一致している。すなわち、“うぜえ〜”と。

わざわざ、“ニヤニヤw w”と“ぶふつ”の部分だけ彫りが深く強調されているのが余計に腹立たしい。もし、ハジ

「まあ、イラツとしたのは置いといて……やっぱり、ハジエモンのアーティファクトは凄いな」

「だねえ〜」

「まさか、暗視ゴーグルも作れるなんてね……」

浩介が身に付けているゴーグルは、ハジメが作り出したアーティファクトだ。その名は、

——暗視ゴーグル型アーティファクト“ナイトビジョン”

ゴーグルには“夜目”が付与されており、その名の通り暗視ゴーグルである。

これは浩介達がハジメ達と別れる際に、ハジメから“宝物庫”の腕輪と共に渡された

物であり、三人の「宝物庫」にはそれぞれ、ライセンでも各々が戦えるようにとアーティファクトが収納されていた。

それを譲り受けた際、浩介は「ハジエモーン!!」と歓喜しながら叫んだが、「誰が猫型ロボットだ?」とツツコまれながらハジメに頭を叩かれていた。

「よし、最初の関門を突破したが、俺達の最初の迷宮がこんな感じだとなあ」

「ハジメつちがイラつくのも分かる」

「はいはい。そういうのいいから行く?」

初めての迷宮の雰囲気に乗気じゃない浩介と奈々の二人をパンパンと手を叩きながら妙子が呆れながらも、前に進もうと呼び掛けると、三人で奥の通路を警戒しながら進んで行くのであった。

三人が迷宮を攻略を始めてから数時間後。

たったそれだけの時間で、ミレディ・ライセンがどれだけウザイ人物かを浩介達は思いついて知らされていた。

まず、魔法をまともに使えない。谷底より遥かに強力に分解作用が働いている為だ。ハジメ曰く十倍の魔力効率で上級以上の魔法は使用できず、中級以下でも、射程が極端に短いらしく氷術師である奈々にとっては相当負担が掛かる場所である。

それに、魔力消費量が馬鹿にできないのだが、そこはハジエモンのおかげで、魔力回



復用の魔晶石が三人の「宝物庫」に入っており、特に奈々には二人の倍以上あるので役立たずにならずに済んでいるのだ。

浩介にとつても影響が出ている。「分身」や「影潜り」といった体の外部に魔力を形成・放出するタイプの固有魔法が全て使用不可といった状態（無理すれば出来る）。頼みの「深淵卿」は出来れば余り使いたくない。なので、浩介達の中で、まともに動けるのは操鞭師の妙子だけであつた。

その妙子はというと……

「頼りつて言つてもなあ……もう、私、疲れちゃつたよアビス」

「何がアビスだ？ コラ」

頭に手を当てながら、溜息を吐いてやさぐれていた。そして、地面に寝っ転がると「ヤダヤダ」と幼児退行しており、普段の妙子じゃ見せないだろう醜態を浩介達の前に曝けだしていた。

しかし、妙子の気持ちはよく分かるので、なんとも言えない浩介と奈々。いつもはボケ役の奈々すら、「タエ……」と呟きながら妙子をあやしている程だ。現在、それなりに進めてきた浩介達だが、ここに至るまでに実に様々なトラップや例のウザイ言葉の彫刻に遭遇してきた。そのせいで頑張つてた妙子が次第にやさぐれ、最終的に幼児退行してしまつたのである。

遂には「寝る。おんぶして」と言いだすので、浩介は妙子を背負いながらという状態で、底意地の悪過ぎるトラップを気を付けながら通路を進むことになった。

しばらくして複雑怪奇な空間に出た。そこは、階段や通路、奥へと続く入り口が何の規則性もなくごちゃごちゃに繋がりが合っており、まるでブロックを無造作に組み合わせたような場所だった。一階から伸びる階段が三階の通路へと繋がっているかと思えば、その三階の通路は緩やかなスロープとなつて一階の通路と繋がっていたり、二階から伸びる階段の先が、何もなかった壁だったり、本当にめちやくちやな構造だった。

「うわあ……ホントに迷宮みたいだあ〜」

「それに悪意トラップ付きだろ? ふざけんな」

「わあ、迷路だあ〜」

「おい、菅原。そろそろ幼児退行から戻れ」

おんぶされながら、抜けたような声を出す妙子。それに呆れ半分同情半分の視線を向けつつ、浩介は「さて、どう進もうか」と思索する。

「……浩ちゃん。どうすんの?」

「そだなあ……取り敢えず、こういう時で定番のマーキングとマッピングしながら進むしか方法はないな」

「それしかないかあ〜」

奈々の言葉に頷いた浩介は、迷宮探索で基本であるマッピングなどをすることにするが、この複雑な構造の迷宮にどれだけ正確に作成できるか、面倒くさそうに顔を顰めた。なお、マーキングに関してはハジエモンから暗くても発光する色をだすスプレーを貰っているので問題は無い。

浩介は早速、入り口に一番近い場所にある右脇の通路にスプレーをして進んでみることにした。通路は幅二メートル程で、レンガ造りの建築物のように無数のブロックが組み合わさって出来ていた。やはり壁そのものが薄つすらと発光しているので視界には困らない。

「凄いねえ〜これ。明かりには困らないねっ」

「そうだけどき宮崎。足元にも気を付けとけよ？　もしかしたらトラップがあるかもしれないだろ」

「そんな、浩ちゃん。私を馬鹿にしす——」

ガコンツ

浩介の返事をしながら歩く奈々の足が床のブロックを一つ踏み抜くと同時にガコンツと音が響く。よく見るとそのブロックだけ奈々の体重により沈んでいる。浩介達から「えっ？」と一斉にその足元を見て冷や汗を流す。特に踏み抜いた奈々は頭から物凄い冷や汗を流しながら笑みを浮かべる。

「宮崎?」

「アハハ……ゴメ——「避ける!」——へ?」

浩介の叫びが奈々の謝罪を遮る。その瞬間、

シヤアアアア!!

そんな刃が滑る音を響かせながら、左右の壁のブロックの隙間から高速回転・振動する円形でノコギリ状の刃が飛び出してきた。右の壁からは首の高さ、左の壁からは腰の高さで前方を薙ぐように迫ってくる。

浩介は咄嗟に背負っていた妙子を抱き締める形で、うつ伏せでしゃがみ込んで二本の凶悪な刃を回避する。奈々も「ひゃあああああ!!」と動揺と恐怖を含んだ揺れる声をだすも、上手くしゃがみ込んで回避したのだが、一秒でも遅れていたら、頭皮の毛が持つていかれただろう。

そんな、殺意と悪意がたつぷりと乗った二枚の刃は、浩介達を通り過ぎると何事もなかったように再び壁の中へと消えていった。第二陣を警戒してしばらく注意深く浩介。しかし、どうやら今ので終わりらしい。ホツと息を吐こうとしたが、浩介は猛烈な殺意を感じ取った。

「えっ、ちよっ? 浩ち——?!」

本能に命ずるがまま飛び出し、奈々を抱き抱えたまま困惑する奈々を回収して勢いの

ままに身を前方に投げ出す。直後、今まで浩介達がいた場所に、頭上からギロチンの如く無数の刃が射出され、バターの如く床にスつと食い込んでおり、先程の刃と同じように高速振動されていると分かる。浩介は、ダラリと冷や汗を流し尻餅を尽きながら、足先数センチ先にある床に食い込む刃を見詰める。奈々も顔面を蒼白させながら硬直していた。

「な、なんとか怪我がなくて済んだな……」

「ゴメン。浩ちん、流石にこれは助かったよ」

「構わねえよ。それより菅原は平気だったか？」

「……………え？ちよつ……………まつ、どういう状況？　なんで私、浩介に抱き締められてるの？」

「？」

「菅原？」

奈々と妙子の心配をする浩介。奈々の返事は聞こえたが抱き締めていた妙子からはブツブツとしか聞こえず、浩介は不思議に思つて妙子の顔を見ようとしますが……

「っ?!——いつまで抱き締めてんの!!」

「ぐほおっ?!」

殴られた。いつの間にか幼児退行から正気に戻っていた妙子だったが、神の悪戯イタズラなのか幼児退行していた時の記憶も残っており、そして今の自分の置かれた状況に顔をボ

ンツと真つ赤に染める。そして、目の前に見えたのは浩介の顔。

それが、引き金となり妙子は恥ずかしさの余り浩介を殴り飛ばされ、そのまま転がり壁へと激突した。奈々は突然の光景にポカンと口を開け、妙子はハツと自分のしでかした事に気付き浩介の方へと駆け寄りながら謝罪する。

「浩介……ゴメン」

「俺………なんかやつたけ？」

そんな、震えるような声音で呟く浩介の姿は、なんとも言えない哀愁感を漂わせていた……。

~~~~~

そんな事がありながら、妙子も無事復活（精神回復）し、通路を進んで行く浩介達は通路の奥の空間に出た。その部屋には三つの奥へと進む道がある。取り敢えスプレーだけしておき、三人は階下へと続く階段がある一番左の通路を選んだ。

「ねえ………なんだか物凄い嫌な予感がするんだけど」

「俺も同感だ」

階段の中段まで進んだ頃、突然、妙子がそんなことを言い出し、それに浩介が賛同す

る。

「二人共々。それはフラグが立つただけだからやめた方が『ガコン』……ほらっ、二人が変なこと言うから！」

「責任転嫁すんな!!」

奈々が話している最中に、嫌な音が響いたかと思うと、いきなり階段の段差が消えた。かなり傾斜のキツイ下り階段だったのだが、その階段の段差が引つ込みスロープとなった。しかもご丁寧地面の小さな無数の穴からタールのような色のよく滑る液体が溢れ出してきた。

「マジっ?!」

段差が引つ込んで、転倒仕掛けた浩介は咄嗟に小太刀で勢いよくブロックに突き刺してスパイク代わりにして堪える。妙子も奈々の咄嗟に浩介に飛びついたので二人も滑り落ちることはなかった。浩介が踏ん張ることを見越していたのだろう。流石、阿吽の呼吸である。

しかし、たったの小太刀一本で三人をこのまま維持すること物凄い出来ない。それに、浩介の腕の限界もある。

「……………うん。無理」

「ちよっ、簡単に諦めないで?!」

浩介の諦めの言葉と妙子の叫びが迷宮内に響くと同時に、小太刀がすっぽりと抜け、三人は滑り落ちていく。二人の絶叫が響く中、黙っていた奈々が落ちていたその時、両手を翳して声高らかに叫んだ。

「ここに絶氷あり 我等を守れ—— 氷壁!!」

その瞬間、三人の目の前に氷の壁が現れる。そのおかげで三人は下へと滑り落ちずに済んだ。叫んでいた二人は安堵して奈々の方へと視線を転じる。

「菅原、マジ助かった」

「奈々。助かったよ」

「ハアハア………ん、凄いでしよう! 私を褒め讃えよ!」

無理して、魔法を発動したので息が荒い奈々だが、二人の言葉に反応して、ドヤ顔でグツとポーズする。

「いやあ、ホントにやらかすだけだと思ったが見直したぜ。菅原」

「ホントにね」

「あれ? 褒めてるよね………ねえ?」

しかし、返ってきた二人の言葉に、予想と違った奈々は引き攣った笑みを見せるのだった。そして、少し氷壁の上で一息を吐くと下から物音が聞こえ、三人は何気なく下を見て盛大に後悔した。



カサカサカサ、ワシヤワシヤワシヤ、キイキイキイ、カサカサカサカサ

そんな音を立てながらおびただしい数のサソリが蠢いていたのだ。体長はどれも十センチ程だろう。もし、奈々の氷壁がなければ、三人はサソリの海に飛び込んでいたかと思うと、全身に鳥肌が立つ思いである。

「……………」

思わず黙り込んでしまう三人。下を見たくなくて、天井に視線を転じる。すると、なにやら発光する文字があることに気付いた。既に察してはいるが、つい読んでしまう三人。

「彼等に致死性の毒はありません。でも麻痺はするから存分にミレディさんの可愛いこの子達との添い寝を堪能してください。プギャー!!」

わざわざ煽る目的の為に作られただろう薄暗い空間でやたらと目立つ文字。ここにも落ちた者はきつと、サソリに全身を這い回れながら、麻痺する体を必死に動かして、葉にも縋る思いで天に手を伸ばすのだろう。そして、発見するのだ。このふざけた言葉

「……………」

また違う意味で黙り込む三人。「相手にするな、相手にするな」と自分に言い聞かせ、なんとか気を取り直すと周囲を観察する。

「あつ、タエ、浩ちん！ あそこ！」

「ん？」

「何かあったの？」

すると、奈々が何かに気付いたように上のある場所を指差した。そこにはぼつかりと穴が空いていた。

「あ、横穴じゃん。行ってみるか？」

「そうね……うん。あれぐらいなら私の鞭で行けるわ」

「じゃ、レッツゴォ〜」

三人は話し合つて、横穴に入ることを決めると妙子が鞭の先端にハジメから貫つた金属のアンカーを取り付けて鉤縄のようにすると、横穴の近くへと投げ入れると流石は操鞭師、一発で成功する。妙子はそのまま鞭を浩介に渡すと奈々と共に浩介に抱き着いた。そして、浩介はターザンの要領で移動して横穴へと無事に辿り着いた。

横穴の奥は明かりが照らされおらずと続いている。特に枝分かれした通路もあるわけでもなく、ただ見える範囲でひたすら真っ直ぐであり、今までのミレディの意地の悪さからして捻りの無さが逆に怪しい。

警戒しつつも、道なりに先へと進む三人。数百メートルは進んだが代わり映えのしない規則正しい石造りの通路は、微妙に距離感を狂わせる。同じ場所をずっと歩き続けて

いるような錯覚に陥りそうになる。

なんとなく気分が悪くなってきた浩介達だったが、まるで、そんな心情を見越したように変化が現れた。前方に大部屋が見えたのだ。浩介と妙子は何かありそうだと怪しむが、ただ一人の戦犯が笑みを浮かべて走り出した。

「わあ、やつと部屋だよー！」

「ちよつと！奈々、ストップ！止まって！」

「おい、菅原ア！止まっ——『ガコンツ』——」

二人の言葉を無視するかのように部屋へと駆ける奈々。そして、浩介の言葉より奈々が早く部屋に踏み込んだ直後、ガコンツとお馴染みの音色が響き、浩介の言葉を掻き消した。

「あー……………メンゴ☆」

ブチッ、二人の額に青筋が浮き立つ。一方、顔から物凄い量の冷や汗を流しながら奈々は浩介達の方へと向き直ると両手を合わせて舌をチロつと出して謝るが……

「……………それで、許されるかあ!!」

「ゴメンなさーい!!」

ライセン大迷宮に男女二人の怒号と一人の謝罪の声が響き渡ったのだった……。

## 深淵二話 ライセン大迷宮 上

神代魔法を手に入れる為、浩介達三人はライセン大迷宮に突入したのだが……

「……………それで、許されるかあ!!」

「ゴメンなきーい!!」

突入して数時間後、ライセン大迷宮内では、男女二人の怒号と一人の謝罪の音が響き渡っており、ホントに迷宮攻略をしてるのかという感じになっていた……。

「っ、今度は……………天井?!」

「どうしよ、どうしよ?!」

「おい、二人共!俺に捕まれ!」

全員が頭上に注意を向けた瞬間、奈々の言葉通り、天井が降ってきた。なんとも古典的なトラップであるが、魔法効率が著しく難しいこの領域で、範囲型のトラップは反則だ。もし、通路から部屋を見ていた者がいたのなら、きつとズシャッ!という音と共に、部屋が消えて通路が突然、壁に覆われたように見えただろう。通路の入り口を完全に塞ぐ形で天井が落ちて来たのだ。傍から見れば、一瞬で行き止まりとなった通路のみ。

静寂が漂う。

一見すれば、部屋全体を押し潰した天井により、中にいた浩介達も圧殺されたかと思えない状況だ。静寂がそれを後押ししている。が、数分後。浩介達が入って来たのは反対側の壁に面する通路。その床に直径二メートル程の長さの水溜まりのような黒い影が現れたかと思うと、スつと黒い影から這い出ようと人の手が現れる。そこから這い出たのはもちろん、浩介、妙子、奈々の三人である。

「ぜはっー、ぜはっー、死ぬかと思った」

「浩介、ホントに助かったわ。ありがとう」

「初めて入ったけど、影の中って凄いな！」

逃げ場がなく、奥の通路までは距離があり過ぎて間に合いそうになくて、咄嗟に浩介が叫んで、二人が浩介に飛びつくと、その瞬間、浩介は自分の固有技能の“影潜り”を発動して影に潜ることで、どうにか三人は窮地を脱した。

もつとも、強力な魔力分解作用のせいで影に潜ることにいつもの数十倍の魔力をこつそりと持つていかれ、更には二人を連れて影の中を移動して出口へと向かった訳なので、浩介は限界に近く影の中から出ると仰向けで倒れると、息が荒くなりながらも口を開いた。

「ハアハア……無理だ。宝物庫を使える気力もねえ……」

「なら、はい浩介。私の使って」

「ハア、菅原。助かる……………」

息を切らして、*“宝物庫”*を開けられないでいる浩介に、妙子が自分の*“宝物庫”*から魔晶石を取り出すと浩介に差し出した。浩介は貰った魔晶石である程度回復すると、体の倦怠感は多少残るも「よし！」と気合い入れて立ち上がった。

「いや、浩ちゃんナイスウー！」

自分のやったことを忘れたのか、上手くいったなら全て良し☆と感じの奈々に、ブチツ、二人の額に再び青筋が浮き立つ。と、妙子が奈々の両頬を引っ張りながら叱つた。

「元はと言えば、アンタが原因でしょう！」

「ハフアイツ！ホメ〜ンナサイ〜」

何を言っているのか分からないが、謝っているの理解出来る。そして、そんな光景を見た浩介は今後から妙子を怒らせないようにしようと心の中で誓うのだった。

「ん？」

ふと、立ち上がった場所から見たことある文字を発見する。そして、視界に入ったのいつものウザイ文だった。

「ぶぶー、焦ってやんの、ダサアーい」

ミレディ・ライセン……嫌がらせに努力を惜しまない奴だと再認識する。  
「……」

浩介は黙ってしまふ。その表情は何かも抜け落ちたような何も感情の見えない表情で、人が見たら恐怖を与えそうなくらいだ。ふつつつと静かな怒りが溢れるせいで目をピクつかせていると、そこへ妙子が浩介の頭を軽くチョップした。

「あ、いつて」

「そんなに、イラついてると周りが見えなくなるでしょ？」

「そうだよ、浩ちゃん！」

「お前等……そうだな、スマン。ん、じゃ気を取り直して行くかつ」

「うん！」

二人の励ましで、なんとか気を取り直せた浩介。そして、休憩が終わると奥の通路へと進んだ三人は、その後も、進む通路、辿り着く部屋の尽くで罨が待ち受けていた。突如、全方位から飛来する毒矢、硫酸らしき、物を溶かす液体がたっぷり入った落とし穴、アリジゴクのように床が砂状化し、その中央にワーム型の魔物が待ち受ける部屋、そして定番になりつつあるウザイ文。三人のストレスがマッハに到達しそうである。

それでも全てのトラップを突破し、この迷宮に入って一番大きな通路に出た。幅は六、七メートルといったところだろう。結構急なスロープ状の通路で緩やかに右に曲

がっている。おそらく螺旋状に下っていく通路なのだろう。

三人は警戒する。こんな如何にも通路でなんのトラップも作動しないなど有り得ない。そして、その考えは正しかった。もう嫌というほど聞いてきた『ガコンツ』という何かが作動する音が響く。既に、スイッチを押そうが押すまいが関係なく発動している気がする。

——なら、スイッチなんか凝った感じなもん作ってんじやねえよ！

とへ盛大にツツコミを口にしなかった浩介だったが、きつとそんな思いもミレデイ・ライセンを喜ばせるに違いないとグツと堪える。

「今度はどんな——」

今度はどんなトラップだ？と浩介達の耳にそれは聞こえてきた。

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロ

明らかになにか重たいものがこちらに転がってくる音である。

「……………」

三人が無言で顔を合わせ、同時に頭上を見上げた。スロープの上方はカーブとなつているため先は見えないが、異音は次第に大きくなり、そして…………

カーブの奥から通路と同じ大きさの巨大な大岩が転がって来た。岩で出来た大玉である。全くもって定番のトラップだ。きつと逃げた先は、またウザイ文があるに違いな



い。

三人はすぐさま踵を返し脱兎の如く逃げ出そうとする。しかし、少し進んで直ぐに浩介だけが立ち止まった。

「えっ浩介?!」

「浩ちゃん?!」

二人の呼び掛けに、しかし浩介は答えず、それどころか大岩の方へと振り返ると、  
“宝物庫”から数本の一風変わったクナイを取り出した。そして、クナイに刻まれた魔法陣に魔力を込めるとクナイが紅く輝きだす。浩介は、轟音を響かせながら迫ってくる大玉を真つ直ぐ見詰め、声高らかに叫ぶ。

「ずっと正当なルートを通っていんのか分からねえし、毎回来る糞トラップとあの煽り文字! 煽られてるだけじゃ……気が済まねえんだよ!!」

正に今まで溜まったストレスをぶつけるかのように大玉に向かって両手で持っていた数本の紅色に輝くクナイを投げる。クナイ達はハジメのような紅い閃光のように物凄い速さで大玉に接近して、刃先が大玉に突き刺さる。そして……

ドガアアアアン!! 凄まじい爆発音を響かせながらクナイが突き刺さった箇所から紅色の爆発が起こる。その光景は紅色の華が咲き誇り一瞬で花卉が舞い散ったように見えた。そして、クナイによる爆撃は衝点 $\square$ を中心に大玉を粉碎していき、全体に亀裂

が生じていき、次の瞬間には、大玉は轟音を響かせながら木っ端微塵に砕け散った。

浩介は、クナイを投げた体勢から全く動かない状態で残心し、やがてフツと気を抜くと体勢を立て直した。そして、妙子と奈々の方へ振り返った。

その顔は、この大迷宮に入ってから一番だと思うくらい清々しいものだった。「やってやったぜ！」という気持ちが無実な表情にあらわれている。浩介自身も相当、作動させなくても作動するトラップとその後のウザイ文にストレスが溜まっていたようだ。

浩介が今回使ったのは、ハジエモン（ハジメ）から貰い受けたアーティファクトの一つだった。

—— 衝撃爆破型アーティファクト “セキバク紅爆”

大玉を木っ端微塵にしたあのクナイは、クナイの持ち手に刻まれた魔法陣に魔力を流し込むことで、内部に埋め込まれた爆薬発電機が起動して、刃先に衝撃が起ることで小規模な爆発を起こすことができ、魔力を流さなくても普通のクナイとして、運用が出来る使い勝手が良い武器である。

これは、ハジメが浩介の為に創り出した力作の一つであるが、数も少なく“宝物庫”に備わっているのは精々三十本ぐらいで余り使うのは控えていた切り札の一つなので……我慢出来なかつたようだ。

満足気で戻って来た浩介を妙子と奈々がはしゃいだ様子で迎えた。

「浩ちん、ナイスウ!!私、見ててスッキリしたあ!」

「私も見ててスッキリしたけど浩介。大丈夫なの? それ、使っちゃって?」

「まあ、そうだけど使ったのは五本だし、余裕もあるから大丈夫——」

二人の言葉に気分良く答える浩介。しかし、その言葉は途中で遮られてしまった。

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴ

という聞き覚えのある音によって。浩介は、笑顔のまま固まる。同じく笑顔で固まっている奈々とニコニコ顔から頬が引き攣り、眉がピクピクと動いている妙子。ギギギと油を差し忘れた機械のようにぎこちなく背後を振り向いた浩介の目に映ったのは……

——黒光りする金属製の大玉だった。

「Wow」

浩介が思わず笑顔を引き攣らせながら英語で呟く。

「ね、ねえ浩ちん。……私の目にはなにか変な液体を撒き散らしながら転がってくるように見えるんだけど気のせいかな?」

「嘘……アレ、溶けてきてるじゃん」

そう、こともあろうに金属製の大きな大玉は表面に空いた小さな無数の穴から液体を撒き散らしながら迫ってきており、その液体が付着した場所がシユワーという実にヤバイ音を響かせながら溶けているようである。妙子と奈々は逃げようと踵を返すが浩介が逃げ

ようとしてないと気付き二人も足が止まる。

「浩介（ちゃん）?!」

「……物は試しだろ?」

二人の声すら押し退けて浩介は、また「宝物庫」から「紅爆」を一本取り出すと、魔法陣に魔力を流して紅く輝くそれをフツと音を立てながら投げける。「紅爆」は風を切りながら金属球へと迫る。三人はその光景をゴクリと唾を飲み込みながら真剣に見守る。

解き放たれた紅い閃光は、金属球獲物へと迫り、そして……

金属球の表面を覆う液体のせいでも、刃先が衝突せずに当たらず、「紅爆」はアザンチウム鉱石を使っているのですぐに溶けずに、そのままツルツと滑って金属球の後方へと紅の閃光は向かっていった。

直後、金属球の後ろで紅色の華が咲いたのが見えた。

「「……………」」

浩介は、それを確認し一度「ふう〜」と息を吐くと、笑顔のまま再び妙子達の方を向いた。そして、奈々のように舌をペロツ☆と出してドジっ娘みたいなポーズをしたかと思ふと「ゴメン。駄目だった〜」とアハハ〜と笑いながら謝罪すると、いきなりスプリンターも真つ青な見事な踏切でスロープを駆け下りていった。妙子と奈々も、一瞬間を

見合わせるとクルリと踵を返し浩介を追って一気に駆け出した。

背後からは、溶解液を撒き散らす金属球が凄まじい音を響かせながら徐々に速度を上げて迫る。

「イヤアアアア!! 轢かれた上に溶けるなんて死に方は嫌だああ!! 死ぬのも嫌だけど!!」

「奈々、喋らず走って! それに、あの馬鹿厨二浩介に制裁を加えないと!!」

通路内に奈々の泣き言と妙子の怒りの声が木霊する。

「つていうか、浩ちゃん! 失敗した挙句、先に逃げるなんて薄情者お〜!」

先を走る浩介に向かって奈々が抗議の声を上げる。

「いや、次も成功するかなーと思っただけどき……駄目だった☆」

「……縛りつけようかしら」

「やめてっ、その笑みもっ、怖いから!」

浩介は自分の言葉にキレたのか鞭を手に持ちながら笑みをこちらに向ける妙子の言葉に戦慄する。

「そうだよ! 縛り上げちゃってタエ!」

「安心して、奈々も縛りあげるから♡」

「すみません! やめて下さい妙子様!!」

「よし、宮崎。お前も道ずれだ」

「ハアツ？そもそも浩ちんが変なことするからじゃん！」

「んな、ふざけんな！俺より宮崎の方がやらかしてるからな！」

「今は、浩ちんのせいじゃん！」

「ん、だとう?!」

「うるさい。ホントに二人まとめて縛り上げるわよ？」

「すみませんでしたあ!!」

必死に逃げながらも、言い争いをしている三人。ホントに自分達の危機を理解しているのか分らない。

そうこうしている内に通路の終わりが見えた。

「出口が見えた。真下に降りるぞ！」

「わかった！」

「了、解！」

三人はスライディングをするように通路の先の部屋に飛び込み、出口の真下へと落下した。そして、

「ファッ?!」

「えっ?!」

「ひんっ?!」

三者三様の呻き声を上げた。出口の真下が明らかにヤバそうな液体で満たされてプールになっていたからだ。

「んのクソ迷宮めえ!!」

浩介は咄嗟に、「宝物庫」からワイヤー付きのクナイを取り出し、ワイヤーの持ち手を片方の手に持つとクナイを壁へと投げ付ける。クナイは壁に突き刺さると更にクナイに内設されたアンカーが射出されて固定をする。そして、一緒に落下している二人を助けようと視線を上に向ける。

しかし……

「あ——」

それは、ある意味ミスだった。上にいる二人の服装はスカート。そして、先に落下して二人の下にいる浩介が上を視線を向ければ必然的に見えてしまったのだ。水色と黒色が……

「——」

「浩ちゃん?!」

「っ、浩介?!」

浩介の突然の行動と、視線の先を察した奈々と妙子は顔を真っ赤にし、バツと手でス

カートを抑えて声を上げる。浩介は一瞬放心するも、ハツと首を振って気を取り直すと上にいる二人を掴まえプールへのダイブを回避した。

直後、頭上を、溶解液で撒き散らしながら金属球が飛び出していき、眼下のプールへと落下した。そのままズブズブと煙を吹き上げながら沈んでいく。

「吹き散らせ——『風壁』」

妙子の風魔法で飛び散った溶解液が吹き散らされる。しばらく、周囲の警戒をしたが特に何も起こらないので、浩介はようやく肩の力を抜いた。

「ふう——っ痛え?!」

が、安堵した途端、腹部に痛みが走る。怪我でもしたかと思っただが、腹部の方を見たなら妙子と奈々の二人に抓られていた。それもジト目付きで……

「あのー、二人共、少し痛いんですが……」

「浩ちゃん……見たでしょ?」

「浩介? 私達のスカートの中を見たよね?」

その言葉に浩介は、冷や汗が流れる。そして、考える。嘘を言うのか、本当のことを言うのかを。二人共、五年ぐらいの仲であり大切な存在だ。そんな者達に自分は、どう答えるべきか……

——二人は大切な存在だ。そんな二人に嘘を言つて良いのか?



その良心が頭に過ぎった浩介の出した答えは……………

「サーセン……………見ちゃいました」

そう言った瞬間、二人は恥ずかしそうに少し顔を赤く染めるも、すぐに表情が直ると何も言わずに浩介に掴まりながらジツと此方を見詰めている。その沈黙が浩介にとつては恐怖などの感情が物凄く襲い掛かる。冷や汗も止まらない程だ。

そして、もうこの空気に耐えきれないと思った時だった。二人は溜息を一つすると、しようがない人を見るような目で此方を見る。

「まあ、良いわ。それに、私達もスカートだったことも悪いしね」

「うん。恥ずかしいけど、浩ちゃんが正直に言ったから許す！」

「……………お前等っ」

二人の言葉に、浩介は嬉しきでパアツと笑みを見せて顔を上げる。二人の自分に対する信頼の高さで事を回避した浩介だが、もし嘘を言ったらどうした？と聞くと妙子は満面な笑みで「う〜ん。半殺し♡」と可愛いらしい声音で声音と合わないほど恐ろしいことを言うので、浩介は内心、自分の選択に心から安堵した。

そんな事がありながらも浩介達三人は、下に溶解液のプール、自分達もぶら下がり状態にずっといられないので、アンカーを利用して振り子の要領で移動し、溶解液のプールを飛び越えて今度こそ部屋の地面に着地した。

その部屋は長方形の奥行きがある部屋だった。壁の両サイドには無数の窪みがあり、騎士甲冑を纏い大剣と盾を装備した全長を二メートルほどの像が並び立っており、浩介は「ほえー」と口を開けながらその甲冑の像をみており、奈々は「怖あ……」と少し怯えながら浩介の服の袖を掴みながらすぐ後ろを歩き、妙子はそんな二人を尻目に羨ましそうに見ていた。

そして、部屋の一番禺には大きな階段があり、その先には祭壇のような場所と、奥の壁に荘厳な扉があった。祭壇の上には菱形の黄色い水晶のようなものが設置されている。奈々に掴まれているせいで動き辛いが浩介は周囲を見渡しながらか微妙に顔を顰めた。

「如何にも扉だ。じゃあ此処がハジメの言っていた解放者の隠れ家……いや、この甲冑の数に嫌な予感がするな……」

「それ、お約束じゃない?」

「それって、襲われるじゃん!!」

そんなことを話しながら三人が部屋の途中まで進んだとき、確かに妙子の言ったお約束はちゃんと守られた。毎度お馴染みのあの音である。

ガコン。

ピタリと止まる三人。内心「やっぱりなあゝ」と思いつつ周囲を見ると、騎士達の兜

の隙間から見えている眼の部分が光り輝いた。そして、ガシャガシャと金属の擦れ合う音を立てながら窪みから騎士達が抜け出てきた。その数、そう勢三十体。騎士達は、スつと腰を落とすと盾を前面に掲げつつ大剣を突き型の型で構えた。そして、人ならざる存在のくせに、すり足をしながらジリジリと包囲網を狭めていく。

「数は多いけど、倒すしかないな……行くぞ二人共」

「ええ！」

「勿論！」

妙子は鞭を振るってパアンツと勢いよく地面を叩いていい音を鳴らしながら笑みを浮かべる。

奈々は、この中で一番火力不足だが、二人のやる気に圧倒され、自分もやるしかない。とサポートに回ろうと思いつながら構える。

浩介は黒塗りのサングラスをスつと胸元のポケットから取り出す。サングラスを着るとその瞬間、浩介はジャンプをしバク宙をすると要らぬターンを決めて着地した。

そして、声高らかに笑い始めた。

「フハハハハハッ!! 刻は満ちた！」

笑い、叫ぶ度に浩介の周りに深淵の魔力が溢れ迸っていく。

「ご唱和下さい我の名を！深淵卿！ コウスケ・E・アビイイツスゲエツト！！」  
そう叫ぶアビスゲート。しかし、以前のベヒモス戦のようになかった。それもそ  
うだろう。ここに居る者達は片やゴーレム。片や顔を赤くして恥ずかしそうに顔を隠  
してる幼なじみ二人。だが、アビスゲートは羞恥心なんて置いて来たぜ！と思わせるほ  
ど平然とターンを決めると……

「我、見参」

何事もなかったように、小太刀を構えだしたのだった……。





















深淵三話  
ライセン大迷宮 中

ライセン大迷宮に、余計なターンを決める共に闇の貴公子が、深淵卿が現れた。

「我の名は深淵卿。コウスケエエ・E・アビイウスゲエイト!!」

小太刀を構えながら声高らかに叫ぶアビスゲートに、後方にいる二人は恥ずかしそうに顔を赤くしながら話していた。

「うう、タエく。なんか私達が恥ずかしいよお」

「そう、ね……アレと一緒に戦ってた優花の気持ちがあつた気がする」

「うん……ユウカつち可哀想」

二人は自分達の幼なじみの変わり様とその臭い発言に羞恥心でダメージを負い、可哀想な人を見る目でアビスゲートを見る。そして、アレと一緒に戦つてベヒモスを討伐した優花に同情していた。

すると、前にいたアビスゲートが二人の方へと振り返ると頭に手を当てながら妙にカッコつけながら話し掛けて来た。

「二人共、何をしている？まさか、私の魅力に見蕩れてしまったか……流石は我つ、なん

と罪深い」

「……………」

アビスゲートの言葉に二人は「アレ、コイツ……ミレデイより腹立つかもしれない」と思いながら無言で蔑むような目でアビスゲートを見る。しかし、そんな視線にアビスゲートは笑って返す。

「だがっ、そんな視線で我は怯まない。だって我は深淵——」

「はいはい。そんな変にポーズ決めなくていいからやろ？」

「浩ちゃん、ダサイよ？」

呆れたように言う妙子の言葉と辛辣な言葉を笑みで言う奈々に、アビスゲートは言葉を失うも、すぐさま立ち直る。

「承ったぞ二人共。しかし、奈々よ……我は浩ちゃんではないアビスゲートだ」

「……………ハア」

三十体のゴーレム騎士を前に、戦う前から何処か疲れたような表情をする妙子と奈々。そして、反対に嬉々としてヤル気満々のアビスゲートのせいで場の空気が混沌カオスとなつている中、ゴーレム騎士達はそんな事はいず知らず一斉に侵入者達を切り裂かんと襲い掛かった。

ゴーレム騎士達の動きは、その巨体と姿に似合わず俊敏だった。ガシャンガシャンと

騒音を立てながら急速に迫るその姿は、装備している武器や眼光に相まって凄まじい迫力である。

そんな、ゴーレム騎士達に向けて先手を取ったのはアビスゲートだ。片方の手に小太刀、もう片方に数本のクナイを装備するとクナイ達を騎士達に投げ付けるとそれに合わせてアビスゲートもゴーレム騎士達のすぐ側まで近付くと自身の魔力で強化した小太刀で斬りかかった。

アビスゲートが投げた。クナイ達は三体のゴーレムに直撃する。ハジメほど正確ではないが、肩や足などを直撃して其処の体の部位ごとを吹き飛ばす。小太刀では、正確に首などの関節部分を中心に斬り裂いてゴーレム騎士達を倒して地面に倒れ伏す。

それを軽やかに飛び越えて後続の騎士達が浩介達へと迫る。しかし、  
「遅い、<sup>アビス・スラッシュ</sup>深淵斬！」

「影潜り」を使って、騎士達の背後をつくと闇の魔力（アビスの自己解釈）を纏わせ、た小太刀で首から上を撥ね、騎士達の頭部が宙を舞っていく。

そんなアビスゲートの神出鬼没な攻撃の魔の手を盾と大剣と仲間の体で凌ぎながら、遂にアビスゲートが守っていた妙子達の目前へと迫った数体の騎士。

だが、其処はツインテールの少し暗い茶髪をなびかせ、鞭を構える妙子のキルゾーンであった。



「――『風刃』起動」

その言葉と共に、ハジメから貰った鞭――『トルネーグ』に刻まれた魔法陣が輝きだし鞭の周りに風の刃が纏いだす。妙子はそのままトルネーグを迫りくる騎士達に向かつて回避不可能の一撃を繰り出す。

「――『大蛇』!!」

正に、大蛇。鞭が獣へと獲物を狙い喰らう蛇のように動き、風を切り裂く刃が迫りくるゴーレム騎士達を襲う。一応、盾を構えていた騎士ですら、バターを切り裂くようにスツといとも簡単にその防御ごと騎士を真つ二つにする。

他の騎士達も妙子へ大剣を持って迫ろうとするも、妙子の思い通りに動く大蛇が後ろから、横から、斜めから腕を足を胴体を削ぎ落としゴーレム騎士達の進軍を止まらせる。

しかし、妙子の『トルネーグ』はなぜ簡単に鉄すらも切り裂けるのはトルネーグが鉋石で出来ていて風の刃を纏える理由もあるが、妙子の操鞭術の派生技能『蛇動』のおかげでもある。『蛇動』によってトルネーグの硬度を上げ更に鋭さを増すことで風の刃の攻撃が更に上乘せれているのだった。

「はああっ」

妙子は風の刃を解くと、一体のゴーレムトルネーグで動けないように拘束すると、鞭を両手で持つとコマのようにグルグルとその場で回り出す。そして、回ることが発生し

た遠心力で拘束されたゴーレム騎士が宙を舞い妙子と同じように回る。

「それっ」

まるでゴーレム騎士は、ただの騎士の形をした武器へと成れ果ててしまいゴーレム騎士達に襲い掛かる。直撃を受けた騎士達は、体をくの字に折り曲げて、まるで高速トラックに轢かれたかのようにぶつ飛んでいき、後ろから迫って来ていた騎士達を巻き込み地面に叩きつけられたり、壁へと激突する。騎士の胴体とかは、原形を止めないほどひしゃげており身動きが取れなくなっている。拘束された騎士も拘束が外れ、一緒に回っていたせいかわ物凄い速さで壁へと激突して胴体から上が壁の中に埋まり足がだらんと垂れ下がっている。

ヒュンヒュンと、そんな風切り音が妙子の耳に入る。そして、チラリと上を見ると、先程のゴーレム騎士達の中野一体が振り上げただろう一つの大剣が、妙子に振り回された際に手放されたようで上空から回転しながら落下してくるところだった。

「空に舞え 高く 荒々しく 咲け旋風の華よ その花卉を美しく吹き散らせ—

— 旋風華—！」

長い詠唱の末、妙子の上に緑の華が咲いた。その華は旋風を巻き起こし妙子を守るように咲き誇る。そして、落ちてきた大剣を旋風の華は下への侵入を拒み、風によって軌道を逸らしてゴーレム騎士に狙いを定め射出した。

大剣は風の勢いも加わり尋常じやない速度で飛翔し、ゴーレム騎士が構えた盾に衝突して大きく弾く。妙子はその隙を逃さず踏み込み、

「切り裂け 風よ 我が剣となれ—— 旋風刃<sup>せんふうじん</sup>」！

駆ける中、詠唱を完了した妙子の左腕からは緑の刃が纏い出して大剣の反動でまだ体勢を立て直していないゴーレム騎士を胴体を切り裂いた。切り裂かれたゴーレム騎士は地面に激突する。

妙子の口元に笑みが浮かぶ。戦いに快楽を覚えたからではない。自分がきちんと戦えてることに喜びを覚えているのだ。自分は浩介達の足手纏いとなっていないこと、黒竜<sup>テイオ</sup>との戦いの際、優花の殺された際に何も手足も出せなかった自分が戦えていることを実感する。

妙子は魔力を回復する為に「宝物庫」から魔力回復薬の入った瓶を飲もうとした瞬間、ほんの少しだけ気が抜けてしまう。だが、戦場で、その緩みは致命的であり、気が付けば視線いっぱいには騎士の盾が迫っていた。なんとゴーレム騎士の一体が自分の盾を妙子に向かって投げ付けたのである。流石ゴーレムというべきか。途轍もない勢いで飛ばされたそれは、妙子にとって当たりどころが悪ければ致命傷になるレベルである。そうなれば、一気に畳み込まれるだろうことは容易に想像できる。

まさか、盾を投げ付けるなどといった本職の騎士でもしなさそうな泥臭い戦い方を

ゴーレム騎士がするとは思わなかった妙子。もはや、「しまった」と思う余裕もなく、目を瞑って襲い来る衝突に覚悟を決める。と、盾が妙子に衝突する寸前で何かよって弾き飛ばされていた。

「フツ、油断大敵だな」

声が聞こえ、妙子が目を開けると目の前には浩介……いや、アビスゲートが自分を守るよう其処に立っていた。

「え、浩介。なんで此処に？」

「フツ、其方の危機を感じて駆けつけたただけだ。それに我はアビスゲートだぞ我が深淵の友よ」

「それ、やめて殴るわよ？」

「あ、ハイ」

「……でも、ありがとう」

「……うむ」

アビスゲートは自分も多数のゴーレム騎士達を抑えている中、妙子に盾を投げ付けようとしているゴーレム騎士を見て、「影移動」を使って駆けつけたらしい。そんな無理をして助けてくれたことに妙子は嬉しくて頬が熱くなるのを感じる。そして、油断してたことを反省して自分の頬をパンツと叩くと気を引き締め直す。

「よし……うん浩介。大丈——ほえ？」

大丈夫だから。と言おうとした矢先、アビスゲートにお姫様抱っこされた妙子。突然の事で言葉を失い、一秒ほど放心して、この事態を把握して慌てふためく。

「え？ ちよつ浩介?!は、恥ずかしいから降ろして！」

「それは出来ぬ申し出だな」

「いや、敵が、敵が迫ってるから!!」

そう。妙子の言う通り、二人に向かつて浩介が抑えていた奴等も含め多数のゴーレム騎士が迫ってきていた。アビスゲートの腕の中で抱えながら暴れる妙子に対してアビスゲートはフツと笑って、

「安心しろ。アレの相手しなくても我等の頼もしい仲間がやってくれる」

「まっ——「行くぞ」——えっ、ちよつ?!」

そう返して妙子の言葉を遮ってアビスゲートは、彼女を抱えて上へと飛翔して後退しながら、もう一人の仲間に合図する。

「今だ!!」

「了解〜!」

アビスゲートの合図を軽く返したもう一人の仲間である奈々が“宝物庫”から取り出した試験管を五、六本を両手で持つと、ゴーレム騎士達に向かって投げ付ける。奈々

は片手を突き出すと投げた試験管がゴーレム騎士達に直撃する前に事前に詠唱して最後の言葉を口にした。

「『氷槍』！」

その言葉と同時にゴーレム騎士達に向かって飛翔する試験管からパリンツとガラスが割れ、計六の氷の槍へと変わりゴーレム騎士の数体を串刺しにする。

「かゝらゝのつ、『散弾』！」

続けられた奈々の言葉で、ゴーレム騎士を串刺しにした氷槍から更に氷の槍が形成されていき、串刺しにされていないゴーレム騎士達を串刺しにし、またそこから氷の槍が形成されるという、正に連鎖攻撃の嵐がゴーレム騎士達を襲う。その光景を見て、アビスゲートと共に奈々の後ろに後退していた妙子は戦慄していた。

「えげつな……」

「フツ、正に連鎖の氷……エターナルチェイン・ブリザード永久連鎖の氷撃だな」

「……………(ダサ)」

アビスゲートは何かを言ってるか、ツツコむ気が無いので妙子は無視にすることにした。すると、前にいる奈々が此方に駆け寄って来た。

「二人共々。どうだった私の二連詠唱攻撃」

笑って口にする奈々だが、二連詠唱は、相当技術が必要な高等詠唱で、普通なら十数

年かけて魔法の修練しても出来ない者もいる。だが、奈々は此処ライセン。魔力分解作用が働くこの地で詠唱や魔法陣の構成で時間の掛かるも成功させたのである。だから妙子はホントに二連詠唱を成功した奈々に驚いた妙子。

「ホントに凄かった……えげつないくらい」

「うむ、素晴らしかったぞ。其方の氷連撃縛鎖」  
エターナルチェイン・ブリザード

「ふえ？ エターなチェリーぶり？」

「気にしないで奈々。ただの厨二発言だから……って何か前のと言葉の意味合い違くない？」

妙子の指摘にアビスゲートは「フツ、そういうことさ」と笑って返し、その返答に二人は「は？」と首を傾げる。

「……そんなことより、我が深淵の同士達よ！今は喋るより彼処のことを気にした方が良いと思うぞで？」

アビスゲートが指差す先には、残ったゴーレム騎士達がいる。三人はそれを見て頷き合うと

「魔力、足りるかなあ……」

「じゃ、切れる前に片付ければ良いのよ。ね、浩介」

「無論、奴等は我が深淵が飲む込むまでっ、参る！」

迫りくるゴーレム騎士達を前に堂々と待ち構えていた。それからの三人の連携は素晴らしかった。アビスゲートは騎士の振り下ろした大剣を小太刀で受け流し、右足を上げて靴に仕込んでいたクナイを出すとそのまま騎士の頭を蹴り上げる。そして、妙子が鞭で前方を奈々が後方でゴーレム騎士達の侵入を阻み、アビスゲートの元へと誘導させていく。

「浩介!!」

「——承知!」

ゴーレム騎士達を一点に集中させ、それを一人で相対していたアビスゲートが妙子の言葉に反応して、答えるとすぐに天井に水の入った水瓶を固定させるとその場を離脱するように後退する。それと同時に妙子の鞭の攻撃の嵐が襲う。

「はあああああつ……奈々あ!」

「まっ、かせてえ!! 氷の雨よ 凍てつく雫よ 氷の涙よ降り注げ——『凍雨』!」

鞭の嵐から、追撃とばかりに奈々の詠唱が終えた瞬間、アビスゲートが後退する前に、天井に設置していた水瓶が割れ、氷の雨が下のゴーレム騎士達へと降り注ぐ。

そうやって三人はゴーレム騎士達を次々と屠っていった。だが……

「……………」

ゴーレム騎士達の襲撃を躲し反撃しながら、アビスゲートは訝しそうに眉を寄せた。



というのも、先程から三人で相当な数のゴーレム騎士を屠ったはずなのだが、迫り来る彼等の数が一向に減つてゐる様子が無いのだ。

その疑問は、妙子と奈々も感じたらしい。そして、よくよく戦場を観察してみれば、奈々が氷槍で串刺しにしたはずのゴーレム騎士達の姿がどこにもないことに気付いた。

「ねえ、やっぱ再生してるよね？この騎士達……」

「同意だ。我もその見解に至った」

「ええっ、面倒くさっ。キリがないじゃん！」

そう、ゴーレム騎士達は破壊された後も眼光と同じ光を一瞬全身に宿すとゾンビのように瞬く間に再生して再び戦列に加わっていたのである。

奈々が「氷壁」で迫り来るゴーレム騎士達を抑えながら狼狽えた声を出した。どれだけ倒しても相手は再生して、一方自分達は魔力が消費されるだけだと、そんな声を出したくなるだろう。

妙子もこの状況は駄目だと理解しながらも打開策が見当たらず、経験の少なさで攻撃にも隙が生じていた。その時だった。背後から大剣を振り下ろそうとするゴーレムの騎士の存在に気付くのに遅れてしまう。

「——っ?!」

しかし、それが戦いの場では命取り。妙子はすぐに対処しようとして振り向くが、自分の

死を連想してしまったせいか手が震えて体が上手く動かない。恐怖で目を瞑ってしま  
う。

しかし……

何時になつても切られないことに、疑問に感じた妙子は、薄目で目の前の光景を見る。

「——へ？」

そして、その目の前に映つた光景に妙子は目を大きく見開いた。そこには、

「フツ……闇に染まつて散れ」

浩……いや、アビスゲートが二本の小太刀を持つて交差させながら自分を切りかかろ  
うとしたゴースト騎士の首を跳ね飛ばし華麗に着地している光景だった。

「浩介、あり——失礼するぞ？タエ——っ?!」

ありがとう。と礼を言おうとした妙子の言葉は、アビスゲートに抱えられたことによ  
り遮られ、そのままアビスゲートは急に抱えられ「え？え？」と困惑する奈々も回収す  
ると、祭壇と扉側の付近の場所へと着地して抱えていた二人を降ろす。しかし、二人は  
アビスゲートの行動の意図が分からなかった。

「ちよつと、浩介！今さっきは助かったけどどうしたの？」

「そうだよ。浩ちゃん!!」

「すまぬな。説明も無しに、しかし、あのままの状態だと何れにしても全滅であつただろ

う」

「……そうだけど」

アビスゲートの言う通りあのまま戦つても先に自分達が限界を迎え死んでいたのでは、あの戦線から離脱させてくれて冷静さも取り戻せたので妙子は感謝してる。しかし、アビスゲートの意図が分からない妙子と同じ思っているであろう奈々は距離があるが此方に向かうゴレム騎士達が来る前に説明しろ。と視線を向けるとアビスゲートは口を開いた。

「……私の見解としては、あのゴレム騎士の再生の原理は分かんが、神代魔法の産物なのは間違いないだろう」

「そうね。あんな規格外なことを可能にするのは身代魔法でしか有り得ないわね」

「うんっ」

アビスゲートの見解に賛同する二人は首を縦に頷く。

「それに、見てて分かったことだが、妙に動きが機械的かと思えば、突拍子の無い行動もする。つまり……」

「誰かが操っているってこと？」

「……ああ、まだ可能性としてであるがその考えが一番信憑性があるんだ。そして、私の予想ではこの扉の奥に操コンッダックッターっている奴がいる可能性が高い」

そう言いながら、アビスゲートは自分達の後方にある巨大な扉を指差す。

「でも、浩ちん。見るからにあの扉、封印されてるよ絶対」

「……だろうな。だから、もし封印されてるのならば、ナナは扉の封印の解除を頼む。タエはその護衛。その間、ゴーレム騎士共の相手は我がしておこう」

「つまり強行突破ってことね。分かりやすいわ！」

「わ、分かったよ！」

アビスゲートの意図を理解した二人は、それぞれの配置に着く。ゴーレム騎士達と自分達の距離も残り僅かだ。

「では、行くぞー！」

「ええー！」

「うんー！」

アビスゲートの合図と共に、妙子と奈々が一気に踵を返し祭壇へ向かって突進する。アビスゲートはこの場に留まり迫り来るゴーレム騎士達を相手取る。

「御相手、願おう貴公等よ」

そう言つて、〃宝物庫〃から四本の〃紅爆〃を取り出したアビスゲートは此方に迫るゴーレム騎士達へと投げ込んだ。背後で紅色のした爆発が起こり、衝撃波と爆風でゴー

レム騎士が転倒していき隊列を乱すと、その隙に敵陣へと駆ける。

「出し惜しみも無しだ！我が深淵の分身よ 我が影から生まれし者達よ この地へと参上したまえ——」  
 “アビス・イリュージョン 深淵分身ツ”。よし、行くぞ我達！」

『おうー！』

続けて、浩介は魔力消費が高いからと控えていたがこの際だと思い分身を四人創りだすと、本体の言葉に分身達は呼応して、ゴーレム騎士達の進軍を五人の深淵卿が抑えに掛かる。

「……以って五分程か」

ゴーレム騎士達を抑えながらアビスゲートは、自分の限タイムリミット界を実感するも、アビスゲートは動じず寧ろ笑みを零していた。

「……フツ、それとて受け入れよう。我は闇に生きる者……深淵分身なのだからっ」

そう言うアビスゲートは、分身達と共に目の前の蔓延る敵達に闇の刃を振り下ろす。その隙に祭壇を守るように妙子が祭壇の前に陣取る。奈々は祭壇を駆け上がり扉の前に到着した。

「奈々どう?!」

「ううう。やっぱり、封印されてるよお〜！」

見るからに怪しい祭壇と扉なのだ。封印は予想していたが案の定の結果だ。

「つ……それつ、解除できそう?!」

「や、やってみる!」

妙子の言葉に奈々は二つ返事で了承し封印を破る鍵であろう祭壇に置かれている黄色の水晶を手にとった。その水晶は、正双四角錐をしており、よくみれば幾つもの小さな立体ブロックが組み合わさって出来ているようだ。

奈々は背後の扉を振り返る。其処には、三つの窪みがあった。奈々は頭を最大限に利用して「ウーン」と頭を悩ませること数秒、「ハッ!」と何か思い付いたのか正双四角錐を分解し始めた。分解し、各ブロックを組み立て直すことで、扉の窪みにハマる新たな立方体を作ろうと考えたのだ。

「ん?」

分解している途中、奈々は、扉の窪みに何かが彫つてあるのを見つけ観察する。そして、よく観察しないと見つからないであろう薄く彫られた文字に気付く。それは……

“とつけるかなあ、とつけるかなあ”

“まっ、解けなくても仕方ないかあ、だって私と違って君は凡人な、ん、だ、からっ

♡”

“でも大丈夫! 頭が悪くても生きて……いけないねえ! ざんねえくん! プギヤ

アーー!!  
”

いつものウザイ文だった。「ムキイイイイイ!!」とめちやくちやイラツとしている奈々。怒りの余り扉を蹴るもつま先をぶつけてしまって痛みにも悶えながらもパズルの解説に戻る。

「……………」

物凄くイラついているんだろなあ。と背後から伝わる怒気を感じながら妙子とアビスゲートは触らず神はなんとやら、と視界に捉えている群れるゴーレム騎士達の排除に集中する。

「……………」（浩介が辛そうにしてる）」

こんな場所で分身も使ってゴーレム騎士達を抑えるアビスゲートも限界だろうと判断した妙子はアビスゲートに大技をする為、避けろと伝える。

「浩介。ちよつと乱暴する」

「承った」

「だがっ」

「我等はっ」

「深淵卿!」

「コウスケ・E・アビスゲートである!!」

「あーもうっ、うっさい!!」

しかし、返ってくる返事にイラツとした妙子は、アビスゲートなんか関係無しに大技を使う。妙子は「トルネーグ」に刻まれた魔法陣に流し込むと、大きく鞭を横一閃に振るう。

「かげなき風風!!」

『フアツ?!』

鞭から放たれた幾多の風の刃が横一閃と飛んでいき、ゴーレム騎士と驚愕しているアビスゲート達を襲う。アビスゲートの叫びも聞こえるが無視だ。ゴーレム騎士達は無慈悲な死の斬撃に為す術なく、鉄屑になるまで切り刻まれていった。

妙子はその様子を見ながら、大量に魔力消費をしたので「ふう………」と息を吐いて、その場でへたり込む。

「……………おい」

「ん?」

声が聞こえ、声ができる方向に視線を向けるとボロボロ姿の雰囲気が違うアビスゲート?が其処に立っていた。

「あら、浩介、戻ったの?」

「お陰様でな!!」



深淵卿から戻ったであろう浩介は、声音的にキレていると察しがつく。

「ゴメンって、流石にイラツときたからさあ〜」

「それで、許されるかあ！マジで死ぬかと思っただぞ！コノ野郎オー！」

浩介は怒鳴るも妙子はどこ吹く風のように、フイツと横を向いて罪悪感のなさを伝える妙子。そんな二人の耳に笑い声が聞こえる奈々だ。

「ふっふっふっ、待たせたようだね。御二人さん！」

「どうしたんだアイツ？」

「封印の解除で頭ヤツちやつた？」

「酷っ?!」

二人の辛辣な言葉に、「頑張ったのに……」とイジける奈々。しかし、そんな状況ではないと思ひ直し、今度は得意気に任務達成を伝える。

「じゃ、じゃーん!! 開きましたあー！」

「ナイス、宮崎！」

「やるじゃん、奈々！」

「えへへ〜、それほどでもお……って浩ちん、元に戻ってたんだ」

「ああ、お陰様で。よし菅原、行くぞー！」

二人は後ろを振り返ると、奈々の言った通り封印が解かれて扉が開いているのが確認

できた。奥は特になにもない部屋になっているようだ。奈々の称賛した後、浩介は妙子に撤退を呼び掛け、自らも奥の部屋に向かって後退する。ゴーレム騎士達が再生する前に封印の扉を閉めれば襲撃は阻めるだろう。最初に奈々が、次に妙子が扉の向こうへと飛び込み、両開きの扉の両サイドを持っていつでも閉められるようスタンバイする。

浩介は、置き土産にと“宝物庫”から取り出したハジメ特製手榴弾を数個放り投げると、自らも奥の部屋へと飛び込んだ。再生しながらもゴーレム騎士達は逃がさんと殺到するも、手榴弾が爆発し強烈な衝撃をも撒き散らす。再生途中に更に衝撃を与えてゴーレム騎士達の再生を遅らせている。その隙に、妙子と奈々が扉を閉めた。

部屋の中は、四角い部屋だった。てつきりゴーレム騎士達を操っていた奴の部屋かと思われたが、違うっぽいので少し拍子抜けする。

「これって、アレか？これみよがしに封印しておいて、実はなにもありませんでしたっていうオチか？」

「ありえるわね……」

「ハアアアアア?! 私のっ、私の努力は?!」

「……無意味だったかも」

「ウワアアアアン!!」

相当、封印の解除に苦労したんだろう。浩介と妙子から提唱された可能性に奈々がへ

たり込むと泣き出してしまい、突然のことに二人はあたふたしながら奈々を宥めていると、突如、もうウンザリするほど聞いているあの音が響き渡った。

ガコンツッ!

「はっ?」

「ビエ?」

仕掛けが作動する音と共に部屋全体がガタンツと揺れ動いた。そして、浩介達の体に横向きのGが掛かる。

「っ。なんだ? 部屋自体が移動でもしてんの?」

「そうだと思ツ?!」

「わっ?!」

浩介の推測を口にすると同時に、今度は真上からGが掛かる。急激な変化に、妙子が舌を噛んでしまったのか涙目で口を押さえてふるふるしている。奈々は泣き止んだものの、転倒して尻餅をついた。

部屋は、その後も何度か方向を変えて移動しているようで、約四十秒程してから慣性の法則を完全に無視するようにピタリと止まった。

浩介は途中から靴に仕込んだクナイをスパイク代わりにして体を固定しており、妙子と奈々の二人も浩介にしがみつくように抱きついていたので急停止による衝撃にも耐

えることが出来た。

「お、おおーつと、ようやく止まったか……二人共、無事か？」

「私は平気」

「私も」

浩介はクナイを引き抜くと立ち上がった。周囲を観察するも特に変化はない。先程の移動を考えると、入ってきたときの扉を開ければ別の場所に行き着いているだろう。

「よし二人共、準備は良いか？」

「大丈夫よ」

「全く平気だよ」

少しこの部屋で一休みして数十分後、浩介は二人に体調の確認を取ると、視線を扉へと向ける。扉の先は、ミレディの隠れ家か、ゴーレムの操者か、或いは別の罠かと浩介は警戒しながら扉を開けた。

そこには……

「……………なんか見覚えあるくね？この部屋」

「うん、物凄く見覚えがあるね。特にあの石版」

扉を開けた先は、別の部屋に繋がっていた。繋がったのは良いが、その部屋の中央には見覚えがある石版が建っており左側に通路があつて、三人は見覚えがあるはずだ。

なぜなら、その部屋は……

「最初の部屋……だね。此処」

奈々が、思っけていても口に出したくなかったことを言っけてしまふ。だが、確かに奈々の言う通り一番初めに入ったウザイ文が彫り込まれた石版のある部屋だった。よく似た部屋ではないかと思ひ込んで、扉を開いて数秒後に浮き出た文字によつて現実に引き戻される。

「ねえねえ、今、どんな気持ちい？」

「苦勞して進んだのに、行き着いた先がスタート地点だと知つたときつて、どんな気持ちい？」

「ねえ、ねえ、教えてよお？　どんな気持ちい？　どんな気持ちなの？　ねえ、ねえ」

「「……………」」

浩介達の顔から表情がストーンと抜け落ちる。能面という言葉がとても当てはまる表情だ。三人とも、微動だにせず無言で文字を見つめてゐる。すると、更に追ひ撃ちかのように文字が浮き始めた。

「あつ、言ひ忘れてたけど、この迷宮は一定時間ごとに変化しますのでご注意ください。いつでも、挑戦者の皆さんに新鮮な気持ちで迷宮を楽しんで貰うというミレディちゃんの健やかな心遣ひです」

“嬉しい？嬉しいよねえ？お礼なんて大丈夫だよ！ミレディちゃんが好きでやってることだからあ！”

“ちなみに、常に変化するのでマツピングは無駄です。ま、まさか、ひよつとして作っちゃった？苦労しちやった？ 残念！ プギャアーーー！！”

「ア、アハハハハッ。オモシロイナー」

「フ、フフフフ」

「アハハアハ？」

三者三様の壊れた笑い声が響く。その後、迷宮全体に届けと言わんばかりに三人は叫ぶ。

「「ミレディイイエエエエエエ！！」」

そんな怨嗟を孕んだ絶叫が響き渡ったのだった……。

## 深淵四話

## 嘘吐きの仮面

『、——』  
誰かが呼んでいる。そんな気がした青年。遠藤浩介は寝ていたのか閉じた目を開けた。

『は?』

『おい、浩介。何、ぼーつとしてんだ?』

其処には、帝国に行っていたはずのハジメの姿があり、自分の向かい側の席で自分の反応に対して心配と疑問に感じているような表情をしている。

『いや、え? は?』

よく見れば、ハジメの服装は黒のコートではなく半袖でジーパンという姿で、自分もよく見れば自分の天職である「暗殺者」に合ったような黒づくめ姿だったのだが、今は異世界召喚される前に着ていた私服姿だった。

『そうよ浩介? どうしたのよ?』

『まさか、此処に来る途中に変なの食った?』

『浩ちゃん、拾い食いしたの〜』

混乱する浩介だったが、よく見ればハジメの隣には、自分を心配そうに声を掛ける優花の姿があり、自分の両隣には妙子と奈々の姿があつて、いつもの仲良し幼なじみ五人組が揃つていた。しかし、浩介は此処で新たなことに驚くも声に出さないようにして目を見開いた。

気が付いたのだ。目の前に映るハジメは、異世界トータルでの白髪で眼帯の姿ではなく召喚される以前の今では懐かしいと思えるぐらいの黒髪の姿であつたのだ。

そして……

『（なんで俺は“ウイステリア”に居るんだ？）』

そう、自分は妙子と奈々と共に神代魔法を手に入れる為にライセン大迷宮の攻略の最中であるのだ。しかし、目に映る光景は、幼なじみの優花の実家兼レストランである“ウイステリア”の店内なのだ。自分もハジメ達と同じように何度もお手伝いしたし、遊びに来るので間違える筈がない。

しかし、そんな情報だけでは何も意味を成さない為、浩介は眠る前のことを思い出すために頭をフル稼働させる。

『（確か……俺達三人共、疲労困憊で主にストレスが原因だが……そして、トラップが無いか念入りに調べた部屋で休息を取っていたはずだ）』



浩介は思い出す。そして三人共、*“宝物庫”*に入れておいた食料を摂ってから幼なじみ二人を早めに休ませ、自分は何が起こるか分からないため、寝ずの番をしていたのを。そして、その時に頭を響かせたかのように聞こえたのだ。

《君はいつまで強がるんだい？》

声が……

《君は何の為に演じる？ 何を得たいんだ？》

心が、頭が、同時に疼く。自分の核心を打ちあて、冷めるような声音で響く声が脳内に直接刺激する。

《強く演じて何がある？ 待っているのは自分にとって相応しくない試練の壁だというのに……》

やめろ。と言おうとしても口が思う様に動かない。声が出ない。

そして、自分の目の前が真っ暗になっていった。

『（そうだ。俺はあの声に……）』

『浩介？』

『（でも、あの声は？ 俺に何かを伝えるため？）』

『浩介？』

『（でも、俺……あの声が誰だか分かんねえし、それに俺、あの声に人格否定みたいな言

葉を言われるがまま言われて逃げられた気分で、なんな悲しくなっちゃう。夢だと思うけど……』

『浩介（浩ちゃん）!!』

『?!——あ、あつ！ ゴメン考えごととしてたわ』

これは、夢か何かの類いだと浩介は考えていると両隣から呼ばれ、ビクツとするが、自分が何度も名前を呼んでも反応しなかったことを知ると、すぐに二人に両手を合わせて謝罪する。顔を上げると四人共、心配そうに浩介を見ている。

『浩介。お前、もしかして夏バテか?』

『（夏バテ?）いや、違うって。昨日、徹夜でゲームしてたから眠かっただけだって』

『そうか、体調悪くなったら言えよ?』

『ああ、分かっているって』

心配そうに言うハジメに浩介は本当に自分は良い親友を持ったと思いながら適当な理由をつけて笑って返すと、話題を変えるかのように奈々が四人に話を持ち掛ける。

『ねえ！今回の夏休みは何処に行くことにする?!』

『そうだなー、考えてねえわ』

『そうねー』

『暑いし、ハジメの家でダラダラする?』

『おい、俺の家でかよ』

『いいじゃない？ ハジメの家にしか沢山のパーティーゲームとか人数分のゲームコントローラーがないし』

『賛成いー』

『おい、俺の許可を取れ。許可を』

奈々の夏休み何処行くか？の発言から、段々とハジメの家でダラダラしようという話になっていく。本人の確認を無視しながらだが……

しかし、奈々は『ええー』という顔をする。

『ねえ、折角の夏休みだよ？ お出かけしようよお？ 宿題も終わったんだし』

『それ、大体は私とハジメのおかげだけ？』

『うぐっ』

『だな。奈々は俺達のノートを写してくらいだしな』

『うっ』

『そうね。後、こんな暑い日が続いてるのに遠出は控えたいしね』

『はうっ』

『後、思い出したんだが、そろそろ父さん達がまた皆でバーベキューで海に行くって企画してるんだとよ？』

『そいえば、愁さんとお父さんがそんな話をしてたわ』

『アハハ、愁さんも凄いよね』

『ああ、俺もある意味で尊敬はしてるよ』

『じゃ、夏休みのお出かけはそれにして、ハジメの家にレッツゴォー』

『おー』

『だから、俺の許可を取れよ』

『うう』

三人の一言一言にダメージを喰らった奈々は、最後には、話題を変えられ、自分の提案が完全に潰えると情けない声を出しながら浩介にギョツと抱き着いた。

『うわ、浩ちいん!!三人が私を苛めるよお!』

『(夏休みなんだな……)』

『浩ちん!』

『ん、あー……ま、今日はハジメの家で良くね?』

四人の話から今は高一の時の夏休みだと理解した浩介は奈々への返事を適当に返すと奈々は裏切ったなあ!みたいな目で浩介を見る。

『えー、浩ちんもタエ達側?!!』

『だって暑くね?』

『はあ?! 浩ちん、弱男めっ』

『なあ、喧嘩売ってる?』

そこからギャーギャーと浩介と奈々が言い合いが始まると向かい側からハジメが頬杖つきながらジト目で見ながら口を開く。

『おい、浩介もだが俺の許可を取れよ……』

『え、もう董さんに連絡してOK貰ったよ?』

『は?』

ハジメがそう言った直後、いつの間にかスマホを出してハジメの母である董に連絡を取っていた優花に、ハジメはポカンとした表情で優花のスマホをまじまじと見る。

『はあああ?!』

『じゃっ、ハジメの家にゴー!!』

『ゴーじゃねえよ!』

『ハジメっち、ドンマイ!』

『よし、家に着いたら全ゲームで奈々を狙う』

『ええええええ?!』

ハジメから宣告されたことに奈々の絶望の叫びが店内に響く中、笑いが起こり浩介もつられるように笑う。

『(ああ、懐かしいな)』

ふと、懐かしいこの光景を、五人でどんなに楽しい日々を過ごしたか。

だからこそ……

『……帰らないとな』

誰も聞こえない声音で呟く。また、五人で——いや、今度は五人以上かもしれないが、  
どうでも良い……、

また、この光景のように平和な日常を送れるなら。

『浩介?』

『どうしたのよ?』

『浩ちゃん、早くう!』

ふと、呼ばれて浩介は顔を上げると優花、妙子、奈々が既に“ウイステリア”の扉の  
所へと移動しており、ずっと座って自分を呼んでいることを理解する。すると、右肩  
に重さ加わる。重さといっても手を置かれたぐらいで、その方向に顔を向けると親友  
がおり、ハジメは浩介の肩にポンと肩に手を置くと笑みを零す。

『行こうぜ。親友』

そう言つて、扉へと向かう彼の背中を浩介は見詰めていた。

彼は優しい。初めて会った時も、ある事で変わった時も、異世界で再開した時もそれは

変わらない。あの暴行の件で、変な尾びれが着いたせいで変な噂が立つも気にせずにいる堂々たる強さを見せつける姿。そして、そんな姿に反して見せる優しさ。それは、異世界召喚されてからも更に上がったと思う。それが大切な人を守る強さが、その姿がカッコよく大きく見えた。そして、自分達を待っている三人も、男子からも人気があるほどで、特に優花は“裏女神”と呼ばれてるほどだ。だからこそ思ってしまう。感じてしまう。

———こんな脇役モブが彼等の傍に居ても良いものなのか？と……………

『(だから、俺にあんな技能があるんだろうな)』

だからこそ納得してしまうのだろう自分に刻まれた技能———“深淵卿”

これは、ある意味黒歴史とも言える劇で自分が演じた闇の貴公子。この役で恥ずかしく死んでもいいほどの羞恥心を味わったが、それに反して強くなつたと感じた。自分をただの脇役モブから強者登場人物へと昇華してくれたような気がした。彼等親友達の隣に並び立てれたような気がして嬉しかったんだと思う。

———自分を強くなれたと実感させてくれる。

———強者としての姿を体現できる。

———大事な親友達の隣に並び立てれる。

“深淵卿”とは、遠藤浩介という弱者を強者に変えてくれる魅力的な仮面ベルソナであるところ……

異世界で、親友を支えるため、幼なじみ達を守るために求めたのだろう。欲したのだろう。

“成りたい自分へと成れる力”が、

『(だから、俺はずっと縋っていくのだろう)』

だが、それで良いんだ。浩介は思いを胸に秘め、顔を上げてこの夢であろうと思われるこの空間の出口であろう扉へと向かう。

『待って、俺も——』

その時だった……。

《それでも、演じるか。嘘吐きと呼ばれても?》

『?!……手?』

あの声が聞こえ、そして目に映った物に浩介は言葉を失った。目の前には手が、四人の誰でもない手が浩介の顔を覆うほどの大きな黒い手が現れたのだ。

浩介は心臓をギュッと掴まれたような感覚に陥るもすぐに身構えると、あの声が空間全体に響くと同時に、空間も色褪せ灰色の世界になっていく。

《お前みたいな弱者が、強き者を演じて何になる?》



『そ、それはっ、彼奴等の隣に並び立つため……』

《失笑。格上の存在に為す術なく負けた貴様が？》

『っ！』

その言葉と共に出現したのは、浩介が為す術なく敗北した神の使徒とアルヴだった。浩介は驚きの余り上手く声を発せなくなる。

《虚栄を張って、無理に格上と戦い無様に負けるとは下らん。実に下らん》

『っ、だ、黙れっ』

《口だけで、実力は凡人にちよつと足した程度、心は更に弱い。そんなお前を見て貴様の大切な友はなんと思うだろうな》

『は？………ど、ういう事、だ？』

《見れば分かる》

『だから——』

核心を突かれる言葉の数々に、心が痛みが強まり蹲ってしまう浩介に、見せられたのは光景は、実に死に近いほどの感覚に陥るほどの光景が目に入る。

それは、

『『『………』』』

大事な幼なじみ達が、自分を人ではないかの存在を見るような黒く無機物のような目



『うっ——うぐっあ、っ』

嗚咽が灰色の空間に響く。その時だった。後ろから気配を感じた。しかし、今の自分にはどうしてもよ無視していると声が掛かった。

《ここまで、言われて貴様は、まだ虚飾という仮面ペルソナを被れるのかを楽しみにしとこう》

そんな言葉に、浩介はバツと振り返るも、空間が壊れるのが早く後ろの存在の姿が見えない。

『っ、待っ——!!』

《楽しみにしてるぞ深淵卿》

『おいっ——』

逃がさまいと手を突き出そうも、世界が暗転して、浩介の視界も同じように暗転するのだった。

~~~~~

「——っは?!」

悪夢から解放されたように浩介は、目を開ける。

「はあっ、はあっ……戻ってこれたんだな」

息が荒くなっているが、すぐに呼吸を整えると、周りを見渡す。そこには、あの夢を見る前に見たライセン大迷宮のある部屋の中だと分かり浩介はホツとする。そして、両腕が何かに掴まれて動けずその原因を見ると、そこには浩介を中心に右側に妙子、左側に奈々が座り込んで肩にもたれ掛かっている。部屋には、静寂が満ちているが、耳を澄ませばほんの僅かにスウーと呼吸音が聞こえる。二人の寝息であり、浩介の両腕を抱いたまま、その肩を枕替わりに睡眠を取っていたのだ。

「……………嘘吐き、か」

それもそうだな。と、浩介は苦笑しながら同意してしまふ。夢なのに鮮明に思い出すあの光景と言葉の数々に、浩介はライセンのトラップよりも精神的に参っていた。そして、同時に自分は大迷宮なんて攻略できるのかと思ひ始めていると、右側からモゾモゾと動いているのを感じる。

「うん……………浩介?」

妙子だ。目を擦りながら妙子は、まだ眠いだろうか半開きの目で浩介を見る。浩介は自分のせいで妙子が起きたのかと思ひ謝罪する。

「つと、菅原悪い俺のせいで起きちまったか?」

「う、うん……………ただ」

「ただ?——つ?!」

妙子の言葉に、浩介は首を傾げるが、次の瞬間、妙子にギュツと抱き締められた。浩介は驚きの余り声を失い顔を赤くする。よく見ると、妙子の方もほんのりと顔が赤く見える。

「ただ、浩介が悲しそうに見えたから……」

「……………」

妙子の言葉に、浩介は驚きまじまじと妙子を見つめる。しかし、妙子は浩介にニコツと笑顔を見せ続ける。

「でも、大丈夫だから……浩介には此処に居ないけど、優花やハジメ……そして、奈々と私が傍にいるから」

「……………菅、原」

その言葉に、浩介は段々と心が軽くなっていく。

「私達は、ずつ、と一緒……だから……安心して……スウースウー」

「……………」

言いたいことを言い終わると、ギュツと浩介に抱きついたまま妙子は息をするように眠りについた。浩介は、その様子をただ無言で見る。

「そうか……ずつと一緒、か」

そう呟くと浩介は、ずしりとした心の重みが無くなっていき、救われたように感じる。

——私達は、ずっと一緒だから安心してね

「……………ありがとな」

浩介の呟いた言葉は眠る二人に聞こえずとも、静寂に満ちるこの部屋で響き渡るのだった……………。

~~~~~

「少しは自信を取り戻したか……………」

薄暗い部屋の中、一人の声が響く。

「だが、これでも遠藤浩介。君は、深淵卿として戦えるかな？」

|||||

遠藤 浩介 17歳 男 レベル：85

天職：暗殺者

筋力：650

体力：820

耐性：530

敏捷：1350

魔力：960

魔耐：800

技能・暗殺術「＋深■ a g m @」「＋短劍術」「＋隱蔽」「＋追跡」「＋投擲術」「＋暗器  
術」「＋伝振」「＋遁術」・氣配操作「＋氣配遮断」「＋幻踏」「＋夢幻Ⅲ」「＋顕幻」「＋滅  
心」・影舞・影潜り「＋影移動」・■■■■・言語理解

「……楽しみだ。君の選択はどう取るのかを」

冷笑が含まれた言葉を言うと共に声は、薄暗い闇へと消えていくのだった……。

## 深淵五話 ライセン大迷宮 下

部屋でひと息ついた浩介達三人は迷宮攻略を再開するために準備を進めていた。が、妙子と奈々の二人は心配そうな表情である一人に視線を向けていた。

「……………」

それは、浩介である。何故か自分達が起きたときから妙に静かで、話しかけたときも……「おう」だの、「わかった」などと言った受け答えしかない浩介に五年以上の付き合いである二人は浩介に異変にすぐに気付いたのだ。

「ねえ、タエ……………」

「大丈夫。言いたいことは分かるから」

準備が終え、妙子は、奈々が言いかけるのを手で制して遮ると二人を待っている浩介の元へ向かう。浩介も気配を感じたのか妙子の方へと振り向く。

「ん、菅原?…………準備が終わったか?」

「終わった、けど……………」

「なら、行く——」



「ちよつと待つてっ」

二人の準備が終わつたと分かると思つて返そうとする浩介に妙子が浩介の手を掴んで止める。手を掴まれた浩介は顔をだけを妙子の方へと振り向き直る。

「どうした？」

「今日の浩介……なんか変だよ」

「変？ 俺が？」

「うん」

「表情に、出ちまつてたか……そうか、でも見ての通り俺は大丈夫だ安心しろよ」

妙子の言葉に、浩介は聞こえない声で呟くと元気を装う。こんなんで心配されては迷宮攻略に支障が出る可能性があるからだ。しかし、妙子は「ホント？」と言いながら目を細め疑いの眼差しで浩介を見つめる。それに対して浩介も表示を変えずに、

「ああ、安心しろ」

悟られないように声の震えさえも無くして言う。

「……………分かつた」

「じゃ、行こ——「でも」——へ？」

「なんか心配なことがあつたら話してよ……私達、大切な幼なじみじゃん」

「ああ、分かつたよ。じゃつ、準備も終わつたところなら行くつか」

「OK、奈々あ。行くよ〜」

「う、うん！ 分かったあ〜」

妙子に呼ばれた奈々も駆け付けるのを確認すると、

「んじや迷宮攻略、再開といきますか？」

「うんっ」

そうか、言う浩介に、二人も応えたと三人は迷宮攻略を再開ししたのだった。

~~~~~

浩介達が、「ライセン大迷宮」に入ってからちようど四日目。その間も数々のトラップとウザイ文に体よりも精神を削られ続けた。スタート地点に戻されることも七回、致死性のトラップに襲われること四十回、金ダライ、トリモチ、変なニオイのする白い液体のぶっかけ等々全く意味の無いただの嫌がらせ百六十五回。

最初こそ、心の内をミレディ・ライセンへの怒りもあつた浩介達であつたが、スタート地点に戻されるのを四回目を過ぎた辺りから段々と「なんかどうでもいいやあ〜」みたいな投げやりになり、そんなことより浩介は、あの声に言われた言葉が、二人は浩介のことが心配なんかで、嫌がらせトラップのことなど気にしていなかった。

それに、食料も贅沢はあるし、力を合わせて対応連携すればそうそう死にはしないのが不幸中の幸いでありトラップの数々をクリアしていく。そして、浩介達は、四日前に訪れてから一度も遭遇することのなかった部屋に出くわした。最初にスタート地点に戻して天元突破な怒りを覚えさせてくれたゴーレム騎士の部屋だ。ただし、今度は封印の扉は開いており、向こう側は部屋ではなく大きな通路になっていた。

「ここか……また包囲でもされたら面倒だし、扉が開いてるから俺が『深淵卿』になってゴーレム騎士達を誘導するから二人は切り抜けろ」

「分かったわ」  
「了解！」

浩介達は、ゴーレム騎士の部屋に一気に踏み込んだ。部屋の中央に差し掛かると、案の定、ガシャンガシャンと音を立ててゴーレム騎士が両サイドの窪みから飛び出してくるのを見て、浩介は打ち合わせ通りにゴーレム騎士を相手するため、胸ポケットからサングラスを取り出してスチャツと装着して『深淵卿』になろうとするが、

「はっ。」

いつも通りにサングラスを装着しても、いつもみたいに感情が昂らない。強くなれた気がしない。強者ヒローなれていないことに浩介は困惑してしまい立ち止まってしまおう。

浩介がいきなり立ち止まったことに驚きを隠せない二人は立ち止まってしまった浩

介を追い抜いてしまうがすぐに方向転換して浩介の元へ向かう。

「浩介！」

「浩ちゃん！」

浩介の元へ辿りついた二人は急いで浩介の腕を掴んで扉へと向かおうとするが浩介は一向に走りもましてや歩きせずに呆然と何かをぶつぶつと呟いきながらその場を立ち尽くしている。

「浩介っ、走るよ！」

「そうだよ浩ちゃん!!」

「……お……っ…………いい」

「っ、どうしたのよ浩介！」

「……二人、共……俺、使えなくなっちゃったみたい “深淵卿”」

「え——」

「嘘——って、そんなことより扉に行かないと！」

浩介の言葉に驚きを隠せず立ち止まってしまふ二人だが、視線の先に映る自分達を狙うゴーレム騎士を見てすぐさま浩介を腕を引こうとしたが、浩介が二人の手を弾く。

「置いていけ」

「はあ?!」

「そうだよ!!」

「俺は……………『深淵卿』が使えなかったら俺はただの脇役モブの遠藤浩介なんだよ」

「何言ってるのよ!!」

「だからっ、戦力外になった俺を置いてけって、つってん——っ、浩介危ない!!」——は……………」

妙子の叫びに首を傾げる浩介だが、すぐに原因がわかった後ろを振り返ると一体のゴーレム騎士が既に浩介の真後ろに到着しており、大剣を振り上げていたのだ。浩介は咄嗟に回避しようと横にズレようとするが、大剣の方が早く浩介の頭へと振り下ろされる方が早かった。

「——あ」

浩介は振り下ろされる大剣を見て自分の死を察して目を瞑るのだが、自分の足元の近くからガラスの割れる音が聞こえた。その時……………」

「ここに絶氷あり 我等を守れ——『氷壁』!!」

奈々は浩介に大剣が振り下ろされる前に残り少ない水が入ったガラス瓶を取り出して投げると部屋全体の両サイドの端から端までの長さの巨大な氷の壁を造り上げ、浩介に振り下ろされるはずだった大剣を防ぎ自分達とゴーレム騎士達を遮断させた。

「ふ、ふう……………間に合っ、たあ〜」

「奈々!」

「宮崎!」

しかし、流石に巨大な氷壁を造ったせいかな々は、そこに座り込んでしまう。妙子は急いで奈々の元へ向かい、浩介もそれに続く。

「奈々っ」

「ごめん、浩ちゃんが殺されそうだったからさ……つい無理しちゃったあ」

「つたく、貴女は……」

「宮崎……ス——」

パン。ゴレム騎士達が氷の壁を壊そうとしているのだから氷を削る音が部屋に響く中、乾いた破裂音がした。妙子が浩介の頬を叩いたのだ。その表情は、目の下に涙を溜めながら浩介を睨んでいた。浩介は頬の痛みを感じながら妙子と奈々を見る。すると妙子から口から冷たい声音が響いた。

「奈々は、浩介を守ろうとして無理したんだよ」

「……ああ」

「アンタと一緒に逃げずにモブとか、置いてけとか言うから……」

「……………」

「私さ、浩介が戦ってる姿は『深淵卿』とか関係なくて強くてカッコイイと思ってたけ

ど違つたんだね」

「……………」

「夜中でもさ、色々な技を練習したりさ、努力を続けている浩介を見てさ……私もハジメとか優花達と一緒に戦えるようになるうと頑張ろうと思つた。でも、『深淵卿』が無くなつただけでそうなるなんて正直、失望した」

妙子の辛辣な言葉に、浩介は何も言い返せずに立ち尽くすしかない。

「……………」けど、アンタの言い分は分かつたわかりました。私は奈々と一緒に先に進む。けど、浩介は迷宮から脱出しとけば良いわ。それじゃ」

「待つ、菅つ……………」

妙子はそう伝えると座りながら二人の話を聞いた奈々を背負つて扉へと進む。浩介は声を掛けようとするが、その時に自分を見る妙子の話し掛けるなど言つたような冷えきつた視線に口が動かない。いや、動けなかつた。

「タエ?」

「ん?」

「ホントにあんなこと言つて良かったの?」

扉へと進んでいく中、妙子に背負われながら奈々はそう問い掛けると妙子はアハハと笑いながら返事をした。

「まあ、強く言っちゃったけどさ……だって、あんな浩介を見たくなかったしさ」

「あー……そうだね。私もあんな浩ちゃんは嫌だなあ」

「……でも」

「ん？」

「浩介に失望したとか言っただけ……信じてるんだ必ず戻って来てくれること」

「……うんっ」

二人はそう話し合いながら浩介が戻って来ることを胸に秘めながら扉の中へと突き進む。だが、二人を襲う悪夢は続いていた。後方からガシャンと音が聞こえ二人はおそるおそる振り向くと、安堵した表情が後ろを向いた瞬間には剥がれ落ちた。なんと、ゴーレム騎士達は氷の壁を抜け扉をくぐってまで二人を追いかけて来たからだ。

しかも……

「まさか、それで奈々の氷の壁を抜けて来たの?！」

「重力、仕事してよお！」

そう、追い掛けて来たゴーレム騎士達は、まるで重力など知らんとはかりに壁やら天井やらをガシャンガシャンと重そうな全身甲冑の音を響かせながら走っているのだ。だから、奈々の張った氷の壁も壁やら天井を走って意図も簡単突破したのだろう。

「タエー！ 降ろしてっ、私も走れるからっ」



「ダメ！　だつて奈々、まだ疲れてんじゃん！」

「うっ」

「後、これぐらい距離が離れているなら大丈夫よ」

奈々を背負いながら走る妙子。息が荒いがゴーレム騎士達との距離は離れているから大丈夫だろうと思うが再度、チラリと振り返ると目を見開いた。

天井を走っていたゴーレム騎士の一体が、走りながら手に持っていた大剣を投げたのである。普通なら大剣は投げたところで二人には届かない。しかし、ゴーレム騎士が投げた大剣は、重力？んなもん知らねえよ！と言った感じで加速して妙子達に迫って来たのだ。

「っ?!」

大剣が迫りくる中、妙子は咄嗟に、奈々を抱えると横へと転がって大剣を回避する。しかし、奈々を守ろうとした為に壁に強く激突してしまい「カハツ」と肺から空気が抜け背中に激痛が走る。その声に反応して奈々は声を上げた。

「タエっ」

「だ、大丈夫……壁に強く当たっただけだから」

「無理しないでよ……」

「それは、お互い様よ」

そう笑って返した妙子。そして、二人に命中せずに通り過ぎた大剣はそのまま役目が失ったかのようにストンと重力を無視したように空中で止まりストンと床に落ちた。

「ねえ……落ちたみたい」

「ええ、でも納得。あの神代魔法なら意図も容易くこういうことも出来るんだと思うわ」  
その光景を目撃した二人は、驚くも納得したような表情になる。だって、ハジメ達もこの迷宮を攻略をしたからこそ、あんな規格外な魔法や戦いが出来るんだと。

二人はゴーレム騎士達がハジメに教えて貰った神代魔法の一つである“重力魔法”だと察する。しかし、そんなことが分かっているにもこの危機的状況は覆せない。奈々も魔力は十分に回復しておらず、妙子も背中の痛みのせいで今は余り動けない。

そんな二人のことなんてどうでもいいかのようにガシヤンガシヤンと音を響かせながら近づくゴーレム騎士の一体。そして、二人の前に立つと大剣を振り上げる。二人は互いに抱き締め合う。

「……タエえ」

「大丈夫だから」

妙子は涙を浮かべる奈々を守るように力強く抱き締めて目を瞑る。しかし、そんな二人に対して何も感情も抱かないゴーレム騎士から冷徹な刃を振り下ろされる。

ガキンイイーン!!

はずだった。

二人は、金属音のぶつかり合う音に目を開ける。そして、目に映った光景に驚き目を見開いた。

「浩介……」

「……浩、ちん？」

そこには、ゴーレム騎士から振り下ろされた大剣を二刀の小太刀で防ぎ二人を守っている浩介の姿があった。

「間に、合ったっ」

浩介は、そう言うのとゴーレム騎士の胴体に蹴りを入れて吹き飛ばすと二人方方へと向き直る。そして、頭を下げた。

「二人共、本当にすまなかつた。俺……思い出したんだ」

「……………」

二人は、謝罪する浩介の姿に先程の時と違って全くの別人だと思えるほど雰囲気が変わって見えた。

~~~~~

妙子と奈々が扉へと進んでいる時、呆然とその場に立ち尽くす浩介は、扉へと向かう二人をただ後ろから見つめることしか出来なかった。

「俺は——」

二人の背中が遠のいているのを見ることが出来ないう浩介は、何も言えないまま、自己嫌悪に陥る。

「……だつてアレが『深淵卿』が使えない俺なんて」

—— そうだ。脇役<sup>モブ</sup>の俺なんて……

『私さ、浩介が戦つてる姿は『深淵卿』とか関係なくて強くてカッコイイと思つてたけど違つたんだね』

「……っ」

しかし、頭にチラつくのは妙子の言葉に口元が歪み浩介は苦い表情になる。

「俺がカッコイイ、か……」

笑えない冗談だな。と一蹴し、浩介は自分自身を貶めるように笑う。だが、そんな時だった。

ふと、思い出した親友との会話を……

それは、中三の時だったと思う。あの時は、自分の影の薄さが強まり、家族すらも気付かれない時があった。それが嫌で嫌で、浩介は『遠藤浩介』という自分自身を嫌つて

いた時期だった。

そして、自分のこの嫌な体質をどうにかしたい為にハジメに相談しに行っていた。しかし、返ってきたのは呆れた表情をしたハジメだった。

『はあ？ 影が薄いのをどうにかしたい？』

『ああっ、頼むハジメ！』

『あゝ、じゃあ…… // 深淵…… 『それ以外でな』 ……チツ』

『舌打ちしたな』

『……してねえよ』

ハジメはそう言いながら顔をふいっと横に逸らす。そして、溜息を一つすると浩介の方へと向き直る。

『でもな……俺は今の浩介のままが良いと思っている』

『は？ なんで？』

嘘だろと思った。自分は何の為に相談しに来たのか分かっていいるのか？ 目の前にいる奴は、何を考えてんだと思いついた口が塞がらなかった。すると、ハジメは困った人を見るような目で答えた。

『なんでっ、てなあゝ……まっ、それが浩介だからな』

『？』

何言ってんだコイツ？という眼差しを送る浩介。しかし、ハジメはそんな眼差しを無視して言葉を続ける。

『浩介は浩介だろ？ 影が薄い？それがどうしたってんだ？ 隠密最強じゃねえか。そ

れを活かして将来は有望な諜報員にもなれるだろうよ』

『……………ぶつ、なんだよ将来有望な諜報員って』

『クハツ……………それもそうだな。俺も自分で何言ってんだと思っちゃまう。でも、俺は尊重するお前の個性を』

真剣な表情で言うハジメに、浩介はその真剣さと言葉内容の差に笑みを零し、ハジメもつられたように笑っているがその本心は本物に見えた。

『……………ホントに俺はこのままで良いのか？』

『良いんだよ。それが浩介の個性であって尊重するべきことだ。後、それにな……………』

ハジメはそう言いながら席から立つと、浩介の元へと近付くと隣に座り込み笑みを見せる。

『俺達がいるだろ？』

その時からだろう。自分の体質が気に食わなく無くなつたのも、誰に気付かれなくても、大事な人達は気付いてくれる。そして、今でも思う。そして自信満々に言えるだろう。

——自分の親友は南雲ハジメだつて

「……………そうだったな。俺は脇役じゃねえじゃねえか……………」

《演じる仮面ベルツナがなくてもか?》

頭に再び声か脳を刺激するように響く。しかし、今の浩介には関係ない。どうでもいい。

「ああ、〃深淵卿〃は強え仮面ベルツナだ。手放したくないほどだ……………でもつ、そんな無くても良いんだよつ……………だつて俺は俺だと! 遠藤浩介南雲ハジメの親友が此処にいるからなつ」

《……………》

浩介の言葉に声は黙り込む。そして、よく見ればゴーレム騎士達が天井や壁を使って氷壁を乗り越え扉の奥へと向かっているの光景を目にする。

「つ、二人共!!」

浩介はそして二人を助けようと向かうが…………

「ん、……………」

その時に、体に不可解な感覚が走り止まってしまふ浩介。

しかし、

「?!、この力なら……………」

それは、新たな力であり、浩介は突然発現した力に驚くも、すぐさま二人の元へ駆け

て行くのだった。

~~~~~

「二人共、迷惑を掛けた本当にすまない……」

「……………」

浩介が頭を下げる姿を二人はただ見ることにしか出来ない。ゴレム騎士達も此方へと足音がしない浩介が此処に来るまでに倒したのだろう。その少しの間、静寂が訪れる。

「…………もう、あんなこと言わない？」

しかし、その静寂を破ったのは妙子だった。妙子はそう言つて浩介の傍まで寄ると、下を向ける浩介の顔を両手で抑えそのまま自分の顔と合わすように動かしてジツと浩介を見つめる。

「ああ、絶対に言わない。だから安心しろ。妙子、奈々」

「……………」

真剣な表情で意思を示す浩介に、二人は言葉を失う。だが、妙子は頷くと浩介を見る。

「…………うん、分かった許す」



「私も、もう、あんなヘタレ浩ちんの姿なんて見せないでねっ」

「ヘタレって……まあ、そうか……ヘタレだな俺。でも、お前等、許して貰ったのは良いが何でそんなに嬉しそうなんだ？」

「へっ」

二人から自分の醜態を許してくれて安堵する浩介。だが、二人が妙に嬉しがつてるのを見て首を傾げる。二人は指摘されてすぐに表情を戻そうとする。だって、二人が妙に嬉しがつているのは、浩介にやつと名前で呼んでくれたからである。

「……………たもん」

「なんて？」

「いや、なんでもないっ」

浩介に今さっきの眩きが聞かれなくて安堵する妙子。しかし、嬉しくて少し表情がニヤケてしまっている。そんな妙子の表情を見た浩介は、

「何、ニヤけてんだ妙子？少し怖いぞ」

「っう……うっさい！」

「イデエツ?!」

浩介の要らない指摘に、妙子は顔を赤くなりキツと睨むと浩介の横腹に目掛けてボディブローをかます。浩介は唐突のボディブローに訳が分からずそのまま悲痛な声を

上げながら蹲る。それを遠目で見てた奈々は、苦笑いするが二人が仲直りできて良かったと安堵している。

「……暴力、反対」

「アハハ……タエ、不意打ちはいけないって」

「フンっ」

蹲る浩介からの痛みに悶えながらの訴えと奈々の注意に腕を組みながらそつぽを向いて無視する妙子。

そして、

「………言える訳ないじゃん。名前呼びされて嬉しいなんてっ」

顔を赤くしながら恥ずかしそうに小声で呟く妙子。しかし、その後には奈々が「浩ちゃんに名前呼びされて嬉しいう」と普通に堂々と本人の前に言っている姿を見て、絶句していたのだった……。

因みに、言われた本人である浩介は、羞恥心がMAXになり「グオオオっ」と声を上げて床をゴロゴロしながら悶えていた。

## 深淵六話

## 迷宮のボスゴーレム少女？

その名はミ

## レディちゃん

色々であった（主に浩介が原因）が仲直りした三人の耳に、ガシャンガシャンと金属音が聞こえた。浩介が倒してきたゴーレム騎士達の再生が終わり此方へと向かってい

るのだろう。

「チツ、もう再生してきたか……」

「ねえ浩介。思ったけどこの通路辺りから動きもだけど……」

「ハジメ達が言っていた神代魔法『重力魔法』を躊躇い無しで使ってくるってことか？」

「うん」

そう。奈々の疑問と浩介の言う通りで、今までのゴーレム騎士達は重力魔法を使われていたとしても、それは操作のみであり、この奥へと続く通路へと入った途端、操作だけに使われてた重力魔法が攻撃の際に使われているのだ。

すると、奈々が二人にある提案をする。

「どうする？ また、私が『氷壁』を張ろつか？」

「いや、駄目だ。この通路の奥に、ミレディ・ライセンがいる可能性が十分にあるこの状況に奈々の氷魔法は流石に使わせたくない」

「ええ、私も同感」

「じゃあ、どうするの？」

奈々の提案は、ゴーレム騎士達を動きを封じるのには一番良い案だが、それだと奈々の負担が大きいため二人は首を縦に振らなかつた。そして、代わりに浩介が前に出た。

「俺が彼奴等の相手をする。二人は先に奥に行け」

「……浩介」

「大丈夫だ、程良く相手したら戻るって……じゃっ」

「えっ、浩ちゃん！武器は?！」

浩介はそう言うのとゴーレム騎士達の方へと駆け出す。しかし、手には小太刀やクナイなどを持っておらず出そうともしない。そんな浩介を見て、妙子と奈々は浩介が何をしようとしているのか分からず眉を顰めた。そんな二人の心配を何処知らず浩介は走るスピードを緩めずにゴーレム騎士達へと接近していく。

「んじゃ、やるか！『黒弦』！」

浩介はそう言うのと両手を自分の影に触れると、影から無数の糸が触れた両手の指に巻

き付いた。そして、一番近くにいたゴーレム騎士が振り下ろした大剣を避けるとそのまま風を切るようにゴーレム騎士達を抜き去っていく。

そして、

「殺取<sup>あやとり</sup>「クサリ蜘蛛」」

そう言つて、「黒弦」をあやとりをするように手を動かした瞬間、ゴーレム騎士達は浩介が走り抜けた際に蜘蛛の巣のように張り巡らされた「黒弦」に拘束されていき、身動きが取れない状態になった。そして、浩介は指に巻き付けている「黒弦」を巻き付けた指でギター<sup>だん</sup>の弦を弾くようにピンツと弾いた。

「断<sup>だん</sup>」

浩介によつて振動した「黒弦」は拘束されているゴーレム騎士達にも伝わっていく。そして、巻き付けられたゴーレム騎士達の胴体や四肢が音も無く綺麗に切断された。切断されたゴーレム騎士達は、「黒弦」の拘束が外れガシャアンと金属が勢いよく叩きつけられた音を立てながらバラバラとなったゴーレム騎士達は床に落ち散らばっていく。「つし………決まった」

フツと笑みを浮かべてガッツポーズを取る浩介。そして、ゴーレム騎士達を切断した「黒弦」は指で引つ張つることで浩介の影へと戻っていった。

そんな光景を見ていた妙子と奈々の二人はポカンと口を開けて驚きを隠せないでい

た。

「何あれ……………」

「……………浩ちゃんがまた進化しちゃった」

二人の目には、浩介が何も武器を持たずに走り出したと思えば影から黒い糸を取り出してからまた走り出すと、次の瞬間にはゴーレム騎士達を拘束してそのまま胴体などを切断されバラバラになっていたのだ。そんな光景を目の当たりにすれば驚くしかないだろう。

「おーい、彼奴等が再生する前に早く行こうぜ」

妙子と奈々が呆然としている内に二人の元へ浩介が戻って来ており、二人に奥へと向かおうと声を掛ける。

「……………はっ！ねえ、浩介。今さっきの何？」

「そうだよ。影から黒い糸を出したかと思えば、一瞬でズサアツて騎士をバラバラにしたしっ」

「あー……………アレさ、俺の新しく得た技能と派生技能のお蔭なんだよ」

二人は浩介が戻ってきたことに気が付くとすぐに詰め寄って聞くと浩介はすんなりと返した。

「……………新しい」

「……技能」

浩介の返ってきた言葉に、驚きと「アレ、技能と派生技能ってそんなに簡単に得られるつけ」と二人の頭の中に？が浮き出る。そんなのを気にせず浩介は新しく得た派生技能の説明を始めた。

「俺が新しく得たのは『影潜り』の派生技能で『黒弦』って言う二人が言っていた黒い糸な。そして、『黒弦』と合わせる為に新しく『操糸術』って言う技能も手に入れたんだ」

——『影潜り』の派生技能『黒弦』

浩介の影は、影潜りの技能のせいか影への干渉。魔力で影に触れるという普通の人の影より特殊な性質へと変化した。その影に触れるという性質を利用して新たな武器へと生成させ黒い糸『黒弦』へと変化した。そして、『黒弦』は魔力を注ぐが糸が切れることなく影に戻ったら魔力消費はゼロとなる。

『黒弦』は、浩介の注ぐ魔力によって硬度は変動し、ゴーレム騎士相手の時はギリギリ金属を破壊出来る程度の硬度にまで魔力を注いでいた。そして、その硬度はザンチウム鉱石と同等の硬度にまで匹敵する。

——  
// 操糸術 //  
// そうしじゆつ //

名の通り糸の扱いが上手になる。糸を自分の思うようにままたに動かせる。

「——って感じだな」

「うん。ヤバイ」

「浩ちゃん。ホントに人間？」

「感想が酷い?!」

浩介の説明が終え、それを聞いた二人は目の前の彼は自分達と同じ人間か怪しくなり訝しんだ眼差しで見つめる。浩介は二人の視線と感想に心にダメージが入る。

「それに、〃暗殺者〃なのに異常にステータスが高——って浩介！　〃深淵卿〃がバグってるじゃない?!」

「ホントだ！文字化けしてる！」

二人は浩介のステータスプレートを見てると、〃深淵卿〃の部分が文字化けしていることに気付いた。浩介も二人の指摘に首を縦に動かす。

「ああ、俺もこの技能が得て確認する時に気付いたんだよ。俺が〃深淵卿〃が使えない理由はこれかもな」

「じゃあ、どうするのよ?」



「そうだよ。もしかしたら次で最後の部屋かもしれないのに……」

「そうだけどきさつ………安心しろ」

浩介の以外の返答に二人は目を見開くも、浩介はそのまま言葉を続ける。

「『深淵卿』は強いさ。でも、それだけであつて俺は遠藤浩介という人間キャラを知ろうとしなかつた。いや、『深淵卿』という強大な仮面ペルソナを被つて逸らしていたんだよ」

「……………」

「俺は自分の力も知れず、『深淵卿』すらも知らずにいた。だから俺は弱かつた。こんな自分で、ハジメの隣に立とうなんて浅はか過ぎたんだよ。だから、俺はここからやり直すと決めたんだ。自分という人間を知つてそこから強くなつていこうつてな」

「浩介」

「浩ちゃん」

浩介の話が終わつて二人を見ると、二人は自分を嬉しそうに微笑みながら見ているの  
と自分の今さっきの発言を思い出してしまい羞恥心が上昇してしまいすぐに二人とは  
逆の方向に体ごと振り向き、恥ずかしさを紛らわすために大きな声音で二人に声を掛け  
た。

「まあ、そういうことだからっ。行こうぜ!!」

そう言つて、奥の通路へと向かう浩介を見て妙子と奈々は顔を見合わせると笑みを零

して、

「待つて浩介」

「待つてよ。浩ちゃん」

二人は先行く彼の後を追うのだった。

~~~~~

通路を歩き続けてから十分ほど経ったぐらいであろう。

そして浩介達三人は今……

「『ウオオオオオオ!!』」

三人は自分達を逃がさまいと追ってくるゴーレム騎士達から雄叫びのような声を上げて全力疾走していた。

それは、一、二分ほど前。最初はゴーレム騎士達が再生しても大丈夫であろう距離で歩いていた三人だったが、後方からガシャンガシャンと物凄い速さで近づく金属音が聞こえ、三人はくるりと後ろを向いた。

『『へ?』』

目に映ったのは、物凄い速さで此方へと向かうゴーレム騎士達の姿だった。三人は

素っ頓狂な声を出してお互いに顔を見合わせそして……

『走れえ!!』

『しつこい!』

『もう嫌あ!』

浩介の叫びと同時に三人はそして、ゴーレム騎士達へ悪態を吐いて走り出すのだつた。

そして、現在に至る。

「あつ、二人共!」

三人は、投げ付けられる大剣や盾を鞭や小太刀で対処しながら、駆け抜けること三分。奈々の声に反応してゴーレム騎士達の投擲物の対処を行っていた浩介と妙子が奈々の方へと視線を動かす。

「どうした奈々……あ」

「どうしたの奈……あ」

そこには、奈々が走りながら前方を指差しており、視線を動かした二人も奈々が指差す方向へと目を移すと歓喜と驚愕が入り混じり二人は大きく目を見開いた。

二人は驚く理由。それは、視線の先には、三人が願っていた通路の終わりが見えたのだ。だが、通路の先は巨大な空間が広がっているようだ。道自体は途切れており、十

メートルほど先に正方形の足場が見えた。

「二人共、俺の合図と同時に飛べ！」

「分かった！」

「了解！」

浩介の掛け声に頷いて声を上げる妙子と奈々。背後からは依然、ゴーレム騎士達が追い掛けている。浩介は「宝物庫」から「紅爆」せきばくを一つ取り出し魔力を注ぎだす。そして、ゴーレム騎士達に目掛けて投げ一体のゴーレム騎士に直撃する。その衝撃で紅雷が迸り爆発が起こる。爆発で発生した爆風により近くにいたゴーレム騎士達を吹き飛ばされていく。

「今だー！」

と同時に浩介の合図の掛け声と共に三人は通路端から勢いよく飛び出した。三人はトータスに召喚されて肉体が強化されアスリートを凌ぐほどの跳躍力で正方形に飛び移ろうとした。

「「はあ?!」「」

が、思ったとおりにいかないのがこの大迷宮の特徴。なんと、放物線を描いて跳んだ浩介達の目の前で、着地予定地の正方形のブロックがスィーと移動し始めたのだ。三人は驚愕して声を上げる。

「クソツ、黒——っ！」

この迷宮に来てから何度目かの叫びを上げる浩介。『黒弦』を使おうとしても、ここは空中。影なんて何処にもなく発動ができなく焦ってしまいう直後、妙子の声が響いた。

「二人共、捕まって！」

魔力で鞭の先端な風の刃を形成してから未だに離れていこうとする正方形のプロックに突き刺さして固定し、ぶら下がった妙子に奈々がしがみつき、浩介は鞭に捕まり体勢を整えると先に正方形の上へと登り、鞭を引っ張り二人を引き上げた。

「ふう……助かったぜ妙子」

「流石、タエ！」

「二人共、無事で良かったわ」

墜落せずに済んだことに思わず笑みを浮かべて浩介と奈々は賞賛する。妙子も一連の咄嗟の動きで少々疲れ気味だが、二人が無事だったことに安堵した。

だが、そんな和やかな雰囲気は空飛ぶゴーレム騎士達によって遮られた。そう、ゴーレム騎士達が空を飛んでいるのである。おそらく重力魔法で重力を制御して落下方向を決めているのだろう。凄まじい勢いで未だぶら下がったままの浩介達に急速接近する。

「っ?! 嘘だろ！」

浩介は、未だに迫りくるゴーレム騎士達に驚愕しながらも、地面に立っている影があるので「黒弦」を取り出して操糸術で更に巧みに「黒弦」を扱い螺旋状に飛ばしていく。

「殺取<sup>らせんじん</sup>螺旋刃<sup>せんじん</sup>！！」

螺旋状に飛ばされた「黒弦」は大気を巻き込み竜巻を起こし、迫りくるゴーレム騎士達を竜巻によって発生した刃で切り刻んでいきゴーレム騎士達を撃墜させていく。

「おおー！浩ちゃん、流石〜」

「いや、何体か避けやがった。こここの空間に入ってから動きが巧みになってきてる。もしかしたらハジメ達が言っていた最後の試練の部屋かもな」

「私も同感。だって、全部浮いてるしね」

妙子の言う通り、浩介達の周囲の全ては浮遊していた。

三人が入ったこの場所は超巨大な球状の空間であった。直径は二キロメートル以上ありそのような空間には、様々な形、大きさの鉱石で出来たブロックが浮遊してスイーと不規則に移動しているのだ。完全に重力を無視した空間である。だが、不思議な事に浩介達はしっかりと重力を感じている。おそらくハジメが言っていたミレディ・ライセンがいる部屋で間違いないだろうと浩介は確信する。

そんな特定の物質だけを重力の制限を無くしているこの空間をゴーレム騎士達が縦

横無尽に飛び回っていた。やはり、落下方向を調整しているのか、方向転換が急激である。

「さて、肝心のミレディ・ライセンは何処だ?」

浩介の言葉に妙子と奈々も同意するように首を縦に動かす。ゴーレム騎士達は何故か、浩介達の周りを旋回するだけで襲っては来ない。取り敢えずミレディ・ライセンが何処にいるか辺りを見渡す三人。

と、次の瞬間、浩介に凄まじい程の悪寒が走り、焦燥に満ちた声を張り上げた。

「っ、逃げるぞ!!」

「?!」

浩介の警告に妙子と奈々は問い返すことなく、瞬時に反応し、弾かれたように飛び退いた。運良く、ちょうど数メートル先に他のブロックが通りかかったので、それを目指して現在立っているブロックを離脱する。

直後、ズウガガン!!と凄まじい轟音と共に、隕石が落下してきたのかと錯覚するような衝撃が今さっき三人がいたブロックに直撃し、木っ端微塵に爆砕した。隕石というのはあながち間違った表現ではないだろう。赤熱化する巨大ななにかが落下してきて、ブロックを破壊した勢いをそのままに通り過ぎていったのだ。

浩介の頬に冷や汗が流れる。自分達がずっとあの場所にいたら確実に直撃を受けて、

そのまま塵と化していただろう。

「浩介助かったわ」

「……危なかったね」

「ああ、俺も自分の悪寒に感謝だな」

三人は隕石モドキを回避したことに安堵するが、改めてこの迷宮の恐ろしさに戦慄しながら、浩介は通過していった隕石モドキの方を見やった。ブロックの縁から下を覗くと、下の方でなにかが動いたかと思うと猛烈な勢いで上昇してきた。それは瞬間に浩介達の頭上に出ると、その場に溜まりギンツと光る眼光をもって三人を睥睨した。

「やっど、お出ましか」

「予想よりも大きいね」

「うわあ、ラスボスって感じ」

三者三様の感想を呟く浩介達。

そんな三人の目の前に現れたのは、宙に浮く超巨大なゴーレム騎士だった。全身甲冑はそのままだが、全長は二十メートルくらいある。右手はヒートナツクルの如く赤熱化しており、先ほどのブロックを爆砕した原因であるかもしれない。左手には鎖がジャラジャラと巻きついて、フレール型のモーニングスターを装備している。

ハジメが言っていたのと全く容姿が同じな為三人は、目の前にいるゴーレム騎士が



ミレデイ・ライセンだと確信しながら身構える。すると、周囲のゴーレム騎士達がヒュンヒュンと音を立てながら飛来し、浩介達の周囲を囲むように並びだした。整列したゴーレム騎士達は胸の前で大剣を立てて構える。まるで王を前にして敬礼しているようだ。

すつかり包囲された三人は緊張感が高まる。辺りが静寂に満ちた状況。そして、その静寂を破ったのは……

「わあ、フーちゃんが帰って一週間ちよつとしか経ってないのに、もう次の挑戦者が来るとはねえ。もしかして、またミレデイちゃんモテ期襲来?!」

そんな、緊迫した雰囲気破壊するほどの軽い巨大ゴーレムの一声だった。

「[「……………」」

浩介達はゴーレム騎士から似合わない声が聞こえ沈黙していると巨大ゴーレムが言葉が続ける。

「あつ、ごめんねえ。挨拶忘れてたよお。みんな大好きウルトラ美少女ミレデイ・ライセンちゃんだよお」

続けてめちやくちや軽いふざけた挨拶をする巨大ゴーレム。更に沈黙してしまう三人に巨大ゴーレムは不機嫌そうにしている。浩介は咄嗟に挨拶をする。

「あつ、すまん。挨拶が遅れた。俺の名前は遠藤浩介。で両隣にいるのは俺の幼なじみ

の菅原妙子と宮崎奈々だ」

「ほう、名前がこつちの世界の名前じゃないねえ……もしかしてハジメンの同郷の人？」

浩介の挨拶に、反応を見せるミレディ。そして、ミレディの質問の言葉の中から「ハジメン」という言葉に、もしかしてと思った浩介は声を上げる。

「ハジメンって言う奴がハジメなら同郷で、親友なんだ」

「おつ、ハジメンと親友かく。じゃ、この迷宮もハジメンに教えて貰った感じかな？」

「ああ、その通りだ。俺達は貴女の神代魔法を求めてここに来たんだ」

浩介の言葉を聞いて、ウンウンと頷くような動きをするミレディは、更に質問を投げ掛けた。

「聞くけど、君達は私の迷宮以外に攻略した迷宮はあるのかなあ？」

「いや、俺達は神代魔法は一つも持ってない。ここが初めて挑戦する迷宮なんだ」

「嘘?! 誰も神代魔法持ち無しでここまで来たの?!」

ミレディの驚愕が含まれた言葉に頷く浩介達。そんな中、ミレディは「はえ、そんな子達がいるんだなあ」と驚きと共に感心していた。

そんな感じでウンウンと頷いていたミレディだったが、少し浩介達を見下ろす。その甲冑から光る眼光から放たれる圧に浩介達は息を呑む。

「うん。君達のは大体わかったし、ハジメンから聞いたとすれば私の神代魔法も知ってるだろうしね。一つ聞いていいかな？」

「ああ」

「君達は何を望む。神代魔法で何を求める？」

嘘偽りは許さないという意思が込められた声音で問い掛けるミレデイ。それは何百、何千年もの迷宮で挑戦者を待ち続けたミレデイであるから伝わるその言葉の重み。

——最初の挑戦者達は元の世界の帰還と自分達の意味を引き継いでくれた神殺しのため。

——次の挑戦者は前の彼等と同じように神殺し。そして、人族と亜人族と魔人族が手を取り合っていていける自由の世界を実現するため。

そんな壮大すぎる、自分達が成し遂げられなかった大願を彼等は口にして、その覚悟を証明してくれた。だから安心して自分の神代魔法を託した。

だから、ミレデイは問う。今の目の前にいる者達に何を望み、求めるかを。

「……………」

ミレデイの言葉の重みとその眼差しに息を呑む浩介達。しかし、ここで怯んでは駄目だ。と、浩介は視線をミレデイを真っ直ぐに見据え嘘偽りのない言葉を返した。

「俺は…………ハジメのように強くない。この迷宮でも自分の弱さをよく理解出来た。だか

ら、神殺しなんて大層なことを俺がやれるなんて自信はない。でもつ、俺は親友としてハジメだけを戦わせたくなえ！隣に立って親友を支えたいんだ！」

「私もつ、ハジメと優花だけを戦わせたくなえ！いつだって無理をするあの超が付くほどのお人好しの二人を支えたい！」

「わ、私も！ ハジメつちやユウカだつて頑張つてるのに自分だけが何も出来ないなんて嫌だ！」

浩介の言葉に妙子、奈々の言葉が続く。

「親友アイツに隣立つ為に俺は——」

「大好きな幼なじみ達を支える為に私は——」

「何も出来ない自分を変えるために私は——」

「「貴女の力が欲しい!!」」

三人の覚悟を感じさせる言葉が部屋全体に響き渡ると思えるほどの声音だ。

「……………」

ミレディはしばらく、ジツと浩介を見つめた後、その視線を妙子、奈々と巡らしていき、納得したように小さく頷いた。そして、ただ一言「そつか」と小さく呟いた。

と、次の瞬間には、真剣な雰囲気霧が幻のように霧散し、軽薄な雰囲気霧に戻る。

「ん、そつかそつか。君達の覚悟はわかったよ。だから次は証明だ！このミレデイさんに君達の覚悟を証明させて？」

ミレデイはそう言つて「ふふ」と微笑んでるかのような笑い声を上げると浩介達に巨大な右手を突き出すと指先をクイッククイッと曲げる。「かかつてこい」ということらしい。

浩介達はミレデイの宣戦布告を受け取り、浩介は小太刀を、妙子は鞭トルネグを、奈々は「宝物庫」から取り出した幾つかの水瓶をすぐに手に取れるように腰に装備品する。

そして……

「じゃあ、行くぞー！ミレデイ・ライセン!!」

「かかつて、こい」

浩介は声を張り上げながらミレデイに目掛けて走り出し、ミレデイも軽くそれに答える。

こうして、浩介達三人のライセン大迷宮最後の試練の幕が開けたのだ……。

## 深淵七話 深淵突破

浩介は右手で小太刀を持ち手前に構えながらミレデイへと駆け出す。同時に左手で“宝物庫”から取り出していた“紅爆”を四本取り出すと魔力を注ぐと思いつ切り巨大騎士ゴーレムのミレデイの頭部を集中的に狙ってに投げる。

浩介が投げた“紅爆”は風を切るような速さで飛来し、ミレデイの頭部に直撃すると魔法陣が起動し、凄絶な爆音が部屋全体に響き渡りると共に紅の爆発がミレデイを襲い、その周りには爆煙が舞う。

「あれって、やれたかな?!」

「いやまだよ。奈々、私達も向かうよ!」

奈々が「浩ちん、ナイスウ〜!」と喜色を浮かべ、妙子は自分達も浩介の支援しようと呼び掛ける。すると、爆煙が舞う中から赤熱化した右手がボバツと音を立てながら現れると横薙ぎに振り払われ爆煙が吹き散らされる。

煙が晴れた奥からは、爆発によつての熱に少し焦げついた鎧が見え、大した損傷ないミレデイの姿が現れた。

「これは、ハジメンのアーティファクトだね。流石の威力。でも、まだミレデイさんはピンピンだよ。」

「じゃあ、これもか？」

「っ?!」

楽しそうに笑うミレデイだが、何処からか浩介の声が聞こえて、気配が察知出来ないことにミレデイは辺りを見回し、消えた浩介を探す。

「何処に——」

「ここだつ。殺取あやとり 蛇行刃じやこうじん！」

突然に上から聞こえた声に、咄嗟に上を向くミレデイ。そこには落下してくる浩介が見え左手には黒い糸が見える。そして、浩介は左手に巻き付く糸を一つの糸へと纏めると左手を振るう。

一筋の黒い糸が真つ直ぐとミレデイを襲う。

「!」

自分に目掛けて放たれた黒い糸に、ヤバイと判断したミレデイは顔を守るように右腕で守るように盾にする。そして、浩介の放った黒い糸はミレデイの右腕に直撃すると、金属音が鳴ったと同時に右腕の装甲を貫いた。ミレデイは装甲が貫通されたことに驚くもすぐに後退する。

「ちっ、目を狙ったが防いだか……」

「ふう、危ない危ない。あの爆発は目眩しで、その黒い糸が本命か〜」

浩介は、防がれたことに舌打ちをしながら一つの浮遊ブロックへと飛び移る。ミレディは、浩介の攻撃に驚きと称賛を送りながらも浩介に左手に巻き付いている黒い糸に警戒して、ミレディは左腕のフレイル型のモーニングスターを浩介に向かって射出した。しかし、それは投げつけたのではない。予備動作なくいきなりモーニングスターが猛烈な勢いで飛び出したのだ。おそらく、ゴーレム達と同じく重力魔法を使い重力方向を調整して“落下”させたのだろう。

浩介は、近くの浮遊ブロックに跳躍して一直線へと自分に迫るモーニングスターを躲す。モーニングスターは、浩介がいたブロックを木っ端微塵に破壊しそのまま宙を泳ぐように旋回しつつ、ミレディの手元へと戻る。

「危ねえ、ホントに恐ろしいな重力魔法」

「ふふ、凄いでしよう。君もその黒い糸もただど気配を感知させないなんて相当だね」  
「いや、影が薄いのは自前です……」

浩介から放たれた言葉に、シンと部屋全体が静まる。自分が失言してしまったと分かったミレディはデカイ甲冑から「ツスー」と息が漏れると手のひらを合わせ謝るポーズを取って「なんか、ゴメンネ……」と謝罪する。迷宮のボスにあるまじき行動と優し



さに浩介の心は少なからずダメージが入る。

「……よし！　じゃあ、再開しよっか！」

「ああ……そう、だな」

互いに切り替えるように戦いを再開しようとして声を上げるミレディに、浩介も賛同し、胸を抑えながらゆっくりと立ち上がる。

「そして、難易度レベルもアップウ〜！」

楽しそうに声を上げるミレディは、指をパチンツと鳴らすと大剣を掲げたまま待機状態だったゴーレム騎士達が、ミレディの声が合図だったかのように一斉に動き出した。通路でそうしたのと同じように、頭をハジメ達に向けて一気に突っ込んでくる。

浩介は、『黒弦』を使って突っ込んでくるゴーレム騎士達を防ぎ、拘束して切断していく。その光景を楽しそうに見れていたミレディは全体に聞こえる声音で問い掛けた。

「ミレディさんのゴーレム達も動きだしちゃったけど、どうなるかな〜？　勝てるかな〜？」

「ハッ、俺も妙子達を舐めて貰っては困るな」

ミレディの煽りに対して笑って返す浩介は笑って返す。その表情に何かを感じ不安がよぎる。そして、その不安は突っ込んでいった内の数体ゴーレム騎士達が自分の元へ

吹き飛ばされて来たからだ。

「嘘?!」

浩介以外はあまり危険視していなかったミレディは驚きの声を上げ、妙子と奈々の方へと視線を向ける。そこには、妙子が風の刃を纏トルネーダわせた鞭を振り回して迫りくるゴーレム騎士達を切り刻みながら吹き飛ばしていた。隣では、奈々がくるり身を翻しながら手に持った水瓶をゴーレム騎士達に投げつけ凍結させていく。身動き出来ないゴーレム騎士達は妙子の鞭の餌食となるのだった。

「水を使って魔力消費を少なくしている……ユエちゃんから教えて貰った感じかな」  
その光景を見ていたミレディは、二人の戦いを見て此処の迷宮の対策はされていると察し、焦るどころか寧ろ感心していた。

「あはは、みんなやるねえ。でも総勢三十体の無限に再生する騎士達と私。果たして君達はハジメン達にみたいに見事に捌けるかなあ」

嫌味つたらしい口調で、ミレディが再度、浩介を狙って、モーニングスターを射出した。妙子がゴーレム騎士達の対処を奈々に任せ鞭を大きく振るって風の斬撃をモーニングスターを狙って飛ばす。浩介はその場から大きく跳躍する。風の斬撃はモーニングスターを直撃してしまい軌道が少しだがズレる。同時に跳躍した浩介がモーニングスターの鎖へと着地すると、そのまま鎖をつたって行きながらミレディの元へ駆ける。

「ふふ、それは悪手だね」

そんな言葉と共に、ミレディは浩介がたつて走っているモーニングスターを大きく揺さぶる。

「チッ！」

足場を揺らされた浩介は、舌打ちをしながらもミレディの元へと駆けていきながら、  
“紅爆”を取り出してミレディに目掛けて投げ飛ばした。

「二度目は効かないよ」

そして、浩介のやろうとしたことを予想していたのか、咄嗟に右腕で“紅爆”を弾くミレディ。“紅爆”は右腕に阻まれ適当な場所で爆発する。そして、逃がさんと言わんばかりに、そのまま右手のヒートナックルを浩介に向かって殴り付ける。

「クソッ」

浩介は迫りくるヒートナックルを見て、すぐに近くの浮遊ブロックへと跳躍しながら移動していき妙子と奈々がいる浮遊ブロックへと戻る。

「浩介、大丈夫?!」

「浩ちゃん！」

「危なかったけど、無事だ」

心配しながら駆け寄る二人に浩介は大丈夫と伝えると、二人は安堵していた。そんな

三人の浮遊ブロックに、遂には、妙子と奈々の二人で捌ききれないほどのゴーレム騎士達が殺到する。

「殺取 らせんじん 螺旋刃」！

浩介は、自分の影から「黒弦」を生成させる。そして、二人を守るように「黒弦」を螺旋状に投げ飛ばす。

投げ飛ばされた「黒弦」は螺旋状にぐるぐると回りながら大気を飲み込んでいき、一つの竜巻を起す。襲い来るゴーレム騎士達は竜巻によって加速された漆黒の刃を以て切断し切り刻んでいく。回避しようとしたゴーレム騎士達も竜巻によって吸い込まれていき、為す術なく切り刻まれていった。

瞬く間に三十のゴーレム騎士達が無残な姿を晒しながら空間の底面へと墜落した。時間を経て、また再構築を終えて戦線に復帰するだろうが、しばらく邪魔が入らなければそれでいい。そう、親玉であるミレディを倒すまで。

「わあ………凄いなそれ。ミレディさんも流石に驚いちゃった」

ミレディは、浩介の無双劇に驚愕して喋り方が変わってしまったも、「そうでなくっちゃっ」と眩くと楽しそうな雰囲気を持ちながら言葉を続ける。

「なら、更に難易度アップといこっか」

ミレディは、そう言いながら目が一瞬光ったかと思うと、彼女の頭上の浮遊ブロック

が猛烈な勢いで三人へと迫ったのだ。

「?!」

「操れるのが騎士だけだと思わないことだよ」

流石は「解放者」の一人であり、七つの神代魔法の内の一つを行使する一人。攻撃がえげつない。ミレディのニヤつく声音を無視して浩介は咄嗟に二人を抱き上げ近くのブロックへと移動する。

しかし、この状況は集中的に狙われてマズイと判断した浩介は咄嗟に二人に声を掛けた。

「っ……………二人共！ 散開だ！」

「うん！」

浩介の意図に察した二人も、浩介が煙幕玉を自分の立つ浮遊ブロックに叩きつけて煙が立った瞬間に三人は別々の方向へと駆ける。そして、浩介はどうか目標の浮遊ブロックに足を掛けた。

当然、ミレディは浩介の足場を「落とそう」とするが、いつの間にか背後にまわって来た妙子と奈々がミレディを狙い定める。

「させない（よ）！」

妙子は、トルネーダ鞭に刻まれた魔法陣に魔力を流して風の刃を形成させ、大蛇の牙がミレ

デイを襲う。奈々も腰から六つの水瓶を取り出して背中目掛けて投げ飛ばす。同時に、詠唱を完了させておいた魔法を解き放ち六つの氷の槍がミレデイに向かう。

「〃大蛇オロチ〃！」

「〃氷槍・六連〃！」

ミレデイは背後からの魔力反応に気付いたように浩介への攻撃を一旦中止する。

「ふふーん、それでミレデイさんに効くかな〜？」

ミレデイは自身の言葉を証明してやるとも言うように振り返ると同時に、左手に巻き付けたモーニングスターで妙子の「大蛇」を弾き返し、奈々の「氷槍」は右手のヒートナツクルの熱で溶かしていく。

「中々のコンビネーションだけどまだまだだね〜」

余裕の声で、自分を見上げる妙子と奈々と見下ろすミレデイ。そこへ予想外に近い場所から声が掛かる。

「だろ。俺達三人のコンビネーション」

「?!」

驚愕し、ミレデイが慌てて声のした方向に視線を転じれば、そこには、いつの間にか「黒弦」でギリギリバレない程度で自分を拘束させた浩介がいた。

「い、いつの間ツ——」

「俺の影の薄さを舐めんなっ!!」

ミレディの驚愕の言葉は、浩介の怒りが混じった叫びによって遮られる。

そして、

「殺取 ばくげんじん 縛弦刃!!」

浩介が「黒弦」を引っ張りながら叫ぶと共にミレディを拘束していた「黒弦」の締め付けが段々と増していく。ミレディの動きを封じながら、鎧からはミシミシと何かが軋む音が聞こえ、浩介を既に妙子と奈々の元へと降りながら移動していた。浩介自身も巨大なゴーレム騎士を抑えているのか指からは血が流れ出る。だが、手放さずに最後の仕上げに掛かり、その技の名を呟いた。

「断爆」

同時に、浩介は空いた指で弦を弾いて微細な振動を全体に送らせていく。ミシミシと軋む音が大きくなる。そして、バキンツと何かが破壊された音が響き、それに続いて「黒弦」に巻き付けていた「宝物庫」から全て取り出しておいた「紅爆」が一斉に爆発する。紅の爆発がミレディを襲い轟音が響き渡る。

「……浩ちゃん、いけた?」

「手応えはあったが……」

「これで、終わって欲しいけどね」

奈々が手応えを聞き、妙子は終わったことを願う。浩介の表情は微妙だ。案の定、両腕が破壊されたままのミレデイが、何事もなかったかのように近くの浮遊ブロックを手元に移動させながら、感心を含んだ声で話し掛けてきた。

「いやあく、大したもんだねえ。ちよつとヒヤツとしたちやつた。まさか、神代魔法も無しにミレデイさんをここまで追い詰めるなんてミレデイさん驚いちやつたよお〜」

三人を褒めるミレデイ。だが、そんな彼女の言葉は浩介の耳には入っていないかった。その表情は険しい。なぜなら鎧は全て「黒弦」で拘束していた筈だ。なのに破壊されているのは両腕だけで、胸部は装甲だけが剥がれているだけで、奥には漆黒の装甲が見えて、そこには傷が一つもついていなかったからだ。浩介には、その装甲の材質に目撃えがあった。

「んう〜？ やつぱりハジメンの親友だから気付いちやつた？ そいえば君とツインテールの子の武器も使われてるからね〜」

ミレデイは浩介の視線に気がつき、ニヤついた声音で漆黒の装甲を指差す。そして、見透かしたように浩介と妙子の武器の材質に使われていると分かっているミレデイに、浩介は表情を歪ませ嫌々しくその鉱石の名を呟いた。

「やつぱり、アザンチウムか……」

アザンチウム鉱石は、世界最高硬度と靱性を誇る鉱石だとハジメから聞いている。だ



から、金属をも切断する「黒弦」を以てしても傷一つつかないわけである。あのアザンチウム装甲を破るには、今の浩介の魔力を全部「黒弦」に注ぐという一か八かの賭けか現在使えない仮面深淵しか方法がないのである。それに、浩介は自分は今もう「紅爆」を使い果たしており、奈々の水瓶も残り少ない状況に眉間にシワを寄せた。

「ふふ。君達はこの難関をどう対処するのかな。さあ難易度を上げていこつかあ！」

ミレディは浮遊ブロックから素材を奪い、両方の腕を繋ぎ合わせて再構築を行うと、モーニングスターを射出しながら、自らも猛然と突撃を開始した。

「っ、どうする?! 浩介!」

「手はあるが……それには、なんとかしてミレディの動きを封じるぞ!」

「了解!」

火力不足というどうしようもない事情に、妙子は焦った表情で浩介に問う。浩介は一か八かの賭けに出るためにミレディの動きを封じるようをお願いする。その言葉に信じて妙子と奈々は頷くと迫り来るモーニングスターを回避すべく近くの浮遊ブロックに飛び移ろうとする。

しかし、

「させないよお〜」

ミレデイの気の抜けた声と共に足場になっている浮遊プロックが高速に回転する。

いきなり足場を回転させられバランスを崩す三人。そこへモーニングスターが絶大な威力を以て激突した。三人は、木っ端微塵に砕かれた足場から放り出される。浩介は、ジャラジャラと音を立てながら通り過ぎる鎖にしがみついた。妙子は鞭を使って、奈々と共にどうにか眼下の浮遊プロックに不時着する。

そこへ狙いすましたように、ミレデイがヒートナックルを猛然と突っ込んだ。

「タエツ——くうう!!」

「奈ツ——つう?!」

奈々が残り少ない水瓶を消費して咄嗟に「氷壁」を造りだして直撃は避けたものの、インパクトの瞬間に発生した強烈な爆発と衝撃に、奈々と妙子は名前をお互いに呼び離さないように手を繋ぎ合うも二人の口から苦悶トルネーグの声漏れる。それでも、妙子は奈々を離さないように抱き締め、すれ違い様に鞭が放たれる風の刃でミレデイの右腕を狙って、一部を切り裂いたが切断までとは行かず、妙子は悔しげな表情で奈々と共に浮遊プロック表情着地する。

「これで仕留め切れないか……二人共やるねえ〜」

感心してやるような口調で二人を称賛するミレデイ。しかし、今度は逃がさないと叫びんばかりにモーニングスターを射出しようとする。が、そこへ黒い影がミレデイの真上

に現れる。

勿論、

「終わりだあ!!」

浩介である。ミレデイが妙子と奈々の二人を相手している間に「影潜り」でミレデイの本体にまで移動した浩介はそのまま全魔力を注いだ。「黒弦」を右手に巻き付けている。

「なっ?!」

突然、浩介が自分の目の前に現れたことに驚愕の声を上げるミレデイ。防ごうと右腕を動かすも、浩介の「黒弦」が放たれる方が速かった。

「殺取「絶・蛇行刃」!!」

放たれた全魔力を注いだ「黒弦」は、一筋の閃光となってミレデイの胸部の装甲へと向かう。浩介もその光景を見ていた二人も貫けると信じていた。

しかし……

「禍天<sup>かてん</sup>」

ミレデイのたったの一言から発動した魔法によって絶望に染まる。放たれた「黒弦」は、ミレデイが出した漆黒の球体によって方向が狂い完全に速度を落とされ最終的にミレデイに届かなかった。

「は——」

浩介は言葉を失い、目の前の状況が理解できずに声が漏れる。するとミレデイから声が掛かる。

「びつくりしたよ。私にここまでさせるなんてね。でも、これで終わり」

軽くはない。真剣な口調でただ、自分をここまで追い詰めた相手に敬意を以てミレデイは浩介に右手を突き出した。浩介は魔力を使い果たしており、避けようとしても上手く体が動けずにそのままミレデイの拳が直撃する。

「カハッ——」

ミレデイの右ストレートを直撃した浩介は、喰らった衝撃で肺から空気が吐き出され、声にならない声が漏れる。骨が折れたのか全身の至るところが痛い。意識も遠のいていき、妙子と奈々が何かを叫んでるが何を言っているのか分からない。

頭が回らず、目の前も暗くなっていき何も見えない。

ただ、これだけ理解できた。

「(死んだ俺)」

自分の死を……………。

ただ、謝ろう。こんな自分を信頼してくれた二人の幼なじみに……………。

「ごめん……………二人共」

そのまま、浩介の意識は段々と闇の底へと沈んでいった。

~~~~~

《それで、良いのか?》

聞き覚えがある声が聞こえ、浩介は目を開けた。

そこには、

『は?』

浩介として、有り得ないのを目にした。

『なんで目の前に俺がいるんだよ……』

浩介の目の前には浩介自分がいた。しかし、その姿は高校の制服を着た浩介であった。

『……………お前は誰だ?』

《ふむ……………申し遅れた。私の名は……………今は名無しアンノウンと呼んでくれたまえ》

浩介の間に掛けに流暢な口調で返す制服姿の浩介―改め名無しアンノウン。アンノウンはその

まま、話を続けた。

《後、君は気になっっているだろうから先に答えておこう。まず、この姿は君を真似まねているだけだ。だから、こういう風に君のどんな姿にも私はなれる》

アンノウンは姿を小学生、中学生、幼い時の浩介へと変えながら話し続ける。声もその時の声色に合わせてきており、ホントに浩介自分が喋っているようで不思議な感覚だ。

《そして、この場所だが……普通、君が来れない場所。夢と現実、時間があやふやな世界。名は精神世界と呼ばれている。所謂、生と死の狭間だ》

『狭間……そつか。じゃあ、俺はまだ死んでないんだな。よし』

アンノウンが突き付けた現実に対して浩介は軽い口調で返しだけで、アンノウンが目を見開いた。

《怖くないのか？》

『怖い？ ああ、昔の俺ならそう思ってたさ』

浩介の発言を聞いて、アンノウンは一瞬で浩介の横へと移動して語気を強めながら問い掛けた。

《なら、何故？ 強くもない、力もない弱者のお前なんか戦いに出て何の意味がある？》  
『何、簡単だろ？ 強くなかったら頼ればいいってことよ。だって、俺には大切な仲間が

いるからな』

《……………》

だが、返ってきたのは呆気なくシンプルなものだった。浩介の返事に、アンノウンは少し考える素振りを見せると更に問い掛けた。それも強大な圧を放ちながら、

《問おう、遠藤浩介。お前は、これからも道化<sup>演者</sup>として、巨大な虚栄を張れるか？虚飾という大罪をこの生涯ずっと背負えるか？》

空気が重い。息をするだけで胸が張り裂けそうだ。だが、怯まず浩介は、ジツと目の前の自分を見詰める。そして、重い口を無理矢理に動かして声を張り上げた。

『ああ、良いぜ。背負ってやる！　どんな罪も、大切な人達を守るならよ!!』

浩介の決意の叫び。自分の放った圧さえも打ち破って叫ぶ声に、アンノウンは目を見開く。だが、湧き上がった感情は驚きではなかった。それは、喜び<sup>喜び</sup>だった。

《……フツ、やっと答えを見つけたか》

笑って呷くアンノウン。同時に、指をパチンツと鳴らすとアンノウンの奥から木製の扉が現れた。そして、扉の方向に指を差す。

《行ってこい》

『?』

突然のことで驚きを隠せず、呆けている浩介に、アンノウンは溜息を一つすると浩介の後ろへと瞬間移動するとポンツと応援するかのうように背中を押す。

《はあ、だから遠藤浩介。早くお前は現実に戻れ。仲間達が待っているんだろ?》

『!、ああ』

《なら、進め。お前には、その理由がある》

いきなり後ろに回られて驚くも、アンノウンの言葉に頷く浩介はアンノウンに感謝の礼を込めて頭を下げると扉の方へと走り出す。そして、扉へと辿り着きドアノブに手を掛ける時だった。後方のアンノウンに声を掛けられ浩介は後ろを振り向く。すると、アンノウンは浩介が振り向いたと同時に何かを浩介へと投げ渡した。

《そうだ。これを、持っていけ。今のお前なら安心して託せれる》

アンノウンから投げ渡されたものを片手で掴み取り、見てみるとそれは仮面だった。それは、普通の人からすれば至って普通の目を隠すだけの仮面。だが、

『……………そっか、これは』

浩介にはこの仮面が何であるかすぐに理解した。そして、浩介は仮面をギュツと抱き締め「おかえり」と小さく呟いた。

浩介は仮面を抱き締めた後、顔に仮面を着ける。身に着けて分かる。心が高鳴り、清々しい気分になる。仮面を着けた浩介は、アンノウンの方へと向き直る。

『コレ、アンタが預かってくれてたんだな。ありがとよ。これを渡したってことは、今の俺なら扱えるってことだろ。だから見ていくれ深淵の再来を、な』

浩介は笑ってそう感謝を告げると扉を開けて、奥へと進んでいった。

その行く道に応援はない。歓声はない。だが、それでいい。

だって、それは……………



——虚飾の罪を継いだ男が進む道なのだから。

やがて、浩介の姿は見えなくなり扉は独りでに閉まる。アンノウンはその光景を見詰めたながら、その姿をまたも変えていく。しかし、その姿は浩介ではなかった。

今のアンノウンは、百八十は優に越えている長身。黒いローブを身に纏い顔は道化の仮面を着けた男の姿であつた。

《大切な仲間の為か……フツ、彼には私みたいにならないで欲しいな》

その言葉は、自分の罪を継いで再び、戦いの場へと向かつた。彼浩介に向ける願い。

《アウス、クリスタ。また、君達と会いたいな……》

そう呟くアンノウンは、昔の思い出を懐かしみながら何も無い灰色の空を見上げるのだった。

~~~~~

「浩介ええええ!!」

「浩ちゃん!!」

妙子と奈々は、浩介がミレデイに殴り飛ばされている姿が目に入り、足に力が入らずその場へへたり込み、その現実を受け入れられなくて浩介の名を叫ばずにはいられな

かった。

しかし、現実には残酷だ。信じたくない事実には、二人の目からは雫が流れ落ちる。すると、上の方から声がした。

「うん、彼は相当、頑張った。神代魔法も無しで、このミレデイさんをここまで追い詰めたんだ」

淡々と話すミレデイ。それは、ちゃんとした浩介への称賛と敬意が込められている。妙子と奈々の二人は、ミレデイの言葉を睨みながらも、ちゃんと耳に傾けていた。すると、ミレデイからある提案された。

「だから、君達には、選ばせてあげよう。ここで諦めてくれたら君達二人は生かして地上に送り帰してあげる。でも、まだ戦うという意志があるなら喜んで受けて立とう」

それは、慈悲だ。ミレデイは冷酷な人間ではない。だから選ばず。逃げるかのを。戦うかのかを。

しかし、二人の答えは既に決まっていた。

「……逃げる？ 嫌よ。私は何としてでも貴女に勝つ！」

「私も、貴女に勝って地上に戻る！」

二人の意志は変わらない。ミレデイ・ライセンに勝ち、自分達の覚悟を証明すること  
を……

「…………分かった。君達の覚悟を尊重しよう」

ミレディは二人の変わらない確固たる意志を受け入れ、それ相応たる攻撃で返す。

直後、それは起こった。

空間全体が鳴動する。低い地鳴りのような音が響き、天井からパラパラと破片が落ちてくる。いや、破片だけではない。天井そのものが落下しようとしているのだ。

「?! つ、まさか!」

「察しが良いね。騎士以外は同時に複数指揮することは出来ないけど、ただ一斉に落とす」だけなら数百単位でいけるからね。さあ、これを凌げるかな?」

淡々と説明するミレディ。しかし、ちゃんと聞ける余裕はない。この空間の壁には幾つものブロックが敷き詰められているのだが、天井に敷き詰められた数多のブロックの全てが落下しようとしているのだ。一つ一つのブロックが、軽く十トン以上ありそうな巨石である。そんなものが豪雨の如く降ってくるのだ。二人の額に冷たい汗が流れる。

「奈々! ドーム状に“氷壁”を張って!」

「え?! つ、うん!」

すぐに身を守る為に指示をだす妙子とそれに応える奈々。奈々はすぐに残りの水瓶を使って自分達を守るようにドーム状の“氷壁”を造り上げると、天井から巨石郡が降り注ぐのは同時だった。

ゴゴゴゴゴゴゴツ!! ゴバツ!!

天井からブロックが外れ、地響きが鳴り止む代わりに轟音を立てながら自由落下する巨石郡。しかもご丁寧に、ある程度軌道を調整するくらいで出来るそうで妙子達がいる場所へ特に密集して落ちてくる。ミレディは既に壁際に退避していた。

「くう!!」

「奈々!」

残りの魔力を使つて“氷壁”を維持する奈々。しかし、そんなのを知らずに“氷壁”へと降り注ぐ巨石郡。時間が経つにつれ、奈々の魔力も切れていき、遂には……

ピキッ!

「?!」

何かがヒビ割れる音が聞こえ、見てみれば“氷壁”の至るところからヒビが入り始めていた。奈々は魔力を注ぐがもう足りない。絶対絶命のその時だった。

「遅くなつたな二人共」

「え」

聞こえるはずの無い声が聞こえ、声が漏れる二人。と同時に二人を守る“氷壁”からガラスが割れる音と共に巨石郡が流れ込んでいくのだった。

そんな二人の様子を壁際で観察していたミレデイの目には、巨石郡によつて“氷壁”が破壊され、一瞬にして呑み込まれたように見えた。流石に数多の巨石郡には耐えられなかつたかと僅かな落胆と共に巨石郡にかけていた“落下”を解いた。

巨石郡に呑み込まれ地に落ちていた浮遊ブロックが天上の残骸と共に空間全体に散開するように浮かび上がる。

「う〜ん。やつぱり無理だつたか。二人も良い線だつたけどなく。まあ死体は回収して彼の死体と一緒に埋葬してあげよつか」

ミレデイは、そう呟きながら妙子達の死体を捜す。

そして、ふと思う。そうえば、殴つて殺した彼の死体は何処にいったと。と、その時、  
「フツ、いつ我が死んだと錯覚していた？」

「えっ？」

聞き覚えのある声が響いた。漆黒の姿に、見たことのないサングラスを身に着けた殴り殺した筈の少年、そう、浩介だ。驚愕と僅かな喜色を滲ませた声を上げて背後を振り返るミレデイ。そこには、以前よりも魔力の質が向上しており、謎にターンを決めながら五体満足の浩介が、浮遊ブロックと浮遊ブロックの間に繋がたワイヤーの上で立ちながらミレデイを見下ろす姿があつた。

「どい、どい、どい……」

巨石郡で呑み込まれた二人よりも確かに殺したと確信していた浩介が、目の前にいることに思わず疑問の声を上げるミレデイ。そんな彼女に、浩介は、サングラスをクイッと上げると声高らかに叫ぶ。

「フツ、我に不可能という文字無し！ 我が深淵は闇を纏い悪を断つ！ 死の淵から再演せし我が名を闇の貴公子！」

「へ？」

「さあ、皆さん！ ご唱和下さい！ 我の名を！ 深淵卿！ コウスケ・E・アビイウス  
ゲエエイト！！」

「イエエス！、アビイイツスゲエエイトツ！！」

「へ?!」

浩介、否、アビスゲートの高らかな自己紹介に続いて二人の声が追従して「アビスゲート」の名を叫ぶ声が聞こえ、困惑する中、ミレデイは声のした方向へ視線を転じると一人はウツキウツキで、一人は恥ずかしそうにしている二人の少女の姿が見えた。

「嘘オ、二人も?!」

「またもや、死んだと思っていた人物が生存していることに驚きの声を上げるミレデイ。そう、妙子達もアビスゲートの『影潜り』で巨石郡を切り抜けていたのだ。しかし、アビスゲートはこの試練の後は二人に叱られるのは確定事項である。」

「ふふ、アハハッ！最高！まさか全員生存なんてミレデイさん驚いちやったよ！特に君。絶対に殴り飛ばして内蔵とかぐちやぐちやの筈なのに……」

だが、そんな状況であるのに、自分が欺けた三人に喜びが抑えられなく笑みを零してしまうミレデイ。しかし、自分が絶対に殴り殺した筈のアビスゲートが生き延びることに一番驚いていた。アビスゲートはミレデイの問い掛けに素直に答えた。

「そうだな。我は其方の言う通り死の淵にいた。だが！我は深淵卿！不死鳥の如き我は何度も舞い降りる！！故に不死身だ！！」

「えっ、ちよつとミレデイさん。着いて来れないなあ〜」

アビスゲートのテンションに着いてこれず、少し引き気味になっている。だが、アビスゲートも今はいつものよりも興奮状態である。そして、それは浩介の「深淵卿」が復活したと同時に発現した新技能に理由があった。

その名は……

アビス・パースト  
深淵突破

限界突破と似た能力であり、ステータスが倍加する能力であるのだが、普通の「限界突破」と違い「深淵突破」はアビスゲートの深度。つまり厨二心が深くなっていくほどステータスが倍化する。

そんなトンデモ技能が発現し、それに加えアビスゲートは今、興奮状態のせいで、極度の超集中状態に入っており、今の深度はV。つまりステータスが五倍の状態なのである。

「解放者ミレディ・ライセンよ！ 故にこの勝負、我が勝利する!!」

「……………」

クルリとバク転をしながらターンを決めて宣戦布告するアビスゲートに、ミレディは無言になる。しかし内心は、喜びに満ち溢れていた。故に、その宣戦布告を嬉々と受け取った。

「……………上等」

両者、互いに見つめ合う。そして短い静寂が訪れた。

そして、

「アビス・ロンド  
深淵演舞!」

先に動いたのはアビスゲートだった。一瞬にミレディの左腕へと移動すると、自分自身をコマのように回転させながら左腕を切りつけていく。

「っ、このお!!」

ミレディは勢いよく左腕を振り回して、アビスゲートを引き離すと傍にある浮遊プラットフォームをアビスゲートへと集中的に“落下”させていく。



「On My Way !!」

しかし、アビスゲートは英語を叫びながら難なく「落下」してくる浮遊ブロックを避けて足場にしていく。そして、足場にした瞬間に出来た影から「黒弦」を取り出す。

そして、ミレデイの上にまで到達すると「黒弦」を爪のように纏わせてから漆黒の爪をミレデイへと振るう。

「アビス・コード  
深淵殺取 深淵暗駆！」

「くうっ——つて嘘?!」

迫りくる爪にミレデイは両腕を交差させて防御するも、一瞬で鉄屑へと変えさせる。ヤバイと判断したミレデイは咄嗟に腕を捨てて後退してアビスゲートの漆黒の爪を避ける。

だが、アビスゲートもすぐに「黒弦」を使って浮遊ブロックを利用して方向転換するとミレデイへと駆ける。だが、ミレデイも負けては要られない。更に多くの浮遊ブロックをアビスゲートへと「落下」させる。

「無駄だ。深淵分身!!」

多くの浮遊ブロックが迫る中、アビスゲートは、そのまま速度を緩めずに分身を創り出した。それも何時もよりも多い人数だ。なんと、その数十人。

「ええ?!増えたあ?!」

「行くぞ我達よ！」

『応!!』

驚きの声を上げるミレディを気にする暇も無く、分身達と共に迫りくる浮遊ブロックを対処していくアビスゲート達。其処にターンは欠かさずに決めていく。

そして、十人のアビスゲート達は一齐に“黒弦”を螺旋状に投げ飛ばす。

『殺取“螺旋刃・十連”!!』

強大な刃を持った十の漆黒の竜巻が、前方の障害の全てを無に帰していく。一瞬で、“落下”させた浮遊ブロックが木つ端微塵にされたのを見て、ヤバイと判断して退避しようするミレディ。

「これは、ヤバ——っ?!」

ミレディが退避しようとした時、胴体に何かに縛りつけられ、身動きが取れなくなる。視線を辿れば、鞭で縛りつけて足止めをする妙子と奈々の二人の姿が見えた。

「っ、このお！」

「フフっ、逃がすわけないでしょ！」

「浩ちゃん、やっちゃって！」

二人は、残り少ない体力と気力で巨大な騎士をその場に留めさせている。しかし、ミレディも一筋縄ではいかない。精密な重力操作で縛りつく鞭をぐり抜けた。

しかし、

「これで終わりだミレディ・ライセン」

「っ！」

身動きが取れるようになったミレディより、アビスゲート達の方がミレディの元へと迫り着く方が早かった。

アビスゲート達から、夜空のような色の魔力が体全体から放たれていく。そして、その魔力の奔流は「黒弦」へと集中していき、綺麗な夜空の糸へと変化した。

「深淵奥義 “影色舞”」

シルエツトダンス

その技名と共に、夜空に流れる流星の如く降り注ぐ夜空の閃光達がミレディを切り裂いていく。その閃光は、胸部のアザンチウムの装甲までも傷付けていく。

アザンチウムは最高硬度の鉱石であり、普通は傷付くことなんて滅多にない。しかし、アビスゲート「浩介が扱う『黒弦』」は注ぐ魔力によってその硬度も鋭さも変化する。そして、それはアザンチウム鉱石と同等の硬度と打ち破る鋭さにもなる訳だ。

キイイイインと金属音がぶつかり合う音が部屋全体に響き渡る。それと同時に、ミレディの装甲が段々とヒビ割れていきバキンツと砕かれた音と共にミレディの装甲は破壊され核が完全に剥き出しになる。

「チエックメイトだ！」

そして、本体であろうアビスゲートがミレデイの破壊された胸部へと侵入して、勝利の宣言を上げながら、ゴレムの核を手にとって持っていた小太刀で思いつ切り、全身全霊、全力全開。残りの自分の全てを使って核へと突き刺した。先端が僅かにめり込み、ピシツという音を響かせながら核に亀裂が入っていく。そして、段々と核の亀裂が押し広がっていき……

遂に完全に粉碎した。

「……………おめでとう。君達の勝利だ」

ライセン大迷宮、最後の試練は浩介達の勝利と解放者ミレデイ・ライセンの激励と共に終わりを告げるのだった……。

## 深淵八話 決意そして……

其処は一言で言えば、黒一色。

辺りが全てが真っ黒であり、例えるなら星の無い夜空。そんな、真っ暗な空間がずっと先が見えない奥の向こうまで広がっていた。そんな空間に、一つの明かりが現れた。それは上に浮かぶ満月から放たれる月光のみだった。

そして、月光が差し込む先には、黒い椅子に座る一人の黒ローブを身に纏った人物がいた。ガタイと長身であるからにして性別は男だろう。顔は縦半分は白黒に分かれた道化師の仮面を着けており、顔は見えない。

《嘔吐きの物語良い道化譚を見せて貰った》

そう楽しそうに呟いた男は、椅子の背もたれにもたれる。そして、彼の視線の先には霧のようなモヤが広がっており、モヤはディスプレイのようにある映像を映し出していた。それは、戦いに敗れた胸の装甲が破壊された巨大な騎士ゴーレム、ミレディだ。

《序章にしては僥倖。ミレディ・ライセン過去の英傑を信頼する仲間と共に打倒し、新たな力も開花させた》  
言葉を続けたまま男の視線は、映し出される映像からは目を離していない。

《虚飾という名の大罪を背負い、その代償に立ちほだかる英雄の器を持つ者しか越えられない壁を、ただの演者<sup>モブ</sup>である君はどう越えていくのか……》

男は思い出す。自分の創り出した大罪を受け継いだ者達の待ち受ける悲惨な末路の数々を……

——正義を掲げた道化は、自分の実力を理解しながらも、無謀と分かつていながらも立ち向かい、その命を散らしていった。

——戦いに明け暮れた道化は、色んな者達から期待されながらも、勇氣より恐怖が勝つてしまい大事な戦いから逃げてしまいその道化を信頼してきた者達によつて無残に殺された。

——平和を願った道化は、終末へと突き進む未来を案じ、自ら悪を演じることで、戦士達を育て上げ、平和に満ちる世界を願いながら戦い殺されて終わりを告げた。

——英雄を目指し、至った道<sup>アルゴノウト</sup>化は、多くの人に騙されながらも人々を救い、英雄という名の数々の試練を越えていった。その内容は喜劇と称されながらも愚者と呼ばれながらも英雄。その世界での“始まりの英雄”へと成った。

そんな数々の役を演じて物語を創り出し、結末が悲惨であったり、残酷であったり、喜劇だったりと様々な終わりを見せた道化達。どれも、結末が違うあれも彼等は、好かれ、嫌われ、喜ばれ、恨まれるも己の道を進んでいった。

《楽しみだよ、遠藤浩介。君はどんな道を歩み、どんな物語を見せてくれるのか——》

男は語りながら、自分の手をギュッと強く握り締めて、

《私が終わらせることが出来なかった。神殺しの物語を終わらせてくれ》

それは、彼の願いなのか分からない。ただ、後悔しているような口振で呟くのがあった。

~~~~~

「——う」

浩介は、体全体が何か柔らかな物に包まれている感じた。随分と久しぶりの感触だ。頭と背中を優しく受け止めるクッションと、体を包む羽毛の柔らかさを感じ、浩介のまどろむ意識は混乱する。

「これ、ベツ、ドか？」

何故ベッドに？と疑問に感じながら浩介は体を起こす。起きる際に、物凄く倦怠感を感じて浩介は、寝ても治らないほどの無理をしたんだと自覚する。しかし、状況が理解出来ずにいるので浩介は自分がいる部屋の中を見渡すと、まず思ったのは壁などが迷宮のと同じなので、今は迷宮内にいるということ。次に思ったのは、シンブルで殺風景だったこと。そして、浩介は部屋の中で一番に目に入った物を見て驚愕のあまり苦笑い

気味で声を漏らした。

「これは、また凄え数だな」

それは、書棚だった。それも壁そのものをくり抜いて作られた天井までの書棚に、ぎっしりと古めかしい書物が収まっている。朽ちた様子もないのは、魔法を使つて保護しているからだろう。

そして、今さつきまで自分が寝ていたベッドは簡素なもので、布団や毛布ほどだ。

まだ調べる余地があると思ひ浩介は、ベッドから抜け出して立ち上がるが、足がおぼつかなくてよろけてしまう。

「おっ、とつと……ふう」

なんとか書棚を手を掛けて転ぶのを回避して安堵する浩介は、書棚に目を向けると興味深い物が目に入った。

「写真？」

それは、写真立てで綺麗に保存されている一枚の写真だった。見ると七人が集まった集合写真だろうと思つた。真ん中で、黒髪の眼鏡の青年が、金髪に蒼穹の瞳を持った少女に腕を引かれて慌てている。その二人を包み込むように、無表情の大柄な男性、不敵な笑みを浮かべる海人族の女性、呆れた表情の魔人族の青年、厳めしい顔付きの禿頭の男性、妖艶な雰囲気森人族の女性が映っていた。



「なんだこの写真……ってか、この世界にカメラなんてあったか？」

何故、この世界に写真があるのかと写真を持つて浩介は眺めながら熟考していると、後ろの壁からガコンツと音が響くと、突然、壁が動き出すと声が聞こえた。それも、ウザイほど聞き覚えがあるほどの……

「おつ、起きたみたいだね。良かった安心したよ〜」

「……………へ？」

その声の主はミレディである。咄嗟に構えを取ろうとするのだが、浩介はミレディの姿を見て困惑する声を上げる。

それは、浩介の目に映ったのは、ちっこいゴーレムのミレディだった。

「ん、どうしたの？……って、そっか。この姿だもんね驚くのも当然か〜」

浩介の表情を見て、ハツとして、「ごめんね〜」と軽く謝るミレディ。その姿は、巨大版と異なって人間らしいデザインで、華奢なボディで乳白色の長いローブに身を纏い、白い仮面を着けている。ミレディ曰く、巨大な騎士ゴーレムよりかは、動き易いだろう。

そして、此処はミレディの住処らしく、向こうには神代魔法の魔法陣も刻まれているらしい。

「なら、俺達は攻略できたってことか？」

「うん、そうだよ。おめでとう！よく、神代魔法無しで攻略したよ。ミレデイさん感激！」

ミレデイの激励に、嬉しいが少し恥ずかしくなる浩介。すると、ミレデイが来たところから二つのこちらへと走って向かっている足音が聞こえてきた。

その音を聞いて、ミレデイが「あー、心配してたからね」と呟いているのを聞いて、浩介も誰と誰がこちらに向かっているのかを察した。

そして、二つの足音がすぐ近くにまで聞こえた時、

「浩介え!!」

「浩ちいん!!」

「ちよつ、二あ——わわわわ?!」

やはり、足音の正体は妙子と奈々だった。二人は浩介が起きたのが分かると、すぐさま駆けつけて浩介へと飛びついた。その時に、ミレデイが二人に声を掛けるが、浩介のことで頭がいっぱいの二人の耳には入っておらず、虚しい叫び声を上げながら巻き込まれていた。

浩介も飛びつかれた勢いで後ろのベッドへと倒れ込んでしまった。二人は浩介に顔を埋めながら、ぐすつと鼻を鳴らしており、余程心配していんだろう。浩介は苦笑いすると、手に持っていた写真をベッドの上に置いて、二人の頭を撫でた。

「すまん、二人共。迷惑かけちゃったな」

「そうよ！この迷惑厨二！」

「うえええん!! よがああつたよオ！」

抱き着かれながら罵倒など色々と言われるが、心配掛けてしまったので、二人の気が済むまで待とうかと思っていたのだが、ふと、ある場所に視線を向けると、二人に踏まれているミレデイを見てしまい「あ、ヤベ……」と思つた浩介は、すぐさま二人に声を掛けた。

「あの一、お二人さん……」

「グスツ、なに？」

「ふえ？」

「下見ろ」

「下？……あ」

二人は浩介の言葉と下の方に指差すジエスチャーを見て、下に視線を向けると、やつと二人もミレデイに気付いたらしく、すぐに足をどけたのだが、ミレデイは「アハハ……ミレデイさんは影が薄いクソ雑魚です」と蹲りながらしよげていた。

それからしばらくして、ミレデイをなんとか励ますことが出来ると、浩介は自分がミレデイを倒してから倒れてしまった後の経緯を奈々はまだ泣き止んでいないから妙子

に尋ねた。

「そういえば、俺がぶっ倒れてから何があった？」

「あ、ごめんね。今から説明するわ。あの後ね……」

妙子曰く、あの後、浩介の体全体から溢れていた魔力が消え、そのままぶっ倒れたのを見て、すぐに奈々と共に駆けつけたらしい。二人は何度も声を掛けても浩介が目を覚まさないことに焦っていると、浮遊ブロックに乗った今の姿のミレデイが現れた。

『お〜い！さつきぶりい〜。迎えにきたよお〜』

現れたミレデイに警戒する二人だったが、事情を聞くとミレデイも浩介のことが心配で駆けつけたことを聞くと、不安がありながらも、二人は浩介の安静が大事だったのでミレデイに着いていくことにしたらしい。

そして、住処に辿り着くと隠し部屋にあったベッドで浩介を休ませたらしい。その後、妙子と奈々は浩介の看病しているとミレデイから休んだほうが良いと言われ、代わりに自分が看病してくれるということで、妙子と奈々はミレデイが用意してくれた簡易用の寝袋で眠りに落ちたという。

「……………なるほどな。じゃ、俺達は迷宮攻略したってことか？」

「うん。そうだよ〜」

浩介の呟いたことに、頷いて同意するミレデイ。そして、二人も浩介に抱き着くのを

やめて立ち上がると、ふと奈々が浩介の隣に置かれたこの世界じや見慣れない写真を見つけた。

「ねえ、浩ちん。それって写真？」

「ん？ あー、うん。その書棚に置いてあつてな」

「へえ……年齢層や種族もバラバラね」

浩介が持つ写真を見て妙子がそう答えた。

「確かに、なんの集まりだこれ？」

「そうね。そもそも写真なんてものがあるのが驚きだけど」

「だよね。カメラなんて王国にも出回ってなかったし」

三人が写真で悩む中、写真の持ち主であるミレデイが答えた。

「それは、オーちゃんのアーティファクトで撮った物なんだ」

「オーちゃん……もしかして、オスカー・オルクスか？」

「うん。オーちゃんが七人で撮ろうって言ってね」

ミレデイから話を聞くと、この写真は、ハジメが持つ「生成魔法」を使っていた解放者の一人、オスカー・オルクスが作ったアーティファクトによって出来たのを知り、写真に映る七人は、なんと解放者を代表するミレデイを含めた七人の神代魔法の担い手だという。

それを聞いた三人は、驚愕しながらマジマジと写真を見つめる三人。すると、写真を見つめていた浩介は、写真に映る一人の少女に指を差した。

「じゃ、もしかしてだが、この金髪の子がミレディか？」

「うん、正解！ どう？ ミレディさんの人間の姿？ 超ウルトラ美少女でしょ？」

自慢するかのような口調のミレディに返ってきたのは……

「嘘?! 性格と見た目が合っていない！」

「滅茶苦茶、可愛いのに、性格が……」

「解放者の人達も苦労したんだろうな……」

「……君達さあ、失礼って言葉を知ってる？」

写真を見て、昔のミレディの姿を見て三者三様の感想を言い始める三人に、ミレディはゴーレムからでも怒りを全体に感じさせるような声音で呟く。

「「スイマセンしたあ！」」

ミレディから伝わるただならぬ雰囲気すぐに土下座する三人であった。

それから、ミレディに少しばかりのお叱りを受らった三人は、ミレディの住処の隠し部屋から出ると、

「はい。三人共、ちよつと待ってねえ」

ミレディはそう言うと、魔法陣を起動させる。三人は床に浮かび上がる目の前の魔法

陣に息を呑みながらジツと見つめる三人。

「これが……」

「うん。これがミレデイさんの『重力魔法』が刻まれた魔法陣だよ」

浩介の言葉に素直に答えるミレデイは、三人に「ほら、乗った乗った」と魔法陣の中に入るように促す。三人もミレデイに従って魔法陣の中へと入った。

「う?!」

「っあ」

「いっ?!」

すると直接脳に神代魔法の知識と使用方法が刻まれていく。そして、いきなり脳に沢山の情報が入り頭痛がして苦悶の声を漏らす三人。

ものの数秒で刻み込みが終了し、三人は、ライセン大迷宮の神代魔法『重力魔法』を手に入れる。

「……いつつ、これが、重力魔法」

「……凄い魔法ね」

「これが、神代魔法……」

「三人共、おめでどう！神代魔法は適正があるけど三人共バツチりだね〜！」

そう、神代魔法には適正がある……

ハジメなら // 生成魔法 //

ユエなら // 重力魔法 //

優花なら // 再生魔法 //

アレスなら // 魂魄魔法 // と // 空間魔法 //

フリードなら // 変成魔法 //

と、それぞれの適正があつたり、シアみたいに適正がない場合もある。だから、同じ神代魔法の遣い手でも適正の有り無しで差が出るのだ。

そう説明するミレデイに、浩介が少し考える素振りをすると質問した。

「適正か……じゃあ、ミレデイ達は各々の神代魔法を十全に扱えるんだよな？」

「うん、そうだよ」

「じゃあ、そんな人達でも神達に勝てなかったのか……」

「……………」

浩介の言葉に、押し黙ってしまふミレデイ。それを見て、妙子と奈々に非難の眼差しを向けた。

「っ、浩介！」

「浩ちゃん！」

「あつ…………ご、ごめん失言だった」



両隣の二人の眼差しに、自分の言葉が失言だったことに気が付いて頭を下げて謝る浩介。しかし、ミレディは「うん、全然大丈夫だよ」と普通は怒ってもいいのに彼女は笑って返した。

「君の言ったことは間違いない。私達の全力を以てしてもあのクソ野郎共には敵わなかった……」

ミレディは語る。人、魔人、亜人の未来を賭けた解放者と教会との神殺しの戦いを……

「あの時は、いろんな事があつたな。戦つたり、泣いたり、怒つたり、喜び合つたり……  
そして、偽神と戦つた」

今でも、思い出す。出会い、別れ、時には遊んだりと楽しかった今でも宝物の思い出。  
そして、自分達に立ちはだかつた多くの敵達を……

——造られた人形の神の使徒。

——神の狗いぬと成り下がった初代勇者。

——腐つた聖光教会と狂つた神殿騎士達。

そして、偽神エヒトルジェ。

沢山の苦難もあつたが大切な仲間達の共に抗い勝ち進み、遂に七人の神代魔法遣いで神域へと到達して、激戦の末なんとかエヒトを討伐した。

「……あの時は、やっと終わらせたんだ。 って思ったんだ」

嬉しかった。 やっと、ベルとの約束を。大事な人 神の理不尽に死んでいった人々の悲願を果たせた。

そう思った時だった。

神域の奥から突然と純白の神殿が現れ、四つの影が見えた。ミレデイ達の表情は歓喜から瞬時に絶望へと変わった。エヒト偽と神は違い、本当の神という存在を、この身を以て思い知らされた。

——自分達がどう足掻いても届かないことを。

そして、ミレデイ達解放者達は一気に神の眷属達に押され始め、負けてしまい、解放者のリーダーだったミレデイ・ライセンは処刑され解放者達の幕を閉じ、守ろうとした人々からは反逆者として語られるようになった。

「これが、ミレデイさんと皆の……解放者達の辿った末路さ……」

「……………」

最後は、力ない声で話終えるミレデイ。その姿を黙って見ることにしか出来ない三人。誰もが何も語らないまま、時間だけが過ぎていく。

その時だった。浩介がミレデイの方へと歩み寄った。そして、片膝を突くとミレデイの両肩を両手でガツチリと掴むと真剣な表情でミレデイを見る。

「ど、どうしたんだい?!」

いきなり肩を掴まれて驚くミレデイに、浩介は気にせず口を開いた。

「安心してくれ、ミレデイ。貴女の……いや、解放者達の願いは、もうハジメが色々な人達が受け継いでる。そして、俺達もだ」

「……」

「俺は弱い。神なんて存在に勝てるどうか分からない。でも——信頼出来る仲間幼なじみがいる」

「ええ」

「うん!」

浩介の言葉に、妙子と奈々も相槌をして頷いて笑みを浮かべてミレデイの方を見る。

「それに、俺達には最強ハジメの親友メもいる。だからミレデイ安心してくれ——神共は俺達がつつ倒す!」

そう宣言する浩介。同じ思いで彼の傍に立つ二人。そんな彼等を見て、ミレデイは——

「フフっ、アハハっ」

笑った。

しかし、それは馬鹿にしてる訳ではない。嬉しくて、流れるはずがない雫を紛らすために彼女は笑う。

そして、ミレデイは笑い終わると小さいゴーレムの体で浩介に抱き着いた。ギュツと力を込めながら、浩介も応えるようにミレデイを抱き締める。すると、ミレデイが口を開いた。

「……ありがとう。コウちゃん、タエちゃん、ナナっち。この、ミレデイ・ライセン。貴方達の勝利を神殺しを成すことを願ってる」

少し震えた声で話すミレデイ。名前に関しては気になるところはあるが、三人は顔を見合わせ頷いた。

「任せろ（て）」

そう答えた三人は、ミレデイが起動させた帰還用の魔法陣の上に立つ。そして、ミレデイに見送られながら浩介達三人は、ライセン大迷宮を攻略を終えたのだった……。

## 幕間 黒の獣

ハジメ達一行が帝国へと向かい、浩介達三人組はライセン迷宮を攻略に向かった頃、ハイリヒ王国は魔族の襲撃の際に破壊された王都の復興をしていきながら、再度の襲撃に備えて防衛にも力を入れていた。

防衛に関しては、王国騎士団、残された神殿騎士達、近衛騎士団達を纏め上げて行っており、それを指揮をしているのはメルド団長である。

そして、愛子も含めた居残り組も元々勇者パーティーと共に迷宮攻略をしていた永山パーティーと三人組となった小悪党組といった戦闘向きな者達は王都の防衛に回り、愛子を中心にした者達は、王都の復興の手伝いなどに徹していた。

そんなある日、居残り組はメルドに呼ばれ城内の大人数が出入りできる部屋に来ていた。しかし、部屋に来たにもメルドの姿はなく、愛子の指示で席に座って、メルド来るまで待つていようということになった。

その数分後、部屋の扉からノック音が響き「入るぞ」と聞いたことある声が聞こえると同時に扉が開き、入ってきたのは自分達を呼んだメルドと新副団長となったクゼ

リー・レイルだった。

メルドは席に座ると、クゼリーは彼の後ろに控えるように立つ。ししす全員が集まったのを確認すると、部屋全体に聞こえる声音で話し出した。

「遅れてすまない愛子殿とお前達。それと急な呼び出しをしましてすまないな」

「いえ、大丈夫です！ それに、私達よりもメルドさんの方がお忙しいですし」

「それに、先生もですが俺も呼ばれるほどつてことは余程、重要なことなんでしょう？」  
苦笑いして申し訳なさそうな口調で話すメルドに、愛子はそんなことないと声を掛け、生徒達も同意するように頷く。その中、清水は忙しいメルドが時間を割いてまでも自分達を呼ぶのには重要なことだと思いい用件を求める。

清水がそう思ったのは理由があり、ハジメ達は言わずがな、光輝達勇者一行組、異世界組でもハジメと優花を抜いて勇者組と張り合える実力を持つ浩介が居ない今、異世界組の実力者は清水である。永山達も十分に実力があるが、防衛に至っては従魔を扱える清水が一枚上手なのである。そんな、重要な役割を担っている清水も呼ぶということはそれなりに重要な案件であると考えられるからだ。

清水の言葉に、この場にいる清水以外の居残り組と愛子は息を飲んで視線をメルドに向ける。その表情からは緊張と恐怖が見える。

「ああ、清水の言う通り。だが、安心してくれ。今から話すことは魔族関連でもない

し、神関連でもない」

清水の言葉に素直に答えるメルド。話す内容も魔人族や神関連のものではないらしく居残り組は安堵の溜息を漏らした。それは、ハジメ達と違って自分達、居残り組は魔人族はともかく、もしも神関連とならば自分達は対抗しようがないからだ。

「じゃあ、どういう用件で——」

「も、もしかして南雲君達とアレスさんに何かあったんですか?!」

清水が何かを言う前に遮って、愛子が自分の生徒達に何かあったのかと切羽詰まった声を上げる。そして、何故かアレスのことも物凄く心配しているのは彼女のために無視しておこう。

メルドも愛子の剣呑な眼差しとアレスへの想いに察してしまい苦笑いしてしまう。

「愛子殿、安心してくれ。帝国へ向かった近衛達からもそんな連絡も来ていない。それに、彼処には南雲とアレスがいるんだ」

「そ、そうですよね……すみません」

「いや、愛子殿の気持ちは分かる。大事な教え子のことを心配するのは当然ですしな」

心配する愛子に、そう伝えるメルド。そして、辺りを見渡して一度頷くと本題へと切り出した。

「よし、遅くなったがお前達に耳にして欲しいことがあってな、クゼリー」

「はっ」

後ろに控えていたクゼリーがメルドの呼び掛けに応じて彼の隣に並ぶように立つ。

「メルド団長に任せられ、僭越ながら、このクゼリーが報告します」

固い口調で話すクゼリー。隣に座るメルドは両手でやれやれともう少し崩して良いのにと思っているながらも、クゼリーは気にした様子もなく手に持っていた報告書を読み上げていく。

「今回、報告するのは最近になって各地に目撃がある黒の獣です」

「黒の獣？ 聞いたことないな」

知らない名称に首を傾げて困惑する居残り組。清水もその黒い獣に心当たりがなく同じように首を傾げる。

「はい。私達もこの情報を聞いたのは、数ヶ月前くらいに噂程度で聞いたのみです」

「数ヶ月前……じゃあ、その黒い獣の噂が出回り始めたのは最近つてことですか？」

「はい。最初に目撃されたと情報があったのはホルアドで、町にいた冒険者数名が夜中に目撃したと……」

クゼリーの報告にあつた町ホルアド。其処にはオルクス大迷宮があり、そこで自分達が初めて異世界らしいことをした迷宮であり、同時に死という恐怖を味わつた迷宮。

そんな迷宮がある町の名を再び聞いて、光輝達と攻略していた永山パーティーや檜山



が居なくなつた小悪党組三人、清水と愛子以外の居残り組は再びその名を聞いて、あの時の記憶がフラッシュバックしたのがギョツと手や服などを握つたりして息を呑んで、そのまま俯いてしまう。

「クゼリーさん。大丈夫です続けて下さい」

場の雰囲気を感じてか一旦、報告を中断するクゼリーに、永山パーティーのメンバーである野村が報告を続けてくれと、クラスを代表して言うのと、クゼリーも「では……」と報告を再開する。

「それで、黒の獣を目撃した冒険者は、すぐにギルドへと向かつて報告して、何人かの冒険者達と職員と共に現場に戻りましたが、黒の獣も足跡すらも見つからなかったと」

「なら、どっかの誰かの悪戯で生み出した幻だったんじゃないかね？」

クゼリーの報告を聞いて、そう投げやりな感じで言うのは、机に足を乗せながらクゼリーの報告を聞いていた近藤であつた。その態度の悪さに愛子や清水、永山なども注意をするが全く聞く耳を持たない。しかし、メルドの敵つい一睨みに怯えてすぐに足を降ろしたのだった。

そして、クゼリーは近藤の意見にも頷きながらも報告を続ける。

「はい私達も、最初にこの報告を聞いて近藤様と同じ意見となりましたが、状況が変わつたのです」

「変わった？」

「はい。また最近になって、黒の獣の目撃情報が上がったのです」

「……何処で？」

「目撃されたのは、七日前」

「七日前。……ってことは、王都侵攻のすぐ後のことですね」

「そうなります。あの時は、王都の復興のことや色々あったので、我々がこの報告を聞いたのは南雲様達<sup>が</sup>帝国に向かった後でした」

クゼリーがそう言うと、メルドが同意するように首を縦にして動かす。

「そして、目撃された場所ですが、ホルアドではなくブルツクの近辺でした。目撃したのはブルツクの近くの近辺を調査して王国の騎士です。彼等は、すぐに身を隠したらしく襲われなかったらしく、黒の獣が通り過ぎた道には大きな足跡を見つけたとの報告もありました以上です」

クゼリーは、そう言い終わると報告を終了する。そして、メルドの後ろへと下がると今度はメルドが話し出した。

「そういうことだお前達。クゼリーの話を報告にあつた通り黒い獣は魔人族の魔物なのか神関連か分からない。ただ、一つ言えることは目撃証言だけで被害は全く無いということだ」

「被害は無いですか……そういえば、最後の目撃があったブルックは大丈夫なんですか？」  
黒の獣の行動に少し違和感を感じる愛子。そして、黒の獣の最終目撃場所の近辺にあるブルックは大丈夫なのかと聞く。その眉をひそめていて心配そうな表情だ。

「ああ、俺もそのことが気になってな。昨夜、その時の調査していた騎士二名をまた向かわせたところだ。連絡用のアーティファクトも持たしてるから、ブルックの状況が分かればすぐに連絡を貰えると思うぞ」

「そうですか、無事だと願いたいですね……」

「ああ、俺もそう願いたいものだ」

愛子の眩きに、同意しながらメルドは席に座りながら、ふっと天井を見上げるのだった。

~~~~~

五日前、ブルックの町。

カラン、カラン

そんな音を立てて、冒険者ギルドブルック支部の扉が開いた。入ってきたのは、一つ

の影、百五十程の身長とシルエツト的に少女だと分かる。ギルド内のカフェで怪我をしながらも楽しく談笑をしていた冒険者達は、少女が来たと気が付くと表情が更に良くなり、周りも「英雄様」や「女神」などと歓声を上げていた。その眼差しは全てが尊敬や好感が込められているものだった。

「……………」

しかし少女は、そんな冒険者達の歓声を無視して、喋らないまま周りをチラツと見渡しただけで、そのままカウンターにいるキャサリンの元へ向かう。

「あら、お嬢ちゃん来たかい？」

カウンターにいたキャサリンは、少女が近付くのが分かると同時に笑みを浮かべながら声を掛けた。キャサリンも先程の冒険者達と同じような表情と眼差しを向けていた。

「……………そろそろ、この町から出ようと思つてな。出る前に靴をくれたお礼を言いたかった」

「あら、そうなのかい？残念だねえ」

少女は、そう言つてキャサリンに貰つたと思われる赤黒い色のドレスに似合う黒色のブーツを見せる。キャサリンも少女が嬉しそうで何よりだが、この町から出ると聞くと少し残念そう苦笑いを浮かべる。

「ま、此処に寄つたのも人捜しの為と聞いたしね」

「うぬ」

「でも、お嬢ちゃんにはホントに感謝してるよ。なんだってこの町を救ってくれたしね」  
そう言いながらキャサリンは思い出す。あの日の出来事を――

三日前の夜。

ブルツクの町に、多くの魔物の大群が押し寄せた。

それは、王都侵攻の際に樹海に攻め込んでいた魔物の一部らしく、いきなりの押し寄せる魔物の大群にブルツクの冒険者達は町を守ろうと必死に魔物達に挑むが、迫りくる魔物達は、並の冒険者達では一体だけでも対処するのが難しい魔物ばかりで、押される一方だった。

勢いが止まらない魔物達は、もうブルツクの検閲門の傍まで押し寄せており、その光景に誰もが絶望する中、一人の少女が平然とブルツクの門と魔物達の間を歩いてきた。

赤黒いドレスを身に纏った少女が現れた。腰まで伸びる艶やかな黒髪は、星一つもない漆黒の夜空のような神秘さを感じさせ、その瞳は紅玉を埋め込ませてると思われそうな美しく情熱さを感じさせる。そして、よく見ると靴を履いておらず裸足だ。

もしかして、何処かの貴族なのかと思つた冒険者達は少女に逃げろと声を掛けようとするが、それよりも早く一体の魔物が少女へと飛びかかる。

「嬢ちゃん！ 逃げ——」

誰もが、悲痛そうな表情になるが、結果は予想外なことになった。

「……邪魔」

少女はそう一言だけ呟くと、一撃の蹴りで、飛び掛かってきた魔物を肉塊にさせた。冒険者達が、その光景に啞然となる中、少女は、気にせず魔物達に視線を転じた。その目からは絶大な圧と怒りと呆れが伝わってくる。魔物も冒険者達もその圧に息を呑む。

「我は、あの人を捜すので忙しい。それなのに、下等な雑種共め……」

面倒事が増えてしまったのかイライラしながら、少女はそう呟くと、同時に魔物達のほうへと歩き出した。

「そんな醜い姿を見せた罰だ。この我が、蹴散らしてやろう」

そして、少女による蹂躞劇が始まった。

「温い」

「クギヤツ」

同時に襲い掛かってきた複数の魔物達を、少女は、ただの回し蹴りで頭部を一撃で完全に砕いた。

「ギヤツ」

細く、肌白い美しい手から出ると思えないほどの握力で魔物を首を掴み絞め殺した。

「……………つまらない」

魔物達の実力に落胆しながら、絞め殺した魔物をゴミを捨てるかのようにポイツと投げ捨てる少女。その言葉に、怒りを覚えたのかように今度は、数十体の魔物達が一斉に少女へと襲いかかる。

「「「「「グルウアアア!!」」」」」

「……………」

迫りくる魔物達に彼女は無言で、表情も変わらず、ただ落胆していた。

そして、

「……………弱い」

地面を蹴って、跳ぶと魔物の頭を殴って、そのまま頭部ごとを吹き飛ばした。

空中で、体を前向きに動かしながら、その勢いから繰り出す踵落として背骨を砕いて魔物を谷折りにして殺すと、落とした踵を軸にしてコマのように回りながら蹴りを繰り出して当たった瞬間、魔物達の足、頭、胴体を吹き飛ばした。

立ち止まっていた魔物達は移動しながら、ただの手刀で首と胴体を離ればなれにして殺していく。

グシヤゴギヤツ

魔物共を踏み潰し、骨を折り、肉を砕き、内蔵が飛ばす。そんな生々しい音を奏でな

がら、まるで舞踏のように舞うように戦う少女。そして、その繰り出す一撃の全てが必殺で、魔物達を蹂躪していた。

一撃、一撃と魔物達を絶命させていく少女。しかし、魔物達が動きが変わるのを見て目を細めた。

「……………む」

魔物達は逃げ出したのだ。やつと本能で理解したのだ。あの少女——いや、あの獣には勝てないと……

「そうか……………やつと我との差に気付いたか混ざりものの雑種共——」

やれやれと言った様子で肩を竦めながら彼女は溜息を一つ吐く。

「だが、逃がすとは言っていないぞ？」

一瞬にして、逃げる魔物達の中心上と移動すると少女は不敵な笑みを浮かべた。

グシャツ

着地すると同時に魔物を踏み潰すと肉と骨が潰れる音がして魔物の血飛沫が少女の頬やドレスなど全体に付着する。しかし、少女は気にせず周りにいる魔物達を見る。

「——終わらしてあげる」

もうこの戦いを終わらすことを告げる彼女は、自分の持つ魔法を発動させる。



それは、自分の記憶に大きく刻まれている一人の男の真似をするように……

迷宮という名のシステムに従うだけだった自分に、ある感情を芽生えさせた男。初めて己に敗北を叩きつけ、死の恐怖よりもあのニンゲンのことしか考えることしか出来なかった。

奈落の魔物共に殺されるも、己の胸の奥が激しく動悸してしまい苦しくても、何故か嬉しいような感じたことのない不可解な感覚。

魔物にとつて必要のない理性を獲得し、“感情”が芽生え迷宮のシステムまでも抗ったことで世界の未知の奇跡が巡りイレギュラーが生じてしまった。

その駒。いや、もう彼女は一人のイレギュラー。その胸に宿ったただ一つの想い。

——あの男との再戦を。

戦つて、あの時の高鳴りを再び感じたい。

戦つて、彼の戦う姿を見たい。

戦つて、彼の必死の声を聞きたい。

戦つて、自分だけを見て欲しい。

そんな想いが、彼女に新たな魔法を発現させた。

そう、それは

『——  
『雷装』』

彼が使っていたあの魔法のように………

「『獄炎鎧』」

その瞬間、紅黒い紅蓮の業火が少女の体に纏いだした。その炎は少女の付着した血までもが蒸発させ、周りの地面すらも焼き付くさんと燃え盛っていく。

そして、

「灰燼と化せ——『炎滅』」

続けて言ったその一言で、彼女の中心から空高くまでも続く勢いの巨大な紅黒い炎柱が出現した。そして、周りの魔物達をも飲み込み骨すらも残すことなく燃やしていくのだった。

そして、ブルツクの町は突然現れた少女によって救われたのだった。

「——ホントにあの時は助かったよ」

キャサリンは再度、少女に感謝を伝えると、すぐ近くの棚からある一つの小袋を取り出した。

「後、町を出るならこれを持っていきな」

そう言つて、小袋を渡すキャサリンに、小袋を受け取つた少女は、少し重みを感じ首を傾げる。

「……これの中は？」

「ちよつとしたお金だよ。それで、旅の足しにしとけばいいさ」

「感謝する」

少女の感謝に、キャサリンは笑つて返した。

「いいつてことさね。色々あると思うけど、死なないようにね」

「大丈夫、我は強い」

少女はそう言つて、キャサリンの笑み共にギルドから出る。すると、町の人や冒険者達も少女が町を出ると聞いて、門へと向かう彼女に感謝などを伝え、彼女を送り出したのだつた。

~~~~~

ブルックを出た少女は西へと向かう。それが、彼の魔力の痕跡があるからだ。でも、それは普通、そんなことを出来る人間はいない。

そう、普通なら

彼女は特別だ。

だからだろう——彼を見つけない。という強い彼女の想いが、ある技能へと発展したのだ。

——きようあいたんきゆう狂愛探求

愛する人の魔力の痕跡を認識することが出来る。

その技能で彼女は迷いもせず己の次の目的地へと移動していけるのだ。

「……………アハ」

彼の痕跡を感じると彼女は立ち止まって、その美しい相貌に邪悪な笑みを浮かべる。

復活する前、迷宮の輪廻を巡っていた彼女はあの人が生きていることを識っている。数多の試練を乗り越え、尋常ならざる力を手にしたことを識っている。

あの時より更に強く、逞しく成長した彼の姿を思い出し、はう、と歓喜の吐息を漏らす。

あの時のことを思い出すと今でも心が揺れる。魂が激しく震え燃え盛る。まるで、心を鷲掴みにされ熱されたように痛みにぎゅつと胸を抑える。

苦しい。苦しい。苦しい。苦しい。

それ以上にこの感覚が酷く恋しくて仕方ない。

——彼の姿を思い出すだけで胸が張り裂けそうになる。

——彼と言葉を交わせると思うだけで頬が熱くなる。

——あのニンゲンとまた殺し合えると考えるだけで下腹部が切なくなる。

早く再会を。速く再応を。疾く再戦を。

嬉しそうに笑みを浮かべた彼女は再び歩き出す。

全ては一人の彼に会いに行くために。

会って、話して……また彼とまた全力で殺し合うために。

「待っててハジメ。すぐ行くから」

恋い焦がれる少女のような表情で彼女は愛おしそうに彼——ハジメの名を呟くの  
だった……。

## 第七章 大巨樹迷宮ハルツイナノ機神への鍵ノ

### 百話 艦内にて

奇妙な光景があつた。

何百人もの亜人が、揃つて自分の頬をつねったり、張り手をしたり、あるいは空の彼方へ遠い目を向けたりしているのだ。現実逃避気味の彼等の耳には轟々と唸る風が響き、その視界には雲海が、そして、その狭間にある流線と化した地上が映つていた。

そう、彼等は現在、空の上にいるのである。

——飛空艇フェルニル

ハジメが製作した重力制御式の飛行用アーティファクト。その船底に外付けされた超大型のゴンドラに彼等は搭乗していた。

亜人達が、トータス世界において歴史上初となる航空機に搭乗している理由は、歴史上初、というより前代未聞の大事件の一つ——後に“ハウリアの乱”と呼ばれる奴隷解放騒動。そして、ハウリアの乱をも含め、帝城、帝都すらも巻き込んだ歴史に名が残るであろう一夜の大事件

—— “帝国事変” などと呼ばれた歴史に刻まれるであろう大事件にあった。

シアの実父であるカムに率いられたハウリア族が反旗を翻し、一夜にして帝城を落としたのだが、それに合わせたように帝国に現れたのはテイオの仇であり五神の一柱

“創獣神オルステッド”

オルステッドは、帝国の皇太子のバイアスを化け物に変えると、五体の神の使徒と帝国を滅ぼそうとしたが、居合わせたハジメ達一行の活躍によって使徒達は倒され、神の一柱であるオルステッドを退け、帝国の危機は回避されたのだった。そして、全奴隷を解放させ、現在、亜人族の故郷である「ハルツイナ大樹海」への帰路の途中であるというわけである。

なお、樹海には空間転移用アーティファクト「ゲートホール」が設置されているため、やろうと思えば一瞬で樹海まで亜人達を送ることが可能だったが、わざわざ帝都近郊にフェルニルを着陸させ、見せつけるかのように亜人達を乗せて飛び立ったのは演出のためだ。

要するに「亜人奴隷の解放は神のご意思である！」という帝国民の人々への説明に對するダメ押しである。空を飛ぶ巨大な物体に導かれて故郷に帰るといふ光景には、帝都の人々もさぞかし度肝を抜かれたに違いない。もちろん、「神の意思」とは建前だ。全ては奴隷制度を廃止の納得のため。「だいたい、困ったときはクソ神のせいにしとけ」



のハジメの普通ならバチ当たりな発想だった。

さて、そんなわけで数千人の傭人達を乗せ、樹海への帰路の途中にあるフェルニルだが、その驚異的な運搬能力の代償に、操縦者は結構な負担を強いられていた。

「あ~~~~~」

艦橋にあるベッドに変形出来るソファで、物凄く怠<sup>だ</sup>そうな声を漏らしているのは怪我がだいぶ回復に至ったハジメである。戦いの疲労がまだ残っているせいかソファをベッドに変形させて寝そべる姿でだらけきっている。手足も投げ出し、体を大の字になって、ぼけえくとしている。しかし、うつすらと紅い魔力を纏っているのです、だらけているわけではなく、今この瞬間も魔力をガリガリと消費しながら操縦していることが分かる。

実際、重量に比例して魔力消費量と操縦頻度も上がるので、今のハジメには余裕がないくらいだ。なのだが、この気怠<sup>だ</sup>そうな有様に、美少女<sup>みせうじよ</sup>達が追加されると、途端に傲慢の体現者のように見えるから不思議である。

「……おいおい。皇帝を前に随分な態度じゃねえか、南雲ハジメ」

艦橋の扉をウインと開けて入ってきた「ヘルシャー帝国」皇帝陛下——ガハルド・D・ヘルシャーが、呆れと怒りの半々のジト目をハジメへ向けた。そう、左右にテイオとシアを、優花は微笑みながらハジメの頭を自分の膝に乗せて膝枕を、嬉しそうに目を細め

て胸元に顔を埋めるユエを、侍らせ、ふんぞり返るハーレム野郎にしか見えないハジメへ。

疲れ気味なハジメを気遣ってか、優花は膝枕しながら癒しの魔法をかけ、他の三人も密着状態だ。一昨日に神の一柱と戦っていたのに、今は莫大な魔力消費に耐えつつ、縦に集中し、更には魔力操作の訓練までしているハジメは、本当に真面目で頑張っている努力の人ののだが……

悲しいかな。ガハルドのみならず、この場にいるほとんど者達にも、強さへのひたむきな内面は魔力の流れを感じて頷くアレスぐらいにしか伝わってないようだった。

「うらやま——ゴホンっ。ふしだらですよ、ハジメさん」

「リリアーナ様、本音が駄々漏れで御座います」

「リリイも混ぜたら——「へタレな兄様は黙って下さい」……はい」

苦言(?)を呈したのは「ハイリヒ王国」の王女——リリアーナ・S・B・ハイリヒ。そして、的確にツツコミを入れるのは専属侍女のヘリーナ。隣に、妹分を応援しようとするが、余計な迷惑で的確に心にダメージが来る言葉を言い返され黙らされたのは元王国最強の神官であり、今はハジメの仲間の一人のアレス・バーンである。

リリアーナ達、王国側の一行が同乗しているのは、ひとえにガハルドの宣誓を見届けるためだ。先の「帝城落とし」は「フェアベルゲンと帝国」の戦争であるため、ちゃん

と改めて「フェアベルゲン」へと赴いて最高意思決定機関である長老衆に、皇帝として誓約する必要があった。ハウリアの族長であるカムの要求で。

因みにこの場には他にも、天之川光輝、坂上龍太郎、八重樫雫に谷口鈴がいる。

そして、彼等もハジメの光景を見て、リリアーナと同じように「疲労してるのが分かるが、自重してもいいと思う」と言葉を投げかけて来るので、ハジメは胸元に顔を埋めるユエの頭を撫でつつ膝の上に乗せ、面倒くさそに起き上がると話題の転換に図った。「ガハルド。艦内の探索はもう終わったのか?」

「おう。本当にとんでもない代物だな。何故、こんな金属の塊が飛ぶのかさっぱり分からん。だが、最高に面白いな! おい、南雲ハジメ。俺用に一機用意してくれ。良い値で払うぞ」

対面の普通のソファアにドガツと座り、キラキラと好奇心を輝かせた瞳を向けるガハルド。ハジメは面倒そうな表情を隠しもしない。

「金なんか要らねえつての。今は今後の事を考えとけよ。乗るのは今回限りかもしれねえし、せいぜい今の内に堪能しとけ」

「おいおい、そう言うなよ。な? 一機だけ小さいのでいいんだ」

「今は面倒くさいし、無駄に労力を使いたくねえんだよ」

「ぬぐう、金がダメなら女だ! 娘の一人に丁度いい年の奴がいる。トレイシーという

んだが、ちょっと戦闘狂の気があるだけで上玉だぞ？お前のハーレムに加えてやるから、な？ いいだろう？」

どうやらガハルドは、ハジメを無類の女好きと思っっているらしい。今の状況的に否定できないのが悲しいところだ。

とはいえ、戦闘狂な王女様を押し付けられても困るだけだし、オルステッドとの戦闘での疲労とフェルニルの操縦で上手く頭が回らないので適当に返そうとしたハジメだったが、それより早く女性陣が反応する。

「<sup>アーク</sup>聖櫃しますよ？」

「……雷龍する？」

「ぶっ潰しますよ？」

「<sup>ブレス</sup>息吹するぞ？」

「陛下と南雲君を一緒にしないでください」

「ダメですよ！絶対ダメです！私を差し置いて！」等々。

ハジメは肩を竦めながら笑みを零して言った。

「クハツ……そういうことらしい」

「チツ、見せつけやがって……ん？ 今、リリアーナ姫も反応しなかったか？」

ガハルドがやさぐれたように舌打ちし、そして不意に気が付いてリリアーナへ視線を

向けた。それに釣られて他のメンパーもリリアーナに目を向ける。若干、二名の侍女と兄貴分が面白そうに目を向けているが。

「へ？ い、いやですわ、ガハルド陛下。聞き間違いではないでしょうか？」

「ククツ。そう言えば、パーティーでもバイアスはそつちのけで大変嬉しそうに踊っていたな。おいおい、南雲ハジメ。お前、ちよつと手が早すぎないか？ 流石の俺でも呆れちまうぞ」

「にやにやにやにを言っているのですか！ わ、私とハジメさんは断じてそんな関——」でも、リリアーナ様。ハジメ様が重症で運ばれた時に大泣きしましたよね？」——！へ  
リリアーナア?！」

なんとか誤魔化そうとするも、その表情は満更でもない。それに何故か侍女からの追撃に叫ぶリリアーナ。それを見て、次にガハルドはハジメへと目を向けて言葉を投げかける。

「そつちは、どうだよ南雲ハジメ？」

一瞬、沈黙が続く。その間に艦内全ての視線がハジメへと向く。それを見たハジメは溜息を吐く。

「俺が落とした云々はまあどう捉えても良いが……リリイは婚約者は死んだが、形式上でまだ人妻だ。それに皇族との婚姻つてのがなくなつたわけでもねえだろ？」

そう真面目に答えるハジメ。言い訳だと思われそうだが、言っていることは正しいし、リリアーナのことを想って言っているのだ。誰もがハジメの言葉に息を呑む中、若干二名ほど何か言いたそうな表情だ。

「あく、それなのですが……」

その一人である言葉を詰まらせるリリアーナに代わって、もう一人の苦虫を噛み潰したような表情をするガハルドが答えた。

「正直、一族は今、それどころじゃねえんだよ。何せ神の介入のせいで帝都も城も被害が大きい。城なんか半壊状態だ。後、この外せば死ぬ呪いの首飾りを一生つけてなきやいけないなんて、とんでもない事態への対処で手一杯だからな」

そう言うガハルドの首には、確かに紅い宝石のついたネックレスがつけられている。

——アーティファクト『誓約の首輪』

魂魄魔法を組み合わせて、口にした誓約を魂レベルで遵守させる首輪だ。首輪を外しても、誓約を違えても、その時点で発狂して死ぬという、恐ろしいアーティファクトである。

「誓約の内容からすると、皇族以外の誰かが約定に背いても、皇族も『法に則って裁く』限り命繋がるだろうが、言ってみれば、国民に命握られているのと変わらねえからな。取締体制の抜本的な改革と、確実に執行される厳罰の体制。それに、帝都以外の町にい

る奴隸の解放の手続きと法の周知徹底……誰も彼も必死なんだよ」

ガハルドはシートの背もたれに深々と背を預けながら、「参った」とでも言うようにガシガシと頭を掻いた。

「いつ死ぬか分からない夫に、王国の姫を嫁がせるわけにはいかないと言われれば全く反論できん。しかも、奴隷解放のせいで労働力はガタ落ちだ。演説した帝都はともかく、他の町は騒動が確定。その辺の対応と鎮圧にも人手を割かなきゃならんから、正直、帝国が王国に援助を頼みたいって状況だ」

「なるほどな。つまりリリーの興入れは白紙撤回ってことか」

「まあ、そういうことだ。状況が落ち着いて、皇族の命が一応でも保証されれば、改めて、今度はこちらからランデル殿下から娘を嫁がせる、という形がベターだろう」

ガハルドの説明に、その場の全員が「へえ」と納得の表情を見せる。ちなみに皇族の一人が「そんな、馬鹿な話があるか！俺は首飾りを外すぞ！」と喚いて本当に首飾りを外してしまい、案の定、発狂して暴れ回った挙句、糸が切れたように絶命した事実があり、これが皇族を必死にさせている原因だったりする。

「良かったじゃないか！リリー！」

「ホントね。自由恋愛……というのは無理かもしれないけど、取り敢えず、時間は出来たわ」

「うんうん！リリイ、良かったね！」

「良かったじゃねえか！リリイ！」

光輝、雫、鈴、龍太郎が口々に「良かった！」と言えば、優花は勿論、ユエ達まで「婚約白紙撤回おめでとう！」と祝福の言葉を贈った。

「ど、どうも」

リリアーナは少々視線を泳がせつつ、もごもごと返礼する。目の前に嫁ぎ先の親かつ皇帝陛下がいる上に、当の婚約者は巨大な竜の怪物へと成り果て、アレスによつて倒されているので非常に気まずい。

とはいえ、自分を暴行しようとした挙句、人間側を裏切つて神の傀儡となつていた輩と縁が切れたのは素直に嬉しいらしく、感情を隠すのが上手なりリアーナをして、珍しく本音が瞳の輝きとなつて表れていた。

これには流石に、ガハルドは苦笑いし、アレスは微笑んでいた。

「まあ、なんだ。そういうわけで、今ならリリアーナ姫はフリーだ。南雲ハジメ。欲しけりや、皇帝の権力をフル活用して協力するぞ？」

「なっ?! 陛下！ 何を言つておられるのですか！ わ、私は……」

リリアーナ、激しく動揺。傍らのヘリーナが「姫様！ チャンスでございます！ このままハジメ様に突撃を！」と力説している。彼女だつて隣にいる想い人の前では奥手な



癖に……

優花と「アハハ……」乾いた笑みと、ユエ達のジト目にも気付かない様子で、リリアーナはハジメをチラ見する。頬を染め、もじもじながら中々のあざとさを見せ付ける。

それを見るハジメは苦笑いを零していると、ヘリーナの隣にいたアレスがガハルドへ口を開く。

「そうですよ、ガハルド陛下。そんな見返りが欲しいという魂胆が丸見えですよ」

「おう、アレス。てめえ、何が言いてえ？」

「いえ、ただ変に首を突っ込むなっことです」

ガハルドがアレスの言葉を聞いて、目を細める。正にここで殺し合いが起きそうな雰囲気だ。この場にいるハジメ達以外の者はギョツとして止めに入ろうとするが、二人は無視して話す。

「見ない内に、言うようになったじゃねえか、あ？」

「ハハツ、そんな喧嘩腰にならなくても陛下」

睨みながら言葉を投げかけるガハルドに、アレスは軽く流して受け応えをしている。

「しかし、王国最強と呼ばれるアレス・バーンが丸くなったもんだ」

「いえ、私は単に可愛い妹の後押しがしたいだけですよ」

そう笑って答えたアレスは、リリアーナの方へと振り返る。微笑みながら声をかけ

る。

「リリイ」

「……兄様」

「王女とか関係無い。今は、リリアーナという少女として振舞っていいのですよ。これは貴女の兄としての言葉です」

「……はいっ」

リリアーナは迷うのを辞めた。

周りを見れば、光輝や雫達も若干一人、不服そうにしてるも、ガハルドもやれやれといった感じで呆れながらも、大切な侍女のヘリーナも本当に兄みたいになってくれるアレスも皆が笑って背中を押してくれた。

だから、進む。進むんだリリアーナ・S B・ハイリヒの気持ちと彼の元へと――。

リリアーナはハジメの元へと近寄る。その表情はいつもにまして真剣な表情だ。ハジメも優花達を一旦、離れさせて彼女に應えるかのように笑顔ながらも態度は目は真剣だ。

「ハジメさん」

「おう」

「私は、貴方と話せて楽しかった」

——彼の声を聞く度に、胸の鼓動が早くなるのが初めてなことだった。

「貴方が怪物と戦って迷宮に落ちてたと聞いて泣きそうになった」

——彼ともう会えないかと思つて胸が張り裂けそうに流れ出る涙を止められなかった。

「貴方と再会できて嬉しかった」

——彼の顔、そして声が聞いた途端、嬉しくて堪らなかった。

「貴方は私を救ってくれた」

——望んでなかったことを、襲われそうになったところを彼は物語の王子様のうように救ってくれた。

ポツリポツリとハジメとの短くても自分にとって大切な思い出を簡潔的で嬉しそうに話すりりアーナ。

そして、

「私は、最初にこの胸の鼓動がなんのかわかりませんでした。……ですが、今なら分かります。これが初恋だと恋をしていたと」

だから、

「ハジメさん、私は貴方のことが大好きです！愛しています！貴方には優花達大事な人がいるのは分かっています」

恐い。もし、フラれるてしまうという恐怖がリリアーナに襲う。でも彼女は恐れずに、ハジメの目を見る。

「それでも、私は貴方の傍にいたい！貴方を支えたいんです！ハジメさんが大好きなんです!!」

これほど初めて人の前で本心を伝えたリリアーナは、恥ずかしさと心臓がバクバクと鳴ってしまつて、顔が赤くなつて息が荒くなつている。

「……………」

リリアーナの本心を聞いたハジメは数秒、目を瞑る。そして、ゆっくりと目を開けてリリアーナを見てから彼女を呼ぶ。

「リライ」

「はい」

「俺は、優花達を愛している」

「……………承知します」

「……………だが、リライの気持ちもよく理解した」

ハジメはそう言い切つて、まだ全快しきれてない体でフラフラとリリアーナの傍まで歩み寄ると彼女の前で片膝を突く。リリアーナは突然のことで驚いてしまつて固まっているがハジメは関係無く自分の想いを伝えた。

「リリイが良いのなら、そして……」

ハジメはフツと後ろへ振り返り恋人達を見る。四人共、しようがないなあーといった感じの表情で微笑んでるのを見て、ハジメも「クハツ……」と笑みを零すと、リリアーナの方へ再度、振り返った。

「俺は異存は無い」

「え、じゃあ……」

「ああ——」

ハジメが立ち上がる。そして、リリアーナの顎を持つて、そのまま——

「——あ」

時が止まった気がした。

自分の唇に感覚がした。それも温かい。

そして、周りの人達の表情を見て、やっとリリアーナはハジメとキスをしてることに気付いた。

十秒ほど時間が流れお互いの唇が離れると、ハジメはそのまま、リリイを抱きしめた。

「これが俺の答えだ。必ず絶対に幸せにする約束する」

「……はい」

真剣な面持ちのハジメの言葉に、嬉しそうにリリアーナは応える。

涙はもう流れない。

——だって、願いは叶ったから。

リリアーナは自分を抱きしめてくれている彼の温もりを感じながら、これから共にする彼との抱擁の一時を楽しむのであった……。

~~~~~

ーオマケー

リリアーナがハジメのハーレムに加入して、艦内は祝福の拍手が鳴る特にどっかの兄と侍女から、

「リリイ、おめでどう」

「おめでどうございます、リリアーナ様！このヘリーナ感激です」

「兄様、ヘリーナ」

慕う兄と侍女からの祝福に、リリアーナは笑みを零す。すると、突然ハジメはリリアーナを抱き上げお姫様抱っこをする。

「えっ、ちよっつ、ハジメさん?!」

「すまん、やつぱり疲労と魔力消費がえげつねえからベッドに戻る」

「へ？あ、ちよっつ！」

ハジメはそう言つて、リリアーナお姫様抱つこしながらベッドに戻ると仰向けになつて倒れ込んだ。リリアーナはハジメの膝上に座らせて貰つてゐる。

「あ、ハジ——」

「リリイ」

ハジメを呼ぼうとしたら、声をかけられ顔を上げると優花達がいた。少しドキツとりリリアーナの心臓が跳ね上がる。

「ゆ、優花……」

「ふふ、そんなに畏まらなくていいわよ」

オドオドするリリアーナに、優花は優しく声をかけてくれる。しかし、リリアーナは彼女に聞きたいことがあつた。

「あの、優花は良いんですか？私が入つても」

「ええ、大丈夫よ。それに、この先もなんか増えそうな気がするし……この女タラシはね」

そう言つて、優花ハジメの頭を撫でる。傍にゐるユエ達もウンウンと頷いており、リリアーナの疑問は野暮だったようだ。

「だから、ね。リリイ、これからも宜しくね」

「はい！」

二人は微笑む。勿論、傍にいるユエ達もリリーナを事を認めているらしく、一緒にハジメの体にギユツと密着する。

それを見ていた艦内にいる者達は……

ガハルドは、

「ケツ、とことんハーレム野郎だな」

と、うざったそうな表情をしてソファアの背もたれに全体重を預けて溜息を吐いて座っていた。

光輝達は、

「リリー、良かったわね」

「うん！ 凄い幸せそうな顔だもん！」

「だな！ な、光輝！」

「あ、ああ………これが、俺と南雲の違いなのか？」

と、若干一名以外はちゃんと祝福していた。

アレスとヘリーナは、

「良かったですね、ね？ ヘリーナ」



「ええ、どっかのヘタレと違ってですね」

「?ヘタレって誰のことです?」

「……………バカ」

と、そんな会話を広げていた。ちなみに、こちらの関係はまだ、進展は無さそうだ。

そんな艦内での出来事がありながらもフェルニルは着々と「フェアベルゲン」へと進んでいくのであった……。

## 百一話 英雄の凱旋

太陽が顔を隠し、夜の帳が下りた頃。

「フェアベルゲン」は仄かほで温かな自然の灯りに照らされていた。燃えやすいが燃え尽きにくい特殊な木の枝で作った松明や、燐光振りまく樹海の虫を閉じ込めたカンテラの灯りだ。

優花の再生魔法により、急速に復興が進んだ今の「フェアベルゲン」は、元の「静謐と幻想の都」と表現すべき美しさを、ある程度であるが取り戻している。一見すると、先の魔族や帝国の襲撃が夢であったかのようだ。

故に、住人達は一日の終わりにホッと力を抜いて、家で一家団欒を楽しむという、襲撃以前の生活を見せていたのだったが、今夜は少し違っていた。

「誰か！西集落の備蓄状況が分かる奴はいないか?!」

「家の割り振りは終わったか?! 時間がねえぞ!」

「東集落の備蓄は大丈夫そうだ! そっちはどうだ?!」

「お前等、いつまで英雄様と優花様談義をしてやがる!早くこつちを手伝え!」

まるで、昼夜が逆転したかのような喧騒。種族、老若男女、職種に関わらず、誰も彼も忙しそうに走り回っている。とはいえ、彼等の表情に、混乱や焦燥の色は見えない。寧ろ、かつてない希望の輝きで彩られているようだった。

そんな都の喧騒を開けっ放しの窓から夜風と共に取り入れつつ、長老衆の一人——森人族族長のアルフレリック・ハイピストは大きく吐いた。ついでに、感極まってか涙が出そうになるのを止めようと目頭を軽く抑える。そして、はにかんだ表情で手元の書類に視線を戻した。

書類の内容は、数千人規模の同胞の受け入れ態勢に関する報告書、それに伴う各申請書などである。

「……なあカムよ。本当に夢ではなく現実よな？」

アルフレリックがポツリと呟くと、直後、まるで部屋の中に突然と現れたかのように人の気配が発生した。

「本当だ、アルフレリック。我等は、もう帝国という脅威は無くなったのだ」

姿を見せたのは、気配を殺して控えていたカム・ハウリアだった。カム達ハウリア族は、亜人族の解放を「フェアベルゲン」に伝え、受け入れ態勢を整えさせるために、ハジメの「ゲート」で先に戻っていたのである。

ハウリア専用の念話石があれば効率的に連絡が行えるので、通信要員の役割を担って

いるというわけだ。ちなみに気配を殺していたのは、感傷に浸っていたアルフレリックの為だと思つてのことである。

カムの言葉に、アルフレリックは頷く。

「分かつている。だが、私達の世代で亜人が虐げられる時代を終わらせられると思うと嬉しいのだ」

「ああ、我々の亜人族の願いは数時間後に完全となるのだ。気持ちは分かるがな。我等とて、ボスがいないければ、まさかここまで成果を挙げられるとは夢にも思わなかつた」  
「ボス……南雲ハジメか。本当にあの者が樹海に来てからと、我等、亜人族は色々救われたな。こんな大き過ぎる恩。どう報いるべきか……」

「フツ、アルフレリックよ。ボスはそんなものを期待してないだろう。ボスはそういう御方だ——つと、また報告が上がったぞ」

そう言うカムを、アルフレリックは一瞥した。

カムは、念話石で仲間と何かを話しているようで、視線は虚空に向いているが、その姿には一分の隙も無い。それどころか、先程まで控えていた時の気配のなさが嘘のように、一族の長に相応しい覇気を纏っていた。

かつて、愚かだった自分達長老衆の前に平伏し、一族処刑の決定がされてからは諦観の表情を晒していたのに……

今じゃ、とても同一人物とは思えなかった。元の温厚で気弱な雰囲気は微塵もなく、優しさは変わらなそうだが、口調も変わり、自分達の敵だとみなせば切り刻まれそうな鋭利さを感じる。

アルフレリックは、本当に変わったなと思ひながら、二日ほど前のことを思い出す。

『戻ったぞ、アルフレリック！』

カムが率いるハウリア族が帰還したことに「フェアベルゲン」の者達がハウリアの帰還に喜びの歓声を上げた。

しかし、戻ってきたカム達は、急いだ様子ですぐにアルフレリック達長老衆を集めた。そして、帝国であった事の次第と、解放された奴隷の受け入れ態勢を整えるようにしてくれと伝えるもんで、集められた長老衆達は動揺が走った。

それもそうだ。カム達の救出から何故か帝国と戦争仕掛けて、*“帝城落とし”*の成功。そして、神の石柱の襲来。神と戦ったハジメは重症ながらも勝利。そして、一番の驚いたのは帝国に囚われた亜人奴隷の解放だった。

長老衆達は、虚偽かと疑ったが、これまでの魔人族と帝国の襲撃、「フェアベルゲン」の復興の際の防衛などにもハウリア族のお陰で救われているようなものであり、カムの人柄から、こんなところで虚偽を言う必要はない。

だからこそ、

『ウオオオオオオオ!!』

長老の誰もが立場も関係無く、たった一人の亜人として感嘆の叫び声を上げたのだ。た。

「本当に変わったものだ」

そんなことを思い出しながらアルフレリックは嬉しそうに一言呟くと、カムの言う報告を持ってきた者が部屋に入ってきた。

「お祖父様、炊き出しの準備が整いましたわ。これが消費後の備蓄量です」

〃鈴を転がすような〃と表現すべき可憐な声と共に、書類を差し出したのはアルフレリックの孫娘——アルテナだった。

地面に着きそうなほどの長い金の髪と、深い森を思わせる翡翠の瞳を持った彼女もまた、帝国に誘拐されていたところをハジメとハウリア族に助けだされた者の一人だ。こうして無事に故郷に戻ってきた今は、精力的に祖父の補佐をしている。とはいえ、深き森のお姫様のような彼女にとって、先の誘拐事件は辛い経験だったはず。祖父としては心配せずにはいられない。

「ご苦労だった。……しかし、アルテナ。お前も帰ってきて間もないのだ。あまり無理せずに、少し休んだらどうだ？」

「わたくしなら平気ですわ、同胞達が帰ってくるというのに、族長の孫娘として、じつとはしてはいられません」

氣遣うアルフレリックに、アルテナは毅然とした態度を取る。アルフレリックは、そんなアルテナを眩しそうに見やった。深窓の令嬢如く育った彼女だが、その能力は実に高い。氣構えも申し分ない。正直な話、この忙しい時にアルテナの補佐はありがたい。一時は生存を諦めた孫娘、凜とした姿に心が温まる——

もじもじ、そわそわ。チラツチラツ。

全然、凜としていなかった。妙に浮ついた雰囲気だ。先程までの真面目な雰囲気はどこにいったのか。訝しむアルフレリックだったが、彼女の視線がカムに向いていることで察しがした。苦笑いして溜息を一つ。

「アルテナ。彼のこと……が気になるなら、カムに聞いてみればどうだ？」

「！いい、いえ、わたくしは別にハジメ様のことなんて……」

「私は一言も南雲ハジメのこととは言っていないが？」

「お祖父様！そんな揚げ足を取るような意地悪をなさらないでくださいませ！」

孫娘の可愛いらしい動搖に、アルフレリックは微笑ましものを見るような眼差しを向けた。「しかし、この反応のガチではないか？」と懸念を抱く。

アルテナは、その人柄、容姿、生まれから縁談が多いのだが、今のところ全てを突つ

ばねている。理由は、祖父の後を継いで国のために仕事をしたいから、ということらしい。なので今まで、浮いた話もなかったのだが………

アルフレの中で爺馬鹿の面がむくりと起き上がってきた。

「ふむ。南雲ハジメは、我等巫人に優しく、確かに国を救い、そしてお前の恩人であるが、あの者は見る限り相当女子に人気があると思うが……少し難しい者だぞ?」

「ですから、そういうのでありませんわ! もうつ、ハジメ様が同胞を連れてきてくださっていると聞いて、少し気になっただけです。ええ、それだけですわ!」

ふいつとそっぽを向くアルテナ。どうやらへそを曲げてしまったらしい。もつともそれは、勘違いされた憤りより、本心を見透かされて恥ずかったからという照れ隠しのようである。

あせあせつと部屋を出ていこうとするアルテナに、アルフレリツクは再び苦笑いを浮かべる。まだ明確な感情ではないのが救いか。もし、彼を追う道を選んだ場合、前途の多難さは想像に難くない。できれば、愛しい孫娘には平穏な道を歩んで欲しいというのが、祖父としての偽らざる気持ちである。と、その時、意外にもカムが、今まきに出ていこうとしたアルテナに声をかけた。

「アルテナ嬢」

「え? は、はい、カムさん。どうなさいました?」



どこか面白いような笑みを浮かべるカムに、アルテナが少し警戒したような表情で返事をする。身構えるアルテナに、カムはにこやかに口を開いた。

「ボスは、一見多くの女性を侍らせて、怖そうに見えるが、その実、お優しい方だ。傍に  
いる女性達もちゃんと愛しておられるし、彼女達の為ならばなんでもされる御方だ」

「は、はあ……なるほど？」

戸惑うアルテナに、カムはニヤリと不敵に笑った。

「ちなみに、そんなボスの傍にいる女性達の一人は我が娘——シアだ。何せ、我等と共に  
帝国を敵に回した理由が、〃シアの笑顔を曇らせないため〃だからな」

「！　そ、そうなのですか？」

「そうだ。ボスはな、シアのためなら平気で国を取れるのだよ。そう、シアのためなら  
な。ま、何せ神をも倒す御方だからな。フフフフ」

「！」

言外に、「お前では娘に勝てんよ」と言われることを、アルテナは敏感に察した。実は、  
アルテナの年齢はシアと同じ十六歳だったりする。なので、同い年の女の子と比べられ  
た挙句、勝負にならないと言われては……ムツと来るのも仕方ないだろう。

「シアさんというのは……あの淡い青みがかった白髪の方ですわよね。お言葉ですが、  
わたくし、あの方に劣っているとは思いません。確かに過ぎた時間が違うという意味

では差はあるのでしょうか……わたくしとて、同じくらい時間があれば……」

「いやいや、うちのシアはいろいろな意味で特別だからなあ。やはり、アルテナ嬢のためにも、無駄なことはやめるべきだと忠告させてもらおう。不毛なことをしていると適齢期を逃してしまいますぞ?」

「大きなお世話ですわ!」

「はあ。カム、私の孫を虐めるのはそれくらいにしてくれんか……」

ぷりぷりと怒るアルテナに、ニヤつくカム。二人を見て、アルフレリツクは盛大に溜息を吐く。

カムが挑発紛いのことをしたのは、ちよつとしたお節介だつたりする。もちろん、アルテナには申し訳ないが、シアに対しての、だ。樹海から出ていったシアとハジメの関係は、言つて見ればハジメに惚れたシアの押しかけだった。だが、帝国の際に再会した二人の様子を見る限り恋人の一人になって、スるにまで至っていたのを聞いてカムは感嘆した「そろそろ、孫の顔が見れるのでは!」と。

その一押し、言い換えれば孫を見るための切り札にアルテナを使えないかと企んでいたのである。シアが聞けば、「巨大なお世話ですう!!」と言いながら、ドリユツケンを担いで怒りそうだ。

アルテナが内心で対抗心を燃え上がらせているのを感じてほくそ笑むカム。少女の

淡い恋心（まだ未満？）を娘のためならば躊躇いなく利用するカムにアルフレリックは苦笑いを浮かべていると、その時、にわかになら外が騒がしくなった。今までの忙しさからくる喧騒ではなく、不測の事態に緊迫するような騒がしさだ。怒号まで聞こえ始めている。

「何事だ！」

アルフレリックが窓に駆け寄り、大声で叫ぶ。直後、騒ぎの原因を目の当たりにした。「光の、柱……だと」

その言葉通り、木漏れ日のように、否、それとは比べものにならないくらい強い光が、天より木々を通り抜けて広場を照らしていたのである。理解しがたいことに目を見開くアルフレリック。そこへ、どこか誇らしげな、落ち着いた声音が響いた。

「案ずるな、アルフレリック。あれは飛行用のアーティファクトだ。そして——ボスのご帰還だ」

【フェアベルゲン】の広場を真昼のように照らす光の正体。そう、それは、樹海の上空に到着したフェルニルのサーチライトだった。降り注ぐ光から、亜人達が蜘蛛のこのよう逃げ出している。そして、遠巻きに、一体何事かと戦々恐々とした表情で天を仰いだ。戦士達が悲壮感を漂わせながらも必死に武器を構えている。

直後、人が捌けるのを待っていたかのように、ぽつかり出来た広場の中央へ、木々の

枝をへし折りながら巨大な影が降りてきた。飛空艇を当然知らない人達は、「すわっ、新  
手の魔物か?！」と悲鳴を上げて右往左往している。

そんな大混乱中の中、降下してきたフェルニルは船底下部のゴンドラをゆっくり着地  
させた。魔物ではない。それは間近で見分かった。だが、この見たこともない物体は  
何だ?自分達に何をやる気だろう。

そんな不安が広場に渦巻く。誰もが緊張に満ちた眼差しをフェルニルに注いでいた。  
一拍。突如、ガコンツという音が響き、ゴンドラの前後がパカリと開いた。

ピクウ!と震える人々。戦士達も例外ではない。亜人らしく、それぞれのケモ耳を  
ぴーんと伸ばし、長いケモシツポを持つ種族は股の間に挟んでしまっている。

人々が注視する中、扉が開いたゴンドラから出てきたのは……

未知のモンスター——などでは突然なく、恐る恐るといった様子の兎人族の少女だっ  
た。兎人族の少女は、険しい表情で自分を睨む同胞達にウサ耳をへニヨンとさせてい  
る。その気弱の様子は、まさに「自分達が知るウサギさん」だ。隠密型<sup>暗殺</sup>戦闘<sup>一</sup>民族<sup>族</sup>になっ  
ちやつたハウリア族ではない!

少し気が抜けた様子の住民達は、一拍して理解をし始めたようだ。

「本当に、戻ってきたのか……」

誰かの呟き。信頼しているハウリア族からは聞いていたが半信半疑だった希望は、

今、現実となった。兎人族の少女を皮切りに、ゴンドラから次々に、奴隷にされていた巫人達、もう二度と故郷にの地を踏むことが出来ないかと絶望していた者達が出てくる。

彼等は一様に、未だに信じられないといった表情で周囲を見回していた。静謐で清涼な空気。たくましく、それでいて包み込むような安心感を与えてくれる木々。懐かしい「フェアベルゲン」の灯り。そして、もう二度と会えないと思っていた同胞達。

草木が水に吸い取るが如く、じわじわと実感が押し寄せて来る。

—— “故郷に帰って来た” のだと。

それは、「フェアベルゲン」の住民達も同じだった。

おもむろに、一人の女性がふらりと進み出る。垂れイヌ耳の三十代半ばくらいの女性だ。彼女は、目の端に涙を溜めながら、そつと、失ったと諦めていた最愛の名を呼んだ。その声に反応したのは、同じく垂れイヌ耳の少年だった。帝都にて、光輝が気に掛けていた少年だ。少年は、女性の姿を視界に捉えると、顔をくしゃくしゃにして涙を流し、ダツと駆け出した。

「母さんー！」

膝を突いて両手を広げた女性の胸にイヌ耳少年が飛びつく。母さんと呼ばれた女性は、腕の中に夢幻でないことを確かめるかのように、きつくきつく抱き締めた。そして、親子揃って奇跡の再会に歓喜の涙をホロホロと流す。そんな親子の再会を機に、帰って

きた巫人達と住民達が地を揺らさんばかりの歓声を上げて互いに駆け寄った。家族、友人、恋人——大切な人を見つける度に、声を噎らす勢いで無事を喜び合う。

「フェアベルゲン」は大きな喜びに包まれ、普段の静謐さはどこかにいったことと思うほどの、かつてないお祭り騒ぎになった。そんな歓喜が溢れる巫人達の喧騒の中、フェルニルから降り立ったハジメ達にアルフレリックを始めとした長老衆達が駆け寄ってくる。

「南雲ハジメ……全く、とんでもない登場をしてくれたな。しかし、その傷は……」

「アルフレリックか。まあ、いろいろと面倒だったから許してくれ。この傷も大丈夫だ」  
アルフレリックが、頭上のバッキバッキに折れられた木々を見て苦笑い気味に言いながらハジメの額に巻かれてる包帯を見て、心配そうな視線を送ると、ハジメは頬をポリポリと掻きながら、若干、バツの悪そうな表情になった。

確かに、オルステッドとの戦いと莫大な魔力消費で疲れていたのは事実。樹海の外から歩いてくることも、「ゲート」で一人一人転移させるのも面倒だったのも事実だ。とはいえ、正確に「フェアベルゲン」の位置に捉えたのは、あらかじめカムに座標位置を知らせるアーティファクトを持たせていたからであり、つまり、疲れていようがいまいが、最初から直接乗り付けるつもりだったのだ。とんだ確信犯である。初めて訪れた時、この都を「見事」などと称賛しておきながら、いろいろ面倒なので破壊しますとは、頭のおかしい人と思われかねない所業だ。

一応、やってしまった事は確かなので、ハジメは、最愛の天使の優花に頼みを入れる。  
 「優花、頼めるか？」

「うん、分かつてる」

ハジメがそう言うのを予想していた優花は、苦笑いしながら、バキバキに折れまくった木々に手をかざした。

「——『絶象』」

——『再生魔法』『絶象』

あらゆる損壊を再生し復元する魔法である。

優花が魔法のトリガーを引いた瞬間、頭上のバッキバキの木々が一瞬で元の姿を取り戻した。何度見ても、やはり目を疑うような神秘的で脅威的な光景だ。そして、その中心には、純白の白から煌めく銀へと変わった魔力光を纏った優花様。緩やかな螺旋を螢火のような光に包まれる姿は、まさに女神だ。ハジメは、その美しさにウンウンと笑みを浮かべながら頷いて後方彼氏面感を出している。

「おおつ、我等の優花様が、また奇跡を見せてくださいっただぞ！」

「優花様万歳!!フェアベルの守護女神！」

あの光景を見て、巫人達がヒートアップ。跪き、感涙の涙と共に崇め奉る。

「や、やめなさい！私を崇めるなあ〜!!」

優花が顔を真っ赤にして、あたふた走り回りながら、跪く人々を必死に立たせようとする。

「また、女神が生まれてしまったのう。先生殿は豊穰の女神と呼ばれとるし、形ではあるじやが唯一神を崇める大陸で、よう、こうもポンポンと神が生まれるのう」

愛子と共に聖教教会の総本山を消し飛ばし、神とタイマンしたテイオが、感慨深そうに、あるいはちよつと呆れたように言った。それに対し、顎に手を当てつつキリツとした表情をするユエ。

「……ん。真つ向から神共に喧嘩を売るスタイル。良いと思います、ハジメ」

「おりがとよ、ユエ。だが、一つ違うあるとしたら優花は元々女神様だぞ」

「やつぱり、ハジメさん。少し休みましょ？頭がイカれてきてますよ」

ハジメが何故か訳分かんないことを言い始めて来たので、シアは真面目にハジメを心配する。

「優花も……大変ね」

「シズシズが何か、同情してるね」

「ええ、優花みたいに私も幼なじみの後始末は大変だったわ……」

雫が遠い目で、その人物達を見る。そして、その人物である光輝や龍太郎がウツ！と、目線を雫から逸らす。



そんな無宗教だったはずの亜人達の中に、優花教が生まれそうな混沌とした状況の中、アルテナがアルフレリックに耳打ちする。

「お祖父様。立ち話もそれくらいになさって、そろそろ……」

アルテナの視線は、たった今、フェルニルから降りてきた最後の乗客——ガハルドと、晴れてハジメと恋人の一人になれてエヘエへと笑みを浮かべるリリアーナと侍女のヘリーナ、その二人を護衛しているハジメ仲間の一人であるアレスを含めた王国一行に注がれている。

一応、ガハルドには、「フェアベルゲン」の情報を極力渡さないよう、光と音を完全遮断するフルフェイスの仮面——ハジメお手製の五人目の仮面・某ロックバンドの方が被るのと同じような狼——を被らせているので、早々正体は分からないだろう。しかし一度、都に來ているアレスは以外の王女のリリアーナと専属侍女のヘリーナ、そして近衛騎士達を見れば、彼女達がやんごとなき身分の人間であることは一目瞭然。

奴隷解放の事実と合わせれば、狼仮面は皇帝だと推測する者も出てくるだろう。一見すると、ただの狼の仮面をつけた、変人にしか見えないが。

長老衆を筆頭に、上層部の亜人達はガハルドの來訪を知っている。が、住民達は知らない。不倶戴天の敵のトップが目の前にいると知れば、いつ暴動が起きてもおかしくない。「ふざけた狼の仮面を付けやがって！馬鹿にしてんのか！」と襲いかかるかもしれ

ない。だが、今後の帝国との関係——ガハルドを生かしたまま誓約の力で安全を確保する。

という、重大な支障が出る危険は絶対に避けなければならない。

そんな懸念故のアルテナの催促だった。もつとも、内心では懸念以上に「何故、帝国の皇帝は、あんな変な狼の仮面を被っているのでしょうか？」と疑問で溢れていたが。隣の雫がピクンツと反応した。仮面フォックスは察しが良いのだ。

「む、そうだな。南雲ハジメ、いや、南雲殿。大体の事情はカムから聞いている。本当にお前さんには、色々と助けられた。そして、今回も囚われた同胞達を解放してくれた。まずは、フェアベルゲンを代表して礼を言わせて貰う」

「事を成したのはハウリア族だぞ。俺はうぜえクソ神の一根をぶん殴っただけだ。そこは間違えないでくれよ？」

アルフレリックの深い感謝を示す言葉と態度に、ハジメは気のない様子でヒラヒラと手を振る。そして、フェルニルとゴンドラを「宝物庫」にしまいながら勘違いされないよう自分はクソな神をぶん殴っただけだと訂正を入れた。

広場から突然、巨大な物体が姿を消したことに、喜びに沸いていた亜人達が目を瞬かせた。そして、長老衆とハジメが向き合うハジメ達に注目する。

ハジメの物言いにアルフレリックは「前から思っていたが、律儀な男だな」と苦笑い

を浮かべて頷いた。

「ああ、もちろん分かっている。まさか、最弱のはずの兎人族が帝国を落とすとはな……。長生きはするものだな。おそらく私は今、歴史的な瞬間に立ち会っているのだから」

ハウリア族が戦いに挑み、勝利を掴み取って同胞を救い出したことをアルフレリックの口から証言されたことで、住民達も大切な人を取り戻してくれたのは誰なのか理解したようだ。アルフレリックの隣で背筋を伸ばすカムに注目が集まる。彼等の瞳に宿っているのは、魔人族と帝国を退け、更に同胞を救ってくれたハウリアの族長に大きな敬意で英雄を見るような色だった。

一時は、故郷を捨てて逃げ出し、たくさんの家族を失って、樹海に戻った後も追放処分を受けそうになっていたというのに……

今は英雄扱い。

父親の堂々としている姿に、シアは、胸の奥の深い部分から何か熱く大きなものが込み上げてくるのを感じた。

誇らしくて、嬉しくて……

シアの手がそつと握られ、優しく抱き締められた。

「…………ユエさん、優花さん」

「……ん」

「シア」

短い言葉。けれど、十分だ。それだけで二人の優しい気持ちが伝わった。見ればハジメも、優しい眼差しを向けている。シアのウサ耳がふみよんと揺れた。

「カムの横に、立ってやったらどうだ？」

ただのひ弱なウサギ少女が、大迷宮攻略の旅まで乗り越えてきたのだ。あまり戦いをしておらず苦勞してきたのはシアの方が上だ。英雄に対する眼差しを、シアもまた受ける資格がある。

かつて自分を化け物として排除しようとした同族達の前に、堂々と立ってやったらどうだ？と、言うハジメの表情と声音は、恋人達にしか普段見せない柔らかさだ。

光輝を筆頭に、雫達やリリアーナ達はギョツと目を見開くほど。アレスは、そんなハジメの年相応な姿に安心したのか頷き、優花達、ハジメの恋人達は「そんなに驚くことか？」と顔を見合わせて首を傾げていた。

そんな旅の仲間の様子に、シアは、なんだか物凄くくすぐったい気持ちになりつつ、「はい、行つてきます！」とカムの元へ歩き出した。

が、そこで娘を無視するのがカムクオリティー。

同族達の視線を向け、一瞬何か考える素振りを見せたカムは、次の瞬間、ニヤリと笑つ

た。そして、スつと右手を掲げる。そうすれば、瞬時に現れるハウリア達！

広場のほぼ中央だと言うのに、シユババツと一瞬で出現。一糸乱れぬ動きで整列し、惚れ惚れするような「休め」の体勢を取った。

あちこちから「どこから来たんだよ！」「どうやって現れたの?!」という声が聞こえる。

「あ、あれ？ 父様？ 一体何を——」

「聞けつ、同胞達よ!!」

父親と並び立てなかったシアちゃん。とぼとぼとハジメのもとへ帰る。「知ってましたし。父様が、ここぞという時に私をスルーするの、知ってましたし」と呟いている。ハジメ、優花、ユエの三人がかりでウサ耳をモフ慰めた。

カムは娘の悲しみに気付いた様子もなく、兎人族らしくない強烈な覇気を纏って、住民達に向かって声を張り上げた。

「長きに亘り、屈辱と諦観な海で喘いでいた我が同胞よ。聞け！ 此度は帝国に打ち勝つことが出来た。だが、永遠の平和など有り得ない。お前達の未来は、そう遠くない内に脅かされることになるだろう」

その言葉に、広場にいる何人かの亜人達が恐怖で震えた。また、帝国での辛い日々がやって来るのかと、どこか継るような目で演説するカムを見つめる。

「そうなれば、お前達はまた昨日までの日々に逆戻りだ。それだけではない。今度は、奴隷を免れていた仲間も同じ目に遭うだろう」

未来が暗いことに変わりないという事実を突きつけられて、亜人族達は伏し目がちとなる。

「お前達は、それでいいのか？」

いいわけがない。尊厳の尽くを踏みにじられるような日々に戻りたいわけがない。まして、そんな辛さを、大切な者に味わわせたいわけがない。

だが、だからといってどうすればいいというのか……

カムは俯く同胞に視線を向けつつ、答えなら目の前にあるだろうと更に声を張り上げた。

「いいわけがないな？　なら、どうすればいい。簡単だ。今、隣にいる大切な者を守りたいと思うなら……戦え。ただ搾取され諦観と共に生きることを良しとしないなら……立ち上がれ。我等、亜人の境遇を変えたいのなら行動に移せ！我等は強い！亜人の強さを信じて！決意さえすれば強くなれるのが我等だ！我等ハウリアがそれを証明しただろう!!」

誰かが「……あ」と声を漏らした。強大な敵を打ち破り自分達を救い出したのは、特別な存在などではなく、亜人の中で一番の最弱種族だ。俯いていた亜人達が、一人、ま

た一人と顔を上げていく。

「帝国で受けていた屈辱を思い出せつ。不遇な境遇に甘んじるな！ 大切な者を守るには言葉だけじゃ意味は無い！ 諦観に浸るなら己を磨け！ 心を火を灯せ！」

カムの言葉に、巫人達の瞳に光が宿った。萎れていたケモ耳やケモシツポが、生を与えられたかのようにピンツと立ち上がる。

それを見たカムは、少し口の端を吊り上げて笑うと、

「戦う術なら教えよう。大切な者を守るため、戦うと決意するなら、我等と共にフェアベルゲンを、故郷を守ろうではないか。ハウリア族は、いつでも歓迎する!!」

そう言つて、演説を締め括った。整列するハウリア達は、どっかの誰かのように不敵に笑う。カムが再びバンドシグナルを出す。そうすればハウリア達は忍者かのようにシユバツ！と散開して一瞬で姿をくりました。

それを見て、巫人達が更に瞳を輝かせる。幾人かの若い巫人の中には、今にも志願すべく駆け出しそうだ。

ほくそ笑むカム。

「ボス、お話の最中に失礼しました。こうでもして戦力を増やそうと思ひまして」

「お、おう。それは別にいいんだけどよ……アルフレリック達ぐらいには言つとけよ？」

苦笑い気味のハジメは、近くで頭を痛いのか手で抑えるアルフレリック達長老衆を見

る。カムは軽く「スマン、スマン」と笑って謝っている。

「……………こうして亜人族は戦闘民族になりましたとき」

「やめてくださいよ、ユエさん！その原因のハウリアの一人として、物凄くいたたまれないので！」

シアの悲しみ再び。

遠からず、もしかしたら亜人族が戦闘民族となり、後の世で「亜人族をこんな集団にしたのは誰だ?！」と問われることがあったとしたら、シアは、こう答えねばならないかもしれないのだ。

——私の旦那様と、父様ですう……、と。

確かに居たたまれない。

「んんっ。さて、それでは奥に案内しようか。アルテナ、頼むぞ」

相談無しの突然の戦力増加の歓迎に頭を痛めるアルフレリックが、どうにか気を取り直して案内を促した。流石は、長生きを生きる最年長の長老だ。他の長老衆や戦士達が頭を痛めてる中で、素晴らしいリーダーシップである。

「それでは皆様、こちらにどうぞ。案内致します。さあ、ハジメ様も」

何故か、ハジメの手に取ってにこやかに案内しようとするアルテナ。こちらはこちらで、カムの挑発を意識しているようだ。取り敢えずシアによるインターセプト。ハジメ



に向かつて伸ばされたアルテナが手がベシツと叩き落とされる。シアとアルテナの視線が交わった。何故だか、バチバチと散る火花が幻視できる。

「わ・た・し達！の案内、お願いしますね、アルテナさん」

にかやかに笑うシア。森のウサギさんに相応しい素敵な笑顔。だがしかし、ウサ耳は口ほどにものを言う。フシャアーと威嚇するようにウサ毛が逆立っている。

「ええ、もちろんですわ、シアさん。ですが、人が多いのですから、はぐれないように念のため手を引かせていただきますわね？」

にこやかに笑うアルテナ。森のお姫様に相応しい素敵な笑顔。だがしかし、エルファミは口ほどにものを言う。ピクピクピクツと抗議するように高速で動いている。

そして、遂に二人はハジメの腕を片方ずつ取って胸を押し付ける始末。

そんな光景を「計画通り！」と言いたげに、ニヤリと笑うカムの様子を見て、ホントに疲れ気味であるハジメは、大体事情が察しがついたのか、にこやかに殺気を向けた。一瞬にして、カムが滝のように冷や汗を流す。

ハジメは、ガクブルし始めたカムにジト目を向けつつ、溜息を吐いて、投げやりな感じで言う。

「なんでもいいから、早く案内してくれ……」

「では、私が!!」

いつもは、そう人に見せない疲れを見せるハジメをシアとアルテナは互いにハジメの手を引っ張っていきながら目的の場所へと向かったのだった。やや、引き摺られ気味で、

そんな三人の様子を、優花達は恋人組はやれやれといった感じで、除く人達は、それぞれ不思議そうな、或いは複雑そうな眼差しをハジメの背に向けるのだった……。

## 百二話

## 新長老誕生

案内された広間では、奥に長老衆が座り、その対面にカムを含めた幾人かのハウリア族が、その右側にガハルドを挟んで優花達が座った。ハジメはというと話を聞けるが、横になって休んでいる。

皇帝陛下の直々の敗北宣言と、誓約の内容が本人から伝えられ、長老衆も、ようやく実感を持てたようだ。

己の中の名状し難い感情を整理するためか、唸ったり、天を仰いだり、目元を手で覆って深い息を吐いたり……それぞれの方法で、この歴史的瞬間を呑み込もうとしている。

外から、未だに歓声の音が響いている中、長老衆の一人——虎人族の族長ゼルが目を鋭く細めた。その視線の先にいるのは、敵地にありながら不敵な笑みを浮かべている不遜な態度のガハルドだ。

「敗戦国の王が、随分な態度だな？　自分がどれだけ我々の恨みを買っているか、自覚がないわけではないだろう？　まさか、ただで帰れるとも思っているのか？」

瞳孔が縦に割れ、獣性を剥き出しにするゼル。全身から凄まじく濃密な殺気が溢れ出

ている。カムとアルフレリック、ジン以外の長老や護衛の戦士達も、隠しきれない殺意と憎悪に滲ませている。ガハルドは怨敵なのだ。無理からぬことではある。

だが、そんな殺気を向けられても、当のガハルドはどこ吹く風といった様子。

「思っているに決まっているだろう。まさか、本気で俺を殺せると思つてねえだろうな。だとしたら、フェアベルゲンの頭共は、とんだ阿呆ということになるぞ？」

「なんだとつ、貴様！」

激昂するゼルに、アルフレリックが抑えるかと思いきや、ずつと腕を組んで無口だった熊人族の族長ジンが抑えた。

「ゼル、よすんだ。気持ちは痛いほど分かる。だが、ガハルドがここに来たのは、我々にハウリア族の成したと誓約の効力を証明するためということを忘れるな。ここで殺してしまったら、ハウリア族が身命を賭した意味がなくなってしまうだろう？」

「ジン、だがっ！」

「ゼル!!」

「くっ……」

悔しそうに顔を歪め、床に拳を叩きつけるゼル。しかし、他の長老衆と戦士達は、こういう場面なら襲いかかると思っていたジンが冷静でいることに驚き、冷静さを取り戻していた。ガハルドはそんなジンの冷静な対応を見て、つまらなかつたのか「ふんっ」と

鼻を鳴らした。場の雰囲気は最悪だ。アルフレリツクが、ガハルドに忠告する。

「ガハルド、少しは態度を改める。今回はジンが止めてくれたから良かったが、我々を阿呆にするな。特に、理屈では抑えきれない感情があると知れ。お前はそれだけのことをしてきたのだ」

静かな声音だった。だが、そこに秘められた感情は、ガハルドをして不敵な笑いを潜めさせるだけの重みがあった。最も長く生きた森人族。それは即ち、最も長くの苦しみを、悔しさを、そして憤怒と憎悪を抱いてきたということでもあるのだ。

ガハルドは胡座をかいた状態で、しばらくの間、アルフレリツクに視線を向けた。そして、背筋をスツと伸ばすと口を開いた。

「だったら、剣を取れ」

胡乱な眼差しを向けるアルフレリツクに、ガハルドは真つ直ぐな眼差しを向けたまま言葉を重ねた。

「俺がて、帝国が、敬意を払うのは強い者だけだ。俺の態度が気に食わないというのなら、力を以て従わせろ。帝国の皇帝を、御託でどうにかできると思うなよ」

ガハルドに、亜人族を奴隷にしていたことに対する罪悪感や謝罪の念は皆無だった。

——魔力を持たない。神に見放された種族だから見下したのではない。

——獣混じりだからと差別しているわけでもない。

——ガハルドが亜人族に価値を見いださないうのは、ただ彼等が「弱い」からだ。

「俺が負けた相手は、亜人族じゃあない。敬意。払うべきは、お前等じゃあない。剣を取り、命を懸け、戦場にて強さを示したのはハウリア族だ！」

ビリビリと、ガハルドの覇気が広間を震わせた。

一髪触発の空気が漂う。張り詰めた緊張の糸が今にも切れて、凄惨な殺意の応酬が繰り広げられる光景を幻視してしまう。しばらくの間、アルフレリツクとガハルドの間に見える火花が散る。

誰もが眉唾を呑み込むような空気の中、果たして沈黙を破ったのは……………

「あー……ガハルド。もうお役目終わったろ？ 国に帰してやるよ」

「あ？」

疲れが取れて、気が楽になって起き上がったハジメだ。

キョトンとするアルフレリツク達長老衆と、訝しむガハルド。そして如何にも「今ここで？」と言いたげな光輝を始めた者達のドン引きした様子も気にもせず、ハジメはむんずつとガハルドの首根っこを掴み、次いで空間を繋ぐ。　「ゲート」を開いた。

「ゲート」の向こう側には、見慣れたた帝城の一室が……………。

「お、おい！ まさか、このまま送り返す気か?! 今、ある意味、二国間の会談って感じだったろ?! 流石の俺でも言うぞ！ 空気読めって！」

「んなもん知るか。それに会談が物理的なのは普通聞かねえよ。それに、お前を証人の為に連れて来たんだ」

そもそもとハジメは言葉が続ける。

「何百年も続いた価値観の相違に、俺がとやかく言うつもりはないが、今回はじゃない。誓約の証明しに来ただけだ……アルフレリック、ここは収めてくれないか？」

実際、ガハルドへの報復や、悔恨あるいは改心と望む亜人族と、徹底した実力至上主義を信念として掲げるガハルドの生き方は、少し話し合ったところで平行線しか辿らな  
いだろう。

この世界の種族間問題、国家間問題に、異世界人であるハジメが、とやかく言う立場ではない。しかし、ジンが言ったように、この場はハウリア族が成したことを証明することが目的であり、それ以上もそれ以下でもない。

「ぬぐう……確かに、そうだな……スマンかった、南雲殿。少し熱くなり過ぎていた」

「落ち着いて貰えて何よりだ。つーわけで、変に問題を起す前に、お家に帰ろうか」  
「てんめえつ、人を反抗期のガキみてえに！あ、こら引き摺るなつ。放しやがれえ!!」

ジタバタ、ジタバタと暴れる皇帝様だったが、人外の膂力に到底、勝てる筈がないのだ。

「ハジメさん♪ 相手はこ・う・て・い・へ・い・か！ですよ！ そんな扱い、あんまり

です♪」

「リリアーナ姫え！お前、言っていることと表情が滅茶苦茶だぞ!!」

ランランラ〜ン♪と、恋人になれた件も含めてか、今にもスキップしそうな上機嫌さでハジメに苦言をリリアーナ。終いには、ハジメに引き摺られてるガハルドにグッドラックする煽り行為にまで突入している。

「リリイ、ただけ皇帝陛下にストレスを溜まってるのよ」

「あれは、政略結婚の時のことも含めてるんじゃない？」

雫が遠い目をして、優花は乾いた笑みを零す。主のあんまりな行動に、アレスは口元を抑えて笑っている。どうやらリリアーナの楽しそうな姿が見れて嬉しいらしい。が、ヘリーナや近衛騎士達が視線を逸らした。現実を直視できなかつたらしい。

ユエ達は、あんな事をするまでストレスを与えたのだろうガハルドへとジト目で見る。引き摺っているハジメも哀れみの表情をしながら苦言を呈した。

「ガハルド……お前、相当リリイにストレスになることしたんだな……」

「うるせえ!!」

ガハルドは青筋を立てて憤る。しかし、ハジメは気にせずに問答無用に「ゲート」の向こうへ投げ出された。「覚えてろよお〜！ 南雲ハジメえ〜!!」と、捨て台詞を吐きな



がら消えていく姿は、なんとも哀れな光景だった。

光輝がボソツと龍太郎と鈴に聞こえる程度に呟いた。

「……ちゃんと見てるんだな」

「だよなあ。俺、ガチで南雲の奴、寝ているかと思ってたぜ」

「龍太郎くんに一票」

光輝、龍太郎、そして鈴がこそこそ話し合っている。酷く満足したようなりりアーナは、ハジメの元へてくてくと小走り感覚で近寄ると流れるように抱き着いた。最早、ブレーキすら壊れて、アクセル全開らしい。

その後、「王女としての仕事があるので」と抱き着きながら話すりりアーナ。どうやら、ガハルドにしたのと同じ、王国や聖教教会の現状、そして今後の「フェアベルゲン」との関係について話しておきたいらしい。

王国は、帝国と違って奴隷商が盛んなわけではなかったが、差別意識が強かったからというものもある。そのことは亜人族も承知であり「簡単な話し合いの場で」というわけにはいかないのはガハルドと同じだ。とはいえ、帝国と比べればまだ敵愾心は少ない。ひとまず話を聞くくらいは、長老衆としても許容すべきことではあるようだった。

「わかった。俺も迷宮攻略に向けて、義手の整備をしたかったしな。話が終わったら呼んでくれ」

「はいっ。ハジメさん、んー」

「？」

「んー」

目を閉じて顔を近付けるリリアーナに、キョトンと首を傾げるハジメだったが、ようやくリリアーナの意図を理解して、軽く額にキスをした。唇じやなかったことに少し名残惜しそうだったが嬉しそうにはにかむリリアーナ。そんな二人に甘い空間が形成される。

優花達は羨ましいなどと少しリリアーナに羨望の眼差しを、雫と鈴は顔を赤くし顔を逸らす。アレスとヘリーナはウンウンと笑みを浮かべて頷いている。光輝と近衛騎士達はキツと睨みつけるが、ハジメには意味はない。

ハジメは席につくと、カムに向かって口を開いた。

「カム。リリイ達はまだ長老衆達と会話する必要があるようだが、お前等はどうだ？」

俺は迷宮に向けて準備を進めたいが、集落ぐらいまでならフェルニルに乗せてもいいぞ？」

「ふむ。そうでしょうな。明日以降、大迷宮の攻略も控えているわけでありませう。了解しました。直ぐに案内人を用意させましょう」

カム自身も解放された者達の受け入れを「フェアベルゲン」で陣頭指揮を執らわねば

ならない仕事があるので、代わりに案内人をつけてくれるらしい。が、カムが部下を呼ぼうとする寸前、アルフレリックが制止の声をかけた。

「待ってくれ、南雲殿。まだ、報いる方法が決まってない。もう少し付き合ってくれないか」

「言つたら、事を成したのはカム達だ」

「もちろん、カム達にも相応の礼をする。だが、南雲殿にも大恩があるのは事実。何もしなければ亜人族として恥知らずとなってしまう」

「クハツ……お堅いな。じゃあ、そうだな……此処での滞在の許可が貰えるなら嬉しいが……」

「お堅いのは、其方であろうに……しかし、それでいいのなら、樹海に滞在する間の宿や食事は、こちらで振る舞わせてくれ」

ハジメは「どうするよ?」と、優花達を見渡した。優花は特に異存はないようだ。雫や鈴などは、美しい都で、ケモミミな人達と触れ合えるかもと瞳を輝かせている。長老衆達も特に反対はなく、寧ろ好意的な反応である。そして、ハジメはある人物に目を向ける。それは熊人族の族長ジンだ。初対面の時よりの変わりように内心、驚いていた。

「ジンだったか? アンタも変わったな」

「そうか? ……まあ、そうだな。前の俺だと慢心のせいかすぐにガハルドに手を出して

いたろうな。が、南雲殿のおかげで変わったのだ感謝する」

「クハツツ……そうかい、感謝することでもないが、受け取っておくよ」

ジンの言葉に、少し笑みを見せるハジメ。彼からもハジメ達に滞在して欲しいという感情が表情に表れていた。客観的に見ても、樹海に来る度に助けた同胞を連れてきて、傷ついた自然や人々を癒してくれた者と仲間で、亜人族も好意的に接してくれる人間なのだ。意図したわけでもない好意に、なんとも言えない表情になりつつも、

「じゃ、世話になるよアルフレリック」

そう言つて、肩を竦めた。

アルフレリックはホツとした様子を見せつつ、次にカムに視線を向ける。

「さて、カムよ。我等と共に襲撃者を駆逐し、尚且つ、帝国に誓約までさせ同胞を取り返した。我等はお前達に報いらなければならぬ」

その言葉に、当のカムは「我等がしたいことをしだけさ」と肩を竦めて呟くだけだった。

アルフレリックは咳払いで間を取りつつ、更なる報償を与える。

「そしてだ。此度の功績に対しては、ハウリア族の族長であるカム、新たな長老の座を用意することで報いの一つとすることを提案したい。他の長老方はどうだ？」

アルフレリックの言葉に側近達が目を見開いた。ここ、数百年、現在の種族以外が長

老の一座席を受けたことはないのだ。森人族、虎人族、熊人族、土人族、狐人族、翼人族、が亜人族の最優六種族なのである。そこに兎人族を加えるというのは、亜人族の価値観からすれば、まさに歴史的快挙と言うべき種族の誉れだった。

アルフレリックの提案に、他の長老達は一度顔を見合わせると頷き合い、満場一致で賛成を示した。

「ふむ。そういうわけだ、カムよ。長老の座、受け取ってくれるか？」  
「もちろん、受け取ろう」

カムの言葉で拍手が音が響く。が、カムが「少し、付け加えても良いか？」と声をかけ、拍手を一旦、中止になる。長老達はキョトンと首を傾げる。

「どうしたのだ、カム？何か不満があるのか？」

「いや、不満はない。が、我等はボスに心から忠誠を捧げている。だから、お願いだアルフレリック。もし、ボスが我等を呼ぶときは長老カム・ハウリアではなく、ハウリア族のカム・ハウリアとして馳せ参じたいのだ」

それは、カムの信念であった。

自分達を変え、強く、何度も自分達を救ってくれたハジメに付き従いたいのだ。頭を下げてまでお願いするカムに、長老達は少し考える。そして、長老達の代表としてアルフレリックが口を開いた。

「うむ。カム、お前の言い分は分かった。なら、兎人族の長老及び特例で一時的にハウリア族の族長カムとなるのを認めよう」

「……戦えない者は？」

「安心せい。我等が責任を持つて守ろう」

つまり、長老達の提案は、カムは長老としての兎人族の長としての役目があるが、ハジメの要請などハウリアとしての役目がある時は、ハウリア族としての活動を認めるということだ。それに、居ない間に残された戦えない者達は、他の長老達が守るということだ。

そんな提案を受けたカムは、嬉しそうに頷くと長老達に頭を下げた。

「感謝する」

「よい。今から、カム。お前も我等と同じ立場だ。故にこれからも共にフェアベルゲンを守つていこう」

「ふっ、そうだな」

二人は、固い握手を交わすと、アルフレリックは、この場にいる者に聞こえる声音で話す。

「そういうわけだ。皆の者、異論は無いな？」

辺りを見回す。誰も反対を示さない。それを確認したアルフレリックは、今回の決定

したことを告げた。

「なら、ハウリア族族長カム・ハウリアを兎人族の新長老と認める！」

「有り難き幸せ」

アルフレリックの言葉に、長老達は頷き、カムは席から立って礼をしながら感謝を述べる。

この瞬間、「フェアベルゲン」長老衆に新たな長老。後に最強長老として名を残す長老が誕生した。

ハジメの隣でシアが両手で口元を抑えた。父親の大出世に感動しているらしい。「なんか涙がでちゃいます」と、目にいっぱい涙を溜めている。そんなシアをハジメは寄り添ってウサ耳を撫でていた。

その後、話はまとまり、楽しそうに団欒する長老衆を残して、ハジメ達は「フェアベルゲン」での滞在中の部屋を案内してもらった。

都の中は、まだまだお祭り騒ぎだ。光輝や龍太郎、鈴、そして雫は、ようやくゆっくり見物できる亜人族の国で興味津々で、久しぶりに少し明るい気持ちでお祭り騒ぎの渦中へと飛び込んでいった。

一部、熱狂的な優花信者が、優花様を捜し回るといふことがあったのだが……

ハジメが頼んだ最強のボディガード（アレス）が付いていたお陰で何事もなく優花

は、ユエ達と楽しんだそうだ。

なお、リリアーナは、それからしばらくして王国へと帰還した。今回の一大事件についても王国なりの行動方針を決めなければならぬからだ。

ただ、帰る際、ハジメと離れたくなさそうなりリリアーナだったが、ハジメからの抱擁とキスで嬉しそうにクネクネしてる隙にムスツとしてるヘリーナがへと運んでいった。  
「ゲート」へと消えていく中、「ヤダ〜！ハジメさんと離れたくない！」という叫び声が届く。

そして何故か、ヘリーナがムスツとしているかは、ハジメの隣で見送っていた右頬に赤い手型で腫れてしまっているアレスに聞けば分かることだろう……。

くオマケく

リリアーナ達が「ゲート」で王国へ帰還した後、アレスに何があった？と、聞くハジメ。それは、周りにいる優花達女性陣も気になってたことなのか耳を傾ける。それに對して、アレスはアハハ〜と困った笑みを浮かべながら口を開いた。

「いやー、ヘリーナに、『私も帰りますけど、何かありません？』と言われたので、ちゃんと『はい、また王国で』と、挨拶をしたんですが……何故か、ぶたれてしまって」



「「「「……………」」」」

それを聞いたハジメ達は、一同に思った。

——この男、<sup>アレス</sup>鈍感にも程が過ぎる、と……。

ハジメは苦笑いを零しながら、アレスの肩にそつと手をポンポンと叩き、ヘリーナの気持ちに同情した女性陣達はジト目の視線をアレスへと送るのであった。

## 百三話 母、そして家族

その日の夜。

未だ、ちらほらと町中の喧騒が聞こえてくる。どこかで帰還と新長老誕生を祝つて宴会でもしているのかもしれない。そんな中、割り当てられた部屋で、ハジメ、優花、ユエ、ティオ、部屋に来ていたアレスの五人は思い思いにくつろいでいた。

そう、五人だ。一人、元気印のウサギがいない。

「シアの奴、遅せえな」

「そうね……シア、どうしたんだろ？」

「……ん。家族に会つてくるって言つてたけど……」

「そうですね。家族の皆さんで戦況祝いでもしてるのでしょうか？」

「ううむ。まあ、シアに限つて悪いことが起きておらんじやろう。何かあつても、元凶の方が木っ端微塵じやろうて」

違いないと、ハジメ達は頷き合う。

なお、ハジメは今ベッドの上で義手の整備をしており、その隣でユエを膝の上に乗せ

た優花は二人で嬉しそうにハジメの作業姿を見ている。ティオとアレスはソファアームに座って帝国での疲れを癒すかのように寛いでいた。

そんな五人がそれぞれのことをしながら会話をしていると、不意に、部屋の窓が開いた。

「夜分遅く失礼します、ボス」

「お、新長老じゃねえか？」

高さ十メートルある部屋の窓から、にゆるりとしてきたのは新長老となったカムだった。ハジメは正体がカムと分かると、悪戯っぽく笑みを浮かばせて、新長老と言うと、カムは小つ恥ずかしいのか「アハハ」と笑みを零して返していた。しかし、かなな時間に此処に来るのも何か用があると思ったハジメは用件を聞いた。

「ボス。お取込み中なのは重々承知なのですが、今から少し、お付き合い願えませんか？」

「こんな時間にか？」

「はい。是非」

言葉少なに、しかし、強く願ひ出るカムにハジメは目を細める。緊急事態なのかとも一瞬思ったが、それにしてはカムの気配は穏やかだ。

何かとシア関連と察したハジメは、部屋にいる四人で視線を送ると、四人も同じよう

な考えに至ったのか、ハジメの目が合うと頷き合う。

「んじや、行くかカム」

「御意」

ハジメは、義手の整備を一旦、やめる。そして、部屋を後にして、カムの導きに従い、ハジメは都を出て樹海の奥——ハウリア族の元の集落へと向かうのだった。

~~~~~

うねるように根の張り出した大きな木のもとに、ポツリと佇む少女の姿があった。何をするまでもなく、ただ目の前の木々をジツと見つめている。

とても静かで、とても穏やかな雰囲気であった。普段の天真爛漫でムードメイカーな雰囲気か嘘のように。

淡青白色の髪と、静謐と愛情に彫られた横顔は驚くほど神秘的で美しく、森に迷い込んだ者が目撃したとなれば、きっと誰であつても心奪われたに違いない。

そんな少女——シアのもとに、人影が歩み寄つてきた。この神秘的雰囲気を惜しんだのか、静かに、ゆっくりと歩いてくる。

「ハジメさん」

「おう」

特に驚いた様子もなく、シアはふにやつと笑いながら人影の名を呼んだ。呼ばれたハジメは、そつと寄り添うように隣に並び立った。すると、シアがハジメの腕にギュツと抱きついて頭をハジメの肩に乗せた。二人はしばらくの間、寄り添い合いながら何も言わず、ただ目の前の大木を見つめて佇む。

やがて、ポツリと、シアが口を開いた。

「父様ですか？」

「ああ、ここに俺を連れてきたら、さっさと帰っちまったけどな」

「ふふふ、父様中々空気が読めますね」

そう、カムの用事は、シアの元へハジメを案内すること。そして、できればハジメとシアを二人つきりしたいというのが親心だった。優花達も察した様子だったし、シアなら問題ないので、今頃は、まったりと寛いでいるだろう。

「母親か？」

「はいです。母様が、この木の下で眠っています」

樹海では、死した者は木の根元に埋葬される。自然に還すためだ。役目を終えた体と魂は自然と一つになり、故郷たる樹海を潤し、そこで生きる者を潤して、再び新しい命が生まれってくる。亜人達は、その循環を尊ぶ。木々は墓石であり、故人の象徴でもあつ

た。

「——英雄になりたかった」

「ん？」

シアの突然の言葉に、ハジメは首を傾げる。シアは木々を見つめたまま言葉を重ねた。

「——家族を守れる人になりたかった。逃げ隠れするだけじゃない。大切な人を奪おうとする全てに立ち向かって、全てを守れるような、そんな英雄になりたかった」

「……………」

「母様の言葉です。燃えるような瞳と心を持った人でした」

最弱種且つ病弱。最も弱き体を持った、最も強き心の女性——モナ・ハウリア  
それが、シアが敬愛する母の名だ。

「……………」だから、シアが生まれたんだな」

ハジメの納得したような言葉に、シアは弾かれたような視線を転じた。墓石を見つめるハジメの目には確かな敬意が宿っている。

——生まれてくる子は、強き子であれ  
かつて、母が伝えてくれた願い。

体の強さは願った通りに。そして、心の強さも、シアは確かに受け継いだのだ。それを、恋人が認めくれた。自然と、照れ笑いが浮かんでしまう。

頬を上気させたシアは、墓石代わりの木々を仰ぎ見ながら、万感の想いを込めて亡き母へ言葉を紡いだ。

「母様。母様が教えてくれたことは本当でした。世界はとびつきり厳しいですけど、時々、とても優しいです。私、見つけましたよ。紹介しますね。この人が南雲ハジメさん——私の、大切な恋人です」

かつてモナは言った。シアと並び立つ人が必ず外の世界にいます。きっと素敵な出会いをするのだと。

「未来視」なんて能力もないのに、モナの予知は必中だった。今でも、敵わないなあと、シアは思う。いつか、母のように気高く、そして強い女性になれるのだろうか。辿り着くには、中々骨が折れそうな未来だ。

だが、それでも、一つ、近づけたこともある。

「私は、父様は、ハウリア族は——英雄になりました。そして、父様は新たな長老の一人になりました」

生きていたら、モナは、一体どんな顔をするのだろうか。あの燃える瞳を更に輝かせるのだろうか。それとも、無茶をしてっと困ったように笑うのだろうか。

在りし日の母の姿を思い浮かべ、シアは笑みを浮かべた。

そして、

「感謝します」

「え？ ハジメさん？」

突然の言葉に、シアはハジメを見た。ハジメの視線はモナの木々に向いていて、その言葉をシアではなくモナに向けたものであることが分かる。

「奈落から這い出て、世界を、神を敵に回す覚悟で始めた二人旅。ユエという女性と共に、大切なものを守る為に二人だけで、全ての障害を乗り越え、この世界を支配するゴミつたれな神共を討伐するつもりでしたが、旅する内に、やっぱり二人だけでは難しいと感じてしまいました。けれど——」

ハジメはシアを見る。そして、微笑むと、再びモナの木々に向き直って言葉を続けた。「シアがいたから、俺は前へと突き進めていきます。色々な人達救えることが出来ていきます。俺のこんな旅に彩りを与えてくれたのは間違いない、貴女の娘だ」

「ハジメさん……」

言葉に詰まるシア。ハジメは小さく笑みを浮かべながら、改めて、大切なウサ耳少女の母親に向けて感謝の言葉を贈った。

「この世に、シアを生んでくれて感謝します。安心して下さいシアは俺が幸せにします、



絶対に」

シアは天を仰いだ。そうしなければ、溢れ出るものが抑えられそうになかった。白の濃霧でさえ、今は二人を優しく包み込んでいるかのようだ。

心地よさすら感じる沈黙を、再びシアの言葉を終わらせた。

「あの、ハジメさん」

「ん？」

「ありがとうございます。いろいろ、言葉にしきれないくらい……本当に、ありがとうございます。ごさいました」

—— 一族の救済、旅の道連れ、望みに応え国を相手取る。

—— 背中合わせ、命を預け合い、共に死線を潜り、自分を愛してくれた。それだけの信頼と愛を寄せてくれた。

—— そして、母の墓前で、こうして同じ時を過ごしてくれている。

シアの深い感謝の言葉に、ハジメは微笑みながらシアを抱き寄せた。お互いの距離が縮まり、心臓の鼓動が聞こえてくる。

「気にするな。俺が伝えたいことを口にしただけだ」

「でも、嬉しいんです。ハジメさんが、そう言ってくれるだけで」

ハジメの言動に、シアがクスクスと笑う。しかし、直ぐに難しそうな表情になって、ハ

ジメに視線を向けた。

「私、何をすればハジメさんに返せますか？」

「礼なら、傍にいてくれるだけで結構だ」

「そんなの、私が納得しません。ハジメさんは、私が何をすれば嬉しいと感じてくれますか？……ハジメさんが望むなら、こ、——だって……」

シアはウサ耳をピコピコと動かしながら、ハジメにピタリと密着して、胸もハジメに密着させた。直ぐ隣からハジメを見つめる彼女の瞳は熱を孕んで潤んでおり、吐息は火傷しそうなほど熱い。言外にシアが何を言っているのか大事な部分は聞こえなかったが口の動きで何が言いたいかわかった。それが、それには応えず、代わりに苦笑いを浮かべて返した。

「いやあ、シア。流石に踏み込み過ぎだ」

「んもう……まあ、流石に大事な時ですもんね。それに、優花さんやユエさん達に叱られるんですし……」

「分かってるなら言うな」

困ったような表情で溜息を吐きながらハジメは、シアの頭を軽く小突く。シアから「アイタ」と言つて小突かれたところを摩る。でも、その表情は嬉しそうだ。

「でも……いつかは、してくれるんですよね？」

「いつか、な」

シアは嬉しそうに笑みを見せる。しかし、シアのウサ耳は正直者らしく、ペタリと力を失ったように垂れてしまった。それにつられてやはり不満はあるようだ。

「でも、やっぱり、何かお礼をしたいんです。ハジメさん達と出会ってから、私はずっと貰ってばかりです。ハジメさんもユエさん達も笑ってくれればいいって言いますけれど、そんなの皆さんといるのが幸せな私からすれば自然なことで、全然お礼なんかじゃないです」

「さっきも言ったろ？俺も、お前に貰っている。十分すぎるものをな」

「むう、釈然としません。そういうのじゃなくて、もつときちんと目に見える形で、ハジメさんにも、ユエさんにも、お礼がしたいんですよ。……いろいろと考えてみたんですけど中々思いつかなくて」

「やさぐれるなよ」

ハジメはいじけるシアに困った表情になる。改めて恩返しがしたいと言われても、本当に、もう十分なのだ。泣きべそ掻きながら必死に付いてきて、ハジメの力になりたいと頑張ってきた。感謝してるのはハジメの方なのだ。

だが、シアとしては、それではどうにも気持ち収まらないらしい。

「むう……邪魔な神さん達が居なければ、ハジメさんに色々と出来たのに……はあ、仕

方ありませんね。では、これからもハジメさんの恋人の一人として頑張つていくことにします」

「クハツ、そうかい」

ハジメの抱き着く力を強めるシア。ハジメは少し笑みを零した。と、その時、再び天を仰いだシアは、上空の霧に輝きを見た。それは、偶然にも局所的に霧が薄くなることで月の光が差し込み、それが空気中の水分に反射して起こる現象だった。

「ハジメさん、ハジメさん。ちよつと付いてきてくれませんか？」

「ん？ いいぞ」

ハジメから離れて、ウサ耳をミヨンミヨンさせながら、シアは楽しそうに木々を駆け上がり始めた。ハジメも、幹の洞や枝を足場にひよいひよいと追従する。

辿り着いたのは、モナの木々の頂上付近。普通、頂上付近となれば細い枝ばかりとなるのだが、そこには幾本もの枝が複雑に絡み合つてできた、実に座り心地のよさそうな場所があった。

「ここに、母様を埋葬したのは、ここが母様のお気に入り場所だったからなんです」  
「なるほどな、隠れスポットみたいな場所か」

二人でもゆつたりと座れる頂上の大きな枝に、並んで座るハジメとシア。

「ほら見てください、ハジメさん。中々の光景が見られますよ！」

「……お？ おお。これはまた……幻想的だな」

霧が流れ、限りなく薄くなる。見えてくるのは、広がる雲海。ちようど、ハジメ達の高さで濃霧が広がり、それより上は晴れた状態なのだ。そして、その霧の海に月の光が降り注ぎ、きらきらと幻想的に輝いている。まさに、宝石をちりばめた真白の海といふべき光景。

「ものすごくつく稀な現象なんですけどね。母様のとつておきです。このタイミングで見られるなんて、ついてますねえ」

「お前の母親も粋な計らいをするな」

母親が、頑張った娘にご褒美をくれたに違いない。そう言うハジメに、シアのウサ耳はわっさわっさと身悶えるように動いた。

二人で、キラキラと輝く霧の海を眺める。

ふと、ハジメはシアを見た。月の光を反射したのは、シアの髪も同じらしい。淡青白色の髪が、風になびく度にキラキラと輝く。その横姿を眺めながら、ハジメは、ふと、彼女との出会いを思い出した。

ユエと二人で、無事に外へと帰還して、魔物から必死に逃げていたひ弱なウサ耳少女。なんで助けようとしたのかは、今でもよく分からない。助けたとしても、面倒事が押し寄せるだけだ。しかし、助けてしまった。

彼女の死ぬ瞬間を見たくなかった。

否、

自分の性格で、つい助けてしまった。

否、

ただ、本能が、己の何かが、そう自分に、助けるといふ衝動を駆り立てたのだった。

そして、案の定、少女を助けたら、今度は一族を助けて下さいだ。頭が痛くなった。が、なんとか一族の危機を回避させて、ハジメは一族のボスとなり、少女は旅の仲間になった。

一緒に戦い、笑い、この異世界旅を共に過ごしてきた。

気が付けば、シアの存在は大きくなっていった。無意識の内にシアに対して独占欲を持つてしまっていた。

最愛と再会した際には、ユエ達に対しての想いも誤魔化せなく、晴れて大切な恋人となっていた。

オルステッドと相対した際は、無惨なシアの姿で、怒りが抑えられなくなった。弱い自分に嫌悪した。だが、その怒りを嫌悪を糧に何か己の中に潜む化け物が咆哮した。

そして、聞こえた。

——もう、失いたくないと……。

そこからは、ハジメは無意識と意識と狭間を行き来しながら、血反吐を吐いて戦って、勝ち抜いた。

そんなことを思い出しながら、大切な存在な眼前の少女を愛おしそうに見つめるハジメ。

「え、えくと、ハジメさん？　なんでしよう？　そんなにジツと見つめられると、流石に恥ずかしいのですが……」

気が付けば、シアが頬を真っ赤に染めながら恥じらうようにモジモジとしていた。ウサ耳も「ううう、どうして見てるの〜」というようにペタリと倒れながら、時折、ふにやふにやと動いてはハジメの方を向く。

そんなシアにハジメは目元を和らげると、そつと手を伸ばした。そして、その恥じらうウサ耳を優しく撫でる。

「ハ、ハジメさん？」

「……………なあ、シア。一つ、頼みがあるんだが」

「頼み、ですか？　もちろんいいですよ！　なんでも言ってくださいです」

ハジメのやつと頼みを言ってくれて、嬉しそうにニコニコしながら快諾した。

「いや、何、少し横になりたくってな。良かったら膝枕でも頼めないか？」

「そんなの頼まなくても恋人ですし、普通に使ってください。さあ、どうぞどうぞ」

「ありがとう」

シアは、ハジメの頼みに拍子抜けしたような表情もするものの、膝枕するのは嬉しいらしく、直ぐに満面の笑みを浮かべて自分の太ももをペシペシと叩いた。ハジメは、笑みを零しながら礼を言い、そのまま遠慮なく横になる。

シアはミニスカートのなので、直接、太ももの感触が伝わる。温かくふにふにとした感触が、柔らかかくハジメの頭部を支える。仄かに、優花やユエ、テイオとは似て非なる甘い香りが鼻腔をくすぐった。

「ふふ、改めてこうしていると、新鮮な感じがしますね。私、少しドキドキしてます」「そうだな、俺も妙に新鮮さを感じてるよ」

シアの膝枕は、初めてではない。しかし、今この時は、ハジメもシアも妙に新鮮さを感じており、頬が熱くほんのりと赤い。そんな二人の視線が重なる。

「シア、愛してる」

「私も、ハジメさんが大好きです」

シアの手が優しくハジメの髪を撫でる。心地よい感触に、ハジメは目を細めた。そして、お返しと言わんばかりに、目の前に垂れ下がっているシアの髪を手に取り、指で弄んだ。

シアの頭上に月が見える。



天真爛漫な元気っ子のくせに、どうしてこうも淡い月が似合うかのか。

月の輝きが強まるにつれ、同じように輝きを増すシアの髪と笑顔。

一体、誰が見惚れずにいれるだろう。

見つめ合い、穏やかに、月と霧が作り出す神秘の中で寄り添う二人。

今のハジメとシアを見た者がいたのなら、きつと砂糖を吐き出すに違いない。それくらい二の釀し出す雰囲気は甘かった。

この場を邪魔する者は現れない。現れても近付くことは出来ないだろう。そうすら思わせるほど二人は見つめ合っている。そんな甘やかな時間は優しく流れる。樹海が再び、濃霧に包まれるまで、ハジメとシアは二人っきりの時間を楽しむのだった……。

~~~~~

### 【魔国ガーランド】

城内、自分の執務室で黙々と報告書を纏めていた將軍フリード・バグアーは、少し焦り見せていた。

「……」

それは、ガーランドに神の使徒達が現れた次の日のことだった。フリードは再びアル

ヴに呼び出され玉座の間にいた。しかし、今回は五神の一柱 聖母神エクストラや使徒の姿はなく、数人の衛兵とアルヴのみだ。

フリードは、その場で跪いて、用件を聞いた。そして、アルヴの口がゆっくりりと開いた。

『フリードよ。これは神託ではなく、王命だ。数日の間、お前の行動の制限を命じる』  
『?!』

フリードは驚愕のあまり顔をバット上げた。アルヴから言われたのは、行動の制限。所謂、謹慎だ。動ける範囲は、城内と外れにある訓練場のみだけという、それは、今の状況的のフリードにとって酷な命令だった。

『王よ。流石に、その命は納得できません！』

流石に、その命令にフリードは、異議を申し立てたが無意味だった。アルヴはフリードに、こう告げたのだ。

『エクストラ様のご命令だ、受け入れよ』

それを聞いたフリードは、ゾツと体全体に悪寒が走った。もしかして、自分が奴等<sup>神</sup>の敵とバレてるのかもしれない。しかし、だが何故、ずくに自分を殺さない？とフリードは思う。

そして、ただの勘であるが、まだ奴等には、バレてないのかもしれないと、だとした

ら、無理に反抗は止めて従つてようとフリードは判断し、謹慎を受けたのだった。

そして、今に至る。

フリードが謹慎の命を受けて、二日が経つ。謹慎は残り数日、だが、この間に自分が何も出来ないことに怒りを感じていた。

そんなフリードが、事務作業を終わりに近い時だった。執務室の扉がノックされた。入室の許可を与えると同時に、執務室の扉が開く。

「フリード様、失礼します」

「アイザックか」

挨拶をして、入ってきた魔人族の男を見て、フリードは彼の名を呟いた。彼は、フリード直属の部下の一人であるアイザック・サガだった。彼もフリードから世界の真実を知り、その上でフリードを信じ従っている直属部隊の一人だ。

「スマンな、アイザック。不甲斐ない私のせいで、お前達も謹慎を受けてしまつて……」  
「いえ、仕方のないことです。それに、奴等も気付いてないようですよ」

「ああ、そこは心の底から安心した。流石に冷や汗が止まらなかつた、寿命が何年ぐらいか縮んでしまった気がするな」

フリードの謝罪に、アイザックは首を振る。アイザックは知ってるからだ。謹慎で一

番、悔しいのはフリードであることを。そして、フリードの軽い冗談で少し場の雰囲気が変わる。

「しかし、どうした。こんな時間に？」

「暗部から連絡を受けました」

「！」

連絡と聞いて、フリードは表情を変え、勢いよく席から立ち上がった。机に両手をついて、少し前のめりになる。フリードの謹慎は、直属部隊のアイザックを含めた彼等も同じような命を受けることになっており、今は自室にいるだろうカトレアも謹慎を受けている。そう表の部隊は……

「……内容は？」

「はい。見張りのガロツクからは、使徒達はまだ動きはないことです。守護を任されているバランとガランからも村の侵入もないと連絡がありました」

「そうか」

フリードはアイザックからの連絡を受けて、安堵した表情になる。そして、気が抜けたように席についた。アイザックも少し笑みをこぼす。フリードも、見張りは危険だが、ガロツクならば安心だ。村の守護も、あの二人であれば、並大抵の者なら敵にもならないだろうと頷く。

アイザックは、次の報告の内容が微笑ましいことに、少しフフッと笑みをこぼしながら報告をした。

「それに、ガランからは、フリード様が無事なのかと泣きべそをかいているらしいですよ」

「ふつ、そうか……じゃあ、今度会いに行ったら、任務を頑張ったガランには褒めてやらんとな」

「そしたら、バランの方も嫉妬して、フリード様に甘えてしまいそうですけどね」

アイザックの言葉に、フリードも「そうだな」と笑みを浮かべた。大事な家族とも呼べる部下が無事を聞けてか、少しばかり張り詰めていた部屋の雰囲気は少しばかり和んだ。

「そうか、連絡感謝するアイザック。後、バランとガランには引き続き村の守護を、ガロツクには迂闊に前にでしやばり過ぎるなど伝えてくれ」

「了解しました。では」

フリードの言伝を頼まれたアイザックは、頷くと「失礼しました」と言つて、部屋から出ていくのだった。アイザックが部屋から出てフリードは天井を見上げて、呟いた。

「……私も私なりに抗わせて貰うからな」

それは、自分達に敵達に向けての言葉。そして、そう呟いたフリードの表情は、口角

を上げ、不敵な笑みを浮かべており、その目は鋭くギラついているのであった……。

## 百四話　　ハルツィナ大迷宮

体に纏わりつくような濃霧の中を、ハジメ達は迷いのない足取りで進んでいた。

「ハルツィナ樹海」真の大迷宮の入口がある。『大樹ウーア・アルト』の元へ向かうためだ。普段はあまりにも密度の高い霧のせいで、亜人族でも感覚を狂わされる大樹近辺は、十日に一度、霧の濃度を下げて道を開く。

ハジメ達が「フエアベルゲン」に到着してから三日目にその道を開けた。都に滞在している三日間、アルフレリック達のもてなしもあつて、ハジメ達は中々快適な時間を過ごし、ハジメのオルステッドの戦闘の際の怪我の完治と壊れた義手などの修復が終わらせることが出来た。

シアとアルテナがハジメを巡って火花を散らしたり、アレスがハウリア達と樹海の戦士達を纏めて地に伏せさせた鬼畜訓練をしていたり、龍太郎が戦士達に絡んだり、テイオが魔法で亜人の子供達を喜ばせたり、光輝が元奴隷の女の子達に絡まれたり、優花が信徒から逃げたり、鈴が亜人の子供達にハアハアしながら絡んだり、ユエが新たな魔法を開発したり……

各々、三日間を楽しく過ごしたのだった。その間、一人、雫だけ酷く疲れていたようだが。

「天之川。右だ」

「——ッ」

霧に紛れて奇襲を仕掛けてくる樹海の魔物達。

しかし、ハジメの他、ユエ、シア、テイオ、アレス、ハウリア達は一切対処せず、全て光輝達に任せていた。大迷宮初の彼等に、樹海の魔物でウォーミングアップをしてもらおうとわけだ。もつとも、樹海の霧は亜人族以外の感覚を著しく狂わせるため、「オルクス大迷宮」での魔物の戦闘とは勝手が異なる。光輝達はウォーミングアップどころではない苦戦を強いられているようだった。

今も、側面から奇襲を受けそうになり、ハジメの忠告で辛うじて凌いだ形だ。光輝は僅かに顔を顰めている。苛立ちが募っているようだ。それは龍太郎達も同じで、先程から舌打ちが止まらない。結界でパーティーを守る鈴も、遊撃に徹する雫も、難しい表情をしている。因みにアレスは、樹海の魔物は二、三回倒したほどで慣れたらしい。ホントに、あの神官は化け物である。

そんな中、光輝達に交じって戦っている優花の透き通った声が響く。

「形状変化——聖剣。IX、X一切り裂いてっ」



帝国の使徒達との戦いを経て、新たに二つの聖杭を手に入れた優花は、十となった聖杭を使い慣らすため、自主的に鍛錬をしているのである。どうやら、天使の力がか濃霧の影響を受けないようで、天性魔法と聖杭の訓練にちょうど良いらしい。

今も、美しい白に輝く翼をはばたかせながら、二つの聖杭を聖剣の変化させて、遠くにいる魔物達へと飛ばし、一瞬で切り刻めるほど、聖杭の操作が上達している。

「はっ」

更に、接近してきた魔物を、残りの聖杭で変化させた聖槌で一掃した。まだ、残りの二つの聖杭も発現をしてない優花だが、少なくとも光輝達よりも遥かに強い。

「優花も、聖杭を扱えるようになってるな。毎日、ユエ達と鍛錬してるわけだ」

「……ん。優花、飲み込みが早い。天性魔法有りだと、私が負けそうになる」

「そうですね、私も攻撃が聖杭を上手く使われて対処されるようになりましたから。今の優花殿の実力は、＼ネームド＼と同じくらいでしょう」

聖杭を周りに浮かせて、残心を解いて「ふう〜」と息を吐く優花を見ながら、ハジメ、ユエ、アレスの三人が言葉を交わす。優花が力を貰つと言われる天使クリスタの本来の戦闘能力は、聖母神エクストラと同等らしいが、力を受け継いでからまだ二週間程度であることを考えれば驚異的な成長速度だ。ハジメ達との鍛錬と帝国での神の使徒戦、優花の努力が、急速に天使化クリスタの戦闘能力をものにしてているのだろう。

「そんなことないわ。攻撃魔法はユエやアレスさんに比べれば弱いし、聖杭も天性魔法も集中しないと操作と発動も難しいし……」

三人の会話が聞こえていたらしく、歩み寄ってハジメに抱きつきながら、唇を尖らせた。ハジメ達との戦闘訓練の際、ユエには、魔法の手数と発動速度で負け、シアには近接戦に持ち込まれたら負け、ティオには持久戦で負け、アレスとハジメの二人には本気でぶつかっても負けてしまうのだ。優花自身はクリスタの力でなら勝てるイメージがあるのだが、思い通りにいかなくてもどかしい……そんな気持ちを表情を出しながら、ハジメの胸元に顔を埋めた。

「……優花。何を言ってるのよ。軽く私達を上回る身体能力に、聖杭という光輝の聖剣をも模造できて複数ある能力、天性魔法とこの世界にない魔法を無詠唱・魔法陣なしでの発動可能。優花自身の持つていた回復魔法と付与魔法も驚異的だし……。もうチートなんて評価じゃ足りない、バグキャラだわ。なのに、不満なの？」

雫から呆れたように客観的なスペックを指摘されて、確かかと思いつながらも優花は、ハジメに頭を撫でて貰いながら不満そうな表情を雫に向ける。

「でも私って、一度もハジメ達に勝てないのよ。そんな私がバグキャラならハジメ達はどうかなのよ……」

「……名状し難い何か……としか……」

雫が難しい表情でハジメ達を表す表現を考えるが、結局、何も出なかつたらしい。そんな雫に光輝が光輝が声をかける。

「大丈夫だ、雫。大迷宮さえクリアできれば、俺達だつて南雲くらい強くなれる。いや、南雲が非戦闘系天職であることを考えれば、きつと、もつと強くなれるはずだ！俺も神を倒せるぐらいにつ」

「そーかあ？でも、どんな魔法が手に入るのか楽しみだぜ！」

「うん、頑張ろうね！」

ハジメの強さは神代魔法だけが要因ではないのだが、その辺はスルーして光輝がグツと握り拳を作った。龍太郎も鈴も気合十分のようだ。

「皆さ〜ん、着きましたよお〜」

光輝達が燃え上がっていると、シアが肩越しに振り返りながら大樹への到着を伝えた。濃霧の向こう側へ消えていくシアを追ってハジメ達の前に進むと、不意に霧のない空間に出た。前方には、以前に見た時と変わらない枯れた巨大な木がそびえ立っている。

「これが……大樹……」

「でけえ……」

「す〜く……大きいね……」

頭上を見上げ、大樹の天辺が見えないこと、横幅がありすぎて一見するとただの壁のようにしか見えないことに、口をポカンと開けて啞然とする光輝達。

きつと、初めて訪れた時の自分達も同じような表情になっていただろうなど、ハジメとユエは顔を見合わせて小さく笑みをこぼした。

ハジメは、「宝物庫」から攻略した大迷宮の証を取り出しながら、根元にある石版のもとへと歩み寄った。石版も以前と変わらない。七角形の頂点に格大迷宮を示す七つの紋様が描かれており、その裏側には証をはめ込む窪みがあった。片膝立ちとなり、ハジメが計五つの証を掌で弄んでいると、光輝達もようやく大樹の偉容から解放されたように、正気を取り戻しハジメのもとへ集まって来た。

ここからは何が起こってもおかしくない本当の魔境だ。気を引き締めると、ハジメは鋭い視線を巡らせる。

「カム、何が起こるか分からないからハウリア族は離れておけ。それに、カムは仕事があるだろ?」

「うっ……了解です、ボス。ご武運を」

新長老となったカムだが、ボス達の案内が我等がすると無理言つて、長老としての仕事を放棄して付いてきたカムとハウリア達だったが、ハジメの言葉に残念そうにしながらも、それでもカムを筆頭に、一斉に跪いてから散開していった。

それを確認すると、ハジメはおもむろに「オルクス大迷宮」攻略の証である指輪を石版にはめ込んだ。一拍おいて、石版が淡く輝き出し文字が浮き始める。

—— 四つの証

—— 再生の力

—— 紡がれた絆の道標

—— 全てを有する者に新たな試練の道は開かれるだろう。

「これも前と同じだな。使う証は……神山以外のでいいか」

ハジメは呟きながら一つずつ証を石版にはめ込んでいった。「ライセンの指輪」「グ  
リューエンのペンダント」「メルジーネのコイン」……………

一つはめ込んでいく度に、石版の放つ輝きが大きく強くなっていく。そして、最後の  
コインをはめ込んだ直後、その輝きが解き放たれたように地面を這って大樹に向かい、  
今度は大樹そのものを盛大に輝かせた。

「む？ 大樹にも紋様が出たのじゃ」

「……………ん、再生の力？」

テイオが興味深げに呟いた通り、大樹の幹に七角形の紋様が浮き出していた。トコトコ  
と輝く紋様に歩み寄ったユエは、そつと手を触れながら再生魔法を行使する。

直後、パアアアア!!と、今までの比ではない光が大樹を包み込み、ユエの手が触れている場所から、まるで根から水を汲み取るように光を隅々まで行き渡らせ、徐々に瑞々しさを取り戻していく。

「あ、葉が………」

シアが刻々と生命力を取り戻していく大樹にうつとりと見蕩れながら、頭上の枝にポツポツとつき始めた葉を指差す。まるで、生命の誕生でも見ているかのような、言葉にできない不可思議な感動を覚えながら見つめるハジメ達の眼前で、大樹は一気に生い茂り、鮮やかな緑を取り戻した。少し強めの風が大樹をざわめかせ、辺りに葉鳴りを響かせる。と、次の瞬間、突如、正面の幹が裂けるように左右ながら分かれ大樹に洞が出来上がった。

数十人が優に入れる大きな洞だ。

ハジメ達は顔を見合わせ頷き合うと、躊躇うことなく巨大な洞の中へ足を踏み入れた。

ハジメが少し懸念していたこと——実際に四つ以上の大迷宮を攻略していないメンバーは、樹海の大迷宮に挑戦できないかという点については、どうやら杞憂だったらしく問題なく洞の中へ入ることができた。おそらく他の大迷宮も同じく、「入りたければ、あるいは入れるものなら入れればいい。ただし、生きて出られる保証は微塵もないが」と

いうスタンスなのだろう。

ハジメが視線を巡らせる。だが、洞の中は特に何も無いようだった。ただ大きな空間がドーム状に広がっているだけである。

「行き止まりなのか？」

光輝が訝しそうに呟いた。

直後、洞の入口が逆再生でもしているように閉じ始める。徐々に細くなっていく外の光。思わず慌てる光輝をハジメが一喝する。入口が完全に閉じ暗闇に包まれた洞の中で、咄嗟にアレスが光源を確保しようと手をかざした。が、その必要はなかった。

何故なら、足元に大きな魔法陣が出現し強烈な光を発したからだ。

「うわっ、なんだこりゃー！」

「なになに！ なんなのっ！」

「落ち着きなさい！ ただの転移の魔法陣ですっ。転移先で呆けてはいけませんよ！」

動揺する龍太郎と鈴にアレスの声が響く。流星は、たった一人で、三つの大迷宮を攻略した男である。アレスの注意の直後、彼等の視界が暗転したのだった。

「……………は………」

再び光を取り戻したハジメ達の視界に映ったのは、木々の生い茂る樹海だった。一瞬、大樹の外に放り出されただけかと思つたハジメ達だが、わざわざ転移させる必要性

はないので、ここが大迷宮の中なのは確かだろう。

大樹の中の樹海……なんと奇妙な状況である。

「みんな、無事か？」

光輝が、軽く頭を振りながら周囲の状況を確認し、仲間の安否を確認した。それに雫達が「大丈夫」と返事をする。優花、ユエ、シア、テイオ、アレスも特に問題はないように、既に周囲を警戒し鋭い視線を飛ばしている。

光輝が困惑したように尋ねた。

「南雲、ここが本当の大迷宮なんだよな？……どつちに向かえばいいんだ？」

ハジメ達が飛ばされた場所は、周囲三百六十度、全てが木々で囲まれたサークル状の空き地であり、取るべき進路を示す道標は特に見当たらなかった。上は濃霧で覆われているので、せきよく紅翼を使って上空から道を探すことはできそうにない。

「まあ取り敢えず、探すしかないだろうな」

ハジメは目を細めて周囲を警戒して見渡しながら、そう言葉を呟きながら、歩き出した。

「俺が先頭に行く。何かあったら教えてくれ」

光輝達もそれに頷き、歩きだす。その中で、先頭のハジメを抜いて光輝は先陣を切った。神代魔法は、大迷宮に試練攻略を認められないと授けられないと聞いて、率先して動



きたかったのだろう。特に異論もなく、そろそろと他の者達もその後を着いていくと思われたが……

「……………そういうことね」

優花が意味深な言葉を呟くと、何故か立ち止まった。それと同時に、ユエ、シア、アレスの三人も立ち止まった。前に進む者達の背を冷たい眼差しで見据えている。

「優花？ アレスさん達もどうし——」

雫が、優花達に声をかけた。「I、<sup>ワンス</sup>行つて<sup>刺して</sup>」その瞬間、雫の横に何かが横切り一陣の風が吹いた。そのすぐ後、グシャツと生々しい音が雫の後ろから聞こえた。

「え——」

振り返ってみると、目に入った光景に雫は言葉を失った。

「ガハッ?!」

それは、優花の聖剣へと形状変化させた一本の聖杖が、ハジメの背中から腹部にかけて聖剣が貫かれているのだった。

~~~~~

ハジメ達が大樹の石版に、四つの証をはめ込んでいる頃。

「ハルツィナ大迷宮」の最奥。いや、正確には天辺と言った方が良いだろう。そこに美しい庭園がそこにあつた。

その場所は、天辺にあるせいか空気はとても澄んでおり、清い水が流れる水路に、芝生のような地面が広がる。小さな木々に囲まれようにして、小さな白亜の建物がある。

そこに木で作られた玉座に女性が座っていた。その女性の体は全て木で出来ており、ストレートを中分けにした髪型でかなりの美人に見える。耳の先端が尖っていることから、おそらく森人族なのだろう。

「ふふ、やつと新しい攻略者が、この迷宮を挑戦しますのね。あの竜人族の方以来の攻略者に胸が踊りますわ」

そう言葉にしながら、女性は嬉しそうに、笑みをこぼすと、石版にはめ込まれた証を天辺から石版から流れる魔力を使って、読み取っていく。

「……オーちゃんさんの迷宮、ナツちゃんさんの迷宮、お姉様の迷宮、……そして、ミレディさんの迷宮。オーちゃんさんの迷宮を攻略したことに驚きましたが、ミレディさんの迷宮までも……凄くゾクゾクしますわあ〜」

はめ込まれた証が誰だか、分かつて頂く女性。しかし、オスカーとミレディの迷宮を攻略していたことには、驚きを隠せなかった。だが、それ以上に驚くことがあつた。

「っ?!」

女性は感じ取ったのだ。今回の迷宮の攻略者の中に、この「大樹ウーア・アルト」の女王として語り継がれてきた、ある伝承の証を持つ者を……。

「本当にいらつしやったのですね……」

女性は玉座から立ち上がると、座っていた玉座を近くの木と同化させると、自分も玉座と同じように近くの木に触れ、同化してある場所へと移動した。

そこは、明るい庭園とはまるで逆な薄暗い場所だった。その場所の奥に石版が置かれていた。女性が石版に触れると淡い輝きを放ちながら文字が浮き出た。

—— 神穿つ、機神の力を持つ者。此処に來たれり、試練遣わす。

そして、女性は石版に手をかざしながら呟いた。

「機神の試練——起動」

その言葉が鍵となり、石版から放たれる輝きが増した。そして、石版の後方から、ガシャンツと何かが動き出す音と共にうつつすらと赤い眼光が輝いたのだった……。

# 百五話 偽者の正体は……

「ワンス<sup>刺して</sup>、行つて」

グシャツ。

そんな生々しい音が聞こえ、この場にいる者全員が音のした場所に目を向けた。そして、言葉を失った。

「ガハツ?!」

そこには、聖剣に形状変化した聖杭がハジメの背中から腹部にかけて貫いているのだ。それに続いて、シアとアレスが動いた。

「シア殿は、偽者のテイオ殿を……」

「了解ですう」

アレスの指示を聞いたシアは、テイオを、指示を出したアレスは龍太郎を力技で地に伏せさせ、身動きが取れないように拘束した。

「シア?!」

「いきなり何をしやがるっ」

いきなり拘束されて、ジタバタともがくテイオと龍太郎。

そんな訳の分からない光景を見て、光輝達は唾然とする。一拍置いて、我に返った光輝が、なんで？といった視線を優花達に向けた。特にハジメを刺した優花に。

「園部さん！ 一体なぜっ、こんなことを！」

思わず怒声を上げる光輝。雫達もどこか緊張したような表情で優花達に意図を問う眼差しを向けた。

「園部さんっ、何か——」

少し声を荒あげて、歩み寄ろうとする光輝を片手で制し、優花は無言、無表情でハジメのもとへ歩み寄った。いきなり刺されて困惑しながら振り返って優花を見るハジメ。優花は、どこ吹く風といった様子だ。その瞳に宿るのは絶対零度の冷たさ。

「ユウ、カっ、なぜっ？」

苦しそうにしながら話しかけるハジメに、しかし優花は、その問いに無視。それを見たハジメは、自分の最愛を見て信じられないといった表情をする。それは光輝達も同じだ。お互い思い合い理想の恋人と言ってはばからないハジメに殺意を向ける優花など、まるで現実感がない。

あるいは乱心でもしたか……。そう思って、光輝が止めに入ろうとした瞬間、

「……………邪魔はさせない」

「——ッ?!」

透き通る声で、ユエが止めに入ろうとする光輝の前に、ユエが立ちはだかつたのだ。またもや、分からない。ユエもハジメの恋人の一人が最愛を刺した優花に味方をするのだ。

「ユエさんっ、どいてくれ!」

「……………何故?」

光輝が言おうも、ユエは優花とハジメの所に近づけまいと前に立ちはだかる。

「な、何をやってるの! 優花!」

雫が、驚愕と焦燥に満ちた制止の声を上げた。慌てて優花のもとへ行こうも、光輝と同じようにユエが止めに入る。

なんとかして優花を止めようとする光輝だったが、それは、次の優花の言葉で霧散することになった。

「止めて、紛い物の分際でハジメの声で喋らないで気持ち悪い!」

優花が声を発した瞬間、まるで、その場が極寒の地にもなったかのような冷気で満たされた。実際に気温が下がっているわけではない。その身から溢れ出る殺気が、生命の発する熱を削ぎ落としているのだ。心なしか周囲が暗くなつた気さえする。あまりに濃密な殺意に、光輝達の呼吸が自然と浅くなり冷や汗が滝のように流れ落ちた。

「ねえ、ハジメはどこなの？ 答えろ」

「……………」

ハジメの姿をした「何か」は、表情はストーンと落とすと無機質な雰囲気纏って無言を貫いた。「何者」ではなく「何か」なのは、聖剣で背中から刺されたのに、聖剣に血が付いておらず、血が流れていないからだ。明らかに人ではなかった。

「I、回って」

優花が指示で、ハジメモドキに刺さったままの聖剣が肉体を抉るように回転しながら腹部を貫くと優花のもとへと戻った。

しかし、ハジメモドキは腹部に大穴が空いたというのに

、表情一つ変えることはなかった。どうやら痛覚がないらしい。神の使徒よりもなお、人形のようなイメージを受けるそれは、あるいは本当に意思を持っていないのかもしれない。

「答える気はないのね。いや、そもそも答える機能がないってことね。なら、もういいわ。死になさい——Ⅲ、潰して」

優花は、もう一つの聖杖を大槌の武器——聖槌へと形状変化させると、ハジメモドキに片手をかざした。そして、聖槌は、そのままから叩き潰した。ハジメモドキの周りにビチャビチャと飛び散る。思わず顔を背ける雫達だったが、堪えてよく見れば、飛び

散ったのは肉片や脳髓のではなく、赤錆色のスライムのようなものだった。

それに続いて、ティオと龍太郎をそれぞれ拘束していた二人もドリユツケンで叩き潰し、ロンギヌスで首を刎ね飛ばした。すると、ハジメモドキと同じように二人も赤錆色のスライムに戻った。スライム達は、一拍おいて龍太郎の首がない胴体や他の二人の肉片がドロリと溶け出すと、そのまま地面に吸い込まれていき染みとなった。

「やってくれますね、流星は大迷宮だ」

「ですなええ。今回は特にヤラシイです」

「ええ、ホントにね……」

三人は、それぞれ武器を仕舞うと悪態を吐く。

「ユエさん、ハジメさんとティオさんは……」

「……ん、転移の際に別の場所に飛ばされたんだと思う。僅かに、神代魔法を取得する時の記憶を探られる感覚があった。あの擬態能力を持つ赤錆色のバチエラムに記憶でも植え付けて成り済ませてから、油断してる時に襲うって魂胆だと思う」

「……でしようね。ホントに気分が悪いわ」

優花達は、自分達の恋人であるハジメと大切な仲間家族であるティオをダシにされて不機嫌そうに表情を歪ませる。ユエの推測を聞いて、雫と鈴がゾツとしたように身震いした。



「なるほどね。……それにしても、よく分かったわね」

「だよ。……鈴には見分けがつかなかったよ。どうやって皆気がついたの？」

鈴が、成り済ましの恐ろしさに少し青ざめながら、優花達に見分け方を聞いた。光輝もはぐれた親友の安否を気にしつつ興味深げに優花達を見やった。

「どうやってと言われてもねえ……」

「……ん、見た瞬間、アレはハジメじゃないって分かったとしか言いようがない」

「ですわね……」

「……」

優花、ユエ、シアの回答に、全員がガクツと脱力した。鈴がジト目になりながら尋ねる。

「じゃあ、龍太郎さんとティオさんは？」

「二度、偽者がいるって分かったら、後はアレスさんに教えて貰った魂魄魔法“心眼”を使えば、人と魔物の魂は違うことを教わっていたから、すぐに分かったわ」

「……ん」

「そ、そっか。でも、龍太郎くんとか、どうやって見分ければいいのかなあ。鈴的に、脳筋発言をされた時点で、むしろ『本物だ！』ってなりそうなんだけど」

「も、もしかして、龍太郎が替え玉に選ばれたのは、そのせいか……くっ、龍太郎……」

鈴の発言も大概だが、親友のはずの光輝の、言外に龍太郎の性格が単純すぎて見分けられないという発言もに大概だ。雫が同情を孕んだ遠い目を、どこかにいるはずの龍太郎に向ける。何故か空の彼方に、サムズアップする良い笑顔の龍太郎が浮かんだ。

優花達の判断の説明がハジメ専用なため、アテにならないと感じた光輝は、もう一人偽者だと分かったアレスに問うた。

「あの、アレスさんは、どうやって南雲達が偽者だと分かったんですか？」

光輝の問い掛けに、雫や鈴も気になり視線がアレスに集中する。視線が集まる中、アレスは「ふむ」と口元に手を当てた後、説明を始めた。

「そうですね、私は優花殿が言っていたように、『心眼』を使って魂魄で偽者かを見分けました……もう一つの方法でも見分けることができます」

「本当ですか？」

神代魔法以外の見分け方があると聞いて光輝は目を見開いて、それは本当なのか聞くと、アレスは頷きながら答えた。

「ええ、それは相手を、見て知る。つまり『観察眼』ですね」

「観察眼ですか？」

「はい。人には、普段の様子や性格は個人に一つです。それは、マネしようとも魂が違う限り無理なことです。だから、どう偽者が演じてても魂が違う限り普段のクセとかにズレ



ヴヴヴツ!!と、まるで扇風機を最大で動かしているかのような音。一つや二つではない。おびただしい数だ。

「魔物か！ アレスさん、俺が戦います！ 手は出さないでください！」

「……まあ、初戦ですからね」

光輝が前に出た。少々、意気込みが強過ぎて危うい感じがするものの、アレス達が対応しては一緒に来た意味がない。アレスは領き、観戦モードで後ろに下がった。

初めての、本当の大迷宮での対魔物戦だ。雫や鈴が緊張の面持ちで光輝の背後に控える。

「この音、ですよお！ 皆さん、気を付けてください！ 飛行系の魔物の中でも、特に樹海の魔物は回避能力がすごく高いですよお！」

「雫、谷口さん、頑張つて！」

シアがアドバイスを、優花が声援を送る。直後、木々の隙間を抜けるようにして、魔物の群れが襲来した。

その途端、

「ひいつ、キモい!!」

鈴が悲鳴を上げた。本来は、結界を張って敵の進路を限定するのが鈴のセオリーなのだ、それを忘れるという大失態を初っ端からしてしまうほど、襲来した魔物の姿が生

理的に受け付けなかったようだ。

見た目は「蜂」ただし、赤ん坊ほどの大きさで、百足ムカデのようにわしやわしや動く無数の足がある。蜘蛛の如き口はギチギチと開閉され、盛り上がった複眼は七つ。黄色と黒の毒々しい色合い、ねつちよりとした緑の粘液を纏っていて、尾の針を伝ってびちゃびちやと撒き散らしている。

確かに、直視を避けたい、ある意味、冒瀆的な生き物だった。

「ツ、鈴……しつかりするんだ！」

光輝が怒声を上げる。鈴に飛びかかろうとした蜂モドキに、「縮地」で急迫すると、聖剣を振るった。だが、シアの予測通り、回避能力は頗る付きで高いらしい。蜂モドキは聖剣の一撃をあつさり回避した。その際、緑の粘液が飛び降り、鈴の顔にべちよつとかかる。

鈴が白目を剥きかけた。反転した蜂モドキが、尾の針を鈴へ向ける。

「疾っ！」

霞むような速度で踏み込んできた雫の黒刀が、間一髪、蜂モドキを捉えた。

「鈴っ」

「——て、天絶う！！」

雫の一喝で、ようやく始動した結界師。押し寄せる蜂モドキの波を、分断し、誘導す

る結界の道を作り出す。涙目でかつてない速さと技量で、自分へ回復魔法をかけておくことも忘れない。ねっちより粘液が光と共に浄化される。

精神的に早速死にかけている鈴を尻目に、光輝と雫の互いの死角をカバーしながら迎撃戦を開始した。

「——天翔閃！」

光の斬撃が飛ぶが、蜂モドキは一糸乱れぬ動きで左右に分かれ、あっさり光輝の十八番を回避してしまった。まるで強弓の矢が貫性の法則を完全に無視して鋭角移動するような俊敏性に、光輝は「無茶苦茶だつ、クソツ」と悪態を吐く。更に、その俊敏性を活かしたまま、蜂モドキは尾の針をマシンガンの如く掃射し始めた。撃ち出された直後には新しい針が生み出され、絶えず周囲を巡回しながら多角的に撃ち込んでくる。

「天絶天絶天絶うー！」

悲鳴じみた詠唱をしながら、鈴の障壁が毒針の攻撃を辛うじて防ぎ、雫が速度を活かした切り込みで相手ほど連係を崩し、そうして生まれた隙に光輝が一撃を叩き込む。だが、それを倒せるのは数体ずつで、何百という蜂モドキの群れを駆逐するのは程遠い。外の魔物に比べ、能力も戦い方もあまりにも高度な魔物だった。

「くそつ、こいつら、まるで魔人族の魔物みたいだ！」

「いや、逆です。アチラの魔物が大迷宮の魔物に近いんですよ」

必死の形相で聖剣を振るう光輝が、少し前に経験した修羅場を思い出して思わず悪態を吐いた。大迷宮の魔物の強さに余裕が全くないようだ。

そんな光輝の背後から今にも奇襲を仕掛けようとしていた蜂モドキを、アレスが訂正の言葉を送りながら光輝よりも速い「天翔閃」で蜂モドキを両断した。

意気込んで自分達が対応すると言った光輝だが、蜂モドキが意を汲んでくれるわけもない。既に後方で控えていたアレス達にも、蜂モドキが襲いかかっていた。

それを、アレスだけでなく、優花、ユエ、シアもなんとなく迎撃していく。

「回避なんざ関係ねえですうー」

シアのドリユッケンが振るわれる度に、？る衝撃波がまとめて蜂モドキを粉碎する。

「……………ん、弱い」

ユエの方は、雷龍が襲い掛かってくる蜂モドキ達を一瞬で雷の顎門で次々と消却されていく。

「思ったよりも遅いわね」

優花の方も十の聖槍へと形状変化した聖杭達が一齐に射出され、蜂モドキ達を撃墜していく。何度回避しようとも、反転して追い掛ける聖杭達は、まさにホーミングミサイル。しかも、優花に攻撃しようとしても聖杭達が自動で優花に向かう攻撃を防いでいく。

視界に入ったその光景を見て、光輝はギリつと歯噛みした。

「光輝くん！ やばいよお。押し切られちゃう！」

既に半泣きの鈴。展開する幾枚もの障壁は、破壊されては新たに作り出されてを繰り返す。鈴の魔力を容赦なく削り取っていく。

光属性中級防御魔法“天絶”は、確かに障壁自体の強度はそれほどなく、展開数が重視した障壁ではある。だが、それでも“結界師”たる鈴が展開する“天絶”は並の強度ではない。普通の魔物なら一枚を割るにも数度の攻撃が必要なくらいの耐久があるのだ。

それが、蜂モドキの前では、文字通り紙屑のように一撃で破壊されてしまい、鈴はかつてない速度での障壁展開を余儀なくされていた。少しづつ、少しづつ、障壁の展開が遅れがちになり、飛んでくる毒針が徐々に距離を詰めてくる光景は、まるで新綿で首を締めるかのように鈴の精神にもダメージを与える。

雫の表情も厳しい。スピードファイタータイプである雫と、蜂モドキは相性がいい。雫の“無拍子”を使った緩急自在の攻撃は、確実に蜂モドキを屠っている。だが、蜂モドキの強みはその数の多さだ。一対一なら問題なくとも、殲滅力に欠ける雫では焼け石に水状態。押し切られるのは目に見えている。

「刃の如き意思よ　光に宿りて敵を切り裂け！——“光刃”！」

聖剣に光が宿る。輝く光は剣先から更に二メートルも伸長し巨大な刃となった。大



劍となつた聖劍を、光輝は回転しながら振り抜く。円の軌跡を描いた光は、その軌道上にいた全ての蜂モドキを見事に両断した。だが、薙ぎ払うために突出したことで、隙の大きなモーシヨンを取つた代償は高く付いた。一瞬の技後硬直を狙われ、蜂モドキの体当たりが光輝を直撃する。

「ぐう、このっ！」

後ろへひっくり返つた光輝に、蜂モドキが覆い被さる。顎をギチギチと鳴らしながら毒針を突き刺そうとする。幸い、光輝の纏う聖鎧が針を寄せ付けず、刺されることはなかった。光輝は覆い被さる蜂モドキをどうにか聖劍で串刺しにして振り払う。だが、簡単に体勢を立て直させるほど大迷宮の魔物は甘くない。立ち上がる前に、畳み掛けるようにして、大量の蜂モドキが殺到した。

「光輝！」

「おおおおお！」

雫に応える余裕もない。雄叫びを上げ、片膝立ち状態で聖劍を振るう。が、苦し紛れの足掻きもここまで。一体の蜂モドキが、遂に聖劍を掻い潜つて光輝の背に組み付いた。凶悪な顎門が、光輝の首筋を噛み千切ろうと迫る。

「——ッ?!」

声にならない悲鳴を上げる光輝。

刹那、白銀の閃光が空を切り裂いた。同時に、光輝に組み付いていた蜂モドキの頭部が消失。光輝が何が起きたのか考える余裕もなく、首筋に感じるヒリヒリとした熱さも無視して、未だ取り付いている蜂モドキの残骸を乱暴に引き剥がした。

九死に一生を得たものの、視界に映るのは幾百という蜂モドキの更なる群れ。

——押し切られる

光輝の表情が引き攣った。そんな光輝の耳に、なんの焦りも感じていない声が届く。

「動かないで、天之川君」

「え？」

直後、十の白銀の流星が空間を蹂躪した。僅かに遅れて聞こえるのは、蜂モドキ達の断末魔。一つ、また一つと白銀の魔力を纏った聖剣が射線状の蜂モドキを貫き消し飛ばす。

更に、優花の新技が炸裂した。

「聖杭——結合てんりん天輪」

優花の言葉で、蹂躪を繰り返している聖剣達が一つ一つが花卉になり、十の花卉を持つ白銀の花へと形成した。

「——廻って」

その一言で、天輪は廻りだす。そして、今までの聖杭達の速さよりも疾く飛び廻る天

輪は、周りにいた蜂モドキ達を消し去っていく。更に、空中で飛び廻る天輪は、見方によれば、まるで敵の方が自ら天輪に飛び込んでいるすら見える。

一つ、また一つと撃墜させながら加速して動き廻る天輪。その光景は、まさに蹂躪。蜂モドキの群れたった十秒もかからず駆逐されることになった。

光輝達が啞然呆然としている中、優花は「戻って」と呟くと何事もなかったように、天輪は十に割れ、聖杭へと戻ると優花の元に帰っていった。そして、ユエの方はトコトコと歩きながら蜂モドキの残骸へと近付いた。

そして、ある意味、優花が見せた蹂躪劇以上に衝撃的なことを呟いた。

「……ん、これハジメが喰っても、意味なさそう」

「く、喰う？ えっ、ユエさん、南雲君って、これを食べるの？」

あまりの衝撃発言に、雫が呆然状態から復活。持ち帰るのは止めとこと頷くユエから、ズザザツと後退りしながら、ドン引きで尋ねる。

すると、ハジメがいらない代わりにシアが答えた。

「アレ？ ハジメさんから聞いてませんか？ 自分と同等の魔物を喰うと、その魔物の固有魔法を会得することがあるらしいんです。あ、でも、私達はやってはいけませんよ？ ハジメさん曰く間違いない死ぬらしいので」

神水という神話級の秘薬をガブ飲みできるといふ条件と、肉体が崩壊と再生を繰り返

す激痛に発狂せずに耐えきるといふ条件をクリアした場合にのみ生じる奇跡だ。

既に神水には限りがある状態であるし、再生魔法は「回復」ではなく「復元」であるから、変化が生じる前に戻るだけで意味がない。優花の最上級回復魔法なら可能性がなくなるが……肉体の崩壊に追いつかなかった時点で凄惨な死に様を披露することになるので、やはりお勧めはできない。ハジメのように、既に肉体が完全に変化した後なら普通の回復魔法で十分だが。

「頼まれたってしないわよ。それにしても、改めて聞くと本当に壮絶ね……」  
雫が、どこか複雑そうな眼差しを、この迷宮の何処かにいるだろうハジメに向けるのであった。

ハジメは頼りになるのだが、その強さの元があまりに壮絶な経験の果てのものであると改めて実感してしまうと、どうにも素直に称賛できない。同情が先に立ってしまうのだ。ユエは残骸から離れようとする、今度は鈴の疑問の声を上げた。

「で、でも、それじゃあ、なんでこれは喰っても意味ないの？ この魔物も十分に強かったけど……」

「……今、シアが言ったでしょ？ 自分と同等以上の魔物を喰うとつて。ここのレベルの魔物だと、ハジメにとっては雑魚でしかない」

「それに、ハジメさん。前回のオルステッドと戦った際に、オルステッドの創り出した竜

を喰らったらしくて、更にステータスと固有魔法が増えたらいいですよ？」

「そっかあ。南雲くんにとつて、この魔物は雑魚なんだあ。そっかあ、アハハ」  
「鈴、気持ちは分かるから壊れないで。戻ってきなさい」

ユエとシアの追撃に、若干、壊れ気味に乾いた笑い声を上げる鈴を、雫が嘆息しながら正気を戻す。

「……………」

そんな中、光輝だけは、優花が撒き散らした魔物の残骸をギョツと拳を握りながら見つめていた。自分が危うく死にかけてほどの強敵を相手に、まるで路傍の石の如き評価を下すユエとシアのことを聞いて、自分とハジメとの隔絶した実力差を嫌というほど感じていたのだ。気付かないふりをしているが、心の内には、黒い感情が湧き出している。無言で佇む光輝を、アレスはチラリと見やった。

「……………勇者」

「っ、な、なんですか？」

「今は、貴方の幼なじみを捜し出すことを考えなさい。あれこれ悩むのは、やることやつてからですよ？」

「……………分かってますよっ。そんなこと」

多少言葉に棘が含まれながらも、アレスの言葉に頷く光輝。一度、大きく息を吐くと、

行方不明の親友を思つて気を引き締め直す。

アレスは、そんな光輝のしばらく見つめた後、頭を振つて視線を逸らした。実のところアレスには光輝が今抱いているものがどういふ感情か、手に取るように分かつていた。劣等感と焦燥感、強さへの嫉妬……かつて、アレスも抱いたことのある感情だ。

アレスが見る限り光輝は、今までは何でも出来ていたのだろう。しかし、ハジメという自分より出来る存在がいることに、そんな感情を持つているのだろう。アレスは、そんな感情も乗り越えてきたが、そういう経験をしてないだろう光輝は、己の暗い感情を律することができるのか……

「少し、心配ですね……」

今は、親友の龍太郎のことだけを考えると伝えて、多少は気を紛らわせたが不満は残るだろうとアレスは大きく溜息を吐いた。

「アレスさくくん、そろそろ行きましょう〜」

シアから声がかかる。

「では、出発しましょうか。ハジメ殿とティオ殿は大丈夫かもしれませんが、坂上君は危ないかもしれませんからね。一刻も早く合流しないとですね」

アレスの言葉に、この場にいる全員が頷く中、はぐれた仲間を捜すべく、一行は樹海の奥へと進んでいくのだった……。

## 百六話

## たとえ姿が変わろうとも

蜂モドキとの戦闘を終えた一行は、ハジメ、テイオ、龍太郎の三人の搜索から、二時間ほど経つ。一行は樹海を進む中、この大迷宮には、蜂モドキに、ゴブリン、狼型の魔物といった多種多様な魔物達が棲息していると分かった。

若干、約三名ほどがイライラして不機嫌の中、一行は、何かを聞き、ウサ耳をピクツと動いた不機嫌中の一人であるシアの声が聞こえると同時に止まった。そして、何事かと視線をシアへと集中させる。

「正面に五十、右に六十、上に五十ですう！」

「了解です。では、優花殿とユエ殿は上を、シア殿は彼等三人の援護で右を、正面が私が対応します」

「はいはい」

シアは、ウサ耳でこちらに近付く魔物達の足音と羽音を聞き取ったのだ。シアは大体の魔物の数を伝えると、その頭数を聞いたアレスが全員に的確な指示を飛ばす。指示を聞いた全員は、それぞれの指示に従い魔物達との戦闘を開始した。

「行くぞつ、皆。俺が道を開く！ 万翔羽ばたき 天へと至れ！——『天翔閃』！」

右では、前に出た光輝が道を切り開くために、天翔閃を放つ。迫ってきていた魔物達は、避ける暇なく放たれた光の斬撃に直撃してしまい数体が灰燼と帰して道を創り出す。

「『天絶う』！ シズシズ、お願い！」

「了解したわ！」

光輝が道を切り開いた間に、鈴はシールドを次々と展開させていく。そして、そのシールドを足場として利用して雫は『無拍子』も発動して、魔物達を翻弄しながら斬り伏せ屠っていく。

「ドつ、セイですう!!」

シアは、シアで光輝達が戦いやすいように『天啓視』で光輝達を奇襲しようとする魔物達を含めてドリユッケンを振り回して粉碎させていくの見える。が、シアはただ、治まらない怒りを、ただ魔物達にぶつけているだけのようなだが……。

そんな四人の連携？で魔物達を一掃していく。

「私も、時間が惜しいですからね。さっさと片付けましょうか」

正面から来る魔物達を、たったの一人で相手をするアレスは全くも焦りの表情なんてせずに、ロンギヌスを『宝物庫』から取り出した。



「——『天翔閃・極』」

ロンギヌスの刃の部分に光り輝くと、横薙ぎに大きく振るつた。そして、横薙ぎに一直線に進む巨大な光の斬撃は正面の魔物達に直撃させ、たつたの一撃で正面の魔物達を殲滅させた。

「ユエ、さっさと終わらせるわよ」

「……ん」

上を任された優花とユエ。優花は、聖杖を聖杖せいじょうへと形状変化させて、聖杖による魔法の全能力の向上と付与魔法のお陰で、魔法の速度、威力が上がった無数の多属性魔法を放つ。ユエも、優花に負けないほどの無数の『緋槍』を放った。

上から攻撃をしようとした哀れな魔物達は、無数の魔法の火の槍が合わさった乱れ打ちによって、黒焦げになったり、凍ったり、頭部が吹き飛んだりして蹂躪されていった。しかし、魔法を放つ二人はシアと同じよくイライラしていた。

何故、三人はイライラとしているのは理由。それは、数分前に襲ってきた猿モドキの魔物が原因だった。

棍棒や、石のナイフなど一応武装をしていた猿モドキの群れは、その俊敏さと樹海という地の利を活かしたトリツキーな動きで、光輝や雫、鈴を翻弄した。とはいえ、やはり優花達の敵になるほどではなく、先程の蜂モドキの時と同じく、自分達に向かつて

る分はさくつと片付けていた。

圧倒された猿モドキは、どうやらそれで危機感を覚えたらしい。彼等は新たな手を打った。彼等にとつて不幸だったのは、中途半端に知恵が回ったことだろう。

猿モドキ達は、思いつきり選択を間違えた。

“擬態”——赤錆色のスライムと同じ、それが猿モドキの固有魔法だったのだが、彼等も大迷宮からハジメ達の情報を受け取っていたらしい。

そう、あろうことか、彼等は選んでしまったのだ。最も怒らせてはいけないう優花、ユエ、シアの三人の精神を、最も掻き乱せる相手——ハジメである。

猿モドキは、奥の茂みから“片腕を失い、石ナイフで刺されて複数の刺し傷がある、血だらけ姿のハジメ”に擬態した仲間を引きずってきたのだ。

赤錆色スライムと同じく、見た目は本物と寸分も違わない。もちろん、優花達は赤錆色のスライムの擬態すら、感覚だけであっさり紛い物だと見抜いたくらいであるから、猿モドキ達が引きずってきたそれがハジメでないことも直ぐに理解していた。

だが、自分達の大好きな恋人のハジメである。

紛い物か本物か、そんなことは関係があるだろうか？否、ない！

プツン寸前の三人の行動が早かった。シアが目の前ハジメモドキにドリユッケンを振りかざして、叩き潰して、一瞬で肉片にした。優花は聖剣へと形状変化した聖杭

達が優花の感情を汲み取ったのか分からないが、一斉に猿モドキ達を細切れにしている。

そして、ユエは猿モドキという存在自体を跡形もなくしてやろうと、自分が出した雷龍と蒼龍の双頭の龍によって猿モドキ達いた場所から前方約五百メートルが扇状に焼け野原にした。あちこちに人型の炭化した生き残りの猿モドキの残骸が転がっている。他にも、樹海の生きとし生ける魔物達が巻き添えを喰らってしまったのか一緒に灰燼と帰っていた。

その後も、苛立ちが収まらず樹海をも破壊しようとする三人をアレスが止める。

「皆さん、少し落ち着きましょう。今は試練の真つ最中ですよ?」

「でも、アレスさんっ」

「……ハジメを侮辱した。許せない」

「ごめんなさい、アレスさん。私も頭にきてて、無理かもしれません」

アレスの言葉に、聞く耳を持たない三人。しかし、アレスの方も折れず、少し語気を強めながら再度説得する。

「もう一度、言います。今は、試練の真つ最中。感情的になつてはいけません。それに今は、はぐれたハジメ殿達の搜索が最重要。樹海を破壊するなど、もし、ハジメ殿達に何かあったらどうするんですか?」

「うっ……それ言われちゃうとねー」

「……何も言い返せない」

「ですう……」

とはいえ、三人も大切な仲間のアレスの言葉と、アレスの言う通り樹海を破壊したら、ハジメやテイオにもしものことがあつたらと思うと何も言い返せず、次第に落ち着きを取り戻した。

少し冷静になつた三人を見て、雫はホツと息を吐く。そして、アレスが本当に仲間にくれたことを物凄く感謝した。もし、アレスがこの場にいなければ自分が説得することになるからだ。そう思うと胃に穴が空きそうな思ひであつた。

「ありがとうございます、アレスさん。なんとか冷静になれました」

「いえ、私もあのやり方には多少イラツとしましたからね。仕方ないことですよ」

「……ん、今回ののは特に最悪だった。タチの悪さは、此処が一番だと思う」

「そうだね、私もまだハジメさんをダシにされてイライラしてますから」

なんとか冷静を取り戻した三人。アレスもその気持ちはちゃんと理解している。やはり、ハジメの仲間として敵の悪辣な手段には嫌悪感を顕にしている。しかし、三人は、まだイライラは収まらないようなので、アレス、は三人に道中に相対した魔物に怒りをぶつけてみてはという提案をするのだった。

そして、現在に至る。

襲いかかってきた魔物達を全て倒し終えた一行。光輝と雫、そして鈴は、流石の連戦のせいか荒い息を吐いている。アレスの方は、己の魔力残量を確認しつつ、周囲の警戒をしている。優花、ユエ、シアの三人は、怒りを多少ぶつけられてストレス発散になったのか、少し表情が明るい。

「いやあ、アレスさんの指示があつて、難なく倒せましたね〜」

「いえ、シア殿が正確に魔物の位置と数を伝えてくれたからこそ出来たことですよ」

互いに褒め合うシアとアレス。しかし、本当にシアの察知とアレスの指示で上手くいったようなものだ。

「でも、ハジメとティオ見つからないね……」

「……ん、魔力も感じ取れない」

「あの、龍太郎のことも忘れなくて欲しいのだけど……」

「龍太郎くん、無事かなあ」

「そうだな。龍太郎の魔力も感じ取れてない」

そう。五人が会話するように、今まで樹海を進みながら、三人の魔力探していたのだが、全然、反応がしないのだ。そのせいで余計に居なくなつた三人が心配になつてしま

すると、アレスと元気印のシアが呼びかけた。

「今は、めげるところではありません。もしかしたら更に奥に行けば、手掛かりが見つかるかもしれません」

「そうですよ。ハジメさん達なら絶対大丈夫です！」

「ふふっ……そうね。坂上君は分からないけどハジメとテイオなら大丈夫そうね」

「……ん、二人の言う通り」

二人の言葉に少し元氣付けられた五人は、少し笑みを浮かばせる。そして、一行は再びハジメ達の搜索のために樹海の奥へと進んでいった。

それから、数分後。

順当に樹海を奥を進んでいた一行だが、不意に先頭を歩くアレスの足が止まる。止まるアレスに雫がキョトンと首を傾げながら声をかけた。

「アレスさん？」

「いえ……シア殿。何か聞こえませんか？」

「え？……！はい！向こうから何か聞こえすう！」

アレスに言われ、疑問に思いながらもウサ耳を澄ますシア。そして、何か聞こえたのかウサ耳をピンツと跳ねている。そして、聞こえた方向に指を差した。

「あつちの方向ですう！」

「行きましよう!」

すると、指を差した方向に向かってアレスが走り出す。それに続いて、優花達も追従する。そんな中、優花がアレスに聞く。

「アレスさん、どうして何かあるとわかったんですか?」

優花の疑問に、他の者も気になったのか走りながらも視線をアレスに集中する。そして、アレスはその疑問の返答を淡々と返した。

「いえ、シア殿みたいに正確な場所は分かりませんが、微かに血の香りがただけです」

「……………アレス、凄いい」

「わー……………やっぱり、アレスさんも人間を卒業してる〜」

アレスの返答を聞いたユエは、吸血鬼である自分よりも血の香りを捉えたことに驚き、鈴の方はアレスの人外さに苦笑いをこぼした。

そして、アレス達は、茂みの中を走り抜けると開けた場所に着いた。そして、血の香りの原因を目の当たりにした。

アレス達の目に映ったもの。それは……

「グルウアアアアア!!」

「グギャ?!」

「クギヤツ!!」

複数の同じ魔物が、一体の魔物を襲っている光景だった。

複数の魔物は、ゴブリンに酷似した生き物だった。暗緑色の肌に醜く歪んだ顔、小柄な体格でボロボロな布を肩から巻き付けたら、軽装な鎧などを身に纏っており、それぞれ棍棒や石槍といった武器を持っていた。

一体の魔物は狼に酷似した魔物だった。体長が軽く一メートルを超え、体毛は美しい。しかし、それに対して、瞳は周囲を引き付けるような紅の瞳を持っていた。

狼は、複数のゴブリン達に狙われる。所謂狩りだった。ゴブリンは一個体だと弱い。しかし、数の多さと連携・持ち前の知能を活かして自分達より強い生き物を狩るのだ。

対して狼型の魔物は、鋭利な爪や獐猛さが伝わる牙を持つて強そうに見える。が、数は一。数が多く知能があるゴブリンには不利だろう。

「あの狼の負けか……」

この光景を見ていた光輝は、狼の負けだとボソツと呟く。しかし、肩をツンツンされて振り返ると雫が、そこにいた。その顔は、何か怖い物を見たのか若干、青い。雫は、光輝が振り返ると同時にある方向に、指を差した。

「どうしたん——はっ。」

光輝は、雫の表情に疑問を持つも、従うように指を差した方向に目を向けた。そして、



言葉を失った。

そこには山があつた。その山は、ゴブリン達の死体が積み重なって出来た山だ数は三十は軽く越えているだろう。ゴブリン達の死体は、どれも三本線の傷や噛み傷がある。そして、他に魔物の死体がないことから、あのゴブリン達を殺したのは、紛れもなく、今も残りのゴブリン達と相對している白の狼だろう。

それを理解した光輝は、恐怖のあまり顔を青くして口元を覆った。他の者達も死体の山に気付いており此処が、アレスが言っていた血の香りの発生源なのだろう。強烈な血の香りが臭つて表情を顰めるのだった。

狼は、優花達に気付いてないのか、自分に襲いかかるゴブリン達に集中していた。ゴブリン達は、色々な角度から石槍などで急所を狙う。しかし、狼はそれを予想したとも言えるほどの動きで避けると同時に、その俊敏を活かして二体のゴブリンの頭部を踏み潰した。

「グルウア!!」

「ギャツ」

「ペギヤツ」

石槍で目を潰そうとするゴブリンとの間合いを一瞬で詰め、首筋を噛み千切つて、後ろから奇襲しようとするゴブリンを尻尾で殴りつけた。

「ガアアアッ!」

「グギヤア!!」

「グギヤ?!」

そして、狼は、その鋭利な爪でゴブリンを引つ掻き三枚おろしにして、戦いは終了した。狼は、爪に付いた血を振り払い、呼吸を整えるために荒く息を吐いてるだけで目立った外傷はない。

その様に、優花達は無言だが、光輝、雫、鈴は、息を飲む。すると狼は、グリーンと首を回して優花達を視界に捉えた。

「っ!」

殺られる!と思った二人は、緊張した面持ちながらも直ぐに武器を構える。しかし、狼の方はというと弾んだ声で「アオーン」と鳴きながら尻尾を高く上げ、小刻みに振っている。が、直後には、自分の声にハツとしたように動きを止める。そして、その場に佇みジッと優花を見やった。顔の造形のせいで、まるで新たな敵を見つけて睨んでいるように見える。

実際に、光輝をそう見えたのだろう。

「何もさせない!」

今のところ、あまり戦果を挙げられてないことから、焦燥感と少しでも活躍したいと

いう思いが募っていたのだろう。光輝の持つ聖剣が光を纏って戦闘態勢に入るというのに、狼は何故かと動かない。動揺も戦意もない。ただ優花達を見つめたまま、無防備を貫かれ相手として見られてないのに見える。

少し訝しむ光輝だったが、魔物に相手をされてないと思われると怒りが湧く。そして、間合いを詰めようとしたその時だった。

「縛拘束って」

「！」

光輝の目の前に現れた四つの聖杭が、光輝の四方を囲み拘束した。優花の突然の行動に、一瞬呆然とした雫達だったが、直ぐに正気を戻ると怒声を上げた。

「ちよつと、優花！　なんで光輝を拘束するの?!　光輝はただ魔物を倒そうとしただけじゃない！」

「そうだよ！　っていうか、なんでユエお姉様達はだんまりなの?!」

雫と鈴が優花に非難の目を向ける。ユエとシア、アレスはホッと安心した表情だ。それを見た雫達は、更に困惑してしまう。その間に、優花は一心不乱と眼前の狼を見つめている。

その様子で、あまりの衝撃展開に吹き飛んでいた狼の存在を思い出し、雫と鈴は身構えた。と、拘束された光輝が声をかけた。それも流石の優花といえど怒気をあらわにし

ている。

「…………園部さん、どういうつもりなんだ。何故、拘束をするんだ？流石に正気を疑う。魔物を庇うなんて——」

「魔物じゃないわ」

呟かれた言葉は予想外。光輝は思わず言葉を失い、訝しむ表情となる。優花は、光輝の目を気にせず見る気もせず拘束だけを外した。そして、未だ何もしてこない狼に嬉しそうに抱き着いた。その行動に光輝達が驚愕して目を見開いた。ユエ達は「よかった、無事だった」と呟きながら、早く狼の元へ向かおうと駆け出している。

優花は、狼の頬と自分の頬を擦り合ったりと、嬉しさを隠し切れないでいる。そうイチャイチャし合うと、ふと目元を和らげ、驚愕すべき言葉を口にした。

「会いたかった、ハジメ」

「ワフっ」

「「…………え？」」

ポカンと口を開けて呆ける光輝達を尻目に、優花は、再度ギューつと狼に抱き締めながら「ハジメ……」と呟いた。狼もまた、どこか嬉しそうに「ワフウ〜」と鳴く。尻尾も今さつきよりも激しさが増している。

「ハジメー！」

「ハジメさあぁん!!」

物凄い勢いで、こちらに來たユエとシアがそのまま突撃するように狼に抱き着いた。狼は少し苦しそうだが「バウっ」と鳴く。

「ハジメ殿、無事で何よりです」

遅れてやって來たアレスも、ホッとした表情を見せる。狼もアレスに視線を向け「バフっ」と返答するかのように鳴いた。そして、狼は何かを訴えるように「バウっ、バウっ、グルウア」と鳴き始めた。だが、やはりまともに喋れないことに「クウウン」と鳴きながら顔を俯かせる。

しかし、そこはハジメの優花達。ハジメをこよなく愛する彼女達三人の前に不可能はない。

「ん? ん、念話?……あつ、念話石が欲しいのね!」

「!バウっ!」

優花は“宝物庫”からハジメから貰っていた念話石が取り付けられたネックレスを狼の首に掛けた。すると狼にネックレスがかかった瞬間——アーティファクト“念話石”が発動した。

『おい、優花? 聞こえるか?』

まるで竜化したティオが話す時のように、空間そのものにハジメの声が響く。ほんの

僅かな間しか離れていなかったにもかかわらず、随分と懐かしく感じる声に、優花達三人の表情がゆるゆると緩みハジ狼に顔を埋める。

困惑していた光輝達も、ハジメの声が聞こえたことで、ようやく目の前の存在がハジメの変わり果てた姿だと実感したようだ。

「うん、聞こえるよ、ハジメ。姿が少しモフモフで可愛いすぎるけど」

「……ん、モフモフハジメ最高」

『クハっ……止めてくれ、くすぐってえんだ。だけど、お前達なら気が付いてくれると思ってた』

「当然よ。ずっと傍にいたんだから」

「……当然、ハジメと魔物なんて、直ぐに見分けがつく」

「そうですねよお。私達がハジメさんを間違えるわけじゃないですう」

『クハっ……そうかい』

「私も、あんなに数の多いゴブリン達を圧倒する魔物になっても、出来る人なんてハジメ殿ぐらいだけですよ」

『そうかよ……ま、アレス、お前も無事で安心したよ』

そんな楽しく会話を続ける四人と一体。行方不明な人物が見つからずピリツとしていた空気も元に戻ったようだ。そして、優花はハジメに今までに何があったのかと聞いて

た。

ハジメは、自分のあつたことを話し始めた。

『そうだな、大迷宮の入口で光つたあとな——』

ハジメ曰く、大迷宮に転移させられて目覚めた後、気が付けば狼の姿になっていたらしい。魔法であることは分かるが、何の魔法か分からず、幻覚の類のものでもないらしく肉体そのものが変化したとハジメは結論付けた。

自分の装備も失っており、魔法も使えないらしく戸惑ったが、試練の一つだろうと思いなながら優花達を探しに向かったという。そして、この姿の白の体毛は目立ち、樹海では奇異な存在なのか、種類関係なく多くの魔物達が襲ってきたが、全て返り討ちにしたらしい。

そして、ゴブリン達の群れと戦い終わって優花達の存在に気付いたのだった。

『——俺が転移後にあつた出来事の全てだ』

ハジメが話し終えると、光輝達が少し引いているが、そこは放っておこう。

『ん？ てか、テイオと坂上は？』

「テイオも坂上君も、ハジメと同じようにはぐれちゃっているのよ」

テイオと龍太郎も自分と同じように別の地点に転移されたと聞いて『マジか』と呟いた。

『じゃあ、俺みたいに魔物になってるかもな……』

「うん、ハジメがこの姿になってるんだから有り得るかもね」

「では、早くテイオさんも見つけなさいとですね」

「……ん、テイオが心配」

「そうですね。それでハジメ殿。その魔物の体はどんな感じですか？」

『ああ、それはな——』

淡々とお互いの確認を取り合う優花達。すると、事態に把握して怒りが鎮火した光輝が、なんとも言えない表情で問う。

「っていうか園部さん達。どうやって気付いたんだ。俺を止めたってことは、最初から分かっていたんだよな？」

「どうやってかー。それはね、単純に」

優花達三人は、狼姿のハジメ——ハジ狼を優しく見つめながら言った。

「姿形が変わっただけで、私達がハジメを見失うわけない。それだけのことよ」

「……ん」

「ですう」

「「……そうですか」」

三人が、砂糖を吐き捨てたような表情で投げやり気味な発言をした。ハジメは、少し



小つ恥ずかしいのか両前足で顔を隠す仕草をしていた。因みに常識外れ人は、魂がハジメのものだと分かったらしい。

「あ、ハジメ、試しに再生魔法かけてみる？」

『ん？ああ、頼む』

『いくよ？——“絶象”』

ハジメに向けて再生魔法の光が降り注いだ。言うまでもなく、再生魔法は神代の魔法でありその効果は絶大だ。本来なら、復元できないものなど、そうはないのだが……

『……やっぱりか』

ハジメの姿は戻らなかった。

再生魔法が発動していないわけがない。事実、白銀の魔力光がハジメに降り注ぎ、優花の魔力は削られている。それでもハジメの姿が戻る様子がない。

「神代魔法は駄目みたい……なら、天性魔法を——あれ？」

神代魔法が効かず、ならばと神代魔法と同等それ以上の魔法である天性魔法を発動しようとする。しかし、優花がどうやっても天性魔法が発動しない。

「どうして……」

天性魔法が使えず肩を落とす優花。ユエ達も心配そうな表情だ。そんな中、普通なら元に戻れないことに落ち込むはずであるハジメと、腕を組みながらこめかみをトントン

と叩くアレスは、今の現状について考え込んでいた。

ハジメは、落ち込む優花に寄り添い元氣付けようとしているのか頬ずりする。そして、心配そうにハジメの傍にいるユエとシアにも大丈夫だと尻尾を用いて二人の頭を撫でる。

『安心しろ、三人共。これは試練の一環でしかない。元に戻る方法は必ずある』

確信に満ちた言葉。優花とユエ、シアはハジメのフサフサも相まって表現を和らげる。

『おそらくだが、再生魔法が効かなかったのは、その変質が同じ神代魔法によるものだからじゃないかと思う。他にも色々な方法が使われているだろうよ』

「私も、ハジメ殿と同意見です」

大迷宮の入口が再生魔法で開く以上、挑戦者が再生魔法を使えるのは当然のこと。ならば、逆説的に、再生魔法で即解決できるような試練を用意してるわけがない。

そう説明するハジメとアレスは、確かに説得力があり、全員が確かにと頷いた。

「でも、天性魔法は？」

『そうだなあ……』

「私の考えだと、天性魔法はこの大樹には受け付けられないのでは？」

「え？」

アレスの説明はこうだ。

優花の持つ天性魔法は、この世界には存在しない種族——天使族が持つ特別な魔法だ。能力が再生魔法の上位と行っても過言はなく多種の聖属性魔法を扱うことができる魔法である。

だが、この魔法は異界の魔法、つまり異物だ。

そんな異物が、この世界の創世記からあり、ある意味では象徴とも言える大樹の中では魔法そのものが分解、封印をされているのかもしれない。

そう自分の推測を述べるアレス。その推測にハジメ達はそれなら納得だ、と頷く。

「じゃあ、私はこの大迷宮にいる間は、理由はどうあれ天性魔法は使えないってことね……」

『だな、でも聖杭が使えるなら、それでカバーしとけばいいじゃないか?』

「そうだね。うん」

気を取り直した優花。そして、シアから「ハジメさんが無事でしたし、テイオさん達を探しに行きましょう!」と全員に声をかけた。各々もシアの言葉に頷く。

「ハジメさんも安心してください! 私が絶対に守りますので!」

「ん、今回は私達がハジメを守る」

『ああ、頼りにしてるよ』

「まあ、ハジメ殿なら、その姿でも大丈夫だと思えますけどね」

『そうか？ 無我夢中だったから分からねえな』

「「……………」」

光輝達は何も言わずに頷く。アレスの言いたいこと分かる。ハジメは、再開するまで魔法もハジメの武器であるドンナーが使えず、更に魔物の姿でも襲ってきた魔物達を返り討ちに行っているのだ。

そんな会話をしながら探索を再開しようとした時だった。普段ならハジメに近付くことのない光輝がバツが悪そうな表情でハジメの元へ歩み寄ると口を開いた。

「南雲。その、さつきはすまなかつた。お前だと気付かなくて……もしかしたら、殺してしまうところだった」

『ん？ あー、あんま気にすんなって』

「え…………」

『あれぐらいの動きなら避けれたからよ。変に責任を持つなって、今はテイオと坂上を捜すことだけ考えようぜ』

「つ……………そうか」

ハジメのさり気ない一撃が光輝にクリーンヒットする。そして、お前なんか魔物でも戦えると言われたような気がして乾いた笑い声を上げた。

『後は、ティオと坂上だな。二人とも俺と同じ状況だとすると、ちょっと急ぐか』

二人が自分と同じ状況の場合、同じ魔物である可能性が高く。ハジメのように戦える魔物だったり、襲われることがなくても、力が失っているわけであるから、危険な状況で変わりない。

狼の姿となったハジメの言葉でも、緩んだ空気が緊張を取り戻すと、ハジメ達は急ぎ探索を開始した。

しかし、十分後。

ハジメ達は、ゴブリンとなっていたティオと無事に再会したのだった……………。

くオマケく

ティオゴブリンとの再会

ティオと龍太郎の二人を搜索するハジメ達。そんな中、ある魔物の集団を見て、目を疑った。

「あの、あれってティオさんですかね……………」

「確かに、あの魔物では、思うことのない気品さを感じるわ」

「…………ハジメ、アレスはどう？」

『ああ。絶対に、あの気品あるゴブリンは、ティオだ。間違いねえ』

「そう、ですね……。魂を見ても、あの魔物は、テイオ殿です」

目の前のある魔物の一体がテイオで間違いないと頷く五人。光輝、雫、鈴は、目の前の光景に有り得ないと口をポカンと開けている。

「クギャー！ゲゲゲ！」

「グギャギャー！」

「ゴブウ！ゴブブブウ！」

鳴き声から分かる通り、ハジメ達の視線の先にいたのはゴブリンの集団だった。その集団は、寄つてたかつて一匹のテイオと思われる気品のあるゴ布林に求婚しているかのように見える。しかし、求婚されたゴ布林は、木の葉を扇子代わりにしてるのか口元を隠しながら、求婚するゴ布林達にプイツとそっぽを向けた。

そっぽを向けられて、相手にされないと分かり落胆して四つん這いで悲しむ哀れなゴ布林達。

「やっぱテイオって、モテるわね」

「……ん、流石は竜人族のお姫様」

「でも、テイオさん。絶対に嫌がってますよ。アレ」

ゴ布林になつてもテイオの美しさが変わらないことに苦笑いする優花達。どんな姿であろうとも、竜人族の気品さを忘れないテイオ、流石である。

そんなティオゴブリンに振られた哀れなゴブリン達は、なら力づくだとティオを襲おうとした時だった。

襲おうとしたゴブリン達は、一瞬で命を刈り取られた白の体毛を持つ狼によつて

……

『人の恋人に、気安く触れるな』

その正体は、当然ハジメである。ティオに求婚するところもイラツとするも我慢したが、ティオを襲おうとした時には、我慢できなかつたらしい。

「グギャ？ グギャギャ!!」

ティオゴブリンも、向こうにいる優花達に気が付き、目の前の狼もハジメであることに気付いた。

「クギャギャ!!」

『ティオ!』

多分、「ハジメ!」と言ったのだろう。鳴きながらハジメに抱き着くティオゴブリン。ハジメもそれに応えるかのようにティオゴブリンに頬ずりするハジメ。

狼の魔物とゴブリンがイチャつく光景。それは、余りにもシユール過ぎるのだった……。

## 百七話 トレントモドキ

鞭のようにしなり不規則な軌道を描いて襲い来る巨大な枝。刃物のように舞い散り飛び交う葉。砲弾のように撃ち込まれる木の実。突如、地面から鋭い切っ先を向けて飛び出してくる槍のような根。一つ一つが致死の攻撃。

それは、かつてハジメが「オルクス大迷宮」のとある階層で戦った木の魔物に酷似していた。所謂、トレントと呼ばれる魔物だ。もともと、ハジメが相対したトレントに比べれば大きさが段違いであり、目の前で大暴れしているそれは直径十メートル高さ三十メートルはありそうな巨木である。

そんな巨木トレントと相対しているのは、光輝、雫、鈴、そしてオーガのような生き物だ。

『ぐらあああー!』

実際のオーガと変わらない雄叫びを上げながら、岩のような拳を振るっているのは龍太郎である。

ここに至る道中、ハジメ達は、オーガ同士の死闘に遭遇したのだが、そのうちの一体



が龍太郎だったのである。一体だけ、やたらと洗練された武道の動き——空手をしていたので直ぐに分かった。

あと数分発見が遅れていたら、あの世に旅立っていただろうボロボロの龍太郎。光輝達が慌てて助けに入り、オーガはアレスが瞬殺して事なきを得たが……

龍太郎は、その後めちやくちや説教された。オカンモードの雫に。ボロボロのまま、正座で項垂れ、女の子にガミガミと説教され続けるオーガの図。

死にかけなので、そんな場合ではないと分かっているのだが、鈴がお腹を抑えて笑い転げるぐらいシユールな絵面だった。

そんなこんなで、龍太郎オーガも無事に合流し、ハジメ達は周囲探索の末、この巨木が鎮座している場所に辿りついたのだが到着直後、その巨木が暴れ始めたというわけだ。

場所的に、そして強さ的に、この階層の主と思われる巨大トレント。この先の進むために、おそらく打倒することが必要だろうと、ハジメ達は戦闘に突入したのだった。

そうして、今度こそ成果をと、光輝達が前線に出ているわけである。なお、今回の相手が相手なので、優花が念の為だと、十の聖杖に形状変化させ聖杭だけを参加させ、光輝達の回復兼援護のためにと前線組の周りを飛んでいる。

「ぐうううっ、攻撃が重い！」

丸太のような太さの枝が風を切り裂きながら迫る。光輝が聖剣でその一撃を受け止めるが、攻撃のあまりの重さに、食いしばった歯の隙間から呻き声が漏れた。

そこに、もう一本の枝が迫ろうとしたが、聖杖から聖槌に形状変化させち二本の聖杖が食い止める。しかし、いつまで持つかわからない状態だ。

雫は手裏剣のように手で飛んでくる葉の刃を捌くので手一杯だ。鈴も強力な障壁を張って攻撃を凌ぎ、聖杖達が炎系魔法を放つ隙を作るのに必死な様子。

「くっ、ダメね。優花がいるから継戦能力は心配ないけれど……」

黒刀「八咫鳥<sup>ヤタガラス</sup>」の能力——風と雷の刃を発生させる「雷風爪<sup>らいふうせん</sup>」をフル活用し、次々と枝葉を切り裂き、塵にさせながらも、雫は押し切れないことに歯噛みした。

大迷宮に入ってからというもの、今の雫達で返り討ちに遭うという、かつてのハジメの言葉が脳裏を過ぎった。

——半端な覚悟で挑むと死ぬぞ？

そんなハジメの言葉が今になって身に染みる。ハジメ達がいなければ、雫達はとつくに全滅しているところだ。

帝国で、神の一柱であるオルステッドや神の使徒達の力を見てからというもの【オルクス大迷宮】で磨いてきた自信が粉微塵になりそうである。

雫は少し悩んだ後、光輝に向かって叫んだ。

「光輝！ // 神威<sup>かむい</sup>」を使って！」

「なっ、ダメだ！ 詠唱が長すぎる！」

「大丈夫よ！ 私達が必ず守るから！」

光輝は、雫の提案にどうしたものかと悩んだ。

目の前の巨大トレントは、明らかに魔族が連れていた魔物よりも強い。優花による聖杭達のバックアップがあるので辛うじて戦えているが、一瞬でも気を逸らせれば即座に命を刈られかねない。そんな中、無防備を晒すのは並みの神経でできることではない。とはいえ、攻撃力不足は明白。このままでは、いずれ何もできないまま敗北するのは目に見えている。

それに……：

光輝は優花達とハジメが再会した時のことを思い出した。

姿形が変わっても何も変わることのない信頼関係。

優花達は一瞬で恋人に気が付いたし、ハジメも光輝に殺されかけながら動揺一つ見せなかった。正直、そんな風に信頼し合う彼等に、そんな関係を築けていることに、ハジメと優花の二人が自分と雫と同じような幼なじみなのに、互いの信頼関係の差に、嫉妬しなかったといえれば嘘になる。

故に、光輝は決断した。自分達だって信頼関係はある。それは決してハジメ達に負け

るものではないと、そう証明するために。

「分かったつ。後を頼む！」

「ええ、任せなさい。龍太郎、鈴！ 固まって！」

「了解だよ！」

『応よ！』

光輝が、その場で聖剣を頭上に掲げたまま微動だにしなくなった。意識は“神威”の発動に全て注がれているため無防備といつていい状態だ。その隙を巨大トレントは逃すはずもなく、左右、真上から木の上が、頭上から竜巻のように迫る葉の刃が、正面から木の実の砲弾が襲い来る。

「(ン)聖域なりて 神敵を通さず—— “聖絶”!!」

それを見越していた鈴が輝く障壁を張り、その真上に聖杭が形状変化した聖盾達が張ってくれたことに更に防御力が増す。今まで何度も自分達の窮地を救ってきた十八番の障壁は、真上は聖盾によつて防げるも、左右からの多大な衝撃には亀裂が入った。しかし、初撃の集中砲火には見事に凌ぎきることは出来た。

「つううううつ！」

聖盾のカバーが入るも、連続して放たれる巨大トレントの攻撃に“聖絶”の亀裂が大きくなり、やがて耐えきれず粉碎される。鈴の呻き声が響く中、急迫する攻撃を雫と龍

太郎オーガが、刃と拳で捌ききる。

「はあああああつー！」

『おおおおおつ!!』

悲鳴とも雄叫びともつかない声を上げながら持てる技の全てで迎撃する。それでも、怒涛の攻撃に無傷とはいかず、二人は一瞬にして傷だらけとなる。捌ききれなかった攻撃によって傷ついた二人の体から血飛沫が宙に舞った。

「ふう——— “回天”、 “付与”———回復力上昇、回復維持！」

戦場に響くその一言で聖杖が光輝く。そして、雫達の傷は一瞬で癒え、更に回復力が維持され回復し続けている。優花の回復魔法と付与魔法だ。

“回天”は複数人用の中級回復魔法だが、その効果は聖杖と付与魔法によって上級レベル。ほとんど時間の巻き戻しかと思う速度で傷が癒えていく。更に維持の付与で雫達は数分のオート回復機能も付与されている。

大樹の中で天性魔法が使えずとも、これまでの経験と天性化クリスタによって得た力で優花は回復の才を更に開花させていた。

鈴が再び障壁を張り数秒を稼いで、また破壊され、再び張り直すまで聖盾と雫、龍太郎が体を張る。傷ついた体はオート回復で即座に癒され、また鈴が障壁を張る。

それを繰り返すこと三度。

遂に、光輝から膨大な魔力が迸り、掲げる聖剣に収束した。太陽に輝く聖剣をグッと握り直した光輝は、大きく息を吸う。

「みんな、行くぞ！—— 『神威』 ツ！！」

自身の切り札たる最大の魔法を解き放った。

光の奔流が射線上の地面を削り飛ばしながら爆進する。葉の刃を吹き飛ばし、木の枝を消滅させ、木の実の砲撃を真っ正面から呑み込み——

轟音と共に光が爆ぜ、周囲を白に染め上げる。

「やっとか！」

光輝が会心の笑みを浮かべて叫ぶ。

後方に控えて、ユエとシアにゴロンされお腹を摩られながら観戦していたハジメが、思わず「あ、フラグ立てやがった……」と呟く。

そのフラグはきっちり回収された。光が収まり粉塵が晴れた先には、あちこち欠損しつつも、堂々と立ち塞がる巨大トレントの姿があった。

「うそ、だろ」

光輝の呆然とした声が虚しく虚空に響く。呆けているのは光輝だけでなかった。雫達もまた、光輝の切り札で倒し切れなかったことに激しく動揺していた。

—— 『神威』

それは、読んで字の如く、勇者の切り札に相応しい威力を持った最上級の攻撃魔法だ。まだトーラス世界に來たばかりの頃の光輝はいざ知らず、練度も上がり、それなりの戦闘経験を積んできた今なら大抵の敵なら屠れる、文字通りの必殺技だった。にもかかわらず、巨大トレントは、戦意すら喪失せず、むしろ傷を負わされたことに怒りを抱いたように、より一層殺意を滾らせている。

心のどこかで、光輝は「自分ならできる」「自分なら大丈夫」だと思っていた。

なぜなら「南雲にもできたこと」なのだ。大迷宮攻略は。なら、自分にできないはずはない。だが、現実は目の前にある。切り札を以てしても、自分の力は大迷宮の魔物に及ばないのか……。いや、そんなことがあるはずない。これはきつと何かの間違いだ！

光輝が、そうやって心の中で必死に現実を否定していると、傍らの雫が声を張り上げた。

「光輝、あれを見て！ 直撃していなかったのよ！」

「え？」

雫の視線を辿れば、そこには木つ端微塵になった大量の木々が散乱していた。どうやら光輝の放った「神威」は巨大トレントを直撃することなく、その手前で大量の木々にぶつかり防がれたようである。

巨大トレントが淡く輝くと同時に、根元付近から外へ広がるように、大量の木々が凄

まじい勢いで生えてきたのである。

「……………、固有魔法！」

そう呟いたのは鈴だ。その見解は正しく、巨大トレントの固有魔法「樹海現界」は、大量の木々を生み出し、それを自由に操れるというものだった。

「や、やばいよ……ここに聖域をつ——「聖絶」!!」

一瞬呆けた鈴だったが、直ぐに状況の不味さに気が付いて詠唱省略した「聖絶」を發動した。光り輝く障壁が鈴達を中心に展開されると、全方位から攻撃が殺到したのは同時だった。

先端を槍のように尖らせた枝や木の根が「聖絶」に次々と激しい衝撃を与える。視界の全てを木々で埋め尽くし、まるで物量で圧殺しようとしているかのようだ。

到底、詠唱省略版の「聖絶」では耐えきれない。実際、既に至る所に亀裂が走っており、もう数秒も持ちそうになかった。そして、鈴の障壁が砕かれた時、果たして彼女が再び「聖絶」を發動するまで光輝達は持ち堪えられるのか……。

できると判断するのは楽観が過ぎるというものだろう。

「もう……………ダメ……………」

鈴が、とんでもない勢いで消費されていく魔力に歯噛みする。光輝は、そんな鈴を見て、ハッと我に返った。茫然自失していたのではない。少し安堵していたのだ。自分の



切り札が通用しなかったのには、やっぱり理由があったのだと。だが、通用しなかった結果、こうして鈴は苦しんでいる。

光輝は、今の今まで感じていた己の心を頭の隅へ追いやった。そして、第二の切り札——“限界突破”を使う覚悟を決める。大迷宮に入って、こんな序盤で切り札を二枚も切らされるとはとんだ誤算であるが、自分の認識が甘かったのだと割り切るしかない。が、その前に、後方より強力な援護が飛んできた。

「——“刻永”！」

聖杖で鈴が対処しきれない枝や木の根を防いでいた優花が一つの聖杖を使って発動した再生魔法“刻永”だ。

——再生魔法“刻永”（こくえい）

有機物・無機物を問わず対象を一定の間、一秒ごとに一秒前の状態に再生し続ける魔法。

白銀の光が、鈴の展開する今にも壊れそうな“聖絶”を包み込み、次の瞬間、まるで何事もなかったように最高位防御魔法の威容を取り戻させた。

「ふわっ、ユウカちゃん！　ありがとう！」

肩越しに振り返る鈴。その目尻には光るものが流れている。余程怖かったのか、それとも感涙か。いずれにしろ、涙目が標準になりつつある鈴に、優花は苦笑いを浮かべて

頷いた。

窮地を脱した光輝達もまた、肩から力を抜きつつ振り返った。するとそこには、同じく大量の木々に囲まれ一斉攻撃を受けているにもかかわらず、特に気負いもなさそうな雰囲気で佇むハジメ達の姿があった。

そのハジメ達の守りはアレスが担当していた。片手をかざし鈴と同じように「聖絶」を張るアレスは、同じように張る鈴と違って全く疲れる様子もなく、何度も仕掛ける巨大トレント達の攻撃にも、揺らぐ気配すらない。あらゆる攻撃も寄せ付けず、亀裂すら入らず全て弾き返す様は、まるで難攻不落の城壁のようだ。

『……限界っぽいな。もうちょい、いけるかと思っただが……』

ハジメが、自分達の方を振り返って複雑そうな表情をしている光輝達を見返しながら呟いた。

「うくん、勇者さんが「限界突破」を使えば、いけるんじゃないませんか？」

『かもな。「限界突破」の更に上のやつを発動すれば確実だろう。その後の弱体化は問題だが……。」「限界突破」の疲労は、通常の回復魔法だと中々癒えないんだ』

「……ん。再生魔法と天性魔法なら治せるかもだけど」

ユエの言葉に、光輝達のバックアップを頑張っている優花が聖杭を操作しながら微妙な表情になる。

「私としては、できるだけ温存するわ。再生魔法も天性魔法も消費魔力は大きいし、序盤で、そんなに消費したくないわ」

優花の言葉に、ハジメ達を守る“聖絶”を張るアレスも同意するように頷く。

「私も、優花殿と同意見ですね。この先、どんな試練が来るか分からないですし、私も今、最小限の魔力効率で魔法を発動してますし」

『ふむ。では、勇者の坊やが使ってしまう前に片付けてしまうのがいいかのう』  
『だな』

テイオの言葉に、ハジメは同意した。

元々、光輝達に戦わせている理由は、自分達が力を貸さなくても大迷宮の魔物には、勝つて力を付けて欲しいからだ。そうしないとハジメ達が神殺しを行うために“神域”に向かう際に、地上に攻めてくるだろう神の使徒と“ネームド”の神の使徒達の対処を任せられないからだ。

だから、力を付けて貰おうと巨大トレントと戦わせているがしかし、光輝達は優花のバックアップがあっても苦戦しているのを見て、ここまでの実力の差があるのかと溜息を吐いた。

それに、今は自分とテイオは戦力外となっており、いつ戻れるか分からず、おまけに装備没収されている状況。変に魔法を連発はしたくない。

「え？ 倒しちゃって良いんですか？」

『ああ、この大迷宮では戦闘での成果は必要ないだらうしな』

「それって、大迷宮のコンセプトってこと？」

シアの疑問に、ハジメは答えた。するとテイオと一緒にハジメの背に乗っていたユエが口を開くと、ハジメの代わりにテイオが応えた。

『うむ。おそらくじやが、ハルツィナは〃絆〃キズナを試しておるんじやろう』

「絆……そういえば、入口の石版にもそんな言葉がありましたね」

『そうじゃ。あれは単に亜人族による大樹までの案内だけでなかつたなく、攻略において絆を試すという意味であつたのではなからうか。仲間の偽者を見抜くこと、変わり果てた仲間を受け入れること、戦力外となつた仲間を守り抜けるか、それとも見捨てるか……まさに〃紡がれた絆〃が試されているように思うがの』

「ふむ。……なるほどですね。その試練を乗り越えた先にゴールがあるなら、確かに〃道標〃みちしるべと言えますね。だとすれば——」

「天之川君達は、坂上君を受け入れているし、共闘もしている。さつきは命も預けた。ここまで来れば、確かに、私達が片付けでも問題ないかもしれないわね」

「………この先も、〃絆を試す何か〃を私達もアツチの方も乗り切れば問題ないってこと？」

『そういうことじゃ。まあ、あくまで推測じゃがの』

とはいっても、中々信憑性がある推測だ。

「ハジメさんも分かかってたんですか？」

『いや、俺はテイオほど、そんな推測に至ってなかったが戦闘の成果は、この迷宮を進んだ限り必要性がないと思っただけだ』

そんなハジメの言葉に、シアは「ひょえ〜」とハジメの耳をワサワサと撫でながら口にする。

それに本当だとすると、単純な戦闘能力だけを問われないこの大迷宮の試練は、光輝達が初の神代魔法を手にする上で相性がいいかもしれない。

優花達が納得する中、ハジメは背中に乗るユエに視線を向けながら声をかけた。

「ユエ、片付け頼めるか？」

何故、ハジメはユエを選んだのは簡単だ。優花は光輝達のサポート、アレスはハジメ達を守る防衛魔法を張っており、シアは近接、ハジメとテイオは装備もなく魔法も使えない今、ハジメの背中でテイオと一緒に乗っていたユエだけが手が空いていたのである。

「……ん、任せて、試したい魔法がある」

そうハジメの言葉を返すと、ユエはテイオをムギユーツと抱きしめながら念話する。

「鈴。今から少し強力な魔法を放つ。死にたくなかったら結界は解かないほうがいい」

「——え、？」

突然の会話に、というより物騒な内容に、鈴はぶわりと大量の汗を流した。光輝達が訝しげな表情を鈴に向けるが、その表情は直ぐに啞然としたものになることになった。

ユエは、テイオをハジメの背に置くと、ハジメから降りるとスつと両目を閉ざして片手を上げる。その瞬間、魔力色と同じ黄金の髪をゆらりゆらゆらとなびくと同時に、巨大トレントの真上に巨大な青色の魔法陣が出現する。

巨大トレントは、自身の真上にある魔法陣が危険と判断したのか、魔力を辿って魔法陣を作り出した。人物を捜し出す。

そして、ユエを見つけ出すと、今まで光輝達に仕掛けていた枝や木の根が魔法陣を発動させているユエを集中的に狙い出す。

しかし、そんな攻撃はアレスにとって全く苦ではない。

「造作もないですね」

アレスは笑みを浮かべながら、その全ての障害を「聖絶」で弾き返していく。何度も攻撃を受けても亀裂が一つも入らず中にいる者全てを守り抜く。

そして、満を持してユエは閉ざした目がゆつくりと開くと、新たな複合魔法の名を口

にした。

「――須佐之男」

その一言で、魔法が発動され、魔法陣から巨大な水の刃が出現する。その色は、透き通る青。全員が、その刃の美しさに見惚れてしまう。

ユエは片手に上げた腕をゆつくりと下ろしていく。同時に水の刃もユエの手の動きと合わせるかのように魔法陣から降下する。巨大トレントは標的をユエから水の刃に変更して破壊しようとするが、水の刃はいとも簡単に枝や根、葉を切り裂いて真下へと降下していく。

何とかしようとしても、全てが切り裂き近づく水の刃。そして、刃の切っ先が巨大トレントに触れた瞬間、一気に降下する速度が上昇して、巨大トレントを一刀両断したのだった。

――複合魔法「須佐之男」

水系の魔法「水刃」、重力・空間魔法を組み合わせ、圧縮させ巨大な水刃を形成させ、大体のものを全てを切り裂くことができ、空間さえも切り裂ける魔法。

ユエが、新魔法で本体である巨大トレントが真つ二つにしたことで、固有魔法で操っていた大量の木々達は攻撃が停止し、戦闘が終了した。

『スゲエな、ユエ』

「流石、ユエさんですう！」

『“水刃”をあそこまでの威力にさせるとは流石じやな、ユエ』

「やっぱ、ユエの魔法は綺麗ね」

「ほう……重力と空間も組み合わせているとは、面白い発想ですね」

巨大トレントの真つ二つになった様を見たハジメ達。それぞれがユエの新魔法を褒めていく。

「……………ムフウ〜」

皆から褒められ、新魔法も上手く発動できたユエは、フツと笑みを浮かべドヤ顔を決めていた。

「凄いわね……あの、魔物を一撃でなんてね。流石……流石ね……フフ」

「大丈夫だよ、シズシズ。未だに鈴も現実逃避したくなる時があるけど、でも、そのうち慣れるよ。慣れるはずだよ。だから大丈夫」

自分達が今まで、苦戦してきた巨大トレントをたったの一撃で真つ二つにされる光景に、精神的ダメージを受けたらしい雫と鈴が、光のない目で慰め合っている。龍太郎オーガが心配そうな目を向けているが、かける言葉がないらしい。龍太郎自身、オーガの身で冷や汗を流している。



そんな雫達と少し離れた場所で、光輝はハジメ達を横目に唇を噛み締めていた。

自分達がどう防ごうとも亀裂が入るほどの攻撃を防ぎ、自分の切り札を使っても倒しきれなかった相手を、まるで片手間ののように片付けられた。そして、その者達は全員ハジメを慕っているのだ。ここには、その差を覆すためにやって来たのだと自分に言い聞かせても、助けられればなしで、果たして神代魔法は手に入るのか、と、そんな不安が心の内から湧き上がってくる。

ネガティブな考えを振り払うように頭を振った光輝は、背後でメキメキツという音が響いたことに慌てて振り返った。

「再生している?」

光輝の言葉通り、真つ二つになった巨大トレントが繋がっていき、巨大トレントとなる。まさに「再生した」といった感じだ。身構える光輝達だったが、再生した巨大トレントは襲いかかるでもなく、しばらく佇むと大樹の時と同じように洞を作り始めた。幹が裂けるように左右に割れて中に空間が出来上がる。

『中ボスっぽいと思っていたが、次のステージに行く扉でもあったんだな』

ハジメは納得したように頷き、躊躇うことなくテイオとユエを乗せながら洞に向かった。その後を優花達も付いていく。身構えていた光輝達も構えを解いて追従した。

洞の中は、特に特徴のない空間だった。が、全員が入った直後、やはりと言うべ

きか洞の入口が勝手に閉じていき、ほぼ同時に足元が輝き出した。

『また転移だな……』

大樹の入口とほぼ同じ魔法陣の発動に、ハジメは眩やきながら傍にいた優花とシアを尻尾で抱き寄せ、上に乗るユエとティオゴブも一緒に抱き寄せた。抱き寄せたところで、転移陣が引き離そうとするなら抗えない可能性が大きかったが、何もしないよりはいい。

もしまた、転移場所が別々で、自分の知らない内に大切な人達を失うなど、有り得ないことだ。

「ハジメ、安心して」

「……ハジメ」

「ハジメさんは、心配性です」

『ハジメ、大丈夫じゃ』

そんなハジメの心配する気持ちが伝わったのか、四人は恥ずかしくても嬉しさと喜びが勝ってしまったって笑みを見せて四人もハジメに抱き着いた。離れてたまるかと思わせるほど抱き締めている。

そして、ハジメ達の視界は、莫大な光によって塗り潰されたのだった……。

## 百八話 理想の世界

—— チュンチュン、チュン

朝を知らせる鳥の囀りが、カーテンの隙間から陽の光と共に、薄暗い部屋の中へと侵入してくる。その音に急かされるようにして、頭から布団を被り鉄壁の要塞を築いている部屋の主が身動きだした。と、同時に、カチツという音がやけに明瞭に響き、次の瞬間、悪魔が咆哮を上げた。

—— ジリリリリリリリリリ!!

けたたましい騒音が朝の静寂をぶち壊し、部屋の主がなり立てる。

「ああ……う！」

悪魔から身を守るように、布団の中へ更にこもる部屋の主だったが、流石にいつまでも無視は出来ない。もともと布団から腕だけ伸ばすと、バンツと頭部を的確に捉えて叩くと堪えない悪魔の叫びを沈黙させることに成功した。

しかし、部屋の主は昨日の重労働のせいか、再び、夢の世界に旅立とうとしていた。  
直後、

「ハジメ。起きなさあ〜い！ どうせ二度寝に突入してるでしょう〜!! さっさと起きなさあ〜い！」

階下から間延びした聞き慣れた声——母の董の起床を促す声が響いてきた。部屋の主——ハジメは、夢の世界へと旅立っているので完全に耳に入っていない。

「やっぱり、ダメねえ〜。もうホントに毎朝毎朝ごめんね〜。今日もお願いできる?」

「——」

階下から再び董の声が届く。ハジメに聞かせるために、わざと大きな声を出しているのだろう。呆れた董は誰と話している。しかし、再び夢へと旅立つハジメにとっては関係ないことだ。

コンコンツとノックの音が響く。

しかし、反応がないことに二度寝しようとしてると分かっているその人物は一拍おいて直ぐに扉を開けた。そして、部屋に入るなり足早にハジメが眠るベッドへと向かう。そして、布団で疼くまるハジメに優しく声をかける。

「ハジメ、起きて」

「……」

それでも反応しない。完全に二度寝に入っているからだ。起こしに来た人物は疼くまるハジメに困った笑みを浮かべた。

「ハジメ、起きなさい。起きないと……」

「……………」

今度ハジメ優しい手付きでゆさゆさと揺さぶってくる。布団越しでも分かる自分よりも小さな手に、ハジメの意識が半覚醒する。

「……ユエ達にも言つて、今日はデート無しね」

「いや、それはやめてくれ」

その一言で、ハジメは一瞬で意識を覚醒させると、ガバツ！と跳ね除けた。一緒に、黒髪が寝癖でびよんつ跳ね、日本人らしい色彩の両目がぱちくりと瞬きする。

その視線の先には、栗色の髪をした美少女がいた。その少女はハジメと目が合うと嬉しそうに微笑みかけながらハジメのベッドに腰掛ける。

ハジメは、そんな彼女に笑みを返しながら抱き締めた。彼女も同じようにハジメの背中に手をまわす。

「おはよう、優花」

「おはよう、ハジメ」

ハジメは愛おしい恋人のとのひと時に目を細めて、一日の最初の幸せを噛み締めながら彼女との抱擁を交わしたそうしていると、部屋の扉から再び三人の人物が部屋に入った。

「……ハジメ、やっと起きた」

「おはようございます。ハジメさん」

「ふふ、旦那様はお眠りさんじやのう」

視線を向けると三人の美女、美少女達がいた。ハジメは、笑みを向けた。

「おはよう、ユエ、シア、ティオ」

「……んっ」

「ハジメさん、寝癖が跳ねてますよ」

「ムッ、優花だけ抱擁か……羨ましいのう」

ハジメの言葉に、嬉しそうに微笑む金髪紅眼の少女のユエ。ハジメの寝癖を見て整えようと向かう淡青白色の髪でトレードマークのカチューシャをつけた少女のシア。ハジメと優花のハグを見て、羨望の眼差しを送る黒髪金眼の美女ティオ。この三人はハジメに惚れており、傍にいたいがために、ハジメの家へホームステイを強行し、ユエとシアは、いつの間にか学校もハジメと優花の学校に編入手続きまでも済まし、ティオも一人暮らししてたマンションから引越すほどだ。

そんな熱烈な想いを寄せる三人に、ハジメは断れず優花という恋人がいるのに三人の想いを了承してしまった。そんなハジメに、普通キレルはずの恋人である優花は怒ることなく寧ろ三人とも仲が良くなっており、自分の両親も優花の両親とも関係は極めて良

好だ。

ハジメは、そのことに、何故？と思ひ親友の浩介と友の大学院生のアレスに相談したが「誑しだな」「誑しですな」としか言われなかった。ハジメは、更に頭を悩ませることになったのだった。

そんな四人の恋人との朝を迎えたハジメは、董に揶揄されたり、愁に弄られたりしつつも朝の準備を終え、優花、ユエ、シアと共に家を出た。学校に行くためだ。

行く途中に、優花の両親である博之と優里に挨拶してから学校に向かった。優花は、優里にハジメが董にされたように揶揄され、顔が真っ赤になっているのだった。

あくびを噛み殺しながら通学路を気怠げに歩くハジメを見て、両隣を歩く優花達はハジメと腕を組んだり、上目遣いで首を傾げたりする。

そんな何気ない仕草がいちいち極上に可愛いくて……

すれ違う度に優花達に見惚れて、溝に落ちたり、電柱にぶつかつたり、事故る人々が量産されていく。人災を振りまく三人は、しかし、周囲のことなど気に留めずハジメが一緒にいることに幸せそうな表情だ。

自分達の学校はブレザータイプの制服を着ているため、スカートがふわり翻る。右隣で腕を組んで歩く優花は、気遣うようにハジメの顔を覗き込んだ。

「また、夜更かししたの?」

「まあな、父さんから頼まれた仕事がい外の外はかどつてな。気が付いたら空が白み始めてた」

「熱中するのはいいけど、体には気をつけてよね」

「……ん。ハジメが倒れたら泣く」

「そうですよ。無理しないで下さいよ?」

「そんなに、心配しなくて——はあ、分かった、気を付ける」

穏やかに話す四人。この四人の間には、どこか甘い雰囲気か漂っている。四人——いや、テイオも入れて五人の恋人となつて随分経つが、熱情の衰えもない。

突然、ハジメの恋人が増えたことに学校では当初は大騒ぎだった。

編入してきた二人の美少女に目の色を変える男子達。しかし、二人は自分がハジメの恋人であると宣言し、学校全体を巻き込むような話題の的となった。

その後、嫉妬に正気を失つた男子達がハジメに襲いかかるが、全て返り討ちにされたのは言うまでもない。しかし、幼なじみの女子二人から叱られ、軽蔑の眼差しを送られるのは少し辛かったのが一番ハジメに響いた。

そんなことが続いて数ヶ月。

優花の説得もあつて、やっと二人からも元の関係に戻れて落ち着いた学校生活に送れ



るようになった。こうして、のんびり散歩じみた登校もできるのも、挑んできた男子生徒達がハジメに恐れをなし、幼なじみや友達と関係に戻ることが出来た賜物だ。

ハジメは、ふとユエ達三人との出会いを思い出す。どれも暴漢を倒して救ったことから始まりだった……気がする。

「(ん?) 暴漢を倒したんだよな……(んん?)」

しかし、ハジメはその時の出来事を余り覚えていない。この話はユエ達から聞いたもので、ハジメの記憶には覚えがなかった。そこにハジメは、違和感を覚えた。

「(……本当に俺は、暴漢を倒したのか?)」

テイオは日本人っぽいのが、ユエとシアの二人の容姿は明らかに外国人であることは一目瞭然で、ホームステイに来ている以上、ユエとシアにも出会ったのも外国のはずだ。

事実、ハジメ自身、二人に出会ったのは外国であると認識している。優花とも恋人になれたのもそこに国だった。しかし、そこが正確にどこだったのか、まるで霞がかかったように伴然としない。そのことに気が付いた途端、記憶の本棚からボロボロと疑問がこぼれ落ちてくる。どんどん膨れ上がっていく疑問に、ハジメの中の違和感も急速に膨らんで――

「ねえ、ハジメ!」

「……ハジメ!」

「おーい、ハジメさあ〜ん」

「おわつ、どうした？ いきなり大声だして」

通学路で、普段は聞き慣れない三人の大声に心臓が跳ねて、思考の渦に呑み込まれかかっていたハジメの意識は急速に現実へと浮上する。

いつの間にか、三人は心配そうにハジメを見つめていた。

「ホントにどうしたのよ、ハジメ」

「……ん、何度も呼んだのに無視した」

「ハジメさん、今日は学校休みます？」

「いや、平気だ。すまんな変に心配させて」

「もう、しつかりしてよ？」

そう言つて優花は、ハジメから視線を外す。その時には既に、先程の疑問はハジメの中から消えていた。

——微笑んでいて。幸せの中に。私達だけを見ていて

優花の囁くような独り言。その声はハジメには届いていない。ハジメは、自分に寄り添う彼女達を見て、優しげに目を和らげるだけだった。

学校に到着したハジメが下駄箱で上履きに履き替えていると、肩に誰かが触れる感覚が伝わる。誰かが肩を軽く手を置かれたらしい。しかし、ハジメは正体は誰か知ってい

る。

「よ、ハジメ」

「おう、浩介」

ハジメの後ろにいたのは、親友で影が薄いで定番の遠藤浩介がいた。浩介の挨拶にハジメも返すが、いつものメンバーが居ないことに気付く。

「妙子と奈々は？」

「ああ、今さっき優花やユエさん達とあっちで楽しそうに話してるぞ」

浩介の言われ、視線を転じると楽しそうに談笑し合う優花達が見えた。「今日もシアさんの胸が大きすぎる……」「ひやつ?! 奈々さんっ」「奈々、やめなさい」「アダツ」と会話が聞こえハジメと浩介は互いに溜息を吐く。

「じゃ、優花達呼んで教室に向かうか」

「お、そうだな」

そう話しながらハジメと浩介は、優花達の所へと向かい、そのまま教室へと向かったのだった。

その後、教室に着いたハジメは、いつも通り優花達と過ごし、いつも通り授業を受け放課後を迎えたのだった。

放課後。

浩介達と別れたハジメ達は、学校の近くにある幼稚園に向かつていた。ご近所さんであるレミアの娘——ミュウのお迎えのためだ。母子家庭故に忙しい彼女に代わり、こうして時折、ハジメが学校帰りに迎えに行くのである。

このお迎えと、レミアが帰ってくるまでの間ミュウをウイステリアや家で預かるというのは、ずっと前から続いているハジメの日常だ。

幼稚園に到着すると、

「あつ、パ……お兄ちゃん！ 優花お姉ちゃんとユエお姉ちゃん、シアお姉ちゃん！」

ミュウがステテテテと寄ってきた。これ以上ないくらい満面の笑みである。

思わずほっこりするハジメ達。

飛び込んできたミュウを受け止めて、ハジメはギュウと抱き締めた。

「ミュウ、飛び込んだじゃダメだ。危ないぞ？ それと今、また『パパ』と呼びそうになつたな？ ホントに勘弁してくれ」

ハジメは、ミュウが口にした呼び名に冷や汗を流しながら窘めた。生まれる前に父を亡くし、父親というものを知らないミュウにとつて、いつも傍にいて優しくしてくれる年上の男性であるハジメはパパだと思えたらしい。

だがしかし、呼び名を許容するわけにいかない。

何せ、レミアが未亡人で、しかも、まだ若く、ご近所でも評判の美人だ。そんな彼女

が大切な娘を任せる相手で、娘はパパと呼ぶ……良からぬ噂が立つことが避けられない。実際、幼稚園の先生達の前で、うっかり口を滑らせたことがあり、ちよつとした騒動にもなったのだ。

ハジメとレミアできちんと説明して、この騒動は事なきを得たが、最近は、何故か幼稚園の先生達から生温かい視線を向けられることが多くなっていると頭に悩ませているハジメであった。

優花がミュウを抱っこされながら、のんびりと帰路を歩く。ユエもシアも優花に抱っこされて嬉しそうにはしゃぐミュウを可愛がっているのを横目に微笑みつつ、この穏やかな時間に浸るハジメ。

茜色の空を見上げながら、わけもなく幸せだと思ふ。だが、今日一日ずっと抱いている違和感が消えずにハジメの頭の片隅に残り続けている。

「もうっ、パ……お兄ちゃん！ ミュウのお話、聞いているの?！」

「え？ ああ、スマン、スマン。少し考え事をしててな」

ぶんすかと怒るミュウに謝罪しながら、優花に抱っこされるミュウの頭を撫でる。頭を撫でられ直ぐに機嫌が戻ったミュウ。

そんなハジメを優花達は目を細めた。と、その時、一層目を細めたシアが、不意に口を開けた。

「…………あらら？ ハジメさん、何か聞こえますよ？」

「ん？ あー…………」

耳のいい彼女の言葉を疑わず、ハジメは耳を澄ませた。微かに、女性の声と複数の男が言い争うような喧騒が聞こえてくる。

ハジメ達は顔を見合わせ、その声が聞こえる路地へそつと顔を覗かせた。

「なんて、テンプレな…………」

「女の敵ね…………」

そこには想像通り、複数の男が少々強引すぎるナンパしている光景が広がっていた。ハジメは、面倒くさそうに溜息を吐くとスタスタと男達のもとへ突き進みながら、いつもの戦力分析せんりよくぶんせきをしていく。

敵の戦力はどうかということもない。歩法や姿勢、纏う雰囲気からしてもただのチンピラだ。仮に武装したとしても大したこともないだろう。

彼等も近寄ってくる気配に気が付いたようだ。ハジメの方へ振り返り、眉を顰める。だが、ハジメの後方にいる優花達を見て、下卑た笑みを浮かべる。その目は明らかに新たな獲物を見つけたと物語っていた。

「(ああ?)」

彼等の視線にドス黒い感情が湧き上がる。ハジメの両手が、己の太もも辺りに伸び

た。が、何故に自分は太ももに手を伸ばしたのかと疑問に感じた。  
「いや、今はどうでもいい」

だが、そんな疑問を一旦置いて、自分の大切な者達に気色悪い視線を送る男共をボコボコにするだけだ。ハジメが一瞬で男達の間合いに踏み込んだ。

そこからは圧巻の一言。一撃必倒を地で行く凄まじい格闘能力で、ハジメは怪我することなく男達を全員に地面にキスさせるとパツパツと手を払った。

そして、ハジメは、少々表情が引き攣っている女性からの固辞すると、さつさと優花達もとに戻ってきた。優花達はハジメのもとへ駆け寄る。

「ハジメ、大丈夫だった？」

「パ……お兄ちゃん！　大丈夫なの？」

「……流石、ハジメ」

「やつぱり、ハジメさんの動きはキレがあつてカツコイイですう〜！」

「クハツ……そうかい」

四人からの心配や称賛を聞きつつ、ハジメは「ミュウは真似すんなよ」と苦笑いを浮かべた。

そして、再び帰路につく。そして、思い出す。自分の違和感に。

「やつぱ、おかしい……左腕はこんな感覚だったか？　右目の違和感はなんだ？　何故

俺は両手を太ももに伸ばした？」

その瞬間、ズキリツと左腕と右目から痛みを感じた。同時に、心も震えだした。

——目を……………ま……………っ

声が聞こえた気がした。自分の、けれど、どこか異なる声が。

夜。

夕食も終えて風呂にも入り、自室でベッドに身を投げ出していたハジメは、濡れた髪を乾かしもせず、何かを考え込むように眉間に皺を寄せていた。

胸中を巡る正体不明の違和感。時間が経つにつれて増していく。それと同時に声が聞こえる気がするのだ。本能と言うべき深い場所で、誰かが叫んでいる気がするのだ。

それは、否定の声。

この幸せなはずの日常を否定する叫び。

「あ、——、クソツタレが……………」

ハジメは苛立ったようにガリガリと頭を掻いた。その時、不意にノック音が聞こえた。

「ハジメ、入るよ?」

「優花か、良いぞ」



一拍おいて、今日は家に泊まりにきた優花が扉を開けて部屋に入ってきた。ネグリジエ姿だ。普段は余り見せない姿にハジメの心音がドクンツと高鳴る。歩み寄る優花は、ハジメの髪が濡れていることに気付くと、眉を八の字にして少し怒りの眼差しを向けてベッドに乗り込んだ。

そして、寝そべるハジメを起こすと丁寧な髪を乾かし始める。

「よし、乾いた。濡れたままじゃダメよ、風邪引いちゃうから」

「へいへい」

「もっつ」

適当に返事をするハジメに、優花はムツとしながらも後ろからハジメに抱きついた。そして、ハジメの首筋に顔を埋めスリスリと甘えるように擦り寄る。後ろから回した滑らかな両腕は、ハジメの胸元から服の中に侵入し、愛しげにハジメを愛撫する。

心地よい感触、幸せな時間。

なのに、心が否定していく。己の本能が叫びだして否定すると同時にハジメに頭痛をもたらす。

「(何故だ?) 優花に抱き締められても、こんなに愛されても嬉しくない? 何故? 何故? 何故だ!! 俺の心はっ、本能はっ、否定をする?!)」

優花の体の柔らかさと体温を感じながら、膨れ上がる違和感と苛立ちに頭痛の激しさ

が増すハジメ。そんなハジメの耳元に唇を触れさせながら優花が囁く。

「大丈夫だから。何も心配いらなわ。ハジメは私が幸せにするから」

「……優花」

「……私だけを見ていて。大丈夫、私はここにいるよ。ハジメの理想通り。ずっと傍に  
いるから」

「……………っ」

そんな優花の一言で、ハジメの何もかもが紐解けていき、目がカツと見開く。

「(そうか……そういうことかっ)」

—— 大切な彼女達との約束。

—— 大切な親友との友情。

—— 自分を認めてくれる仲間との誓い。

—— 殺し合い、自分を認め託していった想い。

そんな、自分の立てた決意を捨ててまで、自分の理想に縋るなんて……………

「言語道断に決まってるだろっ」

“優花に見える何か”を振りほどき、ハジメは立ち上がる。

「(クハッ……理想の恋人？ 甘く優しい世界？ クソ喰らえだ!)」

ハジメは目元で手で覆うと、ギリギリと音がしそうなほど歯を食いしばった。そうし

なければ、理想に縋ろうとしていた自分の弱さを許せそうにない。

「(こんな仮初の世界に縋りそうになるなんて、我ながら反吐が出るな……)」

気合いを入れるように、あるいは罰を与えるように、ハジメは思いっきり自分の頬を殴りつけた。ドガツと生々しい音が響く。ハジメの突然の行動に驚いた優花が慌てて駆け寄り、手を伸ばすが……

バツと、ハジメの振るった手に勢いよく振り払われてしまった。悲しげな表情で、自分の手を胸元を自分の手で掻き抱く優花。

その表情に、おそらく大迷宮が作り出した表情に、ハジメは「……ふざけやがって」と、怒りの宿った声音で悪態を吐いた。

「……ハジメ、どうしたのよ?」

不安そうな優花の問いかけを無視して、ハジメは先程までとは別人のような鋭い視線を優花に向けた。

「なあ、優花。俺は何より優花が大切だ。他には何もいらぬい」

「ハジメ、嬉しい」

突然のハジメの言葉に優花は一瞬面食らうも、直ぐにその表情をほころばせた。だが、その言葉とは裏腹にハジメの視線は鋭いままだ。

「だからさ、他の何かを切り捨てると言ったら切り捨ててくれるか?」

「ハジメがそう望むのなら」

ハジメの要領の得ないはずの言葉に、一瞬の躊躇いなく優花は頷く。

「たとえ、それが、ユエやシア、ティオにミユウ、そして、妙子と奈々であつても？」

「ハジメがそれを望むなら」

まるでハジメの理想を体现するかのよう、ハジメの望むままを受け入れると宣言する優花。

そんな彼女に、しかし、ハジメは嬉しがるでもなく、むしろ苛ついたように表情を歪めた。小さく「こんなのに、縋ろうとしていたとは、情けねえ……」と呟いている。

そして、鋭い視線はそのままに吐き捨てるように言葉を投げつけた。

「そうか、よく分かった、クソツタレ」

ハジメが優花を偽者と断じた瞬間、ハジメの姿が一瞬で変わる。黒髪の、日本人特有の姿が、白髪眼帯と義手の姿へと。

「チツ。まんまと術中にはまるとはな。これだから大迷宮つてところは油断できねえんだ。つていうか、ハルツィナも例に漏れず碌な奴じゃねえな」

悪態を吐くハジメに優花が歩み寄る。そして、縋るような表情でハジメに手を伸ばした。

「(ハジメ)にいよう？ (ハジメ)にいれば、神殺しもせずにハジメはずっと幸せ」

「黙れよ。大概、この世界とてめ<sup>偽</sup>えは、俺や優花の記憶と人格を引き継いだ上、俺の理想を体現させるための俺を主役にするためのような舞台装置みたいなもんだろ？」

「……………よく、分かったわね」

どうやらハジメの推測が正解らしく、この世界も、登場人物達も、転移陣で読み取った記憶と人格を元に作り出されたものようだ。そこに、本人の「もし、こうだったら」という、叶うはずのないIFを付け足し、より理想的な世界を作り出したのだろう。

確かに、奈落で味わった苦痛や、これから立ち向かわなければならぬ神殺しを思えば、それなくして優花達とあの平和な日本で暮らしていられるというのは理想的と言えるかもしれない。

だが、

「度し難いな。あまりに的外れで哀れになるぞ」

ハジメはつまらなそうにそう言うとかッ！とその体から紅い光を爆ぜさせた。透き通るような紅い魔力が一瞬で仮初の世界全てに伝播させ、それだけに留まらず、その密度を凄まじい勢いで高めていく。

これが試練である以上、条件はクリアしているだろうハジメは、脱出を待つよりも力尽くでぶっ壊す方が早い。

「どうして？」

理想的な世界のはずなのに、それを否定するハジメに優花が疑問の声を上げる。いつの間にか、その顔からは感情の色が抜けていた。そんな偽者の優花にハジメは猛烈な勢いで魔力放出を続けながら、ギラギラと光る眼を向けた。

「簡単な話だ。目の前にいる理想おの優花と、現実の優花。どっちが魅力的だなんて、天秤にかけるまでもない。現実の優花以上なんて、存在するわけねえだろ!!」

あつという間に魔力が限界に達し、ハジメの表情に苦しさが紛れ始める。にもかかわらず、口から出るのは惚気ともつかない雄叫び。気合い呼応するように荒れ狂う魔力は、遂に空間全体に亀裂を入れ始めた。

そこで、ハジメは更に「限界突破」を発動。

魔力が尽きかけているのも気にせず、底上げされた魔力を一気に放出した。

「他の連中もそうだ。どいつもこいつも、思う通りになんてまるでなりやあしない厄介な奴等ばかりだ。だが、だからこそ、俺の理想通りでないからこそ、今の俺がある。俺を繋ぎ止め、南雲ハジメという男を愛してくれた彼女達を、たかが理想如きが取つて代われると思うなよ!!」

世界が真紅に染まる。天を衝かんばかりに嘖き上がる紅い光の奔流に、仮初の世界が悲鳴を上げた。

そして――

世界が壊れた。

割れたガラスの破片のように、世界の欠片が宙を舞う。キラキラと光るそれらは、まるでダイヤモンドダストのよう。生命が、その終わりの瞬間に一瞬輝くように、壊れた世界に満ちる光の中で、偽者の優花が微笑んだ。

それは、優花が見せる微笑みではない。もっと別の誰かの微笑みだ。ハジメは、その人物になんとなく心当たりがあつたが、急速に沈みかけそうになる意識を耐えるのに必死だ。

「……合格ですわ。甘く優しいだけのものに価値はない。与えられるだけじゃ意味がない。たとえ辛くとも、苦しくとも、現実で積み重ね、紡いだものこそが貴方の幸せにするのです。忘れないでください」

優花のものとは全く異なる声音。女性的にも男性的にも聞こえる。だが、酷く優しい声音だ。

ハジメは意識が飛びそうになる寸前、声にならない声を上げた。  
「ハッ、余計なお世話だ……けど、まあ、覚えておく」

そう呟いた直後、ハジメの意識が段々と薄れていく。その時にまた声が聞こえた。「攻略者……いえ、資格者南雲ハジメ。この試練をクリアした貴方には必要な記憶をブレゼントです」

そう言つてハジメの額に手を置いた人物は、既に霞んで姿が見えないが、優しい微笑みを浮かべていた気がしたのだった。

~~~~~

少し肌寒さと手足の異様な冷たさを感じて彼は、重い瞼を上げて目を覚ます。しかし、覚醒したばかりか意識は朦朧としている。

「……………」

だが、朦朧としている意識が段々と覚醒していく内に彼は自分が今、どんな状況なのかを理解していく。自身の視線の先には鉄格子があつた。そして、理解した自分がいる場所は牢獄的なような場所だと。

牢獄の広さは人一人は余裕で寝れることが出来る。そして、彼を逃がさないためか片足に足枷が付けられ、数百キロの金属球が取り付けられている。オマケに魔法封じも添えて。

ふささ

そして、今日も彼の変哲もない日常が始まる。



彼の日常は、全て灰色だ。

時々、外に出ること以外は何も変わることのない部屋ですつと過ごすだけだ。

——喜びもない。

——怒りもしない。

——哀しみもない。

——楽しさということもない。

そんな灰色の毎日を送り続ける彼に転機が訪れたのは突然だった。

ある日、いつも通り過ぐす囚人。自分の牢獄にコツコツつと近付く足音。そして、その足音は自分の部屋の前で止むと、ハジメは彼女に声をかけられた。

「ねえ、ねえ、貴方がラーゼン様に創られたっていうデミ・ゴッドね？」

「……」

背中に生えた純白の翼に、輝く銀の髪に彼は思い出す。確か彼女は、ラーゼンに救われ、姉と共に此処に住むようになった天使族の少女の一人であると。だが、彼は疑問に感じた。

天使族は高貴な種族。色々な種族が混ざった紛い物である自分に対して嫌悪感を抱いたり、軽蔑の視線を送られることが当然なのに、彼女はそうしない。むしろ初めて感じられた眼差しを送られた。

そして、彼女は満面な笑みで彼に手を差し伸べ……

「私はクリスタ。貴方と友達になりましたの！」

そんなとんでもないことを満面な笑みで話す彼女を見て、彼はいつの間にか彼女と手を取り合っている。

そして、そんな彼の灰色の毎日が色付き出したのだった……。

## 百九話 夢から目醒めて

背中と後頭部に当たる冷たく硬い感触と乾いた空気。それを感じて、僅かに微睡んでいたハジメの意識は急速に浮上した。

「つ……………んは……………」

頭を振りながら体を起こし、サツと周囲を確認する。

光源は一切なく真つ暗闇だったが、ハジメには「夜目」があるので暗闇は視界の妨げにならない。その結果、どうやら気を失う寸前に入った巨樹の洞と同じような、されど二回りは大きい場所にいらっしゃるらしいと分かった。

ただ、一点だけ決定的に異なる点があつた。それは部屋の中に異物があることだ。ドーム状の空間の中に規則正しく円周上に置かれているそれは、長方形の物体だった。大きさは一人がすつぽりと入れるくら。ハジメは、まるで棺のようだと思つた。ハジメが目を覚ました場所は円周上に並ぶ一つのようだ。部屋の中央は特に何も無い。周囲の壁にも出入口らしきものは一切なかった。

ハジメは両サイドに並ぶ棺のようなそれに視線を向け、おもむろに一番近い左側のも

のに近寄った。

「つ、これは……まるで琥珀だな……って俺、元の姿に戻ってるわ」

思わず息を呑んだハジメの視線の先には、優花がいた。そして、起きてから気付いてなかったが、ハジメの姿は狼の姿から元の姿に戻っていた。突然であつて戻つてことに驚きはしなかった。が、やっと、ともに戦えるという嬉しさが湧き上がりハジメは二ツと口角を吊り上げた。

「しかし、これは……」

元の姿に戻れた嬉しさは今は置いて、ハジメは再び棺型の箱に向き直る。視線の先の優花は、棺型の箱の中に満たされた黄褐色の物質の中で、目を閉じて静かに横たわっている。神秘的だが、確かに、琥珀の中に閉じ込められた太古の生き物を彷彿とさせる有様だ。念の為、ハジメは自分のように偽者になつているのか確かめるために、*「*気配感知*」*を発動して、確かに優花の鼓動を感じ取れ、本物の優花だと判明した。

部屋の中には全部で十の琥珀が安置されている。それらを一つ一つと確認すれば、案の定、他の者達も閉じ込められていた。おそらく、巨大トレントの洞から転移、そのまま琥珀の中に閉じ込められていたのだろう。

先程まで見ていた泡沫の夢。

甘い蜜で誘い、一度捕らえれば二度と放さない食虫植物の如き仮初の世界を、きつと

他の者達も見させられているに違いない。そして、あの世界から脱出できれば、現実においてめ目の前の琥珀の檻から解放されるだろう。

ハジメは、優花が閉じ込められている琥珀を見つめながら現状をそう結論づけた。

「まあ、何にせよ、俺もテイオも元の姿に戻ったのは幸いだ。後は、自力で戻ってこれるかだが……問題ないか」

ハジメの言葉通り、テイオもまたゴブリンの姿ではなく元の美しい姿に戻っていた。これも推測だが、巨大トレントが主を務める階層をクリアすれば自動的に戻ることになっていたのだろう。

ハジメは優花の琥珀に腰掛けると、目を閉じて横たわる愛しい恋人にそつと手を伸ばした。もちろん琥珀に阻まれて手は届かないが、それでも優花の顔をなぞるように手を這わせる。

「早く戻ってこい、優花。今、無性にお前を抱き締めたんだ……」

一瞬、力尽くで琥珀を打ち破ってやろうかと物騒な発想が脳裏に過ぎつたハジメだったが、それで解放できても、おそらく試練は失敗判定を受けてしまうだろうと、グツと己を抑える。

「……それにしても、試練の後に見せられたあの光景。……それに攻略者であつて資格者、か……優花の天使の根源と俺に似た誰か……何故か懐かしく思えてしまう知らない

記憶。……うん、分からん」

ハジメは、意識が失う前に見せられた誰かによって見せられた記憶について考え込んでみると、優花の琥珀が仄かな光を放ち始めた。ハジメは触れていた手を離して一歩距離を取り、その変化を見守る。琥珀は放っていた光を徐々に収めていくと、次に端から順にトロリと溶け始めた。溶けた琥珀は、そのまま棺自体に吸収されるようにして消えていく。五分もしない内に、優花を覆っていた琥珀は完全に消えてしまった。

静かに横たわる優花の胸が呼吸で上下していることを確認して、僅かに残っていた緊張を解いたハジメは、直ぐに優花へ駆け寄りそつと抱え上げた。

いつまでも冷たい場所に寝かせておきたくなかった、というのは建前であり、ぶつちやけ、抱き締めたかったのである。

ハジメが優花を抱き締めながら顔にかかった髪を払い除けていると、優花の長い睫毛が目蓋と共にふるふると震え始めた。そして、ゆっくりと目を開ける。

「優花、お帰り」

「んう……ハジメ？」

「ああ、俺さ」

優花は少しぼおろつとしていたようだったが、その視線は僅かたりともハジメから逸れたりしなかった。完全に意識が覚醒した後、一心不乱にハジメを見つめていた。

「本物のハジメなの？」

「なんでそんな事を聞くのか、なんとなく理由は察せるが……それは優花が判断してくれ。今、目の前にいる俺が優花にとって本物か、それとも偽者か」

きつと前の階層での件と優花が見せられた夢の中に偽者のハジメが出てきたのだろう。理想を映したあの仮初の世界で、優花の心が自分を登場させたことに、ハジメは嬉しさを感じつつ判断を委ねた。

「ちなみに、俺は今、俺の腕の中にお姫様が正真正銘、本物の優花だと確信してる」  
ハジメの言葉に、優花は一瞬キョトンとした表情をしたものの、直ぐにその意味を悟りみるみると顔を真っ赤に染めてギュツとハジメの肩を掴むと恥ずかしいのかハジメの胸元に顔を埋める。

ハジメもまた、夢の中で偽者の自分と出会ったのを察し、理想世界の中に自分がいるという嬉しく感じたのと反面、自分をそんなに想ってくれていて恥ずかしいのだ。「どうしてそう思ってくれるの？」

優花は、その理由は分かっていたが敢えて聞いてみた。たとえ心が通じていても、愛しの人から言葉にしてもらった方が嬉しいのだ。それに、大切なことでもある。

ハジメもまた、そんな優花の心情が手に取るように分かっていた。なので、肩を竦めつつ、あっさり答える。

「違和感を何も覚えなからな。……俺の内側の深いところ、きつと魂が訴えているんだ。今、俺の腕の中にいるのは紛れもなく、俺の“大切”だって」

「ふふっ。私も、私の深いところが、今、私を抱いてる人がハジメって言ってるわ。それに、おかえりハジメ」

「ああ、ただいま」

そう言うハジメに、優花は目元を緩めた。そして、二人はそのまま唇を合わせてキスをした。大迷宮にいることを忘れたのか何度も互いを求め合うようにキスを始めていく二人。

「……………」

「……………ムッ」

そんな二人に嫉妬したのか先程試練を突破して起きたウサ耳少女と吸血姫が自分達が目覚めたのに気付かずにキスを続けている二人に駆け寄ると抱き着いた。

「！」

キスをしてた二人は目を見開いて、突然なことに驚きを隠せずにいる。しかし、抱き着いて来た夢から目覚めたユエとシアがぶくうつとほっぺを膨らましながらハジメを見ている。

「……………優花だけズルイ」



「そうですね、私とユエさんだつて頑張つて試練を突破したのに」

そう言う二人に、ハジメは困つた笑みを浮かべながらも優花を下ろしてからユエとシアを抱き締めた。

「おかえり。ユエ、シア」

「……ん、ただいま」

「ただいまですう」

ハジメに抱き締められて嬉しそうにする二人。二人も優花と同じくらいハジメと会いたかつたのか、もう離さないと思えるほどギユウツと抱き着いていた。

「お前達も、無事に試練を越えたんだな」

「ふふ、当然ですう」

「……ん、ハジメはどんな夢だったの？」

「あ、それ、私も気になる」

三人から、どんな世界を見ていたのかと問われたハジメは、敢えて誰かの記憶のことは隠して、自分の理想世界だけの事を話した。

「あー、俺は、この世界に召喚されず、お前達と日本で幸せに暮らして平和な日常を送っているという理想の世界だったな。……おそらく、過去の大きな苦痛を伴う出来事をなかつたことにして、その上で今ある幸せを組み込んだらだろうな。ご都合過ぎた世

界だったが、久しぶりに優花の制服も見れたし、ユエとシアの制服姿も似合ったし、テイオのOL姿とかも見れて、ある意味幸せだったな。シアなんかウサ耳の代わりにカチューシャ姿で新鮮だったし」

「……………ん。いつか着てあげる」

「ほへへ。カチューシャ姿ですか」

「久しぶりって……………まあ、トータスに来てからは全然着てないけどさー」

ハジメの話を聞いて、それぞれの感想を述べる三人。そんな中、ハジメはウサ耳をピコピコと動かすシアを見て、感慨深そうな表情で口を開いた。

「うん。やっぱりシアにはウサ耳がないとな。ウサ耳あつてのシア。ウサ耳なくしてシアに非ず。むしろウサ耳がシアだな」

「いえ、意味が分かりませんか？断じてウサ耳が本体ではありませんから。ハジメさん、そんなにカチューシャ姿の私って違和感ありますか？」

「ウサ耳無しのカチューシャ姿のシアか。……………うーん……………それってシアなの？」

「……………ん？ それってシア？」

「あの優花さん、ユエさん。確かにウサ耳は私のアイデンティティと言っても過言ではありませんが、なくても私は私ですからね？」

シアは三人の反応になんとなく危機感を覚える。もしや、自分よりウサ耳の方が愛で

られてやしませんか?と。

微妙な表情になるシアを宥めながら、次は優花が自分の見た世界を話す。

「まあ、私の理想世界は、ハジメと余り変わんないと思うけど……」

優花の理想世界は、ハジメと同じように召喚されず、皆と平和な日常を送る日々だったらしく、優花はシアと一緒にユエの料理を改善などをやってたらしい。

「皆、ウイステリアの制服を着てて仕事してたわ」

「ほお、ユエとシアのウイステリアの制服姿……アリだな」

「いつか着てあげる」

「楽しみに待っててくださいい!」

「ああ、そうしてるよ」

そんな優花の話が終え、次にユエが自分が見ていた世界のことを話し出した。

ユエはかつての国が滅びず、裏切りもなく、優花やシア、ティオなど新しい家族にも恵まれ、更にはハジメを迎えたという夢だったらしい。

「……ハジメの礼服と玉座が死ぬほど似合ってた」

「すまん。礼服はともかく玉座は無理だ。っていうか、なんでそんな玉座?」

「……王妃スタートだった。既に、私だけで子供は十一人いた」

「どこまで進んでんだよ?!てか大家族!! うちの子だけでサッカーチーム作れ……だけ

「？」

ユエの話しに驚愕の眼差しを向けるハジメ。優花とシアは話のスケールさに苦笑いをこぼしている。しかし、ハジメはユエの言葉に引っかけかき覚えた。ユエはなんと言った？私だけで、と口にしたはずだ。

もしかして、と思わずハジメはバツとユエへ視線を向ける。すると、ユエもハジメが思っていることを察したのか、唇にペロリと舌を這わせ、艶やかな眼差しを向けていた。

「……優花達のも合わせて五十五」

「やっぱりかよー」

ハジメの叫びは虚しく、ユエの言葉を聞いた優花とシアは無言ながらも、少し頬を赤くしてソワソワと落ち着かなさそうに自分の指をイジっていたのだった。

「最後は私ですねー」

ユエの話から少し各々、気を取り直して次はシアが自分はどんな世界だったか話し出した。

シアの理想世界は、樹海から逃げ出した直後に帝国兵に襲われて亡くなった家族が健在している世界だったらしい。そこには幼少期に無くなったはずのモノもいて、誰一人欠けていない家族と、そしてハジメと優花達と、幸せな日常を送るといふものを見させられていたようだ。

「ホントに幸せなことを詰め込んだ世界だな……」

「今思うと、ホントに違和感ありまくりね」

「……シアはどうやって?」

どうやって、理想世界から抜け出したかという質問に、シアはにこやかに笑いながら返す。

「それはもちろん、今の自分を否定するなんてできませんし、したくありませんでしたから、こんな世界嫌です!!家族を利用しやがって、ふざけんなーって」

「……なるほど」

納得顔のユエ。ハジメと優花もどこか優しい表情で頷く。

シアの夢の中では、彼女は昔のように弱いままだったのだろう。シアはそれを良しとしなかったのだ。

「夢の中では、家族が追われる前にハジメさん達と出会っていた上に、一緒に暮らしていることになってましたからね。私はただ守られているだけで良かったんです。でも、そうじゃない! そんな弱さを許容するような生き方である人達の傍にいられるわけない! って心の奥がそう叫ぶんです。この幸せな日々が段々と違和感が広がって……気が付けば戦うことを選択してました。ハジメさん達の隣で」

「それで戻ってこられたわけか……」

「はいです！　これからも、私はハジメさん達の隣に並んでいたいですからね。その道が痛みを伴うものであったとしても」

そう言つてニツと笑うシアを見て、本当にたくましくなつたと思うハジメは感慨に耽つた。出会つた当初は、負け犬ならぬ負け兎集團の一人に過ぎなかつたのに、ハジメ達に並び立ちたいという思い。特にハジメに対しては愛故なのだ。

ハジメは、そんなシアが愛おしくなつたのか、なんとなくシアを抱き寄せると彼女の頭を優しく撫でる。

傍らの優花とユエは、そんなハジメの心情を察しているのか慈しむ表情をしている。

「え、えつと、ハジメさん？」

「スマン、少しの間こうさせてくれ」

「あ……………はいです！」

ハジメの抱き寄せる力の強さと抱き締められて感じるハジメの想いに、シアはふにやりと笑つた。照れくさそうなこれ以上ないほど幸せそうな、見る者を魅了する笑顔だ。

いつも通り、ハジメが、右に優花、左にシア、膝上にユエを抱きつかせてほのぼのとそれぞれの夢を語り合つていると、再び二つの琥珀が輝き出した。また二人、甘い誘惑の夢という名の牢獄を打ち破り現実へと帰つてきたようだ。

「あの、二つの琥珀は、確か…………」

ハジメが眩くと同時に、ユエが、魔法で出していた灯りの光量を上げて、今まさに解放された二人の人物を照らし出した。

僅かな間の後、

「ふう……………おや、現実に戻ってこられましたかな」

「ふむ。妾達が最後となるとは……………不覚じゃな」

「アレス、ティオ！」

そう言つて、起きる二人は、金髪を揺らす神官服を着た男——アレスと、もう一人は黒衣着物に身を包んだ女性——ティオであつた。ハジメの声が聞こえた二人は、バツと振り返るとティオは、ハジメとの視線が合うと嬉しそうにこちらへと駆け寄つた。アレスもそれに追従する。

「ハジメ！ 会いたかつたのじゃ！」

「ティオ！」

走つてきて、勢いよく飛び込むティオを優しく抱きとめたハジメ。そして、彼女の背中に手を回す。そして、彼女の笑みを見て、何かを感じ取つたハジメ。首を傾げるとティオを追従していたアレスもハジメ達と合流する。

「ハジメ殿や皆さんも試練を突破したことは何より」

「アレスさんも、お疲れ様です」

「……ん、お疲れ様」

「お疲れ様ですう」

「おう、随分と遅かったじゃねえか」

アレスの帰還に嬉しさを見せるハジメ達。それもそうだアレスも立派なハジメ達の大切な仲間なのだから。そして、アレスはハジメの言葉に困った笑みを見せる。

「アハハ。いや、彼女を引き合いに出されると何故か弱くなちやつて手こずってしまいましたね……」

そう言つて話すアレス。詳しく聞くと、神殺しなくてよくて、追放されず王国で自分の幼なじみの女性との幸せな日々が続くという理想世界を見せられたらしい。

「へえ……アレスにも弱い部分があるんだな」

「ええ、昔から彼女には何故か強く出れないんですよ私。先日も別れ際にぶたれました……」

そんな会話をするアレスとハジメを見て、女性陣は「ハジメも私達には強く出れないのね……」「……ん、それにぶたれたのはアレスが悪い」「そうですよお。ヘリーナさんが可哀想ですう」「そうじゃな、彼奴の女性に対する鈍感さは一級じゃしのう」と自分達の恋人と女心に対して鈍感を極めているアレスにジト目を送る四人。

「しかし、妾もハジメも魔物の姿から元に戻れたのは幸いじゃな」



「……」

アレスの話を一旦置いてハジメの隣に座って、ハジメも自分も元に戻れてよかったと話すティオ。しかし、ハジメはジッとティオの表情を見る。

「ん？ なんじゃハジメよ。妾に何か付いておるかの？」

ハジメの視線が気になって自分の衣服を見たり、髪を触るティオ。しかし、ハジメは一拍おくと溜息を吐いた。そして、くしやりとティオの頭を撫でた。キョトンとするティオにハジメは言う。

「無理に笑うな。見て、直ぐに分かったぞ。俺、は心から嬉しそうに笑っているティオが見たい。まあ、なんにせよ……お帰り、ティオ」

ティオは、大きく目を見開いた。そして、直後には「参った」と言わんばかりに目元を覆うと、「……うむ。ただいまじや。ハジメ」と、ほんのり染まった頬を隠したいのかハジメに抱き着いて顔を埋めながら応えた。ハジメも目元を和らげティオの背に手を回した。

それで、優花達も察したようだ。

ティオが、長きを生きる竜人族であり、それすなわち、この中で誰よりも、多くのものを見て、聞いて、経験してきたのだということ。そして、最も自分が生まれ、愛した国が目の前で無残に滅ぼされたのだ。

「こうであつたなら——一体何度、彼女はそう思つたのだろう。

テイオにとつて、大迷宮で見せた理想世界は、それは長い時の間に失つた全てが詰まつた、まさに宝物のような世界であつたのだろう。

目覚めた時、少し間があつたのは、溢れんばかりの想いを胸の奥に押し込めたから。いつものような素振りをして、それを覆い隠そうとしたのだろう。

ハジメは、そんなテイオの隠そうとした感情に目聡く気が付いたのだろう。

「お帰り、テイオ」

「テイオさん、お帰りなさい」

「……ん。お帰り、テイオ」

「私は、同時に起きましたが……お帰りなさい、テイオ殿」

なんだやたらと照れてしまつてハジメに抱き着く力を強めるテイオの姿を見たハジメ達はほっこりした気持ちで笑い、そんなハジメ達に対して「つくづく!!」と声にならない声を上げながら、ますます頬を赤らめたテイオであつた。

「まあ、なんにせよ、俺達の方は全員帰還できたわけだ」

「ですね。それで勇者さん達はどうしますか?」

シアがホツと肩の力を抜きつつ、そう尋ねる。視線は光輝達が収められている琥珀に向いていた。

「そうだな……。最終的には琥珀をぶっ壊して助け出すしかないだろうが、取り敢えず、自力で脱出できるまで待つてみるか。でないと、ここに来た意味がないからな」

「どれくらい待ちます?」

「飯食つて、一休みしたくらいの間でいいんじゃないか?俺の場合、普通に突破してただろが、ついカツとなつてな。力尽くであの世界をぶっ壊したから、魔力が二割ほどしか残つてないんだ。ちよつと休みてえ」

「……何してるんですかあ」

「あの、世界を魔力だけで……凄いですね」

シアがハジメに呆れた視線を向け、アレスは理想世界を壊す程の魔力を持つハジメに驚いていた。対してシアに呆れた視線を送られてるハジメは非常に渋い表情となる。

「反省はしてる。この大迷宮に挑み始めてから、どうも俺もお前達も短絡的な行動が多くなつてている」

「あく。それは、まあ、私達もハジメさんをダシに使われてばつかでしたから」

「だが、言い訳はできねえ。ある意味、弱点になりかねないからな。難しそうだが、この機会に克服しておこうと思う」

殊勝な態度を見せるハジメにシアが感心したような眼差しを向けた。そして、何かを思いついたように、優花の聖杭に乗って楽しそうなユエと、少し一休みしているアレス

とテイオをの横目に、小声でハジメに尋ねた。

「あの、ハジメさん？」

「ん？」

「もし、私がハジメさんやテイオさんと同じことになったら……怒ってくれますか？」

視線は逸らしているが、ウサ耳がぼつちりハジメの方を向いている。自分をダシにされた時に、ハジメは自分達のように怒ってくれるのかと、ちよつと聞いてみたくなったのだ。

ハジメは、揺れる瞳でチラチラと見つめるシアを見て、困ったように笑みを浮かべながらシアを抱き寄せた。

「当たり前だ。優花も、ユエも、シアも、テイオも同じだ。理想じゃない。今、俺が抱き締めているシアがいいんだ」

「あ……えへへ、そうですね」

嬉しそうに、それはもう嬉しそうに微笑みながらシアはウサ耳をパタパタ、ウサシツポをフリフリとする。愛らしいシアの仕草にハジメの手も自然に伸びてモフモフ。

その後、うっかり聖杭の操作を間違えた優花が、ユエが乗る聖杭が壁に激突して、頭にコブができてしまったり、優花があわあわとユエの元へ駆け寄ったり、テイオは完全に就寝したり、アレスはロンギヌスの手入れをしたりして、食事も取りつつ光輝達が解

放されるのを待ったが、体感で三時間ほど待っても出てくることはなかった。

「そろそろ潮時か……」

「うん。これ以上、待ってられないし」

「……ん。確かに」

「ですね。……区切りをつけないとキリがないですし」

「八重樫君なら突破できると踏んでましたが……時間が惜しいですし、仕方ありません」  
ハジメが琥珀を見つめながら、遂に強制脱出を切り出す。優花、ユエ、シア、アレスも、そろそろ仕方ないかと同意を示した。

「俺も八重樫なら越えれると思ったが……」

ハジメとしては、あの時の雫達の覚悟を見て、どうにか大迷宮を攻略して神代魔法を手に入れて欲しかった。一つ神代魔法があるだけで生存率も強さも段違いに上がる。神殺しのためにも雫達には十分な戦力に育って欲しいと思っている。が、流石に待つてはられない。

少し残念そうにしながら、ハジメは一步前に出た直後、逆に琥珀の一つが輝き出した。

「あの琥珀は……雫！」

「やっぱり、八重樫は突破したか」

「ふむ、雫はしっかり者だからの。順当といえば順当じゃな」

溶け出していく琥珀を見て、優花が駆け寄る。雫は少し呻き声を出しながらも直ぐに目を覚まし、優花に支えられながら体を起こした。

「ここは……優花？」

「うん、私。お帰り、雫」

「そう、戻ってきたのね。ふう。なんだか凄く疲れたわ……」

気怠げに深々と溜息を吐く雫だったが、何かを振り払うように頭を振ると優花に微笑みかけ「ただいま」の言葉を口にした。

そこへハジメ達も寄ってくる。

「随分な寝坊だな。だが、乗り切れたようで何よりだ」

「へ？ あ、な、南雲君……そ、そうね。何よりだわ。後、姿も戻ったのね」

「え、ああ」

何故か、ハジメが声をかけた途端、妙に視線を彷徨わせ言葉に詰まる雫。そんな雫の様子を見て、優花達が訝しげな表情になる。雫は動揺を隠すように一回咳払いすると、僅かに赤く染まっている頬を隠すように左右を見回した。

「……光輝達はまだのようね」

「ええ、私達は数時間くらい前には出ていたんだけど、脱出できたのは、まだ雫だけよ」  
「そう、厄介な試練だものね。随分待たせちゃったわ。ごめんなさいね？」

「気にしなくていいですよ、雫さん。脱出おめでとうです。それで、ちよつと聞きたいんですけど……」

「ありがとう、シア。ええ、何かしら?」

シアの言葉に嫌な予感がビンビンに働くのを感じながら、雫は努めて冷静さを心掛けににこやかに応答した。しかし、実際に質問を実行するのはシアではなく、いつの間にか傍らに移動していたユエの方だったらしい。

「……………」

「な、何かしら」

「……………」

「えっと、無言で見つめられても困るのだけど……ユエ?」

ユエは、何故か雫の傍らからジツとその瞳を見つめている。無言・無表情で瞬きもせずジツと、ジツと見つめている。至近距離で、自分を見つめるビスクドールの如き美貌は物凄く迫力がある。可憐な容姿なのに、頗る付きのジト目というのも、動揺せずにはられない。

視線を激しく泳がせてしまおう雫。

ユエは、何かを確かめるようにより一層、雫の瞳に覗き込んだ。

そして、不意に尋ねる。

「……雫、どんな夢だったの？」

「え？　　どんなって、普通の夢よ。なんの変哲もない、ええ、それはもう普通の夢だったわ」

「……普通？　誰が出てきた？」

「誰って、みんなよ。みんな出てきたわよ」

「……そう」

雫は真つ直ぐにユエを見返しながら、動揺なんて欠片もしていませんというようにしつかりと答えた。もつとも、答えの内容がどうにも抽象的でふわつとしたものばかりだったのが、雫の内心の状況を表している。

ユエはもちろん、鈍感組二人以外のメンバーもそのことには気が付いていたが、雫が話したくなさそうな雰囲気でもかと晒し出していたので、取り敢えずそつとしておくことにした。

あつさり引くユエ達に、あからさまにホツとしたような表情をする雫。ちようど部屋の中央でお茶の用意をしていたころなので、疲れた表情の雫を連れてティータイムということになった。

その際、雫が、

「……私がお姫様とか有り得ない。大体、王子役がなんで彼なのよ……」



などとブツブツと呟いていたのだが、それが聞こえていた者はあまりいない。それから更に数時間、雫の精神的な疲れも十分に回復した時点で、未だに戻つてこない光輝達の強制脱出が決定された。流星に、これ以上攻略を先延ばしにすることはできなかった。

ハジメは三人が眠る琥珀の前に立つと、アレスでもギリギリ見える程度の早さの手刀で目の前の琥珀の表面だけを綺麗に切り裂いた。見事な早業に優花達から「おおー」と拍手と歓声が響く。

そうして、全ての琥珀が破壊され、後には規則正しい呼吸を繰り返す光輝達が残った。正規の手順での解放ではないため、心配して駆け寄る雫と後遺症がないかとハジメに調べて欲しいと頼まれて容態を確認してきた優花だったが……その心配は杞憂だったようだ。

「……あ？ あれ、雫？ 園部さん？ ここは？ 俺は皆と……」

「んあ？ どこだ、ここは？ 俺は確か……」

「え？ そんな恵理はっ、恵理……」

そう時間を置かず三人は目を覚ました。

それぞれ直前まで見ていた夢から、いきなり薄暗い穴ぐらへと場面が切り替わったように少々意識が混乱が見られるようだ。

特に、鈴に至っては虚空へ必死に手を伸ばしている。何を求めて手を伸ばしたのかは、その言葉から明らかだろう。おのずと夢の内容も推測できる。己の夢想も振り切れなかったのも無理からぬことかもしれない。

鈴の有様に、雫と優花が悲痛な表情になる。いつも元気に笑っていても、やはり、あの痛い裏切りは彼女の心に深い傷を作っていたようで、その傷は、きつと今も血を流しているのだろう。

「三人共、大丈夫？」

「谷口さんも平気？」

雫と優花の呼びかけで、ようやく、先程まで見ていたのが夢だったのだと理解した三人は、しばらく呆然としていた。

しかし、その後の反応はバラバラだった。

龍太郎は、どこかガツカリしたような雰囲気を漂わせつつも、直ぐに「まあ、しゃあねえか」と恥ずかしげな表情で頭を掻き、光輝は暗い表情で拳を震わせている。鈴は、直ぐに誤魔化すように笑みを浮かべたが、その笑顔はあまり痛々しかった。むしろ、雫の方が耐えられず、鈴を抱き締めたほどだ。

だが、大迷宮は、彼等に己と向き合う時間を与えるつもりはないようだった。にわかには、部屋中央に魔法陣が出現した。

「どうやら、全員が琥珀から脱したことで次のステージへ強制的に送られるらしい。」

「天之川、谷口。省みている時間はないぞ。備えろ。でないと、お前達の望みは本当の意味で潰えることになる」

「っ……ああ、分かってる」

「う、うん。そうだね！」

次の瞬間、魔法陣の光が爆ぜ、またもハジメ達の視界を塗り潰したのだった……。

百十話  
スライム

ハジメ達が転移した場所は最初と同じ樹海の中だった。だが、最初のどこに向かえばいいのか見当もつかないような広大さもなく、天井も向かうべき目標も見えていた。

どうやらこの場所、かつての「オルクス大迷宮」の密林地帯と同じく、極めて限定的な地下空間に存在しているらしい。

見れば、他の木々がほぼ同じ高さであるのに対して、空間の一番奥には一際巨大な樹がそびえ立っていた。セオリーからして、新たな転移陣のある場所だろう。

「今回は全員いるみたいだな」

ハジメとアレスが目を細めながらメンバーに視線を巡らせる。また転移先で何かされるんじゃないかと疑っていたのだが杞憂だったようだ。

「偽者はいなさそうね……」

「ええ、私も、皆さんの魂を見ましたが全員本物ですね」

「アレスさんがそう言うなら大丈夫ですね」

大迷宮のトラップを警戒していたらしいシア達が、一様にほつと肩から力を抜いた。

鬱蒼と茂る樹海と、遠くに見える巨樹を見て、ハジメが号令をかける。チラリと肩越しに振り返れば、未だどこか表情に影を差している光輝と鈴の姿があった。

鈴の方は分かる。親友との全てが幻想だったと突きつけられ、殺されかけたトラウマは、そう簡単に割り切れるものではない。夢の世界が、むしろ心の傷を抉ったなら、容易に調子を取り戻せないものも無理はない。だが、光輝の方は一体何を見たのか。暗い影を宿す瞳、何かを堪えるように努めて表情を消す有様から、酷く危うい印象を受ける。原因は、夢の内容か、それとも「また試練を攻略できなかった」ことか。

とはいえ、ここは大迷宮。殺意高めの魔境だ。ほんの一秒後には絶体絶命の修羅場に陥っても全くおかしくない場所なのだ。いつまでも引きずってはいは命に関わる。

「天之川、谷口。お前等、進む気あんの?」

「なっ、あ、あるに決まってるだろ!」

「え? あ、あるよ!」

ハジメの鋭い眼光が落ち込んで二人に突き刺さる。辛辣とも言える言葉はともしれば追い討ちのようで、仲間思いだが短気でもある龍太郎が目尻を吊り上げた。

しかし、龍太郎が何か言う前に、ハジメの鋭い眼光が龍太郎の方に向き、気圧されてしまう。そして、ハジメは龍太郎から視線を二人に戻すと言葉を続ける。

「ここは大迷宮だ。一步踏み込んだ先、一秒後の未来、そこに死が手ぐすね引いて待つて

いるような場所だ。集中できないなら、攻略は今ここで諦めた方が良い。……死ぬぞ」  
「ま、待て、俺は………」

「何をどう言い訳したところで、きつきのクリアできなかったという事実は変わらない。なら、最低でも必要なのは、残りの全て踏み越えてやるといふ決意じゃないのか？ 今のお前等にはそれが見えない。気概のない奴は、ただの足手まといより質が悪い」

「……………」

「可能かどうかは分からないが、できそうなら大迷宮の外までゲートを開いてやるし、使えなくても、俺達が戻ってくるまでの待機場所として結界くらいは敷いてやる。進むか引くか、今決めろ。惰性で進むことは俺が許さない」

辺りが静寂が包む。光輝はギリギリと歯を食いしばり必死に憤りを抑えているようだ。しかし、それはハジメに対しての怒りではなく、そんなことを言わせてしまった自分自身への怒りのようだった。

落ち込んで集中を欠いていても、アレスや優花、ユエ、シア、ティオ、そしてハジメといった自分より遥かに実力が上である強者達つわものがいるのだから大丈夫だろうと、無意識の内に甘えていた事実が気が付いたのだ。

ハジメの考え方や性格や価値観が気に食わなくて、ハジメを否定できるくらい強くなりたくて、アレスやハジメに説得して、半ば無理やり大迷宮攻略に随伴したのに、帝国

で相対したオルステッドを見ただけで恐怖で何も出来なかつた自分に対して、ハジメは恐怖せず戦い、神の一柱に勝利したあの姿を見て、その強さに、甘えてしまった。光輝は、自分を殴つてやりたい心境だった。

しかし、今ここで激情を発散しても、それもまた、光輝の答えを待っているハジメに對しての甘えだ。光輝は何度も深呼吸をして空気と共に胸の内のモヤモヤを外に吐き出すと、パンツと音を立てて自分の頬を叩いた。

「南雲。もう大丈夫だ。俺は先に進む！」

目に力が戻っている。それを見て、横目で振り返りながら光輝を見るハジメは小さく笑みを浮かべてから、軽い感じで頷くと視線を鈴に移す。

鈴は、一瞬ビクツと体を震わせるが、光輝を真似て自分の頬をバチツと叩く、直ぐに決然とした表情を見せて頷いた。

「鈴も行く。やる気十分だよ！」

「そうか。ならいい。集中を切らすなよ」

ハジメはそれだけ言うのと、さっさと先頭を歩き出した。

龍太郎が光輝の肩をパンツ！と強く叩く。龍太郎なりの気遣いに、「痛いって」と軽口を叩きつつ、光輝は苦笑いを浮かべる。鈴の方も、雫の励ましで、いくらか影の取れた笑みを浮かべた。

そんな光景をハジメ達の後ろから見守っていた。アレスは、ハジメの辛辣と言える言葉だが、中身は二人を想っての言葉であることに「ハジメ殿は、優花殿達の世界で言うツンデレなのですね……」と呟きながら苦笑いを漏らしたのだった。

巨樹を目指して真っ直ぐ進むハジメ達。

樹海は、虫の鳴き声一つ聞こえない静寂で満ちている。風すら吹いていないので葉擦れの音すら聞こえない。ハジメ達が草木をかき分ける音がやけに大きく響いた。

「うゝむ。なんとも嫌な感じじやの」

「……ええ。大迷宮で待ち伏せされた時みたい」

「確かに……魔物気配も全くないものね」

テイオが眉を顰めてポツリとこぼすと、優花も雫も魔人族の男——ウイリス・アルクの奇襲に遭った時のことを思い出したようで、緊張感と警戒心に満ちた鋭い視線を周囲に飛ばす。

「ハジメ殿はどうですか？」

「一応、アラクネを先行させているんだが特に何も無いな。このまま何事もなくとは流石にいかないと思うが……」

後衛を務めるアレスの言葉に返事をしながら、ハジメは、偵察用に送り出した多目的



型ゴーレム「アラクネ」からの映像を確認していた直後だった。

「……………ん、雨か？」

「ほんとだ。ぽつぽつ来てるね」

突然、頭上から感じた水気に顔をしかめる。それに鈴が手をかざしながら同意する。が、次の瞬間、総毛立った。気付いたからだ。

この場所で、雨が降るなど絶対に有り得ないと。

「チツ。ユエ、頼めるか？」

「……………んっ。——『聖絶』」

ハジメが、その異常性にいち早く反応しユエに呼びかける。ユエは阿吽の呼吸で障壁を展開した。

直後、ザアアアアアアと、スコールじみた激しい雨が降り注いだ。

際どいタイミングで間に合ったユエの『聖絶』が雨の侵入を防ぐ。だが、誰も安心などしなかった。むしろ、その表情はますます強ばっている。

当然だろう。降り注ぐ『それ』は、障壁の表面をどろりと滑り落ちていくのだから。

どう見ても雨水じゃない。

毒物か、それもそういう魔物か。果たしてその正体は……

「南雲君、周りがっ」

この状況でも冷静に目を凝らして障壁の外を注視していた雲が、緊迫した声音でハジメを呼ぶ。その視線の先には、木々、草、地面、あらゆる場所からにじみ出てくる乳白色の何かの姿があつた。

「スライムか？クソツ。気配遮断タイプにしても、魔眼石にすら感知されないなんてどんな隠密性……アレス、ティオ、これ知ってるか？」

「隠密性の高い乳白色のパチエラムですか……すみません。知らないですね」

「すまん、ハジメ。妾も分からぬ」

「南雲！ 足元からも来たぞ！」

ハジメが自分にすら気付かせない隠密性と、自身や、アレスとティオに聞いても分からないスライムに内心で舌打ちしていると、足元の地面からも乳白色のスライムが噴き出してきた。『聖絶』は、球状の全方位型障壁であるから地面の中まで防衛可能だが、最初から内側に入っている部分の地面は別だ。地面に潜んでいた乳白色のスライムは障壁の内側からハジメ達を強襲した。

「きゃつ、このつ——『炎爆』！」

突然、足元からドバツ！と飛び出した乳白色のスライムに、膝下まで呑み込まれた優花が急いで中級火属性魔法『炎爆』を発動する。

最小限にまで抑えた爆発域に引き換えに熱量を上げた『炎爆』は、周りへの被害を考

え、威力をより高めた爆熱によって塵と化していく乳白色スライム。スライムの典型的な攻撃といえば、物理攻撃に強い特性を活かして接近し、体内に取り込んで溶かしてしまふというものだが、どうやら溶かされる前に完全に排除できたようだ。

「オラッ。引っ付くんじゃねえ！」

龍太郎が、背後からガバツと面積を広げて覆い被さろうとしてきた乳白色スライムに拳を叩きつける。籠手型アーティファクトの効果で浸透勁にも似た衝撃が伝わり、波打った乳白色スライムは爆散したように飛び散った。

「ちよつ、バカ、龍太郎！ こつちにも飛び散ってきただろう！」

「この脳筋！ 思いつきりかかったじゃない！」

「お？ すまん、すまん！」

「うえく。ネチヨネチヨだよお。気持ち悪いよお」

光輝と雫が、豪快かつ傍迷惑な龍太郎の倒し方に抗議の声を上げた。べつちより被つたらしい鈴が半泣きになっている。

「全く、大丈夫か、しず——」

「ええ。大丈夫よ、光輝。こいつら案外簡単に死ぬわ……つてどうしたの？」

「えつ、いやつ、なんでもないぞ！ ああ、なんでもない！」

「？」

大迷宮の魔物にしては随分と脆い。そのことに違和感を覚え警戒しつつも、雫は、光輝の慌てた様子に首を傾げた。

光輝は、視線を逸らしたまま。雫を見ようとはしない。それどころか、鈴の方へも視線を向けない。そこら中の地面から乳白色スライムが溢れ出しているのに、前だけを向いている。

そんな光輝に、スライムに向けるもの以上の不審顔を向ける雫だったが、結局、今はそれどころではないと、黒刀八咫鳥の電撃能力「雷天らいてん」を上手く使いながら乳白色スライムを駆逐していった。

なお、光輝が動揺した原因だが、それは乳白色スライム——もとい、その体を構成するどろりとした乳白色の粘液にあつたりする。

それを、雫も鈴もしこたま浴びてしまっているのだ。

光輝が何に反応してしまったのかは言わずもがな。雫と鈴の見た目は非常に不味いことになっていた。本人達は気付かないようだが………

当然、それは優花達も同じことだった。

優花は、乳白色スライム達を塵へとさせながら、聖杭を駆使したりして、自分に飛びかかるとうとするスライムを聖盾などで身を守っているが、最初の雨と地面から噴き出した分にやられて、それなりに液体が付いてしまっている。

ユエは、「聖絶」を展開しながら襲い来る乳白色スライムを焼き滅ぼしており、倒したスライムの飛沫が付くことはなかったが、最初の雨の分は頬や首筋についてしまっている。

シアも、龍太郎と同じように覆い被さろうとしてきた乳白色スライムをドリユツケンの「魔衝波」を発動して吹き飛ばしてしまったので、飛び散った分が付着してしまっている。

そして一番見た目が不味いのは、自分に襲い来る乳白色スライムを対処をしていると、近くにいたシアが吹き飛ばしたスライムの飛沫をもろに浴びてしまったティオである。別にシアがティオを狙ったわけではなく、こればかりは運が悪かったとしか言いようがないのだが、まるでバラエティ番組のパイ投げのように正面から顔面に浴びてしまったのだ。

今のティオは、その艶やかな黒髪と黒を基調とした和服風の衣服を乳白色スライムでどろどろにしている状態だ。絵面的に完全にアウトだった。

一番被害が少なかったのはアレスだった。スライムの色を見て、瞬時で察し、女性陣の為に後衛であることを活かし後ろに振り返って乳白色スライムを対処していた彼は、自分の周り全体に「聖絶」を発動して地面から噴き出してくるスライム達の侵入を阻止し、飛沫が飛び散っても心配ない。もつとも、最初の雨で肩や頬に付いてしまってい

る。

飛びかかってくる乳白色スライム相手に、体全体を覆うように「纏雷」を展開することで、早々にスライム限定で無敵状態になっていたハジメは、取り敢えず優花達の姿を光輝と龍太郎の目に入る前に、目潰しをしておこうかと物騒なことを考える。しかし、乳白色スライムの脆弱性という不審な点がある以上、まだ何が起こるか分からない。流石に、この状況で味方二人の視覚を奪うわけにはいかないだろうと自重する。

「(万が一見られたら、後で記憶が飛ぶまでタコ殴りにしようか……なんてな)」

ハジメは冗談でそう思っているのだが、直後、光輝達がビクリツと体を震わせた。本能が危機を感じたのか、今のところ、優花達の方へ視線を向ける素振りはない。

そうこうしている内に、障壁内の乳白色スライムは、あつけないほどあつさりと掃討することができた。それを確認して、今や「聖絶」の外側をびつしり覆い尽くしている乳白色スライムに視線を向けるハジメ。内壁に近寄ると、障壁の外へクロスビットと円月輪を転送した。

「(こいつはまた凄まじいな……)」

クロスビットを通じて魔眼石で見た外は、言葉通り、凄まじい量の乳白色スライムで溢れ返っていた。天井からは、今なおスライムが豪雨となつて降り注いでいる。地上で波打つスライムの群れは、まるで乳白色の海のように。

ユエやアレスのように上級の防御魔法を即時発動できるような者がいなければ、あつという間に呑み込まれて終わりだったかもしれない。

「ユエ、アレス。結界の強化を頼む。俺が全てを焼き滅ぼす」

「……んっ。任せて」

「了解しました」

ハジメは二人の返事を受け取ると、クロスビットを七機を同時に操作して一気に上空に飛ばした。

「南雲の奴、何をする気だ？」

「何か、ヤバそうなのは分かるわ」

「鈴もそう思ってきたよ」

龍太郎がハジメが何をしようしてるのか分からず首を傾げ、雫は、絶対に録なものではないと察知し、鈴もそれに賛同している。ちなみに先程から天を仰いでいる光輝は、優花達の姿をチラッと見てしまい、ハジメからのお仕置きが確定したのだと思い、絶望しているのだろう。

『優花、火属性魔法でスライムを取ってやってくれ。絵面的によろしくないからな』

突然の念話に驚く優花。「どうして、わざわざ私にだけ念話を？」と首を傾げるが、

絵面的によろしくない」というハジメの言葉で、直ぐに意図を悟った。

そして、改めて自分達を見て「確かに、これはね……」と一気に赤面となりながら苦笑いを浮かべる。ハジメがわざわざ念話をしたのは、未だ自分の見た目の不味さに気が付いていない雫達に配慮してのことだ。男であるハジメが指摘するのは、色々な意味で悪手だ。

『ありがと、ハジメ。直ぐに取り掛かるわ。でも、天之川君とかが、私達の姿を見ても痛めつけないであげてよ?』

『……………善処する』

ハジメがしそうなのが察してか、予防線を張る優花。ハジメの返答に、乳白色スライムの残骸を聖杖を使った完璧な操作で処理しつつ苦笑いを浮かべる。

ハジメは、意識をクロスビットから届く映像の方へ集中し直した。

「……………スライムの雨が一向に弱まる気配が見せない。無尽蔵か? だとしたら、まず天井をどうにかしないとな)」

刻一刻と体積を増やしていくスライムの海を眼下に、ハジメは上空で旋回させていた円月輪を天井に向けて加速させた。高速回転をしながら弾かれたように飛翔する円月輪は、スライムの豪雨を回転力で吹き飛ばしながら天井へと次々に突き刺さっていく。

円月輪の半分を綺麗に埋める形で突き刺さっているので、天井の岩盤に中穴による小さなアーチが無数にできているような状態だ。そう、空間を超える“ゲート”の機能を



有する円月輪の中穴のアーチだ。

次いでに、追加の円月輪とアラクネを大量に出す。アラクネは、女子達の収納ボックスにセットしていると配慮をしている。

ハジメ、出した円月輪を地面の至るところに展開させていく。円月輪の展開を終えると、今度はアラクネを地面に置いていた円月輪を通して、天井の円月輪へと次々と転送されていく。転送したアラクネは、そのまま天井に張り付くと、カサカサと足を動かして一斉に散開していった。

非戦闘機動であれば、今やハジメの同時操作可能数は、百をも超える。結果、溢れ出した総数百体のアラクネは、紅い燐光を纏いながら縦横無尽に駆け巡りながら、次々と「錬成」を発動していく。壁の僅かな穴や隙間から溢れ出てくる乳白色スライムを、壁そのものを錬成で固めてしまうことで封殺しようという意図だ。

その目論見は正解だったらしい。錬成した部分からのスライムの流出が止まり、目に見えて雨足が弱まった。それを確認したハジメは、準備が完了して不敵な笑みを浮かべる。

「ひとまずは、準備は終わった。んじゃ、取り掛かるとしますか」

そう呟くハジメに、光輝達は何をするのか検討がつかず首を傾げているが、次のハジメの行動に目を見開くことになる。

「ふう……………」

深呼吸して、己の全ての集中力を研ぎ澄ましていくハジメ。すると、段々と魔力が跳ね上がっていき、紅い魔力の奔流がハジメを包み込んでいく、そして、その膨大な魔力が、この場にいる全員に伝わり、息を飲んだ。

ハジメは、そのまま一つ残しておいた円月輪に、自分の手を当てた。その行動を見て、優花達はハジメがやろうとしてることに気付いた。しかし、それは余りにも無茶なやり方だと思われる。しかし、オルステッドとの戦いを経て更に強くなったハジメには至難な業ではなかった。

「よくもまあ、優花達に汚ねえもんかけてくれたなあ。それりやあもう、こつちもお返ししないとなあ？」

この最初から浴びさせることが目的かのようなスライムの色。何故乳白色なのか。ハジメは、そこに「解放者」の悪意(?)を感じ取った。【ライセン大迷宮】で散々受けた嫌がらせに通じる、あの悪意(?)だ。

その悪意(?)が優花やユエ達に降りかかったのだ。相当頭に来ていた。先程の、短慮を起こさないは、今はどうでもいいハジメは、ここら一帯のスライムを駆逐することだけだった。

「果てろ——  
// しんていばんらい 雷霆万雷!!」

直後、大地震わすほどの轟音が、障壁越しにも伝わってしまふほど。そして、戦おのくよ  
うな空間の震え……外の至るところに設置された円月輪から無数の紅の雷が放たれた  
のだ。

上からも、下からも円月輪から無数の紅雷が放たれ、乳白色スライムの海は避けるこ  
とは出来るはずもなく、全てが塵となるまで雷の鉄槌が降り注いでいく。結界にへばり  
ついていたスライム達も雷が全てを葬り去った。

そして、そろそろ終わらそうと決断したハジメは、新たに編み出した魔法のトリガー  
を引く。

「――// 収束・霹靂へきれきがこう牙鳥がこう!!」

そうハジメが叫んだと同時に、乳白色スライム達を葬っていた雷達が一気に収束して  
いき、一羽の紅の雷で形成された巨大な鳥となり、紅の雷翼らいよくを羽ばたかせながら一直線  
に飛行していく。飛行する間も全体から溢れ出る雷によってスライム達を滅す。

その姿から、まさに紅蓮の霹靂一閃。

木々や草花を灰燼に変えつつも、スライム達も葬りさつていきながら樹海に最悪のダ  
メージを与えていく姿は、ハジメでも、目で捉えることが難しいほどの速さいかすちの雷であつ  
た。

気のせいかな。光輝達は、結界越しから乳白色スライム達の断末魔が聞いた気がした。

まさに、目を疑う光景。雷魔法による鉄槌で塵となつていくスライム達。そんな光景に、なんだんかんだ悟りを開いた表情になつてゐる光輝達であつた。

そうして、ぷすぷすと煙を上げる何かを確認し、乳白色スライム達の駆逐を終えたハジメは、

「ふう………終了」

自分の放つた雷魔法の威力に、一仕事終えたような清々しい表情を見せるのだった。

満足そうなハジメを見て、ほっこりと笑つて傍に寄る優花達と後ろからハジメの魔法に感心してたアレスは平常運転のようだ。すると結界を維持してる一人であるユエが口を開く。

「………もう、結界解いてもいい?」

「いや、もうちょい維持してくれ。地面の下に潜んでないとも限らないしな」

ハジメの感応石の指輪が輝く。途端、天井から無数の黒い物体がスイ〜と一定速度で降りてきた。天井から糸を垂らして下降してきたアラクネ達だった。

「きゃ?!」

おびただしい数のアラクネが空から降つてくるといふショックな光景に、思わず可愛らしい悲鳴を上げたのは、意外なことに雫だったりする。しかし、他全員は華麗にスルーだ。自分の悲鳴に頬を赤らめている雫を見たりはしない。何人かの口元はニヤ

ついでいるが。

着地したアラクネ達は、天井にそうしたように、巨樹までの道程を錬成しながら一斉に散開させ、アラクネの操作に瞑目して集中しつつ、ハジメは結界維持の理由を口にする。

「目標の巨樹まで錬成するのに少し時間がかかる。あのスライムの総量が分からない以上、適時撃破より、少し時間を割いても襲撃対策をしておいた方が楽だろう。悪いがその間、念の為に結界の維持をユエとアレス、交代制で頼む」

「……ん」

「了解しました」

二人の快諾と同時に、光輝達は、危機を脱したと実感して肩から力を抜いた。なお、女性陣を汚していた乳白色スライムは、既に優花が取り除いているので、全員綺麗な姿だ。「今の内に、しっかりと休んでおけよ」

そう言つて、ハジメ自身、その場に胡座をかいて座り込んだ。巨樹までの道程に錬成するには、しばらく時間がかかる。体力的には問題ないが、休める時に休んでおくのは冒険の鉄則だ。

それを見て、全員がそれぞれ僅かな休息に入る。

しかし、ハジメ達は知らなかった。ここの階層の本当の試練が待ち受けていることを

⋮  
⋮  
⋮  
⋮  
⋮  
○

## 百十一話 快樂の試練

アラクネで巨樹までの道を錬成で道や壁の乳白色スライムが出入りする穴を少ない塞ぐまでの間、ユエとアレスが交代制で結界を維持しながら休息をしていたハジメ達。

「?」

すると、それから少しして、不意に「聖絶」の輝きが消えた。と、同時に、ハジメの背中に柔らかな重みが加わる。

ハジメが訝しみながら肩越しに振り返れば、そこには優花の姿が。どうやらハジメの背中から抱きついてきたらしい。その唐突な行動と、ユエとアレスが勝手に結界を解いたことに困惑していたハジメだったが……

「はあはあ……ゴメン、ハジメ。私……なんか変で……今、すごく……ハジメとシたい」「は?」 ちよつ、優花。こんな状況で何を言つて……優花? 一体どうした?」

いつの間にか、優花の姿は人間の姿に戻っており、息も荒い。吐息は火傷しそうなほど熱く、瞳はうるうるると潤んでいる。これが、夜の宿やユエ達しか居ない場所などだっ

たら喜んで応えるところだが、流石に呑気なことを言っていられない。こんな状況でいきなり発情するなど有り得ないことだ。優花が、体になんらかの異常をきたしているのは明白。

ハジメは真剣な表情となり、体ごと向き直って優花を抱き止めた。

それだけで、優花は身悶えするようにブルリと震えながら更に体を熱くする。加えて、我慢できないことでも言うかのように体をグイグイと押し付ける。すると、再び後ろから抱きつかれ、振り返ると、そこにはユエがいた。

「ハジメ……ヤバイ……今、すぐくハジメが欲しい」

「ユエ」

ユエも優花と同じ症状で、息が荒くなつて瞳が潤んでいる。ハジメは、すぐさまユエを優花と一緒に抱き止めた。そして、頭に疑問を埋めながらも優花とユエの容態を調べていると、いつの間にか影が差しかかった。ハジメが顔を上げると、そこにはシアがいた。

「ハジメさん……私……私、もうっ……はあはあ」

「シア、お前もか」

「はあはあ、ハジメさん、私、どうにかなりそうですう」

「ちよっ、待てっ」



ハジメの静止も聞かず、シアはハジメの右腕に飛びついた。胸の谷間と太ももに挟み込んで逃がさないようにする念の入れのようだ。ウサ耳まで、ハジメの首筋に這うようにし頬は薔薇色に上気し、瞳は劣情で霞んでゐる。普段は夜の時にしか見せない色気を全開に放っており、ハジメをくらくらさせるような甘い香りを発していた。

明らかに優花とユエと同じ症状だった。

「これは……っ、まさか……」

困惑顔のハジメだったが、直ぐに原因に思い当たる。予想が正しければ、この異常事態は優花、ユエ、シアだけにとどまらないはずだと、慌てて周囲を見渡した。

案の定、そこには三人と同じく、耐え難い何かを身悶えるアレス達の姿があった。

「はあはあっ……これは、してやられましたね……っ」

困った笑みを浮かべたアレスが、四つん這いで顔を真つ赤にさせながら、何かを耐えている。しかし、そのせいか、アレスの指にとつともない力が入り、指が地面にめり込んで、ヒビが入ってしまった。

テイオは、なんだかぼろろとしてるだけで症状は見られないが、少なくともハジメの呼びかけには応えない。

光輝達も例外ではない。

「うう、うう……なにこれえ」

「うあ……………」

自分を抱きしめるように蹲る鈴。正気を失ったような虚ろな瞳の龍太郎。光輝も血走った目で傍らの雫を見つめており、おもむろに立ち上がると雫へと手を伸ばし始めた。

「ふうふう…………つ、負けて、たまるもんですか」

雫も同じように身悶えた後、アレスと同じように何かを耐えるような表情で、グツと唇を噛めた。ツ―と血が滴り落ちるのも気にせず、むしろ、その痛みで僅かに正気が戻った隙に、すつと背筋を伸ばして座り直した。まるで見本のような美しい正座の姿勢で瞑目し、その後は微動だにしない。

所謂、瞑想だろう。ハジメも以前に精神統一のために師範である李リと共にしていたことがある。雫もしているそれも、八重樫流の流派にある精神統一の方法なのかもしれない。今のところは効果はあるようで、頬の赤みが徐々に取れ、静寂を纏い始めている。

とはいえ、余裕は一切ないようだ。正気を失う一歩手前だったのだろう。自分へも手を伸ばす光輝に気付く様子は一切ない。

雫の名を呟きながら、正気を感じられない眼差しの光輝がすぐ傍まで迫っている。倒れ込んで喘いでいる鈴の方にも、龍太郎が覆い被さろうとしている。

「チイツ、くそつたれつ。これが、あのクソスライム共の真髓かつ」

ハジメは悪態を吐きながら「宝物庫」からポーラを取り出すと、手首のスナップだけで三つ同時に投擲し、光輝と龍太郎、そして鈴に巻き付けた。

ワイヤーの両側についた錘の部分が紅い波紋を広げ、空間固定の効果を発動する。藻掻きながら、しまいには手近な相手なら誰でもいいと手を伸ばす。熱に浮かされた光輝達。鈴など、女の子として見せてはいけなレベルの表情を晒しながら、なんと雫にまで熱のこもった眼差しを向けている。

とはいえ、ポーラの拘束力は、数秒とはいえ「ネームド」の神の使徒すら抑え込む凶悪なもの。正気ですらない彼等に解けるものではない。

ひとまず、仲間内で取り返しのつかない醜態が繰り広げられることだけは阻止できたようだ。そうして、離さんとばかりに体を押し付けながら抱きつく優花と、自分を押し倒そうと剛力を発揮する右腕のシアを押しとどめつつ、既にカプチュウしている左腕のユエをあやししながら、ハジメは対応策を思索していると、不覚にも声がかかった。

「ハジメよ、無事かの？ どうやら、あの魔物の粘液は、強力な媚薬になっておったようじゃな」

「そうですね。不覚にも、私でも発情してしまいそうになるほどの強力な媚薬でした」

それは、テイオとアレスだった。アレスは、今さっきまで、正気を保つために四つん這いとなっていたが、耐えきつたのだろう。全身汗で服が濡れており、若干、表情が疲

れていて息が荒い。問題はテイオの方だった。平然とした表情、かつ、しっかりとした足取りで、更には異常事態の考察までしながら歩み寄ってくる。

ハジメは内心で思った。「え、嘘？なんで？」と。

目を丸くして「え？は？」と頭の上に疑問符が浮かばせながら自分に抱きつく発情中の優花達と普通のテイオを交互に見るハジメ。そんな中、テイオは普通に言葉を続ける。

「強烈な快樂作用で魔法行使すら阻害しておる。時間が経てば経つほど正気を失い、快樂のまま性に溺れることになるじゃろうて。厄介なのは、これが実は粘液を媒介にした物理的な作用ではなく、精神的な作用である点じゃ。敢えて称するなら『媚薬』ではなく『媚法』の固有魔法といふべきか。状態異常魔法の一種じゃな」

「そう考えるべきですね。あれほど正気度を失わせるなんてただの媚薬では無理ですから」

「うむ。それに、ハジメが無事じゃったのは、浴びた量が最初の雨粒数滴で、後は『纏雷』で全てを弾いたからじゃろう。数粒程度では、ハジメの耐性を突破できなかったじゃろうな」

「な、なるほど」

「つまり、不幸中の幸い。とはいえ、厄介な試練ですね。あの物量で襲われては、飛沫を

浴びないということは不可能。戦鬪が長引けばそれだけで全滅。生き残つても仲間がいれば交わらずにはいられない。その後の関係は拗こじれてしまふわけです、か……」

「あ、ああ。そう、だな」

「おそらく、それが狙いじやろうて。快樂に耐えて仲間と共に困難を乗り越えられるか……。あるいは快樂に負けて絆を保てるか……。いずれにしろ性格が悪いことじや。『解放者』というのは本当に厄介な連中じやのう」

「……なあ、ティオ」

「む？ なんじや、ハジメ」

ハジメは、ティオとアレスの推測に「なるほど」と納得する一方で、自分にベツタリと引つづく優花達とティオを再び交互に見つつ、最大の疑問を投げかけた。

「あの粘液が、この事態を引き起こしていることは分かる。それぐらいしか事態の要因は思い浮かばないからな。だが、ティオ。なんでお前は平然なんだ？ 俺の記憶が確かなら、一番粘液を浴びたのはティオだと思ふんだが……」

「そうですね。私でも、意識が飛びそうになつたほどの快樂作用でしたが……」

「確かに、妾の体も粘液の効果が発揮されておる。事実、体を駆け巡る快樂に邪魔されて魔法がまともに使えんからの。じゃがのう、二人共あまり舐めくれるな、妾を誰だと思つておる」

「テイオ……」

「テイオ殿……」

不敵な笑みを浮かべながら胸を張るテイオを見て、ハジメとアレスは大きく目を見開いた。

「妾は誇り高き竜人族。この程度の快樂なぞ、この鍛え上げた強靱な精神には意味をなさん!!それに、愛しの旦那様を前にそんな醜態を晒すわけにいかないからの!」

目をクワツ!!と見開き、扇を広げずに口元にやりながら力説するテイオ。ハジメは、少し笑みこぼすと愛おしそうにテイオを見る。

「クハっ、そうかい。やつぱりテイオは凄いな」

「クフっ、そう言われると嬉しいのじゃ……っ、ふう」

ハジメの言葉に、嬉しそうなテイオ。しかし、一瞬、ハジメへの愛が深まったせいか自分の中に抑えている快樂が一気に押し寄せ体がビクンっとなるが、すぐに持ち前の精神で抑え込む。

そんなテイオは、ハジメから視線を逸らすと優花達に向く。そして、確かな信頼を瞳に込めて、ハジメに縋り付く優花達に語りかけた。

「優花。ユエ。シア。お主等が、たかがこの程度の魔物にいいようにされていいのかの?妾とアレス。それに雫すらこの快樂に耐えておるのに」

そんな挑発まがいのテイオの言葉に、三人の目の色は変わる。頬を真っ赤に染め、絶え間なく熱い吐息を漏らし、ギョツとハジメに抱きつきながらも、三人は顔を上げて確かな意志を感じさせる眼差しをハジメに向けた。

「はあはあ、そう言われちゃう、と……負けられないわねっ」

「んんっ……当然」

「うう……。もちろんですよ」

案の定、挑発に真に受けて、快楽に身を委ねたいという強烈な欲求に抗い、優花達は歯を食いしばりながら正気を保っていた。ハジメは優花達の順繰りに満足げに笑う。

「いいか、これは大迷宮が用意したクソツタレな試練だ。なら、お前等が乗り切れられないなんて有り得ない。ほれ、テイオとアレス、それに八重樫すら耐えてんだ。優花達もいけるだろ？」

その言葉に、熱に浮かされながらも優花達が口元を歪める。ハジメを彷彿とさせる不敵な笑みだ。

「さつき、俺が魔物に変えられた時、再生魔法が効かなかったことを考えると、今回も魔法での解決は難しいだろう。そもそも今は使えないだろうしな。だが、俺達には『神水』がある。ハルツイナも、これは予測していないかもしれない。精神作用とはいえ、奇跡の霊薬だ。試してみる価値はある。……どうする？」

効果があるかどうか分からない、残りの数も乏しい切り札の一つとも言える伝説の秘薬を使って、今すぐ快樂という名の苦痛から解放されるか。

ハジメの問いかけに、三人は声を揃えて、

「必要ないわ」

「……ん、必要ない」

「いりませんよ」

と即答し、試練を乗り越えることを選んだ。

ハジメは「それでこそだ」と柔らかな眼差しを向ける。優花もユエもシアも、嬉しうに微笑み返した。ハジメが、自分を信じてくれていることが伝わるからだ。

ハジメは耐えると決意した三人を氣遣って距離を取って、テイオ達と一緒に見守ろうとする。自分がいない方が快樂には耐えやすいと考えてのことだ。だが、優花達の考えは真逆らしい。

「ハジメ、ギョツとして」

「辛くないか？」

「……まさか、ハジメに抱きしめられて辛く思う人なんて、ここにはいない」

「そうですよ。むしろ心が落ち着きますから……お願いします」

三人におねだりされてしまい、ハジメは少し困った表情をしつつも、三人まとめて腕



の中に閉じ込めた。左腕でユエを、右腕でシアを、正面に優花を抱える。

優花達はぶるりつと身を震わせたものの、直ぐに安心したように身を委ね、荒かった息を整え始めた。目を閉じて精神の均衡を保つことに集中する。

いつしか三人の燃えるような体温は下がり、規則正しい鼓動がハジメに伝わり始めた。ハジメは目を細めて微笑むと、刺激を与えないように微動だにせず三人を支え続けた。すると、後ろから抱きしめられ、柔らかい感触と共に声が届く。

「……ハジメよ。妾も抱きついていいかの？」

「なんだ嫉妬か？」

「……優花達だけズルイのじゃ」

少し嫉妬を顕にした竜姫が後ろから自分に抱きついた。ハジメは少し、可愛いと思いつながら片手で竜姫の頭を優しく撫でるのであった。

どれくらい時間が経ったのか。

いつの間にか、熱せられた地面や空気も元の温度を取り戻し、燻っていた火種も完全に鎮火した頃。ハジメ達の周囲は、妙に光沢のあるメタリックな地面へと変わっていた。その金属質の地面は、巨樹の方へと続いている。

全員の護衛をしていたアレスが危険がないか確認のために巨樹の方へと先行していった。危険が無ければ戻ってくるらしい。

「あれ?」

「……………」

「あらら?」

アレスが向かって、すぐハジメに抱き締められていた優花、ユエ、シアの三人が、突然、ぱちつと目を開いた。

「ん? もしかして……………終わったのか? 体は大丈夫か?」

自分が抱える優花達の異変に、少し心配そうな声音で確認する。優花達は顔を見合わせる、一拍。確信したように頷き合った。

「うん。感覚が戻ってきたみたい」

「……………ん。耐えきつたみたい」

「はい。湧き出していた快樂が綺麗さっぱり消えました」

どうやら、そういうことらしい。正気を失いかねないほどの快樂効果をテイオとアレスと同じように精神力だけで耐えきつたようだ。

行きすぎた快樂は苦痛と変わらない。優花達がどれほどの苦痛に喘いでいたのか、ハジメには想像することしかできないが、今まで経験したことのない厳しい戦いだつたのに違いない。

ハジメは、大迷宮の試練を見事乗り切った腕の中の優花達に純粋な称賛の言葉を贈つ

た。

「流石だ。三人共、よく頑張ったな。お前達なら大丈夫だと確信はしていたが……それでも、うん、本当に流石だよ」

「ふふっ。ハジメが支えてくれたから頑張れたわ」

「……んっ」

「えへへ、照れますね」

既にハジメが三人を抱き締めている必要はないのだが、優花達は誰も離れようとはしない。すると、後ろからハジメを抱きついていた竜姫が口を開く。

「うむ。妾も魔法が使えるようになったしの」

「おう、テイオもお疲れ」

「んんっ……うむ」

ハジメに撫でられて喜ぶテイオ。するとハジメに抱き締められていた優花達がテイオに視線を向ける。

「テイオもありがと」

「……ん、テイオのおかげでも頑張れた」

「テイオさん、ありがとうございます！」

「妾は、思ったことを言っただけじゃ」

「でも、そのおかげで頑張れたわ。ありがと、ティオ」

「……………」

三人の感謝の言葉に、恥ずかしそうに扇で顔を隠すティオ。そんなティオが可愛いらしく思えたハジメは、ティオも自身の腕の中に招き入れ抱き締める。

そして、四人の頬を染めつつ、上目遣いで「もつと褒めて？」とでも言うように、訴えかけるように見上げる姿は、媚薬効果が出ていた時は、優花達のアプローチを無視できたハジメをして、今の素の優花達が見せる魅力は、なんとも抗い難いものがあつたようだ。

無意識に、もう支える必要はないだろうと緩めていた腕に、再び力が入っていく。そこへ、非常に居心地が悪そうな、それでいてちよっぴり不機嫌そうな声が響いた。

「…………ゴホンツ！お邪魔して悪いのだけど、そういうのは全部終わってからにしてくださいかしら？　あと、光輝達の拘束も解いてあげて欲しいのだけど…………って、アレスさんは？」

「ん？　ああ、八重樫。お前も耐えきったようだな。流石、剣士。精神統一はお手のものか？　後、アレスは危険がないか巨樹への道を先行してる」

どこかムスツとしていた雫は、ハジメの純粹な称賛にぼわつと頬を染めた。照れているのか、そっぽを向きながら、若干、早口で答える。

「あ、ありがとう。まあ、剣術を習う上で、祖父や父から心を静める方法はみっちり叩き込まれているからね。少し危ないところだったけれど……というか、光輝達が拘束されているのは私を守るためかしら？ 瞑想に集中して他に対する余裕はなかったから助かったわ。ありがとう南雲君」

「ああ、それくらい構わない。天之川達は……気絶中か。快樂の苦痛に耐えきれなくて意識を落としたんだろう。八重樫、着替えと土壁は用意してやるから、そいつ等を叩き起こしてやれ……フオローは頼むぞ」

「着替え？ 土壁？……っ」

一瞬、ハジメが何を言っているのか分からず首を傾げる雫だったが、なんとなく自分を見下ろすと、次の瞬間、カァーツと頬を染め上げたのだった……。

## 百十二話 傍にいるから

快樂の試練。

その名の通り恐ろしい試練だった。

動かずとも酷く発汗するほどの大変な試練だった。

誰も彼も、全身、濡れそぼるほどべったりとしている。さぞかし、汗でベトついて気持ちが悪いことだろう。

そう、汗で。汗と言ったら汗だ。異論は認めない。と、真つ赤な顔のまましやがみ込んで、キツとハジメを睨む雫の無言の主張。

何度言つても藪蛇になりそうなので、ハジメは視線を合わさなのまま立ち上がった。そつと引き離された優花達も、雫ほどではないが恥ずかしそうに座り込む。

そんな気まずい状況に置かれたハジメに、救いの声が聞こえた。

「ただいま戻りました」

「！」

そう、大樹の方へ確認しに向かっていたアレスが戻ってきたのだ。ハジメの表情は一

気に明るくなる。しかし、アレスはというとハジメの表情を見て、首を傾げながら優花達の方に視線を向けてしまい、全てを察した。

「……………すみません。ちゃんと状況確認してなかった私が悪いです」

すぐに土下座に入るアレス。そんなアレスに、女性陣は少し戸惑いながらも「大丈夫」と声をかけるが、この中で最年長であり、一応、神官の身であるアレスは年下の女性達のあられもない姿を見てしまったことに申し訳なさを感じているらしい。

そんなアレスに、ハジメは肩に手を置いて、話しかけた。

「まあ、アレス。優花達も大丈夫って言ってるし」

「ですが……………」

「大丈夫だって、それにアレス、お前も着替えておけよ。汗で服が濡れてるだろ？」

「あ、そうですね……………このままでは、体も冷えてしまいますし」

「後、坂上の替えの服はアレスのを頼めるか？俺のサイズだと坂上の奴、キツそうと思うし」

「そうですね。私の持つゆつたりとしたタイプの服なら彼も着れると思いますし、了解しました」

そうアレスに話しをつけたハジメは、適当な町で買った予備の服を“宝物庫”から取り出して放り投げつつ、錬成で四方を囲う壁を作り出した。簡易の更衣室だ。

同時に、ボーラも回収する。途端、崩れ落ちる光輝達。鈴は、咄嗟に雫が受け止めた  
が、光輝と龍太郎はゴチンツと痛そうな音を立てて地面に倒れた。勇者とその相棒だか  
ら、きつと問題はない。

「谷口の服は……サイズ的にユエしかないな」

「……ん、今着てるのと似たようなものがあるから、それを出してあげる」

自分の「宝物庫」から、ユエが鈴用の服を取り出している間、雫は視線をシアから優  
花へ滑らせた。

「ねえ、優花。貴女の服を………ごめんなさい。大丈夫よ」

が、優花のある部分を見て、諦めた。しかし、その視線を感じ取った優花の額に青筋  
が立った。

「……ねえ、雫。何処を見たの？」

「ピツ……いい、いや、あのねっ。優花……その」

「聞こえないなあ〜」

今持つ聖杭を全てを飛ばしながらニコニコと満面の笑みで近寄る優花に、雫は快樂試  
練の時みたいに大量の汗を流す。それも、冷や汗だ。

「ごめんなさいっ」

「……ま、冗談だけど」



謝る雫に、優花は怒ってないと苦笑いしながら周りに飛ぶ聖杭を解除する。そして、雫に近付いて耳元で囁いた。

「……………今度は、ホントに怒るからね」

「ピッ」

雫は、今初めて知るのであった。優花を怒らせてはいけない本当の理由を…………。

「でも、そうなる私と私は誰の…………」

優花との茶番が終わり、本格的に雫は誰の服を貸して貰うか悩んでいると、善意のシアが前に進み出る。

「ではでは、雫さんの着替えは私が——」

「勘弁してください」

雫さん。まさかの土下座。シアが「何故です?!」とウサ耳をみよんみよんさせる。

「まあ…………そりやそうだな。俺とアレスは慣れたが、シア。お前の露出過多な服…………服(？)、服(笑)しか持ってねえじゃねえか」

「私の衣服に何か文句でも!?! っていうか、服(笑)ってなんですか?!」

近接戦闘者なのに、女の子の大事な部分しか覆っていない衣服のことである。

「ごめんなさい、シア。貴女の服を着てしまうと私、何かが壊れそうなのよ…………」

「非道いです! ああ、もうっ、これならどうですかっ。優花さん達に買った方が良いつて

言われた服ですけど！」

悲壮な表情で話す雫の言葉に、少しキレ気味のシアが「宝物庫」から露出控えめの動きやすいパンツルック系の衣服を取り出した。

「私は大丈夫です。つて言ったのに、優花さん達がもしもの為に買つときなさい。つて詰められて買ったものですが、やはり私には合わない——それを貰うわ、シア！——へ？」

取り出した衣服を持ちながら少し不機嫌そうに話すシア。しかし、その服を見た雫は目の色を変え、シアの持つ衣服を物凄い速さで受け取った。

「ありがとう優花！」

「え、あの服は、ただ、シアの防寒のた——ムゲツ」

余程、いつもシアが着る衣服が嫌だったらしい。優花に飛びついて軽くキャラがぶれるほど、雫が喜びをあらわにしている。若干、優花が引いている。

そんな中、自分の衣服を軽く否定されたシアが、抗議するかのようにウサ耳をわっさわっさせながら、「解せないです……」と呟いていたが、誰も気に留めなかった。

その後、拗ねたシアはハジメに甘えることで機嫌を取り戻すのだった。

あわや、へそ出し足出し二の腕出し、加えて胸元大胆解放な剣士爆誕の危機を回避し

た雫は、光輝達を叩き起こすと、状況説明をパパッと済ませ簡易更衣室へと促した。

ユエが、魔法で作り出した温水をシャワーのように降らせてくれる。身を洗うと同時に、疲弊した心まで洗われるようだった。

優花達が心身を整えている間、周囲の警戒とアラクネの回収を行うハジメ。周囲一帯も、天井も、そして巨樹までのルートも、かなり錬成したので、空間転移でもしてこない限り、乳白色スライムの奇襲を受けることはないだろう。新魔法「震霆万雷<sup>しんていばんらい</sup>」、<sup>へきれきがごとう</sup>「収束・霹靂牙鳥」のおかげで見晴らしも良く、仮に別の魔物がいたとしても、それは辺り一帯に降り注いだ雷によって塵にされているであろう。なので、ひとまず、この階層の安全は確保されていると考えていい。

もちろん、だからといって警戒を解くことはないが。

「ハジメ殿、見張りお疲れ様です」

考え事をしていたハジメの背後から声がかかった。体を洗い終えて替えの服に着替えたアレスだ。支度が早く済んだらしい。

ハジメは、アレスの声が聞こえたと同時に振り返る。

「おう、アレス。早かったな」

「ええ、グリユーエンの単独攻略の時と違って、安心して攻略出来ますからね」

「……そうだった。お前って、三つの大迷宮を単独攻略した規格外<sup>バケモン</sup>だったな」

ハジメは、思い出す。目の前の男は、ハジメ達と違つて単独で三つの大迷宮を踏破した猛者であること。改めて思うとアレスのぶつ壊れな強さに、若干、苦笑いになるハジメ。

「ハハツ、それを言うなら化け物の私より強いハジメ殿は、それより上の存在ですね」  
「クハツ……そうか？」

アレスの言葉に笑いながら首を傾げるハジメだが、ハジメもハジメで替<sup>スベ</sup>えであつたが、神の石柱を倒した規格外<sup>バケモン</sup>であることを。

「ま、そんなことは置いといて、少し休みてえから少し見張りを頼めるか？」  
「ええ、お任せください」

少し休みたかつたハジメは、アレスに承諾を貰うとアラクネを回収し終えると少し皆とは離れた場所へ歩く。そして、歩いていると少し頭痛がし、体がフラツとよろめく。

「——っ」  
しかし、ハジメは、地面に倒れることはなかつた。誰かに優しく体を支えられたからだ。

「ハジメ、大丈夫かの？」

「テイオか……」

「無理に気張るでない。座るのじゃ」

ハジメは、テイオの言う通り支えられながら座り込む。同時にテイオもハジメに寄り添いながら座る。

「……支度、早かったな」

「妾は、試練に乗り越えるのは早かったからの。余り疲れておらんのだよ」

テイオの答えにハジメは納得する。唯一、テイオは最初から快樂の試練に耐えていたのだ。精神的に疲れているだろうが、身体的には平気なのだろう。

納得するハジメに、テイオは少し心配そうな表情でハジメの義手を握る。

「妾のことより、ハジメ。何かあったかの」

「……気付いてたのか？」

「うむ。妾もじゃが、優花もユエもシア。アレスも気付いておると思うぞ？」

「……心配されないように表情に出さないようにしてたけどな」

「フフツ、愛しの旦那様の異変に気付かない妾達ではあるまいよ」

「クハツ……そうかい」

テイオの言葉に、ハジメは笑みをこぼしながらテイオに握られている義手を握り返す。そして、テイオに何かあったのかを話した。

「……スライム共を駆逐するために魔法を放った時だった。何か干渉されたような感覚があった。それからか、変な違和感を感じてるんだ。まるで、俺の体が俺のではない

ような感覚でな……………」

そう言いながら話すハジメは、いつもなら絶対に感じさせない弱さが滲み出ていた。そんなハジメは、自分の右手をテイオに見せる。テイオは従うように視線を右手に移すと、ハジメの右手は震えていた。

「見ろよ、こんなに震えるのはいつぶりだろうか。……………俺は、恐いんだ。俺が、俺で無くなりそうで……………それで、もしかしたら、体に乗っ取られて……………俺はっ」

「ハジメ」

「テイ——んむ?!」

恐怖で少し冷静さを失い始めているハジメにテイオは、自分の胸にハジメの顔を抱き寄せた。そして、ハジメを落ち着かせるように彼の背中に手を回して優しくさすった。

「大丈夫じゃ。ハジメはハジメじゃよ」

「……………テイオ」

「もし、ハジメがハジメでなくなろうとも妾達が絶対にハジメを元に戻させる。救ってみせる。だって、妾だってハジメに救われたから」

テイオは抱き寄せたハジメの頭を優しく撫でながら微笑む。その姿はまさに美しい妙齡の美女。

「だから、安心するのじゃ。優花も、ユエも、シアも、そして妾も、ずっとハジメの味方

じやよ」

「……………」

「ハジメ。お主が、強者でいたいのは理由は分かる。妾達などの大切な人を守るためじやろ？でも、そんなことを続けていたら、いつかハジメが壊れてしまう。だから、妾達だけでもいい。お主の弱さを見せてほしい。それに、弱さを見たつて妾達は幻滅しない。むしろ嬉しいのじやよ？だって、妾達は、ハジメをずっと傍で支えていたいんじゃない。弱さを見せるといふことは、その相手を心から信頼してることだしの」

「……………」

「だから、いいのじや。ハジメ、今は」

「……………クハッ。ありがとよ、ティオ」

「うむ」

ティオの言葉に、心が少し軽くなった気がしたハジメは、笑みをこぼした。ハジメは、ティオに抱き締められながら本当に彼女は、自分に勿体ないぐらいの「いい女」だと改めて思う。

そして、やはり大切な恋人に抱き締められて心が救われる。彼女の笑みが元気をくれる。同時に、彼女に甘えなくなつたハジメは、

「すまん、ティオ。もう少しだけ、このままでいさせてくれ」

「ふう、構わんよ」

甘えたくなつたハジメに、テイオは嬉しそうに頷いた。そして、ハジメは、テイオの温かさと柔らかさのせいか、フツと眠りに着いた。余程、相当な物を抱え込んでいたのだろう。そんなハジメを、テイオは起こさないようにハジメを動かし、頭を膝の上に乗せて膝枕する。そして、誰もが見ても見惚れるであろう嬉しそうな表情をしながらハジメの前髪をそつと撫でるのであつた。

それからしばらくして、先にながつていたテイオとアレス以外の全員がさつぱりとした様子で簡易更衣室から出てきた。そこで、寝てるハジメに膝枕しているテイオを見て、「自分達もする」といった表情で駆け寄るユエとシアに、「やつぱり、一人で溜め込んでたのね……」と溜息をしながら呟くと、自分に相談しなかつたことに少しムスツとした表情でハジメとテイオの場所へ歩み寄ると、テイオの膝枕で眠るハジメの両頬をムニツツつまむ優花。

その後、優花達に少し怒られたハジメも起き、全員の準備が終わる。ハジメは何か吹っ切れて軽い表情だ。しかし、そんなハジメとは逆に、案の定といふべきか、光輝と鈴、そして今回は龍太郎も物凄く落ち込みようだった。まるで、背中に耐え難い重石おもしでも背負っているかのように項垂れ、特殊な魔法でも使っているかのようにどんよりした



暗雲を纏わりつかせている。

媚薬効果で正気を失っていても自分がしたことの記憶は残るらしい。快樂地獄の果ての人間関係、そして、仲間内の絆を試す——それが、今回の試練だろうというのがテイオの推測だったが、その推測の正しさを証明するように光輝達はギクシヤクしていた。

光輝も龍太郎も、雫や鈴と顔を合わせることなく微妙な距離を取っているし、鈴も、いつもの笑顔もなく、耳まで赤く染めたまま俯いて雫の陰に隠れる。

雫の方も、どうにかフオローしようとひているのだが、事態が事態だけに有効打を打てないようだった。

仲間内で、性的な意味で襲い合いそうになったのだから、その気まずさ、罪悪感が半端ないのは仕方ないことだろう。特に、鈴は女の子だ。仲間とそういう関係になったということだけでなく、痴態を晒してしまったという点でも、精神には特大なダメージが入っているはずだ。

「鈴、忘れましょう？ あればっかかりは仕方ないもの。一線は越えなかったのだし、忘れてしまうに限るわ。誰だって、思い出したくない思い出の一つや二つあるものだし、ね？」  
「……………シズシズ」

「ほら！ 私なんて、彼の行きつけのお店に突撃した挙句、彼を探すの手伝わされて、席に座らず、十分ほど店内をうろちよろしたのよ？ 周囲の客が、あの時、私をどんな目で見

てたのか……思い出しだけで鬱になるわ……」

ちなみに、突撃の首謀者は香織だ。店内で席に座らずうろちよると歩き回る美少女二人……。結果、二人は出禁を食らった。悲しい事件である。

ハジメ達が雫に同情するような眼差しを送る。雫は「そんな目で見ないで……」と眩しきながら、顔を覆ってしまっている。

「シズシズ。……その、ドンマイ」

「やめて、鈴。そんな励まし方されると更に鬱になりそうだから」

「……ふ、くふふ。出禁を食らうシズシズ……ぶくく」

「鈴、笑うのは流石に酷いわ……」

そう言いながらも、鈴が笑ってくれたことに、雫はどこかホツとしたような表情になつた。

どんな慰めも効きそうになかったので、仕方なく記憶の奥深くに封印していた黒歴史を取り出し、自虐ネタで「恥ずかしさの共感」を狙ってみたのだが……

強烈なオウンゴールの決めた甲斐があつたようで、鈴の精神は少し持ち直したようだ。流石フオローの達人。時には身を切ることも厭いとわない。天晴れである！と、ハジメ、優花、ユエ、シア、テイオ、アレスの六人は心の中で拍手を送った。

そんな雫と鈴の様子を見て、俯うついていた光輝が顔を上げた。

「……南雲、その……面倒をかけた。止めてくれて感謝するよ」

「ああ、そうだった。助かったぜ、南雲。マジでありがとよ」

光輝に続いて、ずっと気まずそうに顔を背けていた龍太郎がハジメに礼を言った。

「いや、礼をされることでもねえよ。ただ、同級生のヤツてるところを目にしたくなかっただけだ。それよりも落ち込んでないで、次の試練に向けて気合い入れとけ」

そう、素つ気ない態度で返事をするハジメ。本当に本人にとつてはどうでもいいことらしい。光輝と龍太郎は顔を見合わせると、思わず苦笑いを浮かべる。

どうでもいいといった感じに言われたが、実際、大切な仲間の女の子達を傷つけずに済んだので、多少は気まずさも晴れた。

「でも、南雲君。大丈夫なの？ 貴方、少し疲れてそうだったじゃない？」

「……大丈夫だ八重樫。少し魔力を使い過ぎただけだから、心配はいらねえよ。それより、俺の心配より次の試練に向けて集中しとけ」

「え、ええ……分かったわ」

内心、雫にも気付かれそうになったことに少し焦るハジメだったが、なんとか誤魔化すことができ表情に出さないものの、ホッとした。

その後、ハジメ達は乳白色スライムに襲われることもなく順調に進み、遂に巨樹のもとへ辿り着いた。今回も同じく、巨樹の幹に洞が出来上がる。中に入ると、案の定、洞

は塞がって密室となり、前と同じく足元で転移陣が輝いて、ハジメ達の視界を強烈な閃光で真っ白に染めた。

「ん？ 転移、したよな？」

「見て、ハジメ。あつちに出口があるわ」

ハジメ達が転移した場所は、巨樹の洞とそっくりな洞の中だった。一瞬、転移してないかと錯覚したハジメだったが、優花の指さす方向を見れば、なるほど、確かに転移したのだと頷く。

ハジメが周囲を見渡せば、誰も欠けずに転移してきた様子。横目で、アレスに視線を向けると、アレスは首を横に振った。偽者はいないらしい。つまり今回はそのまま進めということだろう。

ハジメ達は一つ頷き合うと、光が差し込む出口に向かって行つた。洞の出口から外に出たハジメ達は、そのあまりの光景に、一瞬言葉を失うことになった。最初にぼつりとこぼすように所感を口にしたのはハジメだ。

「これは……まるで、フェアベルゲンみたいだな」

優花達も「確かに」と頷く。

洞の先は、そのまま通路となっていた。だが、まずその通路が普通でなかった。ハジメ達を導くように伸びる頑丈そうな通路は、なんと洞から続く巨大な枝そのものだった

のだ。幅は五メートルはあるだろう。

ハジメ達が背後を振り返れば、そこには外周の大きさを目測できないほど巨大な木の幹が存在していた。つまり、ハジメ達がいる場所は、巨大な木の、これまた巨大な枝のその根元というわけだ。そして、伸びゆく枝の通路は、同じように巨大な木のあちこちから突き出している他の枝通路と空中で絡み合い、複雑な空中回廊を作り出していた。

ハジメは、「フェアベルゲンのよう」と称したが、それでは表現的に不足だろう。規模、複雑さ、そして壮大さでは比較にならない。ともすれば、目の錯覚すら起こしそうな、トリックアートじみた巨大空中回廊だ。

「地下空間……であることは間違いないさそうですね」

頭上を見上げれば、そこには石壁でできたような天井が見える。馬鹿でかい地下空間の中心に、巨大な木が天と地を結ぶようにそびえているようだ。

ただ、異常なのは、巨大な木の先が見えないこと。果たして、世界にそう何本もそうあるものなのか……

「……大樹？」

ユエが推測を口にした。シアが同意するように頷く。

「そういうことになりますね。ここは大樹の真下の空間ってことですか」

「でもそれだと、地上に見えていた大樹って……」

優花が、スケールの大きさに圧倒されたような震える声音で呟く。すると、顎を手で摩りながら思索していたティオが口を開く。

「ふむ、これが大樹ウーア・アルトで間違いないまい。そして、地下の幹から枝が生えていることは、本当の根はもつとずっと地下深くにあるということじゃ。ならば、地上に見えていた部分は……大樹の先端部分に過ぎなかった、ということになりそうじゃの？ いやはや、長く生きてても、まだ世界には驚ろかさされる。まさかあれが、ほんの一部だったとはのう」

「ほ、本当の大きさはどれくらいになるんだ？」

光輝の引き攣ったような声色での疑問に、答えられる者はいなかった。皆が皆、改めて大樹の凄まじいまでの巨大さに度肝を抜かれて頭上を仰いだ。

その時だった。

巨大な大樹の幹が淡く光を始めた。突然のことに、驚くハジメ達。しかし、これが次の試練の予兆かもしれないと戦闘準備に入る。

しかし、それは違った。

「っ?!」

「ハジメ?!」

ハジメの声にならない声が聞こえ、全員がハジメの方へ視線を向けると、驚愕し、優

花が声を上げた。それは、何故かハジメの足元だけ紅色の転移陣が現れており、ハジメは身動きが取れなくなっていたのだ。

「ハジメ（さん）?!」

「ハジメ殿!」

「南雲（君）?!」

全員も、驚きのあまり声を上げる。そして、優花達は、何とかしようとハジメに近寄ろうとしたが、

「……そういうことかよ」

ハジメは、何かを察しような表情になると、顔を上げ優花達に視線を向けて、口を開いた。

「そっちは、頼んだ」

短い一言。しかし、その表情は不敵に笑っていた。そして、それを最後にハジメは何処かへと転移された。

「ハジメエエエエ!!」

~~~~~

光が収まり、目を開けたハジメは、自分が転移された場所を瞬時に確認する。

「……………(ハ)は」

そこは、全く覚えのない場所だった。理想世界での試練と同じように薄暗く、  
「夜目がなければどうしようもできない場所だ。そして、一番極めつけなのは……」

「本当に、此処は大樹の中なのか？」

そう、この場所は今までのいた場所と違っていた。今までは、密林や樹海など、壁や天井なども木であつた。しかし、この場所の壁も天井も石レンガなどで囲われたような場所なのだ。当然の疑問である。

すると、

「お待ちしておりました」

「?!」

背後から、聞いたことのない女性の声が聞こえたハジメは、瞬時に距離を取って、背後へと振り返って、ホルスターからドンナーを取り出した。

「誰だ？」

ハジメは、警戒心を顕にしながら目を細めて、ドンナーを向ける。同時に、視線の先の人物を見る。そして、驚いた。その人物は全て木で作られた森人族だったのだ。

「森人族のゴーレム、か？」



「いいえ、違いますわ」

ハジメの言葉に、森人族の女性は首を横に振りながら否定する。そして、ハジメに視線を向き直した。

そして、ハジメに一礼すると、話し始めた。

「申し遅れましたわ。わたくしの名はリユーテイリス・ハルツイナ。ここのハルツイナ大迷宮の主であり、この場所の守護者。お待ちしておりますわ、機神の力を持つ資格者様」

そう言って、微笑む森人族の女性。

ハジメは驚愕した。自分の目の前に現れた人物。

それは、解放者の一人であり、ハルツイナ樹海の初代女王リユーテイリス・ハルツイナ。その人であった……。

## 百十三話

## リューティリス・ハルツィナ

不敵に笑って、消える愛しの人。

助けようと必死に伸ばした手……しかし、それは、消えゆく彼には届かなかった……。

ハジメが何処かへ強制的に転移され、優花は消えるハジメへ必死に伸ばした手が力を失ったかのように下がって手に着き、そのまま優花は地に伏した。

「……ハジメ」

力の無く眩かれた声。生気が感じられない瞳。愛しの人を助けられなかった無力感。最初の試練の時は、ハジメに擬態した怒りが勝って再会するまでは平気でいられた。しかし、今回のはオルクスの時のように目の前でいなくなったハジメを見て、悲劇と蘇トラウマってしまった優花は、思考が定まらず、足にも上手く力が入らなくなってしまい立ち上がれなくなっていた。

そんな優花の姿に、誰もがかける言葉が見つからず顔を俯かせた。ユエとシアが優花の傍へと急いで歩み寄ろうとした時だった。

「優つ——!!」

声をかけようとしたシア。しかし、何処からか音を捉え、ウサ耳がピクピクと動き出した。何の音かと、ウサ耳をピコピコと動かしながら、音源を辿っていく。

ガサガサ、ザワザワと微かに聞こえてくるそれは、何故かやたらと生理的嫌悪を覚えるもので、どうやら、ずっと下の方から響いており、段々、此方へと向かってきているのか、音が大きくなっている。

シアはウサ耳障りなその音に顔をしかめながら全員に伝えた。

「皆さんっ、下から何かが来ます!!」

シアの唐突な叫びに、全員がビクツと体を震わすが、すぐに戦闘態勢に入る。しかし、優花だけは、悲劇トラウマから立ち直れずにいる。

もし、此方に向かう敵が強大な場合、優花が戦えないとなると非常にマズイ。全員の脳裏に危機感が募る。

「優花さん! 敵です!」

「……優花、立って!」

「優花殿!」

シア、ユエ、アレスが優花を必死に呼ぶ。

「優花、立ちなさい!」

「ユウカちゃん！」

「おいっ、園部！」

「園部さん！」

続いて、雫、鈴、龍太郎、光輝も優花の名を呼ぶも、聞こえてないのか、もしくは、体が動かないのか優花は地に伏したままだ。すると、ずつとダンマリだったティオが足早と優花へ近寄ると声をかけた。

「優花」

「何、ティ——」

声をかけられ、ゆっくりながらも振り向いた優花。直後、パァン！と乾いた音が地下空間に響いた。ティオが優花の頬を叩いたのだ。

「っ、何するのよー」

突然、頬を叩かれ、痛みと怒りで眉をしかめながら優花は、ティオをキツと睨む。しかし、ティオの方は普段なら優花に向けるはずのない落胆の眼差しを向けながら見下ろしている。そして、眼差しを優花に向けたまま口を開いた。

「優花よ。お主は、ハジメが居なくなってしまうたら何も出来ない女なのかの？」

「何を言っ——」

「言葉通りじゃよ。愛しの人が目の前から消えてしまったら何も出来ない、とな」

優花は黙る。テイオの言葉の意味を察したからだ。そして、消えいりそうな声音でボソッと呟いた。

「……………テイオは、大丈夫なの？」

「何を言っておる？妾もハジメが無事なのかと、今でも、すぐに探しに行きたいくらい凄く心配じゃ。それは、ユエも、シアも同じじゃ。でも、ハジメは、言った。『頼む』とな。では、妾達がやるべき事はただ一つ。此処を切り抜けてハジメと再会するまで生き残ることが大切と妾は思う」

「……………」

優花は思い出す。ハジメが、転移される前に自分達に向けた言葉を……

『そっちは、頼んだ』

不敵に笑いながら言った彼の言葉。

それは、自分がいなくても大丈夫だという絶対的な信頼を置いている自分達に向けての言葉。

その言葉に対して、今の自分はどうか？ハジメの言葉<sup>約束</sup>を破っているではないか。

「(それは、嫌っ)」

ハジメを一人にさせない。

それが、あの時から自分が決意したことだ。

しかし、それ以前に、大好きな彼を信頼してないなんて言語道断だ。優花の瞳に、生気が宿る。トラウマで力が入らなかつた足は、今はしっかりと力が入る。

そして、今度はしっかりと立ち上がった優花は、目の前にいるティオに近付くと両頬をつまんだ。ティオもやり返す。すると、二人の間で「プツ」と笑みをこぼしている。

「ありがとね。ティオ」

「ふふ、大切な仲間の為なら当然のことじゃよ」

ニツと笑い合うと二人は、戦闘態勢に入る。優花は、天使化になると、十の聖杭を出現させる。その姿を見て、隣のティオは嬉しそうに目を細めながら微笑んだ。

優花は、自分より年下であり、まだ未熟な子供だ。

なら、先に生まれた者として、

辛い記憶トラウマを持つ者として、

大切な仲間家族として、

厳しくとも、彼女のために支えようと。ティオは決めたのだった。

「ごめん、皆！迷惑を掛けたわ」

トラウマから立ち直つた優花は、すぐにユエ達に謝罪しながら隣に立つ。

「……ん、平気」

「優花さん、よかつたです！」

「優花、よかった！」

ユエ、シア、雫から復帰に笑みをこぼし声をかける。鈴、龍太郎、光輝も優花の復帰でホッと一安心する。だが、安心の束の間、アレスからの声が響いた。

「皆さん！優花殿の復帰は良かったです、私の耳でも聞こえるぐらいに近付いてます！気を引き締めなさい！」

アレスの一喝に、優花達も気付く。自分達に聞こえる。ガサガサと、生理的に受け付けない音が聞こえてくる。優花達も顔を青くさせる。

だが、乗り越えるんだ。

優花は口を開く。

「ハジメ、待ってて！私は絶対に乗り越えるから！」

そんな言葉を言っても、今、此処にいないハジメには、聞こえないだろう。しかし、試練を乗り越えるための糧として、優花は呟くのだった。

~~~~~

「資格者？」

その同じ頃。転移されたハジメは、目の前の木のゴーレムみたいな人物？で、解放者の一人であるリユーティリス・ハルツイナと対面し、リユーティリスが話す内容に、沢

山の疑問が浮かび上がってしまい困惑している。

そして、その中でもリユーティリスがハジメを「資格者」と呼ぶことに首を傾げていた。すると、ハジメの言葉に、リユーティリスは、難なく答えた。

「ええ、そうですね。貴方は機神の力を持つ者。唯一、この試練を受けることが出来る者。つまり、資格者です。でも、本当に、わたくしも、御伽噺おとぎばなしの類いと化していた伝承が真実なことに大変驚いておりますわ」

「伝承？」

「ええ、『機神、現れる世。その世、激戦の時代となりうる。天と地による大戦来たれし、だが、これで縛りは終焉となる。天は堕ち、この世に自由という名の変革をもたらす』と、今の樹海の住人達には、知られていない。いえ、忘れられたかもしれませぬわ。だって、この伝承は、わたくしが幼い時から、御伽噺感覚で伝えられていた伝承ですから」  
そう言つて、フフツと笑みをこぼすリユーティリス。しかし、ハジメはまだ沢山の疑問があるが、まず一番聞きたいことを口にした。

「アンタは、本当に、解放者の神代魔法の扱う者の一人、リユーティリス・ハルツィナなのか？」

その言葉に、リユーティリスは無言で微笑んだまま首を縦に振つた。

「ええ。わたくしは、正真正銘、本物のリユーティリス・ハルツィナでありますわ」



「じゃあ、あれか？ミレデイと同じような感じで、魂魄魔法で魂魄をその木製のゴーレムに移動させたのか？」

「そうですわ。でも、ミレデイさんと違って、わたくしの魂魄は、この大樹に移動させていますの」

「は？」

魂魄を移動させ、生きていることに納得したハジメだったが、その移動先の巨大さに動揺を隠せず、間拔けな声が漏れた。

「は？ちよ……なんて？」

聞き間違いだらう。そんな物理的にスケールが大き過ぎることじゃないだろう。しかし、現実違った。

「だから、わたくしの魂魄は、この大樹ウーア・アルトと同化していて、この姿は、大樹の力でわたくしの本来の姿を模倣した姿にしてるだけですわ」

「マジか……」

リユーティリスの答えに驚きを隠せないハジメ。しかし、納得はいく。理想世界で聞いたあの声は、リユーティリスの声だろう。それであるなら、リユーティリスは、大迷宮へはひひの主としても難しいだろう。しかし、この大迷宮の大元である大樹と同化していれば可能であると思えるからだ。

それに、彼女がリユーティリス・ハルツィナ本人なら、この大迷宮の試練を作った人物。つまり、あの性格の悪い試練を組み込んだ張本人。ハジメは引き攣った笑みを浮かべながら額に青筋が浮かぶ。

「そうか、そうか……。てめえが、あんな性格の悪い試練を……」

「つ……その目、ん……んんっ。コホンっ、申し訳ありません。貴方様の思うところがあるかもしれませんが。しかし、わたくしは、乗り越えて欲しいのです。たとえ、どんな佳境でも、仲間との絆は繋がっていて欲しい。それが、この大迷宮の在り方。わたくしが認めた者です」

そう言つて、ハジメの言葉を返すリユーティリス。何故か、頬を赤らめながら、ビクンツと体を震わせたのは、分からないが……。

「そうか。まあ、俺も試練についてはいい。だが、一つ聞きたい優花達は大丈夫なのか？」

「はい。貴方様のお仲間様達は、最終試練へと突入しましたわ。乗り越えられるか分かりませんが……」

リユーティリスの言葉に、ハジメは、「そうか」と短く返した。だが、ある事にハジメは気付く。

「おい、俺はどうなるっ？」

「そこは、安心してくださいませ。今から行う試練が貴方様の最終試練とします。神代魔法も獲得できますわ」

「それは、ありがたい。で、俺の……資格者の試練というのは？見渡す限り、それらしいものがないが……」

辺りを見渡すハジメ。本当にこんな場所で試練を行うかと疑問らしい。

「ふふ、大丈夫ですわ」

リユーティリスは、微笑みながらパチンツと指を鳴らした。いや、木のゴーレムでも指を鳴らしたことに驚きだが、今は、放っておこうとハジメは思う。すると、リユーティリスの傍に石の柱が地面から出現した。

そして、リユーティリスは、石の柱に手をかざすと、口を開いた。

「大樹ウーア・アルトの守護者として命じます。機神の間よ、試練の場と化しなさい」

その言葉と同時に、薄暗かった場所が明るくなり、ハジメとリユーティリスのいた場所の全貌が明らかになった。

「……………闘技場、か？」

そこは、ハジメが言うように闘技場のような場所だった。広さも「竜化」したティオが四体が入るほどの大きさだ。しかし、観客席のような場所はなく、ただ、石壁の上に設置されていた。

そして、気が付くとハジメの目の前からリユーティリスが姿を消していた。それに、気付いたハジメは、急いで辺りを見渡す。

「おい、何処に行つた！ リユーティリス・ハルツィナ！」

「わたくしは、此処にいますわ」

ハジメの声に答えるリユーティリス。しかし、何処を見渡すも姿が見えない。しかし、「わたくしはここです」と言われ、声がする方向に視線を向けると、玉座から一本の木が幹が生え、そこからメキメキと音を立てながらリユーティリスが現れた。

「ふふ、驚きましたか？」

「ああ、驚いたよ」

リユーティリスに笑みをこぼすハジメ。大樹に魂魄を移動させているから、大樹の中ならどこでも行き来可能らしい。

「それで、俺の試練はなんだ？」

「こちらですわ」

そう言つてリユーティリスは、玉座の近くに刻まれていた魔法陣に触れると、一気に光り輝いた。すると、ゴゴゴツと何かが動く音が聞こえると共に玉座の下の石壁がフツと消えた。消えた石壁の奥は薄暗くよく見えないが、直後、明かりが灯つた。

そして、明かりが灯されて奥の光景が顕になった。

「……………これは」

ハジメは、石壁の奥に隠されていたものに唾然とした。自分の目を疑う。そこから、感じる重圧に肌にビリビリと痺れている。

「驚くことも無理もありませんわ。わたくしも、初めてコレを見たときは有り得ないと思いましたわ……………」

「そりやそうだ。だって、こいつぁ……………」

そこにあつたのは、見たことない鉱石に、アザンチウム鉱石を使って修復しているような関節機構に装甲、四つの足に銃器を武装された両腕、背中に多くの武器を武装し、胸部には見たこともない鉱石が埋め込まれているゴーレム。そして、この世界では到底、作れることが不可能な技術。

「銃器に、多くのこの世界にない武装……………」

「その腕の装甲のアーティファクトは、ジユウキと言うのですね。オーちゃんさんにも分からなかったアーティファクトなのに……………」

リユートイリスの言葉に、ハジメは、苦笑いしながら答えた。

「そりやそうだ。この銃は、俺達の世界にあつて、この世界にはない武器だ。たとえば、あのオスカー・オルクスでも分からないだろうな」

「別の世界、ですか……………ホントに世界は広いですわ」

「それは、同意だな。で、コイツはなんだ？」

ハジメは、ゴーレムを指差しながらリユーティリスを問う。

「このゴーレムは、遙か昔に動いていたと伝えられています。わたくしが女王に、ウー・ア・アルトの守護者となった際に初めて見たときは、腕や足などの部分が破損して動いていませんでした。……でも、圧倒されてしまいました。動きもしない。壊れている。あの状態でも、わたくしは負けてしまうと感じてしまいましたわ」

リユーティリスは、ハジメの隣へと移動すると、視線をゴーレムに向いて、話を続ける。

「わたくしは、ゴーレムが戦力になると思い、修復しようと思いましたが。しかし、生産系の天職でもありませんでしたし、無駄に終わってしまいましたわ。そんな時に、教会と連邦軍が神代魔法を持つわたくしの確保の為に樹海へと攻めてきました」

「連邦軍……帝国みたいなもんか」

「ええ、貴方様の記憶で見せて貰った帝国と同じようなものですわ。連邦軍は、教会という強力なバックがいたため、わたくし達の戦況は悪いままでした。でも、そんな状況の時に駆けつけて下さいました」

「……ミレディイカ？」

「はい。ミレディイカさん達、解放者の皆様のおかげで、わたくし達は勝利し、解放者の一員

となりました。そして、沢山の仲間ができ、大切な友達ができて、幸せな日々でした」  
「……………」

木のゴーレムであるのに、リューティリスの話す姿は、ハジメでも微笑んでしまうほど、嬉しそうな表情だった。

「教会との決戦も勝利し、わたくしやミレディたん達神代魔法を持つ七人が神域へと向かい、あのエヒトを倒せました。……………ですが、エヒトが封印していた四柱の神には、為す術なく敗北してしまいましたわ……………」

今でも、鮮明に覚えている。

数多の龍を創り操る龍神。

血を啜り、血を操る鮮血の女神。

神の使徒を遥かに超えた力を持つ戦乙女の女神。

そして、化け物としか言い表せない破壊の神。

そんな四柱相手に解放者七人は敗北した……………。

地上も、自分達が居ない合間に、竜人族の裏切り、使徒達の覚醒などの度重なる不幸によって、戦況がガラリと変わり一転した。解放者は天も、地上でも敗北したのだ。

リューティリスの表情も一変し、暗く沈んだ表情だ。

「そして、敗北したわたくし達は、反逆者として呼ばれ、神代魔法を持つわたくし達七人

は未来の為に大迷宮を創りました。その時に、わたくしが頼んで七人である程度修復したの……」

「このゴーレムって、わけか……」

「ええ、そうですわ」

ハジメの言葉に、リユーティリスは肯定するとゴーレムを真つ直ぐと見つめながら言葉が続ける。

「神代魔法を持つわたくしを含めた七人が、協力して修復したゴーレム。ある意味、わたくし達の集大成。オーちゃんさんで言う最高傑作……名を機神兵デウス・ソルジャーですわ」

「機神兵……」

そう言つて、ゴーレム改めて機神兵を見つめるリユーティリス。ハジメも機神兵の名を呟きながら機神兵を見る。因みにオスカーがパイダー百式という名を提案したが、全員が却下したのは当然であつた。

機神兵を見つめるハジメは、ハツと試練のことを思い出すと、隣にいるリユーティリスに話しかける。

「そーいや、試練内容は？あの機神兵を倒せか？」

「いえ、違いますわ。機神兵は強力ですわ。もしかしたら、貴方様より強いかもしれません。だって、この機神兵は、魂魄を移動させる前のわたくしや仲間達と協力して戦つて



もギリギリ勝てたぐらいですから……」

「なっ……………」

ハジメは、リユーテイリスの言葉に言葉を失う。それは、リユーテイリスが言っていることは、ミレディやオスカーなどの七人の神代魔法遣いと戦えるほどの力を機神兵は持つていることになる。

因みに、ハジメが大戦の時に連れていけなかったのか？と聞くと、機神兵は大樹の外には出られないようになっていっているらしい。

「んじゃ、試練内容は？」

ハジメの質問にリユーテイリスは、機神兵の胸部に指を差した。

「胸部に取り付けられた黒の鉱石を奪ったら試練はクリアとしますわ。まあ、倒せるなら倒してもいいですが……………」

リユーテイリスの言葉に、ハジメは頷くと「クハツ……………」不敵に笑みを浮かべた。

「オーケー、了解した。じゃ、初めてくれ」

ハジメの言葉に、リユーテイリスは無言でコクリと頷くと玉座へと移動し、魔法陣に手をかざして、機神兵の命令する。

「動きなさい、機神兵」

その言葉を引き金に、ゴゴゴツと音共に、機械が作動するような音が闘技場内に響き

渡る。機神兵の瞳が息を吹き返したように紅い光を灯ると同時に動き出した。

「では、機神の試練——始めですわ!!」

そして、リユーティリスの開始の言葉の直後、ハジメのドンナーから放たれる紅い閃光と、機神兵が片腕の銃器から放たれた巨大な極光がぶつかり合うのだった……。

## 百十四話

## P V N

閃光と極光がぶつかり合いハジメと機神兵デラスフォルジャーの間に破裂音と共に巨大な爆発が起きる。それを利用して、ハジメは追撃と言わんばかりに魔法をトリガーを引く。

「『雷閃』！」

雷の斬撃が爆煙が舞う中、一直線に機神兵へと迫る。しかし、機神兵は分かっていたかのように右へ移動し、雷の斬撃を避ける。そして、背中のミサイルポッドから数十発のミサイル（魔剣）を発射させる。

ハジメは、難なくミサイルの群れを避けるが、なんとミサイルは旋回し、またハジメを狙う。

「追尾ホーミングか！」

ミサイル（魔剣）は、追尾性能とバラバラな属性魔法が付与されており、一つでも当たれば追撃を喰らう可能性が高い。ハジメは『魔力探知』、『熱源探知』を駆使して片足を浮かして左へ、右へと避けていく。が、その間にもハジメは攻撃の手を緩めることはなく、『宝物庫』から『オルカン』、『四機の』『クロスビット』を取り出すと、すぐさ

ま機神兵に狙いを付けると十二発のロケット弾を放った。クロスビットで、残りのハジメを追うミサイルをクロスビットのスラッグ弾で破壊していく。

その間に、機神兵へと迫る十二のロケット弾を、機神兵は四つの足を駆使して、普通のゴーレムでは、不可能な機動性で避けていく。そして、最後の二発を避けた時に、一つの影が機神兵の前に突然と現れる。

「取った!」

ハジメだ。

機神兵が、自分の放ったロケット弾を避ける間に、*“紅翼”*を発動して、その紅の翼で急接近していたのだ。ハジメは、すぐに機神兵の胸部に取り付けられた鉱石を奪おうとしたのだが……

「——っ?!」

突如、物凄い強烈な衝撃がハジメを襲う。

機神兵に殴り飛ばされたのだ。機神兵の魔力が込められた鋼鉄の拳に、ハジメは一旦、鉱石を奪うのを止め、顔を守ろうと*“金剛”*を発動しながら*“竜鱗化”*もさせた両腕で防ぐも、尋常ではない膂力に一気に吹き飛ばされたハジメは、そのまま、一直線に闘技場の壁に激突してしまう。

「~~~~!!」

壁への激突は、背中も“金剛”と“竜鱗化”のおかげでダメージが少ないものの、機神兵の一撃を防いだ両腕は、竜鱗は砕け剥がれ落ちていた。左腕は、義手のため平気なのだが、生身である右腕は、竜鱗はハジメの皮膚を硬質化させたもの、つまり剥がれ落ちたところから血が滴り落ちる。右腕から激痛が奔り、声にならない声上がる。

しかし、そこで痛みにも苦しむだけのハジメではない。吹き飛ばされる寸前に真上に投げて置き、ちゃんと機神兵にプレゼントを残していた。それは、手榴弾や閃光弾だ。

直後、機神兵の周りに爆発と光の閃光が機神兵の視界を襲う。その隙にハジメは、再度、機神兵の接近を試みる。視界はぼやけるものの、“魔力探知”と“熱源探知”を発動して目標へと駆けていく。が、

「！」

感じ取った。前と背後から、自分へと向けた強烈な殺気を。

ハジメは即座に、ストンと腰を落とすと左へとスライディングして移動する。すると、ハジメが今さっきのルートから爆発音が聞こえ、爆風が襲う。そこで、察する。あの時、感じ取った殺気とは、自分を狙って放たれたミサイル郡だと。

「チツ、そうだった。奴はミレディと違って本当にゴーレム。視界を潰しても意味ねえな……」

面倒だ。と、ハジメはそんな感想を抱いた。ミレディ以上の機動性、耐久性、攻撃の

幅広さ、全てが機神兵に備わっていると断言してもいい。

だが、

「関係ねえ！」

ハジメは“紅狼”を発動する。全身に紅い雷が纏い出していくと、赤雷によって強化された脚力で一気に機神兵に詰め寄る。

「ガアッ!!」

“竜鱗化”、“金剛”、“衝撃変換”、“集中強化”、“体を纏う雷を右の踵かかとへと集ませ雷の鎌へと形成させると、機神兵の肩の関節部に目掛けて踵落としをする。しかし、機神兵も即座に左腕で関節部を守ろうと防御体勢を取った。が……………

それが、ハジメの狙いだっただけ。

ハジメは、クロスビツトで集中的に頭部にスラッグ弾を撃ち放つ間に、空中で無理矢理に体を動かして、本来の狙うべき目標。機神兵の馬鹿げた機動性の源である四つの脚部の内の一つを蹴り壊したのだ。

バキインツッ!と金属が壊れる音が聞こえたと同時に、機神兵が少しよろめいた瞬間、ハジメは更に“空力”と“天歩”を発動して、体勢を戻して、機神兵の頭上へと移動する。そして、右足と同じような強化で機神兵を殴り飛ばす。機神兵も、これには上手く対処が出来ずに地面に叩き着けるのだった。

「……?!」

リューティリスは、目の前の人間が自分達の最高傑作をたつた一人で地面に叩き付けた光景に驚きの余り玉座から勢いよく立ち上がった。リューティリスは、ハジメのことは彼が迷宮に挑む際に記憶を読み取って、強さはある程度、把握していた。が、南雲ハジメというだった一人の人間が、自分を含めた七人の神代魔法遣いがやつとで倒せる程の機神兵を地面に叩き付けたのだ。

そんな光景を見て、黙って見てはいられないなかった。驚かすにはいられないなかった。玉座に座ったままではいられなかった。生きた体ではないのに、リューティリスの魂魄が自体が興奮してしまい、体が高揚する。ゾクゾクと震える体は、木で作られた体であるのに体温が上がるのを感じてしまう。そんなリューティリスは、熱の籠った眼差しをハジメへと向ける。

「んんっ……まさか、ここまで戦えるとはわたくし、嬉しいですわあ」

そうハジメに、称賛の言葉を送るリューティリス。ハジメも倒れたままの機神兵の警戒をしながらの話に耳を傾けている。

「でも、足を一本壊しただけで、良いとは思わない方がいいですわ。ここから機神兵の本気なのですから……」

その言葉が、リユーテイリスが機神兵と戦うハジメに向けてへの言葉だった。

リユーテイリスの話聞いていたハジメは、機神兵が立ち上がるまでの間に鉱石の回収を試みるも、肩から開かれた姿を顕にした砲門から数々の魔剣が射出された。ハジメは、口元を歪めながらすぐに後退して機神兵から離れたことで魔剣の攻撃を受けずに済んだ。

だが、それで終わるはずがない。後退したハジメの周りに腕が二本入る程度の無数のゲートが出現する。しかし、それは自分の中でも、ユエでも、アレスのものでもない。そのことにヤバイと感じたハジメは、すぐさまクロスビットを呼ぶと同時に、四点結界を発動させ身を防いだ。すると、ハジメの思った通り、周りを取り囲んでいたゲートから爆裂系の魔法が付与された魔剣達が射出されたのだ。

ハジメの頬から冷や汗が流れ出る。

それもそうだ。目の前の敵が、機神兵ミレディ達解放者の神代魔法なのだ。

「神代魔法が埋め込まれたゴーレムかよっ」

ハジメは、結果内で機神兵の奥の手に苦い表情になる。しかし、機神兵の変化はそれだけでは収まらなかった。

機神兵が姿を変え始めたのだ。壊した脚部は再生したかのように元通りになると、



そのまま新たに凶暴なフォームへとなり、腕も両肩から一つ一つ新たな腕が展開された。新たに現れた腕は、元々つけられていた腕とは違い、武装されず、人形のように細い腕だった。だが、武器はメイスと斧ハルバード槍という似つかわしくない武器を装備している。

そんな変貌を遂げた機神兵に、ハジメは苦笑いをこぼす。

「ラスボスにありがちな第二形態かよ」

冗談で、そんな事を口にしながら、新しく装備された近接武器のせいで近接戦闘も危なくなり、難易度も格段と上がったことに頭を悩ますハジメだが、やるしかないと覚悟を決める。

ハジメはクロスビットの四方結界を瞬時に解除すると、機神兵の元へと走り出しながら、「宝物庫」から漆黒の大槍「神喰雷槍」を取り出した。と、同時に、目標に向けてコートコートの裏に隠し持っていたポーラを投げ飛ばした。

機神兵は、ポーラを振り払おうとする。しかし、それが悪手となり、ポーラは、機神兵の四つの腕に絡みついたポーラは、球状の錘から波紋を出しながら空中に留まり、身動きを取れなくする。

暴れ出す機神兵。しかし、そんなに簡単に拘束は解かれないだろう。その隙に、ハジメはここまで走ってきた間に、神喰雷槍に貯めた魔力を一気に解放させる。

漆黒の大槍が紅い魔力を纏い、敵を喰らわんと暴れ出すような勢いで魔力の輝きが増

していく。

「神喰<sup>カミグライ</sup>雷槍——起動!!」

と叫んぶと共に、神喰雷槍を身動きが取れない機神兵へと突き刺した。空間をも貫き通す神速の一撃に、闘技場内に魔力の波紋が波打つ。その一撃にハジメはやつたと、笑みを浮かべるもすぐに、その表情を崩す。

「はっ。」

ハジメから間拔けな声が漏れる。それもそうだ、ハジメの大技を機神兵は、魔力を最大起動させた神喰雷槍をもその装甲は貫き通さず、傷が多少できただけで何事も無かつたように機神兵は、挑戦者<sup>ハジメ</sup>を「これが、お前の本気か?」と言っているのか、ハジメを見る。

神の使徒も、神をも貫く大槍の一撃。しかし、機神兵の装甲も破壊することも出来ず、刃すら通っていない。ハジメは、離れようと後退する。

「っ?!」

が、右肩に激痛が奔る。ハジメの表情が歪んだ。チラリと、右肩を見ると、機神兵の頭から先端が尖った細長い金属の棒がハジメの右肩を抉り貫いている。そして、何かが生きてるかのように右肩の骨や肉に絡み付いているせいか、抜き取ろうとしても、取れない。

その時、ボーラの拘束が剥がれた。メイスの持った腕が横薙ぎに振るわれて、強烈なメイスによる一撃がハジメを襲う。ハジメも棒を抜き取るのを止めて、肩の痛みに耐えながら顔を守るように腕を盾にして防御に徹する。

「ぐうっ……………」

襲い来るメイスに、ハジメは物理的に耐えていたが、魂魄的には、耐えることが出来なかった。

「ガアッ?!」

自身の魂魄に伝わる強烈な衝撃が襲い掛かり、ハジメは盛大に吹き飛ばされ、勢いよく地面に叩き付けられた。手に持っていた神喰雷槍は、握っていた手から離れ落ち、ハジメは地面に叩き付けられた衝撃によってハジメの肺から強制的に空気が抜け、背中に激痛が奔る。

そして、吹き飛ばされたせいで棒が抜き取られたせいかハジメの右肩から大量の血が流れ、滴り落ちた場所が血溜まりができていた。

それでも、ハジメは、右肩を抑えながらフラフラと立ち上がり嫌味たらしく機神兵の手に持つメイスを見て、口にした。

「クソ…………魂魄魔法が付与されたメイスか…………」

機神兵の四つの内の一つが持つ武器のメイス。それは、解放者の一人、ラウス・バー

ンの魔法。魂魄魔法が付与されていることに気付くハジメは、眉をしかめながら機神兵を睨む。

機神兵は、ハジメの睨みなど動じず、ハジメが立ち上がったのが分かると、その脚力で、一気にハジメの元へと詰め寄り、今度は、メイスとは逆の腕が振り上げていた斧槍ハルバードを勢いよく振り下ろした。ハジメは、咄嗟に、左の方へ跳んで回避する。斧槍ハルバードが振り下ろされた場所は、地面がいとも簡単に割れた。普通の斧槍でも、あれ程の威力にはならない。

ハジメは、ポーラを右肩に巻き付け簡易な止血をしながら、尋常じゃない威力を出す斧槍の原因をすぐに分かり、ポロツとこぼれるかのように呟いた。

「重力魔法……」

そう、機神兵が持つ斧槍ハルバードに付与された魔法は、解放者のリーダーであったミレディ・ライセンの重力魔法。斧槍が、振り下ろした瞬間に重力魔法が発動して重さを倍加させたのだらう。それなら、あの威力に納得がいく。

機神兵は、斧槍を振り下ろしたまま、左腕の銃器をガトリング砲の形にすると、多種の属性魔法が付与された玉を放った。ハジメもクロスピットを四機を四方に展開させて完成するシールドを貼りながら時計回りに駆け出す。それに、ハジメも方も攻められばかりではない。“宝物庫”から円月輪を取り出すと同時に機神兵へと投げ飛ばして

ゲートを展開させ、そこから雷魔法とレールガンを連射していく。

明後日の方向から現れる雷やレールガンから放たれた紅き閃光は、機神兵に強襲する。しかし、機神兵は円月輪の正体に気付いたのか、ガトリング砲を撃つのを止めると、瞬時に振り下ろしていた斧槍を持ち上げメイスを持つ腕と共に迫りくる攻撃を防ぐ。多少ばかりの漏れがあるが、それだけでは機神兵の装甲にはダメージはない。

そして、

「チツ、気付かれてたか……」

後ろから奇襲するハジメの蹴りの一撃を後ろ向きでも、残りの二つの腕で防ぐ。ハジメは、仕留め切れないことに苦言を吐き捨てながら、すぐに後退する。が、目的は奇襲ではなかった。ハジメは後退と同時に手放してしまっていた神喰雷槍を手に取った。

神喰雷槍は、機神兵に傷を与えられなかったが、近接武器としては使えるためハジメは、回収しておきたかったのだ。回収した神喰雷槍を背負うとハジメは、ホルスターからドンナーとシユラークを抜く。クロスビット達もハジメに従うように背中を守るような浮かぶ。

ハジメは、それを確認すると同時に、再び、機神兵へと駆け出していく。機神兵は、両腕の銃器で、ハジメを牽制しようとするが、“紅狼”を纏ったハジメには無意味だ。普通より掛け離れた俊足でガトリング砲の連射速度よりハジメの脚力が勝っているから

だ。

機神兵も、ガトリング砲でハジメを仕留めれないと分かったのか、近接戦に持ち込もうとハジメへと近付いていく。一人と一機、両方の距離が二メートル内に入った瞬間、振り下ろしたメイスをハジメの“集中強化”と“金剛”を付与させたドンナーとシユラークで受け止めた。

受け止めたと同時に、ハジメは“天歩”を発動して、踏み込んでメイスの持つ腕を蹴り上げる。追撃と言わんばかりに斧槍を持つ腕の方ももう片方の足で攻撃の隙を与えないように蹴り上げた。機神兵も近接武器を持つ腕を狙うならと、銃器をシヨットガン型に変形させると、ハジメに向けて放つ。ハジメは、全体を“竜鱗化”させてシヨットガンの弾を弾いたと同時に、雷魔法“紅雷玉”を発動させ、紅の爆発を起こす。

爆煙が舞う中、ハジメは“竜鱗化”した義手で、機神兵の顔を殴りつけると、両足で胸部の鉦石を取ろうとするも、復帰した近接武器を持つ両腕に阻まれる。残りの腕がハジメを狙い撃つもクロスビットで防御しながら、クロスビットのスラッグ弾をお見舞いする。しかし、機神兵も攻撃の手を緩めることはない。メイスを下から上へと物凄い速度でハジメを狙って振り上げる。ハジメもこちらを狙うメイスに気付くと、クロスビットを自分の足元に移動させシールド代わり兼足場にしてその場から離れる。そして、振り上げられたメイスを防御したクロスビットは、バキンツと嫌な音がした同時に

破壊された。

「チツ……」

一機のクロスビットが破壊されたことに、眉を寄せるハジメ。が、こちらも手も緩めずにレールガンを連射していく。後ろから斧槍が振り下ろされるが、残りの三機のクロスビットを重ねて三重の盾にするが、インパクトと同時に重力魔法が発動し、死を沸騰させる一撃が炸裂する。クロスビットは、一秒も満たずに三機諸共、破壊された。

手痛い損害だが、その隙に斧槍から逃れたハジメは、一度、立ち直そうと機神兵から離れるが、機神兵の脚部から突出したブレードでハジメの腹部付近を斬り掛かる。迫りくるブレードに、即座に反応したハジメは、空中で“空力”を発動して、一気にブレードの間合いから外れることが出来た。

「ふう……」

全ての攻撃を耐えることができ、安堵の息を漏らす。これで、体勢を整えてから攻めにいく。所謂、ヒットアンドアウェイ戦法でいこうと考えているハジメ。だが、機神兵の強さのせいでハジメは、ある事が頭から抜け落ちて知っていることを知らない。

それは、

突如、ハジメの目の前に現れるゲート。

ハジメの目が見開く。そして、「しまった」と口をこぼした。機神兵は、空間魔法を扱

えることを頭から抜け落ちていた。いや、忘れさせるように仕向けていたのだ。

機神兵は、最初に仕掛けたゲートでの不意打ちを、ハジメは難なく対応されてしまった。つまり、ゲートはハジメに対して無意味であると判断したのだろう。

ミサイル弾の時も、ガトリング砲の時も、接近戦の時も、使える場面は多々あった。だが、使わなかった。ハジメが警戒している可能性があるからだ。変にゲートを使えば、逆に利用されるかもしれない。ハジメの周りに飛ぶアーティファクトに邪魔されるかもしれない。

だから、敢えて使わなかった。

ハジメがゲートの警戒を下げるために、ゲートを使わなくても危険だと、ゲートのことなど考えに入らせまいと……

そこから、神代魔法が付与された武器での戦闘。四つの宙を浮かぶアーティファクトの破壊。ハジメと戦いながら機神兵は着々と準備を進めていたのだ。そして、その時が遂に訪れた。ハジメが足のブレードを回避した時だった。ハジメは、ゲートの警戒をしてないと分かった時点で機神兵は発動した。

南雲ハジメを倒すための一手を。



「——っ?!」

完全な不意打ちに、ハジメは声にならない声を上げる。周りには、もうクロスビツトは破壊されてしまい、「宝物庫」から出そうとしても、時間が無い。防御を取ろうと思っても既にゲートから数々の機神兵の攻撃が来ており、間に合わない。

なら、これしかない。

ハジメは、右手をゲートへと突き出し、魔法のトリガーを引いた。

「舐めんなっ——『天雷牙狼』!!」

直後、赤雷の大狼がゲート、機神兵を獲物と認知したのか、大きな口を開くと、その顎を以てハジメの危険を、敵を葬らんと駆ける。それに、対して機神兵の攻撃も威力が増し、二つの攻撃がぶつかり合ったと同時に、開戦直後の時よりも巨大な爆発が起こつた。

「っ!」

鼓膜を破るほどの爆発音に、周りを吹き飛ばす爆風に、観戦していたリユーティリスさえも危険と判断したのか、大樹の枝を地面から出現させ盾にして防御を取った。しかし、そんな盾さえもミキミキと嫌な音が聞こえた。

爆風が止み、リユーティリスは、自分を守ったポロポロの大樹の盾に触れると感謝を

伝え、地面に戻した。そして、闘技場に目を向けて、体が震えた。

「これは……………」

リューテイリスは、驚きのあまり、逆に冷静になってしまったのか、落ち着いた声音で呟く。闘技場は、辺りはボコボコになっており、一部は地割れが起きている。壁もヒビ割れちよつとした衝撃で崩れそうだ。

そんな有様の中、二つの影が闘技場内に立っていた。

一つの巨大な影は、機神兵。傷も少なく、ハジメの魔法も、あの爆発にも耐える驚異的な防御を誇る装甲。そんな神とも等しい力を持つゴーレムが真つ直ぐと自身と逆の位置に立つ人間を見つめる。

もう一方の影は、機神兵よりも小さい影。右肩や所々からも傷を負ってしまい荒い息を吐きながらも、彼は、その二つの足で大地を踏み締める。

「クハツ……………少し前にクソ神を殺りあつたというのに、また同等の化け物レベルの奴と殺りあうことになるとはな……………」

機神兵よりも多くの傷を負っており、至る所が血で赤くなっているのに彼は……………南雲ハジメは、不敵に笑みを浮かべる。笑いたくなくても、笑ってしまうのだ。

——強敵との殺し合いという快楽が……………。

“宝物庫”が輝いた直後、ハジメの義手に、“オルカン”を装備する。背中に背負つ

ていた神喰雷槍を手に取った。狙うは、解放者達の最高傑作であり、古代のゴーレム機神兵。

——破壊したい。

そんな感情が湧き上がって、ハジメの更に口角が吊り上がる。

「行くぞっ！ クソゴーレム!!」

ハジメの叫びに、武器を構えることで応える機神兵。

そして、双方が駆け出したのを合図に再び、試練が再開するのであった……………。

## 百十五話 反転

ハジメが神代魔法を扱う解放者七人が総力して修復した古代のゴーレム、デウスソルジャー機神兵と激戦を繰り広げてる中、ハルツィナ大迷宮最終試練に挑んでいる優花達は……

「っ、どきなさいよ！ チビ吸血鬼！」

「……そっちこそ、邪魔。アホ天使っ」

迫りくる敵を薙ぎ払い、魔法で塵にさせながらキツと睨み合いながら悪口を言い合う優花とユエ。

「邪魔なのは、お二人ですよ？ ホントにムカつくですう!!」

二人の間に、なりふり構わずドリユツケンを振るうシア。

「おーい、南雲お！ 何処にいるんだあ!!」

ハジメを心配してなのか大声で叫ぶ光輝。

「うるせえよ！ 居ない奴を呼ばずに戦いやがれ！」

敵を殴り飛ばしながら、ハジメを呼ぶ光輝に非難的な眼差しで憤りを顔にしている。

「ホントッ、邪魔！ どきなさいアンタ達!!」

敵味方関係なく、黒刀をブンブンと振り回しながら叫ぶ雫。

「アハハー。もう、どうでもいいや〜」

戦うことに飽きたのか、笑いながら寝っ転がる鈴。

「……………」

「……………」

そんなカオスの光景に、テイオとアレスは自分達へと迫る敵を倒しながら遠い目で眺めているのだった。

こんな状況になってしまったのは、少し時間を遡ることになる。

それは、心が折れていた優花がテイオによって元に戻り、向かってくる敵を迎え撃とうとした時だった。

「…………シア、敵は後どれくらいで来そう?」

ユエが敵がどれくらいかと思いがいいシアに聞くが、シアは何も答えない。

「…………シア?」

返事がない。ウサ耳とウサしっぽが、今まで見たことないくらい逆立っている。ぶわつぶわつだ。面積が二倍になったかと思うほど、ウサ耳とウサしっぽがぶわつぶわしている。おまけにビーンツと伸びきっている。

シアの異常を認め、訝しむユエは同じように下を覗き込もうとしたが、黙っていたシ

アに腕を掴まれ止められる。

ユエは首を傾げながらシアを見る。

「……………シア。本当にどうしたの？」

「ユ、ユエさん。離れた方がいいです。……………皆さんも、ここから離れた方がいいです」

顔を青くさせながら震えがち話すシア。更に困惑する一同。そんな中、優花はシアの言葉を聞きながらも天使化なって真下にゆっくりと降りていく。シアから「優花さん！駄目ですう!!」と叫び声があるが、遅かった。

優花が降りて数秒後、下から絶叫が響き渡る。

「キヤアアアアアアア!!」

優花の絶叫を聞いて、体をビクンツと震わせる全員。シアは、顔に手を当て「駄目って言いましたのに……………」と首を横に振る。

その直後、下から優花がユエ達の元へと急上昇して戻ってきた。その表情は、顔面蒼白で恐怖で満ちており「ハジメ……………助けてえ……………」と震えながら口にしている。

今にも恐怖で怯えながら降りる優花に、テイオが心配な表情で、駆け寄る。

「優花よ。何を見たんじゃない？」

そして、そつと優しく優花を受け止めると何を見たかとテイオは声をかけた。

テイオに抱き締められてか、少しは落ち着きを取り戻した優花は、まだ震えが止まなくても全員に何かを伝えようと口を動かす。

「——がいたの……」

「ん？」

「……アイツ等がいたのよ」

それは、一匹見つけたら複数はいると思え。という言葉と共に恐れられてきた。黒い悪魔の名を冠する頭文字Gのあんちくしょう。いつもカサカサ這い寄る混沌。陰から陰へ高速で移動し、途轍もない生命力で渋とく生き足掻く。宙を飛ばば、地球であつても混乱と恐慌の状態異常をもたらす固有魔法まで使える強者。飲食店やお母さん達の敵。前に一度、ウイステリアで片付けをしていた優花の前で出現した際に、そのまま自分に目掛けて飛ぶアイツ。傍にいたハジメが退治してなければ、危うく人生で一番の恐怖を体験しただろうと思わせるほど、優花がこの世で一番嫌う虫<sup>蟲</sup>。

その名——ゴキブリ

そのゴキブリが、この地下空間の底部に、数百万、数千万、否、もはや測定不能なほど蠢いていたらしい。例えるならゴキブリの海、波の如く寄せては返すゴキブリの波だ。ガサガサ、ザワザワという音は、おびただしい数のゴキブリが奏でる活動音だったのだ。

「え……じゃあ、もしかしてだけど」

「Gがこっちに向かって来てるの？」

話を聞いた雫と鈴が、優花と同じように顔を青褪める。二人共、腕に鳥肌をこれでもかと立てていた。光輝や龍太郎も「おお……」と呻き声を上げて、顔を青くしている。シアは、両手でウサ耳をぺたりと折り畳んで塞ぎ、しゃがみ込んで涙目になっている。アレスは、比較的ましな方だが、それでも若干、顔が青くなっており口を手で塞いでいた。テイオも、アレスと同じくらい、顔が青いも自分の胸の内にいる優花を優先して、魂魄魔法で精神を安定させながら、ヨシヨシと頭を撫でている。流星は、竜人族というベキか、優花も表情が段々と良くなっていく。

「……焼き払おう」

そんな中、ユエが、瞳に闘志を宿しながら、いつになく物騒なことを言う。

「やめるんじや、ユエ。優花の言っている数は多いじゃろう。それに、撃ち漏らしがあつて、大量のゴキブリが妾達の方に飛んで来たらどうするんじや？」

「……………」

数千匹のゴキブリが編隊を組んで一齐に飛んでくる……。

その光景を幻視したのか、ユエはスツと顔色を変えて闘志を萎えさせた。一瞬で心が萎えたらしい。



「とにかく、落ちなければ大丈夫じゃ……と思う。先に進んで、大迷宮の攻略やハジメの搜索もあろう。ここに留まっても、それこそ襲われるだけじゃ」

「そうですね。私は、ティオ殿の意見に賛成です。ここに留まれば、ゴキブリ達に襲われることになるでしょう。今は、この場から離れましょう」

ティオとアレスの言葉に、全員がいつも以上に真剣な表情になると、これまたいつも以上にしっかりと頷いた。

極太の枝通路をアレスを先頭にして進む。

シアと優花のメンタルも回復し、取り敢えず、遠くに枝通路が四本合流していて大きな足場になっている場所が見えていたので、一行はそこに目指すことになった。途中、ゴキブリ達が飛び上がってこないか戦々恐々としながらも、枝通路から枝通路に飛び移ったりしつつ、遂に大きな足場に到着した一行。住宅街にあるちよつとした公園くらいの広さがあるので、ゆつたりと周囲を見渡せる余裕も生まれる。

「さて、どうしましょうか……皆さんは何か見えますか？」

「……ん。特には……ハジメもいない……」

「ホントに、ハジメさんは何処へ……」

「やっぱり、大樹の反対側なのかしら？」

などと、全員で空間全体を見渡しつつ意見を出し合ったりしている……

——ヴヴヴヴッ!!

恐れていた音が響いてきた。羽ばたき音だ。それも大量の。

「——ッ?!」

優花達は表情を引き攣らせつつ、慌てて底部を確認する。そこには案の定、黒い津波の如きゴキブリの大群が、羽ばたきながら猛烈な勢いで上昇してくる光景が広がっていた。

「もうう!イヤアアア!!」

「ん——っ。——〃雷龍う〃」

「嫌ですう——っ!!ぶっ飛べ」

「く、来るでないわあああつ。——〃ブレス〃!!」

「つつつ?!」

誰もが総毛立った。あまりの嫌悪感に雄叫びを上げつつ、半ば無意識に放てる最大級の攻撃を繰り出す。

優花は聖杖で数々の魔法攻撃の雨を降らせ、ユエは〃雷龍〃を、シアはドリユツケンで炸裂スラッグ弾を、テイオは〃ブレス〃を、アレスは〃千断〃を、やんややんやの大騒ぎをしながら繰り出した。

光輝達もそれぞれ咄嗟に放てる遠距離攻撃を一斉にぶつ放す。意外にも雫だけが「な

ぐ——ふみい」とある人物の名前を言いかけながら奇妙な呻き声を漏らして意識を飛ばしかけているが……

とはいえ、流石はチート達の火力だ。

眼下の宙に多種多様な色の華が咲き乱れ、雷の咆哮が轟いた。淡青白色の波紋が無数に広がり、黒の閃光が駆け巡り、空間を裂く斬撃が飛ぶ。純白の剣閃が飛び、衝撃波が鉄槌の如き打ち落とされた。

圧倒的な殲滅力。地上で、王国や帝国の軍の前で放ったなら、きつと彼等は現実逃避を余儀なくされるだろう。

しかし、それだけの攻撃を放つても、数の暴力を前にすると焼け石に水状態だ。怖気を震う羽音を響かせた黒い津波は、どれだけ攻撃を受けても、まるで衰えを感じさせずに迫ってくる。

海そのものに攻撃しても無意味なのと同じだ。ゴキブリの津波は空間全体に広がりながら、まるで鳥が行う集団行動のように一糸乱れぬ動きで縦横無尽で飛び回る。

「うう、うう、うう」は聖域なりてえ、し、しし神敵を通さずうっ——「聖絶う——」

既に、少し前の優花みたいに半泣きになりながら、鈴が障壁を張った。直後、一行のいる広場の更に上空まで、ザアアアアア!!と音を響かせながらせり上がったゴキブリの津波は、そのまま重力に引かれるようにして一気にいつに襲いかかった。

一瞬にして、障壁の外が蠢く黒一色に染め上げられる。障壁に突撃し体液を撒き散らしながら潰れるゴキブリもいれば、カサカサと障壁外部を這い回るゴキブリもいる。

「——む、り」

障壁を張っている鈴がフツと意識を失いかけた。光輝が、咄嗟に支えると同時に必死さの滲む声で励ます。

「鈴う！寝るな！寝たら死ぬぞ！俺達の精神がつ!!」

全く以てその通りである。生身でゴキブリの波に呑み込まれるなど、それだけで神代魔法なんて目じやない威力の精神攻撃だ。異常をきたすのは免れない。それどころか一生もののトラウマとなるだろう。

「ユエ殿、重ねて障壁をっ」

「……………んっ。絶対に破らせない!」

ユエが鳥肌の立った腕を掲げ、鈴の「聖絶」に重ねるようにして「聖絶」を展開した。

「なんだか、この迷宮に来てからこんなのはっかりですね…………」

「うゝむ。妾達の中で、一番強いハジメが何処かへ転移され…………他の大迷宮の攻略の前提にしておくだけに、あるいは難易度も数段上にされておるかもしれない」

多少、表情が引き攣っているが冷静な分析をするティオ。優花がぶるぶる震えながら

テンパリ気味に声を張り上げる。

「れ、れれれ、冷静に分析してないで、どうにかしないと!」

すると、これまた冷静な声が優花にかけられた。意外にも、先程、意識を飛ばしかけていた雫だった。妙に晴れやかな、透き通った表情で言う。

「優花、大丈夫よ、問題ないわ。あれはただの黒ごまだもの。黒ごまプリンとか黒ごまふりかけとか、私、結構好きよ。特に「黒ごまふりかけ・しょうゆ風味」は美味だわ。ご飯がとても進むの!」

「嘘おっ?!雫が壊れたああああ!!」

雫の目は、既に死んでいた。

優花の悲痛な叫びを上げる中、また殲滅戦を繰り広げるしかないかと、ユエは鳥肌の立つ腕をさすりながら、他の魔法を発動しようとする。

しかし、その前に異変が起きた。

障壁に群がっていたゴキブリの波は空中で球体を作ると、それを中心にして囲むように円環を作り出した。巨大な円環の外部に更に円環が重ねられ、次には無数の縦列飛行するゴキブリが円環のあちこちに並び始める。次第に幾何学的な模様が空中に作り出されるその光景を見て、ユエの頬は盛大に引き攣った。

「……まさか、魔法陣?!」

どう考えても不味い事態。本能がけたたましく警鐘を鳴らしている。

ゴキブリの魔法陣を止めようと、優花達が苛烈な攻撃を加えるが、波打つゴキブリ達が魔法陣を守るべく、その身を盾にして立ち塞がる。文字通りの肉壁。吹き飛ばされ絶命したゴキブリの死骸の豪雨となって、降り注ぐが、一向に減ったようには見えない。

そうこうしている内に魔法陣が完成し、空中に浮かぶ魔法陣が強烈な赤黒い光を放つた。と、同時に、中央の球体——一見すると卵にも見えるそれが脈動を始める。

ドクンドクンツ

球体から鼓動のような音を響き、内側から押されるようにして蠢き、形を変えていく。直後、球体が弾けた。そうして現れたのは、全長三メートルはある巨大なゴキブリだった。ただし、周囲を飛び交う普通のゴキブリと同じ楕円形のフォルムではなく、歪な人型という、おぞましいフォルムだ。

胴体からは棘の生えた細い腕ないし足が六本生えていて、一見するとゴキブリらしい見た目にかかわらず、先端だけ人の指のようになっている。その指も、全てが鋭利な刃物になっているようだ。顔面には黒一色の目が付いていて、顎は巨大で鋭い。背中には三対六枚の透き通った羽があり、腰の辺りからは尾が生えている。

放たれる威圧感も、そしてその冒瀆的な姿も、なるほど、おそらくこの大迷宮の最終ガーディアンにして試練なのだろうと確信させる。

「ギチチチチツ!!」

“人型”は、そんな不快な鳴き声を発しながら赤黒い燐光を纏った。すると、“人型”の周囲にゴキブリが集まり、更に魔法陣を形成し始めた。どうやら、“人型”は普通のゴキブリを自由に操れるらしい。

新たな魔法陣の中央に、幾分小さめの球体が幾つか形成され始める。“人型”ほどではないが、大きく特殊なゴキブリが出現するのは明らかだ。

「ツーさせるか——ツ?!」

「……んんっ?!」

優花とユエが、同時に魔法陣に対して攻撃を加えようとした瞬間、突然、足元に大きな魔力の奔流を感じて動きを止める。

咄嗟に視線落とす二人。しかし、そこには異常が見られない。が、二人は確信する。自分達が立つ足場の下——広場たる枝通路の裏側に、集まっていたゴキブリ達によつて魔法陣が形成されていることを。

おそらく、眼前で派手に魔法陣を形成し、それに注目させている間にこつそりと作っていたのだろう。

優花が「不味い」と思った刹那、正体不明の魔法は発動した。

広場を透過して赤黒い魔力が天を衝いた。竜巻のように螺旋を描いて噴き上がる。

眩しい光に優花達は顔を手で庇った。爆発したかのような閃光が周囲一帯を包み込み、視界を塗り潰す。

ものの数秒で光は霧散。

そこには、特にダメージを負った様子もない、無傷の優花達の姿があった。

「……一体何よ？ ユエ、何か——」

ユエを見て、言葉を失ったのだ。

彼女の姿を見て、湧き上がってしまったのだ。

——嫌悪を。

嫌悪、否、もう憎悪と言い換えてもいいかもしれない。そんな深く暗い感情を、優花はユエに感じていたのだ。それは、どうやらユエの方も同じようだ。直ぐ傍で、優花を見るその表情は憎々しげに歪められ、瞳には殺意すら宿っている。

「……ユエ」

「……優花」

互いに馴れ親しんだ名前を呼び、同時に不快感を顕にする。

「大っ嫌い！」

そんな経緯があつて、優花達は互いを嫌悪しながらも敵であるゴキブリ達と戦ってい



る。

しかし、今の優花達は、ゴキブリとの戦闘はあまり苦ではなかった。原因は“人型”によつて発動された魔法。感情を反転させる魔法によつて、大切な人物を嫌悪する代わりに、ゴキブリ達は愛おしく思うようになっており、苦ではなくなっているのだ。

優花とユエがお互いを嫌悪して、本人スレスレで攻撃しながらゴキブリ達を倒している二人は“人型”を相手をしている。“人型”は、黒い球体から量産させた自身の劣化版と言えるような“半人型”と“小型”と共に優花達に襲いかかる。

だが、

「ふふ、可愛いわね」

笑みを浮かべてそう口にする優花は、襲ってくる“小型”の大群の波をいとも容易く十の聖剣で自分を中心に竜巻のように螺旋状に回転させながら切り裂いていく。

「ギイイイイ!!」

そこへ“人型”が耳障りな不協和音を響かせながら、腐食の効果のある黒煙を、周囲に待てる“小型”達は黒い霧を噴き出したことで作りだされた腐食の竜巻。だが、優花には効かない。

「咲け——— “舞華”」

その言葉に反応した聖剣達が優花が発動した風魔法に乗って、まるで、そよ風に吹か

れるように舞い咲き乱れ、咲き誇った風の斬撃達が迫りくる腐食の竜巻を相殺した。しかし、それで終わりではない。

「天輪——廻りなさい」

聖なる銀の杭達が結合し現れた天に浮かぶ十の花弁を持つ銀色の華。主に命じられるがままに廻りだした。

縦横無尽に駆け廻る天輪は、“小型”を“半人型”を紙くずのように切り裂いて黒の花びらを撒き散らす。そして、目標は“人型”。天輪は近くにいたユエ諸共“人型”へと襲いかかった。

「ギイイイイ?!」

「……………んっ?!」

“人型”は、天輪によって右の全ての腕を切り落とし、絶叫させながら吹き飛ばした。ユエは、間一髪に右に逸れたおかげで回避した。が、ユエは冷たい眼差しで優花を見る。

「……………わざと」

「あら、ごめんね。でも、私の射程範囲内だし、ね」

悪気はない様子で謝る優花に、ピキツと青筋を立てるユエだったが、優花に切り落とされた右腕を再生させた“人型”が標的をユエに変えて“小型”を集合させた黒い津波と腐食の霧と共に迫ってきてることが分かると、表情を一変させ喜びを顔にする。

そして、今度は自分のターンだと両手を上に掲げた。

「……可愛いがつてあげる」

妖艶な笑みを浮かべながら言うユエ。

「——『五天龍』」

そして、この空間に五つの龍を降臨させた。ユエの指が軽やかに振るわれ、『五天龍』が主のもとへ集まり、その名の体現するかのように天へと昇る。

「……………ん。——『解放』」

フィンガースナップの澄んだ音色が響くと同時に、五天龍はその身に内包する牙を解放した。

轟雷を纏う黄金の龍の雷鳴の咆哮と共に、万雷の華が咲く。

——雷・重力複合最上級魔法『雷龍』

蒼く燃え盛る龍の爆ぜる咆哮と共に、殲滅の蒼い炎が空間を舐め尽くす。

——炎・重力複合最上級魔法『蒼龍』

翡翠の風を纏う龍の暴風の咆哮と共に、翡翠の風刃が幾千幾万のギロチンと化する。

——風・重力複合最上級魔法『嵐龍』

真白の煙で構成された龍の地鳴りの咆哮と共に、真白の世界が顕現し、放たれた白煙の息吹で全てを真白の石へと化していく。

——土・重力複合最上級魔法 “石龍”

冷気を纏う、透き通ったクリスタルの如き龍の凍てつく咆哮と共に、絶対零度が吹き荒れ眼前にある全てを凍てつかせていく。

——氷・重力複合最上級魔法 “氷龍”

黒の津波と腐食の霧で覆われた空が、五つの天龍の咆哮で消し飛んだ。

「ギイイイイイ」

天を仰ぐユエに、再び “人型” が急迫。その身は既に再生済みだ。だが、それを読んでいたかのように、ユエは自由落下に身を任せて落ちた。

そして、

「ホントツに、死ぬかと思っただわよー」

落ちたユエの上から、全ての聖杖を聖盾にして五天龍を凌いだ二つの聖剣を持った一人の天使が落ちゆく金髪吸血鬼に苦言を呈しながら空を飛ぶ。そして、 “人型” へと急迫して、自分の間合いに立つと全ての腕を切り落とした。が、 “人型” の姿がぶれた。優花が切り裂いたのは、 “人型” の残像。更に加速した “人型” は、二重三重に姿をぶれさせながら、一瞬で優花の背後へと回り込んだ。

腐食の黒煙と共に、風を纏った鋭い刃の腕四本が襲い来る。

「……やっぱりね」

そう眩きながら、優花は後方に待機させていた八つの聖槍達を一気に射出した。後方の聖槍に気付いたのか「人型」は避けようと上昇するも目の前から強い衝撃が襲う。優花が持っていた聖剣を聖盾へと形状変化させ腐食の霧を防ぎながら、そのまま聖盾で「人型」を殴りつけたからだ。

「ギイツ!!」

強い衝撃と、自分の腐食の霧を諸に食らったせいでバランスを崩す「人型」。その隙に八つの聖槍が「人型」の胴体を貫いた。

しかし、「人型」は、姿をぶれさせながら高速移動しながら聖槍を避けていき距離を取った。が、その腹部を見れば、四つは避けきれなかったようで風穴が開いている。

優花は聖槍達を自分の周りに集結させつつ、誰に言うともなく言う。

「やっぱり、神の使徒の模造ね」

「人型」は、おそらく解放者が用意した量産型の「神の使徒」なのだろう。いつか、大迷宮に挑む者が「神の使徒」と戦うことを想定して、近い能力の敵役を試練にしたのだ。

——「腐食」は「分解」。

——「再生」は「無限の魔力」。

——「風の刃」は「双大剣」。

——「小型」は「銀羽」。

そして、焦点速度が合わなくなるほどの「高速移動」。

なるほど。四つ以上の大迷宮の攻略を必要と前提するわけである。一度、帝国で戦った神の使徒と交えた優花の感覚的に、戦闘能力は数段上になっており、もしかしたら「ネームド」ほどの強さと思える。帝国で、複数の使徒との戦闘を知ってなかつたら手に余ったかもしれないレベルだ。

心の中で「上等よ」と、今はユエよりも殺したい人物を真似て呟いた優花に、「人型」が一瞬で音速の壁を突破して急迫。しかし、優花は迎撃の体勢を取らずに、聖杭達と共に、後ろへ下がった。

一見すれば怖気付いた行動にも見えるが、行動の理由は刹那の内に示された。

「ギイツ?!」

一瞬前まで優花がいた場所に、真下から水刃が飛来したのだ。ちょうどその場所に到達した瞬間だった。「人型」は、もはや死を降り注ぐ雨と化している水の刃の掃射をまともに受けた。

「——「須佐之男・散」

その真下には、水の刃を放った張本人ユエは、フツと笑みを浮かべていた。

腕の二本が千切れ飛び、羽が四枚消失する。高速移動を喪失した“人型”に、絶妙なタイミングで上から一つの聖剣が神速の超える閃光となって襲いかかった。

「流<sup>シューティングスター</sup>星」

今の優花では、一つの聖杭でしか制御できない技なのだが、神速を超える一撃によって、真つ二つに両断された“人型”。

一拍。その姿が爆散でもしたかのように砕け散った。後に残ったのは無数の“小型”。

「……………倒した」

「いや、まだよ……………」

魔物には、その心臓ともいうべき魔石がある。“人型”は、その魔石を複数持つており、何匹かの“小型”自体を魔石にしていた。それを見抜いた優花は初撃の聖槍で、ユエの水刃で、最後の聖剣によって全てを破壊した結果、“人型”は形を保っていられず、元の“小型”にばらけたのだ。

優花とユエの二人は上を見上げると天井から、にじみ出るように何十体もの“人型”が出現していた。

「どうやら、“人型”を一体倒すだけでは試練の攻略とは認められないらしい。」

「うげえ……………多いわね」

「……ん」

複数の「人型」の出現に二人の眉をしかめた。

一拍。

総数五十体の「人型」が、一齐に二人へと襲いかかった。

同時に、

「足手まといにはならないですよ？」

「……それはこっちのセリフ」

白銀と黄金の魔力が逆ほしほしった。二人揃って、凜猛に瞳を輝かせる。

大迷宮最大の試練を前に肩を並べ合う二人。

その表情は、今は別の場所で激戦を繰り広げている彼のような不敵な笑みを浮かべる二人の姿は、本当に感情が反転しているのか、大変疑わしいものであるのだった……。



## 百十六話 それぞれ戦い

時間は少し戻る。

優花とユエが飛び出した直後、シア達に再び黒の津波が襲いかかった。

咄嗟に、鈴が結界を張り直そうとするが、

「……………」

一瞬の躊躇い。押し寄せる“小型”の波が、今の鈴には愛らしくて仕方がない。言ってみれば、子猫の群れが「あそんで〜」と駆け寄ってくるような感覚なのだ。

結界を張って拒絶するなんて…………

むしろ、気持ち的にはウエルカム。さあ、鈴の胸に飛び込んでおいで！

「ちよつと、鈴?!」

雫が怒声を上げる。ただでさえ気に食わない奴が、己の仕事を果たさないので。雫的に、そのチヨロリと結われたおさげごと、ぶつた切つてやろうかと思うほど腹立たしい。

「吹き荒べ 頂きの赤き風———  
嵐炎風塵<sup>らんえんふうじん</sup>」

間一髪。広場ごと黒の津波に吞まれる前に、火炎の竜巻が結界の役割を果たす。その

間に、前線を張り「半人型」と戦っていたアレスが戻り、守備に入った。

「助太刀します——『聖絶』」

再び、障壁が張られたことで黒の津波の侵入を妨げ、どんなに大群で押し寄せようともアレスの張る障壁はビクともしない。そして、広場を丸ごと包むほどの巨大な炎の竜巻により、如何に黒の竜巻といえど、それは所詮、生き物たる『小型』の集合体。螺旋を描く火炎の旋風に巻かれては消し炭へと変わっていく。

「しつかりせんか、お前達。なんのためにここに来たのじゃ。戦うべき相手に身を差し出すためかの？」

新しい声音が、鈴だけでなく、特に行動を起こしていなかった光輝達の耳じだを叩いた。紛れもない叱責の言葉に、光輝達がビクリツと震わせる。

見れば、ティオがアレスの隣に立って両手を前に突き出しながら、鋭い目を向けている。隣にいるアレスは、「優しい御方ですね」とフツと笑みをこぼしている。

「(い)、(い)めんなさい」

思わず謝罪の言葉を口にする鈴。

「謝罪はよい。今は役目を果たすのじゃ。お主の天職は『結界師』——守る者じやろう

？」

「っ、は、はいっ」

感情的に、今の鈴はティオに対して悪感情を持つているのだが、その言葉の重みに、気が付けば素直に頷いていた。

何故だろう。酷い悪感情が湧き上がっているのに、今のティオには誰もが無視できずにいる。

「なんで、ティオさん。魔法が効いてないんですか?!」

シアが驚愕の声を上げる。何故、感情が反転してないのかと、驚愕な眼差しをティオへ向ける。

「ティオさんもだけど、アレスさんも?!」

雫もティオのことも驚いたが、平然と障壁を張ったりしているアレスにも驚愕の眼差しを向ける。

「ハハッ、これぐらい大丈夫ですよ。ティオ殿も」

「うむ。……それに、もう直ぐ魔法が解ける。ほれ、シア達も前を見るのじゃ!」

二人の言葉に、納得し難い表情をしながらもシアと雫は視線を前に向けた。

直後、アレスの障壁の外に張っていた火炎の竜巻が虚空へ溶け込むようにして消える。再び黒い津波が押し寄せるかと身構えたシアだったが、意外にもそうはならなかった。

「? ああ、あの二人の方へ行つたわけですか」

シアの視線が、離れた場所で黒の津波や“人型”と戦う優花とユエの姿を捉えた。どうやら、無尽蔵に近い“小型”といえど、あの二人に対抗するには戦力を二分している余裕はないらしい。あるいは、“人型”の意識が、それだけ優花とユエに集中しているのか。

“小型”相手には相性が悪いシア的に助かる展開ではある。もつとも、それがにくつき優花とユエの二人によるものだと……そして、そんな彼女達より憎い彼を想うと腸が煮えくり返る思いだったが。とはいえ、敵がいけないわけではない。むしろ、より強力な敵が待ち構えていた。

広場を包囲するのは、“人型”を二回りほど小さくした“半人型”の群れ。

数は優に二百……否、現在進行形で増殖している。

優花とユエの姿も、それら“半人型”の隙間も埋まるほど、包囲は刻一刻と密になっていく。

「おいおい、こりゃあもう、やりにくいか言ってる場合じゃねえぞ。やらなきゃやられる」

龍太郎が冷や汗を流しながら言う。どうやら、愛らしさ故に抱いていた戦うことへの躊躇いを振り切ったようだ。拳を構え、ようやく戦闘態勢を取る。

「なっ、戦う気か?！」



にいた「半人型」は出端を挫かれる形で潰され、碎けながら吹き飛んだ。

包囲網に、ぼつかりと大穴が出来上がる。

「放置とか許しませんよ！ おチビと胸なし！」

どうやら、シアの怒りの矛先はユエと優花にあつたらしい。憎い相手が、自分には目もくれず戦場へ飛び出していったことが屈辱だったのか……

シアの足元が砕け散った。踏み込んでクレーターを作りつつ、剣玉の砲撃で空いた大穴へ飛び込む。そのまま、優花とユエのもとへ行く気だったのだが、そうはさせじと「半人型」が四方八方から殺到した。

「ええいつ、この構つてちゃん達め！ですう！」

ちよつぱり頬を染めながら、殺到する「半人型」達に止められたことにウサ耳を荒ぶらせるシア。正面からソニックブームを引き連れて迫った「半人型」を、これまた正面からドリユッケンでぶつ叩く。そうすれば、冗談のように吹っ飛ぶ「半人型」。その様は、まるでピンボールそのもの。

「半人型」も鋼鉄じみた強度の肉体を待つてるせいか。シアのドリユッケンが振るわれる度に、ゴインツゴインツゴインツと、どこかコミカルさを感じさせる衝撃音が響き、その度に、四方八方へ「半人型」が飛んでいく。

ただの一体も、シアには触れることすら叶わない。

腐食のオーラを纏おうとも、ドリユッケンが一度振るわれるだけで発生する衝撃波が全て蹴散らす。

全方位同時攻撃をしようとも、鎖で繋がった剣玉が、シアの回転に合わせて周囲一帯を薙ぎ払う。

まさに暴風。シアを中心に、戦鎚と剣玉の織り成すハリケーンが“半人型”の<sup>ことごと</sup>尽くを粉碎する。

「ぬぐううううつ。殲滅力に欠ける自分が恨めしいですね」

とはいえ、シアはあくまで近接戦闘特化タイプ。数の暴力を前に、負けることはなくとも足止めくらいはされてしまう。遠目に、優花とユエが、喧嘩しながらも共闘(?)つぽいことを、一言すると仲睦まじい感じでしているのをチラ見しながら、シアはぶくつと頬を膨らませる。

そしてまた、背後と側面から襲いかかった“半人型”を、今度は回し蹴りの一撃のみでまとめて粉碎。“半人型”二体が、体をくの字に折り曲げながら、周囲を巻き込んで新たなピンボールとなって飛んでいく。

そんな、広場の少し先の空中で無双するシアを見て、雫が妬ましそうに呟いた。

「すげー……」

シアの強さは知っていたが、実を言うと、これほどの多対戦の中で、シアが戦ってい

る姿を間近で見るのは初めてだったのだ。自分も彼女達みたいに飛び出そうと思っていたのに、思わず足を止めてしまいうくらい、それは鮮烈で圧倒的な姿だった。

もちろん、その間も襲ってきている「半人型」を、黒刀で受け止めると衝撃を殺すと同時に、腕などを正確に切り落とすなどをしているので、雫自身も弱いわけじゃないのだが……

(本当に私は……)

という思いが、湧き上がってしまった。

「その感情、溜め込みすぎてるようじゃな……」

「え？」

ブレスを散弾のように拡散させて連射しながら、光輝達の援護をしているティオが、チラリと雫へ視線を寄越しながら呟いた。

完全に内心を見透かされて、雫の中の悪感情が膨れ上がる。だが、ティオはお構いなしに続けた。

「その感情は、誰でも抱く。妾も抱くこともある。だが、それを卑下にせず糧にするんじゃない。そうして妾達は強くなっていくのじゃ」

思わずティオに視線が吸い寄せられて、一瞬の隙を晒してしまった雫。振り返った雫の頭上から「半人型」が迫るが、ティオが見もせず片手間に放った風刃があっさり両断



してしまおう。

恐ろしいほど鋭い。今のテイオのように。

「胸を張って良いのじゃよ、雫。そこまでの剣術も、その努力も、今この場に役立っていることも、お主は誇って良い」

「……うるさい。テイオさんに言われなくなつて分かつてるもん」

何故だろう。腹立たしいのに、やたらと照れくさい。つい子供じみた文句を言ってしまうほどに。そして、少しだけ感じる。胸の奥に温かいものを。

八つ当たり気味に、黒刀を勢いよく振るって、迫りくる『半人型』を薙ぎ払って軌道上にいた『半人型』達に致命傷を与えていく。

やはり見透かしているのか。そんな雫に小さく笑いながら、テイオは「それに」と続けた。

「シアは、特別な子じゃ。誰かと比べられるものではない」

確かに、シアは特別だ。亜人族で唯一、魔力を有し、あんなにも強い。雫がそう思っている、テイオは首を振った。

「そうではないよ。あの子の能力を言うておるのではない。心のことを言うておる」

「心？」

「そう、心。元より、シアは兎人族。その心は平穏を愛し、争いを苦手とする」

けれど、それでは望みを叶えられないから。

「怯えながら一步を踏み出し、泣きべそを掻きながら戦い、愛した者と、友の傍に立ち続けた。どうやら、世界は光輝に勇者を与えたようじゃが……」

テイオの視線が、シアへと流れる。

「妾からすれば、光輝には、その称号には不相応。真に“勇ある者”とは。“勇者”とは——シア・ハウリアのことであろうよ」

テイオにとって、愛しの錬成師の彼を愛している。が、敬愛はしていない。彼の生き様は勇ある者とは言いがたいのだ。彼の原動力は己の命を課していること。その戦う姿は胸がときめくも、敬うべきではない。

仲間である神官の青年は、勇者の称号を背負えただろう器だったのだろう。しかし、更なる願望を叶えるため彼は、その成りうる器を切り捨てたのだろう。

他の二人も違う。だからこそ、仲間の中で最も敬愛の念を抱いたのは、シアであった。それに気が付いた雫は当然驚いたが、しかし、それより驚くことがある。というより、疑問である。

「……ねえ、テイオさん。感情、反転しているの、よね？」

自分に対する言動、先程から精彩を欠く光輝や、実力不足で危機に陥りかける龍太郎達を完璧に援護し続けている姿、そしてシアに対する隠すこともない敬愛の念。

どう見ても、悪感情を抱いているように見えない。だとすれば、ティオは元々、自分達を嫌っていたことになるが……

「ふんっ。お主等のことは気に食わん。今も、憎々しい感情は湧き上がっておる。……じゃがなあ、それがどうしたというのじゃ？」

「え？」

ティオの視線が、再び雫へ向いた。その瞳に宿る「深さ」に、「重み」に、雫は思わず息を呑んだ。ふっと笑ったティオは、またも隙を晒した雫の背後にプレスを放ちつつ、事なげに言った。

「感情の好悪など……そんなものに左右されるようでは、生きておれんよ」

記憶と、魂の標しるべが、ティオに正しい判断を与えている。一度抱いた想いを、容易に忘れて感情に流されるようでは、彼女の長きを生きる心はとつくの昔に壊れている。だから、今憎くても、好意を抱いていた時の記憶さえあれば、ティオ・クラルスは決して流されない。その心は、正も負も、愛も憎しみも、全て呑み込み背負うのだ。

それに、ティオは続けた。

「成すべきことの前では、妾自身の感情など些事に過ぎん。お主のことも気に食わんが、記憶が妾に言っておる。ここに居る者は、妾が守るべき者達であること。それに、今はとても殺したいほど憎いが、記憶では抱きしめたいほど愛おしい旦那様に会いたいから

のう」

使命・義理・義務。どのように称するかはさておき、ティオは己の役目を違え<sup>た</sup>ない。だから、

「零。お主のことも、妾が守ろうぞ。天職 “守護者” を持つ、黒竜ティオ・クラルスの名に懸けて」

身に纏うのは王の如き覇気。他者に与えるは大樹の如き安らぎ。瞳に宿るは鋼鉄の意志。炎と風に黒髪を靡かせて、誇りと共に宣言するその姿は、思わず見惚れるほど美しい。

「け、けけ結構です！私、自分で戦えますから！」

またも、子供じみた言葉を返してしまう零。頬が微妙に赤くなっている。同性の子達からも黄色い声援を浴び、クールビューティと周りから言われているポニテ剣士少女は、竜人族の黒竜姫相手には子供っぽく返事をしてしまう。

自分の視線の映るティオは、格好良くて美しい、誇り高き理想の “お姉様” だった。そして、自分をいつも “お姉様” と呼ぶ彼女達は、自分がティオに対する抱いた想いを自分に抱いていると理解した。

そんな、零は、やたらと気恥<sup>ず</sup>かしくなってしまうって、シアと同じように飛び出そうとする。シアの無双に圧倒されて足を止めていただけだ。

だが、飛び出そうとする寸前、

「わっ!？」

「!!」

聞き慣れた声音の悲鳴が耳を突いた。

半ば無意識にそちらへ視線を向けると、そこには尻餅をついた鈴の姿が。どうやら、足元に付着していた「半人型」の体液で足を滑らせ転倒したようだ。が、近くには光輝と龍太郎がおり、すぐに立て直す鈴。

だが、危険なのは鈴だけじゃない……

「雫!!」

「へ?」

テイオの怒声にも近い声に、雫は視線を戻す。そこには、視界を黒で覆うほどに迫っていた「半人型」の姿が。

「っ!？」

それは、致命的な隙。

「半人型」が、腐食の黒煙を纏った腕を、既に振りかぶっている。テイオは、もうブレスを放っており問題はない。が、恐怖が雫の脳内を覆い尽くし体が動かない。そうになると、ブレスの余波が雫に直撃してしまう。

そのことを連想してしまったのか雫はギョツと目を瞑つて、覚悟したが、待っても、痛みはない。何がどうなつてるか分からずゆっくりと目を開ける。そこには、金色の軽鎧ライトアーマーを身に纏つたアレスの姿があつた。

「無事ですか、雫殿」

「え、あ、はい……」

「それなら、良かったです。では——」

アレスは、雫の無事を確認すると光の速さで移動しながらシアと同じように無双劇を繰り広げていた。

そんな一瞬の出来事に呆然と立ち尽くす雫。ティオは、雫を横目で無事と分かると、雫を助けたアレスへ視線を向けた。

「そういえば、おつたな。妾と同じように感情の反転に順応している者が」

そう呟いきながらティオは思う。アレスという人間の尋常ではない順応力を……

それは、快樂試練も、この反転の試練の時も思っていたことだ。何故、この人物は、自分と同じように早く順応してゐることを。

その強さの要因は、自分と同じような壮絶な過去を経験をしたからなのか？

もしくは、そういうものに耐えることが出来る技能を持ち合わせているのか？

どちらなのか分からない。もしかしたら、両方かもしれないし、両方でもないかもし

れない。だが、一つ言えるならば、アレス・バーンは人間という枠組を逸脱していることだろう……。

雫を助けたアレスは、優花とユエとは逆。後方で「人型」と「半人型」の相手をしていた。

腐食を纏った腕の攻撃を籠手で防ぎ、蹴り飛ばす。高速移動しようとも、「ロンギヌス・オリジン」の状態のアレスならすぐに追い付ける。

そんな、アレスだったが戦闘を繰り返す中、自分の感情が戻ったことに気付く。

「……適応しましたか」

迫りくる「半人型」を魔力で形成させた剣で、細切れにしながら、アレスはぼつりと呟く。その瞳は、深く濁っており、人がするような目ではない。

アレスは、一足先に感情の反転の魔法が解けた——いや、適応したのだ。だから、アレスにはもう感情の反転は効かない。

王国には、アレス・バーンに状態異常と精神操作系の魔法は効かない。という言葉がある。

それは、王国にいた宮廷魔術師達が畏敬と畏怖を込めて口にした言葉だ。しかし、全

く効かないわけじゃない。最初は効くのだ。どの魔法も……しかし、数分後には効かなくなっている。毒も、熱も、精神操作も、石化も、全て最初だけ効いただけで、それは無意味。

故に、最強。

アレス・バーンという人間が最強と呼ばれている一端である。

「さつさと終わらせませすか……」

そんなアレスは、片手間のように「半人型」達を片付けながら呟くと、突然と強襲してきた「人型」の攻撃を避けるとゲートを使って、天井へ移動する。そして、右手に魔力を集中させ、巨大な光の大槍を形成させた。

光の大槍は、膨大な魔力と存在感に、下いる「人型」が危険を察して止めに入ろうとするが、既に遅い。アレスは、大槍を右手を大きく振りかざした。

これは、オリジン原点からこそ成せる技。

「——ジャツジメント神の裁き」

光が収束し、白と黄金が交じる輝きを放つ大槍をアレスは目標の場所へと投げ落としした。これは、神の罰。対象の軌跡も、記録も、塵すらも残さない消滅の極光。投げ落とされた大槍は「人型」を中心に円形の光の柱を作り上げていく。

「ギイイイイイ!」



耳に不快感を与えるような“人型”の悲鳴が聞こえる。が、次第に小さくなって聞こえなくなった。そして、光の柱がなくなると、そこには戦闘の痕跡も跡形も無くなっていた。

「……………」

その光景を上から無言で見下ろしていたアレス。何の感情も抱いていないその目は、段々と薄れていき、普段のアレスの瞳に戻っていく。同時に、オリジン状態を解除して身に纏う軽鎧が槍へと戻りアレスの右手に収まる。

「ふう……………よし、行きますかっ」

一息吐くと、何事もなかったように、いつも通りの姿を振る舞うアレスは、戦線に降り立ち、再び、戦闘に戻るのであった。

アレスの神の裁きジャツジメントを見た雫は、その凄まじさと魔力の余波に肌がビリビリと痺れる。  
「……………すげえ」

雫は、それしか言えなかった。だが、劣等感も芽生える同じ人なのに差が開きすぎて嫌になってしまう。むしろ、全てを彼等を任せた方がいいと思ってしまう。

でも、それを雫の思いを否定するかのように記憶がフラッシュバックした。

——己の死を覚悟した時のこと。

——王宮で友と親友の裏切られたこと。

いつも守っているつもりで、肝心な時に何もできず、ただ守られている。自分は何のためにここに来た？

親友を止めるためだろうか？

なら、どうすれば良い？

簡単だ。精一杯、戦って、本気でぶつかり合って、*「親友」*止めれば良い!!  
心に鋭い痛みが走った。同時に心の枷のようなものが壊れた気がした。

自然、手に力が入る。

あの、ストーカー癖のある親友を止めるんだ。あの優しい香織に戻すんだ。と、想うと黒刀に力が入る。魔力が全身へと漲っていく。

*「そうだ。私は——」*

抜刀一閃。

先程までより格段に鋭さを増した抜刀術が、一撃で*「半人型」*を両断した。

*「強くなって、あの子を止める」*

力強い声で雫は言う。そして、黒刀を構え直して更に迫る*「半人型」*を一気に叩き切っていく。

*「テイオさん！ 援護お願いします！」*

「うむつ、心得た！」

テイオが即応した。雫を見る目に、「それでいい」と褒めるような気持ちが込められている。

光輝、龍太郎、鈴を、三角形の二頂点の位置で囲む。

相変わらず、光輝は敵への情から精彩を欠いている。龍太郎も悪感情のせいで苛立ちが募っているようで十全に力を発揮できていない。鈴もまた、そんないつもと異なる動きの二人に、進路限定用の結界を上手く合わせれずにいる。

だが、雫とテイオが大部分をカバーしてしまえば、あと対応すべきは正面と頭上のみ。だが、その二つも……

「うりゃあああああつ!!」

「——『天翔閃・極』!」

気合い一発。淡青白色の波紋を広げるシアが、光輝達へ降下強襲していた『半人型』をまとめて吹き飛ばし、正面から迫る『半人型』をアレスは、極大の光の斬撃で塵にさせた。雫が、ぱあつと顔を輝かせて二人を見る。

「シア! アレスさん!」

「上は引き受けます!」

「正面は私がしましょう」

引き返して、雫達と共に戦うことを選んだらしいシアと、ある程度片付けたのか助太刀に入ったアレス。アレスは分かるが、シアは何故か、という疑問は、ほんのり赤くなつたほつぺと、チラリとテイオに向けられる眼差し、そして、よく聞こえるウサ耳から察して知るべしだろう。

ここに超攻撃的拠点が完成した。

同時に、“半人型”が“神の使徒”の模倣した魔物といえど、そのスペックは“人型”の劣化版。数の暴力が強みであるが……

それでも、今の彼、彼女達を前にすれば、“半人型”さえ、もはや試練にはなり得ないのであつた……。

## 百十七話

## P V N ② | 鳴動 |

響くは金属同士がぶつかり合い、脳を震えわせるほどの轟音。その轟音が響く中心は、機神兵デウスソルジャーの二対の近接武器と、ハジメの「神喰雷槍」カミグライが交差し、両者は後退し、距離を取った。

「死ねっ」

後退しながら神喰雷槍を背中に背負い直してハジメは、義手側に持つ「オルカン」のトリガーを引いて、十二発のロケット弾と雷魔法「雷槍」らいそうを放つ。機神兵も両腕、背中のミサイルポッドから千を超えるミサイル（魔劍）郡を放ちだす。双方から、ロケット弾と紅雷の槍で相殺させるが、残ったミサイル達がハジメへと迫る。

しかし、ハジメはオルカンを盾にして、ミサイル郡を防ぎながら、闘技場内を駆け抜けていく。同時に右手で、ドンナーをホルスターから取り出すと、レールガンを連発し、六つの紅の閃光が機神兵へ放たれた。

迫りくる紅い閃光を機神兵は、四つの足があるからこそ可能な物理法則を無視したような動きで全てを避けると、アサルトライフルのような銃で魔力弾を連射し、背中から

再びのミサイル郡、片方の腕からはガトリング砲から無数の魔法を放つ。そんな地獄のような死の雨がハジメへと迫る。ハジメは「紅狼」の出力を上げて更に脚力を上昇させた。その速度はライフルから放たれた弾丸速度に並ぶ。

その脚力を駆使してハジメは、死の雨を乗り切ったと同時に、表面が数々の魔法や魔力弾によってボロボロと剥がれ落ちてちるが、直後、「宝物庫」が輝いてオルカンを仕舞うと「シユラーク」をホルスターから取り出し……

直後、無数の紅い流星が空間を蹂躪する。僅かに遅れて聞こえるのは、どこか間延びした炸裂音。それが、一回轟く度に、六条の閃光が乱れ飛ぶ。その様は、まるで紅く輝く光の槍。たった一筋の閃光が、射線上の機神兵の関節部を的確に狙い撃ち、反撃をさせる暇も与えない。

ハジメの銃技——クイックドロウ「神速撃ち」だ。射線速度が速すぎて、銃声が一発分しか聞こえない早撃ち技である。

更に、闘技場を走り続けながらも計算され尽くした射角で解き放たれた弾丸は、あるうことが空中で他の弾丸とぶつかり、微妙に角度を変えた上で、より効率的に機神兵の急所を狙い撃ちする。

同じくハジメの銃技であるバウンドショット「多角撃ち」だ。

見方によれば、まるで銃の方が自ら弾丸に飛び込んでいるようにすら見える。本来六

連射ごとに隙が生じるはずのリロードタイムも、空中に転送された弾丸をガンस्पインリロードすることで刹那の内に終わってしまう。

ドンナー&シユラークを握る両の手は、決して同じ方向を向けることなく、それぞれ別の生き物のように乱れ放った。

まさに絶技。機神兵は、確実の急所へと飛ぶ紅の流星を弾き、避けて動く。だが、全てを避けられず外装は、段々と傷付いていく。しかし、この絶技が成り立つには、場所の広さの把握、敵の構造、動き、攻撃の手段、どこが急所であるのかと、沢山の情報が必要であった。

それを、ハジメは最初から情報を集めていた。

転移された際と、リユースと出会った際に、石壁で囲った円形の闘技場であること。闘技場の広さ。

機神兵を見た際に、ゴーレムであること。急所であり、狙い易い関節部を見つけたこと。

機神兵の戦闘の際に、目眩しは効かないこと。神代魔法を扱えること。攻撃する際、四つの腕をどう動かしているのか。四つの足の動きと機動性。近接戦闘と遠距離戦闘での攻撃と防御等……………

普通なら脳が焼ききれそうな程の多くの情報量。その全てをハジメは「瞬光」など

で補うことで把握して成せた。

——最強の銃技を。

——神を殺すために編み出した絶技の一つを。

空間を支配し、乱れ飛ぶ数々の紅の流星を避けていく機神兵だったが、あることに気が付き、動きを止めた。それを見ていた銃撃を続けるハジメは、ニイツと、不敵な笑みを浮かべて口を開く。

「クハツ……やつと、気付いたか」

そう、機神兵は気付いた。既に逃げ道はなく、数多の紅の流星が機神兵を囲んでいること。自分は、ハジメに誘導されていたことを……

直後。

それは、獣の群れが獲物を襲いかかるかのように機神兵へと迫る。機神兵は、四つの腕とミサイル郡で迫りくる凶弾を弾き、相殺させていく。が、それもゴーレムにとつても限界はある。二条の流星が機神兵の右肩に直撃し、ガキンツと音が響いた。同時に、機神兵の右肩の外装が破壊され、右の二つの腕の連結部が露出される。

自分の銃撃を耐える姿を見て、ハジメは、機神兵に神妙な面持ちで語りかけた。

「なあ……一つ思ったことがあるんだ」

語りかけるも銃撃の手を緩めず反撃の手を許させないハジメ。



「お前の扱う神代魔法。そんなに使えねえよな？それに、神代魔法の一つを使う間は使えないだろ」

その言葉に、機神兵は動揺せずにハジメの銃撃を耐えることに優先してるが、玉座で見物していたリューティリスは動揺せずにはいられなかった。

リューティリスの表情を見て、確信したハジメは淡々と続ける。

「生成魔法はミサイルや銃器や武器。重力は斧槍。魂魄はメイス。空間はゲート。再生は内部機構。お前とヴァンデウル・シュネーのは詳細が分からないから、なんとも言えないが何かの機能の一つに備わっているんだろう」

「……………」

リューティリスは思った。視線の先にいる南雲ハジメという人間は、強大な敵と戦いながら、ここまでの分析をしていたことに驚愕せずにいられなかった。

「よく、分かりましたわね」

「これくらい戦っていれば分かるさ」

平静を取り繕って称賛するリューティリスに、ハジメは、ガンスピンドで弾丸をリロドしながら言葉を続ける。

「生成、重力、魂魄、空間は分かった。アンタのを含めた二つの魔法は分からないが、再生はゴーレムでは有り得ない機動力。あんな動きは、ゴーレムはすぐに内部から壊れ

る。だが、なぜ壊れない？簡単だ。壊れそうになった内部の機構を再生魔法で再生させて奴の動きを衰えさせないようにしている」

普通なら、再生魔法の使い方に気付く者はいない。だが、ハジメは「錬成師」だ。機神兵と言えど神代よりも前に作られたゴーレム。そんなゴーレムが現代でもあそこまでの機動性を維持し続けられるのは無理がある。からこそ、ハジメは気付けたのだ。

そんな、ハジメの説明にリユーティリスは納得し、機神兵は急所の場所を的確に防ぎながらハジメに向かって突進する。

ハジメは、機神兵の思いつきりの出た行動に驚いて声を上げた。

「っ………特攻かよ?!」

機神兵は、ここまで自分の情報を読み取られ、このまま、距離を取られながら戦ってしまうとハジメが有利になるだけだ。

なら、すべきことは一つ。近接戦へ持ち込んで、ハジメの優位性を無くすとが最優先だ、と。

全ての銃弾を跳ね除け、二対の武器の間合いに入ると機神兵は、左右の方向から武器を振るう。ハジメは、「紅翼」<sup>せきよく</sup>を背中に展開し、上へ飛んで回避する。ドンナー&シユラークの代わりに、ハジメが手にしたのは電磁加速式ガトリング砲「メツエライ」を二

門。

毎分一万二千発の怪物が咆哮を上げた。

それは、もはや死の雨。上から紅い光を放つ蹂躪の権化が降り注いでいく。機神兵はゲートを発動し盾にして、降り注ぐ銃弾の雨を防いでいくが……

「無駄だ。——『限界突破・霸潰』」

ハジメの言う通り、機神兵の行動は無駄になる。

紅い魔力が竜巻となって天と地を繋いだ。『限界突破・霸潰』により、今この瞬間、全てのスペックが五倍に膨れ上がった。莫大というのもおこがましい圧倒的な魔力の奔流が闘技場に響き渡る。

これを使えば、ハジメといえどタイムリミットが課される。効果時間は十分。それ以降は、凄まじい倦怠感に襲われ、一時的に行動不能となる。

それは、ハジメの敗け——死となる。

だが、ハジメは発動し、勝負に出たのだ。

おびただしい数の弾丸が、互いに跳弾までして、ゲートを避けて機神兵を狙う。『限界突破・霸潰』と『瞬光』によって通常より知覚状態を五倍に跳ね上げた今のハジメは、ガトリングによる精密射撃すら可能な状態である。

ならばと、機神兵は背後からとゲートで取り込んだ銃弾を放つが、そこには四機のク

ロスビットが、これまたゾツとするほど精密な射撃で相殺して全て防ぐ。

「おい、これだけか？ 古代のゴーレム」

ハジメを守るのは、前門の精密ガトリング射撃。後門のオールレンジ兵器。

まさに絶壁の空中要塞。

——これでは、負ける。

機神兵がそう判断するのに時間はかからなかった。なら、どうすればいい？

簡単だ。

機神兵は最後の奥の手を解放した。直後、機神兵の雰囲気が変わりだしていく。

空気が変わった。それは、上に飛ぶハジメでもすぐに分かり、冷や汗が流れ、頬にたっていた。原因は分かる。機神兵だ。何か奥の手を隠し持っていたのだ。

「クソツ」

ハジメは、急いで四機のクロスビットと二門のメツエライの砲撃を放った。が、その判断は遅かった。

既に、砲撃を放った場所に機神兵の姿が見えない。焦るハジメは、クロスビットで四方結界を張りながら機神兵を辺りを見渡しながら探すも見つからない。

だが、それは唐突に現れた。

ハジメに強烈な殺気が襲う。すぐにその方向に視線を向ければ——いた。結界の目の前にいる機神兵の姿が。

見えなかった。“紅狼”と“瞬光”を発動し、跳ね上げた知覚状態のハジメでも捉えられないスピードで機神兵は目の前に現れたのだ。

「っ!?!」

すぐにメツエライを放とうとしたハジメ。だが、機神兵の方が早く、結界をメイスで一撃で粉碎すると、勢いよく振りかざした斧槍をハジメへと振り下ろす。咄嗟に、四機のクロスビットと右手で持っていたメツエライで盾にするも、いとも容易くクロスビットの盾とメツエライが破壊され、ハジメは地面に叩き付けられた。

「——ガッ!?!」

地面に強く叩き付けられ、全身が痛むハジメだが、機神兵は既に、ハジメの眼前へと移動しておりメイスを振り下ろしていた。

「!!」

左足を勢いよく踏み込んで、上手く回避するハジメ。同時に、ドンナー&シユラクをホルスターから手に取り、再び、“神速撃ち”と“多角撃ち”をするが、全て機神兵に避けられていく。

「マジかよっ!?!」

機神兵は、紅の流星達を全て避け切り、急接近してハジメの背後へと回ると二対の武器が振り下ろす。しかし、ハジメもドンナーの銃口だけを手首の後ろに向け発砲。弾丸が機神兵の腕に直撃し、攻撃の軌道を逸らして回避し、回し蹴りでもう一方の攻撃の軌道を逸らす。そして、少しの隙を利用してシユラークのトリガー引いて、機神兵の頭部にレールガンを放つも首を左に傾けられ、頬の部分に掠れるだけで終わるが、ハジメは機神兵が一定の距離を取る。

「——『雷閃』！——『轟雷風爪』！」

たちまち、ハジメは魔法を発動し、雷の斬撃と雷と風が交わった三本の爪の斬撃を放った。乱雑に放たれた斬撃は機神兵へ迫るも、それより早く機神兵は動き回避した。そして、ゲートを使い、直接、ハジメにメイスを振るう。

「チィッ！」

咄嗟にゲートから現れた自分へと振るわれたメイスを、右足をわざと滑らせ、スライディングして避ける。だが、追撃と言わんばかりに背中の中のミサイルポッドから放たれるミサイル郡。ハジメは、『宝物庫』から大盾を取り出すと、体を仰向けにしながら防ぎ、爆破した衝撃の反動で逆の方向へ移動して背負っていた『神喰雷槍』を地面に突き刺し、杭にすることで体勢を建て直す。

自分の絶技を全てを避けられ、攻撃の幅が広がり、神代魔法の複数使用、動きが一変

していることに苦虫を噛み潰したような表情をするハジメ。しかし、今の機神兵は見る限り「限界突破」ではない。まるで、全て機神兵の全てが昇華されたような動き……  
「……………っ、そうか!!」

そんなことを可能する術なら、可能性は一つ。

「神代魔法!!」

ハジメは叫ぶ。機神兵の奥の手の神代魔法。恐らくステータスや性能等を、昇華させるような魔法だとハジメは推測する。だが、正体は分かたつたとて状況は変わらない。

今も、機神兵のゲートからの不意打ちを避けている。ミサイル郡を大盾で防ぐ。ドーナードで、攻撃の軌道を逸らす。防戦一方となりつつある。そんなハジメに、更に悲劇が襲う。

「っ!」

フツと体が少しふらつき、脳が危険信号を鳴らした。原因は分かる。「限界突破・霸潰」と「瞬光」の使い過ぎと、これまでに傷付いた体のせいだ。そして、ハジメは理解する。自身の体にも限界が近づいていることに……

だが、状況が悪い。自分はまだ近付けてもないからだ。それに、このまま戦い続け、  
「限界突破・霸潰」が解けると敗北は確定。

——ならやることは一つ。

「…………やるしかねえか」

ハジメは覚悟を決めたのか、一旦、深呼吸して「神喰雷槍」を持つ。そして、大盾の前に突き出しながら機神兵へと突進を開始する。機神兵も、ハジメにミサイルとガトリング砲を放つ。迫りくるミサイル郡を、足から放たれた雷の斬撃で相殺し、走るスピードを緩めずにガトリング弾を大盾で防ぐ。

そして、遂に、機神兵の間合いに踏み込んだハジメは、腕の関節部を狙って右手に持つ漆黒の大槍「神喰雷槍」で突き刺そうとする。が、機神兵は前足二本に蹴られたことで攻撃が軌道が逸らされ、ハジメの右手から「神喰雷槍」が離れてしまう。

「くっ……」

しかし、ハジメの攻撃は終わらない。神喰雷槍を弾かれるも次の攻撃手段に移っており、「竜鱗化」、「集中強化」、紅雷を更に集中的に纏い出したことで獣の右足へと変貌させた。

「『紅狼』——蹴り狼」

キックウルフ

雷獣の足へと変貌したハジメの右足。だが、この足は普通なら反動があり過ぎて使えないが、「限界突破」をしているからこそ扱える技である。蹴り狼の蹴りが機神兵の腹部に当たる。その一撃は重い訳でもなくて強力でもない。

だが、一拍。



ズドンツと轟音が響いた。

機神兵は自分のいた逆方向の壁へと激突するぐらい吹き飛ばされたのだ。同時に、内部機構がぐちゃぐちゃになってしまっている。

理由は簡単。蹴り狼のスピードが早すぎて、与えたダメージが遅れてやってきたのだ。その強力な一撃に、機神兵の内部機構の再生が遅れてしまう。

しかし、そんな時間をハジメは与える暇はない。右足で踏み込んで、壁から壁まで数十メートルある距離を一瞬にして詰め寄った。機神兵へ詰め寄った瞬間、「天歩」を駆使して、安定した体勢で再び、右足で蹴りを入れる。しかし、機神兵も負けておらず重力付与した斧槍で防ぐ。数千キログラムまで重力付与された斧槍に対してハジメの右足も負けていない。ぶつかり合い、火花を散らし、拮抗状態が続くも、ハジメがドンナー&シユラークを取り出し、二条の閃光を斧槍に当てて軌道をだいぶズラした。

右足が疼く斧槍の邪魔が無くなり、ただ敵を蹴るだけ。敵を屠る右足の一撃を機神兵の胴体を蹴りを入れた。しかし、その蹴りはギリギリでズラされ、横腹を挟むだけに終わる。同時に、ハジメにも背中に衝撃が走ったと同時に勢いよく吹き飛ばされた。

「カハツ——」

脳が揺らされ、思考が回らなくなる。「魂魄魔法」を付与されたメイスで殴られたのだ。痛みと直接、魂魄への衝撃にハジメは、口から少量の血を吐く。「限界突破・霸潰

“のタイムリミットも近付き、目から、鼻からも血が流れ出ている。

しかし、諦めないハジメは、すぐに立て直そうと蹴り狼を解除して通常の状態に戻して無理矢理にでも体を動かそうとするが、大きい影がハジメを覆う。それは、重力魔法<sup>ハルバード</sup>を付与された斧槍が振り上げていた機神兵の姿だった。

「——っ」

急いで体を方向転換させて回避を取ろうとするハジメだったが、直後、振り下ろした時の衝撃の重力を数千倍にした斧槍を叩きつけるかのように振り下ろされた。その瞬間、振り下ろされた場所の中心に地が割れ、瓦礫と粉塵が舞う。だが、そこにハジメの姿は無い。直後、下から強い衝撃を受ける。

ハジメだ。機神兵の周りに舞う粉塵を利用して上手く回り込んで「竜鱗化」した義手で顎を殴ったのだ。しかし、遅かった。

タイムリミットだ。

「限界突破・霸潰」を終え、倦怠感で行動不能な体を無理矢理に動かしての殴り。でも、その一撃はダメージは入らず、機神兵はハジメの腕を掴むと乱暴に向こうの壁へと投げ飛ばした。

「ガハッ——」

壁に激突しハジメは血を吐く。激突された際に大量の粉塵が舞う。

粉塵が消え、影が見える。そこには、大量に吐血して、ぐだりと腕を下げたハジメの姿だった。

「……残念でしたわ」

その光景を見たリューティリスは、少し残念そうな表情になりながらそう呟くと玉座から立ち上がる。そして、試練を終了させようと機神兵に命令しようとした時だった。

「機神兵。試練は終わ——」

「まだだ」

声が出た。バツと驚いた様子で声のした方向へ振り向きリューティリス。

そこには……

「かふ……俺は、まだ諦めてねえぞ」

頭から大量の血を流し、白の髪が所々、赤く染まっている。体もボロボロだ。しかし、彼は——南雲ハジメはそこに立っていた。

「生きてて何よりですわ。ですが、続けるのですか？その体で？」

もう今のハジメは満身創痍だ。機神兵に勝てるはずがない。そんなリューティリスの言葉にハジメは、クハツと笑みを浮かべた。

「なあ、リューティリス。確か試練の内容は、アイツの胸の鉱石を奪い取ればいいんだろ

「？」

「ええ、そうですが……何故、今、そんなことを——」

「じゃあ、終わりだ」

ハジメは、パチンツと指を鳴らす。その瞬間、地面から、石壁から鎖が現れ機神兵の腕を、足を拘束した。同時にハジメの手には黒いワイヤーがあり、ワイヤーに繋がれたその先には、引っ張っても大丈夫のように括り巻いて固定された黒の鉱石。

「なっ!？」

リユーティリスは驚愕して声を上げる。何故、どうやって、ここまでの準備をハジメは、いつ行っていたのか。そんなリユーティリスの驚愕の表情を遠目で見たハジメは、クハツと不敵に笑みをこぼしながら言う。

「俺は、錬成師だぞ？」

「!」

ハジメの言葉を聞いて、リユーティリスはハツとした表情になる。

そう、ずっと、この時の為に……

バレずにコツコツと、闘技場内を駆け抜ける際に地面も、壁も、相手も傍観者も自分は戦いだけに意識を集中させてると思わせながら、ずっと行っていたのだ。錬成<sup>トランプ作成</sup>を。

だからこそ成せた。

「俺の勝ちだ」

機神兵は拘束された腕を無理矢理に動かす。そのせいで、鎖が壊れていく。何百を何千を超える鎖で拘束してもたった数秒だけ。

でも、ハジメにとつて十分な時間だ。

「ラァッ!!」

ハジメは、勢いよく手に持つワイヤーを両手で引つ張った。すると、機神兵の胸に付けられていたパキッと何かが外れる音とともに黒の鉱石が外れ、そのまま、ハジメは釣り上げ、黒の鉱石をキャッチした。

そして、鉱石をリユース見せながら言う。

「ほら、試練クリアだ」

そう言つて、不敵に笑うハジメを見て、リユースも認めざるを得なかった。南雲ハジメという人間の強さに。

リユースティリスは、機神兵を動きを止めてからハジメの目の前に移動すると、一礼して試練のクリアを伝えた。

「認めますわ、南雲ハジメ様。機神の試練突破ですわ」

「おう」

それを聞いて、笑って返すハジメだつが……

その時だつた。

「!」

ハジメの手に持った黒の鉱石が黒く輝きだし、ハジメの手の平の上に浮きだしたのだ。それを見たハジメもリユーティリスも突然なことに驚きの余り目を見開く。

「お、おいつ、リユーティリス。なんだ、この鉱石は変に光って浮いてるぞ?」

「し、知りませんわ! わたくしも、仲間も鉱石に触れたことあるのに、こういう変化はありませんでしたわ!!」

動揺してリユーティリスに問うハジメだったが、ハジメ以上に動揺しているリユーティリス。それもそうだ。この鉱石は、リユーティリスは勿論、他の解放者の六人も触ったことがあるが、何も起きなかったのだ。

リユーティリスの言葉に、やはり鉱石の変化の原因は、ハジメ自身ということ。正確には、自分の中にあると言われる「ひしがた機神」が原因だと。

そして、鉱石は光り輝きながら菱形から変形し、鍵へと変化した。

「鍵?」

ハジメは、鍵へと変化した鉱石を見て、なぜ鍵?と疑問に感じたが、鍵はゆつくりと降下していきハジメの手の平に収まる。

「鍵、ですわね」

「鍵だな……だが、なんの鍵——っ!!」  
「!?!」

ハジメの手に収まった鍵は、次の瞬間、ハジメの中に入るかのように消えていくのだ。急いで止めようとしたハジメだが、既に遅く、鍵はハジメの中に入った。と、同時に神代魔法を手に入れた時のように、ハジメの脳裏に何かが入り込めてくる。

「ぐうっ……ガアッ!?!」

初めて神代魔法を手にした時と同じような、いや、それ以上の激痛と共に、膨大な情報が入り込められた脳内へと強制インストールされていく。

「ぐっ! うっ、アガッ」

そして、激痛を抑え苦しむハジメに更なる何かが流れ込み、ハジメは驚愕する。

——それは、記憶だ。

~~~~~

風が吹き、涼しく心地よい。自分は、外の庭園で寝そべっていると理解し、もう一眠りしようとした時だった。自分の耳に聞き慣れた声が聞こえる。

『ああ、ここにいたあ〜! もうっ、デウス! 今日大事な日だって伝えたのに!』

誰かが、自分を呼んでいる。振り向くと、そこに腰まで伸ばした銀髪に、人形と思えるほどの美しい顔に乙女のような美しい瞳をした天使族の双子の妹であり、自分の恋人の姿だった。

自分は、まだ寝たいが起きないと彼女が怒るため、上半身だけを起こして彼女に話しかけた。

『ん？ もしかして、今日何かあんの？』

『だから、今日は——』

自分の間に答えようとした彼女だったが、後ろから七人の姿が自分の元へ歩み寄って来ているのが分かり、そちらに視線を向けた。

視線を向けた先には、自分の大切な仲間達と尊敬する主神の姿が見えた。

『ガハハツ。おい、デウス。お主を探してたぞ！』

豪快に笑いながら、自分の傍に駆け寄ると頭をガシガシと撫でてくる白の着物を着た白髪の竜人族の男神。

『アハハ、デウス。まさか、寝てたの？ ホントに君は呑気だなあ』

笑みを浮かべてながら歩み寄るのは、自分の知る吸血鬼の彼女のような綺麗な黄金の髪を靡かせ紅いドレスを着た吸血鬼族の女神。

『はあ、全くだ。ホントにお前は……。今日は“渡り”の対策の為の会議だと言うのに』



趣味である魔導書を読み、少し呆れながら溜息を吐くのは、灰色の髪で浅黒い肌、僅かに尖った耳を持ち、片眼鏡を右目に付けた魔人族の男神。

『まあ、いいじゃねえか！ワタシだっていつも寝てるんだし、それに“渡り”の奴等は、ぶつ殺せば終わりじゃね？』

そう荒い口調で話すのは、背中に自分の背丈の二倍ほどの大きさの大剣を背負った見覚えのある淡青白色の髪をしたシヨートヘアで、額に一本の角が生えている亜人族の女神。

『……………これだから、馬鹿は嫌いです』

その横で、そう呟いたのは、背中に純白の翼が生え、腰まで伸ばした銀髪、妹とは違う何の感情を感じさせない瞳を持つ天使族の双子の姉。

『全く、エクストラの言う通りだな。それでも、貴様は亜人族を束ねる創獣神か？』

そう口にして、亜人族の女に呆れた眼差しを送るのは、司祭の服を着た長髪の今は人族の神をしているため、人の姿になっている男神。

『ハハッ、良いじゃないか。俺は、エルネシアらしくて好きだぞ。それに、宮殿に戻らずとも、ここに八神は揃っているんだ。今回は、綺麗なこの世界を見ながら会議としよう』  
そう言つて全員を纏めるのは、自分に創造主として、ここに在る者達の親みたいな存在である神。白と金を合わせた色合いの服を着た主神ラーゼン。





「落ち着きなさい！……つて、この魔力の感じ」

「うむ。この魔力は……」

「……ハジメさん、ですよね」

「ですが、これほど膨大な魔力の余波。下からですね」

「半人型」達は戦闘していた六人は、光輝は言葉を失い、鈴は尋常じゃない膨大な魔力にパニックになり、龍太郎は何かヤバい敵が来るのかと警戒し、雫は三人を落ち着かせながらも、魔力が誰のものかと分かり、ティオ、シア、アレスはハジメのものと理解し心配になる。

「早く片付けましょう。ハジメさんが心配です」

「うむ。そうじゃな」

「ですね。ここで時間を割かれてはいけませんね」

そう三人は頷き合うと「半人型」達を殲滅を再開する。

魔力の余波は「人型」と戦う優花とユエにも感じ取っていた。ユエと優花は顔を見合わせる。

「……優花」

「ええ、分かってる」

「……ハジメ。苦しそう」

「分かつてる。私も早く傍に行きたい。でも、今は——」

優花は、「人型」に視線を向ける。ユエも優花の言うことは分かつており頷く。

「……ん、知ってる。こいつ等が先」

ユエも優花も一瞬で分かったハジメが苦しんでることを。早く傍で寄り添いたい。抱き締めたい。

だけど、今は壁があつて出来ない。

なら、二人のすべき事は一つ。

「早く片付けるわよ」

「……んっ!」

二人は「人型」という壁を踏破して、すぐにハジメの傍に寄り添うと闘志を燃やすのだった。

しかし、そんな膨大な魔力の余波は、大樹だけでは留まらなかつた。

「ボス!」

「なんなのだ……この魔力は」

大樹を囲む亜人達が住む樹海にも……

「おいおいおい、化け物過ぎるだろ。南雲ハジメ」

へルシャー帝国にも……

「これは、ハジメさん？」

「ハジメ、どうしたんだよ」

「ハジメ」

「ハジメつち……」

大事な友や親友、幼なじみ達がいるハイリヒ王国にも……

「この、魔力は……ハジメンかな。凄い成長してる、けど無理はいけないよ」

ライセン大迷宮にも……

「パパ？」

「あら、どうしたのミュウ？」

「パパが頑張ってるの……」

「あら、なら応援しましょ？ 旦那様を」

「わかったなの！」

大事な娘がいるエリセンでも……………

「……………この魔力。ハジメだあ♡」

愛しの彼を捜して、火山の中の大迷宮を彷徨う黒の獣にも……

「これはっ——」

「ヤバ……………何この魔力」

「……………ハジメクウン♡」

フリードや香織達がいるガーランドにも……………

トータス全体にハジメの魔力の余波が伝播した。大地を揺らし、魔物達は恐怖で声を上げる。人々は混乱し、ハジメの事を知る人達は彼を心配する。

そして、それは天にある神の住処にも……

「「「「?!」」」」

五柱の神達は、覚えのある膨大な魔力の余波を感じ取り目を見開いた。

「この魔力っ、完全に復活しおったかデウスウ!!」

拳を握り締め創龍神オルステッドは瞑想を止め、立ち上がりその名を大声で叫ぶ。

「嘘……………マジで復活したの……………」

死んだ者の膨大な魔力を感じ取ったスカーレットは驚きの余り、手に持っていたお気に入りのワイングラスを落として割ってしまう。

「ヒイヒイヒイ!!」

魔神アルヴは恐怖で腰を抜かしてしまった。それもそうだ復活したのだあの神が。主神とまともに戦える力を持つ神が……。

「……………まさか、愚妹に続いて混ざり者のガラクタまでもですか」

エクストラは、平常を保とうとするも隠せず、額にタラリと冷や汗を流す。

「デウス、デウス、デウスウウウウ!! 殺す、殺す、殺す、殺すう!!!」

器を手に入れた破壊の権化は、最も憎い敵の名前を連呼し、殺意がマックスになって狂ってるほどに叫ぶ。

そして、最高神ラーゼンも機神の復活に驚くも、ある感情が勝ってしまって、口角を吊り上げている。

「……………そうか。どのような方法で蘇ったか知らんがデウス。貴様がまた望むなら受けてやろう! 我との殺し合いを!」

ラーゼンは声高らかに笑いながら両手を広げて叫ぶのであった。

ハジメの膨大な魔力の余波は、痛みが収まると同時に消えさる。ハジメはゆつくりと



立ち上がりながら息を吐いた。

「……大丈夫ですの？」

「ああ、心配をかけた。俺は平気だ」

肩を回したり、手の平をグー、パー繰り返しなど体を動かし、異常は無いと分かる。むしろ、軽くなった気がする。

「なあ、リユーティリス。頼みがある」

「頼み、ですか？」

リユーティリスは首を傾げてハジメの頼みとはなんだと疑問符を浮かべる。

「もう一度、機神兵と戦わせろ」

「え？」

ハジメの頼みの内容にリユーティリスは、一瞬、呆けるがすぐにハツと意識を取り戻して待ったをかける。

「駄目ですわ！ そんな怪我で、死にますわ！それに貴方様は試練をクリアしてます！」

「それは、知ってる。だが、試したいんだ新たな力……いや、取り戻した力を」

そう言いながら、ハジメはギュツと自分の右手を握りこぶしをつくる。

「ですが、危険ですわ！だから——」

リユーティリスの言葉を遮るかのように、後方から機械が動く音が聞こえた。対面の

ハジメは何が起こったのか分かっており、笑みを浮かべる。リユーティリスは「え？」と後ろを振り返った。

そこには、体に巻き付いて拘束している鎖を壊している機神兵の姿だった。

「なんでっ?! 停止させたはずっ」

そう、機神兵の制御権限を持つリユーティリスは確かに機神兵を動きを止めた。だが、機神兵は動き出した。自分の創造主の力を受け継ぐ者が現れたからだ。

「リユーティリス。離れとけ」

「え？」

ハジメはゆつくりと機神兵へ歩み寄る。機神兵も拘束の鎖を全て壊してハジメの方へ動き出す。

ハジメは両太腿に取り付けられたホルスターからドンナー&シユラークを手取る。機神兵は、内部機構の修復を行いながらゆつくり動く。

そして、両者の距離が三メートル内になって足を止めた。両者相手をジッと見つめ合う。

そんな中、ハジメはフツと笑みを浮かべた。

「ありがとよ。俺の我儘に付き合って貰って」

ハジメの言葉に、機神兵は「問題ない」と言ってるのかゆつくり首を左右に振る。

「クハツ……んじや、殺り合おうぜ、機神兵……いや、ゲート全てを守護キーパーする者」  
その言葉を聞いて、昔に創造主に名付けられた名を言われて機神兵は嬉しそうに頷くように見えた。それを見たハジメは苦笑を漏らす。

他愛のない話は終わり、両者は、互いの武器を構えた。

一拍。

ガキイイイン!!

双方が駆け出したと同時に、両者の武器がぶつかり合う。その瞬間、ハジメのハルツイナ大迷宮——本当に最後の試練が始まるのだった……。

## 百十八話 神罰の焰

総数五十体の“人型”。それすなわち、五十体の“神の使徒”。

その全てが、残像を引き連れて飛び出した。

同時に降り注ぐのは圧縮された腐食の黒煙。拳大の黒い砲弾が優花とユエに急迫する。それを何故か回避せず、祈りを捧げるかのような二人はお互いの手と額を合わせ、互いの魔力を共有し合う。すると、二人の背後に白銀の魔力と黄金の魔力が共に巨大な魔法陣を描き、その魔法陣の周りを十の聖剣が円を描きながら飛ぶ。

二人から強大な魔力が奔流し、その魔法の名を口にした。

「———」  
“天龍・星”てんりゅうせい

合体最上級魔法——天魔龍星斬撃弾てんまりゆうせいざんげきだん “天龍・星”  
直後、

魔法陣が白と黄金が交わりながら輝くと同時に、ユエが作りだした魔法で形成された龍達——“五天龍”が魔法陣から現れる。そして、ユエは優花との魔力を共有したことで、新たな五体の龍を生み出した……

聖なる光を照らす黄金の龍

—— 光・重力複合最上級魔法 “聖龍”

全てを呑み込む暗黒の龍

—— 魂魄・重力複合最上級魔法 “魔龍”

激流がとぐろを巻きまるで滝のような荒々しい龍

—— 水・重力複合最上級魔法 “水龍”

空間さえも切り刻む灰色の龍

—— 空間・重力複合最上級魔法 “空龍”

何度も再生を繰り返す白天の龍

—— 再生・重力複合最上級魔法 “天龍”

が新たに二人の手から顕現し、五天の龍と並ぶ。

ユエは、優花の助力によって、苦手とした魔法を扱うことを可能にし、魔力を共有したことにより可能にした複合最上級魔法—— “十天龍”

だが、“十天龍”は顕現しただけ、操作は今のユエには出来ない。しかし、そこで優花が操る聖なる武器へと変化させる杭—— “聖杭”によって可能にさせた。

周りに飛ぶ聖剣達に十の龍達は一体に一つに纏わりつき、龍の星——龍星を作りだし、優花とユエという母星を中心に、目標の対象を狙って動き出した。

それに対抗するは、圧縮された分、腐食のレベルは上がっている黒煙の砲弾。しかし、龍星達はその絶望を前にしても負けることなく優花とユエを腐食の雨から防ぐ盾となり、腐食を喰らうその顎は全てを焼却し、雷鳴を轟かせ、石化させ、凍らせ、風の刃で切り刻み、聖なる光で浄化させ、全てを吸収させ、激流が流れ、空間ごとズラし、腐食させても何度も再生して喰らい付く。

腐食の黒煙は一瞬にして無に帰していく十の龍の咆哮。それは、凄まじい機動力で、幾重にも残像を発生させる“人型”達すらも巻き込み十体の数を塵すら残さずに滅した。

とはいえ、流石の機動力を持つても二人の十の咆哮を掻い潜り、上空へと飛翔して行く者達。が、その中にも、酷くダメージを受けている個体が多い。

お返しばかりに、腐食の砲撃が極太の槍太となって下方より上がってくる。が、魔龍が立ち塞がり母星に掠りもさせずにブラックホールかのように腐食の砲撃を呑み込んでいく。

そこへ飛来する“人型”が三体。同時に、嵐龍、空龍、石龍が相手取る。嵐龍がギロチンと化した風の刃を放ち、空龍は、空間を断絶させる斬撃のプレスを放ち、石龍は全てを石化させていく。

全方向を守る天龍達に死角はなく、二人の左右と下方から追っていた“人型”達を強

襲する。燃やし、凍らし、滅して“人型”を殲滅せんと天を昇り咆哮を上げる。もう、この空間を支配するのは“人型”ではない。母星を守る龍星達だ。

二体は辛うじて避けたが、一体は魔龍に近付きすぎたが故に超重力を帯びた長い胴体に捕まり、動く暇も与えないまま、ブラックホールの餌食となる。

そして、龍星達の猛攻に耐え潜り抜けて追っていた“人型”を雷龍が立ち塞がり、凄まじい轟音を奔らせながら大口を開く。避けようとも、その雷の顎門に一瞬の抵抗も許さず滅却され消えていく。

追撃と言わんばかりに“人型”の後ろから蒼龍が回り込み、雷龍によって立ち往生の状態になっていた“人型”を喰らい尽くさんと燐然と燃え盛る蒼炎がうねり、全てを滅する蒼き灼滅の業火の如し咆哮を轟かせながらその顎門で喰らい灰すら残さず焼却していく。

悲鳴を上げる暇もなく“人型”は雷鳴を轟かせる龍と蒼く燃え盛る龍によって殲滅された。同時に、挟撃するつもりだった右側面の“人型”も、氷龍によって体の髓まで完全に凍らされ飛行能力を失い地面に直撃し砕け散った。

「ユエ……残りの魔力量は？」

「……平気」

頭上に強襲。しかし、警戒することなく嵐龍と空龍によって、木っ端微塵となる。

「そう。ならもう少し威力上げれそ？」

「……んー。優花が龍星達の操作を全受けしてくれたなら——」

そう話していく二人は、互いの背後に迫った敵を石龍と氷龍で滅ぼす。

「分かったわ。操作は私が引き受ける」

「……ん。じゃ、威力は私」

「ええ、任せたわ」

二人は話を付けると再び、お互いの額を合わす。

すると、十の龍星達が今さつきよりも更に研ぎ澄まされた動きへと変化し、魔法の威力も増している。直後、飛び退こうとした“人型”だったが、真白の龍——石龍が一瞬で移動し、とぐろ巻きに動きながら上から石化のプレスを放ち、石化させると下から天へと昇るように上がる嵐龍が移動するついでに石化した“人型”をギロチンと化した風刃で粉々にする。

同時に、二人は手を離して“天龍・星”を解除した。空間を支配していた龍を纏う聖劍達は、再び、主人の元へと集う。ユエも優花の背後へと回る。

「……今、準備する。物凄く高度だから」

背中合わせで、少し疲れた表情でユエが言う。

どうやら、今までずっと大技を準備していたために、大規模な魔法の操作などの大半



は優花に任せていたらしい。「想像構成」による魔法の構築に意識の大半を割り振っているようだ。と、その時、ユエの正面、それなりに距離のある場所で、「人型」が魔法陣を形成しているのが見えた。魔法の専門家のユエとして、あれは不味いと危機感が募る。

更に、優花の正面では、わざと集合を解いた「人型」が、散弾の如く迫ってきた。全ての腐食黒煙付き。だが、この二人には関係ない。

——精密力は優花が。

——殲滅力はユエが。

ユエと優花は、互いにそう思ったと瞬間に、目線だけを合わせて頷き合うと、目の前の敵を放置して背後へとターンした。同時に。そうであるのが当然の如く。何一つ、背後を心配することなく。

絶大な信頼を胸に抱いて。

まるで鏡合わせのように、互いに背中を預けたまま位置だけ交換した二人は、  
「させないわ」

「……させない」

そう言つて、得意技を繰り出した。

魔法にも「核」になる部分があると最愛の人が教えてくれた。彼は続けて、通常の見

えないそれを破壊すれば、魔法は構成が解けて崩れ去る。彼には「魔眼石」という義眼を右目に埋め込んでおり、通常の視界が見えない代わりに「核」を見ることができる。しかし、自分にはそういう物は持っていない。が、自分には彼女から受け継いだ「天性魔法」を持つているが、この大樹の中だと発動は出来ない。だから、優花は考え、そして、あることに思い至った。何故、「天性魔法」が使えないのに天の魔力を帯びた「聖杭」は使えているのかと。

それに気付いた優花は、この場所の規則性に理解した。世界の創世記から存在し、象徴と呼ばれる大樹ウーア・アルト。そんな創世期から存在するからこそ、この世界には存在しない天の魔力を霧散させてしまうのだと。でも、それは回復、防御、攻撃などの外側で使う天の魔力だけであること。逆に「聖杭」のような内側で使う天の魔力は霧散されないのだ。

その規則性に気付いた優花は可能した。最愛の彼のように魔法の「核」を視る魔法を。

「———」  
「天眼」

優花の翡翠色のした瞳は、輝きを失うと神の使徒のような感情を失ったような瞳へと変化した。だが、視えた。魔法の「核」が。

———天性魔法「天眼」

通常では見えない魔力の流れや強弱、属性を色で認識できるようになった上に、魔法の「核」も視えるようになる天性魔法。

そんな優花の「天眼」は、その「核」を見抜く。

針の穴を通すような精密操作が、狙い違わず、発動直後の魔法を聖剣で破壊した。

そして、ユエの方も、黒く渦巻く巨大な闇の渦を一つの凶星<sup>まがつぼし</sup>へと創成。それは、母星<sup>ユエ</sup>を守る第二の守護衛星にして、敵の尽くを禍々しい暗黒の無数の手が襲い闇の宝玉に呑み込み無に帰す。

——魂魄・重力複合魔法 <sup>ツクヨミ</sup> 月詠・玉<sup>ぎょく</sup>」

飛来した腐食の散弾は、拡散したのも虚しく、無数の手によって強制的に一ヶ所に引き寄せられ、丸め込まれてから闇の宝玉へと呑み込まれていく。

「後、残りは三十体弱ぐらいね」

「人型」が距離を取って周囲を旋回し出した。どうやら怒涛の攻撃を跳ね除けられ、十の龍の脅威を警戒して、少し慎重になったらしい。

優花は、「聖杭」をユエと自分を守るように周りを旋回させて飛ばしつつ、ユエに話しかけた。

「それで、ユエ。そのとっておき、あとどれくらいかかりそう？」

「……ん。優花が守ってくれるなら、二十秒」

その言葉に優花は笑みを浮かべる。

「完全に解けたわね」

「……………んっ」

「早く終わらせて、ハジメに抱き着きたい」

「……………んっ、私もハジメによしよしされたい」

「じゃ、行きますかっ」

「……………んっ！」

感情の反転が完全に解け、早く最愛の彼との再会を。とそんな願望を糧に瞳の輝きが増す。優花とユエは、笑顔で頷き合つて敵を見据え直す。

ユエが戦場にあつて禁忌の所業——目を閉じるという行為に入った。凄く集中しているのが傍目で分かる。完全に優花に命を預けた体勢だ。

優花は、今さっきのことで天の魔力の理解が深まったことにより、新たな力を手にしたような感覚を味わつた。それは、天使の力を受け継いでから階段を一段、一段と上がついくような感覚で “天性魔法” の汎用性、 “聖杭” の数を増える際に味わつていた。

——その感覚が今、訪れたのだ。

その間にも “人型” が、次の手を決めたらしい。数体を残して、残りが一斉に襲いか

かった。凄まじい数の腐食の竜巻や砲弾が迫る。

「何もさせない——『限界突破』。十二全ての『聖杭』達よ。私に集いなさい」

白銀の魔力の奔流。『限界突破』により、今この瞬間、全てのスペックが三倍に膨れ上がる。更に優花の元に全てが揃った。

天使族の聖杭の最高は十二。しかし、それを成した者は絶滅した天使族でも数は少なく、精鋭のみだけだった。今も十二を扱えてるのが判明するのは『五神』の一柱でありクリスタの双子の姉『聖母神』エクストラだけだ。

そんな神の領域なる力の一端に優花は至った。いや、正確には取り戻したのだ。

「——『聖盾』」

優花の言葉に十二の聖杭達は形状変化して聖なる盾となり、迫っていた全ての黒煙を防ぎきった。

これを使えば、優花といえどタイムリミットが課される。効果時間後は、倦怠感に襲われ、一時的に行動不能になるだろう。だが、心配など欠片はない。頼れる大切な仲間が、請け負ったのだ。全て終わらせる、とっておきの魔法だと。

ならば、やることは簡単。

今この時、大切な仲間を守れば、それでいい。

「『聖剣』よ。行きなさい」

もう、一言で主人に従うようになった聖杭達は、「聖盾」から十二の「聖剣」へと形状変化し、流れる流星のように「人型」達へと殺到した。

「「ギイイイイッ!?!」」

自分達を殺すまで追尾してくる十二の流星は、精密に敵の未来位置を貫いていく。三倍に跳ね上がったスペックによって、「聖杭」達は、更に速度と機動性が増した状態になっている。

ならば背後から。と思つても、そこには既に「聖剣」から「聖槌」に形状変化していた「聖杭」によつて遠くへ吹き飛ばされる。

優花とユエを中心に駆け巡る十二の星。それは言葉通り二人を守る空中の絶対要塞だった。

——とても、近付けない。

「人型」はそう判断するのに時間はかからなかった。とはいえ、「人型」にとつて、それは大した問題ではなかった。優花とユエを襲う「人型」は全て、陽動であるが故に。

大樹を盾に、反対側に回り込んだ数体の「人型」が絶叫を撒き散らす。そうすれば、どこからともなく聞こえてくる、羽ばたきの音と壁を這う音。何処からでも聞こえてくる音で、「人型」が呼び寄せる眷属が、この大迷宮中から、否、この樹海中から集めら

れているためか。

「うわ。…………最後の最後に」

感情反転が解けた今の優花には、この想像するのも嫌になる大量の音には表情が引き攣り、若干、青ざめている。

「もしかして、そんなに沢山湧き出すつてことは、『ネームド』は、ともかく『量産』はそんなにいるつて警告なの？」

そんなことを独り言ちた次の瞬間、それは起きた。

地下空間全ての壁の——噴火。

そう錯覚するほどの勢いで、全ての壁からゴキブリの大群が噴出したのだ。それはもう、津波などという表現ではまるで足りない、地下空間の壁の縮小ともいべき現象だった。噴出するゴキブリで、壁や天井はもちろんのこと、もはや大樹も見えない。シア達の姿も見えず、どうなったのかも分からない。

もし、この地下空間を俯瞰的に見る<sup>ふかんてき</sup>ことができるなら、優花とユエを中心に巨大な球体が形成されている光景が見えただろう。まさに、数億、数十億という数のゴキブリの閉鎖空間。

優花は直感的に悟った。これは、大迷宮の、引いては解放者達のメッセージだと。

——『神の使徒』を、まともに相手取るな。本体を叩け。さもなくば吞まれるぞ

そういうメッセージなのだ。

「だとすれば、この地下空間のどこかに『本体』があるってことね」

おそらく、そうなのだろう。数の暴力に屈する前に、どこかに隠された『本体』とも言うべきものを見つけ、そして破壊することが『本当の攻略方法』なのだ。

もつとも、

「ルールに従うとは言っていないけど」

ユエの直ぐ傍まで近付くと十二の『聖剣』が二人の周りを廻る。

「ラスト三十秒」

十二の聖剣が白銀の色で輝き、聖剣の形から矢の矢尻の種類の一つ剣尻の形へと変化し、その大きさは一メートルはある。

その形は、まるで星。夜空に浮かぶ星々。

星は廻転し、更に輝きを増していく。

優花は集中力を極限に高めるためにスツと瞼を下ろす。

——『聖剣』は夜空を駆け巡る輝く星々。

——十二の神星は黄道の道を廻り巡る。

——流るる十二の星々は、我が身を害する敵に星の裁きを与え滅却する。

優花は、両手を合わせて菱形のクリスタル型の星を連想させるような掌印をつくる。



しかし、それをさせまいと、次の瞬間、ゴギユツという生々しい音と共に、優花とユエの姿が消えた。ゴキブリの閉鎖空間が、一気に圧縮したのだ。圧縮率から見ても、おそらく中心部は深海レベルのプレッシャーがかかっている。金属すら保てないだろう死の領域となっているはずだ。

生き残った“人型”数十体が、圧縮された球体の閉鎖空間の周りに集まる。そのうちの一体が、スツと前に進み出て球体を開けようとする。そうして、見えるはずの光景は、無残な姿を晒す二人の大迷宮挑戦者……………。

しかし、現実とは違った。

直後、球体がゴムのように、軟性の殻を破るかのように動き爆散した。周りにいた“人型”達は瞬時に距離取る。

球体の爆散した場所からは、無傷の優花とユエの姿が現れる。優花は掌印を崩さないまま、両腕を天に掲げた。莫大な魔力が優花の中へと収束していき、圧倒的な存在を示す白銀の魔力の奔流が天と地を繋ぎ合わせた。

今から繰り出されるのは、十二全ての“聖杭”が揃ってこそ完成する天使達が編み出した天罰。

黒から白へ、紅から白へ、蒼から白へと全てが何も無い平等な白へと染まらす秘技。

——故に最強の絶技。

銀の髪が靡き、背中に生えた純白の天翼が大きく広がり、星の輝きで照らされた優花は、何も言葉を発しないその姿も、まさに天使といえる美しさを見せる。

掌印を解いた優花は、片手を天へ掲げる。それを見た“人型”は絶叫を上げて止めに入るが、それを十二の星が立ち塞がり阻止する。そして、その間に既に天の判決が下された。

天へと掲げられた優花の手は、裁きを与える対象へと勢いよく天から地へと振り下ろす。

「十二の星に裁かれなさい！——」

力強く口上を述べて、優花は、その裁きの名を口にして叫ぶ。

「アストラル・シャリオ十二の星の裁き！！」

その瞬間、放たれた十二の光の流星郡が“人型”達を強襲を開始し、流星のように天から大地へ裁きを与えるかのように降下していく。

「ギイツ……………」

“人型”達は、無自覚だった。試練としての使命も、魔物としても本能も、全て無視して後退つたのだ。

生物としての根源的な本能故に。

“あれ”はいけないと、紛れもない恐怖が“人型”を襲う。同時に、慈悲など無い裁

きが下った。

数十体の「人型」達のいる場所に、巨大な十二の柱が顕現した。全てを滅するその光の柱達は、そこから一帯を更地にし「人型」を跡形も残さず滅却していく。

そんな全てを裁くような勢いで進む柱だったが……………

「!?……………カフツ」

だが、優花の方もタイムリミットを迎えた。強制的に「限界突破」が解け、倦怠感に襲われる。「十二の星の裁き」も優花の意識が一瞬、途切れたため解除される。

裁きの星々が消え、「人型」は心底、安心したのだろう。

だが、現実は甘くはない。「人型」は視線を優花に移すと彼女は笑っていた。

そう、優花の役目は、ただ彼女を守るために、死力を尽くしていたのだから……………

だから結果は当然、

「……………カウント、ゼロよ」

傷一つ付いているはずがない。ユエは、優花の隣で浮きながら、今、この時、初めて瞑目を解く。

「……………「選定」」

開眼と同時に、紡がれた言葉。

胸元には祈るように合わされた小さな手。その中から漏れ出す蒼い光が、静かに脈動

した。

不可視の、しかし確実に力ある何か<sup>が</sup>波紋を広げるのを、“人型”は明確な恐怖と共に感じ取ってしまった。

ユエが、そつと壊れ物を扱うように、手を開いた。そこにあつたのは、渦巻く小さな焰<sup>ほのお</sup>。

それは、まるで小さな蒼色の星。

少しずつ脈動を強めていくその小さな蒼い星をユエは、捧げるかのように天へ掲げた。自らが生み出した蒼星の輝きに照らされた吸血姫の姿は、どこまでも神秘的で美しい。

ハツと“人型”が我を取り戻す。

優花の“<sup>アストラル・シヤリオ</sup>十二の星の裁き”の時と同じような危機感と焦燥感を滲ませた絶叫を上げ、

もう一度圧縮しようとする。

「——“<sup>しんばつ</sup>神罰之焰”」

可憐な声で、しかし、残酷に響き渡った詠唱。

直後、その魔法は殲滅の意思の乗せて発動された。

蒼く輝く星が、一際強く波打った。

次の瞬間、蒼き星を中心に光が膨れ上がり、地下空間へ広がっていく。まるで風いだ

水面に落ちた一滴の水滴がもたらす波紋の如く。静かに、穏やかに、されど慈悲など微塵も宿さずに。

まず、閉鎖空間の近くにいたゴキブリが灰燼に帰した。一瞬の内に、一匹も余さず。“人型”もまた“神罰之焰”と詠われた瞬間、脱兎の如く逃げ出したが、幾ばくも距離を取らない内に、空間全てを蹂躪する蒼の光に捕まって、悲鳴を上げることでもできずにあつさりと消滅した。

シア達の姿が見えた。どうやら無事なようだ。

広がり続ける蒼い光は、そのままシア達をも巻き込んで“半人型”を呑み込んでいく。一瞬で“半人型”を殲滅していく蒼炎に、シア達が焦った表情になるが、アレスは「もう、習得したのですね」と笑みを浮かべている。だが、シア達も直ぐに、焦ることできていること自体に不思議そうな表情となる。そして、自分達を透過して、それどころか大樹や枝通路すら傷一つ付けず、ただゴキブリだけを滅ぼしていく光景に、更に不思議そうな、あるいは戦慄したような表情となった。

不可思議で恐るべき現象の原因。それは、

——火・重力・魂魄複合最上級魔法“神罰之焰”

火属性最上級魔法“蒼天”を、重力魔法によって計十発分圧縮し、更に、魂魄魔法“選定”によって、ユエが指定した魂を持つ者だけ、あるいは指定しなかった魂を者だけ

焼き滅ぼす超広域殲滅魔法である。

——ユエに許された存在だけが生き残ることを許される魔法。

——ユエに敵と定まれた者は、逃れ得ぬ消滅を余儀なくされる魔法。

それは最早、*“御業”*というに相応しい。

ユエという名の神が下す、まさに*“神罰之焰”*というわけだ。*“人型”*が復活してないことからすると、どこかにあったはずの*“本体”*も消滅したに違いない。

「とんでもない魔法ね。流石、ユエ」

「……………ん。優花も凄かった」

蒼炎の光が消えて静寂を取り戻した地下空間に、二人の声が響く。流石に、大魔法中の大魔法を放ったせいかわれた様子でふらついたユエを、優花は、そつと労るように抱きとめた。

ユエは抱きとめくれた優花に微笑み、優花も微笑み返した。だが、優花も流石に*“限界突破”*の倦怠感によりゆっくりと地上へ降り、*“天使化”*を解除する。

戦いが終わり、地上に降り立つも足の力が入らず優花は、そのまま座り込んでしまう。

ユエは優花の膝上に座り込んだ。そして、安堵したように一息吐く。

「終わったね」

「……………ん。早くハジメの血を飲みたい」

「……ねえ、ユエ。そ、そんなにハジメの血って美味しいの？」

「……んっ、ハジメの血は最高に美味。他の人と違ってコクが——」

「そ、そう……ハジメの血……ゴクリッ」

戦いが終わり、疲れているのか二人は仲良く少しアブノーマルな会話をするのであった……。

## 百十九話 P v N③―決着―

大樹ウーア・アルトの中のハルツイナ大迷宮の地下空間にある闘技場では、大迷宮挑戦者南雲ハジメと、神代より前から大樹を守っていたゴーレム機神兵の両者がそこにいた。

片や、神を殺す力を得るため。

片や、神を殺せるのか見定めるため。

一人と一機の戦闘の激しさが羅烈と化していた。

「『紅狼』、『限界突破・霸潰』」

「『紅狼』と本日二度目の『限界突破・霸潰』を発動。紅の魔力の奔流がハジメの両手に赤雷の狼を纏いだす。ステータスが五倍となり、一気に踏み込んでハジメは、ドンナー&シユラークから一秒の間、本当に撃つ動作が見えず、分かるのは発砲音と放たれた十二条の紅の閃光。それに対応した機神兵からは、二つの腕に搭載されたガトリング砲と背中のミサイルポッドから数百発のミサイル郡が同時に放たれた。

だが、両者共、防御体勢を取らずに次の一手を行動に移している。すると、次の瞬間、



二つの圧倒的な魔力の奔流。それが、全方位に衝撃波が放たれ、同時にぶつかり合った。両者が放たれたものの全ての軌道が逸らされ、彼方へと飛んでいく。

しかし、そんな魔力にも動じず、ハジメも、機神兵も互いの武器を持ち合わせて近接戦を繰り広げていた。ハジメは、ドンナー&シユラークに「風刃」、**「集中強化」**、**「金剛」**を纏わせ、機神兵の**「魂魄魔法」**が付与されたメイスの攻撃の軌道をドンナーで逸らし、シユラークで風の爪牙を喰らわそうとするも、**「重力魔法」**が付与された斧槍ハルバードによって阻まれる。だが、ハジメはそれを予測してたのか、わざとドンナーを空中に手放し、空いた手を機神兵の前に突き出して魔法のトリガーを引く。

「――**「万雷」**」

雷鳴が鳴り響き、数々の紅の落雷が機神兵とハジメに降り注ぐ。ハジメは雷耐性があるからなんとでもないのだが、機神兵も己の頑丈な体で防ぎきった。ハジメは、空中に投げ出したドンナーを手に戻すと数発の閃光を放つ。

機神兵は空いている二つの腕を交差させて直撃を防ぎ、仕返しと言わんばかりに二つの凶器を振りかざす。ハジメは**「天歩」**、**「空力」**を駆使して避け、避けきれないと判断したものは**「集中強化」**、**「竜鱗化」**させた足で蹴り上げて攻撃の軌道を強制的に逸らした。

そのまま、地上に着いたハジメは、ドンナー&シユラークをホルスターに仕舞いなが

ら機神兵の背後に周り込んで、取り出した「オルカン」で十二発のロケット弾を放つも、背中のミサイルポッドから射出されたミサイル郡に相殺されてしまい、辺りに爆煙が舞う。

その爆煙が舞う中、一筋の閃光が機神兵を襲う。避けるも頭部の一部を貫かれてしまう。爆煙が舞っている間は危険だと判断したのか斧槍をプロペラのように勢いよく回して爆煙を掻き消して距離を取る。そして、一筋の閃光の正体も判明した。

「チツ……掠っただけか」

そう悪態を吐くハジメの右手には漆黒の大槍「カミゲライ神喰雷槍」を手にされていた。そして、追撃と言わんばかりに神喰雷槍を持つて機神兵との距離を詰めて大槍を振るう。機神兵は、「ゲート」を展開して神喰雷槍の攻撃を無効にし、出口をハジメの背後に展開する。直後、ハジメに襲いかかるのは自分の武器。

「ッ!？」

ハジメは、驚愕して目を見開くも咄嗟に義手で神喰雷槍を受け止め、機神兵の胴体に蹴りを入れると同時に踏み台にして距離を取る。

「クソ……やはり問題はゲートか」

ハジメは、機神兵を捉えながら呟く。機神兵の攻撃パターンは単純だ。一回見れば予測できるし、二つの神代魔法を付与された武器も攻撃の軌道を逸らせばいい。だが、一

番厄介なのは「空間魔法」のゲートだ。いつ、どんな状況で発動させるのか分からない。

しかし、ハジメは分かっている。「ゲート」の原因、空間魔法を付与させたアーティファクト。

それは、

「次は確実に潰してやる。てめえの右眼」

そう、機神兵の扱う空間魔法が付与された部分は右眼であった。それに気付いたのは、機神兵のステータスを昇華させた時だった。不意打ちを喰らった際にハジメは見たのだ。機神兵の右眼に光り輝いていた魔法陣が刻まれていたことに。そして、その魔法陣は、機神兵が「ゲート」を展開したと同時に、輝きだしていたことを。

機神兵もハジメに空間魔法を付与させた右眼に気付いたのだろう。じゃあ、どうすればいい。

簡単だ。

——叩き潰せばいいのだから。

機神兵の魔力の奔流が更に倍増され、魔力の衝撃波がハジメを襲う。咄嗟に地を蹴って後退して避けるハジメ。そして、機神兵を見て驚愕の余りカツと目を見開く。

「おいおい、おい……まだ隠してたのかよ」

驚きのあまり苦笑いをしてしまうハジメ。その視線の先には、更に変貌を遂げた機神兵の姿だった。

四本の足にはガトリング砲とミサイルポッドが、両肩にはキャノン砲、腰辺りには蛇腹剣のような尻尾、四本の腕にはメイスと斧槍は変わらず、銃器の代わりに新たにロングソードと菱形型の大盾が装備されている。

そんな禍々しさは神と対となす魔神のように変貌した機神兵。その傍目から見ても分かる圧倒的な存在感と重圧。ハジメは冷や汗を頬にタラリと流す。目の前の存在は、*“限界突破・霸潰”* をしてる今の自分でも倒せないと分かる。神喰雷槍を持つ手が震えてしまう。

だが……

「……………上等」

クハツと不敵に笑みをこぼし、敵を見据えるハジメ。狙うは右眼。どんなに強くなっても関係ない。勝つのは自分だと。ハジメは駆け出した。

機神兵の方は動かず銃撃の雨を降らす。迫りくる銃撃をハジメは上手いこと避けていくが、眼前に現れる空間を繋ぐ*“ゲート”*。そして、ゲートから現るハジメが避けたはずの銃撃達が出迎えた。

「っ!?(ゲートの展開が速えっ)」

ハジメは、即座に靴底に刻まれた魔法陣で錬成し、壁をつくって壊れる前に移動して避ける。が、更に避けた先、背後、左右からゲートが出現して逃げ場を無くす。

「マジッ!?!」

全方位を囲まれ、逃げ場を失うハジメだったが、*「紅翼」*を発動して上へ逃げて回避する。

「クソっ……急に強くなりす——」

急に、ゲートの展開の速さが増してることにより危機感を覚えるハジメ。しかし、機神兵の攻撃はあれで終わりでなかった。急に機神兵の方から物凄い殺気を感じ視線を向ければ二つの巨大な魔力弾がハジメに急迫していた。

誘導された。

「っっ!」

機神兵はわざとハジメの上だけにゲートを展開せずに、上へ逃げる選択しかできないように誘導して、肩のキャノン砲を放ったのだ。

キャノン砲から放たれた魔力弾は最上級魔法に匹敵する威力だとハジメは右眼の*「魔眼石」*で確認する。逃げようともあの魔力弾の速度だと逃げる暇はない。

「ならっっ」

ハジメは、魔力リソースを挿入して更に翼を強化し「竜鱗化」も発動して完全に竜の翼へととなった。「紅翼」を盾にして、最上級魔法級の魔力弾二つに立ち向かう。二つの魔力弾が「紅翼」に直撃する。

直後、巨大な爆発が起こる。爆風はこれまで以上より強く吹き、機神兵すら後ろに動かされてしまう。それもそうだ。最上級魔法二つ分の魔力弾が爆発したのだ。当然だろう。そして、そんな爆風が起きる爆発に、普通は生きられる者はいない。

そう、普通ならば……

機神兵に円形の何かが飛来する。が、容易くロングソードで弾かれてしまう。すると、爆煙の中から何かが落下し、地面に着地した。

「ぐうっ、はあはあ……」

ハジメだ。頬が焼け、服も至るところが焼け焦げ、火傷も酷く負っていた。しかし、機神兵は首を傾げた。

—— 妙だ。

あれ程の爆発だけで、ハジメは死にはしないと分かっていたが、予想したよりも軽い怪我なのだ。何故？と機神兵が思考が支配してしまい、一瞬の隙が生まれる。

その隙が、

『！』

命取りだった。

何処からか突然と、紅の閃光が、機神兵の眼前に現れた。避ける暇もない。防ぐ暇もない。

故に……

バリントン！

何かが割れる音が響く。右眼が破壊された。『再生』を使おうとも内部機構の急速再生に回してゐるために使うことは不可能。右眼を破壊された機神兵はもう、『ゲート』を使うことができない。

「クハツ……やつと油断したな」

声感知した機神兵は、ハジメを見る。ハジメはドンナーを持って不敵な笑みを浮かべていた。すると、ハジメの元に機神兵を襲った円形の何かが飛来し、ハジメは指に挟んで受け止め、機神兵に円形の何か——『円月輪』を見せる。

「『ゲート』を使えるのはてめえだけじゃねえってことだ」

そう。ハジメは、爆発に呑み込まれる中、『円月輪』を機神兵がいる方向へ投げ、当たっても当たらずともいい。ただ、壊れなければ大丈夫と。そして、ある力で何とか爆発に耐え、機神兵に隙を作りながら『魔眼石』で『円月輪』の場所を見つけた瞬間、隠し持っていた『円月輪』にレールガン一発ぶつ放したのだ。

結果、機神兵の右眼。空間魔法を潰し「ゲート」を封じた。

しかし、ハジメもハジメで、爆発を耐えたとしても既に体が傷だらけだ。それに、

「ゴホツ、ゴホツ。……チツ」

ハジメも、咳と共に服に付着した血を見て、自分の限界に近いことを悟る。それもそう。一日に二度も「限界突破」の派生「限界突破・霸潰」を使っているのだ。一回だけでも、タイムリミットが過ぎたら戦闘不能になるぐらいの代物だ。それをハジメは、二度もちゃんとした休みもなく発動させている。既に体の内側がポロポロになっているだろう。

しかし、ハジメは諦めない。

「なあ、<sup>ゲー</sup>全てを<sup>ト</sup>守<sup>キ</sup>護<sup>バ</sup>する者」

ハジメは、機神兵を真名で呼ぶ。それに反応した機神兵は、ハジメを見る。

「お前と本気で戦えて俺は命を懸けた殺し合いをしているっていうのに、楽しいって、ずつとこうしてたいって思ってしまう」

そう語るハジメに、機神兵は何もせず黙って聞く。

「でも、これからの戦いはそうはいかない。アイツ等と戦うとならばこの感情は捨てないといけない。今度こそ俺の大切な人達を守りたいんだ。もう、嫌なんだ。シキヤ



エルネシア……そして、クリスタの時みたい誰も失いたくない」

語気を強めて拳をグツと握って話す。しかし、今も喋っているハジメは、本当に南雲ハジメなのか、それとも違う誰かなのか……

「だから、<sup>ゲイ</sup>全てを<sup>ト</sup>守護<sup>キ</sup>する者。お前は、オレの贄になつてくれ」

ハジメはそう言い終えると、ホルスターからシユラークを取り出した。そして、機神兵も動きだす。

——それが、創造主様の御命令ならば

機神兵はハジメの言葉を従うかのうように、再び、四つの腕を動かし武器を構える。

一拍。

この場所で初めて静寂が流れる。

そして、両者の瞳がギリリと輝いたその瞬間、一気に前足を踏み込んだ機神兵は、既にハジメとの距離は三メートルもない。しかし、ハジメは二つの銃を握り締めたまま動かない。だが、機神兵は止まらず斧槍とロングソードをハジメを狙って振り下ろす。

それなのに、一步も動かないハジメ。もしや、体が限界に達してしまったのか？あの言葉はただの強がりだったのか？そう思ってしまうほどハジメは逃げも戦いもしない。

もう、戦わずして既にこの戦いの勝敗が決してしまっていたのか……

否。

もう、ハジメの眼前にはロングソードと斧槍が迫っている。その時だった。ハジメはボソツと呟く。

「//組み換え<sup>リセツト</sup> —— //接続<sup>コネクト</sup>」

次の瞬間、紅黒い稲妻が奔り機神兵が向こうの壁まで吹き飛ばされた。

~~~~~

「  
」  
啞然。

今は、その言葉しかりリューティリスは思い付かない。

一步も動かないハジメを見て、あの戦いは機神兵の勝利と確信していた。なのに、次の瞬間では、機神兵は向こうの壁まで吹き飛ばされているじゃないか。

リューティリスは、ゆっくりハジメの方へ向き直す。

そして、

「?!」

驚愕する。驚愕の余りゴーレムなのに腰が抜けてしまうほどだ。リューティリスは今のハジメを見て……

「あの御方は、本当に何者ですの………」



見やる。

「今はガントレットに組み換リえてしまセったが、この銃器………ドンナー&シユラークという名だったな。『生成魔法』と『錬成』で作り上げているが、思ったよりも性能が素晴らしい。オレの力との相性が抜群だ。流石はオレが選んだ宿主だ。錬成も魔法も使い方をわかっている。が、まだ神代魔法の根幹を知らなければアイツ等をと戦つても負けは確実」

口元に手を当ててブツブツと独り言を始めるハジメ？。だが、今は試練の最中、起き上がった機神兵が空けられた距離を一気に無くしてハジメ？に強襲するが、その前にノールツクで強襲された方向に手を出す。すると、何かのシールドに阻まれてしまつて攻撃が通らない。

何度も攻撃を繰り返しても割れる気配のないシールド。そんな中、ハジメ？はうんざりした顔で溜息を吐く。

そして、

「五月蠅い、オレは今、考え中だ」

と、少し眉をひそめると、ハジメの数倍の巨体である機神兵をたつた一蹴りで宙に吹き飛ばした。だが、やはりハジメ？の方にも蹴つた足から痛みが走り、少し表情が歪む。

「やはり、今はまだ弱いな。力は渡してやる。だから、強くなれ宿主よ」

そうハジメ？が言い終えると目を閉じた。そして、すぐ再び、ゆつくりと目を開けるハジメ。意識も覚醒すると、辺りを見渡して状況の確認を取ることを優先する。

ハジメ自身も、デウスと思われる人物と会話しており、今回、貰った力の能力のことを学んでいた。

「ああ……って、俺はアイ——いや、今はそんなのはどうでもいいか」

ハジメはそう言うのと、こちらに迫ってくる機神兵を見やる。

「ざっと、後五分……」

五分。それは、*“限界突破・霸潰”*が切れるまでの時間。これを過ぎればハジメの負けは確定する。

だが、

「関係ねえ！」

ハジメも機神兵へ駆け出した。両者近くなると先手は機神兵からだった。振るわれるのは、三つの振り下ろされる武器。

しかし、ハジメは防御を取らずにただ一言呟いた。

「T・S*“展開”*」

その瞬間、ハジメに武器が直撃せず、直前で正八角形の赤雷の波紋が発生している何かに阻まれていた。

——“T・S (Thunder Shield)”

全方位からの攻撃を防御可能なバリアと言うべき代物であり、展開時には正八角形の赤雷の波紋が発生する。防御力が極めて高く、最上級魔法なら一発分耐えられるほどであり全方位をやめて集中防御したら神代魔法の攻撃すらも防ぐことは可能である。

攻撃が防がれ、次の手に移ろうとする機神兵だったが、ハジメの攻撃の方が速かった。ハジメはガントレットで殴りかかる。機神兵も大盾を構える。

刹那、紅黒い稲妻を纏ったレールガンのような速さのストレットが機神兵の大盾を一撃で破壊する。

「ふっ………」

更に続けて“空力”を発動して、機神兵に踏み込むと片方のガントレットで繰り出したストレットで、大盾を破壊されて何も持っていなかった機神兵の腕の一本を破壊した。

その規格外な強さに危険と判断したのか、機神兵は一旦、ハジメから距離を取る。そんな中、ハジメは、自分に装着されたガントレットの性能に目を輝かしていた。

「凄え……。これがドンナー&シュラークのもう一つの可能性」

——“ドンナー&シュラーク・モード：ガントレット”

機神の力で、構造を銃からガントレットへ組み換えた“ドンナー&シュラーク”。

射撃性能を失ってしまうが、打撃性能が高くなり、より近接戦闘に特化されている。魔力を流して電磁加速によって繰り出すレールガン並の瞬速の一撃は、アザンチウム鉱石で作られた壁も容易く破壊できることが可能である。

しかし、目を輝かすのも束の間。

機神兵のキャノン砲やガトリング砲から数多の魔力弾達がハジメへと迫る。だが、ハジメは笑った。

「面白れえ……遠距離戦……構わねえよ。試したいことがあつたしな」

そう言ってハジメは、「宝物庫」から「クロスビツト」、「オルカン」、「メツエライ」を取り出し、機神の魔法を発動させる。

「組み直し」——「接続」」

三つのハジメの兵器が一つに纏まり現れたのは、二メートルぐらいの巨大な黒の十字架。中心には骸骨を模したグリッブが取り付けられている。

「……「パニツシャー」」

ハジメは、十字架の名「パニツシャー」を口にすると左のガントレットと接続して魔力を流した。すると、黒一色の十字架に紅の線が浮き始め、各部装甲が展開し砲身を露出させた。そして、接続したグリッブの部分の引き金を引いた。

「……発射」

次の瞬間、*“パニツシャー”*の短辺側から複数のロケットミサイルが射出されて、ハジメに向かう砲撃の全てが巨大な爆発と雷が落ちて相殺する。

そして、更に引き金を引くと長辺側に搭載された機関砲から一瞬にして、数百発の砲弾を発射させる。機神兵は避けようとするが、相手は銃の絶技を持つ人間。簡単には避けられず被弾してしまい、前足の一つが破壊された。

しかし、ハジメの攻撃は終わりじゃない。

*“パニツシャー”*に搭載された全ての砲弾を発射し、機神兵へと向かつて駆け出していく。機神兵は逃げようとするが、前足の一つを破壊されてしまつて上手く走れない。

そして、

「喰らえっー！」

機神兵へ迫り着いたハジメは、*“パニツシャー”*を回転させながら大きく振りかざす。咄嗟に斧槍で防ぐも、重力魔法と空間魔法*“震天”*が付与された*“パニツシャー”*のガントレット前では、たったの一撃で粉碎されて腕ごと持っていかれる。

——まずい。

そう判断したハジメとの距離を離そうとする機神兵。だが、距離を剥がそうとも、ハジメは、*“紅狼”*で強化された脚力の前には、三本になつて起動力が落ちてしまつた機



神兵では到底、適わない。両肩のキャノン砲と足に取り付けられたガトリング砲を放つても、前方に集中的に展開された「T・S」によって阻まれ、「パニツシャー」から放たれたロケットミサイルによって相殺され、遂には破壊されてしまった。

「逃がすわけねえだろ」

ハジメは、そう言うと、追い付いた機神兵の間合いに勢いよく踏み込むと空いた右のガントレットから電磁ブレードを出して、腹部に突き刺さして、もう逃げないように拘束すると、

「喰らいな」

「パニツシャー」の長辺側を機神兵の横腹に当てゼロ距離機関砲をぶつ放した。轟音が鳴り、機神兵の横腹には、巨大な風穴を作り上げる。

『!!』

機神兵は、咄嗟に残った三本の腕でハジメのいた場所に攻撃するも、そこには「パニツシャー」と取り付けられていた義手だけが残されていた。そして、振り下ろした腕を止めれずに三本の腕は、「パニツシャー」と義手に攻撃を加えしまい、ハジメが仕掛けた罠——「ボーラー」が射出され、三本の腕が拘束されてしまう。

「クハッ……掛かったな」

そんな時にハジメの声が聞こえ、従うように上を向いたそこに見えたのは、

「……………」

無言で自分を見下ろして、漆黒の大槍 “神喰雷槍” を手に持ち大きく振りかざしておりその表情は不敵な笑みを浮かべていハジメの姿だった。

だが、ハジメ自体、既に満身創痍。どうなってもこれが最後の一撃だ。しかし、そんな状況にハもジメは、瞳をギラつかせ、更に口角が吊り上げている。

「これでチエツクメイトだ。機神兵」

機神兵も既にハジメと同じように満身創痍。どう回避しようと、銃器系は全て破壊され、致命的なダメージにより内部機構は再生が追い付かず、腕は拘束され、足も既にロボロで内部機構も駄目なら逃げ切れる訳がない。

だか、自爆なら……とそう思った時だった。機神兵は、ハジメのギラつく瞳を見てしまふ。どんなに苦境に苛まれようとも諦めず生に執着し、大切な人を守るために強者であり続けるための瞳。

それを久しく見れた機神兵。

故に……………」

機神兵は受け入れる。

——自身の敗北を。

そして、認めた。

——神達を倒せるということ。

そして、信じることにした。

——創造主の願いを叶えられることを。

そして、託すことにした。

——この世界の命運を。自由の未来を。

だから、認める。

——あの御方の力を受け継いだ異界から来た人間。南雲ハジメの勝利を。

「……………  
 //カミグライ  
 神喰雷槍// ——起動」

その言葉と共にハジメの全魔力が、//神喰雷槍//に送られていく。//限界突破//のタ  
 イムリミツトが迫り全身の血管から血が噴き出してしまいが、無視して魔力を送つてい  
 き、切り札の漆黒の大槍に赤雷が纏い出していく。

そして、今の最大の魔力を送らせた漆黒の大槍は、赤雷の魔槍へと変貌しハジメは、  
 「ガアアアアアア!!」

神をも喰らう赤雷の大槍を地へ解き放った。

まさに神速の如き雷が機神兵を襲う。しかし、機神兵は何もせずにその力を認め受け

入れた。

直後、大地までも穿つ雷鳴が闘技場内に轟いた。

戦いが終わり少しの静寂が訪れる。ハジメは、ゆっくり地に降りると上半身の大半を失つても地に立ち尽くす機神兵の残骸の前に歩み寄り片膝を落として、そつと触れた。

「……………本当に長い間、お前は頑張ったよ。だから今度は、ここで安らかに眠ってくれ」  
ハジメは敬意を込めた言葉と眼差しを送ると、機神兵の残骸を“宝物庫”へと収めていく。

「資格者南雲ハジメ様、試練突破おめでとうございますわ」

玉座からハジメの前に移動したりユーティリスが現れ試験のクリアの激励を送る。その言葉にハジメの表情が僅かに柔らかくなる。

「ありがとう。でも、もう流石に歩けねえ……」

そう言いながらハジメは、ドツと疲れが襲ってきたのか足に力が入らなくなつて自然と仰向けになつて倒れた。

「ふふ、安心し下さいませ。わたくしが、ハジメ様を住処へとお運びしますわ」

「すまん、助かる——」

神代魔法の魔法陣がある住処へと運んでくれるというユーティリスに短く感謝を

述べたハジメは、そのまま死んだかのように眠りに就く。

「あら？お疲れのようですね。まあ、仕方ありませんわ——ふふつ。あんなにお強い方ですので、今の貴方様の寝顔の方がお似合いですわ」

リューティリスは、ハジメの寝顔を見て笑みをこぼす。それぐらいハジメの寝顔は、年相応の青年らしく微笑ましい表情であつた……。

## 百二十話 一つの希望

“人型”の本体を倒した優花とユエは、少し魔力を回復させ、互いの体を支え合いながら広場へ戻つてくると、待っていたシアとテイオが笑顔で二人に声をかけた。

「ユエさくんつ、優花さくんつ。大丈夫でしたか？こっちはテイオさんとアレスさんがマトモ過ぎたおかげで無事でした！」

「マトモ過ぎとは、ただ己を自制してたまでというのに……。それより二人共、お疲れ様じゃな」

二人の言葉を聞いて、シア達の方も無事であったことに安堵する優花とユエ。

「お疲れ様です、御二方。しかし、最後の十二の光とあの蒼き炎は凄まじいものでした」

優花の「アストラル・シヤリオ十二の星の裁き」とユエの「しんぼつのほむら神罰之焰」を見て、感銘を受けて称賛を送るアレス。

「ええ、十二全ての「聖杭」が揃うと、あんな凄いことが出来るなんて思いもしなかったわ」

「……ん、アレスが「選定」のやり方を詳しく教えてくれたから上手く出来た」

アレスは、二人の言葉と、それにユエの感謝の言葉に「教える甲斐がありましたね」と頷きながら笑みを浮かべていた。

その後、全員で回復薬や携帯食を口にして回復に専念したりして休息することしばし。

その間、敢えて感情反転の際の言動には言及しない。いろいろ藪蛇になりそうな者もいるし、何より、黒いあんちくしょうへの感情を、誰も思い出さたくないからだ。

そうして、ある程度、全員の肉体的疲労が回復した頃、まるでそれを待つていたかのようなタイミングで、突如、天井付近にある大樹の一部が輝き始めた。その輝く場所から、メキメキツと音を響かせて大きな枝が生え始める。

その枝は、新たな通路となつて伸びていくと、遂に優花達のいる広場まで到達した。そして、波打つように形を変えて天へと続く階段となつた。

「さっきのが最終の試練だと思いたいところね」

優花が、「限界突破」の影響で、未だに倦怠感の残る体に苦笑いを浮かべて言う。ユエ達も同意であり、そして……

「……………ハジメ」

ポツリとユエが寂しそうにその名を呟いた。そう試練が終わつたのに自分達の恋人であるハジメは戻つてこなかった。自分達より下の場所で戦っていると試練中に強大

な魔力で感じ取って理解したが、試練が終わった際も、休息の際も帰ってこず、今の優花達の心配度は限界を越えそうになってしまっている。それに、光輝達は精神的な疲労が限界に来ているようで、更に試練がないよう祈るような面持ちとなっている。

枝階段を上りきると、大樹の幹に見慣れた洞が出来ており、中には既に魔法陣があった。その上に全員が乗った途端、いつも通り光が溢れ出し、転移が始まった。

光が収まった後、優花達の目の前に広がっていたのは——庭園だった。

空気がとても澄んでいて、空が非常に近く感じられ、広さは学校の体育館くらい。美しい庭園で、清い水が流れる可愛らしい水路に、芝生のような地面が広がっている。小さな木々には果実が実り、その木々に囲まれるようにして、小さな白亜の建物もある。

優花達が立っているのは、そんな水路と木々に囲まれた庭園の一角らしく、四方に橋が架けられた円形の足場で、魔法陣が刻まれている。

「もしかして、あれか!？」

光輝が、どこか逸る様子で指を差した。

庭園の最奥に、一際大きな木があった。今立っている場所と同じように、水路に囲まれた円形の小島の上に生えている。木の根元には、めり込むようにして石板があった。

今にも飛び出しそうな光輝を制止しつつ、優花達は周囲を観察する。一見して、非常に高所にあることが分かった。何せ、水平方向にも青空が見えているのだから。



テイオが慎重に庭園の縁まで行き、眼下を覗き込んだ。

「……なんとまあ。どうやらここは大樹の天辺みたいじゃぞ？」

テイオの言葉に優花達も庭園の端へ集まる。

そうして下を見てみれば、なるほど、テイオの言う通りらしい。眼下には、広大な濃霧の海が見えたのだ。どう見ても、樹海の遙か上空だ。樹海の中で、そんな巨大なものがあるとすれば、それは大樹ウーア・アルトに他ならない。

そんな眼下の光景に啞然とする優花達に誰かが話しかけた。

「クハツ……凄いだろ？この光景。俺も最初に見たときは驚いた。フェルニルで樹海の上を飛んだ際も大樹なんて見つけられなかったからな」

「え？」

優花達はその声に覚えがあった。

忘れるはずがない。間違えるはずがない。だって、大切な人の声なのだから。

優花達は声のする方向に振り返った。

「おう、お前等、待ってたぜ」

そこには、服がボロボロ、頬や至る所に切り傷があり、義手は破壊されてるが元気そうなハジメの姿がそこにあった。

「ハジメっ！」

そんなハジメの姿を捉えた瞬間、目から熱いものを流しながらも優花は走ってハジメに抱き着いた。それはユエ達も同様でハジメの元へ向かい抱き着く。特に優花なんかは抱き着きながら「再生魔法」を発動してハジメを治療している。

「……んっ。ハジメ！」

「ハジメ、さん！」

「ハジメよー！」

「うおっ」

優花、ユエ、シア、テイオはもう、絶対に離さないと言わんばかりに自分に抱き着いている姿にハジメはフツと優しい笑みをこぼして四人の頭を撫でるのだった。

そして、遅れてハジメのところに来たアレス達もハジメの生存に安堵し、ホツと息を吐く。

一人は若干、そう思っただけだが……

「ハジメ殿。よくぞご無事で」

「おう、アレス。お前も無事で安心した」

「ハハツ、簡単には死にませんよ」

笑って返す姿に本当にアレスが自分の仲間にいることに内心で感謝するハジメ。すると、そこへ雫も少し涙目になりながらハジメに話しかける。

「本当にびっくりしたわよ。南雲君、突然転移されるんだから」  
「クハツ……すまんな八重樫」

そんな会話をしているとハジメに抱き着いている優花が話しかける。しかし、離れはしないらしい。

「そうえば、ハジメは試練突破したの？」

「……ああ、突破したさ」

そう試練突破を伝えるハジメだが、その表情は少し暗く辛そうだった。試練で何かあったのだろうか、優花は聞かないことにした。

「……そうえば、ハジメはどうやって此処に？」

ユエがハジメに聞いた。どうやって庭園へ来たのか知りたいらしい。ユエの問いに「あー」と、右手で頬をポリポリと掻きながら答えた。

「すまん、分からん」

「……………」

ハジメの答えに、優花達は首を傾げて頭の上に？を浮かべる。ハジメは言葉を続ける。

「いや、俺、試練が終わった際に疲れて寝ちまってな運んで貰ったんだよ」

「運んで貰った？誰にですか？」

「それは——」

『わたくしでございますわ。迷宮挑戦者の様方』

声が届く、優花達が振り向くと体が木で作られた森人族の女性が笑みを浮かべながらそこにいた。ハジメ以外の全員の表情が驚愕に満ちる。そんな中、優花が声をかけた。

「あ、貴女は？」

『あ、申し遅れましたわ。わたくしの名はリユーテイリス・ハルツィナ。解放者の一人であり、ここハルツィナ大迷宮の主でありますわ』

「……「ええ?!」……」

にこやかに自己紹介するリユーテイリスに、ハジメ以外の全員は顔を見合わせ驚きの声を上げる。それもそうだ。数千年以上の前の解放者の一人が話しかけているのだから。

ハジメ以外の全員が驚愕に満ちる中、ユエとシアだけはあることを察して、ハジメの方へ向き直る。

「………ねえ、ハジメ」

「これって、ミレデイさんと同じような感じですか?」

「ああ、俺も最初は驚いたが、ミレデイと同じように魂魄だけを別の場所……ミレデイは

ゴーレムだが、リユーティリスは大樹に移動させたらしい」

ハジメの解説に納得するユエとシア。すると、リユーティリスがアレスを見て急に距離を詰めながら話しかけた。

『あら、ハゲてないですけど、貴方はラーちゃんさんの縁者ですね？』

いきなり距離を詰められて無言ながらも内心驚くアレスだったが、ラーちゃんさん。渾名だろうが自分の先祖のラーズ・バーンだろう。それを察したアレスは優しげな表情を見せるもある言葉に少し引き攣った笑みを浮かべた。

「んんっ、ええ。リユーティリス様。貴女言う通り私の先祖はラーズ・バーンです」

『やっぱりですわ。魔力の波長がどことなく似てましたから。少し乱れているところもあるんですけど』

「そうです、か。流石、解放者の一人です、か」

リユーティリスの凄さに、そしてある事を見抜かれていることに苦笑いを浮かべて解放者は侮れないと感じてしまう。同時に、アレスはあることが気になりリユーティリスに問うた。

「リユーティリス様、お一つお聞きしたいのですが……」

『ええ、いいですわ』

「私の先祖ラーズ・バーンはどんな方でしたか」

アレスの問いにリユーティリスは、木で作られているというのに優しげな笑みを浮かべながら答えた。

『ラーちゃんさんは、一言だけ言えば頑固な方でしたわ』

「頑固、ですか……」

『ええ。しかし、凄く仲間想いであり、家族を愛していた御方でしたわ。わたくしは今でもあの方を尊敬し、大切な仲間だと思っておりますわ』

「ハハッ……そうですか。ありがとうございます」

『……ふふつ、いいですよ』

自分の先祖の事を聞けて嬉しそうにするアレスの姿を見て、リユーティリスは微笑むのだった。しかし、そんな和やかな雰囲気はすぐに終わりを告げてしまう。

それは、鈴の一言が始まりだった。

「え、じゃあ……リユーティリスさんが大迷宮の主なら、あの試練も作ったのはリユーティリスさんですか？」

その一言に事情を知らないハジメ以外の全員がバツとリユーティリスを振り返った。全員、同じように目は物凄い圧を感じさせる眼差しでリユーティリスはビクツと体を震わす。ハジメは最終試練で優花達が何かあったのか知らないためキョトンとしているが、酷い目にあつたハジメと大迷宮の試練ですしと納得してるアレス人外種以外の全員はどん

どんリユーテイリスに詰め寄る。

『あ、あのどうしたのですの?』

いきなり詰められて、慌てふためくりユーテイリスに“聖杭”を周りに飛ばす優花が一言。

「最終試練」

『?……ああ、ウロボロス三世ちゃん達のことですね!』

最初は首を傾げるリユーテイリスだったが、最終試練のゴキブリ達のことだと分かる  
と満面な笑みを浮かべる。

『可愛らしいですよね!あの子達』

「」「全然可愛くない!!」「」

『ピッ?!』

その後、十分近くほどリユーテイリスは、優花達に叱られるという解放者にあるまじき残念な姿の光景が出来上がり、それを眺めながらハジメはアレスから何があつたかと聞き、内容を知ると顔を青くさせて「えげつな」と呟くのだった。

そして、何故か反論なのか「でも、興奮しますわよ!」と、ドM理論を持ち掛けたリユーテイリスに一同はドン引きし、その姿にも興奮する姿を見て、特にハジメ達は、ミレデイと会っているのが解放者はそういう人物達の集まりなのかと思うのだった。

その頃、ライセン渓谷に隠された大迷宮の主は「あれ？なんか、私達の尊厳が失われた感じがするなあ」と呟くのだった。

~~~~~

説教も終わり、木なのに少しゲソツとしてる少し尊敬度が下がったりユーティリスに案内されながらハジメ達は石板の元へ歩いていった。

最奥の小島に続くアーチを渡る。

途端、石板が輝き出し、水路そのものが魔法陣となっていたらしい。煌めく水路から強火のような燐光がゆらゆらと立ち上る。

大迷宮攻略の際、いつも行われる記憶を精査される感覚と、その直後の知識を無理やり刻み込まれる感覚が襲ってきた。ハジメ達とアレスは慣れたものだったが、一人、その衝撃と違和感に「うっ」と呻き声を上げている。

ハジメが流れ込んできた知識から読み取った新たな神代魔法の能力に最終試練で戦った機機神が造り上げたNPC神兵のあの「限界突破」のような強さの理由を知り「そういうこと、か」と

呟きながら笑みをこぼした。



そして、試練を越えた者が新たな神代魔法を得たと分かったのかりューティリスは、ハジメ達の前まで着くと、そつと口を開いた。

「では、改めておめでとうと言わせていただきますわ。よく、数々の大迷宮と、わたくしの——このリューティリス・ハルツィナの用意した試練を乗り越えましたわね。あなた方に最大限の敬意を表すると共に興ふ……んんっ、酷く辛い試練を与えたことに深くお詫び致しますわ」

その姿はまさに女王。十分ほど前に、説教されて変態理論を持ち掛けていた人物に見えず、今のリューティリスは、どこかリアーナのような王族に通じる気品や威厳があるように感じてしまう。

『しかし、これもまた必要なこと。他の大迷宮を乗り越えてきたあなた方ならば、あの神々……獣を創りし神 “創獣神オルステッド”。血濡れの女神 “吸血神スカーレット”。使徒を統率する女神 “聖母神エクストラ”。 “最高神ラーゼン” という我々が倒した “エヒト” の後に現れた厄災との関係、過去の悲劇、そして今、起きている何か……全て把握しているはずですわね？ それ故に、揺るがぬ絆と、揺らぎ得る心というものを知って欲しかったのです。ここまで辿り着いたあなた方なら、心の強さというもの、逆に、弱さというものも理解なさったでしょう。それが、この先の未来で、あなた方の力になることを切に願っています』

神妙な顔でリユーテイリスの話を聞くハジメ達。

『あなた方が、わたくしの魔法——『昇華魔法』をどう使うのかはお任せします。ですが、どうか、力に溺れることだけはありませぬよう。そうなりそうな時は、絆の標に縋りなさい』

リユーテイリスはそう言つて微笑む。

『わたくしの与えた神代の魔法『昇華』は、全ての『力』を最低でも一段進化させますわ。与えた知識の通りに。けれど、この魔法の真価は、もっと別のところにあります』  
ハジメの目がクワツと開かれた。それもそうだ。昇華魔法の真価など与えられた知識の中にはないのだから。

『昇華魔法は、文字通り全ての『力』を昇華させます。それは神代魔法も例外ではありません。生成魔法、重力魔法、魂魄魔法、変成魔法、再生魔法……これらは理の根幹に作用する強大な力。その全てが一段進化し、更に組み合わせることで神代魔法を超える魔法に至る。神の御業といふべき魔法——『概念魔法』に』

誰かがゴクリと生唾を飲み込んだ。その音がやけに大きく響く。ハジメも大きく目を見開いて驚きをあらわにしている。その脳裏には、かつて『ライセン大迷宮』で言われたミレディ・ライセンの言葉が過つていた。

——必ず、私達『解放者』全員の神代魔法を手に入れること。ハジメンの望みのため

に必要なことだから

確か彼女は、声援を送る前にそう言っていた。それは、このことを言っていたのだらう。

『概念魔法……そのままの意味ですわ。あらゆる概念をこの世に顕現・作用させる魔法なのです。ただし、この魔法は全ての神代魔法を手に入れたとしても、容易に習得はできません。なぜなら、概念魔法は理論ではなく、極限の意志によつて生み出されるものだからです』

それが、魔法陣に知識転写されなかった理由。

ハジメは説明を聞いて口元に指を当て考える。『極限の意志』なんて、ふわつとした説明なんだ、と。そして、何故、自分は使ったような感覚があるということかを。

『わたくし達『解放者』七人がかりでも、たつたの三つしか生み出すことができませんでした。もつとも、わたくし達にはそれで十分ではあったのですけれど……。その内の一つを、あなたの方に譲りましょう』

リユートイリスがそう言った直後、石板の中央へと歩きだすとスライドさせ、奥から懐中時計のような物が出てきた。

それを手に取ったリユートイリスは、ハジメに渡した。表には半透明の蓋があり、中には指針が一本だけあった。裏側にはリユートイリス・ハルツイナの紋様が描かれてい

て、どうやら攻略の証も兼ねているようだ。

ハジメが、手にしたそれをしげしげと見つめてみると、リユーティリスが説明を再開した。

『名を『<sup>じょうえつ</sup>導越の羅針盤』。込められた概念は』

——望んだ場所を指し示す。

「?!」

その言葉を聞いた瞬間、ハジメは、自分の心臓が跳ねる音を確かに聞いた。体中に火が入ったような気がする。周りの音が消え、ただ、頭の中に同じ言葉が繰り返される。

『望んだ場所を指し示す』

なら、それなら……

『望めば、その場所へと導いてくれますわ。探し人の所在でも、隠された物の在り処であつても、あるいは——別の世界であつても』

「——っ」

きつとリユーティリスが言っている『別の世界』とは、神のいる世界『神域』のことだろう。極限の意志のみによって概念魔法が生み出されるというなら、解放者達の意志など決まっている。それは当然、神を倒すこと。

ならば、この羅針盤は『神域』を探し出すために作られたのだろう。おそらく、オス

カー辺りが概念魔法を生成魔法で付与した材料を使って、この羅針盤を創造したに違いない。

神を殺す。それがハジメの旅の目的の一つ。

そして、もう一つは優花達と共に日本へ帰還すること。

神殺しを成せても、帰還方法は今まで手掛かりな情報は神代魔法ぐらいしか無かった。だが、ようやく故郷に帰るための一手を掴んだ。

ハジメの胸中に、どうしようもないほどの歓喜が湧き上がる。到底、言葉にできない。表現の仕方も分からない、圧倒的な歓喜。

やっと、この世界に転移された時に優花と約束したことを叶えられるのだと。

堪えろ。まだ、その時ではない。まだ神々をあゝの御方との約束を果たせていない。

ハジメは、溢れ出そうになる瞳の奥の熱に、己の心に、そう言い聞かせた。グツと、変わり果てた、されど誇りでもある今は破壊された左腕の義手を右手で掴む。

改めて、決意を固めるように。

傍らの優花が、とびつきり優しい眼差しでハジメを見上げている。そして、ハジメの後ろから優しく包み込むように抱き締めた。

『全ての神代魔法を手に入れ、そこに確かな意志があるのなら、あなた方はどこにでも行けますわ』

ハジメの歓喜の姿を見て微笑むリューティリスは最後の言葉を紡ぐ。

『自由な意志のもと、未来を、今を選択できますよう。あなた方の進む道の先に幸があらんことを、心から祈っておりますわ』

リューティリスはそう言い終わると同時に石板の輝きも収まる。その前で、余韻に浸っているような、あるいは、今起きた出来事を一生懸命咀嚼しているかのような静かな時間が流れる。そよそよと吹く風の音と、葉擦れの音だけが辺りに響いていた。

やがてその静寂をハジメが破った。

努めて冷静であろうとしているかのように、感情を抑えた声音でリューティリスに尋ねる。

「リューティリス、念の為に聞くが……『昇華魔法』を使えば……空間魔法で……世界を越えられるか？」

ハジメの背後で光輝達のハツとする気配が上がった。

リューティリスは、その言葉の重みをハジメの記憶を読み取って知ったから故に、彼にそんな可能性に縋らないで欲しいために躊躇いなくその可能性を否定した。

『……………めんなさい。無理ですわ』

「そうか……すまん、変な事を探ねた」

ハジメは、そんな分かっていただけなのに聞いたことに自分の感情の昂りを収めようと目頭

を抑えながら反省する。

ただ昇華しただけの“空間魔法”で世界を越えられるなら、きつとリユーティリス達——解放者達は苦勞はしなかったに違いない。

リユーティリスは言った。解放者達は計三つの概念魔法を作ったと。

一つは“導越の羅針盤”に付与した概念。望んだ場所に指し示す魔法。ならば、後の二つは異なる世界に渡るための概念と、そこに巢食う神々を打倒するための概念に違いない。つまり、概念魔法の域に達しなければ、世界を越えることは至難だということだ。

そんな物哀しげで無理に表情を繕うハジメを見て、優花は慰めるかのように優しく彼を抱き締めた。そんな優花の行動に優しげな眼差しを向けると、そつと美しい栗色の髪で指で梳いた。

地肌に触れる感触に、優花はくすぐったそうに首を竦めながら上目遣いでハジメを見つめる。

「なに、問題ないさ。あわよくばと思っただけだ。必要な神代魔法は残り一つ。それを手に入れればいい。それで、神殺しをしてから、浩介達と日本に戻ればいいだけだ」

ハジメが笑って言う。

その見慣れたはずの恋人の笑顔に、しかし、優花は何故か懐かしく感じてしまい自分の心臓が跳ねる音を聞いた。

どこか、違うのに懐かしく感じるハジメの笑み。

柔らかく、温かい。そう、それは自分の記憶ではなく、クリスタの記憶で知っているような……

「優花？」

「へあ？……うう」

ハジメの呼びかけに、優花は初心うぶな少女のような反応を見せ、心を落ち着かせるように深呼吸した。そして、いつも通り、否、いつも以上に輝クリスタのようく笑顔で返事をする。

ジツと見つめ合う二人。

直後、優花と同じように息を呑んでハジメを見つめていたシアが、我を取り戻して二人だけの空間を止めに入る。

「ゴホンゴホンッ。ハジメさくん、優花さくん、いいですか？リユーテイリスさんが顔を両手で隠して恥ずかしそうにしているのでイチャイチャから戻ってくださいさー」

シアの少し上擦った声音での言葉にハジメと優花が振り返れば、確かに木で作られて長年生きてるはずなのに恥ずかしそうに顔を両手で隠すリユーテイリスの姿がそこにあった。

ハジメが、何故か頬を上気させているシアと、これまたポツツとして自分を見ているユエとテイオ達に首を傾げる。



その様子をアレスは保護者のような目でハジメを微笑みながら見る。すると、そんなハジメに光輝が声をかけてきた。

「な、なあ、南雲。さっきの話……その概念魔法が使えるようになれば……」

「ああ、帰れるだろうな。少なくとも、転移先はこの羅針盤が教えてくれるだろう」

「そう、か……」

光輝が希望を見たような表情になると同時に、唇を噛み締めた。龍太郎や鈴、雫も、その表情には歓喜が見える。だが、言いたいこと、確認したいことを、グツと堪えているような表情なのは、光輝と一緒だ。

おそらく、まだ完全に帰還手段が手に入ったわけではないことと、全ての神代魔法を手に入れられる可能性が高いのはハジメしかいないために遠慮がちになっている。

特に、目に映る限り三人はそれが顕著であることに気付き、ハジメは目を細めながらその三人に尋ねた。

「それより、やけに自信なさげにそんなことを聞いてくるってことは……お前等、ダメだったな」

「「うっ!?!」」

ハジメの言葉に、光輝、龍太郎、鈴の三人が胸を抑えて項垂れる。昇華魔法があれば、全ての能力レベルを最低でも一段上げることが出来るのだ。もちろん、そこは神代魔法

なので、昇華させること自体に莫大な魔力は必要だし、言ってみれば副作用なしの限界突破のようなものなので時間制限もあるだろうが、それでも、一般的な表の「オルクス大迷宮」くらいは歯牙にもかけず攻略できるだろう。その下層にある本当の大迷宮も、それなりに進めるはずだ。

にもかかわらず自信なげなのは、つまり「昇華魔法」を得られなかったという結論に至る。そして、三人のその反応を見れば分かることだ。ハジメはリユーティリスを見る。ハジメと目が合ったリユーティリスは申し訳なさそうに重い口を開いた。

「申し訳ありませんわ。そちらの三人方は攻略を認められませんでしたわ」

「「うっ」」

その言葉が再び三人の心を突き刺した。

そんな落ち込んで頂垂れる光輝達だったが、一人、心配そうな、また、どこか気まずげな様子でオロオロとフォローしようとしている人物が……

「なあ、リユーティリス。八重樫はどうなんだ？」

『え、つと、認められていますわ』

リユーティリスの言葉に三人が雫を見る。

「……………えつと……………ええ、使えるみたい」

「ほ、本当なのか、雫！」

「マジかつ！ やったじゃねえか！」

「流石、シズシズ！ 鈴の嫁！」

確かに、快楽の試練と理想世界の夢、そして感情反転は自力で乗り越え成長したことを思えば十分に攻略を認められるだろう。戦闘能力は足りなくても、精神力は十分に神代魔法を得るに値するものだった。

その事実を純粹に喜ぶ鈴。喜びつつも「俺も欲しかった！くっそお」と素直に悔しがる龍太郎。そして笑顔で称賛しながら、どこか表情に影を落とす光輝。

雫は、そんな光輝を心配そうにチラチラと見ている。

「ま、とにかく、だ。一度、フェアベルゲンに少しゆつくりしよう。流石に義手を修理しないと、次の迷宮には望めない。限界突破とあの力の後遺症も少し残っているし……優花達に癒されたい」

「ええ、わかったわ」

「……ん、任せて」

「任せてくださいですう！」

「ふむ、そうじゃな。妾に任せよ」

「そう言ってくれる四人にハジメは視線を巡らせる。何かを確かめるような深い眼差しで。それから、天を仰いで、視線を空へ向けた。己の中を確かめるように。」

ハジメの唐突な行動に、キョトンとする優花達。

ハジメは、そんな優花達に視線を戻すと、少し困ったような笑みを浮かべた。それは先程、優花に見せた時とは違う表情だ。

「……………あ」

それは優花の声。大きく見開いた目は、まるで忘れかけていた何かを唐突に思い出したかのよう。そして、直後に見せた泣きそうな顔は、過去の自分の犯した罪で変わってしまった。前のハジメを思い出しているようだった。

ハジメの事をそれなりに知ったユエ、シア、テイオも、先程のハジメの表情のように息を呑んでいる。

やはり、このほんの僅かな時間の間にハジメは変わったように思えた。

どう表現すべきか。

適切な言葉を見つけられない優花達だったが、敢えて言うなら、自分達に見せてくれる強さと優しさに付け加えて滅多に見せない弱さを加算したような、そんな不思議で、何故か無性に心惹かれずにいられない魅力的な表情だった。

ぽへつとしたまま動かないユエ達に、ハジメは小さく笑って、

「どうした？ ほら、帰るぞ？ 早く癒されたい」

そう言って、ひよいと背を向けた。

「……………」

そんなハジメの姿を優花は黙って見つめている。

優花がハジメに惹かれた理由であるあの公園での出来事。

自分のせいでハジメが変わってしまったこと。

嬉しくて、懐かしくて、だけど「彼」を変えてしまった罪悪感が押し寄せてしまい

色々な感情が頭の中がぐちゃぐちゃになって足が前に進めない。

「……………大丈夫」

「ユエ……………」

ユエが、優花の腕に自分の手を添えていた。その微笑みはとても柔らかい。ユエ自身、優花が何を考え、思っているのか分からない。だが、傍で支えられることは出来る。同じ人を愛し、互いを信頼し合える仲間として。そんな思いが込められた少ないユエの言葉の意味をシアとテイオも理解し、優花へ近付くとシアはユエと逆の腕に、テイオは優花の両手に手を添えた。

優花は三人が自分を安心させようとしてくれることに嬉しくて笑みをこぼした。それを見た三人も同じように笑みをこぼし、ハジメを想う彼女達の絆が深まったようだ。

見れば、既にリユーテイリスに案内してもらった下に降りるための転移陣を起動させているハジメが、「何してるんだ？」と。振り返って小首を傾げている。

ユエ達は、もう一度、笑い合っていると、飛び込むようにしてハジメのもとへ走った。アレも微笑を浮かべ歩き出した。雫達も、故郷に帰れる可能性が見えたという希望で、明るい表情で追隨する。一人、無理をしているのが丸かりの笑みを浮かべる少年がいるが………

全員が転移陣の上に立つと、別れ際にリユータイスがハジメ達に声をかけた。

『皆様、ご武運を。もし、わたくしの力が必要ならば、いつだって力になりましょう』

「おう、その時は力を貸して貰うよ」

『ええ、待ってますわ』

そう会話を終えると転移陣から光が溢れ出し光の燐光が転移陣の周りをを包み込んでいく。そして、転移するまでの間、リユータイスは微笑みながらハジメ達を見送るのだった。

何はともあれ、ハジメ達は、こうして七大迷宮の一つ【ハルツィナ樹海】の攻略は、新たな力と確かな希望を掴み取るという結果と共に幕を下ろすのだった……。

## 百二十一話 早朝の二人

早朝特有の、静謐で満ちる〔フエアベルゲン〕の都。

その凪いだ水面のような静けさに波紋を広げるが如く、小鳥の囀さえずりが少しずつ大きくなっていく。葉擦れの音と相まって優しい森の音楽のようだ。

だが、そんな〔フエアベルゲン〕にあつても、都の外れ——森の奥の人気のない場所は、相反する鋭い音が響いていた。

「疾っ！、ふっ！、はっ！」

短く鋭い呼気に合わせ、ヒュツヒュツと空気を裂く音が鳴る。同時に、霧を散らすように黒線が宙を奔った。それは、淀みなく、水が高さから低きへと流れるような自然さを以て振るわれる黒刀が描いた軌跡。

使い手の動きも極めて洗練され、翻る特徴的な黒髪と合わさると、まるで神に捧げる神楽舞の如き神秘性すら感じられた。円を描くようにして、木の葉が舞い落ちる森の中で踊る黒刀と黒髪。

彼女の作り出した剣界に入った木の葉は尽く四散し、それに交じって玉の汗が飛び散

る。一体、何時間そうやって踊り続けていたのか。

彼女——雫の足元には、すり足が地面に刻んだ幾条もの円と、細切れになった木の葉の残骸が散らばっていた。

一本芯を通したような美しい姿勢で、ただひたすら無心となって刀を振るう。

「——っ」

が、このまま永遠に踊り続けるのでは思われた雫の演舞に、突如、乱れが生じた。剣筋がぶれて斬れるはずだった木の葉をすり抜ける。

くるりくるりと地面に落ちる木の葉と同じく、雫も円運動の遠心力に弄ばれくるりくるとバランスを崩した。辛うじて転倒するかどうかという無様だけは避けられた雫だったが、たたらを踏んで黒刀の鞘を支えにする己の姿には、剣士として苦い顔をせざるを得ない。

「はあはあ……ああっ、もうっ！」

苛立ちしげに頭を振る雫。トレードマークの黒髪のパニーテールが、その心情を表すように右に左に盛大に荒ぶる。

「明鏡止水。明鏡止水よ、雫」

わざわざ言葉にしつつ、大きく深呼吸をして心に静謐な泉を思い浮かべる。

精神を整え、静かな状態を保つ練習は、日本にいた頃、それこそ剣術を習い始めた当



初からやっていることだ。もはや習慣にすらなっているそれにより、雫の荒れた心は直ぐに静けさを取り戻した。と、思われたが、その水面にゆらりと浮かび上がる少年の姿が………

「ぬあああああいつ!!」

途端、そんな女の子にあるまじき雄々しい絶叫を上げながら、雫は心に描いた水面を叩き斬るように、黒刀を大上段から振り下ろした。

「違うったら違うっ!! ぜえくくったい! 違うってばあ!!」

もはや風いだ水面などどこにもない。むしろ、台風の直撃を受けた海の如く、雫の心は荒れ狂ってしまっている。

「違うって、そもそも違うの意味も分からないし! 私は冷静だし!」

どう見ても冷静ではなかった。心の中の絶叫も支離滅裂である。

実は、まだ日が昇らない内からずっと鍛錬をしていた雫は、先程から、集中しては直ぐに乱れて剣筋が鈍り、洗面をしながら立て直した後、また直ぐ心のどこかに飛ばして足元を疎かにする、ということを繰り返していた。

その姿は「何か」が鍛錬の邪魔をしているというよりも、鍛錬によつて「何か」を振り払おうとしているかのようだった。

何故、雫は未だ夜と言つても過言ではない時間からそんなことをしていたのか。

昨日、「ハルツィナ大迷宮」から帰還したハジメ達一行は、その疲れを癒すため早々に休息に入った。当然、雫も食事と風呂を貰った後、直ぐにベッドに入ったのだが……何故か、全く眠れなかった。何時間も悶々としながら、ベッドの上で無意味にコロコロ転がり続け、結局、このままベッドにいても仕方ないと、丑三つ時を回っているにもかかわらず黒刀を片手に飛び出したのだ。

雫は一晩中悶々とさせたものとは何か。

それは、先程、明鏡止水を妨げたものと同じもの。ふとした拍子に心の水面みなもに浮かんでくる——一人の少年だった。

「セイッ！ セイッ！ セエエエイ!!」

雄叫びも更に荒ぶっていく。

考えまいとしても、否、むしろ、そうしようとするほど、思い出されるのは大迷宮での出来事。段階を移動する転移陣を起動した直後、さらわれた夢の世界。

捕らえられた者にとつて甘やかなその世界で、雫は今思い出しても赤面してしまうような「イタイ」夢を見せられた。

それが自分の理想的な世界などとは……絶対に認めないし、誰にも話せない。まして、その世界で酷く乙女だった自分に寄り添う者が……

「うりゃあああああつ!!」

極めつけは大迷宮の最終試練だ。

突然、彼が何処かへ転移されてしまって、物凄く不安が押し寄せる最中、感情を反転させるといふとんでもない魔法が原因で、あの黒い物体に愛情を感じてしまったことは思い出したくない出来事。

しかし、一番問題なのは、雫が、かの少年を酷く嫌ってしまったこと。否、オブラーに包まず言うなら、憎々しいとすら思ってしまったのだ。

それはつまり……

「ちがーうっ！ 友情よ！ 友情バンザーイ!!」

もう太刀筋も何も無い。キャラ崩壊すら起こしていいそうだ。いたずらに振り回された黒刀が、どこか非難するように、粗雑な風切り音を響かせる。

普段なら、これではダメだと仕切り直すのだが、雫はお構いなしに、その乱れた太刀筋で強引に幻影を——何故か頼りに感じさせてしまう不敵な笑みを浮かべたかの少年を——叩き斬った。

霧散する不敵な笑みは、しかし、消えたかと思ツタ直後、最後の大迷宮攻略後の“あの笑顔”へと変わってしまい……

「ちえすと——うっ」

八重樫流にそんな掛け声はない。今まで口にしたことすらない。心の中の祖父や父

が「雫……お前、何をやつとるんだ」と呆れた目を向けてくるが、今の雫は八つ当たりじみた素振りで忙しい。心の祖父と父はまるつと無視する。

そんないつぱいいつぱいで我武者羅な雫の姿は、普段の凜とした雰囲気とは随分とかけ離れて、もし、ここにクラスメイト達がいれば、みんなあんぐりと口を開いて驚きを顕にしたことだろう。

その後もしばらくの間、雫は平然と混乱の狭間で、時に鋭く、時に我武者羅に刀を振り続けた。何かを振り切るように、あるいは否定するように“その感情”に気が付かないふりをしながら、勘違いだと言いつつ聞かせながら、ハルツィナは孔明だと思いつつながら（本当は、ただの変態だったけど）。

やがて、心地いい……という感覚を通り越した疲労が雫の思考を鈍らせ始めた頃、ようやくやく雫の心は元来の静けさを取り戻した始めた。

荒れていた原因についても、転移する前からの関係性や大迷宮という常軌を逸した環境が、彼に向ける信頼の念を一時的に変な方向に捻じ曲げていたのだと結論づける。

もう、彼を思い浮かべても平静なまま乱れはしない。いつも通りだ。

「ふううう……」

ゆつくりと息を吐き、チンツ！と小気味いい鏗鳴りを響かせながら納刀する雫。瞑目が視界を闇に閉ざすが、汗を掻いた肌は視界以上に朝の爽やかさを伝えてくる。

頬に張り付いた一房の髪もそのままに熱い息を吐く姿は、どこか艶めかしい。

そんな風に、雫の鍛錬の余韻に浸っていると、不意に声を掛けられた。

「流石と、言いたいところだが八重樫にしては少し乱れてたな。何か悩んでるのか？」

「っ!? にやに!？」

物凄く聞き覚えのある声。それが直ぐ後ろから響いてきたことにより雫の心臓が跳ねた。ついでに口調も激しく乱れた。全く以て、いつも通りではなかった。

「まさか」と思いつつ、バツと声の方を振り返る雫。

そこに理想通りの人物——ハジメが立っていた。雫の鍛錬を邪魔しないためか、あるいはただの悪戯か……気配を殺して接近していたようだ。

「な、南雲君。驚かささないですよ。いきなり背後に立つなんて悪趣味よ」

バクバクと脈打つ心臓を宥めながら、雫は咎めるように目を細めた。それに対して、非難を受けたハジメはというと……

「……にやに……クハッ」

「!?」

笑いを堪えつつ、雫の可愛らしい誰何すいかをリピートした。キツと、眼差しに込めた非難の色を強める雫。しかし、その頬がうっすらと染まっているため迫力は皆無だった。

その自覚があるのか、雫は、今度は言葉に棘を生やして投げつけた。

「な・ん・の・よ・う・か・し・ら!!」

一言一言、強く区切られた言葉に、ハジメは僅かに失笑しながら軽く謝罪しながら、詫びに『宝物庫』からタオルを取り出し投げ渡した。

それを危うげなく受け取った雫は、今更ながら自分は汗だくという事実が気が付いたようだ。恥ずかしそうに視線を逸らしつつ慌てて拭い始めた。

その間に、ハジメは雫の質問に対する答えを口にした。

「特に用があつたわけじゃない。目が覚めたんでな。義手も修理も兼ねて鍛錬でも思つて適当な場所を探していたら八重樫の魔力がしたんで見に来たんだよ。……その様子だと、相当前からやつてみたいだな。昨日の今日でよくやるよ」

「い、いつもじゃないわよ。その……なんか眠れなくて……」

「クハツ……まあ、初の大迷宮攻略だったからな。気持ちが高ぶつてもしょうがないか」  
「ま、まあね」

まさか、違う意味で高ぶってしまった、荒ぶってしまった!とは言えず、雫は微妙に目を逸らしてしまう。そんな珍しく、どこか挙動不審な雫の様子に、ハジメは首を傾げながら目を細めた。

雫は更に落ち着きをなくす。ジロジロ。そわそわ。ジイー。ビクツ……

「……八重樫。お前、様子変じゃないか? さっきの八重樫らしくない剣の乱れようだつ

たし。……まさか、何か後遺症でも……」

「へ!? えつと、いえ、平気よ? ええ、全く以て健康そのものよ。むしろ、絶好調よ」

「……いや、相当疲労しているように見えるし、妙に挙動不審なんだが……」

「きよ、挙動不審って何よ。私はいたって平常よ。常に周囲を警戒しているの。無闇に背後に立たないことね。思わず斬ってしまうかもしれないから!」

「お前はどこのヒットマンだよ。……まあ、そこまで言うなら平気だと信じとく」

明らかに平常でない雫だったが、「本人がそう言ってるならいいが」と、ハジメは気にすることをやめた。そして、何かを思いついたような表情をすると、唐突に雫の方へ歩み寄っていく。

いきなり近寄ってきたハジメに、雫は激しく狼狽した。わたわたと、バリアでも張るように両手を前に突き出す。

「な、何? どうして近寄ってくるの? ダメ、ちよつと待つて! 汗掻いてるし! 領土侵犯よつ。落ち着きなさい! あつ、タオルね? ほら、返すから……つてダメよつ。これは洗って返すから! だから、そこで止まって!」

「……一旦、落ち着け八重樫。ステイ、OK? ……しかし、本当にどうしたんだ? 俺は黒刀を渡して欲しいだけだ」

ハジメが歩み寄った分だけ後退る雫の態度は、まるで変質者と相対してしまった女の

子のようで、さしものハジメが不機嫌そうな表情になる。

「こ、黒刀？　なんでまた……」

「強化だよ。『昇華魔法』のおかげで更に弄れそうだからな。嫌ならいいが」

「そ、そう。強化ね。うん。してもらえるとありがたいわ」

雫はおずおずと黒刀の端を持ってハジメに差し出した。あくまで近付くつもりはな  
いらしい。

汗を掻いたまま異性の傍にることなど、この世界に来てからはよくあることだ。今更、何を気にしているのかと、ハジメはますます疑うような眼差しになっていたが、やはり「何らかの事情があるのだろう」と、適当に解釈して肩を竦めた。

無言で黒刀を受け取り、足をトントと踏み鳴らす。それだけで、靴に仕込まれた錬成の魔法陣が発動し、ズズツと地面から簡易なテーブルと椅子がせり出てきた。ハジメは椅子に腰掛けると、『宝物庫』から様々な鉱石を取り出して黒刀と共にテーブルへ並べていく。

その様子をジツと見ていた雫だったが、その視線に気付いたハジメは「見るなら座つとけ」と促した。もう一度、向かい側に椅子がせり出てくる。

雫は、そわそわしながらも、ポテツと向かいの椅子に腰掛けた。

「……………」



「……………」

会話は無い。カチャカチャとハジメが鉱石を弄る音と小鳥の囀り、そして葉擦れの音だけが響いている。再び、朝の静謐から戻ってきた。しかし、雫は特段、居心地の悪さを感じなかった。多少の緊張感はあるものの、なんとなく雫がそこにいることをハジメが受け入れてくれてる気がして、ハジメの突然の登場に波立った心も次第に落ち着きを取り戻していった。

「……集中、してるわね」

手元の黒刀から全く視線を逸らさないハジメを、なんとなしに見つめる雫。傍目にもハジメが深く集中しているのが分かった。

澄みきった鮮やかな紅色の魔力光に照らされるハジメの表情は、戦闘中のものと見紛うほど真剣だ。その手元では、数々の鉱石が変幻自在に姿形を変えていく。

心の中で、「やつぱり、綺麗ね……」と独り言ちる雫。

妖しくも神秘的な光に包まれながら、様々なものを生み出していく姿は、雫がイメージする御伽噺の中の「魔法使い」そのものだ。

魔法使いの「魔法」が目の前で行われている。そんな風を感じた雫は、気が付けば見惚れるようにぼくつとハジメを眺めていた。片肘を突いて手を頬に乗せながら、次第に、その目はとろんとし始める。

それは果たして、徹夜明けに襲ってきた睡魔のせいなのか。

それとも……

途中、ハジメが雫から血を採取するために突然手を取り、動揺した雫が椅子から転げ落ちるといふハプニングがあったものの、概ね穏やかな時間が流れた。

そうしてしばらく経ち、刻一刻と重くなる目蓋と、妙な心地良さに身を委ねてしまおうかと雫が半ば無意識にそう思っている、ハジメから声をかけられた。

「ほら。できたぞ、八重樫。『昇華魔法』の練習がてらやってみたが、我ながら良い得物ができたと思う」

「……………」

「八重樫？」

「……………寝ちまったか？」

自身の腕枕に頭を預けて、ほとんど閉じかけた瞳でぼくつとしている雫に、ハジメは片目を眇めた。随分と無防備な表情を晒したものだ、少しの呆れが胸中を過る。

このまま、毛布など取り出して寝かせてあげようと思ったが体が冷えたらいけないし、黒刀の性能実験してもらいたいと雫の体をゆすりながら起こそうも反応がない。だが、ある妙案を思い付いたハジメ。

そして……………雫の耳元まで顔を近付けた。

「起きろ、八重樫」

「にやつ!？」

唐突に耳元に聞こえるハジメの声。

一瞬で跳ね起き、突然ハジメの顔との距離が近いことに、雫は顔を赤面にさせながら可愛らしい悲鳴を上げると同時に再び、椅子から転げ落ちた。その様を見ていたハジメは「少しやり過ぎた、か」と苦笑いを浮かべる。

「な、南雲君!! いきなり何するのよー」

当然、復活した雫が怒りの咆哮を上げる。起き上がってテーブルをバンツ!と手をつけて身を乗り出しながら少し申し訳なさそうな顔のハジメをキツと睨み付けた。

「すまない。呼ぼうと思つたら意識が飛んでるみたいだったから、起こしてやろうと思つて」

「もう、南雲君つて優しいけど、そういうところがいけないと……」

雫の説教が始まりそんなのを察したハジメは、それを制止するように黒刀を投げ渡して、雫は、投げ渡された黒刀を慌てて受け取る。

「『昇華魔法』を得る前は、鉱石に付与できる能力は一つ二つが限界だったんだが、『錬成魔法』と『生成魔法』のレベルが一段上がったおかげで複数の効果もつけれるようになった」

「そして私の説教を説明で回避したってことね……もう、いいけど」

ハジメが説教を回避しようと強化された黒刀の説明を始めたので、雫は盛大に溜息を吐きながらストーンと腰を下ろした。ジト目のまま「まあ、謝ったていたけど……」と、不満そうなる表情をしながら。

「で、だ。その黒刀……ヤタガラス八咫鳥二式”には新たに幾つかの魔法を付加した。一つは“重力魔法”。刀の重さを変えることができる。加えて、刀身に物体を引き付けたり、逆に引き離したり、一瞬だが重力そのものを斬ることも可能にすることもできる」

「それは……凄いわね」

ハジメの説明に思わず目を丸くしながら手元の黒刀を見やる雫。だが、それで驚くには早すぎたようだ。続くハジメの説明を聞いている内に、その能力の絶大さに雫の頬は盛大に引き攣っていく。

曰く、“空間魔法”により、空間そのものを断裂させることができる。

曰く、“再生魔法”により、黒刀自身は放っておいても自動で修繕される。また、持っているだけで、気休め程度であるが使用者への回復効果も望める。

曰く、“魂魄魔法”により、相手の肉体を透過して魂魄そのものに斬撃ダメージを与えることが可能になった。

曰く、“雷華”そうせん爪閃”も性能が向上しており、更に“衝撃変換”竜鱗化が新た

に付与されている e t c。

「……………」

言葉もない。黒刀改め「八咫鳥二式」ヤタガラスが、なんだか凶悪な兵器。あるいは魔剣の類へと進化している。黒刀を持つ雫の手がカタカタと震えている。

「それとアレスの『詠唱「＋詠唱無効」』とステータスプレートの認証方法を応用した、新たな制御方法も組み込んでみた。最初に黒刀を『詠唱発動状態』にしておけば、以降、『詠唱発動中』は詠唱が不要になる」

要は、高い効果を発揮するのに比例して必要だった長い詠唱も不要ということだ。今まで、ワンワード詠唱で能力を発動していた雫だが、実のところ、それだと全力には程遠い効果しか発揮できなかった。これ以降は、アレスのように思考のみで発動も可能であるし、ワンワード詠唱でも最大限の力も発揮できる、ということらしい。

「剣士でスピードファイターの八重樫が、剣戟中に長つたらしい詠唱なんかしてられないし、近接武器での戦闘なら俺よりも遥かに強いアレスのような戦い方が八重樫には合つてそうだからな」

そう言つてハジメは説明を締め括つた。

雫は冷や汗を掻きながら手元の黒刀を見つめる。どう考えても『聖剣』を軽く上回る性能と化している。この性能が知られれば、それこそ黒刀を巡つて盛大な争いが起き

「そうだ。間違いなく、世界最強の刀剣である。」

「いい、いいのかしら……こんな持っていて……」

「まあ、念のためだ。八重樫もアレスとまでは言わないが、それぐらい強くなって欲しいからな」

「ア、アレスさん程って……って、念のため？」

アレス並の強さと言われて盛大に頬を引き攣るもハジメの言葉に首を傾げて聞き返す雫に、ハジメは天を仰ぎながら頷いた。

その眼差しは野生の狼のように鋭く、まるで視線の先にいる何かを射殺そうとでもしているかのようだった。

「分かっていると思うが、最後の大迷宮——シユネー雪原の氷雪洞窟を攻略すれば『概念魔法』を手に入れて本格的に神共との戦闘になる」

「……ええ、帝国に現れた『オルステッド』並の強さの神が五柱もいるんでしょ？」

「ああ。それにその内の一柱、奴等の主神である『破壊神ラーゼン』はオルステッドよりも遥かに強い。他にも大量の『量産型』の神の使徒に、少ないが優花と同じように『聖杭』を持つ『ネームド』なんかもある。現状、優花達、アレス、魔人族にはフリードの頼りになる味方もいるが……俺達の勝算は余りにも低いだろう」

「嘘。……だって、そのフリードっていう人は分からないけど、優花達もアレスさん、そ

れにあのオルステッドを倒した貴方もいるのよつ。それなのに、なんで勝算が低いって分かるのよ」

雫の言葉に、ハジメは黙ってしまふ。言っても分からないだろう。今のハジメは「機神兵」との戦いのせいで「機神」の力を得た代わりに断片的だが、機神の記憶も得たハジメが見たその想像を絶する光景は誰も到底、理解できるわけがない。だから、ハジメは無視して話を続ける。

「『昇華魔法』のおかげで、俺のアーティファクト作成能力も一段進化させたからな。神代魔法を直接会得しなくても、かなりの強化を可能になった。が、それでも奴等の足元に及ぶかどうかだ。だから、俺も覚悟を決めないとな……………」

「え、覚悟ってどういう意味——」

「八重樫。俺達が氷雪洞窟を攻略してる間、『神の使徒』の襲撃の対応や他の大迷宮を挑むのも構わない。安心しろ、お前の以外に天之川達のアーティファクトの性能も上げておく」

「話はわかったけれど……………覚——」

雫が言いかける前に、言いたいこと言ったという様子で立ち上がるハジメに、雫はどこか言いたげな表情をしながら待ったをかけた。

「……………やっぱり、南雲君達だけで行くのよね？」

「んっ……ああ、そうだな。早急に神代魔法を会得して神共に対抗できるようにしておきたい」

「……………」

雫は、ハジメの気持ちは分かる。元々、自分達はハジメに無理言つて付いてきたのだ。大迷宮一つだけ攻略に付き合わせてもらうという話で。

大迷宮の厄介さは「ハルツィナ大迷宮」で骨身に染みた。どうあつても、雫達が挑戦するには実力不足が否めない。つまり、付いていってもハジメ達にとつては枷にしかないのだ。

しかも、次の「氷雪洞窟」さえ攻略すればハジメは帰還手段と神を倒しうる力も手に入る。だから、雫が無理して付いていく理由がなかった。

そんなわけで、答えないというより、答えられなかった雫は、ただ無言で首を振った。そんな雫を見て、ハジメは肩を竦めながら口を開いた。

「まあ、八重樫なら次の迷宮攻略に連れていっても構わない……………」

「え？」

ハジメから漏れ出た思わぬ言葉に、雫は驚いたように目を見開く。そして、一拍。何を思ったのか、うつすらと頬を赤く染め、それを隠すように急いで後ろを向いた。不自然に跳ねる心臓を宥めつつ、ハジメの真意を問いただそうとする。



「それはどういふ……」

「氷雪洞窟の神代魔法は、フリードから強力な魔物を量産させる魔法と聞いている。それと、うちの大切な仲間達を除けば、人となりも実力も、この世界で一番信用してるのは八重樫だからな」

苦笑いしながら、そんなことを言うハジメ。しかし、今の雫には刺激が強かったようだ。信頼している相手に、真正面から信頼を返されるのは、やはり嬉しいもの。

雫のうつすら赤く染まっていた頬がぶわつと、更に赤面してしまう。

そんな雫を尻目に、ハジメは当初の目的である自己鍛錬の準備をしながら苦笑いを深めた。

「といつても、まあ実際、本当に八重樫だけ連れていくわけにはいかないんだけどな」

「え……えつと、どうして……」

「いや、どうしてって……天之川達には、お前が絶対に必要だろ？ 氷雪洞窟に行つてる間、天之川達が大人しくしていると思うか？ 一時的にとはいえ、八重樫が離れることを許容すると？ ないな。絶対にない。十中八九、暴走する。で、その矛先は、俺だろうしな。そして、面倒くさいことが起きて、俺が困る」

「……………身も蓋もないのだけど」

雫がげんなりした表情になった。そんな雫に同情の眼差しを送りながらハジメは

宝物庫”から円月輪を無数に取り出し周囲に浮かべ始めた。

いずれにしろ、光輝達を置いて自分だけ付いていくという選択肢を、雫自身も持つてなかったたので、雫は気を取り直して話題を転換した。

「それって、内側に物を転送させる機能がついてるチャクラムよね？ そんなに取り出して何をやるの？」

「鍛錬だ。元々、そのために来たって言ったろ？ それに八重樫は戻らないのか？ それだけ疲れていればぐっすり眠れるだろ？」

ハジメの言う通り、雫はかなりの疲労感を覚えており、今ならパタリと倒れ眠そうだった。

けれど……なんとなくこの場から離れ難い。

——今を独り占めしたいのだ。

そんな想いが雫の中で芽生え、ハジメが、三十個以上の円月輪を、自分を中心に円柱を作るように周回させ始めたのを眺めてると、気が付けば口を開いていた。

「……少し、見ているもいいかしら？」

「？ 俺のを見たって何の参考もならないと思うが……まあ、構わない。だが、そこで寝ちまつたら風邪引くぞ？」

「大丈夫よ。飽きたら勝手に帰るから」

雫の言葉に肩を竦めて了承を伝えたハジメは、目を瞑ってドンナー&シユラークを抜いた。それを見て雫も腰を下ろし、テーブルに肘を突いて、両手で頬を挟み込むように頭を支えながらハジメを眺め始める。

一拍。それが始まった。

タンツタンツタンツタンツ！と、連続した発砲音が響き渡る。

その銃口は、どうやら周囲を飛ぶ円月輪に向けられているようだ。放たれた弾丸は、驚異的なことに、常人では視認も難しい速度で飛び回る円月輪の中穴へ、吸い込まれるようにして飛び込んでいく。そして、「ゲート」が、別の円月輪から弾丸を弾き出し、全く別の方向と角度からハジメ自身を強襲した。

「——ふう」

小さく息を吐きつつ、真後ろから急迫した弾丸を半身になって躲す。と、同時に、別の円月輪を操作。掠めるようにして通り過ぎた弾丸を、円月輪による円柱結界から出ないよう、「ゲート」を通して再び内側へ喚び込む。

飛翔力を失うまで、延々と限定空間内で主を狙い続ける弾丸。

一連の行動の間にも、ハジメは延々と引き金を引いては、自分を狙う弾丸の数を増やしていく。四方八方から飛び出す弾丸を、木の葉がふらりふらりと最小の動きで躲していく。

その動きは、先程の雫の演舞じみた武芸に比べれば流麗さは欠けるだろう。

しかし、その洗練された合理的な動きは、雫とはまた趣が異なる美しさがあった。

雫の八重樫流が何百年と受け継がれてきた武術特有の美しい型であれば、ハジメが師範である李<sup>リ</sup>から学んだ武術とは、美しさを捨て、戦いに勝つという目的だけに特化された型と言えるだろう。

弾幕という名の台風の目の中心で、障害を躲しながら、自ら嵐を巻き起こすというあまりに特異な鍛錬方法に雫が瞠目していると、ハジメが急に飛び上がった。そのまま、背中から紅の翼を広げると、更に“宝物庫”から円月輪を取り出し、今度は自分中心にして球状に取り囲ませた。

次の瞬間、紅い閃光の嵐が、大量の円月輪で作られた球体の中を駆け巡った。電磁加速させた致死の弾丸が、レーザーのように球体内を紅い線で区切る。

最初、直径二十メートルはあった円月輪の結界は徐々にその範囲を狭めていき、最終的には直径十メートル程度となって、至近距離からハジメに紅い閃光を吐き出し続ける。

それを、時に躲し、時に銃身で逸らし、時に“紅翼”で防ぎ、時に撃ち落として凌いでいくハジメ。左右の手に持つドンナー&シユラークが、別々の生き物のように動き回り攻防一体を体現する。

紅い光を纏う無数の円月輪に、内側を駆け巡る紅い閃光が合わさり輝きを増していく。その様は、まるで空に浮かぶ紅いく月のようだった。

「……………きれい」

どこかうつとりとした表情で、ハジメの紅を見る度に同じ言葉を呟いてしまう雫。

それは、ほとんど無意識故にこぼれ落ちた本音であり、響き渡る銃声は朝の静謐をぶち壊しにしているのだが、むしろ今の方が安らいでしまった雫は、そんな紅い月に見惚れながら徐々に目蓋を重くしていき……………

そのまま、そつと意識を落としたのだった。

~~~~~

「んう……………ん？」

どこか艶めかしさを感じさせる声を漏らしながら、雫は薄く目を開けた。意識は未だ微睡みの中にあり、焦点の合わない瞳がぼくつと虚空を見つめている。

その視線の先には木目調の天井があった。更に、半覚醒状態の意識が、背中と後頭部に柔らかな感触を伝えてくる。

そんな寝起きの無防備な顔を晒してぼくつとしていた雫に、耳慣れた声がかかっ

た。

「あ、おはよ、雫。ぐっすりだったわね。もう、昼よ?」

「う?.....優花?」

雫が声の方へふらふらと視線を向けると、そこには確かに友達の姿があつた。すっかり身支度も整えており、窓際の椅子に腰掛けたまま雫に優しい微笑みを向けている。

淡い水底から浮上していくように意識がはつきりとした雫は、上体を起こして女の子座りをしつつ、丸めた手で目元をゴシゴシとこすつた。ぼんやりした頭で、意識がなくなる前の記憶を辿っていく。

「ん? 私、どうして部屋に.....確か、森の奥で.....つていうか、ここ、優花の部屋?」  
「フェアベルゲン」では、ハジメ達はそれぞれ個室が用意されている。そのため、見覚えのない部屋で優花がいることからすれば、ここは優花の部屋と推測できる。

優花は、こてんつと首を傾げながら尋ねてくる雫の可愛いらしい姿に、いつもの雫との雰囲気の違いにクスツと笑みをこぼしながら答えた。

「ええ、私の部屋よ。朝、早い時間にさ、ハジメが雫を連れてきたのよ。徹夜で鍛錬してたらしいわね? まあ、否定するわけではないけど、大迷宮から帰ってきたばかりなんだし、ちゃんと休まないダメよ」

「え、えーと、そうね。ごめんさい。そ、それで、彼が私を連れてきてくれたの? 全

然、覚えていないのだけど」

「雫、ぐつすりだったからね。凄く疲れていた様子だったわ」

もう、ちゃんと休んでね、と、大好きな恋人と同じことをしてる雫に呆れた眼差しを送りながらも優しく微笑みかける優花を尻目に、雫はどこか落ち着きのなくそわそわと身を振よじらせた。

普段、ポニーテールにしている長い黒髪が下ろされていているせいか、クールより大人しさを感じさせ、女の子座りと相まって中々のギャップを發揮している。

見れば服も脱がされており、シャツ一枚という姿。こんな姿をクラスの男子達や、雫を「お姉様」と呼び慕う女子達が目撃でもしようなものなら、きつと鼻血で虚空にアーチを作りながら良い笑顔で血の海に沈んだことだろう。

雫は、頬を少し褒めながら、上目遣いでおずおずと優花に尋ねた。

「えっと、彼、どうやって私を？」

自分が風邪を引いたらいけないと思つてかハジメが運んでくれたことに心拍数がかかるのを感じつつ、嬉しさと恥ずかしさが相まってしまい雫は身悶えしそうになる。

そんな雫の姿が余りにも新鮮過ぎた。優花がそんな雫の反応に面白がる程に。

「ふふつ、ハジメね。雫を起こさないようにお姫様抱かつこで運んでたわよ。嫉妬しちゃうくらいだったわ」

「お、お姫様だ——」

優花の言葉を聞いた雫は、みるみると顔の温度が上昇していき、脳がパンクしそうになる。既に思考が回ってない状態になっている。

詳しく聞けば、どうやら鍛錬中に別の場所で鍛錬をしていたアレスと会ったらしく、そのまま模擬戦をしようとなったらしく、寝てる雫を優花の部屋まで運んできたらしい。なお、雫の部屋ではないのは、単に部屋が分からなかったらしい。

「後、抱っこされてるときなんか雫ね。寝相が良いのか、悪いのか分からないけど、気持ちよさそうな表情でハジメにスリスリしてたわよ」

「へ————にやあああああ”あ”あ”あ”!!」

更にニコニコ顔の優花から投下された爆弾発言に、それを聞いた途端、雫はぶわっと顔全体が真っ赤に染まりながら恥ずかしさの余り、部屋に響き渡るほどの絶叫を上げるのだった……。



## 百二十二話 不確かな未来へ

大迷宮攻略から一日経った昼頃。

優花と雫以外の全員が昼食が終え、ハジメ達は食堂でティータイムをしていた。

「……ハジメ、あーん」

「こちらもじや、ハジメ」

「サンキュ。ユエ、テイオ」

隣のユエと向かいの席に座るテイオの二人にチーズケーキのような味のデザートをあーんしてもらいながらハジメは幸せを感じながら紅茶を一口。その隣には、アレスも紅茶を嗜んでいる。

そんな和やかな空間に、ハジメが紅茶を飲み干して給仕の人に紅茶のおかわりを貰うと、アレスに話しかけた。

「しかし、魔法なしの槍だけの戦闘だとアレスが上だな。勝てる気がしねえ」

「ハハッ。これでも十八年間、槍で戦ってかましたからね。槍術ではまだ、ハジメ殿に負けるわけにいきませんよ」

そう言つて笑つて、再びティーカップに口をつけてアレスは、言葉を続ける。

「ですが、ハジメ殿も槍の使い方が様になつてきてますよ。持つて半年と少しだけだと思えないほどの成長速度です。これでは、いつしか抜かされてしまいますね」

「そう言つてもらえると嬉しいが、俺が銃を使つても引き分けに持つていくじゃねえか」  
「まあ、経験の差、ですかね」

「……ん、ハジメも強いけど、魔法なしだとアレスが強過ぎる。どこでそんな力を手にしたのか知りたい」

「じゃな。その歳で、快樂、感情の反転なども耐え切る精神の強さに実力。ハジメがこの世界に転移されておらぬなら、アレスが人間族最強であつたじやろう」

二人の話の聞いて、ユエもテイオもアレスの尋常じやない強さに称賛を送る。アレスは三人の純粋な称賛に「ありがとうございます」と嬉しく、少し照れくさそうな表情で言う。

そんなアレスの表情は、ハジメ達も初めて見るので驚くもアレスの一面がみれたことに微笑む。そして、四人は、ティータイムを続けるのだった。

そうしていると、階上から優花と雫が降りてきた。それにいち早く気付いたハジメは二人に声をかける。

「優花、八重樫。こつちに座るか？」

「ええ、そうさせてもらおうわ」

「え、ええ……」

優花はそう言つて、ユエの隣に座るとユエが立ち上がり今は定位置となつてゐる優花の膝上に座り直す。雫もハジメの顔を見た途端、心臓が跳ね上がり顔が紅潮しそうになるが悟られないように短い返事をする、ティオの隣に座る。

すると、給仕をしている亜人族達が二人の傍に近付くと紅茶とケーキを手慣れたように用意する。二人は給仕に礼を伝えると給仕達はペコリと頭を下げ自分の持ち場へと戻つていった。

二人は用意してもらつたケーキを一口食べ幸せそうな表情をして、紅茶を啜る。そして、チラツとある場所を見て優花は苦笑いを浮かべ、雫は呆然とする。

「まだ、続いてるようね」

「ああ、もう俺達は居ないものとしてティータイムを楽しんでいる」

「……居ないものつて」

「仕方ないだろ。何度止めてもあの二人が繰り返すからさ、ほつとくことにした」

優花の言葉にハジメが答えると、それを聞いた雫がなんとも言えない表情になる。

雫の視線の先……

「あゝ、アルテナさあゝん。いい加減ハジメさんに色目を使わないで貰えますかゝ？」

「いえいえ。ただ、わたくし自らハジメさんにお茶を入れましょうと思っただけですわ」

「へえ、よく回る口ですねぇ〜?」

「ふふ、ありがとうございます〜」

そこには、互いの額を当て、両手を握り合いながら取っ組み合いをしているシアとアルテナの姿がそこにあった。両者引けを取らずにドタンツバタンと、大きな音を立てて食堂内に響かせる。

何故、二人がああなつたのはハジメに甲斐甲斐しく世話を焼こうとしているアルテナに、同じ亜人族として、シアがにこやかに、それはもうにこやかに断りを入れたらしい。だが、意外にもアルテナは引かず、それどころか強行突破してでもハジメの傍にいこうとする姿に、我慢していたシアもブチツとキレてしまい取っ組み合いとなってしまうた。

一度はハジメ達も止めようとしたのだがどちらも聞く耳を持たないし、シア自体本気を出していないようなので二人が落ち着くまでほうっておくことにした。

従来なら、兎人族の少女が、亜人族の中でも賢人として地位の高い森人族の姫と取っ組み合うなど考えられないことだ。直ぐに「処刑だっ!」となってもおかしくない。

しかし、今や兎人族は、その名の前に一言つく種族だ。

「亜人族最強」の兎人族と。とじんぞく

正確にはハイリア族の異名だが、他の種族からしたら、もはや兎人族イコール「亜人族最強の種族」という認識なのである。

加えて、シアの父のカムは、「フェアベルゲン」の長老衆の一人であり、かつ、亜人族隷解放を成した救国の英雄種族でもあるのだ。

故に、英雄種族の長老であるカムの娘であるシア、賢人である森人族族長の孫娘であり、森のお姫様のアルテナ。そんな二人だからこそ、ハジメ達以外の誰もがオロオロとして手を出せずにいた。

なお、食堂にいるのは、ハジメ達の除けば先程の給仕係の他。アルテナの付きの側仕えが多数、光輝や龍太郎、鈴は、何やら考え事があるとかで自室にこもっているの、本当に止める者が誰も居ない状況である。

取っ組み合う二人だが、流石に膂力の差が天と地の差があるのでアルテナはシアに投げ捨てられ、中指を立てられながら「おととい来やがれですう!!」と罵倒される。

生まれて初めて、そんな粗雑で乱暴で遠慮容赦ない扱いを受けるアルテナであるがめげずに、ただただシアへ立ち向かっていく。シアは、そんなアルテナの様子を見て、ただの箱入りお姫様じゃないと思った。

ならば、

「これならどう、ですう!!」

「キヤアアアア!!」

アルテナの両腕を掴んだシアは、自分の右足を軸にして勢いよくぐるぐるとコマのように回り始める。アルテナはシアに腕を掴まれており逃げることは叶わず、そのまま目が回ってしまい叫ぶことしか出来ない。それに両手を掴まれてるせいでアルテナは、そのほっそりとした見事な美脚と下着が丸見えとなり、あられもない姿を晒してしまっている。

「ふむ、流石はシア。余り他の者の邪魔にならないように調節してるのう……それに、清純そうな見た目の割に、中々の挑発的な下着じゃなく」

「……………ん、お姫様なんて大体中身はエロい」

ユエ様の独断と偏見に満ちた主張が逆ほとぼしった。それを隣のハジメが、ユエの発言を耳にして、口にしていた紅茶をぶぼつと吹き出している。

ちなみに、ユエは元女王様。ティオは竜人族の御姫。これでリリアーナが「そう」だったら……ユエの主張は証明Q終了EされたD。が、

「妾っ、エロくないのじゃ!」

「ゴホンっ、ユエ殿。リリイは清純派ですからその発言はやめてください」

即座に、顔を真っ赤に染めたティオと咳払いをするアレスが否定に入った。

そんな中、ようやく我に返った雫が、表情を引き攣らせながら口を開く。

「こ、これ大丈夫なの？ あの娘、一応、お姫様なんじゃ……。立場的なものそうだけど、ほら、侍女さんっぽい人達とか、今さっきの給仕さんっぽい人達がものすごくオロオロしているんだけど。アルテナさんのあられもない姿に、もう見てられない！ つて顔になってるんだけど」

「ハジメ、どうするの？」

「……………はあ、行っていくる」

優花に言われ、ハジメは手に持った飲みかけの紅茶をぐつと飲み干すと席から立ち上がってシア達の方へと歩きだしたのだった。

シアは、お姫様がこれほどの辱めを衆人環視の中で受ければ、自分の要求にもあつきり頷いくと思っていたのだが、彼女は一向に「うん」と言わない。まるで、「まだまだ続けてくださいまし！」と無言の主張をしているように見えなくもない。

「チツ。強情なつ。なら、これならばどうですっ!!」

と、痺れを切らしたシアが、更にアルテナを辱めようとしたのだが、突如、自分のウサ耳がモフられて手が止まる。

「ーんう……………あ、ふやあ」

ウサ耳をモフられたことに力が抜け、その場からシアは崩れ落ちる。そして、この触り方で誰か分かったシアは、ムツとした表情でその人物の方へ視線を向けた。

「なんで止めるんですか、ハジメさん！」

「もう、その辺にしとけ」

ハジメは、そう言つて文句を言いたげなシアの腕をグイッと引つ張る。

「ほあ？」

思いがけず引き寄せられ、間の抜けた声を漏らしながらポスツと腕の中に収まるシア。そして、ハジメは腕の中で目を白黒させているシアのウサ耳に穏やかな声で言葉を落としました。

「なあ、シア。お前は俺の大切な恋人だ」

不意に囁かれた「大切な恋人」という言葉に、シアの顔は一瞬で真っ赤に染まった。「ああああ」と言葉にならない声を発しながら、ウサ耳がぶわんぶわんと荒ぶる。ウサシツポもばたばた激しく動いている。

自分がハジメの恋人であることは頭で分かっている。しかし、どこか不安はあつて、だから帝国にカム達が捕まった時も迷惑をかけまいと遠慮してしまつたし、今も、アルテナに少々過剰になつてしまつているのだ。

だが、その不安も今の言葉で吹き飛んでしまつた。完全な不意打ちに、シアは赤面し



たまま石のように硬直。ただし、内心を表すように、ウサ耳とウサシツポだけは神速。パタパタしている。

それを見ていた優花達は、シアに優しい眼差しを向けている。

ハジメは、固まったシアに困ったような表情をしながらも、同じように固まった場の空気をほぐすためか、少し話題を転換して口を開いた。

「それとな、シア。アルテナに関しては俺のこともあるだろうが、少なからずお前に対してもちよつかいをかけてるぞ？」

「ほえ？ な、なんですか？ え？ 私？」

ポンポンとあやすように背中を優しく叩かれたシアは、どうにか再起動が成功。未だ胸の鼓動が収まっていないかったが、言葉に釣られるようにしてアルテナへ視線を向ける。

ハジメとシアのやり取りを、少し羨ましそうに頬をあからめながら両手で顔を覆い、しかし、その指の隙間からしつかりと除き見るというテンプレなことをしていたアルテナは、シアの視線にビクツと体を震わせた。加えて恥ずかしそうにそわそわし始める。「えっと、ちよつかいって……やっぱりハジメさんのことで気に食わないってことじゃ」「ち、違いますわ！ シアさんのことを悪くなんて思っていません！ ただ、わたくしはシアさんと仲良くなりたいたいだけですわ!!」

「わ、私と、ですか?」

予想外の言葉に驚いた表情で尋ね返すシア。

アルテナは、もじもじしながら真情を吐露した。

それによると、どうやらこういうことらしい。

アルテナは「フェアベルゲン」のお姫様である。亜人族の中でも地位の高い森人族の長老の孫娘であり、同族の間でも高貴な存在と見られている。逆に、小さい頃から相応の扱いを受けてきた。

結果は言わずもがな。教育によく応えたアルテナは、聡明で心優しい少女に育ち、多くの同族達から慕われたが、同時にどこまでも特別扱いであり、同年代の少年少女と同じ時間を過ごしても、常に優先され敬われる。遠慮のない対等な関係というものは皆無だった。

アルテナの周囲は心優しい人々で溢れている。故に、寂しいと感じたことはない。だが、憧れはあった。それこそ言いたいことを遠慮なしで言い合えるような「友達」、もつと言えば「親友」のような存在に。

ハジメに惹かれてしまったのも、亜人族として蔑むのでもなく、アルテナの地位や美貌に反応するでもなく、ごく自然であり、一人の女の子として接してくれたことが大きな要因であった。そして、そんなハジメに、当然のように寄り添うシアが羨ましかった

のも事実だ。

だが、カムの挑発もあってか、妙に意地になってシアと張り合った結果、同年代の兎人族の少女は自分の地位とは関係なく全く容赦なく、全力で感情をあらわにし、それを言葉と物理でぶつけてきた。それが、本当に珍しく、思わず放心し、胸の内に嬉しさが込み上げた。

そして、思ったのだ。同じ年で、同族の、この少女との気の置けない関係——親友というものになれたら、どれだけ素晴らしいことだろうと。

「その、恥ずかしながら、わたくし、友人というものをどうやって作ればいいのか分からなくて……シアさんは、ハジメさんのことになると構って貰えるから、つい……」

「いや、構ってもらえるからって人の恋人をダシにしないでくださいね？それに、そういう事情なら、普通に言ってくれれば……」

「いえ、ハジメさんへのアプローチは本当ですわ」

「……………」

ハジメへの想いは本当であるアルテナに、シアが「やつぱり……………」という表情になる。

慌てて居住まいを正して何かに決心をついたアルテナ。もしもじしながら立ち上がると、シアにそっと手を差し出した。

「そ、それでは、その、お友達となつて欲しいと言えば、応えてくださいますか？」  
「……なんだか、告白されてるみたいでむず痒いですが……友達になりたいと言われて断る理由はないです」

シアは、「お騒がせなお姫様ですねえ」と、呆れたような表情をしながらも、アルテナの手を取り握手を交わした。

嬉しそうに微笑むアルテナ。意外な展開があつたがいい感じに話がまとまって、みな、ほっこりした表情になる。特に側仕え達が。

「では、その……わたくしのは、アルテナと呼び捨てに」  
「分かりましたよ、アルテナ。私もシアでいいので」

「はいっ、シア！」

その光景を見て、ハジメは「一件落着だな」と言つた表情で席に戻ろうとしたが、肩をガツと掴まれた。

「ハジメさん、少し待つてください」

相手は、勿論シアだ。

しかし、肩を掴まれる理由が分からないハジメは首を傾げながらシアに問う。  
「ん？ なんだよ、シア。アルテナの件は終わったろ？」

「ええ、私の件は終わりましたよ。ですが、ハジメさんは終わってませんよ？」

「は？」

何言ってる？と、思ったハジメだったが、アルテナの発言を思い返してみると……  
『ハジメさんへのアプローチは本当ですわ』

その言葉がハジメの脳内にリピートされ、顔にダラダラと大量の冷や汗が流れる。そして、情報処理能力が狂い数秒フリーズした後、バツとハジメは、シアの隣にいるアルテナを見る。

アルテナは、ハジメと目が合った瞬間、顔を赤面させて視線を逸らす。そして、異様にそわそわして落ち着きを無くしているのが分かる。

「……………っスー」

やっと、アルテナの想いを察したハジメは天を仰いだ。

ずっと、アルテナの自分への対応は助けた時の恩返し程度としか捉えていなかったハジメだったが、違ったらしく惚れてしまったからであると。

周りを見れば、食堂にいる給仕もアルテナの側仕え達もハジメを見ている。その視線も痛く、同じ男であるアレスに助けを求めように視線を向ける。「助けてくれ。同じ男だろ？」と。

そんなハジメに、視線を感じ取ったアレスは物凄く優しい表情を向けてグッと親指を立てる。

即ち、

「フアイトです。 ハジメ殿」

ハジメが「嘘だろおおお!」と言うような表情をするも、アレスは手元の紅茶を飲み干すと逃げるように食堂から出て行ってしまった。

他の食堂にいる男性陣に目を向けるもバツと視線を逸らされてしまう。

でも、そんな茶番劇も終わりを告げてしまう。

「で、どうなんですか? ハジメさんっ」

「え?」

「え?じゃなくて、ちゃんと答えてください!」

いつの間にか、ハジメの傍まで詰め寄っていたシアがハジメを問い質す。なんと、今さっきまでこちら側だったシアが何故かアルテナ側へ寝返っている。

なんと、シアは先程のハジメの言葉に、自分はちゃんとハジメの恋人の一人だと自信を持ってたようなので、今度はハジメに惚れているアルテナを応援することにしたのだ。

突然の裏切りにハジメは、更に大量の冷や汗を流しながら、ザザーツと後退る。そして、今度は恋人達の方へ視線を向ける。

しかし、視線を向けても意味はなく、ユエとティオ、何故か雫がジト目な眼差しを送っている。因みに優花は、最初から助けるつもりはなく、「私はハジメの判断に任せるわ」

と膝上に座るユエの頭を撫でながら我関せずな態度を取ってしまったている。

食堂に味方ゼロで等々追い込まれたハジメ。

そこへ近付いてくるアルテナ。それも、頬をあからめながら。

「そ、その……ハジメさん」

「お、おう………」

上目遣いでハジメを見るアルテナ。その表情は、緊張してか瞳がウルウルし、唇が震えてしまつて、彼女の長く尖つた耳までもが真つ赤く染まつている。が、頑張つて必死に言葉を紡ぐ。

「わたくし、じゃ……駄目です、か？」

「——っ」

突然の告白に動揺を隠せないハジメは、一瞬、声が出なくなるが、一旦、「ふうー」と深呼吸して息を整えてから口を開いた。

「……少し、考えさせてくれ。今日の夕暮れには答えをだす」

「え、あの……ハジ——」

ハジメは、そう言うアルテナの言葉を待たずに食堂から出ていった。

食堂に静寂が満ちる。

「……わたくし……ハジメさんに嫌われてしまったのでしょうか……？」

静寂を破るアルテナの言葉は、酷く重く悲しみに満ちており、その目元には大粒の涙が溜まり今にも泣きそうだ。

もしかして、嫌だったのか？

もしかして、邪険に思われていたか？

そんなマイナスな思考が頭の中を支配して、アルテナがその場で蹲った。それを見た側仕え達が急いでアルテナの元へ駆け寄ろうとしたが、それより早くシアがアルテナの手をギュッと優しく握った。

「大丈夫ですよ、アルテナ。ハジメさんは、そんなことをする人じゃありませんよ」

「……シ、ア」

ふと顔を上げると、優しい表情のシアが目の前で自分を励ましてくれていた。

「……ん、ハジメはそういう人じゃない」

「じゃな。ハジメは詰め込み過ぎなのじゃ」

更にそこへ、ユエとティオ、駆け寄り、アルテナの背中を摩って優しく声をかける。そして、優花もシアの隣で腰を下ろして片膝を突いて、アルテナに微笑みかけた。

「大丈夫よ、アルテナさん。ハジメは貴女のことを嫌ってない。寧ろ、守るためのよ」

「え？」

アルテナは、優花の言葉に首を傾げたが、続けて聞かされたことにアルテナは驚きの



あまり片手で口を覆う。更に、本当なのかと、ハジメの恋人達に視線を向けるが、全員が頷いており確かなことだと察する。

そして、周りで聞いていた食堂の者達も雫も驚いていた。それもそうだ。南雲ハジメという強者に弱さがあつたことを。

「じゃあ、ハジメさんは……」

「ええ、貴女のことを決して嫌っていないなんかないわ。だから、信じまして、ハジメの選択を」  
「……はいっ」

優花の言葉にアルテナは、目に溜まる涙を手で拭うと力強く頷き、優花は涙を浮かべるアルテナを優しく抱き締めるのであつた。

~~~~~

「災難でしたね」

ハジメが食堂から出ると見知つた人物から声をかけられた。

「……………アレスカ」

声のする方向へ視線を向けると、それは先程、食堂から去つたアレスの姿がそこにあつた。彼は、ハジメが来るのを察していたのか腕を組み、壁にもたれかかりながら話

しかけていた。

ハジメもアレスの隣で壁にもたれかかると、食堂にあつた件のことで問い質した。

「……聞いてたのか？」

「ええ、あんな騒ぎですから聞こえてしまいますよ。で、どうするのですか？」

「……………」

アレスの質問に、今にも、あの時のアルテナの表情が離れずハジメは、口を閉じて沈黙で返した。アレスはハジメの沈黙の返答を見て、頷くと壁にもたれかかるのを止めて自分の部屋に戻ろうとする。が、その前に立ち止まってハジメを尻目に一言だけ伝えた。

「私は、貴方の弱さは美点だと思っています。結果はなんにしろ互いに悲しみを生まないように。神官として、貴方の仲間として願っております」

「……わかつてる」

返答を聞いたアレスは「では」と、その場を去っていった。ハジメは壁にもたれながら、その場で蹲って天を仰ぐ。

「さーて、どうする、か……………」

溜息混じりのその言葉は、誰にも聞かれることなく食堂から聞こえる音によつて掻き消されていく。

「フェアベルゲン」のお昼は、本来の静謐さとはかけ離れた、実に騒々しい有様であつた。

~~~~~

時刻は夕方。沈みゆく太陽の光が木漏れ日となり、「フェアベルゲン」の都をオレンジに染め上げている。

「……………」

都の中心から少し離れた広場。

大きな切り株のテーブルセットや、湧き水を利用した噴水がある、住民達の憩いの場となつている広場だ。

そこに、無言でオレンジ色の空を眺めていた人影があつた。ハジメだ。

住民達は復興の続きや、解放された同胞の世話、戦士団の再編などに忙しく、憩いの場でのほんとしてゐる場合ではないらしい。優花、ユエ、シア、テイオ、アレスや光輝達も、今は亜人達の手伝いや、自己鍛錬、あるいは次の旅の準備をしているはずだ。

そんな静寂が満ちる広場に、こちらへと歩み寄る足音が聞こえると、ハジメは「来たか」と、思いながら席から立ち上がって視線を向けた。

「ハ、ハジメさん……………」

視線を向けた先は、今日の昼に自分に想いを告げてくれた森人族の長老アルフレリックスの孫娘アルテナの姿が見えた。

夕刻の太陽の木漏れ日が反射してか彼女の金髪が更に輝きを増し、その碧色の瞳は、昼の時とは雰囲気を感じさせる。

「ありがとな。ここに来てくれて」

「いえ、元はと言えばわたくしが発端ですから」

「いや、俺にも非がある。だから、気に病まなくていい」

自分を責めるアルテナをハジメは、擁護すると、アルテナは嬉しそうに微笑んだ。

「やはり、ハジメさんは、お優しいですわ」

「そんなことない。俺が優しくかったら、大体の奴が優しいだろうさ」

「いいえ」

ハジメの言葉をアルテナが否定する。

「……わたくしが、帝国に捕まった時のことを覚えてますよね？」

「ああ。勿論」

「あの時、わたくしの人生は終わったと思いますわ。でも、そんな事はなく、ハウリア族の皆さん……そして、ハジメさんに救われました」

森人族であり、聡明であるが非力である自分は、いとも簡単に帝国兵に捕まってし

まった。

自分はもう終わったのだと、もう樹海に暮らせないのだと思っていた。

しかし、そんな時に自分の前に現れたのだ。

綺麗な紅い魔力を持つ白髪の殿方に。

「わたくしの拘束を外してくれた時のハジメさんの魔力も、真剣な瞳も、今でも鮮明に覚えてますわ。忘れるわけがありません。だって、感じてしまいましたもの」

——彼は自分の運命の相手だと。

そう口にするアルテナは、ハジメに近付こうとしたが、ハジメが片手を突き出し首を横に振る。

「それは、ただ、初めての恐怖から解き放たれた時に起こる幸福感によるものだ」

「いいえ。たとえば、拘束を外した相手が違ったとしても、わたくしはハジメさんに惹かれます」

「それに、俺はもうすぐしたら最後の大迷宮へ向かう。その時に、魔力も持っていないお前は連れていけない」

「平気ですわ。いつまでも、わたくしはハジメさんを想い続けながら待つてます」

アルテナの好意をハジメが否定するが、アルテナも負けじと落ち着いた様子で言い返す。否定し、それを否定し合う言い合いが何分か続き、両者とも引かずにいる。

「ふうー。何故、そこまで否定したがる？」

「ハアハア、それは、こっちのセリフですわ」

息を整え、両者とも向き直る。

そして、第二ラウンドが始まると思ったが違ったらしい。

「……………そんなに、わたくしが嫌なのですか？」

アルテナの言葉だった。自分の服をギュツと握り締め悲しそうな声音で言う。それに、長い耳をタラーンと、下げ、その表情も今にも泣きそうで瞳を潤わしている。それを見たハジメが思わず口が開いてしまった。

「それは、違うっ」

「え？」

ハツと、ハジメは思わず口にしてしまい片手で口元を抑えるも既に遅かった。

「違う？」

アルテナは完璧に聞き取ってたらしく、もう隠す意味ないとハジメは諦めたように苦笑いを浮かばせ、腰を下ろして自分の気持ちを吐露した。

「……………君を危険な目に合わせたくない」

「え？」

「俺は、最後の神代魔法を獲得したら本格的に神共との戦闘に入る。だが、もしかした

ら、奴等が俺の友人や恋人を人質に取るとしたら、アルテナが狙われてしまう可能性がある。俺は、そんな……自分のせいで危険な目に遭わすのは嫌なんだ。嫌なんだよ」  
酷く辛そうな表情のハジメ。祈るように握ってる両手も微かに震えているのも分かる。

「ハジメ、さん」

「……すまん。俺は、こういう奴なんだ。友人や大切な人達が俺のせいで危険な目に遭うと思うとな」

あまり見せない弱さを見せているハジメに、アルテナはそつと傍に寄ると、震えるハジメの両手を優しく包み込むように自分の手を添えた。

「なら、わたくしは、そんなハジメさんを傍で支えられる存在になりたいです」

「……アルテナ」

「わたくしは、ハジメさんが好きです。大好きです」

頬を染め、オレンジの木漏れ日を受けてキラキラと輝く長い金髪がハジメの右手にかかり、美しい碧眼が真っ直ぐハジメを捉えながら、再び告げられた愛の告白。  
ハジメ思う。

何故、こんな自分を好きになるような者達がいるのか？

何故、こんな自分を支えようとする者達がいるのか？

何故、こんな自分化け物を救おうと手を差し伸べるのか？

そんな疑問を浮かべながら目の前の彼女や自分の恋人達が頭に過ぎった。

「クハツ……なんで、俺を好きな奴はどいつもこいつも諦めが悪いやら……」

そう言つてハジメは失笑しつつも、アルテナの頬に優しく手を添えた。突然のハジメの行動にビクツと身を震わし赤面するアルテナ。

「ハジメ、さん」

「決めた。アルテナ。俺は、お前の気持ちを確認したりしない」

「……………はい」

突然のハジメの言葉の意味を察して赤面するアルテナの顔は、燃える夕日よりも更に赤く染まつてしまっている。瞳は熱く潤み、期待の光が輝いている。

「アルテナが愛おしい。必ずお前を絶対を守る」

絶対性のない不確かで、ただ、相手を縛り付けるだけの最低な言葉。

だがそれは、アルテナが何よりも聞きたかった言葉。

「だから、覚悟してくれ。アルテナは、もう俺の大切な恋人だ」

「……………はい。はい！ わたくしは、ハジメさんの特別ですわ!!」

その言葉に歓喜の笑顔が咲き誇った。森のお姫様とは思えない元気で可憐な笑顔が。

きつと、他の男が今のアルテナを見たなら、種族も貴殿も関係なく、そのハートのド



真ん中を撃ち抜かれるだろう。それはハジメも例外ではなかった。気が付けば強くアルテナを抱き締め、ごく自然に唇を重ねていた。

「んう……………あ、ふう……………」

ハジメに求められるままに、アルテナは歓喜を震えながら応える。全身が綿菓子のようにふわふわと軽くなり、甘い吐息が漏れ出す。体は熱く、何かが接続し、力が漲ってくるのを感じ、今にも溶け出してしまいそうだった。

「ハジメさん……………」

重なっている影が、少し離れた。恥ずかしそうに目を伏せるアルテナ。スッと尖った耳がシアのウサ耳のようにパタパタと上下に動く姿が、凄まじいほどの愛らしさを放っている。

優花の可愛さとは、また違う魅力がある。アルテナの桜色の唇が僅かに開き、舌がチロチロと動く。上目遣いと相まって、何を言いたいのかは明白だ。

アルテナの可愛いらさいおねだりに、ハジメは目を細めた、そして、それを応えようと頬に手を添えながら再び、口を重ね――。

「ふひゃ、まだする気だよ、あの二人！ こ、こんなお外で……………」

「ちよつ、ちよつと鈴！ 声が大きいわよ！」

「そう言う雫も大きいわよ。もう、バレてると思うけど……………」

「もうっ、全員うるさいですう！ アルテナの邪魔をしないでくださいー！」

アルテナの尖った耳がピクツと動く。あわあわしながら身を離し、声の方へ真っ赤な顔を向けた。すると、アルテナに気付かれたことで動揺したらしい。誰かがバランスを崩したようで「ちよっ、ばかつ、押すなっ！」というお約束の悲鳴が上がり、直後、広場を囲う花壇の一角から人がなだれ込んできた。

折り重なるように姿を見せたのは、光輝、龍太郎、鈴、雫の四人。その後ろからやれやれといった表情をしながら優花が、溜息を吐きながらユエが、光輝達を睨みながらシアが、面白そうに笑みを浮かべたテイオが、ジツとある場所を見詰めるアレスが現れる。どうやら、アルテナとの情事を物陰からたつぶり見学していたらしい。

あたふたと起き上がりながら、一番食いついていたつばい鈴を筆頭に、雫達が顔を赤くしながら視線を逸らしている。

「み、みみみ皆様!? いつからそこに!?!」

爆発寸前みたいな赤い顔で、アルテナが動揺もあらわに問いただす。目を活きよく泳がせる雫達に代わり、ハジメが答えた。

「俺が、アルテナと言い合っている頃からだな」

「最初からじゃないですかっ！ ぜ、全部見られて……ど、どうして言ってくれなかったのですのお」

羞恥心からハジメをポカポカと叩くアルテナ。先程までとは違う意味で涙目になっている。

「別に隠すこともないだろう？ それに、俺達のことを見てたのはアイツ等以外にもいるからな」

「え？ そ、そんな何処に……」

突然のハジメの言葉に、驚きのあまり加勢を殺がれたアルテナは、嬉しいやら恥ずかしいやらもキョロキョロと、ハジメの言っていた優花達以外の人物を探す。

「クハツ……いや、そんなキョロキョロしても見つからないぞ？ だって、地中にいるからな。な？ 出てこいよ、リニューテイリス」

「え？」

「[[[[[!?!]]]]」

アルテナの可愛いらしい姿に笑みを浮かばせながらハジメはその人物の名を呼んだ。アルテナは、樹海の亜人族達を纏めあげた初代女王の名を聞いて間の抜けた声をあげ、光輝達はあの人物がこの場にいるなことに驚く。

『フフ、やっぱりハジメ様には気付かれてしまいましたか』

そうリニューテイリスの声が聞こえると、地中から森人族の木のゴーレムが現れた。その姿から大迷宮で出会った解放者の一人リニューテイリス・ハルツィナだと。

ハジメは、アルテナを抱き寄せながら口を開いた。

「下から知ってる魔力を感じてな」

リユーティリスは、ハジメの言葉に微笑むと一礼する。

『流石ですわ。しかし、ハジメ様もですが、アレス様もお気づきだったでしょう?』

そう話を振られたアレスは頷く。リユーティリスの言葉は合ってるらしくアレスも地中に何かいることは分かっていたらしい。

「まあ、それはいいんだが、リユーティリス。どうして、お前がここにいるんだ?」

ハジメの疑問はごもつともだ。リユーティリスは、神代魔法を持つ解放者の一人であり、大迷宮内に留まらないといけないのだ。

ハジメの疑問に頷いた優花リユーティリスは、それに応えた。

『ここにいれるのは、ハジメ様のおかげですわ』

「は? 俺のおかげ?」

リユーティリスの話を要約するところだ。

ハジメがハルツイナ大迷宮での最終試練デウスフルジャーで機神兵と戦った際での膨大な魔力の余波

が放たれたことよって、数千以上前に切断されていた樹海の全域を張る大樹の根が繋ぎ合わさったらしい。

そして、リユーティリスは、魂魄を大樹に移している為、たとえ「フェアベルゲン」で

も、大樹の根が張られてるなら移動できるらしい。

『——というわけでして、樹海全体ならわたくしの移動範囲となつてわけですわ』

スケールが物理的にも大き過ぎる話にこの場にいる誰もが啞然とする中、ハジメは口元に手を当てて少しの沈黙の後、リユーテイリスに視線を向けて口を開いた。

「それで、お前がここに来たのは、生まれながら魔力を持つていないアルテナに魔力が発現したからだろうか？」

「！！！！！！！！」

「えっ!？」

ハジメの言葉に啞然としていた優花、シア、光輝達が驚きの表情になり、アルテナも驚きの声を上げながら両手で口を抑えた。因みに、ユエ、テイオ、アレスの三人は魔法に長けた者だからなのか「やっぱり」と、納得してる表情をしている。

リユーテイリスは、ハジメの言ったことを肯定するかのように首を縦に動かして口を開いた。

『ええ、その通りでございますわ。ハジメ様のお隣の同族の方が魔力を発現しました。特別な魔力が』

リユーテイリスの言葉に光輝達が息を呑む中、慌てた様子アルテナがハジメに話しかけた。

「え、えっ、え!! わたくしに魔力ですか? ホントにですの!?!」

あわあわと隣で慌てるアルテナに、ハジメは手を握って微笑む。

「アルテナ、落ち着け。そして、息を整えろ」

「わ、分かりました」

アルテナは、ハジメに言われた通り息を整え落ち着きを取り戻していく。

「よし、そのまま自分の魔力の奔流を感じ取れ。そして、魔力を自信に纏わせるように操作してみろ」

「は、はい!」

アルテナは、目を閉じる。

そして、自身の中の魔力の奔流を感じ取る。そして、自身に纏わせるように……

「クハツ……こりゃあ……アルテナ、目を開けてみる」

「? はい……!」

ハジメに言われ、目を開けたアルテナ。そして、そのまま目を見開いた。それもそうだ。今のアルテナの体には翡翠色の魔力が纏っているのだから。

「これが、わたくしの魔力」

『ええ、わたくしも驚いています。だって、貴女はわたくし同様、大樹に認められた者なのですから』

感動しているアルテナに微笑むハジメだったが、リユーテイリスの言葉に「は？」といった表情になる。それは、優花達も同様な表情になっている。

「ふう……リユーテイリス。どういうことだ？」

『はい、説明しますわ』

一旦、落ち着きを取り戻したハジメは聞くとリユーテイリスの説明はこうだった。

以前、聞いた大樹の守護者というのは天職でらしく、リユーテイリスは大樹の守護者であるが、それは巫人達の女王となった時に手にした「王の証」——大樹の枝と特殊な結晶体の複合物の長さ三十センチ程の杖「守護杖」で守護者同等の力を出せていただけであり、正当な大樹の守護者ではないらしい。

故に、彼女の天職は「蟲心師」ちゅうしんし。虫類に関しては無類の観察力と理解力を発揮し、また虫にとても好かれやすいという職業だ。それが理由なのか大迷宮内には、虫系の魔物が多くいたらしい。

リユーテイリスの説明に全員に沈黙が流れる。が、ハジメがそれを破りリユーテイリスに聞く。

「それじゃあ、アルテナは大樹に選ばれた正当な守護者ってわけなのか」

『はい。わたくしもこれまでに何人かの守護者がいたことは知ってはいましたが、見るのは初めてですわ』

「そんなに珍しいのか？」

『ええ、大樹の守護者は、“勇者”や“神天治癒師”よりも希少な職業ですから』

それを聞いたその職業を持つ光輝と優花が驚く。“大樹の守護者”はそこまで希少な天職らしい。

「なら、大樹の守護者はどんな能力なんだ？勇者よりも希少な天職なんだろう？」

『そうですわね……守護者の能力は大樹の権能を扱える。つまり、わたくしが“守護杖”でやってきたことを杖なしで扱えるようになりますわ』

一つ、大樹への干渉。

一つ、白霧の操作。

一つ、大樹の領域内の草木の再生。

一つ、日光の取り入れから日照時間関係なく作物が育つ土壌の作成。

リユースティリスは、更に“昇華魔法”が加わり歴代最強の権能を振るえるらしい。

「そりゃあ、強えな……」

ハジメが引き攣った笑みを浮かべて、若干、引いている。それもそうだ。つまり、アルテナは先程のリユースティリスが説明した権能を扱えるというのだから。

すると、リユースティリスが何故か申し訳なきように、そして落ち着きがない様子に、ハジメ達が訝しむ。



ユエがジト目を送りながらそんなリューティリスに聞くと、オドオドしながらもリューティリスは口を開いた。

「……………まだ、何かあるの?」

『は、はい…………。皆様は、わたくしの“昇華魔法”の魔法陣を何処に刻んでいるか知つてますわよね?』

「うむ、大樹に刻んだじやろ?…………ん、大樹?……………まさかつ」

ティオを初め、察しがついた者達がリューティリスに視線を向ける。当の本人は視線の意味を理解してか素直に答えた。

『はい…………。今のアルテナさんには、わたくしの“昇華魔法”を会得していますわ』

なんと、リューティリスが刻んだ“昇華魔法”の魔法陣が大樹の一部と捉えられたらしく正当な守護者のアルテナは“昇華魔法”を大迷宮を攻略せずには得れたらしい。

「な、なら、今のアルテナはリューティリスさんと同等の力を扱えるのですか?」

シアの言葉にリューティリスは首を横に振る。

『いいえ、彼女はまだ魔力が発現したばかりです。まだ一つの権能も扱うことも難しいでしょう。わたくしの“昇華魔法”も…………』

その言葉に、アルテナが少し残念そうにシユンとなるが、リューティリスが『まだ、言い終えてませんよ』と言って言葉を続ける。

『しかし、実力をつけければ貴女は、わたくし以上……歴代最強の守護者になることは間違いないありませんわ』

アルテナがばあつと明るい表情になる。優花達も、特にシアなんかは「流石、アルテナですう!」と何故か自分のことのように喜んでゐる。

「わたくしが歴代最強……」

『ええ、ですからどうしますか? アルテナ。貴女は元々、魔力を持っていなかった巫人。だから、二つの選択があります。一つは、このまま現状維持。もう一つは、わたくしの教えのもと厳しくはありますが、大樹の権能と神代魔法を扱えるようにしていくの二択がありますわ』

リユーティリスは選ばせる二つの選択を。

——このまま、ただの森人族の長老の孫娘のアルテナでいるのか?

——リユーティリスの教えのもと、大樹の守護者のアルテナでいるのか?

前者を選ばずなら、今までと変わらない生活が待っているだろう。しかし、後者を選ぶなら力を得られるも大樹の守護者として戦に赴かなければならない。

『どうします? アルテナ・ハイピスト』

リユーティリスは、アルテナを見る。そこから感じるのは解放者の一人として、大樹の守護者として彼女が自分の後釜となるのかを見極めるため。その一言がどれ程の重

さなのかをこの場の全員が感じ取り息を呑む。アルテナは手すら震えている。

「おい、リ्यूーティリス。少し——「お願いしますわ」は？」

ハジメが待ったをかけようとしたが、それよりもアルテナの答えが早かった。

『……本当にいいですね』

「守られるだけじゃ嫌なんです。わたくしだって、シア達とハジメさんと一緒に戦いたいんです！ わたくしの力でハジメさんを、親友を守りたいんです！」

「……アルテナ」

アルテナの言葉に、シアは嬉しいのかウサ耳をみよんみよんさせ、ハジメは笑ってそつとアルテナを抱き寄せた。でも、少し心配そうな表情をしている。

「本当にいいのか？ 俺はお前が支えてくれるだけで嬉しいんだが……」

「いいえ。わたくしだって、ハジメさんの支えになりたいんです。ひ、一人の恋人として」

アルテナの自分を愛してるからこそ実力をつけて支えたいという言葉に、ハジメは嬉しさのあまり、再び、アルテナの頬に手を添えて自分の顔を近付けていく。

「アルテナ」

「ハジメさん」

名を呼び合い、二つの唇が重なるうと……

『ウオツホンツ』

したが、リユーテイリスの咳払いによって止められ、アルテナは恥ずかしさのあまりプシューと湯気が出るほど顔を赤面させる。

リユーテイリスは、少し恥ずかしそうにしながらも即座に気持ちを切り替えて口を開く。

『言質は取りましたわ、アルテナ。わたくしの特訓レッスンは厳しいですけど大丈夫ですよ？』

「ええ、お願いしますわ。リユーテイリス様！」

そう言つて、アルテナはリユーテイリスの弟子となるのだった。

その後は、アルテナがシア達の方へ向かいハジメと恋人なれたことを感極まりながら抱き締め合つたり、ハジメがリユーテイリスに疑惑の眼差しを送りながら「修行は良いが、アルテナに変なことを吹き込むじゃねえぞ」と、真顔で忠告されたことに『何故か、わたくしに辛辣く!?』と自分の信頼の無さに落胆の声を上げながら少し興奮してリユーテイリスであった。

なんだかんだ事が終わり安堵するハジメ。と、その時、ハジメ達のやり取りを所在なさげに見ていた鈴が、一段落ついたと見てか、どこか緊張したように表情を改めて始めた。まるで、タイミングを見計らっているようにそわそわと視線を彷徨わせる。

鈴の様子を横目に、ハジメは尋ねた。

「で？ 揃いも揃って出っ歯亀していたのはなんでだ？ 晚餐に呼びに来るには、まだ少し早いだろう？ 何か用事でもあったか？」

「えーと、それでなんだけど、優花達とは偶然会っただけよ。私達の方は……」

雫が困惑したような表情でその視線を鈴に向ける。

「どうやら、珍しいことに、ハジメに用事があるのは鈴らしい。ハジメを捜している途中で、偶然、こちらに向かう優花達と合流したようだ。」

「やたら緊張した、されど決然とした眼差しを向けてくる鈴に、ハジメは怪訝な顔をす  
る。」

そんなハジメに向かって鈴は一步前に進み出た。

「南雲くん。あのね、次の大迷宮に、鈴も連れていってください。お願いします！」

ガバツと頭を下げながら頼み込む鈴の姿に、どうやらハジメに何を言う気が聞いてな  
かったらしい光輝達が驚いたような表情を向ける。

ハジメもまた、仮にその手を頼みをしてくるとしたら光輝辺りだろうと思っていたの  
で、真つ先に頼み込んできた鈴に僅かな驚きを見せた。

「鈴、それは……」

「光輝くん、ごめん。これは鈴個人のお願だから口を挟まないで」

大迷宮から帰ってこの方、随分と暗い雰囲気だった光輝が鈴の言葉に思わず反応するが、それをいつにない強さを以てピシヤリと止める鈴。

雫達もまた、連れていって欲しいのがパーティー全員ではなく鈴個人だと分かり、再び瞠目した。

「そいつはまたなんでだ？別に付いてこなくても、俺がアーティファクトを強化をしてやれば大して問題ないだろう？」

「うん、確かにそうだよ。でも、南雲くんは……」

そこで一端言葉を止めると、鈴は、その名を呼ぶことを少し恐れるように、僅かな躊躇いの後、口にする前にハジメが口にした。

「……中村と白崎のことか」

「……うん。恵理とカオリンのことまで、手を貸してくれるわけじゃないよね？」

鈴の問いに、恵理と香織は最愛の優花が一度、死んだ要因の一人のため苦い表情を浮かべてると、鈴は困ったように笑みを浮かべる。

「南雲くんの気持ちも分かるよ。でも、鈴はもう一度、恵理と会ってお話したい。そのためには力がある。だからね、大迷宮にもう一度挑戦したいんだ。それで結果はどうなっても、生きて出られたら……そのまま魔族の国に行こうと思う」

「鈴っ、それはっ」

雫が、思わずといった様子で鈴の肩を掴んだ。単身で魔族の国【ガーランド】に行こうなど、友人としてとても許容できるものではない。だが、雫を見上げる鈴の眼差しには僅かな揺らぎもなかった。その瞳に宿る決意の強さに、雫は思わず気圧されて手を離してしまった。

一方で、ハジメは「なるほど」と納得していた。

香織と恵理を説得して連れ戻すにしろ、改めて決別にしろ、一度王都に戻るより、ハジメ達に同行して【氷雪洞窟】に挑んでから、そのまま恵理と香織がいると思われる魔族の本拠地——所謂、魔王城に乗り込んだ方が効率的だ。

何せ、【氷雪洞窟】がある【シュネー雪原】は南大陸の東側。南大陸中央にある【ガーランド】とはお隣である。鈴は、ハジメが恵理と香織にも思うところがあるのは理解している。

ハジメが【氷雪洞窟】を攻略した後、本格的に神との戦いを望むとならば、それを邪魔する者が誰であつても遠慮はしないだろう。

鈴が自分の望みを果たすためには、たとえ力不足でも、単身でも、無茶無謀であつても……………

視線をハジメに戻した鈴は、必死さの滲む声音で更に頼み込んだ。

「それでね。それで、もし、もし恵理とカオリンを連れて戻ることが出来たら……………その時

は、恵理もカオリンも一緒に日本へ返して欲しい。お願い！ お願いしますっ!!」  
「……………」

鈴の悲鳴じみた懇願が木霊し、そのまま誰も何も言えず静寂が下りた。

正直な話、ハジメとしては愛してる優花を一度死なせた原因である二人を許すつもりはない。しかし、殺す気もない。優花にも強く言われてるからしない。

だから、ハジメの中では、既に中村恵理と白崎香織という二人の少女のことなどはどうでもいいのだ。だが、そうやってあの二人を無視すれば必ず面倒なことが起こるのは確か。

と、その時、ずっと黙り込んでいた光輝が口を開いた。

「南雲、俺からも頼む。恵理の目的は俺だ。いや、俺こそがあいつと話をしなきゃならぬい。香織のこともある。鈴を一人でガーランドに行かせるわけにはいかないし。それに……………」

グツと唇を噛み締めて握り締めた光輝は、どこか鬱屈した雰囲気を感じながら吐き出すように言葉を放った。

「このままじゃ、終われないんだ。雫だって神代魔法を手にしたのに、俺はつ。次は、次こそは必ず力を手にしてみせるっ！ あんな精神攻撃ばかりしてくるような卑劣な場所でなければ、俺だって攻略できたはずなんだ！ 次に行く大迷宮は、フリードって奴



も攻略できたところなんだろう？　なら、俺だつて必ずっ！」

『……卑劣つて、酷いですわ!』

「……………光輝」

自分の迷宮の悪口を言われて声を上げるリユーテイリスと拳を震わせ、声を荒げる光輝に、雫が心配そうな眼差しを向ける。

光輝が手にできなかった神代魔法を、雫は会得した。そのことに、光輝が複雑という言葉では全く表現しきれない暗い感情を抱いていることが、雫にはよく分かった。

それ故に、帰還後も何かと気にかけていたのだが、果たして、どんな言葉をかければいいのか。

どこか危うい幼なじみの姿に、雫は不安を隠しきれない様子だ。

「ま、確かに、鈴を一人で行かせるわけにはいかねえな。恵理の奴も、香織の奴も、一発どつかねえと俺の気が済まねえし。南雲、悪いが、いっちょ頼むわ!　このとおくり!」  
仲間が行くなら俺も行くぜ!　的なノリで快活に頼み込む龍太郎。

意図してか、それともただの天然か。やたらと明るい雰囲気の声に、少し救われた気持ちで雫は微笑んだ。そして、雫もまた、申し訳なさそうな顔をしながら、ハジメ一人頭を下げた。

「南雲君、その……お願いできないかしら?」

ハジメは、雫達の決断に涙ぐみながらも必死な眼差しを向ける鈴と、どこか感情を押し殺したような光輝、おそらく意図して明るく振舞っている龍太郎、光輝や鈴を気遣う雫に視線を巡らせ、一度深い溜息を吐く。

そして、ガリガリと頭を搔くと、微妙に嫌そうな顔をしつつも答えを返した。

「……………中村、白崎のことは、お前等に任せろ。止めるなり、説得するなりしろ」

「南雲くん！ ありがとう!!」

鈴がペアと顔を輝かせた。雫達もほつと肩から力も抜く。

「クハッ……………ああ、クソ。もうすぐ神共と殺り合うっていうのに……………気、引き締めねえと」

そう独り言ちるハジメ。

【氷雪洞窟】を攻略し、最後の神代魔法を会得した後、神を殺すための概念魔法を生み出すのに、どれくらいの間がかかるかは分からない。それに複数の概念魔法が必要なことも考えると、それなりの時間を要するだろう。

それに、『昇華魔法』のおかげで地力も上がっている。光輝達の存在が、今以上に足手まといになるということもないだろう。

などと、つらつら言い訳じみたことを考えてしまう辺り、気が緩んでしまってるのか。つい自嘲してしまったハジメに、ポンと肩に手を置かれた。

「ハジメ殿。貴方はそこまで自分を厳しくしなくても大丈夫です。また一つ、強くなつたと捉えればいいです」

「アレス」

「それに、貴方を必要とする者達があります」

そうアレスに言われた直後、ハジメの手に何人かが、ハジメの手に触れる。

顔を上げるとそこには……

「大丈夫よ、私はずつと傍でハジメを支えるから」

ハジメの手をそつと優しく包み込む優花が。

「……………ん、ハジメには私達がいる」

そう言つて微笑むユエが。

「私だつて、ハジメさんの力になりますよお！それに私がいれば無敵同然ですう!!」

自信満々に意気込むシアが。

「安心せよ。ハジメも、優花達も、全員まとめて我が黒鱗で守ろうぞ。ふふ、シアの言う通り、妾達は無敵じゃな?」

経験と強靱な意志に彩られたテイオが。

「わ、わたくしも、絶対に力になりますわ!」

あわあわしながらも、そう宣言するアルテナが。

「私も、この力。存分に振るいましよう」

笑って拳を握り締めるアレスが。

そう口々に言葉を重ねる仲間達の姿を見てハジメの心が引き締まる。

旅の、終わりが見えてきた。

神という名の障害が、立ちはだかるだろう。

五神という名の困難が、襲いかかるだろう。

けれど、ああ、確かに、とハジメは思った。大切な者達と共にある限り、自分達は無

敵に違いない、と。

ハジメはふと口にした。

「神殺しが終わったら、ミュウを迎えに行つてやらないとな」

それもまた、ハジメが交わした大切な約束。びっくり箱のような地球という世界を、

愛娘に思う存分見せてやりたい。

カム達ハウリア族は、どうしようか？ ティオの家族は？ アルフレリックにはどう

説明しようか？ 少なくとも、一度は会いに行くべきだろう。

日本で、両親はどうしているだろうか。息子が、異世界から恋人達や娘を連れて帰っ

てきたら、どう思うだろう。

「クハツ……参つたな。神殺しをしてないのに、考えるべきことは増えてやがる」

そう言うハジメの表情は、しかし、いつもの不敵な笑みではなく、どこか穏やかさで彩られていた。

けれど問題は無い。

そんなハジメの姿を、優花達<sub>が</sub>しつかり見ている。嬉しそうに、愛しそうに、慈しむように、温かな眼差しで。

寄り添う彼女達と仲間がいる限り、南雲ハジメの牙が折れることは決してない。

ハジメは自覚なく、けれど楽しそうに“未来への展望”を考えながら、遙か空へ目を向けるのであった……。

## 幕間 終末の始まり

魔人族の国〔ガーランド〕

その魔王城の外れにある訓練場に、殺気と獣の雄叫びが響き渡っていた。だが、その訓練場には一匹も獣はいない。代わりに獣のような“人”がいた。

奇妙な光景であった。

ここは魔人族の国だ。ならば、そこにいる“人”は魔人族であるはずだ。にもかかわらず、彼等は皆、体のどこかに獣の特徴——耳や尾のみならず、牙や爪、瞳孔の割れた目など持っていた。

その動きは獣じみた敏捷性と、人間族や魔人族には有り得ない臂力を有しているようだ。今も、拳の一撃で鋼鉄製の鎧が凹み、地面を叩いた剣が深い溝を作っている。

どう見ても亜人族だった。

だが、亜人族であるはずがなかった。なぜなら、彼等が魔法を使っていたからだ。亜人族の如き身体能力に、人間族や魔人族の如き魔法の行使……

そして、もう一つ。

殺意を迸らせ、獣の咆哮を上げながら戦闘訓練を受ける彼等は、しかし、一人の例外もなく……………

——目が虚ろであった。

生きている者の輝きが微塵も感じない。意思すらも見えない、文字通り、死んだ目だ。

「……………外道が」

訓練場に隣接するテラスから彼等を見下ろしていた男——フリード・バグアーが、嫌悪の滲む声音で、そして、自身を責め立てるように呟いた。

風にさわられそうな小さな呟きは、しかし、この不気味で歪な光景に作り出した下手人に、しっかりと拾われた。

「あれれ々？ フリード、どうしたの？ 僕の成果を見に来たのかな？」

中村恵理。白崎香織と共に同郷の仲間を裏切り、王国騎士団に壊滅的打撃を与え、王国の重鎮達を殺す計画を立てた張本人。いつの間にか、テラスの入口に背を預けて、人を食ったようなニヤニヤ笑いを貼り付けてフリードを見ていた。

「……………恵理。悔るな、私の認識に干渉しても無駄だ。それに、その行為をすることとは裏切りを疑われたいか？」

言外に、前科者に信用があると思うなど、痛烈な批判が飛ぶ。実際、天職、降霊術師たる恵理は、降霊術が闇属性魔法の最高難易度魔法であるが故に、闇属性魔法全般に

反則じみた適性を持っている。

何せ、死者の魂を縛り、意のままに操る「縛魂」というオリジナル魔法を作り出すほどで、それ即ち、自力で神代魔法の領域に手をかけたということでもある彼女をフリードは警戒しないわけでもなく、認識を干渉をされたことを察すると、わざと背後を取らせていたのだ。

フリードの殺気と共に忠告を受けた当の恵理は、

「まあまあ、そんなにカリカリしないで。僕はか弱い女の子なんだよ？でも、流星は魔族の將軍様じゃん。認識を干渉させても気付いてるし、さ〜」

相変わらず、ニヤニヤと笑いながら、あつさりと受け流しながらフリードの侮れなさに感心している。フリードは、訓練している者達をチラリと見やり、内心で「戯言を」と吐き捨てた。

「香織はどうした？」

「あ、香織？ あの子は今、あのエクストラって神のところにいるよ？ あ、もしかしてえ、香織に会いたかったの〜？」

「いや、姿が見えないのでな。気になっただけだ」

「えー、つままないな〜」

恵理の煽りをフリードは軽くあしらうように受け流すと、少しつまんなそうな表情を



する恵理。

白崎香織。恵理と共に同郷を裏切った一人。天職は“治療師”で、その同郷の中でも随一の回復魔法を扱えると聞いている。フリード自身もその洗練された回復魔法を見て実力は認めている。

「それで、私の屍獣兵……お気に召してくれたかな」

「……人道的に反するが、戦力としては申し分ない」

「律儀だねえ。そんなに嫌そうな顔をしないでよ。フリードが手を貸してくれたから、こんなに立派に育ったんだよお？」

悪意を隠しもしない、ねっとりこびりつくような声に、フリードは湧き上がる怒りを自制するように奥歯を噛み砕いて無表情を貫く。

否定は出来ない。

これは、自分の罪なのだから。

——屍獣兵

元王国騎士団達の遺体に、フリードがアルヴ達からの命令で従い魔物の特性を取り込ませ、恵理が降霊術と併せて魂を縛り作り上げた、恵理の私兵団だ。

死してなお、魂ごと弄ばれるように使われる彼等に自分が何もできなかったことへの後悔を、恵里には嫌悪と怒りを感じフリード自身も何もできずに手を貸してしまったこ

とに怒りが湧き上がり、下唇を噛む。

そんなフリードに、つまらんそうに鼻を鳴らした惠理は、ニイツと下卑た笑みを浮かばせながら、話題を変えて問うた。

「そういえば、フリード、知ってるう？ 使徒ちゃん達の行方？ あんなにうじやうじやいたのに、今朝から一匹も見えてないんだけどお？」

惠理をして、心胆を寒からしめたもの

—— “神の使徒” 五百体の顕現。

それはまさに、神判そのもの。

それを見て、惠理は確信したものだ。自分の選択は間違っていないかつたと。あんなもの、逆らったところで意味はない。軽く消されて、それで終わりだ。

たとえ、あの化け物であっても。

「メイン以外の招待客を迎えに行つたと聞いた」

フリードの言葉を聞いて、目を見開く惠理だったが、すぐに深くニイツと笑った。

「やつぱり、裏切り者は君だったんだあ。フリードオ」

「何を言つて——！」

惠理の言葉に憤りを見せるフリードだったが、直後、膨大な魔力が自身の真上から感じ取り、すぐにバックステップで避ける。

すると、先程まで、フリードがいた場所に、銀の極光が降り注いだ。  
「誰だ!」

フリードは叫びながら上を見上げると、自身の目に写ったものに唾然とし、そして、すぐに顔をしかめる。

「何故、貴様等がこの場所にいる!？」

そこには、百を超える神の使徒達。

そして、

「フリード、私は悲しいよ。まさか、裏切り者が自分の腹心だったとはね」

黒色の軍服とケープを纏い仮面を被った人物。

——魔神 “アルヴヘイト”

「流石は、大迷宮を攻略しうる実力を持つ者ですね。次は、ちゃんと狙いなさい香織」

美しい銀の髪に、純白の戦乙女の如き装束と背に生えた濁りなき白の翼を持つ女神。

——聖母神 “エクストラ”

「もう、分かっているよ! だって、この姿になって間もないのに、いきなり実戦だもん。

ミスしちゃうよ!」

隣には、初めて会った時は黒髪だったが、今は白髪へと変え、使徒達と変わらない姿となった白崎香織の姿も見えている。

「……………嵌められたか」

フリードはそう呟きながら、目を動かして自身の周りと上を見る。

空は、エクストラ達をはじめとした使徒達が。

陸は、いつの間にか訓練場から離れ、自分を中心に囲むように屍獣兵達が。

行く手を阻まれた状況に置かれたフリードは、苦笑いを浮かべながら口を開いた。

「逃げ場なし、か……………」

「アハハ。残念だったねえ、フリードオ。ずっと隠していたっぽいけど、女神エクストラの前には隠し通せることは無理だったねえ」

「……………やはり、あの時点で疑われていたか」

ニヤニヤと笑みを浮かべながら話す恵理の言葉に、フリードは思い出す。エクストラと初めて会った際、あの何も感情がない人形のような冷酷な目が自分に怪訝な眼差しを送っていたことを。

すると、上にいるエクストラは、表情を変えずに無表情なまま見下すような眼差しでも感情がこもっていない冷淡な声音でフリードに話しかけた。

「フリード・バグアー。貴様一人だけの裏切りなのは到底、有り得ない。誰が仲間なのか答えなさい。さもなければ……………」

「さもなければなんだ？」

「四肢が失う覚悟をしてください。普通なら死だけです。貴様はまだ利用価値がある」  
告げられたエクストラの冷酷な宣告に、普通なら恐れ慄く神の言葉に、フリードは手で額を覆うように当てながら笑った。

「クハハハハハッ」

誰もが、沈黙している中、フリードだけが笑っているせいか訓練場に男の笑い声が響く。恵理などは最悪の状況のせいで精神が狂ってしまったのかと思ってしまうほどだ。

「ハハハハハハハハッ——はぁ」

笑い終えた瞬間、フリードから放たれる魔力の奔流に空気が凍った。

突然、空気が変わったことに恵理と香織は背筋が凍ったのか体が震え、アルヴは息を呑む。エクストラは「ほう」と、声を漏らした。

「舐められたものだ。大切な部下達に危険を晒すような真似をするわけないだろう」

「……フリード・バクアー。まさか、貴様一人でこの数を相手取るのですか？」

エクストラの言葉に対して、フリードは手を横一直線に薙ぎ払った。その瞬間、空間をズレ、フリードを包囲していた一部の使徒と屍獣兵が細切れにするとエクストラを睨み付けながら口を開いた。

「これが、私の答えだ。邪神共」

空間魔法 “千断”。

その威力に、無詠唱なことにアルヴ達は驚き、エクストラは目を見開く。

「空間魔法を無詠唱………隠していたのですね。本来の実力を」

「ああ、だが、隠す必要は無くなったからな」

そうフリードは言うのと、懐に閉まっていた小瓶を握り潰し、腰に携えた魔剣ではない剣を手を持った。それを見た恵理、香織、アルヴ、使徒や屍獣兵達も戦闘態勢に入りだす。

エクストラも周りに十二の白銀の杭“聖杭”を出現させる。

そんな絶望的な戦況にフリードは思う。

今、ここに相棒やカトレア達信頼を置ける部下達も居ない時を狙った完全なる自分を

逃がさないための包囲網。

だが、寧ろ、自分だけで良かったかもしれない。もし、ウラノス達がいたとしても戦闘となったら、こちらが多く倒しても神達にとつての被害は一割あるかどうか。逆に自分達側が致命的なダメージを受けただろう。

既に、カトレア達の脱出要請は小瓶の中に入れた魔物によつて信号は出している。神との決戦が近い中、ここで戦力がガタ落ちするのはまずい。

せめて、部屋の研究資料やウラノスと共に避難用の隠し集落に行ける間の時間稼ぎ程度にならないといけない。

「最悪、奴の腕一本ぐらい持つていくか」

自分は死ぬかもしれない。

なのに何故だろう。

恐怖はない。

悲しくもない。

ただ、笑ってしまうのだ。

——それは、獣のように。

——それは、本能に身を任せたように。

それは、「グリュューエン大火山」で初めて会ったあの男南雲ハジメのように、口角が自然と上がり、フリードは不敵な笑みを浮かべていた。

その笑みを知る恵理、香織、アルヴは目を大きく見開く。エクストラは表情は変わらないが、フリードの笑みに疑問を感じている。

「なぜ、笑っている。頭がおかしくなったのですかフリード・バグアー」

「いや、気にするな」

そう言つて、フリードは、手に持つ剣に黒炎を纏わせると剣先をエクストラに向けた。そして、力強く、ずっと約十年近く嘘だらけであった言葉ではなく、内なる心に秘めた本心からの言葉を曝け出すように口にした。

「私の名は、フリード・バグアー！ 解放者達の意志を引き継ぎ、貴様等神共を地に引き下ろし、討つ者である!!」

魔族を自由に。

他の種族との共存が出来る世界に。

自由な意志であるべき世の中に。

大切な人達が幸せに笑っていけるように。

故に、彼女達と、亡き親友との約束を信頼できる彼等に託し、自分はその礎となろう。

魔人の英雄が敵陣に向かって走る。

未来の為に……………

勢いよく地面を蹴り上げ、*“重力魔法”*で宙を舞い、黒炎が纏う剣を両手で握り大きく振り上げた。

「さあつ、邪神共っ！ 私の時間稼ぎに、付き合って貰おうかつ!!」

直後、魔王城が揺れるほどの余波と国全体に響き渡るほどの轟音が半日以上続くのであつた……………。

ハイリヒ王国 王都

大迷宮から帰還した浩介達も加わったおかげで、防衛面も上がり復興も順調であつ



た。

「腕を上げたなつ、浩介！」

「まあ、大迷宮を攻略をしたつすから、ねつ」

現在も、野外訓練場で浩介とメルドが模擬戦を行っており、来たる戦いに備えるべく鍛錬を怠つてなかつた。周りに兵士やクラスメイト達（主に男子）が応援や同じように鍛錬や模擬戦などを行っていた。

王都の中心では、リリアーナ、妙子、奈々達が復興の手伝いをしており、今は休憩で楽しく談笑していた。

「やっぱ、リリイもハジメに惚れちゃった？」

「え、あ、はい……」

「やっぱり、女タラシねハジメの奴」

奈々の言葉に、頬を赤く染めながら答えるリリアーナに、妙子は呆れながら今はない幼なじみに顔を浮かべている。他の生徒達や王都の住人達も活気立っていた。

そんな時だった。

模擬戦をしていた浩介の手が止まる。それを見たメルドも同じように手を止め、首を傾げた。

「どうしたんだ浩介？　まだ、模擬戦中——！」

メルドが言いかけようとした直後、「神山」から膨大な魔力が、こちらに向かってくるのが付いた浩介が叫ぶ。

「メルドさん!!」

浩介の叫びに頷きメルドも訓練場全体に聞こえるよう指示をする。

「お前達、何かが来るぞ！ 数人はリリアーナ姫達の元へ！ 残る者は戦闘態勢に入れ!!」

メルドの呼び声で訓練場にいた全員の手が止まる。そして、副団長であるクゼリーと数人の騎士や生徒達がリリアーナ達の元へ向かい、残った者達は武器を手を取った。

その瞬間だった。

「どう足掻いても無駄です」

「——」

空から何の感情も伝わらない声が聞こえた。そんな怖気を振るうほどの綺麗な声に聞き覚えがあった浩介とメルドは冷や汗が吹き、心音の激しさが増す。

浩介とメルド達が、別の場所でもリリアーナ達も空を見上げると、そこには、王都の一部の空を銀に輝く翼が覆い尽くし、幻想的な光景が広がっていた。

神の使徒総勢二百体が天から王国に舞い降りた。

その中から一体の使徒が浩介達に降り立った。

その使徒は、空にいる使徒達と同じであって同じでないような雰囲気を感じさせる。そして、確実に他と違うのは彼女の周りを浮遊する四つの銀色の魔力が纏っている杭がものがあったている。

誰もが、開いた口が閉まらず、啞然とする中、無機質な、まったく感情を感じさせない声音が訓練場内に響いた。

「御初に御目に掛かります主の駒達。私の名は、神の使徒“エアースト”と申します。今回は、主に選ばれた者達をお迎えに上がりました。抵抗するのであれば、此方も相応な対応を取りますので、お見知り置きを」

——ライセン大峽谷　大迷宮入口

その上空に浮かぶ、銀の輝き。

深き迷宮の最奥で、仲間が残した外の情景を見るアーティファクトを見やる、小さなゴレムが呟いた。

「……とうとう始まったね。私の長かった旅も、ようやく終わりかな？」

小さなゴレムに重なるようにして、宿る魂の幻影が現れた。

金色の髪と蒼穹の瞳を持つ少女——ミレデイ・ライセンは、ウザさも、ふざけた様子もない、透明な表情で天を仰いだ。

——遙か西の海 海上の町エリセン

棧橋に一人の女性がいた。手にバスケットを持ち、ほんわり微笑んでいる。周りの男性達がチラチラ視線を向ける中、女性——レミアは、海へ大きく呼びかけた。

「ミュウ~~~~~! お昼ご飯の時間よ~~~~~!

途端、「んみゃ!」と、猫のような声を上げて、海面から飛び出す小さな影。まるで、水の中こそ自由! と言いたげに、スイスイと泳いで戻ってくる。

「ママ、お昼ごはんはなあに?」

「ミュウの好きなものよ?……お肉じゃなくてお魚なのは許してね?」

ザバツと海から上がり、母娘揃って棧橋に腰掛ける。バスケットから出てきたのは、お魚の串焼き。串焼きはミュウの大好物だ。

串焼きであれば、刺さっているものはなんであれ、大体許せる。

だって串焼きは、あの日、シアお姉ちゃんやパパと出会った日に、初めて食べた忘れ得ない食べ物なのだから。

はむはむと串焼きを頬張るミュウに、愛しさに溢れた眼差しを向けるレミア。そんな二人の耳に、戸惑う男達の声が聞こえた。

「あれ? なんだ? 空に……誰か、いる?」

レミアとミュウが、二人揃って空を見上げた。  
確かに、いた。

太陽を背に、銀の翼を広げる者が。

無機質な瞳で、母娘を見下ろしながら……………

## 番外編 月刊フェアベルゲン①

樹海の大迷宮を終えて、美しき「フェアベルゲン」にて、しばしの休養を取ることにしたハジメ達。

「フェアベルゲン」側も、復興やら負傷者の回復、何より奴隷だった同胞の解放に成功したことで、ハジメ達には大きな恩と好意を抱いてくれていられるらしく、それが待遇という形で示されているため、ハジメ達は非常に快適な日々を送っていた。

とはいえ、いつまでも平穩に浸っているわけにもいかない。

明日には最後の大迷宮——「氷雪洞窟」に出発すべく、ハジメ達は都の郊外にある静かな広場に集まって、切り株の円卓に座り、明日以降の打ち合わせなどを行っていた。「つーわけで、氷雪洞窟は、南大陸のシュネー雪原を突破する必要があるわけだが、フェルニルがあれば、まあ、大した問題はないだろう」

「本当だったら、数十ヶ月はかけて、極寒の地を旅しなきゃいけなかったんだよね。ほんと、南雲くんがいて良かったあ」

「言つとくがな、谷口。ショートカットできるってことは、もしかしたら経験すべき大事

な何かをスルーして先へ進むってことかもしれないんだぞ？ 葉できて良かったとか、そんな心構えで大丈夫か？」

「うぐつ。……肝に銘じ、集中して挑む、所存です……」

樹海の大迷宮攻略に失敗した身であるから、気を引き締めろと言われれば反論の余地はない。まして、無理を押しして同行に願ひ出たのだ。

ハジメの目が、光輝や龍太郎に巡る。二人共、苦い表情で頷いた。

そんなハジメを、優花やユエ、テイオとアレスが、どこか温かい目で見ていた。

「……………なんだ？」

視線に気が付いて、ハジメが訝しむように目を細めた。

「なんでもないわ」

「……………ん、何も」

「なんでもないのじゃ」

「なんでもないですよ」

優花達三人は、何故かより一層、ほにやんとした表情で、首を振り、アレスは口に手を当てて笑みをこぼしていた。妙に居心地が悪い気持ちになるハジメ。そんな優花達とハジメを、雫が交互にチラチラと見ている。なんとなく、雫には優花達の感じているものが分かるようだ。

「(……南雲君。雰囲気が変わったかしら? 前よりも、更に、優しくなった感じ?)」

少し前、この世界に転移する前のハジメなら、鈴や龍太郎はともかく、すこぶる仲が悪い光輝に「大丈夫か?」などと聞かなかつただろう。その違和感と、ハジメの纏う雰囲気から、雫は、そんなことを思った。

と、その時、この場に欠けていた二人の仲間が、ようやくやって来た。

「すみませくん、遅くなりました。リユーテイリスさんにこつてり絞られたアルテナを運んでたものですから」

「ご、ごめんなさい、シア。……うぶっ」

「おいおい、大丈夫かよ? アルテナ」

シアに背負われながら魔力の大量消費で吐き気を催すアルテナに、ハジメが心配そうな表情をして、シアとアルテナの方へ駆け寄る。

「平気か?」

「ふふっ。ハジメさんが、こうしてくれるだけでわたくしは、平気です」

「クハツ……そうかい」

二人の元へ来るとシアの背から降ろされたアルテナを、ごく自然に優しく抱きとめるハジメ。アルテナも、これまたごく自然に、ハジメの胸元に幸せそうに顔を埋めている。

二人の動きが自然すぎて誰も言えなかつた。



「むう」

シアが小さく唸る。アルテナが「あ」と気が付いて、視線で「シアもこちらへ」と尋ねると、シアは何故かにこやかに笑って頷くと、ハジメに密着した。ハジメも苦笑いを浮かべながらも、シアのウサ耳を優しく撫でた。

「(なんとというか、アルテナさんも変わったわね。貫禄？余裕？落ち着いた感じなのは確かだね。原因は、うん、それしかないけど)」

冴え渡る雫さんの人間観察。

ハジメの大切な恋人になれたという事実は、アルテナという少女に絶大な自信を与えたいらしい。どことなく、「少女」から「女性」へと踏み込んでいるような、浮ついたものがない魅力で溢れているようだった。

「そうそう、アルテナを背負いながら来る途中に、これを頂きましたよ」

そう言って、シアが円卓の上に出したのは、地球ていうところの雑誌のようなものだった。同じものが数冊ある。

その表示には、こう記されていた。

【月刊フェアベルゲン 再編版第一号】

「……ん？ これって、もしかして翼人族の？」

「そうですね。翼人族は、フェアベルゲンの広報担当の役目を担っていますわ。魔人族や

帝国の襲撃で止まっていたのですけど、元々、月一でこれを発行していますので、ほら、皆様も昨日か一昨日か、取材受けませんでしたか？」

「ああ、来たな。翼人族族長のマオつつー女が、いろいろと、聞いてきた」

「ええ、私もいろいろと聞かれたわね」

同胞が奴隷から解放され、活気づく「フェアベルゲン」ではあるが、失ったものが大きいことに変わりはない。戦死した者達は数知れず、奴隷にされた後亡くなつて戻つてこなかった者も多い。多くの同胞が戻つてきてくれたからこそ、戻つてこなかった者達への悲しみも募る。

だからこそ、止まっていた月刊情報誌——普段から、娯楽関係や、明るいニュースをメインを伝えている——を、再開したのでろう。

その再開を記念として、是非ともハジメ達のことを記事にさせてくれと、翼人族族長にして長老の一人であるマオが直々に頼みに来たのである。

ハジメは適当に一冊を、机に置きながらペラつとめくる。

【初代女王リユーティリス・ハルツィナ様ご帰還！】

「へえ、よくできてんな」

その見出しを見たハジメの言葉に全員が覗き見る。

そこにこう書かれていた。（※一部抜粋）

「この樹海で、我等同胞をまとめ、導き、大樹の守護者であった女王リユーティリス・ハルツィナ様が我等の祈りを聞いてか、フェアベルゲンに大樹の妖精として来てくださった。た。

そして現在、リユーティリス様は、新たに魔力が発現された森人族長老アルフレリツクの孫娘アルテナ様を弟子に取ったと聞き、その理由を聞くことに成功した。

著者の取材によれば、リユーティリス様は「わたくしは、貴方達を守る力が限られています。ですが、安心してください。今、わたくしが育てているアルテナは、わたくしを超えるだろう実力の持ち主です。ですから安心してくださいまし」と感動せざるを得ない言葉ともにリユーティリス様は女神のような美しい微笑みを向けてくださった！（著者は興奮したせいで、そこで意識が途絶えてしまった。）

意識を取り戻した著者は、僭越ながら、今後ともリユーティリス様とアルテナ様の修行するお姿を記事にし同胞達に伝え、アルテナ様の成長を応援したいと思う」

そう書かれた記事を見て、アルテナは嬉しそうに笑みをこぼす。そんな中、光輝も、リユーティリスとアルテナの記事を見てか、にこやかに笑いながら一冊手に取った。

「懐かしいなあ。日本でインタビューされた時のことを思い出すよ」

イケメン剣道男子として剣道関係雑誌に度々……のみならず、ファッション誌やらなんやら、取り敢えずイケメンが映える雑誌に、ということらしい。

ハジメと龍太郎は特に気にした様子もないが、ここにクラスの男子がいれば、舌打ちの一つは出たかもしれない。

光輝は、何気なくペラペラとめくり、

【勇者様は男色家!? 狙われる南雲殿!】

「なんでえ!?! どういうことだよ!」

雑誌をペシンツツと地面に叩きつけた。

他の雑誌に手を取って、全員が該当ページを見てみると、こう書かれていた。(※一部抜粋)

【勇者こと天之川光輝氏は、帝国の奴隷解放のため、帝城への侵入に協力したり、演説の際に一役買ったりと、数々の尽力を頂いた大恩ある方である。

そんな彼に、心奪われた亜人女性は少なくない。著者が独自に調査したところでは、元奴隷の、未婚女性の三割近くが、彼に対して何かしらのアプローチをしたとのことだ。生憎、想いが成就した女性はいないようだが、ここで一つ、驚愕すべき事実が明らかとなった。

著者の取材によれば、とある女性は、光輝氏に「俺には、今すべきことがある。俺は、南雲よりも……」などと濁した言葉で断られたそうなのだが、その時、偶然にも南雲殿が通りかかり、光輝氏は、彼の後ろ姿に熱い視線を向けていたのだという。

もうお分かりだろう。光輝氏の言葉に続き。それは「俺は、南雲よりも想える人がいないんだ！」に違いない。彼は、同性である南雲殿に、秘めたる想いを抱いていたのだ！光輝氏の熱い眼差しは、今なお、南雲殿の後ろ姿に向けられているのだろう。僭越ながら、著者は光輝氏の至難の恋路を応援したく思う」

ユエがスツと立ち上がった。光のない瞳が、「勇者、お前を殺す！」と無言の主張をしている。神罰之焰ステンバクイ。

シアとアルテナも立ち上がった。光のない瞳が、「ハジメさんのお尻は私達が守りますう！」と無言の主張をしている。ドリユツケン&マグナ・アルト（ハジメ作アルテナの専用アーティファクト）ステンバクイ。

「待てっ、待てっくれ！ 悪意だ、悪意を感じるぞ、この記事！ ユエさんもシアさんもアルテナさんも、分かるだろ!? 独断と偏見と個人的趣味に悪意がブレンドされた記事じゃないかっ」

光輝、死に物狂いの弁明。

「あ、天之川、お前……………」

「やめろおっ。南雲！ 俺をそんな目で見るな！」

「へえー、天之川君。ハジメをそういう目で見てたんだあ。フウ……………」

「園部さん!? お願いだから察してくれ！ 決意の視線だよ！ 南雲より強くなってみ

せるっていう、け・つ・い・の・視線!!」

「ケツへ、の視線?」

「龍太郎。今はふざけて良い時じゃない。ぶっ飛ばすぞ」

「男色家の勇者ですか……おっと、鳥肌が……」

「アレスさんも、押揃うのをやめて下さい!!」

しばらく、光輝を警戒して殺意満々、瞳孔の収縮した目を向け続けるユエと、ドリユツケンとマグナ・アルトから手を離さない荒ぶるウサ耳のシア（ヤクザみたいなメンチ切っている）とエルフ耳のアルテナを押さえることに時間が費やされた。

ようやく落ち着きが戻った広場。一番執り成しに尽力した雫が、どこかぐったりしている。その傍らで光輝が「ありがとう雫。雫ありがとう」を繰り返している。

それくらい、瞳孔収縮ユエ様と、ヤクザアイのシアとアルテナは怖かったらしい。しかし、最も、光輝が恐れていたのは、聖剣に形状変化させた「聖杭」を周りに飛ばしながら背筋を凍らすような視線を送っていた優花であった。

「なんか、嫌な予感しかないが……続き読むか?」

ハジメが、微妙な顔をしながら雑誌に目を向ける。雫が、疲れ顔で頷いた。

「逆に、私達の話がどう記録されているのか、チェックしないと怖いんだけど」

「だ、だよねえ。鈴、せっかく亜人の子達と仲良くなったのに、変な目で見られるように

なったりしたら嫌だし……」

取り敢えず、読むことに決定。最初から見えていこうと、それぞれ雑誌を手に取り、ページ目を開いた。

【第一号特集!! 新長老の姫、シア様のラブロマンスに迫る!】

「姫?! シア様?!? なんですかこれえ!?!」

動揺して、シアのウサ耳がぶるんぶるんつ。ハジメが失笑しつつ言う。

「まあ、間違いではないな。ほら、カムは新たな長老の一人になったし、ハウリア族は、英雄一族でもあるんだ。その長老の娘なんだから、一般の亜人からすれば、十分に『姫様』『シア様』なんだろう」

「シアが姫仲間になりましたわ〜!」

「……ん。者共、頭が高い。ここにおられるはシア様なるぞ!」

「くっ……それは、とんだご無礼をシア姫様」

「くっ……お、お許しくださいシア姫様……ぷっ」

「やめてください、ユエさん! それに、アレスさんも優花さんも、そんな茶番に乗らないください! 羞恥心で死んでしまいます!」

素直に、嬉しそうに喜ぶアルテナ以外の全員が、そんなシアを、どことなくニヤニヤしながら眺めつつ続きを読む。

「新長老カム・ハウリアの娘様であるシア様。彼女の人生は波乱万丈だった。幼き頃にお母上を亡くし、一族揃って樹海を出奔。帝国に追われ、ライセン大峽谷でも、死と隣り合わせ。挙句、樹海に戻れば追放処分！」

「追放処分にしたの、フェアベルゲンですけどね。その決定をした一人は、マオ長老ですけどね」

今はマオは編集長なので、客観的に書いているのだろう。（ハウリア族の追放の件については、事情を知って、お怒りになったリユーティリスから、マオを含めた長老達は、お叱りを受けたという。）

シアが物凄いジト目になっている。ユエバリの凄まじいジト目だ。

「だが、そんな逆境の中、彼女は諦めなかった。だからこそ、出会ったのだ。運命の相手に！ そう、我等の英雄である南雲殿に！」

シアがジト目をやめて、もじもじし出した。

「あ、改めて言われると恥ずかしいですねえ」

「全くだ。言われてる俺も恥ずかしいけどな……それに、英雄つて……」

まるで、自分達の実話を書籍化されたような気恥ずかしさ。二人の様子に、優花達は微笑ましそうにし、光輝はなんとも言えない表示となり、龍太郎はあからさまに「ケツ」とやさぐれてる。



「シア姫に直撃インタビューを行った。

——南雲殿と出会った当初、やはり運命を感じたのか。どういう印象だったのか。

シア姫「そうですね。運命だったのか分かりませんが、導かれた先に、私とハジメさんは出会いましたから運命かもしれませんね。実際に会った後は、亜人である私に優しく接してくれるハジメさんに驚きました。ハジメさんは『俺は、別の世界から来た人間だからな。変に亜人に対して嫌悪感はない』と、言っていました、私にとっては、物凄く嬉しかったですね！」

「……ん、分かる。吸血鬼の私にもハジメは優しくかった」

「本当です、ハジメさんの優しさに嬉し泣きしそうになりましたもん、私」

ハジメが照れてしまったのか明後日の方を向いた。優花達が微笑ましそうにそんなハジメを見る。

「——好意は最初からあったかのか？」

シア姫「いいいえ、まさか。一族郎党処刑される寸前だったんですよ？ハジメさんが話をつけてくれるまで、そんな余裕はありませんでしたよ」

なんとということだろう。運命の出会いを果たしてなお、シア姫に襲いかかる不幸！

神は、一体どれだけ彼女を追い詰めれば気が済むのか！

「だから、処刑しようとしたのはフェアベルゲンで、決定したその一人は、この著者のマ

才長老なんですけど。私を追い詰めたの、神じゃなくて貴女ですけど!」

「中々、記者魂があるというか……」

「面の皮が厚い方ですね」

「——では、いつ明確に好意を自覚したのか。」

シア姫「それはやっぱり、あの時ですね。長老衆に向かつて、ハジメさんが言ってくれたんです。『シアは、俺の運命の相手だ!俺からシアを奪おうってんなら……覚悟して貰おうか』って!痺れしまいました!」

「おい、待て。俺は、んなこと言っていないぞ」

ハジメがジト目を向けながら雑誌にかかれた自分の言葉を否定する。それを耳にした全員の視線がシアに向いた。シアは激しくウサ耳を泳がせた後、冷や汗を一筋流し、

「……すみません、ちょっと盛りました」

乙女だもの。恋バナを盛っちゃうのは仕方ない。と、思ったのか、生温かい視線がシアに集まる中、ユエがフォローする。

「……でも『俺からこいつらを奪おうってんなら』とは言ってた」

「!? よ、よく覚えてたなユエ」

ハジメの言葉は、一言一句暗記している……かもしれないユエ。

全員の生温かい視線が、今度はハジメに集中した。ハジメは片手で目を覆い、珍し

いことに「もう少し、言葉を選ぶべきだったな」と、羞恥に震えている。

【絆の深さが窺える。こうして、我等が同胞たるシア姫は、見事、女神である優花様に勝利し、南雲殿の唯一無二の存在となったわけだ。優花様も、シア姫を祝福している様子であった。おそらく、敗北を認め、潔く身を引いたに違いない。シア姫の魅力に勝てるわけがないので、これは仕方のないことだろう。何はともあれ、シア姫の今までの苦勞が報われて、我々同胞一同、感動に震える思いである】

優花の顔がぐりんつとシアに向いた。

「シア？ これは、どういうこと？」

「ししし、知りませんよ！ 私、こんなこと一言も言つてません！」

「わかった。ちよつと、女神の件も含めてマオ編集長とやらと少しオハナシしてくるわ」

「……優花、落ち着いてえ！」

ユエに腕を掴まれつつも、「安心して、ユエ。少し大きな焼き鳥を作るだけよ」と既に、十二の「聖杭」達を外に向けて射出しようとしてる優花。おそらく、「同胞」を強調していることから、亜人族達を盛り上げるための演出の一環として、事実を少し曲げて書いたのだろうか……

「い、命知らずな奴じゃなあ、マオとやらは」

テイオの眩きに雫達も揃つて頷いた。

【著者は、南雲殿の周りにいる女性達について、シア姫は何を聞かれているのか分からないといった様子だった。著者は改めて、南雲殿の周りにいる女性達について、どう思っているかの尋ねた。

この先の、シア姫の言葉は、敢えてそのまま記載させていただく】

シアが、「え!? そのまま!?! 軽いコメントで編集するって言ってましたの!?!」と動揺をあらわにする。女性陣の目がキラリと輝いた。食いつくように雑誌編集目を落とす。

【大好きですよ。私が生まれてきたのは、この人達と出会うためだったんだって思えるくらい、大好きです】

この時点で、シアが「うばあ」と奇怪な声を上げた。羞恥で真っ赤に染まり、円卓に突っ伏す。「何も聞きたくなあ~~~~~いつ」と言いたげに、ウサ耳を両手で押さえる。

【優花さんは、私の憧れの一人です。周りを、よく見て自分のやるべき事を常に分かっているところが尊敬します。それに、ハジメさんの全て分かっているのか、あんな自然にハジメさんと息の合う連携は、優花さんが一番だと私は思います】

「……恥ずかしいけど、嬉しいわ」

優花は、照れくさそうに頬を染めながら、髪をいじいじする。

「でも、ハジメさんが居ないと時々、臆病になりがちなのは控えて欲しいですね」  
「うっ」

「そうじゃのう。ハルツイナの時は大変じゃった」

「……ん、ティオママのおかげでなんとかなった」

「うう……」

優花は、恥ずかしさのあまり椅子の上で三角座りになって蹲ってしまふ。

「でも、そんな優花さんは、やる時は凄くて、見惚れてしまいました。流石は、ハジメさんがこの世で一番愛していると豪語してる理由がわかった気がしました！」

私は、そんな優花さんが大好きです！」

隣のシアに、優花は無言で抱きついた。シアがビクンツと震えるが、優花がお構いなしにくっつく。

「ユエさんは、私にとってお姉さんみたいな存在で、戦いの師匠であって、初めてできた友達です。今の私がいるのはユエさんがいたから。ユエさんを脅かすものは、何があっても、私は許しません」

ユエが、ほんのり頬を染めて、円卓に突っ伏すシアを見つめた。

「ティオさんは、一番私のことを理解してくれていると思うんですよ。ティオさんって、気が付くと、いつも少し離れた場所において、なんだか凄く優しい目付きで私達のこ

とを見てるんです」

テイオが「むう」と変な声を出した。ちよつぱり頬が染まっているのは気が付かれていたことに照れたからか。

「見守つてくれてるし、いつも心を砕いてくれてるし、どんなことでも、一番落ち着いていて、いつも冷静なのつてテイオさんなんです。私、思うんですが、実は、ハジメさんつて、ある意味一番頼りにしてるのはテイオさんなんじゃないかって」

ハジメは、肩をすくめながら苦笑いをこぼす。

「傍にいてくれるだけで、安心できる人。それがテイオさんです。皆のお姉さんのな、母親的な人で、私も頼りにしてるし大好きです！」

恥ずかしさのあまりテイオは顔を覆いながらハジメに抱きついた。余程、恥ずかしかったらしく、ハジメもテイオの頭を撫でると、テイオは下に向けた。口元がむにむにと動いているのは、今、感じている想いを噛み締めているからなのか。ほんのり頬を染めて、長いまつ毛を震わせる姿は、まさに絶世の美女であった。

思わず、見惚れてる光輝と龍太郎。雫や鈴は、甘いお菓子でも頬張つたような表情だが、ハジメの睨みに四人はバツと顔を逸らす。

「アルテナですか？ 最初は、ムカつく奴だなんて思いました」

アルテナが跳ねた。「う、嘘ですよね」と、ショックを隠しきれてない様子。

「ハジメさんに助けられたからって、見え見えアプローチしたり、やけに私に突っかかってくるのでぶっ飛ばしてやろうかとも思いましたよ」

光輝が龍太郎を見て呟いた。

「シアさんって、考え方が龍太郎と似てるな」

「おい、光輝。どういう意味だ、こら」

アルテナはそれどころではないようで、食い入るように先を読む。

「しかもっ、しかもですよ！ ハジメさんがやたらと気に入ってるんですよ！ 恋人の私を差し置いて、談笑とか色々私と知らない間にイチヤイチャしやがってえ！」

アルテナの目元に一杯の涙が溜まってしまっている。もしかして、まだ嫌われてるんじゃないかと思ってしまうのだろうか。

「でも、今は、大切な友達であり、仲間です」

アルテナだけでなく、全員が目丸くして優花に抱きしめられてるシアを見る。シアは、相変わらず羞恥に耐えるように突っ伏したままだ。

「アルテナは、ただの構ってちゃんです。イラッとするほどのですけど。でも、諦めない執念は凄いいと思います。私が何度も拒絶しても友達になろうと、ハジメさんにフラれても諦めず努力している姿は、凄く心が強い人だなあって思いました」

アルテナは大きく目を見開くと、涙を拭って、言葉もなく、ただ打ち震えるように文

字を追う。

「だから、妹みたいな感じで好きですよ。アルテナは私が守ります」

「シアアアアアア!!」

感極まったアルテナがシアに勢いよく抱き着いた。シアから「ぐえっ」と声漏れる。優花は、咄嗟にシアから離れ回避したが、シアはアルテナと一緒に倒れ込んだ。

「こら、アルテナ！ 離れろですう！」

「嫌ですわああ！」

シアが抱き着くアルテナを剥がそうとするが、アルテナも離れずにいてキャットフアイトが始まってしまっている。しかし、アルテナを剥がそうとするシアの表情は嫌そうではなく、少し嬉しそうで笑っている。

そんな光景をハジメ達は、微笑ましそうに見るのであった……。



## 番外編 月刊フェアベルゲン②

二人のキャットファイトは、ユエと優花が止めに入ったことで終え、シアとアルテナの二人は「ゼゼエ」と、肩で息をしていた。

そんな二人の姿に微笑ましそうに見ていたハジメだったが、空気を変えようと咳払いをした。

「んんっ、ごほんっ。一応、アレスや天之川達のことと言及してんな。どれどれ」

「ほう………気になりますね」

「え？ 俺達も？」

シアが自分達をどう思っているのか、アレス、光輝と龍太郎は興味深そうに雑誌へ視線に戻す。

「アレスさんですか？あの人、人間という枠組みを超えていますね、はい」

「おっ、と……」

アレスの表情が微妙に引き攣る。

「だって、ユエさんとか優花さん、ティオさんの後、中接組はともかく、近接戦が得意な

私や、魔法なしではハジメさんに勝てるアレスさんって、人間卒業した最強生物ですよ」

「……………ほう」

アレスが「ほう」としか言えないぐらいの語彙力が低下してしまっている。どうやら、シアの自分に対しての取材コメントに少し傷付いてるのかもしれない。

「ですが、アレスさんが傍で戦ってくれてると思うだけで安心感が半端ないですね。アレスさんって、戦闘での的確なアドバイスや同じ近接戦闘での着眼点で色々と優しく教えてくれて師匠せんせいみたいな方です。ハジメさん、優花さん、ユエさん、テイオさん、アルテナ、アレスさんが揃えば最強パーティー間違いないですよ！」

「師匠せんせいですか……………」

シアから以外の言葉に、そして、大事な仲間の一人として信頼されてることに少し頬を緩ませるアレスであった。

因みに光輝と龍太郎は……………

「え？ 勇者さんですか？ うーん。よく分かりません！ 相棒さんの方も、そんなに話したことないです。興味も全くないので」

アレスと全く違うコメントに、光輝が「うん、知ってた」と言っただけで目から光を消した。龍太郎が「俺なんか、相棒さんの方」だぜ。シアさん、まさか俺の名前、分かってな

いとかないよな？」と、死んだ目で虚空を眺めている。

【鈴さんは……時々、私とユエさんとか、優花さんとテイオさんとかと一緒にいるのを、寂しそうな目で見てることがあるんですよね】

鈴が「つ」と息を呑んだ。雫が心配そうな目を向ける。

【誰を想って、そんな目をするのか、分かります。だから、鈴さんがハジメさんに、次の旅も一緒に行きたいってお願いした時は、なんだか嬉しかったです。ああ、まだ折れないんだな、頑張るつもりなんだなって。私、そういう人は好きです】

鈴が身悶えた。アレスのこともあつてか、光輝と龍太郎が、扱いの差に円卓へ突っ伏した。

【雫さんは……時間の問題ですね！】

「何が!? どういう意味!?!」

狼狽える雫。そんな彼女へ、優花、ユエ、テイオ、アルテナが「確かに」と頷いた。

「だから何が!?!」

答えてくれる者はいない。

【雫さんは、さっぱりした人に見えますけど、実は結構こじらせる人じゃないかと。親友の香織さんでしたっけ? その人も件もあつて表情に出してないですけど、相当溜め込んでいるように見えます。本音を出さないのな? それに、この旅も勇者さん達に〃付き

添っている“感じに見えますが、私的には、置いていかれないよう“付いていつている”ように見えます”

雫が激しく動揺した。視線を泳がせあたふたとしている。

ハジメが失笑し、全員も「確かに」と頷いた。雫は、長いポニーテールを顔に巻き付けて、椅子の上で三角座りをし、そのまま膝に顔を埋めてしまった。

八重樫流羞恥心に耐え忍ぶ型なのかもしれない。

鈴がニヤニヤとしながら、続きを音読した。

「なんとというか……可愛い人です。私達全員を肉食動物とするなら、雫さん一人だけ草食動物、みたいな？」

ハジメ達が、妙に納得した様子で「草食動物」と呟けば、ポニーテールガードで耐え忍ぶ雫さんはビクンツと震えた。

雑誌へ視線を戻す。シア特集の締め括りが記載されているようだ。

「以上が、シア姫の女性陣に対する想いだ。南雲殿の唯一無二の姫。貫禄と余裕がある。他の女性達とは格が違うのだろう。」

我等の同胞たるシア姫と南雲殿の愛は、永久不滅であることを確信する思いだ」

「シア押しがひでえな」

「わたくしも、姫なのですが………」

「どつちにしろ、マオ編集長は殺るわ」  
焼き鳥にする

「……………ん、殺る」

同胞鼻頂が酷くなってきたマオ編集長の命は風前の灯火か……………

「……………それでは最後に、シア姫にとって何が一番大切か？聞かせていただきたい。

シア姫「……………未来です。いつだって未来を大切にしますよ。そうですね、天職“占術師”たるシア・ハウリアが、良いことを教えてください。未来の予想は、当たるものではなく、当てるものです。“こうであれ”と願い、今、頑張る。そうすれば、きっと、素敵な未来へ行けますよ」

なるほど。素敵な未来を思い続けたからこそ、今のシア姫がいるわけだ。著者は感嘆の念を抱くばかりである。

素敵な話をありがとございました。以上、シア姫特集でした」

しばらくの間、誰も何も言わず、優しい目でシアを眺めていた。

「……………うう。格好をつけすぎました。恥ずかしいですう。取材なんて初めてで、ちよつとテンションが上がっていただけなんですう」

本心を晒け出し、最後にちよつと良い気になって読者へアドバイスなんてしちゃった自分に身悶えるウサギさん「誰か何か言ってください」と、居たたまれない空気をどうにかしようと呟くが、アルテナだけが満面な笑みで「素敵な未来」と隣で連呼して

くるが、他の全員が生暖かい眼差しが注がれるだけで、何も言わない。

そして、段々と隣で煽ってくるアルテナにムカついたのかアイアンクローをしたシアは声を張り上げた。

「ぬうえい！ 私だけ公開処刑とか納得いかんです！ 皆さんのインタビュー記事を見てみましょう！ きつと、勇者さんのように爆死してるはず！」

「あ、そうか。これももう発行されてるのか。ははっ、俺、フェアベルゲンの人達に男色家だと思われてるのか。ハハッ」

光輝が壊れ気味だ。龍太郎が殴って正気を戻そそうとしている中、シアがページを捲った。

【資格者の一人。最強の神官と名高いアレス・バーン氏に迫る！】

「おお、アレスさんの記事ですね」

シアの言葉に、光輝と龍太郎以外の全員が記事を見る。

【著者は、資格者の方達の中で王国の人間でありながら我等亜人を忌み嫌わない人物、アレス氏に取材し、いくつかのこちらの質問に答えて貰えた。

Q、何故、アレス氏は我等亜人を忌み嫌わないのか？

アレス「そうですね。昔の私は、貴方達を忌み嫌うというより、貴方達に何の感情を抱いてなかったの言い方が正しいですね」

Q、貴方のその強さを手に入れたのか？

アレス「ふむ、そう、ですね……。私、生まれつき異質でしたからね。上手く答えられませんね。強いて言うなら生まれつきの才能を伸ばした、でしょうね」

Q、いつから槍を武器に？

アレス「昔は、剣を使ってみました、十五の時に王国騎士団長殿との模擬戦で勝利してからは、自分に剣は合わないと感じて、今は自分に合った槍を使っていますね」

そんな質問がくる中、淡々と答えていくアレス。そんな内容を、ハジメ達は黙って読み進めている。

「では、最後にアレス氏は何故、南雲殿と共に？貴方ほどの実力者なら別の道があったはず。」

アレス「何故、ハジメ殿と共にですか……。簡単です。彼の強さに興味が湧いたからです。ハジメ殿は、見る限り天才ですよ……。どんなことでも、見て、覚え、実践すれば、なんとなく出来てしまうタイプの人です。ですが、多才故に一つの研鑽を積み重ねた才を持つ私などの人には弱い方だと思います」

「そそうなの、優花？」

「ええ、ハジメは、見れば大体、なんでも出来る人よ」

雫は、ハジメの才能に驚愕し、優花はハジメの才に模擬戦しただけで気付いていること

に驚いている。

「ですが、彼は、そんな欠点を大迷宮という死と隣り合わせの過酷な状況で生き残るために最善だからと身に付け生まれた卓越された銃技でカバーすることを可能したんです。私は彼を尊敬します。その強さ、その鋼の精神、私はハジメ殿の仲間になれて良かったと心から思っています」

この取材で、著者はアレス氏の強さの理由を僅かに知れたのだと思う。以上で、資格者の一人であるアレス・バーン氏の取材でした」

「少し素直に答え過ぎました、ね」

そう言つて、アレスは苦笑いを浮かべていると、咳払いしながら「んっ」気恥しそうにハジメがアレスに拳を突き出した。その意図に察したアレスは「では、私も」と、ハジメの拳に自分の拳を合わせるのだった。

それを見た優花達は、「ん？ 強敵か？」と、視線をアレスに向けながらコソコソしているのは無視しておこう。

そして、全員は次の記事へ目を向けた。

#### 【資格者達の人間関係】

随分とシンプルな見出しだ。なお、「資格者」とは大迷宮を一つでも攻略した者に対する亜人側の呼び方なので、おそらくハジメ達全員を一緒の記事にしているのだろう。



特集でない辺り、シアとハジメ達の差がよく分かる。

【資格者こと、南雲殿、優花様、ユエ氏、ティオ氏、雫氏に話を聞いた。主に彼等の人間関係についてだ。南雲氏に対し、彼女達が好意を持っているのは明らか。一人の男を巡る彼女達の心情はどのようなものか】

シアの時とは違つて、誰も慌てる素振りが無い。おそらく、取材だということを意識して、言葉をしつかり選んだのだろう。

若干、優花が「どうして私だけ『様』付け……」と、微妙に引き攣った表情をしたり、雫が「ちよつと待つて。この書き方だと、私も南雲君に好意を持っている感じじゃない」と、ポニーテールガードを解いて声を張り上げている。

光輝が、なんとも表示し難い表情で諫めの言葉を口にした。

「資格者でまとめただけだろ？ どうしたんだ、雫。そんなに慌てて」

「え？ あ、うん。そう……ね」

微妙に視線を逸らしながら大人しく座り直す雫。ちよつと妙な雰囲気、全員も記事に視線を移した。

【誌面の都合があるので、著者なりにまとめたものを記載する】

優花達が揃つて「え？」と声を漏らした。

【ユエ氏のシア姫への心情は割愛する。ただ、お二人が強く想い合っていることだけは

確かだ。取材しつつも砂糖を吐きそうになるほど。先の記事でユエ氏に言及した著者は、ちよつと首をくくりたい気分である。翼人族なので、ノーダメージだが」

反省しているのか分からないマオ編集長。

【優花様との関係は姉妹のようであるの一言だ。終始、お二人共、随分と仲が良さそうで、定位置のようにユエ氏は優花様の膝上に乗っており、優花様が姉で、ユエ氏が妹みたいであった】

優花とユエがお互いに「ふふ」「んっ」と声を漏らしながら笑みを浮かべている。

【ユエ氏は、優花様に頭を撫でられては、嬉しそうにしている姿は、著者も見惚れてしまふほどだった】

ユエが気恥ずかしそうにそっぽ向きながら「……恥ずかしい」と口にした。

【そんなお二人を、とある優花教の信者達からは「あれが、我等の素晴らしき女神様だ」と、大粒の涙を流しながら証言しており、直後、信者達の「優花様、万歳!!」コールが始まった。だが、万歳コールを聞いて駆けつけた優花様が可恥ずかしそうに顔を真っ赤にしながら「やめええろおお!!」と叫びながら止めに入るのだった】

優花が突つ伏した。「やつぱり、記事に書いたわね……あの鳥……」と小さく呟いている。優花のマオへの怒りが上昇しているようだ。

【そして、ユエ氏は、ティオ氏に対し、深い敬意の念を抱いているらしいことも、取材を

通して分かった」

その記事を目にしたティオは、面白そうにニコニコしながら、「ほほう、妾を？」と言葉をこぼす。ユエが、更に頬を染めながら何か弁明らしきものをしようとするが、ハジメが小さく笑いながら音読を開始。

「ユエ氏は、ティオ氏を語る時、優花様とはまた違っており、言葉の随所に敬意や好意が見え隠しているのだ。それを示す端的な言葉がある。そして、ユエ氏は、『ティオは私にとつて憧れの存在。だから、変わらざる傍にいてくれるだけで安心する』

そう、ユエ氏は、シア姫と優花様と同じ思いを抱き大好きらしい」

「…………マオめ…………許すまじ」

「ふふつ、そうかそうか。ユエは妾のこと。尊敬もしていて、傍にいて欲しいくらい大好きなんじゃな」

悪戯っぽい、しかし、嬉しさと慈愛も感じる声音に、ユエはどうとう円卓に突っ伏した。

「ユエの珍しい姿が見れたなあ」

羞恥に震えるユエに、微笑ましそうな表情を見せるハジメが、次のページを捲る。

【雫氏はコメントが真面目すぎて面白くないので割愛する】

「……………真面目でごめんなさい。特に面白くなくてごめんなさい」

雫は再びポニーテールガードに入った。案外、打たれ弱いのかも知れない。

「テイオ氏は、他の方々の所感通り、非常に優れた知性と深い懐をお持ちのようだ。そんな彼女の言葉で印象的だったものを抜粋する。

テイオ「む？ ユエ達を一言で表すなら？ ふふ、〃ライバル〃などという言葉を期待したかの？ 残念じやろうが違う。そうじやな、妾にとつてみなは…… 〃奇跡〃じやな。

そう、奇跡じや。今、この場にみなと共にいることは奇跡そのものじやろう。

奈落から這い上がった愛しの少年。天使の力を手にした少女。三百年の封印を解かれた吸血姫。この時代に唯一生まれた魔力持ちの兔人族。鋼の精神を持つ最強の神官。

一体誰が想像し得たじやろうか。神共すら、想像の埒外<sup>らちがい</sup>。みなとの出会いは奇跡。みなとの存在そのものが奇跡。

妾は今、そんな奇跡の中におる。なんと幸せなことか」

テイオが円卓に突っ伏した。「言うた。確かに、つい気持ちに乗って言うたわ」と身悶えている。改めて、奇跡と称した仲間に自分のセリフを客観的に見られるのは、さしものテイオも恥ずかしかつただろう。

これで、優花、ユエ、シア、テイオが円卓に突っ伏し、雫がポニーテールガード状態になった。生存者は、ハジメ、アレス、アルテナ、光輝、龍太郎、鈴の六人のみ、光輝

は男色家騒ぎで半死半生なので、実質五人か。

「み、皆さんが、羞恥でダウン、してますわ……」

「恐ろしい雑誌だな。俺のパーティーメンバーが、俺とアレスを残して全滅したぞ」

「南雲くんは……シズシズと同じで当たり障りないね」

「でも、雫に比べつと、南雲の方が興味の引きそうな話題もそれとなく出してるな。割愛はされてねえぞ」

「南雲……なんか微妙にインタビュー慣れしてないか？」

「うちの母親が売れっ子少女漫画家だからな。よく雑誌の取材なんかも受けるんだよ。で、愉快犯の嫌いがあるもんだから、事前に面白い受け答えの仕込みをしたりするんだが、その練習に付き合わされていたんだよ」

どこで、どんな技術が分らないものである。

鈴が、資格者特集の最後のページを捲った。

「あ、最後は優花ちゃんのインタビューで締め括りみたいだよ」

優花がビクンツと震える。自分が何か恥ずかしいことを言っていないか、必死に頭を巡らせている様子。

ハジメがそんな優花を見て「めっちゃ可愛え」と内心で思いつつ記事を視線を向けた。

【優花様に、今回のアルテナ姫が南雲殿の恋人になった件と、ユエ氏、シア姫、ティオ氏

などの他の恋人達にはどんな心境を抱いているのかを尋ねた。再び、南雲殿達がフェアベルゲンを訪れた時から、南雲殿との絆の強さは傍目にも明らかだった。我等のシア姫とアルテナ姫が嫁いびりのような目に遭わないか、同胞として是非とも確かめておきたい」

「やっぱり、優花が身を引いたわけじゃないって分かって書いてたな。マジで命知らずな奴だな」

優花を「姑」扱いしている時点で、マオ編集長が、優花達の関係を正確に把握していることは明らかだ。亜人達を励ます月刊誌とはいえ、危険をいとわない「同胞押し」には、編集長魂を感じる。

「とはいえ、我等を救った女神でもあり、最後なので、優花様には詫びも兼ねて、頂いた言葉をそのまま記載させていただく」

「あ、日和ったね」

「やっぱり、園部が怖かったんだな」

鈴と龍太郎が、マオ編集長の無言の「いろいろ書いたけど許してください」というメツセージを読み取って苦笑いを浮かべた。

そうして、優花が、ハジメの絶対不動の「最愛」が一体何を語ったのか……

突っ伏している者が多いので、鈴が代表して読み上げた。

「ずっとあの時から、あの夕暮れの時からハジメは、私の傍に居続けてくれた。守つてくれた。ても、そのせいでハジメに迷惑をかけた」

「思わず語られたい重い言葉に、誰もが息を呑むが、ハジメだけが「まだ、責任感じてるのかよ」と、苦い表情をしながら言葉をこぼす。

「あの日、ちゃんと両親や頼れる人に相談しとけば、親友達にも迷惑をかけなかった。ハジメがあんな事をしなくて済んだ。私のために無理をしようするのもなかったと思う。だからかな……ユエ、シア、テイオ、アルテナがハジメの“大切”になつてくれて嬉しかった。昔の私なら嫌つ！て言いそうだけど、私も変わったからね。

「思うんだ。これで、ハジメが私なんかのために無理するのを控えてくれるかもしれないから。」

「そして、この旅が終わつた時、あの頃のハジメに戻つて欲しい。それが今の私の願い」だから、願う。最愛の人に、いつの日か大切に囲まれながら、幸せそうに笑つていて欲しいから。

「しんと静まつた空間。まるで小さな虫すら遠慮して静かにしているようだ。取り敢えず、ハジメが円卓に突つ伏した。耳が真っ赤だ。最愛の天使様の、語られていなかった心情の一つを聞いて「違う。あれは俺が選んだ道だ。優花は悪くない」などと、何かぶつぶつと口にしながら、滅茶苦茶に照れている。

「……結局、アレスさんとアルテナさん以外、全滅しちゃったね」

「かあくつ。口の中が甘ったるくて仕方ねえ！　なんか辛いもんでも食つてくらあ。光輝、行こうぜ」

「あ、ああ。そうだな。うん、そうしよう。あ、人目は避けような、龍太郎。今は、男のお前と一緒にいるところを、都の人に見られたくない」

「では、私も濃い紅茶でも飲みに行きますか……アルテナ殿もどうです？」

「え、あ、はいですわ！」

光輝と龍太郎、そして鈴が連れだつて席を離れていく。アレスもアルテナも遅れて席を離れていった。

その後も、ハジメ達はしばらくの間、円卓に突つ伏したままだった。思いがけず伝わった仲間の本音は、想像以上に気恥ずかしく、照れくさく、どんな顔をしていいのかわからないくらい嬉しいもので、ハジメ達の仲が更に深まるのであった。

森の木漏れ日が円卓に降り注ぎ、日だまりができている。

そんな中、仲良く円卓に顔を伏せるハジメ達の姿は……なるほど。

確かに奇跡のような光景で、思い描くべき明るい未来を示唆しているようだった……。



なお、「月刊フェアベルゲン 再編版第一号」は、特に亜人女性の中で爆発的に人気に  
得て、重版に次ぐ重版となった。

特にシア姫の話は、まさにシンデレラストーリーとして亜人女性の憧れとなり、その  
後、「フェアベルゲン」を代表する童話・物語として書籍化され語り継がれることになっ  
たとか。

因みに、発行翌日にマオ編集長が何者かによつて縄で縛られ、逆さまに吊るされてる  
のを私室で発見された。現場には、純白の羽と『次、変なことを書いたら焼き鳥にする』  
と書かれた紙切れが残されていたらしい……。

## 人物ステータス①

現在七章までのステータスです。

## 《ハジメ side》

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：???  
 天職：錬成師 職業：冒険者 ランク：金

筋力：21000

体力：23800

耐力：20800

敏捷：21000

魔力：30000

魔耐：30000

技能：錬成「+鉱物系鑑定」「+精密錬成」「+鉱物系探査」「+鉱物分離」「+鉱物融



\* ■■■■■……………機神の一部の能力を使用可能。

### 新魔法

——しんていばんらい震霆万雷……………円月輪を利用することで、空間全体を震わすほどの無数の赤雷の鉄槌を放つ魔法。

——へきれきがこう収束・霹靂牙鳥……………“震霆万雷”の雷を収束させることで巨大を赤雷の鳥を生み

出し、霹靂の速度で一直線に突き進み敵を殲滅させる魔法。

——りせつ組み換え……………全ての無機物を新たなものへと組み換え分解する魔法。

——コネク接続……………りせつ組み換えて組み換え分解したものを繋ぎ合わせる魔法。

——T・S (Thunder Shield)……………展開すると正八角形の波紋が発生し、全方位からの攻撃を防ぐことを可能にするバリア。最上級魔法も耐えられることも可能な防御性であり、集中強化は神代魔法をも防ぐ。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

園部優花 17歳 女 レベル：???

天職：神天治癒師

筋力：1500 [＋天使化 20000]

体力：7000 [＋天使化 20000]

耐性：40000 [＋天使化 20000]

敏捷：25000 [＋天使化 20000]

魔力：100000 [＋天使化 20000]

魔耐：100000 [＋天使化 20000]

技能：回復魔法 [＋効果上昇] [＋回復速度上昇] [＋イメージ補強力上昇] [＋浸透看破] [＋範囲効果上昇] [＋遠隔回復効果上昇] [＋状態異常回復効果上昇] [＋消費魔力減少] [＋魔力効率上昇] [＋連続発動] [＋複数同時発動] [＋遅延発動] [＋付加発動] [＋付与魔法] [＋効果上昇] [＋連続付与] [＋高速付与] [＋複数付与] [＋全属性適性] [＋発動速度上昇] [＋効果上昇] [＋持続時間上昇] [＋連続発動] [＋複数同時発動] [＋遅延発動] [＋全属性耐性] [＋全属性効果上昇] [＋複合魔法] [＋天性同化] [＋高速魔力回復] [＋瞑想] [＋吸天復] [＋魔力感知] [＋魔力操作] [＋再生魔法] [＋魂魄魔法] [＋昇華魔法] [＋天使化クリスタ] [＋聖杭] [＋天性魔法] [＋限界突破] [＋天翼の加護] [＋言語理解]

※吸天復きゅうてんふく……天使になったことで、汚れた空気以外なら呼吸するだけで魔力を回復する。

※天翼の加護……自身含め大切な存在ほど精神系の魔法耐性能力を与える。

新魔法

——天使の涙フィストリア……範囲内のあらゆるものを回復、再生させる魔法。 “促進” と “遅延” の二つがあり、“促進” は範囲は狭くなるが回復速度が早く、“遅延” はその逆となる。

——聖櫃アーク……球体型の光のドーム内に捉えることで敵を拘束し、破裂させれば膨大な熱量のダメージを与える魔法。(消費魔力が高く、破裂の際の熱量は危険なため狭く仲間達も近くにいた大迷宮では使用しなかった)

——天網スカイネット……その名の通り天の網を展開でき敵を拘束させる魔法。

——天使の音色エンジェルトーン……範囲内にいる者達の精神を安定させ、心を安らげる魔法。

——刻永……有機物・無機物関係なく対象を一定の間、一秒ごとに一秒前に再生し続ける魔法。

——天龍・星……ユエが天龍達の顕現を、優花が聖杭に天龍達を纏わせることで操作することで完成する合体複合魔法。ユエと優花という母星を中心に十の天龍達が全ての敵を殲滅させる魔法。

——天眼……ハジメの右目の義眼である “魔眼石” 同様の能力で、通常では見えない魔力の流れや強弱、色で属性を、魔法の核を視える。

——十二の星の裁きアストラルシャリオ……十二全ての “聖杭” が揃うことで可能にする魔法。詠唱の際に、聖杭に膨大に貯め込んだ聖の魔力を解き放ち、全ての悪しき者に裁きの光を与え

る。

ユエ 323歳 女 レベル：90

天職：神子 職業：冒険者 ランク：金

筋力：380

体力：800

耐性：280

敏捷：350

魔力：18000

魔耐：14500

技能：自動再生「＋痛覚操作」 「＋再生操作」・全属性適性・複合魔法・魔力操作「＋魔力放射」 「＋魔力圧縮」 「＋遠隔操作」 「＋効率上昇」 「＋魔素吸収」 「＋身体強化」 「＋変換効率上昇Ⅱ」・想像構成「＋イメーヅ補強力上昇」 「＋複数同時構成」 「＋遅延発動」・血力変換「＋身体強化」 「＋魔力変換」 「＋体力変換」 「＋血盟契約」・高速魔力回復・生成魔法・重力魔法・空間魔法・再生魔法・魂魄魔法・昇華魔法





耐性：200

敏捷：170

魔力：4800

魔耐：4500

技能：未来視「＋自動発動」「＋仮定未来」「＋天啓視」・魔力操作「＋身体強化」「＋部分強化」「＋変換効率上昇Ⅲ」「＋集中強化」「＋魔力循環速度上昇」・重力魔法・空間魔法・再生魔法・魂魄魔法・昇華魔法

※魔力循環速度上昇……：自分の魔力の循環速度が上昇させる。技能により、すべての固有技能の能力上昇。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

テイオ・クラルス 563歳 女 レベル：93

天職：守護者 職業：冒険者 ランク：金

筋力：1000 [＋竜化状態10500]

体力：1600 [＋竜化状態14000]

耐性：1800 [＋竜化状態13500]

敏捷：9000 [＋竜化状態10000]

魔力：6000

魔耐：5300

技能・竜化 [＋竜鱗硬化] [＋魔力効率上昇] [＋身体能力上昇Ⅱ] [＋咆哮] [＋風纏]  
 [＋雷纏] [＋痛覚変換Ⅲ] [＋恋竜昇華]・魔力操作 [＋魔力放射] [＋魔力圧縮] [＋遠  
 隔操作]・火属性適性 [＋魔力消費減少] [＋効果上昇] [＋持続時間上昇]・風属性適性  
 [＋魔力消費減少] [＋効果上昇] [＋持続時間上昇] [＋雷属性]・複合魔法・再生魔法・  
 魂魄魔法・昇華魔法

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

\*痛覚変換Ⅲ……痛覚変換Ⅱの上位版。更に全スペック上昇する。

\*雷纏……〃竜化〃の際に雷を纏わせれる。

\*恋竜上昇……彼が恋しいと思うほど全ステータス上昇および、彼を守る際には耐久

と魔力耐性が更に上昇する。(これを見た本人は、恥ずかしさの余り数時間ほど身悶えていた)

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

アレス・バーン 25歳 男 レベル：100

天職：神官

筋力：5000 [＋原点状態5000]

体力：8000 [＋原点状態8000]

耐性：5000 [＋原点状態5000]

敏捷：4500 [＋原点状態4500]

魔力：8000 [＋原点状態8000]

魔耐：7500 [＋原点状態7500]

技能：詠唱「＋詠唱短縮」「＋詠唱極限短縮」「＋詠唱無効」・光属性適性「＋魔力消費減少」「＋効果上昇」「＋持続時間上昇」「＋光帝」・光属性耐性「＋光属性効果上昇」・物理耐性「＋治療力上昇」「＋衝撃緩和」・複合魔法・槍術「投槍術」「＋真槍術」「无二打」「魔槍術」・縮地「＋爆縮地」「＋無拍子」・先読・高速魔力回復「＋瞑想」・気配感知・魔力感知・適応「＋毒耐性」「＋熱耐性」「＋竜耐性」・鉄心・限界突破・空間魔法・再生魔法・魂魄魔法・昇華魔法

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

\*光帝……ハジメの「＋雷帝」同様の技能。光属性魔法を独自で極め上り詰めたことで得た技能。

\*竜耐性……竜系統の魔物からのダメージを軽減する。

\*鉄心……精神系魔法を無効。

新魔法・技

——ロギンヌス・オリジン……アレスがロギンヌスの原点の力を得て槍から黄金の  
ライトアーマー  
 軽 鎧と変化した。全てのステータスが上昇し、籠手や臍当から光刃が出現する。

——光速……光の速度で自由自在に移動する。  
ミューティア

——ロギンヌス・オーバーゼロ……籠手から、通常より巨大かつ強力な聖なる光槍  
ライトランス  
 が放つのが可能な魔法。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

アルテナ・ハイピスト 16歳 女 レベル1

天職：界樹の守護者

筋力：5

体力：90

耐性：50

敏捷：40

魔力：10000

魔耐：10000

技能：界樹権能「十界樹掌握」「十白霧」「十界樹顕現」「十土壤作成」「十昇華魔法」  
 魔力操作「十身体強化」

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

\* 界樹権能……世界の根幹たる世界樹に干渉を可能にする。

\* 界樹干渉……世界樹の権能を掌握する。

\* 白霧……界樹ウーアアルトを顕現させた際に、方向感覚を狂わす白霧の発動と操作。

\* 界樹顕現……自身が掌握した界樹の顕現。

\* 土壤作成……日光の取り入れと日照時間関係なく作物が育つ土壤の作成。

\* 昇華魔法……神代魔法の一つ。

所持武器（アーティファクト）

——マグナ・アルト……長さ一メートルほどの六つの宝石が埋め込まれた杖。〃守護杖”と同じように大樹の枝も使っており、〃守護杖”には劣るも限りなく大樹の権能を発動でき、六つの宝石に込められた魔法も発動可能。

・ 赤の宝石……火属性魔法

・ 青の宝石……水属性魔法

・ 黒の宝石……土属性魔法

・緑の宝石……風属性魔法  
 ・黄の宝石……雷属性魔法  
 ・白の宝石……光属性魔法

遠藤 浩介 17歳 男 レベル：90

天職：暗殺者

筋力：750

体力：1000

耐性：600

敏捷：1500

魔力：1200

魔耐：900

技能：暗殺術「＋深淵卿」「＋短剣術」「＋隠蔽」「＋追跡」「＋投擲術」「＋暗器術」「＋伝振」「＋遁術」・気配操作「＋気配遮断」「＋幻踏」「＋夢幻Ⅲ」「＋顕幻」「＋滅心」・影舞・影潜り「＋影移動」「＋黒弦」・繰糸術・深淵突破・重力魔法・言語理解

\* 黒弦<sup>こくげん</sup>……影へ干渉できるために発現した技能。魔力で影を触れるという性質を利用した黒い糸を生成。注ぐ魔力によって「黒弦」の硬度は変化し、糸が切れることなく自身の影に戻ると魔力消費はゼロになる。

\* 繰糸術……糸を意のままに操作する。

\* 深淵突破<sup>アレスハースト</sup>……「限界突破」の変質版。深淵卿の深度（厨二度数）によってステータスの上昇率が変わるといふ珍しい技能（深度の最大Vであり、ステータス五倍となる）。

#### 新魔法・技

—— 殺取クサリ蜘蛛<sup>あやとり</sup>……「黒弦」を蜘蛛の巣のように張り巡らせて敵を拘束させる。

—— 殺取螺旋刃……「黒弦」を螺旋状に張り巡らせ、「繰糸術」を利用することで全てを切り裂く竜巻を起こす。

—— 殺取蛇行刃<sup>じゃこうじん</sup>……五指の指に巻き付けた「黒弦」を更に一筋の太い糸へと変え、強力な刃へと変える。

—— 殺取爆弦刃……ハジメ作の爆発クナイ型のアーティファクト「紅爆」を利用し、拘束した敵を確実に爆発させる。

—— 影色舞<sup>シルエットダンス</sup>……「深淵突破」状態の分身した浩介達で繰り出す「黒弦」で織り成した美しき夜空は全てを無に帰す斬撃技。





——旋風刃……風刃の強化版。

——風風……鞭を利用した軌道を予測不可能の風の刃を放つ魔法。

宮崎 奈々 17歳 女 レベル：80

天職：水術士

筋力：190

体力：530

耐性：280

敏捷：380

魔力：1000

魔耐：800

技能：氷属性適性「＋魔力消費減少」「＋効果上昇」「＋詠唱短縮・氷」「＋詠唱連結」・氷属性耐性「＋氷属性効果上昇」・造形「＋水造形Ⅱ」・重力魔法・言語理解

\*詠唱短縮・氷……氷属性魔法だけは、詠唱時間が短縮される。

\*詠唱連結……二つの魔法を連結させ、一つの新たな魔法へと進化させる。

\*氷造形Ⅱ……氷魔法での造形速度を上げる。

新魔法

——氷槍……氷の槍を形成させる魔法。

——氷壁……氷の壁を形成させる魔法。

——凍雨……氷柱の雨を降らす魔法。

続きは。パート②へ……

## 人物ステータス②

前回の続きです。

## 《勇者一行》

天の河光輝 17歳 男 レベル：90  
天職：勇者

筋力：1200

体力：1200

耐性：1200

敏捷：1200

魔力：1200

魔耐：1200

技能：全属性適正「＋光属性効果上昇」「＋発動速度上昇」・全属性耐性「＋光属性効果上昇」・物理耐性「＋治療力上昇」「＋衝撃緩和」・複合魔法・剣術「＋無念無想」・剛力・縮地「＋爆縮地」・先読・高速魔力回復・気配感知・魔力感知・限界突破「＋霸潰」・言語理解

八重樫雫 17歳 女 レベル：90

天職：劍士

筋力：700

体力：850

耐性：550

敏捷：1600

魔力：620

魔耐：600

技能：剣術「＋斬撃速度上昇」「＋抜刀速度上昇」「＋無拍子」「＋一閃の太刀」・縮地「＋爆縮地」「＋重縮地」「＋震脚」「＋無拍子」・先読「＋投影」・気配感知・隠業「＋幻

撃」・言語理解

\*一閃の太刀……その斬撃は、一閃の如く敵を断つ。

坂上龍太郎 17歳 男 レベル：90

天職：拳士

筋力：1400

体力：1100

耐性：850

敏捷：700

魔力：380

魔耐：380

技能：格闘術「+身体強化」  
 「+部分強化」  
 「+集中強化」  
 「+浸透破壊」  
 ・縮地  
 「+爆縮地」  
 ・物理耐性  
 「+金剛」  
 ・全属性耐性  
 ・言語理解



筋力：4500

体力：7800

耐性：3700

敏捷：3500

魔力：9200

魔耐：7800

技能：剣術「+斬撃速度上昇」「+抜刀速度上昇」「+魔纏」・炎属性適性「+魔力消費減少」「+効果上昇」「+黒炎」・炎属性耐性「+炎属性効果上昇」・複合魔法・縮地「+爆縮地」「+無拍子」・先読・高速魔力回復「+瞑想」・気配感知・魔力感知「+特定感知」・魔力操作「+魔力放射」「+魔力圧縮」「+遠隔操作」・共鳴「+以心伝心」「+魔力接続」・限界突破「+霸潰」・変成魔法・空間魔法・重力魔法

## 《神》

オルステッドスベア（替体）？歳 男 レベル：???

天職：■■■

筋力：500000 [＋竜神化状態50000]

体力：600000 [＋竜神化状態50000]

耐性：999999 [＋竜神化状態50000]

敏捷：550000 [＋竜神化状態50000]

魔力：999999

魔耐：999999

技能：竜神化 [＋竜鱗硬化] [＋魔力効率上昇] [＋身体能力上昇V] [＋竜祖]・魔力  
 操作 [＋魔力放射] [＋魔力圧縮] [＋遠隔操作] [＋神圧]・武芸百般 [＋身体強化V] [＋  
 集中強化]・神代魔法 [＋概念魔法]・■■■■魔法・限界突破

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

\* 竜祖……竜の祖である証明。格下の相手に対して与えるダメージが二倍。受ける  
 ダメージが二分の一となる。

\* 神圧……神の重圧。

\* 神代魔法……七つの神代魔法を全て発動可能。

——■■■■魔法……オルステッドが持つ固有魔法。能力的に魔法、生物を竜(眷属)へ  
 変え我が者とする。



## 七・五章 鬼人戦線く鬼のたった一つだけの願いく

## 百二十三話 動き出した古

それは、遙か遠い昔。

まだ、地上に神が降り立ち、地上にいる多種多様な民達を導き、諭し、共に歩んでいた時代。

世界の均衡が保たれ、平和であった時代。

だが、その均衡は、神々のいざこぎで崩れ散った。

未だに不明であるが、突然、何らかしらの理由で離反した四柱の神と、残りの四柱の神の戦いから始まり、やがて、大陸全てまでも巻き込んだ大戦が勃発した。

武器を振り下ろしたことで、大地は割れ……

激しいぶつかり合いで、森は消え去り……

咆哮で、山が消し飛び……

膨大な熱量で、湖は枯れ……

大戦によって地形が変わっていく大陸。

また、追い討ちをかけるようにと、あちこちの場所で戦いの戦火が広がり、多くの種族が犠牲になった。体を焼かれ、無惨に殺され、魔法の余波に巻き込まれ、誰かの悲鳴が聞こえ、兵として強制的に戦場に立たされ、たくさんの死傷者をだした。大戦によって、家族、友人、恋人、多くの大切な者達が失ってしまった。特に亜人族は、絶滅してしまった種族もいる。

何故、亜人が多く被害に遭ったのか？

理由は一つ、亜人を纏めていた神が離反した四柱の一柱であり、大戦で命を落としたからであった。

魔人族も束ねていた神が離反側であったため、蔑みの対象となっていた。

そんな離反した四柱の神の名は、

機神デウス・エクス・マキナ

慈神クリスタ

魔神シキ・オーダイム

創獣神エルネシア・ハルツイナ

その四柱は、大戦で命を落とし、名も、名声も、全てが闇に葬り去られた。そして、大戦を生き延びた大半の者達は口にした。

無意味な争いだった、と……

所詮、自分達は神の遊び道具しかなかった、と……

これは、腑抜けた自分達に呆れた神達が与えた試練である、と……

しかし、少数の者達は口にした。

神は、あの方達は、教えたのだ。知らせたのだ。

—— “叛逆” というものを。

そして、決意したのだ。

—— 神を殺し、偽りの自由を破壊し、本当の自由を取り戻すことを。

XXXXX年後……

薄暗く、陽の光も当たらないくらい十数メートルほどの木が何本も生い茂った場所に建てられた石造りの神殿が、そこにあった。

しかし、柱が崩れていたり、所々キズやヒビが入っており、苔が生えたりと美しいといえるものではなく、神殿というより遺跡のように見える

そんな神殿内の最奥には、大きな祭壇があり、その祭壇の前に跪きながら両手を組み祈りを捧げている者がいた。

その者は、二メートルほどの大きさの図体で、跪いていても、その存在感を示しており、祈りをしながらポソツと口を開いた。

「貴女様が命を落としてから、もう自分でも数えるのを諦めてしまうほど時は経ちました。しかし、全く生きてる心地はしません。貴女という太陽がないのですから」

その声音は男であり、酷く悲嘆に暮れていた。

「我等は、貴女の復活をずっと待ち望んでました……。しかしつ、何故！ 何故！ 何故！?! 奴等の復活が早いんだ!!」

段々と男の声は、悲しみから怒りへ変わっていき、組んでいる両手がミシツと音が鳴るほど力が増していつている。

「分からない！ 何故、あの大戦を起こした原因であったあの二柱が復活して、ただ奴等の口車に乗せられただけの貴女様は復活なさらないのか!!」

既に、指を突き立てたせいか両手からボタバタと石床に滴り落ちてしまうほど血が流れてしまいが、男は力を緩めようとせず、更に力を入れながら声を荒あげていく。

「我等の神は、デウスの奴でも、ラーゼンでもないっ！ 貴女様だけだ。強く、気高く、美しき我等の女神はエルネシア様だけです!! どうか、再び、我等の前に御身の姿を……」

と、己の願いを言いかける前に、背後から一人のフードを被った男が現れた。そして、祈っている男に声をかける。

「団長、少し音量を下げてくれ。殺気混じりの声が外まで響いてしまって、小鬼共が怖気

付いてしまつてゐるぞ」

フードの男の言葉に、祈りを捧げてる男は後ろに振り返らず、フードの男に声をかける。

「……今は、あの方への祈りの最中だ。勝手に入つてくるなチャクラム」

恐怖を感じさせるほどの声音に動じず、フードの男改めチャクラムは、祈りを捧げていた団長と呼ばれた男に苦言を呈されるが、チャクラムは、呆れたのか肩を竦めて口を開く。

「団長、まだ苛立っているのか。あの日からずっとだが……まあ、今回は暴れないでくれるのはこちらとしては助かるが……」

チャクラムは知っている。目の前の人物が苛立っている原因を。

それは、数日程前の出来事だった。あの大戦以降、崇拜すべき御方が亡くなつてからは、団長を含めた自分達は、ずっと時が止まっていたよう生き心地がしないまま、生きてきた。

だが、そんな時だった。樹海の方から、大陸中を駆け巡るほどの膨大な魔力を感じ取つたのだ。だが、自分達が重要なのはそこではなかった。

それは、覚えのある魔力だったのだ。

忘れる筈がない憎き奴の魔力を……。

あの大战の発端となった一柱の膨大な魔力を。

その日から、团长のずっと溜め込んでいただろう、我慢していただろう怒りが爆発したのだ。クレーターを何個も作り、部下を吹き飛ばし、それはもう手の付けられない猛獣のようであり、止めることに精一杯であった。

そんな苦勞を思い出しながらチャクラムは口を開く。

「しかし、そろそろ頭を冷やせ。隊を纏める者が冷静でなくてはならんだろう」

そう言うのと、团长の鋭い視線がチャクラムを射抜く。そして、声を荒げた。

「……苛立つに決まっているだろ!! 何故! あんな奴が復活してエルネシア様は復活なさらないんだ!!」

「……っ、团长の気持ちもわかる。俺だけじゃない、他の奴等も怒り狂いそうになっている。俺だつてっ、何故、エルネシア様ではなく、あの機神なんだ!?! つて思うこともある。だがっ、あんたや俺達がどれだけ怒りに身を任せて暴れたとしても、祈ってたとしても、エルネシア様は戻つてくこない。だから、現実を見ろ。アンタは俺達を纏めることをエルネシア様に命じられた团长だろ!」

「……っ」

チャクラムの言葉に、团长は言葉に詰まる。そうだ、自分は尊きあの御方からこの種族を纏める長を任せられていることを。

そんな大事なことを思い出し、落ち着いたのかフウウウと大きく息を吐くと、ゆつくりと立ち上がった。両手には大量の血が流れてるも彼は気にする様子もなく、落ち着いた声音で、チャクラムに声をかけた。

「……すまん。気を遣わせたな」

「頭が冷えてなによりだ」

団長が落ち着いてくれたことに安堵したのか軽い笑みを浮かばずチャクラム。すると、団長がチャクラムに「それで、どうした」と、話しかけた。

「お前が断りも無しに、ここに来るのは有り得ない。考えられるは、急ぎの報告か？」  
団長の言葉に、チャクラムは頷く。

「ああ、デウスの野郎の魔力がこちらへ近付いてきていることがわかった。位置的に我等の故郷たる樹海から南へ向かうための道のりを確実にここを通り過ぎるだろう」

「……………空か？ 陸か？」

「位置的に空。安心しろ、既に魔力妨害の結界を展開させている」  
「そうか」

団長は、チャクラムの報告を聞きながら、神殿の出口まで歩いていく。チャクラムは、そのすぐ斜め後ろで着いていきながら報告を続けていく。

「敵の数は？」

「カラの奴が感じ取った魔力数だと10だ。一つはデウスの野郎、俺達と張り合えそうなのが五つ、雑魚が四つだよ」

「こちらの戦力は？」

「小鬼が500、鬼が300、そして、俺達含めて総勢805だ」

チャクラムの報告に、団長は何か考えるように口元に手を当てる。その手は、血で汚れているものの、何故か傷はなくなっている。そして、物悲しそうに呟いた。

「……滅つてしまったな」

「しようがないだろ。あの大戦で俺達の種族や眷属はほとんどが全滅しちゃったんだ」  
悲しみを滲ませた声音で答えるチャクラム。

思い出すは、主神が亡くなり他種族から危険と判断されて追われる立場となった同族達。

段々と表情が苦くなるチャクラムの額には、一本の角が生えている。そして、そんなチャクラムを気を遣うようにポンツと肩に手を置く団長にも二本の角が生えている。

「辛い表情をするな。同族達の分まで我等はすべきことをしないといけない。そうだろう？」

「ああ、すまない。変な気を遣わせた」

「なに、部下を支えるのが団長として役目だ」



「そうかい」

その言葉に、チャクラムは薄ら笑みを浮かべた。

「報告は以上か？」

「ああ」

報告を終え、神殿から出た二人。その時、入口で足を止めるた団長は空を見上げて雄叫びのように声を上げた。

「待っている、デウス・エクス・マキナアア!! あの時積年の恨み晴らさせてもらおうぞ!!」

宣言のような雄叫びを言えてスッキリしたのかいい表情になった団長は、再び歩き出す。その後すぐに、咄嗟に手で耳を塞いで鼓膜が破れなかったことに安堵するチャクラムが歩き出した。

そう、彼等は目的は一つ。

それは主神を死なさせた神を殺すために……。

## 百二十四話

## 新たなる苦難の前触れ

雲海の上を、滑るように飛行する物体がある。

降り注ぐ陽の光を浴びてキラキラと輝くそれは、トータス世界唯一無二の空飛ぶ乗り物——飛空艇「フェルニル」だ。

直下の雲海は、それこそ大海原のように水平線の彼方まで続いている。本来の綿菓子を彷彿とさせるような真白ではなく、青銅のような濁りがあるため尚更そう見える。

そのせいだろうか。船の形状と合わせて、今のフェルニルは、まるで空の海を遊泳する巨大マンタのようである。

「おお。全然地上が見えませんか。上から見た樹海みたいですよ」

ウサ耳をびこびこ。ブリッジの丸い窓に張り付くようにして外の景色を眺めていたシアが感嘆の声を上げた。

確かに、雲海は樹海の濃霧が作り出す霧の海を彷彿とさせる。

その光景がシアを思い出させたようだ。母——モナの墓所であり、〃とっておきの場所〃でもある大木の上でハジメと語り合った夜のことを。月光にきらめく奇跡のよう

な霧の海を眺めながら過ごした。二人っきりの時間を。

その最愛の人とは、更に関係が深まっており、思わず「えへへ」と照れ笑いが浮かんでしまう。ウサ耳&ウサシツポだつてご機嫌にふりっふりだ。

「……ん。シユネー雪原は常に曇天に覆われてる。地上はいつも吹雪。まさに極寒の地」

「ええ、私も数年ほど前に一度挑戦しましたが、意図的な猛吹雪と遠征をしていた魔人族の目もありましたので途中で断念しましたね」

何やら思い出し笑いしているシアを微笑ましそうに見やりながら、隣の窓から外を眺めていたユエが説明を、ソファーに座つてティータイムのアレスが自身の体験談をした。

西の【魔国ガーランド】と、北の【ハルツィナ樹海】に囲まれたこの場所では、決して晴れることのない曇天が常闇の如き暗い世界を作り出し、ただでさえ最悪の視界を、更に猛烈な吹雪がホワイトアウトさせる。大地は完全に雪と氷に覆われていて、気温が氷点下数十倍以上に上がることはない。

まさに極地というに相応しい地獄のような場所だ。

「まあ、アレスの話を聞く限りだと自然現象じゃあないだろうな」

ソファーに座る優花に膝枕して貰っているハジメが呟いた。眼帯越しに、魔眼石が青

白い光を放っている。リラックスしているように見えて、外部カメラ用のアーティファクトとリンクさせた魔眼石で外をしつかりと警戒しているらしい。

「曇天も雪原も、まるで見えない境界でもあるかのように区切れておったからのう。……まあ、十中八九、解放者が何か手を施したんじゃない？」

テイオが感心と驚嘆の滲む声音を漏らした。

その言葉の通り、「シユネー雪原」は、完璧に外界と区切られていた。北の樹海にも、西の魔人領においても、過去一度として雪原被害が出たという記録はない。

見えない境界が、雪と氷の異界を作り出しているのだ。いくらファンタジーな世界とはいえ、自然現象である可能性は限りなく低かった。

自身の太ももに乗せるハジメの頭を嬉しそうに、優しく撫でていた優花が、思い出すように虚空へ視線を彷徨わせる。

「確か、雪原の奥に大きな峽谷クレバスがあつて、その更に奥地に最後の大迷宮があるのよね？」  
「ああ。氷と雪でできた大迷宮——氷雪洞窟だ」

「一般的には、たぶん大迷宮だろうって言われてる場所よね？ 気候の厳しさと、氷雪洞窟から誰一人と戻ってこなかったから、七大迷宮の一つなのだろうって」

「まあな。けど、確実に大迷宮だから心配いらさないぞ、優花。こちとら、ミレディとリユーテイリスに直接聞いたし、その大迷宮を攻略したフリードもユエが言質取つてい

る。創った連中の二人と目的の大迷宮を攻略した奴から貰った情報だからな」

あ、そういうええそうね。と、優花は納得したように頷いた。と同時に、きつと今向かう極寒も試練の一つだろうと思ひ、それを言葉通りショートカットしている事実になんとも言えない表情になる。

「それでどうじゃ、ハジメ。きちんと羅針盤は機能しておるかの？」

テイオが優花の隣に座ると、ごく自然にハジメを抱き締めた。凄まじい迫力の胸の感触がハジメに頬に伝わる。優花がニコツと笑みを浮かべる。そして、次の瞬間、ハジメをテイオから奪い返すとギョツと抱き締めた。テイオも「むっ」と、負けじとハジメを奪つてギョーッと抱き締める。

奪つて抱き締める。また、奪つて抱き締める。そんな二人の争いを気に留めず平気そうにいるハジメは問題なさそうに頷いた。

「ああ。大丈夫だ。それにしても、改めて概念魔法を付与されたアーティファクトは凄いな、これ、単に羅針盤の針が望んだ場所に向くだけじゃなく、なんとなく目的の場所とか、そこまでの距離とかが感覚で分かるなんてさ」

ハジメが、手に持つ古めかしい懐中時計のような物を少し掲げた。「ハルツィナ樹海」の大迷宮を攻略した際、創設者であるリユーテイリス・ハルツィナから貰い受けたアーティファクト「導越の羅針盤」だ。その機能は「望んだ場所を指し示す」というもの。

既存の魔法でも、神代魔法でもなし得ない、「概念」をこの世に発現させる魔法の極地——概念魔法が込められたアーティファクトだ。

リユーティリス曰く、全ての神代魔法が行使可能で、かつ、現実の理を上書きする極限の意志がなければ発動しないとのことである。

かつてミレディ達解放者全員で挑んでも、たつた三つの概念しか生み出せなかったというのだから、その難易度の高さは溜息ものだ。

争いは終わつて二人で決めたのか、ティオと二人でハジメを抱き締めていた優花が、ハジメの感嘆混じりの言葉に、同じく感嘆を滲ませた声音で同意した。

「そうね、地球の場所もなんとなくわかつたからね。本当に難しい感覚だったけど……」  
「その分、魔力の消費はヤバかつたけどな。まさか、今の俺が一発で魔力枯渇状態に追い込まれるとは思わなかつた。危うく、白目を剥いてぶつ倒れてしまふところだったからな」

苦笑いしながら言うものの、ハジメの瞳には隠し切れない歓喜の色が滲んでいた。

この世界に来て、優花と最初に交わした最初の約束。

——優花達と共に故郷へと帰る

その鍵となる希望を、樹海の大迷宮を攻略した際に掴んだのだ。再び、あの時の微笑を浮かべるハジメ。

柔らかさと強さが同居したような、形容し難い、けれど切ないほど心を焼き付く微笑。この場の誰もがその微笑に笑みをこぼす。

室内が和やかで温かな空気が包み込む。

窓辺からユエとシアが戻ってくると、そのままユエはポスツとハジメと優花の間に収まり、シアもテイオの隣に座るとハジメに話しかけた。

「いよいよ最後の大迷宮ですね！ 早く攻略して、神をぶっ倒してミュウちゃんを迎えに行つてあげたいですね！」

「そうだな。元気にしてるといいが……」

この異世界で、なんとも数奇な運命のもと出会った幼き海人族の少女。自分を。パパと呼び慕ってくれる彼女の存在は、ハジメの心に大きく影響を与えた。

約束をするほどに。いつか、地球に、ハジメの故郷に連れて行くと。

大陸の反対側という離れた地へ、思いを馳せるように視線を向けるハジメに、シアはにつこり微笑みながら言う。

「元気に決まっています。だって、ハジメさんの愛娘ですよ？ 私達が会いに来れないな

ら、旅をしてでも自分から会いに行くなんて宣言しちゃう強い子です」

「違う、とハジメは笑いながら頷いた。そして、視線をシアに移す。

「カム達とも時間を取らないとな」

「ハジメさん……えへへ、ありがとうございます！」

実は、ハジメはカム達ハウリア族に対して、「フエアベルゲン」を発つ前に、この世界を離れて地球に来てみないかと提案をしていたりする。

答えは「否」だった。

理由も、ハジメ自身も分かつており、この提案もダメ元であつた。帝国との決戦の際、彼等の決意を受け取つていた故に。

そう、この世界でも大切な者を自分達の手で守つていく決意を。

亜人族にとつて厳しすぎるこの世界で、戦い続けるといふ決断を。

それこそが生まれ変わったハウリア族の矜恃であり、アイデンティティであると。

家族と離れることになるシアを想い、納得しながら溜息を吐かずにはいられなかつたハジメに、カムは穏やかに、そして嬉しそうに笑いながら「シアを幸せにしてくれるだけで十分ですよ、ボス」と、語つた。

その時のカムの顔は、紛れもなく娘を想う父親のそれだった。

神共を殺しも終えたら、両世界を行き来することを可能にする研究をしたいと考えている。とはいえ、まだ説明しかされず全容のはつきりとしな概念魔法の創作・行使となれば、すんなりとはいかないだろう。

ハジメとしては、いつか必ず実現する腹づもりであつたが、それがいつになるかは分



からない。今も色々な案を出してるが現実的かつ論理的な案は少なく、一番の可能性がある案は「ハルツィナ大迷宮」で自分の中にあると確信した強力な「機神の力」を上手く概念と合わせるといふ案を「脳内設計」で立ててはいるが、しかし、それは「機神の力」と「概念魔法」を扱えるという前提があり、その他にも、不確定要素が多々あるので保留している。

そんな現状であるために、直ぐに再会できる、と安請け合いする気はなく、神を殺し、地球への帰還方法を確立した後、最後の日くらいはシアに家族と過ごす時間を作つてやりたい。

そんなハジメの心情を手取るように分かるシアは、それはもう、蜂蜜をたっぷりとかけたパンケーキを思う存分頬張つたような幸せいっぱい表情で、そつとハジメの手を取つた。

「でも、ハジメさん。父様達とのお別れは十分に済ませましたから。変に気を遣わないでいてくれる方が父様達も嬉しいはずですよ」

「そうか？」

「はいです！それに、ハジメさんはアルテナとリリアーナさんの為に頑張らないといけないですよ！」

シアの言葉にハジメは、「あ」と漏らす。そして、忘れてた……と、頭に手を当てる。

アルテナの件は、樹海から発つ前日に、アルフレリックから「嬉しいような嬉しくないような気持ちで複雑だが、アルテナを幸せにしてくれるなら私は構わない」と了承を得たので大丈夫だが……

「リリイはどうするか……」

リリアーナは王女だ。アルテナも姫と呼ばれてはいるが、それは長老の孫娘であるためでそう呼ばれるらしく、シアもカムが新しく長老になったため、亜人達から「シア姫」と呼ばれている。本人は「恥ずかしくて嫌ですう！」と嘆いているが……

しかし、リリアーナは違う。彼女は列記とした王女で、王国は現在は国王が不在のため、その職務は現在リリアーナが行っている。もし、地球に連れて行くとなると王国が破綻する可能性があるが故に、リリアーナを連れていっていいのかとハジメは悩む。

そんな中、アレスが「大丈夫ですよ」と、口にしながら微笑みかける。

「リリイは、真面目であって、生粋の仕事中毒ですが、ハジメ殿の言葉を無下にはしないとしますよ」

「本当か……?」

「ええ。ですが、あの子も心配性ですから……もしかしたら、王国が安定するまでは動かないかもしれません……」

「まあ、そんな時は気長に待っておくよ」

「ええ、その方がリリイも嬉しいと思つていますよ」

そう言つて話し合う彼等であつたが、少し先の未来で、どこかの元ワーカーホリック王女様が「大好きな兄と自分の侍女が、自分の傍でイチヤイチャしてるのが凄くストレスだつた」と、頭を悩ましながら愛しの旦那に愚痴をこぼすことを彼等と王女様は、まだ知らない。

「ふふ、ハジメさんつて、ミュウちゃんやアルテナの時でも思いましたけど、身内には過保護ですよねえ〜」

ちよつとからかうような口調で、シアはおかしそうにくすくすと笑つた。

それに合わせて、ユエもクスツと笑いながら悪戯つぽく瞳を輝かせる。

「……ん。ハジメは身内に甘々。溺れないように注意が必要」

「じゃな。妾達はハジメに守られるのではなく、隣で支えていたいのう〜」

「ふふ、そうね。ハジメは一人で抱え込む性格だから私達を頼つて欲しいわ」

ティオと優花まで、そんなことを言いながら笑うものだから、ハジメとしては仏頂面になるしかない。なんだか、ダメ女製造機だと言われているようで非常に居心地が悪かつた。そして、腕で口を覆いながら笑うのを必死に耐えているアレスを後で、今度こそポコポコにしようとして、ハジメは決心するのだつた。

と、そこで、ハジメの心情を慮おもんばかつたかのようにスライド式のドアが開いた。

ブリッジに入ってきたのは光輝、龍太郎、鈴、そして、雫だ。

優花、ティオ、ユエ、シア。まさに両手に花……いや、両手に二花といった状態でソファーに座るハジメを見ても、いつものことなので、誰も大した反応を見せない……

否、一人だけ、何故かピクリツと眉を痙攣させ口元をへの字に曲げた。

それに気が付いた様子もなく、ハジメは、これは幸いと話題の転換を図る。

「随分と熱心にやっていたな。どうだ？　アーティファクトの新機能に慣れたか？」

その言葉通り、光輝達はハジメによつて改良されたアーティファクトの扱いに慣れるために、フェルニルの甲板で訓練をしていたのだ。

疲れたのか、あるいは別の理由か、一度、「ふう」と息を吐いた雫は、訓練の手応えを口にする。

「ええ、南雲君。おかげさまでホントに凄いわね」

「そうか、不具合はなかったか？」

そう言つて、不具合はないかと尋ねるハジメに、鞆に収めた聖剣に触れながら光輝が答える。

「ああ、問題はなかった。というか驚いたよ。魔力の通りが段違いだ。出力自体も随分と上がっているし、新しい機能もかなり有用だ」

そう言いながらも、光輝の表情はなんとも複雑だ。

それは、あつさり強くなつてしまったことに対してか、それとも、その原因がハジメであることに対してか。あるいは、その両方か。

そんな複雑な心情を抱いている光輝を、手を組みながらチラツと横目で見るアレスは溜息を一つ。

そして光輝に続き、快活に笑いながら龍太郎が続く。

「いやあ、マジですごいぜ！ 空中を踏むつて感覚は戸惑つたけどよ、慣れればマジ使える。籠手の威力も倍増したしよ。実戦で使うのが楽しみだぜ！」

武器の改良の他にも、光輝達にはいくつかのアーティファクトが与えられている。空中に足場を作る。『空力』が付与されたブーツもその一つだ。

改良された籠手をガツンガツンと打ち合わせて、龍太郎は、まるで新しい玩具おもちゃを与えられた子供のように喜びをあらわにした。その上機嫌な心情をあらわすように、打ち合わされた籠手から衝撃が迸る。

隣に座る鈴が、ちよろりと伸びた二房のおさげ髪を盛大に煽られて、迷惑そうな顔をしつつ頷いた。

「龍太郎くん達と違つて、鈴だけ完全に新しいアーティファクトだから、ちゃんと扱えるかちよつと心配だったんだけど、実際に使つてみるとすごかつたよ！ これで鈴も……ちゃんと戦える。守るだけじゃない。戦える！ ありがとう！ 南雲くん！」

屈託のない、けれど強い意志を感じさせる笑顔を見せる鈴。そちらもで言えば、この旅の同行を懇願したのは鈴である。

たとえ仲間と別れることになっても、もう一度、彼女に——中村恵里に会って話をするのだと。そのために力が欲しいのだと。そう願って、決意して、最後のチャンスを与えて欲しいとハジメに頭を下げた。

文字通り、目の色が変わるほどの意気込みに対しハジメは、クハツと笑みをこぼして一言。

「それは何よりだ。存分にその力を振るってくれ」

「……」

そう言つて、ハジメは鈴に激励を贈った。そして、ハジメの口から出た以外な言葉に、言われた本人である鈴は勿論、光輝、龍太郎、雫の三人も大きく目を見開いた。

天職「結界師」……守ることに天賦の才を有する彼女に、ハジメが戦うための力を与えたのは、そんな彼女の気持ちをも、覚悟を、認めたていたのかもしれない。

「私も問題ないわ。むしろ、機能が多すぎて実戦の中での選択に戸惑わないか不安だけど……そこは、アレスさんの師事通り経験値を稼ぐしかないわ」

知つてるわ、私、知つてるわ。こういうのを「魔改造」というのよね？と言いたげな、ちよつと引き攣り気味の表情で、膝の上の相棒である黒刀——八咫烏二式ヤタガラスを見やる雫。

「そいつは重畳。『昇華魔法』の練習がてらとはいえ、本気で手を加えた甲斐はあったみたいだな。つっても、天之川の聖剣に関しては少々納得し難いところなんだが……」

「え？　ちよ、ちよつと待て南雲！　なんだその不吉な言葉は!?」

まさか、さつき不具合を聞いたのは、「あれネジが一本余ったな……まあ、ちゃんと動いてるならいつか!」みたいなノリの質問だったのか!?と光輝は顔を青ざめさせた。

ハジメは苦笑いしながら首を横に振る。

「心配すんな、そういう意味じゃねえよ。ただ、聖剣つてのはやつぱり特別製みたいだな。キャパシティを余すことなく、精密かつ絶妙なバランスの上に作られてんだ」「えつと、つまりどういうことだ?」

「聖剣は、改良の余地はなく元から完成されてるアーティファクトつてことだ。下手に根幹部分に手を出したら、逆に性能を弱める可能性もある。だから俺がしたのは、整備と外付けオプションの追加くらいだ。とても改造なんて言える仕事はしていない」

曰く、聖剣は相当古いアーティファクトのようで、長い年月により少し機能不全を起こしていたらしく、ハジメがしたのは、言わば錆落としのようなものだったらしい。

ハジメをして、改造の余地なしと言わせる聖剣に誰もが目を丸くした。特に、光輝はマジマジと聖剣を見つめている。

「アレスの聖槍も同様だ。それに、アレはオスカーが生み出したんじゃない、作り直し

たつていう方が合っている」

「……ほう」

ハジメの言葉に、アレスが興味を示す。

「余程、扱えないほど壊れていたんだろう、アレスの聖槍は。調べると、天之川の聖剣と同じくらい古い時代に作られた代物だった。それをオスカーの奴が扱えるような作り直した感じだった。だから俺も習って、アレスの聖槍も聖剣同様に錆落としてみたいな  
ことしかしてない」

「それは、面白いことが聞きました」

アレスにはこやかにそう言うと、「宝物庫」から自身の聖槍「ロンギヌス」を取り出し、槍の柄の部分の指でなぞるように優しく触れる。

「ま、とにかく天之川は、アレスみたいに完全に使いこなせば、魔人領に行っても問答無用に潰されることはないだろう。その前に大迷宮だが……まあ、せいぜい気張れよ」  
素っ気ない言葉と表現のハジメだが、与えた力は本物である。光輝達が、特に鈴が目的を果たすためにはありがたすぎるほどの恩恵だ。

「(南雲君、やつぱりちよつと光輝達との接し方が変わつてるような気がするわね)」

なんとなく、雫はそう思った。この世界に転移する前は、何度も衝突していた二人。しかし今は、光輝はどう思っているのか不明だが、ハジメの方は言動は変わらないのだ



が、その奥には何か柔らかい感情があるように見える。

そう感じているのは、頼みを受けてもらえた鈴なども同じようで、内心では「南雲くんって、あんな顔するんだ」と思っていたりするが……もちろん、怖いので口にはしない。

と、その時だった。

ハジメが不意に視線を羅針盤に落とした。そして、目を大きく見開いた。

「っ?!」

そして、羅針盤を握りしめながらハジメは、勢いよくソファーから立ち上がった。

「ん!?!」

ハジメのいきなりの行動に、ユエがビクツと体を震わし、隣で座っていた優花達や近くにいる光輝達も驚きの表情を見せる。

「ハジメどうしたの?!」

「そうよ、いきなり立ち上がったっ」

優花と雫が声をかけるも、振り向きもせずハジメは苦い表情で前方に視線を向けるだけだったが、直後、怒声混じりのハジメの声がブリッジ内に響く。

「全員、何か掴まれ!!」

「え、どうし——」

隣の優花が問い掛けようとした次の瞬間、ブリッジ内が大きく揺れ重力の楔から解き放れたような感覚に襲われる。

「キャツ」

「ん?!」

「わわっ」

「む?!」

「おっとっ」

「っ、何?!」

「うおお!? なんだ!」

「ぐっ!!」

「キャアアア!!」

激しい揺れに声を上げた優花達だったが同時に下腹部を殴るような急降下特有の感覚に察すると、全員が瞳に真剣さを宿す。しかし、何かに掴まってないといけないことに緊張が走る。

「ハジメ殿!! 一体何が!?!」

やむを得ずに聖槍を床に突き刺して揺れに耐えているアレスがハジメに何があったと聞く。

「分からねえ!! 何故か羅針盤の針が狂つたと同時に俺とフェルニルの魔力パスが途切れた!!」

簡潔に状況を伝えたハジメは、床に義手を突き刺しながら声を上げる。

「今から、俺とフェルニルの魔力パスを直接繋げてみる!」

そう言つて、墜落する前に自身とフェルニルの魔力パスを繋げようと奮闘するハジメ。が、それを許さないのかフェルニルは既に雲海へ突入し、窓の外は陽光が失せ、代わりに、塗り絵でもしたかのような灰色の雲一色に染まっていた。

そこに、稲光らしき閃光が迸つた。刹那、フェルニルに更なる衝撃が走る。雷がフェルニルを襲つたらしい。全員が息を呑む中、ハジメも緊張が走り冷や汗を流す。光輝達も表情を強ばらせる。

「は!? 翼がやられた!」

暴風と雨粒が弾丸のように窓を叩き、石が弾けるような連続した音がブリッジに響く中、ハジメの驚愕に満ちた声が響いた。

無数の氷の礫が、激しさを増す落雷が襲い更に船体にダメージを与えていくことにハジメが奥歯を噛み砕くほど勢いで苦い表情になる。

「(くそつ、駄目だ!このままだと墜落する!!)」

ハジメがそう思ったと同時に今後の予定を替える。

「全員、口を閉じろ!! 今から地上に降りる! 衝撃が来るだろうが、無事に全員生還させる!」

ハジメはそう言い切ると、更に魔力を流していく。それを見たハジメ以外の全員は顔を見合わずと頷き合い目を閉じて、次に目を開ける時も自分が無事なことを願う。

「ウオオオオオ!!」

雄叫びを上げながらフェルニルの緊急着陸を始めていくハジメ。船体が傷付き、色々な箇所が損傷して操作の難易度が跳ね上がっているが、“瞬光”などを発動して対応するも、目が血走り、鼻と口から少量の血が流れ、全身から魔力の奔流が迸って痛みを与えていく。

そんな生死を賭けた過酷な状況にハジメは不敵な笑みを浮かばせ、

「クハツ……やってやらああ!!」

そう叫びながらハジメは、フェルニルを可能な限り操縦で、降下速度を落としていく。

そして、ハジメ達を乗せたフェルニルは地上へ落ちるかのように降下していくのであった……。